

【完結】空の記憶

西条

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——これは、一人の英雄が死ぬまでの物語。

闇の時代終結後、英雄と持て囃された一人の天才闇祓いが自殺した。

それから時が経った今、ハリー・ポッターの双子の弟である少年には常々不思議に思っていることがあった。

一つ目は、夜眠っている間、まるで誰かの人生を体験しているかのようなリアルな夢を見ること。

二つ目は、双子の兄であるはずのハリー・ポッターと見た目が全く似ていないこと。

そして、三つ目は——

ある英雄を巡る運命が、少年を未来へと突き動かす。

すべての真相が白日の下に晒された時、あなたはどちらの道を選びますか？

※自サイトからの転載です。

ボーイズラブではないのですが、多少それっぽい描写が存在します、ご注意ください。

フォント違いは仕様です。

2021/11/15 完結しました。

2022/08/15 続きました。

↓呪いの子扱い（沿わない）連載『空の追憶』（<https://s>

y
o
s
e
t
u
.
o
r
g
/
n
o
v
e
l
/
2
9
5
0
7
8
/

目次

賢者の石編

第1話	不運とぼくらは腐れ縁	1
第2話	4つの寮と『ホグワーツ』	7
第3話	夢と現実の境界線	18
第4話	交わらぬ世界	25
第5話	ダイアゴン横丁	35
第6話	新たな世界への予感	49
第7話	表裏一体の希望と絶望	62
第8話	記憶と記録	79
第9話	ぼくと彼の類似点	88
第10話	運命の恋は一目惚れより始まる	101
第11話	暗闇の入口	122
第12話	泡沫の夢	130
第13話	二つのセカイと邂逅と	141
第14話	全てが始まる、些細な一日	150
第15話	融解する、声	162
第16話	微笑みの間に隠す嘘	170
第17話	君が知っていること ぼくが知っていること	182
第18話	個々人の世界	190
第19話	クリスマスプレゼント	201
第20話	捻れた足音	211
第21話	それはぼくらの願いだった	224
第22話	家と自分、家族と自分	233
第23話	禁じられた森	244

第24話 約束 | 254

第25話 誰が為に君はいる | 266

第26話 レモン・キャンディー | 277

第27話 現実 | 287

第28話 青春グラフィティ | 304

第29話 灯 | 311

秘密の部屋編

第1話 夏休み | 318

第2話 届かない祈り | 330

第3話 車と満月と真夏の夜 | 342

第4話 ライバル宣言 | 350

第5話 友人 | 358

第6話 親子喧嘩 | 365

第7話 悪戯仕掛人 | 370

第8話 忘れ物 | 381

第9話 セカンド・メット | 391

第10話 じゅげむじゅげむ | 401

第11話 クイディッチ | 412

第12話 見覚えのある名前 | 420

第13話 些細で大きな違和感 | 431

第14話 @女子トイレ | 438

第15話 見知らぬ手紙 | 451

第16話 やって来た男 | 458

第17話 花火 | 464

第18話 世界が君の敵になるのなら | 472

第19話	霧の街	484
第20話	不穏な噂	495
第21話	喧嘩	508
第22話	家族	518
第23話	トム・リドルの日記	526
第24話	転機	533
第25話	思い出すキツカケ	539
第26話	擦れ違い	546
第27話	お茶会	554
第28話	『名前』	562
第29話	連れ去られた少年	570
第30話	感覚	579
第31話	唯一の君の弱み	586
第32話	君は誰？	592
第33話	秘密の部屋	602
第34話	友情	610
第35話	私の世界、あなたの世界	614
第36話	巡り合い	620
アズカバンの囚人編		
第1話	フィスナー家	626
第2話	彼の命の顛末、その一つ	634
第3話	親の心、子知らず	642
第4話	幼馴染	660
第5話	杖で交わる友情	667
第6話	シリウス・ブラック	673

第7話	探り合い	685
第8話	壊れる音	694
第9話	楽勝以外の勝ち方	704
第10話	崩壊し始める世界	718
第11話	そして静かに幕は上がる	729
第12話	夜空に輝く一番星	736
第13話	擦れ違った先に見えるもの	748
第14話	共犯者	760
第15話	悪戯仕掛人、参上	770
第16話	仄かな想い、自覚しない恋心	783
第17話	魔法合戦	794
第18話	ぼくは友達が少ない	804
第19話	つんでれ、とは？	815
第20話	「問題です。ぼくは一体誰でしょう?」	822
第21話	変わりゆく関係	841
第22話	更なる高みへ	848
第23話	忍びの地図	860
第24話	新聞社の取材	875
第25話	自覚	883
第26話	崩れる関係	898
第27話	気付けなかった大きな過ち	906
第28話	突き付けられる真実	910
第29話	魔法魔術大会	920
第30話	その瞳が映すもの	931
第31話	友達	942

第32話 最後の優勝者

第33話 決意

第34話 可能性

第35話 暗転

短編 ジェームズ視点 退屈凌ぎの予想外

短編 ハリー視点 いえない

短編 もしも、全てが平和な世界だったら

炎のゴブレット編

第1話 両手分の世界

第2話 落下

第3話 トン・タン・タフィー

第4話 闇の中の真実

第5話 覚悟

第6話 新学期

第7話 闇の印

第8話 兄として、弟として

第9話 慟哭

第10話 誕生日プレゼント

第11話 逸らす、想い

第12話 守り方

第13話 狭間の声

第14話 因縁の決着

第15話 魔法契約

第16話 真夜中の秘密

第17話 ゴブレットは語らない

第18話 Moony

第19話 プライド

第20話 指輪

第21話 舞台の上で役者は踊る

第22話 第一の課題

第23話 いつまでも、どこまでも

第24話 くるくると廻る恋心

第25話 歯車は止まらない

第26話 ダンスパーティ

第27話 不死鳥の騎士団

第28話 望み

第29話 第二の課題

第30話 薄氷の上に立つような

第31話 その言葉の向かう先は

第32話 伏せる瞳に映るもの

第33話 記憶は静かに語りかける

第34話 密かなる想いは巡り行く

第35話 砕け散る、幻想

第36話 誰も知らない物語

第37話 二人の少女、重ならない恋模様

第38話 愚者は静かに目を開けた

第39話 空の青さが気に食わなくて

第40話 青空

短編 遺書

短編 アリス視点 親友の彼女

短編 ユーク視点 憧れの人

不死鳥の騎士団編

第1話 思惑

第2話 侵される日常

第3話 二択

第4話 笑顔

第5話 燻る感情

第6話 思い出の中で

第7話 友情の残量

第8話 魔法省にて

第9話 初恋は実らない

第10話 優等生宣言

第11話 守りたい、守れない

第12話 若者は明るい未来を求める

第13話 似た者同士

第14話 残酷な優しさ

第15話 叶わぬ願い

第16話 モラトリアム

第17話 武装解除呪文

第18話 くすぐる拙い恋心

第19話 真実の代償

第20話 奈落の底

第21話 貴方は本当に変わらない

第22話 ナイチンゲールは歌わない

第23話 秘められた言葉

第24話 贖罪

第25話 君がため 惜しからざりし 命さへ

第26話 恋する少女は前を向く

第27話 灰色の少年

第28話 雄弁な笑顔

第29話 Let's PARTY!!

第30話 最悪の記憶

第31話 友情なんて、幻想だ

第32話 ぼくらがここにいた証

第33話 二代目悪戯仕掛人

第34話 ふくろう試験

第35話 両手いっぱい幸せを

第36話 笑顔に包まれて

第37話 自己犠牲

第38話 エゴイズムの行く先

第39話 乞い願う

第40話 刻

短編 ユーク視点 灰色の少年が見る夢(上)

短編 ユーク視点 灰色の少年が見る夢(下)

短編 レギュラス視点 僕の嫌いな先輩

短編 アリス+?視点 黒猫と子守唄

謎のプリンス編

第1話 もしも、すべてが

第2話 集合写真

第3話 奈落は二度訪れる

181518051797

177817651745172817181708169816851674166816521637163016231617161216081602159315891585

第4話	異界への扉	1822
第5話	束の間の幸福	1835
第6話	いつかの誓い	1844
第7話	暗闇の影	1854
第8話	黒衣の天才の作り方	1860
第9話	初恋の寿命	1866
第10話	人生最後の悪足掻き	1872
第11話	折り重なる十字架	1885
第12話	取り損ね、零れ落ちる	1895
第13話	それはそれはとても綺麗な	1903
第14話	闇を歩む	1912
第15話	映すは深い絶望と	1919
第16話	一縷の希望	1926
第17話	非日常はいつしか日常になる	1930
第18話	それは夢か幻か	1935
第19話	操り人形は幸福な未来の夢を見るか?	1940
第20話	ベツレヘムの星	1948
第21話	想いの果て	1956
第22話	デウス・エクス・マキナ	1965
第23話	都合のいいプロット	1977
第24話	絡み、捻れ、纏れ合う黒の糸	1989
第25話	たとえ赦されないとしても	1995
第26話	悲劇の幕よ、開かれん	2002
第27話		2006
第28話	愛おしき友情よ、永遠なれ	2017

第29話	血管を流れる命の音	2024
第30話	黒衣の天才の殺し方	2029
第31話	9・8m/s ²	2040
第32話	巡り、巡る	2053
第33話	死に損ないと、生き損ない	2063
第34話	選べなかった最善策	2071
第35話	背中合わせで、空を見上げて	2080
第36話	その手に嵌るは友情の手錠	2085
第37話	空の記憶	2088
第38話	境界の向こう側	2095
第39話	シジフォスの罪	2100
第40話	未来へ繋ぐ	2106
第41話	さよなら、主人公	2114
第42話	42	2120
短編	梓視点 直兄の話(上)	2124
短編	梓視点 直兄の話(下)	2140
短編	ライ視点 臆病者の天才の末路(上)	2151
短編	ライ視点 臆病者の天才の末路(下)	2162
短編	ゴミ箱から出てきたくしゃくしゃの紙片	2178
短編	モブ闇祓い視点 Goodbye, Hero.	2182
死の秘宝編		
第1話	白の世界	2193
第2話	鉛色の魂	2199
第3話	浅緋色の思い出	2205
第4話	葵色の約束	2209

第5話 聴色の信託

第6話 青鈍色の葛藤

第7話 白練色の病室

第8話 刈安色の新学期

第9話 織部色の信頼

第10話 真空色の狂気

第11話 白銅色の革命

第12話 濡羽色の忠誠

第13話 紫苑色の危機

第14話 臙脂色の友情

第15話 瑠璃色の裏切り

第16話 萱草色の例外

第17話 呂色の死神

第18話 柘榴色の十字架

第19話 紺碧色の願望

第20話 深紅色の奇跡

第21話 曙色の幻想

第22話 群青色の心音

第23話 思色の邂逅

第24話 月白色の決意

第25話 茜色の夕暮れ

第26話 藍鉄色の思惑

第27話 赤朽葉色の旧友

第28話 青色の殺意

第29話 浅葱色の未練

2306230222992295229122872282227722732270226522602257225222442241223822332230222822242222222022172212

第30話	甕覗色の悲鳴	2333
第31話	銀色の信念	2330
第32話	白百合色の自我	2327
第33話	空色の祝福	2320
第34話	勿忘草色の決着	2315
第35話	深藍色の灯火	2313
第36話	黒の選択	2308

黒衣の天才編

ハリー・ポッターの場合	2340
シリウス・ブラックの場合	2343
アクアマリン・ベルフェゴールの場合	2347
ピーター・ペティグリューの場合	2350
セブルス・スネイプの場合	2352
ライ・シュレディングーの場合	2357
アリス・フィスナーの場合	2360
リーマス・ルーピンの場合	2364
トム・リドルの場合&選択	2368
*****	2372
「ぼくがいない世界」――1	2375
「ぼくがいない世界」――2	2379
「ぼくがいない世界」――1	2384
「ぼくがいない世界」――2	2387
ネタバレ全開オリジナルキャラクター紹介&一言	2393
「ぼくがいない世界」After ep「心の底から幸せに」	2406

「ぼくがいない世界」After ep「おはよう、君のいる世界」

番外編 セブルス視点 不器用な友

番外編 アクア視点 私達の未来

短編 シリウス視点 空が墜ちた日(上)

短編 シリウス視点 空が墜ちた日(下)

24912477247224592442

賢者の石編

第1話 不運とぼくらは腐れ縁

「秋、お前は魔法使いなんだよ」

——それは、からりとよく晴れた十月のある日のこと。

生まれて初めて足を踏み入れた父の書齋で、父から突然夢見がちなことを聞かされたぼくの口からは。

「……うん。ちよつと、お医者様を呼んで来るからね」

「違うから、秋！ 父さん頭おかしくなったわけじゃないからね!？」

——思わずそんな、ごくありふれた言葉しか出てこなかった。



「父さん、こういうのは当人には案外わからないって言うじゃない。だいじょうぶだよ、ぼくは父さんに何があっても、変わらず父さんのことが大好きだからね、うん」

「そう言いながらそろそろと部屋から出て行こうとするのはやめようね秋！」

そうつと後ろ手で書齋の扉を押し開けようとするも、慌てて駆け寄ってきた父にひしつと抱き締められ、脱出はあえなく阻止された。ちっ！

思わず扉に向かって叫んだ。

「母さん！ ねえ母さん！ 父さんがおかしくなっちゃったよー！」

「父さんは至つて正常だから！ あと秋、この部屋は防音魔法が掛かっているんで扉を開けない限り内側の声は外には聞こえない」

「ねえ父さんほんとどうしちゃったの!？」

母と比べて父はずつと普通の人だと思つてたのに！ いや、友達の両親と比べると、あれ？ なんかぼくの両親つてちよつとヘンかな？ つてついつい考えてしまうことはあつただけど！ まさかこんな形で思い知ることになるなんて！

「秋、父さんはお前が常識的な感覚をちゃんと持つていてくれてとつ

ても嬉しい！ でもね秋、お願いだから父さんの話を聞いてくれ、五分だけでいいからああ」

そう言いながら、父はぼくに縋り付く。その姿が我が父ながらあまりにも哀れで、ぼくは思わず足を止めた。

「……わかったよ。で、何？ ぼくがマホウツカイだって話？」

「そう、秋は魔法使いだ」

ようやくぼくがちゃんと話を聞いてくれるとわかったのか、父はぱあつと笑顔になった。

「僕も魔法使いだ」

「……………」

「あ、母さんも魔法使いだよ」

ぼくの視線が母のいる居間へ移るのを見て、父はそう付け足した。

……いや、そんなことを何度も言われても。

魔法使いて。

魔法使いて！

「ファンタジーでしょ……」

「あ、まだ信じてないなー？」

いや、今ので信じる奴がいるとでも？

父は仕方ないなーなんて言いながら、楽しげに懐から木の棒つきれ——父が言うには魔法の杖——を取り出しぼくに向ける。瞬間、もの凄く嫌な予感がしたぼくは、反射的にその場から飛び退いた。

嫌な予感は見事的中。棒つきれから飛び出した青い閃光は、さつきまでぼくが立っていた場所に焼き焦げを残す。思わず青褪めた。

「実の息子に何してんの!？」

「いや、僕の息子なら、何か物が動いたり変身したりしても手品とかを疑うだろうしさあ。それならいつそのこと、自分の身体に異変が起きれば信じるんじゃないかなって」

「だからって息子を攻撃するかなあ!？」

叫ぶぼくを尻目に、父は物凄く楽しそうな顔で棒つきれを振った。途端、本棚のボールが一瞬で巻き上がる。綺麗に納められていた本は、次々見えない手に引つ張り出されたかのように抜き出され、雪崩

を起こしながらも重力に従い落ちてくる。

……落ちてくる？

落ちてくる！

思わず悲鳴を上げると、頭を抱えてうずくまった。身を強張らせ、目をギュツと瞑る。

——しかし、いくら待っても予想した衝撃は訪れない。

え、顔を上げかけたところで、コツンと頭に軽い衝撃。ぶつけたところを擦りながら周囲を見回すと、床には薄い絵本が一冊転がっていただけだった。

「え、じゃあ……」

今のは、と言いかけたところで、ぼくは大きく目を見開いた。

「嫌だなあ、僕が大好きな息子を傷つける訳がないじゃないか」

ぼくが目にしたもの。

それは、座り込んだぼくの頭上から三十センチほどの高さでふわふわと浮かんでいる大量の本と、杖を振り上げたまま得意げにぼくを見下ろしている父の姿だった。

「これで、少しは信用したかい？」

ぼくの十一歳の誕生日は、そんな衝撃で彩られた。



ぼくには、常々不思議だと思っていることが三つある。

一つ目は、夜眠っている間、まるで誰かの人生を体験しているかのようなリアルな夢を見ること。

二つ目は、双子の兄であるはずのハリー・ポッターと、ぼくの見たい目が全く似ていないこと。

そして、三つ目は——

「……あはは」

思わず乾いた笑い声を上げた。隣のハリーも、諦め切った笑みを浮かべてぼくを見返す。

「……笑うしかないよね、この状況」

「全く、本当に……」

容姿が一切似ていなくとも、育った年月は歳の数分。アイコンタクトもなしに、ぼくらは声を揃えて叫んだ。

「ワケ分かんね——!!」

従兄弟のいじめっ子、ダドリー・ダーズリーとその愉快的仲間達に学校中を追い掛け回され、食堂の外にあった大きな容器の陰に飛び込んだら、気付けば学校の煙突の上に腰掛けていた、なんて——

「は、は、は……」

笑うしかないというか、笑えないよ。

腰掛けている場所以外の足場はない。恐る恐る宙に浮いた足の先を眺め、その高さに目が眩んだ。ヒツと思わず喉が鳴る。端的に言つて、滅茶苦茶怖い。

「……ここから落ちたら、死ぬよね」

ハリーがポツリと呟いた。

「……運が悪かったら」

「じゃ、僕らは確実に死ぬね」

「……まあ、そうかも」

そんなにはつきり言うなよ。

「とりあえず、救助が来るまで待つしかない。下手に動いたら真逆さまだ」

「バーノンおじさん、怒るだろうな……」

虚ろな声でハリーが笑った。わあ怖い。

バーノンおじさんは、ぼくらの従兄弟であるダドリーの父親だ。ぼくらにとっては伯父に当たる人であり、一応の保護者でもある。物心ついた頃には、ぼくとハリーは既に伯父夫婦に引き取られていた。両親はずっと昔に自動車事故で亡くなったらしい。その話を持ち出すと、おじさんもおばさんも苦虫を五十匹くらい噛み潰したような顔になり家中にブリザードが吹き荒ぶため、我が家ではその話はタブーなのだった。

ハリーは大きいため息をつくとき、髪をぐしゃぐしゃに掻き混ぜる。

「今度は何日物置に閉じ込められるかなあ……」

「……嫌なこと言わないでよ」

「どうせ確定の未来じゃない。あーあ……」

それは確かにそうなんだけど。それでも、未来を直視したくない時だってあるでしょうが。

ぼくらが問題を起こすと、おじさん達は罰としてぼくらを物置に閉じ込める。ぼくらだって問題を起こしたくて起こしている訳じゃないのに、何度弁明してもおじさんは聞く耳を持ってはくれないのだ。煙突に腰掛けていて突風が吹いたら確実に飛ばされるといふ今のこの現実だけでもお腹いっぱいなのに、未来の悪夢までも思い描きたくない。間に合っています。

「あーあ、誰にも知られずにここから降りられたらいいのにな……」

ハリーがぼやく。その言葉にふと、昨夜の夢が蘇った。

「魔法でも使えたらいいのね。そう言えばぼくね、今日は父さんに『お前は魔法使いだ』って言われる夢を見たんだよ」

「あ、またいつもの『秋くん』？ 今日はまだ、随分と突拍子もない話だね」

「そう、幣原秋。でしょ、ぼくも驚いちゃった」

ぼくが眠る時に見る夢は、人とは違って少し変わったものらしい。夢というのは毎回でんでばらばらなものを見るのが普通らしいが、ぼくは違う。『幣原秋』という、日本に住む一人の少年として人生を生きる、そんな妙に一貫性のある夢を見ているのだ。毎晩、毎晩。

ぼくはハリーに、幣原秋が父親に「お前は魔法使いなんだよ」と言われたり、魔法を掛けられそうになったり本を降らされたりしたこと話を話して聞かせた。ハリーは、ぼくの言葉ひとつひとつに律儀に反応を返してくれるから、こちらも凄く話しやすい。元来聞き上手なんだ、ハリーは。

「しかし、いつ聞いても面白いなあ、アキの夢は」

「ふふっ、ありがと、ハリー」

それからぼくらは、ひとしきり『魔法が使えたら何をするか』について話し合った。どうせ、救助が来るまで暇なのだ。現実を直視して絶望するよりも、今だけは空想の世界に浸っていたい。

ハリーは「ダドリーに豚のしつぽを付けるかな。そうしたらほら、どこからどう見ても豚そのものだろ？」なんて黒い発言をしたり、ぼくは「魔法が使えるのなら、きつとあの家から逃げ出すことだって簡単なはずだよな。ハリーと二人で一緒に生きていけたら幸せだろうなあ」と提案したりして盛り上がる。

ふと、呟いた。

「魔法が使えたら、か……」

本当はちゃんと分かっている。本当は魔法なんか使えっこないってこと。魔法なんて、ファンタジーの中だけのものなんだって。

でも、そんなつまらない現実は無視して、ぼくらはただひたすら『もしも』の話を熱く空想する。

いつか、誰かがぼくらを助けてくれる日を。

この辛くてどうしようもない現実から逃げ出せる日を、ぼくらはただ、待っていた。

——いくら待ったって、誰も助けてはくれないことくらい、わかっていたけど。

誰も助けに來ないのならば、いつそ自分から抜け出してしまえばいい。何もせずに現状に文句だけ言っているよりも、ずっとずっと前向きだ。ハリーと手を取り合い、遠く離れた見知らぬ地へ。おじさんもおばさんもない地へ、どこまででも。

——そんなの、理想だ。夢物語だ。

世の中はそんなに甘くない。家出なんかしたら、子供の足じやすぐに見つかってしまう。家に連れ戻され、更に酷い罰を受けるくらいなら、いつそのこと。

そうして、ぼくは選びたくもない停滞を選択するのだ。



それからおよそ三十分後。近所の人の通報により、ぼくらは無事にレスキュー隊に保護された。

その後物置に一週間閉じ込められたのは、言うまでもない。

第2話 4つの寮と『ホグワーツ』

ぼくは、あの十一歳の誕生日以来、父の書齋に自由に出入りすることを許された。

最初はまだ『魔法』なんて未知で不可思議で小説の中でしかお目にかかったことがないものに半信半疑だったぼくだが、書齋にある魔法関連の膨大な書物、また父が所有していた多くの魔法器具を見れば、『魔法』が現実のものだと納得せざるを得なかった。

というか、こんな大掛かりで凝った仕掛けを、ただ『ぼくを騙すだけ』のためにやるのは不合理だ。それなら、魔法なるものの存在があるのかもしれない程度には、認めてあげても構わないかな、と思ったし——それに、父がぼくの目の前でやったことは、ぼくの常識からは外れた。まさしく未知なるものだったのだから。

いや、認めよう。

平凡な日本の一小学生であるぼくにとって、魔法界の勉強は物凄く面白かった。ここまで面白いのならば、たとえ騙されていたとしても悔しくはない。

日本語で書いてある書物は、膨大とまで思う書齋の本に比べるとほんの僅かしかなかった。大体英語がメインで、後はドイツ語とロシア語、ぼくの知識ではどこの言語か断言出来ないようなものまで多岐に渡る。ぼくが日本語の書物を読破してしまうまで、そう時間は掛からなかった。

これはいつそ、他の言語を学んでみるべきか。そう思いながらも、他言語というハードルは、日本という島国育ちのぼくには高過ぎる。そもそも魔法という概念自体、最近知ったばかりだというのに、それを更に馴染みの薄い外国語で勉強する、だって？

何度も繰り返し日本語の書物を読むぼくに、父は『ホグワーツ』という魔法魔術学校について話をしてくれた。

魔法使いや魔女たちは、十一歳の九月からそこに通い、七年間魔法について学習するらしい。ある意味専門学校のようなものなのかな、と、父の話を聞きながらも脳みそを整理する。

「ホグワーツには四つの寮があつて、生徒はそこで寝起きするんだ。良い行いをすれば寮の得点はプラスされ、悪い行いをすれば減点される。学年末では、一番得点が高かつた寮が表彰されるようになっていくんだよ」

「え、寮なの!?!」

驚いた。ということは、次の九月からぼくは両親と離れて暮らさなといけないのか。

……いや、別に寂しいとかそういうんじゃないよ? ぼくだってもう十一歳、一人でだつて生きていける。両親がいないと泣いちゃう子供ではないのだ。

「……四つの寮、って、父さん言ったよね。じゃあその寮には、それぞれどんな違いがあるの?」

父は柔らかに微笑んだ。

「それじゃ、簡単に説明しようか。」

まずはグリフィンドール、ここは勇気ある者が選ばれる寮。元気が良くて明るくて、自分の行く末をまつすぐな瞳で見据えることが出来る、そんな人たちが集まる寮だ。

レイブンクローはとても頭の良い子達が集まる寮。いつも物静かではあるけれど、先生方の度肝を抜くようなとんでもないことを予告なしにやらかすのは、大体いつだつてここなんだよなあ。

ハッフルパフは優しく、穏やかに生きていける。自分にも他人にも誠実で、一番人間性を重視しているのがこの寮だ。自分を偽らずに生きていける寮だよ。

スリザリンに入れば、自分という存在に誇りを持つことが出来るだろう。高潔な誇りだ。矜持、と言い換えてもいい。自分にも他人にも、決して妥協や怠慢を許さない。少し気難しい奴が多いけれど、仲良くなれば家族のように親身になってくれる。そんな情の深い子達が多く集まる寮」

「ま、待って。今覚えるから。グリフィンドール、レイブンクロー、ハッフルパフに、スリザリン……」

指を折りながら、寮の名前とさつき受けた説明を頭の中で一致させ

ていく。なるほど、なんとなくだけど雰囲気は掴めた気がする。

「……でも、もしどこにも入れなかつたら？」

それでも、そんな不安が胸中によぎる。

「どの寮にも、ふさわしくないと思われたら……」

「そんなことはないさ、大丈夫。秋は頭もいいし勇気だつてある。第一、組み分けられなかつた人なんて、これまで一人もないんだから」
「……なら、父さんはぼくが何寮つぽいと思う？」

父はそこで、少し考え込んだ。

「秋は、そうだな……、……いや、言うのは止めておくよ」

「えっ、なんで？」

「変な先入観は付けさせたくないしね。帽子はきつと、秋に最も相応しい寮を見つけてくれるから」

「帽子？」

何のことだろうと首を傾げた。父は何も言わないまま、静かに微笑む。

「もう夜だよ。そろそろ母さんが、夜ごはんだと呼びに来る頃だ。宿題は済ませたかい？」

「あっ……」

そうだった、漢字の書き取りの宿題が出ていたことをすっかり忘れていた。慌てて本を閉じたぼくに、父は穏やかに呼びかける。

「お前はいつも下や手元ばかりを見ているから、気付いていないんだろう。ほら、上を見て」

「上……？」

言われた通りに上を見る。そして、目を瞠った。

夕焼けと群青が混ざった空に、星が二つ三つと浮かんでいる。見える星の数は徐々に増えていって、代わりに夕焼けは群青に呑み込まれていく。瞬く間に空は暗くなった。

「あの天井には魔法が掛けてあつて、外の空を映し出しているんだ。今日は、いい天気のようなね」

魔法だったのか。てっきり、ガラス張りだとずっと思い込んでいた。確かにガラス張りにしては、継ぎ目もないし綺麗に空が見えると

思っていたのだ。そうだよな、書斎にガラス張りの天井はあり得ないよな、本が傷むもの。

「凄いな、魔法って！ なんでも出来ちゃうみたい！」

父は目を細めてぼくを見ると「そうだね」と笑った。



「……あー……」

毎日見る妙にリアルな夢は、今回は殊更に鮮烈だった。

そう、目覚めたくないと思ってしまうくらいには。

「……今日は、どんなのだったっけ……」

ぼくにそっくりの『幣原秋』の生活は、今のぼくの日常とは比べものにならないくらいに幸福だった。優しい父に面白い母。暖かで愛情溢れる家族に、そして何より『魔法』。

「えっと、ホグワーツ……四つの寮……グリフィンドール、レイブンクロー、ハッフルパフ、スリザリン……」

隣ではハリーが健やかな寝息を立てている。起こさないように小声で呟きながら指折り数えた。それにしても、やけに凝った夢を見るものだ。ホグワーツなんて聞いたこともない単語を、どうやって登場させているのだろう。まったく、夢つてのは不思議なものだよ。

廊下の足音に、意識せずとも身体が身構える。予想通りのタイミン
グで、物置の部屋の戸がガンガンと叩かれた。

「さあ、起きて！ 早く！ 起きるんだよ！」

ペチュニアおばさんの甲高い声。ため息を付きながらも起き上がると、狭い物置部屋の中でぐっと背伸びをした。

「空飛ぶオートバイの夢を見た」

突然の声に、驚いて顔を向けた。ベッドに仰向けになったまま、ハリーは眉を寄せ虚空を睨んでいる。

「空飛ぶオートバイ？」

「この前も同じ夢を見たような気がするんだけど……」

そういえば前にも、そんなことをハリーから聞いた気もする。いつ

だっけ、どんな話だったっけ、と記憶を探るも、ペチュニアおばさんの大声に遮られた。

「まだ起きないのかい？」

「もうすぐだよー」

「さあ、支度をおし。ベーコンの具合を見ておくれ、焦がしたら承知しないよ。今日はダドリーちゃんのお誕生日なんだから、間違いのないようにしなくっちゃ」

ハリーが呻き声を上げた。その声は予想以上に大きくて、扉を隔てた先にいるペチュニアおばさんにも聞こえたらしい。

「何か言ったかい？」

「何でもないよ、ぼくがハリーをちよつと踏んじやっただけ！」

あえて明るい声を出すと、おばさんはフンと鼻を鳴らして行ってしまった。キッチンへと戻る足音を聞き届けてから、ぼくはハリーを論しに掛かる。

「あのさ、ハリー、少しは学習しようよ。今日この日におばさんを怒らせるのはマズいでしょ」

「今の今まで忘れていたんだよ。そして忘れていたかった。ダドリーの誕生日……嫌だなあ……」

気持ちちは凄くよく分かるから、ぼくは曖昧な笑顔を浮かべた。毎年、ダドリーの誕生日では、おじさんとおばさん、そしてダドリーの三人で、テemapパークや映画館といった娯楽施設に行くのが定番だ。それはいいのだが、その間ぼくらは留守番かと言うと、ほんのちよつぱり違ったりする。ぼくらは近所に住んでいる、猫好きの変人と名高いフィッグおばさんの元に預けられるのが常だった。

「ぼくは猫好きだけだな。可愛いもん」

「僕だって嫌いじゃないさ。でもあのばあさんにはうんざりするんだ」

ハリーはそうぼやきながらも、ベッドの下から靴下の片方を探し出すと、引っ付いていたクモを剥ぎ取り怒りを込めて壁に叩きつけた。哀れなクモはぼとりと床に落ちると、動かなくなる。苦笑いをしてハリーを数秒見つめると、ぼくもパジャマから洋服に着替えた。

リビングのドアを開けると、カラフルな包みの山が出迎えた。食卓の上に積まれたダドリーの誕生日プレゼントが、軽く雪崩れを起こしているのだ。

「僕はベーコンを焼くから、アキはそのプレゼントの山をどうにかしてくれない？」

「はい」

手早く、かつ、そうとは見えない程度に乱暴に。プレゼントに罪はないが、それでも僅かな苛立ちは拭えなかった。羨ましいという単純な気持ちだが、心の柔らかいところに棘となつて刺さっている。気付かない振りをして押し隠した。

「髪を梳かせー」

バーノンおじさんは、リビングに足を踏み入れるなりハリーを見て怒鳴ると、次はその目をぼくにに向けて「お前も髪を切れー」と唸る。切る気はさらさらでないが、一応は格好だけでも「はい」と明るい声を返した。

括った後ろ髪に手を触れ、伸びたなあとふと思う。いいんだ、顔立ちで女の子に間違われるより、髪型で女の子に間違われる方が、心が負うダメージが軽いのだから。錯覚？ なんとでも呼ぶがいい。夢で見る幣原秋と、同じ髪型。憧れのアイドルの持ち物と揃いを欲しがるように、ぼくだって彼と同一でありたかった。こっそり見習うくらい、いいだろう——もつとも、幣原秋を知る者なんて、この世にぼくひとりきりだろうが。

ペチュニアおばさんに連れられてキッチンに入ってきたダドリーは、今日のためにか小洒落たジャケット姿だった。もう少し痩せた方が格好良く着られるだろうにと思うが、口には出さない。バーノンおじさんを見る限り、ダドリーもそういう路線で行くだろうことは間違いないのだから。

「お誕生日おめでとう、ダドリー。これ、ぼくとハリーから」

ポケットから小包を引っ張り出して、笑顔でダドリーに手渡した。ダドリーはひったくるようにして小包を受け取ると、ありがとうの一言もなしに綺麗な包装紙を破り取る。出てきたのが新作のゲームソ

フトであったことに、ひとまず満足はしたのだろうか。これで今年度もサンドバックは回避出来そうだ。端的に言えば賄賂だ、賄賂。

ダドリー以外は知らないことだが、ぼくとハリーは意外と小金持ちだったりする。ダーズリー家ではお小遣いに当たるだろう一切をもらったことがないのだが、ぼくらが持っているのはきちんとした真つ当なお金だ。正真正銘、ぼくらが稼ぎ出したもの。手先の器用さや持ち前の体力、それに少々の勇氣（無謀と呼ぶ人もいるけれど）を資金に、同級生からちよつとした仕事を請け負ったりしているのだ。誤つて壊してしまったゲーム機の修理やテストで百点を取るコツを教えたり、はたまたラブレターの代筆をしたりいなくなつた猫探しをしたり。『何でも屋』と呼ばばいいのだろうか。最近は顧客の量も増えてきていて、上級生や他校生、果ては先生方までも顧客リストに載つてきたのだが、まあ、これは蛇足。

ハリーに「アキ、お皿を並べてくれる？」と声を掛けられた。床に座り込んでプレゼントの数を数えているダドリーから目を離すと、ハリーの元に駆け寄る。

「プレゼントなんてしなくても良かったんだ」

ぼくに皿を手渡ししながら、ハリーがそう耳打ちした。ぼくは笑つて聞き流す。

「別にダドリーは悪い奴じゃないんだ、ちよつと育ち方を間違えたただけで。サンドバックにしばらくならないのと引き換えだと思えば、安いものさ」

「また、アキは、何と言うか……」

ハリーはため息を吐きながら、フライパンを傾けると皿にベーコンエッグを滑り込ませた。

「残酷なまでに平等だよな」

平等？ そうなのだろうか。考えたこともなかった。

「いい人、とは言ってくれないの？」

「しっかりと対価を貰っている人には言いません」

軽く肩を竦め、皿を各配置につけた。フォークとナイフ、コップを準備してミネラルウォーターを注ぐと、まだプレゼントの数を数えて

いるダドリーを他所に朝ごはんを食べ始める。その時、ダドリーが切羽詰まった声を上げた。

「三十六だ。去年より二つ少ないや」

「坊や、マージおばさんの分を数えなかったでしょう。パパとママからの大きな包みの下にありますよ」

「わかったよ。でも三十七だ」

ぼくとハリーは静かに顔を見合わせる。常人よりも遥かに短いダドリーの堪忍袋の緒が切れそうなのを察し、テーブルがいつひっくり返されても大丈夫なように、慌ててベークンに食らいついた。ペチュニアおばさんも危機を悟ったのか、急いで言葉を続ける。

「今日お出かけした時、あと二つ買ってあげましょう。どう？　かわいこちゃん。それでいい？」

「そうすると、ぼく、三十……三十……」

「三十九よ、かわいい坊や」

「そっか、そんならいいや」

ダドリーの機嫌が直った気配に、胸を撫で下ろす。ミネラルウォーターを飲み干し、ハリーと目配せし合った。ハリーの瞳が「この歳で足し算がロクに出来ないダドリーが将来どんな職に就けるのか僕凄く興味ある」と語っている。『就く』ではなく『就ける』という言葉回しに、さりげない毒が垣間見える。まあ、こんな環境でむしろ純粋にピュアに真っ直ぐに育つだなんて、それはもう奇跡の類だ。きっとぼくも、年相応の純粋さなんて欠片も持ち合わせちゃいないのだろうかと思うと、なんだろう、少し切なくなる。

「バーノン、大変だわ。フィッグさんが脚を折っちゃって、この子たちを預かれないって」

食べ終わった食器を洗っていた時、ペチュニアおばさんがバーノンおじさんに困った口調でそう話しかけるのが聞こえた。ハリーをちらりと盗み見ると、そこには嬉しい心持ちを隠そうともししていない、満面の笑顔のハリー。少しは隠せよ、ポーカーフェイスは英国紳士の嗜みだぜ？

「どうしよす？」

「マジに電話したらどうかね」

「馬鹿なこと言わないで。マジはこの子達を嫌っているのよ」

「それなら、ほれ、何ていう名前だったか、お前の友達の——イボンヌ、どうかね」

「バケーションでマジョルカ島よ」

「僕らをここに置いていったら」

ハリーのその提案に、ペチュニアおばさんは物凄い顔でぼくらを見た。

「それで、帰ってきたら家がバラバラになつてゐるって訳？」

「僕ら、家を爆破したりしないよ」

ハリーが不本意な顔を浮かべるも、バーノンおじさんとペチュニアおばさんはぼくらを無視して相談を始める。

「動物園まで連れて行つたらどうかしら……それで、車の中に残しておいたら？」

「しかし新車だ。奴らを二人きりで中に残しておく訳にはいかん……」

ぼくらは一体何だと思われているのだろう。

その時、ダドリーが泣き出した。嘘泣きなのだが、バーノンおじさんもペチュニアおばさんも気が付かない。これが親バカの力なのだろうか。

「ダッドちゃん、ダドリーちゃん、泣かないで。ママが付いているわ。お前の特別な日を、あいつらなんか台無しにさせたりしやしないから！」

「ぼく……嫌だ……あいつらが、く、来るなんて！ いつだって、あいつらがメチャメチャにするんだ！」

ハリーの脳の血管が切れるブチツツという音が聞こえた気がして、ぼくは慌てて振り返った。やっぱりというかそこには、にっこり満面の笑顔を浮かべたハリーの姿。うん、怖いね。周囲の気温が一気に三度ほど下がった気がして、ぼくは思わず身震いをした。正直言って、ダドリーの癩癩よりも怖い。

ハリーが何か口走る前にと周囲を見渡して、咄嗟に手元の泡まみれ

の皿をハリー目掛けて放り投げた。ハリーはぼくの思いも掛けない行動に目を瞠ったが、持ち前の反射神経で危うげなくキャッチする。ナイス！ と親指を向けると、ハリーも微笑んで親指を突き出した。そしてダーズリー家の三人を横目で見ると、シュツと親指の向きをひっくり返す。わあ、怖い。笑顔のままなのが特に怖い。

家でバーノンおじさんとペチュニアおばさんを怒らせない、というのがぼくとハリーの間のルールだ。何故かって、リアルに死活問題に直結するから。物置に閉じ込められた最長は二週間。薄れゆく意識の中、ああ、ぼくこのまま衰弱死かなあとぼんやり思ったことは数え切れない。まだティーンエイジャー、まだまだ死ぬわけにはいかない！ せめて、せめて彼女くらい作ってから死にたい！ とぼくは切に切に願っている。

玄関のベルが鳴る音に、ペチュニアおばさんは慌てた声を出した。「ああ、なんてことでしょう。皆が来てしまったわ！」

部屋に入って来たダドリーの一番の子分、ピアーズ・ポルキスに、ダドリーはすぐさま嘘泣きを止めた。

ダドリーの子分が来たなら、家を出るのはもうじきだろう。おじさんたちがぼくらの処遇に悩む時間は、そう長々と残されていない。ぼくは洗った食器を拭きながら、ちらりとバーノンおじさんを見遣った。どうかぼくとハリーを、この家に置いていってほくれないだろうか。祈りを込め、バーノンおじさんに熱い視線を送る。どうかお願いします……ぼくらは家を爆破したりなんてしないから……！

「いいだろう」

やがて、バーノンおじさんはぶつきらぼうに呟いた。

「お前らが動物園に付いて来ることを許可する」

バーノンおじさんはそれだけを言うと、苦虫を噛み潰したようなしかめ面でぼくとハリーを交互に睨みつけ、鼻を鳴らしてリビングから出て行った。ぼくとハリーはしばらく足に根が生えたようにその場に突っ立っていたが、やがて顔を見合わせる。

「今、おじさんが言った言葉、聞き取れた？」

「……なんとか」

堪え切れず、にやりと笑う。互いの手を勢いよく合わせ、叫んだ。
「よっしゃー!!」

今まで生きて来た十年余りの人生で、もしかしたら今日は一番ラッキーな日なのかもしれない——そう思っただけ嬉しくなっていたぼくを、
一体誰が責められようか!

第3話 夢と現実の境界線

「本を読むだけじゃなくて、実際に魔法を使ってみたいと思うんだけど。ぼくも魔法使いなんですよ？ そうしたら、父さんと同じようにぼくだって魔法が使えるんだよね？」

ぼくの言葉に、父は驚いたようだった。眉を寄せ考え込んだ父に、慌てて言う。

「ダメならいいんだよ。ただ、ちよつとやってみたいなって思っただけだし」

「いや、ダメ……という訳じゃない。だが……いや、いつかは来る筈のことだ。本当はもっと早いところを、僕らが因果を捻じ曲げたから……アキナ、来てくれ」

父は机の上から、小さな正方形の板を取り上げると、それに向かって声を発する。すぐさまその中から、母の明るい声が返ってきた。

やがてスリッパを鳴らしながら入ってきた母は、軽く首を傾げ「どうしたのー？」と父に尋ねる。

「秋が魔法を使ってみたって言ってるんだ。もう面倒だし、解除してもいいんじゃないかな？」

「……全部解除しちゃうのは不安だよ。一部だけ、じゃダメ？」

「ねえ、何の話？」

父のシャツの裾を引っ張り尋ねると、父は腰を屈めてぼくの頭を優しく撫でた。

「大体、魔法使いはひとりひとり魔力を持っているんだ。そして、その魔力が大きければ大きいほど、その魔法使いはより大きな力を手にすることが出来る。でも、子供の場合、魔力を自分で制御することは難しい。大きい魔力ほど、そうだ。ここまでは分かるかな？」

「……それじゃあ、子供はまだ魔力をコントロールすることが出来ないから、暴走させてしまうということ？ そして、持つ魔力が大きければ大きいほど、周りに与える影響は増える……」

「その通り」

その言葉に、ぼくはがっかりした。だってぼくは、今まで魔法や不

思議というものに全く関わりのない、平和で平凡極まりない生活を送ってきたのだ。魔力の欠片すら見たことがない。

「じゃあ、ぼく、魔力なんてないんだね。だからコントロールするも何も、そもそも魔力がないから暴走のしようがない」

「いや、魔力はある。父さん達が、秋の魔力を抑えていただけだ」

「……どうして？ 皆、魔力を親が抑えているの？」

「いいや、多分違う」

禅問答のような問いかけに、首を傾げる角度が深くなって行く。

「じゃあ、どういうこと？」

「実際に試してみたらいいんじゃない？」

母の提案に、父はしばらく考えてから「まあいつか」と呟くと、懐から杖を取り出した。母もそれに倣う。わあ、こうして杖を手にしてる姿を見ると、母も本当は魔法使いなんだなあとなんだか感慨深くなってしまう。

二人はしかし、その杖をぼくに向けるのではなくぼくの頭上に、互いの杖の先端を交差させて掲げた。

「さあさ、見せてごらんなさい……」

母の口から言葉が呟かれる。

……いいや、言葉じゃない。

旋律を持った、優しい歌――

さあさ、見せてごらんなさい

あなたの元の姿を彼に

我らが愛しいひとり息子に

とうとうその時はやってきた

さあさ、思い出して

あなたの真の持ち主を

その歌が止んだ途端、二人の杖の先から赤と黄色の鮮やかな火花が、柔らかなリボンのように降り注いだ。ぼくは目を見開いて手を伸ばす。赤と黄色のリボンはぼくの手に触れると、静かに姿を消した。

「これは……」

顔を上げる。瞬間。

ガシヤンガシヤンガシヤンツと耳をつんざく音に、身を強張らせた。目を向けた先にあった窓が、全て粉々に砕け散ったのだ。降り注いでくるガラスはしかし、ぼくを避けていく。しかしそんなことに気付けるほど、悠長に佇んではいられなかった。

「なっ、」

一歩下がり、周囲を見渡す。すると次は、ぼくの視線が通った場所の本が全て本棚から飛び出すと、次から次へと我先に床へと落ちて行った。その落ちた本を目で追えば、今度はその本がふわりと空中に浮かび上がり、隊列を成してはぼくの周りで円を描き出す。

「落ち着けよ、秋！ 集中するんだ、なんでもいい！」

「なんでもいいって何を!？」

その間にも、部屋の中の小物は次々と壊れ、その破片が宙を漂っている。両親は大丈夫なのだろうかと辺りを見渡したが、不思議なことに両親の姿は見当たらなかった。

「まず、息を大きく吸って吐くんだよー。そして、魔力に誰がご主人様か思い出させるの」

母さんの、普段通りののんびりとした声が、パニックに陥り掛けているぼくを少しだけ落ち着かせた。ひとまず言われた通りに、大きく深呼吸する。目を瞑ると、なんだか少し落ち着いた。

魔力に誰がご主人様か思い出させる、ということとは、この部屋の惨状を引き起こしているのはぼくの魔力だということか。

「……君たちが好き勝手暴れまわることとは、許さない」

静かに呟く。辺りの騒がしかった『氣』が、少しだけ収まった気がした。

「今まで放っておいてごめんね。今日からはぼくが、君たちの主人だ」
強く、はつきりと、しっかりと念じる。

「だから、ぼくが君たちを責任持って操るから。……ぼくに、力をください」

旋風が、やがて少しずつ弱まってく。完全に収まったと思ってか

ら、ぼくはそろそろと目を開けた。

「……うわお」

部屋の中は、まるで台風か嵐が過ぎ去ったかのようにめちやくちやだった。両親の姿を探すべく、の肩に、ぼん、と手が置かれる。

「おめでどう、秋。これで秋も、魔法使いだよ」

「母さん」

にっこりと笑う母の隣には、父の姿も。父は目を細めながら「しかし、よくやったもんだ」と周囲を見回している。

「ごめんなさい……」

「何、気に病むことはない」

父はぼんぼんとぼくの頭を軽く叩くと、右手に持っていた杖で辺りをなぞった。すると、どこからともなく一陣の風が吹き、全てのものが元通りとなり、今までであったようにすると配置に戻ってゆく。最後の本がカタカタツと音を立て本棚へと収まると、書斎は再び静かになった。

「しかし、秋の魔力がとんでもないことは知っていたが、まさかこれ程とはね……単純な魔力なら『あいつ』も超えるかもしれない……あ痛痛い痛い、アキナ痛い」

「秋に物騒な話はしないで。ここは日本だよ、イギリスならともかく……」

「アキナ判ったから、ごめんって、二の腕の肉を器用に摘むのは止めてくれないか、地味に痛いんだ」

あらごめんなさい、と母は笑顔で父から手を離れた。父は腕を摩りながら、はあとため息を吐く。

『あいつ』って誰のこと?」

ぼくがそう問い掛けると、母は『それ見たことか』と父に非難の目を向けた。その視線から逃れながらも、父は口ごもりながら言葉少なに言う。

「……ホグワーツ始まって以来と言われた程の秀才だ。……そして、誰よりも深く悪の道に落ちた——と言われている」

「……ふうん?」

歯切れが悪い父は、珍しい。気にはなつたけど、あまり触れたくない話題のようだし、下手に突つつくのも気が引ける。ぼくには別段関係のない話だろうし、まあ構わないだろう。

「そうだ。秋が初めて魔力を現したのは、たった三つの時だったんだ。あの時は酷かったな……」

「家が半壊したよね」

「半かっ……!?!」

思わず口をあぐりと開けた。そんな平然と言うことかな、それ!?

両親は二人、懐かしそうに笑い合っている。

「あの後始末は大変だった、うん」

「だから、お母さんたちは秋の魔力を封じたんだよー。危なっかしすぎるからね。あ、秋も魔法はこの家の中でしか使っちゃダメだからね。お友達に怪我させちゃうかもしれないから、くれぐれも慎重に扱うんだよ」

「う、うん……」

それは、確かに。少し脱力したぼくに、両親は微笑むとぼくの頭に手を伸ばした。

その指先が触れたところで、



「……………あ、」

ぼくは目が覚めた。

ぱつと勢いよく上半身を起こすと、辺りを見回した。そこが見慣れた物置部屋で、隣ではハリーが静かな寝息を立てている。物置部屋には窓がないため、外が明るいのかは判らないが、時計はまだ四時を指し示していた。それらを確かめ、嘆息する。

「……………ゆ、めか……そうだよな」

震える指で前髪を乱暴に掻き上げると、大きく深呼吸をした。

「……………」

頭の中が、夢と現実でごっちゃになっている。その感覚が、少し気持ち悪い。

「お腹、空いたなあ……」

ハリーが動物園で、ヘビのガラスケースを消してしまうという事件から、ちやうど今日で一週間。それはつまり、ぼくらが物置に閉じ込められて一週間が経ったことを意味する。空腹でキリキリと痛む腹を抑え、息を吐いた。一週間で一度空腹というか、色んなもののピークが訪れる。それが去れば、後は空虚にぼんやりとして、気がつけば部屋の扉が開かれているものだ。精神の限界を毎度毎度試されている、そんな気分にはさえない。

「……さあさ、見せてごらんさ……」

ぼくは、知らず知らずのうちに口ずさんでいた。

あなたの元の姿を彼に

我らが愛しい愛息子に

とうとうその時はやってきた

さあさ、思い出して

あなたの真の持ち主を

「……あほらし」

夢は、夢だ。こんなことしたって、ぼくに魔力なんてあるはずがないのだから。

現実を見ろよ、アキ・ポッター。

お前は『幣原秋』じゃないんだぜ。

それでも一抹の期待を胸に、ぼくは息を止めて辺りを見渡した。しかし当然のように、なにも変化はない。幣原秋のように、小物が砕け散ったり宙に浮いたりなんてしない、いたって静かで変わらぬ世界がそこにあつた。

「……いや、別にものを壊したいわけじゃないんだけど」

でも、少し落胆したのは否めない。

期待。そう、期待していたんだ。ぼくも『幣原秋』のように不思議な力があるんじゃないかって。

「……寝よ」

ぼすつと枕に顔を埋め、目を閉じて毛布を被る。そして、もう一度ぼくは眠りについた。



パチリと赤い火花が弾ける。

その火花は次々と数を増やして、眠る少年の上で、小さな円を描き出した。

自身の小さなご主人に、もう一度仕えるために――

第4話 交わらぬ世界

朝の光がカーテンを揺らし、目を灼く光に意識が浮上する。眩しつ、と慌てて手を翳しながら起き上がった。周囲を見回し、ああ、と息を吐く。

ぼくは元来結構な几帳面で、部屋の所定の位置に物がないと気が済まない性格だ。だから、普段からいつも部屋の中は綺麗に整理しているのだが――

「うっわぁ……」

何だろう。やっぱりここは『嵐が過ぎ去ったように』が表現として妥当かな？　なんてどうしようもないことに頭を悩ませる程度には、起きた時に広がる惨状はショッキングだった。

惨状。

本も、文房具も、服も、小物も、全てが部屋中に散乱しているこの状況。

僅かに、風が漂っている。魔力を帯びた風だ。恐らくはこの風がカーテンを揺らし、ぼくを無理矢理にも起こしたのだろう。起きている間の魔力の制御は段々と出来るようになってきたのだが、寝ている時は、となると中々上手くいかないものだ。

「ううう……父さんみたいにちよちよいつて片付けられるようになれればいいのにな……」

まだそこまでは出来ない。そもそも杖すら持っていないのだ。「今度お前の杖を選びに行こうな」と父と約束したのが、夏休みに入る少し前。ホグワーツは確か九月から始まるのだと聞くと、となるとそろそろだろうか。

パジャマから普段着に着替え、髪を手早く髪紐で括ると、よし、と気合を入れ直す。

「秋ー、朝だよー?」

ある程度部屋が片付いたかな、と言える頃合いで、階下から母の声が響いてきた。

「珍しいなあ、今日は随分と遅いねえ。どうしたの?」

「あつ、起きてるよ、大丈夫だから気にしないで！」

自分の力だというのに制御出来ない、だなんて、両親に知られるのは少し恥ずかしかった。部屋はひとまずそれなりに片付いたことだし、朝食の後でも構わないだろう。

「おはよう、父さん、母さんっ！」

居間の扉を開けると、ふわりと紅茶の香りが漂ってきた。紅茶だけではない、焼きたてのパンや、ほかほかのベーコンエッグに掛けられたケチャップ、そんな快い香りに、思わず大きく息を吸い込む。

「おはよう、秋。ほら、お前に手紙」

「手紙？」

父が差し出した手紙を受け取ると、しげしげと眺めた。褐色がかった手紙は、手触りも普通の紙とは少し違う。紫色の封蝋で封をされたそれは、どう見ても同級生からではない。宛名は流麗な英語の筆記体で書かれていて、本当にぼく宛てなのかを疑った。

封を開けたその中には、二枚の紙が入っていた。そのうちの一枚を広げると、ぼくは黙り込む。

「あつはつはやつと気付いたか。それはホグワーツからの入学案内書さ。秋、お前は九月から、父さんと母さんの母校であるホグワーツに通うんだ。どう、驚いた？」

父が『悪戯成功』とばかりの笑顔でぼくの反応を伺ってくる。しかしその期待に、ぼくは応えられそうにない。

「……あ、いや。驚いた、ことは驚いた……んだけど」

「なんだよ照れちゃって。もつと素直に驚きを表現したらどう？」

「いや、そのね。……読めないんだよ」

「……は？」

キョトンとした父の目の前に、先ほどの手紙を突きつけた。

「英文！ ホグワーツからの入学案内書……だっけ？ 何書いてあるのか判らない！ いやちよつと嫌な予感はしていたんだけど、こうしていざ証拠を突きつけられると驚くものだね、さあ父さん、ぼくに何か言い忘れたこと、あるんじゃない？」

父はしばらく手紙を眺めてから、重々しい声でぼくに告げた。

「すまない。ホグワーツはイギリスにあるんだ。言うの忘れてた」
「やつつぱりな!!」 ということは、ぼくは言葉通じない異国の地で魔法を学ぶってこと!? しかも九月一日とか、あとたった一月しかないじゃないそんな短い期間で英会話なんてマスター出来るか!!」
がくり、とぼくはその馬にへたりこんだ。と、肩に優しく手が乗せられる。顔を上げると、母が励ますような笑顔でぼくを見ていた。
「母さん……」

「大丈夫だよ、秋。お母さんはイギリス出身で、日本には結婚してから来たんだけど、今は日本語ペラペラでしょ? だから、その、ね。秋もきつと大丈夫だから! あー……直さんが秋に伝えてなかったのは、そりゃあ確かに悪いかなーって……思うけど……」
「あ、アキナだって言ってくれなかったじゃないか!」

「だってつきり伝えているもんだと思っていたんだもの!」

悲しいかな、夫婦間の相互不理解。いや、親子間でもか。がつくりと落ち込んだぼくに、母が慌ててフォローの言葉を掛ける。

「その、秋、あんまり落ち込まないで! きつとなんとかなるよ、大丈夫だって!」

「……父さん、母さん」

じろりと両親を見上げたぼくに、父と母は揃って笑みを凍らせた。ぼくは大きく息を吸う。

「ふっぎけんあつっ!!!」

その直後、近くにあったものが大小、また使う使わないに関わらずどれもこれも粉々に砕け散ったことは、言うまでもない。



目が覚めても、ぼくは起き上がることなく、今日見た夢を反芻していた。額に手を当て、薄暗い物置小屋の天井をぼんやりと見つめる。しかし、幣原秋。英語が出来ずにあと一月でイギリス行きなんて、可哀想に。苦勞することが目に見えている。出来ることならぼくが英語を教えてあげたいものだ。毎夜毎夜こんなに近くに感じているというのに、触れることも話すことも出来ないだなんて。そもそも向

こうはぼくのことを認識さえもしていないだろう。

「でも、所詮はぼくの夢だしなあ……」

幣原が苦勞したところで、その少年は実在の人物ではない。いくらリアリティがあつたとしても、それはぼくの夢でしかないのだ。

くすりと笑つて、ぼくは隣のハリーを「朝だよ」と優しく揺り起こした。



朝食の準備のためにキッチンの扉を開けると、悪臭がむわんと漂ってきた。思わず顔を顰める。食事時には決して存在してはならない臭いに、一気に食欲が減退する。この異臭の根源は何だろうとキョロキョロ辺りを見渡すぼくに、ハリーはしかめ面で、洗い場に置かれた大きなタライを指差した。灰色の液体には、汚らしい布がぷかぷかと浮かんでいる。

「これ、何？」

「お前たちの新しい制服だよ」

ペチュニアおばさんが、ハリーにも負けず劣らずのしかめ面で言う。

「そう。こんなにビショビショじゃないといけないなんて知らなかったな」

「お黙り！ ダドリーのお古をわざわざお前たちのために灰色に染めてあげているんだ。仕上がればちゃんとした制服になるよ」

果たしてそれはどうだろうなあ。ああ、数ヶ月後の未来を直視したくない。しかし制服くらい買ってよなんて口走ったら、一体何日食事抜きになるのか分かつたもんじやないので、ぼくは口を噤んだ。

いつものように朝食の準備をしていると、バーノンおじさんとダドリーがキッチンに入ってくる。ぼくの「おはようございます」と掛けた言葉を無視して、二人は悪臭に盛大に顔を顰めていた。それでも、朝ご飯は食べるらしい。よくもまあ食欲が湧くものだ、その辺りが体型維持に繋がるのかな、なんて戯言を考えながらシリアルを容器に移

していると、郵便が投げ込まれた音が玄関から聞こえた。バーノンおじさんが唸るように言う。

「ダドリーや。新聞を取っておいで」

「ハリーに取らせろよ」

「ハリー、取ってこい」

「ダドリーに取らせてよ」

「ダドリー、スメルティングズの杖でつついてやれ」

ハリーは諦めたように玄関へと向かう。その最中、ダドリーが突き出した杖を軽々と避け、あたかも偶然のようにその杖に蹴りを入れてから、キツチンの扉を開け廊下に出て行った。ハリーの苛立ちを垣間見、ぼくは虚ろに笑い声を零す。ベーコンの焼き加減を確かめ皿に移すと、食卓へと運んだ。ダドリーは待ちきれないとばかりにベーコンへ食らいつく。

「小僧、早くせんか！ 何をやつとるんだ。手紙爆弾の検査でもしとるのか？」

おじさんはフライドエッグを豪快に頬張りながら、機嫌よく笑った。今日のフライドエッグの味は上々らしい。この香りのせいでぼく自身の食欲は一切ないのが残念だ。しかし、手紙爆弾ってなんだよ、紙に液化爆液でも染み込ませているのか？ ……ハリーならやりかねないな。やること結構無茶苦茶だったりするから、あいつ。

やがて戻って来たハリーは、おじさんに手紙を二通押し付けると、真っ直ぐぼくの元へと歩いて来て、手紙を隠すように手渡した。何？

と視線で問いかけると、ハリーも首を傾げながら、今ぼくに渡した手紙と全く同じものをヒラヒラと振ってみせる。そして椅子に腰掛け、手紙の封を切った。

一体誰からだろう。ハリーから受け取った手紙をまじまじと見つめた。表面には、鮮やかなグリーンのインクでぼくの名前とこの住所、おまけに寝起きしている『物置部屋』の記述まである。気味の悪さに少しぞつとしながらも手紙を裏返すと、紫色の紋章が入った封蝋が押されていた。中央には大きく『H』の装飾文字、そしてその周りを囲むように、獅子、鷲、穴熊、蛇……。

この紋章に見覚えがある気がして、蠟を指でなぞった。紋章だけじゃない。この手紙自体に、何か既視感があるような――

思い出して、身体が震えた。

今日の夢だ。幣原秋が、父親から受け取ったホグワーツからの入学案内書。その手紙と同じもの――！

封を切るのもどかしく、中の便箋を取り出した。普通の紙より厚みがあり褐色がかっているそれは、夢で見たのと同じく二枚、入っていた。

ずっと求めていた幣原の手掛かりに、鼓動が高鳴る。

彼の手掛かりが、今まさにぼくの手の中にある。

幣原秋が読めなかった英文が、ぼくには読める――！

「マジが病気だよ。腐りかけた貝を食ったらしい……」

「パパ！　ねえ！　ハリーが何か持つてるよ！」

ダドリーの声に、はっとぼくは顔を上げた。ハリーの手紙がバーノンおじさんに引いたくられたのを見て、慌てて手紙をズボンのポケットの中に押し込む。

「それ、僕のだよ！」

「おまえに手紙なんぞ書くやつがいるか？」

バーノンおじさんはハリーにそう言ってせせら笑うと、無造作に手紙に目をやった。

バーノンおじさんの顔色が変わるのは一瞬だった。次の瞬間には、死にそうな声でペチュニアおばさんの名前を呼ぶ。すぐに駆け付けたペチュニアおばさんも、手紙に目を通すなり、これまた死にそうな呻き声を上げた。

「バーノン、どうしましょう……あなた！」

おじさんとおばさんは、二人顔を見合わせる。興味をそそられたらしいダドリーは、不機嫌そうにスメルティングズの杖でおじさんの頭を小突くと「ぼく、読みたいよ」と喚いた。ハリーも眉を寄せおじさんに詰め寄る。

「僕に読ませて。それ、僕のだよ」

「あっちへ行け！　二人ともだ」

おじさんはダドリーとハリーを一喝すると、ハツとした表情でぼくの方を見た。ぼくは思わず身体を竦める。いや、でもバーノンおじさんは、ぼくが手紙を持っていることを知らないはずだ。怯える必要はない、平然としていれば、それでいい。しかし、バーノンおじさんはツツカとぼくに近付いて、右腕を突き出した。

「お前もだ、アキ……手紙を渡せ」

「ぼく、手紙なんて持って」

「ポケットの中身を全てひっくり返せ！」

なんでバーノンおじさんに見抜かれたのだろうか？ ハリーがぼくに手紙を渡すところは見られていなかった筈なのに。

ぼくは小さく舌打ちをすると、乱暴に詰めたせいでくしゃくしゃになっっている手紙を引つ張り出した。すかさずおじさんはぼくから手紙を取り上げ、ハリーの手紙と中身の便箋の枚数が異なっていないか確認すると（無駄にスキがない）低い声で「お前も向こうへ行け」とぼくに言う。

「僕の手紙を返して！」

「ぼくが見るんだ！」

「行けといったら行け！」

なおも言い続けるハリーとダドリーを怒鳴りつけると、おじさんはぼくら三人の襟首を掴んで部屋の外に放り出し、キッチンのドアを閉めてしまった。

ダドリーとハリーによる鍵穴の争奪戦を横目で見ながら、ぼくは壁に背をつけ、今日見た夢の記憶を手練り寄せる。

あの紋章は、確か……ホグワーツ。

ホグワーツとは何か？

……ホグワーツ魔法魔術学校、イギリスに存在する、魔法を教える学校。

——いや、それはただの夢のお話だ！ 現実に魔法なんてあるはずがない。そんな学校、イギリスに十年住んでいるけど今まで一度も聞いたことがない。

じゃあなんで、紋章が夢で見たのと全く同一なんだ？

——ただの偶然の一致に決まってる。幣原秋に拘るあまり、少し似たものを、夢で見たのと同じだと思いついてしまったんだろう。

じゃああの手紙は一体何？ 誰から送られてきたもの？ どうやって、ぼくの寝ている場所まで突き止めたの？

——ぼくの仕事の依頼の手紙だったのかもしれない。学校で請け負っている内職の。基本依頼は口頭で住所は公開してないけど、住所録もあるし、調べようと思えば誰だって調べられる。切羽詰まった誰かが手紙を出したのかもしれない。夏休みにも入ったことだし。寝ている場所は、いつかぼくがどこかで話したのかもしれない。

それなら、なんでバーノンおじさんは、ぼくの手紙に気が付いたんだ？

そこで行き詰まったぼくは、はあと息を吐いた。

知っているべきものを知らないような、気持ちの悪い違和感。

頭を振って、目をぎゅつと瞑る。

ぼくは一体、何を知っているんだろう？



その夜、初めて物置におじさんがやってきた。

おじさんの図体を視認すると、ハリーは座つてたベッドから跳びはねるように立ち上がり、おじさんに詰め寄った。

「僕の手紙はどこ？ 誰からの手紙なの？」

「知らない人からだ。間違えておまえらに宛てたんだ。焼いてしまったよ」

「絶対に間違いなんかじゃない。封筒に物置って書いてあったよ」
「だまらっしやい！」

ハリーにキレたバーノンおじさんの怒鳴り声で、天井からクモが数匹降ってきた。ぼくははあとため息をつくど、内職であるレコーダーの修理を止めてぼんやりとハリーとおじさんを眺める。

おじさんは深呼吸すると、無理矢理顔に笑みを浮かべてぼくらを交互に見た。

「エー、ところで、おまえたちや……この物置だがね。おばさんとも話したんだが……おまえたちもここに住むにはちよいと大きくなりすぎたことだし……ダドリーの二つ目の部屋に移ったらいいと思うんだがね」

「どうして？」

ハリーが間髪入れずに尋ねる。またもおじさんはハリーに「質問しちやいかん！ さっさと荷物をまとめて、すぐ二階へ行くんだ！」と怒鳴った。ぼくはほつりと眩く。

「あの手紙にぼくたちの寝起きしてる場所が書いてあったからでしょ」

おじさんは、ぼくの存在に初めて気がついたかのようにぎくりと身を強張らせる。ぼくを睨みつけて、何も言わずに物置を出て行った。「荷物をまとめよ、ハリー。そんなところで突っ立ってないでさ。おじさんの気が変わる前に」

ハリーは未だ無然とした表情だったが、それでも床に腰を下ろした。荷物をリュックの中に詰めながら、溜まっていた文句を口にする。

「僕らにきた手紙なのに、勝手に焼いてしまうなんて」

「まあまあ。二階に住めるなんて、ついてないぼくらにしては信じられないくらい幸運だよ？ もっと喜ぼうよ」

「あの手紙なしで二階にいるより、手紙があつてここにいる方がよっぽど嬉しい」

それに、とハリーは眉を寄せてぼくを見た。

「アキだつて、二階に住めるつてのに、嬉しそうじゃないじゃないか」

「……まあねえ」
もう少しで、幣原秋に近付けると思った。その落胆を思い出してぼくは苦笑いをする。

「……でも、もしかしたら、今までの苛立ちとか何やらが、全部吹っ飛ばぐらいのいい知らせがあるかもよ？」

ぼくが言った言葉に、ハリーはきよとんと目を丸くした。

「アキ、君は一体、何を知ってるの？」

さあね、とぼくは悪戯っぼく微笑んだ。

第5話 ダイアゴン横丁

イギリス魔法界で一番と謳われるこの通りは、ダイアゴン横丁と呼ばれているらしい。九月一日の新学期より二週間前。ぼくらは日本から遠く離れたこの地、イギリスまで来るばるやって来た。これから二週間、ぼくらはダイアゴン横丁の入口であるパブ兼宿屋『漏れ鍋』で過ごすらしい。両親は、ぼくを見送ってから日本へ帰るのだと言う。父と母は、ここに来てから傍目にも分かるくらいに楽しそうで、ぼくよりもワクワクしているようだった。学生時代振りだー懐かしい！と、息子のぼくを放置して思い出話に花を咲かせることもしばしばだ。まあ、構わないんだけど。

一方、ぼくはと言えば――

「秋ー、せっかくのイギリスだよ？ 初めてのダイアゴン横丁だよ？
もっと楽しそうにしようよー」

「後でね。これ覚えてしまつてから。あいまいみー、ゆーゆあゆー、
ひーひずひむ、しーはーはー……」

英語に必死だった。

いや、本当。切実過ぎて、どうすればいいのかさっぱり分からない。こんな有様じゃ、授業はおろか友達とお喋りも出来ない。というかそもそも友達を作ることすら難易度が跳ね上がっている。時間を見つければ、父も親身になって（罪滅ぼしとも言いかもしれない）ぼくに色々講義してくれているのだが、何と言つていいのか――端的に言えば、父には教師の才能がないとだけ。それなら、話があつちこつちに飛んでいくことにだけ気を付ければいい母の方が、随分マシな先生だった。

「悪夢だ……」

「秋ー？ 行くよー」

「はいはいー」

半ば八つ当たり気味に大声を出す。瞬間、パチツと白い火花がぼくの周りで散つたが、気にしないことにする。少し精神が不安定になると、すぐさま魔力のコントロールを失ってしまうのがいけない。

両親に連れられ行つたダイアゴン横丁は、確かに凄く面白かつた。目玉が二個しかないことを悔やんだのは、後にも先にもこれきりだ。面白いものをつたりとも見逃したくなくつて、瞬きする間も惜しみきよろきよろと辺りを見回す。そんなぼくの手を引く両親は、やがてとある大きな建物へと辿り着いた。

「ここは？」

「グリーンゴッツと言う。イギリス魔法界唯一の銀行だ」

「かーわいい小鬼さん達がわんさかいるんだよー」

「母さんに騙されるなよ秋、お世辞にもかわいいとは言いやいぞ」

「えー？　なんでよ、すつごいかわいいじゃない！」

「……母さんのセンス、意味わかんない……」

そんなことを言い合いながらも、買物物がてら色んなものを見て回る。ホグワーツの制服に、大鍋、望遠鏡に、様々な種類の薬草に、教科書。どうしてぼくは英語が分からないのだろうか？　見るだけでもこんなに楽しいんだ、意味まで分かればもつと楽しいに違いないに。

「後は、杖か……」

父が、購入品目のリストを確かめながら呟いた。ふと遠い目をする父に、母も倣う。

「杖かあ……」

「杖だねえ……」

「……父さん母さん、どうしたの？」

母は虚ろに笑いながら、ぼくの頭を撫でた。かなり怖い。

「防御魔法を……」

「そんなんで防ぎ切れるかどうか……」

父と母が呟く言葉に、ぼくは首を傾げた。

その言葉の意味を、ぼくは間もなく知ることとなる。



年季の入った木造りの扉を押し開けると、どこか奥の方から、ちり

んちりんと鈴の音が鳴った。小さな店内は、杖が入っているのであらう細長い箱で壁中が埋め尽くされている。静まり返った店内は独特の雰囲気があつて、ぼくは思わず黙り込んだ。しかし父は、そんな空気が読まずに声を張り上げる。零れた流暢な英語に、慣れてもいいだろうに思わず目を瞠った。

「――」
不意に、存外近くで声が聞こえた。気付けば目の前に、小さな老人が立っていた。彼はにこやかな笑顔を浮かべぼくに二言三言話しかけたが、その言葉は英語なためぼくにはさっぱり分からない。しかし父が何事かを言うと、その老人は納得したように頷き、口を開いた。発された言葉が日本語であることに、思わず驚愕する。

「はじめまして、幣原秋さん。私はギャリック・オリバンダー。ここダイアゴン横丁で杖作りをしております。あなたの父君も母君も、共にこちらで杖を買われていかれました。あのお二人は有名でしてな、色んな面白い逸話がありますわい」

「それは息子には聞かせないでください、教育に悪い」

父は顔を顰めて首を振る。母に視線をやると、母は照れたように微笑んだ。さっぱり分からない。

「秋は、何の因果か魔力の量が半端じゃないんです。お覚悟の程、よろしくお願いします」

「それはそれは……分かりました。秋さん、杖腕はどちらです？」

「あ……左、です……」

オリバンダーさんは、どこからともなく巻尺を取り出すと、ぼくの肩に当て寸法を測り出す。作業をしながらも、柔らかな声で話を続けた。

「オリバンダーの杖は一本一本、強力な魔力を持ったものを芯に使っております。父君は不死鳥の尾の羽、母君は一角獣のたてがみでしたな。どれも皆それぞれに違うのじゃから、オリバンダーの杖には一つとして同じものはありません。他の魔法使いの杖を使っても決して自分の杖ほどの力を出せないわけですな。お分かりですか？」

ぼくはこっくりと頷いた。オリバンダーさんは微笑すると作業を

止め、奥に入っていくつかの箱を取り出すと脇に置く。その内の一つの蓋を開け中から杖を取り出すと、ぼくに差し出した。恐る恐る伸ばした手の指先が、杖に触れる。

瞬間、店の窓が砕け散った。幾度とない力の暴発で、これくらいの破壊には慣れてしまった(嫌な慣れだ)ぼくだが、それでも音と申し訳なさに身を縮める。

「ご、ごめんなさい……………」

「何、構いませんよ。それではこちらはどうぞでしょうか。楓の木に不死鳥の尾羽根……………」

割れた窓を気にも止めず、すぐさまオリバンダーさんはぼくに次の杖を進めてきた。本当にいいのだろうか躊躇いつつも、差し出された杖を手取る。

途端、オリバンダーさんの説明を掻き消すほどの轟音。背後の壁一面に詰まった杖の箱が、勢いよく雪崩を起こしたのだ。オリバンダーさんはちらりと振り返ったが、しかし振り返っただけだった。次の杖を差し出してくる。

「それではこちらはいかがかな？ 檜の木に……………」

この杖も触れた瞬間、置いてあった花瓶その他諸々の小物が全て粉々に砕け散った。

「……………」

「じゃ、じゃあこちらはどうかの?」

なかなかオリバンダーさん、打たれ強い。

しかし次の杖もまた、合わないようだった。爆音を立て、店の扉が豪快に吹き飛ぶ。一拍遅れて、女性の悲鳴とざわめきが聞こえてきた。両親が慌てて外の様子を伺いに行く。大丈夫だろうか、怪我していなかったらいいのだけど。

「店の扉を吹き飛ばされたのは初めてですわい……………」

オリバンダーさんは、少し呆然とした声で呟いた。首を振ると、すぐさま違う杖を用意してぼくに差し出してくる。ええ、まだやるの? この有様で? と、テーブルに積み上がった杖の箱の山を見て思う

も、しかしぼくにはどうしようもない。一刻も早く決まってくれと祈

るのみ。

椅子が粉々になりカウンタ―が砕け天井が軋みいろんなもの破片が空中でタツプダンスを踊り出す中、オリバンダーさんはまたも新たに杖を箱から取り出した。

「松の木、ドラゴンの心臓の琴線、二十七センチ。扱いくいがとても強い魔力を持つ」

「おいおいオリバンダーさん、こいつにそんな強力な杖持たせたら国が一つ滅びますよ！」

父が叫ぶ。しかし、とオリバンダーさんは追い縋った。

「この杖は強い魔力を持つ者しか持ち主と認めてくれん。この子にはちようどいいのかもしれない……」

……隣でそんな怖い話をしないでよお。

杖を差し出すオリバンダーさんの手も、微かに震えている。ぼくは息を止め、ついでに目もぎゅつと瞑って、杖にそうつと指を触れさせた。

しばらく経っても轟音も爆音も響かないことに、詰めていた息をひっそりと吐き出す。目を開けると杖を持ち上げ、握り締めた。それでも、何も起こらない。

オリバンダーさんは大きく息を吐くと、一転期待に満ち溢れた表情で「振ってみなされ」とぼくを促した。言われた通り、ぼくは杖を軽く振り上げる。

——脳裏に浮かんだのは、ぼくが生まれる前からある、とある怪獣映画。歩くだけで街は容赦なく破壊される、あれ。あの怪獣が軽く足を上げたら、きつとこうなるのだろうか。

「……あはは」

見上げれば空。イギリスはいつも天気が悪くて、それは今日も例外ではなく、雨が降る一歩手前の様相を呈していてそれが

——というか、どうするの、これ。

屋根は吹き飛び壁のレンガは崩れ、一階のここからでも二階の住居が見て取れる。誰がやらかしたのか？ と聞かれれば、満場一致でぼくのせい。イエス、実行犯。

「……懐かしい……」

母が目を細めながら呟いた。

……って懐かしいって何!? もしかして以前言っていた「秋が初めて魔力を現した時は家が半壊した」ってやつか!? ああ……それは、うん、そうだよな。こんなにとんでもないのなら、魔力封じようって発想にも至るよなあ。分かる、分かるよ。癩癩起こして泣いただけで家が半壊するとか、考えるだけでうんざりしちゃうもんねえ……。

「……弁償」

「……大丈夫じゃ」

本当かよー……ぼくもう泣きそうだよー……。

「さて、もうこれ以上壊れることはないだろうし……」

「いや、これ以上やったら秋はここを更地にしてしまいますよー!」

「それでもわしはこの子の杖を合わせるのが仕事じゃ!」

オリバンダーさんの目は本気だった。しかし、父が言うのももつともだ。ここが更地になるのもきつと時間の問題だろう。

オリバンダーさんは、今度は物凄く慎重に、杖を選びに行った。箱を手を取っては見極めるようにあちらから、こちらから眺め、ふるふると首を振っては柵に戻す。手出しが出来ないぼくはそれをぼんやりと眺め、両親はこっそりと杖を振っては店の修理を始めていた。ああ、う……申し訳ない、ぼくのせいだ。

オリバンダーさんは、ある一つの箱を手に取りしばらく立ち尽くしていた。柵が崩れた際、埋まっていたのが飛び出してきたのだ。オリバンダーさんはその箱を手にも、こちらに近付いて来ると、カウンタ―にそつとその箱を置いた。思わず、目が吸い寄せられる。オリバンダーさんがそつと埃の積もった箱を開けると、中からは一本の杖が、静かに佇んでいた。

「……こちらはどうかのお、紅葉の木に不死鳥の尾羽根、二十五センチ。気まぐれだが忠誠心は強い」

オリバンダーさんの声が、どこか遠くで響く。まだ促されていないというのに、ぼくはその杖に手を伸ばしていた。

触れた瞬間、何かが脳に繋がるような衝撃が走る。神経と杖が、

しつかりと接続されたような、なんとも言えない心地。震える指で摘み上げ、握り込むと、杖腕にじんわりとした暖かさが染み渡った。

軽く振ると、ふわりと杖先から色とりどりのシャボン玉が零れた。シャボン玉ではないのだろうか、ぼくの語彙で一番当て嵌まるのはこれだった。右手で触れても、シャボン玉のように弾けて消えたりしない。ゆつたりと落ちてゆくシャボン玉は、床に触れる間際で静かに粒子となって溶け消えた。

誰に言われなくても分かる。

これが、これこそが、ぼくの杖だ。

「……決まって、よかった……!」

オリバンダーさんはぐたりと疲れたようにその場に座り込む。ぼくの元に駆け寄ってきた母は、ぼくの頭を優しく撫でると微笑んだ。

「よかったね、秋」

ぼくも、につこり笑って頷いた。

数日後、オリバンダーさんから手紙が届いた。なんでも、戦車に攻撃されてもビクともしないよう、建物を改築したのだという。小物は全て撤去、窓は防弾ガラスにモデルチェンジ済み。

「……あっはっは」

もしかしなくても、

「秋のせいだな」「秋のせいだね」

「だよねえ!」

やっぱり修繕費払うべきですかね、父さん。



指先で、弾けた赤い火花を弄ぶ。

幣原秋の持つ不思議な力——魔力——と呼ばれるものは、なかなか面白い。

ぼく、アキ・ポッターと幣原秋。外見も年齢も性別も、名前はファーストネームのみだけれど、全く同じ。性格に関しては、向こうが純粹

過ぎるのかぼくがちょっと、ほんのちよびつとだけど歪んでいるのか、少々異なるのだが、まあこれは育った環境だろう。……考えると気分がどんよりするので、あまり深く突き詰めないようにする。

更に極めつけは、昨日来た手紙。

あの奇妙な一致で、ぼくはどうとう実験してみるまでに至ったのだ。

幣原秋と、アキ・ポッターがそこまで似ているのならば。

魔力だつて、ぼくにもあるんじゃないか？

そう——幣原秋に宿る『魔力』を確かめてみよう、と思った。

「……しかし、まあ」

本当に出来るとは思っていなかった。

ピン、と人差し指で火花を弾く。ふわりと宙に舞い上がった火花は、トイレの真つ白な天井に当たると姿を消した。

そう、現在ぼくはトイレにいる。どうしてトイレかと言われると、この家の中で誰にも（ハリーにさえも）見られず一人になれる場所が、トイレかバスルームしかなかったからだ。いやぼくもそれってどうなのよ雰囲氣的には思ったものの、しかし場所がないのだから仕方がない。ペチュニアおばさんが潔癖症だから、衛生面では問題はないんだけど、何と言うか……何と言うかさあ。

それでも、誰にも——ハリーにも見られなくなかったのだ。

それなら、幣原秋の父親が言っていた『ホグワーツ』や『ダイアゴン横丁』も——『魔法使い』だつて、現実に存在するのではないか？
今までずっとファンタジーの存在だと思っていた『魔法』が、こうして実在するのだ。どうせなら綺麗に収まって欲しいと思う。

ならば——それならば。

もしそうならば、ぼくとハリーに来たあの手紙は、ホグワーツ魔法魔術学校からの入学案内書だ。

「……………」

確かめない。あの手紙が果たしてそうなのかどうかを。なんとかして、あの手紙を読まなければいけない。

そう決意し、強く拳を握ったその時、ドアを勢いよく叩かれ、ぼく

は飛び上がった。

「早くしてくれよ！ トイレはお前の専用じゃないんだぞ！」

慌ててドアを開け、ダドリーのパンチを華麗に避けると（ちよつと掠めてヒヤリとした）、今ぼくとハリーが寝起きしている部屋に駆け込む。今思いついた考えを伝えるため、ぼくはまだ眠っているハリーを揺すり起こした。



その日の朝は、みんな黙り込んでいた。バーノンおじさんとペチュニアおばさんはしきりに顔を見合わせているし、ダドリーはぼくらに部屋を取られたことのシヨックが抜けていないようで、どこか上の空だった。駄々をいくら捏ねても、我侭が通らなかつたのは、ダドリーにとって初めての経験だっただろうから。だから、普段通り、いや普段以上に元気なのは、ぼくと、さつきぼくの夢やら何やらを聞いたハリーだけ。

誰も口を開く人がいないからか、カタン、という郵便配達の声がやけに大きく聞こえた。ハリーとぼくは顔を見合わせる。

おじさんはぼくらに郵便を触らせまいと思っているのか、ダドリーに郵便を取りに行かせた。予想していたことだけど、ちよつと落胆する。やがて玄関先から、ダドリーの大声が聞こえた。

「また来たよ！ プリベット通り四番地 一番小さい寝室 ハリー・ポッター様、それとアキ・ポッター様——」

ぱつと隣でハリーが駆け出した。弾丸のようなスピードだ、なんだあの反射神経。遅れてぼくもその後が続く。しかし、バーノンおじさんが一番早かった。

細い廊下での手紙を巡つてのバトルは、全員がダドリーのスメルティングズの杖をいやというほど食らった後（絶対取り上げてやると誓った）、バーノンおじさんが勝ちを奪い取った。ぼくらの手紙を驚づかみにすると、息を切らしながらも命令する。

「物置に……じゃない、自分の部屋に行け」

そしてダドリーをも追っ払うと、バーノンおじさんはキッチンに入って行った。



「やっぱり今日も来たね、あの手紙。アキの予想通りだ」

「だね。あとはあの手紙を、どうやって受け取るか、だけど」

物置より少し広くなった二階の部屋をぐるぐる回りながら、ハリーは何やら考えている様子だった。歩きながらも口を開く。

「やっぱり、郵便配達の人から直接受け取るのが一番確実だと思うんだ。目覚まし時計を使って、明日は六時に起きる。そしてプリベツト通りの角のところで配達を待つんだ」

「でも目覚まし時計って、そんなのあつたっけ？」

あるよ、とハリーは、ダドリーのガラクタが積み上げられている山から一つのガラクタを抜き出した。

「結構壊れてるけど」

「……あの、ハリーさん、それ『結構壊れてる』のレベル？」

ハリーの手に握られている目覚まし時計は、嵌まっていた透明なプラスチックは砕け針は全て外れ、中身の機械部分は一部露出していて、それはもうえらいことになっている。いやいや……これはごみ箱行きのレベルでしょ。

「直せるよね？」

ハリーの笑顔に、ぼくは文句を封じられた。ぐつと言葉に詰まって、その『元目覚まし時計』に目を向ける。

「直せるよね？」

「いや、ここまでの破壊は……」

「直せるよね？」

「……努力します……」

弱いぞぼく！ 切ないぞぼく！ でも原則、弟は兄には逆らえないのだ。

「大丈夫、アキがやらなきゃいけない家の仕事は、全部ぼくがやってお

くから。アキは一日中それに専念してていいよ。リミットは今日の夜までね、それじゃあスタート！」

ハリーが鼻歌混じりで部屋から出ていくのを、ぼくはじと目で見送った。大きいため息を吐くと、気を取り直してぼくは目覚まし時計の修復に没頭した。



なんとか目覚まし時計と呼べるまでそのスペックを回復させたそれは、きっかり六時にけたたましく鳴り出した。

ぼくらは慌てて飛び上がりアラームを止め、ほっと一息ついてからすぐさま服を着替えてから、おじさんおばさんを起こさないようにと電気も付けず、息も潜めてひっそりと階段を下りた。抜き足差し足忍び足で廊下を渡り、玄関にやっとの思いで辿り着いたところで——
「ウワーウワーアアアアア！」

前を歩くハリーが、いきなり大声を出して跳び上がった。ぼくはびっくりして一步下がると、身体を強張らせる。弾みで小さな火花が一つ散った。感情が高ぶったりすると魔力が飛び出すのは、ぼくも幣原秋も変わりはないようだが、それはともかくとして。

「は、ハリー!? どうしたの……」

「な、何か踏んづけた……!」

小声で怒鳴るといふ芸当をそれぞれが人知れず成し遂げていた時、廊下と玄関の電気がパチリと付いた。白色光に照らされたそこに現れたのは、寝袋に包まり目をらんらんと輝かせたおじさんの姿。ぼくたちの行動を読んで先回りしていたのか。そして、どうやらハリーが今しがた踏ん付けたものはバーノンおじさんの顔だったようだ。
……二人に合掌。

それから三十分、ぼくたちは冷たい廊下で正座をしながら、バーノンおじさんの説教を聞くこととなった。ぼくらは二人ともしんみりしよぼくれた顔をしていたが、腹の中では次の作戦をしっかりと組み立てていた。

やがておじさんは怒鳴り疲れてのどが渴いたのか、ハリーに紅茶を淹れてこいと命令する。ハリーが立ち上がりキッチンへと姿を消したのを見計らって、ぼくはバーノンおじさんに尋ねた。

「ねえ、もしかしてその手紙って、ホグワーツの入学案内書だったりする？」

どうやら当たりのようだった。直球で尋ねるのも、なかなか良いものだ。おじさんは目を見開き口髭をわなわたと震わせ、顔をさっと蒼白に変える。

「当たり前なんだ」

「なんで、貴様それを……まさか、読んだのか？」

「届いた手紙？ 読んではないよ。でも」

知ってるんだ、とぼくは言った。

「……思い出したのか？」

おじさんは内緒話をするかのように声を潜めた。え、とぼくは訳が分からず聞き返す。

「お前は……」

ちょうどその時、ハリーが紅茶片手に戻って来た。黙り込んだおじさんに、こちららも口を噤む。

「どうしたの？ アキ」

「いや、ちよつと……えつと、足が痺れて……」

誤魔化すために吐いた言葉だったが、事実だった。ずっと正座していたせいか、微かに足の指先を動かしただけで全身に走るなんとも言えない感覚。すつごく気持ち悪い。

ハリーはやれやれと言った顔をして、ぼくの両手を引っ張り立たせてくれた。それでも痺れが今の衝撃でえ……。

一人悶えていた時、郵便配達の声が聞こえた。ぼくとハリーははつと玄関のドアを見る。

カタンカタンという音が聞こえた後、バーノンおじさんの膝の上に郵便が吐き出された。

その中に、見覚えのあるホグワーツからの封筒が六通。

「僕の……」

ハリーが言い終わらないうちに、おじさんはぼくらの目の前で、封筒を粉々に破り捨てた。

おじさんがさつきぼくに言おうとしていたことは何なんだろう？と、ぼくはドリルで釘を打ち込むチュイーンという音をBGMに、狭い部屋の中をぐるぐる回りながら考えていた。おじさんは、今日会社を休んでまで、家の郵便受けを釘づけにすることに意義を見出しているようだ。

ぼくの考えていた通り、あの手紙はホグワーツからの——ホグワーツ魔法魔術学校からの入学案内書だった。

でもおじさんがあの時言った『思い出したのか』というのは、一体どういう意味なんだろう？

今まで十年ちよい……もうすぐで十一年になろうとするぼくの生涯、記憶を失ったことも、それを取り戻したことも、断言できない、ない。でもおじさんは『思い出したのか』と確かに言った。

それは何が主語だった？ ……ホグワーツのことだ。
すると、ぼくは……？

「……わけわかんなくなってきた」

半ば思考することを放棄して、床に座り込むと昨日途中になっていたオーデオの修理に取り掛かる。手を動かしながら、今日のバーノンおじさんとの話はハリーにしないぞ、と心の中で呟いた。

どうしてかは、分からないけど。

言っではいけない気がした。

その日ぼくは初めて、ずっと一緒に生まれ育ってきたハリーに隠し事をした。



金曜には、十二通もの手紙がきた。

郵便受けに入らないので、ドアの下から押し込まれたり横の隙間に差し込まれたりトイレの小窓からねじ込まれたり……なんだろう、こ

こまで来ると、絶対に読ませるといふ差出人の強い意思がひしひしと伝わってくる。

おじさんは今日もまた会社を休むと、玄関と裏口のドアの隙間という隙間に執念深く板を打ち付け、間違っても手紙がねじ込まれることがないようにした。

これで手紙は入ってこなくてはなったが、しかしこちらからもあの板を剥がさない限り出られはしない。

夏休み中のぼくらや専業主婦のペチュニアおばさんはいいとしても、バーノンおじさんは仕事をどうするつもりなんだろう？



土曜日。二十四通の手紙が卵の中に隠され届いた。むしろここまで来たら、差出人の悪意というか悪戯心というか、いやお前実は結構楽しんでんじゃないの？ という気持ちが透けて見えるような気がしなくもない。

バーノンおじさんは郵便局と牛乳店にクレームの電話を入れ、ペチュニアおばさんはミキサーで手紙を粉々にした。

「おまえらなんか、こんなメチャメチャ話したがっているのはいったい誰なんだ？」

ダドリーが驚いてぼくとハリーに問い掛けた。少なくとも普通の神経を持つてる奴じゃないことは確かだね、とぼくは肩を竦める。

「僕らだってそれが誰なのか知りたいよ」

ハリーは苛立ち混じりに答えた。

第6話 新たな世界への予感

九月一日。日本では、入学式や始業式などは四月に行われるのが通例だが、ここイギリス——というよりも、欧米諸国は九月始まりが基本らしい。

イギリスに来る前に、小学校の友人とはお別れの挨拶はしてきたのだが、それでも短い人生の中、彼らと過ごした時間の割合は大きい。新しい環境に足を踏み入れることに対するドキドキワクワク、高揚感はもちろんあるけれど、それ以上に誰も知らない異国の地ということで、不安感がそれ以上に勝るのだ。おまけに言葉が通じないときた。気が滅入らない訳がない。

「秋、こつちこつち。九と四分の三番線はこつちだよー」

そんなぼくの気持ちに歯牙にもかけずに、母はどんどん先に進んで行く。カートは父が引いてくれているので荷物はないが、どうにも人が多く、小柄なぼくはすぐに人に流されてしまう。それでも頑張つて両親に追いつくと、両親は切符も確かめずに足を止め、九と四分の三番線はここだと断言した。

「はあ?」

思わずぼくの口から疑いの言葉が漏れる。ここだ、って、目の前は煉瓦で出来た壁なんですけど。というか、九と四分の三番線って何?なんで分数入ってんの?

眉を寄せ父を見上げると、父は「いや、別にお前をからかって遊んでいるわけじゃないんだよ」と、慌てたように両手を振った。うーん、怪しい。母はぼくの両手を取ると、さりげなくカートを握らせた。父に聞いても埒が明かない、そう思い母に矛先を変え、口を開きかけたその時。

「実際自分でやってみるのが一番だよ」

言うが早いのか。

あろうことか母はぼくの背中を思い切り押したのだ。ぼく一人だったら煉瓦にぶち当たる前に自力で止まっただろうが、ぼくの手には先程母に握らされたカート。慌てて思いっきり後ろに引く張るも、

加速がついたカーブは子供の体重ごとくではほとんどその速さを変えず。

気付けば目の前には煉瓦。

来たる衝撃に備えて、ぼくは身体を強張らせ、目をぎゅつと瞑り――

「……………あれ？」

しかし待てども衝撃は訪れず。恐る恐る目を開けたぼくの目に真っ先に飛び込んで来たのは、紅色の蒸気機関車。思わずぼかんと目と口を開けたぼくの肩に、ぽんと手が乗せられた。

「言った通りだろう？」

振り返ったそこには、まるで悪戯が成功したことを喜ぶような、無邪気な父の満面の笑顔。ぼくは大きく息を吐いて、肩を落とした。

「……………心臓に大変よろしくない……………」

ホームの上には『Hogwarts Express, 11 o'clock』と文字が書いてある。このくらいの英文ならばぼくにも読めるぞ。『ホグワーツ行き特急は十一時出発』って意味か。時計を確かめると、出発まではまだまだ時間がたつぷりあった。道理で、プラットホームにはまだ人が少ない訳だ。

「まずは空いてるコンパートメントを探さなきゃだね。この時間なら人もまだあまり来てないし、大丈夫でしょ」

空いているコンパートメントは、程なくして見つかった。重いトランクを押し上げていると、後ろから父がひよいと手助けをしてくれた。あんなに重いトランクを軽々と持っただなんて、ぼくも父くらいの歳になれば、出来るようになるのだろうか。

機関車――ホグワーツ特急に乗り込み、コンパートメントの中から窓を開けると、母はコンパートメントの中を覗き込み、目を輝かせてキョロキョロと見回していた。

「母さん、ホグワーツは父さんと母さんの母校なんですよ？ この蒸気機関車だってコンパートメントだって、見慣れたものなんじゃないの？」

「秋、歳月の流れというのは残酷なものだよ」

母が珍しくも真顔で断言する。う、と思わずたじろいだ。父も感慨深げな声を漏らしている。

「……外見はあんまり変わってないよな。せいぜいペンキ塗り直した程度かな」

「あ、でもほら、中身はちよつと違うみたいだよ。ほら、私たちの時はこんな上等な座席じゃなかったもん」

それからしばらく、両親はぼくが目の前にいることも忘れ「懐かしいー」だの昔語に突入しだした。会話に入れないぼくは、両親の会話をBGMに、外に身を乗り出すとプラットフォームを眺める。先ほどよりも、人は随分と増えたようだ。たくさん荷物を抱えた人やらふくろう、猫、ヒキガエルといったペットやらでごった返すプラットフォームは、物珍しくて見ているだけでも面白い。そういえば、入学案内書には『ふくろう、または猫、またはヒキガエルを持ってきてもよい』と書いてあった（正確には父に読んでもらった、だ。ぼくは英語が読めないから）。

ペットかあ……ぼくは昔から、何故だか動物に嫌われる性質で、小学校の頃に見学に行った動物園では驚くほどに切ない結果をもたらしたことがある。そんなぼくにはハナからペットなんてものには縁がないのだ……動物、好きなんだけどなあ。

ぼんやりと人を見ていたぼくは、ふと聞こえた金切り声にその方向を向いた。幼い女の子二人が、何やら言い争っている。金髪の子と赤毛の子だ。姉妹なのか友達なのか、顔立ちがほとんど似ていないので見分けが付きにくい……でも何を言っているのかさっぱり分からない。赤毛の少女の手にはカートが握られているが、金髪の少女の方は軽装だ。金髪の少女の方が年上らしいのに、ということは姉妹の片方だけが魔法使い——いや、魔女か。そうか、そういうこともあるのか。さぞかし苦労しそうだ。

やがて金髪の子は、赤毛の子に向かって何事かを吐き捨てると、赤毛の女の子に見せびらかすように両親の元へ駆けて行った。赤毛の子は、ひどく傷ついた顔をしてその場に立ち竦んでいる——

その時、ピリリリと笛が鳴った。そろそろ発車するのだ。赤毛の

女の子は、一人トボトボと汽車の方へ歩いて行く。

「あ、もうこんな時間だね。じゃあまたね、秋。クリスマス休暇に帰っておいで」

母の声に、ぼくは女の子から視線を反らした。

「分かったよ、母さん」

「大変だろうけど、頑張れ、秋。どの寮に入れられたか、手紙を書いて送ってくれ」

「手紙ってどうやって送るの？ 父さんたち、日本に戻るんでしょ？」

ふくろうでも海を渡るのは厳しいと思うけど……」

そもそも、ぼくが望んだとして、ふくろうはぼくの言うことを聞いてくれるのだろうか。しかし、大丈夫、方法はある、と父は胸を張った。ぼくは首を捻る。

「今度その方法でお手紙送るから、それを真似てくれたらいいんだよ」
汽車がゆっくりと滑り出し、両親の姿がコンパートメントの中から見えなくなる。ぼくは慌てて窓から上半身を乗り出すと、両親に向かって手を振った。父と母は、ぼくに向かってにっこりと笑うと揃って親指を立てる。『グッドラック』ってことか。

汽車が角を曲がると、二人の姿が見えなくなる。それでもまだ窓の外を眺めていると、不意に背後から声が聞こえた。ぼくは慌てて振り返る。

小柄な少年だった。肩まで黒髪を伸ばし不機嫌そうな顔でこちらを見ている。サイズの合わない大人用のコートを羽織っているため、すごく不恰好に見えた。

「……………う？」

男の子はぼくに聞き取れないくらいの早口で何かを言い、隣の席を指差す。うーん、つまり、座つてもいいかって聞いているのかな？

「あ、いいよ……………じゃなくて、OK」

「……………」

彼は小さな声で何事かモゴモゴと呟くと（多分Thank you と言ったのだろう）ぼくの向かい側に座るとすぐさま着替え始めた。多分一刻も早くその不恰好な服を脱ぎたかったのだろう。

ぼんやりとその子の着替えているところを見ていたら、何見てんだという目で睨まれた。ぼくは慌てて目を反らす。折角だし、ぼくも着替えてしまおうと上着を脱ぎ、ローブを身につけた。

……うわ、何と言うか、やっぱり『違う』ところに来たんだなあと感慨に浸っていると、先程の少年は着替え終わった途端にコンパートメントの戸を開け、すぐさま外へ出て行ってしまった。どうやらここには、荷物置き場兼着替えに来ただけらしい。

残された荷物とおざなりに畳まれた洋服を見ながら、このコートに縮ませ魔法でもかければマシになるのではないかなあとふと思う。しかし、杖を取り出しかけたところで、やっぱり止めとこうと元通りに杖を仕舞い込んだ。人のものだし、やるならその人の許可を取らないと……そしてぼくは、許可を取るのになんて言ったらいいか分からない……。

はあ、とため息をついて、ぼくは手荷物の中から英語の教材を取り出した。今日中に全て覚え込んでしまいたい。意気込んで単語をぶつぶつ唱えていたとき、ガラリとコンパートメントの扉が開いた。ぼくは顔を上げ、さっきの男の子が帰ってきたことに少し驚く。そして——ぼくは目を見開いた——さっき見かけた赤毛の女の子が、男の子の後ろに佇んでいた。

その子の手を引きながら、男の子は入って来る。男の子は女の子を自分の隣に座らせると、またもなにかしらぼくに眩き、用は済んだとばかりにそっぽを向いた。それを受けて、女の子はぼくにっこりと微笑みかけ、ぼくにいくつか言葉を発した、ような気がした。

『ごめん、ぼく、日本から来たから英語が話せないんだ』

絶対使うだろうからと念入りに覚えた例文が、口について出る。少女はへえ、と驚いたような顔をし、男の子の方も女の子ほどではないにせよ小さな反応を零した。

『じゃあ、簡単な英語なら分かる？』

『……少しは』

驚いたことに、この女の子はぼくとコミュニケーションを取ろうとしているようだ。確かに、単語を区切り一音一音はつきり発音するだ

けで、さつきまでよく分からない音でしかなかった英文も、きちんと聞き取れ理解することが出来た。感動ものだ。

ホグワーツに着くまで、ぼくら三人は拙いでも自己紹介をした。まず、ぼくが少しでもきちんと言き取れるようにはつきり発音してやるほど優しい赤毛の女の子は、リリー・エバンズ。興味なさそうなそぶりをしながらも、リリーに適切なフオローを入れる黒髪の小柄な少年は、セブルス・スネイプだと名乗った。

ぼくが理解できるまでリリーは何度も根気よく教えてくれ、おかげでまともに自己紹介が済んだ時には、窓の外が真っ黒に染まっていた。



日曜の朝、バーノンおじさんはやつれた顔で、しかし嬉しそうに朝食の席についた。

「なんで、今日はおじさんの機嫌がいいんだろ？」

「日曜は郵便の配達が休みだからじゃない？」

ハリーは落ち込んだ様子で答えながら、スクランブルエッグを作っていた。しかし内心荒れてんだらうなーってことが、乱暴に卵を掻き混ぜる後ろ姿で分かり、思わず苦笑いをする。

おじさんは、郵便が来ないという事実が大いに満足しているのだらう、パンと間違えて新聞にマーメイドを塗っていることにも気付いていないようだ。

「今日はいまいましい手紙なんぞ——」

そう言った瞬間を見計らったかのように、暖炉から手紙が何枚も何枚も降ってきた。それらは、まるで手紙自身に意思があるかのように、自由自在、縦横無尽に部屋中を飛び回る。その数に一瞬呆然と突っ立ったぼくとハリーだが、ハッと気付くと大チャンスとばかりに手紙に飛び付こうとした。しかしバーノンおじさんも負けてはおらず、「出て行け、出て行くんだ！」と叫びながら、ぼくらの腰のあたりを捕まえて廊下に放り出す。

床と接触したところを擦りながら、ぼくらが体勢を立て直していた頃、おじさんとおばさん、それにダドリーも廊下に避難してきた。

おじさんはキッチンへ続くドアを入念に閉めると、ドアに背を向け全員を見回す。

「これで決まりだ」

おじさんは平静を装おうとしていたが、弾みで口ひげを半分ほど引っこ抜いてしまった。目撃したぼくは思わず嘔き出し掛け、息を止めて身を震わせる。

「みんな、出発の準備をして五分後にここに集合だ。家を離れることにする。着替えだけ持ってきたさい。問答無用だ！」

そう言ってみんなを睨みつけたバーノンおじさんの形相は凄まじく、ぼくは笑いを堪えるのに手で口を押さえなければならなかった。

それから十分後、板を張り付けていたドアをこじ開けると、ぼくらは車に乗り込み、高速道路やら田舎道やら山の中やら、まさしく色んな場所を走り回った。

「一体どこに向かつてるんだらう？」

何度目かも分からない急カーブを切った時、ハリーがぼくに囁いた。

「さあね……おじさんにも、分かかってないのかもしれない……」

一日中走りに走った後、車は大きな町はずれの陰気なホテルの前でやっと止まった。信号以外では初めて停車したんじゃないか。車内でダドリーが泣き喚くのに閉口していたぼくは、やっと解放された、とホッと胸を撫で下ろした。

ダドリーとハリーとぼくは、三人まとめてツインベッドの部屋に放り込まれた。双子だから、という意味の分からない理由で、ハリーと二人同じベッドで眠ることを命令されたぼくらだが、それもいつものことなので気にしない。まだ身体も小さいから、大人用のベッドに二人でも苦しくはないのだし。

「ハリー、寝ないの？」

ハリーは窓辺に腰掛け、じつと下の通りを眺めている。ダドリーの高いびきを聞きながら、ぼくはハリーに問いかけた。しかしハリー

は、ぼくに生返事をするばかり。どうやら物思いに沈んでいるらしい。

諦め一人、ぼくはベッドに潜り込むと、肩までシーツを引つ張り上げた。

さて、今日は一体、どんな夢を見るのだろうか。

次の朝。ホテルの食堂で朝食を摂り終わった頃、ホテルの女主人がぼくらの元へとやってきた。困惑した表情で、一通の封筒を振りながらも口を開く。

「ごめんなさいまつし。ハリー・ポッターとアキ・ポッターという人はいなさるかね？ 今しがた、フロントにこれとおんなじもんがそれぞれ百ほど届いたがね」

ハリーとぼくは手紙を掴もうとしたが、おじさんはすかさずぼくらの手を払い退けた。

「わしが引き取る」

ぼくらの恨みがましい視線を背中に受けながら、おじさんはさつと立ち上がると、女主人に付いて食堂を出て行った。



「パパ、気が変になったんじゃない？」

おじさんは海岸近くで車を止めると、一人で姿を消してしまった。その隙に、と、ダドリーは哀れっぽくペチュニアおばさんに訴える。

「今日は月曜だ。今夜は『グレート・ハンベルト』があるんだ。テレビのある所に泊まりたいよう」

雨粒が、車の屋根を打つ音が聞こえる。雨が降り出したのだ。ぼんやりとフロントガラスを叩く雨を眺めていると、はっと何かに気付いたように、隣に座っていたハリーが身じろぎをした。どうしたの、と目で問い掛けると、ハリーはぼくの肩に頭を寄せ、ぼくの耳元に近付き囁いた。

「ぼくらの誕生日。明日だ……」

あつ、とぼくは思わず声を上げた。ぼくの声に、ペチユニアおぼさんが苛立ちを含める視線をこちらに投げ掛ける。ぼくは慌てて愛想笑いを浮かべた。その時バーノンおじさんが上機嫌で戻ってきたため、おぼさんはぼくから上手い具合に意識を移した。ホツとする。

「申し分のない場所を見つけたぞ。来るんだ。みんな降りろ！」

おじさんの号令で車から下りる。

七月だというのに、外はとても寒かった。ダドリーからのお下がり
のTシャツは、半袖のはずなのにぼくが着たら七分丈のようになって
しまう。今まで散々いまいましいと思っていたそのTシャツに、たつ
た今初めて感謝した。

おじさんは海の彼方に見える島を——島？ 岩の間違いか——指
差している。小さな掘つ建て小屋がちんまりと乗っかっている島だ。
もしかして、今夜はここで一晩を明かすのだろうか。……いや、思っ
てないよ？ 別にすげえ楽しそう！ とか思つてませんよ？

「今夜は嵐が来るぞー！」

バーノンおじさんの言葉に目を輝かせたのは、どうしてだかぼくだ
けのようだ。いや、だって楽しそうじゃないか。小さな無人島に一つ
の洋館（はさすがに無理だけど）、そして嵐。まるで殺人事件が起こり
そうな雰囲気。名探偵に会いたい。

「このご親切な方が、船を貸してくださいさることになった」

こちらによたよたとした足取りで近付いてきたよぼよぼのおじい
さんは、不気味に笑みを浮かべながら、木の葉のように浮かんでいる
ボロ船を指差した。更によし！ と、ぼくは舞台道具が増えたことに
こつそりガッツポーズをする。

そうすると、次の日の朝はきつと、起きたら誰かが殺されていて、
きやー！ と生き残った人たちは我先に船置き場まで走つていくの
だ。しかし、船は前日の嵐で流されてしまつていた、という、まさし
く最高のシチュエーションが堪能出来る、ということだ。その場合、
死体となっているのはぼくらの中の誰かなのでは？ というツッコ
ミには耳を貸したくはない。

「……アキ、もう皆、先に行っちゃったんだけど」

「うあー！」

気付けば辺りにはハリー一人。おじさんたちはもう、随分と遠くまで行ってしまっている。少し妄想の中に潜り込み過ぎたようだ。

「ぼく、誕生日にこんなレアな経験出来て嬉しいよ……」

みんなに追いつくよう小走りで前を行くハリーに、ぼくは幸せ一杯な表情で呟いた。ハリーは一瞬信じられないものを聞いたとばかりに目を見開くと、頬を引き攣らせながら言う。

「……アキのセンスは、十年間ずっと一緒にいたぼくにも理解出来ない……！」

「えっ、ぼく、そんな変なこと言った？」

「何と言うか……ははは」

ハリーは力なく笑いながら、ぼくから顔を背けた。

「食料は手に入れた。一同、乗船！」

船の中は、さすがに凍えそうなほどの寒さだった。それには閉口したが、しかし寒さ以外は楽しい人生初の船旅であった。しかし、ここでも目を輝かせているのはぼくだけのようなのだ。皆は寒さで辺りを見る余裕もないらしい。勿論、ぼくも凄く寒い。寒いのも暑いのも苦手なのだ。ハリーに後ろから抱きつき、暖を取る。その際ハリーから上がった声には、聞こえない振りをした。温もりにはあ、と息を吐く。ハリーはこちらを振り返ったが、何も言わずにぼくの好きにさせてくれた。

船から降りると、広がる光景に目を瞠った。

「あれが小屋……かあ……」

嵐でも来たら屋根吹っ飛んでいくんじゃない？ と訝ってしまうほどのボロ家だ。近くへ行けば行くほど、そのオンボロさに自然とため息が零れる。

中は、外見通りというか、かなり酷かった。どこにいても隙間風は吹いてくるし、暖炉は湿っている。寒がりのぼくとしては、結構きつい。どうして七月で寒さに震えなければならぬのだろう。

バーノンおじさんが用意した食料（ポテトチップス一人一袋、バナ

ナ五本)を無言で食べる。おじさんはポテトチップスの袋に火を付けようとしたが、燻ってチリチリと縮んだだけだった。それでもぼくは、小さな暖かさを求めて暖炉の前に陣取った。

「今ならあの手紙が役立つかもしれないな。え？」

おじさんが楽しそうに笑う。ぼくは大きく頷いた。どうせ読めない手紙なら、煮るなり焼くなり好きにして構わないし、むしろ暖炉の炎となってくれた方が、今のぼくには嬉しい。それでもハリーは、不満げに眉を寄せた。気持ちは分からないでもないけど、寒さには耐え切れないんだよ、ごめんねハリー。

夜になると、嵐は今まで以上にひどく、その威力を増してきた。おじさんとおばさんはダドリーのためにソファの上にベッドを作り上げると、自分たちは奥の部屋のベッドに収まってしまふ。一方ぼくらといえば、せいぜい床の柔らかさかそうなところで、薄くボロい毛布一枚に苦勞して二人潜り込み、お互いの体温でどうにかして暖まろうと四苦八苦するという。なんだこの格差。

「寒いね……」

「そうだね……」

あまりの寒さに眠れるわけもなく、ぼくらは誰も起こさないくらいの囁き声で、他愛のない話をし合った。

「あと十分で、僕らの十一歳の誕生日だ」

ハリーが、蛍光塗料で針が光るダドリーの腕時計を見つつ言った。「去年の誕生日のプレゼントは何だったっけ？」

「僕、コートを掛けるハンガーとおじさんのお古の靴下だったよ」

「ハンガーはまだ使ってるけど、おじさんの靴下は使い道ないよね？もしかして履いた？」

「まさか。アキへのプレゼントは確か、ヘアゴム一個だったっけ？」

「そう。あの時はよし勝った！ って思ったなあ」
「どうして？」

「だって、ぼくにヘアゴムをくれたってことは、この髪を認めてくれたってことですよ？」

まあヘアゴムは使っていないけどね、と言いながら、ぼくは笑って髪

を解いた。黒髪が肩に流れる感触を感じる。

「髪、長くなったね」

「でしょ?」

「でも、どうしてそんなに長くするのにこだわるの?」

「……、願掛け、かな?」

「願掛け?」

「そう。幣原秋に近づけますようにって」

理想なんだね、とハリーは呟いた。そう、とぼくは頷いて、ちらりとダドリーの腕時計を見る。

——あと五分。

「……ねえ、何か今、外で軋まなかった?」

ハリーが少し怯えた声で囁いた。ぼくは耳を澄ませる。

「屋根が落ちてくるのかも」

「もしかして、そっちの方が暖かかったりしてね」

ぼくはふふつと笑った。

「……ねえ、バースデーケーキ、作ろ」

「え? でも、どうやって?」

きよとんとするハリーに、ぼくは指で地面の砂に大きく楕円を描いた。納得したようにハリーは頷くと、文字の部分を書き始める。その間に、ぼくはケーキの土台を描いた。

最後に十一本の蠟燭を描いたところで、ダドリーの腕時計がピピピと鳴り、時刻が変わったことを——ぼくらの誕生日が来たことを知らせてくれた。ぼくらは顔を見合わせて笑うと、声を揃えて言う。

「ハッピーバースデー、ハリー、アキ」

軽く手を合わせた。

「今年の抱負は?」

「今よりいい生活を送る」

「そんなのすぐ叶うさ」

「アキは?」

「幣原秋の手がかりを見つける」

そんなのあるの? とハリーが怪訝そうに尋ねた。さあね、とぼく

が返した次の瞬間――

ドーンツと大きな音に、小屋中が震えた。

ぼくとハリーは一瞬で飛び起きる。その音の発信源であるドアを見つめ、身構えた。

誰かが、ドアをノックしている。

第7話 表裏一体の希望と絶望

汽車から下りると、あつという間に喧騒に包まれた。全て英語で、何を言っているのかさっぱり理解できない。本当はきちんと意味を伴っているはずのそれらは、ぼくの耳にはただのやかましい『ノイズ』としか認識されない。どうすればいいのか立ち竦んだぼくの腕を、リリーは強く引つ張ると『一年生はこっちよ！』と教えて、連れて行ってくれた。元来面倒見が良い子なんだろうなあ。リリーがいてくれて、本当にありがたい。

ボートに乗せられ湖を渡り、そしてようやく見えてきた、お城のようなああの建物が――

「ホグワーツ……」

隣に座っていたセブルスが、ちらりとこちらを見ては目を逸らす。日本語発音で悪かったな！

ボートを下りると、石段を登り、正面玄関のような場所に出た。巨大な檜の扉をくぐり抜けた先、玄関ホールには松明が辺りを照らし出している。雰囲気満点だ。

ぼくたちは、一つの大きな部屋で待たされた。先導していた先生が去った途端、ざわざわと騒がしい話し声が広がる。何人かは不安そうな顔つきだ。リリーも心細げな顔で周囲を見回していて、これから一体何が始まるのだろうか、とぼくは首を捻った。

やがて先生が再び現れると、ぼくらを引き連れ歩き出す。目の前にあつた大きな扉が開かれ――

煌びやかな大広間が現れた。

四つの細長いテーブルには、生徒がずらりと着席してこちらを見ている。柔らかなオレンジの光を点した蝋燭は、数多く頭上に浮いている。本来天井があるべき場所には空が見える。父の書斎の天井と同じだ。

先生は一年生を一行に並ばせる。顔を上げると、そこには顔、顔、顔……目眩がしてきて、ぼくは軽く頭を押さえた。

先生は、一年生の前に四本足の椅子を置く。そしてその上に、いか

にも魔法使い！　って感じの古いとんがり帽子をそつと載せた。すると、帽子のつばの破れ目が動き、帽子が歌い出す。声帯がないのに歌えるのは、ここがやつぱり魔法界だからだろうか。何を歌っていたのかさっぱり理解出来なかったけれど、ひとまず皆に倣って拍手をした。

『……今から、何をやるの？』

『帽子を被るの。それで自分が入る寮が決まるのよ』

リリーに尋ねると、分かりやすい言葉が返ってきた。この子は本当に親切だなあ。

先生が、新入生の名前をひとりひとり呼び始めた。呼ばれた子は前に進み出ると、促されるままに椅子に腰掛ける。先生はその子の頭に帽子を被せ掛けた。帽子はしばらくして、つばの裂け目から寮の名前を叫ぶ。へえ、一体どんな仕組みになっているのだろうか。

『エバンズ・リリー！』

名前が呼ばれ、リリーはビクリと大きく肩を震わせた。ぎくしゃくとした足取りで前に進み出ると、椅子に座る。その頭に帽子が乗せられた瞬間、すぐさま帽子は『グリフィンドール！』と叫んだ。

ふと、隣から小さなうめき声が聞こえた。顔を向けると、リリーの組み分けを見ながら、セブルスが眉間に深々と皺を刻んでいる。どうしたのだろうか。

『幣原・秋！』

とそこで、急にぼくの名前が呼ばれた。ドキリと大きく心臓が跳ねる。ぼくの様子を見て、セブルスは大きなため息を吐くと、何も言わずにぼくの背中を軽く叩いた。行ってこい、つてことか。セブルスに向かつて頷くと、椅子がある方向へと歩く。緊張ゆえか、地面はなんだかふわふわと感じられた。椅子に座ると、帽子がズボツと首まで落ちて、視界が一瞬で闇に染まる。どんだけでつかいんだ、この帽子。「ほうほう、君は日本人なのじゃな？」

とその時、頭の中で突然声が鳴り響いた。ぼくはドキツとして小さく声を漏らす。日本語、だった。

「珍しいことに……おっと、なんで日本語？　と思っておるな。これ

はの、わしがおぬしの脳に直接働きかけて、意志がそのままおぬしに伝わっているからじゃ。だから言語の壁など必要ない」

「ふうん……」

なんかちよつとずるい、なんて、現在語学の壁に全力でぶち当たっているぼくなんかは思うのだ。

「はてはて、これはどうしようかの……勇敢でもあり、頭も良く優しく、そして目的のためならどんな手段でも厭わない……ふーむ……」
ちよ、ちよつと褒めすぎでしょ。悪い気はしないけど、少し恥ずかしい。

「どうしようかの……レイブンクローカスリザリンか……おや？ おぬしは『組み分けなんぞどうでもいい』と思っておるようじゃ。なんと、なんと。そこまでの溢れる才気を持ちながら、才能の尖りを収める術を知らんとは、なんともまあ勿体無いことよの……」

帽子が何を言っているのか、その意味はぼくにはよく判らなかつたが、それでも『どうでもいい』と思っっているのは本当だった。父は、ぼくが入りそうな寮に心当たりがある口ぶりだったが、長本人たるぼくはさっぱりだった。正直な本音を、帽子に対して口にする。

「どこに入ったところで、大した違いがあるとは思えませんから。ぼくは英語がまだまだ未熟だし、勉強を静かに出来る環境が好ましいな、とは思います」

「……なるほど。その要望ならば……この判断が吉と出るか凶と出るかはさておき——レイブンクロー！」

途端、一つのテーブルから盛大な拍手が鳴り響いた。慌てて立ち上がると、帽子を脱ぎ先生に手渡す。顔を上げて新入生の列を見た時、セブルスと目が合った。不機嫌そうに眉を寄せている。

一体どうしてなのだろう。リリーがグリフィンドールに組み分けされた瞬間も、同じような表情をしていた。セブルスが望む結果ではなかったのだろうか。

セブルスは、ぼくにどの寮を望んでいたのだろうか？

ぼくはセブルスから目を逸らすと、先ほど拍手が鳴ったテーブルへと駆けて行った。上級生らしい人が、ぼくのために席を空けてくれ

る。軽く頭を下げ、そこに腰を下ろした。

「スネイプ・セブルス！」

セブルスの名前に、ぼくは壇上を見た。セブルスの頭に、帽子が乗る。ものの数秒もかからず、組み分け帽子は「スリザリン！」と叫んだ。隣のテーブルから、拍手が巻き起こる。ぼくも小さく手を叩きながら、少しだけ落胆した。セブルスもリリーも、みんな別々の寮になっちゃった。

もし、ぼくが帽子に「リリーと同じグリフィンボールに入りたい」と望めば、帽子はその望みを叶えてくれたのだろうか——そんなの今更考えたって仕方のないことだ。

組み分けが終わると、真ん中の豪華な椅子に座っていた先生がパツと立ち上がった。手を打ち鳴らすと、ざわざわしていた大広間はすぐさま、水を打ったようにしんと静まり返る。長く白いヒゲに長い白髪、半月メガネのおじいさんだ。校長先生だろうか、状況的に考えると。先生は笑顔で二言三言口にする、微笑みを湛えて再び椅子に腰掛けた。

瞬間漂った美味しそうな香りに、顔をテーブルへと向ける。瞬間、ぼくは目を瞠った。一体どうしてだか、さっきまで空だったテーブルの上には、ずらりと豪華な料理がところ狭しと並んでいた。啞然として皿を見つめるも、在學生は平然と、むしろぼくら新入生の反応を面白そうに伺いながら、食事を自らの皿に取り分けている。

緊張で空腹は感じなかったが、それでも皆が食べているのだから、ぼくも何かを食べないと不自然だ。そう思っ、手を合わせるとひとり「いただきます」と呟く。

「？」

その時、隣の席の上級生らしき男子生徒が、ぼくに何事かを話し掛けてきた。しかし、あまりにも話すスピードが早く、周囲の喧騒も相まって、何を言っているのかさっぱり聞き取れない。曖昧に笑みを浮かべると、失望したかのように顔を背けられ、今度はぼくと反対側の子に話し掛けた。

ぼくは黙って食事を皿へと取り分ける。

——分かっていたはずじゃないか？
心の中で呟いた。

——覚悟していたはずじゃないか？

英語が話せないということが、一体どんな衣身を持つのかくらい。分かっていた。リリーとセブルスが、ただ皆よりも優し過ぎた、ただそれだけ。

じきに、きつとすぐに慣れる。

だから——落ち込むな、幣原秋。

これが、現実だ。

何故だろう。口に入れた料理は、どれもご馳走のはずなのに、全然味がしなかった。



食事と先生の（ぼくにはさっぱり分からない）お話が終わった後、レイブンクローの上級生に従って、いくつもの階段や廊下を通り、レイブンクロー寮へと辿り着いた。道筋はとても複雑で、きちんと覚えておけるのが凄く不安だ。おまけに動く階段……そう、階段が動くのだ！廊下も動いたり消えたりしたらどうするよ？ぼくはもう覚えられない自信が全くない。

螺旋階段の上で、先頭を歩いてきた上級生が立ち止まった。踊り場よりも少し広いところだ。彼の目の前には、取っ手も鍵穴もない古めかしい木の扉で、ドアノッカーがぽつんと一つ付いているだけだ。

今から、一体何が始まるのだろう。ざわざわとした話し声が瞬時に止み、特に一年生は彼の一举一動を漏らさぬよう息を潜め、目を凝らした。

彼が一回ノックすると、何処かから声が——ぼくにはそのドアノッカーから聞こえたように思ったのだが——した。その言葉に、上級生の先輩は少し考え込み、やがて一つのフレーズを唱える。途端に、扉がパツと開いた。一体今、目の前で何があったのか、さっぱり分からない。あつという間にお先真っ暗だ。小さくため息を付きながらも、

人の流れに従って中へと入る。

青を基調とした、広い円形の部屋だった。カーテンも絨毯も、何もかもが青い。上級生のネクタイやローブの裏地も青ということから察するに、青がこの寮のシンボルカラーなのだろう。たくさんの机と肘掛け椅子が整然と並んでいて、いかにも勉強しやすそうな環境が整っている。壁にはずらりと本棚が並んでいて、どの棚にもぎっしりと本が詰め込まれていた。

上級生の指示により、一年生は一列に並ばせられる。ついで、寮のシンボルカラーが入った制服やネクタイ、その他小物がそれぞれに手渡される。それらが終わった後、上級生が二言三言何か話すと、全員が自然と男女別れて進み出した。きつとこれは寝室に向かうのだろう、慌ててぼくも男子の列に混じると、階段を上がる。

上級生が、手に持っている紙を見ながら名前を読み上げていく。呼ばれた生徒は、促されて中へと入って行った。今の階で五人が呼ばれたから、一部屋五人の部屋なのだろうか。

『幣原！ 幣原秋！』

と、少しぼうつとしていた。名前を呼ばれていることに一拍遅れて気がついて、慌てて人を掻き分け前に進んだ。上級生はぼくを見下ろすと、部屋を顎でしやくる。頭を下げたが、彼はぼくを無視して次の人の名前を読み上げた。

黙って部屋の扉を開けて中に入ると、既に中にいた子たちの視線がパツと集まった。ぼくはその視線から逃げるようにしながら、部屋をぐるりと見回した。

円い部屋に、ベッドが五つ。等間隔で設置されたそれは、なんと四本柱の天蓋付きベッドだ。群青色のビロードがカーテンのように垂れ下がり、それぞれのスペースを区切っている。

『君の場所があつちだよ』

ほんわりとした声が掛けられ、驚いて振り返った。発音が凄く綺麗だから、とても聞き取りやすい。

柔らかな笑みを湛えた男の子だった。さらさらの短い金髪に、明るい緑の瞳。

『あ……ありがとう』

笑顔を向ける。教えられた場所に近付くと、置いてあったトランクの名前を確かめた。自分の名前を確認して、もう一度『ありがとう』と彼に言う。彼は『どういたしまして』と言ってにっこりと笑った。

凄く疲れていたせいか、ぼくらの他に同室の子たちに会話はなく。パジャマに着替えて歯を磨くと、すぐさまベッドに横になる。

群青のカーテンを引くと、まるで宇宙空間の中にひとりたゆたっているような、不思議な感じがした。うつらうつらしながらも、考える。

結局、レイブンクローの人とまともな会話をしたのは——あれを会話と言えるのだが——さっきの一回、同室の子と話したきりだ。親切なあの子の名前も聞いていないことを思い出して、少し落ち込んだ。

沈んだ心を少しでも浮上させようと、ぼくはセブルスとリリーの顔を思い浮かべた。ホグワーツ特急でたまたま同じコンパートメントになった、スリザリンとグリフィンドールに組み分けされたあの二人。もしぼくがちゃんと英語を話せていたら、もっと仲良くなれたのかもしれない。

英語が、話せてさえいれば——。

頭を振った。ダメだ、楽しいことを思い浮かべないと。

その夜は、疲れているはずなのに、どうしてだかなかなか寝付けなかった。



「アキッ！」

「分かってるー！」

ハリーと共に壁まで一気に後退する。今扉を叩く『誰か』に対抗できるような道具を求め、部屋を見渡した。しかしぼくらの行動を遮るかのように再び大きな轟音が——通常ノックと言われる音よりも数倍はでかい音が——響く。その音にダドリーは飛び起きた、寝ぼけ眼を擦りながらむにやむにやと何かを言っているのを、その首根っこを

掴んで勢いよく引き摺り下ろし、ドアから少しでも距離を取らせようとする。

「誰だ。そこにいるのは。言つとくが、こつちには銃があるぞ！」

二階から降りてきたバーノンおじさんが、ライフル銃を手に叫ぶ。いつの間に、そんな準備をしていたのか。

一瞬の空白、のち、ドアが吹き飛んだ。驚きに、思わずビクリと肩を震わせる。僕がいるよと言うかのように、ハリーはぼくの手をきゅつと握った。

戸口に立っていたのは、大きな男だった。背丈は三メートルを越すだろう。長い髪ともじやもじやの髭に覆われた顔面には、キラキラとした瞳が覗いていた。

大男は身を屈めるようにして部屋に入ると、ドアをバチンと元に戻す。そして振り返ると、部屋の皆を見回した。

「お茶でも入れてくれんかね？ いやはや、ここまで来るのは骨だったぞ……」

ダドリーは、ぼくとハリーの後ろに隠れて身を縮めた。ぼくの手を握るハリーの手から、微かな震えが伝わってくる。それを隠すように、ハリーはその手に力を込めた。

「久しぶりだな、アキ。相変わらず小せえこつて。んで、こつちは……オーツ、ハリーだ！」

親しげに笑いかけられて、戸惑う。恐る恐る、大男の顔を見返した。とてもじゃないが笑顔は返せない。恐怖で顔の筋肉が強張っているようだ。大男は、ハリーを見つめながら言った。

「最後におまえさんを見た時にや、まだほんの赤ん坊だったなあ。あなた父さんそっくりだ。でも目は母さんの目だなあ」

ぼくらの両親を知っているのか。驚きに目を見開いたその時、バーノンおじさんは威勢のいい声を発した。

「今すぐお引き取りを願いたい。家宅侵入罪ですぞ！」

「黙れ、ダーズリー。腐った大すももめ」

大男はそう毒づくくと、バーノンおじさんの手からライフル銃をもぎ取り、やすやすと曲げて部屋の隅に放ってしまう。おじさんは奇妙な

かすれ声を上げた。

「なにはともあれ……ハリー、そして、まあアキもだ……お誕生日おめでとう」

コートの内ポケットを探しながら、大男はぼくらにっこりと笑いかけた。ぼくとハリーは驚いて顔を見合わせる。今まで、他人からお誕生日おめでとうなんて言葉を掛けてもらったことなんてなかった。しかし、そんな『初めて』がこんな場面で、感動するべきか怖がるべきかよく分からない。この状況に、ただただ戸惑う。どうしてぼくらの名前とか誕生日とか知ってんの、とか聞きたいことは山ほどあるけど、怖くて無理だ。

「おまえさんたちにちよいとあげたいモンがある……どつかで俺が尻に敷いちまったかもしれないが、まあ味は変わらんだろ」

大男に手渡された箱を、ハリーは震える指で開けた。隣からぼくは覗き込む。

中に入っていたのは、大きなチョコレートケーキだった。『ハリーアキ 誕生日おめでとう』と砂糖の文字が綴られている。ただただぼくらは驚いた。

「……ありがとう」

笑顔を作り見上げると「ええんだええんだ」と手を振りながらも、大男は嬉しそうにっこりした。その表情は裏表がない。

この人は、悪い人じゃない。言動は確かに荒っぽくて怖いけれど、優しい人だ。そう判断する。

「あなたは誰？」

ハリーが尋ねる。大男はクスクスと笑って答えた。

「さよう、まだ自己紹介をしとらんかった。俺はルビウス・ハグリッド。ホグワーツの鍵と領地を守る門番だ」

ホグワーツ、という単語に、ぼくは僅かに身構えた。夢の中でも、そして最近では現実でも、聞いた単語だ。

大男——ハグリッドは、ハリーとぼくに握手を求めた。おずおずと差し出したぼくらの手を、ハグリッドは纏めてブンブンと振る。

「さて、お茶にしようじゃないか。え？ 紅茶より強い液体だって

かまわんぞ。まあ、あればの話だがな」

ぼくらは揃って首を横に振った。まあそうだろうなと呟いて、ハグリッドは火の気のない暖炉の前に屈み込む。ハグリッドが立ち上がった時には、いつの間にか暖炉には暖かな炎が点っていた。

ハグリッドは我が物顔で、さつきまでダドリーが寝ていたベッドにどっかり腰を下ろすと、ポケットから様々なものを取り出し始める。ヤカンやソーセージに火掻き棒と、妙なものが次々溢れ出るのを、ぼくらはただじっと見つめていた。

琥珀色の液体が入った瓶をぐいと煽ると、ハグリッドはお茶の準備を始める。ソーセージが焼き上がり焼串から外された瞬間、バーノンおじさんが一喝した。

「ダドリー、この男のくれるものに、一切触ってはいかん」

「おまえのデブチン息子はこれ以上太らんでいい。ダーズリーとつつあん、余計な心配じゃ」

ハグリッドが低く笑いながら言う。ぼくは思わず吹き出した。見るとハリーも必死で笑いを堪えている。

ハグリッドはソーセージをぼくらに手渡した。ただ焼いただけのソーセージなのに、凄く美味しかった。久しぶりにこんな美味しいものを食べた気がする。この旅行(追ってくる手紙から逃げ回る旅とも言う)の間、普通の美味しい食事と寝心地のいいベッドが恋しかった。あの家が恋しいと思ったのは、ぼくの生涯で生まれて初めてだ。……それに、ここ寒いし。夏のくせに。

「あの……僕、まだあなたが誰だかわからないんですけど」

ハリーがおずおずと尋ねる。ハグリッドは気のいい笑顔でハリーを見た。

「ハグリッドって呼んでおくれ。みんなそう呼ぶんだ。さつき言ったように、ホグワーツの番人だ——ホグワーツのことはもちろん知つたらうな?」

「あの……、いいえ」

ハリーの言葉に、ハグリッドは笑みを凍りつかせた。その顔のまま、今度はぼくを見る。

「……………」

流石に「夢で見ました」なんて馬鹿げてる。ぼくは黙って首を振った。ハリーは小さな声でハグリッドに「ごめんなさい」と呟く。

「ごめんなさいだど？」

しかし、ハリーの言葉はハグリッドの怒りに油を注いだだけのようだ。ハグリッドがダーズリー一家を睨みつけると、彼らは薄暗いところで身を縮めた。

「ごめんなさいはこいつらのセリフだ。おまえさんらが手紙を受け取ってないのは知つとつたが、まさかホグワーツのことも知らんとは、思つてもみなかつたぞ。なんてこつた！ おまえの両親がいったどこであんなにいろんなことを学んだのか、不思議に思わなんんだのか？」

その時、一瞬頭が鋭く痛んだ。反射的にぼくは額に手を当てる。

今、何かが引つ掛かったような気がしたんだけど……………なんだろう。

「いろんなことつて？」

「いろんなことつて、だど？ ……ちよつとまつた！」

ハグリッドは仁王立ちになると、おじさんおばさんたちに詰め寄つた。ハグリッドは大きいので、その影でおじさんとおばさんの姿は覆い隠される。

「この子が……………この子ともあろうものが……………何も知らんというのか……………まつたくなんにも？」

「僕、少しなら知ってるよ。算数とか、そんなだったら」

しかし、ハグリッドは首を横に振つた。

「我々の世界のことだよ。つまり、あんたの世界だ。俺の世界。あんたの両親の世界のことだ」

「なんの世界？」

ハリーの言葉に、とうとうハグリッドはプツン切れたみたいだった。「ダーズリー！」と叫び、ハリーを熱い眼差しで見つめた。

……………というか、何故だかハグリッドは『ハリーとぼく』にじゃなく、『ハリーに』説明しているのだ。まるで、ぼくは知っていて当然、みえない、不思議な反応を。

確かに夢で見たが故の情報は——ホグワーツとか魔法使いとか、その辺りの知識は——ある。でも、所詮は夢で起きたことで、全てぼくの妄想のほずなのだ。

紅色の蒸気機関車、コンパートメント、リリーにセブルス。

そして——組分け帽子がぼくの頭の上でレイブンクローと叫ぶ夢を見たのは、ほんの少し前のこと。

「じゃが、おまえさんの父さんと母さんのことは知っとるだろうな。ご両親は有名なんだ。おまえさんも有名なんだよ」

「えっ？　僕の……僕らの……父さん母さんが有名だったなんて、本当に？」

しかし、親の顔も名前も知らないぼくらにとって、物心つく前に死んだ両親が有名だったと言われても全然ピンと来ない。ハグリッドは愕然とした瞳を、今度はぼくに向けた。

「知らんのか……おまえは、知らんのか……アキ、おまえさんは覚えてるか？」

ぼくは力無く首を振った。ハリーが知らない両親のことを、ぼくが知っている訳がない。

だってぼくらは、双子、なんだから。

「おまえらは自分が何者なのか知らんのだな？」

しばらくして、ハグリッドはぼくらにそう尋ねた。バーノンおじさんは、そこで鋭く叫ぶ。

「やめろ！　客人。今すぐやめろ！　その子に……そいつらにこれ以上何も言ってはいかん！」

ハグリッドは振り返ると、バーノンおじさんを睨みつけた。

「貴様は何も話してやらなかったんだな？　ダンブルドアがこの子のために残した手紙の中身を、一度も？　俺はあの場にいたんだ。ダンブルドアが手紙を置くのを見ていたんだぞ！　それなのに、貴様はずーっとこの子に隠していたんだな？」

「一体何を隠してたの？」

好奇心に駆られたハリーが聞く。バーノンおじさんは大きく頭を振った。何かを怖がってもいるようだだった。

「やめろ。絶対言うな！」

「二人とも勝手に喚いている。ハリー、アキ——おまえらは魔法使いだ」

小屋の中が、一瞬で静まり返った。

「僕らが何だつて？」

ハリーが信じられないように呟く。

「魔法使いだよ、今言ったとおり。しかも、訓練さえ受けりゃ、そこんじよそこらの魔法使いよりすぐくなる。なんせ、ああいう父さんと母さんの子だ。おまえは魔法使いに決まってる。そうじゃないか？」

……さて、手紙を読む時がきたようだ」

ハグリッドが、ぼくら二人にそれぞれ封筒を手渡した。裏返したそこには、ホグワーツの紋章で封がされていた。どきり、と思わず胸が高鳴る。

中をぱらりと開いた。二枚あることを確認して、ぼくはまず、そのうちの一枚を開いた。

親愛なるアキ・ポッター殿

このたびホグワーツ魔法魔術学校にめでたく入学を許可されましたこと、心よりお喜び申し上げます。教科書並びに必要な教材のリストを同封いたします。

新学期は九月一日に始まります。七月三十一日必着でふくろう便にてのお返事をお待ちしております。

敬具

副校長ミネルバ・マクゴナガル

そしてその下に、特徴のある細長い文字で小さくこう書いてあった。

レモン・キャンディー

は？ とぼくはその文字を見つめた。なんで、どうして急にレモン

キャンディー？ ひよいと覗き込んだハリーの方には書かれていなかったこれは、悪戯書きだろうか？ それとも、何か意味があるのだろうか？ さっぱり分からない。

「これどういう意味ですか？ ふくろう便を待って」
「おつとどっこい。忘れるとこだった」

ハリーとハグリッドの声に、ぼくはやつと羊皮紙から顔を上げた。ハグリッドは、コートの中からふくろうと長い羽根ペン、羊皮紙の巻き紙を取り出した。先ほどで全部だと思っていただけだが、一体どれだけ入っているのだろう、あのコートは。まさかふうろうまでが出てくるとは思ってもいなかった。

ハグリッドが羊皮紙に走り書きするのを、ぼくとハリーはさかさまから読んだ。

ダンブルドア先生、

ハリーとアキに手紙を渡しました。明日は入学に必要なものを買いに連れてゆきます。

ひどい天気です。お元気で。

ハグリッドより

そして、書いた羊皮紙をクルクルツと丸めると、ふくろうのくちばしに啜えさせた。そのまま嵐の中に放る。風に大きく吹き飛ばされかけたふくろうは、しかしやがて自力で羽ばたきを始めた。大丈夫だろうか、と一抹の不安を抱くも、まあなるようになるのだろう。

「どこまで話したかな？」

明るくハグリッドが言った時、おじさんが一歩前に進み出た。身体中に怒りを漲らせている。

「ハリーは行かせんぞ」

「おまえのようなコチコチのマグルに、この子を引き止められるもんなら、拝見しようじゃないか」

あれ、ぼくはいいのだろうか？ 先ほどもそうだけれど、どうして問題になっているのはハリーだけなんだろう？ 不思議だ。

「マグ——何て言ったの?」

「マグルだよ。連中のような魔法族ではない者をわしらはそう呼ぶ。よりによって、俺の見た中でも最悪の、極めつきの大マグルの家で育てられるなんて、まあ二人でいたからよかったものを、不運だったなあ」

「ハリーを……こいつらを引き取った時、くだらんゴチャゴチャはおしまいになるとわしらは誓った。この子らの中からそんなものは叩き出してやると誓ったんだ! 魔法使いなんて、まったく!」

ぼくは唾然としておじさんを見つめた。おじさんはぼくの視線に気付くと、ふいっと目を逸らす。ハリーも驚いたように叫んだ。

「知ってたの? おじさん、僕らがあの、ま、魔法使いだってこと、知ってたの?」

「知ってたかですって?」

ペチュニアおばさんも、我慢ならないとばかりに甲高い声を上げた。

「ああ、知ってたわ。知ってましたとも! あのしやくな妹がそうだったんだから、お前だってそうに決まってる。妹にもちようどこれと同じような手紙が来て、さっさと行っちゃった……その学校とやらへね。休みで帰ってくる時にや、ポケットはカエルの卵でいっぱいだし、コツプをねずみに変えちゃうし。私だけは、妹の本当の姿を見てたんだよ……奇人だって。ところがどうだい、父も母も、やれリリー、それリリーって、わが家に魔女がいるのが自慢だったんだ。それにハリーを引き取ってまた……」

そこでペチュニアおばさんは、ハツとぼくを見て口を閉じた。

リリーだって? 夢で見たあの子と同じ名前だ。それに、おばさんの旧姓は確か——

「リリー・エバンズ……」

思わず口からその名前が零れた。まさか、そんな、偶然がまたも? 混乱するぼくを他所に、ペチュニアおばさんもぼくから目を逸らすと捲し立てた。

「そのうち学校であのポッターに出会って、二人ともどっかへ行つて

結婚した。そしてお前が生まれたんた。ええ、ええ、知ってましたとも。お前も同じだろうってね。同じように変てこりんで、同じように……まともじゃないってね。それから妹は、自業自得で吹っ飛んじまった。おかげで私たちや、お前を押し付けられたってさー！」

吹っ飛んだ、という単語もショックだったが、ぼくはそれと同じくらい、おぼさんの言葉の中で気になるところがあった。

なんでおぼさんは、『お前らが生まれた』じゃなくて『お前が生まれた』と、ハリーだけに言ったんだ？　もしかして、ぼくとハリーは……!?!　いやいや、流石にそんなことない……そうでしょう？　……でも……。

「吹っ飛んだ？　自動車事故で死んだって言ったじゃない！」

ハリーが隣で叫んだ。おぼさんの言葉にそこまでの引っ掛かりは感じていないらしい。

「自動車事故！　自動車事故なんぞで、リリーやジェームズ・ポッターが死ぬわけがなからう。何たる屈辱！　何たる恥！　魔法界の子供は一人残らずハリーの名前を知っているというのに、ハリー・ポッターが自分のことを知らんとは！」

「……どういふこと？　何で皆が僕の名前を知ってるの？」

ハリーは、ようやくと違和感を感じたらしい。隣のぼくをちらりと見て、

「どうしてアキの名前が出て来ないの？」

とハグリッドに尋ねた。

おじさんとおぼさん、そしてハグリッドの顔から、さあつと表情が抜け落ちるのを、ぼくらは訝しげに見つめた。

「……長い話になる。それに、細かいところは、あー……」

そこでハグリッドはぼくを伺うように見て、

「……謎のままだ」

「何が起こったの？」

ぼくは勢いごんで聞いた。

ハグリッドは腰を落ち着け、長話をする姿勢に入ると、しばらくじーっと暖炉の火を見つめ、ようやく語り出した。

それは、何故か。
ぼくに、妙な物哀しさを与えるお話だった。

第8話 記憶と記録

睡眠時間はしっかり取ったはずなのに、朝目が覚めたとき、何故か身体は重たかった。寝不足、なのだろうか。なんだか初めて味わう感覚だ。

慣れぬ制服を苦勞して着ると、皆の後にくっついて昨日の大広間へと向かい、朝食を取る。昨日はそうと感じなかったのだが（という味の記憶がない）、イギリスの料理は日本に比べて味が濃い。辟易しながらも、なるべく薄味のものを選んで食べる。

ふと顔を上げると、隣のテーブルに座っていたセブルスを見つけた。少し不機嫌そうな無表情で、隣の人の話を聞いている。首を回してグリフィンドールのテーブルに着いているはずのリリーを探したのだが、人に遮られて、奥まで見ることは出来なかった。

ぼんやりとトーストをかじっていると、突然頭上で羽ばたきの音が聞こえた。驚いて見上げると、そこにはふくろうの大群。ぽかんとふくろうを見つめ、そして気付いた。包みが、ふくろうの足先に括りつけられている。魔法界では郵便はふくろうに頼むのか、と感心した。ふくろうは、それぞれの届け主のところへと一直線に飛んで行く。生徒の元に。きつと、両親からの届け物を運んでいるのだ。

ぼくは立ち上がった。隣に座っていた生徒がちらりとぼくを見て、すぐさま目を逸らす。昨日ぼくに話しかけてきた人だ、と思い出したが、そのまま大股で大広間から出た。

扉をボタンと閉めて、はあとため息をつく。壁に寄りかかると、衝動のままに髪を掻き混ぜ、そっぴや髪を結んでいたのだったということに思い至る。暗い気分で髪を解くと、手櫛で整え、再び括り直した。懐から手帳を取り出すと、開く。昨日書き留めておいた寮への道順を確かめると、誰もいない廊下を、ただ走った。



「事の起こりは、ある人からだと言える。名前は……こりゃいかん。

お前らはその名を知らん。我々の世界じゃみんな知つとるのに……」
「誰なの？」

早く先を聞きたい一心で、ハリーは尋ねた。ハグリッドは小さく首を振る。

「さて……できれば名前を口にしたくないもんだ。誰もがそうなんだが」

「どうしてなの？」

「どうもこうもみんな、未だに恐れとるんだよ。いいかな、ある魔法使いがおつてな、悪の道に走ってしまったわけだ……悪も悪、とことん悪、悪よりも悪とな。その名は……」

どこかでその話を聞いたことがある気がして、ぼくは記憶を探った。そして思い出す。

幣原秋の両親が一瞬だけ彼に漏らした、『誰よりも深く闇の道に落ちた奴』。……同一人物なのか？ そんなに何人も、深く闇に染まった奴がいてたまるか……。

「名前を書いてみたら？」

「うんにや、名前の綴りがわからん。言うぞ、それっ！ ヴォルデモート」

ハグリッドは身震いした。口に出すだけでも嫌な名前らしい。

「二度と口にさせんでくれ。そういうこつた。もう二十年も前になるが、この魔法使いは仲間を集めはじめた。何人かは仲間に入った……恐れて入った者もいたし、そいつがどんどん力をつけていたので、おこぼれにあずかろうとした者もいた。暗黒の日々だ。誰を信じていかかわからん。知らない連中とはとても友達になろうなんて考えられん……。恐ろしいことがいろいろ起こつた。我々の世界をそいつが支配するようになった。もちろん、立ち向かう者もいた……だが、みんな殺された。恐ろしや……。残された数少ない安全な場所がホグワーツだった。ダンブルドアだけは、『例のあの人』も一目置いていた。学校にだけはさすがに手出しができんかった。その時はな。そういうこつた。

おまえの……おまえらの父さん、母さんはな、おれの知つとる中で

一番優れた魔法使いと魔女だったよ。在学中は、二人ともホグワーツの首席だった！『あの人』が、何でもつと前に二人を味方に引き入れようとしなかったのか、謎じゃて……だが二人はダンブルドアと親しいし、闇の世界とは関わるはずがないと知つとつたんだろうな。

あやつは二人を説得できると思つたか……それとも邪魔者として片付けようと思つたのかもしれない。ただ分かつているのは、十年前のハロウweenに、お前さんたちが住んでいた村にあやつが現れたつてことだけだ。お前さんは一歳になったばかりだったよ。奴がお前さんたちの家にやつてきた。そして……そして……」

ハグリッドはそこで水玉模様のハンカチを取り出すと、大きな音を立てて鼻をかむ。ぼくはハリーの手を握る指に、そつと力を込めた。俯いたぼくの頭を、ハリーはそつと引き寄せ、凭れ掛からせる。

「すまん。だが、本当に悲しかった……お前さんたちの父さん母さんのようないい人はどこを探したつていやしない……そういうこつた。『あの人』は二人を殺した。そしてだ、そしてこれがまつたくの謎なんだが……奴はお前さんも、ハリーも殺そうとした。きれいさつぱりやつてしまおうというつもりだったんだらうな。もしかしたら、殺すこと自体が楽しみになつていたのかもしれない。ところが出来んかつた。お前の額の傷跡がどうしてできたか不思議に思つたことはありやせんか？ 並みの切り傷じゃない。強力な悪の呪いにかけられた時にできる傷だ。お前の父さん母さんを殺し、家までメチャメチャにした呪いが、お前にだけは効かんかつた。ハリーや、だからお前さんは有名なんだよ。あやつが目をつけた者で生き残つたのは一人もいない……お前さん以外はな。

当時最も力のあつた魔法使いや魔女が何人も殺された……マツキノン家、ボーン家、プルウエツト家……なのに、まだほんの赤ん坊のお前さんだけが生き残つた」

ハリーが眉を寄せ、黙り込む。ぼくは意を決して尋ねた。

「ポッター家がその……人に襲われた時、ぼくはどうしてたの？ 生き残つたのがハリー一人なら、ぼくは殺されてるはずだ」

「あー、アキ。お前さんはその時、違ふところにいる。んー……お前の

父さんの友人のところで、ちよつくら預かってもらってたらしい……」
ふうん、とひとまずぼくは頷いた。歯切れの悪さが気になると言っ
ちや気になるけど……。

ハグリッドは続ける。

「ダンブルドアの言いつけで、この俺が、お前さんを壊れた家から連れ
出した。この連中のところへお前さんを連れてきた……」

「バカバカしい」

突然のバーノンおじさんの声に、ぼくらは驚いて飛び上がった。話
に夢中で、おじさんの存在をすっかり忘れていた。おじさんは、ハグ
リッドをはたと睨みつける。

「いいか、よく聞け。確かにお前らは少々おかしい。だが、おそらく、
みつちり叩きなおせば治るだろう……お前らの両親の話だが、間違い
なく、妙ちくりんな変人だ。連中のようなのはいない方が、世の中が
少しはマシになったとわしは思う。——あいつらは身から出た錆、魔
法使いなんて変な仲間と交わるからだ……思ったとおり、常々ロクな
死に方はせんと思っておったわ……」

瞬間ハグリッドが立ち上がった。ピンクの傘を、まるで刀のように
バーノンおじさんに突き付け、唸る。

「それ以上一言でも言ってみろ、ダーズリー。ただじゃすまんぞ」

おじさんは黙り込んだ。「それでいいんだ」とハグリッドは傘を元
のように懐に戻す。ハリーはまだ知りたいことが山ほどあるような
顔をしながら、ハグリッドに質問をした。

「でもヴォル……あ、ごめんなさい……『あの人』はどうなったの？」
「それがわからんのだ。ハリー。消えたんだ。消滅だ。お前さんを殺
そうとしたその夜にな。だからお前はいつそう有名なんだよ。最大
の謎だ。なあ……あやつはますます強くなって……なのに、なん
で消えなきやならん？ あやつが死んだという者もいる。俺に言わ
せりや、くそくらえだ。奴に人間らしさのかけらでも残っていれば死
ぬこともあろうさ。」

まだどこかにいて、時の来るのを待っているという者もいるな。俺
はそうは思わん。奴に従っていた連中は我々の方に戻ってきた。夢

から覚めたように戻ってきた者もいる。奴が戻ってくるなら、そんなことは出来まい。

奴はまだどこかにいるか、力を失ってしまった。そう考えている者が大多数だ。もう何もできないくらい弱つてるとか。ハリーや、お前さんの何かが、あやつを降参させたからだよ。あの晩、あいつが考えでもみなかった何かが起きたんだ……俺には何かがわからんが。誰にもわからんが……しかし、お前さんの何かが奴に参ったと言わせたのだけは確かだ」

ぼくはぼかんとハリーを見つめる。ぼくが知らない間に、ハリーはとても凄いことをしていたようだ。しかしハリーは、何かの間違いだとも言うように顔を顰めた。

「ハグリッド。きつと間違いだよ。僕が魔法使いだなんて、あり得ないよ」

ハグリッドはくすくす笑うと、悪戯っぽい目つきでぼくを見た。

「魔法使いじゃないって？ えっ？ なあアキ、お前さんは知つとるよな、自分が魔法使いだつてこと」

なんでこう、誰もがぼくのことを何でもお見通しなんだろう？ 考えることも諦めてしまった。ぼくは肩を竦めると、左手の人差し指をくいと上げる。少し念じると、指先から一センチほど浮いたあたりのところ、オレンジ色の火が灯った。

「……アキ、なんでそんなこと……なんで僕に教えてくれなかったのさ……」

「ごめんね、ハリー」

慌てて謝罪する。ハグリッドは感心したように、ぼくの手元に浮かぶ火の玉を見ていた。

「いやはや……話には聞いたとつたが、しかし、魔力をこのような形で表すとはな……」

「僕、アキみたいなこと、出来ないよ。やっぱり何かの間違いなんだ。アキは魔法使いでも、僕はそうじゃない」

ハリーがしよんぼりと呟く。しかしハグリッドは、そんなハリーの不安を鼻で笑い飛ばした。

「アキみたいな魔力が半端じゃない奴など、百年に一人くらいしかおらんわ。俺もそんなこと杖なしじゃ出来ねえ。お前が怖かった時、怒った時、何も起こらなかつたか？」

ハグリッドの言葉に、ハリーは目を見開く。学校の煙突事件だとか、思い当たることが意外とたくさんあることに気付いたのかもしれない。こちらもどうしてだか分からない現象で、今まで沢山叱られたし理不尽だとは思っていたけれど、それでもぼくらがそれらの事件を引き起こしていたことは、きっと紛れもない事実なのだろう。

ハリーはハグリッドに微笑んだ。ハグリッドも、ハリーに満面の笑顔を返す。ぼくも笑みを浮かべて、指先の火を揉み消した。

「なあ？ ハリー・ポッターが魔法使いじゃないなんて、そんなことはないぞ……見ておれ、お前さんはホグワーツですごく有名になるぞ。アキもだ……ハリーばかり注目されるっつーわけじゃねえんだ、おまえさんは元々の天性の才能がある、ハリーに隠れようとしたって無駄だぞ」

ええ、と思わず顔を顰めた。目立つのは苦手なのだ。今まではハリーと共に悪目立ちしていたけれど、皆が魔法使いだったら、ぼくも埋もれることが出来ると思ったのに。

その時、すっかり空気と化していたバーノンおじさんが、ハグリッドに食ってかかった。

「行かせん、と言ったはずだぞ。こいつらはストーンウオール校に行くんだ。やがてはそれを感謝するだろう。わしは手紙を読んだぞ。準備するのはバカバカしいものばかりだ……呪文の本だの魔法の杖だの、それに……」

「二人ともおまえさんの言うストーリー……なんちゃら校に行っても、魔力は消えん。魔法使いの元に魔力は自然と集まる。わしは魔力が暴発して半壊した家を見たことがあるぞ。アキの魔法力はそれ以上だ、『例のあの人』にも匹敵する……こいつが望めば、冗談じゃなく国が一つ滅ぶ」

どうしてそんな物騒な話になるのだ。そんな、言って盛り過ぎだろう。国を滅ぼす、なんて、そんなこと願って出来るようなものでもな

いだろうに。しかしハリーは信頼のおけない瞳でぼくを見ていた。生まれてずっと一緒だったハリーに信用されていないとは、これ如何に……。

「それに、この子らが行きたいと言うなら、お前のようなコチコチのマルグに止められるものか」

ハグリッドは唸った。

「リリーとジェームズの息子、ハリー・ポッターがホグワーツに行くのを止めるだど。たわけが。ハリーとアキの名前は、生まれた時から入学名簿に載っておる。世界一の魔法使いと魔女の名門校に入るんだ。七年経てば、見違えるようになるろう。これまでと違って、同じ中間の子供たちと共に過ごすんだ。しかも、ホグワーツの歴代の校長の中で最も偉大なアルバス・ダンブルドア校長の下でな」

「まぬけのきちがいじじいが小僧らに魔法を教えるのに、わしは金なんか払わんぞ！」

バーノンおじさんは怒鳴った。その言葉は、きつと言ってはならないものだったらしい。ハグリッドは燃える瞳でバーノンおじさんを睨みつける。

「絶対に、俺の……前で……アルバス……ダンブルドアを……侮辱するな！」

低く轟く声でそう言うと、ハグリッドは傘の先端をダドリーに向けた。紫の閃光が走るとダドリーが悲鳴を上げるのは、ほぼ同時だった。尻を両手で押さえ床の上を跳びはねるダドリーの尻には、くるりと丸まった豚のしつぽ。おじさんとおばさんは叫び声を上げると、ダドリーを隣の部屋に引っ張って行き、恐る恐るハグリッドを見ては、すぐさまドアをボタンと閉めてしまった。

「癩癩を起こすんじゃないかった。じゃが、いずれにしてもうまくいかんかった。豚にしてやろうと思っただが、もともとあんまりにも豚にそっくりなんで、変えるところがなかった」

ぼくとハリーは、ハグリッドの言葉に吹き出した。しかし、ハグリッドは後悔しているようだ。ぼくはすごくいい魔法だと思ったのだが。

「ホグワーツでは今のことを誰にも言わんでくれるとありがたいんだが。俺は……その……厳密に言えば、魔法を使っちゃならんことになつとるんで。お前さんらを追いかけて、手紙を渡したりいろいろするのに、少しは使ってもいいとお許しが出た……この役目をすすんで引き受けたのも、一つにはそれがあつたからだが……」

「どうして魔法を使っちゃいけないの？」

ハリーは尋ねた。ハグリッドはバツが悪そうに頭をかく。

「ふむ、まあ——俺もホグワーツ出身で、ただ、俺は……その……実は退学処分になつたんだ。三年生の時にな、杖を真つ二つに折られた。直やアキナは弁護してくれただが無理で……だが、ダンブルドアが、俺を森の番人としてホグワーツにいられるようにしてくださいました。偉大なお方じゃ。ダンブルドアは」

聞き覚えがある名前が出て、思わず身体を震わせた。詳しく話を聞こうかと思つたが、それよりもハリーの方が早かった。

「どうして退学になつたの？」

「もう夜も遅い。明日は忙しいぞ。町へ行つて、教科書やら何やら買わんとな」

ハリーの質問を無視して、ハグリッドは大きな声を出した。どうやら触れられたくないところのようだ。ぼくも問いを口の中で燻らせたまま、黙り込む。

ハグリッドはコートをぼくらに放つて「着ておくといい」と言った。ぼくがコートを手に取ると、どこからか鳴き声が聞こえる。ハリーがこんもりと盛り上がったポケットを開けると、待つていましたと言わんばかりにヤマネが三匹、もの凄い速度で逃げ出すと、部屋の隅の暗がりへと身を眩ませた。

「動物に嫌われるのは相変わらずだね、アキ」

ハリーは苦笑いしながら呟いた。そう、何故か、ありとあらゆる動物はぼくを嫌っているのだ。しかも、異様なまでに。この前の、ダドリーの誕生日で行った動物園では、ぼくが柵へと近付いたまさにその瞬間、先ほどもで穏やかに草を食んでいた草食動物も、日向ぼっこを優雅に嗜んでいた肉食動物も、揃いも揃つてパツと跳ね起き寝ぐらへ

と駆け込んで行ってしまった。そのことに腹を立てたダドリーのパンチを脳天に喰らい、しばらくぶっ倒れていたのだが、まあこれは余談中の余談だ。

「あれだ、アキの周囲では魔力が電磁波みたくなつとるんだろ。前もそうだった……」

ハグリッドが呟く。前ってどういう意味？ と尋ねたが、返事はなかった。もう眠ってしまったらしい。

ハグリッドの特大コートに包まると（十一歳の少年二人を余裕で包み込むこのコートは、絶対普通の店じゃ売っていない）、隣にハリーの体温を感じながら、静かに目を瞑った。途端に、忘れていた睡魔が襲ってくる。抗わず、意識を暗闇に預けた。

第9話 ぼくと彼の類似点

ぼくは、レイブンクローの談話室へと続く扉の前で、ひとり途方に暮れていた。

ホグワーツに入学して、早いものでもう一週間が経つ。未だ友達と呼べる人は作れていないけれど、それでもそんな状況に大分と慣れてきていた頃だった。

一番困ったのは、当然ながら授業だ。まず、先生が何を言っているのか分からない。授業についていけないから教科書を見ようにも、その教科書だって読めない。英和辞書を常に持ち歩くも、ここは魔法界だということをお忘れじゃありませんか、だ。こんな言葉載っていない、が山のようにあつて、授業のたびに泣きそうになる。それでも泣いていても誰も助けてはくれないのだ。助けてもらったところでそれは一過性のもの。ぼくの英語力が上がらないことには、問題の根本的な解決にはならない。

どの授業も散々ではあつたけれど、その中でも一番悲惨だったのは何かと問われれば、ぼくは迷いながらも『魔法薬学』だと答えるだろう。まずもって、専門用語が多すぎる。材料の名前と、分量と、手順。全ての説明を一通り頭に叩き込んだ頃は、既に授業時間の半分以上が過ぎていて、残りの時間で急いで仕上げるという有様だった。当然、良いものが出来るはずもない。本当に、ため息しか出ない。

——そして、今も。

「どうしよう……！」

レイブンクローの寮の前で、ぼくはひとり頭を抱えていた。

レイブンクローの寮に入るためには、ドアノッカーが出すパズルを解かなければいけない。それだというのに、今ぼくの手元には辞書がない。言葉が通じないぼくに対し、同級生は辛辣だった。まあなんとするかその、この年頃にはよくあることだ。有り体に言えば、隠された。背丈も小さく、お世辞にも頑強とは言えない、意思表示が弱々しい外国人に対して、同級生にそんな高待遇は望めないだろう。九月一日にホグワーツ特急で出会った、リリーとセブルスが殊更に珍しかった

た、ただそれだけだ。こうなる覚悟は、既に出来ていた。

いや、しかし、それはそうとして。寮から締め出されると、ちよつと困る。誰かが来るまで待つしかないか、そう思っていたら、寮の内側から扉が開かれた。良かった、とホッとする。

寮から降りて来たのは、ひとりの男の子だった。さらさらの金髪に穏やかな緑の瞳の、日本人であるぼくが想像する『外国人の男の子』を具現化したような感じの子。あ、と思わず目を瞠る。ぼくにとっては凄く珍しく、見知った子だったからだ。

名前は、確か——リイフ。リイフ・フィスナー。同室の男の子。英語の発音が、まるでお手本のように凄く綺麗で、覚えていた。

普段温和な彼は、珍しく形の良い眉を寄せていた。その手には、ぼくの辞書。あ、と思わず声を上げる。彼はそのままぼくにつかつかと歩み寄ると、はい、と辞書を返してくれた。

「あ、あり……じゃなくて、Thank you」

「……It's not your fault.」

早口の英語で返され、一瞬戸惑う。リイフはぼくを、少し怒ったよいうな、どうしていいのか分からないような、なんだか悲しそうな、そんな目で見つめていた。

「……No one is to be blamed.」

迷つて、そう返した。微笑むと、リイフは驚いたように目を瞠る。この表現で果たして合っているのかは分からないけど、意味は通じるはずだ。

もう一度感謝の言葉を述べてから、寮に入る。あの優しい彼は、それ以上は何の言葉も掛けては来なかった。



今日は珍しいことに、ぼくよりもハリーの方が早起きだった。身体を揺さぶられ、瞼越しに目を灼く光で意識が覚醒する。身を起こして、現状と昨日の記憶と噛み合わせた。

床にそのまま寝ていたため、背中が痛い。でもまあこのくらいは、

物置小屋のベッドも似たようなものだったから慣れている。嵐は、夜
の間に過ぎたらしい。穏やかな波の音が聞こえている。大きな欠伸
をひとつ漏らし、ぐっと背伸びをした。

「アキ、見てよ。ふくろうだ」

ハリーは、目を輝かせて窓の外を指差した。きつとこの世紀の大発
見を、ぼくと分かち合いたかったのだろう。クチバシに新聞を啜えた
フクロウは、足の爪で窓ガラスをカンカンと叩いている。ぼくらに用
……というわけではないのだろう。きつとハグリッドだ。

ハリーは立ち上がると、サツと窓を開け放った。フクロウは滑るよ
うに飛んで部屋の中に入ると、新聞をハグリッドの上にポトリと落と
す。もう帰ってしまうのかな、と少し残念に思っていると（動物には
嫌われるけれど、ぼくとしては大好きなんだ、ただ遠くから見ている
ことしか出来ないのだけれど）、フクロウは今度は、ハグリッドのコー
トを激しく突き始めた。困ったようにハリーが追い払おうとするも、
フクロウはハリーに威嚇するような表情を見せ、ただひたすらにコー
トを襲い続ける。業を煮やしたハリーは、大声で叫んだ。

「ハグリッド、ふくろうが……」

「金を払ってやれ」

「えっ？」

「新聞配達料だよ。ポケットの中を見てくれ。……んで、五クヌート
やってくれ。小さい銅貨だ……」

ハグリッドは眠そうな口調でそれだけ言うと、ソファに顔を埋め
た。ぼくらはハグリッドのコートに備わっている、大量のポケットを
探る。中からありとあらゆるガラクタを発掘した後、ようやく銅貨が
詰まった袋を発見した。確か、これがクヌート銅貨だ。幣原の記憶で
も、同じものを支払っていた。

フクロウは、小さい革の袋が括り付けられている足を、ぼくらに突
き出す。その中に五枚の銅貨を入れると、ホウとひと鳴きしてすぐさ
まフクロウは窓から飛び立って行った。

ハグリッドは、大あくびをひとつ零すと起き上がる。

「出かけようか、ハリー、アキ。今日は忙しいぞ。ロンドンまで行っ

て、おまえさんらの入学用品を揃えんな」

ハリーはその言葉で、ハツと思いついたようだ。

「あのね……ハグリッド。僕ら、お金がないんだ。そりゃあ、全くという訳じゃないけど」

ハリーはそこでちらりとぼくに意味ありげな眼差しを送る。なんだハリー、言いたいことがあるならばつきり言いたまえよ。

「それに、昨日バーノンおじさんから聞いたでしょ？　僕らが魔法の勉強をしに行くのにはお金は出さないって」

「そんなことは心配いらん。父さん母さんがお前さんになんにも残していかなかったと思うのか？」

「でも、家が壊されて……」

「まさか！　家の中に金なんぞ置いておくものか。さあ、まずは魔法使いの銀行、グリンゴッツへ行くぞ。ソーセージをお食べ。さめてもなかなかいける。……それに、おまえさんらのバースデーケーキを一口、なんてのも悪くないね」

ぼくは笑ったが、ハリーは真面目に尋ねた。

「魔法使いの世界には銀行まであるの？」

「一つしかないがね。グリンゴッツだ。小鬼が経営してる」

「こ・お・に？」「グリンゴッツ!？」

ぼくとハリーは、同時に異なる言葉を発する。ハグリッドは一瞬目を白黒させたが、ハリーに向き直った。

「そうだ……だから、銀行強盗なんて狂気の沙汰だ、ほんに。小鬼と揉め事を起こすべからずだよ。何かを安全に仕舞っておくには、グリンゴッツが世界一安全な場所だ。多分ホグワーツ以外ではな。実は、他にもグリンゴッツに行かなきゃならん用事があったな。ダンブルドアに頼まれて、ホグワーツの仕事だ」

ハグリッドは誇らしげに胸を張った。

「ダンブルドア先生は大切な用事をいつも俺に任せてくださる。おまえさんらを迎えに来たり、グリンゴッツから何か持ってきたり……俺を信用していなさる。な？」

「あーうん、そうだね」

ぼくらは一斉に気のない声で返事をする。

「忘れ物はないかな。そんじや、出掛けるとするか」

ハグリッドは笑顔でぼくらを急ぎ立てる。結局殺人事件は起きなかったなあと思いつながら(当然か)、バーノンおじさんやペチュニアおばさん、それにダドリーWitherby尻尾(あれって結局どうなったんだろう?)を置いて、ぼくらはあの小屋を後にした。

ぼくとハリーにとっては、初めての大都会ロンドンだったのだが、ハグリッドはマグル(魔法が使えない人のことらしい)の電車や道には不慣れらしい。結局、ハグリッドの世話に追われてゆっくり辺りを見回すことも出来なかった。少し残念だ。

「ここだ。『漏れ鍋』——有名なところだ」

そう言つて、ハグリッドは立ち止まる。後ろにいたぼくとハリーは、ハグリッドの身体と戸口の隙間からその建物を覗き見た。

ここは覚えがある。幣原が、ロンドン滞在の際に泊まったところだ。これがデジャヴなのか、ぼくの記憶違いなのか、たまたまな偶然が連続で起こっただけなのか。もう妄想だろうが何でもいいや、どんと来い、な気分にはさえもなるな。考えることを止めてしまっている。

薄暗い店内では数人が談笑し合っていたが、ハグリッドが入って来たことでざわめきが止んだ。ここにいる誰もがハグリッドを知っているようで、笑いかけたり手を振ったりしている。

「大将、いつものやつかい？」

「トム、だめなんだ。ホグワーツの作中でね」

ハグリッドはハリーとぼくの肩をバシんと叩いて言った。軽く叩いたつもりなのだろうが、膝がガクンとなるほどの衝撃に一瞬息が止まる。

「なんと。こちらが……いやこの方が……」

バーテンはハリーを見て目を見開いた。いつの間にか店内は静まり返り、皆が皆ハリーを注視している。ぼくはさっとハグリッドの陰に隠れようとしたが、ハリーがぼくの袖を掴んで引き止める方が早かった。仲間がいた方が安心だということだろうか。

「やれ嬉しや！ ハリー・ポッター……何たる光栄……」

バーテンはカウンターから出てきてハリーに駆け寄ると、涙を浮かべてハリーの（ぼくの袖を掴んでない方の）手を握った。

「お帰りなさい。ポッターさん。本当にようこそお帰りです」

ハリーのぼくの袖を掴む手の力が強くなる。なぜ自分がこうも皆から視線を一身に浴びているのか、さっぱり分からないのだろう。でも助けてやれないよ、なぜならぼくもさっぱり意味分かってないから。何だかんだ言って双子だ、片方が知らないことはもう片方も知らないのだ。

……まあ、最近はずっと例外も増えてきているけれど。

やがて、店内にいた人全員がハリーに握手を求めてきた。ハリーは戸惑いながらも一人一人丁寧に応対する。ぼくはというと若干の居心地の悪さを覚えながらも身動きも取れない状態で、ハリーの横に突っ立っていた。「あんた誰？」みたいな視線が、そこかしこから無遠慮に突き刺さる。……み、見ないで！ ぼくを見ないでー！

相変わらずハリーはぼくを離してくれないし。確かに戸惑うのも分かるけどさ！ ぼくだって立ち位置に困ってるんだよ！ でも、兄には逆らえない。弟の悲しい宿命である。

ハグリッドに肩を叩かれ（肩こりが一撃で治りそうな衝撃だった）ぼくは振り返った。ハグリッドが指差す方向を見ると、ターバンを頭にぐるぐる巻きにした男性が、強張った笑顔を浮かべて立っていた。

「ハリー、アキ、クイレル先生はホグワーツの先生だよ」

「ポ、ポ、ポッター君……と、き、君は誰かね？」

彼——クイレル先生は、カクカクとロボットみたいな不自然な動きでぼくを見た。途端、信じられないものを見たというように目を見開く。

「あ、ぼく、アキ・ポッターと言って、ハリーの双子の弟です」

先生のその反応に少々の訝しさを感じながらも、ぼくは答えた。この反応は、一体何なのだろう。まるで、何かに怯えているような……。

「……幣原に似過ぎてる……子供？ いや、今彼は『ハリーの双子の弟』と言った……」

「先生？」

顔を背けて何事かぶつぶつ呟いていたクイレル先生は、ぼくの声にビクツと反応して「す、す、すまないね……ちよつ、ちよつと考え事を……し、していたものだから……」ともごもご口にした。

「クイレル先生、どんな魔法を教えていらつしやるんですか？」

ハリーはキラキラ目つきでクイレル先生に質問する。新しい環境だ、興奮して当然だろう。しかし、クイレル先生はそんなことは考えたくないというように神経質そうに「や、や、闇の魔術に対するぼ、ぼ、防衛です」とどもりながら言うと、かすかに笑った。どこかを恐れているような表情だった。

「きみにそれがひ、必要だというわけではな、ないがね。え？ ポ、ポ、ポッター君。学用品をそ、揃えにきたんだね？ わ、私も、吸血鬼の新しいほ、本をか、買いにいく、ひ、必要がある」

それだけ言うと、クイレル先生はさりげなさを装いつつもぼくをもう一度じつと眺め、マントを翻し立ち去って行った。

『漏れ鍋』から出て行き、クイレル先生の姿が見えなくなっても、ぼくは彼をじつと見つめ続けていた。

「もう行かんと……買い物がごまんとあるぞ。ハリー、アキ、おいで」
ハグリッドはぼくとハリーの手を引っ張ると、パブの中庭まで連れ出した。

「ほら、言ったとおりだろ？ お前さんは有名だつて。クイレル先生まで、お前に会った時は震えてたじゃないか……最も、あの人はいつも震えてるがな」

ハグリッドはハリーに笑いかけた。

「あの人、いつもあんなに神経質なの？」

「ああ、そうだ。哀れなものよ。秀才なんだが。本を読んで研究しとった時はよかったんだが、一年間実地に経験を積むちゆうことで休暇を取ってな……どうやら黒い森で吸血鬼に出会ったらしい。その上鬼婆といやーなことがあったらしい……それ以来じゃ、人が変わってしもた。生徒を怖がるわ、自分の教えてる科目にもビクつくわ……さてと、俺の傘はどこかな？」

クイレル先生に、ぼくは微かな違和感を覚えていた。あの、妙に不

自然な態度（しかもそれを下手に隠そうとしているらしいところがいただけない）に、なんだか引つ掛かりを感じるのだ。ま、そんなことを深く考えても仕方ない。所詮はぼくの気のせいだろう。

「三つ上がって……横に二つ……よしと。ハリー、アキ、下がってろよ」

言われた通りぼくらが離れると、ハグリッドは懐から花柄の傘を取り出した。いつ見てもなんとも言えないデザインだなあ。言わないけど。お気に入りの一品だったりしたら悪いし。

ハグリッドが傘の先で壁を三度叩くと、煉瓦が震えクネクネと動き出す。やっぱり何度見ても面白い。

あつという間に目の前には魔法使いの町、ダイアゴン横丁が広がった。

「ダイアゴン横丁へようこそ」

目の前の光景に呆然としているハリーに、ぼくとハグリッドは笑いかけた。

グリーンゴッツでお金を下ろした後（ぼくらの両親はお金持ちだったようだ）、ハグリッドの言う「ホグワーツの仕事」のために713番金庫へ行った。そこで、小さな包みをハグリッドは懐に仕舞い込む。何だろう？　と思ったが、ハグリッドはぼくらの質問には答えず、ただ片目を瞑ってみせるだけだった。内緒、ということだろうか。

次に向かったのは、マダム・マルキンの洋装店。ここで、制服を仕立ててもらえるようだ。そう広くない店内には、先客が一人いた。ぼくらと同じ年頃の少年だ。薄い金髪で、どこことなく育ちの良い雰囲気だ。薄く透ける。踏み台の上で、ローブの採寸をもらっていた。

促され、ハリーがその少年のすぐ隣の台へと上がった。ハリーとその少年の会話を、一つ隣の台から耳を澄ませる。会話を割り込もうと身を乗り出すも、いきなり視界が黒に覆われた。遅れて、感触と洋装店ということから、これがローブだと認識する。

「やっぱり大きいわね。もっと小さいの……」

そんな眩きと共に、被せられたローブはすぐさま取り払われた。めまぐるしく身体に布が当てられる様に、ハリーと少年に意識を向ける

こともできない。やっとの思いで制服の採寸が終わった頃には、少年はとつくの昔に帰った頃で、ハリーも待ちくたびれた顔をしていた。「ごめん、待たせちゃったね」

「気にすんな」

ハグリッドが、ぼくらにアイスクリームを買ってくれた。そんなものをぼくらは今まで食べたことがなかったから、人目を憚ることなく喜んでしまったわけだが……。そのアイスクリームを食べている最中、ハリーがやけに沈んでいることに気が付いた。ハグリッドが尋ねる。

「どうした?」

「なんでもないよ」

嘘だな、と直感する。何年一緒に生きてきたと思っっているのか。少しいだけ身をハリーに寄せると、そつとその手を取った。ぼくより少し大きな、それでもまだまだ小さな子どもの手に、手を重ねる。長年こうして、ぼくらは触れ合ってきた。いつも、静かに。

言いたくないことは聞かない。話してくれるのを、ひたすら待つ。ぼくら双子は、そういう関係だ。

やがてハリーは、ぽつぽつと話し始めた。マダム・マルキンの店で出会った男の子のこと。魔法使いと魔女の子以外は、ホグワーツに入学させるべきでないと考えていること――

「お前はマグルの家の子じゃない。お前が何者なのかその子がわかっていたらなあ……」

ハグリッドの言葉に、ハリーは居心地悪そうに身じろぎをした。

それからぼくらは、大鍋や望遠鏡、魔法薬学の材料、教科書を買いに、ダイアゴン横丁を何度も往復した。やがて買ったもので両手が一杯になった折、ハグリッドは言った。

「あとは杖だけだな……おお、そうだ、まだ誕生日を買ってやってなかったな」

その言葉に、ハリーはパツと顔を赤らめた。ぼくは目を見開いて啞然とハグリッドを見つめる。誕生日祝い? そんなの貰えるだなんて、考えたこともなかった。後でこのツケが来たりしないだろうか。

考えすぎ？ いやいや、ぼくとハリーはきつと不幸に憑かれているのだ。身構えてしかるべきだろう。

「そんなことしなくていいのに……」

「しなくていいのはわかっているよ。そうだ。動物をやろう。ヒキガエルはだめだ。だいぶ前から流行遅れになつちよる。笑われつちまうからな……猫、俺は猫は好かん。くしゃみが出るんでな。ふくろうを買ってやろう。子供はみんなふくろうを欲しがるもんだ。なんちゆつたつて役に立つ。郵便とかを運んでくれるし。アキは動物が無理だから、他のがいいな。何がいい？」

ぼくはにっこりと微笑んで、きつき書店で心惹かれた一冊の本をねだった。



イーロップふくろう百貨店からハリーとハグリッドが出てきた後、ぼくらはオリバンダーの店に向かっていた。ぼくは、ふくろう百貨店に入ったはいいものの。ふくろうの羽音などで騒がしかった店内が一瞬で静まり返り動物達が怯え出し、あつという間にハリーとハグリッドによつて店の外に放り出された。泣きそうだ。この『動物に問答無用で嫌われる』性質は、^{スキル}どうにかならないものなのだろうか。

ハリーの持つ大きな鳥かごの中には、純白の綺麗なふくろうが一羽。あからさまにぼくを避けはしないまでも、それでも警戒しているような目つきでぼくを見返してくる。ぼくは白ふくろうに笑いかけると、ハリーに「名前はとするの？」と尋ねた。

「まだ決めてないんだ。綺麗な名前がいいなつては考えているだけど」

ハリーは上の空で答えた。きつと次に買う魔法の杖に思いを馳せているのだろう。

幣原の時を思い出し、ぼくは心の中で苦笑した。さすがにあんなこととは起こらないだろうけど、それでも覚悟はしておくことにしよう。……何の覚悟かって？ そりゃあもちろん、建物半壊の覚悟かな。

『記憶』通りの小さな店のドアを開けると、遠くの方でチリンチリンとベルの音が聞こえた。天井まで積み上げられた杖の山に囲まれた空間は、おいそれと声を発するのも躊躇われる程の厳肅さを秘めている。……まあ、幣原はそんな空間内でガツシヤンガツシヤンしやがった訳だけでもさ……。

「いらっしやいませ」

突然の声に、ぼくらは飛び上がった。なぜこの人は、気配を感じさせずに近寄るのが得意なのだろうか？

「こんにちは」

ハリーがぎこちなく挨拶する。ぼくも慌ててハリーに倣った。

「おお、そうじゃ。そうじやとも、そうじやとも。まもなくお目にかかれると思つてましたよ、ハリー・ポッターさん、そして……アキ・ポッターさん」

はえ？ と、思わず間拔けな声が漏れた。ハリーはヴォルデモート……例のあの人を倒したから有名なのは分かるとしても、ぼくの存在は知られていないはずだ。だって、ぼくはただの子どもなんだもの。きよとんと首を傾げると、同じく首を傾げていたハリーの頭とぶつかった。ゴンという鈍い音に、同時にぐめんと呟いて頭をさすった。うう、痛い。

オリバンダーさんは何とも言えないような目でぼくらをしばらく見つめていたが、言及しないことに決めたらしい。咳ばらいを一つしてハリーに焦点を合わせると、言葉を続けた。

「ハリー・ポッターさん……お母さんと同じ目をしていなさる。あの子がここに来て、最初の杖を買っていたのがほんの昨日のことのようじゃ。あの杖は二十六センチの長さ。柳の木でできていて、振りやすい、妖精の呪文にはびつたりの杖じゃった。

お父さんの方はマホガニーの杖が気に入られてな。二十八センチのよくしなる杖じゃった。どれより力があつて変身術には最高じや。いや、父上が気に入ったと言うたが……実はもちろん、杖の方が持ち主の魔法使いを選ぶのじやよ。それで、これが例の……」

オリバンダーさんは、ハリーの前髪をかき上げると額の稲妻型の傷

痕に触れた。痛ましい目つきだった。

「悲しいことに、この傷をつけたのも、わしの店で売った杖じゃ。三十センチもあってな。イチイの木でできた強力な杖じゃ。とても強いが、間違った者の手に……そう、もしあの杖が世の中に出て、何をするのかわしが知っておればのう……」

そこでオリバンダーさんはハグリッドに気付いたようだ。沈鬱な表情を一変させた。

「ルビウス！ ルビウス・ハグリッドじゃないか！ また会えて嬉しいよ……四十一センチの櫛の木。よく曲がる。そうじゃったな」

「ああ、じいさま。そのとおりです」

「いい杖じゃった。あれは。じゃが、おまえさんが退学になった時、真つ二つに折られてしもうたのじゃったな？」

「いや……あの、折られました。はい。……でも、まだ折れた杖を持っています」

「じゃが、まさか使ってはおるまいの？」

「とんでもない」

そう言いつつ、ハグリッドは例のセンスが悪……失礼、ピンクの花柄の傘を庇うように握り締めた。……ふうむ、これはこれは。ほら、オリバンダーさんも微妙な目つきでハグリッドを見てる。隠し事が出来ないんだよなあ、ハグリッド。

「さて、それでは……アキ・ポッターさん」

「はい？」

突然名前を呼ばれ、少し驚いた。オリバンダーさんの方を振り返る。オリバンダーさんは、いつの間にか一つの杖の箱を眺めながらぼくを手招きしていた。ぼくの後を、気になったのだろうハリーも付いてくる。

「これをどうぞ。紅葉の木に不死鳥の尾羽根、二十五センチ。気まぐれだが忠誠心は強い。——間違いなくあなたの杖ですな？」

へっ？ とぼくはぼかんと口を開けた。きつと間抜け面になっているだろうことに思い至り、慌てて口を閉じる。

——紅葉の木に不死鳥の尾羽根、二十五センチ。気まぐれだが忠誠

心は強い

間違いない。幣原秋の持つ杖と、全く同じものだ。

「これが、ぼくの、ですって?」

「あなたの『過去』を知る者からの預かり物です。あなたに返すべきじゃろう。詳しくはわしの口から語ることはないのにな」

言外に質問すると言われて、ぼくはしぶしぶ喉元まで出かかっていた疑問を飲み込んだ。ハリーは『何が起こってるのかさっぱり分からない』とばかりに目を瞬かせている。

ぼくはしばらくためらってから、恐る恐る杖を掴み上げた。じんわりと痺れるような感覚が、指先に広がる。ぎゅっと手の平に握り込めば、その痺れは一瞬で脳天まで行き渡り、そして消えた。代わりに暖かさが、杖腕である左手に感じられる。

懐かしい、と、思った。

(……………え?)

そして、そんな自分自身に、呆然とした。

アキ・ポッターという自己が揺らぐような、感覚。

ぼくは頭を振り、それを忘れようと努めた。

左腕を上げ、軽く振り下ろす。途端、シャボン玉のような空気の泡が、辺りにふわりと舞い上がった。ハリーが感嘆の声を漏らす。

「……………ほう。これで一番の関門は通過した……………また店を壊されるんじゃないかと戦々恐々しとったわい……………」

ぼくらに背を向け聞き取れないほどの声で呟くオリバンダーさんに、ぼくらは怪訝な目を向けた。しかしオリバンダーさんはすぐさまこちらを向くと、「次はハリー・ポッターさんの番じゃ」と言い、採寸へと入っていく。

後には、よく分からないまま渡された、しかしやけにしっくり馴染む杖を手に、呆然と突っ立っているぼくだけが残された。

第10話 運命の恋は一目惚れより始まる

数あるホグワーツでの授業のうち、呪文学だけは得意科目だった。英語が分からなくとも、先生のお手本を真似してやってみればいいのだ。父の書齋にあった本に載っていた呪文も多く、元々覚えていた、というのも有利に働いたのかもしれない。

そして、呪文学の授業を重ねるにつれ、父の『秋は魔力の量が多い』という言葉の意味も、感覚としてだが分かるようになってきた。ぼくのように言語で苦勞していないクラスメイトが、額に汗を浮かべて必死になっている課題を、ぼくはいとも簡単にクリア出来てしまうのだ。それはもちろん、嬉しいし誇らしいことだ。それでも、同寮の子からのやつかみ混じりの視線を感じずにはいられなかった。

ただ、話し掛けられるのを待つだけなんてそんなことは言っていない。人寂しいのなら、誰かと仲良くしたいのならば、自分からまずは動かなければ。引つ込み思案なぼくにとつて、しかもここは言葉の通じない外国で。勇気を振り絞って、授業で隣の席になった子に話しかけてみるのだが、しかし皆苦笑いを浮かべると、ぼくからそくさと距離を取ってしまうのだ。

ぼくを気遣うように接してくれるのは、同室であるリィフ・フェイスナーただ一人だった。



そんな九月の第二週、事件は起こった。

昔から、本を読むことが好きだった。ぼくの家の周りには、まあ言っちゃなんだけドドがつくレベルの田舎で、本がたくさん置いてある場所と言えば、小学校の図書室が真っ先に思いつくくらい。それも、父の書齋を見せてもらってから二位に落ちた。

そんな訳で、ホグワーツの図書室を見たときには、本当に目を回したものだ。その場にへたり込むかと思った。それくらい興奮した。たとえば、本たちに書いてある文字が、ぼくが理解出来ないものだった

として——これを励みに頑張ろうと思うくらいには。

だから、時間があるとき、ぼくはよく図書館に通っていて——それは今日も、だったんだけれど。

気付けば物陰に引きずり込まれ、胸倉を掴まれていた。部屋は薄暗く、どことなく埃っぽい。そう広くはない部屋だ。物置のようで、掃除に使われる用具が雑多に置かれている。

「——a……t——」

ぼくを囲む、数人の影。何かを言っているようだが、早過ぎて聞き取れない。しかし、その表情とぼくの服を掴む指の力の入り具合から、どういう意図があるのかはさておき、なんとなくは置かれている状況を理解した。

「……ファイアン・エンクローチェ……」

一番先頭にいるその人の名前を、ぼくは知っていた。良い意味では、勿論ない。正直、好きな相手ではない。ぼくへの嫌がらせを率先してやってくる人だ。嫌われるようなことを、無自覚にしてしまったのだろうか。きつとそうなのだろう。ぼくの存在自体が、気に食わなかったのかもしれない。ここにいる全員の首には、レイブクローのネクタイが締められていた。

『……何の用、ですか』

身体を強張らせながらも、固い声を出す。ぼくを見下して、彼は嘲笑った。

『幣原ちゃんは一、自分が一、周りから一、どんな風に一、噂されてるのか一、知ってるのー、かなー?』

無駄に間延びした、小さい子にでも話しかけるような話し方。いや、小さい子にもこんな悪意のこもった話し方はしまい。思わずムツと目を眇めた。途端、首を押さえられる。喉元を一瞬強く圧迫して、彼は力を抜いた。しかし手は離れることなく、ぼくの首元に置かれたままだ。

『今一、置かれている状況一、分かってんのー?』

『……その喋り方、止めてください』

瞬間、ぼくの首を絞め付ける力が強まった。指が喉に食い込み、気

『ううう……あああつ！』

一人が、出口へと辿り着いた。恐怖のあまりか血で滑るのか、ドアノブが上手く回せないようだ。その間にも物は壊れ続け、彼らは傷を負い続ける。集中しようと目を瞑るも、叫び声は容赦なく耳に入り込んできた。むせ返るような濃い血の香り。空気中に微粒子として溶け込むそれが、呼吸と共に自分の身体に入ることが堪らなく嫌だ。

『何の騒ぎっ……!?!』

扉が開く大きな音と共に、光が差し込んだ。誰かが、外から扉を開けたのだ。

『秋?!』

「……っ馬鹿来るなっ!!」

辺りの惨状を目の当たりにしながらも、真っ先にぼくに駆け寄って来ようとした彼、ライフ・フィスナーに対し叫んだ。無理矢理息を搾り出したため、内臓がきりきりと痛む。日本語だったがニュアンスは通じたのだろう、彼は怯んで足を止め、目の前に飛んできた火花を首を振って避けた。しかし完全には避け切れなかったのか、頬に一筋薄い赤い線が滲む。

『秋?!』

「来るなって言ってるでしょ!! 近寄らないで!!」

頭の中がぐちゃぐちゃなまま、ともすれば自分が何を口走っているのかも分からぬままに怒鳴った。フィスナーはぐ、と迷った目でぼくを見ると、ぱつと踵を返す。扉は再び閉められ、部屋は薄暗さを取り戻した。

歯を食い縛り、目を閉じる。耳も塞いで、身を縮めた。ぼくはただ、自分の持つ無駄に強力な魔力に怯え、身体を縮こまらせ、部屋の隅で震えている小さな子供でしかなかった。

耳を塞いでもまだ、彼らの呻き声が頭の中で反響する。目を閉じてもまだ、彼らが血まみれで倒れているあの惨状が脳裏に浮かび上がる。微かに香る血液の、沸き返るような鉄の臭い。

自身の身体の痛みよりも、何倍も強い、

恐怖。

再び扉が開かれ、思わずぼくは反射的に声を張り上げた。

「来ないでっ……!」

「落ち着くのじゃ、秋」

柔らかい声が、存外近くで聞こえた。抱き締められ、反射的にぼくは肩を強張らせる。しかし声の主は優しく力強く、ぼくを落ち着かせようとただひたすらに尽力し続ける。

パチパチと暴力的に爆ぜる火花は、徐々に姿を消して行つた。最後には、シンとした静寂が辺りを包み込む。恐る恐る顔を上げた。

「……校長、先生?」

「さようじゃ、お主の両親も教えたこともある。あの二人は、いやはや……おっと、余談じやつたかの」

ふおっふおっふおっと好々爺風に笑うダンブルドア校長先生を、ぼくはぼかんと見つめた。その時はっと思ひ出す。

「先生っ、彼らはっ……ファイアン・エンクローチエ達は……っ!」

「あの者達なら心配いらん。マダム・ポンフリーに適切な処置を受けておる」

ぼくは息を詰まらせ、辺りを見回した。床に伏しているクラスメイトは見当たらない。しかし床に広がる血だまりと、砕けた破片が床に散乱していることが、惨状をぼくに思い起こさせた。

ぶるりと思わず身震いしたぼくの目を、ダンブルドア先生が手で覆う。シワの多く冷たい、どことなく薬の香りがする手だった。ふ、と、急に眠気に襲われる。

「……ふむ。骨は折れとらんようじゃが……肋骨にヒビが入つとるの。内臓は、まあ大丈夫なようじゃ」

と、ふわりと身体が浮く感覚がした。ダンブルドア先生がぼくを背負つたのだ。衝撃で身体に痛みが走り、歯を食いしばる。

「怖かつたじやろう」

不思議なことに、ダンブルドア先生はぼくに何があつたのかを聞くとはしなかつた。

不自然なまでの眠気を感じる。抗えないほどの強烈な眠気。もし

かして、ダンブルドア先生が何かをしたのだろうか。そう考えを広げるよりも早く、意識は奥へと飲み込まれ――
暗闇に、ぼくだけが残された。



九月一日。まさしく『夢にまで見た』念願のホグワーツ初登校日であるというのに、寝起きのぼくの気分は、暗く沈んでいた。ベッドに寝転がったまま、左腕をぐつと空へと突き出す。拳をぎゅつと握り締め魔力を集中させると、ぱつと手を開いた。途端、どこからともなく火花が手の中から現れる。数秒間あたりをパチパチ飛んだかと思うと、まるで花火のように儂く消えてしまった。

「なにやってんの、アキ」

「別にー」

ぼくよりも早く起き出して（楽しみ過ぎてめっちゃ早く目が覚めちゃったと見るね）トランクの中を整理していたハリーは、ぼくのそんな姿を見て首を傾げた。なんでもないよ、とぼくは苦笑して身を起こす。

それから一時間半後、ぼくらのトランクは車の荷台に積まれ、ぼくとハリーは揃って、バーノンおじさんが運転する車の後部座席に座っていた。正直驚きだ、もつと説得には時間が掛かるかと思っていたのに、案外すんなりキングズクロス駅、九と四分の三番線へと連れて行ってくれるとは。思わず、何か裏でもあるのかと勘繰ってしまふ。もう少し人の好意は素直に受け取りたいものだ――そんなことを考えていたのも、短い間だった。バーノンおじさんは、キングズクロス駅の九番線と十番線の間の特快プラットフォームで足を止めると、意地悪そうに笑った。

「そーれ、着いたぞ、小僧共。九番線と……ほれ、十番線だ。お前らのプラットフォームはその中間らしいが、まだできてないようだな、え？」

頬が引きつる。も、堪えた。偉いぞぼく。

「新学期をせいぜい楽しめよ」

バーノンおじさんはにんまり笑うと、ぼくらに背を向け歩き去ってしまう。後には、ぼくとハリー、二人分のトランク、それにヘドウィグ——ハリーの白フクロウの名前だ——が残された。

「……つぎけんなよ馬鹿野郎……」

罵倒の台詞もタイムミングも全く一緒。流石双子だ。しかし保護監督責任者、略して保護者の態度としてあれはどののだろうか。児童相談所にも行ったら即刻保護されるレベルかもしれない。はあ、そのため息を一つつくと、行こう、とハリーの袖を引っ張った。

「え……でも、どうやって?」

「どうやってって……」

ぼくはそこで言葉を切る。夢で見たからと言って、果たしてハリーは信じてくれるだろうか。ハリーはぼくのことを信頼してくれているけれど、そんな夢見がちなことを言うぼくの言葉を頭から鵜呑みにするようなバカじゃない。口ごもったぼくを、ハリーは怪訝そうに見つめた。その時、ぼくらの耳にある言葉が飛び込んでくる。

「……マグルで混み合ってるわね。当然だけど……」

ぼくらは急いで後ろを振り返った。短い赤毛のおばさんが、きつと息子であろう赤毛の四人の男の子を連れて歩いている。彼らが持っている荷物の中にふくろうがあることに気付いて、ぼくらは目配せし合った。彼らの後へとさりげなく付いて行く。

「さて、何番駅だったかしら」

「九と四分の三よ。ママ、あたしも行きたい……」

「ジニー、あなたはまだ小さいからね。ちよつとおとなしくしてね。はい、パーシー、先に行つてね」

この中では一番年上らしい背の高い男の子が、すたすたとプラットフォームの『九』と『十』に向かって歩いて行つた。どうやら夢の通りらしい、とぼくはほつと胸を撫で下ろす。実はただの壁でしたドンガラガツシャン! という展開は避けたいところだ。

「フレッド、次はあなたよ」

「俺、フレッドじゃないよ、ジョージだよ。まったく、この人ときたら、

これでも俺たちの母親だってよく言えるな。俺がジョージだって分らないの?」

「あら、ごめんなさい、ジョージちゃん」

「冗談だよ。俺フレッドさ」

どうやら彼らは双子らしい。ぼくとハリーと同じだが、しかし向こうは外見も性格もそっくりだし、見たところ随分と悪戯っ子のようだ。隣のハリーが意を決したように、彼らの母親であろうおばさんに歩み寄る。当然のようにハリーはぼくの手首を掴んでいて、まるで引つ張られるような格好になった。

「すみません、ホグワーツ特急に乗るのはどうすればいいんですか?」

ハリーが尋ねる。おばさんは振り返ると、ハリーに優しい笑顔を向けた。

「あら、こんにちは。坊や、ホグワーツへは初めて? ロンもそうなのよ」

そうやって、隣の男の子を指差した。背の高い、ひよろつとした赤毛の男の子だ。目が合った瞬間に笑い掛けたが、彼は戸惑ったような曖昧な笑みをこちらに返した。

「よっし。……行くよ、アキ」

「あいあいさー」

おばさんの説明は、幣原の記憶と同一のものだった。ぼくとハリーは手を握り合うと、お互い空いた方の手でカートを掴む。二人で一つのカートに無理矢理二人分のトランクを詰め込んだからこそ出来る技だ。そのままお互いを見合つて頷くと、一歩足を踏み出した。二歩、三歩、四歩……と進むにつれ段々と歩くペースが早くなり、小走りになって、最後には本気で走っていた。

ハリーがぼくの手を握る手に力を込める。理屈じゃわかっていても怖いんだろうなあと思つたところで、スルリと分厚い煉瓦を通り抜けた。

「ようこそ、九と四分の三番線へ。……つて感じ?」

呆然とした顔で突っ立っているハリーに笑い掛ける。そしてぼくらは空いたコンパートメントを探しに行った。しかし時間が時間な

もので、なかなか見つからない。最後尾近くでやっと一カ所見つけた。ひとまずぼくがひらりと窓からコンパートメントの中に入る。そして中から、ハリーがトランクを持ち上げるのを手伝った。しかし、これがなかなか重たくて上手く持ち上がらない。やっとの思いで一つは中に入れることが出来たが、あともう一つあるのか、とげんなりしたその時、背後から「手伝おうか？」と声が掛けられた。声の方向を向けば、そこにはさっきの赤毛の双子の……どっちだろう……片割れ。

「うん。お願い」

ぼくとハリーは息を弾ませながら同時に言う。ありがたい、なんていい人なんだ。双子の片割れは片割れを呼び、双子揃ってぼくらのトランクを中に入れるのを助けてくれた。

「ありがとう」「ありがとうねー」

ハリーは汗びっしょりになった前髪を掻き上げた。と、双子の一人が露わになったハリーの額にある傷に気付いて、指差しながら尋ねる。

「それ、なんだい？」

尋ねたはいいものの、その答えはもう彼らの中にあるらしい。

「驚いたな。君は……？」

「彼だ。君、違うかい？」

「何が？」

ハリーは聞き返す。双子は同時に言った。

「ハリー・ポッターさ」

「ああ、そのこと。うん、そうだよ。僕はハリー・ポッターだ」

ハリーは困ったようにぼくをちらりと見る。だから、ぼくは助けてあげられないんだってば。

やがて、双子は母親に呼ばれ去って行った。そう言えば、彼らの名前を聞きそびれた。でもまあ、きつといつか出会えるだろう。そんな予感がする。

ハリーは座席に座り、ぼんやりと外の様子を眺めていた。暇を感じたぼくは、トランクから本を取り出すと、座席に深く腰掛けた。膝の

上の本に目を落とす。

汽笛が聞こえ、汽車が動き出した。車輪とレールが立てるカタンコトンという音と、蒸気機関車のエンジンが立てる音、そして時折ぼくがページをめくるパラリという音しか聞こえない空間は、一人の訪問者によって破られる。

「ここ空いてる？ 他はどこもいっぱいなんだ」

そう尋ねた彼は、先程の赤毛の男の子——ロンだ。いいよ、とぼくは笑って本をパタンと閉じると、ハリーの隣に移動した。空いた正面の座席を指し示す。ロンはぼくに戸惑うような視線を向けた後、「ありがとう」と口の中でもごもごと言っただけで席に腰掛け、さりげなさを装いつつ窓の外へと目を移した。色々隠せてないところがまた可愛らしい。

「おい、ロン」

再びガラリとコンパートメントの扉が開かれ、今度は双子が顔を出した。しかしそれにしても、こうして並んで見るとホントにそっくりだ。見分け方の秘訣を知りたい。

「なあ、俺たち、真ん中の車両あたりまで行くぜ……りー・ジョーダンがでっかいタランチュラを持ってるんだ」

「分かった」

いや分かったじゃないよなんでタランチュラ持ってんだよどうやって飼うんだよ！ とぼくは口元を引き攣らせた。

「自己紹介したっけ？ 俺たち、フレッドとジョージ・ウィーズリーだ。こいつは弟のロン。……んで、君は何てーの、可愛い少年くん？」
もしかしなくてもそれってぼくのことだろうか。ため息を付きなからち、口を開いた。

「ぼくはアキ・ポッター……ハリーの双子の弟だよ。同じ双子同士、よろしくね」

「よろしくな、アキ」

双子、フレッドとジョージは——双子でいいか、見分けが付くとも思えないし——双子はぼくとハリーに握手を求めると、来た時と同じ気軽さで「「じゃーなー」」て手を振りながらコンパートメントから出

て行った。何と言うか、自由だ、自由人だ。あんたら弟にタランチュラ見に行ってくるからつつー伝言残しに来たんかい！

「君、ほんとにハリー・ポッターなの？」

ロンがハリーに尋ねる。ハリーはこつくりと頷いた。

「ふーん……そう。僕、フレッドとジョージがまたふざけてるんだと思った。じゃ、君、ほんとうにあるの……ほら……」

そう言ってロンは恐る恐るハリーの額を指差す。ハリーが前髪を掻き上げ傷跡を見せると、ロンはなんか感動したように見入っていた。

「それじゃ、これが『例のあの人』の……」

「うん。でもなんにも覚えてないんだ」

「なんにも？」

「そうだな……緑色の光がいつぱいだったのを覚えてるけど、それだけ」

「うわー」

ロンは憧れの人を見るような瞳でハリーを見つめ、それからはっと思いついたようにぼくに目の焦点を合わせた。ぼくはにっこりと笑って自己紹介をする。

「有名なハリー・ポッターくんの双子の弟、アキ・ポッターです。『あの人』がぼくらの家を襲った時、ぼくは丁度父の友人の家に預けられてたらしいよ」

聞きたいのはそれでしょ、『生き残った男の子』はハリーだけなのになんでぼくも生き残ってんの、つてところでしょ。こんな説明を、これから何度もすることになるんだろうなあ……。

「君の家族は、皆魔法使いなの？」

ハリーが興味津々といった様子でロンに聞いた。新たな環境に大興奮だ。しかしロンは自分の境遇について愚痴っている。大兄弟の貧乏で、いつもお下がりしか貰えないこと。兄達が凄くてプレッシャーを感じていることなど……。

そういえば、とふと思いついた。幣原も、家族全員魔法使いなんだよなあ。……今日の夢を思い出し、気分が落ち込んだ。

あんなの、幣原にとってみればトラウマ以外の何物でもない。誰が悪い、とは一概に言い切れないだろう。幣原の対応にだって問題はあった。始めに手を出して来たのは、そりゃあ悪いけれど、結果として幣原よりも遥かに重度の傷を彼らは負っている。あれが魔力の暴走なのだ。ぼくも気を付けよう。

でもあれからでも続く、続いてしまうのが人生だ。

今まで日の当たる道しか歩いて来なかった幣原秋が、ほんのちよつとしたことで——英語が話せなかったり、魔力が人より強かったり——そんなことで足を引っ張られ転落してしまう。なんとかしてあげたいけど、夢の中のことだからどうしようもない。

妙なジレンマに囚われ、生まれて初めて『夢を見たくない』と思った。

憧れの存在が、一人もがき苦しむ姿は、痛々しくて、やりきれない。きつと彼の精神は、奈落の底まで沈むだろう。自分が人を傷つけてしまった、それだけの事実には、彼は怯え苦しむだろう。たとえそれが、不慮の事故だったとしても。自身に宿る才能を嫌悪し、忌引し、忌むべき存在だと認識してしまうだろう。

そんなことないのに。

幣原秋は闇の中で生きる人間じゃない。

「アキ」

深く沈みそうになっていたぼくを、柔らかなハリーの声が現世に引っ張り上げた。ぼくの顔を覗き込み、心配そうに伺っている。

「大丈夫かい？ 顔色、悪そうだけど……」

ロンも気遣わしげに声を掛けてきた。大丈夫だよ、と言ってぼくは笑みを浮かべる。

「車内販売が来たんだ。何か食べようよ。僕たち、朝ごはんだってまだだ」

「あ、そういえば」

言われて初めて空腹感を思い出した。くう、と呼応するようにお腹が鳴る。ハリーがぷつと吹き出した。ぼくは照れて口を尖らせる。

ハリーはぼくの手を取って通路に出た。カートには、今までのマグ

ルの中での生活では見たことのないものが沢山積まれていて、ダイアゴン横丁に行った時にも似たある種の感動を覚える。ぼくらは金にものを言わせて（ってなんか表現いやらしい！）全種類を少しずつ買った。カートを押すおばさんにお金を支払うと、両手いっぱいにお菓子を抱えてコンパートメントに戻る。ロンがその量に目を白黒させているのを尻目に、座席に無造作に置いた。

大鍋ケーキなるものを発見して、大鍋って書いてあるけどこれって普通のケーキだね、とちよつと躊躇い、それでも食欲には勝てなかった。かぶりつく。……あ、おいしい。意外といける。ハリーはかぼちやパイなるものを、とても美味しそうに食べていた。

「お腹空いてるの？」

「ペコペコだよ」

ロンの言葉に、ぼくとハリーは声を揃えて答える。食べているぼくらにつられたのか、ロンもカバンから包みを取り出して開いた。中には、手作りっぽいサンドイッチが四切れ入っている。ロンはその内の一切れを摘み上げると、パンを捲って渋い顔をすした。

「ママったら、僕がコンビーフは嫌いだって言っているのに、いっつも忘れちゃうんだ」

「僕のと変えようよ。これ、食べて……」

「ぼくのも！ どうぞー」

ハリーに負けじと、ぼくは急いでロンの目前にさっきまで食べていた大鍋ケーキを突き出した。手作り、家庭の味……！ と、そこに反応してしまう自分がある。ちよつとだけ切ない。

「でも、これ、パサパサでおいしくない」「いいから！」

自信なさげなロンに、ぼくとハリーはお互いケーキとパイをロンに突き付けた。ロンは若干怯えつつも（あれーそんなつもりじゃなかったんだけどなー）ケーキとパイを受け取り、サンドイッチを手渡してくれた。ぼくとハリーは顔を見合わせ、どちらともなく笑い合うとパクつと頬張る。なんだ普通に美味しいじゃない。とぼくは素直に品評する。あれだ、愛情のスパイスだ！ ……なんでだろう、ロンが果てしなく羨ましい。

「これ、なんだい?」

ハリーが何かお菓子の包みを手に取った。ハリーの手元を覗いたぼくは、思わず眉を寄せる。

「……蛙チヨコレート?」

「まさか、本物のカエルじゃないよね?」

ロンの言った「まさか」に、酷くほっとした。

「でも、カードを見てごらん。僕、アグリッパがないんだ」

「なんだって?」「カード?」

同時に言われた言葉に、ロンは一瞬目を白黒させた。

「そうか、君ら、知らないよね……チヨコを買うと、中にカードが入ってるんだ。ほら、みんなが集めるやつさ——有名な魔法使いとか魔法女とかの写真だよ。僕、五百枚ぐらい持つてるけど、アグリッパとプロレマイオスがまだないんだ」

ハリーは蛙チヨコの包みを開け、カードを取り出す。そのカードには一人の人が描かれていた。

「アルバス・ダンブルドア……」

長い白髪に白髭、半月メガネ。ホグワーツの、校長先生。見入ると同時に、今日の夢を思い出した。即刻頭を振って追い出すが、隣のハリーは訝しむような視線をこちらに向けている。曖昧に笑顔を浮かべると、ハリーはため息をついて興味をカードに移した。

「この人がダンブルドアなんだ」

「君ら、ダンブルドアのことを知らなかったの! 僕にも蛙一つくれる? アグリッパが当たるかもしれない……ありがとう……」

ロンが呑気な声を上げた。ハリーはロンに蛙チヨコを一つ投げ渡すと、カードを裏返す。そこでダンブルドアの顔が消えていたのに、驚きの声を漏らした。

「いなくなっちゃったよ!」

「そりゃ、一日中その中にいるはずないよ。また帰ってくるよ。あ、だめだ、また魔女モルガナだ……」

ぼくとハリーは、しげしげとカードを見つめた。この世界、魔法界では写真から人が消える光景というのは日常のようだ。

それから何種類かお菓子を摘んで（百味ビーンズとか絶対にぼくは食べません！ そんな勇氣は持ち合わせておりません！）腹も落ち着いた時、コンパートメントがノックされた。戸の一番近くにいたぼくが立ち上がって開けると、そこには小さな——といってもぼくより背は高いが——丸顔の男の子が半泣きで立っていた。一瞬ぼくが泣かせた!? とびつくりして慌てふためくが、どうも違うらしい。

「ごめんね。僕のヒキガエルを見かけなかった?」

ぼくは振り返ると、後ろのハリーとロンの表情を確認する。二人ともぶんぶんと頭を振っていて、やつぱり見ていないらしい。当然ぼくも知らない。と、そこで男の子の瞳から大粒の涙が零れた。ぼくはわたわたとして、とりあえずハンカチを差し出してみた。ごめんね、と男の子は受け取って涙を拭く。

「いなくなっちゃった。僕から逃げてばかりいるんだ!」
「きつと出てくるよ」

ハリーが励ますように言う。男の子は、それでも気落ちした様子でコンパートメントから出て行った。

「どうしてそんなこと気にするのかなあ。僕がヒキガ「アキ、どうしたの?」……最後までしゃべらせてください……」

ハリーがロンの言葉をスルーして、突っ立ったままのぼくに声を掛ける。ぼくは拳を握り締めると、勢いよくハリー達に向き直った。

「探しに行こう!」

「……言うと思った」

目を輝かせるぼくとは対称的に、はあとため息をつくハリー。なんだよノリ悪いな!

「いいよ諦めちやえよアキ。僕がヒキガエルなんか持ってたら、なるべく早くなくしちゃいたいけどな。もつとも、僕だってスキヤバーズを持つてきたんだから人のことは言えないけどね」

ロンがぼくに声を掛ける。むう、と頬を膨らましたぼくの手をハリーは引つ張ると座席に座らせた。ロンは膝の上で熟睡しているネズミ——スキヤバーズをうんざりしたように見つめている。

「死んでたって、きつと見分けがつかないよ。昨日、少しは面白くして

やろうと思つて、黄色に変えようとしたんだ。でも呪文が効かなかつた。やつて見せようか——見てて……」

ロンが杖を取り出し、咳ばらいをした。目の前で魔法を見るのが初めてなぼくとハリーは、わあ、と目を見開いてロンの一挙一動に注目する。しかし、ロンがまさに杖を振り上げたところで、またもコンパートメントの扉が開いた。これで三度目だ。

「誰かヒキガエルを見なかった？ ネビルのがいなくなったの」

今度は女の子だった。ふわふわの栗色の髪が可愛らしい、少し勝気な感じの女の子だ。その子の目もロンの杖に吸い寄せられた。

「見なかったって、さっきそう言ったよ」

「あら、魔法をかけるの？ それじゃ、見せてもらおうわ」

女の子はロンの言葉を綺麗に無視すると、座席に腰掛けた。ロンは僅かにたじろぐも、咳払いをひとつする。

「あー……いいよ……お日さま、雛菊、溶ろけたバター。デブで間抜けなねずみを黄色に変えよ」

ロンは杖を振った。……が、何も起こらない。女の子はロンに冷めた目を送った。

「その呪文、間違つてないの？」

ロンの表情が、女の子に貶されたことに暗くなる。それに気付いたのか、彼女はロンをフォローするように慌てて言葉を付け足した。

「まあ、あんまりうまくいかなかったわね。私も練習のつもりで簡単な呪文を試してみたことがあるけど、みんなうまくいったわ。私の家族に魔法族は誰もいないの。だから、手紙をもらった時、驚いたわ。でももちろん嬉しかったわ。だって、最高の魔法学校だって聞いているもの……教科書はもちろん、全部暗記したわ。それだけで足りるといいんだけど……私、ハーマイオニー・グレンジャー。あなた方は？」

ぼくらはぼかんと口を開けて、これだけのことを一息に言つてのけた彼女——ハーマイオニーを見つめる。そして我に返った。

「あ、アキ・ポッターです」

「僕、ロン・ウィーズリー」

「ハリー・ポッター」

「本当に？ 私、もちろんあなたのこと全部知ってるわ。——参考書を二、三冊読んだの。あなたのこと、『近代魔法史』『黒魔術の栄枯盛衰』『二十世紀の魔法大事件』なんかに出てるわ。……まあ、弟がいるってことは知らなかったけど」

ハーマイオニーがぼくに目を遣った。にっこり微笑みを返す。

「……弟、よね？」

「いかにも、ハリーの双子の弟です。よろしくね、ハーマイオニー」
ぼくは左手を出しかけ、止めて逆の手を差し出した。左利きというのはこういう時不便だ。

ハーマイオニーは、まだ心を許し切ってはいないまでも、ぼくの手を取ってくれた。

「僕が、本に出てるの？」

ハリーが驚いたように聞き返す。ハリーは本当に、自分が有名人だという自覚がない。いや、今まで本当に悪い意味でしか注目を集めたことがないものだから、突然「あなたは有名なんだよ！」なんて言われても実感が湧かないのは当然だろうけど。しかも、物心付く以前にやったことなのだ。

「まあ、知らなかったの。私があなただったら、出来るだけ全部調べられるけど。三人とも、どの寮に入るかわかってる？ 私、色んな人に聞いて調べたけど、グリフィンドールに入りたいわ。絶対一番いいみたい。ダンブルドアもそこ出身だって聞いたわ。でもレイブンクローも悪くないかもね……とにかく、もう行くわ。ネビルのヒキガエルを探さなきゃ。三人とも着替えた方がいいわ。もうすぐ着くはずだから」

そう言い残し、ハーマイオニーはコンパートメントから出て行った。ロンは杖をトランクに投げ入れながら呟く。

「どの寮でもいいけど、あの子のいないとこがいいな。へぼ呪文め……ジョージから習ったんだ。ダメ呪文だってあいつは知ってたのに違いない」

「君の兄さんたちってどこの寮なの？」

「グリフィンドール」

ロンの表情が暗くなった。

「ママもパパもそうだった。もし僕がそうじゃなかったら、なんて言われるか。レイブンクローだったらそれほど悪くないかもしれないけど、スリザリンなんかに入れたら、それこそ最悪だ」

「そこって、ヴォル……つまり、『例のあの人』がいたところ？」
「ああ」

ぼくは黙って、ロンの話を聞いていた。別にどの寮に入ろうと、人の価値はそれでは決まらないのに。現に、夢ではセブルスはスリザリンに入ったけど、いい奴だってことをぼくは知っている。『例のあの人』がいた寮だから、って……。それに、レイブンクローに入ったとしても、ファイアン・エンクローチェのような奴だっているのだ……。ぞくり、と背筋に寒気が走り、ぼくは微かに身震いした。

「それで、大きい兄さんたちは卒業してから何してるの？」

ハリーがロンに尋ねる。

「チャーリーはルーマニアでドラゴンの研究。ビルはアフリカで何かグリーンゴツツの仕事をしてる。……グリーンゴツツのこと、聞いた？」

『日刊予言者新聞』にベタベタ出てるよ。でもマグルの方には配達されないね……誰かが、特別警戒の金庫を荒らそうとしたらしいよ」

「本当？ それで、どうなったの？」

「なーんも。だから大ニュースなのさ。捕まらなかったんだよ。グリーンゴツツに忍び込むなんて、きつと強力な闇の魔法使いだろうって、パパが言うんだ。でも、なんにも盗っていかなかった。そこが変なんだよな。当然、こんなことが起きると、陰に『例のあの人』がいるんじゃないかって、みんな怖がるんだよ」

ハリーは黙り込んだ。頭の中でそのニュースを反芻しているようだ。ロンは沈んでしまった空気を換えようと新たな話題を出す。

「君ら、クイディッチはどこチームのファン？」

「うーん、僕ら、どこのチームも知らない」

「ハリーに同じく」

「ひえー！」

ロンは目を丸くして驚いていた。彼にとってはそれほどショック

なことらしい。クイドイツがどれ程面白いスポーツなのかについて熱弁を振るい始めたロンの言葉を右から左に聞き流していたぼくは、コンパートメントの戸が開く音に気付き目を遣り、驚いた。

「本当かい？ このコンパートメントにハリー・ポッターがいるって、汽車の中じゃその話でもちきりなだけだ。それじゃ、君なのか？」
入ってきた三人の男の子のうちの一人、金髪に青白い顔をした子に見覚えがあったからだ。確か、マダム・マルキン洋装店にいた子だ。
「そうだよ」

ハリーが答えるのを尻目にぼくは瞬時に立ち上がると、短い距離を助走に、彼に勢いよく飛び蹴りを食らわせた。余りにも咄嗟なこと、彼はぼくに反応出来ず、そのまま蹴り倒される。何が起こったのか飲み込めていない彼の目の前で、ぼくは胸を張った。

「これは、この前のハリーの分な。はじめまして、ぼくアキ・ポッター、ハリーの双子の弟です。君は？」

「あ、ドラコ・マルフォイだ……じゃなくて！ おい、クラブ、ゴイル、僕を助ける！」

両脇にいた二人のがつちりとした少年が、慌てて彼、ドラコ・マルフォイから僕を引きはがそうとする。ぼくはぴよんとドラコの上から飛びのくと、につこり笑ってドラコに手を差し延べた。

「大丈夫かい？ 災難だったね」

「元凶が何を言う!？」

ドラコが毒気を抜かれたような顔をしながらも、素直にぼくの手に乗まって立ち上がった。と、はつと我に返ったのか、すぐさま顔を赤らめてぼくの手を振り払う。何この子、案外可愛らしいな。

ロンがクスクス笑っている様子に、ドラコは見咎めるように目を吊り上げた。でも頬が赤い時点で巻き返しは無理だよ、ドラコ。

「僕の名前が変だとも言うのかい？ 君が誰だか聞く必要もないね。父上が言ってたよ。ウィーズリー家はみんな赤毛で、そばかすで、育てきれないほどたくさん子供がいるってね……ポッター君。そのうち家柄のいい魔法族とそうでないのがわかってくるよ。間違ったのとは付き合わないことだね。そのへんは僕が教えてあげよ

う」

「間違ったのかどうかを見分けるのは自分でもできると思うよ。どうもご親切さま」

ドラコがハリーに握手を求めるが、ハリーはきっぱり断った。彼の白い頬に、更に赤みが差す。

「ポッター君。僕ならもう少し気をつけるがね。もう少し礼儀を心得ないと、君の両親と同じ道を辿ることになるぞ。君の両親も、何が自分の身のためになるかを知らなかったようだ。ウィーズリー家やハグリッドみたいな下等な連中と……」

ドラコの言葉はそこで途切れた。侮辱され立ち上がりかけていたハリーとロンは、突然言葉を切ったドラコにきよとんと目を向ける。

「……ドラコ。口が過ぎる」

「……ちっ、お前か……」

ドラコの後ろから顔を出したのは、小さな女の子だった。ドラコの袖を引っ張り、首を振る。思わず、その子に目が吸い寄せられた。

長いストレートな銀髪を、何もせず背中に流している。大きめの灰色の瞳は静かな冷たさを湛えており、小さな顔の中に見事に調和していた。まるで、丁寧に作られた人形のような。頭を振るたびに、綺麗な銀髪がさらさらと音を立て揺れる。何の感情も窺えない、無表情。

凄く、綺麗な子だった。幼いながらも、可愛いという表現よりも綺麗という言葉の方が似合うような。

その子はぼくらにペこりと頭を下げ、そしてドラコの袖を掴んだままコンパートメントから出て行った。引きずられるドラコと、慌てて後を追うようにクラップとゴイル。すぐさま、コンパートメントの中は静かになった。

「……ねえ、ハリー」

「どうしたの、アキ」

ぼくは振り返って、へらりと笑う。

「あの子に、恋しちゃったみたい」

ハリーとロンの、呆気にとられた顔が印象的だった。

第11話 暗闇の入口

あの『事故』から三日間、ぼくは精神的なショックからずっと眠り続けていたようだ。目が覚めても一週間は医務室で薬漬けにされ、寮に帰してもらったのはそれからだった。十日間も離れていけば、ただでさえ遅れがちだった授業でさえ付いていけなくなるし——いや、それよりも。

十日もあれば、ぼくに關する噂が広まるのは道理であつた。

フィアン・エンクローチエを筆頭とする彼らを返り討ち——という表現が妥当かは分からないが、少なくとも大怪我を負わせて——にしたのは事実なのだ。

結果、レイブンクロー生はぼくを『共通の敵』と見做したようだ。

悪意と軽蔑と恐怖と皮肉によつて、氣付けば仇名が付けられていた。『呪文学の天才児』というそれを、彼らはまるでぼくを殴る免罪符のように使い始めた。

辛くて陰惨な学校生活の、幕開けだった。

教えてください、神様。

ぼくは一体、どうすれば良かったんでしょう。

悪意に満ちた視線を向けられるのは、もう嫌なんです。

恐怖に満ちた態度を取られるのは、もう疲れたんです。

痛いことも怖いことも、苦手なんです。

その一心でぼくは、学校の勉強、英語の勉強、そして魔力の制御の練習を、ほぼ独学でするようになった。



ホグワーツ特急を降りると、一年生はハグリッドに従つて、湖を渡りホグワーツ城へと入った。マクゴナガル先生に引き渡された後、連れて行かれた先は、大広間の脇にある小さな空き部屋。窮屈な部屋の中で、マクゴナガル先生の厳肅な声は朗々と響いた。

「ホグワーツ入学おめでとう。新入生の歓迎会がまもなく始まります

が、大広間の席につく前に、皆さんが入る寮を決めなくてはなりません。

寮の組分けはとても大切な儀式です。ホグワーツにいる間、寮生が学校での皆さんの家族のようなものです。教室でも寮生と一緒に勉強し、寝るのも寮、自由時間は寮の談話室で過ごすことになります。

寮は四つあります。グリフィンドール、ハッフルパフ、レイブンクロー、スリザリンです。それぞれ輝かしい歴史があつて、偉大な魔女や魔法使いが卒業しました。ホグワーツにいる間、皆さんの善い行いは自分の属する寮の得点になりますし、反対に規則に違反した時は寮の減点になります。学年末には、最高得点の寮に大変名誉ある寮杯が与えられます。どの寮に入るにしても、皆さん一人一人が寮にとって誇りとなるよう望みます。

学校側の準備が出来たら戻ってきますから、静かに待っていてください」

そう言い残し、マクゴナガル先生は部屋から立ち去っていった。途端、不安げなざわめきが沸き起こる。

「いったいどうやって寮を決めるんだろう」

「試験のようなものだと思う。すごく痛いってフレッドが言つてたけど、きつと冗談だ」

在学生の兄がいるロンのそんな言葉を聞いて、ハリーは一層怖がつたような顔をした。あれ、組分けつて確か、帽子を被るだけじゃなかったっけ？ いや、夢を信じ過ぎるのはどうかと思う、うん。試験……試験、か。どうなのなんだろう。

とその時、ハリーが驚いたようにその場から飛び上がった。周りの皆も、息を呑んでいる。ぼくの背丈では人で遮られてしまい何も見えないのだが、何かあつたのだろうか。首を傾げ身を乗り出し——納得した。

ゴーストだ。その数ざつと二十ほど、談笑しながら空中をふわふわ浮遊している。何人かは生徒たちに微笑みかけていたが、誰もが凍りついていた。カクカクと不自然に頷いている者もいる。そこでマクゴナガル先生が戻ってきた。ゴーストを見慣れたものだとばかりに

意識の外へと外して（か、カッコいい）、ぼくら一年生に声を掛ける。「組分け儀式がまもなく始まります。さあ、一列になつて。ついてきてください」

ハリーの後に続いて、部屋を出た。気分が悪そうなハリーの手を、後ろからそつと握る。ハリーは肩をびくりと震わせると、ゆつくりと握る手に力を込めた。

大広間の扉が開かれる。広がる光景に、思わず感嘆の吐息が零れた。何千もの宙に浮かんだロウソクが、煌びやかな大広間をより幻想的に映し出している。何度見ても、目を瞠るほど圧巻だ。

マクゴナガル先生は、ぼくらを一列に並ばせた。上級生は、微笑ましそうにぼくらを見つめ、寮へと迎え入れるための拍手の準備をしていた。

「本当の空に見えるような魔法がかかけられているのよ。『ホグワーツの歴史』に書いてあったわ」

そう言うハーマイオニーに、へえ、と改めて天井を見上げた。浮いているロウソクの奥に、夜空のヴェールが掛かつて、瞬く星が見えた。魔法つて、やつぱり凄いや。

マクゴナガル先生が、椅子の上にとんがり帽子を置く。組分け帽子だ。帽子のつばの破れ目が開いて、そこから歌が流れ出す。

私はきれいじゃないけれど

人は見かけによらぬもの

私をしのぐ賢い帽子

あるなら私は身を引こう

山高帽子は真つ黒だ

シルクハットはすらりと高い

私はホグワーツ組分け帽子

私は彼らの上をいく

君の頭に隠れたものを

組分け帽子はお見通し

かぶれば君に教えよう

君が行くべき寮の名を

グリフィンホールに行くならば

勇気ある者が住う寮

勇猛果敢な騎士道で

他とは違うグリフィンホール

ハツフルパフに行くならば

君は正しく忠実で

忍耐強く真実で

苦勞を苦勞と思わない

古き賢きレイブンクロー

君に意欲があるならば

機知と学びの友人を

ここで必ず得るだろう

スリザリンではもしかして

君はまことの友を得る

どんな手段を使っても

目的遂げる狡猾さ

かぶってごらん！ 恐れずに！

興奮せずに、お任せを！

君を私の手にゆだね（私は手なんかないけれど）

だって私は考える帽子！

歌い終わる。大広間にいた人たちから拍手が湧き上がるのに、おずおずとぼくら新入生も手を叩いた。

「……機知と学びの友人を、ねえ」

小さく呟いて、肩を竦めた。幣原にも、これからそんな友人が出来るのだろうか。

「アキ、絶対同じ寮に入ってくれるよね？」

ハリーに囁かれ、思わず身震いをした。そんな、狙ってこの寮に入るとかって出来るのだろうか。もし違う寮に入ってしまったら……うわあ、それは怖い、な。目を伏せ頷くと「絶対だよ」なんて不穏な

言葉を言い残された。思わず両手を握り合わせる。どうかお願いします神様イエス様、ぼくとハリーを同じ寮に入れてください……!!
なんだってしますから……!!

組分けの儀が始まった。マクゴナガル先生は長い羊皮紙の巻紙を手で一歩前に進み出ると、名前を読み上げる。

「グレンジャー・ハーマイオニー！」

聞き知った名前に、身を乗り出して前を覗いた。帽子はしばらく考え込むと、やがて「グリフィンドル！」と叫ぶ。次は、ヒキガエルを探していた男の子、ネビルだ。彼もまたグリフィンドルに選ばれた。

ドラコの頭に乗せられた帽子は、頭に触れるよりも早くに寮の名前を叫んでいた。「スリザリン！」と寮の名を、当然とばかりの顔で受け流している。

「ポッター・ハリー！」

ハリーの名前に、大広間中に囁きが満ちた。有名人だなあ、ハリー。そんな兄を持っててぼくは幸せ者だよ……なーんてね。

ハリーの組分けには、随分と時間が掛かった。しかし、帽子が叫んだ寮は、勇気を重んじるグリフィンドル。ハリーらしい。

「ポッター・アキー！」

マクゴナガル先生が、ぼくの名前を読み上げた。グリフィンドルだ、グリフィンドルだと呟きながらも椅子に座り、帽子を被る。一瞬で視界は真っ暗になった。やっぱり大きいなあ、この帽子。

「やれやれ、お主かの。同じ人物をまさか2回も組分けする羽目になるうとはのう……」

「二回？」

はて、とぼくは首を傾げた。どういうことだ？ ぼく、アキ・ポッターは、そりゃあ夢では幣原秋なんて子の人生体験したりして、その一環で組分け帽子も被ったけども……。

「……………」

「おっと口が滑った的な感じで黙り込むの止めてもらえますか超気になる」

「さて、お主は確実にレイブンクローで決定しとるからな、レイツ!？」
「ちよつと待て帽子」

帽子の裾の部分をギリギリと引つ張る。今聞き捨てならないのが聞こえた気がする！

「今のは間違つたんだよね？ 早まり過ぎじゃないの帽子、ぼくはグリフィンドールに入りたい……いや、入らなきゃまずいんだよ」

「いや、お主程レイブンクローに相応しい者はおらん。七年間見て確信した、じゃから……!」

「絶対グリフィンドール……!」

水面下での激しい戦いが繰り広げられているのを、唯一気付いているマクゴナガル先生は見て見ぬ振りだ。

「前はあんなに可愛らしい子じゃったのに、一体何でこんな子になつてしまったのじゃ……!」

「いやいや帽子、ぼくも捻くれたくつて捻くれてる訳じゃないんだよ……! 今回はどうしてもなの、ハリー様の命令なの！ 兄貴には逆らえないって、弟の相場が決まつてるんだ……!」

まるで祖父と孫のような台詞の応酬だけれど、一応ぼくと帽子は初対面だ。

「……な、言ってみ？ グリフィンドールって。ほら、グ・リ・フィン・ド・ー・ル、リピートアフターミー？」

「無理じゃつ、やつぱりレイ……!」

「あーあーあー、聞ーこーえーなーいー。いやさあ、グリフィンドールって言ってくれるだけでいいんだ！ お願いってば、幣原の時はなんかもうほぼ『どれでも好きなを選んでいいよ』状態だったじゃない!」

「確かにあの時はそうじゃった、でもそれから七年お主を見ていて確信したのじゃ、レイブンクローの一心に真実を追い求める心からして、まさにお主じゃ、とな!」

「帽子はぼくの何を知ってるの!？」

ぼくがツツコミを入れた一瞬の空白を、帽子は見逃さなかった。大広間中に響き渡る「レイブンクロー!!」という声に、ぼくはがっくり

と肩を落とす。生まれて初めて口喧嘩で負けた……ショックだ。

沸き上がる拍手。ああ、懐かしのレイブンクロー。ハリーと目が合い、思わず目が泳いだ。ごめんハリー、無理だったよだからそんな怖そうな笑顔を向けられないでお願いします！

レイブンクローのテーブルにつくと、途端に質問責めに遭った。やっぱりと言うか、『あの』有名なハリー・ポッターとの関係を聞かれるものが多かった。ぼくは人当たりのよい笑顔で、障りなく答えている。途中『両親が殺されてどう思った？』『ハリー・ポッターみたいなの名人がすぐ近くにいてどう思うの？』『スリーサイズは？』などの不躰な質問は綺麗に聞こえなかった振りで誤魔化させてもらった。……ちよつと最後の質問出した奴誰だ。

ロンが当たり前にグリフィンドールに入り、まだ組分けされていない者は残り一人となった。その子は汽車で見た『あの子』とは違うため、ぼくが気付かないうちに組分けを済ませてしまったのだろう。でもこの人混みの中、一人の少女を見つけるのは至難の技か。それでも諦め切れずに彼女の姿を探してみる。

……見えた。スリザリンのテーブルでドラコの隣に座っている。愛の力って恐ろしい。

組分けが完全に終わり、組分け帽子が奥へと下げられると、ダンブルドアが立ち上がった。腕を大きく広げにつこり笑っている。ぼくは後ろ髪を引かれながらも、彼女から目を逸らすとダンブルドアを見た。

「おめでどう！　ホグワーツの新生、おめでどう！　歓迎会を始める前に、一言、二言、三言、言わせていただきたい。では、いきますぞ。それ！　わっしょい！　こらしよい！　どっこらしよい！　以上！」

啞然とした。最高か、この先生。歓声を上げる皆に負けじと、手を叩く。そしてテーブルに目を戻し——驚いた、皿が食べ物でいっぱいになっている。どれもダーズリー家では食べたことのない、どころか食卓にすらも並ばないような豪華なものばかりだ。デザートまでしっかり食べた頃には満腹になっていた。お腹いっぱい食べられるってこんな幸せなことだったんだね、初めて知ったよ。

ふと視線を感じて、ぼくは振り返った。教職員のテーブルからだ。しかし視線の主が誰なのかは分からなかった。首を傾げつつも、気のせいだろうと一人結論づけ、目の前のデザートを食べるのに集中する。デザートが綺麗に消えた後、ダンブルドアがまた立ち上がった。「エヘン——全員よく食べ、よく飲んだことじゃろうから、また一言、三言。新学期を迎えるにあたり、いくつかお知らせがある。一年生に——」

いくつか諸注意を聞き、最後に校歌を歌うと、解散となった。ここからそれぞれの寮へは、監督生が先導していく。離れてしまう前にと、ぼくは人混みに紛れてレイブンクローの集団から抜け出すと、グリフィンドールの集団の中にいたハリーを見つけ出した。謝る分は早めに謝っておかないと——

「あつ、ハ「アキっ！ 僕を置いて行くなんて酷いよお！」うぐっ……!!」

ハリーはぼくを視認すると、すぐさま抱き着き、そのままの勢いで腕をぼくの首に引つ掛けた。し、締まる……！

「アキはもう兄である僕なんてどうでもいいと思ったの!? アキと同じ寮になれたら最高だったのに！」

「ちが……話を……」

引きはがそうともがくも、腕に力が入らない。声も出ないから助けも呼べないし、こういつたさりげないところで腹の黒さをチラ見せるのは良くないと思う……というか本当に、苦し……

がくり。

「ねえ聞いているのっ……って、ぎゃあ!? アキ、アキ——!!」

ハリーの声を聞きながら、ぼくは意識を吹っ飛ばした。

第12話 泡沫の夢

ケホン、と咳き込んだ。頭から爪先までずぶ濡れだ。制服と髪が肌
に張り付いて、気持ちが悪い。湖から這い上がった体勢のまま呼吸を
整えていたぼくだが、やがて散らばった荷物を手に立ち上がった。湖
に投げ込まれた本たちは、存分に水気を吸って膨らみ、よれよれに
なっている。これからも読めるようにしておくためには、早めに綺麗
に乾燥させておかなければならない。

——大丈夫。

ぼくは、大丈夫。

足音に顔を上げた。目の前に現れた少年に、思わず目を瞬かせる。

「ライフ……」

息を弾ませたライフ・フェイスナーは、ぎゅつと眉を寄せると杖を抜
いた。思わず身を強張らせる。しかし、彼にぼくを害そうという気は
ないようだ。ぐしよ濡れの制服と髪、それに本が、一瞬で水気を失い
乾く。わ、と思わず目を瞬かせた。

「あ——あり、がとう」

「——どうして」

「えっ？」

目の前のライフは、ギリと奥歯を噛み締めこちらを睨み付けてい
た。普段温厚で、いつもニコニコと笑顔を浮かべている彼にしては、
随分と珍しい仕草だ。何か怒らせるようなことをしてしまったのだ
ろうか。いや、きつとそうなのだろう。

「ごっつ、ごめんなさい……」

本を胸に抱きかかえ、身体を小さくして目を伏せる。息を潜めてい
ると、ライフはため息を吐いた後、静かな声で問い掛けた。その声は
随分と早口で、ぼくは一部しか聞き取ることが出来なかった。

「どうして——なんだ」

「えっ？」

おずおずとライフの顔を見た。ライフは、怒っている——というよ
りもむしろ、理解に苦しんでいるような、理解できないものを見るか

のような瞳でぼくを見下ろしていた。

「どうして、一人で堪えようとするんだ。どうして助けを求めない。……どうして、誤解を解かないんだ。どうして、本当のことを黙っているの」

「……それは、は」

言い淀む。上手く、言葉が組み立てられない。考えていることも、伝えたいこともある。でもそれを、綺麗に伝えることが出来ない。

ぼくの無言を、彼はどう受け止めたのか。やがて、大きなため息を一つ吐くと、彼は歩き去って行った。



荷物を湖にばら撒かれ、自身も湖へと突き落とされた少年を、ピーター・ペティグリューは足を止め、ただただじっと見つめた。

ロクな抵抗もせず突き落とされた少年の名は、幣原秋。レイブンクローの、日本人の一年生。この前、同級生を三人聖マンゴ行きにしたと、密やかに噂が流れていた。それを大義名分として、人は振り翳す。

「……………」

小さな、無害そうな男の子。それが得てして『標的』に変わることもあるのだと、ピーターはよく知っていた。そもそも、あの少年が無害であるとは決めきれない。見た目はどこにでもいるような子だが、しかし同級生にも随分と体格で劣るあの子が、一体どうやって三人を病院送りにするほどの怪我を負わせたのだろう。謎だ。

「何をしている!!」

怒鳴り声に、蜘蛛の子を散らすように、湖の周りでたむろしていた彼らが逃げていった。凄みに、教師かと思つて様子を伺う。

違う、教師ではない。生徒だ。レイブンクローの、自分と同じ一年生、レイフ・フィスナー。有名な家の出だと、ジエームズとシリウスは話していた。

レイフは、逃げた彼らを追うか迷ったようだが、湖から自力で這い

上がった幣原秋に目を留めたようだ。険しい顔で、幣原秋を見下ろしている。

「おーい、ピーター！ 何してるんだ！」

「置いてくぞー！」

前に行くジェームズとシリウスが、ピーターの不在に気がついたようだ。大きな声で、ピーターを呼んでいる。

幣原秋から、目を離した。

「うんっ、今行くよ！」

何も見なかったように、彼らの元へと走った。



パンツ、と勢いよく机が叩かれた。図書館で勉強していたセブルス・スネイプは顔を上げ、はあ、とため息をつく。

「図書館では静かに、だぞ、リリー」

「どういうことよ」

リリー・エバンズは、セブルスの注意を無視すると、無表情でもう一度机を叩いた。何かに対してもものすごく怒っているのは分かるが、如せんここは図書館、厳しい司書の先生もいるため騒いで良い所ではない。

まあまあ、と落ち着かせるように近くの椅子に座らせると、リリーの手をそっと握った。

「どうしたんだ」

「秋のことよ。始業式の時、同じコンパートメントで自己紹介し合ったじゃない、忘れたなんて言わせないわ」

「忘れるわけがないだろう」

忘れるわけがない。あんな子供、初めて出会ったのだ。言葉が喋れないというのは先行きが不安だと、出会って間もない少年を随分と心配したものだ。同じ寮になれば、せめて自分が守ってあげられる――そう頭の片隅で思っていたのだが、あえなく分かれてしまった。まさか、レイブンクローに組分けされるとは。自分と同じスリザリン

には組分けされないだろうと思っていたのだが、リリーを迎え入れたグリフィンドールならば……と考えてはいた。

日本人特有の、艶やかな黒髪。後ろで一つに結った髪型。少女のよ
うな容姿。

そして、あの純粋な笑顔。悪意というものを全く知らず、愛され育
まれた者のみが浮かべることの出来る、あの表情。

「あんなの、ただのいじめで嫌がらせよ。知性を重んじるレイブンク
ローが、聞いて呆れるわ」

「……見た、のか」

「さつきあった、闇の魔術に対する防衛術の授業でね……グリフィン
ドールとレイブンクローは合同授業なの。そこで……全く」

リリーが顔を顰めたことで、何となくの様子が想像出来た。リリー
はしばらくむっすり黙っていたが、やがて静かに目を伏せ、吐き捨
てるように呟いた。

「なんで気付かなかったんだろう、私……最低だ。友達が苦しんでい
ることに、気付いてあげられなかったなんて……」

その言葉に、セブルスも表情を歪めた。

「……仕方ないよ、リリー。僕と君と彼は——秋は、そもそも寮が違う
んだ。僕らは、まだ入学したばかりで……身の周りの環境が変わっ
て、慣れるのに無我夢中だったんだ。他人を気にかける余裕なんてな
かった、そうだろう？」

「彼らは秋に構う余裕があるっていうのにな？」

う、と思わず口ごもる。セブルスの表情に、リリーは失言を察した
のだろう。「……ごめん」と眉尻を下げ、椅子に座り直した。

「……それじゃあ、一体私は、どうすればいいんだろう……」

その言葉に対する的確な答えを、今のセブルスは持ち合わせていな
かった。



目が覚めたら、そこは見慣れない場所だった。一瞬茫然とするも、

すぐさま昨日の出来事を思い出す。

「……あー……」

そう言えば、ハリーに首を絞められて気絶したんだっけ、ぼく。普通、じやれて首を絞めるくらいじゃ到底意識は飛ばないので（多分）なかなかどうしてぼくは色々不運なようだ。早死にする気がする。嫌な未来予想だ。

ベッドから身を起こすと、ぐっと伸びをした。そして、気付く。

「……ハリー」

パイプ椅子に腰掛けたハリーは、ぼくのベッドに突っ伏すようにして眠っていた。きつと、ぼくが目を覚ますまでずっと見守ろうとしていたのだろう。その試みは残念なことに失敗してしまったようだが。

今の時刻を確認する。午前六時三十分……って、普通に眠っちゃっていたのかよ。意外と図太いところもあるんだな、ぼく。自分に呆れながらも、ハリーの肩を軽く揺さぶった。

「ハリー、起きて。朝だよ」

「んう……ふああ……」

ハリーは半眼のまま頭を起こすと、ゆっくりと辺りを見回した。ま、夜を徹する気持ちでぼくを見守ってくれていたのだろうからそりゃあ眠いよね、と思いつつ、空中ブランコ状態のハリーの眼鏡を、元のポジションへと戻してやる。

「おはよ、ハリー」

「おはよう……あつ、アキ!! やつと起きたんだね心配したよロンにはやり過ぎって言われたし、アキ、ごめんねごめんねホントにごめん!!」

「あー、いいっていいって」

「熟睡してたし。言わないけど。」

それでも、ハリーはしゅんと項垂れている。そんなハリーの髪を、くしゃくしゃつと掻き混ぜた。

「ぼくは大丈夫だから、落ち込むなって、お兄ちゃん?」

滅多に呼ばない『兄』という単語をおどけて口にする。くすりと

笑ったハリーは、少し元気になったようだった。

「あ、そうそうこれ、アキに渡さなきゃいけないんだった。はい、レイブンクローの制服一式ね」

「あ、そっか。手際がいいなあ」

すっかり忘れてた。レイブンクローカラーの青と銀のネクタイを見て、グリフィンボールに入れなかったことを思い出す。まさか口喧嘩で負けるとはなあ……しばらく根に持つぞ、ぼくは。

ぼくが真新しい制服に袖を通すのを、ハリーはじっと眺めていた。

「何？」

ぼくはネクタイを手早く結びながら尋ねる。

「いや、なんていうか……新入生らしくないなー、っていうか……なんか、手慣れてるみたいだな……ネクタイの結び方なんてなんで知ってたんだよっていうか……」

ハリーにそう言われ、改めてぼくは自分の姿を眺めた。言われてみれば、手慣れているというのも分かる。新入生らしくない、というのも、確かに。一体どうしてだろう、と考えて、ああ、と思い出した。幣原の夢のせいだ。あれで不慣れなまでも、ネクタイを苦勞して結んだり制服着たりしていたからだ。多分ぼくは、やろうと思えば日本語も話せる。なんだか人生を人の二倍送っている気がするのには気のせいだろうか。ということは、老けてるってこと？ わあ、嫌すぎる。泣きたい。

「ねえアキ、僕のネクタイも結んでくれる？」

ハリーが、ぼくを見て困った顔で頼んでくる。はいはい、とぼくは笑顔を向けた。グリフィンボールカラーの赤と金のネクタイを受け取ると、ハリーに近付いて首に掛けてやった。しばし、ぼくらは黙り込む。

「……寮、離れちゃったね」

「……うん」

カッターシャツの襟にネクタイを滑りこませると、ネクタイの両端を持って長さを調整した。

「寮は、卒業するまで変わらないんだよね」

「……うん」

一度交差させ、結ぶ。ナイロン同士が擦れ合いしゆるりと音を立てた。

「今までみたいなのに、ずっと一緒にはいられなくなるんだよね」

「……うん」

最後に細部の調節をして、仕上げる。綺麗に整えた。と、そこでハリーは、ぎゅつとぼくに抱き着いてきた。ぼくとハリーには、それなりに体格差が存在する。だから、ハリーの腕の中にすっぽりと収まってしまう。

「……アキ、小さくて、まるで女の子を抱きしめてみたい」「うるさい」

「髪も長いし、さらさらだし」

ハリーはぼくの髪に指を通した。何の引つ掛かりも感じず、するりと下まで通り抜ける。髪、結ばなくちゃ。そう、ぼんやりと考えた。

「……アキの匂いって、なんか落ち着くんだ」

「なんだよ、匂いって」

「じゃあ、雰囲気」

ぼくの肩に、ハリーは頭を載せる。その際吐息が首筋にかかり、その感覚がくすぐったい。思わず身を振って笑った。ぼくの反応が気に入ったのか、ハリーは調子に乗って、わざとぼくの首に自分の髪をさわさわと当て出した。くすぐすと笑いが抑え切れない。

その時、ベッドの周りを囲ってあったカーテンが乱暴に開けられた。校医の先生——マダム・ポンフリー——は、ぼくらを見てカチンコチンに固まると、気を取り直したように息を吐き。

「……ミスター・ポッター。個人の価値観に文句はつけませんが、いちやつくの場所に場所と時間を考えていただきませんか？」

「誤解です先生!!」

こうして、朝の時間は慌ただしく過ぎて行く——



一時間目は魔法史、ビンズ先生の授業だった。この科目は、幣原秋の『記憶』と変わらずゴーストが先生の授業で、そして教室も、その記憶と変わらぬ場所にあった。ぼくは、無駄に重たい教科書と羊皮紙の束と筆記用具を腕に抱き、教室へ繋がる階段を二つ飛びに駆け上がる。

昨日は結局レイブンクロー寮に一度も行っていないなかったので、ひとまず荷物の整理を済ませないとな、と簡単に考えていたのが間違이었다。随分と面倒見が良さそうな先輩に捕まってしまったぼくは、レイブンクローの規則をしっかりと懇切丁寧に教えて頂き、気が付けば一時間目が始まる五分前。無駄に広いホグワーツ、ちんたら歩いていたら授業に間に合わない。

そんな訳で、入学早々本気ダツシユだった。

教室の扉を開け、よろよろと身体を滑り込ませる。ちょうどその時、始まりのチャイムが鳴り、滑り込みセーフ、と胸を撫で下ろした。

ビンズ先生はまだ来ていないようだ。壁に寄り掛かり呼吸を整えると、ぼくは空いている席を探すため、教室中をぐるりと見渡した。そして一番後ろの席を見、おや、と目を瞠る。

一人の少年が、机に突っ伏して眠っている。それだけなら、よくあることだ。魔法史の授業は、まるで催眠効果のある液体が何かを振りまいているのではと訝るほどに、生徒を熟睡させてしまう。授業が始まる前に寝ていても、ほんの少し早いだけだろう。

気になったのは、そこではなく。

彼の周り。彼を中心として、半径にしておよそ三メートルの円を描くよう、ぽつかりと人がいなかった。

「……………」

考えたのは一瞬だった。一直線に彼の隣の席へ歩いて行こうとし

——突然、腕を引つ張られた。

「アキちゃんは、あの人に近付かない方がいいと思うよ」

ぼくを引き止めたのは、一人の女の子だった。青に銀色のネクタイ——うちの寮の子か。彼女の後ろにも数人レイブンクロー生がいて、皆一様に心配そうな目をぼくに向けている。

「それって、どういうこと？」

彼女が言うことには。

——昨日、レイブンクローで盛大な喧嘩があったということ。

そして、

上級生四、五人を、

魔法も使わず、

素手でボコボコにのしてしまったのが『彼』である、ということ。

「……すげえな」

「すごいじゃないよアキちゃん！ 怖かったんだよ滅茶苦茶！」

彼女が身震いしながら抗議する。それに合わせ、何人かが同意するように頷いた。レイブンクローは基本的に知性を重んじているため、自然と物静かな人間が多く集まってくる。ホグワーツの四つの寮で、一番温室育ちの坊ちゃん嬢ちゃんが集まりやすいところなのだ。そんな中での派手な喧嘩は、確かに衝撃的なのかもしれない。……いや、まあぼくは今までダドリー達のパンチを散々に受けてきた訳で、喧嘩というよりも一方的なサンドバックは当たり前という環境で育ってきているため、喧嘩などは見慣れている訳だからショックが少ないのだろうなあ。

「アキちゃん、だからあの人には近付かない方がいいよ。怖いし、アキちゃん可愛いし」

は？ とぼくは最後の言葉に首を傾げた。彼女は、はわわっと顔を赤らめ手をぶんぶんと振る。なんだろう、よく分からない。ついでに言えば、なんでぼくはアキ『ちゃん』なのだろうか。ぼく、男なのに。……怖い、ね……」

ぼくはちらりと『彼』の姿を横目で見た。

単純な『チカラ』——魔力でも腕力でも知力でも、それを持つ者は自然と他人に忌避される——か。

ぼくは、その実例をよく知っている。

膨大なチカラのせいで、恐怖され敬遠され恐れられ、一人ぼっちになっちゃった一人の少年を知っている。

「本当に怖いのかな？」

ぼくの眩きに一人が聞き返したが、ちょうどその時先生がやって来た。彼女らは蜘蛛の子を散らすように急いでそれぞれの席へと戻って行った。ぼくは小さく肩を竦めると、持っていた荷物を抱え直し、近くの席に着席する。

……つまり、彼の隣の席に。

「……………」

先生が来て話し始めても、彼は机に突っ伏したまま身じろぎしない。というかこれ、ホグワーツに入学して最初の授業なんだよね、その授業で寝るってどれだけだよ、と顔を引き攣らせた。ぼんやりと彼を観察する。

短い金髪は攻撃的っぽく立っていて、左耳には雪印のピアス。背丈は座っているからよく分からないが、それでも多分ぼくより十五センチは高いだろう。着崩した制服は肘の辺りで曲げられていて、黒のインナーがちらりと覗いている。基本的に、真面目っ子の多いレイブンクローでは滅茶苦茶浮きまくっている容姿だった。むしろ入学初日でここまで崩せるのってすごい。

そういえば、この人の名前って何だろう？ と考えながら、教科書を捲った。頬杖を付いたまま、羊皮紙を広げインク瓶の蓋を開けると、羽根ペンを浸す。単調な先生の講義のノートを取りながら、無造作に置かれていた彼の教科書を手元に引き寄せた。皮の表紙をぺらりと開ける。

『A History of Magic』というタイトルの下に書かれた、意外に几帳面で綺麗な字。

『Alice Finsner』

「……………」

何故だか、この名前に引っ掛かりを覚えた。額に手を当て、僅かに考え込み――

「……………なあ、それ、俺のなんだけど」

突然の不機嫌そうな声に、ぼくは飛び上がりそうなくらい驚いた。慌てて隣を向くと、そこには声から予想される通り仏頂面の彼――アリス・フィスナーの姿。

「あつ、っ、ごめん……」

「……………」

フェイスナーは眉を寄せてぼくから教科書を受け取ると、ちらりと目を黒板に向けてそのページを開いた。インク壺を回し開け、羽根ペンを握る。

「…………何」

ぼくの視線に気付いたのか、フェイスナーは少しだけ眉を上げてぼくを見た。明るい碧の瞳は、想像していたよりも素直な光を湛えている。

「いや別に。授業はちゃんと受けるんだなーって思ってる」

「どうでもいいだろ」

ふん、と小さく鼻を鳴らして、フェイスナーはぼくから目を逸らした。むう、もっと面白いこと言えば彼の注意を引けたのかな、と、羊皮紙の端つこに落書きしながらいじける次第。しかしまあ、羊皮紙に羽根ペンというのは書きにくい。どれだけボールペンにノートが偉大かがよく分かるというものだ。

結局、ぼくとフェイスナー間の距離は縮まらないまま、その日は終わりを告げた。

……あ、ちなみに、真面目なレイブクロー生でも魔法史の授業で襲ってくる眠気に勝っていた人間はごく一部しかいなかった、ということを書いておく。

第13話 二つのセカイと邂逅と

ぼくは、暇さえあれば最近は何書館で勉強するようになっていた。レイブンクロウの談話室は、勉強家が多いレイブンクロウ生らしく学習環境はとても整っているのだが、生憎と今のぼくにとっては居心地が悪い空間だ。今までは、それでも我慢して勉強していた。しかし、あまりにもぼくにちよっかいを出してくる奴らが多すぎて、勉強どころの話じゃない。

そんなこんなで最近は何書館の一番奥——禁書の棚のすぐ隣、ほとんど教師にしか利用されないようなコアな本ばかりが並ぶあたりの机が、ぼくのベストスポットだった。何より、人が滅多に入って来ないのがいい。

ノートを開いて、使い慣れたシャープペンを走らせる。四人掛けの机だが、誰も来ないためありがたく一人で独占させてもらっている。目の前に課題の山を積み上げて、今日のノルマを自分に課す。ぼくの場合、普通なら三十分で済むような課題だって、言葉の問題で三時間は掛かってしまう。教科書に加え、参考資料に辞書や参考書を小脇に積み上げた。初めはこれらの本を探すのにも戸惑っていたが、それも随分と慣れた。一月も経てば、色んなものに慣れてくる。

「be worth……で、くする価値がある……cannot help ……ing……くしないではいられない……えっと、なら、He cannot help feeling anxious about his future——」



参考書片手に勉強している『彼』の姿を、遠くからじっと見つめる人物がいた。その人物は、意を決したように頷くと、拳を握って『彼』への一步を踏み出す。

二人の間の距離が縮まっていく。彼の像が、段々と大きくなっていく。しかし、本棚を四つ挟んだ場所に足を踏み入れたところで『彼』は

顔を上げた。勘付かれた、と焦るも、もう遅い。

『彼』は荷物を纏めることなく、そのまま椅子から立ち上がった。近付いてきた相手が誰であるのかを確かめもせず、走り出す。慌てて『彼』を追うも、意外と足が早い『彼』は一瞬で視界から消えてしまった。

「ああ、もう！」

あとちよつとだったのに、と少女は――

リリー・エバンズは歯噛みして、先程まであの少年、幣原秋が座っていた席を見、地団駄を踏んだ。

それが、リリー・エバンズと幣原秋の『日常』だった。



完全に振り切ったことを確認して、ぼくは観葉植物の影でほうつとため息を吐いた。今回は一体誰だろう、と頭の片隅でちらりと考える。

言葉の通じないぼくに、ちよつかいを掛けたがる奴は意外と多い。というわけで、もうあのような事故を起こしたくないぼくは、誰かの視線に勘付いた時点ですぐさま逃げるようにしていた。元々日本人というのは、人の視線に敏感なのだ。置いてきたぼくの私物に悪戯をされるのは少し困るが、しかしそれらの直し方も手馴れてきた。図書館の本には、さすがに奴らも悪さはしないだろう。怖い司書さんもあることだし。

少し経ってから図書館に戻ろう、と心に決めると、ぼくは懐から参考書の一ページを取り出し、覚え始めた。



「今からの授業、なんだったっけ？」

「魔法薬学だよ。急いで、アキー！」

金曜日。僅かな休み時間は、皆が一度寮へ戻り荷物の整理をするため慌ただしい。大鍋に真鍮ばかり、薬瓶を乱暴にバッグに詰めると、

急いで魔法薬学の教室、地下牢へと向かった。ぼくと同室の友人、ウイル・ダークと共に、階段を駆け下りる。どうしてレイブンクローは塔の上にあるのだ、と、ロウエナ・レイブンクローを恨みたくもなっ
てしまう。

「魔法薬学の教授なつ、目茶苦茶意地悪でつ、自分の寮の鼻屑ばかり
だつてつ、兄貴が言ってたつ！」

「あの教授がつ?! いやつ、あの人はそんなことしなかつたつ、よう
なつ、気がするんだけど!?!」

「なんだつ、お前知り合いなのかつ?!」

階段を二段飛ばしで駆け降りる。地下牢に近づくにつれ、段々と空
気が冷たく鋭くなってくるのが肌で分かった。

「ホラス・スラグホーンでしょ!?! 魔法薬学の教授つて!」

「はあ!?! アキ、お前何年前の話してんだつ、そんな俺らの親父の頃
の時代だぞつ!」

え、とぼくは驚いてウイルの顔を振り返った。途端、階段に足を取
られ転びそうになる。

ひ、と青褪めるも、瞬時に後ろから首根っこを掴まれ、階段落ちは
避けられた。

「前見ろ、バーカ」

「……ありがと、フィスナー」

アリス・フィスナーは無表情でぼくの言葉を受け流すと、そのまま
ぼくらを抜いて走って行った。……なんで一緒に行こうとしないん
だろうか。人とつるむのが嫌いなのかもかもしれない。

「変な奴だよなあ、フィスナーつて」

ウイルが、フィスナーの消えた方向を見ながら目を細める。ぼくと
ウイル、それにフィスナーと、あともう一人、レーン・スミック。こ
の四人で一つの寝室を使っているのだが——フィスナーは相変わら
ず『近寄るな』オーラ全開で、友好的にしたいぼくらを徹底的に拒ん
でいる。仲良しこよしをしなくとも良いが、せめて寝室くらいは居心
地の良い空間にしたいものだ。そのくらいの意は汲んで欲しい——
なんて。

「変、かな？」

「あ、言い方悪かったな？ 変な奴、じゃなくって、えつと……変わった奴？」

「それって、違いあんの？」

苦笑しつつも時計を見る。授業開始まで後五分しかない。フィスナーについての話をそこで切り上げると、ぼくらは走り出した。

……あれ、そう言えば、結局魔法薬学の教授って誰なんだろう？



その疑問は、五分後に解消された。

チャイムが鳴るギリギリに飛び込んできたぼくらを、感情の籠らない目でじろりと見据え「座りたまえ」と吐き捨てた『彼』を見て、ぼくはその場に動けなくなった。

脂っこい黒髪に土気色の顔色。黒一色の服装に——そして、かすかに残る面影。

「……あ……」

目を見開いて、唾然とぼくは彼を——セブルス・スネイプを見つめた。

「早く席に着きたまえ」

対して彼、スネイプ教授は何ら表情を変えなかった。ウィルに引つ張られ、ようやく我に返る。慌ててスネイプ教授から目を逸らした。

「……あの先生、——何て名前なの？」

スネイプ教授が出席を取っている間、ぼくは確認の意を込めてウィルに尋ねた。返ってきた答えは、実にシンプルなものだ。

「ん？ ああ、セブルス・スネイプ教授。スリザリンの寮監だ」

どうということだ、

どうということだ!?

疑問が次々と頭の中に浮かんでは弾ける。黙り込んだぼくをどう思ったのか、ウィルはぼくの背中を軽く叩き「まあ、ちよつとくらい睨まれたところで気を落とすなよ」と励ました。ぼくはその誤解を訂

正せず、ウイルに軽く頷いてみせる。

なんで、どうして。

どうして君がここにいるんだ!?

「……ポッター。聞こえているのかね、アキ・ポッター!!」

「……あつ、はいっ!」

自分の名前が呼ばれていることに気がつかなかった。慌てて返事をしたぼくに、スネイプ教授はぼくを横目で睨みつけ、フンと鼻を鳴らす。

出席を取り終わると、スネイプ教授はクラス全体を見渡した。

「このクラスでは、魔法薬調剤の微妙な科学と、厳密な芸術を学ぶ」

静かな声が、教室中に響き渡る。

「このクラスでは杖を振り回すようなバカげたことはやらん。そこで、これでも魔法かと思う諸君が多いかもしれん。

フツフツと沸く大釜、ユラユラと立ち昇る湯気、人の血管の中をはいめぐる液体の繊細な力、心を惑わせ、感覚を狂わせる魔力……諸君がこの見事さを真に理解するとは期待しておらん。我輩が教えるのは、名声を瓶詰めにし、栄光を醸造し、死にさえ蓋をする方法である——ただし、我輩がこれまでに教えてきたウスノ口たちより諸君がまだましであればの話だがな」

教室がシンと静まり返った。誰もが姿勢を正してスネイプ教授を注目している。その様子を確認したスネイプ教授は、唇の端を歪めて薄く笑った。

「なるほど、なるほど……諸君らは先程のクラスより少しはマシンなようだ……まあ、先程のクラスには、かの有名なハリー・ポッターがいるから仕方あるまい……」

その嘲るような、揶揄するかのような態度に、ぼくは眉を顰めた。スネイプ教授は続ける。

「有名なだけではどうにもならん。諸君の中でもし彼に対して幻想を抱いている者は、すぐさまその考えを捨てるべきだ。彼は極々普通の子供であり、英雄なんぞただの虚像で、本質は愚鈍で鈍重で不勉強で怠慢な人間なのだということを……」

思わず、机の下で拳を握り締めた。本気でスネイプ教授を睨む。おい、とぼくを心配げに見るウィルの声が遠い。

「自分が有名であることを鼻に掛け、学業を疎かにするような、そんな彼のような人間に諸君らがならないことを願っている……さて諸君、教科書の十三ページを開きたまえ……」

立ち上がったぼくに、生徒全員の注目が一斉に集まった。座っていた椅子が反動で後ろに倒れ、大きな音を立てる。歯を食い縛り、スネイプ教授を睨んだ。

「ハリーを悪く言うなっ……!!」

「……ほほう、そういえばいたのでしたな、有名なハリー・ポッターに誰よりも近しい人間が」

「黙れ!!」

「貴様こそ口を慎みたまえ。ポッターの弟だけはある、貴様も所詮は」

「自分の目の前で大切な人を貶されて口を慎める奴がいたら、そいつはただの人でなしだ!!」

微かに、スネイプ教授の瞳の光が揺らいだ気がした。しかし気のせいであったようで、瞬きをした次の瞬間にはその光は消え、虚ろな無表情に戻る。

「何度も言ったはずだ。口を慎め。レイブンクロー五点減点、罰則だ。今年入った一年の中では一番だろう……教科書十三ページを開け。今日はおできを治す薬を作る……各自ノートに書き取れ。書いた者から作り始めろ」

ぼくは無然とした表情のまま、倒れた椅子を起こすと乱暴に座った。指定されたページを開き羽根ペンを握る。

魔法薬学の教授がセブルス・スネイプであるということのを忘れるくらいに、ぼくの頭の中はスネイプ教授への怒りで一杯だった。



夕食後、午後七時五十分。ぼくは冷たい地下牢へ通じる階段を一人

で降りていた。カッン、カッンと、石畳に靴音が反響する。

「……………」

やがて、スネイプ教授の研究室の前で足を止めた。中からは、微かに光が漏れ出している。ぼくは大きく深呼吸をしてから、扉をノックし、ドアノブを引いた。

「…………アキ・ポッターです」

「入れ」

冷たい声だった。ぼくは無言で中に入ると、後ろ手にドアを閉める。

本と魔法薬が、壁の棚にずらりと並んでいる部屋だった。元来几帳面な性格なのだろう、床にはチリ一つ落ちていない。机の前で書き物をしていたスネイプ教授は、立ち上がるとぼくにゆらりと近付いた。

「何故今日ここに呼ばれたか、分かっているだろうな」

「……………」

スネイプ教授の無表情な瞳が、真っ直ぐにぼくを見据える。負けじとぼくも見返した。教授の瞳の中に、自分の姿が映っている。ぼくからほんの五十センチばかり離れたところで、教授は立ち止まった。その近さに思わずたじろぎかけ、その気持ちを覆い隠すように、教授をきつと睨みつける。

教授はゆらりと右手を伸ばした。緩慢な動作からは想像が付かないほど素早い動きで、ぼくの胸倉を掴み、壁にぎりぎり押し付ける。衝撃と困惑で、思わず頭が真っ白になった。

スネイプ教授はぼくに顔を近付ける。さつきまでの無表情な瞳とは打って変わった、憎しみなのか悲しみなのか嬉しさなのか分からないが、とにかく色々な感情が入り混じった瞳で、

「どういうことだっ…………説明しろ、幣原秋!!」

「なっ…………」

言われたことに対する理解が追いつかない。混乱する頭を差し置いて、身体が勝手に動いた。左手をローブに突っ込み、杖を握り締め、

「……………」

パァンツ、という鋭い鞭のような音が響き、スネイプ教授はぼくの

胸倉から手を離した。赤く、鞭で打たれたようにみみず腫れがのたくっている右手を押さえて、その激しい瞳でぼくを睨みつけた。しかし、その口元には壮絶な笑みが浮かんでいる。

まるで、永く焦がれていたものをやつと手に入れたような、そんな狂気じみた。

背筋に寒気が走った。

「なるほどなるほど……盾の呪文を無言呪文では……相変わらず健在らしいな、秋。しかし解せぬ、何故ポッターなどと、あいつの苗字を名乗っている!?!」

「……っ、ぼくはっ、幣原秋じゃないっ……!! アキ・ポッターだ!!」
「違う!! 貴様は……」

そこで、スネイプ教授の言葉が止まる。目を伏せ黙り込むと、ぼくから数歩距離を取り、上から下まで眺めた。

「……まさか、ここまで似て別人なんて有り得るのか……!?! いやでも、実際に退行が人体で成功した例は今まで報告されていない……」

ああ、もう、スネイプ教授が一体何をしゃべってるのか分からない。でも、一つだけ確信した。

それは、今までのぼくの価値観を全てひっくり返すようなもの。

幣原秋の記憶に出て来る『セブルス・スネイプ』と、この『スネイプ教授』は同一人物であるということ。
つまり。

幣原秋はぼくの夢の中だけの住人じゃなく、ちゃんと実体の伴った生身の人間であるということ。

思わず。

簡単に信じることが出来ない真実を目の前に突き付けられたぼくは、叫んでいた。

ずっと言いたかったことを。

「……じゃあっ、何でアイツを……」

同じ世界の住人だったというのなら、

幣原秋を知っているのなら、

ぼくがどれだけ願っても届かないあの世界にいたというのなら、
なんで、

他人に避けられ、

聞こえる陰口に涙を堪えて、

ボロボロの心で必死に耐えて、

笑顔を失ってしまった彼を、

他人を傷つけることを自分が傷つくことよりも恐れて、

自分から他人を避けて、

それでも心の底から他人を望んでいるアイツを、

「なんで幣原秋を助けてくれなかったんだよ!!」

ぼくの言葉に、スネイプ教授は目を見開いて立ち竦む。普段から血の気のない顔色は更に色を失い、瞳は信じられないものを見たような表情を浮かべて。

痛いところを、ざつくりとナイフで抉られたように。

「……それならば、お前は一体誰だ」

静かな言葉に、息を呑んだ。

「幣原秋と寸分違わぬ容姿、等しい声、同じ口調——そんなお前が幣原秋でないというのなら、それでは、お前は一体誰だ」

そんな、ことを言われても。

ぼくが、誰か——？ ぼくは……ぼく、は……。

「……罰則は取り消す。寮へ戻りたまえ、アキ・ポッター」

やがてスネイプ教授から出てきたのは、魔法薬学教師としての言葉だった。

ぼくはのろのろと頭を下げると、部屋を出てレイブンクロー寮への道を取り始めた。

段々と。

歩みが早くなっていき。

最後には短距離走並みの速さで、廊下を駆け抜けて行った。
脳裏に残る、スネイプ教授の最後の表情を振り払いながら。

第14話 全てが始まる、些細な一日

ごめんねごめんね、

僕だって君を救いたかった

僕らの道は、一体どこですれ違っちゃったんだろう？



魔法薬学の教室である地下牢が休み時間に開放されている、という事実は、意外と生徒に知られていない。授業の枠を越えた学習をした者のためのものではあるが、しかし悲しいかな、魔法薬学が得意な者でもわざわざこんなところまで来て勉強しようとする者は稀である。理由は簡単、遠いし寒いし、何処となく陰気臭いからだ。

セブルス・スネイプは、その稀な生徒の一人であった。図書館で借りた魔法薬関連の本を手に、無表情を貫きながらも、頭の中では魔法薬の公式やら何やらがぐるぐる回り回っている。補足だが、彼にとってはそれが楽しいのである。

教室の中へ入る。勝手知ったるとばかりに手慣れた様子で材料棚から必要な分だけ材料を取ると、席に着いた。大鍋に不気味な色をした液体を丁寧注ぎ込むと、杖を一振りして火に掛ける。ニガヨモギの粉末を加え二分三十秒、その間に薬草を刻んで――

その時初めてセブルスは、この教室に自分以外の人間がいたことに気付いた。

小柄な少年だった。セブルスも小柄だが、この少年に比べると大きい。青色のフードがついたローブを身に纏い、黒髪は少女のように長く、後ろで一つに括っている。

その少年――幣原秋は、机に突っ伏して眠っていた。辺りには魔法薬の材料が無造作に散らばっており、大鍋は銀色がかった穏やかな湯気を上げている。大鍋の火が消されていないことを見ると、どうやら途中で眠ってしまったようだ。

「……………」

セブルスは一瞬だけ躊躇ってから、ゆっくりと彼に近付いた。

「……おい、秋、幣原秋、起きろ」

しかし、呼んでも揺すつても、秋が目覚める気配はない。とことん熟睡してしまっている。あまりにも気持ち良さそうに眠っているの
で、起こすのが忍びなくなってくる程だ。思わずため息を吐く。その
拍子に、秋の腕の隙間から覗いている一枚の紙が目に入った。

「……ああ、これか」

ひとつ前の授業で、これと同じ魔法薬を作成した。今回のレポート
は、その魔法薬を使用して薬効を確かめる類のものだ。しかし普通や
れば授業中に一通りは出来るもので、この少年はそう手際や要領が悪
いようには思えないのだが。と、秋の傍らに英和辞典が置かれている
のに気付き、納得した。そう言えば、彼にとっては英語は外国語なの
だ。本人に能力があるうがなかるうが、問題文が読めなければお話に
ならない。よく見てみれば、薬の作り方を記している紙には細かく
色々と文字が——おそらく日本語だろう——書き込まれていた。

セブルスの時計が二分三十秒を指す。後ろ髪を引かれながらも、自
分の大鍋の前に戻り作業を開始した。ヨモギの葉を器用に一ミリ単
位で刻みながら、ふと何かに引つ掛かりを覚える。一体何だ？ とし
ばらく考えこんで、あ、と思い出した。

幣原秋の作っていた魔法薬は、最後は鮮やかなブルーになるはず
だ。だがしかし、秋の大鍋の中にあつた液体は何色だった？ そし
て、あの魔法薬は途中ではなかったか？

セブルスは刻んだヨモギを加えながら、思考する。

（……誤読、か）

やがて、一つの可能性に気がつき舌打ちした。頭をやれやれと振
り、自身の大鍋の火を消すと立ち上がる。薬棚の前に立って必要なも
のを探すと、それを手に取って秋の大鍋に近付いた。退行薬——前の
状態へと遡る薬を、中の薬の様子を注意深く観察しながら慎重に加
え、丁寧に掻き混ぜる。誤読されたであろう場所まで遡ると、新たに
材料を加えた。

（……贖罪のつもりか）

作業を続けながら、思わず自嘲した。結局は、彼を救うために何も出来ない——リリーののように積極的に行動出来ない自分なのか。

「……………」

心の痛みに、歯を食い縛る。

所詮は気になる女の子の前で、ただ虚勢を張りたかっただけなのか。

そんな自分に、酷く吐き気がした。

秋の笑顔をもう一度見たいというこの気持ちも、ならば偽善なのか
もしれない。幣原秋はもう、二ヶ月も前にコンパートメントで出会っ
ただけの自分のことを、忘れてしまっているだろう。

何で、もつと早くに気が付かなかったのだ。どうして、自分は何一
つ行動を起こさなかったのだ。

そうしていたのなら——もしかしたら、こいつは。

こんな酷い嫌がらせなんて受けずに、今も誰かの横で——願わく
ば、自身と、そしてリリーの隣で。

笑っていたかもしれないのに。

「……………」

思わず、ぽつりと呟いた。

この少年が傷つく原因を作ったのは自分だと思い知らされ、一人俯
く。

「……………」

大鍋の中の薬は、いつしか、澄んだブルーに変わっていた。



「……………」

小さな声が聞こえた気がした。夢うつつのまま、ぼくは聞こえる声
に耳を澄ます。

——どうしたの？

頭の中で問い掛けた。

誰に謝っているの？

どうして、そんなに悲しそうなの？

「……ごめん、……」

そんなに泣きそうな声を出さないでよ。

一体、何があったの？

何か、辛いことがあったのかな……。

ぼくなんかでよければ、力になりたいな。

でも、ぼくなんか近付いたら、あっという間に嫌がらせのターゲットにされちゃうから、だから、ぼくは君の力になることが、出来そうにないや……。

「ごめんね……」

眠気でぼんやりした頭で、呟いた。

「……なんで、 が謝るんだっ……やめてくれっ、僕はっ……」

微かな声が、耳に届く。何故だか、すごく懐かしい……そんな声。久しぶりに、ぼくは口元に笑顔を浮かべた。

……眠い。果てしなく眠い。

波のように襲ってくる睡魔に身を委ねかけ——はっ!? と、作りかけの魔法薬の存在を思い出した。一瞬で意識が浮上する。椅子から飛び上がったぼくは、慌てて机に駆け寄り大鍋の中を覗き込んで——

「……あれ？」

既に完成していた薬を見て、首を傾げた。おかしい。ぼくの記憶では、この薬はまだ作りかけだったはずだ。しかしどうだろう、材料の後片付けまで綺麗になされている。もしかして夢遊病者のように、眠りながらも作業を続けていたのだろうか。それは、果てしなく嫌過ぎる。

「……ま、いいか」

ぼくは誰に聞かせるでもなく呟いた。

なんか、久しぶりにいい夢を見たように気分がいい。

晴れ晴れとした笑顔を浮かべて、ぼくはその魔法薬を瓶に詰めると、名前を書いて教授の机に提出した。



「アキっ！ 会いたかった久しぶりだね最近どうご飯食べてるちゃんと眠れてる友達出来たいじめられたりしてないっ!? あとあと」
「ストップ、落ち着いて、ハリー」

まるで詰め寄ってくるように矢継ぎ早に質問（？）を繰り返すハリーを諫める。質問したはいいものの、ぼくの答えを聞く気はあるのだろうか。……なさそうだ。ハリーはそういう奴だ。

「ああでもアキのことが心配なんだよ！ ホントに大丈夫？ 寮で孤立してない？ 嫌な奴とかいない？ 嫌がらせ受けてない？ 言い寄られたりされてない？ セクハラ受けてない？ 僕はすごく心配だよアキが」

「はいストップ、今変な言葉聞こえたー。なんだよセクハラって。それと女の子に言い寄られたことなど今まで一度もないわ」

「大丈夫！ 僕が想定してるのは男だから！」
「なおい悪い！」

想像したくもない。首筋を冷たい手で撫でられた気分だ。腕を触れば、鳥肌が立っていた。うわあ。

「……と、そういえば、レイブンクローに不良が入ったって噂を聞いたんだけど、本当なの？」

「あー……うん、まあ」

アリス・フィスナーの顔を思い浮かべながら、ぼくは曖昧に返事をする。もう余所の寮まで広まってんのか。なんか……やだなあ。

「上級生数百人を前に、切った張ったの大立ち回りをやらかしたっていう」

「すごいことになってるー！」

人の噂は、これだから。

「……ぼくは、悪い子じゃないと思うんだけどなあ」

「そうなの？」

多分ね、とぼくは呟いた。ふうん、とハリーは軽く頷く。

「まあ、何かあったら、僕にすぐ言うんだよ？ アキは何でも自分の中に溜め込む癖があるからね」

「今の言葉、そっくりそのままハリーに返すよ」

その時、予鈴のチャイムが鳴った。あつ、と慌てたように腕時計を確認するハリーに、ぼくは尋ねる。

「次の授業は何？」

「魔法薬学。最悪だよ、スネイプはきつと僕を毛嫌いしてるに違いないね」

「君だけじゃない、ぼくのこと嫌いだろうね」

先日の出来事を思い返ししながら、ぼくは苦い顔で呟いた。ふうん？と少し興味があるように相槌を打つハリーだが、時間が押しているということを思い出したように「ヤバイ！」と叫びダツシユで廊下を走って行った。

「……さて」

図書館に寄るつもりだったのだが、ハリーと話しているとあつという間に時間がなくなってしまった。小さくため息をついてぼくは歩き出し、

「……ん？」

四、五歩足を進めて立ち止まる。足元に転がる『それ』を拾い上げ、目の高さにもまで掲げた。

一冊の本——否、教科書だった。魔法薬学の教科書の表紙をペラリとめくってみれば、そこにはやっぱりというか——

「……ハリー……」

——ハリー・ポッターという見覚えのある名前の、これまた見覚えのある筆跡を左手でそつと撫で、ぼくは息を吐いた。パターンと音を立て教科書を閉じると、ハリーが走って行った方向をしつかと見つめる。

「……これが魔法薬学じゃなかったら、届けないんだけどなあ……」

呟いて小さく笑い、ぼくは駆け出した。

ぼくにも次の授業があるのだということを、忘却の彼方に置き去りにして。



「……………っは、は……」

荒い息を、背後に飛び下がりながら整える。額の汗を、右手で拭いた。目の前には、こちらを睨み据える上級生が四人。

ピリリとした敵意と殺気が、肌を灼く。戦いへの高揚感に、背筋が震える。

「ふ……………い！」

内側から湧き上がってくる『それ』は、空虚な身の内を満たしてくれる。素直な衝動に身を任せ――

アリス・フィスナーは哄笑した。



国際魔法使い連盟に登録されている、名門ホグワーツ魔法魔術学校。英国魔法界随一の尊厳を持つこの学校にも、やんちゃな行動をし、学校や社会に反抗する、所謂『不良』という奴らは存在する。薄暗くじめじめとした場所を好む彼らは、仲間を作り徒党を組む。初日から問題を起こした『はぐれ者』のアリス・フィスナーが声を掛けられるのは、それも当然なことであった。

しかし――

「断る」

申し出を切って捨てたことで、この喧嘩は始まった。一対四、しかも相手は入学したばかりの一年坊主。始めは集団リンチとにやにや笑いを浮かべていた彼らも、雲行きの怪しさに顔面から笑いを拭い去っている。その様子が、堪らなく――愉しい。

自分の居場所は、きつとここなのだ。

こうとしてしか、自分は生きられないのだ。

「――」

父親の顔を思い出し、心が乱れた。チツと舌打ちをし、頭を振る。

殴り掛かってきた一人を、身を翻して交わした。勢いのついた右手を掴むと、トンと軽く捻り上げる。それだけで、その上級生の身体は

ふわりと宙に浮いた。「え？」と目を瞬かせる上級生を、手加減も容赦もなく地面に叩き付ける。背中を強く打つと、しばらくは起き上がることは出来ないだろう。

「——さあ、次はどうだ？」

凄絶に笑う。

腐つても荒んでも、由緒正しい名門血筋の出。幼い頃から一流の教育を受けてきたし、それは体術として例外ではない。護身術を超えた体術は、一通り獲得済みだ。いくつか歳上だからと言って、素人に対し引けは取らない。

——しかしそれは、正面から、一対一で、武器も無しに戦った場合のみである。

「……上級生を舐めんじゃねえぞ、一年小僧が……！」

一人が杖を取り出したのを見て、アリスは動きを止めた。血走った瞳でアリスを見据え、その切っ先をアリスの左胸——心臓に向ける。ざわり、周囲も飛び道具の出現に騒めく。

そうか——失念していた。ここは魔法魔術学校。誰もが魔法使いであることに、変わりはない。

『まともに授業受けてない奴が強い魔法を使えるとは思えない』『でもそうは言っても何が起きるか分からない』『いい、構わず突っ込め』『下手したら命にも関わるぞ』、頭の中でめまぐるしく是か否の議論をしながら、相手の出方を注意深く伺う。

「どうした？ 一年小僧。杖相手のケンカは初めてか？ ビビってんぜ」

「デメエこそ」

反射的に、アリスは言い返していた。

マグル世界の銃にも匹敵する杖が自身に突き付けられていることも忘れ、何も考えずに言葉が飛び出す。

「杖握るのは初めてか？ 震えてんぜ」

あ、やべ、と言ってから後悔するが、時既に遅し。

「やんのかゴリア、上等だ！——」

熱の籠った殺気と共に、杖が振り上げられた。光の速度で、呪いが

襲い掛かってくる。避けることなど出来ない、ただただ来たるべき衝撃に備え身構えて――

聞き覚えのある声が、耳に入る。

「まいったなあ……」

高い、まだ声変わりもしていない少年の声。風鈴の音のような、涼やかで澄んだ透明な声は、決して大きくはないのに不思議と聞き漏らすことはない。思わずアリスは、杖を向けられている状態だというのに振り返る。

「Protego」

『彼』は、杖を持った左腕を上げ、一人前の魔法使いでも習得するには苦勞するレベルの魔法を、さも何でもないとのように唱えた。青い閃光が、アリスの目の前三センチのところまで、まるで見えない壁にぶち当たったかのように火花を散らし、掻き消える。

しかし、そんな光景も、不良たちが新たな登場人物に呆気にとられている間抜け面も、アリスの視界には入らない。

小柄な体躯。

一つに括られた艶やかな黒髪。

レイブクローのカラーが入ったローブをその身に纏った『彼』は。

「よつす、アリス・フィスナー」

アキ・ポッターは、一点の曇りもない微笑みをアリスに向けた。

「で、フィスナーは何してんのさ」

「見て分からねえか？ 喧嘩だ喧嘩」

「ふうん？ さつきは大分ピンチな状況みたいだったけど？」

「馬鹿お前、あそこから俺の大立ち回りが始まるはずだったんだよ。出番取りやがって」

「やったね、ぼくヒーロー？」

「色で言ったらピンクだ」

「せめて赤！ 赤でお願い！」

「テメエ、さりげなく譲歩の振りしてレッド奪ってんじゃねえ！

……たく、責任取ってもらうぞ」

「え、何妊娠したの？ えっと、まずそれってぼくの子？ 覚えが……

あああの時ね、君の親にも挨拶行かなきゃなあ痛っ」

「黙れ。気拔くな」

軽口を叩くアキの頭を小突いて、注意を促す。辺りを見渡したアキは、いつの間にか自分達二人が不良たちに囲まれていることに気付いて苦笑いを浮かべた。見れば、全員が杖をこちらに向けている。打ち合わせをするでもなく、自然とお互い背中を合わせ、アリスは拳を、アキは杖を、それぞれ構えた。

「というか、どこでさっきの呪文習得したんだ、あれは六年のレベルだぞ」

「本に書いてあったの、やってみたら出来ちゃった」

「この呪文必死で練習した奴らに土下座しろ」

後ろから、笑い声が聞こえる。上級生に囲まれ、杖を向けられているという、魔法使いにとつてみれば絶体絶命の状況にも関わらず、アリスは何故だか、ちっとも緊張していなかった。

簡単に言えば、安心したのだ。

「……………」

アキの魔法の腕前に——ではない。

アリスはこの、小さくて華奢な、少女のような風貌をした同寮の少年の存在に——ほっとした。空っぽだった胸の中に、この少年はすり入り込んできた。

今まで張っていた、他人との壁——そんなのは初めから意味がなかったのだと、静かに理解する。

本当は、ただ。

誰かに分かって欲しかった。

「おい、——」

アリスが背後の少年に向かって声を掛けた瞬間——チャイムが鳴った。

「————!!」

アリスは目を見開いて凍りつく。背後で、同じように息を呑む声が聞こえた。おそらく彼も、自分と同じ気持ちなのだろう。不良たちは、突然顔色を変えた二人を怪訝そうに見つめた。

アリスは、淡々と呟く。

「チャイム——鳴ったな」

後ろの少年も、同じく淡々と返した。

「……鳴ったね」

そして、二人揃って大きなため息を吐き——

「とつとと終わらせるぞ」

「了解」

そんな台詞を掛け合ってから——

アリスは拳を握り、不良たち目掛けて突っ込んだ。同時に、アキが一人を失神呪文で気絶させる。それらを合図として、校舎裏は、てんやわんやの大騒ぎに包まれた。

上級生と一年生——文字面を見ればどちらに分があるかは一目瞭然だが、しかし最後に立っていたのは、圧倒的不利な筈の一年生二人組であった。

「授業、始まつてるよな」

「当たり前じゃん、チャイム鳴ったんだし」

汗を拭いながら、アリスは言う。呪文と拳が飛び交う先程の戦いの後だというのに、身体には小さな擦り傷くらいで、目立った外傷はない。

アリスに皮肉げに言葉を返したアキは、一体どういう訳なのか汗の一つもかいていなかった。しかし、彼らの顔には疲労の色が濃く残っている。喧嘩の後の肉体的な疲れではなく、もっと別の、精神的な——

「どれもこれも、アリスのせいだ」

「否定はしない」

「お前だけ怒られる」

「それは拒否する」

彼らがチャイムに顔色を変えた理由。それは——

「……まさかマクゴナガルの授業をブツチするなんて……!」

一体どんなペナルティーが待っているのか、想像しただけで寒気がする。

「というか、いつの間にファーストネームで呼んでんだよ。許可した覚えはねえぞ」

「友達が名前で呼び合うのは普通でしょ？　ということで、アリスもぼくのことアキって呼んでよね」

アリスはちらりと隣の少年の顔を見て、そして大きなため息をついた。

「ちよつと何さそのため息！　そんなに嫌かコノヤロウ！　いいよ、何言われたってずっと名前で呼んでやるから！　アリスアリスアリスアリス！」

「うるせえ」

アリスは肩を竦め、空を見上げる。

この少年に、顔を見られないように。

『友達』という新鮮な響きに顔がにやけるのを、悟られないように。

第15話 融解する、声

『直父さん アキナ母さん』

お手紙ありがとう。ふくろうが海を越えて来るのは難しいだろうと思っていたけれど、まさかあんな方法で手紙が来るとは思いもしませんでした。魔法ってすごいね。そして、大量の文章にも驚きました。書くのに何時間掛かったんでしょうか。

そんな父さんと母さんには及ばないまでも、ぼくも最近の出来事をお伝えします。

九月一日。ホグワーツ特急の中で二人の子と仲良くなりました。二人とも凄くいい子で、英語が出来ないぼくを気遣ってくれる優しい子でした。

でも、そんな二人とも組分けで離れてしまい——ぼくはレイブンクローに入りました。父さんの言う通り、とても頭のいい子、勉強家な子が集う寮で、そんな寮に入ったことは誇らしいけれど、正直なことを言うと、ここでやっていける自信がありません。……でも、頑張るよ。ぼく、頑張ろうと思う。寮の雰囲気自体は、とても気に入っています。特にベッドは夜空のような群青で、横たわったらすぐさま眠くなっちゃう。とつても、いい寮だと思います。

授業は、外国語についていけないところも沢山あるけれど、それを差し引いても面白く、呪文学という得意科目も出来たことで、充実した日々を送っています。

……あ、でも飛行訓練は難しかったかなあ。感覚を掴むまで、ちよつと時間が掛かりました。箒よりもぼくは、歩いて目的地まで行く方が好きです。なんか慣れない感覚で、数時間はずっとなんか浮いてる気分がしました。

今日はハロウィンでした。ご馳走が沢山出てきて、嬉しかったです。……でもぼくとしては、母さんが作る洋食と、父さんが作る和食の方が好きだな。味が濃いうるか、ただ焼いて揚げればいいと思ってるのかな……という料理がとつても多くて。慣れたら、美味しく感じられるのでしょうか。

あと一月でクリスマス休暇ですね。父さんと母さんに会える日を、心待ちにしています。

愛を込めて。 幣原秋』

手紙を書き終わると、一度通して読み直す。妙な箇所がないかを確認すると、綺麗に畳んで封筒に入れた。糊付けして封をする、机に乗せて杖を取り出す。杖の先端を封筒にそっと触れさせ、送り先の名前――父の名前を上からなぞった。瞬間、手紙は発光し、数秒後光が収まった時には、手紙は机の上から消えていた。

「……………」

自然、息を吐く。机の上に突つ伏すと、顔を腕の中に埋めた。

「…………嘘、ぼっか」

自分に対して、呟いた。

日本語で発したその声は、誰に理解されることもなく、静かに闇へと消えて行く。



『ハリー・ポッターがクイディッチの最年少選手に選ばれた』

その噂が校内を巡るのは、早かった。グリフィンドールとスリザリン合同の飛行訓練が終わって、数時間と経っていないのではないかとあつという間にほとんどの生徒がその事実を知っていた。当然、ぼくとして例外ではない。むしろ、興奮に上気したハリー本人から事の次第を聞いたのだ。

「ハリー！ポッターって、本当にお前の兄貴な訳？ 信じらんねえんだけど」

「うん、ハリーが兄で、ぼくが弟。確かに全然似てないけど、れつきとした双子だよ」

夕食時の大広間で、ぼくはミートパイを頬張りながら、隣に座るアリスに向かって肩を竦めてみせた。アリスはにこりともせず、ぼくをちらりと見て、ステーキにナイフを突き刺し、呟く。

「双子なあ……まあ確かに、お前らがただならぬ関係だったのは理解したけどな」

「ただならぬ関係って……」

思わず苦笑いをした。そう言えばアリスには、さつきハリーがぼくの手を握ってクイディッチの選手になるまでの経緯を逐一報告してくれた様子を見られているのだ。

「ああ、俺も話の内容が聞こえる位置にいなかったら、ハリー・ポッターがお前に愛の告白をしているのかと思っただろうな」

「ちよつと待って今何だった!?!」

唾然呆然仰天だ。なるほど、他者からはそんな風に見えてたのかあ、今度から気をつけなくちやなあ……。――

「……つてまず、ぼくもハリーも男ですから！ 同性だから！ そして兄弟だから!! 愛の告白はいくらなんでもない!!」

しかしアリスは首を傾げ、改めてぼくをじっと眺めた。つむじの先から足元までをじっくり観察し、そして、

「男には見えない、お前」

なんて真面目な顔でほぎきやがった。

「もともとが女顔なんだな。まずは髪切れ髪、そしたら大分マシになるんじゃないの？ いっそ坊主にしちまえ」

「誰がするか！ そのピアス引きちぎるぞ馬鹿アリス！ なんで片耳だけ穴開けてんだよ何それお洒落なの？」

「この野郎、本気でその髪刈るぞー！」

「こつちこそ、雪印ピアス引きちぎるよー！」

ぼくとアリスは睨み合う。そして数秒後、どちらともなく吹き出した。

「……でもお前、髪はどうかしないと本気で女にしか見えないぞ、それでもいいのかよ」

「髪切るよりはそつちの方がマシ……じゃないけど、まあ、許せる。……そつちこそ、なんで片耳オンリーピアスなんだよ」

「それは今じゃ明かせねえな」

「伏線張った!」

なんだ、お洒落じゃなかったのか。……なーんてね。

一緒に喧嘩したのが効いたのか、一緒にマクゴナガル先生から罰則（教室掃除だった）を受けたのが効いたのか。まあどういいう訳だか、ぼくとアリスは随分と仲良くなっていった。何と言えれば良いのかは分からないけれど、とりあえず隣にいて心地良いのだ。アリスもぼくを拒絶しないから、同じ気持ちでいるのだろう——と思おう。

アリスの雰囲気も、以前より心なしか柔らかくなった気がする。……前が刺々しすぎただけかもしれないが。少なくとも、妙に他人に壁を作ることにはなくなった。まだまだアリスを怖がつてる生徒は多いけど、この調子じゃ心配いらないだろう。

そう一人で頷いてかぼちやジューズを口に運び——『彼女』の姿を見て、ぼくは思わず咳込んだ。

「え、ちよ、おい、大丈夫か？」

「うん、大丈夫……」

驚いたように目を丸くしながら、アリスがぼくの背中を叩いてくれる。しかしそんな、普段なら揶揄するほどのさりげないアリスの優しささえも気付けないほど、ぼくの目は『彼女』に釘付けだった。

彼女。

名前も知らない、ぼくが一目惚れした女の子。

忘れもしない。始業式の日、コンパートメントで出会い、ドラコを引っ張って行ったあの女の子。腰まであるさらさらの銀髪に、スリザリンの制服を小柄な身体に纏っている。無表情で友人と言葉を交わす彼女を、ぼくはぼーっと見つめていた。

「……アキ、どうした？ 本当に大丈夫か？」

「大丈夫。……いや、大丈夫じゃないのかもしれないね。だってぼくは今、病に侵されているのだから。そう、恋という名の重篤な病にね！」

ズビシ、とカツコつけてアリスを指差してみるが、アリスは目が点といった表情でぼくを見つめるばかり。

……滑った。恥ずかしい、消えたい。

「……えっと、よくわかんないんだが、つまりお前は、あのアクアマリ

ン・ベルフェゴールに惚れてるっつーことか？」

やがて、アリスはため息と共に呆れた顔でぼくを見ながら言った。ぼくへの視線に、さつきまではなかった、まるで救いようなない馬鹿を見るような色が含まれているのは気のせいだろうか。

いや、それよりも。

「あの子、アクアマリン・ベルフェゴールって名前なの？」

「知らねえで惚れてたの？　ベルフェゴールなんて、まあハリー・ポッターには遠く及ばないとしてもだが、魔法界で知らない奴はいない程の名家だぜ」

「だってぼく、マグル界で育ってきたもん」

いじけながら、ぼくはフォークでミートパイを突く。アリスは小さく息を吐いて、説明を始めた。

「ベルフェゴールってのはつまるところ、魔法界における純血の一族で……ええと、うーん、難しいな。簡単に言えば貴族って感じだ。金も名誉も地位も持っているような」

「へえ、じゃああの子はお嬢様って訳？」

「お嬢様……そうだな、確かに言い得て妙ってところだ。……でもまあ、お前とは合わないかもな……っつと」

アリスは口が滑ったとばかりにそこで言葉を切った。しかし、今の言葉は聞き捨てならない。

「……ちよつと。それ、どういうこと」

アリスはしばらく惚けようとしていたようだが、ぼくの押しに負けてため息を吐き、口を開いた。

「……お前は、ハリー・ポッターの弟だからだ」

やがてアリスの口から飛び出てきたものは、予想外の言葉だった。え？　と思わず目を瞬かせる。あー、とアリスは髪をぐしゃぐしゃと掻いた後、据わった目でぼくを見た。思わず居住まいを正す。なんだかんだで、そういう顔をされると凄みがあって怖いんだよな、アリス……。

「……な、なんで、ぼくがハリーの弟だと、その……マズいの？」

「そう、だな。多分、マズい」

「……どうしてさ」

「あの家系は『例のあの人』側の陣営だったからだ」

アリスは辺りを伺い、声を潜めてそう言った。口を噤んで、黙り込む。

なるほど——なるほど。

それならば『例のあの人』を倒したハリーは、彼らにとってみれば敵も敵だろう。自分の主人を挫いた相手なのだ、当然だ。

「まあ、『例のあの人』がいなくなった今となつちや、極々普通の貴族だろうさ。子供をスリザリンに入れるのは変わつてねえみたいだけどな。……スリザリンも、あまりいい話を聞かない。悪の道に落ちた魔法使いは、皆スリザリン出身だ。……それだけで寮を悪く言うのは嫌だが、でも、そういう側面を持つた寮つてことは知つておいた方がいい。あの寮には、全員とは言わないまでもかなりの人数、闇の魔術に適性がある奴らだ。それだけは言える」

何か言わなくちゃと思つた。

でも、何も言えなかつた。

アリスが言ったことは全部事実で——そして、アリス自身も、多分、ぼくと同じことを考えてるから。

アリスはそこで言葉を切つて、暗い雰囲気を払拭するかのようにはげかに笑うと、冗談じみた口調で言う。

「なんて顔してんだ」

「だって……」

ぼくが唇を尖らせて俯いた。アリスはぼくに手を伸ばすと——そのまま、ぼくの髪をぐちゃぐちゃつと掻き混ぜる。

「あ——ちよつと!!!」

思わず悲鳴を上げた。髪を一つに括つているというのにお構いなしに髪を混ぜたものだから、もう鏡なんて見なくとも酷い有様だというくらい分かる。ぼくは涙目で絡まった髪紐を取り外すと、手櫛で髪の毛をどうにかしようと奮闘した。

「やっぱ髪切れ、髪。鬱陶しくねえの?」

「願掛けだからいいの!」

「何のだよ」

言い合うばくらの間を、一陣の風が吹き抜けた。

そして、風は二人の声を運ぶ。

しかし。

「ベルフェゴールね……悪魔の名前を持つ少女、つてどこ？」

皮肉げに笑う少年の眩きは、誰にも聞かれることなく、虚空へ消えた。



アクアマリン・ベルフェゴールは、聞こえた叫び声に振り返った。

髪を結んだ小柄な生徒——髪の長さからして少女のようだが——が、隣にいた少年に髪の毛をもみくちやにされ、悲鳴を上げている。

その二人を取り巻く穏やかな空気を感じて、アクアマリンは目を細めた。

「どしたの？ アクア」

隣にいた友人、ダフネ・グリーングラスが、振り返ったまま歩き出そうとしないアクアマリンに、訝しげに声を掛けた。

「……あの、二人」

「二人？ ……ああ、あそこのフェイスナーとポッターのこと？ ……

うわ、なんか超盛り上がりってる、あの二人に共通点なんてあったのね？ まあ、二人とも有名人ってことは確かだけどさ」

饒舌なダフネに、対照にアクアマリンは端的な言葉で尋ねた。

「……有名人？」

「あれ、知らないの？ この前うちの寮のセンパイたちが喧嘩売りに行って、ぼっこぼこにされて戻ってきたことあったじゃん？ あれ、

やったあの二人組らしいよ。右がアリス・フェイスナーで、左がアキ・ポッター」

「……フェイスナーは、知ってる。……中立不可侵の家の子よ。ただの喧嘩早い馬鹿でしかないわ」

「おお、辛辣な言葉。じゃあ、お嬢様が興味持つてんのは、アキ・ポッ

ター?」

楽しげにアキを指差すダフネに、アクアマリンは小さく眉を顰める。

「……人を指差すのは止めてって、言ってるじゃない」

「おっと、ごめんごめん。……いやーしかし、あのハリー・ポッターに弟がいたとはね、初耳初耳。でも正直なところを言っつて、あの兄弟つて見れば見るほど全然似てないよね。あたし的にはハリー・ポッターよりアキ・ポッターの方が好みかも。小さくて可愛いし。……はっ、もしかしてアクアもアキ・ポッター狙い!?!」

「馬鹿なこと言わないで」

ピシヤリと友人をたしなめると、アクアマリンはアキを一瞥し、そつと呟いた。

「……アキ・ポッターね……聞いたことのない名だわ」

「幣原秋なら、聞いたことあるんだけど」

「ん? アクア、何か言った?」

「……別に。……もう行こう?」

アクアマリンは友人を促し、彼らから遠ざかるように歩き出した。

第16話 微笑みの間に隠す嘘

「ふう……」

紅の蒸気機関車、ホグワーツ特急から降りると、一息吐いた。始業式の時よりも、プラットフォームにいる人は少ない。ぐるりと見渡せば、すぐさま両親を見つけることが出来た。

「お帰り、秋」

「お帰り。ちよつと痩せたんじゃない？ 夜ご飯は、美味しいものを食べようか」

久しぶりに聞く日本語。久しぶりに優しい言葉を掛けられて、思わず泣き出しそうになった。涙を堪え、ぼくは笑う。

「——うん。ただいま」



慣れ親しんだ味の料理を食べ、両親と様々なことを存分に話す。満たされた思いでベッドに横になり、ホツと息を吐いた。

この休みが終われば、ぼくはホグワーツに戻らなければならない。逃げることの出来ない、あの日常に。それはもう、どうしようもないことだった。

「……………」

疲れているのに、目が冴えて眠れない。時差ボケもあるのだろうが、自分のベッドに横になれば、自然と眠くなるものだと思っていた。ぼくとしては正直意外だった。数分うだうだとした挙句、起き上がる。父か母が起きていやしないか。あまり迷惑は掛けたくないけれど、今日はなんだか構って欲しい気分だった。

下に降りる。僅かに開いた書斎の扉からは、一筋の光が漏れていた。

「……………父さん」

「おや、秋」

机に向かっていた父は、ふと顔を上げた。机の上には、様々な魔法

器具がそれぞれ異なる動きをしている。下から上へと流れる奇妙な砂時計に、逆回転する天球儀。自立しゆつくりと動いている、四角ばった直方体のものは、一体何だろうか。和綴じの本に筆で何かを書き付けていた父は、それを退かして立ち上がった。

「眠れないのか？」

「うん……そう」

まあ無理もない、と父は小さく呟くと、軽く指を鳴らした。瞬間、どこからともなく空間に『出現』する急須と湯呑みが二つ。温かな緑茶を湯呑みに注ぐと、父は一つをぼくに手渡し、椅子に座るよう促した。素直に腰掛ける。

「時差もある。疲れているけど寝付けないというのは、父さんも昔よく経験したものだよ」

「……父さんも、日本からホグワーツに通ったんだよね？」

「ああ、そうだよ」

「それじゃ……どう、だった？ 授業についていくの、大変じゃなかった？ 友達はずぐに出来たの？ ……つらく、なかった？」

父はしばらく黙っていた。その間で、今の自分の言葉を反芻する。少し、口を滑らせてしまったことを反省した。

「つらくなかったかと言ったら、嘘になるな。いきなり異国の地に放り込まれて、憎くなかったかと言われたら、それは肯定せざるを得ない。授業だって、人付き合いだって。何もかもが嫌で——でも、一人の友人が、僕を支えてくれたんだ」

懐かしむように、父は目を細める。

「凄く自信家で、傲慢で、高飛車な男だったが、妙に馬があつてね。嫌いには決してなれなかった。それは今もだ。初めての友人とも呼べる奴だった——」

父がこんな表情を浮かべる様を、ぼくは初めて見た。何と呼べば良いのだろうか——懐古、追慕？ ……うまい言葉が見つからない。ぼくの語彙にはないその表情は、しかしすぐさま塗り替えられた。

「……秋。お前、本当につらくはないか？」

父親の表情で、父はぼくを案じるように見た。

「僕は、逃げることを認められなかった。むしろホグワーツに来たところこそ、逃げてきたとだつて言えるし……でも、秋、お前は違う。つらかったら、逃げてても構わない。言葉も通じない異国の地に、いきなり放り込んでしまつてすまなかつた……秋、お前が望むのなら、今からでも……」

「つらくないよ」

明るい声を出した。不安げな父に対し、笑つてみせる。

「全然。言つたでしよう？ 毎日、楽しいつて」

安心して。ぼくは大丈夫だから。

そう言うぼくを、父はしばらくじつと見つめていたが、やがて諦めたように「……そうか」と呟いてため息を吐いた。



「頭が三つある犬を見た？」

アキが訝しげな顔で聞き返した。そうなんだよ、とハリーは頷く。

三頭犬を見た翌朝、朝食を食べに大広間に降りてきたアキを即座に捕まえグリフィンボールのテーブルに付かせた（あまりの早業にアキの隣にいた金髪碧眼の少年が唾然としていたような気がする。アキしか見えてなかったから自信はない）ハリーは、昨日の事の顛末——ドラコ・マルフォイとの決闘（未遂）から、四階の禁じられた廊下で三頭犬に出会つたところまで、実に事細かに——を話して聞かせた。アキは、最初は何がなんだか分からないといった顔でポカンとハリーを見つめていたが、段々と事態が飲み込めて来たのか、最後には真面目な顔つきで腕組みをする。

「ぼくも混ざりたかつた」

「……」

真剣そのものの顔つきで深刻げにため息をつくアキに、ハリーは何と声を掛ければよいか分からずに取り敢えず笑つておいた。アキの動物に嫌われるスキルは、三頭犬でも変わらず発動されるのだろうか、などと想像する。

「……まあまあ、二人とも。まずは朝ごはんでも食べたら？」

ハリーとアキの正面に座っていたロンが、気を効かせて二人の朝食をよそつてくれた。ありがとう、とアキはロンからトレーを受け取ると、かぼちやジュースを一口こくと飲み、パンを頬張り始める。

「……僕は、三頭犬は何かを守ってるんじゃないかと思ってる。で、その守ってるものは多分、ほら、ハグリッドがグリーンゴッツから持ってきた包みなんじゃないかな。じゃああの中身は何なんだろう？」

「大事で、危険なもの、ね……わかんないや」

アキは思い出すかのように視線を上にはさませた。そして肩を竦めると、ポテトサラダを一口。

「ハーマイオニーが言うには、その三頭犬は扉の上に立っていた訳だ。その扉の下に……ロン？」

『ハーマイオニー』という単語にしかめっ面をしたロンに、アキは首を傾げる。さらりと綺麗な黒髪が流れた。

「というか君らねえ、禁じられた廊下って。あそこは生徒立入禁止の場所なんだよ、分かっている？」

話を変え、軽く眉を寄せて叱るアキに、ハリーとロンはごめんと詫言を入れた。

「今度の冒険には、ぼくも連れて行くんだよ？」

「努力するよ」

ハリーの返答に、アキは肩を竦めて笑う。そんなアキを、眩しげに見つめた。

アキが好きだ、と改めて思う。——当然恋愛感情ではないが——誰よりも自分を深く知る者として。

唯一の、家族として。

——アキがいたから、ダーズリー家でも何とかやっていけたんだ。

しかし、ホグワーツに入学して寮が離れ、初めてアキとこんなに長時間離れることになった。それが——

「……寂しいよ」

アキが驚いたように目を向けた。いつの間にか声に出していたらしい。

「……ぼくもだよ。朝起きたら、まずハリーを探すんだ。習慣なんだろうね。……でも、ハリー」

アキは微笑むと、ハリーの左頬に手を当てた。暖かい感触が伝わってくる。

「ぼくらはもう、二人きりじゃないんだ。……ロンがいる、ハーマイオニーがいる、ハグリッドがいる。……ぼくらの周りには、たくさんの人がいるんだ」

「……でも、寂しいんだもん」

拗ねたように言えば、アキは笑って右手をハリーの頭に寄せた。

「ぼくだって寂しいよ。……でもさ」

二人きりよりもさあ、いっぱいいた方が楽しいじゃない。

「ハリーは、ホグワーツ、楽しくないの？」

「……楽しいに、決まってるじゃん」

そういうことだよ、とアキは笑う。

ハリーは思わず、アキに抱き着いていた。うわっ？ と声が聞こえたのにも構わず、アキの小さな背中に、華奢な肩に、手を回す。アキも何も言わずに、ハリーの頭に手を寄せた。

「……あの、さ」

どれくらいそうしていただろうか、ロンに声を掛けられ、振り返る。

「君達、周りから、すごい大注目浴びてるんだけど」

「あ」



「馬鹿か？ 馬鹿なのか？ お前は馬鹿なのか？」

「そんな言わなくてもいいじゃん……」

ぼくは口を尖らせ、皮つきポテトをナイフで突き刺した。

十月三十一日。ハロウインのご馳走が並ぶレイブクロウのテーブルで、ぼくは隣に座るアリス・フィスナーから、耳が痛いお小言を受けていた。何故かって？ ……決まってるじゃないか。

「なんであそこで抱き締め合う必要があるんだ？ 皆唾然だぞ、俺も

引いた」

「……なんてーか、雰囲気で」

「雰囲気？　じゃあお前は、雰囲気が良ければ周りの目すら気にしないのか？」

「……まあその、なんだ、もつと空気を読んで行動しろということだった。……大分はしよつたが大体こんなことだ、うん。」

「そもそも、お前は……」

「あ！　これ美味しいなあ！　うん！　アリスもどう!？」

アリスの言葉を封じるために、アリスの口の中にパイを一つ丸々押し込む。だってあれだ、説教長くなりそうだったんだもの。折角のハロウィン、楽しまなくっちゃ。

「……お前なあ……」

アリスがもごもごしながらパイを全て咀嚼し終わると、大広間の扉がヒステリックにバタンツと音を立てて開かれたのは、ほぼ同時だった。なんだなんだと、皆が一斉に顔を向ける。

大広間に入ってきたのは、クイレル教授だった。蒼白な顔で、衆人監視の中をふらふらした足取りでダンブルドアの席まで進んで行く。そしてテーブルにもたれ掛かり、尋常でない顔つきで喘ぎながら告げたその声は、大して大きくなかったというのに、静まり返った大広間の端まで届いた。

「トロールが……地下室に……お知らせしなくてはと思って」

クイレル教授はそのまま、前のめりに崩れ落ちてしまった。

一瞬の静寂の後——大騒ぎが起きた。恐怖に当てられたか泣き出す子、軽いパニックに陥った子もいたが、殆どは好奇心混じりの興奮した声だ。そんな中、アリスが平然とパイの最後の一欠片を口の中に放り込むのを見て、ぼくは小さく肩を竦めた。

「驚かないんだね、アリス」

「どーせ寮に帰って言われる。なら、食べるうちに食つとくべきだ、だろ？」

「アリスのそういうとこ、ぼく好きだよ」

アリスのこの豪胆さと割り切り様が、ぼくは結構好きだったりす

る。……幣原秋の近くにこんな奴がいたら、良かったのにな。

ダンブルドアが杖の先から紫色の爆竹を爆発させ、生徒を静かにさせた。重々しい口調で言う。

「監督生よ。すぐさま自分の寮の生徒を引率して寮に帰るように」

再び、大広間に騒がしさが戻ってきた。慌ただしく立ち上がり大きな声で指示を飛ばす監督生たち、移動を始める生徒たち、忙しく出て行く先生方。

さてぼくも移動するか、と立ち上がった時、何やら妙なものを見たような気がして、思わず動きを止めた。

「どうした?」

「ん……なんか……」

アリスが訝しげに声を掛けてくるのを流しつつ、ぼくは違和感の正体突き止めようと目を凝らす。

「……………?!」

気絶していた筈のクイレル教授がむくりと立ち上がったのを捉え、ぼくは小さく息を呑んだ。氷のような無表情で首をこきりと動かすと、ぱつと教職員の席の近くにある出口の方に——生徒たちがいつも使う出口とは正反対の扉に——走り出す。誰もクイレル教授の行動には気付かない。

反射的に身体が動いた。クイレル教授を追って、小さな身体を生かし人の間をすり抜ける。アリスの呼び声も、ぼくには届かない。

大広間の外のロビーには、先程までの喧騒が嘘だったかのように人氣がなかった。生徒たちが寮へ戻るのに使わない方の扉だ、当然だ。それがぼくの疑惑を更に深めた。

壁に手をつき呼吸を整えながら、耳に全神経を集中させ、クイレル教授の足音を聞き取る。人氣がなく静まり返ったこの場所の状態が、ぼくを大分助けてくれた。聞こえた小さな音に、聞き耳を立てる。

……階段だ。

上か、下か?

……………上だ!!

頭の中で、ぱちんと音を立ててパズルが組み合わさる。階段を駆け

上がりながら、ぼくは脳みそをフル回転させた。

クイレル教授は誰も自分に注意を向けていない頃合いで起き上がった。つまりさつきぶつ倒れたのは、演技だということになる。

そうしたら。周囲の目を欺いて、彼は何を手に入れることが出来る？

他の先生の目がなくなる。誰も彼の存在を気になげなくなる。先生方と一緒に地下のトロールの元へ駆け付けなくてよくなる——つまり。

彼は自由に動けるようになる。

彼は何故、そうまでして自由に動きたかったか？

先日ハリーとした話を思い出す。

——…：僕は、三頭犬は何かを守ってるんじゃないかと思ってる。で、その守ってるものは多分、ほら、ハグリッドがグリーンゴツツから持ってきた包みなんじゃないかな。じゃああの中身は何なんだろう？

——大事で、危険なもの、ね…：わかんないや。

クイレル教授が、三頭犬が守るものを欲しがっていたとしたら？

クイレル教授は、さつき階下ではなく、上に上がって行った。普通なら、ここは階下に現れたトロールを追うところだろう。それが、生徒を守る教師のあるべき姿だ。しかし、彼はそれをしなかった。

恐怖に駆られた？ いや、それは違うと思う。先程の氷のような無表情からは、とてもそんな感情は読み取れない。あれはむしろ、自分のやるべきことを確信しているかのような表情だ。

そもそも、何故彼はこの食事の時間に大広間にいなかったんだ？ ハロウインのご馳走は普段よりも数倍豪華だ。この時間、彼は一体何をしていた？

…：トロールを入れたのは、もしかして彼なのか？

何のため？ 皆の注意を引き付けるため。

そして、彼は何をしようとしている？

まさか…：まさか!?

なら、クイレル教授が行く場所は決まり切っている。

「四階の……禁じられた廊下っ!!」

四階まで駆け上がると、ぼくは思わずしゃがみ込んだ。なんてことはない、単純にしんどかったのだ。大して運動も得意じゃない、体力もないぼくに、階段ダツシユは辛すぎた。手すりを掴んだまま、荒い息を吐く。脳に酸素が回ってないのか、目の前がくらくらする。頭を振って、無理矢理身体を起こした。

頭の中で校内の地図を思い浮かべる。禁じられた廊下は、この突き当たりの扉の奥だ。

しかし。

「……………」

小さな叫び声と唸り声に、ぼくはその場で立ち竦む。何事だ、とぼくは左手に杖を握ると、物影から少しだけ身を乗り出して覗きこんだ。

そして、息を呑む。

見えたのは、開かれた、禁じられた廊下。

そして、見えるのは、三つの頭を持った犬と、その頭の一つに足を噛みちぎられそうになりながら、必死で抵抗しているスネイプ教授。その奥で何をしているのか——床に跪き、何かを探すクイレル教授の姿だった。

思わずぼくは身を踊らせ、彼らの前に姿を見せる。左手に持った杖を肩の高さにまで上げると、叫んだ。

「Stupefy!」

赤い閃光が、狙い違わず真っ直ぐ三頭犬に直撃する。

「ポッター!?!」

スネイプ教授とクイレル教授が、驚いた表情でぼくを見つめた。特にクイレル教授は真っ青だ。同僚であるスネイプ教授が三頭犬に足を噛みちぎられそうになっているのを無視しているところを生徒に見られたのだ、当然だろう。

「……Wingardium Leviosa」

二人の視線に気付かぬ振りをしつつ、ぼくは杖の先端を三頭犬に向けて呟く。気を失った三頭犬を浮かせると、禁じられた廊下の奥に押

し込んだ。クイレル教授が慌てたように禁じられた廊下から飛び出してくる。

「Colloportus」

パタン、と音を立てて扉が閉まった。小さくため息をついて、ぼくは杖を下ろす。

「アキ・ポッター!!」

スネイプ教授が叫んだ。見れば、片足が血に塗れている。三頭犬にやられたのだろう。ぼくはにっこり微笑んで、言った。

「大丈夫ですか、スネイプ教授、クイレル教授?」

「ポッター、何故貴様がここにいる?」

「ポ……ポッター君……」

畏れるように声を震わせるクイレル教授に、しゅんとして項垂れて見せた。

「クイレル教授が、四階に上がっていくのが見えて……つい、つい、つい、きちゃったんです! 好奇心なんです、ごめんなさい!!」

あえて拙い言葉で言葉足らずに述べた。クイレル教授の顔色が素早く変わる。

「わ……私の……後を?」

「はい……」

スネイプ教授が、じつとぼくを見ている。教授の気持ちが手に取るように分かって、ぼくは心の中で小さく笑った。

スネイプ教授が、ぼくに何をしたいのか。目を見ずとも分かる。クイレル教授とスネイプ教授、先程の状況、さつき推測した内容を鑑みると、出る答えは一つしかない。

分かってるよ、と言うことを示すように、ぼくは心配そうな表情をクイレル教授に向けた。

「クイレル教授、さつきまで気絶していたみたいですけど、大丈夫ですか? ……まあその後すぐに起き上がったので、大したことはなかったみたいですけど、心配になって」

クイレル教授の顔が蒼白に変わる。誰にも見られていないと思っていたあの瞬間を、ぼくに見られていたという現実に、驚きが隠せない

いようだ。素直な表情の変化に、思わず苦笑した。

「そういえば、クイレル教授は、何でこんなところにいるんですか？
ここ、禁じられた廊下ですよ？ スネイプ教授も助けられないで、まる
で何か探していたようですが……？」

スネイプ教授と心の中で通じ合っているというこの状況は、ちよつ
と気持ち悪いが、しかしここはこの茶番劇に付き合うべきだろう。全
く、なんてぼくっていい子なんだろうか。

「我輩も疑問に思っているところすな。どうしてこんなところに
？」

「……っ、貴様ら……」

小さく何事か吐き捨てる、クイレル教授はスネイプ教授を睨ん
だ。スネイプ教授は悠然とその視線を受け流す。

「はて、解せませんな。クイレル教授、どういふことですか？」

「……私、は」

クイレル教授が、この進退窮まる状況に齒噛みした、ちようどその
時。

「――！」

階下から、悲鳴が聞こえた。続いて怒声に唸り声、物が壊れる凄ま
じい音。思わず聞こえた方向を見たぼくの横を、するりとスネイプ教
授が通り抜ける。後からクイレル教授が続いた。

「ポッター!! 貴様は自分の寮に戻りたまえ!!」

スネイプ教授の声が轟く。ぼくは肩を竦め、それに答えた。

「何やってたんだ! 急にいなくなつて心配したんだぞ?!」

「ごめんってば」

誰もいないレイブンクローの談話室で、アリス・フィスナーはぼく
を無然とした表情で叱り付けた。ぼくは苦笑いを返す。

「トロールでも探しに行つたのかと思つた」

「そういう訳じゃないよ」

「……何かあつたのか？」

アリスがぼくの顔色を敏感に察したか、口調を変え静かに尋ねた。

「まあ、ね」

色々あった。クイレル教授の正体とか、三頭犬とか、スネイプ教授とか。でもそれを一つ一つアリスに説明するのは、躊躇われた。何せ、まだ仮説の段階なのだ。ここで妙なことを言うのは、得策ではない。

「……言いたくないのなら、別にいいけどな」

アリスがため息と共に言う。ぼくは、うん、と小さく頷いた。

胸の中のもやもやが、消えない。パズルのピースがまだ揃ってないから、絵の全体像が見えてこない。

まだ、何かある。ぼくの知らない情報が。そして、そのピースを持っているのは、きっと――

「……寝るぞ、明日に響く」

「……うん」

ぼくは素直に身体を起こした。アリスは、そんなぼくの頭を軽く叩く。

さて、眠りに就こう。

幣原秋の世界に、旅立とう。

第17話 君が知っていること ぼくが知っていること

クリスマスの休暇が終わった。年が明け、ぼくは Hogwarts に戻る。紅の Hogwarts 特急の一室に身を沈め、ぼくは静かに目を閉じた。

「……………」

目を開け、すぐさま身を起こす。

「英語……勉強、しなきゃ」

この休みで遅れた分を取り戻さないといけない。時間が足りないのなら、睡眠時間を削ったって。

全然、足りない。何もかも、ぼくには足りていない。足りていない人間に、休むことは許されない。

文字を追う。文字を追う。文字を追う。

——じんわりと、頭が痛んだ。



ぼくを迎えるレイブンクロー寮は、普段通り冷たかった。同級生に囲まれた寝室で、ゆったりと眠れるはずもない。流星にカーテンで区切られたパーソナルスペースにまでちよっかいを出してくる輩はいないが、それでも気を休める場所などない。

「ん……………」

ぐつと両腕を上げて伸びをした。周囲を見回せば、重いカーテンの隙間から仄かな光が差し込んでいる。日が昇ったのか、と目を瞬かせた。

少しだけ眠ろう、と机からベッドに移動する。ベッドに横になると、身体が落ち着いた。ふう、と小さく息を吐く。

「……………」

目を閉じれば、あの日の情景が浮かんでくる。

狭く薄暗い物置に、眩く輝く純粋な魔力。血塗れで誰もが倒れ伏す中、ぼくだけがただ、無傷で立っている。噓せるほどの、血の香り。魔力なんてなかったら。魔法なんてなかったら。才能なんて、なかったら。

——ぼくが、加害者だ。彼らを傷付けたのは、ぼくに他ならない。それを決して、忘れてはならない。引きずり込まれるように、眠りに落ちていた。



「……あー……」

寝起きは、最悪だ。でもそんなことは、最近いつものことだった。気分が良いはずもない。

「……………」

ゴロン、とベッドに横になった。周囲を見回す。群青色で統一されたレイブンクロー寮、同じ寮だというのに、どうしてここまで雰囲気

に差があるのだろうか。

いや、そんなことは分かりきっている。その理由は、もうとっくに知っている。

「お前、寝起き悪いよな」

シャツとカーテンが引かれ、アリスが顔を覗かせた。朝の挨拶よりも先に、ぼくのむすくれた表情を見て苦笑する。

「そんなことはないんだけどね、本当は」

「どうだか。自己申告なんて、もつともアテにしちゃあいけないことじゃねえか」

「その通り。だからこそ客観的に見てあげることが大切なんだ。だけど客観的に見て『君は可哀想な奴だね』とレッテルを貼られることが我慢ならなかった、ただそれだけの話だよ」

何の話だ？ とアリスが目を瞬かせる。

「夢の話さ」と多くは語らず首を振った。

「確か、幣原って言ってたっけ？ どっかで聞いたことあるんだよな、その名前……どこだったかな……」

「珍しい名前だから、妙なものと記憶が関連付けられているんじゃない？」

欠伸を一つ零して、身を起こす。既に制服姿のぼくを見て、アリスは呆れたようにため息を吐いた。

「お前、すげえ凶悪な面になってんぞ。外に出られんのかよ」

「自覚はあるさ。だから大丈夫」

「なにが大丈夫だって言うんだ」

ぼくは表情を一転させ、にっこりと普段通りの明るい笑みを浮かべてみせた。声を元の調子に戻す。

「ほらアリスっ、早く行こう！ 今日ぼくの兄貴の、初めてのクイデイツチの試合なんだからっ！ ……どう？」

アリスは、ぼくの急激な変化にポカンとしていた。ぼくはテンションを少し落とすと、にやりと笑う。

「ざつとこんなもんさ」

「……本当、お前って……」

アリスも苦笑した。「用意してくるから、ちっと待ってろ」と言い、カーテンを閉める。

「……ふう」

群青色に包まれて、息を吐いた。

「……あいつも、このくらい出来れば楽だったろうにな」

声に出さず、囁いた。



ハロウィン以降、ハリーとロンとハーマイオニーはとても仲良くなったようだ。なんでも、ハロウィンの日にハリーとロンが、トロールからハーマイオニーを助けたらしい。色んな意味で仰天した。……本当に、無事で良かった。

そして今日は、ハリーがグリフィンドールのシーカーに選ばれて初

めてのクイディッチの試合の日だ。スリザリンVSグリフィンドール、因縁の対戦とも言われるこの二寮の戦いに、直接は関係のないはずのレイブンクローやハッフルパフも盛り上がっている。

「頑張れ、ハリー……」

ぼくはレイブンクローの観客席に座り、祈るような気持ちで眼下の選手達を眺めていた。隣では、アリス・フィスナーが熱心に双眼鏡を覗いている。クイディッチが好きなのか、と尋ねたら、魔法界の子供でクイディッチが嫌いな奴はいない、と怒ったように言われた。ロンも熱心に語っていたし、そんなものなのかなあ、とマグル育ちのぼくとしては頷くしかない。

審判の笛が鳴り、選手が一斉に空へと舞い上がる。試合開始だ。

『さて、クアツフルはたちまちグリフィンドールのアンジェリーナ・ジョンソンが取りました——何て素晴らしいチエイサーでしょう。その上かなり魅力的であります』

『ジョーダン！』

『失礼しました、先生』

解説は、グリフィンドールの双子のウィーズリーの仲間、リー・ジョーダンのようだ。ぼくは始業式の日コンパートメントで聞いた、彼がタランチュラを持っているという話が今だに忘れられない。……今もいるのかな、タランチュラ。ジョーダンの荷物と共に、グリフィンドール塔に。もしかしたら一緒に寝てたりして。……うわ、身の毛がよだつ。

リーの監視をしているのは、我らが変身術教授であるマクゴナガル先生。本人たちは狙ってないのだろうが、リーとの掛け合いはボケとツッコミのようで、まるで漫才だ。時折笑いが巻き起こっている。

『ジョンソン選手、突っ走っております。アリシア・スピネットに綺麗なパス。オリバー・ウッドはよい選手を見つけましたものです。去年はまだ補欠でした——ジョンソンにクアツフルが返る、そして——あ、駄目です。スリザリンがクアツフルを奪いました。キャプテンのマーク・フリントが取って走る——』

「ねえアリス、ハリーはどこ？」

「あそこだ。ほら、結構上だな。シーカーは攻撃されやすいから、安全地帯でスニッチを探してんだろ」

言われた方向に目を凝らすと、確かにハリーだ。……というかアリス、よく分かったな！　いくら双眼鏡を持ってるとはいえ、今の主役はチエイサーだというのに。視野が広い。この辺り、持つて生まれたものというか、運動神経の差つてもものを如実に感じるな。ちよつと悲しいよ、ぼくは。

『ジョンソン選手、飛びます——ブラッジャーがものすごいスピードで襲うのを躲します——ゴールは目の前だ——頑張れ、今だ、アンジェリーナ——キーパーのブレッツチリーが飛びつく——が、ミスした——グリフィンドール　先取点！』

グリフィンドールの観客席から大歓声が聞こえた。よつしや、とぼくも拳を握り締める。ハリーが嬉しさのあまり、空中で二、三回宙返りをするのが見えた。

『さて今度はスリザリンの攻撃です。チエイサーのピュシーはブラッジャーを二つ躲し、双子のウィーズリーを躲し、チエイサーのベルを躲して、ものすごい勢いでゴ……ちよつと待つてください——あれはスニッチか？』

リーの解説を聞き付けたハリーが、稲妻のように飛んでくる。スリザリンのシーカーも飛ぶが、ハリーの方が速い。

ハリーが手を伸ばした——そこで、マーカス・フロントがハリーに体当たりを食らわせる。堪え切れずにコースを外れ吹き飛ぶハリーに、ぼくは思わず立ち上がった。グリフィンドールの観客席から、怒りの野次が飛ぶ。

「フロントのくそつたれ……」

思わず呟く。アリスが大きく頷いた。

一旦試合が止まった。審判はフロントに注意をすると、グリフィンドールにフリーシユートを与える。そして試合が再開した。

『えー、誰が見てもはつきりと、胸くその悪くなるようなインチキの後……』

『ジョーダン！』

『えーと、おおっぴらで不快なファールの後……』

『ジョーダン、いい加減にしないと——』

マクゴナガル先生が声を震わせる。リーは納得いかなそうな声音だったが、しぶしぶ試合の実況を始めた。

「……おい、あいつはどうしたんだ？」

突然アリスがぼくを揺さぶった。

「あいつって？」

「お前の兄貴だ」

「ハリーが？」

アリスが双眼鏡をぼくに押し付ける。言われるがままにアリスの指差す方を見て——息が止まった。

「……ハリー!？」

箒が変な揺れ方をしている。どう考えても、ハリーの意思でないことは確かだ。

「他の奴なら、箒のコントロールを失ったって思うんだが……」

アリスが呟く。ぼくはハツとして双眼鏡を教師の観客席の方に向けた。

誰かが箒に呪いをかけているのは明らかだ。まして、ハリーの箒はニンバス2000。あの箒に呪いを掛けれるのは、とても強い魔法力の持ち主しかいない。となれば、教師か——

「……………?!？」

口元を動かし、ハリーを真っ直ぐに見据えて呪文を詠唱しているのは、二人。スネイプ教授と、クイレル教授だ。即座に、先日のハロウィンでのことが脳裏に蘇る。

「お、おいつ、アキ!？」

アリスに双眼鏡を投げ返すと、観客席から駆け下りた。アリスがぼくに声を掛けるが、そんなものに構ってはいられない。

「それでも、一体どうして……!？」

何が狙いなのか。一体この学校に、何が隠されているというのか。嫌な予感が、胸を過ぎる。

「……………って、うわあっ!？」

「……きゃっ!?!」

考え事をしながら走っていたからだろうか、突然飛び出してきた子と、正面からぶつかってしまった。衝撃に、思わず尻餅をつく。

「ごめん！ 怪我はな……」

ぼくの言葉は、途中で途切れた。

長いストレートの銀髪に整った顔、大きな灰色の瞳、スリザリンの制服。間違える筈もない、彼女——アクアマリン・ベルフェゴールだ。思わず息を呑むぼくに、同じく彼女も驚いたように目をぱちぱちとさせた。

「……幣原……」

「え?」

彼女の言葉は、ぼくには聞こえなかった。思わず聞き返したぼくを無視して、彼女は自力で立ち上がる。彼女が踵を返して駆け出したのを見て、ぼくも自分のすべきことを思い出した。慌てて彼女に追い絶る。

しかし、聞こえてきた大歓声に、彼女は足を止めた。つられて立ち止まると、フィールドを見上げる。爆発的な歓声の中、聞こえてきたのは「グリフィンドールの勝ちだ!」や「ポッターがスニッチを取った!」という声だった。ということは、ハリーは無事だったのか。ほっとする。

『グリフィンドール、170対60で勝ちました!』

ジョーダンの声が、観客席で聞いていたものよりも遠くで聞こえる。そんな中、彼女はくるりとぼくに向き合った。大きな灰色の瞳に射竦められ、動けなくなる。

「……ハリー・ポッターの弟、アキ・ポッター……」

「え……?」

静かな冷たい声が、鼓膜を震わせる。大騒ぎの観客席から次元を切り離されたようだ。ぼくと彼女が向かい合う、ここだけが、時間の進みが違うようにも思えた。

彼女は真っ直ぐ、ぼくに近付いてくる。

「……あなたは……何を知ってるの?」

「何をつて……」

「……何かを見つけて、ここまで来た。そうでしょ？」

彼女の背丈は、思っていたよりも小さかった。ぼくより少し低いくらいで、西洋人としてはかなり小柄な方だ。手を伸ばせば届きそうな距離で、彼女はぼくを見上げた。

「……好奇心は、猫をも殺す。ただの興味本位なら、近付いては、駄目」
銀色の髪が、ふわりと揺れた。それに、目を奪われる。彼女がぼくに背を向けたのだと気付くまでに、時間が掛かった。

「ま——待ってよ！ 君は——」

そのまま歩き去るだろうと半ば覚悟していたが、しかし幸運にも彼女は立ち止まった。

「……何？」

「……君こそ、何を知ってるの？」

「……私？」

「君こそ、何をするつもりで、ここに来たの？」

彼女はちよつとだけ振り返って、小さく笑う。その笑顔に、見惚れた。

「……多分、あなたと、同じ」

「えっ……」

絶句する。

彼女はぼくの表情を確認すると、そのまま歩き去っていった。

第18話 個々人の世界

ぺたぺたと、裸足で廊下を歩く。ぼくを見た人は、一瞬ぎよつとした表情を浮かべて、そそくさと足早に歩き去って行った。まあ、きつとそうだろうな、と何の気無しに考える。何しろ、頭の中から爪先までずぶ濡れなのだ。後ろを振り返れば、制服から滴った水滴が、ぼたぼたと尾を引いていた。

寒くはない。真冬の寒さは和らいで、随分と過ごしやすくなってきた。それでも、きつとこのままでしたら風邪を引いてしまうだろう。それは避けたい。

そう言えば、と思い出した。ライフ・フィスナー、ぼくと同室の男の子。彼に一度、服を乾かしてもらったことがあった。あの魔法の理論は、この前読んだ本に書いてあった。

「やあ、水浴びにはちよつと季節が早いんじゃないの?」

突然掛けられた声に、心臓が止まるかと思った。気配もなくぼくの真後ろに立ち、声を掛けて来た少年に、飛び退くようにして向かい合う。

首元のネクタイ、それにローブのフード部分の裏地は赤色。グリフィンドール生だ。黒の髪はくしゃくしゃとしていて、丸い眼鏡の奥には榛色の瞳が、無邪気な色を湛えてこちらを見返している。その目から逃げるように、慌てて目を逸らした。

「そ……う、かな」

「そうだよ。ちよつと待っていて」

そう言って彼は、杖を引き抜くと一振りした。ぼくの持ち物は、すぐに水気を失い乾いて行く。

「あ……ありがとう」

「どういたしまして。水浴び、好きなの?」

ぐい、と一步距離を詰められたので、一步後ろに下がった。視線を足元に向ける。

「……好きだよ」

嘘だった。ぼくは山で生まれ育ったから、海を見たのは日本からイ

ギリスに渡る飛行機に乗ったあの時が初めてだ。泳ぎ方も分からな
いから、水はただただ怖かった。それでも、今ここで「水が怖い」な
んて言ったら「じゃあどうして水浴びを？」って話になるに決まっ
ている。

誤魔化さないよ。

必死に平静を保つ。拙い英語を並べ立てた。

「本当は足だけ水に浸すつもりだったんだけど、転んじやっただ
だから」

「靴を履いたまま、水浴びをしたの？」

思わず息を呑んだ。眼鏡の奥の瞳は、こちらの全てを見透かすよ
うな光を湛えている。

怖い、と思った。

この人は——怖い。

あんまり喋ったら、ボロが出る。ぼくの嘘が見抜かれてしまう。

「——っ」

身を翻した。息を止め、全力で駆け出す。

「あつ、ちよつと、君！」

後ろから、彼の驚いたような呼び声。それに一度も目をくれること
なく、ただただ走った。



「ハーマイオニー！」

ぼくの声に、ハーマイオニーは驚いた顔で振り返ると、たしなめる
ようにくすりと微笑んだ。

「アキ、図書館では静かにしないと駄目じゃない」

「あはは、ごめん」

ハーマイオニーは、占領していた荷物をずぎざーつとどかしてくれ
た。それはありがたいのだが、次の授業は薬草学だ。校舎から少し離
れた温室で行われるため、早めに行かなければならない。

「久しぶりね、アキ」

「まあ、寮が違うしね。仕方ないよ。最後に会ったのは、えっと……一ヶ月くらい前？」

「そのくらいかしら。闇の魔術に対する防衛術の授業を除けば、クイデッチの次の日、ハリーがあなたを拉致してグリフィンドールの談話室に連れてきた時よね」

「その話はしないでください……」

苦笑いを浮かべた。懐かしく、そして居た堪れない思い出だ。

「え？ そんなに酷かったかしら？」

「酷かったっていうか……いや、クイデッチが終わった直後にグリフィンドール寮で祝賀会があるって話を聞いてさ。なら行こう！」

ってアリスも引っ張って突撃した訳だ。でもハリーもロンも君もいなくて、したらウィーズリーの双子が『主役はいないけど主役の弟がいるぞ！』なんて言ったもんだから……なら乗るしかないじゃん！ っって、そんなこんなでハメ外し過ぎちゃったんだよ！

うん、中々あれは酷かったんじゃないのかな、ぼく！ 確かに浮かれてた、アクアマリン・ベルフエゴールと初めて話したからって浮かれてた！ ……でも、一つ弁明しておきたい。

まさか一年生にアルコール飲ませますか、普通。アリスがぶん殴って止めてくれなかったら、どんな惨状に陥っていたか想像したくもない。……しかしアリスの拳は痛かった。三日間くらい痛みが引かなかったもんな。

「ああ……だから、ハリーがあなたを連れて来た時、寮の空気が生暖かいもの変わったのね……」

ハーマイオニーがしみじみと呟く。もう嫌だ、いつそのこと消えたい。穴掘って膝抱えて座り込みたい。

「……ところで、ハリーとロンは何処？ 一緒じゃないの？」

ハーマイオニーが口を開きかけたタイミングで、丁度良くハリーがこちらへやって来た。両手には本を大量に積んでいる。ハリーってこんなに本が好きだったっけ？ と、思わず本を注視した。

「……あれ、アキ？ アキだ！ なんだ、君も来てたんだね！」

ハリーの声は、裏表なく素直にぼくの来訪を喜んでいる。そんな彼

には申し訳ないけれど、もう時間が時間だ。「ごめんよ、もう行かなきや」とその場を離れる。

「バイバイ、ハーマイオニー。ロンにもよろしく言つといてね」

「ええ、分かったわ」

「ええっ!? アキ帰っちゃうの!?!」

二人に軽く手を振り、図書館を出た。靴音が反響する音を聞きながら、目を細める。

「……『ニコラス・フラメル』?」

先程ちらりと目に入った、ハーマイオニーの羊皮紙の中心に書かれていた単語。また余計なことになっちゃっかい出してるな、とぴんと来た。だって、ハーマイオニーならともかく、ハリーやロンまで、クリスマス休暇の前にわざわざ図書館で勉強しているだなんて。ちよつと妙だと思つたんだ。

「……でも、誰だっけ? ニコラス・フラメルって……」

聞き覚えはあるのだが。多分何かの本で読んだのだろう。

となれば、話は簡単だ。

「ま、寮の奴らに聞いてみればいいか」

読書家が集うレイブンクローなら、誰か一人くらいは知ってる奴もいるはずだ。

——悪く思わないでね、三人とも。

心の中で、呟いた。

君たちが何企んでるのか知らないけど……

——真相には、ぼくの方が早く辿り着くと思うから。



「ニコラス・フラメル? 知ってるぞ、錬金術の大家だろ?」

「……あっはー」

授業が終わった休み時間、ぼくとアリスは、校庭に積もった雪の上をあてもなく歩いてた。

ハーマイオニー達が調べていたものは、あまりにも簡単に見つかつ

た。あまりにも呆気なさすぎて……ねえ。

アリスがきよとんとした顔で見つめてくる。何がなんだか分からないけど、とりあえず聞かれたから答えたよって顔だ。

「フラメルがどうかしたのか？」

「……いや、何か、大分思い出したわ、うん」

何ヶ月か前、面白い本ないかなーっと図書館をさま迷っていた時に発見した錬金術の本に載ってた。思い出したよ。

「あんな錬金術の大家をど忘れするなんて……」

ぼくとしたことが。アリスが曖昧に笑顔を浮かべて、ぼくから目を逸らす。うう、居た堪れない。

「……じゃあ、どうしてハーマイオニー達がそれを調べていたのか、だ。何かあったのかな……」

「ハーマイオニー？」

「ハーマイオニー・グレンジャー。グリフィンドールの、髪の毛ふわふわで可愛くて頭が良くて……先生の問いに真っ先に手え挙げる子」

ああ、と最後のワードにアリスが納得したように頷く。やっぱそういう覚えられ方なんだね、ハーマイオニー。

「そうだな……賢者の石でも欲しかったんじゃない？ フラメルは賢者の石の作り手だしな」

アリスが冗談混じりに呟いた。そりゃないよ、と突っ込もうとして——手が止まる。

ハリーは、三頭犬が守ってるものを知りたがってた。守ってるものは、多分、ハグリッドがグリンゴッツから持ってきた包み。その中身。ハグリッドが一番安全だと言わしめるホグワーツの、三頭犬が護る床下に隠されている程の、大切に危険な代物。握り拳よりも小さな小包で、そう、ちょうど小さな小石が入っているような——。

「……なんでアリスは、そう簡単に当てちゃうかなあ……」

つままないじゃん、とアリスの腕を叩けば、俺のせいだよ、と呆れたように言われた。あーあ、とため息を吐く。息が白く漂ったのに、もうクリスマス前だもんね、と思いつつた。

「アリスは、クリスマスに家に帰るの？」

「帰らねえ」

アリスは即答する。思わず目を瞬かせたぼくを、不審そうに見遣った。

「……なんだよ」

「いや、てつきり、帰るもんだと思ってたから」

クリスマス休暇は、殆ど全ての生徒が家に帰る。ぼくやハリーのように、学校に残るの方が珍しいのだ。というか、ぼくとハリーがわざわざあの家に帰りがるなど、天地がひっくり返ってもあり得ない。むしろ、夏休みだつてずっとホグワーツに居残りたい程だ。

「お前も残るんだろ？」

「そうだよ」

冷たい風がびゅうつと吹いてきた。うう、とマフラーを引き上げ、身を震わせる。

「寒がりだよな、お前って」

「いや、アリスがおかしいよそれは!？」

ぼくは横目でアリスを睨んだ。

十二月も半ばだというのに、アリスはローブを羽織っただけ、ネクタイは緩め首元を開けている。当然マフラーなんてしていない。ちなみにぼくはというと、ローブの前をしっかり留めるのは当然、ローブの下にもトレーナーを重ねてマフラーに手袋と、防寒対策は万全だ。だって寒いんだもの。

「暑くねえのか？」

「君はおかしい！ 風邪引くよ!？」

「俺がそんなの引くと思うか？」

「……思わない」

それはあれか、何とかは風邪引かないって奴か？

「……失礼なこと考えてるだろ、お前」

「なんで分かったの!？」

「お前……ったく……あ、ベルフェゴール」

「嘘どこマジで!？」

ぼくは文字通り飛び跳ねると、彼女の姿がないか目を凝らした。

「嘘だ」

「……っ、このヤロ……」

涼しい顔のアリスの鳩尾狙って、本気で手刀を叩き込む。クリティカルヒットしたか、アリスはその場にしゃがみ込んだ。

「お前……それはやり過ぎだろ……」

「うるさい、彼女の名前を使うアリスが悪い」

「いやいや……あ、ベルフェゴールだ」

「まだ言うの!？」

拳を振り上げたぼくを制するように手を挙げて、「いやいや今度は本当だって!」と叫ぶ。訝しげにぼくは振り返って——そして、アリスの襟首を掴み揺さぶった。

「どどどどどゆこと!? 彼女が、彼女がええええ!? 何で、何でえ!？」

「ちよつと落ち着け……」

アリスが青い顔で呟く。ぱつとアリスの襟から手を離すと、アリスはどどどどどと咳込んだ。

「いや、だってさあ! 何で! 何で……っ」

「何でドラコと二人つきりで親密そうに話してんの!？」

「……そりやお前、だってあの二人——」

「ちよつと待ってストップ聞きたくない!! ああでも聞きたい!」

「どっちだよ」

アリスが呆れたようにため息をつく。でもうつわあすつごく躊躇う、どうしよう聞きたいけど聞きたくない!

「……やっぱ聞きたい!」

「婚約者だからだ」

「やっぱ聞きたくなかった!!」

率直な単語は、意外と心に突き刺さる。涙が出そうだ。心も折れそうだ。ショックで今なら飛び降りられる。

「……無言で泣くのはやめろ」

「うー……」

アリスの手を借り立ち上がると、小さく見える二人の背中をじっと睨みつけた。

「というか、どういうことだよお、婚約者って……」

「まあお互い純血主義の名家だからな。確かどっかで血い繋がってた気もするが……お互いの血を残そうと必死なんじゃないのか？」

「……それに婚約者っていつでも、たかが名目上は、だろ？」

「え？」

アリスはぼくを見ると、小さく笑った。

「この歳で結婚とか考えてる奴なんていないだろ。一応の口約束、みたいなものだ。……だからよ。お前が本気なら、付け入る隙くらいあるんじゃないの？」

「……………」

アリスは手を伸ばして、ぼくの頭を軽く叩く。思わず目を逸らした。アリスの靴の辺りを見ながら、呟く。

「……アリス」

「なんだよ？」

「……一応、お礼言っとく。……元気出た」

どうも、と余裕の態度で返されて、ぼくはなす術もなく、マフラーを引き上げた。

「……よし、なら……盗み聞きに行くか！」

「ぶっ!？」

アリスが思わず嘖き出す。構わずアリスの手を掴み、駆け出した。

「ちよっ、お前なんでそうなる!?! 訳分かんねえよ!」

「ぼくがしたいのは、他でもない……とにかくあの二人の密会をぶち壊したい!」

「盗み聞きでもなんでもねえな!」

アリスがツッコミを入れるのを笑って躲した。アリスも本気で止める気はないのだろう、ぼくに引きずられるままだ。そのまま走って走って――。

「……だからさ、そこはやっぱり――」

「……………」

と話し込む二人を邪魔するように、

「ドローラーコっ!!」

「ぎゃあっ!」

ドラコの背中に勢いよく抱き着いた。アリスが呆れたようにため息をついているが、いつものことなので気にしない。

「何だ!? 誰だっ!? おい、僕から離れろ!! ……離れろってば!!」

思っていたよりドラコの反応が面白かったので、ぼくはドラコの頭をホールドして振り返らせないようにする。背中が密着しているから、心臓がバクバクしている様子が手に取るように分かる。

「おい、お前誰だよ!? 僕から離れろっ! ……アクアっ、僕を助ける!!」

ちらりと横目で彼女を見れば、『仕方ないわね』とでも言うように小さくため息をついていた。そろそろ頃合いか、とぼくはぱつと両手を外してやる。

「ドツラツコー。久しぶりーいえー」

「お前っ、誰かと思えばポッターの弟!!」

むっ、不本意な覚えられ方。

ドラコはアリスを見て、「げっ、フェイスナー!」と本心から嫌そうな声を漏らした。

「ああ!? 何だよマルフォイ喧嘩売ってんのか買うぞ」

ドラコを睨みつけるアリス。無駄にサマになっていて、何だろう、一年生が出せる迫力じゃないよね、うん。ほら、ドラコもビビってる。ビビってる。

「確かにぼくはハリー・ポッターの弟だけど、ちゃんと『アキ・ポッター』って名前があるんだよ。コンパートメントで挨拶したじゃん、忘れたの?」

「そ、それは覚えてるが……」

「それじゃあ改めて。これからもよろしくね、ドラコ」

無理矢理話をまとめ込むと、ぼくはくりりと振り返ってアクアマリン・ベルフエゴールと向かい合った。彼女はきよとんとぼくを見上げる。

こんなに間近で彼女を見るのは実に二回目、胸が高鳴るのを抑え切れない。透き通るような銀髪とか、白いきめ細やかな肌とか、ちよつと大きめのコートとか、袖からちよつとだけ出た指先とか、もう何というか、ときめいちゃって仕方がない。

「……何？」

「うあつ、えつと……」

形のいい眉を上げ、彼女が尋ねる。慌てて何か言葉を探すも見当たらず、ぼくは継るようにアリスを見上げた。アリスは息を吐くと、髪を軽く搔く。

「久しぶりだな、お嬢サマ」

「……その呼び方、止めてちょうだい」

「……あれー？ 何だか様子が妙じゃないのー？」

ぼくは慌ててアリスの袖を引っ張ると、口をアリスの耳元に近づけた。

「え、何!? アリス彼女と知り合いだったの!？」

「一応な。言つてなかったか？」

「言つてねえよ！」

なんかすごく悔しい。まるで親友に彼女を……あ、いや、この例えは止めとこう。本当になつたら困るし。

「まあ家同士の付き合いってやつだ。そうでなかったら誰が……ま、そんなもんだ、気にするな。……とところでお前ら、まだ婚約者なんてくだらねえもんやってんのかよ？」

「フィスナーごときに同意するのは癪に障るが……そうだ。そんなに家が潰れるのが怖いのか……恋愛くらい自由にさせてくれればいいのに」

「なんだ、お嬢サマとの婚約は不満なのか？」

「当然だろ、望んでない相手と結婚なんて。父上が仰るから一応婚約者扱いだが、機会があればすぐさま解消するさ、こんなの」

「ふうん——で？ お嬢サマの意見はどうなんだ？」

「……私は——」

彼女は、ちらりと目を上げぼくの方を伺った——ように見えた。し

かしそれも一瞬で、ぼくが彼女を見た時には既に、彼女はぼくから目を逸らしていた。

「……分からない」

小さい眩きが漏れる。そして彼女は唐突にドラコの袖を引っ張ると、小さな声で訴えた。

「……ドラコ、行こう。……もうすぐ休み時間、終わっちゃおう」

「え？ あ……分かった。じゃあな、えつと……ポッターの弟」

「だから、ぼくはアキだってば!!」

遠ざかる後ろ姿に叫ぶ。ドラコの隣に立つ彼女は、一度だけぼくの方を振り返ると――

鋭い一瞥を残して、去って行った。

第19話 クリスマスプレゼント

(えっと……確かここで、関係代名詞のThatが入るから……)

図書館の、禁書の棚の隣、既にぼくの指定席と化している席で、ぼくは一人ノートにシャープペンを走らせていた。勉強しているのは、当然の如く——英語。

(……馬鹿らしい)

いくら頑張ったところで、何になる？ この状況が少しでもマシになるのか？

嫌になってシャープペンを放り投げかけ、すんでのところで再びキャッチすることに成功した。トントンとシャープペンの先でノートを叩くと、小さくため息をついて参考書と向かい合う。

(……でも、やらなくちゃ)

語学の勉強も、学校の勉強も、魔力の制御も。

もう二度と、誰かを傷つけないように。

「……………はあ」

余計なことを考えたせい、集中が切れてしまったようだ。小説でも読んで気分を変えるか、と立ち上がって書棚へと向かう。ホグワーツの図書館はその蔵書の殆どが勉強の内容を深めるための専門書だが、小説も少しは入れられている。その書棚の前に立って、面白そうなものはないかな、と一冊一冊じっくりと確かめた。好きな作家さんの本があり、ぼくは背伸びをして、本に手を伸ばす。

その時、世界が回った。

左肩を強く打って初めて、世界ではなく自分が回ったんだと気付く。

妙に頭がくらくらする。初めてだ、こんな感覚。

意識が飛ぶ直前に見えたのは、懐かしい、一人の少年だった。



朝。目が覚めて身体を起こすと、真っ先に色とりどりの包装紙に包

まれたプレゼントの山が目に入った。はて？ と一瞬思索し、すぐに今日がクリスマスだということを思い出す。

パジャマのまま、慌ててベッドから飛び出した。そのままプレゼントの方に駆け寄ろうとし——思い立ってアリスを先に襲撃する。群青色のカーテンを勢いよく引き、丸まったシーツ目掛けて飛び込んだ。

「……いつ!？」

「アリスっ！ 朝だよ起きて！ クリスマスだよっ!! お寝坊さんは損するよー?」

「……あー、お前か……うるせえ」

「うるさくしてんだから当然じゃない。ほら起きて、プレゼントがあるよ」

「クリスマスだから当然だろ……」

「何言ってるのさ、ぼくとハリーなんてクリスマスプレゼントもらうの今年が初めてだよー?」

アリスが小さく噴き出した。言っておくが不幸自慢は伊達じゃない。ストックなら丸々十年分はあるぞ。

「はいはい、分かったから。起きる起きる」

「絶対だよ? 二度寝しちやダメだからね?」

「しねえよ」

ぼくはスキップしながらプレゼントの山の前に座り込むと、しばらくここにこと眺めていた。やばい、滅茶苦茶幸せだ。口元がにやけるのを抑えられない。

アリスに存分に呆れられてから、やっとぼくは一番上の包みを手に取った。ハグリッドからで、小さな木彫りのフクロウが一羽コロんと入っている。荒っぽくも暖かいそのプレゼントを机の上に載せると、次はバーノンおじさんとペチュニアおばさんからのとても小さな包みが出てくる。『お前らの言付けを受け取った。クリスマスプレゼントを同封する』という短いメモに五十ペンス硬貨が張り付いたそれはまあ隅っこに置いておく。

続いてのプレゼントはなんとウィーズリーおばさんからで、手作り

らしい黒のセーターと、これまた手作りらしいフアツジが入っていた。次はハーマイオニーで、マグルのエンターテイメント小説が一冊とクツキー。ロンもハーマイオニーと同じように本をくれたが、こちらにはクイデイツチの写真集だった。ありがたく積んでおく。

個人的一番の難関はハリーだったのだが、今回は妙なサプライズなどはせず極々普通に髪留めだった。髪留めと言ってもヘアゴムではなく、強いて言うならばミサンガか。青と水色、それに銀糸で編まれたそれは、レイブンクローを彷彿とさせる。今日から髪留めはこれだ、と、以前までのと入れ替えて手首に巻き付けた。

続いて――

「……ん？」

黒い包み紙を手にとって中身を出し、思わず首を傾げた。

中に入っていたのは、大分擦り切れた感じの黒い髪紐だった。手紙は入っておらず、差出人を示すようなものもない。プレゼントを配達する人が間違えたのだろうか？ 疑問に思いながらも、ぼくはそれを机の上にそつと置く。

「……おい、アキ。これってもしかして、お前の手作りか？」

アリスが手を振ってぼくを呼んだ。ぼくは身体を捻って腹這いでアリスの元へ行くと、手元を覗き込む。

「うん、そう。なかなか器用でしょ？」

「……悪くない」

ぼくはにひつと笑うと、アリスの手から『それ』を受け取った。床に仰向けに寝そべって、光に透かすように掲げる。

ぼくが皆にあげたものは、手作りの葉だった。透かしも入った本格的なので、一人一人色が違っている。アリスのは水色、ハリーには緑、ロンには赤、ハーマイオニーには栗色、ドラコには紫をプレゼントした。元々手先の器用さには自信があるんだ。ホグワーツに来る前はそれで、ちよつとした小遣い稼ぎとかもしてたんだから。

アリスに葉を返すと、プレゼント開けの続きに戻る。高級紅茶の詰め合わせはドラコから、アリスからはカッコいいメタルチェーンだった。

そして、一番下、埋まっていたプレゼントにもまた、差出人の名前は書いていなかった。

包みを開くと、首から掛けるタイプのロケットが出てきた。中を開いてみるが、何も入っていない。にも関わらず、ロケットはちよつとくすんで年季が入っており、使い込まれた形跡もある。

ちようど、そう——先程の髪紐と同様に。

(……まるで)

「誰かの遺品みたい」

そつと呟いて、ぼくはロケットを髪紐の隣に置いた。



「アキ!!」

消灯時間直前、レイブクロ寮の談話室で一人本を読んでいたぼくは、突然の声にとんでもなく驚いた。ほぼ真後ろで声を掛けたその人物を見て、もう一度驚愕で目を丸くする。

「ハリー!? どうしてここに?」

「俺が入れた。こいつ、お前の兄貴だろ?」

ハリーの後ろから寮に戻ってきたアリスが答えた。肩を竦め、ぼくの正面の肘掛け椅子に腰を下ろして足を組む。

「レイブクロ寮の前でうろうろしてたら声を掛けてくれたんだ。えつと、アリス・フィスナーだね? 僕はハリー・ポッター。アキがいつもお世話になってます」

「別に、寮の前で変な奴がうろついていたから声掛けただけだ。言うならば警察の不審者尋問っただけで、それがたまたま知り合いの兄貴だった、それだけだからな」

「まったくもう、照れちゃって」

「……アキ、こいつ殴っていいか?」

アリスがこめかみを抑え尋ねる。慌てて宥めつつも、ぼくはハリーに椅子を勧めた。ティーポットから紅茶を注ぐと、ハリーの前に置く。

「……で、今日は一体どうしたの？ あと三十分で夜間の外出は禁止だよ。それとも今日はレイブンクローに泊まる？」

「あ、いや……でもそれもいいかな、うん……じゃなくて。今日は、アキにこれを見せに来たんだよ」

そう言つて、ハリーはポケットから銀色に輝く布を引つ張り出した。手渡されたそれはさらさらした手触りで、凄く薄くて羽のように軽い。隣からアリスが覗き込む。

「何、これ？」

「透明マント」

「透明マント？」

「そう。これをこうして……」

ハリーはその布を手に立ち上がると、ふわりと肩にかけた。布に隠れた場所が透明になるのを見て、思わず息を呑む。

「透明マント……実在したんだな……」

アリスが呟いた。

「これ、一昨日のクリスマスに送られてきたんだ。僕らの父さんのものだった、って」

「父さんの……」

ぼくは改めて、その透明マントをしげしげと眺めた。世の中には凄くいいものが出回ってるんだな、と感心する。普段あまり他に興味を向けようとしないうアリスも、興味深そうに観察したり触ってみたりしているくらいなのだ。随分と珍しい一品に違いないだろう。

「そしてね、アキ」

ハリーは声のトーンを真面目なものに変えると、ぼくを見つめた。その瞳がいつになく真剣な光を帯びているのに、ぼくも自然と居住まいを直す。

はたして、ハリーは言った。

「見せたいところがあるんだ」



「鏡？」

「そう。ロンには見えなかったけど、アキなら見れるかもしれない。僕らの父さん母さんに、きつとポッター家の人々が――」

熱に浮かされたような調子で語り続けるハリーに、ぼくはちよつと心配になる。「静かにしよ。人にばれたらまずい」と人差し指を口に当てた。

深夜零時、校内が静まり返る時間を見計らって、ぼくはハリーに連れられ『鏡』のある場所へと歩いていった。アリスは止めはしなかったが共に見に行こうとはせず、お前らの帰りを待ってるよ、とぼくが読んでいた本を引き寄せながら気楽そうに言っていた。きつと今頃はぼくらのことも忘れすっかり本の世界にのめり込んでいることだろう。クリスマスにハーマイオニーにもらった本だが、妙に中毒性があるのだ。

「ここだ……」

ハリーが魂の抜けたように眩くと、ふらふらとマントを脱いで鏡の前に近付き、そのまま座り込んでしまった。慌ててぼくもマントを剥ぎ取ると、ハリーに駆け寄る。

「ハリー、大丈夫？」

「アキ……ここだよ、ほら……何が見える？ 父さんと母さんが見えるでしょ？」

ハリーの様子がおかしいのも気になったが、ひとまずぼくは顔を上げて鏡を見上げた。

高い天井まで届くような、とても大きな鏡だ。見事な装飾がなされ、上の方には『Erised stra ehru oyt ube cafru oyt on wohsi』と書いてある。何語だろうか、ぼくが知っている言語ではないことは確かだ。

そして、鏡の中には。

「――あ……」

ぼくは、思わず鏡に手を伸ばした。硬い感触が跳ね返ってくる。ぐつと拳を握った。

ハリーが言うような両親の姿は、ぼくには見えなかった。

見えたのは——何人かの、少年少女。ホグワーツのローブを身に纏っている。全員五年生くらいだろうか、大人びているが子供らしい澆刺さが残っている。

幣原秋の世界だ、と、直感した。

鏡の中のぼくの肩に手を載せ、ちよつと照れた感じの仏頂面で見返しているのは、セブルス。その反対側で明るく笑う赤毛の少女は、リリー。

そして、彼らを囲むように位置しているのが、さらに四人。

ハリーにそっくりな（しかし笑顔はハリーより豪快だ）丸眼鏡を掛けた背の高い少年が、その隣にいる同じくらい背の高い、甘いルックスの少年と肩を組み合い、手を振ったり笑ったりしている。その隣には穏やかに微笑む鳶色の髪の少年がいて、そして端には、頑張つて背伸びをしてこちらに手を振ろうとしている、小さくてころころと丸っこい少年が映っている。

そんな友人達に囲まれて——幣原秋は真ん中で、笑っていた。

ぼくはぎゅつと、拳を握り締める。

——懐かしい

そんな気持ちが出た。ふと涙が出そうになり、慌てて歯を食い縛る。

——会いたい。会いたい。会いたい。

——戻りたい。

「アキ、見えるかい？ 僕らの両親の姿が」

ぼくは静かに微笑むと、鏡から目を逸らす。そうだね、と頷こうとした時——

「ハリー、また来たのかい？」

突然後ろから声を掛けられ、ぼくらは驚きで飛び上がった。慌てて振り返る。壁際の机に、いつの間にかダンブルドアが腰掛けていた。

「アキも今日は一緒かのう」

「ぼ、僕ら、気がつきませんでした」

「透明になると、不思議にずいぶん近眼になるんじゃない」

ダンブルドアは微笑むと、机から降りてハリーと一緒に地べたに座った。

「君だけじゃない。何百人も君と同じように『みぞの鏡』の虜になった」

「先生、僕、そういう名の鏡だとは知りませんでした」

「この鏡が何をしてくれるのかは、もう気がついたじやろう」

ぼくはちらりと後ろを振り返る。幣原秋が楽しそうに笑いながら皆にどつかれているのを見て、ぼくは目を伏せた。

「鏡は……僕の、僕らの家族を見せてくれました……」

ハリーが答えて言う。

「そして君の友達のロンには、首席になった姿をね」

「どうしてそれを……」

「わしは、マントがなくても透明になれるのでな」

ダンブルドアは穏やかに笑った。

「それで、この『みぞの鏡』はわしらに何をを見せてくれると思うかね？」

ハリーは首を振った。ダンブルドアがぼくに目を遣ったので、ぼくは口を開く。

「望みを……その人の望みを、映し出す鏡……」

「その通りじゃ、アキ」

ダンブルドアが静かに言った。

「鏡が見せてくれるのは、心の一番奥底にある一番強い『のぞみ』じゃ。それ以上でもそれ以下でもない。君は家族を知らないから、家族に囲まれた自分を見る。ロナルド・ウィーズリーはいつも兄弟の陰で霞んでいるから、兄弟の誰よりもすばらしい自分を見る。」

しかしこの鏡は知識や真実を示してくれるものではない。鏡が映すものが現実のものか、はたして可能なものなのかさえ判断できず、みんな鏡の前でヘトヘトになったり、鏡に映る姿に魅入られてしまったり、発狂したりしたんじゃないよ。ハリー、この鏡は明日よそに移す。もうこの鏡を探してはいけないよ。たとえ再びこの鏡に出会うことがあっても、もう大丈夫じやろう。夢に耽ったり、生きることを忘れ

てしまうのはよくない。それをよく覚えておきなさい。さあて、そのすばらしいマントを着て、ベッドに戻ってはいかがかな」

ダンブルドアの声につられたように、ハリーは立ち上がった。

「あの……ダンブルドア先生、質問してよろしいですか？」

「いいとも。今のもすでに質問だったしの。……でも、もうひとつだけ質問を許そう」

「先生ならこの鏡で何が見えるんですか」

「わしかね？ 厚手のウールの靴下を一足、手に持っておるのが見える」

ハリーは、ダンブルドアの回答にポカンと目を瞬かせた。ダンブルドアは笑いながら言う。

「靴下はいくつあつてもいいものじゃ。なのに今年のクリスマスにも靴下は一足も貰えなかった。わしにプレゼントしてくれる人は本ばっかり贈りたがるんじゃない」

「……なら、来年は必ず靴下を贈りますから」

「おお、アキ。嬉しいことじゃ」

ダンブルドアは目元に皺を浮かべ、柔らかい眼差しでぼくを見る。

「……それでは先生、失礼します。おやすみなさい」

ハリーが、ぼくから受け取ったマントを広げてぼくに掛けた。二人で教室を出ようとした時、後ろから声を掛けられる。

「まっすぐベッドに帰るのじゃぞ。……アキよ、ちよつといいかの？」

なに、すぐ終わる」

「はい？」

ぼくは訝しげに振り返ってマントから出ると、ダンブルドアの前に立った。半月眼鏡の奥の淡いブルーの瞳を、しっかりと見つめ返す。

ダンブルドアは穏やかな表情でぼくに尋ねた。

「アキ、君は『みぞの鏡』で、一体何が見えたのかね？」

ぼくは数秒考え、返答する。

「ハリーと一緒にですよ。……両親の姿」

「アキよ。これは怖い鏡じゃ。君のような賢明な人間でも、ついつい心を奪われかける」

「……ぼくは、賢明なんかじゃありません」

そうかの？ と、ダンブルドアがぼくを見上げた。ええ、とぼくは返事をする。

「だって、現に今も」

言いながら、背後のみぞの鏡を振り返った。

「狂おしいほど、焦がれてますから」

アキ^{ぼく}・ポッター^くがいない世界。

彼らだけで完結している関係性。

幣原秋が友人達に囲まれ笑っている姿を——狂おしいほど、願っている。

「アキ。夢に気を取られて、現実をおろそかにするでないぞ」

「大丈夫ですよ」

ぼくは、小さく微笑んだ。

「ハリーがいて、アリスがいて、ロンがいて、ハーマイオニーがいて

……大切な皆がいるこの世界が、ぼくは何より大好きですから」

第20話 捻れた足音

「秋!？」

ふらりと倒れ込んだ少年に、セブルスはここが図書館であるということさえ忘れ、声を上げて駆け寄った。慌てて抱き起こし、何かと集まってきた人に「誰か、マダム・ポンフリーを呼んでこい!」と叫ぶ。

「セブ? どうしたの……秋!？」

「リリー」

人垣を掻き分け、リリーがこちらに近付いてきた。秋に気付くと息を呑み、慌てて膝を付く。

「何があつたの?」

「分からない。急に目の前で倒れたんだ」

早口で説明した。リリーは唇をぎゅつと引き結ぶと、秋の額に手を当てる。

「……熱があるわ。きつと、ずっと一人で無理してたのね」

「……そうだろうな」

セブルスは、秋の小さな身体を見下ろした。

駆け付けてきた校医のマダム・ポンフリーに、秋を引き渡す。

医務室で、目が覚めるまで付き添う旨を伝えると、マダム・ポンフリーは妙な顔をしてセブルスとリリーの顔を交互に見たが、最後には了承してくれた。

「……あの、秋は大丈夫なんですか?」

リリーがおずおずと尋ねる。

「大丈夫な訳がないでしょう。倒れるまで無理に無理を重ねて。倒れて当然です」

ぴしゃりとマダム・ポンフリーが告げた。

「睡眠不足と疲労です! 十二歳の子供がそんなもので倒れるなんて、信じられませんよ。あなた方も、彼の友人なら、止めるなりなんなりしてあげなさい!」

鋭い言葉に、思わずセブルスとリリーは肩を竦めた。

「……あの、秋はどのくらい無理をしてたんでしようか？」

セブルスが尋ねる。マダム・ポンフリーはフンと鼻を鳴らした。

「二日の睡眠時間が二、三時間、と言ったところでしょうね。それも一日二日じゃありませんよ、ここ数ヶ月ずっと、そんな無茶をやり通してきたんでしよう。……全く、そんな切羽詰まってまで、一体何をしていたのか……」

セブルスとリリーは顔を見合わせる。悲しげに、リリーは頷いた。

「ここです。目が覚めたら呼んでください」

シャツとマダム・ポンフリーが白いカーテンを引き、二人を中に入れる。杖を振って椅子を二脚出すと、もうやるべきことは終わったとばかりにつかつかたと出て行ってしまった。

セブルスとリリーは躊躇いながらも椅子に座ると、ベッドに横たわる秋を黙って見つめた。

血の気がない顔。心労により、最初に見た時より少しやつれたようだ。目の下には隈が見て取れる。白いシャツに、黒い髪が流れていた。髪が結ばれたままなのに気付き、髪紐の端を引っ張って解く。リリーが手を伸ばして、秋の顔に掛かった髪を払った。

「……『友人なら』、か……秋にとって僕らは、友人なのかな……」

自嘲的に呟く。

秋のために何も出来なかった僕らを、秋は友人だと呼んでくれるだろうか。

「……分からないわ」

リリーも同じ考えなのだろう——俯いて、頭を振った。

胸の中で、言葉にならない感情が渦巻く。

セブルスとリリーは、黙って秋を見つめていた。



「スネイプ教授がクイディッチの監督を？」

ぼくは思わず吹き出した。

クリスマス休暇が明けて一ヶ月少し経った頃。クイディッチのグ

リフィンンドール対ハツフルパフ、ハリーの二度目の試合で、ぼくはアリスから双眼鏡を借り、眼下のフィールドを——正確には箒に乗ったスネイプ教授をだが——眺めていた。

「スネイプなんて見て、面白いか？」

「面白いよ。あの先生の箒テクは凄まじいからね」

「どっちの意味でだ」

「壊滅的な意味でだよ」

幣原秋の世界で、レイブンクローとスリザリンが合同で飛行訓練を行った時のことを思い返す。その時に比べたら、今の教授の箒テクは抜群に上手い。きつと練習したんだろうな、と微笑ましくなる。

「……てかお前、スネイプのこと嫌ってなかったっけ？」

「ちよつと最近、考えが変わってきてね」

ぼくは朗らかに言った。アリスは眉を寄せ首を傾げていたが、プレイ・ボールの笛がなると慌ててぼくから双眼鏡を取り返し目に当てた。ぼくはアリスに気付かれないように、ローブの中でそつと杖を握り締める。

もしクイレル教授がハリーに何かするのを見たら、ここからでも呪文を当ててやる。前回杖を持たずにクイディッチ観戦に来てしまった教訓だ。

「アキ！ お前の兄貴！」

「どいどい！」

聞かずとも分かった。一直線に誰よりも速く急降下をする紅の選手。スネイプ教授の脇をすり抜け、意気揚々と腕を挙げる。その手にはスニッチが握られていた。思わず歓声を上げる。

「すげ……お前の兄貴、五分も掛からずスニッチ捕まえやがった」

アリスが時計を見、感嘆の息を漏らした。ぼくは誇らしげに「だってハリーだもん」と胸を張る。

「てかアリス、いい加減ハリーを『お前の兄貴』って呼ぶの止めたら？

普通にハリーって呼んであげようよ」

「面倒臭い」

ぼくは肩を竦めた。

試合終了後、前回の教訓を踏まえ、ぼくは沸き立つグリフィンドール寮に突撃することはせず、更衣室前でハリーを待っていた。アリスは面倒臭いと言って先にレイブンクロー寮に戻ってしまったので、今回はぼく一人だ。

一時間ほど待って、ようやくハリーが箒を片手に更衣室から出てきた。周りに誰もいないことを良いことに、ぼくは後ろからそっと近付いて――

「ハリー！ おめでとうっ！」

「うあ!? ……アキ！」

ぎゅっとハリーの背中に飛びついた。ハリーは驚いたようにびくつと肩を強張らせたが、ぼくだと分かるとストーンと肩の力を抜く。ハリーの隣に並んだ。

「待っててくれたの？」

「まあね」

「入ってきてよかったのに」

「グリフィンドール寮のお祝いだもん。他寮へぼく〱が入っちゃまずいっしょ」

「アキならいつでも大歓迎だよ」

夕方の日差しが眩しくて、ぼくは目を細める。箒置き場でハリーが箒を片付けている間、ぼくはぼんやりと夕日に照らされるホグワーツを眺めていた。

「僕、やったよ。鏡のことなんて考えずに、頑張った」

ハリーがいつの間にか隣に立っていた。ぼくと同じようにホグワーツ城を見ながら、言う。

「うん、すごいよ。ハリーは頑張った。アリスもすごいって言ったもん。あのアリスがだよ？」

ハリーが喜びを噛み締めるように、頷いた。

「ねえアキ、一つ聞いてもいい？」

「何？」

ハリーはいつも通りの表情だった。眩しげにホグワーツ城を見て

いる。眼鏡に、夕日が反射していた。

「みぞの鏡でアキが見たの、僕らの父さん母さんじゃなかったんでしょ?」

静かに、穏やかに、ハリーが尋ねる。

ぼくは目を閉じて、小さく笑った。

「そうだよ」

まぶたの裏に、夕日の残像。

世界が、燃えるように赤い。

「……そっか」

ハリーは、何も聞いては来なかった。

この距離が、心地好い。

ずっと一緒に育ってきた故の、この距離が。

誰よりもぼくを理解してるのは、紛れも無く、ハリーだ。

同時に、ハリーを一番理解してるのが、ぼくであるといいな、と願う。

「戻ろうか。夜ご飯食べ損ねちゃう」

「うん。……あ、待って、アキ」

急にハリーの声のトーンが変わった。見ると、訝しげに眉を寄せ、ホグワーツ城を睨んでいる。

「どうしたの?」

「ほら、あそこ……スネイプだ。一体何処に行くんだろう?」

言った傍から、ハリーは箒置き場に向かって走っていた。すぐさま箒を二本引つ掴んで戻ってくると、ぼくに一本を投げ渡す。

「クイーンスイープ五号、フレッドかジョージのだよ——ちよつと拝借しよう。箒には乗れるよね?」

「それなりだけど……まさか、追うつもり?」

ハリーはぼくの声なんて聞こえちゃいないようにニンバス2000に飛び乗ると、地を蹴って舞い上がった。ぼくはため息をついて箒に跨がると、ハリーの後を追う。

黒いフードを被った人物が、特徴的なヒョコヒョコ歩きで禁じられた森へと向かっている。三頭犬に噛まれた足の傷が、まだ治っていない

いのだ。城の上を滑走し森の真上に来た時にはもう、スネイプ教授は森の中に入り姿は見えなかった。

しかしハリーは落ち着き払って円を描きながら高度を下げると、一際高いぶなの木に音を立てずに降り立つ。ぼくもその隣に着地した。

「上手いじゃん、箒テク」

「ハリーには及ばないよ」

箒をしっかりと握りしめ、葉っぱの影から下を覗き込む。

木の下の薄暗い平地に、スネイプ教授とクイレル教授が向かい合っ
て立っていた。小さく肩を竦め、ぼくは耳をそばたてる。

「……な、なんで……よりによって、こ、こんな場所で……セブルス、君にあ、会わなくちゃいけないんだ」

「このことは二人だけの問題にしようと思いましたがね。生徒諸君に『賢者の石』のことを知られてはまずいのでね」

ぼくは息を呑んだ。ハリーが身を乗り出す。クイレル教授が何かもぐもぐ言ったが、スネイプ教授がそれを遮った。

「あのハグリッドの野獣をどう出し抜くか、もう分かったのかね」

「で、でもセブルス……私は……」

「クイレル、私を敵に回したくなかったら」

スネイプ教授が一步クイレル教授に近付く。

「ど、どういうことなのか、私には……」

「私何が言いたいか、よく分かってるはずだ」

そこでふくろうが大きな声で鳴いたため、ハリーが驚いて木から落ちそうになった。助けようかと手を伸ばしかけたが、クイレル教授の言葉に意識を引く張られた。

「……幣原似の、ポ、ポッターの弟と、け、結託しているのか？」

慌てて下を覗き込む。スネイプ教授の表情は、ぴくりとも変わらなかった。

「私が？」

「ハロウィーンの時、み、見られた。聡い子だ、気付いてもおかしくない……」

「……私は、何も知りませんよ。……それに、アキ・ポッターと幣原秋

は、違う。別人です」

「そ、それはそうだが……」

ハリーがようやくと体勢を立て直した。今のところが聞こえてなかったらしいなと願いつつ、ぼくは改めて耳に神経を集中させる。

「……あなたの怪しげなまやかしについて聞かせて頂きましょうか」

「で、でも私は、な、何も……」

「いいでしょう。それでは、近々、またお話をすることになりますな。もう一度よく考えて、どちらに忠誠を尽くすのか決めておいていただきます」

スネイプ教授はマントを頭からすっぽり被ると、大股に立ち去って行った。クイレル教授はその場に立ち尽くしている。その氷のような無表情に、思わず、背筋が冷えた。

怪しげなまやかしとは、一体何のことだろう。

「……戻ろう、アキ」

ハリーがぼくの肩を軽く叩く。ぼくは、小さく頷いた。



試験まで残り三ヶ月を切り、徐々に学校全体が試験ムードに染まり始めた。きつとこの雰囲気は、先生方と、そしてレイブンクロー生が主となって醸し出しているに違いない。……と、思っていたのだが。

「アキ！ 悪いんだけどこの呪文の時の杖の振り方を教えてくれないかしら？ Cを描くの？ それともOを描くの？」

ハーマイオニーさんも凄まじく勉強熱心なお方でした。もう君、レイブンクローに入るべきだったんじゃないの？ と思うくらい。

「そこはCで合ってるよ。てか、どっちでも大して変わらないでしょ」「何言ってるの！ 正しい振り方の方がより効果が出るに決まってるじゃない！」

ハーマイオニーの熱の入りように、アリスと顔を見合わせて肩を竦めた。あのピリピリしたレイブンクローの雰囲気が恐ろしくて図書館に逃げてきたのだが、どうやら大して変わりはないらしい。

「……というか、ハーマイオニーがここにいるってことは……」
「アキ!!」

後ろから喜色満面の声を掛けられて、ぼくはがくりと肩を落としました。振り向かなくともよく分かる、ハリーしかない。

ハリーはそのままぼくの正面に荷物を置くと腰を下ろした。本格的に居座るつもりらしい。さらにその隣、アリスの真つ正面におずおずとロンが座る。ハーマイオニーが慌てて勉強道具を掻き集めてきて、一気に総勢五人に膨れ上がった。

「……はあ……」

アリスがため息をついて、じと目でぼくを睨んだ。曖昧に笑顔を返して、ぼくは魔法史の教科書に顔を隠す。

「こんなのとつても覚えきれないよ」

ロンがとうとう音を上げた。羽根ペンを投げ出すと、恨めしげに窓から空を見上げる。今日はイギリスにしては抜けるような青空で、こんな日に外で日向ぼっこしたら凄く気持ち良さそうだなと思う日差しだった。

「そう言わずに、頑張ってみようよ」

「でもさあ……あっ!」

ロンが急に遠くを指差した。反射的に振り返る。

「ハグリッド! 図書館で何してるんだい?」

ハグリッドがもじもじしながら書棚の間から現れた。後ろに何か隠している。ハグリッドを図書館で見るだなんて、初めてだ。狭い通路にハグリッドがいると、それだけでみっちり一杯になってしまう。「いや、ちーつと見てるだけ」

答えた声の上擦っていて、いかにも嘘ついていますーって雰囲気だ。アリスも訝しげに首を傾げている。

「お前さんたちは何をしてるんだ? アキと……おっ、もしかしてフィスナーの家の子か? お前さんの親父さんには世話になった」
「ども……アリス・フィスナーっす」

アリスは小さく息を吐いた。目を逸らし、眉を寄せている。

「まさか、ニコラス・フラメルをまだ探してるんじゃないだろうね」

「そんなのもうとつくの昔に分かったさ。それだけじゃない。あの犬が何を守っているかも知ってるよ。『賢者のい——』」

「シュー！」

慌ててハリーとハーマイオニーがロンの口を塞ぎにかかった。ぼくとアリスは顔を見合わせる。

「そのことは大声で言い触らしちゃいかん。お前さんたち、全くどうかしちゃったんじゃないか」

「丁度良かった、ハグリッドに聞きたいことがあるんだけど。フラッツフィー以外にあの石を守っているのは何なの？」

ハリーの頭をハーマイオニーが小突いた。ぼくの方をちらりと見てハリーにそれとなく目配せしてる。あつ、とハリーが小さく息を呑んだ。

「シュー！　　いいか——後で小屋に来てくれや。ただし、教えるなんて約束はできねえぞ。ここでそんなことを喋りまくられちゃ困る。生徒が知ってるはずはねーんだから。俺がしゃべったと思われるだろうが……」

「じゃ、後で行くよ」

ハリーが朗らかに言った。

ハグリッドが出て行つた後、きよとんとした顔でアリスが尋ねた。「なあ、石つて何だ？　ニコラス・フラメル？　フラッツフィーが石を守ってる？　　どういうことだよ」

途端、テーブルの空気が凍りつく。三人の顔がみるみるうちに青ざめていくのが、ちよつと見ていて面白かった。

「誰も口割らねえなら、俺が勝手に推理するぞ。そうだな……まず、ホグワーツには何かが隠されてる。それは賢者の石で、そうか、そこでフラメルが関係してんのか。隠されてる場所は、そうだな——四階の禁じられた廊下あたりか？　フラッツフィーっていう名前の何かが、そいつを守ってたんだな。そして、その犬以外にも賢者の石を守ろうとしているのがある。……そういや、少し前にグリンゴッツが破られた、つてニュースがあつたな。でも『何も盗まれなかった』と供述が出ている。あれは妙だなと思つていたんだが、ひよつとしたらそれも

関係してんのか？」

ぼくは思わず内心で舌を巻いた。今の一瞬でこれだけの話を纏め上げるとは、アリス、君って頭良かったんだな。いや、授業態度とか見てたら、意外と真面目なんだって分かるけどさ。

「ぼくらに隠し通すのは無理だと思うよ。一体何を企んでんのさ」

三人は目配せし合う。意を決したように、ハーマイオニーが口火を切った。

「実は……」



一時間後、ぼくらは総勢五人でハグリッドの小屋を訪れると、カーテンは全部閉まっており薄暗く、中からむっとした空気が流れてきた。

アリスが「マジかよ……」と呆れた声を発する。ぼくは小さく頷いた。

ハグリッドはぼくらを招き入れると、お茶とサンドイッチを勧める。暖炉に目を遣ると、予想通り暖炉の火は燃え盛っていた。ぼくは小さく肩を竦める。知らないぞー？

「……なあ、ドラゴンって、飼ったら法律違反だよな？」

「うん……」

アリスに小さな声で耳打ちされ、ぼくは頷いた。

ハリーがハグリッドに尋ねる。

「フラッフィー以外に『賢者の石』を守っているのは何か、ハグリッドに教えてもらえたらなと思って」

「もちろんそんなことはできません。まず第一、俺自身が知らん。第二に、お前さんたちはもう知り過ぎておる。だから俺が知ってたとしても言わん。石がここにあるのにはそれなりの訳があるんだ。グリーンゴツツから盗まれそうになってなあ——もう既にそれも気付いておるだろうが。大体フラッフィーのことも、一体どうしてお前さんたちに知られてしまったのか分からんなあ」

「ねえ、ハグリッド。私たちに言いたくないだけでしよう。でも、絶対知ってるのよね。だって、ここで起きてることでああなたの知らないことなんかありませんもの」

ハーマイオニーがおだてるのに、ハグリッドはにっこり笑った。アリスが小さくため息を吐く。

「私たち、石が盗まれないように、誰が、どうやって守りを固めたのかなあって考えてるだけなのよ。ダンブルドアが信頼して助けを借りるのは誰かしらね。ハグリッド以外に」

ハグリッドは誇らしげに胸を張った。ここまでおだてに弱いだなんて、ハグリッドのこれからが心配だ。まあ、この年にまで来るともう治る治らないの話じゃなくなるんだらうけど……。

「まあ、それくらいなら言ってもかまわんじやろう……さてと——俺からフラッフィーを借りて何人かの先生が魔法の罫を掛けたんだ。スプラウト先生、フリットウィック先生、マクゴナガル先生、それからクイレル先生、勿論ダンブルドア先生もちよつと細工したし、待てよ、誰か忘れておるな。そうそう、スネイプ先生」

「スネイプだって？」

ハリーが驚いたように声を上げた。ハグリッドが窘めるように眉を寄せる。

「ああ、そうだ。まだあのことにこだわっておるのか？ スネイプは石を守る方の手助けをしたんだ。盗もうとするはずがない」

指折り数え、先生の名前を心の中で復唱する。ふむ、と考え込んだ。

「ハグリッドだけがフラッフィーを大人しくさせられるんだよね？」

「誰にも教えたりはしないよね？ 例え先生にだって」

「俺とダンブルドア先生以外は誰一人として知らん」

「そう、それなら一安心だ」

ハリーが安心したように呟く。いいや、とぼくは内心で首を振った。フラッフィーは確かに大きくて凶暴だ、番犬として何かを守るにはうってつけの存在かもしれない。それでも、所詮気絶させてしまえばどうってことはない。そう、ハロウインの時、ぼくがやったように。「ハグリッド、窓を開けてもいい？ ゆだっちやうよ」

ロンが死にそうな声を上げた。ハグリッドはちらりと暖炉を見て、「悪いな。それはできん」と返す。

「ハグリッド——あれは何?」

ハリーが恐る恐る尋ねた。あれ、とはつまり、暖炉の炎の真ん中に置かれた、大きな黒い卵のことだ。ハグリッドの小屋に入った瞬間、誰もが気が付いていたが、今まで知らんぷりをしていたものだ。

「えーと、あれは……その……」

ハグリッドはそわそわと髭を弄る。ロンは「ハグリッド、どこで手に入れたの? 凄く高かったろう」と言いながら暖炉に近付き屈み込んだ。

「賭けに勝ったんだ。昨日の晩、村まで行って、ちよつと酒を飲んで、知らない奴とトランプをしてな。はつきり言えば、そいつは厄介払い出来て喜んでおったな」

そりやあそうだろう、こんなの厄介以外の何物でもない。信じられない、とばかりにアリスが大きなため息を漏らす。ハーマイオニーが慎重に尋ねた。

「だけど、もし卵が孵かえったらどうするつもりなの?」

「それで、ちいと読んどるんだがな」

ハグリッドは枕の下から大きな本を取り出し、パラパラと捲る。

「図書館から借りたんだ——『趣味と実益を兼ねたドラゴンの育て方』——勿論、ちいと古いが、何でも書いてある。(なんでンなもんが図書館にあるんだ、とアリスが呆れたように呟いた) 母竜が息を吹きかけるように卵は火の中に置け。なあ? それからつと……孵かえった時にはブランデーと鶏の血を混ぜて三十分ごとにバケツ一杯飲ませろとか。それとここを見てみるや——卵の見分け方——俺のはノルウェー・リッジバックという種類らしい。こいつが珍しいやつでな」

「ハグリッド、この家は木の家なのよ」

ハーマイオニーが的確なツツコミを入れたが、ハグリッドには聞こえちゃいない。やれやれとぼくは米神を抑えた。

面倒なことになってしまった。



「……お前、知ってただろ」

「んー？」

ハリー達と別れた後、アリスと一緒にレイブクロー寮へと戻っている時、アリスが尋ねた。……いや、こちらが否定することを考えていないような雰囲気、言うならば『断定した』か。

「あの三人が白状したこと、だ」

「……そうだね。知ってた、つて言うか、気付いてた」

「そして、あの三人が知らない何かにも気付いてる」

「……………」

ぼくは黙って微笑んだ。ぼくに話す気がないと分かったのか、アリスは小さくため息を吐く。

「言いたくねえなら、別に構わねえよ。……でも、本当に危ない時には、迷わず俺を呼べ。そうだな……ムカつく奴をぶん殴るくらいはしてやるから」

「……アリスのそういうところ、ぼく大好き」

清々しくて、気持ちいい。

こいつはやっぱり、悪い奴じゃない。

確かに喧嘩っ早いし無愛想だし、近寄り難いオーラを放ってるけど

——本当は、誰よりも面倒見がいい、お兄ちゃんだ。

「あーあ、それにしても、ドラゴンか……どうなるんかねえ」

アリスが呟く。ぼくは小さく笑って、アリスを見上げた。
ほらね。

面倒見がいい、お兄ちゃんじゃないか。

「……なんだよ」

「うふふ、別にー？」

気持ち悪い、と睨んで、アリスはぼくの頭を軽く小突く。
笑顔で、ぼくは窓から空を見上げた。

第21話 それはぼくらの願いだった

「……あ」

目を開けて最初に見えたのは、真っ白な天井だった。

白いカーテン。白いシーツ。白いブランケット。

そして――

「起きたのか」

すぐ側には、小柄な黒髪の少年がいた。顰め面で読んでいた本を閉じると、ぼくに向き直る。

「……セブ、ルス？」

確かめるように尋ねれば「他に誰に見えるんだ」と無愛想な声が返ってきた。

「……あは。久しぶり」

最後に話したのは、確か、九月一日のコンパートメントだ。早いもので、あれから半年もの月日が経っていた。そうだというのに、ぼくなんかのことを覚えてくれていているなんて。

「大丈夫か」

「……ぼく、何で医務室に……？」

「図書館で倒れたんだ」

大丈夫か、と、再びセブルスが尋ねる。反射で大丈夫だよ、と答えようとした、その声が詰まった。

目の前の景色が歪む。鼻の奥がツンとして、咄嗟に目を拭った。それでも、どうしてだか涙が溢れて、止まらない。止め方が、分からない。い。

「……う……く……」

歯を食い縛ると、声を抑えた。

本当は分かっている。

ぼくは、嬉しかったんだ。

ぼくを気遣ってくれる人が、大丈夫か、なんて声を掛けてくれる人がいることが、涙が出る程、嬉しかったんだ。

駄目だ、こんなのみつともない。

セブルスのため息が聞こえた。きつと呆れているのだ。そりやそ
うだよ、突然泣き出すなんて、一体どうかしている。

ベッドのスプリングが、ギシリと軋んだ。

そつと、頭と肩を引き寄せられる。びくりと震えるぼくの背中を、
宥めるように優しく叩いた。

「いいから」

耳元で聞こえる、セブルスの声。

「泣いて、いいから」

震えた声が、鼓膜を揺らす。

背中に、静かに腕が回された。ぎゅつと強く力が込められる。

久しぶりに感じる他人の暖かさに、もう堪えることは出来なかつ
た。

ぼくの頭を、髪を、肩を、背中を、ただただ優しく辿る手。

「…………ごめんね…………ごめんね、秋…………」

何で、君が謝るんだよ。

何で、君が泣くんだよ。

ごめんねは、こつちの台詞なのに。

「もう絶対、君を一人にしないから…………」

もう絶対、誰にも君を傷つけさせないから。

震える声が、耳元で囁く。

ぼくは、小さく頷いた。

声を殺して静かに泣くぼくを、セブルスはずっと、抱きしめ続けて
くれた。



「ドラゴに見られたあ?」

呆れた声を上げたぼくに、ハリーとロン、ハーマイオニーの三人は
揃って頷垂れた。

ハグリッドのドラゴンが孵った一週間後、ハグリッドの小屋でおず
おずと三人が切り出した話には、ぼくは米神を抑えた。しかも話による

と、見られたのはドラゴンが瞬ったその日らしい。

「何でもっと早く言わないの!」

「いや、アキ、それはごもつとも」

ハリーが両手を挙げ降参の意を示す。アリスは散らかしつぱなしのブランデーの瓶を片付けていたが、ぼくらの話を聞くと「なんだマルフォイか。分かった、黙らせてくればいいんだろ?」と言って腕を回しながら小屋から出て行こうとしたので、慌てて止めた。全くもう、喧嘩早いんだから。

「外に放せば? 自由にしてあげれば?」

ハリーが提案するのに、ハグリッドは首を振った。

「そんなことは出来ん。こんなにちっちゃいんだ。死んじゃう」

「……案外しぶとく生き残りそうだけどな、こいつ」

アリスがドラゴンを肩に乗せたまま呟く。このドラゴンは何故か妙にアリスに懐いていて、正直なところハグリッドよりも好かれてるんじゃないかとぼくは見ている。……ちなみにぼくは動物に嫌われるスキルを思う存分発動中らしく、ドラゴンの近くに——つまりはアリスの近くに——近寄ると炎を吐いて威嚇されるため、泣く泣く狭い小屋の隅っこで過ごすようにしていた。

「この子をノーバートと呼ぶことにしたんだ。もう俺がはつきり分かるらしいよ。見ててごらん。ノーバートや、ノーバート! ママちゃんはどこ?」

しかしドラゴン——ノーバートはアリスの肩に乗ったまま、ハグリッドの方を見向きもしない。ため息をついてアリスがノーバートを掴むと(何でそんなに乱暴に扱われても大人しいんだノーバート! ぼくには一ミリたりとも心を開いてくれないのに!)ハグリッドに突き出した。ノーバートがハグリッドに向かって牙を剥く。……おいおい。

「ハグリッド、二週間もしたら、ノーバートはこの家ぐらいに大きくなるんだよ。マルフォイがいつダンブルドアに言い付けるかわからないよ」

ハリーがきつぱりと言った。ハグリッドはアリスから受け取った

ノーバートを優しく撫でながら（しかしノーバートの目はずっとアリスの方を向いている）俯く。

「そ、そりゃ……俺もずっと飼っておけんぐらいのことは分かっどる。だけんどほっぽり出すなんてことは出来ん。どうしても出来ん。なあ、アリス？ お前さんもそう思うだろ？」

「いや、俺は……」

アリスが苦笑いを浮かべて首を傾げ、困ったようにぼくを見た。……なるほど、素晴らしい一方通行だ。

「チャーリー！」

突然ハリーがロンに向かって叫んだ。ロンは目をぱちくりさせてハリーを見「君も狂っちゃったのかい。僕はロンだよ、分かるかい？」と心配げに尋ねる。ハリーはむっとした目でロンを睨むと、早口で告げた。

「違うよ——チャーリーだ。君のお兄さんのチャーリー。ルーマニアでドラゴンの研究をしている——チャーリーにノーバートを預ければいい。面倒を見て、自然に帰してくれるよ」

ロンはパンツと手を叩いた。

「名案！ ハグリッド、どうだい？」

ハグリッドはしばらく渋っていたが、再三の説得により最後には頷いた。

「これで厄介事が終わったな」

アリスがほっとしたように呟いた。ぼくも大きく頷く。

しかし、ここからが本番だったのだ。

何のかつて？ ……厄介事の、さ。



「ウィーズリーがノーバートに噛まれた」

談話室の扉を乱暴に開けたアリスは、つかつかとぼくの正面まで歩き、肘掛け椅子にどっかかりと腰を下ろした。談話室に誰もいないことを確認すると、僅かに声を潜めて告げる。

「……嘘だろ、おい」

読んでいた本をパタンと閉じ、ぼくは小さくため息を吐いた。

「いつの話？」

「昨日らしい。さつきハグリッドの家で聞いた。今は医務室に釘づけだつて」

「ドラゴンの牙には、確か毒あつたもんね」

ローブの中に杖が入っているのを確かめ、立ち上がった。肩を竦めてアリスも腰を上げる。

「行くか」

「おう」

目配せし合い、レイブンクロー塔から出た。放課後の校内は、やけに静かだ。窓から見える校庭にも、人影は数える程しかない。試験前だし、皆図書館か寮に籠つて勉強しているのだろう。

「そんな中、ぼくらはまた妙なことに首突っ込んで、と」

「まあな」

「一体何やってんだろうな、ぼくらは」

「俺は巻き込まれただけだ」

「またまた。ノーバートが一番懐いてたの、アリスじゃん」

「お前にはちつとも懐かないよな」

「うっ……」

痛いところ刺されて、ぼくは頬を引き攣らせる。……仕方ないじゃないか、体質なんだもん。ぼくだって動物と戯れたりしたいのに。

「……なんでぼくばつかこんな目に……」

いや、ぼくだけじゃなく、幣原もだけど。

がつくりと項垂れたまま、先導するアリスの後ろを着いていく。医務室に向かう足取りには、迷いが無い。

人の話し声を聞き付け、思わず足が止まった。振り返ると、そこには一つの教室。天文学関係の器材がごちゃごちゃと置いてある、まあいわば物置だ。ドアが若干開いていて、そこから光と声が漏れている。

一体どうして、そんなことが無性に気に掛かったのか。無意識の反

射に驚くも、そんなものは次に聞こえてきた『ドラゴン』という単語に吹っ飛んだ。扉に駆け寄ると、物陰に隠れて聞き耳を立てる。

「……だから、土曜日の夜にあいつらがドラゴンを移動するんだ。間違いない」

「……だからって……」

「……アキ？ どうしたんだ？」

不思議そうに近付いてきたアリスにシートとジエスチャーをして、ぼくは親指でその教室を指し示した。アリスは訝しげな顔をしていたが、教室の中の話し声を二言三言聞いて理解したらしく顔色を変えた。背伸びをし、ドアの上の辺りについていて小窓を覗き込むと、眉間に皺を寄せる。

「……マルフォイとベルフェゴールだ。やっぱりな」

「え!？」

思わず大声が出そうになって、慌てて口を抑えた。注意して中から漏れる声を聞いてみると、なるほど、確かにその二人の声だ。

「ドラゴンがいるんだ、ハグリッドの小屋で、あいつらは飼ってる——僕は見たんだ!」

「……でも、法律違反。……そんなことが本当にホグワーツであつているとは、考えにくいわ」

「ごめんね。そんなことが実際にホグワーツであつてはいるんです。……全く。」

「なんだよ、僕が言ってることが信じられないって言うのか!？」

「……ドラコが嘘をついてるとは、考えてない。……ただ、信じ難いだけ」

「ふん——お前に信じてもらわなくてもいいさ。……土曜日の零時に、あいつらはドラゴンを、城で一番高い塔に運ぶ——それは間違いない」

「思わず息を呑んだ。」

「どうして、ドラコがそれを知っている?」

「アリスは真剣な瞳で身を乗り出した。」

「……なんで、そう言い切れるの?」

「今日、ウィーズリーのお見舞いに行ったのさ。右手に包帯をぐるぐると巻いてね。ウィーズリーは犬に噛まれたって言ったらしいが、マダム・ポンフリーが疑わしげだったね。それで僕は悟ったのさ。ウィーズリーはドラゴンに噛まれたんだって」

「……ドラゴンの牙には、毒がある。……すぐさま治療しないと、酷い目に」

「そうさ。でもウィーズリーは面倒臭がつてそれをしなかった。馬鹿な奴だ。僕はウィーズリーに言ってやったのさ、マダム・ポンフリーに言い付けられたくなかったら、大人しくこの本を貸せ——ってな」
彼女が答えるまでに、しばらく間があった。やがて彼女が発した言葉は、戸惑いの色が滲んでいた。

「……え？ ドラコ、あなたひよつとして——本を借りに行っただけなの？ ウィーズリーのところまで？」

「ああそうさ。あの本は面白いと評判なんだ。ウィーズリーが持つより僕が持っていた方が、本だって喜ぶだろ」

ドラコ、君はなんて可愛い奴なんだ！ 予想の斜め上を越えてくれるな。こういうところ、嫌いになれないんだよなあ。

彼女はしばらく無言だったが、やがて仕切り直すように小さく咳払いをすると、改めて尋ねる。

「……で？ ……なんでドラゴンを土曜の零時に運ぶことが分かったのか、聞いていないわ」

「ああ。なあと、簡単なことさ。ウィーズリーから借りた本の中に、この手紙が挟まっていた。ウィーズリーの兄からの返事さ。ドラゴンの仕事に就いていた奴がいたような気がするから、おそらくあのドラゴンの処理を依頼したに違いない」

ロンの馬鹿!! 色んな思いはあるが、ひとまずはロンの馬鹿野郎としか出て来ない！

「ここで僕が、あいつらがドラゴンを運んでいるところを捕まえたなら——あいつらを退学に出来るチャンスかもしれない」

「……っ、駄目……！」

「駄目？ なんてだ。お前もスリザリン生なら、ポッターのことが嫌

いだろうか？ ポッターの奴め、自分が『生き残った男の子』だからって、調子に乗ってる。どの教師もあいつには甘いんだ——マクゴナガルだって、あいつを一年なのにクイディッチのチームに入れたんだぞ！」

突撃しそうになったぼくを、アリスは予想していたように押さえ込む。口を手で押さえられ、身動きどころか喋ることも出来ない。むつとアリスを睨んだが、しかしアリスは真剣な目で教室内の様子を伺っていた。

「これはチャンスだ。ポッターにウィーズリー、それに『穢れた血』のグレンジャーを——」

「……その単語を言わないで」

彼女が鋭い声で制した。アリスもきつとドアを睨みつける。……不良の眼光って怖いのかな。ぼくまで背筋が凍ったぞ。

「——この学校からいなくなる、な。まあ悪くても、減点、罰則か。楽しみだな」

「……そんな……止めて、ドラコ。お願い……」

彼女の制止を、ドラコは無視した。彼女は焦ったように声のトーンを高める。

「どうした？ 最近お前、変だぞ」

「……そんなことしても、何も意味ないじゃない。お願い……今、あの人の手を、煩わせるのは止めて……」

「誰だよ？ あのやつて」

彼女は言葉に詰まったように黙り込んだ。ドラコは小さなため息をつく。

「……まあ、退学にはならないだろ。そんなに減多になることじゃない。言うならば、そう、嫌がらせかな」

「……そんなくだらないこと、止めて」

「うるさいな!!」

バンツ、と乾いた音がした。苛立ったドラコが机か何かを叩いたのだ。声を荒げる。

「なんなんだよ最近！ そんなに僕がポッターにちよつかい出すのが

気に食わないのか!? 毎回毎回いちいち突っ掛かって来やがって、訳
分かんないよお前!」

「……っ、ドラコは何も分かってない!」

堪えられなくなったように、彼女が大声を出した。ぼくは少し驚
く。

「何がだよ! お前には何が分かってるっていうんだよ!」

「……この学校で、また危険なことが起きようとしているの! 闇の
帝王がいた時みたいにつ……」

「あの方の名前を出すな!!」

今度はガンガラガツシャンと金属質な音が鳴り響いた。音に身体
を竦める。恐らく、ドラコがバケツか何かを蹴ったのだろう。

「……何も分かってないのは、お前の方だ、アクア。少しは親族の中で
浮いていることくらい、自覚したらどうだ」

「……闇の帝王を崇拜するのは、間違ってる。……彼はただの人殺し
よ。なんで皆、そんな人の家来なんかになり下がるの?」

「それが浮いてるって言うってんだよ!」

「……私は間違ってる!!」

「……勝手にしろ」

ドラコは吐き捨てるように呟いた。コツコツと足音が近付いてく
る。アリスはぼくを抱えると、慌ててドアの影から飛び出し、すぐ近
くの教室に滑り込んだ。

危機一髪、ドアで身体を隠した直後、ドラコが教室から出て来た。
厳しい顔ですたすと足早に廊下を歩いて行く。ドラコが角を曲
がったのを確かめてから、ぼくはアリスのホールドから抜け出すと、
彼女がいる教室前に近寄った。

隙間から、静かに、彼女の姿を見る。

彼女が指先でぐいと目元を拭う。その仕草を黙って見て、ドアから
離れた。

「どうした?」

「なんでもない」

小さくため息をついて、ぼくは歩き出した。

第22話 家と自分、家族と自分

俯いて病室に入って来たリリーに、ぼくは声を掛けた。リリーは顔を上げると、大きく目を見開き、口元に手を遣った。

「リリー」

彼女の緑の瞳が、揺らいで潤む。本当に、彼女は優しい子だ。ぼくは静かに微笑んだ。

「リ……」

ぼくの言葉は、そこで途切れた。リリーに勢いよく飛び付かれ、勢い余って背後のベッドにダイブする。わ、と驚くも、ぼくを抱き締めたりリリーは、小さく震えて泣いていた。

「秋！ 秋……っ、ごめんさい、私っ、もつと早く、あなたに……ごめん、ごめんね、秋……」

「……大丈夫、だから。落ち着いて、リリー」

リリーの赤い髪を撫でると、ベッド脇の椅子に座っているセブルスと顔を見合わせ、笑った。

「久しぶり」

これから、よろしくね。



「仲直りの証に、もう一度自己紹介をしましょうよ！」とリリーが提案したことで、ぼくらは再度自己紹介をすることになった。別に喧嘩をしていた訳じゃないので仲直りという表現は当て嵌まらない気がするけれど、でも言いたいことはなんとなく伝わった。

「じゃあまず私から！ 私はリリー・エバンズ。一月三十日生まれで、寮はグリフィンドールよ。そうね、後は……」

「秋、言っておくがリリーはかなりの変人だ」

横からセブルスが口を挟む。ふうつとリリーは頬を膨らませた。

「私、変人じゃないわよ！」

「どうだか。普通の子は『流れ星を捕まえに行こう！』と言って虫取り

網持つて木に登ったり、ブランコで空まで届くか何回も実験したり、カエルの卵をポケット一杯に持っていたりしない」

うっ、とリリーが言葉に詰まった。言い返せないらしい。……カエルの卵ポケットについて、まさか……ね。うん、深く考えないようにしよう。

「……さて。じゃあ次は僕の番だな。僕はセブルス・スネイプ、スリザリン寮だ。誕生日は一月九日、趣味は読書と、魔法薬学を少々。リリーと違って、至つてまともな——（リリーに頭を叩かれる）——失礼、至つて常識人だからな」

「苦手なことは飛行術つて、言わなくていいのかしら？ セブ」
「うるさいー！」

意趣返しとばかりにリリーがからかい混じりの言葉を掛ける。セブルスは微かに赤くなつてそっぽを向いた。からかわれるほど苦手らしい。

「ほら、次、——秋の番だ」

セブルスが顔を背けたまま促す。と、リリーが身を乗り出してぼくの顔を覗き込んで尋ねた。

「え、というか、今気付いたんだけど……秋、私達は何言ってるか、分かってる？ あっ、もし理解出来てなかったならホントにごめんなさい！ ああもう、なんで私は人の気持ちに気付けないんだろ……」

「あ、いや、大分分かってるから、大丈夫」

リリーが目に見えて萎んでいくのに、慌てて手を振った。と、二対の瞳がぼかんと見返してくる。

「……え？」

「だから、君達は何言ってるか、分かってるから」

話すのはまだ慣れていないため、頭の中で英文を思い浮かべてからになるから、少し反応速度は遅くなるけど。

「えっ、速……!?! 半年で一つの言語をマスターなんて出来るの!?!」

「いや、マスターは流石に出来ないよ。ごまかしごまかしで流してる感じ」

「それでも、相当な努力だよ」

セブルスが腕を組んで頷く。リリーがキラキラした目でこつちを見ているのが、なんだかくすぐつたい。

「……言われてみれば、ちよつと妙な発音とかアクセントとかあったわね」

「あう、やつぱり……？」

自分では分からないものである。やつぱり外国語って難しい。

「秋、自己紹介しよ」

リリーが優しく促すのに小さく頷いて、ぼくは心の準備をすると、息を吸う。

「……えつと、幣原秋、レイブクロウ寮です。誕生日は十月十五日で、好きなことは読書、で、えつと……」

ぼくは躊躇って二人の顔を交互に見つめると、小さな声で呟いた。「出来るなら、だけど……これからも、ぼくと仲良くしてください……」

堪え切れなくなつて、思わず俯く。なんかすぐこつぱずかしいことを言った気がする。多分耳まで真っ赤だろう。

「……馬鹿」

と、そこで頭をげんこつで軽く殴られた。殴った張本人であるセブルスは、眉間に皺を寄せ、不機嫌そうに目を細めている。

「そんな当然のこと、今更改めて尋ねる馬鹿がいるか」

「……あは。ごめん」

「セブの言う通りよ！　ねっ、秋。私達はこれから、ずっと一緒なんだから。それでしよう？」

リリーが拳を握って熱弁する。

二人の反応が何より嬉しくて、思わず涙が出そうになった。

堪えて、笑う。

「そうだね。……ずっと一緒、だよね」

『ずっと一緒』。

信じて疑うことのなかったこの言葉が壊れるのは、しかし、そう遠くはない日であった。



「土曜日の夜零時っていう約束を変えることは出来ないの？」

「うーん、チャリーにふくろう便を送る暇はないだろうし、確かに危険を冒さなきゃいけないけど、所詮マルフォイだ。違うかい？」

ハリーの言葉に、ぼくは苦笑いを浮かべた。

ノーバートのパック詰めを運ぶハリーとハーマイオニーを見送ってから、ぼくとアリスは目配せし合うと駆け出した。スリザリン寮の前で、ドラコを足止めするためだ。ハリーはああ言ったけれど、万が一ということもあるし、ハリーとハーマイオニーを退学になんてさせてたまるか。幸いドラコには、この計画にぼくとアリスまで加わっているということとは知られてないのだ。

「スリザリンって何処だ！」

「その階段下って、地下！」

ようし分かったと叫んで、アリスは手摺りを掴み——ってえええないだろそれは！——勢いよく手摺りを飛び越え、空中で身を翻した。遅れて着地音。慌てて階下を見下ろせば、すでにアリスの姿は見当たらず、ただ走る音が聞こえるだけだった。

「ねーよそりや……」

どこのアクションヒーローだよ。

当然ぼくにはそんな芸当は出来ないの（当たり前前だろ！）、ごくごく普通に階段を駆け降りる。地下牢の奥、迷路みたいな廊下を抜けて、スリザリン寮の入口に辿り着けば、アリスは既にそこにいた。白い湿った石が並ぶ壁の前で、眉を寄せ不思議そうにこつこつと石を拳で叩いている。

「……なあアキ、こっかが——」

「そうだよ」

走って乱れた息を整えながら、言葉を発した。

「スリザリン寮だ」

ふうん、とアリスは頷き、ぼくに訝しげな顔を向けた。

「……で、なんでお前は余所の寮の場所を知ってたよ。……まさか

台言葉まで知ってる、とか言うんじゃねえよな」

「まさか」

ぼくは曖昧に笑って目を逸らす。アリスが不審げにじと目を向けてくるのが怖いなあ……。

「ま、ここでマルフォイの野郎を待てばいいんだろ？」

「そゆこと」

ぼくらは壁に寄り掛かり、ドラコが出て来たら飛び掛かろうと寮の入口を睨みつけた。三分待って、十分待って、十五分待って、三十分待って――

「……なあ、もう零時十分過ぎただけだ」

「おかしいな……」

絶対出てくると思ったんだけど、アテが外れたようだ。首を捻りつつも、壁に近寄りそつと触れる。少し考え「純血」と呟いた。ありえそうな単語を続ける。

「サラザール、勝利、蛇語、――狡猾」

途端にするするすつと石の扉が出てきた。音もなく開いた扉の先、談話室には、もう真夜中だというのに談笑しているスリザリン生が伺える。その中に、一人で本を読んでいるアクアマリン・ベルフェゴールがいて、思わず胸が高鳴った。自然を装い談話室へと入り彼女に近付くと、そつと後ろから小さな声で話しかけた。

「ドラコっているっ」

「……っ!? 幣原……じゃない、ポッター……どうして、ここに」

普段氷のような無表情でいる彼女は、珍しいことにその顔に驚愕の色を滲ませた。何かを言いたげに、じつとぼくを見つめている。小さく笑って、ぼくは人差し指を唇に当てた。あまり目立つ真似はしたくない。

「ごめんね、話せば長くなるんだ、またの機会に。ねえ、ドラコって今どこにいるか知っているかい？」

彼女は静かに首を振った。嫌な予感が胸を過ぎる。

「……二十分ほど前に行っちゃったわ……夜に出歩くのは規則違反だから止めてって言ったのに」

やはり入れ違いだったか。奥歯を噛み眉を寄せた。これからどうしようか、どうやって追おうか。行き先は分かっているが、先回りの方法を。脳みそを回転させ、策を練る。

「……分かった。ありがとう」

「あつ……」

踵を返したぼくの袖を、彼女はパツと引つ張った。その手は反射的に伸ばされたもののようで、慌てたようにすぐさま離される。少し残念だなと思いながらも、ぼくは振り返った。

「どうしたの？」

「……えっと、あの。……ドラコは、多分、天文塔に向かっている。……」

あなたも、早く帰らなきゃ、先生に見つかったら、大変だから、ええと……」

彼女自身、何を言えば良いのかよく分かっていないような口ぶりだ。だがしかし、言いたいことは伝わった。思わず微笑んで、ハリーにするのと同じように頭を撫でようとし——手が止まる。

誤魔化すように自分の頬を搔いて、一歩下がった。

「ありがとう」

口元に笑みを浮かべて、応える。

「でも、行かなくちゃ」

ハリー達のためにも、ハグリッドのためにも。

彼女に背を向ける。彼女はもう、何も話しかけては来なかった。談話室から転がり出れば、そこには呆れた顔でぼくを見つめるアリスの姿が。

「お前、そんなに簡単に余所の寮の合言葉を……」

「ドラコはもう寮を出てる。すれ違いになったんだ、きつと」

アリスの言葉を遮り、早口で告げた。アリスの顔色が瞬時に変わる。

「……行くぞ」

詳しいことは何も尋ねずに、アリスは促す。うん、と頷き、ぼくらは駆け出した。



深夜徘徊を今まで教師に見つからなかったのは、ひとえにアリスのおかげだった。直感と危機察知能力は、軽く常人を凌駕している。一体どこでそんな能力が培われたのだろう、いつか聞いてみたいものだ。

だから、アリスが他のことに気を取られてしまったら、ぼくらはどうしようもない訳であり。

……この状況も大いに仕方がないかな、なんて思ってみたりもするのだ。

順を追って語ろう。



「いたテメエマルフォイ！ お前何面倒事生み出してやがる馬鹿野郎！」

「っ、フィスナー!?!」

天文台の階段の辺りで、ぼくらは無事にドラコを発見することが出来た。ホッと足を緩めるぼくと反対に、アリスは一気にスパートを掛け、叫びながらドラコの背中を蹴飛ばした。哀れ、ドラコは顔面から勢いよく地面に倒れ込みそうになるが、すかさずアリスがドラコの首根っこを掴んで引き戻す。ひえ、と思わずぼくの喉から小さな声が零れた。なんだあれ、こっわい。

「テメエ分かってんだろうな、自分が何してるか。あ?！」

ドラコはしかし、苦しそうに咳き込んでいて（背中蹴られたのだから当然だ、しかも蹴ったのはアリスだし）到底話が出来る状態ではなかったのだが、それに構うことなくアリスは詰問を続ける。酷い奴だ。

「アキの兄貴を陥れようとでもしたんだろうが、残念だったな。……何とか言ったらどうだ?！」

「アリス、ちよつとストップ、落ち着こう」

あまりにもドラコが可哀想だ。二人の間に割って入ると、アリスからドラコを引き剥がす。ドラコは床に転がり、しばらく咳き込んでいたが、しばらくすると起き上がってアリスを激しい瞳で睨みつけた。「フィスナー……そうか、アキがいるから、お前もポッターに肩入れするんだろう。つくづくお前は、僕とは合わない」

「奇遇だなお坊ちゃん、俺もお前とは合う気がしねえよ」

「その呼び方をするな！」

……この二人、実はかなり仲悪い？

ため息を吐いた。「君が入るとごちやごちやする」とアリスを押しやると、床に尻餅をついているドラコと視線を合わせ屈み込む。

「ねえドラコ。ぼくにとつてハリーは、唯一の家族なんだ。ハリーがいなかったら、ぼくは何も出来ないよ。ハリーを退学にしようとドラコが企んでいたのなら、ぼくは悲しいな」

「うっ……いい、いや、別に、退学にするつもりじゃ……」

「ドラコ」

「………え、と」

「ね？」

「……わ、悪かった」

よろしい。ドラコがごめんなさいと言える良い子で良かった。

「……じゃあお前たちは、あの森の番人が何を育てているか知ってるのか？」

「一応は。アリスに特に懐いてるんだ」

「ああ、フィスナーは妙な奴にばかりモテるからな」

「酷いなあ」

今の言葉に僅かなトゲが仕込まれていた気がしたんだけど、気のせいかな？

「ドラコ、ぼくとしては、あのバック詰めを上手いことロンの兄さんに運べたらそれでいいんだ。ね？　だから、寮に帰ってくれないかなあ？」

「バック詰め？」

ドラコが首を傾げた。

「そうだ、帰れ帰れ」

「何をっ！」

「あーもうほら、喧嘩しないの」

はっ、とアリスとドラコは、お互い鼻を鳴らしてそっぽを向く。一体、どうしたもんかねえ。

「とりあえず、もう寮に帰ろう。あんまり歩き回ってたら、見つかる可能性も高くなるし」

「あ……ああ、そうだな」

言いながらも、ドラコはまだ未練がましそうに辺りを見回している。ほら、と頭を叩いて立ち上がらせると、ぼくらは見回りの教師に見つからないように物音を潜めて歩き出した。

「……フェイスナー、お前、クリスマスに家、帰らなかったそうじゃないか」

「……だからどうした」

思い出したようにドラコが話題を出す。それに眉間の皺を深くしながら、アリスが声を低めて返した。

「家の人達は、てつきり帰ってくるもんだと思ってたらしい。……いい加減、大人になるべきだ」

「お前には関係ないだろ」

アリスの声に怒気が混じる。触れられたくないところのようだが、家の話みたいだし、どうも入れない。

「いつまで引きずってんだよ。意地の張り合いなんて、親とするもんじゃない」

「……うるせえよ」

「だいたい、お前は……」

「うるせえつつつてんだよ！」

「アリス！」

ぼくが叫んだ時には、もう遅かった。既にアリスは、ドラコの胸倉を掴んで壁に押し付け、殺意のこもった眼差しで睨みつけていた。

「テメエが知ったような口利くんじゃねえよ！ これは俺の問題だ！

俺と家との問題だ!!」

「アリス、止めっ……」

割って入ろうと手を伸ばしたが、アリスの方が早い。胸の辺りを蹴り飛ばされ、思わず尻餅をつく。手加減しているのだろう、大して痛くはなかったことが、ちよっぴり悲しかった。

「お前に俺の何が分かんだよ！俺はもう、あの家には堪えられねえんだよっ!!」

「っ、お前もアクアと同じだ！理由も中途半端に親を、家を嫌う！それらと真剣に向かい合おうともせず!! 所詮は臆病も」

ドラコの声は、そこで途切れた。アリスがドラコの喉に指を食い込ませたのだ。アリスの目が細く眇められる。

一瞬で、辺りの空気が変わった。ぴりぴりと肌を刺す空気。

——殺意。

「止めろ!!」

鋭く叫んだ。無意識に抜いていたのだろう、左手には杖の感触が。杖先から、パチンと大仰に火花が弾けた。久しぶりの、魔力の雫。

アリスとドラコが、驚いたようにぼくを見た。

「……止めろ、アリス。やり過ぎだ。ドラコも、アリスがこの話題を嫌いなこと、分かってたはずだろ」

「……わーっただよ」

ぼくの乱入によつて頭が冷えたか、正気を取り戻したように、アリスはドラコの首から手を離す。ドラコはずるずると廊下に座り込むと、喉に手を当て小さく咳込んだ。

「……悪かったな、マルフォイ」

「いや……僕も、無神経だった」

決まり悪いように目を逸らして、アリスが呟く。ドラコも、それに応えるように軽く頭を下げた。ほっとした空気が流れた、その瞬間。

「何事ですか!!」

遠くからマクゴナガル先生の声が響く。ぼくらは揃って飛び上がった。

「今の声はアキ・ポッターですね!? お待ちなさい、動くことのないように！ 他にも誰かいるのならば大人しく！」

うわ、バレてる。しかもぼく名指しかよ。

咄嗟に辺りを見回した。人一人隠れられそうな大きさの掃除用具入れを少し離れたところに見つけ、慌ててアリスの手を引つ張る。まだ混乱しているのか、いつもより動きが緩慢なアリスを無理矢理突っ込むと、杖を向けた。

「……悪く思うなよ。……Petriticus Totalus」

アリスを『凍結』させると扉を閉め、目くらまし呪文を掛ける。それから大急ぎでドラコの元へと戻ると、ドラコの手を掴んで引つ張り起こした。辺りを見回すが何も無い、せいぜい窓が並んでいるくらいか。こんな高い塔で窓の外にしがみつくなんて正気の沙汰じゃない。仕方ない、ドラコは道連れだ。一緒に罰則を受けようじゃないか。

……別にアリス鼻肩だとか、そんなんじゃないけど。まあ、いつも一緒にいる方に肩入れしちゃうのは当然だよな。

アリスがマクゴナガル先生に見つからないよう、小さな声で複雑な呪文を唱えながら、ぼくは肩を竦めて目を閉じた。

ハリー達は、無事にノーバートを送ることが出来ただろうか。疲れて左手の力が抜けて、杖が、ぼくの手から滑り落ちた。

第23話 禁じられた森

図書館の、禁書の棚の隣は、ぼくが半年間ずっと占領し続けた指定席だ。教師くらしいしか滅多に立ち入らず。また教師も生徒がうじやうじやいる真昼間に図書館を訪れる気にはならないだろう。という訳で、普段は立ち入る人もおらず静かなものだ。しかし、今日だけは違った。

「秋、そこ間違ってるぞ。『時計回り』じゃない、『反時計回り』だ」

「ありがと、セブルス。えつと……？」

「綴りはこう……あとそれは……それはnか？」

「え、n、だよっ」

「癖字を直した方がいいわね、秋」

「そ、そんなに酷い……？」

いつもは四人掛けを一人で占領しているのだが、今日は慎ましやかに一人分の場所だけ。隣でリリーが、正面にセブルスが、それぞれこちらに身を乗り出してはぼくの勉強の進み具合をチェックしてくれている。

「あ、ごめん。今、何て？」

リリーの言葉が聞き取れず、慌てて聞き返した。リリーは仕方ないわねと言いたげに笑いながら、羊皮紙の端を引き寄せると、伝えたい言葉を書き記す。

いや、今日だけじゃない。明日も、明後日も、これからずっとずっと先も、ぼくらはこうして一緒に試験勉強や、ううんそれだけじゃない、色んな時間を積み重ねていくんだ。

それが、何よりも嬉しいと感じた。



ノーバートのパック詰めを送るために、ぼくらは随分と多大な犠牲を支払ったようだ。チャーリーにノーバートを送ったハリーとハーマイオニー、そして何故かネビル・ロングボトムも見つかり、ぼくと

ドラコも合わせれば、この夜にベッドを抜け出した一年生は五人、アリスも含めれば六人だ。先生方の心労お察しする。

ぼくの――レイブンクロー寮の減点は二十点。だがしかし、この程度ならば授業で頑張れば取り返しの効く点数だったから、少しホツとした。寮の皆も「まあ、アキちゃんならいいか」の一言で許してくれたし。……その真意が少しばかり気になるところではあるのだが。

聞くところによれば、ハリー達は一人当たり五十点も減点されてしまったらしい。ぼくも、大広間前のグリフィンホール寮の点数表示を見て、何かの間違ひなんじゃないかと目を疑ったものな。三人とも物凄く落ち込んでいた。だって、あのハリーがぼくを見ても抱き付いてこないし駆け寄ってもこないのだ。本人達の落ち込みようを感じる。取る。

アリスは、しばらく気まずそうにぼくと距離を置いていたが、しかし時間と共に少しずつその距離が縮んでいるのを感じるので、元に戻る日もそう遠くはないだろう。このまま何もなければ、の話だが。

そして、まあ往々にして、タイミングの悪いことはそういう『ちよつと良くなった?』と思つた頃合いに訪れるもので。不幸に憑かれていくぼくとハリーは特に。

だから。

「おーいアキ！ お前に罰則のことで手紙が来てるぞ！」

と、朝、大広間に姿を見せた途端叫ばれた言葉に、アリスが小さく呻いて頭を押さえたのは、まあ当然のことであった。



「なあ、今から俺も自首していいか？」

「何バカなこと言ってるのさ、ラッキーだったと思いなよ。それじゃ、行ってくるからね」

それでもまだうだうだと言っているアリスの背中を、一発思い切り叩く。

夜十一時。冬の寒さも段々と和らいできたが、夜はまだ冷え込む。

ぶるりと身震いをして、コートの際を引き寄せると、アリスに固く結ばれたマフラーを手繰った。

こんな夜遅くから罰則って、一体何をさせられるのだろう。考えるも、途中で思考を放り投げた。どうせすぐに突きつけられることになるのだし。その代わりに幣原のことを考えながら歩いていると、いつの間にか玄関ホールに到着していた。ぼくが最後だったようで、フィルチにハリー、ハーマイオニー、ネビル、そしてドラコと勢揃い。慌ててハリーの隣に並んだ。

「着いて来い」

ぼくが来たことを確認して、フィルチはランプを手に外へと繰り出した。ぞろぞろと、フィルチの後を追う。

ハリーは黙ってぼくの手を掴むと、ぎゅつと握った。その手は存外に冷たい。

「規則を破る前に、よく考えるようになったらうねえ。どうかね？」
フィルチは厭味っぽい口調で嘲った。うーん、と首を捻る。ぼく、あんまり悪いことしたって自覚はないんだけどね。何も行動を起こさず、ハグリッドがこっそりドラゴンを飼っていたことが発覚する方が恐ろしいし。そんなぼくの内心をさて置いて、フィルチはうっとりした口調で語り続ける。

「ああ、そうだとも……私に言わせりゃ、しごいて痛い目を見せるのが一番の薬だよ——昔のような体罰が無くなって、全く残念だ。手首を括って天井から数日吊るしたもんだ。今でも私の事務所に鎖は取つてあるがね……万一必要になった時に備えて、ピカピカに磨いてあるよ——」

ネビルがヒイツと怯えた声を漏らした。フィルチはそれに、随分と満足したようだ。

その時、ぬつとハグリッドの巨体が現れた。大きな弓矢と、それにファンングを連れている。ファンングはぼくの存在にいち早く気付いたようで、既に牙を剥いて威嚇体勢だ。切ない。

「フィルチか？ 急いでくれ。俺はもう出発したい」

ハグリッドの声に胸が踊る。ハリーも嬉しさを示すように、ぼくの

手を握る手に力を込めた。しかし、そんなぼくらの表情を読んだのか、フィルチは意地悪く笑う。

「あの木偶の坊と一緒に楽しもうと思ってるんだろぅねえ？ 坊や達、もう一度よく考えた方がいいねえ……君たちがこれから行くのは、森の中だ。もし全員無傷で戻ってきたら私の見込み違いだがね」
「森だって？ そんなところに夜行けないよ……それこそいろんなのがいるんだろぅ……狼男だとか、そう聞いてるけど」

ドラコが恐怖に震える声を上げた。ネビルなど、今にも泣きそうだ。フィルチのニヤニヤ笑いが深くなる。

「そんなことは今さら言っても仕方がないねえ。狼男のことは、問題を起こす前に考えとくべきだったねえ？」

果たして本当に、森に狼男がいるものなのだろうか。満月の日以外はただの人間と変わらないんじゃないかなかったつけ？ あれ、でもそれは何かあったような……。

うーん、と考え込んでいると、ハグリッドの苛立ったような声が降って来た。

「もう時間だ。俺はもう三十分くらいも待ったぞ。ハリー、アキ、ハーマイオニー、大丈夫か？」

ぼくらが頷くと、ハグリッドはにっこり笑顔を浮かべた。それを見て、フィルチが殊更冷たく声を掛ける。

「こいつらは罰を受けに来たんだ。あんまり仲良くするわけにはいきませんよねえ、ハグリッド」

「それで遅くなつたと、そう言うのか？ 説教を垂れてたんだろぅ。え？ 説教するのはお前の役目じゃなからう。お前の役目はもう終わりだ。ここからは俺が引き受ける」

おお、ハグリッドが格好良い。でも元を辿れば、ぼくらが捕まる原因となったのはハグリッドがドラゴンの卵なんて貰ってくるからで……分かってるのかなあ？

フィルチが捨て台詞を残し、城に帰って行く。それを見て、ドラコが縋るような瞳でハグリッドを見つめた。

「僕は森には行かない」

「ホグワーツに残りたいなら行かねばならん。悪いことをしたんじやから、その償いをせにやならん」

ハグリッドが厳しい口調で諭す。ハハ、と力なく笑った。

でも、たかが夜の森に入るだけなのにそんなに怯えるなんて。しかしそう思っているのは、どうやらぼくとハリーだけのようだ。他の誰もが、不安と恐怖で青褪めている。

ぼくは努めて明るく笑うと、手近にいたドラコの背中を勢いよくぶつ叩いた。転び掛けたドラコは「なっ、何をする！」とパツと振り返る。

「何怖がつてんのさドラコ！」

「怖がつてなど！」

「じゃあその顔は何だー、ビビっちゃってー」

頬を引つ張ろうとすれば「止めろ！」とドラコはぼくから逃げた。緊張はすっかり溶けたようだ。見れば、ぼくとドラコの微笑ましい戯れにハーマイオニーはクスクスと笑っているし、ハリーとネビルはどこか驚いたようにこちらを見ていた。

「だいたいさ。ここに居る皆、ぼくの呪文学の成績知ってるよね？」

それなりの危険から皆を護るくらいは出来るつもりだよ。だから大人しく終わらせて、早く寮に帰って寝よう。ね？」

胸を張って笑い掛ける。毒気を抜かれたように、ドラコはこくりと頷いた。ハグリッドに目配せをすると、ハグリッドは『よくやった』と言わんばかりにぼくの背中を叩く。衝撃で、膝がカクンと抜けた。

「よし、それじゃ、よく聞いてくれ。なんせ、俺たちが今夜やるうとして居ることは危険なんだ（ハリーがぼくの手を握る手に力を込めた）。みんな軽はずみなことをしちやいかん。しばらくは俺に着いて来てくれ」

ハグリッドにくつついて、ぼくらはぐるりと森の外周を歩いた。やがて森の外れに辿り着くと、ハグリッドは立ち止まり、森の中へと続く小道を指差す。

「あそこを見る。地面に光った物が見えるか？ 銀色の物が見えるか？ 一角獣の血だ。何物かに酷く傷つけられたユニコーンがこの森

の中にいる。今週になって二回目だ。水曜日に最初の死骸を見つけた。皆で可哀想なやつを見つけて出すんだ。助からないなら、苦しまないようにしてやらねばならん」

「ユニコーンを襲ったやつが先に僕たちを見つけたらどうするんだい？」

ドラコはぶるりと身震いをした。

「俺やファングと一緒にあれば、この森に住むものは誰もお前達を傷つけはせん。道を外れるなよ。よし、では二組に分かれて別々の道を行こう。そこから中血だらけだ。ユニコーンは少なくとも昨日の夜からのたうち回ってるんじゃない」

ハグリッドの声は真剣だ。あの綺麗な生き物が、何物かに傷つけられて痛みで足掻いていたなんて。

——一体、誰がこんなことを？

ハグリッドはぼくらを二つのチームに分け、そして手分けして搜索を開始した。ぼくと同じチームには、ドラコとネビル、そしてファングだ。今にも泣き出しそうなネビルにマフラーの端を掴まれながら（締められないかとヒヤヒヤする）、ユニコーンの血を辿って森を歩く。ファングの手綱はドラコの手があり、ちなみにファングはずっとぼくを見て唸りっぱなしだ。全くもう。

「父上が、僕がこんなことさせられていると知ったら何て言うか……」

ドラコがぶつぶつ呟きながら、危なっかしい足取りで木の根っこを乗り越えた。もしかしたら、まともに外で遊んだこともないのかもしれない。お坊ちゃんだし。

「ネビル、大丈夫？」

「うん……平気だよ」

ネビルは青褪めてはいたが、ぼくの言葉に笑顔を返した。きっと素直で優しい子なのだろう。ネビルとは初めて話したのだけれど、仲良くなれそうで嬉しい。

「それに、僕、君のこと知ってたもん」

「え？」

「レイブンクローに、すごく魔法が得意な一年生がいるって。ハリー

が、それは僕の弟なんだよって、よく自慢してるよ。すごく可愛くて頭が良くて優しいって」

ハリー！　なんて恥ずかしいことを吹聴してくれているんだ！　ここが暗くて良かった。顔が真っ赤になっているのを見られずに済む。

「あー……えっと、その……それ、本当？」

「うん。自慢の弟だって」

「……そっか」

自慢の弟、か。

——ごめん、ハリー。

一瞬でも、ぼくはハリーの弟ではないんじゃないかと考えた、あの日の自分を恥じる。

紛れも無い、ぼくだけが、ぼくこそが。

——ハリーの、弟。

それが、何よりも嬉しいと感じる。

「アキー！」

突然、マフラーの端を引かれた。カジュアルに首を締められ、思わずもがく。

「ネビル、マフラー離してっ！」

あああごめんねっ！　とネビルがわたわたとぼくのマフラーから手を離れた。咳き込み、喉をさすりながらじと目でネビルを睨む。

「ネビル……」

「ぐぐぐごめんっ！　でもほらそこ、なんかいる……っ」

思わず息を呑んだ。慌ててネビルが指差した方向に目を凝らす。杖を抜いて眼前に構えた。

しゅるしゅると、何か布のようなものを引き摺るような音が聞こえる。遅れて目が、暗がりでも蠢く何かを見つけた。杖を向けながら、それが何かをじつと観察し——

「うわあああああああ!!!」

ネビルの絶叫が響いた。何事か振り返ろうとしたところで、『それはぼくらの存在に気が付いたように音もなく離れていく。』

「わああああああ!!!」

ネビルの絶叫は続く。『それ』を追うべきか迷ったが、しかしネビルを見捨てるわけにはいかない。

「ネビルっ!? どうした大丈夫か!？」

ネビルはパニックに陥り泣き叫んでいる。両手を広げると、ネビルをぎゅっと抱きしめた。落ち着かせるように背中を叩きながら、全身を検分する。怪我はしていないようだ、ならどうしたのだろうか？

そこで、何やら挙動不審なドラコを発見した。すぐさま勘付く。

「おーい、ドラコ」

低い声で名前を呼ぶと、ドラコはバツが悪そうな顔で肩を竦めて近寄ってきた。ちよいちよい、と手招きしてぼくの手が届く範囲にまで近付かせると、容赦なくドラコの頭を叩く。

「アリスに言い付けないだけ感謝してよね」

「悪かったってば……」

ガサガサツと木の枝が擦れる音に少し身構えたが、ハグリッドだった。ネビルが打ち上げた赤い火花に気付いたらしい。

ドラコを叱り付けてから、ハグリッドは組分けを変更した。ぼくとハリーとドラコとファング、という組になる。ようやくパニックから回復したネビルをハグリッドに預け、ぼくらはさらに森の奥へと向かった。

道は徐々に険しくなり、ついには道を辿ることも出来なくなる。飛び散っている血はだんだんと量を増していて、銀色の血を見るたびに胸騒ぎがした。

大きな樫の木が林立している奥、開けた平地に、それはあった。

純白に光り輝いているそれは、月の光を浴びて一層神々しい。こんなに美しい生き物を、初めて目にした。畏怖すら感じる神格を持つ生き物、それが無残に殺され、横たわっている。

吸い寄せられるように一步を踏み出したハリーの足が、ふと止まった。咄嗟にぼくの前に立ち塞がる。どうしたのだろうか、とハリーの肩越しを覗き——滑るような音に、思わず凍りついた。

暗がりの中から、全身をフードに包んだ何かが地面を這ってくる。

真っ黒なその影はユニコーンに近付くと、傍らに身を屈めた。跪いて頭を近付ける。その唇が血に触れたことで、頭を殴られたような気分になった。

——ユニコーンを殺した理由。

まさか、血を飲むためだったのか!?

そんな魔法生物はこの森にはいない。とすれば他所から紛れ込んできたのだ、この結界に縛られたホグワーツの中に、邪悪な存在が。一体、どうして、どうやって。

ユニコーンを殺し、清廉な呪いを受けても構わないと思うような、そんな奴は一体誰だ。

こんなの、ぼくらじゃ太刀打ち出来ない。

「ぎゃああああアアア！」

ドラコが絶叫して踵を返した。その後をフアングが追う。

フードに包まれた影が頭を上げ、ハリーを真正面から見つめた。その影は立ち上がると、ハリーに向かってすると近付いてくる——慌ててハリーの前に出た。影に杖を向け、叫ぶ。

「Stupefy！」

赤い光線が、一直線に影へと飛んで行く。しかし影が軽く腕を払っただけで、魔法は打ち消されてしまった。そのことに思わず息を呑む。

背筋に寒気が走った。

影はぼくらに背を向けると、するすると木立の向こうに消えて行く。ゆらゆらと闇に紛れ、やがて完全に見失ってしまった。

「ま……待てっ！」

叫ぶが、もう遅い。

呆然と木立の奥を見据えて立ち竦んだぼくの手を、誰かが引いた。ハリーだった。ぼくの手も冷え切っていたが、ハリーも負けず劣らず冷たかった。

「い……今の」

「……………」

ハリーに、上手く言葉を返せない。

713番金庫からハグリッドが持ち出したもの。ニコラス・フレーム。賢者の石。三頭犬。ハロウインの時に見た光景。

そもそもどうして、ダンブルドアは学校に賢者の石を持ち込んだんだ。グリーンゴッツに置いておいたら盗まれてしまう、それを危惧したからだ、一体誰に？ 一体誰に？ 一体誰に？

賢者の石。生命増幅機。命の水。

ユニコーンの血を飲み呪われてまで、生き永らえたいと願う、その人物は一体誰？

この学校に、一体何が迫っているというんだ!?

第24話 約束

「あ」

寢室の扉の前で、同寮で同室であるリイフ・フェイスナーとぼったり鉢合わせをしたぼくは、思わず声を漏らした。しばし、顔を見合わせ立ち尽くす。

先に身を引いたのは、リイフ・フェイスナーの方だった。「どうぞ」と微笑んで道を開けてくれる。思わず恐縮しそうになったが、堪えた。

「……ありがとう。それと、いろんなことも」

そのまま一歩二歩と進む、そんなぼくの背後から声が投げかけられた。

「君が、誰に何をされても決して声を上げなかったのは、君が臆病だったからじゃない。そのことに、今更気付いたよ」

足を止めた。振り返りリイフを見る。彼は、口元を吊らせ笑っていた。

「プライドが高いんだ。『虐められている』ということが、被害者のように他人から見られるということが、誰にどんな嫌がらせをされるよりも君は耐えられなかったと……そういうことだろうか？」

「……何を言っているのか、ぼくには分からないよ」

こちららも、笑って返事をする。

「ぼくはただ、君に『ありがとう』と言ったんだ。……君でしょう？ ぼくにちよっかい出すなって、皆に言ってくれたのは」

そう言つて、前を向く。

背筋を伸ばして、ぼくは歩いた。



今までの経験上、多少のことでは動じない自信があるぼくでも、何者が校内にいると知ってなお、目の試験に集中出来るほどず太くはない。それでもなんとか解答用紙を埋めることが出来たのは、ひとえに『夢』で幣原秋の人生を追体験していたからだ。あいつが真面目な

努力家で良かった。

教師らに相談しに行くことも考えたが、鉄壁の魔法防御を誇るというこの学校で、そんな奴が入り込んでいる、だなんて、子供の戯言としてしか処理されないう。なにせ、ぼくだって未だに信じられないのだ。しかも、ぼくが『怪しいな』と思っている人は、教師の中にいるのだから――

「……と、そうそう」

なんだかんだで全ての試験から解放され、生徒たちは束の間の自由を謳歌しているようだ。今日が珍しくも青空が見えるからか、こうして廊下を歩いていても誰ともすれ違わない。ぼくのクラスメイトだって、皆外へと繰り出してしまった。

「ぼくだって、遊びたいのは山々なんだけどねえ……」

ひとり呟き、肩を竦める。目的の場所――禁じられた廊下へ繋がる扉の前で、足を止めた。

森での罰則の後から、ぼくは毎日禁じられた廊下を確かめるようにしていた。と言っても、何か特別な魔法を掛けている訳ではない。扉と壁の境目に、セロハンテープを貼り付けたら、小さな紙を挟み込んだり。侵入を阻む類のものではなく、侵入を感知するためだけの代物だ。

なにせ、相手は『闇の魔術に対する防衛術』教師。生半可な術では、きっと逆に探知されてしまうだろう。それならばいつそのこと、割り切って『魔法を使わない』という選択肢を選んでみた。

「……ん。大丈夫、かな」

セロハンテープは剥がれた形跡もなく、そこにあつた。紙も同じく。

肩の荷が下りた気分になって、ぐっと背伸びをした。ついでに欠伸を一つ零す。

さて、暗い気分には浸るのは終わりだ。試験終わりまでパアツと遊びたいのはぼくだって一緒。今日は久しぶりに、アリスとチェスでもしようかな。いや、アリスは嫌がるかもしれない。あいつは屋内で引きこもっているよりも、外に出る方が好きな奴だから。さつきも木陰で昼

寝していたし。それなら、箒でも借りてミニゲームとでも洒落込もうか。うんうん、と頷いて廊下を歩いていると、不審な人物を見かけた。「……スネイプ教授、何をしているんですか？」

少し躊躇った挙句、扉に耳を押し当てていたスネイプ教授に声を掛ける。教授はぼくの言葉にぎくりと飛び退くと「なんでもない」と言い捨て、足早に立ち去って行った。思わず首を傾げる。

「どうしたんだらう……」

首を捻った。もしかして、部屋で何か気を惹かれるようなことが起こっているのだろうか。好奇心に駆られ、鍵穴に耳を当てる。何だか最近、よく盗み聞きをしている気がするな。気のせいだと思いたい。

「――」

声の主は二人、男女の声だ。会話をしているようだが、内容までは聞き取れない。

ローブから試験問題を引っ張り出すと、くるりと丸めて扉に当たった。筒の中に響かせ呪文を掛けると、それだけで部屋の中で聞いているかのようにはつきりと聞き取ることが出来る。盗聴防止の類の呪文は掛けられていないようだ。

『とうとう今日だ。あの方もお喜びになるだろう……もう一度我等の時代が来る。それにお前の両親には世話になった。お前からも礼を言っておいてくれ』

『……嫌よ。あなたから言えばいいじゃない。……クイリナス』

冷たい声。もう間違えない、アクアマリン・ベルフェゴールの声だ。クイリナスって誰だっけ？ と一瞬考え、はっと思ひ出す。クイレル教授のファーストネームか。

『私の意思とは、すなわちあのお方の意思だぞ、アクアマリン。お前に拒否権なんてある訳がないだろう』

『……よく分からないわ。何で、そんな……』

彼女はそっと呟いた。

『人に寄生することが出来るだなんて』

『ああ、あのお方も惨めだと考えていらっしやる。だからこそ、早急に

も賢者の石が必要なのだ』

寄生？ 一体、どういう意味だろう。首を捻りかけ——クイレル教授の次の言葉に、息を呑んだ。

『ハリー・ポッターを殺す。ご主人様の悲願が、ようやく叶いなさるのだ……』

なんでもないことのようにクイレル教授は——敬称なんてもうつけるもんか、クイレルは——言い放った。耳をぐっと押しつける。息を殺して、クイレルの言葉を待った。

『……何で、そんなことを』

『それはあのお方しか分からない。ああ——それと、もう一人。ご主人様は、幣原秋似のポッターの弟も始末したいと感じていらつしやる。それには私も同意見だ……外見ばかりか、能力までもそっくりな幣原のコピー、ご主人様が脅威に思われるのも当然のことよ……』

『……幣原秋については、私もあなたから聞いて少しは知ってるけれど。……あのポッターの弟、そんなに聡いかしら？ ……私も注意して見ていたけれど、ただのお調子者のよう……取るに足るほどの存在ではないと思うわ』

彼女の率直な意見が耳に痛い。そっかあ、ぼく、そういう風に思われてたのかあ……ちよつと涙目。

『確かに性格面では、そうだ。だが、技能面では？ ……少なくとも私には、彼が安全な存在だとは思えない。早急に消し去るべきだろう。……幣原のように、完全に敵に回ってしまったからでは遅い』

『……なら、彼、勘付いているんじゃない？』

『何にだ？』

小さな笑い声をした。彼女のものだ。

『……永遠に続く命なんて、そんなもの、本当に欲しい？ ……ドラコが言ってたわ。禁じられた森で、ユニコーンの血を飲む化け物がいたってね。……あなたたちでしょう？ ユニコーンの血は、たとえ死の淵にいようと命を永らえさせてくれる。呪われた命と引き換えに。……賢者の石を手に入れるまでの短い命を求めて。……ドラコから話を聞いただけの私でも、ざつとこのくらいは分かる。……な

ら、アキ・ポッターがあなたの言う通り、幣原と同じくらい聡い奴だったら？ ……闇の帝王がホグワーツにいたことくらい、勘付くのが普通じゃないかしら。 ……今、一番偉い生にしがみついている存在とは何か。ホグワーツに迫っている危険とは何か。ホグワーツに何が隠されているのか。 ……もしかして、今にも闇の帝王の計画を砕こうとしているかもしれないわよ？』

彼女は、楽しそうに告げた。クイレルは数秒沈黙した後、低い声を出す。

『アクアマリン、少しは言葉に注意した方がいい。まるで、闇の帝王が挫かれるのが楽しみのようなのだ』

『……………そう聞こえたのなら、謝るわ』

『それでいい。 ……しかし、幣原秋に酷似していると言っても、所詮は十一歳、出来ることなど高が知れている ……勘付いたって何が出来る？ 十一の小僧がホグワーツ教師に、ましてや闇の帝王に！ 指をくわえて見ているしかあるまいよ…………』

彼女は黙り込んだ。それもそうか、と納得したのかもしれない。

『アクアマリン、私達が石を手にしたら、お前の家を我々の隠れ家として提供するのだ。お前の両親は闇の帝王の一番の忠実な僕、何処よりも安全だのご主人様は考えていらっしやる……………ふくろう便を送るのだ。 いいな？』

『……………』

彼女の返事は、聞こえなかった。

程なくして靴音が近付いてくるのに、慌てて近くの観葉植物の影に隠れる。すぐさまカチャリと扉が開き、今まで決して見たことのない満足げな表情を浮かべたクイレルが姿を見せた。迷いなく歩き去るその後ろ姿をじっと見つめ、詰めていた息を吐き出す。

『……………ああ』

ぼくらの命が狙われていると知った今。

「ハリーを、守らなきゃ」

自分の命よりも大切な人が危険だと知った今。

この手に、『国が一つ滅ぶ』とまで言わしめる力を持つ今。

何を迷う必要がある？

「終わらせてくるよ、ハリー。君に、指一本たりとも触れさせたりなんてしないから」

待っててね。

そう呟いて、物陰から立ち上がった瞬間――

目の前に、杖が突き出された。

「……動かないで」

「……やあ、ベルフエゴール」

ぼくは彼女の目を見つめ、笑った。彼女はちつとも表情を変えることなく口を開く。

「……ここにいてるってことは、私達の話、聞いてたのね」

「まあね」

なかなか勘が鋭い子のようだ。

「で、君は何を望んでいるのかな？　ぼくとハリーに、死んで欲しい？」

「……死ぬ気なんて、これっぽっちもない癖に」

「大正解」

目を細めて、彼女を見つめた。彼女は小さく息を吐く。

「……そうね。出来るなら、死んで欲しくはないかもしれないわ。人が死ぬのは、あまり見たくないもの」

「じゃあ、この杖を下ろしてくれない？」

「駄目。……だって、下ろしたら、あなたは四階の廊下に行くでしょう？　それは、死に行くのと同義」

「……間違っではないけど惜しいね」

彼女は眉を顰めた。ぼくはにっこり笑って、ローブの中の杖を軽く掴む。

「Expelliarmus」

彼女の手から杖が吹き飛び、カンカンキャラリと廊下に転がった。彼女はちらりと振り返り杖を見たが、そのままぼくに向き直る。

「君に死んで欲しくないって思ってもらえるのは光栄の至りだけど、生憎とぼやぼやしてたらどっちにしろ死んじゃうらしいんでね。せ

めて、生き汚く足掻かせてもらおうよ」

「……死なない自信があるとでも？ ……あなたも知ってる通り、相手はいみじくも現役ホグワーツ教師と、力は殆ど失われたけれども、闇の帝王。ただの一生徒が、敵う相手じゃない」

「ぼくのこと、心配してくれてるの？それは嬉しいや」

「……茶化さないで」

彼女が眉を吊り上げた。そんな彼女の目の前に、びしつと人差し指を突き出す。一瞬たじろいだように、彼女が肩を震わせた。

ぼくは笑って――

『呪文学の天才児』を、舐めないでよね」

幣原秋の異名を呟いて、指を鳴らす。

瞬間、色鮮やかな火花が弾けた。至近距離での火花に、彼女は反射的に顔を背ける。

「……なーんてね。ぼくが、君を傷つけるワケないじゃない」

だってぼく、結構君のこと好きだし。

本心を茶化して仄めかせば、案の定彼女はぎゅつと苛立ったように眉を寄せた。からかわれたと感じたようだ。

……そんなつもりは、ないんだけどね。

「……この火花は、魔力？」

「なんなら、そこから打ち上げ花火の真似事でもしてみせようか？」

「結構よ。……ねえ」

彼女は、静かにぼくを見上げた。灰色の双眼に、意志の強さを感じさせる光が灯っている。それを見て思わずどきりとした。

「……あなた、幣原秋って知ってる？」

ぼくは、笑って言った。

「ちよつとだけね」

「……じゃあ」

彼女は、無表情に問う。

「……彼なら、この状況で、どう動くかしら」

「行くに決まってるじゃないか、禁じられた廊下に」

答えが自然に滑り出た。考えるそぶりも見せず即答したことで、妙

な疑心を生み出してしまったのではと焦るが、しかし彼女は違和感を抱いた様子もなく、頤に指を当て視線を宙にさ迷わせている。

「……そうよね。彼なら……きつと、そう言うのかもね」

彼女は、そう呟くと頭を振った。はらはらと優雅に長い銀髪が揺れる。一体どういう頭の振り方をすればそうなるのか、ぼくにはさっぱり分からなかった。

そして、彼女はぼくを見つめて——小さく首を傾げ、微笑んだ。

「……ポッター」

微笑みに、彼女の意志を織り交せて。

切実さを滲ませて。

彼女は、深々と頭を下げる。

「お願い。……闇の帝王とクイリナスを、止めて」

最後の声は、微かに震えていた。

ぼくは手を伸ばして、彼女の頭をそつと撫でる。

「分かった。行ってくる」

ぱつと彼女は顔を上げた。ぼくはにっこり笑って、彼女に背を向ける。とそこで、彼女がぼくの袖を掴んで引き留めた。

「……あと、もう一つ」

「……何？」

「振り返らないで」と彼女に制され、仕方なしに背中で彼女の言葉を待つ。

背中に、小さな感触があった。多分、彼女の手だ。心臓がぼくぼくしてるの、気付かれないか心配だ。

彼女は小さく、囁いた。

「……死なないで」

「……御心のままに、お嬢様」

手のひらの感触が消えた。そのままぼくは歩き出す。角を曲がる時に振り返れば、そこには既に、彼女の姿はなかった。

「……全くさあ」

好きな子に頼られるって、凄まじい威力あるよね。

小さく笑って、ぼくはローブの中の杖を握り締めた。



ゆつくりと息を吐いて心を落ち着けると、ぼくは静かに禁じられた扉を押し開けた。低い軋みを上げて扉が開く。ふと、耳にハーブの音色が聞こえて来た。同時に獣の寝息も。

薄暗い室内を見渡すと、魔法を掛けられ自動で演奏をしているハーブが片隅に置かれていた。音楽を聴かせたら、三頭犬——フラツファイは眠くなるのか。

仕掛け扉を開けると、少し離れた先で扉が開く音が聞こえた。ハッと息を呑み、気配を殺す。先達者だ——クイレルに違いない。

扉が閉まる音がして、それから充分時間が経ってから、仕掛け扉を飛び降りた。着地をし、周囲を見渡す。

小さな羽虫か、さもなきや鳥か。羽根の付いた鍵だと認識するのに、少し時間が掛かった。小さく薄暗い部屋に、縦横無尽に飛び回る小さな鍵。きつとこの中の一つが、先に進むための鍵なのか。

しかし、これを探し出すには骨が折れる。御誂え向きに、隅には箒が立て掛けてあったけれど、最年少シーカーに選ばれたハリーならばともかく、ちよつと身軽なだけの運動神経人並み（もしかすると以下かもしれない）のインドア少年であるべくにとつては随分と強敵だ。

「……え？」

キィイ、と音を立て、奥へと続く扉が開いた。思わず立ち竦む。風で開いた？ そんなことが？

しかし悩んでいる暇はない。手間が省けたと喜ぶべきだ。閉じてしまわぬよう扉に指を掛けると、先を覗く。

大きなチェス盤だ。駒が、人の大きさほどのサイズになっている。駒に囲まれたチェス盤の上で、一人の人間が立っていた。クイレルだ。

「チェックメイト」

その嘎れた声は、クイレルの声ではないにも関わらず、クイレルの立つ辺りから聞こえた。辺りを見回すも、他には誰も見当たらない。

白のキングが、自身の王冠を脱ぐとクイレルの足元に放る。それを一瞥すらせずに、クイレルはチェス盤を降りると先へと進んだ。奥の扉が閉まる音を聞き届けた後、部屋の中に足を踏み入れる。

「……一体、何分で……」

ぼくが羽根の付いた鍵の部屋に足を踏み入れたとき、クイレルがチェスを始めたのだとしても、時間にしたら十分もなかったはずだ。しかも、これは賢者の石を狙う侵入者に対する時間稼ぎのためのチェス。相当の難易度を誇るはずだ。

闇の帝王——ヴォルデモートの仕業なのか？ でも、あの場にはクイレルしかいなかった。授業風景を見る限り、失礼ながら、クイレルがそこまで頭が切れる人物とは思えないのだが——

「……………」

纏まらぬ考えに囚われ、時間を無駄にしてしまうことこそ愚の骨頂だ。ひとまず今は、クイレルの後を追うことが最重要。

奥の扉から、ドオン………という重たい何かが倒れる音がした。閉じた扉を僅かに開け、中を確かめる。

目よりも先に鼻が反応した。この匂いは——トロールだ。頭から血を流して気絶している。コツコツと足音の後、ドアノブが回る音が聞こえた。足音は、扉の奥に吞まれ遠ざかって行く。しばらく扉に耳を当て、様子を伺った。

話し声が聞こえる。二人の男の声だ。一人はクイレルの、そしてもう一人の声は、先ほど——「チェックメイト」と呟いた声と同じ、年老いたような嗄れた声だ。

『この、一番小さな瓶だ——これが、黒い炎を抜け、先に進ませてくれる。もつとも、これに書かれた文章に違いがなければな』

『わ、分かりました、ご主人様……』

やがて、靴音が遠ざかって行く。声は二種類聞こえるのに、靴音は一人分。

「……………」

声が聞こえなくなったのを確認して、そつと扉を開けた。机の上に、瓶と巻紙が置いてある。なるほど、これのことを指して言ってい

たのか。

扉を閉めた途端、扉が燃え上がった。目の前の扉と背後の扉、共に炎が上がる。自然に発火したのではない、これは魔法だ。木の扉は炎に包まれているけれど、焼け落ち炭になる気配は感じられない。しかし近付いただけでも熱気は感じられて、ここを生身で通り抜けるのは厳しいだろう。

となると、と巻紙を手を取った。目を通す。

前には危険 後ろは安全

君が見つけさえすれば 二つが君を救うだろう

七つのうちの一つだけ 君を前進させるだろう

別の一つで退却の 道が開ける その人に

二つの瓶は イラクサ酒

残る三つは殺人者 列にまぎれて隠れてる

長々居たくないならば どれかを選んでみるがいい

君が選ぶのに役に立つ 四つのヒントを差し上げよう

まず第一のヒントだが どんなにずるく隠れても

イラクサ酒の左は いつも毒入り瓶がある

第二のヒントは両端の 二つの瓶は種類が違う

君が前進したいなら 二つのどちらも友ではない

第三のヒントは見たとおり 七つの瓶は大きさが違う

小人も巨人もどちらにも 死の毒薬は入ってない

第四のヒントは双子の薬 ちよつと見た目は違っても

左端から二番目と 右の端から二番目の

瓶の中身は同じ味

ああ、と、読み終えて分かった。論理パズルだ。懐かしいな、小さい時に嵌まったことがある。

「あの声は確か、一番小さな小瓶が先に進む薬だって言ってたな……」

しかし念のため、自分自身でも論理パズルを解いてみた。何度か確認をして、間違っていないことを確かめる。少し躊躇したが、息を止

めると一口飲んだ。冷たい氷が身体をすり抜けて行くような感覚に、思わず身震いをする。

「……さて、行きますか」

口元を拭うと、両手を黒い炎に突っ込んだ。先ほどまで室内を覆っていた熱気は感じられず、炎は肌を焼くことなく、微かに感触を感じられるだけだ。

設置されている罫は、確か次で最後。恐らくはダンブルドアの仕掛けたものだろう。クイレルの協力者がヴォルデモートであろうと、ダンブルドアの知恵に敵うとは思えない。きつとこの先で立ち往生しているはずだ。

つまり、ヴォルデモートがこの先にいるということ。

左手で杖を掲げたまま、扉を僅かに押し開けた。瞬間、ぼくよりも数倍強い力で外側から引かれ、バランスを崩す。

脳味噌を揺さぶられる感覚に、堪らず膝から崩れ落ちた。顔面を冷たい床で打ち付けるも、痛みは感じ取れず、ただただ冷たかった。

「意外と遅かったな」

頭上から嘲るような声が降ってきた。ああ、とそこでやっと自分の愚かさを認識する。ぼくはただ、泳がされていただけなのだ。正義感ぶった、馬鹿で愚かな子供に過ぎなかった。

視界が、徐々に黒に塗り潰される。

——ああ、これぼく、死ぬかなあ。

薄れる意識で、考えた。

——ぼくが死んだら、ハリーは悲しむよね。

——アリスは……どうだろ、怒るかな。

そして。

最後に思うこと。

——ごめんね。最初で最後の約束、守れなくて。

短い一瞬でこれだけのことを脳裏に思い浮かべた後、ぼくは意識を手放した。

第25話 誰が為に君はいる

「今夜だ」

ハリーは、声を潜めてロンとハーマイオニーに告げた。

「スネイプが仕掛け扉を破るなら今夜だ。必要なことは全部わかったし、ダンブルドアも追い払ったし。スネイプが手紙を送ったんだ。ダンブルドア先生が顔を出したら、きっと魔法省じゃキョトンとするに違いない」

「でも私たちに何ができるって……」

ハーマイオニーが眉を寄せる。ハリーを気遣うように首を傾げ、躊躇いがちに聞いた。

「……ハリー、アキに協力を頼むことは出来ないの？ アキは私たちよりも相当知識もあるし魔力もあるわ、一緒に行けば……」

「駄目だ」

ハリーはにべもなく即答する。

「アキを巻き込みたくない。あいつを、危険な目に合わせたくないんだ」

「……そう言うと思ったわ」

ハーマイオニーは嘆息した。ロンがおずおずと口を開く。

「でも、この前、その……アキとアリスに、洗いざらいしゃべっちゃったけど、大丈夫？」

「……でも二人は、スネイプが石を狙っていることは知らないよ。……きつと、大丈夫だ」

最後は自身に言い聞かせるように、ハリーは呟いた。拳をぎゅつと握り締める。

出来るだろうか、僕に、ヴォルデモートの企みを挫くことなんて。やっぱりアキも一緒に——そう思いかけた自身の弱い心を、ハリーは慌てて押し止めた。

兄として、弟を危険に連れ込む訳にはいかない。

だって僕は、アキのお兄ちゃんだから。

アキを守る。絶対に。自身の命に換えても。

静かに決意したハリーの肩越しを、ロンが顔に僅かに怯えの色を浮かべて見つめた。え、とハリーは振り返り――

「なあ、アキって何処にいるか、知らねえ?」

アリス・フェイスナーが、目を細めて仏頂面で立っていた。人相の悪さに、三人揃って硬直する。真つ先に金縛りから抜け出したのは、ハリーだった。

「み、見てないけど」

「あー、そうか……参ったな……」

小さく舌打ちをし、アリスは乱暴に髪を搔いた。弾みで、雪印ピアスが揺れる。

「アキがどうかしたの? 何か急用?」

「いや、用という程の用じゃねえんだけど。ちよつと胸騒ぎつつーか、妙な予感がしてな。何かやらかしてんじやねえのかつて。最近何か考え込んでる様子だったし」

「考え込んでる? 一体何を?」

「それが分かりや苦労してねえよ。言いたくねえのならなつて放つておいたけど、これなら無理矢理聞き出しておけば良かった」

「ら、乱暴なことはしないでね……」

彼に殴られたら、華奢なアキなどひとたまりもないのではないだろうか。いや、アキは結構豪胆なところがあるから、一度口を嚙むと決めたことはどんな手段でも喋らない奴だし……と考えたところで、背後から妙に愛想の良い声が聞こえた。

「やあ、こんにちは」

慌てて振り返る。スネイプが、薄つすらと笑顔を浮かべて立っていた。思わず一步後ずさる。初夏の日差しとスネイプ、こんな合わない組み合わせは、きつとどこを探してもないにちがいない。

「諸君、こんな日には室内にいるもんじやない。もつと慎重に願いたいものですな。こんなふうにはウロウロしていると人を見たら……」

「先生。アキ、見てませんか?」

アリスがスネイプの言葉を遮ったのに、ハリーは驚いた。自分より

も高い場所にあるアリスの顔を見つめる。まさか、よりもよってスネイクに尋ねるなんて。スネイクも虚を突かれたように目を見開いてアリスを見ていたが、やがて口を開いた。

「……アキ、というのには、ポッターの……」

「ああ、そうつす。ハリー・ポッターの弟の。あいつ、ちよつと今見当たらなくなつちやつて。先生なら知ってるかな、つて」

「……いや、知らないな。……そもそも、我輩とアキ・ポッターに接点など、」

「ないつて言うんすか？ 最初の授業であんな啖呵切つた奴と、それにつに最初に罰則申しつけた奴——失礼、先生との間で？ それ以来お互いガン無視つて、何かあつたなつて勘繰るのが普通でしょう」

「……貴様には何の関係もないことだ、フィスナー。……そもそも、アキ・ポッターは我輩のことを嫌っているだろう」

アリスがスネイクの気を惹いている今のうちにと、ハリー達三人はそつとその場を離れた。

「いや、最初はそうだったんですがね。今は違ふみたいつすよ」

アリスの声が遠くで聞こえた。ハリー達は先を急ぐ。

「この前なんて、明け方に俺叩き起こすなり『セブルスだよ！ スネイク教授が幣原秋を救ってくれたんだ！』なんて言つて……」

「……え？ 幣原のことつすか？ 知つてますよ、アキの夢の話でしょう？」

「あいつ、朝はいつつも不機嫌なんですけどね……。まるで」

「悪い夢でも見てるように」



目が覚めたのは、何処かの一室だった。全体的に薄暗く、目が闇に慣れていなくなつたら殆ど何も見えなかつただろう。

「いつ……」

身体を振ると、手首に鋭い痛みが走つた。どうやら、後ろ手に縛ら

れているようだ。筋を違えたような手首の痛みにつられたか、思い出したように後頭部に鈍痛がやって来た。

じんじんと熱を持つ頭の痛みを堪えながらも、ここに至るまでの経緯を思い出し、とりあえず（縛られているという絶対絶命な状況ながらも）まだ命があることに安堵する。

「……ここで死んだら、ハリーに相当怨まれるしな……」

呟いて、ひとまず頭が通常通りの働きをしているであろうことを確認し（意識失う程強く殴られたし。これ以上阿呆になったらどうしてくれる）、現在の状況を把握。

身体は、手首を縛られている以外は大丈夫なようだ。何やら椅子っぽいものに括り付けられている。しかし、手を縛られている以外は至って通常通り。足は動くし目隠しもされてないし猿轡も嵌められていない。

ふと嫌な予感がした。慌てて確認すれば、やはりというべきか何と云うか、いつもローブに入れている筈の硬い杖の感触が感じられない。取り上げられたのか、抜目ないな。ぼくから魔力を取ったらただのクソガキしか残らないというのに。ぼくのアイデンティティーを取り上げやがって。

……なーんて、呑気なこと考えているけど、状況は随分切羽詰まっている。今までのおちやらは全て現実逃避に近い。

そもそも——今、この状態になってみて分かる。先ほどのクイレルは、わざとぼくに後を追わせたのだ。

「初めの部屋の扉が一人でに開いたときに、気付いておくべきだったなあ……」

しかし、今更悔やんでも後の祭りだ。

「どーしたもんかねえ……」

生きてここを出られるパターンが見当たらないのだが。死亡フラグが直視するのも嫌なくらいに乱立している。

ええいまだまだティーンエイジャー、彼女もいないのに死ぬるか！

まだ告白もしてないのに死ぬるか!! と、可能性を暗中模索し——

「目が覚めたか、ポッター」

「……………」

クイレルが靴音を響かせながら部屋に入ってきた。鋭い瞳に負けないようにぎつと睨みつけ——クイレルの手にぼくの杖が握られていることに気付く。

「さて、お前にはいくつか質問に答えてもらわねばならない。全て正直に答えろ、お前の命は風前の灯であることを忘れるな」

「…………どうせ正直に答えても、全て聞き出した後に殺すつもりでしょう？　なら、素直に答える訳ないじゃないですか」

「幣原秋とお前の関係について、洗いざらい話せ」

ぼくの言葉を見無視し、クイレルは冷たい声を発した。思わず息を呑む。

「顔色が変わったな。何を知っている？」

ぼくの表情を敏感に読み取ったか、クイレルが眉を上げた。ぼくは黙り込むことで、完全抵抗の意を示す。

「…………ふ、だんまりか。お前、幣原の子供か？　あいつは結婚してなかったが…………まあいい、忘れ形見ということか。ポッターの家に転がり込んだのも、全部幣原の策略だろう？　幣原は…………」

「っ、ちよっつ、ちよっつと待って!?!」

クイレルの言葉を遮るように慌てて声を上げた。クイレルはその反応を待っていたかのように、薄く笑ってぼくを見つめる。

「何だ」

思わず歯噛みする。今のはぼくから情報を引き出すための布石だった、そう気付きながらもその布石に乗らざるを得ない自分が悔しくてならない。

「…………ぼくは、ハリーの双子の弟、ですよ。いくら似てなくても、ぼくとハリーはちゃんと血が繋がっていて、同じ両親から生まれた存在で、だからっ…………」

「じゃあ何故、幣原秋を知っている？」

鋭い声に、思わず詰まった。

何故か？　それは夢で、なんて、余りにもお粗末な答えじゃないか？

「お前が幣原秋を知っているのは『有り得ない』ことだ。幣原はもういない、あいつのことを語りたがる奴もいない。なのにお前と幣原は似過ぎていて、他人の空似だとしても有り得ないレベルにな！ お前も考えたことはないか？ どうして自身の国籍は英国なのに顔立ちは東洋系——日本人なのかと！ それにその髪型、幣原と同じ結び方！ 幣原と同じ、呪文学に飛び抜けた才能!!」

「……だからって、ぼくが幣原秋の子供であるという馬鹿げた空想に根拠はない！ ぼくがハリーの双子の兄弟であるという事実は揺らがない!!」

『根拠ならある。貴様がハリー・ポッターの弟ではないという、な』

突然、ぼくのものでもクイレルのものでもない声が響いた。クイレルを追っていた時に聞こえていた、あの声だ。ぼくは思わず肩を震わせ、辺りを見渡す。

「ご主人様！ あなたはまだ弱っていらつしやいます、こんなところで力を使うのは……」

『クイレル、俺様はこいつと、アキ・ポッターと話をしたいがために、彼奴を生かしたのだ。今がその時だ……』

クイレルは眉を寄せて俯くと、小さく「分かりました」と呟いた。そして——しゆるしゆると音を立て、ターバンを解いていく。解いた布を床に落とすと、くるりとぼくに背を向けた。

クイレルの後頭部にはもう一つ、人の顔が存在していた。ヴォルデモートだ、と直感し、彼女がこの姿を『寄生』と表現したことに納得する。朱い目に鼻、口を持ったその顔は、ぼくを認めるとにやりと笑った。

『成る程、クイレルが言うのも頷ける……幣原秋に瓜二つの顔だ。クイレル、もつとアキ・ポッターに近付け』

言われた通りにクイレルが——ヴォルデモートが近付いてくる。手を伸ばせば届きそうな距離で、ヴォルデモートはぼくを見下ろした。顔を背けたくなる欲求を堪えながらも、しっかと睨む。

『その目つき……思い出すねえ。勇敢な奴だった、幣原秋は。認めようじゃないか、そう、幣原秋は、ダンブルドアの次に俺様が恐れた人

間だった……よりによつて闇祓いになるとはな。幣原秋のせい、何人も部下が捕らえられ、殺されたたことか……。さて、貴様は奴とほぼ同じレベルの能力を有していると聞く。奴の二の舞にならぬよう、先に勧誘しておこう』

ヴォルデモートは、その顔に笑みを湛え、ぼくを見つめた。そして、言う。

『闇側につけ、アキ・ポッター。貴様と俺様が組めば、世界を征服するのだから容易いことよ。我等で、魔法使いにとつての理想の世界を築き上げようではないか』

「……馬鹿言わないでよ、ふざけてんの?」

ぼくは吐き捨てるように言い放った。

「ぼくが、ジェームズ・ポッターとリリー・ポッターを殺しハリーを殺しかけた奴に下る? 馬鹿げてる! 『例のあの人』なんて恐れられていい気になってんの? 自分に逆らう人を殺して誰もいなくなつた世界で神様気取つてそんなに楽しい!」

「……そこまで啖呵を切つたのなら、殺される心の準備が出来ているということだな?」

クイレルが憎々しげに呟く。無視して、ぼくはヴォルデモートを睨みつけた。

「純血史上主義? そんなもの馬鹿馬鹿しい!! マグル生まれの者を見下してマグルを人以下の者だと嘲笑い、自身に逆らう者は力でもつて屈服させる、そんな門下に誰が望んで入るもんか! そもそもそんなあつ……」

大きく息を吸い込んだ。

「罪のない人々の命を犠牲にしての理想の世界なんて、ぼくは欲しくないっ!!」

それは、完全なる、ぼくの。

拒絶の言葉だった。

あ、やべ、と、言ってしまったから後悔する。これは死ぬなぼく、殺

されるなほく。なんでこうぼくは短気なんだろうな、なんでみすみす命を投げ出すような真似しちゃうんだろうな！ ごめんハリー、不甲斐ない弟はここで死にます！ かっこよく啖呵切った挙げ句失言して殺されます！

思わずぎゅつと目を瞑った。

『……………く』

く？ Crucioだろうか。恐怖に身を強張らせ——

『くくく……………くははははははははは!! ははははははははは!!!!』

聞こえたのは、哄笑だった。驚いて目を開ける。

蛇のような細い朱い瞳を見開いて、ヴォルデモートは笑っていた。その瞳に映る感情に、ぞくりと皮膚が粟立つ。

ヴォルデモートがぼくを見る目は、先程までとはまるつきり違っていた。

例えるならば——そう。

まるで、サンタクロースが待ち侘びていたものを持ってきたような喜びと驚き。

まるで、長年焦がれた人に出会ったような興奮と執着。

まるで、お気に入りのおもちやを叩き壊すかのような憐憫と愛惜。

この目を、この感情を、ぼくは最近見たことがある。

スネイプ教授が——幣原秋に向けた瞳と。

まるつきり——同じもの。

『貴様が——貴様が!! 考えたな幣原秋!! 面白い、そう打ってきた

か! くはははは!!』

『……………主人様?』

クイレルが怯えたように怖ず怖ずと尋ねるが、ヴォルデモートは答えない。代わりに、燃えるような感情をその瞳に存分に滾らせぼくを見据えた。

『貴様と杖を交えることを楽しみにしているぞ! 俺様がもう一度自身の身体を取り戻し、貴様がその能力を万全に奮える日を!! 全力の貴様と直接対決し、完膚なきままに叩きのめし、地に膝を尽かせその瞳に涙を浮かばせてやろう!!』

「なっ……」

気付いた。

ヴォルデモートは確かにぼくを見てはいるが、アキ・ポッターを見ている訳ではないことに。

恐らく、これらの言葉を送られた相手は、ぼくではなく。

『なあ？ 幣原秋、貴様に言いたいことが一つある』

——幣原秋に向けての、言葉。

ヴォルデモートは、嘲るような笑みを浮かべた。そして、あくまでも冷淡に言葉を紡ぐ。

『幣原秋。貴様がいなければ』

聞いてはいけないと、直感が危険信号を光らせる。

しかし手が使えない状態で、それを聞かないでいることなど、出来そうにはなかった。

『貴様がその身に強大な魔力を有していなかったら』

その声は、甘美な毒のようにするりと心の中へと染み渡る。

『貴様さえ、いなければ』

静かな声。聞いてはいけないと脳が判断を下す。

その声に、先程までは感じ取れなかった悔恨の念が読み取れる。

はたして——彼は、言った。

『俺様は、貴様の両親を殺すことはなかったのに』

『幣原秋。貴様のせいで、貴様の両親は死んだのだ』

声に微かな皮肉を交えながら。

ヴォルデモートは囁いた。

「……どうして、ぼくにそんなこと、言うんですか」

ぼくは呟いた。

声が震えないように腹に力を込めて。

動揺を悟られないように虚勢を張って。

動揺。

ぼくの中の何かが——みぞの鏡を覗いた時に揺らいだ何かと同じ

ものが。

今のヴォルデモートの言葉に、酷く動揺している。

なんだよこれ。

なんだよこれ！

なんでぼくがその言葉に動揺しなきゃいけない？　ぼくは幣原秋

じやないのに、なんでその言葉が胸に刺さるの？

ぼくは幣原秋じやないのに。

自己が揺らぐ、定まらない、気持ち悪さ。

ぼくは一体誰なんだ!?

その時クイレルが、静かに来訪者の存在を告げた。

「…………主人様。一人、客人が黒い炎を通り、みぞの鏡の間へと来ています。恐らく——ハリー・ポッターかと」

「ハリーが!？」

思わず叫ぶ。クイレルは無感情にぼくをちらりと見ると、何も言わずに床に落ちているターバンを拾い、元のように巻き付け部屋から出て行った。ぼくはぼつんと一人残される。

「……ハリー」

ひとまず命の危険が過ぎ去ったことに対する安堵よりも、ハリー・ポッターが危険だということに対する恐怖が、全身を包んだ。

「…………な、んで、ハリーが……」

持ち前の好奇心でもって色んなことに首突っ込んでたからか、と思いつく。冷や汗がこめかみから垂れ、頬を伝う感触がした。

ハリーが死んだら、どうしよう。嫌な想像が頭の中を駆け巡る。誰よりも何よりも大切な大好きな唯一の家族が死んだら、ぼくはどうなってしまうのか。恐怖で、身体が震えた。気を抜くとカチカチ音が鳴りそうな歯を食いしぼる。俯いて、目を固く閉じた。

考えろ。考えろ。

ハリーを助けるためには、どうすればいい？

この状況で。

杖もない、身動きも取れないこのシチュエーションで。

「……………………あれっ?」

身動きが取れない？

いや、ただ腕を縛られているだけじゃないか。

「杖がない、だから何だって言うの？」

杖がなくなっただけからといって、魔力までもがなくなっただ訳ではない。杖は所詮、魔力を精製し使いやすくするための道具であって、

……ならば。

杖がなくても魔法は使えるのではないか？

「……………」

実際、ぼくは念じるだけで火花を散らすことが出来る。そこには杖なんて必要ない、完全にぼくだけの力。

その、ぼくの力を、信じてみようか。

国を滅ぼす時まで言われた力を。

幣原秋とほぼ同レベルだと言われた力を、信じて、みようか。

「……暴走とかしちゃったら、怖いなあ」

呟いて、一人で笑った。左手の人差し指をピンと伸ばすと、残りの指をぎゅつと握り締める。右手を、左拳を包むように添えた。

目を瞑り、念じる。

魔力を指先に集めるイメージ。原始的な魔力のカタチではなく、もつと応用の利くものへと、精製し練り上げる。

「Relashio！」

瞬間、まばゆい火花が飛び散った。しかし見た目は派手だが呪文の効果は今ひとつ。それでもまあ手首が動くようになっただけよしとしよう。

「Relashio! ……こんのヤロ、どんだけきつく縛ってんだよっ! Relashio! Diffindo! Morram are！」

呪文が利いたのか、それともあまりに乱雑に膨大な魔力を撒き散らしたせいかは分からないが、パァンツ!! とド派手な音と火花を辺りに散らして手首の拘束は解けた。筋が妙な具合になっているらしい左手を摩りながら、ぼくは立ち上がる。

「今行くよ、ハリー」

第26話 レモン・キャンディー

期末試験まで後、十週間を切った。ホグワーツでは日本の学校とは違い、学期末にドドンと重たい試験があるらしい。今まで試験など受けたことのないぼくら一年生も、上級生のピリピリとした緊張感に当てられて、それぞれがせつせと復習に取り組み始めた。授業が終われば、すぐさま教師の周りに人垣が出来、談話室を見渡せば、そこかしこで勉強道具を広げている。そんな勉強熱心さは、恐らくレイブンクローならではの、我が寮名物とも呼べるものだろう。

「秋」

「リイフ？ どうしたの」

そんな彼らを横目に談話室を通り抜けようとした時、腕を引かれて振り返った。

「図書館に行くの？ それなら、この本をついでに返しておいて欲しいんだ」

「いいけど、また返却期限過ぎちゃったの？ 怒られるのはぼくなんだけど。君は机の上を片付ける習慣を付けた方がいいよ、どうせ今回も埋もれてたんでしょ」

「う……その通りです、申し訳ない……この前の紅茶クッキー一缶でどうだろう」

頭の中で天秤に掛ける。頷いた。

「乗った」

「ありがとう！ 流石は秋だ、話が分かるね！」

左手を出すと、肩を竦めて本を受け取った。

「リイフ、ちよつと……、あ」

リイフを呼ぶ声に、つられて振り返る。とそこには、クラスメイトのフィアン・エンクローチェが立っていた。ぼくがいるのに気が付かず、リイフに声を掛けたのだらう、ぼくを見て表情を凍りつかせている。もつともそれはぼくだって同じだ。

右手には、あの『事故』からずっと包帯が巻かれている。『ぼくに対して当てつけるため』など、そんなことで日常生活の不便を我慢する

ような不合理的な人間では、彼はない。

彼は合理的な人間だ。

リイフ・フェイスナーに諭され、不合理極まりないものである『ぼくへの嫌がらせ』から即座に手を引く程度には、色んなものを弁えている。

「じゃあね、リイフ。クッキー楽しみにしているから」

フィアン・エンクローチエに見せるように、ぼくはゆったりとした微笑みを浮かべた。リイフは数瞬、どうしようかと素早くぼくらに視線を走らせていたようだったが、ぼくの言葉に反射的に「う、うん」と頷いた。

リイフ、君は。

優しすぎる男だ。

リイフに手を振り、前を向く。

さあ、セブルスとリリーが待つてる図書館に行こう。

ぼくの本当の居場所は、多分——そこだから。

そこしか、ないのだから。



ハリーは、右手をぎゅつと握り締めた。

スネイプではなく、クイレルがヴォルデモートの手下だった。彼らは賢者の石を狙っていて、それは今（何故かはよく分からないが）ハリーのポケットの中にある。

心臓がどくどくと脈打つ。自身の両親を殺した相手が、自身を殺しかけた相手が目の前にいるこの状況に、恐怖で今にも震え出しそうだ。ぎゅつと下腹部に力を込め、堪えてぎゅつと睨みつける。

『さあ『石』をよこせ』

ヴォルデモートの顔が、醜く歪んだ。笑ったのだ、と気づき、背筋に寒気が走る。

いつそのこと、賢者の石を渡してしまおうか。そうすれば、命だけは助けてもらえる。

しかしその考えを、ハリーは即座に打ち消した。
駄目だ、そんなことは出来ない。

もし石を渡してしまえば、ヴォルデモートは復活して力を取り戻してしまふ。かつての頃のように、また何人もの人が死ぬことになってしまう。

そして何より、そんなことになってしまえば――

アキに、顔向けが出来ない。

アキはきつと、僕を責めないだろう。

何も言わずに、静かに、目を伏せて――

黙って、僕に背を向けるのだ。

僕を置いて、一人で、僕の手の届かない場所へ行ってしまう。

――そんなの

――そんなの、嫌だ!!

アキに軽蔑されたくない、嘲笑されたくない。

嫌われたくない、馬鹿にされたくない。

アキに、ハリーがそんな奴だったなんて、見込み違いだったと落胆されたくない。

兄として、弟に失望されたくない。

だから。

だから、僕は。

固い石の感触を太股に感じながら、ハリーは叫んだ。

「やるもんか!!」

『捕まえろ!!』

先程やって来た扉へと駆け出すも、十一歳の脚力は成人男性には敵わない。強く手首を掴まれた途端、針で刺したような鋭い痛みが頭を

――正確には額の傷痕を――貫いた。訳が分からず、痛みと恐怖で叫び声を上げ藻掻く。

「ハリーを放せ!!」

瞬間、目も眩むような閃光と爆音が轟いた。手首から、掴まれている感触が消える。強い風に吹き飛ばされ、思わず尻餅をついた。

強烈な光を見た直後のためか、視力はほぼ皆無に近い。それでもハ

リーは、目を凝らした。

今、確かに。

聞き覚えのある声が、聞こえたから。

「……アキ？」

震える声で呟いて、白い世界に手を伸ばした。きゅつとその手が握られる。

自分の手より一回り小さくて、女の子みたくに、細くて薄くて力を込めたら折れてしまいそうな程に華奢なその手は。

しかし、力強く、ハリーを引つ張り上げた。

「大丈夫？」

声変わり前のボーイソプラノが、鼓膜を震わす。聞き慣れたその声に、安心して涙が出そうになった。慌てて、頷く。

「よかった」

ほっとしたような小さなため息。どんな顔をしているか、自然と脳裏に思い浮かぶ。

『ほう……杖なしであの呪縛を打ち破るとはな。流石は幣原秋、ということか』

「ぼくはアキ・ポッターだ！」

目の前の少年が叫ぶ。ハリーを後ろ盾に庇うように立つと、小さくハリーに囁いた。

「ハリー、君は逃げるんだ」

「……っ、出来る訳！」

「君がいても、邪魔なんだよ」

さらりと言われた言葉に、思わず呻く。そうだ、彼は、この弟は、そういうところで率直なのだ。

「賢者の石を、安全なところに」

トン、と肩を押され、よろけた。アキは笑って言う。

「頼んだよ」

「……うん」

納得出来ない心を押し止めた。小さく頷くと、そろそろと後ずさる。

『……いいだろう、アキ・ポッター。しかし弱い貴様に興味はない、用があるのは『生き残った男の子』の持つ賢者の石なのだから』

「ぼくを倒さない限り、ハリーには指一本触れさせない!」

シルエットが霞んで見える。視力がじんわりと戻り掛けているのだ。目を細め、アキの姿を辿った。

『……クイレル、行け。ただし殺すな』

「分かりました」

クイレルの無機質な声が耳に入る。アキは相手の出方を伺っているのか、じつと動かない。

背中に固い壁が当たった。壁に寄り掛かりながら、未だにはつきりとは見えない目を凝らし、扉を探す。手探りで、扉の取っ手を掴んだ。

その時、静寂を切り裂くような大きな音が響いた。慌ててハリーはアキとクイレルがいる方向に目を凝らす。地面に組み伏せられ首に手を掛けられているアキを認識し、思わず駆け寄りそうになって——アキが手を精一杯伸ばして、こちらをぎっと睨んで『近寄るな』と全身で表現しているのに、はつと足が止まった。

「……魔法を使うと思っただろう？ 貴様に魔法勝負を挑もうなど、そんな愚行を犯すものか」

「……う……ぐっ……は、りー、行け……っ!」

アキが苦しげに叫ぶ。

アキを助けなきやいけない。

でも、賢者の石を守れと、他にもないアキに頼まれた。

どうすればよいか分からなくて、ハリーはその場に立ち尽くした。

「幣原、どうして貴様なんか皆が執着するのか、私には分からんよ……」

クイレルが、アキの喉に手を掛けたまま呟く。アキは答ええない——否、答えられない。

「貴様は私の存在など気にも留めなかった。知っていたかさえ怪しい。……でも、私は知っていたんだ」

クイレルの顔は髪に隠れ、表情が読めない。クイレルの意味不明な言葉に、しかしアキが微かに首を横に振るのが見えた。

そつと、最後の力を振り絞るように、アキが左手を伸ばす。しかしクイレルに掠りもせず、やがて力尽きた左手は地面に投げ出された。ぴくりとも動かないその腕に。

理性と本能との間で揺れていたハリーの心のメーターが、とうとう振り切れる。

「わあああああああああ!!」

叫びながら走り、渾身の力でクイレルにしがみつくと、アキから引き離すべく力を込めた。途端、額に激痛が走る。目も眩むような痛みを目を細めながらも、離してなるものかとばかりに足を踏ん張った。

クイレルも叫び声を上げ、アキの首から手を離すとハリーを振り解こうと藻掻く。駄目だ、クイレルを離れたらアキが死んでしまう、その一心で、ハリーは手を伸ばし、クイレルの腕を捕まえ、力の限りしがみついた。

「……っあ、は、ハ、リー……っ、」

アキの声に、割れそうに痛む頭を堪え、薄く目を凝らした。身をよじって激しく咳込んでいる彼に、思わず駆け寄りたくなる。

でも、まずはこちらが先だ。

「ああああアアアアア！」

『殺せ！・ 殺せ！』

叫び声が聞こえる。

目の前が眩んだ。まばゆい光に、思考が奪われる。

——アキ。

それでも、ただ一つ、願うのは。

一人の少年のことだった。

ふわりと、妙な浮遊感が全身を襲う。白かった視界が、さあつと黒に塗り潰された。同時に、あれ程まで強烈な頭痛が消え去る。

闇が、意識を引きずり込む。

抵抗する暇もなく、ハリーは闇の中へと落ちて行った。



クイレルの腕が崩れた。

肩が、顔が、胴体が、ハリーが触れたところが一瞬の内に風化し、砂となって粉々に砕け散る。

そんな様子を、ぼくはただ床に這いつくばって、呆然と眺めていただけだった。

身体の一欠片も残さずに、クイレルの肉体は消滅する。中身が無くなったクイレルのローブにしがみついたまま、ハリーはその場に崩折れた。

「ハリー!!」

咄嗟に叫んで駆け寄ると、慌てて抱き起こす。ハリーの顔色は真っ青というより紙色で、ぐったりしていて生気がない。ハリーの頬をぺちぺち叩いて、目を覚まさせようとしたその時――

カチャリ、と扉が開く音がした。思わず身構え、扉を睨みつける。そして――

「ハリーは心配いらんよ。ヴォルデモートの毒気に当てられただけじゃろう」

「……っ、ダンブルドア先生!?!」

どうやらわしは遅かったようじゃのう、と好々爺風に笑われ、呆気に取られる。数秒ほかんとダンブルドアを見つめ、口が開きっぱなしだということに気がき慌てて閉じた。

「ど……どうして、ここに?」

「そんな当たり前なことを聞くとは、お主らしくないのお、アキ・ポッターくん。さあ、ハリーを医務室に運ばねばなるまい。手伝ってくれるかの?」

「あ……はい」

しかしダンブルドアはついつと右手の杖を振り、ハリーをふわふわとその場に浮かせるとすたすたと歩き出した。慌ててぼくは後を追う。

「先生、あの……」

「アキ、君は本当によくやってくれた」

「よくって……」

口ごもった。ぼくは、何もしていない。ダンブルドアは詳しくは何も語らず、ただにっこりと微笑んだ。その笑みに、この場でついさつきヴォルデモートやクィレルとやり合っていたことを、しばし忘れる。

「君に足りないのは、ハリーとのコミュニケーションじゃったのう。ハリーと、もっとしつかり情報交換しておれば、君は君の望む通り、ハリー・ポッターを守り切ることが出来たじやろうに」

「……先生は、いつから……どこまで、知ってらしたんですか？」

ダンブルドアの背中を見つめながら、ぼくは問うた。ダンブルドアはちよつと黙って「わしが知るべき量ちようどじや、それ以上でもそれ以下でもない」と返す。

「……………」

思わず押し黙る。

それは、つまり、ぼくやハリーがこうして禁じられた廊下に行き、クィレルやヴォルデモートと出会うことも——全て見越した上でのことだと言うのだろうか。

「なら……………」

ぼくは小さく息を吸い込んだ。

目を伏せて、尋ねる。

「幣原秋を、ご存知ですか？」

「……………懐かしい名じや」

しみじみと過去を思い出すような声音で、ダンブルドアは呟いた。「幣原の夢を、毎晩見るんです…………」。『夢』で、ぼくは幣原秋として生活していて…………楽しいことも苦しいことも悲しいことも嬉しいことも、まるで我が事のように経験しています。…………ぼくは最初、あいつはぼくの頭の中だけの住人だと思っていました。でも、違った。あいつは実際にこの世界に、ぼくが住んでいる世界と同じ世界に存在していた。実際にスネイプ教授と言葉を交わし、ヴォルデモートの敵として戦っていた。彼女も…………アクアマリン・ベルフェゴールも、幣原を知っていた。…………何も知らないのは、ぼくだけだった」

言葉を切った。息を吸い込み、続ける。

「教えてください、先生。なんでヴォルデモートは、ぼくを『幣原秋』と認識したんですか？　ぼくと幣原は、何の繋がりがあるんですか？」

「……その質問に、わしは答えるべきではない」

ため息と共に吐き出された言葉に、思わずぼくは詰め寄った。

「どういう意味ですか!?　先生は理由を知っているのに！　だから、みぞの鏡でぼくが見えたものを尋ねた！　ぼくのついた嘘を見破ってた！　ぼくが、ハリーと同じように両親の姿を見ることはないことを知ってた!!」

「どうしてですか、なんで、なんでっ……」

何も知らない自分が悔しくて、無力な自分に苛立って、ぼくは拳を握り締めて目をぎゅつと瞑った。ぎり、と奥歯を噛み締める。

「君に、直々に説明したい人間がいるからじゃ。君の抱く質問に対する答えを、君に直接伝えたい、の」

その言葉に、ハツと顔を上げた。既にダンブルドアは、ぼくの遙か先を歩いている。慌てて後を追った。

「そっ、それは一体誰なんですか!？」

「さてのう。……それはそうと、わしは君に一つがっかりしたことがあるんじゃないよ」

「え?」

「君宛の入学案内書じゃよ、アキ。『レモン・キャンディー』じゃ」

「なんだそれは、と首を捻り、記憶を辿って……思わずぼくは声を上げる。」

「あの落書き！　先生だったんですか!？」

「落書きとは失礼じゃのう。校長室への合言葉だったのじゃが。いつ君が気付くか、わくわくして待っておったというのに」

「いや無茶でしょ！　どう考えたって無茶苦茶だ!」

「スリザリン寮の合言葉を勘で言い当てた君に言われとうはないの」
ぐっ、とぼくは言葉に詰まる。一体、どこまで知ってるんだこの人は。

「いつでも校長室に遊びに来るがよい。なあに、甘いものを全て挙げ

ていけば、いつかは正解に辿り着く」

「そんな重要機密をいち生徒に漏らしていいんですか？」

ふおっふおっふおと笑いながら、ダンブルドアはお茶目に片目を
瞑った。

第27話 現実

「秋！ 急いでつてば!!」

「うう、ごめんライフ……先行つていいよ！」

手を忙しなく動かしながら叫ぶと、ライフは仕方ないといったげにため息を吐いた「遅れんなよ！」と言葉を残し、友人数人と共に部屋を出て行く。賑やかな話し声が遠ざかるのに、ほっと息をついた。

レイブンクロー男子寮。の一室で、ぼくは折角詰めたトランクの中身をひっくり返すという、まるで自分で掘った穴を埋め直しているかのような、身体というよりもむしろ心にくる作業に執心していた。目的は……。

「……髪紐、どこだよお……」

荷造りをした時に紛れた髪紐を探すため。

「どうして昨日、髪解いたままで作業したかなあ……!!」

昨日の自分に怒りをぶつけてみるも、時既に遅い。

いつももあるものがない、という事実は、いいようもない不安感をもたらす。違和感じゃない、不安感なのだ。

「なんでないのさあ……」

独り言が口をつく。泣きそうだ。

「……ん？」

トランクの底に到達した時、何やら手に固く冷たいものが触れた。掴んで引っ張る。

銀色に鈍く光るそれは、ロケットのようだった。まだ新しい。指先で摘んで持ち上げる。チャラリ、とチェーンが擦れる音がした。

「……誰の？」

初めて見た。というか、ぼくは一つたりともこんな装飾品の類は持っていない。髪紐は除いてだが。

何気なく、蓋を押し開けた。

「……あ」

思わず、声が出た。

それは。

『秋へ。君はいつこのロケットの存在に気付くのか、お父さんと一緒に賭けをしています。ちなみにお母さんは、秋が一年生の間にだから、早く気付いてよね。直さん、私、ケーキがいいなあ。スイーツバ イキングとか素敵だよね』

『えー、早速母さんがもう賭けに勝った気でケーキケーキとうるさいので、もうどっちでもいいかという気分になってきてはいるが、お父さんはお前は気付かない派だからな。気付いても気付かない振りしててくれよ、優しいお前なら出来るはずだ。とりあえず今から母さんをケーキ屋さんに連れていくけど、大丈夫かな……万が一『全部下さい！』とか母さんに言われたら財布の中身が心許ない。あ、ちなみにこのロケットは父さんお手製の自慢作、世界にたった一つだけのものなんだよ。少し早いけど、お前の十一歳の誕生日プレゼントとして、お前のトランクの奥の奥に放り込んでみました。単純にひっくり返しただけじゃ落ちない細工はしてあります、心配ご無用』

『秋へ。入学おめでどう。英語が分からない状態で放り出したのは、本当にすまなかった。ものすごく苦勞すると思う。父さんも大変だったから。でもきつと、それ以上に手に入れられるものがたくさんあるからさ、頑張つて欲しい』

『入学おめでどう、秋。知ってた？ 学校つてねえ、勉強するだけの場所じゃないんだよ。いっぱいいっぱい、楽しいこと見つけてね。』

友達や先生、素敵な人、あなたの人生に影響を与えるたくさんの人と出会える場所なんだよ。いつてらっしやい』

『秋、ダンブルドアから話は聞いた。お前は全然悪くないんだ。だから、自分をあまり責めるなよ？ 今はきつと、すごく辛い時期だと思う。でも、父さん達はお前が誰よりも優しく強い子だって知ってるよ。いつか分かってくれる子も出来るだろう。クリスマスに帰ってきたら、色んな話をしような』

『秋、辛かったら帰ってきていいんだよ？ 帰ってきたら、君が泣き止むまで、ずっとぎゅーってしてあげるから。でも君はきつと、頑張るよって笑うんだろうね。そしたらさ、これだけは忘れないでね。お父』

さんとお母さんは、いつでも秋、君のことを考えてるからね』

「……………うわ……………」

一体どんな仕組みなんだろう、そこから靄のような小さな固まりが、父と母の声を乗せて届いた。パタンとロケットを閉めると、シューツとそれは中に吸い込まれるようにして消える。

気付かなかった。

父さんと母さんの、想い。

ぼくへの、想い。

ぎゅつとぼくは、ロケットを胸に押し当てた。俯いて、目を閉じる。暖かな想い、何よりも何よりも大切な想い。心がほつとする、想い。

——父さん、母さん。

今、確かに、受け取りました。

帰ってきたら、笑顔で、ただいまって言うね。

待っててね。



やっとの思いで髪紐を捜し当てた時には、学年度末パーティーはもう始まっていた。ドア越しに聞こえる校長先生の声に、躊躇する。

出来るだけ音を立てないように、細心の注意を払い、重たいドアをゆっくりと押し開き、狭い隙間に身体を滑り込ませ——

目の前で爆ぜた閃光に、度肝を抜かれる程驚いた。

慌てて口を押さえ悲鳴を上げそうになるのを堪えると、辺りを見回す。

大広間は大騒ぎだった。数々の色とりどりの花火が、広い大広間を埋め尽くさんばかりに縦横無尽に駆け巡り、こつちで爆ぜあつちで爆ぜ、賑やかな形相を醸し出している。怖がる人もちらほら見えるが、大半の人は面白がるように指差してその花火を見学している。

「レディース、エーン、ジェントルメーン!!」

魔法で拡声された声が響く。若い声、少年の声だ。

「我ら悪戯仕掛人、初のお披露目!! これから学校中を巡る噂の第一人者となるべくして生まれた我らの初の仕事!! 面白いことなら何でも我らにお任せを!! 年中無休二十四時間営業で承ります!!」

グリフィンドールの席で立ち上がり、その少年は杖をマイク代わりにして叫んだ。歓声と笑い、野次、何だあいつ、といった声が乱れ飛ぶ。笑いの渦の、中心の少年。

その、暴力的とも言える圧倒的な存在感に。

思わず、目眩がした。

『ポッター!!!』

この凄まじい喧噪の更にも上を行くかのように、マクゴナガル先生の怒り心頭な声が轟く。瞬時に場が静まり返った。花火も、まるでマクゴナガル先生の恐怖を察したかのように瞬時に地に落ちる。

『後で職員室に來なさい!! いいですね!? ポッターの他にも、ブラック、ルーピン、ペティグリュー!!』

げっ、と少年は肩を竦める。そして苦笑いでまた杖をマイク代わりに持ち直し、口を開いた。

「えー、……そんなこんなで僕らはまた罰則の日々へと戻るということですね。マクゴナガル先生は僕らにとつて強敵です。いつか皆で手を取り倒しましょう! それでは、ありがとうございますございました!!」

わっとな歓声と拍手が上がる。そそくさと一礼してテーブルから降りた少年は、あっという間に友人達に囲まれて姿が見えなくなった。ダンブルドア校長が代わって立ち上がる。

「素晴らしい余興をありがとう、ミスターポッター。さあ皆の衆、よく食べ、よく飲み、語るがよい!」

途端、テーブルに溢れ返る豪勢な食事。ガタガタツと席を立つ音に、皆の賑やかな喋り声。

ぼくはレイブンクローをそうつと通り抜け、スリザリンのテーブルでセブルスの姿を探すと、近寄っていった。

「セブルス」

「秋。隣、座る?」

うん、と頷いた瞬間、背中に強い衝撃が走る。慌てて足を踏ん張り

堪えると、「だーれだっ?」と楽しげな声が後ろから聞こえた。

「リリー!」

「私も混ぜてくれない? グリフィンドールにいたくなくって」

リリーはちよいとグリフィンドールのテーブルを顎でしゃくると、眉を寄せた。

「あのヒーロー気取りの嫌な奴! 目立ちたがりでちやほやされるのが好きなのよ」

「さっきの人?」

ぼくが尋ねると、リリーは大きく頷く。その瞳には、強い嫌悪の感情が映っていた。珍しい、リリーがこんなに激しく嫌いな人をこき下ろすなんて。

「何かあったの?」

「あったも何も、第一印象から最悪だったわよ。ねえセブルス?

ああもう、ポッターとブラック! 授業の邪魔はする、何か爆発させるのは日常茶飯事、夜にベッドを抜け出すのは当たり前! あんな問題児、初めて見たわ!」

ぶんすか怒って熱弁を奮うリリー。ぼくはセブルスと顔を見合わせると、小さく肩を竦め合った。そしてリリーの肩を抱くと、スリザリンのテーブルに腰掛ける。

「ま、落ち着いてよ。ほら、折角こんなに豪華な料理があるのに、食べなきゃ損損、ね?」

笑って、リリーの前の皿に料理を取り分けた。そして頭を軽く撫でる。

「……ありがとう」

むうっと不機嫌そうに口をへの字に曲げていたリリーだが、しかしお礼はちゃんとと言える子。偉い。

セブルスが頬杖をついて、薄く笑いながら指摘した。

「リリー、今君、相当不細工な面してるぞ」

「なによお!!」

瞬時にリリーの拳がセブルスのこめかみを襲う。頭を抱えて悶絶するセブルス。しかしセブルスの言った『不細工』という言葉はやっ

ぱり女の子にとって気になる部分なのだろう、ほつぺたを引つ張ったり押し付けたりして、顔の表情を戻すことに苦心し始めた。

まあ今はリリーの心を、そのポッターくんとやらから離すことが重要だったから、その点を見れば成功だ。尊い犠牲もあつたことだしね。

「……リリーは手癖足癖が悪い……」

セブルスが呻く。リリーは聞こえない振りをしてかぼちやジュースを煽った。ぼくは小さく笑うと、目を細め、グリフィンドールのテーブルを見つめる。

どこにいるのかすぐに分かる、存在感。人を引き付ける、カリスマ性。

リリーの前では、大きな声じゃ言えないけど、さ。

お話、してみたいな。

友達に、なってみたいな。

小さく呟いたぼくの声を聞いたのは、軽く目を上げてこちらを見た、セブルスだけだった。



ハリーを医務室に運び込んだ後、ダンブルドアに一礼すると、ぼくは駆け出した。階段を下ろうと足を掛けたところで、ふと一つの考えが浮かぶ。身体の向きを変えると、塔を駆け上った。

レイブンクロー寮の自室で、目的のものを引っ掴むと、向かうは魔法薬学教室である地下牢——の隣。一度罰則で呼び出された、スネイプ教授の研究室。

ノックをするのもまだるっこしい。ドアノブをぐいと捻ると、施錠されていないことを良いことに、そのままの勢いで飛び込んだ。

何かの調査中だったのだろうか、部屋に据え置かれた大鍋の中身を掻き混ぜていた教授は、突然の訪問者に随分と驚いたようだった。そんな教授に、ぼくは満面の笑顔で挨拶をする。

「こんにちわっ、スネイプ教授！」

「……っ、ポッター、何の用だ……って貴様、その怪我はどうした!?!」
「え?」

言われ、自分の格好を見下ろした。

「……あらまあ」

ローブが埃まみれで、所々に散る白が、黒地に程よい感じのアクセントになっている気がしなくもない。ズボンの膝は破れているし、縛られていた手首は擦れて血が滲んでいる。パンパンとその場でローブを叩けば、スネイプ教授は苛立ったように「違う!」とぼくを睨みつけた。ツカツカと近付いて来た教授に思わず一步下がるも、構わず手首を掴まれ引つ張られる。

「すっ、スネイプ教授!?!」

問いかけるも返事はない。研究室の奥、スネイプ教授の自室に無理矢理引き込まれると、教授はぼくを突き飛ばすように椅子に腰掛けさせた。机の引き出しを開けると、何かを探すように身を屈めている。

殺風景な部屋だった。研究室に置いてあったものよりも、二回りほど小さな机に本棚、それにシングルのベッドが一つ。ベッドの横にはサイドテーブルがあり、本が一冊無造作に投げ出されている。床は、きつと性格だろう、塵一つ、髪の毛一本さえも落ちていない。白いシートにも皺一つ寄っておらず、まるでホテルかと思うほどに綺麗だ。

——というよりも、何と言うか——そう、この違和感は。

この部屋からは、生活感が極限まで削ぎ取られている。

自身の痕跡を残すことを厭うような、がらんどうの部屋は、確かにホテルそのもので。借り暮らしという雰囲気は漂っていて。

まるでスネイプ教授が、自身の居場所をここだと定め切れていないような、そんな危うさを感じ取った。

「ポッター」

名前を呼ばれ、慌てて正面を向く。と、スネイプ教授はぼくに手を伸ばすと、ぼくの頭をぐわしと鷲掴みにした。途端、目も眩むような激痛が走る。

「痛痛痛痛痛痛っ!?!」

口から零れる、言葉にならない叫び声。指一本すら動かさせない程の全身に渡る痛みに、頭の中が真っ白になった。

「ふむ」

スネイプ教授はぼくの頭から手を離すと、ハンカチを取り出し手を拭う。なんだぼくの頭はそんなに汚いって言うのか、とむつとしたが、しかし清潔そうな白いハンカチに赤い染みが付くのを見て、思わずぼかんと口を開けた。恐る恐る自身の頭に触れてみると、鈍い痛みと共にぬるりとした感触。頭を触った手を目の前に掲げて。

「……………おお」

「おお、じゃないだろう!? 馬鹿なのかね君は! 自身の怪我くらい把握したまえ!!」

瞬時に厳しく言葉が飛んできた。真実なのでただただ肩を竦めるしか出来ない。

スネイプ教授は白い包帯を手にとると、手慣れた仕草でぼくの頭に包帯を巻いていく。神経質な教授のことだ、包帯の出来栄えは間違いないドクター並だろう。ぼくは頭を動かさないように注意しながら、教授を見上げた。そして、怖ず怖ずと口を開く。

「……………あの、教授」

「なんだ」

殊更冷たい声が響いた。気圧されないように自分をしっかりと持って、息を吸う。

「ハリーを助けてくれて、ありがとうございました」

「……………助けたつもりなど、ない」

スネイプ教授の声は、少し掠れていた。ぼくは小さく微笑んで、目を伏せる。

「そう言うと思ってました」

「……………」

教授は何か言おうと逡巡したようだったが、結局口を開かなかつた。

それが何故かは、どうしてだろう、聞かなくても分かるような気がした。

「そして——」

ぼくは笑みを浮かべる。小さく頷いて、目を閉じた。深々と、頭を下げる。

「先日の暴言、すみませんでした」

言葉に、心を込めて。

伝えるんだ、ぼくの言葉で。

「教授は、幣原秋を救ってくれた」

ここで向き合わなきゃ、いつ向き合うっていうんだ。

「闇の中から、掬い上げてくれた」

拒否されてもいい。

怒鳴られてもいい。

避けられてもいい。

伝えなきゃ。

幣原秋の言葉を。

「ありがとうございました……っ！」

更に、深く。

感謝の意を、示すため、ぼくは頭を下げる。

英国にはない、この謝罪の仕方。

日本人の、謝り方。

幣原秋を通じての、知識——

「……………」

無言で——教授は両手の中の包帯を落とした。ぎゅっと拳を握り

締め——

「この大馬鹿者が!!」

目の前に火花が散った。

痛みで意識が一瞬飛んだ、これは絶対飛んだ。声にならない叫び声を上げ、頭を抑えて悶絶する。

「包帯巻いてる時に頭下げる人間がどこにいる！ 少しは考えろ!!」

「……………」

えー。

そこなのー？

「……つたく、貴様は……」

ぼやきながら、スネイプ教授はぐちゃぐちゃになった包帯を解き、もう一度新たに包帯を巻き始めた。ずきずき痛む頭を抱えながら、ぼくは教授を見上げる。

「……本当、嫌になるくらい、あいつにそつくりだ」

「……………」

「嫌になる。貴様ら兄弟は本当、思い出したくないことまで思い出させる」

馬鹿者が、と、教授は吐き出すように言った。ぼくは小さく笑って、口を開く。

「幣原秋の話、聞かせてください」

何も知らないのは、嫌なんです。

そう尋ねると、スネイプ教授は黙ってぼくを上から下まで眺めてから、ぼくの頭から手を外した。そしてくるりと背を向けると、すたすたと机へ歩いて行ってしまふ。

かちやり、という、鍵の錠が外れる音。がたん、と机の引き出しを開けると、程なく教授は一冊のスクラップブックを取り出した。そして、それをぼくに投げ渡す。

「……あ、あの……スネイプ教授？」

「読みたまえ」

スネイプ教授は不機嫌そうに眉を寄せ、ぼくの手の中のスクラップブックを指差した。

「はあ……」

小さく首を傾げ、とりあえず言われた通りに表紙を捲る。

「……………」

慌てて次のページを捲った。

次も、次も、次も。

これは――

「……幣原秋の名前が載った新聞記事、全てがある」

低い声で、教授は呟いた。

「学生時代の時の賞から、あいつが闇祓いに入部した時の記事、その後

の様々な手柄まで、全てだ。多分——漏れはない」

「……ありがとうございます」

古ぼけ、色褪せた新聞記事。それが、一冊のスケッチブック、最後のページにまで、几帳面に貼ってある。

一人の人間について——ハリー・ポッターのように有名でもない、ただの一般人について書かれた記事は、こうもたくさん集まるものなのか。

——すごいな。

単純に、そう思った。

「さて」

その声に、ぼくは顔を上げる。

ことり、と、デスクの上に白いマグカップを置いた教授は（湯気が立ってるのでたった今注いできたものと思われる。……ぼくにはないのか）、回転椅子に座ると優雅に足を組んだ。

そして、膝の上に組んだ指を軽く置く。

「今度は我輩から質問だ」

「……そう来ると思っていましたけどね」

教授は神経質そうに、組んでいた人差し指を軽く動かしながら問い掛けた。

「二つ目、貴様は何処で、幣原秋の名前を聞いた？ 二つ目、貴様と幣原秋の関係は？ 三つ目、何故、貴様は我輩と奴について知っている？」

「……あいつは、ぼくの『夢』なんです」

「……どういふことだ」

「どうもこうも、そのままの意味ですよ。幣原はぼくの夢の中の住人です……ああ、夢ってのは、夜寝てる時に見るやつのことです」

「訳が分からん、一言で言え」

ああもう、はいはい分かりましたよ。

「ぼくは、夢で幣原秋の人生を追体験しているんです」

だから、スネイプ教授と幣原秋の関係を知っていた。

そう告げると、スネイプ教授は驚いたように少しだけ瞳を見開いた。しかしその表情からは、他の感情は推し量れない。

「……それは、現在進行形でか？」

「ええ。だいたいほぼ同じくらい速さで時間が流れていて……だから、幣原の『事故』のことも、スネイプ教授と、あとリリー母さんのことも、全部知ってます」

そう、まるで。

実際その場にいたかのように。

「……信じられん話だな」

スネイプ教授はやがて、ゆっくりと呟いた。

「ぼくもそう思います」

小さく頷く。

「……まるで、記憶だけを自分の子供に埋め込んだみたいじゃないか」
「えっ？」

スネイプ教授がぼそつと何やら言っていた気がして、ぼくは聞き返した。何でもない、と首を振られ、それ以上深入りすることが出来なくなる。

「一つ、ぼくからも質問があります」

ぼくはスクラップブックに目を落としたまま、問い掛けた。

「幣原秋は、今、どうしていますか？」

それは、ずっと前から、気になっていたこと。

気になっていて——でも、誰にも聞けなかったこと。

何となく、察しては、いる。

幣原について語る人の雰囲気、空気、言葉から——何となく、分かるんだ。

でも、もしかして——なんて、

期待、したりもするんだよね。

「……あいつは」

ああ、そんな悲しげな目をしないでください。

分かった。分かりましたから。

そんな辛い目で、ぼくを見ないでください。

「あいつは、死んだ」

そんな目を、しないでください。

何で、スネイプ教授の感情が想像出来るのだろう。

こんな昏い、虚な、真つ暗で、がらんどうな目なのに。

何で、分かるんだろう。

幣原秋の時代とは違う、感情を悟らせない、虚ろな瞳。ぼくを見て
いるはずなのに、ぼくを見ていない目。

何でこの目を見て、悲しいって感じるんだろう？

「……ぼくを、見てくださいよ」

思わず、眩いていた。

これなら、あの日みたいに。

あの時みたいに。

思いつきり胸倉掴んで、感情剥き出しの瞳で、刺々しい口調で、
怒鳴られた方が、マシだったよ。

「心を閉ざさないでくださいよ……」

何で、ぼくは手を伸ばしているんだろう？

左手をそつと伸ばして、

まるで、友達にするかのように。

手を差し延べてしまうのだろうか？

「ぼくは」

「

そこで、はつと我に返った。

今、ぼくは、何を言おうとしていた？

口の中に、言葉の残滓。

慌てて呑み込み、なかつたことにした。

「貴様は……」

「いやはいすみませんごめんなさい！ 立場弁えていませんでした教
師と生徒の壁を乗り越えようとしてましたすみません！」

「誤解を招くような発言は止めろ！」

スネイプ教授は眉間に手を当てると、目をつぶって大きくため息をついた。そして、ぼくにスクラップブックの最後のページを開くように告げる。

「幣原秋が死んだ時の記事だ。あいつは仕事がよく出来たからな。闇の帝王側から相当恨まれてはいたようだが……詳しく調べた結果、事件性はどこにも見当たらなかった」

「……じゃあ、なんで……」

言いながら、最後のページを開いた。見て、思わず呼吸が止まる。

スネイプ教授が、静かに告げた。

「……自殺だ。ビルの屋上から、飛び降りた」

さあつと、体温が下がる感覚。スクラップブックを持つ指先が、酷く冷たい。

見てられなくて。

でも、目が離せなかった。

——ああ、全く。

予想してたことだけど。

——やっぱり、シヨックだ。

『リリー・エバンズ』と『幣原秋』。

ぼくの夢は、今はもういない人達が集う場所なんだ。

「……ありがとうございます。そして……ごめんなさい」

スクラップブックを閉じて、スネイプ教授に戻す。微妙な顔で、教授はぼくからそれを取り上げた。

「帰るのか」

「ええ。アリスが心配してると思いますし。……殴られるかもしれないけど」

「フィスナーか？ 奴なら昨日の昼間、色んな人に貴様の居場所を聞き回っていたぞ」

「あ、殴られるの決定だ」

小さく笑う。

「あ、それと、教授」

ポケットの中に手を突っ込んで、『それ』を手の平に握り込むと、悪

戯っぽく笑みを浮かべて教授の前に突き出した。

「手、出してください」

素直に手を出したスネイプ教授に、ぼくは『それ』を握らせると「ぼくがこの部屋から出るまで、開かないでくださいね」と念を押す。ドアまで殊更ゆつくりと歩き——ドアを開けた瞬間、ダッシュした。

「……アキ・ポッター!!」

必死な声が追ってくる。ぼくは大きな声で笑いながら階段を駆け上がった。

「説明しろ! おいつ、どうして分かった!?!」

「どうして、クリスマスに秋の髪紐を送ったのが私だと気付いたのだ!?!」

声が、段々と遠ざかっていく。

そして——やがて、完全に聞こえなくなった。

「……あはは」

息が苦しい。足がもつれて、ぼくは階段の踊り場で倒れ込んだ。手もまともに付けず、しこたま妙な具合に肩やら膝やら肋骨やらを床で打つ。

きついなあ。

死にそうだなあ!

でも生きてるんだよなあ!

幣原秋と違って、生きてるんだよ!

「……畜生……」

何で、何で、何で。

何で死んだんだよ。

何で、自ら命を絶ってしまったんだよお。

悔しいよ。

あいつが、この世界に生きる価値がないと考えたことが。悔しい。

「お前は……ぼくの、憧れだったんだよ」

手を伸ばしても、届かない。
夢の中の、存在だったのに。

現実には、この世にいた。

生きて呼吸をし、笑い泣き怒り、そして。

ぼくがいるホグワーツで、暮らしていた。

憧れの人の。

背中が、見えたと思ったんだがなあ。

ぼくの腕は短すぎて。

間を阻むものは強敵で。

届かなかった。

「……何寝てんだ、馬鹿」

怒ったような低い声が、降ってきた。

ぼくは、笑って見上げる。

「……ただいま、アリス」

アリスは眉をよせると、ぼくのそばに膝を降ろした。

そして、ぼくの襟を掴み、引っ張り上げる。

「何やってんだ、馬鹿」

「久しぶりに転んで、自分の駄目さ加減に涙目で落ち込んでました」

「ばーか」

殴ってやろうと思ってたが、テメエの顔見たらやる気なくした。

そうぼやいてぼくを座らせると、アリスは立ち上がった。ぼくは

笑って、アリスに手を伸ばす。

「足が動かないから、おぶって」

「……ハア」

頭の包帯のおかげか、アリスは何も言わずにぼくに背中を向けて屈み込んだ。ありがたく背負ってもらう。

「何か、あったのか」

「……まあ、ね」

「続きは署で聞く」

「ぶ!？」

「冗談だ」

ぼくは、アリスの背中に頭を埋めた。

「……なあ、アキ」

「……何？」

アリスは、静かな声で呟いた。

「前、話してたろ。お前の夢の住人『幣原秋』」

「……………」

「聞き覚えあるなと思っていたが、やっと思い出したよ」

「……思い出した？」

ああ、とアリスは頷く。

「すっかり忘れていた。一度、しかも随分昔にアイツから聞いただけだったから……かつての闇の時代……例のあの人、闇の帝王を打ち砕いた英雄ハリー・ポッター、彼が生まれるまでの仮初めの英雄。民衆に必要とされたために照らされた、偽物の光……」

「闇祓いの異端、『黒衣の天才』幣原秋を」

第28話 青春グラフィティ

学年末パーティーの次の日——つまり、夏休みに入る前日。先日の試験の結果が発表された。

各寮それぞれ掲示板に張り出され、上から成績の良い順で名前が並んでいる。名前のすぐ隣には、学年全体の順位。また、表の一番下には目立つ赤線が引かれて降り、進級か落第かが区別されている。しかし、落第することは殆どないらしい。その証拠に今年も、誰も赤線の下に名前は書かれていない。

ひとまず進級出来る、ということに安堵したぼくは、自分の順位を確かめるのもそこそこに（真ん中少し下くらいだった）そそくさとレイブクローの群れから離れた。辺りを見回し、スリザリンの集団から一人ぽつんと離れているセブルスを見つけ、駆け寄る。

「セブルス！ どうだった？」

「まずまずだな」

「まずまず？ それって一体どのくらいなの？」

その場で弾みを付け、勢いよくジャンプしようとするぼくを、セブルスは慌てて押し留めた。早口で「学年で二位だ。そして飛ぶな、飛んでも無理だ」と言う。それは暗に「お前はチビだ」と言われているのだろうか。分かつてはいるけれど、ちよつと虚しい。一般的にはそろそろ成長期が来てもいい頃合いなんだけど。

「つて、凄いじゃないか！ 知ってはいたけど、さすがはセブルスだね！」

笑顔でセブルスを見上げると、セブルスは何故だか釈然としない表情でぼくを見返した。そしてぼそりと何事かを呟く。聞き取れずに聞き返せば「別に……何でもない」と言われて目を逸らされた。向いた視線の先をつられて追うと、肩と首と背中に重たい衝撃が。

「いっ……りりー！」

「ハアイ、セブ、秋」

ぼくとセブルスの背に飛びついたりりーが、弾けるような笑みを零す。ぼくは踏ん張って耐えたけれど、セブルスは勢いを殺し切れな

かったようだ。突き飛ばされ、床に両手と両膝を付いては悶えている。

「あー……大丈夫？ セブルス」

薄い背中が心配になり、思わず声を掛けた。あら、とりりーは他人事のように口元に手を当てている。

「あらセブルス！ ごめんなさい、大丈夫かしら！」

「りりー、白々しいよ……」

てへ、と可愛らしくりりーは片目を瞑った。その笑顔はとても可愛らしく、思わず全てを許せてしまいそうになるのだが、しかしセブルスはさすが幼馴染だ。立ち上がると、絆されることなくりりーに強烈なデコピンを食らわせる。哀れりりーは瞳を涙で潤ませ、額を押さえた。

「りりーは、成績どうだったの？」

「グリフィンドールで二位よ……学年じゃあ三位だったかな」

「わあ、凄い頭いいんだねえ！ 二人ともさすが！」

心から拍手を送ると、何故かりりーもまた、セブルスと同じような表情でぼくを見つめた。そのまま無言で数秒佇むと、ふっと憂いが差したような眼差しで目を逸らし、ぼくの肩を軽く叩く。二人とも一体どうしたんだ。

「……えっと、セブルスが二位でりりーが一位……ってことは、一位の人は誰なんだろう？」

ぼくの何の気無しにした問い掛けに、りりーは物凄く嫌そうな顔をした。しぶしぶといった調子で口を開く。

「……ポッターよ」

「え？」

「ジェームズ・ポッター。グリフィンドール一の問題児。魔法薬学で一個単純な間違いをした以外は全問正解。腹が立つわ」

無表情でそう言い放つりりー。ちょっと怖い。ぼくとセブルスは顔を見合わせ、肩を竦め合った。

「何よりテストの点数で彼に負けるっていうのはショックね。負けず嫌いの血が疼くわ」

「……まあ、自分が一番ではない、ということは若干苛立つことではあるが……」

リリーとセブルスの声を聞きながら、ぼくは辺りを見回した。遠くで何やら騒がしい集団、その中でも殊更輝かんばかりの存在感を見つけ、目を細める。

「……ジエームズ・ポッター。……ポッター」

口の中で、言葉を遊ばせた。

くしゃやくしゃとした癩っ毛に、丸い眼鏡。いつか、湖に突き落とされてぐしょ濡れのぼくに対して声を掛けてきた、あの少年だ。

あの時は、ただただ怖かった。全てを見透かされているような気にさせられて、凄く怖かった。

では、今は？

「……………」

気になる人。

でも、遠い。

その距離に、ため息を吐いた。

ぼくが、ぼくなんか彼と仲良くなるなんて、無理なんだと思いつく。

胸の中で、彼の名前をもう一度呟く。

拳を握り、小さく目を伏せた。



スカートが埃で汚れるのも構わず、指を胸の前で組んで、膝をつき頭を垂れる少女。その姿は、例えばここが教会で、ステンドグラスが織り成す美しい光の中、レッドカーペットの上的なことだったならば、問答無用で『絵』になる構図だっただろう。

しかしここは、そんな厳かで厳肅で荘厳な空間ではない。学校であり、薄暗く埃つぼくて——そして、人間が一人命を散らした、場所なのだ。

「やっぱり、ここにいた」

ぼくは、静かに笑った。

彼女は、そつと振り返る。

「……ポッター」

「久しぶり——お嬢様」

ぼくの言葉に、彼女はむつとしたように眉を寄せた。その仕草に、ぼくは目を細める。

三階の廊下を下り、更に先。

みぞの鏡が置いてあった部屋での、お話。



「座つてもいい?」

彼女の隣を指差して尋ねると、彼女はちよつと考えて小さく頷いた。ぼくは、彼女から少し距離を取り腰掛ける。

流れる沈黙が、気まずい。普段無口な方ではないぼくだが、彼女につられてしまい、次の言葉が迷子になっている。そんな気まずさを払拭するように、強いてぼくは明るく尋ねた。

「ぼくを待っていてくれた、とか?」

「……いつ来るか分からないのに、そんな訳ないでしょ」

おちやらけに、ぎっくりと心に突き刺さる言葉が返される。そうだよなー、と項垂れたぼくの耳に「……けど」と前置きの言葉が届いた。「いつか来るとは、思っていたわ。……そして、あなたと話したいとも、思ってた」

「……ありがとう」

照れ隠しに、笑う。と、彼女は無表情でコートのポケットの中を探った。出てきたのは、ぼくの杖。

「……杖、取りに来たんでしょ」

差し出された杖を受け取った。指先で軽く回すと、手首の力のみで振り上げる。薄いリボン状の光を眺めた後「ありがとう」ともう一度眩いた。

「ねえ、もう一つ聞いてもいい?」

「……何？」

「ここで、何してたの？」

彼女は、しばらく無言で視線を宙に彷徨わせる。横顔を、ぼんやりと見つめた。

「……笑わない？」

「当たり前じゃん」

その聞き方が可愛らしくて、思わず笑った。彼女はむつと頬を膨らませてこちらを見たが、すぐに小さく俯いた。

「……クイリナスが、ここで死んだじゃない」

「……」

「……だから、祈ってた。だって、死んだ後に誰からも悲しまれないなんて、そんな悲しいこと、私は嫌なの」

「……うん」

「……私は、決して彼と親しい訳ではなかったわ。……でも、知っている。覚えてる。初めて会った時、頭を撫でてくれたこと。図書館で本を取ってくれたこと。……忘れない、忘れたくない、だって忘れたら、その人は永遠にいなくなっちゃう。私の元から、離れていっちゃうの」

「……」

「……ごめんなさい、私、何言ってるのか、自分でも分かってない」

「……いや、言いたいこと、分かるよ」

つまりは、死者への敬意の払い方。どんな人間でさえも、その死を悼む誰かが必要だという考え方。

そして、そんな考え方を確立する程、彼女は身近に『死』を見てきたのだろう。

「……じゃあさ、ぼくが死んだら、君は、祈ってくれる？」

薄い灰色の瞳が、見返した。

「……何それ、自殺予告？」

「違うって！」

「冗談よ」

くすりと彼女は微笑む。……全く、もう。

思わず、自分の首に手を当てた。襟と髪に隠れているが、まだ青く指の痕が残る首を、服の上から人差し指で撫でる。そつと、襟元を掻き抱いた。

「……祈って、あげる」

「……ありがとう」

その言葉一つで、心が救われた気がするのには、どうしてだろう。

——やっぱり、ぼくは。

君のことが、好きみたいだ。

「……君のこと、さ」

「……何？」

「その……名前で、呼んでいい？」

照れ臭くて、目を逸らした。早口で続ける。

「えつと、ぼく、友達はやっぱ名前で呼びたいと思うしき、ずっと苗字で呼び合うのってなんか他人行儀でヤじゃん、ってまあぼくらそんなに親しくないかもだけどさ、これから仲良くなりたいうっていうか……何というか……その……」

声がどンドン尻窄みに小さくなっていく。恥ずかしくて俯いた。明るい笑い声に、顔を上げる。

「……じゃあ、私も貴方のこと、名前で呼ぶべきなのかしら？」

「あい、いや、別につ、そんな……そんなつもりじゃ……」

悪戯っぽい笑顔で、彼女はぼくの顔を覗き込んできた。思わず視線を泳がせ、身を遠ざける。

「……アキ」

「……う」

「耳、真っ赤よ？」

慌てて手で耳を覆った。……うわ、熱い。冷まそうと指で耳を摘む。

「……アキ、可愛い」

「やめてよ……」

ああもう、ぼく、死ぬかもしんない。だってこんなに心臓バクバクしてるもん。

「……私の名前、呼んでくれるんでしょう？」

「……うー」

知らなかった。彼女ってこんな性格か。あ、いや、もう、彼女ではなくて……。

「……アクア、マリリン」

眩いた。と、彼女は頭を振って否定する。

「……アクア。親しい人は、皆そう呼ぶ」

……うわ。やばい。今、きゅんってきた。

「……アクア」

名前を呼ぶ、と、ふ、と嬉しそうに彼女は——アクアは、頬を緩めた。

「……ありがとうございます、アキ」

「え？」

「……なんでも、ないわ」

そして、すつとアクアは立ち上がる。パンパン、と軽くスカートを払うと、くるりと背を向けた。

「帰る、の？」

「……ええ」

ちよつとだけアクアは振り返り、笑顔を見せる。そして小さく手を振ると、出口へと歩いて行つた。彼女の姿が見えなくなるまで見送つてから、ぼくはため息をつく。天井を仰いだ。

「……なんで幣原秋を知ってたのか、聞き損ねたなあ」

でも、そんな些細なこと、どうだっていいか。

「……アクア」

口ずさんで、照れて笑う。

彼女に一目惚れして、丸一年。

今までずっと足踏みしてきた訳だけど、——ここまで来てやっと、ぼくは最初の一步を踏み出した。

……よね？　そういうことでいいよね？

第29話 灯

ホグワーツ特急から降りると、目眩がした。ホグワーツ全生徒の倍、三倍はある人、人、人の山。この中から両親を探し出さなきゃならないというのは、かなりの難題だ。

「それじゃ、私とセブはこっちだから。またね、秋！ 新学期で！」
「うん！ いい夏休みをー！」

リリーは大きく、セブルスは小さく手を振ると、二人は並んで歩いて行った。人垣に紛れるまでその姿を追った後、ぼくは静かに手を下ろす。

さて、両親は一体どこにいるのだろうか。辺りを見渡しながら、カートを押して人混みを掻き分ける。しかし、どこを見ても人だらけで、こんな場所で見つけられる訳がないという気もしてきた。

その時、ドンツと背中を押され思わずつんのめった。

「おっと、ごめん」
声に、振り返る。

「……あれ？」

『彼』——ジェームズ・ポッターは、目を瞬かせてぼくをじっと見つめた。……え、どうしてそんなにぼくを見ているの？ そう思いながらも言葉が出せない。ドキドキしながら、黙ってぼくも榛色の瞳を見返した。

「君は……」

ジェームズ・ポッターが口を開きかけた瞬間。

「おーい、ジェームズー！ 早く来いよ!!」

叫び声が、ぼくらに届く。

彼の注意が逸れた。音源の方に首を向け「今行くー！」と叫び返す。今だ、と瞬時に判断したぼくは、カートを引っ張り横つ飛びに移動すると、人混みを掻き分け雑踏へと紛れ込んだ。

「……はあ」

思わず、ため息を吐いていた。心臓の鼓動が痛いくらいに喧しい。彼のような、人を引き付けるような人は——怖い。

上手く言えないけれど……身体が竦んで、肩が強張って、上手く呼吸が出来なくなつて。

酷く、恥ずかしい気分になる。

「……………」

俯いて、カートを押しながら歩いた。周りの人の視線を感じる。ここは英国だから、見た目が日本人のぼくは物珍しいのだろう。母が英国人のため一応ハーフなのだが、どうも目立つ部分——髪とか目とか——は全て日本人である父から受け継いだようだ。……いや、別に嫌じゃないけどさ。

「秋っ!!」

聞き覚えのある声に、振り返つた。途端、暖かな温もりにぎゅっと抱きしめられる。慌てて、でも懐かしい香りに、恐る恐る呟いた。

「母…….さん?」

肯定の代わりに、母は更にぎゅっとぼくの身体を抱きしめる。痛かったけど、その痛さが涙腺を掠めた。涙を散らせて、ぼくは笑顔で囁いた。

「母さん」

母の背中を軽く叩く。母の肩越しに、父と目が合った。にっこりと笑うと、父もホツとしたような笑顔を返してくる。

「アキナ、通行の邪魔になるから、続きはまた後で。ね?」

「……………」

そろそろと母はぼくから離れると、薄手のブラウスの袖口で目元を拭う。そして、にっこりと微笑んだ。父も母の肩を抱くと、笑顔でぼくを見つめる。

「お帰りなさい、秋」

ぼくも、負けじと笑った。

「ただいまっ!!」

さあ、日本に帰ろうか。



「馬鹿か貴様は」

スネイプ教授の声に、思わず身を竦ませる。苦笑いをして、そつと見上げた。

「すみません」

「貴様は馬鹿だ」

「……すみません……」

言い返す言葉もございません。

夏休みに入る前日、テスト結果が発表されてわーきゃー言っているまさにその時、ぼくは一人スネイプ教授から説教を食らっていた。

理由は簡単。

「幣原はこんなミスはしなかったぞ」

「……はい……」

苛立ったように教授は、ぼくのテスト用紙を指先で叩く。その叩いたところが狙い澄ましたように点数の上で、思わず目を逸らして居住まいを正した。勝手に苦笑いが零れる。

「しかもだ。よりにもよって、よりにもよって！ 魔法薬学！ 貴様是我輩に恨みでもあるのかね？ 大体その顔は何だ、何でそんなに幣原に似ているのだ。幣原はこんな阿呆ではない」

「おっしやる通りで……」

まあね、確かにぼくは幣原秋にそっくりですよ、グリソツですよ。そんなぼくがこんな、途中から解答欄一つずらすなんて馬鹿な真似をしたのが気に食わないってことくらい分かってますよ。

でもさ、でもさあ！

「そ、それでも二位だったんだし……」

ほう、とスネイプ教授の目が細くなった。口元に薄気味悪い笑みを浮かべてこちらを見る。思わずすすつと顔を背けた。

「確か、一位はグレンジャーだったな。グリフィンドールなんか一位を取られおって、全く」

「あれ？ でも教授、ジエームズ・ポッター父に負けてませんでしたっけ「黙れ」……すみません」

肩を竦める。教授は額に手を当てると、長々とため息を吐いた。神

経質そうに人差し指を軽く動かす。

「我輩でもな、実力がなくてこの点数であれば文句は言わん。……いや、文句は言うが厭味は言わん」

日和つたな……。

「だがな、実際に能力があるにも関わらずそれを使おうとしない奴は、虫酸が走る」

「……………」

「グレンジャーに対しても、他の奴に対しても、失礼な行いであることに変わりない」

「……すみません」

分かったか、と、スネイプ教授は静かに告げる。その言い方が殊更に教師っぽくて、幣原秋の時代とのギャップを感じさせた。

年月の流れを、変わることなく進み続ける時の存在を。

それが——ぼくには、ちよつと切ない。

「アキ・ポッター」

「あ……はい」

思わず居住まいを正す。と、スネイプ教授は微かに笑った、ようだった。

「次は、期待しているぞ」

「……はい」

——ああ、もう。

反則だろ、そんなの。

「もう用も済んだだろう。帰りたまえ」

「……はい。失礼しました」

一礼して、扉に手を掛ける。

扉が閉まる直前に、教授が掛けた言葉。

慌てて、振り返った。ドアノブを掴み回すも、既に鍵が掛けられているのかびくともしない。

「……畜生、意趣返しだよ」

『ありがとう』

素直な、一言の、想いが詰まった言葉。

小さく笑った。

「いい休暇を、教授」



マグル界へ帰る汽車の中は、つかの間の楽しみの時間だ。家族に久しぶりに会えるということで、誰もが浮足立っている。破裂音や爆発音が聞こえる中（フレッドとジョージなんだろうな、犯人）、ぼくは羊皮紙に羽根ペンを走らせていた。

「聞くけどさ、アキ、一体何やってんの？ そろそろ着替えないと、駅に着いちやうよ」

「待つてよ、もうちよつとだから」

肩を竦めるハリーを横目に、ぼくは羊皮紙を掲げた。スペルミスがないかを丁寧に確認すると、くるりと丸め旅行カバンの中に詰め込む。そして大急ぎでローブを脱いだ。

「ねえ、そろそろ話してよ。何やってたの？」

「完成させたら見せるよ、一番初めにね！」

にっと笑顔を見せると、ハリーは呆れたように小さく笑った。そして窓の外に視線を移す。

マグルの服を引つ張り出し、そこでしばし悩んだ。正直……正直なところ、このダボダボな感じはやっぱいただけじゃない。ダドリーからのお下がりの服は、半袖の筈なのにぼくが着ると七分丈だ。見た目が悪いんだよな。これでぼくが少しでもたくましくなっていたならばまた話も違ってくるのだが、残念ながら入学当初と比べても微々たる数値しか変化していない。……どうしてだろう。既に同級生の女子の殆どよりも背が低いというのに、成長もしていないとは空しい。これでアクアにも抜かれてみる、泣くぞぼくは。

もういいか、と諦めて、ぼくはダドリーのお下がりの服に袖を通した。袖のところを三回折り返して、上からチェックのジャケットを羽織る。そしてハリーの前で一回転した。

「どう？ 変じゃない？」

「んー、大丈夫なんじゃないの?」

「かつこいい?」

「かつこいいかつこいい」

「イカしてる?」

「それは微妙」

ふふつと笑った。とそこでタイミングよく、ハーマイオニーとロンが戻って来る。コンパートメントの座席にどきっともたれ掛かって、ハーマイオニーが困った口調で言った。

「アキ、またアリスとマルフォイが喧嘩しているみたい。車掌さんや他の生徒の迷惑になるから、早く止めてあげて。彼らを止められるの、アキしかないのよ」

またか、と思わず呆れた。この二人は本当に仲が悪い。アリスを放っておけばいいのに、ドラコはいちいち絡むし、アリスも他の奴に言われれば笑ってスルー出来ることでも、ドラコに言われると癪に障るらしい。困ったものだ。

「分かったよ。……でも、君がケンカの仲裁しないのは珍しいね」

「もちろん、しようとしたわ。でもロンが……」

恨みがましい目で、ハーマイオニーはロンを睨む。ロンは手を顔の前で大きく振った。

「いくらハーマイオニーでも無理だよ、あの二人に割って入ろうだなんて! 一体どんな巻き添え食うか!」

恐ろしいとでも言うように、ロンは身体を震わせた。やれやれ。

「分かったよ、行ってくる。全く、あの二人も飽きないね……」

立ち上がる。とそこで、コンパートメントの扉ががらりと音を立てて開いた。立っていたのは、小さな少女。思わず心臓が跳ねる。動揺を顔に出さないように注意しつつ、笑顔を浮かべた。

「……あ……アキ」

「うん、分かってる」

——ハリーしかないなかったぼくの世界は、この一年で格段に広がった。

アリス・フェイスナー。ロンにハーマイオニー。ロンの兄のフレッド

にジョージやパーシー。ドラコに、そして、一目惚れした彼女とも仲良くなれた。

そして——夢の中の住人だった、幣原秋のこと。スネイプ教授や、数え切れない程の沢山の人達。

沢山のことを知った。

そして——痛みも。

激しい怒りを向けられた。

本気の瞳に、殺されかかった。

憧れの人の、真実を知った。

まあ、全部を引つくるめて——我ながら、いい一年だったんじゃないのかな。

ぼくは、少しは何か変わったのだろうか。

この一年、成長出来たのだろうか。

分からない、分からないけど。

「行こうか、アクア」

いつかこの子を守るような、いいや、もつと沢山の大切なものを守れるような、そんな人になりたいと。

その日の空は、どこまでも青く澄み切っていて。

天国からもさぞかし眺めが良いことでしょう。

見ていて下さい、憧れの人。

あなたが捨てた世界は、こんなにまばゆいものなのですよ。
空に、眩いた。

秘密の部屋編

第1話 夏休み

「ねえ、どうしてぼくらは日本に住んでるの?」

ぼくの問い掛けに、両親は目を瞬かせた。

ホグワーツ夏季休暇である今、ぼくは英国を離れ、住み慣れた母国、日本のマイ・ハウスへと舞い戻っていた。やっぱり自分の家ほど安らげる場所はないし、日本語ってやっぱり素敵だと思うし、懐かしの友人達とも会えるし……で、別段不便はない。

ないのだが。

「でもさ、やっぱり英国に住んでた方が楽なんじゃない? 魔法界一の大通り、ダイアゴン横丁だって、唯一の銀行であるグリンゴッツだって、それに、父さんと母さんの母校のホグワーツだってある。どう考えても、日本ここよりも英国むこうの方が便利だと思っただけど」

ぼくの言葉を、父は難しい顔をして聞いている。と、母はぽつりと呟いた。

「理屈っぽくなったねえ、秋」

「なに?」

思わずたじろぐ。

母の言葉は率直で真っ直ぐで、それが心地好くはあるのだけれども、たまにくじけそうになる。

「理由……は、ないことは……ない」

言いづらそうに父は口ごもる。

父がはつきりと物事を言わないのは珍しく、ぼくは首を傾げて父を注視した。

と、そこで母が助け舟を出す。

「日本は直さんの……秋のお父さんの実家だからねー。お母さんも日本、住んでみたかったし、丁度よかったんだよ。秋は日本、嫌い?」

「……その聞き方は卑怯だよ、母さん」

目を伏せた。

嫌いか、なんて、問い掛け自体が——卑怯だ。
嫌いなんで、言えるはずがないじゃないか。

いつの間にか論点をすり替えられた。

その手際の鮮やかさに今までごまかされてきたものが、今のぼくには知覚出来る。

「へえ……子供って、一年見ない間にここまで成長するものなんだね。知ってた？ 直さん」

「秋はもともと、凄く頭がいい子だからね。一年で英会話を習得するだなんて、並の子に出来ることじゃない。さすが僕達の子供だよ」

父は母の肩に手を回した。母は父を振り返る。

一刹那、二人の視線が交差した。

母は微笑を浮かべる。そしてぼくに向き直った。

今の一瞬間なんてなかったかのような笑顔だった。

「ホントのこと言うとね、お母さんとお父さんは、お母さんの実家から絶縁されてるんだ。だから、お母さんの実家がある英国には、家を構えることが出来なかったんだよ」

「アキナそれ普通言う!?! そんなにさりと云っちゃうの!?! 僕にとってはそれ、すごく重たい過去なんだけど!!」

「えー、まあいずれは知ることなんだし、いいじゃない。ねー秋?」

ねー、と母は、父を尻目にぼくに向かって笑い掛ける。その少女のような笑顔に、困ってぼくは苦笑いを浮かべた。

「……え、というか、え? ……絶縁? 何で?」

「んーと、それはねー」

笑顔で話し出そうとする母の口を、父が慌てて封じる。

「よーし、ごめんなーアキナ、僕を恨むなよー……一人息子にこんな黒歴史知られてたまるか……っ、いいか秋、父さんのことを好きでいたいなら聞くなっ、頼 む か ら……!」

父のここまで必死な瞳は初めて見た。思わず引く。そして、ここは深入りしちや駄目なんだと理解する。

「わ……分かった……」

「さすが我が息子!」

ぐっ、と父は親指を立てる。
ぼくは思わず脱力して、ため息をついた。

どうしようもないくらいに子供で、何も出来なかったぼくは、気付くことが出来なかつたんだ。

両親が、ぼくを守るために必死で、戦っていてくれたことに。何もかも、気付いた時には、全部、取り返しがつかなかった。

もし——もしこの時、ぼくがもっと聡明で、人の機敏に聴く、物事に敏感だったなら——物語はまた、違っていたのだろうか。

後悔は、尽きない。



プライベート通り4番地の最近の朝は、賑やかだ。

何故かって？ ぼくとハリーの頭上に、今日もまたヘッドウイグの鳴き声で起こされてしまった、我が敬愛なるおじさんの雷が炸裂するからさ。

「今週に入って三度目だぞ！ あのふくろうめを黙らせられないなら、始末してしまえ！」

おじさんの怒鳴り声。うん、もう日常。

むしろもう、おじさんの声をBGMにトーストをかじるくらいの余裕だつてある。

「うんざりしてるんだよ。いつも外を飛び回っていたんだもの」
いつも通りのハリーの言い訳。

肩を竦めると若干演技気味に「夜にちよつとでも外に放してあげられたらいいんだけど……」と付け加えることも忘れない。

「わしがそんなまぬけに見えるか？ あのふくろうめを外に出してみろ。どうなるか目に見えておるわ」

バーノンおじさんは低く唸る。口ひげの端の黄色いのは、もしかして卵の黄身だろうか。指摘した方がいいのかな、いまいちよく分からない。

「……一体どうなるんだろうね」

ぼくの眩きは、しかしダドリーの長く大きいげっぷによって掻き消された。

ナイフとフォークをカチャカチャさせながら「もつとベーコンが欲しいよ」と催促する。今更ながら、食事マナーって大切なんだなと実感した。

そういえば、ぼくとハリーは食事マナーだけでなく生活に関わる殆ど全ての事柄に関して、厳しく（これ婉曲表現ね）しつけてもらっている。過程はともかくとして、結果だけ見れば自分の実感以上にしっかりしている自分がいる。感謝しない訳にはいかない。

思えば、ホグワーツの生徒でマナーとか何やらしつかりしてない人っていない——いや、少ない。

改めて、ホグワーツって名門校なんだよなって実感する。いいところの坊ちゃん嬢ちゃんも多いし、全体のレベルも引き上げられているのかな。

ドラコしかり、彼女——アクアしかり、アリスしかり——アリス？

そういえば、ぼくはアリスの家族について、全然何も知らない。普通一年も一緒にいたら、いくら無口な奴だってそれなりに知れてくるものなのに。

家が嫌いだ——いつだったか、それは聞いた。

では、一体何処が嫌いなのか？

家族か、家柄か、血統か——はたまた、そのいずれでもないか。アリスは何も話してくれない。

自分にも他人にも無関心で無頓着なアリスの、殆ど唯一とも呼ぶべき、激しい感情の源。

別に、他人の秘密を暴きたいわけじゃない。

でも——なんだろうな。欲求不満にも似た感情が蟠る。

この気持ちに名前をつけてみるとすれば、それは疎外感。そして、幾許かの好奇心、知識欲。

——格好悪いな、ぼく。

アリスが言いたくないのならそれでいい、って、どうして思えないんだろう。

難しいな、人生って。

「お前に言ったはずだな？ この家の中で『ま』のつく言葉を言ったらどうなるか!!」

おじさんの雷に、跳びはねそうなくらい驚いた。すっかり思考の海に沈んでいたらしい。

「でも、僕……」

「ダドリーを脅すとは、ようもやってくれたもんだ!!」

どうやらおじさんをハリリーが怒らせてしまったようだ。いや、おじさんだけじゃないな。おばさんもダドリーも、険を含んだ目でハリリーを見ている。ダドリーなんて、何故か椅子から落っちやけてるし。

「僕、ただ——」

「言ったはずだぞ！ この屋根の下でお前がまともじゃないことを口にするのは、このわしが許さん!!」

「……………」

ぼくは改めて、おじさんの顔を眺めた。

ぼつりとハリリーは呟く。

「分かったよ。分かってるんだ……」

その声に、心の奥がざわりと騒いだ。目を閉じ、小さく嘆息する。まともじゃない、か。

それは——ぼくらが悪いの、かな。

この家庭に異物を持ち込んでしまった、ぼくらが。

「さて、みんなも知っての通り、今日は非常に大切な日だ」

おじさんの声に、顔を上げた。目を瞬かせる。

「今日こそ、わが人生最大の商談が成立するかもしれん」

がっかりしたようにハリリーが俯いた。

思えば今日は7月31日——ぼくらの誕生日だ。期待したのだから、そしてそれがあっさり裏切られた——そんな目をしている。

諦め切れてしまえば楽なんだけど——保護者に忘れられるというのは、やっぱり辛い。

今日は確か、バーノンおじさんの仕事の接待パーティーがある日だった。おじさんはそのことを言ってるのか。

「そこで、もう一度みんなで手順を復習しようと思う。八時に全員位置につく。ペチュニア、お前はどの位置だね?」

「応接間に。お客様を丁寧に迎えよう、待機してます」

おばさんが即座に答える。

「よし、よし。ダドリーは?」

「玄関のドアを開けるために待ってるんだ」

ダドリーが作り笑いを浮かべて答えた。

「メイソンさん、奥様、コートをお預かりいたしましたでしょうか?」

「お客様はダドリーに夢中になるわ!」

いやねえよ、人選ミスだろ! とぼくは心の中で叫ぶ。

……上手くいったとしても夢中にはならないよなあ。やっぱりそれなりのイケメンじゃないと。

そう考えるとハリーって悪くない顔してると思う。ひいき目入ってるかもだけど、さ。

服装さえきちんと仕立てりゃ、そこらの子には負けないものを持つてるのに。おじさんおばさん達はそこが分かってない。

……え、ぼく? 女の子みたい、とよく言われますが、何か。つまりはイケメンからはほど遠いと。……泣いていい?

とぼくがまた詰まらぬ思考に脳みそを浸していると、突然バーノンおじさんはぼくとハリーに向き直り、ぼくらをねめつけた。

「それで、お前は?」

「僕は自分の部屋にいて、物音を立てない。いないふりをする」

ハリーが感情のこもらない一本調子で答える。おじさんは、まるで間違えた方がよかったと言わんばかりの嫌みったらしい口調で「その通りだ」と言った。

「わしがお客を応接間へと案内して、そこで、ペチュニア、お前を紹介し、客人に飲み物をお注ぎする。8時15分——」

「私がお食事にいたしますようと言う」

とペチュニアおばさん。

「そこで、ダドリーの台詞は？」

「奥様、食堂へご案内させていただけますか？」

ダドリーがたっぷりと脂肪のついた腕を女性に差し出す仕草をした。

「なんて可愛い私の完璧なジェントルマン！」

言い過ぎでしょ。感極まり過ぎだつてば。

ふと、アリスの顔が浮かんだ。

そういや、目つきの悪さのせいで目立たないけど、アリスもなかなか整った顔してる。あれで髪をきちんと整えて、かつちりした服着て、笑顔の一つでも浮かべたら、絶っ対かっこいい。

だいたいアリスは何事にも無頓着過ぎるんだ。あのだらし無さを『着崩し』まで引き上げてんのは、ひとえに自分の顔のおかげだってこと、もう少し自覚して欲しい。

「それで、お前は？」

くるりとおじさんがぼくらを振り返った。

「自分の部屋にいて、物音を立てない。いないふりをする」

感情のこもらない、平坦なハリーの言葉。

「それでよし。さて、夕食の席で気のきいたお世辞の一つも言いたい。ペチュニア、何かあるかな？」

「バーノンから聞きましたわ。メイソンさんは素晴らしいゴルファーでいらっしやるのか……まあ、奥様、その素敵な御召し物は、いったいどこでお求めになりましたの……」

「完璧だ……ダドリー？」

「こんなのどうかな、『学校で尊敬する人物について作文を書くことになって、メイソンさん、ぼく、あなたのことを書きました』」

思わず吹き出しかけた。慌てて手で顔を覆い、肩を震わせるのみに留める。

ハリーなんてテーブルの下に潜り込んで笑い転げている。ムカついたので一発蹴ってやった。

「それで、小僧、お前は？」

ハリーの姿が見えなかったためか（当たり前だ、テーブルの下にい

るんだもの）おじさんは、今度はぼくに質問を振ってきた。

小さく肩を竦めて答える。

「ぼくらは自分の部屋にいて、物音を立てない。いないふりをする」
「まったくもって、その通りにしろ」

おじさんが凄んだ。

ようやくとハリーがテーブルの下からはい出てくる。

「メイソンご夫妻はお前らのことを何もご存知ないし、知らんままでよい。夕食が終わったら、ペチュニアや、お前はメイソン夫人をご案内して応接間に戻り、コーヒーを差し上げる。わしは話題をドリルの方にもっていく。運がよければ、『十時のニュース』が始まる前に、商談成立で署名、捺印しておるな。明日の今ごろは買い物だ。マジョルカ島の別荘をな」

バーノンおじさんは上機嫌だ。別荘か、これでうちもセレブの仲間入りって訳か。

まあ別荘持とうが、この家でのぼくとハリーの待遇が良くなるワケないんだからなあ。

「よし、と——わしは街へ行って、わしとダドリーのディナー・ジャケツトを取ってくる。それで、お前らは……お婆さんの掃除の邪魔をするな」

ぼくは頷く。

と、ハリーが黙って席を立った。そのままドアへと歩いて行く。

ぼくは慌ててその後を追った。

「ハリーー」

声を掛けるも、ハリーは振り返らない。そのまま裏口を開けると、庭に踏み出す。

その背中に、手を伸ばした。

「アキ」

耳元で声がある。抱き留められたのだ、と気付くまでに、時間が掛かった。

風が、青々と茂る芝生を掠める。ハリーの肩越しに、まばゆいまでの青空が映えた。ああ、夏だ、と実感する。

世界が反転した。ぐるりと上下が、空の青から芝生の緑へと視界が入れ替わる。

背中から腰に掛け、夏の日差しで温もった草が触れた。耳元や首元に、草独特のさわさわしたあの感触がこそばゆくて、思わず肩を竦める。

じりじりと肌が焼かれる感覚。眩しくって、目が開けられない。

「昔、こうやってよく二人で遊んだの、覚えてる？」

ハリーの声。口元を緩めて、ぼくは頷いた。

「すんごく、久しぶりな気がするんだ。アキと一緒にいるのが」

「夏休み初日も、同じことずつと言ってたよ」

ハリーが笑う。つられて、ぼくも笑った。

暖かい。と、感じる。ああ、幸せなんだって思える。

ハリーが隣にいる、この現実を守るためなら——ぼくは何だってしようじゃないか。

そう、思える。

本当は兄弟ではないのかもしれないと、そう考えたことは何度もあった。

でも、もう、そんなのどうだっていい。

血の繋がりなんて関係ない。誰が何と言おうと、ぼくらは真の兄弟だ。

「アキ、君がいなかったらと思うと、ぞつとするよ。ここの生活に堪えられる気がしない」

「さあてね？ ハリーのことだから、それでも何とか上手くやっついてくんじゃない？」

「酷いな、アキは」

ハリーが上半身を起こした。服や髪に付いた枯れ草をパタパタと払う姿を、ぼくはぼんやりと見つめる。

「でも、アキがいてよかった、って思うのは本心。今までもずっと一緒に、これからもずっと一緒にいる、兄弟だもんね。君がいるから、魔法界というものが夢じゃなく、現実を起こったことだって、確信できるんだ。惜しむらくは、何で同じ寮に入れなかったのかってこと」

「なかなかずつと根に持つよね、それ」

「当然じゃん。僕凄く悔やんでるからね。もし組分けでアキの方が早かったら、僕はどんな手を使ってでもレイブンクローに潜り込んだよ」

どんな手でもって、おいハリー。でも本当に、奴は文字通り『どんな手でも』使ってきたかねない。

と、その時ハリーが弾かれたように立ち上がった。不思議に思っただけでも半身を起こし、ハリーを見上げる。

「どうしたの？」

「なんか今、生け垣から誰かの目が見えた……」

「目？」

改めて、ハリーの視線の先を辿った。眉を寄せて注視する。

「何も見えないけど」

「……………」

納得いかなそうに、ハリーは目を眇めて生け垣を睨んだ。

と、芝生の向こうから人を小馬鹿にしたような声が聞こえてくる。間もなく、ダドリーが姿を現した。

「今日が何の日か、知ってるぜ」

ダドリーが歌うように節をつけながら口ずさむ。ハリーはちらりとダドリーを見て、ため息をついて目を細めた。

「そりゃよかった。やっと曜日がわかるようになったってわけだ」

口を開けば、出てくるのは強烈な皮肉。ぼくは小さく肩を竦めると、二人を見比べた。

しかしダドリーは、ハリーの皮肉をもともしない（そもそも皮肉と理解していないだけかもしれないが）。

「今日はお前らの誕生日だろ」

ハリーの肩が、小さく動いた。臨戦体制に入るかのごとく、重心が下がる。

「カードが一枚も来ないのか？ あの変てこりんな学校でお前らは友達もできなかったのかい？」

「僕らの学校のこと口にするなんて、君の母親には聞かれない方がいい

いだろうな」

冷ややかにハリーが言う。ダドリーはズボンをずり上げながら「なんで生け垣なんか見つめてたんだ？」と問うた。

「あそこに火を放つにはどんな呪文が一番いいか考えてたのさ」

「ハリー！」

慌ててハリーを窘める。ダドリーは怯えたように後ろに下がった。

「そ、そんなこと、できるはずない——パパがお前らに、ま、魔法なんて使うなって言ったんだ——パパがこの家から放り出すって言った——そしたら、お前らなんかどこも行くところがないんだ——お前らを引き取る友達だって一人もいないんだ——」

「デマカセー！　ゴマカセー！」

ダドリーの声を遮って、ハリーが激しい声を上げる。

「インチキー、トンチキーツ！　……」

手を思いつきり引つ張れば、バランスを崩したハリーは芝生にそのまま尻餅をついた。その隙を逃さず、ダドリーは母親に助けを求めながら走って行く。

「馬鹿っ、なんでわざわざ……」

と、ハリーが無言で抱き着いてきたため、ぼくの言葉はそこで止まった。ぼくの肩を抱く力の強さを感じて、ハリーの心の内を想像する。そして黙って、ハリーの髪を撫でた。

「……大丈夫だよ、ハリー」

「……だって……ロンもハーマイオニーからも、一通も手紙が来ないんだ……送るって、約束したのに……」

ぼくを抱く兄の、ぼくよりも広くて大きい、でもまだまだ華奢で頼りない背中を、見つめる。

「何かきつと、手違いがあったんだよ。それに、手紙なんて来なくてもし、友達は友達だよ。二人とも、実はすごい筆不精なのかもよ？」

あははっ、アリスが手紙なんて書くと思う？　ないでしょ！」

ハリーの背中に、腕を回した。

「友達ってさ、常に側にいなきゃいけないもん？　いつつも連絡取り合ってなきゃいけない？　違うでしょ。友達っていうのはさ、たとえ

離れていても、長い年月が経つても、ずうっとお互いを思い合える、そんな存在じゃない？」

そう、その通りだ。

自分の言葉に、納得する。

「……じゃあ、僕には友達がいらないんだ」

「馬鹿」

口調を強める。

「君が友達だと思った人達って、そんな人で無し？ 違うでしょ。その言葉は自虐だけじゃない、君を友人だって思ってくれてる人に対しても、失礼だよ」

腕に、そうっと力を込めた。

小さく、ハリーが何事かを呟く。聞き取れなくて、思わず聞き返した。

「……ありがとう、アキ」

小さな小さな、その声に――

「……どういたしました」

照れ臭くなつて、思わずぼくは身体を離れた。

ハリーがダドリーをからかった代償は、高かった。

フライパンをかわし、窓を拭き、車を洗い、芝を刈り、花壇を綺麗にし、バラの枝を整え、水遣りをし、ガーデン・ベンチのペンキ塗りをした――その部分は描写してもつまらないものだし、割愛させてもらう。

重要なのは、この次。

豪華な夕食が並ぶ横でみすばらしい食事を取り、早々に部屋へと置いたてられたぼくたちが見たものは。

今年一年の波乱を予感させる、小さな使者の姿だった。

第2話 届かない祈り

心が、たゆたう。

安心感のある心地良さは、例えるなら子供の頃離さなかつた柔らかな毛布。大好きだったあの毛布を、一体いつ手放したんだろう。記憶が遠い。

そして——微かに歌が聞こえる。

何処か懐かしい、異国の歌。何処のものかも知れない、遠い歌。

それから？——淡い匂い。

シャボンの泡？ 卵焼き？——否。そんなものでは例えられない。

でも多分、例えるならば花の香り。淡く儂く、されど凜と麗しい——
輪花。

——母さんの匂い。

何かに導かれるように、ぼくは静かに目を開けた。

「……母さん」

歌が止む。

柔らかく微笑んで、母はぼくの顔を覗き込んできた。

澄んだ瞳と、目が合う。

「ごめんね。起こしちゃった？」

大丈夫だよ、と、ぼくは答えた。いつもより母と距離が近いのは、きつと母に膝枕されているからだ。

「何の歌なの？」

「不死鳥の歌だよ。輪廻の歌。巡り廻る、運命の輪の歌」

はあ、と、よく分からないままにぼくは生返事を返した。

母は、何と言うか……少し、変わったっている。

いつまでも少女のままであるというか……大人になりきれてないと言うか——否、その表現では知能の遅れを彷彿とさせる。

違う、違うのだ。

決して頭が悪い訳じゃない。何かが出来ない訳じゃない。

だから——一番当て嵌まる言葉は、やっぱり『マイペース』なのだ

ろう。

ものの捉え方がちよつと人とは違っているだけで。

「どうしたの？ 秋」

ぼうつと母の顔を見つめていたらしい。母ははにかんだように笑うと、首を傾げた。

「……母さんは」

「ん？」

「母さんは、英国出身なんだよね」

言葉が軽い。まだ——眠い。

「そうだよ？」

「……お父さんとかお母さんに、会いたくないの？」

しばらくの沈黙。寝起きでなかったら違和感を感じたであろう無言の間を、しかしぼくは感じとることが出来なかった。

「お母さんの家族は、秋と直さんの二人で充分なんだよ」

やがて返ってきた答えに、深く考えることなくぼくは頷いた。

やがて、とろとろと襲ってくる眠気。

「お休み——秋」

大好きだよ。

そう言つて、母はぼくの額にキスを落とす。ぼくは小さく微笑んで、ゆっくりと目を閉じた。

「……あと、何回……」

意識が暗転する直前に感じていたものは。

震えた声と。

泣き出しそうに歪む顔。

そして、あくまでも優しくぼくの頭を撫で続ける、母の暖かい指先だった。

ごめんね。

何も話してあげられなくて、ごめんね。

いつか、ちゃんと話すからね。

だから、それまで——どうかお願い、無事でいて。



「……っ！」

咄嗟にぼくらは後ずさり、ドアに背をつけた。どちらともなく手を握り合う。階下から、シナリオ通りのダドリーの台詞が聞こえてきた。

生き物——だった。生き物としか表現出来ない。

長い耳に大きな、すごく大きな緑の目。背丈はぼくの胸くらいか。ボロ布を纏い、ベッドの上に立っている。手足は棒みたいに細い。

こんな生き物、幣原秋の記憶を探ってみたところでお目に掛かったこともない。

その生き物はベッドから床に飛び降りて、床に額がつくくらい深々とお辞儀をした。

ハリーがおずおずと声を掛ける。

「あ——こんばんは」

「ハリー・ポッター！」

甲高い声に、思わず肩を竦めた。

絶対今の、下まで聞こえた。

「ドビーめはずつとあなた様にお目にかかりたかった……とつても光栄です……」

「あ、ありがとう」

その生き物は——どうやらドビーという名前らしい——ハリーに向かつてもう一度低くお辞儀をした。

そしてびよこんとぼくに向き直り、そのゴルフボールみたいな目をキラキラと瞬かせて、笑みを浮かべた。

「そして……アキ・ポッター様。お噂はかねがね聞いておりました……お会い出来て身に余る光栄です」

「ちよっ、ちよっと、何でぼくの名前を知ってるのさ？」

ぼくはハリーのような有名人ではない。ましてハリーに全然似てもないから、兄弟だつて見ただけで分かる人もいない。そして当然、

ぼくにこんな知り合いはいない。

ドビーはぼくに対しても頭を下げると、まるで尊敬するものを見るかのようなキラキラした瞳でぼくを見上げる。すごく居心地が悪い。「アキ・ポッター様は、自分がどのくらい有名なのか、全然ご存知ないのです。少なくともドビーめは、あなた様の名を10年前から知っております」

「……はあ、どうも」

それはそれは。

ハリーはぼくの手を引つ張ったまま壁伝いに机の方ににじり寄ると、崩れるように椅子に腰掛けた。

ぼくも机の上に座ると（行儀悪いけど、これ癖だったりする）足を軽くぶらぶらさせる。

ちなみにぼくが机に座ったせいで、机の近くに置いている鳥かごの中で眠っていたヘドウィグがぱつと目を覚ましぼくにうたぐり深い目を向けた。切ない。

「君はだーれ？」

ハリーが尋ねる。今だハリーはぼくの手を握ったままだ。

「ドビーめにございます。ドビーと呼び捨てして下さい。『屋敷しもべ妖精』のドビーです」

「あ——そうなの。あの——気を悪くしないで欲しいんだけど、でも——僕らの部屋に今『屋敷しもべ妖精』がいると、とっても都合が悪いんだ……あ、知り合いになれて嬉しくないって訳じゃないんだよ。だけどあの、何か用事があってここに来たの？」

「はい、そうでございませうとも。ドビーめは申し上げたいことがあって参りました……複雑でございまして……ドビーめは一体何から話してよいやら……」

ドビーが困ったようにうなだれる。間を持たせるため、ハリーはベッドを指差すと「座ってね」と言った。

途端、ドビーはわつと泣き出した。思わずドアがある場所に目を向ける。

階下の雰囲気が一瞬張り詰めた、ような気がした。

「す——座ってなんて！　これまで一度も……一度だって……」
「ごめんね、気に障ることを言うつもりはなかったんだけど」

ハリーが囁く。と、ドビーは涙に濡れた顔を上げた。

「このドビーめの気に障るですって！　ドビーめはこれまでたったの一度も、魔法使いから座ってなんて言われたことがございません——まるで対等みたいにな——」

なんだから、ハリーが何か言うたびに墓穴掘ってる気がする。

ベッドに何とかドビーを座らせると、腕を組む。小さくなった屋敷しもべ妖精を見ていると、なんだか切ない。

「君は礼儀正しい魔法使いに、あんまり会わなかったんだね」

ハリーが同情を込めて尋ねた。ドビーはこっくり頷いて、そして唐突に「ドビーは悪い子！　ドビーは悪い子！」と叫びながら激しく窓に頭を打ち付け始める。

びっくりして、慌ててハリーと二人がかりでドビーを止めた。

「一体どうしたの？」

ぼくが尋ねると、ドビーは少し目を回しながら答えた。

「ドビーめは自分でお仕置きをしなければならぬのです。自分の家族の悪口を言いかけたので……」

「君の家族って？」

ハリーが興味津々といった顔で尋ねた。

「ドビーめがお仕えしているご主人様、魔法使いの家族でございます……ドビーは屋敷しもべです——一つの屋敷、一つの家族に一生お仕えする運命なのです……」

「その家族は君がここに來ること知ってるの？」

「滅相もない……ドビーめはこうしてお目にかかりに参りましたことで、きびしく自分をお仕置きしないとイケないのです。ドビーめはオーブンの蓋で両耳をバツチンしないとイケないのです。ご主人様にバレたら、もう……」

ドビーは身体を抱くと身を震わせた。ぼくも想像して背筋が寒くなる。

「酷い……」

思わず、呟いていた。ハリーも同意見のようで、ぼくの言葉に小さく頷くと再びドビーに向き直り「君を助けてあげられないのかな？ 僕らに何か出来る？」と尋ねる。

しかしこの質問は軽率だった。ドビーがまたしても感謝の雨を降らせたのだ。

「お願いだから、頼むから静かにして。おじさんたちが聞きつけたら、君がここにいたことが知れたら……」

ハリーが必死で囁く。と、ドビーは潤んだ目をぼくらに向けた。

「ハリー！ポッターが『何かできないか』って、ドビーめに聞いてくださった……アキ・ポッターさんも、あなた様方が偉大なお方々だとは聞いておりましたが、こんなにお優しい方々だとは知りませんでした」

「誰に聞いたの、それ？」

ぼくの声に、ドビーは肩を大きく震わせる。

「誰がぼくらの話をしてるの？ それって、君のご主人様だよね？」

……誰なの？」

タンツとぼくは机から下りると、一步前に踏み出した。ドビーは怯えるように一步下がる。

「ああ、アキ・ポッター様。お聞きにならないでください。ドビーめはドビーの意味でここに参ったのです。ご主人様は関係ございません……」

「じゃ、誰かは聞かない。……でも、何しに来たの？」

「アキ！」

ハリーがぼくの肩を掴む。ぼくはハリーを振り返った。ハリーが何か言わんとする前に、強い口調で言う。

「嫌な予感、しないかい？」

「……え？」

「何かが起こる前兆って言えばいい？ とにかく、何かが起きるんだ。そして、それは——ぼくたちの身に、容赦なく降り懸かってくる」

ハリーは黙り込んで、ぼくの顔をじつと見つめた。

ぼくも迷わず見つめ返す。

「ハリー・ポッターはホグワーツに戻ってはなりません」

ドビーの声が、部屋に広がった。思わずはっとして、ドビーに視線を向ける。

「な、なんて言ったの？」

ハリーが、呆然と呟いた。

「僕、だって、戻らなきゃ——九月一日に新学期が始まるんだ。それがなきゃ僕、耐えられないよ。僕の居場所はアキの隣で、そしてホグワーツなんだ」

ドビーは激しく首を振る。

「ハリー・ポッターは安全な場所にはいないといけません。ハリー・ポッターがホグワーツに戻れば、死ぬほど危険でございます」

「どうして？」

ドビーは囁いた。

「罨です、ハリー・ポッター。今学期、ホグワーツで世にも恐ろしいことが起こるよう仕掛けられた罨でございます。ドビーめはそのことを何ヶ月も前から知っておりました。ハリー・ポッターは危険に身を曝してはいけません。ハリー・ポッターはあまりにも大切なお方です！」

「僕だって、自分の身以上にアキが大切だ！　なのに君の話では、ここに留まらないといけないのは僕一人！　何でだよ！」

ハリーが叫ぶ。

ドビーと目が合った。継るような目だった。

「貴方さまなら、なんとか止めていただけたらと思っただけです」

ドビーが囁く。

「アキ様はあのお方にもひけを取らない魔力の持ち主でございます。ドビーめは期待したのです。貴方様なら——あの連鎖を止められると」

「……どういう意味？」

ぼくも囁き返した。と、前触れもなくドビーは叫び声を上げ壁に頭

を打ち付け始める。

思わず仰天して、ハリーと二人で引き戻すと、しつかとドビーの腕を掴んだ。

「言えないのは分かったから！ でも、君はどのように僕らに知らせてくれたの？ もしかして——それ、ヴォル——あ、ごめん——『例のあの人』と関係があるの？」

ハリーが尋ねる。ドビーがまた壁の方へ傾ぐのを慌てて留めた。やがて、ドビーはゆっくりと告げる。

「いいえ——『名前を呼んではいけないあの人』ではございません」

そしてドビーは、意味ありげにぼくとハリーを——主にぼくを——見つめる。ぼくとハリーは顔を見合わせた。

『あの人』に兄弟がいたかなあ？』

「ドビーは大きく首を振る。」

ハリーはお手上げだと言うように肩を竦めた。

「それじゃ、ホグワーツで世にも恐ろしいことを引き起こせるのは、ほかに誰がいるのか、全然思いつかないよ。だって、ほら、ダンブルドアがいるからそんなことは出来ないんだ——君、ダンブルドアは知ってるよね？」

ドビーは頷く。

「アルバス・ダンブルドアはホグワーツ始まって以来、最高の校長先生でございます。ドビーめはそれを存じております。ドビーめはダンブルドアのお力が『名前を呼んではいけないあの人』の最高潮のときの力にも対抗できると聞いております。……しかし、でございます。ダンブルドアが使わない力が……正しい魔法使いなら決して使われない力が……」

正しい魔法使いが、使わない力。

その意味を察して、背筋が凍った。

ホグワーツで一体、何が起ころうとしているんだ!?

そんな思考に頭を浸していたからだろうか、ドビーが電気スタンドを引っつかみ自分の頭を殴り始めるのを、止めることが出来なかった。

ぼくらがドビーを黙らせるのと、一階が静まり返ったのは、ほぼ同時だった。

「ダドリーがまたテレビをつけっぱなしにしたようすな。しようがないやんちゃ坊主で！」

おじさんの声。そして近付いてくる足音。慌てて洋服箆筒にドビーを押し込んだちようどその時、ドアが開いた。

「いったい——貴様らは——ぬあーにを——やって——おるんだ？」

おじさんはぼくらを交互に睨みつけると、唸るように怒鳴る。

「日本人ゴルフアークのジョークのせつかくのおちを、貴様らが台無しにしてくれたわ……今度音を立ててみる、生まれてきたことを後悔するぞ。分かったな！」

おじさんが出て行ったのを確認して、ぼくらはドビーを箆筒から出した。

「ここがどんなところかわかった？ 僕らがどうして Hogwarts に戻らなきゃならないか、分かっただろう？」

ハリーがドビーに訴える。そしてちよつと目を伏せ「あそこにだけは、僕の——つまり、僕の方はそう思ってるんだけど、僕の友達がいるんだ」と呟いた。

「ハリー・ポッターに手紙もくれない友達なのですか？」

ドビーが言いにくそうに言う。え、と、思わず小さく声を上げた。

「多分、二人ともずーっと——え？」

ハリーも気付いたようだ。眉をひそめ、ドビーを見る。

「僕の友達が手紙をくれないって、どうして君が知ってるの？」

ドビーはもじもじと落ち着きなく身体を揺すった。

「ハリー・ポッターはドビーのことを怒ってはダメでございませう——ドビーめはよかれと思つてやったのでございませう……」

「君が、僕たち宛の手紙をストップさせたの？」

「ドビーめはここに持つております」

ハリーは思わず立ち上がる。と、ドビーはハリーの手の届かないところへ逃れると、着ている枕カバーの中から分厚い手紙の束を引っ張り出し掲げた。

「ハリー・ポッターは怒ってはダメでございますよ……ドビーめは考えました……ハリー・ポッターが友達に忘れられてしまったと思つて……ハリー・ポッターはもう学校には戻りたくないと思うかもしれないと」

ハリーは手紙に手を伸ばす。も、ドビーに阻まれそれは叶わなかった。

「ホグワーツには戻らないとドビーに約束したら、ハリー・ポッターに手紙を差し上げます。ああ、どうぞ、あなた様はそんな危険な目に遭つてはなりません！　どうぞ、戻らないと言つてください」

「いやだ！　僕らの友達の手紙だ。返して！」

「それならドビーはこうするほかありません」

ドビーは悲しげに呟く。

目が追えなかった。目の前からドビーの姿が消え、慌てて振り返るとドアが開け放たれ階段を駆け降りる音。

ぼくより先にハリーが動いた。遅れてぼくも後を追う。

と、キッチンで急にハリーが止まった。思わずぶつかりそうになる。ひよっこりとハリーの横から顔を出して——絶句した。

山盛りのホイップクリームとスマイレの砂糖漬けが、天井あたりを浮遊していた。

呆然とし、慌ててドビーを探す。

「ああ、ダメ……ねえ、お願いだ……僕ら、殺されちゃうよ……」

ハリーの掠れ声。視線の先を辿ってやっと、ドビーが戸棚の上に腰掛けていることに気付く。

「ハリー・ポッターは学校に戻らないと言わなければなりません——」

「ドビー、お願いだから……」

「どうぞ、戻らないと言つてください……」

「僕、言えないよ——」

ハリーが静かに叫ぶ。そんなハリーを見て、ドビーは悲しそうな顔をした。

「では、ハリー・ポッターのために、ドビーはこうするしかないのです」
反射的に、左手を伸ばした。杖なしでも魔法が使える力が、ぼくに

はあるから。

でも、結局、使うことは出来なかった。

退学処分と一時の叱責、それを天秤にかけた。

それは、きっと『正しい』ことなんだろうけど。

ガシャン、という音に、思わず顔を背ける。

自分の計算高さが、酷く格好悪く思えた。

パチツと音がして、ドビーの姿が消える。食堂から悲鳴が上がり、バーノンおじさんがキツチンに飛び込んで来ても、ぼくらは呆然とその場に立ち尽くしていた。

それでも何とかその場を取り繕ったおじさんは凄く立派だと思う。メイソン夫妻に苦しい言い訳をし、ぼくらには虫の息になるまで鞭で打ってやると宣言して、モップをぼくらに手渡した。ぼくとハリーは、お互いがお互いの顔を見ないまま、一言も喋らず黙々とモップで床を擦ることに終始する。

あそこで、もつと上手くドビーから話を聞き出せていれば、こんな結末にはならなかったかもしれない——そんな後悔が、酷く身に染み込んだ。

でも、不幸はここからだ。本当にぼくらは不幸に憑かれてる、あるいは好かれてると言ってもいいかもしれない。

おばさんが食後のミントチョコを皆に回していた時、突然巨大なふくろうが、食堂の窓から舞い降りると、メイソン夫人の頭の上に手紙を落として去って行ったのだ。

メイソン夫人は悲鳴を上げながらリビングを飛び出し、何やら喚きながらぼくらの横を走り過ぎ、やがて家から飛び出したようだ。遅れてメイソン氏も奥さんの後を追うように、文句を言いたいだけ言うところの家を出て行った。

これはぼくたち、死ぬかも。

メイソン夫妻に気を取られていたぼくは、バーノンおじさんが手紙をぼくらの目の前に突き出すまで、ふくろうが運んできた手紙の存在にすっかり気付いていなかったんだ。

……いや、気付いてたら何か出来たのか、と問われれば、多分無理、

と答えることしか出来ないだろうけど。

思わず、ハリーを振り返った。

待ち侘びた魔法界からの手紙、しかしハリーの表情は蒼白で、少なくとも喜びの色は何えなかった。当然か。

「読め！」

おじさんが凄む。ハリーが震える手でそれを広げた。横から覗き込んで——そして、不幸はどこまでもぼくらが大好きなことに、絶望する。

それは、魔法省からの、この家で呪文が使われたことに対する、警告の手紙だった。

「お前らは、学校の外で魔法を使ってはならないということを、黙っていたな」

恐怖で、絶望で、身体が硬直する。ぴくりとも身じろぎ出来ない程の、圧倒的な——恐怖。

「言うのを忘れたというわけだ……なるほど、つい忘れていたわけだ……」

おじさんは残忍な顔で、ぼくらに判決を下す。

「さて、小僧ども、知らせがあるぞ……わしはお前らを閉じ込める……お前らはもうあの学校には戻れない……決してな！ 戻ろうとして魔法で逃げようとするれば——連中がお前を退校にするぞ!!」

狂ったように笑いながら、おじさんはぼくらを二階へと引きずって行った。

それは、商談がご破算になったことに対する怒りのようにも、八つ当たりのようにも見えた。

第3話 車と満月と真夏の夜

八月の最終週。慌ただしくもぼくら家族は日本からここ、イギリスへとやって来ていた。『漏れ鍋』で新学期までの残り日数を過ぎ、その後ぼくはホグワーツへ、両親は日本へと戻るようになっていた。

……懐かしいな。去年のぼく、この頃英語に必死だった。英語の学習は今も続けているけれど、正直、あの時の熱意からは程遠いのが現状だ。慣れてダレてきたのもあるのかもしれない。気を引き締め直さねば、と思うぼくなのであった。自分でも真面目な奴だなあと思う。ホグワーツに入学する前、日本にいた頃は、もつとちやらんぼらんしてた気もするんだけど。

……大人に、大人になったということだ！

という訳で、今日は家族全員でダイアゴン横丁にてお買い物。二回目だからか、一回目ほど落ち着きなくキョロキョロすることは無い。大人になったのだろう。良きかな良きかな。

「秋！ ちゃんとして来ないと逸れるよ！」

「全く、落ち着きないのは相変わらずだな」

「……………」

えつと。まあ。

仕切り直し、と。

「父さんも日本からホグワーツに通ったんでしょ？ ならさあ、この、未知への世界に対するドキドキ感っての分かるでしょ！」

「……………え……………あ、ああ」

む、不明瞭な返事。何故だろう、ぼく何かまずいこと言った？

その時、母がごくごく自然に、あまりにも何気ない足取りでふらつと目の前の露店に吸い寄せられて行った。一瞬事態が飲み込めなかったが、父が「アキナ！」と母の名を叫び慌てて手を引っ張り戻ってきたことで腑に落ちる。

「…………アキナ、もう君も母親なんだから、そうふらつと消えちゃ駄目だろ。君の行きたいところにはちゃんと僕もついて行くから、一人で勝手にいなくなるのは止めてくれ」

懇願するような父の口調に、ああ、今までも何度もこのやり取りを繰り返してきたんだろうなということが容易に想像でき、父の苦労が偲ばれた。

「じゃ、手繋いで歩こう？ 懐かしいね、学生時代みたい」

母はそう言うのと、笑顔で父に右手を差し出す。父は、え、と躊躇うように母を見た後ぼくに目を向け、「いや、秋もいることだし……」ともごもご呟いた。

「秋はこっちだよ。ほら、家族全員で仲良くお買い物。ね？」

母が左手をひらひらさせる。手を伸ばして、ぎゅつと掴んだ。その様子を見ていた父も、小さく口を緩めて母の手を取る。

「行こうか」

父の言葉に、母は笑顔で頷いた。

母と手を繋いで歩くのなんて、何年ぶりだろうか。幼稚園……いや、それも記憶がない。慣れない感覚が、なんだかくすぐったい。歩幅を合わせ、歩調を合わせ、一步一步踏み締める。

家族なんだなあつて、思える。改めて思うと、ちよつと照れ臭いけど。

「……ん？」

背後でなんだか騒がしい気配がして、母に手を引かれたままぼくは振り返った。

途端――

並ぶ露店、その内の一つが吹っ飛んだ。

「……………」

一瞬呆然として、そして気を取り直す。

目を擦って人差し指で軽く額を叩き、改めて目を向けた。

立ち並ぶ露店のそのスペースだけが、まるで超局地的ハリケーンにでも遭ったが如く、瓦礫と化していた。

「……わー」

啞然過ぎて反応できねー。

「……秋以外にもこんなことする奴、いるんだな」

父が感慨深げに頷く。何事もぼくを基準にするのは止めてよ父さ

ん、ぼくは至って常識人……のつもり、なんだからさ。

瓦礫の山から少年が2人ばかり、大笑いしながら走ってきた。ジエームズ・ポッターと、そしてもう一人は誰だろう、育ちの良さそうなイケメン君。後ろから、その店の店主であろうお人が怒り心頭なご様子で怒鳴り散らしているのも気にせず、笑い合いはしゃぎ合い、ダッシュでぼくらの横を通り過ぎていく。

「……ポッターの息子だ……父親にそっくり」

母は小さく呟くと、ぼくと父さんの手を引っ張って歩き出した。後ろに気を取られていたぼくは思わず転びそうになり、慌てて足を動かす。

すぐ真横を、彼らは走り去っていく。思わず目が追った。

楽しそうなあの笑顔をぼくも近くで感じていたいと、確かに願ったんだ。



「飢える……」

掠れた声で、ぼくは呟いた。鉄格子越しに沈む夕日を、苦々しく睨みつける。

ぼくらが部屋に閉じ込められ、三日が過ぎた。雀の涙ほどの、12歳の少年が食べるには到底足りない食事が一日三回。勿論おやつも夜食もない。

死ぬ。死んでしまう。

「紙って食べるんだっけ……」

ハリーが部屋の本棚を見つめた。「やめとこうよ……退屈しのぎがなくなっちゃう」と返して、がつくり息を吐いた。

夏休みが終わるまで、あと4週間残っている。三日目ですら死にそうなのに、4週間とか生き伸びられる気がしない。それに、もし生き伸びたところで、おじさん達が素直にぼくらを出してくれるとは到底思えないし……。

簡単に言うと、絶望的。

はあ、とため息をついた瞬間、ガタガタツと『餌差入口』の戸が震えた。浅ましくも身体が反応し、飢えた獣よろしくパツとベッドから身体を起こす。

ペチュニアおばさんの手と、今晚の貴重な食料が入れられた。缶詰が床につく前に、ヘッドスライディングしたハリーがそれを見事キヤツチして、久しぶりのきらきらした笑顔でぼくを振り返る。こちらも笑顔を返して、ハリーから缶詰を受け取ると、小さく息をついた。缶詰スープの蓋を開け、一気に飲み干してしまいたい衝動を必死に抑えながらちびりちびりと飲む。ハリーはもう飲み切ってしまったようで、空になった缶詰をドアの近くに置くと黙ってベッドに横になった。

「……ハリー」

声を掛けるも返事がない。どうやら寝てしまったようだ。

諦めて、近くに転がっていた本を手元に引き寄せた。もう何度目になるだろうか。

この部屋には本くらいしか娯楽がない。去年まであつたダドリーのおもちやは、帰ってきた時にはすっかり姿を消していた。ダドリーが引き取ったのか、はたまた廃品回収に出されたか……その中で唯一無事だったのがこの本棚だ。タイトルならば誰しも聞いたことがあるような、超がつくほど有名な本ばかりがずらーっと並んでいる。ダドリー坊やが大きくなったら読むだろうと思っただろうか。残念ながらその思惑とは正反対の所で活躍して頂いている。

しかし、暇だ。このままでは何ページ何行目に何の文字が書いてあつたかまで覚えてしまう。空腹を紛らわすために活字を追うことに集中しているのだが、しかし危機的状況の時の集中力はハンパない。文庫本くらいなら軽く脳内で再生出来そうだ。シェイクスピアを一字一句暗記したところで何になるというのか。ぼくは将来お芝居への道に進むとでもいうのか。

ため息をついて、ページを繰る。

「……見るがいい。不幸なのはただわれわればかりではない。この広大な世界という劇場では、今われわれが演じているこの場面などよ

り、さらに悲嘆に満ちた芝居が数々演じられているではないか……」
文字を指でなぞって、呟いた。

「そして人間は男も女も、すべて役者にほかならぬ……」
月明かりが部屋の床に光を落とす。そこで初めて、部屋の中がもう暗くなっていることに気付いた。

よつこらせ、と立ち上がる。随分長い時間座っていたらしく、足腰がもうバツキバキだ。ロン・ウィーズリーが「やけに嵌まって読んでたね、何の本？」と感心とも何とも付かない声を上げた。

「ああ、シエイクスピアの……」

普通に声を返しかけたところで、頭の中の違和感ランプが点滅する。あれ、何だろう、と数秒思いを巡らし――

「ロン！ どうしてここに!?!」

慌てて窓辺に駆け寄った。窓を開け、鉄格子越しに話が出来るようにする。今の声で目が覚めたか、むくりとハリーがベッドから身体を起こし、「どうしたのさアキ……」と眠そうな目でぼくを、そしてロンを見て驚いたように「ロン！」と叫ぶと飛び起きてくる。

「ロン、一体どうやって? ——なんだい、これは?」

ハリーが呆然とした口調で呟いた。

空飛ぶ車が、部屋（2階）の窓に横付けされていた。まあ寝起きで飲み込むには重たいシチュエーションだろう。寝起きでなくとも混乱しそうだ。前の座席に座っていたロンの兄貴、フレッドとジョージが、二人一緒に笑いかけてくる。

「よう、ハリー、元気がいい?」

「殿下もお元気そうで」

殿下って、とぼくは苦笑した。シエイクスピアと言えば殿下だろ、なんて適当なことを言って、双子の片割れが片目をつぶる。今だ二人の見分けがつかないぼくであった。ロンがハリーに話し掛ける。

「一体どうしたんだよ。どうして僕の手紙に返事をくれなかったんだい? 手紙を一ダースくらい出して、家に泊まりにおいでって誘ったんだぞ。そしたらパパが家に帰ってきて、君らがマグルの前で魔法を使ったから、公式警告状を受けたって言うんだ……」

「僕じゃない——でも」

ハリーの言葉を遮って、ぼくは窓から身を乗り出した。

「ハリー、そんなことよりもまず聞かなきゃいけないことがあるだろう！
どうしてここに来たの？」

ロンを見て、そして双子を見つめる。双子はにやつと笑って互いに顔を見合わせた。

「さっすが、殿下は話が早い」

「俺たち、君らをここから連れ出すために来たんだから」

「でも、魔法は使っちゃいけないんだよ？」

ぼくの言葉に、しかし双子は余裕綽々だ。

「たしかにアキの細腕じゃあ無理かもしれないが——」

「——俺たちなら、出来る」

双子はハリーにロープの端を手渡すと、「それを鉄格子に巻き付けろ」と指示を出した。

「おじさん達が目を覚ましたら、僕たちはおしまいだ」

堅い声でハリーは呟く。でも双子は、そんなハリーの不安までも笑い飛ばしてしまった。

「心配するな。下がって」

そう言って双子はエンジンを吹かす。ぼくらは部屋の暗がりまで下がると、成り行きを伺った。ハリーがぼくの指先を軽く握る。応えるように、親指で軽くハリーの手の甲を叩いた。

やがて——バキッ！ という音と共に窓から鉄格子が引き離され、遮られることなく月光が降り注ぐ。月夜の晩に現れる怪盗みただいと、彼らを見て思った。見れば謀ったように満月だし。

「乗れよ」

「だけど、僕らのホグワーツのもの……杖とか……箒とか……」

「どこにあるんだよ？」

「階段下の物置に。鍵がかかっているし、僕ら、この部屋から出られないし……」

「任せとけ」

しゅたつ、と物音一つ立てずに双子は窓を乗り越えたとドアに近付

く。そしてヘアピンを手に取ると鍵穴に押し込んだ。はあー、と脱帽するしかない。

「マグルの小技なんて、習うだけ時間のムダだってバカにする魔法使いが多いけど、知ってても損はないぜ。ちよつとトロいけどな」
「うん」

素直に頷く。と、双子の片方がぼくの頭に手を伸ばし軽く叩いた。

「見たかロン、これが可愛い弟の反応だ、お前も見習いたまえよ」

「まあお前がアキを見習ったところで滑稽でしかないんだが」

「うるさい！ 急いでんだろ、早く！」

ロンに小声で叫ばれ、双子は肩を竦めた。

錠の開く微かな音と共に、何日かぶりにドアが完全に開け放たれた。

「それじゃ、俺たちはトランクを運び出す。君らは部屋から必要なものを片っ端からかき集めて、ロンに渡してくれ」

ぼくとハリーは同時に頷く。そしてすぐさま荷造りに取り掛かった。洋服類をバックに詰め込み小物類をまとめロンに手渡すと、まだ準備の整わないハリーを手助けし、トランクを持って上がってきてくれた双子に手を貸そうと——したら「「いらない」と即答された。ハリーは受け入れた癖に！

……筋肉つけよう。

細い腕を眺め、切実に思うぼくであった。

トランクを詰め込み終わって、先にぼくが車に乗り込んだ。ハリーも後に続く。と、窓枠を乗り越えようとした時、突然鋭い大きな鳴き声が響いた。思わずぱつと振り返る。

「あの忌ま忌ましいいふくろうめが！」

「ヘドウィグを忘れてた！」

おじさんの怒鳴り声。ハリーが真っ青になって飛び出すと、やがて鳥かごを手に駆け戻ってきた。かごをロンにパスする。ぼくはハリーに手を伸ばした。ハリーはすぐさま窓枠に手を掛けたが、しかしその時無情にもドアが——さっきの錠開けのせいで何の枷もないドアが——大きく開け放たれ、おじさんとおばさん、そしてダドリーの

姿をさらけ出した。

一瞬だけ怯んだが、猛然とおじさんが走ってハリーに飛び掛かる。おじさんがハリーの足を掴んだのと、ハリーがぼくの手を握ったのは、ほぼ同時だった。

「ペチュニアア！ やつが逃げる！ やつが逃げるぞー！」

瞬時に四方から手が伸びてきて、ロンとフレッド、ジョージが渾身の力でハリーを引っ張る。おじさんの手からハリーの足が抜けた、それを見てすぐにハリーを車に押し込めドアを閉めると、ロンが叫んだ。

「フレッド、今だ！ アクセルを踏め！」

ぐいっと身体に強くGが掛かる。でもそんな感覚すらも楽しくて、皆で大声で笑った。

出れた。抜け出せた。あの鉄格子の中から。

「来年の夏にまたね！」

ハリーが窓を開け叫ぶ。ぼくも窓から首を突き出し、呆然とぼくらを見送る彼らを存分に観察した。夜風が髪を揺らす感じが気持ちよく、目を細める。

そして、大声で叫んだ。

「自由だーっ!!」

夜空を空飛ぶ車が駆ける。

そんな出来事にワクワクして興奮して、はしやぎ回った、真夏の夜のページ。

第4話 ライバル宣言

新学期。駅の構内は、今でこそ人は少ないが、しかしこれからその数を増していくだろう。

時間にまだ余裕があるためか、人で埋まってる場所はまだ少ない。父に手伝ってもらいトランクを乗せ、一息ついて車窓から身乗り出し、セブルスとリリーが来るのを今か今かとわくわくしながら待つ。

「楽しそうだな、秋」

「うんー！」

笑顔が零れる。ぼくにそう尋ねた父は「そうか」と言って笑うと、列車にもたれた。

「父さん達、帰らないの?」

「なんだ、帰って欲しそうな口ぶりだな」

心外そうに言われ、そうじゃなくて、と慌てる。

「ちゃんと秋を見送るまでいるさ。しばらく会えなくなるんだ、最後まで一緒にいたいと思うのは当然だろう?」

言われた言葉に、ぼくはただ小さく頷いた。

「それもそうだけど、お母さんは、秋の一番の友達だっていうリリーちゃんとセブルスくんに会いたくってねー。どんな子なんだろ、つて、ずっと楽しみにしてたんだよ」

「え、そうなの?」

「そうだよ、しっかり紹介してね?」

母が目を細めて笑う。

友達を紹介……か。色々照れ臭くて、でも何だかこそばゆい。そして、何より嬉しい。

自分にも、そんな友達が出来たことが。

自分が、そんな友達を作れたことが。

嬉しくって、仕方がない。

「……しょうがないなあ、母さんは」

照れを隠して、頬杖をつく。

そして、何気ない話をしながら、二人が来るのを待つのだった。



母の行動は迅速だった。

二人がぼくらのいるコンパートメントに姿を現した瞬間、窓越しにも関わらず腕を伸ばし、まだ荷物も下ろしていない二人の手を、それはもう満面の笑顔で握ったのだ。

「こんにちは！ リリー・エバンスちゃんと、セブルス・スネイプくんだよ。幣原秋の母です、秋と仲良くしてくれてありがとう！」

急激な展開の速さにポカンとしている二人に、いたたまれなくなる。ごめん、こんな母親でごめん。

先に現状を把握したのは、やっぱりというか、リリーの方だった。女の子の方が現状把握能力は高いのかな。

笑顔を作りさらりと挨拶すると、荷物を置いて座席に腰を下ろす。そして今だに固まっているセブルスの背中をバシンと叩いた。

そしてようやくとセブルスの時間が流れ出す。

「え、あ、あの……」

顔を真っ赤にさせてセブルスは口ごもる。

「君が、セブルス・スネイプくん？ 可愛い子だねえ」

おっとりとした顔で母は笑う。

それに痛みを覚えたように、セブルスは微かに顔を歪めた。

「……可愛い、だなんて、言われたことない、です」

「あれ？ じゃあお母さん、すごく照れ屋さんなのかもしれないね。じゃあ、代わりに私が言っておあげる」

セブルスの腕を引き、身体を引き寄せ片腕を軽く背中に回すと頭を撫でて。

母は、『お母さん』の表情で微笑んだ。

「君は、すごく可愛くて、すごくいい子だねえ」

セブルスの肩に入っていた力が、少し抜けた。母はそのまま身体を離すと、もう一度愛おしむようにセブルスの頭を撫で、そして満面の

笑顔でぼくの方に身を乗り出してきた。

「秋はホント、可愛い子見つけてくるのが上手だねえ。リリーちゃんもすっごい可愛い」

「ねえ母さん、リリーに『可愛い』って言うのは別に構わないだろうけど、セブルスは男の子だよ？ あんまり可愛い可愛い連呼するのもどうなの？」

あ、それもそうか、と母は思い当たったように呟いた。しかし「ま、いつか！」と勝手に自己完結させ、考え事終わりつとばかりに手を叩く。

その時、もう出発するぞ早く乗り込めー、とばかりに汽笛が鳴る。時計を見ればもう11時、さっきの母さんの暴走はなかなか時間に時間を食ったようだ。

グアコンツ、と汽車のエンジンがかかり、軽くコンパートメントが揺れる。

「じゃあ秋、またクリスマスにね！」

「うん！」

ゆっくりとホグワーツ特急が動き出す。

リリーもセブルスも、ぼくの両親に手を振り返してくれた。

「行ってらっしゃい！」

父が叫ぶ。ぼくも笑顔で、叫び返した。

「行ってきますー！」



角を曲がり二人の姿が見えなくなつて、ぼくはやつと座席に腰を下ろした。

「お前の母さん、変わってるな」

「あはは……ごめん」

セブルスに言われ、ぼくは苦笑いした。

「ホントに。友達のお母さんがあんなフレンドリー、なんて、そうないわよっ。」

「フレンドリーを越えてるような気もするけどな。さすがお前の母親だ」

「それどういう意味!？」

セブルスに突っ込む。

セブルスは小さく笑って、ふと外に視線をやると、照れたような顔で、そうつと呟いた。

「……でも、すごく……いい人だな」



車のタイヤが軽く地面を打ち、停止した。エンジンが止まってからドアを開け、転がるように車を飛び出す。

小さく息をついて、辺りを見回した。

だいたい朝の5時前くらいだろうか、まだまだ空が仄暗い。

込み上げてくるあくびを噛み殺した。

「アキ、眠いの?」

ロンの問いにこくりと頷く。

車の中で2時間程うとうとしたり寝たりといった、そんな中途半端な時間を過ごしていたためか……非常に寝足りない。

でも、車内のテンションが高すぎたのもいけないんだ……寝たいという欲求より遊びたいという欲求のが勝ってしまう。

「アキは寝る時間も起きる時間も規則正しいからねえ……こんなイレギュラーなことに弱いんだよね」

ハリーがしみじみと呟いてぼくの頭を軽く撫でる。

「うん……」と頷いて、くあとあくびをした。

「えっ、したらアキはオールナイトをしたことがない?」

「人生半分は損してるぜ!」

双子が騒ぐも、だって眠いもんは眠いんだもの。夜中の12時を過ぎたら抗えないくらい眠くなるんだもの、仕方ない。

「お子ちゃまだなー」

「お子ちゃまじゃないっ!」

うりうりと頭を撫でてくる双子に眉を寄せ頬を膨らませる。

子供扱いされる程の年じゃないし、この容姿この外見だけで子供扱いされるのは御免だ。

中身で判断されてるのだとすると……そしたら、まあ仕方ない……かな？

「ほら、騒ぐと見つかるぜ、アキ」

「ホント、だからお子様なんだぜ？」

「ぐっ……」

声を詰まらせ双子を睨む。しかし二人いるので視線が定まらず、結果なんだか中途半端なものになってしまい恥ずかしくなって止めた。

双子の片割れが、打って変わった真面目な顔つきで全員を見渡す。

「さあ、みんな、そーつと静かに二階に行くんだ。お袋が朝食ですよって呼ぶまで待つ。それから、ロン、お前が下に跳びはねながら下りて行って言うんだ。『ママ、夜の中に誰が来たと思う！』そうすりゃハリーとアキを見てお袋は大喜びで、俺たちが車を飛ばしたなんてだーれも知らなくてすむ」

「了解。じゃ、ハリーとアキおいだよ。僕の寝室は……」

と、ロンがそこで不自然に間を取る。

どうしたんだ、とあくびを噛み殺しながらロンの視線の先を辿った。

ウィーズリーおばさんが庭の向こうから、鶏を蹴散らし猛然とこちらに突き進んで来ている。普段は穏和そうなその顔が、今は般若の形相だ。

鶏が泡を食って夫人の足元から走り逃げ、飛べないのにも関わらず羽根をばたつかせた。

「アチャー！」

「そりゃ、ダメだ」

双子が観念したように呟く。

ウィーズリーおばさんはぼくらの前で足を止めると、ぼくらを——正確にはぼくとハリー以外を——ずずいっと見渡した。

「それで？」

「おはよう、ママ」

重苦しい沈黙に堪えきれなかったように、双子が朗らかに挨拶する。しかし逆効果だったようで、ドッカーンッ！と地雷が爆発した。

「母さんがどんなに心配したか、あなたたち、わかってるの？」

低い静かな声、それなのに恐ろしさを感じるのは、きつと母親の威厳だろう。

「ママ、ごめんなさい。でも、僕たちどうしても——」

「ベッドは空っぽ！ メモも置いてない！ 車は消えてる……事故でも起こしたかもしれない……心配で気が狂いそうだった……わかってるの？ ……こんなことは初めてだわ……お父さんがお帰りになったら覚悟なさい。ビルやチャーリーやパーシーは、こんな苦労はかけなかったのに……」

「完璧・パーフェクト・パーシー」

「パーシーの爪の垢でも煎じて飲みなさい！ あなたたち死んだかもしれないのよ。姿を見られたかもしれないのよ。お父さんが仕事を失うことになったかもしれないのよ——」

なんでだろう、ペチュニアおばさんの金切り声よりも、こっちのが数倍恐ろしく聞こえるのは。

ウィーズリーおばさんは声が枯れるまで三人を怒鳴りつけると、ぼくとハリーの方に向き直った。思わずたじろぐ。

「まあ、ハリーにアキ、よく来てくださったわねえ。家へ入って、朝食をどうぞ」

そう言つてウィーズリーおばさんは家の方に歩き出した。あくびをしたところでハリーに手を引かれ、されるがままに足を動かす。

半分目をつむりながら家に入り、椅子に座らされても尚眠たくて、ハリーの肩にもたれてうとうとする。

「ほら、アキ」

「ん……」

肩を揺すられたが、それでも眠気が覚めない。

ため息をついたハリーが「すいません、どこかに寝かせられる場

所ってないですか？」と尋ねる声が聞こえた。

「じゃあ俺たちの部屋に來いよアキ。ロンの部屋にハリーを泊めてさ」

「ロンの部屋に三人入るのは厳しいだろ、俺達の部屋には余裕があるし」

口々に双子が言い、「行くぞ」と腕を引っ張られた。慌てて目を開け、双子に続く。

狭い廊下を通って、ジグザグの階段を上る。と、階段の途中で一人の少女が階段から身を乗り出して台所の方を一生懸命見ようとしていた。

「おいジニー。愛しのハリー様が気になるなら自分で見に行けよ」

「もう、フレッド！」

顔を赤らめて、少女——ジニーはフレッドの胸を拳で叩く。その時ぼくに気付いたようで、「あら？」と声を上げて近寄ってきた。

「どうだジニー、お前より可愛いだろう」

「彼こそ、あのハリー・ポッターがベタ惚れしている弟、アキ・ポッターだ！」

「そしてこっちは俺らの妹、今年ホグワーツ入学のジニー」

ベタ惚れって……そうかあ？

というかジニー、ぼくより背が高い。今年入学ってことは一個下。

……一つ年下の女の子にまで……切ない。

「あ、この人がアキ？ 初めまして！ あたしはジニー・ウィーズリー、よろしく！」

手を取られぶんぶん振られる。笑顔でぼくも「よろしく」と返した。と、ジニーはまじまじとぼくの顔を見つめる。

「……な、何？」

思わずたじろぐ。

「……ホントに男の子？ 可愛い……どこに泊まる予定？ あたしの部屋来ない？ スペースなら空いてるわ。その可愛さの秘訣教えて欲しいの」

「い、いや……その。女の子と相部屋は……ちよつと」

何も無いと思うけど。何も間違いなんて起こらないと思うけど。というかそれ以前に恥ずかしい、色々な意味で。

「そっか、ジニー、アキは俺達の部屋に泊まるんだから」

「どうだ、羨ましいだろ」

双子が囁す。苦笑いして「バイバイ」とジニーに手を振り歩を進めた。

数段上ったところで、ジニーに声を掛けられ振り返る。

「……分かったわ。あたし……」

すう、と息を吸い込み、静かに彼女は呟いた。

そして、ずびしっ！ とぼくに指を突き付け、凜然と告げる。

「あなたを、ハリー・ポッターを巡ってのライバルと認定するわ！」

「……………」

違う！

第5話 友人

「え、リリーとセブルスって幼なじみなの？」

「そうよ、家も近所だしね」

ねー、とリリーがセブルスに同意を求めるが、セブルスは照れてそっぽを向いてしまった。

「いいなあ……」

「そう？」

「だって、いつだって遊びに行けるじゃん。ぼくなんて近くに誰もいないんだよ？」

「秋、日本に住んでるからな」

セブルスが口を挟む。そっか、とばかりにリリーが手を叩いた。

「え、でも日本っていいな！ 私も行ってみたい！ サムライとかニンジャとかいるんでしょ？ 腰にカタナを差してワフクで外を歩くのよね！ 秋もカタナ持ってるの？」

「持っていないよ！」

無邪気に問われびつくりする。そうか、英国とかじゃ日本ってそういうイメージなのか。

リリーの頭の中じゃ、日本は今だに鎖国してそんな勢いだ。

「いつの話だリリー。秋は刀も持っていないければ和服だって着ていないぞ。日本への認識を改めるべきだな、秋に失礼だろ」

とセブルス。おお、なんかカッコいい。さすがセブルスだ。余所の国への造詣も深いなんて、なんだか尊敬しちゃう。

「日本と言えばアニメとマンガだろう」

「ぼくの尊敬を返せ！」

がっかりだよ！ 確かに有名だけどさ！

叫んで立ち上がる。

途端、コンパートメントの入口側の壁がごっそり吹き飛んだ。

……え、嘘、今のぼく？ 魔力の暴走？

呆然と立ち竦む。この時間って杖使っていいんだろうか、分からない。というか今ので暴走するか普通！ セブルスもびつくりのツツ

「コミだよ！ ほら見ればセブルスもリリーも険しい顔で立っていい……？」

「ポッター！」

リリーが鋭く叫ぶ。つられてそちらに目をやった。

ひゅつ、と一陣の風が、耳元を掠める。

窓にぶち当たった火花は、窓もろとも砕け散った。

「……………」

「こえー。」

コンパートメントから飛び出したリリーに、つられてついていく。通路はなかなかの惨状だった。ぼくたちのコンパートメントが一番被害が激しいが、近くのコンパートメントも窓にヒビが入ったりと危険なことに変わりはない。

そんな中騒ぎの元凶はやっぱりというかジェームズ・ポッターで、この前のイケメン君と共に杖で西部劇ごっここの真っ最中だ。

「いい加減にしなさい、ポッター、ブラッケー！」

リリーが叫んだ。ずかずかと危険地帯に踏み込むもしかし、遊びに没頭しているらしい二人には全く聞こえていないようだ。

「リリー、危ないよ……………」

声をひそめてリリーを呼び止める。

「うん、危ないから、あの二人が飽きるまで待つてる方がいいよ、リリー」

聞き慣れない声に、目を向ける。鳶色の柔らかかそうな髪に温和そうな表情の少年は、隣のコンパートメントの窓から身を乗り出して、諦めたように小さな笑みを浮かべた。

「でも、リーマス……………」

困ったようにリリーは眉を寄せる。放っておけないとばかりに二人を見て、軽く頭を振った。そしてもう一度顔を上げた時には、緑の瞳に鮮やかに意志の光が浮かんでいた。

「止めてくるわ。ぶん殴ってでも」

そしてスカートを翻し歩いて行く。その背中を、ただただ見つめ

た。

「カッコいい……」

そこらの男子よりも普通にカッコいい。ぼくが女だったら惚れちやいそうだ。

「リリーは凄いなえ」

尊敬したような声音で、少年——リーマスは肩を竦める。

と、そこでリーマスの腕と身体の隙間から、薄い茶色の髪の毛に小柄な体躯の少年が顔を覗かせる。不安そうにジェームズ・ポッターらを見つめていたが、視線に気付いたのか小さく肩を震わせてぼくを見ると、ぱつとリーマスの後ろに隠れてしまった。

見かねたようにリーマスは苦笑いをする、肩を竦めてぼくに笑いかける。

「ごめんね、ピーターってば人見知りが酷くって。僕はリーマス・ルーピンで、こつちがピーター・ペティグリュー。あつちの眼鏡がジェームズ・ポッターに、で、最後がシリウス・ブラック」

「あ、ぼくは……」

名乗ろうとしたところで、小さな声に遮られた。

見るとさっきの少年——ピーターが、リーマスの背中にへばり付くように顔だけを出してこつちを覗いている。

「知ってる、よ……幣原秋くん……でしょ？」

それだけ言って「はわっ」と慌てたようにリーマスの後ろに隠れるピーター。照れ屋なのだろうか、なんにせよ目が合った瞬間隠れられるのはちよつと虚しい。

「……って、どうしてぼくの名前を？」

「んー、まあ君はどうしても目立つしねえ。名簿の中で一人だけローマ字表記だったら、いやがおうでも目に止まるだろう？」

「……………」

「ごめん、ぼくの目にはどつちも同じアルファベットの羅列にしか見えないや。」

「ま、他にも理由はあるんだけどね」

「他にも？ 何、それ」

あのね、と楽しげに微笑んでリーマスは口を開きかけたが、凜としたリリーの声に遮られた。二人してそちらに目を向ける。

「いい加減にして、ポッター！ 人の迷惑つてものを考えなさい！」

「なんだエバンズか。今こっちは忙しいんだ、後にしてくれ」

「なんですつて！ あなたねえ……」

拳を振り上げ叫ぶリリーの背後で、シリウス・ブラックが物陰から身を躍らせた。杖を振り下ろした途端、ジェームズとの直線上にリリーがいることに今気付いたのだろう、端正な顔が驚きに歪む。

「リリー！」

赤い閃光が、リリー向かって迸った。

——反射的に身体が動いたのは、ぼくに言わせれば奇跡に近い。なんせぼくは、からつきしとまでは言わないけど、運動は苦手な方だったのだから。

でも、それを奇跡と呼びたくない自分がいるのは——偶然だと言いたくない自分がいるのは。

やっぱりさあ。

女の子を守りたいっていう男の本能みたいなのが、あるからなのかもしれないね。

「Protego！」

目前で火花が離散した。閃光が幾筋にも分かれ、細くたなびくと、やがて消える。

小さく息をついて杖を戻し——静まり返った空気にはつと我に返った。

「……あ、えっと」

こういう時上手く言葉が出ない自分がかどかしい。頭が真っ白になって、何を言っているのか分からなくなる。

つかつかと険しい顔で、ジェームズ・ポッターがぼくに近づいてきた。後ずさることも忘れ、その場に根が生えたみたいにぼうっと立つてしまう。

背が思っていたより高い。眼鏡の奥のハシバミ色の瞳に、身体が竦

んだ。

「……君、幣原秋だよね？」

フルネームで呼ばれ、こっくりと頷く。と——ジェームズ・ポッターは破顔した。瞳を輝かせ、晴れやかな顔でぼくの手を取るとぶんと大きく振る。

「初めましてっ、僕はジェームズ・ポッター、ずっと前から君と話がしてみたかったんだ！」

「……へ？」

まあ、ひとまず、その……何だ。

新たな友人が、出来ました。



ウィーズリー家での生活は、ダーズリー家とは全く違って面白かった。

双子と悪巧みしたり、ロンとチェスしたり、モリーおばさんに何回もお代わりさせられたり、アーサーおじさんにマグルの生活について質問されたり、ジニーに追い回されたり……はさておいて、今までの中ですっごい充実した夏休みだった。

ある日、いつものように双子と三人で花札（花札！ 英国にこれが存在し、かつ魔法界に根付いていることには驚かされた）をしていると、大きな包みを抱えたふくろうがぞろぞろとぼくらの今いる部屋に飛び込んできて、部屋の空いているスペースに大量の荷物を運び込んできた。

その数と言ったらなんとまあ、20は軽く越えていただろうか。

想像して欲しい、自分の部屋にふくろうが20匹いる情景を。足の踏み場もない上に、丁寧なことにぼくを見ていちいち威嚇してくるもんだから、なんかもう、心が折れそう。ぱきっと。

「何だいこりゃ」

「双子のじゃないの？」

「アキのじゃないか？」

首を傾げながらも荷物を引き寄せ開けると、『誕生日おめでとう』と書かれたカードを添えて綺麗にラッピングされたプレゼントがあった。

「アキのじゃないか」

「ハリーのもあるぞ」

差出人はハーマイオニーで日付は2週間前、ぼくとハリーの誕生日の数日前だ。

あれ？ 確かその頃、ドビーが手紙止めてなかったっけ？ と首を傾げながらも、双子の片方にハリーを呼んでもらえるよう頼むと包みを開ける。

ハーマイオニーにロン、そして予想外にもアリスからのもあった。

まさかあいつがぼくの誕生日を覚えていたなんて！ と感慨深くなる。

サプライズはもう一つ。スネイプ教授もプレゼントを贈ってきてくれたのだ。あれはびっくりした、びっくりして宛名三回は確認したもん。

凄く重くて分厚くて、これは本だ、との予想通り本だった。

しかし、スネイプ教授がプレゼントで贈りそうな本のタイプとは正反対で——『魔法薬学大全』とか『実践黒魔術』とかそういう感じの実用書とは丸つきり別物の、何と言ったらいいのだろう、アイドル？ みたいな人が白い歯を見せている写真が表紙の、何だろう、主婦向け？ な本が贈られてくるとは思いもしなかった。

じ、実は好きなのかな！ と顔を強張らせると、天からの助けとしてメツセージカードが目に入った。飛び付くように開くと、そこにはそっけなく『今年度の闇の魔術に対する防衛術での教材だ。君が買うまでもない。金をドブに捨てる行為を黙って見ておけなかっただけ』と、さらりとした筆記体で書いてある。

スネイプ教授がここまで授業の教材をけなすなんて……うん、考えないようにしよう。

5つ目のものを開けると、ドラコのだった。

『僕のところの屋敷しもべが迷惑なことをしてすまなかったな。』

この大量の荷物について聞き出すと君のところだというので、こちらから送り直しておく。よい休暇を過ごしてくれたまえ。

——そして、誕生日おめでとう、アキ。

P.S. ちなみに僕らはこのバケーションでアテネの方に行ってきたぞ。写真を同封する』

手紙でも高飛車なのは変わらないとくすくす笑っていると、双子の一人が一体何が面白いんだと覗き込んできた。

「この手紙はもしかして、あのマルフォイ家のご子息からではないですか?」

「ダメですぞ殿下、悪い子と付き合っちゃあ!」

双子が騒ぐのに肩を竦めて、ぼくは顔を引き締めるとドラコの手紙の内容に目を細める。

ドビーはマルフォイ家の屋敷しもべ妖精だった。

でもドビーは、あの日ぼくらのところに来たことはご主人様からの命令じゃないって言って、ぼくらに何かを——危険を——知らせようとしてくれていた。とすると考えられるのは——

と、そこで同封すると書いてあった写真の存在を思い出した。封筒から引っ張り出し、そして——稲妻に撃たれたような衝撃が脳天から爪先まで一気に走る。

「——畜生っ!!」

突然の叫び声に、今にも部屋に入ってこようとドアノブに手を伸ばしていたハリーはその体勢のまま固まり、今入っていいものか真剣に悩んだ、らしい。

双子は唾然とぼくを見つめ、ぼくのアマリの真剣さ、絶望さに一言も茶化すことが出来ずただただ黙り込んだ、という。

台所で料理の手伝いをしていたジニーは、ぼくの大声に驚いて指を切ってしまったと聞いた。申し訳ない。しかしそんな周りのことも気に出来ないくらい、ぼくは一枚の写真に呆然としていたのであった。

「アクアとのツーショット、だと……!?」

恐るべし、家族ぐるみのお付き合い。

第6話 親子喧嘩

その次の日の水曜日、学校教材を買いに行くということになった。てつきりあの空飛ぶ車とかを使うもんだと思っていたが、驚くべきことに煙突を通っていくらしい。いったいどんな仕組みになっているんだろう。

「さーて、お客様からどうぞー！ ハリーとアキ、お先にどうぞー！」

ウィーズリーおばさんが笑顔で謎の粉が入った小鉢を差し出す。

戸惑ったようにハリーは鉢とおばさんを見、小さな声で「どうするんですか？」と尋ねた。

簡単にレクチャーをしてもらい、そしてハリーとじゃんけんをして、負けたぼくが先に暖炉の中に入るようになった。

恐る恐る鉢から粉を掴み、暖炉の中に投げ入れると、そうっと足をエメラルド色の炎の中へ。熱くはないけれど何だか居心地悪い。

「ダイアゴン横丁」

声に出した瞬間、地面が抜けたと思った。落ちているような浮遊感に閉塞感がプラスされた、苦手な人はとことん苦手な感覚。かくいうぼくも得意ではない。

足が地面に触れた。と感じた瞬間、硬く冷たい石の上に肩から落ちる。

上体を起こし、狂った平衡感覚を取り戻そうとぼうつとしていたら、突然後ろから突き飛ばされた。

顔面から倒れそうになったのを慌てて留める。反射神経万歳、痛いから云々とかいう気持ちもあるにはあるが、一番の要因はあれだ、過保護な兄貴のせいだ。心配性だからなあ、ハリー。

「アキごめんっ！ 大丈夫？ ってか早く出て！ 後ろが詰まっちゃうのよー！」

ジニーの声。どうやら、今ぼくを突き飛ばしたのはジニーのようだ。

……あれ？ 確かぼくの後ろにはハリーが並んでたはず。それなのにどうしてジニーがここに？

「ハリーは？」

「うん、アキ。落ち着いて聞いてね」

「あつはつは。何を言うんだジニー、どこからどう見ても落ち着き払った大人の態度じゃないか」

「あのね、本当に落ち着いて聞いてね？」

「何をそう念押しするんだジニー。ぼくはこの上なく落ち着いて……」

ジニーは切ないものを見るような目つきでぼくを見ると、同情と焦りが入り混じったような声でぼくに告げた。

「ハリーが行方不明なの」

落ち着いてなどいられなかった。

ハリーがいない。

そのことは、ぼくをパニックに陥らせるには充分過ぎるもので。

戸惑ったようなウィーズリーおばさんや早口のウィーズリーおじさんの声に胸が騒ぎ、おちつきなく視線をさ迷わせ、トントン、と爪先で煉瓦の敷き詰められた道を叩いた。

今にも駆け出したい程の衝動が、腹の中でうごめいているのが分かる。双子やジニーが気をきかせてぼくに色々話し掛けてくるが、それすらも耳を素通りしていく。

——ぼくも君に対して、相当な過保護らしい。

影を失うような、不思議な違和感、不足感。

「——アキ」

名前を呼ばれて、顔を上げた。視界にウィーズリーおじさんの顔が広がる。

「話、聞いてたかい？」

「あ……す、すいません、聞いてませんでした……」

ウィーズリーおじさんは困ったような顔で笑うと、手分けしてハリーを探す旨を説明してくれた。暖炉のある店名を聞かされ、そこを

回ってくれと指示され必死で覚え込む。

そして最後に、小さな黄色のボールを手渡された。聞くと双子作品のおもちやらしい。手の平で握り潰すと真ん中からぱっくり開き、閃光呪文が辺りに飛び散るのだという。

ハリーを見付けたらそれを空に打ち上げてくれ、という話に頷くと駆け出した。

足の向くまま、心が求めるまま、ひたすら走る。路地を駆け抜け露店を通り店を覗き——そこで、無茶苦茶な走りのツケがやって来た。

「クソっ……っ、はー……ケホッ」

壁に寄り掛かり、体重を預けると呼吸を整える。

自分の体力の無さが嫌になる。体力だけじゃない——身長も体重も何もかも平均に届かない、こんな細くて華奢な身体が嫌いだ。

弱い自分が、大嫌いだ。

弱かったら、何も——大切なもの、何も守れないのに。

「……………守れなかったから……………」

苦しくて、もどかしくて。

切なくて、恋しくて。

もう二度と手に入らないからこそ、愛しくて……

(……………え?)

これは——何?

この気持ちは、ぼくのじゃない。

じゃあ一体、この激しい感情は誰のもの?

ぞつとした。

自分が、自分以外のものに操られているような嫌悪感。

自分という存在の不確かさ。

思わず胸を抑えた。頭に手を当て、意識して呼吸を整える。

今すべきことは、ハリーを見つけること。そう、だから、こんな些細なことでも立ち止まっている時間なんてない。

立ち上がった。一歩一歩足を踏み出し、歩き出す。

まず、ここの地理を把握しなくては。大通りから数本抜けたこの裏道は、なかなか複雑に入り組んでいる。さつきまでは何も考えずに

走ってきたから、帰り道もここがどこなのかもよく分からない。

誰か知り合いでも通らないかな……無理だよな……と思った瞬間、路地を二つ程挟んだ向こうに、懐かしき我が友人、アリス・フィスナーの姿が見えた。

よしぼくつて超ラッキー！ と拳を握り締め、「アリス！」と叫ぼうとした瞬間。

「うるせえクソジジイ！ 俺に構うなっつってんだよ！」

怒鳴り声に、思わず怯んだ。駆け寄ろうとした足が止まる。

「アリス、私は……」

「アンタの言い訳は聞き飽きた！ こうやって無駄に親ぶるのも世間の目え気にしてなんだろう、ホントは今にもこんなガキと縁切りてえ癖に！」

鈍い音が響いた。アリスが小さくよろめき、左頬を押さえて凄絶に笑う。

「俺殿んの躊躇わなくなったな、アンタ」

「……そういうことを言うな！」

「アンタの望んだ『いい子』じゃなくて悪かったな。今でも遅くねえ、他のヤツ養子にでもすればいいじゃねえか。そいつにアンタの仕事継がせてよ、そしたら俺なんてお役御免だろ」

口元に笑みを浮かべるアリスの胸倉を、アリスの父親は掴む。こちらに背を向けているため、彼の表情は読めない。

「偽善者ぶんなよ、親父様よお」

「この……」

「アンタだつて俺嫌いだろ？ 無理しないで放つといてくれよ。そしてたらアンタも俺も心穏やかに暮らせるんだからよ」

「……っ」

「周り見ろよ。町中で手え出すなよ、目立ちたくねえだろ？ 家ん中じゃねえんだよ」

指摘され、乱暴にアリスの父親はアリスから手を離す。

乱れた襟を直しながら、アリスが無表情で呟いた。

「来年まで帰って来ねえよ、クソ親父」

「……私も、顔見たらお前を殴らない自信はない。そうしてくれ」
「望む通りにするさ」

小さな麻袋が——金貨でも詰まっているのだろう——宙を舞う。危なげなく片手でキャッチして、中身も確かめず、乱雑にアリスはそれをポケットの中に突っ込んだ。

そして父親の横を通り過ぎる。

「……アンタ、母さんと結婚なんてしなきゃ良かったよ。……俺なんて、生まなきゃ良かったんだ」

反論しようとしたように、ぼくには見えた。そんな感じの振り向き方だった。その時初めて、ぼくはアリスの父親の顔をまともに見た。

極々普通の、優しそうな顔立ちをした人だと思った。彼が今さっきアリスの頬を殴り、胸倉を掴んだ人だとは、到底思えなかった。

「……あ」

その時、まっすぐこちらへと歩いてきていたアリスがぼくに気付いた。戸惑ったように足を止め、そして再び近付いてくる。

「……よう」

「……久しぶり、アリス」

「何やってんだ、お前？」

一瞬盗み聞きを咎められたのかと思ったが、違ったようだ。

ハリーが行方不明であることを説明すると、呆れたようにため息をついてから「で？ どこ回りやいいんだ」とぶっきらぼうに呟いた。

いつもと変わらないアリスに、ぼくはさっきの親子喧嘩について尋ねるきっかけを完全に失った。

ちらりと後ろを振り返る。

アリスの父親の姿は、既に無かった。

第7話 悪戯仕掛人

「幣原秋？ 誰、それ」

時は、さかのぼること数ヶ月。雪は降らなくなったものの、まだ冷え込みの強い、三月の半ばの話。

リーマス・ルーピンの眩きに、尋ねた本人であるジェームズ・ポッターは大袈裟に驚いた顔をした。

「彼の名前を知らない！ そんなことじゃ君、モグリだと思われても仕方ないぜ！」

「……………」

イラツとしたが、笑顔で堪えた。見兼ねたようにシリウスが「ジェームズが今ご執心の奴だ」とリーマスに告げる。

「なんだ、ジェームズが好きの子か。一体どんな子なんだい？」

今の名前の響きからして、おそらく東洋人——日本人か。そんな子ウチの寮にいたっけ？ と記憶を探るも、ジェームズの「ノンノン！ 女の子じゃないんだなこれが！」とやけにテンションの高い声に遮られる。

「え、じゃあ何、男？ ジェームズそんな趣味あつたの近付かないでくれる気持ち悪いんだけど」

「リーマス酷いよ！ そして違うからね！」

眉を寄せ横目でジェームズを見ながら身体を遠ざけてみると、ジェームズは必死な表情で身を乗り出してきた。

嫌だなあ、冗談なのに、そんな顔しないでおくれよ僕が本気で言つたように思われるじゃんか。

「…………幣原秋は…………レイブンクローの生徒、だよ…………」

小さな声に振り返ると、怯えるようにピーターは小柄な身体を震わせた。もう一緒に行動し始めて半年以上経つと言うのに、相も変わらず怖がったような態度は変わらない。

…………いや、これでも随分改善されたんだった。最初は目すら合わせてくれなかつたからなあ。

この四人組——もとい悪戯仕掛人は、元はと言えばたまたま寮の部

屋割がこの四人だったため発生したに過ぎない。

ジェームズとシリウス、という目立つ二人に、たまたま自分とピーターがくつついた——そんなイメージを、リーマスは持っていた。

だから——他のメンバーがどう思っているかは分からないが、少なくとも自分は——まだ、このメンバーでいることにしつくり来ない。

正直、ジェームズとシリウス二人だけでいいんじゃないか、自分が必要なんじゃないか、と違ってしまふ。

ただ、目立たずひっそりと平凡に、学校生活を送るつもりだったのに。

うつすら残る手の甲の傷に、目をやった。

見慣れた自傷の痕に、感情が渦巻く。

——気付かれては、いけないのだ。

気付かれては——

「ほらリーマス！ ピーターだって『彼』の存在を知ってたぞ！」

ジェームズの声に、我に返った。咄嗟にセーターを引き伸ばし手の甲を隠すと、「というか、誰なの？ その人」と尋ねる。

「リーマスも見かけたことはあると思うよ。闇の魔術に対する防衛術とかで同じクラスだしね。覚えてないかい？ いつもわざわざ影の薄い後ろの席を選んで座る癖、授業中は誰よりも真剣なんだ。先生の言うこと一字一句漏らすもんか、みたいな危機迫る眼差しでね。背が低くて黒髪で、髪の毛ここで結んでる奴」

ジェームズは自身の頭の後ろに握り拳を当て、場所を示してみせる。ああ、と、そこでようやくと思い至った。

「そう。『呪文学の天才児』、幣原秋」

リーマスの思考を読んだように、静かにジェームズは口を開いた。眼鏡の奥の瞳が煌めく。

「その名が示す通り、呪文学の成績はすこぶる優秀だそうだ。といってもまだ授業内での小テストくらいしか行われていないもの……噂では、今度の学年末テスト、総合はともかく呪文学は彼がぶっちぎりでトップだろう、とね」

「ぶっちぎりって……君やシリウスよりも？」

頭がすこぶる優秀なこの友人達は、勉強している様子もないのに澄ました顔をしてトップを取り続けている。頂点に当然な顔して居座る、そんな彼らを脅かす存在がいるのは上手く想像出来なかった。

「どんな子なんだい、その幣原くんは？」

リーマスの問いに、しかしジェームズはオーバーに肩を竦め、両手を上に上げた。

「分からないんだ」

「分からない？ どうしてさ」

「今まで一度もしゃべったことがないからだよ」

ますます不思議に思っ、リーマスは首を傾げる。

「珍しいね、ジェームズ・ポッターともあろう人が、どうして話し掛けに行かないの？」

「……それは、その……」

珍しく口ごもるジェームズに代わって、シリウスが口を挟んだ。

「避けてんだよ、他人に関わることを。幣原くんは、徹底的に」

「そ、そうなんだよ！ まともに話す奴なんて、エバンズとレイブンクローの数人と……後、スリザリンの……誰だっけ？」

気を取り直したようにジェームズが身を乗り出す。執り成すようにシリウスが「スネイプだろ、あの陰気臭い奴」と補足した。

「へえ……どうして？」

「さあ？ と、ジェームズとシリウスは揃って首を傾げる。」

「……前、いじめに遭ってたからだよ」

ばつと、三人は一齐に、声の主であるピーターを振り返った。ひえつと小さく声を漏らし、ピーターは慌てて手近にあった毛布を引っ被る。

「おいピーター、いつまでテメエはっ、俺らにビビればっ、気が済むんだっ！」

「はわっ！ や、やめ、シリウス……！」

業を煮やしたシリウスは、ずんずんと大股でピーターの元まで歩み寄ると、被った毛布を掴み引っ張った。

剥ぎ取られては敵わないと渾身の力で応戦するピーターに、シリウ

スも熱が入る。

何だかんだで戯れる二人を横目に、リーマスは口を開こうとジェームズを見た。

しかしジェームズの表情があまりに真剣なのに、思わず言葉が迷子になる。

口元に指を当て、眼鏡の奥の瞳を細く眇め、ジェームズ・ポッターは何かを考え込んでいるようだった。

「……いじめ……いじめか……僕らだから避けられてる訳じゃなかったんだ……じゃあ……」

「……ジェームズ？」

「でも、どうやって……何？」

笑顔で、ジェームズは顔を上げた。

言おうとしていた言葉を飲み込み、代わりにリーマスは尋ねる。

「彼を仲間悪戯仕掛人に引つ張り込む算段？」

元々ジェームズが始めたようなこのグループ、ジェームズリーダーが引き入りたいと願うなら、リーマス達はそれに従うまでだ。

しかし、ジェームズは首を横に振った。

「彼は、悪戯仕掛人には引き込まないよ」

「……どうして？」

だつてさ、と、ジェームズはいつものように、清々しい、本心からの笑顔であることを見る者に感じさせるような、明るい微笑みを浮かべた。

「悪戯仕掛人は永久に、この四人だけのものだ。他の誰にも名乗らせない、世界最高のエンターテイナーなんだから。ひよつと出の奴に、そんな題目名乗らせないさ」

改めて、リーマスはジェームズを見る。

そして下を向いて、小さく笑った。

「世界最高とは、大きく出たもんだ」

「なあに、僕らなら世界も取れる。シリウスもそう思うだろ？」

もはやピーターと遊んでんのか虐めてんのか分からない程ピーターをもみくちやにしながら、シリウスが「おうよ相棒！」と調子よ

く言う。

ピーターが、悲鳴とも笑いとも付かない声を上げた。

「……うん、そうだね、その通りだ」

「だろ？」

ジェームズが、どうしてこの四人で悪戯仕掛人というグループを作ろうとしたのか、その理由は分からないけれど。

これから先の学生生活は、何より楽しく、ずっと思い出に残るような、かけがえのないものになるだろうと思った。……思えた。



ハリーを発見したとの情報が入り、ぼくとアリスは集合場所であるグリーンゴッツで皆と合流した後、教科書を買うためにフローリッシュ・アンド・ブロッツ書店へと向かった。

分かれるタイミングを失い、居心地悪そうにアリスは背を丸めてぼくらより一、二歩遅れてついてくる。目つきが元々悪い上にその姿勢だから、ロンなんてびびっちゃってアリスから距離を置こうと早足で歩いてみたりして、先程出会ったハーマイオニーに「迷子にでもなるつもり!？」と怒られてる。

ぼくとハリーはアリスを間に挟むと、場の空気を明るくしようとして軽くを叩いたり冗談を飛ばしたりしていた。

こういう時、何も話さなくても、ハリーはぼくがしたいことをすぐに理解し、合わせてくれる。双子であること、家族であることが、ありがたく、頼もしく、嬉しい。

……それに、ぼく一人だったら、きっとアリスと上手く話せなくてぎくしゃくしていたと思う。

ちらりとアリスを見上げた。お父さんに殴られた頬の傷は、そう目立たない。目元の皮膚が薄い部分が、微かに赤く腫れているくらいだ。

時折眉をひそめる仕草を見せるので、少し痛むのだろう。

確かに、先程のアリスの暴言は目に余るものがあった。

でも親がそう簡単に、子供を、しかも顔を、グーで殴るものだろうか。子供のケンカじやあるまいし。

視線に気付いたのか、アリスがぼくに目を向けた。

ぼくが何も言い出さないので分かると、不機嫌そうに眉を寄せ、小さく舌打ちすると前を向く。足元の小石を、ぞんざいに蹴り飛ばした。

「……………」

どこまで深入りしてよいものか。

どこまで踏み込んでいいものか。

基準が、分からない。

関わっていいものか、知らんふりを決め込むべきか。

たかが友達、されど友達。向こうが困っていたり悩んでたりしていたら、手を貸したくなってしまう。

……でも、所詮友達だけで、そんな凶々しく他人の問題に首を突っ込むのもお節介な気がする。アリスも、自分のテリトリーに勝手にずかずか上がり込まれるの、嫌いなタイプだし。

……難しいなあ。

「……………うわ、人、多……………」

ハリーが二つ隣で呟いた。目を上げると、そこには確かに黒山の人だかり。何で本屋にこんな人か？ と疑問に思ったか、それもすぐに納得した。

『サイン会

ギルデロイ・ロックハート

自伝「私はマジックだ」

本日午後12:30〜4:30』

「奥様方、お気をつけくださーい！ 押さないで順番にお並びくださいー！」

本屋のバイトさんなのか、若い魔法使いが数人、あちこちに散らばってお客さんの列を整えている。

並んでいる人はほとんどが女性で、主婦くらいの人ばかりだ。

よりにもよって、サイン会の最中に来てしまうとは。

「タイミング悪……」

「あら、アキ、まさかあなた、彼の凄さが分からないって言うんじゃないでしょうね？ 素晴らしいわ、だって新しい教科書のほとんどが彼の本なんですもの」

ハーマイオニーが嬉々として話すのに、苦笑いをした。

……あれが教科書？ ただの娯楽本としてなら読めなくもないが、というかあの本のどこから学べと言うんだ？

誕生日プレゼントとしてスネイプ教授が贈ってきた『ロックハート詰め合わせ』は、まあ確かに役に立った。あんなくだらない——もとい、役にたたないものだけということが分かったのだけでも儲けものだ。

今年の闇の魔術に対する防衛術の教授は彼のファンなのだろうか。ハーマイオニーに引つ張られ、不本意ながらもサイン会の列に並んだ。

脇に山積みにされていたロックハートの著書を、何の気なしに一冊掴んで値段を見る。

……と、目玉が飛び出るくらい高くて唾然とした。誰だ値段設定した奴は、物の価値が分かってない愚か者め！

同時に、ウィーズリー家の家計が心配になってきた。

hogwartsの学生が5人つてことは、すなわち掛かる学用品の値段も5倍つてこと。決して裕福とは言い難いウィーズリー家（これ婉曲表現ね）に、育ち盛りの男二人が転がり込んでいるこの状況下、やはり圧迫している家計分は返すべきだろう。

ぼくは自分で買うとして、スネイプ教授からのロックハート詰め合わせは双子に謹呈するでしょう。

そう一人で領いている間にも、列はどんどん前に進んでいく。

やがてロックハートご本人の姿が見えるようになった。

服のセンスは、悔しいけれども悪くはない。顔も、今のぼくのよう斜に構えた態度でもってしても咄嗟に欠点が出て来ないレベルには整っている。

……まあ確かに、ぼくにはロックハートを嫌う理由はないんだけ

ど。娯楽本を教科書と称し高い金を払わせる、新しい闇の魔術に対する防衛術の教授に対して苛ついているワケだし。

「痛っ—」

ロンが呻いて、じとつとした目で、ロックハートをあらゆるアングルから撮り続けるカメラマンを睨みつけた。

しかし、カメラマンはどこ吹く風と言った体で、「日刊予言者新聞の写真だから」とうそぶく。

「それがどうしたってんだ」

ロンが吐き捨てるも、カメラマンはシカト。しかしロックハートには聞こえたらしく、ん？ とした表情で顔を上げた。

そのまま辺りに目を遣り——やがて、ある一点で止まると、いきなり立ち上がって叫ぶ。

「もしや、ハリー・ポッターでは？」

ああ、またか、と、ぼくの兄貴は額に手を当て、小さく呟いた。

人垣がさつと割れ、あれよあれよという間に前に引つ張り出されるのを、苦笑いして見送る。

ハリーの有名人っぷりは、何も今に始まったことではない。

道を歩けば知らない人に手を掴まれ感動され、店に入れば握手会が始まることもざらにある。

ヴォルデモートを倒したというのは、それだけ凄いことなんだとは分かるけれども、ハリーは不本意のようだ。まあそうだろう、物心つく前にやったことなのだし、実感なくて当然だ。

「皆さん！　なんと記念すべき瞬間でしょう！　私がここしばらく伏せていたことを発表するのに、これほどふさわしい瞬間はまたとありませんまい！」

ハリーの肩に腕を回し、完璧スマイルでロックハートが辺りを見回した。ハリーは苦虫を100匹ほど噛み潰したような表情で、あらゆるところに視線をさ迷わせている。

「ハリー君が、フローリッシュ・アンド・ブロッツ書店に本日足を踏み入れたとき、この若者は私の自伝を買うことだけを欲していたわけでありませぬ——それを今、喜んで彼にプレゼントいたします。無料で——

」
ロックハートの声に、熱烈な拍手が上がった。小さく肩を竦め、
「ロックハートってどう思う？」とアリスに尋ねようと振り返る。

しかしさつきまでアリスがいたはずのところに本人はいなくて、慌
てて辺りを見回しアリスの姿を探した。

出口へ向かうアリスの背中を見つけ、人混みを掻き分け追いますが
る。

「待つ……待ってってば！ まだ何も買ってないじゃん！」

「あんな男の書いた本、中身もスカスカに決まってるだろ」

アリスは振り返りもしない。そのままずんと足を進めていく。

……とつさに「そんなこたあないよ」と反論出来ないのがつらい。

「で、でも！ 一応学校指定の教科書なんだから、ちゃんと揃えない
と」

「……はあ」

アリスは苦り切った表情で振り返ると、ちらりとロックハートを
見、「最悪……」と呟いた。

「そ、それにさ！ 内容なんて読んでみないと分からないし！ 書い
た人は確かにあの人のだろうけどさ……」

ぼくの必死のフォローに、にもべもなく「読んだことあるから」と
返すアリス。……なら、内容の酷さも重々承知って訳だ。なおさら引
き留めるのが難しくなってきたぞ。

「……あ」

その時、アリスが小さく声を漏らした。視線はぼくの頭上に向けら
れている。

思わず、身体を捻って後ろを見上げた。

「……おや、奇遇だな、フィスナーの息子。父親はどうした、いないの
か？」

「……どうもつす、ルシウスさん」

長い金髪に、黒いローブ、さりげなく高級感のあるカフス。歳の頃
はぼくらの父親くらい。纏うオーラは重く、どことなくスネイプ教授
と通じるところがある。

「親父はいませんよ……ルシウスさんこそ、どうしてここに？」

「ああ、ドラコの学用品を揃えにね。……しかし残念だ、お前の父親に伝えたいことがあったのだが」

ドラコ、という単語に、ぴくりと反応した。ひよっとして……ドラコの父さん？

そう思っただけで見てみると、他に考えようのないくらいにそっくりだ。

「……親父に用事なら、本人に直接伝えた方がいいですよ」

「本当に、君ら親子は不仲だな。昔が懐かしいよ、どこに行くにも父親っ子だった君が」

「……その話なら、止めてください」

アリスが硬い声で遮る。ドラコの父親——ルシウスさんは「それは失礼」と慇懃に笑った。

「それでは、私はこれで。お父上によろしくな」

アリスの目が微かに細められる。拳を身体の横でぎゅっと握った。

思わずどきりとするが、しかしアリスは小さく息を吐くと手の力を緩め、「さようなら」と静かに返す。

ルシウスさんはすつと背を向けかけ——突如、何かに驚いたように向き直った。

ずんずんと近付いてきて、ぐわしつ、とぼくの肩を掴む。

あまりに唐突なルシウスさんの行動に、後ずさりどころか身じろぎ一つ出来なかった。

「……名を名乗りたまえ」

低い声で、ルシウスさんは呟いた。刺すような鋭い視線に動揺する。

どうしてそんな真剣にぼくなんかの名を尋ねるのが分からなくて、戸惑った。

「えつと……アキ・ポッターです」

「秋？」

「え？」

強く肩を揺さぶられ、目眩がする。

「……幣原秋の血縁か何か？」

「えー……多分、違うと……」

「まさか!」

……んなこと言われても……一応ぼくはハリーの双子の弟で、ジエームズ・ポッターとリリー・ポッターとの間に生まれた子であつて、幣原とは血の繋がりはないのであつて……多分、一応、戸籍上では。

じゃあ一体、ぼくと幣原はどんな繋がりがあるのだろうか？

その時、遠くから「父上!」という声が聞こえた。

ルシウスさんは弾かれたようにぼくの肩から手を外す。そして、やがて人込みを掻き分けやってきたドラコに、強張った笑顔を返した。「父上、ここにいたんですか、探したんですよ。……あ、アキと……フィスナーもここにいたのか。買ったか君ら、早めに行かないと売り切れる勢いだぞ。何せ、ホグワーツの全生徒がこれを買いに来るんだからな……」

ドラコの両手一杯のロックハートの本を、ルシウスさんは受け取ると丁寧に鞆の中に詰め込んだ。荷物がなくなつて軽くなつたことを示すかのように、ドラコは小さく肩を回す。

「……行くぞ、アキ」

「あ……うん」

アリスに促され、ようやくと視線をマルフォイ親子から外す。

ルシウスさんと目を合わせないように注意しつつドラコに手を振ると、アリスの隣に並んだ。

「……畜生め」

小さな声で、アリスは吐き捨てる。

眉を寄せ苦しげに前を見つめるその姿が、何だかとても痛々しかった。

こつそりとアリスを盗み見て、うなだれて自分の足元を見つめる。アリスはその日、ずっと不機嫌そうに黙り込んでいた。

第8話 忘れ物

「ねえリリー、機嫌直してよ……」

むすつとした顔でそっぽを向くリリーに、嘆願するように呟いた。

時刻は夜。ホグワーツ特急を降りた後、学校へと向かう馬車の中で、辛抱強くぼくはリリーの機嫌が直るのを待っていた。

「ごめん、もうあんなことしないから……」

「あなた、もしかしたら死んでいたかもしれないのよ？ 何の魔法かも分からないような呪文に飛び込むなんて信じられない！」

赤く染まった頬を膨らませ、リリーは眉を寄せてぼくを睨む。まいったな、とぼくは頭を掻いた。と、そこでセブルスが助け舟を出してくれる。

「こら、リリー。君は秋に助けられたんだぞ。礼を言いこそすれ、怒るのは筋違いじゃないのか？ 秋が入っていかなければ君が怪我を負っていたんだぞ？」

「だから嫌なのよ！」

思わずセブルスは黙り込んだ。リリーは涙の溜まった瞳でぼくを睨む。

「私のせいで秋が、誰かが怪我をするのが嫌！ それなら私が怪我した方が100倍マシ！」

「リリー……」

「……自分の不甲斐なさに、呆れてるの。しばらく話し掛けないで。」

……学校に着く頃には、治ってるはずだから」

そう言っつて、ローブを毛布のように頭からすっぽり被ると、座席の隅っこに小さく体操座りをしてしまった。ぼくとセブルスは顔を見合わせ、小さく笑う。

「リリーは本当に可愛いねえ」

「……そうだな」

柔らかい眼差しでリリーを見つめるセブルスに、こっちまで何だか心が暖かくなってくる。と、セブルスがぼくを見て「で、どうするんだ？」と尋ねた。

「どうするって?」

「あのグリフィンドールの眼鏡から、何か招待されたら?」

「ああ……」

『僕ら、いい友達になれる気がするんだ! つきましては来週の日曜日、東の賢者の石像前に集合してくれる? そうだ、エバンズとスネイクもよかつたらどうかかな?』

絶対来てね、秋! と、今までに見たことないような蕩ける笑顔を浮かべられちゃ、断れっこない。しかもお相手は、かの有名なジェームズ・ポッター。

「……セブルスが行くなら、行く」

「……あのなあ、僕らはほぼ君のオマケ状態だったぞ? 奴らが来て欲しいのはあくまで幣原秋、君であって僕らじゃない」

「でも……」

「でも、じゃない。君が決めるんだ、秋」

セブルスに諭されて、考える。

「……じゃあ、行くから、着いてきて」

「……仕方ないなあ」

そう言ったセブルスの顔がにやけていて、思わずこちらも含み笑いをする。

それから二人で、寮での話や授業の話、課題のどこそこが難しかったのだの、どうでもいい話をしばらく喋り合った。一番セブルスが興味を持って聞いてくれたのは、意外にも勉強関連の話じゃなくて、ぼくの家族についての話だった。でもぼくがセブルスの家族について尋ねると、すぐに口ごもり言葉を濁してしまい、「それよりも!」とセブルスらしくなく強引に、違う話題へと引っ張るのだった。

日が傾いて来て、太陽がだんだんとオレンジ味を帯びてくる。時刻を確認して、ぼくとセブルスは無言で頷き合った。

「リリー、機嫌はどうだい?」

「……まあまあ、よ」

毛布代わりにリリーが頭から被っているローブの裾を摘み、ぼくとセブルスはそのおつと引っ張り合げ、リリーに笑いかける。唇をへの字

に曲げながら、リリーはローブの中から姿を現した。

「今、どこ？」

「わかんないけど、あと2時間くらいは掛かると思うよ」

「そう」と頷いて、所在なげにリリーは座席に浅く腰掛けると、足を投げ出す。

「リリーも、ジエームズのやつに来る？ そりゃ、ジエームズが嫌いなら無理には言わないけど」

「……秋もセブも行くんでしょ？ なら、行くわよ」

そう言つて、リリーは頬をぷくつと膨らませた。その仕草が殊更に可愛らしく、小さく笑う。

「でもセブルス、グリフィンドールばかりの中に入っても大丈夫？」

「……生徒間の交流だ、別段問題はないだろう」

渋い顔で、セブルスがリリーの問い掛けに答えた。何のことを喋っているのか分からなくて、首を傾げて「何の話？」と二人の間に割つて入る。

「そつか。秋はレイブンクローだし、今までずっと日本にいたから知らないのよね。……あのね、グリフィンドールとスリザリンって、代々ずっと仲が悪いのよ。寮の対立、とでも言うのかしら、とにかく因縁の仲！ グリフィンドールの中でスリザリンは、まるで親の敵のように憎まれているわ。スリザリンでもそうなの？」

リリーの振りに、セブルスは静かに首肯した。

「……クイディッチとかを、今度よく見てみるといい。スリザリンをグリフィンドールが応援することは有り得ないし、逆もまたしかり。スリザリンVSグリフィンドールなどはもう、半ば反則対決、野次対決みたいで、正直見ていられない」

「そうなんだ……」

実は数回しかクイディッチを見ていないぼくである。……いや、友達いないと気付かないもんだよ、学校行事つてのはさあ。ルールくらいは覚えたが、自寮の選手の名前でさえも分からない。まあ、別段普段の生活に支障はないから構わないんだけど。

「……え、ジエームズ・ポッターはグリフィンドールだよ？ ……大

丈夫なの、セブルス」

「問題ない」

さりとセブルスは自信ありげに言うと、リリーの頭をぼんぼんと叩いた。驚いたようにリリーは目を丸くすると、恥ずかしそうに唇を尖らせてそっぽを向く。そんなリリーの表情の変化に気付かずに、セブルスはぼくを見据えた。

「秋、リリーだってグリフィンドールだ。でも、見ろ、僕らが対立しているように見えるか？　つまりはそういうことだ。……寮なんて関係ないんだよ。大切なのは……」

「友達、ってことだけだろ？」

ふふつ、とぼくとリリーは、顔を見合わせ、小さく笑った。そして腕を上げると、セブルスと拳をぶつけ合う。

「友達、な」

「……ああ」

『友達』なんて響きが、あの頃は無性に輝いてみえたんだ。

この友情は一生続くものだ、無根拠に思っていた。

あの頃が、今となっては、ただただ懐かしい。



9月1日、いよいよ待ち侘びたこの日が来た。……いや、待ち侘びたという程指折り数えて待ってはいなかったんだけど。

特に今年は、ウィーズリー家に居候させてもらっている訳で、むしろずっとここで過ごしていたい程の居心地の良さを提供してもらっている。ご飯は美味しい家族全員いい人だし（ジニーに追い回されるのが玉に瑕だ、ハリー相手じゃあんなにシャイなのにぼく相手じゃどうしてこうも違うのだろう）、双子と悪戯商品を考えるのもすごく楽しかった。くそう、ロンが羨ましい。

しかし今日、いよいよ出立する日となった時に限って、何だかんだで遅れに遅れ、ぼくらはカートを押しながら駅のホームをダッシュしている次第である。

「ハリー、ロン、急いで！」

「アキが速いんだよ！ 走ってカートに飛び乗るとか、身体小さくないと出来ないだろ！」

「アキ、先行っていいから！」

少し遠いハリーとロンの姿を見たまま、何気なく9番線と10番線の間の壁に身を預けた。倒れ込むようにホグワーツ特急のプラットホームに入ると、汽車の中に駆け込む。

「おっ、アキ、間に合ったな」

「正直乗り逃すんじゃないかと思ったぜ」

口々に双子がそう言いながら、ぼくの荷物をコンパートメントに積み込んでくれた。時間を見れば後1分、ハリー達はまだ来ない。

嫌な胸騒ぎがした。慌てて汽車から飛び出しホームに飛び出す。その時ちようど汽笛が鳴り振り返るも、9と4分の3番線ゲートに走った。……いや、走ろうとした。

「アキ！ 何やってんだテメエは!!」

パーカーのフードを引っ掴まれ、首が絞まる。ぐえ、と声を出す暇も与えられず、手首を引っ張られ乱暴に汽車の中へと引きずり込まれた。

目の前で、扉が閉まる。ガタンツ、と、エンジンが掛かる音が低く響いた。

シューつと蒸気を吐き出し、汽車はゆつくりと進み出す。プラットホームにいた見送りの人々の姿が右から左へ流れる速さが徐々に速まり——やがて、目の前から駅が消えた。

「何してんだ、これ逃したら次はねえんだぞ。分かってんのか？」
ため息混じりで言われる。ぼくは奴を振り返らず、流れる景色を見ながら呟いた。

「……汽車、出ちゃったね」

「ああ？ ……ああ、そうだろうな。てかさっきの、どうしたんだ？」

忘れ物でもあったのか？」

「……まあ、ね。アリス」

奴を、振り返る。アリス・フィスナーの顔を見上げて、へらつと笑った。

「ハリーとロン……置いてきちやっただみたい」

忘れ物、二つ。

どうやって取りに帰ろうか。



ハリーとロンが、ホグワーツ特急(ちなみにこの一本しか出ない、らしい)に乗り遅れた。

……どーすんだ、これ。

微かな可能性に期待して、ハーマイオニーとアリスと三人で列車の中を探し回ったけれども、行方は知れず。新入生歓迎会の間もそわそわとしていたら、アリスに腕を小突かれた。

「少しは落ち着け、馬鹿。先生には連絡したんだろ？　なら、どうにか大丈夫だって」

「そう言われても不安なもんは不安なんだよ……」

ぼくの言葉に、アリスは苦笑したが、何も言わなかった。

組分けの儀の後先生から二言三言の連絡があり、ようやくと式が終わった。時計を見ると、式自体は30分くらいしかかかっていない。体感では2時間は軽く過ぎてるもんと思っただけけど。

寮のテーブルに豪華な料理が並ぶのを尻目に、立ち上がって教員席まで走る。ちょうどフリットウィック先生がダンブルドアに何やら耳打ちしているところで、ハリーとロンのことだろうか、と胸が騒いだ。

「ダンブルドア先生！」

「おう、アキ」

駆け寄ると、ダンブルドアは何もかもお見通しだとしても言うように、驚いた様子も見せず飄々とぼくに笑いかけた。そしてすつと立ち

上がると、そのままぼくを手招きして教職員の出口の方へと歩き出す。一瞬躊躇したものの、その後ろに続いた。

「先生、ハリーが……」

「分かっておる。今はスネイプ先生の研究室におるそうじゃ。しかし、わしを頼ってくれるとは嬉しい限りじゃのう、アキ」

え、とぼくは首を傾げる。

「ハリー達はどうかやって学校まで来たんですか？」

すると、ダンブルドアはくすくすと笑いながら「当てられるかの？」と悪戯っぽくウィンクした。唐突な振りに戸惑いながらも、まあスネイプ教授の研究室に着くまでの暇潰しにいいだろうと思ひ、腕を組んで考える。

「……ふくろう便ですか？」

「そうであつたらよかつたがお……残念じゃ」

なんだ、違うらしい。それじゃ何だ？

「箒……はさすがに無理だろうし……姿くらまははまだ出来ないし……近くにいた人とか……アーサーおじさんに送ってもらおうとか……車使つて……」

そこでダンブルドアが「近いの、アキ。そうじゃ、車じゃ。アーサーはおらんかつたがの」と口を挟んできた。車だけどおじさんがいない？ そのヒントに首を傾げ――

「……え、まさか――」

一つ、思い至った。青ざめたぼくに追い撃ちを掛けるように、ダンブルドアは「そう、そのまさかじゃ」と優しく頷いた。そしてとどめを刺すかのように、ぼくにそつと夕刊予言者新聞を差し出す。『空飛ぶフォード・アングリア、いぶかるマグル』という見出しに、言葉を失った。慌てて広げ、読む。

「馬鹿だ……」

それだけをやつと喉から絞り出した。ダンブルドア先生は「本当、馬鹿なことじゃろう？」と楽しげな目つきで問い掛ける。

「退学になつてもおかしくないですよ、これ……」

「本当にのう。でもこんなことをやらからこそ、ジェームズ・ポツ

ターとリリー・エバンズの息子だと思わんか？」

思わず黙り込んだぼくに、構わずダンブルドアは同じペースで歩いていく。小走りでその後ろを追った。

「まあ、それはさておき……わし個人の意見はそれなのじゃが、しかし校長という身分からして、わしは彼らを叱らねばなるまい」

「た、退学にはなりませんよね？」

「大丈夫、処罰程度で済むことじやろう」

ダンブルドアの言葉に、ほっと胸を撫で下ろす。

螺旋階段を下った地下に、スネイプ教授の研究室がある。何だかんだで足を踏み入れるのはこれで三回目だ。ダンブルドアは、ドアを開けると『お先にお入り』と片目を閉じてぼくを促した。慌てて頭を下げ、駆け込む。

「ハリー！」

叫ぶと、驚いたように三人分の目玉が一斉にぼくへと向けられた。ハリーとロンとスネイプ教授だ。走るスピードを緩めず、そのままハリー目掛けてダッシュする。

「アキッ！」

ハリーが『僕の胸に飛び込んでおいで☆』みたいな笑顔を浮かべ、両手を広げた。ぼくも負けじと満面の笑顔で――

「このクソ馬鹿兄貴があっ!!」

全体重に速度を掛けた力を両足に乗せ、我が愚兄に愛の飛び蹴りをお見舞いする。もっともぼく程度の力じゃ、せいぜい数歩後ろによるめかせるくらいしか出来ないけれど。

どんっ、と胸を張った。

「な、何すんだアキッ！」

「何すんだはこっちの台詞だ、馬鹿兄貴！ 目茶苦茶心配したんだぞ!？」

ビシッと指を突き付けると、怯んだようにハリーは身体をのけ反らせた。

「ホグワーツ特急には間に合わない、挙げ句の果てには『空飛ぶフォート・アングリラ』!? どんだけウィーズリーおじさんに迷惑かけたら

気が済むのさ、恩を仇で返すってこういうことだよ!」

まくし立てると、ハリーはバツの悪い顔をして目線を逸らした。その反応に、熱くなっていた頭が少し落ち着く。ダンブルドアは小さく笑った。

「ハリー、後でアキに一言詫びておくのがよいじやろう。あとミスグレんジャーと、それからミスターフィスナーにもな。……さて、どうしてこんなことをしたのか、説明してくれるかの?」

ぼつりぼつりと、申し訳なさそうな口調でハリーが喋り出す。ぼくが近くにいたら喋りにくいだろうと思つて(だつてほら、ぼく、ハリーの弟ですし。弟に先生から怒られてる現場なんて見られたくないでしょ?)静かにドアに近付くと、両手で押し開き、小さく開いたスペースに身体を滑り込ませた。

と、ドアをそうつと閉めようとした時、ドアを押さえる一本の腕。慌ててドアから離れると、出て来たのはスネイプ教授だった。

なんか……久しぶりに見ると、相変わらず精気を失った顔しているというか、病気にしているみたいな顔だよなあ。生命力残り僅か、赤ゲージ範囲みたいなの……。いかん、この前こつそりプレイしたダドリーのコンピューターゲームの影響が中々に強いぞ。

「休暇はどうだったかね? アキ・ポッター」

そんな変なことを考えていたせいかな、教授の言葉に対しての反応が少し遅れた。慌てて口を開きかけるも、すたすたと教授は足早に歩き出す。慌ててその後ろを追った。教授の2、3歩後ろで歩みを合わせ、先程の問い掛けに答える。

「別段変わったことはありませんでしたよ。ただちよつと屋敷しもべ妖精が大騒ぎしたり、一週間の断食に挑戦してみたり、そんな極々普通のバケーシヨンを過ごしてきました」

「それは普通なのか……?」

「断食程度なら」

「そうか……」

納得されてしまった。納得される家庭環境に泣けた。

「……あ。そうだ、教授」

「何だ？」

「誕生日プレゼント、ありがとうございます」

「……………別に」

頬を長く細い指で搔きながら、教授は視線を宙に漂わせる。気まずそうにそわそわと指を神経質に動かしながら、「……………まあ、べつ、別に……………不要ならば捨つつ、捨ててもらっても構わん」と、何故か所々噛みながら呟いた。

「それに、その、き、貴様だけ特別という訳ではなく……………教師と生徒という関係だけに留まらない者にはきちんと、あ、いや別に私と貴様はただの教師と生徒というだけの間なのだが、その……………そう！ 幣原秋だ、あいつと貴様があまりにも似ているから、思わず情が湧いて……………」

……………。

なんだこの人、可愛すぎる。

「とにかくその、なんだ！ 黙って受け取りたまえ」

別にぼく、プレゼントへのお礼を言っただけなんだけどな。

でも、そんな野暮なことは口にせず、ぼくはただ笑顔で「はい」と頷いたのだった。

第9話 セカンド・メット

新学期が始まって、学年が一つ上がっただけで別段何も変わりのない毎日が始まった。

変わったことと言えば、使ってる教科書が変わったり、先生が多少違っていたり、後輩が入って来たりといったことだけ。どれもこれも今までと違ったところはなく、ぼくは、その中で唯一の大イベントである（気がする）ジエームズ・ポッターからのお誘いの日を心待ちにしていた。

『日曜日午後2時、東の賢者の石像前』。

彼、ジエームズ・ポッターから言われた言葉を、もう一度胸の中で繰り返す。今日は金曜日、お誘いの日まであと二日ある。

そんな中、ぼくは図書館にて本を探していた。

何を探していたのか、と問われれば……。

（やっぱ、手土産くらいは持っていた方がいいかなあ）

THE・日本の心。ぼくは大まじめだ。

しかし、手土産といってもぼくはお金を持っていない。あるとしても小学生の小遣いレベルのチップなものだし、そんなに何か買ったところで、何の面白みもない。

そこで、ぼくは手軽な、いわば一発芸感覚で使える魔法ってないかなーと、ここ、図書館にて探していた次第である。

（実際、ジエームズ・ポッターがぼくに興味を持つなんて、このずば抜けた魔力がなかったら有り得なかった訳だし……）

ならば、魔力を手土産にするのは妥当というものだろう。

「水が湧く魔法？ 後片付けが大変じゃん……没」

パタン、と手元の本を閉じた。本棚の元の場所に戻すと、さて、と上を向く。

OWL試験^{初級レベル}までの本はあらかじめ読み尽くしてしまった。後は上級生用の書物なのだが……ふむ。

無理だと思っても、一度手を伸ばしてみる。

……届かない。

全身全霊で背伸びをしてみる。

……これもダメか。

ふう、と額の汗を拭うと、腕を組んだ。目線より遙か上にある棚を睨みつける。

考えてみようじゃないか。

上級生の書物。しかしそれは、現在2年生であるぼくにとってそうであるだけで、6年生にとってみれば何のことはない、普通に授業で使うしテストに出るレベルのものである。つまり、『上級生の書物』とは相対的なものなのだ。自分の年齢によって、同じ書物が『下級生の書物』にもなりうるということ。そして、その書物は大抵の場合、実際に授業で使いテストに出る学年に所属している学生にしか必要とされないのである。よって、そこから導き出される結論は、ただ一つ。「ぼくも六年生になれば、あれくらい普通に平気に背伸びもせずに、タイトルだって斜め読めちゃうくらい目の高さになって簡単に手に届くくらい背が伸びている……!」

やばいね!

あと4年で35センチか!

……1年で8・75センチ? ちょっと待て、ぼくは去年確か3センチしか……

………

成長期という奇跡を、信じよう。魔法があるんだ、奇跡だってきつと起こる! 4年後にはぼくだって身長180センチ越えのイケメンになるんだい! スポーツだって万能で女の子にキヤーキヤー言われてやるんだい!

その時、ぼくの頭上を誰かの腕が通った。その腕はぼくが見つめてやまない棚の、焦がれてどうしようもなかった書物に軽々と触れ、何の抵抗もなく引き抜いた。

………あ。取られた。

「……………」

どうして背が小さいというだけでいわれなき迫害を受けにやならんのだ、そもそもこの図書館、脚立を用意しておけと何度言ったら

……いやそれよりも……

慌てて、ぼくは振り返った。

「どうぞ、可憐なお嬢さん」

目の前に差し出された本と、唐突に降ってきた台詞に、ぼくの思考はしばしフリーズをする。

「欲しかったんだろ？　そういう時は周りを頼ってもいいんだぜ。近くにこんな頼りがいのある男がいるってのに……。ま、そういう女の子、俺好きだよ」

すつと通った鼻梁、涼しげで綺麗な二重の瞳、音を立てて揺れる黒髪。整った顔立ちを引き立てるかのように、程よく緩められた制服。第二ボタンまでが開いたその首に締まっているのは、金と赤グリフィンドールカラーのネクタイ。

よく見ると案外幼い顔してんだけど、その幼さと色気がいい案配に混ざり混ざって、普通の人には出せないイケメンオーラを平然と振り撒いている。

というか。

(シリウス・ブラックじゃんかよ！)

血の気がさあつと引く。まずい、この状況は非常にまずい。女子だと間違えられたこともショックだし、人生初のナンパ(?)が同性だということも中々トラウマチックだ。しかし、更にまずいことがある。

(何でぼくの顔覚えてないんだ、このイケメンは！)

アンタらのトップがぼくに声掛けたんじゃない！

日曜日午後2時東の賢者の石像前の約束はどうなんだよ！

「うっわ、難しい本読んでんねー。何年生？」

アンタと同じ2年だよ！　とも言えず、うう、と後ずさった。と、逃がさないでも言うように、シリウス・ブラックはぼくの肩のすぐ横に手をつく。本棚にピツタリ背中をつけ、ぼくは目線をさ迷わせた。誰か、誰か知り合いはいないものか……。

しかし、友人なぞこの学校では両手の指で事足りる程しかいないばかり、そう簡単に遭遇なんて出来る訳がない。

しかも、シリウス・ブラックが並外れたイケメンという事実が女の子達の嫉妬を掻き立ててしまったようで……ああ、睨まないでつてば。どうかぼくと代わってくださいお願いします。

「その色のネクタイ……つてことは、レイブンクローなんだ。頭良さそうでもないな。こつちの方じゃあまり見ない顔だけど、もしかして外国から来たの？」

迫ってくるシリウス・ブラックに、思わず肩を縮めた。ダメだ、怖い。知らない人に無遠慮に距離を詰められることが、触れられることが、怖い。

思い出してしまう。

自分が相手を傷つける力を持っていることを、否応なしに自覚してしまおうから。

それが好意であれ、敵意であれ。

ぼくの心が、堪えられない――

「ブラック！ その子嫌がつてるでしょ、離れなさい！」

唐突に響いた声に、我に返った。舌打ちと共に腕が離れる。

……助かった？ いや、それよりも……。

「別に嫌がつてなんかねーつて。本取つてあげたんだぜ？ 俺」

「じゃあさっさと渡してあげて離れなさいよ！」

「あー……はいはい。うるっせえな……」

「図書館でナンパするような非常識には言われたくないわ！ ……それよりあなた、大丈夫？ 変なことされたりは……」

そこで、彼女は絶句した。覚悟を決めて、ぼくは彼女――ぼくの数少ない友人の一人、リリー・エバンスに笑いかける。

「助けてくれてありがとう、リリー」

『ナンパ』という単語が、ぼくの中で黒歴史となった瞬間だった。



「え、あの吠えメールつてロンのだったのかい？ あんなの見たのぼく初めてだったから、びっくりしちゃったよ」

夏休み明け最初の昼休み、中庭に出て来たハリー、ロン、ハーマイオニーの姿を見つけぼくは駆け寄った。アリスがあつという間に木陰で眠ってしまい、一人で残りの30分間の休み時間をどう潰そうと途方にくれていた所だったのだ。

「吠えメールのことはもう言わないでくれよ、アキ。僕らだつて反省してるんだぜ」

ロンが唇を尖らせ主張する。そして「そうだ、アキ」と、ふと思いついたようにローブをまさぐると、不器用にテープでぐるぐる巻きにされた杖を取り出した。

「君の魔法のセンスを見込んで頼みがあるんだけど、これ、どうにか直せないかなあ？」

乱暴に扱ったらすぐに二つに分かれてしまいそうなそれを、おっかなびつくり受け取る。テープをそうつと剥がし、静かに地面に置くと腕を組んだ。

「これは……なかなか派手にやったねえ。一体どうしたの？」

「どうしたつて言うか……僕らが車で来た時、暴れ柳に突っ込んでじやつて。その時に」

ハリーが笑いながら答える。ハーマイオニーがそれについてロンにお小言を言うのを尻目に、杖を取り出した。杖の先で静かになぞると、白銀の糸がすうつと杖の傷口に絡みつく。糸の色が完全に杖と同化してから、ぼくは杖を拾い上げるとロンへと手渡した。

「こりや中の芯も傷ついちゃってるよ。ぼく程度じゃ完璧には直らないけど、とりあえず外側の木の部分だけでも繋いどいた」

「サンキューアキ！ 君、やつぱ凄いいよ！」

素直な賛辞に照れながら「でも気をつけて。芯の部分がダメになっちゃってるから、魔力が暴発しやすくなってるからね」と一応忠告しておく。聞いているのか聞いていないのか分からない笑顔でロンは適当に頷くと、いそいそとローブの中に杖をしまった。

「……ハーマイオニー、よくそんなの読む気になるね……」

ハーマイオニーの手にある、ロックハート著『バンパイアとバツチり船旅』を見ながら、ぼくは呆れた声を出した。途端ぐいつと詰め寄

られ、慌ててぼくは身体を引く。

「何言ってるのアキ！ 彼は素晴らしいのよ、読んでみて、よーっく！ 分かったわ！ 大体あなた、書店で買う前からこの本に対して気の乗らない返事ばかりして！ さてはまだ開いてもないんでしよう！」

「ちや、ちゃんと開きはしたよ……」

あまりの剣幕にたじたじた。女の子って強い。ハリーが笑いながら「ハーマイオニーはロックハートにお熱なんだから」と茶化すと、ハーマイオニーはぱつと赤くなつてハリーを睨む。……ふ、所詮女の子なんて、イケメンに弱いんだ。……あ、アクアもこうだったらどうしよう。ぼく、三日くらい立ち直れない自信ある。

組分けの儀の後、闇の魔術に対する防衛術の教師としてギルデロイ・ロックハートが紹介された時は、大広間に女の子達の嬌声が響いたものだ。大半の男子が耳を塞ぎ、アリスなど3割は殺意の籠った目でロックハートを睨み舌打ちしていた。モテる男は敵なのだ。特に、学校内に狙ってる女の子がいたりした場合。

「次が、初めての彼の授業なのよ。ああ、楽しみだわ……」

もう完全にハーマイオニーは目がハートになってしまっている。こりや何言っても聞いてくれそうにない。恋は盲目とはよく言ったもんだ。

「……それ、アキが言う？」

「うるさいハリー」

否定はしないけど。

その時、何だか視線を感じてぼくは振り返った。首に大きなカメラを掛けた薄茶色の髪の少年が、ぼくらの方を躊躇いがちに窺っている。顔立ちが幼いから、ぼくらより一つ下、一年生だと思われた。この時期の男子って本当に、一年で見違えるくらい大人びるものだから。一つ歳が下なだけなのに、凄く幼く見えたりするのが不思議だ。

「それ、君が言うのかい？」

「うるさいよロン」

これでも去年より3センチ伸びたのだ。まだまだによきによき伸

びる筈なのだ。

「どうしたの？ アキ」

ハリーがぼくの視線の先を辿り、少年へと行き着いた。途端に少年は顔を真っ赤にし、そしてぼくらの方に近付いてきた。

「ハリー、元気？ 僕——僕、コリン・クリービーと言います。僕も、グリフィンボールです。あの——」

ロンに目配せして、ぼくらはそつとその場を離れた。3メートルくらい距離を置くと、どうやら写真をせがまれているらしいハリーを眺める。

「有名人は大変だなあ」

そう言つてロンに笑いかけると、ロンは「……そうだね」と微妙な表情でハリー達を横目で見ていた。

「アキは、羨ましいって思つたりしないの？」

「何を？」

首を傾げ尋ねると、ロンは微かに頬を染めた。下を向くと、小声で呟く。

「だって……もしかすると、『生き残った男の子』は君だったかもしれないんだよ。有名になつていたのは君かもしれない。なのに、いつつも話題になるのはハリーばかり……それって、何か嫌じゃない？」

赤みがかつた瞳が、何かを訴えるように揺れた。

「……ぼくは」

唇を舐め、言葉の続きを探す。

「ぼくは……」

「サイン入り写真？ ポッター、君はサイン入り写真を配っているのかい？」

その時、ドラコの皮肉めいた声が聞こえた。クラブとゴイルを両脇に従えたドラコは、コリンのすぐ後ろで立ち止まると、大きな声で「みんな、並べよ！ ハリー・ポッターがサイン入り写真を配るそうだし！」と叫ぶ。

ドラコが何でいちいちハリーに絡むのか、ぼくにはよく理解出来な

い。根はいい奴なんだけど、ハリーの悪口を言ってる時のドラコは嫌いだ。

「僕はそんなことしていないぞ。マルフォイ、黙れ！」

ハリーが怒って叫び返した。負けじとコリンも「君、やきもち妬いてるんだ」と応戦する。

「妬いてる？」

ドラコはコリンの言葉を鼻で笑い飛ばした。上から視線を崩さずに含み笑いをする。

「何を？ 僕はありがたいことに、額の真ん中に醜い傷なんか必要ないね。頭をかち割られることで特別な人間になるなんて、僕はそう思わないからね」

「……アキー！」

ハリーの声が聞こえる。ざわつと喧騒が一瞬大きくなって、やがて静まった。左手で杖を構えたまま、ぼくはドラコを見据える。

「ドラコ、ハリーに謝って」

ぴんと張り詰めた緊張感が場を支配した。誰もが事の成り行きを見守って、息を潜めている。咳ばらい一つ聞こえない静寂の中、ぼくは軽い足取りでドラコに近付いた。その間も、杖の切っ先は揺らすことなく、ただただ真つすぐにドラコの心臓を狙っている。

「今謝ったら、口が滑ったってことで許してあげるよ」

「……は、アキ、いたのか」

「うん、久しぶり」

にこやかに笑った。ドラコは引き攣った笑顔を浮かべながら、こっそりと両隣のクラップとゴイルを見上げる。すかさず二人の鼻先に杖を突き付け、動きを封じた。

「君は僕の友人だろう？ 友人に杖を向けるなんて、行儀がなっていないんじゃないか？」

「生憎だけど、ぼくは友人よりも家族が大切なんだよね。んー、謝ってくれないとなると、さて、どうしようか？ 手始めに、君に首輪をつけて禁じられた森でも散歩してみよう。ぼくってば動物に嫌われるからさあ、一度ペットつてものを飼ってみたかったんだよね」

禁じられた森、という単語を聞いて、ドラコがさつと顔を青くした。冷やかな目で、ぼくはドラコを見つめる。人に首輪をつけて散歩、なんて想像したら目茶苦茶シユールなシチュエーションなのに、茶化す人は何処にもいない。それは多分、ぼくなら実際にやりかねないと思われているからだろう。何だかしよっぱい。

「……………う、そ、その……………」

拳をギュツと握り、頬を染めてドラコは口を開いた。プライドが高いお坊ちやま、ぼくに——というより、ハリーに——謝らざるを得ないのが悔しいのだろう。全く、赤くなったり青くなったり、忙しい人だ。ちよつといじめ過ぎたかな、と反省した。

「その……………わ、悪かつ……………」

「いったい何事かな？ いったいどうしたかな？ サイン入りの写真を配っているのは誰かな？」

ドラコが勇気を振り絞って謝罪しようとした瞬間、大きな声が響いた。振り返ると、そこにはトルコ石色のローブをひらめかせたギルデロイ・ロックハートの姿。ロックハートは、ドラコに杖を向けるぼくを見て、それはそれは楽しそうに「おやまあ！」と白い歯を輝かせ笑った。

「決闘の真似事でもしてるのかい？ オチビちゃん、君程度の力じゃ彼に切り傷だって付けられないさ。そう、私くらいでない——もつとも、私じゃ相手が可哀相ですがね」

チビ、という単語にカチンとくる。自分の背丈について言われるのは構わないが、それがバカにした響きを伴っていた場合、誰でもそうだろうが、むつとするのだ。

しかしロックハートの興味はぼくからハリーに移ったようで、「聞くまでもなかった！ ハリー、また会ったね！」とハリーを羽交い締めにする。彼はハリーが凄まじいまでの殺気を出していることに気が付かないのだろうか。

ドラコ達がこりや幸いとばかりにこの場から抜け出したのを、視界の隅で捉えた。しかしロックハートの登場にすっかり気が抜けてしまつて、追いかかけようという元気もない。

「さあ。撮りたまえ、クリービー君。二人一緒のツーショットだ。最高だと言えるね。しかも、君のために二人でサインしよう」

コリンはわたたとカメラを構え、写真を撮った。パシヤツとフラツシユが辺りに飛び散る。

その時昼休みの終了を告げるチャイムが鳴って、思い思いの時間を過ごしていた生徒達も皆、だらーつとした足取りで校舎へと歩き出した。

「さあ、行きたまえ。皆急いで」

ロックハートはそう呼び掛けると、ハリーをヘッド・ロックしたまま校舎へ向かう。残されたぼくとロンは顔を見合わせ、肩を竦めた。

「あんな間近で彼を見ることが出来るなんて！ あの完璧な笑顔っ、穏やかな眼差しっ、知的な鼻筋っ！ ああっ、格好いいーっ！」

一人ハーマイオニーだけが、恋という重篤な病に冒されていた。ロンと目配せしあい、ハーマイオニーを放置してぼくらは歩き出す。

次の授業、闇の魔術に対する防衛術が、酷く憂鬱に思えた。

第10話　じゅげむじゅげむ

「それでは……ようこそ、我が部へ！」

ジェームズ・ポッターが大袈裟な手振りで目の前の像を指し示す。しかし真面目な顔つきは瞬時に崩れ、腹を抱えて笑い始めた。

「マジ、シリウスやべえ……！　女の子とか、しかもナンパするとか……顔覚えてないとか、マジありえねえ……！」

「うるせえな、こつちだつてやつちまつたー！　って思ってたよ！……笑い過ぎだろ！　クソでめえピーターまで笑ってんじやねえよー！」

真つ赤な顔でジェームズに言い返していたシリウス・ブラックだが、ここにきてターゲットを変更したらしくピーターにヘッドロックを極めにかかる。「ちよつ、シリウス苦しいっ……！」とピーターがシリウスの腕をバンバン叩くも、一向に緩む気配はない。

……ぼく的には、そこで誰よりも笑い転げているリーマスの方が気になるんだけどな……。

金曜日。つまり、予定よりも二日ほど早く、ぼく、幣原秋と、リリーにセブルス、それにジェームズ、シリウス、リーマス、ピーターは、東の賢者の石像前に集まっていた。理由は……まあ、言いたくはないんだけど……その、シリウスとぼくが、その、いろいろ会ってちよつと早めに出会っちゃって……そんなところ。詳しくは前回はチェック。

「災難だったね、秋」

「……ホントにね！」

笑い過ぎて出てきた涙を擦りながら労っても説得力ないよ、リーマス。

「全くもう、ナンパなんて最低よ！」

と、これはリリー。

「すごく秋困ってたのよ！　そういう強引き、直した方がいいと思うわ！」

「リリー……」

何だろ、リリーが格好良すぎて涙が……。

リリーは続ける。

「確かに秋が可愛いのは分かるわ。だって私も抱きしめたいくらい可愛いもの。むしろたまに抱きついてるわ。すつごくほっぺとかもぷにぷにでシミひとつないし、髪もサラサラで無邪気な笑顔が超絶可愛くて毎日観察日記を書きたいくらいだけど！」

……あれ？

「秋に手を出したいなら、私に秋への想いを綴った羊皮紙を三巻き提出しなさい！ それから面会を許可するわ！」

「ちよつ、何言ってるの？ リリー大丈夫!?!」

「そうか……じゃあ、三巻き出せばいいんだな？」

「もちろん内容はチェックするわ。80点未満のものは不可よ」

「ジェームズも乗らないで！」

本当に、どうしてこんなことに……。

「というか、何でこの場にスリザリンなんかがいるんだよ？」

ピーターをいじめるという照れ隠しから復活したシリウスが、腕を組んでセブルスを文字通り見下した。しかしそんな態度にも、セブルスは屈せずになやりと笑う。

「秋を狙う変態から、秋を守るためにな」

「ぐっ……」

言葉に詰まり、悔しげにセブルスを睨むシリウス。対するセブルスは涼しい顔で、「秋、何かあったらすぐに僕に言うんだぞ。ブラックがキモいとか、ブラックがセクハラしてくるとか、ブラックがウザいとか、何でも言って構わないからな。すぐさま肅清してあげよう」とぼくに言う。ぼくは曖昧に笑みを浮かべると、肩を竦めた。

「というか、いつまでこんなところで喋ってるつもり？ 僕、いい加減中に入りたいんだけど」

「おつと、そうだな！ リーマス大魔王様がお怒りだ！」

リーマスが「僕別に魔王でも何でも無いんだけどね……」と笑顔で呟く。……いや、その笑顔怖いって。

「中って？ この辺り、部屋も何もないじゃない。廊下のだ真ん中なのよ」

リリーの言葉にジエームズは胸を張ると「お任せあれ！」と言って仰々しくローブから杖を取り出した。そしてそれを石像の眉間につきつけると、「行くぞ……」と低い声を出す。同時にシリウス、リーマス、ピーターの三人も表情を引き締め、ジエームズに倣い杖を取り出した。今から何が起こるのかがさっぱり分からなくて、ぼくら三人はそれぞれ顔を見合わせる。

果たして、ジエームズは息を大きく吸い込むと「せーの！」と叫んだ。

寿限無、寿限無

五劫の擦り切れ

海砂利水魚の

水行末 雲来末 風来末

食う寝る処に住む処

藪ら柑子の藪柑子

パイポパイポ パイポのシューリンガン

シューリンガンのグーリンダイ

グーリンダイのポンポコピーのポンポコナーの

長久命の長助

物凄い勢いで四人が言い終わると同時に、石像がパカリと中央から真つ二つに割れ、中に人一人が通れるくらいの穴が開いた。

「……一体どうして?」

ぼくの声は、誰にも聞かれなかった。

「さあ、付いてきたまえ」とジエームズは言うど、スルスルと中をくぐっていく。その後にはリーマス、ピーター、シリウスが続き、残されたぼくらは半笑いで首を傾げあった後、彼らの後に続いて中を通っていった。

中は小さな部屋のようだった。畳でいうと六畳くらいだろうか。誰かがずっと昔住んでいたように、ベッドや机、本棚が置かれている。足元には絨毯が敷かれていて、真ん中には少し大きめの円卓が設置されている。

「ここが、僕ら悪戯仕掛人の司令室だ。そして、これからは君らの部屋

でもある」

ジェームズが恭しい仕草でぼくらに入室を促した。そして慣れたように杖を振り、椅子を三脚出すと座るように勧める。おずおずと座ったぼくらの前に、手際よく紅茶が現れた。湯気まで立っていて、まるで淹れたてほやほやのようだ。

「この部屋、一体どうしたの？」

リリーの言葉にシリウスが「一年の時、探検してたら見つけたのさ。誰も使ってなかったから俺らの部屋にしてるんだ」と答えた。

「主にクラスメイトに聞かれたくない話をする時とかによく利用してるんだ。悪戯とか、ほら、皆にバレたら楽しくないだろう？」

と、これはリーマス。

「ま、そういう訳だ。さつき僕らが唱えた呪文があつただろう？ あれを唱えりや中に入れる。君らにはその権利をあげよう」

ジェームズの言葉に、ぼくは黙って紅茶を傾けた。熱い紅茶は、しかし火傷しそうな程ではなく、程よい暖かさで喉を滑り落ちていく。甘さも丁度よくコントロールされていて、紅茶について詳しくないぼくでも、ああ、美味しいなと感じることができた。

「……ひとつ、質問があるんだけど」

いいかな、とぼくは左手を上げた。

「なんで君らは、ぼくを……ぼくらをここに誘ったの？ ぼくらは、何をすればいいの？」

真っ直ぐ、ジェームズを見つめる。ジェームズは落ち着いた様子でカップをテーブルに置くと、僅かに微笑んでみせた。

「何もなくていいんだよ、秋」

「……何も？」

そう、とジェームズは肩を竦めた。カップを目の高さにまで掲げ、ぼくを悪戯っぽい目で見ると。

「君は、少し誤解してる。君は、自分が誘われたのは自分が持つその莫大な魔力のためだと考えている、違うかい？」

「……そうじゃなかったら、何なの？」

それ以外に、ぼくは理由が思い浮かばなかった。

そう、何一つも。

ジェームズ・ポッターに見込まれたのは、ただただぼくに人並み外れた魔力があるというだけで——他に、理由なんてないと思っていた。

——だから。

「言っただろう？ 『いい友達になれそうだ』って」

驚いたんだ。

だって、こんなこと言われたのは、生まれて初めてだったから。

「君のこと、もつとよく教えて欲しい。——僕と、友達になってくれませんか？」

すつと差し出された右手を、しばらくぼくは見つめ。

おずおずと出した右手を、彼は優しく握った。

「——あ、それと。ご存知の通り、僕らって悪戯仕掛人だから」

にこやかな笑顔でそんなことを言うジェームズに、ぼくらは「？」と首を傾げた。

「だから——悪戯仕掛けられても、怒らないでね☆」

ジェームズが頬に人差し指を当てて言うが早いか、セブルスの頭から「ぴよこん」と可愛らしい擬音を立てて、黒い猫耳が飛び出した。セブルスと猫耳のコラボは、まるで奇跡とも言える絶妙なハーモニーを生み出し、見る者の腹筋を崩壊させる程度の破壊力を持つに至る。

真っ赤になったセブルスがジェームズに掴み掛かるのは、それからそう遠くない話。



ギルデロイ・ロックハート教授の教室に着き、彼の著書全七冊を積み上げると、ぼくの座高では前が見えないという状況に陥ってしまった。

隣で（まるでロックハートの本を持っていること自体が嫌なように嫌そうに）ぼくと同じように本を積み上げたアリスは、それでもまだ

余裕げに目の前が空いている。張り合ってもどうしようもないことだけれど、でもちよつとだけ悔しくて、ぼくは気付かれないようにそつと本を数冊脇へ置いた。

授業が始まる三分前に、ハリーがロックハートに連れられてやってきた。ハリーは「僕とこの人とは何の関係もありませんし、喋ったりもしていないし興味自体ありません」といった澄ました顔でロックハートから離れると、ぼくらの席の後ろに座り、黙ったままロックハートの本を目の前に積み上げた。

ぼくより背が高いハリーでも、目線の高さまで積み上がるんだということに、少しだけ安堵を覚え胸を撫で下ろす。

「マジ、ないよ……」

ハリーがため息と共に吐き出した言葉に、にやつと笑って肩を竦める。ぼくは気の毒げな顔をして後ろを振り返ると、「お疲れ」と声を掛けた。

「お願いだよ、アキ、代わってって」

「無理だつてば」

その時ロンとハーマイオニーが入ってきて、ハリーの両隣にそれぞれ腰掛けた。二人がそれぞれハリーに労いの言葉を掛け、ハリーがそれに応える。

全員が席に着いた後、ロックハートは大きな咳払いと共に生徒の前に進み出た。途端に静まり返った教室の中、ロックハートはネビルの教科書を一冊掲げる。

表紙はウイנקをしている自分の写真で、こんなにたくさん自分の顔に囲まれて恥ずかしくはないのかなあとぼんやりと考えた。

「私だ」

知っている、と喉元まで出そうになった。

「ギルデロイ・ロックハート。勲三等マリーリン勲章、闇の力に対する防衛術連盟名誉会員、そして、『週刊魔女』五回連続『チャーミング・スマイル賞』受賞——もっとも、私はそんな話をするつもりではありませんよ。バンドンの泣き妖怪バンシーをスマイルで追い払ったわけじゃありませんしね！」

ああ、今のは笑わせようとしたんだな、と思って曖昧に笑みを浮かべてみるも、余計に白けた空気が辺りを漂った。アリスなどは両腕を組み、顎を上げてすっげー興味なさそうな顔でぼうっとしている。まだ眠いのかもしれない。

「全員が私の本を全巻揃えたようだね。たいへんよろしい。今日は最初にちよつとミニテストをやらうと思います、心配ご無用——君たちがどのぐらい私の本を読んでいるか、どのくらい覚えているかをチェックするだけですからね」

テスト、という言葉に、レイブンクロー生（アリス以外の、だけど）はざわついた。テストの中身うんぬんというよりも、テスト自体に恐怖を感じるのだ。

真面目ちゃんだからね。ぼくも分かる。……本当だからね？

テストペーパーを配り終わると、ロックハートは教室の前の席へと戻った。そして「二十分です。よーい、はじめ！」と叫ぶ。バサバサツと紙の擦れる音が教室中に響いた。ぼくも用紙を表に返すと、中身に目を落とし——思わず、ぽかんと口を開ける。

1. ギルデロイ・ロックハートの好きな色は何？
2. ギルデロイ・ロックハートのひそかな大望は何？
3. 現時点までのギルデロイ・ロックハートの業績の中で、あなた

は何が一番偉大だと思うか？

カチャン、という音が隣から聞こえた。アリスが羽根ペンを投げたのだ。アリスはそのまま机に突っ伏すと、程なくして寝息を立て始める。アリスの自由っぷりが、今はかなり羨ましい。

三十分後、テスト用紙が回収された。ロックハートはそれらをパラパラとめくりながら「チツチツチ——私の好きな色はライラック色だということ、ほとんど誰も覚えていないようだね」などと好き勝手に呟いている。

アリスはまだ突っ伏して目を閉じたままだ。本格的に寝てんのかもしれない。さつき回収される前にアリスの答案を見たところ、見事なまでに真っ白だった。名前すら書かれていない清々しさだ。

てかコイツ、意外とまつ毛長いなあ……。

「……ところが、ミス・ハーマイオニー・グレンジャーは、私のひそかな大望を知ってましたね。この世界から悪を追い払い、ロックハート・ブランドの整髪剤を売り出すことだとね——よくできました！ それに満点です！ ミス・ハーマイオニー・グレンジャーはどこにいますか？」

ロックハートの言葉に、クラス中（アリス以外、だけど）がハーマイオニーの方を振り返った。ハーマイオニーはいつものように手をびしっと伸ばしていたが、しかしその手は微かに震えていた。

「すばらしい！ まったくすばらしい！ グリフィンドールに十点あげましょう！」

パチパチと、曖昧に拍手が沸き上がる。これが他の教授で、もつとマシンテストだったら、ぼくもちゃんと拍手するんだけど。ごめんね今回はこれで許してね、なんてことを考えながら、おぎなりにぼくも拍手をした。

とその時、唐突に「ミスター・アキ・ポッター！」と名前を呼ばれ、びつくりして前を向く。

「実に惜しい！ 一問ミスです。第三問、今までの私の業績の中で、何が一番偉大だと思うか？ との問題に答えていませんね？ 先程自己紹介の時にももう一度言ったと言うのに——まあいいでしょう。ミスター・アキ・ポッターはどこです？」

手を上げるのがもの凄く恥ずかしい。アリスが寝てるのが救いだった。アイツに笑われたら、立つ瀬がない。レイブンクローの皆も凄く微妙な顔してぼくを見ていて、それがさらに何とも言えない感を増長させている。

「ミスター・ポッターは、えっと……レイブンクローですね。レイブンクローにも五点差し上げましょう。おや？ 君はもしか、ハリー・ポッターの……」

「……はい、弟です」

「おお、君がそうか！」と言って、ロックハートはニッコリした。そしてすぐさまぼくに興味を失ったようで、「では、授業ですが……」と言うと机の後ろに屈み込んだ。

「アキつたら、何だかんだ言つて、彼の本きちんと読んでるんじゃない！」

と、ハーマイオニーが目を輝かせ、身を乗り出してくる。それに苦笑いを返して、「暇だったんだよ……」と肩を竦めた。

そう、暇だったのだ。そしてロックハートの本は、いい暇潰しの役目してくれた。いつの間にか、フィクションのSFだと思つて読んでたし。

ロックハートは覆いの掛かった鳥カゴのようなものを持ち上げると、教卓の上に置いた。皆も緩慢ながら注意を引かれ、なんだなんだと注目する。

「さあ——気をつけて！ 魔法界の中で最も穢れた生き物と戦う術を授けるのが、私の役目なのです！ この教室で君たちは、これまでにならない恐ろしい目に遭うことになるでしょう。ただし、私がここにいる限り、何物も君たちに危害を加えることはないと思いたまえ。落ち着いているよう、それだけをお願いしておきましょう」

そう言つて、ロックハートは覆いに手を掛けた。

「どうか、叫ばないようお願いしたい。連中を挑発してしまうかもしれないのでね」

ロックハートは低い声で囁く。雰囲気作りは得意なのか、弛緩していた教室も少しピリツとした空気が漂い出す。学校の先生なんかじゃなくて、俳優にでもなればいいのに。

ロックハートはパツと覆いを取り払った。人の間から、ぼくも前に目を凝らす。

「さあ、どうだ。捕らえたばかりのコーンウォール地方のピクシー妖精」

誰かがプツと噴き出した。堪え切れずに、横を向くと何人かが笑い始める。

大きいふくろうが余裕で入るくらいの大きさの鳥カゴに、群青色の身体をしたピクシー妖精が所狭しと詰め込まれていた。キーキーと喧しく鳴き続け、中には挑発的に中指を立てている奴もいる。魔法界ってホント凄いい。でもそんなに恐ろしくはない。

「さあ、それでは。君たちがピクシーをどう扱うかやってみましょう！」

ロックハートが楽しげに叫ぶと、籠の戸をひらりと開けた。

途端に猛スピードで飛び出すピクシー妖精。一瞬で教室中は阿鼻叫喚の大騒ぎとなった。というか、対処法の一つも教えてから放せよ先生。いい加減だなあ。ぼくの髪紐を引っ張ろうとするピクシーを手で追い払いながら、ぼくはため息をついた。

「さあ、さあ。捕まえなさい。捕まえなさいよ。たかがピクシーでしょう……」

ロックハートがなにやら言っている。机から杖を取り上げると、それを振り上げ「ペスキピクシペステルノミ——ピクシー虫よ去れ！」と叫んだ。

「……………」

しかし何も起こらない。ピクシーが一匹ロックハートから杖を奪うと、ぽいっと気軽に窓の外へ放り投げた。ロックハートはヒエツと肩を縮めると、机の下に潜り込む。呆れてぼくは肩を竦めた。

「二体、何の騒ぎだコリヤ……」

ふと隣を見ると、不機嫌そうにアリスが眉を寄せて教室の惨状を傍観していた。アリスの雪印ピアスに悪さしようとしていたピクシーを無造作に捕まえると、平然と机に叩きつける。哀れなピクシーはそれで伸びてしまったようだった。

「んだよ、ピクシー？ バツカじゃねえの」

アリスが吐き捨てるのと同時に終業のチャイムが鳴る。ロックハートが何か言う前にすぐさま教室のドアが開き、どっと生徒が流れ出た。

「さあ、君たちにお願いしよう。その辺に残っているピクシーをつまんで、籠に戻しなさい」

ロックハートは残っていたぼくやアリスやハリーといった姿を見つけると、そう言い残してそそくさと出て行ってしまった。後ろでバタンと扉が閉まる。

「耳を疑うぜ」

「私たちに体験学習をさせたかっただけよ」

ロンの言葉に、ハーマイオニーが返した。いやハーマイオニー、それは流石に盲目過ぎない？

「……はー、早く終わらせよっか」

大きく息をついて、ぼくはそう呟いた。そしてパチンと一回、大きく指を鳴らす。一瞬後、そこら中を好き勝手はしやぎ回っていたピクシーは、何か大きな手に押し潰されたように机の上に転がっていた。「アキってさあ、ずっと前から聞きたかっただけど、何者？」

ロンが尋ねるのに、軽く肩を竦めた。

「さあ、何なんだろうね」

第11話 クイドイツ

「秋！ 今回こそはちゃんど！ クイドイツの試合見に来てよね！！」

寮の天蓋付きのベッドに寝転んで本を読んでいた時、突然リイフ・フィスナーが、断りもなしにカーテンを開けると笑顔でそう捲くし立てた。ぼくは小さくため息をつく和本をぱたんと閉じ、上半身を起こす。枕元に本を置いて一回伸びをしてから、「何、急に」とリイフを見た。

「そりゃ、今まであんまりクイドイツの試合は見てなかったけどさ……去年の後半は、結構君に連れられて行ったと思うけど？ まあ、確かに選手の名前とか、細かいルールとかは全然覚えてないけど……」

「でも秋、今までは僕が誘わないと来なかったじゃん？ そうじゃなくて、次からは一人でも来てねってこと。アルとかジェイもいるからさ、そいつらと一緒においでよ」

「……どういうこと？ リイフ、見に行かないの？」

ぼくの問いに、待ってましたと言わんばかりにリイフは胸を張った。零れんばかりに笑みを浮かべ、「僕、レイブクロウのチエイサーに選ばれたんだ」と誇らしげに言う。思わずぼくは身を乗り出した。「凄いいじゃん！」

「ま、まだまだ控えだけだね。でも選抜通ったんだ」

ふにや、とリイフの顔が嬉しそうに緩む。さらさらの金髪が、ふわりと落ちた。

「うわ、凄い！ おめでとう！！」

まるで自分のことのように嬉しい。そうか、これが『友達』なんだ。パチパチと拍手をし続けるぼくに照れたように、リイフはぼくにストップを掛けた。

「いやー、それほど喜んでもらえると嬉しいっーかなんっーか……はい、不肖リイフ・フィスナー、寮のために頑張ります！」

ビシッ、と敬礼してみせるリイフ。しかし真面目な表情もすぐに崩

れ、「ありがとう〜」とデレる。

「いつあったの？ その選抜ってやつ」

「選抜自体は五日前にあって、で今日が結果発表だったんだ。受けたの結構多かったよー、採用枠三人のところに十何人も来てたしね」

「へー、でも、二年生で受かるって凄いいんじゃない？」

ぼくの言葉に「まあまあ」と笑顔でリイフは頷いた。

「でも、今年は結構多かったよ、二年生。えっと、ウチの寮からは僕とダグだろ？ ハツフルパフに女の子が一人と、あとはグリフィンドールの……えっと、確か、ジエームズ・ポッター」

「ジエームズ!？」

思わず身を乗り出したぼくに驚いたように、リイフは「うわっ」と言って少し仰け反った。

「なんだ、知り合いなの？」

「あ……えっと、うん。……友達、なんだ」

『友達』のくだりに、ちよつと照れた。友達って、名乗ってもいいんだよね。友達ってそう言ってくれたもんね。認めてくれたもんね。

「友達かあ。……なんだか秋が言くと、重みが違う気がするなあ」

「き……気のせいだよ、きつと」

「じゃあ、なおさら見に来てよ。応援よろしく！ 秋、全然クイディッチの試合見に来ないからさあ、嫌いなのかと思ってたよ。僕が無理矢理連れてきてる感がハンパなくてさあ！」

「嫌いじゃ……ないよ。……約束、しよう。絶対見に行くから」

こくこく、と首を縦に振る。そんなぼくの頭を、リイフはぐしゃぐしゃと乱暴に撫でた後、「おう、約束！」と、あの輝かしい笑顔でそう言ったのだった。



日曜日の朝。クイディッチの練習があるというハリーを待ったため、ぼくは着替えて身支度をした後、いつものように朝食を食べ、それからロンとハーマイオニーと共に連れ立ってクイディッチ競技場へと

足を踏み入れた。ついさつき太陽が昇ったばかりの競技場は、まだ少し肌寒い。でも、朝露に濡れた芝生が光を反射してキラキラ輝くのが凄く綺麗だった。

「うーっ、寒いっ！」

ローブの端を掴んで身震いすると、「このくらいで？」とロンが呆れたように声を出した。

「そんなんじや、ホントに冬が来た時もたないぞ？」

「だって寒いもんは寒いんだもん。アリスみたいなこと言わないでよ！」

そう言うとロンは僅かにたじろいで「……みたいなこと言ったかなあ」と眉を下げる。相変わらずアリスが苦手なようだ。確かに、この二人が仲良く喋ってるのって見たことないけど。……てか、アリスが誰かと仲良く喋ってる現場自体、ぼくは見たことないんだけど。

「あら、ハリー達が出てきたわ！」

とその時ハーマイオニーが指差した。そちらを見ると、なるほど深紅のユニフォーム姿の選手達が更衣室からぞろぞろと出てきていた。誰もが眠たそうで、中でも双子はふらふらしていて、たまに二人で頭をぶつけ合っている。

「まさか……まだ終わってないのかい？」

ロンが信じられないという顔でハリーに尋ねた。ハリーはちよつと眉を寄せ「まだ始まってもないんだよ。ウッドが新しい動きを教えてくださいってたんだ」と若干不機嫌そうに返す。そしてロンとハーマイオニーの手にあるトーストを恨めしげに見つめた後、箒にまたがり空へと舞い上がった。

「あれだけ自由に空を飛べたら、なんて素敵だろうね」

思った言葉が、そのまま口をついて出る。それほどまでに、選手達は自由そうだった。

目を細めて選手達を眺めていると、背後で小さな音が聞こえた。誰かが金網を開け、スタンドの中に入ってきたのだ。何の気なしに振り返る。

「あ……」

そして、何の気なしに振り返ったことを後悔した。

小さな身体に細い手足。長い銀髪は朝日を受けて透明に輝いていて、思わず目を細めた。

緑と銀のコートをきつちりと着込んだ彼女、アクアマリン・ベルフェゴールは、ぼくたちを見て「あ……」と驚いたように目を丸くする。

「あ、えっと……アクアも練習見に来たの？　じゃあ一緒に見ようよ」
やばいやばいやばい。心の準備が出来ていなかったせいで、声の上擦りそうになる。心臓は一瞬で狂ったように早鐘を打ち始め、頬が緩みそうになるのを食い止めるだけで精一杯だ。今年度初アクアの威力は伊達じゃない。

「あ、いや、その……」

困ったように眉を寄せてきよろきよろと辺りを見回していたアクアだったが、ハーマイオニーが優しく「ね、こっち来て私達と一緒に見ましょうよ」と促してくれたおかげで、てててと駆け寄ってきた。ハーマイオニーGJ。さすがは学年一の才女だ。

「……あの……ありがとう」

「いえいえ、どういたしまして」

ぼくの横にちよこんと座ったアクアは、不安げに小さく肩を丸めた。しばらく黙って練習風景を眺めていたアクアだったが、やがてぼくの肘を軽く引っ張った。

「……ねえ、アキ」

その仕草がかーわいっ。

高鳴る気持ちを抑えつつ「どうしたの？」と聞くと、アクアはぼくにししか聞こえないような小さな声で「……この練習、もう終わるの？」と尋ねた。

「いや？　今始まったばかりなんだ。……何で？」

途端、アクアの表情が曇る。ぎゅっとコートの裾を握ったアクアにもう一度「どうしたの？」と尋ねた。掛けた言葉は同じだが、しかし内容は全く違う。

「……ドラゴが……今日、スリザリンが練習するからお前も見に来

「……」

「いいなあドラコ、アクアをお前呼びかあ、呼びつけるって羨ましい……、じゃなくって。」

「……スリザリンが練習するって?」

黙ってアクアが競技場の入り口を指差した。辿ると、そこには濃い緑のユニフォームを着込んだ集団が、今まさに入ってくる場所だった。

誰かが一人、練習から外れて急降下する。きっとグリフィンドールのキャプテンだろう。

「何だ? あいつら、何しに来やがった」

ロンが首を傾げながら呟いた。その言葉にアクアが身を固くする。次々にグリフィンドールの選手が降り立ち、スリザリンと話を始める。しかし話と言っても穏便に済むような雰囲気は微塵もなく、まさに一触即発の空気が漂い始めた。誰に促されるでもなく自然にぼくらも立ち上がり、彼らの元へ向かう。アクアがぼくの隣に並んで歩いてくれるのがたまらない。がしかし、今はそう軽口を叩ける場面ではなかった。

「何であそこにマルフォイがいるんだ? ……どうしたんだい? どうして練習しないんだよ。それに、あいつ、こんなところで何してるんだい?」

ロンが、クイディッチのユニフォームを着ているドラコを見て言った。ドラコは得意げに頭を傾けると「ウィーズリー、僕はスリザリンの新しいシーカード」と事も無げに笑う。

「僕の父上が、チーム全員に買ってあげた箒を、皆で賞賛していたところだよ」

スリザリンチーム全員が、揃って新品の箒をぼくらに見せ付ける。金文字で「ニンバス2001」と書かれたその箒は、箒に疎いぼくでもその価値が分かるくらいだった。

「いいだろう? だけど、グリフィンドール・チームも資金集めして新しい箒を買えばいい。クイーンスリープ5号を慈善事業の競売にかければ、博物館が買いを入れるだろうよ」

スリザリンが笑い出す。しかしアクアはコートをぎゅつと掴んで、小さく俯いた。伏せられた瞳は、しかし弱々しくマルフォイを見つめている。そこでチームと一緒に笑うマルフォイは、アクアの存在に気付いているのだろうか。

「少なくとも、グリフィンドールの選手は、誰一人としてお金で選ばれたりしてないわ。こっちは純粋に才能で選手になったのよ」

ハーマイオニーがきっぱりと言う。マルフォイの笑顔がさっと消え、そして吐き捨てるように言い返した。

「誰もお前の意見なんか求めてない。生まれそこないの『穢れた血』め」

途端、グリフィンドールチームから驚くほどの声が上がった。フレッドとジョージはドラコに飛びかかろうとし、オリバーがかろうじてそれを食い止める。誰もが非難轟々で、ぼくもドラコが何か言っているはいけないことを口にしたんだということが分かった。ハーマイオニーの顔を恐る恐る覗き込むと、今にも泣き出しそうに歪んでいた。大きな瞳の端に、涙が見る間に溜まっていく。息も出来ず、ぼくはその様子をただただ見つめていた。

「マルフォイ、思い知れ！」

ハーマイオニーに気を取られて、ロンをすっかり忘れていた。慌てて振り返った瞬間、緑の閃光が迸る。そして何故かドラコではなく、ロンが後ろ向きに倒れ尻餅をついた。

「ロン、ロン！ 大丈夫？」

ハーマイオニーがすぐさま駆け寄る。ぱつと袖で涙を拭いたのを、ぼくは見た。ロンは口を開いたが、出てきたのは声ではなく、大きなゲップと数匹のナメクジだった。かけるはずだった魔法が、ロンの壊れかけの杖のせいで逆噴射したのだ。それを見て、笑い転げるスリザリン。ムカツと来たが、今はひとまずロンの方が先だ。そう思ってロンの元へ駆け寄ろうとしたとき、ふと視界の端でアクアの姿を捉えた。思わず足が止まる。

アクアは、地面を叩きながら笑っているドラコへとツカツカと近付いていった。アクアの影に、ドラコが顔を上げる。「何だ、お前もいた

のか」とドラコが笑いかけた瞬間、アクアはドラコの頬を平手で張った。

スリザリン全員の笑いが止んだ。ドラコが驚いたようにアクアを見つめる。

「最低っ！」

アクアのこんな大声は、初めて聞いた。そのままローブの中に手を突っ込み、杖を取り出したのを見て、ぼくは慌ててアクアを後ろから羽交い絞めにする。

「嫌っ、放して!! あんなこと言っちゃいけないのっ、ドラコ、謝って、謝ってよ!!」

「駄目だってー！」

暴れる彼女の手から、無理矢理杖をもぎ取った。ドラコたちスリザリンが、そそくさとその場を離れていく。

「ハリーごめん、ロンをハグリッドのところに……」

「分かってる」

ぼくの兄貴は言葉少なに頷くと、ロンの肩に腕を回した。ハイマイオニーと二人でロンを支えると、そのまま引きずっていく。グリフィンドールチームも戸惑いながら、その場を後にしていった。

アクアの身体から、すつと力が抜ける。思わず彼女を取り落とし、地面に膝を着いた彼女は、小さく嗚咽を漏らす。震える肩に、ぼくは触れることが出来なかった。

「あ……アクア」

泣いている女の子に掛けてあげられるような言葉を、ぼくは知らない。女の子の涙を止められるような男じゃない。

好きなのに。彼女のことを好きなのに。

ぼくは、彼女のために何も出来ない。

吸い込まれるように、眩いていた。

「君は……ドラコのことか」

何故か、言葉が喉の奥でつつかえる。更に彼女を泣かせてしまうと分かっていながら、ぼくは言葉の続きを口にした。

「好き……なのかい？」

びくつ、と大きく、アクアの肩が震える。しばらく静かに涙を零していた彼女だったが、決心したように、頭がこくと傾いた。

「……………、そっかあ……………」

すどん、と芝生に腰を下ろした。いや、下ろしたなんてそんなじゃない、身体力が抜けて尻餅をついた、って方が正しい。

両手で顔を覆って、大きいため息をついた。アクアが、こつちを見ていないのが幸いだった。

こんな顔、彼女には見せられない。

「そっかあ……………」

眉を寄せ、小さく笑った。そして、歯を食いしばる。

「……………はーあ」

見上げた空は、朝の澄んだ、綺麗な水色で。

ぼくらの想いも全部、吸い込んでくれたらいいのに。

ぼくの想いを、消し去ってくれたらいいのに。

この、胸の痛みと、一緒に。

第12話 見覚えのある名前

熱狂的な観戦の声が、びりびりと肌を刺す。わくわくするような高揚感に当てられるように、ぼくはそつとライフから借りた双眼鏡を目に当てた。

「今アンデュー……ルイス……ミーシャ……つと、レイブンクローに渡った……すかさずゴールを狙って……でもウチのトーマスのが上だな！」

ぼくの隣で実況中継をしてきているのは、グリフィンドールのシリウス・ブラック。本人たつての強い希望だ、ありがたい。

ちなみに隣にはピーターが、更に隣にはリーマスがいる。

そう、ぼくは今現在、グリフィンドールの応援席にいるのである。「お前、何でレイブンクローなのにそこにいんだよ」みたいな視線が突き刺さる。ローブ脱いでくればよかった。でもネクタイだつてセーターだつて寮のカラーが付いているのだ、どっちにしる同じか。

本日の試合は、グリフィンドール対レイブンクロー。両者一步も譲らぬ攻防が続き、試合開始からそろそろ一時間が経とうとしているにも関わらず、得点は序盤に入れたグリフィンドールの20点から凍りついたままだ。

そろそろ選手にも疲れが見えてきたようで、集中が切れ、単純なパスミスなどが多くなってきた。

「ミーシャからオリオンに……つと、カットか！ そして……つと、シュート！」

わつとレイブンクローから歓声が沸く。ぼくもあの大歓声の中に混ざりたい気分だ。

「ありや誰だ？ レイブンクローの……」

「ライフだよ、ライフ・フィスナー！」

双眼鏡を当てた目を、ぐつと見開いて叫ぶ。

鮮やかなボール捌きは、二年生の新入りとは到底思えない。しかも初スタメン、初ゴールだなんて。

「先輩が腹壊して出なきやいけなくなったんだけど……うわー、僕も

腹壊しそう」なんて直前に青い顔で呟いていた奴と同一人物だとは思えない。

「フィスナー？ ああ、フィスナーか……なーんか、俺とはタイプの違いイケメンだよな……おい秋、君、ああいうのがタイプなのか？」

「シリウス、そういう言動のせいでゼブルスにマークされるんだよ」

「そうかあ？」

「そうだよ」

シリウスとリーマスの声。一体何の話をしているのか分からないが、今はひとまず試合の方が重要だ。

ぼくは動体視力がよくないから、シリウスのガイドがないと、いくら注意して見てもボールを見失ってしまう。双眼鏡は視野も狭いから、ボールを追うには不向きだし……。

ほら、そう呟いている間にも、早速見失ってしまった。

「おっと、試合はどうなったかな……なんだ、今はレイブンクローボールか。フラスコが持ってたんな」

……ちよつとだけ悲しくなるよ、そういうところで差あ付けられるのって。

悲しいかな、最終的には運動神経の差なのだろう。シリウスがスポーツをしているのを見たことはないが、でも絶対下手じゃなさそう。普通に格好よさそう。

何だろう、イメージ？

「フラスコからジェミニに……と、そこにブラッジャーが飛んできた！ あわやかかわして、ブラッジャーは……っ！」

シリウスが、そして皆が、同時に息を呑む。ブラッジャーは捕らえようとしたビーターの腕を搔い潜り、すぐ近くにいたグリフィンドールの選手を箒から叩き落としたのだ。

地面の砂地にドサツと落ちた選手に、試合は一時中断を宣告される。

「おいおい、あれってシーカーじゃねえか？」

「みたい……だね」

ざわざわ、と波紋が広がっていく。双眼鏡を下ろして、ぼくは辺り

を見回した。誰もが不安げな表情で、これからの試合の行方を喋っている。

「シーカーだろ、いなくなったらまずいんじゃないか……」

「10点差でグリフィンドールの勝ちになんのかな？」

「10点差じゃ勝った気なんてしねえよ。せめて100点差あつて勝ってもらわねえと」

「そうそう、お勉強が出来ない分、こういうところで稼いどかねえとな」
男子生徒が二人、後ろで笑い声を上げた。しかしその声にも不安が混じっている。

審判の先生方が集まって何やら話し始めた。やがてグリフィンドールチームに先生が声を掛けると、チームは慌しく動き出す。

「何があつたんだ？」

「さあ……」

シリウスとピーターが呟いたその時、選手控え室から一人選手が出てきた。真新しく大きめの深紅のユニフォームに、新品の箒。緊張した面持ちで歩く『彼』に、ぼくらは誰とでもなしに呟く。

「ジェームズ……!?!」

ざわめきが広がっていく。「この場で二年生をシーカーとして出すなんて無謀すぎる」「勝負を投げたかグリフィンドール」「試合より経験を積ませることを選んだんだよ」「ふざけんな！俺は今日の試合に、来週の打ち上げ代賭けてんだ！勝ってもらわねえとまずいんだよ！」と、誰もが諦めの声を上げていた。それだけ、シーカーというポジションは難しく、大変なのだろう。

「そりやそうさ。何せ、あーんなちっこい球を探し回んなきやなんねえんだからな」

シリウスは静かに言った。

「……不安？」

「まさか！」

双眼鏡を目から離すと、シリウスは驚いたように声を上げた。ぼくはシリウスに、にやっと笑い返す。

「ぼくもだ」

あいつならやってくれる、という期待感。

あいつなら、どんなことでもやってのける感じがする。

……根拠は全くないんだけど。

でも多分、あれだ。つまるところは。

ぼくにとってはあいつが、ヒーローなんだろうな。



「グリフィンドール勢に混じって祝賀会に参加しようとするなんて、全く油断も隙もありやしない！」

夕方。ぼくのローブの袖を掴んだまま大股の早足で歩くのは、我が同室の友人、リイフ・フィスナーだった。既にユニフォームは脱いでいて、今は普通の制服姿だ。

ぼくより20センチ（目測）は背が高いリイフが早足で歩くと、ぼくはもう小走りで後ろをついていくしかない。

「君はレイブンクローなんだよ？　せめてクイディッチに関してだけは、そこんとこ意識してもらいたいな。他はどうでもいいからさ」「ごめんって、分かってるよ」

リイフが言ってるのは、この学校にある目に見えないルールのようなものことだ。生きるのに必死だった昔と比べて、少し余裕が出来た今、リイフはそういうものを教えようとしてくれている。共同生活のルールとか、細かい上下関係とか。そう厳しくはないんだけど、それでも知っているのと全然知らないのとじゃ相当違う。

「秋がグリフィンドールと仲がいいのは知ってるよ。でもさ……うん、まあ……」

「分かったよ。でも勝ってくれないと、次もまたどっかに行っちゃうかもなー」

リイフの肩がぴくんと動いた。ぼくはにやっと笑って言う。

「次は勝ってよ、リイフ。格好よかったよ」

「……どうも」

背中から声が返ってきた。ぼくは目を細め、彼の背中を見る。

ぼくよりも高い身長、大きな身体。

ふとした瞬間にすごく大人びた顔をする同室の彼を、でもこの時、一番身近に感じた。



(……マジ、やってらんないよ)

そう一人心中で毒付きながら、僕、ロン・ウィーズリーは『学校に対する特別功労賞』と刻印された大きなトロフィーからナメクジを擦り落とす作業を続けていた。

何でそんなことをしているのかって？ 校則を破ったからよってハーマイオニーは言うけれど、それにしてもこれは酷い仕打ちなんじゃないかと思う。

しかも魔法は一切使っちゃダメなんだって、気が狂ってるとしか思えないな。

しゃっくりが出て、慌ててトロフィーから離れた。ぴよんと二匹、小さなナメクジが僕の口から飛び出てくる。

何でナメクジが口から飛び出てくるかって？

そりゃ長い話になるな。

「やっと拭き終わったか、ボンクラめ。規則を破っただけでは飽き足らず、今度は崇高な学校の宝までも汚すとは」

ナメクジは不可抗力だ、と説明してもらちが明かないため、僕は黙って『学校に対する特別功労賞』のトロフィーを奥に押しやると、違うものを手に取った。

『学校に対する特別功労賞』、何度も拭き過ぎて文字まで完全に暗記しちゃってるよ。でも、このトム・マールヴオロ・リドルって人、一体何をしたんだろう。別に興味はないけれど、書かれていないと少し気になる。

新たに手に取った銀の盾は、今まで磨いていたものよりかは少し小さかったものの、装飾が非常に細かくて僕はげんなりした。

それでも気合を入れようと、腕をぐつと反らし伸び上がる。背中が

ゴキゴキツと音を立てて鳴った。

(魔法魔術大会、学生部……こんなのあるんだ。つて……なあんだ、20年も前の話か。校内部、優勝……へえ、4年生が優勝してるじゃん、上級生は出てなかったのかな?)

銀の盾を磨きながら、刻まれた名前をなぞる。声に出さずに、呟いてみた。

(幣原、秋)

誰だっけ。聞き覚えある気がするんだけど、誰が言ってたっけ?

……ハリーかな。でもハリーが、20年前の学生の名前なんて知ってるか?

(アキと、響きが同じだ。……そうだ、確かに言っていた。……でも、この人って誰? 何者? ……よく分かんないなあ)

「誰が休んでいいと言った!」

怒鳴り声に、はつと我に返った。無視して手を動かすと、腐れフィルチは鼻を鳴らして物言いたげに僕の周りを歩き回る。

大きく息を吐いて、僕は手先に集中した。



「……アキ。おい」

——胸が痛い。そうか、これが失恋の痛みか。

涙が出るほど鋭くはないけれど、ずっと疼き続ける傷。熱を持って、一つの生物のようにぼくの身体を侵食して回る。

「聞いてんのか? アキ、ちょっと」

この傷につける薬は、一体何なのだろう。いくら払っても構わない、この痛みを忘れることが出来るなら。

——いや、ぼくは本当は、忘れたくなんてないのかもしれない。未練がましく継り続ける心は、叶わないと知りつつもいつまでも彼女に執着する。そんなぼくはいわば——

「話くらい聞けよっ!」

目から本当に火花が散ったかと思った。中々な力がこもった手刀

を後頭部に食らったぼくは、しばし頭を押さえテーブルをのた打ち回る。

ああもう、と頭上で声が聞こえ、豪華な料理が載っていた皿たちをぼくの周りからどかさような音がした。

そう、本日今日は、我がホグワーツ屈指のお祭り、ハロウィンなのだ。頭を上げれば至るところにお化けかぼちゃがふわふわと浮き、コウモリが優雅に飛び回っている。

まあ、今は痛みのあまり頭を上げられないけど。脳みそシエイクされたかと思った。

「お前、いい加減にしろよ？ 辛気臭い顔されちゃ、こつちも迷惑だつて言ってるの」

不機嫌そうな顔で、アリスがフォークをぼくに突きつける。何気に怖い。マジに刺されそう。さくつと。

「帰るぞ。パーティーは終わりだ」

そう言われて辺りを見渡せば、皆帰り支度をして各々めいめいが出口に向かって歩き出していた。テーブルについている生徒の数もまばらで、先生方は杖を振り、大広間の飾りつけの後片付けを始めている。

「あ……終わったんだ」

「……お前らしくないな。お祭りごとって、お前好きなイメージあったけど」

「……そうだね。好きだ」

ぼくが肯定すると、アリスは少しだけ肩を竦めた。残っていたリングを一切れ頬張ると、「何考えてたんだよ」と、ぼくの方を見ずに尋ねる。

優しい奴だ、と思った。でも、それを言うとなアリスは怒るから、ぼくはその言葉を飲み込んで、簡単に先日あったことを話す。

アリスにこういうことを打ち明けられるのは、そりゃアリスがアクアのこともぼくのこともよく知ってるからってのもあるけれど、アリスがぼくの話を馬鹿にせず聞いてくれるからってことが大きい。変なお節介を焼かずに、ただただ見守ってくれている。

ぼくの話が終わるころには、広間の人は相当数いなくなっていた。残っている数組は、余ったお菓子を食べたり話をしたりして、自由に時間を潰している。

「ふーん……お嬢サマが、あいつを、ねえ……」

フォークを口に啞えたまま、アリスは一人唸った。

「意外……っつー程じゃないんだが……まあ、意外なんか……」

「……ドラコはアクアのこと、どう思ってるんだろ」

ぼくの問いに対する、アリスの答えはシンプルだった。

「ありえない。あいつはそう思ってるよ」

そう言って、アリスは髪をぐしゃつと掻き毟ると、そのまま髪の毛を引っ張った。

「婚約なんてとつとと解消してくれ。親同士が決めた恋人なんて真つ平御免。ずっと昔からだ。俺もあいつも、耳にタコが出来るほど聞いている。……だからこそ、意外だ。そう何度も言われちゃ、好きになんてなんねえもんだろうけど」

ま、他人の恋愛事情なんざ俺の知ったことじゃねえよ。

アリスの呟きに、ぼくは無意識に拳を握っていた。どこに向ければいいのか分からない拳、そこにぎゅつと力が入っていたことに、アリスに触れられて初めて気が付く。

「人の恋愛事情なんか気にすんな」

「……っ、え？」

「諦めるなんて、俺は言わないぞ」

トトン、とアリスはぼくの拳を指で軽く叩くと、穏やかな目で笑った。

「……アリス……」

「ん？」

「大好きだーっ！」

勢いよくぼくは両手を広げてアリスに抱きつこうとした。ぎよつとした風にアリスは飛び上がると、ぼくの頭を押さえて「抱きつくなっ！」と眉を顰める。

「俺相手にンなことしてんじゃねえよ、気持ち悪い。そーゆーことは

お前の兄貴とでもやって来な」

「ハリー……うん、そうだね、行つてくるよアリス！　ありがとう！」
すつくと立ち上がり元気よく言ったぼくに、アリスは頭を抑えて大きくため息をついた。

力なく振られる手に、力強く返すと、ぼくはくるつとアリスに背を向け、大広間を後にした。

（アリスって、やっぱすっげーいい奴ー！）

廊下を歩きながら、ぐつとぼくは拳を握る。

ぼくの最初の印象は間違つていなかった。

上級生とケンカして、不良つてレツテル貼られて、皆から遠巻きにされていて、んで自分も他人遠ざけて……そんな彼に興味を持ったのは、そんな境遇が、幣原秋に似てると思つたからだつた。

事故で他人を傷つけてしまい、他人と関わることを酷く恐れるようになった幣原秋。その様子は見ていただけで痛々しくて、だからこそ、アリスを放っておけなかった。

（現に、幣原秋もアリスも、どつちもいい奴じゃん！）

楽しい。そう思う。

幣原秋もいい友達が出来て夢見もいいし、現実世界でもアリスつー最高の奴が近くにいて、ハリーがいて、皆いる。

アクアのことだつて……これからどうなるか分かんないんだし、そう悲観することでもない。諦めなかつたら、きつといつか想いは叶う。

アリスは、絶対に「諦めろ」なんて言わないんだ。

ありがとう、アリス。君のおかげで、ぼくはまた、前に進める。
にしし、と小さく笑う。そして、しっかと前を向いた。

グリフィンホールに行く道は、レイブンクローとは少々方向が違
う。でも何度も通い慣れた道だから、既に足が覚えている。あと一時
間ほどで消灯時間だけど、それでもハリーに会いたかつた。

「……ん？」

違和感に包まれ、思わず足を止めた。程なくして、その違和感の原
因が耳にあることに気付く。

何だか、廊下が騒がしいのだ。それも数人レベルじゃないほどの喧騒。確かにパーティーの終わりは皆テンションが高いから少々騒がしいものだけど、でもこれは度が超えている。

足を進めると、やがて人垣が見えてきた。その中に見知った人物がいるのに気付き、ぼくは声を掛ける。

「ザック！ 一体これは何の騒ぎ？」

ザック——同寮の友人だ——は振り返ってぼくの姿を見ると、少しだけ眉を寄せた。しかしその表情は嫌悪から来たものではなく、むしろ気の毒げと言わんばかり。その表情に首を傾げた時、数人が人垣から抜け出した。やがてぱらぱらと、まばらに人が散って行く。

「フィルチの猫が、その壁に吊り下げられてた。というか、凍ってたんだ。ハリー……君のお兄さんが、その第一発見者。その後ダンブルドアが来て、ロンやハーマイオニーも連れて、どこかへ行っちゃった。……見えるかい？ その壁だよ」

ザックの指差した方へ、静かに歩み寄った。人垣は、もう人垣と呼べないくらいにまばらで、ぼくは簡単に例の壁へと近付くことが出来た。

石壁に書かれた赤い文字。その文字を、ぼくは静かに読み上げる。

「——秘密の部屋は開かれたり 継承者の敵よ、気を付けよ——」

指で文字に触れると、もう既に乾いていた。赤いのは血ではなく、ただのペンキのようだ。少し下がって、文字全体を眺める。

と、水溜りに足を突っ込んでしまい、慌てて飛び退いた。

「アキー、僕らもう帰るけど……」

「ああ、うん！ 先帰ってて！」

ザックの声に言葉を返し、ぼくは屈み込んだ。足元の水溜りは、どうやらただの水のようだ。どこから来たのだろう、と水の出所を辿ると、行き着いた先は女子トイレだった。どうやら故障しているらしい。

「秘密の部屋……継承者って、何の……」

考えてみるが、情報があまりにも足りなさ過ぎる。諦めて、ぼくは踵を返した。

明日、ハリーにいろいろ聞いてみよう。考えるのは、情報を集めてからだ。

(しっかしよくもまあ、ここまで面倒事に巻き込まれる兄ですよっと)

第13話 些細で大きな違和感

夢を、見た。

悪戯仕掛人らと、セブルス、そしてリリーと、皆で雪合戦をする夢。最初は普通の雪合戦だったのだが、悪戯仕掛人がいる中で「普通」なんてありえない。最後は三メートル大の巨大な雪玉が飛んできたり、火を吹く巨人が雪玉を弾き飛ばしたりと、何でもありなゲームだった。

でもまあ、楽しかったな、と、寝起きのぼんやりした頭で思う。

「アキ、起きてるかー」

とその時、アリスがぼくのベッドのカーテンをシャツと引っ張って開けた。大欠伸をしたぼくを見て、「珍しいじゃんか、お前が俺より起きるの遅いなんて」と、にやつと笑う。

「……あれ？ 今……」

慌てて時計を見ると、朝食時間の十五分前だった。普段より一時間以上の寝坊だ。急いでパジャマから制服に着替え出したぼくに「そう急がなくてもいいぞー」と声を掛けながら、アリスはぼくの机に置いてあった本を手に取り、ベッドの端に腰掛けた。

「夜更かしでもしてたんか？」

「まあね……早目に仕上げときたい分があつてさ」

シャツのボタンを留め、ズボンを履き、ベルトを締め、ネクタイを結び、靴下を履き、セーターを被り、ローブに袖を通す。

もごもごとコートを羽織ったぼくに、アリスが呆れたように声を上げた。

「おい、暑くねーのかよ」

「アンタは感覚おかしいんだよ。雪積もった真冬なのに、シャツ一枚とか気が狂つてるとしか思えないね」

「……俺の気が狂つてるかどうかはともかくとして、だ。とりあえず今日は、俺に軍配が上がったな」

え、と声を漏らしたぼくに對し、アリスは立ち上がるとカーテンを思いっきり開け放った。そのまますたと窓の方に歩みを進め、窓

も全開に開け放すと、親指で外を指差す。

「寝ぼけてんのか？ 今はまだ11月だよ」

「……え……あつ」

かあつと頬が赤く染まるのが分かる。

言い返す言葉もなく、でも慌ててコートを脱ぐのは癪なので、殊更ゆっくり脱ぐと、きつちりハンガーにまで掛けて、クローゼットの奥深くへと仕舞い込んだ。

きつと今年の冬は、寒さで凍えるまでこのコートは引っぱり出さないだろう。

手櫛で髪を梳かすと簡単に結び、澄ました顔でぼくはアリスを追い抜いた。「ほら、行くよ」と肩を竦めれば、アリスは喉の奥で笑いながら、素直について来る。面と向かって笑われるよりも、そっちのが相当恥ずかしい。

苦虫を噛み潰したような顔で歩くぼくに、同寮の友人はぎよつとして道を開ける。

(……早まってんだ、幣原の時間が、現実の世界より)

今までは、そりゃ日付までとは言わないまでも、大体同じペースだった。同じように年を取り、同じように季節が巡っていた。

でも今は、違う。

急に早まった、そのことは、何か意味があるのだろうか。

不意に浮かんだ不安感を照れで打ち消して、ぼくは食堂へと向かう足を速めた。



「こんにちは。顔色がいつも通り悪そうですけど、スネイプ教授、元気ですか？」

満面の笑みで首を傾げたぼくに、教授は大きいため息をついた。

「何の用だ」

「まあまあ、そう急かさずに。ぼくと教授の仲じゃないですか」

「どんな仲だ！」

「えつと……昔あれやこれや色んなことがあった今、お互いの誕生日プレゼントを贈り合う間柄……」

ぼくの軽口に、教授の眉間に深い皺がぎゅつと刻まれる。どうやら今日は、そうご機嫌ってな訳ではないらしい。

こほん、と咳払いをして、ぼくは表情を引き締めた。

「今日は一つ、見て頂きたいものがありました」

そう言つて羊皮紙の束を軽く持ち上げると、教授は少しだけ興味を引かれたらしい。ぼくの手から羊皮紙を取り上げると、ドアを押さえて顎で部屋の奥をしゃくる。どうやら入室のお許しが出たようだ。

「それでは、失礼しまーす……」

軽く頭を下げ部屋に足を踏み入れると、ぼくは辺りを見回した。一年の頃見た部屋と、内装はそう変わっていない。壁一杯の棚にぎつしりと詰まった本と魔法薬は、見ているだけで圧巻だ。

自室へ繋がる扉は開いているが、しかしこれは勝手に入っていないものだろうか。

「何をそこで突つ立っている。早く中へ入りたまえ」

と、背後で声がした。同時に背中をぐいと押され、思わずつんのめりそうになる。おつとつと、とバランスを取ったところで、ドアが閉まる音が聞こえた。

「座れ」

命令形ですかそうですか。幣原の前ではあんなに可愛い子なのに、どうしてこうなったやら。どれもこれも長い歳月のせいだろう。

ともあれ大人しく腰を下ろした。

コトン、と目の前にカップが置かれる。暖かそうに湯気を上げる目の前の物体に、思わず「え」と声が漏れた。

「何だ」

「いや……だって、カップ……」

「客人をもてなすのは人としての基本だろう」

……えー、だってさあ。

ぼく前入ったとき、もてなされてないんですけどー。

でも文句を垂れるとせつかくのお茶も取り上げられそうなので、ぼくはぐつと言葉を飲み込み「ありがとうございます」と礼を述べて、カップに口をつけた。途端、今まで味わったことのないくらい芳醇な香りに包まれ、目を見張る。

教授、いい茶葉持つてんなあ！

このお茶目当てに通うかもしんない、ぼく。そのくらい美味しいぞ。お茶にはこだわり派なのかなあ、教授。

「さて……聞かせてもらおうか、アキ・ポッター。これ、貴様が全部一から考えたのか？」

バサツ、とぼくの前に先程の羊皮紙を置くと、教授は神妙な顔のまま指を組んだ。トントントン、と神経質そうに、指先が三度動く。

ぼくはカップを脇にやると羊皮紙を手に取り、目を落とした。

「元ネタはありますよ。マグル界でのインターネット、ご存知ですか？」

「……使ったことはないが、原理程度は知っている」

「じゃあ、電子メールも分かりますよね？」

教授が頷くのを横目で見て、ぼくは説明を始める。

「発想の原点はそこです。離れた場所にいる二者が、同時に会話する方法はないか。現在マグル界に極々普通に存在する電話やメールといった機器が、魔法界には全くと言っていいほどない。だから……」

「だから……作ったと？」

教授の声は、心なしか少し震えていた。不審に思い目を上げるも、続きを促され改めて羊皮紙に書いてある図面を見る。

「はい。本当は電話を真似たかったんですが、技術がなくて……メールを真似るくらいしか出来ませんでした。魔法式が合っているか、見てもらいに来たんですけど……」

「ああ……しかし、まさかこの歳で……ひよつとして……」

「……教授？」

ぼんやりと宙を見つめる教授に声を掛けると、はっとした風に教授は我に返った。コホンと咳払いをし、「魔法式の確認だったな。どれ、見せてみる」と身を乗り出す。

数箇所ちよつとしたスペルミスを直された後、教授は「貴様も中々やるもんだなあ」と何故か普段よりも生き生きとした目で（あの、普段死んだ魚の目みたいな光の灯らない目してる教授が、だぞ?!）ぼくはちよつとした恐怖を感じたね）頷いた。

いつもと違う教授に戸惑いつつも、辺りを見回したぼくは、ふと柵に刺さっていた一冊の本に目が留まる。

「あ、教授。その『ホグワーツの歴史』、借りてもいいですか?」

「ん……別に構わんが。何だ、貴様も『秘密の部屋』に興味のある口か?」
そうですけど、と肯定すると、教授は立ち上がり、『ホグワーツの歴史』を手に取った。

「貸してやるのもいいが、今まで何人もうちの寮生が聞きにきてるからな。簡単な概要くらいなら喋れんこともないぞ」

「え?」

「……っ、鈍いな。我輩が貴様に教えてやろうと言っているのだ。心して聞きたまえ」

どうしたどうした。何か今日の教授、キャラ違くない?

しかしそう突っ込むのはばかられるため、ぼくはつとめて真面目な顔をして「お願いします」と言ってみせた。

教授は椅子に深々と腰掛けると、指の腹で『ホグワーツの歴史』の背表紙を撫で、口火を切る。

「……秘密の部屋とは、ホグワーツ魔法魔術学校の四人の創始者の一人、サラザール・スリザリンが、ホグワーツを去る時に秘密に造った部屋のことだ。」

創始者については知っているな? 各寮にもその名が残っている通り、創始者たちは自身の名を冠した寮を設け、好みの生徒を自身の寮に選び取った。

しかし、サラザール・スリザリンは、ホグワーツの生徒そのものを、生粋の魔法族の家系の者のみに限ると考えていた。それが後、他の三者、特にゴドリック・グリフィンドールと決定的に決裂し、サラザール・スリザリンはホグワーツを去った。

しかしその際、自分の継承者が、ホグワーツに相応しくない生徒を

追放出来るよう、『秘密の部屋』をこつそり造り、そこにスリザリンの怪物を封じて、ホグワーツを去った……と言われている」

ぼくは黙って、教授の言葉の続きを待った。

「しかし、それから千年経った今も、『秘密の部屋』は見つかっていない……『秘密の部屋』はあくまで伝説であり、真実ではない。『秘密の部屋』などは存在しない……」

それが、我々の出した結論だ。誰かが考えた空想話が広がったものと」

「じゃあ……先日の事件も、愉快犯だったと？」

声を上げると、教授は「そうだろう」と頷く。

「でも、ミセス・ノリスは石になったんですよね？ あんなの、一生徒が出来るものじゃないですよ。ましてや、愉快犯なんて。教師か、もしくは相当な魔力の持ち主か……」

そこで、ぼくは口をつぐんだ。静かにぼくを見つめる教授の目を、しっかりと見返す。

ああ、この目は。

なるほどなるほど、そういうことか。

「……疑ってるんですか、ぼくを」

「自覚があるようだな」

カップを手に、教授は立ち上がった。お代わりの紅茶を注ぐ後ろ姿を、奥歯を噛んでじっと見る。

「貴様、先日の事件の犯人だと思われてるぞ」

知ってたか？ と聞かれ、思わずあっけに取られた。

「やっぱりな。本人の耳には入らないようにするなんて、さすが学生というものだ。つめの甘さも含めてな」

「な……何で、ですか。ぼくには何の関係も……」

「あるじゃないか。貴様の兄ハリー・ポッターは、あの事件の第一発見者だ。猫を失ったフィルチが我を忘れてポッターが犯人だとわめき散らしたのを聞いた生徒だって多い。そして、猫を石にすることくらい簡単だと思わせる程、魔力を持った人物が、ポッターのすぐ近くに一人いる……短絡的な人間なら、繋げてしまうのももつともだと思わ

ないかね？」

ぼくの前から空になったカップを教授が取り上げた。目線を落とすし、こぶしにぎゅつと力を入れる。

「……まあ、でも」

よかつたよ、と教授は、ぽつりと呟いた。

「……え？」

「やってないだろ？」

そう言っただけを見た教授は、何と言ったらよいのだろう、凄く……穏やかな表情をしていた。

そう……たとえるなら、幣原を見つめているような。

心許せる友人と相對しているかのような暖かな視線に、自然、目が奪われる。

「……今日はもう遅い、帰らたまえ。完成したら、実物を持ってくるように」

「は……あ、あのー！」

ガタン、と椅子を蹴り、ぼくは立ち上がった。ぼくに背を向けた教授は、顔だけで振り返る。

「……あの。また、暇な時とかに来て、いいですか？」

教授は、しばらく黙ってぼくを見ていたが、やがて顔を戻すと「次もまた、もてなすとは限らんぞ」と呟いた。教授の背に、ぼくはにっこりと笑って見せる。

「ありがとうございます」

歡喜に騒ぐ胸の内を悟られないうちに、ぼくは部屋から立ち去った。

第14話 @女子トイレ

今日は朝から、今にも雨が降りそうな、どんよりとした天気だった。ぼくはマフラーの両端をぎゅっと握ったまま空を見上げる。

一月も半ばに入った今、雨が降るとしたら、それはきつと雪か糞だろう。そうなると、選手は体力が奪われて大変だ。

特に今回は、ぼくの数少ない友人の一人であるジェームズ・ポッターが、弱冠二年ながらもスタメン起用として出場しているのだ。心配するのも当然というものだろう。

しかし、ぼくの心配は、違った方向で裏切られることになる。

試合前から、クイディツチ競技場は、何だか不穏な空気で満ちていた。ぼくはそれを気のせいかと思っていたのだが、選手入場の際に湧き上がった野次の凄まじさに、ぼくの場合は正しかったことを思い知らされる。

「ねえ、一体今日はどうしたの?」

隣に座るリーフに尋ねると(今回はちゃんとレイブンクロー観客席に座っているぼくである)、リーフはため息をつきながら、形式だけの笑みを浮かべた。

「そっか、秋はあんまり馴染みがないんだっけ」

「何にだい?」

「グリフィンとスリザリンの確執に」

そうやって、リーフはグリフィンとスリザリンの観客席をちらりと見た。どちらの寮生も大声を上げていて、何を言っているのかぼくにはさっぱり分からない。そのせいで、普段は聞き取りやすいリーフの英語でさえも、くぐもって聞こえた。

「確執……」

「ずっと昔から、この二つの寮は仲が悪くてね。創始者の頃から言われているし、こりやもう因縁だ。グリフィンとスリザリンを嫌っているし、スリザリンの生徒はグリフィンを憎んでいる。これは変わらない、ホグワーツの慣習みたいなものだ」

「……………」

「秋もそのうち慣れるよ。このくらい、いつものことだ」

リーフの笑顔に、ぼくは応えることが出来なかった。

試合が始まると、野次はますます激しくなり、解説すらもまともに聞き取れないほどになった。英会話を習いたてのぼくにとって、正直解説を聞くのは、この状況でなくても難しい。諦めて、ぼくは試合中のジェームズの姿を探すことにした。

程なくして、ジェームズは見つかった。戦況から離れた上空で、ふわふわと飛び回っている。しかしジェームズの顔面すれすれをブラッジャーが飛んできたのに、思わず血の気が引いた。

間一髪で避けて、すぐさま箒の方向を変え逃げようとしたジェームズだったが、ブラッジャーはそんなジェームズを永遠と追いかけてまわしている。ブラッジャーがこんなに一人の選手を狙うことはないのに、と不思議に思ったが、よくよく目を凝らせば、スリザリンのビーターがジェームズ目掛けて、間髪いれずにブラッジャーを打っているのだ。

「うっわ、えげつな……二年の新米だからって、ここまで集中攻撃かよ……」

リーフが毒づいた。

ジェームズがギリギリで避けるたび、グリフィンドールの野次も高まっていく。ジェームズはブラッジャーを避けるのに精一杯で、スニッチを探すことすらままならない。グリフィンドールの選手が順調に得点を重ねているが、しかしそれは、ジェームズ一人に二人のビーターがついていて、ゴールを邪魔されないからだろう。

しかし、ジェームズがスニッチを掴まない限り、グリフィンドールの勝利となることはない。

これは確かに、えげつないぞ。

「他の寮相手じゃ、スリザリンもこんな挑発的なことは仕掛けないんだけど……相手が悪かったね」

グリフィンドールのシーカー、君の友達だろう？ と、リーフは尋ねた。

「これが、トラウマになんないけど。てか、怪我しないといいけ

ど」

リイフには、そして競技場に集まったほとんどの観客には、既に勝敗が見えていたのだろう。

その通り、130対170で、スリザリンの勝利が決まった。

試合時間、2時間45分。

ジェームズは、始まって2時間で、他の選手と交代し、フィールドを去った。



クイディッチの試合が終わった後も、何となく寮に居つくのが嫌で、かといって図書館などで勉強する気にもなれず、ぼくは一人、廊下をとぼとぼと歩いていった。ホグワーツの大きな窓からは、夕日が明るく輝いているのが見える。眩しくて、顔を背けた。

グリフィンドールとスリザリン。寮同士の対立は聞いてはいたけれど、ここまではつきりと見て取れるものなのか。

こんな伝統は、どうして存在しているのだろう。

皆仲良く、なんて、そんなの綺麗事だ。子供のぼくにだってそれくらいは分かる。

じゃあ、どうしてこんなにも、胸の中がもやもやするのだろうか？

「秋？」

声に、振り返った。小さく息を呑む。

「……セブルス……」

「久しぶりだな」

いつも通りの仏頂面に、手には大きな専門書。一番上まで神経質に留められた制服のボタン。普段青白い顔は、夕日に当たってか、少し血色がよく、穏やかな顔に見えた。

瞬間、分かった。

ぼくが、何を気にしていたのか。

思いついたのと、言葉に出したのは、ほぼ同時だった。

「セブルスは」

口に出してしまつたら、もう止まらない。戻れない、引き返せない。人に向けた言葉は、取り消せない。

「ずっとずっと、リリーやジェームズ達と、ぼくと、一緒にいてくれるよね？」

それは、確認のような、懇願の言葉だった。

セブルスの表情が、僅かばかり驚いたように変わる。

「急に、一体どうしたんだ？」

その一拍の間ですらも、神経が振れるくらいにじれったい。

早く、そうだよと言つて。ずっと一緒なんだと、そう誓つて。

自分は寮同士の対立なんか興味ないと、そう言い切つて。

「君とぼくとリリーは、いつまでも友達でいられるよね？」

どれだけ自分は切羽詰つたような表情をしていたのだろう。それを見る術はないけれど、セブルスの返事から、なんとなくそれは読み取れた。

「ああ、約束する」

その言葉に、肩の力が抜けた。ほつと安心して微笑んだぼくに、セブルスも小さく笑みを浮かべてくれる。

「僕とリリーが、君を置いてどっかに行く訳がないだろう？ 少しは信頼してもらいたいものだな」

セブルスの、ぼくの抱いていた不安とは少しばかり論点の違う話を、あえて訂正せずに、ぼくはただ、嬉しくて笑っていた。



唯一のレイブンクローとグリフィンドールとの合同授業である、闇の魔術に対する防衛術は、初回のピクシー妖精以来、物凄くくだらない授業へと姿を変えていた。自分の本の中から素晴らしい（と本人が思っている）場面を抜き出し、自ら演じてみせる授業。

白けたその授業に興味を示す人物は、ハーマイオニーといったロツクハートが格好いいと思つているような視野の狭い乙女を除いてほとんどのいなかった。

アリスなんて大概寝てるか、他の授業のレポートしてるか。ぼくも皆も大体そのようなものだ。

しかし、今はそのどちらでもない。ぼくは拳を組み、その上に顎を乗せ、壇上で行われる授業を静かに見物していた。

理由は簡単。

「ハリー。大きく吼えて——そう、そう——そしてですね、信じられないかもしれないが——」

ロックハートの茶番に、我が敬愛すべき兄貴、ハリー・ポッターが付き合わされているからである。

ロックハートはハリーがお気に入りに入りらしく、茶番にしょっちゅうハリーを誘ってくる。普段は真っ黒い笑顔を人の目も気にせず振り巻き断るのだが、今回は何故かノリノリだった。いや、ノリノリとまではいかないか。イヤイヤとノリノリが7：3くらいだ。

「ねえロン、うちの兄貴は一体どうしたっていうの?」

隣に座るロンに尋ねてみると、ロンは曖昧に首を傾げた後、救いを求めるようにハーマイオニーに視線をやった。ハーマイオニーは肩を竦めると、今度教えるわとばかりに目配せをする。何だか仲間外れのように、ちよつとだけ寂しい。

皆が知っていることを、ぼくだけが知らない。そんな気分。

チャイムが鳴り、一気に皆が目を覚ました。騒がしくなった教室内で、ロックハートの声が響く。

「——宿題。ワガワガの狼男が私に敗北したことについての詩を書くこと! —— 一番よく書けた生徒にはサイン入りの『私はマジックだ』を進呈!」

きつとその本は、ハーマイオニーに行くのだろう。サイン入りだなんて、売ったら結構な金になりそうなものだ。本を貰おうと頑張る気力はないが。

ちらりと隣のアリスを見ると、まだ眠たそうに前をぼーっと見つめていた。普段より陰のない眼差しで、本日最後の授業ということもあり、朝整えられた髪はだいぶ大人しくなっている。その横顔を見ていると、面影がふと、ライフに重なった。思わず瞬きをする。

どうして今まで気付かなかったのだろう？

性格の違いか、纏う雰囲気の違いか。金髪に碧の瞳、なんて、ここ、英国にはありふれていたからか。

こんなに似ていることに、今まで気付かなかったなんて。

唐突に言葉が口をついて出た。

「そういうば、アリス。リイフ・フィスナーって、君の親戚にいたりする？」

「いない」

驚くほどの速さで返事が返ってきた。う、とぼくは黙り込む。アリスは、眠気が一気に吹き飛んだかのような目つきで立ち上がると、乱暴に椅子を蹴り、すたすたと一人歩いて行った。

「何だ、あいつ……」

訝しげに眉を寄せる。と、その時ハリーが席へと戻ってきた。アリスが消えた扉を眺めると、「一体どうかしたのかい？」と首を傾げる。

「何でもないよ、多分」

「そう？　ならいいんだけど」

ハリーは思いの他あつきりとそう言うと、ふと悪戯っぽい顔を見せた。声を潜めて「付いてきてよ、黙ってるだけでいいから」と言うと、ぼくの手を取り歩き出す。向かった先は何故だかロックハートの所で、しかも不思議なことに、ロンとハーマイオニーも付いてきた。

ハリーが目配せすると、ハーマイオニーがロックハートの元へ進み出る。そして珍しく歯切れの悪い口調で「あの——ロックハート先生？」と尋ねた。

「わたし、あの——図書館からこの本を借りたいんです。参考に読むだけです」

ロックハートはシャイニングスマイルと共に振り返ると、ハーマイオニーを見た。かあつとハーマイオニーの顔が色を塗ったように赤くなる。可愛いなあ、これで相手がロックハートなのが残念だ。

「問題は、これが『禁書』の棚にあって、それで、どなたか先生にサインをいただかないといけないんです……先生の『グールお化けのクールな散策』に出てくる、ゆつくり効く毒薬を理解するのに、きつ

と役に立つと思います……」

「ああ、『グールお化けとのクールな散策』ね！ 私の一番のお気に入りの本と言えるかもしれない。おもしろかった？」

「はい、先生。本当にすばらしいわ。先生が最後のグールを、茶漉しで引っ掛けるやり方なんて……」

すばらしいのか。ぼくはあそこ、声を出して笑ったけどな。

「そうね、学年の最優秀生をちよつと応援してあげても、誰も文句は言わないでしょう」

ロックハートはにこやかに微笑むと、机の引き出しからすごく大きい、利便性よりも見た目を重視しましたと全身全霊で主張しているような孔雀の羽ペンを取り出した。そしてロンの顔を見て（どうやら呆れた顔をしていたようだ）「どうです、素敵でしょう？」と笑いかける。ロンは曖昧に笑みを返した。

「これは、いつもは本のサイン用なんですけどね」

枠からはみ出るほどの大きな丸文字で、ロックハートはハーマイオニーの差し出す紙にさらさらとサインをすると、その紙をハーマイオニーに返した。そしてハリーに目をやると（ハリーがぎくつとたじろいだ）「で、ハリー」と、本当かどうかよく分からない自慢話を始める。ロンとハーマイオニーと頷き合って先にその場を離れると、廊下に出てハリーを待った。

「ねえ、禁書の棚の本を借りたんだなんて、一体どうしたの？」

「ちよつと色々あるのよ。落ち着いた場所で話すわ」

ハーマイオニーは息を切らしながら言う。と、その時ハリーが教室から飛び出してきた。4人で歩きながら、ハリーが呟く。

「信じられないよ。僕たちが何の本を借りるのか、見もしなかったよ」

「そりゃ、あいつ、能無しだもの。どうでもいいけど。僕たちは欲しいものを手に入れたんだし」

「能無しなんかじゃないわ」

ハーマイオニーが反論するのに、ロンは「君が学年で最優秀の生徒だって、あいつがそう言ったからね……」と皮肉げに言った。

ハーマイオニーが司書のピンス先生の審査を通り抜け、無事に大き

な古そうな本を両手に抱えてきた後、ぼくらはまた廊下を歩いていった。三人とも気が急いでいるのか、無意識のうちに普段より歩くスピードが速い。口数がぐっと少なくなった三人に、ぼくも黙ってついていく。

着いた先は、三階の女子トイレだった。ハーマイオニーが躊躇いもなく入り（そりやそうだ、女の子だもの）、ぼくら男三人は立ち止まる。するとハーマイオニーに「何してるの、入ってきなさいよ」と一喝された。

「いや、入ってきなさいって……」

たじろぎながらも、表札を確認する。確かに女子トイレだ。ハリーが諦めたような表情で「アキ、ここはもう誰も使っていないから、気にせず入っていいんだよ」とぼくを促し、自らも女子トイレに足を踏み入れた。ロンはしばらく文句を垂れていたが、ハーマイオニーに論理的にまくしたてられ、すぐすごと中に入っていく。意を決して、ぼくも女子トイレに入ってしまった。

……なんか、物凄く、なんてーか……精神に掛かる負担が大きい行為だ、これ。

「さて、アキ。こんなところまで連れてきてしまって、悪かったわね」「まさかぼくの生涯で女子トイレに入る羽目になるとは、露ほども思ってたかったよ」

ぼくの皮肉とも愚痴とも付かぬ言葉を聞き流し、ハーマイオニーは「あなたの意見も聞きたいの」とはきはきと言った。

「説明するわ。私達が今、一体何をしているのか」

ハーマイオニーは最初からすらすらと、まるで台本でもあるかのよう淀みなくぼくに語ってくれた。ミス・ノリスのあの事件のこと、サラザール・スリザリンが作ったという『秘密の部屋』について、そして継承者について――

「私たちは、スリザリンの継承者を、ドラコ・マルフォイだと考えているわ。いえ、疑っているのよ」

「……………」

何か言おうとした、でも言葉は出てこなかった。

マグル生まれの子供を排除し、純粋な魔法族の子供のみに教育を施したいと願っていた——それがサラザール・スリザリンだと言うのなら、その継承者もまた、同じ思想を持つているだろう。そして、確かにドラコはこの上もなく、その人物に相応しいように思えた。

「でも、突拍子なさ過ぎる。ぼくらがよく知っている人物から、条件に当てはまる奴をピックアップしたに過ぎないじゃないか」

「だけど、アキ、あいつ以上に当てはまる奴なんて、中々いないんだよ」と、ロン。

「今、魔法界でも混血が進んで、本当に正真正銘混じりけなしの純粋な魔法族の家系ってのは本当に少なくなってるんだ。僕が知ってる中でも、僕んとこのウィーズリー家に、マルフォイ家、ベンジャミン家にベルフェゴール家、後もう一つが……ああ、あそこは混じったんだっけ。とまあ、代表的なのは4家しかない。その中で一番闇の魔術に寄ってるのが、マルフォイ家だ。あの家系は全部スリザリン出身で、いっつもそれを自慢してるしね。あいつならスリザリンの末裔だっっておかしくはない」

「もちろん、可能性の話だけだね」と、ハーマイオニーが引き継いだ。「だから、私達は確かめようと思ったの」

そう言っつて、ハーマイオニーは借りてきたばかりの分厚い本をバラバラと捲った。さすが禁書、ぞつとするような挿絵がいたるところにある。スネイプ教授は好きだろうな、こういうの、と、失礼にも何となく想像してしまった。

「あつたわ。ポリジュークス薬」

「ポリジュークス薬!? 君ら、まさか……」

驚いて叫ぶ。

ポリジュークス薬は、少なくとも学生がおいそれと手を出してはいけないほど危険な劇薬だ。作るのも大変だし、またその手順も複雑怪奇。その代わり、きちんと調合さえすれば、一時間他人の姿になることが出来る。闇祓いの入学試験でも出されたほどの、超高度な魔法薬だ。

「そう、そのまさかよ」

ハーマイオニーはそんなことを、真面目な顔で言つてのける。いや、でも、これは流石にハーマイオニーでも難しい——でも、真剣な瞳で文字を追うハーマイオニーを見ていると、もしかして彼女なら……といった感情が沸いてくるのは不思議なものだ。

「こんなに複雑な魔法薬は初めてお目にかかるわ……クサカゲロウ、ヒル、満月草にニワヤナギ……」

ロンとハリーはハーマイオニーに全てを丸投げするつもりらしく、ハーマイオニーの眩くことにうんうんと頷くだけだ。しかしその二人も、さすがに「変身したい相手の一部」という言葉は聞き捨てならなかったらしい。

「なんだって、どういう意味？ 変身したい相手の一部って。僕、クラブの足の爪なんか入ってたら、絶対飲まないからね」

「でも、それはまだ心配する必要ないわ。最後に入れればいいんだから……」

ハーマイオニーはロンを無視して本を読み進める。清々しいまでのシカトっぷりだった。

「ハーマイオニー、どんなにいろいろ盗まなきゃならないか、わかってる？ 毒ツルヘビの皮の千切りなんて、生徒用の棚には絶対にあるはずないし、どうするの？ スネイプの個人用の保管倉庫に盗みに入るの？ うまくいかないような気がする……」

ハリーの言葉を遮るように、ハーマイオニーがぴしゃりと本を閉じた。男共は皆黙り込む。

「怖気づいて、やめるって言うなら結構よ」

女子トイレに、ハーマイオニーの声が朗々と響いた。

「私は規則を破りたくはない。わかっているでしょう。だけどマグル生まれの者を脅迫するなんて、ややこしい魔法薬を密造することよりずーっと悪いことだと思うの。でも、二人ともマルフォイがやっているのかどうか知りたくないっていうんなら、これからまっすぐマダム・ピンズのところへ行ってこの本をお返ししてくるわ」

「僕たちに規則を破れって、君が説教する日が来ようとは思わなかったぜ」

ロンが小さくぼやいた。ハーマイオニーはぼくの方に向き直ると、キラキラした目で身を乗り出してくる。

「この作戦のためには、あなたの力が必要なよ、アキ。こんな複雑な魔法薬、私一人でなんて到底無理、無謀だわ。でも、あなたに直接これを飲ませるつもりもない。あなたがドラコ・マルフォイやスリザリンの何人かとも仲がいいことくらい知ってるもの、その友情を壊すようなこと、出来ないわ。ただ、手伝って欲しいの。そして、マグル生まれの子が脅迫される事件を、一緒に解決してほしいと思ってる」

ハーマイオニーが差し出した手を、ぼくは少し考えてから、握り返した。「そうだね」と、ぼくはため息をつく。

「ドラコから聞き出すっていうんなら、きつとアクアも近くにいるはずだし。あの子の前で演技なんて、出来る気がしないしね」

「ありがとう」

ほっとしたように、ハーマイオニーが笑った。ぼくも、「ぼくに、君らマグル生まれの子が一人でも助けられるのなら」と言っただけで、僅かに微笑む。

ハーマイオニーもマグル生まれだ。先日面と向かって『穢れた血』なんて言った奴が、秘密の部屋の後継者かもしれない、ということとは、中々の恐怖だろう。気丈に振舞ってはいるが、事情は何となく読める。

ハーマイオニーははっとしたように、少しだけ息を呑んだ。それに気付かぬふりをして、ぼくはハリーに向かい合う。

「そうだハリー、君に渡したいものがあるんだ」

「何だい？」

ハリーが訝しげに眉を寄せた。ぼくはカバンの中から、三十センチ四方くらいの羊皮紙を取り出す。その端をハリーに掴んでもらうよう言うと、ぼくもその反対側の端を右手で摘んだ。そして左手で杖を取り出し、ちよっとした魔方阵を空中で組むと、コツンと杖で羊皮紙に触れる。

途端、カアツと明るい光が小さな個室中に飛び散った。眩しさに思わず腕を上げ、顔を逸らす。光が弱まった頃、薄目を開けて羊皮紙を

見ると、そこにはラテン語の文字が浮かび上がっていた。

「ねえアキ、今のは何だい？」

「ふふ、まあ見てなよ」

やがて、浮かび上がった文字が消える。それを見届けた後、ぼくは羊皮紙を真つ二つに引き裂いた。片方をハリーに持たせると、「ちよつと見ててよ」と笑って羽根ペンを取り出す。そして、自分側の羊皮紙に『ハリー・ポッター』と書き込んだ。

「えっ？」

ハリーの驚く声が聞こえる。それにニヤツと笑うと、ぼくはハリーを振り返った。

「ちやんと送られた？」

ハリーが、手元の羊皮紙を表にしてみせる。そこには確かにぼくの字で『ハリー・ポッター』と書かれていた。

「いきなり浮かび上がったんだよ。……あ、もしかして。これが、君が夏休み中掛かって作ってた発明品？」

「正確にはもつと前からなんだけどね。ま、送られたのなら何よりだよ」

あげるよ、持ってて。と、ぼくはハリーに言った。

「これがあれば、お互いすぐに連絡を取り合える。ぼくに何か伝えたいことがあつたなら、君もその羊皮紙に書いてみてよ。……ああ、そうだ。ちなみに、ハリーが手に取らないとその文章、写らないからね。先生達くらいに魔力のある人じゃない限り、ただの羊皮紙にしか見えないから」

「へえ……分かったよ、大事にする。ありがとね、アキ」

ハリーは無邪気な笑顔をぼくに向けた。その笑顔はとても暖かくて、穏やかで、ぼくに対する信頼に満ちていて……。

この笑顔を守りたい、それだけだった。

クイレルの賢者の石事件があつてからというもの、ぼくはこの発明品作成に熱中した。まだ二年のぼくに専門的な知識はなく、思ったより時間が掛かってしまったが……とりあえず、今の不穏な校内、ハリーが巻き込まれる前に渡せてよかつたと思う。……もう巻き込ま

れているような気もするんだけど。

ぼくが、ハリーを守る。

この紙切れ一枚で、ハリーを巡る運命が変わるかは分からないけれど……それでも。

ハリーは大切な、ぼくの家族だ。

そんな決意を胸に秘めて、ぼくは静かに微笑んだ。

第15話 見知らぬ手紙

両手には余るほどの大きな本を抱えて、ぼくは急いで廊下を小走りで進んでいた。

時刻はもうすぐ午後八時、図書館の閉館時間まで、あと十分もない。返却期限が今日までなのを、すっかり忘れていたのだ。

司書の先生は厳しいことで有名だから、一日でも遅れたら、一体何日貸し出してもらえないことか想像したくもない。

外はもう真っ暗で、昼間は採光のおかげでとても明るいこの廊下も、今では魔法の松明が柱に掛かっているくらいだ。

ゆらゆらと揺らめく炎は、何だか不安感を掻き立てられる。

ふと、違和感を感じた。最初はそれが何だか分からなかったけれど、後からそれは、足音が重なっていたからだということに気付く。

続いて、正面に真っ黒の人影が見えた。そのまま擦れ違おうとしたぼくだが、向かってくる相手の顔を見て、思わず足が止まった。

向こうはぼくより早く、ぼくが近付いてきていることに気付いていたらしい。大して驚いた素振りも見せないまま、つかつかとぼくの正面に対峙した。

「……よう、幣原ちゃん」

低く暗い声。ぼくを上から見下ろすようにして、彼、フィアン・エンクローチェは、立っていた。

「……どうも」

視線を、彼から外す。本を胸に抱いて、視線を足元に彷徨させた。「楽しそーじゃん、最近。良かったなー、友達が出来て」

「……………」

「つーかき、俺のこと覚えてる？ 去年アンタに痛い思いさせられた、可哀ソーなフィアン・エンクローチェ君なんですケド」

「……………」

顔を無遠慮に覗き込まれ、思わず目をぎゅゅとつぶった。肩が自然に震え出す。

忘れられるわけがない。

今まで必死に思い出さないようにしていた記憶の蓋が、無理矢理引き剥がされるのを感じた。

忘れられるわけがない。

忘れられるわけがない。

忘れられるわけ、ないじゃないか。

忘れられるわけがない、この、罪の意識を。

自分の力で、他人に大怪我を負わせてしまった、あの感情を。

忘れられるわけがない。

その後のいじめなど、あの気持ちの前では大したものじゃない。

「あの時の傷跡さあ……いくつか取れなかったやつもあんだよね、ほら」

と、ファイアン・エンクローチエは、自身の左袖をくいと捲った。見たくないのに、何かに強制されるように、そちらに目を移してしまう。「……っ！」

「魔法でつけられた傷だからよー、一生治らないんだってさあ。あーあ、どう責任取ってくれんの？ 幣原ちゃん」

ぼくの肩に、彼は手を置いた。反射的に身体がびくつと震え、半歩後ろに後ずさる。しかし、ファイアン・エンクローチエはその反応を許さないとばかりに、逆にぼくを引き寄せた。

感情が、弾けそうになる。その感情に、魔力が引つ張られる。努力してコントロールして押さえつけたぼくの魔力が、足枷を引きちぎって飛び掛ろうとする。

こんなにもぼくは、弱くて脆い。

「ライフ・フィスナーにジェームズ・ポッター、目立つ奴らにくつついていれば安心だって分かったの？」

耳元で囁かれる。皮膚が、ぞくりと粟立った。

「俺が怖い？ ……冗談言うなよ。俺に言わせりゃ、アンタの方が相当怖いよ、幣原ちゃん。だって君が本気出せば、こんな校舎丸ごと吹き飛ばもんねえ？ 俺なんて瞬時に木っ端微塵に出来ちゃうもんねえ？ 指先一つ動かすだけで、さ。一人が持つには手に余るほどの、絶対的な暴力だね」

息が、思うように出来ない。ぐらぐらする。足元の感覚が覚束無い。この地面は、本当に固いのか。ぼくのところだけ柔らかいんじゃないのか？

『呪文学の天才児』。異名は、中々取れないよ」

霞がかかる思考の中、一つ浮かぶのは、後悔という感情だけ。

「そうそう、悔いてもらわなくちゃ」

フィアン・エンクローチェは、楽しげに笑うとぼくの背中を叩き、「じゃあ、またね、幣原ちゃん」と言葉を残して去って行った。

残されたぼくはしばらく立ち尽くしていたが、やがて大きいため息をつくとき、その場に座り込む。

倦怠感が、全身を重く支配していた。

もう、何も考えたくない。何もしたくない。

ぼくはぼくで、いたくない。

時計の針は、もう午後八時三分を指し示していた。



かきり、と静かな音を立て、アリス・フェイスナーは便箋を捲った。日差しが、彼の横顔を照らし出す。

左耳の雪印のピアスが、きらきらと光を受けて反射していた。

「アリスー？ そろそろ行くよー！」

同室の友人、アキ・ポッターの声に、アリスは慌てて顔を上げた。

「おう、今行くー！」と叫びながら、その便箋をポケットにねじ込もうとしたアリスだったが、ふとその手が止まる。ぐしやぐしやになったそれを引っ張り出すと、手早く破り、紙切れに変えてしまった。

「全く、こんな寒い日にベランダに出ようだなんて、気が知れないよ」ベランダへと、アキ・ポッターが降りてくる。マフラーにコートに耳当てと、普段にも増して寒さ対策に余念がない格好だ。

長く艶やかな黒髪に大きな瞳、華奢な体格のこの友人は、相変わらぬ初対面ならば少女と間違えられる。

アキ・ポッターに気付かれないように、紙切れをポケットに突っ込

んだ。

「今日の試合は、どこ対どこだっけ？」

「グリフィンドール対スリザリン！」

普段あまりクイディッチというスポーツに興味を持たないアキ・ポッターだが、今回ばかりは弾かれるように答えが返ってきたのは、ひとえに彼の双子の兄、ハリー・ポッターが、グリフィンドールチームのメンバーだからだ。

こちらが引くくらいに兄を慕うこの少年のせいで、自分までも、魔法界の有名人、ハリー・ポッターに詳しくなってしまった。誕生日、血液型は言うまでもなく、好きな朝食の味付けまでも言えるのは、我ながら驚く。

「今回はドラコも出るんだよ。あいつがどれくらいハリーについていけないのかは分かんないけど、きつと面白いゲームになるんじゃないかな」

無邪気に笑うアキ・ポッターの横を、すつと通り抜ける。「あ、アリス！」と慌てた声を尻目に、髪を掻き上げ一息ついた。自然、左耳のピアスに手を当てる。

冷たい金属の感触に、心が落ち着くのを感じた。

大丈夫、これがある限り。そう、思える。

「行くぞ、アキ」

後ろを振り返り促すと、表情豊かな友人は眉を寄せて、少し怒ったように「分かってるよ！」と小走りで近寄ってきた。

そのまま並んで歩く二人の後ろに、アリス・フィスナーが取り落とした紙切れが一片落ちていたことに気付いた者は、誰一人としていなかった。

『By Leaf Finsner』と、群青色のインクで綴られたそれは、風に吹き飛ばされ、姿を消した。



今日は、グリフィンドール対スリザリンのクイディッチの試合の日

だ。じめじめとした湿気がある日で、空は曇りだし、今にも一雨来そうな天気。

ハロウィンが終わった頃からめつきり寒くなったここ、ホグワーツは、晴れの日が随分減ってきた。特にこんな天気の日、真冬並みの完全防寒スタイルで外に出ないと寒さで死んでしまう。

……まあ、中にはアリスのような、こんな寒い日でもカッターシャツにベストみたいな、意味分かんない格好の奴もいるけど……。

しかも首元はいつものごとく開けっぱだし。ありえねー。

そんな悪天候の中始まったゲームは、なんだかんだでスリザリンが優勢だった。ドラコのお父さんがチーム皆に買ってあげた、最新型の箒のおかげであることは間違いないようだ。

そのせいか、本来中立でただゲームを楽しむだけの立場であるはずのレイブンクローやハッフルパフも皆、グリフィンドールの味方だった。半官びいき、といったところですかね。

ぼくは当然、ハリーがいるグリフィンドールを応援するに決まっているので、まあ普段より居心地いい環境ではあった。大声でハリーを応援しても、回りの視線が気にならない。

試合の流れが変わったのは、中盤だった。しかしそれは、箒による劣勢をグリフィンドールが実力で吹き飛ばした、というわけではない。

ブラッジャーが、まるで魔法でも掛けられたかのように、執拗にハリーだけを狙い始めたのだ。

最初は、幣原秋の夢を見た、敵チームのビーターがシーカーばかりを狙う、あの悪質な手にハリーも引つかかったのかと思った。

けれど、よく見れば違う。まるでブラッジャー自身に意志があるように、ハリーばかりを付け狙う。

これは偶然なのか？ それとも、誰かの故意によるものなのか？ そう考えて、むう、とその考えを打ち消した。

ブラッジャーには特殊な魔法が掛けられていて、魔法使いにはクイディッチのボール自体に魔法を掛けることは出来ないようになってる。

そりや、クイドイツは国際スポーツなんだから、不正なんてあつたら大変だもんな。多分ぼくや幣原も、クイドイツのボールに細工は出来ないだろう。

雨も降り出して、選手のコンディションは悪くなる一方だ。点差もじわじわと開いてきた。

一旦タイムを取った後、試合が再開された後も、雨は止むことを知らず、むしろ勢いを増してくる。

雨で霞むグラウンドに、ハリーを探そうと目を凝らした。目は悪い方じゃないのだけれど、流石に雨の中で一人一人の選手を肉眼で探すのは無理だ。

と、ぼくがハリーを探していることに気付いたのか、何も言わずにアリスがひよいと双眼鏡を投げ渡してきた。あまりに無造作だったため、一瞬思考が止まる。

こちらを見ずにつつとグラウンドに目を向けているアリスに「ありがとう」と言つて、ぼくは双眼鏡を目に当て、ハリーの姿を探した。やっとハリーの姿を捉えたぼくが見たものは、急降下というか、箒と一緒に落ちていると表現した方がいいくらいの兄。派手に水飛沫を上げ地面に突っ込んだハリーに、叫び声上がる。

ぼくはアリスに双眼鏡を投げ返すと、踵を返して立ち上がり、下のフィールドに続く階段を駆け下りた。

途中で解説のリー・ジョーダンが、ハリーがスニッチを取った、と大声で放送している。わっ、とスリザリン以外の観客席から歓声が上がった。

フィールドの入口には、ぼくと同じようにハリーを心配したのだろう、ロンとハーマイオニーがいた。ぱつとフィールドの中を見ると、数人の人だかりが出来ている。多分、あの中心にいるのはハリーだろう。

ロン達と合流し、その集団の元に走り寄った。

「ハリーー」

ぼくの声に、数人が振り返る。その中にいたロックハートは、ぼくを見て輝かんばかりの笑顔を向けると「やあ！ ミスターアキ・ポツ

ター、下がっていたまえ。今から私が、君のお兄さんの腕を直してあげよう」と言い、ハリーを隠すかのようにくるりとぼくに背を向けた。腕を直す、つて、ハリーは腕が折れるかどうなるかしたのだろうか。まあ、教科書に載っているあれらの喜劇が彼の実験の経験だとするならば、任せてもいいのかもしれない。

しかしハリーが「やめて！」と悲痛な声で叫ぶ。が、ロックハートは既に杖を振り回していた。

ぴりっ、と、魔法を使った時特有の、空気が痺れるような感覚。ぼくはカメラを構えるコリン・クリービーを押しつけ、前に出た。

「あっ」

誰かの声がある。今にも死にそうな顔色のハリーと、目が合った。しばし、無言で見つめ合う。

「そう。まあね。時にはこんなことも起こりますね。でも、要するに骨は折れていない。それが肝心だ。それじゃ、ハリー、医務室まで気をつけて歩いて行きなさい。——あっ、アキ・ポッター君、ウィーズリー君、ミス・グレンジャー、付き添って行ってくれないかね？——マダム・ポンプリーが、その——少し君を——あ——きちんとしてくれるでしょう」

ハリーの口元が、何か言いたげに僅かに動く。瞳の奥で意志が揺らめくのを、ぼくは確かに見た。

……そりゃ、自分の腕を骨抜きにされたら、呪いたくもなるよねえ。ギルデロイ・ロックハート。彼は本に書かれているほど、能力のある人ではないのかもしれない。

……薄々気付いてたことだけど、さ。

第16話 やつて来た男

期末テスト前。あの小部屋にふらりと立ち寄ると、テスト前だといふのに、グリフィンドール悪戯仕掛人4人衆は、どういうわけか全員集合していた。

四人で、中央の丸いテーブルを囲んでいる。肩を竦め、彼らに近付くと「何やってるの?」と尋ねた。

「おおつ、これはこれは幣原くんじゃないですか。どう? 最近元気してた?」

「まあまあだね。てか皆、試験勉強は?」

「勉強の息抜きだよ」

これはリーマス。

「ジェ……ジェームズが行くぞって……はわわ」

これはピーター。

「皆が勉強してる環境って、何だか居心地悪いんだよね」

これはジェームズ。

「勉強? ああ、そういや今、テスト前か。道理で皆勉強してると思っ
た」

そして、安定のシリウス。

大きく息をついて、ぼくは深々と椅子に腰掛けた。そしてもう一度「何やってるの?」と尋ねる。

「終了式の時、今年は一体どんな悪戯をしようかなーって話をしてたんだよ。去年の僕ら、覚えてるかい? それともそんなにインパクト
なかったかな?」

「何言ってるの! 覚えてるよ、だって君ら、凄かったんだから!」

リーマスに言葉を返した。

去年の終了式、大広間中に花火が飛び跳ねていたあれか。

凄くど派手で、思いも寄らなくて、本当にびっくりした。でも何だか、お祭りっぽくて、生徒も笑顔で、なんだかとても楽しかったことを覚えてる。

あの日、確かにぼくは、彼らに憧れたんだ。

シリウスがふと、にやつと悪戯っぽい笑みを浮かべた。身を乗り出して、皆を、ジェームズを見て、言う。

「そうだ、レミスの野郎に悪戯すんのはどうだ？ 皆、あいつの授業嫌ってんだろ」

レミス教授は薬草学の先生だ。確かに、授業は単調だし、生徒には私語すら許さないほど厳しい先生で、あの先生が好きな生徒はあまりいないんじゃないかと思う。それでも、何だか気が乗らなかつた。

シリウスは続ける。

「あの野郎、いつも帽子被ってんじゃん。そんな中からカエルやら蛇やらがうじゃうじゃ飛び出すのはどうだ？ 大慌てだろ、下手すりゃ大パニックになる」

笑いながら提案するシリウスに、ジェームズはきつぱりと言った。

「ダメだ」

「……何だよ？ 相棒」

「魔法つてのは皆を笑顔にするためのものだろ？ 悪戯もそう。だから、笑い飛ばせないことはしちやダメなんだ」

ジェームズという言葉に、一瞬、皆が黙り込んだ。

最初に口火を切ったのは、シリウスで。

「……あー、それもそうか」

簡単に納得すると、すぐさま次のアイデアを探し始めた。他の三人も各々、思いを巡らせているようだった。

その様子を見ながら、ぼくは気持ちが悪くなるのを抑える。

何だか、嬉しかった。

ジェームズという言葉が、そして、それを当然だと受け入れる、この三人の空気が。

心の中で、そつと呟く。

父さん、母さん。

ぼくはこの学校で、最高の友人をたくさん見つけたんだよ。



ハリーの骨を生やす治療の付き添いで病室に泊まることは、流石に出来なかった。グリフィン・ドールの選手が集まってパーティーを始めそうになったことが原因かもしれない。

普段から厳しいマダム・ポンフリーは、パーティーのせいで一層頑固度合いが増していた。そのためぼくはしぶしぶ寮へ戻り、自室で睡眠を取り、そして朝一でハリーの病室へ向かったのだった。

まだ日も昇っていない病室に、この時間でも起きていたマダム・ポンフリーに許可を取り（呆れた目を向けられたのは気のせいではないだろう）、ハリーが眠っているベッドの横にパイプ椅子を出し、腰掛ける。

久しぶりに見たハリーの寝顔は、いつもより苦しげだった。

まあ確かに、骨を生やすのとかすつごい痛そうだもんな。

ハリーをぼんやりと眺めていたら、いつの間にか眠っていたらしい。

肩を揺すられる感覚で、目が覚めた。

「アキ、おはよう」

目を開けると、いつもと変わらず優しく微笑むハリーの姿。

ぼくがここにいることに、驚いた様子もない。

そりやそうだ。だってぼくらは双子だもの、いつも一緒にいて当然なんだ。

たまたま寮が違うだけ。たまたま、見た目が違うだけ。

一緒に過ごしてきた年数は、年の数分ある。

「今、ちょうどマダム・ポンフリーが抜けてる時間だ」

ハリーは目を細めて扉の向こうを見、呟いた。

「話したいことがあるんだ。昨日の出来事について」

そこでハリーが語ったことは、驚くべき内容だった。

ドビーが病室にやってきたこと、ブラッジャーに魔法をかけたのは自分だと告げたこと。そして、『秘密の部屋』について。また、コリン・クリービーが昨日、石になって運ばれてきたということ。

『秘密の部屋』は本当にあるんだ。ドビーは、それが前にも開かれたって言った。そして、今もそれが『開かれた』んだって——僕が

危険だって、警告してくれた。学校に闇の罫が仕掛けられてるんだって——」

その時マダム・ポンフリーが帰ってきて、ぼくらははっと黙った。マダム・ポンフリーの手にはハリー用の朝食が並べられていて、そういうば朝ごはんを食べていなかったことに気がつく。それをハリーに言うのと、「ゆっくり食べてきなよ、折角の日曜日なんだしき」と左手を振った。

大広間には、既に過半数が集まって、それぞれが朝食を取っていた。今日は日曜日だから、平日よりもまだお部屋でぐつすりの人は多い。でも日曜でも朝ごはんの時間は決まっているし、手紙は運ばれてくるし、先生からの連絡もあるしで、日曜だけどぼくらはいつも通り規則正しい生活を送っている。

レイブンクローの寮にたどり着いて、辺りを見回した。レイブンクローの二年生が固まっているところに寄っていくと、ぼく以外でアリスと一番仲がいいウィルに「おはよう、今日はアリスはいないの?」と尋ねる。

「一応声は掛けたんだが、まだ寝てるっぽかったぞ」

「ああね」

ハムエッグトーストを齧りながら答えるウィルに、納得して頷いた。

あいつは朝が弱い。平日ならばいざ知らず、今日は休日だ。朝食よりも睡眠の方が大事なのだろう。

「そっさいやアイツ、昨日遅くまで帰って来なかったんだよね」

「え、そうなの?」

そうなの、と、今度はウィルの隣に座っていたレーンが、かぼちやジュースを飲みながら言った。いつも夜中の3時4時まで平気で起きている宵っ張りのレーンは、でも朝は皆と同じように普通に起きてくる。睡眠時間4時間で、よく生活できるなと思ってしまう。

「僕が寝る準備をしていた頃だから、大体3時ちよつと前くらいかな? 消灯時間過ぎても校舎歩き回るとか、ヤンキーだよな。あいつなら分かるけどさ」

遠慮なしに呷くレーンに、ぼくは肩を竦めた。レーンの隣に腰掛け、紅茶を入れるとパンを手に取る。

皆が大体食べ終わった時（つまりぼくはまだ食べ終わっていない時）、パンパンと手を叩いてダンブルドア先生が立ち上がった。騒がしかった大広間が、一気に水を打ったように静まり返る。

これだけの人数を一瞬で黙らせるなんて、ダンブルドア先生は何か魔法でも使っているのだろうか。使っていても不思議じゃない。

「さて、今日は異例じゃが、一人の役人を紹介しようと思う。魔法界内閣府の方じゃ。最近物騒なんadena、学校の警備等について、しばらく詳しく調査してもらおう。皆の衆も、彼の指示には従うように」

そして、ダンブルドア先生は彼の名を呼んだ。その単語に、しばし呆ける。

ダンブルドア先生が手を叩くと、一人の男性が裏から歩いてきた。すらっとした背丈に煌びやかで豪華な衣装、金髪に碧の瞳。彫りの深い顔立ちは、俳優だと紹介されても素直に信じるだろう。

大広間が一気にざわめく。主に女子の声だ。しかし、ぼくも思わず「あつー」と声を発してしまった。

彼は壇上に立ち、軽く咳払いをすると、自然に大広間全体を見回した。

穏やかな笑みを顔に浮かべ、言葉を紡ぐ。

「えー、先程ダンブルドア先生にご紹介に預かりました。魔法界内閣……」

ぼくは、呆然と壇上の彼を見つめるしかなかった。

あまりにもインパクトが強すぎて、夏休みから半年経っても覚えていない。

夏休み、アリスと言いつ争っていたときは、今よりもつとやつれて、不精ヒゲもクマもあって、同一人物だとははつきり分からなかったけど。

今ぼくは、二重の意味で驚いている。

「ライフ・フェイスナーです。何かあったら、気軽に声を掛けてくださいね」

壇上の、魔法省から来たという彼は、幣原秋の大切な友人の一人であり。

そして——あの日目撃した、アリスの父親であった。

彼は、アリスの父親とは到底思えない爽やかな笑顔を、全校生徒に向けた。

第17話 花火

終了式が終わった後、悪戯仕掛人の4人組と、ぼく、セブルス、そしてリリーは、連れ立って夜中の中庭に出てきていた。

初めて見る夜の中庭は、奥に禁じられた森が見えるせいかとても暗く、少し恐ろしく見えた。

しかし、悪戯仕掛人の4人は何度も夜外に出ているらしく、慣れたものだ。

「よい、しよつと……秋、水、このくらいで大丈夫かい？」

「うん、十分だよ」

ジェームズが、湖からバケツに水を汲んで戻ってきた。ぼくは笑顔で宣言する。

「それでは、今から……第一回、花火大会を開催します！」



きっかけは、魔法薬の授業だった。ある決められた物質を燃やすと特有の光が出る、すなわち炎色反応を習った後、セブルスと話している時、ふと「花火って作れんじやね？」という話題になった。

その時はただの夢物語と思っていたのだが、思った以上に話が弾み、さあ後は実験してみるのみ、という段階にまで話を作りこんでしまった。

そんな面白そうな話に、悪戯仕掛人が乗らないわけがない。

とんとん拍子に話は進み、終了式終了後、皆で自作した花火大会をしよう、ということになった。

「おいブラック、手元が震えて危なっかしいぞ。僕が火をつけてやろう」

「スネイプは黙ってる！ 火くらいつけれるに決まってるんだろ」

「どうだか」

皆でわいわいしながらロウソクに火を点すと、いよいよ花火大会が始まる。

花火大会、といってもそんなに大げさなものではない、このメンバ―で手持ち花火をする、といった小規模なものだ。

それでも自分たちで自作したものを試すのは皆楽しく、あつという間に、結構数があつた花火は消費されていく。

赤、青、緑に輝く闇。

白く光って、最後には燃え尽きる。

花火に火がついているときは、近くにいた人と他愛もない話をして。火が消えたら、新しいものを取りに行つて。

花火が尽きても、話のネタは、尽きることがなかった。

「あーあ……終わっちゃったな」

なくなつた花火に残念そうなため息を漏らすリリーに、ぼくは小さく笑つてみせた。

「最後に、一つ用意してるんだ。……皆で、どうかな？」

ぼくが最後まで取つておいたのは、線香花火。イギリスにはない、日本独特の花火。

派手さは全然ないけれど、静かにジリジリと、時には華やかに、オレンジの光が舞う、幻想的な花火。

火花を眺めているときは、自然と皆静かになつて、自分の花火をじつと見つめていた。

オレンジ色の火花が、皆の顔を染めている。セブルスが、リリーが、ジエームズがシリウスがリーマスがピーターが、皆確かにここにいて、そして今、最高に楽しい時を過ごしている。

どうか、この友情が、永遠でありますように。

玉が落ちなかつたら、この願いはきつと叶う。

そう、祈つた。

玉は音も立てず、落ちずに消えた。



「アリスっ！ 何でライフ・フィスナーのこと聞いたとき、『知らない』なんて嘘ついたのさっ！」

朝食のあの騒ぎの後、ぼくらレイブクローの二年生は寮の談話室で、アリスに詰め寄っていた。談話室に下りてきたアリスは、唐突に同級生一同に囲まれて面食らったようだったが、納得したようにため息をつくとき、小さく舌打ちをした。

「そっか、お前一度、あいつの顔見てたんだっけ」

「どうして嘘ついたんだよっ」

息巻くぼくに、アリスは冷めた目を向ける。思わず気が削がれるほどに構わず、アリスは集まってきた同級生らに対して一言「暇人だな」と呟いた。

「どうだっていいだろ、あんな奴のことなんざ。それより明日の予習の方が、お前らには大切なんじゃないやねえの?」

嘲りをも含むその口調に、数人が殺気立つ。

ぼくは挑発されるよりむしろ、そんなことを言うアリスの方が気がかりだった。

あいつは、自分から敵を作るタイプじゃない。それが、どうしても……。

「……フィスナー! 口を慎め!」

「育ちが悪いもんでね、こりゃ生まれつきだ。神経逆撫でしたんだったら、悪かったな」

「テメエ……!」

レイブクローの生徒は、他寮と比べても大人びていて落ち着いている奴が多い。

それでも、まだ12歳だ。挑発されりや、それが安い挑発だと分かってても、買わずにはいられない。

「ハッ、育ちが悪いなんて、どこの冗談だ? 魔法界でも屈指の名門、フィスナー家のご子息がよく言うよ」

一人が、逆に挑発し返した。

アリスの目の色が、僅かに変わる。眉がすつと寄った。

「王室直属、そして英国魔法界の始まりから脈々と連なる『中立不可侵』の家系、羨ましいねえ? 中流家庭で5人家族のウチとはえらい違いだよ。まあ、アンタは? その煌びやかな家系の中でも一番の間

題児で、落ちこぼれだけどなあ！」

そこまで言われてアリスが黙っていないことは、この一年ちよいの付き合いで読めていた。アリスが手を出すよりも先に二人の間に割って入る。

アリスは舌打ちをして拳を下ろすと、ぼくを見下ろした。

「ぼくの質問に答えてよ」

「答える義務はない」

「今日の朝起きてこなかったの、わざとだろ」

ぼくの言葉に、アリスは少し驚いたようだった。

「知ってたんだ、君は。今日、君のお父さんが来るってこと。……ねえ、どうして会いたくないの？　そこまでして君は、お父さんを嫌うの？」

苛立ったように、アリスの目が細まる。普段の、アリスが怒ったときとはまた違う反応だ。

こんな表情をするのかと驚いた矢先、肩を押された。思わず後ろに倒れこみかけたのを、数人の同級生が助けてくれる。

その間に、アリスは一人、談話室を出て行った。

パタン、と扉が閉まる音を皮切りに、同級生の皆が今のアリスについて文句を言い始める。

「大丈夫か？　かなり強く押されたみたいだったけど」

「全然大丈夫だよ」

助けてくれた同級生数人の手を払うと、ぼくは寮の出口へと急いだ。

ぼくの背中に、声が掛かる。

「あんな奴放つとけよ、アキ！」

ぼくは何も言わずに扉を押し開け、前を目指した。

「アリスっ！」

廊下の先に、見慣れたシルエット。それを目指して駆け出したぼくだったが、しかし、そもそもの運動量の差か、体力の差か、ぼくはあつという間にアリスに撒かれてしまった。

行き場がなくなり、ぼくは廊下の真ん中でただただ立ち尽くす。

「どうして……」

誰もいない廊下で、一人呟いた。

「どうして、父親をあそこまで嫌うんだ……」

『……アンタ、母さんと結婚なんてしなきゃ良かったんだよ。……俺なんて、生まなきゃ良かったんだ』

『アンタの言い訳は聞き飽きた！　こうやって無駄に親ぶるのも世間の目え気にしてなんだろう、ホントは今にもこんなガキと縁切りてえ癖に！』

夏休み、ハリーを探して迷い込んだ、ダイアゴン横丁の裏路地で聞いてしまったあの会話。

今までずっと聞けずにいたけれど……。

「……アリス……君は、何で……」

「……君は……」

声に、顔を上げた。あ、と、思わず声を漏らしそうになる。

驚いたのは向こうも同じようで、あ、という口の形のまま、ぼくの姿を凝視していた。

そりやそうだ。幣原秋の知り合いだった者は、ぼくに会うと大体こんな反応をする。

ぼくの姿に、幣原の面影を見出す。

懐かしい亡霊を見たかのように立ち尽くし、呆然とする。

彼——リイフ・フィスナーもご多分に漏れず、そんな人間だった。

「ああ——すまないね。ちよつと聞き覚えのある言葉が聞こえたもので、思わず……」

照れたように苦笑し、リイフは頭を掻いた。そして「初めまして。私は魔法省内閣第一王室警護府所属のリイフ・フィスナーだよ。本日挨拶をさせてもらったんだけど、覚えているかな？　本当はもう少し役職名が長いんだけど、勝手に省略させてもらってるんだ。あんまり長いと覚えにくいし、印象にも付きにくいからね」と笑い、右手を差し出してくる。

ぼくも右手を差し出した。

ぼくの手がすつぽりと包みこまれるほどの、大きな手。幣原の時代

とは比べ物にならないほど、大きくて年を重ねた、大人の手。

「覚えてますよ。驚きましたもん」

二重の意味で。

リイフは——つて、彼の友人でもないぼくが大人の男性を（しかも友達の父親を）こうしてファーストネームで呼んでいいものか分からないのだが——「そう。……驚いた？ ……まあ、いいか」と頷くと、少し辺りを見回した。誰もいないことを確かめると、小声で尋ねる。「今、『アリス』と聞こえた気がしたんだけど……良かったら誰のことか教えてくれないかい？ いや、その……その名前に心当たりがあつてさ。えつと……その、君が仲がいい女の子だったりするのかな？」

「違いますよ。ぼくの知るアリスは、男ですから」

リイフの目を見て、答える。

この目の色、アリスにそっくりだな、と考えながら。

笑顔を浮かべた。

「初めまして。ぼくはアリス・フィスナーの友人の、レイブンクロー寮所属のアキ・ポッターです。これからよろしくお願いしますね、アリスのお父さん」

リイフは、しばらく啞然としていたようだったが——やがて小さく笑うと、目を細めてぼくを見た。

「それなら話が早いようだね。あいつに友達がいたとは、何よりだ」

「……実の息子なのに、不思議な表現をするんですね。人ごとみたいだ」

「人ごとだよ。あいつの友達なら分かるだろう？」

「人ごとって……」

リイフは、どこか疲れたような笑顔を浮かべた。

「君は何だか、結構色んなことを知っているようだね。もちろん、うちのことも」

「……そう多くは、知りませんよ」

アリスは、自分のことを全然語ろうとしないから。

ぼくがアリスについて持っている知識は、一年余りを過ごしてきた

にしては、あまりに少ない。

8月25日生まれのA型で、趣味は昼寝。意外と読書が好きで、意外と字が上手い。几帳面だけど、身の回りは適当。

時折、左耳の雪印ピアスに触る。触る時一瞬だけ、穏やかな顔をする。

それだけ？ —— それだけ。

父親はリイフ・フィスナー。

では、母親は？ 家族構成は？ 兄は、弟は、いるのだろうか。

分からないことが多すぎて、知らないことが多すぎて、まるで、信頼されていないようだ。

本当にそうなのかもしれない。

アリスは、誰も信頼していないのかもしれない。

「ダイアゴン横丁で、たまたまあなたとアリスを見掛けたんです。その……言い争っている、ところを」

「ああ……あれか」

リイフは遠い目をして、虚空を眺めた。

「それは、みつともないものを見せてしまったね。私のことを、酷い父親だと思っただろう？」

「いえ、そんなことは……」

アリスがそれ以上に衝撃的すぎて、そちらを思う理由がなかった、というのが正解かもしれない。

でも確かに、実の息子の顔をグーで殴った姿は、未だに覚えている。

「言い訳をさせてもらうなら、あの時数日、眠っていなくてね。少タイライラしていたんだ。殴り合いなんて我が家では日常のことだけけれど、驚かせてしまったのなら、すまなかったね」

「……アリスはあなたのことを、憎んでいるようでした。父親だと認めたくないかのように——」

「ああ……あいつは、私を父親だとは、もう二度と思いはしないんだろうね」

「どうして——アリスとの間に、何があったんですか？」

切なげに、リイフは目を伏せた。

「――僕は、ダメな父親だから」

小さく呟かれたその言葉に、思わず目を瞬かせた。自然、黙り込む。「今度は私から、質問させてくれないか？」

その沈黙を破ったのは、リイフ・フィスナーだった。

彼はぼくの目を見たまま、真剣な表情で尋ねる。

「変なこと聞くようだけどき、……幣原秋って、親戚にいたりしないかい？」

昔よりもずっと精悍で、ずっと体つきも変わったリイフは。

それでも、目の色だけは、昔と変わらないのだなと思った。

少年時代の面影を僅かに残しただけの、大人になってしまった彼の瞳の中に。

ぼくは、少年の頃のリイフ・フィスナーを、見つけた気がした。

ぼくはしばらく無言でいた後。

「いないですね。……人違いじゃないですか？」と、小さく呟いた。

第18話 世界が君の敵になるのなら

夏休み真っ只中。

朝からぼくは、幣原家で取っている新聞の一つ、イギリスのマグルの新聞を読んでいた。

何が楽しいかって、自分が2年前はさっぱり読めなかった、読もうとも思わなかった英字の新聞を、今のぼくはサラサラと読めてしまうことだよな。

こういうことに楽しみを感じるぼくは、中々どうして勉強というものが好きらしい。知識が増えていくことが快感と感ずることはもちろん、勉強という行為自体が苦にならないんだから。

2学年が終わり、夏休み。何か新しいことでも始めてみようか、と思いついた『新聞斜め読み』も、そろそろ一ヶ月が過ぎようとしている。

我が家の新聞は数が多く、普通の地域の新聞、経済新聞、日本の魔法使いや魔女向けの新聞である『魔導士通信』や、当然ながら日刊預言者新聞、そしてイギリスのマグルの新聞と、ざっと5種類もの新聞がある。

これだけに目を通すのは意外と大変だけれど、慣れてくると結構面白い。地域や文化ごとで、同じ出来事でも捉え方が全く違ったりする、それが興味深いのだ。

今日のイギリスのマグルの新聞は、センセーショナルなものだった。ぼくは何ともなしに、その見出しを呟く。

『民間人八人惨殺、犯人の手がかりは未だ見つからず』——物騒な記事」

その記事に対する興味は、しかしそこまでだった。少なくとも、この時は。



友人と遊び疲れて、ベッドに入ったのは午後8時。いくら何でも早

過ぎる。

ふと目が覚めた時、時計は午前1時を指していた。日付が変わるまで起きていた経験がないぼくにとつて、この時間はまさに未知の時間帯だ。

トイレにでも行こうかとベッドから降り、部屋をそつと抜け出す。廊下を歩いてトイレに向かう途中、開いた扉の隙間から居間の電気が漏れているのが見えた。

閉めようと近付いた時、父親の深刻そうな声が聞こえ、思わず伸ばした手を引っ込める。

「……話し合ってみよう」

「何とかなる相手じゃないよ。分かっているでしょ？」

母が珍しく、きつぱりと反対した。

「話し合いなんかで何とか出来る人じゃない。多分、もうすぐ——『始まる』」

「それでも。……友達だ」

母は少しの間黙った後、「友達、ねえ……」と含みを持たせて言った。

「向こうはきつと、直さんのこと、友達なんて思ってないと思うけど」
「……………」

「聞いてちゃ、ダメな話のようだ。そう思って回れ右しかけた時、ふと、父の言葉が耳に入った。」

「ねえアキナ。僕はね、こう思うんだ。魔法は、皆を笑顔にするためのものなんだって」

その言葉に——ジェームズを思い出した。

『魔法ってのは、皆を笑顔にするためのものだろう？』

なんてことないように、そう言い放ったジェームズ。その姿が、眩しくて、明るくて——

「それを、もう一度——あいつに、分からせてあげたいんだ」
ぼくは静かに、ドアから離れた。

イギリスに戻る日は、あと10日に迫っていた。



「決闘クラブ？」

玄関ホールの掲示板の前で、ぼくは首を傾げた。

レイブンクロー生は、基本的に朝が早い。基本的に、規則正しい生活を送る優等生が集う寮なのだ。ぼくみたいな。

……じ、自分で言うくらいいいじゃないか。優等生だよ？ ぼく。多分。

……まあ、いい。そんな訳で、朝大広間に最初に足を踏み入れるのは、大体レイブンクロー生だったりする。

早起きした、ゆつくりとした時間の中で、あと15分もしたら込み合う掲示板もゆつくりと見ることが出来る。

そこで、貼り出してあった一枚の羊皮紙を見つけたのだ。

『決闘クラブ』の案内……決闘を教えてくださいるんだ！』

「今夜8時が第一回目か。アキ、行く？」

「ぼくは行くよ。何かで役に立つかもだしね」

後ろの声に返事をして、ぼくは羊皮紙を再び見上げた。

ハリー達は来るのだろうか。あいつらのことだから、面白そうなものには大体首突っ込んでくるし、来てもおかしくない。なら、行くのもいいかもしれない。

気がかりなのは、アリスの方だ。めつきり顔を合わせる機会が減ってしまった。

まず、寮に帰ってこない。これは相当な問題で、一日二日程度ならまだしも、一週間ともなれば、無断で外泊するのはご法度だ。先輩や先生方に知られたら大変なことになる。

今のところは何とか身内だけで事を収めているが、これからも長引くとなると、どうなることか保証できない。

授業は、たまに出てきたり、来なかつたり。その際もぼくとは離れた場所に座るし、授業が終わるとすぐさま姿をくりますから、今やアリスを捕まえることは至難の技となっていた。

同室の奴らはもう呆れたように諦めていたけれど、ぼくまで諦めてしまったら、一体誰がアリスを信じてやれるというんだ。

友達だと名乗るなら、諦めちやいけないだろ。

アリスはこれに、顔を見せるだろうか。

正直、可能性は非常に薄い。けれども、行ってみることにした。



行つてすぐ、この中からアリスを見つけることは、たとえアリスがこの中に混じっていたとしても、見つけられはしないだろうということが分かった。それくらい、大広間には人が溢れていた。

普段のテーブルは取り払われ、壁に沿って金色の舞台がでんと据え置かれている。全校生徒のほとんどが集まっているだろうこの空間は、各々がテンション高めに喋り合い、とても騒がしい。

と、いきなり前方にて、しゃべり声が止んだ。伝染するように、静かに声が静まっていく。先生が入ってきたのだ。

そういえば、決闘クラブを教えるのは誰なのだろうか？ もしかしてライフだろうか。

そう思つて背伸びをし、教師の姿を見つけた瞬間、軽く絶望した。ギルデロイ・ロックハートだ。きらきらとした深紫のローブを纏っている。早々と今日来たことを後悔し始めたばかりだったが、後ろに控えている人物を見て、思わず声が漏れそうになった。

スネイプ教授が、もの凄いい頂面で腕を組み立っている。今にも誰かを（具体的にはロックハートを）呪い殺せそうなオーラを放つ姿は、圧巻の一言に尽きた。

というか、何故そこでスネイプ教授をセレクトしたのでだろうか。ロックハートを講師に選任したのも十分に意味不明だが、スネイプ教授がロックハートの助手をする、というのも解せない。

本当に罰ゲームなのか、そうなのか。
「静粛に。みなさん、集まって。さあ、集まって。みなさん、私がよく見えますか？ 私の声が聞こえますか？ 結構、結構！」

ロックハートは上機嫌に、観衆に手を振った。これでもまだ、騙されている女の子たちは多いようで、黄色い声があちこちから飛ぶ。

いいなあ、羨ましいなあ。ぼくもあのくらいのイケメンに生まれたかった。

「ダンブルドア校長先生から、私がこの小さな決闘クラブを始めるお許しをいただきました。私自身が、数え切れないほど経験してきたように、自らを護る必要が生じた万一の場合に備えて、みなさんをしっかりと鍛え上げるためにです——詳しくは、私の著書を読んでください。では、助手のスネイプ先生をご紹介しましょう」

そこで、ロックハートは満面の笑みで、スネイプ教授を右手で指し示した。彼はスネイプ教授が放つ圧倒的な負のオーラに気付かないのだろうか。気付かない方が、いつそ幸せなのかもしれない。

「スネイプ先生がおっしゃるには、決闘についてごくわずかご存知らしい。訓練を始めるにあたり、短い模範演技をするのに、勇敢にも、手伝ってくださいるといって承をいただきました。さてさて、お若いみなさんにご心配をおかけしたくはありません——私が彼と手合わせしたあとでも、みなさんの魔法薬の先生は、ちゃんと存在します。ご心配めさるな！」

多分誰も、スネイプ教授の心配なんてしていない。

ぼくはむしろ、ロックハートが心配になってきた。スネイプ教授、まさか本気でロックハートをぶっ飛ばすつもりじゃないだろうか。全校生徒の前で恥をかかせる、とか。

曲りなりにも教師なのだから、流石にそれはないか。

ロックハートとスネイプ教授は、向き合って一礼した。そして杖を剣のように前に突き出して構え、その体勢のまま止まる。

「ご覧のように、私たちは作法に従って杖を構えています。三つ数えて、最初の術をかけます。もちろん、どちらも相手を殺すつもりはありません」

いや、あられたら困るけど。お互いに。

「1——2——3——」

「エクスペリアームズ！ 武器よ去れ！」

ロックハートが数を数え終わると同時に、スネイプ教授が叫んだ。紅の閃光が教授の杖から迸り、ロックハートに命中する。

ロックハートは十数メートル後ろに吹き飛ぶと、壁にぶち当たってようやく止まった。数人の生徒が歓声を上げる。何気に全部男だ。

ロックハートはよろよろと立ち上がると、舞台によじ登ってきた。

「さあ、みんなわかったでしょうね！ あれが、『武装解除の術』です——ご覧の通り、私は杖を失ったわけですから——ああ、ミス・ブラウン、ありがとう。スネイプ先生、たしかに、生徒にあの術を見せようとしたのは、すばらしいお考えです。しかし、遠慮なく一言申し上げれば、先生が何をなさろうとしたかが、あまりにも見え透いていましたね。それを止めようと思えば、いとも簡単だったでしょう。しかし、生徒に見せた方が、教育的によいと思ひましてね……」

教授の凄まじい形相を見て、ロックハートも流石に気付いたらしい。

「模範演技はこれで十分！ これからみなさんのところへ下りていつて、二人ずつ組にします。スネイプ先生、お手伝い願えますか……」
教授らが、生徒たちの群れの中に混じっていく。それを何となく見つめ、ふと視線を壁に遣ると、そこにはリーフ・フィスナーが立っていた。静かな、というと聞こえはいいが、冷やかな瞳で会場を見渡している。

幣原秋が二年生の時までは、リーフはセブルスと接点はなかったけれど、それから二人が友達になっていても不思議ではない。

大人になった今、二人は何かを話しただろうか。学生時代のことを思い返し語り合うことを、果たして二人は行うだろうか。

その中の話題に、幣原秋は上るのだろうか。

ぼくの知らない幣原について、二人は語るのだろうか。

「アキ・ポッター。貴様はこちらで見えていたまえ」

と、急に後ろから肩を叩かれて驚いた。見上げると、そこにはスネイプ教授の姿。不機嫌そうな仏頂面で壁際を指差している。

「えっ？」

「え、ではない。貴様が他の生徒に対して術をかけるなど、考えただけでも身の毛がよだつ。誰かを怪我させる前に離れたまえ。もつとも、ここでにつくき相手を葬っておこうという考えならば、悪くはないと

思うがな」

いつも通りの無表情だが、台詞から考える限り、教授はだいぶ機嫌はいいのだろう。ロックハートを吹っ飛ばせたからだろうか。

促されるまま壁際へと寄り、背中を預ける。間に柱を挟み、少し離れた場所に教授も立った。

「相手と向き合って！　そして礼！」

壇上に立ったロックハートが号令をかけている。皆のざわめきをどこか遠くで聞いていると、不意に近くで声がした。

「おや？　えつと……アキ・ポッター君。君はクラブに参加しないのかい？」

いつの間にか、リーフ・フィスナーが、穏やかな笑顔と共に話しかけてきた。この前話したときとは違う、大人の立場として、生徒に話しかけるような雰囲気。

口を開こうとしたが、しかしスネイプ教授が口を挟むのが早かった。

「彼は他の生徒と比べて、いささか魔力が強すぎるのでな。見学という訳なのだよ、フィスナー」

「……おや、セブルスじゃないか」

リーフの雰囲気が変わったのが分かった。同時に、教授の雰囲気も。

生徒達が、言わば和気藹々としている中、ここだけが空気が張り詰めている。

「それでも、一人だけ見学なのは可哀想じゃないか？　アキだって、きつと友人らと一緒に新しく習った術を試してみたいだろうに」

「余計なことを言わないで頂きたい。教師である我輩が決めたことに、横槍を出さないでもらおうか」

「別に私は、教育に口を挟もうとしている訳ではないのだけどね。しかし、いささか過保護過ぎやしないかい？」

「何が言いたい」

「あいつと似てるからって、特別扱いしてんなよってこと」

吐き捨てるように言ったリーフの言葉に、思わずどきつとした。

「……あいつとは違う。彼はあいつよりも魔力自体は小さいし、今までそれで事故を起こしたこともない。あいつよりも魔力の練り方は上手い」

「じゃあ参加させてあげればいいじゃないか」

「それとこれとは話が別だ。これは相手に直接魔力をぶつけるものだ。まだまだ未熟な生徒が生身で喰らったら、本当に怪我しかねない」

「だから教師の立場として止めるしかない？ よく言うもんだね。さすがは『秋の一撃を喰らった本人』だ——経験者は語る、とはこのことかい？」

すぐ隣で会話が飛び交う。ぼくは出来る限り身体を小さくさせ、それでも一言一句聞き漏らすまいと耳を澄ませていた。

「今彼に対して世話を焼いているのは、昔に対する罪滅ぼし？ あいつにそっくりなこの子にあいつを投影させて、それで償っているつもり？」

「——違う」

「いいや、違わないね。私は君とは違う立場で、ずっとあいつの近くにいた。あいつが命を絶つ一ヶ月前まで、あいつの傍にいたんだ。君とあいつの関係性を、それが崩れていく過程も結末も、私は全てを見てきた。だから言っているんだ」

「じゃあ何故、貴様はあいつの死を止められなかった」

鋭く、教授が言った。ライフがぴくりと身じろぎをする。

「近くにいたと主張するなら、どうしてあいつの闇に気付いてあげられなかった。どうして、あいつを救ってやれなかった。所詮、貴様も騙されていただけだ。あいつの見せ掛けの笑顔に。真綿で抱きしめられるようなあの嘘吐きに。全ての暗闇を隠す、あの優しさに。」

騙されていただけなのだよ、ライフ・フィスナー。貴様も私と同じだ。共に罪深く、共に穢れを背負っている。貴様に私を断罪する権利などない。私に、貴様を糾弾する権限がないのと同様にな」

それから、お互い黙り込んだ。気まずい沈黙が、ぼくらを支配する。

「……いつまであいつの幻想を追っているつもりだか」

そう言い捨て、リイフは教授から離れていった。騒がしい教室を見回るように、ゆっくりと壁沿いに移動する。

さつきまでの重たい雰囲気など感じさせない暖かな笑みを浮かべていた。

「アキ・ポッター」

急に低い声で名前を呼ばれ、思わずびくつと肩が震えた。そつと教授を窺う。

「今の会話は他言無用だ。いいな。質問もするな」

教授はぼくを見ずに、そう呟いた。

「……はい」

深呼吸をし、壁にもたれる。

ぼくにとつて、幣原秋は何者なのだろう。

そして。

幣原秋にとつて、ぼくは何者なのだろう。

そんな、答えなんて出ないことを、ぼんやりと考えていた。

「さて、誰か進んでモデルになりたい組はありますか？」

ふと気付けば、さつきまで阿鼻叫喚の大騒ぎ（視界に入っている中でも、吹き飛んだ杖を探しあたふたする者、口論から発展して喧嘩になっっている者、上手く術が掛けられなくて四苦八苦している者、術なんて掛けずにおしやべりに興じている者、はたまた全然違う呪いを掛け合っている者、など。シリアスな雰囲気をぶち壊さないためにも黙っていたのだ）だった大広間が静かになっている。

ロックハートは生徒の間を歩きながら、どうやら決闘の生徒のモデルを探しているようだ。

と、そこにスネイプ教授が（いつの間にかそんなところに行っていたのか！）「マルフォイとポッターはどうかね？」と嫌味な笑顔で推薦した。

ハリーの姿を探すまでもなく、二人は舞台の上へと上がる。やつぱり、ハリーも来ていたのか。帰りは上手く捕まえて、少しの間でいいからおしやべりしたいな。

ハリーにロックハートが、ドラコにスネイプ教授がそれぞれ何やら

助言した後、舞台にはハリーとドラコだけが残された。

ロックハートが掛け声を掛ける。

「1, 2, 3, それ!」

ハリーが杖を振る。がしかし、ドラコの方が速かった。

「サーペンソーティア!」

ドサツ、と、何かが空中から落下する音が聞こえる。と同時に、舞台の周辺にいた生徒が悲鳴を上げて後ずさりした。

その隙にぼくは彼ら彼女らの間を掻き分け、舞台に近付こうと試みる。

ぱつと視界が開けた先に見たものは、黒光りする大きなヘビと、ヘビに威嚇され動けない、あの子は確か……ハツフルパフの、ジャステインだっけ?

思わず杖を取り出しかけたぼくの耳に、その時、聞き慣れない音が——否、言葉が、飛び込んできた。聞き慣れない、でも、不思議と聞き覚えのある声に、自然と音の発信源を探す。

聞き覚え、だなんて、今更のこと。

だってぼくらは双子なんだから。

一体何年間、一緒にいたと思ってるの?

ハリーが、何かをヘビに向かって呟いていた。しかしその言葉は、ぼくらには決して聞き取れない種類のもので、ジャステインもドラコも、ハリーの声が届く誰もが皆一様に、怯えた顔をする。

ヘビが、ハリーを向いた。一人と一匹が、数刻、見つめ合う。

ぼくの知らないハリー・ポッターが、そこにいた。

ぐいっといきなり、横から押しつけられる。ぼくの前に出てきたスネイプ教授は、無言で杖を振り、ヘビを消した。

ハリーが安心したように息を吐き、肩を下ろしたところで——静まり返っている大広間の現状に気づき、きよとんとする。

その顔は、ぼくの知っているハリーそのもので、どうして皆がそう静かなのか理解出来ないといった顔が、ひたすら愛おしく思えた。

何の偶然か、因果か。ふ、とその時、舞台に立つハリーと、目が合った。

ハリーは助けを求めるような顔でこつちを見たが、は、と表情を強張らせる。

その顔を見て初めて、自分が険しい顔をしていたことに気付いた。「あっ……」

ハーマイオニーとロンに引つ張られ、ハリーが舞台から降りた。そしてそのまま、人に紛れ、姿を消す。

ひそひそと、ざわざわと。生徒の囁き声が、まるで意志を持っているかのように集団となり、唸りを上げるのが分かった。

へび語使い

パーセルタング

襲われる

スリザリン

の

後継者

単語しか聞き取れないそれは、どう頑張っても好意的にはならない感情からのもので。

この悪意が、この負の感情が、ハリーに、ぼくの大切な人に向けられているのは、我慢ならなかった——いや、そんなのは言い訳だろう。

ぼくは多分、償おうとしたのだ。

さつきハリーに向けてしまった表情を、取り繕おうとしたのだ。

今更。

舞台に飛び乗る。この場にいる皆の注目が集まるのを感じながら、叫んだ。

「ハリーはスリザリンの後継者なんかじゃないっ！」

皆のざわめきが、一気に止む。身を切るような静寂の中、ぼくはもう一度叫んだ。

「ハリーは誰も襲ったりしない！ あいつはぼくのっ、誰よりも大事な人なんだっ!!」

多分、おそらく、きっと。誰もが動きを止め、ぼくを見ていただろう。

ある者は、好奇の視線を。ある者は、奇異なものを見るかのような

目線を。

ある者は、関心なく、ぼくを見ていただろう。

ぼくの声は、広い大広間中に反射し、無意味に反響した。

誰も、ぼくの声に反応を返す者はいなかった。

やがて、ぼくはスネイプ教授に無理矢理壇上から引き摺り下ろされ、友人らに引き渡される。背後でロックハートがお開きの口上を述べているのを聞きながら、ぼくは大広間から、そして部屋まで、無言で連れて行かれた。

誰も口を利かなかつたし。

ぼくも、誰とも口を利かなかつた。

第19話 霧の街

霧の街ロンドンには、ぼくのことを嫌いみたいだ。ぼくが来る日は、霧が立ち込める確率が上がる。気がする。

新学期、三年生用の学習用具を揃え、ホグワーツへと出発するためにロンドンへ来た、今日も今日とて霧がかっていた。

こんな天気の日には、街を歩く人通りも少ない。ダイアゴン横丁に入ると、マグルほどでないにしても、人の数は少なかった。

それでも沢山の店は通常運転している。

軒先に売られているものを見るのも楽しくて、両親の後ろをはぐれないようについて行きながらも、目はあちらこちらと移っていく。

「そういえば秋、あなた、ローブと買って買い替えなくてもいいかな？」

「え、どうして？」

意味も分からず聞き返すと、母は普段通りの口調で「だって、背とか伸びてたら、新しいものに替えなきゃでしょ？」と首を傾げた。

「……………」

「？」

「……………」

「…………あら、ごめんなさい」

ぼくの成長期はいつ来るのだろうか……………どうか早く来て欲しいものだ。

日本人って基本的に小さいよね。

「…………まさか、あの人……………」

「怖いわねえ……………」

主婦の人たちが、ひそひそと何やら話しながら通り過ぎた。思わず目で追う。

何だ……………？

気のせいだろうか。何だか不穏な空気を感じる。

「じゃあ、お母さん達はお父さんの新しいローブを見てくるけど、秋はどうする？」

「なら、ぼくは隣の本屋にいるよ」

そう、じゃあね、と笑って、母と父はぼくに手を振ると背を向けて歩いて行った。

本屋の前に一人残されたぼくは、改めて辺りを見回す。

間違いない。最初は天気の良いかと思っただが、それを抜いたところで、今までにないくらいに街の雰囲気が暗い。

大人たちの井戸端会議や、店の人との立ち話、ひそひそ話す大人たちの顔には、笑顔はほとんど見受けられない。

楽しそうなのは幼い子供ばかりで、ある程度年齢がいつている子たちも、どうして大人たちが暗い顔をしているのか得心いつているようだった。

路地には怪しげな人たちがシートの上に怪しげな物を並べて座っていて、普段は見向きもされないようなそんな店に、人はひっきりなしに立ち寄っていく。

近付いてみると、その店は闇の魔術に対抗するグッズを売っているようだった。しかし軟骨を繋いだブレスレットなんかで闇の魔術が凌げるものだろうか。

勇気を出して、ぼくは本屋の店主に話しかけてみることにした。

「あの……すみません。最近、何かあったんですか？」

「ん？ ああ……もしかして両親はマグル出身とかかな。なら知らなくとも無理ないな……」

別にマグルとかではないけれども、話を進めるために黙っておくことにした。海を越えた向こうにいるのと、世界が違うマグルの中で暮らしているのでは、情報格差は同じようなものだろうから。

店主が教えてくれた情報に、ぼくは目を見張った。

「マグルと結婚した魔法使いが、家族もろとも亡くなったんだ」

「……え？」

それだけ、と言おうとした言葉を、すんでのところで飲み込んだ。しかし肩透かしを食らった気分なのは否めない。しかし、続いた言葉にぼくは驚いた。

「犯人は分かっている。奴はマグルを、心の底から憎んでるんだ……マ

グルなんかと結婚する魔法使いも含めてね。君も、気をつけた方がいい……両親がマグルだなんて、奴に知られでもしたら格好の獲物だぞ……私の祖父もマグルなんだ……」

「犯人が分かっているなら……どうしてそいつを捕まえないんですか？」

「捕まえられないんだよ。魔力が強大過ぎてね、闇祓い何人かかっても返り討ちだ」

「……その犯人は、何と言う名前なんですか？」

ぼくの質問に、店主はちらつと回りを見回した。そして小声で答える。

「本名は知らないがね。……本人は、『ヴォルデモート卿』と呼ばせてがっているみたいだよ」



いつものことながら、ぼくの朝は早い。この時期ならば6時には必ず目が覚めている。

勿論、育ち盛りかつ好奇心旺盛なこの年代で、そんなに早起きが習慣づいている者なんて殆どいない。だからぼくは、朝の時間を一人、読書に充てるようにしていた。

友達がいる時はいつも友達と絡んでしまうから、ついつい本を読む時間が削れちゃうんだよなあ……

そう思いながら、談話室のソファアに腰掛け、本を開く。パラパラと本を捲って、しおりの位置を探し当てた。

さてさて、ソディアの冒険はこれからのようになるのだろうか。この前サメに喰われかけ奇跡的に生還したのには驚いたなあ……まさかあんな方法でサメを撒くことが出来るだなんて……

文章に目を落とす。がしかし、妙な音で、ぼくの読書はすぐに遮られた。

何か小さなものがぶつかる音がする。しかも、結構近くで。きよろきよろ見回して、やがてそれが、一匹のふくろうが窓に何度も激突し

ている故に出ている音であることに気付いた。

一瞬躊躇するも、立ち上がって窓に近付き、窓を開けてやる。ふくろうは窓からスィーっと音もなく入ってくると、ぼくの読みかけの本の上にポトリと手紙を落とし、そして現れた時の唐突さそのままに、窓から出て行き、姿を消した。

うーん……。

打ち解けてはくれないなあ、ふくろうも。

動物には異様に嫌われる才能、遺憾なく大發揮なう。

……………。

「……いやでもしかし、この手紙はぼく宛なのだろうか……」

封筒を手に取り引っ繰り返すも、宛名も送り主のサインもない。少々迷った後、まあいいか、と封を切った。

中には、一枚の紙のみが入っていた。それに記されていた文言も、たった一行のみだった。

【アリス・フィスナーに近付くな】

「……はっはっは。中々ベタな線行くじゃない……?」

一人嘯いて、杖を取り出す。さつきから開けっ放しの窓から、その手紙に火を付けると、放り投げた。

レイブンクロー塔の高い窓から落とされたそれは、火に包まれた後、真っ黒なススとなって細かく飛び去り、やがて見えなくなつた。



決闘クラブの後、ハリー・ポッターのサラザール・スリザリン継承者説は、もはや生徒の中では常識となつているようだった。

ぼくへの風あたりも中々に強く、ぼくと仲のよいレイブンクロー2年生男子以外はほぼ皆、ぼくを見てひそひそ話すわ離れていくわ……と、結構凹むぞ、これ。

友人いわく、「アキはいわば、ハリー・ポッターの手足、つまり、実戦部隊だと思われるみたいだね。だって、猫や人を石にするくらい、ハリー・ポッターは無理でも、君なら出来るだろ?」とのことだっ

た。

ちなみにそいつに「ぼくが怖くないの？」と聞くと、にへらつと笑って「俺を石にしたらすぐさま物的証拠が出来ちゃうからね」とのたまいやがった。したたかな奴。

そんなこんなで、ハリーに会う時間なんて取れるわけがない。ぼくらが二人近付いたら、それだけで細菌でも撒いてるんじゃないかとも思われるくらい避けられそうだ。

これ以上妙な噂をばら撒かれちゃたまらない。ハリーとの連絡手段は一応確保してあるし、今のところは必要ないだろう。

緊急の用事は、今のところない。

薬草学の授業がやっと終わった。これでもう、今日の講義は全部終了だ。

寮に戻るか、それとも中庭でも散歩するか……そう思いながら勉強道具を片付け席を立った瞬間、後ろから、ぐい、と左手を引っ張られた。思わず転びそうになる。

そんなぼくの様子にも構わずに、意外と強い力で、『彼女』はぼくを引っ張り、教室を出、廊下をすたすたと歩いていく。

数回に及ぶ階段、数十メートルに及ぶ廊下を歩いた後、『彼女』が入ったのは、とある小さな空き教室だった。

ぼくの手を離し、『彼女』は扉を閉める。そしてくるりとぼくの方を向き、普段通りの無表情な瞳でぼくを見た。

「愛の告白でもしてくれるのかな？」

ぼくの冗談にニコリとすることもなく、『彼女』——アクアマリン・ベルフェゴールは、「……あなたに聞きたいことがあって」と口を開いた。

「どうしたの？ ぼくに答えられることだったら、何でもいいよ」

笑顔で尋ねる。

……ところで、手首を握って引っ張られるのって、一般的には「手を繋いだ」ことになるのだろうか……。

「……ちよつと待って」

と、そこでアクアは立ち上がり、扉から首だけを出してきよろきよ

ろと辺りを見回した。ほどなくしてドラコ・マルフォイが現れ、ぼくたち二人きりだった部屋の均衡が破られる。

……いや、まあ、ね。いいんだけどさ。」

ちよつと、いや、かなりがっかり。

特に、彼女の想い人を知った今となつては——いや、まあこれはおいておこう。

「さて、アキ。一つ聞きたいことがあるんだ」

ぼくの気持ちも知らず、ドラコはぼくの前の椅子に座った。倣つてぼくも椅子に腰掛ける。

「久しぶりだね、ドラコ。再会の挨拶よりも先に、一体何の用?」

「君ら、サラザール・スリザリンの後継者なのかい?」

ぼくの軽口を無視し、ドラコが単刀直入に問いかけた。

……なるほど。これが狙いか。

「そう聞くんことは、君は継承者じゃないんだね」

確か、ハリー達はドラコが怪しいって言つてなかつた。古くから歴史のある家系で、代々スリザリンで——みたいな。

ドラコはぼくの言葉に、少々気分を害したらしかった。小さく舌打ちをしてから、それでも律儀に「違う」と答える。

「違う。僕だったらよかつたのにと何度も願つたが——違う、僕じゃない。スリザリンの継承者は、僕じゃない」

ちらり、とアクアを見る。無表情のアクアだがしかし、ドラコの言うことは嘘ではないように思えた。

ドラコは続ける。

「はつきり言おう。この学校に、僕の家系、マルフォイ家以上に、歴代スリザリン生を輩出してきた家柄は存在しない。こいつの家、ベルフエゴール家にしても同様だ」

そう言つてドラコは気安くアクアを顎でしゃくつた。ちよつとむつとしたが、堪える。

「スリザリンの継承者に足る人物なんて、僕以外にはいないのに——僕以上の人物なんていないにも関わらず、今こうして、スリザリンの継承者を名乗る人物が存在し、そして事件を引き起こし続けている。

——僕としては、これは見過ごせない。アキ、君には分からないだろうけれど、これは結構、重大なことなんだ」

「……………」

考える。

スリザリンの継承者とは。

そして、そいつの狙いとは。

「……違うよ。ハリーは、そしてぼくも、スリザリンの継承者とはなんら関係ない」

「……でも、彼はパーセルマウスよ。……純粋なスリザリンの証」

アクアが、鋭く切り込んだ。ドラコから目を離すと、彼女にしっかりと視線を合わせる。

「昨日の、決闘クラブでのあの出来事……あれはぼくにも、よく分からない。あんなハリーは初めて見たんだ……ヘビ語を話せる、なんて、全く知らなかった」

そしておそらく、ハリー自身も、知らなかったのだろう。

昨日、ヘビを退けた後に見せた、何で皆がそんな表情をしているのかさっぱり分からないといった表情から、それは明白だった。

「でも、ぼくはハリーを信じてる。たとえ消去法で、ハリーしか犯人候補がいなくなったとしても、僕だけはずっと信じ続ける。唯一の家族だから」

ぼくの意志の強固さを感じ取ったのだろう、ため息をついてドラコは肩を竦めた。

「結局、アクアの言う通りか……」

「……………」

ドラコの呟きを耳聴く聞き拾ったぼくに、ドラコが付け加える。

『アキならそう言うだろう』って、アクアがね」

それは——喜んでいい、情報だろうか？

彼女が、ぼくの思考を読んだ、読もうとしてくれた、ということに。

「はー……んじゃ一体、スリザリンの継承者というのは誰なのかね……アキ、心当たりはあったりするかい？」

「あ、心当たりって程じゃないんだけど……」

ぼくは小さく手を上げた。二人が揃ってぼくを見る。

「あのさ、スリザリンの継承者つて、その、サラザール・スリザリンの意志を継ぐ者、つて考えてもいいわけだよな？ その、マグル生まれの子を排除して、純粋な魔法族の子供のみに教育を受けさせようと考えてるみたいな……」

「ああ、そうだ。だからこそ、純血主義の主張をきちんと持っている僕が相応しいと——」

「じゃあさ、純血の家系か、それに近い家柄の者から当たっていく方が、やっぱり手取り早いんじゃない？」

ドラコの話を通り、ぼくは言った。

「えっと、ロンから聞いた話で、一回聞いただけだから記憶が曖昧なんだけど……魔法界で純粋な魔法族の家系は少なくて、ほんの数家しかないって聞いたんだ。ロンのところのウィーズリー家に、ドラコのマルフォイ家、そしてアクアのベルフェゴール家……で、あと聞いたんだけど、忘れちゃった。何だったっけ……」

記憶を探る。しかしそれより早く、アクアが小さく呟いた。

「……ベンジャミン家と、フィスナー家……」

「ああそう——フィスナー家？」

フィスナー？

アリスの家か？

でも、ロンがアリスの家を話題に出したのなら、いくら何でもぼくだって覚えているだろう。記憶にないってことは、ロンはフィスナー家については何も触れていない。それなのに、どうして——

「アクア、違うぞ。フィスナー家は最近『混じった』んだ」

「混じった？」

ドラコの言葉に聞き返す。ぼくの反応に驚いたように、ドラコはぼくを見、目を瞬かせた。

「アキ、フィスナーから何も聞いてないのか？」

「何を？」

自分の感情が少し、波打つのが分かった。

果たして、ドラコは何でもないことのように、ぼくに告げる。

「フェイスナーの、家の事情」

ドクン、と、血液が身体中を巡る音が、聞こえた。

「……あいつは、家のことを、人あまり言いたがらないから」

ぼくの言葉に、ドラコは「ああそっか」と事も無げに頷いた。

「じゃあ何も聞いてないのか？ 今学校に来ている、内閣からのお偉いさんが、フェイスナーの父親だつてことも？」

「あ、いや、その辺は知ってる……けど……」

頭を搔く。その辺りは色々と複雑に絡み合った事情の末、ぼくはライフ・フェイスナーのことを知り得ている。

ドラコはぼくの反応に、少し呆れた風だった。それはぼくに呆れた、というより、アリスに呆れているようだった。

相変わらず、あいつは——というような。

「じゃあ、それ以外は？ 例えば……あいつはこの夏休み、遂に一度たりとも家に帰らずにずっと家出を継続していた、とか——」

「何それ……かんっぜんに初耳なんだけど」

そしたら、ぼくが見たダイヤゴン横丁でのアリスとライフの二人の会話は、久しぶりに再会——いや、逃げるアリスにようやとライフが追いついた場面での出来事だったのか？

『言い訳をさせてもらうなら、あの時数日、眠っていないくてね。少々イライラしていたんだ』

ライフの言葉が、声が、表情が、蘇る。

『——僕は、ダメな父親だから』

そう切なげに呟いた、あの時は。

「……ドラコ。もし良かったら、アリスのことについて、もつと詳しく聞かせてもらえないかな？」

アリスは嫌がるだろう。もしかすると、嫌われるかもしれない。

あいつにとって家の事情は、ここから伺える限り相当デリケートで、複雑だ。

でも、それでも。

知りたい。

——何のために？

あいつを、助けたいから。
アリスを、リイフを、助けたい。

終わりに向かいつつある家族の仲を、どうか直したいから。

——多分それは、両親共にはいないぼくの、どうしようもない願い
だったのだろう。

家族には、仲良くして欲しい。

ぼくにはもう、それは叶わないから——

「……結構、長い話になるけれど」

そう前置きして、ドラコは語り始めた。



「あー……成る程ね。そういう事情か……」

ドラコの話が終わって、ぼくは小さく息をついた。

「リイフの奴……器用な奴なのに、自分のことになるとてんで不器用
になっちゃうんだよなあ……」

「ん？ 誰の話だ、それ？」

「なんでもない」

ドラコに笑顔でかぶりを振って、ぼくは腕を組んだ。

「つまるところ、こりやホントに擦れ違ってるだけなんだ、この親子
は」

「少なくとも、僕らにはそう見える。……が、そんなこと聞いて、どう
するつもりだ？」

「ぼくはただ、繋ぎ止めたいだけだよ。フィスナー親子の絆を、ね」

ドラコはちよつと考え込む素振りを見せた。ぼくの言葉に、何か思
うところがあったのだろうか。

もしくは、何か言おうとして、その言葉を飲み込んだ、か。

「……私はむしろ、家に縛られているのは父親の方だと思うけれど」

「そう……そうだね」

アクアの言葉に、ぼくは静かに頷いた。

「……僕らは、フィスナーに言葉を届かせることは出来なかった」

やがて、ドラコは口を開いた。言葉を選んでいる風だった。

「それは、僕らもあいつに遠慮したからで……思っていることが、ほとんど伝えられなかったからで。……でも、お前なら」

しつかと、ドラコはぼくの目を見つめて、言う。

「かなり自分勝手に、まだ出会って一年くらいなのに、いや、出会って早々フィスナーを振り回せて、文句も何も笑い飛ばせて、傍若無人で、いつでも自信満々で、たまにこっちがビビるくらい無茶苦茶だけど」

「ちよつと、ドラコ、おい」

「お前なら。……フィスナーに言い聞かせることくらい、簡単なんじゃないかって思うよ」

「……当たり前でしょ。ぼくを誰だと思ってるの？」

自信に満ちた表情で。

ぼくは、笑ってみせた。

「アリス・フィスナーの一番の友人、アキ・ポッターだよ？」

「——少々長引いた親子喧嘩の仲裁くらい、お茶の子さいさいだよ」

第20話 不穏な噂

ホグワーツでも、ダイアゴン横丁で感じたような暗く重たい雰囲気は健在だった。普段は明るく華やかな大広間も、生徒の元気がないせいか、何故か安っぽく感じて冷めてしまう。

ぼくもそうはしゃぐ方ではないけれども、この時ばかりは笑い声でさえも控えがちだ。悪戯仕掛人のメンバーも（まあ主にジエームズとシリウスだけど）何度か大広間で弾けるような悪戯を試みているのを見たが、今までのような盛り上がりには至らなかった。

「どうしてこんな空気になってるんだろうね……」

夕食の後、リリーと話しながら2人で首を傾げ合った。

「グリフィンドールも、こんな感じ?」

「ええ……秋、何か知ってる?」

「そう多くは……」

もう一度顔を見合わせ、うーんと眉を寄せた。とその時、「何やってんだ?」と後ろから肩を叩かれ、振り返る。

「セブルス!」

「秋。リリー。久しぶりだな」

「言うほど久しぶりじゃないけどね。ホグワーツ特急の中でも一緒だったんだし」

とは言え、夏休みの間見なかっただけで、セブルスは背が伸びて、纏う雰囲気も少し大人っぽくなった気がする。

並ぶと元々あった身長差が更に際立つように感じられて、なんていうかもう、ぼくも早く成長期が来て欲しいと切に願っている。

「セブ。最近学校中が妙な雰囲気になってるじゃない。あなたはその理由、知ってる?」

リリーがセブルスに尋ねた。

セブルスはちよつとの間思考するかのよう視線を上に向けると、腕を組んで「そうか。リリーも秋もそう詳しくは知らないんだな」と、納得したように頷く。

「何? ある家族が皆殺されちゃって、その犯人は捕まってないって

いう風には聞いたよ。それにまだ続きがあるの？」

「いや、続きはない。殺された、被害者もまだその家族4人だけだ。……だが、続きのページはなくても、この物語には前のページがあるんだ」

「前の、ページ？」

「この事件の犯人……ヴォルデモート卿だと名乗ってるらしいがな。……彼は過去に数度、同じように人間を殺している。それも、1人2人じゃない……数十人単位で、だ」

セブルスのその言葉を聞いて初めて、この空気の意味が分かった気がした。

背筋がぞくつと冷える。隣でリリーが身震いした。

セブルスは続ける。

「十年前に5人家族を筆頭に、大勢の人を殺した……ここ数年は静かだったんだが、もしかしてあの時の惨劇がもう一度繰り返されるんじゃないかとハラハラしてるんだ、皆」

「でも……どうしてその、ヴォルデモート卿？ が犯人だって分かるの？ その、十年前の事件と今は、別の人が犯人かもしれないじゃない」

リリーが恐る恐るといった風に疑問を呈した。ゆるりとセブルスは首を振ると、目を細める。

「ヴォルデモート卿は、現場にとあるマークを残すらしい。その作り方は、一般の魔法使いには分からない特殊なものらしいんだ。だから、同一人物の犯行だと分かる」

「その……そのマークって何なの？ セブルス」

何かに急ぎたてられるように、ぼくはそうセブルスに尋ねていた。

セブルスはぼくの目を覗き込むようにして見、そして小さな声で言った。

『闇の印』と呼ばれているものだ……それが、犠牲になった家の真上に掲げられている、と聞いている」



三人目の犠牲者（と言っても、正確には三人目と四人目なのだが。ハッフルパフのジャステインと、グリフィンドル寮のゴースト、ほとんど首無しニックだ）が石にされてというもの、学校中がもうパニック状態、針でつついたら大恐慌が起こりそうなくらいの恐怖感に包まれていた。

二人同時に石にされたということから、集団で固まっていることが必ずしも安全ではないということ、またゴーストすらも石にしてしまう未知への相手に対するえも知れぬ恐怖が、特にマグルの両親を持つ生徒達を中心に広まっていったようだった。

ハリーとは先日渡した魔法の紙で、時々情報交換を行っている。三人目の犠牲者の現場に居合わせたこと、それからダンブルドア校長の部屋に行ったこと。ダンブルドアはハリーを疑っていないようで、それはとても何よりな情報だった。

「しかし……」

不穏だ、と思う。

幣原秋の方と同じような雰囲気を、こちらもち始めてきた。

こちらの方が、誰々が殺された、とまではいかないから大分いいのかもしれない。だが幣原の世界よりも身近な人達が被害に遭っている分、皆の恐怖度はこちらの方が上だ。

「……………」

スリザリンの継承者。

石にされた人間（＋猫、ゴースト）。

開かれた秘密の部屋。

スリザリンの継承者のみが開けることの出来る部屋。

スリザリンの継承者が、ホグワーツに相応しくない生徒を追放出来るように作った部屋。

そこには、スリザリンの怪物が封じられているのだという。

スリザリンの継承者が、ホグワーツに相応しくないと思う生徒——つまり、マグル生まれの生徒。

その通り、今まで襲われた生徒は二人とも、マグル出身の生徒だっ

た。

しかし、秘密の部屋は伝説であり、千年経った今でもまだ見つかっていない——

「……手がかりが足りない気がするな……」

決定的なピースがまだ見当たらない。パズルに例えるなら、まだ四隅のピースが見当たらない状態だ。外枠がぼんやりしていたら、中の絵だって上手く描けっこない。

ハリーがスリザリンの継承者だと疑われている。それだけで、ぼくが動く理由には充分だ。

……まあ、正確に言うと、ぼくも共犯だと疑われているらしいのだけれど……

ハリーの蛇語について——パーセルタングというらしい——のあの件については、一応解決した。解決したというか、ぼくが一方的に全力で謝った。ハリーは一体何のことかさっぱり分からないといった風であたふたしていたが、そんなこと気にせずにはぼくの気の済むまで謝ってきた。ので、その件については一件落着だ。

……そういえば、パーセルタングはスリザリンの証、という話だったな……スリザリンの紋章はヘビだし、スリザリンの創始者、サラザール・スリザリンはパーセルタングだと言われているらしい。

どうしてハリーはパーセルタングなのか。本人に確かめてみたが、本人にはヘビ語を話している自覚はないらしい。ただ前にもヘビと一度話したことがあると言っていたし（まだぼく達が魔法使いだなんて思いもしなかった時の話だ。ダドリーの誕生日の時、皆で動物園に行つて、そこで話したのだという）、誰かから習つたりもしていないらしい。

となると生まれつきのものか、となつて、更にハリー＝スリザリンの継承者説が強まってしまう。どうやらこの方面のアプローチは手詰まりらしい。

じゃあどうしたものか、というところである。

教授に聞きに行くか……？ いや、でもこの前聞いたこと以上に、有意義なことを聞けるとは思わない……

スリザリン出身で、今もなおスリザリン寮の寮監をしてるスネイプ教授でさえ、知っていることは一般に知られていることと変わらないのだ。それ以上に分かる人など――

「……コラ、こんなところを一人で歩いていたら危ないよ。集団行動をするか、寮に帰りなさい――」

背後から掛けられた声に、はっと思い当たった。間違いない、この聞き取りやすい穏やかな声は――

「リイフ！」

「え？ あ……じゃなくて、えつと……アキ君」

うわっ、おっとつと。

「……っ、さん、丁度いいところに」

アリスも高いが、リイフはそれ以上に高い。羨ましいまでの長身に、きつちりと留められた豪華なローブは、しかし洗練された上品さを感じさせる。きつと内閣の制服なのであろう。アリスに似た顔立ちは、しかしアリスが絶対に浮かべることのないような素直な驚きを表現していた。

そうだ。ハリーのことと心配なのだけれど、それと同時にアリスのことも悩みの種だったのだ。

三人目の被害者が出たことで、監視の目も今までより一層強くなっている。その中で夜寮に帰ってこないアリスを誤魔化し続けるのも、そろそろ限界だ。

リイフに、今のアリスの状態を伝えておくべきだろうか？ でも、アリスは嫌がるだろう……絶対に修復されない溝が、二人の間に更に増えるだけな気もする。リイフはアリスのそのような行動は許さないうしろ、アリスはリイフに反発するしで、喧嘩になるのは間違いない。

まあ、ぼく自身は、本当はそう心配していないんだけど……。

折角唯一の家族なのだから、もっと歩み寄って、大切にしてもらいたいと思う。

そう思うのは、ぼくもハリーが唯一の家族だからだろうか。

ハリーしか家族がないから、余計にそう思うのか。

「丁度いいところに？ 何か私に用事でもあるのかな？」

「あ、そうです。えっと、その……今、学校で起こっている事件について、なんですけど」

ひとまずアリスのことは置いておいて、ぼくはホグワーツで現在最もホットだろう話題を上げてみた。

「リーフさん、魔法省の役人の方なんですよね？ 向こうではこの事件、どのように捉えられているんですか？」

ふむ、とリーフは少し考えこむような素振りを見せた。

「そうだね……どのようには、とは表現が難しいんだけど、少なくとも君達が思っているよりも軽くは扱われていないよ。私の役目は、ホグワーツでの実態を収集して、ありのままを上にも報告するものだからね」

「ホグワーツの実態を収集……」

「情報収集、といった方が分かりやすいかな」

「……じゃあ、リーフさん。あなたは、この事件の犯人は、一体誰だと思えますか？」

リーフはふと黙り込んだ。切り込みすぎたか、とぼくは少し反省する。

「……アキ・ポッター君。君はどう思う？」

と、逆に問い返された。思いも寄らぬ振りに少々戸惑いながらも、何とか頭の中を整理してまとめてみる。

「そうですね……少なくとも、生徒の仕業だと思っています」

「ほう……？ どうしてかい？」

リーフはぼくの言葉に、少なからず興味を惹かれたようだった。といっても、そんなに大きな裏付けがあるわけではないのだ。

「消去法ですよ……ホグワーツにいる先生方やその他諸々、ゴーストだとかは、まず理由がありません。どうして今この時期に、スリザリンの継承者が現れたのか。その理由を説明するには薄いんです。いままでホグワーツにいたのなら、どうしても早くからマグル生まれを襲っていなかったのか。スリザリンの創始者は、マグル生まれの魔法使いは魔法教育を受けさせる価値がない、って言ったんですよね

？ それならば、マグル生まれの人たちは、もっと早くから襲われているのが道理……マグル生まれを入学させないためには、『マグル生まれはホグワーツに入ると襲われる』という噂を流布させるのが一番だから」

「だから、生徒だと？」

「ええ……ホグワーツは外部からの進入を防ぐ強い魔法が掛けられているんですよね？ なら、外部犯が紛れ込んでは考えにくい。すると残るのは生徒、ということになる。そうすると、その生徒はやっぱりスリザリンの継承者ということだろうな……今年になって活動を開始した、ということは、その生徒は今まで、自分がスリザリンの継承者だということ知らなかったんじゃないのか？ 秘密の部屋の開け方とかは親とかから教わった可能性もある……この校舎にはやっぱり秘密の部屋は存在していて、でもそれは中々見つけにくい場所で……いや、見つけても限られた人しか、自分しか開けることは出来ないようにしておけば、皆が目につくところでも構わないのか……ダンブルドアでも開けなくて、でも継承者にだけは開けることが出来る……鍵？ でも鍵穴なんてあつたらそれこそ誰かに見つかつちやうだろうし……」

ぼくの眩きを、リイフは微笑みながら静かに聞いていたようだった。ふと我に返り、「あ、その、ぼくの妄想……ですけど」とあたふたと付け加える。

「いや、いい線いってると思うよ。私も犯人は生徒だと思っし、秘密の部屋もあると思ってる。……じゃあ今日は一つ、ヒント感覚で新しい事実を教えてあげよう」

「え？」

リイフを見上げた。リイフは回りを見渡して、誰もいないことを確かめてから、ぼくの顔に顔を近付け、小声でそつと囁く。

「秘密の部屋はね、50年前に一度、ある人物の手によって開けられたんだ」

「え……？」

「そう、開かれた。その際に一人、女子生徒が犠牲になったんだ。その

際、一人の生徒が犯人として挙げられた。そして、その生徒を犯人だと指摘した生徒は、ホグワーツ特別功労賞を授与された」

「っ、その、犯人って!？」

リーフの口から零れた名前は、にわかには信じられないものだった。

「……ルビウス・ハグリッドだ」

「……え？ まさか!」

ぶんぶん頭を振る。

そんな、ちよつとおつちよちよいだけれど気がよくて、ぼくやハリーのことを親身に面倒見てくれるハグリッドが、そんなことするはずがない。と、ぼくを安心させるように、リーフは「でも、それは冤罪だったんだ」と頷いた。

「じゃあ、結局当時の犯人は分からず仕舞いだったってことですか……」

「いや、そういう訳でもないんだよ」

リーフの言葉がどうも要領が掴めなくて、きよとんと首を傾げる。「犯人は分かったんだ。いや、後から分からされた、というのかな……証拠はないけれど、でも、絶対に彼しかない、という人物が、後から現れたんだ」

「ど……どういう意味?」

リーフは、今度こそ——意を決したように、ぼくの耳元へ口を近づけると、言った。

「例のあの人——彼こそが、ハグリッドを糾弾してホグワーツ特別功労賞を貰った少年だよ」

ぞくつ、と、背筋が冷えた。

例のあの人——ヴォルデモート。

ぼくとハリーの両親を殺し、自分に逆らうものは誰でも殺し、マグルを心の底から憎んでいた彼。

ハリーを殺そうとして、そして、殺せなかった人。

去年、ぼくは彼に出会っている。

「……アキ。君は賢い子だ」

リイフが、ぼくの両肩に手を置いた。ぼくの目を覗き込んで、言い聞かせるように言葉を発する。

「この情報は君に託そう。もしかしたら……君は、真相を暴けるかもしれない」

「……………、ぼく、は」

「ただ、よく知っていて欲しい。……この事件は、君らが考えている以上に、奥が深く、そして危険なんだ。私がどうして君にこの話をしたか分かるかい？ 君なら、彼に辿り着いてしまうかと思ったからさ。君には論理的に物事を考える力も、周囲の状況からの確に判断出来る能力も持ち合わせている。遅かれ早かれ、彼には辿り着いただろう。だったら、ここで教えておこうと思っただけ。生半可な気持ちでこの件に関わるのは、危険だと」

「……………」

しん、とした静けさが、辺りを包み込む。先に目を逸らしたのは、リイフの方だった。

「……………リイフ、さん……………」

「……………いや、すまないね。言い過ぎたようだ。……君は、私のかつての友人によく似ているから……………とても頭がよく回る子だね、魔法がとっても上手だった。そのせいで、自らが望まない不幸に巻き込まれる子だったから……………」

それは、幣原秋のことだろうか。

ぼくの知らない幣原のことだろうか。

幣原秋。誰よりも身近で、そして誰よりも遠い人。

君のことを自分のように感じる時もあれば、ものすごく遠い人のように感じる時もある。

そう、今のように。

「あの、リイフさん、幣原は——」

幣原秋について詳しく聞こうとした瞬間、誰かが階段を昇ってくる足音が聞こえた。思わず黙り込んで、ぼくとリイフの二人で階段を注視する。

やがて階段を昇ってきた人物は、最初ぼくたちに気付かなかつたよ

うだ。物思いに耽るように俯いていた。ぼくたちが気付いた数秒後、すなわち、彼の姿がはつきりと見えてから、彼はぼくたちに気がついた。

彼——アリス・フェイスナーは、ぼくたちの姿をその目に捉えると、一瞬で表情を変え、すぐに身を翻して階段を駆け下りる。しかしこちらに気付くまでにタイムラグがあった。その時間差を有効活用して、ぼくはアリスがこちらに気付くよりも先に駆け出していた。

「アリスっ！」

ちらりとこちらを振り返り、思った以上に距離が近いのを確認した後、アリスはペースを上げると、階段を数段飛ばしで駆け下りる。踊り場の曲がりを利用して、ぼくはアリスの捕獲を試みた。

「どうして父親を避ける、自分の親から逃げるっ！ アリス、君はっ——」

伸ばした指先が、アリスのローブのフードに触れた。しかしその指に力を込めようとした矢先。

「……アキ、もういいよ」

指と指の隙間から、アリスのローブがすつと抜けていった。アリスはぼくと、それから自身の父親を目視してから、階段を最後まで駆け下りると、廊下を曲がって姿を消す。

トン、と、ぼくは踊り場に着地した。指に微かに残る感触を見つめた後、振り返ると、先程の位置から一步も動いていないリイフを見上げる。

「どうして……？」

愕然とした怒りが湧いてきた。

奥歯を噛み締めると、ぼくはリイフを見つめたまま叫ぶ。

「どうしてっ、諦めるんだよっ!!」

——リイフ。君は、皆から忌まれていた幣原秋《ぼく》にも、普通に仲良くしてくれたよね。

人と接するのが怖くて、一人ぼっちは嫌なのに一人になろうとしていたぼくに、普通に接してくれた。

気にかけて助けてくれて、友人扱いしてくれた。ぼくを皆の輪の中

に引つ張り込んでくれた。

そんな君がどうして、実の子供を追いかけるのを諦めるの？

そんなの、まるで――

「そこで諦めたら、それこそ父親失格だろ!？」

リイフに近付くと、左拳を握り、リイフの胸をどんと叩いた。

「……アキ君。私は――」

『どうせ父親失格だから』？ この前もそう言ってたよね。『ダメな父親だ』って。でも、ぼくにはそれ、ただの言い訳のように聞こえるよ」

君が笑いかけてくれる、それだけで、世界が明るくなった。

君が話しかけてくれる、それだけで、寮が格段に居心地がよくなった。

君は、幣原秋の恩人なんだ。

「君はただ、アリスとちゃんと向き合っていないだけだ!」

リイフは、少しはつとした表情を浮かべた。しかしすぐさま、声を荒げたぼくを気にかけるような大人な表情に変わる。

「アキ君。私はね、あいつに憎まれて恨まれて当然なんだ、当然のことをしたと思っっている。あいつに分かつてもらえなくても構わない。私のせいであいつの母親は死んでしまったし、家族は滅茶苦茶になっってしまった。私が壊してしまっただ。あいつに責められて当然で――」

「憎まれて恨まれて責められて、で君は、それに対してはつきりとした謝罪をしたの？ 理由を説明したの？ ただ『悪かった、ごめん』だけじゃ、誰も納得しないんだよ」

ぎゅつとリイフのローブの裾を掴んだ。

「いい加減にしろよ。いつまで『フィスナー家』に囚われてるつもりだよ。今となつちやたつた一人の家族なんだろう？ 家族って、家系より仕事より何よりも大事にしなきゃいけないもんなんじゃないのかよ。ぼくの知る『リイフ・フィスナー』は、そんなくだらしないもののために、大事なものを犠牲にする人じゃなかったはずだ」

リイフ。ぼくは、君に感謝しているんだ。

日の当たるところを歩かせてくれて、ありがとう。

かつて君に助けてもらったばくは——今、君を助けたい。

「まだ取り返せる。失った信頼は、まだ取り戻せる。全然遅くないんだよ、リイフ。アリスは——ぼくの親友は、きちんと話せばちゃんと分かってくれる奴だ。君より少々アクは強いけれど、ちよつと捻くれるけれど、でも頭がよくて、ぼくみたいな奴とずっと一緒にいられる、すっごい優しい奴だよ」

君達家族は、まだ、やり直せるんだ。

どうか、気付いて、分かって。

「君の息子はそういう奴だよ！ 分からないなら何度でも言ってるっ！ あいつは喧嘩っ早くて血の気が多くて、ある一定値超えたらもうすぐに手とか足とか出ちゃってて、だから結構皆不良だつて言つてビビったりしてんだけど、でも授業態度はかなり真面目で、魔法史の授業以外寝てる姿なんて一回も見たことないし、字とかびっくりするくらい奇麗だし、レポートの提出期限とかも一回も遅れたことなくて、ぼくなんて何度忘れてて助けられたことか分かんないよ！ 何だかんだですっごい面倒見よくて、一年の最初の方とか皆怖がつてたんだけど、今はそんなアリスの姿を皆知ってるから、あいつのことを仲間だと思ってるんだよ！ あと、目つきすげえ悪いけどすっごい格好いいし！ 本気で羨ましいって思ってるよぼくは！ なんだ、フィスナー家は美形の血でも流れてんの!? あんなに着崩してダサくないなんて相当だからね！ 背も高いし、特に二年に入ってからというものの何だかアリスが気になってるとかいう女の子も中々絶えなくて困ってたぞぞ！ 女の子はちよつとした不良に弱いつてことがホントよく分かるよ！ それに比べてぼくは女顔だし背なんて全然高くないし、気になってる女の子には好きな子いることが発覚しちゃうし、踏んだり蹴ったりだよ！ コンプレックス刺激されるよ！ それでもあいつの傍にいるのはなんでか、君に分かる!?!」

「アリスのことが好きだからだよ!!」

「あいつがどうしようもなくいい奴だから、すっげえいい奴だから、傍に
にいるんだよ！ 傍にいたいって思えるんだよ！ 君の息子はそれ
だけいい奴なんだよ！ それを、分かってもらえなくて構わないとか
憎まれて当然だとか、そんな訳あるか！ あいつはそんなに器ちっ
ちやくねえよ！ そんなのを向かい合ってない言い訳なんかにする
な!! きちんと話し合ってもいない癖に、勝手にアリスの気持ちを決
め付けんな!!」

ドン、と、もう一撃、リイフの右胸を殴る。

しかし、ぼく程度の力に、リイフは一步下がった。

「……向き合い方がね、もう、分からないんだ」

弱気な声だった。

「どうやってアリスと接すればいいのか、僕にはさっぱり分からない
んだよ」

秋、と呟かれた言葉は小さすぎて、本当にリイフがそう呟いたのか
はつきりしなかった。

「大丈夫だよ、リイフ」

ぼくは優しく微笑んだ。

「ぼくに任せて」

第21話 喧嘩

「アリス、見つけた」

ホグワーツに無数に存在する小部屋、その中でも奥まった、ひよつとすると見落としてしまうような場所、その扉を開いて、ぼくは微笑んだ。

「久しぶりだね」

「……………」

ぼくがドアを開けると同時に、寝転がっていたベッドから一瞬で身体を起こしたアリスは、ぼくに掛ける言葉を探していたようだが、どうやら丁度いい言葉が見当たらなかったようだった。

顔を少し歪めると、ため息をついて髪を乱暴にぐしゃぐしゃと掻く。

そして手に持っていた本をバンと閉じると、ぼくを睨みつけた。

「何の用だ」

「まあまあ、そう怒りなさんなっつて」

本棚が部屋の壁を覆い尽くすように設置してあり、それに入りきれなくなった本が辺りにバラバラと散らばっている。それに、シングルベッドが一つ。小さいながらも窓まである。

「それにしても、よくこんな優良物件見つけたじゃん。ちよつと狭いけどさ、ぼくもここに住んじゃおうかなー」

「ふざけんな。……………はっ」

アリスは凄みのある笑みを浮かべた。本を奥に押しやると、座ったまま顎を上げ、ぼくを見上げる。

「俺を連れ戻しに来たのか？」

「うん、それもあるんだけどね」

「じゃあ、何の用だ」

目を細め、ぼくはアリスを見下ろした。

両手を頭の後ろで組むと、意地悪く笑みを浮かべる。

「ケンカしに来たんだ」

アリスがその言葉の意味を理解するより早く、ぼくは動いていた。

驚いた時の目の見開き方は、リイフとそっくりだ。表情の作り方が違うのは性格のせいだろうが、顔のパーツの一つ一つは非常に似通っている。

目前に迫っていたぼくの右拳を、寸前の所でアリスは左手で受け止めた。

そのまま手首を掴まれるが、それを利用して両足でアリスの腹に蹴りを入れる。

ぼくの軽い、それでも全体重を乗せた蹴りに、さすがにアリスもぼくの手首を掴む力が緩んだ。

すかさず振りほどくと同時に、逆に奴の手首を掴み返す。

手足のリーチがアリスと全然違うぼくにとつて、遠距離戦は非常に不利だ。逆にこの距離まで近付けば、そうそう暴れることは出来ないだろう。

空いた左手で拳を作り、もう一度あいつの無駄に整った鼻筋目掛けて殴りかかる。

しかしぼくの左拳は、アリスがふっと首を横に倒して避けたため、あえなく宙を切った。

そこを逃すような奴ではない、ぼくのネクタイごとぼくの胸倉を、ぼくが掴んでいる方の手で掴むと、身体をぐっと反転させる。

全身が空中に浮いていたぼくの身体は、力づくでアリスに引っ張られ、ベッドで背中をしこたま打った。

「……………」

このベッド、寮のに比べるまでもなくクソ固え！ 木箱にシートと毛布掛けただけなんじゃないの？

さすが空き部屋クオリティ、などと考えるまでもなく、アリスは杖を抜こうとしていたぼくの左手を押さえていた。

右手もそのまま押さえつけられ、ぼくはふうと身体から力を抜く。杖を自ら手放した。

床に杖の転がる軽い音が聞こえる。

お見事、としか言いようがない。

ここままで占めて15秒か、いくらなんでもぼくシヨボいだろ。

「……どういふつもりだ、アキ」

鋭い眼光で、アリスはぼくを睨みつけた。

対照的にぼくは余裕げに笑ってみせる。

「だから、ケンカだよケンカ。ぼくでも、アリスに蹴りくらいは食らわせることが出来るんだね」

「馬鹿野郎、お前なんか本気出す奴がどこにいんだ。……そして、お前もな」

アリスの目線が、ぼくから床に転がった杖へと動いた。

「俺を沈めたかったんなら、最初から魔法を使えばいい。お前に魔法を使われたら、俺は勝てないよ。でも、お前はそうしなかった。……何故だ？」

「だから、最初から言ってるだろ。君とケンカをしに来たんだって。……ま、このザマだけどね」

ぼくは弱い。魔法が使えなかったら、ただの非力なガキそのものだ。

「どうしてここが分かった？」

「そういうことをぼくに訊くの？」

意地悪く言うのと、アリスはため息をついた。それもそうだと思ったのかもしれない。

「何の用だ」

「こうでもしないと、君はぼくの言葉を聞いてくれないと思ってね。そろそろ追いかけてこも疲れたんだ。この辺りで捕まっとくのも一つの手じゃないかな」

しかし、他人にマウントポジションというか、こういう位置に陣取られると、相当落ち着かないな……。

両手拘束されてる状態だし、尚更。

「まあ、この状態でも簡単な魔法くらいは掛けられるんだけどね」

呟いて、指を鳴らす。と同時に、開きっぱなしのドアがボタンと音を立てて閉まった。

アリスはちらりとそちらに目を遣ったが、ぼくを黙って見下ろした。

「さて、アリス。舞台は整った。役者は二人だけだけど、この狭い部屋には丁度いい。話し合いを、始めようか」

「……勝手に舞台作って、勝手に役者に仕立てあげてんじやねえよ……」

「舞台を降りないの？」

「降りないんじゃない、降りれないんだ。ドア閉めたのはお前の魔法だろ」

「ドアは確かに閉めたけど、カギを掛けたとは誰も言っていないよ。案外、ドアノブを捻ったら普通に開くのかも」

「お前の戯言には惑わされねえ」

「つれないなあ」

小さく笑った。

と、アリスは眉を寄せ、呟く。

「親父のことだろ」

「……………」

「無駄だ。俺と親父が、この先どうこうなることは有り得ない。俺達家族は、もう終わってしまってたんだ、3年前に」

「……君の事情は、ある程度知ってるつもりだ」

静かに答えた。つ、と、アリスは息を呑む。

この体勢だと、アリスの表情は丸見えだ。

わずかに眉を顰めた感じも、奥歯を噛み締めたことも、全部分かる。

「……ああ、マルフォイとお嬢様か」

「正解。無断で聞いて悪かったとは、思ってるよ」

「嘘つけ。……まあ、それなら話は早いな。てか、なら、どうしてそれで、話を聞いた時点で諦めないんだよ、馬鹿な奴」

「馬鹿な奴とは、失礼だなあ」

「俺はあいつを許さない。母さんを殺したのは、あいつだよ。その思いが俺の中から消えることも、薄まることもない」

「……そうだね。君の父親も、同じようなことを言っていた。君に憎まれて恨まれて責められて当然だ、って……でもさ、アリス」

ごめんね、アリス。

君は触れられたくないところだろうけれど。

あえてそこを、ぼくは訊こう。

君がずっと目を逸らし続けてきたことを、ぼくは、君に突きつける。

「君は本当は、君の父親を憎んだり恨んだりはしてないだろう？」

それを聞いたアリスは、瞬時に凄まじい形相をした。

眉を寄せ歯を食いしばって、今自分は何を耳にしたのか分からない、そんな表情で。

ぼくの両腕を拘束している手に、ぎゅっと力が入ったのが分かった。

息遣い。呼吸が荒くなったのも分かる。

手を出す寸前、キレる間際、そんなギリギリの表情をしていながらも、アリスはぼくに殴りかかつてはこなかった。

そりやそうだ。ぼくを殴ったら、全てを認めてしまう。

ぼくの言葉を、肯定することになるのだから。

(……殴られる覚悟は、あつただのだけれど)

犠牲なしに、何かを得ることなんて出来ない。

それが他人のものだったりしたら、尚更。

「確かに三年前は憎んでいただろう、恨んでいただろう。責めていただろう。でも、今は違うんじゃないの？ 三年前よりも格段に理解力も判断力もついた今なら——理解してるんだろ？ お父さんの行動の意味くらい」

そう。全てはそこに帰着する。

三年前は納得出来なかったことが、今では受け入れることが出来る、そのの違い。

リイフはそこに気が付いてないだけだ。

子供は——成長するのだ。

それも、大人の想像以上に早く、急激に。

「……違う」

「……じゃあ、どうして君は、そんな顔をしているの？」

「違う」

「君は、逃げてるだけじゃないのか？ お父さんと向き合うことを避

けてるだけじゃないのか」

「違うー！」

ぼくの左手首から手を放すと、そのままアリスは右手でベッドを殴りつけた。

シーツの下の固い木箱らしきものが、ミシツと音を立てて軋む。

……いや、軋んだだけか？ シーツで分からないけど、多分破損してそう。

それくらい勢いはあった。

「……何様のつもりだよ、お前。人の家庭事情引つ搔き回して、楽しいか。あ？」

低い声で、アリスは凄んだ。

今までに見たことがないような最強に凶悪な面で、ぼくを睨む。

「お前のそういうところ、前からうざってえって思ってたんだよ。そんなお節介必要ねえんだってっつてんだろ。他人の問題に口出してんじゃねえよ」

「……お節介、そうだろうね」

「自覚があんなら放つといってくれよ。大体、何で俺にそう絡んでくるんだ。お前は友達だって沢山いる、つるむ相手だっていくらでもいるだろ。俺と一緒にいる必要なんてどこにもない」

言葉で、全身で。

アリスはぼくを拒絶する。

それはきつと、本心から出た言葉なのだろう。

ぼくの胸倉を、アリスはぐつと掴み上げた。

顔を近付け、凄みを効かせた瞳で睨みつける。

「これ以上、俺に関わるな」

アリスはぼくから手を離すと、すつと身体を引いた。しかし逃さず、ぼくはアリスのネクタイをむんずと掴む。

あいつはしっかりとネクタイを締めることがないので、ずっと前から掴みやすそうだなと思っていただのだ。

「ぼくの話はまだ終わってない」

「俺は話すことなんてない」

「正直ぼくも、何から話そうかと思案してるところなんだけどね。あーもうやだやだ、筋金入りのコミュ障ぼっちに『どうしてお前は俺と仲良くしてくれるんだ』と尋ねられた気分だよ。あながち間違ってもないよね」

「……なんだと……?」

「そんなの決まってる。君と一緒にいる理由なんて、一つしかない」
真っ直ぐにぼくは、アリスを見つめる。

「君と一緒にいると、楽しい。それだけだ」

碧の瞳。アリスの瞳の形は、リイフとよく似ている。

「それ以外に理由なんてあると思う? 君と一緒にだと楽しいから、ぼくは君といたいんだ。面白い奴だと思ったから、ぼくは君と友達になつたんだ。それ以外に特別なことは何も無い」

瞳の色は、リイフの方が若干明るめだ。

僅かな違いすらも見分けられるほど、ぼくはこいつの近くにいた。

「……アリス」

ああ、駄目だ。

どうしても、この感情は出てきてしまうのか。

友情などという美しい言葉で飾り立ててはみたけれども、この感情は、決して消えないのか。

「ぼくは……君が羨ましい」

アリスとリイフの問題を放っておけないのも。

わざわざ首を突っ込んでしまうのも。

認めたくはないけれど、どうしてもこの気持ちは表に出てきてしまう。

「親がいる君が、羨ましい」

アリスの家族は、一般的に見れば特殊な部類で、崩壊寸前のものだけれど。

そんなものでも、ぼくは『家族』が羨ましい。

アリスだけじゃない。

夏休みに泊まったロンの家だって、ハーマイオニーの家だってドラコの家だって――

どんな家族にも、ぼくは羨みの気持ちを消すことは出来ない。ずつと、ハリーと二人きりだった。

物心ついてずつと、ハリーと二人だった。

伯父さんや伯母さんは、家族らしいことなど何一つしてくれなかったし——何年彼らと一緒にいても、彼らがぼくらを家族と認めてくれる日は来ないのだと思う。

だからこそ、ぼくはアリスが羨ましい。

壊れてしまいそうな家族だからこそ——絆が断ち切れそうな親子だからこそ。

羨ましいと思ひ、勿体ないと思う。

「自分の家族が終わってるとっていうなら——父親なんかいらなんていうなら——ぼくにちようだいよ」

ぼくがいくら望んでも手に入らないものを——勝手に捨てる奴は、見てられない。

「——親がいない子どもの気持ちなんか、知らない癖に」

アリスの幼少期を、ドラコとアクアから聞いた。

それは、ぼくの理想そのもので。

強く、羨ましいと思った。

ぼくも、親に愛されて育ちたかった。

君のように。

幣原秋のように。

優しい父親、朗らかな母親、親子三人で暮らす我が家が、なんと暖かくのどかだったことか。

その暖かさを、ぼくは知っている。

知っているからこそ、余計に焦がれる。

満たされた心を知っているから、満たされたいと思う。

ハリーには言えない、ぼくの心の暗い部分。

「ぼくはただ……見てられないだけなんだ。君たちが……ぼくがもうどう頑張っても手に入らないものを、簡単に捨ててしまおうとするのが……それだけなんだよ」

お節介だ、うざったい、他人の問題に口出しするな。

全部正解だ。言葉もない。全て甘んじて受け入れよう。
でも、いくら自分が余計なことをしているという自覚があっても、
動かなきゃならない時がある。

……いや、違う。動かずにはいられない時もある、だ。

「アリス……どうか、君のお父さんのことを許してあげて。憎んでも
恨んでもない代わりに、君はお父さんを許してない。どうか、決着を
つけて欲しい」

最後は、ただのお願いだった。

「ちゃんと話し合って……ちゃんと、家族に戻って欲しい」

お願い、アリス。

そう言うと、アリスは考え込むように目を閉じた。

やがて大きなため息と共に目を開けると、ぼくに「ネクタイから
手え離せ」と、気のない声を掛ける。

ぼくが手を離すと、アリスは起き上がった。

ぐしやぐしやと乱暴に金髪を掻き混ぜるとベッドに腰掛け、頭を抱
え再び大きなため息をつく。

「俺はもう、この家族は終わりだと思っていた」

やがてぼつりと、アリスは口を開いた。

「母さんが死んで、俺は家を出た。そのくだりはマルフォイやアクア
から聞いてると思う」

「……うん、知ってるよ」

寝転がったまま、ぼくは呟く。

アリスはぼくに背を向けたまま続けた。

「家を出て、もう親父の元に戻る気はなかった。適当に走ってたら、地
下街に出てな……そこである人に出会ったんだ」

アリスは左手で耳に——いや、正確には左耳のピアスに——触れ
た。

背を向けてるから、アリスの表情はさっぱり読めない。

「奇特な人でな。俺みたいになクソガキを引っ切り無しに気にしてく
る、ウザい奴だった。そう、お前みたいな感じだ」

「ぼくみたいなウザい奴って……かなりシヨックなんですけど」

「わざわざ頼まれてもねえのに人の事情に首突っ込みたがる、お節介野郎だ。まあ、お前と一緒だよな」

「ちよつと、アリス、わざと言ってるでしょ。殴るよ?」

「そんな生活にも大分慣れてな……落ち着いてきた時、あの人に言われたんだ」

アリスはどうやらぼくの台詞を無視することに決めたらしい。

勝手にネタ放り出しやがって、なんて奴だ。

『今は許せねえだろうけど、いつか親父さんを許してやれ』、『憎んでねえなら、家に帰れ』――

『家がある奴は羨ましい』とも言われたな」

「……………」

「正直……怒ってねえかと言われりや嘘になる。あいつのあの時の行動は、そりや確かに納得いかねえ。でも――許してやるくらいなら、出来る」

「……ありがとう、アリス」

何でお前が礼を言うんだ、と言って――

アリス・フィスナーは、久しぶりに、ぼくに笑顔を向けた。

「帰るか、寮に」

第22話 家族

到底信じられないかもしれないが、俺、アリス・フェイスナーは、幼い頃はどうしようもないくらい父親っ子であった。

父の後をどこまでも着いていくのは勿論、父のやっている事は何でも真似したかった。

あの頃の俺にとつて、父親というものは憧れの象徴でもあった。

大きく、明るく、優しい父。仕事が忙しいため殆ど帰ってくることはなかったが、それでも、一週間に一度ほど帰ってくる父親が、幼い頃の俺は、大好きだった。

でも、成長するに従って、様々な事柄の道理を理解するにつれて、今まで見えなかったものが見えてくる。

どうして、母は外に出ないのだろうか？

始めは、そんな違和感だった。

父の仕事関連でパーティーに誘われるときも、当然のように母は家に居残った。そのことがあまりにも日常過ぎて、俺はそこで出会った同年代の二人、マルフォイとアクアに聞かれるまで、そのことを不審に思いもしなかった。

『アリス、君のおかあさまはどちらにいらっしゃるんだい？』

母親もこの場に『いる』ことを前提としてされた質問に、俺はしばらく、言葉を失った。

母は家から出ないんだ。そんな俺の言葉を聞いてからのアクアの台詞が……きつと本人は、もう覚えていないだろう。だが俺は、あまりにもぴったりすぎて、年を経た今でも、その言葉が当てはまり過ぎて、忘れることなんて出来ないくらいになってしまった。

アクアはあの時言ったのだ。

『……じゃあ、アリスのおかあさまは、とらわれのおひめさまみたいね』

成長し、魔法という概念も、存在も、はつきり分かるようになった頃、気付いた。

母は俺達とは違うのだ、と。

何も出来ない、囚われのお姫様。

お姫様は、王子様に助け出されるのが普通だろ？

じゃあ、王子様がお姫様を閉じ込めていた場合、誰がお姫様を助け出してあげるんだ？

父がお姫様として、一生添い遂げると決めた相手は。

穢れ無き血、魔法族のみの家系として、その希少さを誇りに生きてきた家柄の直系の末裔が選んだ人は。

あろうことか、マグルの女性だった。



フィスナー家。

かつて純血として、魔法界の中でも誉れ高き位置にいた、純血一族の家柄の一つ。

その歴史は古く、代々直系の男児は、ホグワーツ魔法魔術学校を卒業すると、魔法省内閣のポストの一つ、王室警護の任を与えられることとなっている。また魔法界の『中立不可侵』として、表と裏とを機敏に見、立ち振る舞うことを求められるのだ。

自分たちの役割が、今の英国魔法界にとってどれだけ重要なものであるのか。

そのことに驕ることなく、任に相応しい人物になれ——父は幼い頃から、俺にそう強いてきた。

魔法使いだからといって、杖に、魔法だけに頼るな。

剣術、体術、格闘術。礼儀、礼節、作法。

誰よりも正しい人であれ。

そう言い聞かせられて育ってきた。

その教えに盲目的に、従順に従ってきた。

——母さんが倒れる、あの日までは。

元々、虚弱な人だったのだと言う。

俺を産むことも、母には大仕事だった。

ましてや、魔法族の中の魔法族、純血を誇りとする一族に嫁ぐなど

元々母には、荷の重い仕事だったのだ。

食事に不自由することはなかった。洋服だつて何だつて、欲しいのは何もかも手に入る、そんな生活だった。

魔法界でも恵まれた家族。古くから途絶えることなく続いていた、純血の血筋。高貴なる家系。

それは、母の存在を隠蔽することによって成り立っていたのだと、初めて理解した。

今まで気付かなかった、親戚中からの母への嫌がらせ。悪意のある、悪意しかない行為。

病は気から、という言葉がある。その言葉通り、母は身体より先に、精神を病んでしまった。

いつも通り笑顔の母に見送られて学校へ行つて——帰ってきた時、母はもう病院に運び込まれた後だった。

母は、俺とは会いたくないと言つたらしく、俺は母と面会することすら許されなかった。

それは今思えば、心を病んだ母親の姿を息子に見られたくない、息子には元気な姿だけを見せたいという母の思いからだつたのだろうが……幼い頃の俺はその辺りの機微に気付かず、随分とショックを受けた記憶がある。

広い屋敷に、俺と使用人だけ。

父が自宅に帰ってくることは、なかった。

それから3ヶ月後、母との面会は許可されるようになったが……それは母の容態が良くなったからではなく、むしろ逆で、いつ急変してもおかしくない状態だから、というのが理由だった。

もともと病弱だった母の身体を、どんな病が蝕んでいたのか、医者
が一度説明してくれたようだが、俺は覚えていない。

覚えているのは、綺麗だった母の変わり果てた姿と、痩せ細った枯れ木のような腕。全身をコードで繋がれながら虚ろな瞳で虚空を眺める母に、涙すら出なかった。

俺の目にも、母は永くないのが分かった。だから、面会が許可されたのだということも、一瞬で理解した。

俺は毎日、母の病室に通った。たまにだが、アクアやマルフォイ（この時にはまだドラコとファーストネームで呼んでいたか）も付いてくることもあった。もちろん、2人とも家族には内緒でだ。

あいつらの親は、マグルである俺の母とあいつらが接触するのを、まるで母が病気でも持っているかのように極端に嫌がる。だから俺も、アクアとマルフォイには付いて来るなど何度も念を押すのだが、あいつらは黙って付いてきて、そして黙って俺の母の手なり顔なりに触れて帰る。それが、あいつらなりの気遣いだったのだろう。

きつと、何度も怒られたことだろう。特にマルフォイの家はマグルに厳しい、マグルと混ざったとはいえフィスナー家直系の俺と関わるのはともかく、マグルである母との関わりはきつと許されなかったはずだ。

でも、2人とも何も言わなかったし、俺も何も聞かなかった。それから半年後の冬、母の容態が急変したと病院から連絡が入った。

俺はすぐさま父に連絡した。父親の姿はもうかれこれ一年近く見ていなかったが、でも自分の奥さんが危険な状態なのだ、絶対に駆けつけるだろうと思った。そう思っていた。

しかし待っても待ってもふくろう便は返ってこなかった。父も帰ってこなかった。

最期の最後に、母は俺を見て微笑んでくれた。最期に、母は自分の心を取り戻した。

俺の名前を、そして最期に父の名前を呼んで、母は静かにこの世を去った。

俺が9歳の時、母は33歳の若さで旅立った。



葬儀は身内だけのこじんまりとした式として執り行われた。

葬儀は驚くほど手間が掛かる。その忙しさの中、父はおよそ一年ぶりに俺の前に姿を見せた。

母には親類が誰もいなかったらしい。よって式は父の身内で行うこととなった。

マグルである母の葬儀に参列する人は殆どいなかったが、僅かながらいた人たちも皆一様に、死者を悼む争議の場であるにも関わらず、出るのは母への気遣いではなく、母への誹謗中傷が主だった。

死んでもまだ、母はここまで言われなければいけないのか。

魔法が使えることがそんなに偉いのか？ 魔法を使えないことが、そんなにも悪いことなのか？

母が一体何をした。お前らに一体何をした。

純血であることが、死者を冒瀆する以上に大切なことなのか？

腹が立つてそいつらに言い返そうとした時、父が見計らったように俺を止めた。

「アリス。やめなさい」

その声に、その言葉に——限界まで堪えていた全てのものが、決壊したのだと思う。

気付けば俺は、葬儀の最中だというのにも関わらず、父に掴みかかっていた。

何を叫んだかは、はっきり覚えていない。ただ一言、これだけは覚えてる。

『母さんが死んだのはお前のせいだっ！』

何故覚えているかと言えば、この言葉を叫んだ瞬間、父の表情が変わったからだ。

感情が抜け落ちたような、とでも表現するのだろうか。今まで見たことない表情に、思わず俺も力が抜ける。

その直後、俺は親戚の手によって父から引き剥がされた。

その手を振りきって全力で走り——気が付いたら、見知らぬ土地にいた。



そこからの話は、ここでは必要ないだろう。この後俺は、まあなんだ、とある人に出会い、そして別れの際にピアスを片方譲り受けることになる。

俺が父と母のことを整理する間というか、俺が精神的に落ち着くまで傍にいてくれたあの人の人に関して、語る必要はないように感じる。ただ、今思えば——微妙に父さんに似てる人だった気もするな、なんて。

そう思うのは、今の俺があ頃よりかは色んなことを受け入れられるようになったからだろう。

いや、父さんに似てたけれど、あれは、あのお節介はむしろ——あ、いや、何でもない。

とりあえず、あの人が支えてくれたおかげで、今の俺はここにいます。それだけ分かっていけば、十分だろう。

ドアが開く、音がした。
そちらは振り返らない。

背を向けたまま、応対する。

「……アリス」

張り詰めたように、俺の名前を呼ぶ。この人でも緊張しているのか、と思うと、何だか笑い出したくなった。

「……お前が生まれる前に、お前の母さんと一緒に名前を決めたんだ。子供の名前は、アリスにしようって。」

……母さんが好きだった絵本の主人公の名前だよ。彼女のように、可愛らしさ、優しき、素直さ、おとなしき、礼儀正しき、そして好奇心に富んだ子になって欲しいと願いを込めた。

……それから僕は出張で家を離れることになって、結局お前が生まれるのにも付き添えなかったんだけど……あいつはお前に『アリス』と名付けて、僕の帰りを待っていてくれた。

僕は、アリスという名は生まれてくる子が女の子だったら付けようと思ってた名前だったんだけどね……僕と話し合った名前にそうこだわらなくても良かったのに、なんて言うのと、あいつは笑って言うっ

たんだ。

『だってライフ、女の子の場合はアリスにしようね、なんて言わなかったじゃない』ってね。

……君のお母さんは、そんな、自由な人だった」

「……そんな自由な人を、アンタはフィスナー家という鳥籠に閉じ込めた」

「否定はね、出来ないよ」

「……………」

「閉じ込めることになるって分かっていても、それでも好きだった。会えないと分かっているって、それでも好きだったんだ、母さんのことが」

「……………」

「お前もいつか、この気持ち分かる時が来ると思う」

「……さあ、どうだろうな」

目をゆっくりと瞑った。息を吐き、両手で顔を覆う。

「俺は、アンタが許せない」

「……………」

「母さんを死なせたのはアンタだ。俺のその気持ちは、これから先もずっと変わらない」

「……アリス」

「でもな。……本当はきつと、最初から気付いてたんだよな、俺」

振り返った。父親の姿を目に捉える。

最後に記憶に残っていたのは、母の葬儀のあの時の姿。それから3年の歳月は、人の外見もそこそこ変えてしまいうらしい。

父親の姿すらも、今までまともに見ていなかったのか。

「母さんは最後に、自分の心を取り戻した。最期に、母さんは言ったんだ……『子供の時からずっと、大好きだったよ』って、アンタに……」

どんなに傷ついても、どんなに傷つけられても、最期に母が言った言葉は、父への愛の告白だった。

その事實は、変わらない。

父は黙って、両手で顔を覆った。力なく床に膝をつく。何かを堪えるようなため息が、肩の震えと共に漏れた。

「……だからさ」

俺は、アンタを許そう。

だから、アンタも。

もう一度家族になる努力を、してくれ。

「母さんの話、もっと聞かせてよ。……父さん」

第23話 トム・リドルの日記

「リイフ、起きてる?」

毛布を頭まですっぽり被って丸まっているリイフに、ぼくは声をかけた。

「……秋?」

「うん、ぼくだよ」

にっこり微笑む。やがてもぞもぞと毛布から身体を覗かせたリイフは、ひどくバツの悪そうな顔でキョロキョロとあたりを見渡した。

「大丈夫だよ、誰もいない」

「先輩とか……どう言ってた? 僕のせいで、試合負けちゃって……」
「誰もリイフのこと、責めたりなんてしないよ」

本当? と尋ねるリイフの瞳が、不安げに揺れていた。しっかりと目を見て「本当だよ」と言っただけ。

「リイフはリイフなりに、一生懸命頑張ってる。頑張ってる人を笑ったり責めたりする人なんて、誰もいないよ」

「……っでも、君だって分かってるんだろ。僕が全然、普段の調子を出せてないこと」

肩を震わせながら、リイフが呟いた。ぼくは静かに首を傾げ「……そうだね、うん。新学期が始まってから、ずっとだね」と言い、リイフの言葉を待つ。

「……理由はね、分かっているんだ」

そう言っただけ、リイフはぽつぽつと話し始めた。

両親からずっと掛けられ続けている期待のこと。

それを裏切られなくて、家でも気を緩めることが出来ないこと。

魔法族のみの家系であるという『名門』という重圧に、重苦しさを感じていること。

「ずっと、ずっと……父と母は僕に言い続けていた。『文武両道であれ』と……昔はね、でも頑張れた。僕が頑張って結果を出せば、皆が喜んでくれるから。でもね……最近、疲れちゃって。上手く身体に力が入らなくなっちゃったんだ」

特に、今この雰囲気だから、尚更……ね。

そう付け足したリイフは、しかし笑ってみせた。

「……ごめんね、秋。急にこんな話されても、困るだけだったよね。……ごめんね、ねえ、そろそろ夕食の時間だよ。ご飯食べに行こっか」

「あ……リイフ」

ぼくからそくさと離れようとしたリイフの手を、ぼくは咄嗟に掴んだ。ぼくよりも一回りは大きな、でもまだ幼い手。

この手で、この身体で、君は一体どんな大きなものを支えようとしているんだろう？

そう考えると、胸につつかえていた言葉はするりと零れ落ちた。

「君のおかげで、ぼくはここにいるんだ」

両手で、リイフの冷たい手を握り締める。

「君がいなかったら、きつとぼくはこうして寮の人と仲良くなることも出来なかった。ぼくはずつと1人で……もう絶対誰も傷つけたくなくて、きつと誰とも友達になれないままだった……ありがとう、リイフ」

そう、こうして人の手を握ることも、人に触れられることも、ずっと怖いままだった。

自分の持つてる力が、怖くて怖くて。自分に余る力が、恐ろしくて恐ろしくて。

そんなぼくを優しく誘ってくれたのは、リイフ、君なんだよ。

上手く言葉にならない気持ちを、両手に込める。

きつと伝わってくれると、信じて。

「……秋。好きな子はいるかい？」

「え？」

目を細め微笑むリイフに、首を傾げる。「いないけど……どうして？」と尋ねた。

「僕はね、小さい頃からずっと好きな子がいるんだ。家が近くて、まあその子の家には遊びに行ったことはないんだけど……公園でね、よく見かけてた。あまり走り回ったりしないので、1人でブランコを小さく揺らしてるような子なんだ。すごく細くて白くて、ぎゅつと抱きしめ

たら壊れちゃうんじゃないかと思うくらい、儂げな女の子なんだけどね……すつごく好きなんだ、ずっと」

でもね、とリイフは目を伏せた。

「ぼくがその子を好きだという想いは、誰からも許されないんだ。多分この想いが報われても、きつと僕にはあの子を幸せにすることは出来ない。ねえ秋……この恋はさ、諦めた方がいいのかな？」

少し考えて、ぼくはリイフの頭をぽんと撫でた。驚いたように、リイフがぼくを見上げる。ぼくは立ったまま、リイフはベッドに座り込んでるからこそ為せる技なんだよね。それにしてもリイフの頭を撫でるのは初めてだ。

「リイフが幸せになる方を選べばいいんだよ、そういうのは」

ぼくには難しすぎて、その辺りのことはよく分らないけれど。でも、これだけは分かるんだ。

君は、幸せになるべき人だって。

君の笑顔を見るだけで、ぼくは幸せな気分になれるんだから。

「……ありがとう、秋」

ほらね。

ぼくは今、心の底から幸せなんだ。



アリスが父親と仲直り、というか、まあ何とかなったのかな、という間に、ハリー達も何やらごたごたしていたらしい。

ちよくちよく様子を見に行っていたポリジューズ薬が仕上がり、ハリーとロンがスリザリン寮に忍び込みに行ったり、ハーマイオニーに猫耳や尻尾が生えたり（いや、こうして文字で見ると笑えるけど、実際全然笑い事じゃなかったんだからね！）マートルが何やら日記みたいなものをぶつけられて泣き喚いて廊下を水浸しにしてファイルチが怒ったりと、色々あった。

そうだ、忘れちゃならないのがクリスマスだ。アクアからプレゼントが来たのだ。もう一度言おう、アクアからプレゼントが来たのだ！

もうそれから一週間、天にも昇るかのような気持ちだった。一応ぼくからも通販で取り寄せたプレスレットをプレゼントしたのだが、まさかアクアからももらえるとは思っていなかった。

『面白かったので、アキにも読んで欲しいと思ったの』と書かれた手紙に（一生保存版だ）一冊の小説（内容は、「え、アクアこんな本読むの!?! うっそ!」と思わせてくるような痛快アクションコメディだった。どこまでギャップを狙う気なんだどこまでぼくを萌えさせれば気が済むんだああ!!）だったので、とりあえず本は通販で同じものを取り寄せて、アクアから貰った本は観賞用とせずと綺麗なままで取っておこうと思っている。

アリスに「キモい」とかなりあつさりばつさり切り捨てられたが、ぼくは負けない。

そんなぼくにはバレンタインなんてものは結構あつかりと過ぎていって（風の噂で、ハリーが大変だったというのは聞いた。詳しくは教えてもらえなかったが。……何があつたんだろう）、ロックハートが大広間を悪趣味にもコツテコテのバレンタイン色に染めてスネイプ教授やフリットウィック先生が軽く巻き添えを食っていたり、なんか誰々がプレゼントもらったーだの誰々が付き合うことになったーだのそういう甘つたるい話を聞いたりだのしたその日の夜、ハリーから例の羊皮紙で連絡が来た。

既にぼくはベッドの中でもう半ば夢見心地にうとうととしていたのだけれど、ハリーに呼ばれたとなつちや寝ておけない。

眠い目を擦りながらも机に向かい、羽根ペンとインクを出すと「何?。」と書いた。

『夜遅くにごめん、寝てた?』

「うん、寝てた。どうしたの?。」

『起こしてごめんね。ちょっと前、日記を拾ったって話をしたの、覚えてる?。』

「ああ、マートルのいる三階の女子トイレでしょ? 覚えてるよ」

『その日記で今日、発見があつたんだ』

「発見？」

『あの日記は、君が作ったこの羊皮紙とおんなじような造りになっている。日記の中の『記憶』と、話が出るんだ』

思わず、羽根ペンを持つ手が止まった。

そんなことが出来るのか？ と、しばし考え込む。

『アキ？』

「ああ、ごめん。続けて」

その技術は、こんな羊皮紙のものなんかと比じゃないくらい、とても高度なものだ。あの日記に、そんな魔力が秘められていた？ でも、何のために……。

『この日記の持ち主だった彼の名前は、トム・リドル。……そこで、僕は聞いたんだ、秘密の部屋の真相を……』

そこでハリーは、リドルが見せてくれた風景のことを語ってくれた。

秘密の部屋に閉じ込められていたと思われる大きなクモを、ハグリッドがこつそり外に出していたこと……。

「……でも、ハグリッドは犯人じゃないよ。秘密の部屋なんて開けてない、それは濡れ衣だ」

先日リイフに言われた言葉を、思い出した。

ハグリッドはスリザリンの後継者じゃない、本当の犯人は例のあの……『ヴォルデモート卿』なのだと教えてくれた。

このことはハリーには言うのが憚られて、全然言っていない。

『うん、僕もハグリッドが犯人な訳ないと思ってる。だから、アキに客観的に話を聞きたいんだ』

ハリーの言葉が真剣みを帯びてきたことに気付いて、ぼくはハリーの言葉の続きをじっと待った。

『アキ。明日君に、この日記の一部分を渡したいんだ。君の目で、君自身で、リドルの言葉を聞いて欲しい。そして、判断して欲しい。僕だけじゃ判断しきれないから、アキと一緒に考えたい』



次の日、ハリーからもらった日記帳の数ページを手にしたまま、ぼくはどうしたものかと迷っていた。

今日空いた時間いっぱい使って図書館でトム・リドルの日記の仕組みを調べていたのだが、これといった収穫は得られなかった。

迷った末に、ぼくは羽根ペンを手に取った。インクをつけ、ちよつと考えてから「初めまして、リドル」と書き込む。

『初めまして。あなたはどなたですか？』

すると、すぐに返事が来た。なるほど、ハリーがぼくの羊皮紙に似ているというのもよく分かる。ちよつと違うけれども似たような文字の浮かび上がり方だ。

でもぼくの羊皮紙と違うのは、受取人がいるかいないかの違い。これは受取人というよりもむしろ、羊皮紙自体が返事をしているような……

否。

羊皮紙に誰かが乗り移っているような。

『どうされました？』

ぼくからの返事がなかなか来ないことを不審に思ったらしく、リドルが急かすように尋ねてきた。慌てて羽根ペンをインク壺に浸し、書き出す。

「あ……ぼくは」

そこで、何故かすつと手が、意図しない風に動いた。

「ぼくは幣原秋です」

そう書き終わると同時に、インクは紙に吸い込まれるように消えていく。そんな自分に驚愕した。

だってそうだろう、名前を名乗ろうとしたら、意図せずに違う人物を名乗ってしまったのだから。

確かに幣原はぼくにとつて一番身近な存在だけど、名前を間違えたことなんて今まで一回もないのに……。

「あつ、いや、ぼくは……」

『幣原!? 幣原つて、じゃあもしかして、親戚に幣原直とかいたりするの!?!』

走り書きのような、本人の興奮を表すような文字に、名前を訂正しようとしていた手が止まる。

これは……。

「……うん、父親だよ。知ってるの?」

代わりにそう書くと、返事はすぐに返ってきた。

丁寧に整っていて、本人の几帳面そうな性格を如実に現している筆跡は、僅かに面影を残す程度までに乱れて、でもそれがまた、不思議と気持ち伝わってくる一つの要因となっていた。

嬉しそうに走り書きされた文字には。

『うん。僕の、友達なんだ』

そんな言葉が、刻まれていた。

第24話 転機

ホグワーツに通う三年生以上の生徒は、魔法使いだけが暮らす村、ホグズミードへの外出が許可される。

今まで学校の中だけでしか過ごすことが出来なかったのが、年に数回だけでも外を見て回れるようになるのだ。テンションが上がりずにはられない。

三年生はホグズミードに行ける日時が掲示されてからというもの、皆がそわそわと落ち着きがない。ぼくだってずっと楽しみだった。

始めて行ったホグズミードは、期待していたよりもずっと面白いものだった。魔法使いしかいないというのはダイアゴン横丁と同じではないかと思うだろう、だが違うのだ。

生活感があるかないかの違い、みたいなものだろうか。それとも、ぼくら学生が遊ぶに適した店があるかないかの違いかもしれない。

ホッグズ・ヘッドにハニーデュークス、三本の箒など、学生向けのお店も多数並んでいる。ぼくとセブルスとリリーは、三本の箒で、一番人気なバタービールという飲み物で乾杯した後（想像していたよりもとても美味しかった！ そりや一番人気だよ、と納得させてくれる味）、ゾンコの悪戯専門店にて、まあ順当というか、ジェームズやシリウス、リーマス、ピーターの悪戯仕掛人4人組と出会ったのだった。「秋達じゃないか！ 君たちも悪戯に興味があつて来たのかい？ それなら早く言ってくれたらよかつたのに、水臭いなあ。君たちにオススメの悪戯は枚挙に暇がないよ。優等生だと思われている子がいきなり繰り出す悪戯に、尻餅をつかない先生はいないからね」

「あ、いや、ぼくらは別に悪戯を仕掛けたいから来た訳じゃないんだよ！ 誤解しないでほしいな！」

しかし、ゾンコの悪戯専門店は面白かった。時間を忘れる、といった表現がぴったり当てはまる、そのくらい熱中してさまざまな工夫が凝らされた悪戯品に見入っていた。

総勢七人に膨れ上がった集団で、ゾンコの悪戯商品を見て回り、この仕組みはどのような魔法が使われているのか、あの魔法だろうかいや

こつちだろうとあーでもないこーでもないという意見を皆で交わし合うのは、とても楽しかったし、やっぱり皆頭いいなあと改めて感じた。

ジェームズもシリウスもセブルスもリリーも、学年トップ10の中に常にいるし、リーマスだって上位らしい。ピーターは成績自体は平均らしいが、たまに飛び出る発言には、独特のセンスが感じられた。「……秋、ちよつといいか?」

ぼくが空中に浮かぶガラス細工に見入っていた時、セブルスが声を潜めて近付いてきた。目を離すと、小さく首を傾げてセブルスを見る。

「どうしたの?」

「ちよつとした講演が近くであるんだが……行かないか?」

「講演? 何の?」

「僕にもよく分からないんだが、昨日スリザリン寮でそんな情報が回ってきたんだ。レイブンクローでは、そんな話は聞いてない?」

「聞いて……はないと思うよ。分からないけど」

情報網は少ないんだけど、でもそういうのがあれば、きつと真つ先にリイフが教えてくれるはずだ。

仲良くなり始めておよそ2年、ぼくはリイフにかなりの信頼を置いている。

「じゃあ、皆で行こうよ。リリーやジェームズなんかも誘ってさ」

「いや……それは……」

歯切れが悪いセブルスに「どうしたの?」ともう一度尋ねると、セブルスは「……グリフィンドールの生徒は、呼んじやダメらしい」と、気になることを呟いた。

「何それ? どういうこと?」

「だから、僕にもよく分からないんだ。なのに、先輩には絶対に来るようにと言われるし……」

「……そう、なんだ。じゃあ……」

ぼくも行くのかな、と言おうとした瞬間に、目の前のガラス細工が突如、粉々に砕け散った。

ガシャンツと大きな音を立てテーブルに落ちたガラス細工に、しばしの間呆然とした後、ぼくじやないよとばかりにセブルスに向かってブンブンと頭を振った。

「あー……本当か？」

「失礼な！」

しかし、このガラス細工はどうしようか、割っちゃったんなら弁償しなきゃなあと途方に暮れていると、先ほどの大きな音に、なんだなんだとばかりにジェームズやシリウスを筆頭としたグリフィンドール集団が引き寄せられてきた。それから、少し遅れて店員さんも。

ガラス細工を割ってしまったことを伝えると、店員さんは笑顔で「ああ、これはこういう仕掛けなんですよ」と教えてくれた。

「しばらくしたら独りでにさっきの形に戻りますから」

そう教えてくれた店員さんがいなくなった後、興味津々とばかりに悪戯仕掛人とリリーがそれらの仕組みについてじっくり観察しながら、これはこう思うのだといった意見を上げ出した。一人がそう言えば全員が何らかの仮説を提示する。白熱した議論の中、ゆつくりとガラス細工が元に戻っていく様は中々壮観だった。

ぼくらから少し距離を取っていたセブルスが、静かにぼくに手を振った後に気配なく離れていった。あ、と思わず眩くも、誰もぼくの言葉なんか聞いちやいない。

「なあ秋！ 秋はどう思う!？」

とそこで、シリウスがぼくの肩に腕を回して尋ねてきた。ぼくはセブルスから目を逸らすと、ちよつとため息をついて、気を取り直して自分の考えをたどたどしくも喋り始めた。

気付けば、セブルスのさっきの話など全部吹き飛ぶくらい、ぼくらは議論に熱中した。

多分ここが、一番最初のターニングポイントだったのだろう。

ぼくらの関係は、この日を境に、変わっていく。



「ぼくにはよく分からなかったよ、ハリー。この日記がどうい
ものか……君に、ハグリッドが捕まった現場を見せた、その理由も
……ごめんね、ハリー」

ほとんど全ての学生が待ち侘びていた、イースター休暇の日がやっ
てきた。

ほとんど、という表現を選んだのは、ハーマイオニーのような勉強
熱心で毎日授業があることをむしろ望んでいるかのような、まあ勤勉
で真面目に真面目を重ねたような生徒中にはいるからだ。

でもほとんどの学生にとつて、学校が休みだということほど嬉しい
ものはそうそうない。特にホグワーツは全寮制の学校だから、普通つ
ていたマグルの学校のように、大雨だとか酷い天気で休みになるよう
なことはありえない。

だからこそぼくら学生は、数少ない休暇を楽しみに日々を過ごして
いるのである。

そんなイースターに、ぼくはハリーのいるグリフィンドールの談話
室へと遊びに来ていた。アリスは朝から早々に「ちよつと出掛けてく
る」と言つて寮を出たので、暇だったのだ。

暇な時はハリーと遊ぶに限る。ハリーに話したいこともあつたこ
とだしね。

余談だけど、多分アリスは、父親であるライフと一緒に何処かへ出
掛けたのだろうと思う。

休暇中であつても、ホグワーツの学生が学生だけで外へでることは
許されない。そしたら、まあ父親同伴だろうなというのは当然の流れ
だ。親子水入らずを邪魔するなんて野暮なことほしくない。

「ああ、別に大丈夫だよ。アキにも見てもらいたかっただけだから。
リドルと話せた？」

「うん、まあ……」

曖昧に言葉を濁した。思わず本名である『アキ・ポッター』ではな
く、何故か『幣原秋』を名乗ってしまいました、そして未だに訂正出
来てないままです……なんて、ハリーには言えっこない。

「ちよつと調べてみたけど、あの日記の秘密は分からないままだったよ。君は、ぼくが作った羊皮紙と、リドルの日記が似たようなものだと解釈してみたんだけど、実態は全然違うんだ。ぼくのなんかよりも、きつとこれは遥かに高度な魔術だよ……信じられないくらいに高級な魔法だ。」

日記の中のリドルは五年生だったみたいだけど、少なくとも、一介の五年生が作り出せる代物じゃない……ハーマイオニー、いや、彼女以上……この日記を作ったトム・リドルは、ぼく達を知る誰よりも、頭がいいよ。例えるなら……ダンブルドアくらい、かな」

ダンブルドアほどの頭脳の持ち主で。

ダンブルドアほどの魔力の持ち主。

でも、そんな人なら、何か功績を立てていてもおかしくない……でも、ハリーに聞いた話じゃ、ハーマイオニーもトム・リドルなんて人は知らない、ときた。これは一体、どういう意味を持つのだろうか？

「まあ、小難しいことはいいいよ、今は。それよりもき、アキは来年、何の科目を選ぶんだい？　せつかくアキが来てくれたんだし、これも話しておきたかったんだ。この選択は、寮関係なしに学年で一括だろ？　そしたら闇の魔術に関する防衛術の授業以外でも、アキに会えるじゃないか」

思考の海に沈みかけていたぼくを救い上げるかのように、ハリーがぼくにそう声を掛けた。それではつと我に返る。

本当に、言葉を掛けるタイミングが絶妙だ、ぼくの兄貴は。長年一緒にいるんだもんな。

「そうだね。ぼくも、ハリーとおんなじ授業がいいなあ。何取る？」
今現在、グリフィンボールとレイブンクローが合同な授業は、闇の魔術に関する防衛術の授業だけだ。

基本的に、グリフィンボールはスリザリント、レイブンクローはハッフルパフと合同の授業が多い。でも、週に2コマしか会えないのは、いくら何でも寂しすぎる。

「僕、魔法薬学をやめたいな」

「そりゃ、ムリ。これまでの科目は全部続くんだ。そうじゃなきゃ、僕

は『闇の魔術に関する防衛術』を捨てるよ」

ハリーの隣に座って新しい科目のリストに目を通しながら、ロンが憂鬱げに呟いた。なるほど、ロックハートか、と得心する。

しかしロンの言葉が聞き捨てならないお方が一人この場にいることを、ロンは忘れていた。ハーマイオニーだ。

「だってとつても重要な科目じゃないの！」

なんてことを言うのだとばかりに目を丸くさせるハーマイオニーに、ロンが気だるげに言い返した。

「ロックハートの教え方じゃ、そうは言えないな。彼からはなんにも学んでないよ。ピクシー小妖精を暴れさせること以外はね」

そう言えば確かに、三年生からは選択科目が増えるのだった。幣原は何を取ったつけか。確か、セブルスとリリーと三人で考えて取ったんだつたよな。

休みの日に三人で図書館で、あーでもないこーでもないこの授業は云々あの授業は云々言いながら……。

「ハーマイオニー、君は何を選ぶんだい？」

「私？ 私はもちろん、全部の科目を履修するわ！」

ハーマイオニーの言葉に、ぼくら三人は揃って目を丸くした。さすが秀才ハーマイオニー、考えていることがぼくら一般人とは違う。

そしてそれだけたくさんの科目を取っても一個たりとも落とすどころか、全てにおいてとても優秀な成績を修めるであろうことが既に分かる。すっごいなあ。

結局ぼくは、ハリーとロンと三人で、同じ科目を履修することにした。

パーシーに将来のことを考えて選べとかやいのやいの言われたけど、将来のビジョンなんて全然思い浮かばない。

とりあえず、ハリーとロンがいれば、どんな授業も楽しくなるに違いない。

アリスが帰ってきたら、アリスも同じ授業を取ろうと勧めてみよう。

そう思った。

第25話 思い出すキツカケ

朝から、なんだかいつもと空気が違うというのは感じていた。

暗いというわけでも、重いというわけでもないのだが、何とさえいえばいいのだろうか……『不穏』な空気、とでも表現すればいいのだろうか。誰しもがそれを、敏感に感じ取っているようだった。友人らと声を潜めて話したり、不安げに辺りを見回したりしている。

リイフを含む何人かはこの空気の理由が分かっているかのように、僅かに憂鬱げな表情をしていた。

ふくろう便が届くのは、基本的に朝食の最中だ。ぼくは特に何も届くことはないのだけれど（日本から海を渡ってここまで来るのは、流石にふくろうも無理だろう）、リイフは日刊預言者新聞を取っているため、毎日ふくろう便が届く。他の子も家から手紙だの荷物だのお菓子だのと、何かしら送ってもらっているようだ。

この日も、ふくろう便がやって来た。
不穏な雰囲気に含まれていた大広間が、一瞬だけ普段のざわめきを取り戻す。

しかしそんな日常を掻き消す声が、どっと上がった。

「ヴォルデモート卿、万歳!!」

スリザリンのテーブルだった。皆が一斉に立ち上がり、何やら嬉しげに喚きあっている。

誰もが一斉に話しているため、何を言っているのかぼくには聞き取れない。

何が起こったのか分からないスリザリン以外の寮生は、これに一気にざわついた。

ぼくは、隣で小さくため息をついたリイフに、「ねえ、今日のスリザリン、どうしたの?」と尋ねてみる。

「僕も詳しくは知らないんだけどね……昨日、ホグズミードでスリザリンの会合があったのは知ってるかい?」

「会合……」

セブルスが言っていた、あのことか?

「そこで何やら、ヴォルデモートを名乗る人物が現れたらしいんだ。……ヴォルデモート、知ってる？」

「ヴォルデモート……うん、知ってるよ」

夏休みの時のダイアゴン横丁の沈んだ空気は、まだ記憶に新しい。

書店で聞いた話だつてちやんと覚えている。

「彼は、スリザリン寮の卒業生なんだ。昨日はだから、何と言ったらしいのかな……演説。そう、演説だ。彼の講演会が行われたんだ。で……信者が生まれた、つてとこかな」

リイフは、彼にしては珍しい、気だるい調子だった。

そんな彼に更に尋ねるのは気が引けたが、リイフ以外にこの出来事について詳しい人物はセブルス以外思い浮かばなかつたので、思い切つて尋ねてみることにした。

「……でも、その、ヴォルデモート？　つて人は、何というか、えつと……人を殺してるんだよね？　最近の暗い雰囲気も、そのせいなんですよ？　なのに何で、その……スリザリンの人たちは、そんな奴の信者なんかになつちやつたんだろ？」

「殺したなんて明確な証拠はどこにもないよ。魔法省も無能な訳じゃない、でも、たくさんの魔法の専門家を呼んで調べてみても、結局何の手がかり一つ得られていない状況だ」

「じゃあ、どうして……」

『』どうして、皆がヴォルデモートの仕業だと知っているのか』

ぼくの言葉を、リイフが先回りした。

ぼくは口を噤んで、リイフの言葉を待つ。

「簡単だ。名乗り出たからだ、そいつが」

「……え？」

「ああ、名乗り出たと言っても、魔法省に出頭したとかそういう話じゃない。『これこれこういうことをしたのは私、ヴォルデモート卿だ』と、様々な手段を使ってイギリス中にはら撒いている。ダイアゴン横丁にも一度現れて、そんな自作のチラシだかなんだかをばら撒いていったらしいよ。だから、世論も大体は、ヴォルデモートが犯人だということまで一致している」

「でも、それってただ自分で言ってるだけなのかもしれないじゃない？ 愉快犯っていう線だつてあるよ」

「……じゃあ、ヴォルデモートが事件が起きた場所に、何か目印を付けてたとしたら？ 彼にしか作れないような、理屈が分かっていないと魔法式自体が組めないほど難しい魔法を、現場に残していつていたとしたら？」

リーフの言葉に、息を呑んだ。

リーフは難しい表情で、声を潜めて言う。

「ヴォルデモートが殺した家の真上には、濃い霧のようなものが浮かんでいるらしい。そして……それを見た人によると、その霧は、髑髏のような形をしているんだって」

スリザリンのテーブルでの歓声嬌声どんちゃん騒ぎは、まだまだ続いていて。堪えきれず、テーブルに手を着いて勢いよく立ち上がる。リーフが驚いたように小さく声を漏らした。気にせず、スリザリンのテーブルに目を凝らす。

セブルスの姿を、探した。

セブルスは頭がいい奴だ。そんな妙な奴の信者になんてなる訳がない。

ましてやそいつは、人殺しを名乗ってるんだぞ。

そんな奴の配下につくなんて、正気の沙汰とは思えない。

でも、もし、もしかしたら――。

セブルスを探すのは、そう難しくはなかった。立ち上がって盛り上がったいる生徒が多い中、セブルスは座っていたからだ。

セブルスは確かに、立ち上がってはいなかった。

ただ一人、静かに――満足そうに。

この空気が心地良いかのごとく、静かに微笑していた。



グリフィンボール対ハッフルパフのクイディッチの試合がある前日の金曜日のことだった。競技場で毎晩遅くまで練習する兄を、ぼく

は渡り廊下の片隅から眺めるのが日課だった。

だって外は寒いんだもの。いくらハリーが練習してるからって、コートが必要な野外に出ようとは（しかも夜に！）ぼくは思わない。でも、せっかくハリーが頑張っているのだ、弟としてその勇姿を観察しないわけにはいかないだろう。

クイディッチ競技場を上から見ることの出来るこの渡り廊下は、そういう意味でとても最適な場所だった。

ふと、誰かの足音が聞こえた。

この廊下は人通りが少ないため、思わず反射で振り返る。

「ジニーじゃないか！ 久しぶりだね」

ロンの妹、ジニー・ウィーズリーだった。夏休みにロンの家で数日を過ごした以来、会うのはとても久しぶりだ。

確かに、他察の、しかも学年まで違ふとあっちゃあ、そうそうばつたり会うことなんてない。

ジニーは、ぼくの声にはつとしたように、うなだれていた顔を上げた。

暗い渡り廊下の照明マジックだろうか、なんだか顔色が悪そうにも見える。

そう思うと、綺麗な赤い髪の毛も、なんだかかくすんでいるようにも見えてきた。

「……アキ？」

「それ以外の誰かに見えるのかい？」

語尾についた疑問符を茶化して指摘すれば、かすかにジニーは笑ったようだった。

「今時間ある？ ぼくの兄貴のカッコいい姿でも見ていかない？ 隠れバーストスポットとして、ぼくの中では話題の場所なんだけど」

ぼくの前では強気で可愛いジニーも、ハリーの前だと恥ずかしがり屋さんだ。

そのことを踏まえて促すと、微妙にジニーの表情が凍りついた気がした。

「いえ……今、時間がないの。ごめんね、アキ」

「いやいや、気にすることはないよ」

浮かない表情のジニーに、強いて朗らかに答えた。

「じゃあ、引き留めて悪かったね」と言い手を振ると、ジニーは一瞬だけ、迷う素振りを見せた。

「どうかした？」

そう尋ねると、我に返ったように首を振って「何でもない」と答え、「じゃあね」と小さく手を振った。

そして、小走りでぼくの前から離れていってしまふ。

再び一人になったぼくは、ジニーの消えた方向を見ながら、ふと考えた。

あつちには確か、嘆きのマートルがいる女子トイレだったよなあ、と。



『リドルの日記が盗まれたんだ。だからリドルの日記は、今君が持つてる数ページ分しか残ってない。ハーマイオニーには盗難届を出すように言われたけど、50年前にハグリッドが退学処分された、なんて話を蒸し返したくはないんだ。お願い、リドルに何か知らないか、聞いてみて欲しい』

そう羊皮紙に書かれたのは、ジニーを見かけたその晩のことだった。

もう床に就く準備をしていたぼくは、眠い目を擦りながらも机に付き、鍵をかけた引き出しからリドルの日記を取り出すと、羽根ペンにインクをつけ、書き出した。

「こんばんは、リドル」

『こんばんは、秋』

自分でない名前と呼ばれることが、なんだか妙な感じがする。

あの時間違って名乗った名前は、未だに訂正出来ずにいる。実際響きは同じなのだけれど。

前置き無しに、ぼくは本題を切り出した。

「君の日記の本体が盗まれたんだけど、何か知らないかい？」

『へえ、そうなの？ 僕は何も知らないな』

返事は、間髪入れずに返ってきた。

「本当かい？」

『君に嘘つく必要はないだろう？』

「君の日記を盗んだ何者かを、君が庇っている可能性もあるよ」

『そんなことをする義理なんてないよ』

いつも通りの口調で、リドルは冷ややかにそんなことを言っている。

思わず沈黙したぼくに向かって、今度はリドルが『そんなことより』と話題を変えた。

『君について、幣原秋個人について、教えてよ。幣原直の子供である君のことを、もっと知りたいんだ』

リドルは最近、幣原についての話を聞かせてくれとよくせがんでくる。今まではのらりくらりとかわしていたのだけれど、ふと気が向いた。

幣原の父親と友人だと聞かし、その子供のことが気になるのだろう。まあぼくだって確かに、今アリスの子供に会ったらどんな子なのか知りたいもんなあ。

「いいよ。代わりにリドルも、ぼくの父親のこと教えてよ」

『了解だよ。じゃあ僕からね。君のご両親の名前は？』

こうなったら、嘘をつき通そうじゃないか。幸いにして幣原の知識をぼくは持っているのだから。

「幣原直と、アキナ。母の旧姓はエンディーネ」

『本当に？ じゃああの二人の子供なんだね、君は』

「母さんのこと、知ってるの？」

『知ってるも何も、君のお父さんが頑張って君のお母さんにアタックし続ける様を一番間近で見ってきたのは僕なんだよ』

「父さんと母さんはどこの寮出身なの？」

『聞いてないのかい？ 直はハツフルパフ、君のお母さんはグリフィンドルだよ』

「何気に聞きそびれてたんだよ」

『ふうん。じゃあ次は僕からだね。君はどここの寮に所属してるの?』

「レイブンクロー、叡智を重んじる寮だよ。君は?」

『スリザリン。伝統を重んじる寮さ』

リドルの言葉に納得した。

確かに彼にはスリザリンがよく似合う。

その後何周か、お互いに質問を投げ合い、幣原の両親の馴れ初めだとか、どういった経緯で幣原の父親とリドルが仲良くなっていたのかを聞いた後、ぼくが眠気に耐えられなくなりギブアップした。

羽根ペンや羊皮紙を片付けるのもそこそこに、ベッドに倒れこむ。

なかなか楽しくお喋りに興じてしまったけれど、この日記は一体どういうものなのだろう。

ふと浮かんだ疑問を解決することも出来ないまま、ぼくはそのまま眠りへと落ちていった。

第26話 擦れ違い

「セブルス！」

ぼくの声に、セブルスはゆっくりと振り返った。周りにいたスリザリンの友人達に「先に行ってくれ」と促すと、目を瞬かせてぼくを見る。

「どうしたんだ、秋？ そろそろ授業が始まるのは君もだろう？」

「今日の朝のスリザリンの歓声……どういことだよ」

いつになくぼくが真剣な眼差しをしていることに、セブルスは多少なりとも驚いたようだった。

だが、ぼくの左手に握られていた、本日付の日刊預言者新聞を見て、納得したようにああ、と頷く。

「どういこと何も、説明することはそうないとは思うけど」

「どうしてヴォルデモートを賛美するあの中にいられるんだ。どうして彼なんかを……」

「なんか、とは失礼だな。君も講演にすればよかったのに。そうすれば、あの人の素晴らしさを身に染みて感じただろう」

セブルスから出た驚くべき言葉に、思わず絶句した。

「……っ、人が死んでんだぞ?!」

ようやく、それだけを絞り出す。

しかし、セブルスは至って涼しい顔で……興奮するぼくを宥めるかのように、僅かに窺うような表情を滲ませて、ぼくを見返すだけだった。

「君は、何も知らないからそう言うんだよ。やっぱり君も講演に連れていけばよかった。でも僕じゃ、あの方のおっしゃったことを君に上手く説明出来そうにないからな……そうだ、ルシウス先輩に頼もうか。あの人なら大丈夫だ。秋、今日時間はあるかい？ なら……」

「嫌だ。ぼくはそんなもの聞きたくない」

真っ直ぐにセブルスを見た。

どうして分かってくれない？ ぼくが言いたいことは、そういうことじゃないのに。

伝わらない。ぼくの言葉は、セブルスに何一つ伝わっていない。だいぶ慣れてきた英語を、久しぶりに煩わしく感じた。

日本語だったら、きつと伝えられる。ぼくが今、どんな気持ちなのか。どんな思いを、君に対して持っているか。

「どんな大義名分があるうと、ヴォルデモートは人殺しだ。それは全然変わらない。そして、許されるべきことじゃない。マグル殺しは許されないことだ」

セブルスは不満そうに、少し眉を寄せた。何と言う言葉をぼくに掛けたらいいのか、迷っているようだった。

「マグルは、それ以上に魔法使いを……僕達を殺したよ」

「……っ、それは……」

静かに紡がれた言葉に、思わず狼狽える。そういう返答が返ってくることは予想していなかった。

押し黙ったぼくを横目に、セブルスは腕時計をちらりと確認して「もうすぐ授業が始まるからね。秋、君も急いだ方がいいよ」と言った。

「……残念だ。君なら、分かってくれると思ったんだけど」

そう呟いて、セブルスはぼくの隣をすつと通り過ぎた。

その背中に手を伸ばしかけーやがて力無く、手を下ろした。



「アキ、アキ！ おいアキ、行くぞ！ 今日はお前の兄貴が出るクイディッチの日だろ！」

アリスに肩を乱暴に揺さぶられて、ぼくははっと目を覚ました。

ぼんやりした頭でアリスをぽけつと見つめると、痺れを切らしたようにアリスはぼくのクローゼットを勝手に開けると、制服を一揃いまとめてぼくに放り投げた。

咄嗟に手が出ず、顔面含む全身でキャッチする。

勢いが殺せずもう一度毛布の上に倒れこんだぼくに、アリスは飄々と「おお、悪かった」と肩を竦めた。

「つて、痛あ！ ハンガーが鼻に直撃したんだけど!? もっと真心込めて謝れよ！ てかちよつとアリス、ぼくの鼻大丈夫？ ちゃんといてる？ もげてない？ 人前に出ても大丈夫？」

「おー、大丈夫大丈夫」

「せめてこつちを見てから言えよバカ！」

身体に積み重なった制服を横に置いて怒鳴ると、「目は覚めたみてーだな、行くぞ」とアリスはぼくの椅子に腰掛けながら言った。

「今日はお前の兄貴のクイディッチの日だろ」

「ハリー！ そうだった！」

慌てて時計を見ると、試合開始まであと20分を切るところだった。トレーナーを2枚一気に脱ぐと、ジャージのズボンも脱いで、急いで支度を始める。

アリスは小さく欠伸を漏らした後「お前が朝起きてないの、珍しいな」と呟いた。

「ちよつと昨日、夜更かししちゃってね」

「面白い小説でもあったんか？」

「んー、そういう訳じゃないんだけど……」

ワイシャツとセーターを一緒に着込みながらもごもごと答える。と、アリスは何かを手を取った。

「何、この紙」

アリスが手にしているものは、リドルの日記だった。「それが原因なんだよ、実は」と、簡単にリドルの日記についての経緯を説明すると、アリスは眉を寄せて少し嫌な顔をした。

「余計なお世話かもしれないねえけどよ、こういう脳みそがどこにあんのかわかんねえやつには触れないが一番だぜ」

「そう？」

「ああ。マグルの持つてる、箱型の机に置くやつで、でも全世界に繋がってるやつとかあんだろ。気持ち悪くていけない」

「パソコンのこと？ あーゆうのダメなんだ、アリス」

「受け付けねえな。ラジオですら拒否反応出る。一回分解して中身確かめたな」

へえ、意外。アリスがそんな繊細なたまだったなんて。

「でもこれ、50年前の事件について何かを知っているようなんだ。聞き出そうと色々試してるんだけど、中々答えてくれなくてね」

「50年前の事件？ って、あの？」

「そう、秘密の部屋が開かれた事件」

頷くと、アリスは少し興味を惹かれたようだった。

「へえ……」と首を傾げながら、紙を表から裏から検分する。

「この日記の持ち主、誰だったっけ？」

「あれ、言ってなかったっけ」

「聞いたけど忘れたんだよ」

「トム・リドルだよ」

ズボンのベルトを締めながら答えた。靴下を履き終わり、そう言えばアリスからの返事が聞こえないなどと思って顔を上げる。

「……どうしたの、アリス」

「……トム・リドルだって？ 本当か？」

途端、両肩を強く掴まれた。

どうしたんだよ、と軽口を叩こうとし、真面目な瞳に押されて口を噤む。

「……いや、俺の記憶違いかもしれないねえ……最近は何も『あの人』の本名なんて知らねえんだ……一回親父に確かめて、アキに言うのはそれからでいいだろ……」

「……ねえ、何の話？」

ぼくの声に、アリスは口ごもった。しかし「アリス！」と強く促すと、根負けしたように小さく息をついた。

「俺の記憶違いかもしれないねえから、全部が全部信じねえでくれ。なんせそんな書物なんてねえから……小さい時にたまたま聞いた話だ。話半分に聞いてくれよ」

アリスがそう前置きを長々とつけるのは珍しい。

部屋にはぼくらしいかいないらしく、しんと静まり返っている。

それにも関わらず、アリスは、まるで誰かに聞かれてもしたらまずいかにように声を潜めた。

『例のあの人の本名が、確かそれだ』

「……っ、え……」

「違うかもしれないねえ。その日記について、俺は詳しくは聞かない。だからお前も、軽々しく人に喋るな」

アリスに真っ直ぐ見つめられ、ぼくはリーフの言葉を思い出した。

『例のあの人——彼こそが、ハグリッドを糾弾してホグワーツ特別功労賞を貰った少年だよ』

四隅のピースが、やっと今、見つかった。

「……分かった。喋らない。一人で勝手に首突っ込んだりもしない。約束する」

アリスの手に入っていた力が、くつと抜けた。

ぼくはアリスに微笑みかけると、自身の肩からアリスの手を外し、「さあ、クイディッチだ。ぼくの兄貴の勇姿を見に行こう？」と誘う。

「……ああ」

アリスは、ぎこちなくぼくに笑みを返した。

寮を出て、クイディッチ競技場へと続く廊下を歩く道すがら、ぼくはあえて先ほどまでの話とは全く関係のない話をし続けた。

同級生が言っていた面白いセリフ、先生方のくすりと笑える秘密など、普段通りの会話を続ける。

アリスは少し考え込むところがあるから、気を紛らわせないといけない。

アリスを巻き込みたくはなかった。

こいつは何の関係もない、ただの一般人だ。下手なことを喋ったら尚更、アリスに危害が加わる可能性が高くなる。

だって、ぼくの想像が正しければ、この事件の犯人は生徒なのだから——

『まもなく、グリフィンボール対ハッフルパフの試合が始まります。城内にいらっしやる生徒の皆さん、振るってご観戦くださいませ——』

魔法で拡声された、リー・ジョーダンの声が外から聞こえる。

アリスと目配せしあい、ぼくらは足を早めた。

「って、おっ!？」

途端、周りも見ずに角から飛び出してきた子とぶつかりそうになり、慌てて後ろに飛び退いた。

彼女は少しよろめいて、すんとその場に座り込む。

「ご、ごめん！ 大丈夫？」

ぼくの差し出した手を払い、少女は立ち上がった。

燃えるような真っ赤な髪に、ぼくよりも少し高い背丈、グリフィンドールの制服。ジニーだ。

ぼくに気付いていないのか、そのままふらふらとぼくらの横をすり抜け、歩いていってしまう。

「……あの子、ウィーズリー家の……」

「うん、ジニーだ。具合でも悪いのかな？」

ジニーの消えた方を見つつ、アリスと二人呟く。

この前会った時も顔色が悪そうだったし、体調でも崩しているのだろうか。

「アリス、先に行つて。ジニーの様子を見てくる」

「んにゃ、いいよ。俺も行く。お前じや彼女を支えらんねえだろ」

「失礼な。ぼくにだってそのくらいの力はあるさ」

「どうだか」

うつわ、鼻で笑やがった。むかつく。

でも確かに、ぼくよりジニーの方が背が高いのは事実なのだ。悲しいことに。

「きゃああああっ!!」

唐突に、全てを切り裂くような悲鳴が上がった。女子の声だ。

思わず身体が硬直するも、アリスがぼくの手を掴んで悲鳴の聞こえた方へ走り出し、我に返った。引きずられまいと足を懸命に動かす。

悲鳴が聞こえた方向が、アリスには分かっているようだった。迷うことなく一直線に、階段を駆け上がっていく。

やがて——図書館前の廊下で、アリスは足を止めた。

「遅かったか……」

目の前には、少女が二人。ハーマイオニーと、レイブンクローの監

督生、ペネロピー・クリアウオーターだ。

最初は単に彼女らは、その場に立ち竦んでいるのだらうと思った。だけど、違った。

彼女らは立ち竦んでいるのではない。石にされているのだ。

「ダンブルドアを呼んでこようか」

「いや……その必要はないみてえだ」

耳を澄ませながら、アリスは呟いた。

微かに聞こえる足音やざわめきは、徐々にこちらに近付いてくる。

寒気がして、ぼくは壁に背中を預けた。荒い息を漏らしたぼくに、

アリスが心配げに「大丈夫か」と尋ねる。

「大丈夫……ハーマイオニーが犠牲になったことに、ショックが隠し切れないだけだから……」

マグル生まれの子どもが狙われる、この事件。

ハーマイオニーもマグル生まれだということを、忘れていたわけではない。

でも、マグル生まれなんてこの学校にはいっぱいいる。

だから……

まさか巻き込まれるとは、思ってもいなかった。

壁に体重を預けたまま、ずるずると地面に腰を下ろす。

『秘密の部屋はね、50年前に一度、ある人物の手によって開けられたんだ』

リーフの声が、脳裏に蘇った。

『そう、開かれた。その際に一人、女子生徒が犠牲になったんだ』

例のあの人——ヴォルデモート。

彼の本名が、トム・リドル。

ホグワーツ特別功労賞をもらった少年。

秘密の部屋を開いた犯人を探し出したその功績に、ホグワーツ特別功労賞を授与された少年。

トム・リドルの日記の存在。

リドルの日記は、誰かに盗まれたのだとハリーが言っていた。

それは、誰にだ？

グリフィンドール寮には、合言葉がないと入れない。
それらを踏まえて、考えろ。

「もしかして――」

「なのか？」

ぼくの眩きは、こちらに走ってくる大人たちの足音によって掻き消された。

第27話 お茶会

昼休み。

少しだけ早く教室についてしまったため、ぼくはぼんやりと外を眺めていた。

だんだんと冷え込んできたため外は寒いが、こうして窓際にいると陽射しはとても暖かい。

一人日向ぼつこに興じていると、唐突に後ろから肩を叩かれた。

驚いて振り返る。

「ジェームズ！」

「やあ、秋」

笑顔でジェームズは片手を上げた。

「シリウスたちは？ 一緒じゃないんだ」

「ちよつと今日までに図書館に返さなきゃいけない本があつてね。あの3人はまだ中庭にいる頃だろう。ピーターの度胸試しも兼ねて、大王イカの足をくすぐらせるんだって、シリウスが言ってたから」

頑張れ、ピーター。と、内心ぼくは深くピーターに同情する。

ちよつとドジでおちよこちよいで引つ込み思案なピーターを、シリウスはお兄ちゃん気質なのか、必要以上に構いたがる。

たまに「おいおいそれ大丈夫かよ」みたいなこともあるが、まあ2人は楽しそうなのでいいんじゃないかと結論を出している。

ジェームズはぼくの隣に座ると、何の気なしに口を開いた。

「最近、セブルスと話していないようだけど、何かあった？」

いきなりそう尋ねられて、思わず言葉に詰まった。

その振る舞いこそ、雄弁なものはない。

少しの間躊躇った後、ぼくは意を決した。

「……この前、セブルスが別人みたいに見えたんだ」

そしてぼくは、先日の出来事を話し始めた。

ホグズミードでの秘密の講演、スリザリンで上がった歓声、そしてセブルスとの会話——ジェームズは時折顔をしかめるだけで、ぼくの話に黙って聞いていた。

ぼくが話し終わると、ふと目を伏せ、何かを考え込むように髪をぐしゃぐしゃにする。

「彼の噂を、僕は聞いたことがある。僕が入学したての頃にだ。君は聞いたことがあるかい？」

「噂？……ううん、ないよ」

入学したての頃は、周りの噂なんて聞く余裕、どこにもなかった。ただただ毎日を生きるのに精一杯で、他のことに気を向ける余裕なんて、全然なかった。

「入学してすぐ、話題になったんだ。『スリザリンに、闇の魔術に関して上級生よりも詳しい一年が入ってきた』ってね。その一年生が、何を隠そう、セブルスだ」

「……え？」

目を見張った。ジエームズをちらつと見て、そして顔を戻す。

ジエームズは窓の外を見つめながら、言葉が続けた。

「そうか……君は知らなかったんだね」

「……ごめん」

「謝る必要なんてないよ」

ジエームズは朗らかにそう言った。ぼくが謝った意味を、しっかりと分かっているらしかった。

ぼくが思わず謝ったのは、ぼくがセブルスのことについて何も知らないことに、改めて気付かされたからだだった。

察が違うから、なんて言い訳にならない。知り合って三年経つのだ。

相手のことを何も知らないで――

よく今まで臆面もなく、セブルスのことを一番の友達だと思っただもんだ。

そうすると、あの時のセブルスは。

別人のように感じたセブルスも、ぼくが知らなかっただけなのか。知ろうともしなかった、だけなのか。

「そう自分を責めるなよ、秋。君がセブルスについて何も知らないのは、セブルスが意図的に君に対して言っていなかっただけだと思うけ

どな、僕は」

そう、ジエームズは笑って言った。

「……どういう意味？」

「さあ？　でも話したくないから、話さないだけだと僕は思うけどな。彼は、君のことをとつても大事に思っているからー傷付けたくない一心なのかもね」

首を傾げる角度がより深くなったぼくに苦笑して、ジエームズは「はい、頭起こせよ」と手を叩いた。

言われた通り頭を起こして、少しだけ思案する。

「……ならばぼくは、セブルスを信じてみたいと思うよ。これから先も、このまま」

「君がそう言うなら、僕も信じるよ」

そうジエームズはさらりと言うと、にかつと笑ってみせた。
穏やかな、昼下がりのことだった。



ぼくは、醜い大きな石のガーゴイル像の前に立つと、小さく深呼吸をした。そして、一言呟く。

「レモン・キャンディー」

途端、ガーゴイル像に命が宿ったようにガーゴイル像が飛び上がった脇に寄り、背後の壁が音を立てて左右に割れた。

何気に、こうやって訪問するのは初めてだ。

エスカレーターのように動く螺旋階段を見上げながら、合言葉が変わらずこのままであったことに安堵する。

でも変わった時用にと、昨日寮の友人らに魔法界のお菓子の名前を聞きまくったメモは必要なかったようで、そういった意味では少しだけ残念だ。

階段に両足を載せると、階段は動き始めた。

これならダンブルドアのようなお年寄りでも大丈夫だな、いや、ダンブルドアは健脚そうだけでも、とふと思う。

背後で扉が閉まる音が聞こえた。

その音に、もう引き返せないぞ、と表情を引き締める。

一番上で、階段は止まった。

輝きを放つ櫺の扉を、左手を伸ばしてノックする。

すると音もなく扉は開いた。

広くて美しい円形の部屋だった。

不思議な小さな音で溢れている。

歴代の校長先生の写真がずらりと並んでいたが、皆眠っているようだった。

「いつ来てくれるかと、楽しみにしておったよ。アキ・ポッターくん」
穏やかな声のした方向に、目を向けた。

部屋の奥の大きな事務机に座って、ダンブルドアはぼくを見ていた。

その隣には不死鳥の姿。赤と金色の見事な羽根がとても美しい。

「たまには、校長先生とお喋りするのでもいいかと思いましたが」
にこつと笑顔を見せると、ダンブルドアは楽しげに笑った。

ぼくに正面のふつかふかなソファを勧めると、「何を飲むかの？」
と尋ねてくる。

「じゃあ……紅茶で」

ダンブルドアが指を振ると、銀色のティーポットがふわふわと空中に浮いて動き出し始めた。

しばらくそれを見ているのも楽しそうだったのだけれど、ダンブルドアが「さて、アキ。何の話をしたいかの？」とぼくを促したので、視線を外しダンブルドアを見る。

「秘密の部屋と、トム・リドルについて」

ダンブルドアの笑みが、一層深くなった気がした。

手元に、ティーカップに注がれた熱々の紅茶が運ばれてくる。

ダンブルドアがぼくを見ながら、右手のゴブレットを少し掲げた。ぼくも同様に、ティーカップを少しだけ持ち上げ、傾ける。

日が傾き始める、午後6時30分。

二人だけのお茶会が、始まる。



「リドルの日記が存在することを、知っていますか？」

「日記とな？」

「はい。3ヶ月くらい前に、ハリーが捨てられていたのを拾ったそうです。そこに書かれていた名前が、トム・リドル。ぼくもその日記を見せてもらいました」

ダンブルドアは静かに、続きを促してくる。

……まあどうでもいいんだけど、本当は今現在凄まじいまでの厳戒態勢が敷かれていて、午後6時以降の寮からの外出は禁止なんだけれど、ダンブルドア、どうやって抜け出してきたのかとか、規則は守らないとか、そういったこと何一つ言わないんだなあ。すっげえや。「日記は、一見何も書かれていない、真っ白なものだったそうです。でも、その日記に文字を書き込むと、返事が返ってきた。自らをトム・リドルだと名乗る人物からの。彼はハリーに、50年前の事件の時、彼が犯人を捕まえた夜の思い出の中に、ハリーを連れていった」

ダンブルドアはふと、机の上の銀細工に目を惹かれたようだった。そんなダンブルドアを無視して、ぼくは話し続ける。

「その次の日、ハリーから日記について教えてもらいました。ただの紙のようだったけど、本当は全然違う。凄まじいまでの魔力が隠されていることに気がつきました。魔法を解析しようとしても、全然歯が立たない。……日記の中の彼と、少しお喋りもしました。あまりぼくの欲しい情報は喋ってくれなかった、というより、意図的にはぐらかされてしまったのですけどね。ですが先日、ハリーの部屋からその日記が盗み出されたらしいのです。ハリーはその日記の存在を、ぼくとロンとハーマイオニー以外に話してないと言っていました。それら全てを統合して、今からぼくの考えをしゃべります」

ダンブルドアは銀細工に、唐突に興味を失ったようだった。今度はフォークスを突き始める。

「トム・リドルが、スリザリンの後継者。そして、この日記越しに、人

を操って事件を起こしていた。以上が今回の事件の顛末です」

「……もう少し詳しく話してくれんかの？」

やつとのこと口を開いたダンブルドアは、そんな言葉を口にした。「君は言葉が足りないのが唯一の難点じゃな。皆が皆、君の思考についていけないとは限らぬことを、ゆめゆめ忘れぬよう」

「じゃあ、何を語ればいいんです？」

「そうじゃのう、それでは手始めに、秘密の部屋を開けたのはトム・リドルだという考えに至ったことについてから聞かせてもらおうか」

「アリスの父親から聞きました。秘密の部屋を開けた人物はヴォルデモートだと」

リイフは口が軽いのが難点じゃの、とダンブルドアは小さく呟く。

「トム・リドルⅡヴォルデモートの部分も、アリスの父親から確からしさを得ました。彼なら——彼ならきつと、生徒を操って事件を起こさせるくらい、容易なことでしょう」

そう。

幣原秋の世界のように。

一度の講演で生徒を味方につけることの出来る彼なら——そんなこと、余裕だろう。

「左様。彼はその気になれば、いくらでも魅力的になることができた」

ダンブルドアが、何かを思い出すかのように言った。首を傾げるほかに、「じゃあ、逆に君は、何が分かってないか分かるかの？」と聞く。

「……秘密の部屋にいる、スリザリンの怪物の正体と、秘密の部屋の場合。あと、操ったとされる生徒」

「それらの証拠がない限り、君の仮説は未だ仮説の域を出ぬ」

「そうです。ですから今日は、先生とお喋りをしに来たんです」

両手を胸の前で広げた。笑顔で尋ねる。

「この仮説について、いかが思われますか？ 校長先生」

「いつの間に、そんなしたたかな子どもになったんじゃ？ アキ」

「やだなあ、昔っから変わらない、可愛い可愛いアキくんじゃないですか」

二人で腹の奥に一つ抱えながら笑い合う。ふとぼくは笑顔を消し

た。

「リドルの日記は、グリフィンドール寮のハリーの部屋から盗まれたそうです。グリフィンドールに、リドルに操られた生徒がいる可能性は高いと思います」

「誰かの予想は？」

「……ついてません」

ダンブルドアの瞳を見返す。

先に目を逸らしたのは、ダンブルドアの方だった。

「……分かった。グリフィンドールには殊更嚴重な警戒を行おうかの」

「……ありがとうございます」

「と、言いたいところなんじゃが」

ん？ とぼくは「ありがとうございます」を言い終えた表情のまま動きを止めた。

ダンブルドアはひよいつと若々しく肩を竦めると、大きくため息をつく。

「いやー、理事の決定？ とかいうやつでのお、わし、停職になっちゃったんじゃよ。つい昨日のことじゃ。そろそろ荷物をまとめて出ていこうとおったのじゃが、その時に君がやって来たんじゃよ」

「……え？」

「というわけで、悪いがそれはマクゴナガル先生にもう一度話してもらっても構わんかの？ とところでアキ、せっかく長い休暇をもらったのだし。どこか旅行にでも行こうと思うのじゃが、どこがいいと思う？ 個人的には日本の『温泉』というものがすごく気になっているんじゃが……」

そう言いながら、なんとダンブルドアは本当に「別府・湯布院」と表紙にでかかど印刷されている観光マップを見せてきた。

開いた口がふさがらないとはまさにこのことだ。

さつきまでの真面目な雰囲気どこいった。お願い5クヌートあげるから早く帰ってきて。

「……いい、いいと思いますよ。疲労などにもよく効くらしいですし、温泉は」

「そうじゃのう。若返ってくるかの」

ぼくは大きいため息をついた。ふと時計を見ると、そろそろいい時間になっっている。

「お暇します」と言葉を零し、肩を落として出口へと歩いて行つた。

「……あ、そうだ。最後に一つ、聞きたいことがあるんでした」

くるりと振り返る。気負いもなく、あえて自然に、ぼくは呟いた。

「幣原秋の父親、幣原直と、トム・リドルは友人だったそうですね」

「……………そういえば、そうじゃったのう」

「ぼくにはよく分かりませんが……………」

目を閉じて、開いた。肩に入っていた力を、ふと抜く。

薄く微笑んで、ぼくは言った。

「かつての友人を殺すことに、ヴォルデモートは、少しは良心が痛んだことがあるんでしょうかね。それとも、彼にとって友人というのは、殺しても何の差し支えもないような人のことを指すんですかね」

返事は聞かずに、言い逃げる。

背後でドアが、静かに閉まった。

第28話 『名前』

「秋」

図書館で本を探していた時、ぼくはセブルスに久しぶりに声をかけられた。

思わず心臓がどきりと早鐘を打つ。

一瞬声に詰まりかけ「……セブルス」と、彼の名前を呼んだ。

「久しぶりだね。君も図書館へ？」

「ああ。魔法薬学の書物でね、司書の先生に頼んでおいたものが届いたんだ。それを取りに」

そう言つて、セブルスは腕に抱えていたものをちよつとだけ傾け、こちらにタイトルを見せた。

表紙がまだ新しい。聞けば、ほんの最近出版されたばかりの本なのだという。

「この著者の思考は興味深くてね。君も一度、読んでみるといい」

「へえ、じゃあ借りてみようかな」

セブルスがそこまで絶賛するような著者に興味を惹かれた。

セブルスに勧められるまま、数冊本を借りる。

図書館前の廊下に出て、ふと思いついた。

「……そうだ。セブルス、これから時間ある？ 久しぶりに小部屋にでも行つてみない？」

しかし、セブルスの返事は、そう色良くないものだった。

「いや……遠慮しておくよ。今日は寮の先輩に呼ばれているんだ」

「そう……じゃあ、仕方ないね」

ばいばい、と笑顔で手を振ると、セブルスに背を向け、ぼくは歩き出した。

「はあ……」

なんだかちよつと、意気消沈してしまう。

さつきまでは軽かった、両手に抱えた本たちが、急に重みを増したようにも感じた。

肩を落としてつつ廊下を歩いていると、背後からまた「秋！」と声を

かけられた。

振り返ると、こちらに小走りで近付いてくるリリーの姿。

その無邪気な笑顔に、ふ、と心が弾んだ。

何故か本も、すつと軽くなった。

「リリー」

「秋に会いたいなああって思いながら歩いてたら、ホントに会えたんだもの。びっくりしちゃった」

「本当に？　ぼくに会いたいって思ってたの？」

「本当よ。秋にはいつでも会いたいわ。何で一緒じゃないんだろうって、常日頃から思ってるくらいよ」

ぼくの隣に並んだ彼女は、いつものように笑った。

その笑顔は、一年生の頃、ぼくが彼女と初めて出会った時から変わらないもので、その変わらなさが、すごく嬉しかった。

「……でね、そこでミサが……ちよつと秋、聞いているの？」

「聞いている聞いている」

唇を尖らせ片方の眉を上げて、リリーはぼくを見た。

小さく笑って、ぼくは右手を伸ばし、リリーの頭を軽く撫でる。

途端びっくりしたようにリリーは目を見開くと、頬を染めて俯いてしまった。

「まだ、リリーの方がぼくより背が高いなあ」

「……ふんっ、秋には絶対に抜かれないわ。秋は大人になってもきつとそのまま、私よりちっちゃいままなのよ」

「それは困るなあ」

つん、とリリーはぼくから顔を背けると、手を後ろで組んでぼくより数歩前に出た。

綺麗な赤い髪の毛が、リリーの背中で揺れる。

「……困るって、どういう意味よ」

「え？　ごめん、聞こえなかった」

「何でもないわー！」

早口でリリーは何かを呟いたが、ぼくには聞き取れなかった。

しかし聞き返しても突っぱねられたので、ぼくは首を傾げつつ、口

を噤む。

「……今から、どこ行くの？」

「そうだなあ、久しぶりに悪戯仕掛人に会いたくなっちゃって、小部屋に行こうと思ってたところだよ」

「そ。……じゃ、私も行こうかな」

付け加えたようなリリーの言葉に、ぼくは少し目を見張った。

そして、小さく笑う。

「ありがとう、リリー」

ぼくの台詞に、リリーが眉を寄せて振り返った。不可解そうにぼくを見ると、「何で『ありがとう？』と尋ねる。」

「さあね。何と無く、言いたくなっただ」

ふうん、とリリーは頷いた。

胸の中で、もう一度呟く。

ありがとう、リリー。

ぼくをこんな穏やかな気持ちにしてくれて、ありがとう。

この穏やかな時間が、ずっと続けばいいと、願った。



ダンブルドアが消え、ハグリッドがアズカバンへ連れて行かれた後のホグワーツは、何というか、静かだった。

いるべき人がいないと、ここまで冷え冷えとしているのか、と改めて感じさせる。

特に、こんな時期にダンブルドアがいなくなるとか、本気で理事会を怒鳴りつけたくなるな。

しかも噂によると、ダンブルドアを停職させたのはドラコの父親らしい。

お前のせいで今頃ダンブルドアは日本で優雅に温泉浸かってんだぞ！ と、ちよつとドラコの父親正座させて小一時間説教したい。

しかし、ダンブルドアがいなくなってから、校内は「まだ」平和だ。今のところ、誰も石になってもいないし、殺されてもいない。

マクゴナガル先生が「あと一週間後の六月一日から試験がある」と宣言したので、皆身が入らないまでも緩慢に、頭の中を無理矢理試験モードに変えて勉強していた。

それから四日後、つまり、試験の三日前の朝食の席でのこと。テスト直前のレイブンクロー生は、なんというか、こう、気迫がある。

近寄りたくない感じ、とも言い換えられそう。

朝食を取りながら暗記ものを見るのは当たり前前、口を開けば問題についての議論が始まり……と、まあ、他の寮ではきつと見ることができないだろう光景が、ありとあらゆるところで展開されていた。

慣れると案外面白い。

根本的に、学ぶことって好きなんだよな、ぼく。

今日もまた、ウィルやレーンが、魔法薬学のとある実験の解釈について、朝っぱらから議論していた。

同室のよしみということ、ぼくとアリスもそれに巻き込まれ、まあ楽しく議論していると、マクゴナガル先生が、また発表があると言った。

途端に、大広間がしん、と静まり返る。

皆がマクゴナガル先生に注目する中、先生は口を開いた。

「よい知らせです」

途端に、大広間は大騒ぎ。皆が興奮して立ち上がり、「ダンブルドアが帰ってくるんだ!」「スリザリンの継承者が捕まった!」と、各々が勝手な妄想を膨らませては大騒ぎしている。

その喧騒が治まった後、先生は発表した。

「スプラウト先生のお話では、とうとうマンドレイクが収穫できるところです。今夜、石にされた人たちを蘇生することができるでしょう。言うまでもありませんが、そのうちの誰か一人が、誰に、または何に襲われたのか話してくれるかもしれません。私は、この恐ろしい一年が、犯人逮捕で終わりを迎えることができるのではないかと、期待しています」

その言葉に、大広間中が歓喜した。

特にレイブンクローでは、五年生の監督生の女の子が襲われたこともあり、その子の友人であろう先輩方が抱き合つて喜び合い、感極まって泣きじゃくっている人もたくさんいた。

かく言うぼくも、ハーマイオニーが目を覚ましてくれるという事実には、嬉しさを隠しきれない。隠すつもりもないけれども。

でも、アリスですら笑顔で拍手を送つたくらいなのだ、ちよつとくらい、いやかなり喜んだっていいじゃないか。

「スプラウト先生愛してる！」

「薬草学最高！ もう一生寝ねえ！」

「俺、薬草学の試験だけは、ガチで勉強するわ……」

と、レイブンクローににわか薬草学ブームが巻き起こった折、友人らと盛り上がっていたぼくは、ちよいちよい、とローブの袖を引かれた。ん？ と振り返る。

「……ジニー？ どうしたの？」

ロンの妹、ジニーは、あたりがレイブンクロー生ばかりだということとに落ち着かないみたいで、身体を小さくさせていた。

「……アキに、相談したいことがあるの」

「……相談？ ……いいよ、分かった。ここじゃうるさいでしょ、場所変えよ」

ジニーがこくりと頷く。

なんか、この前見たときよりも、顔色悪くなってないか。

するりと騒ぎの群衆の中から抜け出すと、ジニーの手を引き静かな場所を探した。

しかし大広間には見当たりそうもなく、仕方なしに大広間の外に出ることにする。

騒ぎに加わることなく（かといって「うるせえ」と出ていくこともなく。笑）レイブンクローのテーブルの隅に一人座っていたアリスに一言告げて、ぼくらは大広間を抜け出した。

大広間の扉を閉めると、外は大分静かだった。

ふう、と一息ついて、そしてジニーを振り返り、「さて、相談したいことって何？」と尋ねると、途端ジニーの瞳に大粒の涙が浮かんだ。

あまりに唐突のことに思考を停止している間に、瞳に溜まった雫はぼろりぼろりと次から次に流れ出す。

ぼくはと言えば、完全に大パニックだ。

女子に目の前で泣かれる経験なんて、ああそうだ一回アクアが泣いたくらいで、しかもアクア下向いてたから涙自体は初めて見るわけで、ただの塩分が少し含まれただけの水なのに、自分だって流そうと思ったら流れるものなのに、それが何故か、女の子の瞳から出ているのだと思うと、途端に呼吸が出来なくなった。

はっ、と我に返るのに、たっぷり三十秒は要しただろうか。一瞬だったかもしれないし、三分だったかもしれない。

時間の感覚が曖昧で、なんだかふわふわして、それでいて頭の中はどうしようどうしようという思いでいっぱいだった。

「だ、大丈夫？ どこか痛いの？ 大丈夫？」

どこか痛いのか？ ってなんだよ！ どんだけパニックってんだよ！ とセルフツツコミを入れてみるも、心臓はさつきからずっと早鐘を鳴らし続けている。

ジニーはふるふると頭を振ると、ぼくのローブを掴み、しゃくりあげた。

パニック状態から少し回復したぼくは、さすがにこの図は人に見られたらやばい！ というところまで、やっと思考が働いた。

ぼくが後輩女子を泣かせてた、なんて噂になってみる。考えることすらおそろしい……

「と、とりあえず、あっち！ あそこに小部屋あるから、そこ行こ、そこ！ ここ誰が来るかわかんないしき！ ほら！」

促して小部屋に入ると、小さな椅子にジニーを座らせ、扉を閉める。ジニーにぼくのハンカチを握らせて涙を拭わせると、少しは落ち着いてきたようだった。

「さて……じゃあ、話を聞こうか。一体どうしたの？」

「あのね……あのね、アキ。あたしね……先にハリーに言おうと思っただけだね……」

「うん」

根気強く待つ。ぼくのハンカチを握り締めるジニーの両手が、あまりにも震えているものだから、それを止めてあげようと思い、ジニーに近寄ると跪いて、ジニーの両手をそっと包み込んだ。

「あたしね……」

ジニーの手は、驚くくらいに冷たかった。

ぎゅっと力が入っていて、関節も真っ白だ。

この小さな身体に、この子は一体何を溜め込んできたのだろうか。きつと、誰にも相談出来なかったんだろう。

だから話し始めるのに、勇気がいるのだ。

最近顔色が悪かった原因も、ならばそれか。

一瞬でも疑ってごめん、と、心の中でジニーに詫びた。

「あのね……」

「うん」

「……あのね……」

「……うん。……っえっ!？」

何が起こったのか、分からなかった。

気付けばジニーに、床に押し倒されていた。

ジニーの両手がぼくのハンカチを離すと、ぼくの首に伸び、一気に絞められた。

息が詰まると血液が脳に回らないので、瞬時に頭がぼうつとなる。

「どう、して……ジニー……?」

「どうして? 今どうしてって言ったのかい? アキ」

ジニーの声が降ってくる。

ジニーらしくない口調で、ジニーらしくない表情で、ジニーはぼくを噛った。

「僕の見込み違いだったようだね。君なら気付いてるかなと思ってたんだけど。まあ、『幣原秋』は天才だけど、君は天才じゃないもんね」

「……っ、あ……」

「ねえ、天才の名前を騙った偽物くん? 僕が誰だか分かるかい?」

笑顔が歪んで見えるのは、視界が歪んでいるせいだろうか。

違う、ジニーの笑顔はこんなじゃない。こんな歪んだ歪なものな
んかじゃない。

こいつは。

彼は。

君は。

「ヴォル、デモート……っ!!」

歪みが、より一層深くなった。

そう思った瞬間、ぼくの首を絞める手に更に力がこもる。

「せーいかい♪」

その声を最後に、ぼくの意識は闇に塗りつぶされた。

第29話 連れ去られた少年

ぼく、幣原秋は今、ちよつとだけ困っていた。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………くしゅんっ」

「ふあっ！ ………………」

ぼくがくしゃみをする、驚いたように彼、ピーター・ペディグ
リユーは身を震わせた。どちらからともなく顔を見合い、「ごめん」と
小さく呟く。

そして、再び流れる沈黙。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

なんとというか……………すんごく、重たい……………。

悪戯仕掛人の小部屋で、ぼくとピーターは二人つきりで、重たい沈
黙の時間を過ごしていた。

普段はうるさいジエームズやシリウスが好き勝手に喋るから、沈黙
というものを感じたことがなかったが、ピーターと二人つきりだとい
れが相当くる。

ぼくも普段はあまり相手に話を振らない方だが、ピーターも中々の
無口さんだ。

出会ってから今までで一年間と少しくらい経つが、それでも中々碎
けてはくれないようだ。

お互いを挟む、壁が分厚い。

今でも、ぼくが身じろぎをするたびに、びくつと肩を震わせてる。何だかちよつと寂しい。

「ジエームズ達……遅いね」

「そうだね……」

沈黙を埋めるかのように言い合うも、また沈黙。

そんな気まずい沈黙を破ったのは、驚くべきことにピーターだった。

「……ねえ、秋」

急に名前を呼ばれ、ぼくは少し目を見張った。

そして優しく微笑んで「何？ ピーター」と尋ねる。

「君は今の学校について、どう思う？」

ぼくは笑顔を引っ込めた。

今の学校。ピーターの言葉が意味するものとは、つまり。

「……居心地はちよつと、悪くなったよね」

ぴりぴりとした、妙な緊張感。理由もよく分からぬ重たい雰囲気。

接しがたくなった、スリザリン寮所属の友人。

ヴォルデモートとは何者だ？

どうしてセブルスは彼を支持するんだ？

分からないことだらけで、少し気分が悪い。

「……秋は、ヴォルデモートがスリザリンの支持を受けている理由、分からない？」

「理由……」

ぼくの目を覗き込むようにして、ピーターが訊いた。

薄い色の瞳をしっかりと見つめることが出来なくて、ぼくは目を逸らす。

「ヴォルデモートはね、時代の象徴なんだ」

「時代の？」

「象徴。……彼はね」

「魔法使いの英雄になるよ」

「……………」

「……それがいい意味か、悪い意味かはともかくとしてね」

そう言っつて、ピーターはぼくから目を離した。ピーターが椅子に座り直したのを区切りに、ぼくもふう、と息を吐いて、左手で顔を覆った。

バタバタツ、と慌しい靴音が、部屋の外から聞こえる。

やがてドアが乱暴に開いて、「やあやあ君たち集まりかいっ！」とジェームズの楽しい声が部屋に響いた。

「全く、ジェームズ遅いよ！ シリウスも！」

「悪い悪い、マクゴナガルに捕まっちゃってさ」

「授業で先生のテーブルをラクダに変えちゃったりするからだよ！」

「マクゴナガルのあの顔と来たら」

途端に騒がしくなった部屋に、ぼくは微笑んだ。

顔を覆っていた左手を外して、「ぼくも見てみたかったなあ、そんな状況」と笑う。

「面白かったぜ！ じゃあ今度もう一回、マクゴナガルに何か仕掛けようか」

「だから毎回罰掃除が絶えないんだよ、二人とも。リーマスは？」

「今日は体調悪いんだって。医務室で寝てるよ」

「そう、じゃあ後でお見舞いに行きたいな」

談笑しながら、ちらりと横目でピーターを見た。

ピーターも横目で、ぼくを見ていた。



「生徒が、しかも二人も、怪物に連れ去られました。『秘密の部屋』そのものの中へです」

「誰ですか？」

マクゴナガルに、呆然としたような声でマダム・フーチが尋ねた。「どの子ですか？」

「ジニー・ウィーズリーと、もう一人——レイブンクローのアキ・ポッターです」

隣で、ロンがへなへたと崩れ落ちた。

僕は今聞いたことが信じられなくて、どこか現実味がないような気がして、その後のマクゴナガルの声を聞いていた。



やっと、職員室で先ほど盗み聞きした話が実感として湧いてきたのは、グリフィンボールの談話室の片隅で、ロン、フレッド、ジョージたちと一緒に黙って座っていたときのことだった。

アキが、連れ去られた？

秘密の部屋に？

嘘だろ。誰か嘘だと言ってくれよ。

明日の朝一番のホグワーツ特急で、僕達生徒は帰宅させられるらしい。

アキは？

アキを、ホグワーツに残したまま、僕はダーズリー家に帰らなければいけないというのか？

そんな当てもない考えが、頭の中でずっと永遠ぐるぐる回っていた。

「ジニーは何か知っていたんだよ、ハリー」

日没後、フレッドとジョージが寝室に上がって行ったその後、職員室の洋服掛けに隠れて以来、初めてロンが口を開いた。

「だから連れていかれたんだ。パーシーのバカバカしい何かの話じゃなかったんだ。何か『秘密の部屋』に関することを見つけたんだ。きつとそのせいでジニーは……だって、ジニーは純血だ。他に理由があるはずがない」

じゃあ、アキは？ と口を開きかけ、押しとどめた。

今口を開いたら、何もかもをぶちまけてしまいそうになる。

辛いのは僕だけじゃないのだ。

「ハリーは、アキが連れ去られた理由に心当たりはないの？」
アキが連れ去られる理由。

理由なんて思い浮かぶ訳もない。

アキが秘密の部屋に連れ去られる理由なんて、あつていいはずがない。

アキを、脳裏に思い浮かべた。

幼い表情を、柔らかな笑顔を、長い黒髪を。

『ハリー』

僕を呼ぶ、高い声を。

それだけで、堪らない気持ちになった。

「ハリー。ほんのわずかでも可能性があるだろうか。つまり——ジニーやアキがまだ——」

ロンの言葉の意味するところに思い当たって、僕は黙って俯いた。
秘密の部屋に連れ去られて、二人が生きているとは到底思えない。

「そうだ！ ロックハートに会いに行くべきじゃないかな？ 僕たちの知ってることを教えてやるんだ。それがどこにあるか、僕たちの考えを話して、バジリスクがそこにいるって、教えてあげよう」

ハーマイオニーが残してくれた、秘密の部屋に隠された怪物、バジリスク。

それを発見したときの午前中の興奮は、今やもう萎びてしまっていた。

気怠くて、何をするのも億劫だ。

でも他に案はないことだし、と、僕はロンと一緒に、グリフィンドールの談話室を出ることにした。

もう既に日は落ちて、廊下はもう大分薄暗い。

いつもは見回りをしている先生方も、今日はきつと色々話し合うことがあるのだろう。

人の気配が全くしない廊下を、ロンと二人、黙って歩いた。

「アキの兄貴っ！」

と、唐突に後ろから声をかけられた。慌てて振り返る。ロンもつられて振り返った。

僕をこんな呼び方で呼ぶのは、この広いホグワーツ中探しても一人しか見当たらない。

「フィスナー……」

驚いたように、ロンが呟いた。足音が高らかに近付いてくる。

やがて、息を軽く切らせて、アリス・フィスナーは僕らに追いついた。

「良かった、捕まえられて……グリフィンホール寮まで行こうと思ってたんだが、道分かんなくてよ。教師の監視厳しくってさ、さつき隙見て抜けてきた」

「えっと、どうして……」

ん？ と不思議げに、彼の碧色の瞳が煌めいた。

左耳で、雪の結晶の形をした銀色のピアスが揺れる。

「アキを助けに行くんだろ？」

そう、当然のように問いかけられて——僕はやっと、目が覚めた。頭を思いつきり殴られたような衝撃に、目を見開いたままロンを振り返る。

ロンもまた、驚いたような、何かを悟ったような、そんな表情をして僕を見返した。

息を呑んで、そしてゆっくりと吐く。

ぎゅっと目をつぶって、そして目を開けると、アリスを真っ正面から見つめた。

「そうだ、行こう」

彷徨っていた目的が——

今、ストーンと、腹に落ち着いた。

「アキを、アキとジニーを、助ける」

そう、思いを込めて、言い聞かせるように呟く。諦めるな。

膝をつくな。

目を伏せるな。

姿勢を正した。

しっかりと面を上げて、前を見据えろ。

もし、僕が秘密の部屋に連れ去られたとして、アキはそこで諦めて、ただただ無力に座り込むだけだろうか？

絶対違う。

あいつは動く。

たった一人でも、僕を助けに、絶対に来てくれる。

それがたとえ、どんなに危険な道でも。

「……僕達は、多分だけど……秘密の部屋の入り口を知ってる。それを今からロックハートに教えてやりに行くところなんだ。ロックハートは秘密の部屋に入ろうとしてるからね。……アリス」

改めて、この少年が、アキの一番の友人であることを感じた。

そのことに、ちよつとだけ嫉妬した。

「君も一緒に来て欲しい。アキが連れ去られた理由もわかるかもしれない」

アリスは、当然とばかりに頷いた。



ロックハートを連れ、三階の女子トイレに向かう。

杖を『武装解除』され先頭を歩かされているロックハートは震えていたが、可哀想だとはちつとも思わない。

ロックハートがただの詐欺師のペテン師だつてことも発覚したことでだしね。

いやあ、しかしアリスがいてくれて良かった。ちよつと胸倉掴んで凄んだら、すぐに怯えちゃって。

まあ確かに、アリスに脅されたら僕も怯えるかもだけどさ。

喧嘩慣れしてるからか、脅し方が様になってる。

本当に同級生か？ と疑ってしまうほどだ。

アリスは女子トイレに入ることに抵抗があつたようだが、眉を寄せただけで、ごちやごちやとうるさいロックハートの背中を蹴り、女子トイレに入つて行つた。

マートルは、一番奥の小部屋のトイレの水槽に座っていた。

僕を見るなり、マートルは表情をぱつと明るくさせ、「アラ、あんただったの。今度は何の用？」と尋ねた。

「君が死んだときの様子を聞きたいんだ」

マートルは、今までに見たことがないくらいに嬉しそうな顔をした。

「オオオオウ、怖かったわ。まさにここだったの。この小部屋で死んだのよ。よく覚えているわ。オリーブ・ホーンビーがわたしのメガネのことをからかったものだから、ここに隠れたの。鍵を掛けて泣いていたら、誰かが入ってきたわ。何か変なことを言ってた。外国語だった、と思うわ。とにかく、いやだったのは、しゃべってるのが男子だったってこと。だから、出ていけ、男子トイレを使えって言うつもりで、鍵を開けて、そして——死んだの」

「どうやって?」

「わからない。覚えているのは、大きな黄色い目玉が二つ。体全体がギョツと金縛りに遭ったみたいで、それからふーっと浮いて……そして、また戻ってきたの。だって、オリーブ・ホーンビーに取っ憑いてやるって固く決めてたから。ああ、オリーブったら、わたしのメガネを笑ったこと後悔してたわ」

「その目玉、正確に言うところどこで見たの?」

僕が聞くと、マートルは手洗い場のあたりを指差した。

ロックハート以外の僕らは、急いで手洗い場に近寄ると、目を凝らして隅々まで、何か仕掛けがないかを丹念に探す。

やがて僕は蛇口の脇に、小さなヘビの形が彫つてあるのに気付いた。

手を伸ばして蛇口を捻ろうとすると、マートルが楽しげに「その蛇口、壊れっぱなしよ」と言った。

「ハリー、何かを言ってみろよ。何かを蛇語で」

「アキの兄貴は蛇語が喋れるのか?」

「僕にも理由なんて分からないんだから、詳しいことは聞かないよね、二人とも」

そう二人に言つて、何を話せばいいのかを考えた。

「開け」

そう呟いて二人の方を見ると、どうやら普通に英語だったらしい。本物の蛇に向き合うような気持ちでー。

「開け」

今回は、自分でもはつきりと分かった。

自分の口から漏れる、まるで蛇の息遣いのようなシューシューという奇妙な音。

次の瞬間、手洗い場が動き出した。

やがて――

「ここが『秘密の部屋』……」

50年間閉ざされていた、秘密の部屋が姿を現した。

第30話 感覚

「なあ、このまま小部屋に行くだろう？」

そうシリウスが声を掛けてきたのは、レイブンクローとグリフィン
ドールが唯一合同な授業、闇の魔術に対する防衛術が終わった時のこ
とだった。

闇の魔術に対する防衛術の授業は、本日最後の授業だ。

それから夕食までは一時間そこから時間がある。

腕時計を確認して「うん、いいよ」とぼくは頷いた。

「ジェームズたちは？」

「ジェームズは日直。リーマスは図書館で、ピーターは忘れ物して寮
に戻ってる」

「ああ、なるほどね」

雑談を交わしながら、ぼくらは二人で廊下を歩く。

放課後となった廊下は中々人通りが激しい。

その中で擦れ違う女子生徒は結構な確率でシリウスをはつとした
顔つきで見つめており、改めてこいつって顔いいんだなあと感じさせ
た。

それはいいんだけどさ、シリウスを見た後隣にいるぼくを見て顔色
変えるの止めてくれませんか。彼女か？　みたいな疑いの顔。全
然違うっての。傷つくねえ。

その時、隣をすつと通り過ぎた影があった。セブルスだ。

先輩か同級生か分からないが、スリザリンの寮の人と一緒にいる。
思わず振り返ったぼくに釣られて、シリウスも顔を後ろに向けた。

「ふん……スネイプか」

「……セブルス」

行くぞ、とばかりにシリウスがぼくの肩を小突く。

ちよつと俯いて、ぼくはシリウスの後ろを付いて行った。

「何だ？　あいつとケンカでもしてんのか？」

「……別に。ただ……最近話せてないだけ」

ふうん、と、シリウスはただ相槌を打った。そしてふと呟く。

「放っておけばいいんだ、あんな奴」

「……でも」

「放っておけばいいんだよ、秋」

廊下を曲がった。普段使われている教室と何ら関係のない教室ばかりが並んでいるため、人気はない。

「放っておくわけにもいかないよ」

「じゃあ、どうするんだ？」

そう尋ねられ、言葉に詰まった。

ぼくは一体、どうしたいんだろう。

セブルスに一体、どうして欲しいんだろう。

シリウスは合言葉を唱え、小部屋の扉を開ける。その後ろに従って入った。

円卓に腰掛けたシリウス、その対角に座る。

しばらく黙っていたぼくらだったが、ふとシリウスが口を開いた。

「スネイプが変わった理由が知りたいのか？」

ぼくは顔を上げた。

以前、ピーターが言った言葉が蘇る。

「……秋は、ヴォルデモートがスリザリンの支持を受けている理由、分からない？」

「理由……」

「残念だが、理由なんてないってのが俺の考えだけだな」

シリウスは足を組むと、両腕を頭の後ろに回して、椅子に体重を預けた。

「感覚の違いは生まれ育った環境で決まるモンだ。話しても無駄だよ」

「無駄って……」

「無駄だよ。感覚なんてモンは理屈じゃない。理詰めで話して通じるモンじゃない。秋、君は感覚的に、スネイプに違和感があるだろ？」

それがどうい理由なんか、わかんねえんだろ？　つまりそれは、君

とスネイプの感覚が根本的に違うってことだ」

「……………」

「感覚は、ほとんどが育った環境に依存する。自らが生まれ育った世界に違和感を抱く人間なんて……凄く、少ないんだ」

ふと、シリウスが切なげな眼差しをした。一瞬垣間見えた表情に、ぼくは驚く。

目を凝らしてもう一度その表情を探すも、それはすぐさま隠れて見えなくなった。

「セブルス・スネイプ。入学した段階で既に、上級生をも上回る、闇の魔術に関する知識を持っていた男」

顔を上げたときには、シリウスの瞳にはいつも通りの、真っ直ぐな光が宿っていた。

「所詮はスリザリン生だ。俺達とは分かり合えない存在だ。人殺しのヴォルデモートを是とし肯定する。そんな奴を俺は、仲間とは思わない」

「秋。俺は、セブルス・スネイプを認めない」

椅子を引きずる音が聞こえた。続いて足音も。扉が閉まる音。

全ての音が消えてから、ぼくは息をついて、固く目を閉じた。

両手で顔を包み込む。

ぼくの世界は、ぼくの意志とは無関係に、その形を変えようとしていた。



秘密の部屋へと続いているパイプを滑り落ち、地下にあるどの教室よりも深い場所、湖の底よりも深いんじゃないかと思われる場所に着地した僕は、辺りを見回した。

先に行かせたロックハートは、きつとヌメヌメの地面に叩きつけられたのだろう、全身ベトベトの無残な姿で突っ立っている。

ロンとアリスが落ちてくるのを待ってから、僕たちは杖の明かりを頼りに歩き始めた。

「みんな、いいかい。何か動く気配を感じたら、すぐ目をつぶるんだ……」

地面に落ちているのは小動物の死骸ばかり。

それももう骨になっていいるものばかりで、アキやジニーがどうなっているのかを考えるのもおぞましかった。

トンネルのカーブの先に、何やら大きく丸いものがあつた。

思わず足を止めると、皆も立ち止まる。

「ハリー、あそこに何かある……」

ロンが震える声で、ぼくの肩をギュツと掴んだ。

とそこでアリスが、明かりを点す杖を上げ、左手はポケットに突っ込んだまま、すつと歩み寄る。

そんな平然としたアリスの姿に仰天するも、小さな声で「アリス、気をつけて……！」と言つた。

「ただの抜け殻だ。命は宿っていない。しかしこれは……驚いたな」

アリスがその物体を照らし出すのに、恐る恐る近付いた。

近付いてやつと分かる、これは巨大な蛇の抜け殻だ。

鮮やかな緑色の鱗が、抜け殻だというのに、明かりに反射してキラキラと、その存在を主張している。

脱皮した蛇は、ゆうに6メートルはあるだろう。

「なんてこつた」

ロンが恐怖に満ちた声で呟いた。

きつとこれはバジリスクの抜け殻だ。バジリスクとはこんなに大きい蛇なのか。

バジリスクは対象の目を見て殺す、なら目さえ見なければいい、そう思っていたが、こんなに大きいと簡単に噛み砕かれてしまう。

戦えっこない。

それにしてもアリスは、恐怖を感じることはないのだろうか。興味深そうにバジリスクの抜け殻を見つめている。

まあアキの一番の友人なのだ、普通の性格はしていないだろう。

そう失礼なことを考えていた時、後ろでドサツという音が聞こえた。

振り返ると、ロックハートが腰を抜かしている。随分遅いタイミン
グだ、抜け殻を見てしばらく放心状態だったのだろうか。

「立て」

ロンがロックハートに杖を向け、きつい口調で言った。以前、アキ
に修理してもらったロンの杖。

スペロテープでぐるぐる巻きで、アキに直してもらった直後はとも
かく、もう今となってはまともな呪文なんて掛からないだと、嘆い
てたっけ。

ロックハートはゆっくりと立ち上がると——なんと、ロンに飛び掛
り、殴り倒した。

思わず息を呑む。ぱっとロンに駆け寄ろうとしたが、アリスの方が
早かった。

しかしそれよりも早く、ロックハートはロンの杖を奪うと鋭くアリ
スに向ける。

アリスは瞬時に立ち止まると、僕を庇うように右手を横に伸ばし
た。

ロックハートは肩で息をしながら立ち上がる。

顔には今までのような笑顔が戻っていた。

「坊やたち、お遊びはこれでおしまいだ！ 私はこの皮を少し学校に
持って帰り、二人を救うには遅過ぎたとみんなに言おう。君たち三人
はズタズタになった無残な死骸を見て、哀れにも気が狂ったと言お
う。さあ、記憶に別れを告げるがいい！」

ロックハートはロンの杖を頭上にかざし、叫んだ。

「オブリビエイト！」

杖は小型爆弾並みに爆発した。トンネルの天井が崩れ、岩がバラバ
ラと音を立てて落ちてくる。

僕は頭を覆って後ろに逃げた。そのまま隠れてやりすくす。

轟音が鳴り止み、土煙が収まった時には、僕はたった一人でそこに
いて、岩の塊が僕らを阻んでいた。

「ロン！ アリス！ 大丈夫か？ ロン！」

「ここだよ！」

岩と岩の隙間から、かろうじて声が聞こえた。

ほっと安心して、胸を撫で下ろす。

「僕は大丈夫だ。フイスナーも。でもこっちのバカはダメだ……杖で吹っ飛ばされた」

僕は岩に手を触れた。ちよつとの力じやビクともしない。

「さあ、どうする？ こっちからは行けないよ。何年も掛かってしま
う……」

手近にあった岩を掴み、岩の塊に突き立てる。しかし岩の表面を細
かい砂粒に変えるだけだった。

魔法で砕くか？ でもこんな巨大なもの、砕いたことなんてない。

アキじゃないんだ、初めてでそう上手くいくとは思えない。僕には
アキのような魔法の才能はない。

かと言ってこのままじゃ、ただ時間が過ぎていくだけ——。

首筋を汗が伝った。手の甲で拭うと、立ち上がる。

「ロン、アリス。そこで待ってて。ロックハートと一緒に待っていて。
僕が先に進む。一時間経って戻らなかつたら……」

そこで言葉に詰まった。ロンが言葉を返す。

「僕は少しでもここの岩石を取り崩してみよう。そうすれば君が——
帰りにここを通れる。だからハリ——」

ロンは、その台詞の後に何を続けるつもりだったのだろう。聞いた
くなかった。

だからロンの声に被せるように「それじゃ、また後でね」と言った。

「アキの兄貴」

背を向けた僕に、静かな声が届いた。アリス・フイスナーの声だ。

思わず振り返る。

「必ず、二人を連れて戻って来いよ」

脳裏に、アリスの精悍な顔が浮かんだ。両手で顔を覆い——そして
鋭く息を吐いて、両手を離す。

そうだ。僕は。

僕は、アキ・ポッターの兄だ。

僕が、アキを助けるんだ。

覚悟は、決まった。
同時に、足の震えも、止まった。

第31話 唯一の君の弱み

穏やかな昼下がりの休日。まだ真冬とは思えないほどに青く高く澄み切った空は、数ヶ月に数回のご褒美、ホグスミート行きに相応しい、麗らかな日だった。

「リリー、セブルス、早く行こうっ！」

振り返って誘うと、「ちよつと待ってよ、秋！」と、二人が笑顔で駆けてくる。そんななんでもないことが嬉しくて、ぼくは笑った。

こうして三人で遊ぶのも、随分久しぶりだ。

最近の息詰まる日常を打破するために、ぼくが二人を呼んだのだ。

そう、これは紛れも無くぼくの意志。

ぼくが、この二人と一緒にいたいと望んだ、証拠。

「早く早くと君は急かすがね、秋。一体君は今からどこに行こうとしてるんだ？ 僕らに見せたいものでもあるのかい？」

「それは、えつと……」

セブルスが肩を竦めながら尋ねるのに、思わず口ごもった。

すかさずリリーがフォローする。

「じゃあ私、ティーカップ専門店に行きたいわ。大きいカップから小さいカップ、色とりどりより取り見取りのお店なのよね？ 今なら一つ買おうと、カエルの卵が付いてくるんですって。素敵よね」

「リリー、君のセンスについて今更どうこう言うのは僕は随分昔から諦めてはいたんだけどね、黙っておくのは僕の気分的にも許せないから言っておこう。君はおかしい」

「あら？ 私からすれば、まるでピクシー妖精向けとも言わんばかりの小さな、虫眼鏡を使わなきゃ読めないほど字もちっちゃい本を、まるで最愛の男性から贈られた精緻な細工が施された宝石を眺めるように熱心に見る人の方が、相当おかしく感じられますがね」

「ぼくからすれば、二人とも相当おかしいよ」

ため息をついて、でも久しぶりの懐かしい感覚に、そつと微笑んだ。

なんだ。昔となんら変わりが無いじゃないか。

変わったのかと思った。危惧した。恐怖した。

でも実際は、ぼくたちの関係には、何の変わりもなかった。昔と同じ——二人がぼくを受け入れてくれた時と同じ、暖かな雰囲気。

変わらない日常を、ぼくは望んだ。

変わらない時を、ぼくは望んだ。

変わらない関係を、ぼくが望んだ。

ずっと、このままの穏やかな時間が、ずっとずっと続きますように。永遠に。

ぼくが、願った。

変わらないものなんてないと気付くのは、もう少し先のことだったから。



「う、ん……」

頭が酷く重い。ズキズキと心臓の鼓動に合わせて痛む頭に、ぼんやりと意識が覚醒する。

次を感じたのは、冷たい頬。どうやら硬く冷たい地面に横たわっているらしい。

薄く目を開けると、辺りは何だか薄暗かった。

どうしてぼくはこんなところにいるんだろう？

ぼんやりと考えて——意識を失う直前のことを思い出し、慌ててぼくは飛び起きた。衝撃で頭がズキンと鈍く痛む。

「いった……」

左手で頭を押さえた。とそこで声をかけられ、ぼくは地面に腰をついたまま振り返る。

「やあ、やっとお目覚めかい」

「……君は……」

一人の少年だった。歳は大体15、6といったところだろうか。

短い黒髪に、スリザリンカラーの制服をきっちりその身に纏っている。

ぼくをじつと見据えるその顔は、ぞつとするくらいに整っていて、ぼくは生まれて初めて、男に対して『美しい』という形容を感じた。「ひよつとして、君が『トム・リドル』なのかい?」

「そういう君は『幣原秋』じゃないようだけど」

リドルの輪郭がぼやけている。まるで、記憶の中の世界のようだ。

いや——実際、その通りなのだろう。

「……ああ、そうだ。ぼくは『アキ・ポッター』。ハリー・ポッターの弟だ」

「ふうん、アキ・ポッター、ね……ハリー・ポッターの弟、アキ・ポッター。『幣原秋』と比べるまでもなく、全くの無名の名前だね」

クスクスとリドルは笑った。しかし目は少しもニコリともせず、ぴつたりぼくを見据えている。

「君は日記とあまり接点を持つとうとしなかったからね、時間のズレに気付くのは、結構最近だった。最後に秘密の部屋が開かれて50年、直の息子がまだホグワーツにいるわけないものね。幣原秋。幣原秋。幣原秋。幣原直と、アキナ・エンディーネの子供。まさか彼が、闇祓いになって未来の僕の前に立ち塞がることになるとは、思いもしていなかったよ。よりにもよって直の息子が、僕の前に! 中々傑作な話だと思わないか? 親友の息子は僕の敵でしたってね!!」

リドルはそのまま、何が面白いのか天を仰いで哄笑した。甲高い、奇妙な声だった。

ぼくは黙ってリドルを見つめる。

やがて笑い止んだ彼は、酷く冷たい目でぼくを見た。その目に怯みそうになるも、ぐつと堪えて口を開く。

「トム・リドル。君が、マグル生まれ襲撃事件の犯人だ」

ぼくの端的な指摘にも、リドルは動じなかった。

ふん、とつまらなさそうに鼻を鳴らすと、小さく肩を竦め、歩き出す。

「まあいいや。そうだよ、僕が犯人だ。可哀想で哀れな少女、ジニー・ウィーズリーを操って、ホグワーツを恐怖に陥れた張本人だ。しかし皆、運がいいよねえ。前回秘密の部屋を開けた時みたいに、一人くら

いは死ねば良かったのに」

「何……!?!」

「別に驚くことはないだろう？ 穢れた血が一人や二人死んだところで、世界は何も変わらないさ」

ぼくは顔を歪めた。吐き捨てるように、呟く。

「……最低だな」

「真理だよ」

「どうして君のような人間が、ぼくの父親と友人だったんだ」

その言葉は、リドルには効いたらしい。眉を顰めるとぼくにツカツカと歩み寄り、座り込んだままのぼくの顎を掴んで見下ろした。

ぼくはリドルと視線を合わせる。

『君の』父親じゃない。『幣原秋の』父親だ」

「どうでもいいよ、そんな細かいことは。それより、父さんが君なんかと友達だとはね。父さんもジニーみたいに操ってたの？ それともその綺麗な顔と演技で騙したのかな？」

きゅつと、リドルの赤い瞳が細められた。

ぼくの顎を掴む手に、力が籠る。

「調子に乗るなよ、アキ・ポッター。幣原秋の名前を名乗った偽物くん。直と何の関係も無い君に、直のことを語られたくない」

「……でも、父さんは」

「お前が直を『父さん』と呼ぶな！」

ぼくは黙ってリドルを見つめた。

この絶体絶命な状況を抜け出す光明が見えた。

常に冷静なトム・リドル。彼は今まで出会ったどの誰よりもきつと頭がいい。その彼が唯一動揺し感情的になる相手、幣原秋の父親、幣原直。

これを使わない手はない。

「……君は、幣原直と友人なのかい？」

何を今更、という目で、リドルはぼくを見返した。「だから何だと言うんだ？」と聞き返す。

ぼくは、ふつと笑顔を浮かべた。肩の力を抜き、穏やかにリドルを

見る。

リドルはそんなぼくの反応に、多少なりとも戸惑ったようだった。「ねえ、いいことを教えてあげようか」

「……何」

一瞬、胸がぎゅつと痛んだ。冷ややかで鋭い痛み。冷たい氷の棘で心臓を刺されたような痛み。

無視して、ぼくは口を開いた。

「幣原直と幣原アキナはね、君が殺したんだよ」

その言葉を聞いたときのリドルの顔は、何というか……笑えた。

初めて理解出来ないものにぶち当たったような顔。

素直に、ぼくは笑みを零す。

「……嘘だ」

「うふふ……あはっ、そう思うなら、そう思っていればいいよ。ぼくはこれを、未来の君から聞いたんだ」

図書館に置いてある、日刊預言者新聞のバックナンバーをどれだけ漁っても。

どの文献を探しても、そんな情報は一言たりとも載ってはいなかったけど。

「僕が直を殺す？ ……意味が分からないな」

「……未来の君が言うには、それは幣原秋のせいらしいけど」

そういえば、去年ヴォルデモートはぼくに対して『幣原秋』と語りかけてきたな。あれは一体どうしてなんだろう？

でも、同一人物であるはずのリドルは、ぼくと幣原秋は別人だと断言したし……まあいい。

今はそのことが重要なんじゃない。

不用心にも、ぼくのローブの左ポケットには、ぼくの杖が入っている。ぼくに対する緩みない監視の視線、それが外れるのを、油断なく待った。

「未来の……僕」

「そう、未来の君だ。……そうだリドル。ぼくね、ずっと君に聞きたいことがあったんだ」

微笑んで、首を傾げる。

いつの間にかぼくの顎から、リドルの手は離れていた。

「君にとって友人というのは、殺しても何の差し支えもないような人のことを指すのかな？」

一瞬の動揺、一刹那の隙。それさえあれば、ぼくには十分だ。

杖を引き抜きリドルに向ける。

オレンジの閃光が杖の先端から迸り、リドルに命中した。リドルの驚いた顔が、閃光に照らされる。

「……何っ!？」

しかし驚いたのは、こっちも同じだった。リドルに命中したはずの呪文は、リドルをすり抜け後ろの壁に当たると、てんでばらばらな方向に跳ね返った。

ぼくが唾然としているうちに、リドルはゆっくりと立ち上がった。

「ここは僕の作った夢の世界だよ？ アキ。物理的魔法は僕には効かない。僕には実体がないからね。……ふっ、まあいいや」

薄く笑ったリドルは、既にいつも通りの余裕げな微笑を浮かべていた。

と、すつとぼくの目の前に右手を突き出す。咄嗟に危険を感じ、地面を転がると、リドルから数メートル離れた地点で立ち上がり、構えた。

果たして、リドルは言った。

「決闘をしようじゃないか、アキ」

第32話 君は誰？

「学校の地図を作るー！」

そうジェームズが高らかに宣言したのは、期末試験が二週間後に近付いた時のことだった。

小部屋にて各々好き勝手（例えば、ぼくは読書、シリウスはゲーム、リーマスはピーターに勉強を教えているというんでばらばらな状況下で。リリーはさつきまでいて勉強をしていたのだが、シリウスのうるささに辟易して出て行った）やってる中、いきなりジェームズは机をバンツと叩き、そう叫んだ。

「地図？ そんなの作ってどーすんだよ」

「ちつちつち、分かかってないねえシリウスは。じゃあ聞くが、君はこの学校の部屋一つ一つが全て頭の中に入っているのかい？」

「頭の中って……何個も部屋があるんだ、そんなの無理だよ」

リーマスが零す。それを耳聴く聞きつけたジェームズは、満面の笑顔で「その通り！」とリーマスを指差した。指差されたリーマスは、普段通りの笑顔を顔面に貼り付けながらも、彼に向いたジェームズの人差し指を掴み、他所へ強引に向かせる。どうやら指を指されたのがお気に召さなかったらしい。

ジェームズは声にならない声を上げ、右手の人差し指を左手でそつと握りしばらく悶えていたが、痛みが治まった頃に再び復活した。

「そう、ホグワーツには無数といっていいくらいの部屋が存在する。それだけならまだしも、動く階段や消える廊下、更には抜け道回り道もあるという噂も多い。そこで、だ！ 僕たちが学校の地図を作れば、これからの学校生活もより有益に送ることが出来ないかと考えた！」

そう言うと、ジェームズはカバンからゴソゴソと羊皮紙を取り出すと、円卓のテーブルに広げた。皆が自然と集まり、羊皮紙を覗き込む。

「へえ……」

ぼくは思わず感嘆の声を上げた。

羊皮紙には学校の概略図に、授業や普段の日常生活で使われる部屋

は勿論、今まで噂としか思っていなかった抜け道も何箇所か、既に書き込まれている。

図の脇には、ジエームズがその地図に盛り込みたいと思っている魔法（例えば、持ち主以外の人にはただの羊皮紙にしか見えなくする魔法だとか、地図上を実際に人が歩く通りに足跡をつける、とか）が事細かに書かれていた。

思いつきではなく、結構前から計画は練っていたようだ。
というか。

「試験前なのに、よくこんなこと考えたよね……」

そう、現在ホグワーツは絶賛試験期間中。様々な教科の課題が山のように出て、ぼくなんて自由な時間などほとんど作れなかったというのに。

そのわずかな時間を、ぼくは趣味の読書に当てている。今もその時間なのだ。別に試験が余裕だから読書してるとかそういうことじゃなくって、息抜きとしての行為だということをお忘れなでね。ぼくの学力について無駄に期待されても困る。

「何を言っているんだ秋。むしろ試験前だからこそ、こういった計画作りがはかどると言うことだよ！」

「……まあ、言ってることは分かんなくもないんだけど」

つまりは現実逃避、ということか。

でも一昨年、去年と二年連続で主席のジエームズだ、ぼくのような普通の人間が考えるような現実逃避ではないのだろう。余裕が故の自由時間、ということか？ 凄いなあ。

「……でも、これ、相当大変だよ……単純に考えて、僕らでホグワーツにある全部の部屋や廊下を回らなきゃいけないし、この横に書いてある魔法だって、きつと凄く複雑だよ……」

「だからこそ、楽しいんだろ？」

ジエームズが邪気の欠片もない笑顔を浮かべた。

う、と、先ほどの台詞を言ったピーターは苦笑いで黙り込む。

「まあ、出来なくはないかもね。僕たちまだ3年生なわけだし、卒業するまであと4年もある。ジエームズやシリウスの行動力なら、完成も

夢じゃないよ。魔法だって、秋がいるんだ。僕たちがやって出来ないことは、多分世界中の誰がやっても、出来ないことなんじゃないかな」
リーマスが、ジエームズの青写真を見ながら呟いた。ジエームズはぼくを見て、真剣な顔で尋ねる。

「秋。この魔法、実現可能だと思ukai?」

ぼくは思わず黙って、小部屋にいる全員の顔を見渡した。そして目を瞑り、小さく息を吐いて、心を定める。

「出来ると思うよ、ぼくらなら」

ぼくらだったら、何だって出来る。

そう確信してしまう程度には、ぼくらはまだ幼く、若く、向こう見ずなほどに真っ直ぐだった。



決闘だと?

よく言うよ、この状況で。

これは決闘などではない。

これは——拷問だ。

「……………」

既に足に力が入らなくて、ぼくは冷たい地面に崩れ落ちた。両手すらも付けずに、全身をあらかた打ち付ける。

霞む視界の中、ぼくはリドルの姿を探すと、必死に顔を上げた。左手の杖をリドルに向ける。

「まだ逆らうんだ? いい加減諦めてもいいだろうに」

「……………っう!」

左手に鈍い衝撃。魔法で杖ごと吹っ飛ばされたのだ。リドルは転がったぼくの杖を拾うと、指先でくるりと弄び、ぼくに向けた。

思わず目をつぶって、両手で頭を庇う。

頭を、背中を、足を、全身を、鞭で叩かれるような痛みが走る。身体を丸めて痛み能耐えた。

「早く気でも失ってくれないかな? 君は所詮、ハリー・ポッターを誘

い出すための餌に過ぎない訳だし」

「……なん、だと……!?!」

「あれ、聞こえてたんだ？ 言った通りだよ。大好きな弟、アキ・ポッターが攫われた。なら、絶対に君の兄であるハリー・ポッターはやって来る。未来の僕の力を奪った奴を、僕はこの手で罰することが出来る！」

狂ったように笑うリドルを、ぼくは睨みつけた。

「ハリーの元には、行かせない……！ ハリーには、指一本たりとも触れさせないっ！」

瞬間目の近くに攻撃が飛んで来て、ぼくは反射的に目を閉じる。

リドルの楽しげな笑いは止まらない。

「反撃しないのかい、アキ・ポッター？ このままじゃなぶり殺しにされるだけけど」

一体どうやって反撃すればいいのだ、と言い返そうとして、背中に重い一撃が入り、息が詰まった。再び地面に叩きつけられる。

記憶相手に、実体がない相手に、どうやって戦えばいいんだ？

こちらからの攻撃は、何一つ通じない。全てがリドルをすり抜けていく。

しかしリドルからぼくに攻撃を仕掛けることは可能なようで、流石はリドルの夢の中、だ。お膳立ての舞台がぼくに不利過ぎる。

何か、何か反撃を。

「……？ ああ、壁でも壊そうとしたのかな？ 杖もないのによくやるね。ここが僕の記憶の中じゃなかったら壊れてたんだろうけど、残念だったね」

「……………っ、う……………」

倒れたままのぼくに、リドルが近付いてくる。

避けることも出来ないまま、ぼくはリドルに乱暴に髪の毛を掴まれ、顔を上げさせられた。

「アキ、君の負けだよ。幣原秋のそっくりさん？」

「ぐ……………」

ダメだ。ぼくが、リドルを止めないと。

ぼくがハリーを守るんだ。

ぼくが……。

しかし、強固な意志とは反対に、視界はどんどん黒に塗りつぶされていく。

「……ははっ、弱いんだあ、アキ・ポッターって」

リドルの歪んだ笑みと哄笑を感じながら、ぼくは意識を落とした。



アキ・ポッターが意識をなくしたのを確認してから、僕、トム・リドルは、掴んでいた彼の髪の毛を離した。

そのまま笑いながら立ち上がると、両手を広げた。

「あっはっは、あははははははは!!!」 かの有名な幣原秋を自称するから、どの程度かと思えば、所詮はこんなものか！ ヴォルデモート卿の前には恐れるに足らぬ存在よっ!! あはははははははははは!!!」

しばらく心行くまで笑ってから、僕は床に倒れている少年を見た。現れた時は綺麗だった黒のローブは、今は埃に塗れている。

一つに縛られた髪の毛はぐしゃぐしゃで、ぱつと見では人間なのかすら判別が怪しい。

「ふん……」

「幣原直と幣原アキナはね、君が殺したんだよ」

「……………っ!」

ふと思いついて、腹が立ったので、ボロ雑巾のようになっていた少年を蹴飛ばした。

アキはそのまま床を数メートル滑り、ぐったりとしている。衝撃で、うつ伏せだった身体は仰向けとなり、その顔がじつくりと望めるようになった。

艶やかな黒髪。白い肌。幼くも整った顔立ち。基本的に日本人めいた造りながらも、肌の白さといったところが西洋人めいている。

直とアキナの息子、幣原秋。日本人とイギリス人のハーフと考えたら、ぴったり嵌る容姿だ。

だが、彼は幣原秋ではない。

幣原秋の名を騙った、偽者だ。

幣原秋。

直の息子であり、未来の僕の前に強敵として、立ち塞がった男。

ホグワーツ卒業後、異例の成績で闇祓いの試験に合格。ヴォルデモートに並び立つとも言われるほどの、情け容赦のないその力で、何人もの死喰い人をアズカバン送りにしてきた、『黒衣の天才』。23歳の若さでこの世を儚み、自殺。

ジニー・ウィーズリーに調べさせたところだと、未来の僕は11年前、ハリー・ポッターによって倒されたらしい。それなら殺しておこうかな、なんて軽い気持ち。未来の僕のために敵討ちを、なんて積極的な理由じゃない。実際はただの暇潰しだ。

僕が作って、僕が自分自身を閉じ込めた。孤独と退屈という地獄に。

50年振りの刺激だ、満喫しない訳にはいかないだろう。

しかし……。

「仮にも幣原秋を名乗るんだったら、もう少し骨のある奴でいてよ、アキ。退屈過ぎてあくびが出ちゃうよ」

肩を竦めた。

さて、そろそろ記憶の世界を抜けて、50年後の世界へ行こう。1年弱を掛けてジニー・ウィーズリーから搾り取った魔力は、記憶でしかない僕を実体化させるほどの量になっている。

ここに転がっている少年に、もう用はない。彼の兄であるハリー・ポッターをおびき寄せるための餌の役割はもう十分だし、出来るなら出会って手合わせを願った幣原秋とは別人だ。

さて、と、この世界を壊すために、僕は右手を伸ばした。

途端、どこからともなく激しい風が吹き抜けて、思わず僕は身体のバランスを崩す。

何だ、と周囲を見渡して――

「……まだ動けたんだ」

アキ・ポッターは、ふらふらと身体を起こし、立ち上がった。小さく咳き込み、左手で口元を拭う。

十分痛めつけたのに、その怪我で立ち上がるとは。その度胸に敬意を示し、僕は両手を広げると、アキに向き直った。

「ちよつとは君を見くびってたようだね。その心意気だけは評価してあげよう。敬愛する兄、ハリー・ポッターを命を賭して守ろうとするその心意気だけは……」

最後まで言い切ることは、出来なかった。

気が付いたら、僕は地面に倒れ伏していた。

「……………つが、あつ!?!」

頭が割れるように痛い。いや、頭だけではない。全身が軋む。

声が出ないほどの痛みが、全身を包んでいた。

「何っ……………」

アキは、立ち上がった姿勢からちつとも動いていない。

アキの髪がそよそよと動くその流れから、まだ風が吹いていることに気付いた。

ふと、目を閉じていたアキが、目を開けた。辺りをゆつたりと見渡すと、ゆつくりと頭を振る。

ぐしやぐしやだった頭に触れると、頭の後ろに両手を回し、一つに括っていた髪を解き放った。ふわり、と黒い髪が宙に舞い、やがて重力に従って落ちる。

一つ一つの仕草が、確かに、先ほどまでのアキ・ポッターとは違っていた。

「……………き、君は……………」

「ああ、ちよつと待ってね。髪くらい結ばせてよ、せっかちななあ」

声は、先ほどのものと変わりない。声変わりする前の、幼く高い、少年の声。

しかし、アキ・ポッターではないと、感覚がそう訴えていた。

『彼』は髪を括り終わると、ふう、と息をつき、僕を見た。

「なるほどね。君がトム・リドルか。なかなかぼくの身体をめつたため

たにしてくれたじゃない？ 大分重傷みたいなんだけど。結構痛いんだけど」

すつ、と、『彼』は左手の人差し指をついっと上げた。途端に一瞬で、『彼』が纏っている埃塗れのローブが新品のように変わる。『彼』の顔についた擦過傷も、無かったかのように消えた。

「トム・リドル。未来の君には随分と因縁があつたもんだよ。……うふふ、でも、君本人と会うのはこれが初めてだね。いや、二度目かな？ まあいいや。ぼくにとつて、君って何だろうね？ 父さんと母さんの敵？ 可愛い部下の敵？ それとも……親友の敵かな？」

「君は、誰だっ！」

僕の声に答えずに、『彼』は左手を広げて僕に向けた。それだけで全身への痛みが増す。内臓を圧迫される痛みに、堪らず咳き込む。口の中に血の味が広がった。

「思い込みが激しいタイプなのかな？ クールな見た目とは違って。随分引っかかりやすい」

軽く、『彼』は僕に近寄ると、僕のすぐ脇に座り込んだ。僕の無様な姿を鑑賞するように見た後、首を僅かに傾げる。

「……僕に、何をした……！」

「ん？ ……ああ、別に魔法対決としては普通のことをしたまでだよ。ここは君の記憶の世界でしょ？ だから物理攻撃は効かない。だつたら残りは精神攻撃。脳波に干渉するだけの、簡単なことしかしてないよ。そんな目で睨むなって。幼いなあ」

まあいいや、赦してあげようか。

そう言つて、『彼』は立ち上がる。風でふわりと、黒いローブが舞い上がった。

「幼い、この段階で切り離された君には、ぼくに對する罪はない。ぼくに對する罪は全て、君の本体が背負うべきものだ。記憶の中の引きこもりには、別段用もないしね。ぼくもこんなに早く出てくるつもりなかったしさあ。ま、今回は特別出演ということで見逃してよ監督、つて話だよな」

踵を軸にして、『彼』は僕に向かい合う。

目を細めて、『彼』は微笑んだ。

「ぼくは、君を赦そう。君の全ての罪を、ぼくは責めない。ぼくをこんなにボロボロにした恨みは、ちょっとだけあるけどね。でもそれ以外の些細な罪は、責めるに足りないものだ」

「……些細、だと……？」

霞む視界の中で、『彼』を見上げる。

僕の罪を、些細だと。

何も知らないから、そんなことが言える。確かに、『ヴォルデモート卿』として背負った罪に対して、今の僕、『トム・リドル』が背負った罪は、量的に言えば些細なものだろう。だが既に僕は人を殺め、操り、命を奪ったのだ。

それを知らずに、のうのうと。

「知ってるって言ったたら、どうする？」

静かな声で、『彼』は笑う。

楽しげに、密やかな声を上げて。

「そろそろこの世界も、飽きてきたよね。君の手間を省いてあげようか」

僕の返事も聞かずに、『彼』は左手を真上に上げた。途端にギンツと音を立て、世界が崩れる。現れたのは、懐かしい秘密の部屋。

『彼』は興味深そうに辺りを見回すと、少し遠くで倒れているジニー・ウィーズリーを視認し「まあ、生きてるならいいや」と軽く呟いた。

こいつは、誰だ。

アキ・ポッターとは全く異なる雰囲気。先ほどとは桁違いの魔力。

はっと、思わず目を見開いた。

まさか——

焦る気持ちのまま、声を振り絞り、叫んだ。

「……誰だ、お前は！」

「……ふふ。ぼくはね……」

答えずに、『彼』は笑った。そして——ふ、と、糸が切れたかのようにその場に崩れ落ちる。

同時に、解放されたかのように、激しい痛みがすつと引いた。思わ

ず『彼』の元に駆け寄るも、ただ気を失っているようだった。

「……………っ」

本能的に、恐怖した。背筋を、ぞつと悪寒が走る。

寒気がした。

きつと、彼は――

「ジニー!?!」

背後で、ハリーの声が聞こえた。はつとして後ろを振り返る。

「ジニー、お願いだから目を覚まして」

ハリーはジニーに駆け寄ると、ジニーの身体を抱き起こし揺り動かす。

アキをもう一度見て、小さく息を吐いた。

そして顔を引き締めると、アキに踵を返す。

動揺した心を隠そうと顔に不敵な笑みを浮かべ、僕はハリーに一步踏み出した。

「その子は目を覚ましはしない」

第33話 秘密の部屋

長かったテスト期間も、本日で終わる。

最後の試験科目は薬草学だった。

もう夏も近いのか、教室の大きな窓からはさんさんと日差しが差し込んでいる。窓際の生徒は、試験中だと言うのに、眠たそうにうとうとうとしている。ぽかぽかした陽気に、ぼくも集中力が徐々に途切れてくる。

試験が終わると、皆がほっとしたような顔をした。一気にざわめき、各々自由に教室から出ていく。

これからはもう授業らしい授業もないし、後は夏休みまでのカウントダウンだ。

ぼくは早めに自分の荷物を片付けると、早足でセブルスの元へと駆け寄った。

「セブルス！」

「秋じゃないか。ちよつと待ってくれ」

セブルスはぼくに穏やかに微笑むと、鞆に筆箱を突っ込み立ち上がった。

「今から時間、大丈夫？」

「ああ、別に予定は何も入ってないが……」

「じゃあ、今から小部屋に行かないか？ 君にも見てもらいたいものがあるんだ」

そう言うと、セブルスは若干迷ったようだった。だが小さく息を吐くと、「分かった。久しぶりに顔でも出してみるか」と頷く。

「しかし、僕に見てもらいものとは何なんだ？」

「うん。えつとね、今ちよつとした企画が持ち上がったんだ。それがさ、結構複雑な魔法みたいで……君の意見も聞きたいなって」

「ほう？ それは興味をそそられるな。君が『結構複雑な魔法』と言うのだから、それは難しいのだろうか」

「買いかぶり過ぎだよ。ぼくはそんなに凄い奴じゃない。ただちよつと人より魔力が多いだけの、ただの学生だよ。君やリリーやジエーム

ズの方が、成績だって何だって凄いじゃないか」

セブルスは大きいため息をついた。何だか……呆れている？ ような雰囲気は漂っている。

「君は本当に自己評価が低いな。僕もリリーも、ポッター達だって皆認めているというのに……肝心の本人が問題だな」

「一体何の話をしてるんだい、セブルス？」

首を傾げると、セブルスは目を伏せ「……いや、何でもない」と呟いた。

「……しかし、新しい企画とはどんなものなんだい？」

「それはね……」

そんな話をしているうちに、小部屋についた。合言葉を唱えた後中に入ると、中にはジェームズ、そしてリリーがいた。ジェームズとリリーと一緒にいるのは珍しい、と思わず目を見張る。リリーはどちらかと言うと、リーマスやピーターとよく一緒にいるから。うるさいのは嫌いだとよく言っていたし。

「あらか秋。セブルスも今日は来たのね、久しぶり。試験お疲れ様」

「ああ。君こそお疲れ様」

セブルスの表情が、ふと緩んだ。セブルスはリリーを見ると、よくこんな優しい表情を浮かべる。この僅かな表情の変化が分かるようになったのも、結構最近のことだ。ひよつとしたらセブルスも気付いていないかもしれない、セブルスのリリーに対する心情も。

その時、ガチャリと背後でドアが開く音がした。振り返ると、入ってきたのはシリウスだった。シリウスはセブルスを見て、若干眉を顰める。

シリウスは何故か、セブルスと仲が悪い。相性が合わないのかもしれない。その理由はぼくにはよく分からないけど……。

「ジェームズもシリウスも、お疲れ様」

ぼくがそう挨拶をすると、ジェームズは笑顔で「お疲れ」と返してくれたが、シリウスは軽く会釈をするだけだった。そんなシリウスの反応に、セブルスもむっとしたように眉を寄せる。

「さて、じゃあ試験も終わったことだし、これから本格的に忍びの地図

作成に取り掛かりますかーっ！」

ジェームズが楽しげにそう言つて手を叩いた。重苦しかった雰囲気
気が、それで僅かに晴れ上がる。

「本格的に取り掛かるって、すぐに夏休みが来るんだぜ。そう進むと
は思わないがな」

「何を悠長なことを言っているんだシリウス！ 時は止まってはくれ
ないんだぞ？ なあ、秋？」

「えっ？ あ、まあ、そうなんじゃないかな」

唐突に話を振られ、ぼくは曖昧に頷いた。ふん、とシリウスは鼻を
鳴らすと、面倒臭そうに椅子に体重を預ける。

シリウスが不機嫌な理由、それは、セブルスががいるからだろうか。
「所詮はスリザリン生だ。俺達とは分かり合えない存在だ。人殺しの
ヴォルデモートを是とし肯定する。そんな奴を俺は、仲間とは思わな
い」

「秋。俺は、セブルス・スネイプを認めない」

以前彼に言われた言葉が、脳裏に蘇る。

何故だか、嫌な予感がしてきた。ここにセブルスを連れてくるべき
ではなかったのかもしれないと思う。セブルスとシリウスを、向かい
合わせてはならない、そう、ぼくの中で何か警報を鳴らしていた。

ジェームズが、ホグワーツの見取り図を広げた。ぱつと見は前と同
じだが、ところどころ描き込まれている部屋が増えている。試験中に
もホグワーツ探検は継続していたのか、と、ぼくは呆れながらも感嘆
した。

「他にも分かるところは、是非とも描き込んでくれないかな。秋はレ
イブンクロー、そしてセブルスはスリザリンだろ？ 寮の位置とか内
部とかも描き込んでくれたら、一気に作業が進むんだけど」

「いいよ」

ぼくは快諾したが、セブルスは迷っているようだ。グリフィンドー
ルとスリザリンの溝は、こんなところにも存在するのか。少し悲しく
なりながらも、ぼくはレイブンクロー寮の間取りをあらかた描き終わ
ると、「はい」と羽根ペンをセブルスに渡した。反射的にセブルスが受

け取る。はつとぼくを見るセブルスに小さく頷くと、セブルスは仕方ないなどでも言うように軽く笑って、描き込み始めた。

「へえ、スリザリン寮って、学校の地下にあるんだね」

「ああ。日の光は差し込まないがな。隠し部屋みたいで、僕は嫌いじゃない」

さらさらと、見取り図が描き込まれていく。まだ地図は全体の三割ほどしか完成していないが、この調子だと来年中には出来るだろう。

「いやー、二人がいて助かったよ。おかげで随分と手間が省けた」

「ジェームズ、ちよつといいか」

「うん？ ……あ、いや。 ……別に今じゃなくてもいいだろう、シリウス」

「いや、もう我慢できない。決定的に無理だったんだよ、俺らは。もう必要なことはやってもらったし、いいじゃねえか」

シリウスとジェームズが、何やら話している。何のことは分からないが、少なくとも、楽しい話ではなさそうだ。

やがてジェームズは、シリウスの説得を諦めたようだった。力なく息を吐くと「 ……分かった」と呟き、荷物を纏めて出て行ってしまった。

「秋にエバンズ。君らも、良かったら出て行ってくれないか？ 俺はスネイプに用事があるんだ」

シリウスの言葉に、ぼくはリリーと顔を見合わせた。そして揃ってセブルスを見る。セブルスはぼくらを見ずに、じつとシリウスを見返していた。

「ちよつと、ブラック!? どういうことよ、今から何を ……」

「分かった」

リリーの言葉を遮り、ぼくは立ち上がった。「行こう、リリー」とリリーを促すと、勝手にリリーの荷物を取り上げ、出口へ向かう。

「 ……悪いな、秋」

シリウスの傍を通った時、シリウスはそう呟いた。ぼくは目を伏せ、何も答えずに外に出る。

「秋っ！ どういうことよっ、今から何が始まるの？ 秋！」

やがて、リリーが追いついてきた。リリーの鞆を渡すと、顔を上げ、リリーを見返す。リリーはぼくの表情から何かを察したらしい。

ぼくらは重苦しい雰囲気のまま、お互い別れた。



バジリスクの牙を掴んだまま、大きく右手を振りかぶると、僕はそれをリドルの日記帳のど真ん中に突き立てた。リドルの絶叫が秘密の部屋中に響き渡り、日記帳からはインクが、まるでリドル自身の血のようにどくどくと吹き出てくる。リドルは身悶えし、その場でのたうち回ると、やがて姿を消した。リドルが持っていた僕の杖が、リドルが今までいた位置にカランと落ちると、カタカタと音を立て、やがて止まった。

乱れた呼吸そのままに僕はしばらく自失していたが、やがてゆっくと立ち上がった。地面がまるでスポンジのように、ふわふわとして頼りなく感じる。そんな状況の中、何かに導かれるように、僕はアキの元へと駆け寄った。

「アキっ！」

倒れているアキのそばに崩れ落ちるようにして駆け寄ると、両手でアキの肩を掴み揺すった。少々乱暴だが、そんなことに構っていられるような状況ではない。このままアキが目を覚まさなかつたらどうしよう、そんな不安が胸の中をよぎるも、幸いにしてアキはゆっくと目を開けた。

「あれ……ハリー？」

「……っ、良かった……！」

思いのまま、僕はアキを抱き締める。アキは何が起こったのか分からないというように目を白黒させていたが、ゆっくりと僕の背中に腕を回し、僕を安心させるかのように優しく背中を叩いた。

「じゃあ、終わったんだね？」

「ああ……終わったんだ」

全部、終わったんだ。

アキは穏やかな声で、「助けに来てくれて、ありがとう」と、僕に告げた。



「ジニー！生きてたのか！夢じゃないだろうな！いったい何があつたんだ？」

あれだけ分厚そうに見えた石の壁は、いまやもう一人くぐれそうなくらいの大きな穴が開いていた。感極まったロンがジニーを抱き締めようとしたが、ジニーはしゃくりあげ、ロンを拒否する。ロンはちよつとだけ寂しそうな顔をしたが、「でも、ジニー、もう大丈夫だよ」と笑いかけた。

「アキも、よく無事で……よかった」

「うん。心配かけてごめんね。助けに来てくれてありがとう。でもまあ、まさかアキが来てくれるとは思ってなかったけどね」

アキはそう言うと、アリスに悪戯っぽい目を向けた。そんなアキにアリスは「ありがとうって涙ながらに言ってもらってもいいんだぜ？」と鼻で笑う。

「そう言われると言いたくなくなるよなー！」

「言つてろ、馬鹿」

この二人も相変わらず、二人独特の友人関係を築いているみたいだった。これはこれでいいのだろう、少なくとも、当人同士は納得しているみたいだ。

「ロックハートはどこ？」

ロンに尋ねると、ロンはにやつと笑って後ろを顎で指した。

「あつちの方だ。調子が悪くてね。来て見てごらん」

導かれるままロンについていくと、そこには、ロックハートが鼻歌を歌いながら、大人しくそこに座っていた。

「記憶をなくしてる。『忘却術』が逆噴射して、僕たちでなく自分にかつちやつたんだ。自分が誰なのか、今どこにいるのか、僕たちが誰

なのか、チンプンカンプンさ。ここに来て待つてるように言ったんだ。この状態で1人で放っておくと、怪我したりして危ないからね」
ロックハートはニコニコしながら僕たちを見上げると、「やあ、なんだか変わったところだね。ここに住んでいるの?」と屈託無く尋ねた。

「ここまで来ると憎めないよなあ」

アリスがそう呟く。うんうん、とアキが頷いた。

僕は、秘密の部屋に来るために通った道、上に伸びる長く暗いパイプを、屈んで見上げた。

「どうやって上まで戻るか、考えてた?」

ロンは首を横に振る。するとその時、僕らの話を聞いてたようなちよほどのタイミングでフォークスが飛んできて、僕らの目の前で羽を優雅に揺らした。長い金色の尾羽を、まるでつかまれと言っているように振っている。

「つかまれて言ってるように見えるけど……でも鳥が上まで引つ張り上げるには、君は重すぎるな」

ロンも同じように捉えたらしい。困惑した顔でフォークスを見つめていたが、僕ははっとした。

「フォークスは普通の鳥じゃない。皆で手を繋がなきや」

「フォークスがぼくらを引つ張り上げるんだ? 凄いね」

アキが無邪気に声を上げた。そして僕に、そつと右手を差し伸べる。意図を理解して、僕は剣と組み分け帽子をベルトに挟むと、アキの手を取った。

全員がちやんと掴まったのを確認すると、僕はフォークスの尾羽をしっかりと掴む。全身がふわりと浮いた感覚がして、気が付くと既に浮いていた。人間を数人引つ張っていることを感じさせない速さで、フォークスは空気を切つて進んでいく。ロックハートが「すごい! まるで魔法のようだ!」と驚く声が聞こえた。

やがて僕らは、『嘆きのマートル』のトイレに降り立った。僕らが出て来ると、秘密の部屋の入り口を塞ぐ役目をしていた手洗い台が、元の位置へと戻っていく。

誰かの視線を感じて振り返ると、そこにはマートルがいた。

「生きてるの」

ポカンとした顔つきで、マートルは僕らを見渡した。

「そんなにがっかりした声を出さなくてもいいじゃないか」

小さく肩を竦めると、マートルは僅かに頬を染めたようだった。

「ああ……わたし、ちようど考えてたの。もしあんたが死んだら、わたしのトイレと一緒に住んでもらったら嬉しいって」

何を言われたかよく分からなくて、僕は曖昧に頷いた。アキが楽しげに、僕の脇腹を肘で小突く。

「モテモテだね、ハリー」

「モテて……るのか？ 甚だ疑問なんだけど」

トイレから出て暗い人気のない廊下に立つと、フォークスが先導するかのようスイーツと飛んで行った。その後ろについていくと、やがてマクゴナガル先生の部屋の前に出る。

振り返ってアキを見ると、アキはこくりと頷いた。柔らかく微笑んで、僕の背中を後押しする。

アキに頷き返して、僕はマクゴナガル先生の部屋をノックした。

第34話 友情

結局、シリウスとセブルスは決別したらしい。仕方ない、と言われれば、確かに仕方がないのかもしれない。

シリウスの実家はスリザリン気質で、シリウスはそれに猛反発しているということ、後からジエームズに教えてもらった。一家全員がスリザリン出身の中、シリウスだけがそれに逆らうようにグリフィンドールに入ったのだという。シリウスが生まれた家はかなり有名な名家で、その直系の長子がグリフィンドールということは、ブラック家にとっては相当な衝撃だったそう。

そんなシリウスと、スリザリン寮所属のセブルスは、最初から相容れない存在だったのだろう。むしろ、よく『保もった』というべきなのかもしれない。

犬猿の仲だとは思っていたが、そんな事情があつたとはさっぱり知らなかった。

ぼくには遠く及ばない、知らない世界の話、そんな気分させられる。

ぼくは無力で、何も出来なくて、全ては終わった後で――

本当に？

本当に、ぼくは何も出来なかったのか？

何かをすることは、出来たんじゃないのか？

全てが終わる前に、何かを為すことが、本当は出来たんじゃないのか？

ただ、やろうとしなかっただけで。

出来ないと思いつつもとただけじゃないのか？

分からない。

全てが終わってしまった今、全てはただの夢物語で、ただの夢想だ。

「で、君はどうしたいんだい？」

ジエームズがそう尋ねた。

「君とエバンズは、ただただ僕のがままで連れてきただけだ。このグループに、明確な名前はない。目的もない。だから秋、抜けたかつ

「たらいつでも抜けていいんだよ」

ジエームズ達には、『悪戯仕掛人』という明瞭な名前がある。それに対してぼくらが加わった後は、すっかりとした名前もない、ふわふわとしたものだった。

でも、グループに名前なんて必要なのか？ そんなにしつかりとした拠り所がないと、集まることは出来ないのか？

「そんなことはないさ。ただ強制力はない。『悪戯仕掛人』では僕が一応のリーダー的な役割を持つてるけど、このグループはそんなものはないし、必要もない」

ぼくはただ、皆ですつと一緒にいたかっただけなんだ。それだけだったんだよ。

「知ってるよ、秋」

ジエームズは僅かに笑った。

「秋。最初も言っただろう？ 僕は君と、友達になりたいだけなんだって」

友達。ジエームズは確かにそう言った。

ぼくはこれから、どうすればいいんだろう？

そう尋ねると、ジエームズは困ったように眼鏡の奥の目を細めた。

「それは、君が決めることだよ」

ジエームズの言う通りだった。ぼくはいつも、行動の理由を誰かに求める。

そろそろ、自らの意志で歩き出さなくてはいけない。

進む方向くらいは、自分で決めなくてはいけないんだ。

「君がやりたいようにやればいいんだ。君の人生は、君のものなんだから」

ぼくがやりたいこと。

ぼくが求めるもの。

ぼくは――

「ぼくは、ぼくが好きな人たちと、ずっと一緒にいたい」

左の手を、ぎゅつと握り締めた。

「守られるんじゃないくて、ぼくが、守りたい」

今まで散々守られてきた。

セブルスに。リリーに。ジェームズ達に。

居場所がなかったぼくに、ここにいていいんだと言ってくれた。

悪意から、ぼくを守ってくれた。

それはとてもありがたい行為で、感謝しても仕切れない。

でも、もう守られてばかりではいたくない。

ぼくにだって、皆を守る力くらいはあるはずだ。

「君の好きにするといいよ、秋」

そう言ったジェームズの口調は、暖かかった。



全ての真相をハリーがダンブルドア先生とマクゴナガル先生に説明した後、ぼくとアリスはハリー達と別れ、レイブンクロー塔に向かった。

途中、宴会へと向かうパジャマ姿の学生に何度か遭遇し、そのたびにぼくらは軽い英雄扱いをされた。ぼくもアリスも、そんな扱いには慣れていない。肩を竦め通り過ぎるだけで精一杯だ。

「宴会に参加しなくていいのか？ お前、そういつた行事ごと大好きだろ」

「流石に今回はね。ダンブルドア先生にも伝えたし。それよりいいの？ アリスは」

「興味ないな」

「そ」

あらかたの人間は、宴会が始まる大広間へともう行ってしまっている。人気がないレイブンクロー塔を昇り、ぼくらは寝室へと辿り着いた。

「……っ、……あつた」

やはりというべきか、幸いに、というべきか。

自分の机の上に、無造作にリドルの日記の数ページが置いてあることに、小さく息を詰めた。

ハリーが壊した日記帳。しかし、そのページは、今も尚、ぼくの手元に存在する。

引き出しからインク壺と羽根ペンを引っ張り出すと、震える手で羽根ペンにインクをつけた。

『リドル?』

そう疑問符付きで書き込むと、インクは一瞬だけ光って、やがて吸い込まれるように消えた。しばらく、祈るような気持ちで待つ。

やはり、本体が壊れた以上、こちらも効力を失ったのか? そう不安になり始めた頃、やつと日記帳は『何?』という返事を書いて寄越した。ぼくは思わず目を見開くと、アリスと顔を見合わせる。

『なんでもない』

急いでそれだけ書き込むと、ぼくは日記帳のページを折り畳んだ。乱暴にポケットの中へ突っ込む。

「燃やさなくていいのか?」

アリスが、ぼくにそう尋ねた。

「……分かんない。捨てた方がいいのかもしれない。けど……」

なんとなく、捨ててはいけない気がした。

「ほう? で、第二の秘密の部屋が開かれるってか?」

「そんなヘマはしないよ。そんなことさせやしない。……何となく、持っておいた方がいいって思ったんだ。……いや、そうじゃないな」

ぼくはゆっくりと頭を振った。

「捨てちゃダメだって、誰かが言ってる。そう……これには罪がないんだから、赦してあげようって」

「赦し、だあ? お前はいつからそんなに偉くなったんだよ」

「だから、ぼくじゃないって……」

アリスは眉を寄せたが、「まあ、お前がそう言うのなら、俺は止めねえけどよ」とため息と共に呟いた。

第35話 私の世界、あなたの世界

足音に、リリーと二人で目配せをした。そして、二人で息を詰めて数秒待つ。自分の心臓の鼓動がうるさく聞こえてしまうほどの静寂と興奮の中、ぼくらは二人で「わっ！」と叫び、セブルスの目の前に飛び出した。

「うわあっ!？」

単純だが効果のある悪戯に、セブルスは見事驚いてくれたようだった。その場から固まって動かない。

悪戯の成功に二人で手を叩いて喜んでいると、やがて、セブルスはあつ、と大きなため息をつき、頭を押さえた。

「……秋、リリー。君らはちよつと、あいつらに影響され過ぎやしないか？ リリーはともかくとして、秋までが乗るとは思ってたなかったよ」

「何を言ってるんだいセブルス！ ぼくはそんなに大人しい子じゃないよ」

「やっぱり私の見立ては正しかったのね！ 秋、ノリノリで乗ってくれたわよ。やっぱり持つべきものは良き友！ よねー」

セブルスが1人の時に物陰に隠れ、脅かす。言葉で書けばこんな十数文字で表せてしまう程度の行動だが、これを実行するのは案外難しい。まずセブルスを1人で、人気のない廊下に誘導すること、そしてそれを先回りして待つということ。タイミングもかなり重要だ。セブルスの目の前に急に現れないと、驚きも半減してしまう。

リリーはその点、とても優秀な仕掛け人だった。さすが、セブルスの幼馴染なだけはある。セブルスが「昔のリリーはすごくやんちゃで……」と苦い口ぶりで語るのが、少しだけ理解できたほどだ。

「それで？ これからどんなコンボが待っているんだ？ 爆竹がパンパン鳴りながら後ろから迫ってくるのか？ カエルが無限に増殖して部屋を溢れ返らせるのか？」

「あれ？ 私、そんなことしたっけ」

「したんだ！ 勝手に忘れられちゃあ困る」

ぼくはリリーと顔を見合わせた。リリーが可愛らしくウインクをする。そんな可愛らしい外見とは裏腹に、一体何をやっているんだ君は。

「今回は本当にあれで最後の悪戯か？ まだ続きがあるんじゃないだろうな」

「やだなあ、あれだけだつて。そんなに警戒しないでよ」

「ふん、どうだかな……リリーとずっと一緒にいて、警戒しなくなる方がおかしいんだ」

どれだけリリーに悪戯されてきたんだ、セブルスは。

「セブルスが悪戯されそうな顔してるからなんじゃない？」

「どんな顔だー！」

「そんな顔よ、セブ」

ぼくとリリーは顔を見合わせてクスクス笑い合った。セブルスは言い返そうと何かを言おうとしたようだったが、諦めたように肩を下ろす。

「大広間では悪戯仕掛人がまだ何やらやってるみたいだが、君らはいいのか？ 行かなくて」

「別にぼくら、悪戯仕掛人じゃないしね。セブルスとリリーとこうして三人でいる方が、ぼくは好きだな」

「そうそう。やっぱりこの三人じゃないとねー」

そう言うぼくらに、セブルスはちよつと驚いたようだった。ぼくらを交互に見た後、ふつと表情を和らげ「君らは……」と呟く。

「私達が離れていくとも思ってた安心してたんでしょ。残念でした、私達はセブのことがだいすきだから、いつくらセブが望んでも離れてなんてあげませーん」

「まあ、三人とも察が違うのにわざわざ一緒にいる辺り、離れる気なんてそうそうないよね」

そう、これは、ぼくが出した結論。

ぼくと、リリーとセブルス、この三人の友情ほど手放したくないものは、ぼくにはない。

これこそが、ぼくが守りたいもの。

そう、胸を張って言える。

「……ありがとう」

セブルスが小さな声でそう言った。ぼくらは笑顔で、それに応える。

「よし、じゃあネタばらししましょうか！」

リリーが大きな声でそう言った。きよとん、とするセブルスの前にぼくは出ると、にやつと笑って赤く長い、リリーの髪の毛みたいなカツラを外す。その下に現れた黒髪を見て、セブルスはぽかんと口を開けた。同時にリリーが、まるでぼくの髪のような黒髪のカツラを外すと、ぼくの隣に並んだ。杖を取り出し、一振りで声を元に戻す。

「……あー、うん。やっぱり自分の声がしっくりくるよ。自分の喉からリリーの声が出てくるなんて、なんか妙な感じ」

「私はむしろ、自分が喋ってないのに自分の声が聞こえることの方が変に感じたわ。それにしても秋、スカート似合うわね」

「ぼくとしては早く着替えたい限りなんだけどね……すぐく心許ないんだけど、これ。女の子はいつもこんなに不安な気持ちで一杯なの？」

「うーん、慣れれば別に何ともないんだけどね。そうだ秋！ 今度本格的に女装させてよ。あなた目は大きいし睫毛長いし、すっごく可愛くなると思うの！ いや、今も可愛いんだけどさ！」

「全力で断る！」

果然とぼくらを見ていたセブルスが、ようやつと「な……なっ!?」と我に返ったように後ずさった。ぼくら二人を交互に見た後、もう一度「……はあっ!?」と叫ぶ。

「き……君ら、いつの間に!?」

「ん？ 一番最初の、セブを脅かす前から」

「で、でも……た、確かに君らは体格も似てるし、身長も同じくらいだし……で、でも目の色とかは!?」

「カラコンって言うのが、今女の子の間で流行ってるの」

「声は!?」

「流石にそれは魔法を使ったんだ。結構魔法式を組むの、苦労したん

だよ?」

息を呑むセブルスに、ぼくら二人は笑顔で、声を揃えて言った。
「悪戯成功!」



学期末の試験がなくなったことに、学校中が歓喜に沸いた。普通なら試験期間真っ最中の筈なのに、ぼくら生徒は一足早い夏休みが来たとばかりに全力で遊びほうけている。

ついこの前まで寒さが抜けなかったのに、夏が訪れ、この英国に、ホグワーツに焼けるような暑さを振り撒き始めた。

中庭の木陰で、僕は芝生の斜面に寝転んでいた。闇の魔術の防衛術の授業が中止になったため、この一コマはぼくたちレイブンクロー生にはありがたい空き時間だ。さっきまで読んでいた分厚い本を枕に、ぼくは空を眺める。

雲の動きが早い。風が芝生をさあつと駆け抜け、鳥がすつと空を横切った。

「アキ」

「うわああっ!?!」

視界が銀に覆われた。それが何かを理解するのは、頭より身体が早かった。

ぼくの運動能力では驚くべきと表現出来るほど早く、ぼくは身体を起こして振り返る。

「あ……、アクア」

長く真っ直ぐな銀髪。小柄で華奢な体躯。きっちりと留められた制服には、スリザリンのカラーであるグリーンが、あらゆるところに刺繍されている。

アクアも、ぼくの咄嗟の動きに驚いたらしい。ぽかんとぼくを見ていたが、やがて口を開いた。

「……びっくりした」

「あ、ごめん……えと、まあぼくもびっくりしたし、おあいこつてとこ

ろで。で……」

辺りを見回した。

「……え、と。何か用？」

「……用ってほどじゃ、ないんだけど。あなたと話したいと思って」
ほう。嬉しいことを言ってくれるじゃないか。舞い上がってしま
いそうだ。

「スリザリンは、授業は？」

「……さつき、早めに終わったの。薬草学の授業。もう、2年生で習う
範囲は終わっちゃったからって。……あそこで寝てるのはアキかな
？」と思つて、来てみたの」

アクアはその場に、スカートの皺を気にしつつ座った。

……あー、もうね、なんだか分からないけどとりあえず嬉しいね。
心が温かくなるっていうの？ アクアがぼくの視界の中にいるって
だけで、何だか浮き足立ってきてそわそわする。

「……無事で、よかった」

「あはは……ありがとう」

言葉に困つて、頭を掻いた。ぼくはただ、巻き込まれただけなのだ。
ハリーをおびき寄せるためにリドルが使った、囿の役割。

あれだけ散々ぶちのめされたのに怪我一つしていなかったのは、流
石夢の世界だから、というべきだろうか。

「……それと。あのね。フィスナーの件、ありがとう」

「え？ ……あ、ああ……別に、ぼくは何もしてないよ」

笑つて頭を振る。ぼくはただ、思いのままに二人に対して思いをぶ
ちまけたただけだ。関係を修復させたのは、間違いなく二人が互いに
歩み寄ったから。

「……でも、きつかけを与えてくれたのは、あなたよ。ドラコもあなた
には感謝してた。お礼が遅くなって、ごめんなさい」

「そんな、お礼だなんて。いいよ、アクアのその言葉だけで、ぼくは十
分だよ」

むしろ、そこまで心を配ってもらえるアリスがむしろ羨ましいほど
だ。

「ドラコは？ 最近落ち込んでるって、風の噂で聞いたけど」

「ああ……別に、放っておいて大丈夫よ。アキが気にすることじゃないわ。ドラコのお父様が、ホグワーツの理事長の職を辞された、それだけのことよ。校内を威張って歩けないのが不満みたい」

くすくすとアクアは笑った。僅かに彼女の頭が揺れ、銀髪が日の光に当たってキラキラと輝く。

やがて、お互いの間を沈黙が流れた。でも、この沈黙は嫌なものじゃない。穏やかで、何だか暖かい。なんとなく、ずっと一緒にいたいと思う。

「……ねえ、アキ」

「……ん？」

アクアは、僅かに不安げな表情で、ぼくを見上げた。

「あなたは、この世界が好き？」

「え……」

思わず、アクアを見返した。ごくり、と唾を飲み込む。

アクアはどうして、そんなことを訊くのだろう。

この世界とは、何を指しているのだろう？

「そうだね、好きか嫌いかって言われたら、迷い無く好きって答えられるくらいには好きかな、ぼくは。ぼくが大好きな人たちが一杯いるこの世界が、ぼくは大好きだよ」

物言いたげに、アクアの瞳が揺れた。

今のぼくの答えは、正解だったのだろうか。それとも間違えてしまったのだろうか。アクアの表情から、それは読み取れなかった。

「……アキは、優しいわね」

「そうかな？ ぼくは、自分の思う通りに生きてるだけだよ」

くすりとアクアは柔らかに微笑む。

「……私も、大好きな人たちが一杯いるこの世界は、大好きよ」

第36話 巡り合い

「……君の親は、また来るのか？」

何故かそわそわとするセブルスに、ぼくは首を傾げつつも「多分来ると思うよ」と答えた。

ホグワーツ特急のコンパートメントにて、ぼくはセブルスとリリーと一緒に、最後の時を過ごしていた。

ジェームズやシリウスたちとはコンパートメントどころか車両間で結構離れているので、向こうで何があっているのか分からないが、多分いつも通りの大騒ぎが起こっているのだろう。そう想像して、思わずくすりと笑った。

リリーは、ぼくの微笑みを別の意味に解釈したようだ。笑って「セブは、秋のお母さんのことが好きなのよねー」と言うと、セブルスの肩に腕を回す。

「なっ、何を言うんだリリーー！」

「ごまかさなくてもいいわよ。幼馴染の目は確かっ！ 初恋が人妻だなんて、セブもなかなかやるわねえ！」

「セブルス、ぼくのお母さんのことが好きなのかい？ それは初耳だったなあ。でもごめんね、うちの両親は仲がいいから……」

「君も本気にするんじゃない、秋！」

セブルスが頬を赤らめる。その反応が物珍しくて、ぼくはリリーと顔を見合わせて笑った。



「お帰り、秋！」

母が笑顔で手を広げるのに、ぼくは素直に飛び込んだ。ぎゅつと優しく抱き締められ、自然と笑顔が零れる。

「ただいま！ 母さん」

キングズ・クロス駅に着くと、父と母はぼくを待っていてくれた。父も「お帰り」と笑顔でぼくの頭を撫でる。

「さーて、セブルスくんとリリーちゃんはどこかな？ 秋」

「あそこだよ」

指差すと、笑顔で母は二人に近付いて行き、「二人ともお帰りー！」とセブルスとリリーを抱き締めた。リリーは嬉しそうな笑顔を浮かべて母を抱き返したが、セブルスは顔を真っ赤に染めてされるがままでいる。

その様子が面白くてぼくは声を上げ笑ったが、父はちよつとだけ不満そうだった。多分、母を取られた気分でのだろう。全く、未だに子供っぽい人だ。

ふと、金髪の女の子が目に入った。お母さんらしき人の手を握ったまま、母に抱き締められているリリーをじっと、睨むように見つめている。

あの子には見覚えがあった。一年の頃にリリーと一緒にいた女の子だ。ということは、リリーの姉妹か。

リリーの家族は、確か全員がマグルだ。その中で一人、自分だけが魔女であることを、そして姉と離れることになってしまったことを、密かに気に病んでいる。

この子が、リリーの姉か。

視線に気付いたか、彼女がぼくに目を向けた。じっと睨みつけるような視線に、吸い込まれそうになる。

「じゃあね、二人とも、元気でね！」

そう言って母は二人から離れた。その瞬間、彼女はぼくから目を逸らし、ぱつとお母さんの後ろに隠れてしまう。

ぼくの父が、リリーの両親に気付いてそちらに歩くと、二言三言言葉交わす。

彼女はちらりと顔を覗かせると、再びぼくをじっと見つめた。ぼくも黙って彼女を見返す。

「秋、行くよー」

そう言われて、はっと我に返った。

「じゃあ、また学校で！」とリリーとセブルスに手を振ると、彼女に目を向ける。彼女に向けて小さく手を振ると、向こうも気付いたよう

で、驚いた表情を見せた。

「さあ、帰ろうか、秋」

父がそう言つて、ぼくに左手を差し出す。

頷いて、ぼくは父の手を掴んだ。



楽しい時は、いつだつてあつという間に過ぎていく。

終了式（と言う名の宴会）で、リイフが本日付けでホグワーツを離れ、元の通り魔法省内閣の王室警護任務に戻るらしい。最後にもう一度会つてみたいと思つていたけれど、女子生徒の嘆きがハンパじゃなかったので、こりや無理だと判断した。今日の夜は、リイフの部屋に引つ切り無しに女子生徒が訪れることだろう。

アリスはほつとしたような惜しいような、複雑な表情をしていたが、アリスの元にもリイフのファンの女の子が押し寄せてくるようになり、大変辟易しているようだった。アリスの元に女子がこんなに集まるなんて、珍しいこともあるもんだ。そう面白がつて見学していたら、凄まじい勢いで睨まれた。これを期に、アリスも社交性を持つてもらいたいと思う。

今日は、ホグワーツ特急に乗つて家に帰らなければならない日だ。また、あのダースリー家での悪夢のような日々が始まるのか。そう思いながら憂鬱げに、昨日詰め込んだ荷物をコンパートメントに運び込む。

「アキ、手伝うよ」

そう言つて手を差し伸べたハリーの手を、ぼくは笑顔で取つた。

やがて、汽車が動き出す。ハリーやロン、ハーマイオニー、フレジヨの双子にジニーと一緒にコンパートメントは、退屈という二文字の存在すらも疑うほどに楽しかった。

魔法が使える最後の数時間を存分に楽しもうと、「爆発ゲーム」をしたり、双子が持っていた花火をしたり、魔法で武器を取り上げる練習をしたり。ハリーはめつきり武装解除の呪文が上手になつていて、感

嘆するばかりだ。

途中で、ぼくらのコンパートメントにアリスが入ってきた。

アリスは最初こそ、このコンパートメントの騒々しさに引いていたが、フレッドとジョージの双子に「騎士様のお出ましたー!」「フィスナー卿ー!」ともみくちやにされるうちに、どうでもよくなつたらしい。双子は、人を楽しい気持ちにさせる魔法を持っている。すばらしい魔法だ。

アリスが、トイレに行く、と言って席を立つと、ちらりとぼくに目を向けた。察して、二言三言喋った後にぼくも立ち上がる。

コンパートメントの外で、アリスはぼくを待っていた。そのままぼくを見ないまま、アリスは足を進める。

デッキに出ると、風が顔面を直撃した。衝撃に反射的に目を閉じて、ゆっくりと目を開く。

風景が、猛スピードで流れていく。アリスは鉄柵にもたれたまま、流れる木々をじっと見ていた。

アリスの金髪が、風に掻き回されてあちこちへと飛び回る。アリスの左耳についた雪印のピアスが、煽られてキラキラと舞った。

「……前、ぼくに手紙が来たんだ。『アリス・フィスナーに近付くな』ってだけ書かれた手紙」

アリスが、ふとぼくを見た。

ぼくは意地の悪い笑顔を作る。

「あれ、君が出したんだろ?」

「……性格悪いな、お前。そういうのは察しても言わねえってのがセオリーじゃねーの?」

アリスもぼくを見て、にやりと笑った。

「ホントに意味わっかんねー奴だな、お前」

「そうでもないよ、君の友達なんてやってらんないよ」

風が想像以上に強い。髪を押さえて、ふと目を上げると、木々の間に海が見えた。アリスも「おっ」と声を上げ、二人でそちらを無言で見つめる。

「お前、夏休みうちに来ないか?」

「アリスの家には？」

「ああ……その、な。親父、今まで働きすぎだ、少しは家族を大事にしろーってんで、この夏休み一杯休暇をもらったらいいんだよ。でも……」

「アリスと二人じゃ間が保たない、と。で、話し相手にぼくが？」

「ま、簡単に言やあそんなもんだ。勿論、お前が良ければの話だが」

アリスの提案に、ぼくは少し迷った。

と、その時、新たな声加わった。

「行っておいでよ、アキ」

慌てて振り返ると、そこにはハリーが、何もかも了解している、という顔で笑っていた。

「あんまりにも君たちが遅いからさあ、ひよつとして何かあつたんじゃないかーって、僕が探しに来たってわけ。全く、ジニーもいるってのにフレッドとジョージったら『ひよつとしたらフィスナー卿×アキ殿下の秘められた恋が！』『主従関係に対する反逆行為ですな！下克上とはいい響きだ！』なんて盛り上がっちゃってさあ、早く帰ってこないと、更にエスカレートしちゃうよ」

「……双子が何を言ってるのかいまいちぼくには理解できないんだけど、まあそれは置いて、だ」

人間同士を掛け算して、一体何が楽しいのだろうか？　そもそもどうやって掛け合わせるのだろうか。まあいいや。

「行ってもいいのかい？　ハリー」

「ああ。行っておいで。僕は大丈夫だから」

そんなこと言われても、あのおじさんおばさん達の中にハリーを一人残すのは不安で仕方がない。

アリスも、ぼくの家の事情は理解している。「アキの兄貴、お前もアキと一緒にうちに来れば……」と言いかけたのを、ハリーは笑顔で制止した。

「僕ら二人とも行っちゃったら、いじめる相手がいなくて、それはそれでおじさん達が怒るでしょ？　だからアキ、君一人で行ってらっしいい」

それでもぼくが不安げな目を向けると、ハリーは優しくぼくの頭を撫でた。ぼくよりもずっと大きい、それは、『兄の手』だった。

「お兄ちゃんを、信じなさい」

ハリーがふと、遠くを見つめた。眩しそうに目を細め、微かに微笑む。

ぼくも振り返ると、ハリーの目線を追った。アリスが天を仰ぎ、息をつく。

「綺麗だな」

珍しくも、アリスが感嘆の声を漏らした。

吸い込まれていきそうなくらいの、蒼く澄み切った空。

その色を中心に焼き付けようと、ぼくは目を見開いた。

アズカバンの囚人編 第1話 フイスナー家

日本にあるぼくの実家は、閑静な片田舎にある。

辺りを見渡しても人家はなく、あるのは山と川ばかり。そんな自然に囲まれて、ぼくは生まれ育った。

小学校の友人達の家は、山を下った地域に点々と散らばっていた。ぼくが十一歳まで通った小学校は自宅から数キロ離れた場所にあり、子供の足では少しきついくらいだった。小学校はとても小さく、一年生から六年生までの全学年の子供が同じ教室で学んでいた。

父と母は大体家にいた。父はいつも、傍目からはよく分からない小物を弄っては書き付けたリ、屋上に出て星を眺めては何やら占ったりしていた。母は庭で草花を育てたり、近所の人と交流しては困りごとに手を貸したりするのが好きなようだった。

両親が家からあまり離れたがらないから、旅行には一度も行つたことがない。二人の口から親族の話は聞いたこともないし、祖父母とも一度も会つたことがない。きつともう亡くなって久しいのだろう。

ホグワーツやダイアゴン横丁があるイギリスと、そして日本とを往復する日々。

どこかに行きたいと思つたことはない。この狭い世界でも、ぼくは十分に幸せだった。

——後に、全て理解した。

両親の行動の意味も、真意も、そして思惑も。

理解した時には、何もかもが遅かった。

初めは小さな違和感だった。

ぼくの朝は早い。まだ薄暗くて肌寒い早朝は、この世界に自分しかないかのようにシンと静まり返っている。世界の全てを独り占め

している感覚が、ぼくは結構好きだった。

両親が起き出してくるまではまだ時間がある。親孝行とでも称して朝食でも振る舞ったら、二人は喜んでくれるだろうか。

……ううん、ぼくにできるかな？ 紅茶を淹れたりパンをトーストしたりするくらいなら問題ないけれど、目玉焼きを焼いたりスープを作ったりとかは少し不安だ……魔法薬学の授業で大鍋を火にかけてたこともあるし、目玉焼きくらいなら……どうかなあ？

頭の片隅でそんなことを考えながらも、服を着替えると髪を梳かして一つに括る。部屋の窓を開け放てば、ふわっと冷気が飛び込んできた。

七月。夏真っ盛りの筈なのに、それでも朝方はまだ冷える。昨日ホグワーツから戻ってきたばかりということもあり、日本の気候にも少し慣れないものがある。

「……と。そう言えば」

ふと思いついて、ぼくは部屋の隅にちんまりと置かれたトランクに近付いた。トランクはホグワーツから持ち帰ってきた時のまま、まだ開かれてすらいない。

どの授業も夏休みの宿題が山のように出ているものだから、早めに手を付けておかないと後から苦労する羽目になる。折角早起きしたのだし、山の一角でも削っておきたい。

トランクの蓋に手を掛ける。しかしいくら弄つても一向に開く気がない。あれ？ と思わず首を傾げた。

……これ、こんなに固かったっけ？

もしかしたら、輸送中に何かの拍子でぶつかって留め具の部分が壊れてしまったのかもしれない。だってホグワーツで荷造りをしている時は、当たり前のようにスムーズに開け閉めできていたのだから。

……やれやれ、仕方ない。

手で開けるのを早々に諦めたぼくは、机に置いていた杖を手にとった。

幸運なことに、ぼくは魔法使いだ。次の秋ではホグワーツの四年生となる。OWL試験を再来年に控えた今、日常で使う呪文は基礎の基

礎、目を瞑つても扱えなければ。

家の外で魔法を使つちやダメだとは言われているけれど、今は家の中。父の結界に守られた範囲内だし、ちよつとくらいなら良いか。

「修復せよRepair」

トランクに杖を向け呪文を唱える。杖先から呪文の光が迸った直後、トランクは音もなくその口をパカリと開けた。ホッと胸を撫で下ろしては杖を下ろす。

目を瞑つても扱える魔法——それはそうなのだけれど、とは言えぼくの場合だと少々事情が違っていたりする。

なにせ、何の因果かぼくが生まれ持った魔力は他人の数十倍、数百倍だと言うのだ。人とどのくらい違うのか比較したことはないものの、それこそ魔法を学びたてだったホグワーツ一年生の頃はよく魔力の暴走を引き起こしていた。ホグワーツで魔法を勉強して丸三年、もう魔力の制御は手慣れてきていて滅多なことでは暴走なんて起きないものの、それでも魔法を使う時はいつも少し気を遣う。

その時、ふと頭の中で声が響いた。

《見つけた》

ハッと辺りを見回せば、開いた窓の外にいた鴉がじつとこちらを見つめているのに気が付いた。ぼくと目が合った瞬間、鴉はパツとその場から飛び立ってしまう。

……今の声は一体誰のものだ？

鴉が喋った……訳ないか。魔法使いの中には動物の言語を解する者もいるらしいが、ぼくにそんな能力はない。もし言葉が分かるのなら、ここまで動物に嫌われることもないだろう。

——与太話はともかくとして。

《見つけた》と、確かにそう聞こえた。

一体何を見つけたのだろうか。

それとも、ぼくが——何かに見つかったのだろうか。

何となく嫌な予感がして、ぼくはしばらく息を詰めて窓の外を窺っていた。しかし、世界は至つて静かなものだ。朝の穏やかな陽射しと

風は、普段と何も変わらない。

……ぼくの気のせい、だったのかな？

幻聴だったのかもと考え出すと本当にそんな気がしてくる。風の音が奇妙な感じに響いて人の言葉のように聞こえたのかも。いきなり妙な声がしたというよりそちらの方が納得が行く。

気味の悪い違和感を覚えながらも、ぼくは立ち上がると開いていた窓をそっと閉めた。



驚くべきことに、我らが親愛なるバーノンおじさんとペチュニアおばさんは、ちゃんとキングズ・クロス駅でぼくとハリーを待っていた。そんな彼らに「友人の家に夏休み中宿泊することになったのでぼくはダーズリー家には帰らない」なんてことを言うのは忍びないなあ……とは、残念ながら微塵も思わない。むしろ一人残していくハリーのことが気掛かりで、ぼくはアリスの家にお世話になる旨をぱつと報告した後は、ひたすらおじさんおばさんに対してぼくがいない夏休み中のハリーの扱いをこんこんと説いていた。

三食きちんとご飯を与えること、買い物のおつかいでいいから毎日外出させること。お仕置きと称して部屋に監禁なんてもつてのほか。

そんな基本的な人権すら守られないというのであれば児童相談所へソーシャルサービス駆け込むぞと脅しつければ、おじさんおばさんは忌々しい目つきでぼくを睨みはしたものの、最後には了承してくれた。口が回るクソガキが面倒な知恵を付けやがってとでも思っているのだろう。

ハリーには毎日『羊皮紙』で連絡をする旨を伝え、最後にもう一度抱き合っしてしばしの別れを惜しみ合う。少し離れた場所で待つてくれているアリスの元へと駆け寄ると、アリスはどことなく神妙な顔でぼくを見下ろした。

「……お前んち、ヤベエな」

「ヤベエっしょ。ひとまず釘はぶさぶさ刺しておいたから一旦は大丈夫。さ、行こうか。ライフさんはどこだろう？」

ライフはぼくらより一日早く、先にホグワーツから去っていた筈だ。魔法省から来たお役人は、流石に生徒と同じ汽車では帰さないだろうし。

「駅の外で待つてるつつつた。大体いつもそうだよ、ここいらはマグルも多いしな」

そう言つてアリスは駅の出口へと歩き出す。なるほどなと頷きながら、ぼくもその後ろに続いた。

今日のキングズ・クロス駅は、気を抜けば人の波に押し流されてしまいそうなほどに大勢の人間でごった返している。通勤・通学のマグルに加え、今日はホグワーツから帰ってくる学生と、その学生を迎える家族もいるのだ。

特に今日のホグワーツ生は荷物が多いから、余計に混雑して見える。そう考えると、出口で待っているライフは頭がいい。

「ま、だからこそ俺は去年、父親の寄越した迎えに見つかることなく姿を眩ませた訳だがな」

アリスがニヤツと悪どい笑みを浮かべて呟く。

……前言撤回。ライフは自分の息子の性格をもう少し把握して行動するべきだ。

ライフつて割と懲りないんだよな……息子に二度も長期間家出されてんなよ……。

「そーいや聞いてなかったけど、アリスは去年の夏休みはどこで寝泊まりしていたの？」

「ん？ ああ、ちつと昔お世話になつてた人のトコに転がり込んだり、後は公園や教会や、店の軒下借りたこともあつたかな」

息子本人が望んだことではあるのかもしれないけれど、ライフも息子にホームレス同然の生活を送らせちゃいけないと思う。養・育・責・任！

「真冬じゃなくて良かったとは思うよ……」

「そーうだな、真冬だったらせめて屋根は欲しいもんな」

誰が屋根の有無の話なんてするか、馬鹿アリス。

……こいつ滅茶苦茶良い家柄の坊ちゃんじゃなかったっけ……マ

ジで屋根がないところで寝泊まりしてたのお……？

そんなアリスの言う通り、駅の出口ではアリスの父親リイフ・フィスナーがぼくらを待っていた。

ホグワーツで目にしていた煌びやかで豪華な魔法省の制服とは正反対の、カジユアルでラフなワイシャツにジーンズ姿。短い金髪に碧の瞳、すらりと恵まれた長身に、俳優だと言われたら素直に信じてしまうほどに整った顔立ちを持つリイフは、相変わらず周辺の人々の視線を独り占めしているようだった。

リイフはぼくらの姿を認めて「よっ」と爽やかな笑顔と共に右手を上げた。少し苦い顔をしたアリスは、それでも律儀に「おう」と頷く。この親子独特の距離感に含み笑いをした途端、アリスに軽く背中をどつかれた。無駄に鋭い奴め。

「おかえり……何もないか。ついこの前までホグワーツで会っていたのだしね。アキ、来てくれて嬉しいよ」

「いえ。こちらこそ、お招きいただきありがとうございます」

笑顔で答える。目を細めたリイフはぼくの頭を軽く撫でると「向こうに車を停めているんだ」と手招きした。

「へえ。魔法使いでも車を運転できる人っているんだね」

魔法使いの移動手段といえば第一に『姿あらわし』だ。学校の外で魔法が使えない未成年魔法使いがいる家庭は『煙突飛行粉』か『移動キー』が主に使われるのだと、去年アーサーおじさんから聞いたことがある。

そもそもマグルの文化に疎い魔法使いだって多い中、わざわざ運転免許を取ってまで自動車を移動手段として使う人がいるなんて。そんな物好きはアーサーおじさんくらいなものだと思っていたよ。ま、アーサーおじさんが持っていたあの車は運転免許があれば運転できるような代物ではないだろうが。

「あのなあアキ、俺の母親はマグルだぞ？ お前が想像してるほど、ウチは魔法魔法してねえっつの」

「ああ、そっか」

そうだった、アリスのお母様は非魔法族なのだった。しかもリイフ

は普段仕事で家を不在にしがちとくれば、自然とマグルの生活スタイルに寄って行くのかもしれない。

でも、アリスの家は《中立不可侵》と呼ばれる魔法界有数の名家だ。マグル界の中流階級に位置するダーズリー家とは、やはり結構違うんじゃないだろうか。

そんなことを考えながらも、ぼくはリイフに促されて車（黒のスーツ系高級車で、確かに浮いたり消えたりする仕掛けはなさそうだ）の後部座席に乗り込んだ。

ちなみに言えば、てつきりリイフが運転してくれるものと思っていたぼくは、運転席にごくごく当たり前のように運転手が座っていたことに思いつきり肩透かしを食らったのだった。あー、ですよねー。ちえつ。

車を降りてフイスナー家を見た途端、ぼくはポカンと口を開けた。

豪奢で細やかな飾りがあしらわれた門扉に、その奥には綺麗に刈り込まれた植え込みからなる広い庭が広がっている。広大な庭の中央には噴水が設置されて、色と季節のバランスを揃えた花々がなんとも優雅に咲き誇っていた。そのまま続いた先にはクラシカルで優美な、まさに『お城！』と言いたくなるほどの邸宅。

これってこれってもしかしなくても。

「……アリスってやつぱりお坊ちゃんなんだなあ……」

想像以上のお屋敷に、庶民歴十二年のぼくはひたすら恐縮するばかりだ。ご貴族様、こえー。

アリスはぼくが驚いている理由がどうにもピンと来ないようだった。育った環境というものは恐ろしい。極々当然のように門の扉を開けると（まあそりや、自分の家だし）「ほら、入れよ」とぼくの肩を軽く押した。

……ぼくとしては、家の庭に石畳が敷いてあるということも、庭に噴水があるということも、庭だけでプリベット通りがまるつと入りそうなことにも驚愕なんですけど。

そう言うとアリスは不思議げな顔で「でもマルフォイやお嬢サマの家はもつとでつかいぞ?」と平然と言い放った。思わず目が回る。マジですか。

……ぼくって、学校で物凄い人達と仲良くさせてもらっていたんだなあ……。

庭に敷かれた石畳を歩いて屋敷を目指す。屋敷の入口前で立ち止まったリイフは、懐から鍵を取り出すと古めかしい錠前に差し込んだ。

カチャリと音が鳴ると共に、解錠の魔法陣が一瞬浮かび上がる。魔法で鍵が掛けられているのだ。年季が入った音で扉が開き、いよいよフィスナー家の中身が露わになった。

真つ暗な屋敷の中は、まるで何年も不在にされていたようにしんと静まり返っている。一對の階段は左右対称に配置されていて、ホールを広々と見せていた。高い天井には予想通り、豪華なシャンデリアが飾ってある。

ぼくが人生初のお屋敷に胸をときめかせていた時、隣から低い声が聞こえた。

「なあ親父様よ」

「なんだい我が息子よ」

「庭師はちゃんと雇っていたみたいだが——家の手入れは、一体誰がしてたんだ?」

「怒らないで聞いておくれ、我が息子よ」

「心配するな、もう怒ってる」

「すまん、忘れてた」

広いホールに足を踏み入れたアリスは、そのまま勢いよく振り返った。アリスの動きに合わせるように、暗闇にキラキラと光るものが……まあ、十中八九埃だろうね……。

リイフに指を突きつけ、アリスは叫んだ。

「ふぎげんな、このバカ親父っ!!」

第2話 彼の命の顛末、その一つ

夕暮れと朝焼けを切り取ったような世界の真ん中に、その階段は聳そびえている。

階段は果てのない夜の帳を映した青褐色あおかち。頭上に朝焼け、足下に夕暮れを認めつつ、僕はひたすら階段を上っていく。

階段は幾千、幾万、永遠にも連なっていて、行く道のぼるは幾重にも枝分かれしているものの、不思議なことに帰る道くだるは一本道だ。

——否。元は、沢山の道があったのだ。

枝分かれし、回つては、途中で進めなくなった細い道。人の力では飛び越せない空虚が立ち塞がっていて、先へ進むことを諦めた道。光が眩しすぎて辟易し、引き返した道だって。

選ばなかった道はやがて、静かに確かに廃れて行く。結果、後には一本の道しか残らなくなる。

階段を上る僕の周囲には、花の冠毛のような仄かな光を放つ球が、幾つも幾つも漂っている。その球は映写機のように未来の場面を虚空に投影していて、僕が望めばより鮮明な情景を見せてくれる。

少し歩き疲れた僕は、息を吐いてその場に座り込んだ。途端に光の球が数個寄ってきて、他人の未来を勝手に垂れ流してくる。興味ない他人の人生を視たところで何にもならない。手を振り光を追い払ったところで、少し離れた場所で瞬く暗黒の光に気が付いた。

暗褐色の血液に似た色合いのその光は、まるで心臓のように脈打っている。

この光が誰のものか、僕は知っている。

しばらくじつと光を見つめた後、僕はゆるりと光に手を伸ばす。光は手の中で何度か瞬いた後、パシヤンと弾けて虚空に消えた。

静かに立ち上がり、僕は歩みを再開する。無限に連なるように思えた階段は、しかし途中で途切れていた。崩壊した階段からは深淵が覗いている。

ああ、と小さな声が、肺腑の奥から零れ出た。

なるほど、ならば。そうでしかないのであれば。

彼の友として、僕が為すべきことは。

「秋にだけは——僕の最愛の息子にだけは、手を出させてなるものか」
秋が幸せでいられるなら、僕は他に、何もいらぬのだから。

「直さん、直さん。大丈夫？」

アキナの声が耳に差し込む。そこで意識が覚醒した。

ハッと目を開ければ、愛する妻、アキナが心配そうに僕の顔を覗き込んでいた。どうやら魔されていたらしい。心臓は全速力で走った直後のように早鐘を打ち、前髪は寝汗に濡れている。

身を起こし、震える手で水の入ったグラスを『呼び寄せ』る。一気に煽ると目を伏せた。意識を集中させて気配を探る。二階の子供部屋で眠っているであろう秋の気配を探知し、何事もなく無事であることに安堵した。

「ぶめん……起こしちゃったかな」

誤魔化すように笑ってみせるも、アキナは僕を案じる眼差しを崩さない。昔から、僕の嘘を何でも見抜いてしまう人だった。

「夢を見たの？」

アキナの温かい手が頬に触れた。伝わる温もりに、思わずため息をつく。

「……アキナ。驚かず、聞いてくれ」

アキナの手に自分の手を重ねる。彼女の目を真っ直ぐに見つめ、僕は静かに告げた。

「どうやら僕は、殺されるみたいなんだ」



聞くところによると、どうやらライフはホグワーツへの赴任が決まった頃合いで「屋敷に誰もいなくなるから」と使用人のほとんどに暇を出していたらしい。そして見事に呼び戻すことを忘れたまま、夏休みに突入してしまった——と、そんなところか。

慌てて連絡を入れたものの、使用人にもそれぞれ生活がある。今日明日になんて集まる筈もない。いや、お貴族様の強権を発動させれば即座に馳せ参じるのかもしれないが、そんなことはしなくていいとアリスが首を振ったため、使用人の皆様には各々のタイミグで戻ってきてもらうこととなった。

という訳で、ぼくのフィスナー家での最初の仕事は『屋敷の掃除』だった。

「客人に掃除をさせるだなんて！」と反対したリイフに「寝る場所だって埃塗れなんだぞ！ 今更貴族ぶんな阿呆！」とアリスが一喝。ぼくもこれまでのダーズリー家での生活で磨きに磨かれたこの掃除のスキルが生かせるならと快諾し、今に至る。

……いやしかし、この屋敷は本当に広い。親子二人暮らしだということを考えてと間違いなく持て余すだろう。

一人で一体何部屋使えばいいのやら。中には住み込みの使用人のための部屋もあるらしい。うーん、お貴族様だ。常識が違うぜ。

一年弱の間で積もった埃や汚れは中々の強敵だ。使用人が戻ってくるまでの間、ひとまず生活する上で最低限の場所——台所や寝室、居間や玄関など——のみを重点的に掃除することとなった。

こと掃除や炊事といった家事全般に関して言えば、リイフよりアリスが数枚、数十枚上手だった。アリスは普段面倒臭がり屋な癖に、こういうところは凄く細かい。

まあぼく自身も日頃から若干潔癖なきらいがあるので（幣原に影響されているのかもしれない、あいつも実はペチュニアおばさんと張れるくらいの潔癖症だし）アリスの細かさには割と共感を覚えている。拭き掃除を終えたぼくは、使い終わった雑巾を手に広い廊下を歩いていた。

……どうして個人の家の廊下なのに自動車がすれ違えるほど広いのだろう。ダーズリー家の廊下なんて、人がギリギリすれ違えるほどの広さしかないんだぞ。バーノンおじさんとダドリーの組み合わせの場合、すれ違うことすら厳しいんだぞ。

その時、一つの扉が開いているのが見えた。誰かいるのかなと中を

窺う。

ちよつとした物置のような部屋だ。テーブルや本棚といった家具類から、古びた箒、幼い子供の遊び道具のようなおもちゃ（もしかして幼い頃のアリスが使っていたのだろうか）と想像してみたものの、うまくイメージできなかつた）、本や雑誌や衣装やら、いろんなものが雑多に積み上げられている。アリスが見たらマジギレしそうだな。

「おや？ アキじゃないか」

視界の隅で何かが蠢いた。と思うと、やがてゴソゴソとガラクタの山からリイフが這い出してきた。

シャツもズボンも埃に塗れて衰れたことになっている。どれも上等な仕立てだろうに、気の毒なことだ。……思い返せば、リイフの机の上はいつも汚かつたなあ……。

「リイフさん、その格好のままアリスの前に出ないでくださいよ」

「おや、本当だね。しかしあいつは少し細かすぎると思わないかい？

一体誰に似たのやら」

「少なくとも、リイフさんじゃないと思いますけどね」

恐らくリイフは反面教師だろう。

そんなぼくの内心を気にもせず、リイフは「ちよつとこっちに来てくれないか？」とぼくを手招きした。見ると、リイフの手には何かが握られている。

近寄ったところ、それは写真のようだった。リイフから手渡されたその写真に、ぼくは深く考えずに目を向ける。

瞬間、思考が止まった。

「秋は写真を撮られることが好きではなかったからね。あまりないんだ、あいつの写真。どうだい、君にそっくりだろうか？」

写真の中の幣原は、夢の中で見る彼よりずっと大人びていた。ホームパーティーか何かだろうか。服装もホグワーツの制服ではなく、黒のクラシカルなローブを纏って柔らかく微笑んでいる。

幣原の隣には今よりも若いリイフの姿があった。夢の中のリイフと今のリイフ、その中間くらいだろうか。幣原の肩に手を回しては、楽しげに笑っている。

「アキ。君は幣原秋について、何か知ってるようだったね」
気付けば、ライフがぼくの顔をじつと覗き込んでいた。碧の瞳に
灯る真つ直ぐな意志の光に、ぼくは思わず息を呑む。

「——かつての光。魔法界の仮初の英雄『黒衣の天才』幣原秋。彼がこの世を去ってもう十年になる。当時の熱狂ぶりが嘘のように、彼は時代の闇に埋もれていった。彼について書かれた本もないし、彼を知る当時の者も須く語る口は重い。マグル界で生まれ育った筈の君が、幣原秋の存在を知っているのは不自然だ。……でも、君は彼の存在を知っていたね」

「……ええ、知ってますよ」

口の端を吊り上げぼくは笑った。

この辺りでライフに伝えるのも悪くない。それに、ぼくもライフには聞きたいことがある。

ぼくの『夢』の話を、ライフは静かに聞いていた。ライフは相変わらず聞き上手だなあ、相槌を打つタイミングが絶妙だ。

語り終わったぼくの顔を、ライフはどこか困惑した表情で見返した。

「……不思議な話だね」

「全く、その通りですが」

「君の夢のことを知っているのは？」

「ある程度いますよ。アリスだって、ぼくが『幣原秋』の夢を見てるところとは知ってますし。でも意味を本当に理解しているのは、ライフさん、あなたで三人目です」

スネイプ教授とダンブルドア校長、そして——ライフ。

「……幣原は死んだと聞きました。自殺だと」

「……ああ。私も調べさせてもらったよ。遺体の血液、歯型、指紋、全て本人のもの一致した。間違いはない」

淡々と答えるライフだったが、その表情は沈んでいた。友人の死の状況を語っているのだから無理もない。

その傷口を抉るような真似になってしまうけど——それでもどうしても、ぼくはライフに聞きたかったことがある。

「幣原が死んだ理由に、心当たりはありますか？」
今度こそはつきりと、リイフは苦い顔をした。

——当然だ。この質問はあまりにも、不躰で配慮に欠けている。
でも、リイフは優しいから。

他人の好意までも計算に入れた。この問いでリイフが気分を害しても構わないとすら思った。

それほどまでに、ぼくは理由を知りたかった。

幣原秋が、この世界に見切りをつけてしまった理由を。

「……先程の話を聞く限り、君は秋がまだ四年生の時までしか知らないんだったね」

「そう……ですね」

「なら、その後のことについて、私が知っている限りのことを話そうか。……どうせセブルスは、何も喋らなかつたのだろうか？」

よく分かっているらしい。

何度探りを入れても、教授は一切口を割らなかつた。ぼくの夢の状況をただ聞くだけで、これから未来がどうなるか、一言たりとも口にしなかつた。

何も知らないなんて、ありえないだろうに。

幣原のことを語るたび、教授の瞳に懐かしむ以外の感情が浮かぶことをぼくは知っている。憎しみとも愛しさともつかぬ、執着の色。

「秋とセブルス、この二人が親友同士だったことは私もよく知っている。加えてグリフィンドールのリリー・エバンズ——ハリー・ポッターと君の母親か——と、三人で一緒にいることが多かったことも。

君達の関係が明確に変わったと僕が気付いたのは、確か七年生の頃だった。秋とセブルスが正反対の道を歩み始めたんだ。秋は闇祓いになると言った。彼の両親は『例のあの人』に殺されたから、その復讐をするのだと秋は言っていた。その言葉通り秋は闇祓いに合格して、そして——」

一瞬迷うようにリイフは言葉を切った。小さく息を吐き、続ける。

「闇祓いは魔法省の管轄だ。だから私と秋は、部署は違うものの同じ職場で働く者同士だったんだ。お互い忙しかったから、そう会えはし

なかったがね……でも忙しい合間を縫って、秋は私の結婚式にも来てくれたよ。幼いアリスを抱き上げたこともある」

へえ、それは驚きだ。いずれ夢でアリスを抱き上げる情景を見ることになるのだろうか。そんな夢を見たんじゃ、しばらくアリスの顔をまともに見れなくなりそうさだ。

……なんて、くだらないことに一瞬意識を飛ばしてみたものの。リイフの沈んだ表情に、続く言葉を察してしまう。

「秋は凄く優秀な闇祓いだ。生まれ持った膨大な魔力に加え、彼ほど魔力を精緻にコントロールできる魔法使いを私は知らない。『例のあの人』でさえも、彼と直接向かい合うのは避けたと言われていた。『黒衣の天才』——世間からはそう持て囃され、連日彼の名が日刊預言者新聞の誌面を飾っていた。きつとそれは、不利な戦況を国民に悟らせないための政府の策でもあつたのかもしれないね。」

秋は皆の希望だった。秋なら『例のあの人』を倒せるかもしれない、秋がいれば大丈夫だと、世論はそのように傾いた。その通り、彼の魔法は多くの人の命を救ったよ。……同時に、多くの敵の命を奪うことにもなった」

ねえ、アキ？ とリイフは微笑んだ。無理矢理笑顔を浮かべたような、ぎこちない表情だった。

「幣原秋はあの戦争の英雄だった。じゃあその英雄は、戦争が終わった後どのように生きれば良かったのだと思う？」

ぼくはその問いに、答えを返すことができなかった。

「稀代の英雄、時代に愛された存在。『例のあの人』に匹敵するとも評された魔力をその身に抱いた彼は、新しい時代の幕開けには不必要な、むしろ障害となる人物だった」

「……幣原が第二のヴォルデモートとなることを、恐れたんですね」

ぼくの眩きに、リイフは微かに表情を慄かせた。思えば『例のあの人』を名前で呼んでしまっていたのだった。申し訳ないと思わずリイフを窺ったものの、リイフはぼくを咎めることなく再び話を続ける。「その通りだよ、アキ。悲しむべきことに、幣原秋は誰よりも善良だった。残念なことに愚かでもなかった。全てを、彼は知っていた。周り

の思惑も、自身の罪も、何もかもに気付かないような真似は、彼にはできなかったのだろう」

それは——理解できる。

「……僕は、どうすれば良かったんだろうな」

リイフはぼつりと呟いた。

「気付いていた筈なのに、気付いてやれなかった。救えた筈なのに、救ってあげられなかった。あいつの笑顔の裏側を、僕は察することができた筈なのに——助けると伸ばされた手に、僕は気付くことができなかった。その結果が——あれだ」

思い出す。

教授が見せた新聞記事を。

『……自殺だ。ビルの屋上から、飛び降りた』

そう告げたスネイプ教授の声を、あの眼差しを、思い出す。

絶望に満ちた、あれは。

「……君にアリスのことで怒鳴られた時、まるであいつに怒られてい
るような気がしたんだ」

「あ……あの時は、無我夢中で……すみません」

「いや、いいんだ。あれで私も目が覚めた。……秋が生きていたとし
たら、あいつも君のように僕を怒鳴ったことだろう」

そう言つて、リイフは一瞬どこか懐かしむような眼差しを浮かべ
た。

その後ぼくに向き直ったリイフは、ニコリと微笑んでみせる。

「私とアリスを向かい合わせてくれてありがとう、アキ」

その誠実な声に、ぼくも素直に頷いたのだった。

第3話 親の心、子知らず

楽しい時間はいつだってあっという間に過ぎていく。一体いつの間に時間が経っていたのやら、気が付いたらもう夏休みは終わっていた。

そんなことを思うのもきつと、今年の夏は我が家にしては珍しく、いろんな場所に行ったからだろう。海水浴やキャンプ、地域のお祭りや花火大会と、楽しいがな両親にひたすら連れ回されていた。

そりゃあ楽しかったけどね？ 夏休みの課題が新学期の前日まで終わらなかったのは生まれて初めてだ。

そんな訳で九月一日、新学期。

九と四分の三番線のホームを潜り抜けると、深紅のホグワーツ特急は既にプラットフォームに停まっていた。まだ人の数は少ないものの、これからどんどん増えていくことだろう。

そんな中、乗客の中に友人、セブルス・スネイプの姿を見つけたぼくは大きく手を振った。

「あつ、セブルス！」

ぼくの姿を認め、セブルスは驚いたように目を丸くしている。夏場だというのに、セブルスは長く野暮ったいコートをきつちりとその身に纏っていた。

そう言えばセブルスの私服を見たのは初対面の時以来な気がする。あの日も確か、小柄な身体に不釣り合いなほど大きなコートを着ていたっけ。

「久しぶり。元気だった？」

「ああ、久しぶりだな。まずまずだよ」

笑みを浮かべてセブルスの元へ駆け寄った。セブルスも頬を僅かに緩め、ぼくを歓迎してくれる。

「ちよつと秋、急に走り出さないでよね。見失ったと思ってお母さん……あら？」

その時ぼくを追いかけたきた母が「アイリーン！ アイリーンじゃないの！」と明るい声を上げた。

母の視線を辿れば、セブルスのすぐ傍に佇む一人の女性にぶつか
る。セブルスとよく似た目鼻立ちをしているから、きつとセブルスの
お母様だろう。

いきなり母に話しかけられて、彼女はオロオロと視線を彷徨わせて
いる。そんな彼女に構うことなく、母は「久しぶり！ 私のこと憶え
てる？ アキナ・エンディーネだよ」と言いながら彼女の手を取った。
「私が辞めちゃってからはさっぱりだったものね。忘れられても仕
方ないかな」

「そんな……あなたみたいな人、忘れられる筈がないわ……アキナ先
輩」

彼女はか細い声で呟き首を振る。途端、母の表情がぱあっと明るく
なった。

「本当？ 嬉しい！ まさか秋の友達がアイリーンの子供だなんて
思ってたなかったわ、素敵な偶然ね！ あ、この子は息子の秋よ。セブ
ルスくん、秋といつも仲良くしてくれてるらしいの。本当にありがと
う」

「そんな……こちらこそ……」

ようやくカートを引いた父が追いついてくる。母がまた何やら暴
走していることを察した父は、少し困った顔をした。と、パツと振り
返った母は「直さん！」とキラキラ笑顔で父を呼ぶ。

「直さん、彼女のこと憶えてる？ アイリーンよ、アイリーン・プリン
ス！」

「プリンス？ ……ああ、トムの後輩か……久しぶりだね、元気だった
かい？」

「ねえアイリーン、ゴブストーンはまだやってるの？ 直さんも秋も
あんまり好きじゃないみたいで、誰も一緒にやってくれないの」

「い、いえ、もう……夫が……そういうの、あまり好きじゃなくて」
「じゃあ今度、一緒にしましょうよ！ わあ、学生時代に戻ったみたい
！」

大人組は大人組で、子供のことを放って和気藹々としている。ぼく
はセブルスに「ぼくらは汽車に乗ってようよ」と耳打ちしたが、セブ

ルスはぼくの言葉がまるで耳に入っていないらしく、目を丸くしては大人組を——特に、セブルスのお母さんを——凝視している。

「セブルス、どうしたの？」

「いや……その、母があんなに明るい顔を見せるのは珍しいと思っただけだ」

セブルスは小さく笑って視線を逸らす。その瞳に一瞬暗いものが過ぎった気がしたが——光の加減だろうか、すぐに見失ってしまった。

……そう言えば、セブルスは家族の話を全くと言っていいほどしてくれない。兄弟はいないようだが……流石に、今日姿が見えない父親のことまでは聞けないや。

「君のご両親は、不思議な力を持っているんだな」

「え？」

「人を笑顔にする力だよ」

そう言ってセブルスは笑うと、俯いた。

母とセブルスのお母さんは、学生時代にゴブストーン・クラブで一緒に活動する仲間だったらしい。

ゴブストーンというのはマグル界のおはじきゲームと同じようなものだ。枠内に置かれたビー玉を、外側から狙って弾き飛ばすという至極単純なゲームである。

魔法界ではごく一般的に認知されているゲームのようで、談話室や大広間といった生徒達が集まる憩いの場には常備してある。ぼくも何度かプレイしたことがあるものの、失点のたびにイヤな臭いの液体を吹きかけられるわ、しかもその臭いが中々取れないわで、基本的には不人気側のゲームだ。

ぼくとセブルスは先に汽車へと乗り込むと、コンパートメントでリリーの到着を待った。まだ汽車が出発してもいないのにそそくさとホグワーツのローブに着替えたセブルスは（なんとコートのすぐ下にホグワーツの制服を着込んでいた。賢い）窓の枠に肘を寄せ、プラッ

トフォームを行き交う人々をじつと眺めている。

きつとリリーを探しているのだとニヤニヤしていたら、セブルスに気付かれてしまった。

「……何だ」

「ん？ 別にー？」

「その顔を止めろ！」

「まあまあ、あ、リリーだ」

途端、セブルスは物凄い勢いで「リリー!？」と頭を窓から突き出した。その態度でよく隠せていると思えるよな。バレバレなんだよ。

赤い髪の女の子が、重たそうなカートを手に一人で歩いている。「おい、リリー！」と叫ぶと、リリーは晴れやかな表情で手を振り返しては、足取りも軽やかに近付いてきた。リリーに気付いた大人組も笑顔でリリーを迎える。

「ハアイ、セブ、秋！ 久しぶりね！」

「久しぶり、リリー！」

裏表のない明るい性格に、周囲を華やかに染め上げる明るい笑顔。セブルスが惚れるのも無理はない。

「あ、ごめん、セブルスちよつと邪魔かな、よつと」

……まあ、窓からコンパートメントに入って来るなどちよつとアクティブすぎる面に目を瞑れば、かな……。ショートカットの仕方が大胆だよ。

「あら、トランクを持ってくださるなんて、ありがとう秋のお父様！」

「いやいやこのくらい」

「リリーちゃんも久しぶり！ 君は見るたびに可愛く美人さんになっていくね！」

「あはっ、秋のお母様も若くてお綺麗なのに、嬉しいです！」

……ま、いいか。リリーだし。

「一人で来たの？ お父さんやお母さんは？」

「パパやママは、チュニーの……姉の、方に」

そう言いながらリリーは少し寂しそうな顔をした。

リリーの姉……というと、夏休みが始まる前にリリーを迎えに来て

いたご両親と一緒にいた女の子かな。……残念だ、また会えるかと思っただけだ。

その時、出発の合図の汽笛が高らかに響き渡った。ガタン、と汽車全体が振動する。

「そろそろ出発だね……行ってらっしゃい、秋」

「うん、行ってきます、母さん」

両手を広げる母にぎゅっと抱きつく。次いで父にも。母は手を伸ばすと、リリーとセブルスも一緒に抱き締めた。

「秋をよろしくね、二人とも」

ホグワーツ特急がゆつくりと動き出した。遠ざかっていく両親に、ぼくは笑顔で手を振る。

「またクリスマスにね！」

——これが今生の別れになるとは、この時のぼくは夢にも思っていなかったんだ。

深紅のホグワーツ特急がカーブで姿を消す。振っていた手を降ろしたアキナは、堪えきれなくなつたように両手で顔を覆った。肩を震わせしやくりあげるアキナに、アイリーン・スネイプは驚いて半歩後ろに下がった。

「せ、先輩……？」

「ごめんね、プリンス——あ、今はスネイプ夫人だっけ。ちよつと……いろいろあつてさ」

幣原直は、予想していたようにアキナの肩を抱いた。ニコリと柔らかく微笑んだ笑顔は、学生時代によく向けられたものと同じだ。他寮の後輩であるアイリーンにも、直はよく穏やかに笑いかけてくれた。

……そう言えば、あの人は今どうしているのだろう。

学生時代、幣原直とよく共にいた彼。スリザリン寮、いやホグワーツの歴史に残るほど優秀で、教師からの覚えもめでたく将来は官僚か学者かと期待されていた。

当時の女子生徒は誰もが彼に憧れていて、アイリーンも皆に漏れず

ではあったものの、しかし自分ではあの人に釣り合わないと思いは胸の内に秘めた。今となつては懐かしく甘酸っぱい思い出だ。

彼は今何をしているのだろう。アイリーン自身、マグルの夫と結婚したのを契機に魔法界の情報には疎くなつてしまった。

直もアキナも、アイリーンと入つた寮は異なる。それでもこうして親しみを抱くのは、二人が寮の垣根を気にすることなくアイリーンと接してくれたからだ。特にアキナはスリザリン寮と天敵のグリフィンドール寮出身だというのに、驚くほどに親切にしてくれた。

学生時代からいつも笑顔のイメージしかないアキナの唐突な涙に、アイリーンは思わず慌ててしまう。アキナは目元を拭うと、泣き笑いのような顔でアイリーンを振り返つた。

「ごめんなさい、アイリーン。一緒にゴブストーンしようねって約束は、多分、守れそうにないや……」

決意を秘めたその瞳を、アイリーンはただただ見つめ返した。



フィスナー家の敷地をジョギングペースでぐるっと二周したところで、体力の限界が先に来た。膝に手をつきゼーはーと肩で息をするぼくに、アリスが驚愕とばかりの顔で駆け寄ってくる。

「ウツソだろお前……まだ二周だぞ」

「いや無理ごめん……ちよつと休憩……」

フィスナー家の敷地の広大さを舐めていた。こっちはプライベート道を走る気分だったのに、いきなりハーフマラソンコースをご用意された気分だ。

フィスナー家に滞在して一週間、そろそろ屋敷の掃除に目処がついてきた。来週あたりには使用人も何人か戻つてくる手筈にもなつたらしい。少し時間の余裕ができたのを幸いと、ぼくはアリスに「ぼくもトレーニングにご一緒させてほしい」とお願いしたのだった。

アリスが元々一通りの体術をきちんと学んできているのは、普段の身のこなしから何となく感じていた。実際聞いてみたところ、確かに

剣術・体術・格闘術は幼い頃から専門の教師を付けられ叩き込まれていたらしい。

ホグワーツに入学してからは指導を受ける機会も無くなったものの、それでもたびたび身体が鈍らないよう走りに行っていたようだ。道理で、普段朝には弱いくせにたまに早起きして外に出てってるなどは思っていたよ。

なんだよ一人で格好つけちゃってぼくも誘えよとごねたところ、アリスはすこぶる嫌そうな顔をしつつも最後には渋々了承してくれた。

そしていよいよ迎えた本日、だったのだが――

「どーよ、俺と走った感想は」

「思った以上に体力の差が歴然としてて凹む」

「そいつは自明だったろ」

そりや自分だって運動神経が良い方だとは思っていなかったものの、それでも割と身軽な方だし徒歩だったら長距離歩いてても平気だし、と慢心していたのは否めない。いやうん、確かに慢心していた。今日で思い知った、ぼく、同級生の中でも体力ない方だ。小柄だし筋肉ないしで頼り甲斐のない男だった。

「それにしても、急に体力作りに励むなんてどーしたよ」

手持ち無沙汰なのか、アリスがストレッチをしながら尋ねてくる。四阿あずまやのベンチに腰を掛けたぼくは、水の入ったボトルを傾けつつ「別に、何かあった訳じゃないけどさ。体力はないよりあった方がいいでしょ」と口を尖らせた。

……何かあったというか、こう、諸々が積み重なった感じなんだよな。

トランクを運ぶ手伝いをしようとしたらウィーズリーの双子に「いらない」と言われたり、クイレルに殴られて気絶したり、リドルに操られたジニーに首を締められて意識を飛ばしたり、リドルとの対決でボロボロになるまで痛めつけられたり。そんな諸々が積み重なった結果芽生えた感情ではある。それに自分の身は自分で守れた方がいいし。

ぼくがそう言うと、アリスは少し不思議そうな顔で首を傾げた。

「そりや体力はあるに越したことがないのは事実だが、でもお前、今のままでも自分の身くらい余裕で守れるだろ？」

「え？」

「魔力。そんだけ辺りに漂わせといて、自覚がないとは言わせねえ。正直言つて、そんだけ魔力持つてりや無敵じゃね？俺だつて、お前と魔法ありの勝負じゃ絶対敵わねえもん」

「うーん……」

そう言われればそうかもしれないんだけど、それでも現実問題、魔力以外の部分で負けがちなんだよな……物理攻撃に弱いというか。

「魔力を薄く伸ばして全身に纏わせとくのは？直で生身に攻撃喰らわないようにさあ。もしくは魔力を索敵目的で周囲に漂わせて、間合いに入った敵を感知するとか。つまりは反応できない距離から攻撃されるとしんどいつてことだろ」

アリスが指折り数えながら提案してくる。こいつ物騒なことになるとポンポンアイディア出てくるな。ごく平凡な学生生活送ってる中、どうして死角から攻撃された場合の対応を考えなければならぬのだろうか。でも実際問題として、ぼくつてば割と死角から攻撃されやすいんだから仕方ない。

「まあ、そうだなあ……それがいいのかな。ちよつと集中力使うけど、何とかなるか」

「マジ？『ちよつと』で済むの、お前？ 化け物……」

何故か、ぼくに提案した側のアリスが引いていた。君が言い出したくせに梯子を外すのは止めてほしい。

……そう言えば、闇祓いは法執行部に所属する軍人でもあるのだった。幣原も身体を鍛えたのだろうか。……なんか似合わないけど……。

少し休んで呼吸が整った。汗を拭いて「よし」と立ち上がると、アリスは「なんだ、まだやる気かよ」と苦笑する。

「それはそれ、これはこれ。やっぱいいざつて時に動けた方が都合がいいしね。それに……」

「それに？」

「鍛えてた方がモテそうじゃん。アクアはどういう人が好みかな？でも運動できない奴よりできる奴の方がなんかいいよね」

「……そいつは知らんが、ま、頑張れよ」

「パーティー？」

リイフが言った耳慣れぬ言葉に、ぼくはこてんと首を傾けた。

あの後再び屋敷の敷地を一周し、朝から良い汗をかいたなあ朝食を美味しく頂いていた時のことだ。

夏休み初日は人も入れない惨状を呈していたキッチンは、アリスが執念で綺麗さっぱり磨き上げてぴっかぴかだ。やつぱり綺麗だと居心地がいいね。

特にフィスナー家はどこを見ても見栄えがする。まあその分、手入れをしないとすぐにゴーストハウスの一角かと思うほど廃れてしまっただけだ……。

ちなみに今お皿に乗っている、まるでお手本のようなイングリッシュ・ブレックファストはアリスの手作りだ。ぼくも手伝うよと言ったのだが、客人は座っていないさいとリイフに窘められた。ついでに言えばそんなリイフも、アリスに邪魔だと秒殺されてすごごとキッチンから戻ってきた。

まさかアリスの手料理が食べられるなんて、こりやクラスメイトに自慢するネタがまた一つ増えたなと思いつながら、ベイクトビーンズを頬張っていた矢先のことだ。

「ああ。パーティーと言っても比較的カジュアルなものだしね。アキ、君もおいで。主催者も快く了承してください。美味しい食べ物もたくさん出るから楽しみにしておくといいよ」

リイフは普段通りの穏やかな微笑みを浮かべたまま、紅茶のカップを軽く持ち上げてみせた。「はあ」とぼくは曖昧に頷く。

『パーティー』なんて、普段の日常からかけ離れたことを突然言われると、人間の脳は思わず処理落ちしてしまうらしい。

パーティーか。ダーズリー家でもパーティーはたまに開かれてい

たものの、ぼくとハリーは厄介者としてずっと部屋に籠らされていた。そう思うと、ぼくはホグワーツで経験したハロウィンとクリスマスのパティーくらいしか経験がない。

……楽しみだけど、一体どんなパーティーなんだろう？

「……ちよつと待て、親父様よ。……今、何て？」

「なんだい我が息子よ、聞こえなかったか？ 私は『パーティーが開かれるから行くぞ』と言ったんだよ。ああ、お前は絶対に連れて行くからな。フィスナー家の後継として挨拶回りの義務が残ってるんだ、嫌だと喚いても強制参加だぞ」

「そのくらい分かってる。なあ、一つ聞かせてくれよ。アンタの言うパーティーの日取りはいつだ？」

ふむ、とリイフは頷いた。今アリスを見遣ったならば、きつと物凄い顔をしていることだろう。ぼくはそつと二人から視線を外す。

「つまりアリス、お前は『どうして今日開催予定のパーティーのことをよりによって当日伝えるんだ！』と言いたいのかな？」

「その通りだよド畜生！ ああもううぜえつ、分かってんのならとつとど言いやがれクソ親父！ パーティー？ パーティーつつつたか!?! アンタの言うパーティーってのはドレスコードは存在しねえのか！ Tシャツジーンズで行っていい場所なのか、ああ!?!」

「全くお前は口が悪いね」とリイフはため息をついた。その意見には全面的に賛成するものの、今回ばかりはリイフが悪いと思う。

「あのリイフさん、ぼくちゃんとした服なんて持ってないので、流石に遠慮させてもらいたいですけど……」

「ああ、気にすることはないよ。あと一時間もしたら仕立て屋が来るからね。君に合う服をちゃんと見立ててあげようじゃないか。アリスも座りなさい、折角の朝食が冷めてしまうだろう？」

アリスは苦虫を数十匹噛み潰したような表情でリイフを睨みつけ「アンタのそういうトコが、俺は心底大っ嫌いなんだよ！」と叫んだ。

……改めて……この親子、性格全く似てないな……。

「一体どの辺りを見て『比較的カジュアル』などと言っておられるのでしょうかね、ライフさんは……」

同僚のホームパーティーだから、なんてライフの言葉に騙された。ホームパーティーなら敷居も高くなくてちよつと安心だと思っていた数時間前の自分に会えたら忠告してやりたい。ぼくら庶民の感覚での『普通』とお貴族様の『普通』が同じ次元な訳ないだろうと。

ホグワーツの大広間の半分ほどの広さを持つ一室に、煌びやかな服を纏った人々がひしめき合って歓談している。等間隔に配置された丸テーブルの上には一口サイズに小分けされた美麗な食事が並び、テーブルの間を縫うように給仕が忙しく立ち回っている。

ううん、ダーズリー家のホームパーティーとはどこをとっても雲泥の差だ。もはや別物として単語を分けた方がいいんじゃないかと、ぼくは今着ているドレスローブ（昼間にフィスナー家に来た仕立て屋に仕立ててもらった一品だ、手触りがまるで水のように、黒のシンプルなローブなのに細部のデザインが優美で、どうしても値段を聞く勇気が出なかつたほどの恐ろしい代物である）を何となしに整えながら思うばかりだ。

初めてのパーティーに怯えまくるぼくと正反対に、アリスは至って堂々としたものだったが（夜空色のローブが似合って仕方なかった、ツラが良いというのはどこまで行っても得でしかない）ライフに半ば無理矢理連れ去られる形で人混みの中に消えてしまった。

一人残されたぼくは、もう腹を括るしか道はない。美味しい料理をひたすら食べ、人に話しかけられれば笑顔で受け答えをする。今フィスナー家に遊びに来ているんです、フィスナー家の息子のアリスとはクラスメイトなもので。

そう話せば大体の人が納得した表情を見せるのには驚いたが。皆が皆アリスのことを知っているとというのは、何だか少し気持ちが悪いものだ。これが名門貴族に生まれた宿命というものなのだろうか。

……ハリーもいつもこんな思いをしてるんだろうなあ……可哀想に。

ノンアルコールのカクテルを手に壁に寄り掛かって人の群れを眺

めていたところ、ふと見知った顔が見えた。「お」と身を乗り出すと、彼らもぼくに気付いたようだ。驚きに目を瞠りながら歩み寄ってくる。

「やあ、ドラコにアクア。久しぶりだね」

「アキー・ どうしてここに？」

ドラコもフォーマルな服装が似合うなあ。着慣れてるっていうの？

はてさて、今自分が一体どんな風に他人から見えているのか想像もしたくない。きつと服に着られている感が満載なのだろう。

「実は今、アリスの家にお世話になってさ。夏休みはそこで過ごさせてもらってるんだ」

「ああ、フィスナーのか。確かこのパーティーの主催者とあいつの父親は同僚だったな。……ということは今日はフィスナーも来ているのか？ 珍しい」

「いるいる。父親に連れられてどっかに行っちゃったけどね。挨拶回り、だそうだけど」

「ふん、そりやそうだ。ずっと家に寄り付かなかった馬鹿息子がようやく帰ってきたんだからな。フィスナーの後継として顔見せをしないと始まらない。あいつの父親に心底同情するよ」

ふふんとドラコは笑っている。どうやら機嫌は悪くないようだ。

夏休みの直前、ドラコの父親が学校の理事長を辞めさせられたとかで荒れていたことは記憶に新しい。しかも辞職の原因を作ったのは、ドラコの天敵であるハリーだし。

……しかし、それにしても……。

「アキは楽しめているかい？ ハハッ、楽しむほどの余裕はなさそうだな。人生初のパーティーに緊張しているのか？ まあ無理もない。せいぜい豪華な料理でも口にはしているとい」

「あ……うん、そうさせてもらおうよ……」

ドラコから目を逸らし、視界の隅にちらちらと映る『彼女』をずっと見つめていたい衝動になんとか打ち勝つ。しかしぼくの秘めたる努力も『彼女』が一步ぼくに歩み寄ったことで簡単に砕け散ってし

まった。

「……久しぶり、アキ」

ドレスの裾を摘んだアクアはその場でそっと淑女の礼をとると、ぼくを見上げてニコリと微笑んだ。

普段は自然なまま下ろされてる真つ直ぐで長い銀髪は、パーティーの場だからか華やかに纏め上げられ、優雅な気品に溢れている。ドレスは年相応の柔らかさと可愛らしさのある雰囲気纏められており、アクアの可愛らしさを爆上げしている。今まで想像すらしたことがないアクアのドレス姿を目の当たりにして、ぼくは完全に言葉を失ってしまった。

……可愛すぎる。天使だ。

「ひ、久しぶり、アクア」

動揺のあまり上手く口が回らない。アクアを直視できなくて、ぼくは無様に視線を彷徨さまよわせた。そんなぼくを、アクアは不思議そうにじいっと見上げてくる。やめてホントそんな目でぼくを見ないでお願いします。

「……でも、まさか君達が来てるなんて驚いちゃったよ」

わざと、近い位置にいるアクアではなく少し離れたドラコに話しかける。ドラコは少し訝しげに眉を顰めたものの「今回の主催者はうちの親戚筋だからな」と律儀に言葉を返した。

「あ、そうだったんだ」

「ああ。それに、驚いたのは僕らの方さ。大体、英国魔法界に於ける名家も一世代前と違って随分と数を減らしてきた。今となつては《こちら側》だとマルフォイ家やベルフェゴール家、グリーンングラス家が主流で《あちら側》だとダンブルドア家やウィーズリー……ウィーズリーを名家と呼ぶべきかどうかについては議論の余地を残すと思うが、歴だけは張るから仕方ない。後は《中立不可侵》のフィスナー家やらといった辺り……見回すだけでもかなりの人間が見知った奴らばかりだ。この中で君を見かけるなんて、本当に驚いたんだからな」

《こちら側》や《あちら側》というのは、何となくだけけれど《スリザリン派閥》と《グリフィンドール派閥》という意味合いだろうか。フィ

スナー家の《中立不可侵》は去年アリスの家庭のゴタゴタで何度か耳にしたことがある。

少し考えようとしたものの、アクアの視線が気になってどうしても気が散ってしまう。どうかお願いアクア、今だけぼくから目を逸らしていてくれないかな？ 息が苦しくて敵わない。

「姉上！」

と、その時子供の声が出た。同時に人混みの中から小さな少年が飛び出して来る。銀髪の利発そうな顔立ちをした美少年だ。

姉上？ と疑問に思う間もなく、あろうことかその少年はアクアに抱きついたではないか。思わず目を瞠ってポカンと口を開ける。

「姉上、探しましたよっ！ 僕を置いてどこに行くんですか！」

「えっ、姉上？」

「……ユーク。お行儀が悪い真似はしないで」

「はいっ、姉上」

静かなアクアの声に、少年はパッとアクアから離れた。続いてぼくを見上げては「ところでこいつは誰ですか！ さつきから下心ある目つきで姉上をチラチラ見てたんですけど！」と叫ぶ。

な、なんと失礼な。そういうことは分かっても言わないのが同性としてのマナーじゃないか。それに、ぼくは下心なんて全くこれっぽっちも持っていない。神に誓おうじゃないか。目を逸らしたい気持ちとずっと見ていたい気持ち^{せめ}が闘ぎ合ってぼくにこんな行動を取らせているのだ。ぼくは何一つ悪くない。

「……って、姉上!? 姉上って、アクアが!?!」

「姉上のことと呼び捨てにしやがりましたね貴方！ 一体どういう了見ですか！」

背丈はアクアより少し高く、ぼくより少しだけ低いくらい。小生意気そうな目をぼくに向けた少年は、アクアを守るようにぼくの前に立ち塞がる。その姿に思わずたじろいだ。

助けを求める眼差しをドラコに向けると、ドラコはやれやれと大仰に肩を竦めた。

「彼はアクアの弟で、ユークレース・ベルフェゴールだ。僕らはユーク

と呼んでいる。ベルフェゴール家の長男で、ベルフェゴールの後継は彼になる。そしてこちらは……あー、えっと、僕の友人でアキと言う。ホグワーツの学友でね、この夏はアリス・フィスナーの家に世話になってるらしい」

前半はぼくに、後半は少年に向けてドラコは説明する。ドラコがぼくの姓を伏せたのは、この場で騒ぎになる可能性を危惧したからだろう。ポッターの姓は、親愛なる我が兄貴ハリー・ポッターのおかげで大層有名なものだから。

「ほらユーク、挨拶をしないか。仮にもベルフェゴールの長男だろう」
「……ユーク」

二人に言われ、少年はしぶしぶ「……ユークレース・ベルフェゴールです」と名乗り、ぼくに右手を差し出した。しかしその目はぼくを確実に『姉にちよつかいを出そうとする敵』だと認識している。頬が引き攣るのを堪えつつ「……どうも」と彼の手を取り、握手した。

「……しかし、アクアに弟がいるなんて初耳だったよ」

声に恨めしい色を乗せると、ドラコは「それはすまなかつた」と苦笑した。

「ユークは今年ホグワーツに入学するんだ。まあ寮が異なる下級生などあまり関わりはないと思うが、何かあればよろしく頼む」

「この人に『よろしく』されることはないと思いますけどっ」

ユークが小生意気な口を挟んでくる。ここが格式ばったパーティー会場じゃなければ「あっかんべー」も繰り出してきそうだな。

ユークは姉に咎められるよりも早くドラコに駆け寄ると「それよりドラコ、アリス・フィスナーを見ませんでしたか？」と尋ねかけた。

「フィスナーか？ 会場のどこかにはいると思うが、どうして？」

「是非とも挨拶をしておきたくて。今年僕もホグワーツに入学しますから。それと、珍しくもこのようなパーティーに足をお運びいただいたことに対するお礼と、あの精悍なお顔を久しぶりに見てみたかった！」

このようなパーティーに足をお運びいただいたことに対するお礼？ 精悍なお顔？ ユークの口から信じられない言葉が次々と飛び

出てきて、思わず目が回りそうだ。

とりあえず、この少年はアリスのことがものすごく好きなんだということは分かった。そして何故だか、ぼくのアクアに対する密かな恋心も一瞬で見抜かれてしまったであろうことも。

……とりあえず先程の下心云々の話を早めに訂正しておきたいんだけど、今更話を蒸し返すのも何だか変な空気になりそうだし……うーん、困った。

「……あ」

その時アクアが小さな声を上げた。「どうしたんですか、姉上？」とユークがすかさず問いかける。

「……フェイスナー、あっちにいたわ」

「えっ、本当ですか！ 行きましよう姉上！ それではドラコ、また後で！」

ユークはアクアの手を取ると、一直線に人混みの中へと突撃して行った。しっかりとぼくに睨みを利かせていくことも忘れない。

ユークとアクアの姿が見えなくなり、はあと胸を撫で下ろした。「すまなかったな、騒がしい奴で」とドラコはため息をつく。

「あれは姉のことが好きで好きでしょうがないらしい。僕ですら時折恨み言を吐かれる始末だ」

「ああ、婚約者だから……」

「全く困ったものだな。こんなもの、生まれる前に親同士で取り決められたものだ。二人とも婚約者になりたくてなった訳ではないと言うのに」

肩を竦めたドラコは、ふと笑ってテラスを指差した。

「少し風に当たらないか？ ユークと接していると、こちらまで熱くなる」

外に出ると、もう既に夜はとつぷりと暮れていた。汗ばんだ身体には冷たい夜風が心地いい。室内から一枚隔てただけなのに、パーティーの喧騒は一気に遠ざかった。

「アキ。僕が間違っていたらすまない。最初に謝っておく」

「一体どうしたの？ そんな真面目な顔しちゃって」

いやまあ、と気まずげにドラコは目を逸らした。はてと首を傾げるも、次いでドラコの口から発せられた言葉に、ぼくは思わず呼吸を止めた。

「君は、アクアマリン・ベルフェゴールのことが好きなのか？」

一音一音のどこにも失礼さを滲ませぬよう、神経が使われた声だった。

しばらく黙って、ゆつくりとぼくは「そうだね」と頷いた。

「……あーあ、バレちゃった？ まあね、うん、そうだね。ぼくは彼女のことが好きだ。実は一目惚れだったんだよね。君は彼女の婚約者だし、出来れば知られたくなかったんだけど、まあバレちゃったものは仕方ないよね。だからぼくにとって君は友達である以上に恋敵でもあった訳で、あ、でも無理矢理奪おうとかそういう気持ちは全くないから。彼女を見ているだけで、ぼくは幸せだからさ。ま、ぼくはズルい人間だから、君が婚約を破談にしてくれたのならぼくが付け入る隙もほんのちよっぴりだけあるかなーなんて考えたりもしちゃうんだけどね。はは……」

ぼくの顔を、ドラコは眉を寄せて見つめていた。その目を真っ直ぐに見返すことができなくて、ぼくは自然を装い目を逸らす。

——こういう時は、いつか来ると思っていた。

ぼくの恋心がドラコに知られた時、きつと多分、ぼくとドラコの友情めいたものは終わるのだ。そんな漠然とした予感、ずっと心の奥底に存在していた。

「……ごめんね。ずっと、君を騙していた気分だった」

ドラコに近づく理由の一つに、アクアと会えるかなという期待があったことは事実だ。アクアと会いたい、話したい、そう思った時、いつもアクアの近くにいるドラコは格好の建前だった。

ドラコがアクアを大切に想っていることくらい、気付いていた。アクアもドラコを想っていることだって知っていた。割り込める訳がないことも、全部、全部分かっていた。

「……僕こそ、すまない」

「え？」

ドラコの口から発された思わぬ謝罪の言葉に、ぼくはドラコを見返した。ドラコは意を決したような、射抜くような目でぼくを見る。

「……僕は、君と友人関係を結ぶことができた理由が分からなかった。君はハリー・ポッターの弟だ。ポッターと僕のようにいがみ合っても全然おかしくはない。むしろそちらの方が自然だろう」

「……………」

どうして、いきなりそんな話を？

戸惑いながらも、ぼくはドラコの話に耳を傾けた。

「初対面で飛び蹴りを食らわされてきたり、僕に首輪をつけて禁じられた森を散歩すると杖を突きつけて脅したり。僕の今までの人生で、君のような無茶苦茶な奴には出会ったことがない」

ああ、そう言えばそんなこともあったっけ。そんなことをねちねち覚えているなんて、執念深い奴め。というか飛び蹴りくらいはアリスだつてやってただろ。あ、アリスは初対面じゃなかったか。

「僕とアクアが何年掛かってもどうにもできなかったフィスナー家の問題を、君は一年も掛からずに解決してしまった。秘密の部屋に連れ去られた筈なのに、何故か無傷で戻ってきた。そして——他寮の人間なのに、マルフォイ家の僕とも普通に仲良くしてくれる」

君はきつと、いい奴なのだろう。

ドラコはそう呟いた。

「君を大切な友人と認めた上での言葉だ、アキ」

瞳に宿った光に、思わず息を呑んだ。

意志が籠った瞳だった。

「アクアは、ダメだ。アクアマリン・ベルフェゴールは、あいつだけは、君には渡さない」

「悪魔の名を持つ少女は、アキ・ポッターには守れない」

第4話 幼馴染

「魔法魔術大会？ 何それ」

「君は本当に、ホグワーツの行事に興味がないんだね」

ぼくの数少ない友人の一人、リイフ・フィスナーがしみじみと呟く。「興味がない訳じゃないよ、ただそれよりも本を読んでるのが好きだけ」と反論したが、リイフは肩を竦めてため息をついた。信じてないな、こいつ。

「魔法魔術大会ってのは、三年に一度ホグワーツで開催されてるイベントだよ。僕らが一年の時にも開催されてた筈おぼだけど、憶えてないかい？」

「二年の時は右も左も分からない中、とにかく英語に必死だったから周りを見る余裕なんて無かったんだよ」

あまり積極的に思い出したいことではない。

リイフは一瞬だけ申し訳なさそうに顔を歪めた。そんな顔をさせるつもりはなかったんだと、ぼくは慌てて「で、その魔法魔術大会がどうしたの？」と尋ねる。

「ああ。これは簡単に言えば『ホグワーツの中で魔法を一番上手に使える生徒は誰だ！』ってイベントなんだ。最近の時勢を反映してか、前回から一対一の決闘方式に変わったんだけど。実はこのイベント、四年生から出場可能なんだよね」

なんとなく嫌な予感がした。こんな予感ほど、無駄に当たるのだ。

「……で、ぼくにどうしろとっ？」

「秋、出てみなよ！」

「イヤ」

「即答かよっ！」

ほら、やつぱり。

ツンと顔を背け、数占い学の教室へと歩みを進める。「ちよつと待ってよお……」と情けない声を上げたリイフが、程なくして隣に並んだ。

一夏見ない間に、リイフは凄く背が伸びたようだ。成長期だろう

か。もう十四歳だものね。

……ぼくの成長期はいつだろう。お利口さんにしていたらサンタさんも成長期もちゃんと来るって、ぼくはそう信じている。

「……大体、ぼくなんかが出たところで簡単に負かされちゃうに決まってるよ。四年生から出られるって言っても、五年生や六年生、七年生だって出るんだよ？ 勝ち目なんてある訳ない」

「そんなことないですよ。前回の優勝者は四年生でしたから」

リイフではない声が返ってきたのにギョツとした。慌てて振り返る。

「フリットウィック先生！」

我がレイブンクロー寮監かつ呪文学教授、フィリナス・フリットウィック先生。温和で優しく授業も分かりやすいと、自寮以外の生徒からも大好評の先生である。小鬼の血が混ざっているということ、ホグワーツでも数少ない、ぼくより背が小さい人だ。

フリットウィック先生はぼくらに「こんにちは。いい夏休みを送りましたか？ 秋くん、リイフくん」とニコニコ笑いかけた。

「上々です」

「いい夏休みでしたよ」

ぼくも先生に笑みを返す。フリットウィック先生は「さて、先程の話の続きですが」と前置きして口を開いた。

「決闘と言っても死ぬようなものじゃありませんね。君達は成績も優秀ですし、生涯で一度くらい決闘を経験しておくのも有意義だと思いますよ？」

「流石フリットウィック先生、かつて決闘チャンピオンだっただけありますね！」

リイフの声に目を瞠った。フリットウィック先生が決闘チャンピオン？ 先生は照れたように「昔の話ですよ」と苦笑する。

「歳が下だといって上級生に敵わないなんてことはありません。優勝したら盾やメダルももらえますし、将来ホグワーツを卒業した後にも役に立ちますよ。腕試し感覚でエントリーしてみてくださいはどうか」

実はですね、とフリットウィック先生は肩を竦めて声を潜めた。ぼくとリイフは身体を屈め、先生が話す言葉に耳を傾ける。

「三回連続、グリフィンドールに優勝をかつさらわれてるんです。そろそろ、我らレイブンクローの時代が来てもいい頃じゃありませんかね？ ミネルバの誇らしげな顔は、もう見飽きました」

そう言つてフリットウィック先生はウィンクした。ぼくとリイフは揃つて吹き出す。

「そういうことなら、どうだい？ 秋」

「ふふつ、仕方ないなあ。なら、全校にレイブンクローの腕前を見せてあげてあげてくださいね」

それでこそ我が寮の生徒です！ と、フリットウィック先生が小さな手で拍手する。ぼくとリイフは顔を見合わせ、笑い声を上げた。

新学期が始まつてすぐの、九月。まだ暑い日差しが照りつける時の話である。



古きを辿れば、ベルフェゴール家は元はブラック家とグリーングラス家の分家に相当する。

どちらも数少ない純血の名家。そこから分離したベルフェゴールは経済界にて頭角を顕し、そのまま時の流れに身を任せ——やがて彼らは悪魔と契約した。

「分家であつた筈のベルフェゴール家は、いつしか本家より勢力が大きくなつた。そんなことは滅多にない。何よりも優先されるべきは本家である。分家とは大樹の枝に過ぎない。ないのは見栄えが悪いが、いざとなつたら切り落として差し支えない——その筈なのに、半ば成り上がりにベルフェゴール家は栄えていった。今や分家と誰も呼ばなくなるほどに。悪魔と契約したのだと、その苗字に因んで囁かれるほどに」

そこまで言い切り、アリスは一度息をついた。前髪を掻き上げ、左耳のピアスに触れると手を下ろす。

アリスの部屋は、本人の性格をそのまま反映しているようにすつきりと片付いていた。そもそも最低限しか物がない。本棚に勉強机にベッドにクローゼットと、この名門貴族らしい家の中では唯一と言っているほど機能重視の部屋だった。まあ、部屋自体は相当広い訳だけど……。

「スリザリン側についたのも確かその頃だった筈だ。ブラック家を筆頭に、ここ近年英国魔法界で強い力を持っていたのはスリザリン派閥だからな。根深い純血主義に迎合した方がベルフェゴールとしても得と判断したのだろう。」

そもそも凄まじく乱暴に定義すれば、英国魔法界はぼつさり二つに分けられる。グリフィンドール派とスリザリン派だ、お前も肌感覚としてはあるだろう？ ダンブルドア、ウィーズリー、ロングボトム、それにポッターはグリフィン^{そっ}ドル派^ち。ブラック、マルフォイ、ベルフェゴール、グリーン格拉斯、レストレンジはスリザリン^{あっ}派^ち。まあ人間なんざ言葉で分類できちまうほど簡単な生き物じゃねえからな。おつそろしく複雑な思惑とかが絡み合ってたんだろうけど、ぎつくりと説明すりゃあこんな感じだ」

まあ確かに、おつそろしくぎつくりとした解説ではあった。「アリス先生」とぼくはおずおずと左手を上げる。

「ぼくとハリーの苗字がさりと登場したり何やら覚えのある苗字がわんさか出てきたりしている訳ではありませんが……」

「詳しいことは俺もよく分からん。何せガキの頃に叩き込まれたことだからな。詳しく知りたいなら親父に聞け。あいつなら大体網羅してるだろうし」

そんなリイフは、今日もまたどこかのパーティーにお呼ばれだ。そんな調子で週の半分は家に不在なものだから、流石は名門のご当主様よと呆れ返ってしまう。

いずれアリスも家督を継いだらそうなるのかと尋ねたところ、アリスは苦々しい顔つきで「ぜってえ嫌だ」と首を振った。

「でも、家は継ぐんでしょ？」

「俺が継がないと、他に継ぐ奴いねえからな。俺は一人っ子だし、養子

も取らない、新しく妻も娶らないとなりやあ俺が継ぐしかねえしよ。
《中立不可侵》のフィスナーを、俺のせいで潰すワケにはいかねえし」
「ああ……」

去年同室の友人ウイル・ダークに教わったことを思い出す。英国魔法界の秩序を担う《中立不可侵》。グリフィン・ドール派閥とスリザリオン派閥の均衡を保つ影の功労者。

「そりゃあなあ。イギリスの地図が二色に塗り分けられる未来なんざごめんだし。マジめんどいけど誰かがやんなきゃだし、ならウチしかねえだろつて。……激務だから気は進まねえけど」

アリスは憂鬱げな眼差しだ。まあ、リーフの働き方を間近で見るとそう思うよな……。

でも、フィスナー家つて本当に凄い名家だったんだなあ。普段のアリスからはその辺りの感覚を全然感じないんだけど。

ドラコほど露悪的ではないにせよ、もつと名門貴族らしく振舞うべきじゃないのかいアリスさんよ。少なくともリーフは、アリスよりはそのように振舞っていたぞ。

「さて……お嬢サマの話に戻すぞ。マルフォイに何て言われたつってた？」

アリスの言葉に、ぼくは慌てて顔を引き締めた。

そう、本題はそちらの方なのだった。ただ本題に入る前にと、アリスは英国魔法界の派閥に疎いぼくのために『アリスさんの簡単・魔法界名門貴族特集』をしてくれたんだけど……。

——この世界には、知らないことが多過ぎる。

強いて、淡々と答えた。

『アクアは、ダメだ。アクアマリン・ベルフェゴールは、あいつだけは、君には渡さない。——悪魔の名を持つ少女は、アキ・ポッターには守れない』と——そう言われた」

『渡さない』と言われたことよりも『守れない』と言われたことの方がショックだった。

ぼくでは彼女を守れないと、面と向かってそう言われた。

「……それは、多分」

「ぼくが『アキ・ポッター』だからだ。『例のあの人』を倒したハリー・ポッターの、双子の弟だからだ。そうだろ？　アリス」

僅かに目を瞞ったアリスは、やがて静かに頷いた。

「……スリザリン側にとつて、グリフィンドールの象徴でもある『生き残った男の子』ハリー・ポッターは憎むべき敵だ。『例のあの人』が姿を消し、平和な時代が訪れて尚、そんな時代錯誤な考えに取り付かれた頑迷な奴らは多い」

「……ああ、そうだろうな」

「それに加えて……ベルフェゴール家。あの中でアクアマリン・ベルフェゴールがどういう立ち位置か分かるか？」

「え？　そういう立ち位置って……その一族の直系で、弟がその家の後継だつて、そう言つてたんじゃなかったっけ？」

「阿呆。お前はお嬢サマが絡むと、途端に頭の回転が鈍くなる。困つたもんだ、お前としたことが表面的なことしか見えてねえのか？」

むうつとぼくは眉を寄せた。そりゃあ一体どういう意味だ。同時に考える。

……表面的しか見えていないと評したということは、つまり問題はアクアの性格か？　とまで考え付いてからは早かった。

「まさか……」

「やつと思ひ当たつたか」

アリスは物憂げに口を開く。

「アクアマリン・ベルフェゴール。闇の帝王は間違っていると主張し、両親、はては一族の思想全てを拒絶する少女。ベルフェゴールきつての異端であり、アイツの両親ですら、アイツの扱いには手を焼いている。ベルフェゴール家直系でありながらも孤立している状態なんだ、アイツは」

あの大人しい外見からは想像もつかないほど、アクアが激しく怒った姿を、ぼくは何度か目にしたことがある。

たとえば一年生の頃。闇の帝王は間違っていると、ドラコに面と向かつて叫んだあの時。

たとえば去年の事。ハーマイオニーを侮辱したドラコの頬を、公衆

の面前で張った時。

「地下牢に何度放り込まれても、闇の帝王は悪い人だ、皆騙されてるんだと叫ぶアクアを……俺もマルフォイも見過ぎたんだろうな……」

沈鬱そうな表情を浮かべ、アリスは呟いた。

「なあアキ。俺はお前に謝らなくちゃいけないのかもしれない。お前の、アクアに対する気持ちを焚き付けるような真似をしたことを」

「……アリス、それは……」

それは。

それは、どういう。

『守れない』……言葉通りの意味だ、アキ。好きでこんな奴と一緒にいる訳じゃないと散々喚きながらも、アイツは決してアクアの手を放さなかった。最後には必ず、アクアの元へと戻ってきた。昨日のパーティーだってそうだ……公の場には、大体アイツはアクアのすぐ傍にいた。……アイツの両親に対する恭順が、まさかこんなところで重要となってくるとはな」

アリスは切なげに苦笑した。

「ドラコ・マルフォイ。ブラック家を継ぐ者がもういなくなった今、スリザリン派閥の筆頭はマルフォイ家だ。その次期当主であるアイツは、その身分を盾にアクアを一生涯守る気である。アクアを害する全てのものから」

そこまでの意志を持ち合わせているとは思わなかったんだと、アリスは微笑んだまま言った。

「本当に……すまない、アキ」

やめてくれ。アリス、お願いだから謝らないでくれ。

惨めになるから。

「そりゃあ……『アキ・ポッター』には渡せねえよな……」

アリスはしみじみと目を細めた。それは、幼馴染を懐かしむような表情で。

ぼくは開きかけた口をぎゅっと閉じると、何も言えずに目を伏せた。

第5話 杖で交わる友情

気が付いた頃には、ホグワーツ中が魔法魔術大会の話題で持ちきりだった。そこかしこで話が飛び交っていて、一年の頃のぼくはよくもまあ何一つ気が付かなかつたものよと思うばかりだ。

そんな折、ぼくはジェームズとシリウスに捕まった。

「秋！ 聞いたぜ我が友人よ！」

「君も魔法魔術大会に出るんだって？」

「ああ、まあ……よく知ってるね、本当」

交友関係が広いのだ、この二人は。情報通と言うべきか。インフルエンサーだから自然と情報が集まるのだろうか？

「そうそう、ぼくも君達の噂は耳にしたよ。君達も出るんだって？」

グリフィンドールのトップ2は流石だね」

友達が少ないぼくでさえ、この二人の話は聞き及んでいる。いろいろな意味で、ぼくら四年生の中で一番有名な二人組なのだ。

「勿論、出るに決まってるだろ？ こんな面白いイベント、参加しない訳がない！」

「でも秋が出るのはちよつと意外だったな。君ってあまり行事ごとに興味がなさそうだったから。クイディッチにもあんまり興味ないでしょ、実際」

「そ、そんなことないよ。戦略とか、戦術とかは嫌いじゃないし……ジエームズもリイフも凄いつて思う」

これはぼくの忌憚なき本心だ。

よくもまあ、上下左右を自由自在に飛び回りながらボールを自在にキャッチしたり投げたりできるものだよ。箒に乗るくらいならぼくもできるものの、そこから片手ないし両手を離してクアツフルやスニッチを掴み襲い来るブラッジャーを避けるなんて……同じ人間だとは到底思えない。

「そりやそうさ。そして、出るなら当然優勝を狙う。今まで三回連続で我が寮、グリフィンドールが優勝杯を手に行っている——言いたいことが分かるか、秋？」

「……なるほど。他の寮に……レイブンクローに勝たせる気はないと言うことか？ シリウス」

「レイブンクローにもハツフルパフにも、当然スリザリンにもだ。どこにも勝ちを譲る気はないね」

「……それじゃあ、同じセリフをぼくも君達二人に返すことにしよう。この大会にぼくが出る以上、レイブンクローが勝たせてもらおう」

「……そう言うと思っていたよ」

視線はどこか鋭いまま、ぼくらは顔を見合わせ笑い合う。

「幣原秋。君は僕らの対等なライバルだ」

「どっちが勝っても恨みっこなしだぜ」

「上等。魔法の腕なら負ける気がしないね。ジームズ・ポッター、シリウス・ブラック。容赦はしないよ、全力で叩きのめしてあげる」

「君のそういう勝ち気なところが、僕は好きだよ」

ぼくらは拳を合わせあう代わりに、杖を合わせた。

……ま、とは言ってもこれは売り言葉に買い言葉。

まだ四年生のぼくらにとって、優勝争いなどずっと遠い世界の話だと——この時のぼくは、まだまだそんなことを思っていた。



アクアマリン・ベルフェゴール。「純血」を誇りとする名門、悪魔ベルフェゴールの名を冠する家の長女。

ドラコ・マルフォイの生まれる前からの婚約者であり、そして二年前、ぼくが一目惚れした女の子。

普段、ベッドに横になるとストーンと眠りに落ちるぼくにしては珍しく、その日の夜はなかなか寝付くことができなかった。

フィスナー家の客間の一室（当然ながら、ダーズリー家のどの部屋よりも広い）のベッドの上で、ぼくは一人天井を見上げていた。ホグワーツのように空を映す魔法は掛かっていないけれど、幾何学的な模様が幾重にも連なる天井は、見続けていても案外飽きない。

頭の中を取り止めのない考えが巡る。その中心に居座っているの

やはり、アクアに対するどうしようもない想いなのだった。

……初めは完全に一目惚れだった。

さらさらで真つ直ぐな銀の髪に、雪のように白い肌。幼くも綺麗と呼ぶに相応しい容姿と、守ってあげたくなる小柄で華奢な体躯。こんな可愛い子見たことないと、一瞬で心が奪われた。

その後、彼女の性格に触れた。大人しそうに見えて意外と強情なところ。案外負けん気が強いところ。

出会ったばかりの頃は分からなかった彼女の表情の変化が、最近分かるようになってきた。ぼくに対して少し気を許してくれたのか、目が合うと微かに微笑んでくれるようになった。

アクアが傍にいと、今でもどうしようもなく舞い上がってしまった。こんなにも思い通りにならない感情が自分の中にあるんだと、アクアに出会って初めて知った。

他の女の子には抱いたことがない感情。他でもないアクアにだけ、心の奥底が揺さぶられる心地になる。

——これがきつと「好き」という感情なのだろう。

ぼくはアクアのことを好きだ。その気持ちはもう、嘘にも偽りにもできない。

でも——ぼくの側にいることでアクアが不幸になるのなら、それは、やっぱり良くないことだ。

……何、簡単なことじゃないか。そもそもぼくは彼女に想いを打ち明けてもいない。寮も違うし、授業も大体は別だし。

それに……一番重要なことに、アクアがぼくを好きな訳じゃない。だって、アクアの好きな人は——。

だから、ぼくじゃダメなんだ。ぼくじゃアクアを守れない。

いいじゃないか。ドラコがアクアを守ってくれる。アクアを取り巻く全てから、ドラコはきつと守ってくれる。それでいいじゃないか。

アクアが笑っていられるなら——それで、いいじゃないか。アクアが幸せなら、それでいいじゃないか。

——本当に？

「いいんだ、それで」

己に言い聞かせるように呟いた。

その時、窓ガラスにカツンと何かがぶつかる音が聞こえてきた。ぼくはベッドから身体を起こしては、どうしたのだろうかと思いつき窓辺に歩み寄る。

「……………ふくろうっ？」

見慣れないふくろうが五羽ばかり、窓ガラスを割らんとばかりに順繰りに体当たりをかましている。

慌てて窓を開けると、ふくろう達は一斉に室内へと飛び込んで来ては、カーペットの上に荷物を投げ捨て、入ってきた唐突さそのままに一瞬で外へと出て行ってしまった。

「……………」

ぼくだってなあ、ぼくだって傷付くんぞぞ？ 分かってんのか？

動物に嫌われるスキルは相変わらず常時発動中のようにだった。この体質のせいで、ぼくは魔法生物飼育学の授業を諦めたんだ……………。

ハリーと一緒に決めたはいいものの、提出する直前になって「ダメじゃん！」と気が付いた。気が付けて良かった……………ぼくがいたら授業が滅茶苦茶になること間違いなしだ。まあ単位は確実にもらえないことだろう。

カーペットに散らばったものを拾い集めようとした時『羊皮紙』がハリーからの言伝を受信した。去年、ぼくがハリーに渡した通信魔法の羊皮紙だ。ぼくらは夏休みの間、この『羊皮紙』でほぼ毎日ひっきりなしに連絡を取り合っている。お互いなかなか兄離れ・弟離れがでないものだ。

羊皮紙を広げる。そこには見慣れたハリーの字が躍っていた。

『寝てるかな？ まあいつか、誕生日おめでとう、アキ！』

そうか、七月三十一日。もう日付が変わって、ぼくらの誕生日が来ていた。

取り急ぎ、ハリーへの羊皮紙に『起きてたよ！ 誕生日おめでとう、ハリー！』と書き記してカーペットの上の荷物を見下ろす。

ということは、今さっきふくろう達が運び込んできたのは誕生日の

プレゼントだったのか。

……いくらぼくのが嫌いだからって、プレゼントまで放り投げることはないんじゃないかな、ふくろうさんよ……。

まあでも、ふくろうからどんな渡され方をされようとも嬉しいものは嬉しい。勝手に緩む頬を抑えながら、ぼくはカーペットに腰を下ろして包みを開いた。

ロンからは『かくれん防止器』^{スニークスコープ}だった。一緒に日刊預言者新聞の切り抜きも入っている。フィスナー家に届いた新聞で知ってはいたもの——日刊預言者新聞のガリオンくじグランプリ、それも一等を当てるとは。七百ガリオンが当たるに一番相応しい家族だと思う。去年お世話になった時も思ったが、誰もが凄くいい人達なのだ。普段の行いって大事だね。

ハーマイオニーからは本が三冊贈られてきていた。マグル界で人気のある、ぼくが一番好きな作者のものだ。一回喋った話を覚えていてくれたんだ。ハーマイオニーはフランスにいるらしい。いいな、生まれてこの方外国には行ったことがない。ダーズリー家がぼくとハリーを連れてどこかに行くなんて絶対にあり得ないことだ。

続いてはハグリッドだった。歯の折れそうなロックケーキが丸々一つ入っている。これは後でありがたくいただくことにしよう。

他にも同僚の友人や、フリットウィック先生からの包みもあった。心が温かくなるのを感じながら、ぼくはそれらのプレゼントを一個一個丁寧に仕分けていく。

次に手に触れたのはホグワーツからの手紙だった。中には新学期の教科書リストと、ホグズミードの許可証が入っていた。

幣原の記憶でホグズミードがどんな場所なのかは知っていた。魔法使いだけが暮らす街で、三年生からは数週間に一度遊びに行けるようになる。許可証には保護者のサインが必須との記載があり、ぼくは思わず真顔になった。

ダーズリー家にいないぼくがサインをもらえないのはどうでもいい。そもそもダーズリー家にいたとして、バーノンおじさんが素直にサインをしてくれると思えないのが問題なのだ。ハリー、駆け引きめ

いた取引は苦手だし……。

ふと時計を見ると、針は夜中の二時を指していた。こんなに夜更かししたのはいつぶりだろう。

最後、残っていた二枚のメッセージカードを手にとった。ドラコと、そしてアクアからのものだ。

先にドラコからのカードを開いた。彼らしい流麗な字で、どこか素直じゃない祝いの言葉が並んでいる。苦笑して、最後にアクアからのカードをぱらりと開けた。

そこには、いつもの彼女の字で一言。

『親愛なるアキへ』

「親愛なる……か」

アクアの字を指でなぞりながら、ぼくはそつと呟いた。

この気持ちを消してしまえたのなら、きつと何もかもが上手くいくのだろう。生まれる前から定められた婚約を、それでも二人とも嫌がってはいないことが分かったのだから。喜ばしいと祝福すべきなのだろう。

ずつと、ずつと、ぼくとアクアは友達のまま……ドラコの隣で幸せな花嫁となるその姿を、見守ってあげるべきなのだろう。

それでいいんだ。

それで……いいんだ。

「……っ、いいんだよ、それで」

床に散らばるカードやプレゼントを拾い集め、机の上に丁寧に置いた。アクアから届いたカードを一番下に重ね、目に入らないようにする。

ベッドに潜り込んだぼくは、ぎゅつと強く目を瞑った。

第6話 シリウス・ブラック

大広間での晩餐の直前「そういえばの」とのダンブルドアの軽いノリで、ゆるつと『魔法魔術大会』の開催が宣言された。試合は全一対一の決闘形式、トーナメント戦で、優勝者には盾に加えて『考え得る限り至極の名誉』がご用意されるのだという。

……『考え得る限り至極の名誉』ってどういうことだろう？ 分からないがしかし、ダンブルドアのその言葉を聞いた瞬間、生徒が一斉に顔を引き締めたのには驚いた。

後ほどリイフに「あれってどういうことだったの？」と尋ねたところ、リイフは一瞬驚愕を顔に滲ませたものの「ああ」とすぐに合点があったように頷いた。

「そっか、君は生まれ育ちが日本だったね。もう滅茶苦茶馴染んでいたから忘れてたよ」

「馴染めてるのは嬉しいんだけど……で、どういうことなの？」

リイフはニヤニヤと笑っている。「……そういう訳じゃないけど」と口を尖らせると、リイフは声を上げて笑いながらぼくの背中をバシバシ叩いた。痛いんだけど。

「なら優勝してからのお楽しみだと思ってなよ。今から腰が引けても仕方ないしね」

「はあ……」

そう言われてもなつて感じた。とにかく、リイフが勿体ぶるほどの『ご褒美』なんだろうなということには想像がついた。それに、どうせ優勝争いに自分が絡むことなどないだろうし。こういうのは参加することに価値があるのだ。

夕食後、各寮の談話室に張り出されたトーナメント表の前には大勢の人が詰めかけていた。

ひええと思わずたじろいだぼくを見て、リイフが「ちよつと待って」と言い残しては果敢に立ち向かって行く。やがて戻ってきたリイフは、右手に握ったメモをぼくに見せてくれた。流石リイフ。

「今年は例年に比べて七年生の出場者が少ないみたいだね。まず各学年で予選が行われるらしい。四年生は四年生の中でそれぞれトーナメントを行い、それぞれの学年で勝ち残った二名——つまり、計八人が本戦に進めるんだ。本戦も同じトーナメント形式で最終的な順位が決まることになる」

「なるほど。それならいきなり七年生とぶち当たってけちよんけちよんに叩きのめされることはない訳だね」

少し安心だ。

「大会予選は来週の十月一日から。君の相手はグリフィンドールの女学生、シェフィールドって子らしいよ」

「ふうん、知らない子だなあ」

「君にとっては知っている人の方が少ないでしょう」

「うるさいよ」

そう簡単に人見知りが出るもんじゃない。

「ま、君ならそうそう負けることはないだろ。期待してるよ、『呪文学の天才児』」

「久しぶりにその渾名あだなで呼ばれたよ……やめてくれって、ぼく、あんまりその呼ばれ方は好きじゃないんだ。それを言うなら君こそ、だよ？

我がレイブンクロウの秀才さん」

「君に言われても全然嬉しくないのはどうしてだろうな」

「純粹に褒めてんのに、失礼な奴だな」

前年度の期末試験の結果を見返すまでもなく、レイブンクロウ四年生の中でリイフが一番成績が良いのは明らかだ。でもリイフがあまり嬉しくなさそうなのは……ひよつとすると、ぼくらの学年にずば抜けた奴らがいるからかもしれない。

ジェームズ・ポッターとシリウス・ブラック。三位に大きく差をつけてのトップ2である。一体何をどうすれば、百点満点のテストで三百何点などという点数を叩き出すことができるのだろうか。ううむ、謎だ。

「僕にとってみれば、外国語である英語を一年も掛からず日常生活に不自由ないレベルにまで仕上げた君こそ凄まじい奴だと思うけどね

「……」

「ん？ 何か言った？」

「何でもないよ」

リイフは何故か不機嫌そうだ。はて？ と首を傾げるも、リイフは何でもないと言った。話は終わりとばかりに本を開いた。なんなんだと肩を竦めつつ、做ってぼくも本に手を伸ばす。

今日の読書は『闇の魔術に対する防衛術』の予習として図書館から借りてきた本だ。レイブクロウ生として予習・復習は欠かせませんからね。

ええつと、明日授業の範囲は『狼人間』についてで……。

「……ん？」

ふと覚えた強烈な違和感に、思わず目を見開いた。

突如声を上げたぼくに対し「どうした？」とリイフが尋ねてくる。何でもないよと愛想笑いを浮かべ、ぼくは口元に手を遣った。

「……」

狼人間についての記述を指で辿る。

腹の中の疑惑が一つの結論に着地するまで、ぼくは何度も該当箇所を読み込んだ。



なんと最悪なことに、ダーズリー家にマージおばさんが来ているらしいとハリーから『羊皮紙』で一報が入った。

マージおばさんはバーノンおじさんの妹で、居候のぼくらをいたぶることを至極の楽しみとしている嫌な人だ。犬のブリーダーを生業としていて、マージおばさんがダーズリー家に訪れる際は必ず犬が何匹もついてくる。

ご存知の通り、ぼくはとんでもなく動物に嫌われる性質の持ち主だ。何もしていないのに犬に吠えられるという事象が、マージおばさんには理解できなかつたらしい。気持ちは分かるよ、うん。

でもそれが「犬に嫌われるのはお前の性根が腐ってるからだ！」と

いう理論に落ち着くのは納得できなかったけどね。ぼくはどこからどう見ても穏やかで優しい少年じゃないか。その理屈なら嫌われるべきはお前の方だろうがこの性悪……コホン、失礼。

そんな訳で、ぼくもハリーもマージお婆さんは出来れば関わり合いになりたくない相手なのであった。

……ああ、ハリーが心配だ。実は何度も迎えに行こうかと訊いたのだが、ハリーは頑として『大丈夫って言ったからね』と首を横に振るばかりだ。

なんでもバーノンおじさんと『マージお婆さんが滞在している間は口裏を合わせる』という約束をしたらしく、マージお婆さんを無事に凌ぐことができればホグズミード行きの許可証にサインがもらえるのだと言っていた。

『アキの分のサインももらう手筈になってるから、アキはなーんにも心配しないでいいんだからね』

……そんなこと頼んでないのに、馬鹿兄貴。すぐに一人で耐えようとするのはハリーの悪い癖だ。

せめてハリーのガス抜きは請け負おうと、ぼくはハリーとの連絡手段である『羊皮紙』を肌身離さず持ち歩くようになった。

——『その知らせ』が入ったのは、そんな折。ぼくとアリス、リイフの三人で一緒に朝食を取っていた時だった。

いきなり暖炉がボウツと緑色に燃え出したかと思うと、次の瞬間には一人の男が現れた。ぼくはびっくりして身構えたものの、リイフは面倒臭そうな顔をして、手に持っていたトーストを口の中に放り込む。

煙突飛行ネットワークかと、暖炉に灯った緑の炎を見て遅れて気が付いた。去年初めてウィーズリー家で味わったものだ。

「ジム、こんな早朝から一体何の用だい？」

「邪魔立てしてすまないねリイフ、休暇の真っ最中だというのに。おっ、そこにいるのはもしかして君の息子くんか？　君、二人の子持ちだったっけ？」

「片方は違うよ。私に似てない方は息子のご学友だ。私をもう少し目

つきを悪くしたような顔してんのが、私の息子だよ」

リーフの言葉に、アリスがチイツとあからさまに舌打ちした。でもリーフの言ったことも間違っちゃない、というより描写がそれでドンピシャなのでどうしようもない。

「初めまして、アリス・フィスナーくん。私はジム・モーリス、以後お見知りおきを……っと、そうじゃないそうじゃない。リーフ、すまないが緊急だ。魔法省に来てくれ」

「何か事件でもあったのか？ 新人くんが何かやらかしたかい？ あの子は確かに、そのうちどでかいことをやらかしてくれそうな子ではあったけど。ある程度の対策マニュアルなら作っておいてあげた筈だろう？」

「その対策マニュアルに載ってないことが起きたんだよ、リーフ」

リーフの同僚が続けた言葉に、ぼくは表情を凍らせた。

「シリウス・ブラックがアズカバンから脱獄した」

『……ブラックは武器を所持しており、きわめて危険ですので、どうぞご注意ください。通報用ホットラインが特設されていますので、ブラックを見かけた方はずぐにお知らせください……』

アナウンサーが一人映されたシンプルな画面にザザザ、と時折ノイズが混ざる。ぼくの魔力のせいかな、電波はたまに乱れるもの、何とか言葉は聞き取れた。

ソファアの上で膝を抱えたまま、ぼくはテレビのチャンネルを切り替えた。

ダーズリー家でよく流れていた面白くもなんともないテレビショッピングに、よく分からないけどダドリーが好きそうなアニメ、ピーラーのCMと、パチパチとチャンネルを替えた後、ぼくは結局ニュースに戻す。今やどこのニュース局もシリウス・ブラックの脱獄について報道していた。

アナウンサーが酷く真面目な顔で、シリウス・ブラックがどんな大犯罪を犯した危険人物であるかを読み上げる。十数人も人間を殺

した恐ろしい人物であると、まるで彼が快樂殺人者であるかのよう
に。自分達とは違う恐ろしい人外であるかのよう読み上げる。

シリウス・ブラックの顔が画面にでかど映し出された。髪も髭ひげ
も伸び放題のもじやもじやで、眼窩は深く落ち窪み、頬はげっそりと
痩せこけている。そこに昔の面影は見られない。

リーフの同僚の言葉を聞いて呆然と立ち竦んだばかりに、リーフは一
瞬哀れみのような表情を浮かべてみせたものの、そのまま魔法省へと
行ってしまった。

「帰ったら少し説明しよう」、それだけを言い残して。

流れているテレビ番組はどれもマグルのものだ。だからシリウス
が本手に持っているのは銃ではなく杖だということや、どこの刑務所
から脱獄してきたのかなどは全く報道されていない。

頭の中で疑問がいくらでも弾けて消える。

……どうしてシリウスが人殺しなんて。一体、何が起きたというの
だ。

いくら幣原秋の記憶を探っても、シリウスがそんなことをする人だ
とは思えなかった。

……でも、人は変わる——変わってしまう。

時の流れという、残酷でどうしようもないものによって、変わらざ
るを得なくなる。

だって、ジエームズとリリーがヴォルデモートに殺されるなんて思
わなかった。それを言うなら幣原だって死んでいるし、幣原の両親
だって……。

ニュース番組に映し出されたシリウス・ブラックの写真。その顔
を、穴が開くほどにじつと見つめる。

学生時代、幣原が知る誰よりもハンサムだったシリウス。無頓着に
制服を着崩していて、でもその無頓着さが何よりも格好良く映った。
いつも自信ありげで楽しそうな笑みを口元に浮かべていた、彼が
……。

「ああ、もう！ くっそ、俺はお前の沈んだ顔なんざこれっぽっちも見
たくねえんだよ！」

そう叫んだアリスは、そのまま勢いよくテレビの電源を落としてしまった。バシヨンと消えた画面を背に、アリスは眉を寄せてぼくを睨む。

「何で俺がお前なんかに気い遣わなきやなんねえんだ、阿呆らしい！お前が何に思い悩んでんのか知んねえけどな、そのシケた面ずつとぶら下げてんじゃねえよ、見るに耐えねえんだよ！」

喚くアリスを、ぼくはただポカンと見つめた。ああクソと舌打ちを零したアリスは、ぼくを盛大に睨みつける。

「気晴らしだ、外に出るぞ」

アリスがぼくを連れ出した先は、ダイアゴン横丁のミニチュア版といった雰囲気を持つ魔法専門の商店街だった。銀行の支部に薬問屋、アイスクリームパーラー——はマグル界でもよく見る代物だけ——に、箒専門店、ふくろうやらヒキガエルやらネズミやらがわんさかいるペットショップに本屋。

人通りもそれなりに多く、すれ違う人々は皆色とりどりのローブを纏っている。ダイアゴン横丁以外にもこんなところがあったとは驚きだ。でも普通に考えてみたら当然のことだ、ダイアゴン横丁だけで魔法使い全員の生活をどうにかできる訳がないのだ。

「さ、何か欲しいもんでもあるか？ 親父からたんまりふんだくってきたから金ならあるぞ」

「その言い方やめて？ そんな、でも悪いよ」

「いいだろ。そういやお前、今日誕生日じゃねえか。何か買ってやるよ」

アリスの家から暖炉五つ離れた場所にあるこの商店街は、アリスも幼い頃からよく訪れていたらしい。顔見知りらしきおぼちゃん達から至る所で「おっ、アリスじゃないか！」と気さくに声を掛けられている。「よ、レイネスのばあちゃん」とアリスが気軽に返したのにはちよつと驚いた。学校じゃかなりの気難しがり屋で通っているけれど、実際は付き合い良い奴だからな。

「久しぶりだねえ、アリスちゃん！」

「うるっせえなラインばあ呪うぞ！　ちゃんをつけんクソババア！」

……口の悪さは昔からのものらしいが。

アリスとぼくは商店街をぶらぶらしながら店先の商品を冷やかしつつ、最終的に本屋へと向かった。もうこれはレイブンクロー生の本能と言っている。談話室の一角に本の貸し借り専用スペースができていて、レイブンクローには本好きが集まっているのだから。

ついでに言えば、読書が嫌いなレイブンクロー生をぼくは今まで一度も見ることがない。

「おっ、これどうかな。『大嫌いな相手に有効！　有名魔法使い五十人が選んだ呪い一〇〇選』——」

「誰に使う気だ、おい」

「じゃあこっち、『凝り固まった頭を柔らかくする魔法パズル一〇〇連発』——ほら、この前レイブンクロー寮の前で三時間頑張った君にピッタリ」

「さっきの本、やっぱり買うか。片っ端からお前に試してやろう」

「ごめんアリス」

そんなこんなで、ぼくらが仲良く和気藹々と過ごしていた時のことだった。

「アリス・フィスナー！」

幼く高いボーイソプラノが静かな店内に響き渡る。つい先日聞いたばかりの声だ。慌てて振り返ったぼくらは、ユークレース・ベルフェゴールの姿を発見した。

ユークは本屋の中だというのに全力ダッシュしては、勢いよくアリスに飛び付いてくる。アリスも慣れた顔でストンとユークを受け止めると、腰を曲げてユークに目線を合わせた。

「ユーク、うるせえ。静かにしろ」

「はいっ！　アリ……アリス」

元気よく返事をしたユークだが、アリスに睨まれ声のポリウムをぎゅいんと落とした。「よし、いい子だ」と、アリスはユークの頭を

ぼんぼんと軽く叩く。……なるほど、こういう飴と鞭こそが、やつぱり懐かれる理由か……じゃなくて。

「で？ お前一人で買い物に来た訳じゃねえよな……俺、お前の父親と母親苦手なんだよ。何度地下牢に放り込まれたことか……アキ、ずらかるぞ」

一体何をどうして地下牢に、しかも何度も放り込まれることになるのか非常に詳しく理由を知りたいところだ。ぼくとハリーが、よく物置部屋に閉じ込められたのと同じ感じだろうか……うわ、何この気持ち、他人事とは思えない。

アリスに手を掴まれ引つ張られる。ぼくも歩き出そうとしたものの、背後から聞こえた声に咄嗟に足を止めた。

「……アキ？」

そうか弟がいるなら姉の方もいるよなそれが自然の摂理というものだそもそもガウデの原則的に言うのだね自然の摂理というものも——つと、ちよつとトリップしかけた。

「あ……アクア」

……どうして君は普段は無表情な癖に、こういう時だけほんのりと笑顔を浮かべてるんだらうなあ？ おかげで立ち去れないじゃないか。

足を止めたぼくに、アリスが呆れたようにため息をついた。

「……あなたも、お買い物？」

「あ、うん、えつと、そうだね、ま——暇潰しも兼ねて、アリスが」

「……そう。あなたとこんなところで出会えるなんて思っていなかったから、驚いちゃった」

「あー、そりゃ、ぼくもだね……うん」

コクコクと何度も頷く。ぼくの反応に、アクアはクスクスと笑った。

「……あなた、この前から挙動不審じゃない？」

そりゃそうだろこの前は君が可愛すぎて……あう。

んで、今日はその、ドラコに色々言われたばかりで心の準備というか心構えがまだできてなくて……その。

「そう、かな」

「……そうよ。変なアキ」

「アリス、一体今何の本を読んでるんですか？」

『親愛なる友人へ贈る、友情が壊れる悪戯ベスト一〇〇』

「この店、やけに『一〇〇』って数字が好きなんですね」

「……ねえアキ、その、まさか今日会えるなんて思っていなかったから……えっと」

その時アクアの声を遮るように「アクア！ ユーク！」と二人を呼ぶ声が聞こえた。アクアは言いかけた言葉を飲み込み「……父様」と呟く。……父様？

「父上……」と軽やかな声を上げたユークは、アリスから身を離すと一人の男性の元へと駆け寄って行った。なるほど、父親と一緒に来ていたのか。ユークの動きにつられて視線を向けた。

リイフと系統は違うものの、こちらもすこぶる格好良い人だ。アクアとユークの父親なのだから当然か。

顔かお貌かたちが整っているのは勿論のこと、身に纏っているものが須く英国紳士然としていて品がある。リイフが立っているだけで視線を集める俳優ならば、この人は身に付けた服や小物を映えさせるモデルのようだ。

「欲しい本は見つけたかい？ そろそろ帰ろうと思っっているんだけどね……あっ!？」

ユークとアクアに穏やかに声を掛けたその人は、そのままぼくに視線を向けると息を呑んでその場に凍りついてしまった。

「どうしました？ 父上」

そんな父親に向け、ユークが心配そうに声を掛ける。父親は慌ててぼくから視線を外すと「何でもないよ、ユーク」とニコリと微笑んだ。

「ああ、アリスくんもいたのか。先日のパーティーではお疲れ様」
「どうもっす」

アリスが軽く頭を下げる。頷いた父親はアクアとユークの肩を軽く叩いては「帰ろう」と促した。

「……はい、父様。アキ、フィスナー、またね」

「アリス・フィスナー、新学期にまた会いましょう！」

ユークが大きく、アクアが小さく、ぼくらに向かつて手を振る。ユークはぼくに睨みを利かせていくことも忘れない。こりや目を付けられてるな……。

「……あー、悪いな、アキ。あいつらと会う可能性を考えてなかった……」

「いや、大丈夫だよ、アリス。それよりぼく、この本が欲しいんだけど、どうかな？」

ぼくは十センチほどの厚さの本を指差した。ハードカバーの重たそうな本で、振り抜いたら鈍器としても充分役に立ちそうだ。きつと値段もそこそこするだろう。

「何だよ、これ……」『一目で分かる、魔法界重要歴史一〇〇』……また一〇〇か……値段は？ 一〇〇シツクル？ ここでも一〇〇か！ この店こんなだったか？」

何やらアリスが喚いている。そんなアリスの声をBGMに、ぼくはアクア達が消えていった方向を見つめながら、先程のアクアの父親の挙動について考えを巡らせていた。

先程ぼくに一瞬見せたあの表情。ぼくに対して驚愕か、恐怖か、どこか畏れを抱くような顔をしていた。当然ぼくと彼の間に面識はない。とすれば――

「……幣原秋、かな」

一年の頃、クイレル教授とアクアの会話を盗み聞きしたことがあった。あの時のクイレルは賢者の石を手に入れた後、自らを匿うようアクアの両親に伝えてほしいと要請していた。

となると、ベルフェゴール家は――

「あの人の仲間――死喰い人、ね……ならば『黒衣の天才』、闇祓いの幣原秋を恐れるのも道理……」

「アキ？ 何ぶつぶつ一人で言ってたんだ、気持ち悪い」

「き、気持ち悪いとは何さ！」

「思った通りのことを言っただけだ」

「酷い！ その率直さがむしろ滅茶苦茶酷い！」

「うるせえ」とアリスは、会計を通したばかりの先程の本を——十センチほどの厚みがあり鈍器にもなりそうだと称したその本を——僕の頭に振り下ろした。痛みにも出せずに蹲ったぼくに向かって「ほら、さっさと帰るぞ」と追い立てる。

「君はなんて酷い人なんだ、なんて性格が悪いんだ……」

恨みが籠ったぼくの言葉を、アリスは鼻で笑い飛ばした。

「何言ってるんだ。性格悪くねえと、お前の友達なんてやってらんねえよ」

第7話 探り合い

たびたび述べている通り、闇の魔術に対する防衛術の授業はグリフィンドールとレイブンクローの数少ない合同授業だ。

「……という訳で、狼人間とは……」

何の因果か、闇の魔術に対する防衛術の教師は毎年一年で辞めていく。今年の先生は、アタリかハズレかで言うならば『ハズレ』のようだった。

教科書をただ読むだけの退屈な授業に、まだ今学期が始まって間もないというのにレイブンクロー生の皆は飽きてしまっていて、各々好き勝手に魔法史の予習や呪文学の復習をやっている。それを注意する度胸もないから、更に舐められるんだってば。

ぼくも普段であれば、闇の魔術に対する防衛術の教科書の上に数占い学のノートを重ねているものの、今日ばかりはそうする気も起きなかった。

思わずグリフィンドールの彼らに視線が向かう。ジェームズやシリウス、リーマス、ピーターが楽しそうにクスクスと笑い合っている姿が、更に己の考えを煽る結果となる気がしてしまって、ぼくはそっと視線を外した。

「……以上で、今日の授業は終了。本日の授業を踏まえて『人狼の見分け方』を五十センチ書くように……」

先生の言葉を皮切りに、教室中が一気に騒がしくなった。息をついて、ノロノロとカバンの中に教科書やノートを詰め込む。そこに悪戯仕掛人の四人が近寄ってきた。

「やあ、秋。どうした？ 気分が優れないような顔をして」

「別に。授業があまりに退屈で、ちよつとウトウトしててまだ眠いだけ」

「なかなか言うなあ。まだ先生様がすぐそこにいるってのに」

ジェームズは後ろにいる先生を指し示しながらにやりと笑う。ぼくは小さく肩を竦めた。

「君達は楽しそうだったね、始終」

「そりゃあ楽しいさ、何て言ったって……」

と、うっかり失言しかけたシリウスの頬をリーマスがぐいっと抓へつねった。その手際は容赦という言葉が一切見えないほどで、思わず感心してしまう。

「シ、リ、ウ、ス？」

「わ、悪かったっ！」

「本当にそう思ってるのかい？」

リーマスが更にシリウスの頬を引っ張るのに、ピーターが「も、もう止めてあげよつ、可哀想だよシリウスが！」とワタワタしている。

「ピーターが言うのなら仕方ないなあ」

ニコリと微笑んだリーマスは、シリウスの頬から手を放した。シリウスは赤くなつた頬を手で押さえ、若干リーマスから距離を取る。そんな様子を見て、ジェームズが堪え切れなくなったように笑い声を漏らした。

「……あれ？ リーマス」

「ん？ どうしたの？」

リーマスが少し首を傾げてぼくを見る。ぼくは無言でリーマスに手を伸ばすと、リーマスの頬に触れた。リーマスは驚いたように目を睨つたものの、ぼくの手を振り払うことはしなかった。

頬に一直線に入った傷をそつとなぞる。結構最近のもののように、まだ赤い。

「……そう言えば先週、リーマス、数占い学休んでたよね」

ポツリと零す。小さく息を呑んだリーマスは、何かを誤魔化すように笑つた。

「僕がすぐに体調を崩すのは、君も十分知っているだろう？」

「知ってる。……一ヶ月に一回のペースで、君は体調を崩すよね」

ジェームズとシリウス、ピーターも、はつとしたようにぼくを見つめた。リーマスはぼくの手に触れると、自分の頬からそつと外す。

「ああ……そうだね」

「……………」

リーマスの右手が、ぼくの左手を掴んでいる。その指先はひんやり

と冷たかった。

ぼくはパキンと指を鳴らし、リーマスの傷を癒す魔法を掛ける。リーマスの手を解くと、そのままカバンを手に取った。

「……変なこと言ったね、ごめん」

リーマスに笑いかけたぼくは「じゃあ、また」と彼らに背を向けた。予想通り、彼らは追っては来なかった。



リーフはそれから、三日間家に帰って来なかった。

三日後、八月三日の晩にようやく帰ってきたと思えば「寝かせてくれ」と呟いてリビングのソファに倒れ込み、子供のように眠ってしまふ始末。不寝の番として待機していた使用人を呼ぶことで、何とかリーフを自室まで送り届けてもらうことができた。アリスがずっと悪態をつけていたものだ。

四日の朝は朝食も取らずに『姿くらまし』してしまったものだから、まあアリスを宥めるのは大変だった。

「まあそりゃあね、その反応も当然ですよね、だって今日の朝食を作ったのは料理人じゃなくて自分なのに、愛息子の手料理に目もくれずにいなくなっちゃったお父さんを見ればね痛いっ!!」
「二度と喋れねえようにしてやろうか」

ちなみに、以前雇われていた料理人は今回の解雇で実家の店に戻ってしまつたらしく、再雇用に時間が掛かっているそうだ。だからこの夏中はアリスの手料理を頂けるらしい。やったぜ。

ぼくも手伝いはしているものの、メインはアリスだ。名門貴族のお坊ちゃんがよく料理なんて覚えたものよ。

そんなこんなでしばらくぼくとアリスだけの日々は続き、リーフがやっと仕事から解放されて帰ってきたのは八月六日の深夜——というより八月七日の早朝だった。

どのくらい早朝だったかと言うと、リーフが帰ってきたのとぼくが朝起きてきたのが同じくらい。ちなみに時刻は朝の五時半、いつも

通り清々しい朝の目覚めだった。

目の下の隈くまを濃くしたリイフに手を貸し、彼が寢室のベッドに倒れ込むのを見届ける。

……リイフってホント、何と言えればいいか……アリスのお母さんが生きている時もきつとこんな感じだったんだろなあ。そりゃ、アリスがあんな捻くれた子供に育つ訳だよ。

そんなリイフがようやくと自室から這い出てきたのは、もう日が落ち切った頃だった。ぼくとアリスの二人で夕食の用意をしていた時に、髪の毛に盛大な寝癖を付けてのご登場だ。折角のイケメンが勿体無い。

「おや、ただいまアリス」

「……で？ もうすぐ発つってか？」

「何を怒ってるんだいアリス？ ひとまず、あらかた用事は終わったよ……後は休暇の続きを楽しんで来いとね」

「嘘だろ!? アンタの分の夕飯作ってねえよ！」とアリスは叫んだ。

「ほら、やっぱり言った通りだろう？」とぼくは苦笑する。

「あー、えつと、なんだい？ 今日の私の夕食は抜きと……悲しいな」
「るっせえ、誰のせいだと思ってやがる！」

「そう言いつつも即座にもう一人分を空いた左手で作り始める君はホントに凄いな」

「アキ、ホグワーツに着いたら呪いの練習に付き合ってくれないか」

「上等。全て反対呪文で粉々にしてあげよう。君のプライドも一緒にね」

その日の夕食は、何とも美味だった。

夕食後。一人で皿洗いをしていると、キッチンにリイフがやって来た。
た。

「やあ、アキ。お客様なのに手伝わせてしまつてすまないね」

「いえいえ、このくらいは。アリスは『働かざる者食うべからず』つて言つてましたよ」

それに、ダーズリー家では掃除洗濯料理と一通りの家事を仕込まれているのだ。お役に立てて嬉しい限り。

「キッチンに何か用事ですか？」

「いや、私は君に用事があつてね。この前言いかけていただろう？」

——シリウス・ブラツクのことです」

食器を洗う手が思わず止まった。ハッと我に返って手を動かす。

「……ああ、そのこと」

「その、アリスの前では切り出しづらいところもあつてね……まず、彼がアズカバンに入れられた理由だが」

『たった一度の呪いで、魔法使い一人とマグル十二人を一度に殺した大犯罪者』——ちなみにその哀れな魔法使いの名前は、ピーター・ペティグリユー」

「………」

「この一週間、ぼくが何も調べなかった訳がないじゃないですか。『一目で分かる、魔法界重要歴史一〇〇』に日刊預言者新聞のバックナンバー、それだけあれば充分です。リイフさん、あなたのお父さんは随分几帳面な方だったようですね。十二年前のものも綺麗にスクラップされてましたよ」

アリスが几帳面なのは隔世遺伝だろうか。だとしたらアリスの子供はリイフに似るのかな。

特にアリスのお母さんが亡くなった辺りの頃から、日刊預言者新聞は、そりや全部揃つてはいるのだろうけど、あつちはぐしやぐしやこつちはぐしやぐしやでちよつと見るに耐えなかった。

「……っはは。君には全部お見通しか」

「聞きたいことは——山ほどあります」

そりやそうだろうねと、リイフは笑つたようだった。

水道の栓をきゅつと捻つて水を止め、布巾で食器の水気を吸い取る。

「どうして、シリウスが……ピーターを、ポッター一家を殺すことになったのか。シリウスがどうして『例のあの人』の配下に……死喰い人、なんかに」

「……人は変わるものだよ、アキ」

「……そう、ですね」

頭を振った。目を伏せる。

「シリウス・ブラックが——『例のあの人』の第一の臣下がアズカバンから脱獄して、真つ先に考えることは、恐らく」

言葉を切って、続けた。

「ご主人様を倒した相手——ハリー・ポッターへの復讐」

「……その通りだよ。君は本当に賢いね」

拭き終わった食器を重ねる。そのまま食器棚に持つていこうとしたところ、リーフの杖の一振りで、一瞬で食器が食器棚の中へと移動して行った。いいなあ魔法。ぼくはどうしてまだ未成年なんだろう？

「だが、アキ、心配することはない。君達の伯母さんの家にいる限りにおいて、ハリー・ポッターの安全は保証されている。闇祓いと協力して、君達の家には絶対の防衛呪文を施したんだ。それに加えて監視……いや見張り……ええつと」

「うん、いい表現を探してくれたのはありがたいけど、いいから」

道理で最近、ハリーからよく『被害妄想かもしれないけど、どこからか視線を感じるんだ……』と愚痴られる訳だ。

「いいのかい？　ちゃんと監視もつけたからね、ハリーは大丈夫だよ」
「……いいとは言ったけれど、そうはつきり『監視』と明言されるとなかなかクるものがあるな……」

あと、なんともしよっぱい話だが、ハリーの安全がダーズリー家によつて成り立っているというのもなんだか歪な話だよなあ。ぼくら、あの家で何度も命の危機に瀕しているんですけど？

「加えて……君には後一つ、話しておかなくてはならないことがある。どの書物にも、日刊預言者新聞にも載っていない事柄だ」

リーフの、真剣みを帯びた声を聞いた途端。

……背筋を這う嫌な予感に、

「幣原秋のことだ。君は知っておくべきだと思つてね」

——ドクン、と心臓が、跳ねた。

「シリウス・ブラックを捕縛したのは、幣原秋だ」

それは——つまり。

ぼくの声はしかし、窓ガラスを突き破ってきた『何か』によって遮られた。派手な音と共に飛んできた『それ』は——

「……紙飛行機？」

紙飛行機が窓ガラスを突き破る？ 普通逆なのでは、というか何じゃそりゃ。魔法界の不可思議にはいい加減慣れてきたと思ったのに、まだまだ知らないことがたくさんあるなあ。

驚きに声も出ないぼくとは反対に、リイフは至って落ち着き払った様子だ。すぐ目の前を飛んでいた紙飛行機を掴み、中を広げる。一行読んだリイフは、素早く顔を上げるとぼくを見た。

「大変だ、アキ」

その時大きな物音を聞きつけたアリスが「おいアキ、今凄まじい音が聞こえてきたが大丈夫か!？」と駆けつけてきた。

「ガラスが割れたような……って親父!? なんでキッチンなんかに、滅多に立ち入らないのに!」

「ああ、すまないねアリス。今片付けるから」

キッチンを覗き込んで素っ頓狂な声を上げたアリスに、リイフは杖を一振りして割れたガラスを元通りにする。

……いや、アリスが驚いたのはそこだけじゃないと思うんだけど。つくづくこの親子、お互いちょっとズレている。

「リ、リイフさん。一体何があったんですか？」

ぼくは慌ててリイフをせっつく。ああと頷いたリイフは、心底困ったような顔でぼくを見下ろした。

「ハリー・ポッターが、マージ・ダーズリーを膨らませて失踪したと報告が入った」

「アキ！ 君の伯母さんちの暖炉は煙突飛行ネットワークに組み込まれてないから行くのは無理だって！ アリス、しっかり捕まえて！」「つたり前だろ！ 箒もないのにどうやって行く気だこの馬鹿!」

「こうなったら『姿くらし』で……!」

「理論も習ってないのにできる訳ねえだろ! 身体がバラけんのが関の山だぞ!」

「バラけるのは案外痛いものだよアキ……!」

「大体、ハリーが失踪したって、そりや監視の意味ないじゃんかよ!

おいふぎけんよ、ぼくはハリーの元へ行かないと、ハリーを守んないといけないんだよ!」

「ちようど監視役が手洗いにコンビニにふらつと立ち寄って、マグルの女の子のグラビア雑誌に魅せられていたところだったらしい」

「何だそれ、減棒モノだな」

「落ち着いてくれアキ、一晩もすればハリーは魔法省が見つける。それまで君はここで待つんだ」

「それまでにハリーがブラックに殺されたらどうすんだ!」

くっそう、魔法さえ使えたらなあ!

ぼくが二人に押さえ込まれジタジタしていると、再び飛んできた紙飛行機がリビングの窓ガラスを割り侵入してきた。

「……なあ親父様よ。紙飛行機が窓ガラスを割ってくるのはどうしようもないのか?」

「暖炉から人が出てくるよりいいじゃないか。その場合私は魔法省に呼び出されることがほぼ確定なんだから……つと。アキ、安心してくれ。ハリーの安全は確保された。ハリーは『夜の騎士バス』に乗り込んだらしい……女の子好きのあのクソ野郎だが、最後にはちゃんと仕事しやがった。ハリーを追って、直後に『夜の騎士バス』に乗ったと報告が入った……」

「ほっ、本当に!」

アリスの力が緩んだ。ぼくは慌ててホールドから抜け出すと、ぺたんと床に座り込んだままりーフを見上げる。「ああ」とリーフは穏やかに微笑んだ。

「明日ハリーに会いに行こうじゃないか、アキ。私も行くよ。あの女の子好きのクソ野郎をちよつとシメる用事が出来たものでね」

……似てない似てないと思っていたものの、根元の物騒さはこの親

子共通のものなのかもしれないなど思い始めてきた。

第8話 壊れる音

「秋、多分気付いてるよね」

「ああ、多分な」

ジェームズ・ポッターとシリウス・ブラックは、両手に大量の本を抱えながら廊下を歩いていった。

図書館からの帰路である。一週間に一度、この二人が図書館で上限いっぱいの本を借りて行くのは最近の日常となっていた。

図書館の閉館時間ギリギリまで粘り、厳選に厳選を重ねた上で借りる本を選ぶ二人の姿を、周囲の人間は「流石、学年首席と学年次席はやるのが違う」と賞賛の眼差しで見えていたものの、別にこの二人は学業のために図書館へと通っていた訳ではない。二人の腕の中にあるものが『最上級変身術』『リセット・ド・ラパン——『動物もどき』の手記』『上級・闇の生物』『超物質的変身術理論』と、タイトルをなぞっただけでも現在四年生である彼らが受けている授業にはこれっぽっちも掠らないものであることからそれは明白である。

「やっぱり、この前の闇の魔術に対する防衛術の授業のせいかなあ」

「あれがキツカケなのは間違いないだろうな」

「だからさあ、狼人間についての授業なんてしなければいいのにな」

「おい、それじゃ本末転倒だろ」

シリウスの言葉にジェームズは肩を竦めた。歩く速度を緩めては「よいしょ」と本を抱え直す。

「全く、図書館の本にも浮遊呪文が効けばいいんだけどなあ」

「本当にな。マダム・ピンスがよくもまあ……昔うつかり落書きして頭殴られたぜ」

「僕はページを破りかけて噛み付かれたよ」

「歯はどこにあるんだよ」

「それはまあ、気分の問題さ」

はあとシリウスはため息をついた。ちよウどのタイミングですれ違った女子生徒二名が、シリウスの顔を見ては「きゃあつ」と黄色い声を上げて駆けて行く。

学年一、もしかしたら学校一を争うほどにシリウス・ブラックはモテる。羨ましい限りだとジェームズは鼻を鳴らした。

「折角、秋にバレないようにって数ヶ月放課後の秋をストーキングして、秋が一番図書館に来る確率が低い、六限に薬草学がある木曜日にやってたのになあ」

「そういう事情で木曜日だったのかよ。というか数ヶ月ストーキングされて気付かないあいつもあいつだな……」

「ぼくのストーキングの腕が素晴らしいという結論には行かないのかい？」

「行つていいのか？ ジェームズ。それは素晴らしく不名誉な称号に、俺には思えるがね」

「闇祓いの隠密捜査では重宝するだろ？」

「それは否定しないけど、さ」

ジェームズは軽やかに笑った後、表情を一転させた。眼鏡の奥の瞳を僅かに細める。

「どうする？ シリウス」

「……どうするもこうするも、リーマス次第さ」

「君は、リーマスが自分から口を割ると本気で思っているのかい？」

「僕らは一体何年一緒にいるんだよ」

「あー、悪かった悪かった。そうだな……俺達がいっくら詰め寄ったところで数ヶ月間口を利かないという暴挙に出た上、現場を押さえられてやっとな吐いたレベルだったもんな」

彼らが一年の時の話である。

「そりゃ、リーマスにとつては好んで話したくはない話題だろう……いくら秋が、友人が相手でも」

「僕にとつちやあ、あんなの『ふわふわでちっちゃな問題』だけどね」

「そんな風に捉えられるのは君くらいなもんだろうな、ジェームズ」

「秋もそんな風に捉える人間だ、とは思わないかい？」

「俺はそんなにポジティブに生きちやいないよ……」

「そうだね、シリウスはどつちかというネガティブ思考だ。生きててつらくないの？」

「君はいつでも楽しそうだな」

「僕がいる世界に楽しくないものなんて要らないよ」

極端なことを口走った友人に、シリウスはまたもため息をつく。

その時、すぐ近くの空き教室から数人の生徒が出てくるのが見えた。スリザリンの制服を着ている。その中にセブルス・スネイプも混じっていたことに、ジェームズとシリウスは目を瞠った。

彼らは二人には気付かず、教室の扉に魔法を掛けた後立ち去っていく。

胸中に過ぎる嫌な予感に、ジェームズは慌ててその教室の前に駆け寄った。両手に抱えた本を地面に置くと、扉の引き戸に手を掛け引張る。しかし『貼り付け呪文』でも使われているのだろうか、どれだけ力を込めても扉はぴくりとも動きはしない。

「お、おい、ジェームズ？ どうしたんだ」

「今の奴ら、どうして空き教室の扉に魔法を掛けたんだと思う？ この中に誰かが閉じ込められている可能性は考えられない？ ……くっそ、Finite（終われ）！」

ローブから杖を抜き呪文を唱える。扉に掛けられた魔法を無効化させたジェームズは、勢いよく扉を開け中へと駆け込んだ。シリウスもすぐ後に続く。

教室の真ん中で、一人の男子生徒が磔刑の格好で空中に吊るされていた。まだ小柄で制服も真新しいから、今年の新入生だろうか？ ジェームズは見当を付ける。

ジェームズとシリウスの二人がかりで少年を下ろした。助け出された少年は、地べたに腰を下ろしたまま堪え切れなくなったように泣き出してしまう。

「あーよしよし、大丈夫かい？ 一体何があったんだ？」

少年曰く。

自分の両親はマグル生まれで、であるにもかかわらずスリザリンに入ってしまったことについての先輩からの制裁——だと言うのである。

ジェームズとシリウスは、同時に顔を見合わせた。

同寮の後輩にそんなことをするほど、あいつは落ちぶれた奴なのか。

「……秋には」

「言ったって信じるもんか」

シリウスは吐き捨てるように呟く。

「腐れスリザリンが」

「……ああ」

小さく、ジエームズは頷いた。

ローブの中で強く杖を握り締める。

パチン、と火花が弾ける音が、聞こえた気がした。



「ああこれこそが至福という訳だねよく分かってるよううんそうだこれこそが天国だ僕は今まさに死んでも構わないさアキから抱きついてきてくれるだなんてねああでも今死んだらこの至福の時間が途切れてしまうし永遠にアキと会えないなんて僕は絶対に死ねない！」

「ホントに大丈夫かよこの眼鏡。頭でも打ったんじゃないのか？」

「クソ野郎からの報告には、そんなことは書いてなかったけれど」

アリスとリイフがすぐ傍で何やら話しているもの、どうだっさいい。ハリーが無事だったという事実だけで、今は充分だ。

「……あー、そのね、うん。アキ、ごめんよ、ちよーつとばかし自制心が足りなかったただけなんだ。マージおばさんを膨らませちゃったことはさ、うん。後……ホグズミードの許可証……」

「そんなのどうでもいいよー！」

顔を上げ、ハリーの服を掴んだ。驚いた顔のハリーとしっかり目を合わせる。

「君が今生きてるといふ、それだけでぼくは……」

「……ごめんね、アキ。心配かけて」

ハリーは、やがてふわりと笑った。

「魔法大臣が？」

「うん、そうなんだ。僕が『漏れ鍋』に着いたら、何故かそこにファツジがいて——」

多分それは、ハリーの監視……いや、見張り役の報告のおかげだろう。

リイフとアリスの二人は、ハリーの見張り役だった役人（マグルに紛れられそうなくらい影は薄いものの、どこか肝の据わった部分も併せ持つていそうな青年だった）との話が済むと、ぼくを『漏れ鍋』に残したまま帰ってしまった。これから新学期が始まるまで、親子水いらずで過ごすのだろう。

……心穏やかに休みを満喫できればいいんだけどな、アリスの奴……。

そしてぼくとハリーは、新学期までの二週間『漏れ鍋』に滞在する許可をもらうことができた。何と驚き、滞在費は魔法省から出るらしい。ありがたいけど、魔法省の予算をこんなことに使つていいのだろうか。

「僕、規則を破つたのに何も処罰されなかつたんだ。どうしてだろう？」

「それは、多分……」

フロリアン・フォーテスキューのアイスクリーム・パーラー、このテラスで宿題を広げつつ、ぼくとハリーはお喋りに興じていた。暖かな日の光を浴びながら、しかも時折店主のフロリアン・フォーテスキュー氏にサンデーを振舞ってもらいながらハリーと談笑し合う時間は、何物にも代えがたいほどに素晴らしい。フォーテスキュー氏の祖先にはホグワーツ校長がいたらしく、だからかどうかは分からないものの、彼は中世の魔女の火炙りを中心とした歴史事項に詳しくて、ハリーは夏休みの宿題が随分と捗ったようだ。

「それよりハリー、マージおばさんを膨らませちゃったんで？
一体どうやったの？ ぼくも常々、あの丸さは風船のようだって思つてたんだよ。よくあんなに中身が詰まってるものを浮かせたねえ」

「あれは……思わず、かんしゃく癪癪が爆発して、ね……最中は自業自得だと思つてただけけど、改めて考えたら悪いことしちゃったよ」

「ハリーは本当に優しいね。ぼくがその場にいたら、きつと屋根に大穴を開けてどこまで飛んでいくのかを計測したと思うよ」

「アキがいなくて良かったと本気で思ったのは今が初めてだよ」

ハリーはホツとした顔でそんなことを言う。

ふふと笑つて、ぼくはレポートの続きを書こうと羽根ペンをインク壺に突っ込んだ。しかしインクが切れてしまったようだ。予備を探しかけ、そう言えば予備も切れていたんだと思い出した。

「アキ、僕のを貸そうか？」

「ありがとう。でもどうせ買わなきゃいけないものだし、買つてくるよ。ついでに新しい教科書も見に行つてくるから、ハリーは先に帰つてて」

そう言つて、ぼくは荷物を纏め立ち上がった。アイスクリーム代を支払い、フローリアン・フォーテスキュー氏に挨拶をして、ぼくは通りを歩き出す。

ダイアゴン横丁は相変わらず人で溢れていた。どこを見ても人ばかりだ。その中でも一際の人垣があつた。『高級クイティツチ用具店』の店先だ。どうやら新しい箒が展示してあるらしく、店員らしき人が通りを歩く人に向け、この箒がどれだけ素晴らしいものなのかを喧伝している。

「ファイアボルト——世界で最速の箒ですよ！ ニンバスなどもう時代遅れ！ これからはこの箒を何本持っているか、どれだけ使いこなせるかで勝敗が決まるのです——！」

へえ、世界最速の箒かあ。ハリーはきつと惚れ込むことだろう。連れて来なくて正解だった、きつとここから梃子てこでも動かなくなるに違いないから。

「あれ、教授？」

見覚えのある後ろ姿を発見し、ぼくは思わず声を上げた。彼——セブルス・スネイプ教授はビクツと肩を震わせ振り返ると、そろそろとファイアボルトが展示してあるガラスから身体を離し、何事もなかつ

たかのように咳ばらいをして近付いてくる。

「教授、箒に興味あったんですか？」

「ない」

「え、でも今、滅茶苦茶見て……」

「ないと言ったらないんだ！ 二度と言わせるな」

不機嫌そうに眉間に皺を寄せる教授に肩を竦める。ハイハイ、左様ですか。

「今日はあの兄は？ 貴様と一緒にではないのか？」

「ハリーならアイスクリーム・パーラーのテラスで宿題をしますよ。ぼくはインクが切れたから買い物に。まさか教授とこんなところで会うとは露ほども思っていなかったです」

教授、クイディッチ好きなのかな。まあ確かに、学生の頃は熱心に応援していたっけ。

「お茶でもしようか。奢ろう」

「わ、いいんですか？」

「昔のよしみだ。もしくは……ま、年長者だからということにでもしておこう」

そう言っつて、教授はローブを翻すと歩き始めた。教授の歩みに数歩遅れる形で、ぼくも後をついていく。

「そう言えば。この前までぼく、アリスの家にお世話になっていたんですよ」

「ほう、貴様一人でか？ よく貴様の兄が許可したな。あんな酷い弟馬鹿が……」

教授、なかなか遠慮がない。

教授は路地の目をすいすいと抜けて行く。気付けばダイアゴン横丁の大通りから随分と入り組んだところまで来ていた。あれだけ大勢いた人の姿も、この辺りではほとんど見かけない。

「なら、ポッターが先日魔法を使ったことは聞いているか？」

「リイフさんから教えてもらいました。その後ダーズリー家から逃げ出して『夜の騎士バス』に救助されたことも」

「ああ、フェイスナーか……確かに奴なら把握しているだろうな」

石畳に二人分の足音が反響する。

「……教授は、何を買いに来たんですか？」

「私か？ 私は……」

教授はそこで言葉を切ると口を噤へつぐんだ。「……別に、大したものではない」と言い訳めいた言葉を口にする。

「大したもんじやないのなら、教えてくださいよお」

「貴様には関係のないものだ、ポッター」

授業中のようにねっとりとした言葉遣いで、教授はぼくを突き放した。

へえ、ほお、ふうん？ そんな態度取っちゃうんだあ？

「……意地悪」

「いじつ……!?!」

思惑通り、教授はぎくりとたじろいだ。そんな教授に向けて、ぼくは可愛らしく小首を傾げ上目遣いをしてみせる。

「ぼくには教えてくれないんですかあ？ ひどいつ、ぼく、悲しいですっ！」

「う、うるさい！ ……その目を止めろ！ 夏休みの前半は忙しくて貴様への贈り物を買うに行く暇がなかったから今日買いに……あ」

「……聞かなかったことにしてあげますね。忘却術は掛けられたくないですから」

「……レイブンクロー十点減点」

「まだ新学期は始まっていませんよ？」

全くもう、困ったお人だ。

教授に連れて来られたのは、こじんまりとした紅茶専門店だった。お客さんはぼくら以外誰もいないようだ。

わあい貸切だ、とはしゃいでみたところで、このカフェの経営は大丈夫なのだろうかとそんなことが気に掛かってしまう。立地が悪過ぎる。お客さん、本当に入っているのかな。

「この店では自分好みに紅茶を淹れることができる数少ない名店だ。折角の紅茶を他人に任せるのは真っ平御免だからな」

「なるほど、そんなレアな人間御用達な店って訳ですね」

普通は自分で淹れた紅茶より、お店で淹れてもらう紅茶の方が美味しいものだろうが。

教授はぼくの言葉に「何を言っているのか分からないな」と訝しげな顔をした。どうやら本当に分かってないっぽい。

しかし、紅茶の瓶が壁一面にずらりと並べられているのは壯観だ。何十種類置かれているのだろうか？ 実はここ、知る人ぞ知る『隠れ名店』なのかもしれない。教授、そういうところ好きそうだな。

どれがよろしいでしょうかと尋ねられても分かんないぞとドキドキしていたものの、しかしぼくが選ぶ間もなく教授が「いつものを」と注文してしまった。ちよつと肩透かしだ。

というか『いつもの』で通じるって凄いな。教授行きつけの店ですか、そんなところで奢ってもらえるなんて、ぼくってば大丈夫かなあ？

やがてお茶の一式が運ばれてくる。茶葉と茶器を手慣れた様子で扱いながら、教授は何気ない調子で話題を振った。

「ところで……シリウス・ブラックがアズカバンから脱獄したとの話は聞いているか？」

「……ええ、聞いてます」

ようやくと本題に入った。ぼくは思わず身構える。

教授はこの話がしたくて、ぼくをここまで連れてきたのだろう。

「ブラックを……幣原秋が捕らえたという話も」

「……そうか」

沈黙がぼくらの間を満たした。

セブルスとシリウスは、幣原秋がいた頃も仲が悪かった。馬が合わなかったというべきだろうか。最終的にはあんな、絶交のようなことを……。

「……ポッターに伝えておけ」

「教授、ぼくもポッターなんですけど」

「貴様のいけ好かない兄の方だ。勿論私からだとは悟られるな、あくまでも貴様からの言葉として受け取らせろ。『今年は余計なことに首を突っ込むな』と」

「……ハリーは『いつも厄介事の方からやってくるんだ』と言うでしょうけどね……分かりました。教授なりの優しさも、ちゃんと受け取っておきますよ、ぼくが」

「……そんなものは受け取らんでよろしい」

教授はあからさまに苦い顔をした。

それから話題は、いつものように夢でぼくが見ている幣原秋のことに移り……教授は基本的に聞いているだけで時折口を挟む程度だったが、それでも大体は和やかにお茶の時間は過ぎて行った。

最後、席を立つ間際に教授が小さく呟いた。

「……こうして穏やかにあいつの話が出来るのも、そう長くはないのかもしれない」

それは、何やら不吉な暗示めいて聞こえた。

第9話 楽勝以外の勝ち方

大広間ではないものの、大広間と同じくらいの高さを持つ教室が、魔法魔術大会の会場だった。

教室は大会会場らしく飾り付けられており、中央には腰ほどの高さがある決闘用の舞台が据えられ、その周囲は観客席として椅子が等間隔に設置されている。真ん中で戦う二人を、三百六十度どこからでも見ることができるようにとのことだ。観客席には防御魔法が掛けられていて、万が一呪文が逸れたとしても大丈夫な仕様らしい。

十月四日。いよいよぼくの順番が回ってくる。今まで二日間、それぞれの決闘を観客側で見ていた訳だけど……いやあ、うん。ぼくには無理だわ。

こんな衆目監視の中で決闘だなんて、怖くて足が震えてしまうこと間違いなしだ。確かに決闘のやり方くらいは授業で習ったものの、授業と実践とじゃ全く勝手が違うだろう。

幸いなことに、四年生同士での決闘だから上級生が見に来ていることはほぼ無いようだ。でも同級生と後輩とで、観客席はいつも三分の一ほど埋まっていた。それだけ注目されると思うと緊張も半端じゃない。

加えて、ジェームズやシリウス、リーマス、ピーターといった悪戯仕掛人四人組も、昨日は随分とハツパかけてくれちゃって。

「僕らの友人兼ライバルたる君のこと、初戦負けなんて無様なことはしてくれるなよ?」とか。

ちなみにジェームズとシリウスは二人とも余裕の圧勝で二回戦へと駒を進めていた。くっそ、流星は学年主席に学年次席。彼らも観客席のどこかにいるのだろうか。……いるんだろうなあ。

リリーからは複雑そうな顔で「どちらを応援すればいいのか私には分からないわ……」と言われてしまった。そう言えば、ぼくがこれから戦う相手はグリフィンドールの女の子——つまりはリリーのクラスメイトなのだった。

セブルスは「こんな浮ついた行事に興味などない」と言っていた。

応援されるよりそちらの方がよっぽどありがたい。

「——さて次は、レイブンクロウのミスター・幣原とグリフィンドールのミス・シエフィールド。尊い騎士道精神に基づき、正々堂々闘ってくださいね」

フリットウィック先生の声に覚悟を決めた。

……ええい、ままよ。

ぼくは杖を強く握り締めて舞台へと上がった。パツと注目が集まるのが分かる。うう、どうかぼくを見ないでください。注目には慣れていないんだ。

ぼくと向かい合う位置で立っているのは、グリフィンドールのシエフィールド嬢——下の名前は知らない。

茶色の長い髪の毛をバレッタで留めている女の子だ。スラツとしていてぼくより十センチは背が高い。勝気にぼくを見つめるその顔は、緊張で今にも足が震えそうなぼくとは大違いだ。

ぼくらは向き合って一礼した後、杖を剣のように前に突き出し構えた。

「行きますよ——いち、に——さん！」

「Expelli——」

「Glisseo！」

ぼくが呪文を唱えるより、相手の方が早かった。

直後、足元の床の摩擦係数が一気にゼロになり、たまらずぼくはすっ転ぶ。

「Flipendo！」

無防備なぼくに畳みかけるように、彼女は呪文を唱えた。彼女の杖から弾丸のようなものが発射される。

でも、何と言うべきか——ぼくはそれを避けようとしたんだ、それだけは認めてほしい。

足元が滑りやすくなっていたことが幸いした。立ち上がろうとしたぼくはまたも床に足を取られて滑ったものの、そのおかげで弾丸を避けることができた。ラツキーラツキー。

しかしその後も防戦一方で、相手からの一方的な攻撃をただただ凌

ぐだけだ。

「秋ー！ お前、本気出せよー！」

「君の実力はこんなもんじゃやない筈だー！」

ジエームズとシリウスの声。うああ、やっぱり見に来てる。

うるさいなあ。ぼくは所詮こんなもんだよ。君達はぼくを買い被り過ぎていただけなんだ。

実際のぼくは、皆と違って全然格好良くないし、頭も普通だし、ただの一介の学生に過ぎなくて——

『呪文学の天才児』が聞いて呆れるわね！ どんな強敵かと思っただのに——」

勝利を確信してか、彼女は笑っている。呪文を杖で打ち消しながら、ぼくは小さな声で呟いた。

「……違う」

「え？ 何か言ったかしら？」

「別に……なんでもないよ」

「F*終*inite」でやつとこさ足元の摩擦が復活する。やれやれ、これは案外面倒な呪文だな。覚えておくことにしよう。

「ふふ……やつと本気になったって目ね。そうでないとなつまらないわ」

ローブを払い、ぼくはゆつくりと立ち上がる。彼女は追撃の手を休め、ただぼくが立ち上がるのを待っていてくれた。

「……ああ、よく分かったよ」

「は？ 何が分かったっていうの？」

「ぼく自身の戦い方、つてやつかな……なんともつまらない、ね」

彼女はきよとんとぼくを見ている。何を言っているのか分からないって顔だ。

彼女の杖は未だ、油断なくぼくに向けられ続けたもの——

そんなもの、ぼくの敵じゃない。

「Expelliarmus」

彼女に杖を向け、淡々と唱える。

彼女の手元を離れた杖は、一直線にぼく目掛けて飛んできた。目の前で直立した杖を難なくキャッチした後、ぼくは彼女へ歩み寄り、果然とする彼女に杖を突きつけた。

「楽勝以外じゃ、ぼくは勝てないみたいだ……本当につまらないよ、これは」

「……………」

声も出せずにパクパクと口を動かす彼女に、ぼくは「ごめんね」と微笑んだ。

「秋、君は一体何をしたんだい？」

魔法魔術大会が終わり、寮への帰路。リイフと並んで廊下を歩いていた時、リイフはそうぼくに問いかけてきた。

「ん？ 何の話？」

「だから、さっきの大会の話だよ。始終防戦一方だった君が、どうして最後にはあんなにあっさり逆転してしまったんだい？」

「別に……あんなのはただ、ぼくが決闘つてものに慣れてなかったからちよつと手間取っちゃっただけさ。無様な姿を晒してしまった」

「だーかーら、何をしたんだいって聞いているじゃないか」

「大したことはしてないってば。呪文でね、ちよちよいつと」

どこかおちよくるようなぼくの言葉に、リイフが少しイラツとしたのが分かった。はいはい、とぼくは素直にネタばらしをすることにする。

「相手に黙らせ呪文を掛けただけさ。まだ四年生だから、無言呪文は流石に使えないでしょ？」

「……その黙らせ呪文とやらはいつ掛けたのさ。観客側として言わせてもらえば、君は『F*in*i*te*』と『E*x*p*e*l*l*i*a*r*m*u*s*』しか唱えてなかったと思うけど？」

「そりゃあ、無言呪文でに決まってる」

「……………」

呆れたとばかりにリイフは天を仰いだ。

「だから、つまらないって言ったんだよ」

ぼくには楽勝以外の勝ち方が分からない。
つまりはそういうことさと言うと、リイフは目を眇めて「君って、案外嫌な奴だね」と呟いた。



夏休み最終日にやっと、ダイアゴン横丁にロンとハーマイオニーが姿を現した。

アイスクリーム・パーラーの席でぼくらに呼びかけた二人を見た瞬間のハリーの表情は忘れられない。人ってあんなに晴れやかな顔ができるんだ、ときえ思ってたものだ。

「やつと会えた！ 僕達『漏れ鍋』に行ったんだけど、もう出ちやっただって言われたんだ。フローリシユ・アンド・ブロッツにも行ってみただしマダム・マルキンのところにも、それで……」

「僕ら、学校に必要なものは先週買ってしまったんだ。『漏れ鍋』に泊まってるって、どうして知ってたの？」

「パパさ」

「ハリー、ぼくがどうやって君の居場所を知ったのか、もう忘れちゃったの？」

ああそつか、とハリーは目を何度もパチパチさせている。その時ハーマイオニーが大真面目な顔で「ハリー、本当におばさんを膨らませちゃったの？」と尋ねたので、ぼくとロンは思わず吹き出してしまった。ハリーは照れたように頭を掻く。

「そんなつもりはなかったんだ。ただ、僕、ちよつと——キレちやつて」

「アキ、ロン、笑うようなことじゃないわ。本当よ。むしろハリーが退学にならなかつたのが驚きだわ」

「僕もそう思ってる。退学処分どころじゃない。僕、逮捕されるかと思っただ」

事の重大さを思い出したのか、ハリーは真顔になった。

「多分、君が君だからさ。違う？ 有名なハリー・ポッター、いつもの

ことさ。おばさんを膨らませたのが僕だったら、魔法省が僕に何をするか見たくないなあ。もつとも、まず僕を土の下から掘り起こさないといけないだろうな。だってきつと僕、ママに殺されちゃってるよ。それはそうと、僕達も今晚『漏れ鍋』に泊まるんだ！ だから明日は僕達と一緒にキングズ・クロス駅に行ける！ ハーマイオニーも一緒だ！」

ロンとハーマイオニーがにっこりと笑う。ぼくとハリーもつられて笑顔になった。二人が一緒ならどんなに楽しいだろう。おまけに明日からは待ち侘びたホグワーツの新学期が始まるのだ。

「パパとママが、今朝ここまで送ってくれたの。ホグワーツ用のいろんなものも全部一緒にね」

「最高！ それじゃ、新しい教科書とか、もう全部買ったの？」

ハリーの問いかけに、ロンは袋から細長い箱を取り出した。オリバnderの杖の箱だ。

「これ見てくれよ。ピカピカの新品の杖。三十三センチ、柳の木、ユニコーンの尻尾の毛が一本入ってる。去年アキが頑張って直してくれただけど、流石にあれじゃあ呪文は使えないもんな。……いや、その、とってもありがたかったけどー」

「そりゃ新しい杖の方がいいに決まってるよ。ロン、良かったね」

ニコリとロンに笑みを向ける。

……だってあの杖、見るも無惨なほどに壊れていたものなあ……。よくあれで一年保ったものだよ。杖がああ惨状なのは、魔法使いにとって致命的なもの。

ロンは「ありがとう」とはにかんだ。

「——それに、僕達二人とも教科書は全部揃えた。怪物本、ありや、なんだい、エ？ 僕達が二冊欲しいって言ったら、店員が半べそだったぜ」

怪物本というのは確か、今年の魔法生物飼育学の指定教科書か。ぼくは受講していないから良かったものの、凄まじく凶暴なようで、ハリーはベルトで縛っていた。フローリシュ・アンド・ブロッツ書店の店先では、本同士で殺し合い(?)なんてしてたし。あれは……ちよっ

といただけない。

「ハーマイオニー、そんなにたくさんどうしたの？」

ハリーはハーマイオニーの隣の椅子に山積みになっている袋を指差した。

ハーマイオニーは当然のように言う。

「ほら、私、あなた達よりもたくさん新しい科目を取るでしょ？ これ、その教科書よ。数占い、魔法生物飼育学、占い学、古代ルーン文字学、マグル学——」

「なんでマグル学なんか取るんだい？ 君はマグル出身じゃないか！ パパやママはマグルじゃないか！ マグルのことはとづくに知ってるだろう！」

うーん、ロンの疑問ももつともかも。マグル学はマグルのことを知らない魔法族の子供が学ぶことを想定しているものだから、マグル生まれのハーマイオニーにとっては退屈そうだ。

……そう言えば確か、リイフはマグル学を取っていたっけ。それも大層熱心に。やっぱり名門貴族フィスナー家のご子息となれば、マグル関連にも造詣を深めておきたいと思うものなのだろうか。シリウスやジェームズが受講していたのは好奇心故のものだろうけど。

「だって、マグルのことを魔法的視点から勉強するのってとっても面白いと思うわ」

ハーマイオニーは大真面目な顔だ。流石、学年首位の才女は言うことが違いますぜ……。ハリーまでもが「ハーマイオニー、これから一年、食べたり眠ったりする予定はあるの？」などと尋ねる始末だ。

「私、まだ十ガリオン持つてるわ。私のお誕生日は九月なんだけど、自分で一足早くプレゼントを買いなさいって、パパとママがお小遣いをくださったの」

「すてきな本はいかが？」

ロンの茶々を、ハーマイオニーは「お気の毒様」で切って捨てた。

「私、とってもふくろうが欲しいの。だって、ハリーにはヘドウィグがいるし、ロンにはエロールが……」

「僕のじゃない、エロールは家族全員のふくろうなんだ。僕にはス

キャバーズきりいない」

「まあいいじゃない。ぼくなんて何も飼えつこないんだから」

一体どうして動物は、すべから 須くぼくのことを嫌いなのだろうか。遺伝子にでも刻みつけられてるのかな。……いやまあ、ぼくを取り巻く魔力のせいらしいってことは知ってるけどさ。

「アキみたいな奴がいるなんて、ホグワーツに入学するまでさっぱり知らなかったよ……っと、こいつをよく診てもらわなきゃ。どうも、エジプトの水が合わなかったらしくて」

言いながら、ロンはスキヤバーズをテーブルの上に置いた。

スキヤバーズをちやんと見たのは、もしかしたら初めてかもしれない。確かに具合が悪そうだ。もう結構な歳なのだろう、ぐったりと痩せ細っていて髭もダラリとしている。

それに——よく見れば、足が一本——……

「……ん？」

その時、何かが脳裏で弾けたような感覚に襲われ、ぼくは咄嗟に頭を押さえた。スパークのような痛みはなかなか引かず、それどころか奇妙な動悸まで襲ってくる。

視界の端で、スキヤバーズが怯えたように毛を逆立てながらロンのポケットの中に隠れて行くのが見えた。

ハリーが気遣わしげにぼくを見る。

「大丈夫かい？ アキ」

「ああ……何でもないよ、ハリー。一瞬頭が痛くなっただけ……スキヤバーズを怯えさせちゃってごめんね」

前半はハリーに、後半はロンに向けて答えた。ハリーはふと思いついた顔で言う。

「そう言えば、すぐそこに『魔法動物ペットショップ』があるよ。ロンはスキヤバーズ用に何かあるかどうか探せるし、ハーマイオニーはふくろうが買える。だから……」

「じゃあ、ぼくは先に『漏れ鍋』に戻ってるよ」

そう言っただけは先に立ち上がった。「じゃあ僕も……」と立ち上がりかけた我が兄を「君はロンとハーマイオニーをペットショップま

で案内してあげるんだよ、いいね？」と宥める。

アイスクリームの代金だけを置いて、ぼくはパーラーを出た。

真夏の太陽の光に目が眩む。先程までの頭痛は既に引いていたものの、少し気分が悪かった。ぼくは近くの店の壁に手をつき、体重を預け息をする。

「っ、はあ……」

——暑い、のに寒い。

這い寄る悪寒に身震いをして額の汗を拭った。手で口元を覆い背を丸める。

何故か心だけが急いている。何に急かされているのかも分からないまま、心臓の鼓動が身体の中央で響いている。

理屈に合わない嫌な予感。知らない筈の事柄なのに、何故か記憶にあるような。

一年の頃、ヴォルデモートに幣原の両親の死を伝えられた時と同じ感覚だ。

心の虚を覗き込むような浮遊感に、何とか足を踏ん張って耐える。

「……あれ？ あんた、だいじょうぶ？」

その時、背後から歌うような声が聞こえた。高く軽やかな声に振り返る。

「あ……ルーナじゃないか」

「ん？ あたし、名前乗ったっけ？」

「何言ってるんだ……後輩の名前を忘れるほど、ぼくは不義理な先輩じゃないつもりだけど」

レイブンクローの後輩、ルーナ・ラブグッドは大きな瞳をぱちくりと瞬かせている。

ダークブロンドのふわふわとした長い髪に、銀灰色の瞳を持つこの可愛い後輩は、自分がどれだけ有名人なのかを知らないみたいだ。他察から「変人揃い」と揶揄されるレイブンクローの中でも、左耳の後ろに杖を挟んでいたたり、コルクで自作したネックレスを首から下げていたり、カブのイヤリングをしていたりする女の子はあまりいない。

おまけに綺麗な顔立ちをしているものだから、レイブンクローでも

ちよつと悪目立ちしている気がして、ぼくはそれとなく気に掛けるようにしている。

「去年、君の教科書を探してあげただろ……忘れちゃった？」

「だってあたしのそれ、いつものことだもん。でも、確か……結局あたしの見つかんなくって『基本呪文集』をくれた人？ アキ・ポツター？」

「そうそう、それぞれ。思い出してくれたようで重畳重畳」

ニコリと笑ってみせる。ルーナはぼくをじいつと見つめた後、小さく首を傾げて「具合が悪いの？」と尋ねてきた。

「少し暑さにやられた気がするんだ。少し休めば良くなるだろうから、気にしないで」

「フウン……じゃあ、折角だからこれあげる。ドルーブルのベスト風船ガムだよ」

ぼくの手を取ったルーナは、ガムを握り込ませるとにつこりと笑った。

……きつと、心が消耗していたせいだろう。

憔悴メンタルしていた精神が、ルーナの優しさを一瞬、ほんの一瞬だけ——
幣原アキナ母のものを取り違えた。

「……難儀だね」

「ん？ どうしたの？」

「なんでもないよ……少し、気分が良くなった。ありがとう」

眩のんきき、壁から手を離す。暢気に笑ったルーナは「それは良かったねえ。じゃあね、バイバイ」とぼくに手を振り去って行った。

「別に……重ねてる訳じゃないんだ」

全然似ていない。改めて考えてみても、共通点なんてほとんどない。

でも……ただ、どうしても。

「優しいんだね、ルーナ」

手の中のガムをぼんやりと見下ろす。

——何故か無性に、アクアに会いたくなった。

八月三十一日——つまり夏休み最終日の夜の『漏れ鍋』は大騒ぎだった。主にウィーズリー家の皆さんの大騒動で、だけど。

明日持つていくものを確かめるだけの筈なのに、どうしてこうも大騒ぎになるのだろうか。パーシーは首席のバッジがないと怒鳴っていたし、ロンはネズミ栄養ドリンクがなくなったと辺りを探し回っていた。荷造りが終わったばかりとハリーは、とりあえずネズミ栄養ドリンクが落ちているかもしれないと、バーまで探しに行くことにした。

「こんなにいるさいいんじゃ眠れないよね」

「全くだよ」

ハリーと二人、笑い合いながら廊下を歩いていると、扉の奥から今度は別の誰かが言い争っている声が聞こえた。またかあと思わず呆れるも、ハリーはハッと気が付いた顔で「ウィーズリー夫妻だ」とぼくに耳打ちをする。

耳を澄ませば、口喧嘩をしているのは確かにウィーズリー夫妻——アーサーおじさんとモリーおばさんのだ。どうやら食堂にいるようなのだが、バーに行くためには食堂を通り抜けないといけない。

どうしようかとハリーに目配せをしたちようどその時、扉の奥からハリーの名前が聞こえてきた。思わず立ち止まったばかりは、そつと食堂の扉に忍び寄る。

「……ハリーに教えないなんてバカな話があるか。ハリーには知る権利がある。ファッジに何度も言ったんだが、ファッジは譲らないんだ。ハリーを子供扱いしている。ハリーはもう十三歳なんだ。それに——」

「アーサー、本当のことを言ったら、あの子は怖がるだけです！ ハリーがあんなことを引きずったまま学校に戻る方がいいって、あなた、本気でそうおっしゃるの？ とんでもないわ！ 知らない方がハリーは幸せなのよ」

「あの子に惨めな思いをさせたい訳じゃない。私はあの子に自分自身で警戒させたいだけなんだ。ハリーやロンがどんな子か、母さんも知ってるだろう。二人でフラフラ出歩いて——もう『禁じられた森』

に二回も入り込んであるんだよ！ 今学期はハリーはそんなことをしちやいかんのだ！

ハリーが家から逃げ出したあの夜、あの子の身に何か起こっていたかも分からんと思うと！ アキは傍にいなかったし、見張っていたあの女好きは、ハリーが家から飛び出した瞬間を見計らっていたかの如く消えちまっていたあのクソ野郎！ リーフが大層キレていたよ。何日あのクソ野郎が小間使いのように魔法省の雑用をやらされていたか、あつちでくるくるこつちでくるくる……。

コホン。『夜の騎士バス』があの子を拾っていなかったら、賭けてもいい、魔法省に発見される前にあの子は死んでいたよ」

……最近段々と、ハリーの見張りをしていた人がどんな人物なのか興味を掻き立てられることが多くなつた。そんなに皆から女好きだのなんだの評されると気になるじゃないか。この前会った時にちよつとでも話しておけば良かったかなあ。

「でも、あの子は死んでいませんわ。無事なのよ。だからわざわざ何も——」

「モリー母さん。シリウス・ブラックは狂人だと皆が言う。多分そうだろう。しかし、アズカバンから脱獄する才覚があつた。しかも不可能と言われていた脱獄だ。もう三週間も経つのに、誰一人ブラックの足跡さえ見えていない。ファッジが『日刊預言者新聞』に何と言おうと、事実、我々がブラックを捕まえる見込みは薄いのだよ。まるで勝手に魔法を掛ける杖を発明するのと同じぐらい難しいことだ。一つだけはつきり我々が掴んでいるのは、ヤツの狙いが——」

「でも、ハリーはホグワーツにいれば絶対安全ですわ」

「我々はアズカバンも絶対間違いないと思っていたんだよ。ブラックがアズカバンを破って出られるなら、ホグワーツにだって破って入れる」

「でも、誰もはずつきりとは分からないじゃありませんか。ブラックがハリーを狙ってるなんて——」

ドスンと木を叩く音が聞こえた。恐らく、アーサーおじさんがテーブルを叩くか蹴るかした音だ。思わずびくつと肩を震わせた瞬間、す

かさずハリーがぼくの肩を抱く。

「モリー、何度言えば分かるんだね？ 新聞に載っていないのは、ファッジがそれを秘密にしておきたいからなんだ。しかし、ブラックが脱走したあの夜、ファッジはアズカバンに視察に行ってたんだ。看守達がファッジに報告したそうさ。ブラックがこのところ寝言を言うって。いつもおんなじ寝言だ。『あいつはホグワーツにいる……あいつはホグワーツにいる』」。

ブラックはね、モリー、狂ってる。ハリーの死を望んでいるんだ。私の考えでは、ヤツはハリーを殺せば『例のあの人の権力が戻ると思っているんだ。ハリーが『例のあの人の』に引導を渡したあの夜、ブラックは全てを失った。そして十二年間、ヤツはアズカバンの独房でそのことだけを思い詰めていた……」

——シリウス・ブラック。

ジェームズとお互い『相棒』と呼び合うほど仲が良かった。そんなシリウスが、ジェームズの子供であるハリーを殺そうとしているなんて……時とはなんと残酷なのだろうか。

「そうね、アーサー、あなたが正しいと思うことをなさらなければ。でも、アルバス・ダンブルドアのことをお忘れよ。ダンブルドアが校長をなさっている限り、ホグワーツでは決してハリーを傷つけることはできないと思います。ダンブルドアはこのことを全てご存知なんですよ？」

「勿論知っていらっしやる。アズカバンの看守達を学校の入り口付近に配備しても良いかどうか、我々役所としても、校長にお伺いを立てなければならなかった。ダンブルドアはご不満ではあったが、同意した」

「ご不満？ ブラックを捕まえるために配備されるのに、どこがご不満なんですか？」

「ダンブルドアはアズカバンの看守達がお嫌いなんだ。……それを言うなら、私も嫌いだ……。しかしブラックのような魔法使いが相手では、嫌な連中とも手を組まなければならんこともある」

「看守達がハリーを救ってくれたなら——」

「そうしたら、私はもう一言もあの連中の悪口は言わんよ……母さん、もう遅い。そろそろ休もうか……」

椅子の動く音が聞こえた。ぼくとハリーは目配せし合うと立ち上がり、急いで物影に隠れる。

食堂の扉が開いた後、足音が階段を上がっていく。二階で部屋の扉が閉まる音が聞こえるまで待った後、ぼくらはようやく立ち上がった。

そのままバーに行こうとするハリーの右手を、ぼくはぎゅっと掴む。

「……アキ」

一瞬目を伏せたハリーは、ぼくと繋いだ手に力を込めた。

ロンのネズミ栄養ドリンクは、午後に皆が座っていたテーブルの下に落ちていた。栄養ドリンクを拾ったぼくらは、お互い聞いたことには何も触れずに二階へと戻った。

第10話 崩壊し始める世界

その日は朝からザワザワと騒がしかった。

朝食の席では数人の生徒が泣きながら先生方に連れて行かれる姿が見られたし、低学年の生徒は中庭などでいつも通り楽しそうに遊んでいたものの、事情を知っている上級生は誰しもがあちらこちらで固まり囁き合っている。

その理由は明白だった。

日刊預言者新聞で一面にデカデカと載せられた『マツキノン一族、全滅!』との見出し。

「マツキノン家は魔法界の名家だ……グリフィンドル側の筆頭として、先陣切って闇側と闘ってきた。彼らの親族もホグワーツには多い……」

リイフは物憂げな表情で呟いた。

「これは……荒れるぞ」

『マツキノン一族全滅』は、それから長く尾を引いた。ホグワーツ以上に安全な場所はそうそうないだろうに、それでも何人もの生徒が親元に帰ってくるようふくろう便を受け取ったそうだ。先生方も忙しそうに飛び回っている姿をよく見かけた。

学校中が、何か見えない、けれども大きくて抗いがたいものに引つ掻き回されているようで——それでいてぼくだけが、それに残り残さ残っているようだった。



九月一日。今日は待ちに待ったホグワーツの新学期だ。

魔法省の車でキングズ・クロス駅まで送ってもらい、九と四分の三番線を潜り抜けた先にあるのは、昔から変わらないホグワーツ特急だ。深紅の車体は何度見ても惚れ惚れするほど美しい。

モリーおばさんはウィーズリー家の子全員にキスをした後、ハーマイオニーにキスし、ぼくとハリーの頬にもキスをした。ハリーなんて照れて顔が真っ赤になってしまっている。

「そりゃ君もだろ、アキー！」

全く、うるさいつたらありやしない。

おばさんが子供達にサンドイッチを配っている間、アーサーおじさんが小声でハリーを呼んだ。一緒に振り返ったぼくの顔を見たアーサーおじさんは、少しだけ視線を彷徨させた後「あー、アキも、そうだな……来て欲しい」と頷く。

「君達が出発する前に、どうしても言っておかなければならないことがある——」

「おじさん、いいんです。僕ら、もう知っています」

緊張した面持ちのアーサーおじさんの言葉を遮り、ハリーは言った。

「知っている？ どうしてまた」とおじさんが驚いた表情で尋ねる。

「僕ら……あの、おじさんとおばさんが昨日の夜話しているのを、聞いてしまったんです。あの、ごめんなさい……」

「すみません、ちよつと、出来心で……」

ぼくとハリーは揃って謝罪した。

「出来ることなら、君達にそんな知らせ方をしたくはなかった」

「いいえ——これで良かったんです、本当に。これで、おじさんはファッジ大臣との約束を破らずに済むし、僕らは何が起こっているかが分かったんですから」

きつぱりと言うハリーに、アーサーおじさんは眉を下げる。

「ハリー、きつと怖いだろうね……」

「怖くありません。……本当です」

一拍間が空いたのは、おじさんが信じられないとでも言いたげな目をしたからだろう。

「僕、強がってるんじゃないやありません。でも真面目に考えて、シリウス・ブラックがヴォルデモートより手強いなんてこと、ありえないでしょう？。」

『ヴォルデモート』の名を聞きおじさんは一瞬怯んだものの、すぐさま子供を心配する大人の眼差しに戻った。

「ハリー。君はファッジが考えているより、なんと言うか、ずっと肝が据わっている。そのことは私も知っていた。君が怖がっていないのは、私としても勿論嬉しい。しかしだ——」

「アーサー！　アーサー、何してらっしゃるの？　もう出てしまいませんかよ！」

モリーおばさんの呼び声。「モリー母さん、ハリーとアキは今行くよ！」とアーサーおじさんは答えながらも、ぼくとハリーの顔を交互に覗き込んだ。

「いいかね、約束してくれ……」

「僕が大人しくして、城の外に出ないってことですか？」

ハリーは憂鬱そうだ。そういう規則だのなんだのに縛られるのを嫌う辺り、ジエームズとよく似ている。

「それだけじゃない。いいか……二人ともだ。私に誓ってくれ。ブラックを探したりしないって」

いつになく真剣な顔のアーサーおじさんに、ぼくらは思わず「えっ？」と同時に声を揃えた。

「二人とも、約束してくれ。どんなことがあっても……」

「ハリーを殺そうとしている人を、何でぼくらの方から探したりするんですか？」

「誓ってくれ。君達が何を聞こうと——」

「アーサー、早く！」

モリーおばさんが叫んでいる。慌ててハリーがぼくの手を掴んだ。ハリーと共に駆け出すも、逆側の手をアーサーおじさんに掴まれ、ぼくは振り返る。

「アキ、頼む。ハリーを、ハリーを守ってくれ——」

その言葉を、ぼくはずっと前に聞いたことがあるような、そんな気がした。

その後、なんとかギリギリホグワーツ特急に乗り込んだぼくらは、空いたコンパートメントを探して通路を歩いていた。

途中アリスやレイブンクロー三年男子が集まっているコンパートメントを見つけ飛び込みたい衝動に襲われたものの、今もずっとハリーが、ぼくの手を強く強く、それはもうちよつと指先がひんやりしてきたくらいに強く握り締めているので叶わない。

ぼくらは列車の最後尾で、ようやく空いたコンパートメントを見つけることができた。空いていると言っても完全な空席という訳じやなく、一人の先客が既にいたのだけれど。

その男性は窓側の席にもたれかかり、それはもう気持ちよさそうに眠っていた。髪の毛に白いものが混じり始めており、どう見ても生徒には見えない。

「この人、誰だと思う?」

「ルーピン先生」

ロンの疑問にハーマイオニーが即答した。え、と目を瞬かせたロンの隣で、ぼくもそつと目を瞠る。

「どうして知ってるんだ?」

「カバンに書いてあるわ」

ハーマイオニーが指差したのは、男性の頭上にある荷物棚に置かれた小さな旅行カバンだった。片隅に『R・J・ルーピン教授』と剥がれかけの文字が押してある。

リーマス・ジョン・ルーピン。

シリウスに続き——君までも出てくるのか、リーマス。

「ちよつ、ちよつとアキ、そんな先生の顔を覗き込んだらダメでしょ、起きてしまうわ、わわつ、前髪を掻き上げてダメだって! コラツ、顔を触らない! 座っていなさい、アキ!」

「ハーマイオニー、君ってお姉さん気質だね。どうして一人っ子なんだい?」

「ロンは兄妹がたくさんいるのに、どうしてそう気が利かないのかしら?」

「あ、いや、ちよつと……懐かしくて……じゃなくて、懐かしの友人に

よく似てて」

うん、間違いない。この頬の傷は、幣原秋の友人であるリーマス・ルーピンのものだ。

それから更に傷が増えているようだけど……それに、セブルスやリイフと同じ年であるにもかかわらず、白髪の数がべらぼうに多いんだけど……大丈夫かな。

「一体何を教えるんだろ?」

「決まってるじゃない。空いてるのは一つしかないでしょ? 『闇の魔術に対する防衛術』よ」

「ま、この人がちゃんと教えられるならいいけどね。強力な呪いを掛けられたら一発で参っちまうように見えないか?」

——いや、そんなことはない。

リーマスの父親は、確か闇の生物の専門家だった。グリフィンドルとレイブンクロー合同の授業である闇の魔術に対する防衛術では、時としてジェームズをも凌ぐ素晴らしい成績を残していたじゃないか。

よいしょとリーマスの隣に腰掛けたロンは、好奇心で瞳をキラキラと輝かせながらハリーを見た。

「そう言えば、さっきうちのパパと何を話してたんだい?」

「そうだった。あのさ……」

そうしてハリーは、ウィーズリー夫妻の言い合いのことや先程アサーおじさんから受けた警告について、二人に語って聞かせた。僅かな沈黙が流れた後、ハーマイオニーはゆっくりと口を開いた。

「シリウス・ブラックが脱獄したのは、あなたを狙うためですって?」

ああ、ハリー……ほんとに、ほんとに気を付けなきゃ。自分からわざわざトラブルに飛び込んで行ったりしないでね。ね、ハリー」

「僕、自分から飛び込んで行ったりするもんか。いつもトラブルの方が飛び込んで来るんだ」

さてどうだろう。どっこいどっこいな気もするが?」

「ハリーを殺そうとしている狂人だぜ。自分からのこのご会いに行くバカがいるかい? ブラックがどうやってアスカバンから逃げたの

か、誰にも分からない。これまで脱獄した者は誰もいない。しかもブラックは一番厳しい監視を受けていたんだ」

——誰かがシリウス・ブラックのことを話すたびに、心が暗く沈んでいく気分にもなる。

毎回毎回、信じられないとさえ思う。

だって、あのシリウスだ。ジェームズと双子のように仲が良かったんだぞ。そんな彼が闇側に寝返り、友人をヴォルデモートに売り飛ばしたなんて。

それに……ピーターの話も。シリウスはピーターを弟のように可愛がっていた。……まあ、可愛がってんのか苛めてんのかよく分かんなくなる時もあったけれども、あれはきつとシリウスなりに可愛がってたんだろう。

それなのに……。

——まさか、シリウスが——

——一人の魔法使いと、十二人のマグルを、しかも大通りのど真ん中で——

魔法警察が一人の人間を取り囲んでいる。気が触れたような笑い声は、通りの隅々にまで響き渡っていた。

その人間に杖を突きつけ、ぼくは言う。

『魔法省魔法法執行部闇祓い局第一班副班長、幣原秋が命じる。……杖を捨てろ』

『案外サマになっくんじゃねえか、秋。威圧感が増した』

『聞こえなかったのか？ 杖を捨てろ。従わないなら、殺す』

『シリウス・ブラック。君をアズカバンの看守に引き渡す。抵抗する素振りを見せたら、迷わず殺すからそのつもりでいてくれ』

——ああ、やはり、あの時——

『ハリーを、守ってくれ……』

「あの時、殺しておけばよかったんだ……」

「アキっ!？」

唐突に身体を揺さぶられ、ぼくは我に返った。

ハリーはぼくの肩を掴んだまま、心配そうにぼくを見つめている。ハーマイオニーとロンも、ぼくを案じるような眼差しを浮かべていた。

「あ……ごめん、ちよつとウトウトしてて……寝惚へねぼけてたみたいだ」

ふにやりと笑ってみせると、ハリーは力が抜けたような顔をした。それでもまだまだ心配そうに「大丈夫？」とぼくの頭をそつと撫でる。

「大丈夫。……ぼく、寝惚けて何か喋ってた？」

少し戯けて問いかけた。ハリーはちよつと躊躇した後「その……あの時殺しておけばよかったんだって、物騒なことを……」と歯切れ悪く呟く。

「あはは、ちよつと夢でさ、昔のことを思い出しちゃって……ほらハリー、昔大きなイモリを庭で見つけたことがあっただろう？ 弱ってたし可哀想だからってそのまま放置してたらさ、次の日開いてた窓から家の中に忍び込んじゃって、ペチュニアおばさんが大騒ぎしたやつ」

「ああ、アレね……何故か理不尽な難癖つけられて、三日間物置に閉じ込められたやつか……」

ハリーが遠い目をした。いやあ、あれは辛かったなあ……理不尽ここに極まれり。

……しかし、今のはきつと、幣原秋の記憶——なのだろう。断片しか見ることができなかつたものの、ライフから聞いた情景と重なる部分があった。

シリウスに杖を向けた幣原は、一体どんな気持ちだったのだろうか。かつて友人だった者に杖を向けるのは、一体どんな気分なのだろうか

その後、ハーマイオニーがペットショップで買ったという大きな猫を見せてもらったり（ぼくの魔力にも大騒ぎをしない、肝の据わった猫で感嘆した）、ドラコ達が来て即座に帰ったりといういろいろあったものの、ぼくらは概ね和やかにコンパートメントでの時を過ごしてい

た。

雨が降り出し、外の景色が闇色に染まりゆく。後もうすぐでホグワーツに到着するだろうというところで――

汽車は、何故かその場で停車した。

「何で停まるんだ？」

扉から一番近いハリーが、通路に首を突き出して様子を窺う。すぐに顔を戻したハリーは「皆、不思議そうな顔をしてるよ」と首を傾げた。

その時、何の前触れも無く照明が一斉に消えた。周囲からも悲鳴が上がる。

いきなり真っ暗になったものだから、コンパートメントの中でもちよつとした騒ぎが起きていた。

「一体何が起こったんだ？」

「イタツ！ ロン、今の、私の足だったのよ！」

「ごめんね！ 何がどうなったか分かる？ アイタツ！ ごめんね――」

「ネビル？ ネビルなのかい？」

「ハリー？ 君なの？ どうなってるの？」

「分からない。座って――」

「アイタツ！ 何か毛深くてぐにやりとしていて温かいものの上に座ったと思ったら手の甲に鋭いナイフで切り裂かれたような痛みが走ったよ！ もしかしてシリウス・ブラックかい？」

「もしかしなくても、きつとクルックシャンクスの仕業だよ、ネビル」
「だあれ？」

「そつちこそだあれ？」

「ジニーなの？」

「ハーマイオニー？」

「何してるの？」

「ロンを探してるの――」

「入って、ここに座れよ」

「ここじゃないよ！ ここには僕がいるんだ！」

「アイタツ！」

「ちよつと、これジニーかい？　ぼくの足を踏まないでつて……」

「あらごめんなさい、その声はアキ？」

「ぼくだと思つたら躊躇なく君は膝の上に座ってくるんだねジニー。驚いたよ」

「静かに！」

突然しわがれ声がした。リーマス……ルーピン先生が目を覚ましたようだ。

カチリという音の後、灯りがコンパートメントの中を照らし出す。

「動かないで……えつ、どうして君の膝の上にリリーののような赤毛の女の子が乗つて……ツゴホン！　様子を見て来よう——」

言いながら立ち上がったリーマスは、ゆつくりと扉へと歩み寄つた。しかし直後、何者かの手により外側から扉が開かれる。

扉の前には、マントを着た黒い影が立っていた。頭の部分は黒い頭巾のようなもので覆われている。

その影はガラガラと音を立てて息を吸い込んだ。途端、ぞつとするような冷気が全身をすつぽりと包み込む。

まるで冷凍庫の中に閉じ込められたような気分だ。

何者かに足首を掴まれ、深い海の底へと引きずり込まれていくような感覚——

『そのまま溺れ死ね！　この『呪文学の天才児』！』

『フィアンの敵！』

——カチリ。無邪気で残酷な声がする。

自分が正しさの側にいると確信し切つた傲慢さが、いとも容易く一人の人間を傷付ける。

足が付かない恐怖。

溺れて死んでしまうかもという恐れ。

泣き喚いても伝わらない絶望。

短い期間だったものの、渦中の時は永遠とも思える時間だった——

——カチリ。音と共に場面が切り替わる。

視界に映るのは幣原秋の実家だ。

全ての物が執拗に壊されていて、到底住めたもんじやない。
ぐちゃぐちゃな家の中、何かに突き動かされるように、彼は廊下を
歩いている。

……父さん、母さん。

書斎の扉に手を掛けた彼は、やがてそれを目の当たりにする。

……どうして、父さんと母さんは床に倒れているのだろう。

……どうして、息をしていないのだろう。

……どうして、心臓が止まっているのだろう——

——カチリ。

凍てつくような寒さを感じる。

吐き気がするほどの絶望が、しんしんとこの身に降り積もる。

『……秋。君は』

『セブルス。もう元へは戻らない。ぼくは……ぼくらは……』

——カチリ。

半壊した家と、その上に浮かぶ『闇の印』。

……ああ、ああ。彼は。

とつくの昔に気付いていたのだ。

その両手は、大事なもののばかりを取り零すつて。

守ることより、壊すことの方が得意なのだって。

『ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい』

背負う罪ばかりが増えていく。眠れない夜が積み重なる。

それでも必死に歩き続けた。この杖の先に、より善い未来があると
信じて。

歩いて、歩いて、歩いて——歩いた先が、このザマか。

——カチリ。

屋上に吹き荒ぶ温い風が、彼の髪を粗雑に揺らす。

『——自殺だ。ビルの屋上から、飛び降りた』

かき混ぜられた記憶の中、霧もやが掛かった自我の中、教授の音が耳元で響く。

……ダメだ、幣原。

自ら命を絶つのは、それだけは——ダメだ。

君はセブルスやリイフにあんな顔をして欲しくはなかった筈だ。

——逃げてんじやねえよ、幣原秋！

『さようなら、黒衣の天才よ』

ぼくの指先は、叫んだ声は、幣原秋には届かない。

ぼくの視界はそのまま闇に飲み込まれた。

第11話　そして静かに幕は上がる

マグル学の授業が終わり、放課後。教科書とノートをかばんに詰め込んでいたリイフ・フィスナーは、背後から掛けられた声に振り返った。

「よう、久しぶり」

「……シリウス……と、ポッターか」

シリウス・ブラックとジェームズ・ポッターが並んでいる様子を見て、リイフは小さく息をついた。さっと周囲を見渡したシリウスは、小声で「リイフ、今から時間はあるか？」と尋ねる。

「なくっても作るよ。ブラック家長子とポッター家長子に頼まれちゃ、断れない」

そう言つて、リイフはかばんを掴むと立ち上がった。

《中立不可侵》を謳^{うた}うフィスナー家、その一族直系長子に当たるリイフ・フィスナーにとって、ある程度の純血名門の子息子女はあらかじめ顔見知りである。それはスリザリン系家系であるブラック家長子のシリウス・ブラックや、グリフィンドール系家系直系長子のジェームズ・ポッターの二人も例外ではない。

後にこの世に誕生する、リイフ・フィスナーの息子アリス・フィスナーは、そのような『馴れ合い』を好まずいつも社交界をパツと抜け出してばかりで、リイフはホトホト手を焼くことになるのだが……ともあれ普段のリイフ・フィスナーは、両親、ないし純血名門の秩序には従順であり恭順の意を示していた。

「シリウスの従姉妹はマグル生まれと駆け落ちしたんだって？」

「ああ。ふふつ、ドロメダもよくやるよな。何とも粹、何とも自由だ。俺もあんな風に生きたいよ」

「シリウスもかなり自由な人間だと、僕は思うがね」

「君は窮屈なんだよ、リイフ」

空き教室に入ると、念のため防音魔法を施す。椅子にそれぞれ腰掛

けた後、ジェームズは「さて」と切り出した。

「《中立不可侵》フィスナー家のリイフ・フィスナーに聞きたいことがある」

「ああ。僕も、グリフィン・ドール側であるジェームズ・ポッターと、スリザリン側であるシリウス・ブラックに聞きたいことがあった」

互いに顔を見合わせた三人は、ほぼ同時に口を開いた。

「今、どうなってる?」

「しかしまあ、こうして名門家系三人が集まると、何とも壮観だねえ」

ジェームズはニヤニヤと笑っている。「うるさいぞ、ジェームズ」とシリウスはニコリともせず、ピシヤリと言った。

「ま、我がポッター家は名門とかそういうもので言う『庶民派』ですからねえ。『純血一族一覽』にも載ってませんし、そういうお貴族様の社交場にも縁はなかったし」

「確かに僕も、ポッター家の一人息子と同学年だって知ったのは入学してしばらく経ってからだったから……シリウスとポッターは親戚なんだって?」

「ああ、僕の母親はブラック姓だからね」

「でも、それを言うならブラック家は大体の純血家系と親戚だろ……フィスナー家にも何人か嫁いでたと思うがね」

「そうだね。僕の伯母さんもブラック家の人だ……」

頷くりイフに、ジェームズは笑みを崩さぬまま「でも、二人ともイトコのご貴族様だし、なんだか僕は肩身が狭いなあ」と嘯く。

「フランクでも連れてくる? ロングボトムの子」

「あそこはNEWT試験が控えてるんだから、邪魔しちやまずって」
「じゃ、フェアビアン・プルウエットだ。彼ならきつとヒマしてるよ」

「ここに居る三人で事足りるだろ、ポッター」

「足りないと思ってこそその言葉さ……まあいいや。黙る、黙りますよ」

そう言っようやと口を閉じたジェームズに、リイフは小さくため息をついた。

「今日僕を呼んだのは、マツキノン家襲撃事件があつたからか？」

「ご名答。それぞれの家の見解を聞きたくてな」

シリウスは頷く。

「ブラック家はまだ様子見だそうだ。だが十中八九『あいつ』に間違いはないだろう」

『『あいつ』——ヴォルデモート卿か』

「ああ。全く、自分を『卿』と名乗るなんて一体どんな神経してんだか……ブラック家はほぼノータッチだが、どうも最近近辺で不穏な動きが多い。マルフォイ家やレストレンジ家辺りは要注意だ」

「……ルシウス・マルフォイやロドルファス・レストレンジか。とすると、卒業してからヴォルデモートの配下に入ったと考えるのが妥当だろうか？」

「おそらくそうだろう。俺の従姉妹のベラトリクスって奴が、この前そのロドルファス・レストレンジと結婚した。ブラック家も取り込まれる可能性は否定できない」

「ブラック家を取り込まれる、ね……今までの常識じゃ考えられないな」

眉を寄せるリイフに、シリウスは「中立側から見ると、どうなんだ？」と問い掛けた。

「とりあえず、魔法省は闇祓いの戦力を底上げしようとしているみたいだ。あまり大々的には公表されていないけれど、闇祓いに『許される呪文』の行使を認めたり、闇の陣営に対しては裁判をせずとも捕縛したり殺したりしても良い権限を与え始めた。知ってるだろう？」

クラウチ家当主で魔法法執行部部長のバーテミウス・クラウチだよ」

「ああ。確かその息子がスリザリンにいた筈だぜ、同名のジュニアがな。十二ふくろうの天才だと持て囃されてた」

「闇祓いの戦力……権限を底上げ、か。それもそうだね。世間も皆、何かが迫ってきたことを薄々察し始めた」

小さな声で呟くジェームズに『『何か』って、そりやぎつくりとしてるな』とシリウスは苦笑した。しかしジェームズは真面目な顔つき

だ。

「そりゃあ、魔法省もふわつとしかまだ分かってないさ……そうだ、まだ全容はさっぱり分かってない。何せ、これは英国魔法界始まって以来の危機だ。下手するとグリンドルバルドの台頭以上かもしれないね。歴史に名を刻む、今までの常識を打ち壊すような、凄まじいまでの力が台頭してきているんだ」

シリウスとリイフは揃ってジェームズを見た。

ジェームズは腕を組んだまま、虚空を一直線に見つめて口を開く。「グリフィンドル側でも新たな動きが見られる。ヴォルデモートの陣営に対抗しようとする者達が徐々に集まり始めている。つまり、何が今から起こるか、分かるかい？」

「何が、って……何だよ」

シリウスは戸惑いがちの声を漏らした。リイフは唇を噛み締め、じっとジェームズを見据える。

学年首位の頭脳を持つ、ポッター家の末裔である彼、ジェームズ・ポッターは、眼鏡の奥の瞳を煌かせた。

「——戦争だよ」



汽車が動き出す揺れと音で、ハッと我に返った。車内の照明が一斉に灯る。

……頭の奥が焼け付くように痛い。鈍い痛みがじわじわと広がっていくようだ。

痛みに思わず顔を顰めたその時、左手に杖が握られていたことに気が付いた。無意識に掴んでいたようだ。

「やだ……やだ、トム……」

ぼくの膝の上では、ジニーがガタガタと震えていた。

大丈夫かい？ とそっと尋ねる。ぼくを見たジニーは、僅かに安心した表情を浮かべて頷いた。

具合が悪そうなのはジニーだけではないようだ。誰もが酷い寒気

に襲われたように顔色が悪い。

「ハリー！ 大丈夫!？」

ジニーを席に座らせ、ぼくは慌てて床に倒れているハリーに駆け寄った。ハリーの肩を強く揺さぶる。

呻き声を上げたハリーはゆっくりと目を開けた。誰もが顔色を悪くさせているものの、ハリーは殊更輪を掛けて酷い。

ロンに手を貸してもらい、ハリーを席に戻した。ハリーの手をぎゅっと握り締める。ぼくの手もひんやりと冷たくなっていたが、ハリーの手はぼく以上に冷たくて、おまけに小さく震えていた。

「大丈夫かい?」

「ああ……何が起こったの? どこに行っただ……あいつは? 誰が叫んだの?」

「誰も叫びやしないよ」

ハリーの疑問に、ロンが心配そうに答えた。ハリーはコンパートメントを見渡した後「でも、僕、叫び声を聞いたんだ……」と呟いた。

叫び声? ハリーは一体何を聞いたのだろう。

考えようとしたちようどその時、バキツと大きな音がして、皆が驚いて飛び上がった。リーマスが巨大な板チョコを割ったのだ。

「さあ。食べるといい。気分が良くなるから」

リーマスはハリーに一番大きな一欠片を差し出した。ハリーは受け取ったものの、口にはせずに「あれはなんだったのですか?」と尋ねる。

「ディメンター、吸魂鬼だ。……アズカバンの吸魂鬼の一人だ」

「ディメンター? でも、彼らはアズカバンにいる筈じゃ……」

ぼくが呈した疑問に、リーマスは皆にもチョコを配りながら「分からない」とそつと首を振った。

「気の早い個体がいたのか……それよりも食べなさい、元気になる。私は運転手と話してこなければ。失礼……」

そう言い残して、リーマスはコンパートメントを出て行ってしまった。

ぼくはリーマスからもらったチョコの端を軽く齧る。途端、ふつと

身体の芯が温まった感覚がした。頭痛に加えて、ざわついていた胸中も少し収まる。

「ハリー、本当に大丈夫？」

「僕、訳が分からない……何があったの？」

ハーマイオニーの問い掛けに答えるハリーは、未だ困惑した面持ちだ。

「ええ、あれが——あの吸魂鬼デイメンターが、あそこに立ってぐるりつと見回したの……ってというか、そう思っただけ。だって顔が見えなかったんだもの……そしたら——あなたが——あなたが——」

「僕、君が引き付けかなんか起こしたのかと思った。君、何だか硬直して、座席から落ちて、ヒクヒクしはじめたんだ——」

ハーマイオニーの後をロンが引き継ぐ。

「そうしたら、ルーピン先生があなたを跨いで吸魂鬼デイメンターの方に歩いて行って、杖を取り出したの。そしてこう言ったわ。『シリウス・ブラックをマントの下に匿っている者は誰もいない。去れ』って。でも、あいつは動かなかつた。そしたら先生が何かブツブツ唱えて、吸魂鬼デイメンターに向かつて何か銀色のものが杖から飛び出して、そしたら、あいつは背を向けてスーツといなくなったの……」

「怖かったよお。あいつが入ってきた時どんなに寒かったか、みんな感じたよね？」

ネビルが上擦った声で囁く。ロンも気持ち悪そうに肩を揺すって「僕、妙な気持ちになった。もう一生楽しい気分になれないんじゃないかって……」と項垂れた。

「だけど、誰か——座席から落ちた？」

ハリーの問いに、皆が気まずそうに首を振った。

ぼくはチョコを見つめながら、先程見たものについて思いを巡らせる。

……あの記憶はぼくのものではない。だとしたらあれらは、幣原秋のものなのだろう。

最後——屋上から飛び降りた幣原に、ぼくは手が届かなくて——。

……そりやそうだ、届く筈もない。だってあれは、ただの……ぼく

の夢なのだ。過去に起こったことは決して変えられない。それでも、ぼくは……。

その時リーマスがコンパートメントに戻ってきた。

ぼくらの様子を見たリーマスは「おやおや、チョコレートに毒なんか入れてないよ……」と苦笑する。

リーマスの言葉に、皆もやつと自分の手にチョコレートが握られていたことに気付いたようだ。ネビルなんて慌てて口の中に押し込んでいる。

吸魂鬼デイメンターの対処法は、チョコレートを食べること、だっけ。リーマスなら知っていて当然だろう。

……吸魂鬼デイメンターに襲われるなんて予想もしていなかった筈なのに、どうして特大板チョコを持っていたのかを訊くのは愚問というものか。砂糖でとびきり甘くした紅茶が大好きだったもんな、リーマスは。

「あと十分でホグワーツに着く。ハリー、大丈夫かい？」

「……はい」

リーマスの問いに、ハリーは目を伏せたまま頷く。穏やかに笑顔を浮かべたリーマスは、そのまま視線をぼくに向けた。そして――

「……っ!？」

リーマスがぼくの耳元に顔を近付け、一言囁く。その動作はあまりにも自然で、ぼくの隣に座っていたハリーも違和感を持たなかったようだ。――囁かれた言葉に、ぼくは目を見開いた。

リーマスは――ルーピン先生はぼくに悪戯っぽい視線を向けた後、そつと片目を閉じてみせる。今は何も――何も聞くなつてことか。

ぼくはしばらくリーマスを見つめていたものの、やがて視線を逸らすと残ったチョコレートを口の中に放り込んだ。

チョコレートの甘みと共に、今の言葉を反芻する。

『久しぶりだね、秋』

「……………」

ホグワーツ特急は、様々な人間の思惑も一緒に乗せて、ホグワーツへと一直線に進んでいた。

第12話 夜空に輝く一番星

不穏な雰囲気は拭われないものの、それでも『魔法魔術大会』はつづがなく進行していた。ぼくやリイフ、ジェームズ、シリウスも危なげなく二回戦を突破し、三回戦へと駒を進めていた。

三回戦では、なんとリイフとシリウスの決闘が見られるのだ。どっちが勝つのか予想も出来ない。

「…………… あれは……………」

ふと気が付いて、ぼくは少し背伸びをした。

あそこで一人廊下を歩いているのは、あの横顔は、我が友人シリウス・ブラックではないか？

「おーいつ、シリウスー！」

伸び上がって手を振るも、シリウスはトンと気付いた様子もなく、変わらぬ無表情で歩みを進めている。

ぼくは思わずムツとした。なんだよ、ぼくがシリウスに気付かなかつたら、ぼくの言い訳も無視してヘッドロックかましてくる癖に、自分は平然とシカトですか。

「シリウスー！」

駆け寄って後ろから飛びついてやる。振り返ったシリウスに満面の笑みを浮かべてみせると、シリウスは戸惑ったように「……………えつ」と声を漏らした。

……………ん？ 近くで見ると、何だか普段のシリウスとは雰囲気が違うような……………シリウスはこう、ボタンをきっちり留めることもネクタイをしっかり締めることもあんまりしないような……………、って。

シリウス、じゃない。彼の首元に締められたネクタイは緑と銀色――スリザリン生のものだ。間違っても、赤と金のグリフィンドールのものじゃない。

――間違えた！

ぼくはそろそろと後ずさった。

ぼくよりも十センチかそこら高いけれども、シリウスよりは少し小柄なようだ。シリウスによく似た顔立ちをして……………つまりは彼

も、ずば抜けたイケメンなのである。

「ご、ごめんなさい！ 知り合いと凄く似ていたから、思わず間違えちゃって……」

「……兄と間違えられたのは久しぶりです」

「兄？ ……シリウスが？」

はい、と目の前の少年は頷く。表情は先程見せた驚きのものから、既に無表情へと戻っている。

スリザリンには表情豊かな奴はいないのだろうか。……少なくともぼくの知り合いには見当たらないな。というかスリザリン所属の知り合いなんて、ぼくにとってはセブルスクらいなものだし。

「レギュラス・ブラック。それが僕の名前です」

「レギュラス……」

なるほど、レギュラス——レグルス、ね。

一等星の中でも一番明るい星のシリウスに、一等星の中で一番暗い星のレグルス。対比になっているのか。ブラック家では子供に星の名前をつけるのが慣わしなのかな？ 流星ブラック、闇夜に輝く一等星、ってか。

「僕は名乗りましたけど、貴方は？」

「あつ……ぼくは幣原秋——えっと、君のお兄さんの友人です……」

「……兄の友人」

「ううっ」

……何故だろう。口調は全然きつくないのに、視線が何とと言うか——追い詰められてる気分になる。

「ご、ごめんなさい……」

「どうして謝るんですか？」

「ど、どうしてって……」

そう返されると弱い。

「……はあ。ま、いいです。兄によろしくお願いします」

レギュラスは冷たく言い捨て、ぼくに背を向ける。

普段のぼくならそのまま黙って見送ったのだろうが、思わず心に浮かんだ疑問がそのまま口から零れ出た。

「お兄さんと仲が悪いのかい？」

言った瞬間慌てて口元を押さえるも、言ってしまった事実は変わらない。

ピタリと足を止めたレギュラスは、もう一度ぼくに向き直った。

「別に仲が悪い訳ではありません。兄が、僕を嫌いなんです」

「……そう、かな？」

「そうですよ。……大体、兄の友人である貴方にも、僕の存在は話したことがなかったんでしよう？ それは、兄が僕のことを嫌っているからです。兄は自分の家が嫌いなんです。憎んでると言ってもいい。僕の存在ごと、憎んでいるに違いないんです」

「……家が嫌い？」

ぼくの言葉に、レギュラスはハツとした顔で目を瞬かせた。

「……もしかして貴方は、何も知らないんですか？」

「何を？」

「それは……」

一瞬、レギュラスは視線を彷徨わせる。ぼくは軽く首を傾げ口を開いた。

「君達の家の事情なら、ぼくは何も知らないよ。知らないことだらけだ。ぼくが知ってることなんて、この世界のほんの上っ面だけだ。そのくらいよく分かってるさ。そしてぼくには、人の秘密をむやみやたらと暴く趣味はない。隠したいと思っていることを、聞いて欲しくないと思っていることを、わざわざ聞こうとは思わない」

「……」

「君はぼくに、自分の家の事情を知って欲しいと思っているの？ 聞いて欲しいと思っているの？」

「……っ！」

かあつ、とレギュラスの頬が赤くなる。バカにされたと感じたようだ。

「……では、貴方に教えて差し上げましょう。何も知らない貴方に手向けの花です」

そう言って、レギュラスはぼくの手首をおもむろに掴んだ。そのま

ま連れ去るように引つ張って行く。

「えっ!? ちよ、な、何!?!」

「何、じゃないでしょう。あなたが知りたいたいと思っっていること、疑問に思っていることを教えてあげようと言うんです。感謝してください」

「そ、それは! とうか、どこに連れて行く気だい君は!」

決まっているでしょう、と、レギュラスは目を細めてぼくを睨みつけた。

「スリザリン寮です」



ホグワーツ特急を降りた後、ぼくらは馬車にそれぞれ分かれて乗り込んだ。

ハリーのことを心配だったが、リーマ……ルーピン先生がにっこり笑顔で「一緒に乗ろうか、アキ」と言うものだから断れっこない。

他に誰も先生と相乗りしたいという酔狂な奴はおらず、仕方なくぼくは広々とした席に所在なく腰掛けた。

恐る恐るルーピン先生の方を盗み見る。先生は窓の外の景色を興味深そうに眺めていた。

鷺色とびの髪にはかなりの量の白髪が混じっている。夢の幣原との年月の違いと、どうでもいいことだけど、スネイプ教授とリィフについても思いを馳せてしまった。同い年の筈なのに、この白髪の混じり方の違いは何なのだ。

その時ふと、ルーピン先生の手の甲に引つ掻き傷があるのに気が付いた。真新しい傷のようで、見るからに痛々しい。

……そう言えば、リーマスも常に生傷が絶えない奴だった。

「僕っておちよこちよいで、すぐ転んだりいろんなどこぶついたりしちゃうんだよね」なんてよく笑っていたっけ。でもすぐ転んだりいろんなどころをぶついたりするのは、リーマスよりピーターの方が多かったように思うけど。

「アキ、学校生活は楽しいかい?」

ルーピン先生はおもむろに尋ねた。ハッと我に返ったぼくは、慌てて居住まいを正すと「た、楽しいです」と頷く。

ルーピン先生は、そんなぼくの反応にクスクスと笑った。

「そんなに構えなくていい。私のことは、そうだね、リーマス先生って呼んでくれて構わないよ。今年新しく、闇の魔術に対する防衛術の教員の任を頂いたんだ。リーマス・ジョン・ルーピン、それが私の名前だよ」

——その名前は、よく知っている。

「……はい、リーマス先生。……一つ、聞いてもいいですか?」

その……リーマス、先生、は、穏やかな表情で「何?」と首を傾げた。ぼくは勇気を出して口を開く。

「さつき、コンパートメントで……『久しぶり』って言いましたよね……ぼく、先生とどこかでお会いしましたか?」

「ああ、ごめんね。そのことか。私がよく知る人に、君がとても似ていたものだからね。思わずそう声を掛けてしまったんだ」

軽く言われて拍子抜けした。……え、じゃあさつきのはただ、ぼくが幣原秋に似てたから? 何のことだろうと悶々としていたのは無駄だったのか?

「それに、どうしてぼくの名前を……」

「君は、自分が思っているよりも有名なことを知った方がいいと思うよ」

そ……それだけえ?

釈然としないものを抱えながらも、ぼくは「はあ」と頷いたのだった。

馬車がホグワーツに到着した後、リーマス……先生、と分かれたぼくはハリー達と合流した。ホグワーツの門扉の前にも吸魂鬼デイトメンターが立っていて、ハリーは大丈夫かと不安になっていたのだ。

予想通りハリーは具合が悪そうな顔をしていたので、ぼくは精神を安らげる魔法をこっそりハリーに掛けておく。

ぼくらは生徒の流れに従い大広間へと向かったものの、途中でぼくとハリー、それにハーマイオニーは、何故か変身術教授兼グリフィンドール寮監であるマクゴナガル先生に呼び出された。

「なんだい、僕だけ放っておかれるんですか」

「ごめんってロン。でも一体何の用だろう？」

膨れるロンを宥め、ぼくらはマクゴナガル先生の後を追っていく。

しかし、まだハリーとハーマイオニーは分かる……いや分からないけれど、グリフィンドールという繋がりはある。

……でも、マクゴナガル先生はぼくに何の用があるんだろう？

やがてぼくらはマクゴナガル先生の研究室へと辿り着いた。マクゴナガル先生はぼくらに座るように合図した後、挨拶もそこそこに切り出す。

「ルーピン先生が前もってふくろう便をくださいました。ポッター、汽車の中で気分が悪くなったそうですね」

この場合の『ポッター』は基本的にぼくじゃなく、兄の方を指すのだということは経験的によく分かっている。

ぼくはそのままふかふかのソファアに深く身を預け、ハリーとマクゴナガル先生+マダム・ポンフリーの攻防を黙って聞いていた。

ハリーの体調に問題ないことを確認した二人は、ホツとした表情でハリーに告げる。

「いいでしょう。ミス・グレンジャーとミスター・アキ・ポッターと時間割の話をする間、外で待っていらつしやい。それから一緒に宴会に参りましょう」

え、とぼくはマクゴナガル先生を見上げた。ぼくの選択科目は占いと古代ルーン文字学だった筈ですが、一体何の問題が？

ハリーとマダム・ポンフリーが共に廊下に出て行くのと入れ替わりに、我がレイブンクロー寮監であり呪文学教授のフリットウィック先生がせかせかと駆け足でやって来た。

フリットウィック先生はにっこりと満面の笑みを浮かべ「久しぶりですね、いい夏休みでしたか？」と尋ねる。ぼくとハーマイオニーは揃って「ええ」と頷いた。

「さて、ミスター・アキ・ポッター、あなたを呼んだのは他でもありません。あなたに、ミス・グレンジャーと一緒に全ての授業を受けて欲しいのです」

「ええっ!？」

思わずぼくは声を上げた。そんな、教科書とか他に買ってないのに。

そんなぼくの言葉を見通したように、マクゴナガル先生は「憂慮することはありません」とキビキビと言った。

「予備の教科書を貸し出します。試験等の基準も緩めましょう——ミス・グレンジャーとミスター・アキ・ポッターに、こちらを貸し与えます」

そう言つてマクゴナガル先生が傍らの小さな箱から取り出したのは、金色の砂時計だった。細く長い鎖が付いている。

「これは逆転時計タイムターナーといます。とても危険な代物ですよ、何せ時間を操るのですから。魔法省に掛け合つて、特別に取り寄せて頂きました。あなた方にはこれを使つて授業に出てもらいます」

逆転時計。時間を巻き戻す時計、つてことか。思わず胸が高鳴つた。

マクゴナガル先生が続ける。

「貸し出すにあたり、四つ、条件があります。

第一に、勉強以外には絶対にこれを使わないこと。

第二に、誰にもこの逆転時計の存在は言わないこと。

第三に、一人で扱わないこと。二人以上で用いるという制限の元で取り寄せたのです。賢いあなた方には、時間を操るといふことがどんな意味を持つのか、説明せずとも分かるでしょう。

そして第四に、五時間以上前には遡らないこと。五時間以上遡るとは法律で禁じられていますからね。関わつた魔法使いや魔女にどんな被害をもたらしたのか……あなた方二人ならば、ミンタンプル女史を思い出せ、の一言で全て納得していただけますよね？」

ミンタンプル女史——一八九九年、逆転時計で過去に遡つたエロイーズ・ミンタンプルが一四〇二年に五日間足止めされた、あの事故

のことか。

現代に戻ってきたミンタンブル女史の肉体は一気に五世紀分も歳を取り、間もなく彼女は死亡した。被害はそれだけに留まらず、彼女が出会った全ての人々の人生が乱れ、二十五人もの子孫が『生まれてない』ことになり、現在から姿を消したという。

また、時の法則をあまりにも大きく侵害したことにより時間そのものに乱れが生じ、彼女が再び姿を現した翌日の火曜日は二日半も続き、一方木曜日は四時間で過ぎ去ったという話である。

時間を操るといふこと。それはつまり、同時刻に同じ人間が二人存在するという矛盾が生じることになる。

思わず身構えた。ハーマイオニーも同様に緊張した面持ちだ。

そんなぼくらにフリットウィック先生は優しく笑いかけ「何、君達ならば使いこなせると思つてのことです、そう緊張せずともよろしい」と言つた。

「使い方を誤らない限り、この道具はとても便利なものです。どうか有意義に使いなさい」

そう言つて、マクゴナガル先生はハーマイオニーの首に、そつと逆転時計を掛けたのだった。

「アキ、お前、今までどこに行つてたんだ？　組み分けはもう終わつちまつたぞ」

「うん、ちよつと突然お腹が痛くなつちやつて。昨日毛布なしで寝ちやつたのがまずかつたのかもしれないね。ところでいい夏休みは過ごせた？」

「俺の定義する『いい夏休み』に親父の要素は存在しない」

「はいはい、ハッピーバースデー」

八月二十五日に誕生日を迎えたアリスに祝福の言葉を投げかけたところ、何故かおもむろに頬を抓つかられた。痛い痛い。なんだい、ハッピーバースデーはハッピーバースデーだろ？

ライフと二人で誕生日ケーキを囲むアリスを想像すると、ちよつと

腹が振れる心地になるな。ぼくからもプレゼントとメツセージカードを贈ったのだが、ものの一時間も経たないうちに『吼えメール』で『プレゼントじゃなくてお前が来い今すぐ来い』とメツセージが送られてきたのだ。嫌だなあ、ぼくが親子団欒の邪魔なんてする訳ないじゃないか。

ぼくらが大広間に戻った頃には、既に組分けの儀は終わっていた。アリスに適当な返事を返し、ぼくはそそくさとアリスの隣に腰掛ける。

ちょうどその時ダンブルドアが立ち上がった。ざわめきに満ちていた大広間が一齐に静まり返る。

……凄いなあ。ぼくが小学校の頃の校長先生にも見習って欲しいものだ。あの野郎、ぼくとハリーが問題ばかり起こすからって目の敵にしやがって、ダドリー軍団には甘かった癖に……おっと、嫌なことを思い出してしまった。

「新学期おめでとう！ 皆にいくつかお知らせがある。一つはとても深刻な問題じゃから、皆がご馳走でボーツとなる前に片付けてしまう方がよからうの。ホグワーツ特急での捜査があったから、皆も知ってるの通り、我が校は只今アズカバンの吸魂鬼、つまりデイメンター達を受け入れておる。魔法省の御用でここに來ておるのじゃ。吸魂鬼達は学校の入り口という入り口を固めておる。あの者達がここにいる限り、はつきり言うておくが、誰も許可なしで学校を離れてはならんぞ。吸魂鬼はいたずらや変装に引かかるとかのようなシロモノではない——『透明マント』でさえムダじゃ」

最後にダンブルドアが付け加えた言葉に、ハリー達はきつと目配せをしていることだろう。全く、ダンブルドアって人は。

「言い訳やお願いを聞いてもらおうとしても、吸魂鬼には生来できない相談じゃ。それじゃから、一人一人に注意しておく。あの者達が皆に危害を加えるような口実を与えるではないぞ。監督生よ、男子、女子それぞれの新任の首席よ、頼みましたぞ。誰一人として吸魂鬼といざごぎを起すことのないよう気を付けるのじゃぞ」

……危害、か。確かに危害ではある。そもそもアズカバンの看守を

ホグワーツに放つだなんて、アズカバンの謂れや起源を知らないとか思えない。

「楽しい話に移ろうかの。嬉しいことに、今学期から新任の先生を二人お迎えすることになった。まずルーピン先生。ありがたいことに、空席になっている『闇の魔術に対する防衛術』の担当をお引き受けくださった」

パラパラと寒々しい拍手が起こる。去年ロックハートにあれだけうんざりさせられたものだから、今年もまたあんなヤツじゃないだろうなどという警戒心の方が強いのだろう。

ぼくも頑張つて拍手を送つたものの、それよりもスネイプ教授が凄まじい表情でリーマス……先生、を睨んでいるのに気付き、思わず唇を噛んだ。

これは……うん。隠す気すらもないのか、教授。

ダンブルドアは続けた。

「もう一人の新任の先生についてじゃ。ケトルバーン先生は『魔法生物飼育学』の先生じゃつたが、残念ながら前年度末をもつて退職なさることになった。手足が一本でも残っているうちに余生を楽しみたいとのことじゃ。そこで後任じゃが、嬉しいことに、他ならぬルビウス・ハグリッドが、現職の森番役に加えて教鞭を取ってくださることになった」

ざわざわっと驚きのざわめきが巻き起こる。同時に素晴らしいまでの拍手も。

それはまるで、ハグリッドが今まで大勢の生徒に慕われてきた証のようだった。教職員席のハグリッドは真っ赤な顔で、とても嬉しそうに笑っていた。

「さて、これで大切な話はみな終わった。さあ、宴じゃ！」

ダンブルドアの合図で一斉にご馳走が『出現』した。その光景の素晴らしきは筆舌に尽くし難い。皆も身を乗り出しては、自分の皿に料理を山盛りにししようと我先にと奪い合う。

ぼくも手を伸ばした時のことだった。

「アリス・フェイスナー！」

この夏休みに何度か聞いた声だ。幼く高いボーイソプラノ。何故か身の危険を感じて、慌ててその場から飛びのいた。

「ツチー！」

ぼくにタツクルをかまそうとした小柄な少年は、ぼくに躲されて大きく舌打ちをする。予想通りの彼の姿に、ぼくは思わず頭を押さえた。

「ユーク……そうか、今年ホグワーツ入学って言ってたっけか……」

「あなたに用事はありません、アキ！」

「何言ってるんだ、君からタツクル仕掛けてきたんだろが……」

全く、やれやれだ。

と、アリスがユークの首根っこを掴んだ。そのままぼくと反対側の隣に座らせる。

ユークの頭をガシツと驚掴みにしたアリスは「食事中だ、ちつとばかり大人しくしてろ。……後で話がある」と低い声を出した。そんな手荒な扱いにも、ユークは何故か満足そうだ。

「というかユーク、君はスリザリンなんじゃないのかい？ アクアやドラコのところにはいないと、二人とも心配するんじゃないの？」

「……あー、お前は組み分けを見てなかったんだよな。見てたらあんなざわめきは印象に残るだろ。まさかこんなことが……それに危うく『組み分け困難者』になるとこだったんだから……」

アリスは目頭を押さえては、大きくため息をついている。こんなこと、とは？ とぼくはきよとんと首を傾げた。

すると、ユークがアリスの影からぼくの方に身を乗り出した。生意気そうに眉を寄せ、大きな瞳でぼくを見つめては誇らしげに告げる。

「ユークレース・ベルフェゴールはレイブンクローに組み分けされたんですよ！ アリス・フィスナーと同寮です！ 帽子と戦った結果、

僕の勝利です！」

ぼかんとぼくは口を開けた。アリスが苦い顔をしつつユークにアイアンクローを掛ける。

「うわっ、痛い痛い痛い痛いですアリスっ！ どうしてそんなに怒ってるんですかあ！」とユークが叫び声を上げるのもお構いなしだ。

「全く、お前ら、姉弟は、どれだけ俺に、迷惑を掛ければ、気が済むんだあ！ あのどうしようもねえお前の姉貴だって何とかスリザリンに組み分けされたつてのに、よりにもよってお前が、お前が……！」
「痛い痛い痛いっ、ごめんなさいっ！ ごめんなさいアリス！」
「マルフォイが思わず立ち上がって『もう一回組み分けし直してくれ！』と叫んだレベルだぞ分かってんのかお前きっちり反省しやがれこの向こう見ずっ！」

「ま、まあまあアリス、組み分けは二度はできないんだ……終わってしまったことはもう仕方ない、そうだろう？」

「アキ・ポッター！ 初めていいこと言ってくれましたね痛いっ！」

「うん、ユーク。いい加減ぼくも怒るぞ？」

ぼくは思いっきりため息をついた。

こりや……騒がしくなりそうだ。いろいろと、さ。

第13話 擦れ違った先に見えるもの

端的に言うと、ぼくがスリザリン寮に連れ込まれ、レギュラスに膝詰めで精神的に追い込まれるという羽目にはならなかった。

理由は単純。ぼくの親友セブルス・スネイプがぼくを助けてくれたからである。

簡単に、片腕一本で。

「こいつは僕の友人だ。無作法をしたのなら謝るよ、レギュラス」

ぼくを背後に庇うように立ち、セブルスはそう言い放った。それでレギュラスは頭の上っていた血が抜けたようだ。

「……っ、すみません」

きつとレギュラスの謝罪は、ぼくではなくセブルスに向けられたものなのだろう。

ともかくとして。

「レギュラス・ブラック。ブラック家を、そうか、君は本当に何も知らないんだなあ」

「シリウスの家だろ？ 大体レギュラスもレギュラスだよ、誰もが自分のことを知っていると思ってるんだ。だから、ぼくみたいな何も知らない奴が現れると極端に驚く」

「……秋、怒ってるのか？」

「怒ってなんかないさ。怒る道理なんてないんだもの」

セブルスは小さくため息をついた。ちよつと、ぼくは別に怒ってないってば。

「まあスリザリンにいと、ブラック家を知らない奴なんてトンと出会わないからなあ……ブラック家と言えば、多分魔法界では一番名の知れた家柄だぞ」

「へえ、貴族のお坊ちゃんって訳かい」

「秋……」

セブルスが眉を寄せたのに、流石にぼくも態度を改めた。小さな声で「ごめん」と呟き先を促す。

「まあ君の言う通り、貴族の坊ちゃんに変わりはあるまい。……秋、

『純血』という言葉を知っているか？」

「純血？ 先祖代々ぼくは純粋な日本人だとかいうその純血かい？ まあぼくの母は日本人じゃないから、今のたとえばちよつと違う訳だけれど」

「そうだが、少し違うな。魔法界での純血とは、正しくは、先祖をいくら辿っても魔力を持った人物しか輩出していないという意味だ。初めは単に魔法使いと魔法の夫婦から生まれた魔法族を指す単語だったのだが、今となつては純血の魔法族のみで続いてきた家系の魔法族の夫婦の間に生まれた魔法族のことを指す」

「……へえ」

初めて知つたなあ。となると、ぼくはどうなのだろう。両親からはあまり家系の話を聞いたことがない。そもそもぼくは両親以外の親族にも出会つたことがない訳だし。

「セブルスは純血なの？」

「……っ」

何の気なしにセブルスに尋ねると、セブルスは息を呑んでぼくを見つめた。

三年一緒にいたけれど、この表情は初めて見た。じつとセブルスを見つめていると、ふいつと顔を逸らされた。

「……違う。僕は母親が純血で、父親は……マグルだ。そういう子供のことは『半純血』、ないし『混血』という」

言いながら杖を引き抜いたセブルスは、空中に『Half Blood』と綴つてみせた。

「純血は非常に数が少ない。少ないが故に、高貴で尊い。もしくは、高貴で尊いからこそ少ない。そんな純血家系で一番勢力が大きい家柄が、ブラツク家だ。普通、魔法使いの親に育てられた子供は皆知っていることなんだけれどな。マグル生まれでもそのようなことは一年生のうちに覚えこませる……」

「だってぼく、日本から来たんだもの」

「知ってるさ。そう棘のある口調で言うな」

セブルスが柔らかめの口調で言う。

「レギュラスもただ戸惑って驚いただけだろう……悪気があった訳じゃない、許してやれ」

「だからぼくは別に怒ってなんて……うん、ごめん」
全く、とセブルスは呟いた。

「……じゃあどうしてレギュラスは『兄は家を憎んでいる』なんて言ったの？」

「それは……また別の話になる。ブラック家は代々スリザリンばかりを輩出してきた。その家族の中でも唯一の異端として、シリウス・ブラックはグリフィンドールに組み分けされた……」

「え？ でも別に、寮なんてどこに組み分けされたって同じじゃない」「同じじゃないんだよ。グリフィンドールとスリザリンの対立は君も知っているだろう。スリザリン生はグリフィンドール生を憎んでいるんだ。何世紀も前から、創設者の時代から」

「……でも、君はリリーを憎んではないだろうか？」

セブルスは呆気にとられた顔をした。次の瞬間我に返って頭を振ると、今のぼくの言葉を聞かなかつたかのように話を進める。

「……えっと、だな。創設者の思想の話になるが、スリザリンの創設者サラザール・スリザリンは『マグル生まれの者は魔法を教えるに値しない、魔法族とマグルは区別されなきゃならない』という思想の持ち主だった。ブラック家はその思想を色濃く継いでいる。英国魔法界では、マグル生まれだが魔法が使える者を『穢れた血』と呼んでいる」「穢れた血……？」

「そうだ」

セブルスはやや強めに言った。押し通すような声音だった。

「……でも、どうしてマグル生まれを、その、排斥するようなことを？」
「君はどうしてだと思おう？」

「……質問を質問で返すなんて……」

そう愚痴りながらも、ぼくは素直に考えを巡らす。

「……んー」

ちら、ちら、とセブルスを見上げるように視線を送ると、セブルスはやがて根負けしたように顔を覆った。

「……つ、一六九二年！」

「国際機密保持法の制定！」

「それだよ！ もう！」

……セブルス可愛いなあ。

「魔法史で習っただろう。中世、どれほどの数の魔法使いがマグルによつて排除させられた？ だから魔法省は国際機密保持法を制定したんだ。マグルから身を守るために。第一次世界大戦、そして第二次世界大戦は僕達の親の時代だ。マグルがあ時代の時代に何をしたか、日本出身の君ならばよく知っている筈だ」

「……………」

ああ、知っている。

広島と長崎のあの惨劇を、ぼくは知っている。

「だから、魔法使いとマグルとの婚姻は、法律に抵触することに加え、倫理的にも恥ずべきことだという意見が広まった。マグルは、折角の頭脳をあんな何万人も虐殺する兵器を^{こしら}え、ためらわずに使ってきた！ 僕達魔法族はずっと、何世紀もの歴史の中、マグルから息を潜めて逃げ続けてきた……だが、もうそんな時代は終わりだ」

セブルスはそこで嬉しそうに笑った。

その笑みは少しだけ、ぼくの背筋を凍りつかせた。

「マグルは穢れたものだ。穢れていて、野蛮で、残酷で、残虐で、凄惨で、無慈悲だ。だから僕達魔法族が、厳しく管理し支配下に置かねばならない。マグル生まれも同罪だ。穢れたものを魔法界に入れてはならない。この世界は今こそ浄化されるべきだ」

「ちよ……ちよつと待って、セブルス」

セブルスの腕を掴み、ぼくは慌てて引き止める。

「それは極論つてやつじゃないの？ 確かにマグルはぼくら魔法使いの考えが及ばない化学兵器を大量殺戮に使った歴史がある。それは、それはどうやっても否定はできない」

「否定する必要もないな、ああ」

「…………だからと言って！ 同じ人間だということに変わりはないじゃないか。人と人との関わりに、魔法が使えるから上だとか使えないか

ら下だとか、そんなの関係ないだろう？ それにマグルの数の方が、ぼくら魔法使いよりもずっと多いんだ。彼らを管理したり支配したりなんてできる訳がない！」

「できるさ。僕達がやるんだ。『あの方』がいればどこまででもできる。僕達は無限の可能性を持っているんだ。僕達だけが持つ魔法の才能、それを生かさないなんて勿体ないだろう？」

セブルスの言葉に、ぼくは今度こそ身を凍らせた。

「セブルス、君はマグルがやる野蛮な行為を嫌っているんだろう!? だったら何故、同じ行為に身をやつす!？」

「同じ行為？ どこがだ」

「だって君が言っているのは、まさしくマグルが魔法使いに対し行使した支配と同じじゃないか！ マグルがぼくらを排斥しようとした時と同じだ、武力を持って別の人種を制圧しようとしている！」

「全然違うな。マグルが僕達にしたのは『排除』だ。彼らは虫ケラのように僕達を潰していった。だが僕達がしようとしているのは『支配』だ。魔法使いの叡智の下で支配されるんだぞ？ マグル共の愚かなやり方とは次元が違う。マグルが、また大規模な戦争を起こして同土討ちをしないように見守ってあげようとしているんだ。彼らのためにもなるだろうさ」

——やばい、流されそうになる。

セブルスの意見の勢いに流されかける。

でも『違う』ということだけは、感覚として分かるのだ。

日本にいる友人の中に、魔法使いは誰一人としていない。

でもぼくは、彼らが自分より劣っているなんて一度も思ったことがない。

ぼくより足が速い子。

ぼくより歌が上手い子。

ぼくより絵が上手な子。

ぼくより優しい子。

ぼくより心が広い子。

彼らを支配する？

そんな思想——馬鹿げている。

第一——

「それに、さつき言ってくれたじゃないか、君の父親だってマグルだろう!？」

ぼくの言葉に、セブルスはプツツン来たらしい。

「だから嫌なんだよ、マグルなんて僕は大嫌いだツ!!」

セブルスの怒鳴り声を聞いたのは、初めてだった。

脳天から爪先まで、ジンと痺れが走る。

ぼくに背を向けたセブルスは、足音も荒々しく歩き去って行った。

ぼくは呆然と、その場にただ突っ立っていた。



新学期初日。朝食に大広間へと降りてきたぼくらに、早速新しい時間割が配られた。

時間割を配っていた監督生は、手渡す前に一瞬ちらりとぼくの時間割を見て不思議そうな顔をした。その違和感の正体を悟られないようにと、ぼくは半ば奪い取るようにして時間割を受け取ると、そのままグリフィンドールへのテーブルへと走っていく。

ハーマイオニーもぼくと同じ行動を取ったようだ。ぼくらはグリフィンドールとレイブンクローのテーブルのちょうど中間辺りで出会うことになった。

「アキ！ あなたも時間割を受け取ったのね！」

「ああ……まさか一日に十科目もあるなんて思いもしなかったけどね、全く……九時から『占い学』と『マグル学』と『数占い学』か、気が狂いそうだよ」

やれやれと頭を振るぼくとは反対に、ハーマイオニーは楽しそうに笑っている。この子は本当に勉強することが好きなんだろうなあ。

「今年は私達……私しか全科目履修する人はいないみたいね。ビルやパーシーは十二ふくろうだったし、そういう人が他にもいるだろうと思っただけ……迷惑かけてごめんなさいね」

「別に構わないよ。ぼくも新たな知識を得るのは好きだしね」

主要七科目は既に幣原秋として習っているのだ。幣原は数占い学と古代ルーン文字学を取っていたから、それらも多分大丈夫だし。

後、不安要素といえば――

『魔法生物飼育学』は無理かもなあ……」

「え？ 折角のハグリッドの授業なのに……ああ、そうね、あなたは……ね」

ハーマイオニーが察して苦笑いを浮かべてみせる。

……ぼくだって動物と触れ合いたいやい。くつそお。

「ハリーとロンは占い学を取ってたよね。じゃあ朝食が終わったら、まずはそれぞれ占い学の教室へ」

「分かったわ。その後落ち合ってマグル学、その後数占い学、で大丈夫？」

「大丈夫。じゃあ、また後で」

お互い頷き合い、ぼくらは別れた。

「……左手でカップを持ち、滓おりをカップの内側に沿って三度回しましょう。それからカップを受け皿の上に伏せてください。最後の一滴が切れるのを待ってご自分のカップを相手に渡し、読んでもらいます。『未来の霧を晴らす』の五ページ、六ページを見て、葉の模様を読みましょう。あたくしは皆様の中に移動して、お助けしたり、お教えしたりいたしますわ――」

占い学のシビル・トレローニー先生の、霧がかったような囁き声に眠気が誘発される。部屋は暑いくらいにポカポカと暖かいし、窓のカーテンは閉め切られていて薄暗いし、香料の香りは漂っているしで、思わず瞼まぶたが重たくなってしまう。

流星に最初の授業で寝る訳にはいかないと、ぼくは眠い目を擦りながらもウトウトしているアリスの肩を揺さぶった。

「子供達よ、心を広げるのです。そして自分の目で俗世を見透かすのですー！」

トレローニー先生が声を張り上げている。

すぐ隣はハリー達が座るテーブルだったが、ハリーもロンも眠たそうだ。ハーマイオニーだけが教科書と睨めっこしている。

アリスとカップを交換し、お茶の葉を見た。

……でも果たして、これが何かの形に見えるものなのだろうか？

ぼくの感受性が乏しいせいかもしれないけれど、本当に、お茶の葉が雑多に底に張り付いているようにしか見えない。

まあ、雲を見て「あ、これ何とかの形に見える！」とか、星を見て「確かに牡牛の形に見える！」とか思ったこと、これまでの人生で一度もないしなあ……星を見ても星座線しか浮かばない。昔の人は、よくあの線から牡牛の形を連想したものだ。アリスなんて、すぐ隣のハリー達のテーブルに先生がいるにもかかわらず、大きな欠伸を零す始末だし。

占いは確かに魔法の中心ではあるものの、学問としては少し漠然としていて難しい。特にこの先生は実践形式が主のようだし。

「そう言えば、ユークの件はどうなったの？」

お茶の葉を見るのは諦めた。アリスにそう囁くと、アリスも小さな声で返す。

「ああ。少し混乱したようだったが、レイブンクローならまだ言い訳が利くというところで話が落ち着いた。ユークがグリフィンドールに行かなくなって良かったぜ」

「ふふっ、アリスってば相当好かれてるじゃない」

「止めてくれ……俺はガキのお守は好きじゃない」

そんなこと言って、実際かなり面倒見が良いのはどこのどなたでしようかね。

その時トレローニー先生がハリーのカップを持ち上げ「あたくしが見てみましょうね」と言ったので、皆がシーンと静かになった。

「隼……まあ、あなたは恐ろしい敵をお持ちね」

「でも、誰でもそんなこと知ってるわ」

ハーマイオニーが聞こえよがしに囁いた。ハーマイオニーがそんなことを言うとはと少し驚く。占い学に書物は不必要だと言われた

ことがよっぽど癩だったのだろうか。

「だってそうなんですもの。ハリーと『例のあの人』のことはみんな知ってるわ」

トレローニー先生はハーマイオニーを無視することに決めたようだ。そのままハリーのカップをためつすがめつ見つめている。

「棍棒……攻撃。おや、まあ、これは幸せなカップではありませんわね……」

「僕、それは山高帽だと思ったけど」

「罽毬……行く手に危険が。まあ、あなた……」

ロンの声もハーマイオニーと同様に無視された。

「おお——かわいいそうな子——いいえ、言わない方がよろしいわ……ええ、お聞きにならないでちようだい……」

「先生、どういうことですか？」

聞いて欲しくないのならば言わなければいいのに、なんて思ってしまうのは、ぼくが捻くれているからだろうか。ディーン・トーマスが尋ねるのも無理なからんよ。

「まあ、あなた、あなたには死神犬グリムが取り憑いています」

「何がですって？」

ハリーはきよとんとした顔で尋ねた。ああ、ハリーは知らないかもなあ。

死神犬、もしくはヘル・ハウンド——ブラックドッグとも呼ばれる、イギリスでは広く『悪魔の化身』として知られた妖精だ。不吉な象徴とされ、目撃した者を死へと誘うと言われている——ま、御伽噺の類だね。

ハリーの薄い反応が、トレローニー先生にとっては面白くなかったらしい。

「グリム、あなた、死神犬ですよ！ 墓場に取り憑く巨大な亡霊犬ですよ！ かわいいそうな子。これは不吉な予兆——大凶の前兆——死の予告ですよ！」

拳を握り『死』を強調するトレローニー先生に、ハリーも流石に怯えた顔をした。しかしハーマイオニーは立ち上がると、冷静にハリー

のカップを傾ける。

「死神犬には見えないと思うわ」

ハーマイオニーの態度に、トレローニー先生もカチンと来たようだ。イラツとした表情でハーマイオニーをジロリと見ては言い放つ。「こんなことを言っでごめんあそばせ。あなたにはほとんどオーラが感じられませんのよ。未来の響きへの感受性というものがほとんどございませんわ」

「……なあアキ、これってどこの何とかファイトだ？」

「キャットファイトのことを言いたいのなら、微妙に違うと思うけどね、アリス」

ぼくとアリスは顔を見合わせ笑い合う。しかしハリーが「僕が死ぬか死なないか、さつさと決めたらいいだろう！」と大声を出したことで、教室がこれまでとはまた違った静けさに包まれた。

「今日の授業はここまでにいたしましたしょう。そう……どうぞお片づけなさってね……」

「お前の兄貴はなかなか言う奴だな」

「横でごちやごちや言われるのが嫌なだけだよ……それに、死神犬……ね」

先日ハリーが喋っていたことを、ぼくは思い返していた。

なんでもハリーは、ダーズリー家を飛び出したその日に大きな黒い犬を見たのだという。その直後『夜の騎士バス』に轢き殺されかけたらしい。そもそも『夜の騎士バス』自体がかなり荒っぽい運転なようだが、それでもハリーは少し怖がっていた。

「……あつ、アリス、ごめん、先に行っけてくれないか？　ちよつとトイレに行ってくるよ」

「ん？　そうか。ま、次は魔法史だし、別にちよつとくらい遅れても平気だけどな」

「うん、そうするよ……じゃあね！」

アリスに手を振り踵を返すと、ぼくは近場の空き教室に滑り込ん

だ。先程ハーマイオニーがスツと入っていったのを横目で見ていたのだ。

「来たわね、アキ！　じゃあ……始めるわよ」

ぼくの訪れを待っていたハーマイオニーは、パツと顔を輝かせ駆け寄ってきた。どことなく緊張した手つきで、逆転時計タイムターナーの鎖をぼくの首にも掛ける。

「えっと……一回ひっくり返せば良いのよね？」

ハーマイオニーが逆転時計をひっくり返した。途端、教室の外が騒がしくなり、やがてしんと静まり返る。砂が落ち切ったことを確認して首から鎖を外した。時計を見ると、確かに一時間だけ時間が戻っている。

「ほ、本当に時間が戻ったの？」

「信じるしかないだろうさ……行こう、早くしないと自分達と遭遇しちゃおうよ」

「わ、分かっているわー！」

ぼくらは空き教室を抜け出し、北棟を駆け降りた。

……全く、どうして占い学の教室はこんなにも高い塔の上なんだ。遠いじゃないか全くもう！

「絶対、近道が、ある筈だ、わっ！」

走りながらハーマイオニーが息を弾ませる。彼女のカバンは教科書や教材でパンパンに膨れていて重そうだ。

「ハーマイオニー、ちょっと待って。今の時間なら歩いて行っても十分間に合うよ。それより……」

ポケットから杖を取り出し一振りする。ハーマイオニーは驚いた表情で荷物を抱え直した。今の魔法が正しく効いたなら、彼女が持っているカバンの重さは以前の十分の一ほどになった筈だ。

「しよ、消失呪文の発展系じゃない！　しかも無言でなんて……」

「魔法は賢く使うべきだろ、ハーマイオニー？」

ニコリと笑ってみせる。額の汗を拭いたハーマイオニーも「……そうね」と言って笑った。

授業開始のギリギリに滑り込んだというのに、マグル学の教室はま

ばらにしか人がいなかった。ざつと数えてみても二十人ほどだ。

占い学はレイブンクローとグリフィンドルが合同の授業だったが、マグル学は全寮生が対象のようだ。だって――

「あ、アクアもこの授業取ってんの!？」

スリザリンの彼女、アクアマリン・ベルフェゴールが教室に居たことに、ぼくは思わず唾然とした。ぼくのそんな反応に、アクアはぷくつと頬を膨らませ「……そんなに驚くことかしら」と言う。可愛い。「だ、だって、スリザリン生なんて君しかいないじゃないか……その、別にスリザリンに偏見を持つてる訳じゃないんだけど……」

辺りを見回すと、いつの間にかハーマイオニーがグリフィンドルの女子達と合流していた。気を利かせてくれたのだろうか……流石、ハーマイオニー。

始業のチャイムと共に、皆も慌てて席に戻って行った。そろそろ先生も来る頃だろう、いつまでも突っ立っているのはまずい。

その時、服の裾を引っ張られた。誰か――なんて見ずとも分かる、アクアだ。

「……この中であなた以外、お友達がないの。……隣に座っても、構わないかしら？」

「……っ、……!」

そんな誘い、断れる訳がないじゃないか。

第14話 共犯者

「秋」

図書館で本を読んでいた時のこと。リーマスから声を掛けられたのは十月の終わり、段々と日が短くなり、寒さを感じだす頃だった。「話したいことがあるんだ。ちょっと来てくれないかい？」

リーマスの笑顔はいつもよりずっと強張っている。

ぼくはパタンと本を閉じると「いいよ」と言っただけで立ち上がった。

連れて来られたのは、いつも悪戯仕掛人達が集まっているあの小部屋だった。セブルスが悪戯仕掛人から離れた後、ぼくも自然と足が遠のいていたところだ。

そこにはジェームズとシリウス、ピーターが勢揃いしていた。ぼくがリーマスに連れられて来たのにも特にリアクションがないことから、リーマスはあらかじめぼくを呼ぶと皆に伝えていたのだろう。

「話したいことがある……僕のことだ。秋、僕は……僕は、狼人間なんだ」

胸の中に堪えていたものを吐き出そうとするかのように、リーマスは顔を歪めて告白した。

——大体一ヶ月か。

ぼくは日付を数えて、そう結論づけた。

一ヶ月。ぼくが気付いていることを悟り、リーマスが悩んだ日数。

リーマスは一つずつ、ゆっくりとした口調でぼくに話をしてくれた。

自分の両親のこと。幼少期に噛まれたこと。その後の家族の苦労。ホグワーツに入学を許可された時の喜び。

二年生の時、ジェームズ達に自分が人狼だと勘付かれて無理矢理口を割らされたこと。

そして今、ジェームズ達が密かに進めている『動物もどき』^{アニメーガス}について——

ぼくは椅子に腰掛けたまま、黙ってリーマスの話を聞いていた。両手の指を無意識に合わせ、力を込める。

「……黙っていたことを謝るよ。ごめんね。決して、秋を信用していなかった訳じゃないんだ。でも……」

リーマスは俯いた。

「……でも？」

「……君に嫌われるかも、と思ったんだ」

ぼくは静かに目を瞬かせた。

リーマスは続ける。

「狼人間なんて、怖いじゃないか……危ないじゃないか、危険じゃないか。だから、君が離れていくことが怖かった」

「……」

「でも、この一ヶ月で……今までと全く態度を変えることなく、僕と接する君を見て……考えを改めた」

数秒。ぼくは目を閉じた。

再び目を開いた次の瞬間には、リーマスは——リーマスは、その顔に笑みを浮かべていた。

それは意識的で、無理矢理な笑顔で、その眉は今にも泣き出しそうに歪んでいたけれども、その瞳には決して涙を滲ませない。

怖くて堪らないという気持ちを綺麗さっぱり押し隠すことに成功したように、瞳に勝気で悪戯めいた感情を浮かべ、リーマスはぼくを見据えた。

「——秋。ぼくらの共犯者になってくれ」

「……上出来」

口元を吊り上げ、ぼくは上目遣いにリーマスを見た。

「その提案、乗ろうじゃないか」

右手を差し出す。

ぼくの手を、リーマスはしっかりと取った。



昼食の後は（個人的な）鬼門である、魔法生物飼育学の授業だった。「あれ？ アキ、この授業を取るのは止めたって言ってなかったっけ？」

「じ、時間割の変更が上手くできてなかったみたいで！」

ぼくの姿を認めたハリーの問いかけを、両手を振って誤魔化した。ハリーは不思議そうに首を傾げたものの、しかし直後に幸せそうな笑顔浮かべてみせる。

「でも、アキと一緒にハグリッドの授業が受けられるなんて嬉しいよ！」

「……あ、はは……ぼくもだよ、ハリー」

ちよつとだけ心苦しい。

ロンとハーマイオニーは先程の占い学の授業でのことで、また喧嘩をしたらしい。この二人の喧嘩は日常茶飯事なので、ぼくらは大して気にすることなく歩みを進めた。

とその時、ハリーがキツと目の前を見据える。何だろうとハリーの視線の先を辿ったところ、ドラコとクラップ、ゴイルの三人組がいた。ハリーをチラチラと見ては揶揄するように笑っている。

ドラコとは……あのパーティー以来、一度も口を利いていない。流石のぼくも、面と向かってあんなことを言われた後じゃ、ドラコとどんな顔で会えばいいのか分からない。

ハリーに話したら、ドラコのことを嫌っているハリーはどんな手段に出るか分からないし……ううん、どうしたもんかねえ。

小屋の外で、ハグリッドは皆を待っていた。オーバーを着込みファングを従えたハグリッドは、早く授業を始めたくて堪らないといった表情を浮かべている。

「さあ、急げ。早く来いや！ 今日皆にいいもんがあるぞ！ すごい授業だぞ！ 皆、来たか？ よーし。ついてこいやー！」

「……ハグリッドがそう言う時は、決まって何かがあるんだよな……」アリスの呟き声に、ぼくとハリーは深々と頷いた。ちよつと気を引き締めて掛かることにしよう。出来る限り魔法生物には近寄らない方向で。

ぼくらはハグリッドの後について校庭を横切った。一瞬森の方に行くのかと危惧したものの、どうやら違ったようだ。

生徒を放牧場のような場所まで連れてきたハグリッドは「皆、この柵の周りに集まれ！」と号令を掛けた。

「そーだ……ちやんと見えるようにしろよ。さーて、イツチ番先にやることあ、教科書を開くこつた——」

「どうやって?」

ドラコが冷たく尋ねる。

「どうやって教科書を開けばいいんです?」

ドラコがカバンから取り出した教科書は、紐でぐるぐる巻きに縛ってあった。……あー、そういやハリーもベルトで縛っていたつけ。書店では確か本同士で殺し合いをしてたっぽいし、なかなかとんでもない教科書のようなだ。

……あれ? でもフリットウィック先生がぼくにと用意してくださった本は随分と大人しいようだけど?

「だ、だーれも教科書をまだ開けなんだのか?」

ハグリッドの言葉に、ぼく以外の全員が頷いた。ハグリッドは無然とした表情で「お前さん達、撫ぜりやーよかったんだ」と言いつつハーマイオニーの教科書を取り上げ、スペロテープをべりりと剥がす。背表紙を一撫でするだけで、教科書は大人しくなった。

「ああ、僕達って、皆、なんて愚かだったんだろう! 撫ぜりやーよかったんだ! どうして思いつかなかつたのかねえ!」

意地悪げに言うドラコ。ハグリッドがみるみる自信を無くして「お……俺はこいつらが愉快なやつらだと思つたんだが」ともごもご咳く。

うーん、悪いけどハグリッド、愉快ではないかな、困ったことに……。

「ああ、恐ろしく愉快ですよ! 僕達の手を噛み切ろうとする本を持たせるなんてね、まったくユーモアたっぷりだ! アクアがこれであわや指を数本無くすところだったんですからね!」

ごめんハグリッド、それは許せない。

アリスが隣で「おー、今日もお嬢サマの保護者だな、あいつは」とクツクツ笑っている。

ハグリッドが魔法生物を森から連れてくると言っただけで離れた途端、一気に辺りがざわついた。

アクアがドラコに何か言っている。それにドラコが何か言い返して——仲いいなあ、全く。ぼくが悲しくなるほどに。

「オオオオオオオオー!!」

急に女子生徒が甲高い声を上げた。思わず何事かと辺りを見渡す。

馬と鳥を掛けて二で割ったような不可思議な生き物が十数頭、こちらに向かって走ってきている。ハグリッドがそれらを鎖で繋いでいるから安心できたものの、猛烈な勢いに当てられて、気弱な子などは泣き出してしまわないだろうか。

……別に、アクアの方を窺ったりなんてしていないよ？ 彼女はいつも通り、むしろ少しワクワクした顔をしていた。可愛い。

「ドゥ、ドゥー」

ハグリッドの掛け声に、群れは柵の前で足を止めた。その生き物達を柵に繋ぎ、ハグリッドは嬉しそうな大声で「ヒツポグリフだ！ 美しかろう、え？」と笑う。

ぼくは静かに数歩下がった。どのくらい距離を取っていれば、彼らを怯えさせずにいられるだろう。

……でも、ハグリッドが「美しい」と言うのも分かる気がする。毛並みの艶が驚くほど綺麗で、彼らが身じろぎをするたびにオーロラのようにキラキラと波打つのだ。いつまでも見ていられる気がする。

「そんじゃ、もうちつと、こつちやこいや……」

ハリー達が恐々と柵に近付いていく様子を、ぼくは少し遠くから眺めた。ハリー達以外はあまり近寄りたくないらしく、皆がハリー達の様子を窺っている。

……お、アクアは一歩進み出たな。と思ったらドラコに引き止められた。危ないぞ、とでも言われているのだろうか。しかしアクアはドラコの制止を振り切って前に歩を進めた。ドラコは諦めたように肩を竦め、クラブとゴイルの元に戻っていく。

「まんず、イツチ番先にヒツポグリフについて知らなければなんねえことは、こいつらは誇り高い。すぐ怒るぞ、ヒツポグリフは。絶対、侮辱してはなんねえ。そんなことをしてみろ、それがお前さん達の最後の仕業になるかもしんねえぞ。必ず、ヒツポグリフの方が先に動くのを待つんだぞ。それが礼儀つてもんだらう、な？」

こいつの傍まで歩いてゆく。そんなでもってお辞儀する。そんな、待つんだ。こいつがお辞儀を返したら、触ってもいいっちゅうこった。もしお辞儀を返さなんたら、素早く離れる。こいつの鉤爪は痛いからな。じゃ……よし、誰が一番乗りだ？」

ハグリッドは期待を込めた眼差しで辺りをぐるりと見渡すも、誰もが尻込みしているようだった。ハグリッドの表情がどんどん曇っていく。

その時、ハリーが「僕、やるよ」と名乗り出た。

「……流石、ぼくの兄貴」

ハリーは放牧場の柵を乗り越え、前に進む。ハグリッドはとても嬉しそうだ。

「よし、そんじゃ——バックビークとやってみよう」

鎖を一本解いたハグリッドは、灰色のヒツポグリフを群れから引き離すと首輪を外した。固唾を呑んで見守る皆の前で、ハリーも緊張したように身構えている。

「さあ、落ち着け、ハリー。目を逸らすなよ。なるべく瞬きするな。——ヒツポグリフは目をしよぼしよぼさせるやつを信用せんからな……」

ぼくも祈るような心地でハリーを見つめた。ヒツポグリフはまだ動かない。

心配したハグリッドがハリーを後ろに下がらせようとしたその時、ヒツポグリフは前足を折り、お辞儀をした。

ワツ、と生徒の間でも歓声が起こる。中でも一番喜んでるのはハグリッドのようだった。

「やったぞ、ハリー！ よーし……触ってもええぞ！ くちばし 嘴を撫でてやれ、ほれ！」

ハリーとしては下がっていいと言われたかったに違いない。ちよつと困った顔をしながらも、ハリーはヒツポグリフの嘴を撫でた。

ハリーの勇姿にクラス全員が拍手をした。ぼくも大きな拍手をハリーに送る。

「よーしと。ほかにやってみたいモンはおるか？」

ハリーが成功した姿を見て勇気づけられたのか、他の生徒も放牧場へと入っていった。ハグリッドはヒツポグリフを一頭ずつ放している。やがてあちらこちらでヒツポグリフがお辞儀をする光景が見られるようになった。

向こうでは、アクアがヒツポグリフの一頭と向かい合っている。真っ黒な毛並みが綺麗な仔だ。……あらあら、お辞儀をしてもらった瞬間、あんなに晴れやかな顔しちやつて……うん。

アリスはこういった生き物系はお手のモノだよなあ。一年の頃もノーバートを、下手すりゃハグリッドより早く手懐けていたし。あつという間にお辞儀をさせてやがる。

ネビルはなかなか成功しないなあ。また上手くいかなくつて慌てて逃げちやつた。これで三度目か。次こそは成功して欲しいな……。

「……アキ」

「うひゃあつ!」

「……毎回毎回思うのだけど、そんなに驚かなくてもいいんじゃない?」

アクアが呆れた声を上げた。なんと、いつの間に隣に来ていたのか。

尻餅をついたぼくに対し、アクアは手を差し伸べてくれる。数秒間躊躇して、ぼくはアクアの右手をおずおずと握った。ぼくよりも小さくて、薄くて、柔らかい。

立ち上がって手を放した後も、その感触だけはなかなか消えてはくれなかった。

「……噛みちぎられなくてよかった」

「?」

「いや、こつちの話」

「そう？ ……あなたは、参加しないの？」

「あはは……しないというか、出来ないというか……ね」

アクアはきよとんと首を傾げる。ぼくの特殊な体質について説明すると「……不思議なこともあるものね」と頷いた。

「いいな、ぼくも触ってみたいもんだよ。あんなに毛並みが見事な生き物は見たことがない」

「そうよね！ とつても綺麗で……あ」

アクアがキラキラ輝く素晴らしい表情でぼくを見上げた。しかし我に返ったのか、小さく声を漏らすとほんのりと頬を赤らめる。その姿に思わずにやけた瞬間、アクアに睨まれた。

残念、普段の氷雪系美少女の無表情で睨まれたらちよつと怖いけど、頬が赤い状態の君に睨まれたところで可愛い！ としか思わないんだ。

「……コホン。……近付くこともできないだなんて、残念ね」

「まあね。皆が飼ってるフクロウとかも飼えないものだから、ちよつと羨ましいなと思うよ。もう慣れたけどね」

ぼくに怯えない動物なんて、ハリーが飼っているシロフクロウ——ヘドウィグくらいなものだ。きつとぼくの存在に慣れたのだろう。

「……そう言えば、ユークのことなんだけど……」

「ああ、ユークは……」

言葉が続けようとした瞬間、放牧場の方から悲鳴が上がった。

先程、ハリーにお辞儀をしていたヒツポグリフ——バックビークが暴れているのを、ハグリッドが押さえつけている。草の上で身体を丸めているのは——

「……ドラコっ!?!」

アクアが小さな悲鳴を上げて口を押さえた。

ドラコのローブが見る間に血で染まる。その時、アリスが素早くドラコの元に駆け寄った。

「死んじゃうー!」

「死ぬかバカ。教師の話くらいちゃんと聞いとけ」

喚くドラコの頭をアリスは思いっきりぶん殴った後、ひよいとドラコを背負い上げた。

「……あー、あれは痛い。頭がカチ割れた気分になるだろう。しばらくは声すらも出せなさそうだ。」

「ハグリッド、俺がこのバカを医務室に連れてくから、後はちゃんと締めつけ」

「うにゃ……いかん、それはいかん。俺の責任だ……」
「いいからー!」

アリスの怒鳴り声に、ハグリッドが竦み上がる。

「わ、分かった……うん」と呟いたのを確認し、アリスは歩き出した。血が草地に点々と飛び散るのを見てアクアがビクツと身を硬くする。

「大丈夫だって……マダム・ポンフリーは傷跡一つ残さず治してくれるさ」

「……ええ、そうね」

アクアは脳裏に浮かんだ嫌なイメージを振り払うように頭を振った。

「あー……じゃ、じゃあ、その……うん。もう授業はこれで終わりだ……解散」

震える声でそう言ったハグリッドは、声と同じくらいぶるぶると震える手でヒツポグリフに首輪を掛けると森の方へ歩き出す。

パンジーが「大丈夫かどうか、私見てくる!」と言って駆け出して行った。アクアもドラコの様子を見に行きたいんじゃないかと、ぼくはアクアをそつと窺う。しかしアクアはぎゅつと拳を握ったまま、微動だにしなかった。

スリザリン生は喧々囂々、全員がハグリッドを罵倒しているようだった。そんなスリザリン生にグリフィンドール生が鼻息荒く反論している。

「すぐクビにすべきよ!」

「マルフォイが悪いんだ!」

「……アクア?」

アクアの顔色が悪い。そつと顔を覗き込んだところ、アクアはハッ

と我に返ったように目を瞬かせた。

「だ……大丈夫」

「まだ、何も言っていないけど」

「……………」

アクアが唇を引き結ぶ。

まあ……アクアにとつてのドラコの大きさを思えば、そんな顔をするのもしむなしだろう。

「ドラコが心配？」

「……心配と怒りが半々かしら」

アクアの返答にぼくは思わず目を瞬かせた。

……驚いた。てっきり心配し切っているものだと思ったのに。

「フェイスナーの対応を見る限り、ドラコに落ち度があったことに間違いはないでしょう。彼のことだから、ヒツポグリフを侮辱でもしたんじゃないかしら。……愚かな人」

血の気が引いた顔のまま、アクアは毅然とした眼差しで前を見据えた。

「……………」

ぼくは開きかけた口を閉じ「……帰ろう」とアクアを促した。

第15話 悪戯仕掛人、参上

その後、ぼくとセブルスは何となく気まずい雰囲気のまま、お互い話しかけることもなく日々を送っていた。

元々ぼくらは寮が違う。会おうと思わない限り、会わずとも何も問題なく時間が過ぎてしまう。

このままでは良くないと分かっているのに、どうすればいいかわからないまま二の足を踏む。それはきつと、セブルスも同じだったと思う。

そんなぼくらが何やかんやで和解するきっかけとなったのは——認めたくはないものの、やはりあの事件のおかげだろう。

「世にも珍しい薬を開発した!」

そう叫びながらジェームズがレイブクローの朝食の席に乱入してきたのは、十一月も半ばとなった頃のこと。ちょうど魔法魔術大会四年生の部における三回戦が終わった頃合いで、ぼくとジェームズ、そしてシリウスが四回戦へと駒を進めていた。

次の四回戦が、予選トーナメントにおける準決勝に当たるようだ。今残っているのはぼくら三人に加え、ハツフルパフ生が一人。四回戦でぼくとシリウス、ジェームズとそのハツフルパフ生が戦い、勝った二人が本戦に——すなわち学年混合の決勝戦へと進むことになる。

……まさかぼくがここまで残ることになるなんてなあ。感慨深い。リイフはシリウスと善戦の末に負けちゃったし、ちよつと残念だ。はてさて。

「……何?」

「とにかく、これを食べてみてくれ!」

ジェームズがぼくの手の上に何かを乗せる。それをまじまじと見つめた。

「……飴?」

透明の袋で包装されたそれは、飴玉のようだった。薄い水色がかつ

た半透明で、小石ほどのサイズだ。しかしいくらぼくでも、悪戯仕掛人筆頭のジェームズからもらった飴を無警戒に口にするほどバカでも愚かでもない。

——それにこいつ、ついさっき『世にも珍しい薬を開発した!』とか叫んでなかったっけ。

「さあさあ、早く! 食べてみてよ!」

「いや、こんな怪しいものをぼくに食べると?」

「怪しくない怪しくない!」

「二回言うあたりがまずもって怪しい!」

いやいやいや、と両手を振ってのけぞるぼくに、ほらほらほら、と詰め寄るジェームズ。やめてくれ。

ちなみに学年首席かつ目立ちたがり屋のジェームズは、他寮のレイブンクロー生ですらその名が知れ渡った有名人であり、ぼくがそんな有名人の彼と言い合いをしているものだから、周囲からは凄まじいまでの注目が集まっていた……やめてくれ。

そんな時に、まるでヒーローのように助けに来てくれるリイフ・フィスナーは、今日に限って寝坊だし。くそ、こんなことなら無理矢理叩き起こして引きずって来ればよかった。

「ええい、頑固な奴め! ならこうしてくれ!」

ぼくとの攻防に痺れを切らしたジェームズは、どういうことかその飴を自分の口の中に放り込んだ。直後、テーブルに置いてあったグラスを手に取り、中の水を口に含む。

そして——

ぼくの顎をぐいと掴んだジェームズは、そのまま顔を上向けさせると、無理矢理自分の口の中の水と共に、飴をもぼくの口の中に移したのだった。

つまりは、そう——口移し。

「……………」

辺りは一時騒然となる。ぼくこそ、だ。何をされたのか、さっぱり頭がついていかない。

ぼくが水ごと飴を飲み込んだのを確認し、ジェームズはぼくから唇

を離れた。その後ようやく騒がしい周囲に気付いたのか「あれ？」と不思議そうに首を傾げている。

「飲み込んだかい？ 秋」

「……………つ、アంతは……………」

やっと、今の状況まで頭が追いついた。恐らく今のぼくの顔は、羞恥で真っ赤に染まっていることだろう。

当たり前だ。大事な大事な初チューを、よりもよって、ああ、本当に、よりもよって！ 好きな女の子ならまだしも、こんな奴に！！

こんなクソ眼鏡なんかに！！！！

「……………あれ？ その反応を見るに、もしかして君、今のがファーストキスだったのかい？ それは悪いことをしたね。まあ犬に噛まれたと思つて諦めてよ。いや、鹿かな？」

ハツハツハと笑うジェームズに、ぼくの怒りは頂点に達した。

「Incarcerous！」

杖も持たずにぼくは叫んだ。途端、ジェームズに不可視の縄が巻き付く。

ジェームズは驚いたようにぼくを見たものの、知つたこつちやない。

「Accio！」

恐らくジェームズが持っている飴は一つではない筈だ。一体いくつ作つたかまでは分からないが『実験台』がぼくだけとも思えない。

そんなぼくの読み通り、ジェームズのポケットから四つ、五つと飴玉が飛んでくる。それら全てをキャッチしたぼくは、一つの包み紙を乱暴に破り捨てた。水の汲まれたコップを手に、身動きの取れないジェームズに歩み寄る。

「あ、あはは……………秋？」

乾いた笑みを漏らすジェームズの口に、問答無用で飴玉を突っ込んだ。コップの水を口の中に注ぎ込むと、両手で奴の口を覆い、鼻を摘んで少し待つ。

堪え切れなくなったジェームズが、口の中の飴玉を飲み込んだ。その様をゆっくり確認してから、ぼくはジェームズを解放してあげる。

なんかとんでもなく苦しそうにゲツホンゲツホン咳き込んでいるけれど、悪かったとはちつとも思わない。

「ポッター!! あなた秋になってことをしてくれたのよ! 私の天使に!!」

と、リリーが物凄い勢いでこちらに走ってきた。どうやらグリフィンドールのテーブルにまで話が伝え及んだらしい。

四つん這いになって咳き込むジエームズの脇腹に容赦なく蹴りを入れたリリーは「グハツ!!」とジエームズが更にもんどりうった、ぼくの両頬に手を当て顔を近付けた。

「ああ、もう! 秋、今起きたことは全部忘れるのよ! 私の天使を穢すだなんて、よくもまあやってくれたじゃない、ポッター!」

……天、使? リリーも大概おかしいぞ。

リリーの介入——もとい乱入に、流石にジエームズ一人残してはおけないと残りの悪戯仕掛人が駆けつけてきた。彼らの視線が、ぼくとリリーから地面に倒れ伏しているジエームズへと移る。

「えつと、つまりこれは……秋にへおいたしたジエームズが、リリーから鉄槌を喰らった……という解釈でいいのかな?」

リーマスが苦笑している。そうだ、とぼくはリリーの手を自分の頬から外すと彼らに駆け寄った。

「ねえ、さっきの水色の飴玉! あれは一体何なんだ、君達なら知っている筈だよね!」

「ああ、うん、まあ……その」

「ちよつとシリウス、僕の後ろに隠れないでよ!」

「このクソ犬、秋の前にちやんと出るんだ!」

リーマスとピーターに押し出され、シリウスがぼくの前に出てきた。「えつと」と言う声も普段より歯切れが悪い。

「その、新たに悪戯グッズを発明して……ちやんとできてたら、女の姿になるんだけど……」

シリウスの言葉が終わる前に、ポンツと軽い音がしてぼくの身体が白い煙に包まれた。

途端、胸の辺りに何やら柔らかかなものが。……こ、これは、もしや。

しかし触って確認するのも憚られる……。

ぼくの姿を視認して、シリウスの目が輝いた。

「よっしゃ、成功だぜ相棒！」とジエームズを振り返ったシリウスは、ジエームズが立ち上がりとうとしてリリーに再び蹴り転がされているのを確認し、まるで見なかったかのように振る舞いながらも、流れる動作でぼくの胸——そう、先程ぼくが触って確認するのも憚られると描写したその脂肪の塊を驚掴みにした。

「すっげえ、なあおい、ズボンの中……」

ぼくに詰め寄ったシリウスは、一瞬後リリーの手によって地面に転がされていた。流石リリー。

しかしぼくも、やられっぱなしじゃられない。

「Wingardium Leviosa！」

呪文を唱え指を鳴らすと、例の水色の飴玉が空中に浮遊する。

ぼくはシリウスとリーマス、ピーターに向かってにつこりと笑いかけた。

「さあ、三人とも、口を開けて？」



あの『魔法生物飼育学』の授業から数日。今日は初めてのリーマス……先生の、闇の魔術に対する防衛術の授業だ。

なのだが……。

「……遅いねえ、先生」

机に突っ伏しながら呟く。隣でハリーが「そうだね」と相槌を打ってくれた。

左手で杖をくるりくるりと回しつつ、ぼくは大きく息をついた。全く、もう授業開始のチャイムは鳴ったというのに。これじゃあぼくとハーマイオニーが遅刻するかもと本気ダツシユした意味がないじゃないか。疲れたただけだ。

その時、やつとリーマス……先生が教室に入ってきた。パツと私語

が止む。

古いカバンを教壇に置いた先生は「やあ、皆」と微笑んだ。

「教科書はカバンに戻してもらおうかな。今日は実地練習をすることにしよう。杖だけあればいいよ」

その言葉に、何人かの生徒が怪訝そうに顔を見合わせた。大方、去年ロックハートがピクシー妖精を持ち込んだ時のことを思い出しているのだろう。ロックハートよりもリーマスの方がよっぽどまともなのは言うまでもないけれど……でもリーマスは何をする気なのだろう？

リーマスの後に従い教室を出たところ、ピーブズと鉢合わせた。手近な鍵穴にチューインガムを詰め込んでいる。リーマス……先生の姿を認めたピーブズは、途端に嘲るように歌い出した。

「ルーニ、ルーピ、ルーピン。バーカ、マヌケ、ルーピン。ルーニ、ルーピ、ルーピン——」

ピーブズって奴は何年経とうが相変わらずこんな調子だ。呆れて肩を竦めるも、しかしリーマスは笑っていた。

「ピーブズ、私なら鍵穴からガムを剥がしておくけどね。フィルチさんが箒を取り入れなくなるじゃないか」

しかしピーブズがリーマスの言うことを聞く筈もない。案の定、ピーブズはリーマスに舌を突き出しケタケタと笑った。

予想していたように小さく息をついたリーマスは、ぼくらを振り返ると杖を取り出し微笑んだ。

「この簡単な呪文は役に立つよ。よく見ておきなさい——」
W a d d i w a s i !

リーマスが杖を振る。途端、チューインガムの弾丸が鍵穴から飛び出し、ピーブズの鼻の穴に見事命中した。ピーブズは悪態をつきながらスイーツと消えていく。

……おお、紛れもなくリーマスの手口だ。鮮やかで容赦がない。そして、この一撃で皆のリーマスを見る目が変わったのが分かった。

打って変わって尊敬の眼差しを向けられるようになったリーマスは、皆を引き連れ職員室までやって来た。

職員室にはただ一人、スネイプ教授の姿があった。ぼくらが職員室に入ってくる様子を眺めながら意地悪そうな笑みを浮かべている。リーマスが最後に入って扉を閉めた瞬間、教授はスツと立ち上がった。

「ルーピン、開けておいてくれ。我輩、出来れば見たくないのですね」
「……じゃあ、もっと早く出て行っていればいいじゃないか」

ハリーが小声で悪態をつく。ある程度距離があるから聞こえてはいないだろうけど、教授が一瞬こちらを見たので思わず肝が冷えた。

扉の前でくると振り返った教授は、嘲る口調で捨て台詞を吐く。
「ルーピン、多分誰も君に忠告していないと思うが、このクラスにはネビル・ロングボトムがいる。この子には難しい課題を与えないようご忠告申し上げておこう。ミス・グレンジャーが耳元でヒソヒソ指図を与えるなら別だがね」

ネビルがパツと顔を赤らめ顔を伏せた。流石にそれはやり過ぎだろうと、ぼくも思わず眉が寄る。

リーマスは一瞬だけ鋭い眼差しを見せたものの、すぐさま普段通りの穏やかな笑みを教授に向けた。

「術の最初の段階で、ネビルに私のアシスタントを務めてもらいたいと思ってましてね。それに、ネビルはきつと、とてもうまくやってくれると思いますよ」

スネイプ教授は物言いたげに唇を引き攣らせたが、何も言わずにバタンと扉を閉めて出て行った。リーマスは何事もなかったように手を振り、皆を部屋の奥まで来るよう合図する。

部屋の奥には古い洋筆筒だんすが置かれていた。

リーマスがその脇に立った瞬間、筆筒が急に震えてバーンと大きな音を立てる。びくりと何人かが驚いて飛び上がった。

「ああ、アキ、今のはびっくりしたね」
「う、うるさいよ、びっくりなんてしてない」

「心配しなくていいよ。中にまね妖怪——ボガートが入っているんだ」

皆が一斉に胡乱な目つきでリーマスを見た。どう見ても心配する

べき事象だろうと言いたげな目だ。

注目の中、リーマスは滔々とうとうと講義を始めた。

「まね妖怪は暗くて狭いところを好む。洋箏筒、ベッドの下の隙間、流しの下の食器など——」

ベッドの下の隙間かあ。そりやあ一部の男子諸君はちつとばかり困る羽目になりそうだ。何とかして自力で倒さないと秘蔵のコレクションが衆目に晒されることになってしまう。一部の男子の表情が引き締まるのも道理というものだ。

……え？ 真面目にやれって？ ぼくはいつだって真面目さ、何言っちゃってんの全く。

「——ここにいるのは昨日の午後に入り込んだやつで、三年の実習に使いたいから、先生方にはそのまま放っておいていただきたいと校長先生にお願いしたんですよ。……それでは最初の問題ですが、まね妖怪のボガートとは何でしょう？」

レイブンクローからもちらほらと手が上がるものの、ハーマイオニーの速度には敵わない。

「形態模写妖怪です。私達が一番怖いと思うのはこれだと判断すると、それに姿を変えることができます」

「私でもそんなに上手くは説明できなかつたろう」

リーマスはにつこりと笑った。褒められてハーマイオニーの頬も赤く染まる。

「だから、中の暗がり座り込んでいるまね妖怪は、まだなんの姿にもなっていない。箏筒の戸の外にいる誰かが、何を怖がるのかまだ知らない。まね妖怪が一人ぼっちの時にどんな姿をしているのか、誰も知らない。しかし私が外に出してやると、たちまちそれぞれが一番怖いと思っているものに姿を変える筈です——ということとはつまり、初めっから私達の方がまね妖怪より大変有利な立場にあります……ハリー、何故だか分かるかな？」

突然当てられたハリーがびくつと肩を震わせた。「えーと……」と数秒考えた後、思いついたように口を開く。

「僕達、人数がたくさんいるので、まね妖怪はどんな姿に変身すればい

「いか分らない?」

「その通り。……まね妖怪退治をする時は、誰かと一緒にいるのが一番いい。向こうが混乱するからね。首のない死体に変身すべきか、人肉を喰らうナメクジになるべきか? 私はまね妖怪がまさにその過ちを犯したのを一度見たことがある——一度に二人を脅そうとしてね、半身ナメクジに変身したんだ。どう見ても恐ろしいとは言えなかった。」

まね妖怪を退散させる呪文は簡単だ。しかし精神力が必要だ。こいつを本当にやつつけるのは、笑いなんだ。君達は、まね妖怪に、君達が滑稽だと思える姿をとらせる必要がある。初めは杖なしで練習しよう。私に続いて言ってみて——『Riddikulus!』」

「Riddikulus!」

全員が一斉に唱えた。リーマスは満足そうに頷く。
「そう。とっても上手だ。でもここまでは簡単なだけだね。呪文だけでは十分じゃないんだよ。そこで、ネビル、君の登場だ」

ネビルが震えながら進み出た。心配になるほど顔が青白い。

リーマスは朗らかに口を開いた。

「よし、ネビル。一つずつ行こうか。君が世界一怖いものはなんだろう?」

ネビルの唇が小さく動く。しかし声が小さすぎて、誰も聞き取ることができなかった。

「ん? ごめん、ネビル、聞こえなかった」

「……………スネイプ先生」

蚊の鳴くような声だった。クラス全員が今のネビルの台詞に笑ったものの、リーマスは真面目な顔で顎を撫でる。

「スネイプ先生か……フォーム……ネビル、君はおばあさんと暮らしているね?」

「え……はい。でも——僕、まね妖怪がばあちゃんに変身するのも嫌です」

「いや、いや、そういう意味じゃないんだよ。教えてくれないか。おばあさんはいつも、どんな服を着ていらっしやるのかな?」

「えつと……いつもおんなじ帽子。たかーくて、てっぺんにハゲタカの剥製がついてるの。それに、ながーいドレス……たいてい、緑色……それと、ときどき狐の毛皮の襟巻きしてる」

「ハンドバッグは？」

「おつきな赤いやつ」

「それに化粧もさせてみようか……」

「え？」

「いやいや何でもないよネビル」

「うっわあ、リーマス……先生が滅茶苦茶生き生きしてらっしやる。」

「ゴホン。よし、それじゃ。ネビル、その服装をはつきり思い浮かべることができるかな？ 心の目で見えるかな？ 君のおばあさんの髪が紫色になった様子を鮮明に想像できるかい？」

「む、紫……？ な、なんとか」

ネビルが自信なさげに答えた。

ダメだ、ぼくも笑いを堪えないと。まだ早い……やっぱり実物を見てから笑おうじゃないか……。

……リーマス、先生、その目でぼくを見るなって！

「ネビル、まね妖怪が洋筆筒からウワーツと出てくるね。君を見たまね妖怪はスネイプ先生の姿に変身するんだ。そしたら、君は杖を上げて——こうだよ——そして叫ぶんだ。『Riddikulus』。その後、君のおばあさんの紫色の……ああ、虹色でもいいよ？ 髪の毛と服装に精神を集中させる。全て上手くいくと、ボガート・スネイプ先生はてっぺんにハゲタカのついた帽子を被って、緑のドレスを着て、赤いハンドバッグを持って、髪の毛を虹色に光り輝かせた姿になっちゃう」

ダメだリーマス、詳しく描写するのは反則だ。

教室中が爆笑の渦に包まれ、堪え切れずぼくも吹き出してしまった。

「ネビルが首尾よくやっつけたら、その後まね妖怪は次々に君達に向かってくることだろう。みんな、ちよつと考えてくれるかい。何が一番怖いかって。そして、その姿をどうやったらおかしな姿に変えられ

るか、想像してみても……」

「ぼくが一番怖いもの、か。改めて考えると難しい。ぼくは何が怖いのだろうか？」

ハリーは普段優しいけど、怒ったハリーは結構怖い。賞味期限が切れた卵も案外怖い。読むのをとても楽しみにしていた推理小説を図書館で借りたのに、登場人物の欄に『↑犯人』と落書きがあったりするのかなり怖い。泣き叫ぶレベルかもしれない。

後、アクアに嫌われるのも怖い……あ、いや、うん。

「みんな、いいかい？」

リーマスの声。うーん、まだ何も決まっていけないものの、まね妖怪を前にしたら何か思いつくだろう。

……そう言えば幣原秋の怖いものは、実家に置いてある小説で読んだ死神だったなあ……うん、あれは確かに怖かった。その死神の持つ大鎌で、死神自身を真つ二つにさせたのは『Riddikulus』としてはどうだったのだろうか。笑えなくはないけどブラックユーモアの範疇だよ。気の弱い女の子、半泣きだったし。

「ネビル、私達は下がっていいようか。君に場所を空けてあげよう。いいね？ 次の生徒は前に出るようになら私が声を掛けるから……。みんな下がって、さあ、ネビルが間違いないやつつけられるように——」
言われるがまま、ぼくらは壁にぴたりと張り付きネビルを見守った。ネビルは青ざめながらも杖を構える。

「ネビル、三つ数えてからだ。いち、に、さん、それ！」

洋筆筒が勢いよく開き、中からスネイプ教授が這い出てきた。目をぎらつかせてネビルに迫る教授に、ネビルが怯えて数歩下がる。

「ロングボトム？ 我輩は確かに君に教えましたよなあ？ 一体どうやったら君に理解していただくことができるのかむしろ我輩にご教授いただきたいものだ——グリフィンドール十点減点、罰則だ」

……きつと、よく言われていることなんだろうなあ。ネビルに同情してしまう。

「リ、リ、Riddikulus！」

半泣きのネビルが呪文を唱えた。

パチンと軽い音がして教授が躓く。次の瞬間、ドレスを着て帽子を被りハンドバッグを持った教授がそこにいた。ご丁寧にも髪は赤から紫に光り輝いている。どつと笑い声が上がった。

「……っ、……ネビル、いいぞっ……！ つく、ふふふ……」

近くの机に突っ伏して、天板をバンバン拳で叩いているリーマスが一番楽しそうではあった。リーマス……先生、この職業はきつと天職だよ。ぼくが保証する。

「パ、パ、パーバティ、前へ！」

息が整わないほど笑い転げつつも、リーマスは次の生徒の名前を呼ぶ。

パーバティが前に進み出た瞬間、教授は血まみれの包帯をぐるぐる巻いたミイラに変わった。笑い声は瞬時に収まった。

「Riddikulus！」

自分の包帯に絡まったミイラは、つんのめった途端に頭がころりと転がり落ちた。再び笑いが巻き起こる。

まね妖怪はそれからバンシーに、ヘビに、目玉に、手首に、そしてロンが一番怖いものである大蜘蛛に姿を変えた後、ぼくとハリーの足元に転がってきた。

「……っ、ぼくがやるよー！」

咄嗟にハリーの前に躍り出る。

ハリーはきつとヴォルデモートの姿を思い浮かべてしまう。だとしたら教室中がパニックになるだろう。それだけはダメだ――。

ボガートがぼくの目の前で姿を変える。さて、ぼくが一番怖いものは何だろう？ お手並み拝見な気持ちも胸に、ぼくは杖を抜いた。

ボガートは横たわった人間の姿を取り始めた。それがはつきりとした実体となるに従い、ぼくだけでなく教室中が静まり返る。

「……ああ……」

ボガートがぼくの目の前で姿を変えたもの。それは死んだハリーの姿だった。

これは、確かに……怖い。これ以上なく、怖いものだ。

心の底が冷えていく感覚。心臓を冷たい手で鷲掴みにされたよう

な心地。

「……最悪、だ」

苦笑して、ぼくはボガートに杖を向ける。

「Riddikulus!」

目を閉じていたハリーの目がパツと開いた。むくりと起き上がったその死体は——否、これはハリーじゃない。この、^{ハシバミ}榛色の瞳の持ち主は——

「ハリーかと思った？ 残念、ジエームズでした!!」

「ブツハアツ!!」

リーマスが盛大に吹き出した。後ろでハリーが小さな笑い声を零す。

ジエームズはキョンシーのように両手をだらりと前に突き出すと、凄まじく腹が立つ顔でピョンピョンと飛び回り始めた。

「まさかジエームズ、くっそ、そう来るとは……そろそろ時間だ——、こっちだジエームズ! つく、その顔かなり腹が立つ!」

ボガート・ジエームズはリーマスの前に来ると、銀白色の球に姿を変えた。

「つぶ、こんな『ふわふわのちっちゃな問題』なんて軽いもんさ——」
リーマスは笑った。学生時代を彷彿とさせる、何とも若々しい笑顔

だった。

「——Riddikulus!」

第16話 仄かな想い、自覚しない恋心

リリーに手を引かれたままフリットウィック先生の元へ事情を説明しに行ったところ、フリットウィック先生は好きだけ笑い転げた後、一回り小さい制服を貸し与えてくれた。

元々男子としても小柄なぼくだけど、こうして……まあ認めたくはないものの、女の子になって更に一回り小さくなってしまったようだ。袖も裾もぶつかぶかのずるずるで、流石にこのままでいる訳にはいかない。

「ああもう秋、私ずっとあなたのことを女の子みたいに可愛いと常日頃から思っていたのだけど、女の子になったら更に可愛いわね！ これこそまさに私の天使だわ！ マイ・スウィート・エンジェル！ ああ秋、どこまで私を萌えさせれば気が済むの！」

……リリーが壊れた。

ちなみに、例の悪戯仕掛人の四人組は、グリフィンドール寮監にして変身術教授であるマクゴナガル先生の元でド派手にお説教を喰らっているところである。勿論、四人とも女の子の姿で。

三日ぐらいつとお説教されていけばいいのには思うものの、元に戻る方法は彼らしか知らないのでそういう訳にもいくまい。

「ほっぺもすすべすべだし、睫毛は長いし手首は細いし、ちよつと私フリットウィック先生に女子の制服を頼んでくる！」

「待ってリリー！ 落ち着いてよりリリー！」

……ぼくの真の敵って、もしかするとリリーなんじゃないのかわい、助けてもらった身で言えるもんじゃないけどさ。

流石にスカートはダメだろう。男としてのプライドが、それだけは許しちやダメだって言ってる。去年リリーと制服交換した時にスカート履いたじゃないって？ それはそれ、これはこれだつてば。

ぼくに引き止められたリリーは不満そうに頬を膨らませていた。そんな顔をするんじゃないやありません。

今のこの状態の上、女子生徒の制服だなんて……同寮の皆にどんな顔をされるのか、想像すらしたくない。腫れ物に触れるような扱いを

受けそうだ。

「……でも今日が日曜日で良かったわね。流石に女の子のまま授業は受けたくないでしょうし……」

「うう……まあね」

その点では悪戯仕掛人に感謝して……いや感謝はしてないけど。どう好意的に捉えても感謝は絶対にできないけど。

その時機の上に置かれた大鍋の火が消えた。飴玉の成分解析が終わったのだ。

どれどれと立ち上がり大鍋の中を確認したりリリーは、すぐさま落胆した声を零した。

「……うーん、ダメね。解析してみたけれど、どんな魔法薬なのか私にも分からないわ」

「そう……魔法薬学が得意なりりーでも分からない、か……」

「まあ私としては、秋がそのまま女の子の格好でいてくれても全然やぶさかではないのだけれど……」

「早く！ 早いと二元に戻す薬を作らなきゃね、リリー!!」

慌ててリリーの肩を揺さぶる。ぱちぱちと目を瞬かせたリリーは「そ、そうね!」と言い、何故かぼくから目を逸らした。……おい。

「で、でも! あのと、これ以上贅沢は言わないからせめてあなたの髪の毛だけは結わせて! お願ひ! 秋の髪、触ってみたかったの!」

……む。まあ髪の毛くらいなら……いいか。今回の件の後でも、髪は以前と変わらないのだし。

ぼくから許可をもらうが早いか、リリーはウキウキした様子でぼくの背後に回り込んだ。

……何故か寒気が、こう、ゾワツと。何だろう、危機感みたいなの? 「髪は前と変わんないと思うんだけど、そんなの弄って楽しいかい?」

「楽しいに決まってるわよ! 今だから言うけど、私、あなたがそれほど綺麗な髪を持ちながら、いつも代わり映えなくただ一つに括っているだけの姿を見て『なんてつまらない人なの』ってうずうずしていたのよ」

「……………はあ」

つまらない人だと言われてしまった……そりゃ、ぼくはそう面白みのある人間じゃないけどさ……なんかショック。

その時、自分の髪の中にリリーの手が差し入れられた。ゾクゾクツと、何か得体の知れない感情が胸の中で渦を巻く。

う、わ……何というか、これは。

リリーの手がぼくの頭を、耳の後ろを、首筋をそつと撫でていく。その度にぼくは小さく息を詰めた。

——どうして、こんなに緊張するんだろう？

今まで抱き締められたことも手を繋がれたことも、何度だってあつたじゃないか。

なのに、たかが髪を触られたくらいで意識するなんて、ぼくらしくもない。

十四年も生きているのだ。自分の見た目が女の子のようなこともいい加減自覚している。性格も口調も柔らかな方だという自認もある。

日本でだって、女の子との距離は異性間というより同性間のように近かった。だからぼくも、その距離感に慣れ切っていた筈なのに。

その時、リリーがそつとぼくに声を掛けた。

「……………ねえ、秋？」

「何？」

「セブと、ケンカでもしたの？」

「……………」

——ケンカ、か。

ケンカならまだ良かったのかもしれない。

「……………何なんだろうね。ケンカというか……お互いの意見がさ、合わなかつたんだ」

見解の不一致。

意見の相違。

思想の、食い違い。

「ぼくが正しいと思うことと、セブルスが正しいと思うことは、どうし

ようもなく違っていて……お互い、自分の正しさを相手に認めさせようとしたんだと思う。でも、お互い認め合えなくて、それで今……こんな感じに」

「……秋もセブも、お互い頑固よねえ」

「……頑固、かなあ？」

「頑固よ。それとも、男の子ってそういうもののかな？ まあ、今の秋は男の子じゃないけどね」

「言わないでよそれは……」

認めたくないのだ。物的証拠がいくら揃っていようとも。

「お互い正しいと思っっていることがあるんだから、違う意見を認めさせようとしても無理に決まってるじゃない」

リリーはあつさりと言った。

「……じゃあ、リリー。リリーはさ、もし友達と感覚が食い違ったら……価値観が違うって感じたら、君はどうするの？」

「私？ 私なら……そうね。その意見を持つ友達ごと受け入れる、かしら」

「……」

「受け入れたい、が正確かしら。受け入れられるかは分からないけど。でも、友達ですもの。だってそんなつまらないことで、友達一人をなくす方が悲しいじゃない？」

「ね、秋？」と、リリーの笑い声が聞こえる。

「さて、秋。男の子は意地っ張りで頑固なのが定説ですけど、今のあなたは女の子よね？」

「……敵わないなあ。」

敵わなくてもいいと、思わせてくれるよなあ。

「ああ……そうだね」

ぼくは苦笑して、大きく息を吐いた。

その後の顛末は、語る必要もないだろう。

妙な薬を作った癖に、元に戻す薬は作っていなかったジェームズ達

のせいで、何日間ぼくらがこのままで過ごさなければいけない羽目になったかなんて、話して聞かせる価値もない……。

悪戯仕掛人四人組のスカート姿は案外似合っていたとだけ伝えておこう。

——ああ、後、一つ。

幣原秋とセブルス・スネイプが、互いの信条を曲げることなく、それでももう一度、手を取り合ったことは——

それから遠くない将来において、どうしようもないほどに決別し合うことが、既に定められていたとしても——
記しておくに、やぶさかではない。



「ねえ、アクア」

授業の合間の休み時間。廊下を歩いていたアクアマリン・ベルフェゴールは、背後から掛けられた声に振り返った。

ショートカットの黒髪を揺らした同寮の女子——パンジー・パーキンソンが腕を組んで立っている姿を視界に入れる。

「……何、かしら」

「アクアってさ、ドラコの婚約者なのよね？」

「……一応、親同士の取り決めで」

「へーっ、やっぱりご貴族様は違うわね！」

含みのあるパンジーの言葉に、アクアは僅かに眉を寄せた。

クラスメイトではあるものの、彼女のことは好きにはなれなかった。

もつともアクアはスリザリン生の大半が好きではない。アクアがスリザリン生の中で気を許している相手など、幼馴染であるドラコ・マルフォイと友人のダフネ・グリーンングラスくらいなものだ。

「……何の用？」

つつけんどんに尋ねる。アクアの態度に、パンジーは肩を竦めてため息をついた。

「……はーあ、少しはアンタとお喋りでもしようかと思ってたんだけどね……アンタがその気じゃないようだし、まあいいわ。本題に入りましょう」

パンジーは笑顔を浮かべ、アクアに一步近付いた。

「婚約者、でもドラコは嫌がつてるみたいだけど？ 話してくれたわ、『望まない相手と結婚なんて』『こんな婚約今すぐにでも破棄したいのに』って」

「……だから？」

そんな言葉は言われ慣れている。他でもない、ドラコ本人の口から。

無意識のうちに、両手でスカートをぎゅつと掴んでいた。

「アクアは実際、ドラコのことをどう思ってたの？」

「……」

ドラコ・マルフォイ。自分達が生まれる前からの、親に定められた婚約者。マルフォイ家とベルフエゴール家の間の取り決め。

子供の頃から兄妹のように育ってきた。ずっと、ずっと一緒だった。

アクアが闇の帝王についての違和感を口にするたび、ドラコはいつも怖い顔をしてアクアを怒鳴りつけた。しかしそれもドラコなりの優しさなのだ、アクアは知っている。

ドラコがアクアを守ろうとしてくれていることも。だから、嫌だ嫌だと言いながらもアクアとの婚約を破棄しないことも、知っている。

——私は、誰からも守られてばかりだ。

アクアはうつすらと微笑んだ。僅かな表情の変化ではあったものの、曲がりなりにも二年余りの歳月をクラスメイトとして過ごしているのだ。アクアの笑みに気付いたパンジーは、僅かに警戒するような態度を見せた。

「……あなた、ドラコのことが好きなんでしょう？」

「なっ……いきなり、何を」

「……隠さなくてもいいわ、今更よ」

——そうね。私もいい加減、何かを決断しなければならないのかも

しれない。

「……私に許可なんて取らなくていいわ、好きになさい。私とドラコは名目上は婚約者ではあるけれど、実際はただの幼馴染。それ以上のものは何もないわ」

驚いたようにアクアを見ていたパンジーは、やがて白い頬を赤く染めた。

「ば、バカにしないで!」

「……話はそれだけ? 私、次の授業があるの。行かなくちゃ」

ヒラリと手を振りパンジーに背を向ける。

しかし数歩踏み出したところで、背後の怒鳴り声に呼び止められた。

「何よつ、この……スリザリンの異端児! アンタなんてね、ドラコがいなけりやあつという間にいじめられてたわよ! 家でも鼻つまみ者らしいじゃない! いつだってドラコに守られてる癖に、ただ可愛いだけの、守られるしか能のないお姫様な癖に!」

「……………っ!」

堪え切れずに杖を抜いた。振り向き、パンジーに杖を向ける。パンジーも素早くローブから杖を取り出すと、キツとアクアに向かい合った。

突如始まった二人のケンカに、廊下にいた生徒達がぎわつく。

「アラ、凶星を指されて頭に来ちゃった? 可愛い可愛いお嬢様。あなたでも怒ることなんてあるのねえ」

「……私は案外気が短いのよ。知らなかったのなら教えてあげるわ」

肩に掛かる髪を左手で払った。

ドラコが来たらそれはそれで面倒なことになる。早目にケリをつけたいところだ。

「アンタの弟も! ベルフエゴール家の長男がスリザリン以外の寮に入ったなんて、ベルフエゴール家の醜聞だったんじゃない?」

「……私の弟を悪く言わないで」

「姉弟二人共がこんな有様じゃあ、ベルフエゴールも落ちぶれたものねえ!」
「両親に同情しちゃうわ!」

「……………Impediment a!」

「Confundo!」

明るい青の火花と赤の火花がぶつかり合い、相殺し合う。それを見て、辺りにいた生徒達が悲鳴を上げて逃げ惑った。

「……………この……………」

「Incendio!」

「つ、Agumentii!」

パンジーが炎を放ってくる。慌てて杖先から水を出して打ち消した。数歩下がったアクアは、次は何が出てくるかと身構える。

パンジーが杖を振りかぶった。

「Diffin……………」

「やめろっ!!」

唐突に辺りに響き渡った大声に、アクアとパンジーは慌てて振り返った。

後ろで一つに括られた艶のある長い黒髪に、レイブクローの制服を纏った小柄な身体。つい先程までこの廊下にはスリザリン生しかなかったというのに、一体どこから現れたのだろう。何故か、奥にはグリフィンドールのハーマイオニー・グレンジャーの姿まで見える。

そんな彼は——アキ・ポッターは「はい、ケンカはやめなさいね」とパンパンと手を叩きながら、アクアとパンジーに近付いてきた。その口元には飄々とした笑みが浮かんでいる。

「……………つ、ポッター!」

「あんまり苗字で呼ばないでよね、パンジー!パーキンソン。我が親愛なる兄貴と被るじゃないか。あと、むやみやたらと人に杖を向けないの」

アキは杖を抜くと軽く振り上げた。途端、アクアとパンジーの杖は持ち主の手を離れ、各々のローブのポケットの中にひとりでに収まってゆく。

「廊下でのケンカは、確か校則違反だった筈だけど?」

「……………アキ、その……………」

「ごめんなさいと言い掛けた言葉は、アキにそつと背中を叩かれたことで止まった。」

「アクア、謝る相手が違うんじゃない?」

「……ごめんなさい、パンジー」

「あ、いや、まあ……言い過ぎたわ。ごめんね、アクア」

アクアとパンジーがお互い謝罪し合ったのを見て、アキは「そう、仲良きことは美しき哉^{かな}。じゃあぼくらは授業に行こうじゃないか。ハーマイオニー、今は何時だい……」と言って振り返った後「……あう」と目を瞠った。

アクアとパンジーも振り返る。

「……廊下で魔法を使っているとの報告を受けましてね。貴様か、アキ・ポッター」

「な、何のことでしようスネイプ教授、はは……」

「レイブンクローに十点減点。おやおや、ミス・グレンジャーも一緒にグリフィンドールも十点減点」

「理不尽!」

「今の口答えにレイブンクローからも十点減点だ、アキ・ポッター」

「……ひどい身内轟負」

「罰則追加。次の週末、我輩の研究室へ来い」

「嘘だろ!」

「……学ばない人だ……口答え^{くた}で余計に罰が増えて……。」

現れたセブルス・スネイプは、一瞬だけアクアを見た後「あと三十秒ほどで授業が始まる筈だが? 高貴で誇りあるスリザリン生よ、早く教室へ向かいたまえ」と生徒を追い立てる。生徒は蜘蛛の子を散らすようにパアツと逃げて行った。アキとハーマイオニーも時計を見ている、慌てた顔で授業へと駆けて行く。

「……アクアマリン。どうして次の授業に行かないのかね」

「……先に杖を出したのは私よ、先生」

「そんなことは瑣末なことに過ぎん。それとも、罰則をアキ・ポッターと共に受けたいのかね?」

挑むような眼差しで、スネイプはアクアを見下ろした。その眼差し

に一瞬怯んだものの、アクアは立ち向かう。

「……ええ、それも悪くないかもしれないわね、先生。アキと一緒に、罰則だつてきつと楽しく過ごせるもの」

「……驚いたな。自ら罰則を望む酔狂な者がいるとは。あの場で杖を持つていたのはアキ・ポッターただ一人だ、君もパンジーも両手は空いていたと我輩は記憶しているが？」

「……………」

やはりスネイプも、アクアとパンジーのケンカだと気付いていたのだ。

だからアキは、先にアクアとパンジーに杖を仕舞わせた。先生に見られても言い訳が効くように。

全くどこまで——聡い人。

「アキ・ポッターと君が、いつの間にかファーストネームで呼び合う関係になっていたことには驚いたが」

「……別に。友達、ですもの」

「ほう。君の狭いカテゴリーの範疇にあの少年が入っているとは、まっこと意外」

「……あなたがアキに辛辣なのは、彼が幣原秋に似てるから？」

アクアの言葉に、スネイプは少し黙り込んだ。アクアも口を噤む。

「アクアマリン・ベルフェゴール。ここは学校だ。我輩は教師、そして君は生徒だ。……早く行きなさい。我輩は自分の寮から点を引くという気が進まぬことはしたくない」

「……ええ、ごめんなさい、先生」

アクアはそつと頭を下げた後、スネイプの横を小走りですり抜ける。しかしその足は数メートル先で止まった。

「……あの、先生。……今度あなたの研究室に、お茶を飲みに行っても構わないかしら」

アクアの問いに、スネイプは少し瞳を揺らした。しかしすぐさまその顔に笑みを浮かべては軽く頷く。

「……ああ。罰則以外ならば、いくらでも来るといい。君の舌に合うかは、分からないが」

アクアは微笑むと、今度こそ駆け出した。

第17話 魔法合戦

「とうとう、この時が来たね……」

「ああ、その通りだ……」

腕を伸ばし、ぼくらは杖先を合わせあう。指定位置にまで戻ると、フリットウィック先生の合図で構えた。

「どっちが勝っても恨むなよ、秋！」

「こつちこそ！ シリウス！」

——魔法魔術大会四年生の部四回戦。

グリフィンドール寮シリウス・ブラック対レイブンクロー寮幣原秋

——開幕！

初っ端に仕掛けてきたのはシリウスだった。

「Incarcerous！」

先手必勝とばかりに呪文を唱え、シリウスはこちらに走ってくる。

ぼくが魔法を打ち消している間に距離を詰めようという算段か。

——だが、そんな時間は与えない。

「Impedimenta！」

妨害呪文を唱える。

杖の一振りで魔法を打ち消したぼくは、バックステップでシリウスに詰められた距離を離れた。シリウスは足を止め、反対呪文で飛んできた魔法を消し去る。

そこから先は、呪文の打ち合いだった。

「Diffindo！」

「Incendio！」

「Relashio！」

「Tarantallegra！」

「Finite！」

ここ数年の付き合いで、シリウスもぼくのこととは熟知している。一瞬でも間が空いたらその時点で終わりだとも思っているようだ。

間髪いれずに呪文を唱え続ける。

しかし、相手のことをよく知っているのはぼくも一緒。もう四回戦、流石にもう一回戦の頃のようなぎこちなさは解れている。決闘にも随分と慣れてきた。

「Confringo！」

「Agua mentii！」

「Bombarda！」

「Protego！」

ぼくの爆破呪文は、すぐ脇の石像に直撃しては、石像の右肩を根こそぎにした。

辺りに激しく破片が飛び散る中、それでもシリウスは『盾の呪文』で武装しつつ突っ込んでくる。

「……っ！」

近距離戦だとぼくは圧倒的に不利だ。『魔法魔術大会』と銘打っているものの、実際は何を使っても構わない。最終的に相手を『決闘継続不能』な状態にすればいいのだ。

他の組では相手の手から無理矢理杖をもぎ取ったり、更には魔法を使うことなくそのまま相手に殴りかかったりといったこともあったらしい。呪文ちゃんたら唱えるよりも拳握って振り抜いた方が早いというのは、まあ一理ある。

シリウスはそんなことをするような奴じゃないとは思うもの、でもアイツは杖をもぎ取るくらいなら平然とやりそうだ。護身術とか習っていてもおかしくないような名門の生まれだし、後なんつーか、単純にケンカが強そう。

「Immobulus……っ！」

呪文を叫んだものの、それより早くシリウスが物凄い勢いでぼくに飛びかかってきた。思わず狙いを外してしまふ。

シリウスはぼくに杖を向けたまま、空中で叫んだ。

「Lumos！」

瞬間、目も眩む閃光がシリウスの杖先から迸る。慌てて目を瞑ったものの、しばらく視力は奪われることになるだろう。

そして今のは、何よりもぼくに対して有効な手段だ。

「Expelli...」

……流石に視界を奪われちゃ敵わない。もう少し戦っていたかったけれど……仕方ない、か。

「……なっ!?!」

呪文の途中でシリウスが驚愕の声を上げた。

目が開けないため正確には分からないものの、ぼくがこっそりと仕掛けておいた『落とし穴』に足を取られたに違いない。直後「うわっ」と聞こえたから、恐らくは両足とも。

声が聞こえてきた方向と、仕掛けた位置を頭の中でマッチングさせる。おおよその場所の見当をつけ、ぼくは杖を向けた。

「Petrificus Totalus!」



十月三十一日のハロウインの日は、初のホグズミード休暇だった。

ホグズミードで週末を満喫した同寮の友人達のお喋りを、ぼくはハロウイン仕様のご馳走を頂きながら聞いていた。そんなに楽しげに話されると、なんだかぼくまで楽しくなってくるな。

許可証にサインがないため留守番となったぼくへと、友人達は様々なお土産を買ってきてくれた。なんともまあ心の優しい友人達だ。お土産のほとんどがゾンコの悪戯グッズだったのには何らかの悪意があると思えなかったけどね。

ぼく? ぼくはとりあえず、信じられないほど大量に出された課題の山を崩すことができただけでも充実した週末だったと言えよう。

全く、選択科目を全部履修するなんて正気の沙汰とは思えない。ハーマイオニーは大丈夫だろうか。

また、先日アクアとパンジーのケンカの仲裁をした際に謎の理不尽でスネイプ教授から罰則を受けたため、仕方なしに教授の研究室へと向かったところ、教授はぼくに罰則を言い渡したことをすっかり忘れていた顔でぼくを出迎えた。何なんだよ全くもう。気分ですら罰則を言

い渡すのはやめましょう。

折角だったので教授とお喋りに興じてきた。現代の魔法界では脱狼薬という薬が開発されていて、これを満月の前一週間欠かさず飲むことにより、満月の日が来ても理性を保ったまままでいられるらしい。「じゃあこれが罰則ということで」との雑な指示で、教授の代わりにその薬をリーマスの元へ届けに行ったところ、そこには我が兄ハリーの姿もあった。どうやら二人でお茶をしていたようだ。

リーマスはぼくが届けた脱狼薬を見ては「本当に砂糖を入れちゃダメなのかい？」と恨めしそうな顔をしていた。気の毒なことに、味がすこぶるイケてないようだ。

さて、十月も終わり際、クラスメイトもぼくがどうやって全部の授業に出席しているのか不審に思い始めたらしく、度々「どういうことだ？」と問いかけられるようになった。

勿論、タイムターナー逆転時計のことを話す訳にはいかないため、思いつきり全力で誤魔化すしかないのだが。

……一体いつまで保つかなあ。あと、こういう時異様に勘が鋭いアリスが何も言っただけ来ないのが怖いなあ。

しかし豪華な食事を目一杯詰め込んだせいで、大広間から寮へ戻る道すがらですら、うっかりすると歩きながら眠ってしまいそうなほどに眠かった。課題に頭をフル回転させたからかもしれない。

ホグズミードではっちゃけたのだろう、皆の顔もぼーつとしていた。アリスもひっきりなしに大欠伸をしていた。

ユークはアリスの腰に抱きついたまま（最近のユークはアリスを見かけるとすぐに引っ付きに来るので、ぼくも段々とその姿を見慣れてきた）幼い寝息を立てている。全く、こいつは眠っている時は可愛いものなあ。姉に似た整った顔をしている訳だしね。

ぼくらを引率する監督生も、意識は既に寝室のふかふかベッドへと向かっているらしく、ドアノッカーが出す問題に三度も間違える羽目になっていた。

レイブンクロー寮の前で待たされるのは、レイブンクロー生にとっては日常茶飯事だ。運が悪いと何時間も立ち往生することになる。

以前、ドアノツカーの問題に四十人近くが集まっても正解することができず、挙句の果てにフリットウィック先生を呼び出す惨事にまでなったことがある。しかしフリットウィック先生も結局答えられなくて、寮の中にいた生徒がたまたま降りてきた時は思わず喝采が上がったものだ。本当に、ロウエナ・レイブンクローは厄介な品を作ったものよ。

寮の扉が開くのを待っている間、気付けば立ったままうたた寝をしていたようだ。フリットウィック先生の「諸君！ 大広間に戻りなさい！」との声にハッと意識を取り戻した。

何事かとざわめきが走る。レイブンクロー生の一人が「どうしたんですか、先生？」と尋ねた。フリットウィック先生も動揺していたのか、普段は賢明な先生らしくもなくポロリと口を滑らせた。

「シリウス・ブラックが Hogwarts 内に侵入しました！ 監督生、点呼の後大広間に皆を引率するのです、即座にどうぞ！」

ぼくらは急遽大広間で一晩を過ごすこととなった。ぼくはハリーやロン、ハーマイオニーと一緒に隅の方に寝袋を敷くと中に潜り込む。

「シリウス・ブラックが侵入したって、本当なの？」

「ああ、そうだ……グリフィンドールのほら、太った婦人^{レデイ}、知ってるだろ？ あの肖像画がズタズタに切り裂かれてたんだ」

ハリーの言葉にこくりと頷く。

『太った婦人^{レデイ}』とはグリフィンドール寮の入口を守っている肖像画だ。何度もハリーにグリフィンドール塔に連れ込まれているものだから、今では太った婦人へレデイとも顔見知りになってしまった。

「ピーブズがダンブルドアに『シリウス・ブラックがやった』と報告した……ピーブズは厄介なヤツだけど、校長先生には嘘はつかない。本当に、シリウス・ブラックだったんだ……」

「でも、どうしてグリフィンドールの塔の場所を知っていたのかしら？」

ハーマイオニーは険しい顔で呟いた。

「あそこは他の寮の人は知らない筈よ……アキはまあ、別でしょうけど」

「……シリウス・ブラックはグリフィンドール出身だよ、ハーマイオニー。死喰い人は皆スリザリンだ、なんて認識は間違ってる」

——そう、シリウスはグリフィンドールの出身だ。ジエームズやリーマス、そしてピーターといつも一緒に……四人で『悪戯仕掛人』などど名乗ってはいろんなことをしていたっけ。

「おったまげー。ブラック家からでもグリフィンドールっているんだね」

と、これはロンだ。

「どういうこと？」とハリーが尋ねる。

「だってブラック家っていえば、マルフォイのことおんなじくらいブラックな純血家系だぜ！ 純血大好き一家で、一族みーんなスリザリン！ そんな中、よくグリフィンドールに組み分けされたもんだよ」

それは……確かに、そうだ。

それだけじゃない……シリウスは闇の魔術やヴォルデモートの思想を憎んですらいた。少なくとも、ぼくにはそう見えた。

——人は変わる。歳月が人を容易く変えてしまうことを、ぼくは知っている。

——本当に、それだけか？

純血主義のスリザリン一家の中、一人だけグリフィンドールに組み分けされたシリウス。闇の魔術が嫌いで、どこまでも真っ直ぐで——それは何だか、アクアとユークをも一緒に思い出された。

「ブラックはまだ城の中だと思っ？」

ハーマイオニーの囁き声に、ロンは「ダンブルドアは明らかにそう思ってるみたいだな」と言葉を返した。

「ブラックが今夜を選んでやって来たのはラッキーだったと思うわ。だって今夜だけは、誰も寮塔にいなかったんですもの……」

「きつと、逃亡中で時間の感覚がなくなっただと思うな。今日がハ

ロウインだつて気付かなかつたんだよ。じやなきやこの広間を襲撃してたぜ」

「……一体どうやって入り込んだんだろう?」

ハリーがポツリと呟く。

ハリーの言葉は、恐らく生徒全員の疑問だった。

『姿あらわし術』を心得てたんだと思うな。ほら、どこからともなく突如現れるアレさ」

レイブンクローの先輩であるアベルが口を挟んでくる。アベルの言葉につられた周囲の生徒も、ざわざわと「変装してきたんだ、きつと」「飛んできたのかもしれないぞ」と好き勝手に言い出した。

「まったく、『ホグワーツの歴史』を読もうと思ったことがあるのは私一人だつていうの? アキは読んだことくらいはあるわよね?」

「アベル、同じレイブンクローとしてちよつとそれはいただけだと思ふけど」

レイブンクローである誇りと自負くらいは持つていて欲しいものだ。

その時、少し離れた場所でフレッドとジョージが何やら話しているのが目に入った。

「なあ、あの地図で探せば……」

「この監視の中、グリフィンボール塔には戻れないだろ」

「それもそうか。あれをどこで手に入れたのかも話さなきやいけなくなるな」

「さすがにそれは困りモンだ」

双子にしては真面目な表情だ。一体何の話をしているのだろうか?

ハーマイオニーが大きなため息をついた。

「あのねえ、この城を護っているのは城壁だけじゃないってことなの。こつそり入り込めないように、ありとあらゆる呪文が掛けられているのよ。ここでは『姿あらわし』はできないわ。」

それに、吸魂鬼デイメンターの裏をかくような変装があつたら拝見したいものだわ。校庭の入口は一つ残らず吸魂鬼が見張ってる。空を飛んできたつて見つかった筈だわ(ここでハリーとロンがちよつと目を見合わ

せた。去年の空飛ぶ車のことでも思い出しているのだろう。

その上、秘密の抜け道はフィルチが全部知ってるから、そこも吸魂鬼が見逃してはいない筈……」

「灯りを消すぞー！ 全員寝袋に入って、おしやべりはやめー！」

その時、辺りの見回りをしていた監督生のパーシーが大声を出した。

ロウソクの灯りが一斉に消える。パーシーがすぐ近くにいたのもあり、ぼくらは黙り込んだ。

目を閉じるも、心がざわついていて眠気はさっぱりやって来ない。さつきまでは立ったままウトウトしていたのに、何たる差だ。

いや……きつとぼくは眠りたくないのだろう。その理由ははっきりしている。

ぼくは夢の中で、シリウスと会いたくないのだ。

ジェームズやリーマスやピーターと仲良く楽しく日々を過ごす彼を、ぼくに親しげに笑い掛けるあいつを、ぼくはもう……きつと、見たくないのだ。

「……………」

リーマスと話したい。リーマスに何もかも打ち明けて、縋ってしまいたい。

幣原秋としてリーマスと喋りたい。でもそうするには、今のぼくが持っている幣原秋の記憶と、リーマスが知るだろう幣原秋との数年の空白が邪魔だ。

夜が更けるごとに、次第に生徒のざわめきが消えていく。徐々に生徒達も眠りに落ちていく。

——夜って、こんなに長かったっけ？

天井に映された星々を、ぼくはずっと見つめていた。

生徒が寝静まった朝の三時頃、大広間に入ってきたダンブルドアは、ぼくらのすぐ近くにいたパーシーの元に歩み寄った。ぼくは目を閉じて耳をそばだてる。

「先生、何か手がかりは？」

「いや。ここは大丈夫かの？」

「異常なしです。先生」

「よろしい。何も今すぐ全員を移動させることはあるまい。グリフィンドールの門番には臨時の者を見つけておいた。明日になったら皆を寮に移動させるがよい」

「それで、『太った婦人』は？」

「三階のアーガイルシャーの地図の絵に隠れておる。合言葉を言わないブラックを通すのを拒んだらしいのう。それでブラックが襲った。『婦人』はまだ非常に動転しておるが、落ち着いてきたらフィルチに言つて『婦人』を修復させようぞ」

そこでまた扉が開く音が聞こえ、足音がこちらに近付いてきた。

「校長ですか？」

この声はスネイプ教授のものだ。

「四階はくまなく捜しました。奴はおりません。さらにフィルチが地下牢を捜しましたが、そこにも何もなしです」

「天文台の塔はどうかね？ トレローニー先生の部屋は？ ふくろう小屋は？」

「すべて捜しましたが……」

「セブルス、ご苦労じゃった。わしも、ブラックがいつまでもグズグズ残っているとは思っておらなかった」

「校長、奴がどうやって入ったか、何か思い当たることとおありですか？」

「セブルス、いろいろとあるが、どれもこれも皆ありえないことだな」

「校長、先日の我々の会話を覚えておいででしょうな。確か——あ……一学期が始まった時の？」

「いかにも」

「どうも……内部のものの手引きなしには、ブラックが本校に入るのは……ほとんど不可能かと。我輩は、しかとご忠告申し上げました。校長が任命を——」

「この城の内部の者がブラックの手引きをしたとは、わしは考えておらん」

ダンブルドアの言葉にやっと勘付いた。スネイプ教授は、リーマス

がシリウスを城に引き入れた可能性を示唆しているのだ。

ダンブルドアはきつぱりと言った。

「わしは吸魂鬼達デイメンターに会いにいかねければならん。捜索が終わったら知らせると言っただけであらうぞな」

「先生、吸魂鬼デイメンターは手伝おうとは言わなかったのですか？」

パーシーの声。ダンブルドアは冷ややかに返した。

「おお、言ったとも。わしが校長職にある限り、吸魂鬼デイメンターにはこの城の敷居は跨がせん」

その言葉を最後に、足音は立ち去っていく。

ふと辺りを見回せば、ハリーは勿論、ロンとハーマイオニーも目を開けていた。

「一体何のことだろう」

ロンが呟く。

ぼくは何も喋らず、ただ、寝袋を頭まですっぽりと被った。

第18話 ぼくは友達が少ない

四回戦でシリウスに勝ったぼくと、順当にハツフルパフ生に勝ったジェームズは、簡単に表彰を受けた後、本戦へと進むことになった。今までは同級生ばかりだったから、呪文の程度もたかが知れていた。しかしこれからはジェームズ以外、皆上級生という舞台で戦うことになる。しかも唯一の同級生がジェームズなんて、こりやもう完全に悪夢だろ。

……ともあれ、出るからには勝ち進みたい。

ダンブルドアから表彰を受けつつ、ぼくはそんな決意を新たにす
る。

しかし、そんなぼくの決心を早くも打ち砕く試練が待ち構えていた
のだった。

『クリスマスダンスパーティーのお知らせ』

そんな告知が各寮の掲示板に貼られたのは、十二月頭のことだった。

「何だよこのイベントは、何だこれ、一体何なんだこれは、非リア殺しにかかってんじゃん、ぼくはホグワーツに殺されるのか、ああそうか」
「秋、この時代にもこの世界にもそんな単語はないから、現実に戻っておいで」

「戻れるかつ！ 一体なんなのさこれはっ！ なにっ、だんすぱー
ていーって何！ こんな聞いてないよ!!」

「ダンスパーティーってのは、男女がダンスミュージックに乗ってダンスをするもので……」

「うるっさいなシリウスは！」

空中に赤いボールを『出現』させシリウスに投げつける。シリウスは「ごおっ」と謎の言語を発して椅子から転がり落ちた。

小部屋でのこと。喚くぼくを、悪戯仕掛人は生温い目で見つめている。最近のぼくと悪戯仕掛人は、よくこの小部屋で学校の地図作成と

『アニメーガス』の練習に取り掛かっていた。

「ぼくは知らない！ 聞いてない！」

「まあそう言うなって、我が友よ。君ならきつといい人が見つかるさ」
「そう簡単に見つかるかあ！」

今度はラグビーボールを『出現』させると浮遊呪文と攻撃呪文を同時に掛ける。グリフィンドールのクイディッツチームにて花形エースでいらつしやいますジェームズは、ブラッジャーは避けられても至近距離のラグビーボールは避けられなかったようだ。椅子ごと後ろに倒れたジェームズは「ぐへっ」と声を漏らした。

「まあ、大変だよねえ。魔法魔術大会の本戦進出者、各学年二名ずつの計八名は最初に踊らなきやいけない、なんて……」

ピーターの呟きに「そうだよ！」とぼくは大きく頷いた。

「ぼくの友達の少なさを舐めるなあ！ ホグワーツでの友達なんてね、両手で数えられるくらいなんだぞ！ 女の子の友達なんてリリーしかないんだぞ！ そんな奴の前にこんな無理難題突きつけてくれちゃって、一体何だよ!!」

「両手の数……」

「うわあ、ごめん、秋……」

「秋が壊れた……」

身を起こしたジェームズとシリウスは、自分達の両手を見ては心底気の毒と言いたげな顔をぼくに向けている。

そこで、穏やかに笑ったリーマスが凄まじいことを口走った。

「じゃあ、そのリリーを誘えばいいんじゃない？」

「……、あー」

確かに。盲点を突かれた気分だ。でも……それは、うん。

「いや、リリーは……その」

……言えないなあ。折角のチャンスなんだからと、昨日セブルスを思いつきり焚き付けてダンスパーティーに誘わせた、なんて……。

「……ねえ秋、僕と君は友達だよ？ エバンズが……何？」

「ジェームズその言い方は本当に卑怯だって！」

言わざるを得なくなる。

……結局、昨日のことを洗いざらい白状させられてしまった……ごめんセブルス、なんかごめん。

「スネイプ……いやあんな奴はスニベリーで十分だ……」

「殺す……泣きみそスニベリー、爆発四散すればいいのに」

ジェームズとシリウスの目が怖い。なまじ、リリーが学年トップの美少女なだけはある。

「……シリウス！ 君モテるでしょ、モテる極意みたいなの教えてよ！」

「モテるって言われてもなあ……」

シリウスは困ったように頭を掻いた。そんな何でもない様子でもサマになる、憎たらしいほどハンサムな奴だ。

「お世辞でも俺、性格良くはねえし……顔、としか」

「死ね！」

床に転がるラグビーボールを拾い上げたぼくは、心から零れる言葉と共に呪詛を込めてシリウスの顔面に投げつける。しかし威力が弱かったのか、シリウスには難なくキャッチされてしまった。チツ、やっぱり魔法を使うべきだった。

「何だ？ このヘンな形のボールは」

「ラグビーボールって言うんだ。ラグビーって競技で使うボールだよ、シリウス」

「ラグビー？ どんな競技なんだ？ リーマス」

「このボールを奪い合って、相手の陣地まで運ぶゲームさ」

「へえ、面白いのか？」

「さあね、僕はやったことないけど」

「とにかく！ 君らは相手とかどうなったの？」

「テールをバンと叩いて皆の顔を見回した。」

「僕は、一昨日かな？ シリウスと一緒にいたら声掛けてきた女の子達が案外可愛くってね。オツケーしちやった」

「右に同じく、だ」

「ジェームズとシリウスは、なんてーか。ブレないなあ。」

「僕は、別にそういうのはいいかなって。壁の花を決め込むよ、ダンス

は元々苦手なんだ」

「僕は……クリスマスはどっちにしろ、家に帰る予定だったし」

と、これはリーマスとピーター。……ううん。

「……来世ではきつと、銀髪の氷雪系美少女とダンスできる気がするんだよね、ぼく」

「夢見がちなことや言っていないで、現実を見なさい、秋」

リーマスに結構ガチめな口調で怒られた。ちよつとくらい現実逃避して良くない？

その時ジェームズが「でも、君さあ」とぼくに身を乗り出してきた。「僕が言うのも変だけど、顔も性格も悪くない、むしろ全然いいと思うよ?」

「……褒められてる気があんまりしないんだけど」

「ちゃんと褒めてるって、だって僕はほら、君の初チュウの相手だけ?」

無言で殴った。

何をつて、奴の眼鏡を、利き腕である左で、グーで。

レンズが割れたかは分からないが、フレームぐらいなら歪んだんじゃないだろうか。ジェームズが床でもんどり打っているものの、他の皆も「自業自得だ」という目で見下ろすばかりで、心配の言葉すら掛けもしない。

「……じゃ、じゃあ秋は、誰か気になる人とかいないの?」

「気になる人?」

うん、とピーターは頷いた。

「友達じゃないけど、これから友達になりたいなーって人。そういう人に思い切って声を掛けてみるのはどうだろう?」

「おお、ピーター良いこと言うじゃねーかつ!」

シリウスがピーターの頭をぐしゃぐしゃつと乱暴にかき混ぜる。リーマスも「それはいい考えだね。どう、秋? そういう人はいないの?」と笑顔を見せた。

「これから友達になりたい人……」

「気になる人、でもいいんじゃないかな。なーんかこの人最近気に

なつてんだよねーって人。そういう人をダンスに誘ってみるのもアリだと思うよ」

——気になる人。これから友達になりたい人。

「……あ、一人いる」

「じゃあ、決まりだ。その人に誘いを掛けるべきだね。僕の眼鏡がそう言ってる」

「ジエームズ、眼鏡割れてんぞ」

割れた眼鏡をくいっと押し上げる仕草をしながら、ジエームズは床から椅子へと這い上がってきた。シリウスが呆れたようにツツコミを入れる。

「……んー、あの人かあ……乗ってくれるかなあ」

「大丈夫、とは一概に言い切れないけど……秋の性格がいいのは僕らが保証するよ。顔もほら、今流行りの『可愛い系男子』ってところで」

「そこんじよそこの女よりも秋は可愛いから、大丈夫だ」

「シリウス、それ褒めてないよ……」

しばらくぼくは悩んだものの、最後には「……分かった、行つてくるよ」と結論を出した。何故か拍手が巻き起こる。

「で？ 折角だし、名前くらいは教えて欲しいもんだなあ。ここまで応援した身としてはよ」

シリウスがそう言うのももつともか。分かったよと頷いて、ぼくは口を開いた。

「レギュラス・ブラック」

「……は？」



シリウス・ブラックが Hogwarts へ侵入する事件があつてからというもの、ぼくは出来る限りハリーと共に行動するようにした。

勿論、空き教室から突然シリウス・ブラックが飛び出してくるかもなんてことは思っていないものの、それでも咄嗟の時にハリーを守れるようにすぐ近くにいた方がいい。タイムターナー 逆転時計のせいでハーマイオ

ニーとも四六時中行動を共にする必要があるものだから、ある意味一石二鳥でもあった。

それでも流石にクイディッチの練習までは付き合い切れない。グリフィンボールのキャプテンであるオリバー・ウッドは、試合が近付くにつれ他寮であるぼくが練習を見ているのを嫌がるようになった。スパイのようなことをするつもりはないけれど、疑われるようじゃ仕方ない。

試合を明日に控えた今、授業の合間にウッドに捕まったハリーを置いて、ぼくとロン、ハーマイオニーは、グリフィンボールとレイブンクロー合同の授業である闇の魔術に対する防衛術の教室へと急いだ。教室のドアを開けたぼくらは、教壇の前に立っていたのがリーマスではなく魔法薬学教授であった筈のセブルス・スネイプ教授であったことに、思わずポカンと口を開けた。

教授はぼくらにジロリとした目を向ける。ロンが迂闊なことを言わないよう、ぼくは人差し指を口の前に当ててロンを見ると、ロンは不満そうに両手を広げて肩を竦めた。

「ハリーは間に合うかしら？」

「どうだろうな。あの状態のウッドには何言ってもムダさ」

ハーマイオニーとロンがヒソヒソ声で話をしている。席に着いたぼくは、カバンの中から『天文学年表』を取り出すと今日の日付のところを開いた。

……そうか、満月は明後日だ。

始業のチャイムが鳴るのを機に、教授は朗々と講義を始めた。ハリーはまだ来ない。

「さて、今日はルーピンが体調不良ということなので、我輩が代わってこの授業を受け持つことになった」

地を這うような低い声だ。リーマスが体調不良だと聞いて、教室中が心配する声でざわめく。しかし直後、教授が「お喋りをするならばグリフィンボール、レイブンクローそれぞれから十点減点する」と言ったため、瞬時にざわめきは収まった。

「こんなに騒がしいクラスを受け持つとは、ルーピン先生の心労、お察

しする」

教授が皮肉げに唇を引き攣らせた。

「ルーピン先生はこれまでどのような内容を教えたのか、記録を残していない。これは教師として全くなっていないことだ。唐突に体調を崩すことで他の教師にそのお鉢が回ってくることもあるというのに……そう、今回の我輩のように」

「なんだか教授、今日はムダに生き生きしているなあ。リーマスに表立って皮肉を言えることがそんなに嬉しいのか。」

幣原の記憶の中では、セブルスとリーマスはそこまで険悪ではなかったように思うけど……それから更に何かがあったのだろうか。あったのかもしれない。

とその時、本当に間が悪いことにハリーが教室へと駆け込んできた。

「遅れてすみません、ルーピン先生。僕——」と呼吸を弾ませたハリーは、教授の姿を見て目を丸くした。

「授業は十分前に始まったぞ、ポッター。であるからグリフィンドールは十点減点とする。座れ」

「ルーピン先生は？」

ハリーの問いに、教授は歪んだ笑いを浮かべる。

「今日は気分が悪く、教えられないとのことだ。座れと言った筈だが？」

「どうなさったのですか？」

ハリー、たまにぼくは君の度胸に感服するよ。

「命に別状はない。グリフィンドール、更に五点減点。もう一度我輩に『座れ』と言わせたら、五十点減点する」

ハリーはのろのろと教室を横切り、ロンの隣に腰掛けた。

教授は教室中をぐるりと見渡す。

「ポッターが邪魔をする前に話していたことであるが、ルーピン先生はこれまでどのような内容を教えたのか、全く記録を残していないからして——」

「先生、これまでやったのは、まね妖怪、ポ
ガ
ー
ト、赤帽鬼、レ
ッ
ド
キ
ャ
ッ
プ、河童、カ
ッ
パ、水魔です。グ
リ
ン
デ
ロ

これからやる予定だったのは——」

ハーマイオニーが言い募ったものの、教授は「黙れ」と冷たく遮った。

「教えてくれと言った訳ではない。我輩はただ、ルーピンのだらしなさを指摘しただけである」

「ルーピン先生はこれまでの『闇の魔術に対する防衛術』の先生の中で一番良い先生です」

デイーン・トーマスが勇敢にもそう発言した。

グリフィンドール生はデイーンの発言をガヤガヤと支持するが、ぼくらレイブンクロー生は半ば呆れ顔だ。グリフィンドールの勇敢さを履き違えてるとしか思えない。

「点の甘いことよ。ルーピンは諸君に対して著しく厳しさに欠ける。

——レッドキャップ グリンデロー赤帽鬼や水魔など、一年坊主でもできることだろう」

確かに幣原の時代はそうだった。闇の魔法が流行っていて、身を守るための術を生徒に教える必要があったからだ。毎年先生が変わっていたのは今と変わらないものの。本当、呪われている席だよ。

リーマス……先生は、ぼくらが一、二年の時にまともな授業を受けてないことを、あらかじめダブルドアから聞いていたのだろう。基礎的なところをすっ飛ばしていきなり三年生で習うべき事柄を教えなくても分かる訳がない。リーマスはちゃんとした教師だった。

「我々が今日学ぶのは、人狼である」

教授の声に、ざわりと胸が騒いだ。

「でも、先生、まだ狼人間までやる予定ではありません。これからやる予定なのは、ヒンキーパンクで……」

「ミス・グレンジャー。この授業は我輩が教えているのであり、君ではない筈だが。その我輩が、諸君に三九四ページを捲るようになってくるのだ。……全員！ 今すぐだ！」

苦々しげな目配せがこちらで交わされる。

ぼくは黙って教科書を開くと、半ば睨みつけるような目つきで教授をじっと見た。

「人狼と真の狼とをどうやって見分けるか、分かるものはいるか？」

教授が尋ねる。勤勉なレイブクロー生でも、流石にそんなところまで予習ができている生徒はそういない。皆は教科書にじつと目を落としているが——ああ、ハーマイオニーはいつものように手を挙げている——ぼくは教授を見つめ続けた。

幣原秋が人狼を習ったのは四年生の時だ。三年生の教科書に書かれてはいたものの、時間が足りずに教え切れなくて、四年生の序盤に勉強した。それは教授も一緒だろうに。

「誰かいるか？」

ハーマイオニーの姿を無視し、教授がせせら笑った。

「すると、何かね。ルーピン先生は諸君に、基本的な両者の区別さえまだ教えていないと——」

「お話しした筈です。私達、まだ狼人間まで行つてません。今はまだ——」

パーバティ・パチル——レイブクローのパドマ・パチルとは確か双子だった——が声を上げるも、教授はすぐさま「黙れ！」と怒鳴りつける。

「さて、さて、さて、三年生にもなって、人狼に出会つても見分けもつかない生徒にお目に掛かろうとは、我輩は考えてもみなかつた。諸君の学習がどんなに遅れているか、ダンブルドア校長にしっかりお伝えしておこう」

そこでハーマイオニーが堪え切れなくなったように口を開いた。

「先生。狼人間はいくつか細かいところで本当の狼と違っています。狼人間の鼻面は——」

滔々と喋るハーマイオニーに対し、教授は殊更冷ややかに言った。

「勝手にしゃしゃり出てきたのはこれで二度目だ。ミス・グレンジャー。鼻持ちならぬ知ったかぶりだ、グリフィンドールから更に五点減点する」

ハーマイオニーは力なく手を下ろした。あまりの物言いに、クラス中がスネイプ教授を睨みつける。

ロンが大声を上げた。

「先生はクラスに質問を出したじゃないですか。ハーマイオニーが答

えを知ってたんだ！ 答えて欲しくないんなら、なんで質問したんですか？」

ロン、それは言い過ぎだ——きつと、クラスの誰もがそう思っただろう。

「処罰だ。ウィーズリー。更に我輩の教え方を君が批判するのが、再び我輩の耳に入った暁には、君は非常に後悔することになるだろう」その後には口を開く者は誰もいなくなった。教授が黒板に記す文字をノートに書き留める音で教室中が満たされる。

ぼくは腕組みをしたままじいつと教授を見据えていたものの、教授は意地でもぼくと目を合わせようとはしなかった。たとえば、ノートすら開いていないぼくの机のすぐ横を通ったとしても、だ。

「あの、アキ。ノートくらいは取った方がいいんじゃないかな……」ネビルが小さな声で囁く。

そう言われちゃ……はあ、無言の抵抗は諦めよう。

この授業がきつかけで、リーマスが人狼であることに誰かが気付くかもしれない。ぼくはずつとそのことが気掛かりだったし、リーマスの秘密を知らしめようと動く教授にも腹が立っていた。

杞憂？ だって幣原は気が付いたじゃないか。

加えてこのクラスの皆は、まね妖怪ポガートがリーマスの目の前で白銀の丸い球に——満月に——変身した様子を間近で見ているのだ。

不完全だがヒントは与えられてしまった。これだけのヒントで気付ける人は流石にいない気はするもの……安心はできない。

終業のチャイムが鳴ると、教授は言った。

「各自レポートを書き、我輩に提出しよう。人狼の見分け方と殺し方についてだ。羊皮紙二巻き、月曜の朝までに提出したまえ。このクラスは、そろそろ誰かが締めてかからねばならん。ウィーズリー、残りたまえ。処罰の仕方を決めねばならん」

結局、授業中は一度も教授と目が合わなかった。目が合ったら即座に開心術でも掛けてやろうかと思うくらいには苛立っていたというのに。

……まあ、教授に開心術なんて使うと後が怖い。それに、この術

は失敗した時は逆にこちらが『開心』させられると聞く。それは流石に嫌だ。

教室から出た瞬間、皆が一気にスネイプ教授への不満をぶちまけた。

「いくらあの授業の先生になりたいからといって、スネイプは他の『闇の魔術に対する防衛術』の先生にあんな風だったことはないよ。一体ルーピンになんの恨みがあるんだろう？ 例の『まね妖怪』のせいだと思ukai?」

「分からないわ。でも本当に、早くルーピン先生がお元気になってほしい……」

曲がり角で、ぼくらレイブンクロー生はハリー達グリフィンドール生と分かれた。じゃあねとハリーに手を振り、ハーマイオニーに『また後で』と目配せをする。

階段を上りながら、アリスは疲れた声で呟いた。

「まさか、この先ずっとスネイプが闇の魔術に対する防衛術を教えるなんて、ねえよな?」

「それはないと思うよ」

ぼくは淡々とそう返した。

第19話 つんでれ、とは？

「……で？　そこで、何故僕なんですか」

「さつきで一通り説明したと思うけど。えっと、これから友達になりたい人や気になる人で……」

「そういうことは訊いてません」

「そういうことを訊いたんじゃないの？」

「だから、そうじゃなくて……はあ、もういいです」

時は経って、十二月末。クリスマス休暇の到来だ。

普段であれば、クリスマスを家族と共に過ごすためにほとんどの生徒がホグワーツから離れるものの、魔法魔術大会が開かれる今年はダンスパーティー目当てに居残る生徒も多いようだ。居残っている生徒は大体七割から八割ほど。普段のクリスマス休暇とは逆の現象が起きている。

ぼくも父と母に「今年のクリスマス休暇は帰らない」と連絡したところ、二人とも「魔法魔術大会であれば仕方ない」と一瞬で納得してくれた。存分に楽しんでくるんだよとのことだ。

さて、クリスマス休暇に入り、学び舎であるホグワーツはすっかりクリスマスモードに様変わりしている。廊下も寮も、どこを見てもクリスマス一色だ。今までクリスマスは日本に帰っていたから分からなかったけれど、こんなクリスマスもなかなかいいものだね。

「でもまさか、受けてくれるとは思ってなかったよ」

ぼくがそう一人ごちると、レギュラスは露骨に不審そうな目を向けた。

「何ですか、断られること前提で誘ったんですか？　そんな珍妙な人に僕は初めてお目に掛かりました。きつと貴方は告白も玉砕覚悟で向かう人なんですね、そんなんだから彼女の一人も出来ないんですよ。ああ、彼女以前に、まず友達がいなかったっけ？　貴方には」

「……そんな痛快な皮肉を言われたのは初めてだよ」

イギリスにも皮肉って文化があるんだなあ。いや、そもそもブラックジョークと皮肉が得意なお国柄だったっけ？　英語にも随分と慣

れたものだよ、本当に。

そしてレギュラスは案外毒舌家だった。初めて会った時の印象としては大分無表情で無口なのかと思っていたけれど。

無表情なのはその通りだったが、舌鋒鋭くぼくを攻撃してくる。そして毒舌を振るっている間は、目に生氣が宿っている。

「でも、普通は受けてくれないもんじゃない？　だって君、ぼくのこと嫌ってそうだったし……少なくとも苦手にはしてそうだし。だから、受けてくれたら嬉しいなって程度。それにしても、一体どうしてぼくの誘いを断らなかつたの？　君ならダンスパーティーに行く相手くらい簡単に見つかるでしょ」

何せ顔はシリウスと瓜二つなのだ。兄弟でもこれほど似るものなのかと思うほどにそっくり。加えてクイディッチではスリザリンチームのシーカーを務めているそう。

顔よし運動神経よし家柄よしとなれば、女の子が放っておく訳もない。さつきレギュラスがぼくに言った通り、レギュラスなら友達どころか彼女の一人や二人余裕で作れるだろう。……ちよつと羨ましいなあ。

ぼくの言葉を聞き、レギュラスは僅かに眉を顰めた。目を細めてぼくを苦々しげに見つめる。

「ええ。僕は貴方が嫌いです」

「……じゃあ、どうしてダンスを受けたの？」

「そういう無神経な質問をする辺りが、特に大嫌いです」

そう言われ、しぶしぶぼくは口を閉じた。

無言の時間が流れた後、次に口を開いたのはレギュラスだった。

「……貴方、ダンスは踊れるんですか」

「ううん、全然。さっぱり」

「はあ？」

すつげえ見下すような声音で「はあ？」と後輩から言われてしまった……。

ぼくでも少しは傷つく。

「……僕は男役しか踊りませんよ」

「まあ、そうですね……」

「だから貴方は女役を覚えてください」

「……ん？ あれ？」

てつきり「貴方とダンスなんて何があってもたとえ惚れ薬を盛られたとしても服従の呪文に掛けられたとしても天地に誓って踊りません」と言われるとばかり思っていたのに。

きよとんとするぼくの前に、レギュラスは手を差し出した。

「どうしたんですか。ちなみに言っておきますが、僕は一度しか教えませんよ。一回で完璧に覚えてください。ダンスすらまともに踊れない人の相手なんて、僕は絶対にしませんからね」

「……っふふ」

「何笑ってんですか。気持ち悪い」

「あは……ごめん」

差し出された手を軽く取る。

そんなぼくの反応に、何故か手を差し出した側のレギュラスが驚いたように目を見開いた。

「どうしたの？」

「……女役をやるなんて、嫌じゃないんですか」

「まあ、こんな見た目だしね。髪も伸ばしてるし、女の子に間違われるのは慣れてるよ。君の方がぼくより背も高いし、君が男役をやるのはまあ当然かなって。流石に女性物のパーティードレスは着ないけど、そのくらいなら喜んで」

「……喜んでやるなんて、変態ですか」

「違う、今のは言葉の綾つてもんだよ！」

レギュラスはそこで、ほんの僅かだけ笑みを浮かべた……：……ような気がした。

一瞬で普段の無表情に戻ってしまったので、もしかしたら目の錯覚か、光の悪戯だったのかもしれない。

でも——シリウスとはまた違う、穏やかで柔らかい雰囲気、ほんの一瞬でも感じたのは確かだった。

「レギュラス」

「……何ですか」

「ぼくとのダンスを受けてくれて、ありがとう」

「……本当ですよ。高貴な僕が、本来なら絶対に関わることのない貴方と踊るんです。精々心から感謝してください」

「……全く、口が減らない後輩だ」

「貴方に先輩面される謂れはありません」

「はいはい」

ぼくは笑顔でレギュラスを見上げた。

「……本当に……変な人ですね、貴方って」

そう呟いたレギュラスは、何かを言いかけては口を閉じ。

そつと目を伏せ、口元を歪ませた。



グリフィンドール対ハッフルパフの試合は、何と云うかも、滅茶苦茶だった。

とにかく酷い大雨で、あまりの土砂降り加減に観客席では選手達の姿なんてまともに見ることもできない。観戦は諦めて、監督生らと共にクラスメイトや後輩に（特に女の子を優先に）、風邪を引かないよう防水魔法と保温魔法を掛けている時——『それ』は現れた。

ホグワーツ特急のコンパートメントで感じたあの寒気が、ゾクゾクツと足元から這い上がってくる。

——同じだ。深い海の底に引き摺り込まれるような感覚——

「……吸魂鬼だ！」

観客席の一番前に駆け寄り、身を乗り出してグラウンドを見下ろす。グラウンドを埋め尽くさんばかりの数の吸魂鬼デイメンターに、思わず目が回った。咄嗟に手すりを掴む。

……一体どうして。ダンブルドアの許可はあるのか？

観客席のパニックは指数関数的に増大して行き、応じて吸魂鬼の勢いも増していく。

『……ああ……もう、疲れた、な』

耳元で誰かが呟く。いや——呟いている人など誰もいない。

『止めてくれ……ぼくは、もう耐えられない……』

この声は、知っている。

ぼくは、君をよく知っている。

『……ぼくはもう、誰も殺したくなんてないんだ』

君は——君は。

鋭く頭が痛んだ。目が眩むほどの頭痛に、右手で頭を押さえ歯を食い縛る。

遠のきそうになる意識を何とか引き止め、ローブのポケットに手を伸ばした。杖を掴むとグラウンドの吸魂鬼に向ける。

「Expecto Patronum……っ」

しかし、ぼくの杖先からは儂い霞しか出てこない。いくら魔力を込めたところで、実体のある守護霊を作り出すことはできなかった。

手に力が入らず、思わず杖を取り落とす。虚しく地面に転がった杖に手を伸ばしたその時、グラウンドに誰かが入って行くのが見えた。ダンブルドアだ。

ダンブルドアが杖を振ると、杖先から真っ白な守護霊が飛び出した。あれは不死鳥だろうか？

守護霊がグラウンドを優雅に飛んで行く。それを見た吸魂鬼は、波が引くようにすうっと逃げていった。ぼくはホッと胸を撫で下ろす。

その時、箒から誰かがグラウンドの泥の中に落っこちた。二十メートルを真っ直ぐ落ちていく人の影に、ぼくは思わず血の気が引く。

頭痛は吐き気すらも伴うものだったが、全てを無視してぼくは杖を掴んだ。観客席の手すりを乗り越え空中に身を投げ出す。

落下の最中杖を振り、人影が落下するだろう地点の泥濘を限りなく柔らかくする。自分に対する空気抵抗も最大限にまで上げて、泥のグラウンドに軟着陸した。泥に足を取られるも、そのまま駆け出す。

ホグワーツ特急のコンパートメントでも、吸魂鬼^{デイメンター}一体を見て気を失ったハリーだ。

あれだけの数の吸魂鬼に対して、到底無事だとは思えない——

！

「ハリー！」

落下地点にはグリフィンドルの赤いユニフォームを着た選手達が集まっていた。選手達は駆け寄ってきたぼくを見て道を開けてくれる。

フレッドとジョージがハリーを泥の中から抱き起こしているのを見て、ぼくは思わず立ち竦んだ。

「心配するな、アキ。ハリーは生きてる」

「気は失ってるけどな」

フレッドとジョージはぼくに笑みを向ける。双子の笑顔にホッと胸を撫で下ろした。

やがて来たダンブルドアは担架を『出現』させるとハリーを乗せた。城へ向かう担架の後ろに、ぼくも黙ってついていく。医務室までの道すがら、誰もが無言だった。

途中、ロンとハーマイオニーがぼくらの集団に合流しても、ウッドが「ちよつと俺、シャワー室に行く」と青い顔で言い残し去って行っても、双子が「あいつ、溺死するつもりだぜ」と囁いた以外は皆ずつと黙りこくっていた。

医務室に到着し、ハリーを担架ごとマダム・ポンフリーに預ける。医務室を出た後、ダンブルドアはぼくを呼び止めた。

「何ですか？」

「あの場所では手狭でもあるし、もう少し広いところで話そうかの」
ダンブルドアが歩いて行く。なんだか……態度でしか分からないものの、どこか苛立っている、ような？

「……そう言えば、どうして吸魂鬼が校内に入ったのでしょうか？」

「吸魂鬼は誰の言葉であっても従わぬ。吸魂鬼が人に従っているように見えるのは、彼らにとつての利益を我々が差し出しておるからじゃ。そしてその利益が足りぬと思えば、彼らは手段を選びはせん」
ダンブルドアは振り返らずにそう言った。

……利益、か。確か吸魂鬼の好物は人間の幸福な感情だったっけ。
シリウス・ブラックからホグワーツを守るため、魔法省は吸魂鬼をホグワーツに配置しているけれど……そもそも吸魂鬼自体が魔法省

で従えられる代物ではないってことか。

やがて、ここで良いかと判断したのか、大きな窓の傍でダンブルドアは足を止めた。

「アキよ。君が予想していた時期よりちーつとばかし早いが、いかにせん急なものでの」

「はい？」

首を傾げるぼくに、ダンブルドアは「吸魂鬼を倒す唯一のものを、君は知っておるかね？」と問いかけた。

「……守護霊の呪文。それ以外、奴らを退けるものは存在しないと」

「やはり、君は勉強熱心で優秀な学徒のようじゃな。まっこと、レイブンクローの名に相応しい」

「守護霊の呪文なら」

ダンブルドアから目を逸らす。小さな声でぼくは言った。

「……何度か練習したんですが、どうもしっくり来なくて……」

ぼくも幣原と同じく莫大な魔力を持っている。これだけの魔力だ、大抵の魔法であれば苦もなく使いこなせていた。それが何故か、守護霊の呪文だけ上手く行かないのだ。

難易度は確かに高い筈だけど、でもだからと言ってぼくが使えないなんて……うーん、自分の能力をちよいと過信しすぎていたかもな？

謙虚になろう、自分。

ふむ、とダンブルドアは頷いた。

「幣原秋も苦手な代物じゃった。だがしかし、君の大事な兄上を守るためにはこの上なく有効な手段であろうぞ」

——それは、そうだ。

ハリーを守るためにはこの上なく有効な手段であることに、間違いはなくて。

であれば、ぼくが選ぶ道はたった一つしかない。

……何だか、とてつもなく嵌められている気もするんだけど……しかしこれがハリーを守る手立てとなるのであれば、ダンブルドアの思惑に乗るのもいいかと思えた。

「分かりました。——ぼくに守護霊の呪文を教えてください」

第20話 「問題です。ぼくは一体誰でしょう?」

ダンスパーティーの日がやって来た。

最初のダンスを踊った後、レギュラスは「もう自分が果たすべき義務は終わった」とばかりに、ぼくに一瞥もくれず、勿論言葉も何もくれずに人混みの中へと消えていった。その清々しきと云ったらない。

まあ、一曲踊ってくれただけでも良しとしよう。千里の道も一歩からとよく言うじゃないか。

しかし……慣れないダンスと人混みに、まだまだパーティーは始まったばかりにもかかわらず、少々気疲れしてしまった。壁際で水の入ったグラスを煽り、人心地つく。

ふと大広間に視線を向けたところ、見慣れた人物を発見した。リリーとセブルスだ。

なんかすつげえ勢いでセブルスがリリーに振り回されているけれど、楽しんでいるようで何よりだ。

「ねえ、きみが幣原秋?」

その時、斜め横から突然声を掛けられた。

振り向くとそこには三人の女子生徒が立っていた。赤に、黄色に、紫のドレスを身に纏っている。華やかに巻かれた綺麗な髪は気合十分で感じの出で立ちだ。

きよとんと彼女達を見返していると、三人の真ん中にいた赤いドレスの女の子が、一歩ぼくに歩み寄った。

「……そう、ですけど」

半歩下がって言葉を返す。

……何だろう、彼女達に見覚えはないけれど、ぼく、何かしたっけか。

ぼくを囲むように半円状に広がる彼女達の方が、ぼくより背が高い。女の子相手に表現が悪い気もするものの、なんだかまるで追い込まれているような気分にもなる。

ぼくの返事に、彼女達は顔を見合わせた。居心地の悪さを感じてぼくは更にもう半歩下がる。

その時いきなり、赤いドレスの女の子に両手をガシツと掴まれた。思わずビクツと肩を震わせるべくに構わず、彼女達はキラキラした目でぼくに詰め寄ってくる。

「やっぱり！ やっぱりやっぱり幣原くんだ！ 魔法魔術大会の本戦進出者の幣原秋くんがファイナルアンサー!?!」

見れば、黄色のドレスの子も紫色の子も、何故かぼくに興味津々といった面持ちだ。

なにになにに、一体何が起こっているんだ。ぼくが一体何をした。表情に出さないようにしながらも、内心は既にパニック状態。リー以外の女の子と話したのなんて一体何ヶ月ぶりだろう。

「うわうわうわっ、噂に違わぬ、いやいや噂以上の可愛らしさだっ！ こりやあ将来、ブラックも認めるレベルのイケメンになることは間違いないですなあ!」

「今のうちから目をつけておいて損はないよね。隠れイケメン、はっけーん」

「東洋の顔立ちって、やっぱりいい感じ。ねえ秋くん、お姉さん達と一緒に喋りしない？ 君なら大歓迎だよ!」

「……………」

混乱しすぎて言葉も出ない。何だ何だ何なんだ。

無意識にまた一步下がった時、腰がテーブルにぶつかつた。弾みでテーブルの上に乗っていたグラスが空中へと投げ出される。

グラスを目で追いつつ、反射的に呟いていた。

「Locomotor」

瞬間、重力に従い落下していたグラスが空中でピタリと動きを止めた。

やがてふわりと浮かび上がると、テーブルの元あった場所に、中に入っていたジュースもそのままの状態で、何事もなかったかのように戻っていく。

一瞬後、今の様子を見ていた三人が再びぼくに詰め寄った。

「何何何今の!?! 杖抜いてないよねっ、私が幣原くんの手握ってるもんねっ！ こんなこと出来る人本当にいたんだっ!」

「評判通り……いや、評判以上の人物」

「秋くん、良かったらごつちで、お姉さん達とお喋りしよう?」

……えつと、これはもしかして。ぼく、褒められているのだろうか?
?

それはそれは……その……悪くはない気分だ。三人ともなかなかの可愛い子揃いだし……。

コホン。そりゃ、ぼくだって男の子ですから。女の子に寄ってたか
られてちやほやされる、なんて男の夢でしょ。

「ね、秋くん?」

赤いドレスの子に両手を、黄色いドレスの子にダンスローブの左袖
を、紫のドレスの子に裾を、それぞれ掴まれる。

六つの瞳に見つめられて思わず頷きかけたその時、背後から肩をぐ
いと引つ張られた。

「私の大切な人を軽々しく口説かないでくれるかしら? 先輩方」

聞き慣れた声に慌てて振り返る。

リリー・エバンズが、険しい表情で彼女達を見つめていた。リリー
の魅力的な深紅の髪にとても映える、同じ色の華やかなドレス。胸元
には白い花のコサージュがあしらわれている。普段よりも背が高く
見えるのは、きつと足元のヒールのせいだろう。

「り、リリー……?」

何故だか声を掛けづらくて、言葉が尻すぼみになっていく。

彼女達は、突然現れたリリーを上から下まで見つめた後、ぼくに向
き直つては笑顔を見せた。

「あらら、彼女ちゃんが来ちゃったよ。それじゃあね、幣原くん。大
会、応援してるよっ!」

ひらひらと手を振って彼女達は去っていく。ぽかんとその背中を
見つめていたぼくは、リリーにネクタイをぐいと引つ張られて我に
返った。

「あーもうっ、何女の子に囲まれてデレデレしてんのよっ! あんな
人達なんかにつ!」

「ご、ごめん……」

一体どうしてぼくは謝っているのだろうか。それ以上に、どうしてリリーは怒っているのだろうか？

……ああ、もしかして。

「ごめんねリリー、さっきの子達が君をぼくの彼女だつて誤解したことに ついて怒ってるんだよね。ぼくみたいな頼りない男が彼氏だなんて、笑つちやうくらいの冗談をさ。全く、一体どこを見てるんだか……」

「違うわよ！ 秋のバカ!!」

……違つたらしい。女の子つて難しいな。

ぼくの今の発言は、リリーの怒りの火に油をドバドバツと注ぎこんでしまったようだ。リリーの怒りが、もう雰囲気からビシバシ伝わってくる。

怖い、怖すぎる。

「あ、あの……リリーさん？」

「何よ」

……怖い。

リリーはぼくの手をぎゅつと強く握つたまま、スタスタと早足で歩き出した。引つ張られたぼくは慌ててリリーの後を追う。

手を掴まれていてある意味助かったというべきか。これだけの人混みではあるが、なんとか逸れずについていけている。

しかも多分、リリーつてば闇雲に歩いてるだけだし。今もほら、リリーの可愛さに目を惹かれて声を掛けようとした男が、雰囲気を押されて引いちやつたし。

……まあ、ぼくの目の前で、変な男にリリーを誘わせるかつて。

しっかし……そんなに怒らせるようなことしたかなあ？

「リリー！ 君つて子は、昔からー」

と、人混みをかき分けセブルスがぼくらの前に飛び出してきた。荒い息を吐きながら、疲れた声でリリーの肩を掴む。

「頼むから勝手にどこかに消えなしてくれ……はあ……」

どうやら姿を消したリリーを探して彷徨っていたらしい。……セブルスも大変だ。

セブルスの登場に、リリーも落ち着きを取り戻したようだった。流石は幼馴染だ。

「……だって、秋が女の子の声掛けられてんの見たら、いてもたってもいられなくなっただもん」

そう言つてリリーはぶくーつと頬を膨らませる。可愛い。

セブルスは「……そうか」と苦笑いとも苦虫を噛み潰したような顔とも取れる表情を浮かべてぼくを見た。

「……今まで見向きもしなかった癖に、今更になつて手の平返すみたいな……」

「ん？ 何か言つたかい、リリー」

「……なんでもない」

リリーが何やらボソツと呟いたように聞こえたけれど、どうやら気のせいだったようだ。

「セブルス、楽しんでる？」

「うるさい、暑い、人が多いの三重地獄に苦しんでいる」

セブルス、ダンスパーティーでそれを言っちゃあおしまいだと思うよ。

「そうじゃなくって……」

リリーと踊れて、と続けようとしたものの、すぐ目の前に張本人であるリリーがいること、そしてそのリリーとぼくが今手を繋いでいるという状況にやっと思い至った。慌ててそつと手を解く。

振り返つたリリーはちよつと不満げにぼくを睨んだものの、何も言わなかった。

セブルスは近くの椅子にどっかりと座ると足を組み、ぼくとリリーに向かつて言う。

「僕は疲れた、元気爆発のリリーと踊るのももうたくさんだ。秋、リリーと踊つてあげるといい」

「え、ぼくが？」

「ああ。さつきは女役を踊っていたけれど、当然男役も踊れるんだらう？」

まあ、と曖昧に頷く。

リリーはくるつとぼくに向き直ると「本当につ!？」と目を輝かせた。
「じゃあ秋、踊りましょう! 私、まだまだ踊り足りないの!」

ぼくの手を掬い取ったリリーは、今度は打って変わって上機嫌、スキップでもしそうなくらいに飛び跳ねながら、ステージまでぼくを引っ張っていく。

ちよつと、ぼくはまだ何も了承なんてしていないのに! セブルスつてば、自分が休憩したいからつてリリーをぼくに押し付けやがったな!?

首を回してセブルスを見ると、セブルスはなかなか見ることの出来ない不敵な笑みを浮かべていらつしやつた。

ぼくの視界をリリーが遮る。

「ほら秋、行こう?」

……そんな満面の笑みで微笑まれてさあ、断れる人がいると思つてんの?

「……………」

リリーに掴まれた左手が、何故だかそこばかり暖かい。

この暖かさを、温もりを、どうしてだろう——ぼくはこれから先ずっと、忘れることはないだろうと感じた。

その時、リリーがふと足を止めた。足がもつれそうになり、慌てて体勢を立て直す。

「どうしたのリリー……………」

リリーに問いかけた折、その騒ぎがやつとぼくの耳にも届いた。

人で溢れる大広間の中、唯一ぼつかりと空いたスペース。そこで男女が言い争つて——というか、男側が一方的に口説いていて、女の子の方は心底迷惑そうにしている。

周囲の人達は止めに入りまではしないまでも、男のしつこさに呆れ果てているようだ。

その様子を見て、ぼくは何とも言えない気分になった。

……確かに、凄く可愛い女の子だった。

綺麗なプラチナブロンドに青い瞳の彼女は、まるで絵本のお姫様がそのまま現実に出てきたかと思うほどに見目麗しい。

しかしぼくが何とも言えない気分になったのは、単純に、女の子の気持ちも考えない男のしつこさに呆れたから……だけではない。

その女の子を口説いていたのが、ぼくの友人だったからだ。

「……ジエームズ……」

ドン引きだよ、全く。確かに普段から自意識過剰の気はあったけれど、このパーティーという雰囲気には酔っちゃったんだらうか。

ストッパー役のシリウスやリーマスやピーターはどこに行つた。ああ、ピーターは実家に帰ってんだっけ。

「ね、僕の話聞いてるかい？ 学年首席でクイディッチのエース様だよ？ こんな僕が君と踊りたいって言っているんだ。君も妙な意地張らずに踊ろうじゃないか」

ジエームズが髪をクシャクシャにしつつ、女の子に迫っている。自分が断られることなんて一切想定していないような、自信に満ち溢れた笑顔だった。

リリーの手がぼくから離れた。そのままリリーは無言でジエームズへと歩み寄っていく。ぼくは何も言うことができず、ただその背中を黙って見送った。

ジエームズの背後に立ったりリリーは、リリーの姿に気付いていないジエームズのローブを容赦なく引つ張りこちらを向かせた。

そして、ジエームズがリリーを視認したかしなかったかのタイミン
グで、

パンツ！

大広間中に響いたんじゃないかとさえ思った。

人の頬つてあんなにいい音鳴るんだな……。

広間中とは言いすぎだけれど、少なくともここいら一帯はリリーの平手でシンと静まり返った。

ジエームズは叩かれた頬を左手で触れ、呆然とした表情でリリーを見ている。

「傲慢もいい加減にしなさい。誰もがあなたの誘いに乗るだなんて考えないで。学年首席がそんなに偉いの？ クイディッチが少し人より上手だけれど、それが何よ。あなたの人間性の底が知れるわね」

眉を寄せたりリリーは、鋭い瞳でジェームズを見上げている。咳すらできない、身じろぎですら気を遣うような緊張感が、辺りを支配していた。

ジェームズが口を開くまで、一体どれくらいの間があっただろうか。

数秒だった気もするけど、何分にも、何時間とも感じられた。

「……エバンズ」

ジェームズの言葉に、リリーはくいつと顔を上げた。肩に掛かった髪を払い「何よ」と毅然と言う。

しかし、流石のリリーも、いきなりジェームズから両手を握られることは予想外だったようだ。

そして、その後に続いた言葉もきつと、リリーにとっては予想外だっただろう。

「好きだ！ 僕と付き合ってくれ、エバンズ!!」

「つて、ええええ!?!」

思わず声を上げてしまったぼくを、一体誰が責められようか。

大広間にいた大勢の生徒の、実に三分の一ほどが聞いた公開告白。

この告白が、これからのぼくらを、否応なしに変えていく。



「失礼します……」

守護霊の呪文はリーマスの方が詳しいからとダンブルドアに促され、ぼくは月曜の放課後、早速リーマス……先生の研究室へと向かった。

……この時間を作るのが、どれだけ大変だったことか……!

全科目を履修しているぼくとハーマイオニーに出される宿題は、そりやあもう山が二つ三つできるほどの量だった。加えて予習復習のために割かねばならない時間も相当ある。更に『逆転時計』^{タイムターナー}の件。あれの扱いに気を遣うだけでもかなりの負担だというのに、更に——守護霊の呪文と来たもんだ。

早目に終わらせなければならぬ。是非とも、速急に、迅速に。今日はレイブンクロー寮でマグル学のレポート（マグルの衣服の変換とその背景にある歴史との関係について述べよ）を仕上げる予定なのだ。まだ提出期限までは時間があるが、可能であれば今日中に終わらせてしまいたい。

……ぼくは、ハリーを。

ハリーを守らなくちゃ、いけないんだ。

ハリーをお見舞いに行った際、ハリーはぼくだけに「実は死神犬を見たんだ」と打ち明けてくれた。クイディッチの試合の最中、ピッチにそいつがいたのだとハリーは怯えていた。

加えて、吸魂鬼について。吸魂鬼が近付くと、ハリーは女性の声を聴くのだと言った。そして——多分その声は、ぼくらの母親——リリー・ポッターの最期の声だと思うと、ハリーは苦しそうな声で零した。

ハリーを守るためにヴォルデモートに命乞いをする母の声。聴きたくなんてないのに、それでも聴くたび、愛されていたことを実感できるときののだ——と。

そうハリーが言った瞬間、ぼくはハリーをぎゅうっと抱き締めた。ハリーを危ない目に合わせるやつは、ぼくが全部排除してあげる。

——そのためにも。

「ああ、アキ。ダンブルドア校長から話は聞いてるよ。守護霊の呪文を習いたいんだって？」

「はい」

掛けなさいとリーマスに促され、ぼくは大人しくソファに腰を下ろす。

キョロキョロと辺りを見渡すと、河童だの何だの不思議な生き物達がズラリと並んでいる棚が目に入った。その隣の本棚には、古めかしい書籍がぎっしりと詰まっている。それらを眺めた後、ぼくは最後にリーマスを見上げた。

リーマスは戸棚の前に歩み寄りながら口を開く。

「でも、アキは魔力の扱いが巧みだし、理論もきちんと頭に入ってい

る。これまで呪文に苦労したこともないだろう？　きっと簡単にできるようになると思うんだけどね……何かキツカケが必要なのかな」
「そう……ですかね」

「……まあ、今回は少しばかり強引だ……ダンブルドアはきつと、君なら用がなくとも私のところに来るだろうと踏んでいただろうから。君は存外に忙しいようだね」

リーマスの口ぶりに、ぼくは僅かに目を瞠った。

「ええ、まあ……それなりに、忙しいですね」

実態はそれなりに、なんてもんじやない。時間に追われているというか、時間と戦っているというか。まあ大変だ。

しかもその努力を、誰にも知られないようにこなさないといけない。レイブンクロー生はただでさえ鋭い奴が多いのだ。下手にヒントを与えれば、その持ち前の頭でどれだけの真実が暴かれる羽目になるだろうか。

アリスなんて、たまに一体どうしてと思うほどに冴えた推理を發揮するからな。リイフはその点大分鈍かったんだけど。

「実はね、ダンブルドアと私で仕組んだんだ。どうにかして私の元に君が訪れてくれる場面を作りたいとね。君は授業態度も真面目だし、レポートも優秀で指摘事項がないものだから、なかなか呼び出す機会が掴めなかった」

リーマスはそう言いながら、カップとソーサーを戸棚から取り出した。まるで客人を出迎えるかのような挙動に、ぼくは不思議に思っ
て問いかける。

「あの、どういう……？」

振り返ったリーマスは、ぼくを見てニコリと微笑んだ。

「話がしたいんだ、秋」

ポスンと小さな音を立て、少年の身体がソファに倒れ込む。彼が再び目を開けた時には、先程までにはなかった雰囲気が漂っていた。

一陣の風が吹き抜ける。その風はリーマスの机の上の資料を揺ら

し、椅子に掛けられたコート裾を動かし、少年の括られた髪を靡かせた。

アキ——否『彼』は、目を閉じたまま静かに頭を振る。そんな彼の正面に、リーマスは淹れたての紅茶を置いた。

「ああ、ありがとう」

「どういたしまして」

微笑んだ彼にリーマスも笑みを返し、砂糖のポットを手元に引き寄せる。

蓋を開けながら「紅茶の好みは昔のまま？」と尋ねたところ「昔よりちよつと甘党になったかな。スプーン三杯が一番美味しく感じるよ」との答えが返ってきた。

彼の言う通り、砂糖を三杯掬い取りカップに入れる。ティースプーンで軽く掻き混ぜ、彼に渡した。

そつとカップの取っ手を摘んだ彼は、リーマスの淹れた紅茶を味わうように数口飲むと小さく息を吐いた。その後、リーマスが自分のカップに砂糖をざばざばと投入しているのを見ては含み笑いを零す。

「君の味覚異常はまだ治ってないのかい？」

「そんな風に言わないでよ。人よりほんのちよつぴり甘党なだけさ」

「砂糖をそんだけ入れておいて、よく言うよ。コンパートメントでも、吸魂鬼の襲撃があるなんて予想してなかった癖に、大きな板チョコ持参してさ」

クスクスと幼い声で笑った彼は、ふと表情から笑みを消した。カップを置くとソファの背もたれに身を預け、大きな目をゆるりと細める。

「本題に入ろうじゃないか、リーマス」

「……ああ、そうだな」

「シリウス・ブラックのことだろう？」

そうだ、とリーマスは頷いた。彼は神経質そうに両手の指を合わせつつ眉を顰める。

「アズカバンからシリウス・ブラックが脱獄したことは、アキ・ポッターを通じて——彼の目と耳を通して聞き及んでいる。よくもまあ、

あの監獄から脱獄できたものだとは思うよ」

「……秋。その件についてダンブルドアから話が来ている。君が捕らえた犯罪者だ。君がこの後の処置を決めるのが妥当だろうと」

「……そうか」

彼は両手の指を合わせ目を閉じた。項垂れ、小さく息を吐く。

「……ダンブルドアに伝えてくれ。シリウス・ブラックを捕らえた暁にはぼくが直接手を下すと。シリウスを殺す判断をせず、アズカバン送りにしたのはこのぼくだ。彼の命には、ぼくが責任を取らなければならない」

「……秋、それは」

「それがベストだ。分かるだろう、リーマス」

彼の声に、リーマスは口を噤んだ。

再び目を開けた彼の瞳には、強い意志が籠められていた。

「あの時、殺しておくべきだったんだ……ぼくは、あいつを」

シリウスを、と搾り出すように彼は呟いた。

「……でも、君が手を下す必要はない。秋、君の代わりに僕がやる。……この十二年間、僕がどれだけの……どれほどの気持ちでいたか」

「ダメだ」

彼の言葉はにべもない。苦々しい表情を浮かべ、彼は「それだけはダメだ。リーマス、君は手を汚すべきじゃない」と首を振る。

「いいかい、リーマス。殺人っていうのはね、それをした者の魂を引き裂く行為だ。君の魂は穢れていない」

「それを言うなら、君の魂だって……ああ」

失言したとばかりにリーマスは表情を変えた。

そんなリーマスを安心させるように、彼はそっと微笑んでみせた。何かを掛け違えたような笑顔だった。

「……違うよ、リーマス。ぼくの魂はもう穢れて壊れている。今更もう一度引き裂かれたところで何の苦痛も感じはしないさ」

「……秋」

「時間がない。話さないといけないうことから先に話そう」

リーマスは一瞬だけ口を噤んだものの「……そうだね」と小さく息

を吐いた。

「時間がない、とは？ やっぱり頻繁には出て来られない感じかい？」
「そうみたいなんだよね。案外この身体は制約が大きくなって……この前ちよつとある人、まあうん、人だ、そいつにアキ・ポッターが追い詰められちやつてね。くつちやくちやのボロ雑巾になるまで痛めつけられて、軽く死に掛けたんだけどさ」

「……軽く言うなよ、我が友人よ」

「今更さ。流石に今死ぬ訳にはいかないと行って久しぶりに出て来た訳だけど、想像以上に時間の制限が短くつてね。すぐさまぶつ倒れちゃった。あの時は久方ぶりに死を覚悟したもんだよ」

肩を竦めた彼は、掻い摘んだ現状を早口で伝える。一年時のヴォルデモートの件、去年の秘密の部屋の件、そして今の『タイムターナー逆転時計』の件。全科目を履修することになってしまったためあまり時間が取れないことを伝えた彼に、リーマスは苦笑いを浮かべた。

「アキなら、そう言った危険物の管理を任せても問題ないとのダンブルドアのお考えだろう。あの子は賢い子だね、君に似たんだろうな」
「さあどうだろう？ なんだかアキは、ぼくとはちよつとタイプが違う気がする。同一人物だけど、性格は育った環境に依るのかな……なんだか不思議だよ。だからそう、セブルスとも……」

彼はそこで言葉を切った。数秒黙り込んだ後、ふと暗い笑みを浮かべてみせる。

「……そう、アキ・ポッターとセブルス・スネイプ。予想外にも彼らは、友情とも信頼ともつかないそこそこ良好な関係を結べているようだ。……全く、信じられないよね？ リーマスもそう思うだろう？ あっはは、ありえない、ありえない、ありえない。こればかりはアキが可哀想だ。ぼくは心から同情するね。彼なんかを信用するなんて、彼なんかに友愛の情を抱くなんて」
「……………」

「よくのうのうと生きてられるよ。リリーとジエームズを殺した癖に」

そう、彼は吐き捨てた。

彼はしばらく昏い瞳で虚空を見つめていたもの「……まあいや」と仕切り直した。

「アキ・ポッターがあいつとどのような関係を作っているかが、ぼくには関係ないことだったね。どうせ今だけなのだし、生徒として教師と仲良くしておくに越したことはない。アキが誰かを嫌いになる訳もないのだし……アキ・ポッターは誰に対しても平等だ、残酷なまでにね。流石に人狼についての授業をあいつがした時には、結構怒ってはいたようだけどね。クラスの空気もあいつへの呪詛で渦巻いてたし、リーマスも良い生徒を持って幸せなんじゃない？」

「……生徒と言えば、だ。秋、君も知っているだろうが、少し前の授業でまね妖怪を扱った」

「うん、知ってるよ」

「アキ・ポッターの目の前でまね妖怪が変身した姿は、ハリー・ポッターの死体だった」

「……………」

彼は両手の指先を合わせると、目を細めて視線を本棚の辺りに向けた。

リーマスは少し責める口調で言う。

「刷り込みすぎ、じゃないか？ 確かに『ハリー・ポッターを守る』ここそが至上の目的だけれども、アキ・ポッターはただの十三歳の少年なんだよ？ この数ヶ月アキを見てきたけれど、友達と楽しくはしゃいで騒いで、楽しそうに日々を過ごしていた……年相応の少年らしかった。そんな彼が一番怖がるものが『ハリー・ポッターの死体』だなんて——」

「アキ・ポッターは操り人形に過ぎない。目的を達成するために、ハリー・ポッターに近い人間である必要があった。ハリー・ポッターの弟、その役職が欲しかっただけだ」

冷ややかな声で、彼は淡々と口ずさんだ。ちらりと視線をリーマスに向けた彼は、リーマスの表情を見て薄く笑う。

「どうしたんだい、その顔は？ アキ・ポッターに同情でもしたの？ 可愛い可愛いお人形さんに過ぎないあの子に」

「……いや。そうだったね」

ゆるやかにリーマスは頭を振って目を伏せた。そんなリーマスに、彼は少し言葉を切ると続ける。

「……この身体の主人格はアキ・ポッターだ。確かに少々刷り込みが強かったことは認めるよ……でも、最終的に判断するのはアキだ。ぼくは、彼の意志までは操ることはできない。……それを言うなら、この身体は実に不便なものさ……」

言いながら彼は左手を広げた。何度か感触を確かめるように、軽く握つてもう一度広げる。

「ぼくは、アキ・ポッターの考えていることや、触れている感触、味わっている味覚、感じている嗅覚、それに痛みまでは感じ取ることができない。ぼくが分かるのは、彼が見たものと聞いたもの、それだけだ。ぼくがアキ・ポッターを思想的に操ることはできない……夢の世界でならばできるのかもしれないけど。やったことないけど」

「……アキが考えていることは、君に筒抜けという訳ではないのかい？」

「だから不便だと言ってるんだよ。別に、アキ・ポッターのプライバシーに配慮した訳ではないんだけどさ。だから、アキがいくらブラコンのお兄ちゃん大好きっ子だとしても、ぼくはそれに関しては一切ノータツチだ。刷り込みが少々おかしな方向に感化したのかもしれないけど……まあ、ぼくが見たもの聞いたものは、アキ・ポッターには伝わらないことになってるけどね」

ふうん、とリーマスは頷いた。

小さく息をついた彼は、思い出したかのように紅茶に手を付ける。しばらくぼんやりと本棚の書物を眺めていた彼だったが「そう言えば」と口を開いた。

「あと一個、言い忘れてた。アキに言ってあげて。あいつが守護霊を作り出すことができないのは、今までまともな『幸福』を味わったことがないからだって」

「……まともな幸福を味わったことがない？ それはどういう……」
「言っておくけど、ぼくのせいじゃないからね。ハリーとアキが育つ

た環境は本当に酷いものだった……あんなところで幸福なんて味わえるものか。心を守って、何とか楽しいと思えるものを見つけ出すのが精一杯だろうさ。でも今のままでもほぼ実体に近いものは作り出せるし、成長すれば器も大きくなる。それに、いざとなればよくが代わるから問題はないと思うよ」

そこで、彼は小さく眉を寄せると「つく」と軽く呻いた。頭を押さえ、ソファに腰掛け直す。

「そろそろ時間かな……久しぶりにリーマスと話せて良かった。アキ・ポッターによろしくね……後、しばらく気を失うと思うんだけど、起きるまでそつとしておいてあげて……夕食までに起きなかつたら厨房から何か持ってきてあげてね。君、得意でしょ？」

「学生の頃から一体何年が経つてると思ってるんだい……分かったよ。アキのためだからね、善処しよう」

リーマスの言葉を聞き、彼は安堵したように微笑んだ。目を閉じるとソファにストンと倒れ込む。

彼に近寄ったリーマスは、そつと呼吸を確かめた。彼の呼吸が眠っている時と同じ穏やかなものだとは分かった、呪文で毛布を呼び寄せ、少年の身体に掛けてやる。

「……秋」

そつと彼の名を囁き、彼の前髪を掻き上げた。少年の額に浮かんだ汗が手に触れる。

よく見ると、尋常じゃない汗を掻いているようだ。汗の粒が首筋に浮かんでいる。

小さく息を呑んだリーマスは、固く握り締められた右手に触れるとそつと指を解いた。

きつと苦痛だったのだろう。時間制限があると言っていた。リーマスの前では余裕げに振る舞っていたものの、実際はどれほどの苦痛がこの小さな身体を苛んでいたのだろうか。

静かに眠る少年の手を取ると、両手で包み込む。

リーマスはしばらく、そのままだった。

目を覚ました瞬間、ぼくは慌てて起き上がった。辺りを見回す。ここがリーマスの研究室であること、自分がソファで眠り込んでいたことに気付き、さあつと血の気が引いた。

……もしかしてぼく、眠っちゃったの？

慌てて時計を見ると、あろうことか入室した時間からたつぷり三時間は過ぎていようだ。外はもう宵闇に染まり、大広間では生徒達が揃って夕食を取っている最中の時間。

……嘘だろ、おい。確かに最近疲れてたけどさ……こりやあんまりだよ。

自分の身体には毛布まで掛けられている。うっひゃあ。

「おや、目が覚めたのかい？」

「あつ、先生！ すみません、ぼく、いつの間にか眠っていたらしくって……」

らしくって、じゃねえよ、実際寝てたんだよ。

リーマスは笑うと「疲れが溜まっていたんだろう。それに『守護霊の呪文』の練習で追い詰めてしまったようだね。糸が切れたように眠り込んでしまったよ」とぼくに言う。

「……え、と、じゃあ、守護霊の練習はしたんですか？」

「おや、覚えてないのかい？」

全然、全く、さっぱりと。

首を振ると「まあ眠る直前のことは覚えてないことも多いからね、気にすることはない」と頷かれた。うう、リーマスが優しい。

「……えと、ぼく、ちゃんとできてましたか？」

「そうだな……じゃあ、もう一度見せてくれるかい？」

リーマスの言葉に頷き、ぼくは杖を取り出した。

「Expecto Patronum」

呪文を唱えると、杖先から明るい煙が飛び出した。それはやがて見慣れた形——ふくろうの姿になると、ゆったりとリーマスの研究室を一周し、やがて空気に溶けるように消えていった。

「……え？ ふくろう……」

「えっ？」

リーマスの驚きまじりの眩き声に、ぼくは思わず目を瞬かせる。

……さつきまでぼくはここで、守護霊の呪文の練習をしていたんじゃないのか？ ぼくは覚えていなかったけど……。

なら、リーマスは一体何に驚いているのだろうか？

「……あ……何でもないよ、ごめんね」

リーマスはパツと手を振り笑顔を見せた。何かを誤魔化す時のリーマスの癖だ。

……リーマスは今、何を誤魔化した？

(ぼくは今、何を誤魔化された？)

しかしリーマスが続けた言葉に、ぼくの考えは邪魔されてしまった。

「とにかく、今の時点では文句なしの出来栄えだ。でも君にはまだ不満があるみたいだね？」

「あ……そうなんです。熟練した魔法使いなら吸魂鬼デイクンターの前だとしてもきちんとした実体のある守護霊を作り出せると聞いて……幸せな記憶を全力で想ってるんですけど、なかなか上手くいかないんです」

一体どうしてだろうなあ？ 幸せ度が弱いのだろうか。アクアの微笑みじゃまだ足りないとしても言うのか、全く。天使の微笑みだぞ？

リーマスはじつとぼくを見つめていたが、あろうことか「へえ。なら、君が今思っている『幸せな記憶』について私にも教えてくれないかな？」と言うではないか。

えっ？ と咄嗟に顔が赤くなる。慌てて顔を伏せたものの、リーマスには気付かれてしまったようだ。「えー？ 何々、どういうことかなー？ どうして赤くなってるのかなー？」と、今度はこれまでとは違った笑顔でぼくに詰め寄ってくる。先生やめてください。

「ま、そう焦ることはないさ。例え霞のままでも、近くの距離の吸魂鬼デイクンターであれば追い払うことは可能だからね。それに、私やダンブルドアもいる。もつと周りの大人を頼ってくれよ」

そう言われて反省する。確かにぼくは人を頼るのが苦手だ。何で

だろう、いざという時に『大人に頼る』という選択肢が見えなくなってしまう。

「はい」と小さな声で頷いた。ぼくの肩を、リーマスは軽く叩いた。

「それに、お腹が空いただろうか？ 時間を取らせてしまったからね、食べなさい」

リーマスは言いながら、テーブルの上に次々と料理を運んできた。ミートパイにサンドイッチ、かぼちゃジュースにマッシュポテトにケーキ。わあつとぼくは目を輝かせた。同時にお腹がぐうと鳴る。

「それじゃあ遠慮なく、いただきますー！」

どれもこれもぼくが好きなものばかりだ。ありがとうございますと礼を言うと、リーマスは頭を掻いた。

「……好みは、あいつと変わらないんだな……」

「ん？ 何か言いました？」

「何でもないよ。さあ、どんどん食べなさい。……とここでさっきの『幸せな記憶』の続きだけけれど」

ぐっふつ、とかぼちやジュースを飲んでいたぼくの喉が妙な音を立てた。リーマスは相変わらぬ笑みを浮かべてぼくを見ている。

……くっそお、この頑固そうな笑顔。絶対口を割らせる気だな。

ぼくは諦めてため息をついた。

「……内緒ですよ？」

夜は、静かに更けていく。

第21話 変わりゆく関係

「え？ ああ、断ったわよ、普通に」

平然とそう言い放ったリリーに、ぼくとセブルスは揃って胸を撫で下ろした。

ダンスパーティー——の、翌日の話だ。

リリーはぼくらが切り出すまで、ジエームズから告白されたことをすっかり忘れていたらしい。今までドキマギしていたぼくは一体何だったんだ。

……ん？ 胸を撫で下ろした？

一体どうしてぼくが、リリーとジエームズが付き合わなかったと聞いて安心する必要があるんだ、リリーに片想いしているセブルスじやあるまいし。きっと気のせいだろう。隣のセブルスに影響されたんだな。

「大体ねえ、告白されたからってそうひよいひよい付き合うほど、私は軽い女じゃないのよ。あなた達二人が分かってくれてなかったなんて、ちよつとガツカリだわ。……大体ね。自慢じゃないけど私、告白くらいなら何度もあったわよ」

「ええっ!？」

「……秋のその反応、たまにムカつくわね」

「ご、ごめん、別にリリーがモテなさそうとか、そういう意味じゃなくてだよ……」

腕を組んだリリーは口を尖らせる。

そりゃ、リリーは可愛い……友人の鼻根へひいき目かもしれないけれど、学年でも三本の指に入るんじゃないだろうか。いや、学年の女の子全員を見比べた訳じゃないから何とも言えないんだけど……それに性格もいいし、優しいし、いい意味でさっぱりとした女の子だし、ぼくとしては大変魅力的な女の子だと思うし……何考えてんだろ、ぼく。

……でも、今まで四年間一緒にいて、そういう雰囲気をあんまり感じたことがなかった——というかぼくとセブルス以外の男の影を感じ

じたことがなかったから、なんとなくリリーと恋愛とを結びつけて考えようとはしなかったんだらうなあ。

「いいい？ 少なくとも私は、誰か他の男の子と付き合うよりも、あなた達二人と一緒にいる方が、ずっとずっと楽しいの。……そのくらい、分かりなさいよ」

リリーがちよっとつつけんどんな口調で言う。照れているのだ。可愛いなあ。

「……なら、ぼくがリリーに告白したら、リリーは付き合ってくれる？」

ぼくは何の気なしにそう尋ねた。

ぼくの質問に、リリーは面食らったようだった。しばらく口を開けてぼくをポカンと見つめた後、頬を赤く染め「……えっ？」と声を漏らす。そんなリリーの反応で、ぼくも自分の失言をやっと自覚した。

「あつ、うわ、えっとその、たとえば話！ たたとえば、の話だから！」
うわつ、恥ずかしい！ 何だ今の！

ぼくの慌てぶりを見て、リリーはくすりと笑った。

「たとえば……そうね……」

そして——普段の勝ち気な表情とはまた違った、何と言うか——凄く穏やかでふんわりとした微笑みを浮かべて、

「……秋なら、大歓迎かな」

……その表情に、何故だか胸の動悸が激しくなった。

リリーが真っ直ぐ、ぼくの目を見つめて告げたからかもしれない。

「……リ「エバンズ！ エバンズじゃないか！ 奇遇だね全く！ いやいや運命かもしれないね！」

唐突に、ジェームズがぼくの言葉を遮って乱入してきた。先程まで漂っていた妙な雰囲気というか、居心地の悪い空気は霧消する。しかし胸の動悸は悪い意味で激しくなった。

「……ポッター、一体何の用？」

さっきの笑顔は夢か幻か、眉を寄せ不機嫌そうに顔を歪めるリリーに構わずジェームズは「いやいやいやいや！」と叫んでいる。

「運命の人に出会うのに、用事なんているものか！ リリーに会った

めならば、そこがたとえ火の中水の中魔法薬の中だとしても全力で飛び込み君の王子様になろうじゃないか！ ああ、さぁりりー！ 僕の胸の中に飛び込んでおいで！」

「全力で遠慮させていただくわポッター、あと気安くファーストネームで呼ばないで」

「ああ！ 怒った顔も素敵だよりりー！」

「私、言語が通じない方と楽しくお喋りする暇はないの。消えてくれないかしら」

「僕の女神は手厳しいね！ 分かっただけけどね！」

りりーは眉間を押さえてため息をついている。

とそこでセブルスが、りりーを守るようにジエームズに一歩進み出た。

「ポッター、彼女が嫌がっていることすらも分からないのか？ 大体君は昨日振られた筈だろう。とっとと傷心して自分の巢へと大人しく引込んでろ」

「ふん、一回振られたくらいで諦めるほど生温いような恋とは無縁だよ、僕は。自分の気持ちを相手に伝えることすら出来ない、骨付きチキンのスリザリン野郎とは違ってね」

ジエームズとセブルスは、しばし無言で睨み合った。

「……しつこ過ぎてりりーに平手を喰らった貴様は、流石言うことが違うな。更に嫌われる行為だと自覚していないところが甚だ不愉快だ。ああ、僕はりりーのことをずっとファーストネームで呼んでいる訳だが、この辺りも低俗で鳥頭なグリフィンドール野郎とは格が違うと言うべきか？」

「出会ったのが少しぐらい早かったからって調子に乗るなよスネイプ。それだけ長い間すぐ近くにいて女の子の心一つ奪えないだなんて、君の方こそ格が違うと言っているんだよ童貞野郎」

「……礼儀がなっていないと見える。貴様の親は一体何を教えていたのだろうか、貴様みたいな奴が同じ学年にいるだなんて吐き気を催すレベルだ」

「なんだいその何日も風呂に入っていないような脂ぎった頭は？ 君

こそ親からまともな身だしなみを教えてもらっていないに違いない。そんな頭で人前に出られるなんて、僕としては考えられないな」

「……ポッター！」

「セブルス！」

杖を抜きかけたセブルスを、ぼくは声で制した。

「相手の挑発に乗る必要はない。……ジエームズ、何か用があるんだろ？」

ジエームズを見据える。ジエームズはにやりと笑ってぼくを見返した。

「さっすが、秋は鋭いねえ。それでこそ僕が見込んだ男だよ。……魔法魔術大会本戦のトーナメントを発表するらしい。今から来てくれないか？」

「……分かった、行こう」

ジエームズは踵を返して歩き出す。ジエームズの後ろに従いつつ、ぼくはちらりとリリーとセブルスを振り返った。



ぼくがその声を耳にしたのは、山積みの宿題と予習復習もなんとか終わり、僅かながらの余暇に息をついた頃だった。

レイブンクロー談話室の暖炉のすぐ傍のふっかふかな肘掛け椅子に埋もれてつつ、勉強とは何ら関係のないエンタメ本を開く。ううん、これぞ至福の時間。

書痴とは言わないまでも、ぼくも他のレイブンクロー生の例に漏れず本好きだ。日々の勉強のしんどさに、現実逃避しようとは何度本を手に取りかけたか分からない。本を読みたい欲求をぐうつと抑え込んでやるべきことをやった後、ご褒美として自分に読書を許可する。こうすると、早く本を読みたい一心で勉強に集中し、短時間で終わらせることができるのだ。ふふん、ぼくってば策士。

「……ん？」

勉強机が並んでいる辺りが、何やらざわざわと騒がしい。あの辺り

は確か、三年男子が固まって座っていた気がする。何か揉め事だろうか？

その時、ぼくが座っている肘掛け椅子まで、同部屋の友人レーン・スミツクが駆け寄ってきた。

「アキ、いた！ ねえ、ちよつとあの二人を止めてくれよ！ 僕じゃ無理だよ……」

「あの二人って？」

……うーん、なんだか嫌な予感がする。

そしてぼくの『嫌な予感』は大抵当たるのだ。

予想通りというか何と言うか、レーンは「アリスとウィル！」と言つてはお手上げとばかりに肩を竦めた。

「……仕方ないなあ」

あーあ、ぼくの平穏な読書時間よ、グッバイ。

「おやおやうるさいなあ、一体どうしたの？」

「アキー！」

どうやら向こうではちよつとしたケンカ——というか、議論になっているようだ。

オロオロとしていた数人が、近付いてきたぼくの姿に目を輝かせた。自然と人の波が割れ、ぼくの前に道ができる。

「年表見て確かめたのかよお前は！ なら少しは気付いてもおかしくねえんじやねえの？」

「これだけの情報でそう判断するのは危険だって言ってるんだよ！」

「何揉めてんの、君達は」

腰に両手を当てて二人に声を掛ければ、二人は揃ってぼくを振り返った。と思うと「ちよつと良かった、アキー！」「お前もちよつと来い！」と腕を引かれ、一瞬で机の前に引つ張り込まれる。

「……一体何さ……」

ぼくは首を傾げつつ、机に広げている教科書やノート、書きかけのレポートやその他様々な参考資料に目を走らせ——思わず黙り込んだ。

広げられているのはどれも、前回の授業でスネイプ教授が出したレ

ポルト——『人狼の見分け方と殺し方について』の資料だ。ご丁寧に『白銀の球↓月?』なんて走り書きまである。この几帳面な字はアリスか。

どうやら嫌な予感が当たってしまったらしい。教授も迂闊だ……全く。

「この四ヶ月、月の満ち欠けとルーピンが授業はおろか大広間にも姿を見せない時期が関係してる。これはやっぱり……」

「だからそれだけでそう疑うのは気が早いって言ってんだろ、アリス！」

うう、やっぱアリスの勘、鋭過ぎる……。

ぐるりと談話室内を見回せば、アリスの言葉に触発されたであろう数人が、自分でも天文学の年表を開いて確認していた。こうなってしまうえばアリス一人に釘を刺しても無駄だろう。

ならば——

(ごめん、リーマス！)

心の中で思いつきりリーマスに謝っておく。レイブンクローの洞察力の前には、リーマスの秘密も形無しだ。

「……聞いてくれ、皆」

ぼくの言葉に談話室中が静まり返った。そこまで大きな声は出していない筈なのに、同級生はおろか、先輩や後輩までもがぼくに視線を向けている。うっわあ責任重大。

「これから話すことは、絶対に絶対に、この寮での秘密にして欲しい。『計り知れぬ英知こそ、我らが最大の宝なり』——ロウエナ・レイブンクローの名の元に誓ってくれないか。誓ってくれたならば、ぼくの知る全てを君達に話そう」

「お前は何を知ってるっていうんだ？」

「君よりかは遙か多くのことを知ってると思うけどね、アンソニー」
ニコリと微笑み名前を呼ぶと、アンソニー・ゴールドスタインは少し怯んだようだ。

さあ、とぼくは言う。

「誓えないものは、ここから出て行ってくれ」

立ち去る者は誰もいなかった。周囲を見回し「じゃあ、この寮だけの秘密にしてくれるということだね」と頷く。

「ああ、あらかじめ言っておくけど……もし寮外の人に話した場合——これは家族や親戚も含むよ——この情報を漏らした場合はどうな目に遭うか……ぼくのことを知っている人間であれば、簡単に想像がつくことだろう。二度と人前に出られない顔になりたくなければ、他言無用でお願いする」

ちゃんと脅しもつけておく。

「じゃあ……アキ。本当だと言うのか？」

アリスは、半ば睨みつけるような射抜く瞳でぼくを見ていた。全く、君は目付きが悪いんだから、そんな目でぼくを見ないでよね。ちよつと身が竦むじゃないか。

「ああ、そうだ」

一人が気付けば、近くの人間にその考えを打ち明け「どう思う？」と尋ねる。そういう議論の土台が、既にレイブンクローには築かれている。

一人の知識は皆のもの。この文化は他寮には決していない、レイブンクロー特有のものだろう。

静かに、ぼくは告げた。

「お気付きの通り——リーマス・ルーピンは、狼人間だ」

第22話 更なる高みへ

クリスマスと年越しが過ぎ、一月。いよいよ魔法魔術大会の本戦が始まった。

本戦は四年生から七年生までの計八人によるトーナメント戦となる。ぼくとジエームズは山が違うので、当たるとしたら決勝か。

ほぼ全員が上級生。おまけにぼくを除く唯一の四年生は、学年ダントップかつ底意地が悪く悪どい^{あく}ことをなんだって思いつくジエームズ・ポッターときた。一試合たりとも気を抜けるものではない。

本戦最初——準々決勝のぼくの対戦相手は、知り合いと呼べる人がホグワーツにほとんどいないぼくにはとつてもとつても珍しいことに、ぼくが知っている人だった。

知っている、というか。

七年生のレイブンクロー監督生、エリス・レインウオーター先輩。後輩のことも気に掛けて親身になってくれる、いい先輩である。かくいうぼくも、何度も寮の前で立ち往生しているところを助けてもらった恩がある。

卒業後は闇祓いを目指して、現在猛勉強中。この大会も息抜き兼力試しということらしいが、それだけで簡単に本戦に勝ち上がってくる辺り、なんというかも、絶妙だよなあ。

なお、エリスという女性名だが、どこからどう見ても男性である。少し長めの赤い髪に銀縁眼鏡の、レイブンクロー生としては珍しいくらい明るく快活な人だ。だから監督生なんだろうね。

とまあ、久しぶりに自分のクジ運の悪さを呪う出来だった。

勝てっこねーよ、こんなの。

「さあさあお待ちかねの魔法魔術大会いつ、本戦第一試合目は、因縁の先輩後輩対決！ 泣いても笑っても今年で最後の七年生からあ、レイブンクロー監督生、将来は闇祓いか!? エリートコースを歩まんとする将来有望株、最近にはわかにもテ始めているという噂もあります。そこんとこどうなんですかエリスくん！ やっぱり今は安定志向な

んですかそうなんですか—— エリス・レインウオーター！ 対するは同じくレイブンクローの四年生！ 新星現る!? 呪文の才能は天才的、小柄な体躯に似合わぬ魔力量を併せ持つ、この大会でも随一の可愛らしさを誇る少年！ 『こんな可愛い子が女の子な訳がない！』 東洋の美少女—— 幣原秋！』

司会者がテンション高くぼくらを紹介している。どうやら本戦からは、こうして場を盛り上げてくれるような司会者がいるらしい。

それもその筈。予選とは観客の桁からまず違う。

大広間中を埋め尽くさんばかりの人、人、人。その人達全員が、ぼくと先輩の試合を見に来ているのだ。

ちなみに解説役はフリットウィック先生とのこと。いいなあ、ぼくもフリットウィック先生の解説が聞きたいなあ。

「緊張してる？」

舞台袖で、レインウオーター先輩はぼくに微笑みかけた。人好きにする柔らかな笑顔がぼくを見下ろしている。

「ええ、そりやあまあ」

「はは、素直だね」

「変に意地張っても仕方ないですから」

肩を竦めた。苦笑を零したレインウオーター先輩は「それにしても、凄い人の数だね」と観客席を見下ろし呟く。

「先輩を見に来てるんじゃないですか？ 最近モテ始めてるって司会者の方が言っていましたけど」

「あんなのただのジョークだよ。司会者のアレンとは友人でね……あとできつちり絞っておかなくちゃ」

この先輩に絞られるのか。それは……うん、怖そうだ。リーマスと似た雰囲気を持つてるからなあ、この人。

「しかし……東洋の美少女、とは、ねえ」

「わ、笑わないでくださいよ……」

何という二つ名だ。間違っても十五歳の少年を呼ぶべき呼称じゃない。

「いやいや、とつても合ってると思……おっと、時間だね」

レインウオーター先輩が表情から笑みを消した。真剣な眼差しで、舞台上が上がって来たフリットウィック先生を見つめている。

「それじゃ、舞台でまた会おう。幣原、どっちが勝っても恨みっこなしだよ」

「ぼくなんか先輩に勝てる訳ないじゃないですか、嫌だなあ」
「幣原」

レインウオーター先輩は、そこでやけに真面目な顔をした。つられて思わずぼくも居住まいを直す。

「手加減に手加減を重ねていた予選とは違う。本気で私に掛かってこい、幣原秋」

「……………先輩」

「……………よし、行こうか」

ぼくの肩をパシンと軽く叩くと、先輩は舞台へと歩みを進めた。

「……………本気で、ね……………」

ぼくも舞台上に足を踏み入れる。途端に眩いスポットライトが目を灼いた。

思わず目を細めつつも、舞台の中央へと真っ直ぐに歩く。

「尊い騎士道精神に基づき、正々堂々闘ってくださいね」

フリットウィック先生がにこやかに言った。

向き合って一礼をしたぼくらは、杖を剣のように前に突き出し構える。

レインウオーター先輩と目が合った。歳下の、それも三つも下の後輩に向けているとは思えない、真剣で深刻で、油断の欠片もない瞳だった。

……………本気で。

『本気で私に掛かってこい、幣原秋』

……………本気を出しても、いいんですか？

ぞくぞくぞくつと、不思議な感覚が全身を支配した。

嬉しい、楽しい、喜ばしい、心からそう思う。

先輩なら、全力をぶつけてもきつと大丈夫。

これは、今から戦う相手への敵意なんかじゃない。

これが——信頼。

……勝ちたい。

初めて、そう思った。

「行きますよ——いち、に——さん！」

合図と同時に杖を振り上げる。

油断なんてしない。絶対にできない相手だ。最初っからフルスロツトルで行く。

失神呪文を無言呪文で、それを同系統の呪文で打ち消された後は、もう魔法の打ち合いだった。

魔法の火花が弾ける音、それだけが広い大広間に響き渡る。集中を切らさぬよう、先輩をしつかと見据えた。先輩も険しい表情をしている。

次は何の魔法で来るだろうか。無言呪文での決闘は、普通の呪文を唱え合うよりも『お互いの手の内を読み合う』という戦略性が高くなる。

レインウオーター先輩が得意なのは変身術。だから先輩の過去の闘いを見ても、変身に関係した魔法がわりかし多い。ぼくは呪文学が得意だから、姿を変えるというよりも、空気だとか何か他の物体に作用する系統の魔法がどうしても多くなる。

また知識量も違う。向こうは七年生だ、ぼくが知らない魔法も当然たくさん知っているし、ぼくに配慮して難しい魔法は使わないなどと手を抜いてくれる筈もない。

……けれど、ぼくだって負けてはいられない。『呪文学の天才児』という不名誉な渾名あだなを付けられたのには訳がある。

呪文にかけては、ぼくは誰にも負けはしない。あのジエームズにも、呪文学だけは今まで一度も負けたことがない。

父に、国を滅ぼすとまで言われた魔力。普段は抑えているこの力は、一生使わないものだと思っていた。

そう——ぼくには、他人の数十倍、数百倍ともある魔力を、この身につに宿している。

その力のベクトルを合わせるだけで——魔法の威力は、何倍にも膨

れ上がる。

（——やっぱり先輩、強い）

魔法の威力自体は、こちらが何倍も上だ。でも、それを受け流し弾き返す先輩の技量が並外れている。魔法が一つもまともに入らない——それを言うなら、向こうの攻撃だってぼくに通っていないのだから、お互い様という気もするが。

一旦呪文の打ち合いを切り上げると、間合いを取り、息をつく。この真冬に汗をかくほど集中したのは初めてだ。

切れた息を整え額の汗を拭う。先輩もぼくの意図を理解したのか、しばし魔法の手を休めた。

しかし互いに、杖は相変わらず向け合っているし、不審な動きを見せた瞬間魔法を掛ける用意もできている。

ぼくは口を開いた。

「……驚きました。やっぱり、先輩は凄い人だ」

「褒めても何にも出ないがね。でもまあ、君に認めてもらおうというのはなかなか気分が良いものではあるね」

「誰かをそんなランク付けするほど、ぼくは偉くも傲慢でもありませんよ……」

「私に言わせれば、幣原、七年生である私と互角に戦えるほどの君こそ、凄い人材だと思うよ。怪我一つも負わずに、さ」

「……凄い、ですか？」

「ああそうだ。素晴らしい人材、百年に一度の逸材だとも思う。そんな君と手合わせ願うことはきつと、私の生涯ではこれから先一度もないだろうというのが残念なくらいだ」

杖を肩の高さに持ち上げたまま、ぼくは小さく微笑んだ。

「凄いとか、素晴らしいとか、この力をそんな風に言ってくれたのは、もしかしたら先輩が初めてかもしれません」

ぼくは、この力が大嫌いだった。

どうしてぼくにこんな力があるのだと、いつも呪い恨んでいた。

——今でも、たまに悪夢を見る。

一年の時、ファイアン・エンクローチエとの、あの事件。

部屋中をひしめく眩いばかりの魔力の火花。耳を塞いでも聞こえる苦悶の声と、肉が弾け飛ぶ痛々しい音とむせ返るような血の匂い。

誰もが倒れ伏している室内に、ぼくだけがただ、無傷で立っている。夢で見るあの日の情景は、しかしあの日とは違った光景を紡ぐ時がある。倒れ伏す人物がフィアン・エンクローチエ自身である時もある。ば、レイブンクロー同室の友人、リイフ・フェイスナーである時もあるし、ぼくを仲間に取り入れてくれた悪戯仕掛人の彼らである時もある。また、ぼくが絶対に傷つけないと思っていて、ぼくが何よりも大切だと思っていて、ぼくが命よりも大事だと思っている彼と彼女が——あの二人が、倒れ伏している時もある。

その夢を見るたびに、ぼくは自覚せざるを得ない。

ぼくのこの力は、誰かを傷つけるものなんだと。

まだ精製すらしていない、純粋な魔力として持ちうる力だけで、人を殺傷しうるものなんだと。

……でも。

レインウオーター先輩は、ぼくを認めてくれた。この力を素晴らしいとまで言ってくれた。

この力は——今まで重荷だとしか感じられなかったこの力は——誰かの役に立つことだつてできるのだろうか。

人を傷つけるのではなく、人を助ける目的で、使うことができるのだろうか。

……ぼくは。

「……ありがとうございます、レインウオーター先輩」

ぼくは、笑顔でお礼を言った。

そして——自然な動作で、杖を持った左手を振り上げる。先輩は何か気付いたように目を見開いたが、その後の表情の変化は見る事ができなかった。

大広間中の照明が一斉に消える。予想もしていなかった事態に、観客がザワザワと騒ぎ出す。

風を操りぼくの足音を消すと同時に、先輩の座標を風で感知した。暗闇の中走り寄ったぼくは、先輩の目の前に杖を突き付ける。

(Lumoss……っ!?)

無言呪文を放ちかけた、その瞬間のことだった。

ぼくのことなど一切知覚できない筈のレインウオーター先輩は、ぼくの左手首を素早く掴む。痛みに思わず呻いた瞬間、先輩は杖をぼくの鼻先に向けた。

「Lumoss!」

途端、目が眩むような光が目の前に広がる。

自分がやろうとしていたことを寸前で止められ、そっくりそのままお返しをされた。そのことに内心歯噛みしつつも、あまりの眩しさに生理的に顔を背ける。

「引つかかると本気で思ったの?」 Experimentum

ほぼゼロとなった視界の中、先輩のそんな声が聞こえた。捻られ握力の弱まっていた左手から、杖がするりと抜け落ちる。

ぼくの左手を解放した先輩は、杖を拾うとそのままぼくに突きつけた。左手首を押さえつつ、ぼくは僅かに距離を取る。

「さて幣原、これで君は丸腰だ。残念ながら奇襲作戦は失敗しちゃったみたいだね。さあ……どうする?」

どうやら先輩は、敗北宣言をぼくの口から聞きたいらしい。いい性格してんじやん。

眉を寄せ、レインウオーター先輩を見上げた。奥歯を強く噛み締める。

「……だんまりかい? 君に魔法を避けるような身体能力はなかったと思うけど、ものは試しにやってみようか」

これでおしまいか、とぼくは小さく下を向き——うつすらと微笑む。

ぼくの表情の変化に、先輩も「何かがおかしい」と勘付いたようだ。魔法を瞬時に止めるとぼくの杖を放り投げ、余裕のない表情で自分の杖を握り直す。

……ああ、残念だ。その杖で是非とも魔法を掛けて欲しかった。一週間かけて仕込んだのに、勿体無いなあ。

そう、ぼくが欲しかったのは、その一瞬の心の乱れ。どれだけ気を

張っていても、慌てた瞬間は誰もが集中力を欠いてしまう。

例えば――背後でダミーの杖が派手に爆発した音に、思わず顔を向けてしまったり。

レインウオーター先輩の懐に飛び込んだぼくは、袖口から取り出した本物の自分の杖を先輩の喉元に突きつけた。

あと数ミリで、杖先が喉を突く距離。避けられっこない『詰み』の体勢だった。

「……これは、挽回の目はないようだね」

そう言っただけで先輩は両手を上げた。自ら杖を地面に落とす。

「負けたよ、幣原秋。流石は我が寮の後輩だ。このまま優勝して、レイブンクロウの誇りになってくれと切に願っているよ」

まあ、と戯けるように付け加え、レインウオーター先輩は口元を吊り上げた。

「あいつには、流石の君も勝てないだろうがね」

勝者――レイブンクロウ寮四年生、幣原秋。

敗者――レイブンクロウ寮七年生、エリス・レインウオーター。

魔法魔術大会本戦準々決勝、これにて――閉幕。



「へえ。じゃあルーピン先生と守護霊の呪文の練習をすることになったんだね」

「うん。来学期から、らしいけど」

十二月末。ぼくはハリーと共に、放課後の Hogwarts を歩いていた。

段々と寒さが厳しくなり、外は真っ白な雪が積もるようになってきた。寒さに弱いぼくにとっては生きにくい季節だ。

「もう、クイディッチで箒から落ちるなんて無様な真似は絶対にしない……するもんか」

「そう言えば、箒はどうするの？ ほら、ニンバス二〇〇〇は、その

「……壊れちゃったし」

ハリーが箒から落ちたあの日。制御を失ったハリーの箒は、フラフラと暴れ柳に突っ込んだ挙句に見事なまでのホームランを喰らったらしい。粉々になったニンバス二〇〇〇の残骸は、それはもう哀れなものだった。ハリーがどれだけ悲しんだことか……。

「箒……そうだよね、それも考えないといけないんだ……学校にある『流れ星』は競技じゃ使えないほどオンボロだし……」
「ふくろう通信で新しいのを買う？」

「今いろいろと見てはいるんだけど……いいのがなくなつて」

「……ファイアボルトとか」

「そんな！ あんな高そうなもの、買えないよ！」

『ファイアボルト』と名前を出した瞬間すぐさま反応を返した。きつとハリーは、新しい箒としてファイアボルトが欲しいのだ。ダイアゴン横丁では、随分と熱心に見ていたし。

「……流石に、父さんと母さんの金庫を箒一本のために空っぽにすることなんてできないよ……あのお金はぼくとアキのものなんだ、大事に使わないと。おじさんに魔法の教科書を買うからお小遣いちょうだい、なんて言えないしさ」

「……そうだよねえ」

ため息をつく。ううん、お金。お金、か……難しいな。

その時、正面から思いも寄らぬ人影が見えた。思わず足を止めたばかりに、ハリーは「ああ」と何もかもを見透かしたような笑みを浮かべては「じゃあ、僕はこつちだから。じゃあね！」と手を振り、曲がり角を曲がって消えてしまった。

グリフィンボールの談話室に行くには、こつちの道を真っ直ぐ行つた方が近い筈だけど？ ……全く、下手な気の遣い方。

「……あら、アキ」

「や、やあ。今日は一人？」

ええ、と彼女——アクアマリン・ベルフェゴールは微笑んだ。

いつも薄着なアリスと違い、アクアはきつちりと制服を着込んでいるものの、彼女の華奢な身体つきも相まって何だか寒そうに見える

なあとついつい心配してしまう。クリスマスにもこもこの手袋をプレゼントしたら、アクアは使ってくれるだろうか——って、落ち着けぼく。ドラコから釘を刺されたのをもう忘れたのか？

「……久しぶりね。何だか今学期は、あまりあなたとお話できていない気がするの。ねえ、アキが良ければ、お茶でもどう？」

「い、いいの!？」

「……お茶に誘っただけなのに、どうしてそう驚くの？」

「あう……」

それは、そのお……もごもご。

クスクスと笑ったアクアは「……こっち。ちょうどいいテラスを見つけたの。大広間で何か飲み物でももらって行きましよう？」と言
い、ぼくを先導して歩き出す。

レイブンクロー塔にはまだまだ手をつけていない宿題やら予習復習やらが大量に残っているものの、アクアに誘われちゃあ仕方ないよね！ 断れっこないよね！

「そう、ちょうどマグル学の授業で分からないことがあったから、同じ授業を取っているアクアに話でも聞こうかと思っただけで……」

「……私より、あなたの方がマグルについては詳しいと思うけど？」

……あう。

アクアに従い、黙って階段を下りていく。

……な、何か話した方がいいんだろうか……。

「アクア、誕生日っていつだったけ？」

「……三月十二日よ。忘れたの？ 去年プレゼント、くれたじゃない」
しまった、話題のチョイスを間違えた。しかし仕方ない、このまま
突き進もう。

「じゃあ血液型！」

「……B型」

「星座は!？」

「……魚座」

「好きな食べ物は？」

「……レモンタルトとアップルパイ……どうしたの？ 急に」

「いや、別に……」

失敗を掻き消そうとして、更に失敗の上塗りをしている気がする。
……ダメだ、アクアが相手じゃ頭が働かない。ぼくらしくもない。

「……あ」

と、前を歩くアクアが小さな声を漏らした。

角を曲がって現れたのは、ドラコとその取り巻きであるクラップ、ゴイルの三人組だ。

彼ら——正確にはドラコ一人だが——は、ぼくとアクアの姿を見て足を止めた。

ドラコが、アクアと一緒に歩いているぼくをキツと睨みつける。そんなドラコをぼんやりと見返しながら、ああそっかー、幸せって長くは続かないのね、なんてことを考えていた。

「……アキ。ちよつと来い」

ぼくを呼ぶ、ドラコの低い声。返事をしようとした時、アクアが一歩前に踏み出した。

「……アキに何の用よ。先にアキと約束していたのは私よ、ドラコ」
ドラコがぼくからアクアに視線を移した。二人黙って睨み合う。

ぼくは肩を竦めると、ドラコの方に歩み寄った。

「ごめん、アクア。実は先にドラコと約束してたんだ。行く、ドラコ」

「……アキ？」

「ごめんね」

アクアにニコリと笑いかけ、ぼくは踵を返した。クラップとゴイルが困惑するのも構わず「ドラコ、行くよ」とスタスタと歩いていく。
「……っ、何、よ……何よ！ ドラコのバカっ！ 寮に帰ったら、覚えてなさいっ！」

そんな声が後ろから追いかけてきた。振り返りたい衝動に胸が締め付けられるものの、ぼくは前だけを見て歩き続ける。

「ごめんねドラコ、今度からはもっと気を付けるようにする」

「……アキ、すまない」

「謝る必要はないよ。それよりドラコ、寮に帰ったらアクアに気を付

けた方がいいかもね？」

「……明日の薬草学は休むかもしれない」

「大袈裟だなあ」

「君は、あいつが怒ったら怖いことを知らないから……、……いや」

そこでドラコは言葉を切った。

「僕は……」

「アクアを守ってくれるんだろ、ドラコ？」

「……」

「なら、ぼくにとってそれ以上の幸せはないよ」

「……ああ。分かっている、アキ」

俯いたぼくは、ドラコに見えない角度でそっと微笑んだ。

第23話 忍びの地図

「気に食わないな」

ジェームズ・ポッターがぼそりと漏らした言葉に、ピーター・ペティグリューは人知れず身を強張らせた。

「……どうしたんだい？」

これまた慎重に発言したのはリーマスだ。読書の片手間に返事したような顔をしつつも、視線は一点から動かない。ジェームズの機嫌を敏感に察知しているのだ。

「スネイプさ。そうは思わないかい？ リーマス」

「……別に、僕はそうは思わないけど……」

ジェームズの口から出てきた『気に食わない相手』が自分の名前はなかったことに、ピーターは詰めていた息をこっそりと吐き出した。

談話室の一番ふかかなソファに寝そべっていたシリウスは、ジェームズの言葉にパツと起き上がると「賛成するぜ、相棒」と大きな声を上げる。

「やっぱり、シリウスならそう言ってくれると思っていたよ」

「当たり前だ。というか俺は、君がやつとその結論に達してくれたことが嬉しいよ。あの根暗スリザリン野郎、誰が好きになるかってんだ」

こうなるともうジェームズとシリウスの独壇場だ。ピーターは黙って、目の前に広げた天文学の課題の星図に向かい合う。

土星が獅子座の方向にある時、これは一体どういう意味だったか……。

「大体どうして、あいつなんかエバンズのすぐ傍に番犬みたいな顔をして居座っているんだ？ この前のダンスパーティーにしたらってそうだ！ エバンズにはもつといい人がいるだろうに、僕とか僕とか僕とかさ！」

「幼馴染、とか言ってなかったか？ まあこの場合、エバンズは男を見る目がないんだという結論でいいんじゃないか」

「エバンズを侮辱するなんて、シリウスでも許さないぞ！」

「面倒くせえなおい！」

——ああそうだ、土星が獅子座の方向にある時……ある時は確か、確か……。

「そんなにスネイプが邪魔なら、とつと『排除』しちゃえばいいじゃないか」

「そうもいかないよ。だってスネイプは秋とも繋がりがあるんだもの」

唐突に出てきた幣原秋の名前に、ピーターはピクンと頭を揺らした。しかしジエームズもシリウスも、今のピーターの挙動に気付く様子はない。

「そういや、秋もエバンズと仲がいいよな。秋はいいのかよ、おい？」
「愚問だねシリウス。そんなことすら分からないのかい？ 君は本当に僕の相棒か？」

「悪いが、俺は女で悩んだことがないもんで」

「全く羨ましい限りだね。……秋を？ 秋が邪魔？ 僕が、この僕がそんなことを思う訳がないじゃないか」

「……ま、そうだろうな」

「幣原秋は僕が見つけ出した、このホグワーツ魔法魔術学校全校生徒一三五一人の中でも、おそらく唯一の、随一の天才だ。磨かずとも光っている宝石だ。彼こそが、彼のような人物がきつと『英雄』になるのだろうね。そんな幣原秋を、僕が手放す訳もない」

熱っぽく語るジエームズの声が聞こえる。

幣原秋。

「秋が魔法魔術大会にエントリーしてくれたのは嬉しい誤算だった。これで世間も幣原秋を正しく認めるだろう。才能を、その価値を知らぬ馬鹿な誰かに捻じ曲げられずに、正しく育ててくれることだろう。」

——幣原秋。『呪文学の天才児』なんて、『天才』なんてそんな単語、そうおいそれと与えられるものじゃない、認められるものじゃない。幣原秋はそれをやってのける。秋が魔力の片鱗を見せる瞬間、僕らはまざまざと突き付けられるんだよ。何よりも暴力的に『彼こそが天才

だ』と認めさせる。それが天才というものだ。無理矢理認めさせられたからこそ、その事実すらも受け入れがたくて、世の中は天才を排斥する。その結果が一年の幣原秋さ」

「……君が何を言っているのか、俺にはたまに理解ができなくなるんだよ、ジエームズ」

「理解ができない？ そんなに難しいことは言っていないと思うんだけどね。シリウス、僕は頭が良い。これはナルシズムでも自意識過剰でもない、客観的な事実だ。教科書なんてものは大体一度読めば全て頭に入るし、覚えたことは忘れない。学年首席というものに興味はないけれど、三年後に僕が首席のバッジを受け取るのはほぼ確定している。そんな僕だからこそ感じるんだよ。彼の特別さを、異常さを」

「俺には、ジエームズが言うように、秋がそんなにすっごい奴には見えないけどな。俺にとっちゃあ秋は、可愛い弟分で、女みたいな可愛い顔してて、ちっこくて、人畜無害そうな少年だけど」

「……人畜無害、ね。ま、可愛い顔してるのはその通りだけどね。最初シリウス、男だつて知らずに口説いてたし」

「そんな昔のこと覚えてんじやねえよ！」

「そんな昔じゃないだろう。二年前だよ、たった二年前」

「……まあ、凄い奴には見えないが、それでも大した奴なのは認めるよ。まさか君と共に魔法魔術大会の本戦まで進むなんて」

シリウスの言葉を聞いて、ジエームズはけらけらと笑った。

「シリウスはその辺りが見込み不足なんだよ。秋に同学年の奴らが敵うとでも？ どれくらい彼が自分の力をセーブしていたか、気付いていなかった訳ではあるまい？ 『見せる試合』を演出してんだよ、秋は。観客が見て面白く、対戦相手も戦い甲斐のある試合を。秋の『本気』こそが、一昨日見せたエリス・レインウオーターとの試合……いや、それすらまだ十全には出してないのかもしれないね」

「ジエームズ、俺だつて秋と大会で戦って負けたんだぜ？ その辺慮ってくれないか」

「秋に負けて良かったねって、確か僕言ったと思うけど？」

「言われたことを今思い出したよ」

シリウスははつきりと苦い顔をした。

「じゃあジェームズはどうなんだ？ 君が秋と戦ったらどっちが勝つんだよ」

「おいおい、僕を買い被り過ぎないでくれよ。僕が秋に敵う訳がないじゃないか。……ただし」

「ただし？」

「秋が、本気で僕を潰そうと思っていたのならね。秋が僕を倒したくないと、心のどこかで少しでも思っていたのなら、きつと僕は負けることはないだろう。勝てるかどうかはともかくとして、負けはしないさ」

「回りくどいな。つまり？」

「君は何でも直球だね、シリウス。つまり、秋が僕を好きな限り、僕は秋には決して負けないってことさ。その辺りが秋の優しさであり弱みであり、甘さであって、人並み外れた魔力を制御できている所以なんだろうけどね」

ピーターは幣原秋を脳裏に思い浮かべた。

平均に満たない自分よりも小さな体躯に、穏やかで柔らかで純粋な微笑みを浮かべるあの少年を。

ジェームズがそこまで買っている相手、幣原秋。

彼だけは、敵に回してはいけない——味方のままでいなければ。

「それじゃあ、話は戻るけどさ。つまり、ジェームズにとって、エバンズと秋が一緒にいるのは何の問題もないってことか？ ジェームズが秋を好きだということはよく分かった、分かりすぎるほどによく分かったよ」

「ああ、その通りだね。たとえエバンズと秋が付き合うことになったとしても、僕はそれを笑顔で祝福できるさ」

「君、秋のこと好きすぎて気持ち悪いな。……まあ、あの二人が付き合うなんて、もしもでも考えられないか」

「そうだね。だが……スネイプ、彼は別だ」

静かな声に、ピーターは思わず背筋を震わせた。

「あいつはエバンズと秋の隣には相応しくない。純粋で清らかなあの

二人の傍にいるべき人間じゃない。だから潰す」

シリウスは小さく口笛を吹くと喝采の意を伝える。

「だが、きつと秋はスネイプを庇うだろう。友人思いの彼は、絶対にスネイプを庇って怒る筈だ。ついこの前も止められたしね。だから、秋が傍にいる時は何もしない。狙うのは——奴が一人の時だ」

ピーターは小さく息を呑んだ。

ジェームズ、それは……それは。

それは、幣原秋を虐めていた相手と同じ発想だぞ——

「……………っ」

しかし、ピーターは何も言えなかった。

リーマスは本に没頭している振りをしていたし、ジェームズとシリウスを止められる人間など、この場には誰一人として存在していなかった。



「アキっ!!」

クリスマス直前のホグズミード休暇の日。普段より閑散とした図書館で課題を広げていたぼくは、生き残った男の子であり超絶有名人の我が兄貴、ハリー・ポッターに襲撃された。

……襲撃という表現が間違っているって？ だってそんなイメージで突っ込んできたんだ、仕方ない。

「ハリー……図書館ではお静かになって、ぼく、何度も言ったよね？」

「あはは、痛い痛い、眉間を中指でグリグリするのは止めて、地味に痛い」

「全く……」

はあ、とぼくはため息をついた。

「アキ、暇かい？」

「暇だと思うかい？ これだけ山ほど課題があって」

「アキならできるって僕は信じているよ。それよりこれを見てくれ」

「そんなに簡単に信用しないで。ぼくにだってできないことはいっぱ

いあるんだ……つと、それは何？」

ハリーの手に握られたものを尋ねる。ハリーはどこか悪戯っぽい笑みを浮かべたままそれを広げた。

大きくて古びた羊皮紙だ。両面ともに、文字のようなものは何も書かれていない。真正正銘、ただの羊皮紙である。

「フレッドとジョージの双子がくれたんだ……『忍びの地図』だと双子は言っていた。ほら、見てごらん……」

ハリーは小さく咳払いをして杖を取り出した。杖の先端を軽く羊皮紙に触れさせ、唱える。

「われ、ここに誓う。われ、よからぬものを企む者なり」

途端、杖の先が触れたところから、細いインクの線がサアツと広がりはじめた。浮かび上がったのは大きな地図だ。あまりの様子に、ぼくは息をするのも忘れて魅入っていた。

羊皮紙の一番上には、渦巻形の大きな緑色の文字が浮かんでいる。

『ムーニー、ワームテール、パッドフット、プロングス、レイブン
われら『魔法悪戯仕掛人』の御用達商人がお届けする自慢の品

忍びの地図』

ぼくは震える手で羊皮紙に触れた。精緻な地図に指を滑らせる。

完成……したのか。

完璧な地図。 Hogワーツ城と学校の敷地全体の精密な見取り図。昔の幣原秋がどうすればいいか分からないと頭を抱えていた、地図上を動く人の点。どれも一つ一つ細かい字で名前が書いてある。……はは、よく校長室まで……。

ムーニー、ワームテール、パッドフット、プロングス、レイブン——これらはきつと渾名あだなだろう。ぼくの記憶での幣原は、まだそんな名前前で呼び合っているはいなかった……。恐らく、この先の未来で呼び合うことになるに違いない。

ただ、幣原だろう名前はすぐに分かった。レイブン——カラスの英語名であり、レイブンクロウの名の一部。これに違いない。

「それでね、アキ……アキ？」

ハリーの声に意識が引き戻される。完全に、地図に見惚れていた。

「そんなな夢中になるなんて……まあ、きつとアキは好きそうだと
思っただけだね。……フレッドとジョージが、これも教えてくれた
んだ。ほら、ここ、抜け道があるだろう？ この道は——」

ハリーが一本の道を指で辿る。その道は途切れることなくずっと
伸びていて、地図の外にもまだ道があると聞いたげだ。

興奮を隠し切れない顔で、ハリーはぼくに言った。

「ホグズミードのハニーデュークスに続いているんだ！」

その後、ぼくとハリーはマダム・ピンスに図書室を追い出さ……いやいや、普段通り優雅に図書室を出たぼくらは、その抜け道をずっと
進んでハニーデュークスへと辿り着いた。ハリーは流石、抜け目なく
透明マントを準備していたので、ぼくらは二人で透明マントの中に入
ると、人や物に触れてしまわぬようゆっくりと歩く。

クリスマス直前のホグズミードということで、通りを歩く生徒の数
はかなり多い。ぼくらは人混みをすり抜けるようにして、何とかロン
とハーマイオニーの二人と合流することができた。

「ハリー！ それに、アキも!？」

「やつほう、今日は最高のホグズミード日和だぜ！」

ロンはそう言ってくれたもの——しかし今日は生憎の吹雪、最高
のホグズミード日和とはいかないようだ。

目を輝かせたハリーが満足するまでホグズミードを彷徨いた後、ぼ
くらは『三本の箒』のバタービールでも飲もうかというところで意見
が合った。

相変わらず、三本の箒は人と騒がしさと煙で一杯のようだった。ぼ
くらは一番奥の席に陣取ると、透明マントを脱いで一息ついた。クリ
スマスツリーがすぐ前に立っていて、ぼくらをちようど隠してくれる
位置取りだ。ぼくらの姿はクリスマスツリーのすぐ傍でうんと背伸
びをしなければ見えないだろう。

ぼくらはロンがまとめて買ってきたバタービールで乾杯した。泡
立っていて温かい。幣原の記憶としての味は知っているものの、こう

して実際に味わってみるとこれまた、こんなに美味しいものは今まで飲んだことがない。

とその時、ハリーがぼくの腕を引っ張った。同時にロンとハーマイオニーがぼくとハリーをテーブルの下に押し込める。危ない危ない、バタービールを引っ繰り返すところだったじゃないか。

「いきなり何……わぷっ」

「アキ、黙って。魔法大臣のファツジが来た。あと、マクゴナガルとフリットウィックとハグリッドも」

うわお、それは——見られたらおぞましいことになるだろうな、想像したくもない。どうしてこんな時にグリフィンドールとレイブンクローの寮監が揃うのだ。

「Mobil^木iliarb^よus^動！」

ハーマイオニーが呪文を唱えると、傍にあつたクリスマスツリーが浮き上がった。ふわふわと漂い、ぼくらのテーブルのすぐ脇に着地する。

先生方と魔法大臣は、ぼくらのテーブルのすぐ傍に陣取つたようだ。やがて『三本の箒』の主人であるマダム・ロスマルタが飲み物を運んでくる。

「ギリウオーターのシングルです——」

「私です」

「ホット蜂蜜酒、四ジョッキ分——」

「ほい、ロスマルタ」

「アイスさくらんぼシロップソーダ、唐傘飾りつき——」

「ムムム！」

「それじゃ、大臣は紅い実のラム酒ですね？」

「ありがとうよ、ロスマルタのママさん。君にまた会えて本当に嬉しいよ。君も一杯やってくれ……こつちに来て一緒に飲まないか？」

「まあ、大臣、光栄ですわ」

……さて、隠れたはいいものの、これからどうするかはさっぱり考えていない。先生方はいつまでここで飲むつもりなのだろう。抜け出す隙が見つかればいいんだけど。

そうこうしているうちに雑談が始まってしまった。抜け出すタイミングを計っているのか、ハーマイオニーの足が神経質そうにリズムを刻んでいる。

「……でもねえ、わたしにはまだ信じられないですわ。どんな人が闇の側に加担しようとして、シリウス・ブラックだけはそうならないと、わたしは思っていました……」

その時、マダム・ロスマルタが感慨深い声で呟いた。隣でハリーが小さく息を呑む。ぼくは唇を噛み締めた。

「あの人がまだホグワーツの学生だった時のことを憶えてますわ。もしあの頃に誰かがブラックがこんな風になるなんて言っていたら、わたしきつと『あなた蜂蜜酒の飲みすぎよ』って言ったと思いますわ」

「君は話の半分しか知らないんだよ、ロスマルタ。ブラックの最悪の仕業はあまり知られていない」

「最悪の？ あんなにたくさんの方の可哀想な人を殺した、それより悪いことだっておっしゃるんですか？」

「まさにその通り」

胸の奥がざわりと騒ぐ。吐きそうな気分、ぼくは左手を強く握り締めた。

「信じられませんわ。あれより悪いことってなんででしょう？」

「ブラックのホグワーツ時代を憶えていると言いましたね、ロスマルタ。あの人の一番の親友が誰だったか、憶えていますか？」

「ええええ、いつでも一緒、影と形のようなだったでしょ？ ここにはしよつちゆう来てましたわ——ああ、あの二人にはよく笑わされました。まるで漫才だったわ、シリウス・ブラックとジェームズ・ポッター！」

ハリーがバタービールの空のジョッキを取り落とした。床に触れる直前で、ぼくは慌ててキャッチする。

「その通りです。ブラックとポッターは悪戯っ子達の首謀者。勿論、二人とも非常に賢い子でした——全くずば抜けて賢かった——。しかしあんなに手を焼かされた二人組はなかったですね」

「そりゃ、分かんねえですぞ。フレッドとジョージ・ウィーズリーにか

かつちや、互角の勝負かもしれないねえ」

「皆、ブラックとポッターは兄弟じゃないかと思っただろうね！一心同体！」

「全くそうだった！ポッターは他の誰よりブラックを信用した。卒業しても変わらなかった。ブラックはジェームズがリリーと結婚した時新郎の付き添い役を務めたし、二人はブラックをハリーの後見人にまでした。ハリーは勿論全く知らないがね。こんなことを知ったら、ハリーがどんなに辛い思いをするか」

ハリーは目を伏せたまま、眉をぎゅゅつと寄せて話に耳を傾けていた。ローブの裾を力一杯握り締めている。そんなハリーの左手に、ぼくはそつと右手を重ねた。ハリーはハツとした表情でぼくを見返した後、ぼくの手をきゅつと握り込む。

「ブラックの正体が『例のあの人』の一味だったからですか？」

「もつと悪いね……ポッター夫妻は、自分達が『例のあの人』につけ狙われていると知っていた。ダンブルドアは『例のあの人』と緩みなく戦っていたから、数多の役に立つスパイを放つていたんだ。その内の一人から情報を聞き出したダンブルドアは、ジェームズとリリーにすぐに危機を知らせ、二人に身を隠すよう勧めた。だが、勿論『例のあの人』から身を隠すのは容易なことではない。ダンブルドアは『忠誠の術』が一番助かる可能性があるかと二人にそう言ったのだ」

「どんな術ですか？」

「恐ろしく複雑な術ですよ。一人の、生きた人の中に秘密を魔法で封じ込める。選ばれた者は『秘密の守人』として情報を自分の中に隠す。かくして情報を見つけることは不可能となる——『秘密の守人』が暴露しない限りはね。『秘密の守人』が口を割らない限り『例のあの人』がリリーとジェームズの隠れている村を何年探そうが、二人を見つけてすることはできない」

「それじゃ……ブラックがポッター夫妻の『秘密の守人』に？」

「当然です。ジェームズ・ポッターは、ブラックだったら二人の居場所を教えるぐらいなら死を選ぶだろう、それにブラックも身を隠すつもりだとダンブルドアにお伝えしたのです。……それでもダンブルド

アはまだ心配していらっしゃった。自分がポッター夫妻の『秘密の守人』になろうと申し出られたことを憶えていますよ」

「ダンブルドアはブラックを疑っていたらした？」

「ダンブルドアには、誰かポッター夫妻に近い者が、二人の動きを『例のあの人』に通報しているという確信がありました。ダンブルドアはその少し前から、味方の誰かが裏切って『例のあの人』に相当の情報を流していると疑っていたらっしゃいましたし……前線に立って死喰い人と戦っていた闇祓いの中にも、何人ものスパイが紛れ込んで騒ぎになったこと、憶えてますでしょうか？」

「ええ……それでも、ジエームズ・ポッターはブラックを使うと主張したんですの？」

「そうだ、そして『忠誠の術』を掛けてから一週間も経たないうちに……」

「ブラックが、二人を裏切った？」

徐々に冷えていくハリーの手が、ぼくは気になっていた。温もりを移そうと思うものの、ぼくの手もハリーに負けず冷たかった。

「まさにそうだ。ブラックは二重スパイの役目に疲れて『例のあの人』への支持をおおっぴらに宣言しようとしていた。ポッター夫妻の死に合わせて宣言する計画だったのだろう。ところが、知つての通りに合わせて宣言する計画だったのだらう。ちようらくとところが、知つての通り『例のあの人』は幼いハリーのために凋落した。力も失せ、酷く弱体化し逃げ去った。残されたブラックにしてみれば、全く嫌な立場に立たされてしまった訳だ。自分が裏切り者だと旗幟鮮明にした途端、自分の旗頭が倒れてしまったんだ。逃げる他なかった……」

「くそつたれのあほんだらの裏切り者め！ 俺はヤツに出会ったんだ。ヤツに最後に出会ったのは俺にちげえねえ。その後でヤツはあんなに皆を殺した！ 秋から、幣原秋から騎士団に連絡が入って、そんな時皆は誰も手が空いとらんで、俺がポッター家に向かった……」

「彼は、ダンブルドアと共にポッター家に守護の呪文を掛けてましたからね。家が崩れたことも感知できたのでしょうか？」

フリットウィック先生が沈鬱そうに呟く。ズビツとハグリッドは鼻をすすった。

「崩れた家の中で、リリーを抱き締めて呆然としとった秋……人間があんな表情をすんのを、俺は初めて見た……。ここにいつまでもおるのは危ねえ、いつ家が崩れるか分からんぞって言ったら、ハリーを頼むと頷いてまた闇祓いの方に『姿くらし』してっただな……。」

可哀想なちっちゃなハリー。額におつきな傷を受けて、両親は死んじまって……。それで、シリウス・ブラックが現れた。いつもの空飛ぶオートバイに乗って。あそこに何の用で来たんだか、俺には思いもつかなかった。ヤツがりリーとジエームズの『秘密の守人』だとは知らなかったからな。『例のあの人』の襲撃の知らせを聞きつけて、何かできることはねえかと駆けつけてきたんだと思った。ヤツめ、真っ青になって震えとったわ。それで、俺がなにをしたと思うか？ 俺は殺人者の裏切り者を慰めたんだ！」

「ハグリッド！ お願いだから声を低くして！」

「ヤツがジエームズとリリーが死んで取り乱してたんではねえんだと、俺に分かる筈があっか？ ヤツが気にしてたんは『例のあの人』だったんだ！ 俺はあの後何度も後悔した、あん時秋を少しの間でも引き留めておけば、ヤツを見た瞬間秋はブラックを捕まえただろうさ！ ジエームズの友人だった秋なら『秘密の守人』がブラックだったことくれえ知ってただろう！ あんな凄惨な事件が起こることもなかっただろうさ……。」

ほんでもってヤツが言うには『ハグリッド、ハリーを俺に渡してくれ。俺が後见人だ、俺が育てる——』ヘン！ 俺にはダンブルドアからの言いつけがあったわ。それで、ブラックに言ってやった。『ダメだ。ダンブルドアがハリーはおばさんとおじさんのところに行くんだって言いなさった』ブラックはゴチャゴチャ言うもったが、結局諦めた。ハリーを届けるのに自分のオートバイを使えって、俺にそう言った。『俺にはもう必要がないだろう』そう言ったな。

もし、俺がハリーをヤツに渡してたらどうなってた？ えっ？ 海のとど真ん中あたりまで飛んだところで、ハリーをバイクから放り出したにちげえねえ。無二の親友の息子をだ！ 闇の陣営に与くみした魔法使いにとつちや、誰だろうが、何だろうが、もう関係ねえんだ……。」

その後は長い沈黙が続いた。ハリーは思い詰めた顔で、じつと床の一点を見据えている。

……でも今のぼくが、ハリーに何と声を掛ければいい？ 何と声を掛けたい？

「でも、逃げ^{わお}させなかったわね？ 魔法省が次の日に追い詰めたわー！」
「ああ、魔法省だったら良かったのだが！ 確かに捕らえたのは闇祓いに所属していた幣原秋だ。だが、ヤツを最初に見つけたのはチビのピーター・ペティグリューだった——ポッター夫妻の友人の一人だが。悲しみに頭がおかしくなったのだろう、多分な。だが、ブラックを見つけて瞬時に、あー、自分の息があるうちに、だが——幣原秋に連絡を入れたのは正解だった。幣原秋は即座に闇祓いと魔法警察を呼んだ……そうでなければ、きつとあの場はそれ以上の惨劇が繰り広げられたことだろう。」

私はあの時魔法惨事部の次官だったのだがね、ブラックがあれだけの人間を殺した後に現場に到着した第一陣の一人だった。私は、あの——あの光景が忘れられない。今でも時々夢に見る。

道の真ん中に深く^{えぐ}抉れたクレーター。その底の方で下水管に亀裂が入っていた。死体が累々。マグル達は悲鳴を上げていた。そして、ブラックがそこに仁王立ちになり笑っていた。その前にペティグリューの残骸が……血だらけのローブと僅かの……僅かの肉片が……。

誰もが呆然とする中、幣原秋が杖を掲げたまま、血まみれの道を歩いてブラックに近付いて行った……ブラックは、幣原の前では抵抗しなかったよ。きつと、勝てないと分かっていたのだろう。天才ばかりが揃う闇祓いの中でもとびっきりの逸材である、彼に……」

「秋……幣原秋ね。覚えていますわ。ジエームズ達とたまに一緒に来ていたあの子……リリーととても仲が良くて、卒業した後も二人一緒にこの店に飲みに来てくれました。優しい眼差しの、穏やかで可愛らしい男の子でした。いつもちよつとした素敵な呪文を見せてくれて、年甲斐もなくなるときめいたものです。そんなあの子がいつしか闇祓いの英雄として、『黒衣の天才』として名を馳せた拳句……でも、あの子

も死んでしまった……」

「……あの優しい子に、闇祓いは向いてなかったんですよ」

フリットウィック先生は沈んだ声で呟いた。何だか悔いているような声音だった。

「あの子の進路相談に乗ったのは私です。あの子が闇祓いになると言った時、推薦状を書いたのは私です。でも、私は本当は、彼に呪文学の教師になってももらいたかった……私の助手になって、ゆくゆくはこの職を継いで欲しいと思っていました。彼の才能を生かせるのは、戦場などではなく、教育であり、研究であり、ここだと……でも、彼は闇祓いになることを強く望みました。本人がそこまで言うならばと、私は……彼があそこで、あの職場で一体何をさせられたのか、私には容易に想像が付きまします……」

「……闇祓い。あの時代はとても危険な職だった……一年後に生きているのは半分だとも言われていた。更に、あの時の魔法法執行部部长——バーテミウス・クラウチが、闇祓いで『許されざる呪文』の行使を認めさせてからというもの……」

「私は秋くんの寮監でした……レイブンクロウ寮監として、ずっと彼のことを見守ってきた。あれほどの才能を見せてくれた生徒は他にいません。七年間ずっと、最高点を付け続けた。あれほど莫大な魔力を持った子は見ることがない。だからこそ、分かるんです。彼が闇祓いの中で、どんな扱い方をされてきたか……。『黒衣の天才』だなんて、そんな言葉で彼を祭り上げて！ 心を病んで、この世を夢み自ら命を絶った者が、彼の他にどれだけ多かつたことか」

「いやはや、まっこと残念。あれだけの才能の持ち主を失うこと自体が、魔法界の損失だと言わざるを得ないというのに」

……幣原秋。君は……一体。

その時、今度はハリーが握っている手に力を込めた。冷たい手に、それでも少し励まされる。

「大臣、ブラックは狂ってるというのは本当ですか？」

「そう言いたいがね……『ご主人様』が敗北したことで、確かにしばらくは正気を失っていたと思うね。ペティグリューやあれだけのマダ

ルを殺したというのは、追い詰められて自暴自棄になった男の仕業だ——残忍で何の意味もない。しかしだ、先日私がアズカバンの見回りに行った時ブラックに会ったんだが、なにしろあそこの囚人は大方みんな暗い中に座り込んで、ブツブツ独り言を言っているし、正気じゃない……ところが、ブラックがあまりに正常なので私はショックを受けた。私に対して全く筋の通った話し方をするんで、何だか意表を衝かれた気がした。ブラックは単に退屈しているだけなように見えたね——私に、新聞を読み終わったならくれないかと言った。洒落へしやれ〜てるじゃないか、クロスワードパズルが懐かしいからと言うんだよ。ああ、大いに驚きましたとも。吸魂鬼デイメンターがほとんどブラックに影響を与えていないことにね——しかもブラックはあそこでもっとも厳しく監視されている囚人の一人だったのでね。そう、吸魂鬼が昼も夜もブラックの独房のすぐ外にいたんだ」

「だけど、何のために脱獄したとお考えですか？ まさか、大臣、ブラックは『例のあの人』とまた組むつもりでは？」

「それが、ブラックの——アー、最終的な企てだと言えるだろう。しかし、我々は程なくブラックを逮捕するだろう。『例のあの人』が孤立無援ならそれはそれで良し……しかし彼のもっとも忠実な家来が戻ったとなると、どんなにあつという間に彼が復活するか、考えただけでも身の毛がよだつ……」

テーブルの上にグラスを置くような音が聞こえた。

「さあ、コーネリウス。校長と食事なさるおつもりなら、城に戻ったほうがいいでしょう」

マクゴナガル先生の言葉を皮切りに、一人、二人とテーブルから人が離れて行く。カランカランと『三本の箒』の扉が開く音と共に、先生方は立ち去ったようだ。

「……ハリー？ アキ？」

ロンとハーマイオニーがテーブルの下を覗き込んだ。二人はぼくらの様子を心配げに窺っている。

しかしハリーは顔を上げると、ぼくを真っ直ぐに見つめた。その視線を数秒受け止めた後、ぼくはゆっくりと目を閉じた。

第24話 新聞社の取材

魔法魔術大会の準々決勝も終わり、あんなにたくさんいた参加者が、気付けばぼくも含めてあと四人に減っていた。ジエームズとぼく、それに六年生の女子生徒と七年生の男子生徒とのことだ。

過去を振り返ってみても、準決勝に四年生が二人とも勝ち残っていることはほぼないらしい。そんな意味でも、ぼくやジエームズは芸能人のような注目のされ方をしていた。

注目しているのは hogwarts 校内だけではないようだ。三大魔法学校対抗試合と並び、歴史的にも深いこの大会は、イギリス中に散らばったOBやOGにもチェックされているのだという。そんな人達への情報提供という意味も込めて、準々決勝から一週間が経過した今日この日、ぼくらの元に日刊予言者新聞の記者が訪れた。

放課後、指定された小部屋へと急ぐと、そこではジエームズと女子生徒が談笑していた。恐らく彼女が六年生の代表者——ハツフルパフのパスカル・スマイサーだろう。

しかし初対面の異性の先輩とも物怖じせず談笑できるなんて、流石ジエームズだ。ぼくには一生掛かっても真似できそうにない。生まれ変わった自分に期待だなあ。

「やあ、秋じゃないか！」

ぼくが来たことに気付き、ジエームズが満面の笑みで手を振ってきた。ぼくは苦笑いして小さく左手を上げる。彼女——スマイサー先輩は、ぼくの反応を見てクスクスと楽しそうに笑うとぼくに微笑みかけた。

「こんにちは。あなたが、幣原秋くん？」

「あ……はい」

ぺこりと頭を下げる。上品に笑ったスマイサー先輩は「次の試合、よろしくね」と小首を傾げた。

そう言えば、次の試合はこの人とだっけ。おっとりとした優しい雰囲気があるが、しかしここまで勝ち上がってきた人だ、気は抜けない。

「やあ、皆集まったかね？」

そんな声と共に、数人の大人が小部屋へと入ってきた。何人かは大きなカメラを持っている。新聞記者の人だろう。最初に入ってきた人はぼくらにっこりと笑みを振り撒いたものの、ふと眉を顰めた。「おや？ 一人足りないようだね。えっと、誰かな……おつと！」

そこで彼は大袈裟に手を叩くと「彼がいないじゃないか！」と叫んだ。

——彼？

「……ライ・シユレディンガー」

スマイサー先輩は静かな声で呟いた。その名前を聞き、ジェームズは楽しみに口の端を吊り上げる。

「前回の大会の、優勝者さ」

ジェームズの言葉に、ぼくはやつと勘付いた。

三年に一度の大会。四年生から出場可能だということ。そして、前年度の優勝者は四年生。

と言うことは、前回の優勝者は今は七年生——在校生だ。今年の大いに出ているもおかしくない。

「申し訳ございません、遅くなりました。ミスター・シユレディンガー、早くお入りなさい」

その時扉が開いて、マクゴナガル先生と一人の男子生徒が姿を現した。

グリフィンドールの制服を細身の身体に纏っている。柔らかそうな濃い茶色の髪に、その髪色と同じ色の瞳は、眠たげに半分ほど閉じられていた。

「ライ！ 遅いじゃないか、集合時間をもう十分も過ぎているぞ！」

「……すみません。研究してたら、忘れてました」

「全く……相変わらずだね、君は」

そう受け答える彼を、スマイサー先輩とジェームズはじつと見つめていた。スマイサー先輩は真面目な顔で、ジェームズは楽しそうな笑みを浮かべて。二人につられて、ぼくも記者の人と話している彼を見る。

——と。

唐突に、何の前兆もなく、ライ・シュレディンガー先輩は振り返ると、真っ直ぐにぼくを見つめた。思わず硬直するぼくに構わず、二、三度瞬きをしたシュレディンガー先輩は、ぼくから視線を外しては、何事もなかったように再び記者の方に向き直った。

緊張で、心臓が激しく脈打っている。左手を胸に当てて息を吐いた。

今のは……今のは、なんだ？

スマイサー先輩やジェームズにはちらりとも目を向けなかったのに、ぼくを——ぼくだけを見据えたことに、一体何の意図が、意味が存在する？

……その時のぼくには、いくら考えても分からなかった。

取材は十分そこで終了した。主に問いかけられていたのはシュレディンガー先輩で、彼はボソボソと小さい声で受け答えしていた。あまり喋るのに慣れていないような話しぶりで、ぼくの周囲の人に誰が一番似ているかと言われたら……ううん、悩んだ挙句のピーターだろうか。

しかしその十分そこのインタビューでも、シュレディンガー先輩について少しは知ることができたと思う。

前回の魔法魔術大会にて四年生ながら優勝。その後、弱冠五年生で『魔法医学への誘い』に論文が載り、魔法医学学会に最年少で入会。様々な革新的な医学体系を発表し続けており、研究が滞っていた医学界に新しい風をもたらす新星。卒業後は既に、国内最大手の研究機関に進むことが決定しているという。

「ライ先輩は確かに凄い人だよ、ああ。いつつも研究室に籠りっぱなしでさ。冴えない見た目はしてるけどね。気を遣えばかなり良くなるのに、興味の無いものには無関心なんだ。……だが、研究に見た目は関係ない。……ひゅーっ、カツコいいよねえ。クラスメイトの誰も手の届かない高みに、一人悠然と座っているんだぜ？」

ジェームズは朗らかに笑った。ぼくは首を傾げて言葉を返す。

「君だって、誰も手の届かない高みに悠然と座つてると思うけど？」

ジェームズよりも頭が良い奴なんて、同学年の中には誰もいないよ」

ジェームズはぼくの言葉に「……そりやどうも」と返した後、小さく息をついた。

「自覚がないから、ライバル視すら敵わないんだよな……」

「どうしたの？ ジェームズ」

「なに、秋は相変わらず可愛いなと思っただけさ」

「いつまでそんな頭がおかしいこと言ってるのさ」

そんな他愛もないことを数言交わした後、ジェームズと別れ寮へと帰る道すがらのことだ。

誰かが走り寄る足音に振り返ったぼくは、駆け寄ってきたのがシュレインガー先輩だったことに目を瞠った。思いも寄らぬ人物にぼかんとしている間にも、ぼくの前で足を止めた先輩は、走って乱れた息を整えている。

「幣原……秋」

「は……はい？」

じつと瞳の奥を見据えられ、目を逸らす訳にもいかずにぼくはただ狼狽えた。ぼくの心を見透かさなばかりに、茶色の瞳は真っ直ぐにぼくを射抜いている。

「……気をつけろ」

「えっ？」

そこで、シュレインガー先輩は少し咳き込んだ。よく見ればまだ呼吸が荒い。運動は苦手なのかもしれない。確かにインドア的な雰囲気は醸し出している。

「お前は、俺と同じだから」

そこでやっと先輩はぼくから目を逸らした。空中をしばらく睨んでは、目線を落として続ける。

「……俺が、何を言っても意味はないんだろうけど」

「な……何を」

「きつと……無駄なんだろうけど。……だけど、同じだから」

「同じだから」と、先輩はもう一度繰り返した。

何が、同じなんだ？

先輩と、ぼくは。

「……………いや、やっぱりいい」

しかし、シュレディンガー先輩はそこで静かに首を振った。

「引き止めて、悪かった」

淡々と言い、踵を返す。

「…………俺が、勝てばいいだけの話だ」

先輩がそう呟くのが、確かに聞こえた。

「…………あのっ！」

先輩のその言葉に、決して苛ついた訳じゃない。

ぼくは四年生で、シュレディンガー先輩は七年生。実力差はあり過ぎて、ぼくがこの先輩に勝てるなんて到底思えない。

しかも、ぼくとシュレディンガー先輩が当たるのは決勝での話だ。次の準決勝で、ぼくがスマイサー先輩に負ける可能性だって大いにある。

だから——ここで言い返したのは、ぼくのちっぽけな意地、プライドだったのかもしれない。

「ぼく、頑張りますからっ……………！ 負け、負けません、から……………！」

ぼくにだって意地がある。プライドがある。

ここまで勝ち残ってきた誇りがある。

ぼくの言葉に、シュレディンガー先輩は足を止めた。ゆっくりと、振り返る。

「…………俺に、勝つ？」

先輩の瞳が、ぼくを映した。

「面白い」

瞳に、攻撃的な光が灯る。

にやりと、先輩は笑った。

「…………流石、エリスに勝っただけのことはあるな…………『呪文学の天才児』、楽しみにしてる…………。パスカルに負けるんじゃないぞ、秋」

ぞくり、と、肌が粟立つ。

絶対的王者の貫禄、というか。

ずっと頂上に座っていた人物にしか出せないオーラというものを、確かに感じた。

「……それがお前の選択なら。俺は、それに従おう」

先輩の言葉の意味が分かったのは、それからずっと後のことだった。



気付けばホグワーツにもクリスマスがやって来ていた。

今年のクリスマス休暇もホグワーツに残っている生徒はほとんどいないものの、それでも校内はクリスマスのデコレーションで華やかだ。そんな中、ぼくは今年もまたフリットウィック先生と一緒に廊下の飾り付けを行っていた。

「ふんふんふふーん♪」

楽しそうに鼻歌を歌いながら、フリットウィック先生は杖を振りつつちよこまかと歩いて行く。先生が歩いた後の廊下には、柵ひごらぎやヤドリギが編み込まれた赤と緑のリボンが張り巡らされていた。

先生の後について歩くぼくは、鎧や肖像画に装飾を施していく。一年の時にフリットウィック先生直々に頼まれたこのお手伝いも、もう今年で三回目だ。もはや恒例と言っていいたいだろう。

「どうです、勉強の方は進んでいますか？」

「まあ……なんとか」

フリットウィック先生の言葉に、ぼくは思わず苦笑した。

宿題、予習復習の量、どちらもクラスメイトの誰より多いものの、何とかこなすことはできている。分からないところも、先輩に訊けば快く教えてくれるしね。教え合う環境が既に出て上がっているレイブンクローに來られて良かった。

「それよりも、体感時間の方が慣れるまでに苦労しましたけど」

「それもそうですね。どうです、一日が三十時間もある生活は？」

「滅茶苦茶ですよ。時差ボケなんて目じやないくらい。変な時間に眠

たくなるし、変な時間に目が覚めるし、お腹空いてない時にご飯は出るし、かと言ってお腹が空いても何も食べられないし」

おかげで、厨房に大分お世話になる羽目になったことは秘密だ。
フリットウィック先生は穏やかに笑った。

「今年の時間割は少しゴタゴタありましてねえ、時間がなくて急いで作って、後から見返して「しまった！」なんて……安心してください、来年からはそうはならないように気をつけましょう」

「ま、全教科履修することについて不満はないんですが」

レイブンクロー生にとつて、知識が増えるというのはこの上ない喜びでもある。ぼくも根っからのレイブンクロー生だということかも知れない。

広い学校内をぐるりと一周した時には、外はもう夕闇に染まっていた。

「アキくん、今日はありがとうございました」

「いえ……あの」

少しだけ口籠った後、ぼくは意を決して口を開いた。

「先生。幣原秋は闇祓いに入るべきではなかったと、そう思いますか？」

フリットウィック先生は目を瞪ると、黙ってぼくを見上げる。

「そうは思いません。時代が時代でした……ですが、私個人の、彼を見守ってきた教師として——彼の友人として言わせてもらうならば」

闇祓いには入って欲しくなかった。

先生はそう言った。

「……ありがとうございます」

「ああ、アキくん。これ、手伝ってくれたお礼です」

そう言ってフリットウィック先生が『出現』させたのは、両手で抱えるほどのサイズの四角い箱だ。受け取って中を覗いたところ、ケーキが二切れ入っていた。ショートケーキとチョコレートケーキだ。

「わあっ、ありがとうございます……でも、二切れ？」

「生徒の恋路を見守るのも、教師の務めですからね」

「え……」

思わず絶句したぼくに構わず、フリットウィック先生はこれ見よがしに呟いてみせた。

「今年も大勢の生徒がクリスマスに実家に帰ってしまったみたいですが……そう言えば珍しくも、スリザリンのアクアマリンさんは Hogwartsに残っているようですね。そうそう、私、この間の呪文学の授業で殊更素晴らしく炎を『凍結』させたアクアマリンさんに点数を与え忘れていたのを思い出しました。アキくん、申し訳ないのですが、アクアマリンさんにこちらの一切れを差し上げてくれませんか？」

「……全く、もう」

ぼくは苦笑すると、少し目を伏せ頷いたのだった。

第25話 自覚

準決勝、第一試合。

グリフィンドール七年生代表ライ・シユレディンガー対グリフィン
ドール四年生代表ジエームズ・ポッター。

前試合でのぼくとレインウオーター先輩のように、奇しくも同寮の
先輩後輩対決となってしまったこの試合は、わずか十五秒で幕を閉じ
ることとなる。

勝者——グリフィンドール寮七年生、ライ・シユレディンガー。

敗者——グリフィンドール寮四年生、ジエームズ・ポッター。

まさしく一瞬、これぞ瞬殺。

後輩だからとか同寮だからとか、そんな情けや容赦を微塵たりとも
見せることなく、シユレディンガー先輩はジエームズを完膚なきまで
に叩き潰した。

負けたジエームズに、ぼくは何と声を掛けたらいいか分からなかつ
た。

その気持ちはシリウスやリーマス、ピーターも同じらしい。観客席
で一緒に応援した後、ジエームズを迎えに舞台裏で待つ間も、口を開
く者は誰もいなかった。

「……ジエームズが、まさか負けるなんてな」

最初に沈黙を破ったのはシリウスだった。

「考えたことなかったよ。あいつが負けるどころなんて」

「……でも、負けた。あれが実力の差であり、そして……学年の差、な
んじゃないかな」

そう発言したのはリーマスだ。

「ジ、ジエームズはまだ四年生なんだし……そんな気を落とすことは
ないというか……むしろ、ここまで勝ち上がったことを称えるべきだ
と……僕は思うな……」

おずおずとピーターも呟く。

ぼくはそんな彼らの会話に入らずに、ただじつと、先程の試合の十五秒間を思い返していた。

シュレディングー先輩が杖を振ったあの瞬間に、全てが決まっていた。ジエームズが油断していた訳じゃない。むしろ思いつきり警戒していただろう。ジエームズは、真剣である時ほど笑って臨む人だから。

そんなジエームズが、呪文の一つもまともに通せず、あっさりと負けた。

「……………」

魔法使いの決闘は、お互いの手の読み合いから始まる。特に本戦では、誰もが無言呪文を使ってくるから、次にどんな系統の魔法が来るかを見極めることはとっても重要だ。反対呪文で打ち消すか、防御呪文を展開させるか、はたまた力づくで押し通すか、選択肢は多い。

打ち消された後、直後にどれだけの威力の魔法式を組めるかも大切だ。状況を見極めるクレバーさと、何事にも動じないニユートラルで柔軟な思考回路。この二つが不可欠となる。

ライ・シュレディングーは、そのどちらともを手にしている。

「……………」

レインウオーター先輩に使ったような目くらましは、あの人には絶対に通用しない。じゃあ、一体どうすればいい？　どんな手段で、あの人に立ち向かっていけばいい？

——勝利のビジョンが、全く見えない。

……勝てつこない。

ジエームズがあんなにもあっさり負けた相手だぞ。勝てる訳がない。

「…………秋？　秋！」

名前を呼ばれて、ぼくはハッと我に返った。見ればピーターが心配そうな表情でぼくを見ている。

「…………大丈夫？　思い詰めてるような顔をしてたけど」

「…………ああ、うん。大丈夫だよ」

無理矢理笑ってみせた。ピーターから目を逸らす。

——勝ちたい。でも、無理だ。

ジェームズを倒した相手に、ぼくなんか勝てる筈ないじゃないか。

ここまで来られたのも、ただ運が良かったからだ。最後の四人に残れたんだぞ？ それだけでも凄いことだよ。

その時、こちらに近付いてくる足音が聞こえた。ジェームズかと、ぼくらは近付いてくる相手を待ち構えたもの——違った。

「……………」

シリウスが、リーマスが、ピーターが、それぞれ息を呑む。

ライ・シュレディンガー先輩だ。ただただ無表情で、足元を見つめたまま歩いてくる。全く顔を上げようともしないため、てつきりぼくらの存在に気付いてない——のかと思っていたが、実際はちゃんと認識していたらしい。

ぼくらの前を通り過ぎた後、足を止めたシュレディンガー先輩はぼくらを——ぼくを振り返った。

「……秋」

「……シュレディンガー先輩」

「ライでいい。……長いだろ」

そう言われ、ぼくは思わず驚いてしまう。

まさかシュレディンガー先輩の側からファーストネーム呼びを推奨されるとは。でも思い返せばこの人、ぼくのことを最初から名前と呼んでいた訳だし、前試合でぼくと戦ったレインウォーター先輩のことも、確か『エリス』と名前呼びしていたっけ。案外気さくな人なのかもしれない。……見えないけど。

「……ライ、先輩」

「怖いのか？」

直球で尋ねられ、心臓が強く脈打った。

「……怖いです」

迷った末、率直にぼくは伝えた。

「そうか」

「……………って、ちよつと!?!」

いきなりライ先輩に腕を掴まれた。そのままライ先輩は、シリウス達に口を挟む暇すら与えることなくスタスタと歩いて大広間を抜ける。

しばらく廊下を歩いた後、ぼくらは小さな空き教室に辿り着いた。学校の備品がごちゃごちゃと雑多に積み上げられている部屋だ。しばらく誰も使っていないようで埃っぽい。肩を寄せたライ先輩が軽く杖を振った途端、部屋中全ての窓がパツと開き、教室内に籠っていた空気がさあつと流れて行った。

ライ先輩が近くの机に腰掛けたのを見て、ぼくもおずおずと手近にあった椅子に座る。そのまましばらく無言の時間が流れた。

……き、気まずい……。

「……ジエームズは、お前の友達だと……聞いたんだが」

「え？ あ……はい」

またまた無言。……しまった、今のはぼくがもう少し話題を広げるべきだった。肯定するだけじゃ会話なんて成り立たないだろうぼくは馬鹿か！

「……あ、あの！ ライ先輩はどうしてこの前、ぼくを見たんですか？」

この間をなんとかしなくちゃという一心で、とりあえず口を開いた。いいものの、ライ先輩は目を瞬かせるばかりだ。確かにこの質問じゃ、何のことを言ってるのかさっぱり分からない。

「えっと、新聞社の取材の時……いきなり、振り返りましたよね……？」

そして、ぼくの気のせいかもしれないんですけど、ぼくを見たように感じた……んです」

「……ああ」

ライ先輩は得心いったように頷いた。

「あれは、別に……ジエームズは寮の後輩で知ってる奴だし、パスカルは前話しかけられた。あの中で知らない人間は、お前一人……だったから」

「あ……そうですか」

聞いてみれば、案外なんでもないあつさりとした答えだった。思わ

ず拍子抜けする。

「それに、お前だけ心の内が、全く読めなかった……から」

「……え？ 心の……何ですか？」

「……心の内」

ライ先輩の濃い茶色の瞳が、ぼくを真っ直ぐに射抜く。

「前……俺とお前が同じだからって、言っただろ？」

小さく頷く。ライ先輩は軽く逡巡した後、口を開いた。

「秋、お前は杖を使わずとも魔法が使えると聞く。お前ほど派手じゃないが、俺も、他人が使えない力を持っている」

「そ、それは……？」

「……他人の考えていることが、分かるんだ」

ザアツと、外で一際強い風が吹いた。教室内に冷たい風が吹き込み、ぼくは思わず身震いする。

「……凄いい」

「……どうして、そう思う？」

素直に漏れた言葉を、ライ先輩は静かに追及してきた。ぼくは戸惑いながらも口を開く。

「だって……人が考えてることが分かるんだったら、いろいろ便利だし……だって……」

あれ？ と、言いながらぼくは首を傾げた。

便利？ 確かに便利には違いない。でも、人の言葉によって装飾されていらないむき出しの感情は、時に相手を酷く傷つけてしまうこともある。自分が『これは言っちゃいけない』と、たとえ思っても言葉に出すのを自重するようなあれやそれや……そういうものも全て受け取ってしまうことになるんじゃないか？

「……人の心というのは、とにかく煩い」

ライ先輩はそつと口を開いた。ぼくから視線を外すと、窓の外に目を向ける。

「騒がしくて、煩わしい。……秋。お前も、同じような経験がないか？」

「……同じような、経験」

「こんな力、消えてしまえばいいのにつて、思ったり」
「……………」

言葉に詰まった。唇を噛んだ後、ゆっくりと首肯する。
「大きすぎる力は、人を傷つける。絶対に。他人を、そして自分を、どうしようもなく滅茶苦茶にってしまう」

他人の考えていることが全て分かったら、一体どんな気持ちだろう。

ぼくは目を伏せ、想像を巡らせた。

知りたくなかった友人の気持ち、人の原始的な感情が、自分の心まで押し寄せてきたとしたら？

耳を塞いでも聞こえてくる喧噪に、耐えられなくなったとしたら？

『ライ先輩は確かに凄い人だよ、ああ。いつつも研究室に籠りっぱなしでさ』

先日ジエームズから聞いた言葉が蘇る。

そりゃあ、籠りたくもなるだろう。たった一人でいることこそが、ライ先輩にとっての安息なのだから。

「でも、お前の心の内は、読めないから……………安心する」

「どうして……………ですか？　なんでぼくだけ……………」

ライ先輩は、そつと微笑んだ。……………ように見えた。表情の変化が希薄なので、いまいち分かりづらいものの……………。

「お前が、日本人だからだ。……………俺には日本語が分からないから。ヒツポグリフ語やふくろう語が分からないのと同じ理屈だな」

ひ、ヒツポグリフやふくろうと同列に語られてしまった……………。

気を取り直す。

しかし、なるほど、日本語か……………盲点だった。

確かにぼくは、思考自体は日本語だ。口から出す言葉を直前で英語に翻訳して喋っている。

それはもう慣れたもので、今では唐突に後ろから飛びつかれたとしても、咄嗟に英語が出てくる自信はある。

でも、心の内で自分の考えを整理したりする時や、独り言なんかは日本語だ。ライ先輩が言っているのは、そこか。

「だから、お前は有利なんだ」

「え？」

「……決勝。お前と戦うだろ」

話が見えず、ぼくは首を傾げた。シュレディングー先輩は話し疲れたとばかりに大きいため息をついたものの、何とかちゃんと喋ってくれた。

「お前の心の内は読めない。だから、俺が先手を取ることはできない。対等……いや、むしろ、お前はいつも通りなのに対し、俺は読めないお前と戦う訳だから、お前が有利なのは間違いないんだ、秋」

「あつ……」

丁寧の説明され、やっと理解できた。

ぼくが、ライ先輩に、勝てる……

……かも、しれない。

いや、でもその前に、スマイサー先輩との準決勝が残っているんだけど……。

「……パスカルのことを考えているのか？　そうか、準決勝で当たるからな」

……考えを見透かされたのかと思ったものの、ぼくが単純なだけかもしれない。

「だが……エリスを振ねじ伏せたお前のことだ、きつと大丈夫だろう」

「エリス……レインウォーター先輩のこと、ですか」

「……今、闇祓いに入るということが、一体どういう意味を持つか、分かるか？」

唐突に尋ねられ、ぼくは目を瞬かせた。

ライ先輩はぼくの答えを期待してはいないようで、勝手に喋り始める。

「殺す覚悟と、殺される覚悟……そんな戦場に身を投じる覚悟があるエリスを、俺は尊敬してた。俺にはないものだから……そんな覚悟は、俺にはできないから……」

ライ先輩の瞳に昏くらいものが一瞬よぎった、気がした。……気のせいかもしれない。

「覚悟した人間は、強いんだ。自分はどのように生きるのかを決めて、それだけを目指して進んでいける……そんな人間に勝ったお前は、もっと自分のことを、誇っていい」

「……………」

「……時間を取って、すまなかつたな」

そう言つて、ライ先輩はゆつくりと机から腰を上げた。慌ててぼくも立ち上がる。そのままライ先輩は、ぼくに背を向け教室から出て行くとした。

「ライ先輩」

その背中に声を掛ける。

「先輩は……どうして、魔法医学の世界に入ったんですか？」

ライ先輩は、ぴたりと足を止めた。

「……俺には、エリスみたいな覚悟がなかったから、かな」

ライ先輩はそれだけを言い、今度こそ教室から出て行った。

教室から遠ざかっていく足音を、ぼくはただ聞いていた。



フリットウィック先生にあそこまでお膳立てされちゃ、仕方ない……。

ぼくはハリーから借りた『忍びの地図』を手に、廊下を歩いていた。将来の幣原秋は——いやぼくにとっては過去の話だけでも——こんな素晴らしい地図を作ったのかと考えると、何と云うか、すっごいよなあ。

この地図は、ぼくの心に喜びと、そして悲しみをも引き起こす存在だった。あの頃の努力がこうして実ったことを喜ぶ気持ちと……それを思い起こす時に、同時に思い出させる、シリウス・ブラックの存在に沈む気持ちと。

……と、今はそれどころじゃない。フリットウィック先生から頂いたケーキ、これをアクアに渡さなければ。

……生徒間の恋愛事情って、案外先生に筒抜けなんだよなあ……。

「……………」

アクアは一人でスリザリン寮の談話室にいるらしい。寮の合言葉なんて分からないし、入れないよなあと思った瞬間、忍びの地図はなんと優秀なことに、合言葉らしき言葉を吹き出しと共に浮かび上がらせやがった。なんて無駄に高性能。

ついでに目を凝らし、ドラコの名前が地図のどこにも見当たらないことも確かめておいた。ドラコは毎年クリスマス休暇は家族と過ごしているから、いないと分かっているもの、念の為に。

スリザリン寮に近づくにつれ、徐々に足が重くなる。なんてことはない、ぼくは、アクアと会うことに躊躇っているのだ。

「……………」

頭を強く振って気を取り直す。アクアは友達だ。向こうも友達だと思ってくれている。

友達に会いに行くのに、何も遠慮することなんてない。

友達、友達、友達なんだ。

スリザリン寮の前まで来た。この間に誰とも会わなかったとは、ホグワーツも随分と人が減ったものだ。

……そう言えば、アクアの弟であるユークはこのクリスマスに実家に帰っていた筈だけど、アクアは帰らなかつたんだな……どうしてだろう？

スリザリン寮の前で合言葉を唱えると、入口がスルスルと開いた。中に入るのは流石に躊躇われたので、大きな声で「アクアー!」と呼ぶ。姿は見えないけれど、地図を見る限り声が届く距離にはいる筈だ。

アクアが来る前に、杖で地図を叩いて「いたずら完了!」と呟く。ただの羊皮紙に戻った地図をローブのポケットの中に畳んで突っ込んだ。

「……………あなたにとって寮の壁というのは、そんなに薄いものなのかしら」

「いや、そんなことはないんだけど……………ごめん」

アクアは咎めるような視線でぼくを見た後、小さく肩を竦めた。

「……………どうしたの?」

「えつと……フリットウィック先生からケーキを頂いてさ。一緒に食べない？ アクア、甘いもの好きだったよね」

この前好きな食べ物を尋ねた時、返ってきた答えはレモンタルトとアップルパイだった。ならばショートケーキとチョコレートケーキも好きな気がする。

そんな予想通り、アクアの表情がぱあつと明るくなった。可愛い。「……どこに行くの？」

「アクアがこの前言ってたテラスに行ってみたいな」

アクアは嬉しそうに微笑むと「……こつちよ」と言って歩き出した。ぼくはアクアの半歩後ろをついていく。

アクアが誘った先のテラスは、日当たりが良くて光がさんさんと降り注ぐ場所だった。

大きな窓ガラス越しに、真っ白な雪に覆われた中庭が見える。また雪がちらつき出したようだ。舞い落ちる雪は、太陽の光を反射してキラキラと輝いている。

ぼくとアクアは外に一番近い位置のテーブルに腰を下ろした。杖を振り、ケーキの入った箱と、厨房で失敬してきたバタービールを『出現』させる。アクアは感心したように声を零した。

「……相変わらずね。出現魔法なんて、確かOWLレベルじゃなかったかしら？」

「褒めても何も出ないよ？ ぼくが誇れるものなんて、これしかないしね」

ショートケーキとチョコレートケーキのどちらがいいかアクアに訊くと、アクアはショートケーキを指し示した。それならばとぼくは自分の方にチョコレートケーキを引き寄せ、バタービールのグラスで乾杯をする。

「まさか、アクアがクリスマスにホグワーツに残ってるだなんて思いもしなかったよ。ユークは家に帰ったみたいなのに、一体どうしたの？ 何かあった？」

「そうね……特に理由はないのだけれど。強いて言えば……ちつちやな反抗、かしら」

「ん？ 何に対しての？」

「家に、対しての」

物憂げにアクアは目を細めた。そんなアクアを黙って見つめた後、ぼくは口を開く。

「あの……さ。嫌じゃなかったら教えて欲しいんだ……君が、ずっと悩んでいることについて」

「……悩み」

「わだかまり、と言ってもいいかもしれない。君はもしかして、何か家族に対して思っていることがあるんじゃないかな？」

「……」

アクアはフォークを皿に置くと、目を伏せた。

「……何から話していいか、分からないけれど」

「うん」

「……聴いてくれる？」

「もちろん」

「……っ、わたし——私は」

私は、闇の帝王が嫌い。

そんな言葉で、アクアの話は始まった。

純血主義の家系も。

死喰い人の両親の思想も。

選民意識を持つスリザリンのクラスメイトも。

みんなみんな、大嫌い。

——でも、それよりも何よりも。

自分の思想を貫き通すこともできず、スリザリンは縛られて窮屈だけれども、安全と平穏が保証された生活を安穏と送り続け。

両親の迷惑だと分かってはいるけれども、自分の意志を曲げられない。

そんな中途半端な自分のことが一番嫌いなのだと、アクアはそう告白した。

「……私にも、選べた筈だった。それを選ばずに、ただ流されて、ただ守られてる……選ぼうと思ったなら、私だって選べた筈だったの……」

チャンスが与えられていたのを、私は見過ごしてしまった。

ユークは、それを選び取った……自らの意志で、スリザリンじやなくレイブンクローに行った。……その行動が一体どれだけの混乱を引き起こすのか、あの子には自覚がなかったのかもしれないけれど……でも」

もつと強く願えばよかった。

もつと強く望めばよかった。

現状から逃れたいと思っている癖に、目の前にいざチャンスが現れると怖気づき、現状に引きこもってしまう。

そんな自分が情けなくて、吐き気がするほど嫌いなのだと。

話はドラコのことにも触れた。

ドラコが自分を守ってくれようとしていること、それに何一つ応えてやれていないこと。

兄のような立ち位置のドラコに余計な心配は掛けたくないけれど、純血思想にどうしても反発してしまうこと。ドラコの優しさを知っているのに、思想が嫌になってぶつかってしまうこと。

「……私は、ずっとずっと、勇気が欲しかった」

ぼつりと、アクアは呟いた。

「……勇気ある人に、私はなりたかった。自分の意志で進む道を決めることができる、勇敢な人に、私はなりたかった」

——私には何もない。

グリフィンホールに入りたかった。勇敢さが欲しかった。

ハッフルパフに入りたかった。善良さが羨ましかった。

レイブンクローに入りたかった。賢明さを持ちたかった。

「真実の意味で、勇敢で、目的のために最高の手段を選べるスリザリン生になりたかった！」

大きな瞳に涙を浮かべて、アクアはそう言った。

「あ……アクア」

「……泣き言を語ってしまったって、ごめんなさい、アキ。ケーキ、とつても美味しかったわ……フリットウィック先生によろしくね」

そう言つて、その場から逃げるようにアクアは椅子から立ち上がった

た。出て行こうとするアクアの腕を咄嗟に掴んで引き止める。

「……何。何よ」

「アクア、ぼくを見て」

「……それ、は」

「今にも泣き出しそうな女の子を、放っておく訳にはいかないよ」

アクアの肩が震えた。ぼくに背を向けたまま、アクアは「……別に、泣き出しそうなんかじゃないわ」と若干鼻声で言う。この子は案外意地っ張りだな。

「アクア……ねえアクア。勇気ってさ、何だと思う？」

「……勇、気？」

「そう。勇気。ぼくはね」

そつと微笑んだ。

「勇気なんてものは、ちよつとした思い切りと同じだと思うんだ」

「……え？」

「ほら、階段をさ、せーのつで飛び降りるじゃない？ あんな感じ。ああ、女の子はあんまりそういうことしないかな。じゃああれだ、二年生の時にさ、マンドレイクの植え替えをしたでしょ？ あのマンドレイクを引っこ抜く感じ。ちよつとだけ気合を入れて、それってやんの」

「……それが、どういう」

「つまりさ、勇気なんてものは誰にでもあるものなんだ。君だってマンドレイク、引っこ抜けたでしょ？」

「それとこれとは話が……」

「全然違うさ」

アクアが振り返った。泣くのを堪えるように、奥歯を噛み締めている。

そんなアクアに、ぼくは優しく笑い掛けた。

「自分に勇気がないなんて、本当に勇気がない奴には絶対言えない台詞だよ。少なくとも、周囲の人達の誰もが正しいと思っていることを、君一人が、一人きりでずつと、それは違うなんて言い続けたこと自体、勇気があるとぼくは思うね」

白を黒と教え込ませる世界で、白は白だと信じ続けること。
それも、一つの勇気じゃないか。

それは一体、どれだけ孤独だったことだろう。挫け掛けた心を、それでも保ち続けた。

……それに……：……勇氣が欲しいのは、ぼくの方だ……。

ドラコから言われたことで、ウジウジずっと引きずって、悩んで、答えが出てこない問題をいくら悩んだって、羽根ペンが勝手に答えを出してくれることもないというのに、ぼくは……。

「……本当？」

アクアの顔がくしゃりと歪む。綺麗な灰色の瞳から、涙の雫がほろりと解けて。やがて堪え切れなくなった涙が、彼女の白い頬をそっと伝った。

その涙を見た瞬間、何故だか頭の中が真っ白になった。

咄嗟にアクアを引き寄せ、何も考えられないまま、無我夢中でアクアを抱き締める。細い肩を、小さな頭を、衝動のままに。

華奢で、繊細な硝子細工のような彼女の身体は、それでもぼくが強く抱き締めても、壊れなどしなかった。

今更——今更。

よく諦めるなんて思えたものだ。よく身を引こうなんて思えたものだ。

どう足掻いたって消せやしない。誰に何と言われようと、自分なりに諦めようと頑張ろうと、この気持ちを掻き消すことなんて出来やしない。

全く、全く——どうして、こんなに好きになってしまったんだ。

アクアのことが、ぼくは好きで好きで仕方がない。

アクアを誰よりも大事にしたい。誰かがアクアを守ってくれるのなら、それでいいなんて、ぼくには決して思えない。

ぼくが、ぼくこそが、アクアをずっと守りたい。

君には守れないなんて、言わせたくない。

この子を誰にも、渡したくない——。

ぼくの腕の中で、声を殺して、ぼくの制服を掴んで涙を零すこの少

女のことを――
誰よりも何よりも、愛おしく思った。

第26話 崩れる関係

「ほらっ、セブ、急がないと遅れちゃうわよっ！」

「君が言うな」との言葉を、セブルス・スネイプはすんでのところで飲み込んだ。

本日最後の授業は、グリフィンドルとスリザリン合同の魔法薬学だった。

魔法薬学を担当するホラス・スラグホーン教授は、セブルスが在籍するスリザリン寮の寮監でもある。魔法薬学の知識も豊富な素晴らしい先生なのだが、そんな彼にも欠点が一つある。リリー・エバンズをお気に入り生徒として可愛がりすぎるのだ。

勿論、恋愛的な意味ではない。リリーが魔法薬学でとびきりの才能を見せているのは事実だし、加えてあの可愛らしい容姿にさっぱりとした性格だ、惚れない人間などいないだろう。男子女子問わず万人に人気があるのが、自らの幼馴染であるリリー・エバンズだ。

しかし、それにしても授業終了後にリリーを相手にずっと語っているのはいただけない。しかも今日の放課後は、セブルスとリリー双方の親友である幣原秋が出場する魔法魔術大会の準決勝戦があるのだ。

試合を見に行くことは、リリーとわざわざ打ち合わせずとも決まっていた。リリーを待つことを不自然に思われないように、殊更ゆつくり魔法薬の片付けをしていたというのに、まるでセブルスが遅いことを責めるかのようなその台詞はいただけない。

「本当、秋って凄いわ！ まさか上級生にも互角に戦えて、そして勝っちゃうなんて！」

大広間へ行く道すがら、リリーが楽しげに話しかけてくる。それに相槌を打ちながら、セブルスは時計を見た。後二分。

歩く速度を早めると、慌ててリリーが隣に並んだ。

「……今日も、勝てばいいね、秋」

「……ああ」

大きく頷いた。

大広間に到着したのは、ちょうどフリットウィック教授が「尊い騎

士道精神に基づき、正々堂々闘ってくださいね」と口上を述べている頃だった。観客はかなり多く、用意された座席以上に人がいて、立って観戦している人もちらほら見受けられる。

リリーはセブルスの手を引いて、すすいと人混みの中を抜けていった。人に躓きつまずそうになりながらもなんとかついていく。

対戦相手——パスカル・スマイサーと距離を取り、向かい合って杖を構えている秋は、目を閉じ集中しているようだった。人の目を気にしがちな秋は、しかし集中すると観客など見えなくなるらしい。実に、自由にのびのびと魔法を使っているようだった。

「行きますよ——いち、に——さん！」

フリットウイック教授の掛け声で、決闘が始まった。

本戦の準決勝ということもあり、かなりレベルが高い。無言呪文などまづもって四年生ができるような代物ではないのだ。それを連発するなんて以ての外。それを、秋は平然とやってのける。

——敵わないと苦笑した。

魔法の火花が飛び散るたびに、辺りからはどよめきが起きる。観客席は魔法で守られているものの、魔力が自分達の方に飛び散るたびに悲鳴が上がった。

こうして観客席から見る限り、秋とパスカル・スマイサーはほぼ互角の戦いをしているようだった。お互い余裕のない表情でじりじりと呪文を打ち合っている。秋の魔法は通常の魔法使いの何倍も強いものだが、流石六年生の代表だけのことはある。スマイサーも上手に受け流し、秋の隙を狙って細かく呪文を放っていく。

声が聞こえる。壇上で戦う二人を応援する、観客の声だ。スマイサーの名前と秋の名前。どちらの声が大きいかわからない。セブルスに区別は付けられなかった。

秋を応援してくれる人がいる。そのことが、セブルスはどうしようもなく嬉しかった。

最初は、自分が守ってやらねばという思いからだ。

皆からの悪意に晒され、傷つき倒れそうな少年。自分が支えてあげなければ、彼はそのまま倒れ込んで、動かなくなってしまうそうだった。

た。

秋に手を差し伸べるような人間は、あの時はリリーの他に自分しかいなかった。だから手を差し伸べた。

秋を見ていられたなかったから。秋を助けられるのは、リリーと自分しかないと思ったから。

それが——歳月が経ち、あんなに儂げだった少年は、今こうして堂々と舞台に立っている。周囲から潰される原因となった魔力を良い方向に使えるようになり、誰からも評価されるようになった。そんな秋の成長が、何よりも嬉しかった。

他人を見てこんなに暖かい気持ちになるのは、初めてだった。

これからずっと、秋とリリーと自分、三人で生きていけたなら——らしくもなく、そんな夢物語を夢想するくらいには。

「……ねえ、セブルス」

しかし、そんな思いは、あまりにもあっけなく破壊される。

「ん、何だ？」

隣にいたリリーは、小さく頭を振ると、ゆつくりとセブルスを見上げた。

「あのね」

囁くような声が、セブルスの鼓膜を震わせる。僅かに潤んだ瞳を直視できずに視線を下げた。

「私ね——秋が好き」

——辺りの喧噪が、一瞬にして消え去ったかのよう。

頭の中が真っ白になって、何も考えられなくなる。

キーンと、脳味噌の内側に響く耳鳴りを感じた。

「……え」

ただセブルスは、間拔けな声を漏らすのが精一杯だった。

リリーは照れたような笑いを浮かべ「……何、その顔は」と、セブルスの額を軽くつついた。反射的に額を押さえる。

「……す、好き、とは」

「もう、言わせないでよ、セブったら意地悪ね。……秋が好き」

呼吸すら忘れていたことに、ようやく気付いた。

吸う。吐き出す。吸う。吐き出す。

落ち着け、落ち着け落ち着け落ち着け。

動揺を悟られるな。絶対に気付かれるな。

目の前の彼女だけには、知られるな。

「……そうか」

「……うん」

「応援するよ」という言葉は、確かに自分の口から零れた筈なのに、どうにも自分の声だとは思えなかった。

僕は何も驚いちゃいない。

僕は何も動揺しちゃいない。

僕は何も感じちゃいない。

僕は、何も――

「……秋はいい奴だからな。あんまり、あいつに迷惑かけるなよ」

――僕は、何を恨めばいいのだろう。

何を悔やめばいいのだろう。

何を、憎めばいいのだろう。

リリーも、秋も、二人とも自分にとって、確かに大事な友達で……。

大事な、友達で……。

「あぁっ、秋っ！ ……はー、良かった……」

………友達？

友達って、何だっけ？

寮も違う。思想も違う。それなのにどうして僕は二人と馴れ合っているんだ？

お前の隣にいる少女は、マグル生まれの『穢れた血』だ。

お前の視線の先にいる少年は、ほんの三年前に手に余る魔力を暴走させ、クラスメイト数人に重傷を負わせた奴だ。

――それだけじゃない。

秋は以前、セブルスの思想を完全に否定した。受け入れたくもないと頑として認めはしなかった。

理解ができなかった。秋ならば合理的な方を選ぶと信じ切っていた。まさか「嫌なものは嫌」と感情論に走るとは。やはり分からない。分かり合えることはないのだ。

……何故、自分はグリフィンドールの少女の隣にいるのだろうか？
入学してからずっと、寮ぐるみで対抗心を燃やしてきた。ライバル、など生温いものじゃない。グリフィンドールはスリザリンにとって『敵』なのだ。

しかも彼女の両親はマグルだ。自分達が憎んで仕方のない『穢れた血』。

穢れた血は魔法界には必要ない。むしろ邪魔なものでしかない。

「わあっ、ねえセブ、今の見た？ 秋、すっごいわね！」

その時、リリーがセブルスの制服を掴んだ。我に返りリリーに視線を向ける。リリーは同意を求めるかのように、目を細めてにつこりと微笑んだ。

その笑顔にどうしようもなく心臓が跳ねる。言葉にならない複雑な感情が、胸中で嵐のように荒れ狂う。

「……ああ……そうだな」

そう、言葉を返すだけで精一杯だった。

気付けば試合は終わっていた。

魔法魔術大会本戦準決勝、第二試合。

勝者——レイブンクロウ寮四年生、幣原秋。

敗者——ハツフルパフ寮六年生、パスカル・スマイサー。

秋を見に来た筈なのに、ずっと見ていた筈なのに、セブルスは試合の内容を思い出すことができなかった。



……やらかした。

それがぼくの忌憚ない正直な意見だった。もうアクアの顔をまともに見られない。魔法薬の大鍋に頭から突っ込みたい。教授の研究室を訪問した際は、突発的に大鍋に頭から飛び込もうと……血相を変

えた教授に止められていなかったら、一体どうなっていたことが……
あうう。

そしてリーマス。クリスマスシーズンと満月が重なったのはなんだか不憫だった。教授に命じられ、ぼくはリーマスの元へとせつせと薬を届けたのだが……よくよく考えるとぼく、教授に良いように使われてるな？　ぼくを緩衝材にしないでくださいーい。

やつれたリーマスは、それでもぼくの訪れを歓迎しては、ハニーデュークスのお菓子詰め合わせセット（クリスマス仕様）をプレゼントしてくれた。

残りのクリスマス休暇の期間は、ぼくは主にハーマイオニーと図書室でバックビークの裁判のための準備と勉強で時間を潰した。ハーマイオニーはぼくの態度からすぐさま何かを察したようだ。ぼくはハーマイオニーにアクアとのあれそれをあらかじめ白状させられてしまった。……閉心術でも学ぼうかとぼくは真剣に考えている。

ハーマイオニーも徐々に疲れが見えるようになり、最近はずりずりとする時間が多くなった。先日はそれでハリーやロンとも喧嘩をしたらしい。

ロンはともかくハリーは珍しいなと思っていると、後日ハリーから詳細を聞くことができた。なんでもハリー宛のクリスマスプレゼントに無記名でファイアボルトが送られてきたらしく、喜ぶハリーとロンを尻目に、ハーマイオニーはファイアボルトがシリウス・ブラックからの贈り物なのではとマクゴナガル先生に進言したのだと言う。マクゴナガル先生にファイアボルトを没収されたと、ハリーは大層嘆いていた。……ううん。

加えて、ハーマイオニーが飼っているクルックシャンクスが、ロンのペットのスキヤバーズを食ってしまったのだとか……そんなあれそれもあり、グリフィンドール仲良し三人組は今ギスギスしているらしい。

ハリーはハーマイオニーが最近怒りっぽいのを不思議に思っているようだ。それも、タイムターナー逆転時計の影響なのは間違いない。時をこうも頻繁に遡っていては、頭がおかしくなってしまう。

人間は、時という何者にも勝る叡智の前では、ただただ流されるしかないのだろう。弄ったりなんてもつての外ほかだと身をもつて学べただけでも……良くはない。成長期なのに睡眠時間が確保できずにぐっすりと眠れないのは弊害だ。関わってくるだろう、何とは言わな
いまでも。

という訳で、クリスマスが明けた新学期。最近の占い学は、ぼくにとつて絶好の睡眠時間だった。いくら目を凝らして水晶玉を見つめようとも、どうせ何も見えつこないのだ。ならば目を開けていようが閉じていようが一緒じゃないか……むにやむにや。

「いい加減にしてよー！」

ハーマイオニーの大声でぼくは目を覚ました。アリスも眠たそうな目を瞬かせて顔を上げる。

「また、あのバカバカしい死神グリムじゃないでしょうね！」

トレローニー先生は無言でハーマイオニーを見、すつくと立ち上がった。驚いた、この先生がこんなに機敏な動きを見せることがあるなんて。

「まあ、あなた。こんなことを申し上げるのはなんですけど、あなたがこのお教室に最初に現れたときから、はつきり分かっていたことございますわ。あなたには『占い学』という高貴な技術に必要なものが備わっておりませんの。全く、こんなに救いようのない『俗』な心を持った生徒に未だかつてお目にかかったことはありませんわ」

トレローニー先生の言葉に、クラス中が沈黙に包まれた。

「結構よー！」

ハーマイオニーは金切り声で叫ぶと、ガタンと乱暴に立ち上がった。ハーマイオニーが座っていた椅子が後ろ向きに勢い良く倒れ、床にぶち当たり大きな音を立てる。それを気にも留めずに、ハーマイオニーは教科書を勢いよくカバンに詰め込んだ。

「結構ですとも！ やめた！ 私、出ていくわ！」

そしてその一体教科書が何冊入ってんだと言わんばかりにパンツパンにはち切れそうなカバンをグイッと掴むと、ハーマイオニーは跳ね上げ戸を蹴飛ばし、はしごを下りて出て行った。

「……すっげえな、あの才女様」

アリスがクツクツと笑っている。ぼくも他の生徒達と同じく呆然としていたものの、今日の逆転時計はハーマイオニータイムターナーが持っていたことをハツと思い出し、立ち上がってはパツと手を挙げた。

「先生！ 急な腹痛と頭痛と歯痛に襲われたので、医務室に行ってください！」

先生の返事も待たずに、ぼくははしごを飛び降りた。荷物をカバンに詰める暇なんてなかったものだから、教科書も手に持ったままだ。

「ハーマイオニー！」

ぼくの声に振り返ったハーマイオニーは、涙が零れる三秒前みたいな顔をしていた。流石に廊下で泣かれるのはまずいと、慌ててハーマイオニーの手を引き空き教室へと入る。教室の扉を閉めた瞬間、ハーマイオニーはぼくに縋って泣き出した。

「あーあーあー……うん。お疲れ、ハーマイオニー」

落ち着かせるようにハーマイオニーの肩を撫でる。

「ちよつと抱え込み過ぎちゃったんだね。あーつと……まあ、思いつきり泣いたらスッキリするよ。そしたら顔を洗って甘いものでも食べようか。次の時間は数占い学だっけ……ぼくらは皆勤だし、一回くらいサボっても何とかなるよ」

こくり、とハーマイオニーは頷いた。

「頑張るのもいいけど、気を抜くのも大切だよ。大丈夫、君は一人じゃない。ぼくがついてるよ。ハリーとロンだってきつと、君の力になりたいと思ってるんだ」

「……ごめんなきい」

「ぼく、謝られるようなことしてないよ。どうせもらうのなら、謝罪の言葉よりは感謝の言葉の方がいいな」

「……ありがとう、アキ」

どういたしまして、とぼくは微笑んだ。

第27話 気付けなかつた大きな過ち

呪文を唱え杖を振る。瞬間、黒い炎が噴き出した。——成功だ。
わつと喜びたい気持ちを抑え、大鍋の中を覗き込む。大鍋の底には
蠢く小さな物体——雛があつた。不恰好で醜い存在だが、確かに『命』
が宿っている。

『それ』はしばしプルプルと震えていたものの、時間の経過と共に動き
は弱まり、やがて力尽きては完全に停止した。

「流石セブルス、お前がいてこそだな」

「……僕は、ただ助言をしたまでだ。それよりもまだ『これ』には改良
の余地がある。もっと大型の動物……それらに適用させるにはどう
すればいいか、また長い期間『生存』させておくにはどうすればいい
か……」

賞賛され緩みかけた頬を、自覚的に引き締めた。

——まだまだ。もつと、もつと。

僕はどこまでだつていける。僕は皆に認めてもらえる。

動かなくなつた雛をじつと見つめた。杖を上げ呪文を唱えると、再
び黒い炎が雛を包んだ。炎が消えた暁、再び雛がピクピクと動き出
す。

昏い死から明るい生へと魂を引き戻す魔法——反魂はんこんの魔法だ。

魔法で生死を扱うことは禁止されている。これは闇の魔術の範疇
だ。

……だから？ だから何だと言うんだ？

天才とまで言われる魔法の才能を持つ秋に、自分は敵わない。自分
が一番得意な魔法薬でも、リリーには敵わない。成績なんて言わずも
がな——。

リリーと秋に認められたい。あの二人の傍にいても大丈夫だと胸
を張れる何かが欲しい。

そこで見つけたのがこれだつた。

母親は呪いやまじないに詳しかった。絵本や童話を読み聞かせて
もらう代わりに、自分はずつと母親からそういった類の話の話を聞かせら

れてきた。

闇の魔術——この分野であれば、自分にもアドバンテージがある。ふとジェームズ・ポッターの顔が脳裏に浮かんだ。軽薄そうにこちらを見下す笑みを浮かべるその顔を、こちらも思いつきり睨み返してやる。

あいつに、あいつらに負けたくない。何か、何か一つでも、あいつに勝てる部分が欲しい。

リリーと秋を守るような強さが欲しい。

そのためだったら、僕は何だってやってやる。

——間違いに気付く頃には、もう全て終わっていたんだ。



我が愛すべき最高の兄貴、ハリー・ポッターのおかげでグリフィン・ドールにクイディッチ優勝杯が授与された後、とうとうホグワーツにも呪われしその季節がやってきた。何を隠そう期末試験である。

今年も色々あったものの、期末試験に例外はない。秘密の部屋のような大事件が起こらない限りは試験も平常運転だし、ぼくも試験勉強に励まなければならなくなってきた。

五年生はOWLL、七年生はNEWTと呼ばれる魔法資格試験を受験しなければならぬ。それよりかはまだ気楽でいいものの、流石に十二科目分の勉強はつらいの一言だ。

ぼくとハーマイオニーは、ここのところずつと図書館で勉強していた。理由は簡単、お互いが同じ科目を取っているから分らないものにぶち当たった瞬間尋ねられるのだ。歩く辞書、教科書生き字引のハーマイオニーさんは頼りになります、本当に。

図書館で勉強しているのはぼくらだけじゃない。クリスマス休暇が終わってからというもの、様々な寮の人達が一心不乱に勉強しているのをよく見かけるようになった。少し離れたところではドラコとパンジー・パーキンソンの姿も見える。この二人は最近よく一緒にい

るのを見かけるな……代わりにアクアとドラコが一緒にいるのを見なくなった。

「そう言えば、バックビークの控訴裁判……六日に決まったのですって」

「……そう」

六日といえば、ぼくも期末試験が終わるその日だ。ぼくは積んでいる教科書の山から一冊のノートを引っ張り出した。

ハグリッドが裁判で勝てるよう、ぼくとハーマイオニーで作った虎の巻。とうとう日程が決まったのなら、こちらも今まで以上に気合を入れて取り掛からなければ。

「ハグリッド、勝てればいいのだけど……あら？」

ハーマイオニーはぐしやぐしやと髪をかき混ぜながら、ふと視線をぼくの後ろに向けた。パアツと晴れやかな顔で手を振り「アクア！あなたもお勉強をしに来たの？」と嬉しそうに言う。

アクアだと？ 慌てて振り返った。

「……こんにちは、ハーマイオニー。……アキも」

「二人？ なら、一緒に勉強しましょう？」

アクアもハーマイオニーに軽く手を振り、こちらに近寄ってくる。ううつ、無邪気な笑顔が眩しい。

ハーマイオニーが気を利かせてか「ちょうどアキの隣が空いてるわ」とアクアを促した。そんなことされても、実はまだ気まずかったり……というか、いつの間にか二人は名前で呼び合う仲になっていたのだろう。

アクアは小さく首を傾げて、ぼくに「座ってもいいかしら？」と尋ねかけた。それでダメと言える男がいるのなら是非ともお目に掛かりたいものだ。どうぞと言うと、アクアはぼくの目を見つめて「ありがとう」とふんわりと微笑んだ。……うわ、動悸が。

「……アキ、それは？」

ぼくの隣の席に腰を下ろしたアクアは、ぼくがちょうど開いていたバックビークの裁判資料に気が付いたようだ。ああこれはと簡単に説明したところ、アクアが段々と暗い顔になっていく。

「……私も、手伝いたい」

「え？ でも、試験前だし、悪いよ……」

「いいの。……元は、ドラゴが招いたものだから……」

あー……そうか。

……そうか。

「……微力だけど……私にも、手伝わせて。……あなた達より、試験の科目も多くないから」

「……で、でも」

「ありがとうアクア！ とつても嬉しいわ！」

ぼくの声を遮るように、ハーマイオニーが身を乗り出した。アクアも意を決したように小さく頷いている。

どうしてハーマイオニーはこんなにも、久しぶりに見るほどのキラキラの笑顔なんだろう……？

としばらく考え、ようやく閃いた。

ハーマイオニー、もしかして、女の子の友達がずっと欲しかったのかな……。

「……ありがとう、アクア。じゃあさ、とりあえずこのノートに一通り目を通してくれないかな？ それから、最後のページにまだ調べていない項目がリストアップされているから、本を探して調べてほしいんだ」

そう言っただけでアクアにノートを手渡す。

アクアはそのノートを大事そうに胸に抱きかかえて「……うんつ」と晴れやかな表情を浮かべた。

第28話 突き付けられる真実

——幣原、秋。

トム・リドルは、日刊預言者新聞に載っている名前を指先で撫でた。ホグワーツ魔法魔術学校にて、三年に一度行われている競技——魔法魔術大会。時勢の変化により前回から完全決闘方式に変更されたこの大会の、上位四人のインタビュ―記事をリドルは眺めていた。

まずは一人目——グリフィン・ドール寮七年生、ライ・シュレディンガー。

彼にもう用はない。

彼はもう何もできない。

殺す価値も意味もない。

どれほど上手く魔法が使えようとも、自分の前に立ちはだかる障壁とならないのであれば、彼が何をしようがかまわない。どうなろうが自分には関係ない。

しかし、魔法医学の方面に進むとは……納得でもあり、また予想外でもあった。三年前はもつと才気に溢れていて、この幼い少年が敵に回ったらとまで考えたものだ。

闇祓いにもなるつもりだったなら、この際に潰しておこうと考えていたのだが……医学関連ならばわざわざ手を出す必要もない。

二人目——ハッフルパフ寮六年生、パスカル・スマイサー。

正直ハッフルパフ生がここまで上がってくるとは意外だった。そもそも、スリザリン寮が上位四人の中に入っていないとはどういうことだ。この代は、どうやら腑抜けた後輩ばかりのようだ。

クイディッチが得意で、現在はハッフルパフのシーカーを務め上げている。二年生の頃からスタメンで、今年晴れてキャプテンに任命されたと記事には書かれていた。

ハッフルパフ系列の家系としてはなかなか有名な家柄出身だった。将来は恐らく、どこかのプロチームからスカウトが来るだろう。自分の敵とはなり得ない存在だ。

三人目——グリフィン・ドール寮四年生、ジエームズ・ポッター。

グリフィンドール系列で有名な家柄だ。ポッター家は昔からどこか変わっている。この少年も恐らくそうなのだろう。

庶民的な家系だが、一応は数少ない純血だ。それに、彼の母親は確かブラック姓だった。もしかしたら闇の魔術にも優れた才を発揮するかもしれない。

そして——最後。レイブンクロー寮四年生、幣原秋。

日本人、それも『幣原』なんて苗字、英国でそうそう被ることもないだろう。十中八九間違はなく、かつての友人、幣原直の息子だ。

記事ではあつさりとしか書いていないが、魔術に天才的な才能を発揮しているらしい。もつと具体的に書けよ、トリドルは小さく舌打ちを零した。

——直の、息子。

「……………」

厄介だ、と呟く。

——やはり、直は初めからこちら側に引き込んでおくべきだった。その後悔するも、直はたとえ自分がどれだけ誘おうともこちら側には決して足を踏み入れはしなかつただろう——そんな確信がリドルにはあつた。

幣原直に理詰めは効かない。「よく分からないけれど嫌なもの嫌」と拒絶してしまえる直感的な人間だと、リドルはよく知っていた。

——しかし、今度こそは。

息子を盾に取れば、もしかしたら——

さて、さて。魔法魔術大会も準決勝が終わった今、後は決勝を残すのみ。

ライ・シュレディンガーと、幣原秋。

どちらが優勝するだろうか？

順当に考えればライ・シュレディンガーの独壇場だ。彼に勝てる者など、魔法界広しと言えども片手の指ほどしかないだろう。彼の才能は恐れるべきものだった。

だから潰した。

まさか、今年も出てくるとは思っていなかった……彼の心は完膚な

きまでに叩き潰したつもりだったのに。

——後輩を守るために、出てきたか。

自分が優勝すれば、後輩を守れるとでも思ったか。

なら、再びその心を折ってやろう。

対する幣原秋。彼に対する評価を改めなければいけない。

舐めていた、見縊っていた、軽んじていた。

幣原直の一人息子、幣原秋。

「……………くく……………」

幣原秋の名前を指で叩きながら、リドルは微笑んだ。

「さあ、日本に行こうじゃないか。……………久しぶりだなあ？ 直……………」



最後の試験は占い学だった。

水晶玉に映る、霧とも霞とも靄とも付かぬ白いモヤモヤを一生懸命何かの形にでっち上げ……………いやいや当て嵌めた後は、ようやく待ちに待ったお休みだ。

試験終了の鐘の音に、同級生達は途端にわあっと盛り上がる。そんな彼らを尻目にぼくの気分は晴れなかった。ハグリッドが控訴裁判に負けたのだ。

バックビークは日没後に処刑される予定らしい。ぼくとハリー、ロン、ハーマイオニーは、夕食の後『透明マント』を被るとハグリッドの小屋へと向かった。

ハグリッドは茫然自失としているようだった。泣きも喚きもしていなかったけれども、そのことが何よりも、ハグリッドがバックビークの処刑を悲しんでいるということが伝わってきた。

手が震えて掴んだものを何もかも割ってしまおうハグリッドのために、ぼくとハーマイオニーは立ち上がって台所を搜索した。

ティーカップを人数分見つけ出したちょうどその時、ハーマイオニーは驚くべきものを見つけたらしい。突然の叫び声に、ぼくらは一斉にハーマイオニーを注視した。

「ロン！ し、信じられないわ——スキヤバースよ！」

ミルク入れをテーブルに持ってきたハーマイオニーは、ロンの目の前でそれをひっくり返した。キーキー大騒ぎしているネズミが中から滑り落ちる。ロンは呆気に取られた顔をした。

「スキヤバース！ スキヤバース、こんなところで一体何してるんだ？ アイテツ……」

スキヤバースを捕まえようと、室内はにわかに騒がしくなった。ぼくはロンのネズミを驚かせてしまわぬよう、少し離れたところで立ち止まる。

「スキヤバース！ 大丈夫だってば、ここにはお前を傷つけるものは何にもないんだから！」

その時、窓の外を見たハグリッドは勢いよく立ち上がった。

「連中が来おった……お前さんら、行かねばなんねえ。ここにいてこを連中に見つかっちゃなんねえ……行け、はよう……」

城の階段を何人かが連れ立って下りてくる。ダンブルドアとファッジに加え、後ろに二人。その二人は大きな大斧を持っていて、ぼくは小さく身を震わせた。

「裏口から出してやる」

ハグリッドに促され、ぼくらは裏庭へと出た。バックビークがかぼちや畑の中に繋がれているのを見、思わず眉が下がる。バックビークも不穏な雰囲気を感じ取っているのか、落ち着きなく頭を振っていた。

「大丈夫だ、ビーキー。大丈夫だぞ……お前ら、行け、もう行け」

しかしぼくらは動かなかった。

「ハグリッド、そんなこと出来ないよ……」

「僕達、本当は何があったのか、あの連中に話すよ……」

「クラスの奴ら全員連れてきたって構わない……」

「バックビークを殺すなんて、ダメよ……」

「行け！」

ハグリッドは断固として言った。

「お前さん達が面倒なことになったら、ますます困る。そんでなくて

も最悪なんだ！」

そう言われては仕方ない。ぼくらはマントを被りゆつくりと歩き出した。

「急ぐんだ。聞くんじゃねえぞ……」

ハグリッドの声は掠れていた。ハーマイオニーは小さく啜り泣く。「お願い、急いで。耐えられないわ。私、とつても……」

しかし、途中でロンが立ち止まった。皆で一枚のマントを被っているため、当然ぼくも立ち止まる羽目になる。

「ロン、お願いよ」

「スキヤバーズが——こいつ、どうしてもじつとしてないんだ……」

暴れるスキヤバーズに、ロンは四苦八苦しているようだ。……もしかしてぼくが傍にいるからか？

「ロン、ごめん……」

かと言ってマントから出る訳にもいかないし……ううん。ごめんねロン。

ぼくらの背後で扉が開く音がした。と同時に人の声も。ぼくらはゆつくりと歩き出したが、ロンはまたもやすぐに立ち止まってしまった。ハーマイオニーは今にも泣き出しそうな表情で口元を押さえている。

「こいつを押さえてられないんだ……スキヤバーズ、こら、黙れ。皆に聞こえつちまうよ……」

スキヤバーズはキーキーと喚き散らしていたものの、それでも背後の音を掻き消すことはできなかった。男達の怒声の後、ふと静かになり、そして——斧を振り下ろす風切り音。

ハーマイオニーはよろめいた。

「やってしまった！ し、信じられない……あの人達、やってしまったんだわ！」

ぼくらはショックでしばらく呆然と立ち竦んでいた。遠くで荒々しく吼える声が聞こえる。きつとハグリッドだろう。

「本当にどうして……こんなことができるって言うの？」

ハーマイオニーが声を震わせた。ロンも身震いしている。

「……行こう」

ロンの声で、ぼくらは城へと向かった。日は見る間に落ち、先程まで夕焼け空だったのに、今はもうどこを見渡しても真っ暗だ。

ロンはまだスキヤバースと格闘しているようだった。本当に申し訳ないと思う。

全く、この体質はいただけじゃない……。申し訳ないが失神呪文で大人しくなってもらおうじゃないか。

杖を出したぼくは、ロンに「スキヤバースをちよつと出して」と囁いた。しかしロンがスキヤバースを取り出した瞬間、どこからともなく現れたクルックシャンクスがスキヤバース目掛け飛びかかり、思わずロンはスキヤバースを取り落とす。

逃げ出したスキヤバースを、クルックシャンクスが追いかけていく。ぼくらが止めるよりも早く、ロンは『透明マント』を脱ぐと物凄いスピードでスキヤバースを追って行った。

「ロンー！」

ぼくらは慌ててロンの後を追いかける。透明マントなんて邪魔なだけだ。どうせこの夕闇の中じゃ、ぼくらの姿ははつきりとは見えない。マントを脱ぎ捨て走ったぼくらは、やがてロンに追いついた。

「捕まえた！ とつとと消えろ、嫌な猫め——」

ハーマイオニーが慌ててマントを広げる。しかしまだ呼吸も整わないうちに、何か巨大な動物の足音が聞こえた。暗闇から躍り出たのは真っ黒な大型犬だ。

杖を出す暇もなく、犬は大きくジャンプするとぼくとハリーを押し倒す。

——この犬はハリーを狙っているのだ。

直感的に悟り、ぼくは咄嗟にハリーを庇って前に出た。左手の人差し指を犬に向ける。犬はもう一度ぼくらに飛びかかろうとしたものの、ぼくのその動作に怯んだようだった。ハリーからロンに狙いを変え、ロンに飛びかかる。

ロンは逃げようとしたが遅かった。ロンの腕に噛み付いたまま、犬は易々とロンを引っ張っていく。慌ててロンの後を追おうとした瞬間、ぼくはいきなり何かに吹っ飛ばされた。仰天したまま地面に這いつくばる。

「Lum^光osi」

ハリーの呪文で、太い木の幹が眩く照らし出された。『暴れ柳』だ。激しく暴れる木の根元に、ロンと、先程の犬がいた。根元に大きく空いた隙間にロンを引きずり込もうとしている。

ロンは抵抗したものの、バシツという音と共に足が折れ、そのまま姿が見えなくなった。

「ああ、誰か、助けて。誰か、お願い……」

ハーマイオニーが呟く。

その時クルックシャンクスがサツとぼくらの前に躍り出た。木の枝をするりと避けては両の前足を木の節に乗せる。瞬間『暴れ柳』はピタリと動きを止めた。

「クルックシャンクス！ この子、どうして分かったのかしら——？」
「あの犬の友達なんだ。僕、二匹が連れ立っているところを見たことがある。行こう——君達も杖を出しておいて……」

そう言いながら、ハリーはぼくの手を強く掴んだ。驚くほどに冷えた指を、ぼくもぎゅつと握り返す。

クルックシャンクスに先導され、ぼくらは暴れ柳の根元にできたトンネルを下って行った。ぼくとハリーとハーマイオニーの三人とも、杖に光を灯したまま進む。

「このトンネル、どこに続いているのかしら？」

「分からない。『忍びの地図』には書いてあるんだけど、フレッドとジョージはこの道は誰も通ったことがないって言ってた。この道の先は地図の端からはみ出してる。でも、どうもホグズミードに続いているみたいなんだ……」

先程まで下っていた道が急に上り坂に変わった。その先に一つの扉があった。

「……下がって」

ハリーの手を振り解き、ぼくは二人の前に出る。杖を構えたまま、ゆつくりと扉に近付き——勢いよく扉を開け放つと、中に一斉に押し入った。

「……誰もいない？」

ハリーが呟く。

ただの部屋だ。使われなくなつて何年も経っているようで埃っぽい。全ての窓には板が打ち付けられ、家具は軒並み壊れている。

ハーマイオニーが目を見開いて囁いた。

「ハリー、アキ。ここは『叫びの屋敷』の中だわ」

その言葉にハツとする。そうか、ここはリーマスが連れて来られていた……。

突如、頭上で何かが軋む音がした。何かが上の階で動いたような音だ。

ぼくらは顔を見合わせると、そろそろと隣のホールへ行き階段を上った。床をよく見ると、何かを上階に引きずつたような跡が見える。

杖の灯りを消し、ぼくらは扉に近付いた。扉の奥からは物音が聞こえてくる。呻き声と、何やらゴロゴロという声——。

目配せの後、一斉に飛び込んだ。

カーテンが掛かった天蓋付きのベッドにはクルックシャンクスが寝そべっている。その脇にはロンが座っていた。足が妙な方向に捻じ曲がっている。ぼくらは思わずロンに駆け寄った。

「ロン、大丈夫？」

「犬はどこ？」

「犬じゃない。ハリー、罨だ……」

ぼくは慌てて振り返る。

影の中、黒い姿がゆらりと動いた。汚れ切った髪に伸びた髭、学生時代の面影すらない落ち窪んだ眼窩は、爛々とハリーだけを見据えている。

ロンは声を震わせた。

「あいつが犬なんだ——あいつは『動物もどき』^{アニメーガス}なんだ——」

杖を振り上げた瞬間、奴は——シリウス・ブラックはロンの杖をぼくらに向け「Expelliarmus!」と唱えた。咄嗟にぼくは呪文を打ち消すも、ハリーとハーマイオニーの杖は宙を舞い、ブラックの手に収まる。

「君なら友を助けに来ると思った。君の父親も私のためにそうしたに違いない。君は勇敢だ。先生の助けを求めなかった。ありがたい……その方がずっと事は楽だ……」

ハリーの前に、ぼくは杖を構えたまま立ち塞がった。ぼくよりずっと背の高いシリウス・ブラックを睨みつける。

「ハリーに一歩でも近付いてみる——ただじゃおかない」

「……誰だ、君は？」

ブラックが、今度は不思議そうな声を上げた。驚いたように目を見開き「どうして……どうして君がここにいる？ 俺は夢でも見ているのか？」と呟く。

「秋か……秋なのか？」

懐かしそうな顔で、ブラックは微笑んだ。その表情に思わず胸をつかれる。

「ハリーを殺したいのなら、僕達も殺すことになるぞ！」

声を荒げたロンに、ぼくとブラックは同時に我に返った。ブラックの視線がぼくから離れロンへと向かう。

「座っている。脚の怪我が余計酷くなるぞ」

「聞こえたのか？ 僕達四人を殺さなきゃならないんだぞ！」

「今夜はただ一人を殺す」

ブラックは歪んだ笑みを浮かべた。先程浮かべた微笑みとは全く違う笑顔だった。

ハリーが憎々しい顔で吐き捨てる。

「何故なんだ？ この前は、そんなことを気にしなかった筈だろう？ ペティグリューを殺るためにたくさんのマグルを無残に殺したんだろう？ ——どうしたんだ。アズカバンで骨抜きになったのか？」

「ハリー！ 黙って！」

「こいつが僕らの父さんと母さんを殺したんだ！」

ハリーは叫ぶと、ぼくを突き飛ばしてブラックに飛びかかった。まさかハリーに突き飛ばされるとは思ってもおらず、ぼくは無様にぶつ倒れる。

ブラックに馬乗りになったハリーは、ブラックの顔面を思いっきり殴った。顔面だけでは飽き足らず、ありとあらゆる場所を手当たり次第に殴りつける。

「ハリー、やめろー！」

ブラックが反撃に出る前にと、ぼくは慌ててハリーをブラックから引き剥がした。二人とも肩で息をしながら、凄まじい目つきでお互いを睨み続けている。

いつの間に奪い取ったのか、ハリーは自分の杖をブラックの心臓に真っ直ぐ突きつけていた。

「ハリー、私を殺すのか？」

ブラックが呟く。

「お前は僕の、僕らの両親を殺した」

「僕ら？」

「僕とアキのことだ！ 知ってるだろう、お前は、父さんと母さんが死ぬ直前まで友達の振りをしてたんだ！ 僕らは双子だ、僕と血を分けた、父さんと母さんの——」

「何を言ってるんだ、ハリー？」

ブラックは、ハリーの言葉を遮り言った。

「リリーとジェームズの子供は、ハリー、君一人だ」

第29話 魔法魔術大会

「うう……」

その日は、朝から胃が痛かった。

魔法魔術大会の最終試合——決勝戦。週末の今日は授業はない。決勝戦は朝の十一時から、大広間で行う予定となっていた。

「すっごい顔色悪いよ？ 大丈夫？」

「まさか、大丈夫な訳ないじゃない……」

心配そうに声を掛けてくれたリイフだったが、ぼくの言葉に苦笑いを返した。

対戦相手はグリフィンドールの七年生、ライ・シュレディンガー。前回の魔法魔術大会優勝者であり、また準決勝にて、あのジェームズ・ポッターをものの十五秒で沈めた相手。

無理だ、もう無理だ。

三年に一度のこの大会。しかも決勝戦ともなれば、ほとんどの生徒が観戦に来ることだろう。生徒のみならず先生までも。

元来ぼくは注目されるのに慣れていない。出来れば物静かに、一人ひっそりと物陰に隠れて本を読んでいたタイプの人間だ。

それがどう間違つてこんな……はああ。

朝食の席では、見知らぬ上級生に「今日頑張れよ！」と気さくに声を掛けられたり、下級生の女の子に「お、応援してますっ！」と握手を求められたりして、それら全てがもう……今日が決勝戦なんだ、戦うんだとぼくに突きつけてくるようで、もう緊張し過ぎて疲れてしまふ。

しかも、ジェームズ達悪戯仕掛人があんなことを……ああ、思い出したくもない。また胃が痛くなってきた。頭も痛い気がする。

その時、フリットウィック先生の声でアナウンスが流れた。

……そうか、もう三十分前か。

選手は試合が始まる三十分前に舞台裏に集合して、そこで軽いチェックを受けなければならない。杖以外の危険なものを持っていないか、杖が動作不良を起こしてはいないか、体調は悪くないか。

……正直体調不良者として今すぐ辞退したい気分ではあるものの、流石にそれは許されないだろう。風邪だとかそういう意味で具合が悪い訳ではないのだ。

「頑張れよ」と背中を押すリイフに頷きを返す。レイブクローの同級生が数人、ぼくの肩やら頭やらを軽く叩いて激励してくれた。

「あ……待って！」

突然背後から掛けられた声に、踏み出しかけた足が止まる。見ると人混みをかき分け、リリーがこちらにやってくる場所だった。リリーはいつものように、セブルスの手を引いている。

「い……今から、ね」

「ああ……うん」

「が、頑張つてね！」

リリーが真剣な眼差しでぼくの手を握ってきた。温かく柔らかい感触が、ぼくの左手を包み込む。思わず顔を赤らめたものの、真面目なりリーにぼくも頷いた。

「秋」

無表情のまま、セブルスが拳を突き出してくる。何のことか分からずきよとんと目を瞬かせていると、セブルスは焦れたように「君も拳を握るんだ」と口を開いた。言われた通り拳を握ったところ、セブルスはぼくの拳にコツンと自分の拳を当ててくる。

「君なら大丈夫だ。自分を信じろ」

「……………、……………うん」

腹を決める。生徒のいない舞台裏へと、ぼくは一人向かった。

舞台裏では、既にライ・シュレインガーが数人の教師に囲まれていた。ぼくの姿を視認して、何人かがこちらにも近付いてくる。

「危険なものを持っていないかの確認と、保護魔法を今からあなたにお掛けします」

マクゴナガル先生がキビキビと言った。ぼくは頷き、両手を広げて目を瞑る。

頭上からサラサラとしたものが降ってくる感触がした。保護魔法だ。命に関わる怪我を防ぐための魔法。下手をすれば死ぬかもしれない

ない、そんなレベルの呪文が交錯する試合が今から始まるのだ。

「……何も危険なものを持っていないようですね。よろしい」

目を開け、自分の身体を確認する。特に違和感はない。

伝統ある大会の決勝戦。ということ、今日のぼくの格好は卒業の儀がある時にしか袖を通さないきちんとした正装だ。まだちよつと着慣れない感はあるものの、気になるほどではない。

ぼくの様子をしばらく見ていたマクゴナガル先生は、やがて微かに微笑んだ。

「……頑張りなさい、幣原」

まさかマクゴナガル先生からそんな言葉をもらえるとは思っていなかった。ぼくは小さく目を瞠る。

「……はい！」

その後はフリットウィック先生から杖のチェックを受けた。

「Orchid^花eous^よ！」

フリットウィック先生が呪文を唱えると、杖先から様々な種類の花が溢れ出た。鮮やかな色合いの花々は、床に触れると同時に空間に溶けるように姿を消す。

「オツケーです。秋くん、ふぁいと、おー！　ですよ。まあ気楽にやってください。こういう勝負は楽しんだもんが勝ちなんですから」

そう言つて、フリットウィック先生はぼくを見上げた。「ありがとうございます」とぼくは深々と頭を下げる。

教師陣が引いた。辺りを見渡したところ、ライ先輩は一人で壁に寄りかかっていた。腕を組み、目を瞑っている。集中しているのだろうか。

声を掛けるのにちよつと躊躇したものの、まあいいやと思い「ライ先輩」と歩み寄った。ライ先輩の方がぼくよりも圧倒的に優位なのだ、少しはその集中を乱しても構わないだろう。

「……秋か。どうした？」

「いえ、その……」

目を開けたライ先輩は、長めの前髪の隙間からじつとぼくを見た。「あの、ぼく。この大会にエントリーしたときは、勝つとか負けるとか

どうでもいいって思ってたんです」

ライフに誘われるままイントリーして。負けたくないとは思っていたけれど、勝ちたいとも明確には思っていなかった。ましてや、こんなに勝ち進むなんて想像すらしていなかった。

「ぼくは……ぼくはいつも、大体成り行きに身を任せて生きていて……何となく流されるままで、あんまり自分の意志で行動を起こしたりすることはなくって……そんなぼくだけど、この大会で、ちよつと変わったのかもしれない」

ぼくの持つこの力は、そう悪いものではないと思えるようになった。

誰かを傷つけるだけじゃなくって、誰かを助けることができるのかもしれないと思えるようになった。

この力を呪うだけじゃなくって、誇りに感じられるようになってい。

自分を認めたい。

——だから。

「ライ先輩……ぼくは、あなたに勝ちたい」

ライ先輩の、いつもは眠たげな濃い茶色の瞳が、驚いたように少しだけ見開かれた。そのまま、ぼくの心を読み取ろうとするかのように、ぼくの瞳の更に奥深くまで視線が注がれる。

その視線をしっかりと受け止めた。

「……ふ」

やがて、ライ先輩は楽しげに笑う。目を僅かに細めると、唇の端を吊り上げた。

「優勝の王冠は重いぞ、秋」

「……望むところですよ」

頷いてみせる。

フリットウィック先生が舞台上上がった。そろそろ時間だ。ぼくは表情を引き締め、口上を述べる先生を見据える。

「……秋」

「? なんですよ……!」

頭を上から押さえつけられた。と思うと同時に、髪を乱暴にわしやわしやとかき混ぜられる。

うわ、何てことするんだ、髪がぐっちゃぐちゃになるじゃないか。そう思いつつ、眉を顰めてライ先輩を見上げた。

「緊張するな。自然体で行け」

ぼくの頭から手を離れたライ先輩は、言葉通り何にも気負っていない普段通りの歩き方で舞台へと歩いて行った。舞台の上はスポットライトが煌々と照り付けていて、ここからだとも舞台は霞みがかって見える。

「……もう、あの人は……」

後輩との接し方が分からないにも程がある。七年生にもなって後輩一人まともにも可愛がれないなんて。

そう思いつつ、いつの間にか口元には笑みが浮かんでいた。

「……よしー」

手早く髪を括り直し、ぼくは前を向く。

気分が高揚している。これから始まる勝負に、ぼくは何かワクワクしている。

舞台に足を踏み入れた瞬間、スポットライトに照らされた。ちらりと周囲に視線を向ける。明暗差が激しくてぼんやりとしか見えないものの、観客は相当数いるみたいだ。ホグワーツのほとんど全員が集まっていると言っても過言ではない。

前回の大会は三年前だったから、当時のぼくは一年生としてホグワーツにいたんだろうけど……この大会を見に行った記憶もなければ、話を小耳に挟んだ記憶すらない。

ちよつと残念だ、と思った。

もし見に行っていれば、四年生ながらに優勝するライ・シユレディングターの姿を見ることができたのかと思うと、惜しいことをしたと感じる。

ぼくの向かいに、ライ先輩が立っている。彼は真っ直ぐにぼくを見据えている。

もう、自分に向けられる視線には怯えない。

意志を込めて、その視線を受け止め、投げ返した。

「尊い騎士道精神に基づき、正々堂々闘ってくださいね」

フリットウィック先生がにこやかに言う。

向き合って一礼したぼくらは、杖を剣のように前に突き出し構えた。

心はびっくりするほど穏やかだった。余計なことは何一つ考えない。頭がすうっとクリアになっていく。ライ先輩の一挙一動を、今なら決して見逃すことはないだろう。

「行きますよ——いち、に——さん！」

合図と同時に杖を振り上げる。

魔法魔術大会本戦の決勝戦が、いよいよ始まった。



「リリーとジェームズの子供は、ハリー、君一人だ」

ブラックのその言葉にハリーが凍りついた。ハリーだけじゃない、ロンもハーマイオニーも——勿論ぼくも、動作どころか呼吸も止まった。

「……………え？」

足下が急にスポンジに変わったかのような気分だ。全くもって、頼りない。

どこまでも頼りない土台に、ぼくはずっと立っていたのか。

扉が勢いよく開いた。視線を向けると、そこには真っ青な顔のリーマスが立っていた。

リーマスは視線をぼくらとブラックの間で行き来させた後、すぐさま杖を抜き「Expelliarmus！」と叫ぶ。

ハリーとブラック、そしてぼくの手からも杖が離れた。四人分の杖を手にしたリーマスは、ぼくを真っ直ぐに見つめて口を開いた。

「アキ……………すまない、こんな、こんな慌ただしい時に言う羽目になって、本当に申し訳ない——」

「……………リーマス、止めろ……………ぼくは」

『話がしたいんだ、秋』

リーマスの唇が動く。途端、意識が急に遠のいた。そうか、そういうことか。これは——つまりはキーワードだったのだ。

ぼくと幣原秋との繋がりカラケリは、そういうこと、だったのか。

……ごめんね、ハリー。

視界が、全て闇に塗り潰された。

ハリーの目の前で、アキの身体が力無く崩折れる。ハリーは慌ててアキを抱き留めた。

「アキ……？ アキ!?! どうしたの、アキ!?!」

「安心していいよ、ハリー。意識を飛ばしてもらっただけだ。すぐに目が覚める。ただし——」

ルーピンが喋り終わるよりも早く、アキはハリーの腕の中で目を開けた。

どこかから風の流れを感じる。床にうず高く積もった埃が、僅かに舞い上がった。

「ああ、アキ、大丈夫かい？ 君は——」

ハリーの言葉を最後まで聞くことなく、アキはハリーを押し返すと立ち上がった。風に、アキの括られた髪の毛が舞っている。

——待て。風？

窓は全て打ち付けられており、扉はルーピンが先程閉めた一つきり。

それではこの風は、一体どこから吹いているのだろうか？

「……アキ？」

「リーマス」

低い声で、アキは呟いた。その声は何年も聞き慣れた声であるにもかかわらず、ハリーの耳には全く別人のものにさえ思えた。

パキン、とアキは指を鳴らす。途端、ルーピンの手から一本の杖が飛び出して来ては、アキの正面でピタリと静止した。無造作に左手で

杖を取ったアキは、杖を指先でぐるりと一回転させる。

「ぼくから『武装解除』するなんて、君もやるようになったもんだ」

「仮にも教師だからね。秋、まずは話を聞いてくれないだろうか」

「……急にぼくを呼び出したのは、ブラックを殺させるためじゃなかったんだ？」

皮肉げにアキは笑った。

いや——『彼』は本当に自分の知るアキ・ポッターか？

違う、と直感が叫んでいる。

「ピーター・ペティグリュード。あいつが——生きている」

ルーピンは真摯な顔で真っ直ぐに『彼』を見据えた。

「秋、君なら確信している筈だ。忍びの地図に間違いはない。忍びの地図に現れた事象は、どれほど疑わしくとも真実なのだ。僕はあれにあの名を見たんだ、確かに見たんだ！ このホグワーツにおける生徒職員ゴースト全ての生き物に於いてあの名を持つ者はただの一人もいなかった、いなかったんだ！」

ルーピンが何を言っているのか、ハリーには分からなかった。しかし『彼』は目を大きく見開いた後、視線をブラックに、次いで何故かロンへと移す。いきなり視線を向けられ、ロンは戸惑いと恐れとで顔を強張らせた。

「——まさか」

「そう、そのまさか、だ」

「……おいムーニー。いつまで私に『待て』をさせておくつもりだ？」

まず——彼は、誰だ。秋によく似た——」

ブラックが慎重に口を開く。それにルーピンは「秋によく似た、じゃない」と笑みを返した。

「幣原秋、本人だ」

「——本人、だと？ それは——」

ブラックは困惑の色を浮かべ『彼』を見つめている。

「カラクリを説明している暇はない、シリウス。後で話そう。先にやらなければならぬことがある」

そう言つて『彼』はちらりとハリーに視線を向けた。

……その顔も、何もかも。ハリーの知るアキ・ポッターにどこまでもそっくりな筈なのに。

どうして、こんなにも違うと感じるのだろう。

へたり込むブラックに歩み寄ったルーピンは、身を屈めてブラックの手を取り助け起こした。そして——ハリーは目を疑った——ルーピンはそのままブラックを抱きしめたではないか。

ブラックは一瞬身を強張らせたものの、ルーピンが身を離さないと分かるとおずおずとその背に腕を回した。

「……どういふことだよ。アキと、先生と、ブラックが、まるで友達みたいに——」

ロンは驚愕に目を見開いたまま、震える声で呟いた。ブラックから離れ、ルーピンはロンに向かって頷いてみせる。

「——ああ、友達だ、私達は」

「なんてことなの!」

ハーマイオニーはルーピンを指差し悲鳴を上げた。

「やっぱり、やっぱりそうだったのね! ああ……私——先生が、先生がホグワーツに、ブラックを手引きしてたんだわ!」

「ハーマイオニー、落ち着きなさい……」

「私、誰にも言わなかったのに! アキにも言わなかったのに——先生は狼人間だってこと!」

何も考えられなかった。与えられた情報量が多過ぎて、何から考えれば良いのかさえも分からなかった。

そつと目を伏せたルーピンは、それでも普段の授業と同じ柔らかな声でハーマイオニーに問い掛ける。

「……ハーマイオニー。いつ頃から気付いていたのかね?」

「スネイプ先生のレポートを書いた時から……後、まね妖怪ポガートが先生の前で月に変身するのを見たわ……それに、月の満ち欠けと先生の体調不良が一致したことも」

「一人でその結論に辿り着くとは、しかもこんなに短時間で「リーマス」

どこか苛立ち混じりの声で『彼』はルーピンの名を呼んだ。

「ぼくには時間がないんだ、分かるだろう?」

「まあ待って、秋。彼らにも知る権利というものはある。きちんと話してあげないと……」

「……手短かにしてくれ」

「ああ、善処するよ」

眉を寄せた『彼』は、小さくため息をついてソファに腰を下ろした。神経質そうに両手の指を合わせている。アキのそんな仕草は、今まで一度も見ることがなかった。

「私はシリウスの手引きはしていない——」

それからルーピンは驚くべき内容をハリー達に語って聞かせた。

忍びの地図を、ジエームズ・ポッターとピーター・ペティグリュー、それにここにいる三人で作ったこと。ブラックの有罪をずっと信じしており、勿論ブラックがホグワーツへと侵入する手引きなどしていないこと。ところが今日の夕方、忍びの地図を見ていたらあることを発見したこと——。

ルーピンの話に聞き入っていたハリー達は、扉が一度ふわりと勝手に開き、また静かに閉まったことに気が付かなかった。

長年飼っているペットのネズミの正体が、未登録の『動物もどき』であり、シリウス・ブラックに殺された筈の魔法使い——ピーター・ペティグリューであると言われたロンは、信じられないと言わんばかりの顔をした。

ルーピンは滑らかに語った。自分が狼人間であること、それを知った三人の友人達が未登録の『動物もどき』^{アニメーガス}になったことも話した。その後、スネイプがブラックの悪戯で、ルーピンが狼人間だと知ってしまったところまで——。

「だからスネイプはあなたが嫌いなんだ。スネイプは、あなたもその悪ふざけに関わっていたと思った訳ですね?」

「その通り」

嘲るような冷たい声がすぐ後ろから聞こえた。ハリーは驚いて振り返る。

『透明マント』を脱ぎ捨てたセブルス・スネイプが、杖をルーピンに向

けて立っていた。

第30話 その瞳が映すもの

誰もがスネイプの登場に驚く中『彼』だけは黙って喧騒を見つめていた。ハリーはルーピンやスネイプの話聞きつつも、時折『彼』を盗み見た。

間違はなく『彼』はアキだった。しかし同時に間違はなく『彼』はアキではなかった。

スネイプがルーピンに杖を振り上げようとしたその瞬間『彼』は初めて動いた。

果たしてスネイプは『彼』がそこにいたことに気付いていたのだろうか。無言で『彼』が放った呪文は、狙い過たずスネイプに直撃した。驚愕の表情を浮かべたまま、スネイプは床に倒れ臥す。

「……失神呪文を放つただけだ。そんな顔をしないでくれ、リーマス」
「……いや。助かったよ、レイブン」

「久しぶりにその名で呼ばれたな」
リーマスに笑いかけ、『彼』はそのままロンの方にツカツカと歩いて行った。

「ロン。そのネズミを渡してくれ」

「……お前は、誰だ。アキじゃないよな」

「いいや、ぼくはアキだよ」

にっこりと『彼』は微笑んでみせる。それは、紛うことなくアキと同じ笑みで——でも、違う。纏う雰囲気全然違う。ロンもそれを悟っているのだろう、青ざめた顔で後ずさった。

「ペティグリューがネズミに変身できたとしても、ネズミなんてごまんといるじゃないか。どうしてスキヤバーズだと思ったんだ？」

「もつともな疑問だ。そうだと、シリウス。あいつの居場所をどうやって見つけ出したんだい？」

ロンとルーピンの問いかけに、ブラックはローブの中からくしゃくしゃになった紙の切れ端を取り出した。ロンと家族の写真が載っている『日刊預言者新聞』だ。ブラックはロンの肩に乗っているスキヤバーズを指差した。

「一体どうしてこれを？」

「ファツジだ。去年アズカバンの視察に来た時、ファツジがくれた……ピーターがそこにいた。私にはすぐ分かった。こいつが変身するのを何回見たと思う？ それに写真の説明——この子がホグワーツに戻ると書いてあった。ハリーのいるホグワーツへと……」

「何たることだ」とルーピンは呻いた。

「……こいつの前脚だ」

「それがどうしたって言うんだい」

「指が一本ない」

『彼』が唇を噛み締めるのが見えた。暗い表情で下を向いて俯いている。

「あいつを追い詰めた時、あいつは道行く人全員に聞こえるように叫んだ。私がジエームズとリリーを裏切ったんだと。それから、私が奴に呪いを掛けるより先に、奴は『武装解除』した私の杖で道路を吹き飛ばし、自分の周り五、六メートル以内にいた人間を皆殺しにした……そして素早く、ネズミがたくさんいる下水道に逃げ込んだ」

そこでブラックは息をついた。『彼』は沈んだ口調で言う。

「……すまない、シリウス。あそこで、ぼくが……」

「いや、いいんだ。現行犯相手に、普通は開心術なんて使わない。……ところで、君は本当に、私の……俺の知る『幣原秋』なのか？ ……レイブン、なのか？」

「ああ……その通りだ、パッドフット」

「……死んだと、聞いていた」

「死んではいないさ。偽造しただけだ……その話は後だ、シリウス」

『彼』は再びロンを見て手を差し伸べた。ロンは躊躇いながらも、ポケットからネズミを掴み出すと『彼』に手渡す。ネズミは『彼』に触れられまいと暴れるも、気にせず『彼』はむんずと掴み上げた。

「良かったね、ワームテール。アキが自分から動物を遠ざけておくよ
うな奴で。……皆でやるか？」

ネズミを見つめ『彼』はうつそりとした笑みを浮かべた。ブラックとルーピンは頷くと、杖を構える。

「三つ数えたらだ。いち——に——さん！」

青白い閃光が、三本の杖から迸る。そして——

数秒後、そこには一人の男が座り込んでいた。色褪せたまばらな髪はくしやくしやで、スキヤバーズと同じくてつぺんには大きな禿げがある。ハリー達は呆然とその男を見つめた。

ルーピンが朗らかに声を掛ける。

「やあ、ワームテール。しばらくだったね」

「パ、パッドフット……ムーニー……レイブン……」

周りの全員を見回したペティグリューは、素早く扉に視線を向けた。

「友よ……懐かしの友よ……」

「随分とご挨拶じゃないか。友だというなら、早くぼくらの前に姿を現してくれても良かったんじゃない？」

「こ、こいつが！ アズカバンを脱獄して、わた、私を殺そうとしていたから！」

ペティグリューは喘ぎながらもブラックを指差す。ブラックの杖腕が上がったのをルーピンが窘めた。

「そのために十二年間もネズミの姿に身をやつしていたと？ シリウスがアズカバンを脱獄すると分かっていたと言うのか？ 未だかつて脱獄した者は誰もいないのに？」

「こいつは私達の誰もが夢の中でしか敵わないような闇の力を持っている！ それがなければ、どうやってあそこから出られる？ おそらく『名前を言つてはいけないあの人』がこいつに何か術を教え込んだんだ！」

ブラックは唐突に笑った。虚ろな笑い声が部屋中に響く。

「ヴォルデモートが俺に術を？」

ブラックが吐き捨てた名前に、ペティグリューはビクリと身を縮めた。

「どうした？ 懐かしいご主人様の名前を聞いて怖気づいたか？ 無理もねえな、ピーター。昔の仲間は君の……いや、お前のことをあまり快く思っていないようだ。違うか？」

「シリウス、君が何を言っているのやら……」

ペティグリュウは近くの戸棚を思いつき蹴つ飛ばした。「ひえっ」と情けない声を上げ、ペティグリュウは小さく縮こまる。

「お前は十二年もの間、俺から逃げ隠れていたんじゃない。ヴォルデモートの昔の仲間から逃げ隠れていたんだ。アズカバンでいろいろ耳にした、ピーター……皆お前が死んだと思ってる。さもなきや、お前は皆から落とし前をつけさせられた筈だ。俺は囚人達が寝言でいろいろ叫ぶのをずっと聞いてきた。どうやら皆、裏切り者がまた寝返って自分達を裏切ったと思ってるようだった。ヴォルデモートはお前の情報でポッターの家に行った。そこでヴォルデモートが破滅した。ところがヴォルデモートの仲間は一網打尽でアズカバンに入れられた訳ではなかった。そうだな？ まだその辺にたくさんいる。時を待っているんだ。悔い改めたフリをして……ピーター、その連中が、もしお前がまだ生きていると風の便りに聞いたたら——」

「何のことやら……何を話しているのやら……リーマス、秋、君達は信じないだろう？ こんな脱獄犯の戯言など……」

「ぼくは論理的な方を信じる。昔も今もそれは変わらない。浅ましいね、ピーター」

吐き捨てるように『彼』は告げた。その声にもまたペティグリュウは身を竦ませる。

「ヴォ、ヴォルデモート支持者が私を追っているなら、それは、大物の一人を私がアズカバンに送ったからだ！ スパイのシリウス・ブラックだ！」

「よくもそんなことを！」

ブラックは般若の形相で叫んだ。

「俺がヴォルデモートのスパイだと？ 俺がいつ、自分より強く力のある人達にヘコヘコした？ しかしお前は……ピーター、お前はいつも、自分の面倒を見てくれる親分にくっついてるのが好きだった……自分を守ってくれる、より力のある方を見極めるのが上手かった……かつてはそれが俺とジェームズだった。で、今はヴォルデモートだということか？」

「私が、スパイなんて……正気じゃない、どうして、どうしてそんなことが言えるのか、私にはさっぱりだ……」

「ほう？ 理由を聞きたい？ なら教えてやろうじゃないか、ピーター・ペティグリュー。ジェームズとリリーの『秘密の守人』はお前だからだ」

ブラックの言葉に、ハリーは息を呑んだ。

ルーピンは奥歯を噛み締め『彼』に視線を遣る。

「……シリウスだと、私は……私達はそう聞いていた。そうだよな、秋？」

「ああ……。……でも、違っただな。ぼくらがスパイだと思っただのか、シリウス」

「その件については本当にすまない」とブラックは真摯な声で謝罪した。

「だがあの時代は、誰であろうと信用なんてできなかつた。昨日までの友人が、今日は敵になるかもしれない。『服従の呪文』のせいだと言ったら、責任転嫁だと君達は怒るだろうか？」

「……いいや。疑っていたのはこちらも一緒だ。怒りに我を忘れて、真実がどうなのかを探ろうとも思わなかつた」

その時、ずっと黙っていたハーマイオニーが「ルーピン先生」と口を開いた。

「あの……聞いてもいいですか？」

「どうぞ、ハーマイオニー」

ルーピンは丁寧に応える。

「あの——スキヤバース——いえ、この人、ハリーの寮で三年間同じ寝室にいたんです。『例のあの人の手先なら、今までハリーを傷つけなかつたのはどうしてかしら？』」

「そうだ！」

ペティグリューは我が意を得たりとばかりに声を上げた。

「ありがとう！ 聞いたかい？ ハリーの髪の毛一本傷付けていない！」

「その理由を教えてやろう」

唸るようにブラックが言った。

「お前は、自分に得がなければ絶対に何もしない奴だ。ヴォルデモートは十二年も隠れたまま、半死半生の状態だと言われている。ダンブルドアの目と鼻の先で……お前が気が付いてたかは知らんが、幣原秋もいて……この二人のいる中、力を失った残骸のような魔法使いのために人殺しなんてするか？ お前が。そもそも魔法使いの家族に入りこんで飼ってもらってたのは何のためだ？ 情報がすぐ手に入る状態にしておきたかったんだろ？ ヴォルデモートが力を取り戻し、またその下に戻っても安全だと確信できるまで」

しん、と部屋の中が静まり返った。ペティグリューは反論の言葉を無くしたように、ただ口をパクパクとさせていた。

ブラックはハリーに視線を向けた。ハリーも目を逸らさずにブラックを見返した。

「信じてくれ」

掠れた声だった。

「信じてくれ、ハリー。私は決してジェームズやリリーを裏切ったことはない。友を裏切るくらいなら、私が死ぬ方がマシだ」

そこで、ようやくハリーはブラックを信じる事ができた。

ハリーの頷きに、ブラックは感極まったように身を震わせた。落ち窪んだ眼窩に光と、そして涙さえも浮かべている。

反対に、ペティグリューはがっくりと膝をついた。祈るように手を握り合わせては這いつくばり、許しを請うように哀れっぽく啜り泣く。

「駄目だ！ シリウス——私だ……ピーターだ……君の友達の……まさか君は……」

「私のローブは十分に汚れてしまった。この上お前の手で汚されたくはない」

ブラックは威嚇するように長い脚を振ってみせる。ペティグリューは情けなく後ずさりした後、ルーピンに救いを求める眼差しを向けた。

「リーマス！ 君は信じないだろうね……君は私の、一番最初の友達

だった！」

「今ではそれを悔やんでいるくらいだ。君をジェームズとシリウスの二人に紹介しなければ、ジェームズは生きていたしシリウスは十二年間もアズカバンにいなかっただろうに」

ルーピンは蔑むような目でペティグリュウを見下ろす。どこか痛みを覚えたように、顔を歪めたペティグリュウはルーピンに伸ばしかけていた手を引っ込めた。

「ロン……私はいいい友達、いいペットだったろう？ 私を殺させないでくれ、ロン。お願いだ……君は私の味方だろう？」

「自分のベッドにお前を寝かせてたなんて！」

「優しい子だ……情け深いご主人様……殺させないでくれ……私は君のネズミだった、いいペットだった……」

「人間の時よりネズミの方がサマになるなんていうのは、ピーター、あまり自慢にはならないな」

ブラツクが冷たく言い放った。

ロンは痛みを堪えながらも、折れた脚をピーターの手の届かないところへと捻る。

「優しいお嬢さん……賢いお嬢さん……あなたは、あなたならそんなことをさせないでしょう？ 助けて……」

ハーマイオニーは怯えた顔で壁際まで下がった。

皆がペティグリュウを見下ろす中、次にペティグリュウが縋った先は『彼』だった。

「ああ、秋……秋……君なら分かってくれるだろう？ 君と私は……君と僕は似ていると、初めて見た時から思っていた……君はジェームズに憧れていた、僕もそうだ……」

ペティグリュウが『彼』の足に縋りつく。『彼』はペティグリュウを邪険にも、足蹴にもすることなく、身を屈めてはペティグリュウと視線を合わせた。

「秋……生きてたんだな……僕はずっと、君に会いたかった……」

「ぼくもちよつと前までは、君に会いたかったよ」

「そんなことを言わないで……秋、ねえ秋、分かるだろう？ 僕は臆病

者だ、闇の帝王が怖かった……僕は弱かった……僕は……僕は、
ジェームズが羨ましかった……」

泣きながら、ペティグリューは訴える。

「ジェームズの、あの強いところが羨ましかったんだ……ジェームズ
といれば、何も怖いことはないって思わせてくれるような、あんな強
さが羨ましかったんだ……妬ましかったんだ……何もしなくても勝
手に人が集まってくるような、あのカリスマ性が羨ましかったんだ
……」

「……だから、殺したのか？」

「殺すつもりなんてなかった……」

「殺すつもりだったんだろ！」

「黙って、シリウス。ぼくは今ピーターの話を聞いてるんだ」

振り返り、『彼』は強い瞳でブラックを睨みつけた。ブラックはぎく
りと怯んで口を閉じる。

「殺すつもりはなかった……本当だ……『あの人』に逆らったら、僕が
殺される……僕は臆病者だ、死ぬのが怖かった……でもきつとジェー
ムズは、死ぬのも怖くないと思ったんだ」

ルーピンとブラックは揃って目を瞠った。

「ジェームズなら、どうして僕が裏切ったのかも分かってくれら
思っていた……僕の弱さも全部ひっくるめて、僕を認めてくれたのは
ジェームズだけだった……『あの人』から今まで三度も生き延びてき
たんだ、今度もきつと生き延びるさって思ってる……」

「ジェームズとリリーを売った。そういうことか？」

「秋！ 助けて……助けてくれ。僕は『あの人』が怖い……『あの人』
の仲間が怖い……助けて……僕を守ってくれ……」

「……ああ、助けよう。ぼくは君を、ヴォルデモートからも死喰い人か
らも守ってあげる」

『彼』の口からそんな言葉が漏れたことに、この場にいる誰もが動揺し
た。

「秋!? 何を言って……」

「ああ、秋はきつとそう言ってくれらると思っていた！」

「……助けてあげるよ、ピーター」

『彼』はゆつくりと立ち上がり、ペティグリュウに杖を向けた。ペティグリュウは『彼』に縋りついたまま、何が何だか分からないといった目で『彼』を見上げる。

「ぼくが君を殺してあげる。そうすれば、ヴォルデモートも死喰い人ももう怖くないだろう?」

「……秋……いい、いや、レイブン、な、何の冗談だよ……」

『彼』は——幣原秋はニコリと笑った。アキそのままの顔で、柔らかく慈愛に満ち溢れた天使のような完璧な笑顔を浮かべてみせる。

「ワームテール。かつてぼくの友人だった者。あの世で、リリーとジエームズに土下座して謝ってくれ」

——ふわり。

部屋中の魔力が、幣原秋を中心^{かれ}に渦を巻く。

息を吸えぬほどの^{プレッシャー}の圧。ぱちり、ぱちりと、静電気にも似た火花が散る。

音もなく——幣原秋の黒髪が揺れる。

誰もが息を呑んだまま、幣原秋とペティグリュウを見つめていた——ハリー以外は。

「やめろ!!」

ハリーは精一杯の声で叫ぶと、今にも杖を振りかぶろうとした秋に對し、タツクルをかますように全身の体重を掛けて突き飛ばした。二人もつれ合うように床に倒れ込みながら、秋の手から杖をもぎ取る。

秋に跨ったままハリーは肩で息を吐いた。よほど予想外だったのだろう、秋は呆然とハリーを見上げている。

「やめろ——やめてくれ、アキ。いや……幣原秋」

秋の両の手首を押さえつけたまま、ハリーは秋の目を真っ直ぐ見つめた。

「こいつは城まで連れていこう……^{デイメンター}吸魂鬼に引き渡すんだ。こいつにはアズカバンこそが相応しい……殺しちやダメだ。シリウスの無罪を晴らすためには、こいつには生きていてもらわないといけない筈だ」

「死んでいようが構わないだろう。十二年前に小指だけを残して死んだピーター・ペティグリュウの死体が何故か此処にある、それだけで物的証拠には成り得る」

「いいや、足りないね。『秘密の守人』の真実を知ってるのは、脱獄犯で指名手配中のシリウスだけだ。悠長に話を聞いてもらう前に、シリウスが吸魂鬼デイトンターの餌食になる」

ハリーの言葉に秋は黙った。

「僕の父さんは、親友が——あんな奴のために、殺人者になるのを望まないと思うし、それに、僕が——アキの姿をした君が、世界で一番大好きで誇らしい弟の姿をした君が、人を殺すのは——見たくないんだ」

静寂が辺りを包んだ。誰もが、ペティグリュウですら、呼吸の音を潜めた。

その静寂を破ったのは、どこか押し殺したような秋の声だった。

「……アキ・ポッターは、君の本当の弟じゃないんだ。ぼくが、後から人工的に作ったもので……君の傍にいて、咄嗟の時いつでも君を守ることができる人間ほしよが欲しくて——だから、アキ・ポッターは……」

「そんなの関係ないんだ。どうして分からないの？ 君はアキの中にずっといたんだろう？ アキの中から、僕を見ていてくれたんだろう？ 見守っていてくれたんだろう？ ならどうして分からないんだよ！ ハリー・ポッターはアキ・ポッターが大好きだったという簡単なことを！」

秋の瞳が揺れる。何を言っているのか分からないという表情で、秋はハリーを見つめていた。

「本当は血が繋がってなかったところで！ 実の兄弟じゃなかったところどころで！ アキが好きだって気持ちには揺らがない。アキの姿で、ぼくが大好きなあいつの姿で人を殺すのは、僕が絶対に認めない」

「……………っ」

秋は顔を歪めた。ハリーは秋の手首を掴み引つ張り起こす。

ブラックは言った。

「……ハリー、君だけが決める権利を持つ。君がこいつをアスカバン

に送るといふのなら、私達はそれに従うべきだ……そうだろ、レイブ
ン」

「……分かったよ、パッドフット」

大きなため息を零した秋は、頭に手を当て「ごめん、もう限界だ」と
膝をついた。秋が地面に倒れ臥す前に、ハリーは咄嗟に手を伸ばして
秋を支える。ルーピンもハリーに加勢した。

秋はじつと目を閉じている。ハリーは恐る恐る呼びかけた。

「……幣原、秋？」

「気を失ってるだけだ。入れ替わる時は、どうしてもそうなつてしま
うらしい……秋本人からも起こすと言われてる。どれ、私が秋を支
えようじゃないか……」

差し出されたルーピンの手を、ハリーは拒否した。

「いや、僕がアキを支えたいんだ」

アキの身体を背負い、ハリーは立ち上がる。自分より二回りほど小
柄な身体だ、背負うことも全然苦にならない。

ルーピンは一瞬物言いたげな目をしたものの、やがて微笑みを浮か
べ頷いた。

「そうか……うん、ハリーがそれでいいならいいんだ。さあピーター、
立て。立つんだ。大人しくしてろよ」

ルーピンの杖の先から細い紐が噴き出る。その紐に縛り上げられ
たペティグリューは、猿轡さるむすわまで噛まされて床の上でもがいていた。

「しかし、ピーター。もし変身したら——やはり殺す。いいね、ハリー
？」

ブラックは唸るように言う。ハリーは床に転がる哀れな姿を見下
ろし、ペティグリューに見えるように頷いた。

第31話 友達

日本の片田舎。山と川という自然に囲まれた、こじんまりとした一軒家。辺りに人家はなく、この家に来るためには山を分け入る必要がある。

この山が神聖なものだということは、精神に直接作用する感覚ですぐに分かった。幣原直が、どうしてこんな山奥に家を建てたのかも。

幣原直は、きつと予期していたのだろう。

家の近くに邪悪なものを寄せ付けないための、聖域。

邪悪なもの——つまり、ヴォルデモート卿へじぶんのような。

トム・リドルは杖を取り出し、無造作に振り上げる。途端、山が炎に包まれた。

悪霊の炎は勢いよく燃え盛ると、川を一瞬で干上がらせ、ほぼ全ての木々を炭化してはすぐに鎮火する。今の炎で複数の結界が吹き飛び、家を目視で捉えることができるようになった。口元に笑みを浮かべ、リドルは歩を進める。

家の場所は下調べ済みだ。去年の七月、日本に張り巡らせていた監視に巨大な魔力が引っかけた。強大で膨大な魔力——十中八九、幣原秋のもの。

それでも、最初は放置しようと思っていた。持つ魔力がどれだけ多くとも、それだけでは自分の敵となり得ない——全ては扱い方次第。

そう、ライ・シユレディンガーを今年捨て置いたように。

しかし、魔法魔術大会にてその力を発揮せんとするのであれば話は別だ。現在の不穏な情勢に併せ、前回から一対一決闘方式となった魔法魔術大会は、より実践的に魔法を扱う場となる。この大会で上位に入った選手は、闇祓いに直結する進路を選ぶ可能性が——すなわち敵となる可能性が高い。

焼け野原となった山の中に、無傷の家が佇んでいる。家の周囲には、大人が手を伸ばした高さほどの柵がぐるりと張り巡らされていた。入口のところは門になっており、手で押すと開く仕組みになっているようだ。

右手を門にそつと掛ける。ぎい、と金具が軋んだ後、想像以上に簡単に門は開いた。

門の中に足を踏み入れた瞬間、ぞわりと首筋を撫でられたような違和感が走る。何だ、と身構えて周囲を見渡すも、別段変わった様子は見受けられない。

門から家までの間には玉砂利が敷き詰められていた。足を下ろすたびに音が鳴り、その音が若干気に障る。ピリピリし過ぎだ、と意識的に息を吐き出した。

幣原夫妻を殺すために来た訳ではない。勿論、上手く動いてもらえない場合はやむなしと考えているが。

ドアベルを鳴らす。涼やかな音が響いた。

やがて、ゆっくりと扉が開かれる。

「やあ。待っていたよ、トム」

ローブの中で杖を握り締めていたリドルは、昔と変わらない笑顔でにこやかに微笑む幣原直に、彼には悟られない程度に脱力した。

……いや、待て。

『待っていた』と、今しがた幣原直は言った。

勿論、トム・リドルは幣原家を訪問する際に事前のアポイントなど取ってはいない。

もしかすると、周囲の山が燃え盛る様を見て己の仕業だと気付いたのだろうか。たとえそうだとしても、リドルのことを全く警戒する素振りもなければ、怯えすらも見せないというのは解せなかった。

学生時代、リドルが周囲に『ヴォルデモート卿』と呼ばせていたことを、直は知っている。いくら海を挟んだ島国だとしても、息子がイギリスの Hogwarts に通っているのだ。イギリス全土を騒がす『ヴォルデモート卿』の噂を、直が耳にしたことがないとは思えない。

それなのに――。

「立ち話も何だからさ、入ってよ。ああ、靴はそこで脱いでくれる？」

「あ、ああ……」

直に言われるがまま、リドルは靴を脱いだ。靴箱の上にふと視線を遣ると、一輪の花が生けられた花瓶と、小さな透明の水晶、それに白

く細かな結晶——塩だろうか？——が三角錐の形で器に盛られていた。

これは一体何だろう。些細な疑問を持つも、今考えるべきはそれじゃないと軽く頭を振り追い出す。僅かな段差を乗り越え、直が出したスリッパを履くと、直の後について歩みを進めた。

直は一切警戒する素振りも見せず、リドルの前で無防備に背中を晒していた。その様子が、逆にリドルに手出しを躊躇させる。

直は、リドルが見慣れない衣装をその身に纏っていた。紋付の羽織袴だ。腰に何かを差している。杖かと一瞬危惧するも、よく見れば扇子のようだった。

それが直の戦闘服であったとは、リドルはついぞ知らぬままだった。

「……直」

「話の中でもいいかい？」

直は人好きのする笑顔で振り返った。直の眼前に、リドルは杖を突きつける。

「……惚^{とほ}けるなよ、直。僕が何をしに来たか、気付いていない訳でもあるまい」

「まあ、落ち着きなよ。なんてったって久しぶりの再会だ。ゆっくりしていいよ」

杖を突きつけられているというのに、直の声はあくまでもニュートラルだ。直の方がリドルより背が低いため、自然と見下ろす形になる。

「アキナ、トムが来たよ。君も久しぶりだろう」

直は廊下の奥へと声を張り上げた。途端「はいはい」と明るい女性性の声が——幣原アキナの声が返ってくる。

能天気そうなこの声も、腹が立つほど昔と何一つ変わらない。

「……ね？　こちらとしても、君と事を荒立てるつもりはないんだ。話し合いをしよう、トム。そうだろうか？」

腰から抜いた扇子を、直は空いた手のひらに軽く打ちつけた。ぱしんと乾いた音が鳴る。

小さく舌打ちをし、リドルは杖を納めた。

「わあ、本当にトムくんか。久しぶりだねー。ようこそ我が家へいらっしやいました。お茶出すからほら、入って入ってー」

一体何年間会っていないのか、そんな歳月の隔たりさえも一瞬忘れてしまうほど、直とアキナの二人は何一つ変わっていないかった。時の流れに一人だけ取り残されてしまったかのような、そんな孤独感をリドルはふと感じる。

——本当に、全く変わっていない。

リドルが通された先は、どうやら応接間のようなだった。

畳ではなく板張りの部屋で、脚のある椅子とテーブルが据え置かれている。大きな窓からは太陽の光が燦々と差し込み、広々とした庭が窺える。庭には花が多く植えられていて、どれもきちんと手入れされているようだった。

食卓の上や棚の上にも、花が一輪ずつ飾られている。

「百合の花だな」

テーブルの上に生けられた白い花を見て、リドルは思わず呟いた。にっこりと笑った直は「綺麗だろう？」とリドルに椅子を勧める。直もテーブルを挟んだ向かい側に腰掛けたので、リドルもそろそろと腰を下ろした。

警戒を胸に秘めつつへやをぐるりと見渡す。隅の高いところに……あれは確か、神棚と言ったか。木で作られた小さな鳥居が載せられ、神前に捧げるよう、玄関で見たものと同じ透明な水晶と塩が盛られた器が置かれている。

何でもないものの筈なのに、何故かそれが無性に気に掛かった。

アキナがキッチンから、湯呑みを三つ持ってくる。湯気が立ち上る湯呑みをそれぞれに差し出した後、アキナ自身も直の隣の席に腰を下ろすと両手で湯呑みを引き寄せる。

湯呑みの中を覗く限り、どうやら緑茶のようだった。一旦は礼儀として、感謝の言葉と共に一口含む。紅茶とはまた違う、煎った草の匂い。不味いとは感じないものの飲み慣れないため、リドルは早々に湯呑みを置く。

直は先程から全く怯えた姿も見せず、またこちらを探るような雰囲気もなく、ただ美味そうにお茶を啜っていた。湯呑みの隣には先程手にしていた扇子が置かれている。気が焦れて、思わずリドルから口を開いた。

「単刀直入に言おう、直。僕の味方になって欲しい」

「……僕はいつだって、君の味方のつもりだよ、トム」

穏やかに微笑む直の目を、リドルはじつと見据えた。黒い瞳のその奥に隠された心を読み解こうとする。

しかし心に押し入る前に、直は視線を静かにリドルから外した。それが意図的なものか、それとも無意識的なものだったのかは、リドルには判別つかなかった。

「直、僕の言いたいことが分かっている訳じゃないだろう。僕はずっと、お前に味方になって欲しかった。……来て欲しいんだ、直、アキナ。僕と共にイギリスへ行こう」

「……君と、共に」

「ああそうだ。僕と一緒に英国魔法界を統べるんだ。そのためにも一緒に来て欲しい。なあ、直……お前と僕は、友達だろうか？」

「……友達」

リドルの言葉を復唱し、直は目を閉じた。そして再びゆっくりと開く。

「ねえ、トム。好きな人はできたかい？ 守りたいと思える人には出会えたかい？」

リドルから目を逸らしたまま、直はぽつりと問いかけた。

「は？ 何をいきなり……」

「何か、何か、何でもいい。大事なものはできたかい？ 命を捧げても良いと思える、そんな宝物には出会えたかい？」

どこか必死さすら感じる口調だった。

想像すらもしていなかった問いかけに、リドルは目を瞬かせるも、直に嘘をつく必要もないと素直に「いや」と否定の意志を言葉にする。

「何だ、気持ち悪い……そんな感情は邪魔なだけだ。何かに一途に盲目になるなんて、そんなことは愚か者のすることだ」

「……………」

「愛も恋も僕には必要ない。存在すら悍ましい。自分の人生が他人に支配される、そのことが疎ましい。……僕がそう思っていることくらい、お前は知っていた筈だろ」

「……ああ、そうだね。分かった、ちゃんと言葉にするよ」

そう言つて、直はことりと湯呑みを置いた。

「僕が命を賭けても守りたいものはこの世に二つある。何としても、何があつても守りたい人。生きていて欲しい人が二人いる。今、僕の隣にいてくれるアキナと、後もう一人——一人息子の秋なんだ。この二人だけは何が何でも守らないといけない。でも、二人のうちどちらかしか救えないというのであれば……僕は、秋を守ることにした。僕は、僕とアキナの血を受け継いだ最愛の息子、秋を守ろうと思つた。」

話がさつぱり読めずに、リドルはただ訝しげに眉を寄せた。

「お前達三人くらい、僕が守つてやるよ。簡単なことだ」

「……そうだねえ。君ならそのくらい、とつても容易いことなんだろうね」

ふ、と微笑み、直はやつとリドルを見た。リドルがこれまで見たこともないような、静かで儂い笑顔だった。

「でも、君には守れない。君には何一つ守れない」

「……どういう意味だ」

自然、声が低くなる。直は小さく笑い声を漏らした。

「言葉通りの意味だよ。君には何も守れない。何一つとして、君は守ることはできない。自分が一番大事な君に、自分より優先する事柄がない君に、何かを守ることができない。人を喪う悲しさを感じない君に、大切なものの価値が分からない君に、何かを守り通すことなど出来はしない。……はつきり言えよ、トム」

漆黒の瞳に鋭い光を滲ませ、直は言った。

「本当に欲しいのは、僕とアキナじゃなくなつて、秋だろうか？」

「……………」

一瞬、息ができなかった。

直の纏う殺気が、ピリピリと肌を灼く。

「秋を君なんかにやるものか。秋を君の、お前の道具になんてさせない。僕らの最愛の息子を、お前のちゃちな野望のためには使わせない」

「……っ、直……どうやらお前にはまだ状況が理解できていないらしい。いいか、お前に断る権利などない。僕に従え、直。従わないのなら……殺す」

杖を抜くと椅子を蹴って立ち上がり、直の鼻先に突きつけた。小さく息を呑んだアキナは咄嗟に身構える。そんなアキナを片手で制して、直はリドルを見上げた。

「トム、君は間違っている。魔法界を統べる？ 自分に逆らう者を全て皆殺しにして、君は一体どこに向かうつもりなんだい？ いい加減に気付いたらどうだ」

「直、お前やけに余裕だな。この僕に杖を突きつけられておきながら、よくそんな軽口が叩けるものだ。自分が死ねば嫁アキナも息子秋も見逃してもらえらなくても思ってるのか？ 直、お前は生かしてやる。ああ、お前は殺さないよ、だって僕の友達だからな。その代わりお前の目の前でアキナを蹂躪した後、殺す。秋も同様だ。目を背けることは許さない。お前は『殺してくれ』と懇願したところで絶対に殺してやらない。お前が守りたい二人を、僕は完膚なきまでに破壊する」

杖の照準を直からアキナに移す。直が表情を強ばらせたのを、リドルは見逃さなかった。

「……………」
「これが最後だ、直。よく考えて言葉にするんだな。……僕に従え。僕と共に来るんだ」

杖を下ろし、代わりに右手を差し出した。直は口を引き結んだままリドルを見上げていたものの、目を閉じると大きく息をつく。

「……そうか。君はどうしても『そう』なんだな」

「……………」

「分かったよ、トム」

直は傍らの扇子を手に取り立ち上がると、そのまま素早く押し広げ

た。パツと艶やかな金色が視界に広がった瞬間、扇子の中から一枚の紙がハラリと零れる。

細長い紙には、黒と金で何かの陣が書き込まれていた。その紙を見た瞬間、何故だかぞくりと肌が粟立った。

咄嗟に身を乗り出し、直からその紙を奪おうと手を伸ばす。しかし、直がその紙をテーブルに叩きつける方が早かった。

キーンと硬質感のある音と共に、その紙を中心として魔法陣が空中に浮かび上がる。瞬間、神棚の上に置いてあった水晶が眩いばかりの光を灯した。リドルは思わずテーブルから後ずさり、杖を構える。

「……幣原家当主、幣原直が命ずる。森羅万象、この世に生きとし生けるすべての事物よ。我らの願いを、祈りを聞き届けよ」

直が早口で呟いた。途端に光はより強く青白い光を放ち始める。

「万物を司る象徴の精霊よ。我が銘なにおいて命じます。どうか秋をお守りください」

直の隣に寄り添ったアキナが、両手を胸の前で握り締めたまま囁いた。目を上げると強い瞳でリドルを見つめる。

「……っ、お前ら……」

ふと、嫌な予感がした。

杖を窓に向け破壊呪文を繰り出す。普通であればそこら一帯全てが消え去ってしまうほどの威力の魔法を受けて尚、窓ガラスはヒビすら入らなかった。

「何を……直、お前、何をした……!」

「結界や!」

幣原直はさらりと言う。右手には扇子を、左手には様々な刻印が描かれた札を持ち、印を結んだ。

「此処に来る前に、日本の魔術についてもっと勉強するべきだったね、トム。まずは地形。樹齢千年を超える杉の木を有するこの山自体が聖域だ。大きく囲むように流れる川も、一種の結界——もっとも、君がつい先程燃やし尽くしてしまったみたいだね?」

家の門を押し開けた時、嫌な感覚はなかったかな? そう、家を囲む柵も一つの結界だ。

玄関で、君は水晶を興味深そうに眺めていたね。大正解、あれが最後の結界だ。家の四隅に配置してある。結界を発動させた今、もう君は外には出られない」

「……外に出られないのはお前も一緒じゃないか。そもそも結界というものは、外界から異物を遮断するためのものだろう？ 既に内側へと入り込んだ僕には無意味な代物だ」

「分からないかな？ この結界は君を入れないためのものじゃなく、君を出さないための結界なんだ」

どこまでも自然体に、幣原直は言葉を紡ぐ。

「どうして、と不思議そうな顔をしているね。君はもしかして、僕が玄関で君を迎えた時の『待つていたよ』も引つ掛かっていたりするのかな。最後だ、ネタばらしをしてあげよう。」

幣原家は日本魔術界においては名家でね。特筆すべきはこの一点——数世代に一人の割合で、時に関連する異能力を持つ人間が誕生すること。僕もそう。幣原家当主幣原直は夢で未来を視ることができ。加えてアキナはヨーロッパで脈々と継がれた精霊使いの末裔。そんな僕らの息子だから、秋が人並み外れた膨大な魔力を持っていたとしても、そうそう不思議なことじゃない。

だから僕らは知恵を絞ってきた。将来的に、君は秋を狙うだろうと確信していたからね。

後、もう一つあるんだ。僕とアキナが二人揃って初めて組み上がる魔法。東洋と西洋の魔術コラボだ。これは、僕らが命を落として初めて完成する」

じわじわと、真綿で喉を締められている感覚がする。息苦しさに思わず喘いだ。

「僕らの最愛の息子、幣原秋。『秘密の守人』を改変することで、秋自身の座標を僕らの中に隠すことに成功した。これでお前は、秋がすぐ隣を通ったところで姿を視認することさえできない。秋が君を意識的に探していない限り、君は永遠に秋の居場所を知ることにはできない」。

さて、話を最初に戻そうか。結界の話だ。この結界は、僕らが死な

ない限り壊れることなく、ずっとそこにあり続ける。君はここから一生出ることはできない。……ちなみに言っておくと、この結界を解く方法はない。例えるなら、解毒剤のない毒って感じかな。鍵穴のない錠か。だって、僕とアキナはここから出る気なんて全くないのだからね。

こんなに若い身空で両親を喪うことになるなんて、秋はどれだけ辛いだろう。あいつの悲しみを考えると、心が引き裂かれるように痛むよ。……最後に、秋に会いたかった」

そこで言葉を切り、直は大きく息をついた。

リドルは目を見開いたまま、今の話を反芻し、咀嚼したと確信した後、ゆっくりと口を開く。

「直、お前……死ぬのが怖くないのか」

「怖いさ。とつても怖いよ」

柔らかな口調だった。

「まだまだやりたいことはたくさんあった。好きな作家の新作はまだ読んでないし、この前食べた桃のゼリーはもう一回食べたいし、明後日は流星群が極大なんだ。アキナとおじいちゃんおばあちゃんになつてもずつと仲良くしていたかったし、秋の成長をこの目で見届けたかった。秋が彼女を連れてきて、照れながら紹介するのを微笑ましく見たかったし、孫をこの腕で抱きたかった。……でも、いいんだ。死ぬことよりも、僕は秋を失うことの方が怖いから」

そして、リドルを真っ直ぐに見つめる。

「トム、以上が僕の全てだ。君は僕の大切な友達だ。だからこそ、僕は君の足枷になり続ける。秋は天才だ。君に並び立つほどの能力を持っている。秋は両親が死んだことを嘆き悲しむだろう。そしてその怒りから、秋は全力で君の敵になり、味方になることはないだろう。君は秋を殺せないが、秋は君を殺すことができる。秋は君の野望を、全力で阻止しにかかるだろう。これが……友人の君に贈る、最後のプレゼントだ。

僕らを殺さない限り、君はここから出られない。僕らを殺せば、君は秋を見つけることができない」

直はにっこりとリドルに微笑んだ。

その表情はまるで、心を許した親友に向ける柔らかいもので。
「僕の勝ちだ、トム」

第32話 最後の優勝者

爆風に耐え切れず、足が地面から離れた。慌てて空気をクッションのような柔らかいものに変え、地面に叩きつけられる直前で勢いを殺す。

「——っは、やっぱり強いな、ライ先輩……！」

ぼくは日本語で呟いた。

「この人混みは、ライ先輩にとつては最も苦手な場所の筈……こんな大勢の思考が頭に流れ込んでくるんだもの。ぼくには考えも付かないけど……でも、あの人なら、これだけたくさん観客から、ぼくを見ている人の考えだけを抽出することも可能なんだろうなあ。たとえライ先輩の目に映らなくとも、ぼくの一挙一動は見抜かれていると思っただ方がいい。それならせめて——その集中を乱したい」

せめてもの抵抗として、彼の思考にノイズを走らせる。

何だっもいい、悪足掻きで構わない。自分に出来る限りのことを全てやり遂げたい。

全部やり切つて、そして——勝ちたい。

ぼくとライ先輩の間にあつた煙が徐々に薄れていく。注意深く杖を構え、目の前をじつと見据えた。

やがて、ライ先輩の姿が見えてくる。ぼくと同じように杖を構えたまま、こちらの出方をじつと窺っている。

煙が完全に消え去つても、ぼくらはしばらくの間、同じ姿勢で睨み合っていた。

互いに相手の隙を探し、また同時に自らの隙を消していく。どちらも攻めあぐねたこの時間は、あまりに動きのないぼくらに観客が痺れを切らしてざわつき始めても尚、継続していた。

「……っ、凄いなあ、ホント……」

全く動いていないのに、緊張で全身から汗が吹き出る。身じろぎ一つできないほどの緊張感。杖先どころか目線すらも動かせない。先に動いた方が負けるなんて、そんなことを定められているかのよう

恐ろしいまでの威圧感、怖いまでの集中力で、ライ先輩はじつとぼくを見つめる。まるで、獲物に飛びかかる寸前、呼吸どころか気配すらも殺す獣のようだと思った。

——だけど、やられっぱなしではられない。

ぼくだって、持ち得る全ての集中力でライ先輩の一挙一動を見逃さぬよう目を凝らす。杖を握る、力の籠った指先も。こちらをじつと見つめる、濃い茶色の瞳の動きも。呼吸のたびに微かに動く肩も、全てを見逃さない。僅かな、針の穴ほどに僅かな隙を探す。

——それにしても、服がやけに重たいな。

着慣れていない正装だからだろうか。杖を掲げている左腕も、じわりと痺れてきたような感覚がある。目を凝らし過ぎたか、徐々に目も霞んできた。頭の中が段々とぼんやりとしてきて、何だか——瞼が重たい——……

「——っ！」

そこで、ハツと我に返った。

反射的に杖を振り、バックステップで数歩下がる。フツン、と何かが切れるような音が聞こえると同時に、視界も脳内もクリアになった。

「あつぶな——……」

持つていかれるかと思った。

魔法というものは、火を起こしたり攻撃をしたりといった、直接目に見えるものばかりではない。むしろその逆——精神に影響を及ぼす魔法、こちらの方が圧倒的に多いのだ。

心を読む魔法、元気になる魔法、記憶を消す魔法、そして——これを一度でも使えばアズカバンで終身刑になるという、相手を操る服従の魔法。

ライ先輩が今使ったのは、恐らく相手の眠気を誘う魔法だろう。ぼくに悟られることなく魔法を使ってみせることなど、ライ先輩にとっては容易だろうから。

しかし今、魔法を解除するために動いたことで、ぼくとライ先輩との間にあった均衡は崩れた。それを見逃すライ先輩ではない。

赤い閃光がぼくに向かってくるのを慌てて打ち消す。それから術の打ち合いとなった。

息つく間もなく魔法を繰り出し、相殺し、避ける。瞬きする暇さえ与えてはもらえない。先程とは真逆の試合展開となった。

ぼくはジリジリと後ろに後ずさる。反対に、ライ先輩は一步ずつ近づいてきた。足を動かすタイミングはほぼ同じだというのに、ぼくらの間の距離は徐々に縮まっていくのは……ひとえに足の長さの差だろう。ちよつと悲しいけれど。

距離が迫れば迫るほど、術を弾くための時間が短くなる。それに焦れて、ぼくは次の足を心なしか大きく後ろに踏み込んだ——それが仇となった。

「……………っ!？」

何ともお恥ずかしい話ではあるが——気が急いたせいか、ぼくはローブの後ろ裾を踏んでしまったのだ。

しかも悪いことに、目の前のライ先輩に全ての意識を集中させていたため、反応が一步遅れてしまった。気付いた時にはもう、体勢を自力で立て直せないほどだった。

ああ、やってしまった。

そう悟った、その瞬間。

——確かに聞こえた気がした。確かに見えた気がした。

重たい鎖が、弾け飛ぶ様子が。

パァンツと、頭の奥で音がする。粉々に砕かれた、手足に繋がられていた青銅の鎖が、スローモーションで目の前を通り過ぎていく。

それは、今まで感じたことのない感覚だった。

例えるなら、そう——今まで閉じ込められていたことにすら気付いていなかった部屋の窓が開け放たれ、見たこともない景色が外へと広がっていることに、初めて気が付いた時のような。

ほんの小さな変化だけでも、確実に自分の人生を変えることが分かっている——そんな確信を抱かせるような。

「——あ」

尻餅をついて、ハツと我に返った。今が魔法魔術大会の決勝である

ことも、ライ先輩と戦っていたことも、すっかり意識の外だった。ぼくのこんなにも大きな隙を、ライ先輩が見逃す筈はないだろう。今更ながら、ぼくは慌てて杖を握り直す。

——がしかし、予想に反してライ先輩は何も仕掛けて来てはいなかった。むしろ一層注意深く、ぼくの様子を窺っている。

……どうしてだろう？ 先程までは、隙があればすぐさま飛びかかって来そうな勢いだったのに……。

後輩のぼくに気を遣ったのか？ 尻餅をついた相手には魔法を掛けないというフェアプレイ精神の現れか？

でも、そんな雰囲気じゃない。なんだか、さっきよりもピリピリしているというか——さっきよりもぼくを警戒しているような……心なしか、ぼくらの距離も先程より開いている気がするし。

何にせよ、いつまでも座り込んだままでは恥ずかしい。何百人もの観客が見ているのだ。セブルスやリリー、それに悪戯仕掛人にも笑われてしまう。

ぼくは慌てて立ち上がって——杖を持つ手に僅かな違和感を覚えた。

「ん？」

しかし杖に視線を落とすも、特に変化はないようにも見える。指で触って確かめたが、木の細かなささくれもない、いつも通りの自分の杖だ。

気のせい、だろうか……。

ライ先輩は、相変わらずこちらの出方を窺っている。どうやら向こうから仕掛ける気はないようだ。ならばこちらから、と杖を振ったその瞬間——

今まで感じたこともない熱量が、自分自身の杖先から噴き出たのを感じた。

一瞬後、轟音とも称すべき爆発音が大広間に響く。爆風に煽られ、ぼくは僅かによろめいた。女子生徒の悲鳴が木霊する。

驚いたのはぼくも同じだ。ぼくの放つ爆破魔法は、ここまで威力が強いものだったか？

——いいや違う、とぼくは即座に首を振る。この大広間中を揺るがすほどの威力なんてなかった筈だ——ならば何故？

魔力の暴走……ではないことは分かる。魔力が暴走した時特有の、弾ける火花が見当たらないから。これは、言わば——

「呪文の威力が——倍増してる？」

ぼくとライ先輩の間に流れていた煙が晴れてきた。あれほどの威力の爆破魔法すらも防いでしまえるほど練度の高い防護魔法を操れるとは、流石はライ先輩だ。怪我一つ、焼き焦げ一つないまま、ぼくを鋭く見返している。

そんなライ先輩が——動いた。杖を振り、魔法を繰り出そうとする。

ぼくはライ先輩の杖の動きを読んで次の魔法を予測した。先輩が杖から魔法を繰り出した瞬間、対応するべくこちらも魔法を繰り出す。

魔力が杖から溢れ出した瞬間、またも同じ感覚がぼくを襲った。

ぼくが放った呪文はライ先輩の魔法を打ち消すだけでなく、その魔法さえも飲み込んでライ先輩に襲い掛かる。ぼくの呪文を間一髪で避けたライ先輩は、しかしそこでぐらりと体勢を崩した。

一体急にどうして、と疑問を持ちつつも、咄嗟にぼくは杖を振る。

元々無理な体勢だったライ先輩が、新たな追撃を避けられる筈もなく。魔法を初めてまともに食らったライ先輩は、両手を広げた十字の形で空中に縛り付けられた。

縛り付けられた体勢のまま、ライ先輩はぼくを見た。

ライ先輩の口元が動く。何か言葉を発したようだったがけれど、この距離ではその言葉を聞き取ることはできなかった。

——でも、その後。

ライ先輩は目を細め、困ったように微笑んだ。この緊迫した場面にはどこかそぐわない、苦しいものを飲み込むかのような笑顔だった。虚をつかれたぼくは、思わず杖を握っていた手を下ろす。

「お前の勝ちだ」

そう言って、ライ先輩は杖を手放した。軽い音を立て、杖が目の前

に転がってくる。

一瞬、ぼくは拾い上げるのを躊躇した。

杖までの距離、およそ三步分。ぼくはおぼつかない足取りで杖へと歩み寄った。

観客は固唾を呑んで見守っているようだ。周囲を見渡す余裕はないものの、自分の靴の音以外は呼吸音すら聞こえない。

震える指で、確かに杖を掴み取る。頭上に掲げたところで――爆発、とも言うべき歓声が湧き上がった。

実際、それは爆発だっただろう。力が抜けてストーンと座り込み、やっと周りを見渡せば、大広間中に次から次へと花火が上がっていくのが見えたから。

広間中が大騒ぎで、先生のアナウンスすらも聞こえない。何だか、全てがぼんやりとしている。

「秋」

喧騒の中、しかしライ先輩の声だけははつきりと聞こえた。ぼくは緩慢に顔を向ける。

ぼくの魔法から既に解放されたライ先輩は、ぼくに近寄り右手を差し出した。おずおずと手を伸ばすと、グイッと握られあつという間に引き上げられる。

自分の両足で立つ感触って、こんなのだったつけ。地面ってこんなにふわふわしてたっけか。

「おめでとう」

「あ……」

ライ先輩の言葉で、やっと実感が湧いた。

ぼくは勝ったんだ。

ぼくは、この人に勝つことができたんだ。

「ありがとうございます……」

何故だか涙が込み上げてきた。悲しくもないのに、その水は湧き上がってくる。ぐっと堪えたものの、それでも堪え切れず、咄嗟に左の袖で涙を拭った。

大歓声が聞こえる。ぼくが勝ったことで、大勢の人が喜んでくれて

いる。

そのことが何よりも嬉しかった。

第二一八回魔法魔術大会本戦、決勝戦。

優勝者——レイブンクロー寮四年生、幣原秋。

同時に、彼が最後の優勝者となった。



——父さんじゃなかった。

あの姿は、あれは——僕自身、だったんだ。

「守護霊 Expecto Patronum!」

呪文を唱えたハリーの杖先から、銀色の動物が噴き出した。こんなにも眩しい守護霊は初めて見た。

ハリーは目を凝らし、吸魂鬼デイメンターに向かって突進していく守護霊が果たして何の動物の姿を象っているかを見ようとする。

次の瞬間、湖の対岸にて眩い光が見えた。逆転時計タイムターナーを使う前に自分達が倒れていた辺りだ。そこに、小柄な影が立っている。

ああ、恐らく『彼』は——

「幣原……秋」

大きなワタリガラスが、翼を広げて飛んでいる。それを追う自らの守護霊は、あれは——牡鹿だ。

「プロングズ……父さん」

二体の守護霊の出現に、吸魂鬼デイメンターは散り散りになっては暗闇の中へと姿を消した。

吸魂鬼デイメンターに囲まれ、シリウスとハリー、ハーマイオニーが意識を落とした瞬間、幣原秋は再び目を覚ました。

「……連続で外に出てくるのは、負担が大きいな……やつぱり」
吐き気すら込み上げる頭痛を堪える。

立ち上がった自分を目掛け、吸魂鬼デイメンターは我先へと襲い掛かってくる。杖を抜くと静かに唱えた。

「――Expecto Patronum」

瞬間、杖からは見慣れた銀色のワタリガラスが飛び出して来る。守護霊をじっと見つめていると、ふとかつてのリーマスの声が脳裏に蘇った。

『君の守護霊はワタリガラスか。じゃあ君の渾名あだなは『レイブン』だ。これからもよろしくね、レイブン』

「……ムーニー、パッドフット、ワームテール……プロングズ」

目を伏せた瞬間、何か銀色のものが近寄ってくる。何だろうと視線を向け、秋は思わず息を呑んだ。

守護霊。それも――銀色の牡鹿だ。

「ジエームズ……？」

目を凝らすも、守護霊が眩し過ぎて対岸は窺えない。

やがて吸魂鬼デイメンターを全て追い払った守護霊は、闇夜にふわりと解け消えた。

「……いや」

秋は静かに息を吐くと杖を下ろした。

……今日一日、様々なことが起こり過ぎた。シリウスのこと、ピーターのこと、秘密の守人のこと。そして――自分自身のこと。

どれだけの時間、湖畔に佇んでいただろうか。誰かがこちらに近寄ってくる足音に、秋は振り返った。

「……アキ・ポッター？」

セブルス・スネイプが、こちらを怪訝な眼差しで見つめていた。意識を取り戻したのか。

しばし、秋もスネイプも黙って見つめ合った。

「どうして、アキ・ポッターと君が友情めいたものを作り出せたのか、ぼくは理解に苦しむよ」

冷ややかな声に、スネイプは目を睜った。

「……君は……」

「ぼくは決して君を許さない。だから君も、ぼくを絶対に許さないで

くれ」

「……………っ、秋……………」

秋はスネイプを睨みつける。

「もう会うこともないだろう。さようなら、セブルス・スネイプ」

「秋？ 秋、秋なのかっ!?! 秋……………」

スネイプがこちらに駆け寄ってくる。それを最後まで見ることがないままに、幣原秋は自らの意識を手放した。

目が覚めると、そこは医務室のベッドだった。しばらく天井をぼんやりと見つめていたものの、ふと誰かがぼくの左手を握っていたことに気が付いた。

起き上がって見ると、その手はハリーのものだった。ぼくの手をぎゅっと握ったまま、ぼくのシートに突っ伏して眠っている。

一体あれからどれくらいの間時間が経ったのだろう。一体何があったのだろう。

「……………幣原秋だった」

ぼくが、幣原秋だったんだ。

幣原秋とぼくの繋がりは——何てことはない。ずっと追いかけていた人物は、すぐ傍にいたってことだ。

ぼくが、気が付かなかったただけ。

「……………ん、アキ……………起きたんだ」

「あ……………ハリー」

頭を起こしたハリーは、ふにや、と力の抜けた笑みを浮かべた。眼鏡がずれてしまっているの、右手を伸ばして掛け直してやる。

「一体、何が起こったの？」

そう尋ねると、ハリーは昨日の出来事を思い出すようにゆっくりと、一つ一つ丁寧にあった出来事を説明してくれた。

秘密の守人のこと、動物もどぎのこと。アニメーガスリーマスが狼人間に変身し

たこと、シリウスが再び捕まったこと、タイムターナー逆転時計を使ったこと、守護霊のこと。そして——幣原秋のことも。

「……そう、なんだ」

「……ねえ、アキ」

俯いたぼくに、ハリーはそつと声を掛ける。

「君が、本当はぼくの弟じゃなくても関係ないよ。君が気に病む必要は何もない」

「……え？ ど——どうしてき。ぼくはずつと君を騙していたんだよ……アキ・ポッターなんてどこにもいないんだ。ぼくが、幣原秋なんだよ」

「違うよ。君はアキ・ポッターだ。僕の、大好きで最高の弟だ。僕と血が繋がっていなくたって、僕と君が家族だつてことに変わりはない」

「……でも」

「アキ。君は僕のことを嫌いなのかい？」

「まさか、そんな筈ないじゃない！」

ぼくは条件反射で大声を上げた。

「なら、それでいいんだ。……僕は、君が自分の双子の弟だから、君のことが好きになった訳じゃないんだよ」

ハリーはにっこりと微笑んだ。

「君が君だから、僕は君のことが好きになったんだ」

何かを言うことは、できなかつた。

喉の奥に何かがつつかえたようで……一言でも喋ると、何故か涙が零れてしまいそうで——

ハリーはただ、ずっとぼくの手を握っていてくれた。

第33話 決意

「秋っー！」

表彰式の後、壇を降りた直後に大きな声で名前を呼ばれた。振り返る前に勢いよく飛びつかれる。

後ろにひっくり返りそうになったが、何とか堪えた。と思つたら腰を掴まれ、高く抱き上げられて、思わず情けない悲鳴が零れる。

「ほらジェームズ、秋がびっくりしてるだろー！」

「あはははは、知つたこつちやないね!!」

ぐるんぐるんと回っていた視点が、やっと落ち着いた。

そこは自分の目線よりも相当高い場所で、ちょうど手をついたところは丸くてさらさらとしていた。数瞬後、それはシリウスの頭だということ、そしてどうやらぼくはシリウスに肩車されているようだということに気付いて慌てる。

「ちよ、ちよつとー！」

「なんだい秋、え？ 疲れて足が動かない？ それは大変だ、僕らが連れて行ってあげないとー！」

「棒読み具合ひどいなー！」

いくら叫んでも止まってくれるような奴らじゃないことくらい分かってる。ジェームズはシリウスと共に先導しているし、リーマスは笑っているし、ピーター一人じゃこの二人の暴走は止められる訳がないし。

ジェームズとシリウスはぼくを肩車したまま、大広間中をぐるりと一周する。その間ぼくはずっと注目の的で、ぼくは恥ずかしさのあまりシリウスにしがみついたまま、ずっと顔を伏せていた。

「秋！ 秋ってばー！」

ジェームズの声が聞こえる。背中を揺すられて、ようやく声のした方へとちらりと視線を向けた。

「顔を上げてよ」

「う……やだよ、恥ずかしいよ……」

「秋、お願いだよ」

「うう……」

シリウス、リーマス、ピーターにまでも「秋」と声を掛けられ、腹を決めた。

意を決して、ゆっくりと顔を上げる。

「……あ」

ぼくの目の前には、決勝戦を見に来てくれた大勢の人々の姿があった。

大広間のずっと奥まで、一体何人いるのだろうか……数えるのも諦めるくらい。そんなにたくさんの人々が皆、一斉にぼくを見上げては、笑顔で、拍手をしたり手を振ったり、思い思いにぼくを讃えてくれていた。

——どうして気付かなかったのだろう。大広間中を震わす、割れんばかりの盛大な拍手に。

どうして気付かなかったのだろうか……。

何かが胸に込み上げてきて、ぼくは奥歯を噛み締めた。

「ありがとう、皆」

そう呟いた声は、ジェームズとシリウスに拾われて「何を言ってるんだ」と笑われた。

お祭り騒ぎも終わった。窓から差し込む鮮やかな夕焼けが、大広間中を染めている。あれだけ大勢集まっていた人々は、今やまばらになつて思い思いに自由な時間を楽しんでいるようだ。

ジェームズ達と別れた後、ぼくは二人が寄り添って座っているテーブルへと近付いていった。

「あら、秋」

夕焼けよりもずっと胸に来るような、綺麗な赤い髪を持つ少女——
リリー・エバンズは、ぼくを見て柔らかく微笑んだ。

リリーの声に、ぼくが一番の親友である少年——セブルス・スネイプは顔を上げると、読んでいた本をパタンと閉じた。

「二人とも」

ぼくは、二人のすぐ傍の椅子に腰掛けた。

「おめでとう」

「おめでとう、秋」

二人から口々に祝いの言葉を述べられ、少々照れる。「ありがとう」と笑った。

「まあ、秋なら優勝くらいするんじゃないかと思っていたがな」

「当然よね、私達の秋なんだから」

「二人とも、買い被り過ぎだつてば……」

「そんなことないわ！ 秋、あなたつてば自己評価が低すぎよ」

そう言いながら、リリーはぼくの左手をそつと取った。優しい目つきで、ぼくの手の甲を撫でる。

その仕草に、感触に、今から喋ろうとしていた言葉が喉の奥に仕舞い込まれていくのを感じた。

「……こんな手が、あんなに凄い魔法を生み出してたつて思うと……」

ぎゅ、と指を握り込まれる。リリーの手は温かくて、それでいて細くて、薄くて、力を入れるとポキツとあっけなく折れちゃうんじゃないかと思うくらいで、何だかドキドキした。

やがて、すつとりリリーの手が離れていく。少し残念だと思ったが、引き止めるのも何だか変で、ぼくはそのまま手が離れていくのを見送った。

「おめでとう、秋。……なあ、これ、さつきもらっていた盾か？ ちよつと見ても大丈夫か？」

「あ、うん。いいよ」

セブルスはぼくの腕に抱えられている盾を指差した。ぼくが手渡すと、セブルスは慎重にその盾を受け取り、恐る恐る検分する。

「そんなに身構えなくても、簡単には壊れないつて」

「いや、万が一のことがあるだろう。この盾は、君が伝統ある大会で優勝したことの証だ。壊すことはおろか、傷一つさえつけるのは僕が許さない」

ぼく、じゃなくつて君が許さないのか。苦笑しつつも、セブルスらしいなと思う。

「思っていたより、小さいんだな……」

「そうだね。でも細工が凄いなだよ、ゴブリン製って聞いた。この細工全部銀で出来てるんだってさ」

「へえ……」

セブルスが物珍しげに『魔法魔術大会学生の部』『校内の部優勝』『レイブンクロー寮四年 幣原秋』と彫られた部分を指でそつとなぞつた。

「これ……君の両親には見せるのか？」

「うん、そのつもり。多分、すつごく喜んでもらえると思う」

「ああ……そうだな」

静かに、セブルスは微笑んだ。

「きつと、喜んでくれる筈だ……」

春から夏へと、日差しが移り変わる頃。

ぼくらはまだ、幸せだった。



「ドラコ、話があるの」

いつになく強い口調のアクアに、ドラコは驚いた顔で振り返った。

ルーピンが辞めたと今朝方スネイプに聞き、スリザリンの談話室は大盛り上がりしていたところだった。今日はお祝いだパーティーだなどと、スリザリン寮は一年から七年まで上を下への大騒ぎ。その真っ最中のこと。

「どうしたんだ、アクア。珍しいな。早く済むか？ パーティーの準備がまだ途中なんだ。僕が抜けちゃ、準備に滞りが出る」

「……ええ、早く済むわ。後々大変でしょうけど」

アクアの言葉に、ドラコは疑問符を浮かべる。

「……さすがに私一人の問題じゃないから。でも、出来るだけあなたの手は煩わせない……言い出したのは私だから」

「……何の話だ？」

アクアは小さく息を吸い込むと、真っ直ぐにドラコを見つめた。

「……婚約を解消しましょう、ドラコ」

ドラコはしばらく呆然とアクアを見つめていたものの——やがて「はああつ!？」と大声を上げ、ドラコはアクアに詰め寄った。その大声に、談話室にいたかなりの人数が振り向くのもお構いなしだ。

「な、何言ってるんだお前……自分が言ってることの意味が分かってるのか?」

「……分かってる」

「分かってない! アクア、こういうのは思いつきで行動しちやダメなんだよ。少しはちゃんと考えてから……」

何人もの生徒がドラコとアクアを注視する。その視線にすら気付かないまま、ドラコはアクアの肩を揺さぶった。

「……ちゃんと考えたわ……考えた。その末の行動が、これよ」

「じゃあ考え直せ! お前は何も知らないからそんなことが言えるんだ。お前は」

「守られてばかりは、もう嫌なの!」

アクアの大声に、ドラコは思わずたじろいだ。

今にも泣き出しそうに顔を歪めつつ、アクアは懸命に言う。

「……今まで散々、あなたに守られてきた。それはとつても、とつても感謝してるの。あなたがいなかったら、私は多分、潰れてた。あなたの背中に隠れることで、今までいろんなものから逃げてきた。……でも、もう逃げたくない」

「だからって……」

「……私は、勇気が欲しかった。決められた道じゃない、自分自身で生きる道を作る勇気が。でも、そんな勇気なんてないって、ずっと諦めてた……でも、違ったの。決められた道以外を望みながら、私は今まで自分から動こうとはしなかった……誰かの影に隠れて、息を潜めて生きてきた。でも、それはもう、やめる」

大きな目の隅に涙が溜まり始める。ローブの裾で乱暴に拭ってから、アクアはドラコを見上げた。

「わたし——私は、弱虫で、泣き虫で、我が侷で、いつもドラコにすつ

「ごい迷惑かけて……不器用で、意地ばつか張つて、でも——私は、あなたに守られてばっかは、嫌なの」

「……アクア」

「私だって……私だって、誰かを守りたい。守られる人じゃなくって、守る人に、守れる人に、私はなりたいの」

「そう言い切り、アクアは堪え切れなくなったかのようにポロポロと涙を零した。ああもう、と舌打ちしつつも、ドラコはアクアの頭を抱き寄せ、落ち着かせるように軽く背中を叩いてやる。」

「子供のころからずっと一緒に育ったのだ、あやし方くらい心得ている。それに、こういう時のアクアは絶対に自分の意志を曲げないことも。」

「多分、すっごい怒られるぞ」

「……うん」

「僕はもう、お前と一緒にいてやれなくなるぞ」

「……分かってる」

「誰に何を言われても、庇ってあげられなくなるぞ」

「……それで、いいの。……それが、いいの」

「アクアが頭を振った。」

「……そこまで言うんならな。流石に、お前にそんな酷い顔で詰め寄られちゃ敵わない」

「ひ、酷い顔って……」

「実際そうだろう。ほら、顔拭け。ハンカチ貸すから。ああ、顔を擦るな、赤くなるぞ」

「う……うるさいわ」

「そう言いつつ、アクアは素直にドラコのハンカチで顔を押しさえた。」

「ということは、きつと夏休みは戦場だな……母上にぶん殴られる覚悟はできてるか?」

「……今更、よ」

「そうか」

「ドラコは小さく息をつく。」

「——この少女を、自分こそが守らなければと思っていた。」

器用に生きることができない幼馴染を守れるのは自分だけだと思っていた。

……でも、違ったのだ。

アクアは自分が守ってやらねばならないほど弱くない。自分でしっかり前を向いて歩いている。

なら、自分は彼女の幼馴染として、誰よりも彼女を知っている者として、後押しをしてやらなければならない。

「……アクア、お前、好きな奴ができたんだろ」

アクアが驚いた顔でドラコを見上げる。その顔が見る見る間に朱に染まっていくのが面白く、ドラコは思わず吹き出した。

「な……っ、ち、違うわ！ そんなんじや、ちが、違うってば！」

「そんなに言い訳しなくても、何年一緒にいると思ってるんだ。しかしまあ、あんな女みたいな顔した奴が好きなんて、お前の趣味もなかなか……」

「やつ、それ以上言わないでっ！ 別に私は、その、べちゆに！」

「噛んだぞ」

「うるさいわ！」

そんなにも真っ赤な顔をして、よくもまあ。

「……アキに謝つとかないとな……」

「違うわっ！ アキじゃない、別に私、違うから！ 好きな人が出来たんじゃないから！」

「今更何を言ってるんだ」

「違うの！ アキなんて、アキなんて別に……」

初めて見るほど動揺しまくってるアクアをさしておいて、ドラコは肩を竦めた。

第34話 可能性

魔法魔術大会の決勝戦が終わり、すぐに修了式の日になった。

今年度は我がレイブクロウ寮が見事に寮対抗杯で一位を獲得したので、大広間中の飾りは青と銀色に彩られている。だからだろう、レイブクロウ生は誰もが誇らしげな顔だ。

当然、ぼくだって嬉しい。だってこの優勝は、ぼくが魔法魔術大会で優勝した分もプラスになっているのだから。二位のグリフィンドールと百点も差を付けた圧倒的な勝利だ。

基本穏やかなレイブクロウ生だ、表立って騒ぐような人は少ないものの、今日は心なしか皆の表情も綻んで見える。

シミ一つなく磨き抜かれた銀の食器が、空中でゆらめく蠟燭の光に照らされてピカピカと光っている。

オーケストラ隊の合奏が聞こえる中、ダンブルドアはゆっくりと立ち上がり両手を叩いた。すぐさまざわめきが収まる。

ダンブルドアが今にも喋り出そうと息を吸った瞬間、急に大広間の扉が開いた。全校生徒の注意がパツと扉に集まる。

ドアから現れたのは、巨大な火の玉だった。それはぼくら生徒の頭上を猛スピードで飛び越えると、壇上のダンブルドア目掛けて一直線に突っ込んでくる。

ダンブルドアがその火の玉を片手でパツと払った、その瞬間——
パツという音と共に、その火の玉から沢山の星の欠片が零れ出た。

それらは色とりどりに発光しながら、大広間中を自由気ままに飛び回る。星と蠟燭の光で彩られていた大広間に、新たな光が加わった。まるでそれらは、長く尾を引く流星のように、とても綺麗で、幻想的で、美しかった。

誰の仕業か——なんて、聞かなくても分かっている。

手を差し伸べると、タイミングよく星が手の中に飛び込んできた。そっと摘み上げ、光にかざす。

自然と笑みが零れていた。



訪れたリーマスの部屋は、もう随分と片付けられていた。

リーマスは部屋の真ん中で鼻歌を唄いながら杖を振っている。杖の動きに従って、本棚に押し込められていた本が次々と旅行カバンの中に入っていく。拡張呪文でも掛けられているのだろう、どう見ても入りそうにない量の本がカバンに吸い込まれるように消えた。

「……おや、アキじゃないか。目が覚めたようだね。どうだい、気分は？」

「悪くはない、とだけ言っておきましょう……」

少し息を吸い込み、ぼくは言葉を紡いだ。

「昨日の顛末を、ハリーから聞きました。……ぼくが、幣原秋だつてことも」

「……あの場で突然バラすような真似をして、悪かつたとは思っているよ」

リーマスの笑顔が消えた。代わりに気遣わしげな表情でぼくを窺う。

ぼくはその視線を無視して口を開いた。

「最初に会った時の『久しぶり』は、何てことはない、幣原秋への挨拶だったんですね。ぼくの中で……この中で」

自分の頭を指差した。

「眠る、幣原秋へ」

「……早目に言わなかったのは、ごめんね。ただ、君が『アキ・ポッター』としてどう生活してるのか気になっただけなんだ」

「……昨日、幣原が何を言ったのか、何をしたのか、ハリーは多分、ほとんど全部正直に教えてくれたと思います……そういう嘘をつかれるのをぼくが嫌うことを、ハリーは知ってるから。」

……ハリーがぼくを、弟でもない宙ぶらりんで不安定なぼくを、それでも好きだつて言ってくれたから……ぼくはかろうじてここに

ることができる。ハリーに拒絶されたら、ぼくは生きていけない。ぼくは……ぼくはハリーが好きだ。でも、この気持ちは、幣原秋がハリーを守るために、ぼくに植え付けた人工的なものなんじゃないかって、思つて……凄く、怖くなった」

自分の思考をコントロールされている気分。

自分の意思で行動している筈なのに、誰かに操られているような、そんな恐怖。

「ああ、それなら大丈夫だ」

「……大丈夫？」

しかしリーマスは、ぼくを安心させるようににつこりと笑った。

「一度、君がここで眠り込んだことがあっただろう？ その時、久しぶりに秋とお喋りさせてもらったんだけどね。その時、秋は言つてたよ。自分が分かるのは、アキ・ポッターが見たものと聞いたものだけだ、アキの感情や思考は分からないんだって」

「……それは、不便ですね」

「本当にそう思うかい？」

「だつてそうでしょう。幣原はぼくを、自分の手足と同じ感覚で作つたんだ。ならば幣原はブレインとして、操縦者として、ぼくの上に君臨しなきゃいけない。それにしちやあ、これはあまりにお粗末じゃないか——手足ですらない、ぼくは幣原にとつてただの同居人だ。この身体を共有しているお荷物に過ぎない」

「……まあ、私には……幣原秋が結局のところ何を考えていたのか、いまいち分かりかねるところがあるからね。天才の所業は、凡人には理解できないものさ。秋が失敗したのか、それとも意図的にこうしたのか、それは私にも分からない。でも」

そこでリーマスは言葉を切った。

「君は一つの可能性だ。僕はそう思うよ」

「……可能性」

「幣原秋が選び取れなかった道を選んでくれる、可能性だ」

「何ですか……それ」

「言つてもいいけど、君を通して幣原に伝わっちゃうからね。それは

癪かな」

「……………」

次にリーマスは戸棚に杖を向けた。陶器の食器が凄いい勢いでカバンの中に飛び込んでいく。……えっ、いや、流石に陶器は………というか、このカバン四次元にでも繋がってんのか？

「……ホグワーツを辞めて、これからどうするんですか？」

「とりあえず、書き溜めていた論文があるからそれを出す。しばらくは何とか暮らしていけるだろう……職は適当に探すよ。何、慣れたものさ」

そんな顔をするなとリーマスは言っ、ぼくの頭を軽く撫でた。感触を懐かしむように、髪に指を絡ませするりと解く。

「先生……いや、リーマス」

リーマスの目を、ぼくはじつと見つめた。

「ぼくら、また会えるかな」

「君らしくない、消極的な言葉だね。僕の知るアキ・ポッターは、もっと明るい少年だった筈だけど？」

悪戯っぽくリーマスは微笑む。それなら、とぼくもにやりと笑った。

「また会おう、リーマス」

そうだね、とリーマスは頷いた。

第35話 暗転

手に馴染むその扉を、ぼくはゆっくりと押し開けた。部屋に足を踏み入れる。

大きな窓からは、太陽の光がさんさんと降り注いでいる。庭には花が多く植えられていた。それらは全て枯れていた。テーブルは真つ二つに折れていた。

食器は全て割れていた。

棚は全て倒れていた。

小さな雑貨は全て棚から落ちていた。それらは全て砕かれていた。奥の部屋へと行ってみた。部屋中をぐるりと囲む本棚から、本は床に全て落ちていた。それらは全て破かれていた。

そして、その中央に――

「秋？ 秋！」

揺さぶられて、ぼくはハッと目を覚ました。

ライフ・フェイスナーが、ぼくを覗き込んでいる。開いたカーテンの隙間からは、眩しいばかりの日の光が差し込んでいた。

「珍しいね、寝坊なんて」

「ん……ごめんね、ありがとう」

「早く支度しなよ？ 今日忙しいんだからね」

はあいと頷き、ぼくは慌ててパジャマを脱ぐと服に袖を通した。

今日はホグワーツ特急でホグワーツから家へと帰る日だ。早めに朝食を食べて帰省の用意をしなければ、汽車に乗り遅れてしまう。

手早く髪を括るとライフを追いかける。その頃にはもう、先程見た夢のことなどすっかり忘れてしまっていた。

キングズ・クロス駅は多くの家族連れで賑わっていた。紅のホグワーツ特急からは大きなカートを引いた生徒が次々と降りて行って、

九と四分の三番線で待つ家族の元へと駆け寄っていく。

そんな様子を横目に、ぼくはコンパートメントの中でセブルスとリリーに向き直った。

「じゃあ、また新学期で」

「ああ」

「またね、秋！」

そう笑い合い、ぼくも汽車から降りる。二人の姿が見えなくなるまで手を振った後、ぼくも両親を探してカートを手に歩き出した。

「んー……」

四年生も終わったものの、ぼくの身長は人と比べて小さめだ。だから自然、ぼくの周りには人の背丈で壁ができていて、周囲を碌に見渡すことも難しい。

今までどのように両親を見つけていたんだっけ……と考え、思い出した。今まではいつも、両親がぼくを見つけてくれていたんだ。

……列車の近くにいた方が、両親にとっては見つけやすかったかな？

今更ながらそう思ったものの、もう遅い。汽車からはもう随分と離れてしまったし、今から重たいカートを手にこの人混みの中をUターンするのは骨が折れる。

後少し経てば、人の量も減るだろう。そうすれば見通しもぐつと良くなるに違いない。

それまで待つのが得策かと、ぼくは待合室へと入った。どこも混み合っているものの、たまたま一席だけ空いている席を見つけ、ラックキーとばかりに腰を下ろす。

両親と会うのも、何だか随分と久しぶりだ。今年度はクリスマスにも帰らなかったから丸一年ぶりか。

ちらりと隣のカートに視線を向けた。この中には、先日の魔法魔術大会でぼくが優勝したときに貰った盾が入っている。

両親をびっくりさせたくて、まだ優勝したことは話していない。きっと驚くだろう。喜んでくれるだろうか。きっと喜んでくれる筈だ。

……もしかして、まだ両親はイギリスに到着していないのだろうか？
一人静かに待っていると、そんな不安がむくむくと湧き上がってくる。

日本まではいつも飛行機で帰っている。その飛行機が遅延したとか故障したとか、そんな不具合があったのかもかもしれない。

首からいつも下げているロケットを引っ張り出して中身を確認するも、新しいメッセージは入っていないようだった。むう……と唇を尖らせつつも、ロケットをいつもの通りに仕舞い込む。

——もしかして、事故にでもあったのかもしれない。

そう思い始めたのは、待合室の椅子に座って優に三十分は経った頃だった。ロケットにメッセージを入れることすらできないくらい、緊急なことが起きているのかも……。

そう考え始めると、段々と良くない方向へと思考がズレていく。ブンブンツと頭を振って、嫌な考えを追い払った。立ち上がり待合室を出る。

プラットフォームにいる人の数は、予想通り随分と少なくなっていた。その中でぼくは、両親の姿がないかキョロキョロと探す。

ホグワーツ特急もホグワーツに帰ってしまったようだ。周囲を見回すも、両親らしい人の姿はどこにもない。端から端まで探しても見当たらない。心細さに唇を噛んだが、顔を上げた。

いつまでも九と四分の三番線に留まっている訳にもいかない。今度はキングズ・クロス駅を探してみよう。もしかしたらホームで会えるかもしれない。

駅を探して、それでもいかなかったら……。

——いいや、ちよつと一人で心細いだけだ。大丈夫、ぼくはもう十五歳なんだから。

駅の柱に寄り掛かるフリをして、九と四分の三番線を通り抜ける。辺りに人気はなく、見られた雰囲気もない。そのことに安堵しつつカートを押した。

キングズ・クロス駅はイギリスの主要駅だ。様々な路線が入り組ん

でいるのもあつてとても広い。

その時、背後から駆け寄ってくる足音が聞こえてぼくは振り返った。駆け寄ってきた人物が思いも依らない人だったので更にギョツとする。

「え……ライ先輩!?!」

ぼくの傍まで走ってきたライ先輩は、膝に手をつき苦しそうに喘いだ。しかし息を整える間もなく顔を上げると、長めの前髪の間からぼくを険しい眼差しで見つめ「……秋」と口を開く。

「えと、その、一体どうしたんですか……?」

「……本当に」

——すまなかつた。

ライ先輩は掠れた声で呟いた。

その声は、思わず聞き逃してしまいそうなほど小さくて、ぼくはとうしてライ先輩がぼくに謝るのか、意味が全く分からなくて、咄嗟に「ええ?」と尋ね返した。

しかし、答えが返ってくることはなく。代わりにライ先輩はぼくの手をぐいっと掴んだ。ぼくを自分に引き寄せると、右の踵をカツンと左踵に当て、その場でクルツと回転する。

これは——この動作は、姿くらましの術——

「何が……起こってるんですか」

ぼくの問いかけに、ライ先輩は短く答えた。

「お前の両親が——死んだ」

その言葉を最後に、ぼくの視界は急速に暗転していく——。



学期の最終日、期末試験の結果が発表された。なんと『魔法生物飼育学』が合格していたのには驚いた。

ハーマイオニーも、授業を途中放棄した『占い学』以外は全科目良い点が取れたようだ。ハーマイオニーのことだからきつと大丈夫だと思っていたものの、それでも何だかホツとした。

この日の大広間は、グリフィンドール寮が優勝杯を獲得したお祝いとして赤と金色に彩られていた。普段青と銀色のレイブンクローの中で暮らしているぼくとしては、何となく目が痛くなる。

それでも素晴らしい料理を前にすると、そんなことも些細なことだと思えてしまうのだ。ここにリーマスさえいれば、と思った。

「そういや、もういいのか？」
「ん？」

突然アリスにそんな言葉を投げかけられ、ぼくはローストビーフを頬張りながら顔を向ける。アリスはしばらくじつとぼくの顔を見ていたものの、やがてフツと笑って顔を逸らした。

「だって今年、お前ずつと忙しそうだったし」

「……あー……あはは……」

無意味にかぼちやジュースのストローをくるくるさせる。やつぱりアリスには隠し通せてなかったか。タイムターナー逆転時計を使っていた……までは勘付かれていないかもしれないものの、それでもだいぶ気を遣わせてしまったようだ。

「ごめんごめん、来年度はもつと構ってあげるからさ」

「ハ？ 何様のつもりだコンニャロ」

アリスはぼくの頭に手を伸ばすと、そのまま勢いよくぐしやぐしやにする。あーあーあー、だから髪括つてる時にそんなことさあ……ま、いいや。ぼくは寛大なのでね、許してあげますよ。

……そう、タイムターナー逆転時計と言えよ。

タイムターナー「逆転時計はシリウスが解放された日、マクゴナガル先生に私から返しておいたわ。それとね、アキ。私、占い学とマグル学を辞めることにしたの」

ホグワーツ特急を待つ間、ハーマイオニーは宣言した。ぼくは驚きつつも納得して頷く。

「ああ、それがいいと思うよ。あんなもの逆転時計を使い続けてちやあ気が狂っちゃおう」

「その割には、アキは平然としていたように見えるけど？」
「ぼくはほら、いろいろと慣れてるからね。理不尽なことが唐突に

降つ掛かつてきたりとか日常茶飯事だから」

ハーマイオニーは面白そうに笑った。

彼女の晴れやかな笑顔も、思えば久しぶりだ。随分と逆転時計タイムターナーのせいで参つてたからな、精神的にも、身体的にも。

「散々迷惑を掛けてごめんさい、アキ。あなたがいたおかげで、気持ちの面ではかなり楽だった」

「だったらいいんだけど。ハーマイオニーの役に立てて、嬉しいよ」

ぼくもハーマイオニーに笑みを返す。

ハーマイオニーもロンも、ぼくが幣原に——リーマスやシリウスの友人である幣原秋に作られた存在であるということについて、ほとんど手放しで受け入れてくれた。ぼくに今まで通りに接してくれる。その反応は、不覚にも……涙が出そうなほどに、感情を揺さぶられた。

その時、ハーマイオニーが悪戯っぽい目をぼくに向け囁いた。

「そう言えばアクアのことだけれど、知ってた？ あの子、マルフォイと婚約を解消したんですって」

ああ……そう言えば、この前アリスがボヤいていたっけ。「あのお嬢サマは、マジで何考えてやがんのか分かんねえ」とサジを投げていた。ぼくも考えたけど、何で彼女達が婚約を解消することになったのかはよく分からない。

この一年でドラコはパンジーと親密になったようだけれど、恋人とかじゃないみたいだし……それに、あの婚約はアクアの方から解消したようだし……うーん。

「アキ、チャンスよ！ 私の目に狂いはないわ、あの子多分アキに気があると思う。今年一年、アキと一緒にいる機会が多かったけど……あの子、私があなたの隣にいるのを見つけた時、いつもちよつと不安そうな顔するの」

「……いや、どうだろうね。そうだったら、そりや嬉しいけど」

ぼくは苦笑いを浮かべてみせた。誰にも気付かれない程度に目を伏せる。

——ぼくはアキ・ポッターだ。でも同時に幣原秋でもある。

自分の親ほどの歳である『ぼく』を、アクアは受け入れてくれるだ

ろうか。

それに……きつとぼくは、幣原秋として、やらなければならぬことがあるのだろう。

そんなぼくが、アクアと……？

アキ・ポッターは、アクアのことが好きだ。我ながら心底惚れ込んでいると思う。

でも一方、幣原秋としては、そりやぼくの友人であるアクアマリン・ベルフエゴールの存在くらいは知っているだろうが、彼女に対し特別な興味も何もないだろう。

自分の身体が、幣原秋と意識を共有するものだとは知ってしまった今——今までのように心そのままには振舞えない。独り言すらも下手には漏らせない。

心の中までは覗けない、というのは少し嬉しかったけれど——それでも、常に監視されているような息苦しさは付き纏う。

それに——正直なところ、自分自身のことでも手一杯で、とてもアクアに回せる分は残っていない。自分でもまだ、幣原秋を完全に受け入れることはできていないのだ。

毎晩『夢』で見ている幣原秋と、ハリーが話してくれたあの日の幣原秋は、まるで別人のようだった。

ぼくの知る幣原秋は、あんな奴じゃない……あそこに辿り着くまでに、一体何があったのか。その部分が抜け落ちている。

「アキ？」

ハーマイオニーがぼくの顔を覗き込んだ。どうやら心配させてしまったみたいだ。

「どうしたの？ 具合でも悪い？」

「いや、大丈夫。別に何ともないさ、平気だよ」

「そう……ところであなたは、来年の授業はどうするの？」

「ああ、そのこと。それなんだけどさ、フリットウィック先生が、折角だからこのまま——つまりまあ、十二科目だね、履修し続けてみないかって。逆転時計は使わないように、何とか時間割を工夫してくれるってさ」

笑って肩を竦める。ハーマイオニーは尊敬するような同情するよ
うな視線を向けた後「アキならきつとできるわ。実際、私より頭も良
いものね」と頷いた。

「ハーマイオニーより頭が良い？ 言い過ぎだよ。ぼくはもう実際、
幣原秋として一度習ってるから……」

ポロリと零した直後、失言だったとすぐに気付いた。『幣原秋』の名
前を聞いた瞬間、ハーマイオニーの表情が強張ったのが分かった。

「……うん、まあ、そんな感じだよ」

ふわつとした言葉で締める。ハーマイオニーは今の間を振り払う
ように無理矢理笑みを浮かべてみせると、やって来たハリーとロンに
大きく手を振った。

「あなた達、遅いわよ！ どうして昨日のうちにトランクに荷物を詰
めておかないの？」

「うわあ、ハーマイオニー、どうして分かったんだい？」

「あなたのことなんてお見通しよ」

そんな言葉を交わしながら、ぼくらは空いていたコンパートメント
に入って腰を下ろした。

「ハリー、アキ、夏休みは絶対に僕達のところに来て、泊まってよ。僕、
パパとママに話して準備して、それから話電する。フエルトン 話電の使い方が

もう分かったから……」

「ロン、テレフォン 電話よ。まったく、あなたこそ来年『マグル学』を取るべき
だわ」

去年の夏休み、ロンがダーズリー家にとんでもない電話を掛けてき
たあのことを言っているのか。

「今年の夏はクイディッチのワールドカップだぜ！ どうだい？ 泊
まりにおいでよ、一緒に見に行こう！ パパ、たいてい役所から切符
が手に入るんだ」

「へえ、ロンのお父さんって凄いな」

素直に感心する。流石は魔法省勤め。

だとしたら、ライフも切符を手に入れられるのだろうか。でもリイ
フのことだ、また休みもなく仕事潰けかな……？ アリスだけなら、

あるいは……。

そんなこんなでお昼過ぎ。ふと窓の外を見たぼくは、ギョツとして思わず声を上げた。

それはちっちゃなフクロウのようだった。自分の身体よりも大きな手紙を啜えているものだから、空気に煽られまくっていて今にもどこかに飛んで行ってしまいそうさ。

窓を開けたハリーは、シーカーらしい俊敏な動きでパツとそのふくろうを捕まえてみせた。コンパートメントの中に入れてやると、そのふくろうは凄いい勢いで天井辺りをブンブン飛び回る。

「僕宛てだ……シリウスからだ！」

ハリーが嬉しそうに叫んだ。目を瞠ったぼくらは「よ、読んで！」とハリーに詰め寄った。

その手紙にはシリウスの現状と、ファイアボルトを贈ったのは自分だという告白、そしてハリーとぼくの Hogwズミード行きを許可する旨が書かれた羊皮紙が入っていた。

「ん？　なんだこれ、もう一枚入ってた……アキ宛だ。はい」

封筒の中をもう一度見たハリーは、ぼくに一枚の羊皮紙を渡した。ぼくの名前が書かれている。

ぼくは黙ってその羊皮紙を開いた。

『親愛なるアキへ』

君本人とは結局話せなかったものだからね、こうして手紙を送らせてもらった。

今まで、私の代わりにハリーを守ってくれてありがとう。私は君の後見人でも何でも無いが、幣原秋の友人として、君をこれからも見守っていききたいと思っている。

親代わり、と書こうとしたが、気恥ずかしくて止めたよ、思わず。君は私の学生時代の姿も知っているんだらう？　なら、下手に大人ぶったところで無駄なだけだ』

そこまで読んで初めて気が付いた。

夢で、ぼくは毎日幣原秋の人生を追体験している。それはつまり、幣原に視覚と聴覚が筒抜けな現状と同じじゃないか？

いや、アキ・ポッターには幣原秋がかつて考えていたことも、感情も痛みも絶望もダイレクトに伝わっているのだ。程度としては酷い。

『また会おう、アキ。君に会えて、よかった』

「……………」

『ここからは秋へ』と書かれているところで、ぼくは手紙を折り畳んだ。いくら自分自身だとしても、他人の手紙を見るのは失礼かと思っただからだ。

ハリーもロンもハーマイオニーも、手紙の内容は尋ねてこなかった。その距離感の取り方が、なんだか心地よく感じた。

キングズ・クロス駅は相変わらず凄い人混みだったものの、ぼくとハリーはすぐにバーノンおじさんを見つけることができた。ウィーズリー夫妻を遠巻きに見つめる姿が、もうマグルオーラ全開だったからだ。

ぼくとハリーはまず真っ先にモリーおばさんに駆け寄った。ぼくらが抱き締められるのを見て、おじさん達はますますウィーズリー夫妻から距離を取った。

ロンとハーマイオニーに「また今度！」と手を振り、ぼくらはバーノンおじさんの方へ歩き出す。その時、ロンが叫んだ。

「ワールドカップのことで電話するからな！」

ぼくとハリーは振り返り、了解とばかりにロンに手を振った。

ハリーの手に握られていたシリウスからの手紙を見て、バーノンおじさんは心底嫌そうな顔で口を開いた。

「そりやなんだ？ またわしがサインせにやならん書類なら、お前はまた……………」

「違うよ。これ、僕の後見人からの手紙なんだ」

「後見人だと？ お、お前に後見人なんぞいないわ！」

「ううん、いるんだ」

ハリーは弾んだ声で言う。

「父さんと母さんの親友だった人なんだ。殺人犯だけど、魔法使いの牢を脱獄して逃亡中だよ。ただ、僕らといつも連絡を取りたいって。

僕らがどうしてるか、知りたいんだって。幸せかどうか確かめたいんだってさ」

バーノンおじさんの顔が恐怖で歪んだ。

ぼくとハリーは顔を見合わせクスクスと笑うと、共にカートを引いて駅の出口へと向かう。

どうやら、今年の夏休みはかなり居心地が良さそうだ。

短編 ジェームズ視点 退屈凌ぎの予想外

ジェームズ・ポッターが、初めて幣原秋と出会ったのは、普段あれほどの変人さを醸し出し、悪戯好きで天才肌の彼らしくもなく、何の変哲もないのだが、極々普通に、グリフィンドールとレイブンクローの唯一の合同授業である、闇の魔術に対する防衛術の授業の際であった。

始業時間ギリギリに、相棒のシリウスと共に教室に滑り込むと、出席を取っている教授にバレないように一番後ろの席に腰掛ける。二人で「今日も間に合ったな」とばかりにニヤリと笑い合い、背もたれに体重を預けて辺りを見渡して初めて、隣に一人の少年がいることに気がついた。

やけに小柄な少年だった。同室のピーター・ペティグリユーもグリフィンドールの一年男子の中で一番小さいが、彼はピーターよりも小さいかもしれない。魔法で赤々と灯された光に輝く、後ろで一つに括られた、珍しいほどに艶やかな髪が印象的だった。この授業では、ただ教科書一冊持ってくればいだけなのに、彼は教科書どころか、他にも数冊の分厚い書物を机に並べていた。それが、『辞書』と呼ばれるものであるということ、後にジェームズは知った。

教授が、やがて「秋・幣原」と名前を呼ぶ。それに彼が小さな返事をしたことで、ジェームズは彼の名前を知った。英国人ではない、彼の名前。アジア系、響きとしては日本人か、と、ジェームズはなんとなくの辺りをつける。そちらの血が混ざっているのだとしたら、あの髪質も納得できるというものだ。

やがて教授は授業を始めたが、そんなものは聞き流しつつ、ジェームズは隣の少年の観察を、少年にはバレないように続けた。どうして、彼がそんなにも自分の興味を惹いたのかは分からないし、退屈な授業の暇つぶしの一環であったことも間違いではない。教科書なんでもものは、数度読めばすぐに覚えてしまえる。その後、学年主席の座を誰にも渡さずに7年間の学校生活を送るジェームズ・ポッターには、すべての授業が退屈で仕方がなかった。

そう、退屈だったのだ。

退屈はユニコーンをも殺す。

ジエームズは、刺激が欲しかった。ホグワーツに入学して、そろそろ一年になる。初めの頃は環境が変わったこともあり、新しい生活を楽しめてはいたのだが、そろそろ限界だ。慣れた友人、飽きた授業。自分を退屈させないのなんて、隣に座ってまた眠りこけているシリウス・ブラックか、同室のリーマス・ルーピン、せいぜいピーター・ペディグリュークくらいか。彼らとホグワーツ中を探索したり悪戯を考えたりするのはそこそこ楽しいが、それでも何か足りない気がした。

幣原秋。

レイブンクロー他寮で、外国人の少年。

声でも掛けてみるか、と考えた折、教授が二人組になるよう指示を出した。どうやら講義は終わり、後は実践らしい。生徒がバラバラと、杖を手に席から立ち上がる。隣で気持ちよさそうに眠っているシリウスを叩き起こすと、ジエームズも杖を持ち立ち上がる。教授が机と椅子を隅の方に寄せているのを、ぼうっと見た。手の中で、杖をくるりと弄ぶ。

幣原秋の姿を探すと、彼は暗い隅っこの方で、気配を消し、小さく俯いていた。二人組を作るよう言われたのに、動く気配すらない。レイブンクローの誰かとは組まないのだろうか。そう思っていると、金髪で背の高い少年が、幣原秋に近づいていくのが見えた。あの少年は確か、フィスナー家の長男、ライフ・フィスナーだ。純血の家系なら、あらかた見知っている。しかし、一体どういうことだろう、数人のレイブンクロー生が、幣原秋に近づこうとするライフ・フィスナーを引き止めた。何やら少し揉めているようだ。一体何が起きているのだろうかよく分からないが、レイブンクロー生の誰もが、幣原秋とは一緒に組みたがってはいないようだという事は察することができた。

どうして？ あの無害で大人しそうな、小さな一人の少年を、なぜ受け入れたがらないのだろうか？

「シリウス、ごめんね。今日は違う人と組んでくれないか？」

「はあ？ どうしたんだよ急に、って、ジェームズ!？」

シリウスの声を無視して、ジェームズは幣原秋に近づいた。俯いていた幣原秋は、近寄ってきた人影に気づいて顔を上げる。そこで初めて、ジェームズ・ポッターは幣原秋の顔を正面から見た。

「やあ、初めまして。僕と組まないかい？ 余っちゃってさ」

そう言つて笑つてみせる。幣原秋は狼狽えたように視線をさ迷わせ、所在なさげにジェームズを見ると、小さな声で「……ぼくでよければ」と答えた。

「いいですか？ 3, 2, 1, で一齐に、『エクスペリアームズ、武器よ去れ!』ですからね——」

教授がそう言つて回っている。幣原秋は、先ほどから目を合わせようとしないう。初対面の人間に緊張しているのだろうか。どこことなく、ピーターと同じものを感じさせた。

「じゃあ僕からいくよ、『エクスペリアームズ、武器よ去れ!』」

教授の指示に従い、幣原秋に杖を向け、呪文を唱える。意図した通り呪文は効果を表して、幣原秋の杖は彼の手を離れ、ジェームズの方に飛んできた。持ち前の反射神経で難なくキャッチし、辺りを見渡す。しかし成功した組はジェームズたちも入れてほんの小数のよう。他はうんともすんとも言わない組が殆どだった。教授は慣れたように、ジェームズを含め一度で出来た生徒それぞれに対し5点を加点し、「これから使えるようになってくださいね」と、うまく出来なかった人らに声を掛けた後、術を掛ける側を交代するように指示した。

「ほらよ、君の杖だ」

そうにつこり笑つて、幣原秋に杖を投げ返す。しかし秋にとっては思いも寄らないことだったのか、慌てて手を伸ばすもうまく杖を取ることが出来ず、指先で弾いてしまった。あらあら、と、代わりに拾つてやろうと手を伸ばす。

「アクシオ」

そのとき、幣原秋がそう呟くのが聞こえた。思わず耳を疑う。彼の手から杖は離れているし、しかもその呪文は、4年生ですら習得に苦労するものだ。1年生で習う程度の呪文ではない。

しかし、杖は地面に触れる直前に、まるで重力がその一瞬だけ裏返ったかのようにふわりと浮き上がると、すっと幣原秋の手に収まった。

驚愕、なんてものじゃすまない。

凄まじいものを見てしまったと、そう思った。

天才とは、彼のためにある言葉なのかと、そこまで考えた。

そして——理解した。

レイブクローの生徒が、どうして彼と組みたがらなかったのか。

これは、確かに、僕ですら躊躇う。躊躇する。

教授の声に合わせて、幣原秋がジエームズに杖を向けた。それだけで肩が震え、息が上がった。

あんな才能の持ち主に杖を向けられたこと、それ自体に、恐怖を感じた。

この少年なら、きっとこの程度のこと、造作もなく人差し指一本でやってしまう。杖は、ぎっくり言ってしまうえば魔力の増幅装置に過ぎない。

じゃあ、この少年が杖を握ったら、一体どうなるのか。

「……エクスペリアームズ」

小さな声で、幣原秋は呟いた。ジエームズの手からするりと杖が抜け、空いていた秋の右手に簡単に収まる。

幣原秋が杖を下ろした。それだけで、身体の緊張が緩んだ。緊張していたんだ、と、そこでようやく気がついた。

ぞくぞくつ、と、背筋に寒気が走った。

彼だ。自分を退屈から救ってくれるのは、彼しかない。

幣原秋。その名前を、脳裏に刻み込む。

この名前は一生、忘れることはないだろう。そんな予感めいたものを感じた。

事実、彼の名前を忘れることは、ジエームズ・ポッターのその後の人生の中で、一度たりともなかった。



幣原秋と（半ば無理矢理にではあったが）友情関係を結んだ後、ジエームズは一番最初に幣原秋に抱いた感想である「ピーターと似てる」という印象をガラリと改めることになる。

「やあ、秋！ 今日元気かい？」

「元気だよ、お世話様で」

そう言っつて、幣原秋は頬杖を付いたまま、左手で鉛筆をくるりと回した。周囲が羽根ペンを使う中、好き好んで彼だけは鉛筆やボールペンを使いたがる。「取り止めのない考え事をするのに向いてるんだ」と、以前言っつていたっけ。

一度気を許した相手に、幣原秋は優しく素直だった。暖かく純粹な微笑みや、悪知恵を思いついたときの悪どい笑顔。他にも様々な表情を見てきたし、これからもずっと見続けるのだろうか。

「また地図を見てるのかい？」

「そう……どうにも上手くいかないんだ。魔法式自体は、考えた通りに出来ている……でも、この前シリウスが言っつた奴、地図上の何処に誰がいるのか描写させたいんだけど、それが上手くいかない。各個人の持つ魔力に反応させてはみたんだけど、それじゃ魔法使い以外は地図に映らないじゃないか……ピーブスだとかゴーストだとか、あの辺りも対応するようにしたいんだけど、考えても出ないんだよね……」

秋は眉を寄せ、ぎゅつと目を瞑つた。両手の指を合わせ、力を込めている。

「まあまあ、考え過ぎると良くないぜ？ 我が友よ」

杖を振つて紅茶を出すと、秋に恭しく差し出した。秋は目を開けると苦笑して、鉛筆を置くとカップを持ち上げる。秋の正面に腰掛けると、魔法式が書かれた紙を手元に引き寄せた。綺麗なんだけど何処となく特徴のある文字で書かれたそれは、秋の字に慣れていないと苦労する。だがもう五年生、秋とも四年の付き合いだ。それに、癖字じゃジエームズの方が酷い。

用いる魔法の数は、単純に三桁を超える。膨大で複雑なこの魔法式

に、ジエームズらは三年も掛けた。その成果が、そろそろ出ようとしている。

改めて、幣原秋を引き込んで良かった、と思った。自分と対等に話せる頭脳の持ち主を、ジエームズ・ポッターは待ち侘びていた。

幣原秋がいると、退屈することはなかった。あの時のあの少年が、今や、命よりも大切な友人の一人になった。

「リーマスの件は、どうなったの？」

秋の声に、羊皮紙から目を離さないまま「ああ、あの、ちっちゃくてふわふわな問題のことかい？」と笑ってみせる。

「そ。どんなご様子でしょ、プロングスさん？」

「あと数週間で形になるかな。出来たら見せるよ。ただ、ピーターはもう少し時間が掛かるかも。僕とシリウスが手伝ってただけだよ」

ふうん、と秋は頷いたようだった。

「君も、やってみればよかったのに」

「悪くはないと思っただけだね。流石にそこまでしたら、セブルスとリリーに勘付かれちゃうよ。あの二人は、ぼくがこうして君らの悪戯にまだ付き合ってるのも渋い顔をするんだ」

秋の口から出てきた二人の人名に、ジエームズは顔を上げた。

セブルス・スネイプ。スリザリンの中のスリザリンみたいな奴で、『暇潰し』のいい対象。何でスネイプのような、闇の魔術に首までどっぷり浸かっているような奴と秋が友達なのだろうか。彼との間で一瞬友情めいたものが芽生えた時期もなくもなかったが、今となってはそんなものの欠片すら見当たらない。向こうだって先手を取ろうと、出会ったらすぐに呪いを掛けてくるのだ、どっちもどっちだろう。

そして、リリー・エバンズ。ジエームズの想い人でもある彼女だが、未だにジエームズのことを虫ケラ以下の存在以上には認めてくれない。彼女の隣にいれる秋が羨ましい程だ。

「スニベリーとエバンズが仲違いしたって聞いたけど、あれは本当なのかい？」

「ああ……」

秋は切なそうに目を伏せた。「その通りだ」と呟き、カップを置く。

「何かね、色々……思い知ったよ。父さんと母さんが死んだ時と同じくらい」

「……そう」

何と言葉を掛けてやればいいのか、ジエームズには分からなかった。代わりに、魔法式を見て思いついたことを言ってみる。

「あのさ、秋。ホムンクルスの術なんてどうかなあ？」

ホムンクルスの術。それは最高学年にならないと習わない、いや、習うかどうかとも怪しい、教科書の隅に書いてあるような、恐ろしく高度な魔法だ。錬金術の範疇に含められ、取り扱いには最大の注意を要する、最高難度の魔法の一つ。

秋が知っているかは分からなかったが、知らなかったら教えてやればいい。秋ならばすんなり飲み込むだろう。

でも、彼は幣原秋、『呪文学の天才児』だ。

秋がジエームズの期待を裏切ったことが、過去に一度としてあっただろうか。

四年生にして、ホグワーツ魔法魔術大会で優勝し、悟られないようにしていたリーマスの秘密をたつた一人で暴いた、彼ならば。

秋は表情をパツと明るくさせた。その表情の変化に、思わず笑った。

「ジエームズ、それだっ!!」

ほら。

幣原秋は、ジエームズ・ポッターの期待を、決して裏切らない。



(……何故それを、今思い出すかな)

『リリー!! ハリーを連れて逃げろっ!』

杖も持たずに、ジエームズはそう叫んだ。

『僕が奴を引き付ける!』

玄関にヴォルデモートが現れた。ハリーを、ジエームズとリリーの息子を、殺しにやってきた。

ポケットから、ヴォルデモートは見慣れたネズミを引っ張り出した。そのネズミが、ピーターが裏切ったのだということ、ヴォルデモートは見せつけるように、ネズミを指でつまみ上げる。次の瞬間、もう10年近くずっと一緒にいたはずの友人の姿が変わるのを、息を呑んでただ見つめた。

「ピーター、お前は逃げろ」

シリウスとリーマスは、確実にお前を捕まえ、殺そうとするだろう。親友を殺人犯にはしたくなかった。

秋、どうか気付いてくれ。秘密の守人のカラクリに気付いて、ピーターを捕まえてくれ。シリウスとリーマスが、ピーターを殺す前に。君の手で、ピーターをアズカバンに入れてくれ。

三人とも、怒りに我を忘れて、ピーターを殺さないでやってくれ。あいつもきつと、何か事情があつたんだろう。僕はピーターを恨まない。ピーターの事情に気付けなかった、気付くことが出来なかった癖に。ピーターの親友を名乗っていた自分こそを、恨もうじやないか。憎もうじやないか。

怯えるピーターを後ろに突き飛ばし、ヴォルデモートが杖を構える。ぞわつと髪の毛が逆立つほどの魔力を、恐怖を感じた。奇しくもそれは、一番最初に秋に杖を向けられた時と、全く同じ気分だった。

——秋。

お願いだ、秋。

君は今まで一度も、僕の期待を裏切ったことはなかったよね。

頼む、秋。

僕とリリーが好きならば。

リリーを、愛していたのならば。

この世界は、確かに生き辛いけれど。君にとって残酷な時代だけだ。ど。

この世界を、嫌いにならないでくれ。
どうか、どうか、僕らの希望を——

「ハリーを、守って欲しい……」

ヴォルデモートが杖を振り上げる。その様子が、秋に重なった。

ああ、秋に殺されるのなら、別に構わないかな、なんて、巫山戯たことを考える。

緑の閃光が、視界いっぱい広がって――

やがて、何も見えなくなった。



「ねえ、ジェームズ。ジェームズはどうしても、ぼくに声をかけたんだい？」

「相変わらず、君は自己評価が低いんだね」

「ぼくの持つ、人並み外れた魔力のせい。そうとしか思えない」

「まあ確かに、それも要因のひとつではあるんだけど……その魔力を見るよりも前から、僕は君に眼をつけてたんだって言っても、君、信じないでしょ」

「信じないね、確かに。ジェームズは口が回るから」

「詭弁だつて言うのかい？ 酷いなあ」

「……まあ、ぼくはさ、たとえジェームズがぼくの魔力目当てで近付いてきたのだとしても、それでも、仲良くなれて嬉しかったよ」

「どうしたんだい？ 珍しく素直じゃないか」

「ぼくはいつだって素直さ、君とは違ってね」

「僕だっていつも素直じゃないか。……まあ、そうだね、うん」

「？ どうしたんだい？」

「君を敵に回すよりは、いつだって君が味方でいてくれた方が、僕としてはありがたいかな。『呪文学の天才児』さん？ それとも『黒衣の天才』って呼んだ方がいいかい？」

「その恥ずかしい呼び名はいい加減に止めてくれ。本当に耳聡いんだから。どこから聞き知ったのか……」

「今更だろう?」

「うるさい。ごちゃごちゃ言うな」

「はいはい」

「……………」

「……ねえ、秋?」

「何?」

「もし、僕が死んだらさ」

「不吉なたとえ話はよしてくれよ。秘密の守人は絶対の魔法だ。ダンブルドアとぼくが保証しているんだ。その仮定は、友人を疑うことになっちゃう」

「その辺りのことは取っ払ってき、聞いておくれよ。聞き流してくれたって構わないから」

「……はー、ま、いいや。話だけは聞いてあげる。そんなに話したがっているんだしね」

「ありがと。……もし、僕が死んだらさ」

「うん」

「ハリーを守ってくれよ」

「……色々前提条件からして間違ってるような気がするんだけどさ。大体ジェームズ、君が死んで、ハリーが生き残ることなんてありえないだろ? それに……守るのは、ハリーだけでいいのかよ」

「ああ、秋としては、リリーを守りたいかい?」

「っ、違うだろ! ジェームズ、君はいつだってそうだ、君はいつだって飄々としていて、冷静で、憎たらしいほど落ち着いて……それで……」

「……分かってるよ、秋」

「……何を」

「僕らを、守ってくれ。僕と、リリーと、ハリー、全てを、守ってくれ」
「……一体、誰に言ってると思ってるの?」

「そうだね、幣原秋、君には今更のことだったね」

「約束しよう。全部守ってみせるよ。ぼくが絶対に守ってみせる」

「たとえば、何度ほくの魂が引き裂かれようとも」

短編 ハリー視点 いえない

幼い頃の、話だ。

まだ、ハリー・ポッターとアキ・ポッターがホグワーツからの入学許可証を受け取る、ずっとずっと前の話である。



ハリー・ポッターの双子の弟、アキ・ポッターは、眠っている時によくうなされた。理由はいまいちよく分からない。同じベッドで眠っていたハリーが、アキの苦しげな呻き声で目を覚まし、慌てて揺すり起こしたところで、アキが明確にどんな夢を見ていたかを話すことはなかったからだ。

まだ幼く、夢の内容を人に伝えられるほど細かに説明出来なかったということも原因の一つではあるだろう。その状態のアキを起こしたところで、アキは自失したまま泣きじやくり、ガタガタとその細く華奢な身体を震わせるしか出来なかったのだから。

指先一つまともに動かせないほどに震える、アキの冷え切った身体を、夜中抱き締めた。ポロポロと涙を零すアキの頭を、自身の胸に押し付けた。やがて、アキの冷え切った身体が温かみを増し、涙が止まり、落ち着いたように身体の震えが止まる。「ハリー」と兄の名前を掠れる声で呟いた後、「ありがとう」と言い、安心したように力が抜ける。穏やかな寝息が聞こえてくるまで、ハリーはずっと、アキを抱き締めていた。

普段は明るく元気で、体力がない割に遊ぶことが大好きで、意地悪な叔父叔母の言うことも素直に聞く弟が、いつしか眠ることを恐れるようになった。

それでも遊び疲れた小さな身体は、いつしか夢の世界へと雪崩れ込み、そして悪夢にうなされる。

どうしていいのか、幼いハリーにはさっぱり分からなかった。

助けてやりたいと何度も願い、でも、どうすることも出来なかった。

日中楽しげに外を駆け回るアキに、何の夢を見ているのかと、何度も尋ねた。

アキの夢の中の存在である『幣原秋』を、ハリーは知っている。その夢で、何か辛いことでも起きているのか？

「うーん、違う……ような気がする。よく分からないんだけど」

アキは困ったように眉を寄せて、首を傾げた。

「幣原秋の夢は、全然怖くないんだ。優しいお父さんに面白いお母さん。楽しい学校。なんにも怖くない、むしろ楽しいくらいなんだ。……でも、あの夢は……」

その頃は、まだアキが髪を長くし始める前のことだった。短い髪の毛でもなお、さらさらで艶やかな髪や大きな瞳、愛らしく整った顔立ちから、アキはよく女の子の間違われた。間違われてもアキは決して怒ることはなく、ただただニコニコと笑っていた。

幼い頃から、アキはそんな子供だった。いつも笑顔で、いつも楽しそうなおもちゃばかりしている。人を恨むこともなく、たとえお気に入りのおもちゃがダドリーに取られたところで、そんなの別にどうってことないとはかりに怒ることもなかった。誰に対しても優しく公平で、純粋で裏表のないアキは、どこにいても人が集まってきた。ダドリーやその仲間にはよくいじめられたが、アキは何をされても笑って許していた。おもちゃが壊されては、歳に対して器用な指で直し、壊されたことに怒るよりも、自分が直したおもちゃの出来栄えを楽しげに誇るほどだった。

誰も、アキの涙なんて見たことがなかった。

自分を除く、誰もが。

「あの夢は……暗くて、怖い……楽しいことも嬉しいことも、全部がなくなっちゃいそうな夢で……大切なものが、全部なくなっちゃうように……そんな、夢なんだ……」

アキが眠りについた後、隣で、アキの髪を優しく撫で、祈った。

今日は、アキがうなされませんように。

アキが『幣原秋』の夢だけを見て、幸せに目覚めますように。

そう願ってアキの額にキスすると、気分なのかもしれないが、そう

しない日よりも、アキがうなされることが心なし減った気がした。

「いや……いやだっ、そんなことはぼくはしたくないっ、ぼくは……っ！」

隣でうわごとのように呟くアキの声で、跳ね起きる。苦しそうに歪められた顔、ぎゅつと閉じられた瞳から、涙が一粒零れ落ちる。

「なんで、そんな……たすけて、いやだ……っああああっ!!」

「アキっ！」

アキを抱き起こすと、背中に腕を回し、ぎゅつと抱き締める。アキが目を開けるも、その目は目の前のハリーに向けられることはない、暗い闇の中でも、その時のアキの瞳は、闇よりも暗い色を帯びている。「たすけて……たすけて、だれか……ごめんなさい、ごめんなさい……」

「アキ、僕はここにいるから……」

落ち着かせるように小さな背中を叩くと、やがてアキの声が小さくなっていく。小刻みに震える身体をそのままに、アキが助けを求めようとハリーを抱き締め返す。泣きじやくるアキの小さな頭を、優しく撫でる。

「僕がアキを助けるから。ちゃんと、助けてあげるから。どこにいても君を助けるよ。だからアキ、どうか安心して……」

そう言うと、アキの身体の震えが少し収まる。荒い呼吸が、やがて普段のゆったりとしたものに戻り、冷たいアキの身体が温かみを取り戻す。抱き合ったままゆっくりと横になって、アキの肩に毛布を掛け、アキが落ち着くのをいつまでも待ち続ける。

時折アキは、うなされる中で、何か人名のようなものを口走る時がある。その名前は時によって違ったが、いくつかの名前を覚えて日中のアキに尋ねてみたところ、訝しげに首を振って「誰それ、全然知らないよ」と言う。

アキは記憶力が相当いい。ずっと昔の頃の話も、いつまでも覚えていたりする。そんなアキが「知らない」というのだから、本当に知らないのだろう。

じゃあどうして、アキは夜にうなされながらそれらの名前を口にす

るのだろう。時には涙ながらに、時には悲痛な叫びを伴って、時には切なげな響きと共に。

ハリー・ポッターにとってアキ・ポッターは、何よりも身近な存在であり、何よりも大切な人間であり、守るべき家族であり、そして一番最初に知る『他者』であった。

アキ・ポッターを助けること。

アキ・ポッターを守ること。

それはもうハリーにとって、頭で考えるまでもなく当然のことだった。

アキが悪夢にうなされるのは、歳を重ねるにつれ、段々と減っていった。アキが髪を伸ばし始める頃には殆どなくなり、ホグワーツに入学する頃には、もうずっと遠い昔の話のように思っていた。念のため、ホグワーツに入学してからも時々それとなく、アキと同室であり一番の友人であるアリス・フィスナーに探りを入れたりしてみたのだが、うなされたりはしていないらしい。

だから、安心していた。

夏休みにダーズリー家に帰ってきて、久しぶりに二人で一緒のベッドで横になった夜の話だった。

微かな呻き声に、目が覚めた。最初は風の音かとも思ったが、そうではない。しかし、アキのことに思い当たるのに、そう時間は掛からなかった。

「アキ……っ、アキー！」

ぱっと起き上がり、肩を揺さぶる。苦痛に顔を歪めたアキの瞳から、つうつと涙が零れ落ちる。

「やだ……助けて、誰か……誰か……っ、ごめんなさいっ、ごめんなさい……」

これ以上、アキの辛い表情は見ていたくなかった。昔のように抱き起こすと、背中に腕を回す。ハリーが知る同学年の男子の中で、一番華奢なアキだったが、それでも昔より随分と重くなった。その重みすらも愛おしい。

「アキ、僕はここにいるよ。ずっと君のそばにいるよ。僕がアキを助

けるから、アキは僕が助けるから」

耳元で静かに囁くも、アキは聞こえた素振りを見せず、狂ったように「ごめんなさい」と呟き続ける。ガタガタと震える身体は汗ばんでいて、やるせなくて、ハリーは更にアキを強く抱き締めた。

「ねえアキ……アキ……僕は、君にとつてどんな存在なのかなあ？」

唯一の家族。二人きりの兄弟。大好きな人。

「アキ……君は一体、誰なのかなあ……」

違和感には気付いている。きつと、本当の兄弟ではないのだろう。血は、繋がってはいないのだろう。

全然似ていない兄弟だと言われ続けてはきたけれど、いざ血が繋がっていないと考えるまでは時間が掛かった。

アキの両親は、どうしているのだろうか。

どうしてアキは、毎晩『幣原秋』の夢を見るのだろうか。

「アキ……大好きだよ」

そう呟くと、頬にキスをする。

その時、ふと、アキがぼんやりと目を開けた。焦点の合わない瞳を覗き込み、「アキ！」と呼びかけると、アキの瞳がハリーの緑の瞳を捕えた。

「……………ああ」

アキは、ほっとしたように微笑んだ。ふ、と肩の力を抜く。

「そこにいたんだね、リリー……」

アキの、真っ黒で大きな目から、涙が一筋零れ落ちるのを。

愛おしいな色を讚えた瞳が、そつと閉じられるのを。

ハリーは、息を呑んで見つめていた。

ハリーの胸に、コトンとアキは頭を預けた。安心し切ったように眠っている。呼吸は穏やかで、表情も憑き物が落ちたかのようにすつきりとしていた。

「……………アキ」

アキの身体を、そつとベッドに横たえる。アキから手を離してやつと、自分の手が小刻みに震えていることに気がついた。ぎゅつと拳を握りしめる。

「アキ……君は」

言いかけて、言葉を切る。目を伏せると、アキの身体に毛布を肩まで被せてやった。アキの隣に横たわると、アキの頬に手を伸ばす。そつと確認するように触れた後、ハリーはアキの左手を取ると、両手で包み込んだ。

「……おやすみ、秋。愛してるよ」

優しく微笑んで、ハリーは静かに目を閉じた。



その日以降、アキがうなされることはなくなった。

もう、こうしてうなされはしないのだろうと、ハリーには妙な確証があった。

アキには、今まで何一つ隠し事をしたことはなかったのだけれど。

ハリーは、この日アキが呟いた一言だけは、アキに伝えることは、出来なかった。

短編 もしも、全てが平和な世界だったら

蒸気機関車の汽笛が、高らかに響いた。煙が視界を曇らせるのに目を細める。

懐かしいプラットフォーム。ホグワーツ行きの紅の列車がゆつくりと滑り込んでくるのに、思わず胸が高鳴る。

「よっす秋！ 久しぶりだなー！」

突然、後ろから肩に手を回され振り回された。軽くよろめいて、目を見張る。

「シリウス！ 久しぶり、一年ぶりくらい？ 少し老けたね」

「ダンディーになったって言えよ。俺でも傷つくんだぜ？ そういう君は全く変わらないなあ」

「ねえ、それはそれで傷つくんだけど？」

あっはっはと豪快に笑いぼくの肩を叩くシリウス。学生時代からカッコいいって思ってたけど、こうして社会に出ても輝きが曇るどころかどんどん増してってる気がする。

すつと通った鼻梁に涼しげな甘いマスク、そして浮かべるのは少年のような笑顔。これでモテない方がどうかしてる。

「今、何してんの？」

「ブラック家の財産食い潰してる」

「働けよ！ レギュラス見習えクソ兄貴！」

心外な、というように大袈裟に肩を竦めてみせると、シリウスはにやつと、学生時代によく見た『裏がある』笑顔を浮かべた。

ちよいちよいと手招きするのに、疑問符を浮かべながらも近寄る。

「実はさ、俺、今世界一周目指してんだよね。今日も、実は韓国から飛んできた」

「へえー！」

耳元で囁かれた声に感嘆した。

ああ、ブラック家の財産食い潰してるってそういうことね。

「旅はいいぜえ〜？ 自由だし、何しても怒られないし、女の子はナンパし放題だし」

……ん？ 今何か変なの聞こえたような。

「いやー、宿代タダってのはいいよな！ メシも美味しい女の子はお酌してくれるし、文句ねえよ」

「刺されて死んじまえ、このタラシ。そしてもうぼくらも30代なんだから、いい加減体力とか健康とか考えるべきじゃない？」

「そういうお前はどうかんだ？ 後輩の不始末もひっ被る苦労人さんよ？」

軽やかに言われ頬が引き攣る。

……そうか、レギュラスからの情報か。

『秋先輩、秋先輩』って家でもふくろう便でも何でもお前の話ばかりでなあ、嫁さんが嘆いてたぞ、『レギュラスは私より幣原さんのことが好きなのよ』って」

「うう……色々誤解が……」

頭を抱え、曖昧に笑顔を浮かべた。

「レギュラスは何故か、ぼくのことを何かのヒーローみたいにしてる節があるんだよねえ……ぼくなんて、ちよつと真面目で魔力が人よりちよつと多いだけのただの一般人なのに」

「謙遜すんな我が友人よ。秋先輩以上に闇祓いに相応しい人はいません！ ってレギュラスが熱弁奮ってたぞ」

「それぼくすごく恥ずかしいんだけど！」

いたたまれなくなる。

「おっ、あれリーマスじゃね？ おーい、リーマスー！」

高い背丈を存分に生かして遠くを見渡し、シリウスはいち早くリーマスを見付けると手を振った。

目を凝らすと、確かにそこにはリーマス、そして隣には闇祓いの我が後輩、トングスの姿が。そーいやこの前入籍したんだっけか、渋るリーマスをトングスが無理矢理押し切って……。

「やあ秋、久しぶり。少し痩せたんじゃない？ この前はウチのドローが迷惑かけて悪かったね」

普段と変わらず柔らかな笑顔のリーマスに、恥ずかしそうに顔を赤らめてトングスが下を向く。

おお、新婚さんだ。旦那さんの前では、おてんばなトunksもしとやかな娘さんか。

「ううん、大丈夫だよあのくらい。失敗の内にも入らないって」
朗らかに笑った。

……いや、ホントは後始末すつげー大変だったんだけどね……くそう、トunksめ。後で残業押し付けてやる。

「じゃ、リーマス、私その辺りで適当に時間潰してるね。学生時代の友達、まだまだ会う約束してるんでしょ？」

「ああ。すまないね、ドーラ」

リーマスが小さく笑ってトunksの頭を撫でた。

トunksは恥ずかしそうに笑うと、ぼくに「それでは、秋先輩」と頭を下げ、人込みに消えていく。

「仕事はどう？　ちゃんと休み取れてる？」

と、その時穏やかな笑顔でリーマスがそう尋ねてきた。リーマスはホント心配性だよなあ、と、何年経っても変わらない友の性格に癒される。

「大丈夫、食事も睡眠も休息も、ちゃんと一般人並みに取れてるよ」

「ホント？　秋は仕事のこととなると、平気で食事も睡眠も休息もぶっ飛ばすからね。目が離せなくて心配なんだよ。いつまでも独り身でお嫁さん貰おうともしないしね」

「……た、タイミングがなかったんだよ……！」

リーマスからすーっと目を逸らす。

うう、視線がいたたまれない。

「本当？」

「ホントだよ……仕事も忙しかったし、学生時代も結局、恋とは無縁だったし……」

「でも秋、モテない訳じゃないんだよな。おいリーマス、覚えてつか？　6年の時に、新聞部がバレンタイン特集とか言って、人気投票やっただやっ」

「あ、覚えてるよ。シリウス、君が断トツトツプだった奴だろう？　物好きがいっぱいいるーって言って、皆で大爆笑した奴か」

「……ああ、言われてみりやーそうだったな……まあ、それは置いといて、だ。あれの順位な、俺が1位なのはまあ当然として、二位がレギュラスだろ、で3位にレイブンクローの誰かが入ってて……」

「ライフだよ、シリウス。ライフ・フィスナー」
横から口を挟んだ。

低学年時代は可愛らしく、高学年では格好よく。明るい金髪に澄んだ碧眼、人懐っこい笑顔と親しみやすい性格で先輩後輩同級生問わず人気の、我がレイブンクロー誇りの友人だ。

もう結婚して子供が一人、ハリーと同じ歳じゃなかったっけ。

男の子なのに『アリス』と名付けられたあの少年は、しかしライフによく似ている。一年ほど前に久しぶりに会ったのだが、目つきの悪さを除けば入学当時のライフそっくりだ。しかしライフほど簡単に懐いてはくれない。まあ、そこが可愛いんだけど。

父親の後を一生懸命付いていく、そんな姿が微笑ましい。

「ああ、そんな名前だったか。で4位に、ハツフルパフのシーカーが入ってただろ？ んで5位が、秋、君だった」

「よく覚えてるねえ」

ぼくなんて今の今まですっかり忘れてたぞ、そんなものがあつたこと。

「ああ、魔法魔術大会で君の知名度はぐんと上がったもんな。その後、魔法魔術大会では二連覇するし。全く、歴史を書き換えた男だよ」
「うっ……でも、モテると結婚出来るのとじゃ違うでしょ。現にシリウスだって、自他共に認めるモテ男だけど結婚してない。つまりはタイミングなんだよ。ぼくの場合は仕事も忙しかったしね。恋愛なんてしてる暇なかったんだよ」

「まあ、それはそうだけどさあ……秋は浮ついた話がちつともねえかな、つまんない」

「つまんない言うな」

ぼくのせいなのかよ、それは。

「本当に、今まで一度も恋したことないの？ 秋」

リーマスが顔を覗き込んでくる。思わず身体をのけ反らせつつ、眉

を寄せて「だーかーらー、ないって言うてんでしょ」と言いかけたところで、後ろから声を挟まれた。

「5年の時、スリザリンの先輩をダンスパーティーに誘っただろ？正直に言えよ、秋」

「……セブルス」

思わず低い声が零れる。振り返ってじと目で睨みつけるも、鼻で笑われてしまった。

「なんだいそれ！ 初耳だよセブルス！ 詳しく話を聞かせてもらえるかな!？」

口を尖らせるぼくと対照的に、リーマスが食いついてくる。

「おいスネイプ、俺にも聞かせろよ」とシリウスも身を乗り出してきて、思わず舌打ちした。

「どうして教えてくれなかったんだよ秋！」

「フラれたから言いたくなかったんだよ！」

ああもう、と目頭を押さえる。

まあ確かに、とセブルスは肩を竦めた。

「スリザリンの先輩って、誰なの？」

「聞いたことないかな？ エメラルド・クラリス、僕らの一個上で、ルスィウス先輩のいとこでね。人気投票にランクインする程綺麗な人だった。真っ直ぐな銀髪を腰まで伸ばしていてね、覚えてないかい？」

「ああ、あの人な。知ってるぜ、一度新聞部からの依頼で、一緒に写真写ったことがある。……あの人に告ったんか、我が友人よ。あの人あ競争率高かつたろうに」

「告ってないよ！ ダンスパーティーに一回誘っただけだよ！ ……フラれたけど、さあ」

だって、今まで見たことないくらい綺麗な人だったから。付き合おうなんて大それたことは考えてなかった。

ただ――

「……ま、いいじゃん。これも青春だよ」

肩を竦め、小さく笑った。

「というか、僕は秋、実はリリーが好きだったんじゃないかって勝手に考えてたんだけど、外れちゃったみたいだね」

にこやかな笑顔のまま、リーマスがさらりと爆弾発言をかます。空気が凍った。

「……あ、あれ？　なんか僕、言っちゃいけないこと言っちゃった感じ？」

「まあ……ルーピン、それはその……な？」

「そうだぞーリーマス、世の中には触れちゃいけない部分というものがあるんだから」

セブルスとシリウスが微妙な顔で顔を見合わせた。ぼくはブンブンと音が鳴る程激しく頭を振る。

「ないって！　リリーはない!!」

「ええ？　どうしてだい？　そうだ秋、知ってた？　一時期リリーは君が好きだったんだよ」

「嘘お!？」

「嘘なもんか、当時の本人から聞いたんだから。間違いようがない」
思わずぼかんと口を開けた。

初耳だ、というか気付きもしなかった。嬉しいけど何だか申し訳ない。

「……いや、うん……リリーは、ぼくの中では、その……そーゆーの対象じゃないというか……なんか上手く言えないんだけど、家族みたいな存在だったんだよ。妹って言うか、姉って言うか……」

ちらつとセブルスを見るも、セブルスは涼しい顔をして立っている。

——畜生、言えるかよ。

セブルスがリリーのことを好きだったから、リリーに恋しないようにした、なんて——

リーマスがもつともらしく頷いた。

「うん。リリーもそれは分かってたよ。妹は恋人になれないもの、って、よく言ってた。結局のところは受け入れて、諦めちゃったみたいだけど」

「……そっか。何か、悪いことした気分」

「ま、リリーは大して気にもしていなかったがな」

「へえ……って!」

普通に相槌を打とうとして、慌てて顔を上げた。

「セブルス知ってたの!?!」

「そりゃ、まあ気付くだろう。誰が君の一番近くにいたと思ってるんだ」

……はー。

待てよ、そしたら、えつと……リリーはぼくが好きで、セブルスとジエームズはリリーが好きで、でもってぼくは……だから、なかなかしつちやかめつちやかな学生時代を送っていた訳だ。

もしかしたらぐちやぐちやに崩れてしまっていたかもしれない、微妙なバランスの上に成り立っていたなんて、全然気付きもしなかった。

「……そうだ、クラリス先輩——って、もう結婚してベルフェゴール先輩か——の娘も、今年ホグワーツ入学なんだと。今年はまた、殊更に忙しくなりそうだな」

空気を察したか、セブルスが話題を僅かに変えた。

ほっとしつつもそれに乗っかる。

「そうなの？ 頑張れよホグワーツ魔法薬学教授!」

笑ってセブルスの肘を小突くと、「当然だろう」とさらりと返された。

「ま、今年は僕だけじゃないのだがね。ルーピン、もう秋には話したのか?」

「まだだよ。サプライズで僕の口から伝えたかったからね」

「何、何の話?」

リーマスを見上げると、リーマスは心なしか誇らしげに胸を張り、ローブのポケットの中から大分よれている折り畳まれた紙を取り出すと、丁寧な手つきでそれをぼくの目の前で広げてみせた。

「今年から、僕も闇の魔術に対する防衛術の教師となりました。これからもよろしく」

「わあ！ おめでとうりーマス！」

ホグワーツ教員採用通知を手にとって、ぼくは歓声を上げる。

笑顔でりーマスを見上げれば、照れ臭そうにりーマスは頬を掻いた後、「ありがとう」と柔らかく笑った。

「うわ、うわー……本当によかったね！」

りーマスの夢がホグワーツの先生だったこと、でも人狼のために就職を断られたことを、ぼくらは知っている。

りーマスがあんなにへべれけに酔っ払ったところは、後にも先にもあの時が最後だ。潰れて眠り込んでしまったりーマスをシリウスと共に運んだのも、今となってはいい思い出。

「シリウス達！ やつと見つけた、探したんだよ？」

「ピーター！ 久しぶりだなあ！ 元気してたか？」

その時、人混みの中から声が上がった。いち早く、近付いてきたピーターに気付いたシリウスは、大きく手を振り笑いかける。

やがて出てきたのは、少々腹と頭が気になる我等が友人、ピーター・ペディグリュ。ぼくらの中では一番年相応なのかもしれない。老け方的に。

だってシリウス見てみるよ、確かに以前よりは老けたけど、普通に20代と言われても信じるぞ。

「久しぶりだね、秋。何年ぶりかなあ？ 変わってないからすぐ分かったよ」

「ざっと5年って言ったところかな？ 結婚したって聞いたよ、行けなくてごめんね」

「ううん、大丈夫だよ」

顔立ちは老けたが、笑顔は学生時代と変わらない。ピーターに笑い返してから、ピーターの手をしっかりと握る女の子に目を向けた。

「君の子供？」と尋ねつつ目線を合わせるようにしやがみ込むと、小さく微笑む。

「初めまして、お父さんの友達の幣原秋です。お名前は？」

すると、女の子はすっとピーターの後ろに隠れてしまった。

……すごい、ピーターの人見知り属性が遺伝している。

ピーターは呆れたように笑いながら、女の子の背中を押ししてぼくの前に出した。

「ほーらマリア、自己紹介しなさい」

「……マリア・ペディグリーです……よんさい、です」

「そつかあ、四歳かあ。ぼくも年取るわけだよね」

「秋、君がそれを言うのかい……?」

あははと軽く笑って、ぼくはマリアの柔らかい銀髪を軽く撫でた。

と、そこでシリウスが「おりゃ！ マリア、でかくなつたなあ！」と豪快にマリアを抱き上げる。

マリアはびつくりしたように目を丸くさせていたが、相手がシリウスだと分かると嬉しそうに笑った。

「……こんにちは、シリウスおじさん。……それに、リーマスおじさんも」

「こんにちは。覚えていてくれて嬉しいよ、マリアちゃん」

リーマスがにっこり微笑んでマリアの頭を撫でる。その様子を見ながら呟いた。

「……本当、小さい子って可愛いよね。ぼくも子供欲しかったなあ」

「何、今からでも遅くないよ。よさげな人いないの?」

「んー、微妙」

ほい、とシリウスからマリアを受け取ると、小さな温もりに思わず笑顔が零れる。

「あんまりピーターには似てない気がするけど、やっぱり女の子だからかな?」

「多分ね。母親のエリアに似てるんだ、マリアは。ま、僕に似なくてよかったよ」

マリアは、出会ってまもないぼくの腕の中だからか、少し不安げにぼくを見つめている。

小さく笑いかけて銀髪を撫でると、恥ずかしそうに目を伏せた。

「……秋、僕思っただけどさ」

「ん、何?」

リーマスに声を掛けられ、くるりと振り返る。リーマスは苦笑いし

ながら、マリアを指差した。

「秋って、なにげ銀髪好きっしょ?」

びっくりして、思わずマリアを落つことしそうになった。身の危険を感じたか、マリアがぼくの服を小さな手でひっしと握る。

マリアを抱え直して、リーマスに向き直った。

「なっ、なっ、な……何を急に!」

「あ、いや、別に他意はないんだけど。でも好きでしょ、銀髪。なーんか秋見ると、秋はだいたい誰にでも優しいんだけど、でも銀髪の子に対しては特別に優しいっていうか、何か違和感あったんだよねえ。そっか髪フェチか、ありだと思うよ、僕は」

「なんだ、秋は銀髪が好きだったのか。もっと早く教えてくれれば良かったのに、水臭い。僕らは親友じゃなかったのか」

「セブルスまで乗るなっ!」

顔が熱い。頬を赤らめるなんて何年ぶりだろうか。

「……秋おじさん、これ、きれいだねえ」

ふと近くで聞こえた声に、慌ててマリアに目を向ける。

いつの間か首に掛けていたロケットを引っ張り出されていたらしく、マリアは小さな手の平の上にそれを乗せ、顔を近付けて見ていた。

「こらマリア、駄目だよ。秋が困るだろ」

「あーいやいや、大丈夫だよピーター」

ぼくからマリアを引き離そうとするピーターに手を振ると、マリアの手の中のロケットに触れた。

「これはね、ぼくのお守りなんだ」

「お守り?」

「そう。ぼくの父さんが作ってくれたんだよ。ぼくが小さい時にね」

細かい細工を指でなぞり、蓋をぱちんと開けて見せた。マリアはそれを覗き込んでくる。

「面白くもなんともないだろうけど……ぼくらの卒業式の時の写真だよ。ほら、ここ……君のお父さんも写ってるだろ? ……誰一人欠けることのないよう、願いを込めて入れてあるんだ。その甲斐あつてか、13年経った今でも誰も欠けちゃないけどね」

「ま、スネイプは今にも死にそうな面してるがな」

「うるさいぞブラック」

後ろでセブルスとシリウスが言い合いをしているのを尻目に、ぼくはロケットをぱちんと閉めた。元のように服の下に戻すと、「あー」と残念げにマリアは声を漏らす。

笑って、ぼくはマリアを地面に下ろすと、銀髪を軽く撫でた。

「ジェームズ達はまだなの？」

「もうすぐだと思っただけど……」

ピーターの眩きに言葉を返すと、ぼくらは辺りを見回した。

「どつかで大騒ぎが起きてたら、原因はあいつらだと思えよ」

「ラジャー……」

シリウスの言葉に思わず吹き出す。さすが、あいつのことをよく分かっけていらつしやる。

本当にあの目立ちたがりは治らなかった。結婚して子供持つて、確かに少しは落ち着いた。少しだけ、ほんの少しだけだけど。そんなもの、簡単に吹っ飛んでしまうくらい少しだけど。

「でもまあ、今はリリーがいるし……大変なことにはならないでしょ」
「甘いな秋。リリーこそ危険なんだって、一緒にいた7年間で学ばなかったのか？ もしくは長年の仕事浸けで、そんなことも忘れてしまったのかい？」

隣でセブルスが、ふ、と影のある笑いを浮かべた。

口元を引き攣らせ、ぼくは人混みの向こうを遠い目で見つめる。

「なるほど、そうか……じゃああれは……だんだんこちらに近付いてくるあれは、何なんだろうねえ……ぼくにはオートバイに見えるけど」

微かに、遠くから750ccのエンジンの唸り声。高い天井に反響するのと、こちらに近付いてくるのとで、徐々にその音量は上がってくる。

……てか、プラットホームって乗り物オツケーだっけか。わざわざ9と3／4番線にまで持ち込んできて、ご苦労なこつて。

人垣がバイクの進行方向について、さあつと波が引くように離れて

いく。出来た一本道を、颯爽と駆け抜ける一台のバイク。

黒いヘルメットに、同じく黒い、全身を覆うレザースーツ。長く赤い髪をたなびかせる人間は、よく見たら女性のようにだった。

思わずセブルスを見ると、やっぱりかと言うように額を押さえ大きくため息をついていた。

そのバイクはぼくらの前でキュツとブレーキ音を響かせ止まる。

バイクの主は華麗にバイクから降りると、ぼくらの前で決めポーズをかました。

「……あ、あれ？ 皆無反応？」

「リリー……」

ぼくらの反応があまりにも微弱だったため、わたわたと慌ててその主はヘルメットを取る。

やっぱりというかなんというか、そこには、一時は学年5本の指に入る程の美少女だった我らが友人の成れの果て。学生時代よりも残念度が上がっている。

……いや、まあ、顔は可愛いんだけどね、今でも。中身が残念なんだよなあ。

「あれ、失敗だったかな？」

とその時、サイドカーから降りてきたのは、若干生え際が後退した友人、ジェームズ・ポッター。

「ジェームズ！」とリリーは叫ぶと、ジェームズに詰め寄った。

「どういうことよ！ この登場の仕方は絶対に受けるって言ったのはあなたじゃない！」

「いやー、皆意外と冷めてたね。皆、ここは僕が何かやらささだろうと予想してただろうから、えっ、あえてのリリー!? 作戦で行こうと思っただけだ」

「いやジェームズ、あんまり『あえて』になつてないから。そして、皆冷めてんじやなくて、引いてんの、皆。あんたらの登場の仕方に」

肩を竦めると、ジェームズは朗らかに笑ってぼくらに近付いてきた。ぼくらは顔を見合わせると、誰ともなしに笑い合う。

「久しぶり、ジェームズ……」

挨拶を口にしかけた瞬間、唐突に何者かに押し倒された。尻餅を着き目を白黒させていると、やがてずしつとした重みと体温の感覚がやってくる。合点が行き、ぼくは下を向いた。

「ごら、ハリー！」

ぼくを押し倒した張本人、ジェームズとリリーの息子であるハリー・ポッターは、ぼくの首元に埋めていた顔を上げ、「ごんにちは、秋！」と満面の笑顔を浮かべる。小さく苦笑して、父親譲りのくしゃくしゃな黒髪を撫でた。リリーそっくりの緑の瞳が、楽しそうにきゅつと弧を描く。

「ハリー！　また秋にそんな乱暴な真似して、死んじゃったらどうするのー！」

「ぼくは昆虫か何かかよ！　そんな簡単に死なないよ！　セブルスだったらどうか知らないけどね！」

「秋、もういいから僕を巻き込むな！」

リリーが、慌ててぼくからハリーを引きはがそうとやってきた。ほら、とハリーの背中を軽く叩くと、おとなしくハリーはぼくから離れ、マリアを見つけて駆け寄っていった。

ぼくは立ち上がってパンパンとローブについた汚れを払う。と、リリーも手伝ってローブを叩いてくれた。

「ありがとう、リリー。……久しぶり」

「うん、秋も。元気してる？　そのローブ、闇祓いのよね？　これから仕事？」

「そう、ちよつとね。今日は休み入れてただけど、野暮用入っちゃって。ハリー達を見送ったら、すぐ帰るよ」

「あら、ジェームズが、久しぶりに皆集まるから今日は酒盛りだー！　って騒いでたのに」

「本当に？　じゃあ早目に切り上げて、ぼくも参加しようかな」

小さく笑う。リリーも微笑んで、優しい目で集まっているメンバーを見つめた。

向こうは向こうで、ジェームズとシリウスを中心に何やら盛り上がっている。さすが黄金コンビ、何年経っても絆は錆びることはな

いってね。

「……生活はどう？ 楽しい？」

「毎日が大騒ぎよ。ハリリー一人でも大変なのに、うちにはもう一人問題児がいるでしょう？ あれのお世話が更に大変なのよ」

「そりやそうだ」

ジェームズがピーターの肩に腕を回し、何やら叫んでいる。それに対して皆が笑う、学生時代によく見た構図が、すぐそばで展開されていた。

「……秋に背抜かれたの、いつだったっけ」

いつの間にか、リリーが隣に並んでいた。手を頭の上に掲げ、背丈を比べている。

「6年の時だね。嬉しかったから、よく覚えてるよ」

「秋もハリリーくらいの時は、ハリリーくらいに……いいえ、ハリリーよりもっと小さかったのね。私、最初は秋とセブよりも大きかったのよ？ 全く、男の子って成長が早いんだから」

む、と頬を膨らませるリリー。笑って頬を突くと、照れたように下を向いてしまった。

と、そこでぐいっと肩を組まれる。

「幣原くん、人妻に手を出すのはよろしくない、非常によろしくないぞ」

「セ、セブルス……」

はははーと暗い一本調子で笑いながら、バシバシとぼくの肩を叩いてくるセブルス。怖い、非常に怖い。

そういやこいつ、抜け駆けしたらいつつもこんな調子だったっけ……。

「久しぶりだな、リリー。先日上げた薬の調子はどうだ」

「上々よ！ あの花、セブに見てもらうまでは今にももう枯れちゃいそうだったけど、今じゃもう見違えるくらい元気になったもの。ありがと、セブ」

お前も抜け駆けしてんじやないか！ とばかりに肘を小突くと、セブルスは澄ました顔してそっぽを向いた。

余裕の表情がムカつくなあ、おい。

「おいセブルス！ 僕のリリーは渡さないぞ！」

「ジエームズ！」

ぬつとリリーの肩越しに乱入してくる男が、一名。そのままジエームズはリリーの肩に手を回すと、セブルスに見せ付けるように頭をリリーの方へと傾けた。

プチン、と隣から音がする。見ればセブルスは、普段中々見られないような笑顔を浮かべていた。

……まあ、その、両拳には固く固く力が込められているわけだが。よく見ると額にも青筋が浮かんでいるし。

「ちよつとジエームズ、邪魔なんだけど。何？」

冷めた目でリリーは腕を組むと、ジエームズを見上げる。

「あ、いや、何でもないけど……」

「じゃあとつとと離れなさいよ。私は秋とセブと、仲良し三人組の旧交を暖めていたのよ。あなたはいらないわ」

「すみません……」

スゴスゴとジエームズはリリーから数歩離れた。それを見たセブルスが、聞こえよがしに鼻で笑う。

「様ないな、ポッター」

「畜生、セブルスの癖に……」

……何だろう、この構図、学生時代にもよく見た気がする。

全く変わらないんだからなあ、この二人も。

「リリー、ポッターの馬鹿に堪えられなくなったら、その時は遠慮なく僕のところに来てくれても構わないからな」

「ざらりと僕のリリーを口説いてんじゃねえよセブルス！」

「えー、でもセブ、これからホグワーツでしょ？ 大丈夫、ジエームズに呆れ果てたら、その時は真っ先に秋のところに行くから、心配しないで」

「え、ぼく!？」

唐突な振りに思わず声が裏返りかけた。

咳込むぼくに、じとーつとした二人分の視線が突き刺さる。

「恨むぞ、秋……」

「お前だけモテやがって……」

ゾンビみたくなってる二人から、あつははーと目を泳がせた。あはは、リリーもモテて大変だなあ……、……。

コホン。

マリアの頭を撫でて、仕切り直し。

「マリアを撫でる必要はあるの……?」

「ロリコン予備軍と呼ばれないように気いつけろよ?」

「うるさいっ!」

リーマスとシリウスに叫び返すと、ぼくはリリーに向き直り、ぎこちなく笑顔を浮かべた。

「……えっと、その。……何のおもてなしも出来ないけど、その……どうしてもつて時は、別に……来ても、いいよ?」

照れたようにリリーは目を伏せ、小さく笑う。何だかむず痒さに襲われ、ぼくは静かに身を震わせた。

後ろでジェームズらが何やら叫んでいるけど、気にしない。

「ねえ母さん、何の話?」

ハリリーがリリーの服の裾を引っ張り、話の概要を催促する。リリーは母親らしく「内緒♪」と微笑んだ。

「もしかしたら、秋がハリリーのお父さんになるかもねって話だよ」
笑顔でリーマスが、ハリリーにいらんこと吹き込んで。皆もう止めてあげて、夜道でぼくが襲撃される可能性が上がるから。

その時汽車の汽笛が高らかに鳴り響いた。時計を見れば10時5分、汽車が出発する5分前の時間だ。慌てたようにリリーがハリリーに乗るよう促すと、ハリリーは汽車に飛び乗って、友達のいるコンパートメントを探しに駆け出した。

まもなく戻ってくると、ぼくらに「後ろから二番目の車両だよ」と告げ、また汽車の中に引っ込んでしまう。

「じゃあ、僕らもここにさよならだ。また今度、何処かで集まろうね」
リーマスが穏やかな顔で笑うと、トランクを持ち上げ手を振った。つられたようにセブルスも、いつもの無表情を崩さぬままにおずおず

と片手を上げる。そのぎこちなさに、思わずリリーと二人で吹き出した。

「わ、笑うなお前らー！」

「はいはい、行つてらっしやい」

リリーの笑顔に、セブルスはぐつと言葉に詰まる。相変わらずリリーには弱いんだよね。

ハリー達のコンパートメントに行く途中、ルシウスさんに会った。お互いに目を見張り、怖ず怖ずと頭を下げ合う。

シリウス達に「先に行つてて」と告げ、ルシウスさんと向かい合つた。

「そっか。息子さん、ハリーと同じ年でしたもんね」

「ポッターの子供を中心に思い出されるのは、何か納得いかないな」

途端に不機嫌になったルシウスさんに、苦笑いを返す。

「リィフがさつきまでいたんだが、用事があるとかで一足早く帰つてしまったぞ」

「ああ、お役所仕事は大変そうですね。ぼくも会えるとは思つてませんよ」

肩を竦めた。王室御用達の付き人の役を代々仰せ付かっている我が友人は、いつも忙しそうに国から国を飛び回っている。家族になかなか会えないのが不満だつて、前会つた時に話してたつて。ぼくなんかは独り身だから、その点は気楽でいいものだ。

ガタンツと列車が大きな音を立てた。ぼくはルシウスさんに慌てて頭を下げると、ハリーのいるコンパートメントまで走つて行く。

「遅いよ秋！ 一体何してたのさあ！」

「あはは、ごめんごめん」

むうつと頬を膨らませるハリーの頭を、優しく撫でてやる。そして「見ててごらん」と言つて杖を取り出した。

「学校生活が楽しくなるおまじないだ」と笑つて、杖を振り上げる。

「うわあつー！」

ハリーが身を乗り出して感嘆の声を上げた。シリウスが「見事なものだな」と眩き、リリーが楽しげに笑う。

外の異変に気付いたか、コンパートメントの窓が開き、生徒達が続々と顔を覗かせた。

空のような、澄み渡った一面の青。天井から足元まで、全てを青色に塗り替えて、駅を一瞬で空中へ。

線路を虹色に輝かせると、まるで太陽へと伸びる虹のよう。

「君の人生に、幸多からんことを！」

ゆっくりと汽車が動き出した。ハリーが一生懸命手を振るのに、笑顔で振り返す。

深紅のホグワーツ特急が光の彼方に消えていくのを、目を細めて見守っていた――



そこで、目が覚めた。

「……あ……ゆ」

夢か、と。

眩きかけたところで、つうつと一滴、涙が零れた。慌てて目を擦り、袖口で涙を拭く。しかし涙は止まらないで、何故か次から次へと溢れてきた。

「うわ……ちよつと、これは……」

涙を拭きつつ、小さく笑う。

「……夢、か」

ぎゅつ、とシーツを掴んだ。

「きつついなあ……」

これが、幣原秋が望んだ未来。

実現されることのなかった希望。

もう叶わない、願い。

この世界に、幣原秋は存在しない。

ジェームズ・ポッターとリリー・ポッターは殺され。

ピーター・ペディグリューは裏切り。

シリウス・ブラックは投獄された、この世界。

身体をくの字に折り曲げ、感傷に堪える。
今だけは泣かせてくれ——
眩いた言葉を、空は聞いていただろうか。

炎のゴブレット編

第1話 両手分の世界

ぼくの世界は、とっても狭い。

小学校時代を一緒に過ごした日本の友人たち。そして、今ぼくと仲良くしてくれている、ホグワーツでの友人たち。悪戯仕掛人の四人。セブルスとリリー。そして、ぼくを育ててくれた両親。

十五才のぼくにとって、世界とは、ぼくの手の届く範囲までを意味していた。ぼくは、将来は起業したいとか、もつと学問を修めて見識を広めたいだとか、そんな高尚な意志なんて全く持ち合わせちゃいなかった。ただ、毎日学校の宿題に追われて、友人らと他愛もない話で盛り上がって、そして長期休みには両親や日本の友人たちと楽しく過ごす。至って普通の、十五才の子供だった。

それでもいいと思っていた——それがとても幸せなことだったのだと、ぼくは後に、知ることになる。



幣原秋がどうして「黒衣の天才」と呼ばれ、戦争の英雄扱いされるようになり、彼の名を当時の魔法使いの殆どが知ることになったのか。その理由は、当時の日刊預言者新聞を少し漁ってみれば、すぐに分かる。

新聞の一面を華々しく飾る、闇祓いや「不死鳥の騎士団」と呼ばれていた集団、彼らの活躍。闇の魔法使いと戦った彼らの活躍は、おそらく士気を上げるためだろう、より英雄的に模範的に勇敢に、戦死したとしたらより悲劇的に、美麗な筆致で描かれていた。

幣原秋は、闇祓いに関する記事のほとんどに、その名が載っていた。若かりし天才。

「例のあの人」に匹敵する魔力の持ち主。

闇祓いの訓練期間である三年間、その期間を異例の一年間のみで終

了させ、十八の若さで前線に投入。その後も輝かしい戦績を修め続けた彼は、暗い世論に沈む世界の中で、光だったのかもしれない。

活躍が煌びやかに描写される一方、公に姿を出さず、写真すらも新聞に載らない彼ら闇祓いは、きつと、偶像化するのに丁度良かったのだろう。

幣原秋。

戦争の英雄であった彼の葬式は、国を挙げて大々的に執り行われたそう。

真つ黒な棺の上に、山になるほど積み上げられた白百合の花。

その写真が、唯一幣原秋関連で新聞に載った写真だった。



「ん……」

ふわり、と意識が覚醒する。じんわりと感覚が戻ってくる。

閉じた瞼の奥が明るい。もう朝か。

ゆっくりと瞼をこじ開ける。

目の前数センチの距離に、ハリー・ポッターの顔があった。

「……………」

ちよつと驚いた。がしかし、いつものことだと思い直す。

ハリーは、ぼくを抱き枕にするかのように、ぼくを抱き締めて眠っていた。ハリーの両腕が、ぼくの背中に回されている。呼吸の感覚は一定で、まだ起きる予兆はない。

しかし、さすがにこの歳になると、一つのベッドで一緒に眠るのは狭く感じるな。主にハリーのせいだ。無駄にでっかくなりやがって。少しは身長と体重ちようだいよってんだ。

首を回して時計を確認すると、針は五時半を示していた。おばさんが目が覚めてぼくらを起こしにくるまで、まだまだ時間がある。ハリーから抜け出そうとするが、思った以上にハリーのホールドは嚴重で、ぼくは諦めて身を委ねることにした。

時間があるので、幣原秋のことについて考える。

幣原秋とは何者なのか——いや、この問いは突き詰めていけば「アキ・ポッターとは何者なのか」という問題に打ち当たることになる。何せ、幣原秋とアキ・ポッターは同一人物なのだから。

ぼくは一体、何者なのだろう。

幣原秋に作り出された人格——幣原秋が、自らの手足として扱うために作り上げたお人形。

けれども、一体何のために、幣原秋はぼくを作ったのだろうか？

『可能性』——そう、リーマスは確かにそう言ったのだ。『幣原秋が選び取れなかった道を選んでくれる、『可能性だ』と。詳しいことは全く何も教えてくれなかった——ただ意味深に笑顔を浮かべただけだ。

幣原秋が選ぶことが出来なかった道。もしくは、幣原秋が選ぶことを拒否した道。

そんな道が——あるのだろうか。

そんな道を、ぼくならば、選ぶことが出来るのだろうか。

「……………」

口を開きかけ、閉じた。

ぼくの頭の中で眠る、幣原秋。ぼくのもう一つの人格、と言ったが分かりやすいだろうか。

彼は、一体何を考えているのだろうか。

ぼくの見たもの聞いたもの、それらが伝わっていると聞いた。ということとは唯一自由なのは、ぼくの思考だけということになる。でも、ぼくのもう一つの人格ということは、身体を共有しているということだ。当然それは、脳みそも含まれる。いくら幣原秋本人から、思考の自由が保証されたからといって、簡単に信じる事が出来るだろうか？

幣原秋とアキ・ポッターは、同一人物だ。だが、同時に異なる人間だ。根っこが同じ——身体が同じ、というだけで、育ちも境遇も性格も、友人関係だって違う。違う人間なのだ。

あの夜。ピーターを追いつめた日の幣原秋の様子は、ぼくが知っている幣原秋とは全く違っていた。

温厚で物腰柔らかく、穏やかな彼とは……。

ハリーのうめき声で、はっと意識が引き戻された。頭を抑え、苦しように息を荒げている。

ぼくは慌てて頭を上げると、小声で「ハリー！」と名前を呼び、ハリーを揺さぶった。

「……………アキ？」

「大丈夫？ ハリー」

ハリーの目が、ぼくの顔で焦点を結んだ。ハリーはベッド脇のメガネに手を伸ばすと、額を抑えつつメガネを掛ける。

「具合が悪い？ どこか痛むの？」

「いや……………体調が悪いんじゃない。ただ、傷が……………痛むんだ」

少し唇を噛んだ。そっとハリーに顔を近付けて、額の傷跡に触れるだけのキスをする。ハリーはぼくの頭を、心配ないよと言いたげに軽く撫でた。

「夢を見たんだ」

「夢？」

「ああ……………ヴォルデモートが出てくる夢……………三人いた。ヴォルデモートとワームテール……………そして老人が一人。その男が床に倒れて……………」

「無理しないで」

上半身を起こしたハリーが、額を抑えてうなだれた。ハリーの手を取ると、今は真夏なのに、氷のように冷たかった。よく見ると、寝汗をびっしょりとかいている。

「待ってて、タオル持ってくるから……………」

そう言っただけでベッドから降りようとしたが、ハリーはぼくの手を離さなかった。

「いや……………聞いてくれ、アキ。僕が忘れてしまう前に……………細かいことを覚えておくのは、僕より君の方が得意だから」

そう言っただけでハリーは、ぼくの間を見つめた。

「確か……………ヴォルデモートとワームテールが、誰かを殺したと言っていた……………誰だっけ、名前が思い出せない……………でも、誰か……………魔法省やクイディッチワールドカップについても話してた……………そして、誰かを

殺す計画を立ててた……僕を、殺す計画を」

何も言わずに、ハリーの指に指を絡める。

「記憶を消すのかも言ってた……それに、ワームテールにして欲しい重要な仕事があるって言っていた……褒美を授けるって……それが何なのかは言っていなかったけど……それにアキ……君の名と、幣原秋の名を口にした」

そうか……あの後、やっぱりピーターはヴォルデモートの元に戻ったのか……。

ヴォルデモートは一体何をやるうとしているんだ？ 今度はどうやってハリーを殺そうと考えている？

ぼくだったら……ぼくだったら、ハリーを殺したいと思うなら、先にぼくを殺す。だってぼくは、ハリーが一番近くについて、ハリーを殺そうと思ったときに真っ先に立ちはだかる、邪魔な存在だから。

だけど、クイディッチワールドカップでぼくやハリーを殺せるとは思えない。ぼくらは夏休みの間魔法を使っちゃダメだけど、ハリーの身に危険が及ぶとなっちゃぼくは杖を抜く。

それに、確かにたくさんの魔法使い達が来るけど、その分警備も厳重だ。たくさんの人目につく場所で、ヴォルデモートが直々に出張ってハリーを殺しにくることはまずないだろう。同じく、ピーターもだ。13年前死んだはずの人間が（しかも、去年シリウスが脱獄したことで、魔法使いにとっても覚えが新しいはずだ）のこのこと現れることは考えにくい。

「……ねえ、アキ。僕は怖いよ。このような夢を見る自分が怖いんだ」
冷たい汗で湿ったハリーの手をしっかりと握り、ぼくは明るい表情で言った。

「シリウスに相談してみようよ」

第2話 落下

真っ暗だ。深夜の暗がりとは比べものにならない、本物の闇。黒のインクをぶちまけたような、光さえも吸い込んでしまいそうなこの闇は、身震いするほど恐ろしく、またぞつとするほど蠱惑的だ。

時間にしてはほんの一瞬だっただろう。しかしぼくにとっては、何だか永遠のように長く感じた。

気がつくくと、ぼくは地面に座り込んでいた。ライ先輩に右手首をぐいっと引つ張られ、無理矢理立ち上がらされる。体力なんて欠片もなさそうな見かけとは裏腹の、とても強い力だった。

辺りを見渡すと、どうやらこの場所は、部屋の中のようなだった。床には豪華な絨毯が敷き詰められ、部屋の壁には大きな暖炉が、季節柄、現在は稼働していないようだった。脇には趣味のいいガラス棚に、様々な見たこともない魔法道具が所狭しと並べてある。

「……幣原秋を連れてきた」

ライ先輩がそう口にするのと、さつきまで眠っていた肖像画の目が弾かれたようにぱつと開いた。驚いたが、どうやら寝たフリをしていたようだ。

肖像画に描かれた、真っ白なヒゲを長く伸ばした男性は、ライ先輩に目を飲った後、じろりと値踏みするようにぼくを見回すと、小さくフンと鼻を鳴らし、パカリと寮の扉のように開いた。

扉の奥には、どこか見覚えのある空間が広がっていた。ここは——
そうか、ホグワーツの校長室だ。

自律的に回る天球儀に、ぷかぷかと煙を吐く銀飾り。かつての校長先生が描かれている、たくさんの肖像画。視界の右端に、赤と金色の不死鳥の姿。

「秋」

ぼくの名前を呼ぶ声に、はっと目を向けた。ダンブルドア校長先生だ。普段好々爺な笑顔を絶やさないあの人は、今日は珍しく真面目な表情を浮かべている。

つかつかとぼくに歩み寄ると、ぼくの肩を掴んだ。想像していたものより、強い力だった。

「気をしっかり持つのじゃ。……と言っても、酷かもしれないがの」
何を言っているのか。よく分からない。ぼくは至って正常だ。

ぼくがおかしいのだとするならば、

そんな世界の方が間違っている。

「……そうじゃな」

ダンブルドア先生は、何故か哀しげな眼差しでぼくを見た。

「世界の方が、間違っておるのじゃ」



気がついたら、ぼくは自分の家の前に立っていた。何かに誘われるかのように、ぼくは無意識に、門に手をかける。あまりにも軽々と、門が開いた。

玉砂利を踏みしめ、家に向かう。靴の下でやかましく鳴るはずの砂利の音は、どうしてかぼくの耳には届かなかった。

そういえば、今は真夏のはずなのに、そしてこの家は山の中にあるはずなのに、聞きなれた蝉の音も鳥の声も、なんにも聞こえないのはどうしてだろう。分からない。

玄関の扉を押し開ける。

沓脱ぎには、母が飾っていた小さな花瓶は粉々に割られていた。ビー玉ほどの大きさの水晶が砕け、盛ってある塩が黒ずんでいるのに、思わず足を止めた。靴も脱がずに家へと上がる。

廊下を進んだ。ドアが吹き飛ばされているから、廊下からそのまま首だけ突っ込んで部屋の中を見回す。

家の中は、まるで泥棒が手当たり次第にひっくり返したかのようにぐちゃぐちゃだった。執拗なまでに壊された電化製品、引き裂かれた大量の本、引きずり出された座布団の羽根。落とされ壊された神棚。

ここでもない、ここでもない。

足が、止まらない。

呼吸が整わない。

——やがて。

父の書斎の前に立ってようやく、ぼくの足は止まった。

何か第六感でも働いているのだろうか、ここに間違いなく——ある、そう心が焦っている。

両親の姿を見たいと、心が欲する。

恐る恐る、一步を踏み出した。

「……ああ」

息を吐いた。

術者が死んだからなのか、天井は今までのように空を映し出すことはなく、ただただ白い。壁を埋め尽くす勢いであった本は、半分くらい地面に落ちている。ぼさぼさと乱雑に落とされた本はぐちゃぐちゃで、修復が大変そうだと思った。

そして——部屋の真ん中。

抱き合って眠っているような姿の両親に、一步一步近付いた。

「……父さん、母さん」

母の傍らに、膝をつく。母の肩にそつと手を置いて揺すった。

「ただいま。ぼくだよ、秋だよ。父さん達が迎えに来ないから、待ち切れずに来ちゃったよ」

返事はない。

「確かに日本から迎えに来るのは大変だって分かっているけど、でも父さん達に迎えてもらわないと、寂しいよ。しかもさ……何で……っ」
声が詰まった。奥歯を噛み締める。

「何で、勝手に死んでんのさっ……っ」

母の傍らに蹲り、拳を地面に叩き付けた。

言葉に出来ない強い衝動に付き動かされるまま、ただ一心に、拳を振るう。

何故か、痛みはなかった。

頭の中が霞みがかかったようにぼんやりとして、うまく考えられな

い。反対に身体の方は、胸から腹に掛けて、とぐろを巻いたヘビがうごめいているかのよう、そわそわして落ち着けない。

「……秋」

振り上げた拳を掴まれた。振り返るとそこにはライ先輩がいて、あれ、何で日本にライ先輩がいるの？ と不思議に思った。

後ろから抱きしめられ、父さんと母さんからぼくを離れさせようとする。待ってよ、どうしてそんなことするのか。ぼくらは家族なんだよ、誰にもぼくらを引き離すことなんて出来ないはずなのに。

暴れるけれどライ先輩はぼくを離してくれない。やめてよ、ここはぼくらの家で、君は部外者なんだよ。

何で、何で、何で。

「秋、今から――」

「――して」

「え?」

「放してよおっ!!」

魔力が、弾ける音がした。

瞬時、家中全ての窓が粉々に吹き飛ぶ。家全体がガタガタと音を立てて揺れ、軋み、悲鳴を上げた。

全部、全部、全部。何もかも、跡形も残さず、面影も、原形も、何も留めない形で。

壊れてしまえ。

手に余る程の膨大な魔力。それが今、自分の思う通りに動くのを実感した。玄関のタイルも、居間の壁も、屋根の瓦までもが、はつきりとしたイメージを持つ。

魔力を精製し、練り上げ、全てを破壊しつくした。



気付けば、立っているのはぼく一人だった。両親の所を避けるように、瓦礫の山が堆く積もっている。

二人の姿を視界に入れた途端に、涙が溢れた。頬を伝う生温い水を感じる。身体の内から、堪えきれない熱量がせり上がってきた。それはぼくの喉を震わせ、開いた口から漏れ出てくる。

見上げると、青空があった。青く高い空。そして、その青空と不釣り合いな、銀色に光り輝く髑髏。思わず、目を見開いた。

溢れた涙が頬を伝う。嗚咽が身の奥底から込み上げる。

ぼくは、何年か振りに、声を上げて泣いた。

第3話 トン・タン・タフィー

夢を見た。なつかしい夢を。とても小さい頃の記憶だった。

日当たりの良いリビングで、ぼくは父さんに抱えられて、一緒に本を読んでいたんだ。勇者が、悪い魔法使いを倒して、世界を平和にするお話。

時折ぼくは、背後の父に、読めない漢字の読み方なんて聞いて……。

母さんは、そんなぼくらに優しく微笑んで、美味しいクッキーとジュースを出してくれた。でもぼくは、何かに夢中になると美味しいお菓子もジュースも目に入らなくなるから、だから母さんがお菓子を持ってきてくれると、父さんは「さあ、休憩にしよう」と言っつて、ぼくの手から本を取り上げるのが役目だった。

その頃のぼくは、まさか自分が魔法使いだなんてことも知らずに、これから数年後にホグワーツに入学するなんて夢にも思わずに、それどころか、自分は何者なのか、なんて考えたこともない、ごくごく普通の平凡な子供だった。

そんなぼくがその本を読み終わった頃、父さんはこう言った。

『魔法使いも、悪い奴らばかりじゃないんだよ……』

「そうなの？ でも、本の魔法使いは、だいたいが悪いやつらだ」

『それはね、秋。魔法を使えない人たちは、魔法が《怖くて危ないもの》のように見えちゃうからだ。《怖くて危ないもの》だから、それを扱う人も《怖くて危ない人》なんだと思ひ込んでしまう。』

この世界は、魔法を使えない人がほとんどだ。だから、そういう思ひ込みが多く出回ってしまう。確かに魔法はいろんなことが出来る、出来てしまう。怖いことだって、危ないことだって。

でも、真に怖くて危ないのはね、誰もが持つている、魔法使いじゃない普通の人たちも持つている、自分の心なんだよ』

父さんの話は、その当時は難しくって、よく理解出来なかった。でも、わからない、というのはなんだか悔しくて、わかったような振りをしてみせたんだ。

今なら分かる。どうして、父さんがあんなことを言ったのか。



待ちに待った日曜日がやってきた。ロン達が、ぼくたちを迎えにくるのだ。

バーノンおじさんは一昨年メイソンさんの接待の時に使った一張羅の背広を着込み、ウィーズリー家の人々を見た目で威圧しようと頑張ってる。でもウィーズリー家の人たちは魔法族だから、マグルの洋服なんて、ましてや背広の善し悪しなんてわかんないだろうから、正直無駄だとは思うけど。

ペチュニアおばさんは、神経質そうにクツションを引っ張って、元々ない皺をさらに伸ばそうとしている。ダドリーは、本人の横幅よりも狭い肘掛け椅子に身体を押し込んで、出来る限り小さくなるうとしている……のかな？

そわそわしているのは、ぼくやハリーだっ一緒だ。緊張しているおじさんたちを見ていたくなくて、二人で玄関の階段に腰掛け、時計を見上げて時間を潰していた。

一体彼らはどうやって来るのだろうか。昨日の夜話し合ったけど、結局結論は出さず仕舞いだ。空飛ぶ車はホグワーツで野生を謳歌しているし、他に車を用意するのだろうか。

まさか箒で来る訳がない……とは言いつても切れないのが悲しいところだ。

「連中は遅れとるー！」

約束の五時を過ぎたところで、我慢ならないといった風におじさんが叫んだ。ぼくとハリーは肩を竦め、目配せする。まだ、ついさつき五時を過ぎたばかりだというのに、神経質なんだから。

とはいえ、五時を十分、十五分と過ぎるごとに、ぼくたちも段々と不安になってきた。ウィーズリーおじさんだっってお役所で働く役人なのだから、時間には正確なはずだ。それがこんなに遅れるなんて、何か途中で事故にでもあったのだろうか……ウィーズリー家の人が事故にあうなんて、何だか考えられないけれど……。

五時三十分が過ぎて、ぼくらの不安は最高潮に達しようとしていたし、おじさんとおばさんの緊張の度合いもMAXみたいだった。

「大丈夫かな？ おじさんたち」

ハリーが耐えられないと言った風に零した。勿論、この「おじさん」とはバーノンおじさんのことではなく、ウィーズリーおじさんのことだ。

「きつと大丈夫だよ。何かあれば、ふくろう便で送ってくれてるだろうし……」

「けど、誰もふくろう便が出せないくらい、酷い状況だったら？」

「それは……」

ぼくは口ごもった。ハリーから目をそらし、上手い返しを考える。しかしぼくの思考は、居間から聞こえてきたおじさんとおばさん、それにダドリーの悲鳴で邪魔された。

「何!? 何が起こったの!?!」

居間で何やら悲鳴と怒号、ドタバタとした足音が聞こえる。ぼくらは慌てて立ち上がった。

ちょうどその時、居間からダドリーが出てきて、ぼくらに目もくれず、尻を押えて(彼なりに)急いでキッチンへと逃げ込んでしまった。急いで居間に入ると同時に、居間にあった暖炉が凄まじい音を立てて吹き飛んだ。土煙がもうもうと上がり、ペチュニアおばさんがふらりと倒れ込むのを慌ててバーノンおじさんが支える。

怯える彼らとは逆に、ぼくとハリーは目を輝かせて駆け寄った。

「ウィーズリーおじさん!」

「やあ、ハリー、アキ。元気だったかね？」

そう言つて柔らかな微笑みを浮かべるウィーズリーおじさんに、ぼくも負けじと笑顔を見せた。

ぼくらの頭をぼんと軽く撫でたあと、ウィーズリーおじさんはバーノンおじさん達を見つけ、挨拶をしようと歩いて行く。代わりにぼくらは、ウィーズリーおじさんと一緒に来ていたロンと双子に囲まれた。

「よう、ハリーにアキ。元気してたか？」

「元氣してたに決まってるだろ、相棒。だって誕生日にあーんな素敵
なプレゼントが届いたんだから」

「ああ、とっても素敵だよ、君らの感性は」

大きな布包みを送ってきたと思ったら、そこから大量のゴキブリ・
ゴソゴソ豆板が……これ以上は言わないでおこう。スタツフが美味
しく頂きました……うっぷ。

「トランクは上だよな？ 俺たちが取ってきてやるよ」

そう言っつて、双子はぼくらにウイंकして部屋を出て行った。きつ
と部屋の外にいる「噂の」ダドリーを一目見ようと思っただろう。

一昨年彼らはぼくらを迎えに来たから、部屋の場所も覚えていたの
か。

「けど、君ら、一体どうして暖炉から？」

ハリーが尋ねると、ロンが答えた。

「パパがこの家の暖炉を『煙突飛行ネットワーク』に加えたんだ。マグ
ルの暖炉を繋ぐのはホントはやっちゃダメなんだけど、そっちの部署
にパパがちよつとしたコネがあつてさ」

「なるほどなあ」

ダドリーが部屋の中に逃げ込んできたのを目敏く見つけたウィー
ズリーおじさんが、ダドリーに柔らかく話しかけた。しかし魔法恐怖
症のダドリーは（魔法恐怖症はダーズリー家全員が患っているような
ものだが）怯えるばかりで、ちつとも会話が成り立っていない。その
様子を面白おかしく眺めつつ、ぼくはロンの話に相槌を打った。

「あー、では、そろそろ行こうか」

双子がぼくとハリーの荷物を持って戻ってきたのを見て、ウィーズ
リーおじさんは言った。杖を取り出すと、暖炉——今はただの壁の
穴、だけど——に向け、「インセンディオ！」と呪文を唱える。杖の先
から火花が飛び散り、一瞬後には暖かな炎が暖炉から立ち上り始め
た。

この暖炉だつて、自分が一生のうちに本当に火を灯すことになる
は思いもしなかっただろうに。

その後おじさんは、ローブのポケットからフルーパウダーを一掴み

炎に振りかける。すると炎はパツとエメラルド色に変わった(誰とも知れぬヒツと怯えた声が聞こえた気がした)。

「さあ、フレッド、行きなさい」

「今行くよ。あつ、しまった——ちよつと待って……」

フレッドが一步踏み出したその瞬間、ぼくのトランクに躓いて、フレッドは少しよろめいた。その動きはあまりに自然で、ぼくは思わず彼に駆け寄ったが——彼のポケットから落ちたお菓子の包み紙に目が止まった。美味しそうなヌガーだ。

フレッドは慌ててお菓子を拾い集め、乱暴にポケットに突っ込んだ。ぼくは足元に転がった一個を摘まみ上げ、フレッドに渡そうとしたが、それはジョージに阻まれた。

「持ってな—アキ。俺たちの最高傑作だ」

「今のところのな」

二人に耳打ちされ、肩を叩かれる。と、いうことは……ぼくはもう一度、手の上のお菓子の包みをじつと見つめた。

赤と緑の包装に、丸いフォントで書かれた「ヌガー」の文字。その裏にはデフォルメされたピエロの絵。随分凝っている。言われなければ手作りだと分からないくらいだ。双子の手作りだと知らなかったら、無邪気に口に入れるところだった。ふう、危ない危ない。

フレッドとジョージとぼくらのトランクが消え、そしてロンも炎の中へと消えて行った。残されたのはぼくとハリーとウィーズリーおじさんだ。

「じゃあ、ハリーとアキ」

ウィーズリーおじさんに促され、ぼくらは炎へと身体を向けた。首だけをダズリー一家に向けると「それじゃ……さよなら」と挨拶する。

しかしダズリー一家は何も言わず、ただ強ばった表情でぼくとハリーを交互に見つめるだけだ。早く厄介事が去ってくればいいと心から願っているに違いない。

返事が来ることなく期待していないぼくらは、そのまま背を向けて歩き出したが、ウィーズリーおじさんに引き止められた。

ウィーズリーおじさんは、信じられないと言った表情でダーズリー一家に声を掛けた。

「ハリーとアキがさよならと言ったんですよ。聞こえなかったんですか？」

「いいんです、本当に。そんなことどうでも」

「来年の夏まで甥御さんに会えないんですよ。勿論、さよならと言うんでしょうね」

ハリーの言葉に耳を貸さず、ウィーズリーおじさんは、今度は先ほどよりも少し強い口調でそう言った。

バーノンおじさんの顔が歪むも、ウィーズリーおじさんが杖を握ったままだということを思い出したようだ。吐き捨てるように「それじゃ、さよならだ」と言った。

「じゃあね」

ぼくもそれだけを返すと、軽く手を振り、炎の中に足を踏み入れた。木漏れ日のそよぐ風のような暖かさで、眠気を催すくらいに心地よい。しかし突然背後で妙な音とペチュニアおじさんの悲鳴が上がったため、ぼくらは振り返った。

見たのは、ダドリーがテーブルの脇に跪き、三十センチほどの紫色のなんだかヌメヌメしたものを口から出して、ゲホゲホ咽せている光景だ。そして、すぐ近くには、今もぼくのポケットに同じものが入っている、色鮮やかなお菓子の包み紙。

ペチュニアおじさんは半狂乱でダドリーに生えたそれをもぎ取ろうとするし、そりや勿論ダドリーは抵抗して暴れるし、バーノンおじさんも喚き出したし、ぼくも優雅に煙突飛行してる場合じゃない。「心配なく！ 私がちゃんとしますから！」

ウィーズリーおじさんが杖を手にダドリーに駆け寄ったが、ペチュニアおじさんは悲鳴を上げてウィーズリーおじさんからダドリーを守ろうとダドリーに覆い被さった。ウィーズリーおじさんは困って色々言っって落ち着かせようとしているが、逆効果だ。

阿鼻叫喚、とはこのことを言うのだろうか。混乱の極みだ。

「ハリー、アキ！ 行きなさい！ 早く！ 私がなんとかするから！」

何を言っているんだ、こんな面白いものを見逃すなんて、と思ったが、バーノンおじさんが投げた置物が暖炉の枠に当たってド派手な音を立てたので、ここはウィーズリーおじさんに任せようと、ぼくはハリーと頷き合った。

「隠れ穴！」

ハリーが叫ぶと、視界が歪んだ。

栓が抜かれた洗面台の水の視点のように、今まで見えていたダーズリー家の居間は消えていき、暗闇だけが残された。

第4話 闇の中の真実

それからの日々は、あつという間に過ぎていった。葬儀は英国風ではなく、あくまでも日本式で執り行われた。

ぼくは両親の死の感慨に耽る暇もなく、ずっと忙しく過ごした。

ぼくが所属するレイブンクロウ寮の寮監であるフリットウィック先生は、ぼくを手助けしてくれた。フリットウィック先生だけではない、色んな先生が、ぼくを親身に支えてくれた。

ぼくが壊してしまった家は、今は元通り、綺麗な状態に戻しておいてある。

でも、そこに再び住む気にもなれなくて、ぼくはホテルに仮住まいする日々を送っていた。

葬儀で、ぼくは初めて自身の『親戚』に出会った。父の兄弟や親だと名乗る人に囲まれるのは少々息苦しく、悪い人たちではないと思うのだけれど、なんとなくこちらから距離を置いた。彼らも、ぼくをどう扱っていいのか分からないみたいだった。

両親が死に、身寄りがなくなったぼくを預かりたいと言ってくれたのは、ぼくにとって父方の祖父母にあたる人だった。血が繋がっているとはいえ、初めて会ったばかりの他人であるぼくを引き取ってくれと言ってくれたのは大変に有り難かったが、丁重にお断りさせて頂いた。

幸いにも、両親は幾らかのお金を遺してくれていた。もう十五だ、ある程度の身の回りの世話は自分で出来る。

それに——どうして両親が彼らと連絡すら取っていないなかったのかよく分からない今、頼るのは賢明ではないと思ったのだ。

遺品を整理していると、両親からの手紙を見つけた。

これからの、ぼくの身の振り方について書いてあるものだった。

それは、まるで自分たちがいつ死ぬのかが分かっていたみたいで現状に沿っていて、ぼくはその通りに動くだけでよかった。

いや——もしかしたら、本当に予期していたのかもしれない。

葬儀で、両親の話をたくさん聞いた。それは、今まで耳にしたこと

のなかった話もとても多かった。そのうちの一つに、興味深い話があった。

曰く、父は予知夢者だったらしい。

未来を予知する夢を視る人間。呪術を司る幣原家には、数代に一人の割合で現れるのだという。ならば、自分の死期を知っているのも道理であると言える。

しかし不思議なのは、《>どうして両親は自分が死ぬとわかっていながら逃げずにみすみす殺されたのか?》ということだ。

自分たちが死ぬことが分かっていたのなら、どこへでも逃げればよい。昔の話ならばともかく、今は飛行機も船も、また魔法使いなのだから『姿くらまし』だって出来るのだ。

なのに、それをしなかった。

不思議なことはそれだけではない。

家の中の物は、執拗に壊されていた。

これは、ぼくはてつきり犯人——ヴォルデモートが、ぼくの両親を殺そうとして壊れたものだど解釈していたが、よくよく確かめてみると違うことに気がついた。

何故なら、全てのものが壊され、砕かれ、破かれているのだ。食器棚に入っていたぼくらの食器から、父の蔵書の本のページまで、全て等しく。

これは一体、何を示しているのだろう。

家の中の物を『復旧』させたとき、ダンブルドア先生から「何か足りないもの、なくなっているものはないか?」と聞かれたが、ぼくには見つけ切れなかった。

それと——ぼくが家に置いていた日用品や服、本、また両親の通帳、印鑑その他は、葬儀が終わってちょうど一週間後に宅配便で、現在ぼくが仮住まいの拠点としているホテルに届いた。

送り主は、我が父幣原直。一体、どこまで予知していたのやら。

そんなこんなで、八月も半ばが過ぎ、夏休みも残りを数えるほどになった頃（休み、と言っても、休んだ気は全くしないが）、ある人物から連絡が入った。

海を超える長旅で疲れているのだろうけれど、その疲労も見えないくらいに羽根を広げぼくを威嚇するフクロウに、苦勞しつつも返事を託すと、ぼくは早速荷造りの準備に取り掛かった。



気がついたら、ウィーズリー家のキッチンの暖炉に倒れ込んでいた。顔面から倒れなかったのは、ハリーが支えてくれていたからだろう。顔を上げると、ウィーズリー家の面々がぼくとハリーを覗き込んでいた。

「やつは食ったか？」

いらつしやいの一言もなく、ハリーを助け起こしながら、フレッドが興奮を隠し切れない口調で尋ねた。そんな相棒に、ジョージがぼくに手を伸ばしつつ「許してやれよ、楽しみで夜も眠れなかったんだから」と笑みを零す。

「いったい何だったの？」

「トーン・タン・タフイーペロペロ飴さ。ジョージと俺とで発明したんだ。誰かに試したくてさ……」

「夏休み中ずっと被験者を探してたってワケ」

ジョージがぼくの服についた土埃を払い落とす。

見回すと、キッチンには双子とロンの他に、もう一人座っていた。二人とも赤毛で、双子よりも大人びている。きっとビルとチャーリーだ。

「やあ、君がアキ？ 君のことはよく聞いてるよ。僕はビル。ウィーズリー家よろこそ、アキ」

ビルが微笑んで、ぼくに右手を差し出した。長い赤毛はポニーテールにしてあって、何だか親近感が湧く。

左耳には……なんだろう、ドラゴンの牙のイヤリングだろうか？ 服装も一人小洒落っていて、なんだか凄く格好いい。

次に挨拶をしたチャーリーは、ロンより背こそ低かったが、小柄だとかそんなことは全くなく、むしろがっしりとしていた。

「初めまして、アキ。お前、動物が苦手なんだって？」

「違うよ！ 動物が苦手なんじゃなくて、動物がぼくのこと苦手なんだって！」

そう言うとチャーリーは「それなら、今度俺が、お前を怖がらない動物を連れてきてやるよ」と笑った。

その時、ポン、と小さな音がして、ウィーズリーおじさんが「姿現し」した。本気で怒った表情をしている。

「フレッド！ 冗談じゃすまんぞ！ あのマグルの男の子に、一体何をやった!?!」

「俺、何もあげてないって。落としちゃっただけだよ、拾って食べたのはあいつだろ」

「わざと落としただろう！ あの子が食べると分かってたはずだ。あの子がダイエット中だと知っていただろう！」

「あいつのベロ、どのくらい大きくなった？」

「ご両親が私に縮めさせてくれたときには、一メートルは超えていた！」

キッチンに爆笑の渦が巻き起こる。「笑い事じゃない！」とウィーズリーおじさんが叫んでも無意味だ。

「こういうことがマグルと魔法使いの関係を悪化させる原因になるんだ！ 母さんが知ったら、一体何と言うか……」

「私に何をおっしゃりたいの？」

タイミングよく、モリーおばさんがキッチンに入ってきた。気まずげにウィーズリーおじさんが口ごもる。

ウィーズリーおばさんの後ろには、ハーマイオニーとジニーの姿が見えた。二人ともこちらに笑顔で手を振っている。しかしジニーはハリーと目が合った途端、真っ赤になってそっぽを向いてしまった。可愛いなあ。

「ハリー、アキ、ロンに寝室まで案内してもらったら？」

ハーマイオニーがそう声を掛ける。

「二人はもう知ってるよ、前もそこで——」

「みんなで、行きましょう」

ハーマイオニーの強調に、やっとロンもピンと来たようだ。「あつ、オツケー」と言い、腰を浮かす。

「ウン、俺たちも行くよ」

「あなたたちは、ここにいなさい。ウィーズリー・ウィザード・ウィーズのことでお話があります」

双子の言葉をピシヤンと沈めるようにウィーズリーおばさんが凄んだ。

ぼくらはキッチンを出ると、ハーマイオニーとジニーと一緒に階段を登っていった。

「ウィーズリー・ウィザード・ウィーズって何なの？」

ハリーの言葉に、ロンとジニーは笑った。しかしハーマイオニーは渋い顔を崩さない。

「ママがね、二人の部屋を掃除したら、注文書が束になって出て来たんだよ。発明した物のなっがーいリストさ。悪戯おもちゃが満載の。すっごいよ、僕、あの二人があんなに色々発明してたなんて知らなかった……」

「昔っからずっと、ちよくちよく二人の部屋から爆発音が聞こえていたけれど、まさか何か作っているなんて思いもしなかったわ。ただうるさくしたいだけだと思ってた」

「ただ、作ったものがほとんど——いや、全部が、そのー、ちよいとばかり危険なんだよ。それに、あの二人、ホグワーツでそれを売って稼ごうと計画してたみたいなんだ。それでママはカンカンさ。もう何も作っちゃいけませんって、注文書を全部焼き捨てちゃった。ママったら、OWL試験で二人がいい点とらなかつたことにも腹を立ててたからさ……」

「それからね、大論争があったの。ママは、二人にパパみたいに魔法省に入って欲しかったんだって。でも二人は、どうしても悪戯専門店を開きたいって言って……」

どこをとっても、あの双子らしい。

そこで、思い出したかのようにジニーがぼくを見た。

「そういえば、アキ、あなたってまだ、フレッドとジョージの二人と一

緒に寝る勇氣はある？」

とても不思議な聞き方だ。だが危機感と、彼女がどう思っているのかはよく伝わった。

二年前にウィーズリー家にお世話になったとき、ハリーはロンの部屋で、そしてぼくは双子の部屋でそれぞれ泊まったのだ。ロンの部屋が狭いからだと言っていたが、はてさて、どこまで信用していいものか。

まあ、ぼくも双子と一緒に悪巧みするのはとっても楽しいし（モリーおばさんの堪忍袋がどうなるかはともかくとして、だ）。

ジニーに向かって肩を竦めて「きつと大丈夫さ」と答えてみせた。するとジニーは苦笑して（前見たときより大人びたな、と、ふと思つた）、「じゃあ、二人の部屋はこつちね」と言い、ハリーとロン、ハーマイオニーと別れ、先導してくれた。

道くらい覚えているよ、なんて野暮なことは言うまい。彼女の好意に甘えておこう。

「……ねえ、アキ？」

「うん？」

「アキは……あの二人がやろうとしてることについて、どう思う？」

ジニーは、ぼくに背を向けたまま、そう問いかけた。ぼくは黙り込む。

ジニーは続けた。

「お店を開くなんてお金、うちにあると思う？　ロンはビルやチャーリーからのお下がりの服しか持ってないわ。教科書だって、新品で買ってもらったことなんてない。……ロックハートの教科書を除いて、だけど……」

最後に頬を赤らめて付け加えられた言葉に、茶々を入れる気は起きなかった。

「あの二人も……本当は分かっているはずよ。だって、あたしが分かるんだもの。なのに、なんで、どうして……」

ぼくは考えを巡らせた。一体いくらほど、一軒のお店を建てるのに必要なのだろうか。そしてその事業を継続していくためには、一体ど

れほどの大金が必要なのだろうか。

双子の能力の高さは、十分に理解している。幣原秋の時代の悪戯仕掛人に勝るとも劣らない柔軟で見事な発想力。人を惹き付けてやまないカリスマ性。校則の網の目をかいくぐり、計画的に暴れることの出来る狡猾さ。

彼らが悪戯専門店を開けば、きつと成功するだろう。それだけの将来性を、あの二人は秘めている、そう思う。

だが、事業を興すには何より、資本が、先立つものが必要なのだ。それはとても現実的で、シビアで……だからこそ、目を逸らす訳にはいかない。

夢ばかり追いかけていられる歳では、ぼくらは——そして彼らは、なくなってしまうたのかもしれない。

「……ごめんね、こんな話して」

ジニーはそう言うのと、ぼくを振り返り、ふわりと笑った。とても綺麗な笑顔だと思った。

「不幸自慢なんて、ホント、するもんじゃないよね。貧乏自慢なんて、バツカみたい」

「……ジニー」

「同情は、いらないからね、アキ」

「……」

「これは、あたしたち家族の問題だから。あたしたちで解決しなきゃいけないことだから」

ぼくは足を止めた。ジニーも立ち止まる。

んー、と頬を掻きながら、ぼくは口を開いた。

「五百ガリオン」

「……え？」

ジニーがきよよんとした表情でぼくを見る。ぼくは肩を竦めた。

「そんなくらいあれば、ダイアゴン横丁……はちよつと厳しいけど、ホグズミードくらいなら店が開ける。土地代建築代もろもろ合わせると、二千ガリオンを超えるか超えないかくらいかな？ 詳しくは分からないけど……」

ウィーズリーおじさんとパーシーは魔法省に勤めてらっしゃるよね。ウィーズリー家は魔法界でも古くからある由緒正しい家柄だし。何よりビルは銀行員だ。……ジニー、ぼくが何を言いたいか、分かる？」

ジニーは困った表情で首を振った。ぼくは微笑んで続ける。

「それだけあれば、信用は十分だ。そしたらね、双子は銀行から融資を受けることが出来るんだよ」

「……融資？」

「そう。店を新しく開こうと思うとき、銀行からちよいと貸してもらうことが出来るってこと。五百ガリオンを担保としてね。……あの二人の部屋から、注文書が出てきたって言ってたよね？　ということ。二人は、もう既にホグワーツでも悪戯グッズを売る気満々だってことだろう。それをモリーおばさんに見つかって怒られても、自分たちは悪戯専門店を開きたいって堂々と言ったんだろ？　それだけの心づもりなら、あの二人はここまで考えてると思うよ。そして五百ガリオン貯めることは、難しくはあるけれど、決して不可能じゃない。

だからジニー、君はあまり心配しなくても大丈夫だよ。君の敬愛する兄貴二人は、あれでいて、結構考えてるはずだから」

ジニーの頬が、僅かに赤く染まった。

「け、敬愛なんてしてないってば！　あんなどうしようもない二人なんて、兄でもなければお断りよ！」

くすりと笑って「じゃあそういうことにおこうか」と言うと、ぼくはいつの間にか辿り着いていた、双子の部屋へと足を踏み入れた。

全く、あそこまで妹に思ってもらえるなんて、本当、兄貴冥利に尽きるってもんだよ。

第5話 覚悟

重たい荷物を転がして向かったのは、魔法使いの街、ホグズミードだった。

いつも雪が積もっている印象だったホグズミードは、夏も涼しげで居心地が良い。人通りも少なく、ぼくが知っている街とは少し違って見えた。閑散期なのかもしれない。

『三本の箒』に向かうと、店主のマダム・ロスマルタがにっこり笑顔で迎えてくれた。彼女はいつも感じのよい笑みを浮かべている。

ホグワーツのホグズミード休暇で、いつもここにはジエームズやシリウスたちと来てたっけ。ほんのちよつと前のことなのに、随分と懐かしく思えた。

表通りの人は少なかったが、『三本の箒』の中はいつも通り喧騒に溢れていた。

よかった、ここまで静まり返っていたら、どうしようかと思っていた。

一番奥まった席に向かうと、ぼくを呼び出した張本人、ライ先輩はもう既に来て座っていた。黙って分厚い本のページをめくっている。ちらりと覗いた感じでは、どうやら医学関係の本のようだった。

ぼくはマダム・ロスマルタにアイスバタービールを一杯注文すると、黙ってライ先輩の正面に腰掛けた。

注文の品が出てくるまでの間、両手の指を合わせ、ぼんやりと視線を店に漂わせる。

やがて届いたバタービールに口をつけた瞬間、ライ先輩はやつとぼくを見た。構わず一口飲む。相変わらず、甘い。

「……秋」

先に口を開いたのは、ライ先輩の方だった。本を閉じると、ぼくに向き直る。

ぼくはグラスをテーブルに置くと、その視線を正面から受け止めた。

「謝らないでください」

ライ先輩の言葉を押しとどめる。虚をつかれた表情で、ライ先輩は黙った。

「ライ先輩のせいじゃない……先輩が気に病むことなんて何もありません。むしろ、ありがたいとまで思ってるんですよ」

両手の指を合わせ、ぼくは静かに微笑んだ。

「……いや、ぼくの方こそ謝らないと。この前、両親からぼくを引き離そうとしてくれましたよね。その時に吹き飛ばしてしまって、ごめんなさい。怪我とかありませんでしたか？」

「……っ、ああ……大丈夫だ」

ライ先輩はぼくの顔から目を外すと、「……お前に、言わなきゃならないことがある」とぼそりと呟いた。

「だから、謝らなくていいですって……」

「謝罪じゃない。……いや、謝罪も含むのか」

自嘲気味に、ライ先輩は唇を歪めた。小さく息を吸うと、手元の医学書の表紙をさらりと撫でる。

『neurology of magical medicine』

——魔法医学における神経内科学、か。

「……一体何から喋ればいいのか……俺は、喋るのが下手だから、よく分からない。分かりにくいところがあつたら……聞き返してくれて構わない」

長い前髪で、ライ先輩の目は隠れて見えない。

「……お前は知っているか知らないが、俺は前回の魔法魔術大会の優勝者だ」

それは、知っている。

ライ先輩は続けた。

「当時も、上級生を押しつけて四年が優勝した、つてのは珍しくてな……色々、注目されたもんだ。お前と違って、俺は頭の足りない馬鹿なガキだったから……優勝した、つてだけで、自分は強い、最強だ、天才だ、なんて、有頂天になったもんだ」

……有頂天になったライ先輩って、どんななんだろうか。全然想像がつかない。

「……というか、有頂天になったと言っても、実際にライ先輩は凄い人だから、正しい評価だと思うのだけれど……それでも、本人がその当時の自分を『頭の足りない馬鹿なガキ』だと恥じているのなら、ぼくがそれを否定するのはあまりにも無遠慮だ。」

「……ぼくだって、頭の足りない馬鹿なガキでしたよ」

小さな声を、しかしライ先輩は聞き逃さなかったようだ。前髪の間から、じつとぼくを伺う。ぼくは目を伏せると、無言でライ先輩に話の続きを促した。

「……夏休みが始まって、ホグワーツから家に帰った。その日、『奴』が——『ヴォルデモート』が——家にやって来た。」

ヴォルデモートは、一瞬で俺の家族を滅茶苦茶にした。俺以外の家族全員を、一瞬で意識のない状態にしてしまった。そして、ヴォルデモートは俺に選択肢を与えた。『このまま家族全員が死ぬ』か、『ヴォルデモートに一生逆らわない、という条件付きで、家族全員が生きるか』だった。……俺は、後者を取るしか道がなかった」

ライ先輩はそこで言葉を切ると、濃い色のコーヒーを口に含んだ。そして長々と息を吐くと、続ける。

「……父、母、そして妹。三人の意識は、まだ戻らない。医者もどうしているのか分からずに匙を投げた。……だから俺は、医者になるろうと決意した。家族を治すために」

「……そういうこと……だったのか。」

「……俺の家は、純血家系ではないが、かと言ってマグルの間に生まれた子、という訳ではない。俺はグリフィンドールだったが、父と母はレイブンクローの卒業生だ。グリフィンドールとスリザリンの対立にもそう縁はない。そんな我が家がヴォルデモートに襲われた理由を考えると、俺の存在以外に思い当たらなかった。もしかして、この魔法魔術大会で優勝した人間に対し、ヴォルデモートは害を与えていたのではないだろうか。枷を嵌めているのではないだろうか。そう思い立ったら、それ以外には考えられなくなった。そして——申し訳ないが、今回のお前の件で、俺の妄想は真実だったのだと分かった」

ぼくは目を瞑った。今までのライ先輩との会話で、一体どうい

とだろうと首を傾げていた部分の意味が、ようやく分かった。

「……幸いにも、俺が在学中にも、もう一回魔法魔術大会が開かれることになった。だから、今年の犠牲者は出ないだろうと慢心していた……お前の真の才能を見くびっていたんだ。」

お前を、心のどこかで侮っていた。自分が、誰かに負けるなんて考えたこともなかった、俺の驕りが招いた結果だ。真に、後輩に負けるなんて思ってもいなかった」

すまない、と、ライ先輩はぼくの目を見た。その目を見返せずに、ぼくは目を逸らす。

どうして英国人は、謝る時に相手の目をじっと見るんだ。本当に止めて欲しい。

「……もう、学校側とは話をつけた。魔法魔術大会は、この前の大会で最後だ。もう二度と開催されることはない。……お前が、最後の優勝者だ」

ふと、トランクの中の盾を思い出した。魔法魔術大会で優勝した証。両親に見せようと思って、日本に持ってきてきたのだった。結局、それは叶わなかった訳だけど。

もう、ぼくが帰る家はなくなってしまった。手元に置いておくのも億劫だし、学校で預かってもらおうか。

「……話は、それだけですか」

そう呟くと、ライ先輩は少し身じろぎした。

「……違う。あともう一人、この場に来るはずなんだが……」

思わず顔を上げた。ライ先輩は時間を確認すると、普段通り眠たげな無表情に、僅かばかり渋い色が混ざる。

「あと一人……？」

「ああ……つと……噂をすれば……」

ライ先輩が入り口の方へ目を向けるのに、ぼくも身体を捻った。そして、目を瞠る。

我がレイブクロ寮の監督生——否、この前卒業してしまったから『元』監督生か——エリス・レインウォーター先輩だ。

エリス先輩はぼくらに気付くと、軽く片手を上げた。

「遅いぞ、エリス」

「すまないね、研修が長引いてしまったんだ」

「闖越いの？」

「そう。最近色々とゴタついててキナ臭いから……やあ、幣原。わざわざ来てもらってすまないね。父君と母君の件、御愁傷様だった。心からお悔やみを申し上げるよ」

「い、いえ……」

ライ先輩は分かる。がしかし、どうしてエリス先輩までもがここに？

訝しむぼくを尻目に、エリス先輩は紅茶を一杯頼むと、ライ先輩の隣に座った。先輩二人と向かい合う形で、なんだか面接みたいだ。

「……さて。単刀直入に聞きたい」

ライ先輩は、静かにぼくを見た。

「お前は、両親を殺したヴォルデモートや、彼に従う手下達と、戦う気はあるか？」

息を呑んだ。

「こら、ライ。直接的過ぎる、もう少し配慮を……」

「いや。そんなものは必要ない。俺が知りたいのは……覚悟だ」

覚悟。——それは。

以前、ライ先輩とした会話を思い出す。

『……俺には、エリスみたいな覚悟がなかったから、かな』

——覚悟とは。

「幣原。あまり真剣に考えこまなくても大丈夫だよ。君はまだ幼いし、両親のことからまだ日が浅いんだ、考えがまとまらなくても全然不思議じゃ——」

「いえ」

エリス先輩の言葉を遮って、ぼくははっきりと言った。

自分の言葉で。

「戦いたい……絶対にヴォルデモートを見つけ出して、両親の墓の前で土下座させてやりたいんです」

指先が戦慄く。

満たされた、と思った。両親が死んで、空っぽだった自分の中に、ライ先輩の言葉はしつくりと入ってきた。

戦う。ヴォルデモートと。手下たちと。

絶対に許してはならない。ぼくは、ぼくの両親を殺した奴を、絶対に許すことは出来ない。

——自らの中の復讐心を、生まれて初めて感じた。こんなにも誰かを憎んだことなど、生まれて初めてだった。

「……死ぬかもしれないんだぞ。これはこの前の魔法魔術大会のようなお遊びの決闘じゃない。本気の殺し合いだ。幣原……君にその覚悟は本当にあるのか？ 誰かを殺す覚悟も、殺される覚悟も、本当に備わっているのか？ 戦場に身を投じる覚悟が、君にはあるか？」

覚悟。覚悟。覚悟。

言葉の重みを噛み締める。

「はい」

ぼくを見て、エリス先輩は、

「嫌な目だな」

と言って笑った。

「じゃあ早速だ。本題に入りたい。こればかりはライが提案できない事案だから、私が呼ばれた訳だけだね」

そう言ってエリス先輩は、ぼくに身を乗り出した。「これはまだ構想段階で、始動はしていないんだけど」と前置きすると、口を開く。

「アルバス・ダンブルドアが、ヴォルデモートの陣営に対抗するために組織を創設した。この組織は闇祓いや魔法省とはなんら関係のない、日々強大になっていくヴォルデモート側に対抗したい人間だけが集まるレジスタンス集団だ」

「ダンブルドアが……」

小さく呟く。エリス先輩は頷いて見せると、続けた。

「ああ。おそらくメインとなる活動は、ヴォルデモート陣営の動向調査や、場合によっては戦闘も大いに考えられる。当然、熟練した魔法の使い手でないという意味がない。幣原……君の才は、今や誰もが認めるところだ。両親の件の直後に畳み掛けるように悪いが、どうか頼む、

私たちに力を貸して欲しい」

エリス先輩から目を逸らした。なるほど、確かにこれは、ライ先輩は出来ない頼みごとだ。

『家族』という人質を取られているライ先輩は、一体どんな気分でぼくを見ているのだろうか。足枷のないぼくを。

「……ぼくでよければ、喜んで」

エリス先輩は、ぼくの言葉に悲しげに微笑んだ。

ぼくに右手を差し出す。

「ありがとう。そして……ようこそ、日の当たらない世界へ」

エリス先輩の手を、ぼくは取った。



誰もが待ちに待った今日が、ようやくやって来た。クイディッチワールドカップに向けての出発の日だ。

ぱつと目が覚めたときは、外はまだ暗かった。

部屋では、まだ双子は爆睡している。寝るときの体勢が全く同じで、なんとも微笑ましい気分させられる。本当、寝ているときは静かなのになあ。

「フレッド、ジョージ。起きなよ、朝だよ」

「んー……」

ゆさゆさと双子の布団を揺さぶると、二人は同じ表情で唸り、同じタイミングで寝返りを打った。流石だ、と感心しそうになるが、そんな場合じゃない。

階下からは、微かに物音がする。モリーおばさんが起き出して、早い朝の準備をしているのだろう。

もう少ししたら、モリーおばさんがぼくらを起こしにくる。双子の部屋は、昨日悪戯商品のことと議論を戦わせてそのまま寝落ちしてしまったから、おばさんに見られてはマズいものが出しっ放しなのだ。

おばさんがぼくらを起こしに部屋に入ったが最後、双子はワールドカップの会場に姿を現すことが出来ないだろう。

「むー……起きろっ!!」

揺さぶるのは諦めて、ぼくは勢いをつけて双子の上にダイブした。「うぐっ」と苦しげな声を漏らした後、やっと双子の目が開く。

「なんだよアキ……まだ夜じゃないか……」

「眠いよ寝かせてくれ……頼むよパトラッシュ……」

「モリーおばさんが起こしにくるまで寝かせておきたいのは山々なんだけどね。君ら、この部屋の惨状を見てもおんなじ台詞が言える?」

双子はのっそりと起き上がると、目をぱちぱちさせて部屋をぐるりと見渡した。そして二人同時に「ヤバい!!」と叫ぶと、二人揃ってベッドからバツと立ち上がる。

「フレッド、ジョージ? 起きてるの?」

「起きてるよ、ママ!」

こんな理由で、モリーおばさんが起こしに来る前にぼくらが目覚ましていたということは、ぼくら三人の小さな秘密だ。



ぼくらがウィーズリー家を出たときは、まだ薄暗く、西にはまだ月が出ていた。東の方角を見れば、日の出が近いのだろう、ぼんやりとした光が見える。肌寒くて、ぼくは自らを抱くように両手を回すと、身震いした。

皆はまだまだ眠そうだ。それに、双子なんかは、さつきモリーおばさんに『ペロペロ飴』を取り上げられたのが、よほど腹に据えかねているらしい。むっつりと歩いている。

ぼくらは、ワールドカップへ行くために『移動キー』のあるストーツヘッド・ヒルへと向かっていた。

辺りは草むらと足元の小道、それに点在する家々以外は何もなく、皆眠そうでお喋りに興じてくれそうな人がいないため、ぼくは黙って、時折空を見上げながら歩いた。

今の季節は夏だが、もう夜明けのこの時間、冬の星座が見えかけている。アルデバランが出てくると夜明け、一体どちらが早いだろう

か。ぼくは心の中で、一人その勝負を楽しんだ。

勝負の結果は、夜明けの勝利だった。空中が群青色に変わった頃には、ぼくにはもう空の移り変わりを楽しむ余裕はなくなってきた。丘は案外急斜面で、そして舗装されていない、自然のままだったからだ。一步一步を踏みしめることが目標となった。

やっと風景が開き、平らな地面を踏んだときには、まだ早朝だというのに、ぼくらは疲れてクタクタだった。

「やれやれ、ちょうどいい時間だ。あと10分ある」

ウィーズリーおじさんが時計を見つつ呟いた。

「さあ、後は『移動キー』があればいい。そんなに大きいものじゃないはずだ……さあ、探して……」

移動キーは、マグルが間違っただけで持っていないように、ガラクタのような見かけをしているらしい。正直そんなことを言われても困る。ぼくらに『移動キー』とガラクタの区別がつくものか？

ぼくらが探し始めて数分経ったとき、初めて聞く声が静寂を破った。

「ここだ、アーサー！　息子や、こっちだ。見つけたぞ！」

「エイモス！」

ウィーズリーおじさんはニッコリ笑って、声の主のいる丘の頂きの向こうへと歩いていく。ぼくらも自然と、おじさんの後に従った。

「みんな、エイモス・デイゴリーさんだよ。『魔法生物規制管理部』にお勤めだ、息子さんのセドリックは知ってるね？」

おじさんは、声の主——エイモス・デイゴリーさんと握手をしながら、ぼくらを振り返った。

デイゴリーさんの隣に佇む青年、セドリックが、微笑んで「やあ」と皆を見回す。ぼくらも同じく挨拶を返したが、双子はむっつりとした顔のまま頭を軽く揺らしたけだった。どうやら去年セドリックのチームであるハツフルパフが、クイディッチでグリフィンドールを負かしたことを、まだ根に持っているようだ。

セドリックはぼくに目を止めたようだ。爽やかで人好きのする笑顔で、ぼくに歩み寄ると「えーと、初めまして、だよね？」と言い、手

を差し出した。

「そうだね。もつとも、ぼくは君を一方的に知ってはいたけれど……」
なにせ有名人なのだ。

グリフィンドールの天敵はスリザリンであるように、レイブンクローのライバルはハッフルパフだ。自然、ハッフルパフに燃やす対抗意識は大きくなり、対ハッフルパフ戦は注目されやすい。

そんな中、ハッフルパフのシーカーである彼を知らない人なんて、(かつての幣原秋ならともかくとして)レイブンクローにはいないんじゃないだろうか。

「なら、それはこちらと同じだね。僕も、君を一方的に知っていたから」

え、と、ぼくは目を瞬かせてセドリツクを見上げた。セドリツクは意味有りげに笑うと「君は案外有名なんだよ？」と告げる。

なんだよそれ、と言おうと思ったが、デイゴリーさんの「お前はハリー・ポッターに勝ったんだ！」という大きな言葉に、思わず口を噤んだ。セドリツクは困ったような顔で、自らの父に言う。

「父さん、ハリーは箒から落ちたんだよ、そう言ったでしょう……事故だったって」

「ああ。でも、お前は落ちなかった、そうだろう？　うちのセドは、いつも謙虚なんだ……」

「いつもあの調子だ……気にしないで」
セドリツクはぼくにそっと耳打ちする。はあ、とぼくは生返事を返した。

「そろそろ時間だ。『移動キー』に触っていればいい、それだけだよ」
ウィーズリーおじさんの声に、セドリツクはぼくから離れて行った。あ、と少し惜しい気持ちを抱えつつ、ぼくは彼を見送る。

ぼくらは、デイゴリーさんの掲げた古いブーツの周りに集まっていた。ウィーズリーおじさんがカウントする。

「3……2……1……」

ゼロ、がカウントされるべき瞬間、ぐいっと身体が前に引つ張られる感覚がした。浮遊感と共に、風景がぐるぐると渦を巻く。煙突飛行

と、感覚的には同じだ。全く、こんなのに慣れる気がしない。

足がやつと地面についた、と思ったときには、ぼくは地面に倒れ込んでいた。「きやつ」という小さな声と共にぼくの上に折り重なってきたのは、多分ジニーだろう。言葉にならない声を上げ、ぼくは悶える。

「五時七ふーん。ストーツヘッド・ヒルからとうちやく」

ぼくらが到着したことを知らせるアナウンスの声が聞こえた。

第6話 新学期

九月一日。ホグワーツの始業式。

ぼくは淡々と用意を済ませると、ひとりで9と4分の3番線へと向かった。

今年でぼくも5年生。キングズ・クロス駅も慣れたものだが、ひとりで歩くのは初めてだ。

暇を潰す当ても、待つ人もいないので、ぼくはまだ人気の少ないプラットホームでぼおっとし、紅の汽車が到着した直後に、コンパートメントに乗り込んだ。

ぼんやりと窓の外を見て、時間を潰す。

段々と駅の構内に、人が溢れてきた。家族と別れを惜しむホグワーツ生を横目で見ても、ぼくはぐっと伸びをする。

「秋っー」

声の方向を見ると、リリーだった。満面の笑顔で手を振りながら、こちらに近付いてくる。ぼくも少し微笑むと、手を振り返した。

「久しぶり、秋！」

ぼくのいるコンパートメントの窓越しで、リリーは勢いよく立ち止まると、ぼくを見上げ——ふ、と明るい表情を消した。

「……秋？　なんだかちよつと、……雰囲気、変わった？」

「ん？　……そうかな？」

笑顔でリリーを見返すと、リリーは少し気まづげな顔をして「……気のせいだったみたい。ごめんね」と呟いた。

「リリー！　もう、勝手に走っていないでよ……っ」

と、リリーを追いかけて、女の子が走ってきた。リリーより少し年上だろうか、金髪の女の子だ。確かこの子は、リリーの姉だったか。

「あら、チュニーごめんね。大好きな友達を見つけて、つい」

「……ふうん。アンタと同じ変人学校に通うお友達、ね」

リリーの姉は、確かマグルだっけ。少し意地悪い物言いだったが、リリーは全く気にした様子がない。

それどころか、「ハアイ、こちら、私の姉のペチュニア。私はチュ

ニーって呼んでるわ。チュニー、彼は幣原秋。日本人なの。とっても可愛い子でしょう！ 私の自慢の友人なのよ」と紹介を始めた。

相変わらずのリリーに、ぼくは少し笑みを漏らすと、彼女、ペチュニアに右手を差し出す。

「幣原秋です。よろしくね」

ペチュニアはぼくの右手を驚いたように凝視すると、やがて「仕方ないわね」というように嘆息して、ぼくの手を握った。

「どうも。リリーが世話になってるわ。ペチュニア・エバンズよ。この通り困った子だけれど、よろしく頼むわね」

ぼくの手を離すと、ペチュニアは時計を見て、慌てたように「もうこんな時間！ 行かないと、ここから出られなくなってしまおうわ」と言い、リリーに「じゃあね」と手を振り、ぼくをちらりと横目で見てから駆け出して行った。

遠ざかるペチュニアの背中を目で追っていると、リリーがトランクを持ち上げて、コンパートメントの中へと入れようとしているのが見つかった。手を貸してやり、そして一言付け加える。

「窓から入って来ないでよね、君はスカートを履いてるんだ、少しは気を遣って欲しいなあ」

リリーはその言葉に、パツと頬を赤く染めた。

「もう！ そんなことしないわっ、ほんつとう、男の子ってどうしてこうデリカシーってもんがないのかしら」

「確かにデリカシーがない発言かもしれないが、リリー、君だってそうデリカシーがあるようには思えないぞ」

リリーの背後に気配もなく近付き、そういう言葉を掛けたのはセブルスだった。リリーはキツとセブルスを振り返ると「何よっ！ セブルスまで私をいじめるのねっ！」と叫ぶ。

「別にいじめてるつもりはないのだけどね」

「そうそう、可愛がつてるだけだよ、セブルスは」

「少し黙らないか、秋」

「冗談だよ」

にこやかに笑った。

出発を知らせる汽笛が鳴る。汽車の外にいたセブルスとリリーは、慌ててドアのある方へと走って行った。その二人から目を逸らすと、息について座席にもたれかかる。

周囲の喧騒を耳にしながら、ぼくはそっと目を瞑った。



キャンプ場にてテントを立てた後、「姿あらかわし」組と合流し、昼食を取った。

初めての野外キャンプにウィーズリーおじさんは大興奮して、無理にマグルの手法を真似ようとしたり（そのたびにハーマイオニーやハリーやぼくが後始末をしたり）なんだったりと色々大変だったが、まあ、それも旅行の醍醐味かと思えば、悪くはない。

そういえば、水を汲みに行く途中、ちらりとアクアらしい人物を見かけた。いや、アクア「らしい」じゃない、あの後ろ姿は十中八九アクアだった。ぼくがアクアを見間違えるはずがない、あれは絶対にアクアだった。背丈も髪の長さもスタイルも雰囲気も、何から何までアクアだった、間違いない。

すぐさま人混みに紛れてしまったので、声をかけられなかったが……この広いワールドカップの会場で、会うことが出来るだろうか。まあ会えなくても、ホグワーツでの話のネタくらいにはなるに違いない。あくまでポジティブに行こう、ポジティブに。

昼食の後、トイレから戻つてくると、場には二人の人物が増えていた。

誰だろう、と訝しがるぼくに、いち早くウィーズリーおじさんが説明してくれた。

「アキ、ルード・バグマンとバーティ・クラウチだ。ルードは我々にこのワールドカップのチケットを手配してくれた、いわば恩人だな。バーティは、うちのパーシーの上司にあたる人だ、アキもパーシーから名前は聞いたことがあるだろう」

ああ、あの人か、とぼくは思わず苦笑いを浮かべた。

ウィーズリー家にお世話になっている間、パーシーとの会話の中で「クラウチさん」という言葉を聞かなかったことがない。双子は「あの二人はそのうち婚約発表をしだすぜ」と言い始める始末。

「どうも、初めまして」

そう言つて右手を差し出すと、バグマンさんはにっこり笑顔でぼくの手を取つて力強く振った。その力の強さに顔を引きつらせながらも、続いてクラウチさんに手を差し出す。

しかしクラウチさんはぼくの差し出した手に一瞥もくれず、ぼくをじつと睨むように見つめていた。その視線の強さに、ぼくはたじろぐ。

「あ、あの……」

「……ああ、すまない」

そう言うと、クラウチさんはぼくの手を一瞬だけ取り、すぐさま放した。握手した、というより、何だか表面を撫でられた、くらいの感覚だった。

「お茶をぐちそうさま、ウエーザビー君」

クラウチさんはそう言うと、ぼくから目を逸らして立ち上がった。バグマンさんも立ち上がると、ぼくらに手を振り、すぐさま「姿くらし」で消えてしまった。

「……………」

クラウチさんと握手した右手を見つめ、クラウチさんの視線を思い返す。

あの目に、ぼくは覚えがある。

あのような目でぼくを見た者は、皆、脳裏に幣原秋を思い浮かべている。

「おい、アキ！ お前もバグマンさんと何か賭ければよかったの！ おつもしろい人だぜ、ああ！ ああいう頭が柔らかい大人になりたいたいもんだねえ」

「ダメだダメだよジョージ！ だってアキ殿下はレイブンクローのお利口さんなんだもの、賭けなんて不純なものは殿下にはさせられません！」

「何だよ一体、何の話……？」

ぼくが首を傾げると、ハリーが教えてくれた。

「バグマンさんと賭けをしたんだ。えっと、アイルランドが勝つけど、
クラムがスニッチを取る、だって……」

「えっ、クラムってブルガリアの選手じゃなかったっけ？　なんでク
ラムがスニッチを取るのに、アイルランドが勝つのさ、それっておか
しくない？」

「やっぱりそう思うよね？　僕もそう思う」

「頭が固いなあ、アキもハリーも。よーしよしよし、俺たちが教えてあ
げましょう……」

「知ってて損はさせねえぜ？　よーしこっち来な、誰にも知られるん
じゃないぞ……」

そんなこんなで、ぼくとハリーは双子からみっちりギャンブルの
手解きを受けることになった。一体彼らはどこでこんな知識を身に
つけたのだろうか……。

第7話 闇の印

五年生は学期末に、今までのような期末試験とは少々毛色の違う試験を受けることとなる。普通魔法レベル試験といい、Ordinary Wizarding Levels の頭文字を取って「O.W.Ls (ふくろう)」と生徒から呼ばれている。

この試験で一定以上の成績を修めた生徒だけが、六年生からのN.E.W.T レベルの授業を受けることを許される。将来に関わる、とても重要な試験だ。

そのため、どの授業でも先生は、今年の勉強がどれだけ大切なのかを口酸っぱく言う。そのため、ぼくらは嫌でも自分の将来についてを考えさせられた。

「もう、子どもじゃあいられないんだな……」

そう呟いたリイフを、横目で眺める。と、リイフはぼくを見て、尋ねた。

「そーいや、秋って将来の夢、ある？」

「夢……」

自分は、将来何になるのだろうか。一体どんなものになるのだろうか。

「まだ、あんまり……考えられないんだ。実感が湧かないというか、卒業してからのビジョンがよく見えないというか、さ」

リイフはぼくの言葉に、深々と頷いた。

「分かるなあ、その気持ち。まだまだモラトリアムに浸っていたいよ。勿論、そんな訳にはいかないんだろうけど……後3年で卒業とか、本当に嫌になっちゃうよ」

「リイフは、将来どうするの？」

ぼくの言葉に、リイフは少しだけ渋い顔をした。

「残念だけど、僕の将来は生まれた時から決まってる……フィスナー家の長男は、魔法省の王室警護の任を請け負うことが決定づけられているんだ。あそこは驚くほど激務なんだ……父が一般的な時間に帰ってきたことなんて見たことがない」

「そりゃあ大変だなあ」

「全く、同感さ。いつまでも学生でいたいもんだ……」

リイフから目を逸らした。

「……でも、いつまでも子どもそのままじゃいられないんだ」

何も知らない、無知で純粹でいられる時期は、もう過ぎようとして
いるんだ。

自分に言い聞かせるように、呟いた。



ブルガリア対アイルランドのクイディッチワールドカップは、上々の内に終わった。フレッドとジョージは見事あの賭けに勝ったし（本当に見事だと言わざるを得ない。あんな内容の賭けをしようと思うその度胸にも感服だ）、最後にスニッチを取ったクラムはもう、最高に格好良かった。クイディッチの素晴らしさを再認識出来た試合だった。

誰もが、クイディッチワールドカップに浮かれきっていた。誰もが熱に浮かされたように興奮し、はしやぎ回っていた。アイルランド勢は勝利のお祝いに騒ぎ、負けたはずのブルガリア勢だって、クラムの素晴らしい活躍を誰かと共有したくて仕方がないようだった。

だから、だろうか。こんな事態が起こったのは。

いや——きつとこれは偶然ではないのだろう。

ぐっすり夢の中のはずだったぼくが瞬時に覚醒したのは、誰かの叫び声——苦悶にもがく叫び声が聞こえたからだった。

はっと目を開け飛び起き、外に耳を澄ませると、眠りに落ちる前に聞こえていた、あの楽しいげな喧噪は失われ、代わりに恐怖と混乱が蠢いていた。

まだ、ウィーズリーおじさんもハリー達も寝静まっているようだ。

少し考えたが、皆を叩き起こすよりも先に、今何が起きているのかを把握したくて、ぼくは誰にも何も告げないまま、急いで着替えてテントを飛び出した。

テントの外に一步出て、思わず足が竦んだ。炎だ。テントが燃えている。

そして、キャンプ場の向こうから、集団が——黒いフードを被り、仮面をつけた集団が——杖から魔法の光を吹き出しつつ、やって来ているのが見えた。彼らに追い立てられるように、人々は半狂乱で森の奥へと逃げていく。

その、あまりの非現実的な風景にぼうっとしていたのは、ほんの数秒だっただろう。しかしぼくにとってみれば、まるで時が止まったかのような、そんな気分で立ち竦んでいた。

はっと我に返ったのは、目の前で小さな金髪の女の子が躓いて転んだのを見たからだ。思わず駆け寄り、女の子に手を貸す。

「ガブリエル、急いで！」

彼女の姉と思われる女の子（こんな場面ではあるが、すごい美人だなあと少し見蕩れた）が、女の子が転んだのに気付いてこちらに駆け寄ってきた。発音からしてフランス語だろうか。ぼくに一瞥をくれると、立ち上がったばかりの女の子の手をぐいと引っ張って森の方へと走っていった。

「アキー！ 手伝ってくれないか！」

名前を呼ばれて振り返ると、セドリツクが逃げる人々を誘導しているところだった。ぼくが走って行くと、「杖を出していた方がいい」と険しい表情で言った。

「仮面の集団を見た？」

「ああ。さつき、ちらりと……」

キャンプ場の方を見遣る。集団の姿は見えないが、時折見える魔法の火花から、奴らが大体どこにいるのかは見て取れた。

「奴らはマグルを狙ってる。マグルで遊んでいるんだ。……許せない」

「何をする気？」

「奴らを止めたい」

無理だ、と出掛かった声をすんでのところで止めた。

代わりに「……どうやって？」と言葉を返す。

「いや、今のところ、何も考えてない」

「……って、ちよつと」

「でも」

そこでセドリックは言葉を切って、ぼくを見た。

「君がいれば、大丈夫だ。協力してくれないだろうか」

「……はあ。するに決まってるでしょ。ぼくを誰だと思ってるの」

差し出された手を強く叩くと、ぼくらはあの集団目掛けて走り出した。

ぼくらの進む方向とは逆の方向に向かって、人々は逃げていく。それと同時に、ぼくらが知覚する魔法の音や光は徐々に大きく、強くなっていくのが分かる。

集団にある程度接近したところで、ぼくらは止まった。

先ほど見たときよりも、集団は大きくなっていった。フードを被った一団はその更に中心にいて、容易には手出しが出来なさそうだ。そのすぐ近くには魔法省の役人らしい人々がいて、一団に何とかして近付こうと奮闘しているようだった。

その中にアリス・フィスナーの父親、ライフ・フィスナーがいることにぼくは気付いた。そして……その集団の頭上には、人間が4人浮いていた。

「酷いものだ……」

思わず絶句したぼくに代わり、セドリックはそう言い捨てた。

「一体どうしよう。ただ下ろしてあげるだけならまだしも、もしも奴らの真ん中に落としてもしたら……」

考え込んでいるセドリックをよそに、ぼくは杖を握ると真一文字に横薙いだ。まるで操り人形のように空中にぶら下げられていた4人は、その糸が切れたように宙を飛び、そして狙い定めたライフ・フィスナーとその周辺に着地した。予想もしていなかっただろうに、見事にキャッチするとは流石ライフだ。驚いてあたりをキョロキョロ見渡しているのは、本当にすまないと思う。後で謝ろうっと。

「……そのあたりがやっぱり、僕には……」

「ぐちゃぐちゃ言ってるで、逃げるよ、セドリック！」

セドリツクの腕を掴み、ぼくは後ろを振り返らずに駆け出した。

「な、何だよアキ！」

「あの集団に気付かれた！ 追ってくるよ！」

そう言うが早いのか、怒号と呪文の閃光が迫ってきた。セドリツクは一瞬だけもたついたが、それでも流石ハツフルパフで長年シーカーを務めているだけのことはある、あつという間に体勢を立て直した。

こうなると、今度はぼくよりもセドリツクの方が足が速い。逆にセドリツクに引きずられるように、障害物の多い森の中を縦横無尽に駆け抜けていく。

ぼくらがようやく足を止めたのは、辺りに人がなくなった辺りのことだった。二人とも息を切らし、倒れるようにその場に座り込む。

疲れに震える指で杖を振り、グラスに注がれた水を二つ『出現』させると、一つをセドリツクへと差し出した。セドリツクは礼も言わずに一気に水を煽ると、大きく息をつき、そして「ありがとう」とぼくに告げた。

「……あのマグル達は、助かったのかな」

「きつと魔法省が保護したに違いない。……僕が言い出したことなのに、君に押し付けて、すまなかった」

「そんな、謝ることなんて！」

謝られ、動揺した。

「あんなの、ぼくが勝手にやったことだ……君に言われたから、彼らを助けたわけじゃない。彼らを助けたのは、紛れもなくぼくの意志なんだから」

「それでも……、……いや、すまない」

セドリツクに頷き、ぼくは周囲を見渡した。

えらく静かな所に来てしまった。人の気配すらない、生き物の気配も感じられない、寒々とした森の中。一人つきりじゃないということだけが心の支えだ。

そう言えば、ハリー達は大丈夫だろうか。テントにも火の手が迫っていた。無事に逃げられただろうか。

いや、一番は全てが眠っている間に沈静化していることで、何も気

付かずに朝を迎えられていたら、それだけでいいんだけど……。誰にも告げずにこんなところに来てしまったから、ハリーがぼくを探していないか心配だ。

セドリツクも同じようなことを考えたのだろう、立ち上がり、警戒した眼差しで辺りに目を配っている。

瞬間、今まで音も気配もしなかった背後の木立から、一体どこに隠れていたのだろうか、カラスが十数羽、一斉に羽ばたいた。音にびつくりして、ぼくたち二人は振り返る。

その音がカラスが立てたものだということに安堵したものの、それでも異様な気味の悪さは消えなかった。

こういうのを何と呼ぶのだろうか、虫の知らせ、というものだろうか。その時だった。目の前の真つ暗闇から、緑色の閃光が立ち昇り、暗い空へと舞い上がっていく。

つられて空を見上げて、ぼくらは息を呑んだ。

髑髏だ。一軒家ひとつ分くらいだろうか、とても大きい。緑がかつた銀色の霞が集まって、髑髏の姿になっている。髑髏の口が開いたと思ったら、その口から蛇の頭を持つ舌が這い出してきた。その舌はぐるぐると絡み付くように蠢いた後、夜空に張り付くかのように殊更明るく光り輝いた。

この印を、ぼくは知っている。

これは——闇の印、だ。

ぞくり、と肌が粟立つ。

脳裏に蘇るのは、当然のように、幣原秋の記憶と、そして、幣原秋の、強い強い感情だった。

「アキっ!？」

全身から力が抜け、地面に座り込んだぼくに対して、セドリツクは慌てたようにぼくの名前を呼んだ。「大丈夫か？」としゃがみ込み、ぼくに目線を合わせて尋ねる。

ぼくは頷いたが、我ながら説得力のない肯定だと感じた。セドリツクもそう思ったのだろうか。

「……色々あったからね、疲れてしまったんだろう。大丈夫……あの

印は、ただの……印だ。誰かが……危ない目にあつたとか、そういうことじゃ、ない……と、思う……」

ぼくを元気づけようとしているのにも関わらず、そんな自信なきげな声でセドリツクは呟いた。

ぼくは自分の左胸部分のシャツを掴むと、意識して呼吸を整え、鳴り響く自分の心拍を抑える。

「……………」

気ばかりが急く。

早く杖を取って、闇の印の元へと行かなければいけない。惨状が繰り広げられているに違いないドアを、真っ先に開けなければならぬ、他ならぬ、ぼくが。

そんな感情が、アキ・ポッターには存在しない感情が、胸の中で渦を巻く。

「……ハリーの元に行かなくちゃ」

「……………」

ぼくはふらりと立ち上がると、暗闇に向かって歩き出した。どういう訳だろうか、闇の印が浮かび上がった真下にいるような気がしてならなかった。

ハリーは死なせない。ぼくが、ハリーを……。

「アキッ!!」

セドリツクに腕を引かれて、ぼくは振り返った。

セドリツクは純粹に、ぼくを心配してくれているようだった。

ぼくがにつこりと微笑むと、セドリツクは驚いた表情でぼくの腕を掴む力を弱めた。

「ハリーに会いたいんだ。会わなくちゃいけないんだ。会って、無事を確かめなくちゃ」

そう言うと、セドリツクは少し悲しそうな表情をした。しかしそれも束の間、セドリツクは優しい笑顔で「じゃあ、一緒に探そうか」と、ぼくの腕を強く握る。

ぼくは笑って頷くと、俯いて表情を消した。

第8話 兄として、弟として

小部屋に行くと、予想外にもそこでは、悪戯仕掛人のリーマスを除く三人が雁首揃えて一心不乱に考え込んでいた。

テーブルには大量の書物が積み上げられ、羊皮紙は乱雑に散らばり、一部は床に落ちていた。

「何やってんの？ 四人とも」

ぼくが声を掛けると、初めて四人はぼくの存在に気付いたようだ。

髪を掻き毟りつつ、ジェームズが代表して答えた。

「前に話したろ？ アニメーガスについてだよ。どうも上手くいかなかったてさ……」

「ああ、あれか……」

頷くと同時に、シリウスが「もう無理だ、諦めようぜ」と言って本を放り投げた。

しかし本は図書館の本だったらしく、司書のマダム・ピンスの呪いによって、シリウスはたいそう酷く本に頭をぶつ叩かれ、辺りは一瞬騒然とする。

「僕とシリウスは何とか形にはなったんだが、ピーターがどうにも上手く出来なくなつて」

騒ぎがようやく静まったところで、ジェームズが肩を竦めた。大きな本に顔を埋めていたピーターだったが、申し訳なさそうに「ごめん、僕が飲み込みが悪いばかりに、迷惑を掛けて……」と縮こまる。

「ノンノン！ 何を言ってるんだい、ピーター。友達を手助けするのに理由なんているもんか。ピーターは一生懸命やっている、そうだろう？ 一生懸命やっている奴を手伝うのに、誰が迷惑に感じるものか！」

そう言つてジェームズは笑い飛ばした。

そんなジェームズの様子に、ピーターはわずかに表情を晴らす。

「次の満月まで、あと二週間を切っている。今度こそ成功させてえんだ……ピーター、こればかりは本を読んでもどうにもなんねえと思うぜ。実践あるのみ、練習あるのみだ」

本で思いつきりぶつ叩かれた頭を擦りながら、シリウスはそう言う
とピーターの手から乱暴に本を奪い取る。

「ああつ、シリウス！」

「うるせえ、本の中身なんざ飽きるほど読んだだろ。……魔法式は間
違ってねえんだ。後は死ぬ気でやれば、なんとかなるだろ」

「うわ、すつごい根性論……」

シリウスはピーターを無理矢理立ち上がらせると、杖を持たせた。

ピーターはしばらく傍若無人なシリウスに対してブツブツ文句を
言っていたが、諦めたのか杖を取ると、緊張した面持ちになる。

「次に失敗したら、ピーター、君はしばらく椅子になるからな、つて、
秋が」

「言つてないよ!?!」

「ううつ、椅子はやだよ……絶対シリウスその上に飛び乗るに決まっ
てる……っ」

ピーターは青い顔で呟くと、大きく深呼吸をし、ピツと杖を振り上
げた。

「おおっ!!」

途端、ピーターの姿がみるみるうちに縮んでいくのに、ぼくは感嘆
の声を上げた。

ぼくと同じくらいの背丈だったピーターが、最終的には拳大ほどの
大きさになり——やがて、ネズミが一匹姿を現した。

「凄いじゃないか、ピーター！」

ジェームズやシリウスと違い、ピーターは極々普通の少年だ。気も
決して強いとは言えず、何をするにも怖がりだ。

そんなピーターがここまで出来るようになるとは……感動で涙が
出そうだ。

「本当に、死ぬ気でやったら出来た……っ」

やがて、ポン、という軽い音と共に元の姿に戻ったピーターは、疲
労困憊の体だったものの、笑顔を浮かべていた。

「やったな、ワームテール！」

「よく頑張った！」

シリウスやジェームズも、ぼくと同じ気持ちなのだろう。心からの拍手をピーターに送っている。

「……ねえ、ワームテールって何？ ピーターのあだ名？」

「ああそうさ。リーマスが名付けたんだ。リーマスはこういうセンスのある名付けが得意だからね。ピッターだろう？ ちなみに、僕はプロングス、シリウスはパッドフットさ。秋には何と名付けるかなあ、リーマス。リーマスにも、何か名付けてあげなくちゃね」

なるほど、ねずみの尻尾ワームテールか。

ということは、あだ名から推察するに、シリウスのアニメーガスは犬なのか。ジェームズは何なんだろう？

それを尋ねると、ジェームズは得意げに「それは見てのお楽しみかな！」と胸を張った。

「君もおいでよ。二週間後だ。楽しい深夜徘徊と洒落込もうじやないか」



クイディッチワールドカップが終わって隠れ穴に戻ってきてても、僕の弟、アキ・ポッターは、ずっと沈み込んだままだった。

あの夜——クイディッチワールドカップの夜、空に『闇の印』が打ち上げられた日——クラウチさんが屋敷しもべのウインキーを解雇した後、姿がずっと見当たらないアキを探す僕の前に、セドリック・デイゴリーと、彼に手を引かれるアキが現れた。

どうしていなくなつたんだ、と詳しい事情を聞くよりも先に、アキは僕の元へとふらふらと歩み寄り、泣きそうな表情で僕を抱きしめた。その小さな身体は震えていて、その日僕らは久しぶりに一緒にベッドで眠った。

アキの様子がおかしいことは、ウィーズリー家の誰もが気付いていた。あのパーシーですら、ちよくちよくアキの様子を見に来るほどだったのだ。

僕やロン、ハーマイオニーは勿論のこと、ジニーもフレッド、ジョー

ジも、どうしたものかと思っていた。

あの、元気が取り柄のようなアキが、ずっと目を伏せてぼんやりしているのだ。

話しかけられると返事はする。ちゃんとお礼も言うし、笑顔も作る。でもその笑顔は、なんとというか、とても痛々しくて、作り笑顔だというのが一目で見抜けるくらいにボロボロで、アキも自分がおかしいと自覚しているのか、事あるごとに「ごめんなさい」と口にするのだが、それが本当に悲痛で、見ていられないほどだった。

アキがこうなった理由について、いろんな人から質問を受けた。僕はいつも曖昧な笑顔で、その質問をかわすようにしていた。

理由なんて、僕の方こそ教えて欲しい。僕の弟は、どうすれば普段の明るさを取り戻してくれるのか。思い悩み憂う、愛しい弟の姿を見るのは、僕にとって苦痛だった。

理由があるとするれば、あの夜に見た『闇の印』だろう。それ以外に原因は思い当たらない——ひよつとすると、僕が知らないあの晩、アキの身に何か起きたのかもしれないけれども、おそらく『闇の印』関連だろうと、僕の勘が告げていた。

そして、幣原秋関連だとも、分かっていた。

幣原秋。アキであってアキじゃない人物。

彼のことを僕は、アキの前世のような存在だと思おうようにしている。

かつて、僕の両親と同じ時代に生を受け、そして闇祓いとなり、闇の陣営と戦った人物。彼が一体どんな人物だったのかは、よく分からない。人によって、幣原秋の印象は大きく異なるようだった。

世間では、彼は非常に冷酷で冷酷で、自らの使命——闇祓いとしての使命に忠実だったと言われている。

『黒衣の天才』と二つ名まで付くほど、彼はあの時代、素晴らしい成果を挙げたのだろう。その冷酷さは、先日ピーター・ペティグリュウが姿を現した時、片鱗を見せた。

「助けてあげる」

そう言っつてペティグリュウに杖を向けた彼を、僕は咄嗟に突き飛ば

したのだった。

しかし——しかし、だ。そんな冷酷な面を持つているにも関わらず、シリウスやルーピン先生は揃って、「秋はとても優しい子だ」と言う。

とても優しく、優しすぎて——だからこそ、こうなってしまったのだと。

「アキを助けて、支えてあげて欲しいんだ。信じてあげて欲しい、アキを。幣原秋とアキ・ポッター、二人を引つくるめて認めてくれた君だからこそ」

ルーピン先生は、ホグワーツを去る時、僕にそう告げた。君にしか出来ないことだから、と。

アキは、普段はあんなにもお喋りな癖に、こういうこと——幣原秋関連のこと——は全く語らない。昔は楽しそうに幣原秋のことについて語ってくれたのだが、最近ではこちらが尋ねても口を濁すようになった。そして、口を濁した後、アキは決まって唇を噛み締め、昏い目をするのだ。

アキにそんな表情をさせるくらいなら、と、僕は幣原秋についてアキに尋ねることを止めた。

ちなみに、だが——僕は幣原秋は、アキとそう変わらない子なんじゃないかと思っている。

頭が良くて、ユーモアを解し、笑顔が素敵で、等身大の少年だと想像している。

だって、アキはアキなんだ。

「ねえハリー、お願いだよ、アキに元気を戻してあげて」

そう困った顔でロンやハーマイオニーに言われ、僕は少し考えて、こう口にした。

「分かったよ」



それから僕が取った手段は、なんてことはない。

僕はアキのために、何もしなかった。ただ一緒にいただけだ。黙って何かをずっと考え続けるアキのそばに、ずっと。

励ましの言葉なんてかけない。わざと明るく振舞ったりしないし、楽しみに接したりなんかしない。

アキ自身が、落ち込んでいる人にそう振舞う傾向があるためか、いざ自分がそういうことを人からされると、人に気を遣わせている申し訳なさから、アキは更に落ち込むだろうことが分かっていた。

何年一緒にいるかと思っているんだ。ここ数年は寮が離れるという誤差もあつたりしたが、それでもお互いの人生で一番近くにいた人間なのだ、それくらいはわかる。

アキだって立ち止まる。アキだって思い悩むことだってある。

アキはとても聴くて、とても頼りになって、いつも皆を引つ張つてくれるけど、僕だけは、立ち止まるアキを急かさずに、じつと待つてあげたかった。

アキの強さを信じてあげたかった。

アキの闇を、僕は知らない。アキの全てを知らなくても別にいいと、思っている。

——思っている。
「ハリー、ありがとう」

数日後、すっかり元通りの笑顔で、アキは僕にそう言った。

憑き物が取れたような、悩みが解決したような、とりあえずは自分の中で自己解決出来たのだろうと思えるような、そんな笑顔だった。

僕はアキに微笑んだ。

「僕は何もしてないよ、アキ」

そう、何も。

第9話 慟哭

「秋、君に届けものだ」

その日の授業が終わった夕暮れ時、セブルスはそういう言葉と共に、紫色のリボンで巻かれた羊皮紙を差し出した。

セブルスのそばにはリリーもいて、セブルスだけならともかく、リリーがすぐ近くでびっくりするほどニコニコしているから、受け取ったはいいものの、開くのを少し躊躇った。

「……どうした？ 秋」

「いや、その……」

ちらりとリリーを見遣ると、ぼくの視線から、セブルスはぼくの言いたいことを敏感に察したようだった。

小さくため息をついて「……別に、怪しいものではない。スラグホーン教授からの頼まれものだ。早く開けるといい」と言う。

「スラグホーン先生から？」

一体何だろう。一年の頃ならともかく、最近じゃ魔法薬学でそうそう悪い出来栄えのものは作り出してはいないはずだし、レポートも全部提出しているはずだけど。

首を捻りつつもリボンを解き、羊皮紙を開く。そこには、こういう文面が記されていた。

『幣原 秋 くん

十月一日に、十八時から夕食会を開こうと思っている。参加してくれると、大変嬉しい。

敬具

H・E・F スラグホーン教授』

「なんだいこれは？」

羊皮紙から顔を上げると、満面の笑顔でリリーがずっとぼくに顔を近付けてきた。ちよつ、近い近いって。

でも距離を取るのもなんだか無遠慮な気がして、ぼくはそのまま、

リリーの話すことに耳を傾けた。

「あのね、魔法薬学のスラグホーン先生なんだけど、自分が気に入った生徒を集めて、たまに夕食会やパーティーを開いているの。中々楽しいのよ。私もセブもお呼ばれしているの。ね、秋も行きましよう？」
「うーん、君たちもいるのなら……」

パーティーなんかはそう得意じゃないんだけど、この二人がいるのなら、重い気持ちも軽くなるだろう。

そう思っただけで、リリーは殊更に幸せそうな表情をした。



長く楽しい休暇も終わり、9月1日、新学期がやって来た。朝から様々なトラブルが起こったものの、ひとまず無事にホグワーツ特急に乗り込むことが出来たとホッとすする。

ウィーズリーおじさん以外のウィーズリー家全員が、9と4分の3番線にまで見送りにきてくれた。コンパートメントに乗り込んだばかりは、窓を開けてウィーズリー一家と別れを惜しんでいた。

「僕、みんなが考えているよりも早く、また会えるかもしれないよ」

ジニーを抱きしめてお別れの挨拶をしつつ、チャーリーはそう言った。耳聴く、フレッドが「どうして？」と尋ねる。

「今にわかるよ。……あ、僕がそう言ったってこと、パーシーには内緒だぜ……なにしろ、『魔法省が解禁するまでは機密事項』なんだから」

「ああ、僕もなんだか、今年はホグワーツに戻りたい気分だよ」

「どうしてさっ？」

チャーリーに、今度はビルも同意する。好奇心がくすぐられてたまらないといった表情で、双子がビルとチャーリーそれぞれに、窓から身を乗り出して詰め寄る。

それをかわしながら（すごいなあ、と感心した。あの双子の猛攻を平然とかわすとは、さすがあの二人の兄なだけはある）、ビルは年に似合わずに目をキラキラと輝かせた。

「今年は面白くなるぞ——いつそ休暇でも取って、僕もちよつと見物

に行くか……」

「だから何をなんだよ?」

ロンの声はしかし、汽笛にかき消された。ガタン、と汽車が震える。エンジンが動き出したのだ。

「クリスマスにもお招きしたいけど、でも……ま、きつとみんな、ホグワーツに残りたいと思うでしょう。なにしろ……いろいろあるから」
ウィーズリーおばさんが意味深に微笑む。

ロンがイライラしたような口調で「ママ! 三人とも知ってて、僕たちが知らないことって、何なの?」と尋ねた。

「今晚わかるわ、たぶん。とっても面白くなるわ——それに、規則が変わって、本当によかった——ダンブルドア先生がきつと話してくださいませ。お行儀よくするのよ、ね?」

汽車が滑るように動き始めた。ぼくらは窓から身を乗り出し、手を振る。

「ホグワーツで何が起るのか、教えてよ!」

双子の叫びに対する答えはしかし、帰ってこなかった。

駅を出ると、外は土砂降りだった。ぼくらはすぐさま窓を閉める。

窓ガラスに雨粒が叩きつけられて、外は一面真っ白だ。

双子は「ひと遊びしてくる」と言っ、早々にぼくらのコンパートメントから飛び出してしまった。

手には、かつてモリーおばさんが捨てたはずの W・W・W の注文書の束が握られていた。新学期早々売りさばくつもりらしい。商魂溢れるというか、本当たくましいというか。彼らならどこでだって生きていけそうだ。

そのとき、躊躇いがちにコンパートメントのドアが開いた。

開けたのはなんと、アクアマリン・ベルフェゴールだ。ぼくが何か喋ろうと口を開くよりも早く、ハーマイオニーが嬉しそうに立ち上がった。

「アクア! 久しぶり、元気だった? こっちに来て、お話ししましょう!」

「……久しぶり、ハーマイオニー。元気だったわ……あなたも元気そ

うで何よりよ」

久しぶりのアクアは、なんというか、とつても、ううん……心拍数が上がるものだ。

学校にいるときはちよくちよく見るから、こんな気持ちにはならないんだけど（それでもまあ、少しではあるが浮かれはするな、うん）、期間を開けるとこう、胸に来るものがある。

それに何より、アクアはまだ制服を着ていなかったのだ。

私服。私服!!

夏らしく涼しげな水色のワンピースだ。半袖から伸びる肌は真っ白で、とつても細くて、見てはいけなような、けれども目が離せないような、危険な魔力を無自覚に放っている。

長い銀髪は、大きな青いリボンでひとまとめにして横に流している。そんな姿も新鮮だ。

結論。今日もアクアは可愛い。

「……アキ？」

「えっ？ ……あつ」

ハツと気がつくと、アクアがぼくの顔を覗き込んでいた。顔が赤くなるのが分かる。

「……元気だった？」

「う、うん……元気だよ」

「……それはよかった」

アクアはそつと微笑んだ。目元を緩ませて、僅かに頬を染めている。

なんだろう、今日のアクアは滅茶苦茶可愛い。出会った当初より、感情を表現するようになったからだろうか。とても……魅力的だ。

「そうだ、君は今年ホグワーツで何があるか知ってる？ だーれも教えてくれなくてさあ……」

「ああ……それは」

ロンの言葉にアクアが答えようとしたそのとき、ハーマイオニーが「シツ」と突然唇に指を当て、隣のコンパートメントを指差した。

耳を澄ますと、聞き覚えのある声が、僅かに開いたドアの隙間から

聞こえてきた。

「……ホグワーツではなく、ダームストラングに入学させようとお考えだったんだ。父上はあそこの校長をご存知だからね。父上がダンブルドアをどう評価しているか——あいつは『穢れた血』鼻屑だ——ダームストラングじゃ、そんなくだらない連中は入学させない。でも、母上は僕をそんなに遠くの学校にやるのがお嫌だったんだ。ダームストラングじゃ『闇の魔術』に関して、ホグワーツよりずっと気の利いたやり方をしている。生徒が実際それを習得するんだ、僕たちがやっているようなケチな防衛術じゃなくてね……」

と、そこでハーマイオニーは扉をきつちりと閉めた。くるりと振り返り、腰に手を当てて言う。

「それじゃ、あいつ、ダームストラングが自分に合ってただろうって思っているわけね？　ほんとにそっちに行ってくれてたら、もうあいつのこと我慢しなくて済むのに」

申し訳なきように、アクアが身体を縮めた。膝の上に置かれた手が、自らのスカートをぎゅつと掴むのをぼくは見る。

「ダームストラングって、やっぱり魔法学校なの？」

「そう。しかも、ひどく評判が悪いの。『ヨーロッパにおける魔法教育の一考察』によると、あそこは『闇の魔術』に相当力を入れてるんだって」

「僕もそれ、聞いたことがあるような気がする……」

ハリー、ロン、ハーマイオニーの三人組が、今度はダームストラングが一体どこにあるのかについて議論し始めた間も、ぼくはじつとアクアを見つめていた。

ぼくの視線に気づいたアクアは、大丈夫というように軽く微笑んでみせる。

昼食の時間が過ぎた頃、ネビルがやってきて、クイディッチ・ワールドカップの話になった。ロンが誇らしげに「僕たち、クラムをすぐそばで見ただぞ！　貴賓席だったんだ——」と話しているところに、ぼくらの話に割り込む形で、ドラコがドアのところに現れた。後ろにはクラップとゴイルがいつものように付き従っている。

「君の人生最初で最後のな、ウィーズリー」

そう嫌味っぽく言ったドラコは、ふとアクアに目を留めた。

「なんだ、なかなか帰ってこないと思っただら、こんなところにいたのか」

アクアはドラコの声に微動だにせず、ずっと俯いている。アクアに對して何か言おうと口を開いたドラコだったが、ちらりとぼくの姿を視界の隅で見た後、「……ふん」と口を閉じた。

「君を招いた覚えはないよ、マルフォイ」

ハリーが冷ややかにそう告げるも、ドラコは聞いちゃいない。ロンがピッグウィジョンの籠に掛けたドレスローブを指差し、楽しそうに嘲笑う。ぼくは席を立つと、ドラコの正面に立った。ドラコを見上げ、言う。

「君のパパも、仮面の集団の一員か？」

ドラコが鋭く息を呑んだ。ぼくらは数秒見つめ合う。

後ろの皆は、ぼくが何のを行っているのかさっぱり分からないだろう……いや、おそらく、アクアを除いては、だが。

「……ノーコメントだ」

「そうか……それが賢い」

ぼくはにっこりと微笑んだ。

ドラコは、その顔に僅かに恐怖の色を浮かべ、後ずさる。そして後ろのクラップとゴイルに「帰るぞ」と言うと、くるりと踵を返した。

ぼくもコンパートメントの中を振り返ると、両手を広げて「さ、仕切り直しだよ」と笑った。戸惑っていたハリー達だが、それでも徐々に、話題を今までのものに戻していく。

「……アキ」

と、ぼくを小さな声で呼ぶ人物がいた。アクアだ。

ぼくはアクアに笑いかけると「場所を変えようか」と提案した。



デッキの外は、土砂降りだった。雨が猛烈な勢いで窓ガラスを叩い

ている。

構わずぼくはデッキへと続くドアを開けると、一步外に踏み出した。土砂降りは変わらないが、しかし雨はぼくを避けて降り続く。

振り返り、アクアに手を差し伸べた。

「おいで、アクア」

アクアは少し戸惑ったようだったが、ぼくの手を取り、デッキの外へ出た。

雨はぼくら二人を避けて、降り止む気配を見せない。その雨の激しさは、数メートル離れた人物が誰かすら分からないくらいだ。

アクアの手はさらさらとしていて、ぼくは決して頼りがいのありそうな手のひらではないが、ぼく以上に薄く、細く、掴んだだけで折れてしまいそうで、そしてひんやりとして冷たかった。

しかしそれ以上に、自分の手の方がもつと冷たかった。

「……アキ？」

ぼくの表情に気がついて、アクアがぼくに向き直った。土砂降りの灰色の世界でも、アクアだけは一人、輝いて見える。

「……ぼくは、ずっと昔から、ハリー以外に知ってる人がいたんだ」

突然のぼくの語りに、アクアは少し驚いたようだった。

しかし黙って、ぼくの話聞く体勢に入ってくれる。

そういうところが、本当に、大好きだ。

「その人は、ぼくの夢に現れた。毎日毎日……飽きることなく、ずっと……ぼくは、その夢の中で、『彼』の人生を、ずっと歩んできたんだ。ぼくとまるきり同じ顔で、同じ身長で、同じ声で……『彼』は、ぼくとは全く違う人生を歩んでいた。ぼくが欲しくて欲しくてたまらなかつた暖かい生活を、優しい両親や友達に囲まれた、穏やかな暮らしを送っていたんだ。ずっと、家族が欲しかったぼくは……心から『彼』に憧れた。とても……羨ましかった」

優しい父親に、少し抜けているけれど、とても面白い母親。

夢から覚めた後も、何度も夢想した。ぼくとハリーのお父さんとお母さんが、もし生きていたら……って。

写真一枚さえないけれども、両親の姿を何度も思い浮かべた。実は

死んでいなくて、どこかで生きていて、いつかぼくたちを迎えに来てくれる——なんて、そんなどうしようもない妄想までした。

『彼』は成長して、彼にとつての外国の学校、ホグワーツに入学した。そこでは、言葉が通じない『彼』はどうしようもなく異端だった。言葉が通じない中、その身に余る魔力を持ち合わせた『彼』は、ある日クラスメイトを傷つけてしまう。そこから——彼の地獄が始まった」

身の回りの人物全てが、敵に思えて仕方がないあの日々。人から敵意と悪意を向けられることが、こんなにも恐ろしいことなのだということを知った。

「同年代の男子よりも小さかった『彼』は、どこまでも苛烈な虐めを受けた。暴言や陰口や暴力は当然のこと、ロッカーに閉じ込められたり、真冬に池に落とされたり、物が切り裂かれたりなくなったりすることは日常茶判事で、それを『彼』は外部に訴える術を持たず、ただ懸命に耐え続けた」

期間にしてみれば半年と少しだったが、当時してみれば、永遠とも思えた。

いつ終わるのかの見通しもつかずに、ただただ身体を丸めて、嵐が去るのを息を殺して待ち続けた。

「そんな彼にも、光がやってきた。暗闇から掬い上げてくれた、友が出来た。『彼』は友を慕った。友もそれに答えてくれた。『彼』が待ち望んだ穏やかな日々が……やっと『彼』の手元に訪れた。とても嬉しかったよ。ただ疎ましいとばかり思っていた自分の能力を、素晴らしいと言ってくれる人がいる。自分を肯定してくれる人がいる。そして、自らの能力を試せる大会が、学校で開かれた。それに『彼』はエントリーして、優勝した」

世界が自分を認めてくれたと、あの時思った。自分はここにいていいのだと、この力は、何かを傷つけるためのものではないのだと。

そう思えたのも、束の間のことだった。

「そんな幸せは、長くは続かなかった。当時、闇の勢力は圧倒的な力で、徐々に世間を脅かしていた。有力な名門の主が、何者かに殺害されていく——自らに逆らう者は殺す。力で従える、闇の帝王の時代

だった。『彼』の両親も、遠く離れた地であつたにもかかわらず、殺された。——おそらくは『彼』のせいだ。彼の持つ、その膨大な魔力を、闇の帝王は欲しがった。だからこそ——殺されてしまった」

アクアが小さく息を呑んだ。

ぼくの声は、震えていなかっただろうか。平静に、言葉を紡いだだろうか。分からない。

「……視点を変えよう。ぼくの話だ。ぼくは、君も知つての通り、ハリー・ポッターの双子の弟として暮らしてきた。お世辞にも、住みやすいとは言えない環境だった。魔法に恐怖心しか抱いていない叔父叔母に、甘やかされて育つたワガママたっぷりの従兄弟。自分のものは何一つない、気を抜いたら餓え死にしような環境の中、ぼくとハリーは一生懸命助け合つてきた。そんな中、ぼくらに救世主が現れた。ホグワーツに入学できると聞いたときは、頭が真っ白になるくらいの喜びだったよ」

世界が変わつた瞬間だった。待ちわびた、非日常への誘い。やつと、自由になれたんだ。

「初めて、広い世界を知つた。いろんな人と出会えた。アリスやロン、ハーマイオニー、ドラコ……それに、君。

ぼくは、今の世界が大好きだ。とつても気にいってる。壊したくない」

アクアがどうしたらいいのか困惑した顔で、ぼくを見ている。……申し訳ない、そんな顔をさせるつもりはなかったのに。君には笑つていて欲しいのに。君には幸せであつてもらいたいのに。

雨は降り止まない。雨に遮られて、まるで世界はぼくと彼女のふたりきりになつたようだ。

そうであれば、どんなに幸せだろうか。どれだけ喜ばしいことだろうか。

ここまで来たのだ。最後まで伝えよう。つらいけど、もう少し……頑張ってみようか。

「幣原は……幣原秋は、あいつは、闇祓いになつたらしい。両親の死がきっかけで、あいつは自らの人生を復讐に費やすことにしたんだ。そ

れがあいつにとつていいことだったのか悪いことだったのか、ぼくには分からない……けれども、世間にとつては、平和な世のためには、きつとそれは、幣原が闇祓いになることは、とつても『いいこと』だったんだろう……」

『黒衣の天才』だなんて、英雄だなんて！

そんな言葉で裝飾されて……綺麗で耳障りのいい言葉で誤魔化して。全てを幣原秋に押し付けた。

「……わ、私は」

そつと、アクアが口を開いた。

「私は……幣原秋を知っているわ。あなた達が、闇の帝王を『例のあの人』と呼んで怖がっているように、こちら側で、彼が亡くなって十年以上も経つ癖に、その名前を聞いただけで空気が冷たくなるような、そんな彼を……私は知っている。私やドラコの両親が、未だに彼の名前に背筋を震わせる様を、私は知っている……幣原秋と同じ姿形を持つあなたに、ハリー・ポッターの弟だと名乗るあなたに、彼らが気を張り始めたことも……私は知っている」

アクアの瞳が、言葉を探すようにふと揺れた。

そして、意を決したように、ぼくに向かって真っ直ぐに言った。

「ねえ……アキ。あなたにとつて幣原秋って、誰？」

息を止めて、静かに吐いた。

虚勢を張って笑って見せる。

「ぼくが、幣原秋なんだ」

ぼくの言葉を聞いたアクアは、まるで泣き出す寸前の幼子のような表情をしていた。

一体どうして君がそんな顔をするんだよ。そう茶化して笑おうとしたけれど、何故だか声が出なかった。

アクアが、ぼくの手を離す。そして次の瞬間、ぼくはアクアに抱き締められていた。

「アキ……っ」

細い腕が、ぼくの背中に回る。彼女の体は、ほんのりと暖かかった。「お願い、そんな顔で笑わないで……っ」

彼女の目の縁に、みるみる涙の雫が溜まっていく。その粒が決壊する様を、彼女の頬をそつと流れていく水の塊を、ぼくは見ている。

「……アクア」

彼女の肩を掴んだぼくの手は、目で見て分かるほどに震えていた。息が、うまく出来ない。

気付いたら、アクアを抱き締め返していた。

言葉が溢れ出して、止まらない。

感情が堰き止められることなく吐き出されていく。

どこにも行き場のなかった不安や、心の奥底に溜まった苦悩が、流れていく。

「もう嫌だ……もう嫌だよ！　自分が一体誰なのか分からなくなってくるのは、もう嫌だ！　毎日毎日！！　ぼくは何をすればいいんだよっ、ぼくはお前のラジコンじゃないんだっ、ラジコンにしたいんだっしたら、どうしてぼくに意志なんてものをつけたんだよっ！！　ぼくは……ぼくは、君を好きでいいの!?　わかんないよ、誰も教えてくれないっ、ぼくは一体誰なんだよ……っ!!」

地面に膝をついた。

アクアの細い腕を掴んだまま、俯いて言葉を吐き出し続ける。

「ぼくには無理だよ……ぼくは君にはなれないよ。ねえ、秋……聞いているんだろう、返事をしてよ……どうして、どうして君は答えてくれないの……ぼくに押し付けるだけ押し付けて、逃げてるだけじゃないか……どうしてぼくが、君の分の苦痛まで背負わなくちゃいけないんだよ……っ、どうして！　答えてくれよ、秋……っ！　こんな子供の中に引きこもって!!　なにが『黒衣の天才』だっ、お前は逃げた!!　自分が生き辛い世の中だからって、目を逸らして、挙句子供の中で引きこもっている臆病者だ!!」

雨が降っていてくれて、本当に良かった。

ぼくの声を掻き消してくれる。

ぼくの姿を隠してくれる。

アクアは、何も言わずにぼくの側にずっといてくれた。ぼくの背中に添えられた手の温もりを……ぼくはきつと、一生忘れないだろう。

第10話 誕生日プレゼント

「秋、ハッピーバースデー！」

そう言っただけからともなく現れたリリーは、ぼくに花束を押し付けてると、にっこりと笑いかけた。

十月十五日は、ぼくの十六歳の誕生日だ。極々普通の平日で、いつも通りみっちり授業はあるけれど、ぼくの中でちよっぴり大切な日。悪戯仕掛人からは大量のゾンコの悪戯グッズを、ライフからは温かみのあるブックカバーを、そしてセブルスからは紅茶の詰め合わせをそれぞれ貰った。今年は、両親はいないけれど……でも友人たちからもらったものはどれも、ぼくの宝物だ。

「わあ、ありがとう、リリー！」

花束は、どうやら百合の花のようだった。思わず心臓が跳ねる。

ぼくの実家にもよく、百合の花が飾られていた。

しかし、リリーに深い意味はないのだろう。恐らく、自分と同じ名前の花だから選んだに違いない。

「えへへ、十六歳の誕生日おめでとう、秋！ 毎年秋が一番誕生日が早い、驚くわ。こんなに小さくて可愛いのに」

「何を言ってるんだい。そろそろ君を追い抜きつつあるよ、ぼくは」
そう言うと、リリーは悔しげに「そうなのよね……」とむくれた。

「ちよっと前までは、セブも秋も二人とも私よりちっちゃかったのに……」

「まあ、ぼくも男の子だしね……？」

ぼくとセブルスが男だって、本当に分かっているんだろうか、リリーは。

「何はともあれ、プレゼントありがとう、リリー。花を貰ったのは初めてだけど、何とか枯らさないようにするよ」

そう言うとリリーは慌てて「あ、あのね！」とぼくに身を乗り出してきた。思わず後ろに身を引くと、リリーもはっと気付いたように頬を染めて身体を元に戻した。

「あ、あのね……花だけじゃないの。これも、なの」

そう言つてリリーはポケットから、小さな包みを取り出すとぼくに差し出した。受け取ったぼくは、リリーに「開けていい?」と尋ねる。リリーは顔を赤らめて、こくりと頷いた。

一体何が入っているのだろうか。わくわくしながら開けると、中から出てきたのは黒の髪紐だった。少し歪な箇所はあるが、全体的にはとっても綺麗だ。

「もしかしてこれ、リリーが?」

そう尋ねると、リリーは何故か怒つたような表情で「……だったら悪い?」と唇を尖らせた。

「とっても上手だなんて思つて。作るの、時間掛かつたんじゃない?」
「……そんなこと、ないわ」

嘘だ。リリーは嘘をつくとき、目が泳ぐ。元来正直者なんだ、この子は。

「ありがとう、リリー。とっても大切にするよ」

微笑んで告げると、リリーは照れたように「……よかつた」と笑つた。

花が咲いたような、とっても綺麗な笑顔だった。



トライウィザード・トーナメント
三大魔法学校対抗試合は、あつという間にぼくらの話題の中心となった。ボーバトン、ダームストラング、そしてホグワーツ。この三校の代表者が、学校の威光と誇りを持って、互いに術を競い合う大会だ。

十七歳以上しかこの大会にはエントリー出来ない、ダンブルドアが言ったにも関わらず、上の学年から下の学年まで、誰も彼もがこの話題を口にしていた。十七歳以上の者は、表情を輝かせながら自分の夢について語つたし、十七歳に満たないものでも、どうやってゴブレットを出し抜き自分の名前を入れるか、そんな考えに熱中した。

学校中が微熱状態の雰囲気の中、ぼくだけは、なんだかその話題に上手く乗ることが出来なかつた。むしろ、奇妙な胸騒ぎがするのだっ

た。

翌日から、授業が本格的に始まった。相変わらず授業は多かったが、それらに没頭できるのは、ぼくにとってはありがたかった。

今年は時間割が、少なくとも去年よりは良心的になったようだ。同時刻に始まるコマを3つも履修したりだとか、一日が三十時間も続く生活は、時間割を見る限りなくてホッと胸を撫で下ろす。

時間を弄ろうなんて、ぼくは金輪際思わないだろう。気がおかしくなりそうだ。

授業開始初日だというのに、朝から晩まで授業を受けた後、腹ペコの身体を抱えながら玄関ホールにつくと、そこは夕食を待つ生徒で行列が出来ていた。その行列に今にも並ぼうとしているハリーとロン、ハーマイオニーを見つけ、ぼくは彼らの中に飛び込む。

「やあ、三人とも」

「アキじゃないかー」

にっこり笑顔でハリーが迎えてくれたのに、ぼくも同じく笑顔で応える。すると背後からロンを呼ぶ大声が聞こえて、ぼくら四人は揃って振り返った。

「ウィーズリーー！ おーい、ウィーズリーー！」

そこには、マルフォイとクラップ、ゴイルが、とても嬉しそうな表情で立っていた。彼らがこんな表情をしているときは、大抵こつちにとって良くないことが始まるのだ。ぼくは小さく眉を寄せた。

「何だ？」

ロンが尋ねると、ドラコは「日刊預言者新聞」を振りながら、ぼくらだけでなく周囲にいる人みんなに聞こえるような大声で言った。

「君の父親が新聞に載ってるぞ、ウィーズリーー！ 聞けよ！」

それからドラコは、喜色満面でロンを侮辱してみせた。ロンは怒りで震えていて、ぼくは小さく嘆息する。どうして、ドラコはこうなのか。

「失せろ、マルフォイ」

ハリーが鋭く言うが、ドラコはその言葉を耳に入れず、なおもあげつらい続けた。

「ポッター、君は夏休みにこの連中のところに泊まったそうじゃないか。それじゃあ、ウィーズリーの母親は本当にこんなデブチンなのか？ それとも単に写真写りかねえ？」

ロンが今にもマルフォイに飛びかかりそうだったので、ハリーと二人がかりでロンを押し留める。口が利けないほど怒り心頭のロンに代わって、ハリーが皮肉を返した。

「マルフォイ、それじゃあ君の母親のあの顔つきだったら、鼻の下に糞でもぶら下げていたのかい？ いつでもあんな顔を？ それとも君がぶら下がっていたからなのかな？」

ドラコが怒りで頬を染めた。

「僕の母上を侮辱するな、ポッター」

「それなら、その減らず口を閉じとけ」

ハリーはそれだけを言うと、肩を竦めてドラコに背を向けた。ぼくらに「行こう」と促す。ハリーも大人になったもんだ、いつの間にと、兄の成長に感動しつつ、ぼくもドラコに背を向けた——と、そこで気配を感じて、意識よりも先に身体が反応した。

振り向きざまに杖を抜くと、ドラコがハリーに魔法をかけようとしているところだった。瞬時に魔法式を構築するも——激しい音と閃光が、ドラコに当たるのが早かった。

もちろん、ぼくが魔法を掛けたんじゃない。目の前でドラコが純白のケナガイタチになる様を、ぼくは唾然と見ていたが、慌てて術主を探した。

「若造、そんなことをするな！」

術主は、すぐに見つかった。今年新しく「闇の魔術に対する防衛術」の担当教諭となった、ムーデイ先生だ。杖を真っ直ぐケナガイタチ、もといドラコに突き付け、大理石の階段を音を立てて降りてきている。

先ほども喧騒に溢れていた玄関ホールは静まり返り、動いているのはムーデイ先生と恐怖に震えるケナガイタチのみだ。

ムーデイ先生はハリーをじっと見た後、次いで隣のぼくに視線を移した。瞬間、ぞくり、と肌が粟立ち、背筋が震える。

瞬きをすると、ムーディ先生は既にぼくから視線を外していた。ぼくは制服の上から、鳥肌が立った両手を擦り合わせる。

「敵が後ろをみせたときに襲うやつは気に食わん」

イタチに杖を向けると、哀れなイタチは空中に跳ね上がった。床に落ち、その反動でまた跳ね上がる。何度も床にぶつかっては跳ね上がり、その高さは段々と高くなっていく。

「鼻持ちならない、臆病で、下劣な行為だ……二度とこんなことはするな——」

耐えられなくなつて、ぼくは前に進み出た。左手の杖を振り、ドラコを元に戻してやる。ドラコは急に戻ったショックか、しばらく呆然と床に這いつくばっていたが、頬を紅潮させると慌てて人混みの中に姿を消してしまった。

「……ふん。お前か」

ムーディ先生は、健在な方の目と魔法の目、両方の瞳でぼくを見た。その視線は冷たく鋭くて、ぼくはたじろぎそうになるも、唇を引き結んで見返す。

「……まあいいさ。邪魔が入ることくらい、計算の内なのだから」

ムーディ先生はそう呟くと、ローブを翻し、足を引きずりながら歩いて行った。ムーディ先生の前方で、生徒がさあつと道を開ける。

「よつくやるよなあ、アキ」

「別に……見てられなかっただけさ」

ロンに言葉を返すと、ぼくは目を伏せ、静かに杖をローブに戻した。

第11話 逸らす、想い

「秋、花なんて飾る趣味、いつ持ったの?」

「嫌だなあ。ぼくだって花を愛でる感性くらい持つてるよ」

ぼくの机の上に飾られた百合の花を指摘するリイフに、ぼくは肩を竦めてみせた。

リイフはそれでも怪訝な顔をする。

「秋が、花を愛でる感性をねえ……」

「……ちよつと、リイフ」

なんとも失礼な言い草だ。

確かにぼくは花の名前なんてチューリップと薔薇と百合、あとは魔法薬学で使う薬草くらいしか言えないけれど、その言い方はあんまりじゃないか。

「いや、悪いね。秋は花をただの薬を煎じるために必要な材料としか思っていないもんだと、てつきり。その百合も鎮静効果を持つ薬を作るためのものかと」

「おい」

全く悪びれぬ口調でリイフはぼくに謝ると（謝ってないよね、それ!）、リイフはじつと百合の花を見つめ、そしてぼくを見てにやつと（リイフがそんな笑い方をするのは初めて見た）笑った。

「秋、大事にしなよ。その花、大切な人にもらったんでしょ?」

「なっ……」

リイフの言う『大切な人』には、明らかなニュアンスが込められていた。それを感じ取り、ぼくは思わず顔を赤らめる。

「……っ、そんなんじゃないからねっ!」

そう言い返すも、自分の言葉に説得力の欠片もないことくらい、分かりきっていた。

リイフはくつくつと喉の奥で笑いながらも「はいはい」とぼくを宥めるように言い、ぼくのベッド脇のカーテンを閉める。

「……………」

ぼくはそつと百合の花に触れた。目を伏せる。

「……そんなんじゃ、ないんだからね……」



魔法薬学の授業が終わった後、ぼくはスネイプ教授に学期始めの挨拶を行うべく、教授の前に立ち塞がった。にっこりと微笑むと、「お元気ですか?」と尋ねる。

「顔色が優れないようですが、しっかりと睡眠は取っていますか? 三食きっちり食べることに、それだけで……」

そう言葉を続けたぼくを押しつけ、教授はぼくに一瞥もくれずに歩いて行く。

え、と驚いて、ぼくは呆然と教授の後ろ姿を見つめたが、我に返ると駆け出した。教授に追いつけると、「ちよつとちよつとちよつと」と笑顔が浮かべる。

「無視しないでくださいよお、お人が悪いな。ぼく、教授とはそこそこ仲がいいつもりでしたんですけど。傷つくなあ……」

教授の袖を引っ張ると、瞬時に振り払われた。思わず息を呑むぼくに、教授も「やってしまった」というような表情で振り返る。

「あ……ぐ、ぐめんなさい」

慌てて笑顔を作り直すも、自分が本当に普段通りの笑みを浮かべられているのか、自信がない。

「……もう、私に近付かない方がいい」

そうぼそりと呟いた教授に、目を見張った。

「……どうして、そんなことを言うんですか? ぼくは……」

「貴様のために言っているんだ!」

教授の剣幕に、ぼくは口を噤んだ。

「本当に、貴様は、どうして! もう二度とその面見たくない! 私の堪忍袋の尾が切れる前に、とつとと失せろ!」

そう言い切って、教授は肩で息をする。そつと教授に「どうして……」と声を掛けると、瞬時に怒声が返ってきた。

「失せろと言ったはずだ! 聞こえなかったのか!」

ぼくは動かなかつた。囁くような声音で呟く。

「幣原に、何か言われましたか？」

教授は、ぼくの言葉にはっと目を見開いた。

ぼくの質問には答えずに、スタスタと歩き去ると、教室のドアを乱暴に押し開け、外に出る。

「アキッ！」

ぼくを呼ぶアリスの声に、振り返った。アリスはじっと観察するような目つきで「大丈夫か？」とぼくに尋ねる。

「大丈夫だよ」

ぼくは本心から、その言葉を口にした。

第12話 守り方

グリフィンドールとスリザリンの合同の魔法薬学の授業が、セブルス・スネイプは好きにはなれなかった。

そもそも、とセブルスは思う。

グリフィンドールとスリザリンの生徒の対立は、何世紀も前から変わらず根深く存在するのだ。先生方もそんなことは分かっているだろうに、どうしてグリフィンドールとスリザリンの合同の授業はこんなにも数多いのか。

せめてレイブンクローと合同だったら、こんな殺伐とした空気にはならないに違いないのに。

スリザリンは他の三つの寮と比べて少々特殊で閉鎖的だという自覚はあるが、それでも一番雰囲気として似通っているのは、恐らくレイブンクローだ。

彼らは、自分たちとは異なる意味で誇り高く、知的好奇心に溢れているため、授業の邪魔をすることはまずもってありえない。共に机を並べるとしたら、スリザリン生は真つ先にレイブンクローを望むだろう。

計り知れぬ叡智をこそ至上の宝と尊ぶレイブンクロー生は、寮の対立なんていう「どうでもいい」ことに関して一番無頓着で、その無頓着さが、寮のしがらみに疲れたセブルスにとっては心地よかった。最も、スリザリンと共に勉学に励む相手としてレイブンクローを指名したところで、レイブンクローがそれを受け入れるとも限らないのだが。

レイブンクロー生の考えることは、他寮生から見るとよく分かりづらい。彼らの中では論理が通っているのかもしれないが、その論理がそもそもどこから導き出されたのやら、外側からではさっぱり分からないのだ。

レイブンクロー生にはいわゆる「変人」と呼ばれる人が多い、と言われるのも、そのあたりに起因しているのだろう。

幣原秋も、セブルスにとつては何を考えているのかよく分からない

人物の一人だ。

一年の時に出会って、今年で付き合いは五年にもなる。寮が異なるというのに、よく長々と付き合っているものだ。

幣原秋を自らの親友と呼ぶことに対して躊躇はないが、しかしその親友の考えていることはよく分からないというのがセブルスの本音だった。

闇の帝王に賛成するセブルスを正面切って否定しておきながらも、友達であり続ける彼の姿は、どこか物悲しく滑稽だ。

話を戻そう。グリフィンとスリザリン合同である、魔法薬学の授業が終わった後のことだ。

魔法薬学の担当教師であり、且つ我がスリザリンの寮監であるホラス・スラグホーン教授に、本日の授業の疑問点を尋ねていたら遅くなってしまった。手早く荷物を纏めて次の授業に向かわなければ、授業の開始に間に合わない。

スラグホーンも、次の授業の準備のために教室を引き払ってしまった。急いだ方がいいだろう。

しかし、そんなセブルスの気持ちは、あっけなく崩されることになる。

自分の座っていた机の前に立ちなやらししている人物が見知った顔、ジェームズとシリウスであるということ、そして彼らが見ているのは、さんざん様々な書き込み済みのセブルスの教科書であるということに気付いて、セブルスは青褪めた。

「おいっ!!」

大声を上げ、足音も荒く彼らに近付くと、彼らの手から教科書を乱暴に引ったくった。

二人は——ジェームズとシリウスは一瞬だけセブルスに目を瞞つたが、すぐに普段の余裕めいた笑みを取り戻す。

「なんだスニベリー、お前のだったのか」

「なんだ相棒、分かってなかったのか。余白の文字からスニベリー臭がプンプンしていたじゃないか」

そう笑い合っていたジェームズの表情が引き締まった。セブルス

の手にある教科書を指指し、言葉を紡ぐ。

「お前……なんの呪文を作っている？」

眼鏡の奥の瞳が、鋭く煌めいた。セブルスに対し、一歩ずつジェームズは近付いていく。距離を詰められるのが嫌で、セブルスも後ろへ下がって行つた。後ろ手に教科書を隠す。

「教科書、二百三十一ページ。右上の余白の部分だ。覚えていないとは言わせない」

ページまで正しい。さすがは腐っても学年主席だ。

「僕の予想が正しければ——それはまさしく闇の魔術だ。悪霊や闇の生物、良からぬものの力を借りて魔力を増幅させ、相手を傷つけるためだけの魔法だ。……そんなものは、触れてはいけない。スネイプ、秋の友人でありたいのなら、秋やエバンスの友でい続けたいのなら……手を切るべきだ。あいつらは、それを許さない。だから」

「許さない？ 秋やリリーの何を、お前は知ってるというんだ」

虚勢を張ってせせら笑った。ジェームズの眉間にぎゅつと皺が寄る。

「僕の選んだ道だ、口出ししないでくれたまえ、目立ちたがり屋のポッター君。人の物に手出しをするとは、なんたる育ちの悪さか。……この時代だ、闇の魔術に勝る力など存在しない。自分の身すら守れない奴が、リリーのことを好いているだなんて？ 笑わせる。タチの悪い冗談だな、芸人になったがいんじゃないか？」

「……デイフィンダー！」

我慢のならなくなつたらしいシリウスが、ジェームズが止める間もなく杖を抜いた。それに黙っているセブルスではない、「ステューピファイ！」と応戦する。

「レビコーパス！」

叫んで、セブルスは杖を振り上げた。それは、セブルスが考案した呪文だった。まだ一度も試したことはなかったが——上手く行った。シリウスは踵を見えない手で掴まれたように宙吊りになる。

その隙について、セブルスはカバンを掴むと教室から走り出た。

「スネイプ!!」

ジエームズの叫び声が聞こえる。無視して、スネイプは唯、走った。「……セブ?」

聞き慣れた声に、振り返る。リリーが、びつくりした表情でこちらを見ていた。

「……どうしたの、そんなに慌てて。次の数占い学は確か、休講だったと思うのだけど」

そうだった、すっかり忘れていた。リリーの前で足を止めると、リリーは懐からハンカチを出し、セブルスの汗を拭う。

「一体どうしたの? セブ」

「いや……何でもない」

目の前にいる少女を、この仄暗い時代から守りたい。ただ、それだけだった。



ムーディ先生の初授業、闇の魔術に対する防衛術を、待ちわびている同級生は多いようだ。上級生や下級生など、他学年から漏れ聞こえる情報に、『今までのどの先生の授業とも違う実践的なもの』という期待が大きく弾んでいる。

ぼくは、楽しみじやない、というわけではないけれども、気が進まない、という自分の気分から目を逸らすことは出来なかった。

どうして気が進まないのだろう。考えても、理由はよく分からなかった。

いや——理由にならない理由なら、一個だけ、存在する。

ぼくは——ムーディ先生が怖いのだ。

この気持ちは、全く論理的なものじゃない。一から十まで直感的なもので、どうしてあの人怖いのか、まったくもって分からない。

しかし、現実問題として、あの人近くにいると寒気がするし、目が合ったら総毛立つ気分になるのだ。

確かに、恐ろしい容姿ではあると思う。傷だらけの顔に、義眼に義足。

でも、ぼくが怖いのはその見た目じゃなくって、もつとこう、存在
というかなんというか……。

しかし、いくら先生が怖いと言ったって、ムーデイ先生は授業の担
当教師なのだ。そんなこと言っても仕方がないだろう。

ハリーたちは、この授業を心待ちにしているようだった。彼らは最
前列の先生の机の真正面に陣取ると、ワクワクした表情でお喋りをし
ている。

流石にそこまで近付く気にはなれなくて、ぼくはアリスと共に後ろ
の端の机を選んだ。

やがて、ムーデイ先生が現れた。席に座る全員を見遣ると、唸るよ
うに「教科書なんぞ仕舞ってしまえ。そんな物は必要ない」と言う。
ザワザワと皆が教科書を鞆の中に戻した。

ムーデイ先生は出席を取ると、いよいよ話を始めた。

「このクラスについては、ルーピン先生から手紙を貰っている。闇の
怪物と対決するための基本をかなり満遍なく学んだようだ——そう
だな？　しかしお前たちは、遅れている。非常に遅れている。呪いの
扱い方についてだ。そこで、わしの役目は、魔法使い同士が互いにど
こまで呪い合えるものなのか、お前たちを最低線まで引き上げること
にある。わしの持ち時間は一年だ。その間にお前たちに、どうすれば
闇の——」

「え？　ずっといるんじゃないの？」

一番前の席に座るロンが、思わず、といった感じで口走った。ムー
デイ先生は言葉を着ると、ふ、と笑う。

「お前はアサー・ウィーズリーの息子だな？　お前の父親のお陰で、
数日前窮地を脱した……ああ、一年だけだ。ダンブルドアのために特
別にな……その後は静かな隠遁生活に戻る」

ムーデイ先生は喉の奥でくつくつと笑うと、話の続きに戻った。

「では——すぐ取り掛かる。呪いだ。呪いは力も形もさまざまだ。さ
で、魔法省によれば、わしが教えるべきは反対呪文であり、そこまで
で終わりだ。違法とされる闇の呪文がどんなものか、六年生になるま
では生徒に見せてはいかんことになっている。お前たちは幼すぎ、呪

文を見ることさえ耐えられぬ、というわけだ。

しかしダンブルドア校長は、お前たちの根性をもっと高く評価しておられる。校長はお前らが耐えられるとお考えだし、わしに言わせれば、戦うべき相手は早く知れば知るほどよい。見たこともないものから、どうやって身を護るといふのだ？

いましも違法な呪いを掛けようとする魔法使いが、これからこういう呪文をかけますなどと教えてはくれまい。面と向かって、優しく礼儀正しく闇の呪文を掛けてくれたりはせん。お前たちの方に備えがなければならん。緊張し、警戒していなければならんのだ。

いいか、ミス・ブラウン。わしが話しているときは、そんな物はしまっておかねばならんのだ」

ラベンダーがびくつとして、慌てて何かを仕舞い込んだ。魔法の目は堅い木も透かして見えるようだ。

「さて……魔法法律により最も厳しく罰せられる呪文が何か、知っている者はいるか？」

何人かがパラパラと手を挙げた。その中で、ムーディ先生はロンを指名した。

「えーと。パパが一つ話してくれたんですけど……『服従の呪文』」

「ああ、その通り。お前の父親なら、確かにそいつを知っているはずだ。一時期、魔法省をてこずらせたことがある。『服従の呪文』」

そう言うともーディ先生は、机の引き出しからガラス瓶を取り出した。黒いクモが三匹、中で這い回っている。

これから起きることを察して、ぼくは早くも具合が悪かった。

「……アキ？ お前、顔色が真っ白だぞ」

小さく首を振り「大丈夫」と呟くと、ぼくはぎゅつと反対側の袖を握りしめた。

ムーディ先生は瓶に手を入れると、クモを一匹つかみ出し、手のひらに乗せると、一言呟いた。

「インペリオ！」

杖先から閃光が零れた瞬間、クモはムーディの手から飛び降りると、様々な曲芸をやってみせた。自分の吐いた糸で空中ブランコを

し、後ろ宙返りをし、側転をし——その面白い動きに、ほとんどの生徒が笑った。

「面白いと思うのか？ わしがお前たちに同じことをしたら、喜ぶか？」

笑い声は瞬時に消えた。

「完全な支配だ。わしはこいつを、思いのままに出来る。窓から飛び降りさせることも、水に溺れさせることも、なんだった。……何年も前になるが、多くの魔法使いたちがこの『服従の呪文』に支配された。誰が無理に動かされているのか、誰が自らの意思で動いているのか、それを見分けるのが、魔法省にとってひと仕事だった……」

『服従の呪文』と戦うことは出来る。これからそのやり方を教えていこう。しかし、これには個人の持つ真の力が必要で、誰にでも出来るわけではない。できれば呪文を掛けられぬようにする方がよい。油断大敵！」

そう言ってから、ムーディはクモをつまみ上げるとガラス瓶に戻した。そして改めてクラス中を見渡す。

「他の呪文を知っている者はいるか？」

そこでムーディ先生が当てたのは、驚くべきことにネビルだった。ネビルがこうして自分から進んで答える姿を、ぼくは初めて見た。

「一つだけ——『磔の呪文』」

「お前はロングボトムという名だな？」

ネビルは恐る恐る頷いた。ムーディ先生は二匹目のクモを取り出すと「エンゴージオ！」と肥大呪文を掛けた。瞬時に、クモは教科書くらいの大きさまで膨らむ。

ムーディ先生は再び杖を上げると、呪文を唱えた。

「クルーシオ！」

ぼくはぎゅつと眉を寄せたが、しつかりと直視した。クモは痙攣し、ひっくり返り、苦しげにピクピク身を振った。

「やめてー！」

ハーマイオニーの声に、ムーディ先生は杖を離した。

「レデュシオ！」

ムーディ先生はクモを縮ませると、ガラス瓶の中に戻す。そして言葉を紡いだ。

「苦痛。『磔の呪文』が使えれば、拷問に『親指締め』もナイフも必要ない……これも、かつてさかんに使われた」

意識して息を吐いた。静かに目を閉じる。

「他の呪文を何か知っている者はいるか？」

ムーディ先生の声。その後、少し間が空いて、ハーマイオニーが「アバダ ケダブラ」と囁いた。

「そうだ。最後にして最悪の呪文。『アバダ ケダブラ』……死の呪いだ」

ぼくは目を開けると、目前で今から始まることを、しつかり見ようとす。

しかしその時、ぼくの頭を無理矢理机の方に向かせる手が隣から飛んできた。誰か、なんて聞くまでもない、アリスに決まっている。

「見たくねえなら、見なくていいんだ」

ぼくの後頭部を押さえつけながら、静かな声でアリスは言う。

そんなことない、ぼくは大丈夫だ、しかしここは、アリスの優しさに甘えておくことにする。

「アバダ ケダブラ」

目を瞑った真つ暗な世界の中でも、ぼくははつきりと緑の閃光を見た。

ぼくの頭を抑えるアリスの手に、ぐ、と力が籠るのが分かった。

「気持ちのよいものではない。しかも、反対呪文は存在しない。防ぎようがない。これを受けて生き残った者は、ただ一人。その者は、わしの目の前に座っている」

アリスの手が、ぼくの頭から外れた。ぼくは頭を上げて、ムーディ先生の言葉に耳を傾けた。

『アバダ ケダブラ』の呪いの裏には、強力な魔力が必要だ——お前たちがこぞって杖を取り出し、わしに向けてこの呪文を唱えたところで、わしに鼻血さえ出させることが出来るものか。

さて、反対呪文がないなら、なぜお前たちに見せたりするのか？

それは、お前たちが知っておかなければならないからだ。最悪の事態がどういふものか、お前たちは味わっておかなければならない。せいぜいそんなものと向き合うような目に遭わぬようにするんだな。油断大敵！

さて、この三つの呪文だが、これらは『許されざる呪文』と呼ばれる。同類であるヒトに対してこのうち一つの呪いをかけるだけで、一生アズカバンにぶち込まれる。お前たちが立ち向かうのは、そういうものだ。そういうものに対しての戦い方を、わしはお前たちに教えなければならぬ。備えが、武装が必要だ。しかし、何よりもまず、常に、絶えず、警戒することの訓練が必要だ。羽根ペンを出せ……これを書き取れ……」

それから、『許されざる呪文』のそれぞれについてノートを取り、この授業は終わった。

授業が終わるまで、誰もが黙りこくっていたが、授業が終わり、教室を出た瞬間、ほとんどの生徒が興奮したように喋り始めた。

ぼくは黙って鞆に教科書を詰めると、立ち上がり歩き出す。アリスはぼくの隣に並ぶと、ぼくの顔色を伺うように覗き込んだ。

「やっぱり顔色悪いぞ、お前」

「自覚はあるよ。だから大丈夫さ」

アリスは小さく息を吐くと、呆れたと言わんばかりに肩を竦めた。

第13話 狭間の声

毎日みっちり行われる授業と、毎回出される大量のレポートで疲れ果て、それでも今日の授業が終わった開放感に包まれながらレイブンクロー寮に帰り着いたぼくが見たものは、自分の私物のほとんど全て——教科書や筆記具、制服などが全て——破り、切り裂かれている光景だった。

カーテンを開けた体勢のまま顔色を変えたぼくを不審に思っつか、レイフが「どうしたの？」と尋ねつつカーテンの中を見、息を呑む。「誰が……っ」

「レイフ、落ち着いて。ぼくは別に気にしてないから」
レイフを宥めると、杖を振った。制服や教科書、筆記用具などは極々普通の呪文で壊されていたため、簡単に元通りになる。

しかし、一部の私物は元通りにはならないものがあつた。その最もたるものが——百合の花だ。
せつかく、生けてたのになあ。ずっと綺麗な姿でいて欲しかったのになあ。

「……秋。大丈夫か？」

「ぼくは大丈夫。ただ、ちよつとばかし怒ってるけど」
今まで何度も、こんなことはあつた。日付を開けて、繰り返し繰り返し。

一年の頃だけじゃない、二年の頃も、三年の頃も、四年の頃も。そのたびに、まあ直せるし、と思って放置してきた。……いや、放置じゃない。ぼくは、関わるのが怖かったから。自分の罪に向き合うのが嫌だったから。……わざと、気付かないフリをしてきたんだ。

しかしこれは、もう見過ごせない。

「レイフ。誰にも言わないでね」

「いや、でも……」

「お願いだよ」

にっこり笑うと、レイフは黙り込んだ。

「……秋は、それでいいの？」

問いかけに、答える。

「……いいんだよ、それで」

跪く。枯れてしまった百合を、ぼくは胸に抱いた。



深夜は、ぼくにとってあまり馴染みがない時間帯だ。十二時を回ったら、抗えないほどの眠気に襲われる。

その代わり、と言ってはなんだが、ぼくは無茶苦茶朝には強い。だから、皆が夜やる宿題も勉強も読書も、ぼくにとっては早朝の営みだった。

「おい、アキ。起きろ」

そんな訳で、アリスに眠い中起こされた深夜二時は、ぼくにとってはまだ夢の中、気持ちのよい熟睡タイムだったというのに……。

起こしたアリスを半眼で睨むも、アリスには全く効果がないようだった。

アリスは見覚えのある白フクロウを肩に置いていた。それがヘドウィグであることに気付くまでに、寝惚けた頭は少しの時間を要した。

「ヘドウィグ！ どうしてここに？」

「手紙を括り付けた。ほら、これだ」

アリスが手紙を差し出すのを、ひったくるようにして受け取った。ヘドウィグは、最後にシリウスに手紙を届けさせていたことを思い出したからだ。

「いてっ、おい、落ち着けよ。なんか気が立ってんな……」

アリスがヘドウィグに突かれ、文句を口にした。そちらに一切目を向けず、ぼくは慌てて手紙を開く。

手紙は、急いで走り書きしたような文字で書かれていた。ぼくはそれに目を通す。

『アキ

今すぐ北に向けて飛び立つ。ハリーをしつかり見ているよ。いら
ないお世話だろうが、用心しろ。再三言うが、ハリーの側から離れる
な。

パッドフット』

「あんのバカ犬が……」

何が用心しろ、だ。君こそ用心しやがれ。まだお尋ね者だというの
に——北へ行く、だと？ こっちに帰ってくるというのか？

ハリーとの会話用の羊皮紙を見ると、こちらもハリーからの伝言が
入っていた。ハリーの元にも同じような手紙が届いたようだ。酷く
慌てて、傷跡が痛んだことを告げたことを後悔していた。

ひとまず、ハリーのせいじゃない、悪いのはあのバカ犬のせいだ、君
が気に病むことは何も無い、と返しておく。

「犬？ 犬が手紙を出してきたのか？」

「ああ。それも飛びつきりのバカ犬さ。躰がなっていないんだ……リ
マスに躰け直してもらわなくっちゃ」

そう言うが早いか、ぼくはパジャマの上から一枚カーデイガンを羽
織った。裸足にスリッパを突っ掛けると、駆け出す。

「おい、どこ行くんだー？」

「校長のとこー！」

それだけ返して、部屋を飛び出した。

「犬の躰に校長が必要なのか……？」

背後で、アリスが首を捻っている声が最後に聞こえた。



校長室に行くと、ダンブルドア校長はナイトガウンにナイトキャツ
プ姿で目を擦りながら出てきた。なんというか、予想どおりというべ
きか、掛けるべき言葉のチョイスに迷いながらも、シリウス・ブラッ
クがこちらに来るということ、そのお目付役をリーマスに頼みたいこ
とを告げると、快く了承し、暖炉をリーマスの住処に繋げてくれた。

深夜だと言うにも関わらず、リーマスはまだ起きていて、突然現れたばくに驚いた様子だった。

「秋!? ……いや、今はアキか。どうしてここに?」

「シリウスがこっちに来ると言い出したんだ。リーマス、頼まれてはくれないかな?」

そう言うのと、リーマスはさすが飲み込みが早かった。

昔と変わらぬ底の知れない笑顔を浮かべると「分かった、奴に首輪をつければいいんだね?」と爽やかに言う。ぼくは思わず身震いをした。

「そう言えば、君は元気でやってるの?」

そう尋ねると、リーマスは「ぼちぼちね」と肩を竦めてみせた。

ぼくが目を眇めると、慌てた様子で目の前で両手を振り「いやホントだつて!」と言い訳めいた言葉を口にした。

「ダンブルドアが資金援助をしてくれているんだ。おかげ様でね、ちゃんと食べているから、安心してくれ」

「ふうん……」

眉を寄せつつも頷く。と、今度はリーマスが問いかけてきた。

「君がこんな時間に起きているなんて珍しいね。早寝早起きが信条の君が、さ」

「信条って訳じゃないよ、身体がついていかないってだけ……今も眠くて眠くて倒れそう」

大きく欠伸をすると、リーマスはふふつと笑った。そして、名案を思いついた表情を浮かべる。

「じゃあ、アキ、今日はここに泊まっていくかい?」

「え?」

目を瞬かせた。リーマスは楽しげに笑う。

「誰も訪ねてきてくれないからね、とつても暇だったんだ。折角なんだし、泊まっていつてよ。授業の前には帰すからさ」

「うーん、でも……」

渋るぼくだったが、窓ガラスをコンコンと叩く音に振り返った。

リーマスが窓を開けると、真紅と金色の美しい鳥、フォークスが、何

やら一抱えの包みを持って飛んできた。ぼくの上にその包みを落とすと、リーマスの肩に飛び乗り、リーマスの顔にそつと頭を擦り付けた後、さつと飛び去って行く。

「ほおら、ダンブルドアも泊まっていけつてさ」

包みの中身は、思った通り、ぼくの制服一揃えだった。これじゃあ、「朝にパジャマ姿で学校をうろつきたくない」なんて主張も認められない。

「はあ……分かったよ」

諦めると、リーマスは表情を輝かせた。いそいそと自分も寝る準備を始めるリーマスに、まあいいか、と思いつつも、ソファアに深く腰掛ける。

「そう言えば、幣原秋と話していかないで大丈夫？ 代わろうか？」

そう言うと、リーマスは動きを止めた。しかしそれも一瞬のことだった。

「いいや、構わないよ。今の僕は、むしろ君と一緒にいたいかな」

ふうん、とぼくは頷いた。

リーマスと共にベッドに潜り込むと、ぶわつと抗いきれぬほどの眠気が押し寄せてきた。堪えずに目を閉じる。

ふと、頭を撫でられているのを感じた。

薄く目を開けると、どこか懐かしむ表情で、リーマスはぼくの髪を優しく触れていた。その手の感触が気持ちよくて、ぼくはゆったりと夢の世界へと落ちて行く。

「……生きていてくれて、ありがとう。秋」

耳に届いたその言葉は、夢か現実のものか、よく分からなかった。

第14話 因縁の決着

ぼくに呼び出されたフィアン・エンクローチエは、どことなく挙動不審だった。それでもぼくの前に堂々と姿を現したのだから、大したものだと思う。

ホグワーツには、使われていない、何の用途に使う予定だったのかすらも分からない部屋がいくつもある。その中の一室、レイブンクロー寮からもグリフィンホール寮からも、どの寮からも程よく遠い、誰も立ち寄らないような場所にある小部屋に、ぼくは彼を呼び出した。

このような小部屋の存在を知れたのは、ひとえに悪戯仕掛人、彼らと共に目下製作中の、地図のおかげに間違いない。

「なあに？ 一体どうしたの、幣原ちゃんから呼び出してくれるなんて。俺に何の用？」

鼓膜を震わすその声に、脳みそが痺れるような感覚を覚える。

止まりそうな息を、意識して吐き出した。気を抜くと震え出しそうになる身体を、意志で抑えつけ、ぼくはまっすぐに彼を見た。

「……ぼくはずっと、君に謝らないといけないと思って生きてきた」

エンクローチエは、少しだけ驚いたようにぼくを見つめた。

「四年前の、あの日……ぼくは君に、決して消えない傷を負わせてしまった。ぼくの精神力が足りなかったからだ。あの日の全ては、ぼくの責任だ。もし君に障害でも残っていたとしたら、ぼくはどうやって償っていいのか分からない……本当に、すまない」

心から、頭を下げた。

エンクローチエはしばらく黙った後、冷ややかな声で「で？」と訊ねた。

「だから？ アンタが謝ったところで、どうにかなんの？ もしかして、俺とオトモダチになりたいの？」

「さすがのぼくも、そこまでお人好しじゃないよ。……謝ったのは、ぼくが自分自身にケジメをつけるためだ。ぼくは謝った。君はひとまはらずは受け止めてくれた。それと、後はまあ……ここ数年の地味な嫌が

らせ分も鑑みて、丁度いい感じになるんじゃないかと思っっているよ、ぼく個人としてはね」

エンクローチエは、それについては否定しなかった。腐ってもレイブンクロー生、見積もりはそうそう誤らないようだ。

「ぼくが君を呼び出した理由について、分からないわけじゃないだろう？」

ぼくは僅かに唇の端を釣り上げると、表情を消した。

「もう一生、ぼくに関わるな」

エンクローチエは、一瞬怯んだようだった。

しかしすぐさま軽薄な笑みを浮かべると、「嫌だと言ったら？」と絡むように言った。

「君がもう二度とぼくに関わりたくないと思うまで、君を痛めつけるまでだよ」

今度こそ、エンクローチエの顔に恐怖の色が刻まれた。

ぼくが彼に一步踏み込むと、ぼくを畏れるように半歩下がる。

「は、は……冗談が過ぎる」

「冗談だと本気で思っているのかい？　ぼくは去年の魔法魔術大会の優勝者だ。校内で、魔法の腕でぼくに敵う者は誰一人としていない。『呪文学の天才児』——君がつけてくれた異名は、奇しくも本当のものになってしまったね」

一步ずつ、ぼくはエンクローチエに近付いていく。

彼は後ろに下がっていったが、やがて部屋の壁に背中が触れた。

「近付くなっ！」

エンクローチエの言葉に、ぼくは足を止めた。杖すら持たぬぼくに本気で青褪め恐怖するエンクローチエを、酷く悲しいと思った。

ぼくの持つ力は、ここまで他人を恐怖に陥れるものだということを、思い知る。

忘れてはいけないのだ。

見誤ってはいけないのだ。

取り違えてはいけないのだ。

測り間違えてはいけないのだ。

自分の真の力を。莫大な力の分量を。

——ああ、それでも、やっぱり、ぼくは。

「……もう、ぼくに関わらないで。お願いだよ」

そう呟いて、ぼくはエンクローチエに背を向けた。

もう二度と、彼はぼくに手を出してはこないだろう。彼はそういう男だと、ぼくには確信があった。

——それでも、ぼくは。

俯いて、歯を食いしばった。

——怖がられるのは、寂しいや。



目が覚めると、朝だった。ぼくのすぐ隣では、リーマスが心地よさに熟睡している。

うんとぼくは伸びをすると、ぼんやりとリーマスを見つめた。そして、真新しい傷が首筋にあるのに目を止める。

それは首の真ん中あたりから始まって、パジャマの中まで続いていた。昨日はそう観察する余裕がなかったから気付かなかった。

パジャマのズボンのポケットから杖を抜くと、そつとリーマスの傷口に当てる。

なぞるように杖を動かすと、傷はもうほとんどわからなくらいに消えてしまった。

少しの間、ぼくはそのままの体勢だった。しかし窓ガラスをどのふくろうも叩かなかったことで、ぼくの想像は確信に変わる。

「……やっぱり、か」

未成年の魔法使いは、幣原秋の時代ならともかく、学校の外で魔法を使うことは禁止されている。

もし魔法を使ったら、魔法省からの警告を知らせるふくろう便が速攻で飛んでくるはずだ。そう、一昨年のハリーののように。

しかし、ふくろう便は飛んでこなかった。それが何を意味するのか。

それは、ぼくの身体が幣原秋のものだということだ。幣原秋はリーマスやシリウスと同年、年齢としては三十を超える、もういい大人だ。

彼の身体を使わせてもらっているから——彼と同居しているから、ぼくは未成年魔法使いとしてカウントされないのだ。

「……………」

様々な感情を振り払った。

兎にも角にも、これは一つの収穫だ。ぼくは未成年だからと気兼ねすることなく、いつでも魔法を行使することが出来る。

いつでもどこでも、ハリーを守ることが出来る。それはぼくにとつて、朗報以外にないだろう。

「ん……………」

と、小さな声と共に、リーマスが身じろぎした。やがてゆつくりと目を開け、その瞳にぼくを移すと、にっこりと微笑んだ。

「……………やあ、アキ。おはよう」

ぼくも笑顔を浮かべる。

「おはよう、リーマス」



リーマスが作ってくれた朝食は、甘くて美味しいホットケーキだった。

たつぷりの蜂蜜に添えられたホイップクリーム、ほかほかの紅茶。学生時代から、甘いものが好きな味覚は変わっていないらしい。

「そう言えば、僕の後任——闇の魔術に対する防衛術の教授は、あのマッド——アイ・ムーディなのかい?」

「確かにムーディ先生だけど……………あの、つて?」

「おや? 往年の素晴らしい闇祓いだって話、聞いていない?」

「チラツと小耳に挟んだ程度」

「じゃあ、この話は知らないんだねえ」

「どの話?」

「ムーデイは君の……幣原秋の直属の上司だよ」

フオークを取り落とした。お皿の上で跳ね返り、やかましい音を立ててテーブルの下に落下しようとする。人差し指をくいっと上げ、フオークを「浮遊」させると、難なくキャッチした。

その間も、リーマスを唾然と見つめ続ける。

「いやー……嘘でしょ？」

「嘘じゃないんだなー、これが。不死鳥の騎士団……っと、これもまだ知らないのか。ヴォルデモートに対抗するレジスタンス集団にも、ムーデイは参加していた。結構可愛がられていたもんだよ、君は。まあ、あの人なりに、だから、ちよつと可愛がり方が普通とは違うけど」

「えー……」

どうも信じられない。腑に落ちない、といった表情をしているぼくに、むしろ疑問を抱いたリーマスが「どうしてそんなに頑なに信じようとしなないんだい？」と尋ねた。

「んー……なんでか分かんないんだけどさ。ぼく、あの人に近付くと、なんかどうにも嫌な気分になるんだ……嫌、というより、怖いのかな。ぼくはムーデイ先生に、本能的な恐怖を感じているんだ」

ぼくの言葉を聞いて、リーマスは眉を寄せた。

「本能的な恐怖？ それは……妙だね」

「妙だろう？ だから不思議に思っているんだ。そんなに幣原が可愛がられていたとするなら、近付かれただけで全身の毛が逆立つような気分一体どうしてさせられるのか、ぼくにはさっぱり分からない」

「……凄まじいスパルタ指導でも受けてたのかね」

「あー……」

それは盲点だった。

確かに、あの人の「指導」を——本人は善意で行っていたとしてもだ——受ければ身が持つまい。その恐怖が骨身に沁みているから、そんな気分させられるのかもしれない。

でも——。

「……どうなんだろうねえ」

ぼそりと呟いた。リーマスも思慮深げに「覚えておくよ。もしかしたら、とても大事なことなのかもしれない」と頷く。

「……ご馳走様。もうぼく、行かなくちゃ。今年も授業がみっちり詰まっっているんだ」

「学生も大変だね」

「楽しいだけじゃられないよ。……つと、あと一個聞きたいことがあるんだった」

「何かな?」

リーマスから髪紐代わりにリボンを借り(夜中だったので寮に忘れてきてしまったのだ)、髪を結びつつ、ぼくはリーマスを見た。

「幣原秋は、セブルス・スネイプのことが嫌いなのかい?」

リーマスはぼくの言葉に、驚いたように目を泳がせた。

「……何か、言われたのか?」

「まあね。『私に近付かない方がいい』って。今までとは随分と対応が違ったから驚いたけど……その様子じゃ、幣原とスネイプ教授の仲は険悪なんだ」

「険悪……そんな言葉で表せるんならむしろ、良かったかもね」

「……どういうこと?」

目を細め、リーマスが言ったことについての真意を問う。

しかしリーマスはそれ以上は答えようとせず、「ほら、授業に遅れてしまうよ」と言うと、いつも通りの微笑みを見せた。……何も聞くな、ってことか。

「またおいで、秋。今度はケーキでもご馳走しようじゃないか」

「それ、単純に君が作りたいだけだろう?」

くすりと笑った。手を振る。

リーマスの笑顔は、やがて炎に紛れ、見えなくなった。

第15話 魔法契約

段々と夏っぽさが消え、冬らしい風が吹き込んでくるようになった十一月。今日は、レイブンクロー対スリザリンのクイディッチの試合の日だ。

今年度最初の試合ということで、大勢の観客が見に来ていた。去年はクイディッチと魔法魔術大会が被ったりして、なかなか観戦しに行けなかったから、なんだかとても久しぶりな気分だ。

ちなみに、レイブンクロー対スリザリンの試合であり、ぼくはレイブンクローの寮生だけれど、何故かグリフィンドールの観客席にいるということについての説明は……もう不要だろう。

そう、お察しの通り、途中で悪戯仕掛人の四人衆に会いってしまったが運の尽き……って訳。両脇をジェームズとシリウスに、後ろをリーマスとピーターに囲まれて最前列に陣取られちゃ、逃げ場はどこにもない。

……まあ、逃げる気なんてもう起こしはしないけどさ。

「あら、秋じゃない！ こんなところで出会えるなんて！」

……もう一人増えたあ。

リリーがリーマスの隣に加わったことに、ぼくはため息をつくのだった。

逃げはしない、と言ったところで、包囲網が分厚くなるのは嫌なのだ。分かってくれるだろうか、このぼくの気持ちを。

選手が入って、フーチ先生の前に並ぶ。いよいよ試合が始まるのだ。

と、そこで隣のシリウスが舌打ちした。

「どうしたの？」

「いや……あいつがいねえ」

「あいつって？」

「レギュラスだよ……」

シリウスが唸るように呟く。ぼくは身を乗り出して、クイディッチのピッチを見下ろした。

……本当だ、レギュラスがいない。確かレギュラスはスリザリンの正シーカーだった筈なのに。

「あー、君の弟くんかあ。君にそっくりの子だろう？ でも君の方がイケメンだけど」

ジェームズもそんな評価を口にしつつ、「体調でも崩したのかねえ……」と、僅かに心配する声音を零した。

ジェームズもシーカーだから、敵チームとは言え同じポジションな訳だし、少しは気になるのか。

「あいつ、季節の変わり目とか、意外とすつぐ風邪引くんだよな………つたく、自己管理がなってねえ」

「シリウス、心配してんの？」

「誰が心配なんてするか。俺は今までの経験から言っただけだ」

「はいはい」

肩を竦めると、シリウスはむっとした表情でぼくを見た。

「本当だからな」とぼくに念押しする。

「いやーでも、君んちつて本当に不仲だよねえ。僕だつたら息苦しくって逃げ出しちやいそうだ」

ジェームズはどこことなく楽しそうにそう呟いた。

シリウスは「それが出来たらどんなにいいだろうな」と苦い顔で言う。

「やれ純血だ、やれ『穢れた血』だ。何が『高貴なブラック家』だ。高貴なんかじゃねえ、ただ昔つからちつぽけな信念曲げれずに、どうしようもない思想に縋り付いてるだけの家の癖に。黴びて錆びついて、もう見てらんない有様になってんのが、どうして分からないんだか」「そんなこと言つてえ、またブラックご婦人に怒られちゃうぜ？ ただでさえ君は一族の異端児なんだから」

「この歳になって、『ママに怒られるから』で唯々諾々と従つてられつかよ。とつとと成人して、とつとと家を出る。それが最善手さ。ただ……」

そこでシリウスは言葉を切った。ぼくはそつと「……レギュラスが心配？」と尋ねる。

シリウスは驚いた表情でぼくを見ると「……心配、つつー訳じゃねえけどさ」と眉を寄せた。

「とつと目を覚ませ馬鹿野郎、つては、常々思ってる。でも、あいつはスリザリンだ。スリザリンの連中にロクな奴はいねえ」

「見事に全否定したね、君の家族は全員スリザリンだろう?」

「だから分かるんだよ、あそこの風通しの悪さがな。黴臭くなるのも当然だ。……だからこそ、今のあいつにとっては、このままの方がいいんじゃないかなとも思う」

「……複雑だね」

ぼくは本心から、その言葉を口にした。

シリウスは灰色の瞳をクイディツチ競技場に向けたまま、ぐっと背筋を逸らす。

「ああ、そうだな。……スリザリンにいる限り、あいつは今のままでいるのが一番安全なんだ。あいつが、親の思想をそのまんま自分の意志だと思い込んだまま、これから生きて行くのだとしたら……スリザリンや闇の帝王は、他の誰よりもあいつを歓迎して迎え入れてくれるだろう」

だがな、と、シリウスは静かに言った。

「それと俺の気持ちは別だ……いつかあいつと、どでかい喧嘩をしてやる。それでもあいつが分からなかったら、そりやもうあいつはそういう奴だったことだ。見切って出ていくさ、いつまでもあいつの手を引いてはやれねえんだ」

ジェームズは「君は案外お兄ちゃん気質だね」と、意味深な微笑みを浮かべてみせた。



授業が全て終わり、それから夕食までは、忙しい生徒たちがホツと一息つける時間帯だ。

ぼくはアリスと別れ、一人レイブンクロウ寮に来ていた。図書室で返却しておきたい図書があったのだ。

寝室に入ると、そこには既に先客がいた。

予想もしていなかった人物の姿に、ぼくはぱかんと口を開け——
「リドル!？」

叫ぶと、『彼』——トム・リドルは振り返った。ぼくの机に腰掛け、羽根ペンを持ち、何やら書き物をしている。

癖のない黒髪に、赤い瞳。ぞつとするほど整った顔立ち。きつちりと一番上まで留められたスリザリンのローブ。

最後に会った二年生の頃より目線が近く思うのは、ぼくの背が少しは伸びたからか。

ハリーが壊したトム・リドルの日記、そのぼくが破って持っていた分の数ページ。

確か机の中に仕舞い込んでいたはずだ。

「やあ。久しぶりだね、アキ」

そう言ってリドルは薄く笑った。ぼくは恐る恐る近付くと、左手でリドルに触れた。

肩に、背中に、頭に、ちゃんと触れる感触がある。

「どうして……?？」

問い掛けると、リドルは肩を竦めた。

「君の周囲に漂っている魔力は、中々濃くて純度も高い。ジニーの魔力を吸い取っていたときは、それでも実体化には一年弱を要したもんだけど、君の場合はそんな期間もいらないうだね」

「また、何かを仕出かすつもりなのか?？」

秘密の部屋が開かれたあの時を思い出す。また、全校生徒を恐怖と不安に陥れるつもりなのか。

「そんなことはしないよ。信じてくれ」

しかし、リドルは首を振って両手を広げてみせた。

「せっかく君が生かしてくれた命なんだ。君のために使いたいって思う気持ち、信じられないかな?？」

「そう簡単には信じられないね」

「まあそうだろうね」

「一体どうしたっていうのさ」

目を細めて尋ねると、「そんなに怖い顔をしないでよ、悲しいなあ」とリドルは笑った。

「退屈過ぎて死にそうだったんだ。刺激が欲しくってね、本でも借りていつていいかな？」

「うーん……それくらいなら……」

確かに、ひとりですつと日記に閉じ込められる生活は苦痛だろう。ぼくなら一週間で発狂しそうだ。

せめて何かしらの刺激が、娯楽が欲しいという気持ちは共感出来る。

頷いたぼくに、リドルは晴れやかな表情を見せたあと、ぼくの所持する半数以上の本を所望してきた。こいつ、最初から見繕ってたな。

リドルが求める本をどさつと渡してあげると、リドルは「ありがとう」と微笑んだ。

その表情はとても綺麗で、思わずうろたえる。そんなぼくの様子に目敏く気付いたリドルは、声を出して笑った。

「う、うるさいよ……君みたいに綺麗な人、見たことないんだもの……」

「うん、よく言われてた。大丈夫、君のような反応をする人、今までも沢山いたからさ」

それはなんだろう、かなり複雑な気分になるな。顔がいいというのはつくづく羨ましいものだ。

思わずむくれたぼくに、リドルは笑顔でぼくの頭を軽く撫でる。

「こうしてぼくの前に出てきてくれたってことは、ぼくのことを赦してくれたの？」

そう尋ねると、リドルは小さく首を傾げた。

「むしろ逆じゃないのか？ 僕が君に謝らないといけないことは多いけれど、君が僕に謝らないといけないことってあったかな？ 君が自分を『幣原秋』と名乗ったくらい？ まあ、あながち間違いじゃなかったようだけど」

「いや、でもさ……ハリーが、君の本体の日記を壊したんだ。恨まれていても全然おかしくないと思って」

ぼくの言葉に、リドルは少しだけ機嫌悪そうに鼻を鳴らした。

「……僕がこうして出てきたのは、君を許したからじゃない……もつと許せない存在が出来たからさ」

「許せない存在？」

「ああ。そいつに会って、事の真相を確かめたい」

リドルは眉を寄せ、凄絶な表情で笑った。正直、滅茶苦茶怖い。思わず身震いする。

「だからまあ、君や他の生徒、教師、その他ホグワーツに暮らす生き物全てに対して僕は害を与えない、そう約束しようじゃないか」

そう言うときリドルはぼくの右手を取ると、小指に自分の右手の小指を絡めた。まるで、日本の「指切りげんまん」のようだ。

リドルはそのまま、左手の指をパキンと鳴らす。するとどこからともなく赤い細い糸が、ぼくらの小指を結びつけると、やがてお互いの小指に揃いの赤いリングを残して消えてしまった。

「はい、魔法契約終了。これで僕は君に対して嘘がつけなくなりました」

ぼくは右手を広げ、小指に嵌ったリングを見つめる。

そしてリドルに視線を移すと「分かったよ。君を信頼しよう」と頷いた。

「そうしてもらえると助かるな」

リドルは底の知れない笑みを浮かべると、「じゃあね、アキ。本に飽きたらまた来るよ」と告げる。

「ぼくがひとりのときなら、いつでも構わないよ」

と、ぼくは返した。

「……ああ、そうだ。言い忘れていた」

リドルはふと目線を頭上に向けると、独り言のように呟いた。

「僕はいいつの一部だから、微弱だけれど感じるんだ……あいつの力が、大分戻ってきている。アキ。あいつはね、良からぬことを考えてるよ。もつとも、あいつは子供の頃から、『良いこと』を考えたことなんて殆どないんだけどね」

「……良からぬこと」

「きつと、君のような良い子には、一生掛かっても考えやしない『良か

らぬこと』さ。精々気をつけるといい」

「……分かった。気をつけるよ」

「あとね、もう一つ」

リドルは真面目な口調を一転させ、悪戯小僧のように笑った。

「その教科書、大して役に立たないから、僕が書き直してあげたよ」

その言葉を置き土産に、今度こそリドルは姿を消した。

今更図書館に行く気にもなれず、ぼくはリドルの最後の言葉の真意が気になって、机の上に広げられていた教科書を手に取った。そして、思わず吹き出す。

「ああ、リドルが何を書いているのかと思ったら……」

闇の魔術に対する防衛術の教科書（しかし授業で未だ一度も開かれたことがない）「闇の力——護身術入門」が、びっしりと赤いインクで修正されている様を見て、ぼくはふふっと笑った。

きつと許せなかったんだだろうなあ。生真面目そうな奴だし、学生時代もこんなことをしていたのだろう。

ベッドに倒れこみ、右手を天にかざした。

右の小指に嵌ったリングを、ぼんやりと眺める。

リドルのあの心境の変化が、一体どのような結果をもたらすのだろうか。

そう考えると、少しだけワクワクした。

第16話 真夜中の秘密

「それにしても、よくやったよなあ……」

ホグワーツの十一月、それも後半は、もう冬の気配が目前に迫っている。特に深夜ともなれば、気温はぐっと冷え込み、吐く息も白い。

大型犬に姿を変えているシリウスが、ガウガウとぼくに返事をするかのように吠えた。ぼくは笑って「何言ってるか分かんないっての」と言うと、シリウスの首に顔を埋める。

ふかふかで艶やかな毛並みを持つ動物をこうやってもふもふするのは、ぼくにとっては初めてのことで（だって普通の動物はぼくが近付くことすら嫌がるんだから）、この感触はいつまでもこうしていたくなる。もふもふ……。

今、ぼくと悪戯仕掛人の四人は、本来は立ち入り禁止の場所である『禁じられた森』を歩いている。

リーマスは狼姿で、悪戯仕掛人たちは『アニメーガス』を使って、そしてぼくは、ジェームズの家々に代々伝わる代物である『透明マント』を被って、だ。

『透明マント』なんて、魔法界のお伽噺での架空のアイテムだとしてつきり思っていたから、実在していると知ったときは仰天したものだ。ポッター家、凄い。

同時に、これを使って今まで様々な規則破りや悪戯を行ってきたんだな、ということも分かった。やることなすこと人間離れしてると思ったんだ……透明マントがあつたところで、同じことが果たして出来るか、と問われちゃあ、言葉に詰まるけど。

それはさておき、リーマスに人間の気配を悟られないよう、風や香り、音など、ぼくを取り巻くあらゆる環境を緻密に制御するのは、恐ろしく面倒臭い。

そう言って断るぼくを、しかしジェームズは乗せるのが上手かった。口説き落としに本当に強いな、ジェームズは。本気になればリーも口説けるんじゃないだろうか。……リリーにその気がないから無理か。

自分の力を過剰に見積もる気は更々ないけれど、しかしこの術は高度で、誰も彼もが簡単に出来るようなものではないだろうとは思う。そうだなあ……ライ先輩なら、やってのけるだろうか。

リーマスは、心なしか落ち着いているようだ。いや、むしろ普段の悪友らに囲まれて、楽しそうでもある。

人狼を間近で見たのは今日が初めてだから、リーマスの感情を正確に読み取れている自信はないが……なんとなく、そう感じる。

しかし、一体いくつの規則破りをしたのだろう……数えるだけでも恐ろしい。

ジェームズなんかは「規則破りと悪戯は青春の華だ」なんて言っただけで笑っていたわけ。まあ確かに、その言葉には一理あるか。

ふと、先頭を歩くジェームズが道を外れ、横道へと入り込んだ。

牡鹿の姿に変身したジェームズは、動物の姿になったとしても普段通り気まままで、動きを見れば一発でジェームズと分かるほどだ。プロングズ、というあだ名の由来がようやく分かった。

牡鹿の角の先には、一匹のネズミが器用に掴まっている。ワームテールことピーターだ。ネズミらしくなく、後ろ足二本で立ち上がっている。そんなワームテールが、気ままに道を外れたプロングズに驚いたか「どうしよう？」と言わんばかりにこちらを振り向いた。

パッドフットは息を吐くと、リーマスを突つき、プロングズの後を追う。ぼくは振り落とされないように慌ててしがみついた。

ジェームズは、一体どこに向かっているのだろう。いや、特に目的地は存在しないのかもしれない。

当てもなくふらつくことも、よくジェームズがやることの一つだ。木の根っこや石で入り組み、人間であれば確実に足を取られるであろう道を、しかし動物である全員は軽々と進んでいく。

見たこともない色をした植物や一角獣、とても大きな翼を持つ鳥など、森の中は初めて見るものばかりで、ぼくをいつまでも飽きさせることはなかった。

それは、きつと全員が同じなのだろう。初めて見る植物に足を止めることもしばしばだ。

パッドフットが、これはなんだろうと鼻を近付けたものが大石くらのヒキガエルで、それに気付いて「キヤインツ！」と一鳴きし飛び跳ねたときは、さすがに吹っ飛ばされるかと肝っ玉が冷えたけど。うろうろしていたら、森の外れに来ていた。

頭上を遮っていた木々もまばらになり、リーマスはちようど頭の上にある満月に牙を剥くと、ぐるると唸る。

しかし、今日は冷える。パッドフットにくっついていなかったら、きつと凍えていただろう。

犬つてこんなにあつたかいんだ、知らなかったな。

パッドフットの前足が、シャリと音を立てて地面を踏みつけた。

先ほどと音が変わったのに気付き、ぼくは顔を上げた。そして目を瞪る。

この場所だけ、雪が積もっている。そして雪の間から、小さな芽が覗いていた。

その芽は一つ一つが様々な色に発光しており、真っ白な雪に反射して、幻想的な光景を醸し出している。

悪戯仕掛人たちが足を止めたのに、ぼくはひらりとシリウスから降りると、マントをすっかり手繰り寄せ、その芽に駆け寄った。

シリウスが「どこに行くんだ」と言わんばかりにワンと鳴く。しかしぼくは、今まで見たこともない新しく幻想的な植物に目を奪われていた。

そつと手を伸ばし、一つを摘み上げようとするも、案外しっかりと雪に根を張っている。

触った感触は、想像していたものよりも冷たくはなかった。触れた指先を見てもみるが、鱗粉のように指に粉がつくことはないようだ。すると、内部から発光しているのか。

「来月になれば……花がついているかもしれないね」

そう呟くと、プロングズは「そうだね」と言わんばかりに頭を縦に振った。

ぼくらは気が済むまで、ずっと目の前の光景を見つめていた。



毎日の授業はどんどん難しくなっていた。なんでも、来年受ける「ふくろう試験」を見据えてのことらしい。ため息しか出ない。

中でも、闇の魔術に対する防衛術は、そのもつとも極まるものだった。

「服従の呪文を破る練習をする。各自、杖を取って立ち上がれ。呪文に屈するな、撥ね退けるのだ。油断大敵！」

ムーディ先生はある日、唐突にそう言った。

「二人一人にかけて呪文の力を示し、その力に抵抗できるかどうかを試す」

ムーディ先生の言葉に、教室中はざわめいた。

意を決して言ったのはハーマイオニーだった。

「でも、先生。それは違法だとおっしゃいました。同類であるヒトにこれを使用することは——」

「ダンブルドアが、これがどういうものかを体験的にお前たちに教えて欲しいというのだ」

ムーディ先生はハーマイオニーの言葉をむべもなく突っぱねた。

「もつと厳しいやり方で学びたいというのであれば——いつか誰かがお前にこの呪文をかけ、お前を完全に支配する、その時に学ぶというのであれば——わしは一向に構わん。授業を免除する。出ていくがよい」

教室中が静まり返った。

ハーマイオニーは結局教室を出ていくことはなかった。

ムーディ先生は生徒を一人一人呼び出すと、「服従の呪文」を掛けていく。

ネビルは見事な体操演技を立て続けにやってのけたし、アリスは情感込もった見事な声音で『ロミオとジュリエット』のワンシーンを熱演してみせた（腹がよじれそうだった）。

誰も呪いを破れた者はおらず、ムーディ先生が呪いを解いてようやく皆、我に返った表情できよろきよろ辺りを見回していた。

「ハリー・ポッター」

ムーディ先生の言葉に、ハリーが前に進み出た。その指先が微かに震えているのを見つける。

ムーディ先生が杖を上げた。途端に、ぞわぞわっと嫌な気がぼくの身体中を這い回る。

「……何の真似だ」

ムーディ先生は杖を下ろした。

気がつくとはぼくは、ハリーを庇うように先生の前に立ち塞がっていた。いつの間にか、左手には杖を握りしめている。

これにはぼくの方こそ驚いた。いつハリーの前に躍り出たのか、全くもって記憶がない。

急いで退こうと思ったが、しかし身体は足に根が生えたかのようにピクリとも動かなかった。

(もしかして、お前なのか？ 幣原)

心の中で呟いた。

「アキ・ポッター、授業の邪魔をするなら出て行くのだ。それとも、お前から掛けてやろうか？ ……インペリオ！」

閃光が飛んでくる。ぼくは思わず身構えたが、しかしぼくの身体はそんな気持ちとは裏腹に、軽く杖を一文字に横薙いだ。

それだけで、呪文は目の前で四散する。

「ふむ……なるほど。確かに、呪文は掛けられるよりも先に防ぐべきだ。アキ・ポッター、お前の考えは正しい。……しかしだ、アキ・ポッター。そうお前がこうして守っているだけでは、お前の兄君の力は伸びんぞ」

「……………」

後ろを振り返ると、ハリーが心配そうな目で立っていた。

「僕、大丈夫だよ。やれるよ。ありがとね、アキ」

優しく微笑んで、ハリーは言う。ぼくは頷いて、後ろに下がった。

(大丈夫だ、幣原。ハリーはきつと大丈夫。だってぼくの自慢の兄貴

なんだから)

先ほど動かなかった身体は、今回はちゃんとぼくの思い通りに動いてくれた。

ハリーが「服従の呪文」を破る様子を、ぼくは黙って見つめていた。

第17話　ゴブレットは語らない

幣原秋が、現・闇の魔術に対する防衛術教師であるマッド　ーアイ・ムーディを警戒しているのは間違いない、というのが、ぼくの中での結論だった。一体どうしてなのか、その理由はさっぱり分からない。すぐここにいるのに——どうやって連絡を取ったらいいのか、その感覚が、ぼくにはかなり歯痒かった。



ボーバトンとダムストラングの代表の人たちが十月三十日に到着するという知らせは、風よりも早く校内を駆け回った。城は普段よりも念入りに大掃除され、なんだか心なしか明るく見える。

困ったのは、管理人のフィルチだ。校内を汚す奴には断固鉄拳制裁の構えで、靴の汚れを落とし忘れると凄まじい態度で脅すため、皆の悩みの種となっていた。

先生方も心なし緊張した面持ちで、授業はますます難しく、厳しくなっていた。普段通りなのは——ムーディ先生くらいだろうか。

十月三十日の朝には、大広間は煌びやかに飾り付けられていた。各寮それぞれのシンボルが、巨大な垂れ幕となって壁にかかっている。入り口入って正面、教職員が座るテーブルの後ろには、ことさら大きいホグワーツ校の紋章が描かれた垂れ幕が掛かっていた。

朝から、その日は誰もが浮き足立っていた。

ボーバトンとダムストラングの生徒は、一体どのような人たちなのだろう。ホグワーツの生徒以外の魔法学校生を見たことがないから、こうなるのはもつともなことだ。

ぼくだってそれは同じだった。他校生との交流なんて初めてだ。

終業のベルが鳴ると、ぼくらは一斉にレイブンクロー寮へと駆け戻り（こういうときに限ってドアノックカーが難しい問題を出してくるのだ！ 法の外にいるのは誰か？　なんて……）、カバンを置くと、入学卒業の儀でしか袖を通さない正装に着替え、慌てて寮を出て、玄関

ホールに向かった。

そこでは各寮の寮監が生徒達を整列させていて、ぼくらは小さなフリットウィック先生を探すのに時間が掛かった。

「レイブンクローの諸君！ レイブンクローの諸君！」

やがて、レイブンクローの監督生、ロジャー・デイビースに肩車されたフリットウィック先生の指示に従い、正面の石段を下りると城の前に整列する。

もう秋が終わるのか、日が落ちるのが早くなった。この時間なのにもう東はとつぷりと暮れ始めている。

じりじりと待つだけの時間が過ぎ去り、生徒たちもざわざわとしてきたところで、ダンブルドア先生が声を上げた。

「わしの目に狂いがなければ、ボーバトンの代表団が近付いてくるぞ！」

その声にざわめきは更に強まった。

一体どこから近付いているのだろう。キョロキョロしていると、隣にいたアリスに腕を掴まれた。

「あそこだ！ 見てみろ！」

そう言つてアリスは、禁じられた森の上空を指し示す。アリスの横顔は無邪気に驚きと興奮に満ちていて、ぼくは珍しいものを見た、と少し得した気分になる。

空を飛ぶ大きな水色の馬車が、やがて姿を現した。馬車は天馬に引かれていて、それぞれがとても大きいだろうことが予想出来る。

馬車はどんどん高度を下げると——やがてぼくらの目の前に着陸した。地響きがぼくらの足元を揺らす。

馬車の扉には、紋章だろう、二本の金色の杖が交差し合い、杖から三個の星が飛んでいる絵が描かれていた。

馬車からボーバトンの女校長、マダム・マクシームが出てくる。とっても大きい。その後ろに、水色のローブを着た男女学生の姿も見えた。大人びた顔立ちや背丈から、全員が十七歳以上であることは容易に分かった。ついでに、全員が全員美男美女だったことも。

……壮観だな、こりや。目がチカチカしてくるよ。

続いて、ダームストラングの一行が姿を現した。大きく堂々とした船が、湖から顔を出す。

やがて降りてきた学生は、誰もが厳しい顔つきをしていて、ボーバトンとはまた違った印象を受けた。

一番先頭を歩いているのは、恐らく校長だろう。一人だけ銀色の毛皮のコートを着ている――。

「……………」

彼――カルカロフ校長を目にした瞬間、何とも言えない気持ち悪い感覚が体内を駆け巡った。悪寒と形容するのが一番近いかな。ぞわり、と肌を内側からくすぐるような感覚。

ムーディ先生と対面したときの気分に近いが、しかしそれほどではない。

それに、その感覚は一過性のものだった。

カルカロフが、最後の一人を招き寄せる。一人暖かそうな毛皮を身に纏ったその人に、見覚えがあった。生徒間でもざわめきが走る。

「クラムだー！」

この前ロンの家族と一緒に見に行った、クイティツチワールドカップ、そのヒーロー。

ブルガリアの代表選手としてシーカーを務めていた彼が、まさかまだ現役の学生だったとは。

ボーバトンとダームストラングの生徒を迎えた後、ぼくらは再び玄関ホールを横切ると大広間に向かった。

ボーバトンの生徒はレイブクロウのテーブルについていたため、男子からの密やかな歓声（彼女らに伝わらない程度の大きさで）上がる。

ダンブルドアのいつも通り短く簡潔な口上が終わった後、豪華な夕食がテーブルを覆い尽くす。今日は客人も多いためか、見たこともないような外国料理も数多く並んでいた。

振り返ると、ダームストラングの生徒はスリザリンのテーブルについていた。アクアのすぐ近くに、ビクトール・クラムが座っている。思わず気を取られたが、ボーバトンの女子生徒に話しかけられ、ぼく

は視線をアクアから外した。

「あー、こんにちは。ホグワーツにようこそ、どうかこの滞在が、素晴らしいものになりますよう……」

そう口にして、ふと彼女の顔立ちに見覚えがあることに気付いた。それは、彼女も同じようだった。

とても綺麗な女の人だった。粒ぞろいのポーバトン生の中でも際立つ美人だ。それに、凄く大人っぽい。

長いシルバードブロンドの髪に、深く澄んだ青い瞳。抜けるように白い肌。

もしかして――

「あの、クイディッチワールドカップの！」

「ハーン、そうです！ この前は妹をどうもありがとうございました！」

やっぱりそうだ。クイディッチワールドカップで、ぼくの目の前で転んだ女の子のお姉さん。すごい美人だったから覚えている。

でもまさか、向こうもぼくのことを覚えてるなんて思いもしなかった。

「お隣よろしいですかー？」

ぼくが何かを言うよりも早く、彼女はぼくの隣に腰掛ける。レイブンクロウの生徒の目が一齐に（しかしさりげなく）ぼくを見据えたのに慌てた。それほど絶世の美少女だった。

「あー、えっと、名前を聞かせてもらっても？」

「オーウ、フラーです。フラー・デラクール。あなたのお名前は？」

「かわいい男の子」

「アキ。アキ・ポッター」

「アキ！ これからもよろしくお願いしまーす！」

ギュツと手を握られ、ぶんぶんと振られる。

そしてふとテーブルに目を遣ると、「この辺りにはブイヤベースがないですねー」と呟き、長い銀髪をさらりと手で払った。思わず目が行く。

「ブイヤベース？」

「存じませんかー？ 魚介のごった煮鍋みたいなもんでーす。あちらのテーブルにあげるようなので、ちよつと行ってきーますね」

そう言つて、フラーは立ち上がるとテーブルを離れた。ぼくは小さく息を吐く。

とそこで、隣のアリスに肘を突つかれた。

「見ろよアキ、お嬢サマが面白い顔してやがる」

なに、アクアが。

慌てて振り返るも、既にアクアは普段の無表情で、両手にマグカップを持ってゐる。そんな小動物のような姿も可愛らしい。

「お前は相変わらさずお嬢サマラブだなあ。あんな美人に手え握られて。殺意とか感じないのか？ お前」

「あ、やっぱり殺意向けられてた？」

「そりやそうだろ」

「とつても美人さんだったものねえ」

と、すぐ近くに座っていた一学年上の先輩、チヨウ・チャンは、ぼくらの会話を聞いて穏やかに笑つた。

「羨ましいなあ。私もあんな美人に生まれたかったよ」

「チヨウは美人じゃないか」

心の底からそう言つと、チヨウは僅かに目を瞬かせた後、吹き出すように笑つた。

「ねえアリスくん、アキくんっていつもこの調子なの？」

「ああ。調子狂うだろ？」

「どんな調子だよ」

「そんな調子だよ」

どうやらアリスとチヨウは分かるらしく、二人で笑い合っている。

ぼくは頭の中で疑問符を乱舞させていたが、フラーが戻ってきたのを機に、まあいいや、と思考を戻した。

あらかた夕食の皿が空になったところで、今度はデザートが、これまた見たことのない様々なものが出てきた。

それも空になると、ダンブルドアが改めて立ち上がった。生徒は静まり返り、一斉にダンブルドアを見つめる。

ボーバトン、ダームストラングの生徒も、ダンブルドアを見上げた。「時は来た。三大魔法学校対抗試合はまさに始まろうとしておる。『箱』を持ってこさせる前に、二言、三言説明しておこうかの——」箱って何のことだろう？ 思わず首を捻った。

その後、ダンブルドア校長は審査委員会のバーテミス・クラウチ氏とルード・バグマン氏を紹介すると、フィルチを呼び寄せ、大きな木箱を持ってこさせた。ダンブルドアの前のテーブルに置く。

「代表選手たちが今年取り組むべき課題は三つ。どれも代表選手をあらゆる角度から試すためのものじゃ——魔力の卓越性、果敢な勇気、論理・推理力——危険に対処する能力なんかもそうじゃ。

試合で競うのは、参加三校から各一人ずつ、三人の代表選手じゃ。選手は課題をどのように巧みにこなすかで採点され、三つの課題の総合点がもつとも高いものが優勝杯を獲得する。代表選手を選ぶのは、公正なる選者——『炎のゴブレット』じゃ」

ダンブルドア先生が杖で木箱の蓋を叩くと、箱はゆっくりと開いた。

出てきたのは、口から青白い炎を零すゴブレットだ。ダンブルドア先生は木箱の上にゴブレットを置く。

「代表選手に名乗りを上げたい者は、羊皮紙に名前と所属校名を書き、このゴブレットの中に入れてなければならぬ。立候補の志ある者は、これから二十四時間の内にその名を提出しよう。明日、ハロウィーンの夜に、ゴブレットは、各校を代表するに最もふさわしいと判断した三人の名前を返してよこすであろう。

このゴブレットは、今夜玄関ホールに置かれる。我はと思う者は、自由に近付くが良い。

尚、年齢に満たない生徒が誘惑に駆られることのないよう、『炎のゴブレット』が玄関ホールに置かれたなら、その周囲にわしが『年齢線』を引くことにする。十七歳に満たない者は、何人もその線を越えることはできぬ」

「なんだって！」

悲嘆に暮れた声があった。ウィーズリーのあの双子だ。

そう言えば、あの二人は四月に誕生日だったつけ……。

「おうおう、残念なことじゃ」

ダンブルドア校長は軽く流すと、表情を引き締め、続けた。

「最後に、この試合で競おうとする者にはつきり言うておこう。軽々しく名乗りを上げぬことじゃ。『炎のゴブレット』がいったん代表選手と選んだ者は、最後まで試合を戦い抜く義務がある。ゴブレットに名前を入れるということは、魔法契約によって拘束されることじゃ。代表選手になったからには、途中で気が変わるといふことは許されぬ。じゃから、心底、競技する用意があるのかどうか確信を持った上で、ゴブレットに名前を入れるのじゃぞ——」

誰もが静まり返って、ダンブルドア校長の言葉を聞いていた。



『年齢線』か——なら、『老け薬』で誤魔化せないかな？」

「ダンブルドアが見張っている訳じゃああるまいし！ ゴブレットに名前を入れちゃえばこつちのもんだろ」

翌日は土曜日だというのに、この日に限っては皆が早起きだった。

『炎のゴブレット』を間近で一日見ておこうと一人早朝に起きてきたのだが、ゴブレットの周りには既に人が四、五人いた。どうやら考えることは皆同じらしい。

ゴブレットはホールの真ん中に、丸椅子の上に置いてあった。普段組み分け帽子が乗っている椅子だ。

そして、ゴブレットの周りの床に、金色の線で円が描かれている。半径およそ三メートルといったところだろうか。

玄関ホールの入り口のあたりでたくさんの人が近づいてくる足音が聞こえて、ぼくは振り向いた。

ダームストラングの生徒だ。昨日見た人数とほぼ変わりない。先頭を歩くのはカルカロフ校長で、そのすぐ後ろにはビクトール・クラムが続いていた。

周囲で見ているぼくらに一瞥もくれず、ダームストラングの生徒は

整然と『年齢線』を跨ぐと、既に用意していた羊皮紙をゴブレットに投入していく。

「すっごいや」

すぐ近くにいた少年が、目を輝かせた。

やがて、ハリーとロン、ハーマイオニーも降りてきた。彼らも見にくるだろうと思っていた。

「おはよう、三人とも」

そう笑いかけると、三人はてんでバラバラに「おはよう」と返してきた。

「もう誰か名前を入れた？」

「ダームストラングの生徒が、ついさつき。ホグワーツはまだ誰も見てないな」

「昨日の夜のうちに、みんなが寝てしまってから入れた人も思うと思うよ。僕だったらそうしたと思う……」

ハリーは考え込みながら言った。自己評価が低いこの兄は、案外こういう小心者などころがある。

「ゴブレットが、名前を入れたとたんに吐き出してきたりしたら嫌だろ？」

ぼくらは笑ったが、ぼくら以外の笑い声も聞こえてきた。

そちらを振り返ると、フレッド、ジョージの双子に、リー・ジョーダンが階段を数段飛ばしに駆け下りてきているところだった。最後の十数段を、双子は勢い良くジャンプすると、空中で一回転して軽やかに着地する。すっごい運動神経だ。尊敬してしまう。

思わず拍手を送ると、双子はにかつと笑って左右から同時にぼくの頭をわしゃわしゃっ！ と撫でた。

「ちよつと！ 髪ぐしゃぐしゃにしないでよー！」

「悪い悪い！」

双子はそう言ってぼくにウインクをすると、ぼくとハリー、ロン、ハーマイオニーをかき集め、耳打ちした。

「今飲んできたんだ」

「何を？」

『老け薬』だよ。ロン、鈍いぞ」

「二人一滴だ。俺たちはほんの数ヶ月分、年を取りやあいんだからな」

「三人のうち誰かが優勝したら、一千ガリオンは山分けにするんだ」

へえ、よくやったもんだ。あの校長の『年齢線』がそんな子供騙しに引つかかるとは思わないけど、そのチャレンジ精神は尊敬するぞ。

しかし、ハーマイオニーは慎重派だった。

「でも、上手くいくとは思えないわ。ダンブルドアはきつとそんなことを考えてあるはずよ」

しかし双子とリーは聞こえないフリをした。

「それじゃ、いくぞ——俺が一番乗りだ——」

そう言つて、フレッドが——恐らくフレッドだろう、ぼくには双子の見分けがつかないが、こういうのに真つ先に手を挙げるのは大体フレッドなのだ——線の上で立ち止まり、せーのっ、の勢いで円の中に足を踏み入れた。

上手く行つたのか、と、一瞬誰もがそう思った。

「やった！」

ジョージが後を追つて飛び込んだ、次の瞬間——ジュツという大きな音とともに、二人はポーンツと円の外に放り出されると、数メートルほど軽々と吹き飛んだ。

ひやりと肝っ玉が冷えるのもつかの間、ポンと大きな音がする。

起き上がった二人には、白く長い顎髭が生えていて、玄関ホールは大爆笑に包まれた。双子も互いを揃つて指差しながら笑い出す。

「忠告したはずじゃ」

面白がっている声音で、ダンブルドアが大広間から出てきた。双子を楽しそうに鑑賞している。

どこことなく、してやったり、みたいな雰囲気が出ていた。

「二人とも、マダム・ポンフリーのところへ行くがよい。既に二人ほどお世話になっておる。少しばかり年を取る決心をしたようじゃ、君らと同じようにの」

笑い転げているリーに付き添われて、双子は医務室へと向かった。

双子はまるで英雄たちの凱旋のように肩を組み、周囲に手を振っている。自然と拍手が湧き上がっていた。

これで立派な顎髭さえなければなあ、普通に格好良いんだけど。

「朝から良いものを見れたよ」

ぼくらはクスクス笑いながら、大広間へ朝食を取りに向かった。

大広間は、昨日とはまた違い、すっかりハロウィン仕様に仕上がっていた。天井を飛んでいるのは生きたコウモリか。大きくなり抜きカボチャはあちこちで笑顔を見せている。

ハリーたちと別れ、レイブンクローのテーブルに向かったとき、「アキ！」と誰かに呼び止められた。セドリック・ディゴリーだ。

爽やかな笑顔を浮かべ、ハツフルパフのテーブルから立ち上がると、ぼくに近付いてくる。

「セドリック」

「良かった、すっかり元気そうだね」

「心配かけてごめんね。もう大丈夫だよ」

そう言うと、ホツとしたようにセドリックは笑った。そして「髪ぐつしやぐしやだけど、大丈夫？」と指摘する。そういえば、忘れてた。

「あの双子が……」

「フレッドとジョージ？」

「そう」

髪を解いて手早く整え、元のように結び直す。セドリックは黙ってぼくの様子を見つめていたが、ふと「君はどうして髪を伸ばしてるんだい？」と訊いてきた。

ぼくはちよつと考え込む。

「うーん、昔はね、理由みたいなものもあっただけど」

言葉を切って、続けた。

「今はそう大した理由はないよ。なんとなく、長い方が落ち着くんだ」

「ふうん……僕も、髪伸ばしてみようかな」

「……似合わないと思うよ、セドリックは」

セドリックみたいな爽やか好青年は、髪が短くさっぱりとしていて

こそだろう。

ぼくの真意がどれくらい伝わったのかは分からないが、セドリツクは「それもそうか」とあっさり納得した。

「実はね……まだ誰にも言っていないんだけど」

そう言つて、セドリツクはぼくの耳元に顔を近付ける。

……腰を屈められると、なんだか悲しくなつてくるな。ぼくの成長期はまだか。

「昨日の夜、ゴブレットに名前を入れてきたんだ」

「へえ、すごいじゃん！」

素直に目を瞞つた。セドリツクが選ばれたなら納得だ。紳士が服を着て歩いているような奴なんだもの。

「しっかし、何で夜？ 朝じゃダメなの？」

「朝だと人がいるじゃないか……もし名前を入れて、ゴブレットに吐き出されでもしてごらんよ。みんなが見ている中そんな目にあつたら、立ち直れないぞ、僕は」

なんだかハリーと同じことを言っている。二人とも妙に自己評価が低いなあ。

「なににせよ、君が選ばれることを期待してもいいんだね？ ぼくは」

「……ああ、期待しておいてくれ」

につこりと笑うと、セドリツクも笑い返した。

そうしてふとセドリツクは真面目な表情でぼくに言う。

「……年齢制限なんてなければいいのに」

「……………」

真つ直ぐな視線が、ぼくを射抜いた。

「君の魔法の腕は、誰にも劣らない。真性の一級品だ。君こそ、学校の代表に相応しいのに……」

「止めようじゃない、セドリツク。そいつは理想論つてもんだよ。ぼくは自分より、セドリツクの方が相応しいと思う。ぼくみたいな奴が学校の代表なんて、恥晒しもいいところさ」

何かを言いたげにセドリツクの瞳が揺れたが、ぼくはにつこり微笑むことでそれを押し留めた。

「朝ごはん、食いつぱぐれちゃう。もう行ってもいいかな？」

「あ、ああ。すまないね、長々と話し込んでしまつて」

「ううん、大丈夫」

ぼくはセドリックにひらひらと左手を振ると、「今夜を楽しみにしているよ」と言い残して、足を踏み出した。



大広間は、水を打ったように静まり返っていた。

炎のゴブレットは、四人目の代表選手の名前を吐き出した。一人目はダムストラングのビクトール・クラム。二人目はポーバトンのフラー・デラクール。三人目はホグワーツのセドリック・デイゴリー。

そして、四人目が……ぼくの兄、ハリー・ポッター。

ハリーは凍りついたように目を見開いて座っていた。

うろろうと所在無げに彷徨っていたハリーの視線が、ぼくを捉える。その目は全く予想外だと訴えていて、誰かがハリーの名前をゴブレットに入れたのだということ、強力な魔法契約の品であるゴブレットを騙し四人目の代表者の名前を吐き出させた者がいるということ、如実にぼくに伝えてきていた。

様々な人の言葉が、ぼくの頭の中をぐるぐると回る。

「いらぬお世話だろうが、用心しろ——あいつはね、良からぬことを考えているよ——」

誰が。一体、誰が、こんな真似を。

「ハリー・ポッター！ ハリー！ ここへ、来なさい！」

ダンブルドア校長は声を張り上げた。ハリーはハーマイオニーに促されて立ち上がると、ローブの裾を踏んだのか僅かによるめき、そして壇上へと向かった。

ダンブルドア校長は真面目な顔でハリーを代表者のいる部屋に促すと、静かな瞳で辺りを見回し——ぼくを見据えた。

それは一瞬のことだったが、ぼくにははつきりと分かった——ダンブルドアは、ぼくと狙って目を合わせたのだと。

「……全ての代表選手が出揃った。宴はこれで解散とする」

そう言つて、ダンブルドアはくるりと身を翻し、素早い足取りで代表選手が集まる扉の奥に消えて行つた。ダンブルドアの後ろに、クラウチ氏やカルカロフ校長、マダム・マクシーム、マクゴナガル先生、スネイプ教授も続く。

ざわめきで、大広間は一気に埋め尽くされた。誰も彼もが今の出来事について——四人目の代表者について——選ばれるはずもないハリ・ポッターについて——話している。

そのうちの視線の何割かが、じつとぼくを見ていることに、ぼくは気がついていた。不躰な視線が背中や首元にチクチク刺さる感覚が気持ち悪い。

「出るぞ、アキ」

アリスがぼくの腕を掴むと引つ張つた。素直に続く。

「一体、誰が……チツ」

アリスは舌打ちすると、小さな声で零した。

「信じられねえよ、全く……」

嗚呼、全く、その通りだよ。

第18話 Moony

本日の闇の魔術に対する防衛術の授業内容は、守護霊の呪文だった。「学習する内容としては高度なものだけれど」と前置きして学んだこの呪文は、座学で既に二回、そして実践で三回の講義を予定しているらしい。

今日は、二回の座学が終わり、初の実践授業だ。

今年の防衛術の先生は、どうやら当たりのようだった。何の因果か毎年変わる防衛術の授業、その今年の先生、アメリカ・スミス女史は、丁寧で親切な教え方で、授業も分かりやすいと評判だ。

この先生なら、このままぼくらの卒業までいて欲しいと思うけれども——まあ、あまり期待するのも止しておこう。

守護霊の呪文は、最も難易度が高い呪文の一つらしい。吸魂鬼やレシフォードに対する唯一の防衛術として知られており、ほとんどの魔法使いや魔女は実体のある守護霊を創り上げることが出来ないため、この呪文を完璧に使えるものは、ウイゼンガモットや魔法省の高官に選ばれることも多いという。

ぼくらは現在五年生だが、年相応の教科書には載っていないため、スミス女史は別にプリントを配布してくれた。

彼女は、この一年間をぼくらにどれだけ有意義な呪文を教えられるかに対して全力だ。そんな彼女の姿勢を、ぼくはとても好ましく思う。もつとも、ふくろう試験を控えた身であるぼくらに、その試験の範囲外である呪文を教えることに對する批判がないこともない。しかし、一度でもスミス女史の授業を受けた者であるならば、彼女がどれだけ教育に真摯であるかは分かるだろう。だから、概ね生徒からの評判は上々だった。

世論は、どんどん暗くなる一方だった。日刊預言者新聞は、今朝も闇の陣営と第一線で戦っている闇祓いの戦死を報じていた。数年前まで存在した明るい話題は、もう長らく紙面に上っていない。

それでも、ぼくらは目を逸らしてはいけないのだ。この、何とも知れない戦いから。気分がげんなりするような記事ばかりでも、脳に焼

き付けるようにして読んでいるのは、そんな意地のせいだろう。

だから、たとえふくろう試験が間近に迫っているようにとも、この授業——闇の魔術に関する防衛術で、試験の範囲外だからといって、誰も手を抜こうとはしないのだ。

まさしく今が、この授業の真骨頂。自分がどのようなようにして闇の魔術と戦い、そして生き延びるのか——それが何より、試験でいい点数を取るよりも重要なのは、誰もが自然と知っていた。

闇の魔術に対する防衛術の教室は、机が綺麗さっぱり下げられ、広々とした空間が作られている。そこで各々は自由に散らばって、『守護霊の呪文』を実践した。

「エクスペクト・パトローナム」

教室の隅、悪戯仕掛人のすぐ近くで、ぼくは呪文を唱えると杖を振った。脳内で、必死に幸せな思い出を想う。しかし杖からは霞のような靄が溢れるばかりで、ぼくの思い出とは裏腹に、実体なんてとっちやくれない。

確かに難しい呪文なのかもしれないが、呪文に関して今までぼくが行い出来なかった呪文はこれが初めてで、少し愕然とした。これは、ちゃんと気を引き締めなければならぬようだ。

しかし、杖から靄を出せたのも極々少数のようだ。実体なんて言うまでもない。教室をぐるりと見渡しても、ぼく自身と、ジェームズとリーマスくらいしか見当たらない。

ジェームズも、普段はへらへらしている顔を真面目なものに変えていた。いつも通りじゃ、この呪文は使えない、ということに気付いたようだ。

「この呪文は、何よりも精神力が重要となります。自分の心の隙を、幸福な思い出で埋める。これが、守護霊の呪文の最大の肝なのです」

スミス女史の声が聞こえる。幸福な思い出、と、ぼくは記憶の中を探った。

幸福な思い出。

ぼくにとっての——幸福。

——父さん、母さん。

両親のことを思い出して、ぼくは眉を寄せた。歯を食いしばる。ぼくはとても幸せな子供だった。あの両親の間に生まれて来れたことを、何より誇りに思っている。

たとえば、他にどんなに恵まれた夫婦があつたとしても。どれだけ財力に恵まれていようと、どれだけ賢くあれたとしても。ぼくは、自分を産んでくれた両親の元に、もう一度生まれたい。

様々な、キラキラとした思い出を——ぼくは必死に掻き集めた。何一つ、手放さないように。

全てを、絶対に忘れないように。

「エクスペクト・パトローナム」

——この呪文は、まるで祈りのようだ。

届かぬ想いを杖に乗せ、制服越しに胸に掛けているロケットを掴み、ぼくは祈る。

ふわりと、杖が白い靄を生み出した。やがて靄は形を作るようにその場に留まると、ゆるやかに翼を広げ、空間を滑るように静かに飛行する。あれは——カラスだ。レイブンクローの紋章にも描かれている、知性の象徴。

自分の守護霊を作り出すのに夢中になっていたからか、ぼくは周囲が自分に注目していることも、教室中が静まり返っていることにも気付かなかつた。

ミス女史が大きく手を叩いたことで、はっと我に返って辺りを見る。

「ブラボー！ 幣原秋くん、さすがです。君なら出来ると思つていました。レイブンクローに十点を差し上げましょう」

ミス女史の言葉に、拍手が湧く。素直な賞賛に面映くなって、ぼくは少し俯いた。

「さすがは僕の秋！ 素晴らしいね！」

と、後ろから飛びつかれる。この声は振り返るまでもない、ジェームズだ。「お前のじゃないぞー」と言いながらも、シリウスはぼくの頭をうりうりと撫でてくる。

リーマスは、穏やかな笑みを浮かべて近付いてきた。

「君の守護霊はワタリガラスか。じゃあ君のあだ名は『レイブン』だ。これからもよろしくね、レイブン」

友人からあだ名を付けられるなんて、初めての経験だった。今まで、『呪文学の天才児』なんていう、エンクローチエらが流した二つ名しかなかったから、純粹に友情のみで付けられたあだ名が、すごく嬉しかった。

「よし、僕も負けていられないな」

そう言っつて、不敵にジエームズは笑った。軽く肩を回すような動作をすると、咳払いをし、目を閉じる。再び目を開けたときには、刺すような集中がジエームズの周囲を漂っていた。

——さすが、学年主席。

「エクスペクト・パトロナム」

杖先からふわりと、白い動物が姿を表す。それが何の動物なのかは、目を凝らさずとも、ぼくと悪戯仕掛人には一瞬で分かった。

牡鹿だ。『動物もどき』でジエームズが化けた姿と、角の形も体格もまるつきり一緒。『動物もどき』で自分が化ける動物は、自分じゃ選べないと聞いたけれど、守護霊の呪文とこんな関連性があるのは驚いた。そしたら、ぼくが『動物もどき』になれば、ワタリガラスに姿を変えられるのだろうか。

ジエームズに対しても、クラス中から大きな拍手が送られる。スミス女史はグリフィンドルにも十点プラスしてから、ぼくとジエームズに、「他の子にコツをアドバイスしてあげてください」との言葉を受けた。

「コツ、つて言ってもなあ……えいや、つてやったら出来たんだよなあ……」

そう言っつて首を捻っているのはジエームズだ。天才肌のこの友人は、おそらく出来ない人の気持ち分からない。なんでもちよちよいつつとやっちゃうもんなあ、憧れちゃうよ、全くもう。

「ぼくは、一つの強烈な幸せより、今までの幸福な思い出をどれだけ掻き集めるか、つて考えながらやったら、上手く出来たよ。……自分の大切な宝物をね、何一つ零さないように両腕でしっかり抱える、そん

な気持ち」

へえ、とも、ほお、ともつかない声をジエームズは上げた。そんなこと思いつきもしなかった、と言わんばかりの表情で、メガネの奥の瞳を瞬かせている。

周囲を見渡すと、ふとりリーの姿が目にとまった。彼女も守護霊の呪文に悪戦苦闘しているようだ。どうして上手くいかないんだろう、と言わんばかりに、ぎゅつと眉を寄せて杖を握りしめている。

「あんまり硬くならない方がいいよ。幸せなことを思い浮かべるとき、身体に力は入らないはずだから」

そう言ってりリーの肩に触れると、りリーは大きく肩を震わせ勢いよくぼくを振り返った。その勢いに、思わずぼくもびっくりする。

「……あ、秋だったのね、気付かず……ごめんね」

「あ、いや、ぼくも驚かせちゃって、ごめん」

さすがに、女の子の肩を後ろから無遠慮に触るのは、ちよつと配慮が足りなかったか。どうも、ぼくは鈍感でいけない。今後はもう少し気をつけることとしよう。

「おやおやどうしたんだエバンズお困りかい!? 今こそ僕の出番のようだねっ、僕が流星のように君の前に降り立ち、君のサポートを華麗にこなして見せようじゃないか! さあ! 僕の胸に飛び込んでおいで!」

「お呼びじゃないわ、ポッター。すっこんでなさい」

りリーの声が、ぼくと話していたときよりも二オクターブがくんと下がった。瞳に絶対零度の色が見える。不快感を表すかのように、りリーの眉間に深く皺が刻まれた。

しかしジエームズはめげない。こいつはへこたれるということがないのか、とまで思う。

「照れる必要はないよエバンズ! 僕が手取り足取り教えてあげようじゃないか。君が望むんだったら、それこそ大人の恋愛のイ・ロ・ハ、も……」

ジエームズが言い終わるより、りリーの拳がジエームズの腹にめり

込む方が早かった。ジェームズが芸術的に、教室の床にゆっくりと崩折れる。リリーは鼻を鳴らすと、両手をパンパンと打ち鳴らした。そしてぼそりと呟く。

「……いくら冗談でも、そういうこと、秋の目の前で言わないで欲しいわ……」

「え？」

聞き返したぼくに、リリーは頭を振ることで答えた。

「……大丈夫かい？ ジェームズ」

腰を屈めジェームズにそう尋ねると、呻き声が返ってきた。良かった、失神してはいないようだ。

一瞬ピーターがジェームズに対して心配そうな目を向けただけで、シリウスとリーマスはジェームズを見もしない。さすが、付き合いが長いだけのことはある。

リーマスは目を閉じて、神経を集中させているようだ。そして「エクスペクト・パトロナム」と呪文を唱え、杖を振り上げる。リーマスの杖先から靄が噴き出た。その靄が何かを形作ろうとしたのを見て、ぼくとジェームズ、そしてリリーは拍手を送る準備をする。

リーマスの守護霊は、一体どんな形になるのだろう。期待に表情を輝かせているのは、リーマスも同じだった。自分にも、この呪文を扱うことが出来た。そんな喜びが、彼の表情を明るくさせていた。

しかし、靄がその形を作った瞬間、リーマスは愕然と目を見開いた。ぼくからも思わず目を瞪る。

幸せな思い出を保持出来なくなったのだろう、リーマスの守護霊はすぐさま姿を消してしまった。そのため、ぼくら以外にリーマスの守護霊を目撃した人はいないようだ。沈鬱に俯くリーマスに疑問を抱いているのはリリーだけだった。

リーマスの守護霊は、彼が忌避して止まない苦悩の象徴、狼だった。ジェームズが、パツとぼくを見る。声が出せないジェームズ自身の代わりに、ぼくがリーマスにフォローをしてあげないと。しかし、今のリーマスにどんな言葉をかけてあげればいい？

「……ムーニー」

考えがまとまらないまま、でも何か言わないといけないと思い、ぼくは口を開いた。

考えろ。考えろ。考えろ。

リーマスの表情を明るくするために最適な方法を、考えるんだ。

「……君のあだ名、まだ決まっていなかったよ。どうだろう、これは？ 月に狂わされるのは、誰だって同じだ。どうせなら、折角狂うのなら」

一緒に狂おう。

共に饗宴を開こう。

ぼくらは地の果てまでも、君に着いていく。

「……秋」

ぼくの言葉が、どこまで伝わったのかは分からない。

分からないが、しかし。

「……ありがとう、僕の共犯者」

彼の意地にも似た笑顔を再び見ることが出来たので、ひとまずまあ——
—良しとしよう。



三大魔法学校対抗試合の第一試合目は、十一月二十四日に行われることが発表された。その知らせを、ぼくは黙って聞いていた。

ロンは、ハリーが本当に自分で自分の名前をゴブレットに入れたと思っっているらしい。もつとも、大半が、ハリーが誰かに嵌められて代表選手となったとは思わず、ハリーがハリー自身の意志で代表選手になったと決めつけているようだが。ハーマイオニーがハリーの味方となつて信じてくれているのは、不幸中の幸いか。

十七歳以上という制限が設けられるほど過酷とされる三大魔法学校対抗試合に、十四歳の選手が出て、無事に済むとは到底思えない。誰かが——ハリーの命を狙う誰かが、裏で糸を引いている。しかし、それは一体誰だ？

ハリーの命を狙う人物——と言えば、真つ先に思いつくのはヴォル

デモートだ。そして、彼に恭順を誓う死喰い人の面々。

不安で仕方がなかった。不穏な兆候は、前からあったのだ。クイ
ディッチワールドカップで、闇の印が打ち上げられてからというもの

寒気がしたのは、冷たい旋風が巻き起こったことだけが原因じゃない。
い。

ぼくはどうすれば、ハリーを守れるのだろうか。

「ぼくはどうすればいい——幣原、教えてくれよ……」

声に出して、囁いた。

「ハリー・ポッターを守る、それだけが、お前の……ぼくの生きる、理由
なんだろう……」

ぼくの言葉に返事が来ることは、なかった。



「ドラコッ!!」

私——アクアマリン・ベルフェゴールの声に、ドラコはぎよつとしたように振り返った。そして、私から逃げるようにわたたとスネイプ教授の後ろに転がり込む。私はそんなドラコやクスクス笑う同級生に対し眉を寄せると、ハーマイオニーの方に駆け出した。

ハーマイオニーの前歯は、もう喉元を通り過ぎるほどに伸びていた。私は制服を脱いでハーマイオニーの頭から掛けると（彼女は私より十五センチは背が高かったから少し苦労したが）、スネイプ教授を振り返った。

「……彼女を医務室に連れていきます。構わないかしら？」

スネイプ教授は僅かに眉を顰めたが、小さく頷いた。それを見て、私はハーマイオニーの肩を抱くと、急いでその場から離れる。

「全く、ドラコったら、本当、どうしようもない、子供なんだから——」

「あ、アクア……ごめんなさい、手を煩わせて……」

「あなたの謝罪は求めていないわ。私はドラコに腹を立てているのよ」

そう言うと、ハーマイオニーは小さく息を呑み、そして「……ありがとう……」と言って泣きじやくり始めた。

医務室にはすでに、ゴイルと、彼の付き添いのクラブがいたが、ゴイルはもう処置が終わるようだった。さすがマダム・ポンフリー。ひとまず別室で待っているようにと言われ、医務室の隣の小さな部屋にハーマイオニーを促した。彼女をソファーに座らせると、ふと窓辺に歩み寄る。ついこの前まで、あれだけ多くの葉っぱを茂らせていた木が、もう冬の装いになっていた。時間が経つのは本当に早いものだ、と小さく嘆息する。

「ねえ、アクア……」

後ろから声を掛けられた。ハーマイオニーだ。いくら私の制服を頭から被せたままだとしても、顔を見られたくはないだろう。そう思っただけ振り返らずに「……何？」と返した。

「何で、アクアは……私を助けてくれるの？ だって、あなたと私はグリフィンとスリザリンなのよ……それにあなたは、マルフォイの幼馴染で、とつても由緒正しいお家の生まれで……私みたいな『穢れた血』と関わっちゃ、いけないわ……」

「ハーマイオニー」

少し、口調が荒くなった。それでも構わない。

「……その言葉は好きじゃないの。いくらあなたでも、その言葉をもう一度口にしたら、頬を張るわよ」

私の言葉に、ハーマイオニーは黙った。

「……あなたが私の大切な友達だからよ。……私に言わせれば、あなたの方が奇特だわ。スリザリンにも友達がほとんどいない私なんかに声を掛ける。なんて変な人なのかしら、あなたも……アキも」

窓越しに空を見上げた。夏よりも薄い色の空は、どこまでも高く、澄んでいる。

様々な柵を解いて、早く抜け出したい。家も寮も何もかも捨て去って、広い世界を見てみたい。

「……ドラコに代わって、謝るわ。本当にごめんなさい。ドラコはふざけてるだけなの、それで傷つく人のことを何一つ考えてない……」

フェイスナーに一発殴られれば、少しは目が醒めるといいのだけど」
「どうだろうか。よく分からない。」

最近、ドラコが遠く感じる。いや——私が段々と遠ざかって行っているのかもしれない。もう私には、ドラコが何を考えているのか分からない。ずっと、一番近くで見てきたはずなのに——。

……私は——どうするべきなのだろう。

幼い弟、ユークは守らないといけない。フェイスナーに憧れを持つあの子は、その心のままにレイブンクローに飛び込んだ。出来るなら、そのまま——両親の思想に染められず——自分の意思で、自分の行く末を決められる子になって欲しい。

「……アクアは、ハリーが本当にゴブレットに名前を入れたと思ってる?」

ハーマイオニーは囁いた。それに関する私の答えは、シンプルだ。

「……ポッターは、アキの嫌がることはしない。そしてアキは、ポッターを危険に晒すことはしないわ」

私は、アキを信じている。

唯、それだけ。

それだけ分かっていたら、十分でしょ?

「……ねえ、ハーマイオニー」

ずっと、誰かに聞いてみたいことがあった。誰かに打ち明けたくつても、でも、一体誰に打ち明ければいいのかも分からない、そんなどうしようもない気持ちを抱え続けていた。

ハーマイオニーなら、聞いてくれるだろうか。この、胸の中でざわめく、私の気持ちを。

先日、ホグワーツ特急で、豪雨の中私に縋った彼の言葉は、私の聞き間違いではなからうか。

『ぼくは、君を好きでいていいの?』

思い出すたびに顔が熱くなるこの思いは、一体どうすればいいのだろうか。

「……アキって私のこと、どう思っているのかな」

この世界は、分からないことだらけだ。

でも、それも悪くはないのかもしれない。

第19話 プライド

「スネイク」

それは、日曜の日暮れのことだった。ふらふらと廊下を歩いていたセブルス・スネイクは、目の前に立ち塞がった人影に、ふと足を止めた。顔を上げる。

「何の用だ」

唸るように呟けば、三人組はせせら笑った。無遠慮に、一番屈強そうな一人が、セブルスの胸倉を掴み上げる。抵抗出来ずにセブルスは、両手に持っていた荷物を落とす。

バラバラと地面に散らばる本や筆記用具の音を、そしてそれらが他の二人に蹴り飛ばされる音を、醜い耳障りな笑い声を聞いて、セブルスは眉を寄せた。

三人組がその身に纏っているローブの裏地は、自らと同じ緑色。――そして、おそらくは一つか二つ歳上だ。

そのことに気付いて、セブルスは、絶対に抵抗する素振りを見せないこと、声を上げずにただただ嵐が過ぎ去るのを待つこと、決して彼らに何も喋らないことを、自らに課した。

「何の用か、分かかってない訳じゃあないだろ? 『穢れた血』と長年付き合っていると、輝かしい脳みそまでも鈍重になっていくのかい? それとも、元々がそんなに愚鈍なのかな?」

周囲に目を凝らすも、辺りは人っ子ひとりいない。その程度の狡猾さくらい、スリザリン生なら誰もが持ち合わせているということ、自身もスリザリン生であるセブルスにも身に沁みて理解していた。ぐ、と、ただただ耐えて彼らの気が済むのを待つことを、セブルスは覚悟する。

心を殺して、耳を塞ぐのは、セブルスの得意とするところだった。

物心つく前から、暴力は身近にあった。父は酔うと母と自分に手を上げる人物だった。マグルで、到底尊敬出来る人物ではない。母はいつも、そんな父に涙を流していた。冷え切った家族仲で、セブルスは生まれ育った。

だから、セブルスにとっては、幣原秋の両親のような親がいるなんて、信じられないことだった。穏やかな父親に、ほんわかと優しい母親。

現実味がない、と思うほどに、幣原秋の両親は、セブルスにとって理想だった。

空中に持ち上げられ、首が絞まって息が出来なくなる。それでもセブルスは、考えに頭を浸し続ける。

それが、セブルスなりの自己防衛だった。現実を直視しないこと。それが、セブルスにとって心を守る唯一の術だった。

こんな両親の元で生まれ育ったからこそ、幣原秋のような、どこまでも善良でお人よしで、純粋な笑顔を浮かべられるような人間が出来るのだ、ということ、あの時セブルスは悟った。同時に、自分はどんなに頑張っても、幣原秋にはなれないということも。

誰にでも愛され、そして愛された分だけちゃんとして愛し返せる、彼のような人物には、逆立ちしてもなれないのだと。

自分は、何もしなくても人が集まってくるような人物にはなれない。

自分が今持っているもので勝負出来るほど、自分の手持ちのカードは強くない。

だからこそ——闇の魔術という強いカードを求めるのは、ある意味で真理であった。

「何度言わせれば分かるかな？ 『穢れた血』と関わるなって。これは君のためにも言っているんだよ？ スリザリンの品位を落とすような真似、君もしたくはないだろう？」

空中で手を離され、地に這い蹲った。息が止まる。耐えず飛んでくる暴力の嵐に、セブルスはただ、目を閉じた。

自分は弱い。秋よりも、リリーよりも。そんな自分が、あの二人を守りたい、だなんて——なんてお笑い種。

ならば、あの二人に並びうるほどの力が欲しい。二人の背中を追うのではなく、せめて、肩を並べて歩きたい。

そのためなら——そのためなら、セブルスはなんだってやるだろ

う。

悪魔に魂までも——売ってみせるだろう。

それがどんなに愚かしい行為なのかに、気付くこともなく。

「本当、『半純血』の癖に、取り入るのが上手いよな。ルシウス先輩、ベルフェゴール先輩しかり」

腹を、強く踏みつけられる。髪を乱暴に引つ張られ、無理矢理起き上がらされたところを、再び突き飛ばされた。

一体、こんなことをして何になるというのだろう。セブルスの意見を変えさせたいのなら、もつと他に手を打つべきだ。暴力では、セブルスは変わらない。痛みや暴言に、セブルスは慣れ過ぎていた。

むしろ、生ぬるい、とまで思う。

これなら、マグルの父がやることと何ら変わりはない。むしろ父の方が、生命の危機を感じる分、彼らに勝る。

そもそも、暴力を以って他人を支配しようとするなんて、高尚な魔法使いが取るやり方ではない。

こんな下賤な連中は、セブルスにとって眼中にもない存在だった。マグルと同じく、歯牙にも掛ける価値のない存在。

単純な腕力を、それも一対多数で弱者に対し振るうことに、一体どれだけの価値が存在するのだろうか。

「ここまでされて、まだあの『穢れた血』と関わろうとするなんて、そこまであの女が大事かよ、スネイプ」

ああ。

大事だ——と、セブルスは思う。

誰よりも何よりも、大切な存在だ。

「じゃあ、あの女——壊しちゃおうか?」

その言葉に、初めてセブルスは顔色を変えた。セブルスの表情の変化に気付くことなく、彼らは下卑た笑い声を上げる。それはいい考えだ。気の強そうな美人を組み敷くのは大好きだ——そういう、耳を覆いたくなるほどの品のない言葉に、セブルスは杖を掴み半身を起こす。しかし瞬時に、杖ごと蹴り飛ばされ、セブルスは地面に蹲った。「何、正義ヅラしてるんだい? 闇の魔術に頭の先までどっぷり浸

かった奴が、今更誰かの物語の主人公になれるとでも？　ねえ、『半純血のプリンス』君？」

かろうじて目を開けると、その言葉を発した人物は、いつの間にかセブルスの教科書を手に取っていた。

パラパラと、彼は教科書を——正確には、セブルスが記した余白の落書きを——見遣る。

「凄いいねえ、流石だねえ。闇の魔術とミックスさせて新たに呪文を作り出すなんて、一体どこまで深く沈めば出来ることなんだろうねえ。例えば——『セクタムセンプラ』」

閃光に、思わず目を瞑った。全身を刀で滅多に切り裂かれたような鋭い痛み。顔に、腕に、足に、身体に、全身から、まるで鎌鼬カマイタチに襲われたかのように血が噴き出す呪文。——セブルス自身が考案した呪文。

ローブが、みるみる血で染まる。床に血だまりが出来た頃、やっと彼は反対呪文を唱えてくれた。

身体の傷は癒えても、身体はジクジクと熱を持ったように痛み続ける。また、失われた血液は戻ってこない。身体を起こしたら、目眩がするだろう。

「——いい呪文だね、本当、素晴らしい呪文だ。何より、この反対呪文でしか癒えない、というところが最高だ。……君は暴力じゃあ意見を曲げないみたいだけど、君自身が考案した呪文だと、一体どうなるんだろう——試してみようか。何度今の呪文を繰り返したら、君が音を上げるのか。それとも、出血多量で君が昏倒するのが先か」

杖を振り上げる彼らの目に宿るのは、狂気。
痛みを堪えるように、セブルスは身を強張らせ——

「何をしている！」

鋭い声が、廊下を響き渡った。蜘蛛の子を散らすように、と言ったが早いか、見つかったと分かった瞬間、彼らは素早く走り出し、あつという間に角を曲がって姿を消してしまう。

声の主——幣原秋は、左手に杖を持ったまま、三人組が消えた方向をじっと睨みつけていたが——もう追いつけないと悟ると、ぱつとそ

の表情を泣き出しそうな悲しげなものに変えた。

セブルスの元に駆け寄ると、「大丈夫!」と、その大きな瞳を揺らす。

「ああ……大丈夫だ」

「でも、血が……」

「傷自体はもう消え失せている」

秋はそれでも、セブルスを心配するようにあらゆる場所に目を走らせた。心配する必要がある、とセブルスは右手を振り、立ち上がろうとするも、足に力が入らずその場に尻餅をついた。

「セブルス!」

秋は座り込むセブルスに、右手を差し出した。

しかし、秋は純粹な好意のみで、ただただセブルスを心配するあまりの行為だと分かっている、セブルスはその手を取ることは出来なかった。

同情されたようで——憐れまれたようで。

自分の考えすぎだということくらい、気付いている。秋は、そんなことを考える人物じゃないことを、一番自分がよく知っているはずだ。

「……自分で立てる」

そう口にして、セブルスは秋から目を外した。秋は、少し驚いたようだったが、すぐさま手を引つ込めると「……ごめん」と呟く。

セブルスは足を引きずりながら、寮までの道を歩いた。

思っていた通り、あの純粹で優しい少年は、セブルスの後を追ってくることはなかった。



ハリーら代表選手四人は、新聞記者の取材と杖調べの儀を受けたということを、ハリーから聞いた。シリウスが無事だということ、そして、シリウスが直接会って話したいということも。二週間後の十一月二十二日を、ぼくらは待ち侘びた。

ハリーの味方は、とても少ないようだった。特に、ロンがハリーの

そばにいないというのは大きな痛手だ。ハリーがロンをどれだけ精神的に頼りにしているのか、ロンはさっぱり気付いていない。

ぼくが付きっ切りでハリーのそばにいたかったが、寮が違うぼくらにとつて、それは無理な相談だった。

まるで、秘密の部屋の再来だ、と思う。

噂で、ぼくがハリーの名前をゴブレットに吐き出すように仕向けた、というものも耳にした。様々な噂が飛び交う中では、悪くない方だと思う。ぼくはハリーが望むのだったらなんだってしてあげたいし、実際にゴブレットを『錯乱』させようと思えば……多分、やって出来ないことはないだろう。なるほど、悪くない読みだ。

唯一外れているのは、ぼくがハリーを危険な目に合わせるわけがない、ということをお分かっていないところか。

「……ねえ」

ぼくの周囲ですら、ハリーが自己顕示欲で名前を入れたと思ってる人とそうでない人の比率は、甘めに見積もったところで三割程度だ。むしろ、三割もいてくれることに有り難みを感じるべきなのかもしれない。

「アキ？」

ぼくとハリーは、いつそのこと露悪的に、時間さえ合えばよく行動を共にするように心がけた。

ハリーだけを矢面に立たせるよりは、せめて矢の矛先を分担したい、という裏の思いもあった。

「ねえ、聞いているの、アキ!!」

ローブのフードを後ろからぐっと引つ張られ、ぼくの思考はそこで中断した。ぐえ、と情けない声が喉から漏れる。

よろめきかけた身体をなんとか戻して振り返ると、そこには怒った表情のアクアが立っていた。

「あ、アクア……」

「……ずっと呼んでるのに、どうして気付かないのかしら？」

「う、ごめん……」

考え込むと周りが見えなくなるのは、ぼくの悪い癖だ。反省する。

でも、一体どうやって直せばいいのだろう、分からない。

それにしても、久しぶりにアクアと出会った気分だ。もしかして、始業式の日にはホグワーツ特急で会ったのが最後なのか。

あの日のことを思い出すと、もう大分時間が経ったはずなのに、まだ顔が熱くなる。あんなことを喋るつもりじゃなかったのに。

記憶力には自信があるぼくだけど、あの時激情任せに叫んだ言葉はよく覚えていない。一体自分は、あのとき何を口走っただろうか。変なことを言いはしなかったか。

「……またぼうつとしてる」

気付けば、アクアがぼくを覗き込んでいた。その距離の近さに、ぼくは慌てる。

「別にぼうつとなんてしてないさ。……それより、一体どうしたの？

ぼくに何か用事でも？」

ぼくの言葉に、アクアは一瞬逡巡した。しかし迷いを断ち切るかのように頭を振ると、決心した顔でぼくに向き直る。

……うん、だから、近いって。この子はぼくを殺す気か。

「……今度の土曜、空いてるかしら」

「うん？　土曜？　予定は入ってない気がするけど……」

でもなんだろう、今度の土曜、何かあったような気がするんだけど。なんだったつけ……。

ぼくの言葉に、アクアは少しだけ表情を和らげた。「……よかった」と弾む口調で呟くと、「じゃあ、土曜、入り口で待ってる」と微笑み、ぱつと駆け出して行った。

その後ろ姿を見て、はつと雷に打たれたような衝撃がぼくの頭のとっぺんからつま先まで駆け巡る。

「土曜って……ホグズミードじゃん……っ」

来たれ、ぼくの時代よ。

第20話 指輪

「なんか今日、気持ち悪いな、お前」

「そ、そんなことないよー」

アリスに言われて、ぼくは思わず冷や汗をかいた。

今日は待ちに待った土曜、ホグズミード休暇の日だ。しかも、アクアと一緒に。これを喜びと言わずして何が喜びだろうか。

今日は普段より一時間も早い、日もまだ昇っていない時間に目覚めてしまった。まるで遠足が楽しみな子供のようだ。……似たようなものか。

呆れたようにアリスは笑うと、「まあ、せいぜい頑張るんだな」と言い、ぼくの頭をわしゃわしゃと乱暴に掻き混ぜた。いつもだつたら怒るところだが、今日は機嫌がいいので寛大にも許してあげよう。

「ところでお前、そんな指輪してたっけ？」

アリスに右手の小指を突かれ、ぼくは紅茶のカップを手放すと右手を広げた。

赤色に鈍く輝く指輪は、繋ぎ目が存在しない。その場で回転はするものの、抜こうと引っ張ってもさっぱり抜けない。そういう風になっている。

「最近ね、ちよいと」

そう明るく言うアリスは、少しむっとしたように眉を寄せた。

「……はん。趣味の悪い指輪だな」

「……えへへ」

微笑む。

「アリス・フィスナーー！」

と、そこで聞き慣れた高い声がした。見ると、猛然とこちらに向かって走ってくるユークレース・ベルフェゴールの姿。慌ててその場から飛び退くと、ちようどさつきまでぼくがいた位置に向かって拳を突き出したユークは「チイツー」と先輩への敬意も虚しく舌打ちした。

……ちよつと、全く。毎回毎回、本当に君はいいところの長男坊なのかよ。……って、アリスを忘れてた。アリスもいいところの長男坊

だったな、そういえば。しかも、ユークはアリスのことをどうしてか滅茶苦茶好いているわけだし、今更か。

ユークはぼくが今さっき飛び退いた場所であるアリスの隣にちやつかりと腰掛けると、「おはようございます、アリスー」と姉に似たキラキラした笑顔を振り撒いた。姉は表情があまり変わらないのに、随分と表情豊かな奴だ。本当にお前ら姉弟かよ……とは思うが、顔のつくりはかなり似ているから、姉弟であることは一目瞭然なんだよなあ。

しかし、姉が大好きなユークにだけは、今からアクアと一緒にホグズミードに行く、なんてことは口が裂けても言えないぞ。アリスもその辺は分かってくれると信じているけど、どうも心配だ。

もしユークにこのことが知られたら、ぼくはロープでぐるぐるに縛られて湖に捨てられる気がする。そうするだけの行動力を持つてる、ユークは。

「ぼくには『おはよう』は言わないんだな、ユーク……」

大きいため息をついて、ユークとは逆側のアリスの隣に腰掛けると、ユークはいけしゃあしゃあと「いたんですか、アキ」と言った。いたんですか、じゃねーよ、さつき凄まじい勢いでぼくに襲いかかろうとしたのは一体誰なんだ。

ユークはぼくの言葉を鼻で笑った。

「アキが小さすぎて見えなかっただけですよお」

「君に言われたくないね！　ぼくよりも低い君にはね！」

「僕はまだまだ成長期が来てないだけです！　二つも歳下の後輩に向かってなんと大人気ない人なんでしょう！」

「ぼくだってまだ成長期が来てないだけだい！　成長期が来ればニョキニョキ伸びて、君なんて目じゃなくなるんだい！」

「それはごつちのセリフです、アキ・ポッター！」

「なにを！」

「お前らうるせえ、俺を挟んでケンカしてんな」

アリスに二人まとめて拳骨を喰らい、ぼくらは仲良くテーブルに突っ伏して悶えた。

うう、いつてえ……何こいつ、こいつの拳って鉄かなんかで出来てるの？ 人体とは思えないんだけど。

「だってユークが……」

「だってアキが……」

「もう一発ずつ喰らうか？」

「ごめんなさい」

ユークと声を揃えて謝ると、アリスは息をついて両手を下ろした。そしてユークを半眼で見下ろすと「で？ ユーク、何か用があんじやねえのか」と尋ねる。

アリスの言葉にユークははっと目を見開くと、「忘れていました！」と言って頭を起こした。全く、忙しい奴だ。

「アキには言われたくありません！」

「なんだと！」

そう口答えしつつも、ユークはローブのポケットから一通の封筒を取り出すと「これ、アキ・ポッターに渡してくれと頼まれました」と言い、ぼくに差し出した。

封筒を受け取り、しげしげと見る。青いインクで書かれた文字には見覚えがあった。

「ねえユーク、これ、一体誰が？」

封筒を開け、中の便箋を開きながら尋ねたぼくに、ユークは一言で答えた。

「アルバス・ダンブルドアが」

……あー、滅茶苦茶嫌な予感がする。むしろ、嫌な予感しかしない。このまま見なかった振りを決め込みたい、そう思いながらも目を通して、ぼくは小さく呻いた。

「……なんで、よりにもよって今日なんだよ……」

『アキ・ポッター ならびに 幣原秋

朝十時に校長室へ。合言葉は知っているね？ 必ず来なさい。

アルバス・ダンブルドア』



幣原秋の名前を使ってくるのは、卑怯だ。ぼくにとってその名は、絶対的な意味を持つ。その名前を出されたら、ぼくは逆らえない。

『必ず来なさい』と最後に付け加えられなくても、『幣原秋』に宛てられたものだということだけで、もう自由を奪われたのと同じことだ。

「アクア、怒るよなあ……」

本来なら、今頃は二人で楽しい時間を過ごすはずだったのに。

そう考えるだけで、自然と眉が寄っていく。畜生、どうして今日なんだ。

イライラしながら校長室に行くと、ダンブルドアが飄々と迎えた。

挨拶も手短かにソファに腰掛けると、ダンブルドアは「苛ついておるようじゃの」とぼくの顔を覗き込む。

「……そりゃ、朝からいきなり呼び出されりゃあ、こうもなりますよ。

折角のホグズミード休暇だというのに……」

「おお、そう言えばそうじゃったの。すまんかった」

……よく言うよ、全く。

ダンブルドアが杖を振ると、ぼくの前に紅茶が『出現』した。一言礼を言うと、左手でカップの取っ手を掴み、口をつける。

「……で？ ぼくに一体何の用なんです？ それともアキ・ポッターではなく幣原秋をこそ望ですか？」

そう意地悪く言うと、ダンブルドアは「おお、なんて捻くれた子に育ってしまったんじゃ……」とさめざめ嘘泣きをした後、急に真面目な表情でぼくに向き直った。

「両方に用があつての。まあ、君に言えばあやつにも伝わるから、呼び出す必要もない。楽なものじゃ」

「……………」

そーですか。

「まず一つ目じゃが……あまりハリー・ポッターにむやみやたらと近付くでない」

「……嫌だと言ったら？」

「おお、わしには君に強制する権限はない。だがの、アキ。三大魔法学校対抗試合は、基本的に選手が一人で戦い抜く過酷なものじゃ。それに君が手を貸すことは、ホグワーツ魔法魔術学校校長として好ましいものではない」

「ハリーは自分の意思でエントリーしたんじゃない。誰かに嵌められたんだ。ハリーの命を狙っている奴がいる、それも、ゴブレットに細工が出来るほど強い魔力の持ち主が」

即座に、ダンブルドアの言葉に異議を並べ立てた。

「アキ・ポッターはハリー・ポッターを守るために生まれてきたんだ、そうでしょう？　ぼくの生きる理由なんだ。ハリーが死んだら、ぼくは存在価値がなくなってしまう。存在意義を見失ってしまう。『ハリーを守る』、それだけの目的で、幣原はぼくを作ったんだ」

「……本当にそれだけだと思っておるのか？」

ダンブルドアに見竦められ、思わず怯んだ。

「……違うんですか」

「君はもつと賢い子だと思っておったが、どうやら思い込みが過ぎるようじゃ。見えているもの、耳にしたこと、それだけが真実ではないことを、君はもつと学ぶべきじゃの。『計り知れぬ叡智こそ、我が最大の宝なり』——ロウエナ・レイブンクローの設立したレイブンクローの生徒は、事実ばかりを尊び過ぎることが欠点じゃ。文字や数字のみが全てではない。数式でこの世界全てを書き表せると思ってるうちはまだまだ若い、ということじゃな」

「……………」

煙に巻かれる気分だ。ぼくは下唇を噛むと、代わりに尋ねた。

「ハリーが自分の意思でゴブレットに名前を入れたとお思いですか？」

「分かりきっている問いかけをするでない、アキ」

打てば響く、その言葉の通り、ダンブルドアの答えは明確だった。

ぼくは考えて、口を開く。

「……分かりました。ハリーにはあまり干渉しない……それでいいんでしょー？」

「それが賢明な判断じゃ」

「……あなたの考えが、ぼくの想像通りなら……その目論見が上手く行くことを願っています」

「……やっぱり君は聡明な子だの」

ダンブルドアはそう言うと、にっこりと笑った。

「第二に」

そして、滑らかな口調で言う。

「セブルスと和解するのじゃ」

ぼくは目を見開いた。

胸の辺りが途端にぎわめく。

身体が無意識に震え出すのを、ダンブルドアに見抜かれないように堪えた。

「……和解、なんて、仲違いするつもりは、ぼくには」

そう、ぼくは何もしていない。

ぼくを拒絶してきたのは、スネイプ教授の方だ。いや——元はと言えば、幣原秋が、スネイプ教授に何かしら言ったのか。

幣原と教授は、一体いつ出会い、言葉を交わしたのだろう。ぼくには分からない。

「ぼくは……教授のことは、嫌いじゃなくて……そりゃ、確かに意地悪だしハリーに対して大人気ない仕打ちするし課題面倒臭いものばかり出すし困った大人だし……」

スネイプ教授のことを思い出す。

一番最初、執着と憎悪の籠った瞳でぼくの胸倉を掴んだ時のこと。その後、ぼくの頭の怪我に包帯を巻きながら、幣原秋について語った時の、あのがらんどろで空虚な瞳。秘密の部屋について語ってくれた時の教授。ダイアゴン横丁で、お茶に連れていってもらったこともあったつけ。

どれもこれも、話題の中心は幣原秋だった。

「……でも、教授は、幣原秋をひとりぼっちの地獄から助けてくれたんだ。明るい世界へと引っ張り上げてくれたんだ。教授は……」

『幣原秋の恩人だから』、そう言おうとした瞬間、目も眩むほどの激し

い頭痛に襲われた。思わず頭を押さえる。

やがて頭痛が引いていき、ぼくは目を開けた。

ダンブルドアは黙ってぼくを見つめていたが、静かに口を開いた。

「……そんなに口にされたくなかったか——秋よ」

ひう、と耳元で、風が鋭く鳴る。

幣原秋は、にこりと微笑んだ。



「久しぶりじゃの。十年ぶりかのう?」

「十二年です。相変わらずお元気そうで何より」

もうそんなになるか、とダンブルドアは呟いた。

ぼくは背中をソファアにゆったり倒すと、足を組み合わせ、両手を合わせる。

「セブルスと和解しろと? 何ですか」

「君らの……君とセブルス、そしてリリーの因縁は、この老いぼれがちやーんと知っておる。もしかすると、君以上にな」

「なら、どうして」

「先ほども言うたじやろう? 秋。聞いておったかの? 事実だけが全てではない。見えるものが真実とは限らない」

ぼくはダンブルドアを見据えた。

この狸爺、どこまで気付いているのか。

「君がアキ・ポッターを作った理由を思い返すとよかろう。『ハリー・ポッターを守る』を掲げておきながら、ハリーの話の時でなく、セブルスの話の時に出てくることもな」

「……自覚がありますよ」

指先を合わせ直す。

「それで十分でしょう」

「……秋。セブルスはとても悔いておる。知っているのじやろう?」

彼が毎年君が死んだあの日に、君の墓の前で蹲るように懺悔しているのを。知っているのじやろう? 彼の思いを。知っているからこそ、

君は——」

「知っているよ」

ダンブルドアの言葉を遮る目的で、声を張り上げる。

「……あいつは、生きた人間を見ていない。そこがぼくには気に食わない。死者を、ぼくやリリーばかりを追って、目の前にいるハリーとアキ・ポッターに、ジエームズと幣原秋の幻想を重ねてる。アキはそれに気付いてる。気付いてて、でもそんなの悲しいから、気付かないフリをしてるんだ」

「……………」

「セブルスの時間は、ぼくが死んだあの時から止まったままだ。幻想の中のぼくとリリーに縛られて、前に進めずにいる。ただの同僚となったリーマスに対しても敵意を向け、シリウスのお話を聞こうともしない。ハリーを、アキ・ポッターを……見てくれない。……だから」
小さく息を吐いた。少し躊躇って、そして茶化すように続ける。
「そうだな、セブルスとシリウスが握手でもしたなら、セブルスと和解するのも悪くないかな」

まあ、無理だろうけどね。

そう付け加えると、ダンブルドアは笑って「了解じゃよ」と言った。

ぼくは肩を竦めて、紅茶のカップを再び手に取り、一気に煽る。

「…………おや、その指輪」

と、ダンブルドアがぼくの右手小指の指輪に目を留めた。ああ、と呟いて、右手を広げる。

「とある奴からね、魔法契約の証として貰ったんです。あいつは、意外とアキ・ポッターを好んでいるみたい」

「ほお。君は奴のことを憎んではおらんのかの？」

「あいつのことは憎んでませんよ。学生時代で切り離されたあいつには、ぼくが恨みを抱く理由はない」

それに、と思う。

あいつも、ぼくと同じだ。

「いい指輪でしょう？」

「ああ、その通り、いい指輪じゃ」

ぼくは目を細めて、小指の指輪を見つめた。

「それと、あと一つ」

ダンブルドアの言葉に、ぼくは目を瞠った。

「頼まれてはくれんか、秋」



気がつくのと、既に夕方だった。校長室の大きな窓から、西日が差し込んでいる。

ソファアから飛び起きると、ダンブルドアは「おお、起きたかの」と飄々と言った。

「……っ、あー、つつーことは……幣原だなー、幣原なんだな……」
頭はもう痛くない。がしかし、むしゃくしゃする。

髪を解いて、思いつきり両手でかき混ぜた。それだけで、なんだかすっきりした。単純なのかもしれない、自分。

「教授と仲直りしろってやつ。あいつ、なんて言いました？」

髪の毛を手早くまとめながらダンブルドアに尋ねると、ダンブルドアは笑って「セブルスとシリウスが握手したら考える、じゃとよ」と言った。

「ああ、それはなかなか難しい」

「勝算はどのくらいじゃと思うかの？」

「うーん、そうだな。万に一つくらいは、あるんじゃないですか？」

適当に答える。

というか、そこまで嫌いかよ……一体何があれば、親友とそんなに仲違い出来るんだ。

「そう言えば、アキ」

ダンブルドアの言葉に振り返る。そんな出だしで始まった言葉に、ぼくは表情を凍らせた。

「君はその身体で恋愛をすることに対して、どう思っているかの？」

「……あいつが、何か言ったんですか」

ダンブルドアに向き直る。

「さてのう。今はわしが質問している、君はそれに答えるべきじゃろう」

「……今この身体を主体に扱っているのはアキだ、幣原じゃない。ぼくの意味でぼくの身体をどう扱おうが、幣原に何かを言われる謂れもない」

様々なことが、脳裏を駆け巡る。

自分が幣原と身体を共有していることに気がついたこと、幣原がぼくを『作った』こと。ぼくが見たもの聞いたものを、幣原秋は感じ取れるということ。リーマスの家に泊まったとき、魔法を使ったにも関わらず魔法省から手紙が来なかったこと。

何も答えてくれない幣原秋。

始業式、ホグワーツ特急にて、雨の中アクアに縋ったこと。

『ぼくは、君を好きでいいの?』

「……………っ」

思い出した。あの日、自分がアクアに何を口走ったのか。

激情の最中、理性を放り投げて叫んだあの言葉を。

血の気が引いた。

「……………失礼します」

ローブを翻し、足早に校長室を出る。

ダンブルドアは、何も言って来なかった。



「……………はあ」

頭がくらくらする。精神的な疲れだろう。廊下の窓辺に腰掛け、息をついた。

土曜だからか、普段は生徒で溢れかえる廊下も閑散としている。まだ、ホグズミードへ行った生徒は帰ってきていないようだ。ホグワーツ特急の姿が、見当たらない。

「…………どうなん、だろぅねえ」

ぼくが生まれてきた理由。ぼくの存在意義。

ぼくはただ、幣原秋がハリー・ポッターを守るそのために、ハリーに近しくいつも一緒にいられるように、ハリーの双子の弟として作られた存在だ。

『…………本当はそれだけだと思っておるのか?』

それだけじゃないのだとすると、一体何なんだろう。分からない。「自分」という確固とした核が、曖昧だ。酷く揺らいで、危なっかしい。窓から外を見た。西の太陽はもう沈もうとしていて、東は群青色に染められている。

青系統の色を見ていて落ち着くのは、ぼくがレイブンクロー生だからだろう。

廊下を歩く足音が聞こえ、ふと目を遣った。思いもよらぬ人物に、驚いて目を見開く。

「…………アクア」

アクアもぼくの姿に気がついたようだ。目を瞠り、そして少し怒ったような表情でこちらに近付いてくる。そりやそうだ。

窓の枠から立ち上がると、アクアに向かい直った。

「えっと…………本当に今日は、ごめん。ホグズミードには行かなかったの…………?」

「…………アキと行くつもりだったから、アキがいなかったら意味がないじゃない」

「本当にごめん!」

アクアは呆れた表情でぼくを見ていたが、険は少し取れたようだ。先ほどより雰囲気柔らかい。

「…………そんなに、私と行きたくなかったのかと」

「そ、そんな訳ないじゃん! ……あの、君さえ良ければ…………」

慌てて、胸の前で両手を振った。また次回のホグズミード休暇にでも、とそう言おうとしたとき、アクアの表情が凍ったことに気がついた。

アクアは視線を一点に止めると、静かな声で尋ねた。

「……それ、誰からもらったの？」

「え？」

間拔けな声を上げた瞬間、思い至った。右手の小指、リドルの指輪のことを指しているのだ。

「……あー、えつと……」

ここでパツと「自分で買ったんだ」とか「ハリーに付けられて」とか、気の利いた——そしてアクアが求める——言葉を口に出たらよかったのかもしれない。

しかし残念なことに、アクアを前にしてそんな取り繕いがすぐさま出来るほど、ぼくは恋愛慣れをしていなかった。

そして、どうしようもなく詰まった一瞬は、アクアの疑念を増すのには十分すぎる時間だった。

「……嘘つき」

アクアのその言葉を即座に否定出来るほど、ぼくは清廉潔白な人物ではなかった。

だってぼくは、今までたくさんの嘘をついてきたから。君や色んな人を、たくさんの嘘で誤魔化して、その場を凌いできたのだから。

アクアにも、多くの嘘をついてきたのだから。

アクアが駆け出していく。

追いかけていけるほど、ぼくは厚顔無恥な人物ではなかった。

第21話 舞台の上で役者は踊る

ホラス・スラグホーン先生が開く個人的クラブ、通称スラグ・クラブから、クリスマスパーティーの知らせが届いたのは、十二月の頭のことだった。

ダンスパーティ、だなんて、随分と豪勢なことだ。そう思ってしまったのは、ぼくを取り巻く環境が、今年と去年で激変してしまったからだろう。

スラグ・クラブのメンバーは、いつそのこと刹那的に、目前の楽しみを心の支えにして、ダンスパーティーのことばかりを考えて、重苦しい日々を乗り越えていた。

「秋は、一体どうするの?」

リリーに尋ねられ、真つ先にレギュラスが浮かんだ。彼も、スラグホーン先生のお気に入り、スラグ・クラブのメンバーだった。

メンバー以外の人もパートナーとして連れてきても構わない、どのお達しが出ていたが、折角ならばぼくはレギュラスを誘いたい。もつとも、去年彼が受けてくれたからと言って、今年もオツケーしてくれらるかどうかは分からないけれど……レギュラス、カッコイイし、「あ、僕は彼女と行きますから」とさらつとすっぱり断られたら、悲しむに悲しめない。そっかー、楽しんでね、と見送るばかりだ。

「ふうん……そっか」

リリーは、少し慥然とした表情で頷いた。その表情の変化に、ぼくは「どうしたの? 元気がないようだけど」と尋ねる。

「……ねえ秋、鈍感って罪だと思わない?」

「ええっ?」

いきなり話が飛んだな。

まあ、リリーの話があらぬ方向へと飛んでいくのは日常茶飯事なので、ぼくはため息を吐きつつも、リリーの質問に返答した。

「罪に問われるほど、鈍感って酷いことをしたのかなあ。確かに、鈍感って言われる人も悪いとは思うけど、なんでも察せてが当然、分かって当然、みたいな態度も、ダメだと思ふなあ」

「……なるほど、確かに」

グウの音も出ないわ、と、リリーは呟いた。

リリーはセブルスと行くんだろうな、というのには、ぼくの中ではもう確信できるもので、疑いすらもしなかった。去年も二人でダンスパーティーに行ったのだし、セブルスもリリーに対して心変わりしたようにも見受けられない。本当に一途なのだ、ぼくの親友は。

鈍感というなら、まさしくリリーがそうだろう。ずっとセブルスから好意の視線を向けられているのに、全く気付かないのだから。そう思うと、確かに「鈍感って罪」なんて気分にもなる。

と、正面にレギュラスの姿が見えた。珍しくも廊下を走っている。普段クールな無表情を崩さないレギュラスとは思えない。

「……っ、いたー！」

そのままレギュラスは、ぼくを視認してまっすぐ走ってきた。ぼくの目の前で足を止めると、僅かに乱れた呼吸を直す。

……ってか、「いたー！」って、ぼくが「いた」って意味か。ぼくは珍獣かなんかじゃないぞ。この後輩は、まさしく慇懃無礼、という言葉がぴったり似合う。

「どうしたの、レギュラス。そんなに慌てて」

「慌てていません」

「いや、取り繕っても無駄だって……」

どう見ても慌ててたじゃん。でも、何を言ってもレギュラスはぼくの言葉を認めないことは分かりきっていた。

「あら、ブラックの弟さん、で合ってるわよね？」

「あ、え、ええ……Ms. エバンズ。レギュラス・ブラックと申します。愚兄がいつもご迷惑を」

「本当に！ 弟のあなたからも、きつーく言ってあげてちょうだい！」
はは、とレギュラスは気の乗らない笑みを浮かべた。兄をどうこうするのはどだい無理だと諦めているらしい。

リリーには申し訳ないが、レギュラスのその意見には全面的に賛成する。シリウスとジェームズの奔放さに歯止めなんて効く訳がない。

「で、どうしたの？ レギュラス。ぼくに何か用事？」

そう尋ねると、レギュラスは目を泳がせた。きよとんとぼくは目を
瞪る。

「……貴方の方こそ、僕に用事があるのではないでしようか」

その言葉に、ますますきよとんとした。ぼくが、レギュラスに？
何かあつたつけ？

首を傾げて考え込むぼくに、レギュラスは我慢の限界に来たらしい。
普段は白い頬に赤みを浮かべて叫んだ。

「ダンスパーティーですよ！ 今年は何と行くつもりなんですか！」
「えっ？ ……えっ!？」

唐突に言われた言葉に混乱する。確かに、レギュラスをダンスパー
ティに誘うつもりだったけど、まさかそのレギュラス本人に「誰と行
くつもりなのか」と問いたただかれるとは思ってもしなかった。

もしかして、今年はおくに先手を打ってきたのかもしれない。こう
いう姿勢を見せることで、今年は何と貴方と行きませんかからね、と
いう……きつとそうだ。そうに違いない。

「ご、ごめんよ……君を誘おうと思っていたけど、迷惑だったよね……
今年は何としておくからさ、君は好きな子を誘っておいでよ、君の
邪魔をするほど、ぼくは大人げなくはないから……」

「一体どうしてそんな話になるんです!？」

レギュラスは怒り心頭といった様子で、ふるふると震えている。

ダン！ と一歩踏み込まれ、思わず半歩下がった。

「……あー、ブラック、レギュラス？ 秋には遠回しな言葉は効かない
わ、特にこのような場面ではね」

鈍感なのよ、とリリーは呟いた。

リリーの言葉に、レギュラスは少し頭が冷えたらしい。というよりは、
むしろぼくに呆れ果てたようだ。ため息をついて頭を押さええてい
る。

「なるほどなるほど……そうですか。心労お察しします、M s. エ
バンズ」

「べっ、別に苦勞はしてないわよ!」

今度はリリーが赤くなる番のようだった。

ぼくには、一体目の前で何が繰り広げられているのか分からない。リリーとレギュラスは、何かに対して分かり合ったようだが——それもぼくの、おそらく欠点で——

「それでは、単刀直入に伺います。僕にこんな態度を取らせるのなんて、貴方くらいだと胸に刻みなさい」

「え？ あ、はい」

なんでぼく、怒られているのだろう。

レギュラスは軽く咳払いすると、目を細めてぼくを睨みつけた。レギュラスのように顔が整っている人にこのような表情をされると、なんだかすごく居心地が悪くなる。

「僕とダンスパーティーに来なさい」

「はい……えっ？」

つい反射で頷いてしまったが、今は本当に返事しても良かったのだろうか。というか、「伺います」と言っておきながら、明らかに命令口調だったよな、レギュラス……。

「え、えつと……レギュラス、それでいいの？」

「何がです」

ぼくとダンスパーティーに行くって、と口の中でもぐもぐと呟くと、レギュラスは大きなため息をついた。

「構わないから、こうしてお誘いしているんです。本当に物分かりの悪い鈍感野郎ですね」

「物分かりの悪い鈍感野郎……」

ぼくだって人の言葉に傷つくんだぞ？ 分かっているのか？

レギュラスは独り言のように続けた。

「それに、先にこうして毒にも薬にもならない人物をパートナーと決定していれば、集まる女性を断る格好の言い訳になりますし、後々面倒ごともないし……下手に女性を一人選ぶと、後の処理が面倒なんですよね……」

「おモチになる奴は、さすが言うことが違いますね……」

ハハハ。なるほど、だからぼくをね……。去年のダンスパーティーでぼくをパートナーとすることのメリットに、味をしめたということか

……ちよつと悲しい。

「なるほど……秋はそうやって誘えばいいのね、勉強になるわ……今後に生かそう」

リリーはなにやらブツブツ言っている。ちよつとだけ背筋が寒くなつて、思わず身震いした。

「それでは、クリスマスに」

「はは、はい……」

そう言つて、満足したようにレギュラスは踵を返した。その後ろ姿に力なく手を振つて、はあ、と肩を落とす。

「物分かりの悪い鈍感野郎……」

さすがのぼくもグサツと来たぞ。レギュラスはぼくに対して本当に辛辣だ。嫌われているのかもしれない。

「でも、レギュラスの言葉に私は同意するわ」

「リリーまで……」

そんなに鈍感な自覚はないのだが、そもそも自覚があつたら鈍感とは呼ばれない訳で。

一体どうすればいいのだろうと頭を抱えたとき、リリーがふわりと笑つた。

その笑顔に、思わず目が離せなくなる。

「ま、秋はそのままの秋で、別にいいと思うわ。もう仕方ないしね。私は秋のそんなところ、好きよ」

何気ない会話の一部分である『好き』という単語に、どうしようもなく心が揺れた。

なんでこんな気分になるんだろう？ 不思議に思つて胸を押さえる。

「そっか……いや、うん……ありがとう」

リリーは「変な秋」と言つて、また笑つた。



重たい心を引きずりながらも、グリフィンドール塔でハリーと合流

したのは、シリウスが現れるという午前一時の五分前だった。

ハリーの帰りが遅く、見かねたハーマイオニーが談話室に入れてくれたのだが、やっぱり他寮の居心地はそうよくはない。しばらくはハーマイオニーが相手をしてくれたが、十二時を回ったあたりで彼女も寝室へと上がってしまった。

「ハリー、遅いよ」

「ごめんね、でも、ハグリッドが……」

そこでハリーは言葉を切ると、目を輝かせて暖炉の前に駆け寄っていった。

「シリウスおじさん！ 元気なの？」

目を向けると、暖炉にはシリウスの生首が鎮座していた。ぼくも暖炉に近付くと、ハリーの隣に屈み込む。

「シリウス！」

「やあ、ハリーにアキ……」

シリウスはハリーに「おじさん」と呼ばれたことに少しショックを受けたようだったが（まあ、実際おじさんだし。……そんな歳なんだなあ、本来はぼくも）、ハリーに「ああ、心配しなくていい」と気丈にも言った。髪を短く切って、食事もちやんと取っているのか、前に会ったときよりも若々しい。幽鬼みたいに見えたもんなあ、前は。そしてやっぱり格好いいな、シリウスは。昔と変わらずイケメンだ。

「ハリー、君はどうだね？」

真剣な表情でシリウスに言われ、ハリーは一瞬言葉に詰まったが、今まで溜まっていた胸の内のモヤモヤを吐き出すように、様々な言葉が溢れ出た。ゴブレットに名前を入れてないことを誰も信じてくれないこと、『日刊預言者新聞』のこと、そして——ロンのこと。ハリーの背中を、ぼくは優しく叩いた。

「それに、ハグリッドが付きつき、第一の課題が何なのか見せてくれたんだ。ドラゴンなんだよ、僕、もうおしまいだ」

その言葉で、ハリーは少しスッキリした面持ちで話を終えた。シリウスはじつと黙ってハリーの話聞いていたが、ようやく口を開いた。

「ドラゴンは、ハリー、何とかなる。しかしそれはちよつと後にしよう。あまり長くはいられないんだ……この火を使うのにある魔法使いの家に忍び込んだから。ハリー、君に警告しておかなければならないことがある」

「何なの？」

続いてシリウスが言った言葉に、ぼくらは目を瞠った。

「カルカロフだ。ハリー、アキ、あいつは『死喰い人』だった。それが何か、分かっているね？」

「……えっ？——あの人が？」

「あいつは逮捕された。アズカバンで一緒だった。しかしだ、あいつは釈放された。ダンブルドアが今年『闇祓い』をホグワーツに置きたかったのはそのせいだ。カルカロフを逮捕したのはムーデイだ。そもそもムーデイがやつをアズカバンにぶち込んだ。ムーデイは凄まじい魔法使いだ。なあ、アキ？」

ぼくは曖昧に頷いた。ムーデイ先生に対してぼくが持つ違和感については、今言う必要はないだろう。

「カルカロフが釈放された？ どうして釈放したの？」

ハリーは逮捕されたカルカロフが釈放された理由が呑み込めないようだった。こういう政治的な感覚は、ハリーにはまだ備わっていないようだ。正義感の強いハリーには、馴染みのない感覚だろう。

「魔法省と取引をしたんだ」

シリウスは苦い顔をして言う。シリウスも、このような取引は毛嫌いするタイプだった。そういうぼくも、そう好きではない……。

「自分が過ちを犯したことを認めると言った。そして他の名前を吐いた……自分の代わりに多くの者をアズカバンに送ったんだ。あいつはアズカバンでは嫌われ者だ、言うまでもないことだがね。そして、出獄してからは、私の知る限り、自分の生徒全員に『闇の魔術』を教えてきた。だから、ダムストラングの代表選手にも気をつけるんだ、いいね？」

「うん。でも……カルカロフが僕の名前をゴブレットに入れたってことではないと思うんだ。だって、もしカルカロフの仕業なら、あの人は

随分役者だよ。カンカンに怒っていたように見えたもの。僕が参加するのを阻止しようとした」

「奴は役者だ。それも相当の。何しろ、魔法省に自分を信用させて、釈放させた奴だ。……さてと、『日刊預言者新聞』にはずっと注目してきたよ、ハリー——」

『日刊預言者新聞』という単語が出た瞬間、ハリーは表情を歪めた。

「シリウスおじさんもそうだし、世界中がそうだね」

皮肉げにハリーは言う。シリウスはまたも「おじさん」呼びにダメージを食らったようだったが、気丈にも話を続けた。

「そして、スキーター女史の記事の行間を読むと、ムーディはホグワーツに出発する前の晩に襲われた。……いや、あの女がまたから騒ぎだったと書いてることは承知してるよ、ハリー。しかしだ、私は違うと思う。誰かが、ムーディがホグワーツに来るのを邪魔しようとしたんだとね。彼が近くにいると仕事ができにくくなるということを知っている奴がいるんだ。誰も本気になって追及しないだろう——侵入者の物音を聞いたと、ムーディはあまりにも言いすぎた。しかし、だからといってムーディがもう本物を見つけれないというわけではない。ムーディは魔法省始まって以来の優秀な『闇祓い』だった」

「じゃあ、シリウスおじさんが言いたいのは、カルカロフが僕を殺そうとしてるってこと？ でも——どうして？」

そう尋ねられ、シリウスも黙った。シリウス自身も、考えがまとまってはいないのだろう。

「近頃、どうもおかしなことを耳にする……『死喰い人』の動きが最近活発になっっているらしい。クイディッチ・ワールドカップでも正体を現しただろうか？ 誰かが『闇の印』を打ち上げた……それに、行方不明になっっている魔法省の魔女職員のこととは聞いているか？」

「バーサ・ジョーキンズ？」

「そうだ。ヴォルデモートが最後にそこにいたという噂のあるその場所、アルバニアで姿を消した。その魔女は、三校対抗試合が行われることを知っていたはずだね？」

「ええ、でも、その魔女がヴォルデモートにばったり出会うなんて

……」

シリウスは少し躊躇うように言葉を切った。

「いいか。私はバーサ・ジョーキンスを知っていた。私と同時期にホグワーツにいた、ジェームズ……君の父さんや私より二、三歳年上だ。とにかく愚かな女で、知りたがり屋で、頭が全く空っぽ。いい組み合わせじゃないな。彼女なら簡単に罠にハマるだろう」

「それじゃあ、ヴォルデモートが試合のことを知ったかもしれないってことなの？ カルカロフがヴォルデモートの命を受けてここに来たってこと？」

「それは……分からない。しかし、ゴブレットに君の名前を入れたのが誰であれ、理由があつて入れたんだ。それに試合は君を襲うには好都合だし、事故に見せかけるにはいい方法だと考えざるを得ない」

「そりゃそうだ」

ハリーは肩を竦めて自嘲気味に笑った。

「だって、自分のはのんびり見物しながら、ドラゴンに仕事をやらせておけばいいんだもんね」

「そうだ、そのドラゴンだ。倒す方法はある、『失神の呪文』以外でもな——。ドラゴンは強いし強力な魔力を持つてるから、アキならともかくとしても、普通は一人の呪文でノックアウト出来ない。半ダースの魔法使いが束にならないと倒せない」

「うん、分かってる」

ハリーが沈んだ声で呟いた。

「しかし、一人でも出来る方法があるんだ。簡単な呪文だ、つまり——」

と、そこで足音が聞こえた。ぼくとハリーは瞬時に目を合わせる。と、ぼくは立ち上がり、ハリーはシリウスの言葉を遮りに掛かる。

「行って！ 誰か来る！」

そう言うなりハリーは立ち上がると、暖炉の火を身体で隠した。ぼくもハリーに習うも、シリウスの声で呼ばれて振り返る。

「早く行きなよ！」

「アキ。君だけが頼りだ。ハリーを……」

「守る、分かっている」

ポンと小さな音がした。やっとシリウスが行ったのだ。ぼくらは足音の主が誰かを注意深く見極めようとして――

「……ロン」

脱力して、眩いた。

ロンはグリフィンホール寮にいるぼくに驚いたようだったが、ハリーが低い声で「こんな夜中に、何しに来たんだ？」と言うのが先だった。声の感じから、相当怒っていることが分かる。

ロンは少し気まずい表情をしていたが、肩を竦めた。

「別に。僕、ベッドに戻る」

「ちよつと嗅ぎ回ってやろうと思ったんだろう？」

ハリーが怒鳴ったのに、驚いた。まさか、ロンにそんなつもりがある訳がない。

ハリーの腕を引くも、ハリーの勢いは止まらなかった。そこで引くロンじゃない。

「悪かったね、君らの作戦会議を邪魔しちゃって。どうぞ、存分にお続けください」

「ロンー」

ロンの名前を呼んだが、ロンはそのまま踵を返した。パジャマ姿のまま談話室を降り、外に出る。

「傷をつけてやりたかった。額にさ、そうしたらあいつも文句は言わないだろう」

「ハリー」

ただただ悲しかった。腕を伸ばすとハリーを抱きしめ、髪を撫でる。ハリーはしばらくさられるがままでいたが、やがてしっかりとぼくを抱きしめ返した。

「……どうして、分かってくれないんだ」

ロン、と、ハリーは小さく眩いた。

第22話 第一の課題

最近、校内では、人を宙吊りにする呪文が流行っていた。呪文を掛けられた者は、まるで見えない手に踵を掴み上げられたように、空中に宙吊りになってしまふのだ。

この呪文の一筋縄でいかないところは、「フィニート」一言で終わらないことだ。反対呪文はたった一つ。その呪文も、すぐさま生徒に知れ渡った。

やんちゃな男子生徒は誰も、隙あらば誰かれ構わずにこの呪文を使うようになっていた。

女子生徒は、宙吊りにされては堪らないとばかりに、その呪文を使うような、やんちゃでクラスの中心にいるような人物を毛嫌いした。

女子生徒ばかりではない。気を抜くと宙吊りになるということで、男子生徒だって掛けられたくない気持ちは同じだ。誰だって、宙吊りにされてゲラゲラ笑われたくはない。

ぼくは、あまりその呪文には無関心な方だった。

確かに、周囲が騒がしいな、とは思っていたが、前年度の魔法魔術大会で優勝したぼくに対して、そんな魔法を掛けてこようと思う奴はそういない。悪戯仕掛人の筆頭である悪ガキ、ジェームズとシリウスくらいか。ぼくはあの二人にだけ気を付けていればいいのだから、楽なものだ。

同様に、もう一つの呪文も校内を飛び交っていた。こちらは、宙吊りの呪文よりもっと性質が悪く、また邪悪で、学校側からもすぐさま「使ってはならない」というお達しが出るほどだった。

その呪文は『セクタムセンプラ』。全身を鋭い刃で切り裂く呪文だ。呪文の源は、一体どこからなのだろう。分からないがしかし、これが凶悪な呪文だということは明白だった。

先日のセブルスを、思い出す。ぼくの大切な親友を、あんな目に合わせた呪文だ。

あのとときのセブルスの惨状を思うと、自然と眉が寄った。許せない、静かにそう思う。

リイフ・フェイスナーは、このような魔法が校内を飛び交っていることについて、いいこととは思っていない、数少ない人物の一人だった。「あれは、闇の魔術が含まれている呪文だ。……一体誰が」
こんなことを。

ぼくは目を伏せ、かぶりを振った。誰なのだろう、と思いを馳せる。その呪文の作者が、思いも掛けずに身近にいたことに、ぼくは気が付きもしなかったんだ。



ハリーの手助けをしない、というのは、ぼくにとってなかなか難しいことだった。兄の窮地に手助け出来ないというのは歯痒いものだ。じりじりと待つだけの日が過ぎて、ようやく第一の試練の日になった。ハリーは一体どのような対策をしただろう。ドラゴンに対する対処法を、ハリーは何かしら手に入れただろうか。

「ハリー！」

大広間にて、昼食を取りに来たハリーの姿を発見し、思わず駆け寄った。

ハリーは、どこか心ここにあらず、な表情をしていたが、ひとまずぼくを見て笑顔を浮かべてくれた。顔色が悪い。試練の対策で、ちゃんと眠れていないのか。

「アキ」

緊張と不安でいてもたってもいられないはずなのに、こんなときでも、ハリーはぼくの兄らしく、ぼくを優しく気遣ってくれる。そんな優しい兄が、ぼくはとても誇らしい。

たとえ、血が繋がっていないとしても。

ハリーの隣にはハーマイオニーがいた。彼女も憔悴した表情をしている。きつとハリーを手伝ってくれたのだろう。本当にありがたい。

「頑張れよ、ハリー。なに、死ななきや大丈夫さ」

「はは……相変わらずだね、アキ。死ぬかもしれないんだよ」

「君は死なないよ。ぼくが保証する」

そう言つて、ぼくは懐から一枚の紙を取り出すと、ハリーの手にそれを握らせた。

杖で紙を叩くと、紙は瞬く間に姿を変え、ハリーの手首にしゅるりと巻きつくと、銀色のブレスレットになる。

「護符をぼくなりアレンジしたものだ。一度だけ、そう、一度だけ。致死性の攻撃を喰らったとき、こいつが助けてくれる。ぼくの代わりに、君を守ってくれる。だから、安心して、ハリー」

ハリーの両手を掴むと、掲げた。ぼくの額に当てると、目を閉じ、祈る。

どうか、ハリーを。ぼくの大切な人を、守ってください。

ハリーは「……ありがとう」と呟いて、ぼくの頭を優しく撫でてくれた。



選手四人中、三人の試練が終わった。残るはハリー一人。セドリツクもフラーもクラムも、見事に課題をこなしてみせた。

「最後に登場するは——ハリー・ポッター！」

バグマン氏の言葉に、観客は一斉に拍手をした。どうやらドラゴンの前では、ハリーに対する悪意など吹っ飛んでしまったようだ。

出てきたハリーは、不安と決意の入り混じった表情をしていた。

ぼくは胸の前で両手を組むと、祈るように拳を額に当てて目を瞑る。

大丈夫。魔法式は完璧なはずだ。護符自体にも間違いはない。大丈夫、大丈夫。

ホイッスルが鳴る。いよいよ開始だ。ホーンテールが、卵をしつかり抱えて伏せている。四体のドラゴンの中で、確か一番気性が荒いドラゴンのはずだ。

さすが、引きがいいというか、運が悪いというか。なんにせよ、ハリーらしい。

ぼくの隣にはハーマイオニーと、そしてロンが座っている。二人ともハリーに見入っていて、ロンなんてハリーとずっと険悪だったはずなのに、とても不安げな眼差しで両手を組み合わせていた。

ハリーは杖を上げると、叫んだ。

「アクシオー！」

ぼくは息を呑んだ。なるほど、そういうことか。ハリーの特技、空を飛ぶこと。

そうか、それならば……。

「お願いします、神様……！」

ハーマイオニーがぎゅつと目を閉じ呟いている。とてもいい手を出いついたな、ハリーは。

しかし、この呪文はハリーは確か苦手だったはず。もし、これが失敗すれば、ハリーは無策でドラゴンに挑むことになる。

ぼくもハーマイオニーの隣で祈った。おそらくロンも、祈っただろう。

やがて——ファイアボルトが自らの主人の元へ馳せ参じた。ハリーの脇にぴたりと止まり、主が乗るのを今か今かと待っている。

ハリーが箒に跨り空へと飛び立った瞬間、爆発とも違わんばかりの歓声が響いた。

箒に乗って飛んでいるハリーは、とても晴れやかな表情をしている。様々なしながらみから吹っ切れたような表情、年相応の顔を。

ぼくはそんなハリーが、世界で一番大好きなんだ。

ハリーが急降下する。ホーンテールもハリーの動きを追い、火を吐いたが、それよりもハリーが箒の先を上げ、上に舞い上がる方が早かった。

「いやあ、たまげた。何たる飛びっぷりだ！ クラム君、見てるかね？」

バグマン氏が興奮気味に叫ぶ。そういえばこの人、元プロクイディッチ選手だったっけ。今日も当時のものらしいユニフォームを身に纏っている。

ハリーはしばらく上空で弧を描いて浮かんでいたが、再び急降下し

た。しかし今度は尻尾に邪魔される。

ハリーは颯爽と交わしたが、尻尾の長い棘が肩を掠めたようで、ローブが引き裂かれた。ハーマイオニーが隣で悲鳴を上げる。

ハリーはしかし、傷はそう深くはなさそうだ。動きにそう変化はない。

今度はハリーは、ホーンテールが届かないギリギリのところまで飛び回り始めた。ホーンテールは首を伸ばせるだけ伸ばし、ハリーの姿を追っている。しかし、なかなか卵から離れない。警戒心がとても強いようだ。

それならば、とハリーは先ほどより高く飛んだ。ホーンテールが炎を吐く。しかしハリーは身軽にひらりと躲し、再びじりじりと飛び回った。

「もう少し……もう少し……」

さあ、ハリーを捕まえに行くんだ。立ち上がれ。

ホーンテールが後ろ足で立った。翼を広げ、ハリーを排除しに掛かる。

その瞬間を待ち侘びていたのはハリーだった。逃すはずもない、すぐさま急降下し、ファイアボルトから両手を離し——次の瞬間は、ハリーの両手に金の卵が握られていた。

一斉に会場中が歓声に包まれる。ぼくだって声が枯れんばかりに叫んでいた。

「やった！ やりました！ 最年少の代表選手が、最短時間で卵を取りました。これでポッター君の優勝の確率が高くなるでしょう！」

とその時、ハーマイオニーが感極まったとばかりにぼくに抱きつき、泣きじゃくる。

良かった！ とロンがぼくとハイタッチして、はっと我に返ったらしく、少し気まずげな顔でそっぽを向いた。

「ロンー！」

名前を呼び、ロンの手を引っ張って、ハーマイオニーと二人一緒に抱き合った。

ロンとハリーは、きつともう大丈夫。そんな予感が胸を満たし、ぼ

くはにっこりと笑った。

第23話　いつまでも、どこまでも

『動物もどき』を、ジェームズ、シリウス、それにピーターが自在に操れるようになってからというもの、『忍びの地図』の作成スピードは格段に早まった。

今まで彼ら三人が、『動物もどき』完成に力を注いでいた時間が、単純にこちらに割り振られるようになった、という理由以外にも、もう一つ訳がある。ピーター・ペティグリーの『動物もどき』、すなわちネズミが、今までじゃ行けないようなルート（例えば、管理人のフィルチさんのいる管理人室の先、とか、マクゴナガル先生の私室、とか）もするりと潜り込み、地図完成に多大なる貢献をしてくれたからだ。『動物もどき』の思わぬ副産物である。

「秋、行くよー」

リーマスが伸ばした手を、ぼくは取った。

水曜の三限は、今学期、ぼくと悪戯仕掛人の四人が、授業が入っていない奇跡の時間だ。授業中だから、廊下は閑散としているし、教師は授業で出払っている。一時間半もすれば人で溢れかえる廊下を、ぼくと悪戯仕掛人の四人は走った。

ぼくらの先頭を走るのは、ジェームズでもシリウスでもない、ピーターだ。誇らしさに表情を輝かせている。

ピーターが先頭に行くことは、とても珍しいことだった。だって、誰よりも目立ちたがり屋なジェームズとシリウスの陰に、普段はリーマスやピーターは隠れがちだったから。

リーマスは、自らが人狼であることに対する引け目から（ジェームズは「あんなふわふわでちっちゃい問題、気にするだけ無駄なのになあ」と肩を竦めていたが）、そしてピーターは、臆病で引っ込み思案な性格から。

四階の廊下、魔女の石像の前まで辿り着くと、ピーターは杖を取り出した。

ピーターがこんなにも表情を輝かせて杖を振るのを、ぼくは初めて見た。恐らく、悪戯仕掛人の他三人も、そうだっただろう。

「デイセンディウム」

そう言つて魔女のコブ部分に杖をコツンと当てると、石像はたちまち真つ二つに割れ、人が一人通れそうな隙間が出来る。

ぼくらは黙つて頷き合い、ピーターを先頭に、隙間を潜つていった。曲がりくねつた曲がり道や登り道を、僕らは黙々と歩く。やがて、石造りの階段が現れた。それをも登つていくと、やがて頭上に観音開きの扉が現れる。身長が低いピーターに変わつて、シリウスがその扉を慎重に押し開けた。漏れる光に、知らず知らず唾を飲み込む。そして――

シリウスが、猫かと思ふばかりの俊敏な動きで光の中に身を躍らせた。そしてキラキラした目で、暗闇にいるぼくらに小声で「大丈夫だ、来い！」と頷き、ピーターに対して手を差し伸べる。その手に握まり、ピーターが、そしてぼくとジェームズ、リーマスも、外へと這い出た。

そこは、倉庫のようだった。木箱がところ狭しと積み上げてある。ジェームズは何の気なしにラベルを読み上げた。

『ナメクジゼリー』か。親友共よ、どうやら僕たちはやり遂げたようだ」

「ハニーデュークスか」

リーマスが、まるで宝の山のだ真ん中にいるかのように表情を輝かせている。

ぼくらは扉を元どおりにしっかりと閉めると、階段を上った。そこはハニーデュークスのカウンター裏のようだ。ぼくらは客に紛れ、やがて、ハニーデュークスの外に出た。

外は、珍しくも眩いばかりの晴天だ。

「まるで俺らの未来を暗示しているようじゃないか」

「ああ、その通りさ相棒」

ジェームズとシリウスが、目を細めながらそう言い合う。そして二人は目を見合わせると――言葉を交わした様子はない、彼らの間には言葉なんて無粋なものとは不必要だ――予告もなしにピーターを抱え上げた。

「わあっ!？」

ピーターが度肝を抜かれた声を上げるのもお構いなしだ。まあ、そんなものに構っている二人は、二人じゃないか。

それに――

「凄いじゃないかピーター!」

「さすがは悪戯仕掛人の一員だな!」

――こんな笑顔、誰にも止められっこないのだから。

驚きに満ちていたピーターの表情が、だんだんと変わっていく。

やがて、喜びと誇らしさを噛みしめるように、ピーターは何度も何度も頷いていた。



三本の箒は、いつでも人で混み合っていた。しかしカウンター席が空いていたので、シリウスは真っ先にカウンター席へと歩みを進む。

ぼくなんかは、カウンター席だところ、店員さんと何を話しているのか分からなくて苦手なのだけど、その辺りは、さすがシリウスだ。

「あら? あらあらあら? この顔ぶれ、どこかで見たことある気がするわねえ」

『三本の箒』の店主、マダム・ロスマルタは、ぼくらをずらりと見渡して、悪戯めいた楽しそうな笑顔を浮かべた。シリウスは軽く肩を竦めると、にやりと笑ってぼくを見る。

「気のせいだろ。ま、こんな美人見たら、俺はなかなか忘れないけどな。な、秋」

「ふふっ、そうだね、シリウス」

全く、口が上手いんだから、とマダム・ロスマルタは微笑んだ。バタービールを五つ注文すると、ウインクと共にぎくぎくと美味しそうなクッキーが、大皿で出てきた。

「はい、校則破りの悪い子ちゃんに」

ぼくらはそれに歓声を上げ、それぞればらばらにお礼を言う手を伸ばす。育ち盛りの男の子は、いつも空腹なのだ。

「そういや、今年か、ふくろう試験」

「ジェームズ、それ本気で言ってる？ 最近じゃ、どの授業の最初もふくろう試験のことから始まるってのにさ」

「我らが親愛なるスミス女史以外はな、ああ」

「スミス女史なあ。俺は好きだけど、美人だし」

「シリウスは、何かあれば美人か美人じゃないか、だ。顔がよければ誰だっていいんだろ、あーやだやだ、不潔だわ」

「レイブンクローのポーンピー、グリフィンドールのミーシャでしょ」

「はたまたその前は二つ上の……」

「俺の話はもうそのくらいにしてくれないか」

シリウスが苦虫を五十匹くらいに飲み潰したような顔で手を振ってきたのに、ぼくらはそろって「えー？」と不満の声を漏らした。

普段、ぼくらの誰かが恋文をもらったとか手作りケーキもらったとか、ひとたび聞きつけばすんごい勢いで食いついてくるのは君じゃないか、シリウス。

その時、ぼくらの元にバタービールが運ばれてきた。おつ、と、そこで会話も一区切りつく。

バタービールが全員の手元に回ったのを確認すると、ジェームズが立ち上がった。コホン、と咳払いをする。

「えー、本日はお日柄もよく……」

「巻け、巻け、そんなとこ！ 時間は有限だ、俺たちの輝かしい時間をそんな下らない口上で浪費してなるものか」

「なるほど、それも真理か。ならばダンブルドアのごとく——」

ジェームズは、澄んだ瞳で叫んだ。

無邪気に未来を待ち望む若者の瞳で。

『未来』が、そう遠くない先、あまりにも残酷な形で切り取られ蹂躪されることなんて、微塵も考えることなく。

「それっ、僕らの前途に！」

「乾杯!!!」

まだぼくらは、幸せだった。



十二月ともなると、寒さに弱いぼくはコートとマフラーが手放せない。今年はとりわけ、天気が悪いようだった。二日に一日は霏混じりの雨が降り、身体の芯から凍えそうになる。

それでも、ホグワーツ城はダムストラングの船よりはマシなのかもしれない。真っ黒で大きな船は、風に煽られ、近くまで行けば軋む音が聞こえた。

ハグリッドはマダム・マクシームの馬に、シングルモルト・ウイスキーをたっぷりと与えているようだ。それは別に構わないのだが、「魔法生物飼育学」の授業がその馬たちの放牧場のすぐ近くだから、お酒の匂いが授業中漂ってくるのには参った。目を回してスクリュートらに指を食いちぎられないように気を確かに持つのは、結構大変なことだ。

今回の授業内容は、スクリュートが冬眠するかどうかを試す、というものだった。結果を先に言くと、スクリュートは冬眠しないということが分かった。かぼちや畑で暴れ回るスクリュートに、生徒のほとんどがハグリッドの小屋に立てこもる事態。まさしく阿鼻叫喚。

残った何人かでハグリッドを助け、スクリュートを捕まえたが、全員が火傷や切り傷だらけになった。

「脅かすんじゃねえぞ、ええか!」

ハグリッドが叫ぶも、ちょうどロンとハリーは向かってくるスクリュートに火花を噴射したところだった。

しかしスクリュートはむしろ激昂したように二人に迫ってくる。ちいつ、と舌打ちして、ぼくは杖を抜いた。

「インカーセラス!」

杖からロープが飛び出て、スクリュートにぐるぐると巻きついた。杖が久々にこれだけの出力の魔力を放出したためか、ビリビリと杖を持つ手が痺れる。

魔力の制御が難しい。普段の出力で魔法を掛けても、外装が分厚くて弾かれてしまうのだ。かといって全力で相手をする、スクリュー

トはきつと『見せられないよ!』状態になってしまうことは請け負いだし、この絶妙な調整が大変だ。

ハリーとロンが、その場でじたじたと暴れるスクリユートにトドメを刺す。その上からハグリッドがねじ伏せた瞬間、尻尾から火が噴出され、そこら一帯に生えていたかぼちやの葉や茎が軒並み萎びてしまった。

こういう飛び道具、本当に困ったやつだよ、スクリユートってのは。「おーや、おや……これはとっても面白そうさんすね」

そんな声に振り返ると、いつの間にかリータ・スキータがハグリッドの庭の柵に寄りかかってこちらを眺めていた。ハリーの偏った新聞記事を書いた人だ。

「あんた、誰だね?」

「リータ・スキータ」。『日刊預言者新聞』の記者さんすわ」

「ダンブルドアが、あんたはもう校内に入ってはならねえと言いなすったはずだが?」

ハグリッドは顔をしかめながら言う。そうだったのか。

しかしリータはハグリッドの言葉を無視した。

「この魅力的な生き物は何て言うさんすの?」

『尻尾爆発スクリユート』だ」

「あらそう?。こんなの見たことないさんすわ……どこから来たのかしら?」

そう言われてみると、一体どこから来たのだろう。違法な匂いがプンプン漂ってくるな。

同じことに思い当たったらしいハーマイオニーが急いで口を挟んだ。

「本当に面白い生き物よね?。ね、ハリー、アキ?」

「あ、うん……痛つ……面白いね」

「う、うん、そうだねー」

ハリーがハーマイオニーに足を踏まれながら答える。ぼくも冷や汗を掻きながらハーマイオニーに応戦した。

瞬間、リータがハリーに凄まじい勢いで向き直る。

「まつ、ハリー、君、ここにいたの！ それじゃ、『魔法生物飼育学』が好きなの？ お気に入りの科目の一つかな？」

「はい」

今度のハリーの言葉は、嘘じゃなかった。ハグリッドもニッコリする。

「そちらの子、お名前を聞かせてもらってもいいじゃないですか？」

唐突に、リータの矛先がぼくに向いた。驚いてキョロキョロ辺りを見回すと、ハリーが気の毒そうな目でぼくを見ていた。

「あー、えつと、アキ・ポッターです」

「ポッター？ ということは、噂のハリー・ポッターの双子の弟かしら？」

「あー、そんなもんです」

噂の、か。ぼくも有名になったもんだ。

「もしよろしければ、詳しい話を聞かせてもらってもよろしくて？ 幼少期のハリー・ポッターとか、本人の口からよりも他者の口から語られる方が真実味が出るわ」

え、とハリーを横目で見ると、全力で頭をブンブン振っていた。だよなあ、何言ったっていろんな脚色改変されるんだもんなあ、と悩んだところで。

「……彼のことは新聞に載せないでくださいます？」

流れる銀髪。小柄な背丈。緑が入ったコート。

アクアが、ぼくを庇うようにリータの前に立ち塞がっていた。

「……色んな人に、混乱を巻き起こしてしまうので」

「……あら、ベルフェゴールのお嬢ちゃんじゃないですか？」

「ええ。お願いしますわ、是非とも」

そう言うが早いのか、アクアはぼくの袖をぐいと掴んでスタスタと歩き去る。引つ張られ、慌てて足を踏み出した。

「すてきさんすわ。長く教えてるの？」

「まだ今年で二年目だ」

リータはハグリッドにターゲットを変えたらしい。大丈夫かな、と、それはそれで心配になるものの、まずはこっちが先だ。

「……えっと、アクア。……助けてくれて、ありがとう」

「……別に」

アクアがぼくのコートの袖を離した。

「……あなたのためじゃないわ。あなたの顔写真とかが出回ったら、幣原秋を知る人物に混乱をもたらしてしまう。それだけよ」

「それでも……ありがとう。本当に助かったよ。そして……こないだは、ごめん」

アクアはじつと黙っていたが、ふいと俯いてしまった。困ったな、と思うも、聞いてはいるのだろうから、言葉を続ける。

「指輪が誰からもらったのかは話せないけど……これはとある奴との魔法契約の証なんだ。ごめん、あの時、誤魔化そうとして」

それでね、と、ぼくは少しだけ笑って言った。

「もし君さえよければ、次のホグズミード休暇、一緒に過ごせないかなあ」

アクアはしばらく黙っていたが、やがて小さく「……暇ならね」と答えた。

第24話　くるくると廻る恋心

クリスマス休暇に入る前の日曜が、我らが魔法薬学教授、ホラス・スラグホーン先生の主催するダンスパーティーの日取りだった。クリスマスは家族と過ごすもの、という、スラグホーン先生の配慮らしい。複雑な気分にならざるを得ないものの、スラグホーン先生はいい先生だ。ぼくを取り巻く環境が、変わっただけのこと。

去年のような学校全体を巻き込んだのクリスマスパーティーではなく、こじんまりとしたものだとしてたつて、パーティーというのは心踊るものだ。きつちりとダンスローブを着込み、準備をすると、クリスマスパーティーの会場へ向かう。

レギュラスは、寮の前でぼくを待っていてくれていた。本当に気が利く奴だ。

どうしてぼくなんかと一緒にダンスパーティーに行ってくれるのだろうか？　ぼくが独占することを申し訳なく思うくらいだ。

「遅い。僕を待たせるなんて一体何を考えているんです」

「う、ごめん……」

……この冴え渡る毒舌さえなけりやあなあ。

あたりにもチラホラとドレスローブ姿の生徒が見える。女の子は、誰もがレギュラスに一度は目を奪われるようだった。

そりやあそうだ、すつと通った鼻筋に、綺麗な二重の切れ長な目、すつと伸びた背筋に、華奢ではあるがクイティッチ選手らしいしつかりとした筋肉。少し憂いを含んだ眼差しに、見つめられたいと願う女の子も多いのではないか。

そしてそんな女の子たちにこう言いたい。レギュラスの近くにいたら、毒舌で心が折れるぞ。

会場は、大きなテントのようなどころだった。色とりどりのビロードで壁が覆われ、何人もの屋敷しもべ妖精がこっちでうろろうろあつちでうろろうろ、大きな銀の皿を持って動いている。

「やあ、レギュラス、秋。来てくれて嬉しいよ」

スラグホーン教授が、ニコニコと人のいい笑顔を浮かべながらグラ

スを掲げた。ワインらしい液体が、中で揺れる。レギュラスが礼儀正しく頭を下げるのに、ぼくも慌てて做った。

「秋！」

そう声を上げて走ってくるのは、誰だろう、ぼくの親友、リリー・エバンズだ。よくもまあ、あんなに高いヒールで走れるものだ……尊敬しちゃうよ、全くもう。

真つ赤なドレスは、彼女の燃えるような綺麗な髪色にすごく合っている。しかし、ヒールを履かれちゃあ、スニーカーで現在リリーと同じくらいの身長のはくは、軽々と抜かれちゃうんだよな……そこが少し悲しい。

いや、これでも追いついた方なんだぜ。入学したての頃は、ぼくはおろか、セブルスよりも背が高かったし、リリー。

「……って、あれ？ セブルスは？」

セブルスの姿が見当たらない。そう思って尋ねると、リリーはふくれっ面をした。

「……知らないわよ。誘ってもくれなかったし、セブは」

「ええっ!？」

それは初耳だ。というか、耳を疑うことだ。

じゃありりーは誰と一緒に来たの、と尋ねようとしたところで——「やあやあ秋、御機嫌よう！ 素晴らしい青空だね！ 鳥が歌い、木々は囀り、日差しは囁く！ ああ、なんと麗らかな日だろうか！」

「……あー。うん、ジェームズ。もう日は落ちたよ」

ジェームズが飛び跳ねながら近付いてきた。凄まじくテンションが高い。

まさか、とリリーを見ると、リリーは渋い顔をした。

「……だって、行きたい行きたいってうるさかったんだもの……」

「……それでも、リリーが押し切られるって中々だね……」

「さすがの私も、行きたい行きたいですお願いします荷物持ちでも構いません本当僕のこととはそこの石ころだと思って頂いて全然構わないのでどうかお願いしますってプライドも何もなく談話室で土下座されちゃあねえ……」

そんなことしたのか、ジエームズ。そりやありりーも呆れ返るわけだ。

「セブルス先輩は確か、何かの集まりがあるって言っていましたよ？
ルシウス先輩の誘いだそうですね、ウキウキしたご様子で出ていかれました。僕も誘われましたが、先約があると断りをいれたんです」

と、そう言うのはレギュラスだ。

セブルスが『ウキウキした様子』というのは、これまた随分と珍しい。一体何があるというのだろう。それも、リリーとのクリスマスパーティーを差し置いてまで。

「つて、先約ってまさか……ぼく？」

レギュラスに尋ねると、レギュラスはその品のいい顔に「はあ？」と心底見下すような表情を浮かべた。

顔がいいから、本当、そういう顔が無駄に似合う。ぼくの心も折れそうだ。

「当たり前前に決まっているでしょう。分かりきったことを口にさせないでくれないですか」

「ごめんなさい……つて、ぼくの誘い断ってそっち行っても全然ぼくは構わなかったのに……」

今度は睨まれた。瞳の色はシリウスと同じ色合いをしている。

元来そっくりなのだ、この兄弟は。性格以外は。

「今度卑屈なことを言うようでしたら、僕は貴方と二度と口を利きません」

「ごめ……つと」

慌てて口を塞いだ。謝罪の言葉もダメなのか。

レギュラスは難しい。その点、シリウスはかなりシンプルなんだけど。

「あら？ どうして『穢れた血』なんかがここにいいのかしらね？」

クスクス、と笑って、一人の女子生徒がすぐ側を通り抜けた。ふわりと長い銀髪が印象的な、深い緑色のドレスを着た女の人だ。おそらく、ぼくやリリーより年上だろう。びっくりするほど美人だ。

その女子生徒は、ぼくの隣にいるレギュラスに目を留めて、心底お

かしそうに笑った。

「レギュラス。お元気？ 家名汚しのお兄様も達者かしらね？」

「……ええ、M s. クラリス。残念なことに元気が有り余っているようですよ」

それは残念なこと、と、彼女は上品に微笑んだ。そしてぼくらをチラリと見回すと、レギュラスに対して「お友達は選んだ方がよろしいんじゃない？」と嘲けるような笑みを向ける。

「純血の面汚しに、『穢れた血』ですか。彼らと関わってるようじゃ、ブラック家も落ちぶれたと言われてしまうわよ」

『穢れた血』。マグル生まれの子を——リリーを、侮蔑する言葉だ。

リリーの眉間にぎゅつと皺が寄る。しかし、何とも言葉を返せず、リリーは静かに俯いてしまった。そんなリリーの表情に浮かぶのは、疲れた諦め。

何度も何度も言われたことのあるその言葉に、もう言葉を返すこと、対抗することすら諦めてしまったのか。リリーにこんな表情を浮かべさせるまで、この言葉はリリーの心を深く傷つけたのか。

「二度とその言葉を口にするな」

ぼくに代わって——リリーに代わって、低い声でそう言ったのは、ジエームズだった。

彼は、酷く怒っていた。リリーを庇うように立ち塞がると、鋭い視線を女子生徒に送る。

「……あらあら。血を裏切るポッター少年？ おおいぬ座の一等星くんと仲がいいそうね。裏切り者同士、何かと気が合うのでしよう。何よりだわ」

「……僕のこととは何と云ってくれても構わないが、大切な人を侮辱されて尚、黙っていられるほど、僕はお人好しじゃないんでね。エバンズ嬢のこと、そしてシリウスのこともだ、M s. クラリス？ ……謝罪しろとか、多くのことは言わない。僕が言いたいのは、ただ一つだ。『失せろ』」

樂しげに女子生徒は笑うと「あらあら。それでは失礼しますわ」と言い、身を翻して去って行った。

ジェームズは眉を寄せて、彼女の後ろ姿をじつと睨みつけていたが、ふと表情を変えると「エバンズ！ 大丈夫かい？」と情けない声を上げた。

「君の気を悪くしなければよかったんだけど！ くっそあの……あの……あの、美人さんめー！」

「ええ、なんとか罵倒語を思いつこうとした形跡は認めてあげるけれど」

リリーはため息をついて、なおも飛び跳ねるジェームズを「うるさいわ」と絶対零度の声音で黙らせる。

そして、隣にいたぼくにしか聞こえない小さな声で呟いた。

「……ちよつとだけ……ちよつとだけよ？ ……見直してあげてもいいかもね」

その声音に、その言葉に、ちよつとだけ、胸の奥がざわついた。

その理由はいまいちよく分からなくなつて、それでもぼくは「そう」とだけ、リリーに頷いた。



クリスマス・ダンスパーティーの知らせは、風よりも箒よりも早く全校生徒に知れ渡った。

誰もが（特に女の子が）楽しみにダンスパーティーの話をしていたし、普段クリスマスにホグワーツに残る人は少数派なのに、今回は四年生以上は全員名前を書いたんじゃないだろうか。それくらい、ダンスパーティーの知らせは校内を熱狂させた。

ハリーら三大魔法学校対抗試合の選手四人は、ダンスパーティーの最初に踊らなければならぬ、というのが規則のようだ。それを知つてからのハリーは、もう一度ホーンテールと戦う方がマシだと思いつめんばかりに項垂れている。その気持ちは分からんでもない。

しかし我が兄ハリーは、ちよいと思いつめすぎじゃないだろうか。しかも代表選手でもあるのだし、女の子がまさしく選り取り見取りなのは。

そう言うと、ハリーは大きくため息をついた。

「彼女たちは僕が有名だから誘いたがってるだけさ。ハーマイオニーがクラムについて言った言葉が忘れられないよ。『みんな、あの人が有名だからチャホヤしてるだけよ!』ってね。今まで申し込んでくれた女の子の何人が、僕が代表選手じゃなかったら一緒にパーティーに行ってくれたと思う?」

「……あー」

なるほどね、とぼくは小さく呟いた。

「ところで、金の卵はどうだったの?」

確か、金の卵には、次の課題のヒントが隠されているはずだ。気になって尋ねてみると、ハリーは少し表情を曇らせ、代わりにロンが「ハーマイオニーみたいなこと言うなよな、アキ!」と、ハリーを庇うように言ってみせた。

この二人はついに今まで通りに戻ったようだ。ホツとする。

「それより、アキ。君は一体どんな調子なのさ」

「え? 何が」

「何が、じゃない、ダンスパーティーに決まってるだろ。アクア嬢は誘えたの?」

「……あー」

その話か。

もごもごと「誘えてない」と言えば、ハリーは仕方ないなど言うように笑ってぼくの頭を優しく撫でた。

「早く誘わないと、よく分かんない男に取られちゃうぜ? あの子可愛いもん」

「うう……知ってるよ」

知っている。アクアが可愛いことくらい、重々承知している。男子が放っておく訳ないことくらい分かっている。

「でも、勇気が出ないんだ」

僕と同じだね、とハリーは小さく呟いた。



昼食が終わると、次は数占い学の授業だった。アリスと別れ階段を降り、人気のない廊下に辿り着く。生徒にあまり知られていないこの廊下は、数占い学の教室に直通する近道だった。どれもこれも、『忍びの地図』作成のときの知識の副産物だ。

時間的にはまだ余裕があるが、早めに行って授業の予習をしておきたい。そう思い足を急がせるも、ふと人の声が入ってきた。珍しい、この廊下を使う人がぼく以外にいるなんて。

まあ廊下というのは使われるためにあるものだ、なんて考えつつ素通りしようとして、その場の異様な雰囲気、ぼくは思わず立ち止まると、慌てて隠れた。

セドリックと、もう一人は——レイブンクローのチョウだ。

チョウは、セドリックが勇気を振り絞って言う言葉を、じつと待っている。やがて、セドリックが口を開いた。

「あの、さ……僕と、ダンスパーティーに行ってくれませんか？」

……うおお、なんだこの緊張感。ぼくは誘う側でも誘われる側でもないのに、滅茶苦茶ドキドキする。

これを、ぼくが、アクアに？ 無理だよこんなの、心臓が爆発しちゃう。

チョウはしばらく黙っていたが、やがて頬を染めると、小さな声で「……はい」と頷いた。

カチンコチンに固まっていたセドリックの背中が、安心したように力が抜ける。覗き見している立場であるぼくも、ホツとして胸を撫で下ろした。

なんだよこの行事、心臓に悪い……。

「そ、そうか……ありがとう」

そう言ったセドリックの声は、若干上ずっていた。

「じゃ、じゃあ……クリスマスに、また」

「あ、ああ……また」

「あの、その……ふくろう便、送るから」

「あ、ああ！ そうだな、うん」

セドリックがチョウの言葉に何度も頷く。

チョウはまだ頬を染めたままだったが、「じゃあね、セド」と言うと、廊下を駆け出していった。ほんのり口元が緩んでいる。

セドリックはまだぼおつとした表情でその場に立ち竦んでいた。こつそり忍び寄って「よう色男!」と背中を思いつきり叩くと、「うわっ!」と度肝を抜かれたような声を上げて振り返り「な、なんだ、アキか……」と肩を下ろす。

「というか、見てたの? 覗き見とか趣味が悪いなあ」

「見えちゃったんだよ。覗き見たことは謝るよ、ごめんね。でも、おめでとう」

ぼくの言葉にセドリックは、珍しくも年甲斐もなく表情を緩めて「……ありがとう」と漏らした。

「君でも女の子を誘うの、緊張するんだ」

そう意地悪く言うと、セドリックは情けなく眉尻を下げる。

その顔、チョウには絶対に見せられないな。

「当たり前だろ。僕がそう女の子に慣れているように見えるのかい?」

「まあ、クイディッチの花形シーカー様ですしね。代表選手にも選ばれて、しばらく女の子のファンに付きまとわれてたろ?」

「知ってたのなら、どうして助けてくれないの」

「君が好んで連れ回してるのかなって」

「そんな訳ないだろ。全く……」

肩を竦めた。

「第一の課題、おめでとう」

「ああ、あれか……君の兄にもさ、ありがとうって言っておいてくれないかな」

「どうして?」

「ハリーが教えてくれたんだ、『第一の課題はドラゴンだ』って。それがなけりや絶対、僕は何の対策も立てられないままドラゴンの前に引きずり出されて負けてたよ。本当に助かった」

そう言ってセドリックはにっこりと笑った。

「しかし、僕もクラムもクイディッチ選手なのに、箒を使うなんてちつとも頭に浮かばなかったからなあ……ハリーの発想力には、本当に目を瞠るよ。それとももしかして、君の入れ知恵だったりするのかな？」

「それは違うよ。課題に対してぼくは何の手助けもしていない。正真正銘、ハリーだけの力さ」

誇らしくて、ぼくは胸を張った。しかし次にセドリックから出た言葉に、ぼくはしゅんと唇を尖らせることになる。

「ところで君は、ダンスパーティーのお相手は決まったの？」

「……話がいきなり飛ぶなあ」

「なあに、戻っただけさ。その様子じゃ、まだ決まってないみたいだね。君は人気があると思っただけだなあ、僕」

「言っておくけどね、セドリック！　ぼくは男に誘われても全く行く気にはならないんだよ!!」

誘われはしたぞ、確かに。しかし駄目だ、ありや駄目だ。

なんせぼくに声を掛けてくる九割が男なのだ。最初の一人二人は「あー可哀想に」な表情をしていたアリスが、数が増えるごとに笑い転げるのだ。やってられない。本当に髪を刈り上げるべきだろうか、と真剣に検討するくらいだ。

「セドリックも笑うんじゃない!!」

壁にもたれて笑うセドリックに地団駄を踏んだ。来世では間違っても『可愛い』とは言われない、アリスやシリウスやセドリックのようなイケメンに生まれてやるんだ。

しかし、男に誘われてみて思ったが、よくレギュラスは幣原秋の誘いをオーケーしたもんだ……普通は断るだろうに。

「つくく、ごめんごめん……つい、アキらしいなって」

「らしいってなんだよ!」

「じゃあさ、アキは誘いたい女の子っているの？」

う、と言葉に詰まった。お、とセドリックが悪戯っぽい光を目に宿す。

「いるんだ?」

「……ノーコメント」

「それはイエスととってても？」

「……好きにしなよ」

「楽しみにしてるね」

「……趣味悪い」

「覗き見してた君には言われたくないな」

むうっと膨れると、セドリツクは優しく笑ってみせた。

「……頑張れ、アキ」

その言葉に、ぼくは息を吐いた。

「……頑張る」

——クリスマスダンスパーティーまで、あと二週間。

第25話 歯車は止まらない

ホグワーツで、魔法薬学教授のホラス・スラグホーン教授主催のクリスマスパーティーが開かれている、ちょうど同時刻。こちらでも、集まりが開かれていた。

場所は、ダイアゴン横丁とは雰囲気も通りを歩く人物も正反対の場所である、ノクターン横丁の、更に通りを何本も挟んだところにある小さな民家。そこが、トム・マルヴオロ・リドル、通称『ヴォルデモート』の隠れ家の一つであることを知る人は、そう多くない。

見た目はパツとしない民家だが、一步中に足を踏み入れれば、建物の中は外から見かけがつかなくらい豪華で煌びやかに装われている。しかし、日当たりが悪いのか、どんなに煌びやかであろうとも、陰気臭い印象は拭えない。しかしその印象も、この家の主人は好んでいるのだろうか、言うだけ野暮か。

その家の、一番奥の、一番広い部屋。そこで、その家の主、トム・リドルは、椅子に座って足を組みふんぞり返っていた。その顔には、かつての整った面影は見当たらない。人ならざるものに身を落とし、更に闇の深く深くまで埋没する姿が、そこにはあった。

彼の足元には、跪いた姿勢の人物が三人。ルシウス・マルフォイ、アンバー・ベルフエゴールと、今年ホグワーツを卒業した、バーティミス・クラウチ・ジュニアだ。

「連れてこい」

闇の帝王のその一言に、三人は短く「は」と声を揃えると同時に立ち上がる。

そして部屋の外へと出て行った。

部屋の外には、不安げな面持ちの少年らが数人、緊張して、しかし手持ち無沙汰に待っていた。マルフォイとベルフエゴール、そしてクラウチが姿を現した瞬間、一斉に視線を集める。

見たことがある顔ぶれも多い、スリザリンの後輩か。エイブリー、マルシベール、ロジエール、ウィルクス。その中に一際不健康そうな顔色をした少年がいた。セブルス・スネイプだ。

「セブルス、おいで」

マルフォイの言葉に、セブルスは驚いたように目を瞬かせた。一瞬だけ漏れた不安を、すぐさま胸底へと押し隠したその技術に、さすがだとクラウチは舌を巻く。

この少年は、高等技術である『閉心術』を、半ば無自覚に、いとも簡単にやってのける。闇の帝王に相対するには相応しい人材だ。

進み出たセブルスに、恨みとも何ともつかない視線が無遠慮に突き刺さる。しかしその視線にはビクともせず、セブルスはマルフォイに従い、部屋の中へと入っていった。

部屋に入ったセブルスは、目の前の闇の帝王の姿を見た瞬間、膝をついて頭を垂れた。

しかし闇の帝王は優しげな声音で「近く寄るのだ、セブルスよ」と囁く。その言葉にセブルスは、一瞬迷ったようだったが、すぐさま立ち上がると闇の帝王へと歩み寄った。目の前で再び膝をつく。

クラウチもベルフェゴールも、マルフォイでさえ、闇の帝王には「今からセブルス・スネイプという少年を連れて行きます」などと言った覚えはない。しかしすぐさま目の前の少年の名前を看過する闇の帝王は、凄まじいまでの開心術士だ。

そして今から、この術士は目の前の少年を、まさしく心の奥底までも見透かしてみせる。

「顔を上げよ」

その言葉に素直に顔を上げたセブルスの表情が、苦しげに歪んだ。闇の帝王はセブルスの目をまっすぐに見つめたまま、彼の心をじつと読み取っているようだ。誰も触れたことのない心の奥底まで、無遠慮に触れる。『自分』の核の部分を、闇の帝王は簡単に握ってしまう。そこを握られた人物は、もう闇の帝王に逆らうことは出来なくなる。従順な彼の駒に、命令を聞く彼の忠実なしもべに、成り果てる。

心の一番柔らかなところを突くだけで、人は簡単にも陥落する。それを身をもって教えてくれたのは、闇の帝王だった。この無口な少年も、すぐさま墮ちるだろう。

そう思い、ただ目の前の光景を傍観していたクラウチは、ふと目を

瞠った。

「貴様……貴様っ!!」

闇の帝王は、普段の余裕げな仮面をかなぐり捨てるとセブルスに駆け寄った。うずくまり呻くセブルスの肩を、遠慮なく揺さぶる。

「答える……幣原秋を知っているのか!?!」

セブルスは苦しげに眉を寄せていたが、疑問を湛えた瞳で頷いた。どうして闇の帝王が、あの少年のことを聞くのか分からない——本心から、そう思っているような瞳だった。

疑問に思ったのは、クラウチだって同じだ。

誰だ? 幣原秋とは。

闇祓いにも、そんな者はいなかったはずだ。

いや、そもそも、現在ホグワーツ生であるこの少年が、闇祓いの名を知っているとも思えない。

では、一体誰なのか?

闇の帝王にこんな表情をさせる、幣原秋という人物は、一体誰なのか?

「……ははははは……はははははは!! まさか、まさかこんなガキが知ってるとは! こんなガキと、まさか繋がりとあるとは!! 直、見つけた、お前の息子を!! お前の負けだ、幣原直!! 俺様の勝ちだ!! はははははははは!!」

哄笑する闇の帝王に、言い知れぬ恐怖を感じた。マルフォイは、クラウチよりももっと露骨に、闇の帝王を恐れているようだ。小さくクラウチは舌打ちをする。ベルフェゴールは能面のような仮面を被ることに成功したようだったが、それでも焦りは透けて見えた。

闇の帝王はしばらく狂ったように叫び、狂ったように笑っていたが、やがてその笑いを収めると、今まで通り静かで厳かな声で——しかし、喜色を抑えきれぬ声で——セブルスに腕を出すよう告げた。思わずクラウチは顔色を変える。

まさか、まだ十五かそこらの少年を!?

セブルスの顔には、ありありと恐怖の色が刻まれていた。この少年が、ここまで感情を露わにするのは珍しい。まあ、闇の帝王に強力な

『開心術』を掛けられてなお、無意識に貼っていた『閉心術』を保てるほどの人材はそういないだろう。

腰が引けている様子のセブルスに構うことなく、闇の帝王はセブルスの左腕を掴むと、袖をぐいと捲り上げた。細く白い腕が露わになる。

闇の帝王が、杖の先をセブルスの左腕に押し当てた。

「——っっ!!」

言葉にならないセブルスの絶叫が響く。思わず眉を顰め、目を逸らしていた。ズキ、と、クラウチ自身の左腕も鈍く痛む。思わず撫でさすった。あれは確かに、痛い。

セブルスの悲鳴が絶え絶えになり、やがてすすり泣きのような音が漏れた。

闇の帝王は左腕を抑えうずくまるセブルスに何も声をかけることなく、満足げに立ち上がると、虚空を見据え、高らかに、何より楽しそうに、叫んだ。

まるで。

ライバルに勝ち越したことを確信したような表情で。

「勝ったぞ——僕は、俺様は、君に、お前に——幣原直!!」



「そうは言っても、だな……」

セドリツクには「頑張る」と言ったが、そう簡単にアクアを誘えたらこんな苦勞はしない。呼び止められないから苦勞しているんじゃないか。

本当、どうして女の子って皆で固まって歩くのだろう。ぼくとおんなじ思いをしている男はきつと多いはずだ。

ハーマイオニーは、驚くべきことにビクトール・クラムと行くようだ。「ハリーとロンには内緒よ?」と言って教えてもらった。

本当にあの二人は、ハーマイオニーを女の子だと思っていない。それは時折とても気持ち良く見ていられるのだが、ハーマイオニーとし

ては複雑なようだ。性差は感じて欲しくないが、女の子として見て欲しい……と。女心は複雑だ。

ハリーはチョウを誘いたかったようだ。これにはぼくも驚いた。いつの間にチョウを見初めていたのか……クイディッチでかな？ チョウ、レイブンクローのシーカーだし。

ぼくとしては、ハリーがチョウを好ましく思っていたことにびっくりしたが、ロンやハーマイオニーは納得顔だったのがよく分からない。しかも、二人ともぼくをじーつと見て、の納得顔だし。納得いかないのはこつちだつて。

時間ばかりが過ぎる中、もう、クリスマスまで十日を切っていた。ぼくは、まだアクアを誘えずにいる。



「とつとと声かけちまった方が楽だつて」

そう言いながら、アリスは熱々のシチューをスプーンで口に運んだ。ホグワーツにもシンシンと雪が降り積もる今、身体を温める料理がテーブルをところ狭しと並んでいる。

ぼくはグラタンを引き寄せつつも「……そりゃ、それは分かってるんだけどさ」と唇を尖らせた。

「お嬢サマが待ちくたびれんのが先か、お前が声かけるのが先か。こりゃあいい勝負だな、全く」

「そういうアリスはどうなのさ？ さっぱりそういう浮ついた話聞かないけど」

「お生憎だな。もう誘われた」「誰っ!？」

テーブルに勢い良く手をつけて立ち上がると、アリスは少し眉を顰めて「行儀悪いぞ」と言った。しかし機嫌はいいのだろう、口元が少し緩んでいる。

「ボーバトンの子さ。そこにいる、レイチェル・クレティエ」

慌ててアリスのフォークの先を目で追うと（と言うか、人に「行儀

悪い」とか言っておきながら、お前だって人をフォークで指してんじゃないか！)、そこには金髪ショートカットの女の子が友人らと談笑していた。頭に黒のニット生地帽子を被っている、綺麗で上品そうな子だ。スラリと細身で、華奢な手首には金色のブレスレットが覗いている。

「いつの間に……」

「お前がお嬢サマを誘う誘わないでうだうだしてる間に」

しれっとのたまうアリス。なんだこの差は、顔か、やっぱり顔なのか!?

「オー、あなーたがレイのハートを射止めた色男さんなーのですねー！」

そう会話に入ってきたのは、ボーバトンの代表選手、フラー・デラクールだ。長いシルバーブロンドの髪に、掘りの深い整った顔立ち。姿形、立ち居振る舞い、全てにおいて気品と魅力を備える彼女には、少しヴィーラの血が入っているらしい。

彼女と話していると周囲の男子の視線が気になるのだが、彼女はクイディッチ・ワールドカップで、転んだ彼女の妹にぼくが手を貸したことから、よく話しかけてくれるようになっていた。

「ああ、どうもな」

「レイを泣かしたら承知しーませんよ！」

「泣かさねーよ、多分。俺優しいもん、な、アキ」

「さあてどうだろうね、こいつ口が悪いから、余計なこと言って泣かせちゃうかも」

「バカ、余計なこと言ってんじゃねえよ」

「何言ってるんだ、大切なことだろ？」

にやりと笑って肩を竦めた。親友の恋路を邪魔するのも、親友の大切な責務だ。

「そういうアキはどーなんですー？」

「そうだぞーアキ、どーなんだー？」

と、風向きが変わった。興味津々と言った表情でぼくに向き直るフラーに、悪ノリするアリス。なんたること。

「えつと、そのー……まだ誘えてないというか……」

「m^全, e n f i n^も! 男はガツツ! 何をためらうことがあーりますか! ボーバトンの男、みーんな積極的ですよ! ホグワーツの男情けないね!」

「う、うう……」

何も言えずに言葉に詰まった。アリス、突っ伏して笑ってんじやねえ。肩震えてんの見えてんだよ馬鹿野郎。

「なんか……どうやっていいのか分かんないんだ。今までどうやって彼女と喋っていたのか分からない、というか……言いたいことはいっぱいあるのに、彼女を前にすると何も言えなくなる、というか」

あらあら、とフラーは大人びた笑みを浮かべて、ぼくの頭を撫でた。

と思った瞬間、頭を引き寄せられる。

「ホントーにかわいーですねアキは! ウブでかわいー男の子、わたし大好きでーす!」

ちよつと待つてちよつと待つてちよつと待つて、何だろこの顔面を優しく包み込む柔らかな二つの塊は?!?! 暴力的なまでに柔らかいんだけど何だよこれ?!?! そしてすっごいいい匂いするよ、何この匂い?!?!

! 周囲がにわかに殺気立つ。だって首筋が殺気でピリピリ痛いもの!

こういうとき一体どうすればいいの!?! 離して欲しいけど、一体フラーのどこを掴んで離して貰えばいいの!?!

「アキっ!!」

そんな声と共に、ローブのフードをグイツと掴まれた。喉が締められ思わずぐえつと声が漏れたが、とりあえず天国なのか地獄なのか分からないアレからは解放された。

フラーは楽しそうに「あらあら」と呟いている。アリスがニヤニヤと笑いながら、「後ろ見てみる、後ろ」と言い、ぼくの背後を指差した。

今ぼくのフードを引っ張ったのは、アリスじゃないらしい。じゃあさつきからフードを掴んで離さないのは一体誰なんだろう……と、首を回して見たところ――。

「あ、う、アクア……」

アクアが、見たこともない無表情で立っていた。まさしく冰雪系美少女と呼ぶにふさわしい、氷のような表情だ。一年の頃も、こんな無表情を向けられたことはなかったぞ。思わずゾクリと身震いをした。

「……アキ」

「ご、ごめんなさい!!」

アクアがぼくのフードを離す。瞬間、ぼくはアクアの前に両手を付いて土下座した。

「本当、そんなつもりはなかったんです！ ごめんなさい、許してください……」

「本当に、あなたは……いつになったら私を誘ってくれるつもりなのよ！」

思わず、目を見開いた。ゆっくりと頭を上げる。

アクアは、さっきまでの無表情を一転させ、顔を真っ赤にさせて、泣き出しそうな表情で両手をぎゅっと握りしめていた。大きな瞳に、涙が浮かんでいる。

「あ……」

周囲が、ぼくらの騒動を何だ何だと見ていたことにも、アクアの言葉で周囲が静まり返ったことにも、ぼくは気付かなかった。

ただただ、目の前のアクアを見ていた。

「……ごめん」

左膝を立てた。アクアの右手を取ると、真っ直ぐにアクアを見つめる。

アクアの右手は、ひんやりと冷たかった。

「ぼくとダンスパーティーに行ってくださいますか？」

アクアは顔を左手で覆うと、小さな声で「……はい」と頷いてくれた。

第26話 ダンスパーティー

「いやー見直したぜアキ。見た目はただの美少女だけど中身はちゃん
と男だったんだな！」

「まさかあんな大観衆の中で誘うなんてなー、やるなあ、真似出来ない
よ」

「うるさいなあー！」

同室の友人、ウィルとレインからステレオで言われ、ぼくは両手を
振った。

ついにこの日がやって来た。クリスマスだ。ただでさえ特別な日
なのに、今日はしかも、ダンスパーティー。これで浮足立たない人はい
ないんじゃないのか。

朝からたくさんのプレゼントに豪華な昼食、そして夜にはダンス
パーティー。雪に囲まれているものの、ホグワーツ中が熱気に溢れてい
た。

それまでぼくはハリー達三人にフレッド、ジョージを含めた総勢六
人で雪合戦をしていたが、七時になり暗くなって、どこに誰がいるの
かも分からなくなったのでお開きになった。

レイブンクローの寝室では、ルームメイトがもう身支度の準備をし
ていた。慌ててぼくも、昨日ハンガーに掛けておいたドレスローブを
引っ張り出す。

黒の艶やかなローブは、去年アリスの父親、リイフに見立てても
らったものだ。値段は聞いてない。聞くのも恐ろしい……。

もたもたとローブに袖を通してしていると、突然寝室の扉がバーンツと
開け放たれた。

「アキ・ポッターー！」

……あー、この声は。間違いない、アクアの弟、ユークの声だ。

振り返ると、ユークがズンズンとこちらに向かって歩いてくる。大
好きなアリスに目も向けないから、相当怒ってんな、こりゃ。

「アキー！ 姉上を誘ったなんて聞いてませんよ！」

「そりゃあまあ、言っていないんだもん……」

だって、絶対こうなると思ってたし。

アリスはとつと服を着替えた状態でベッドに寝転がり本を開いていたが、ボタンと本を閉じてユークに声をかけた。

「でもあんなだけ大々的に誘ったわけだし、よく今日まで知らなかったなあ、お前」

「だって、姉上もドラコも教えてくれないですよっ、二年生はダンスパーティーに参加出来ないから、そんな情報もあんまり回って来ないし！ アリスが教えてくれればよかったのに！」

「やだよ、お前面倒臭いもん」

ほーらよ、とアリスは立ち上がると、ぼくに付きまとうユークの脇に腕を入れ持ち上げ、「同学年の奴らに遊んでもらえ、俺らはこれから忙しいんだよ」と言って寝室の外に放り出した。

「アリス！ ひどいつ、僕はただ、姉上のために思ってる！」

「おー、あいつのことを思うんだったら、アキはそつとしいてやれよ」

そう言つてアリスはユークの鼻先でボタンと扉を閉める。ユークには申し訳ないが、少しホツとした。

アリスは息を吐くと、周囲を見回し「お前らおっせえなあ」と肩を竦めた。

「誰もがお前みたいにドレスローブを着慣れてると思うなよ！」

「そうだそうだ！ 不良お坊ちゃんめが！」

「お前みたいは何着ても似合う訳じゃねーんだぞ！」

瞬時にぼくらはアリスに怒鳴り返す。アリスは少し驚いたように目を見張ったが、やれやれと首を振って、ぼくに近付いてきた。

「ほーら、手伝ってやっから。持って生まれた顔はいいんだ、しゃんとしてりやあ問題ねえよ。たとえお嬢サマの隣でもな」

そう言いつつ、留め具の歪みやシャツの流れ、胸ポケットのハンカチの位置など、鏡ではよく分からないところを、アリスは手早く直してくれた。ありがたい。

やがて、アリスはぼくの首元のリボンタイに目を留めた。二、三度瞬きをして、

「……ちよいとずれてたぞ」

と言い、軽く位置をずらす。

「こうして見ると、本当アリス、アキの執事みたいだな。アキ殿下に仕えるフィスナー卿」

「お前もさされてえか？ ウイル」

「残念ながら、もう準備は終わった」

アリスとウイルスが軽口を叩き合っているのを尻目に、髪紐を丁寧に結び直した。

「ありがとう、アリス。行ってくる」

「おうよ、行ってこい」

につ、と笑うアリスに親指を立てると、ぼくは駆け出した。

レイブンクローの談話室には、普段と違う色鮮やかなドレスを身にまとった人たちが溢れていた。誰もが期待に満ちた表情をしている。思わず笑みが零れた。

スリザリン寮の近くまで行くと、アクアの到着を待つ。アクアはすぐに現れた。ぼくに気付くと顔を上げ、ふんわりと微笑む。

普段流したままの銀髪は、上の方で品良く結い上げられていた。普段見えない白い首やうなじや華奢な肩が見えて、自然と心拍数が上がる。

ドレスは水色の薄絹を何枚も合わせたようなもので、光に反射してキラキラと光っていた。胸元には、薄い水色の宝石が嵌ったネックレス。

「……可愛い」

素直に、口からそんな言葉が零れていた。無意識の言葉に慌てるも、アクアはほんのりと頬を染め「……ありがとう」と呟く。

そしてふと、ぼくのリボンタイに目を留めた。ぼくに近付くと、手を伸ばす。

「……少し、ずれてる」

「……っ」

アリスのせいだ、と叫びたい衝動を、ぐつと堪えた。こんなに近くと、アクアの銀色の睫毛の長さまでよく見える。

ふわりと香るこの香りは、何の匂いだろう。フラワーのような強烈な魅力の香りではないが、肺を満たし安らげる香りだ。

「お手をどうぞ、お嬢様」

芝居がかった口調で左手を差し出すと、アクアはくすりと笑って「……エスコートお願いしますね、王子様」と言い、ぼくの左手に右手を乗せた。

玄関ホールは、人で溢れかえっていた。大広間のドアが開くのは午後八時、それまで皆うろうろしている。ぼくとアクアはホールの端の方に行き、ドアが開くのを静かに待った。

ふと人混みの中、ハリーの姿を見つけた。隣にいるのは、確かグリフィンドールのパーバティ・パチルだ。レイブンクローのパドマ・パチルとは双子だっけ。

そう言えば、レイブンクローの女の子が誰かロンと行くようなことをお喋りしていたような気がする。ひよっとしたら、パドマがロンのパートナーか。

深緑色のローブは、とても落ち着いた色合いで、ハリーによく似合っている。ぼくの視線に気付いたか、ハリーがこちらを見て、驚いた表情を浮かべた。

ぼくは笑顔を浮かべて手を振ると、ハリーも手を振り返してくる。パーバティがハリーの今の仕草について尋ねているのだろう、ハリーがそれに答えるのを、ぼくはしばらく見つめて、やがて目を離した。大広間のドアが開いたのだ。

人に押し流されてはぐれないよう、アクアの手を掴んだ。恥ずかしくてアクアの顔をまともに見れない。

アクアは驚いたようにぼくを見ていたが、やがて繋いだ手に力を込めた。

扉の脇には、代表選手が待っていた。どうやら生徒全員が着席してから入場するようだ。四人の代表選手と四人のパートナーが、入場する人たちを手持ち無沙汰に眺めている。

もつとも、眺めているのはこちらと同じだ。代表選手とそのパートナーを、誰もが穴が開くほど眺めていた。

フラーのパートナーは、レイブンクローのクイティツチキャプテンで監督生のロジャー・デイビス。そしてセドリツクとチョウは、ぼくに気付くとにつこり笑って手を振った。

セドリツクが「やったな」と口パクで伝えてくる。余計な御世話だ
い。

ハリーはぼくとアクアを見て、につこりと笑った。

アクアはちよつと戸惑ったように、軽く首を傾げてハリーを見た
が、おずおずと笑みを返した。

そして、クラムとハーマイオニーの姿。

ハーマイオニーは見違えるほどに可愛くて、普段の彼女を知る者は
皆あんぐりと口を開けてハーマイオニーを見ていた。艶やかな栗色
の髪に、薄い青のドレスで柔らかく微笑んでいる。とつても美人だ。

「……ハーマイオニー、とつても可愛いでしょ」
心を読まれたかと思った。

慌ててアクアを見ると、しかしアクアは何処となく誇らしげだつ
た。

「一緒にドレスを選んだのよ。……すつごく可愛い」

ハーマイオニーがぼくとアクアに気がついて、華やかな笑顔で手を
振った。アクアがびよんと軽くその場で飛び、手を振り返す。子供つ
ぽい仕草のアクアも、とつても可愛い。

大広間の中も、普段とは全く違っていた。

銀色に輝く霜で壁が覆われて、空を映す天井の下には、ヤドリギや
蔦が絡んでいる。普段のテーブルは取り払われ、代わりに十人くらい
が座れる円形のテーブルが数多く置かれていた。

大広間の席に全員が着いたのを確認して、マクゴナガル先生と代表
選手、そしてそのパートナーが入場してきた。拍手で出迎える。

ハリーは緊張の面持ちで、きつと自分の足にまずいて転ばないよ
うに必死なのだろう、と思つて微笑ましくなった。

代表選手は審査員のテーブルに近付くと、揃つて腰掛けた。ハリー
の隣にはパーシーがいる。綺麗な濃紺のパーティローブを纏つてい
た。

ふと気がつく。クラウチ氏の姿が見えない。ダンブルドア、マダム・マクシーム、そしてカルカロフ、バグマン氏がいるのに、どうしてクラウチ氏はいないのか。体調でも崩したのだろうか。

クリスマスのディナーは、驚くほどに美味だった。ひよつとする、横にアクアがいたからかもしれない。

アクアをじっと見つめると、アクアが気付き、何？　と言わんばかりに首を傾げてこちらを見つめるその姿が、ぼくにはたまらなく可愛く見えるのだ。

食事が終わると、ダンブルドアは立ち上がり、生徒たちを立ち上がらせた。杖を一振りすると、すべてのテーブルは壁際に退いていき、真ん中に広いスペースが出来る。

その後、ダンブルドアは右手にステージを拵えた。ドラムやギターなど様々な楽器がそこに設置される。

そして「妖女シスターズ」が、大勢の拍手に迎えられステージに上がった。

ぼくにはさっぱり馴染みがないが、普段魔法界で暮らしている人にとっては誰もが知っているバンドなのだろう。アクアが目を輝かせているから、いいか、とぼくは肩を竦めた。

伝統に従い、代表選手が先にダンスを始める。

幣原秋の時代でも、魔法魔法大会の年にクリスマスダンスパーティーはあったが、勝ち残った選手が先に踊る、ということはなかった。皆に見られながら踊らなくてよかったと心から思う。さすがのレギュラスも、全校生徒に大注目される状態で幣原と踊りたくはなかっただろうし。

一曲が終わると、すぐさま全校生徒もダンスフロアに出て踊り出す。ぼくも笑顔でアクアの手を取った。

夢のようだと思った。アクアとダンスを踊っている、なんて。

夢なら覚めないで欲しいと願った。

今日ばかりは、幣原秋のことだって、三大魔法学校対抗試合のことだって、ムーディ先生のことだって、スネイプ教授のことだって、先日ダンブルドアに言われたことだって、何もかも——自分が何者か、

なんてことも、全て——忘れ去ってしまいたい。

ただ、目の前で笑顔を見せる一人の女の子のことだけを考えていた。ただただそれだけを、望んでいた。

「楽しんでるか、アキ？」

そう尋ねられ後ろを向くと、セドリツクとチョウのペアだった。心からの笑みを浮かべる。

「当然！」

楽しくないはずが、ないじゃないか。

曲が一旦ひと段落ついた。

アクアの頬が赤みを帯びて火照っているので、「休憩しようか」と提案すると、アクアはすぐさまコクリと頷いた。ちよつと無理をさせてしまったのかもしれない。

共に飲み物を手に取り丸テーブルへ着くと、アクアは一息にグラスを煽り、そして人心地ついたように息を吐いた。汗で前髪が額に貼り付いている。

ぼくの視線に気付いたか、アクアは前髪を気にしつつも照れたように笑った。

「……暑いわね、全く」

「ああ、本当に」

ぼくも笑みを返した。

すると、ぼくの隣にアリスがどっかり腰掛けた。背を逸らし、ぐつたりと肩を落としている。

「……あー、疲れた……」

「アリス、パートナーの女の子は？」

そう尋ねると、「あつちで違う奴と踊ってる」と言い顎で方向を指した。

腕を上げるのも億劫らしい。珍しい、アリスがこんなにも疲れてるなんて。

「女の子舐めてたぜ……なんだあの無尽蔵な体力は……見た目と全然違うじゃねえか……」

「ふん、その程度で音を上げるとは、お前もその程度か、フェイスナー」

ドラコがどこから聞いていたのか、楽しみに会話に入ってきた。しかしドラコも頬を紅潮させ、オールバックにされた髪は何束か額に掛かっている。

「そういうお坊ちゃんも息が上がってるようだが？　ダンスパーティーなんてしよつちゅう行き慣れてるだろうに、このくらいで息を切らして大丈夫なのか」

アリスも皮肉で応戦する。この二人は、全く変わらない。

熱気で言い合いがヒートアップしてもまずいし、せつかくのダンスパーティーなのだ、楽しまなくつちや勿体ない。

ドラコにアクアの隣にでも座るように促すと、「ああ」と頷き素直に腰掛けた。

「ドラコ、パンジー連れてたよね？　放っておいて大丈夫なの？」

「向こうでクラスメイトと喋っている、楽しそうだし大丈夫だろう」
「そう」

しかし、アリスもドラコもパートナー置いてぼくのところに集まるなよな。ここだけ男密度が高くなる。

「アキは女の子みたいに見える目だし、問題ないさ」

「ちよつとドラコー」

声を上げると、ドラコは声を上げて笑った。

ドラコと喋るのも、思えば久しぶりだ。しかし、あんまり歳月を感じない。

「それにな。……最後だし、やりたいことがあつて来たんだ」

「やりたいことって？」

ぼくは首を傾げた。ドラコは微笑むと、アクアを見た。とても優しい眼差しだった。

「アクアを、一曲だけ貸してくれないか？」

アクアは驚いたように目を見開くと、申し訳なさそうにぼくを見上げた。

ぼくはアクアに笑いかけると、ドラコを見る。

「うん、気が済むまで、どうぞぞ」

「……ありがとう、アキ」

ドラコはぼくに頷くと、アクアの前に跪いた。

どこまでも格式高く、どこまでも優美にアクアの右手を取り、グローブ越しに軽く口付けると、真摯にアクアを見上げる。

「僕と踊っていただけませんか？」

アクアは、少し迷ったようだった。しかしぼくが背を押すと、ぼくをちらりと振り返った後、フロアに出て行った。

今、妖女シスターズは、穏やかなワルツを奏でている。そのリズムに従って、二人は踊り出した。最初は表情を曇らせていたアクアだったが、ドラコが何事か囁くのに、だんだんと表情を明るくさせる。

ふわり、ふわりと、ターンのたびにアクアのドレスが揺れる。ドラコがアクアの腰に手を回し、抱き上げた。二人は、とても無邪気に笑っていた。

いい表情をしているな、と、素直に思った。

「……あーあ、いいのかよ、アキ」

「いいんだよ、ぼくは」

アリスに、言葉を返した。

それは、本心から出た言葉だった。もっと嫉妬に焦がれるかと思っていたのに、胸の中はひどく穏やかだ。

「アキ、お前なら大丈夫だよ」

何の気負いもなしに、アリスはそう言った。

一体何が「大丈夫」なのか、そんなことはアリスは言わなかったし、ぼくも聞かなかった。

「……ねえ、アリス」

ぼくは悪戯っぽく笑って、アリスを見た。アリスも目に光を湛え、ぼくを見返す。

「一緒に踊らない？」

「奇遇だな、同じこと考えてた」

「じゃあ、決定だ」

「お前女役踊れんの？」

「踊れるよ、実際に踊ったこともある」

「いつの話だ、そりゃ……」

「前世の話だよ」

アリスに手を差し伸べた。アリスもにやつと笑ってぼくの手を掴む。

「あっはははは!!」

楽曲はいつの間にか、テンポの早くノリの良い曲に変わっていた。周囲も最初のパートナーと踊る、というよりは友人とお遊びで踊っている、みたいな人も多く、ぼくらはとても気楽にはしゃぎ合った。

誰も形式に拘らない。ターンを回り過ぎようが、相手をぶん回し過ぎようが、誰に気負う必要もない。

呼吸を読もうとも思わない。自分が思うままにステップを踏めば、自然と息が合っている。それは、アリスも同じだろう。

お互いが自由気ままに、居心地のいい場所を求めて、自然と隣にいるのだ。

他の誰でもない、ぼくが、アリスとアクアの隣にいたいと感じたんだ。

それだけ分かっていたら、大丈夫だろう。



ふて腐れた表情で、アクアはぼくを待っていた。

ドラコは二曲だけ踊ると、パンジーの元へと戻ってしまったらしい。アリスと調子に乗って四曲も踊ってしまったことに対して、アクアは唇を尖らせていた。

「……私とは三曲しか踊ってないのに」

「あー……ごめん」

しかし、もう「妖女シスターズ」は休憩に入りそうな気配だ。おそらくこの曲で終わりだろう、そんな雰囲気漂っている。ダンスホールも人はまばらになっており、生徒は思い思いに飲み物を飲んだり歓談に耽ったりと時間を過ごしている。

「……外に出てみない?」

そう誘うと、アクアは「……いいわよ」と言って笑った。



玄関ホールに出ると、正面の入り口とは逆の方に歩いて行く。裏口から外に出た。周囲は灯りも人気もない。

杖を振り上着を『出現』させると、アクアに被せる。心細げに、アクアはぼくの手をぎゅっと掴んだ。とくん、とぼくの心臓が跳ねる。「どこに行くの?」

「内緒」

そう言うと、アクアは不満を示すようにぼくの手を強く握った。痛い痛い。

月の明かりを頼りに、ぼくらは歩いていく。澄み渡った冬の空気の中、月は煌々と明るく存在を示している。

吐く息が白い。今はまだ涼しいと感じる夜風も、汗が引いてくると寒く思うだろう。アクアに風邪を引かせるのもまずい。早めに済ませて、早めに帰ろう。

温室の横をすり抜け、森へと抜ける小道に入った。まっすぐ行くと、『禁じられた森』へと辿り着くルートだ。

「……森へ行くの?」

アクアは少し不安げに尋ねた。

「そこまではいかないよ。もうちよい手前さ」

そう言って、小道の途中で左に曲がる。

少し行くと、視界が開けた。

「……わぁ……」

アクアが目を瞠る。ぼくは柔らかく微笑んだ。

「気に入って頂けたかな? お嬢様」

辺りは一面、花で埋め尽くされていた。

ただの花ではない、雪に根を張り、夜に幻想的な光の花びらを開く、なんとも不思議な花だ。昔、幣原秋が、悪戯仕掛人と夜の散歩を楽しんでいた時に見つけたもの。ぼくと彼らの宝物。

そんな宝物を、彼女には見せてあげたいと思ったんだ。

花粉が穏やかに舞っている。

花粉自体が色とりどりに発光していて、それが白と黒の雪景色の中
では、何よりも映えて見えた。

「ねえ、アクア」

驚くほど自然に、声が出た。

心は凧いでいた。

どこまでも穏やかに、ぼくはアクアを見つめた。

「ぼくは、君のことが好きだよ」

アクアはしばらくポカンとぼくを見ていたが、やがてパツと顔を赤
く染めた。

その反応がおかしくて、ぼくは笑った。

「ぼくと一緒にいたら、普通に過ごすより厄介事が増えると思う。ぼ
くはハリー・ポッターの弟で、同時に幣原秋でもあるから。ぼくは
きつと、君を最優先には出来ないし、君を誰より幸せに出来ると思
えない。それに、ぼくは嘘つきだから。これからも君を誤魔化し続け
ることもある。……それでも」

ずっと隣にいて欲しい。

それだけで、ぼくは幸せになれるから。

「君の一番の幸せを考えるなら、それこそドラコに渡した方がいいの
かもしれない。ドラコなら、君の幸せを一番に考えてくれる。君を
守ってくれる。……でもね、君を渡したくなかったんだ」

これは、ぼくのエゴイズムだ。

でも、少しくらい、いいだろう？

自分自身のために動いたって。

「……ねえ、アキ」

やがてアクアは、そつと口を開いた。ほんのりと笑みを浮かべて、
囁く。

「前にね。……『君を好きでいいの？』って、言ったでしょう？」
「……あ」

あの時のことを思い出して、頬が熱くなった。恥ずかしい、覚えら
れていたなんて。

あの日の支離滅裂さ加減を、ぼくは許さない。どうしてタイムターナーを返してしまったのか……あの日の自分をぶん殴ってやりたいくらいだ。何がなんでも、色々零しすぎだろう。

しかしアクアは、優しく微笑んだ。

「……好きでいて、いいよ」

アクアが、ぼくに手を伸ばす。

抱きしめた背中が、とても小さくて。それでいて、暖かくって。

ぼくはこの子を守ってもいいのだ、と、赦された気がした。

第27話 不死鳥の騎士団

クリスマス休暇がやってきた。今年は、去年と違って、学校に残る人は少ないようだ。

まあ、去年は学校主催のクリスマスダンスパーティーがあったわけだし、今年はそんな行事がないから、クリスマスくらい家で家族と一緒にゆっくりしたい人も多いのだろう。

いつもは四人で利用している寝室も、ルームメイトが全員帰省してしまったため、ぼく一人だ。談話室に降りてみても、見事にガラガラ、誰もいない。

「わーい、ひっそりじめだー！」

試しに叫んでみた。ちよいと反響したくらいだった。虚しくなる。

いつもは競争率が高くてなかなか座れない、暖炉のそばのふかふかしたソファに、膝を抱えて座り込んだ。

暇過ぎて、クリスマス休暇にと出された宿題は、全てもう終わらせてしまった。悪戯仕掛人も、今年は全員実家に帰っているらしいし、セブルスもリリーもないようだ。寂しいったらありやしない。

その時、談話室の扉がガチャリと開く音がした。誰か帰ってきたのか。

人見知りの自覚があるぼくは、普段なら知らない人には話しかけることが出来ないが、今は無性に話し相手が欲しかった。

誰でもいい、誰でもいいから、せめてチエスにでも付き合っただけがいい。一試合だけでいいから。

しかしぼくの予想を外れて、談話室に入ってきたのは、ぼくの知っている人だった。

「エリス先輩!？」

エリス・レインウオーター先輩。ぼくの三学年上で、現在は魔法省の闇祓い局で働いている。

去年の魔法魔術大会の本戦で、ぼくと当たった人。そして、この前の夏休み、ライ先輩と共に、ぼくをヴォルデモートに対抗するレジスタンス組織に誘った人。

エリス先輩は、ぼくの姿を視認すると、ちよつとだけ目を瞠って、「やあ、幣原」と微笑んで近付いてきた。レイブンクローの青い裏地が縫いこまれたローブじゃない。黒のインバネスコート、というのだろうか。クラシカルで重厚なイメージを相手に与える服だ。

襟元や袖口には、紋章が刻まれている。

「ああ、闇祓いの制服だよ。まだまだ訓練生だけだね」

ぼくの視線に気付いたか、エリス先輩はそう言うと、ぼくの斜め右隣の肘掛け椅子に腰掛けた。談話室を感慨深そうにぐるりと見渡し、微笑む。

「卒業してから半年も経ってないのに、懐かしく感じるよ。そう変わってないね」

「そんなに変わるもんじゃないですよ。……それより、一体どうしたんですか?」

ああ、と言って、エリス先輩はぼくを見た。

「夏休みの話、覚えているかい?」

「……ヴォルデモートに対抗するレジスタンス組織の話、ですか?」

「さすが、素晴らしい洞察力。我がレイブンクロー切つての人材だね」

お世辞だと分かっているけど、褒められるのは嬉しいものだ。

「その『不死鳥の騎士団』——ああ、名前がこの前決まってるね。名もなきレジスタンス集団から『不死鳥の騎士団』。どうだい、格好いいだろう? 誰が名付けたんだろうね、いいセンスだ……」

「……『不死鳥の騎士団』……」

その言葉を、口の中で遊ばせた。

なるほど、確かに格好いい。

エリス先輩は、にっこりと笑った。

「その一番初めの会合にご招待だ、幣原秋」



「しかし、暇そうだったね。課題はもう終わったの?」

ホグワーツ校内では、『姿くらし』は禁止されている。そのため、

ぼくとエリス先輩は、『姿くらし』が出来るほど校内から離れた場所へと歩いていた。

積もった雪を踏みしめつつ、エリス先輩はそうぼくに尋ねた。

「友達が、皆が皆帰省しちゃって。あまりに暇で、気付いたら全部終わってました」

そう肩を竦めると、「さすがだね」と、エリス先輩はおかしそうに笑った。

「あんまり、君とこういう話はしたことがなかったね。成績はどんな感じなのか、聞いても？」

「……そう面白くはないですよ。そんな、悪くはないです」

「それは分かってるよ。具体的な数字を教えてくださいませんか？ 覚えるだろう、君ならば」

むう、とぼくは口をへの字に曲げた。自慢のようにも感じるから、あまり成績については触れられたくはないのだけれど。

「……去年の、四年の時の成績は、トータル学年で五番でしたけど」
「なるほど、なるほど。トップはやはり、ジエームズ・ポッター？」

「そうです」

ジエームズには敵わない。努力している風にも見えないのに、頭いいんだもんなあ。嫌になっちゃうよ。

「でも、呪文学の成績は彼よりいいんだよね？ 『呪文学の天才児』、だっけ？」

「止めてください、そのあだ名、あんまり好きじゃないんです……」

「はは、ごめんね。じゃあ、『呪文学』と『闇の魔術に対する防衛術』、『変身術』、それに『魔法薬学』の成績は？」

どうしてそんな質問をするのだろう、と思い、ぼくは目を瞬かせる
と、エリス先輩を見た。

先輩は、謎めいた微笑みを浮かべてぼくを見ている。

「……単刀直入に言おう。『闇祓い』に入る気はないか？」
目を見開いた。

闇祓い。魔法省魔法法執行部の中でも、エリートと呼ばれる実戦部隊。入ることも至難の業、と呼ばれるほどに、その門は狭く、極めて

優秀な者しか採用しないため、採用者がゼロである年も少なくないと聞く。

今日の日刊預言者新聞の見出しを、思い出した。

『闇祓い三名、意識不明の重態』――。

「……ぼくなんか、受かる訳……」

「受かるさ」

エリス先輩の声は、確信に満ちていた。

「謙遜は美德だが、自分の能力をはつきりと見積もることも必要だと、私は思うよ。君には才能がある。そしてその能力を一番生かすことが出来るのは、闇祓いだ。闇祓いになれば、君は間違いなく、英雄になれるだろう。この戦況を左右するほどの戦力になるだろう」

「……………」

「今決めずとも良いさ。ただ、頭の片隅に、置いていてくれ。五年生だろう？ ふくろう試験がある。それで、今言った科目――『闇の魔術に対する防衛術』『呪文学』『変身術』『魔法薬学』は、本気で勉強しな――君の将来を決定づける、大切な科目になるかもしれない。まあ、『闇祓い』にならずとも、今言った科目をしっかり学ぶことは無駄にはならない……必ずや将来の糧になるはずだ」

エリス先輩の言葉に、ぼくはしばらく黙って、そして小さな声で「考えておきます」と返事をした。



エリス先輩の『付き添い型姿くらまし』で連れてこられたのは、一軒の古びた屋敷だった。扉にはドアノブがなく、木の板が打ち付けられ、いかにも放置されて長い家に見えた。

しかし、その木の板にエリス先輩が杖を押し付けると、扉はスルンと姿を重厚で深みのあるものに姿を変える。

「後で杖を登録しよう。そうすれば君も入れるようになる」

そうエリス先輩は囁くと、ぼくの背を押した。

家の中は、外からの荒れ家からは想像もつかないほど綺麗だった。

タイル敷きの廊下が、ずっとまっすぐ続いている。人に反応してか、棚置きのランプがポツと淡い光を灯した。

両脇の壁には、多くの肖像画が掛けられていて、その肖像画たちはじっとぼくらを——ぼくを見ていた。

「まだ小さな子供じゃないか!」

「あんな子供を入れるというの?」

「人手不足なのだ、悪くは言うてやるな……」

「気にするなよ、幣原。君の魔法力は、そこらの大人より数段上なのだから」

そう言いながら歩みを進めるエリス先輩の後を、追いかけた。足音が廊下に反響する。

まっすぐ行くと、一つの部屋に辿り着いた。漏れるざわめきから、ここに何人もの人がいるのであろうことが簡単に予想出来た。

エリス先輩はドアを開けると、ぼくの背中をぐいと押した。堪らず部屋に数歩踏み入れると、部屋にいた全員の視線が、ぼくに一斉に突き刺さる。

誰もがぼくより歳上だ。近くても、エリス先輩の同級生くらいの人しかない。

「お前の秘蔵つ子か? レインウオーター」

と、一人の男性が声を上げた。「そうですよ、ムーディ先生」と、エリス先輩がぼくの頭に手を乗せる。

「今年の魔法魔術大会優勝者、幣原秋。私を實力の半分程度の力でぶちのめした実力者です」

「止めてくださいその言い方!!」

思わず声を上げた。なんたることを。

しかし青褪めるぼくとは逆に、場の空気は和んだようだ。

「お前を少々鍛え直さんといかんようだな、レインウオーター」

「あ、やべ」

エリス先輩が素の声を漏らすのに、どっと笑いが零れた。

少し、緊張していた気持ちが解れる。

二つ空いていた席があったので、そこにエリス先輩と並んで腰掛け

る。

すると、隣の女の人がつこりとぼくに笑いかけた。丸顔で優しうな人だ。

「初めまして、幣原くん。アリス・プルウエットよ。エリスくんとは同期なの。この前の魔法魔術大会、見てたよ。まさかライを負かすとはねえー」

「ライが誰かに負けるのなんて初めて見たよ、いっつも澄ました顔しているし。でもアレで、案外抜けているというか、そこが面白いんだけどね……つと、初めまして、僕はフランク・ロングボトム。同じく、エリスの同期だよ。去年まで、グリフィンドールにいてね。ライとは七年間同室だったものさ。ま、悪友ってところかね」

そう言つて顔を覗かせたのは、短い茶髪の男の人だ。えつと……プルウエットさんもロングボトムさんも、エリス先輩と同じく闇祓いの制服を身に纏っている。

「は、初めまして」と慌てて頭を下げると、「そう畏まらなくつてもいいよ」と笑われてしまった。

「だいたい集まったようじゃの」

その声に慌てて顔を向けると、いつの間にかダンブルドア校長が、円卓についていた。一体いつ現れたのだろう、気配も感じなかった。

一瞬で場が静まり返る。ホグワーツでの何かしらの行事でも思うが、やっぱりこの人、魔法使つてんじゃないの？ 小学校の校長先生とはえらい違いだ。

「さて、我らが『不死鳥の騎士団』に、ようこそ名乗りを上げてくださつた。ぐるりと見回しただけでも、錚々たるメンバーのようじゃ。闇祓いが二人に、闇祓い訓練生が三人。魔法省関係者が三人。ここには集まっていないメンバーもまだおる。わしの愚弟もそうじゃが、我が古くからの友人や、ミネルバ・マクゴナガル教授も、是非ともと名乗りを上げてくださつた」

ほう、マクゴナガル先生が。すごいメンバーだ、とぼくは目を瞠つた。ふとダンブルドアと目が合う。

ダンブルドアがぼくに向けて密やかに片目を瞑つたのに、一体何を

返していいのか分からなくて、曖昧な笑みを浮かべた。

ダンブルドアは、ふと真面目な表情になって周囲を見回した。

「さて、『不死鳥の騎士団』じゃが、急速にやらねばならぬことが二つばかりある。一つは、メンバーを集めることじゃ。圧倒的に足らん、数も、力も、何もかも、あやつには劣っておる。戦力拡充が重要じゃ。しかし人選も大切じゃ。心より信頼出来る者を、あやつに屈せぬ心の持ち主を選べ。もはや年齢は問うておられぬ。力と強き意志を持つ者を何よりも求めるのじゃ、ヴォルデモートよりも先に。

もう一つ。この『不死鳥の騎士団』に逮捕権限はない。そのため、あやつやあやつに付き従うもの——最近『死喰い人』と呼ばせておるらしいが——を捕まえることは出来ぬ。そのため、『不死鳥の騎士団』では主に隠密活動を執り行うこととする。とても危険な任務じゃ。それに数も少ない。決して皆の者よ、ゆめゆめ、命を粗末に扱うことのないようお願いしたい」

全員が一斉に頷いた。誰もが目に強い光を宿している。ダンブルドアは「以上じゃ」と言つて椅子に腰掛けた。瞬間、ざわめきが再び立ち上る。

その時、一人の男性と目が合つて、ぼくは思わず声を上げそうになった——慌てて口を手で塞ぐ。その人はぼくの反応を見て、にやりと笑つた。

エリス先輩に「鍛え直さんといかんようだな」と言つた人だ——エリス先輩は確か、ムーディ先生と呼んでいたっけ。顔中が傷だらけで、両目がまだあるのが奇跡のように思える。笑い顔もまた、歪に口が裂けたようにも見えて恐ろしかった。

「ムーディ先生に驚いた？ まあ無理もないわよねえ、あんな形相なんだもの。私なんてこの前、夜中に会ったとき血相変えて叫んじやつたわよ」

「ああ、あの時の。血相変えて叫ぶのはいいけど、アリス、驚いた『ついで』に呪いを乱射は止めてくれよ」

「あの時の騒ぎ、君だったのかい、プルウェット」

プルウェットさんがそう言うのに、ロングボトムさんが天を仰ぎ、

そしてエリス先輩が笑う。

その、なんとも言えない暖かな雰囲気、ぼくは思わず笑ってしまった。

ここが戦争の最中で、そしてヴォルデモートに対抗する私的集団の第一線だということも忘れて。

大の大人も、子供の——そう、ぼくにとっては先輩だけれど、ダンブルドアや他の大人から見たら、ぼくらはひとくりに『子供』なのだった——そんな無邪気な掛け合いに耳を傾け、時折合いの手を入れつつも、笑顔を見せる者もいた。

——そう長からぬ先、この先輩三人衆ですらも物言わぬ存在にしてしまう不幸があるだなんて、一体誰が予想出来ただろうか。

出来るとしたら、ずっとずっと高みから悠然とぼくらを見つめ続ける、空くらいだろう。



クリスマスの後、ぼくら生徒はすっかり記憶の彼方へと忘れ去っていた『宿題』という強敵の存在を、ようやく思い出していった。

気がつけば、冬休みは残り十日を切っていた。そのためぼくらは、今まで一体なんで無為に日々を送っていたんだと、休みだというのに誰もが談話室の机と椅子を占領し、あぶれた人は図書館に流れ、必死になって課題をこなすという、休暇とは到底思えない日々を過ごした。

年が明けて、一月になった。十二月まではあんなに柔らかかった雪は、溶けて凍ってを繰り返し、驚くほど硬くなっている。

寒さはどんどん増していき、外に出るのも億劫なほどだ。

魔法生物飼育学の担当の教師は、年明けから、ハグリッドからグラブリー・プランク先生に代わっていた。

その理由はすぐに分かった——日刊預言者新聞に掲載された、ハグリッドの中傷記事だ。ハグリッドが、巨人を母親に持つ、いわゆる『半巨人』だということに、シヨックを受けた生徒は多いようだ。

それよりもぼくは、どうしてリータがこの記事を書くことが出来たのか、疑問に思えて仕方がなかった。彼女にハグリッドが馬鹿正直にこんなことを話すとは思えない。だって、ぼくやハリーだって知らなかったくらいなのだ。それを、一体どこで――

ハグリッドの小屋をアリスと何度か訪ねたが、どれも空振りだった。部屋の窓には分厚いカーテンが掛けられていて、外からじゃあハグリッドが中にいるのかいないのかも判別がつかない。

大広間にも姿を見せないハグリッドを、皆が心配していた。

あまり気分の良いニュースが流れない中、一月半ばのホグズミード休暇が、もっぱらのぼくの楽しみだった。

それに、今回は――今回こそは、アクアと一緒にだ。初めての彼女とのデート、前回のようないことが二度と起こらないよう、ぼくは細心の注意を払い、ホグズミード休暇を待ちわびた。

そして、やつと今日――ホグズミード休暇だ。この日を、一体どんな気持ちで待っていたと思う？

カレンダーに印をつけるぼくの姿に笑っていたアリスが忘れられない。くっそお、遠慮なく笑いやがって。

ホグズミードに行く、紅のホグワーツ特急が、これほど輝かしく見えたのは生まれて初めてだ。フィルチが名簿と照らし合わせ、列の中に許可証を持っていない者がいないか隈なく目を光らせている。

その行列を抜けた先、ホグワーツ特急のプラットホームで、アクアはぼくを待っていた。

暖かそうな緑色のマフラーを巻きつけ、白い手袋をして寒さを凌いでいる。黒いタイツにショートブーツの出で立ちのアクアは、普段学校で見る姿とはまたちよつと違っていて、新鮮だった。

「ごめんね、待った？」

ぼくの言葉に、アクアは頭を横に振った。

二人で一緒に乗り込むと、二人がけの座席に腰掛ける。そして、黙って汽車が動き出すのを待った。

アクアは決してお喋りではない。むしろ、かなり無口な部類に入らるだろう。ぼくは決して無口ではないが、彼女と一緒にいると、自然と

口数が減ってしまう。

でも今は、そんな無言の時間が心地よくも思えた。

ホグズミードは、ホグワーツに勝るとも劣らぬ雪景色だった。夏でも涼しいこの魔法使いだらけの街は、しかし、どの店も適度な空調が効いており、ホグワーツよりも暖かく感じられた。

ぼくはアクアと共に様々なお店を冷やかして回り、そして『三本の箒』に入ることにした。

「ハリーじゃないか！」

『三本の箒』には、ハリーとロン、そしてハーマイオニーの姿があった。ハリーがにつこり笑顔でぼくらに手を振る。ハリーの右手首には、以前ぼくが上げた護符が、銀色のブレスレットとなって掛かっていた。

カウンター席に彼らが座っていたので、ハリーのすぐ隣に腰掛けた。

「いやあ、それにしてもよくやったねえ、アキ」

「うるさいなあ」

ニヤニヤしているハリーの視線に耐えきれなくなつて、ぼくは唇を尖らせてそっぽを向いた。

ハリーはアクアに身を乗り出すと、優しく笑つて言う。

「アキを受け入れてくれてありがとう、アクア。どこを取つても、僕の誇らしい弟だ。そんな彼が君を選んだこと、そして君もまた、彼を選んでくれたことが、僕はとっても嬉しいよ。……アキをよろしくね」

アクアは、白い頬を僅かに赤くさせた。

ちよつとだけ目線を下げて、「……うん」と小さく頷く。

「ハリー、そんなこと言わなくてもいいよ！」

「えー？ でもさ、ちゃんと挨拶しておくべきじゃない？ 君の四年越しの片想いだって実つたわけだし」

「わー！ わー！！ マダム、バタービールひとつね、あったかいの！

アクアは!？」

「え、あ……私も、同じのを」

「オツケー！ マダム、ホットバタービール二つ！」

ハリーの言葉を掻き消すように声を張り上げた。アキラは目を白黒させていたが、ハリーはくすくす笑っている。わざとか、わざとだな、知ってた。

「ダメなの？ アキ」

「ダメに決まってるじゃない」

当たり前だ。それは秘中の秘、トップシークレット扱いだ。

……いつかアリスあたりもぼろつとバラしそうだなあ、あいつにも釘を刺しとかないとな。

「お、わ」

ふとロンが入り口を見て声を上げた。

リータ・スキーターが、カメラマンを従え『三本の箒』に入ってきた。近くにいたウエイトレスに飲み物を注文すると、ぼくらの近くのテーブルへとやって来る。

ハリーは先ほどまでの表情を一転させ、眉を寄せてリータを見ていた。リータはぼくらに気付いていないようだ。何やら満足げに、カメラマンに対して捲し立てている。

「あたしたちとあんまり話したくないようだったわねえ、ポゾ？

さーて、どうしてか、あんた分かる？ あんなにぞろぞろ小鬼を引き連れて、何してたんざんしょ？ 観光案内だとき……バカ言ってるわ

……ちよつとほじくってみようか？ 『魔法ゲーム・スポーツ部、失脚した元部長、ルード・バグマンの不名誉』……」

「また誰かを破滅させるつもりか？」

ハリーの大声に、近くにいた客は振り返った。

リータは顔を上げると、ハリーの姿を見つけ目を煌めかせる。

「ハリー！ 素敵さんすわ、こっちに来て一緒に——」

「お前なんか、一切関わりたくない。三メートルの箒を間に挟んだって嫌だ」

ハリーは静かに怒っていた。触れるのさえも躊躇われる程だった。

「一体なんのために、ハグリッドにあんなことをしたんだ？」

リータ・スキーターは眉を吊り上げた。

「読者には真実を知る権利があるのよ。ハリー、あたくしはただ自分

の役目を——」

「ハグリッドが半巨人だって、それがどうしたって言うんだ？　ハグリッドは何も悪くないのに！」

ハリーの声に、『三本の箒』中がしんと静まり返った。

リータ・スキーターは僅かに頬を引きつらせたが、すぐさま自動速記羽根ペンを取り出すとハリーに笑顔を向けた。

「ハリー、君の知っているハグリッドについてインタビューさせてくれない？　『筋肉隆々に隠された顔』ってのはどうなんす？　君の意外な友情とその裏の事情についてなんすけど。君はハグリッドが父親代わりだと思う？」

その時、ハーマイオニーはさっと立ち上がった。怒りのあまり、空になったバタービールのジョッキを持つ手が震えている。

「あなたって、最低の女よ。記事のためなら、何にも気にしないのね。誰がどうだろうと。たとえルード・バグマンだって——」

「お黙りよ。バカな小娘の癖して。分かりもしないのに、分かったよ。うな口をきくんじやない」

ハーマイオニーに対して、リータ・スキーターは辛辣だった。

「ルード・バグマンについてちや、あたしゃね、あんたの髪の毛が縮み上がるようなことを掴んでるんだ……もつとも、もう縮み上がっているようなんすけど——」

アクアが、膝に置いた拳をぎゅつと握りしめた。怒りの籠った眼差しで、じつとスキーターを睨みつけている。

ぼくは、いつの間にか運ばれてきていたホットバタービールを手に取った。そしてそのまま、狙い定めてリータ・スキーターにバタービールの中身を浴びせかける。

思わぬところからの攻撃に、スキーターは驚いたようだった。もつとも、それはこの場にいる全員がそうか。ハリーやロンやハーマイオニーも驚いた表情でぼくを見ている。

「ごめんね、思わず手が滑っちゃった」

ぼくはにこやかに笑って言った。

『読者には真実を知る権利がある』って、まさか自分の書いたものが

『真実』なんて本気で思ってたの？ 創作も甚だしい。辞めなよ、この仕事。作家にでもなりな。向いてないよ」

「……アキ・ポッター」

スキーターの目が据わる。

ぼくはマダム・ロスメルタに「ごめんね」と謝ると、二人分のお代を置き、アクアの手を引っ張った。アクアは慌てて椅子から降りる。店から飛び出していくぼくの背に、スキーターの「覚えておきな、アキ・ポッター」と低い声が追い続った。

「……アキー」

アクアが怒ったように声を上げる。

「ごめんねアクア、君を巻き込んだんじゃない」

「……そうじゃないでしょ!? あなた、一体何をしたのかわかってるの？ 幣原と瓜二つなあなたが——幣原が、新聞に載る意味を、私の両親や、闇の帝王や『死喰い人』の目に触れるってことが、どういうことか——」

なおも言い立てるアクアの唇に、そつと人差し指を当てた。

ぼくの行動に、アクアは黙り込む。

「ごめんね」

はつとしたように、アクアの目が見開かれた。

「……まさかあなた、それを狙ってた？」

「そこまで深くは考えていないよ。ただ腹が立った、それだけさ」
でも、と続ける。

「もう、そんなに幣原秋のことを——アキ・ポッターのことを隠してはおけない。そんな時期に、来ちゃったんだと思うよ」

アクアから視線を逸らして、ふと空を見上げた。薄い色の空に、静かに嘆息する。

——出て来いよ、幣原。

——お前のやりたいことは何だ。

言葉を口の中で遊ばせると、ぼくはこくりとそいつらを飲み込んだ。

第28話 望み

ピーター・ペティグリュウは、そろそろふくろう試験なのだから勉強したかった。

彼の親友の二人、ジェームズ・ポッターとシリウス・ブラックは、勉強している様子すらないのに抜群の成績を誇っている。ジェームズなんて、今まで一度も学年主席の座を誰にも譲ったことがない。一体どんな頭をしているのか、ピーターには到底同じ人間だとは思えなかった。

そして、この二人に対して「勉強したい」と言い張ったところで、鼻で笑い飛ばされるだけだということも重々承知していた。

『はあ？ 勉強したい？ わざわざふくろう試験のために？ 必要ないだろ、そんなもん』

『試験休みこそ、悪戯仕掛人の本領発揮という時き。ペティグリュウはその真意を分かってないねえ』

——この、頭がすこぶるよろしくていらっしやる二人には、僕みたいな勉強しなければ点数が取れない、いや、勉強したって点数が取れない劣等生の気持ちなど分かるものか！

……こういう時に役に立つのは誰か、ピーターはよく知っていた。幣原秋だ。

幣原秋。レイブンクローで努力家で勤勉な彼ならば、ピーターの試験勉強の邪魔をするジェームズとシリウスをまとめて叱ってくれるだろう。秋の言うことなら、ジェームズとシリウスは聞く——悲しいかな、ピーターが拳を振り上げ叫ぶよりも。

だからこそ、あの二人は、秋の前ではこんなことはしない。

そう——セブルス・スネイプに対し、今日もまた、悪質な悪戯を仕掛けるようなことを。

「へっへーん、この前の逆襲さ！ 今日こそ覚悟するんだなスネイプ、いやいや泣きみそスニベリーちゃん？ ……つとお！」

踵からいきなり吊り下げられたスネイプは、一瞬だけ驚いたようだったが、しかしそれも一瞬だった。すぐさま我に返ると、宙吊りの

まま杖を抜き、ジェームズに呪文を浴びせかける。校内を飛び交う踵吊りの呪文に、スネイクもまた慣れてしまったようだった。

ピーターは、シリウスとジェームズの後ろに隠れて物事を伺う。ジェームズとシリウスは、持ち前のその素早い反射神経で呪文を避けたが、その隙にスネイクは踵吊り呪文を解除すると、油断なく杖を突きつけつつ、ジェームズ、シリウス、そしてピーターを見据えた。その視線が恐ろしくて、ピーターは自然と目を逸らす。

「ルーピンはいないのか？ 珍しいことだ。だがしかし、集団で掛かってくるしか能のない腰抜けだということに変わりはないがな。そんなに一対一が怖いのか、腑抜け」

スネイクがせせら笑う。それに黙っているようなジェームズとシリウスじゃない。

「なあに、獅子は兎を狩るのも全力を尽くすというだろう？ いや、兎じゃなくて……コウモリかな？ 育ち過ぎたコウモリみたいじゃないか、なあ相棒？」

「……いや、その表現はよく理解出来ないが」

「相棒!? なんてこった、信じていたのに！」

ジェームズが大げさに天を仰ぐと「神は僕を見捨てたのか……」とさめざめ嘘泣きをする。

セブルスはその様子を睨みつけていたが、やがて冷笑を浮かべた。

「はっ、詰まらぬ小芝居はもういいか？ 貴重な時間を浪費したくないのでね、左様、グリフィンドールの諸君。ふくろう試験で将来詰めば、貴様らもこのような詰まらぬことをやろうとは思えないよ」

「試験前に切羽詰まって勉強する？ そんなの自己管理が出来ていない証拠じゃないか。授業内容と教科書さえ全部覚えていれば楽勝だろうに、あんな試験」

平然とジェームズは言つてのけるが、果たしてそれは何人を敵に回す発言か。少なくとも今、ジェームズの背後にいる自分は敵に回った、とピーターは確信した。

スネイクは眉をぎゅつと寄せ、不快さを隠そうともししていない。

「……なんで貴様などが学年首位を」

「さあね。才能なんじゃない？ 才能なき者に用はないよ、とつとと陰気な地下牢にお帰り？」

「貴様が先に呪文をかけたんだらうが！」

歯噛みしながら叫んだスネイプの言葉に、心の奥でピーターは同意した。

足音も荒く、セブルスは背を向ける。そこを逃すようなジェームズやシリウスではない、すかさず杖を向けるが——しかしそれは、スネイプの言葉によって阻まれた。

「ところで明日は満月だな。ルーピンは息災か？」

その二言が適切に離れてさえいれば、何とも問題はなかったらう。問題は、その二言が一呼吸の間に再生されたことだ。

スネイプは振り返る。その顔には、憎悪と歪んだ喜びが刻まれていた。

「……スネイプ。お前……」

「僕が何も気付いていないと思ったら大間違いだ。貴様らの悪事を全て重ね合わせると、一体どれくらいの謹慎になるだらうな？ おまけにルーピンの……」

「黙れ!!」

鋭く、シリウスは叫んだ。杖先から火花が飛ぶのに、スネイプは口を閉じる。

「……必ず尻尾を暴いてやる。その時が貴様らの命日だ。天下を取ったような自慢げな顔で校内を歩けるのも今のうちだぞ」

そう吐き捨てる、スネイプは今度こそローブを翻し、姿を消した。ジェームズとシリウスは杖を下ろすと、互いに目を合わせる。

「どう思う？」

「……ブラフだといいな、ああ」

ピーターは黙っていた。ブラフではないことは——スネイプが何らかのことを掴んでいることは——リーマス・ルーピンの『秘密』について、既に確信に近いある程度の推論を持っていることは、ピーターにとっては明らかだった。

ピーターは、ずっと人の顔色を伺って、様々な情報を集めて、今ま

でなんとか生きて、生き延びてきたのだから。

普通の人達が何気なく生きる日常も、ピーターにとっては戦場だった。弱い自分が生き延びる術。強い者の陰に隠れること。

幣原秋に負けず劣らずの苛められっ子だったピーターには、いつの間にかそんな生き方が染み付いていた。

「……………」

ピーターは、ただ黙って目を伏せた。

明日は満月だったな、と、考えながら。



あんなに先のことだと思っていた三大魔法魔術学校対抗試合、二つ目の課題は、いつの間にかすぐそこまで迫ってきていた。

ハリーは果たして、第二の課題のヒントを手に入れられたのだろうか。そして、それに対する対策は立っているのだろうか。心配で仕方がなかったが、ダンブルドアとの約束が、ぼくを身動きとれなくさせていた。

ハリーの様子を知りたい。でも、ハリーたちに面と向かって——なしは遠回しにでも——尋ねて進捗を聞いたところで、ぼくが「ふうんそうなんだ、じゃあね」と言って立ち去ることはあまりに不自然だ。ぼくはいつだってハリーに対して力を貸すことを惜しまなかったし、それをハリーも知っている。そんなぼくが急に態度を変えたなら、怪しむのは当然のことだ。

だって、ハリーがぼくに対してそんな態度を取ってきたら、ぼくだって不審に思うもの。

遠目から伺う限りにおいて、だが——ハリーの展望は、あまりよくなさそうだった。ハリーとロン、それにハーマイオニーは、毎日図書館に籠っては様々な呪文の本を漁っていた。その様子を見るに、おそらく『課題の内容は分かったが、その対策が見つからない』といったところだろう。

ダンブルドアが、ぼくに対して「ハリーに手を貸すな」と言った意

味を、ぼくは分かっている――。

ハリー・ポッターの名前がゴブレットに入れられたということは、誰かがハリーの命を狙っている、ということだ。でも、恐らくは、課題でハリーが死ぬことを願ってのものではないだろう――もしものことがあるかもしれないと思って、保険としてぼくはハリーにあの銀のブレスレットを贈ったわけだが――ならば、ゴブレットを騙した犯人は、必ずハリーを手助けしてくるはずだ。

そこを見極めたい、というのが、恐らくはダンブルドアの狙いだろう。そして、そのダンブルドアの狙いに、ぼくの存在は非常に邪魔なのだ。

しかし、第一の課題で、ハリーは見事自分の強みを生かしてみせた――あんな方法でドラゴンの卵を奪うなんて、思いもしなかった。

あれは、誰かに入れ知恵されたものじゃあないだろう――呼び寄せ呪文は四年生の呪文学の必修だし、そこから箒を呼び寄せ、ハリーの強みを生かすことは、ゴブレットを騙した犯人より、むしろ実際に授業を受けている生徒の方が思いつくハードルは低いのだから。

恐らく、ダンブルドアもそう考えている。

だから、第二の課題でいくらハリーが煮詰まっていようとも、ぼくは今ここで手を出してはいけないのだ。

煮詰まっているときこそ、今この瞬間こそ、犯人が一番ハリーに近付きたがる頃合いなのだから。

そこを逃しては勿体ない。

そう、歩きながらぼんやりと考えをまとめていたぼくだったが――
気配に、思わず足を止めた。

気配というか。感覚的に分かる恐怖心というか。

「……アキ・ポッターか。息災か？」

元闇祓い、現闇の魔術に対する防衛術教師――

マッド――アイ・ムーディが、目の前に立っていた。



(どうしてこうなった?)

ぼくは心の中で、全力で首を傾げていた。

何故だかぼくは、ムーデイの部屋に連れてこられていた。去年まではリーマスがいた部屋だ。

もつとも、リーマスがいた頃にあつた闇の生物たちはもうおらず、代わりに様々な魔法の物品がところ狭しと置かれていた。壁には『敵鏡』が掛けられ、靄のような物体を間断なく映し出している。ハリーの持つているものよりふた回りは大きい『かくれん防止器』はくるくると回り続け、様々な形の銀細工は小さく音を鳴らし続けている。

そして——ぼくは目を瞠った——少し空いた引き出しから覗いているのは、『忍びの地図』ではないか? 確かハリーが持っていたはずだが、一体どうしてここにあるのだろう。

「先日夜の散歩をしていたポッターから借り受けたものだ——お前の兄が、スネイプの奴から逃げ果せるのに力を貸した、その時にな」

ぼくの視線に気付いたか、ムーデイは引き出しを閉めた。

そして、ぼくの前に淹れたばかりの紅茶を差し出す。

ぼくの身体は、先ほどからずっと警報をガンガン鳴らし続けている。激しい胸騒ぎがその証拠だ。

しかし、今はそんな身体の指示に従うのは、あまりにも勿体なかった。

どうして、ここまで自分の身体がムーデイを拒否するのか、それを知りたい。身を刺すこの違和感は何なのかを確かめたい。

「毒なんて入つたらん——もつとも、警戒せよ、油断大敵とは、わしが言い続けておることだがな」

喉の奥で、ムーデイはくつくつと笑った。ぼくは受け取った紅茶に一瞥もくれず、ムーデイをまっすぐに見つめる。

「要件は、何ですか?」

「要件? まつこと奇妙なことを聞くな。え? 姿を変え、師弟の恩をも忘れてしまったか、幣原秋よ」

『幣原秋』——その言葉に、ぼくは身体を硬くした。

どうして知っている?

「目の前の紅茶が毒と思うか——試してみるといいだろう。幣原、お前ならばそれも容易」

「……………」

ぼくはムーディを睨みつけると、カップの取っ手を掴んだ。一息に飲み干すと、ソーサーの上に振り下ろす。

カップとソーサーがぶつかり合い、ガチャンとやかましく音を立てた。

「ぼくは幣原秋じゃない、アキ・ポッターだ……ホグワーツ魔法魔術学校四年、レイブンクロー寮のアキ・ポッターだ。そこを忘れないというのであれば、お話をお伺いしましょう」

「……なるほど。幣原ならばそのような愚行は起こすまい。確かに別人だな、アキ・ポッター」

しばし、ぼくらは睨み合う。

先に目を逸らしたのは、ムーディの方だった。懐から小瓶を取り出すと、蓋を開けぐいと煽る。そして蓋を閉めると、元通りに仕舞い込んだ。

「すまなかつたな、アキ・ポッター。しかし、幣原について話すことは構わんか？」

ムーディが何を考えているか分からないが、ぼくはひとまずこつくりと頷いた。

「左様、わしが知っているのは、訓練生上がりの幣原だ。通常は三年掛かるはずの訓練生を、異例の一年そこらで実践に組み込んだ。組み込んだのは、わしだ。クラウチが目をつけ、わしが第一部隊に突っ込んだ」

へえ、そうだったのか。それは知らなかった。

「初めてお前を見たとき、わしは三ヶ月も保たんだろうと思った。三ヶ月も保たずに殺されるか、もしくは頭がイかれて自殺するとな。

それは、仕方のないことだった。闇祓いの半分は最初の一年で死ぬ。残りの半分は、いつの間にか姿を眩まして故郷に逃げ帰る。それをも残った奴は、大体がイかれるものだ。

誰もが気が狂わんばかりの時代の中、お前は酷く『まとも』な奴に

見えた。だから、これから犯す罪に、十字架の重さに、耐えられるようには見えなんだ。

だからこそ、一番苛烈で過酷で最前線の第一部隊に突っ込んだ。せめて、じわじわと狂っていくより一気に狂って死ぬがいい。お前の力は、当時の魔法省にとっては垂涎ものだった。せめて狂うなら、その武器を使ってから狂え。じゃなきゃ宝の持ち腐れだ。そう思った。

しかし、お前は狂わなかった。殺されもしなかった。自殺はしたがな、ああ。だが『黒衣の天才』として、あの時代を闇祓いとして生きた人間として、為すべきことを為してから死んだ。それは讃えるべきことだろう」

——違和感。違う、と直感が叫んだ。

あなたが『初めてぼくを見た時』、それは『不死鳥の騎士団』の初会合のときだ。

——忘れていただけかもしれない。だけれども。

黙っている方がいいだろう、と、ぼくは口を噤む。

ぼくの内心に気付かぬまま、ムーデイは自身の両手を見据えた。

「アズカバンの半分はわしが埋めた。四分の一ほどは、お前が埋めただろう。だが、アズカバンにぶち込んだ数よりも多く、人を殺めた。捕らえるためでなく、殺す目的で、杖を振った。それでもわしは、まだ恵まれた方だった。お前よりかはな、幣原」

ぼくは幣原じゃない、と言いかけるよりも早く、ムーデイは「おつと、アキ・ポッターだったな」と訂正を入れた。ぼくは開きかけた口を閉じる。

「だが、わしの見込みが甘かった。お前は存外、莫大に重い十字架に耐えた。たとえ感情を殺し心が死んだとて、昏い双眸に光を灯さなくなったとて、それでも進み続けるとは、わしは想像していなかった。お前は、想像していたよりも強かった。誰もがお前に期待した。お前が、お前こそが、この世界を救ってくれるヒーローなのではないかと」
ムーデイはそこで、義眼ではない方の目を細めた。

「闇祓いの誰もが、十字架を背負っていた。重い十字架を背負う奴が、誰より一番強かった。奪った命、奪った未来、そして世界の期待を、あ

のときの闇祓いは一心に背負っていた。魔法界の未来のために、進み続けるしかなかった。立ち止まることは許されなかった。戦場での迷いは、即座に『死』に繋がる。

そんな中を、お前は先頭に立って進み続けた。折り重なる敵と仲間
の屍を振り返ることなく、足を動かし続けた。戦争の英雄、『黒衣の天
才』として」

幣原、と、ムーディは語りかけた。

「お前はもう十分に戦った。そろそろ、お前の選びたかった道を選んでもいい頃だ。」

もう誰も、お前を責めない。立ち竦んで蹲ったとて、誰も文句を言わない。もう、お前を縛る十字架は存在しない。ただただ、お前が幻想の十字架を追っているだけだ」

ムーディは言う。

「お前の思い込む使命はまやかした。その足枷は妄想だ。お前が見る夢はまぼろしだ。お前自体が、幻影だ」

ムーディは言う。

「お前の望みを叶えることを、もはや誰も邪魔しない。お前を縛る鎖は空想だ。お前の敵は迷妄だ。お前は生きる屍だ。お前は十二年前から、ずっと泡沫の夢を見続けている」

ムーディは言う。

ムーディは言う。

ムーディは言う。

「……幣原の望みって、何なんですか」
ぼくは口を開いた。ムーディの青い義眼が、じっとぼくを覗いてい
る。

果たして、彼は言った。

驚くほど、簡単に。

「死ぬことさ」

第29話 第二の課題

満月の夜、ベッドを抜け出して悪戯仕掛人らと一緒に校庭や禁じられた森を探索するのは、もう慣れたものだった。

何よりもまず、動物と触れ合えるというのは思いの外楽しいものだ（たとえ元が人間だとして）。特にパッドフット。大型犬に変身するパッドフットは、真つ黒な毛並みがすごくふかふかで、犬になっても綺麗なんだなあと思れ惚れしちゃう。

夜になると、ぼくなんかはすぐさま眠たくなってしまっただけで、そんな眠気を押し殺しての夜の探索が、ぼくはすごく好きだった。校則を破る、っていうことに、ロマンを感じる年頃だったんだ。

だから、思いもしなかった。

こんなことになるなんて。

「やあ、秋。今日はどこに行こうかね」

「君のお気に召すまま、どこへなりと、どうぞ？」

途中でジェームズと出会って、ぼくらは一緒に『暴れ柳』へ向かった。しかしそこには、何よりも楽しそうな表情を浮かべるシリウスと、ものすごく不安げな顔のピーターがいた。

何故だかすごく嫌な予感がしたのは、ジェームズも同じだったらしい。表情を真面目なものに変えると、静かにシリウスに「……どうしたんだ？」と尋ねた。

「遅いぞ相棒、それにレイブン。時はガリオンなり、だ」

「シリウス」

鋭い声に、シリウスは目を瞠った。やがてバツが悪い顔をして、「ちよつとからかってやろうと思っただけさ……」と呟いた。

「何をした？」

「あー、その、スネイプに会ってな。リーマスがポンフリーと『暴れ柳』の方に行くのを見たらしい。だから、木の幹のコブを突つけば、後をつけて穴に入れるぞ、って——」

その言葉を聞いた瞬間、ジェームズの顔色が変わった。ジェームズだけじゃない、ぼくも多分青褪めただろう。

「お、おい、ジェームズ、秋!？」

シリウスの声を背後に、ぼくらは駆け出していた。

ジェームズが、走りながらも地面の石をぼくの目の前に放る。ぼくはその石に左手を翳すと、『暴れ柳』に向けた。狙い違わず、その石はコブに当たり、『暴れ柳』は動きを止めた。

今だ、とぼくらは木の根元に開いた大きな隙間に身を滑り込ませる。

「ルーモス！」

それぞれが杖に明かりを灯して、リーマスのいる『叫びの屋敷』へと駆け出した。

どうか、どうか間に合ってくれ。

「っ、セブルス!!」

ぼくの親友、セブルスは、背後から走ってきたぼくらの姿に驚いたように呆然と目を見開いた。

「な、んで、秋……」

考えている暇はない。

セブルスの腕を掴んで「戻って！」と叫んだが、セブルスはぎゅつと眉を寄せると首を振った。

「校則違反は見過ごせない。君もだ、秋。自分が何をしているのか分かっていいのか？」

「今はそれどころじゃないんだよ！」

どうして分からない。思わず歯噛みした。

「ごちやぐごちやうるさいな、走れ!!」

ジェームズはセブルスの右袖のあたりをぐいと掴むと、脇目もふらず走り出した。

何が起こっているのか分からず、セブルスがフリーズしている隙に、ぼくもセブルスの左手を掴むと、走った。

背後から、何かが追ってくる音がする。

——何か、なんて。そんな言葉で誤魔化せはしない。ムーニーだ——人狼が、人間を知覚して、追ってくる。

ムーニーに噛まれるわけにはいかない。

ぼくらを人狼にしたら、リーマスは心の底から後悔するだろう。どれだけ嘆き悲しむだろう。

リーマスの心の闇は、深く、そして暗い。

誰も寄り添えないほどに。

リーマスは、自分自身を絶対に許さないだろう。

ぼくらがどんな言葉を尽くしたところで、リーマスは世界で一番、自分自身のことを嫌いになってしまおうだろう。

そんなこと——絶対にさせない。

「インペディメンター！」

パツと背後に向かって妨害呪文を唱え、再び走る。

本心では、このトンネルを爆破したいくらいだが、そうもいくまい。リーマスが卒業するまで、この道は使われ続けるのだから。

上り坂を、ジェームズが先頭で駆け上がった。セブルスを押し出す。ジェームズがぼくに手を差し伸べた。その手を取ると、一瞬で引っ張りあげられる。

「秋！」

「分かってる！」

慌てて、暴れ柳の入り口を塞いだ。

小枝、石、なんでも構わない、そこらにあるものは全て使う。

ドシン、と、塞がれた入り口が軋んだ。体当たりしているのだ。

今のリーマスに、理性は存在しない。あるのはただ、人狼としての本能だけ。

壊れないように、嚴重に。幾重にも瓦礫や石を積み上げたところで、体当たりする音が止んだ。

ほう、とぼくは安堵に肩を落とすと、その場にへなへたと座り込んだ。

セブルスは呆然とした表情で、腰を抜かしていた。

そんなセブルスに、険しい表情でジェームズは歩み寄る。

「お前……っ、ふざけるなよ」

ジェームズは、静かに怒っていた。

「死ぬところだったんだぞ?! 分かっているのか!!」

ビクリ、とセブルスの肩が震えた。

セブルスへの説教はジエームズに任せよう、と、ぼくはシリウスとピーターに目を向けた。

二人は気まずげに立っていたが、ぼくの視線に気付くと殊更にバツの悪そうな顔をする。

「どうしてぼくらが怒っているか、分からないわけじゃないだろう？」

「わ、悪かったって……」

「悪かったで済んで良かったと思いな」

う、とシリウスは言葉を詰まらせた。その隣のピーターに目を向ける。

「君もだ、ピーター。シリウスの今回の悪戯が度を過ぎていると、気付いていたのなら止めるべきだった。それでも君は友達か」

ピーターが大きく身震いをした。

俯いて、絞り出すように「……ごめんなさい……っ」と呟き、涙を零す。

「……リーマスがどれほど悲しむと思う？ ……少しは気付けよ、馬

鹿野郎」

そう言い残して、ぼくは二人の前を去った。

セブルスの前、ジエームズの隣に並ぶと、座り込んだセブルスと視線を合わせるようにしやがみ込む。

「怪我はない？ 大丈夫だった？」

「……っ、ああ……」

頬に切り傷がある。それを指摘すると、セブルスは思い出したように手を頬に当てた。

「……そう言えば、『暴れ柳』で、避けきれずに」

杖をそつと当てると、傷はみるみるうちに塞がっていく。

その様子を、セブルスは目を瞠って見つめていた。

「……傷はさ、癒すことが出来る傷と、癒すことが出来ない傷がある。

……君は、癒すことが出来ない傷を、自分とリーマスに負わせるところだったんだ。忘れないで」

セブルスの瞳が、揺れた。

ぼくは「無事でよかった」と、につこりと微笑んだ。



『幣原秋は、死にたがっている』

そのことは、ぼくの腹まですんと落ちてきた。

有り体に言えば、納得した。

幣原秋には、死に損ないという言葉がはつきりと似合う——本当は死んでいるはずなのに、何故か生きている。

死にたかったのに、今もまだ死にたいのに、今まで生きて、生き延びてしまった。

ぼくは、その願いを叶えてあげべきなのかもしれない。

……最近、眠りが浅い。眠りに就いても、二時間おきくらいに飛び起きてしまう。

おそらくぼくは、怖いのだ。

眠っている間に——ぼくの意識がないときに、幣原秋が出てきて、ふらりと死んでしまうんじゃないかと、そんなことを、何度も何度も考えてしまう。

飛び起きて、周囲が空しか見えない高い塔の屋上ではなく、自分のベッドだということに、心の底から安堵し胸を撫で下ろす。

幣原秋がなんと思おうと、ぼくは——死にたくない。

まだぼくは、この世界で、生きていたいよ。

たとえそれが、幣原秋にとってはこの上もない苦痛なのだと、分かっていたとしても。



第二の課題は、「湖の底にいる、選手たちが奪われたものを取り返す」というものだった。

バグマンがその言葉を観客席に向かって放ったとき、驚いたようにアリスはぼくを見た。

「驚きだな、そんなお題なら、お前の兄貴はお前を湖に沈めたがると思うんだが」

「ハリーが選んだ訳じゃない。選ぶのはお偉方さ。ぼくは選ばれなかった、それだけだよ」

そう言つて、ぼくは座席にゆつたりともたれかかった。

アリスはまだ納得いかない表情で首を傾げていたが、考えても詮無いと思つたのだろう、やがてモニターを観戦する姿勢に入る。

お偉方——とは言つたが、選んだのは恐らくはダンブルドアだ。

そして、ダンブルドアは間違いなく、ぼくを選びはしない。

観客席には、どこに座つていても見えるよう、正面、そして左右に、どでかいモニターが浮遊していた。モニターそれぞれが四分割されていて、代表選手が映し出されているのが見える。一体どこから撮影しているのだろう、代表選手が、カメラに気付く気配はない。

既に、代表選手は全員が全員、湖に潜っていた。フラアとセドリツクは『泡頭呪文』を、クラムは頭をサメに変身させて、今回の競技に臨んでいた。そしてハリーは——鯉昆布を。

決まつた、と思つた。間違いない。これは、ハリーが自分で考え出せるものではない。ロンも、ハーマイオニーがいくら学年一賢くても、これを思いつきはしないだろう。

後は、ハリーが無事に帰ってきた後——鯉昆布の効果は一時間だ、十分に保つだろう——この策をハリーに入れ知恵した人物について聞き出せばいい。

その人物こそが、ハリーの名前をゴブレットに入れ、ハリーを陥れようとした人物だ。

と、そこで水中から赤い火花が上がった。瞬時に観客席がざわめく。モニターを見ると、フラアが三体の水魔に襲われている。どうやら堪らず救援信号を上げたようだ。

救助要員として待機していた者たちが、予測の範囲内とも言うように、流れる動作で湖に飛び込んでいく。やがてフラアが岸边に辿り着いた。

驚くべきことに、フラアは号泣していた。再び湖に飛び込もうとす

るのを、毛布を抱えた看護師が数人がかりで取り押さええている。

「ガブリエール！ わたしのガブリエルが、まだ湖に!!」

半狂乱で叫ぶフラーは、愛する妹が自らの棄権によって湖の底に取り残されることに、酷い恐怖を感じているようだった。普段人の目をあれほど意識している彼女が、人目も憚らず泣きわめく姿に、驚いている人も少なくない。

しかしぼくには、フラーの気持ち痛いほどよく分かった。ぼくがフラーの立場で、そして湖に沈められているのがハリーだったら、同じようになるのは容易に想像がついたから。

まだぎわめきが収まらない中、一番最初に戻ってきたのはセドリックだった。人質であったチョウを、しっかりと抱いている。ホグワーツの観客席から、大歓声が湧き上がった。

チョウがゆっくりと目を開ける。それに感極まったように、セドリックはチョウを思いっきり抱きしめた。そのことに、大歓声は一オクターブまたテンションを上げ、「ビュービュー!」「見せつけやがって!」「幸せになれよクソ野郎!」「イケメンは滅べ!」「くたばれセドリック!」と言った暖かい野次も飛び交う。

ぼくもにつこり笑顔で拍手を送ったが、ハリーがここにいないよかったですと心から思った。

もう、制限時間の一時間が終わった。一番早かったセドリックですらも一分の遅れだ。

ハリーとクラムは、まだ帰ってこない。モニターを見るも、モニターの効果は制限時間の一時間で切れてしまうようで、画面は暗転していた。なんて使えないやつだ。

次に現れたのは、クラムだった。ハーマイオニーを連れている。

ハーマイオニーはやがて目を開けると、良かったと微笑むクラムに一瞥もくれず、周囲を見回した。そしてハリーが制限時間を大きく過ぎててもまだ戻っていないと知ると、悲嘆に暮れた表情のまま座り込む。クラムが心配そうにあれこれ話しかけているようだが、ハーマイオニーは全く反応しない。……段々クラムが可哀想になってきた。

観客も、ハリーの安否について心配し始める。ぎわぎわと、不穏な

ざわめきが周囲に広がっていく。

——ハリー、一体何をやっているんだ。

鯉昆布なら、呪文のように間違いはそう起きない。教科書通りの効果を発揮したはずだ。

だが、こんなに時間が経ってしまったのなら、もう効果は切れているだろう——そして、ハリーは、ハリーとぼくは、泳ぎの訓練を一度も受けていない。バーノンおじさん、ペチユニアお婆さんは、いつかぼくらが溺れ死んでしまえばいいと願ったのだろう。その願いは、皮肉にもこんなところで叶ってしまうかもしれない。

立ち上がりかけたぼくの腕を、誰かが掴んだ。アリスだった。

「座って見ている。お前がどうこう出来る時じゃない……最近のお前は、どうも危なっかしい」

アリスは静かにぼくを見た。穏やかな碧の瞳が、しつかりとぼくを見据えている。

ぼくは身体力を抜くと、再び座席に腰掛けた。

祈るように、両手の指を組み合わせる。

ぼくはただ、じつと祈った。

歓声が轟いたのに、慌てて顔を上げた。ハリーが帰ってきたのだ。生きている。ちゃんと、生きている。

ぼくが観客席を飛び降りるのを、今度はアリスは止めはしなかった。

観客席から選手のいる場所に行こうとするぼくの前に、慌てたように何人かの教師が立ち塞がる。しかし教師陣の前にダンブルドアが進み出て、ハリーらのいる方向を右手で指した。

目を見張って、「……ありがとう」と呟き、ダンブルドアの指した方向へと駆け寄った。

ハリーの周囲には、人質のロンとハーマイオニー、それにパーシーと、フラーの妹のガブリエル、そしてガブリエルを抱きしめおいおい泣くフラーの姿があった。ハーマイオニーの後ろには、どんな表情をされているのかよく分からない、と言った顔のクラムの姿も。パーシーは、弟のロンが心配でならないよう、甲斐甲斐しくも身体は無事か

何ともないか本当に大丈夫かという質問を矢継ぎ早に繰り返している。ロンはそれにうんざりしているようだった。まさしく、兄の心弟知らず、といったところだ。

ハリーはまさしく疲労困憊といった面持ちでその場にへたり込んでいたが、ぼくの姿を見てにやりと笑うと親指をぐつと突き出してきた。

胸が突かれる。無理矢理ぼくもにやりと笑うと、ハリーをぎゅっと抱きしめた。

「濡れちゃうよ、アキ」

「そんなの構わないよ」

無事に戻ってきてくれて、本当に良かった。

そう囁くと、ハリーは「心配かけてごめんね、アキ」と言い、ぼくの頭を撫でた。

第30話 薄氷の上に立つような

「もう限界だわ」

リリーはそう言うのと、くるりとセブルスに向き直った。

「エイブリーやマルシベールらと手を切りなさい、セブ」

四月。寒さがだんだんと和らぎ、草木が萌え出すこの頃。

リリーは中庭で、セブルスに向き直った。リリーの表情は今まで見たことがないくらい真剣で、嫌悪感を表すように形のよい眉を顰めていた。

「……僕たちは友達じゃなかったのか？ 親友だろう？」

「そうよ、セブ。でも、あなたが付き合っている人たちの何人かが嫌いなもの！ 悪いけど、エイブリーやマルシベール……マルシベール！ 一体どこがいいの？ あの人がこの前、メリー・マクドナルドに何しようとしたか、知ってる？」

リリーは柱に寄りかかると、セブルスの顔を覗き込んだ。

この一年で、ぐんとセブルスは背が伸びた。リリーはそれに悔しがっていたつけ……。

「あんなこと、何でもない。冗談、そう——」

セブルスとリリーの会話に入れぬまま、ぼくは黙って空を見上げていたが、リリーの言った『闇の魔術』という言葉に目を向けた。

「あれがただの冗談？ セブ、あなた本気で言ってるの？」

「じゃあポッターらがやっていることはどうなんだ？ 夜にこっそり出歩いて、毎月満月の日に——」

ぼくの視線に気付いたか、セブルスはそこで言葉を止めた。

リリーが「あなたが何を考えているかは分かっているわ」と、静かな、ともすれば冷たい声で言い放つ。

「でも、あの人たちは闇の魔術を使わないわ。この前の晩に何があったか、聞いたわよ。ジェームズ・ポッターが、あなたを救ったと——」

「救った？ 救った!? 君はあいつが英雄だと思っているのか？ あ

いつは——僕は君に——許さない」

「私に何を許さないの？」

リリーの瞳がきゅつと細くなる。

セブルスは何を言ったらしいのかも分からず、でも言葉を止める訳にもいかずに、無理矢理言葉を紡いだ。

「そういうつもりじゃなくって……ただ僕は、君があいつに騙されるのを見たくなくって……ジエームズ・ポッターは君のことが好きなんだ！」

なあんだ、と言わんばかりに、リリーは鼻を鳴らした。

「私がポッターに騙される？ 騙せるものなら騙してみなさいよ。ポッターが私に気があることなんて、今じゃ学校の半分が知ってるのよ。ねえ秋？」

どうしてそこでぼくに振るのだ、リリーは。

曖昧に笑顔を浮かべると、につこり笑顔が返ってきた。しかしすぐさまリリーは表情を引き締めると、セブルスを見上げる。

「ジエームズ・ポッターは傲慢で嫌な奴よ。でも、マルシベールやエイブリーが冗談のつもりでしていることは、邪悪そのものだわ。セブ、邪悪なことなのよ。どうしてあんな人たちと友達になれるのか、私には分からないわ」

セブルスの友人を強く非難するリリーの言葉を、ぼくは少し遠くで聞いていた。

セブルスの友人関係についてどうこう言う権利を、ぼくは持っていない——だってセブルスは、ぼくと仲良く『してくれている』んだもの。

……でも。だとしても。

「……でも、ヴォルデモートの意見に賛成している君は、ぼくも嫌いだ。『闇の魔術』だって。あんなもの、誰も幸せになんてしない。相手を傷つけるためだけの魔力なんて——」

「君には分かるまい！」

セブルスに、叩きつけるように叫ばれた。はつとぼくは目を見開く。

セブルスは頭を振って、ぼくを睨みつけた。心の中がぐちゃぐちゃで、どうしようもない、そんな眼差しだった。

「力を持っている君には、強い君らには、僕の気持ちなど分かるものか！」

そんなことを叫ばれて、なおも心を落ち着かせて平常心でいることは、まだまだガキンチョのぼくには無理なことだった。

カツと頭に血が昇る。

「ああ分かるわけないだろうが！ 分かりたくもないね、人殺し野郎を是として崇め奉るような意味不明な宗教団体にはね！」

「あの人のことを悪く言うな、何も知らない癖に！」

「盲目過ぎるのも困りものだな！ 何も知らないのはそっちだろう！」

セブルスに胸倉を掴まれた。背後の柱に押し付けられ、たまらずカバンを離す。

「秋！」と、リリーの悲鳴のような叫び声が聞こえるのも構わず、ぼくとセブルスは睨み合った。

「……秋。君とは分かり合えると思っていたのだが」

「奇遇だね、ぼくもだよ。……いや、ぼくも『だった』よ」

過去形で言えば、セブルスの眉が寄った。

「訂正しろ、幣原秋。そうすれば見逃してやる」

「もうやめて！ 秋も、セブも!!」

リリーの声を無視して、ぼくは言葉を発した。

「いつの間にそんなに従順になったの？ ……絶対認めてなるものか。あんな殺人鬼野郎に従うなんて」

「あの人の高尚な思想を、君なら理解出来ると思ったんだがな。見込み違いだったようだ」

「それはこっちのセリフだ、セブルス・スネイプ。ヴォルデモートは間違っている」

「あの方を否定するな！」

強く揺さぶられた。

右手でセブルスの左腕を掴むと、セブルスはハツとしたようにぼくから手を離れた。その不自然な動きに、思わず目が止まる。

柱にもたれかかったぼくは、そのまま座り込んだ。ケホケホとえず

くぼくに、リリーは駆け寄ると「セブ！」と非難する眼差しをセブルスに向けた。

「……リリー、君はやっぱり、秋の味方をするんだな」

「馬鹿なこと言わないでよ!? セブ、秋、あなたたち二人とも今日はおかしいわ! 頭を冷やしなさい!」

リリーがぼくの前に立ち塞がる。その言葉にぼくらは口を噤んだが、熱が冷めやらぬまま、憎々しい目つきで互いを見遣った。

「左腕、どうかしたの? 変に庇ってた」

「……君には関係ない」

「ああ、そうかい」

一瞬、セブルスは何か言おうと口を開きかけた。

しかしぎゅつと唇を引き結ぶと、落とした自分のカバンを拾い上げ、黙ってぼくとリリーに背を向ける。

「ちよつと、セブ!」

リリーの声にも耳を傾けることなく、足音荒く立ち去っていくセブルスに、ぼくはイライラと前髪を引つ張った。そしてカバンを肩に引つ掛けつつ立ち上がると、小さな声で「ごめん、ぼくもイラついてるみたいだ。……君の言う通り、頭冷やすよ」とリリーに呟き、セブルスが消えた方向とは全く逆の方へと足を向ける。

「秋! ……後から、ちゃんと仲直りするんでしょね!」

背後から掛けられた、そんなリリーの言葉に、ぼくは返事をしなかった。

この時は思いもしなかった。

これが、ぼくら三人の、最後の会話になるなんて。

——もし、時間が戻せたなら。

——もし、違う決断をしていたなら。

結末は、変わったのだろうか。



「えっ——ドビーが？」

兄、ハリー・ポッターから思いも寄らぬ名前が飛び出してきたのに、ぼくは動揺した。

第二の課題で、ハリーに鯉昆布を入れ知恵したのは一体誰なのか。それを尋ねると、ハリーはあっさりとして、元マルフォイ家、現ホグワーツに仕える屋敷しもべ妖精、ドビーの名前を口にした。

「そんな……そんなはずはない」

「どうしてそう思うの？」

ぼくの口から漏れた言葉に、ハリーは訝しげに眉を寄せた。

「ドビーはいい奴だよ、君も知っているだろう？　いつでもぼくを助けようとしてくれる。まあ、少々その手段がいつも手荒なのは否めないけど……」

二年生の時、クイディッチの試合でブラッジャーに魔法を掛けたときのことを言っているのか。

ハリーに何と言えればいいだろう。ぼくは考え考え、口を開いた。

「……ドビーはそのことをどこから聞いたんだろう？　つまりだ、課題の内容なんて、代表選手ならばともかく、普通の生徒は知るはずがない、そうだろう？　なのにドビーが課題の内容を知っていて、しかもその対策までも持ってきてくれた。一体どうして？」

「うーん……そう言われちゃ、僕も分かんないよ。あの時は無我夢中で、ドビーの助けが天からの救いに見えたんだ。アキは全く力を貸してくんないしさ」

ハリーは半眼でぼくを見ながら最後の一言を呟いた。

はは、とぼくは力無い笑い声を上げると「ごめんね」と息をついた。「なにか理由があるの？　僕を手伝ってくれないことについて」

「……………」

そう尋ねられ、ぼくは黙った。ハリーはそんなぼくの様子をじっと見つめていたが、やがて「……なるほどね。答えられない事情があるんだ」と肩を竦める。

「…………ごめん」

何を言っているのか、何を言っているはいけないのか、だんだんとよく

分からなくなってくる。

ハリーに嘘や隠し事をするのは、他の人に対するものとは訳が違う。心が圧迫され、何もかもを喋ってしまいたい衝動に駆られるのだ。

「でも、これだけは……これだけは知っていて欲しい。ぼくは絶対に、君を裏切るような真似はしない。ぼくは絶対に君の味方だ。『破れぬ誓い』を結んだっつていい——」

ぼくの言葉を、ハリーは笑顔で止めた。

「知ってるよ、アキ。僕は君のことを、世界で一番よく知ってる。僕らの間に、たくさんの言葉は必要ない。そうだろう？」

ハリーはぼくの両手をぎゅつと握った。ハリーの袖元から、銀のブレズレットが見える。

「僕は君のことを信じ続ける。何があっても、どんなときでも。絶対的な信頼を僕は君に置いているし、君も僕に同じ気持ちを抱いていることくらい知っている。……分かってるよ、アキ」

トン、と背中を優しく叩かれた。

「君が、僕を守ってくれるんだろう？」



「ドビー——」

勢いよく厨房に現れたぼくに驚いたように、しもべ妖精たちの目が一齐に集まった。ぐるりと見回しドビーの姿を発見すると、ドビーに駆け寄る。

ドビーはいきなり現れたぼくに度肝を抜かれたようで、その場に硬直していた。悪いことをしたな、と反省し、ドビーのフリーズが溶けるまで待つことにする。

「な……なんでございましょう、アキ・ポッター様？ ドビーめはあなた様に何かなさいましたでしょうか……」

オドオドとぼくの目を見返すドビーの目線に合わせると、ぼくは出来るだけ優しく言葉を掛けるよう心がけた。

「ううん、ドビーが何かをした訳じゃあないんだ。今日は君に、一つ聞きたいことがあつて。この前の対抗試合の課題を――」

ぼくが言い終わる前に、ドビーはすぐ横のキャビネットに頭を打ち付けていた。

慌てて「責めてるわけじゃないんだ！」とドビーの手を掴んでキャビネットから遠ざける。

「ハリーを助けてくれたんだらう？ それについて、今日はお礼を言いに来たんだ」

「お礼……う？」

ドビーは大きな瞳にぼくを映して、訊き返した。そう、とぼくは大きく頷いてみせる。

「ハリーを助けてくれて本当にありがとう……君がいなかったら、ハリーは課題をこなせなかった。心から感謝の意を君に示すよ」

そう言つて深々と黙礼したぼくに慌てたように、ドビーはぼくの肩を揺さぶつた。

「アキ様、アキ・ポッター様。どうか顔をお上げになつてください、ドビーめには過ぎた礼です……」

「ドビー」

顔を上げた。

ドビーの両手を掴むと、ぼくはまっすぐにドビーを見つめる。

「ハリーを助けるためなんだ。教えてくれ。君は一体誰から課題の内容を聞いた？」

ドビーはぼくの言葉にぶるりと身震いした。

「ドビーめは言えません……ドビーめはたまたま聞いたのです……」

ドビーの目線が、ぼくから逃げるように彷徨つた。キャビネットに、テーブルに、積まれた皿に、椅子に、せわしなく目を移すドビーの両手を、ぎゅつと掴む。

「たまたま、誰が君にこのことを聞かせたの？ 君に課題の内容を聞かせ、鯉昆布のことを教えた人物は一体誰？」

「ドビーめは言つてはなりません……言つてはならないのです……」

「教えてくれ、ドビー。君しかないんだ」

「ドビーめは喋ってはなりません！」

そう言った瞬間、ドビーの目がふと虚ろになった。その様子に、ぼくは目を瞠る。

その場に膝から崩折れるドビーを、支えた。止まっていた息を、意識して吐き出す。

これは――。

「……………ん？ はれ？ アキ・ポッター様ですか？」

ドビーはぱっと目を開けると、ぼくを見てそう尋ねた。そしてぼくに抱えられている現状に気付くと、「も、申し訳ございません！ アキ・ポッター様！」と言ってぼくの腕からぴよんと飛び跳ねると、地に頭がつくくらいのお辞儀をした。

ぼくは呆然とドビーを見つめていたが、ゆっくりと口を開いた。

「……………ドビー。ハリーを助けてくれてありがとう」

ぼくの言葉に、ドビーはきよとんと目を瞬かせた。

ぼくが何を言っているのか心底不思議に思っている、といった表情だった。

「何のことをおっしゃられているのですか、アキ・ポッター様？」

「……………」

ぞわりとした寒気が、身体中を襲う。

ぼくは自らをぎゅつと抱いた。

「寒いのですか？ アキ・ポッター様。少々お待ちを、ドビーめが今毛布を持って参りましょう」

ドビーは楽しそうに、ぼくの前から駆け出していった。すぐさま、毛布を持って戻ってくるだろう。

「……………」

おそらくは、錯乱の呪文と忘却術の合わせ技だ。誰かが、ドビーに入れ知恵をした者について尋ねたとき、この呪文が発動するようになっていたのだ。

ドビーが第二の課題でハリーを助けた記憶は、ドビーの中から永遠に失われてしまった。

ぼくはそつと目を伏せると、指を組み合わせた。

得体の知れぬ敵は、想像以上に強敵のようだった。



第三の課題は、六月二十四日。第二の課題で犯人を取り逃がしたからには、第三の課題で蹴りをつけるしかない。

ハリーの名前をゴブレットに入れた犯人は、ハリーが課題に成功して欲しいようだった。しかし、第三の課題は、これをクリアしたから次の課題に進める、といったものではない。第三の課題がゴールなのだ。——仕掛けるのなら、ここしかない。

しかし、第三の課題における事前のヒントは、今回ばかりは何もないようだった。第一の課題、ドラゴンと同じように、今回は初見でプレイするタイプの課題のようだ。これじゃあ、犯人の入れ知恵には期待出来ない。

——じゃあ、どうすればいい？

奥歯を噛み締める。

考えろ、考えろ、考えるんだ。

何かを見逃しているんじゃないか？ 本当にもう手詰まりなのか？ ぼくがやれることは、本当に何一つ残っていないのか？

「……アキッ！」

声に顔を上げると、アクアがこちらに走ってきていた。ぼくの前で立ち止まると、苦しげに息をつく。

「一体どうしたの？ そんなに慌てて」

そう首を傾げて尋ねると、アクアはぼくの袖をぐいっと引っ張り「こっちー」と廊下を曲がった。おっとつと、とアクアの後に続く。

廊下に溢れる人々の波を掻き分け、出来るだけ人が少ない方へとアクアは歩いていく。その周囲の何割かが、ぼくに奇異な視線を向けていることに、ぼくはやっと気がついた。考え事をして歩いていたから、周囲の目なんて気にしてなかった。

「……あなたがこの前怒らせた、スキーターからの仕返し。それが載ってるわ」

空き教室を探し当て、滑り込む。アクアから手渡された『週刊魔女』を開いて、目を走らせた。新聞や本は読むが、こう言った女性向けの週刊誌は初めてだ。

中程のページに、ハリーのカラー写真と記事が載っている。ハーマイオニーを中傷する目的の記事に、思わず眉が寄った。

「……そこじゃないわ。いえ、そこも酷いけど……もうちよつと先よ」
アクアがページを繰る。そんな場合じゃないのにも関わらず、白く細い指に目が行った。ぶんぶんと首を振る。何を考えているんだ、ぼくは。

やがて、お目当てのページを探し当てたのだろう、アクアの手が止まった。ぼくはそれに目を通す。

それは、普段文学的な表現を好んで使用するリータ・スキーターらしくなく、かつちりとした英文で書かれている記事だった。

『ハリー・ポッターの双子の弟、果たしてその実態は』

『かの有名なハリー・ポッターに双子の弟がいるという事実は、世間にはあまり知られていない。『名前を言っではいけないあの人』の魔手から生き延びた、たった一人の子供、ハリー・ポッター。その双子の弟だと名乗るアキ・ポッターは、本当に血縁関係があるのかと疑いの目を向けざるを得ないほど、顔形が全く似ていない。』

本当に彼は、ハリー・ポッターの双子の弟なのだろうか。記者、リータ・スキーターは気になる情報を入手した。なんと彼は、一世代前にホグワーツに在籍し、魔法省所属の闇祓いであった幣原秋という人物と、まるで親子とも違わんばかりに瓜二つなのだという。

記者の調べに対し、ホグワーツ魔法魔術学校校長アルバス・ダンブルドアは明言を避けた。ふくろう便の返事はまだ来ないが、しかし何の返答もないことこそが、大きな答えなのではないか。

幣原秋という人物は、十一年前に自殺したことが報じられている。幣原秋の子供だとするならば、年齢も合う。幣原秋とアキ・ポッター、彼らは果たして『他人の空似』なのだろうか。まだまだ深い謎は残っている』

ぼくは記事から顔を上げた。

「見直したよ。目の付け所も悪くない。一体よくこんな情報をもたらしてきたね、どこからだろう?」

「『どこからだろう』、じゃないわよ」

アクアはむっと顔をしかめた。軽口を叩いていい雰囲気ではなさそうだ。

「でも、幣原秋の顔写真はそう出回ってないんだぜ。昔の新聞ざつとさらったけど、写真は載ってなかったもん。幣原の写真とぼくを見比べて、なるほどそっくりだ、というなら分かるけど、なかなかそうはいかないでしょ。一体誰が、この情報を流したんだろう」

「……それは知らないけれど、幣原秋の顔写真は今もまだ実在するわよ。私の家にもね」

「え」

目を瞬かせてアクアを見ると、アクアは軽く肩を竦めた。

「死喰い人らにとつて、幣原は強大な敵だったのよ。顔写真が出回るのは当然じゃないかしら。自衛のため、先制攻撃のため、今もまだ幣原の写真を持っている死喰い人——元死喰い人も、多いはずよ。私の両親のようにね」

「……………」

なるほどなあ、とぼくは息をついた。

それにね、と前置いて、ふとアクアは教室のドアを振り返った。誰も辺りにはいない、ということを確認して、ぼくに囁く。

「……この前の魔法薬の授業でね、カルカロフがスネイプ教授に、左腕を見せてたの——『こんなにはつきりしたのは初めてだ』とか『君も気付いているはずだ』とかよ——何のことか、あなたは知っているかしら?」

左腕を見せる?　なんでカルカロフは、スネイプ教授にそんなことをしたのだろう。

「知らない」と、ぼくはかぶりを振った。

「……そうよね。幣原ならともかく、普通は、あなたは知らないわよ」

ね」

そう言つて、アクアはぐ、と息を呑み――

『闇の帝王』の仲間、死喰い人の左腕にはね――『闇の印』と同じマークが刻まれているの。そのマークがはつきりしてきているというの
はね――」

「闇の帝王が力を取り戻している、ということよ」

第31話 その言葉の向かう先は

ぼくは、ハリーとロン、ハーマイオニーと共に、ホグズミードへとやって来ていた。

ハリーが持つカバンの中には、大量のチキンにパン、それにかぼちやジュース。シリウスの頼みだった。命綱、と言ってもいいかもしれない。

「しかしまさか、ホグズミードに来るとは思いもしなかったよ……」

ハリーはため息と共に呟いた。自身の名付け親の度重なる無謀な行動に、呆れかえっているようだ。

ホグズミードの、ダービシュ・アンド・バングズを過ぎたところにある柵。そこが、シリウス——いや、パッドフットと呼ぶべきか——が指定した待ち合わせ場所だった。

全く、何たること。学生時代の行動力を、パッドフットはそのまま持ち合わせている。アズカバンでの生活は、シリウスを精神的に大人にするには力不足だったようだ。

ダービシュ・アンド・バンクスを過ぎると、辺りはぐんと郊外らしくなつた。家もまばらで、空き地や木々が多い。

やがて角を曲がると、道外れに柵があつた。そして、その一番高い柵に前足をのせ、新聞のようなものを加えてこちらを見ている、大きな黒い犬の姿——

「やあ、シリウスおじさん」

ハリーはにこやかに挨拶した。『おじさん』のワードに反応してか、パッドフットはキャインとひと鳴きし、ハリーのカバンを夢中になつて嗅ぐと、尻尾を振ってトコトコ歩き出した。

上り坂で、岩だらけだ。どうやら山の麓あたりらしい。

岩だらけの山道を、三十分は歩いただろうか。狭い岩の裂け目をハリーの後に従つてくぐり抜けると、中には広々とした洞窟が広がっていた。

奥には、懐かしい、ヒツポグリフのバックビークの姿。ぼくらがお辞儀をすると、バックビークもお辞儀を返した。ふう、とぼくは息を

吐く。

パッドフットは、既に人の姿へと戻っていた。ボロボロの灰色のローブに、伸びた黒髪、無精髭。それに、とても痩せたようだ。

「チキンー」

挨拶より先に、シリウスが掠れた声で叫んだ。パッとハリーはカバンを開けると、チキンを一掴みとパンを渡す。

シリウスは感謝の言葉もそこそこに、夢中でチキンを食べ始めた。チキンに噛みつき、パンを齧り、かぼちやジュースで喉を潤し、やっとなシリウスは人心地ついたらしい。

大きく息を吐くと、誰に聞かせるでもなくひとりごちた。

「ほとんどネズミばかり食べて生きてきた。ホグズミードからあまりたくさん食べ物を盗む訳にもいかない。注意を引くことになるからね」

シリウスはハリーにっこりと笑ったが、ハリーは曖昧な笑顔を返すのみだった。飢えの辛さは、ぼくらもよく知っている。

「シリウスおじさん、どうしてこんなところにいるの？」

『おじさん』の言葉にシリウスはチキンを喉に詰まらせかけたが、咳こみつつハリーの質問に答えた。

「名付け親としての役目を果たしている。私のことは心配しなくていい、愛すべき野良犬の振りをしてるから」

「折角、リーマスの元にいられるよう手配したのに」

ぼくの言葉に、シリウスは申し訳なきような表情をした。

「それはすまない、アキ。でも、私は現場にいたいんだ。そうリーマスを説き伏せた——彼は最後には納得してくれた。久しぶりに彼が笑顔で怒るのをみたよ、ありやあ怖いものだね、うん。君が最後にくれた手紙——そう、ますますきな臭くなっているとだけ言っておこう。誰かが新聞を捨てるたびに拾っていたのだが、どうやら、心配しているのは私だけではないようだ」

そう言ってシリウスは、床に落ちている日刊預言者新聞を顎で指した。

ハリーはしかし、無然とした表情で言う。

「捕まったらどうするの？ 姿を見られたら？」

「私が『動物もどき』だと知ってるのは、ここでは君たち四人とダンブルドアだけだ。……まあ、後はリーマスと、それに愛すべきピーター・ペティグリューか」

シリウスはピーターの名前を口にした瞬間、僅かに眉を寄せた。

ロンが、シリウスが示した日刊預言者新聞を回してくる。ハリーと共に覗き込んだ。

『バーティミウス・クラウチの不可解な病気』『魔法省の魔女、いまだに行方不明——いよいよ魔法大臣自ら乗り出す』という見出しが並んでいる。

ハリーは考えながら呟いた。

「まるでクラウチが死にかけているみたいだ。だけど、ここまで来られる人がそんなに思い病気のはずないし……」

ハリーの言葉に引っかけかりを覚えて、ぼくは顔を上げた。『ここまで来られる？』

クラウチはずっとホグワーツに姿を見せていないのに、一体どうしてハリーはそんなことを言ったんだ？

ぼくは口を開きかけたが、ロンに遮られた。

「僕の兄さんが、クラウチの秘書なんだ。兄さんは、クラウチが働きすぎだって言ってる」

「だけど、あの人、僕が最後に近くで見たときは、本当に病気みみたいだった。僕の名前がゴブレットから出てきたあの晩だけ——」

「ウィンキーをクビにした当然の報いじゃない？ クビにしなきゃよかつたって、きつと後悔してるのよ——世話してくれるウィンキーがないと、どんなに困るかわかつたんだわ」

ロンはハーマイオニーの言葉に肩を竦めた。シリウスに「ハーマイオニーは屋敷しもべに取り憑かれてるのさ」と囁く。

しかし、シリウスは興味を持ったようだった。

「クラウチが屋敷しもべをクビに？」

「うん、クイディッチ・ワールドカップのとき」

ハリーはワールドカップで何が起きたかを、シリウスに簡単に説明

した。「闇の印」が浮かび上がったことや、クラウチ氏の屋敷しもべのウインキーがハリーの杖を握りしめたまま発見されたこと、クラウチ氏がそれに激怒してウインキーをクビにしたこと。

シリウスはハリーの話が終わると、立ち上がり、あてもなくうろろと洞窟を彷徨った。考えをまとめるときのシリウスは、よくこうして歩き回ってたっけ。落ち着きがない、なんて、ジェームズはよく言って笑っていた……。

「整理してみよう」

シリウスは、食べ終わった鳥の骨を指揮棒のように振りながら、口を開いた。

「初めはしもべ妖精が、貴賓席に座っていた。クラウチの席を取っていた。しかし、クラウチは試合には現れなかった?」

「うん、あの人は忙しすぎて来れなかったって言ってたと思う」

シリウスは、またも洞窟内を歩き回り、そして足を止めた。

壁に寄りかかると、ずるずると座り込む。

「ハリー、貴賓席を離れたとき、杖があるかどうかポケットの中を探ってみたか?」

「うん、とハリーは考え込んだ。記憶を探り探り呟く。

「ううん、森に入るまでは使う必要がなかった。そこでポケットに手を入れたら、『万眼鏡』しかなかったんだ——『闇の印』を作り出した誰かが、僕の杖を貴賓席で盗んだってこと?」

「その可能性はある」

「ハーマイオニーはシリウスの発言にむっとしたように「ウインキーは杖を盗んだりはしないわ!」と鋭い声を上げた。

しかし、シリウスはゆるりと頭を振る。

「貴賓席にいたのは妖精だけじゃない。君の後ろには、他に誰がいたのかね?」

「いっぱいいたよ。ブルガリアの大臣たちとか、コーネリウス・ファッツジとか、あとはマルフォイ一家……」

「マルフォイ一家だ! 絶対、ルシウス・マルフォイだ!」

ロンが確信を持った顔で叫んだ。

シリウスはしかし、そこで思考を止めることはせず、穏やかに「他には？」と尋ねた。

「他には、いなかったような……」

「いたわよ、ルード・バグマンが」

「バグマンのことはよく知らないな。ウイムボーン・ワスプスのビーターだったこと以外は。どんな人だ？」

「あの人は大丈夫だよ。三校対抗試合で、いつも僕を助けたっていうんだ」

何だつて？ とぼくは眉を寄せた。見るとシリウスも同じ表情をしていた。

ちらりとシリウスはぼくに眼を遣ると、こくりと頷く。多分シリウスも、ぼくと同じことを考えているのだ。

「なんでそんなことをするのか、理由は分かるか？」
「僕のことを気に入ってたって言ってたけど」

ハリーはそう言うが、バグマン氏もどこまで信頼出来たものか。
ハーマイオニーが思い出したように声を上げた。

『闇の印』が現れる直前に、私たち森でバグマンに出会ったわ。覚えてる？」

「うん。でも、バグマンは森に残ったわけじゃないだろう？ すぐにキャンプ場へ行ったはずだ」

「どうしてそう言い切れるの？ あの人はあそこで『姿くらまし』したのよ。行き先がキャンプ場だと、本当に言い切れる？」

「ルード・バグマンが『闇の印』を作り出したって言いたいのか、ハーマイオニー？」

「ウインキーよりは可能性があるわ、ロン」
ロンはやれやれと肩を竦めた。シリウスは質問を続ける。

『闇の印』が現れて、妖精がハリーの杖を持ったまま発見されたとき、クラウチは何をした？」

「茂みの様子を見に行った。でも、そこには何もなかった」
「そうだろうとも、クラウチは自分のしもべ妖精以外の誰かだと決め

つけたかっただろうな……それで、しもべ妖精をクビにしたのか？」

「そうよ、クビにしたの。テントに残って踏みつぶされるままになっていなかったのがいけないって言うわけ——」

「ハーマイオニー、頼むよ、妖精のことはちよつと放つといてくれ！」

ロンはうんざりしたように叫んだが、シリウスは首を振って、「ロン、人となりを知るには、その人が自分と同等よりも目下の者をどう扱うかをよく見るのが重要さ」と言った。

ぼうつと虚空を見ながら、顎に伸びた髭を撫でている。

「バーティ・クラウチがずっと不在だ……わざわざしもべ妖精にクイデイツチ・ワールドカップの席を取らせておきながら、観戦に来ない。三校対抗試合の復活にずいぶん尽力したのに、それにも来なくなつた……クラウチらしくない、これまでのあいつなら、一日たりとも病気で欠勤したりしない。そんなことがあつたら、私はバツクビークを食つてみせるよ。なあアキ？」

唐突に振られ、驚いて眼を瞠つた。

しかしぼくが口を開くよりも、シリウスの方が早かつた。

「ああ、すまん。そうか、まだそこまでは『思い出して』ないんだつたよな」

「……………」

ぼくはシリウスから目を逸らすと、無言で頷いた。

ハリーが「クラウチを知つてるの？」と尋ねるのに、シリウスは表情を曇らせる。

「ああ、クラウチのことはよく知っている。私をアズカバンに送れと命令を出した奴だ。裁判もせずに」

「ええっ!？」

ロンとハーマイオニーが信じられないといった表情で叫んだ。ハリーはぼくを気遣わしげな目で見ている。

ハリーは、幣原がシリウス・ブラックを捕縛した人物だということを、覚えているのだろう。ハリーの目を避けるように、ぼくは目を逸らした。

「クラウチは当時、魔法省の警察である『魔法法執行部』の部長だった。次の魔法大臣と噂されていた——素晴らしい魔法使いだ、バーティ・

クラウチは。強力な魔法力、それに権力欲を兼ね備えている。……ああ、ヴォルデモートの支持者だったことはない。バーティ・クラウチは常に闇の陣営にはつきりと対抗していた。しかし、闇の陣営に反対を唱えていた多くの者が——」

そこで言葉を切ったシリウスに、ロンがイライラと「僕らが若いからって侮るなよ。パパと一緒にだ。僕らにも話してよ、分かるかもしれないじゃないか」と言う。

シリウスはその言葉に驚いたようだが、やがてにっこりと笑った。「いいだろう、試してみよう……ヴォルデモートが今、強大だと考えてごらん。誰が支持者なのか分からない、誰があいつに仕え、誰がそうでないのかさっぱり分からない、そんな時代だ。あいつには人を操る力がある。誰もが、自分がやっているとも気付かぬまま、恐ろしいことをやってしまう——自分で自分が怖くなり、家族や友達でさえ怖く思う。」

毎週毎週、死人や行方不明や拷問のニュースが引つ切り無しに流れ、自分たちを守ってくれるはずの魔法省も大混乱で、どうしていいかも分からず右往左往。全てをマグルから隠そうとするものの、一方でマグルも次々に死んでいく。恐怖、パニック、混乱、そんな時代だった。

そういうときにこそ、最良の面を發揮する者もいれば、最悪の面が出る者もいる。クラウチの主義主張は、最初は目を瞠るほど素晴らしいものだった——のだろうね、私にはよく分からないが。

あいつは、ヴォルデモートに従う者に対して極めて厳しい措置を取り始めた。『闇祓い』に、捕まえるのではなく、殺してもいいという権力を与え、裁判なしに吸魂鬼に引き渡して良いという法律を整え、『許されざる呪文』を行使することを認めさせた。

……あいつのやり方が正しいと思う者も沢山いた。だが……」
そこで、シリウスは言葉を切るとぼくを見た。腰を浮かす。またうろろ歩き始めるのかと思ったが、シリウスはぼくのすぐ隣にどっかりと腰を下ろした。

肘が触れるか触れないかの位置で、シリウスはぼくの頭を乱暴に撫

でる。

「……おい、パッドフット。最後にシャワー浴びたのいつだよ？」

「おー、レイブン。君がそんなに綺麗好きだったとは知らなかったぜ」「君の方が存外、綺麗好きの格好付けだったとぼくは記憶してるけど？」

「綺麗好きではあるが、格好付けじゃあないぞ。昔から俺は何もしなくっても格好よかっただろ？」

「……イケメン、滅べ」

くつく、と笑って、シリウスはぼくの頭をわしやわしやと触り、髪の中に指を遊ばせる。そして真面目なトーンで、再び話の続きを語り始めた。

「クラウチを魔法大臣にせよと、支持する声も多かった。しかしそこで、小さな、しかしクラウチにとっては、何よりもあつてはならない事件があった……クラウチの息子が『死喰い人』の一味と一緒に捕まったんだ。この一味は、言葉巧みにアズカバンを逃れた者達で、ヴォルデモートを探し出して権力の座に復帰させようとしていた」「クラウチの息子が捕まった？」

ハーマイオニーが息を呑む。

「そう。あのバーティにとつては、相当なショックだっただろうね。もう少し家にいて、家族と一緒に過ごすべきだった。たまには早く仕事を切り上げて帰るべき、自分の息子をよく知るべきだった」

「クラウチの息子は、本当に『死喰い人』だったの？」

ハリーの言葉に、シリウスは「分からない」と返した。

「息子がアズカバンに連れてこられた時、私自身もアズカバンにいた。あの時捕まったのは、確かに『死喰い人』だった。だが、あの息子が本当に死喰い人だったのか、それとも運悪くその場に居合わせただけかは分からない。私たちは、あの息子の三つほど歳下だった。スリザリン生で、十二ふくろうの秀才だと持て囃されていたよ。将来は官僚か、と言われていたが——いやはや」

「クラウチは、自分の子の罰を逃れさせようとしたの？」

ハーマイオニーが小さな声で尋ねる。

シリウスはその言葉に、引き付けのような声で笑った。

「クラウチが？ 自分の息子に罰を逃れさせる？ ハーマイオニー、君にはあいつの本性が分かっていると思っただが？ 少しでも自分の評判を傷つけるようなことは消してしまおう奴だ。魔法大臣になることに一生を掛けてきた男だよ。献身的なしもべ妖精をクビにするのを見ただろう？ 『闇の印』と自らが結びつくことを嫌ったんだ

それで奴の正体がわかるだろう？ もはやクラウチにとって、あの息子は、自分の経歴に疵を付ける厄介者でしかなかったんだよ、十二ふくろうの秀才、自慢の息子ではなく、な。

せいぜい父親らしい情けを見せたのは、息子を裁判にかけることだった。まあ、どう考えても、クラウチがどんなにその子を憎んでいるかを人に知らしめるための口実に過ぎなかった。まっすぐ息子はアズカバン送りになったよ」

「自分の息子を『吸魂鬼』に？」

「その通り。私は『吸魂鬼』が息子連れてくるのを見た。私の房に近い独房に入れられた。日が暮れる頃には、母親を呼んで泣き叫んだ……二、三日すると大人しくなったがね。誰もが、最後は静かになるものだ……眠っている時に悲鳴を上げる以外はね」

ぼくは黙って、頭をシリウスの肩にもたれ掛からせた。シリウスは、思い出したようにぼくの頭を撫でる。

「それじゃあ、息子はまだアズカバンにいるの？」

ハリーの言葉に、シリウスはゆっくりと答えた。

「いや、あそこにはもういない。連れてこられて、大体一年後に死んだ。……あの子だけじゃない。大概が気が狂って、生きる意志を失い、何も食べなくなる者が多い。死が近付くと、間違いなくそれが分かる。『吸魂鬼』がそれを嗅ぎつけて興奮するからだ。」

あの子は収監された時から病気のようだった。クラウチは魔法省の重要人物だから、奥方と一緒に息子の死に際に面会を許された。それが、私がバーティ・クラウチに会った最後だ。奥方を半分抱きかかえるようにして、私の独房の前を通り過ぎていった。

そのまま、奥方はまもなく死んでしまったらしい。息子を嘆き悲しんでだろうな。クラウチは息子の遺体を引き取りに来なかったから、『吸魂鬼』が監獄の外に埋葬していたよ。

クラウチは、全てを手に入れかけた瞬間、全てを失った。家族は崩壊、あの有名だった家名は汚れ、人気も地に落ちた。コーネリウス・ファツジが魔法大臣の椅子に就き、クラウチは『国際魔法協力部』などという傍流に押しやられた」

そこで、シリウスは口を閉じた。長い沈黙が辺りを漂う。

沈黙を破ったのは、ハリーだった。

「ムーディは、クラウチが闇の魔法使いを捕まえることに取り憑かれているって言った」

「ああ、ほとんど病的だと聞いた。多分、あいつはもう一人『死喰い人』を捕まえれば昔の人気を取り戻せると、まだそんなことを考えているんじゃないかと思う」

「そうか、だから、学校に忍び込んで、スネイプの研究室を家捜ししたんだ！」

「家捜し？」

ロンの言葉に、ぼくは思わず口を挟んだ。

「あれ、言ってなかったっけ？ こないだ、ハリーが夜中『忍びの地図』で、クラウチがスネイプの研究室をうろついているのを見たんだってさ！」

「僕は、てっきり『忍びの地図』が動作不良でも起こしたのかと……だってほら、僕の父さんたちが作ったものだし、古いから……」

ハリーがそう言うのに、シリウスは首を振った。

「いや、『忍びの地図』は動作不良なんて起こさない。私とジェームズにリーマス、そして、うん、まあ、ピーターもだ、うん、それに秋、この五人で作り上げた最高傑作なのだから」

シリウスの声に、一瞬誇らしげな色が混ざる。

しかしふと真面目なトーンに戻すと「だが、クラウチがスネイプを調べたいなら、堂々と試合の審査員として来ればいい話だ。スネイプを見張る格好の口実があるじゃないか」と嘆息した。

「それじゃ、スネイプが何か企んでるって、そう思うの?」

ハリーの言葉に、ハーマイオニーが口を挟んだ。

「いいこと? あなたが何と言おうと、ダンブルドアがスネイプを信用なさっているのだから——」

「全く、いい加減にしろよ、ハーマイオニー。ダンブルドアはそりやあ素晴らしいさ。でも、本当にずる賢い闇の魔法使いなら、ダンブルドアを騙せない訳じゃない——」

「だったら、そもそもどうして、スネイプは一年の時ハリーの命を救ったりしたの? どうしてあのままハリーを死なせてしまわなかったの?」

「知るかよ、ダンブルドアに追い出されるかもしれないと思ったんじゃないか?」

「どう思う? シリウス、アキ」

ロンとハーマイオニーの口論を遮るように、ハリーが声を張り上げた。

シリウスはちらりとぼくを見て、口を開く。

「スネイプがここで教えていると知って以来、私は、どうしてダンブルドアがスネイプを雇ったのかと不思議に思っていた。スネイプはいつも闇の魔術に魅せられていて、学校ではそれで有名だった。気味の悪い、べつとりと脂っこい髪をした子供だったよ、あいつは。」

スネイプは学校に入ったとき、もう七年生の大半の生徒より多くの『呪い』を知っていた。スリザリン生の中で、後にほとんど全員が『死喰い人』になったグループがある。スネイプはそれの一員だった。

ロジエール、ウィルクス——両方とも闇祓いに殺された——レストレンジ夫婦——アズカバンにいる——エイブリー——『服従の呪文』で動かされたと言って、まだ捕まっていない。だが……私の知る限りにおいて、だが、スネイプは『死喰い人』だと非難されたことはない。しかも、スネイプは難を逃れるだけの狡猾さだっただけで備えている。何より——君こそが、スネイプが『死喰い人』かどうか、一番よく知っているはずだ、アキ」

シリウスの言葉に、三人の視線はぼくを向いた。

ぼくは小さく息を吐いてから、口を開いた。

「……認めよう。彼は『死喰い人』だった。何度か、ヴォルデモートを認める認めないで、幣原秋とたまに議論になってたものだよ……何度議論しても、互いの主張は平行線になったけどね。……その証が、彼の左腕にある。『死喰い人』の証拠、『闇の印』が」

「それだ！」

ハリーは夢中になって叫んだ。

「昨日、魔法薬のクラスにカルカロフが来たんだ。スネイプに話があるって。スネイプが自分を避けているって、カルカロフが言っていた。スネイプに自分の腕の何かを見せていた……『闇の印』を見せていたんだ！」

——そのまま、話は右往左往し、明らかな結論らしい結論は出ないまま、議論は収束した。

よく分からない、という、結論が出ないゆえのぐったりとした雰囲気、周囲に蔓延する。

その雰囲気をぶち壊したのは、ハリーだった。

「ところでシリウスおじさん、アキに彼女が出来たんだよ」

「彼女!？」

シリウスはぼんやりと鳥の骨をしゃぶっていたが、ハリーの言葉に凄まじい速度でぼくに向き直った。

ぼくの両肩をがっしり掴むと、楽しくてたまらない、と言った表情で目を輝かせる。学生時代と同じ表情だ。

「ハリー！　よりにもよってシリウスになんて！」

「なんで隠すのさ、別にいいじゃん」

ハリーは飄々とそう言っただけのけるが、目には悪戯が成功したことを喜ぶ子供のような、キラキラした光が灯っている。ジエームズと同じ表情をしている。

「そうだぞ、『よりにもよって』とはどういう意味だ。さあアキ、詳しく聞かせてもらおうか。いつからだ？　いつからだ？」

ああー、こうなるから嫌だったんだよ……シリウスは、自分はどういう話をしたがらないのに、人のこういう話はすごい勢いで聞いて

くるんだ。

「クリスマスのダンスパーティーから、だよね？ アキ」

「……………」

ハリーににこやかな笑顔で尋ねられ、仕方なしにこつくりと頷いた。

シリウスは、自分のことのように嬉しそうに満面の笑みを浮かべて「そうかあ、アキがなあ、あの、恋愛とは全く無縁だった秋がなあ……………」と何度も何度も頷いた。

「幣原秋の話？」

ハーマイオニーがそつと尋ねるのに、シリウスは首肯した。

「そうだぞ、全く色恋の噂を聞かないし、女の影すら見当たらないからなあ…………ダンスパーティーにも、俺の弟を誘う始末だし、せつかく可愛いや顔してんのに、本当に勿体ねえなって思ってたんだぜ。なるほどなあ、道理で珍しくもシャツのボタン開けたり、ちよいとだけネクタイ緩めてると思ったんだよ。秋は几帳面なくらいにしつかりと制服を着るやつだったからな。全く、色気づきやがって」

シリウスはそんなことを言いながらも、楽しげにぼくの首元をちよちよいと突ついた。

もう、とぼくは眉を寄せると、襟首を掻き抱く。

「でもさあ、本当、良かった」

シリウスは。

シリウスは、ぼくの目を見て、何よりも幸福そうに呟いた。

「いい加減、幸せになれよ…………そろそろ君は、幸せになってもいい頃だ。な、秋？」

第32話 伏せる瞳に映るもの

ふくろう試験が、もうすぐそこまで迫ってきていた。

先生方は誰もがピリピリして、ぼくらは望む望まないに関わらず、試験勉強に急ぎ立てられた。毎日どっさり出る課題に、復習ばかりの授業内容。

なんとも勉強に身が入らずに、久しぶりに悪戯仕掛人の小部屋に足を踏み入れると、そこにはジエームズが一人でいた。丸いテーブル中に羊皮紙を広げている。

ジエームズはぼくに気がつくのと、目を輝かせて「やあ、秋」と言つて微笑んだ。

「何をしてるの?」

「見て分からない? 『忍びの地図』さ」

「さっすが、学年主席様は余裕でいらっしやる」

肩を竦めると、「まあね」とさりと流された。まるで、自分が二年後に主席のバッジを受け取ることを微塵も疑っていないようだ。

……そうだろうなあ。

「そういう秋も、暇そうだけど」

「なんか、やる気が起きなくなつて」

「へえ、秋もそういう時あるんだ。意外」

「ぼくをどう思う奴だと思ってるのさ……君とは違う、極めて普通の生徒だよ」

「謙遜が過ぎると嫌味にもなるって知っていた? 秋。それも、日本

人の特性なのかな」

ぼくは口を噤んだ。

「気に障ったのなら謝るよ。ごめんね?」

「……いや、いいよ。色んな人から、そんなことを言われるんだ、最近。でもぼくはさ、自分をそんな凄い人間だなんて全く思えないんだ。ぼくはただ、何となく、それなりに一生懸命に日々を生きてきて……その結果、英語も上達したし、魔法も上手に使えるようになったし、元々勉強は好きだった。でも、それだけだ。ぼく自身は、何も変わってい

ない。それなのに……いきなり凄い凄いと持ち上げられても、困ってしまうよ」

「ふうん……僕は、君を初めて見た時から、君はこの学校随一の天才だ、と思っていたよ。世辞でもおべつかでもないさ。僕がそんなのを友人に対して使うような奴だと思う?」

思わない。

思わないからこそ、ぼくは黙っていた。

「君の持つ才能は、人よりもずば抜けている。普通なら、飛び抜けた才能を持つ人は往々にして、性格が捻じ曲がるもんなんだけど……」

「ジエームズみたいに?」

「そう、僕みたいに」

否定しないところが、ジエームズらしい。

そう言うと、ジエームズは眼鏡の奥の目を楽しそうに細めた。

「僕は自分の能力を卑下しないよ、する必要がないからね。僕の成績やらクイディッチの腕前やらについてごちやごちやと御託を並べてる奴らは、僕の能力に妬み嫉んでいる奴らだ。僕が構う必要のない人間さ。君もいつそのこと、そう露悪的に振る舞うべきだ」

「……露悪的に、ね」

「そうさ。実のことを言うと僕は、君の才能が途中で、そういう凡人に叩き潰されてしまうんじゃないかと怖かった。凡人は傑出した人間を嫌うからね。お手で繋いで徒競走、やったね皆一等賞——驚くほどにくだらない。才能は生かして伸ばすべきだ。叩き潰すなんて言語道断、人類の損失にも値する。君の力は誇るべきものだ。素晴らしいものなんだよ、秋」

ぼくはジエームズの隣の椅子を引くと、腰掛けた。

背もたれに体重を預けると、両手を合わせる。

「……実はね、ジエームズ」

思っていたより、穏やかな声が出た。

「ぼくの両親が死んだんだ——いや、殺されたんだ、ヴォルデモートに」

ジエームズは少し黙った後「それはご愁傷様だったね」と涼やかな

声で囁いた。

その声は穏やかで、胸に刺さる憐憫の色が見えず、ぼくは素直に受け取ることが出来た。

「ぼくの才能のせい——ぼくの持つ、この力のせいで、ぼくの両親は死んでしまった。……ぼくはこの力が憎いよ。この力が、ぼくが、大好きな父さんと母さんを殺したんだ——」

「それは違うよ」

ジェームズの声は、あくまでも静かだった。

「秋。間違えちゃいけない。君のご両親を殺したのは君じゃない、ヴォルデモートだ。君の力の有無が原因じゃない。……履き違えるなよ、幣原秋」

につこりと、ジェームズは微笑んだ。

「恨む対象を間違えるなよ、秋。君の敵は自分じゃない。君の敵は、あいつだ」

眼鏡の奥の瞳を、密やかに煌めかせ。

ジェームズは言葉を紡いだ。

「ヴォルデモートだ」



この前の『週刊魔女』で、ハーマイオニーはハリーファンのマダムたちの御不興を買ってしまったらしい。あれからハーマイオニーの元に呪いやらなんやらが送られてくるのに、ハリーは大憤慨していた。

もちろんぼくも、ハーマイオニーがそんなことをされているのを黙ってみていられるほどお人好しな性格をしていない。『呪い返し』のやり方を教えると、さすがハーマイオニーさんは飲み込みが早かった。最初の方は何通か開いてダメーヂを負ったそうだが、その後は次から次へと『呪い返し』を軽快にかけていく。

……ハーマイオニーには、ぼくが教えた『呪い返し』の呪文が、本

来の『呪い返し』よりも数倍の強さで相手に返るものだということ
黙っておくことにした。

人を呪わば穴二つ。安易に他人を呪うなんてしちゃいけないし、そ
ういうことをした以上、自分に返ってくることは忘れたらダメだ。

一方、ぼくのところはというと、ハーマイオニーとは一転して、何
の音沙汰もない、というのが正直な反応だった。

しかし、何の反応もないということが、必ずしも誰も見ていないと
いうことにならないんだと、アクアに厳しく釘を刺されてしまった。
むしろ、誰もがその記事の正誤を疑っているからこそ——真剣にその
記事を読んだからこそ、今のこの無反応なのだろう、と。

ぼくも、その意見には賛成だった。

いつの間にか冬が終わり、春がやって来ていた。

あれだけうず高く積もっていた雪はすっかり溶け、禁じられた森も
鮮やかな緑が垣間見える。コートはもう既にクローゼットの中だし、
ローブも最近はまだあまり着ていない。もっぱらセーターを一枚羽織つ
たのみで、最近は生活している。

三大魔法学校対抗試合の第三の課題は、いつの間にか来月に迫って
いた。

ぼくはまだ、ハリーの名前をゴブレットに入れた相手を見つけられ
ずにいる。



五月最後の週、僕、ハリー・ポッターは、夜にクイデッチ競技場
へと足を向けていた。

クイデッチ競技場を一目見た瞬間、僕はここが第三の課題の舞台
になるのだということが分かった。腰くらいまでの生垣が、クイ
デッチ競技場をうねうねと張っている。

僕とセドリックが分かりやすく不満の表情をしていたのか、バグマ
ンは「課題が終われば元通りにして返すよ！」とにっこり笑いかけて
くる。その言葉に、僕は揃って胸を撫で下ろした。

第三の課題は、障害物のある迷路を抜ける、というものだという。しかし、その障害物はマグルの運動会でよくあるような障害物競争とは訳が違う。

ハグリッドが生き物を置いたり、呪いが掛かっていたり……ハグリッドの生き物だつて？ そりゃあ名案だ、一体誰が考えたのだろうか？

クラムが僕と少し話がしたい、ということだったので、全体での話が終わった後、僕はクラムに連れられて『禁じられた森』へとやって来ていた。

クラムは、僕とハーマイオニーの関係について気にしているようだ。僕が「僕とハーマイオニーは友達だ、それ以上のことは何もない」と断じて、やっとクラムは晴れやかな年相応の表情をした。そして、僕の箒の腕を褒めてくれた。

クラムとこうして穏やかに話をしているなんて、クイディッチ・ワールドカップで貴賓席に座って観戦していたときには想像もしていなかった。

今、僕が対抗試合の選手として選ばれていて、そして何とか生き残っている、ということも。

何もかも、予想外なことばかりだ。僕は渦中にいるはずなのに、何だか置いていかれているような気がしてならない。

アキが、今までより僕と距離を取っているからだろうか。アキが、一体何をしようとしているのか。本人に聞いたが、アキは苦しそうな顔で何も答えてくれなかった。ただ「信じてほしい」と繰り返す。そんなアキを見たくはなかった。

僕を守ろうとしてくれている。それは分かっている。でも、僕は――

手首に嵌まる、銀のブレスレット。

『ぼくの代わりに、君を守ってくれる。だから、安心して、ハリー』
アキの言葉を、思い出した。

アキはいつでも、ぼくを守ることに必死で、一生懸命だった。

アキは強い。確かに、強い。

でも、そんなアキは、随分と脆く、儂く見える。

僕の前から消え失せてしまいそうな、そんな危うさがある。

一体いつからなのか——それは、分かりきっていた。幣原秋が、『叫びの屋敷』で僕らの前に姿を現したときからだ。

今までも、幣原秋に縛られがちだったアキは、あの日を境に幣原に
がんにがらめになっている。

まるで、呪いのようだ。

そう思った。

森の中で、幽鬼のようにふらつきぶつぶつと取り留めのないことばかりを呟くクラウチさんを見つけた僕とクラムは、ひとまずクラムにクラウチさんを見てもらうことにし、そして僕はダブルドアを呼びに、城へと走った。

クラウチさんは、明らかにおかしくなっていた。何年も前に亡くなった息子さんや奥さんのことを、パーシーに対して嬉しげに話すのだ。

急いで階段を駆け上がる。勢いそのままに角を曲がった瞬間、誰かとぶつかりそうになった。

わあっと慌てて避けると、「ごめんなさい！」と謝り、そして目を見開いた。

アキだった。驚いたように目を瞬かせている。

丁度いい、アキの腕をぐいっと掴み「着いてきて！」と叫ぶと、アキは「何!?!」と素っ頓狂な声を上げながらも、僕の走る速さに合わせて走り出した。

「クラウチ氏が、今禁じられた森にいるんだ！ よく分からないことばかり言ってる、僕のことも分かってないみたいだった。早く、ダブルドアに知らせないと」

そう言うと、アキは息を呑み、そして黙って走る速度を上げた。

やがて、校長室の前に辿り着いた。ガーゴイルの石像に対して「レモン・キャンディー！」と合言葉を唱えるが、ガーゴイル像は動かない。

アキを振り返ると、アキは眉を寄せて「……合言葉が変わったのか

も。職員室に行ってみよう」と呟く。

それに頷いて、僕たちは走り出し――

「ポッター！」

名前を呼ばれ、立ち止まった。振り返ると、スネイプがガーゴイルの裏の隠れ階段から姿を現したところだった。

「ここで何をしているのだ？ ポッター」

スネイプは、アキに一瞥もくれず、僕だけを見てそう言った。

「ダンブルドア先生にお目にかからないと……クラウチさんです、たった今現れたんです……禁じられた森にいます……クラウチさんの頼みで――」

「寝ぼけたことを！ 何の話だ？」

僕の言葉をにべもなく突っぱね、スネイプは言った。僕はたまらず叫ぶ。

「クラウチさんです！ 魔法省の、あの人は病気か何かです――禁じられた森にいます。ダンブルドア先生に会いたがっています！ 教えてください、その合言葉を――」

「校長は忙しいのだ、ポッター」

スネイプの表情が意地悪く歪んだ。僕が困ることが、心底楽しいのだ。僕は気が焦れた。

そのとき、アキがぼくの手を振りほどいた。スネイプに一步進み出る。

「セブルス」

そう言うが早いか、アキは険しい表情で、少し背伸びをすると手を伸ばし、スネイプの襟を掴んだ。スネイプの目が驚いたように見開かれる。

スネイプは、やっとアキを見つめた。

アキは低い声で呟く。

「早くしなよ。ぼくらが遊びでこんなことやってると思う？ お前の目の前にいるのはハリーだ、ジェームズじゃない。そんなつまらないこと、ハリーはしないよ」

「……………っ」

「ダンブルドアの部屋の合言葉くらい、言えるでしょ？ ……早く」
アキは目を細めて舌打ちした。

しかしスネイプが口を開くより、ダンブルドアが降りてくる方が早かった。アキはスネイプから手を離すと、スネイプから視線を逸らす。

アキの様子も気になったが、今はダンブルドアに状況を説明する方が先だ。ダンブルドアの前に進み出て端的に言う、ダンブルドアはすぐさま「案内するのじゃ」と言った。

「クラウチ氏は何と言ったのかね？」

「先生に警告したいと……酷いことをやってきたとも言いまして……息子さんのことも……それに、バーサ・ジョーキンズのこと……ヴォルデモートのこと、ヴォルデモートが強力になってきているとか……」

やがて、禁じられた森へと辿り着いた。しかし、先ほどまでクラウチさんがいたあたりには、誰の姿も認められない。

ダンブルドアは杖に光を灯し、あたりを見回した。そして、二本の足の上で光が止まった。

僕らは慌てて駆け寄った。クラムは大の字になって倒れていて、クラウチ氏の姿は見当たらない。

アキは杖に光を灯したまま、ぱつとその場から駆け出したが、少しして戻ってくると「……この辺りにはいないみたいだ」と言って首を振った。

「リナベイトー！」

ダンブルドアがクラムに呪文を掛けると、クラムはぼんやりと目を開けた。

起き上がろうとする彼を押しとどめる。

「あいつがヴおくを襲った！ あの狂った男がヴおくを、後ろから！」
「しばらくじっと横になっているがよい」

ダンブルドアはそう言った。

まもなく、ハグリッドがフアングを従えやってくる。ダンブルドアはハグリッドに「カルカロフ校長を呼んできてくれんか、そしてムー

デイ先生に警告を」と言付けたが、「それには及ばん」との声が降ってきた。ムーデイだ。いつの間に、こちらに来ていたのか。

ムーデイは忌々しげに舌打ちした。

「この足め、もっと早く来れたものを——何事だ？ スネイクが、クラウチがどうのとかと言っていたが——」

ムーデイの魔法の目が、じろりとアキを見つめた。アキは眉を寄せ、魔法の目を睨みつける。

「バーティ・クラウチがどこに行ったか分からんのじやが、しかし、何としても探し出すことが大事じや」

ダンブルドアの言葉に、ムーデイは「承知した」と頷いた。そして杖を構え直し、僕らに背を向け歩いていこうとする。

しかしその後ろ姿に、アキが追い続った。

「ぼくも行く」

そう言って、アキはダンブルドアをじっと見る。

君は行くな、ムーデイ先生に任せろ、とてつきり言うと思ったが、ダンブルドアは想像よりもあっさり「行ってくるがよい、気が済むまでの」と頷いた。

アキはぼくに目もくれず、先を行くムーデイの後を追って駆け出し、森の奥へと入ってしまった。

「……アキ」

思わず呟いていた。ダンブルドアが静かに「心配かの？」と言葉を返す。

「……当たり前、じゃないですか」

アキが心配で堪らない。

いつもなら、僕が慌てていたり気が急いでいたりするときも、アキは一人冷静だった。その大きな瞳は、いつも静かに状況を把握していた。

それなのに、今年は違う。静かにたゆたっていたアキの瞳は、今、落ち着きがなく揺れている。

昔は、アキはよく、夢の中の登場人物、『幣原秋』の話をしてくれた。優しい両親に、物珍しい日本の風景を、拙くも鮮やかに描写してくれ

た。

にこにここと、アキは楽しそうに幣原秋のことを語っていた。そんなアキを見るのが、僕は何より好きだった。アキを笑顔にさせる幣原秋のことも、同じく好きだった。

いつからだろう。アキが幣原秋の話の口にしなくなったのは。

いつからだろう、アキの瞳に昏い影がよぎるようになったのは。

今のアキが、幣原秋のせいでこうなったのならば。

アキを急ぎ立てているのが、幣原秋であるのならば。

僕は幣原秋を、許さないだろう。

第33話 記憶は静かに語りかける

昏い、昏い。ここは一体どこだろう。

自分が立っているのか、座っているのか。平衡感覚がない。

自分の姿は見えるけれども、周囲は驚くばかりの暗闇だ。色を全て拭い去ったかのような黒が、ぼくを取り囲んでいる。

『アキ』

聞き慣れた声が、鼓膜を震わせた。ぼくははつと振り返る。

聞き慣れた、だなんて、なんたる遠回しな表現なのか。

自らの喉から零れるものと、まるつきり同じものだというのに。

「あ……っ……」

ずっと待ってた。

ずっと会いたかった。

ぼくは、君に。

ずっとずっと、会いたかったんだ。

「秋……っ」

駆け出す。

心が、急ぐ。

縛れる足を、無様にも前に出す。

手を伸ばした。

「秋!!」

しかし、ぼくの手は幣原秋には届かない。

どれだけ走っても、幣原秋には追いつけない。

「待ってよ、待って……っ」

聞きたいことが、たくさんあるんだ。

話して、聞かせて。

ねえ、どうして。

お願いだよ。

『アキ。ぼくらはやっぱり、死ぬべきなんだ』

秋は、そう言っただけでつこりと笑った。

心からの、純粹な笑顔を。

穢れを知らない、無垢な笑顔を。

ぼくが、絶対に浮かべられない表情を。

「そんなこと、言わないでよ……っ」

君の口から、そんな言葉を聞きたくない。

死ぬべき人なんていないんだ。

君は、幸せになるべき人間なんだ。

『ぼくらは……ぼくは、死ぬべき人間だよ。幸せになる権利なんてない。だって、今まで沢山の——』

『沢山の命を、奪ってきたんだから』

そう言つて笑う、秋の後ろには。

目も当てられぬほどの惨状が、広がっていた。

地に倒れ伏す、何人、何十人、何百人もの人、人、人。人としての尊厳なんてまるでない、死者への敬意なんて存在しない。

物のように、適当に、辺りに打ち捨てられた人の山は、ぴくりとも動かない。

『これだけ殺した人間が、天国にも地獄にも行ける訳がない——でも、この世にも、いいはずがない』

分かるよね？ と、秋は言う。

ぼくは、それでも震える声を上げた。

「でも……でも、君は、秋、君は、正義を貫いたんだ。それよりもたくさん人の命を救った、そうでしょう？ じゃないと、英雄なんて言われない……『黒衣の天才』なんて、呼ばれやしないんだ」

縫るように、首を振った。

秋は、笑顔で言う。

純粹な笑顔を、浮かべてみせる。

そうか、これは、こんな笑顔は、穢れを知らないから浮かべられるのではない。

穢れを全て飲み干し、共に生きていく決意をした人間だけが、浮かべることが出来る表情なのだ——

『どれだけたくさんの人を救ったからと言って、ぼくの罪が消えることはない。ぼくのこの力は、忌むべきものだ、忌避すべきものだ、恨まれるものだ、憎まれるものだ——フィアン・エンクローチエ、オリビエ・ウツドナード、ジネーブ・マカスキル。彼らを傷つけてしまった時に、理解するべきだったんだ』

秋は、そこで初めて、笑みを崩した。

『ぼくはずっと一人でいるべきだった。セブルスとリリーの手を取るべきじゃなかった。ジェームズにシリウス、リーマス、ピーターと、出会わなければよかった。仲良くならなければよかった。ライフに、ライ先輩、エリス先輩……レギュラスとも、知り合わなければよかった。なんであそこで、寂しさに負けてしまったんだろう？ 誰とも触れ合わなければ、ぼくは誰も傷つけずに済んだのに。ずっと一人でいればよかった。魔法魔術大会なんて出なければよかった。一番最初の試合で負けておけばよかった。勝ち残らなければよかった。優勝なんてしなければよかった。そうすれば、ぼくの両親は死なずに済んだ。ぼくは、父さんと母さんを殺さずに済んだのに』

泣き出しそうな瞳で。

大きな瞳を、切なく揺らしながら。

それでも、涙を零さずに、秋は言う。

後悔の言葉を。

贖罪の思いを。

『リリーと仲良くならなければよかった。セブルスと仲良くならなければよかった。闇祓いに入らなければよかった。『黒衣の天才』なんて呼ばれたくない。ぼくは、誰も殺したくなんてなかった……っ、誰も傷つけたくなかった！ ぼくが愛した人たちに、ずっと笑っていて欲しかった！ ずっと、幸せでいて欲しかった！ どうせ壊れるのなら、誰との間にも、友情も、愛情も、絆も、何も作らなければよかった！』

そう言い切って、秋は息をついた。項垂れる。

再び顔を上げたとき、その顔には、どんな表情も浮かんでいなかった。

昏く、深い。

透き通っていた瞳は、光を全て吸収してしまうかのように、濁って、淀んでいる。

『……アキ。君には、悪いことをした。……ムーディ先生の言う通りだ。ぼくはあそこで、死んでおくべきだった。それを間違っつて、色んなものを間違え続けて——ぼくは生きている。生き延びて、しまつて
いる』

一緒に死のう。

アキ・ポッター。

『ぼくの、唯一の願い。どうか、叶えてくれ、アキ』

秋が、ぼくに手を伸ばす。

秋の手が、ぼくの頬に、そつと触れた。

「……あ」

ぼくは、こくりと頷いた。

秋の願いを、叶えてあげたい。

だって、ぼくは。

ぼくは、幣原秋なのだから。

『……いい子だね、アキ』

ごめんね。

そう言つて、秋は微笑んだ。

なんとも儂い、笑顔だった。



——ぼくは目を開けた。

群青色のカーテンが、視界に入る。自分の部屋のベッドで、ぼくは横になっていた。

「……ぼくは」

心は、酷く落ち着いていた。

「死ぬべきだ」

幣原秋のために。

左手を、天に向かって伸ばした。



古い学の授業は、気温が上がってくるにつれて、厳しさを増していた。

何の厳しさかって？ いかに、うだるような暑さの教室で眠気を抑えるか、だよ。

今日は、火星と海王星が素晴らしい位置にあるらしい。太陽系のミニチュア模型を出して、トレローニー先生が説明をしている。もう少し風通しの良い場所で聞いたのなら、興味を持って聞くことも出来ただろうが、生憎と身体を包み込む温風と鼻に付く香料が、集中力を途切れさせる。

何人かは、もうギブアップしている様子だ。机にぐったりと突っ伏している。アリスも御多分に漏れず、その中の一人だった。

トレローニー先生の囁くような声が、更に眠気を誘う。頭の働きがどんどん鈍くなっていき、それと同時に瞼がどんどん重たくなっていく――。

「アアアアアアアッ!!!」

背後から聞こえた叫び声に、さつきまでぼくを取り囲んでいた眠気は胡散霧消した。霧がかっていた思考がパツとクリアになる。

教室中に先ほどまで漂っていた、誰もを眠気に誘おうとする雰囲気は、既に消え去っていた。

「ハリー」

条件反射で、ぼくは床に転がるハリーに駆け寄った。両手で傷跡を抑えている。傷が痛むのか。ハリーを強く揺さぶった。

この前の夏休みと同じだ。ヴォルデモートの夢を、見たのか。

ヴォルデモートとハリーを繋ぐ絆。

どうしてハリーは、ヴォルデモートの夢を見るんだ？

ハリーはやがて目を開け、ぼくを見た。荒い息を吐いている。クラス中が、ハリーに注目していた。

ロンが「大丈夫か？」と心配げに声を掛ける。トレローニー先生は興奮したように叫んだ。

「大丈夫なはずありませんわ！ ポッター、どうなさったの？ 不吉な予兆？ 亡霊？ 何が見えましたの？」

うるさいな、とぼくはちよつとだけ眉を寄せた。ハリーも、ぼくと同じように思ったらしい。ぼくの手に乗まって立つと、トレローニー先生にはつきりと「僕、医務室に行つた方がいいと思います。ものすごい頭痛がするんです」と告げる。

「まあ！ あなたは間違はなく、あたくしの部屋の、透視振動の強さに刺激を受けたのですわ！ 今ここを出ていけば、折角の機会を失いませよ。これまでに見たことのないほどの透視——」

「頭痛の治療薬以外には、今は何も見たくありません」

語気を強めてハリーは言う、ぼくの腕を引いて歩き出した。え、と目を瞠るも、ハリーの見た夢について詳しく聞きたい気持ちだが、授業よりも圧倒的に勝った。

アリスに、後で荷物を持ってきて欲しい、と目配せすると、羨ましそうに睨まれる。ぼくは小さく笑って肩を竦めると、教室を出た。

「ヴォルデモートの夢を見た」

廊下は、授業中だから閑散としていた。

誰もいない廊下を大股で歩きながら、ハリーはぼくに言った。

「ヴォルデモートがワームテールのしくじりを責めてた。でも、ふくろうが何かいい知らせを持ってきたんだ。だから、ワームテールはナギニの餌にならずに済んだ。その代わり、僕が死ぬ。そんな算段を立てている夢だった」

ハリーは、自らの見た夢を淡々と言葉にすると、医務室ではなく校長室へと足を向けた。ガーゴイルの石像の前で立ち止まる。

そして、ぼくらは目を見合わせた。そう言えば、合言葉は違うものになっていったんだっけ。

「ダンブルドアは、ぼくに昔『甘いものを全て挙げていけば、いつかは

正解に辿り着く』って言ってた……今もまだ、そんなルールなのかは知らないけど」

「でも、やってみる価値はありそうだ……梨飴。杖型甘草飴。ファイファイズビー」

なかなか当たらない。ハリーに続いた。

「どンドン膨らむドルーブルの風船ガム。バーティー・ボッツの百味ビーンズ」

「アキ、ダンブルドアは百味ビーンズ、好きじゃないって昔言ってたよ。何でも若いとき、ゲロの味に当たったらしい——」

「……それは、なんたる災難」

想像して、口の中が強張った。それはトラウマものだろう。

ハリーは首を捻りつつ、続ける。

「あと、何があったかな……蛙チョコレート、砂糖羽根ペン、ゴキブリゴソゴソ豆板」

驚くべきことに、『ゴキブリゴソゴソ豆板』が合言葉で正解だったらしい。

ガーゴイルがぴよんと飛び退くのに、ぼくとハリーは目をまん丸くさせた。

「ゴキブリゴソゴソ豆板？」

顔を見合わせる。

「冗談のつもりだったのに……」

さすがはダンブルドアだ。ぼくらの予想を超えてくる。

ぼくらはガーゴイルの横を通り抜けると、石の螺旋階段に足を掛けた。階段がゆっくりと上昇し、後ろの壁は閉じられる。

やがて、ぼくらは扉の前に辿り着いた。真鍮のノッカーが、ぼくの目の高さの位置にある。

部屋には、誰かがいるようだった。ぼくらはちよつと躊躇する。

「ダンブルドア、私にはどうも繋がりが分からんですよ。全く分かりません。ルードが言うには、バーサの場合は行方不明になっても、全くおかしくはない。確かに、今頃はもうとつくにバーサを発見しているはずではあったが、それにしても、何ら怪しげなことが起きてい

るといふ証拠はないですぞ、ダンブルドア。全くない。バーサが消えたことと、バーティ・クラウチの失踪を結びつける証拠となると、尚更」

この声は、魔法大臣のコーネリウス・ファッジのものだ。続けて、ムーデイの声も聞こえた。

「それでは、大臣。バーティ・クラウチに何が起こったとお考えかな？」

「アラスター、可能性は二つある。クラウチはついに正気を失ったか——大いにあり得ることだ。あなた方にもご同意頂けるとは思うが、クラウチのこれまでの経歴を考えれば——心神喪失で、どこかを彷徨っている——」

「もしそれなれば、随分と短い間に、遠くまで彷徨い出たものじゃ」
ダンブルドアの声は冷静だった。

「もしくは……いや、クラウチが見つかった現場を見るまでは、判断を控えよう。しかし、ボーバトンの馬車を過ぎたあたりだとおっしゃいましたかな？　ダンブルドア、あの女が何者なのか、ご存知で？」
「非常に有能な校長だと考えておるよ。ダンスも素晴らしく上手じゃ」

「ダンブルドア、あなたはハグリッドのことがあるので、偏見からあの女に甘いのではないのか？　連中は全部が全部無害ではない——もっとも、あの異常な怪物好きのハグリッドを無害と言うのならの話だが——」

「わしはハグリッドと同じように、マダム・マクシームも疑ってはおらんよ。コーネリウス、偏見があるのはあなたの方かもしれん」
「議論はもう止めぬか？」

ムーデイが唸った。それにファッジも対抗するように苛ついた声を出す。

「それでは外に行くでしょう」

「いや、そうではないのだ。ポッターどもが話があるらしいぞ、ダンブルドア。扉の外におる」

ぼくらは度肝を抜かれたが、そう言えばムーデイは『魔法の目』で、

たとえ分厚い扉が間に挟まれていたとしても、それを透かして見ることができただった。

やがて、扉が開かれ、ムーデイがぼくらを見下ろした。

「よう、ポッターども。さあ、入れ」

ぼくらは、少々居心地の悪い思いを感じながらも、ダンブルドアの部屋へと入った。ファッジは「ハリー！ それに、君も」と、ぼくらを見て愛想よく笑う。

「今、丁度クラウチ氏が学校に現れた夜のことを話していたところだ。見つけたのはハリー、君だったね？」

「はい。……でも、僕、マダム・マクシームはどこにも見かけませんでした。あの方は隠れるのは難しいのじゃないでしょうか？」

ファッジは気まずそうな表情を浮かべた。

「まあ、そうだが。今からちよつと校庭に出てみようと思っていたところなんでね、ハリー、すまんが、授業に戻ってはどうかね？」

「僕、校長先生にお話したいのです」

ハリーはダンブルドアを見て急いで言った。

ダンブルドアは、ハリーの真意を探るような目でハリーを見たが、やがて微笑んだ。

「それなら、ここで待っているがよい。我々の現場調査は、そう長くはかからんじやろう」

そう言って、ダンブルドアとファッジ、そしてムーデイは出て行った。

ムーデイは、最後にぼくに暗い一瞥を残す。その視線を、臆することなく受け止めた。

ぼくらは、主人がいなくなった部屋で、ソファに腰掛けた。

「まだ、傷は痛む？」

そう尋ねると、ハリーは首を振った。

「もう大丈夫。心配かけてごめんね、アキ」

「ううん、いいんだ」

ハリーはちよつと微笑んで、周囲を興味深そうに見渡した。不死鳥や組み分け帽子、それにゴドリック・グリフィンドールの剣。

ふと、何かに興味を惹かれたように、ハリーは立ち上がった。背後の黒い戸棚へと近付いて行き、覗き込む。

「なんだろう、これ……」

「どれ？」

戸棚は、きちんと閉じられてはいなかった。ハリーは迷いながらも、戸棚に手を掛け、そろりと開ける。

中には、石の水盆が置かれていた。中には、見たこともないものが入っている。液体なのか気体なのかも判別出来ない。白っぽい銀色の物質で、じっと見ていると、絶え間なく波打っているのが見えた。なんとなく、守護霊のようだな、と考える。

この物体は、一体何なのだろう。ハリーも同じ考えのようで、杖を取り出すと、校長室を恐る恐る見渡し、そして杖で水盆の中を軽く突つく。

すると、途端に中の銀色の物体は渦を巻き始めた。そして、何やらどこかの風景を映し出す。

大きな部屋だ。そして、とても薄暗い。窓がないのか。

ぼくはハリーと共に、水盆の中をじっと覗き込んだ。

ぐるりと部屋を一周して、ベンチが階段状に並んでいる。そこに、人がずらりと腰掛けている。

部屋の真ん中には、椅子が一脚だけ置いてあった。椅子の肘には、重たそうな鎖が鈍く光っている。

ハリーは、ぼくの指をぎゅっと掴んだ。そして、もつと水盆に顔を近づける。

ハリーの鼻先が水面に触れた、その瞬間、視界がぐるりと回った。

ハリーがするんと水盆の中に吸い込まれていく。呆気に思う暇もなく、ぼくはハリーに掴まれていた指先から、水盆の中へと入って行った。



気がつくくと、ぼくとハリーは、さっきまで水盆の中に移っていた景

色の中にいた。丸い部屋の壁際、階段状のベンチの一番上に、ぼくらはいつの間にか立っていた。

部屋には、ざっと二百人くらいは人がいるだろうか。誰も、ぼくらが現れたことに気付いた様子すらない。

こんなに大勢の人がいるというのに、身じろぎをするときには鳴る服の擦れる音以外は、誰も口を開いていない。

「わあっ—」

突然、ハリーが叫び声を上げた。慌てて振り返ると、ハリーの隣にはダンブルドア。

ぼくらは口々に謝ったが、ダンブルドアはこちらをチラリとも見ず、気付いてすらいないうようだった。

「アキ、もしかして、これ……」

『記憶』の中、だろうね、多分」

そう思って見てみると、少しはダンブルドアが若々しく見える。同じ銀色の髪に長い髭だが、ほんの、ほんの少しだけ、シワが少ないかな？ 程度だが。

部屋を見渡してみる。光が全く入っていないし、どことなく感じる雰囲気から、地下室のようだ。ベンチが円状に並んでいて、その中心に一脚の、鎖がついた椅子……これは、この部屋は、多分——法廷だ。隅にあるドアが開いて、三人の人影が入ってきた。男が一人、そして彼に付き従っているのは、二体の吸魂鬼だ。一気に周囲の温度が下がる。

ハリーが、ぼくの手をしっかりと握りしめた。その手も冷たい。

吸魂鬼は、男を中央の椅子に座らせた。この顔には見覚えがある。イゴール・カルカロフだ。

椅子の鎖が金色に輝くと、カルカロフの腕に一人でに巻きつき、縛り付けた。

「イゴール・カルカロフ」

クラウチが立ち上がり、罪人の名前を読み上げた。今よりもずっと若々しく、生気に溢れている。

「お前は魔法省に証拠を提供するために、アズカバンからここに連れ

てこられた。お前が、我々にとって重要な証拠を提示すると理解している」

カルカロフは目を瞬かせながらも、出来る限り背筋を伸ばした。「その通りです、閣下。私は魔法省のお役に立ちたいのです。手を貸したいのです——私は魔法省がやろうとしていることを知っております——闇の帝王の残党を一網打尽にしようとしていることを。私に出来ることでしたら、何でも喜んで……」

ベンチに腰掛ける聴衆が、不快感を露わにするようにざわざわと声を上げた。

「汚い奴。クラウチは奴を釈放するつもりだ。奴と取引した。六ヶ月もかかって奴を追い詰めたのに……仲間の名前をたくさん吐けば、クラウチは奴を解き放つつもりだ。……いいだろう、情報とやらを聞くんじゃないか。それからまた真っ直ぐ吸魂鬼の元へとぶち込め」

ムーデイだ。そして——ぼくは目を大きく見開いた——その隣に、幣原秋が座っていた。

年齢は、二十を少し超えたあたりだろうか。随分と大人びた。輪郭がシユツとして、目つきがちよつと鋭くなったか。

自分が成長した後の姿を見る、という経験はそうそうないから、ぼくにとってはかなり衝撃的だった。そうかあ、ぼく、数年後にはこんな感じになるのかあ。

願うなら、もう少し身長があつて、もう少しイケメンであればなあ、と思いはするのだが。女の子にも未だに見間違えられる大きな目とか、ちよいとコンプレックスではあるんだぞ。初対面のシリウスに、女の子と間違えられナンパされたのはトラウマだ。

幣原は、黙って指先を合わせ、感情の読めない瞳でカルカロフを見下ろしていたが、「ムーデイ先生、なんでぼくをわざわざここに連れて来たんですか？　ぼく、まだ仕事に大量に残っているんですけど。こないだの始末書、まだ書き終わってないし」とため息と共に尋ねた。「何、貴様も知っておいて損はないだろう？　どうせ、そのうち相手取ることになるのだ。奴さんの名前を再認識するのに損はするまい？

あいつがいなくなつた今、お前が何十人も部下を指揮するのだから

ら」

「……本当、やってらんないよ」

そうぼやいて、幣原は軽く頭を振った。

着ている服は、ムーデイのものと少しデザインは異なるが、大まかな形や色は大体同じだ。黒の、インバネス・コート、というのだろうか？ そんなローブに、ループタイ。きつちりと一番上まで止められたシャツのボタンは、幣原の神経質さが現れている。襟元や袖口には、鈍い輝きを放つ紋章があらわれていた。

カルカロフの尋問が始まっていた。喘ぎながらも、何人もの名前を挙げていく。その様は、こうして『記憶』を覗き見しているだけのぼくにしてみても、醜悪で、嫌悪を催すものだった。

「よかろう、カルカロフ、これで全部なら、お前はアズカバンに逆戻りしてもらおう。我々が決定を——」

クラウチ氏がそう結論つけようとした時、カルカロフは「まだ終わっていない！」と必死な面持ちで叫んだ。半ば立ち上がりかけようとするカルカロフの手足を、金色の鎖がきつく縛り上げる。

「スネイプ！ セブルス・スネイプ！」

「この評議会はスネイプを無罪とした。アルバス・ダンブルドアが保証人になっている」

「違う！ 誓ってもいい、セブルス・スネイプは『死喰い人』だ！」

幣原は、先ほどまでの無表情を僅かに歪め、眉を寄せてじつとカルカロフを見つめていた。

眼差しには——なんだ？ この色は。憎しみだけじゃない、なんだろう、悲しみなのか？ 少し違うようにも見える、そんな感情が渦巻いている。

合わせている指先に、ぎゅつと力が籠ったのが見てとれた。

ダンブルドアは立ち上がった。

「この件に関しては、わしが既に証明しておく。セブルス・スネイプは確かに『死喰い人』ではあったが、ヴォルデモートの失脚よりも前に我らの側に戻り、自ら大きな危険を冒して我々の密偵になってくれたのじゃ。わしが『死喰い人』ではないと同じように、今やスネイプも

『死喰い人』ではないぞ」

ムーディは甚だしく疑わしげな目つきでダンブルドアを見ていたが、氣遣わしげに幣原をちらりと見た。幣原はその視線に気付かず、未だ迷いの残る眼差しで前を見据えている。

「よろしい、カルカロフ。お前は役に立ってくれた。お前の件は検討しておこう、その間はアスカバンに——」

声が段々と遠ざかる。法廷は消えかかり、すべてが半透明となっていく。

暗闇が渦を巻き——やがて、法廷がまた戻ってきた。

今回は、先ほどと違って楽しげな雰囲気だ。ここがクイディッチ競技場だ、と言われても納得出来るだろう。

部屋の隅のドアが開き、ルード・バグマンが入ってきた。今より若く、精悍だ。

ベンチに座る魔法の何人かが手を振るのに、バグマン氏はちよつと笑って手を振り返した。

「ルード・バグマン。お前は『死喰い人』の活動に関わる罪状で答弁するため、魔法法律評議会に出頭したのだ。既にお前に不利な証拠を聴取している。間もなく我々の評決が出る。評決を言い渡す前に、何か自分の証言に付け加えることはないか？」

「あの——その、私はちよつとただ——」

「若造め、本当のことを言いおったわい」と、ムーディは呟いた。今回は、幣原の姿は見当たらない。

「しかし、申し上げたとおり、私は知らなかった！ ルックウッドは私の父親の古い友人で、『例のあの人の一味とは考えたこともなかった！ それに、ルックウッドは、将来私に魔法省の仕事を世話してやると、いつもそう言っていたのです……クイディッチの選手生命が終わったら、の話ですが……死ぬまでブラッジャーに叩かれ続けてるわけにはいかないでしょう？」

温かみのある忍び笑いがそこかしこで上がった。クラウチ氏は冷たく「評決を取る」と言い放つ。

「陪審は拳手願いたい——禁固刑に賛成の者——」

誰も手を挙げなかった。一人の魔女が立ち上がる。

「先週の土曜に行われたクイディッチのイギリス対トルコ戦で、バグマンさんが素晴らしい活躍をなさいましたことに、お祝いを申し上げますわ」と思えますわ

法廷は拍手の音で埋め尽くされた。クラウチ氏はカンカンに怒っていた――

そして、再び世界は回る。

次に現れた光景もまた、法廷だった。今度は、一番最初に見たものと雰囲気に近い。しんと静まり返っている。クラウチ氏の隣にいる魔女のすすり泣きが――涙の雫ももう出ないようなすすり泣きが――聞こえるだけだ。

今回は、幣原秋の姿があつた。先ほどよりもやつれて見える。それに、少し痩せたようだ。目の下には黒々とした隈が刻まれており、眉間には深いシワが寄っていた。いつものように両手の指を合わせ、神経質そうに人差し指同士をトントントンと触れ合わせている。

今度は、四人の被告と六体の吸魂鬼が姿を現した。鎖付きの椅子は四脚になっており、吸魂鬼はそれぞれを椅子に座らせる。

「お前たちは魔法法律評議会に出頭している。この評議会は、お前たちに評決を申し渡す。罪状は極悪非道の――」

「お父さん」

薄茶色の髪 of 青年が呼びかけた。ガタガタと震えている。と、いうことは――彼が、クラウチ氏の息子なのか。

平素ならば鼻筋の通った美青年であるだろうにも関わらず、さらりとした髪は乱れ、その表情は恐怖に歪んでいる。

「お父さん……お願い……」

クラウチ氏は息子の声を無視して続けた。

「――この評議会でも類のないほどの犯罪である。四人の罪に関する証拠の陳述は既に終わっている。ロドルファス・レストレンジ。ラバスタン・レストレンジ。ベラトリクス・レストレンジ。――バーティミス・クラウチ・ジュニア」

最後の人物の名をクラウチ氏が読み上げた瞬間、法廷がざわつい

た。

クラウチ氏は憎々しげに齒噛みすると、ざわめきよりも大きな声で罪状を読み上げる。

「お前たちは一人の闇祓い、フランク・ロングボトムを捕らえ、『磔の呪い』にかけた咎で訴追されている。ロングボトムが、逃亡中のお前たちの主人である『名前を言っただけはいけないあの人』の消息を知っていると思い込み、この者に呪いをかけた咎である——」

「お父さん、僕はやっていません！」

悲痛な声。聴衆の何人かが、痛ましげに目を逸らした。

「お父さん、僕は、誓って、やっていません。吸魂鬼のところへ送り返さないで——」

「さらなる罪状は、フランク・ロングボトムが情報を吐こうとしなかったとき、その妻、アリス・ロングボトムに対して『磔の呪い』をかけた咎である。二人を回復不可能な状態にまで追い込んだ。お前たちは『名前を言っただけはいけないあの人』の権力を回復せしめんとし、その者が強力だった時代を、お前たちの暴力の日々を復活せしめんとした。加えて——」

「お母さん——」

その声に、クラウチ氏の隣にいた魔女が大きく肩を震わせた。ガタガタとハンカチを持つ手を震わせ、すすり泣く。

「お母さん、お父さんを止めてください。お母さん、僕はやっていない。あれは僕じゃなかったんだ！」

「加えて！ 闇祓いのアリス・レインウォーター、かの者を闇の魔術により『生ける亡者』とし、闇祓いの動向を探ったことについて！ これは酷く非人道的な行為であり、極めて凶悪な犯行であると見なされるだろう！」

幣原は、ぐ、と齒噛みした。合わせた両手が、細かく震えている。ムーディも憎々しげな表情で、目下の四人を睨みつけていた。

アリス・レインウォーター。幣原が四年生の頃の、レイブクロー監督生。

魔法魔術大会で、幣原の前に帽子を脱ぎ——そして、幣原の両親が

死んだ折、まだ設立されたばかりの『不死鳥の騎士団』に誘った人物。空っぽだった幣原に、『復讐』という、生きる意義を差し出した人物。クラウチ氏は続けた。

「ここで陪審の判決を。——これらの罪は、アズカバンでの終身刑に値すると、私はそう信ずるが、それに賛成の陪審員は挙手を願いたい」誰もが、一斉に手を挙げた。自然と、拍手が沸き起こる。残忍な拍手が——自分を正義と断ずるが故の、傲慢な拍手が、沸き起こる。

その拍手に負けない声で、クラウチ・ジュニアは叫んだ。

「嫌だ！ お母さん、嫌だ！ 僕、やってない。やっていない。知らなかったんだ！ あそこに送らないで！ お父さんを止めて！」

吸魂鬼が、四人をアズカバンへと再び輸送しようと現れる。そこで、魔女は——ベラトリクス・レストレンジはクラウチ氏を見上げ、狂気の籠った声で叫んだ。

「クラウチ、闇の帝王は再び立ち上がる！ 我々をアズカバンに放り込め！ 我々はただ待っただけだ、あの方は必ず蘇り、我々を迎えにおいでになる。他の従者の誰よりも、我々をお褒めくださるであろう！ 我々のみが忠実であった！ 我々のみが彼の方をお探し申し上げた！！ 闇の帝王、万歳！！ ヒヤハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！！！！」

クラウチ・ジュニアは、父親を見つめて、まだ叫び、もがいていた。聴衆は、そんな彼を嘲笑う。

「僕はあなたの息子だ！ あなたの息子なのに！」

「お前は私の息子などではない！」

クラウチ氏は、籐が外れたように叫んだ。

クラウチ・ジュニアの瞳が大きく見開かれる。

「私には息子などいない！」

その言葉に、クラウチ・ジュニアは呆然と、その顔から表情を失くした。

——しかし、それも一瞬だった。

「つぶ、ふつぶ………アハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！！」

びりついて離れなかった。ムーデイが、目を見開いて自失する幣原の肩を強く揺さぶる。

「幣原、我を忘れるな。お前はここにいる、お前は、確かにここにいる。自分を見失うな。お前が迷うと、何人が路頭に迷うと思う？ お前の迷いが、仲間を殺すのだ。忘れるな、幣原秋。お前は迷ってはいいい」

「……そこまでにするのじゃ、アラストー。お主のその言葉こそが、何よりその子を追い詰める——と、言っても今更のことだがの」

ダンブルドアは悲しげにため息をつく、ぼくとハリーをくるりと向いた。

「そろそろ、わしの部屋に戻る時間じゃ。ハリー、アキ」



気がつく、ぼくとハリーは校長室にいた。水盆の入っていた戸棚の前に立っている。すぐ横にはダンブルドアがいた。

「校長先生……いけないことをしたのはわかっています——そのつもりはなかったんです。戸棚の戸が、ちよつと開いていて、それで——」
ハリーがたどたどしく言うのに、ダンブルドアは鷹揚に頷いた。

「分かっておる」と言うと、その水盆を持ち上げ、自分の机の上に乗せる。そして椅子に腰掛けると、ぼくらに向かい側に座るよう合図した。

「これは何ですか？」

ハリーが尋ねる。

「これは、ペンシープ、『憂いの篩』じゃ。時々感じるのじゃが、考えることや想い出があまりにも色々あって、頭の中が一杯になってしまったような気がするのじゃ。そんなときに、この篩を使う。溢れた想いを頭の中からこの中に注ぎ込んで、時間のあるときにゆっくり吟味するのじゃよ」

「それじゃ……この中身は、先生の『憂い』なのですか？」

「その通りじゃ」

ダンブルドアは杖を取り出すと、その先端をこめかみに触れさせた。そして杖を離すと、銀色の物質が、糸状になって杖にくっついていく。ダンブルドアは、その『憂い』をそつと水盆の中に落とす。水面にハリーの顔が写っていた。

ダンブルドアが篩を掴んで揺ると、次はスネイプ教授の顔が水面に浮かぶ。教授は口を開いた。

『あれが戻ってきています……カルカロフのもです……これまでよりずっと強く、はつきりと……』

「篩の力を借りずとも、わしが自分で結びつけられたじやろう。しかし、それはそれでよい」

ダンブルドアは、ハリーとぼくを交互に見た。

「ファッジ大臣が会合に見えられたとき、ちょうどペンシーブを使っておつての。急いで片付けたのじや。どうも戸棚の戸をしつかり閉めなかったようじや。当然、君らの注意を引いてしまったことじやろう」

「……ごめんなさい」

「好奇心は罪ではない。しかし、好奇心は慎重に使わんと……まことに、そうなのじやよ……」

ダンブルドアは、杖の先で水盆を突ついた。すると今度は、十代後半くらいの女の子が現れた。

『ダンブルドア先生、あいつ、私に呪いを掛けたんです。私、ただちよつとあの子からかっただけなのに。普段は虫も殺さないような顔してるから、ちよつと意地悪しようと思っただけなのに。あの子が先週の木曜に、温室の陰でフローレンスにキスしてたのを見たわよつて言っただけなのに……』

「じやが、バーサ。君はどうして、そもそもあの子の後をつけたりしたのじや？」

ダンブルドアは悲しげに独り言を呟いた。それじやあ——今の子が、バーサ・ジョーキンスか。

ハリーも、同じことを考えたようだった。

「この子が、昔のバーサ・ジョーキンス？」

「そう、わしが覚えておるバーサの学生時代の姿じゃ」

ダンブルドアはその『憂い』を沈めると、ぼくらに向き直る。

「君には、酷なものを見せてしまったかの、アキ」

「……そんな、こと」

思わず口ごもる。ハリーが、ぼくの手をぎゅっと握った。それに、少しだけ励まされる。

「じゃが、忘れるでない。アキ」

ダンブルドアは、目を細め、険しい口調でぼくに告げた。

「全て、忘れるでないぞ、アキ。想いも、憂いも、悲しみも、喜びも、望みも、全て君自身のものじゃ。決して、誰かのものではない。そのことを、ゆめゆめ、忘れるな」

第34話 密かなる想いは巡り行く

イースター休暇が終わると、寮監と進路指導の日程が組まれた。

ふくろう試験の結果により、来年度以降、どの科目を履修するかが決まる。それにより、自分の将来の選択肢も自ずと狭まっていく。だからどの先生も、ふくろう試験が大事だと口酸っぱくして言うのだ。「どうだった？・リイフ」

フリットウィック先生の教室から出てきたリイフにそう尋ねると、リイフは苦い顔をした。

『モラトリウムに浸るのもそろそろ終わりにしましょうね』だってよ……さすが、よく見てらっしゃる」

「さすが、フリットウィック先生」

よく生徒のことを見てるよ、本当。

「頑張れよ」とリイフに肩を叩かれ、ぼくは軽く頷くと、フリットウィック先生の部屋に入った。

「やあ、秋くん。どうぞお掛けなさい」

そう言うフリットウィック先生にお礼を言って、先生の机の正面のソファに腰掛ける。

この部屋の中で、このソファだけが普通の大きさで、あとはどれも小さなサイズだから、まるでぼくが大きくなったかのように感じられた。まるで、小人の国に難破したガリバーの気分だ。

「この面接は、君の進路について話し合っつて、これからどの学科を継続するかを決めるためのものです。さて、秋くん。ホグワーツ卒業後、君は何がしたいですか？」

「えつと……」

真つ先に浮かんだのは、エリス先輩から言われた『闇被い』という職業だ。

ぼくがそれについて口にするると、フリットウィック先生は少しだけ悲しそうな表情をした。

「……『闇被い』ですか」

「えつと……いけませんか？」

「いえいえ、いけないということはありません。それが君の望みならば……」

とフリットウィック先生は頭を振ると、机の上に積み上がっている大量の資料から、一冊の黒い小さな冊子を引っ張り出した。小さな丸眼鏡を押し上げつつ、冊子を開いて目を凝らす。

「闇祓いになるには、最優秀の成績が必要です。七年生での N・E・W・T・試験では、最低でも五科目はパスしなければいけませんし、それも『E』より下の成績は受け入れられません。しかもその後、性格・適性テストが闇祓いの方で行われます。昨年度の生徒は、優秀でした……うちの寮のエリス・レインウオーターくん、知っていますね？ それに、グリフィンドールでもフランク・ロングボトムくん、アリス・プルウエットさんと、三人もの卒業生が合格しています。これは非常に珍しい……一人も採用されない年もとても多いのです。それくらい狭き門ですよ、秋くん」

こくり、とぼくは頷いた。

「『闇祓い』になるには、目下のところだと、ふくろう試験で『闇の魔術』に対する防衛術』『変身術』『呪文学』『魔法薬学』は、特に良い成績を取らなければいけません。変身術の先生、マクゴナガル先生は、ふくろう試験で『E』以上の成績を収めた者にしか教えません……『呪文学』は、君に対して私から言うことは何もありませんね。君は優秀な生徒です」

フリットウィック先生はにっこりと笑った。照れて、思わず小さく頭を下げる。

「君の成績だと『呪文学』『闇の魔術』に対する防衛術』『変身術』は問題ないでしょう。後、残るは『魔法薬学』ですね。スラグホーン先生は『E』以上の生徒ならば受け入れてくださいます。精進なさい」

「はい」

魔法薬学か……そう得意じゃないんだよなあ。よくリリーやセブルスからは「変なところで大雑把なのがいけないのよ」「最後まで目を離すな、全部終わってから気を抜け」と言われるし……あの二人にも教えを仰ごう。

「ところで秋くん」

「はい？」

フリットウィック先生は、闇祓いの黒冊子を書類の一番上にバサツと置くと、ふと真剣な目でぼくを見つめた。

「教師、という道に興味はありませんか？」

「……教師、ですか？」

「はい。ホグワーツの先生という道です。生徒を教え育み、自らのやりたい研究に打ち込む——そんな道です。君なら、『呪文学』の優秀な教師になれるでしょう。優しい君なら、後輩を正しい道に導いてやることも出来るでしょう。君の才能は、教育、研究という道にこそ、最高のものを示すでしょう」

才能。

ぼくの、才能。

「……あまり、ピンと来ないっていうのが、正直な気持ちです」

戸惑いながらも、ぼくはそんな言葉をフリットウィック先生に返した。胸の中に溢れる気持ちを、必死に言葉にする。

「ぼくは……両親を殺したヴォルデモートを恨んでいます。『闇祓い』こそ、ヴォルデモートに一番近付ける……あいつを絶対に捕まえる、それが今、一番強いぼくの望みなんです」

すいません、と、ぼくは眉を寄せて頭を下げた。

フリットウィック先生は、しばらくぼくを悲しげに見つめていたが、やがて「……分かりました。でも……気が変わったらいつでも言ってくださいね」と微笑んだ。

「君の幸せを、私は心から、願っていますから」



ダンブルドアとその少年は、彼らの他に誰もいない校長室で向き合っていた。

長い黒髪を、後ろで一つに括っている少年だった。幼くも整った顔立ちは、今は愕然と見開かれている。レイブンクローのネクタイを僅

かに緩めた彼は、囁くように呟いた。

「……そういうことか」

俯いた少年の髪を、どこからともなく吹く風が揺さぶった。彼は力が抜けたように、ストンとソファに座り込む。

「ハリーは、ハリーまでもが、あなたにとつては罔に過ぎないのか——ダンブルドア」

彼の言葉に、ダンブルドアは口を開いた。

「そうは言っておらぬ。しかし、彼のみが、あやつを倒す唯一の存在なのじゃ」

「言葉が変わっただけじゃないか！ あなたはハリーを、駒としてしか見ていない！ そんな、そんなこと……」

「幣原秋よ」

その言葉に、彼は動きを止めた。

「分かっておったことじゃろう？ わしがお主に協力したあの時から、気付いておったことじゃろう？ 君が見ようとしなかっただけじゃ。……過去に縛られておるのは、君もセブルスも同じじゃよ、秋」少年は、しばらく黙っていた。静かに指先を合わせ、自身の両手に目を向ける。しかしその双眸の焦点は、両手には合っていないことが一目で見とれた。

「……だから、あなたはぼくに言ったんですね。『第三の課題のとき、幣原秋として、校長室にいろ』と。あなたは気付いていたんだ、あいつの正体に。あいつが、バーティミウス・クラウチ・ジュニアだということに。気付いていて、あなたは……っ」

怒りに、彼の語尾が震える。眉を寄せ、歯を食い縛ると、彼は意識して呼吸を整えた。

「……ハリーが、可哀想だとは思わないんですか。ハリーは……、ハリーはあなたの道具じゃない……っ、何も知らないまま泳がされて！死ぬかもしれない罫の中に、わざわざ突き落とすような真似を……っ」

「秋。わしはハリーに期待しておるのじゃ。彼の力をいかにして伸ばし、あやつに対抗させるかを。あやつを倒すためなら、わしは自分の

命までも掛けてみせるじゃろう。ハリーも同じじや。あやつを倒すために、自分の命を利用する、それが一番の方法なのじや」

少年は、怒りと葛藤に表情を歪めてダンブルドアを見た。苦々しげに口を開く。

「以前あなたは、ぼくの出身寮、レイブンクローになぞらえて、ぼくを批判しましたよね。『ロウエナ・レイブンクローの設立したレイブンクローの生徒は、事実ばかりを尊び過ぎることが欠点じや』——あなたにも、言いたい。ゴドリック・グリフィンドルの設立したグリフィンドルの生徒は、軽々しくも自分の命を投げ打つことを美德とすることが欠点だ。死んでも、敵に一矢報いてやれたならば本望——ふざけるなよ」

「……そうじやのう」

ダンブルドアは、小さく頷いた。

「残念なことに、否定は出来ん。自らの力を見誤り、敵に突っ込んで死んでいくのは、グリフィンドル生の悪癖じや。強敵に立ち向かうのは素晴らしいが、しかし死んでは何もならぬ、そう言いたいのだじやな？」

彼は、そう言うダンブルドアを強く睨みつけた。ダンブルドアはその視線を受け止め、受け流す。

「ハリーを見殺しにするのじや、幣原秋よ。それが得策じやということくらい、君が理解するのは容易いことじゃろう」

大きく舌打ちすると、少年は立ち上がった。振り返ることなく、大股で部屋から出ると、後ろ手に強くドアを閉める。バタン、とドアが軋んだ。

少年が消えた先のドアを、ダンブルドアはじっと見つめていた。



いい加減にしろ、アルバス・ダンブルドア！

ぼくは怒りに任せつつ、階段を一段飛ばしで駆け下りていた。

『ハリーを見殺しにしろ』なんて——ジェームズとリリーの置き土産

を、見殺しに、なんて。

「これでハリーが死んでみる。狸爺、その日がお前の命日だ」

ハリーが生きていることこそが、ぼくの生きる希望なのに。

「……………」

『ハリーを守ってくれ』。何人に、この言葉を掛けられただろう。そのたびに、ぼくは頷いてきた。

その約束を守ることを、生きがいとして、生きる目的として——アキ・ポッターという人格を作り出し、そいつを現実世界に対面させ、代わりに引きこもることが、果たして生きていると言えるのかと問われれば、それは首を傾げざるを得ないのだが——それでも、ハリーがぼくの生きる目的だったことは間違いない。

それを取り上げられたぼくに、生きている意味なんてあるのだろうか。

本当に、ムーディの——クラウチ・ジュニアの言う通りだ。彼の言う通りというのは癩に触るが、しかし誠に、彼の言は説得力があった。ぼくの望みを見事に言い当てた彼に、ぼくは素直に両手を上げようじゃないか。

人混みをすり抜ける。

こうして、ホグワーツの中を歩くのは、随分と久しぶりだ。誰かと会話する目的以外で外に出たことがなかったから、景色も、普段ならうんざりするであろう人混みや、大勢の人の声も、随分と新鮮に思える。

大きな窓からは、青空が広がっていた。初夏の濃い青色が、ずっと遠くまで広がっている。

アキの目を通して、いつも見ていたはずなのに、自分の目で見た世界は、また感じる色彩が違って見える。

「アキじゃないか」

名前を呼ばれて、反射的に振り返った。そして、振り返ったことを後悔する。

セドリック・デイゴリーだ。にこやかな笑みで、ぼくに近付いてくる。

参つたな、ぼくは今、幣原秋で、彼が知る快活で人懐っこいアキ・ポッターとはかけ離れた人格の持ち主だというのに。

「やあ、セドリック。元気かい？」

せめて、『アキ・ポッター』らしく、無邪気に笑顔を浮かべてみせた。人懐っこいこの少年は、人見知りのぼくから派生したのかを疑うくらい、交友関係が幅広い。ぼくだったら、他寮の上級生を呼び捨てになんて、絶対に出来ないもの。

「元気だと思う？ 明日だよ、明日。第三の課題がある——気が滅入って仕方がないよ」

セドリックは、話しながらぼくの隣に並ぶと歩き始めた。どうやら、まだ立ち話は続くらしい。ボロが出ないといいのだけど。

「君の兄の調子はどう？ ……って言つても、ハリーの方が僕より度胸が据わつてるからね。知ってる？ 第三の課題。クイディッチ競技場が迷路になつてるんだよ。驚いた驚いた……本当に元通りになるんだろうね？ まあ、僕は今年がホグワーツの最高学年だから、もうあのピッチで競技をすることは無いんだけど……願わくばもう一度だけ、あのピッチでハリーと一緒にスニッチを追いかけたいな」

「ああ……そう言えば、ハリーとはあの試合から、一回も対戦してないんだっけ？」

「そうなんだよ！」

セドリックは声を上げた。拳を振り上げ、憤慨する。

「あんなの、勝つたつて言えない——『ハリー・ポッターに勝つたんだ！』って父は言うけど、あんな勝利、僕は認めない。あの試合での勝利なんて欲しくない。あんな形での勝利に意味はない。……だから、もう一度だけ」

セドリックは、精悍なその顔に、年相応の笑みを浮かべた。

「ハリーと戦いたい。勝つても負けても、どっちだっていい……いや、今のは嘘。格好つけた」

セドリックは、未来を語る。

第三の課題が終わつた、その後を。

「僕は、正々堂々とハリーに勝ちたい。勝つても負けても、なんて理想

論だ。ハリーには、絶対に負けたくない。クイディッチ選手として、シーカーとして、絶対に」

セドリツクの瞳の奥は、澄んだ光が煌めいていた。

セドリツクは知らないのだ。この試合に、死の罫が掛けられていることに。

この純朴で誠実な青年は、知らないのだ。

ぼくとダンブルドアが、その罫をあえて見過ごそうとしていることに――

怒りが湧いた。

もし、ハリーよりも先に、誰かが優勝杯を掴んだとしたら？ ハリーが死ぬ確率よりも、その者が死ぬ確率の方が圧倒的に高いのに。ヴォルデモートは、ハリーをさくつと殺してしまいはしないだろう。杖を取り、己と戦うことを望むだろう。ジェームズやリリーがそうだったように、そんな勇敢さを、息子にも望むだろう。

しかし、ヴォルデモートは、ハリー以外の人物に対して、決して容赦しない。

「……ふざけるなよ」

お前は、ハリー以外は、駒としてすらも見ちやいないのか？

それとも、ぼくのこの想いすらも、お前の手の内だというのか？

「アキ？ どうしたの？」

――いいだろう。踊ってやるよ、アルバス・ダンブルドア。

ポケットの中を探ると、いつのものとも知れぬ羊皮紙の切れ端が出てきた。授業の暇潰しとして、リイフの息子、アリス・フィスナーと共に書いた落書きの跡があるが、この際贅沢は言っていられない。

ハリーとの連絡ツールである羊皮紙は、さすがに使うとアキが怒るだろう。

ピリ、と脳裏に、閃光のような痛みが走る。そろそろ時間か。しかし――ここまでは。

セドリツクの胸にそれを押し当てると、魔力を込める。

パアン、と光が零れ、その光が収まった後には、幾何学的な模様が羊皮紙に刻まれていた。

「持つてな。それが君を守る盾となる。セドリツク・デイゴリー、賢く誠実で真面目なハツフルパフの徒よ^{ともから}」

セドリツクは、何が起きたのか分からないと言わんばかりに目を瞬かせていた。

頭痛は、徐々に激しさを増していった。早く引つ込めと、身体が叫んでいる。

構わずぼくは言葉を紡いだ。

「君が生きたいと望むなら。未来を歩いていこうと欲するなら。君にとってこの世界は、酷く生きにくいものだろう。優しい者こそが損をし、自分勝手な者が利を得る、そんな世界に、それでも君が、価値を見出すというのなら……いや」

小さく首を振った。若者の行く末に、先達は口を出すべきではないだろう。

「死ぬなよ……セドリツク」

羊皮紙を押し付けると、ぼくは身を翻した。走り、生徒の中へと身を投じる。

「アキ……? アキっ! 君は一体何者なんだ!？」

セドリツクの声が、遠くで聞こえた。

何者か? なんて、そんなこと。

「決まってるだろ……ぼくは、ぼくだよ」

秋も、アキも。

第35話 砕け散る、幻想

ふくろう試験は、二週間にも渡って行われた。午前中は筆記試験、午後は実技試験（天文学の実技試験は、当然ながら夜中しか出来ないが）。

普段四寮の長テーブルが並ぶ大広間は、ずらりと一人掛けの机が並び、五年生の全員が一堂に会した。

「くれぐれもカンニングのないように。筆記試験のペーパーには、厳しいカンニング防止呪文が掛けられています。ま・さ・か、ではありませんが、その呪文を破ろうなどと考えるような不届き者がいるようでしたら、その時間をどうか貴重な自分のお勉強に当てなさいと申し上げます」

マクゴナガル先生のそんな言葉で、試験は始まった。

泣いても笑っても、これで全てが決まる。ピリピリした校内の雰囲気から、やっと解放される。

この二週間は、テスト以外のことはほとんど何もしなかった。誰もが目の前のふくろう試験に没頭していた——悪戯仕掛人までもだ、という、色々語弊があるだろうか。

ともあれ、この二週間は矢のように飛び去っていった。教科書とノートとの睨めっこ、そして幾ばくかの呪文の練習、それしかしていない。

「はい、羽根ペンを置いて！ 答案羊皮紙を集める間、席を立たないよう！ 『アクシオ！』」

フリットウィック先生が杖を振った瞬間、羊皮紙が一斉にフリットウィック先生目掛けて飛び立った。それは先生の腕の間に見事に飛び込んだが、しかし先生を反動で吹っ飛ばしてしまった。

前の方にいたぼくやライフは、クスクス笑いながら立ち上がると、先生を引っ張り起こす。

「いやはや、ありがとう、秋くん、ライフくん……さあ、皆さん、出てよろしい！」

その声に、一斉に生徒が席を立った。

ぼくとリイフは、羊皮紙をかき集め、綺麗に合わせてフリットウィック先生に渡す。先生は何度もぼくらにお礼を言うのと、にっこりと笑ってぼくらに手を出すように言う。その言葉通りに手を出すと、フリットウィック先生は小さなカップケーキと飴玉を数個ぼくらに握らせ、無邪気にウインクしてみせた。

「どうだった？ 秋」

ぼくとリイフが試験問題用紙や羽根ペン、インク壺をカバンに仕舞い終わる時には、辺りには誰もいなかった。ぼくはリイフと共に外に出る。

「案外簡単だったね。スミス女史を引き止めることに、一役分でもあればいいんだけど」

「スミス女史、来年もいればいいのになあ。本当、『闇の魔術に対する防衛術』は運次第だ」

「全くだ」

外は珍しくも、凄くいい天気だった。夏めいた爽やかな風が、中庭に吹き抜けている。

湖には、何人かの女の子が、足を湖に浸してはしゃいでいた。青春だ、とぼんやり思う。

「しかし、試験も後は『変身術』の実技を残すのみだ——終わったら思いつきり遊ぶぞ。僕は。チエスしよう、秋」

「また？ リイフ、弱いじゃん」

「違う。秋が強いんだ」

「いや、リイフは弱い方だと思うよ……」

そんなことない、と意地を張るリイフに、ぼくは肩を竦めた。

「まあ、後は実技だけだし、気楽なものだ」

ぐっ……と、大きく伸びをする。腰の辺りがボキボキと鳴った。首から腰まで、長い筆記試験に悲鳴を上げているのだ。

「秋はそりゃ気楽だよ。杖を使うタイプの実技試験なら、秋の得意分野そのものなもの。変身術なあ……考えてたら頭がゴチャゴチャしてくるんだ」

リイフは羨ましげに呟いた。

「ああいうのはゴチャゴチャ考え始めちや上手くいかないものさ。理屈や理論を頭に入れたなら、後は野となれ山となれ、の気持ちで杖を振る」

「そういうことが出来るのは君くらいなもんさ。あーあ、クイディツチしたいなあ！」

リイフはそう言うと、大きく息をついて天を仰いだ。

確かに、こんなにもいい天気なのだ、こんな日に箒で風を切つて空を飛ばば、何より気持ちいいだろう。ぼくも空を見上げて目を細めた。

その時、風に乗って遠くのざわめきが聞こえてくるのに、ぼくは顔を戻した。湖の近くに人ばかりが見える。一体どうしたのだろう。

リイフと顔を見合わせて、ぼくらはその人だかりに近付いた。

近付いて——思わずぼくは顔色を変えた。ジェームズとシリウス、それにセブルスだ。

ジェームズとシリウスはせせら笑つて、セブルスは殺してやると言わんばかりの瞳で、這いつくばつて二人を睨みつけている。ぼくが人垣を掻き分け彼らの元に行くよりも、リリーが飛び込んでいく方が早かった。

「やめなさい！」

ゴミ屑を見るような目で、リリーはジェームズを見据える。ジェームズは目を瞠ると、口調を芝居がかったものへと変えた。

「元氣かい、エバンズ？」

「彼に構わないで。彼があなたに何をしたというの？」

「そうだな……むしろ、こいつが存在するつて事実そのものがね。分かるかな……」

観衆がどつと笑つた。ここにいる人たちは、誰もがジェームズの味方の方ようだった。

しかしリリーはにこりもしなかった。

「冗談のつもりでしょうけど、ポッター。あなたはただの傲慢で弱い者いじめの、嫌な奴だわ。彼に構わないで」

「僕とデートしてくれたら、やめるよ。どうだい？ そうすれば、親愛

なるスニベリーには二度と杖を上げない、約束しようじゃないか」

ジェームズのその言葉に、観衆から野次が飛んだ。

ぼくは人の間を掻き分け前に出ようとしますが、突き飛ばされ思わず尻餅をついた。ジェームズたちの姿が、視界から消え、生徒の真っ黒なローブしか見えなくなる。くっそ、こういうときに自分の身長が恨めしい……。

「あなたか巨大イカのどちらかを選ぶことになっても、あなたとはデートしないわ」

リリーの声は辛辣だった。シリウスが「残念だったな、プロングズ」と朗らかに言う声が聞こえる。瞬間、閃光が迸り、前の方にいる観衆は悲鳴を上げた。

「彼に構わないでって言うてるでしょう！」

リリーの怒りに燃える声。

ぼくは観衆をかき分けるのを諦めて——もっと早く決断すべきだった——困む観衆をぐるりと大回りした。するとリーマスの姿を見つけた。木の幹に寄りかかり、本に視線を落としている。しかし、本を読んでいるわけではないことは明らかだった。

「リーマス……」

ぼくの声に、リーマスはハツとした表情で振り返った。膝から本が、バサリと音を立てて落ちる。

「……っ、秋……」

リーマスの表情が、情けなさに歪んだ。ぼくは身を翻すと、観衆の隙間に飛び込み、一番前へと踊り出る。しかし、瞬間聞こえた声に、ぼくは足を竦ませた。

「あんな汚らしい『穢れた血』の助けなんか、必要ない！」

それは、空中に踵吊りされ、パンツを剥き出しにされた、セブルスの悲痛な叫び声だった。

リリーは大きく、その緑色の目を見開いた。

「……結構よ」

静かな声だった。

「これからは邪魔しないわ。それに、スニベルス、パンツは洗濯したほ

うがいわね」

その声に、深く声から染み渡る、リリーの絶望に、背筋が震えた。呆然と、思わず立ち竦む。

絶対に、なくならないと思っていた。

ぼくらの友情は、永遠に続くものだど、無邪気に描いていた。

そんな幻想が、今、ぼくの目の前で、粉々に砕け散る。

「エバンズに謝れ！」

「あなたからスネイプに謝れなんて言っただけで欲しくないわ！ あなたもスネイプと同罪よ！」

リリーは叫ぶと、ぐつと歯を噛み締めた。泣き出したいのを堪えるような、ともすればやけっぱちとも取れるような眼差しだった。

「かつこよく見せようと思っただけで、箒から降りたばかりみたい髪をくしゃくしゃにしたり、つまらないスニッチなんかで見せびらかしたり、呪いをうまくかけられるからって、気に入らないと廊下で誰彼なく呪いをかけたり——そんな思い上がりで膨らんだ頭を乗せて、よく箒が離陸できるわね。あなたを見てると吐き気がするわ」

そう言っただけで、リリーは背を向けると、その場を走り去っていった。

ジェームズは髪をぐしゃぐしゃとすると、「あいつ、どういふつもりだ？」とさりげなさを装いシリウスに尋ねる。

「つらつら行間を読むに、友よ、彼女は君がちよつと自惚れていると思っておるな」

シリウスが肩を竦めた。ジェームズは唇を尖らせると、「よーし」と、杖を再びセブルスに向ける。また閃光が走ると、セブルスはまたしても踵吊りになった。

「誰か、僕がスニベリーのパンツを脱がせるのを見たい奴はいるか？」

ハッ、とそこで我に返った。ぼくは観衆から飛び出すと、怒りに任せ杖を抜く。

ジェームズはぼくに気付くと「やあ、レイブンじゃないか」と、場違いなほど明るい声でぼくに笑い掛けた。ぼくは表情を崩さぬまま、一直線に杖を横薙ぐ。

ジェームズとシリウス、ピーターを湖に放り投げ、返す腕でセブル

スに掛けられた呪いを解除した。そして、めいめい驚いた表情を浮かべる観衆を、ギツと睨みつける。

ぼくの怒りに満ちた表情に恐れをなしたか、観衆はすぐさま散りじりになった。

「セブルス！」

「来るな！」

駆け寄ろうとした足が、その場で止まった。

屈辱に顔を歪ませ、その目に涙を浮かばせて、セブルスはぼくを強く睨みつけた。

「……憐れむつもりはない」

ぼくは淡々と言葉を紡いだ。セブルスから僅かに視線を逸らしつつも、歩み寄ると、セブルスの手をぐいと掴み引つ張り起こす。

「……君は、僕を軽蔑しないのか？」

「軽蔑？」

「……っ、リリーは、僕を軽蔑した！ 聞いただろう、僕のあの言葉を！ 言っではいけない言葉を言ってしまったんだ！」

落ち着きなく、セブルスは髪を掻き毟った。そしてぼくを血走った目で見据えると、声を荒げた。

「なのはどうして君は僕を軽蔑しない！ どうして僕から離れていかない！ どうして、どうして！」

「……君がまだ、リリーに、言っではいけないことを言ってしまった、という自覚があるから、かな」

頭を軽く振った。結ばれた髪の前がぱたぱたとはためくのを感じつつも、ぼくは呪文を唱える。瞬時に、セブルスの土埃まみれのローブは綺麗な状態に戻った。

「リリー……リリーに嫌われてしまったら、僕は生きていけない」

「そんなこと言うものじゃない」

想像よりもキツイ声が出た。ぼくは眉を寄せ、鋭い目つきでセブルスを見た。

『生きていけない』なんて。

たかがそんなことで。

「君が今するべきことは、一つしかない」

ぼくの言葉に、セブルスは目を瞠った。

「心から謝ることだ。……それしか、出来ないよ」

たとえもう、失われたものは戻らないとしたって。



いよいよ、三大魔法学校対抗試合の一番最後、第三の課題が行われる。ここでどんな結果を出したとしても、これでやっとならぬ、今年のごたの全てが終わるのだ。

僕、ハリー・ポッターは、肩の荷をやつと下ろせるといふ思いでいっばいだった。

昼食は、いつもより多くの品がテーブルを埋め尽くしていたが、到底食べる気力は湧かなかつた。でも、ウィーズリーおばさんは「食べなきゃ精が出ないわよ！」なんて言つて僕のお皿に料理を次々に取り分けていく。ビルが「母さん、ハリーはもう満腹のはずだよ！」とストップを掛けてくれなければ、僕は競技が始まっても、お腹が重くて動けなくなつただろう。

第三の課題が始まる前に、アキに会いたかつたが、僕ら代表選手以外の生徒は試験期間中だ。アキは、ハーマイオニーよりも多い科目、ホグワーツで開講される全科目を取っている。もしかすると、まだ試験があつているのかもしれない。

「アキの兄貴」

その時、アリス・フィスナーが僕の肩を軽く叩いた。

僕は首を回すと、「やあ」と微笑み、そして彼の隣にちらりと目を向ける。僕がロンやハーマイオニーといふも行動を共にしているのと同じように、アキはアリスとよく一緒にいる。しかし、今日は、アリスの隣に、我が愛しの弟の姿は認められなかつた。

「あー、俺が何言つていいのかはよく分からんが、ひとまず頑張れ。うん」

そう言つて、アリスは髪をぐしやりと搔いた。きつと、こういう言

葉を誰かに掛けるのに慣れていないのだろう、そんな感じがする。

左耳にぶら下がっている、雪の結晶の形をしたピアスが、光に当たってキラキラと輝いていた。

「ありがとう」

本心から、微笑む。アリスはふと眉を寄せると、ぼくの耳に顔を寄せた。そつと耳打ちする。

「……試合前の集中を乱すようで悪いが、お前に伝えとかなきゃと思つてな。アキの姿が見当たらない。見てないか？」

え、と僕は目を瞠つた。見ていない、と静かに首を振ると、アリスは苦い表情で舌打ちする。

「あいつが姿をくらますのは、大抵がロクでもない時だ……二コマ前のルーン文字の時にはいたんだが、それからいなくなつた。……つて、ハリー!？」

アリスの言葉が終わらないうちに、僕は駆け出していた。アリスの驚きに満ちた大声を背後に走って大広間を抜けると、勘に従つて階段を一段飛ばしで駆け上がる。

何となしに、アリスにちゃんとファーストネームで呼ばれたのは初めてだなあ、と考えた。

嫌な胸騒ぎがする。

どうか、アキよ、早く僕の前に姿を現して。僕を置いて、どこかに行ってしまわないで。

幸運なことに——アキには、すぐ会うことが出来た。三階の廊下で、物思いに沈むように俯いて、窓の枠に腰掛けている。

声を掛けるべきか、一瞬躊躇った。

意を決して「……アキ」と呼びかける。

僕の声に、アキはぱつと顔を上げた。表情には驚愕の色が浮かんでいる。

「どうして……ハリー」

「どうしてもこうしてもないよ。アキがいなくなったのだったら、僕はいつだってどこだって君の元に駆けつける。大切な弟なんだから、当然だろ」

アキは、僕のそんな言葉に、僅かに目元を歪めた。

「……弟なんて。ぼくは」

「アキ……いや」

僕は軽く頭を振ると、アキを、愛しい少年を、まっすぐに見つめた。
「幣原秋、と呼んだ方がいい？」

僕の言葉に、アキは——否、幣原秋は、寒気を感じたように、その身を震わせた。

「……君を見縊っていたようだ、ハリー」

「あまり僕を舐めないでよね。僕は、世界で一番可愛い僕の弟のアキのことなら、他の追随を許さない自覚はある。アキと君の見分けくらい、出来なくてアキの兄を名乗れないよ」

「……さすが、ジエームズとハリリーの息子だけはある……変なところばかり似たものだよ」

「どうして、君が出てきているんだ？」

僕の問いかけに、彼は口を噤んだ。そして、僕の問いには答えず、逆に僕に問いかける。

「ハリー、君は……自分が誰かに利用されていると知ってなお、その誰かのことを、これまでと変わりなく愛することが出来る？」

「……何、それ」

思わず、僕は眉を寄せた。脊髄反射で、僕は言葉を返す。

アキと全く同じ顔で、アキとは全く違う表情を浮かべる彼を——何もかもを知ったような顔で、諦めの表情を浮かべる彼に、意趣返しをしてやりたかった。

「誰か、なんて回りくどいこと言うなよ。君のことだろ、幣原秋。そして、アキのことだろ」

幣原は、しかし僕がそう答えることを予測していたみたいに、落ち着き払っていた。

それが、余計に僕を苛立たせる。

「アキが僕を利用していようが、僕のアキに対する愛は揺らがない。僕は、世界で一番アキを信じている。もう一回、地面に引き倒して言うてあげようか？　僕はアキ・ポッターのことが大好きだ。血が繋

がっていないなかったところで、実の兄弟じゃなかったところで、アキが僕を騙っていたとしたって、アキからどんな仕打ちを受けたって、僕はアキのことが大好きだ。一緒にダーズリー家で辛い日々を乗り越えたアキが大好きだ。機知とユーモアに富んだアキが大好きだ。何度だって言つてやる。……そして、君のことも」

幣原に、一歩ずつ近付いた。右手を差し出す。

「アキを僕に与えてくれた。アキを、僕の隣で一緒に育ててくれた。大切なアキを、その源も、僕は愛してる。君のことが好きだよ、幣原。……どうか、このまま、君のことを好きでいさせて」

幣原は、僕の右手には一瞥もくれず、ただじつと僕の目を見ていた。僕は言葉を続ける。

「あんまり、アキを苦しめないで。アキを壊さないで。アキに酷いこととしないで。君にどんな思惑があろうとも、アキを傷つけることは、僕が絶対に許さない」

僕の言葉に、少しだけ幣原は瞳を揺らせた。その弾みに、酷く無防備な表情が露わになる。

アキでさえ滅多に浮かべないような、不安と恐怖でどうしていいかわからない、そんな表情に、僕の言葉はそこで堰き止められた。

「……ごめんなさい」

俯く幣原に、それ以上は何も言えなかった。

どうして幣原は、アキを作り出したのだろう。そんな疑問が、ぐるぐると回る。

僕をただ守るだけだったら、わざわざもう一つの人格を作り出す必要はない。幣原自身が、ずっと僕の側にいればいい。

そのくらい、彼には容易いことだろう——僕を守ることにくらい、彼には些細なことだろう。

なのに、何故か、幣原はアキを作り出した。無邪気で純真で、優しい少年を。

僕が知らない理由が、そこにある気がしてならない。

僕だけじゃない、誰も知らない理由が、きつと眠っているのだ。

ふと、放送が聞こえた。

『紳士、淑女のみなさん。あと五分経つと、皆さんにクイディッチ競技場に行くように、わしからお願ひすることになる。三大魔法学校対抗試合、最後の課題が行われる。代表選手は、バグマン氏に従って、今すぐ競技場に行くのじゃ』

ダンブルドアの声だ。

幣原の表情が、ふと引き締まる。そこに、先ほど垣間見えた、無防備な瞳は見当たらなかった。

「ハリー。お願いだ。ぼくの言うことなんて、君は信じてくれないかもしれないけど……絶対に死なないで。絶対に無茶はしないで。この大会には、いろんな人の思惑が蠢いている。……ダンブルドアやぼくも、君に期待している。君を利用して、と言ってもいいかもしれない。……でも、ハリー。君は君のことだけを考えろ。絶対に死ぬな。何がなんでも生き延びろ。人の思惑なんか、知ったことじゃない……君は、ただ、君のためだけに、そして……アキ・ポッターのために。君の愛する友人たちのために」

生きてくれ。

幣原秋は、強い眼差しでそう言った。

この大会で、一体何が起るのか。今の幣原秋の言葉で、問いただきたい点はいくつもある。

でも、今はそんな時間はなかった。

「アキから貰ったブレスレットはつけているね？ あいつは、ぼくよりも発明家気質だ、君限定に。……きつと、君を守ってくれることだろう」

そう言つて、幣原は、酷く大人びた笑みを浮かべた。

だから、僕はあまり言葉を重ねずに、右手首に嵌るブレスレットに触れると、しつかりと頷く。

「健闘を祈る。ジェームズ・ポッターとリリー・エバンスの愛息子、ハリー・ジェームズ・ポッターよ」



いよいよ、第三の課題が始まった。

クイディッチ競技場で歓声が響く中、ぼくは喧騒から離れた校長室で、競技の様子を眺めていた。目の前には、ぷかぷかと浮かぶモニターが、代表選手の四人を映し出している。

ハリーが迷路を進むのを、ぼくはただ、何もせず、眺めていた。

頭が痛む。人格交代に、こんな厄介な機能をつけた覚えはないけれど——十年以上引きこもっていたが故の後遺症なのかもしれないと思うと、文句も言えない。

それに——それに。

まだ、アキ・ポッターと交代するわけにはいかないのだ。

アキに代わったら、あいつはハリーを助けてしまう——。たとえばダンブルドアが言葉を尽くし、ハリーをあちらに渡す意味と必要を説いたところで、決してあいつは納得しないだろう。対抗試合で、ハリーに手を貸すな、と言われたときだって、その意味をきちんと理解していながらも、あれだけ葛藤していた奴なのだ。

ハリーが死ぬかもしれない可能性を察した時点で、アキが飛び出すのはもう、仕方がなかった。

「……………」

もしここで、ダンブルドアの言葉を全て無視して、ぼくがハリーを助けたならば。物語は、どう変わるだろうか。

あの狸爺の描く物語をひっくり返せたら、どんなに胸がすくだろう。

——そんな真似、ぼくには出来っこないけれど。

両手の指先を合わせ、嘆息した。モニターを見る限りにおいて、明らかにハリーのみが、障害物に相対する回数が少ない。誰かしらの——クラウチ・ジュニアの意図があるのは、明白だった。

そうならば、クラウチ・ジュニアが仕掛けているとするならば——それは優勝杯。

ホグワーツ内では、移動の魔法は制限されている。それを鑑みて——優勝杯は、移動キーに変えられているだろう。

今すぐここを飛び出して、箒でもなんでも構わない、走ってだって

いい、迷路に飛び込んで、あの優勝杯を掴んだならば。

その先に、ヴォルデモートとピーターが、きつといるのだろう。両親の仇と、親友を売った昔の親友と、いつペんに会うことが出来るのだ。なんたる僥倖、なんたる幸運。

しかし、そんな絶好の機会を、ダンブルドアは抑えろと言う。

ダンブルドアは、何を考えているのか。ただ、ヴォルデモートを倒したいのならば、そのままぼくをヴォルデモートの元に向かわせれば済む話だ。

今ならば、文字通り、赤子の腕を捻るがごとく、あまりにも容易く、あつけなく、ヴォルデモートを倒すことが出来る。それは、明白すぎるまでに明白だった。

なのに、それをしないのは、何故――

モニターの奥がざわついているのに気付き、ぼくは目を向けた。フラーが運び出されている。恐慌状態で、ガタガタと震えている。

この恐怖に怯えた表情に、ぼくはよく見覚えがあった――磔の呪文に掛けられた者は、よくこんな表情を浮かべている。そして直後に、クラムも。クラウチ氏と最後に出会ったのはクラムだ――もしかして、あの時。

思考の海に溺れかけたが、頭を振って目を覚ました。

頭痛は、どんどん酷くなってきた。頭を上げているのも億劫だ。こんなに長い時間、表に出ていたのは初めてかもしれない。

……頼む、もう少しだけ。もう少しだけ、見届けさせてくれ。そうしたら、すぐに代わるから。

残る対抗試合の選手は、ハリーとセドリックの二人だけ。もう、ホグワーツの優勝は決まった。

――いや、最初から出来レースだったのだ。ハリーを優勝させるため、仕組まれていた。

すごいよ、クラウチ・ジュニア。よくまあ、こんなことを仕出かした。

あなたの計画は、誰にも止められない。止める立場であるダンブルドアが、何よりも、この計画に価値を見出してしまったから。

さすがに、そこまでは計算のうちではなかったのだろうけれど……
それでも、ぼくはあなたの前に帽子を脱ごう。

エリス先輩と、ロングボトム先輩方。彼らの仇ではあるけれども――まさか、ここまでの強敵だっただなんて。

あなたが、ここまでの壁として、立ちはだかるなんて。

そして、よくぞまあ、ぼくの望みを言い当てたもんだ。脱帽どころか、地に伏すことも、あるいは、とさえ思う。

そこまで読まれたならば。そこまで看過されたならば。

彼の言う言葉に従うのも、悪くはない。

ソファに身体を倒した。頭だけを上げて、モニターを見つめる。少々行儀は悪いが、そんなことも言っていられないくらい、頭が鈍く痛んでいた。

浅く呼吸をする。心臓が早鐘を打っているのは、身体の不調に反応してか、それとも、この試合の行く末を案じてか。

ハリーが優勝杯に駆け寄った。しかし、セドリックも同じだ。セドリックの方がハリーよりも速い。――そんな、嘘だろ、やめてくれ。

ぼくの願いは、聞き届けられたようだ。クラウチ・ジユニアとしても、セドリックをハリーより先に優勝杯に触れさせるわけにはいかなかったのだろう。

セドリックを襲った黒い影に、セドリックは慌てて身を翻したが、足を纏れさせ転んでしまった。セドリックの上に、黒い影が――巨大なクモだ――のしかかろうとする。セドリックがクモを退け、体勢を立て直すよりも、ハリーが優勝杯に辿り着く方が速いだろう。

しかし、誰もが予想していなかったことを、ハリーは行つた。セドリックを無視して優勝杯に手を伸ばす――のではなく、なんと、セドリックを襲ったクモを攻撃したのだ。ぼくは息を呑んだ。

ハリーがこんな行動を取るなんて、予想出来る人はきつと、世界広しと言えども、そうだな……アキ・ポッターくらいのものだろうか。

何度も何度も、ハリーはクモに対して失神呪文を放つ。しかし、クモが大きすぎ、そしてハリーの魔力はそこまで育っていないせい、クモを失神させるまでは至らない。瞬きをした後には、ハリーはクモ

の前足に挟まれ、宙吊りになっていた。

それを見ているだけのセドリックでは、決してない。ハリーと協力してクモを倒したセドリックは、ハリーの元に駆け寄った。

ハリーはどうやら、足を怪我してしまったようだ。歩けないハリーを見てとったか、セドリックはハリーに肩を貸す。そして、二人一緒に優勝杯に向かって歩き始めた。ぼくは思わず声を零す。

「やめろ、馬鹿……っ」

掠れた声は、しかしモニターの奥のハリーとセドリックには決して届かない。

二人が、誇らしげな表情で、優勝杯に手を伸ばす。

その様子が、もう二十年以上にもなる、ずっと昔の自分自身に重なった。

魔法魔術大会で、優勝した時のあのときの自分に。

そのすぐ後に訪れる未来に、絶望することすら気付かず、ただ目の前の輝かしい栄光に無邪気に目を輝かせる、愚かで純真な自分自身に。

ぼくは、静かに目を閉じた。

アキ・ポッターの目を通して見る未来は、自分の目を通して見る世界よりも残酷なのだろうと、そんなことを考えながら。

第36話 誰も知らない物語

「……っ、リリー、見つけた」

そう言つて、ぼくはにつこりと笑つた。

真夜中、と言つてもいい頃合いの時間。ホグワーツ城の中庭へと続く渡り廊下で、リリーは壁に背中を預け、ぼんやりと夜空を見上げていたが、ぼくの声に驚いて振り返つた。その顔に涙の後があるのにはぼくは気付いてしまい、少し気まずくなる。気付かなかつた振りをして、ぼくは微笑みを浮かべた。

「メリーつて子、君と同室なんだつて？ 帰つてこないって、凄く心配してたよ。だって、他寮のぼくにまで、取り乱した様子でさあ、探すの手伝つて、つて言いに来るくらいだったもの……」

そう言いながら、リリーの隣に腰掛けた。リリーがしていたように、空を見上げる。

月は、もう沈んでしまったようだ。三日月だったからな、とふと思う。その代わり、月が出ている間は、月明かりが明るすぎて見えないような暗い星々も、今日は穏やかに瞬いていた。

「……秋、あのね」

囁くような声だった。リリーは、その目に星を映したまま、言葉を口にした。

「セブがね……謝りに来たの。私に」

「うん」

「……でもね。もう、無理なんだ」

「……うん」

リリーが、ゆっくりと両手で顔を覆つた。指の隙間から、声が漏れる。

「なんで……私は、両親がマグルだからって、あんなことわれなきやいけないの……、マグル生まれだからって何？ 『穢れた血』って……私の血のどこが、穢れてるって言うの？ 私のどこが、皆に劣ってるって言うの？ 今まで私、いっぱい努力してきたよ。魔法なんて知

らなかった。自分が魔女だなんて、思いもしてなかった。だから、皆との差を埋めたくって、私、頑張ったんだよ。勉強だつてそう。なのに……」

「……うん」

「セブが……セブが、一番最初にね、私に、『君は魔女だ』つて言ってくれたの……セブルスは昔、『マグル生まれって何が違うの?』つて尋ねた私に、こう言ったのよ……『何も変わらない』つて……それなのに、どうして……」

「……」

息が詰まった。意識して、ゆっくりと吐き出す。

リリーは、ぐい、と手のひらで目元を拭った。

「セブは、変わってしまった……私も、変わったんだと思うの。でもね、秋は、変わらないね」

そう言つて、リリーはぼくを見て、にっこりと笑った。

その笑顔は、普段のリリーが浮かべるような、晴れやかで暖かい笑顔とは全然違う、切なさに胸が引き絞られるような、笑顔だった。

「秋は変わらない。優しくて、一緒にいてね、すごく、落ち着くの……いつだって。寮が違つても、あなたは私の近くに来てくれる……それが、すつごくね、嬉しいの」

「……もう、セブルスとは、仲直り出来ないの?」

ぼくの言葉に、リリーは笑顔で首を振った。

「ごめんね、秋。……もう、出来ないよ……私にはもう、セブが分からない……一番長い付き合いなのに、セブが何を見てるのか、何を考えているのか、さっぱり分からないの……」

そう呟きながら、リリーは俯いた。

震える、細い肩。

ぼくは、手を伸ばせなかった。

「ずつと……ずつとずつと、三人で一緒にいられるつて思つてた……わたしと、セブと、秋で、ずつと……なのに、どうして……っ、どうしてなの……っ」

地面に、ポタポタと涙の雫が落ちる。それを見るたびに、ぼくの心

も引き千切られるように痛んだ。

この想いが、一体何なのか。

気付いていなかった。気付きたくなかった。気付かない、振りをしていた。

気付かない振りをして、いたかった。

ずっと、ずっと、永遠に。

『鈍感』なんて、言われ続けながらも。

気付いては、いけなかったんだ。

左手を伸ばした。震える指先で、リリーの頭にそっと触れる。綺麗な赤い髪、その中に指を差し入れ、その小さな頭をぐいと引き寄せた。自分の胸に、リリーの頭を押し付ける。

暖かな、その感触に。

初めてリリーを自分から抱き寄せた、そのことに。

知らず、歯を食い縛っていた。

リリーは、ぼくの行動に一瞬身を強張らせたが、やがてぎゅつとぼくのシャツを掴んだ。大きく肩を震わせ、しゃくりあげる。

「あのね……秋。聞いて……」

リリーは顔を上げると、潤んだ瞳でぼくを見た。濃い緑の瞳は、今は目に薄膜を張る涙のせいだろう、僅かに薄く見える。

「ごめんね、秋……」

止めてくれ、リリー。

その言葉を言っではいけない。

リリーの瞳が、細くなった。耐えきれない、と言った風に、彼女の頬に涙がすうっと伝う。

ぼくはそれを、息を止めて見つめていた。

「好きよ、秋」

ぼくは一体、どんな顔をしていただろうか。

彼女の手が、ぼくの頬に触れる。

とてもひんやりとしていたことを、覚えている。

「ぜったい、言うはずじゃなかったのに……」

そんな言葉が、耳をくすぐって。

両の腕が、背中に回されて。

やっぱり、君も。

君も、そう思っていたのか。

ぼくらは。

彼女の顔が、だんだんと近付いてくる。

リリーの瞳を脳裏に浮かべたまま、ぼくは静かに目を閉じた。



目が覚めて、ぼくは青褪めた。

ここはどこだ、今はいつだ。ここが校長室であること、そしてすぐ近くに浮かんでいるモニターが——第二の課題で観客席にあったものと同じだ——、優勝杯を掴んで倒れているハリーを、皆が囲んでいる姿を映し出していた。優勝杯を、ハリーが掴んでいる。

第三の課題が終わり、優勝者が決まったのだ。しかし、モニター越しに見るその雰囲気は、どこをどう見ても、決してハリーが優勝したことを喜ぶものではなかった。

またもぼくは、間に合わなかったのだ。

ひんやりとした絶望感が、心の奥底に染み渡る。

膝を突きそうになったが、使命感に突き動かされた。

——ハリーの元に、行かなくては。

慌ててソファから立ち上がる。そのとき、一枚の紙が、テーブルの上に置かれていることに気がついた。

羽根ペンではなくボールペンで書かれたその文字は、癖があつて少々読みにくく、几帳面な彼を知る者は、よく彼の字が存外に汚いことに驚いていたつけ。

見覚えがある、どころじやない。

夢の中で、いつも書いている文字だ——書き癖がある文字、幣原秋の字だ。

紙を取り上げ読むと、そこには一言だけ書き殴つてあつた。ただでさえ癖字なのに、乱雑に書いたら読めなくなるだろう——そう思うが、ぼくが読めれば事足りるのだから、別に構わないと思つたのか。『ムーデイの部屋に向かえ』

紙には、それだけが書かれていた。

従うか、従わないか。考えるのは一瞬だつた。

紙をぐしゃぐしゃに丸めて握り締めると、校長室を飛び出し、廊下を走る。階段を駆け下り、目指すは、闇の魔術の防衛術教師の部屋。

ムーデイが——否。彼はムーデイではない、クラウチ・ジュニアだ——ハリーに杖を向けている。

その様子を目の当たりにして、カツと頭に血が上つた。杖を掴み、一直線に横薙ぐ。『武装解除』によつて吹き飛ぶ彼の杖を無視し、更に杖を彼に突きつけた。赤い閃光が迸り、彼を部屋の壁に叩きつける。ミシリ、と、部屋が軋んだ。

「アキー！」

「大丈夫、ハリー!？」

彼から杖も目も離さずハリーに訊くと、ハリーは少し息をついてから「大丈夫」と答えた。

彼は、少しばかり脳震盪を起こしているようだつた。目の焦点が、両目ともに合っていない。そのことを確認した折、ちようどこの部屋に、ダンブルドア、マクゴナガル先生、そしてスネイプ教授が雪崩れ込んできた。

「退くのじゃ、アキ」

鋭く言うダンブルドアに、ぼくは素早く後ずさつて道を開けた。ダンブルドアはその顔に冷たい怒りを滲ませながら、目を回すムーデイの体の下に足を入れると、容赦なく蹴り上げ、顔がよく見えるようにする。

ハリーは医務室に行くべきだと主張するマクゴナガル先生に、きつぱりとダンブルドアは首を振った。ハリーは真実を知らなければならぬ、と言うダンブルドアに、ぼくはハリーを振り返る。

ハリーの目は、何が起こつたのか、事の真相を知りたいと強く叫ん

でいた。

「セブルス、君の持っている『ペリタセラム真実薬』の中で一番強力なのを持ってきてくれぬか。それから厨房に行き、ウインキーという屋敷妖精を連れて来るよう。ミネルバ、ハグリッドの小屋に行ってくださいらんか。大きい黒い犬がかぼちゃ畑にいるはずじゃ。犬をわしの部屋に連れていき、まもなくわしも行くからとその犬に伝え、それからここに戻ってくるのじゃ」

マクゴナガル先生もスネイプ教授も、すぐさま身を翻した。

ダンブルドアはムーデイのトランクへと歩いて行き、鍵を錠前に差し込んでトランクを開けた。二つ目の鍵を同じ錠前に差し込むと、今度は呪文の本が姿を現した。やがて——七つ目の鍵で、一つの真相が露わになった。

トランクの下が、奥まで続いている。そして、下の床に横たわりぐったりと目を瞑っているのは、彼こそが本物のマッドアイ・ムーデイだった。ハリーは驚いたように、本物のムーデイと、床に転がるムーデイを見比べる。

ムーデイの『ポリジューズ薬』の効果が切れるのを、義足と義眼が外れ、傷跡が消え、髪の色が変わるのを、ハリーは呆気にとられた表情で見つめていた。

やがて、スネイプ教授がウインキーを連れて来る。その後ろにはマクゴナガル先生の姿も。スネイプ教授が目を見開いて「クラウチ……バーティ・クラウチ！」と喘いだ。

ダンブルドアは『真実薬』を彼の口の中に流し込むと、蘇生術で、クラウチ・ジユニアを呼び起こした。

長い長い話が始まった。

どうやって、クラウチ・ジユニアがアズカバンから抜け出したのか。バーサ・ジョーキンスとのこと、クイディッチ・ワールドカップのこと、貴賓席で、目の前にいたハリーから杖を盗んだこと。空に『闇の印』を打ち上げたこと。クラウチ家の戸口に、ヴォルデモートが現れ、呆気なくクラウチ氏が『服従の呪文』にかかり、彼は自由の身になったこと——そして、ホグワーツに来てからの、今年一年のこと——全

てを包み隠さずに、クラウチ・ジュニアは話した。

「今夜、俺は夕食前に、優勝杯を迷路に運び込む仕事を買って出た。俺はそれを移動キーに変えた。ご主人様の計画は上手くいった。あのお方は権力の座に戻ったのだ。そして俺は、他の魔法使いが夢見ることも叶わぬ榮譽を、あのお方から与えられるだろう……ククク、アハハハハハハハハハハハハハ!!!」

しばらく、クラウチ・ジュニアは狂ったように笑い続けていた。薄暗い教室に、狂気の笑い声が響き渡る。誰も、何も言わずに、その声を聞いていた。

「……そして、幣原秋よ。ご主人様に執着される人物よ。お前の首をご主人様に献上出来なかつたのが、俺の唯一の心残りだ」

クラウチ・ジュニアは敵意をその双眸に宿し、ぼくを睨みつけた。臆さず、ぼくの側も一步彼に踏み出すと、睨み合う。

その均衡を崩したのは、彼だった。瞳に狂気を漲らせ、ぼくを指差し、嘲笑う。

あの時のように。あの、裁判のように。

「だが、あのお方は蘇った。過去の自分と等しい力を手に入れなかつた。ああ、嗚呼！ご主人様がお前を壊す様を見ることが出来ないなんて、なんたる不運なのだろう!! 死に損ないの生き損ないよ、どれだけ重い十字架を背負い生き続ける？アハハハハハ、アハハハハハハハハハハハツ」

ぼくはぎゅつと眉を寄せた。杖を、ぎゅつと握りしめる。

幣原秋と、同じ杖を。

幣原秋が、多くの命を奪った、その武器を。幣原の罪を一番近くで見してきた、相棒を。

クラウチ・ジュニアは哄笑していたが、ふとその表情を理性あるものに変えた。しっかりとした眼差しで、ぼくを見遣る。

「しかし——アキ・ポッターよ。俺はお前に同情する。お前は可哀想な奴だ。お前の願いは何だ？ 生きがいは？ 幣原から与えられるだけの使命のどこに、お前の意志は存在する？」

淡々と、クラウチ・ジュニアは言葉を紡ぐ。

悪意も敵意も籠っていないその言葉は、しかしだからこそ、何よりも鋭く尖っていた。

「誰もアキ・ポッター^{お前}を見ちやいない。誰からも、お前は認められない。意志を持たぬ傀儡に、生きる価値など存在しない。だから、お前は死ぬべきだ。お前が救われるためには、死ぬしかない。生きていることがつらいだろう？ 『死』は誰よりもお前を深く受け入れてくれることだろう」

可哀想に、と、クラウチ・ジュニアは呟いた。その同情的な視線に――思わず、息が出来なくなる。

これが、クラウチ・ジュニアの『本心』なのか――そうなのか。心から、そう思って、ぼくを見ていたのか。

ダンブルドアが立ち上がった。ありありと嫌悪の色を浮かべ、杖を振る。縄がクラウチ・ジュニアをしっかり縛り上げるのを確認して、ダンブルドアはマクゴナガル先生を振り返った。

「ミネルバ、ハリーを上に入れていく間、ここで見張りを頼んでもよいかの？」

「もちろんですわ」

吐き気を堪えるように眉間に皺を寄せて、マクゴナガル教授は即答する。

「セブルス。マダム・ポンフリーに、ここに降りてくるよう頼んでくれんか？ アラスター・ムーディを医務室に運ばねばならん。そのあとで校庭に行き、コーネリウス・ファッジを探して、この部屋に連れてきてくれ。ファッジは間違いなく、自分でクラウチを尋問したいことじやろう。ファッジに、わしに用があれば、あと半時間もしたら、わしは医務室に行っておると伝えてくれ」

スネイプ教授は頷くと、すぐさま部屋を出ていった。

「ハリー」

ダンブルドアが、ハリーに優しく声を掛ける。ハリーは頷いて立ち上がったが、ぐらりと傾いだ。足を痛めているのか。

ダンブルドアはハリーの腕を掴むと、介助しながら廊下へと出た。「ハリー、まずわしの部屋に来てほしい。シリウスがそこで待ってお

る。来るのじや、アキも」

ぼくは俯いて首肯した。そして、ハリーの前に跪くと、杖を振る。包帯と添え木を出現させると、黙ってハリーの足の手当てを行った。ハリーは小さく「ありがとう」と呟いた。

校長室に着くまで、ぼくもハリーもダンブルドアも、誰も一言も喋らなかつた。

校長室の扉を開けると、目の前にシリウスが立っていた。顔色は蒼白で、この前見たときよりもやつれたようだ。

「ハリー、大丈夫か？ 私の思った通りだ、こんなことになるのではないかと——一体何があつた？ 何があつたんだ？」

ハリーを机の前の椅子に座らせながら、シリウスが勢い込んで尋ねた。

そしてその瞳に驚愕の色を露わにしながら、「どうして君がいながら、こんなことになつたんだ？ 秋」と、責めるような目をぼくに向ける。

ぼくは黙っていた。

ダンブルドアがクラウチ・ジュニアの話をシリウスに語り始めた。シリウスの目が、初めて対面する真実に見開かれる。

話し終わると、次にダンブルドアはハリーを見つめた。ハリーはダンブルドアから目を逸らしたが、ダンブルドアはハリーを逃さなかつた。

「ハリー、迷路の移動キーに触れてから、何が起つたのか、わしは、わしらは知る必要があるのじや」

ダンブルドアの声に、ハリーは語り始めた。今日、墓場で何があつたのか。一度口を開けば、後は堰き止められていたものが溢れ出すかのようにスラスラと言葉が零れ出た。

ハリーをヴォルデモートの父の墓標に縛りつけたこと。セドリツクに『死の呪文』を掛けたこと。ワームテールがハリーの腕を刺した件で、シリウスは激しく罵つた。そこに、かつての友人に対する慈悲は存在しない。

ダンブルドアは、ハリーの腕の傷を見せるように言った。ハリーは

素直に腕を捲る。

「僕の血が、他の誰の血よりも、あの人を強くするとあの人自身が言っていた。僕を護っているものが——僕の母が残してくれたものが——あの人にも入るのだと言っていました。その通りでした。ヴォルデモートは僕に触っても傷つかなかった、一年の時とは違った。僕の顔を触ったんです」

その言葉が意味することは、ぼくには分からなかった。しかし、幣原には何かピンとくるものがあつたのだろう、胸の奥でざわめきがある。

ハリーは話を続けた。ヴォルデモートの復活、死喰い人が集合したこと、ヴォルデモートがハリーに杖を返し、決闘しようとしたこと。

金色の光が、ハリーとヴォルデモートの杖同士を繋いだこと。年老いた男が、バーサ・ジョーキンスが、母と父が、ヴォルデモートの杖から出てきたこと——。

「セドリックは？ セドリックの姿は出てこなかったのか？」

ダンブルドアはそう勢い込んでハリーに尋ねた。ハリーは目を瞬かせながら、なんでそんなことを聞くのだろうという表情で「ええ」と頷いた。

ダンブルドアはその後、ぼくを振り返る。澄んだブルーの瞳に見据えられたが、生憎とぼくには心当たりがない。

「なるほど、なるほど……」

そしてダンブルドアは、ハリーとヴォルデモートの杖が「兄弟杖」であること、そしてその杖同士を無理に争わせようとすると、杖が正しく機能しないことをぼくらに告げた。

ハリーは、杖から現れた姿たちがハリーにアドバイスをくれたこと、そして優勝杯を掴むと、再びこちらに戻ってこれたこと——それらを話し終え、疲労の色が見える息を吐いた。

「ハリー、今夜君は、わしの期待を遥かに超える勇気を示した。君は、ヴォルデモートの力がもつとも強かった時代に戦って死んだ者たちに劣らぬ勇気を示した。一人前の魔法使いに匹敵する重荷を背負い、大人に勝るとも劣らぬ君自身を見出したのじゃ——更に君は今、我々

が知るべきことを全て話してくれた。わしと一緒に医務室に行こうぞ。今夜は寮に戻らぬ方がよい。魔法睡眠薬、それに安静じや……シリウス、アキ、ハリーと一緒にいてくれるかの？」

シリウスはすぐさま首肯したが、ぼくは静かに首を振った。

ダンブルドアとシリウス、そしてハリーの、三者三様の視線が、ぼくに突き刺さる。

ぼくは笑顔を浮かべた。

「少し、一人になりたいんだ」

心を、厚いベールで覆い隠す術。『閉心術』。

初めて使ったにも関わらず、そんな気がしないのは、きつと幣原秋が、この呪文をよく使っていたからだ。

校長室から出て、ぼくは廊下を歩いた。誰もいない。人気もない。どこに行くか、心は決まっていた。さぎ波さえも、心は波打たない。何よりも穏やかで、どこまでも心は凪いでいた。

秋も、ぼくと同じ気持ちなのだ。だから、こんなにも心が平穏なのだ。

そのことは、ぼくを安心させた。

「アクシオ、忍びの地図よ」

杖を振ると、静かに待つ。やがて飛んできた羊皮紙を、ぼくは掴んだ。

懐かしの忍びの地図。ここに使われた魔法がどんなものか、ぼくは全てを熟知している。

「われ、ここに誓う。われ、よからぬものをたくらむ者なり」

そう言つて杖で羊皮紙を叩くと、瞬く間に地図が浮かび上がった。一番てっぺんには、渦巻き型の大きな緑色の文字。

『ムーニー、ワームテール、パッドフット、プロングス、レイブン われら『魔法悪戯仕掛人』の御用達商人がお届けする自慢の品 忍びの地図』

この地図は、秋の青春の象徴だ。ぼくらが確かに、ここにいたことの証。

目を凝らして、今会いたい人の名前を探す。

間もなくして、それは見つかった。

だって、それほどぼくは、あの子のことを、名前を見るだけで心が躍るほど、好きになってしまったのだから。

『アクアマリン・ベルフェゴール』

最後に、彼女に会いに行こう。

第37話 二人の少女、重ならない恋模様

ふくろう試験が終わったその後の週末は、ホグズミード休暇だった。五年生は誰もが皆、気が抜けない試験が終わった開放感ではしゃぎ回っていた。

「秋、早くー！」

そんな中、一際はしゃいでいたのはリリーだった。ぼくの手を思いつきり引つ張つて、人混みの中をすいすいと掻き分けていく。ぼくはそんなリリーについていくのが精一杯だ。

「な、何をそんなに、急いでるのさ……っ」

息も絶え絶えにそう呻くと、リリーは楽しげに「だって、今日はマダム・パディフットの店で、先着順のスイーツバイキングがあるんですもの！」と微笑んだ。

その笑顔は、どうしようもなく『今まで通り』で、晴れやかで、暗いものなど何もないようで——だからこそ、酷く歪に見えた。

——こうなるとは、目に見えていたんだ。

分かっていた、ことじゃないか。

やがて着いたマダム・パディフットの店は、大通りから一本脇道に入った、小さな喫茶店だった。ピンクを基調とした、なんとも言えぬ少女趣味の可愛らしさに溢れていて、それがぼくの足を竦ませる。

しかしリリーはぼくの気も知らないで、ぐいぐいとぼくの手を引つ張って行くのだ。

店に入ると、中はピンクのフリルが雪崩を起こしていた——ぼくにはそう見えた。どこを見ても、ピンク、フリル、ピンク、フリル。ゲシュタルト崩壊を起こしそうだ。

甘ったるい香料の匂いと、それにも負けぬ甘いお菓子の匂いが、凄まじい喧嘩を繰り広げている。

リリーはぼくの手を離すことなく、店の店員に「スイーツバイキング、大丈夫ですか？」と尋ねていた。そしてぼくを見ると、「大丈夫だって、やったわね、秋！」と綺麗な笑顔を浮かべてみせる。

ぼくはそんなリリーに、曖昧な笑顔を返した。普段なら、そんな笑

顔を浮かべざるぼくに対して「そんな心が全くこもってない笑顔を適当に浮かべないで欲しいわ！ それなら無表情の方がマシよ！」と不機嫌になるリリーは、今日ばかりはそうじゃないようだ。

……今日ばかりは、というか。……なんと云えばいいのか。

案内されて、席に着く。気付いたが、このお店の窓ガラスは全て曇りガラスだ。

おまけに、周囲のお客さんが皆カップルだということが、ぼくをより落ち着かなくさせた。既に混ざり合った甘い匂いで酔いそうだというのに。

「秋、紅茶で良かったかしら？」

そう言ってリリーは、ぼくの前に紅茶を置いた。気付けば、いつの間に取りつてきたのだろう、テーブルの上には大量のケーキ。

リリーはその内の一つを自分の小皿に載せると、スプーンに掬い、口の中に入れ、物凄く幸せそうな表情をした。そしてぼくを見ると首をこてんと傾げ、「食べないの？」と尋ねる。

正直、甘い香りで既に満腹ではあったが、リリーのそんな言葉を断ることが出来るほど、ぼくは精神が強くない。出来る限り甘くなさそうながトーシヨコラを選び、ぼくは自分の皿に載せた。

甘いものは嫌いじゃないし、普段は普通に食べるけれども、こんな場所で平然と食べることはぼくには出来そうになかった。

しかし、食べている間は何もしなくていい、というのは、少しだけ気が楽になるものだ。

最近、というか、あれからのリリーは、あの日のことを忘れたように——あの日のこととは、ぼくとのあれこれじゃなく、セブルスのことだ——はしゃいでいる。

五年生の誰もが、試験が終わって浮かれているから、その中で上手く溶け込んではいないが——リリーのはしやぎようは他の人とは違うことを、多分この世で、ぼくだけが、知っていた。

「でね、あそこでメリーがね……聞いているの？ 秋」

リリーの言葉に、ぼくはガトーシヨコラの上のホイップクリームを突つくの止めると、顔を上げた。笑顔を浮かべてみせる。

「聞いている、聞いている。で、メリーがどうしたの?」

「あのね、そこでね——」

あれからぼくらは、一言もセブルスについて話していない。

ぼくはリリーの話に適度に相槌を打ちながら、静かに目を伏せた。こんな関係がいいものだとは、思っていない。

でも、一体どうすればいいのか、ぼくには分からなかった。



アクアマリン・ベルフェゴールは、あてもなく校内を彷徨い歩いていた。

談話室にはいたくなかった。闇の帝王が戻ってきたのだということとを、誰よりも、どこか察よりも、スリザリン寮の生徒は知っていた。それに恐れ怯える者、見ない振りをして目を逸らす者、反応は様々だ。ドラコは恐れ怯える者、そして、自分は見ない振りをして目を逸らす者か、と、アクアは分析する。

空はもう夕焼けに沈んでいた。もう夏めいてきて、日もどんどんと伸びてきているが、もう間もなく日没を迎えるだろう。

闇夜に沈むホグワーツで、皆は今日、何を考えながら目を閉じるだろうか。

消えたセドリック・デイゴリー。『ヴォルデモートが戻ってきた』と言ったハリー・ポッター。

足音に、ふと顔を上げた。そして、目を見開く。

「……アキ?」

「……やあ、アクア」

優しい目つきで、大きな黒い瞳を細め、目の前の少年は、アキ・ポッターは、微笑んだ。

「……てつきり、ポッターの元にいるのだと思っていたけれど」

三大魔法学校対抗試合の最終試合は、先ほど終わったばかりだ。

優勝杯を掴んで姿を消したのは、ハリー・ポッターとセドリック・デイゴリーの二人。それなのに、帰ってきたのはハリー・ポッターだ

け。

何かが、あちらであつたのだ。血と泥でボロボロになったハリー・ポッターの姿を一目見て、それは容易に理解出来た。闇の帝王が復活した、そう嬉々として綴られた手紙が両親から届いたのは、すぐだった。目を通してすぐさま、絶望に駆られたものだ。

だからこそ、この少年は、ハリー・ポッターの隣にいるものだと思うていたのに。

「ハリーの話は、もう聞いたよ。ぼくはそろそろ、ぼくの望みを叶えるべきだ——そう思ったんだ」

アキはそう言うものの、アクアには要領を得ない。

アキはおそらく、アクアに意図を理解させないように喋っているのだと、それだけがかるうじて理解出来た。

「……あなたの望みって？」

そう尋ねると、アキはより一層優しげな目つきをした。アクアの問いに直接は答えることなく、アキは言葉を紡ぐ。

「……本当はね。ここまで来る間、ずっと考えていたんだ。君に何を喋ろうか、って。でも、君に会った瞬間、ごちゃごちゃしてた考えが全部吹っ飛んじゃった。そしてね、今、一つの想いで一杯なんだ」

アクアの手を、アキはそっと取った。壊れ物を扱うような手つきで、優しく握る。

「ありがとう。ぼくを受け入れてくれて、ありがとう。ぼくを選んでくれて、ありがとう。君と一緒にいたら、ぼくはどんな悩み事も吹き飛ば気がした。君のためなら、それこそなんだって、やってやるって気分になれた。君の隣は、何より幸せだった」

大好きだよ、アクア。

そう言っつて、満ち足りた表情で、アキは微笑んだ。

「……どうして、そんなこと言うの？」

そんなの、まるで。

まるで、最後の別れのようじゃないか。

「どうして……そんな表情で、笑うのよ」

いつでも、この少年はそうだった。辛い時こそ、儂い笑顔を浮かべ

てみせる。

この少年の泣き顔を、アクアは見たことがなかった。いつでも、アキは笑っていた。時には困ったように、時には心から楽しげに。そして、時には、悲しみを全て押し隠して。

「……きつと、今の君は、今のぼくに祈ってはくれないんだろうね……でも、もしも、一つだけ願いが叶うなら」

幣原秋のために。

祈ってくれ。

少年は、少女からするりと手を離れた。

トントントンと跳ねる仕草で少女から数歩距離を取ると、綺麗な笑顔を浮かべて、少女を振り返る。

「じゃあね、アクア」

「あつ……」

思わず、手を伸ばした。しかし目の前を、ザアツと桃色が散る。

目を瞠った。桃色に隠されて、アキの姿は消えてしまう。

視界を遮った桃色の正体は、たくさんの桜の花びらだった。

身がかがめると、手を伸ばし、拾い上げる。

「アクアー」

名前を呼ばれて振り返ると、そこには彼の兄、ハリー・ポッターの姿があった。未だに血まみれで、泥だらけのローブを羽織っている。

身体中が傷だらけだったが、そんなのに構っていられないと、目が訴えていた。

「アキを見なかったか!?!」

「……さつき見たわ。様子がおかしかった。私に、ありがとうって……幣原のために、祈ってくれて、言い残して……消えてしまったの」

クソツと、ハリー・ポッターは大きく舌打ちをした。アクアの前に散らばる桜の花びらを見て「……っ、あの、格好つけが!」と吐き捨てる。

嫌な予感に背筋が震えた。ハリーは真剣な眼差しをアクアに向ける。

「アキを探してくれないか、アクア」
焦る瞳のまま、ハリー・ポッターは言った。
「あいつは、アキは、死ぬつもりだ」

第38話 愚者は静かに目を開けた

ホグワーツの中で、一番高い場所、時計塔。大きな振り子式の時計は、ホグワーツには珍しくも魔法ではなく、この地球上の理、物理で、永久に動き続けるもの。

時計塔の内側では、ぼくが両手を伸ばしてもまだ足りないような、大きな歯車がいくつも噛み合っていた。一つも足りない部品なんて存在しない。全てが全てきっちり噛み合い役目を果たす、秩序を保った素晴らしい世界。

足を止め、じつくりと鑑賞した。

一秒ごとに、こんなにも大きな歯車が、ガタン、ガタンと音を立てて回る。

そう言えば、まだホグワーツからの入学案内を受け取る前、目覚まし時計を修理したこともあったっけ。差出人が誰かも分からぬ手紙をおじさんたちに捨ててしまわれる前に、郵便配達の人から直接受け取ろうと、早起きしようとして……。

階段を上ると、視界が開けた。もうすぐ、日没が訪れる。傾く太陽が、西の空を燦然と燃え上がらせていた。あと十五分もすれば、夜の帳が落ちるだろう。

外に足を向け、ぼくは軽く手摺りに腰掛けた。ぶらぶら揺らす足の先、地面は遥か遠くにある。

昔、気付いたら学校の煙突の上に腰掛けていたことを思い出した。今日は、昔のことをよく思い出す。ダドリーに追いかけて、食堂の外にあった容器の陰に、ハリーと一緒に飛び込んだっけ。

閉塞感のある日常に、毎日息苦しくて、ぼくとハリーは二人で悪戦苦闘しながら、一緒に手を繋いで生きてきた。物置に閉じ込められたり、ダドリー軍団に追いかけられたり。ぼくとハリーが問題ばかり起こすから(どれもこれもわざとじゃないのに)、先生方にも目の敵にされて、ダドリー軍団に目をつけられるから、ぼくらと大っぴらに友達になつてくれるような同級生もいなくなつて。

自分の正体も知らず、自分が魔法使いだなんて考えもせず、穏やか

で幸福な『幣原秋』の夢を見て、あんな家族が欲しい、と夢想するだけの日々だった。

あの時は、ハリーと共に煙突に腰掛け、救助を待つ間、ずっと『魔法が使えたら何をするか』なんてことを語り合っていた。ハリーは『ダドリーに豚のしつぽをつける』なんて言っていて、しかもそれはハグリッドの手によって叶えられたし。ぼくの提案した『ダーズリー家から逃げ出す』というのも、ある意味叶ったようなものだ。

素晴らしいものだよ、魔法って。

「死ぬつもりなのかい、アキ？」

耳に、涼やかな声が届く。

ふと右隣を向くと、トム・リドルが、ぼくと同じように手摺りに腰掛けていた。

「うん」

軽く頷く。リドルは、物珍しげにキョロキョロと辺りを見渡していたが（まあ、五十年も日記の中に引きこもっていたわけだし、その反応は当然か）、ぼくの言葉に肩を竦めた。

「『死に損ない』って、あのクラウチに言われたのがそんなに引つかかってるの？」

「そんなんじゃないさ。……いや、きつかけの一つではあるんだけどね」

「クラウチなんて、僕に言わせちゃ秀才の皮を被った凡人さ。役者度合いも何もかも、僕の方が上だ」

「何張り合ってるんのか」

「顔だつて僕の方が格好いい」

「……そうですか」

「ブラック家の末裔よりも僕の方が格好いい」

「それには同意しかねる」

ぼくにとっては、リドルとシリウスは同レベルのイケメンだ。優劣なんてつけられっこない。

「じゃあ、どうして死ぬんだい？」

リドルの声は、単純な疑問に満ちていて、他の感情は全く入っていない

ない。

悲しみや哀れみが感じられないその問いかけは、ぼくにとっては酷く心地よかった。

だから、ぼくも気兼ねなく言葉を紡ぐことが出来る。普通の人だったら『考え直せ』『そんな考えをするんじゃない』と言ってくるところを、リドルは絶対にそんなことを言わない。

良くも悪くも、リドルはそういう人間だ。他人の気持ちが分からない。理解しようとしてもしない。

リドルはただただ、自分の興味関心が向くものだけを求めている。今は、どうして死にたがる人間がいるのか、その思考回路を知りたいだけだ。

「あいにくと、ぼくは世間一般からかなりかけ離れた部類に属すると思うけど」

言外に「君が求めるものは与えられないかもしれない」と仄めかすと、リドルは「そんな分かりきったことはいいいよ。君に関しては、常に人間のレアケース、特殊形態だと思っっているから」と軽く流した。……って、おい。

「ぼくは、幣原秋の願いを叶えるために存在している生き物だから」
そう言うと、リドルは少し考え込んだ。

「僕は死んだことないから、死ぬときの感じが分からないんだけど。君と一緒にいたら、死ぬときの感じが分かるかな？」

「さあてね、その状態の君が死ぬるかどうかは分からないよ、前例だつてないし。……もし死んだら、墓の中でも君と一緒にあつて思うと、少し気が萎えるよ。この指輪、投げ捨ててしまえないかなあ」

そう言いながら、小指に嵌ったリングを引っ張るが、抜ける様子はまるでしない。

リドルは少し焦ったように「おいおい！勝手にそんなことしないでよ！」と声を上げた。

「ひっどいなあ……魔法契約の品は丁重に扱えって、親御さんに習わなかったの？」

「言わせてもらうが、ぼくの両親は君が殺したんだぞ。本当の産みの

親も、今の戸籍上の親も」

「そう言えばそうだった」

全く、とぼくは嘆息した。

「君も天国や地獄にはいけないだろうけど、ぼくも死んだって天国にも地獄にも行けなさそうだ。……そうしたら、色んなことを君と話そうか。きつと、時間ばかりはたくさんある」

ぼくの言葉に、リドルはおかしげに笑った。

「それならしばらくは、退屈しなさそうだ。そうだね、色んなことを、君と話そうじゃないか」

そんな言葉を残して、リドルは姿を消した。

ふう、とぼくは空を見上げる。群青色の空が、どこまでも遠くまで広がっていた。

綺麗だと思った。

「さて、と」

群青色の空に、星が一つ、二つと瞬いている。今日の一番星は、金星のようだった。

ぼくが死んでも、この空だけは、何もかも覚えてくれている。

空は、何年経っても、何十年経っても、ぼくらを永遠に見つめ続けてくれる。

空の記憶を覗くことが出来たなら、どんなに面白いだろうか。

死んだら、空の記憶を覗くことが出来るだろうか。

ああ、それは、存外に、ワクワクすることだ。

ぼくは静かに、空中へと身を躍らせた。

「アキ!!」

叫び声。そして、右手首に感じる強い力。

ぼくは目を開けた。

ハリー・ポッターが、ぼくの双子の兄が、飛び降りたぼくの手を、しっかりと掴んでいた。

「……さっすが、主人公だよ……」

きつと、この物語は、ぼくが生きるこの世界は、ハリーを中心に描かれていたのだ。

そう確信出来るくらいに、あまりにも、ハリーのタイミングはドンピシャだった。

「……ハリー、放してくれ」

「……っ、そんな言葉に僕が頷くと、本気で思っているのかい？」

ハリーは、必死な面持ちで、それでも不敵な笑みを作った。

ジェームズによく似た、でも、ジェームズとは決して重ならない、それは、ハリーだけの笑顔だった。

「アキ、君はどうして死にたいんだい？」

その言葉に、ぼくは。

「生きる意味がなくなったから」

そう答えた。

「ねえハリー。ぼくは君を見捨てたんだ。君を死地に送り込んだのは、紛れもないぼくなんだよ。ぼくは、君を守るために生まれてきたはずだったのに。ぼくが、君を見捨てたんだ」

渾身の力でぼくの右手首を掴むハリー、その手首には、未だ、銀色のブレスレットが掛かっている。

ハリーの顔は苦痛に歪んでいて、いくらぼくの体重が平均より格段に低くたって、そう長々と耐えていられるはずもない。

「そんなの、そんなの何だっけ言うんだ！」

ハリーがそう叫ぶのに、ぼくは少しだけ目を瞠った。

「君は強いよ、ああ！ でもさ、僕だって君に守られ続けたくはないんだ！ 君に守られなくなると、僕だって自分の身は自分で守れる！！

余計なことをするなよ、アキ、お節介過ぎるんだよ君は！」

「……っ、お節介って何だよ！ ぼくはただ、君のために思っ……！」

「それがお節介って言うてんだよ、馬鹿アキ！ 一人でぐちゃぐちゃ抱え込んでさ、痛々しい笑顔作ってさ、ちよつとは僕を頼ってよ！」

兄の見せ場作れよ、馬鹿！」

「馬鹿馬鹿言わないでよ、馬鹿って言う方が馬鹿なんだ、バーカ！」
「馬鹿に馬鹿って言われたところで、ちつとも痛くもなんともないやい、バーカ!!」

どうしてぼくらは、こんなところで口喧嘩をしているのだろう。
時計塔のてっぺんで、ぼくは飛び降りようとしていて、ハリーはぼくを止めようとしていて。

なのにどうして、ぼくらは口喧嘩をしているのだろう。
ハリーと口喧嘩をしたのなんて、何年ぶりだろう。喧嘩をした記憶自体が、あまりない。

ぼくもハリーも、物分かりがいい子供だったし、お互いがお互いに対して、とつても優しく、そしてとつても甘かったから。

だから、こうして馬鹿みたいに喧嘩しているのが、すごく新鮮に感じた。

「生きる意味がなくなった？ 何甘えたこと言ってるんだよ、馬鹿!!
そんなのなあ、与えられるだけじゃなくって、自分で作れよ！ 自分で見出せよ!! お前の人生だろ、アキ・ポッター！」

その言葉に、ハツとした。

「君は幣原秋じゃない！ 君がいつも言っていることだろ！ 君は僕の弟のアキ・ポッターだ!! レイブンクローの一番の大馬鹿野郎だ、レイブンクローの面汚しだ！」

「レイブンクローを悪く言うなよな！ グリフィンドールの単純馬鹿！ 君だって無謀無策でいつつも突っ込んでいく癖に！ 君が生き残っているのは運がいいからだ！」

「そうだよ、僕は運がいいんだ！ 決して、君に守られてきたからここまで生き延びた訳じゃない!! 馬鹿にするなよアキ・ポッター！ 僕を見縊るな!! 僕は決して君を諦めないっ、絶対に、絶対に運命に屈しない！ 君とは違う！ 膝を屈して、闇に付け込まれたりしない!!」

「……………」

言葉に詰まった。

「アキっ！」

その声に、目を瞠った。ハリーの後ろからぴよこんと飛び出してきたのは、誰だろう、アクアだった。泣きそうな表情で、手すりから身を乗り出し、ぼくに手を伸ばしてくる。

無理だよ、君じゃあぼくの体重を支えきれないよ、一緒に落ちてしまおう。

「馬鹿あ！ 何、勝手に、どつか行こうとしてんのよ！ 残された者の気持ちを少しは考えなさいよ！」

アクアは、一生懸命にぼくに手を伸ばしながら、叫んだ。

「祈ってなんかあげないわ、あなたみたいは大馬鹿野郎には！ どんなに無残な死に方したって、絶対に祈ってなんかあげないんだから！ あなたが死んだことを後悔するくらい、あなたに縋って泣いてあげるんだから!! 私のが好きだって言うのなら、一緒に生きてよ！」

誰よりも幸せにしてちょうだいよ!!」

——ああ。

ぼくは、なんて。

「生きる理由なんて、そこら中にあるだろ、馬鹿野郎！ アクアを残して逝く気かつ、なら思いなんて初めっから伝えるな！ ずっと胸に秘めてそして死ね!!」

ハリーが、思いの丈をぼくに叫ぶ。

——ぼくは。

「ぼくは、生きていても、いいの……?」

「いいに決まってんだろ、馬鹿野郎」

そう言っつて、アクアの後ろから、アリスが顔を出した。アクアの肩をしっかりと掴み、彼女が落ちないようにする。

「とつとと掴め。さもないと、お嬢サマに殺されんぞ。良かったな、どっちでも死ぬる」

「……は。アリス、君は全く……っ」

そつと、アクアに左手を伸ばした。アクアははつとした表情を浮かべると、両手でぼくの手をしっかりと掴む。

「アキっ!?!」

「アキ、馬鹿なことは止めなさい！」

そう叫ぶのは、ロンとハーマイオニーだ。二人はハリーを両側から手助けするように、ぼくの右腕をそれぞれしっかりと掴む。

「アキ殿下よ、何やか楽しそうなことをやっておいでですな」

「俺たちも混ぜてくれねえか？」

そう言っただけでひよつこりと姿を見せたのは、フレッドとジョージの双子だ。その後ろには、「アキ死んじや嫌よ！ 馬鹿あ！」と大粒の涙を零すジニーの姿。

「馬鹿馬鹿言われて可哀想だから、僕らはド阿呆とでも言おうかね？」
「レオン、それもそれでどうかと思うぞ。まあアキがドがつく阿呆だということに異論はないが」

同室の友人、レオンとウィルの姿もある。全く、誰も彼も、ぼくのことを好き勝手言いやがって。

「君は幣原秋じゃない。アキ・ポッターだ。君が君だからこそ、幣原秋ではないからこそ、今君は、これだけの人に囲まれているんだ」

ハリーは、につこりと笑った。

「君を愛する者のために、君は生きるんだよ、アキ」

引き上げられたぼくは、いろんな人にもみくちやにされた後、アクアの前に引きずり出された。

アクアは、涙が零れる三秒前、のような顔をしていたが、ぼくに相対すると、いよいよ声を上げて泣いてしまった。ぽかぽかと両手で、手当たり次第にぼくを殴りつける。

案外、アクアの拳は痛かった。

「馬鹿め」

「……まだ言うか」

むうつと唇を尖らせてアリスを見上げると、アリスはうりうりとぼくの頭を乱暴に撫でた。

「……まあ、焦った。お前、思い切り良すぎ。もう少し思い悩め、馬鹿」
「そんなこと言うの、本当、君だけだよ、アリス」

まあ、だからこそ、アリスの言葉には救われるのだけれど。

でも、そんなことを本人に言うのは癪だから、黙っておくことにす

る。

ハリーは、ぼくと別れてすぐさまぼくを探しに校内を走り回ったらしい。その際手当たり次第にアキを探してくれと触れ回ったから、とこやかに言われ、思わず顔が引きつった。これからしばらくの間は、いろんな人にやいのやいの言われるのだろう。

でもまあ、それも悪くはないのかもしれない。

色んな人に怒られて、色んな人に殴られた。殴りも怒りもしなかったのは、珍しくもアリスだけだった。

ハーマイオニーには抱きつかれつつも怒られたし、ジニーは大泣きしながらもぼくに綺麗な右ストレートを決めてきた。おかげで、左の頬が腫れている。しばらくはこの腫れも引かなさそうだ。

ハリーを医務室に送り届けて、ついでにぼくの左頬もガーゼで覆ってもらって、ぼくは同室のメンバーであるアリスとウィル、レーンと共に、レイブンクロー寮へ帰った。

「もう、馬鹿な真似起こすんじゃないぞ」

「そうそう、アリスを心配させんなよー、心労で死ぬぞ」

「ウィルが先にアリスに殺されそうだけどね」

ケラケラ笑うレーンが、ぼくの寝室のカーテンを閉めた。

見慣れたはずのベッドも、自分の机も、何故だか新鮮だった。

まるで、一度死んで、もう一度生まれ直したかのようだ。

——いや、本当に、多分、あそこで一度死んだんだ、ぼくは。

迷って立ち止まっていた自分は、時計塔から飛び降りたときに、死んだんだ。

ふと、机の上の紙に目が止まった。ぼく、こんな紙、出しっぱなしにしていただろうか。

何の気無しに手にとった瞬間、思い出した。リドルの日記の切れ端だ。

ぱらり、と裏返す。

そこには一言、流れるような綺麗な文字で、こう書いてあった。

『そう簡単に死なれちゃ困る』

……なるほど。道理で、やけにお喋りだった訳だ。

「死ぬのがどんなか体験出来なくて残念だったな、バーカ」
右手の小指に嵌まる指輪に向かってそう言うと、ぼくは笑った。

第39話 空の青さが気に食わなくて

ふくろう試験が終わって、ホグワーツ特急が出発するまで、一週間ばかり時間があつた。その間、何もすることがなかったから、ぼくは悪戯仕掛人たちと共に小部屋にこもって、『忍びの地図』に没頭した。悪戯仕掛人からは（というか、ジエームズとシリウス、ピーターからは）、それぞれ地に額を擦り付ける勢いで謝られた。謝るだけじゃない、それぞれがこの前のホグズミードで買えるだけたくさんのお菓子や本や日用品やらをお詫びの品としてプレゼント——というよりは『押し付けて』きて、ぼくとしては苦笑するほかない。

それに。

いくら物を贈られたところで、心を込めて謝罪を受けたところで、ぼくに対してそれを行うのは色々と間違っていると思うし——なにより、もう何をどうこうしたところで、ぼくとセブルスとリリーの三人が一緒に笑い合うことは、もう——ないのだろうから。

気晴らしに、小部屋から出た。東塔の屋上に出ると、風に当たる。手すりに体重を寄り掛からせ、ぼくは大きく息を吐いた。空の青色に眉を寄せると、腕に頭を乗せる。

一人になれるのは、久しぶりだった。

酷く、疲れていた。

「……………」

リリーのことは、好ましく思っている。それは——事実だ。

優しくて、可愛くて、表情をくるくると変える様は愛おしくて。

認めよう。今まで目を逸らしていたことを。

いつからだろうか知らないが、ぼくは彼女を好きになっていたことを。

認めたくはなかった——だってぼくは、セブルスと争いたくはなかったから。

リリーの親友として、ぼくはずっとただ、彼女を、見ているだけで良かったんだ。

見ているだけで、ぼくは本当に、良かったのに。

風が、髪を揺らす。そんなことにすら、苛立ってしまう。

左の人差し指を軽く振る、それだけで、風はピタリと収まった。乱れた前髪を、乱暴に整える。

好きな人と付き合えたら、問答無用で幸せになれると思っていた。ぼくの両親は、お互いがただそこにいるということに、いつも幸せそうだった。

だけど、現実はどうだ。

恋愛って、こんなにも訳が分からないものなのか。

こんなにも、ただただ辛くて苦しいものなのか。

——こんなもの。

「幣原くんじゃーん」

そんな言葉を掛けられ、ぼくは振り返った。

振り返って、誰だ？ と目を瞬かせる。

女子生徒だった。首にグリフィンドールのネクタイを巻いている。栗色のショートヘアを揺らしながら、女子生徒は笑った。

去年、魔法魔術大会で優勝したぼくの名前を知っている人は、案外多い。こうして親しげに話しかけてくる人も何人かいる——がしかし、ぼくはあなたの名前を知らないんだ！ と、声を大にして言いたい。

「バーサ・ジョーキンス。来週卒業予定の七年生。見ての通りグリフィンドール。卒業後は魔法省勤務が決定してるー」

幸いなことに、彼女は自分からサクサクと名乗ってくれた。オマケに色んな情報付きで。バーサ・ジョーキンス先輩。ふうん。

「……えっと、ジョーキンス先輩。何か用ですか」

警戒しつつそう尋ねると、ジョーキンス先輩はにへらっと笑った。

「そんな硬くならないならなーい。幣原——えっと、秋くん。だよねえ」

右手をふらふらと振りながら。

ジョーキンス先輩は、楽しげに口を開いた。

「フローレンスと付き合ってるんだー？」

その言葉に、ぼくは目を見開いた。無意識に、ローブの中の杖を

握っていた。

フローレンス。リリー・エバンスのミドルネームだ。女の子の友達から、時折そんな名前と呼ばれているのを聞く。

リリーがぼくと付き合っていることは、ぼくらの間だけの秘密だった。幸いにも、ぼくらはそれまでもよく一緒にいたし、ぼくの見ただけから、ぼくらがそういう関係だと思われたことは、今まで一度もなかった。

「怖い顔しないでよー、せつかく可愛い顔してるのに。ほらほら笑って笑ってー」

「……………」

ジョーキングズ先輩は人懐っこい笑顔で笑ったが、笑みを浮かべられる状況ではなかった。

やがて、ジョーキングズ先輩は笑みを消すと、むう、と唇を尖らせた。

「無反応なのつまんなーい。久しぶりのゴシップなのに」

「……………」

ぼくの言葉に、ジョーキングズ先輩はにいつと笑った。

「先週の木曜日さあ、アンタの姿を見つけて、暇だったし追っ掛けたのよ。なあんか切羽詰まったような顔してるし？ こりゃあなんかあるぞ！ と、私の第六感がピピルピ。大正解だったね——君、温室の陰で、フローレンスにキスしてたでしょ」

気付いたら、杖を抜いていた。

「コンファウンドー！」

力を全く制御せずに叫んだ錯乱呪文は、久しぶりにぼくに、酷い結果をもたらした。まともに食らったジョーキングズ先輩は、ふ、と虚ろな瞳になると、その場に力なく倒れこむ。

彼女の無事を確認する余裕は、ぼくにはなかった。

何も見たくなかった。何も考えたくなかった。何もかもが嫌だった。ぼくを取り囲む、全ての現実から、目を逸らしていたかった。

自棄っぱちで、ぼくはその場から逃走した。



ハリーの言葉を、現魔法省大臣、コーネリウス・ファッジは信じなかった。ヴォルデモートが復活した、という事実は、彼が受け入れることが出来る枠には入り切れなかったようだ。

クラウチ・ジュニアは、吸魂鬼のキスにより、死よりも酷い姿となった。

ぼくを哀れんだ、彼の魂は、永遠に失われてしまった。

クラウチ氏の遺体は、『禁じられた森』の奥の奥で発見された。色々問題の多い父親だったが、最期は、息子のためを思って、他人に容易く発見されない場所で逝ったのか。

そう思うと、酷く遣る瀬無い気分になった。

シリウスとスネイプ教授は——これは一体どんな喜劇なのかよく分からないが——握手をしたようだ。

この話を聞いて、しばらくぼくは笑い転げた。この二人が、握手とは！ 信じられない。

「約束でしたからね」

冗談だとは思えないあの約束も、ならば、守られるべきだろう。

「スネイプ教授」

教授は、ぼくが研究室に訪れることを、予期していたようだった。苦虫を噛み潰したような表情ではあったが、部屋の中へとぼくを促す。

初めて訪れたときと、何一つ変わらない部屋。少しだけ、本が増えただろうか。しかし、その程度。相変わらずの、借りぐらしの様相の部屋。

「死に急いだそうじゃないか」

開口一番、スネイプ教授はそう言った。苦々しい口ぶりだった。ぼくは苦笑する。

「嫌だなあ。ぼくの黒歴史を、会った誰もが言うんだもの。なんでこんなに知れ渡ってるんだろう？」

「そりゃあ、貴様が有名だからだ、アキ・ポッター。足して二で割れば、恐らくは丁度いい社交力になるだろう」

誰と足して二で割るのか、スネイプ教授ははっきりと明言しなかった。

そんなこと、言わずとも誰かなんて、はっきりしている。

「死ねなかったと思うぞ。飛び降りたところだな」

「えっ?」

驚いて、目を見開いた。教授は無表情に続ける。

「あいつが言っていた。『三度飛び降りたが、三度とも失敗した』と。一番最後に、あいつにたまたま会った時にな。その莫大なまでの魔力が、貴様の身を守っている。だからおいそれと死ねないはずだ」

「……………」

なるほど。

幣原がぼくを作ったのは、自分が死ねないからでもあつたんだ。

死ねなくて——でも、この世界と対面し続けることが、苦痛で仕方がなかったから。

だから、世界に代わりに向き合ってくれる存在を、ぼくを作り出し、その中で眠りにつくという道を選択したのか。

「ぼくはアキ・ポッターで、幣原秋じゃない……そんなこと、自分でも分かってたはずなのに。いつの間にか、誰かに言ってもらわないと、分からなくなってた。ぼくと秋の境界線が曖昧になって、いつの間にか、何も見えなくなっていた」

目の前に、紅茶が置かれた。淹れたばかりのほかほかだ。ぼくは歓声を上げて、お礼を言う口を付けた。相変わらず、教授が淹れるお茶は絶品だ。

そう言えば、幣原と味覚は繋がっていないんだっけか。

ざまあみろ、幣原め。君が味わうことがない教授の紅茶は、ぼくが独占しているんだ。

「……私も、誰もが、貴様にあいつの姿を重ね過ぎた。自分を通して、誰かが他の人間を見ていることなんて……自分を見られないことを、誰もが嫌がることくらい、知っていたはずなのに」

そう教授がポツリと零すのに、慌てて両手を振った。そんなことで気に病まれちゃ、敵わない。

「幣原秋の望みが、死ぬことだとしたって……ぼくは、あいつの望みは絶対に叶えてなんてやらないんだ。だって、ぼくはまだ生きていたんだもの。生きて、幣原が死んだ歳も平然と越えてやるんだ。ヴォルデモートなんてけちよんけちよんにしてやって、お爺ちゃんになって、孫や曾孫に囲まれてき、そしてやっと、いい人生だったなあって言って、死にたいんだ。そこまで幣原秋は死なせない。生きて生きて、ぼくなんか作り出すんじゃないかった、こんなに素晴らしい世界を、ぼくが体験したかった……って、思わせてやるんだ」

そう、強気に微笑んだ。

「……そうだな。貴様ならそれも、簡単にやってのけることだろう」
スネイプ教授も、僅かに微笑を浮かべる。

「……だからさ、教授。——いや、セブルスも」

ぼくの言葉で。

アキ・ポッターの言葉で。

手を差し伸べた。

「過去に囚われないで——囚われすぎないで。目の前のぼくを、ちゃんと見てよ。幣原秋じゃなくてき、ぼくを、ハリーをちゃんと見てよ。ハリーはジェームズでもリリーでもない、ハリー・ポッターだよ。ぼくが幣原秋じゃなく、アキ・ポッターであるのと同じように」

スネイプ教授の瞳が、驚いたように見開かれた。ぼくの差し出した手を、凝視する。

「……今すぐ変われ、なんて、無理だと思う。リリーと秋が死んで、囚われるなっていう方が無茶だし……あいつだって、秋だって、過去からがんじがらめになっている。君と秋は、お互いがお互いの存在に対して囚われてる、足を引っ張り合っている。でもさ……そろそろ、前を向いてもいいはずだ」

聞こえているか、幣原秋。

聞いていなくなったって、続けるぞ。

「君と秋が前を向いて歩み続けることを、ぼくは心から、願ってるよ」
そう言っ

て。ぼくは静かに、右手を下ろした。

やっぱり、手を取ってはもらえなかつたなあ、と思いながら。

「……私は、なんで貴様なんかを、秋が作り出したのかと、常日頃から不思議に思っていた」

そう、教授は呟いた。

「貴様と秋は正反対の人格をしている。秋は普段から謙虚で控えめで、あまり自己主張をしない奴だった。貴様と違って。そう、目立ちたがり屋の貴様や貴様の兄とは違って」

「教授、悪意が、悪意がだだ漏れてる」

「貴様らと違って……あいつは、優しすぎた。優しすぎて、だからこそ……声を上げずに、ただ耐え続けた。貴様なら、大声を上げるだろうときを、あいつは見過ごした。あいつだけじゃないな……誰もが、私も……誰もが、全て、気付いたときには手遅れだったんだ。……あの時、あいつの手を取っていれば」

未来は違っていたのかもしれないな。

「……………」

「秋が貴様を作り出した理由が、分かる気がするよ、私には」

穏やかで、でも沈鬱げなその表情を見て、ぼくは出てくる言葉を押し留めた。

「……………」馳走様でした、教授」

言葉少なに立ち上がると、一礼して、ぼくは研究室を出た。

教授は、過去に想いを馳せる瞳を、ずっと虚空に彷徨わせていた。

第40話 青空

「やっほー。元気？」

突然現れたジェームズ・ポッターに、ぼくは目を瞬かせた。

紅の Hogwarts 特急、そのデッキで、流れる風景を一人ぼんやりと見ていたときのことだった。

メガネが吹き飛ばされないよう、ジェームズは右手で押さえながらも、ぼくの隣で手すりに寄りかかり、「いい眺めだね」と呟いた。

「……元気だよ」

もともとが天然パーマな髪質上、ジェームズの髪は風に掻き回されてもなお、ぱっと見はそんなに変わっていないように見えた。

ぼくらは話すこともなく、そのまましばらくずっと、風景を見ていた。

ぼくらの間の沈黙を破ったのは、ジェームズだった。

「あのさ、秋」

ぼくは左手で髪を押さえていたが、その声にジェームズの方を向いた。

ジェームズは、ぼくを見ずに、穏やかに言う。

「夏休み、僕の家に来ないかい？」

ぼくは目を瞠った。口を開きかけ、言葉が出て来ずに、そのまま口を閉じる。ジェームズは楽しげに笑った。

「もちろん、君が良ければ、だけど」

そう言っただけを見たジェームズのハシバミ色の瞳は、真つ直ぐに澄んでいた。

「……構わないの？」

「もちろん」

さらりと乾いたジェームズの声は、ぼくの心の柔らかな部分を傷つけることなく、優しく撫でて通り過ぎていく。

「……『忍びの地図』も、いい加減完成させないとだ。僕の家には、いろんな蔵書があるんだよ。……きつと君も、気に入ると思うんだ」

につこりと、ジェームズは微笑む。右手を、ぼくに差し出した。

迷って、迷って――。

「……じゃあ、よろしく頼むよ」

ぼくは、その手を取ることを、決意したのだった。



ハリーの元に、三大魔法学校対抗試合の優勝賞金、一千ガリオンが与えられた。ハリーはそれら全てを、フレッドとジョージの双子に何の未練もなくあげてしまった。あの二人なら、このお金で悪戯専門店を開いてみせるだろう。こんな時期だからこそ、ぼくらには、笑いや悪戯が必要なんじゃないか。

あの双子は、重苦しい雰囲気全て吹き飛ばすことが出来る、素晴らしい魔法の使い手だ。そう、もしかしたら、悪戯仕掛人よりも。

カルカロフは、ダームストラングの校長職も何もかも、全て捨て置いて姿をくらました。自分の命が大事、他の何よりも、そんな姿勢に生徒や職員らは呆れかえっていたが、ぼくはそのなりふり構わない姿は、案外嫌いではないのだった。

偽ムーデイー――クラウチ・ジユニアはホグワーツを去り、もう授業はないのだが、本物のムーデイはしばらくホグワーツ校内で療養するため滞在していた。

一度だけ、彼と廊下で出会ったことがある。今までムーデイと対峙していた時に感じていた、あの嫌な胸のざわめきは、本物のムーデイに対しては、何も感じはしなかった。

「……お久しぶりです、ムーデイ先生」

そう言っつて、ぼくはにっこりと微笑んだ。

ムーデイ先生は、まるでボガートでも見たかのような凄まじい目つきでぼくをしばらく見ていたが、「……貴様も、数奇な人間だな」と言い、大きく息を吐いた。

「ええ、本当に」

ムーデイ先生が、ぼくをお茶に誘う。ぼくはそれを頷いて受けた。セドリツクの悲報に、全校生徒は嘆き悲しんでいた。

セドリツクは、行方不明者として処理された。まだ死んだと決まっていたわけではない、そのことを支えとしている人は多いようだった。

我がレイブンクロー寮五年生、チョウもその一人。普段はあんなに明るいその表情を暗く沈みこませている彼女に、一体何と声を掛けていいのか、クラスメイトたちも迷っていた。チョウがセドリツクと付き合っていたことは、ダンスパーティー以降、誰もが知っていたことだったから。

修了の儀の大広間は、普段よりも一層、静かだった。

普段は、寮対抗杯で優勝した寮のカラーで染め上げられるはずの大広間は、セドリツクを悼み、黒く重い垂れ幕が掛かっていた。

ぼくらは起立をして、セドリツクの名前を唱和し、杯を掲げた。

ボーバトンの生徒たちに対するお別れ会のようなものは、その後レイブンクロー寮で、密やかに、そしてしめやかに行われた。この半年あまり、同じテーブルで食事を取った仲だ。

「お前は入っていかないのか？ フラー・デラクールと親しかったようだが」

少し離れたところでチェス・プログレム——詰め将棋のチェスバージョンのようなものだ——に向き合って考え込んでいたぼくに、アリスは近付くと、盤上を見回して黒のナイトを手に取り、「チェツクメイト」と言いつつ白のキングを詰ませる位置へと置いた。ぼくは思わず身を乗り出すと、本当に今の手が正解なのかを確かめる。確かに唯一の正解手だと分かると、ぼくは力なく肘掛け椅子に倒れこんだ。

「あー、もう、何だよ……せつかく考えてたのに……」

「考えるほどじゃねえだろ、今のは」

そう言いつつ、アリスはぼくの正面に腰掛けると、黒の駒をかき集め、並べ始めた。ぼくも黙って白の駒を集める。

「今回こそは勝つ」

「多分無理だな、今の問題に手こずってたレベルのお前には」

「うるさいな」

eの4にポーンを進ませた。即座にアリスも eの5に黒のポーンを置く。

ぼくらはしばらく、無言で盤上の駒を戦わせた。

「いいんだよ」

ぼくの声に、アリスは俯いたまま、目だけをこちらに向けた。

「君こそいいのかい。レイチエル・クレティエ嬢と過ごせる最後の晩だろう」

「生憎だが、俺たち付き合ってた訳じゃねえぞ」

「え!？」

動揺して、思わず悪手を打ってしまった。

そこを見逃すアリスではない。碧の目を煌めかせると、すぐさま穴の空いた布陣に突っ込んでくる。慌てて手駒を呼び寄せたが、もう遅い。

「お前はすぐ油断する。心の乱れが盤に素直に反映されてんぞ。お前は秘密主義な癖に、肝心なところで脆い」

アリスは楽しげに、喉の奥でくつくつと笑った。

ここからどう巻き返すかを考え込むぼくを満足そうに見遣ると、ぐつと伸びをし、左耳のピアスに触れると、背もたれに体重を預ける。

「付き合ってたんじゃないのかよ……」

「彼女、あつちに年下のボーイフレンドがいるらしい。ヒュー、女は怖いね」

「全然、そんな人には見えなかったのに……全く、本当、怖いね、女の子は」

なんとか布陣を立て直そうと、がむしやらにもがくものの、戦況は悪化する一方だ。アリスにチェスで勝てた試しがない。決して弱くはない方だと自負してはいるのだが。

「お前の、負け戦だと分かっているながらもどうにかしようと思えば、俺は好きだぜ」

「見苦しいって言っても別にいいんだよ」

リイフはチェス、かなり弱かったんだけど。本当にこの親子は、ものの見事に正反対だ。ロンとどっちが強いだろうか、一度試合させてみたいものだ。

「テラクール嬢に関しては心配なさるな。既に連絡先くらい交換済み

だ。今日彼女が人に囲まれることくらい、予測しているに決まってるだろ？」

ローブの懐から、彼女の手書きの住所をちらりと見せる。アリスは目を睨ると、にやつと笑った。

「今、デラクールにまとわりついているロジャー・デイビースが知ったら、お前、身ぐるみ剥がされるぞ」

「内緒にしててね、アリス」

ぼくも悪戯めいて笑うと、軽く片目を瞑ってみせた。

翌日は、雲ひとつない晴天だった。眩しさに、思わず目を細める。

プラットホームでは、全校生徒が一斉に、紅のホグワーツ特急へと乗り込んでいた。ハリーとロン、ハーマイオニーの三人組を見つけ、駆け寄る。

「ハリー」

ハリーはぼくの姿を見つけると、優しい笑顔を浮かべた。

「さて、帰ろうか、あの悪夢とも言うべき日常へ」

「なあに、悪夢はすぐさま覚めるもんさ」

ハリーがぼくに、手を差し出す。

ぼくはその手を、しっかりと取った。

ぼくらを乗せて、列車はゆっくりと滑り出す。それからすぐに、ぼくらのコンパートメントを開ける人物がいた。アクアだった。

「……一緒に、いいかしら？」

そう言っって首を傾げ微笑む彼女に、一体誰が嫌だと言えるものだろうか。そして、ぼくよりもハーマイオニーの方が喜んでる気がするのは何故だろうか。そしてアクアも、ぼくに向ける笑顔よりもハーマイオニーに対する笑顔の方が輝いている気がするのはいさだかだろうか。

やがてアリスまで「暇だったからな」と言いつつコンパートメントに現れた。

せっかくだから、とロンとアリスにチェスをそそのかすと、二人とも一気に燃え上がった。二人とも強い分、自分と並ぶような対戦者が欲しかったらしい。ロンはずっとアリスを怖がっていた節があった

が、チェスの対戦をしていると、そんな思いはもう遠くの彼方へ吹き飛んでしまったようだ。

この二人が頭を寄せ合って一つの盤を睨んでいる様は、すごく新鮮だった。おそらく、すぐさま、見慣れた光景になるのだろう。それが、なんだかぼくには嬉しかった。

やがて、ランチのカーブが回ってくる。様々な食料と共に、ハーマイオニーは日刊預言者新聞を買い求めていた。コンパートメントの全員が気になるような見たくないような、な複雑な表情を向けたのに、ハーマイオニーは新聞を広げながら肩を竦めた。

「何にも書いてないわよ。ファッジが黙らせているのね。三大魔法学校対抗試合から、セドリックのことも、なーんにも書いてない」

「でも、リータは黙らせられないでしょ」

「あら。リータはここしばらく何にも書いてないわよ。そう、何にもね」

ハーマイオニーの声は、嬉しい気持ちを無理やり押しさえ付けているように、少し弾んでいた。ぼくら男性陣がポカンと頭上にハテナマークを浮かべるのに、ハーマイオニーとアクアの女性陣はにっこりと顔を見合った。

「学校の敷地に入れないはずのリータが、どうして個人的な会話を盗み聞きしていたのか、突き止めたのよ。あの女は、無登録の『動物もどき』なの。あの女は変身して、コガネムシになるのよ」

ハーマイオニーは少し屈んでカバンの中を漁ると、やがて小さなガラス瓶を取り出した。ゴム栓で蓋がしてあるその中に、小枝や木の葉と一緒に、一匹のコガネムシが入っている。

「触覚の周りの模様が、あの嫌らしいメガネにそっくりでしょう？」

ハリーはあんぐりと口を開けてコガネムシを見つめていたが、やがてハッと何かを思い出したようだ。

「ハグリッドがマダム・マクシームに自分のお母さんのことを話すのを僕たちが聞いちゃった夜、石像にコガネムシが止まっていた！」

「それだけじゃないわ。ビクトールが湖のそばで私と話した後、私の髪からゲンゴロウを取ってくれた。それに、ハリー、あなたの傷跡が

痛んだ日、『占い学』の教室の窓枠にもこのコガネムシがいたはずよ」

「僕たちが木の下にいるマルフォイを見かけたとき……」

「マルフォイは手の中のリータに話してた。そう、スリザリンの連中は……あら、ごめんなさい、アクア」

ハーマイオニーの声に、アクアは首を振った。

「……構わないわ。あの人たちは、グリフィンドールのあなたたちやハグリッドのとんでもない話をリータに吹き込めるなら、なんだってやるような人だもの。だから、あの、その、私……」

アクアがちらりとぼくを見て、俯いた。目を瞬かせるぼくに、ハーマイオニーが補足する。

「アキ、あなたと私の記事が『週刊魔女』に載った日に、アクアはこの虫を捕まえて来てくれたの。私に全部説明してくれたわ。ね、アクア？」

ハーマイオニーはとても優しい瞳でアクアの髪をそっと撫でた。アクアも気を許したような微笑みで、ハーマイオニーの肩にもたれ掛かる。一体、いつの間にこんなに親密になっていたのか。

呆然と二人を見ていると、ロンもぼくと同じ表情をしていることに気がついた。アリスとハリーは、そっくりな笑顔を浮かべながらぼくとロンの肩を抱く。

「おいアキ、いいのか？ お嬢サマ取られちまうぞ」

「ロン、いいの？ 女の子にハーマイオニーが取られても」

——いいわけがないだろう！

ぼくらの音ならぬ悲鳴は、青空に消えていった。

短編 遺書

親愛なる我らが息子、幣原秋へ。

やあ秋、元気かな？ 風邪は引いてないかい？

お前は案外身体が丈夫だからあまり心配はしていないけど、でもそれにかまけて乱れた生活を送っちゃ駄目だからね。

まあ、秋は分かっているか。

さてさて、こうして手紙を書こうと思ったのはいいものの、何から書けばいいのかよく分からない。難しいものだね、手紙というのは。

これをお前が読んでいるということは、お父さんとお母さんはもう死んじゃったのかな。

それについては謝るよ。本当にごめん。

お前を残して逝くことが、お父さんとお母さんは何よりも辛いんだ。

分かってくれ、とは言わないよ。これは全部、秋の意志を無視した行為でしかないからね。存分に、秋は怒っている。

何でぼくを置いて死んだんだ、勝手な真似しやがって、って、怒っている。泣いていい。

でもね、秋。それでも、前を向いて欲しいんだ。

立ち止まってうずくまってもいい。

でも、いつかは立ち上がって、歩き出して欲しいんだ。

秋。最愛なる我らが息子。

大好きだよ。

お父さんとお母さんは、お前のことが世界で一番、宇宙で一番大好きだ。

その気持ちは、たとえお父さんとお母さんがいなくなってしまうっても変わらない。

雲の上で、お前をずっと見守っている。

ただ、会えなくなるだけだ。

寂しいだろうね。

本当に申し訳ない。お前を一人にしてしまった。

でも、秋。いくら寂しいからって、お父さんとお母さんに会いに来
ちやあ駄目だよ。

それは、遠い未来の話だ。

お前が誰かを好きになって、その子と結婚して、子供を育てて、子
供の成長を見届けて、好きな子と一緒に歳を取って、それから……お
前が存分に幸せを堪能してからだ。

約束だよ、秋。

絶対絶対、死んじゃ駄目だ。お前は生きるんだ。

さもないと、お父さんもお母さんも、意味がなくなっちゃう。

秋、お前は幸せになるんだよ。

これから先、お前の前にはかなり多くの障害が待っている。

その障害はきつと、普通の人より何倍も過酷だ。父さんと母さん
は、お前にそんな業を背負わせてしまった。

でも、どうにか乗り越えて欲しい。

お前はとつても強くて優しい子だ。

父さんと母さんは、お前のような息子を持って誇りに思う。

辛かったら、泣いていい。

苦しかったら、立ち止まっていい。

立ち向かえなかつたら、逃げていい。

一人じゃどうにもならなかつたら、誰かに頼るんだよ。秋は一人で
抱え込んじゃう子だから、父さんと母さんはそこが心配だ。

これからのことは、全部ダンブルドアに頼んでいるから、心配しな
いで。不安に思うことは何一つない。

ダンブルドアはいけ好かない腹黒爺さんだけど（おつと失言、見な
かったことにしてね）、誰よりも安心して信用できる人物だ。

秋……お前には生きにくい時代になってしまった。

ただ優しいだけじゃ、生きていけない時代になってしまった。

これからお前は、辛い経験をたくさんする。

そのたびにお前は躓いて、転んで泣くだろう。立ち上がれないくら
い痛いかもしれない。

でも、立ち上がるんだ。

生きるんだ。何があっても、生き延びるんだ。
父さんと母さんと、約束してくれるよね？

大好きだよ、秋。

お前のことを、父さんと母さんは、世界で一番愛している。

「お帰り」って言うってあげられなくて、ごめんね。

お前のことが誰よりも大好きな父さんと母さんより



「……バカ……っ」

両親の葬儀が終わり、一週間が過ぎた。バタバタした日々ではあったが、それでも段々と落ち着きを取り戻してきている。

そんな中、仮住まいのホテルに届いた『遺書』に、ぼくは奥歯を噛み締めた。

「本当、バカだよ……父さんも、母さんも」

何、呑気に手紙なんて書いているんだ。何、息子に向けて謝ってるんだよ。

何、自分が死ぬことに対して、すまないなんて書いているんだよ。

どうしてぼくの幸せなんて、願っているんだよ。

ぼくが——したも、同然なのに。

「……っ、う……っ」

泣くものか。絶対絶対、泣いてなんかやるものか。

こんなどうしようもない両親のためになんて、泣いてなんかやらない。絶対に。

ぼくを残して、二人だけで逝ってしまった両親なんかに向ける涙なんて、ない。

こんな、どうしようもない両親になんて——

「泣かない、泣かない、泣かない——っ！」

両の拳を、強く握り締めた。強く、強く。

爪が手のひらに食い込む。じんわりと痛い。痛い。

——生きているから、痛い。

顔を、しっかりと上げた。

俯いていると、ぼくの意に反した水が、溢れてしまいそうだったから。

本当に、ぼくの両親は勝手だ。ぼくに、一言も相談なしで、いつでも何だってやってしまう。

いつだって強引に、ぼくの手を引っ張ってくれていたのに——放り出すなんて。

「絶対、立ち止まらない。絶対に」

喉の奥から、声を絞り出す。

「絶対に、仇を討つまで、たちどまらない」

短編 アリス視点 親友の彼女

「ピアス開ける、だあ?」

アリスの言葉に、アクアマリン・ベルフェゴールは、意を決した表情でこつくりと頷いたのだった。

時は春。長く厳しい冬が終わり、重く分厚く雪が降り積もっていたここ、英国でも、時折暖かな日差しが差し込むようになった三月。

せつかくのうらかな天気、外に出ないのは勿体ない。そう思ってた同室の友人、アキ・ポッターを誘ったのだが、素っ気なく断られてしまった。その時のアキの目が「こんなに寒いのに外に出るとか馬鹿か? こいつ」と、まるで正気とは思えないものを見るようなものであつたことは言うまでもない。

アキに断られ、他に楽しく遊ぶような間柄の友人もおらず、かといって外に出ないのは負けた気分になるため、一人で木陰に寝転がり昼寝をしていたアリスだったが、その眠りは突然の闖入者によって妨げられた。

「……フェイスナー」

アリスの肩を揺する、小さな手。小さな声。うとうととした心地好いまどろみに身をたゆたわせていたアリスだったが、その声に眉を寄せると目を開けた。

「……お前か……何」

寝起きのためか、声が尖る。中々に凶悪な面構えであつたが、しかしアクアは怯むことなく平然と「起きて」と命じた。

長年の付き合いのためだろうか、外見、中身共に不良のアリスにもアクアはちつとも引きはしない。

「んだよ、つたく……」

文句を言いながらも身を起こし、目を開ける。髪を手櫛で軽く整えれば、アクアが手を伸ばし、アリスの服についた枯れ葉を掃った。気にせず、朝方ワックスで整えた髪の乱れを直す。そしてその場に胡坐をかくと、目を細めてアクアを見た。

「で、何の用だよ、お嬢サマ」

厳格にきっちり留められたボタン、緩まないように気を遣われたりボン、シワのないプリーツスカート。何処からどう見ても文句のつけようがない程に完璧に制服を身に纏い、その小さく華奢な身体からお嬢様然としたオーラを醸し出している幼なじみの少女、アクアマリン・ベルフェゴール。何処から何処まで自身と正反対な少女を見て、つくづく己とはそぐわない奴だ、と思う。

周りからは、このツーショットはどう見えているのだろうか。せめて、優等生の女子を不良が恐喝しているような凶に見えなければいいのだが。

「……あのね、フェイスナー」

ぎゅっと、アクアは拳を握り締めた。きゅっとスカートにシワが寄る。

顔を上げたアクアは、真剣な目をしてこう言った。

「ピアスを開けて欲しいの」



「……何でまた、急に」

別にピアスが珍しかった訳ではない。生徒の中には、親の意向で生まれ直後からずっとつけ続けている者もいるし、校則で禁止されている訳でもない。歳が上がるにつれ、お洒落感覚でのピアスもだんだん増えてくる程だ。

アクアもその、お洒落感覚なのだろうか？ どうも、このお嬢様がお洒落をするという感覚が上手く掴めなかった。

幼い頃から、まるでお人形みたいに可愛らしいドレスを纏った姿などは沢山見てきたが、それはあくまでも親の好みであって、本人は別にそういうものに興味がないようだったからだ。実際雑貨屋に連れていっても何の興味も示さず、ただ退屈そうにその辺りの小物を弄っていた。そんな思い出があるからこそ、なおさら不思議に感じる。

「……えっと、その」

言葉に詰まったようにアクアは黙り込み、指先で髪の毛を弄り出し

た。やがて、照れ臭そうにぽつりと呟く。

「アキから……誕生日に、ピアスを貰ったの」

ああ、と一拍遅れて納得する。それなら、突然そんなことを言い出すのも納得だ。

ゴソ、とアクアは制服のポケットから小さな紙包みを取り出すと、中身を手の平に落とした。そしてつまみ上げ、アリスの目の前に掲げる。

「……可愛いって、絶対似合うって言われて。アキのあんな顔見たら、断れなくて。でも、一人で穴開けられるような勇気が出なかった」

「……だからって、何で俺だよ。友達に手伝ってもらえばいいだろ、そんなの」

「? ……フェイスナーは友達でしょ?」

きよんとした顔で言われて、思わず頭が痛くなる。そういう意味で言った訳ではないのだが。日の光に映える綺麗な青色に目を細めると、手を伸ばした。

「何だこれ、宝石?」

「……うん。アクアマリン、なんだって。君の名前を知った時から、いつかプレゼントしようと思ってたんだって言ってた」

「……よつくそんな台詞が臆面もなく吐けるよなあ、あいつも」

自分には死んでも無理な芸当だ。

首筋が痒くなって、右手で掻きむしった。と、アクアが顔をアリスに近付けてくる。すわ何事かと驚いたが、ただ左耳のピアスを見たかっただけじゃなかった。

「……これ、自分でつけたんでしょ? ……どうだった? ……どのくらい痛いのか?」

手を伸ばして触れようとするアクアを押し止め、小さく息を吐く。悪戯心が湧いて「目茶苦茶痛いぞ、お前なら泣くかもな」とデマカセを言ってやった。すると予想通り、「え……」と不安げな顔をする。

「片方だけの俺でもそうなんだから、両方開けようとするお前の根性はすげえな、見直した」

「……え、っと、その……」

「いや、本当にお前はすげえよ。ただのお嬢様じゃなかったんだな。好きな男のためだけにそれだけの犠牲を払うたあ、見上げたもんだ」
「……………」

「だが安心しろ！俺がついてやる。お前の勇姿はちゃんと俺が見てやるからな」

補足だが、別段ピアスは専門の道具を使えばそれ程痛くはない。きちんと冷やしてやれば出血も少なく、アレルギーの心配も殆どない。

既にアクアは涙目だ。少し遊び過ぎたと反省する。

大きく咳ばらいをすると、「で…………えっと、道具あんのか？」と尋ねた。眉をハの字に下げたままアクアはポケットをまさぐると、恐る恐ると言った体でピアッサーを差し出した。

「…………母様が、アキからピアス貰ったって話したら、これ送ってくれたの」

「ああ…………」

ベルフェゴール家では確か、宝石の名前を子供につけるのが習わしだった。そして成人になると、その宝石をお守りとしてピアスにし、常に身につけられるようにする。その点で、今回名前と同じ宝石を貰ったアクアは、ある意味ラッキーであると言えた。

「うう…………出来るだけ痛くないようにお願いします」

「え、今からやっていいのか？」

いいから早く、とアクアは目をぎゅつと瞑ったまま呟いた。嫌なこととは早く済ませてしまおうとの魂胆か。そういえば昔から、嫌いなものから先に食べる奴だった。

ピアッサーの調子確かめるため、軽くカチャカチャ動かすと、音が聞こえるたびにアクアはビクツと肩を震わせる。少々いじめ過ぎたか、と反省した。

そうつと、アクアの髪を掻き上げる。日の光に輝く銀髪を耳に掛けさせると、耳たぶに触れた。ぎゅつとアクアの肩が強張る。

小さな耳。細い首。恐怖か羞恥か寒さか、微かにうなじが赤い。その赤さを強調するような白い肌。耳の後ろを通って鎖骨へ流れる筋を、思わず目で追った。

唐突に、彼女の首筋に頭を埋めたい衝動に駆られた。慌ててその幻想を打ち砕く。こいつは親友の彼女だ、手を出す訳にはいかない。

頭を振って雑念を追い出すと、ピアツサーで耳たぶを挟み込む。後はホッチキスのように、ただ力を込めればいいだけ。なのにアリスの手はそこで止まった。

「……………」

恐怖と戦うアクアの顔を、正面から眺める。小さく息をつくとき、力を抜いた。するりと抜けた感覚に驚いたように、アクアは目を開ける。

「…………え？ 今…………」

「…………何もしてねえっつの」

ポケットから杖を取り出すと、呪文を唱えながらピアスを軽く叩いた。そしてそれをつまみ上げると、アクアの耳にそっとつける。

「…………お子様にやあ、まだ早い」

「え!? ……だって…………」

慌ててアクアはアリスに向き直る。その時に揺れる青い宝石。耳についたそれに触れるアクアに、肩を竦めた。

「そりゃ、ただのイヤリングだ。たかがピアス穴開けるだけでビビってるお子様にや、丁度いい代物だろ?」

「っ! ……馬鹿にして!」

今度は羞恥に頬を染め、逆はの字に眉を寄せるとアリスを睨む。はっ、と鼻で笑うと無理矢理頭の向きを変えさせて、逆側にもピアスを付けてやった。

「耳に穴開けるのにビビらなくなってから来い、お嬢様が」

「う…………うるさい馬鹿! ……もう…………」

引っ張れば取れる代物に、しかしアクアはそれを外しはしなかった。唇を尖らせアリスを見詰めていたアクアだったが、やがて下を向いてしまう。その頭を軽く撫でてやった。

「ほーら、早くアキに見せてやれ、お嬢さま。身の安全だけは確保しとけよ? あいつが我に返る一言も用意しとけ。まああいつにやそんなこと出来ないだろうけどな」

「……馬鹿フェイスナーの癖に」

「はいはい、どうせ俺は馬鹿ですよ」

むう、と何か言いたげにむくれるアクア。笑ってもう一度頭を撫でれば、居心地悪そうにアクアは触られた所を整えた。

「ほら、行つてこい」

「……………ありがとう」

消え入りそうな声を、しかしアリスの耳は漏れなくキャッチする。しかし聞こえなかった振りをして、そのままアクアの背中を押した。

「……………はあ」

静かになった木陰で、最初のようにアリスは寝転がる。

「……………らしくねえ、俺」

眩しさに、思わず目を閉じた。

短編 ユーク視点 憧れの人

校舎から出て来たアリス・フィスナーの姿を見つけ、ユークレース・ベルフェゴールは、手に持っていたボールを放り投げ駆け寄った。後ろで同級生がユークに文句を言っているが、知ったことではない。

「アリス・フィスナーー!」

名前を叫んで勢いよく飛びつく。

アリスはネクタイを緩めながら息を吐いていたが、ユークの来襲に一瞬驚いたようにその碧の瞳を見開いた。しかし軽々とユークの小柄な体を受け止めると、ゆっくりとその顔に笑みを灯す。

「ユーク、お前か……また姉待ちか?」

「です。アリスが出て来たのなら、もうすぐですかねえ」

そうかもな、と小さく呟いて、アリスは背後の校舎を見遣った。

プレップ・スクールは大半が男女別学だ。しかしここは、英国魔法界における良家の子女がホグワーツに通う前の受け皿という一面を帯びた、英国随一の学校である。

そのため、プレップ・スクールにしては珍しくも共学であった。

「アリスと姉上が、同じクラスなら良かったのに」

「なんだ、ドラコと一緒にだから安心じゃないのか?」

「ドラコは姉上のこと大切にはしてくれないですから。アリスは優しいですよ!」

「別に俺、優しくないよ」

「いいえっ、優しいですよ!」

何を言ってるんだ、とアリスは苦笑しながらユークの髪をわしやわしやと撫でる。その手の温もりを、目を細めて受け取った。

「お前の母親は? 来てるんだろ」

「はい。アリス、一緒に帰りませんか? それともオペアが迎えに来られます?」

ユークの言葉に、アリスの瞳が一瞬陰った。下からその顔を覗き込むと、ふいっと逸らされる。

少し顔を上に傾けられれば、ユークには表情を伺うことが出来なくなつた。

「……母さんところに行こうと思つて。オペアには迎えに来るなど言つてある」

「……あつ」

思わず口元を覆つた。

アリスの母が、今は病院に長期入院していることを思い出したからだ。

「ご、ごめんなさい」

気にするな、と先ほどよりも強い力で頭を撫でられる。

アリスは少し不安定な瞳で、それでも微笑みをユークに向けた。

「……僕も、行きたいです」

「ダメだ」

アリスの返事はにべもない。

「俺の母さんと会うの、お前の両親は嫌がるだろ。……だって俺の母さん、アレだから」

直接的な言葉を使わずに表現し、それでも言葉の最後は声を潜め、一瞬周囲を伺つた。思わず身を硬くする。

アリスの母親はマグル——非魔法族の人間だ。魔法が使えない人の存在を、ユークはアリスの母親で初めて知つた。恐らくはユークの姉、アクアマリンも、そうだろう。

現在八歳のユークにとって、本当に魔法が使えない人がいるということは俄かには信じられなかったが、しかしアリスがそうだと言うのならばそうなのだろう。

「でも、僕、アリスのお母様を見たことがないんですよ……? 姉上がこっそり教えてくれました。すつごく綺麗な人だつて。姉上はよくつて、僕はどうしてダメなんですか」

その言葉に、アリスは顔を顰めた。

「あれは、アクアが……どうしてもって押し切るから、仕方なかったんだ。お前はベルフェゴールの長男だろう。お前と母さんを会わせたら、俺は今度こそお前の家の地下牢から出られなくなる」

「……ドラゴは許した癖に」

「ちよつ……お前、そんなことまで知っているのかよ……」

アリスの、黒色の制服の裾をギュツと掴んだ。アリスを見上げる。

「……ダメ、ですか……？」

う、と碧の瞳が揺れた。手応えを感じる。

もう一押し、と背伸びをしたところで、アリスがふと視線を横に向けた。つられてユークもそちらを向くと、思わず顔を輝かせる。

「姉上！」

ユークの姉、アクアマリン・ベルフェゴールは、氷のような無表情で校舎から出てきたが、ユークとアリスの姿を認めると、瞳を瞬かせほんの僅かに微笑んだ。

アクアの表情はあまり変わらない。楽しい時も、いつも上品に笑うだけだ。感情表現が希薄な姉に変わり、ユークは姉の分まで笑ってあげようと思っている。

「……ユーク」

「聞いてくださいよ、姉上。アリスが、僕がアリスのお母様のお見舞いに行くことを許してくれないんです！」

「ダメに決まってるだろ。お前から何か言ってやってくれ、アクア」
アリスの言葉に、アクアは少し考え込むように首を傾けた。頤に指を当てながら、ユークを見る。

「……母様を誤魔化してくることに、出来る？」

「おいアクア！」

「お安い御用、です！」

なあにその言葉、とアクアは笑った。

姉の笑顔を見るのは好きだ。ふわりと優しい気分になる。

校舎の門を出た先で、母親の姿を見つけた。駆け寄ると、演技を始めめる。

姉上と共にハイストリートにお買い物に行きたいんです、アリスのお誕生日が近いから、彼のプレゼントを選びに行きたくなって。

実際アリスの十歳の誕生日は一ヶ月後に迫っていたため、これは嘘ではなかった。

「……通信販売ではいけないの?」

「嫌です! 実物を見ないと納得出来ません!」

ユークの頑固さを知っている母は、案外簡単に折れてくれた。

五時までには必ず帰ってくることを約束すると、母親は『姿くらまし』でその場から消える。

ホツと胸を撫で下ろし、姉とアリスの元に駆け寄った。

「オツケー出ましたあ!」

ユークの声に、露骨にアリスは苦々しい顔をする。しかし口元が緩んでいることは見逃さない。

アリスに拒絶はされていないことを確信して、アリスの手を取った。自分より大きな、それでも一般的に見ればまだ小さな子供の手。同年代の子に比べれば背も高く体格もいいが、それでもまだまだ薄い身体。

「行きましょう、アリス。僕も、アリスのお母様に会いたいです」

にっこりと微笑むユークに誘われたか、アリスも笑ったようだった。碧の光がふと和らぐ。暖かい海のようなその色が、ユークは好きだ。

『絶対に魔法は使うなよ』とアリスから厳命され、校門を出ると歩いて行く。

公共交通機関を乗り継ぎ(ユークにとっては初めてのマグルの乗り物であったが、好奇心丸出しでキョロキョロするのはみっともないという自覚からなんとか堪えた)、病院へ。聖マンゴとは違う外観に感じ、自動ドアに驚きつつも中に入る。

と、アリスの姿を視認した受付の方がパタパタとこちらに走ってきた。その表情は焦りをも感じさせるもので、不穏な雰囲気小さく身構える。

アリスも何かを感じ取ったのか、ユークとアクアをその場に押し留め、一人で彼女と数言会話する。アリスの顔色が、サツと変わった。

「お前ら、今日は帰れ」

やがてこちらに戻ってきたアリスは、アクアとユークそれぞれを見てそう言った。

「一体、どうしたんですか？」

「いいから」

「アリス、もしかして」

「早く帰って言ってんだよ!!」

叫ばれた声に、息を呑む。

普段優しい瞳を向けてくれていたアリスは、見たこともないほど険しい表情を浮かべていた。アクアはユークの手をパツと掴むと「……ごめんなさい」と小さな声で呟き、強い力でユークを引っ張った。

出口へと向かうアクアに手を引かれながらも、ユークは背後のアリスを振り返る。

アリスは受付の方と深刻な顔で話をしていたが、やがて会話を切り上げると病棟の方向へと駆け出して行った。

黒の制服を纏ったアリスの背中では、やっぱり小さかった。



マグルの通貨を持っていなかったため、帰りは交通機関を使うことが出来なかった。道を尋ねながらもずっと歩き、何とか帰り着いた時には、時間は夜の八時過ぎ。

両親に散々叱られ、一体どうしてこんなに遅かったのかと詰問されたが、姉弟共に沈黙を守り通した。

翌日も、そのまた翌日も、アリスは学校に姿を見せなかった。幼心にも、何かがあったのだ、と直感した。

アクアは、きつとユークよりももっと多くのことを感じ取っていたに違いない。微笑みさえも減多に見せなくなっていった。

アリスの母親が亡くなったのだと知ったのは、それから数日後のことだった。段々と、アリスがいない日常に慣れて来た頃合いだった。

姉と共に行った、幼い頃から利用している商店街で出会ったのは、アリス・フィスナーの父親、ライフ・フィスナーであった。

「アリスのお父様。お久しぶりです」

アリスの父を見るのは、本当に久しぶりだった。二年近くになるか

もしれない。

アリスの父親、ライフ・フェイスナーは「大きくなったね、アクアにユーク」と微笑んで二人の頭を撫でたが、微笑みにはしかし、隠し切れない疲労が滲み出ていた。

「君たち、うちのアリスと仲が良かったよね。ここ最近あいつを見たりはしていないかな？」

「見てないですけど……どうしたんですか？」

ライフは僅かに周囲を伺うと、疲れた笑みを浮かべて「実は、家出されちやつてね……」と呟いた。その言葉と意味に、目を瞠る。

「ど……どうして？」

「……きつと、私に嫌気が差したんだ。ずっと我慢させてきていたし……あいつも、きつと限界だったんだろう」

ライフは、どこか他人事のようにそう言った。

ふと、アクアが口を開く。

「……アリスのお母様、どうかされたんですか……？」

その声に、ライフは表情を凍らせた。

やがて深々と息を吐くと「……あいつが喋ったのか」と囁き、目を瞑る。

「……あいつは、君たちのことを信頼していたんだろう。なら、こちらも打ち明けないといけないね。シャーロットは……アリスのお母さんは、亡くなったんだ」

思いもしていなかった死の告白に、ユークは一瞬茫然とした。

アクアは、しかし予想はしていたのだろう。シヨックからユークよりも早く立ち直ると「……お悔やみ、申し上げます」と目を伏せる。

「いや……いいんだ。ありがとう」

「……式は」

「身内だけで済ませた。呼ぶのも……すまないね。ああ、もしかして。病院の人が言っていたよ、うちの息子が連れて来ていた銀髪の男の子と女の子……」

「……私と、ドラコです」

そうか、と瞳を揺らしながら、ライフはもう一度アクアの頭を撫で

た。

「……ありがとう、ね」

「……アリス、言っていました。お母様にお父様を会わせたい、会ってもらわなきや……もう会えなくなるかもしれないのに、って。……間に合わなかったらどうするつもりだろう、って……そんなことないって、わ、わたし……きつと、お父様は帰ってくるわって、言って……」

アクアは言葉を震わせると、滲んだ涙を指で拭った。

リイフは、アクアの頭に手を置いたまま、奥歯を噛み締め顔を伏せる。

「……わたし……私、アリスのお母様のこと、好きでした。凄く綺麗で、最近はお話は、あの、出来なかったんです、けど……むかし、アリスのおうちに伺ったとき、マドレーヌがすすごく美味しくて……アリスが、甘いものあんまり好きじゃないんだけど、でも私お菓子作るのが好きなのよ、って、笑って……だから、作ったお菓子を食べてくれて、美味しいって言ってくれる人がいて、嬉しいって……ちよつと難しい子だけど、アリスと、仲良くしてねって……髪の毛、可愛くしてくれたり、女の子も欲しかったな、って、言って、だから私、また来ますって……あれが、さいごで。その『また』のやくそくに、なんども……」

止まらぬ涙を、アクアは両手で拭った。

アクアの小さな身体を、リイフはそつと抱き締める。大人の男の人でも、瞳に涙を浮かべることがあるのだということ、ユークはそのとき初めて知った。

大人は泣かないものだ、と、ずっと思っていたから。

「……ありがとう、ありがとう、アクア……」



それから丸々一年が過ぎた頃、長い家出からアリスは戻ってきた。戻って来たアリスは、口調も性格も随分と変わっていた。今まで穏やかだった彼は、いつの間にか周りに人を寄せ付けない雰囲気纏っ

ていたし、荒い口調と空気に、どう接していいのか周りは戸惑っていた。

それでも、ユークは嬉しかった。ずっと慕っていた彼が、やっと帰ってきてくれたのだ。

「アリス・フィスナー！」

飛びつけば、なんだかんだで無下にはされない。きちんと受け止めてくれる。

驚いたとき僅かに見開かれる目も、穏やかな海のような色の瞳も、変わってはいないのだ。

頭にはぐるりと巻かれた包帯に、頬には絆創膏。最近のアリスは、いつ見ても怪我をしている。

父親との喧嘩で出来た傷なのだと、アクアは少し怒ったように言っていた。

「よっくも飽きずに俺に構うよな、お前も」

「だって、アリスはアリスです。そうでしょう？」

昔よりも随分と着崩された制服。左の耳には、雪の形をしたピアスが揺れている。

随分と背が伸びたし、昔は薄かった体格も厚みを増していた。

「ホグワーツにご入学、おめでとうございます」

やっと帰ってきたのに、すぐ会えなくなってしまう。ユークがホグワーツに入学するのは二年後だ。まだ、待っていないといけないのか。

それでも、待てばアリスはそこにいる。

アリスの行方が知れなかった今までと違って、アリスの居場所はちゃんと分かっている。そこは、全然違っていた。

「おお、どうもな」

軽くアリスは頷くと、ふと思いついたように制服の上着を脱ぎ、ユークに着せかけた。

小柄なユークはすっぽりと包まれてしまう。

「やるよ、それ。あとこれも」

ネクタイも投げ渡され、ユークは手が袖から出ていない状況ながら

も慌てて受け止めた。

「僕、もう制服持ってますよ……？」

「知ってるよ。でもそれ、お前の歳の時俺がピッタリだったやつだぜ。やっぱお前、ちいせえな」

笑うアリスに唇を尖らせる。

背が伸びないのはユークの小さな悩みの種なのだ。父は普通に背丈があるから、きつとそのうち伸びるだろうとは信じているもの、姉であるアクアも小柄であるから少し心配している。

「俺がいないと泣いちゃうだろ、お前」

「なっ、泣きませんよ！」

慌てて頭を振った。誰だ、本人にバラしたのは。後でとっちめてやる。

そう胸の中で誓いつつも、アリスのネクタイを胸に抱く。

「……お前のその変わらないところ、俺、結構好きなんだよ。変な奴つてやっぱ変わんねえよな」

「……アリスも、変わってないですよ」

「そんなこと言うの、お前だけだよ、本当に」

それじゃあよ、と、アリスはユークの髪を乱暴に撫でた。わ、と頭に手を遣ると、楽しげにアリスは笑う。

何かから吹っ切れたような、そんな笑顔だった。

「……………」

魔法界の『中立不可侵』を守るフィスナー家。その直系であるアリス・フィスナー。

彼のように真面目で勤勉でありなさいと、ベルフェゴール家長男であるユークに、両親は事あるごとに言っていた。文武共に優秀で、家柄に決して驕ることなく、家業を継ぐに相応しい人物であると。

しかし、その頃のアリスと今のアリスを見比べると、今の方がずっと、ずっと自由で、楽しそうだった。

きつとアリスは、自分を繋ぐ全ての鎖を一度振り払ったのだ。

親からも、魔法界からも一度離れることで、全てのしがらみから逃げたのだ。

そこまでの勇氣は、自分にはない。

そこまで吹っ切れることは、ユークには出来ない。

それでも。

「待っていてください、きっと、追いつきますから！」

背を向け歩き出していたアリスは、振り返るとひらひらと手を振った。

憧れ続けることくらいなら、背中を追いかけ続けることくらいなら、僕にだってきつと出来るだろう。

不死鳥の騎士団編 第1話 思惑

——砕け散った幻想を、一つずつ集めていったら、最後はどんな絵が出来るだろう。

細やかな破片は、集め切れない。大きく割れた破片をどう組み合わせても、完成する絵は元のものとはかけ離れる。

砕けた破片は、拾い集めようとしたぼくの指先を、鋭く切り刻む。血の雫が、破片に降りかかる。また一步、元のものとはかけ離れていく。

それでも、破片を集めて組み合わせ続ける。顔を歪めて、苦痛に身を焦がしながら。

——歪に完成したそれは、己に絶望しかもたらさないと知りながら。

「ぼくが欲しかったのは、こんなのじゃない……っ」

完成した絵を、ぼくは地面に叩きつけた。



ハリー・ポッターが優勝杯の『移動キー』を掴んで逃走し、ほとんど全ての死喰い人も姿を消した墓場で——立っているのは、三人だけだった。

とうとう元の姿を手に入れたヴォルデモート、そして、ピーター・ペティグリュー。残る一人、嚴重に黒いフードを被っている彼の名を、アンバー・ベルフェゴールと言う。『悪魔』の名を持つ純血家系の一つ、ベルフェゴール家当主であり、アクアマリン・ベルフェゴールの父親であった。

ヴォルデモートは、しばらく憎々しげにハリー・ポッターが消えた辺りを睨みつけていたが、やがて墓石の隅へと歩み寄った。

そこには、セドリック・ダイゴリーの遺体があった。むんずとヴォ

ルデモートはセドリックの髪を掴むと引きずり起こす。ダランと生氣もなく項垂れる彼に、ヴォルデモートは囁いた。

「役者だな、セドリック・デイゴリーよ」

そして瞬時に『磔の呪文』を掛ける。死者には何の苦痛ももたらさないはずのその呪いに、セドリック・デイゴリーは激しく呻き、もがいた。

ピーター・ペティグリューとアンバー・ベルフェゴールは、思わずヴォルデモートの元に駆け寄ると、目の前の光景に目を瞠った。

「し、死んだはずでは……」

アンバー・ベルフェゴールが震える声で呟く。

確かに彼は、ヴォルデモートが放った緑の閃光が、彼の胸を貫くのを見ていたのだ。

「死んではない。先ほどの直前呪文を見ただろう？ 彼の者が姿を現したか？ ——死んではいなかったのだ」

やがて、ヴォルデモートは杖をセドリック・デイゴリーから放した。肩で息をついている彼の髪を再び掴み持ち上げると、今度こそ彼は瞳を開けた。

この後に及んでなお、精悍で、しつかりとした光を瞳に宿していた。「ハツフルパフの学生は油断ならない。必ず、一矢報いてやろうとする。それを教えてくれたのは、幣原直、お前だったな……」

誰に向けるでもなく呟いたヴォルデモートの言葉を理解出来たのは、この場には誰一人としていなかった。

ヴォルデモートは、セドリック・デイゴリーのローブのポケットに手をつっ込んだ。やがて一枚の紙を掴み出す。

真っ黒に焦げ付いた紙切れだった。僅かに焼け焦げていない部分には、幾何学模様が垣間見える。

ヴォルデモートが指を鳴らすと、その紙からぼやりと人魂のようなものが浮かび上がった。そのことに、アンバー・ベルフェゴールとピーター・ペティグリューは、それぞれ違った感情を伴う声を漏らした。

「やはりお前か……幣原秋よ」

髪の長い少年が、こちらを凜とした眼差しで睨みつけている。
ヴォルデモートも、その少年の目に応えるように、赤く鋭い瞳を向けた。

「……秋」

ピーター・ペティグリューは、愕然とした表情でその少年を見ていた。

忘れていたかったことを突き付けられたように、その顔は歪んでいた。

「……幣原秋、ですって？」

アンバー・ベルフェゴールは、しばらく前に『週刊魔女』に載った、とある記事を思い返していた。ハリー・ポッターの双子の弟、アキ・ポッター。彼が、あの闇祓い、幣原秋と全く変わらぬ見た目であること。

妻からもたらされたその情報は、ベルフェゴールの心中をざわめかせるに足るものだった。

「アンバーよ。この勇敢な青年、セドリック・ダイゴリーの処置については貴様に一括しよう」

そう言われ、慌ててアンバー・ベルフェゴールは片膝をついた。視線を下げたまま、頷く。

「ただし、絶対に殺すなよ。傀儡として、我らの人形として動けるように躡けるのだ。よいな？」

「御意」

「期待している」との言葉を残し、ヴォルデモートは「とつとと行くぞ、ワームテール」とすぐ近くの従者を蹴り上げると、姿を消した。



アクアマリン・ベルフェゴールは目を見開いた。

「……やあ、アクア」

つい昨日、彼のことを悼み、全校生徒で杯を掲げたばかりだということ。どうしてその張本人が、しかも、私の家の地下牢に閉じ込めら

れているのだ。

「んー、なんか、生き残っちゃって。君の彼氏くんのおかげでね」

そう軽く言わないで欲しい。

「いやあ、まさか君の家だとは。そうか、ベルフェゴールなんてそうでもない苗字だよね、その時点で気付けば良かったや。それにしても、広いお屋敷だね。しかも、こんな地下牢にまで掃除の手が行き届いているとは、驚くものだ」

「……私も、ちよくちよくここに放り込まれてたから」

言葉少なに呟くと、へえ、とセドリックは目を瞬かせた。

拷問を受けたのだろう、身体の至るところに生々しい傷があるが、しかし彼にはあまり堪えていないようだ。表情も今までと変わらさず生気がある。

「しかし、友人の家だと思うと、なんだか楽しくなってくるね」

「……友人？ ……私と、あなたが？」

「そう。君はアキの友人だろう？ それなら、僕と君も友人だ」

……なんとという論理の人だろうか、と、アクアは眉を寄せると小さく頭を振った。

アキと同類の匂いがする。人懐っこく、誰とでも友人になれる彼と同じ人種なのだろう。人見知りの自分とは大きく違って。

「……姉上、父上がお呼びですよ。いつまで喋っているのかと——」

そう言いながら地下牢へ続く階段を降りてきたのは、アクアの弟、ユークレース・ベルフェゴールだ。ユークもまた、セドリックの姿を見て驚いたように目を瞠った。セドリックとアクアたちを隔てる鉄格子に駆け寄ると、慌てて鉄格子を掴んでガタガタと揺さぶる。

「え、ええええええ!? どういうことなんです、どうしてセドリック・デイゴリーがうちに……!?!」

「うん、まあ、話すとき長くなるのだけれど」

はは、とセドリックは、いつそのこと楽しげだった。監禁されているとは到底思えない。

「死んだはずじゃ……」

「うーん、それが死んでなかったみたいで」

「軽く言わないでください!」

さすがは私の弟、思うことは同じだったか。

「……ユーク。父様が呼んでいるの?」

「あ、そうだった。早く上がってくるように、と。話したいことがあるようです」

「話したいこと? ……何かしら」

「さあ? とユークはこてんと首を傾げた。自分と違って、感情表現が豊かだ。アキに似ている、と、ふと思う。」

「……デイゴリー。出してあげたいのは山々だけれど、そうも出来ない。……ごめんなさい」

「分かっているよ。そこまで君達に頼むことは出来ないさ。休みの間だけでも、たまに顔を出してくれるだけで、気晴らしになるから」

セドリツクはそう言うと、人好きのする笑顔を浮かべて見せた。ユークも心配げに、セドリツクを伺っている。

ユークの目がちらちらとセドリツクの生傷に移るのを見てとったか、セドリツクは「何、名誉の負傷さ」と朗らかに笑った。

「……そうだ。あと、僕が生きてるってことは、僕と君達の秘密にしておいてもらえないかな?」

「……アキにも?」

うーん、とセドリツクは考え込んだ。『アキ』という名前に反応してか、ユークの眉が不機嫌そうにぎゅっと寄る。何故だか、ユークはアキのことが嫌いなのだ。その理由の原因は間違いなくアクアなのだが、アクアはその理由を知ることはない。

「アキなら、大丈夫か……あいつなら、誰が信用出来て誰が信用出来ないか、分かるだろうし、それに」

セドリツクは素直に微笑んだ。

「君の信頼する人だしね」

……どうして、そんなに素直に、心から人を信じる事が出来るのか。

さっぱり分からない、そう思いながらも、アクアは小さく頷いたのだった。



「魔法省は『例のあの人』が復活したというハリー・ポッターの言葉をもみ消した」

深夜。家に帰り着いたリイフ・フィスナーは、眠っているであろう息子を起こさぬよう、そうつと階段を上り——そんな声に出迎えられた。

「——起きていたのか」

「親父殿よ。俺がどんな子どもなのか、まだ実感がねえみたいだな？ 夜更かしと喧嘩は不良の得意分野だぜ」

「………違うない」

そのままリイフはリビングへと入ると、カバンをその辺りに放り投げ、バルコニーへと出た。ウッドチェアに腰を下ろす。

リイフの正面にアリスも腰掛けると、足を組んだ。

「一本いいか」

「構わねえよ」

そうか、と呟き、リイフは懐からタバコのパッケージを出すと、そこから一本を取り出し口に咥えた。魔法で火を灯すと、大きく吸い込み、静かに吐き出す。

「お前も吸うか？」

「息子の非行の手伝いか？」

「私だつてそうそう『いい子』でいた訳じゃないさ………学生の頃も隠れて吸っていた。友人は眉を顰めていたがね」

「幣原秋のことか」

「ああ」

それを聞くと、アリスは僅かに首を傾けた。

「俺はいらねえや、興味もそんなにない。アキも嫌がりそうだしな」

「そうだね、あの子には嫌われそうだ。………ピアス増やしたか？」

「お前にや関係ない」

「そう」

つれなくあしらわれ、リイフは肩を竦めた。どうにも息子との距離感が掴めない。

まあ、こんなものなのだろう。これでなんとかやっていくしかないのだ。自分たちは

「……ああ、もみ消した。コーネリウスは残念ながら、そういう人物のようだ。自分の常識の範疇を超えた分野は受け入れられないと。事務処理は上手なのだがね」

「……アンタはどう思う?」

「ん?」

「アンタは、『例のあの人』が復活したと思うか?」

リイフはしばらく答えなかった。空にたなびいていく白い煙を見上げていた。

「ハリー・ポッターがそう言うのなら、そうなのだろうね」

「……人任せだな」

「そりゃあそうさ。自分の目で見た訳じゃない。ハリー・ポッターを信じるか、信じないか。こいつで世論は真つ二つさ」

「世界地図が二色に塗りつぶされる?」

アリスの端的な質問に、思わず笑みが零れた。

しかしリイフの笑みに、アリスは気を悪くしたようだ。ぎゅつと眉が寄る。

「お前は存外に賢いな」

「……闇の帝王と、不死鳥の騎士団の対立。グリフィンボールとスリザリンの対立は、再び……」

アリスの言葉を、リイフは一睨みで掻き消した。

「……なあ、アリス。……お前はさ、どうしたい?」

アリスは気圧されたように黙っていたが、「……どう、って」と小さく呟いた。

「好きな方、選んでいいぞ。お前の人生だ。この家継ぐも継がないも好きにしろ」

「……っ、継がないって選択肢、あるわけ——」

「……まあ、誰かがやらなきゃいけないことだ。だけどな、アリス、我

が息子よ。必ずしもお前がやらなきやいけない、つてことじやあない。昔のお前が望んでいたように、今から嫁を娶ったつて、養子取ったつて、本当は構わないんだ……純血の誇りは、既に僕が」
壊したのだから。

リイフは淡々と、そう告げた。

「フィスナー家に縛られなくても、いいんだ……お前は、昔っから、何かに縛られんのが大っ嫌いなガキだったな。名門の肩書きは重いだろう。フィスナーの苗字はお前を縛る。魔法界に、イギリスの魔法省に。やりたいことなんて絶対にやれない。なりたい職には絶対に就けない。好きなどころにも行けないし、ロクな休みも取れない。お前の将来は、お前が生まれる前から決まっている」

アリスの瞳が、僅かに揺れた。

迷うように、一度閉じられ——そして再び開かれた時には、意志の光が宿っていた。

「……人の考え、勝手に決めてんなよな」

リイフは鷹揚にアリスを見た。目の色合いは、僅かにアリスの方が深みがある。

——あいつの目も、こんな色だったな。

自分とよく似た息子の見た目に、随分前に亡くした妻の面影を見出して、リイフは僅かに微笑んだ。

無邪気な人だった。身体が弱いのに、お転婆な人だった。何よりも、自由な人だった。

フィスナー家の鳥籠に閉じ込めなければ、今もまだ、生きてくれたいたのかもしれない。

「バカだな、お前。こんな家、なくなっちゃえばいいのにつて思ってたのはお前だろ」

「それより、アンタの思惑に乗る方が気に入らない」

「お前は本当に、私のことが嫌いだね」

呆れて息を吐いた。

「……やってやんよ、親父殿。『中立不可侵フィスナー家』——継いでやる。だから」

俺は何をすればいい。

「…………ふふ」

リイフは楽しげに、碧の目を細めて息子を見た。

「そうだね…………じゃあ、まずは私のご飯を作ってくれないか？」

ぎゅつと寄せられていた眉が、ぽかんと離れた。

は、とアリスは目を瞬かせて父親を見る。呆然とした表情は、案外年相応だ。

「さつきからお腹が空いて仕方なかったんだよ。アリスが作ってくれるなら万々歳だ。お前の方が私より家事は上手だからね」

アリスはしばらく何を言われたのか分からないといった表情をしていたが、やがて苦虫を数十匹は噛み潰したような表情を浮かべた。

「俺はっ、アンタの…………」

『『そういうところが大嫌いだ』？』

「…………っ、そういうところが、俺は本当に、大っ嫌いだ!!」

第2話 侵される日常

白のクイーンをeの3に移すと、同じ場所にあった黒のナイトを盤から退場させた。黒のルークが、途端にeの6に滑り込んでくる。

取つてもいいが、と、ぼくは頭を悩ませた。そしたら遅くても三手後には、クイーンがビショップの餌食だ。

「毎日毎日、そう簡単に人死に事件は起きんわい」

プリベット通りの少し奥、マグノリア通りの公園のベンチで、チェス盤を挟んでぼくと向かい合っているのは、ペチュニアおばさんが見たら一瞬で記憶からも削除してしまいたいそうなくらいの浮浪者だ。

何年も洗ってなさそうなボロボロのコートを身にまとい、足元にはサンダル。綺麗な建物が立ち並ぶ通りにはなんとも似合わない人だ。この人が、しかし五年前に英国ナンバーワンチェスプレイヤーの称号を得た人だと知る人は少ない。

「じゃあ行方不明とか。そうじゃなくても、何か不審な事件とか、ないの？」

「聞かんな」

ルークがこちらの布陣に突っ込んでくる。

しかしこちらにも準備は万全だ。いつでも掛かってくるがよい。

「スペインの空港でストが起きてるくらいだ。後はこの日照りか」

「どっちも一昨日聞いた話だ」

「そうそう物珍しいニュースなど起きん」

「十四年前は起きただろう？ 色々」と

浮浪者のおじさんは、睨めつけるようにぼくを見た。

「坊主、幾つだつて言った？」

「もうすぐ十五さ。いや、三十五だったかな？」

肩を竦める。おじさんはフンと鼻を鳴らすと、ポーンを一步進ませた。

「十四年前はそりゃあ酷かった。イギリス中で何かしら起こっていた。テロやら人死にやら行方不明やらが。政府も狼狽えるばかりだし、誰もが信用ならねえし」

「もう一回そんな時代が来るとしたらさ、おじさん、どうする?」
ナイトを掴むと、黒のルークを排除する。すぐさま、クイーンが飛んできた。

あつさりとナイトは盤から取り上げられる。

「家に閉じこもって、一人でチェスをするしかねえわな。その時は坊主、お前が来い」

「無理だよ。そのときはぼく、ここにはいないもの」

満身創痍のクイーンを、やつとの思いで退避させながら、ぼくは言った。

ぼくの指し手を見ながら、おじさんは眩く。

「お前は、一人のクイーンを捨て駒に出来ない奴だな。クイーンは確かに強い駒だが、所詮駒だ、兵士だ、頭じゃない」

「……なるほど。『王より飛車を可愛がり』ってやつか」

「なんだ、それは」

「日本の将棋でよく言われる文句さ」

はああ、とぼくは息をついた。

首をぐるりと回し、我が兄、ハリー・ポッターが公園に入ってきたのに気がついて、おっと目を瞠る。

「アキじゃないか」

ハリーもぼくに気付くと、目を輝かせて走ってきた。髪に草がついていることを指摘すれば、「さっきまで芝生に寝転んでニュースを聞いてたから」とちよつと顔を赤らめる。

「そんなにニュースが見たいのか、お前ら。妙なガキどもだな」

「妙なガキどもの自覚がありますよ」

ハリーは渋い顔でそう言うと、ぼくの隣に座った。

ぼくとおじさんは、しばらく黙って駒を戦わせる。

決着がついたのは、それからしばらく経つてからのことだった。「雑魚め」とおじさんは大人げなくもぼくを嘲笑うと、チェスの駒を仕舞い、来たときと同じようにふらりとその場を去っていく。

公園にはぼくら二人だけが残された。

「誰かに監視されてるような気がするんだ」

ハリーは眉を寄せると、そう呟いた。ぼくは軽く請け負う。

「そりゃ、そうだろ。監視くらいされてるに決まってる」

「……え？」

『監視されているような気がする』と言ったのはハリーなのに、ハリーは目を瞬かせた。

「あんなことが起きたばつかなのに、君を監視しないわけがないじゃん？ 二年前の夏休みを思い出しなよ。君のそれは被害妄想じゃない、れっきとした監視だよ」

それにしても、今度は一体誰だろう。

ハリーが鋭いのか、それとも監視が下手くそなのか。闇祓いの隠密試験だったら落第してるぞ。

そろそろ日が落ちてきた折、公園にダドリー軍団がやってきた。やがてダドリーは皆と別れると、一人になって公園を出て行く。

ダドリーよりも遅く家に帰りついたら、何を言われるか分かったもんじゃない。ぼくとハリーは、共にダドリーの後を追いかけた。

「やあ、ビツクD」

ハリーは不自然なくらい明るく挨拶をした。ギョツとしたようにダドリーは振り返ると、ぼくとハリーを落ち着きなく見る。

最近のハリーは気が滅入っているのか、隙あらばダドリーを挑発しようとする。今回は、ぼくがいるからハリーが荒れることはないと思っただけ、ダドリーの緊張が少し緩むのが分かった。

しばらくぼくら三人は無言で、家路を急いだ。

ちらりと背後を振り返る。ハリーの監視をしているだろう人は、ついて来ているのだろうか。気配がないのは、上手く姿を隠しているだけだろうか。

急に、冷蔵庫の中に身体を突っ込んでしまったのかと、そう思った。先ほどまで星が瞬いていた空は、何故か真つ暗闇だ。路地の街灯までも明かりが消え去る。辺りはシンと静まり返り、驚くほどに寒い。

「え、ぼ、僕——」

「黙って！」

ハリーが思わず声を上げるのを、諫めた。杖を抜き、周囲に目を配

る。

この寒気には、覚えがあった。

「何をするつもりだ？ やめろ！」

「ダドリー、動くな！」

「見えない！ 目が見えなくなったんだ！」

「黙ってろって——」

ダドリーがやたらめったら振り回した腕が、ぼくに直撃した。真つ暗闇の中だったので、全く気付かなかった。

体重差か体格差か、何にせよやすやすと吹き飛ばされる。そのついでに杖が手から離れ、どこかに転がった。

「ダドリーのバカ野郎！ 大丈夫、アキ——」

ハリーの言葉は、後半掻き消えた。

——これは一体、どんな悪夢なのか。もしくは、どんな喜劇なのだろうか。

こんなマグルだらけの町に、吸魂鬼が二体、立っているなんて。

胸がざわめく。身体の中が、冷たさで満たされる。同時に、記憶が雪崩れてくる。

——また、あの感覚だ。

アキと秋が混じり合う。明確な境目を見失う。

ぼくの記憶。秋の記憶。

いや——脳みそを共有しているのに、記憶に違いなんてあるのだろうか。

秋が、死体の山の正面で、ぼくに微笑み掛けてくる。左手を伸ばしている。

『一緒に死のう、アキ』

その手を取らなければ。ぼくは——

——ぼくは、誰だ。アキか、秋か。

——父さん、母さん。

「や、やめろ！ こんなことやめろ、殴るぞ！」

「ダドリー、だま——」

鈍い音。ドサツと何かが倒れる音。ハリーも流れ弾に当たったようだ。

「ダドリーの大バカ！」

ダドリーは走り回っているようだ。慌ててぼくは「アクシオ、ダドリー！」と叫び、左の指を振る。

ダドリーがぼくに体当たりしてきたかと思った。気付けば、ぼくはダドリーの下敷きになってきた。

杖なしだと、魔力が上手く制御出来ないのが難点だ。

「ルーモス！」

ハリーが叫ぶと、ハリーの杖がボヤツと灯りを灯した。ハリーは慌てて立ち上がると、杖を引つ掴み、ぼくとダドリーの前に立ちふさがると、吸魂鬼に対して杖を向ける。

「エクスペクト・パトローナム！」

銀色の牡鹿が、ハリーの杖から飛び出した。吸魂鬼は吹き飛ばされ、逃げて行く。

守護霊が暗闇に溶けてなくなった瞬間、ハリーはふらりと座り込んだ。

「ハリー、大丈夫!？」

やっとこさダドリーの下から抜け出したぼくは、ハリーの元に駆け寄った。両手を取ると、驚くほどに冷たい。

気付けば、夜空の月や星の瞬きや街灯は普段通りに光っていた。

ダドリーはしばらく気を失っていたようだが、やがて目を覚ますとヒンヒン泣きながら震えていた。ぼくとハリーは目配せしあうと、それぞれダドリーの両脇を抱えようと身を屈めた。

その時、誰かが駆け出してくる音がした。ハリーは慌てて杖を持ち直すと、振り返る。

しかしその誰かがフィツグばあさんだと分かると、ハリーは素早く後ろ手に杖を隠した。

しかし、フィツグばあさんが叫んだ言葉に、ぼくらは頭をガンと強く殴られたような衝撃を受けた。

「バカ、そいつをしまうんじゃない！ まだ他にもそのへんに残ってたらどうするんだね？ ——アイタツ、アキ、杖をそのへんに転がらせたままにしておくんじゃないよ！」

フィッグばあさんがぼくの杖に躓きそうになって、ぼくは慌てて駆け寄ると杖を回収した。危ない、折れたら大変だ。オリバンダーさんの家をまた半壊させなければならぬ。

「アキ、絶対に油断するんじゃないよ！ ああ、マンダングス・フレツチャーのやつめ、殺してやる！ ちよろまかした大鍋があるとかで——言わんこつちやない、吸魂鬼！ ぐずぐずしてる間はないよ！ 急いで、家に帰してやんなきゃ！ ああ、あいつめ、殺してやる!!」

「お、おばあさんが——あなたが魔女？」

ハリーは呆然とした表情で呟いた。

フィッグばあさんは苦々しげな顔で言う。

「あたしや、出来損ないのスクイブだよ。あんたらのことをずっと見てたんだ。さあ、早く——」

ダドリーの腕の下にハリーは素早く潜り込む。ぼくもダドリーを支えようとしたが、フィッグばあさんに「あんたはちやんと見張つてな！」と叫ばれてしまった。

ここはマグルの街中だ、ぷかぷか浮く担架を出す訳にもいかない。ぼくは杖から守護霊であるふくろうを生み出すと、周囲に本当にもういないのかどうかを確認させる。

その時、マンダングス・フレツチャーが、バシツという音とともに『姿あらわし』した。瞬時にフィッグばあさんが口汚く彼を罵る。

マンダングスはダンブルドアに知らせに『姿くらまし』して、ぼくらはやっと家に辿り着いた。

バーノンおじさんが怒髪天を衝く勢いで怒り狂う中、ふくろうが開いていた窓からすいと入り、そしてハリーの足元に羊皮紙の封筒を放り投げた。ぼくとハリーは目配せをし合う。

ハリーは息を呑むと、羊皮紙を広げた。慌てて目を走らせる。

「僕宛てだ、魔法省からだ——『未成年魔法使いの妥当な制限に関する法令』——退学処分!？」

ハリーは胃がひっくり返ったような絶望的な顔をした。

ぼくは目を剥いて、見間違いではないかと二度ほど文言を読み返す。

「ふざけてる……そんなはずはない」

やっと出てきたのは、そんな言葉だった。

「ありえない……この法令は、自分の身体に危険が及んだ時止むを得ず、の場合は除外されるはずだ……三年の夏休みの時みたいに」

ぼくの声に、ハリーは少しだけ我に返ったようだった。それにしたって、蒼白な顔は変わりはないが。

その時、バーンツと大きな音がしてぼくらは目をやった。メンフロウだ、透明な窓ガラスというものがこの世にあるということを知らなかったのだろう、目を回している。

ハリーは走って窓をこじ開けると、フロウから手紙を受け取った。震える手で開くと、目を通す。

「アーサーおじさんからだ——ダンブルドアが收拾を付けようとしてくれているらしい——この家を離れるなど」

さっとハリーはぼくを見た。信じていいのか分からない、とその目は訴えかけていた。

バーノンおじさんは怒りにわななく目でぼくらを見ると叫んだ。

「さてはお前ら、息子にへんてこりんな呪文をかけて、ダドリーをこうしたんだ、そうだな!？」

「僕らじゃない!! 吸魂鬼がいたんだ、二人も!」

ハリーが叫び返す。

「キューコンキとか言うのは一体全体なんなんだ?」

「魔法使いの監獄の看守だわ。アズカバンの」

誰もが息を呑んで、今の言葉を発した人物を——ペチユニアおばさんを見つめた。

しん、と、部屋中が静まり返る。

「どうして知ってるの?」

静寂を切り裂いたのは、ハリーの唾然とした声だった。

「……聞こえたのよ、ずっと昔——あのとんでもない若造が——あの

妹にそいつらのことを話しているのを」

「僕の父さんと母さんのことを言っているのなら、どうして名前と呼ぶはないの?」

ペチュニアおばさんはハリーの言葉を黙殺した。

バーノンおじさんは、まさか自分の妻からそんな言葉が出てくるとはと驚愕に口をパクパクさせていた。

「——それじゃ——そいつらは——本当にいるのだな? キューコンなんとかは?」

ペチュニアおばさんが頷く。その時再びふくろうが、今度は窓ガラスにぶち当たることなく部屋のテーブルの上に降り立った。

魔法省の公式文書だ、封蝋がさつきと同じだ——ハリーは慌ててその封筒を開封する。

「……杖を破壊する決定を変更——懲戒尋問まで持つてていい……退学も当日決定」

掠れる声で、ハリーは文書を途切れ途切れに読んだ。ハリーの肩が安堵に小さく揺れる。

再び現れたふくろうに、バーノンおじさんはやってられないとばかりに怒鳴った。ハリーの代わりにふくろうから手紙を受け取ると、ふくろうはぼくを品定めするような目で見て、ぱつと帰っていった。動物には相変わらず嫌われる。

手紙はシリウスからだった。

『アーサーが、何が起こったのかを、今、皆に話してくれた。何かあるうとも、決して家を離れてはいけない。アキ、決してハリーを家から出すな』

この手紙じゃ、ハリーは決して納得しないだろうな、と思いつつも、手紙をハリーに渡した。

予想通り、ハリーは眉を寄せて手紙を見ると、羊皮紙を裏返し落胆した表情を見せる。

「今夜何が起こったのか、本当のことを言え! キューコンダーとかがダドリーを傷つけたのなら、なんでお前が退学になる?」

「僕が吸魂鬼を追い払うのに守護霊の呪文を使ったからだ。あいつら

に対しては、それしか効かない」

「キューコントイドとかは、なんでまたリトル・ウインジングにいた？」

「知らない」

ハリーはうんざりした声で呟いた。顔色が悪い。

「おじさん。ぼくが説明しよう——」

「お前らに関係があるんだ。それ以外ここに現れる理由があるか？

お前らだ、全部お前らのせいだ」

バーノンおじさんはぼくの声を遮って、口角泡を飛ばした。

「妙ちきりんな監獄とやらをガードしとるそいつらが現れたのは何故だ!?!」

「ヴォルデモートが送り込んだに違いない」

ハリーが硬い声で呟いた。

「ヴォルデ——待てよ。その名前は聞いたことがある。確か、そいつは」

「そう、僕の両親を殺した」

「しかし、そいつは死んだ。あの大男がそう言ったはずだ」

「戻ってきたんだ。ついこの前、蘇った」

ハリーがしかめっ面をした。頭が痛むのか。

しかしペチュニアおばさんは、今までとは全く違う表情でぼくとハリーを見つめていた。

その表情は、幣原の記憶で一度見た、リリーに「私の姉よ」と紹介された頃のペチュニアおばさんに、ふと重なった。

「戻ってきた?」

ハリーが目を瞬かせる。

そして息を吸い込むと、ペチュニアおばさんを見て、ゆっくりと告げた。

——リリーと全く同じ瞳だ。

ぼくはハリーを見て初めて、そう感じた。

「そうなんだ。一ヶ月前に戻ってきた。僕は見たんだ」

バーノンおじさんは、今日の前で起きている光景が信じられないと

ばかりに呆然としていた。

「お前の両親を殺したヴォルデナントかが戻ったと、そう言うのか？

そいつが、お前らにキューコンバーをけしかけたと？」

「そうらしい」

「なるほど。——さて、これで決まりだ。小僧！ この家を出て行つてもらうぞ！」

バーノンおじさんの怒鳴り声に、全員が飛び上がった。

「聞こえただろう、出て行け！ お前もだ、アキ！ とつくの昔にそうすべきだった——出て行け、もうたくさんだ！ お前らのせいでこの家は滅茶苦茶だ、もうこれ以上妻と息子を危険に晒させはせん！ 出て行け!!」

ハリーは愕然とした表情でバーノンおじさんを見ていた。

瞬間、目も眩むような激しい頭痛が巻き起こり、思わず額を押さえた。膝をつく。

——お前か、秋。

——何を言いたい。

「……ハリーは出て行かせない。そう言ったはずだ」

立ち上がると、ぼくはバーノン・ダーズリー氏に歩み寄った。

変わった声音に、ダーズリー氏の瞳が驚きに見開かれる。

「……秋」

囁くようなその声に、ぼくは笑顔を向けた。

「久しぶり……ペチュニア」

彼女は、愕然とぼくをただ見つめていた。

風が渦巻く。

「この家の守護の呪文のことも。ハリーに流れる血のことも。リリーと血縁であるペチュニアのことも、言ったはずだよ、ダーズリー。忘れたとは、言わせない」

恐怖に、ダーズリー氏は目を見開いた。

「ハリーを放り出したなら、この家の守護は消えてなくなる。そうしたら一体どうなるだろうね？ ……見たはずだ、あなたも。ジェームズ・ポッターとリリー・ポッターの生家が、どんな惨状になったかを。

……今更放り出さないでくれ。断るなら、初めから——承諾しないでくれ。そうしたなら、ぼくらは、あなた方の平穩を犯しはしなかっただろうに」

再び、部屋の中はシンと静まり返った。

「……この子は、バーノン、ここに置かないといけません」

ペチュニアの、意志を伴った言葉に、ぼくは胸を撫で下ろした。

「な——なんと?」

「ここに置くのです」

「しかしペチュニアや……」

ペチュニアは、ダーズリー氏を無視してハリーを見た。

「お前は自分の部屋にいなさい。外に出ては行けない。さあ、寝なさい」

ハリーはぼくとペチュニアを口を開けて交互に見つめていたが、やがてぼくを見た。

どうということなのだ、と、強い眼差しが告げていた。

——参ったな。

ぼくはあの目に弱いのに。

「……幣原秋。私はあなたを信じます。……私はあなたとの約束を守る。だからあなたも、約束を守りなさい」

「——仰せのままに」

ぼくは静かに、ペチュニアに頭を垂れた。

第3話 二択

「……………、あー」

カーテンから差し込む日差しに焼かれ、ぼくは目を覚ました。見慣れぬベッド、見慣れぬカーテン、見慣れぬ机、見慣れぬ部屋。——
ジェームズ・ポッターの生家。

……嫌な夢を見た、気がする。覚えていないけれど。覚えていなくて良かった、とも思う。忘れることは、あまり得意ではないのだ。

余計なことばかりを覚えている。

忘れたことばかりを、覚えているのだ。

身を起こした。もう一眠りする気も起きず、身支度を整えると時計を見る。

まだ、朝の六時を少し過ぎたくらいか。降りていくには、少々早すぎる時間帯だ。

夏休みの宿題を少しばかりやって、もともとの部屋にあった本をパラパラ読んだ頃合いで、七時が過ぎた。そろそろ大丈夫か、とぼくは本をパタンと閉じると、部屋を出た。

木造りの、ちよつと不思議な家だ。昨日、ここに初めて来たときは、今にも崩れてしまうんじゃないかと驚いた。ヘンテコな木箱がいくつも積み重なったようなお家なんて、初めて見たものだから。

木のお家は、石造りのホグワーツより、なんだか少し暖かく感じられた。

リビングを開けると、トーストの焼ける香ばしい匂いと、コーヒーの香りが漂ってきた。

ジェームズのお母さん——ユーフェミアさん、と言っていたっけ——は、ぼくの姿を見ると「あら、早いね。おはよう、秋くん」とにっこりと笑った。

「あ、あの、はい、おはようございます……」

やっぱりもう少しゆっくりしてから降りてくるべきだったか。

僅かに目を伏せた瞬間、両頬に手が添えられた。ジェームズのお母さんの手だった。穏やかに、ぼくの目を覗き込んでいる。ジェームズ

のハシバミ色の目と、同じ目だ。

「秋くん、ジエームズを起こしてきてくれる？ あの子、寝汚いから。夏休みだと言っても、いつまでも眠ってちゃダメよ。『眠れるドラゴンをくすぐるべからず』なんて言うけれど、ジエームズはくすぐっても起きないわ。覚悟してね？」

「あ……はい」

頷くと、優しく頭を撫でられた。何だか、変な気分になる。

撫でられた部分をなんとなしに手で触りながら、ぼくは先ほど下ってきた階段を上った。ジエームズの部屋は、確か最上階だったはずだ。

うねうねと入り組んだ廊下や階段を、昨日案内された記憶を頼りに歩く。

やがて、目的の部屋へと辿り着いた。温かみのある赤い木の扉に、ちよつぱり歪な文字で『じえーむず』と書いてある表札が掛かっている。

軽くノックしたが、返事はなかった。そこまでは期待しちやいな、い、ぼくも。

ドアを押し開け中に入ると、壁に貼られたクイディッチ選手のポスターに出迎えられた。ビュンビュン飛び回ってはクワツフルやらを忙しなく投げ合っている。目が回りそうだ。

足元に適当に放られているトランクに足を取られそうになって、ぼくは慌てて飛び退いた。半開きになっているクローゼットに、本棚はあるものの、中身は半分ほどしか詰まっておらず、残りの半分は床やら机やらベッド脇やらに散乱している。

ベッドの上で大の字になって眠っているジエームズを起こすより先に、まずは紅色の分厚いカーテンを開けるのが先だ。

窓を開け、大きく息を吸い込み、吐き出した。ここからは、この辺り一帯、ゴドリックの谷を一望出来る。

「ジエームズ、朝だよ、起きて」

新鮮な空気を肺いっぱいに取り込んだところで、ぼくはジエームズを起こしに掛かった。

まずは肩を軽く揺さぶりながら、声を掛けてみる。しかし、このくらいじゃジエームズは目を覚まさない。

「起ーきーてー、ジエームズ、朝だよー！」

強く揺さぶるも、ジエームズは幸せそうにむにやむにやと言葉にならない声を漏らした。

「ジエームズー！」

毛布を剥ぎ取ると、ジエームズは眉間にシワを寄せて、毛布を探すように空中に手を伸ばした。

「起きて、起きてっば……って、ちよつとー！」

ジエームズを再び揺り起こそうと手を伸ばしたぼくの腕を、ジエームズは掴むと遠慮なく引っ張った。

堪えきれずベッドに倒れ込むぼくを、ジエームズは容赦なく抱きしめる。

「んー、秋……秋の音がする……」

「はっ、離して、ジエームズ……っ！」

じたばたともがくも、もがけばもがくほどにジエームズのホールドは強まっていく。

「ジエームズっ、おいつ、プロングズー！」

「あー、レイブン、あつたかーい……ええ、僕のためにその服、着てくれるの……うへへ」

「一体どんな夢を見てんだよ!? ……っひ」

もぞり、と、ジエームズの手が服の中に入ってきたことで、ぼくの堪忍袋の緒もぷつつん切れた。

穏やかに揺れていたカーテンが、突如として暴風に巻かれたようになってくると踊る。地面に散乱していたものは、旋風によって端に吹き飛ばされた。

「あ、や、やあおはよう、レイブン……」

「プロングズ」

壁に叩きつけられて、ジエームズはようやくと目を覚ましたようだ。

はは、と床に座り込み笑うジエームズを、腕を組み見下ろした。

「一体何を怒ってらっしやるので？ ま、まさか、僕の夢を垣間見た!?」

「へえ、ぼくに怒られるような夢を見ていたの？」

「やべ、墓穴掘った」

風が、部屋の中で渦を巻く。ぼくの長い髪を、風が揺らしている。

「……選ばせてあげよう、プロングズ」

ぼくはにっこりと笑った。

「ここから紐なしバンジージャンプか、明日からきつちりばつちりしつかり起きるか、の二択だ」



それからのハリーは、荒れていた。部屋に閉じこもり、ご飯の時にも降りてこない。

きつと、シリウスとロン、ハーマイオニーに宛てた手紙の返事がなかなか返ってこないことに、腹を立てているのだと思う。思春期だろうか。

「おい小僧」

ぼくは居間で付けっ放しにされていたテレビのニュースを見ていたのだが（ハリーがニュースを見ていると文句を言うのに、ぼくには言わないのは、多分……いや、やめておこう）、おじさんの声に顔を上げた。

「わしらは出かける。上にいるあやつにも伝えろ」

「どこに？」

『全英郊外芝生手入れコンテスト』の授賞式だ」

「うん、どうぞ。行ってらっしやい」

バーノンおじさんは、ぼくの気のない受け答えに渋い顔をした。

「この家から出てはならん」

「ハリーが窓から飛び降りようと思わなければね」

「……鉄格子をつけるべきか」

「さすがに非常識だと思うよ。もう一回空飛ぶ車の登場かな？」

まあ、あの車は今頃ホグワーツの『禁じられた森』で野生化してるんだらうけど。

「……分かっておるのか？ わしら全員が、この家からいなくなるんだぞ？」

「ああ」

ぼくはそこでやっと、テレビから目を離してバーノンおじさんを見た。おじさんの手に持っているのは、その案内の公文書だろうか。それを見て、ぼくはにやりと笑った。

「分かってるよ」

彼らが車に乗り込むのを、その車がエンジン音と共に駐車場を滑り出すのを、ぼくはレースのカーテン越しに見つめていた。そしてさまざま階段を駆け上がると、部屋のドアを勢い良く開け放ち、ぼんやりとベッドに寝転がっているハリーに笑顔で叫んだ。

「ハリー、荷物をまとめて！ 用意をするんだ！」



「さすが、と言うか、何というか……準備がいいというか、手際がいいというか」

リーマスは少し頭を押さえていたが、横目でぼくを見た。

「どうして、私たちが今日迎えに来ることが分かったんだい？」

ぼくとハリーは、もうそれは準備万端、いつでも出発出来ますよ、な体制でスタンバっていた。部屋はもう綺麗にしてあるし、トランクやらヘドウィグの籠やらはもう既に玄関の前だ。

そんなぼくらの様子を見て、リーマスは呆れた声を漏らした。ぼくは端的に、それに答える。

「だって、『全英郊外芝生手入れコンテスト』なんて出したの、シリウスだろ？」

「……あの一等星が、一番私たちの中で公文書向きの文字を書けるから、そうしたのだけれど……そんな分かりやすい何かがあったかな？」

「封蝋に見覚えがあった」

「……君の記憶力を度外視していた」

苦々しい口ぶりだったが、リーマスの表情はほころんでいた。

やがてリーマスは、ダーズリー家に『全英芝生郊外芝生手入れコンテスト』が嘘八百だったことのお詫びと、ぼくとハリーが姿を消すことに対して心配は要らない、という旨の手紙をしたため終わったようだ。「よし」と呟き、用紙を手に取り読み返す。そして「大丈夫かな？」とぼくに手渡してきた。

受け取り「大丈夫だろ」と頷き、リーマスの手に握られていたボールペンを要求する。『リーマス・ルーピン』と書かれた署名の隣に、『幣原秋』と名前を書き加えてから、リーマスに用紙を返した。

「君の方が、あいつより存外字が綺麗だね」

「ああ、あの癖字は読みにくいでしょ」

「本当に。普段は神経質で几帳面だから、あの字の汚さには驚いたものだよ」

「あいつは読めればいいと思っっている節があるからね。人に読めない文字は書くべきじゃないとぼくは思うよ」

しかし、普段バーノンおじさんやペチュニアおばさん、それにダドリーがいるはずのキッチンに、リーマスやマッドアイや魔法使いがたくさんいる、という光景はとても変な感じがするな。

マッドアイは「魔法の目が調子が悪い」と呻いて、水を張ったグラスの中に義眼を漬けているし、すぐそこでは、ニンファドローラ・トンクスと名乗った若い魔女が、ハリーの前で『七変化』を披露している。「すごいものだ」

髪の色が紫からショッキングピンクに変わったのに、ぼくは感嘆の声を漏らした。ふふ、とリーマスは、トンクスを見て優しく微笑む。

「幣原秋の後輩だよ。『闇祓い』なんだ。マッドアイの秘蔵っ子でね」
「……それは、それは」

その言葉に、先ほどとは違った目でぼくはトンクスを見た。

ぼくとリーマスがあまりに不躰にトンクスを見つめ過ぎたせいか、彼女はこちらを振り返り、近付いてきた。

「何見てんの？ 面白いことでもあった？」

「君を見てたんだよ、ニンフアドーラ」

リーマスが微笑む。それにトunksは呆気に取られたように目を瞬かせていたが、やがてボツと頬を真っ赤に染めた。それも『七変化』の能力だろうか？

「に、ニンフアドーラって呼ばないでっていつも言ってるでしょ！」
「ああ、ごめんね。……そういうことで、彼女の話はファミリーネームで呼んであげて欲しい」

リーマスは、前半はトunksに、後半はぼくに対してそう告げた。

ぼくはこっくりと頷くと、トunksに対して「よろしく」と笑った。
「あ、うん！ ……えっと、その。話には聞いていたけど、改めて見ると、なんかすつごい不思議な感じ……」

「何が？」

「だって、あなた、幣原秋、なんでしょう？ 『黒衣の天才』、幣原秋。あなたの名前は、闇祓いの中では密やかに伝えられてる。時代の英雄で——そして、あなたのような人を二度と出さないようにって」

「……………」

「闇祓いはね、変わったよ。少なくとも今は、皆の憧れの、カッコイイ職業だ。エリートなのは変わらないし、物騒なものもそのまんまだけど」

そう言って、トunksはキラキラと輝く笑みを浮かべてみせた。

虚を突かれて、ぼくは黙り込む。

マッドアイがトunksを呼んだ。弾かれたように彼女はマッドアイの元に駆けつける。

それに、ぼくは金縛りが解けた気分で大きく息を吐いた。

「大丈夫？ アキ」

「……………うん、大丈夫。……少し、驚いた」

闇祓いに、あんな笑顔を浮かべられる人がいるなんて。

「いい子だね、彼女」

そう言うと、リーマスは穏やかに目を細めた。

「ああ……………そうだね」

第4話 笑顔

ジェームズが言う通り、ポッター家にはたくさん書物が置いてあった。地下に広がる数多くの蔵書に、ぼくは目を輝かせる。

その地下室で、ぼくとジェームズは思い思いに本を読み、時折思い出したように宿題に手をつけ、『忍びの地図』のアイディアを思いついては羊皮紙に向かうという、そんな時間を過ごした。

ジェームズのご両親は、ぼくにとてもよくしてくれた。まるでぼくを、実の息子のように扱ってくれる。

変に気を遣わないで放ってくれるその感じは、ジェームズの人付き合いの仕方ととてもよく似ていて、ああ、ジェームズの家族なんだなあ、と、しみじみと思った。

ふと気を抜けば、物思いに沈んでしまう最近のぼくにとっては珍しく、ぼくは快適に夏休みを過ごしていた。



「ジェームズ、君に、話しておかなくちやいけないことがあるんだ」
暖かな昼下がり。日の当たらないはずの地下室には、おそらく魔法でだろう、窓があり、世界の様々な場所の風景を代わる代わるに映し出している。

昨日は、清水寺の素晴らしい紅葉だったし、今日はバータラ峡谷の、現実とは到底思えないくらい美しい景色が、窓の外に広がっている。「何？」

ジェームズは、本に目を落としたままぼくに問いかけた。

「リリー・エバンスのことなんだけど」

その言葉に、ジェームズの動きが固まった。

やがてパターンと本を閉じると、ぼくに向き直る。

そのハシバミ色の瞳から目を逸らし、ぼくは口を開いた。

——ぼくは日本人だから、キリスト教徒である人の気持ちは分からない。

だけれど、神に懺悔する人の気持ちは、おそらく今のぼくの気持ちと、ほとんど変わらないだろう。

そう、思えた。

「付き合ってるんだ、リリーと」



ぼくの話に、ジェームズは黙って耳を傾けていた。途中、声が震えてどうしようもなくぼくが黙り込んだときも、決して続きを急かさず、ぼくが再び口を開くのを待っていてくれた。

ジェームズのそういうところが、ぼくはきつと、この上もなく、大好きなのだった。

「君たちの関係が変わったことには、気付いていた」

ぼくの話聞き終わったジェームズは、二、三度静かに瞬きをして、そう言った。

ぼくの絶望した表情を見てとったか、慌てたように「違う、付き合い始めたとか、そういうことが見て取れたってわけじゃないよ」と付け足した。

「君とエバンズが仲がいいのは、知っていたし……そこにスネイプが今まではいたのに、いなくなってしまった、ということを指して、『関係が変わった』と言ったまで……混乱させてすまない」

「あ、ああ、そういうこと……」

僅かに安堵した。

「どうしても、付き合っていることを誰にも知られたくないんだい？

僕だったら、エバンズと付き合えたら逆立ちでホグワーツを一周しながら誰彼構わず自慢しまくるだろうに。まあ、それは僕だけの特殊形態だろうとて、君だって健全な男の子だろう。なんで？ エバンズが君の好みじゃない？」

「……そういうことじゃない。リリーは可愛い、それはその通りだ……」

「ああ、あの深い緑の綺麗な瞳とか、素晴らしいよね」

「さらっさらの赤毛とか、本当に綺麗だよね」

「分かる。気が強いところもいいよね」

「でも、リリーの笑顔はとても可愛らしいよ。……そう、すごく。ぼくは、あの笑顔が大好きなんだ」

ぼくは、そうだ。

あの笑顔を、ずっと見ていたかっただけなんだ。

滅多に見られなくなった、あの笑顔を。

「……リリーは、可愛いし、美人だ。ぼくにはもったいないほどに……そう、ぼくにはもったいないんだ、あの子は」

「ランク上の女の子をゲットしたことを喜びこそすれ、沈むべきではないと思うよ、普通はね。……本心を言っごらん、秋。今更、僕に隠し事はなしだよ」

ジエームズには、何もかもお見通しのようだった。ぼくは息をついて「……分かったよ」と目を伏せた。

「……罪悪感で、一杯なんだ。ずっと。リリーと付き合い続けることが、あの子の……あの笑顔を見ることが、苦しくて仕方ないんだ……っ、どうしてなのか、分からない……全く、分からない。ぼくは、ぼくはただ、リリーと、そしてセブルスと……ずっと一緒にいたかっただけなんだ」

「……ずっと一緒にいられる関係なんて、ないんだよ、秋。……なんて、君には愚問だったかな」

ジエームズはそんな言葉を、ぽつりと口にした。

「そうだね……。でも、信じてたんだ。一年生のとき、ひとりぼっちだったぼくを、引つ張りあげてくれたのは、セブルスとリリーだった……ずっと、一緒にいてくれるって……『もう、君を一人にしないから』って言うてくれたあの言葉を、ぼくは思っていた以上に、頼りにして……縋って、生きてきていたんだ、きつと」

それが、酷く脆い言葉だと、気付いていたとしたところで。

何も、根拠がない言葉だと、分かっていたとしたって。

この関係が、いつ崩れるかも分からないものだって、理解していたはずなのに。

見ないふりをしてきた。いろんなもので取り繕って、ぐらぐらな支柱を、倒れないように一生懸命支え続けてきた。

「ぼくは、バカだよ……何もかも、失ってから初めて、気がつくんだ。何よりそれらが、手放しがたい宝物だったのか。どれほど、それらに自分が……救われていたのか」

「……あまり自分を責めるなよ、秋。エバンズとスネイプが仲違いをするのは、ある意味では必然だった。グリフィンドルとスリザリンの対立は、あまりに根強いし……それに、時代が時代だ。君らは『合わなかった』のだから？ スネイプの考える思想に。マグルを魔法使いが、自分たちが支配するという選民思想に。その『合わなかった』という、どうしようもない感覚の違いがある限り、エバンズとスネイプの別離は、避けられなかったと思うよ。君はただ、巻き込まれただけだ。すぐ近くにいたから、巻き込まれた、それだけだ。君がいてもいなくても、遅かれ早かれ、あの二人の進む道は別れていた、僕はそう思うよ」

「……そんな、こと。……いや、そうかもしれないけど……」
「秋」

言い淀むぼくに、ジュームズは存外、優しく言葉を掛けた。

「君が好きな道を選びな。いつだって僕は、君の意志を尊重してきた。今までも、そしてこれからも。……君が、やりたい方を選びたいよ」
「……ぼくが、やりたい方」

「そう。秋は結局、エバンズとどうしたい？ 今のまま付き合い続ける、それもまた一つの手だろうさ。エバンズは君のことが好きだし、君もエバンズのことを好きなんだろう？ それはそれで一つのハッピーエンドだ。それがたとえ傷の舐め合いだったとて、一人減った分の埋め合わせとして、代替品として互いを求める行為だとして、それを咎める者は誰もいない。そういう恋愛を、誰も否定は出来ないよ。そう……渦中の二人以外は」

「……………」

「別れる、それも君は選択することが出来る。二人でいることにそれほど苦痛を感じているのなら、離れることも一考する価値がある。お

互いがお互いを好きで、好き合つて付き合つたとしたつて、一体生涯添い遂げるカップルの割合はどれほどだろうね？ 君の潔癖さが、今のようないき合いを許さないというのなら……君の純粋な精神が、今のようないき合いに堪えられないというのなら、別れるのもいいと思うよ」

ぼくは両手の指を合わせて、ジエームズの声を聞いていた。

一度目を閉じ、息を吐くと、目を開ける。

「……ジエームズは、リリーのことを好きなんじゃないの？ 君にとつては、ぼくらにとつと別れて欲しいんじゃないの？ いや、まづそもそも、ぼくは君の想い人と付き合つてるんだよ。ぼくに対して『なんて奴だ！』とか『僕のエバンズを取りやがって！』とか、そうは思わないの？」

ジエームズはぼくの言葉に、ふむ、と少し考え込んでいたが、やがて首を傾げた。

「そうだね、僕はリリー・エバンズに好意を抱いている。彼女とあれやこれや君には到底想像もつかないことをしたいと思うし、実際彼女とあれやこれや出来る関係である君の立ち位置が羨ましいとは思ふ。エバンズとデートしたいし手を繋ぎたいしキスしたいし、出来ればそれ以上もやってみたいと思う。……でも、それとこれとは別なんだ」「別？」

「僕が、友人の幸せを心から願つてるつていう想いと、僕の恋愛感情は、別だつてこと」

「……………」

「君が幸せになれる道を、選ぶんだ、秋」

目を伏せた。指先を合わせ直す。

「……ぼくは、バカなガキだから……恋愛つてもつと、キラキラしてて、その子と一緒にいると幸せだ、何だつて出来る、そういうものだつて……何も考えず、思つてたんだ」

「……………」

「だから、こういう……お互い好きで付き合つたはずなのに、どうしようもなく辛くて、やるせない、こんな想いがあるなんて、知らなかつ

た」

「……秋」

「ぼくはね、ジェームズ。ぼくの、一番の願いはね……リリーに幸せになつて欲しいんだ。それだけ、なんだよ」

顔を上げると、僅かに微笑んだ。

ジェームズは、少し眉を下げて、ぼくを見ていた。

「ぼくの隣じゃなくていい……ぼくの隣にすることで、リリーが今までのように笑えなくなるのなら、ぼくはリリーの隣にいたべきじゃない。ぼくは……ぼくは、あの子の笑顔が、氷までも溶かしてしまうよ。うな、暖かな陽だまりのような笑顔が……本当に、大好きなんだ。あの笑顔を、もう一度見ることが出来たら……ぼくは、もう、それだけでいい」

「……それが、秋の望み？」

「そう。ぼくの、本心からの望み」

ジェームズはぼくから目を逸らすと、ぐしやぐしやと髪を掻いた。

「……無欲な奴だね、君は」

「……そんなことないよ」

小さく頭を振った。

「でも、うん……そう、なのかな」

「そうなんだよ。普通、欲しいものは自ら手放さない」

「リリーを手に入れたかった訳じゃない、ぼくは」

そう、元々は、その違いだ。

ぼくもリリーも、お互いこの想いを伝える気はなかった。

そこを間違えて、間違えてしまって、ぼくらは今、ここにいる。

「……それで、君は本当にいいのかい、秋？」

その言葉に、ぼくはにっこりと笑った。

「いいんだよ、ぼくは」



『不死鳥の騎士団の本部は、

ロンドン グリモールド・プレイス 十二番地に存在する』

ぼくとハリーがその羊皮紙を読み終わると、羊皮紙は一人でに火が付き、細かな灰となつて空気中に掻き消えた。瞬間、マグルの家と家の間にお屋敷が、両側の家を押しつけて現れる。重厚な、というと聞こえはいいが、古びて傷んでいる家だ。どことなく陰気で湿っぽい。

リーマスが杖で扉を一回叩くと、扉が開いた。昔の『不死鳥の騎士団』と、仕組みはそう変わらないようだ。

「早く入るんだ。でも、あんまり奥には入らないようにね。そして、何も触らないように。トンクスも」

「分かってるって！」

リーマスがぼくらの背中を押した。

玄関ホールは真つ暗だ。廃屋の匂いがする。掃除の手が全然入っていないようだ。

「まあ、ハリー、アキ！ また会えて嬉しいわ！」

と、扉の奥からモリーおばさんが姿を現した。ぼくらをぎゅっと抱きしめる。

そしてモリーおばさんはぼくらの後ろ、リーマスたちに対して急かすように「あの方がいましがたお着きになって、会議が始まっていますよ」と囁いた。「ほう」や「へえ」などという声と共に、リーマスやトンクスたちが扉へと入っていく。

ハリーは付いていきたげな顔をしたが、モリーおばさんに釘を刺された。

「ダメよ、ハリー。騎士団のメンバーだけの会議ですからね。ロンもハーマイオニーも上の階にいるわ。会議が終わるまで一緒に待ちなさい。それから夕食にしましょう」

モリーおばさんはぼくらの手招きし、先頭に立って歩き出した。

黄ばんだカーテンに覆われた壁に、暗い階段。屋敷しもべ妖精の首の剥製がずらりと並ぶ廊下。なんともまあ、陰気臭い家だ。不死鳥の騎士団の持つ金と紅のイメージからは程遠い。

ぼくらの寝室の場所を教えると、モリーおばさんはせかせかと階段を降りて行った。

ぼくらは顔を見合わせる。

「一体何が？」

「さあ……」

ハリーは誰も説明をしてくれない不満からか、少々乱暴にドアノブを掴んで捻った。

中に入ろうとしたその瞬間、叫び声と共にハーマイオニーがハリーに飛びつく。ハリーは堪え切れずに尻餅をついた。

「ハリーだわ！ 元気なの、大丈夫なの？ 怒ってたわよね、私たちの手紙が役に立たないことは知ってたの——でもあなたに何も教えてあげられなかった。ダンブルドアが——ああ、話したいことがいっぱいあるのよ。あなたもそうでしょうね——吸魂鬼、吸魂鬼ですって！ それに魔法省の尋問のこと——魔法省はあなたを退学には出来ないわ。『未成年魔法使いの妥当な制限に関する法令』で、生命を脅かされる状況においては魔法の使用が許されることになっててね——」

「ハーマイオニー、ハリーに息くらいつかせてやれよ。ようアキ、元気かい？」

ハーマイオニーの影から、ロンが姿を現した。ぼくを見てにやつと笑う。

「また背が伸びた？」

「まあね。服が合わなくなっつてしようがないよ」

「いいなあ、ぼくもそんなこと言ってみたいよ」

「そういうアキも、少し背が伸びた？」

「ちよびつとだけね。嬉しいことを言ってくれるじゃない」

ハーマイオニーが離れて、やっとハリーは落ち着きを取り戻したようだ。

落ち着きと一緒に今までの不満も思い出したらしい。足取りも乱暴に部屋の中に入ると「で？」という低い声と共に、ロンとハーマイオニーを睨めつけた。

「僕らに何の知らせもくれないまま、君たちは一緒にいたわけだ。僕らは夏休みにあのダーズリー家に缶詰だったというのに、君たちは一緒に楽しいバカンス。そうだろうか？」

ハーマイオニーとロンの笑顔が、すうっと消えてなくなった。

ハーマイオニーが慌てて申し訳なきように言う。

「ごめんなさい、ハリー。でも、私たち、ダンブルドアが言ってはいけ
ないっておっしゃって……」

「僕に何も言わないって？　へえ、そうかい」

「ダンブルドアは、君がマグルと一緒にの方が安全だと考えて……」

「へー、じゃあ、君たち、夏休みに吸魂鬼に襲われたとでも？」

「そりゃ、ノーさ、だけど……」

「それでも僕に知らせることは出来たはずだ！」

ハリーの痲癩がとうとう爆発した。

ぼくは小さく息を吐くと、気配を消して部屋を抜け出した。

何の気無しに階段を上る。やがて最上階に辿り着いた。

部屋は二つ。ふと扉にかかった表札を見て、ぼくは目を瞠った――

『シリウス』と書かれている。

もしかして、と、もう一つの部屋の前に歩み寄った。ドアに小さな
文字で書いてある。

『許可なき者の入室禁止　レギュラス・アークタルス・ブラック』

そうか、ここはシリウスの家なんだ。

そう思うと、なるほど納得がいった。細やかな装飾のいたるところ
に蛇が描かれているのが、さつきから気になっていたのだ。

レギュラスの部屋のドアノブに手を掛けるも、開かない。鍵が掛
かっているのか。

レギュラスらしい。小さく笑った。

軽く指を鳴らすと、カチリ、と鍵が開く音がする。押し開いて、ぼ
くは辺りを見回した。

スリザリンカラーの緑と銀で、壁もカーテンもベッドも全て統一さ
れている。年月が経ち、色が変わった新聞の切り抜きが、ベット脇の
コルクボードに貼り付けてあった。近付いてよく見ると、それは全て
ヴォルデモートに関するものだった。

机の上には、写真立てが二つ置かれていた。

一つは、スリザリンのクイディッチチームで撮られたものだ。レ

ギユラスはその一番前の真ん中に座って、静かに微笑みかけていた。そして、もう一つの写真立てには。

一体いつのものなのだろう——よく似た幼い兄弟が、それぞれ若い父親と母親に抱えられ、無邪気な笑顔をこちらに向けていた。

思わず手に取ると、軽く埃を払う。

——レギユラス、君は。

一体どんな思いで、この写真を飾り続けていたのだろうか？

「アキ」

呼びかけられた声に、目を遣った。

ハリーが立っていた。

「落ち着いた？」

ぼくはそつと笑いかける。

ハリーはバツが悪そうに頬を搔くと、小さな声で「……ごめんね」と囁いた。

「その謝罪は、ロンとハーマイオニーに向けるべきだ。そうだろうか？」
「……うん」

ごめんと、ハリーはもう一度呟く。そして振り払うように、ハリーは笑顔を浮かべてみせた。

「夕食だって、モリーおばさんが呼んでる」

「分かった。ありがとう」

ぼくはそう言うと、今までであった場所にそつと写真立てを置き直した。

幼い少年二人は、いつまでも無邪気に、笑っていた。

第5話 燻る感情

七月も終わりに入った頃のこと。

ジエームズは、悪戯仕掛人——特にシリウスといると、それはもうどうしようもないほどに騒がしいが、ぼくと二人きりだとそうでもない。ぼくとジエームズの二人という、穏やかで平穩極まりなかった日常は、しかし、とある出来事により粉碎されることとなった。

とある出来事——もとい、シリウス・ブラツクの来襲である。



「いやー、本当よかった、ジエームズんこの住所知ってて。のたれ死ぬところだった」

「いらっしやい、シリウス。ジエームズからよくお話は聞いてるわ」

「おっ、ありがとうな、ユファイおばさん！」

ジエームズの母、ユーフェミアさんが淹れてくれた紅茶に、調子よく感謝の言葉を述べて、シリウスは口をつけた。

シリウスが、ポッター家の暖炉からいきなり飛び出してきたのは、つい十分ほど前のことだ。

「家出してきた！ 泊めてくれ！」と笑顔で叫んだシリウスを分厚い本の角で容赦なく殴ったジエームズは、頭を抑えてやれやれとため息をついた後、少し苦々しい顔で宿泊を許可したのだった。

「家出って、一体どうしてまた」

「いやー、レギュラスのヴォルデモート卿スクラップブックが、どうしても生理的に受け付けなくて。インセンディオったらブチ切れられての大喧嘩。親も当然ながら、優秀で出来がいい弟の方についてさ、もうこの家はどうしようもない、俺がいる価値がない、と思って飛び出してきたんだ」

「……軽く言ってくれるね」

猪突猛進さが、シリウスらしいというか、何というか、だ。

「でも、人のものを勝手に燃やすのはよくないと思うよ……」

「あんな気持ち悪いものを、誰もが目につくりビングなんか置いておく方が悪いに決まってる。部屋の壁の、鳥肌が立つような新聞記事は見逃してやってんだから」

シリウスは軽く肩を竦めた。ぼくは僅かに目を伏せる。

ぼくの感情の機微に気がついたのかどうかは定かではないが、そこでジェームズが「その紅茶を飲んだら、母さんに手当てをしてもらおうか」と口を挟んだ。そう言えば、と、思い出したようにシリウスは頬の痣を撫でる。

「せっかくのいい男が、台無しだ」

「秋、嬉しいこと言ってくれるじゃないか。君も少しばかり顔つきが男前になった気がするぜ」

「気休めどうもありがとう」

顔についてはもう、諦めの境地に達しているんだ。何年この顔と付き合ってきたと思ってる。何度男子トイレに行こうとするのをぎよつとした顔で引き止められたと……ううう。

髪型のせいか、女子とも未だによく間違えられるし。

「君はまあ、その髪が似合ってるからいいよ。でもシリウス、君も髪を伸ばすつもりなのか？ 僕、君は短髪の方がずっといいと思ってるんだけど」

ジェームズはそう言うのと、手を伸ばしてシリウスの青痣を突つついた。「やーめろ」とシリウスは眉を寄せてジェームズの手を払う。

「飽きたら切るよ。はなっからそのつもりだ。秋ほどに伸ばす気はないの？」

「君も髪が伸びたよね、秋。最初に見たときは、まだ肩甲骨のあたりくらいまでだったのに、今はベルトに挟めるくらいだ。邪魔にはならないの？」

「そうそう邪魔じゃないよ。普段は結んでるしね。シリウス、伸ばしっぱなしは暑くない？ 今は夏だよ、せめて括りなよ」

「犬になると常に毛まみれ状態だから、人間の方が涼しいんだけどな……」

シリウスがぼやいたとき、ユーフェミアさんが救急箱を持って現れ

た。久しぶりに見た、マグルの救急箱だ。

「あれ？ ジェームズ、お前の母さんってマグル出身だっけか？」

「僕の記憶が正しければ違ったと思うがね。まあ、これは母さんのモットーだ。『喧嘩して作った傷は魔法では手当てしない、自分の治癒力に任せてしばらく痛い思いをしなさい』というね」

「というわけだから、シリウス」と、ジェームズはニヤリと笑った。

「しばらく痛い目見て大人しくしときなよ？」

その言葉に、ぼくは心から同意した。



鼻と口をハンカチで覆い、左手には黒い液体入りのノズル付き瓶。臨戦態勢完了だ。

後はひたすら、部屋の至るところに蔓延っているドクシーを殺す、殺す。

「あらアキ、上手じゃない」

「昔取った杵柄、というものかな」

モリーおばさんに手際を褒められ、ぼくはにっこりと微笑んだ。ダーズリー家で培ったものが、まさかこんなところで生きてくるとは。掃除洗濯炊事は一通りこなせるしね、ぼくとハリーは。

「それじゃあ、アキは次の部屋に——」

おばさんの言葉を、ドアベルのカーンカーンという大きな音が遮った。途端、シリウスの母親の肖像画が大音量で叫び出す。

「不名誉な汚点、穢らわしい雑種、血を裏切る者、汚れた子らめ……」
「扉のベルは鳴らすなど、あれほど言ってるのに！」

シリウスが足音荒くも部屋から出て行った。その後ろを追いかける。

「加勢するよ、シリウス」

「ああ、助かる、アキ」

肖像画の前で、ぼくは杖を取り出すと手元でくるりと遊ばせた。そして杖を振ると、肖像画に描かれた女性は声が出なくなったように口

をパクパクとさせ、恨みがましい瞳でぼくとシリウスを見た。その隙にシリウスがカーテンを閉めてしまう。

「この呪文がずつと効けばいいのだけど」

「残念ながら、ぼくでも一日が限度みたいだ」

軽く肩を竦めた。シリウスは前髪を掻き上げつつも「やれやれ」と頭を振る。

玄関から入ってきたのは、キングズリー・シャックルボルトだった。禿げた黒人の魔法使いで、昨日ダーズリー家に来たうちの一人でもある。

「キングズリー、頼むからドアベルは鳴らさないでくれ、頼むから」
「おお、済まないねシリウス」

苦々しい顔のシリウスと対照的に、キングズリーは朗らかに言う
「君たち、同じ髪型してるから家族かなんかに見えるよ」と笑った。

ぼくとシリウスは顔を見合わせる。確かにぼくもシリウスも黒髪で、直毛で、下で一つに括ってるけど。けども。

「家族……」

「嫌そうな顔しないでよ、お揃いにしたのは君の方だろ、シリウス」
「思い当たらなかつたんだよ！　いつまでその髪型してんだ、飽きないのか？」

「君の髪こそ刈り上げてあげようか？　きつとスツキリするだろうさ」

「君たちは本当に仲がいいねえ」

ぼくとシリウスの会話に入り込んできたのはリーマスだ。にこやかな笑みで「お帰り」とキングズリーに告げる。

「ああ、ありがとう、リーマス。ヘスチアが、今私と代わってくれたんだ。だからムーデイのマントは、今ヘスチアが持っている。ダンブルドアに報告を残しておこうと思ってね」

「分かった。わざわざありがとう」

キングズリーはひらひらと手を振ると、ぼくになっこりと笑いかけ、踵を返して家から出て行った。

彼も忙しい人だ。闇祓いだと聞く。ひよつとすると、幣原と面識が

あつたりするのだろうか。夢でそのうち会つたりするのだろうか。

「……いつまで俺はここにいなくちやいけないんだ」

シリウスが低い声で呟くのに、目を向けた。

リーマスがたしなめるような眼差しでシリウスを見る。

「死にたいのか？ 君の首には一万ガリオンの賞金が掛かつてるんだ。ワームテールがヴォルデモートについた今、君の『動物もどき』の情報も筒抜けだ——ここにるのが一番安全なんだ。外に出るなんて——」

「分かつてるよ!!」

シリウスの怒鳴り声に、部屋がビリビリと振動した。リーマスは口を噤む。

「……悪い、八つ当たりした」

「いや……私も、君の気持ちを考えずに、悪かった」

シリウスはふてぶてしい笑いを浮かべてみせようとしたようだが、失敗したみたいだ。

捨てられた犬のような目で、小さく呟く。

「……ハリーが来てくれただけで、喜ぶべきなんだ……会えるはずも、分かってくれるはずも無いと思っていた、ハリーに……また、リーマスや秋と会えて、心を交わすことが出来て、良かったのだと……」

ぼくとリーマスは、何も言えなかった。

「……ちよつと、頭冷やしてくる」

そう言つて階段を上つていくシリウスを、誰が引き留められたらうか。

第6話 思い出の中で

「もう行くのか?」

「うん。一旦、日本にも帰らないといけないから」

「ああ、お盆か」

「そのあたりはあまり気を遣っていないけど。……ありがとね、ジエームズ」

ぼくの言葉に、ジエームズは「どういたしまして」と微笑んだ。

八月、第二週目。ぼくは、一ヶ月ほどお世話になったポッター家で、最後のお別れをしていた。

シリウスは、ぼくがいなくなることが不満のようで、数日前からちよくちよく文句を口にしていたつけ。「俺が来て入れ違いじゃないか」「そんなに俺のことが嫌いか」違うと言っても拗ねて聞く耳を持たないシリウスに、ジエームズは笑って呆れていた。

「ユーフェミアさん、毎日美味しいご飯をありがとうございます。フリーモントさんも、ぼくを実の息子のように扱ってくれて、とても嬉しかった」

二人と抱き合って、お礼を告げる。

「また、いつでも来なさい」

彼らの笑顔が、炎の中に融けていく。

目的地を叫ぶと、視界は真っ黒に塗りつぶされた。



「……懐かしい、なあ」

思わずそんな声が漏れた。

イギリスから、飛行機と列車を乗り継ぎ、十数時間。最寄り駅からトレッキングと洒落込み、山を登って一時間。ぼくは自宅の前に来ていた。

一年前は干上がって枯れていた川は、わずかではあるが水量が復活している。

しかし焼けて丸裸になった山が元通りになるのは、一体この後何年掛かるだろうか。

息を吸い込み、吐き出した。門戸を押し開き、足の裏で鳴る玉砂利の音を聞きながら、歩みを進める。

扉の前で立ち止まると、ポケットから鍵を取り出し、鍵穴に差し込んだ。回すと、やがてカチリという音と共に、鍵が開く。

家の中は、最後に見たときと変わらず、綺麗なままだった。一年間誰も立ち入らなかつたせいから、うっすらと埃が積もっている。

リビングの窓を開けると、ぶわつと風が吹き込み、室内の埃を全て攫っていった。思わずコホコホと咳き込む。

「無茶苦茶だなあ、ぼくの魔力も……」

こいつらを手懐けるのは、並大抵じゃないな。こういうときなんかは、ぼくの意志を先読みしてくれるから、楽といえば楽なのだけれど。

「ただいま……父さん、母さん」

僅かに微笑んだ。当然、返事はない。期待もしていない。

庭の花たちは、手入れする人がいなくなつたからか、皆枯れてしまっている。可哀想だとは思いますが、学生のぼくにはどうしようも出来ない相談だった。

父の書斎に入ると、ぐるりと天井まで続く本棚が出迎えてくれた。何の気無しに、近くにあつた一冊を手にとると、昔よく座っていた、父の机の正面に位置するソファに腰掛ける。

やがて読み疲れ、ふと天井を見上げた。何の変哲もない、真っ白の天井。父が生きていたときは、天井がガラス張りのように透けて、空が見えるようになっていたつけ。

昔なら到底出来なかつたことが、今のぼくには簡単に出来る。

天井の透過率を、限りなく百パーセントに。それだけで、今までと変わらぬ天井になる。

父が生きていた頃と、変わらない天井に。

「……………」

パタン、と本を閉じた。本をソファの上に置いたまま、ぼくは書斎を出る。背後で本が今まで通り本棚に収まるのを、最後まで確認しな

いまま、ぼくは扉を閉めた。

リビングで杖を振る。途端、庭の花々が色鮮やかに咲き誇った。記憶通りの花たち。

ぼくは花には詳しくないから、それぞれがどんな名前を持っているのか詳しくは知らないのだけれど……それでもきつと、この花は、母が愛した花なのだ。

二階に登った。二階は、ぼくの部屋と、両親の寝室がある。

足の向くまま、自分の部屋に入った。瞬間、窓が勝手に開き、埃が一斉に外に出ていく。

ベッドに倒れ込むと、小さく息をついた。ホグワーツのとはやっぱり違う、家の毛布の肌触り。

ああ、帰ってきたんだな、と感じる。

枕をぎゅっと抱きしめ、頭だけを起こしてベッドサイドを見上げた。

写真立ての中に、写真が一枚。ぼくは、あまり写真というものが好きじゃない。だから、両親が撮りたい撮りたいというのも全て逃げ回ってきたのだけれど……今となつては、少しくらいは撮らせてあげてもよかつたな、と思う。

だからこれが、(物心つく以前を除いて、だが)——ぼくら家族の、唯一の写真だった。

右に父。左に母。二年前の——ほんの、二年前の夏休み。

「……この頃にはもう、死期を悟っていたのかなあ」

写真の父に呼びかけても、当然返事は来ない。ただただ、優しい笑顔でこちらを見つめているだけだ。

「……父さん、母さん」

写真を見つめて、ぼくは静かに目を伏せた。



(……当たってしまったなあ)

シリウスは自室のベッドに横たわったまま、まんじりとせずに自室

の天井を見上げていた。

銀の壁を紅と金で覆ったそれは、ホグワーツの懐かしいあの頃を想起させる。

あの頃を——悪戯仕掛人や秋と笑いあっていた、あの頃を。

(当たるつもりじゃ、なかつたのに)

もういい加減大人だ、自分の置かれている状況くらい理解している。何も考えず突っ込んでいくほど子供でもない——シリウスが『何も考えず突っ込んでいくほど子供でもない』と思っていることを秋やリーマスやハリーが知れば腹を抱えて笑うこと請け負いだが、シリウスは知らない。かつての無謀無策無鉄砲からは卒業したものだと思っている。

「なんで、戻って来てしまったんだろうな」

この家に。

その時、軽いノックの音がした。シリウスは寝転がったまま「誰だ？」と声を発する。

ノックの主は答えずに、そのままシリウスの部屋の扉を押し開いた。

「……って、アキか。どうした?」

少年の姿を視認し、シリウスは身を起こした。普段は後ろで一つに結ばれている髪は、夜だからか解かれている。

「シリウス」

にっこりと笑って、少年はシリウスに歩み寄った。

ふわり、と、どこからともなく風がたなびいている。その風はさらさらと少年の髪を揺らした。

「……いや、違うな。君は——」

ギシリ、とベッドのสปリングが軋んだ。少年が腰かけたのだ。

「……秋だ、そうだろう?」

「ああ……久しぶり、シリウス」

大きな目を細めて。唇には笑みを浮かべて。

幣原秋は、微笑んだ。

「……あ、っは」

思わずシリウスも、笑みを零していた。手を伸ばして、秋の頭に乗せる。

「君と、会いたかった」

「ほくもだ」

昔と変わらないその感触を、懐かしむように。

指を滑らせた。

「あの日——以来じゃないか」

「……そうだね」

色んな話を、しよう。

十四年の、積もる話を。

第7話 友情の残量

もう見慣れてしまったホグワーツ特急。重たいカートを押しながら、九と四分の三をくぐり抜け、空いているコンパートメントがないかを探し通路を歩いて——程なくして、見つかった。

「隣、いいかな?」

そう言つて微笑むぼくに、彼——セブルス・スネイプは、驚いた目を向けた。



「初めて見たとき、君の服に魔法を掛けてやりたいと思つていたんだ。だって可哀想なくらいにダボダボだったんだもの。今は、ピツタリのようにだ。背が伸びたね」

「……いつまでもあの頃のままじゃ、いられないさ」

ガタンガタン、と、振動が座席から身体に伝わる。

紅の特急は、ホグワーツ目掛けて一目散に進んでいた。

「……何の本、読んでんだ?」

「ああ……日本の、東洋のね、魔術の本だよ」

ほう、とセブルスは、僅かに興味を惹かれたように目を見張った。読んでいた分厚い魔法薬学の本を傍らに寄せると、ぼくの本を覗き込む。

「読んでみる?」

「いいのか?」

「いいよ」

そう言つて、ぼくらは互いの本を交換した。

ぼくらの間に、言葉はあまり飛び交わない。リリーがいたときは、また違ったのだけれど——リリーは静かにしていることが苦手な子だから——ぼくらの間に飛び交うのは、少ない会話と、それに本と、少々のお菓子だった。

静かな時。穏やかな時間。

日本に帰っていたときも、一人静かな時間を過ごしていたが、誰かがいる『静かな時間』というのは、随分と久しぶりだ。

互いが本のページを捲る、ペラリ、ペラリという音。風が、窓を叩く音。線路を走る列車の振動音。それだけで満たされた空間。

「坊ちゃんたち、車内販売はいかがですか？」

そう扉を開けた、大きなカートを引く店員さんに、ぼくらは本から目を上げると、小銭を数えて立ち上がった。

そのちようど後ろを、リリーが通る。リリーはちらりとぼくらを見て、ハッと表情を変えた。そして、幾分具合が悪くなった顔をして、足早にスタスタと通り去る。

「……リリー」

セブルスは苦しげに、その名前を口にした。自分で言ったその言葉に、身震いをしている。

「……蛙チョコを二つと、大鍋ケーキを二つください。かぼちゃジュースも」

空気を振り払うように、ぼくは笑みを浮かべて店員さんに声を掛けた。

店員さんが立ち去り、ぼくらは買ったものを手に再び腰掛けた。かぼちゃジュースの蓋を開けたぼくと対照的に、セブルスは一気に食欲がなくなった顔で、何も手をつけようとしなかった。

「……………」

口を開きかけ、言葉がまとまらず、口を閉じる。前髪を引っ張ると、小さく首を振った。

そして、考える。

ぼくとセブルスの、友情の残量を。



「アズカバンの看守、吸魂鬼は、一体も持ち場を離れていないとのことだ。これまでも、そしてこれからも」

深みのある声。キングズリー・シャツクルボルトの声が広間に朗々

と響いた。

それにふむ、と声を発したのはムーディだ。

「だが、あやつらに聞いてみた訳じゃあなかろう？ 魔法省の頭がい奴らの中に、吸魂鬼と意思疎通しようと思うイカれた奴がいるようなら、是非ともうちに紹介してもらいたいもんだ」

「やーめてよ、闇祓いはもうそんな時代じゃないんだってば……十年以上前のことじゃない、マッドアイ」

トンクスが聞き飽きたとばかりに肩を竦めた。リーマスは腕を組んで発言する。

「だが、ハリーがプリベット通りで吸魂鬼と遭遇したのもまた事実だ。あの少年は、そんな嘘をつくような人間じゃない」

「その通り。私もリーマスを支持しようじゃないか、ハリーの名付け親として」

「やっぱり、魔法省の誰か……それもある程度高い地位の者が秘密裏に、吸魂鬼に命令を出したと考えるのが一番かね」

ヘスチア・ジョーンズはピンクの頬を引つかきながら呟いた。

「高い地位の者……コーネリウスか？」

「その可能性は低いんじゃないか？ あの、脳みそお花畑閣下は、ハリーを排除するよりは目を瞑りたいタイプの御仁に見えるぞ」

「とにかく、そのあたりのことは引き続きあなたに任せますわ、キングズリー」

ミネルバ・マクゴナガルはハキハキとした口調で言った。

「今、あそこの警備は誰がしているんだ？」

「スタージスが、昨夜私と代わってくれた」

アーサー・ウィーズリーの質問に答えたのはリーマスだ。

「あと、ダンブルドアが——」

「しっ、静かに！」

リーマスの声を、モリー・ウィーズリーは遮った。ドアの外に目を遣る。

「階段を降りてくる音がするわ——きつと、うちの子の誰かだと思うけれど」

「興味津々なんだよ。気になって仕方がないんだ。まあ、僕だってそうだっただろうけど——」

ビル・ウィーズリーは母親にニヤツと笑いかけた。

モリーは気遣わしげにチラチラと扉の外を見ていたが、放っておくわけにもいかなないと考えたのだろう。「少し待っていてくださいね」と場に言い残し、扉の外へと姿を消した。

「ハリーも聞きたいだろうに……」

「パッドフット、何度言えば分かる？ ハリーはこの会議に参加させないって」

「わーった、わーったよ、ムーニー……」

そこで再び扉が開かれた。

てつきりモリーかと思っていたが、しかし顔を覗かせた人物は違った。

真つ黒の艶やかな髪。小柄な体軀。大きな黒い瞳。

口元には穏やかな笑みが浮かんでいる。

「ちよつと、アキ……」

「待て、リーマス」

立ち上がりかけたリーマスを、シリウスは慌てて抑えた。

周囲に漂うこの風は、自然にたなびくものではない。

シリウスは、現れた少年をじつと見つめて口を開いた。

「……秋、だな？」

モリーは、何とも言えない瞳で少年を見ている。

背後のそんな視線をもちもせず、少年は口を開いた。

「お久しぶりの方も、そうでない方も。……元闇祓い、元不死鳥の騎士団団員、幣原秋です。……どうぞ、お見知り置きを」

深々と頭を下げ、少年はにっこりと微笑んだ。

第8話 魔法省にて

八月十二日は、ぼくとハリーの言い争いから始まった。
「何さ、一体何の騒ぎ……」

ぼくらの声に驚いたか、ロンがベッドから半分ずり落ちながら眠け
眼を擦っている。

ぼくらが二人で「ロンー!」と叫ぶと、ずるつとベッドから滑り落
ちた。驚かせてしまったようだ。だがしかし、今はそんなのに構って
られない。

「びっくりした、何さ、二人して……」

「だってハリーが、法廷にシャツとジーンズで行こうって言うんだぜ
!?! 信つじられない、正装に決まってるだろ!」

「まだ十五の子供が、着慣れない正装なんてしてつても変じゃないか
! ロン、何か言ってやって……」

ロンは目を白黒させてぼくらを交互に見ていたが、やがて「あー、う
ん、どっちでもいいんじゃない……?」と曖昧な笑みを浮かべた。

「何だよ使えないな!」

「ロンの優柔不断! 見損なつたよ!」

「なんで僕が罵られてんの!?!」

その時、バチンという大きな音がした。同時に背中に重みが乗り、
堪えきれずに床に這い蹲る。

「おお、ごめんなアキ、君だったとは」

「肋骨とか折れてないかい? 君を潰しつちまう気はなかったんだ
ぜ」

そう言ってぼくの背中から飛び降りるのは、フレッドとジョージの
双子だ。

うぐう、とぼくはくぐもつた声を漏らす。成人男性二人分の重み
は、さすがに痛かった……。

「ねえジョージ、聞いてよ。アキがね、僕に正装して行けって言うんだ
よ。そもそも正装なんて持ってないって言うのに……」

「ほほう? 正装とな」

フレッドとジョージの目がキラーンと光る。

しまった、聞く相手を間違えた、とハリーも瞬時に悟ったようだ。しかし、黙り込むのが少しばかり遅かった。

「ハリーよ、ここをどこだと心得る？」

「純血の名門も名門、あのブラック家本家のお宅であるぞ」

「煌びやかな正装の一着や二着」

「クローゼットを開けるとそこはめくるめく布の洪水」

「ついでにたであろう値札を考えるのも恐ろしい」

「そんな、庶民の感覚とは懸け離れた大貴族、それこそブラック家！」
「つてなわけで、シリウス呼んでくるぜ」と消える双子に、ハリーはため息をつき、ぼくは勝利のガッツポーズを決めたのだった。



「なんか、変じゃない？」

「変じゃない、全然変じゃない」

「おお、似合ってるぞ。さすがはジェームズの息子だな！」

シリウスは上機嫌にハリーのネクタイを直している。

シリウスのこんななまに晴れやかな顔を見たのは久しぶりだ。まあ確かに、ぼくだってプリベット通りに閉じ込められ続けちゃあ気が滅入って仕方がないだろう。

シリウスの気持ちも分かるというものだ。

「私と一緒にには行けないが、ハリー、君の無罪を誰よりも強く信じているのは私だということを忘れないで欲しい。……あと、これも」

そう言っつて、シリウスはハリーのネクタイに、金色に輝くネクタイピンを刺した。

真ん中にはルビーが埋め込まれている。

「これは？」

「ジェームズが卒業祝いに私にくれたものだ。きっと、君を守ってくれることだろう」

へえ、とハリーは目を輝かせてそのネクタイピンを見つめた。

「カツとなるなよ。礼儀正しくして、事実だけを言うんだ。そして、何
度も言うが、アキの——幣原秋のことは一言も口にするなよ」

「分かってるよ、シリウス」

「……そうだな」

そう言つてシリウスは笑うと、ぼくを見て「ハリーをよろしくな」と
言う。

ぼくは小さく頷いた。



ぼくとハリー、それにアーサーおじさんは、マグルの地下鉄を乗り
継ぎ、魔法省までやって来た。

アーサーおじさんは、ぼくとハリーの予想通り、地下鉄に乗るのは
初めてで、ぼくとハリーは一時すらもおじさんから目を離せなかつ
た。だつてすぐさまあっちへふらふらこっちへふらふら面白そうな
ものがあつたら吸い寄せられていくんだもの……。

まあ、そのおかげで、ハリーが緊張でガチガチにならずに済んだの
かもしれない。

赤い電話ボックスからぼくらは魔法省に入ると、人の波に従い歩き
出す。

途中、『魔法族の和の泉』をハリーがじつと見ていた。ホグワーツを
退学にならなかつたら財布の中身全部いれよう、とでも考えているの
かもしれない。

エレベーターを乗り継ぎ、アーサーおじさんの働く『マグル製品不
正使用取締局』へ。

ここへ来る途中、『闇祓い本部』にいたキングズリーがぼくらを呼び
止める。仕事の話にプライベートを混ぜながらアーサーおじさんと
喋る傍ら、キングズリーはぼくに一冊の雑誌を押し付けてきた。

「きつと気に入るだろう」

唇をほとんど動かさず、キングズリーは片目を瞑ってみせる。

目を落とすと、どうやら表紙はコーネリウス・ファッジのデフォル

メ画のようだった——あまりにも下手くそな絵なので自信がないが。よく分からない見出しが並ぶ中、『シリウス・ブラック——加害者か被害者か?』という見出しに目が止まった。パラパラと開いてみる。

『大量殺人鬼? それとも歌う恋人?』という煽り文に、シリウスのこれまた下手くそなイラストで、思わずぼくは吹き出した。『ザ・クイブラー』か、覚えておこう。

「アーサー! よかった、出会えてー」

アーサーおじさんの仕事場へ到着した時、息急ぎ切つて一人の魔法使いが現れた。

「十分前に緊急通達が来た——」

「逆流トイレのことか?」

「いやいや、トイレじゃなく。ポッター少年の尋問ですよ……時間と場所が変わつて、八時開廷で、場所は地下にある古い十号法廷——」

慌ててぼくは時計を探した。アーサーおじさんの机の上の時計は、既に七時五十分を指していた。

ぼくらは弾かれたように駆け出した。

「急げ、ハリー! よかった、随分早く来ていたから。もし出廷しなかったらとんでもない大惨事だ!」

ウィーズリーおじさんはエレベーターの前で急停止すると、下へ行くボタンを連打した。

「あそこの法廷はもう何年も使っていないのに、何故あそこでやるのか——もしか、いやまさか——」

エレベーターに乗り込む。おじさんがブツブツと呟くのに、思わず目を瞬かせた。

「神秘部でございませす」

アナウンスする女性の声を最後まで聞かないまま、ぼくらは走つた。更に下へ行く階段を下ると、廊下を走る。まるで魔法薬学教室の廊下とそっくりだ。

「法廷……十号……多分ここだ……あつた」

おじさんは息を切らしながら、親指で扉を指した。

「さあ、ここから入るんだ」

「おじさんたちは一緒じゃないの？」

「いや、私は入れない。頑張るんだよ！」

ぼくはハリーの肩に手を乗せると、屈むようにハリーに言う。そしてハリーの額に軽くキスをして、「行っておいで」と微笑んだ。

「……うん」

ハリーがしつかりと頷き、重厚な扉の中に消えていく。

「……大丈夫かな」

アーサーおじさんの声に、ぼくは眉を寄せた。

「信じるしかない」

はあ、と大きく息を吐いて、ぼくは壁にもたれかかった。

思わず頭を押さえ、目を閉じる。

「ダンブルドア！ よかった、もう無理かと！」

「少々早く目が覚めすぎたようじゃ。年かのう？」

その声に目を開けると、ダンブルドアがスタスタとこちらに歩いてくるところだった。

学期末、ハリーを死地に平気で放り込んだあの時のことを思い出し、思わず眉が寄る。腸が煮えくり返っているのだ、あれから。

そのまま扉の奥に消えていくものかと思っていたが、ダンブルドアはぼくにまっすぐ歩み寄った。

薄いブルーの瞳の中に、ぼくが写っている。

ダンブルドアは両手でぼくの肩を掴むと、言った。

『話がしたいんだ、秋』

「なっ……」

ぼくは目を見開いた。

乱暴に、何より無理矢理に、意識が引き剥がされる。

「……何、ですか」

「何、わしはあの子に嫌われとるようだからの」

やがて頭を上げたぼくに対し、ダンブルドアは囁いた。

その言葉にぼくは息を呑む。

ぼくの肩から手を離すと、ダンブルドアは毅然とした様子で歩みを進め、扉の奥に姿を消した。

ぼくは目を見開き、ダンブルドアの後ろ姿を呆然と見つめていたが、大きく息を吐いた。シャツの胸元を強く握りしめ、肩で息をする。「ど、どうしたんだ？ 大丈夫かい、アキ——」

アーサー・ウィーズリーの腕の下をすり抜け、ぼくは駆け出した。背中に「アキ!？」という叫び声が掛けられる。

階段を駆け上がりながら杖を抜き、振った。

カツン、と、重たいブーツが石造りの床に触れる音。目線が今までより十五センチほど上がったからか、少しだけ平衡感覚が狂っている感じがする。

頭を振って髪を掻き上げる。普段より随分と短い髪に、小さく笑った。

エレベーターに乗り込むと、二階のボタンを押し、腕を組む。何人もの魔法使いや魔女が、次々と乗り込んで、やがて出て行く。

人に押されてたまたま隣に来た魔女が、鏡を見ながら自分の前髪をずっと弄っていた。横目でチラリと見る。短い茶髪に緑の瞳の、闇祓いの制服を身にまとった青年が写っていることに、よし、と心の中で笑った。

『闇祓い本部』と表札がついているその小部屋を、そっと押し開き、隙間に身を滑り込ませた。

左の人差し指を軽く振り、できる限り影を薄くする。擦れ違う人に、違和感すら抱かせない影の薄さ。確かに認識したはずなのに、三秒後にはどんな顔だったのかも思い出せない、そんな風に。

しかし、懐かしい。

不自然を悟られぬように、そっと周囲を見回した。

指名手配犯の人相書きや日刊預言者新聞の切り抜き。クイディッチ・チームのポスター。どこからともなく香る、コーヒー豆の匂い。クリップ留めされた書類に目を通すキングズリーの背後を通った。彼はぼくに全く気付かないまま、眉を寄せて報告書を睨んでいる。

小部屋の最奥に、重厚なつくりの扉が一つ。ドアノブは存在しない。

ぼくはちらりと周囲を見回し、誰もぼくを見ていないことを確認す

ると、そつと杖を押し当てた。カチリ、と奥で錠が開いた後、ギイ、と小さな音を立てて扉が開いた。

ぼくは素早く中に滑り込む。

扉の先には、長い廊下が続いていた。

闇祓いとして登録された者の杖でしか入れない場所だ。ぼくが『死んで』から十年以上も経っているから、もう契約は解除されているのかと思っていたが——なにせよ、良かった。

廊下の左右には、表札のない扉が六つばかり並んでいる。

右手の一番奥まった扉の前で、ぼくは立ち止まった。ここでもまた、杖を押し当て、扉を開ける。

中に一歩足を踏み入れると、ぐるりと周囲を見渡した。

雑多な物置だ、と初めて目にした者は思うだろう。いや、実態も、そうは変わらないのだけれど。

この部屋は、部隊長以上の者しか入れない。

かつての闇祓いの遺品が、ここに集められている。

杖を振ると、戸棚から一つの黒い箱が姿を現した。埃まみれではあるが、箱はしっかりとしている。

黒い箱には白いマジックで『幣原秋』とぼくの名前が書かれていて、横には小さな鍵穴が取り付けられていた。

指を鳴らすと、パカリと箱は口を開く。中には数枚の書類と、数枚の写真、昔よく使っていたマグカップ、鍵、そしてぼくの二本目の杖が収められていた。

闇祓いでは、二本の杖を持ち歩く習慣がある。

たとえ自分の杖を折られたとしたって、まだ足掻かなければいけないからだ。

生きるために。生き延びるために。

杖と鍵を取り上げ、ローブに収めた。そのまま閉じてしまおうとも思ったが、気が変わった。

写真を取り上げる。懐かしさに、思わず頬が緩んだ。

ぼくと、悪戯仕掛人が、笑い合っている写真だ。卒業前に撮った、唯一の集合写真。

みんな幼い——まあ、今のぼくを除けば、だけど。シリウスの部屋にも飾ってあったつけ。

そして、二枚目。

何の写真か覚えてはいた。しかし、記憶を思い返すのと、実物を直接見るのとじゃ、全然違った。

「……………」

息を堪えず、意識して吐き出した。

父と、母。

そして、先ほどの写真より、何歳も幼い自分が、二人に囲まれ、にっこりと無邪気に笑っている。

込み上げてくるものを、呑みこんだ。

誰がいつ来るかも分からないところに、長居は出来ない。ぼく自身にもタイムリミットがあることだし。

一瞬——そう、一瞬だけ、逡巡した。

手に取った写真を、揃って黒い箱の中へと戻す。

指を再び鳴らすと、鍵を掛け、元通りの位置に仕舞い込んだ。

目を瞑る。

全ての迷いを断ち切って——断ち切った『振り』をして、ぼくは静かに身を翻した。

第9話 初恋は実らない

言葉を告げた後の、リリーの表情は、安堵とも悲哀とも、なんとも形容しがたいものだった。

「リリー、ごめ……」

「謝らないで」

リリーの、涙に濡れた、しかし鋭い眼差しに射抜かれ、ぼくは口を閉ざした。

一回目の、ホグズミード休暇。

ぼくは、道外れの喫茶店で、リリーに別れの言葉を告げたのだった。

「……秋は、すぐに謝る……ずるいよ、秋は……謝れば、それで済むって思ってるんでしょ？」

「……何度だって、謝るよ。だって、君を泣かせたのは、明らかにぼくなんだから」

リリーは両手で顔を伏せた。

「泣いて、なんてないわよ……」と意地を張る。

「……ぼくと一緒にいても、リリーは幸せになれないよ……気付いて、いるんでしょ？」

リリーは賢くて、頭がいいから。

気付いていることくらい、分かっているよ。

「……秋。私ね、好きな人と一緒になれたら、どんなに幸せなんだろうってずっと思っていたのよ」

「……………」

「恋をして、毎日楽しそうに彼の話をする友人を見て、いいなあって、私もこういう風になりたいなああって、ぼんやりと憧れていたの。……なのに、一体どうしてなんだろうね。なんで、こんなに息苦しいんだろう。どうしてこんなに、胸が詰まるんだろう。秋が、すぐ隣にいるのに……どうしてこんなに、悲しいんだろうって」

君も、ぼくと同じ気持ちだったのか。

遅かれ早かれ、ぼくらはこうなっていた。

この恋は、決して実らない。

ならば、咲かない花を待つよりも早く、手折ってしまうべきだろう。リリーは顔を上げると、微笑んだ。

涙に濡れた、けれども吹っ切れたような、笑顔だった。

「……手を、繋いでもいい？」

リリーはおずおずとそう尋ねた。

「大通りに出たら、手を放すの。それで、もう全部、終わり。私と秋は、今までも、そしてこれからも、友達で、親友だった」

「……分かった」

リリーの手を取り、指を絡める。

ほっそりとした手は、冷たかった。

お会計を済ませ、店の外に出る。黙って、二人で並んで歩いた。

自然と、足取りは遅くなった。

「……ふふっ」

大通りに出る道と、更に脇道に入る道。そんな三叉路で、思わず脇道を選んでしまったぼくに、リリーは僅かに笑った。

「好きよ、秋。あなたのそういうところもね」

「……ありがとう、リリー」

人気がない道を、ゆっくりと歩く。

しかし、時間はぼくらを待つてはくれなかった。帰らなければいけない時間が、迫ってきていた。

変なの。ぼくが、この関係を終わらせようとしたのに。

こうして、この時間が終わるのを惜しむなんて。

「……ずっと、この時間が続けばいいのに」

心の声が、漏れたのかと思った。

隣でリリーは、ぼくが考えていたことと、全く同じことを呟いていた。

ぼくが、この、ぼくが。

リリーを傷つけることしか出来ないぼくが、一体どの口で、その言葉に同意出来るだろう。

聞こえなかった振りをして、ぼくはただ、足元を見つめ続けた。

「ハハ」で、「ふふ」

リリーは大通りの喧騒が聞こえてきたあたりで、ふと足を止めた。ぼくを見て、にっこりと笑う。

「次のホグズミード休暇も、一緒に来ましょう、秋。次は、友達同士として」

「……うん」

ぼくも、笑った。

リリーが、ぼくの手を放す。ぼくに背を向け、歩いて行く。

「……………」

手を伸ばしかけた。

行かないで、リリー。

好きだよ、大好きなんだよ。

ずっと前から、君のことが。

——そんなこと、言えるわけがない。

伸ばしかけた手を、引つ込める。リリーの後ろ姿を見ながら、歯を食い縛った。

「幸せになって……リリー」

それが、ぼくの望みなのだから。

ぼくの初恋は、静かに終わった。

知る人は、今はもう、ぼくしかない。



「無罪放免！ どーれ見たことか、そりやそうだろう！」

シリウスは笑顔で言うが、一番心配していたのはシリウスに違いない。リーマスも呆れた顔で笑っていた。

夏休み最後の日。明日、ぼくたち学生は、ホグワーツ特急にてホグワーツに帰らなければならない。

シリウスがそのことを残念がっているのを、ぼくやリーマスは知っ

ていた。

台所では、モリーおばさんが腕によりをかけた料理を作っている。ロンとハーマイオニーが監督生に選ばれたことについてのお祝いだ。正直、これには少し驚いた……てつきり、ハリーだと思っていたのだが。いや、ロンが選ばれたことに対して不満があるわけじゃない。……まあ、ハリーはあまりにも厄介ごとに巻き込まれすぎた。

「しかし、大法廷で裁かれるとはね……魔法省は徹底的に、ハリーを敵と見なしたな」

「ああ……そのようだ」

両手で紅茶のカップを持ちながら、ぼくは小さく頷いた。

「わざわざウィゼンガモットの、それも一番の大法廷でだなんて……あそこは確か、『死喰い人』級の極悪人を裁くための場所じゃあなかったか。我が親愛なる従姉妹様のような」

「ああ……そうか、そう言えば、君の従姉妹に当たるのだったね、ベラトリクス・レストレンジは」

「ああ」

シリウスの瞳に暗い影が過ぎる。ぼくとリーマスが何うよりも、シリウスが表情を切り替える方が早かった。

隅で頭を寄せ合いヒソヒソ話をする双子の元に歩み寄ると、「今度はどんな悪戯を考えてんだ、え？」と豪快な笑い声を上げた。

「シリウス、しーっ、しー！ ママに聞かれたら俺ら死んじゃうだろ！」
「おお、そりゃあ悪かった。だがな、君たち、我らが悪戯仕掛人の意志を継がんとする同胞よ。私だったら、そのドクシーの粉末は発熱より嘔吐向けに使うぞ——」

ぼくとリーマスも「おやおや」と近付くと、「私にも見せてくれないかな？ これでも悪戯仕掛人の一人なんだよ」と笑った。

「まさかこんなところに、我らが敬愛してやまない悪戯仕掛人の面々が揃っていたとは」

「フィルチが凄まじい表情で悪行を言い立てる先輩が、まさかシリウスとリーマス、それに愉快なお仲間だったとはなあ」

「あとは誰だっけ？ ハリーのおっとさんと、あとは、えーと、ロニー

坊やのでぶつちよネズミ?」

その言葉に、ぼくとシリウス、リーマスの三人は声を上げて笑った。「本当に、『忍びの地図』は素晴らしい作品だ、全くけしからん、全く素晴らしい」

「それにアキが尽力していたとは、さすが我らの可愛い弟分だけはあるな」

「ああ、何度もホグズミードへ繋がる通路や厨房へ行く道にはお世話になったものだよ」

「それにちよつとした深夜徘徊にも」

「ちよつとしたお散歩にもな」

「ああ、あのハニーデュークスに繋がる道か。あの道は私たちもよく使ったものだ」

「毎回毎回、リーマスの目が輝いてたっけ。味覚異常は変わらないな」

「うるさいよ、レイブン」

「悪いね、ムーニー」

「常にチョコレートを持ち歩いてたっけか。今もか? ムーニー」

「パッドフット、おすわり」

「ちよつと、俺とアキの扱いが違いすぎないか!？」

ぼくとリーマスは二人で笑った。

「しかし、ダンブルドアはハリーを監督生にしていると思っていた」

双子から離れつつ、低い声でシリウスは囁いた。

「やっぱり、シリウスもそう思っていたのか。」

「きつと、何か考えがあるんだろう、あの人には」

「だけどそうすることで、ハリーに信頼していると示せたと思わないか?」

「この前ハリーが言っていた。ウイゼンガモットでダンブルドアが、一度も目を合わせてくれなかったと。妙じゃないか?」

「ダンブルドアのお考えは、最近きっぱりだ。今までも読んでいたのかすら危ういがね」

「その通りだ……最近のダンブルドアは、ハリーをわざと危険に晒しているような気がする。この前の三大魔法学校対抗試合と同じよう

に……」

眉を寄せた。あの時のことは、未だに許せない。

ハリーのことだし、それに——セドリックのことも。

「とりあえず、だ。アキ。俺たちの分まで、ハリーをしつかり守ってくれよ」

シリウスの灰色の瞳が、ぼくをしつかと見た。

その目を見返し、ぼくは微笑んでみせる。

「ああ……当たり前じゃん。なんのために、幣原がこんな身体にしたと思ってるの。ハリーを一番近くで守るため、そうでしょう？」

「まあ、その割には詰めが甘いよね。あいつらしいと言っちゃ、あいつらしいけど。ハリーを守るんなら、グリフィンドールに入らなくっちゃ」

「あれは、帽子と戦って負けたんだよ……」

思い出すにも口惜しい。口喧嘩に負けたのはあれが初めてだ。

負けた、というか、押し切られた、とも言うか。

「でも、アキがグリフィンドールとか、想像付かねえな。お前はやっぱりどこからどう見てもレイブンクローだ。なんというか、俺たちとは気性が違う」

「褒め言葉として受け取っておこう。グリフィンドール生は攻撃的過ぎる、穏やかなレイブンクロー生と違って」

「穏やかかねえ、レイブンクロー生。時折舌鋒鋭くズバズバ言ってくる癖に」

「そりゃあ、そいつの論理展開が無茶苦茶だからだろ。論理の穴を見つけたら、指摘せずにはいられない性なのさ……あっ！」

ふと大切なことを思い出して、ぼくは息を呑んだ。

なんだなんだ、とシリウスとリーマスが不審げな顔を向けてくる。

「忘れてホグワーツに持ってつちやうところだった……これ、シリウスに」

そう言っって、杖を差し出すと、シリウスは眉を寄せて受け取った。

「どういうことだ？」

「幣原の昔の『二本目の杖』らしいよ——この前魔法省に行ったとき、

気付いたら持ってたんだ。どこから取ってきたのかは幣原に聞いてよね。気が付いたら、今までの杖の他にその杖と、鍵の束と、あいつの癖字で書かれたメモがあったんだから」

「君も全く、難儀なことだ」

リーマスが同情を込めて呟いた。本当に、と肩を竦める。

ふうん、とシリウスは杖を軽くしならせたりくるくると回していたが、ひよいつと軽く手首を振り上げた。瞬間、空中に花びらが舞い上がり、ぼくに降り注いでくる。

頭を振ると、髪に付いた花びらが二、三枚飛んでいった。

「ちよつと、シリウス！」

「はは、悪い悪い」

全く悪びれた様子がなく、シリウスは軽く詫びた。

「黒檀、か？」

「そう。芯はドラゴンの心臓の琴線。二十八センチ。……よかった、悪くはないようだ」

ほつと息を吐いた。魔法使いが杖を選ぶのではなく、杖が魔法使いを選ぶのだ。

もし、相性が悪かったらどうしようかと思っていた——比較的、誰とでも馴染む杖であったとしたところで。

「シリウス、杖持っていないだろ？ その……幣原が、折っちゃったから」

少しだけ、口ごもる。

ああ、と合点が行ったように、シリウスは「そういうことか」と呟いた。

「気に病むことじゃねえのに……」

「あいつは、気に病むんだよ、シリウス」

リーマスの声に、「……それもそうか」とシリウスは肩を竦めた。



夕食後。朝には強いが夜には弱いぼくは、チェスに誘ってくるジ

ニーを軽くいなして、先に上がらせてもらった。眠気に目をパチパチとさせながら、大きな欠伸を一つ漏らす。

ふと、啜り泣きが耳に入った。誰かが、泣いているのか。

足音を響めて階段を登り切る。

啜り泣きは、客間の方から聞こえていた。様子を伺い、思わず声を掛ける。

「モリーおばさん……」

声を掛けて、おばさんの目の前に広がっている光景に気がついた。ロンだ。大の字に倒れて、死んでいる。

思わず息を呑んだ。

「リディクラス！」

泣きながら、おばさんが杖を振った。ロンの死体がビルに変わる。そしてアーサーおじさんに、双子に、パーシーに、ハリーに――。

「おばさん、落ち着いて」

モリーおばさんの肩を、優しく撫でた。

――不安なのだ、おばさんも。

いつ誰が死ぬかも分からぬ『不死鳥の騎士団』に、家族全員がいることに。

家族を失うこと、それこそが、おばさんが一番恐れるものなのだ。

「リディクラス」

杖を取り出し、はつきりと唱える。

ハリーの死体が消え、代わりに現れたのは、ぼく自身だった。

いや、ぼくじゃない。

幣原秋の姿だ。

『死んでくれるって、言ったよね？ アキ』

純粹な笑顔で、ぼくに笑いかける。濁って淀んだ、光の灯らない瞳で。

何より綺麗な微笑みなのに、どこまでも歪に見えた。

『ぼくの唯一の願い、叶えてくれるって』

「……ああ、叶えてあげるよ」

杖を一文字に横薙いだ。幣原秋の姿は、霞となって消え失せる。

「今すぐじゃあ、ないけどな」

第10話 優等生宣言

「そう言えば休み中に、なんだっけ？ 皆になんとか卿って言わせてる巷で話題のあの人物に会ったよ」

ジェームズという言葉に、ぼくは思わず鉛筆を取り落とした。

小部屋で、悪戯仕掛人とぼくで、忍びの地図の最終設計をしていたときのことだ。

ジェームズは何の気負いもなしに、そんなことを言つてのけたのだった。

「ヴォルデモート卿、な。もつとも、今じゃその名前を呼ぶのすら怖がって、日刊預言者新聞でも『名前を呼んではいけないあの人』やら『例のあの人』やら呼ばれているみたいだけど」

頬杖をついたシリウスが、ジェームズのことを補足する。

その言葉に、ピーターはヒエツと怯えた声を漏らして椅子から飛び跳ねたし、リーマスも僅かに眉を寄せた。

しかし、その二人の様子を見たジェームズは、なんとも楽しそうに笑った。

「おいおいおい、勇猛果敢なグリフィンドル生が、聞いて呆れるね？ あんな奴怖がる価値もない、純血思想なんて思春期染みた妄想を患っている、ただのおっさんだ」

「でも、ジェームズ。その『ただのおっさん』は、闇祓いが束になって掛かっても倒せないんだよ？ これまで奴と戦って、何人が死んだと……それにしても、よくぞ無事だったね」

リーマスが安堵のため息を漏らした。本当に、リーマスの言う通りだ。

「ああ、あつちの陣営に俺とジェームズを引き込みに来ただけだったようだ。あの純血選民思想全開のあいつは、俺とジェームズを狙っていたらしい。一応はポッター家もブラック家も純血の家系だからな。もつとも、すぐさまジェームズが追い返しちまったがね」

「あんな十四歳の自意識拗らせたような奴の下に付く気なんて死んでも起きないよ、お世話様、つてところだ」

ジェームズが肩を竦める。そういうところが、本当にジェームズらしい。

「一体、いつ？」

「秋が日本に帰ってから、一週間も経たないうちだよ。惜しかったなあ、秋。もうちよつとジェームズんちにいたら、出会えたのに」

シリウスの言葉に、ぼくは思わず黙り込んだ。

会いたい、のだろうか。

ぼくは、あいつに。

両親を殺した、あいつに。

是非とも両親の仇を取りたいと思う。

でも実際に奴を目の前にして、ぼくはそれでも、杖を向けることが出来るのだろうか。

「……僕は、秋がいなくてよかったと思っただけだね」

ジェームズの声は、静かだった。先ほどまでの得意げな笑みは、既に影を潜めている。

「……どういふこと？」

ジェームズに尋ねたのは、ピーターだった。

それに、ジェームズは答える。

「秋の両親は、あいつに殺されているから」

「ジェームズ！」

無意識に、テーブルを叩いて立ち上がった。

心臓が早鐘を打っている。息が、上手く出来なかった。

「秋。隠しても、どうしようもないことだ。それなら無配慮に誰かが君を傷つける言葉を吐くより先に、真実を言ってしまった方がいい」

「……………」

混乱する頭で、ジェームズに返す言葉は見つからなかった。

部屋の中は静まり返っていた。誰もぼくとジェームズを交互に見つめている。

そんな目で、そんな気遣わしげな眼差しで、ぼくを見ないでくれ。

「ここには、誰も君を傷つける人はいないよ、秋」

ジェームズは、いつそのこと淡々とした口調で言った。

「ここに居る誰も、君を傷つけない。誰だって、君を助けたいんだ。君を、救いたいと思っっているんだよ。——僕らを信じて、秋」

——そんなこと。

次に口を開いたのは、リーマスだった。瞳に光を宿して、ぼくに笑いかける。

「秋。君は僕のあの病気を、受け入れてくれたよね。あの瞬間から、君は僕の共犯者だ。……だから、僕らも君の共犯者にさせてくれないか？」

柔らかな笑顔だった。

ピーターが、揺れる瞳で呟く。

「……どうして、話してくれなかったの？ 一体それ、いつの話？」
誤魔化すことも、もう出来ない。

観念して、ぼくは口を開いた。

「……二年前の、魔法魔術大会の終わり。……ライ先輩は『魔法魔術大会で優勝した人間に対して、枷を嵌めているんじゃないか』と言っていた。あの人も、以前あの大会で優勝した折、家族が襲われている」
「……そう、だったんだ」

呆然と、ピーターが呟いた。

「……俺とジェームズが、君に『大会に出ろ』なんてけしかけなかったら……」

「……それは違うよ、シリウス。君らが何もしなくても、元々あれは、フリットウィック先生に誘われていたし……それに、ぼくが出なかったところで、優勝した誰かの家族が犠牲になっていたんだと思う」

そう考えると、ライ先輩は信じられないほどに強い人だ。理不尽に自分の家族が襲われて、なお、続く被害者を出さないためにエントリーしたのだから。

疑問と、疑念を抱きながら。

「ライ先輩……ああ、ライ・シユレディンガーか」

「そう。去年卒業した、グリフィンドールの先輩だ」

シリウスは、思い返すような表情をした。

ライ先輩だけじゃない。闇祓いになったエリス先輩も、不死鳥の騎

士団で出会ったフランクさんも、アリスさんも、本当にすごい信念を持った人だ。

ぼくにも、なれるだろうか。あんな人たちのように。

……まだ、告げるのは早いだろうか。

でも、彼らは、むしろ「遅すぎるくらいだ」と愚痴るのかもしれない。

そう考えながら、ぼくは口を開いた。

「……不死鳥の騎士団という組織を、知っている？」



ホグワーツ特急での旅は、決していいものとは言い難かった。

ドラコがハリーたちグリフィンボール生を挑発するのはいつものことだったが、『犬のように』はさすがに言い過ぎた。

——やっぱり、何がなんでも置いてくるべきだった。

しかし、あの大型犬は納得しないだろう。単純な行動力だけで言えば、シリウスは悪戯仕掛人随一、ジェームズをも上回っていたのだから。

「ねえ、アキ。この馬、一体何？」

「え？」

馬車に乗り込むとき、ハリーが震える声でぼくに尋ねた。

ハリーが何を言っているのかよく分からず、ぼくは首を傾げる。

「今まで、こんな馬いたかい？ ロンは見えないって言うんだ——」

「あんたはあたしと同じくらい正気だよ、そう言ってるじゃん」

ルーナが言うも、ハリーは心配げな表情でぼくを見ていた。

「……ああ、セストラルのことか」

やっとな合点が行った。頷く。

「セストラル？」

「この馬の名前。そうか……君にも見えるのか」

ハリーが首を傾げるのに、ぼくはちよつとだけ眉を寄せて笑った。

『死』を視たことのある者にしか、セストラルは見えない——そうい

うごとさ」



「あんたのお兄ちゃん、ちよつと変わってるね」

「そうかな？ きつとハリーは、君の方こそ変わってると思っただろうさ」

ハリーたちグリフィンドル生と別れ、ルーナとそんなことを話しながら、レイブンクローのテーブルへと向かった。アリスの姿を見つければ、その正面に腰掛ける。

「やあ、アリス。いい休暇だった？」

「いいと言いはないが、悪くはない休暇だった。……お前は案外軽い男だな、新しいガールフレンドか？」

「止めてよ、アクアに殺されちゃう。一つ下のルーナ・ラブグッド。見覚えくらいはあるだろう？」

「アリス・フィスナーだ」

夢見心地のような瞳でルーナはアリスを見ると、ほわっと笑った。

アリスは少し毒気を抜かれたような顔をしていたが、小さく息を吐くと頭をぐしやぐしやと搔いた。

「ピアス増やした？」

「ああ、まあな」

左耳のピアスが、今までは雪印ピアスだけだったのに、もう一種類増えている。

それを指摘すると、アリスは思い出したように左耳のピアスに触れた。

「災難だったな、お前の兄貴。よかった、と伝えておいてくれ。こっちも胸を撫で下ろしたと」

「ああ、リーフさんから聞いたのか。全くもう、な話だよ」

憤慨したところで、一年生が入ってきた。ぼくらは揃って口を閉じると、前を向く。

目を期待と不安に輝かせている一年生を見て、懐かしいな、と感慨

に耽った。もう、あれから四年も経つのか。

ついでに、帽子と口喧嘩して負けたことも思い出し、思わずギリつと歯を食いしばった。くっそう。

「マクゴナガル先生が、椅子の上に帽子を置いた。」

帽子が歌い出す。今年の歌は、普段とは少し毛色が違っていて、ホグワーツの四人の創始者、ゴドリック・グリフィンドール、ロウエナ・レイブンクロー、ヘルガ・ハツフルパフ、そして、サラザール・スリザリンにまつわるものだった。

『外なる敵は恐ろしや』……か」

アリスは眉を寄せ、小さく呟いた。

「帽子が警告を伝えることって、今までにあつたのかなあ？」

『ありましたよ、ルーナ』

ルーナの呟きに答えたのは、レイブンクローの寮付きゴースト、『灰色のレディ』だった。

創始者、ロウエナ・レイブンクローの娘、ヘレナ・レイブンクローだ。

『帽子は学校に危機が迫っていると、警告を発する義務があると考えているのですよ』

それだけ言うと、『灰色のレディ』は姿を消してしまった。

「……団結しろ、つてことか」

今日のハリーとドラコの様子を思い出し、小さく頭を振った。

四寮の、それもグリフィンドールとスリザリンが手を取り合うことなんて、本当にあるのだろうか。

組み分けの儀が終わり、ダンブルドアの合図でテーブルに豪華な食事が現れた。

そして、誰も腹が満たされた頃合いで、ダンブルドアが再び立ち上がった。今までと変わらぬ注意事項を述べて、言葉を続ける。

「今年は先生が二人変わった。グラブリー・プランク先生がお戻りになったのを、心から歓迎申し上げます。『魔法生物飼育学』の担当じゃ――」

ぼくは慌てて教職員テーブルを見渡した。あんなに目立つハグ

リツドの姿がない。

アリス、と声を掛けようとしたところで、シツとアリスは人差し指を口元に当て、鋭い瞳で前を見た。

「さらに紹介するのが、アンブリッジ先生、『闇の魔術に対する防衛術』の新任教授じゃ」

アリスの眉がぎゅつと寄る。

アンブリッジ先生——思わずぼくは二度見したが——全身がピンク尽くしだ。ローブもピンク、カーディガンもピンク、ヘアバンドもピンク、持っている小さなハンドバックもピンク。ちよいと少女趣味すぎやしないか。

人の趣味をとやかく言うつもりは毛頭ないが、少しは実年齢を考えて欲しい……ちよいと、あれは、凶器だ。

ダンブルドアの言葉を咳払いで遮り（今までそんなことをする人は誰一人としていなかった——ほら見ろ、マクゴナガル先生がすごい表情をしている——）、アンブリッジ先生は立ち上がった。

「歓迎のお言葉恐れ入りますわ、校長先生」

見た目とこれまたギャップのある——いや、服装の趣味からは合っているのか——甲高い声に、少しだけ啞然とした。

「さて、ホグワーツに戻ってこられて、本当に嬉しいですわ！　そして、みなさんの幸せそうな可愛い顔がわたくしを見上げているのは素敵ですわ！　みなさんとお知り合いになれるのを、とても楽しみにしております。きっとよいお友達になれますわよ！」

——ここは本当にホグワーツだったか。

間違えて幼稚園の教室に来てしまったんじゃないか。そう思わせるレベルの衝撃だった。誰もが冷笑を隠さない。

アリスなんて、絶対興味をなくしているだろう——そう思ったが、しかしぼくの予想は外れていた。アンブリッジの言葉に気分が悪そうに眉を顰めながらも、アリスはじつとアンブリッジを見据えていた。

再び咳払いをした後、アンブリッジは口調を変えた。しつかりとした口調で、スラスラと述べてみせる。

「魔法省は、若い魔法使いや魔女の教育は非常に重要であると、常にそう考えてきました。みなさんが持つて生まれた稀なる才能は、慎重に教え導き、養って磨かなければものになりません。魔法界独自の古来からの技を、後代に伝えていかなければ、永久に失われてしまいます。われらが祖先が集大成した魔法の知識の宝庫は、教育という気高い天職を持つものにより、守り、補い、磨かれていかねばなりません。」

ホグワーツの歴代校長は、この歴史ある学校を治める重職を務めるにあたり、何らかの新規なものを導入してきました。そうあるべきです。進歩がなければ停滞と衰退あるのみ。しかしながら、進歩のための進歩は奨励されるべきではありません。なぜなら、試練を受け、照明された伝統は、手を加える必要がないからです——」

ぐるりと周囲を見渡すと、誰もアンブリッジの話聞いていないようだ。雑談に興じていて、まともに聞いているのは数えるばかりだ。

ルーナは隣で「ザ・クイブラー」を読み始めたし、ちゃんと聞いているのは、ハーマイオニーと、ハツフルパフのアーニー・マクラミン、それに——

ちらりと正面を見た。

アリスは吐き気をこらえるような表情ではあるが、じつと話に耳を傾けている。

——と、あとは教授陣か。

演説から漂う、隠しきれない選民思想臭。

魔法使いは希少で稀で、魔法使いであることそのものの自体に価値があると思っている。

魔法省は、ホグワーツの進歩を許さない。

「……教育に、政府の圧力が掛かって、ロクな試しがないことくらい、周知の事実じゃないか」

小さな声で吐き捨てると、アリスはちらりとぼくを見た。その目は「ああ全くだ」とぼくの言葉に同意している。

「保持すべきは保持し、正すべきは正し、近ずべきやり方と分かったものは何であれ切り捨て、いざ、前進しようではありませんか。開放的で効果的で、かつ責任ある新しい時代へ」

その言葉で口上を締め括ると、アンブリッジは座った。パラパラと気の無い拍手が鳴り、すぐに止む。

「まさに啓発的じゃった」

ダンブルドアがそう言うのに、「本当に啓発的だ」と嘲るような声でアリスは呟いた。

「アキ、先に言っておくぜ。面倒なことになる前にな」

アリスはニヤリとぼくに笑いかけた。

「今年の俺は優等生だ、どっからどう見ても、なあ？ アキ」
よくその顔で、その服装で、そんなことが言えたものだ。

第1話 守りたい、守れない

セブルス・スネイプは、痛む左腕を服の上から撫でさすった。

この『闇の印』のおかげで、半袖も着られないし、袖もおちおちま
くれない。魔法薬学で、薬品が袖に跳ねないように神経を遣わなけれ
ばいけなくなってしまった。

いや、不自由はそれだけではないのだが。

これはどうやら、闇の帝王が仲間である死喰い人を呼び集めるとき
にも使われるようで、学生であるセブルスは『姿あらわし』で馳せ参
ずるわけにもいかないのだが、度々痛むのだ。

何度か、浅い睡眠を邪魔されたこともあるし、授業中に脂汗をかき
ながら堪えたことも一度や二度ではない。

こんなに若い自分に、どうして闇の帝王は印を付けたのか。

思い返すと、あの日のことが蘇る。

『答えろ……幣原秋を知っているのか!?!』

そうだ。あの方は確かに、そう言ったのだ。

自分の親友の名前を、口に出したのだ。

秋と、闇の帝王に、一体何の関係があるのだろうか？

『お前の負けだ、幣原直!!』

狂気を孕む瞳で、高らかに叫んだ闇の帝王。

あの目は一体、誰を想起していたのだろうか。

——秋。

君は一体、何者なんだ？

秋の身を、案じた。

あの少年がいくら強かろうとも、闇の帝王にかかれば一捻りだろ
う。

あの少年は、優しすぎるから。

闇の帝王は、無慈悲で容赦がない。

あれほどの執着を垣間見せたのだ、闇の帝王に捕まれば、秋は一体
どうなるのだろうか。

——そうか。

そのとき初めて、気がついた。思い至った思考に、息が止まった。どうしてこのことに、今まで思い至らなかったのだろうか？

秋と親友だから、闇の帝王は自分に印を付けたのだ。

決して逃げていかないように、首輪と鎖をつけたのだ。

バラバラと、腕から抱えていた教科書が落ちる。そんなことにも気が付かない。

自分が側にいる限り、あの少年は常に危険に身を晒すことになる。

——あの少年を弾幕の前に押し出したのは、自分なのだ。

リリーがいなくなった今、もはや唯一人の親友で、守りたい相手なのに。

「大丈夫、セブルス？」

顔を覗き込まれていることに、初めて気がついた。驚きに飛び跳ねる。

思考の大半を占めていた人物が、幣原秋が、目の前に立っていた。

「どうしたの、真っ青な顔で」

言いながら、先ほどまでセブルス自身が持っていたはずの教科書を「はい」と手渡してきた。しかし、受け取ろうとするも、震える手はそれを弾いてしまう。

再び、上級魔法薬学の教科書は地面に落ちた。

「あーもう、本当に大丈夫？ 医務室に行く？」

秋は瞳に心配そうな色を湛えながらも、教科書を拾い上げようと秋は屈み込んだ。

パカリと裏表紙を開いて落ちた教科書は、ちょうどセブルスが昨日の授業中に書き込んだ『半純血のプリンス蔵書』という文字が残っている。

とても小さい文字でパツと見ただけじゃ気付かないだろうが、それでもセブルスは秋よりも先にその教科書をひったくった。

「大丈夫だ」

秋は目を丸くしてセブルスを見つめたが、「そう、それなら良かった」と、やがてその瞳を弧にして微笑んだ。

「魔法薬学が、ふくろうでEを取ることが出来て、本当に良かった。セ

ブルスもいてくれたしね。そうでもないよ、『生ける屍の水薬』なんて、あんなに難しい薬作れっこなかったよ」

「君は几帳面な癖に、変なところで大雑把なんだ。ある程度終わったら、思考が次の過程に行ってしまうのだろうな。だから、最後の一センチで、二ミリ刻みだと書いてあるのに、四つしか断片が出来なくなったりするんだよ」

「うう、肝に銘じます……」

その時、角を曲がって、リリーと友人らしき少女がこちらに歩いてきた。

リリーはセブルスを視認すると、僅かに表情を強張らせる。しかし隣の少女から話しかけられ、笑顔で言葉を返した。

顔を伏せ、足元を見つめる。

すぐ隣を、綺麗な赤い髪が通り過ぎた。そのことを確認してから、セブルスは顔を上げる。

ふと、秋が隣にいないことに気がついた。振り返る。

秋は、ちようどりリーとすれ違ったあたりのところで、足を止めていた。リリーの後ろ姿を、切なげな瞳で見つめている。

その眼差しは、酷く優しく、愛おしくてたまらないと、叫んでいるかのようだった。

——秋、君も。

「……秋」

我に返ったように、秋がセブルスを振り返る。

照れ隠しのように微笑んで、「ごめんごめん」と駆け寄ってきた。

「今日の魔法薬学のレポート、ちよつと分からないところがあったんだ。教えてくれないかな？」

「……ああ」

秋の言葉が、何か喋らなければという義務感に急ぎ立てられたでまかせだということは、分かっていた。

セブルスはそれを指摘せず、秋の嘘に騙された振りをした。



「やーめ、やめろって、締まる、首！」

「バーカっ、ネクタイくらいまともに締めてなくってどこの誰が優等生だ、聞いて呆れるわっ！」

朝からレイブンクロー寮男子の寝室は、戦場だった。主に、ぼく対アリスの。

「アリスー、いつまで抵抗してんだよ。とつとと諦めろ」

呆れた顔でそう言うのは、同室の友人、ウイル・ダーク。

アリスのベッドの端に寄りかかっていたレーンも、ウイルの言葉に肩を竦めた。

「そうだよ、こういう時のアキは絶対に自分を曲げないんだから。だから、とつとと諦めろ？」

「お前ら……っつ、つたく、もう、分かった、分かったから！ 自分で結ぶ、それでいいんだろ？」

「始めっからそうしてればいいんだ」

ボタンを一番上だけ外して、後はしっかりと留めると、ぼくの手に握られていたネクタイをものの抵抗とばかりに乱暴に奪い取る。

だが、そんなことで揺らぐほど、ぼくの心は脆弱でもないのだった。「腕まくりも禁止だ」

にこやかに告げてやれば、ぐう、とも、うう、とも付かない声がアリスから漏れた。

「っ、あー、落ち着かねえ……！ よくお前、平気でいられるな……」
「これが普通だぞ、アリス。君が着崩しすぎなんだよ。……『闇の魔術に対する防衛術』だってあるしね、今日は」

ぼくの言葉に、アリスは小さくため息をついて、「やってらんねえ、優等生なんて……」と呟いた。

まだ、やってもないのに！



「毎っ回！ 誰も彼もが俺を見て笑いやがって！ 『薬草学』でのマル

フオイの顔見たか!? 『七五三か?』「みたいな!! 顔を!!」

「落ち着いてアリス、イギリスに七五三はないから」

「オマケに『占い学』ではお前の兄貴まで腹抱えて笑ってんだもんよ!!」

「そりやあ笑うさ、だって面白いんだもの……っふ、あつはは……っ」

堪え切れず笑い声を漏らした。

アリスが顔を染めて「笑うな!」と喚いている。

「明日からはローブを着てくるか……少し暑いが、このままよりは目立たないはずだ」

「そ、そうだね……」

目の端に浮かんだ涙を拭って、ぼくは頷いた。

「でも、やんなきゃいけないんだらう?」

アリスはぼくの言葉に、真面目な表情で頷いた。

「ああ……そうだ」

「……ふうん」

出てきたじやん、名門貴族『らしさ』ってやつが。

『闇の魔術に対する防衛術』の教室に入ると、アンブリッジは既に教壇に座っていた。『占い学』から一緒のハリーが、アンブリッジを見て吐き気を堪える表情を浮かべる。

ハリーはアンブリッジを「ガマガエルのようだ」と評していたっけ。

言われてみれば、なるほど、納得できる。

「さあ、こんにちは!」

相変わらず、この人の見た目と声のギャップには驚きだ。

何人かがぼそぼそと「こんにちは」と返すのに、アンブリッジは舌を鳴らしてもう一度挨拶を唱えさせる。もうこの時点で、アリスの目は八割方死んでいた。

早い。まあ、アリスらしいといっちゃあらしいが。

クラスの全員をじっくりと吟味するように出席を取ったあと、アンブリッジはこの授業についてとくとくと述べ始めた。

「今年は、慎重に構築された理論中心の魔法省指導要領どおりの防衛術を学んでまいります。ウィルバート・スリンクハードの『防衛術の

理論』を持っていますか？ それでは五ページを開いてください。『第一章、初心者の基礎』。おしやべりはしないこと」

……指導要領、ねえ。

今までのどの授業でも——幣原の時代を取ってみても、杖を使わない『闇の魔術に対する防衛術』なんてなかった。

確かに理論は大切だが、理論というのは実践ありきのものじゃないのか。

レイブンクロー生も、暗い表情で隣同士目配せし合ったりしている。

机に右肘をつくると、パラパラと教科書を捲った。そしてふと顔を上げ、目を瞪る。

ハーマイオニーが手を上げている。しかも、教科書を開いてすらない。

気付いていない訳ではないだろうに、アンブリッジも頑固だった。

しかしその膠着状態が数分続き、教科書よりもハーマイオニーの行動を見ている生徒が大多数になると、さすがに無視も出来なくなつたようだ。

「この章について、何か聞きたかったの？」

まるでハーマイオニーに今気付いたかのように、アンブリッジは話しかけた。

「この章についてはありません、違います」

「おやまあ、今は読む時間よ。他の質問なら、クラスが終わってからにしましょうね」

「授業の目的に質問があります」

ハーマイオニーの言葉に、ぼくはパタンと教科書を閉じた。アリスでさえも、ハーマイオニーをまじまじと見ている。

おい、この授業は優等生でいるんじゃないのかよ。

「ちゃんと全部読めば、授業の目的ははっきりしていると思いますよ」
「でも、防衛呪文を使うことに関しては何も書いてありません」

アンブリッジをマッドアイの後任に据えたのは、いろいろとアレだなあ、とぼくは思い返していた。マッドアイ、というか、偽ムーディ、

クラウチ・ジュニアだった訳だが。

どこからどう取っても実践、闇の魔術に対する心構えを一年間説かれた直後のアンブリッジの座学オンリー授業は、ジェットコースターもびつくりの急展開だ。

「防衛呪文を使う？ まあ、まあ、ミス・グレンジャー。このクラスで、あなたが防衛呪文を使う必要があるような状況が起ころうとは、考えられませんけど？ まさか、授業中に襲われるなんて思っていないでしょう？」

「魔法を使わないの？」

「わたくしのクラスで発言したい生徒は、手を挙げること！」

アンブリッジの声に、ロンがパットと手を上げた。同時にハリーとハーマイオニーの手も上がる。

「はい、ミス・グレンジャー、何か他に聞きたいの？」

「はい。『闇の魔術に対する防衛術』の真の狙いは、間違いなく、防衛呪文の練習をすることではありませんか？」

「ミス・グレンジャー、あなたは、魔法省の訓練を受けた教育専門家ですか？」

「いいえ、でも——」

「さあ、それなら、残念ながら、あなたには授業の『真の狙い』を決める資格はありませんね。あなたよりもっと年上の、もっと賢い魔法使いたちが、新しい指導要領を決めたのです——」

パット、レイブンクローの女子生徒が手を上げた。リサ・ターピンだ。

「この作者、私の祖母です。祖母はこの本を単独で使うことを好みませんでした。この本は理論のみを書き下しているため、教育機関等で用いるときは必ず実践書を共にするよう——」

「発言は指名されてから！」

金切り声に、リサはむっとした表情で手を上げた。アンブリッジはあからさまにリサを無視する。

「あなた方が防衛呪文について学ぶのは、安全で危険のない方法で——」

「そんなの、何の役に立つ？」

次に声を張り上げたのはハリーだった。

「もし僕たちが襲われるとしたら、そんな方法——」

「拳手、ミスター・ポッター！」

先ほどのリサの発言で、「やれやれまーたグリフィンボールの熱血突っ走りが始まったよ」とそっぽを向いていたレイブンクロー生も軽く火がついたようだった。

何人かがパツと手を上げている。

「それで？ ミスター・トーマス？」

「ええと、ハリーの言う通りでしょう？ もし僕たちが襲われるとしたら、危険のない方法なんかじゃない」

「もう一度言いますよ。このクラスで襲われると思うのですか？」

「いいえ、でも——」

「この学校のやり方を批判したくはありませんが」

そんなニヤついた表情で、よく言えたものだ。

「あなた方は、これまで大変無責任な魔法使いたちに曝されてきました。非常に無責任な——言うまでもなく、非常に危険な半獣もいました」

思わず声を荒げた。

「だつ、れが、非常に危険な半獣だ、取り消せ!!」

「拳手を！」

「ルーピン先生のことを言っているなら、今まで最高の先生だった！」「拳手、ミスター・トーマス！ 今言いかけていたように——みなさんは、年齢にふさわしくない複雑で不適切な呪文を——命取りにもなりかねない呪文を——教えられてきました。恐怖に駆られ、一日おきに闇の襲撃を受けるのではないかと信じ込むようになったのです——」「そんなことありません、私たちはただ——」

「手が拳がついていません、ミス・グレンジャー！」

ハーマイオニーの手も、アンブリッジは無視した。

「わたくしの前任者は違法な呪文を皆さんの前でやって見せたどころか、実際みなさんに呪文をかけたと理解しています」

「随分いろんなことを教えてくれましたがね、ああ」

「手をお挙げなさい、ミスター・スミツク!」

レーンは肩を竦めると、小さく舌を出した。

「さて——ふくろう試験に合格するためには、理論的な知識で十分足りるというのが魔法省の見解です。結局学校というものは、試験に合格するためにあるのですから」

アンブリッジがちょうど手を挙げたばかりのぼくを見た。

「コホン、と咳払いをして、ぼくを見下ろす。

「あー……ミスター・ポッター?」

アリスが「おいバカ止めろ」とも「羨ましいな」とも取れぬ表情でぼくを見ている。

静かに立ち上がると、ぼくはまっすぐアンブリッジを見た。

「ぼくの記憶では、ふくろう試験には確か『実技試験』というものもあつたと思いますが? その学習は一体いつ行うんでしょうか」

「理論を十分に勉強すれば、試験という慎重に整えられた条件の下で呪文が掛けられないということはありません」

「そんなことあるわけないでしょう? アンタ本当にホグワーツ卒業生ですか?」

「理論を十分に勉強すれば、と言ったでしょう。必ず——」

「じゃあこのクラスの半数は、今年のふくろうを落とすだろうな!!」

ぼくの声に、教室は静まり返った。

「それで、理論は現実世界でどんな役に立つんですか?」

静寂を切り裂いたのは、ハリーの大声だった。アンブリッジは目を上げる。

「ここは学校です、ミスター・ポッター。現実世界ではありません」

「それじゃ、外の世界で待ち受けているものに対して準備しなくていいんですか?」

ハリーの言葉に、アンブリッジは背筋が震えるような猫撫で声で言った。

「外の世界で待ち受けているものは何もありません。ミスター・ポッター。あなた方のような子供を、誰が襲うと思っているの?」

ハリーは考え込む素振りを見せた。

想像していたより、我が兄は役者だ。ちらり、とハリーと目を見合わせる。

何を言いたいか、もう分かりきっていた。

「例えば……」

だってぼくらは、双子なのだから。

「ヴォルデモート卿とか」

シン、と再び教室が静まり返る。

アンブリッジはぼくとハリーを見比べて、気味の悪い笑みを浮かべていた。

「グリフィンドール、レイブンクロー、十点減点です。ミスター・ハリー・ポッター、ミスター・アキ・ポッター」

アンブリッジは立ち上がると、机の上から身を乗り出した。

「さて、いくつかはつきりさせておきましょう。みなさんは、ある闇の魔法使いが戻ってきたという話を聞かされてきました。死から蘇ったと——」

「あいつは死んでいなかった、蘇ったんだ！」

「生徒の言葉を見無視するのが今年の魔法省のやり方なんですか？」

アンブリッジはぼくらの言葉を綺麗に無視した。

「今言いかけていたように、皆さんは、ある闇の魔法使いが再び野に放たれたという話を聞かされてきました。これは嘘です」

「嘘じゃない！ 僕は見た。あいつと戦ったんだ！」

「何度ハリーの言葉を見無視したら気が済むんだ、魔法省は！」

「罰則です。ミスター・ポッター。二人とも、明日の夕方五時、わたくの部屋で。もう一度言いましよう、ある闇の魔法使いが蘇ったと、あれは嘘です。魔法省は、皆さんに闇の魔法使いの危険はないと保証します」

一体本日中に何度、教室が静まり返っただろう。

ハリーは震える声で言った。

「それでは、先生は、セドリック・ダイゴリーが独りで勝手に死んだと言うんですね？」

思わず、ハリーを見つめた。

ハリーは蒼白な表情だったが、しっかりとアンブリッジを見つめていた。

アンブリッジの顔から作り笑いが消える。

「セドリック・デイゴリーの死は、悲しい事故です」

「殺されたんだ。ヴォルデモートがセドリックを殺した。先生もそれを知っているはずだ」

誰もが、呼吸の音すらも、潜めるほどに。

沈黙の音が煩いとまで、感じるくらいに。

完全な沈黙が、部屋を包み込んだ。

「ミスター・ハリー・ポッター、いい子だから、こつちへいらつしやい」
やがて、アンブリッジは甘ったるい声でハリーを手招きした。ハリーは乱暴に椅子を蹴飛ばすと、アンブリッジに歩み寄る。

アンブリッジはピンクの羊皮紙を一巻取り出すと、何かを書き、そして羊皮紙を丸め、ハリーに手渡した。

「さあ、これをマクゴナガル先生のところへ持っていらつしやいね」

ハリーは黙ってそれを受け取ると、教室を出て行き、ドアを閉めた。

「さて、五ページ、『初心者基礎』を読み続けてくださいね。読み終わったら次の章に行きなさい。私語は厳禁ですよ」

その言葉に、はちきれんばかりの沈黙は破られた。

ぼくは小さく笑うと、吐き捨てるように呟く。

「堕ちたもんだ、魔法省……現実を見ろよ。何人死ねば分かる……どこまで盲目だと、気が済むんだよ……」

ストン、と、椅子に座り込んだ。アンブリッジは、ぼくを無視することに決めたらしく、何も言っては来なかった。ハリーを一人排除出来たことに、むしろ満足げである。

ただただ、絶望に満ちていた。

これほどだったなんて。ここまで絶望的だったなんて。

二十年前は、少なくともここまで頑迷ではなかった。

魔法省は、何が敵で、何が大切なことなのかを、きちんと理解していた。

平和とは、ここまで世間を錆び付かせるものなのか。

ちよいちよい、と、肘のあたりを突つかれた。アリスだった。

ひよい、と羊皮紙の切れ端を、机の下で渡される。何だ、と目を通した。

『《中立不可侵》フィスナー家を、信じてくれ』

目を瞠った。アリスの横顔を見つめる。

左耳には、群青の石が嵌ったピアスと、見慣れた雪印のピアスが揺れていた。

——アリスが、こんなことを言うとはな。

小さく笑った。

『言うようになったもんだ』

それだけを書き殴り、アリスに放った。

第12話 若者は明るい未来を求める

「……………」

ぼくとジェームズは、揃って顔を見合わせた。

慌ててジェームズは、テーブルの上に広げていた羊皮紙を持ち上げる。書き散らした紙の切れ端が、テーブルから滑り落ちるのも構ってられない。

「……………出来た」

小さな声で、呟いた。

「どうした？ プロングズにレイブン。そんな、世紀の大発見をしたような顔をして」

「我、発見せりへユーレカ！ とでも叫ぶのかい？」

「なんだいそれは」

「パッドフット、知らないの？ マグルのとっても有名な学者さんの言葉だよ」

一体どうしたんだ、とシリウスはぼくらに近付いてきて、ジェームズの持つ羊皮紙を後ろから覗き込んだ。瞬間、目の色が変わる。

何も言わずにジェームズの手から羊皮紙を奪い取ると、真面目な表情で目を通した。灰色の瞳が、徐々に見開かれていく。

「……………完成……………したのか」

シリウスの言葉に、リーマスもピーターも駆け寄ってきて、羊皮紙を見つめた。

テーブルに、床に、散らばった大量の魔法式。式にもならない計算は、その十倍以上。

計算未満のアイディアまで合わせれば、一体どれほどの数になるだろう。

それが、たった一枚の、両手を広げたほどの羊皮紙に、凝結している。

杖を抜いた。杖の先端で羊皮紙を叩くと、羊皮紙上で浮かんだり消えたりしていた大量の魔法式は、吸い込まれるように姿を消した。

「ぼくらの、前に」

声が、興奮で上ずった。

「姿を現せ、『忍びの地図』よ」

再び、杖先で羊皮紙を叩く。

瞬間、叩いたところから蜘蛛の巣が広がるように、インクが蠢いた。インクはホグワーツ中の地図を、その羊皮紙いっぱい描き出す。

ジェームズは弾かれたように立ち上がると、勢いよく小部屋を飛び出して行った。

「ジェームズ!？」

ピーターが叫ぶ。ぼくらは地図を注視した。

『ジェームズ・ポッター』と名前の付いた足跡が、この小部屋から早い足取りで出て行く。

廊下を通って、上の階に。天文学準備室をぐるりと一周した後、引き返した。途中、女の子の集団とすれ違い、少し慌てたように足取りが乱れた後、小部屋に戻ってくる。

扉が開いた。ジェームズが息を切らし、しかしその顔を興奮に染め上げ、言う。

「どうだった!？」

「二つ上の、天文学準備室。合ってるかい?」

「途中で女子の集団と会ったな。エミリア・マーキュリーといやあ、確かハツフルパフの子じゃなかったか」

ぼくらは顔を見合わせた。

徐々に、嬉しさと達成感が込み上げてくる。

『忍びの地図』、ここに——完成!



それから五人で向かった先は、ホグズミードの『三本の箒』だった。完成したばかりの地図は、しっかりとその技能を思う存分発揮してくれる。フィルチの猫、ミセスノリスを鼻先で交わしたときは、思わずすすす笑いが出そうになった。

全員でバタービールで乾杯した後、ぼくらは議論に熱中した。

「何かさ、カッコイイ呪文を作りたいよね」

「そう、まるで僕たちのように！」

「ジエームズは黙ってて」

「まだ一言しか喋っていないのに!!」

「地図を消すときは、やっぱり『いたずら完了!』かな」

「それ、いい。さっすがリーマス」

「口が弾む。次から次へと、アイディアが溢れていく。」

「名前を入れよう。僕らの名前を」

輝く瞳で、ジエームズは言った。

「ムーニー、ワームテール、パッドフット、プロングズ、レイブン。僕ら五人の名前を書き入れよう」

「いいな。ついでに『我ら魔法悪戯仕掛人がお届けする自慢の品』ともな。後世、俺たちの後を継ぐ悪戯っ子達に、先達からのプレゼントと洒落込もうじゃないか」

「それ、いい案だね、シリウス」

「これを持った悪戯っ子達は、一体どんな途方もない悪戯を仕出かしてくれるのかなあ。未来に希望が持てるね」

「ピーターは案外悪戯好きだね。やっぱりジエームズとシリウスの悪影響か……」

「ちよつと、おい、レイブン、今のは聞き捨てならないな。どういう意味だ？」

「文字通りの意味だよ、お生憎」

明るい笑い声。どんな暗さも、吹き飛ばしてしまえるようだった。

そんなプラスのエネルギーを、誰もが求めていた。

当の本人たる、ぼくらも。



「アキの言う通りさ。今年度末のふくろうを、実技訓練なしで誰が通る？ 半数と言わず落とすだろうさ」

「ダンブルドアも信じられないよな、あんな女を教師にするなんて」

レイブンクロー寮内も、アンブリッジに対するヘイトで渦巻いていた。どの学年も、「信じられない、ありえない」と非難轟々。

しかし一番怒っていたのは、やはりふくろう試験を控えた五年生だろう。

「将来は銀行員の『呪い破り』になりたいんだ。『闇の魔術に対する防衛術』は必修だ……こんなところで夢破れるのは御免だ」

「ざわついてんな」

レイブンクロー寮の談話室。

アリスは、授業が終わって、教師の目がないのを確認するとすぐさまボタンを外しネクタイを緩め袖を捲ってしまった。二日目からこんな調子じゃ、一体いつまで『優等生』が保つのかも怪しいものだ。

「そりゃあそうだよ」

アリスにそう返す。

『占い学』の宿題で出ていた『夢日記』を一月分描き上げると、目を通した。

「見事なでつち上げだな、おい。来月の夢なんて、一体いつ見たんだ？」

「そもそも、ぼくにとつてでつち上げる以外の道があるとしても？ 馬鹿正直に幣原の夢の内容を書く必要はないさ。そして、どうせでつち上げるのなら、とつとと終わらしてしまった方がいい、そうだろう？」

「そういう合理的なところ、嫌いじゃないぜ」

「それはどうも……つと、行かないとだ」

寮の談話室の壁に掛かっている時計を見て、ぼくは慌てて立ち上がった。

「アンブリッジの罰則だったか」

「うん。今日から今週毎日」

「あの女は悪どいぞ」

「分かってるよ」

「アキ」

袖を掴まれた。

真剣な顔で、アリスはぼくを見つめる。

「昨日も言ったが、あの女は本当に何をしでかすか分からない。迂闊なことをするなよ」

「……本当、言うようになったもんだ。見違えたな」

小さく笑って、アリスの手から袖を外した。

「分かってるよ」



——本当、この女、とんでもない。

『ぼくは嘘をついてはいけない』と書くたびに、左の手の甲にその言葉が刻まれる。始めはすぐさま引いていた傷も、徐々に赤みを帯び、やがては消えなくなっていく。

ちらりとハリーを見ると、ハリーは歯を食い縛って、絶対に弱音も何も吐いてやるもんか、という表情で羊皮紙に向かっていた。

——アリスがあれだけ言うのも、分かるってものだ。

魔法省法執行部の次官であったと、アリスは語った。

権力に何より弱く、力を持っている人を見つけ媚びへつらうのが上手なのだ。

「親父がああ女に騙くらかされないで本当に良かった。ハニートラップを仕掛けられかけたらしい……本当、良かった」

アリスは本心からそう思っている声音で、大きく息を吐いていた。リイフも災難なことだ。

リーマスの就職を更に困難にさせた『反人狼法』を制定したりと、憎む部分は片手じゃ数え切れない。

「こつちへいらつしやい」

やつとこさ終わりか。

ただただ、負けん気だけでずっと書き続けた。ハリーもきつとそうだっただろう。

アンブリッジはぼくとハリーの手をまじまじと観察すると（ムーデイの時とは全く違うが、彼女の手が触れるとゾツと寒気が走った）、ぼくらににっこりと笑い掛けた。

「まだあまり刻まれていないようですが、今週一杯掛ければ大丈夫でしよう。帰ってよろしい」



「なんなんだ、あのクソ教師!! アンブリッジばばあ!! ガマガエルばばあ!!」

アンブリッジの部屋から十分遠く離れたことを確認してから、ハリーは大声で叫んだ。

無理もない、とぼくは肩を竦める。

『僕は嘘をついてはいけない? 誰が嘘をついたって言うんだ、この——』

それからしばらくハリーは、決断している子には聞かせられないような口汚い言葉でアンブリッジを罵った。好きにさせてやろう。

ぼくの方まで悪辣な言葉を並べ立てただろうか、そのくらいで、ハリーの悪態は止まった。

ぼくの手を取ると、傷に触れ、顔を歪ませる。自分自身の甲にも同じ傷があるというのに、なんともまあ、優しい奴だ。

「治癒呪文じゃ効かないよ。『呪い』だから」

ハリーが杖を取り出しかけたのを見てとって、先回りした。

自分の左の甲に刻まれた文字を見て、眉を寄せる。

「効くとしたら、マートラップのエキスかな……傷口の治癒力を高めてくれる。んで、マグルの怪我治療用の軟膏に包帯。これが多分一番か。ハーマイオニーなら、何も言わずとも用意してくれる——耐えるんだ、ハリー」

先行きは暗けれど、決して曇り空ばかりではないのだから。

第13話 似た者同士

ぼくは思わず足を止めた。彼女もおそらく、そうだっただろう。足を止めたぼくらを不審がるように、不躰な眼差しで生徒たちが通り過ぎていく。あからさまな『邪魔だ』という視線に、ぼくらは同時に我に返った。

「……元気？ 秋」

「……元気、だよ。リリー」

目の前でリリーが、にっこりと笑う。

ぼくは、ちゃんと笑えただろうか。



「久しぶりに話す気がする、秋と」

「そうかな……そうかもしれない」

隣り合って、ぼくらは歩いた。

あの頃より、僅かに空いたぼくらの距離。三人でいた頃と同じ、距離。

「いきなり寒くなったわね、最近。男の子は羨ましいわ」

そう言ってリリーはぼくのズボンを睨みつけた。ハンターの目だ。

「……リリー、ぼくのズボンは上げられない」

「貰わなくていいわ。交換しましょう」

「……何と」

「もちろん……」

「いやっ、聞きたくない！ ぼくは何にも聞いてないからね!!」

慌てて耳を塞いだ。

ぼくの様子に、リリーは楽しげな声で笑う。

「絶対似合うのに……」

「リリーの勘違いだからね、それ」

「そう言えば昔、秋が女の子になっちゃったこともあったっけ」

「思い出さなくていいよそんなこと！」

「一枚くらい写真に収めておけば良かったわ。秋、写真嫌がるんだもの」

「あの姿じゃなくなつたって、ぼくは写真が嫌いだけどね」

リリーは首を傾げた。

「なんで、写真が嫌いななの？」

「……なんでだろう、嫌いな理由について、あんまり深く考えたことはないなあ。なんとなーく、嫌なんだ。『写真を撮られると、魂が吸い込まれる』って聞いたことない？」

「何、それ。変な秋」

そんなこと言われても、好きになれないのだから仕方がない。

その時、前方から猛スピードで走ってくる人影が見えた。誰だろう、ジエームズ・ポッターだ。

ジエームズはぼくとリリーの前で足を止めると、額の汗もそのままに満面の笑顔を浮かべてみせた。

「やあ、秋、エバンズ！ 偶然だね!!」

「そんな猛ダツシュしてきて偶然も何もない気がするけど……？」

リリーは苦笑いで肩を竦めた。

本当に、何が偶然だ。尻ポケットから忍びの地図がはみ出しているぞ。

「ところで二人とも、お腹空いてないかい！ 美味しいカップケーキがあるんだ、どうだろう一口！」

そう言いながら、ジエームズは隠し持っていたカップケーキをそれぞれぼくらに差し出した。

美味しそうなチョコレートケーキだ。ジエームズが差し出してさえないければ。

リリーはあからさまに警戒の表情を浮かべて半歩下がった。その気持ちは非常によく分かる。

「美味しそうだね、それじゃあ一個頂くよ」

ぼくはにつこり笑顔で、ジエームズの手からカップケーキを受け取った。え、と、むしろジエームズが驚いたように眼鏡の奥の目を見開く。

リリーが「ちよつと、秋、変な薬とか絶対入っているわよ！」という言葉を尻目に、ぼくは口を開いた。

「……へえ、思っていたより美味しいじゃん、これ。ジェームズが作ったの？」

「えっ、嘘!」

ジェームズがぼくの手からカップケーキを奪い取る。「間違えたかなあ……」と検分するジェームズに、指を鳴らした。

瞬間、目にも止まらぬ速さでジェームズの口の中にカップケーキが飛び込んで行く。

「もごっ……!?!」

「わあ、そんなにジェームズも食べたかったんだ。吐き出すなんてもつたいないこと、ジェームズはしないよね？」

上唇と下唇を、『接着呪文』で塞ぐ。

真っ青な顔で、ジェームズが口の中のものを飲み込んだ。数秒待つ。

ポン、という小さな音と共に、ジェームズの姿が白煙に包まれた。

そして、白煙が薄れた先には――

「……あらっ」

リリーは目を見張ると、頬を緩めた。

さつきまでジェームズがいた辺りに、三毛猫が座り込んでいた。目の周りが丸い黒縁で覆われている。

その三毛猫はしよんぼりと、どこか何うようにぼくらを見上げていた。

「なあんだ、これなら、秋が猫になった姿も見たかったなあ」

「やめて、リリー。カップケーキを手に近付かないで。……そのカップケーキは……っ、あいつらにやんないとだ!」

『浮遊呪文』を掛け、すぐその角で様子を見ている残りの悪戯仕掛人へ。

誰の口の中に突っ込もうか一瞬迷ったが、リーマスがカップケーキを見て目を輝かせたので、それなら仕方ないなあとリーマスの口の中に飛び込ませる。

「げっ、なんで！ もしかして、秋にバレてる!？」

「リーマス!! そんな幸せそうな顔でもぐもぐしないでっ、吐き出—
—ああ」

わたわたと騒ぐ声。聞こえてるっての。

「はー、でも、よくやるわねえ。食べた人を猫に変身させるなんて、一体どれだけ高度な『変身術』だと思ってるのかしら」

「才能の無駄遣いさ、ああ」

そこで、リリーはジェームズ、もとい現三毛猫を抱き上げた。

綺麗な笑顔を近付け、「人間の姿よりこつちの方がいいんじゃない？ ポッター」と言い放つ。わあお、強烈。

「秋。今からマクゴナガル先生のところに行きましよう?」

「え、なんで?」

なんでって、と、リリーはにっこりと微笑んだ。

「猫の先輩として、きつとこの悪戯にやんこさんに、いろいろ教えてくださると思うの」

ジェームズの尻尾がブルルツと震えた。

嘘だろ、嘘だよね、と、縋るような瞳をぼくに向けてくる。

「(愁傷様」

猫の悲痛な鳴き声が、廊下に響き渡った。



「酷いもんだ」

同室の友人、レーンは、無遠慮にぼくの左手を持ち上げ検分しつつ言った。

一週間分の手の甲に刻まれた『ぼくは嘘をついてはいけない』という文字を、まじまじと見つめている。

「消えないのか?」

「消えないんだなーこれが。ぼくがこんな悪趣味な入れ墨、気に入って見せびらかしてると思う?」

「全くもって思わないな」

軽く眉を上げウィルは言った。レーンはぼくの左手を、今まで通りマートラップのエキスで満ちたボウルの中に漬ける。

「ところで、アリスはどこ行っただんだ？」

「知らないよ、あいつがフラフラどっかに行くのは日常茶飯事だろ……今年の授業が始まって、まだ一週間しか経っていないというのに、既にもう憂鬱だ……ずっと寝室に引きこもっていたい」

「レーン、今からバスケしに外に出るが、じゃあお前は来ないんだな？」

「行く。行きますよ、行くつてばあ……」

ウィルが「アクシオ！」と杖を振ると、部屋のレーンのスペースからバスケットボールが飛んできた。

マグル生まれのレーンを筆頭に、最近ではバスケットボールがとにかくレイブクロウで流行っている。しかし悲しいかな、上背がないぼくにはなかなか憎むべきスポーツである。

「じゃあ、アキ、ちゃんと包帯まで巻くんだよ？ 面倒臭がらずにね！」

「分かってるつて！」

レーンに叫び返す。二人が部屋から出て行ったのに、小さく息をついた。

軽く右手の人差し指を振ると、机の上に置いていた読みかけの『日刊預言者新聞』を呼び寄せる。魔法で直立させたまま、ぼくは何度か読み返したその記事をもう一度読んだ。

『魔法省侵入事件』

「スタージス・ポドモア……」

『不死鳥の騎士団』団員だ。深夜一時に、魔法省の『最高機密の部屋』に押し入ろうとしているところを、ガード魔ンに捕まった——アズカバン六ヶ月収監の刑、と。

九月一日、ハリーの護衛隊に加わるはずだったのに、結局姿を現さなくって、マッドアイがイライラしていたっけか……。

「アキ！」

バンツとドアが勢いよく開け放たれ、びっくりしてぼくは跳び跳ね

た。

アリスは、ローブをしつかりと羽織っていれば、シャツの首元をある程度開けても大丈夫、ということを学んだらしい。ローブ姿のアリスを見ると、『今は真冬だったわけ……？』とそんな気分になってくるのだが、それはそうとして。

「ど、どうしたの、アリス？」

そうぼくが尋ねる間にも、アリスはローブをベッドに放り投げると、ネクタイを素早く緩めていた。早着替えの腕前は、ここ最近で瞬間に上がったようだ。

「来い、早く！ お嬢サマが呼んでんぞ！」

その言葉を聞いてなお、飛び跳ねずにいられるほど、ぼくは大人じゃないのだった。



アクアは居心地悪げに、肘掛け椅子に腰かけて、レイブンクローの談話室をキョロキョロと見回していた。

アクアが座る椅子の、肘掛けの部分に腰掛け、忠犬の如くぼくをじつと睨みつけているのは、誰であろうユークレース・ベルフェゴール、レイブンクロー寮に所属し、アリスを兄とばかりに慕う、アクアの弟だ。ちなみに、アクアと付き合っているぼくを目の敵にしている、な。アクアに淹れたての紅茶を差し出すと、少し驚いたようにアクアはぼくを見て、そして「……ありがとう」とにこつと微笑む。

その微笑みに、胸が満たされていくのを感じた。

「姉上は紅茶よりコーヒー派ですよ、アキ・ポッター！」

「……ユーク、うるさいわ。どちらも飲めるから、気にしないで、アキ」
……いや、しかし、そうだったのか。覚えておこう。

「本当なのか、それは」

周囲に『耳塞ぎ』と『漏音防止』『邪魔防止』呪文を幾重にも掛け、談話室であろうと孤立空間を作った。誰かがぼくらのすぐそばまで近寄り耳をそばたてたところで、ぼくらの話し声は何一つ聞こえない

だろう。

アリスは真剣な表情で、アクアを見据えている。

その視線を正面から受け止めて、アクアは「ええ」と頷いた。

「そう——セドリック・デイゴリーは、生きている。生きて、私の家の地下牢にいる、それは確かよ」

「闇の帝王には、殺す意思はないみたいです。有効利用を目論んでいるのでしよう……どちらがセドリック・デイゴリーにとって幸せなのか、僕にはよく分かりませんが」

ユークの言葉は、辛辣だった。

だけでも、その通りだ。死ぬより、生きている方が辛いことは、いくらだってある。

ヴォルデモートは、様々な『生きている方が辛いと思わせる』方法を熟知していることだろう。

「デイゴリー……第四代目の魔法大臣を排出した家系だ。あそこは有力だ……」

アリスは目を細め、小さく呟いた。

「なんとか、助け出す方法はないのかな？」

「……あの家には、色んな魔法が掛けられているわ。古いものから、最近のものまで。生身で奪い返すのは、厳しいでしょうね……」

ふうむ、と唸る。

「……セドリック、元気だった？」

ぼくの言葉に、アクアは少し目を瞬かせた。

「……ええ、元気そうだったわ。拷問の傷はあつたけれども、少なくとも心は、随分としつかりしていた」

「……それは良かった。セドリックの精神力に掛けるしかない」

何より、心を折られることが怖い。

生きて行く希望を失うことほど、怖いものはない。

「うちの両親は」

そこで、ユークが口を開いた。

「案外、騙されやすいんです。表面に。だから、姉上がこんなでも、僕が全くもって両親が信じる闇の思想に同意していなくても、両親の前

だけ信じる振りをしていれば、なんとかなる——僕はそうやって、心を殺し、身を守って生きてきました。姉上は、そういう真似、すつごく下手くそでしたけど」

「……性に合わないの、演技というか、誰かを騙すみたいな真似……」
アクアが反論するのを、ユークはいなした。

「姉上、不器用ですから。……まあ、姉上がこうやって、分かりやすく声を上げていたから——僕もこうして、ちゃんと周囲を把握することが出来ているんですけどね」

ユークは乾いた笑みを漏らした。

姉と同じ灰色の瞳を、僅かに曇らせる。

「本当に……育った環境で、見える世界は変わります。一步間違えれば、僕も姉上も、アリス・フィスナーならばともかく、あなたと（ここでユークはぼくを見た）——口を利くこともなく、闇の旗を振っていたでしょうから——ドラコ・マルフォイと同じく」

ぼくらはしばし、黙り込んだ。

「……闇の帝王は復活した。魔法省は頼れない。……フィスナー、あなたが頼りなの」

「分かってる」

アリスは言葉少なに答えた。嘆息し、眉間に寄ったシワを押さえつけている。

取れなくなるぞ、と笑って手を伸ばせば、うるさい、と跳ね除けられた。

「……アキ、その傷、何？」

あつ、と、慌てて隠そうとしたが、遅かった。

アクアに左手を取られ、ぼくは思わず目を逸らす。

「アンブリッジのクソババアに対抗したときの傷さ。心配いらない、こいつ曰く『名誉の負傷』だから」

アリスが軽く言うのに、救われた。

しかしアクアは、それでも心配そうにぼくの手の甲の傷を見つめている。

『私は嘘をついてはいけない』——よくも、そんな言葉を刻ませたも

のね、あのガマガエル女史、年甲斐もない少女趣味のピンクババア
アクアの眉がぎゅつと寄った。

アクアが誰かを罵るのを、初めて聞いた気がする。少し驚いてアク
アを見つめると、アクアはハッと我に返った顔をした。

「ち、違うの、思わず……」

「……いや、君がぼくのために怒ってくれて、嬉しかった」

そう言って笑うと、アクアは白い肌を桃色に染めた。

こっちの桃色の方が、アンブリッジの纏うピンクよりずっとずっと
いい。

「……なあアキ、お前去年何て言ったっけ？ 『親友のナントカを邪魔
するのも親友の大切な務め』？」

「記憶にないなあ。一体全体何のこと？」

全力ですつ惚ける。

「……アクア。それにユーク。君たちに一度会わせたい人がいるん
だ」

脳裏に、あの一等星を思い浮かべながら。

ぼくはにっこりと微笑んだ。

第14話 残酷な優しさ

「もう三回目だから、新鮮みなんてあんまりないかもしれないけどさ」
ぼくは笑って、レギュラスに右手を差し出した。
「ぼくとダンスパーティーに行ってくれませんか？」
スラグホーン先生主催のクリスマスパーティーでの、話だ。



「全く、僕以外に誘う相手は今年もいないんですか。全く寂しい人ですね貴方は」

「そう言う割には嬉しそうじゃ……ごめん」

描写するのもはばかられるほどの物凄い目で睨まれ、即座に謝った。顔が整っている分、凄みが出て怖いんだよ……。

「去年も僕言いましたよね？ 貴方はただ他の女子を誰か一人でも選ぶと後々面倒だから妥協案として選んでいるだけだと」

「あーうん、ごめんごめん」

「本当に分かってるんですか!？」

「分かってる、分かってるって」

「絶対誤解してる……」

誤解はしてないと思うぞ、ぼくは。

「秋、楽しんでる?」

声を掛けられ振り返ると、そこにはリリーが華やかな笑みを浮かべて立っていた。ドレスはリリーの瞳の色と同じ深い緑色で、とても彼女に似合っている。

「やあ、リリー。ドレス、とつてもいいね」

「そうでしょう? 一目惚れしたの。でも、このドレスを褒めてくれた人はあなたただけだわ!」

「ええっ、嘘だあ、あいつは……?」

訝って彼の姿を探すと、瞬間背中に重たい衝撃がのし掛かってきた。誰か、なんて言うまでもない。

「やあ秋、楽しんでるかいい!? 楽しいね、楽しんでるなんてもんじゃないねっ、浮かれ騒ぐのも止む無しと言ったもんだよ!」

完全に浮かれきった声。テンションが上限突破してしまっているぞ。

「……ジエームズは、褒めてくれなかったの?」

信じられない、の気持ちを込めて呟くと、リリーは腰に手を当てて大きくため息をついた。

「あの人は私の美しさを百万本のバラにも勝るみたいなことをぺらぺらと並べ立てていたから、途中から話を聞く気がなくなっちゃって」

……なるほどなあ。

「こんばんは、レギュラス。あなたも存分に楽しんでいってね」

につこり微笑むリリーに、レギュラスは曖昧な笑みを返した。

「エバンズ!! 僕と踊ろう!! いつまでも喋ってないでさ!! ねえエバンズエバンズ!!」

「うるさいわ。静かにしなさい」

リリーが声の調子を一転させ、低い声でジエームズに告げる。ジエームズの声が一気にボリュームが落ちたのが、なんだか面白かった。

「二人も楽しんでね。リリー、踊ってあげなよ、折角だしさ」

笑って促すと、リリーは「……秋がそう言うなら」と言い、少し目を眇めた。

「ごめんよレギュラス、待たせたね」

隅の方で一人飲み物を片手にぼんやりとした眼差しを浮かべていたレギュラスに、慌てて駆け寄った。綺麗なドレスを纏った女の子の集団が、レギュラスに目を止め声を掛けようかと画策していたところだったのだ。

「パートナーを放置するなんて」と、後からどんなことを言われるか。レギュラスは、ぼくに驚いたような目を向けると「あ、はあ」と小さく頷いた。

「……少し、場所を変えませんか?」

レギュラスの提案に、ぼくは目を瞬かせた。

「話したいことが、あるんです」

灰色の瞳が、光を灯す。

シリウスとよく似た目だと、思った。



「寒くなってきたねえ」

空気がしんと冷たい。現在雪は降っていないが、三日前に降り積もった雪はまだ溶ける気配がない。両手を擦り合わせ、手の中に息を吐いた。

バルコニーに出ると、人はぼくらの他に誰もいなかった。暖かい室内に人が集まるのは当然だろう。まだダンスミュージックは陽気に鳴っている。

レギュラスがバルコニーと室内を繋ぐドアを閉めると、一気に周囲は静寂に包まれた。

「一体どうしたの、レギュラス」

「貴方は、セブルス先輩の友人ですよね。親友、なんですよね」

そう尋ねられ、思わず息が詰まった。

「……そう、だよ」

息を吐き、笑みを浮かべてみせた。

そう、ぼくと彼は親友だ。お互いに、秘密を抱えていたとしても。それでも、ずっとずっと、親友だ。

「でも、兄とも、友達ですよね。兄だけじゃない、先ほど話していたエバンス先輩も、ポッター先輩とも——グリフィンドールの人とも仲がいいですよね」

レギュラスが、何を言いたいのか。

言葉の真意が掴めなくて、ぼくは黙って続きを待った。

果たして、レギュラスは問いかけた。

「貴方は一体、どちら側なんですか？」

短い間に、色々なことを考えた。

本当に、色々なことを。

「……ぼくは、多分」

自分の立ち位置、それを定めて。

静かにぼくは、微笑んだ。

「君や、セブルスの、敵だ」

冷たい風が、ぼくらの間を吹き抜ける。レギュラスは僅かに身震いをした。

「ヴォルデモートは間違っている。一体どうして皆分からないんだろうね」

ぼくの言葉に、レギュラスはムツと眉を寄せた。自分が敬愛している人を他者にばっさりとは否定されたら、そんな顔にもなるだろう。

「あの方は、魔法使いの理想郷を作ろうとしている偉大な人ですよ。今まで僕ら魔法使いは、マグルに好きないように迫害されてきた。僕らにも正当な権利があつてしかるべきだと思わないんですか？

どうして、僕らがマグルから隠れないといけないんですか。僕らが一体、何をしたと言うんです」

レギュラスの言葉を、目を伏せて受け止めた。

「貴方も日本人なら、マグルが起こしたあの惨劇を知っているはずだ。せつかくの命を、せつかくの頭脳を、あんな残虐行為に使うんですよ。マグルとはそういう生き物なんですよ。僕らが、魔法使いである僕らが、彼らを管理してあげるべきなんだ。そちらの方が、世の中はより良くなるに決まっている。そう、貴方は思わないんですか？」

「……君の言いたいことは、分かっているつもりだ」

レギュラスの口元が、僅かに喜びに緩む。

しかしぼくが続けた言葉に、再び口元はきつく結ばれた。

「でも、同意は出来ないよ。絶対に。……純血至上主義だなんて……マグルを排斥していい理由なんて、何ひとつとしてないんだ。……誰だって、誰かを殺していい権利なんて持っていないんだよ、レギュラス」

「……僕は貴方を、それなりに評価してきたつもりです。前回の魔法魔術大会の優勝者、『呪文学の天才児』幣原秋。少々鈍感なのが欠点ですが、馬鹿ではない」

「褒めてくれて、どうもありがとう」

「なのに、どうして分かってくれないんですか。貴方も……兄さんも」
レギュラスの灰色の瞳が、揺れた。

「どうして、分からないんですか」

「……さあ、どうしてだろうね……ぼくもよく、分からなくなるんだよ」

レギュラスを説得する気は、起こらなかった。セブルスさえ、ぼくは説得し切れなかったのだ。

親友とでさえ、分かり合えなかった。

「貴方が僕の敵だと言うのなら。僕らが分かり合えることはきつと、ないのでしよう」

「……そうかもしれないね」

薄く笑う。

ぼくの態度に、レギュラスは眉を寄せた。

「セブルス先輩とも、いつか分かり合えなくなるのでしようね」

「……もう、セブルスが考えていることは、ぼくにはよく分からないんだ」

小さく頭を振った。

「友達なのにね。親友、なのにね。全然、分からないよ。どうして分からないのかって、聞きたいのはぼくの方だ。どうして、分かってくれないんだろうね」

もう、セブルスと口論するのは疲れてしまった。

最後に怒鳴り合ったのは、まだ、ぼくとセブルスの間に、リリーがいた頃。

リリーがいなくなっって、ぼくとセブルスの関係は変わった。

友人だと、親友だと、その思いは変わらない。それでも、今までとは全然違う。

ぼくらは三人で、バランスが取れていた。

「……なら、どうして突き放してやらないんですか」

レギュラスの目は据わっていた。

「分かり合えないというのなら、そんなのもう、親友じゃない。友達

じやないですよ。それなら、いつそのこと突き放してくださいよ。うちの、兄のように、僕のこと。分かり合えないと分かっているのに、どうしてわざわざ僕らと関わろうとするんです。僕にはさっぱり理解出来ない。……分かり合えないというのなら、貴方が僕らの敵でしか成り得ないというのなら。……なら初めから、仲良くならなければ良かった」

「……………」

「貴方の優しきは残酷すぎる。貴方は卑怯だ。貴方は結局、僕らを突き放すのが怖いだけなんだ。自分が傷つくのが嫌なだけなんだ。人に突き放してもらうことで、自分が被害者であるように装おうとする。……狡い人だ」

「……………そうだね」

瞼を落とし、息を吐いた。

「貴方のその優しさが、甘さが、生温さが——いつか貴方を滅ぼすでしょう。そんな時が来ないことを、祈っていますよ」

「……………」

レギュラスがぼくの前から立ち去っていく。

一人残されたぼくは、肩を落とした。

「……………痛いところを、容赦なく突いてくる後輩だ……………」

色々、刺さった。

バルコニーの手すりを、そつと掴んだ。氷のようにひんやりと冷たい。

ぼくはしばらくぼおつと、空を眺めていた。



「前回の授業で第一章は終わりましたから、今日は十九ページを開いて、『第二章、防衛一般理論と派生理論』を始めましょう。おしやべりは要りませんよ」

アンブリッジの授業第一声がそれだった。

ぼくは教科書を開きもしないで、パツと手を挙げる。ハイマイオ

ニーも、ぼくとほとんど同じタイミングで手を挙げた。思わず目を見合わず。

アンブリッジは、まずはハーマイオニーの元へと行った。今回は無視するのではなく、各個撃破と戦略を変えてきたらしい。

「ミス・グレンジャー、今度は何ですか？」

「第二章はもう読んでしまいました」

「さあ、それなら、第三章に進みなさい」

「そこも読みました。この本は全部読んでしまいました」

「それでは、スリンクハードが第十五章で逆呪いについて何と書いているか言えるでしょうね」

「著者は、逆呪いという言葉は正確ではないと述べています。逆呪いというのは、自分自身がかけた呪いを受け入れやすくするためにそう呼んでいるだけと書いています」

ハーマイオニーに感心したのだろう、アンブリッジの眉が上がった。

「でも、私はそうは思いません」

ハーマイオニーの言葉に、アンブリッジは冷たい目をした。

おそらくこの人は、こうして人が『自分の意見』というものを持つことが嫌いなのだ。誰もが等しく同じ方向を向いている、それこそが素晴らしい秩序を保った世界の有様だと、信じているのか。

「そう思わないの？」

「思いません。スリンクハード先生は呪いそのものが嫌いなわけではありませんか？ でも、私は、防衛のために使えば、呪いはとても役に立つ可能性があると思います」

「おーや、あなたはそう思うわけ？ ですが、残念ながら、この授業で大切なのはあなたの意見ではなく、スリンクハード先生のご意見です」

ハーマイオニーの反論を無視して、今度はアンブリッジはぼくの方へと向かってきた。

よかった、そろそろ左手の感覚がなくなってくるころだったんだ。

「で？ あなたはどうしたんですか、ミスター・アキ・ポッター？」
「魔法省の指導要領というものについてお聞きしたくて」

ぼくがにこやかに言うと、アンブリッジの眉がぎゅっと吊り上がった。

「わたくしの一番最初の授業でお話したはずですよ。授業の目的三つ、ありましたわよね？ 空で言っただらんなさい」

「一つ、防衛術の基礎となる原理を理解すること。二つ、防衛術が合法的に行使される状況認識を学習すること。三つ、防衛術の行使を、実践的な枠組みに当てはめること」

「……っ、ちゃんと分かっていようですわね。でしたらわたくしの言っていることも理解できるといふものでしょう」

「いいえ、分かりません。そもそも、今年魔法省がホグワーツの教育にこれほど力を入れ始めたのは何故なんですか？」

アンブリッジがぼくに対して苛立っているのが手に取るようになって、なんだか愉快的気分になった。

「本日の日刊預言者新聞をお読みになったかしら、ミスター・ポッター。わたくしが『初代高等尋問官』に任命された記事ですが」

「ええ、『あの』日刊預言者新聞でさえ、驚愕と動揺を隠しきれていない記事のことですね。半年にも満たない期間に、よくここまで法律を増やしたもんだ」

『高等尋問官』に対して意見をおっしゃるといふことはすなわち、わたくしの上司、魔法大臣コーネリウス・ファッジに楯突くということですよ？ その意味をよくご存知でないようですよわね。レイブンクローは叡智を尊ぶ寮だと思っていたのですけれど」

「そういうあなたはスリザリン寮出身のようですね。あの寮が一番、そのー、ワルぶってみたいというか、ちよいと怪しげな魔術に手を出したがったり、自分たち魔法使いが特別だと思ひ込んではいやいでもたりする輩が多いような気がするんですが、一体何なんですかね、選民思想を叫ぶ枕でも常駐しているんですか？」

アンブリッジの額に青筋が浮き上がった。

「レイブンクロー十点減点」

「お好きにどうぞ。今年の魔法省は少々焦りすぎではないですか？

教育令第二十二号『現校長が空席の教授職に候補者を配することが出来なかった場合魔法省が適切な人物を選定する』なんて、八月三十日に制定されたばかりの新法律ですってね。それからすぐさまあなたが選ばれて、九月一日にはホグワーツ到着。あらあらまあまあ、慌ただしい部署移動お疲れ様です。教科書を読むだけじゃあ授業とは言えませんよ？ まあそんなに急な人事異動じゃ、十分な授業の用意なんて出来なかったのも仕方ないですけどね」

「レイブンクローもう十点減点ですわ」

「望むところです。そういえば『高等尋問官』って、ホグワーツの教育水準低下を購うためのものなんですよってね。えーっと、なんだっけ。『高等尋問官は同僚の教育者を査察する権利を持ち、教師たちが然るべき基準を満たしているかどうか確認します』——本当にホグワーツの教育水準が低下したのか、ぼくのような疑い深い人間は、是非とも学力低下のグラフを見てみたいものですね」

ギリギリとアンブリッジは奥歯を噛み締めている。

「教育水準が低下していることは魔法省で異論が出ませんでしたわ。特に本職『闇の魔術に対する防衛術』は、毎年教師が変わるといいうことで特に不安定で——」

「でしたら、先生、しかしそれは近年に限ったことではありませんよね？　もう三十年も前から、この教職に就いた人間は一年で辞めていくのですから。ああ、先生がいたときはそうではなかったのかもしれないね。おっと、女性に年齢についての話を振るなんて。失礼しました」

「……レイブンクローに更に十点減点」

「ご随意に。しかし、先生？　先ほどの先生のおっしゃられた言葉から推測しますと、『闇の魔術に対する防衛術』の授業をこそ査察すべきではないでしょうか？　この授業が一番入れ替わりが激しく不安定だとおっしゃられるのならば、その年の『闇の魔術に対する防衛術』教師の教育水準こそを計測し、改善すべきでは？　それを一人の人間がやろうとしちゃあ、ダメでしょう。自分の採点を自分でやろうなんて

そんな真似、先生はさすがにしませんよね？」

「わたくしの教育のやり方に不満があるのでしたら、どうぞいつでもおっしゃってくださいませ？　コーネリウス・ファツジ魔法大臣にいつでもお繋ぎいたしますわ」

「本当ですか、やったなあ。いろいろ彼にも聞きたいことがあったんですよ」

ぼくはにっこりと笑った。

「——例えば、どうしてこんな人をホグワーツに派遣したのか、とか」

第15話 叶わぬ願い

「どうしたのライフ、不良デビュー?」

ぼくの声に、ライフは驚いたように振り返った。口には火のついた煙草が啜えられていて、先から煙が細くたなびいている。

薬草学の授業終わり、温室から帰る途中で、ぼくは校舎裏で一人佇むライフ・フィスナーの姿を目に留めたのだった。

「秋か……びっくりした」

「ライフって吸う人だったんだ」

「先生に告げ口はしないでよね、何でもするから」

「そこまで言うのなら、吸わなきゃいいのに」

ライフの隣に並ぶと、校舎を背にして座り込んだ。瞬間ライフの煙が飛んできて、思わずケホケホとむせる。

「バカだなあ、秋。そっちは風下だぞ。来るなら逆、逆」

「なんでこんなの吸いたがるかなあ、喫煙者の思考は理解出来ない」

「はは、君らしい」

「……それ、暗にお子様だつて言ってる?」

目を眇めるも、ライフはニヤニヤと笑うだけだった。

煙をゆつくりと吸い込むと、静かに吐き出す。物憂げに瞼を伏せるその仕草は、ライフの整った顔立ちと相まって、なんだかとても格好良く見えた。

ぼくの視線に気付いたか、ライフは人差し指と中指の間に煙草を挟むと軽く振った。

「どうしたの、秋? もしかして興味ある?」

「……遠慮しておくよ、我らが監督生さん?」

「うっ……そこを突かれると痛いなあ……」

笑って、ライフは空を見上げた。

校舎裏のここからだ、空は建物で四角く囲われて見える。

「……ちよいとね、ストレス発散というか、現実逃避、というか。僕もね、少しばかり悪ぶってみたいときもあるんだ」

「現実逃避……」

僅かに心惹かれた。ぼくの様子を見て、リイフは「何、気になる？」と肩を竦めた。

「ああ、でも、煙草吸うと身長止まるって言うしなあ」

「……止めておくよ」

「つく、それがいい」

伸ばしかけた手を引つ込めると、喉の奥でリイフは笑った。

……うるさいな、まだ伸びるんだい。

『不死鳥の騎士団』に入ったんだって？」

「……うん。色々だね、思うことがあつて。よく知ってるね」

「情報も一つの武器だからね。君もこれからのために、情報を上手く使う術を覚えた方がいいよ。……秋は、闇祓いを目指すの？」

静かに言われた言葉に、目を瞬かせた。首肯する。

「そうだね。受かるかは分かんないけど、ふくろうでは必要なだけの単位も取れたし。リイフは、家業を継ぐんだっけ？」

「ああ……ま、そんなところかな。……そいつと、『中立不可侵』のフィスナーとで、ちよいと参っちゃっててさ。少しくらい心の安寧を求めさせてよ」

茶化したようにリイフは笑ったが、何だか疲れているようだった。

じつと緑の瞳を見つめると、リイフはふいつとぼくから目を逸らした。

「……卒業したら、さ」

ぼくの言葉に、リイフはちらりと視線を寄越した。

「今まで同級生として、ホグワーツ生として一緒にやってきた人たちの、どのくらいが……どのくらいを、『敵』に回すんだろうね。敵だと見なさなきゃ……ならないんだろうね」

「……闇祓いになるのなら、より一層、そうなんだろうね」

リイフはぼくの言葉に、小さく頷いた。

……ほんの少しだけ、否定して欲しい気持ちはあった。

そんなことないんだと、世の中はもっと平和で未来は明るいんだと、笑って欲しかった。

ありえないことだと、分かっていたけれど。

「きつと君は、分かっているんだろうけど」

そう前置いて、ライフは言った。

「セブルス・スネイプとは、距離を置いた方がいいと思うよ」
目を閉じる。

「分かっているよ」

分かっているんだ。

それが出来ないのは、ひとえにぼくの弱さと甘さのせいだということも、分かっていた。



ついでに言うと、ハリーとぼくの罰則はもう一週間伸びた。

「あそこで、その発言は完全に逆鱗だろ、バカめ……」

「ハリー一人をガマガエル女史の巢に放り込むなんて出来ないよ。大好きな兄が頭からペロリと食べられる様、想像したくもないもの」

アリスの『優等生』は、三週間目に入っていた。

最初は誰もが笑っていたアリスの優等生姿だったが、だんだんと皆慣れてきて、案外やっていけるようだった。元々、根は真面目な奴なのだ。少々見た目と口が悪いだけで……。

アンブリッジは、アリスを『あの名門フィスナー家の嫡男』と認識したらしく、アリスを見ると頬を緩め、声が甘ったるくなるようになった。それにアリスも——アリスもアリスだ！ 初めて見た、アリスのあんな笑顔——素晴らしい、なんとというか、すごく『紳士的』で丁寧な態度で応じているようだ。

アリスの素を知るべくや、同室のウィルやレーンは、その攻撃に真顔で耐えなければならず、腹筋が随分と鍛えられる結果となった。

そんな折。

『闇の魔術に対する防衛術』を自習したいと思うの、生徒だけで。その先生を、ハリーとあなたに頼みたいと思っっているのよ」

何の役にも立たない『闇の魔術に対する防衛術』の授業が終わり、アンブリッジの目も耳も届かないところまで来たことを確認して、そん

なことをハーマイオニーは口にしたのだった。

ハリーは複雑な表情ではいたが、教師役を引き受けることにひとま
ずは頷いたらしい。

「悪くない考えだと思うよ。そのうち誰かが、そんなこと言い始める
んじゃないかと思つてた」

そう言つて肩を竦めると、ハーマイオニーはむつとした表情でぼく
との間の距離を詰めた。

ちよつと、近い近い。思わず仰け反る。

「私はね、あなたに、あなたとハリーに、先生になつてもらいたいよ、
アキ。あなたの才能を、是非とも生かしてもらいたい」

「……教えられるかは怪しいよ？ ぼくは『出来る』人間だから、『出
来ない』人間の気持ちから分からないかも」

意地悪く言う。

しかし、ハーマイオニーは落ち着き払つていた。

「あなたは教えるのに向いてるわ。三年生のとき、誰がいつも一緒に
いたと思うの？ 誰と、常日頃勉強していたと思うの？ 私は一体誰
に、何度も何度も呪文を教えてもらったと言うの？」

「……………」

「来週、十月最初の週末はホグズミード休暇だわ。関心のある人を少
しばかり、あそこで集めてみようと思うの」



—— しばかり、という言葉の定義を、少々議論する必要があるよ
うだ。

ざつと見ただけでも、グリフィンドールがネビル、デイーン、ラベ
ンダー、パーバティ、アンジェリーナ、ケイティ、アリシア、ジニー、
フレッドとジョージの双子に、リー、コリン、デニス。

レイブンクローがパドマ、チョウ、マリエッタ、ルーナ、アンソニー、
マイケル、テリー、レーン。

ハッフルパフがアーニー、ジャステイン、ハンナ。名前が分からな

い人も数人いる。

「数人だつて？」

ハリーも啞然としているようだ。そりゃあそうだ。

「ええ、そうね、この考えはとつても受けたみたい」

バタービールを回して、乾杯した。キャップをクルクルと弄りながら、ハーマイオニーが概略を話しているのを聞き流す。

脳裏に浮かぶのは、ついさつき交わした、アリスとアクアとの会話だった。

『俺は、行かない』

はつきりとした声で、この会合に参加することを拒否したアリス。

その瞳には、しっかりと意志の光が灯っていて——ああ、こいつは、何かを決意したんだな、と、一目で分かった。

『私は——スリザリンだから』

そう言ったアクアは、寂しげだった。

『応援は、しているわ。でも、スリザリンの私が行くことは出来ない。スリザリンと他寮の壁はね、あなたが思っている以上に分厚いのよ。』

——ハーマイオニーとも同じ話をしたわ。分かって、アキ』

何より信頼していた二人から、揃って拒絶の言葉を向けられると、やはり揺らぐ。

この会合は、本当に正しいものなのか？

「ヴォルデモートがどんなふうにも人を殺すのかをはつきり聞きたいからここに来たのなら、生憎だったな。僕は、セドリック・デイゴリーのことを話したくない。分かった!? だから、もし皆がそのためにここに来たなら、すぐ出て行ったほうがいい」

ハリーの怒鳴り声に、顔を上げた。場が静まり返る。

「それじゃ……さつきも言ったように、皆が防衛術を習いたいのなら、やり方を決める必要があるわ。会合の頻度とか、場所とか」

ハーマイオニーは少し上ずった声で言った。

そこで、ハツフルパフのローブを纏った女子生徒が声を上げた。

「守護霊を創り出せるって、ほんと？ 有体の守護霊を？」

「あ——君、マダム・ボーンズを知ってるのかい？」

「私のおばよ。私、スーザン・ボーンズ。おばがあなたの尋問のことを話してくれたわ。それで——本当に本当なの？ 牡鹿の守護霊を創るって？」

「ああ」

ここで否定するのも変だろうと、ハリーは少し口ごもりながら頷いた。

周囲がハリーへの賛辞でざわざわするのが嫌だったのか、ハリーは「でも、アキだつて」とぼくの名前を出した。一気に皆がぼくを見て、思わずたじろぐ。

「アキが今まで使えなかった呪文はない。ひとつの例外残らず、だ。何より、いい先生になるだろう」

「ああ、レイブンクロー切つての秀才だからね、アキは」

レーンがニヤリと笑つてぼくを見た。やめてくれ、とぼくは唇を尖らせる。

「じゃあ、ハリーとアキから習いたい、ということ、皆賛成ということ、とでいいのね？」

ハーマイオニーの言葉を、否定するものはいなかった。

「羊皮紙に、何か呪いを掛けたいんだけど、いい案はないかしら、アキ」
集まった名前を書く羊皮紙を回しているとき、ハーマイオニーが小さな声でぼくに耳打ちした。

「呪い？」

「そう。誰かがアンブリッジに告げ口したり、そういう人が出たときに瞬時に分かるような……そして、そういう人を出さないための抑止力となるような何か」

「……あとで教えよう」

羊皮紙が回ってきた。羽根ペンをインク壺に突っ込みつつ、ふと思

う。

——ジェームズたちなら、面白がっただろう。

セブルスは、たとえスリザリン生じやなかったとしたところで、こんな集まりには参加しなかっただろう。ライフも、アリスと同様に、参加を表明することはないに違いない。

ならば、幣原は？ あいつは、どうだろうか。

分からない。分からない。

その読めなさ加減が、妙に気に掛かった。

「……………」

左の甲、『ぼくは嘘をついてはいけない』と刻まれた文字に、無意識に唇を押し当てる。

そして、ぼくは一番下に署名を施したのだった。

第16話 モラトリアム

「リリーがジエームズとデート?」

忍びの地図が完成して、悪戯仕掛人の創作意欲も少し減退したようだ。最近、満月の日以外は随分と大人しい。

それでもぼくらは、何をするでもなしに、暇な時は小部屋に集まっては課題や読書などで時間を潰していた。

そんな折、小部屋のドアを勢い良く開けて入ってきたジエームズは、にやけ切った顔のまま、「エバンズととうとうデートに漕ぎ着けたぞ!!」と高らかに叫んだのだった。

シリウスは読んでいる本から顔も上げずに言った。

「そうか、いい夢だったな。明日も見られるといいな」

「夢じゃないからね!! 現実だから!! でもちよつと不安になってきたじゃないか、ムーニー僕を一発殴って痛い!! ありがとう!!」

リーマスの手があまりに早すぎて見えなかった。

腹を抑えてうずくまるジエームズに、ピーターが駆け寄る。

「現実だった?」

「うん……」

やがて復活したジエームズは「なんて友達甲斐のない奴らだ、見損なった、薄情者共め、こんな友達しかいないなんて僕可哀想! 可哀想!」と喚き出す。しかし皆知らん顔だ。

段々と可哀想になってきたので、ジエームズに声を掛けた。

「あー、ま、良かったね、ジエームズ」

ジエームズは砂漠でオアシスを見つけたかのような表情でぼくを見ると、何を思ったか抱きついてきた。

「そうなんだよー!! 秋、君ならそう言ってくれると思っていた!」

「で、一体どんな壺を買わされるのかな」

「信じていたのに!!」

泣きながらジエームズはぼくを突き放す。

それに笑いながらも、少しばかり複雑な気分になるのは否めなかった。

——リリーが、ジェームズとねえ。

「で？ その『デート』とやらは一体いつの話なんだ？ 兄弟よ」

シリウスが尋ねるのに、ジェームズは「イースター休暇直前のホグズミード休暇さ！ もう、今から待ちきれないよ！」と夢見心地に口ずさんだ。

「いったいどんな手を使ったの、ジェームズ」

「少々土下座と懇願を繰り返しただけさ」

「そりや……リリーも災難だ」

リーマスは大きくため息をつく。

「おっと、こんなところでボヤボヤしちゃいけないっ、デートのためにも服と眼鏡を仕立てなければ！ それではバイバイ、女の子に相手にされない可哀想な友人諸君よ!!」

「誰に向かって言ってるんだ、鏡見ろ!!」

シリウスがぶん投げた本は、ジェームズが閉めたドアに跳ね返って床に落ちた。チイツとシリウスが舌打ちする。

「エバンズもよりによって妙なやつを選んだものだ。エバンズは絶対なびかないと思っていたのに」

「ま、最近ジェームズも落ち着いてきたからね。僕らの前以外では、だけど」

リーマスがニヤニヤと笑いながら言った。ピーターが何の気無しに呟く。

「シリウスが気に食わないのは、ジェームズがリリーに取られたからなんじゃないの？」

「ワームテール、覚悟は出来てるんだろうな」

「やめっ、痛い痛い関節はそっちには曲がらないってば!!」

「秋、どうしたの？」

ポロツと失言したピーターに、シリウスが関節技を掛けている。その様子を横目で見つつぼうっとうっとうしていると、リーマスに声を掛けられた。はっと我に返る。

「ちよつと長考してただけ。次の手をどうしようかとね」

言いながら、チェス盤上のナイトを動かした。しかし、これは悪手

だったららしい。チェスの駒が「わしをこんなところに置くとはなんたる主君じゃ、仕える価値もないわい！」と喚き始める。

リーマスは吹き出した。

「長考して、その手？」

「う、うるさいな……そもそもぼくは日本人なんだ、チェスより将棋の方が合ってる」

「秋、将棋やったことないって言ってたよね？」

……声も出ない。

「ようし君ら、分かってるんだろ？」

ピーターを虐め終わったららしいシリウスが、先ほどより幾分スッキリした顔で立ち上がった。

ピーターは未だ、床に転がって関節の痛みに悶えている。

「何を？」

「鈍いな、秋よ。決まってるんだろ？」

ニヤリとシリウスは笑った。久々に見る、悪戯に目を輝かせた悪どい笑みだった。

「親友の恋路を邪魔するのも、大事な務めさ」



全ての寮に『教育令二十四号』が張り出されたのは、ホグズミードで初会合があった、すぐ次の週の頭のことだった。

三人以上で行われている全ての組織、団体、チーム、グループ、クラブが解散され、再結成を求める場合は高等尋問官——アンブリッジのことだ——に願い出て、許可を頂かなければいけない。この承認なしに、何かを結成したり属したりした生徒は、退学処分となる。そう、書いてあった。

「大丈夫かな？ アレ」

ぼくにそう耳打ちしてきたのは、同室で、一緒にホグズミードの会合についてきてくれたレーン・スミックだった。

レーンの声が聞こえたか、アンソニーやマイケルたちがぼくらを振

り返る。

「大丈夫じゃないだろうね」

ぼくは掲示された紙を睨みつけた。

タイミングが悪い、というか。むしろ、タイミングが『良い』というべきか。素晴らしい、ナイスタイミングだ。

「あの会合、許可を願っても絶対認可されないだろ」

左胸に輝く監督生のバッジを弄りながら、アンソニーはぼくに言った。

「許可を願いに行つた時点で、ぼくとハリーは退学処分かな」

何せ、目の敵にされている自覚はある。

時にはおおっぴらに、時には独り言じみて、今の魔法省の憂いを呟くぼくに、最近のガマガエル女史は顔の周りを飛ぶような蠅を見る目つきを向け出した。バカスカ寮から減点されているが、レイブンクロー生は案外寮対抗杯に掛ける情熱が薄いため（あまり興味が無いとも言える。興味関心が向かないことには一切手を伸ばさないのでぼくらレイブンクロー生だ）、あまりヘイトを集めずに済んでいて、本当にレイブンクロー生でよかったと、こんなときにしみじみと思う。

「あの会合も確かに憂うべきものだけど、それよりもっと考えないといけないものがあるわ——」

そう言ったのは、チョウ・チャンだった。ぼくの隣につかつかと歩み寄ると、しつかと掲示の紙を見つめる。

チョウの後ろでは、彼女の友達のマリエツタが、小さくため息をついていた。

「何を考えるの？」

チョウに尋ねると、チョウは「どうして分からないの？」とばかりに少し眉を寄せた。なんでもかんでも分かるものか。

チョウは、告示の紙を指差し、読み上げた。

『『学生による組織、団体、チーム、グループ、クラブなどは、ここに全て解散される』——クイディッチチームもだわ！』

……ああ、なるほど。



「俺は、あのガマガエルばあが、死ぬほどだいつつつつきらいだ!!!」

寝室に足音荒く入ってきたアリスは、息も荒くそう吠えた。

ローブを脱ぐと、まるで親の仇かと思うくらい憎々しげに地面に叩きつける。それだけでは飽き足らず、ネクタイをも放り投げると、ズボンの中に入れていたシャツをあつという間に出しては、イライラとボタンを外した。

「落ち着きな、アリス。皆も『ありがとう』って言ってたよ」

そう言って、アリスにクッキーの箱を放り投げてやった。部屋の奴らで金を出し合って買ったヤツだ。

甘いものが嫌いなアリスでも、この店の紅茶クッキーだけは好んで口にしている。機嫌取りになるだろうと値段を調べて、思わず唾然とした。多分こいつ、値段を全く気にしていない。さすが坊ちゃん、名門貴族様は伊達じゃないな。

アリスはベッドに横になると、クッキーの箱を開けつつ指折り数えた。

「クイディッチチームだろ、魔法チエス、ゴブストーン、勉強会が四つに、タロットクラブに音楽サークルが二つ、スポーツクラブが三つ、魔法飛行クラブなんてわけのわからんもんが一つ。一体いくつ申請取ってきたと思ってる？ 十四だ!! 俺、ひとつも入ってねえのに!! アキ、紅茶!」

「はいはい」

杖を振り、ほかほかの紅茶を出現させると、アリスは礼も言わずに一息で飲み干してしまった。

しかし、飲み干したことで一緒に溜飲も下がったようだ。少し落ち着きを取り戻して、息を吐いた。

「しかし、よく一人でこれだけの申請取ってこれたもんだ。フィスナー家様様、だな」

ウィルが、椅子のキャスターを転がしつつアリスを労った。レーン

も感慨深そうに呟く。

「本当にあの人の、名門に弱いね。分かってたことだけど」

「ああ……グリフィンドールもハッフルパフもスリザリンも、どつこもいいとこの坊ちゃん嬢ちゃんが運び屋さ、あのガマガエルばあの選民思想は明らかだ、反吐が出る」

ガシガシ、とアリスは髪を掻き毟ると、おもむろに右手を睨みつけた。やがてすつくと立ち上がる。

「あの女に触れられたところが気持ち悪い、風呂行ってくる」

「行つてらっしゃーい」

そうひらひらと手を振った。

アリスが部屋から姿を消した後、おもむろにウィルが言葉を発した。

「変わったな、あいつ」

「本当にね。今までのあいつなら、こういうこと押し付けられても絶対にやらなかっただろうさ。頭を誰かに下げるよう強制されること、何より嫌いだったはずなのに」

「……大人になったんじゃないの？ あいつも、さ」

目を細め、ぼくは言った。

第17話 武装解除呪文

イースターだからか、ホグズミードは華やかに彩られていた。咲き誇る花々に、もう春か、と時間の進む早さに驚く。

そこらかしこに、ペイントを施された卵が飾られていた。ホグワーツに来た当初は、日本にはないこのイベントに目を瞠ったものだ。今やもうすっかり慣れてしまったが。

「それにしても、いい天気だ……」

最近はまだまだ冬の名残が強かったのに、今日は春の気配がする。暖かい。

「こないいい天気の中、僕らは一体何をしているんだろうね……」

リーマスが愚痴る。もうすぐ満月だからか、顔色が悪い。

「やいやいうるさいな。何だ君たちは、ジェームズがエバンズに奪われてもいいって言うのか!？」

「むしろジェームズはそれを望んでると思うけど」

「あれほどリリーリリーうるさかったしね」

「シリウス、ジェームズのこと好きすぎるよね」

ぼくら三人に即座に言い返され、シリウスはうぐうと言葉に詰まった。

「リーマス、ハニーデュークスの隣に喫茶店が出来たらしいよ。ハニーデュークス直営らしくって、喫茶にも手を伸ばしてみようとかいう新ジャンルらしい」

「行くよ、秋、ピーター」

「待って！ 俺を置いて行くな！」

リーマスと共に身を翻した。即座にシリウスに腕を掴まれ引き止められる。

「だってなあ……」

「楽しそうなところを邪魔出来るほど、僕らは極悪人じゃないしなあ……」

ジェームズとリリーのデートは、想像以上に上手く行っているようだった。

なんか、なんだろう、普通にカップル。邪魔というか手出しが出来ない感じ。

しかし、それにしても女の子の気持ちというのは分からないなあ。この前までジェームズを蛇蝎の如く嫌っていたというのに、一体どんな化学反応の結果だろう。

まさしく、移ろい変わりやすいのは女心と秋の空。ぼくもよく見た目から女の子に間違われるが、それなら少しぐらい女心というものを分かってもいい気もする。そうしたら、リリーに「鈍感」と言われずに済むのだろうか。

「本当に友達甲斐のない奴らだな……秋、君はジェームズにエバンズが取られてもいいのかよ！」

「構わないよ。むしろ大歓迎」

むしろホツとする。ジェームズなら、あいつが持ちうる全ての力を使ってリリーを幸せにしてくれると信じているから、下手に誰かに取られるより、ずっと安心というものだ。

「いいじゃんか、親友の恋路くらい優しく見守ってやりなよ。第二、シリウス、君の方が格段にモテるんだからさ」

「その通り。せっかくだしい天気なんだし、尾行なんかで休暇を潰さないで、もっと有意義なところに行こう。ハニーデュークスの隣の喫茶店とか最高だと思っただ」

「ゾンコも新商品が入荷したらしいよ。この前広告が入ってた」
ぼくとリーマス、ピーターから説得されるも、まだシリウスは渋っている。

するとその時、背後で立ち止まる足音がした。

「君たち、何をしているのかな？」

猫撫で声に、ぼくらは揃って表情を強張らせた。そろりそろりと振り返る。

ジェームズとリリーが、恐ろしいほどの満面の笑みを浮かべて立っていた。

ヒツと誰かの喉が鳴る。

「「「いつのせいです」」」

ぼくとリーマス、ピーターは即座にシリウスを生贄に捧げた。

「お前らあ!!」

「ぼくら、シリウスに無理矢理連れて来られたんだ……リリー、ジェームズ、信じてくれるよね……?」

リリーとジェームズに一步步み寄る。

不本意ではあるが、一番この二人にウケがいい、守り甲斐のある小動物のような仕草を演じてみせた。

「当たり前じゃない! 私が秋を信じないなんて死んでもありえないわ!」

「当然だね! さあ秋、こっちへおいで! あんな肉球から離れるんだ、危ないからね!」

「わーい」

棒読みで嬉しさを表現した。

ジェームズとリリーの元についたぼくらに、シリウスが「この裏切り者共!」と喚く。

「さあ、我が友パッドフット。死に行く準備は出来たかい?」

「リリー、僕らと一緒にハニーデュークス隣の喫茶店に行こうよ」

リーマスがリリーを誘うと、「あら、いい考え」とリリーは微笑んだ。

「行こう。あいつらなんて放っておいてさ」

「あはは……大丈夫かな」

「大丈夫大丈夫」

ちらちらと後ろを振り返るピーターの背中を軽く叩いた。

「お前ら覚えとけよ!!」

シリウスの叫び声が響く。ぼくらは笑って、その場を後にしたのだった。

……まあ、デートは邪魔出来たので、良しとしよう。



シリウスが、暖炉での会話中にアンブリッジに捕まりかけた、という話は、朝からぼくの気分をげんなりさせるのにとっても効果を出して

くれたようだった。

「ホグワーツの通信網は見張られている、そうなの、アリス？」

朝食の席で、ハリーはぼくらレイブンクローのテールに來ていた。ハリーだけではない、ロンもハーマイオニーも一緒だ。アリスとロンは朝のひと勝負と言つてチェス勝負をしていたが（現在ロン曰く三十四勝三十敗らしい）、ハリーの言葉に、アリスは頷いた。

「そうだ。ふくろう便、煙突飛行ネットワーク、こいつらは魔法省の管轄だ。いくらだつて監視が効く。今のふくろう便は全てが全て検閲対象だ……この前、ガマガエルがそう言っていた」

う、と、アリスはあからさまに食欲を無くした表情で、手に持っていた紅茶のカップをテールに戻した。

「それ以外の連絡手段を考えるべきだ。アキ、お前のその羊皮紙のような」

ああ、と、ぼくとハリーは目を見合わせた。

二年生のときに作り上げた、ハリーとの連絡ツールのことか。

「アキ、片方がたとえロンドンにいても、これって使える？」

ハリーの言葉に、ぼくは少し考え「……出来ないことはないと思う。もう一組作ってみよう」と頷いた。

「手紙なら、送る方法はもう一つ知ってる」

幣原秋が、両親と手紙をやり取りしていた方法を思い返ししながら、ぼくは呟いた。

そういえば、あれも一つの手段だ。

「日本とイギリス間は、ふくろうは使えない……だから、手紙に時空を超えさせるんだ。空間転移の魔法だよ——結構難しいけど」

最後に、そう付け加えた。

よく、幣原の父親は、一年生の右も左も分からない幣原に、この魔法を教えたものだ。当時は、何も考えず、教わった通りのことをやっていただけだけど——今思うと、これ、かなり高度な魔法だぞ。

その瞬間、手元に一通の羊皮紙が『出現』した。

空間から滲み出るように現れたその羊皮紙は、まるで今のぼくの言葉を聞いていたかのようにタイミングばっちり、ぼくは僅かに眉を

寄せた。

「へえ、こういう魔法なのね」

ハーマイオニーが感心しているのを他所に、羊皮紙を広げた。

こういうことをするような人は、ぼくは一人しか知らない。

『アキ・ポッター』

話したいことがある』

署名はないが、誰のものはすぐさま分かった。細長い文字は、なかなか特徴的だ。

羽根ペンとインク壺を取り出した。眉を寄せ、羊皮紙の余白に書き殴る。

『ぼくは話したいことはない』

それだけを書いて、杖の先で『アルバス・ダンブルドア』となぞつた。

瞬間、羊皮紙は発光し、瞬きの後には跡形も残さず消える。

「……アキ、君は」

「ぼくはあの人を許してないよ。去年、分かっているながら君を危険に晒した、あの人をね」

ついでに言うなら、それに気付いていながら企みを見逃した幣原も、あの人と同罪だ。



「ホグワーツにこんな部屋があったとは」

『必要の部屋』を見渡して、ぼくは小さく舌打ちをした。

完璧だと思っていた『忍びの地図』に、まさかの綻びがあったとは。悪戯仕掛人も、幣原も知らない部屋が、まさかホグワーツにあったとは。プライドを傷つけられた気分だ。

広々とした部屋だった。本棚にはみっしりと呪文やらなんやらの本が並び、大量のクッションに、一番奥の棚には『かくれん防止器』やら『敵鏡』やら、いろんなものが収められている。

この部屋を幣原や悪戯仕掛人らが見つけたら、一体どのような部屋

になっただろうか。

リーダーがハリーに決まり、そしてこの会合の名前が——ぼくは顔をしかめたが、圧倒的多数に黙り込んだ——ダンブルドア軍団、D Aと決定された。

ハリーは一番最初に『武装解除呪文』を教えることにしたようだ。基本的な呪文だが、それすら出来ない者が半数を占めていた。

「アキ、お相手願いたいんだけど」

ハリーがそう言うってくるのに、ぼくは目を瞬かせた。

「正気かい？」

「酷いな、僕だつてそこそこやる」

へえ、とニヤリと笑つて立ち上がった。杖を抜く。

瞬間、呪文が飛んできた。

「エクスペリアームス！」

不意を突かれたと言うのは、言い訳だろう。むしろ、よく不意を突いたと称えるべきだ。

ぼくの手を離れた杖を、ハリーは難なく片手でキャッチしてみせた。そして、笑う。

「こんなものなの？ アキの実力つて」

「……っ、言つたね？」

パキン、と指を鳴らした。

「インセンディオ！」

ぼくの呪文を、ハリーは『妨害呪文』で打ち消した。

「グリセオ！」

瞬時に唱える。ハリーが僅かに体勢を崩したところですかさず「アキシオ！」と叫んだ。

ハリーの手から、ぼくの杖が飛び出す。掴んで、一步踏み込んだ。

「アグアメンティ！」

「ボンバーダ！」

「レラシオ！」

「オバグノ！」

「コンフアンド！」

——凄い。

思わず目を輝かせた。

ここまで、ぼくとやり合えるなんて。

見くびっていた、ハリーのことを。ハリーがここまで強くなっているなんて、考えもしていなかった。

いつの間に、ぼくに守られ続けるようなハリーじゃなくなっていたのか。

——だけど、ごめんな。

——いくら君でも、負けるのは性に合わないんだよ！

「エクスペリアームス！」

魔力の出力を一気に上げると、振り上げた。

ぶわりと辺りを風が舞う中、ぼくは飛んできたハリーの杖を掴むと、ハリーに突きつける。

「……リザイン、降参だ。さすが、アキ」

「君こそ、驚いたよ。ぼくから『武装解除』してみせるなんて」

『武装解除』したところで、君の武装はその桁外れの魔力そのものだから、あまり意味はないな。杖なしで魔法使ってくる相手の対処も考えないとだ」

ハリーに杖を投げ返した。

そして、気付く。誰もがぼくとハリーを見ていることに。

「……あー、あの。その……」

「はーっ、あんたたち、凄いだねえ」

素直に感嘆の声を漏らしたのはルーナだ。その声を皮切りに、ざわざわと賞賛の声上がる。

ハリーは照れながらも、しっかりと声を張った。

「ここまで皆が出来るようになる必要はない。でも、身を守る術を覚えるのは大切だ。いいかい？　じゃあ、もう一度『武装解除』をやってみよう」

ハリーの声を聞きながら、ふと目を落とした。

右手には、ハリーの杖を取った感触がまだ残っている。

——だけど、まだまだだな。

四年生時のジェームズやシリウスにも劣る。

ぼくに無言呪文すら使わせない程度に。

——鍛えないと、使い物にならない。

でも、叩けばいくらでも伸びる。

ハリーの可能性に胸を弾ませながら、ぼくは小さく微笑んだ。

第18話 くすぐる拙い恋心

飛行機から降り立つと、息をついた。

六年生が終わり、七年生となる。その間の夏休み、およそ一年振りに、生まれ育った地日本に帰り立った。

列車を乗り継ぎ、そこから歩いて家に辿り着いた。荷物を置き、時差ボケを直すために少し寝る。軽く家の掃除をしてから、バケツと雑巾を持って外に出た。

向かう場所は、決まっていた。

両親の墓だ。



途中の花屋で、花を買った。よく分からないので、適当に包んでもらう。

「……百合の花を入れてもらっても、いいですか？」

思いついたそれを、店員さんは快く実行してくれた。

山を降りると、墓地に出た。その頃にはもう既に汗でびっしりだった。

日本の夏は暑い。空気が湿っている。イギリスの方が日差しは強いが過ごしやすいのは、日本は湿度が高いからだろう。

墓地には、ぼくと同じく墓参り目的だろう人がちらほら見受けられた。夏休みだからだろう。

それでも、子供が一人で墓地に来るのは珍しいらしく、ちらちらと見られているのが分かる。顔を伏せて、そそくさと足早に通り過ぎる。

「……え」

両親の墓の前に出たぼくは、思わず声を漏らした。

人がいる。墓の前、石畳に、人が倒れ伏している。

男の人のようだ。それも大人の。紺色の着流しを身に纏っている。

「あ、あの……」

恐々近付いて、声を掛けてみた。しかし、ピクリとも身じろぎしない。

「あのー……」

弱ったな、と思いつながらも、その辺りにバケツと花を置いて、その人の肩を揺さぶった。

まさか、死んだりしないよな。墓地で死んでるって、なんてホラーなのか。まだ日は高いというのに。

幸いなことに、その人は呻き声を上げつつも目を覚ました。良かった、と胸を撫で下ろす。

少し肝が冷えた。そうそう怪談話は得意ではないのだ。幽霊とかそういうのなら、ホグワーツで慣れているから大丈夫なのだが。

「大丈夫ですか？」

目を開けたもののどこかぼんやりとした様子のその人に、ぼくは声を掛けた。

その人は顔をこちらに向けると、ぼくの顔に焦点を合わせる。瞬間、一気に瞳に光が灯った。目を見開いたその人は、ガバツと起き上がる。ぼくの両腕を掴む。

「君っ、もしかして秋くんか！」

「えっ？」

突然名前を呼ばれ、目を瞬かせた。

どうしてぼくの名前を知っているのか。どこかで会ったことあったっけ。

そう言えば、どことなく見覚えがある気もする。記憶を辿って辿って、もしかして、という人物に行き当たった。

「……あ、もしかして、梓さんですか……？ 父の、弟の」

「そうだよ。よく覚えていたね、直兄の葬儀以来のはずなのに」

「記憶力にはそこそこ自信がありました……それより、どうしてこんなところで……」

倒れていたんですか、と口にしようとした瞬間、ぐぎゅるる、と凄まじい音が鳴った。

パツとぼくの腕を離し、恥ずかしそうに顔を赤らめる。

「あ、はは……ごめんね。何か食べるもの、持ってない？」
ぼくは目を瞬かせた。



「いや、本当に助かった。本当にありがとうね、感謝してるよ」

「い、いえ……」

『何か食べるもの』と言ったって、ぼくだって日本に帰ってきたばかりなのだ。

ひとまずあちらから持ってきた、小腹が空いたときに食べる用のパンを差し出すと、梓さんは涙を流さんばかりにぼくに何度もありがとうありがとうと言って食べていた。

「それより、一体どうしてあんなところに？」

杖を振り、いつもの癖で紅茶を差し出したところで、ここは日本だとハツとした。しかし梓さんは全く気にした様子もなく、一息に飲み干してしまう。

カップをソーサーに置いて息をついたところで、梓さんはへらりと笑った。

「なんとなく、君に会えるかなあって思っていたんだよ」

「……あれ、梓さんって……」

「ううん、僕は『予知夢者』じゃないよ。直兄みたいな能力は持ってない。だから、これはただの勘。でもまあ、こうして秋くんに出会えたんだから、僕の勘もそうそう捨てたもんじゃないね」

「でも、倒れるまであんなところにいなくてもいいじゃないですか。そう、うちに来たりとか……」

梓さんは「そんなこと出来ないよ」と首を振った。てつきりぼくは礼儀的な意味でそう言ったのかと思っただが、真意は違ったようだ。

「この家はね、幾重にも結界が巻かれていて、そこんじよそこらの人じゃ近付けないようになってるんだよ。地図通りに進もうと思っても進めない、まっすぐ山を登っているはずなのに、いつの間にか降りている……そういう結界が敷き詰められている。直兄は優秀な術

者だったからね、僕程度じゃあ到底辿り着けやしないよ。森の中を永遠彷徨って、気付けば腹が減った野生動物の餌食さ」

へえ、初めて知った。そうだったのか。

道理で、幼い頃から両親に「友達は家に連れてきちゃダメだよ」と口酸っぱく言われていたわけだ。

「どうしてぼくに会いたかったんですか？」

そう尋ねると、「甥っ子に会いたいわって気持ちに、理由なんている？」と微笑まれた。

「……違いますよね。ぼくの両親は、あなた方とは断絶していた。親戚の交流なんて全くなかったし、ぼくはあなたに、父が死んで初めて会いました。ちよくちよく会って交流があったならともかく、いきなりそんなこと言われて『はいそうですか』とは、到底信じられませんよ」

久しぶりに、長々と日本語を喋っている気分だ。ぼくも随分とあちらに馴染んでしまっているらしい。

梓さんはちよいと目を瞠ると、心底楽しそうに笑った。

「警戒心が強いんだね、君は」

「父がどうしてあなたと、あなた方と連絡を取っていなかったのか、それが分からない限りは、気安くはなれませんよ」

「なるほど、なるほど」

飄々とした人だ。のらりくらりと掴ませない、掴みどころがない。

その辺りは、微妙に父と似ている、と思った。

「直兄がどうして僕らと断絶したのか、知りたい？」

「……………」

思わず口を噤んだ。しかし、こくりと頷く。

嘘を吹き込まれる可能性は否定出来なかったが、それを言うなら真実を伝えてくれる確証がある人は、今やもう誰一人としていないのだ。

「ちよいと長い話になるけどね」

梓さんは変わらなず笑みを浮かべていたが、僅かに瞳を陰らせた。

「君のためなんだよ、秋くん」



DAの集会の日付を全員に手早く知らせる仕組みとして、ハーマイオニーがガリオン金貨（に似せた金属）に『変幻自在術』を掛けることに思い至ったのは、比較的すぐだった。

受け取ったガリオン金貨に、へえ、と感嘆する。この子は本当にすごいな。レイブンクロウ生も嫉妬する秀才だ。学年一位は伊達じゃない、さすがはハーマイオニー。

しばらく、DAは順調だった。『武装解除呪文』は皆かなり上達したし、『妨害呪文』も半数が出来るようになった。

ハリーはとても満足げで、アンブリッジ対する闇の魔術に対する防衛術の授業でも、上手く癩癩を抑えられるようになってきた。

しかし、しかし、だ——万事順調だと思っていたときに、試練は降りかかるものだ。

とりわけ、ハリーには。

初めて、ロンがキーパーとして参戦したクイディッチの試合——グリフィンボール対スリザリンの試合。

そこで、ドラコをボコボコにぶちのめしたハリーと、フレッド、ジョージの双子は、あのガマガエル女史に、生涯クイディッチ禁止令を出されてしまったのだった。



「ホント、バカだな」

アリスは包帯グルグル巻きでベッドにいるドラコに、容赦なく言葉を浴びせた。

「よくもまあ、飽きもせずにあきの兄貴を挑発するよ。それだけぶん殴られることをお前はしたんだ」

ドラコの傍らにはアクアもいて、呆れた、とも言わんばかりの絶対零度の視線を送っている。

アリスとアクア、幼なじみの二人から容赦ない言葉と視線を浴びせられ、ドラコは身体を小さくして黙り込んでいた。少し気の毒にもなる。

「ハリーの何が気に食わないの？ ドラコ」

そう尋ねるも、ドラコはそっぽを向いてしまった。言いたくないつてか。ため息をつく。

「……君らには分からない」

小さな声が聞こえた。ドラコのものだ。アリスは肩を竦めた。

「そりゃ分かんねえよ。お前、何も言わねえもん」

「……………」

「しかし、変な構図だな」

ポツリと、アリスはひとりごちた。

「グリフィン・ドール側、ハリー・ポッターの弟であるアキと、スリザリン側のお前とお嬢サマ、中立不可侵の、俺。お嬢サマは家の思想を否定しては地下牢にぶち込まれる問題児だし、お前は両親の期待に応えるいい子ちゃんだ。よくまあ、一緒にいられるもんだよ」

「……お前は、結局フィスナーを継いだと聞いた」

ドラコの言葉に、アリスは「ああ」と静かに頷いた。

「結局な、あの家がなくなんのは、俺も困る。だったら早めに意志を表明して、先回りして準備しておいた方がいいんだ」

「……戦争が、始まるのね」

アクアは僅かに眉を寄せた。灰色の瞳が伏せられる。

「お前はさ、結局、どうしたいんだ？」

アリスの問いかけに、ドラコは何も答えなかった。

ただ、黙ってシーツを掴んだ自分の手を見下ろしている。

「なあ、ドラコ」

アリスが、ドラコのファーストネームを呼ぶのを初めて聞いた。

幼い頃は、きつとこうして、名前で呼び合っていたのだろう。そういうことが分かる、優しい声音だった。

「ずつと、ガキのまんまじゃいらねえんだ。自分の人生だ、どう生きるか、早めに決めとけよ……幼なじみからの忠告だ」

「……ふふつ、偉そうに言うわね。あなたもこの前、やつと決断した癖に。……散々迷って、家飛び出して、好きなだけ親に迷惑を掛けたのは、一体どこの誰だったかしら？」

アクアは、ちよつとだけ嬉しそうにそう言った。

「うるさい」とアリスは眉を寄せるも、声には怒気が感じられない。

「丸くなったね、アリス」

感慨深く呟くと、途端にゲンコツが飛んできた。慌てて飛び上がり、拳が当たらないところまで下がると、アリスは露骨に舌打ちをした。

アクアはぼくらのやり取りを見てクスクスと笑う。

「……アリス」

その時、黙っていたドラコが口を開いた。

アクアよりも濃い灰色の瞳が、縋るように揺れている。

「フェイスナーの名前は、今もまだ、健在か？」

ぼくには、その言葉の意味はよく分からなかった。

しかし、アリスには伝わったらしい。

「……ああ」

はつきりと、頷く。

それにドラコは、安堵の表情を浮かべてみせた。

「……死ぬなよ、アリス・フェイスナー」

ドラコはそれだけ言うと、身をベッドに倒し、シーツを頭まで被る。もう、話す気はないようだ。

「……難儀な性格してんよ、お前も」

アリスはそう吐き捨てるように言うと、立ち上がった。

「んじゃ……俺、先戻つとくわ。レーンからバスケ誘われてんだった」

「えっ？ あ……」

言い残して、あつという間に病室から出て行ってしまふ。まるで風のような。

「……気の遣い方が、下手くそなのよ、バカ」

「どうしたの、アクア？」

ぼくの声に、アクアは恨みがましい目を向けた。理由が分からず、

ただたじろぐ。

「……鈍感というか、無神経というか、何も考えてないというか」
「ええ!？」

酷い言われようだ。

アクアは「……じゃあね、ドラコ」というと病室から出て行ってしまふ。

慌ててぼくも「ドラコ、お大事に!」と声を掛けると、彼女の後を追った。

「ま、待ってよ、アクア!」

アクアは振り返った。ぷく、とむくれるように頬を膨らませている。そんな子供っぽい仕草も滅茶苦茶可愛い。

「……今年のクリスマス」

「うん?」

「……ホグワーツに残る? って、聞いてんのよ」

察しなさいよ、バカ、と、アクアは頬を染めて呟いた。

思わず、ぼくの顔も赤くなる。

「……あー、えっと」

多分、今年はホグワーツには残らないだろう。夏休みの最後、モリーおばさんが「またクリスマスに」と言っていたと思うし。

だけど、それをアクアにそのまま伝えるのは、憚られた。

ぼくの無言の間を解釈して、アクアの瞳が曇った。申し訳なさに、胸がぎゅっと痛む。

「……ごめん」

「ううん……私こそ、ごめんなさい」

「で、でもさー! その……」

勢いで、アクアの手を掴んだ。

「手紙……贈るから。プレゼントも……」

アクアは顔を赤らめてぼくを見ていたが、こっくりと頷いた。

いや、大きく俯いただけかもしれない。それからアクアが顔を上げるまで、長く時間が掛かったから。

「……き、期待してる」

「あ……うん」

しばらく、何とも言えない気まずい時間が流れた。それを断ち切るように、アクアが「じゃあ……バイバイ」と言って、顔を上げると僅かに微笑んだ。

「あ、う、送ってくよ」

「あら……ありがとう」

いつの間に、自分はアクアの手を握っていたのか。はっと気がついて手を離そうとしたが、アクアは咎めるように首を振った。

ぼくのローブのポケットの中に、自分の手も一緒に入れる。

どうにかなってしまうかと思った。足取りが軽すぎて、ふわふわしている。

自分のポケットの中に、アクアの手が入っている。冷たい指が、暖かさに包まれて、じんわりと熱を持つてくる。

幸せすぎて、こんなに幸せでいいのかと、考えてしまう。

「……デイゴリーの様子も、見に行かなくちゃ」

アクアの声で、一気に現実に引き戻された。

「どうにかできないものかな？」

「……難しいでしょうね。でも、生きてはいるはずよ。殺すつもりなら、初めから殺していたでしょうし」

「……ヴォルデモートが何を考えているのか、予想がつかないな……つと、ごめん」

『ヴォルデモート』の単語を聞いて、アクアは大きく身震いをした。

慌てて謝ると、アクアは息を吐いて「大丈夫」と頭を左右に揺らした。ポケットの中で、ぼくの手を握るアクアの力が、僅かに強まる。

「あの活動は、順調？」

アクアの言う『あの活動』が、D Aのことを指しているだろうことは、容易に分かった。

「いい感じだよ。これならふくろうもO間違いなしだろうね」

あえてぼかして告げる。

アクアはクスクスと笑って「皆してOをとったら、先生方、驚くでしょうね」と言った。

「……アクアもいたら、きつと、もつと……」

ぼくの言葉を、アクアは静かに止めた。少し、切なげな笑みだった。

「……その気持ちだけで嬉しいわ、アキ」

「……………」

「……で、いいよ」

いつの間にか、スリザリン寮の目の前まで来ていた。

アクアはぼくのポケットから手を抜くと、「……手紙とプレゼント、楽しみにしてる」と言って駆け出して行ってしまった。

一人取り残されたぼくは、小さく呻いた。

「……失敗したなあ」

DA のことは、ほかの誰でもない、アクア自身が一番、気にしていたことなのに。それをぼくは、分かってあげないといけなかったのに。

「……バカで鈍感なところ、どうやったら治るんだろうな」

ね、幣原。

第19話 真実の代償

「何から語ろうか。まず、幣原家についてから語り始めるべきか」

笑顔は崩さず、梓さんは口を開いた。テーブルの上で、両手の指を合わせている。ぼくと同じ癖だ、と少し驚いた。今にも合わせようとしていた指を、意識して離す。

「君は確か、ホグワーツ魔法魔術学校に通ってるんだよね？ 直兄と同じだ」

「梓さんは……？」

「僕？ 僕は違うよ。魔法処、まあ、ホグワーツの日本版みたいなものかな、そこに通った」

「日本にも魔法学校があるんですか!？」

目を瞠った。

ぼくの反応に、梓さんはクスクスと笑う。

「あるよ。ホグワーツとは少し毛色が違うけどね。陰陽師、って、聞いたことない？」

「……一応は」

「それは重畳。僕ら幣原は、今や相当に少なくなった日本呪術の使い手、陰陽師の生き残り家系の一つだ。例えば……これ」

そう言うとき梓さんは立ち上がり、ふらりと台所へ消えた。

やがて戻ってきた時には、一枚の板を持っていた。真ん中に正方形が描かれている。

これは確か、父が母を呼ぶ時によく使っていたっけ。

「式神の応用版さ。ある程度の距離なら、声を飛ばして相手に伝えることが出来る。……はあ、すっごいな、よくこんなもの作り出したものだ。直兄は発明家気質でね、よく色んなものを気まぐれに作っていたよ」

それは、確かに、そうだ。

首にいつも掛けているロケットを、シャツの上から握った。

「どうして父は、ホグワーツに？ 弟のあなたは、日本の魔法学校に通ったんですよね。一体どうして……」

「ちよつとその辺りはゴタゴタしててね。一言でざっくりと言えば、直兄は飛ばされたんだ。政略的な意味で」

椅子に座り直した梓さんは、ほんの少しだけ仄暗い目つきをした。「ちよいとぼつかしね、直兄は有能過ぎた。僕らの父……まあつまり、君のお祖父さんに当たる人だね。あの人は次男だった。幣原の正式な跡取りはちゃんといいた……ちよいと前に飛び降りて死んだがね。直兄の死の知らせを聞いた瞬間だった、止める間もなかったらしい……バカな奴。いつまでも直兄をライバル視してた、叶いつこないのに。」

結局のところ、幣原の当主は直兄になったから、直兄が飛ばされた意味はまるつきりなかったんだ。直兄は、それほどまでにずば抜けていた。可哀想に、あの跡取りは人生を直兄の才能に振り回されて、まさしく全てを棒に振ってしまった」

思わず息を呑んでいた。

梓さんはその話のフォローを一切せず、指を合わせてにつこり笑う。

「話を続けよう。直兄は邪魔だったからホグワーツに飛ばされたんだ。程よく遠く、程よく有名で、程よく言葉の通じない異国の地へ。僕は邪魔になるほど能力がなかったから、そのまま魔法処に入学した。それだけの話だよ。……シヨックだった？ でも、君が聞いたって言ったんだ」

「……そうですね。大丈夫です」

詰めていた息を吐き出した。

テーブルの下、梓さんから見えないうところで、指を合わせる。そうすることで、少しだけ落ち着いた。

「直兄はホグワーツを卒業して、日本に帰ってきた。まさか英国から女の子を連れてくるとは思いもしていなかったけどね。直兄の縁談を手ぐすね引いて待ち構えてた奴らには、大打撃を与えたよ。そして少々の厄介事も引き連れてきた。最近よく耳にするよ、直兄と君のお母さんを殺した人の話をね。英国で暴れ回っているんだって？」

「……はい」

ふうん、と、梓さんは軽く返事をした。

聞きようによつては、どうでもいい、とも取れる声音だった。

「直兄を殺せる人が、この世にいるなんてね。僕はそっちの方が驚きだけど……どこまで話したっけ？」

「ぼくの父が、母を連れて日本に戻ってきたところまで……」

「ああ、そうだった」

なんとなく、だけど、少しずつ、両親が——父が、ぼくと親戚とを——実の弟である梓さんとを引き離していた理由が、分かってきた気がする。

少し、怖い。

この人からは、あまり人間味というものが感じられない。

事実を事実として、ありのままに語っている。淡々とし過ぎている。

その率直さ故、嘘を語られているのではない、ということが分かるのはありがたかったが。

「直兄は幣原の家が嫌いだった。嫌いだった理由は、何だろうね。『夢』で色んな人間の思惑を見たから嫌いだったのか、それともその逆か。」

ともかく、日本に帰ってきてすぐさま、あの人はうちの両親に……君にとつては祖父母か。彼らに絶縁状を叩きつけていった。当主という肩書きも誰かに押し付けたかったのだろうが、生憎と残っているのは跡継ぎの見込みもない痴れ者と、昼行灯の僕。いろんな人に説得されて、名ばかり当主でいいならと直兄はしぶしぶ受け入れた。それからしばらくして、君が生まれた。自覚しているのだろうが、君の魔力はそれはそれは恐ろしいものでね。君が三つの時は家を半壊にしたと聞いたよ」

ああ、それは——以前両親から聞いた覚えがある。

「とんでもない魔法力を保持する君を、君の両親は、幣原からも、英国で暴れている奴からも、守らなくちゃいけなくなった。どちらも厄介だが、最重要は幣原から君を守ることだ。君の能力を垣間見た幣原の人間は、まさしく君を当主にしたいと思うだろう。直兄はそれが嫌

だったんだろうなあ。息子を自分と同じ目には合わせたくなかったんだろうな」

そう——だったのか。

梓さんは、薄く微笑んだ。

「良かったね、秋くん。幣原当主は君には行かない。直兄が死んで、僕が継いだ。僕が死んだら、多分僕の息子が継いでくれるだろう……君のいとこ、に当たるのかな。今年で十五になる。直兄と君のお母さんの葬儀で、君も見たはずだ」

覚えている。梓さんの隣にいた。学生服を着た少年だ。名前は、どうだろう、覚えていない。じつとぼくを睨みつけるその目が、印象的だった。

「才能つてのは、凄まじく人を振り回す。才能を持つそいつも、そいつの周りの人間も。本物の才能というのはね、人を狂わせるんだ。それを、僕はずつと部外者として見てきた。そうでもしないと、直兄の才能に巻き込まれてた」

淡々と、梓さんは言葉を紡いだ。

「直兄の場合、狂ったのはあの跡取り。そして君の場合、狂わされたのは一体誰だろうね」

挑むような目だった。

ぼくは静かに目を閉じると、両手を組み合わせ、額を擦り付ける。「……まだ、どうしてぼくに会いたかったのか、その理由を聞いていません」

目を開けた。

まっすぐ見据えたぼくに、梓さんは少しだけ感嘆したような眼差しを送る。

「あはは。……おいで、秋くん」



「この家で一番本が置いてある部屋はどこかな？」

そう、梓さんは尋ねた。

「必要な本があるんだ。きつとこの家に置いてあるはずだ」
なるほど、だから梓さんは、墓でぼくを待っていたのか。いつ来る
とも知れぬぼくを。

一番本が置いてある部屋、といえば、ここしか思い浮かばない。
父の書斎だ。

扉以外の壁を天井まで覆う本棚に、圧倒されたように梓さんは黙り
込んだ。

「……あの、聞いてもいいかい、秋くん」

「なんです？」

「この本たち、分類分けされてたりとか……」

「まさか。ぼくの父は案外適当でしたから、取り出した本は、一番近く
の棚の空いた部分に適当に戻していました」

ぼくは結構神経質だったから、そんな父の仕草にちよつとイライラ
していたものだったけど。

「あー……直兄、困るよそれは……あの人、自分が覚えてるからそれで
いいってタイプの人間だものなあ……机の上に物を放置はしないけ
ど、引き出しの中開けたらぐつちやぐちやなんだよなあ……」

梓さんが呻いている。

その形容は悔しいがかなり真実を突いていて、ぼくは思わず笑って
しまった。

「手伝いしましょうか？　どんな本なんですか」

「それは助かるよ。んー、一目で分かると思う。手に取った瞬間、文字
が浮き出てくるんだ。『血』に反応するから」

「血……？」

「そう、幣原の血に。だから、君にも反応するはずだ」

へえ、とも、ほう、ともつかない声を、ぼくは上げた。

探し始めて数時間が経ち、だんだんとこれが随分とロクでもない作
業なのだということが分かってきた。

一冊一冊ただ手に取り中身を確かめるだけの作業なのだが、本があ
まりにも膨大過ぎた。キリがない、と言ってもいい。

それでもやつと三日目の夜に、全ての本を確かめ終わった。

結論。

そんな本は、見つからなかった。

「……はあ、なるほど、なるほど」

梓さんは疲労困憊の体だったが、面白そうに笑った。積み上げられた本の隙間に、身体を横たえる。

「……本当に、この家にあるもんなんですか、その本って……」

「んー、なけりやおおかしいんだよ。……うん、ちよつと待って」

身体を起こすと、梓さんはぼんやりした眼差しを宙に彷徨させた。何を一体思いついたのか、今度はもう少し生産性のあるものがないなあ、と思いつつ、空っぽになった本棚に背中を預けて座り込む。

「……もしかして」

そう呟いて、梓さんは瞬時に書斎を飛び出して行った。

あまりの素早さに、声をかける隙もない。パチパチと目を瞬かせた。

やがて帰ってきた梓さんは、楽しげに口元を緩ませていた。

もつとも、この人はいつだって笑っている。

「秋くん」

随分とあっさり。三日間の苦労全てが水の泡と消えたというのに、梓さんは笑顔でぼくを振り返った。

「おいで」

首を傾げながらも梓さんの元へと駆け寄ると、梓さんは「押してみて」と言っただけの手を空っぽのある本棚に持っていった。

首を傾げながらも、力を込めて――

「……っ!?!」

いきなり本棚が回転した。支点を失ったぼくの腕は、そのままつんのめるように倒れ込み、その奥、隠し部屋の中へとダイブする。

どのくらい開かれていなかったのか、ものすごい量の埃が溜まっていて、ぼくは慌てて立ち上がった。

「あっはっは、大丈夫かい、秋くん?」

全然心配してない口調で、梓さんが隠し部屋の中に入ってきた。少し咳き込みながらもこくりと頷く。

指を鳴らせば、もうもうと舞っていた埃はすぐさま部屋の外へと出ていった。クリアになった空気に、息をつく。

「まさか、こんな部屋があったなんて……」

「直兄は子供っぽいところがあつたからね。息子の君から見ても、そうだったんじゃない？」

当たっている。

忘れもしない、十一歳の誕生日に、『君は魔法使いだ』と言って本の雨を降らせようとしたり。

隠し部屋は、大体一畳くらいの広さだった。

梓さんが左手を広げると、手の上にふわふわとした灯りが出現した。部屋には何も置かれていない。

「あの人のことだから……」

そう言つて梓さんは、空いている右手を懐に突っ込んだ。

やがて一枚の細長い紙を取り出すと、床に触れさせる。

「開^{カイ}」

瞬間、何もなかった床に、光輝く緑の線が浮かび上がった。

線で四角く区切られたその部分は、光が収まった、と思つた瞬間、勝手にパカリと開く。開いた先を覗き込むと、ずっと階段が続いていた。

「じゃ、行こうか、秋くん」



クリスマス休暇の直前、最後の D A の会合で、ハリーは「今夜はこれまでやったことを復習するだけにしようと思う」と宣言した。

不満は少し出たようだが、ハリーの狙いは的を射ている。新しいことを始めたところで、クリスマス休暇で三週間も間が空くのだ。

「アキ、手合わせ願いたい」

皆が『妨害呪文』を練習している傍ら、ハリーが杖をくるりと回し、ぼくに向けた。

「かかっておいで、どこからでもね」

杖を抜くと、ぼくも立ち上がる。

見えない障壁を、ぼくらと他の人との間に張り巡らせた。この前、思わぬ事故でハリーをあちら側に吹き飛ばしてしまい、大騒ぎになってしまったから。

会合で、ハリーは毎回こうしてぼくに挑む。

段々と、術の使い方も鋭くなってきた。ハリーの成長を実感でき、ぼくも嬉しい。

「アキ」

まっすぐに、ハリーはぼくを見つめた。

「君に、本気を出させたい」

「……やってみな」

杖を突き出し、構える。

「三……二、いちー」

どちらともなくカウントダウンをして、ぼくらの手合わせは始まった。

(本当、強くなったよ、ハリー)

前は一辺倒な攻撃ばかりだったのに、少しずつ頭を使えるようになってきた。

常に、二手目、三手目、もつと先の手を考える。この攻撃が受け流されることを前提に、次の手を打つ。それも、出来る限り迅速に。

受け流し方もいろいろある。避けるか、受け止めるか、相殺させるか。一瞬で、どのパターンが良いかを弾き出し、魔法式を組み立てる。相手よりも早く、そして威力のある式を。その過程を、いかに素早く行うかが、魔法使いの決闘では重要な役割を担ってくる。

『失神術』を杖を振って打ち消した。すぐさま『妨害呪文』が飛んでくる。

しかし、それは読めていた。ハリーはこの呪文を連続で放つのが、半ば癖だ。後で教えてやらないと、ぼくみたいに読まれてしまうぞ。

ハリーより早く『妨害呪文』を放つと、それらの呪文はぼくらの間で打ち消しあう。

ハリーが次の魔法式を組み上げるより、ぼくが杖を振る方が早かつ

た。

「レラシオー！」

ハリーがその術を、身体を仰け反らせて避ける。

その隙に杖を振り掛けて——ハリーの緑の瞳の奥に、闇から這い寄り蠢く、赤い目を見た気がした。

嫌な予感に、組み立てかけた魔法を放棄して『盾の呪文』に切り替えた。

呪文を声に出している暇は、なかった。

一瞬後——爆発、と言ったがいいだろうか。そんな轟音と爆風に襲われる。

『盾の呪文』を貼っていなかったら、間違いなく吹き飛ばされていた。普段のハリーの呪文とは比べものにならない、桁違いの魔力が放出された。

そのことに驚いたのは、ぼくだけではないようだった。ハリーも、びっくりしたように目を見張っている。

隙を逃さず『武装解除』を掛けると、あつさり——あまりにもあつさり、ハリーの杖が飛んできた。

ぼくの目の前に直立するハリーの杖を掴んで、ぼくは詰めていた息を吐いた。

汗が滲んでいた。

今のは一体何なんだ。

さつき目の前にいたのは、本当に、本当に、我が兄、ハリー・ポッターなのか？

「さすが、アキ。勝てないなあ」

ハリーはぼくに歩み寄ると、にっこりと微笑んだ。

杖を受け取ろうと、ぼくに手を伸ばす。

僅かに、躊躇した。

杖を、ハリーに渡しても大丈夫なのか？

——何を考えているんだ、ぼくは。

杞憂だ、と、首を振った。

ハリーに杖を渡す。

「上達したよ、ハリー。ぼくに『無言呪文』を使わせるなんて」
「本当かい？ それは嬉しいなあ」

無邪気に微笑むハリーの瞳に、先ほど垣間見えた赤い瞳は、ちらとも確認出来なかった。

——気のせいか、見間違いだったのだ。

光の悪戯なのだろう、と、ぼくはそう結論づけた。

——それが間違いだったことを、引つかかったことを、もっと深く考えるべきだったことを、ぼくは後から、後悔することになる。

第20話 奈落の底

階段は、想像以上に長かった。

やがて辿り着いた先は——奈落だった。

地下に広がる、広々とした空間。

壁には、本棚が一つ。小さな机が一つ。不可思議な発明道具は、そこらかしこに置いてある。

本も小物も本棚も机も何もかも、原型を留めているものは存在しない。

黒いインクをバケツでぶち撒けたようだった。

壁に、床に、本棚に、机に、小物に広がる黒い染み。

乾いたそれが、以前は黒ではなく赤を示していたのだと、理解するのは早かった。

「あー、こんなな血まみれじゃ、もはやあの判別方法は意味がないなあ。幣原の血に反応するも何も、直兄の血に塗れちゃってる。あーあー、しかも秋くんのお母さんの血も混じっちゃってるよ、こりや。困ったね」

「……………っ」

「秋くん、吐くならよそに行つてね」

梓さんの声は冷たかった。

いや、この人は元々こんなものだ。無機質で感情の籠らない喋り方をする。

「だ……………いじょうぶ、です」

何度目か分からない「大丈夫」の言葉を口にして、細く息を吐いた。首にかけているロケットを、強く握りしめる。

「んー……………秋くん、これ、元通りに直せる？ ひとまず、引き裂かれた本だけでも何とかしてくれたいんだけど……………」

「……………全部戻せます、大丈夫です」

杖を握った手が震えているのは、見ずとも分かっていた。

「レパロ」

無言呪文が使えるほど集中出来るような精神状態ではなかった。

杖を振ると、机も本棚も小物も本も、何もかもがかつてあつたような整然とした状態に戻る。しかし降り掛かった血は、そのままだつた。

「ああ、血は仕方ないよ。そもそも血に魔力は宿るものだしね。しかも幣原直の血なんだし」

そう言つて、梓さんは本棚に近付くと適当に一冊の本を手にとつた。その背表紙が血に塗れているということに気づき、ヒツと思わず喉が鳴る。

そもそも、この部屋自体が血まみれなのだ。壁だつて、床だつて。

「君に手伝えというのはさすがに酷か。待っていてね、そう長くは掛からないと思うから」

そう言われ、ぼくは頷いた。

うずくまり、頭を抱えて強く目を瞑る。

ゾクゾクと悪寒が這い回る。息がどうにもぎこちない。

よく梓さんは、平然としていられる。

家の地下に、こんな場所があつただなんて。そんなことも知らず、ぼくはこの家で寝起きをしていただなんて。

怖気が走る。この家に長居はしたくない。長居なんて、出来る訳がない。

父の、両親の血だと、梓さんは言った。

両親の葬式時に、周りの人たちが話していた言葉が蘇る。あの時はわざと聞き流していたものだ。認識したくはなかつたから。

『何ヶ月も気付かれなかつたというのに』

『死体は腐ることなく形を保ち続けている』

『二人の血は、体内から抜き取られていた』

「……………」

思い出した瞬間、もう無理だった。

階段を駆け上がり、一目散にトイレへと走る。胃の中のものを全て吐き出すと、幾分か落ち着いた。

それでも、この家にいること自体がもう耐えられなかった。そもそも、ここは両親が殺された場所なのだ。そんなところで寝泊まりしようと思っていた今までの方が、おかしかったんだ。

ぐったりとした足取りで、洗面所に向かう。

鏡に映る自分の、あまりの顔色の悪さに思わず笑えた。

「……大丈夫かい？ 済まなかったね」

振り返ると、梓さんが立っていた。目的のものを見つけられたのか。

右手に握られている本から目を逸らし、小さな声で「……いえ」と呟いた。

「本当に済まないことをした。もう大丈夫だよ」

梓さんはぼくの頭を軽く撫でようとしたが、ぼくは反射的に一歩後ろに下がった。

乾いた血の痕に触れた手で、触れられたくはなかった。

「……ごめんね」

そう、梓さんは頬笑んだ。



「それじゃあ、秋くん。さよならだ」

改めて両親の墓参りをした後、梓さんはぼくに笑いかけた。

「どこに住んでいらっしやるんです？」

何の気無しにそう尋ねると、梓さんは「ここから大分遠いところだよ」と言い、僅かに首を傾げた。

「君は、あまり来ない方がいい。用がないのならね」

「……はあ」

夕暮れの道を、ぼくらは歩いた。

セミが近くで、遠くで鳴いている。生温い風が吹いていた。

町は、賑わっていた。どうやら今日は、どこかで夏祭りがあったりするようだ。

浴衣を着た小さな子たちが、神社のある方に向かって走っている。

踏切がカンカンと音を立てるのに、足を止めた。

一つの線路しかない、小さな踏切だ。遮断機すらない。

カンカンカンカン・カンカンカンカン

日本は、なんだかイギリスよりも物悲しい。何故か、そう思う。

夕暮れ時は切ないし、花火はシユンと消えてしまう。セミの命は儂いし、空気は夏独特の気配を纏う。

カンカンカンカン・カンカンカンカン

「……あれ？」

は、と気付いた。

もうここは使われなくなった線路のはずだ。ぼくが幼い頃には、既に使われていなかった。

小学生の間では、使われてもいないのに一人で鳴り出す踏切として、ちよつとした話題になっていたものだけ。でもぼくは、この踏切が音を鳴らすのを聞いたことがなかった。

今、初めて耳にした。

カンカンカンカン・カンカンカンカン

ふらりと、梓さんは足を踏み出した。

あまりにも自然な動作で、気付いた時には、梓さんは線路の中に足を踏み入っていた。

ゴウツと、向こうから音が聞こえる。

見えない電車が、音を立てて近付いて来ている。

「梓、さん……っ」

慌てて駆け寄ろうとした瞬間、空気に押された。思わず尻餅をつく。

梓さんはぼくを振り返ると、微笑を浮かべた。

父とは全く違う、笑顔だった。

「秋クン、君ハ本当ニ、莫迦ダネエ」

カンカンカンカン・カンカンカンカン

轟音を立てて、見えない電車は目の前の線路を通り過ぎていく。

ガタンガタンと、レールを車輪が進む音。気付けば、梓さんの姿は消えていた。

カンカンカンカン・カンカン……

電車が通り過ぎ、しばらくしてから踏切の音も消えた。

しばらくポカンと口を開けて見ていたぼくだが、やがて口を閉じると、立ち上がる。

手の砂を払うと、ぼくは歩き出した。

忌々しい、我が家へと。



——ロンの父親が、アーサーおじさんが襲われた。

深夜、フリットウィック先生に叩き起こされたぼくは、その言葉に冷水を浴びせられたかのように目が覚めた。

それを、ハリーが『予言』したのだという。

フリットウィック先生に連れられて校長室へ向かうと、そこにはハリーとロン、それにフレッドとジョージの双子に、ジニーがいた。皆、蒼白な表情だ。

ハリーはぼくの姿を見るなり、顔を歪めて抱きついてきた。身体が、痙攣しているかのように震えている。安心させるように背中を叩くと、徐々にだが、身体の震えは収まっていった。

「何があったの？」

ハリーは青ざめていたが、しっかりとぼくの目を見つめて言った。

「……アーサーおじさんが、蛇に襲われたんだ。……僕はそれを、見ていたんだ」

ざわり、と胸が騒ぐ。

どうして、ハリーがそれを知ることが出来たんだ？

幣原の父親のような予知能力は、ハリーにはないはずだ。

それとも素質は眠っていて、何かしらの刺激で目覚めたのだろうか？

「アーサーは、『不死鳥の騎士団』の任務中に怪我をなさったのじゃ。

アーサーはもう『聖マンガ魔法疾患障害病院』に運び込まれておる。君たちをシリウスの家に送ることにした。病院へはそのほうが『隠れ穴』よりずっと便利じゃからの。モリーとは向こうで会える」

ダンブルドアは静かにそう言った。

フレッドが震える声で「どうやって行くんですか？ フルーパウダー？」と尋ねた。

「いや、あれは現在安全ではない。『煙突網』が見張られておる。移動キーに乗るのじゃ。今はフィニアスが戻って報告するのを待っているとろじや……君たちを送り出す前に、安全の確認をしておきたいのでな」

冷え切ったハリーの身体に、わずかだが温かみが戻ってきた。

そのことを確認して、ぼくはハリーから身を離す。ハリーは俯いて、ぼくの手を握った。しばらく離そうとはしなかった。

「あいつは、喜んで、と言っておりますぞ。私の曾々孫は、家に迎える客に関して、昔からおかしな趣味を持っていた」

額縁に、フィニアスと呼ばれた魔法使いが現れてそう言った。

曾々孫ということは、シリウスの曾々祖父か。さすがにここまで離れると、面影も何も見つからない。黒髪に灰色の瞳は、シリウスと一緒だ。

「さあ、ここに来るのじゃ。邪魔が入らぬうちに」

ハリーとぼく、それにウィーズリー兄妹も、ダンブルドアの机の周りに集まった。

ダンブルドアは錆びて黒ずんだヤカンを指差して言う。

「移動キーは使ったことがあるじゃろうな？ よかろう。では——」
皆、ヤカンに手を伸ばした。ダンブルドアが数を数える。

ふとハリーがダンブルドアを見上げた。ダンブルドアも、ハリーに目をやった。

途端、ハリーの顔が苦痛と苦悶に歪む。どうしたのだ、と声も出せないまま、ダンブルドアを見ると、ダンブルドアはハリーの反応を予測していたように落ち着き払ってハリーを見つめていた。

「……二」

ダンブルドアの瞳が、ぼくに移る。

何かを伝えようと、その目は意志を持っていた。

しかしその思いが何なのかを詳しく探る時間もなく、移動キーは作動し、ぼくらは落ちて行つた。

深い、異次元へと。



グリモールド・プレイスで、ぼくらは知らせが来るまでまんじりとしないうちを過ごした。

誰もが、口数少なかつた。ウィーズリー兄妹たちは、揃って実の父の安全を思い不安げな表情を浮かべていたし、ハリーは真つ青な顔で、ずっと膝の上に置いた自分の拳を見つめていた。

シリウスも、どうしていいのかわからないと言つた雰囲気だつた。時折シリウスは物言いたげにぼくを見た——ぼくと話がしたいのだろうと言うことは、すぐに察せられた。でも、ぼくらが揃つて抜けると、皆は一層不安がることだろう。

それが分かつていたから、ぼくらは暗い瞳を見合わせることにしか出来なかつた。

朝の五時を過ぎたあたりには、やつとモリーおばさんが姿を現した。青ざめていたが、安心させるように微笑んでいる。気丈な人だ。

「大丈夫ですよ。お父様は眠っています。後で、皆で面会に行きましよう。今は、ビルが看ています。午前中仕事を休んでくれたのよ」
部屋に、安堵の空気が流れた。張り詰めていたものが、パチンと切れたようだった。

「朝食だー」

シリウスが立ち上がり大声で言つたことで、誰もがやつと空腹の存在を思い出したようだ。

クリーチャーの姿が見当たらないので、シリウスは楽しげに台所へと駆けて行つた。『動物もどき』に変化していないにもかかわらず、その尻には見えない尻尾があるようにも見えた。

ぼくとハリーはシリウスを追った。ウィーズリー家だけにしてやりたいと思っただからだ。

しかしハリーは途中でモリーおばさんに呼び止められ、ぼくは一人でシリウスを追いかけた。

「どう思う、アキ」

杖を振り、水の入ったヤカンを火に掛けながら、シリウスは低い声で言った。

「分からない」

ぼくも正直に答えた。

シリウスは振り返る。真剣な眼差しだった。

「ポッター家に『予見者』が出たと聞いたことはない」

「でも、ハリーは時折、ヴォルデモートと繋がりのある夢を見ている。君に送っただろ、去年の夏だったかな」

「ああ……覚えがある。同じことが、よく?」

「よく、と言えるほど頻繁じゃないのだろうけど……でも最近、頻度は多いようだ。廊下の夢を見るのだと、言っていた」

「廊下?」

訝しげに、シリウスの眉が寄る。

ぼくは首を振った。

「分からない」

ちょうどそこに、モリーおばさんがエプロンを付けて台所へと入ってきた。

ぼくとシリウスは揃って口を閉じる。

「シリウスおじさん。それに、アキも」

そう声を掛けられて振り返ると、ハリーが立っていた。

「ちよつと話があるんだけど、いい? あの——今すぐ、いい?」

断る理由は一つもなかった。

暗い食料庫で、ハリーは語った。

内臓を吐き出すように、激しい痛み顔に顔を歪めながら、ハリーは話した。

「そのことをダンブルドアに話したか?」

「うん。だけど、ダンブルドアはそれがどういう意味なのか教えてくれなかった。まあ、ダンブルドアはもう僕に何にも話してくれないんだけど」

恨みがましい声だった。

シリウスが落ち着けるように言葉を紡ぐ。

「何か心配するべきことだったら、きっと君に話してくれていたはずだ」

「だけど、それだけじゃないんだ」

ハリーの顔色は、蒼白を通り越して白っぽく見えた。

「僕、頭がおかしくなってるんじゃないかと思うんだ。ダンブルドアの部屋で、移動キーに乗る前、ほんの一瞬蛇になったと思った。そう感じたんだ。ダンブルドアを見た瞬間、傷痕がすごく痛くなつて——ダンブルドアを、襲いたくなつたんだ」

あの時のアレは、見間違いや幻ではなかったのか。

一体どうということだろう、とぼくは考えこんだ。シリウスの声は、穏やかだった。

「幻を見たことが尾を引いていたんだろう。それだけだよ。夢だったのかどうかは分からないが、まだそのことを考えていたんだよ」

「そんなんじゃない、何かが僕の中で伸び上がったんだ——まるで身体の中に蛇がいるみたいに」

ハリーは、切羽詰まった声でそう言った。

「眠らないと。朝食を食べたら、上に行って休みなさい。昼食の後で、皆と一緒にアーサーの面会に行けばいい。君はきつとシヨックを受けているんだ、単に目撃したただけのことを、自分のせいにして責めている。それに、君が目撃したのは幸運なことだったんだ。そうでなければ、アーサーは死んでいたかもしれない。心配するのはやめなさい」

シリウスの言葉に、ハリーが納得したかは怪しいところだった。

シリウスが食料庫から出て行く。

「……本当に、僕の気のせいなのかな？ 僕の、勘違いなのかな？ アーサーおじさんのアレを見て、気が昂ぶってたから、そういう風に

感じたのかな？」

縫うような、声だった。

ぼくは静かにハリーの手に自分の指を絡める。

「疲れていることもあるんだろうね。君に必要なのは、食事と暖かいベッドだよ。……さあ、行こう」

皆の元へ。

ぼくの言葉に、ハリーはこくりと頷いて、笑みを浮かべた。

救われたように。

——ぼくは、重要なことを見過ごしたことに気付けなかった。
この時が、一つの契機だったのに。

第21話 貴方は本当に変わらない

「……う、うう……」

ああ、母が泣いている。

母が、泣いている。

「……かあ、さん」

あの男はいない。自分と母を脅かす、あの男は今はいない。

どこへ行ったのか、興味は全く湧かない。出来るだけ遠くに、出来るなら帰って来ないで欲しいと思う。

汚らわしいマグルの男。魔女の母に暴力を振るう男。

あいつの血が自分の中に半分も入っているという事実が、酷くおぞましい。

「母さん」

杖を手に、そっと近付いた。

足音に、母は顔を上げもしない。俯いて、ただはらはらと涙を零している。

母はいつも、無抵抗で殴られる。マグルなんか振るう物理的な怪我なんて、魔法使いならば杖一振りで治せるというのに——母はそれをしない。

否、出来ないのだ。

精神的なことで、魔法が使えなくなることがある。

日々繰り返される男からの暴力に、母は耐えられなかった。

純血の魔女なのに。

ギリ、と奥歯を噛みしめる。

胸の中に広がる男への憎しみを感じながら、母の前に跪いた。

「……母さん。大丈夫、大丈夫だから」

ふと、母の手に一枚の手紙が握られていることに気がついた。母が強く握りしめているせいで、シワが寄ってしまったている。

「……セブ、ルス……」

母は顔を上げた。涙に濡れた顔に、痛む心はもう存在しない。痛み
に、随分と慣れてしまった。

現実から一枚ボールを掛けたような、そんな感覚で、母と相對する。

「どうして、教えてくれなかったの……？」

「……え」

思いも寄らぬ言葉に、目を瞠った。

自分は、母に何か隠し事をしていただろうか。

どれだか見当がつかない、というのが正直なところだった。隠し事も、話していない事も、山積みだった。

——この、左腕の印も。

右手で、左腕の闇の印を服の上から撫でさすった。半ば無意識だった。

「……僕が、母さんに隠し事なんてする訳、ないじゃないか」

口から零れたのは、そんな心の伴わない言葉だった。

しかし、母は瞳に再び涙を溢れさせる。

「嘘、嘘。知っていたんでしょ、あなたは……ああ、どうして。あなたは、あの子と、幣原秋くんと、友達なんでしょう……」

母の口から親友の名前が飛び出たことに、動揺した。

一体、どうして。どうしてここで、秋の名前が出てくるのか。

果たして、母は。

「あの子と友達なら、知っていたはずよ。……あの子のご両親が、ああ、アキナ先輩と、幣原先輩が……亡くなっていたことに」

頭を重たい鈍器で殴られたような、そんな衝撃が走った。

血の気が引く。

「どうして、もっと早くに教えてくださらなかったの……先輩、アキナ先輩……」

母は顔を伏せ、大きく肩を震わせた。

心労で痩せ細った首が、酷く頼りなく見えた。

「秋の、両親が……亡くなっていた？」

呟いた自分の声は、他人のもののように白々しく、耳に入ってきた。思い出す。思い返す。

鮮烈な記憶を。

温かな、あの人を。

『君は、すつごく可愛くて、すつごくいい子だねえ』
抱きしめられたあの時のことを。

何年も昔のことなのに、秋の母親の記憶は、自身の中に鮮やかに残っていた。

——彼女が、死んだ。死んでいた。

記憶の中の彼女に、亀裂が入る。

破片が、崩れていく。

「どうして、教えてくれなかったんだ……」

——秋。

ひび割れた破片の奥に、親友の姿が見えた気がした。

こちらに一瞥も暮れず、振り返らない彼の姿が。

何年も一緒にいたはずなのに、秋が何を考えているのか、さっぱり分からなかった。



ロンドンの中心部。古く寂れたデパートが、聖マンゴの入り口だった。

トンクスの言葉に応えるよう、壊れたマネキンが手招きする。ぼくらはガラスを突き抜け、歩き出した。

「ロンドンのど真ん中に、こんなのがあんなって……」

「本当だよねえ」

ぼくとハリーが口々に呟くのに、トンクスは笑った。

「マグルたちって、本当になーんにも見てないんだもんねえ。まっ、こんなところに魔法使いの病院を建てようなんて思い至った奴も、私は気が知れないなあ」

薄膜を抜けると、そこは広々とした病院のホールだった。受付は混み合っていて、いかにも奇天烈な魔法障害を持つ人もいれば、見たところなんにもなさそうな人もいる。

受付に尋ねると、アーサーおじさんの病室はダイ・ルウエリン病棟の二階だと言う。

モリーおばさんに続いて、ぼくらは歩いた。廊下には癒者の肖像画がずらりと並び、クリスタルの玉が、ロウソクの光を灯してゆらゆらと揺れていた。

そう言えば、クリスマスが近いのだ。今更ながら、思い出す。

「私たちは外で待つてるわ、モリー。大勢でいつぺんにお見舞いしたら、アーサーにも悪いもの。最初は家族だけに、ね」

マッドアイも賛成のようだった。

ぼくとハリーは身を引くも、双子とモリーおばさんにそれぞれ引つ張られる。

「ハリーにお礼を言いたいはずさ、父さんも」

「でも、ぼくは……」

「アキも家族の一員だ、そうだろう？」

「ああ、その通りさ。じやなきや、この前の夏休みも俺たちと悪戯グッズを発明して母さんに正座で怒られるなんて経験するもんじやない」
明るい双子の声に、救われる。

アーサーおじさんのベッドは、一番奥だった。

日刊預言者新聞を読んでいたおじさんは、来訪者の姿を視認して、につこりと笑い新聞を横に置いた。

「やあー。モリー、ビルはいましがた帰ったよ。仕事に戻らなきやならなくてね。でも、後で母さんのところに寄る、と言っていた」

おじさんの傷は、病院服と毛布に覆われて見えない。

だからか、血色が悪い以外はいつも通り元気な姿で、それが皆をホッとさせた。

ハリーに何度もお礼を言ったアーサーおじさんは、子供達の元気な追及に少々眉を寄せた。

モリーおばさんがぼくらを外につまみ出し、代わりにマッドアイとトンクスを呼び込む。

「騎士団の話でしょ、ぼくもダメ？」

小首を傾げて見上げると、トンクスは少々ぐらりと来たようだった。

しかしモリーおばさんが「ダメに決まっています」とピシヤンと言

う。

「ぼく、幣原なのに……」

「なら、幣原秋になっておいでなさい。彼の方が分別があります」
チエツ、とぼくは舌を出した。

「アキが潜り込めずとも、我らを誰と心得る？」

「今こそ『伸び耳』の出番、そう洒落込もうじゃないか」

ぼくとハリーは声を上げて笑った。

薄橙の紐が、するすると伸びていくと、ドアの下から入り込み、やがて内部の音がすぐ近くにいた時と同じほどはつきり聞こえるようになる。

「……隈なく探したけど、蛇はどこにも見つからなかったって。アーサーを襲った後、消えちゃったみたい。だけど、『例のあの人』は蛇が中に入れるとは期待してなかったはずだよな？」

「わしの考えでは、蛇を偵察に送り込んだのだろう。なにしろ、これまでは全くの不首尾に終わっているだろう？　アーサーがあそこいなければ、蛇はもつと時間をかけて見回ったはずだ。それで、ポッターは一部始終を見たと言っておるのだな？」

マッドアイの声。モリーおばさんが不安げに言った。

「ええ。ねえ、ダンブルドアは、ハリーがこんなことを見るのを、まるで待ち構えていたような様子なの。今朝お話したとき、ハリーのことを心配なさっているようでしたわ」

「むろん、心配しておる。あの坊主は『例のあの人』の蛇の内側から事を見ておる。それが何を意味するか、ポッターは当然気付いておらぬ。しかしもし『例のあの人』がポッターに取り憑いておるなら——」
誰もが、ハリーを見た。

ハリーは『伸び耳』を耳から引き抜き、蒼白な顔でぼくらを見渡した後、パツと立ち上がって駆け出して行った。

「ハリー——」

『伸び耳』を引き抜くと、ぼくはハリーの後を追いかけた。

しかし、ハリーは足が速い。リーチの差だろうか。

あつという間に見失い、ぼくはキョロキョロと辺りを見回した。

「……ええいつ」

勘で、左に曲がる。廊下にいる病人と見舞客を避けながら、ぼくは走った。

ハリー、どうか。

思いつめないで。

角を曲がる。

瞬間、少女とぶつかりそうになった。避けるのには成功したが、勢いを殺しきれずによるめき、尻もちをつく。

「ろうかははしつちやダメなんだよ、おねえちゃん！」

少女はそんなことをぼくに言うと、咎める瞳ではあったが、ぼくに手を差し伸べた。

「……おねえちゃん、じゃない、おにいちゃん、だ」

「え？　だって、かみのけながいよ？」

「それでも、おにいちゃん、なんだ」

少女の差し伸べた手に、ありがたく掴まると立ち上がる。

「髪長いのおおにいちゃんなんて、へーんなの」と少女は呟いた。見ると、少女も病院着を身にまとっている。ぱつと見は普通だけど、この子も何かしらの病気を抱えているのか。

「……アリシア、勝手に病室を出ちやいけない。そう言っているだろう」

「だって、お星様が飛んできたんだもの。ほら」

そう言って彼女が指差した先には、何もなかった。

近づく靴音に、振り返り——呼吸が、止まる。

靴音が、止まった。

ぼくらは、黙って見つめ合った。

いつもは眠たげに半分ほど閉じている目は、今日は見開かれている。濃い茶色の瞳が、長めの前髪の間から、まっすぐにぼくを見つめていた。

「……ライ、先輩」

記憶より、年月分の時間を積み重ねた容貌。

でも、全く変わっていないと思わせるのは、この人の纏う空気が、変わらないから。

魔法医学に足を踏み入れた、人。

鋭すぎる牙を持つが故に、家族を人質に取られ、その牙を封じられた人。

ヴォルデモートが、その才能を危険なものだと判断し、すぐさま枷を嵌めた、その人が。

「……アリシア、病室に戻りなさい」

「ええー」

「……後で、お星様を捕まえてやる。だから、早く」

ぷう、と頬を膨らませながらも、アリシアと呼ばれた少女は駆け出して行く。その姿を目で追うことなく、ライ先輩はぼくに歩み寄った。

鋭い瞳で。

「……アキ・ポッター」

名前を呼ばれ、反射で身が震えた。

ゆるり、と、ライ先輩の手が伸びる。

緩慢な動作なのに、身体は全く動かなかった。

思いつきり頬を殴られ、ぼくは吹き飛んだ。魔力は籠っていないが、溢れんばかりの怒りを感じた。

「……一度、殴ってやりたいと思っていた」

地面に倒れ伏したぼくに、冷ややかな声が浴びせられる。

ぐい、と胸倉を掴まれ、乱暴に引き起こされた。濃い茶色の瞳に映るのは、怒りの感情。

「詰まらないことを考えたものだ。その意地が、再びお前から、大切なものを奪うだろう」

そうか、と、その時理解した。

人の考えていることが分かると、ライ先輩は昔語っていた。

幣原秋は、思考が日本語だから読めないだけだと。

今のぼくは、英語圏で生まれ育った。言語も、思考も、英語なのだ。

「……浅はかなことだ」

激しい怒りを、その瞳に滾らせて。

ライ先輩はぼくを睨みつけた。

「どこまで愚かだと気が済む。どこまで馬鹿なのか。どこまで、俺を失望させれば気が済む。どうして見えない、どうして分からない。俺には馬鹿なお前の考えが理解出来ない」

「な、にを……」

何を言われているのか、分からない。

「……分からないか。そうか」

ライ先輩は、ぼくに見切りをつけたように、ぼくの服から手を離れた。

あっさり。

「なら、失って初めて気が付けばいい」

辛辣に言い放つと、ツカツカと歩いて行く。

ふと立ち止まると、振り返ってぼくに告げた。

「ハリー・ポッターは二つ下の階のロビーにいる。早く行ってやれ」

そして、立ち去る。

ぼくは呆然と、その後ろ姿を眺めていた。

第22話 ナイチンゲールは歌わない

日本に長居する気は、残念ながらぼくには全くと言っていいほど起きなかった。

両親の墓参りに、ほんの一泊するくらいでいい。それも、自分の家以外で。

おぞましいあの家で眠れるほど、ぼくは神経が太くは出来ていない。

両親が、一体どのようにして死んだのか。どのようにして殺されたのか。

……なんて、そんなことをぼくは知りたくもない。考えたくもない。

薄情？ そうかもしれない。

それでも、ぼくは無理だった。そこまで心は強くない。

ぼくが両親のため出来るのは、ただ一つ。

敵討ちしか、存在しない。



「ハイ、秋。一緒にしてもいいかしら？」

新学期。

一人コンパートメントで本を読むぼくに声を掛けてきたのは、誰だろう、リリーだった。豊かな赤い髪の毛を、サイドで軽く結い上げている。

「どうぞ、好きなお席に」

「……あなたの膝の上とか？」

「それはこいつで満席」

手に持つてる本を示すと、リリーは笑った。

リリーの冗談は、冗談なのかそうじゃないのかたまに分からなくって始末に困る。

「チュニーー！ ハンコよー！」

窓から身を乗り出して、リリーは大きく手を振った。

やがて窓越しに近付いて来た彼女に、ぼくも笑いかける。

「久しぶり、ペチュニア。二年振りくらい？ 美人になった」

そのセリフに、ペチュニアは凄まじい目つきでぼくを睨んだ。

と、リリーに頭を叩かれる。手首のスナップが効いていて、想像以上に痛かった。

「チュニー、その、許してあげて」

「もう知らないわ。それじゃあね」

そう言つてペチュニアは肩を怒らせながら去ってしまった。

「ああ……」と、リリーはしょんぼりして座り込む。

「一体どうしたの？」

「……あなたは見た目が女の子のようなのに、本当に女心には疎いわよね」

「そりゃ……まあ、うん……」

自覚はある。リリーに何度も鈍感鈍感言われちゃ、まあ、ぼくが鈍いんだろうなつてことも。

今のも、きつとぼくが悪いのだろう。

「……でも、今の何が悪かったって言うんだい？ 思い当たるのは『美人になった』つて言葉くらいだけど、思ったことを言つて何が悪いの？ 褒め言葉だよね」

「ええ、そうね。褒め言葉だけど、その褒め言葉を額面通りに受け取れない人もこの世にはいるのよ」

「……はあ……」

そういうものなのだろうか。

兎にも角にも、女心というものは複雑怪奇だ。学問として研究してもいいのではないか。

「そうだわ、秋。見てみて！」

さつきまで落ち込んでいたリリーが、今度はいきなり表情を輝かせる。このいきなりの変化も、『女心』とやらがもたらす摩訶不思議なものなのだろうか。

「じゃーん！ 首席バッジ！ どうだ！」

「おおおっ！　すごい！」

黄門様の紋所のように（つて、ここはイギリスだけでも）ババンと突き出した『首席』バツジに、思わず手を叩いた。リリーも鼻高々で満面の笑みを浮かべている。

「まさか私がもらえるとは思ってなかったわ。えっへへ、秋には是非とも自慢したかったの」

「すごいよ、さすがはリリーだ！」

「もつと言つて！」

「頭もいいし美人だし、君は本当に才色兼備つて言葉が似合うね。日本には『立てば芍薬座れば牡丹、歩く姿は百合の花』つて言葉があるんだ。美人を形容する語句なんだけどね、まさしくこれこそリリーにぴったりで」

「ストップ。止めて、お願いします、私が悪かったわ」

褒め殺される、とりりーは顔を覆った。殺すつもりは全くないのだけれど。

「変に暑くなっちゃった。あなたのせいだからね」

「君が褒めてつて言つたんじゃないか……」

納得がいかない。

む、と唇を尖らせていると、リリーがふと思いついたように手を叩いた。

「そうだわ。じゃあ私が今からあなたのいいところを並べ立てるわね。どこまで耐えられるか、やってみましょう」

「何だよ、その変なの……」

ぼやくが、リリーは聞いちゃいない。楽しそうに指折り上げ始める。

「髪の毛さらつさらなところ。凄く綺麗な黒髪で、本当に憧れる。手入れしているように見えないのにどうしてそんなに綺麗な状態が保てるの？　頬もすべすべで本当に女の敵よね。華奢で可愛くつて、どうしてあなたは女の子じゃないんだらうつていつも思っているのよ」

「……褒めてる？」

「褒めてる褒めてる。あとはその目。真っ黒で、光に当たるとキラキ

ラして、すっごい綺麗なのよ。……あなたは知らないでしょうね」

リリーは淡く微笑んだ。心臓の鼓動が、妙な感じに飛び跳ねる。「あなたはとっても優しいわ。あなたはそれを、臆病だと評すのかもしれない。それでも、いつも私はあなたの優しさに救われてきた。いつだって、いつだって。あなたの笑顔はとても暖かい。すぐく心が軽くなるの。……ねえ、秋。あなたはどう思っているか分からないけれど、私はあなたと友達になれて良かったよ。あなたと一瞬だけでも手を繋ぐことが出来て、良かったよ」

ぼくの両手を、リリーは握った。暖かで細く、柔らかな手。

女の子の手だと思った。

「……ぼくら、さ。あのときぼくが別れようって言わなかったら、一体どうなっていたと思う？」

リリーはぼくの問いにキョトンと目を瞬かせたが、やがて笑った。

「あなたが別れを切り出さなかったら、きっと私が言っていたわ。私はあなたのことが好きで、あなたも私のことが好きだけれど……多分、恋人としてやっていける種類の『好き』じゃなかったのね」

「……そう、だね」

そう言われて、随分とホツとした。

「いつでも私は、あなたのことが大好きよ。……だからね、教えて、秋。あなたの心の暗闇を、私は知りたい。私は、あなたに寄り添いたい」

ぼくの目を見て、リリーは言った。

「あなたのご両親は、どうして姿を見せなくなったの？ いつもいつも来て、あなたを見送ってくれていたのに、どうしてもう来てくれないの？ ……ご両親が来てくれなくなって、あなたの纏う空気が変わったのは何故？」

息が、震える。

リリーから目を逸らしたかったけれど、リリーがそれをさせてくれなかった。

「……あ、う」

小刻みに震える身体を、何故だか流れる涙を、止めることは、拭うことは、出来なかった。

リリーに、両手を握られていたから。
「ぼく、のせい、なんだ……ぼくが」
この世に生まれたから。



シリウスは、始終上機嫌だった。クリスマスを、ぼくらがこの屋敷で迎えることが決まったことが大きいだろう。クリスマスソングを口ずさみながら、飾り付けをしている。

「なにか考え込んでいるな、我が友人よ」

「……まあね」

大きなクリスマスツリーに飾り付けを施しながら、シリウスはぼくに声を掛けた。

ぼくは膝を抱え、椅子に座り直す。

「ねえシリウス。ぼくは、何か間違えているのかな」

ぼくの言葉に、シリウスは目を瞬かせた。

「間違う？ 一体何を？」

「……分からない」

シリウスは、梯子からヒョイッと飛び降りた。床が軽く軋む。

「君は思慮深いし、神経質な奴だから、そうそう大きなミスは犯さないと考えていたけれど」

「そんなことない……いつもいつも、後悔しつばなしだ」

幣原も、そうだ。

いつも、気が付いたときには、何もかもが取り返しのつかないことになっていた。

両親の死も。リリーとセブルスの別離も。

気付いたときには、手遅れだった。

「俺が世界で一番後悔したのはさ、やっぱりまあ、ジェームズとリリーが死んだときなんだよ」

シリウスは静かに言った。

ぼくは伏せていた目を上げる。

「あのとき、『秘密の守人』にピーターを推薦しなかったら。ピーターの真意に気付いていたら。ピーターの裏切りに、気付いていたら。兆候は、確かにあったはずなのに……あいつの心の闇に、気付いてやれていたら。あいつの本性を知っていたら。……ヴォルデモートなんかに継るよりも強く、俺たちが、ピーターの心を掴んでいれば」
「……………」

「何度も、あの日の夢を見る。ハロウィーンのある夜の……。家が、壊れていて。ジェームズが、リリーが、死んでいて。なのにどうして、俺はこうして生きているのかって。あの絶望を、何度も何度も、夢で突きつけられるんだ……忘れるなって言われてるのかな、ジェームズに。忘れた試しなんて、いっぺんもないのに」

グシャツと、シリウスは髪を掻き上げた。

眼差しは、遠く虚ろだった。

「君に、秋に杖を向けられて、杖を折られて、アズカバンに送られて……正直、ホツとしたんだ。俺の罪を償う術が、ここにあったんだって。」

アズカバンで過ごすことが、俺の贖罪の証となるのなら。ジェームズとリリーが、不甲斐ない俺を、それで許してくれるのなら。俺は、なんだってするよ」

分かるよ、シリウス。

昏い瞳が、言葉を紡ぐ。

「どうして、俺は生きているんだ。親友一人守れなくて、どうして俺はのうのうと生きているんだ。こんなところに閉じ込められて、俺は生きていく価値があるのか？」

……この家は、嫌なことばかり思い出す。父も、母も、レギュラスも死んでしまった。どうして俺は、生きているんだろう。まだ、ジェームズとリリーに償わなきゃいけないのかな」

シリウスが、そっとぼくに手を伸ばした。

一瞬後、強い力で抱きしめられる。

「……ハリーを見てみると、不思議な気分になる。ジェームズと重ねてはいけないと分かっているのに、重ねてしまう。ジェームズの言動

を期待しては、一人失望してしまう。ハリーはジエームズじゃないのに。ジエームズは、もうここにはいないのに」

震える息が、耳元で鳴る。

「あの二人の元に行きたいと。そう願うことは、間違っているのかな」
その言葉に否定を返すことは、ぼくには出来なかった。
だって。

幣原も、同じことを思っているだろうことは、間違いなかったから。
だから。

「……ハリーのために、生きてよ。シリウス」

ぼくの言葉に、シリウスが小さく息を呑んだ。

シリウスの髪に、くしやりと触れる。

幣原秋として、言葉を返した。

「ぼくも、ハリーのために、生きるから」

背後に佇む、大きなクリスマスツリーのイルミネーションは、無機質にチカチカと光っていた。

第23話 秘められた言葉

「……ねえ、秋」

広い広いホグワーツの中の、小さな一部屋。

小部屋の中には、勉強している幣原秋と、ジェームズ・ポッターのみ。

テーブルにぐでんと顎をつけてスニッチを弄っていたジェームズだったが、勇気を出して秋に声を掛けた。

「何？」

「……あの、さ」

口ごもる。そのことをごまかすように、スニッチを持っていない方の左手で髪の毛をぐしゃぐしゃと掻いた。

秋の黒い瞳、それを直視しないように視線を落とし、えいやっと口を開く。

「……エバンズに告白しようと思うんだけど」

ノートに何かを書き付けるボールペンの音が、止まった。

ジェームズがちらりと顔を上げると、秋は頬杖をついたまま、無表情でジェームズを見ていた。

秋の無表情は、本人は自覚がないのだろうが、少しばかり怖いのだ。丁寧に整った顔立ちをしているからだろう。

「ぼくに気兼ねする必要はないよ、ジェームズ」

くるりと秋は指先でボールペンを回した。

「そもそも告白なら、一番初めの段階でもうしていたじゃない。四年生のダンスパーティーできあ。覚えてるよ、ぼく」

「いや、それはそうなんだけど……そうなんだけど、ほら、改めて、というか」

「改めて」

淡々と秋はジェームズの言葉を繰り返す。

「……その。これでダメだったら……」

「諦める？」

「諦められる訳ないじゃないか！」

「だと思った」

しまった、思わず。

軽く咳払いをして、仕切り直した。

「諦めることは出来ないけど……でも、今より少し距離を置く……かも」

語尾が小さくなったのは、自分でも自信がないからだ。

リリー・エバンズに惚れて、早三年。初めは歯牙にも掛けられず冷たい言葉しか掛けてもらえず（いや、それは今もかもしれない）他の男——まあ目の前にいる幣原秋なのだが——とエバンズが付き合ったりした訳だが、ダンスパーティーには二度（どちらも土下座をして同伴のお許しを乞うた）、デートには一度（途中でシリウス達に邪魔されたが）成功している。

「でも、昔より成功する確率が高いと思う……んだよ」

「そりゃ、以前は皆無、コンマ以下を探っても見事にゼロが並ぶほどの見込みなしだった訳だし、それならたとえ現在の成功率が一パーセントだったとしても、昔よりは確率が高いんじゃないの」

「そんなに見込みなかったの昔の僕!？」

「自覚なかったの!？」

むしろぼくの方がびっくりだよ、と秋はぶつくさぼやいた。

「昔はところ構わず格好つけては呪い掛けるし、セブルスに嫌がらせはするし、セブルスに度を越した悪戯はするし、セブルスを公衆の面前でパンツ脱がそうとするし。あの時はこんなクズとどうして友達なんだろうと本気で頭抱えたよ」

「う、うう……あの時はごめんよ。君に湖に放り投げられて、頭が冷えた」

「冷えるのが遅いんだよ」

「秋は僕に対して辛辣だよね」

そう言うと、秋は目を瞬かせた。

「そうかな?」

「そうだよ。だってそんなにずけずけと物を言わないもん、他の人には。リーマスやリイフ・フィスナーにそんな物言いしてるの、聞いた

「ことない」

「そうかな……そうかも」

「特別扱い？」

「にやけて聞く。」

「てつきり」「そんな訳ないじゃん」と返されるかと思っただが、予想は外れた。

「きつとそうなんだろうね」

「……へええ」

「ジェームズは、ぼくの憧れだから」

奇も銜いもなく、真っ直ぐに、幣原秋はそんなことを言ってみせた。思わず呆気に取られる。

「憧れたもんだよ、君のような破天荒な人に。たくさんの人を、一つの悪戯で笑顔にしちゃうんだもの。まるで魔法みたいだ」

「……みたい、じゃないよ。魔法なんだよ」

「うん、そうだね。とつても優しい魔法だ。……素晴らしい魔法を、君はこれからも人にかけて続けていくんだろう。そんな君になら、リリーを任せてもいいかなって思えるんだ」

秋の声は、淡々としていた。

秋は真実、そんなことを考えているのだろうか。

「……秋、エバンズの父親みたいだ」

「は……はああ!？」

「もしくはお兄ちゃんか。妹を頼むー、みたいな？」

「何言ってるの!？」

「君が……秋、君が、エバンズともう一度、付き合い直すってことがあるのなら」

ジェームズは口を開いた。

「僕は……身を引くよ。いや、エバンズの視界に入っているかも怪しいところだけだね、僕は。……君の邪魔はね、したくない」

存外大きな音に、ハツとした。

秋が、手元の本を乱暴に閉じた音だった。

「ぼくはリリーとは付き合わない。この先何があろうと、絶対に。」

……君ならぼくの気持ち、分かってくれているもんだと思っていたんだけど」

まあそうだよね、と、秋は乾いた声を漏らした。

「だから今言っておく。ぼくは絶対に彼女のことをそういう意味で好きにはならない。彼女だって、ぼくをそういう意味で好きになることはありえない。ぼくと彼女と一緒に未来を歩む世界は、存在しない」
断定的な口調だった。曖昧な感情を、全て切り捨てるような声だった。

「……じゃあ、僕がもらっても、いいの？」

囁く声に、秋はほんの少しだけ、笑ったようだった。

「……初めから、そう言っているじゃない」



クリスマス、再びぼくたちは聖マンゴを訪れていた。アーサーおじさんにクリスマスのお祝いをするためだ。

大人たちに病室を追い出され、「六階の喫茶店へ向かおう」というロンの提案に、反対する者は誰もいなかった。ぼくとハリー、ロン、それに昨日合流したハーマイオニーと一緒に、喫茶店へと向かう。

「まさか、ロックハートと出会うとはね」

ハリーは噛みしめるように呟いた。

三年前、ロンの杖が逆噴射して、『忘却術』が彼の身に降りかかったのだ。そのことについて平然としていた訳ではないだろうが、しかしいざ彼の容体を目にして、動揺しない訳にはいかなかったのだろう。

「あら、ミセス・ロングボトム、もうお帰りですか？」

そんな声に、ぼくらは揃って振り返った。

そして、瞬時に理解した。おそらくハリーも、そうだっただろう。ネビルと、老婦人の姿があった。「ネビル！」とロンが声を掛けると、ネビルは飛び上がった。

ぼくらが止める間もなく、ロンが駆け出し、ネビルの元へ向かう。仕方なしに、ぼくらはロンの後を追った。

「ネビル、お友達かえ？」

ネビルのおばあさんだろう。おばあさんはハリーに目を止めると、柔らかな笑顔で握手を求めた。

「おう、おう、あなたがどなたかは、もちろん存じてますよ。ネビルがあなたのことを大変褒めておりましたね」

ネビルは俯いていた。拳にぎゅっと力が入っているのが見て取れる。

祖母の「おや、アリス、どうしたのかえ？」という言葉に、弾かれたようにネビルは顔を上げた。

ネビルのお母さん——アリス・ロングボトムが、ゆらゆらと身体を揺らしながら、こちらに歩み寄ってきた。

『初めまして、幣原くん』

あのとときそう微笑んだ面影は、僅かに見受けられた。

ネビルにガムを手渡した彼女は、ふとぼくを見た。彼女の瞳が、僅かに見開かれる。

「——あら、幣原くん」

やがて、その表情に笑みを灯し、彼女は柔らかに微笑んだ。

「ずっと待ってた。いつ、来てくれるのって、フランクとも言っていたのよ」

瞳に、縫い付けられる。

「エリスくんは、元気？」

「——っ」

息が、吐き出せない。

ふと隣を、誰かが通り過ぎた。

「……アリス。もう、休むといい」

彼女の視線が、ふと動いてライ先輩に止まる。

「ライくん。あのね、幣原くんが来てくれたのよ」

「そうか。それはよかったな」

「エリスくんも、来てくれないかなあ。ずっと見ていないわ」

「……忙しいのだろう。アリス、君も早く元気にならなければ」

「そうね。フランクも一緒に」

彼女の背を押し、ライ先輩は病室の奥へと向かった。ぼくは大きく息を吐き出す。

『幣原くん』

耳の奥で、今呼びかけられた言葉が輪唱を起こす。ぎゅつと目を瞑って、堪えた。

ぼくは幣原秋じゃない。

ぼくは、アキ・ポッターだ。

『自分』を見失うな、アキ。

「徐々に良くなってきたよ。あの先生のおかげでね」

ネビルのおばあさんは、二人が消えた奥を見ながら言った。

「前は言葉もうまく話せなかった。それをここまで回復させてくれたのはあの先生のおかげです。まだ、意識は十五年前のまま、現在を認識出来ないようだけれど……。あの先生はフランクとアリスの同級生でねえ、本当によくしてくれる。魔法医学、特に脳医学を専門にしている方だね。時折、様子を見に来てくださるんですよ」

やがて、ライ先輩が姿を現した。

ネビルのおばあさんに目を向けると、「……どうも。来ていらしたんですか」と一礼する。

「いつもいつも、ありがとうございます」

「……いえ、私はこれが仕事ですから。それでは」

頷き、ライ先輩はぼくを一瞬だけ視界に入れると、すぐさま歩き去ってしまった。

「さて、もう失礼しましょう。みなさんにお会いできてよかったです」

そう言って、ネビルと、ネビルのおばあさんは立ち去っていった。

「……アキ、行こう?」

そう言うハリリーに、小さく首を振った。

「後で行くよ」

ハリリーは少し悲しげな顔をしたが、何も言わなかった。

閉じられた病室の前で、ぼくは静かに息をついた。

幣原秋は、彼女のお見舞いに一度でも顔を出したのだろうか。

出していないのだろうと、直感が告げていた。『アキ・ポッター』と

なつてからは、会いに行くことも出来なかつた訳だし。

——それでも。

求められていた。望まれていた。

『いつ、来てくれるのって』

待っていてくれたのだ。彼女は、幣原を。——ぼくを。

病室の扉に、額をつけた。奥歯を食いしばる。声には出さず、呟いた。

——ごめんなさい。

かつて同僚だった、彼女に。彼女の夫に。二人の息子である、ネビルに。そして、エリス先輩に。

「お前が謝っても、どうにもならない」

声に、振り返る。

ライ先輩が、立っていた。

「出せ、アキ」

静かな声で、ライ先輩は言った。

何もかもを見通した瞳で。

「子供の中に引きこもって現実を直視していない、あの臆病者を」

第24話 贖罪

日刊預言者新聞は、今日もまた、激化を辿る戦争を報道していた。淡々とした筆致にも、随分と疲れが垣間見える。

一体いつになったら終わるのか、そもそも本当に終わるのか。誰にも、先は見えなかった。

『闇祓い六人殉死』『名前を言っではいけないあの人』『再び現る』
ぺらり、と新聞を捲る。

殺された闇祓いが入れられた真っ黒な棺が、白黒の写真で載っていた。

『名前を言っではいけないあの人』——ヴォルデモート。彼が台頭してから、新聞は暗いニュースばかりだ。

かつてあった楽しい魔法界の姿は、今はもうどこにも見受けられない。

新聞は毎日、絶望的なニュースを流す。人死にや行方不明、奇妙な事故。イギリス全土のみならず、その手の事件は今や、ヨーロッパ中に広がっていた。

同時に『死喰い人』と呼ばれる、ヴォルデモートの手下たちの蛮行も、ヴォルデモートの凶行と同列の扱われ方をしていた。

それと戦う闇祓い達は、酷く孤独で、そして、苦戦していた。これから先、ぼくが歩もうとしている道は一寸先も見えない闇なのだということ、新聞は、そして世論は、残酷に示していた。



——意識が遠のく。

いつだって、そうだ。

いつだってぼくは、主人公にはなれない。

操り人形は、主人公にはなれないのだ。

「——せん、はい」

目を開けた瞬間、再び殴られた。狙った訳ではないのだろうが、頬

骨の同じ部分に直撃し、嫌な感じに熱を持って痛む。

「——幣原秋。何をしている」

怒りの感情が、痛いほどに突き刺さる。

「……どうして、今まで一度も見舞いにすら行ってやらなかった。あいつらは、お前を待っていた。待っていたのに、なんで……」

「……どの顔をして、会いに行けって言うんですか」

ぼくは微笑んだ。ライ先輩は眉を顰め、口を閉じる。

「どのツラ下げて、何を言えがいいと言うんです。守れなかった、手から取り零した、ひとたちに……っ、なんと声を掛ければいいんですか！」

拳を、爪が食い込むほどに握り締めた。

「……だから、立ち止まるのか」

静かに、声が掛けられる。眉を寄せ、ライ先輩を見上げた。

「立ち止まることが許されると、思っているのか」

「……そんなこと、思っていない」

「じゃあなんで立ち止まっている」

「立ち止まってなんか、ない」

「ガキの中で眠るだけが仕事だなんて、さぞかしいいご身分だな」

「あなたに何が分かる!!」

ライ先輩の背後の窓が、激しい音を立てて吹き飛んだ。

ライ先輩はピクリとも表情を変えない。じっとぼくを、冷たい眼差しで見つめている。

「人を救い続けたあなたに、ぼくの気持ちは分からない！ 何人殺したと、この手で、ぼくは！ 気が狂いそうで、自分がマトモなのかそうじゃないのかも分からなくなってくる、そんな経験したことあります!?!」

ライ先輩は目を細めると、大腿でぼくに歩み寄った。座り込むぼくと目線を合わせるように、しゃがみ込む。

「じゃあ、替わってくれよ」

濃い茶色の瞳が、ぼくを射抜いた。思わず、動けなくなる。

「死にたいか？ 殺してやるよ。目の前で何人看取ったことか。こん

な職業マトモならやっていられない。お前は狂ってる。俺も狂ってる。なあ、秋」

ライ先輩は右手を伸ばし、ぼくの首に触れた。頸動脈の辺りを軽く撫でる。

「俺は、お前が羨ましい。枷のないお前が憎らしい。復讐に殉じたお前が、妬ましい。俺だって、家族を滅茶苦茶にしたあいつと戦いたかった。死喰い人を殺してやりたかった。エリスを殺し、フランクとアリスをあんな目に合わせた奴らを、殺してやりたいよ。今だって、いつだって」

狂気を孕んだ眼差しで、ライ先輩は笑った。

「この真上に俺の両親と妹がいる。あの日のまま、あの日と変わらぬ姿のまま、眠り続けている。三人のちようどこここに」

ぼくの頸動脈に、ライ先輩は軽く爪を立てた。ピツと鋭く引つ掻く。

「魔法で付けられた印がある。解析すると、まあ予想通りだったが、あいつが望んだ瞬間、俺の家族の首は吹き飛ぶ、そういう代物だった。……なあ、秋」

口調は、存外に優しくかった。

「俺はずっと、家族を殺してしまいたいという衝動と戦っている。家族を喪ったお前には、分からない感情だろうが……俺も、分かりたくなかった感情なんだが」

目を伏せ、ライ先輩は微笑んだようだった。

「いつそのこと、もう目覚めないのなら。この手で逝かせてやった方がいいんじゃないか。こんな……こんな状態で生きるより、死んだ方がマシなのではないかと」

首元から、ライ先輩の手が離れる。

「なあ、替わってくれよ。頼むから」

秋、と、震える声が空気を揺らした。

「俺が、好きだった家族を、殺してしまう前に。……もう、手遅れなのかもしれないけれど」

刺すような、ぼくに対する怒りは、ライ先輩の瞳からは消えていた。

ぼくは、何も言えなかった。
ぼくの手首を、ライ先輩はしつかと掴む。見た目に反する強い力
だった。

「お前に立ち止まる権利はない、幣原秋」
歩み続けろ。

それが、お前の贖罪だ。

第25話 君がため 惜しからざりし 命さへ

セブルスは戦慄した。

クリスマス休暇。『死喰い人』として若年の——まだホグワーツの学生として生活している者は、闇の帝王が根城としている屋敷へと集められていた。

誇らしげに表情を輝かせている者もいれば、おどおどと不安げな眼差しを彷徨わせている者もいる。しかし、一抹すらも胸に期待を抱いていない者は、誰一人としていないだろう。そのことは、セブルス・スネイプには容易に予測出来た。

新聞を賑わす極悪人、その名前をも言うのを躊躇われ、新聞ではついに『名前を言つてはいけないあの人』と呼ばれるようになった闇の帝王。

彼の元に着くことは、今ここに集まっている全ての者の憧れでもあった。

一体今から何が始まるのだろうか、という、怖いもの見たさな感情は、闇の帝王が姿を現した段階で最高潮に達していた。

らんらんと目を輝かせる若き死喰い人を、闇の帝王は満足げにぐるりと見渡す。二、三言おざなりなセリフを述べたのち、闇の帝王は口を開いた。

なんとも、楽しみに。

「幣原秋を殺せ」

その言葉に、場は一瞬静まり——やがて、耐えきれなくなつたざわめきが静けさをかき消した。

幣原秋の名前を知る者は数多い。前回の魔法魔術大会——もう三年前になるのか——にて、四年生ながらに優勝した彼は、当時観戦していた者の脳裏に刻み込まれている。こちらではあまり耳にしない名前、外国人の名前だということも一役買っているはずだ。

「いや……違うな。殺すな、戦闘不能にして俺様の前に引きずり出せ、というのが正しいか。まあ、貴様らに幣原秋が殺せるかは怪しいものだ」

笑い混じりで言われた言葉に、プライドが刺激された者はそこそこ多いようだ。

元々、ここには純血名家の者が半数以上を占めている。その純血名家出身の最もたる者、レギュラス・ブラックもまた、言外に「貴様らは幣原秋を殺すことが出来ないほど弱い」と言われたことに、嫌悪感を滲ませていた。

「セブルスよ。どうして、と聞きたげな表情をしているな」

赤い瞳に捕捉され、セブルスは思わず身震いをした。「そんなことはない」と言おうとしたが、口から零れたのは違う言葉だった。

「あいつの……秋の両親は、我が君、貴方が殺したのですか？」

闇の帝王の目が、弧を描いた。吊り上がった口元が、裂けるように動く。

「お前の望みを叶えてやろう、セブルスよ」

貴様が一番、幣原秋に近いのだから。

囁く言葉は、蜜のよう。



「ルーピン先生」

現・不死鳥の騎士団本部、グリモールド・プレイス。数日遅れのクリスマスと、もうすぐ来る新年の挨拶のために出向いたリーマスは、ハリーに呼び止められ、足を止めた。

「どうしたんだい、ハリー？」

にこやかに笑顔を浮かべたリーマスだったが、続くハリーの言葉に、思わず凍りついた。

「幣原秋について、聞かせて欲しいんです」

「……どう、して」

「知らなきゃ、いけないんだ」

お願いします、と、ハリーは真剣な表情で言った。

「……アキに聞けばいいじゃないか。それが、シリウスに。なにも、私じゃなくても……」

「ルーピン先生じゃないといけないんです。幣原秋に一番最後まで寄り添ったのは、あなたなんでしょう？ アキは……、アキに聞けるわけ、ないじゃないですか」

「……それも、そうだね」

「それに、シリウスは、その」

そこで、ハリーは言いにくそうに口ごもった。リーマスは無言で続きを促す。

「シリウスは……アキと幣原秋を、同じ人物として見ている気がするんだ。アキと幣原は、全然違う人間なのに。アキは、幣原秋じゃないのに。……っ、アキは幣原秋じゃない。それなのに、それなのに……色んな人が、アキを幣原秋として見ている。そんな中、ルーピン先生だけが、違うんです。ルーピン先生だけが、アキをアキ・ポッターとして見ている。幣原秋とアキを、一緒にしない。……だから、聞きたいんです」

お願いします、とハリーはリーマスに、濃い緑の目を向けた。

思わず、リーマスはハリーから目を逸らす。

——リリーと同じ目だと、思ったから。

「……ハリー。君は、アキのことが好きかい？」

「好きです」

即答だった。打てば響く、そのくらい、ハリーの言葉は明快だった。「どうして？」

「好きなことに、理由なんて必要あるんですか？ ただ、アキがいる。それだけで僕は嬉しい。そういう気持ちを抱いているから、僕はアキのことが好きです」

ハリーの言葉に、リーマスは目を伏せて微笑んだ。

「なら、今から私が言うことは、君にとって辛いことかもしれないね」「……どういふことですか？」

「幣原秋は、アキのことを何とも思っていないのだから」

その言葉に、ハリーは小さく息を呑んだ。

あえて、残酷に。柔らかな言葉を選ぶことなく、リーマスは告げた。「アキ・ポッターは、幣原秋にとって操り人形であり、時限爆弾に過ぎ

ないんだ」

あの少年の鮮やかな笑顔を、くるくると変わる表情を、脳裏に思い描きながら。

リーマスは吐き捨てた。

「あの少年に情を込めすぎちゃいけないよ、ハリー」

「彼はただの舞台装置だ。幣原秋という主役を生き延びさせるための、代替品に過ぎないのだから」

第26話 恋する少女は前を向く

(ま、まずいいことになってしまった)

ピーター・ペティグリューは身震いした。

ピーブズに追いかけられ、『動物もどき』の姿のまま、必死に隠られる場所を探して飛び込んだ。そこが、グリフィンドール寮の天敵、スリザリンの談話室であったことに気付いたのは、すぐのことだった。

すぐさま出ようとしたが、談話室のドアは閉じられてしまった。現在ネズミの姿であるピーターには、それをこじ開けるだけの力はない。

人型に戻れば可能だろうが、談話室に人は大勢集まっていて、そこでグリフィンドールのローブ姿を晒すことがどれだけの愚策かは、ピーターにも容易に分かった。

(ど、どうしようか)

こんなとき、ジェームズだったらどうするだろう。

シリウスだったら、リーマスだったら、一体どう対処するのか、小さな脳みそで考えた。

(ジェームズとシリウスは……ダメだあ、あの二人は堂々と姿を見せて周りの人たちボコボコにして颯爽とこんなところから退散してるよお)

なら、リーマスは？

リーマスなら、しばらく息を潜めているだろう。そしてほとぼりが冷めた辺りで退散するはずだ。

リーマスが取りそうな行動なら、自分にも真似が出来る。そう思うと、少し心が楽になった。

スリザリン生は、何やら集まって話をしているようだった。円を描いて集まっている。

ピーターに辺りを見渡す余裕が出てきたからか、彼らの会話が耳に飛び込んできた。

「……でも、どうやってっ？」

「あの方も、無理難題を押し付けてきた」

「セブルスは？ あいつはどこに行つたんだ？」

「知らないよ」

「セブルスの奴、幣原と仲がいいだろうか？ 庇おうとするんじゃないか？」

「あの方の命令に背いてまで？ 冗談だろう。セブルスもそこまでバカではないさ。所詮友達だ、あの方のためなら簡単に売る。セブルスはそういう男だ。狡猾で掴みどころがなく、どこでも上手く立ち回る……」

くつくつとくぐもった笑い声が漏れた。賛同する声がそこかしこで上がる。

「闇の帝王はセブルス・スネイプにこの任務を課したのではない。我々全員にこの任務を課したのだ。幣原秋を闇の帝王の元に引きずり出すという任務を」

ピーターは思わず目を瞠った。

「どうして幣原秋を闇の帝王がご所望なのかについて、考えるだけ杞憂、時間の浪費に過ぎないだろう。闇の帝王の高尚な考えは、一介の僕に過ぎぬ我らが考え及ぶものではない。それよりも考えるべきことは、どうやって幣原秋を無力化するか、という件だ」

「……その通りだな。君の言う通りだ、エイブリー」

「しかし、一体どうやって？」

「それは……」

——とんでもないことを聞いてしまった。

ドクドクと耳の奥で鼓動が鳴っている。

——秋に知らせないと。

秋が危ない。

逃げるように駆け出した瞬間、床に落ちていた本に思いつきり鼻から当たってしまった。大きな音に、何人かが何事だと振り返り、音の元凶を探す。

慌てて隠れようとしたが、摘み上げられる方が早かった。

「なんだ、ネズミか。汚らわしい」

「とつとと放り出しておけ」

チーチーと鳴く。ピーターに、音の原因が分かって失望した目を向けるスリザリン生。

しかし、その中の一人だけは違った。

「……いや、ネズミじゃないぞ。もしかしたら、こいつ……」

ピーターにじつと顔を近付ける彼、名前は確か、エイブリーだったか。

底冷えのする瞳でじつと見られて、ピーターは竦み上がった。

「おい、エイブリー。ネズミなんて放つておけよ」

「万が一のこともある。試してみようじゃないか、ネズミをどつかにやるのはそれからいいはずだ——」

そう言つてエイブリーはすらりと杖を抜くと、ピーターの眼前に突きつけた。恐怖にかられ暴れるも、自身を摘み上げる力は案外強く、離してはくれない。

「汝の姿を現せ」

青白い閃光が、杖先から迸る。気付けばピーターは、元の人間の姿のまま呆然と注目を浴びていた。

エイブリーに胸倉を掴まれ壁に押し付けられてなお、ピーターはしばらく現実を飲み込むことが出来なかった。

「ほお……面白い、『動物もどき』か。どこかでこそコソコソ嗅ぎ回る人間臭いネズミの話は聞いていたものの、君のような出来損ないの落ちこぼれが、こんな高度な術をマスターするとは思ってもいかなかったよ、ピーター・ペティグリュークン」

杖を顎先に押し当てられ、ピーターは恐怖でガタガタと震えた。目に涙が浮かぶ。

「ポッターとブラックの腰巾着くん。今日ここで見たこと聞いたことを、決して誰にも話さない」と約束してくれるかな?」

秋の身に危険が迫っていることと、現状の自らの窮地を、天秤に掛け。

迷いなく、自分自身の安全を取った。

こくこくと頷く。ピーターに、満足げにエイブリーは頷くと杖を引

く。

しかし掴んだ胸倉はまだ放さない。

「このくらいで見逃してあげるよ、害にもならない臆病者」

——ああ、その通り。

涙で霞む視界の中、ピーターは思った。

臆病者。

その呼び名は、誰より何より、自らに相応しい。



ハリーは、冬休みが終わってから、スネイプ教授と『閉心術』の訓練をすることになったようだ。

グリモールド・プレイスにスネイプ教授が訪れたのは、冬休み最後の日だった。対応したシリウスと色々あったらしく、しばらくシリウスはずっと不機嫌だった。

冬休みが明けて二日目のこと。ぼくはアリスの隣で、日刊預言者新聞を睨みつけていた。

『アズカバンから集団脱獄 魔法省の危惧——かつての死喰い人、ブラックを旗頭に結集か?』

「パンくずを零すな、汚れるだろ」

アリスがムツとした顔で、紙面からパンくずを払い落とした。「ごめんごめん」と軽く詫げる。

「いい加減、自分で新聞買えばいいじゃねえか。そんなに金に困ってる訳じゃねえんだろ?」

「今の、魔法省に迎合し媚びへつらってハリーをこき下ろす日刊預言者新聞には一クヌートたりとも払ってやるもんか。そもそもイギリスの魔法界の主だった新聞社がこしかないうのがいけない。市場の独占は企業の墮落を許すんだぞ」

「そんなこと言うのなら、お前が作れ、競合企業を。……しかしまあ、落ちぶれたもんだ、とは思うがな」

軽い口調とは裏腹に、アリスの視線は鋭かった。何度となく一面記

事を見ながら、考え込むように口元を手で覆っている。

ぼくはちらりとスリザリンのテーブルに目を向けた。どの寮の生徒も、今日の新聞を片手に騒ついてはいるが、スリザリンのテーブルだけは、ざわめきの種類が少しばかり異なるようだった。

ドラコは仲間たちと一緒に盛り上がりつつはいたが、その表情には僅かばかりの焦りが見える。アクアは普段通りの無表情ではあったが、何も考えていないことはあり得ないだろう。

「集団脱獄、とは言うが、おそらく魔法省はもはや、吸魂鬼を制御出来ていないんだろう……お前の兄貴の件だったり、どうも最近動きがおかしい。ブラックを旗頭に、というよりむしろ、アズカバンの看守の怠慢が原因だろうな」

アリスは冷静に言葉を紡いだ。

「きつと、そうだろう。ヴォル……例のあの人は、闇の生物を味方につけるのが得意だった。彼らがぼくら魔法族に奪われ続けてきた『自由』をくれてやると約束して」

「ああ、その通りだ」

アズカバン集団脱獄のニュースは、ホグワーツに暗い影を落とした。

親戚が、あの十人の死喰い人の手に掛かって命を落とした生徒も多く、彼ら彼女らは廊下を歩くたびに下世話な好奇心の詰まった眼差しに晒されて辟易していた。

同時に、ハリーへの視線の種類が少しずつ改善してきたようだ。日刊預言者新聞の記事では満足出来なくなった生徒が、「ヴォルデモートが復活した」と言い続けるハリーとダンブルドアに興味を示し始めたのだ。これは、いい兆候だった。

その折だった。

「……アキ。次のホグズミード休暇、絶対空けておくのよ」
そんなことをアクアに言われたのだった。



「……期待した、期待したのに」

何せ、このホグズミード休暇はバレンタインなのだ。アクアからその日を「絶対空けておいてね」と言われたら、そりゃあ期待する。期待しないわけがない。……何を期待するかって？ そりゃ……コホン。ぼくも一応は男の子ですし。

「ごめんなさいね、アキ、邪魔しちゃって。まだ時間もあるし、アクアとどっかに行つてきてもいいのよ？」

『三本の箒』には、アクアと、そしてハーマイオニーの姿。

ハーマイオニーがいるから、というわけではないが、それでもため息でも吐きたくなるというものだ。

「いや、でもそうしたら、ハーマイオニーがひとりぼっちになっちゃうじゃん。いいよ……」

「あら、あんたも来てたんだ」

ほんわかと夢見るような声を掛けられ振り返ると、そこには我が寮の後輩、ルーナの姿。

「ほら、ひとりぼっちじゃなくなったわ」

「……」

大きくため息をついた。

ルーナが「どうしたの？ 変な顔してる」とぼくを見て大きく首を傾げている。

「なんでもないよ、なーんでも……」

頭を振ると、普段より乱暴に席を立った。ローブのポケットに手を突っ込んだまま、アクアに「行くよ」と声を掛け、振り返らずに『三本の箒』から出て行く。

通りは雨が降っていて、色とりどりの傘が、決して広くはない通りを埋め尽くしていた。

「ちよつと、アキ……」

パタパタと、アクアが走ってきてぼくの隣に並んだ。ぼくの顔を伺うように覗き込んできて「……怒ってる？」と尋ねる。

「……無意識、なんだろうなあ」

「え？」

「なんでもない。行こう」

傘を手に、ぼくらは歩いた。これといった宛てもなく、時折アクアを置き去りにしていないか振り返って確認しながら、ずんずん進んで行く。

雨と雪で、足元が悪い。外にいても冷えるし、どこか喫茶店にでも入ろうか。

そう思った辺りで、喫茶店らしき建物が目に付いた。

ドアを押し開け、軽く後悔する。

マダム・パティフットのお店は、昔と——幣原秋の記憶と変わらず、今でも少女趣味の洪水に溢れていた。

しまった、とりあえずなんでもいいから屋内に入りたいという思いでいっぱいで、店の名前を確認することすら怠ってしまった。出ようとするも、それより店員が席に案内する方が早かった。断りきれず、ぼくは再びため息をつく。

案内された席のすぐ近くで、ハリーとチョウの姿があった。ぼくは思わず目を瞠る。

チョウはこちらに背を向けているため気付いていないようだが、ハリーはぼくらに気付いたようだ。青ざめた顔で助けを呼んでいる。ぼくに何が出来るといふのだ、頑張れ我が兄貴よ。

席では、小さなキューピッドが一人、赤く大きなハートを手に、命の通わない笑顔で飛び回っていた。少女趣味が理解出来ないぼくとしては、嫌にグロテスクなものにも見えて、席に付く前に左手で払いのける。

「紅茶とコーヒーを一つずつ」

やって来た店員さんにそれだけ伝えて、頭を押さえた。店内の香水の香りだろうか、やけに甘ったるい匂いが、側頭部あたりを刺激して微妙に気分が悪い。

「……やっぱり、怒ってる」

「怒ってない」

「ほら、怒ってる」

「怒ってないって……本当だから。人の思い通りになってる自分が嫌

なだけ……」

ぐしゃぐしゃと前髪を掻き、引つ張ると、頭の中を切り替える。丁度よく飲み物が運ばれてきたので、紅茶に砂糖を入れるとかき混ぜ、一口飲んだ。

はあ、と息をつき、なんとなしに隣を見て、隣がその、なんだ、接吻とやらを公共の場であるにも関わらずなさっていて、思わず動揺する。

えっ、ここ喫茶店だよな、いかがわしいところじゃないよな!?

「あ、あのさ、アクア。彼の様子はどうだった?」

チョウとハリーが近くにいて、ということ鑑み、『彼』と伏せて会話を振る。

アクアは一瞬だけ目を白黒させたが、すぐに飲み込んだのか「ああ」と頷いた。

「……元氣、そうだったわ。だからこそ、歯がゆいんだけど。彼を、助けてあげられない自分に。飼殺している自分自身に」

「……そうか」

……ここにいると全身から汗が吹き出るのはぼくだけか。

緊張で死にそうなんだけど。緊張というか、凄く居心地が悪い。

アクアは一体どう思っているのだろう。女の子の思考は意味不明だ。

もしかするとぼくにその、キ、キスなんてして欲しいとか思ってた
り……。

「……絶対無理」

「はっ」

しまった。声に出していた。非常に気まずい。

「……飲み終わったら、とつとと出る。いいね? アクア。……
ちよつと、何笑つてんの」

ぼくの言葉に、アクアはクスクスと笑っていた。一体なんなんだ。

アクアは悪戯っぽく微笑んで言った。

「アキは、一体いつこの空気に耐えられなくなるのかしらって考えていたところだったのよ。案外耐えたわね」

アクアは軽やかに立ち上がると「行きましょう、アキ」と笑う。その笑顔に思わず見惚れ、慌ててぼくも立ち上がった。一生、彼女には敵わないなと思った。敵わなくてもいいや、と思って、口元がにやけた。



「さあ、始めてちょうだい」

『三本の箒』に、ハーマイオニーの明快な声が響く。

「……どこから話せばいいのか分からない。けれど、僕が去年見たことを、そのまま話そうと思う」

そう前置いて、ハリーは語り出した。リータの自動速記羽根ペンが、羊皮紙の上を飛び跳ねている。

「それでも、本当にいいの？ アクア」

ハーマイオニーの声に、アクアは顔を顰めて、それでも微笑んだ。「ええ。……よろしく頼むわよ、リータ」

僅かに、目を伏せて。

「……私は多分、もう二度と、あの家には帰れないわ」

再び顔を上げたときには、その瞳には真摯な光が宿っていた。

第27話 灰色の少年

「……んー、何だい、君たちは」

折り重なって気絶している者を数えると、ちょうど両の手で足りるほどだった。

「いきなり人に呪文かけて来ようとするなんて、不躰だなあ」

しかし、どこかで恨みでも買ったのだろうか。記憶にない。

そもそもぼくは、あまり他人とは関わらないわけだし。しかもロブを見る限り、襲いかかってきたのは全員がスリザリン生。スリザリンの知人なんて、セブルスとレギュラスくらいしかいないのだけだ。何かしたつけ、ぼく。

「エネルギー」

山の中の一人に蘇生呪文を掛けると、彼ははっと目を覚ました。

起き上がるうともがいたせいで、人の山が崩れる。

「やあ、初めまして」

彼ににっこりと笑いかけると、彼の顔に恐怖の色が刻まれた。

その反応はなんだか傷つくから止めて欲しい。先に杖を出したのとはそちらじゃないか。

「ぼくに何か用？ あ、もしかして人違い？ ぼく、幣原秋っていうんだけどさ。誰かと間違えてない？」

ヒツと怯えた声が彼の喉から漏れた。ぼくの質問に何一つ答えずに、彼はガタガタと身を震わせ後ずさり、気絶した人の山を見て青ざめる。

「や、やめ……ころ、殺さないで……」

「殺す？ 人聞きの悪いこと言わないでよ、冗談きついな。先に喧嘩吹っかけてきたのはそっちでしょ、理由くらい教えてよ」

彼は口を破るべきかどうか悩んだらしいが、一歩ぼくが近付いたところで恐怖に耐えきれなくなったらしい。命乞いをするような口調で口を開いた。

「や、闇の帝王の言いつけで……」

「闇の帝王？ 誰、それ」

随分と趣味の悪い呼び名だ。

眉を寄せると、彼は怯えたように身震いした。

「な、『名前を言っただけはいけないあの人間』——あの方が、お前を、いっいや、あなたを……戦闘不能にして引きずり出せ、と……」

「……………」

目を細めた。

黙り込んだばかりに恐怖を感じたのか、彼はペラペラと喋り出す。

「お、俺は止めようって言ったんだ！ それでもエイブリーの奴が、闇の帝王に逆らうつもりなのかって！ 俺は悪くない！ だから……」

「君が悪くはないはぼくが決めるよ。そうでしょう？」

一睨みで彼は竦み上がった。呼吸を止めるように、自らの口元を両手で塞いでいる。

「……父と母を殺しただけじゃまだ飽き足りないってか」

心の中に、暗い復讐心が燃え上がる。

魔力の火花がパチリと音を鳴らしたことで、我に返った。

「お仲間さんに言っておいて。ぼくを戦闘不能にしたかったら、ダンブルドア並みの戦力連れてこいって。まあそんな奴、君らの寮にはいないだろうけどね」

ガクガクと頷く彼に『失神呪文』を掛けると、ぼくは辺りを見回した。

今は下級生は授業中だから廊下に人気はないが、それでもあと少ししたら人で溢れることだろう。さすがにこれだけの気絶者を廊下に放置しておく、ちよつとした騒ぎになりそうだ。

浮遊呪文を掛け、気絶した者たちを手頃な空き教室へと押し込んだ。窓にカーテンを掛け、外から見えないようにする。

とつとと退散しようとして踵を返したが、たまたま目に入ったものに振り返った。

倒れ伏す一人の袖が、先ほどの戦闘と今の場所移動によってか捲り上がっている。左腕の内側に、何か黒い模様があった。なんだろうと近寄ってみる。

髑髏だ。口から蛇が出ている。悪趣味な模様に顔をしかめた。

立ち去ろうとしたが、記憶が刺激された。
ぼくはこの印を、どこかで見たことがある。

「……………」

思い出して、呼吸が乱れた。

死んでいる両親の頭上、空高く浮かんでいた銀色の髑髏。

あれと全く同一のものだ。

もしかして、と目を見開いた。

一番手近にいたそいつの左腕も捲ると、同じ模様が。他の者にも。

「……はあ、なるほど」

そういうことか、と息をついた。

「……まあ、分かりやすくいいか」

敵なのか、味方なのか。



月曜は、朝から大騒ぎだった。ハリーの記事が載る『ザ・クイブラー』が発刊されたのだ。

ルーナは始終いろんな人に『ザ・クイブラーの余りはないのか、売ってくれないのか』と詰め寄られ、嬉しい悲鳴をあげ続けていた。人波にもみくちゃにされ飲まれる様に、助けに行くべきかとも思ったが、ルーナが思ったよりも楽しそうだったから良しとする。

『ホグワーツ高等尋問官令』として、アンブリッジが『ザ・クイブラー』を所持しているのが発覚した生徒は退学処分処す』と告知された時点で、ホグワーツでこの話を知らないものは誰一人としていなかった。

双子の呪文がこんなにも役立つと感じたのは初めてだ。ホグワーツの生徒は、本日で、双子の呪文に関しては一級品の腕を持つことになっただろう。

「エヘン、ミスター・アキ・ポッター。ポケットの中を全てひっくり返して見せてくださる？」

そんな中、ぼくはアンブリッジに再び捕まっていた。

本日で三度目だ。一回失敗した時点で、諦めればいいのに。素直にポケットの中のを並べて見せる。もう三度目、慣れたものだ。

ハンカチ、ボールペン、羊皮紙の切れ端、小銭、時計。アンブリッジは羊皮紙の切れ端を、まるで親の仇でも見るような眼差しで手に取り、杖で叩いたりなんざりと検分していたが、異常は見当たらなかったみたいで、悔しげに返却してきた。

「それでは、失礼します、アンブリッジ先生」

輝く笑顔をアンブリッジに向けると、彼女は目の前でハエを取り逃がしたカエルのような表情でぼくを見ていた。

生徒の目は、瞬く間に変わった。

手のひらを返すように、ハリーはいろんな人から応援されるようになったし、スリザリンの一部に対する風当たりは非常に強くなった。スリザリンに所属する何人かの生徒の親が、ハリーに『死喰い人』であり、ヴォルデモートが復活する現場に馳せ参じたとすっぱ抜かれたからだ。

マルフォイ、クラブにゴイル、ノット。ベルフェゴールの名前も、その中にはあった。

「悪かねえよ。ただ、勇敢と無謀を履き違えるなよって話だ」

レイブンクローの談話室には、『ザ・クイブラー』が大手を振って置かれていた。ルーナの手柄だ。

アンブリッジも、寮の中には入って来れまい。アンブリッジには、レイブンクローのノッカーが出す問題には答えられないだろうから。その『ザ・クイブラー』を手に取りつつ、アリスは小さく息を吐いた。

アリスが座る椅子の足元には、アクアの弟、ユークレース・ベルフェゴールが、小柄な身体を更に小さくして膝を抱えている。俯いているため、銀髪に遮られて表情は伺えない。

「考えがあつてのことなのか？ 今、こうして死喰い人の名前をあげつらうことが、何かの得になるのか？ 目先の利ばかりに釣られんよ」

アリスの言葉に黙っていられるほど、ぼくも考えなしな訳ではない。

むっと眉を寄せると、口を開いた。

「この記事を機に、魔法省も少しは考えるだろうさ。いい方向に動き出すことを期待しているんだ。いつまでたつてもハリーの言葉を無視して、例のあの人の復活を見て見ぬ振りしていたら、魔法省は傀儡と化すよ。無用の長物だ。政府が陥落したら、それこそあの戦争の二の舞だろうね。人が死んでからじゃ遅いんだ。もう既に遅すぎるんだよ」

「じゃあ聞くが、こんなんでも魔法省が動くとしても本気で考えているのか？ あの甘々閣下が、こんな記事で慌てふためいて、例のあの人の復活をはあ恐れ入りましたその通りですと認めると、本心から思っているのか？ ありえない。こんな火種ぶちまけたら、魔法省が内部から崩壊すんぞ」

「この程度の事実で崩壊する魔法省なんて、元からただの砂上の楼閣だったんだ。むしろ滅びてしまった方がいいのかもしれない、そんな脆い政府なんて。……アリス」

畳み掛けるように、アリスに語りかけた。

「君が、骨を折ろうとしてくれていることは知っている。グリフィン・ドール側にもスリザリン側にも染まらない、完全なる《中立不可侵》として、普通の人たちを守ろうとしてくれていることも、分かってるよ」

アリスは、ぼくの言葉に口を閉ざした。

代わりに口を開いたのは、黙りこくっていたユークだった。

「……アキ・ポッター」

姉と同じ、灰色の瞳。アクアを思い出し、動揺した。

「僕は一体、どうすればいいんですかね」

縫るような眼差しだった。苦しげな瞳だった。

思わず、呑まれる。

「僕は、僕なのに。僕は、ただの『ユークレース・ベルフェゴール』であって、僕が両親と同じく、闇の帝王を慕っているなんて、そんなことないのに。……どうして」

どうして、と、ユークはもう一度つぶやいた。

「……皆が、僕を闇の帝王の手先かのような目で見るんです。そんなこと、ないのに。親が、闇の帝王に心酔していたところで、子供がそうであると、限らないのに。……ねえ、アキ・ポッター。僕は、敬愛する両親を裏切つてまで、自分の思想を貫くべきなんですかね。姉上のように」

「……ユーク」

ユークは、瞳をたゆたわせたまま、口元を緩めた。

「この戦争の最中、僕は、どこに立っていればいいんだろう」

「若い少年のその言葉に、返す言葉は、ぼくは持っていなかった。」

第28話 雄弁な笑顔

「頑張ってるね、秋」

図書館で一人勉強するぼくの前に姿を現したのは、リリーだった。周囲に司書のピンス先生がいないことを確認して、ぼくに蓋つきのグラスに入った紅茶を差し入れる。礼を言って受け取った。

「闇祓いの試験勉強？」

「うん、そう」

「捗ってる？」

「ぼちぼちね」

それは良かった、とりりーは微笑んだ。

凝り固まった身体をほぐそうと、ぐつと伸びをする。

ついでに髪の毛を一度解いた。括り直すぼくを見ていたりりーだが、ふと破顔する。

「どうしたの？」

「ふふ……その髪紐、まだ使ってくれてたんだ、って思ってた」

ああ、と手元の髪紐を見た。

黒の髪紐は、確か二年前、十六の誕生日にリリーから貰ったものだ。

「君から貰ったものだもの。ちゃんと使ってるに決まってるじゃない」

「……ありがとう」

穏やかな表情だった。

リリーの細い手首に、ハートのチャームがついたブレスレットが掛かっていることに気がついた。ジェームズがこの前のクリスマスで頭を悩ませていたやつだ。

髪を括り直して、ぼくは口を開いた。

「……ねえ、リリー。ジェームズのこと、好き？」

にっこり笑ったその顔が、答えだった。



『占い学』のトレローニー先生がアンブリッジによって休職に追い込まれ、代わりにケンタウラスのフィレンツェが教鞭を取るようになった。

嬉しくないのはアンブリッジだ。半端なもの、純粹でないものを憎むアンブリッジが、狼人間やら半巨人やらを嫌っていることは、今や誰もが知っていることだった。

DAの活動は、ハリーの『閉心術』の訓練で、今までより更に不定期に開催されるようになっていた。

ついに『守護霊』の練習を始めた DAメンバーは、見違えるほどに防衛呪文が上達していた。

「神秘部には、一体何があるんだろう?」

メンバーの進捗を見回りながら、ハリーは問いかけた。

「それが傍目から分からないからこそ、『神秘部』って名前がついてるんだろうね……。ヴォルデモートが、あんなところで一体何を手に入れようとしているのか、それが問題だよ」

「不死鳥の騎士団のメンバーは、あそこで見張りをしていたんだよね、交代で。ということは、騎士団メンバーなら、あそこで何が守られているのか知っているんじゃないの?」

「幣原に聞いてみたい、って言うんでしょ。ぼくだって机の上に置き手紙みたいな残したり、いろいろやってみたよ。でも、幣原が出てきてる気もしないんだ。ぼくの目と耳を通して、あいつはぼくらがそれを知れたがってるって知ってるはずなのに、教える気ゼロだよ」

「困ったなあ……最後の頼みの綱だったのに」

ハリーが困った顔をした。

「幣原なんかを頼みの綱にしない方がいいって、ぼくなんかは思うがね……」

肩を竦める。

そのとき、チョウがぼくらに「見て見て！ 出来たわ、守護霊よ！」と飛び跳ねる声で笑いかけた。

「凄いじゃないか、チョウ」

ハリーがチョウに微笑みを返す。

この二人は、この前まで喧嘩していたようだったが、いつの間にか仲直りをしたらしい。恋愛のいざこざは、ぼくにはさっぱりだ。ハリーが幸せなら、それでいいと思う。

二人の空気を邪魔したくなくて、そつと離れた。

そう言えば、今日のチョウは一人だ。普段 DA にも行動を共にしているマリエッタの姿が、見当たらない。体調でも崩しているのだろうか。

人懐っこいチョウとは違って、マリエッタと殊更に仲がいい訳ではなかったが、それでも同僚の先輩だ。少しは気にかかる。

「ねえ、アキ。あんたの守護霊、もう一回見せてよ」

一人になったぼくに、そうせがんで来たのはルーナだった。

後輩から頼られるのは、なんだか嬉しいものだ。先輩風をやたら吹かせたくなってしまうし、格好もつけたくなる。

「エクスペクト・パトローナム」

杖を握り、振る。杖先からふわりと姿を現したのは、銀色に輝くフクロウ。大きく翼を広げ、滑るように部屋中を滑空する守護霊に、何人かは呪文の手を止めて見つめている。

大きくぐるりと部屋を一周した後、ぼくの伸ばした腕にふわりと降り立った。

「触れるの？」

「触れないよ、さすがにね」

ルーナは手を伸ばすと「ホントだ」と目を瞬かせた。ぼくは笑って、軽く指を鳴らす。守護霊は空間に溶けるように消えていった。

「むむむ……待ってて、今にあたしもやってみせるもん」

「あまり気を詰め過ぎない方がいいよ」

「あたし、気を詰めたことなんてないよ？」

「……………うん、そんな気もしていた」

そのとき、ふと部屋の中が暗くなっていることに気がついた。守護霊の呪文を皆（ルーナ以外、だが）止めてしまっているのだ。

何をしているのかというと、皆ハリーを見ている。ぼくはハリーの元に駆け寄った。

「どうしたの……ドビーじゃないか」

ハリーのローブを掴むドビーに、驚きの声をあげた。ドビーはおどおどとした怯えた目つきで、ハリーを見上げている。

ぼくが近付くと、ぼくにも目を向け「アキ・ポッター様……」と震えた声を漏らした。

「……どうしたの」

表情を引き締める。一体、どうしたというのだ。

ドビーは、意を決したように叫んだ。

「あの女が——アンブリッジが、ここに来ます!!」

第29話 Let's PARTY!!

手紙の筆跡は、乱れに乱れていた。

誰もいない空き教室で、セブルスはその手紙を読んだ。何度も、何度も。

手紙は、母の字で父の訃報を伝えていた。

「……………」

ああ、もうこれであの父親に悩まされることはないのだという安堵と、あんな男でも愛していた母が気がかりな気持ちと、あともう一つ。

——これでもう、逃げられない。

脳裏に闇の帝王の姿を思い描いて、セブルスは細く、長く息を吐いた。



——DAのことをアンブリッジに密告したのは、マリエッタだった。

あのえげつない魔法は、どうやら期待通りの効果を発揮したらしい。望ましくないことに。

「あんな呪文を掛けているなんて。酷いわ」

恨みがましい瞳でチョウウから詰られ、ぼくは憤慨した。

「密告する方が悪いに決まっているじゃないか」

「マリエッタはお母様が魔法省に勤めてらっしゃるのよ。仕方ないことではあるわ」

——ロンのお父さんだって、魔法省に勤めているというのに！

彼女の前で怒鳴らなかつただけでも、褒められてしかるべきだろう。しかし、ハリーとチョウウの仲は壊れてしまったようだった。そのことは、少しだけぼくの心を重たくさせた。

恋愛だろうが、そうじゃなからうが、誰かと誰かが仲違いするのは、見たいものではない。

あの日、アンブリッジ勢力に捕まったのはハリー一人だった。むしろ

ろ、ハリーでよかった、と思う。下手に D A の誰かが捕まるよりも、ハリー一人の方が機転も効くだろうし。

しかし驚いたのは、ダンブルドアがハリーを庇ってホグワーツから逃亡したことだ。代わりにアンブリッジがまたも魔法省令を発行し、アンブリッジが新しくホグワーツの校長になることを宣言した。

「……見つけたぞ、アキ。さて、僕と一緒に来てもらおうか」

「……一体ぼくに何の用？ ドラコ」

じりじりと、ぼくはドラコから距離を取る。ドラコも攻めあぐねるように、重心を低くした。

「アンブリッジ先生が君をお呼びだ」

「あの人に伝えてよ、あなたの授業に失神者や吐き気をもよおす人がわんさか出たところで、ぼくのせいじゃないって」

「あれ、君のせいだったのか！」

「ぼくじゃないって言ってるでしょ、話聞いてよー！」

じりじりじり。ドラコが一步踏み込むごとに、ぼくが一步後ずさる。

ドラコのローブの胸元には、監督生のバッジと『尋問官親衛隊』の真新しいバッジが輝いていた。

「よくあの人と対面して吐き気をもよおさずにいられるものだ……尊敬に価するよ」

「アキ、僕が監督生であり『尋問官親衛隊』だと知っての狼藉か？」

「レイブンクローから減点したいのなら、好きにどうぞ？ ガマガエル女史から何点減点されたと思ってるの、今更少しの減点じゃビクともしないねぼくは。監督生のアンソニーからはよく怒られるけど」

「……少し、レイブンクローに同情してきた」

「はっはは、そりやどうも。……つとおっ！」

掴みかかってくるドラコを、すんでのところで避ける。軽く数歩飛び跳ね距離を置くと、いきなりドラコの後ろを指差し「ドラコ、後ろ！」と叫んだ。

「はっ、そんな子供騙しに騙されると……」

ドラコがぼくを見てせせら笑った瞬間、奴の頭に双子の肘がクリー

ンヒットした。

声も出さずに美しいフォームで倒れ込むドラコ、そのドラコの腹に容赦なく膝を入れる双子。

「あー、だから言ったのに」

沈んだドラコを素早く床に横たえた双子は、パンパンと軽く手を払いながら「「やあ、アキ」と朗らかに笑った。

「元気か？ 我らが弟分よ」

「マルフォイの野郎に狼藉を働かれていないか、アキ？」

「全然大丈夫」

ぼくの肩を思いつきり叩くと、双子はにっこり笑った。……地味に痛い。

「ちようどよかった、アキも手伝ってくれ」

「何を？」

「俺たちの華々しいパレードさ。二代目悪戯仕掛人と名乗ってもいいかい、先代さん？」

「ぼくは悪戯仕掛人じゃないんだけど……ふふつ、一体何を仕出かすつもり？」

ぼくの許可なんてなくなつて、彼らが二代目悪戯仕掛人だということを否定する人なんて、いるわけない。ジエームズだつて諸手を上げて賛成するに決まつてる。

「俺たちの最高傑作、その名も『ウィーズリーの暴れバンバン花火』さ！」

そう言うが早いか、双子は懐から、クアツフル大の赤くて丸い物体をそれぞれ取り出した。先には導火線らしい紐が伸びている。

「耳塞いどけよ、アキ」

「耳がイカれたくなけりやな」

そう言うが早いか、双子は互いに杖を振り合つた。あまりにも短い導火線は、一瞬で短くなり、ぼくは慌てて耳を塞ぐ。

耳を両手で塞いでいても感じる爆発。ドーン！ と身体を貫く振動に、思わずよろめいた。

目の前で赤い玉は破裂すると、中から大量の花火がわんさか溢れ出

る。それらは好き勝手に跳ね回りながら、廊下から階段に、空いていた窓から外に、好き勝手に飛んで行く。色とりどりの花火は、騒々しいけれどもとても幻想的で、ぼくは目を瞠った。

「ミス・ガマガエルに俺たちからの愛の籠ったプレゼントさ」

「たつくさんの俺たちの愛、受け取ってくれるかなあ、先生」

「愛が重すぎて『消失』させられっちゃうかもな」

「そんなときのために『消失呪文』を掛けられたら十倍に増えるぜ、俺たちの愛は」

『失神』で大爆発、のオマケつきだ」

「ふふっ、分かった」

上の階から騒がしい音がする。確かこの上は、アンブリッジの部屋だったか。

ぼくらは笑いながらも、慌てて廊下に掛かっているタペストリーの裏の隠れ小部屋に潜り込んだ。バタバタと慌てたような足音。「なんでこんなところで寝ているんです、ミスター・マルフォイ!? アキ・ポッターを連れてこいと言っていたでしょう!」と叫ぶガマガエル女史の声。そういえば、ドラコを放置しっぱなしだった。

アンブリッジとフィルチの声が、段々と遠ざかっていく。ぼくらが息を殺して笑い転げていると、小部屋のドアを開けて誰かが入ってきた。我が兄、ハリーだ。ハリーはぼくと双子の姿を視認すると、ニヤツと笑った。

「凄いよ。君たちのせいで、ドクター・フィリバスターも商売上がったりだよ。間違いない……」

「ありがとよ、我らが尊敬する大パトロン」

双子がにやりと笑って言う。ハリーはぼくのすぐ隣まで来ると、大きく息を吐いた。

「アンブリッジに捕まってさ。ダンブルドアの行方を知らないかって。アキも捕まえようとしていたみたいだけど、さすがはアキだね」
「ああ、なるほどね。捕まえて吐かせようとしたところで、ぼくら知らないから無意味なんだけどなあ」

花火は、その日一日中爆発しっぱなしだった。生徒が皆、花火に出

会ったら『消失呪文』と『失神呪文』の練習の的に使うからだ。

先生方も、マクゴナガル先生もフリットウィック先生も、こんな花火なんて杖一振りですくすく消し去れるはずなのに、アンブリッジを呼びつけては花火を消させていた。誰もが、アンブリッジを腹に据えかねていたのだ。

「あの反抗心、見習いてえな、本当」

飛び出してきた花火にやすやすと『消失呪文』を当てながら、アリスはふと呟いた。

「なんとも粋じゃないか？ ああ」

「全く、その通り」

窮屈げにネクタイを緩めながら、アリスはにやりと笑った。

第30話 最悪の記憶

彼らたつての願いで、ぼくが悪戯仕掛人とリリーを不死鳥の騎士団に案内したのは、雪が腰までの高さに積もった頃だった。

古びた屋敷に訝しんでいた彼らだったが、中を一目見るなり納得したようだ。

彼らを不死鳥の騎士団員に紹介し、会議が終わってひと段落ついたところで、ぼくはエリス先輩の元に近付いて行った。

エリス先輩は任務が書かれた紙を難しい表情で眺めていたが、ぼくに気付くと笑顔を見せた。畳んで懐に直す。

「幣原。久しぶりだね、少し背が伸びた？」

「お久しぶりです。ほんのちよつぱり、ですけどね」

待望した成長期の恩恵か。もつとも、ぼくの成長期は人よりも遅く、しかも短いようで、もうそろそろ成長が止まりそうで、最近のぼくはヒヤヒヤしている。

エリス先輩は楽しげに笑った。

「髪も伸びたようだ。切らないの？」

「切ってもいいんですけど、あそこにいる眼鏡と赤毛の可愛い女の子が悲しむので」

「なるほど」

ジエームズとリリーは、少し離れた場所でムーディ先生と歓談している。シリウスはギデオン・プルウエツトと、リーマスはマクゴナガル教授とそれぞれ話しているし、ピーターは……ピーターはエルファイアス・ドージに絡まれている。思わず苦笑した。彼の話は長いからなあ、ピーターに合掌。

「聞祓いになろうと思っっているんです」

ぼくの言葉に、エリス先輩はパチパチと目を瞬かせた後、ゆっくりと微笑んだ。

「努力を履き違えない君なら、必ず合格するはずだ。待っているよ、幣原」

「ありがとうございます」

と、背中に軽い衝撃が入って振り返る。てつきりジエームズかシリウスかりリーだと思っていたのだが、全然違った。アリス・プルウエットさんだ。

「幣原くん、聞祓いになるの？ 大歓迎！ こんな可愛い後輩がずっと欲しかったの！」

「プルウエット、仮にも幣原は成人した男だよ。可愛いって形容は、私はどうかと思うがね」

「可愛い子を可愛いと言って何が悪い！ エリスくんは本当にそういうところがダメだよねえ！」

うぐ、とエリス先輩はたじろいだ。同期の人と絡むと、エリス先輩は途端に無邪気な表情をする。ぼくはそんなエリス先輩が嫌いにはなれないのだった。

「今日は、ロングボトム先輩はいらっしゃらないんですか？」

尋ねると、プルウエット先輩は肩を竦めた。

「一昨日から任務なのよね。無事に戻ってくるのを祈るばかりだわ」

「……本当に」

脳裏に日刊預言者新聞の記事がちらつく。しかしプルウエット先輩は笑顔だった。

「きつとだいじょうぶよ、フランクは」

「……………」

どうしてそう言い切れるんです、と言いかけたが、堪えた。

彼女の笑顔を曇らせるだけの発言のように思えたから。

だから代わりに、微笑んだ。

「……ええ、そうですね」

信じよう。

信じることしか、ぼくらには出来ないのだから。



「ぼくとデートしてくれたら、やめるよ。どうだい？ そうすれば、親愛なるスニベリーには二度と杖を上げない、約束しようじゃないか」

ハリーは呆然と、目の前で起こっている光景を見ていた。

スネイプとの、何度目かとも分からない『閉心術』の個人授業。腹が立ってヤケクソめいた気持ちで、スネイプの憂いの篩を覗き込んだことを、ハリーは今、死ぬほど後悔していた。

目の前で繰り広げられる、自分の父親と仲間たちが仕出かす悪行。見物人のど真ん中で辱められるスネイプが、今一体どんな気持ちなのか、ハリーには痛いほど分かっていった。

「あなたか巨大イカのどちらかを選ぶことになっても、あなたとはデートしないわ」

辛辣なリリーの——母の声。嫌悪に満ち溢れるその声は、数年後に結婚する相手に向けられたものとは到底思えない。

その時、懐かしい顔を見た気がした。ハリーは思わず、目を瞠る。

——幣原、だ。

アキ・ポッターと全く同じ姿形。艶やかな黒髪も、後ろに一つで縛る髪型も、また同一で。

悲しげに歪むその表情も、どこかで見ただことがあるもので。

初めて出会った、というには、あまりにも見知りすぎていた。

——彼が、幣原秋。

愛しい弟を作り出した、誰もが天才と称する男。

弟の中で眠っている、もう一つの人格。

『あの少年に情を込めすぎちゃいけないよ、ハリー』

以前言われた、リーマス・ルーピンの声が、脳裏に蘇る。

『幣原秋は、アキのことを何とも思っていないのだから』

——そんな、幣原秋が、まるで情の欠片も持ち合わせていない人物の様に言うものだから。

三年時に初めて出会った幣原の、酷く無機質な眼差しを思い出していた。

ピーター・ペティグリューに。かつての友に、杖を向けた幣原秋を。『ぼくが君を殺してあげる。そうすれば、ヴォルデモートも死喰い人ももう怖くない』

天使のような、完璧な笑顔を浮かべた彼。

あの彼と、ルーピンの言葉は、案外簡単に結びついた。結びついて、しまった。

それなのに。

——今、目の前にいる少年は。

目前で行われていることに、青ざめて、絶望の色を浮かべるこの少年は、ハリーの知る、何もかもを知ったような、どこか達観したような幣原秋とは、いくら容姿が全く同じでも、似ても似つかなかった。

——憎んでいたのに。怒っていたのに。

優勝杯が移動キーと知っていたのに、みすみすハリーを死地に向かわせた、と、アキは本気で怒っていた。

ハリー本人だって、自分をヴォルデモートの元に送り込んだ幣原を、よく思っている訳はない。そこに、何らかの思惑があったところだ。愛しい弟をどこまでも苦しめる幣原を、憎んでさえいた。

でも、どうだ。

——憎める訳がない。

「あんな汚らわしい『穢れた血』の助けなんか、必要ない！」

スネイプの悲痛な叫び声に、幣原は大きな瞳を、溢れんばかりに見開いた。

呆然と、小さな身体を震わせ立ち竦む幣原は、どこまでも、自分の弟に、アキにそっくりで。

アキは、この情景を見たのだろうか。

幣原秋の『夢』の中で。

アキは一体、何を思ったのだろう。

それが気になったけれど、同時に、それだけは絶対に聞きたくない、とも感じた。

「楽しいか？」

二の腕を、思い切り掴まれた。ハリーは振り返り、戦慄する。

大人のスネイプが、怒りで顔を蒼白にして、ハリーのすぐ脇に立っていた。

「楽しいか？」

周囲の風景が、ぐるりと様変わりする。

気付けば、再びハリーは、魔法薬学の研究室にいた。

「お楽しみだった訳だな？ ポッター？」

「い……いいえ」

「お前の父親は、愉快な男だったな？」

スネイプは激しくハリーを揺さぶった。そしてありつただけの力でハリーを投げ飛ばす。

地下牢の床に叩きつけられ、思わず絶息した。

「見たことは、誰にも喋るな!!」

「はい、もちろん、僕——」

慌てて立ち上がると、スネイプから離れるために後ずさった。瞬間、頭上の死んだゴキブリが入った瓶が爆発する。

脇目もふらずにハリーはドアに向かって走ると、廊下を駆け抜け、階段を駆け上がる。膝が疲れてガクンと抜けたところで、やっとハリーは止まった。

震えが止まらなかった。

無意識に髪をぐしゃぐしゃと掻き混ぜ、自分の父も同じ仕草をしていたことを思い出し、慌てて髪から手を外した。

——自分の父親は、どこまでも傲慢だった。

そんなことはないと思っていたかったのに。

あんなことをする人だと思っていなかった。まさか自分が、スネイプに同情する日が来るなんて、死んでも思わなかった。

幣原秋も、スネイプも。彼らに抱く憎しみは、いつの間にもやっら消え失せていた。

「……幣原、秋」

彼に会いたかった。

でも一体、どうやって会えるのかは、分からなかった。

初めて、アキにだけは会いたくないと思った。

でも、どうしても、あの日のことについて知っている誰かに尋ねたかった。自分の父は、あんなクズのような人間じゃないということ、誰かに知らしめて欲しかった。

「……シリウス」

ふと、心に一人の顔が浮かぶ。
「シリウスに、会わなくちゃ」

第31話 友情なんて、幻想だ

「秋」

図書館。名を呼ばれ顔を上げると、目の前には友人、セブルスの姿があった。無表情でぼくを見下ろしている。

ぼくは勉強する手を休めて、セブルスを見上げた。

「やあ、セブルス。どうしたの？」

ぼくは微笑みを浮かべたが、セブルスはニコリともしなかった。

「少し、いいか」

「……………」

声の調子は、平坦だった。

「いいよ」



「最近、どう？」

「悪くはないよ」

途切れ途切れに会話をしながら、ぼくらは校舎を歩いた。

セブルスは、どこか行くあてもあるのだろうか。

目的地があるとき、セブルスは早足だ。のんびり彷徨うことを嫌う。反対に、目的地がないときはすぐぼんやり歩く。そういう癖がある。

七年間も友達でいれば、そのくらいは分かる。

今日は、目的地がないタイプのようだ。歩みが遅い。

だから「どこに行くの？」とか、そういう問いかけは無意味。

「もうすぐ卒業だな」

きつとセブルスは、ぼくと話がしたかったのだろう。

七年生ともなれば、いもり試験で受験する科目と、あとはもう個人の趣味で授業を取っている。ぼくとセブルスが被っている授業は、魔法薬学しかなかった。魔法薬学なんて、集中していたらあつという間に終わってしまう。七年生ともなれば内容も高度で、何かに気を取ら

れている隙はない。

「そうだね」

「……秋は、この先どうするんだ？」

階段を降り、一階へ。大広間の前を通り、中庭へと抜けた。

「闇祓いになろうと思ってる。……なれるかどうか分からないけど」

ぼくの言葉に、セブルスはしばらく沈黙した。

目は開いていたが、何もセブルスの目には映っていないんだろうな、ということが分かった。

「君ならなれるさ」

「……へえ」

返ってきた言葉は、少しだけ意外なものだった。

だって、今のぼくの言葉は、『闇祓いになる』というその言葉の真意は——君たちの敵になると、真正面から言っているようなものだったから。

「君の努力を、僕は知っている。……多分、君を一番近くで見続けてきたのは僕だ。一年足らずで、英語を喋れるようになった君を、魔法魔術大会で優勝した君を——僕は見てきたのだから」

「……ありがとう」

風が冷たい。思わず身震いをした。カバンからマフラーを取り出し、巻きつける。

まだまだ雪は、降ることは減ったものの、未だうず高く積もっていた。中庭のそこかしこに、雪の山が作ってある。

中庭は、ぼくらの他に誰もいなかった。もう夕暮れだからかもしれない。傾く西日が、積もった雪に、凍った湖に照りつけていた。

夕焼けの中佇むホグワーツ城は、普段と少し違った印象を与える。普段の、穏やかな優美さは消え去って、荘厳な、少し怖いくらいの存在感を醸し出す。

急に、背中を押された。

強い力に、堪え切れず凍った地面に倒れ込む。

左腕を捻り上げられ、思わず呻いた。

「な、に……」

「……ごめん、秋」

振り返る。

見慣れた親友の姿は、夕日に照らされたことも相まって、見たことのない色に染まっていた。

「僕を恨んで、秋」

左の手首に触れる、冷たい金属の感触。

手錠のような見た目のそれは、肌に触れた瞬間、なんとも形容しがたい不快感をもたらした。魔力をせき止める拘束具なのだと、感覚で予想がついた。

左手首の次は、右手首に。しかし、黙ってされるがままのぼくじゃない。

右の人差し指をついっと上げ、魔力を籠める。利き腕ではないから、細かい調整は上手く出来ないけれど、セブルスを吹き飛ばすくらいは余裕で出来た。

慌てて立ち上がると距離を取る。左手首にぶら下がる手錠に、眉を寄せた。

「……セブルス」

強く、強く、睨みつけた。

「何のつもり」

指を鳴らすと、手錠が外れる。

手錠を地に叩きつけた。

セブルスは、変わらぬ無表情だった。瞳はさざ波さえも波立っていない。

それが、自らの心を押し隠すための術の結果だということを、ぼくは知っていた。

セブルスが、心を閉ざした状態でぼくに接してきたことが、本当に、どうしようもなく、腹立たしかった。

「解けよ、それ」

左の拳を、強く握りしめる。

「閉心術なんて使ってんなよ」

もう、終わりだ。

何もかも。

友情ごっこも、親友ごっこも。

「ふざけるな」

杖を、左手に取った。

ゆっくりと持ち上げ、杖先をピタリとセブルスに合わせる。

「ぼくを拘束しようとしたのは、ヴォルデモートの命令？」

セブルスは、僅かに驚いたように目を見開いた。

「左腕をまくって見せて」

その言葉に、セブルスは明らかに躊躇うそぶりを見せた。

しかし、逡巡する暇を与えるほど、ぼくは優しくは出来ていない。

「早く」

苛立つて足を踏み鳴らした。

緩慢な動作で、セブルスが左腕をまくる。

——ああ。

これが全部、悪い夢だったらしいのに。

「……何で。ねえ、何でだよ。どうしてなんだよ」

囁いたぼくの言葉に、セブルスは唇を噛み締めた。

既に今までの、何が起こっても波立たない瞳ではなくなっていた。

目に映るのは、激しい感情。

どうして。どうして。どうして。

疑問ばかりが降り積もる。

いや——本当は分かっていたんだ。

何もかも、ぼくは気付いていたんだ。

目を逸らしていたツケは、高かった。

「……僕こそ、聞きたいよ。どうして分からないんだ。これからの魔

法界には、あの方の力が不可欠なんだ」

セブルスの瞳は、真剣だった。

真剣に、ヴォルデモートに忠誠を誓う瞳だった。

「秋。どうして教えてくれなかった」

「……何を」

セブルスの唇が、言葉を紡ぐ。

「君の両親が、死んでいたことに」

その言葉に。

一瞬、世界が凍りついた。

「……知ってたの」

自分の口から零れた言葉が、自分のものでないような、そんな錯覚を感じた。

「知ってたんだ、セブルス。ぼくの両親が、ヴォルデモートに殺されたって。……ヴォルデモートに聞いたのか。じゃあどのようにぼくの両親が死んだのかも、きつと聞いた訳だ」

ギリリ、と奥歯を噛み締める。

「さぞや愉快だったろうね？ 痛快だっただろう、きつといい御伽噺になっただろう、ぼくの両親の死は。高みからぼくを見下ろすのは、いい気分だっただろう。両親の復讐のために足掻くぼくは、きつと滑稽だっただろう。君にとってはぼくの両親の死ですら、あの方の崇高な理想のための犠牲に過ぎないんだったね」

ぼくの言葉に、セブルスは動揺の色を見せた。

「違う、違うんだ、秋。僕は……」

「聞きたくない!! 今更、今更何を言う!!」

頭を振った。目を細め、セブルスを睨みつける。

呆然と、セブルスはぼくを見つめていた。

「選べ」

杖を突きつけて、ぼくは言った。

「ぼくか、ヴォルデモートか。君自身の意志で選べよ。さあ!!」

杖の先端から、火花がパチパチと零れた。ぼくの想いに反応しているのか。

「これが、最後だ。ぼくの手を取るか、取らないか。リリーに『穢れた血』と口走った時のように」

セブルスは息を詰めてぼくを見返していたが、『リリー』という単語に我に返ったようだった。

瞳に光を灯し、強く、強くぼくを睨みつける。ぼくに言い返したい、それでも言葉が見つからない、そんな憎々しい眼差しだった。

数瞬前まで友人だと、親友だと思っていた。

今はその彼を、いくらでも傷つけてやりたくてたまらない。

きっとそれは、向こうも同じ。

「僕は君の敵だ、幣原秋」

——友情なんて、幻想だ。

水面に映った月と同義。

花開いた朝顔に誓うのと、同意。

永遠に続く友情なんて、存在しない。

そんな、当たり前のこと。

「こんな形で、気付きたくなかった……」

さつきまで、隣り合って肩を並べていたのに。

どうして今、向かい合っているのだろう。

どうしてぼくは、彼に杖を向けているのだろう。

「ぼくらは一体、どこで間違ってしまったのかな」

ぼくの言葉に、セブルスは。

「出会ってしまった、ところから」

酷く苦しげに、そう答えた。

「……秋。君は」

「セブルス。もう元へは戻らない。ぼくは……ぼくらは……」

はつきりと。

断言する。

「ぼくらは君たちの敵だ。ぼくにぶちのめされなくなかったら、とつとつと視界から消えてくれ」

ぼくの言葉に、セブルスは異論はないようだった。

踵を返しかけ、一步步を進めたところで、足が止まる。

「なあ、秋」

酷く悲しげな瞳だった。

全てを諦めきったような、一切抗わずに運命を受け入れたような瞳だった。

「僕を恨んで。僕を憎んで。君が、気が済むまで」

「……嫌だ」

「……どうして」

「君も、ぼくを恨んで。ぼくを憎んで。好きなだけ、心の底から。そうじゃないと、釣り合わない」

セブルスは、ほんの少しだけ、笑顔を見せた。

傷跡が引きつるような、笑顔だった。

「でも、僕には君を恨む理由なんてない」

「——じゃあ、こうしよう」

杖を、振り上げた。

魔力を、最大の火力まで。

容赦も、手加減も、何もなく。

「最大限の力で、今から君をぶちのめすから」

だから、ぼくを許さないで。

ぼくも、君を許さないから。

第32話 ぼくらがここにいた証

冬の名残は、あつという間に過ぎていった。もう、空気は春めいてきている。

まだまだ風は冷たいが、じきにすぐ夏になるだろう。

「はー……」

教室の床に、大の字に転がった。ぐ、と大きく伸びをする。

目を開けると、空中には銀色の濃い霞の他、虹色に輝く光の玉、金色にたなびくオーロラのようなものに、光に反射してキラキラ光るふわふわとしたリボン状の霧が広がっていた。

顔を動かせば、馬に変身させるために使ったテーブルや、呼び寄せ呪文に使ったクツション、狙撃呪文の狙いをつけるためのダーツ盤など、様々なものが転がっている。

闇祓いの試験は、筆記と実技。いや、それよりもまず、いもり試験で望まれた点数が取れなきや意味がない。

いもり試験は、ふくろう試験と同じく六月にある。二週間の長丁場に耐えた後、闇祓いの本試験は、そのすぐ来週だ。悠長に構えている時間はない。

「エリス先輩、すつごいな……ありえない……」

両手を目に当て、ぼくは呻いた。

例年ならば、七年生のちようどこの時期に魔法魔術大会の本戦が始まっていたはずだ。よく、二足のわらじが履けたものだ。しかもあの人、監督生も兼任してなかったっけ。化け物かよ。

「……よし」

頑張ろう。エリス先輩にも『闇祓いになる』って宣言して逃げ道を塞いだんだから、頑張るしかない。

闇祓い以外の他の進路は考えてないし、職の当ても、それどころか住む場所の当てすらない。色んな人にも『君なら出来る』と励まされたい、なれなかったらお笑い種だ。

開いて置いてあった『闇の魔術に対する防衛術』のノートをパラパラとめくる。

次はどの呪文を練習しようかな、と考えたところで、ふと視線を感じた。

「……オパグノ」

教室の扉に向かって杖を振ると、飛び出した何十もの小さな鳥が、鋭いクチバシを扉に突き立てた。「うわあっ!？」と、教室の外から叫び声が聞こえる。

「……何してんの?」

扉を開けると、そこには腰を抜かしてもつれ合うように倒れ込んでいる悪戯仕掛人プラス、リリーの姿が。

「秋、酷いよ!」

「びっくりしただろ!」

「手加減はしたよ、ちゃんと」

手加減しなかったら、あの鳥たちはクチバシを扉に突き立てるだけじゃ飽き足らないはずなもの。

長年、魔力の制御を特訓している成果だ。昔は無理だったけど、今じゃ蛇口を捻るように出力が思いのまま。

「どうしたのさ、こんなところで?」

首を傾げて聞くと、思いがけない言葉が返ってきた。

「君を探してたんだよ!」

「……ぼくを?」

「そうよ!」

這い出してきたリリーが、満面の笑顔でぼくを見上げた。

いいけど、リリー、髪の毛ボサボサだぞ。折角綺麗な髪なのに。

「もうすぐ卒業しちゃうでしょ? だから、その前に写真撮りましようよ!」



「写真なあ……」

「苦手なんだよなあ、撮られるの。」

「なんで苦手なの?」

リーマスが目を瞬かせて尋ねた。
んー、と肩を竦める。

「……魂を抜かれる、って、言わない?」

「なんだそれ! 日本じゃそんなこと言うのか? 変なの!」

ジェームズが笑い転げている。リーマスも苦笑を隠しきれないようだ。

確かに、こつちじゃそんな話聞いたことないけど……。

「いいい? 撮るわよー! 秋、魂取られないから、もつと力抜いて! すつごい怖い顔してるわよー!」

リリーがカメラを構えて大きく手を振っている。ぼくはそれに引きつった笑みを返した。

うう、逃げたい。逃亡したい。

「ほら、秋!」

シリウスがぼくの肩に腕を回した。引き寄せる。

「だーいじょうぶ。魂抜けても、俺が引つ張り戻してやるからさ」

「……つふ、何、それ」

「お? なんだ、俺が信じられないか?」

悪戯っぽい目で、シリウスはぼくを見た。

灰色の瞳が、楽しげに煌めいている。

「君なら、本当にやってのけそうだ」

「当然さ。僕らの絆は永久不滅。王水にだって溶かせやしない!」

ジェームズが、澄んだ眼差しで叫んだ。

カシャリ、とシャッター音が鳴る。と同時に、シリウスがぼくを解放した。

「どうだ? 魂、ちゃんとある?」

「……当然!」

リリーが持ってきたカメラは、ポラロイドカメラのようだった。即座に現像が行われる。

マグルのカメラは、普通一回の撮影で一枚が限度だけれど、これは違うようだった。人数分刷ったそれを、ジェームズが配る。

直視せず受け取り即座にカバンの中へ突っ込んだぼくに、リーマス

は笑った。

「うるさいな……リリー、代わるよ。君も入れて撮ってあげる」
「ええー」

リリーのカメラに手を伸ばすと、リリーは不満の声を上げた。

「秋と写りたかったのに……」

「もう勘弁して……」

一枚でもうメンタルゲージが赤色を示しているのだ。これ以上は無理。

カメラを構えると、慌てたようにそれぞれが集まってきた。各々好き勝手にポーズを決めている。

ジエームズが、何かをリリーに囁いた。リリーはくすりと笑う。

とても、綺麗で可愛い笑顔だと思った。

笑顔を逃さぬよう、カシヤリとシャツターを切る。

「ちよつと秋！ 撮る時は合図くらいしてよー」

「あつ、ごめん」

思わず、反射的に。

文句を垂れる仕掛人たちに謝りながらも、現像された写真を手に取った。

そして、沈黙。

「わあ、とつても素敵ね！」

初めに声を上げたのはリリーだった。輝くような笑顔を、ぼくに向ける。

「……ま、これでいいんじゃない？」

呆れたようにそう言ったのは、ピーターだった。それに、悪戯仕掛人の面々も同意する。

「秋、君、カメラ初めて触っただろ」

シリウスにそう言われ「どうして分かったの？」と目を瞠った。

「一目瞭然さ。ああ……でも、まあ、それにしちやよく撮れてるんじゃないか？」

「よく撮れてるも何も、最高だよ！」

ジエームズが楽しそうに微笑んだ。

写真の中の彼らは、いきなり撮られたことにそれぞれ驚いたり呆れたり笑ったりしている。

「写真ってのは、楽しい思い出を切り取って、ずっと保存するためのものなんだからさ！」

——ジエームズのその言葉に。

ぼくは少しだけ、ほんの少しだけ——写真が好きになった。



進路指導の日程が寮に貼り出されると、五年生の雰囲気は一気に張り詰めた。自分の進路を決める大切な試験、ふくろう試験が迫っていることを突きつけられるからだ。

レイブンクロー生は、誰もがノートや教科書を常に開いて持ち歩き、前を見ずによく誰かしらにぶつかっていた。試験前のレイブンクロー寮名物だ。

「失礼します」

笑ってフリットウィック先生の部屋に入る。幣原の記憶通りの、フリットウィック先生サイズの小物に溢れた部屋。

その中、今日は異端者がいた。隅の方にアンブリッジが椅子に座っている。進路指導が先に終わった同級生が辟易した顔で「君のせいだろ」と肩を揺さぶってきていたから、予測はしていた。

「アキくん、お掛けなさい」

フリットウィック先生はにこやかに笑って正面のソファを指し示した。アンブリッジがいるというのに、普段通りの柔らかい声だ。

「さてさて、アキくん。君の成績ならどこにだって行けるでしょう。我が寮から『12ふくろう』の努力家くんが現れるのは、実にめでたいことです」

「そんな、先生、まだふくろう試験は終わってませんよ？」

「いやいや、今までの君の成績を鑑みての妥当な発言です。滅多なことが起こらない限り、私は二年後、君に主席のバッジを渡すつもりですよ。」

そこで、アンブリッジの咳払いが入った。ぼくもフリットウィック先生も共に無視する。

「将来就きたい仕事は、何かありますか？ 以前苦手だった『魔法薬学』も、良い成績を収めているようですね。結構結構」

フリットウィック先生の言う『以前』が、ぼくの一〇四年生までを指すのではなく、幣原秋のことを言っているのだと、ぼくには分かっていた。

「……先生。将来就きたい仕事、一つだけあるんです」
小さく微笑んだ。

あの当時は、幣原秋は、選ぼうとしなかった道を。

「ホグワーツの先生になりたいんです」

ぼくの言葉を聞いて、フリットウィック先生は破顔した。

「君になら、いつでもこの座を譲り渡しましょう。そもそも、二十年も前から、君に渡そうと思っていた席です」

ぼくも思わず笑みを浮かべた。

ぼくらの間の和やかな雰囲気をぶち破ったのは、アンブリッジの声だった。

「エヘン。お言葉ですが、フィリウス？ 彼がホグワーツの教師に相応しいかどうかは、わたくし疑問に思っておりますの」

フリットウィック先生はものすごく面倒臭そうな眼差しでアンブリッジを見た。

「一応お聞きしましょうか。何故ですか？」

「エヘンエヘン。それでは言わせてもらいますが、彼には教師として若輩を教え導くには、少々未熟ではないかと思えますわ。彼の記憶力は確かに腹立たしいほど素晴らしいですが、教師に対する反抗的な態度といい、実際子供たちを教えられるかと言われますと、難しいものがありますわね」

「おっしゃりたいことはそれだけですわ？ アキくん、昔も言いましたよね。君の才能を一番活かせる場所は、ここだと。君の才能は、教育、研究という道にこそ、最高のものを示すと。私の思いは、今も変わっていませんよ」

フリットウィック先生の眼差しは、真摯だった。それを遮る、アンブリッジの咳払い。

「そもそも、ではありませんが、ホグワーツの人事権は校長、すなわち現在わたたくしが持っているというところをお忘れではないですか？」

「フリリウス。わたたくしは彼が教職に就くことを絶対に認めませんわ」
「あなたの個人的な好き嫌いなど聞いていません。この子は私の最高の教え子です。ずっと最高点を付け続けた、今もなお。この子が杖を振った様すら見たことがない、実技をまるつきり無視して教科書を読むことしか出来ない闇の魔術に対する防衛術教師は黙っていなさい」

フリットウィック先生がピシヤリと言うのに、アンブリッジは鼻白んだ。口を閉じて、手元のフリツプボードに猛烈な勢いで何かを書き込み出す。

「ぼくは愉快だったが、フリットウィック先生が停職にでもなったらどうしようと、それだけが心配だった。」

「教師になりたいと、その言葉、信じてもいいのですか？ アキくん」
フリットウィック先生の言葉に、思わず詰まった。

「どうして詰まったのか、自分でもよく分からなかった。」

「……はい」

「しっかりと頷く。」

フリットウィック先生は満足げに、にっこりと微笑んだ。

第33話 二代目悪戯仕掛人

六月中旬。暖かい風が吹き始めた頃、闇祓いの本試験が開催される。

ホグワーツを出発したのは、明け方だった。

闇祓い本部から送られてきた切符を手掛かりに、試験会場へと足を運ぶ。『姿あらわし』や『フルーパウダー』『箒』は禁止。マグルの交通機関や足を使って来ることが原則として求められた。

「こういうことで、落ちる人もいるんだろうなあ」

ずっと魔法界で育ってきた人にとっては、マグルの地下鉄やらバスやらは本当に未知のものだろう。

と、始めは楽観視していたのだが。

「……本当に、どこへ行くんだ……!?!」

船に乗せられ、本当にこの行先であっているんだろうなと何度も確かめる。

二時間に及ぶ船旅の末に降ろされたのは、地図にはない島だった。

島に降り立つと、風景が溶けた。

ぐにやりと歪んだ後、気付けばぼくは広い部屋に立っていた。ホテルのロビーのような、ただっ広いところだ。ぼくと同年代くらいの人々が数人（受験者だろうか）、適当にソファに腰掛けて時間を潰している。

「幣原様ですな」

突然声を掛けられて、飛び上がるかと思った。少なくとも、心臓はドキリと跳ねた。

すぐ脇に、人が立っていた。気配もなく、全然気付かなかった。以前見たエリス先輩やムーディ先生と同じ、闇祓いの制服を身に纏っている。

「番号札を一枚お取りください」

そう言って、その人は手に持っている箱を振った。引いた番号は二十八番。

「番号札を胸につけてお待ちください」

淡々とそれだけを言うと、その人は現れた時と同じ唐突さで消えてしまった。

面食らったけれども、言われた通りに胸につける。

何もすることが見当たらなかったもので、ひとまず辺りをキョロキョロと見回した。

勉強道具は一切持ってきていない。むしろ置いてこいと厳命されていた。持ってきた唯一の手荷物であるカバンの中には、筆記具と手帳、後は財布と、マグルの本屋でついさつき手に取った一冊の文庫本のみ。

途中マグルの公共交通機関を使う、ということ、ローブですらない。杖は見えないようにベルトで仕舞ってある。

「初めまして」

声を掛けられ、ぼくは顔を向けた。

肩までの金髪に、どこことなく勝気そうな青色の瞳をした女の子だ。胸元には『六』と書かれた番号札がついている。

「良かったあ。女の子、あたしだけかと思ってた。あたし、ソフィア・エレメント。ソフィでいいよ」

「あ……えっと、その、ぼく、男なんだ」

多分、この髪型から女の子だと判別したのだろう。ぼくの顔立ち自体も、非常に残念なことながら、女の子っぽい顔立ちだとよく言われるし。目が大きいのがアレなのか？

「ええ、嘘だあ」

「う、嘘じゃないよ……」

証拠を出せと言われても困るけれども。

ブンブンと頭を振るぼくの顔を、彼女——ソフィは覗き込んだ。

「あんた、名前は？」

「幣原秋」

「ん、あれ？ 外国人？」

「まあ、そう。日本人」

ソフィは大きな青い瞳をぱちくりと瞬かせた。ビスクドールみたいだ。

「秋は、どこの学校の卒業生なの？」

「ホグワーツだよ」

「おー、名門じゃん。あたしはレオンハルトってちっちゃい魔法学校だったんだ。多分知らないと思うけど」

「……うーん、知らない」

そうか、ホグワーツ以外にも魔法学校ってあるんだよな。うっかり忘れそうになる。

「学長のジジイがうるさくってさあ。『ソフィ！ お前は闇祓いになるのじゃー！ ドーン！』って。ホンツト口うるさいジジイでね。でもま、育ててくれた恩は感じてるし、特にやりたいことも見つからないし、闇祓いになってみるのもいいかなーって」

「へ、へえ……」

なんかこの子、ちよいと変な子だ。この短い間でも、そのことは理解出来た。

「本当に男の子？」

「ほ、本当だよ……」

こういう絡まれ方をしたのは初めてで、戸惑ってしまう。

そのときアナウンスが聞こえた。

『受験生の方は前方の扉の先にお進みください』

言葉が終わると同時に、さっきまでただの真っ白い壁だった部分に突如扉が出現した。大広間のような、両開きの扉だ。この声も、一体どこから響いているのやら。

ぼくは周囲を見渡したが、ソフィは気にもしていないようだ。ピヨンとぼくの隣から立ち上がると「さ、行こ」と微笑む。全く緊張していないらしい。

受験者全員が扉の中に入ると、扉は消えた。代わりに十個もの扉が、一斉に姿を表す。

「わあおー」

隣でソフィが、物凄く気が抜ける声を発した。思わずガクンと肩を落とす。

『それぞれ一部屋にお入りください』

そう言われ周囲の受験生の数を数えると、扉と同じく十人。なるほど。

「じゃーね、まったねー」

ソフィがまったりと手を振った。それに軽く手を振り返し、適当に一つの部屋を選んで入る。

小さな部屋だった。机と椅子の他は何もない。

『全ての荷物をここにお預けください』

またもアナウンス。同時に大きめのバスケットが出現した。

「筆記具も？」

『筆記具も時計も全てお預けください。杖だけをお持ちください』

はあ、徹底している。

言われた通りに荷物をバスケットの中に入れると、バスケットごと消えてしまった。代わりに姿を現したのは、大鍋と魔法薬の材料戸棚。

何もなかった机の上には、試験問題と羽根ペンにインク壺が置かれている。

『今からの筆記試験に、制限時間はございません。あなたの精神力と体力が続く限り、回答をお続けください。それでは、始めてください』
無機質な声は、フツンと消えてしまった。

「……求めるものが分かりやすくていいじゃないか」

さあ、自分の限界を試す時間の始まりだ。



部屋の二階は、受験者の寝室になっていた。泊まりがけとは思ってもしていないかった。

一人一部屋与えられて、そこで一晩を過ごした後（と言っても、時計は取り上げられているし、窓はないしで、本当に一晩を過ごしたかは定かではない）、闇祓い試験二日目。

『受験生の方は前方の扉の先にお進みください』

昨日と全く同じアナウンスの声。同時に部屋の壁に出現した扉の

先に、受験生は各々足を踏み入れた。筆記試験の時とは少し違う色味の扉だ。

そして、目を瞠る。

ホグワーツの廊下、のような場所だった。雰囲氣的に、城、だろうか。

一緒に足を踏み入れたはずの他の受験生の姿はなく、今ここにいるのはぼくとソフィだけだった。

どこからともなく、紙飛行機が飛んできた。ぼくとソフィ、それぞれ一機ずつ。

飛び込んできた紙飛行機を両手で掴む。

『今から実技試験を始めます。今、共にいる人とペアを組み、与えられた任務を遂行してください』

反射的に、隣にいたソフィを振り返った。ソフィはにっこり笑顔で「よろしく、秋」と首を傾げる。

「……よろしく」

紙飛行機を広げると、中には一文、こう書かれていた。

『司令塔最奥にある機密文書を奪え』

読んだ瞬間、紙飛行機は炎に包まれる。炎は粒子となってぼくの左手首に巻き付くと、やがて赤いブレスレットのように変化した。金属のような素材だが、冷たくはなく、軽い。見るとソフィの手首にも、同じ色合いのそれが嵌まっている。

『ペア以外の受験生は、任務における『敵』です。『死の呪文』『磔の呪文』、これら二つの呪文の使用を禁じます。タイムリミットは日没、太陽が地平線に全て沈んだ瞬間とします。それまでに任務を遂行してください。健闘を祈ります』

アナウンスの声が消える。

大きく開いた窓から空を見上げると、太陽はちょうど真上に輝いていた。

「……『服従の呪文』の行使はオツケーってことか」

小さく呟いた。

「ソフィ、君の任務は何だった？」

「んー？ えつとね、『東塔地下に囚われし物を守れ』って」

「囚われし物……？」

さあ、とソフィは肩を竦めた。

「秋は？」

『司令塔最奥にある機密文書を奪え』って」

「わー、なんだか映画みたい。スパイ映画でこういうの無い？」

「映画はあまり興味がないから……とりあえず、どれが東塔で、どれが司令塔なのかも分からないから、とりあえず東に行ってみよう」

太陽を見て、方角に見当をつける。

ホグワーツから、『魔法学校』という機能を抜いたような城だという
思いは、段々と強くなっていった。縦横無尽に通路や廊下、階段で入
り組んでいて、すっかり意識していないと迷ってしまいそうだ。

しかも、様々な仕掛けが施されていて、一筋縄じゃあ全然いかない。
「ソフィ、いろんなことしないでよー！」

ソフィが壁に手をついた瞬間、再びぼくらは見たことがない廊下に
放り出された。これで四度目だ。

さつきは手頃な教室にソフィが足を踏み入れて飛ばされたし（二度
も）、それよりもう一個前は、「窓から出てみたらどうなるかな？」と
呟き、止める間もなく窓を開けて飛び降りた瞬間、気付いたらまたも
廊下に立っていた。太陽を見て方角を確かめると、東塔に全然近付い
てないことが一目瞭然だった。

「イライラしないでよ、秋。どういう仕掛けがされてるのか確かめる
のも大事だよー？」

「そりゃ、そうだけどさ……」

嘆息したが、ソフィの言うことももつともではある。たくさん
の教室があるにはあるが、どれも入れない（足を踏み入れた瞬間別の廊下
に飛ばされる）ことが、ソフィの二度もの実験によって証明されたし、
城の外に出ることも、壁に触れることも出来ないということが分かつ
たのは、確かに貴重な発見だった。この場所での『ルール』を数多く
知ることでもまた大切だろう。そう考えて、溜飲を下げた。

まずの目的地は、東塔の地下。城の構造から行っても、この塔が東

塔なのは確定で大丈夫だろう。

螺旋階段を降りていくと、段々と空気が冷たいものになっていく。魔法薬学の教室に向かっている気分だ。足音が反響するのが気にかかって、杖を振り、音が響かないようにする。

「……足音がしないって、変な感じ」

「仕方ないでしょ、ぼくら以外は敵だってアナウンスも流れてたんだし」

話し声も、密やかに。

地下は、灯りが届かないからか真っ暗だった。杖先に光を灯して歩くと、いきなり襲われたときに唯一頼れる光源がなくなってしまう。だから魔法で小さな火の玉を出すと、数個そのあたりに転がした。ふわふわと、淡い光が空中に漂う。

「気をつけてね」

「君の方こそ」

廊下を進んだ先に、扉があった。押し開くと、少し広い部屋に出た。大きなソファが二対に、床に敷き詰められた絨毯。

『『囚われし物』だから、何か捕まえられてるのかなあ?』

「そういうものを探さないでだ」

そのとき、カタリと背後で物音がした。振り返りざまに『隠密探知呪文』を掛ける。

すると先ほどまで何もないと思っていた空間から、二人の受験者が姿を現した。手首には共に緑色のブレスレットが輝いている。胸にはそれぞれ『二』『三十五』と書かれたバッジがついていた。

「バカ、お前が物音を立てるから」

「アンタがグズグズしてんのが悪い」

軽口を叩きつつも、二人はぴったりと杖をぼくとソファイに合わせている。

「おい、『囚われし物』とは何だ?」

「知らないよお」

ソファイはのんびりとした口調で答えた。本当に何と言うか、胆が据わっているというか。

そんなソフィに苛立ったのか、二番のやつがソフィに一步踏み出した。反射的に、彼女を庇うように手を広げる。二番はぼくに目を遣った。

「女守るたあ見上げた奴だな、チビ」

……ひよつとしなくても、「チビ」ってぼくのことなのか。

「その意気は評価してやるよ。だが……」

「……お喋りが多いなあ」

ポツリと呟いて、杖を振った。

ソフィに杖を向けていた二番は、ぼくの放った『失神呪文』を避けられずに地に伏せる。返す腕で、三十五番の呪文を防ぐと、パツとソフィが躍り出た。想像以上に敏捷な動きで、三十五番を戦闘不能にしてしまう。

「ふいー、びつくりしたねえ」

伸びた二人をそのまま転がしておくのもどうかと思ったので、縛り上げてクローゼットの中に放り込む。

クローゼットに『施錠呪文』を掛けると、ぼくらは再び『囚われし物』を探しにかかる。

部屋のずうつと奥に、『囚われし物』は置いてあった。

談話室くらいの広さの部屋だ。家具は何もないし、地下であるため当然ながら窓もない。

部屋の中央に、椅子が。そしてその上には、鳥籠らしきものが置かれていた。

「これ……スニジェットだ！ 初めて見たあ」

ソフィが息を呑んで鳥籠に駆け寄った。

スニジェット。確か、クイディッチでの昔のスニッチが、これだったか。乱獲され過ぎて、今や絶滅危惧に指定されていたはずだ。

ふと嫌な予感がした。

「ソフィー！」

叫んで、手を掴むと思いつき引き張った。しかし、少しだけ遅かった。

鳥籠に僅かに触れたソフィの手が、『仕掛け』を作動させる。

けたたましいサイレンの音と共に、部屋中に煙が立ち込める。濃い煙はあつという間に視界を奪っていつて、慌ててぼくらは部屋を飛び出した。

煙の中から、呪文がこちら目掛けて飛んでくる。『盾の呪文』を周囲に張り巡らせたまま、ぼくらは走った。

階段を駆け上がり、地下から抜け出たところで、煙からやつと解放される。

「きつつ……」

息が整わない。壁に手をつく訳にもいかなないので、前屈みになって息をつく。

ソフィも地に膝をついて喘いでいたが、いつの間にかその手にはスニジェットの鳥籠が握られていた。よく持ち出せたな。

「え、へへ……どんなもんだい」

ソフィは鳥籠を胸に抱きかかえ、満足げに笑みを浮かべた。

これで、ソフィの任務は終わり。後は、ぼくの司令塔奥の機密文書。肩の力を抜きかけて、後ろから聞こえた音にハッと身を強張らせた。

さつきからずつと張りっぱなしの『盾の呪文』により、ぼくとソフィを狙った青白い閃光は離散する。

ソフィは小さく悲鳴を上げて鳥籠をぎゅつと抱きしめた。

「……次が、早いよ……」

未だ息は上がったままだし、さつきいきなり走ったせいで足も少し震えている。しかし、そんなことを言ったところで誰も配慮なんてしてくれはしない。

十七番と四十九番の番号札をつけた二人組だった。ブレスレットの色は白。

疲れを顔に出さずに、背筋を伸ばした。

握りっぱなしだった杖を、見せつけるようにくるりと回してみせる。

「後ろから攻撃するのは、流石に卑怯なんじゃない？」

余裕たつぷりに笑うと、二人は僅かに怯んだようだった。

その時、四十九番の男がこちらに一步步み寄る。

「なるほど。凄いな、『盾の呪文』をずっと張りっぱなしだなんて、並の人間に出来ることじゃない」

芝居がかった笑みを浮かべて、彼はぼくらに提案した。

「僕たちと手を組まないか？」



ハリーがシリウスと話したいということで、ぼくらはハリーがアンブリッジの暖炉を使ってシリウスと話している間、出来るだけ派手にアンブリッジを引きつけておこう、ということになった。

一体何を、ハリーはシリウスと話したいのか。尋ねても、ハリーは苦笑いを浮かべるばかりで、一向に答えてくれようとしなない。

ハリーがぼくに隠し事をするというのはなんだか珍しくて、なんだかハリーが大人になって少し遠くに行ってしまったかのような、そんな一抹の寂しさを覚えてしまう。

渡り廊下から上半身を乗り出し、杖から青い閃光を空に向かって放った。準備完了、の合図だ。

それを見て、南棟と北棟、そして東棟でもそれぞれ合図が上がる。やがて赤い閃光が東棟から上がった。これは、戦闘開始、の合図。

乗り出していた身を引くと、杖を鋭く振った。瞬時に、廊下中に仕掛けていた煙幕が同時に爆発する。ぼくがいる西棟も、悲鳴が響き渡った。

東棟は、確かジョージが担当だったはずだ。あそこはアンブリッジの部屋があるところだし、無事に済めばいいのだけれど。

逃げ惑う生徒たちを避けて、上へ上へと上がった。

最中、双子が作った長々花火を惜しげもなく消費していく。廊下に、階段に、落とし穴を作ることにも忘れない。

爆発音に、悲鳴に叫び声。ホグワーツ中に響き渡る大音量が何とも愉快で、ぼくは大きな声で笑った。

ここまでの大規模なことは、悪戯仕掛人はしたことがない。せいぜ

い、一つの棟を爆破してみせるくらい。当時はそんなことも凄いと目を見張っていたけれど、双子とリーのここまでの大暴れを見た後だと、なんだか物足りなくなる。

ポケットから時計を出して、時間を確認した。

濃い煙幕で一メートル先すら見えないが、杖をかざすとその部分だけ煙幕が引いた。

ぼくらがそれぞれ別行動を取る時間は二十分。その二十分間、ぼくらはアンブリッジにも『尋問官親衛隊』にも捕まらないように逃げ回らなければならぬ。

正面から大きなざわめき。再びどこかの集団にかち合ったらしい。

この煙幕の中、集団を突っ切るのも至難の技だ。ぼくはくるりと身を翻し――

「アキッ!!」

思いつきりローブのフードを引っ張られ、勢いで足が滑った。妙な体勢のまますっ転ぶ。

そのまま腕を後ろに捻られ、思わず杖を落とした。頭を後ろから押さえつけられ、背中に重み加わる。おそらく、膝で体重を掛けているのだろう。手加減している風なのが、なおさら腹立たしい。

「……っ、君の存在を忘れていたよ……」

頬を廊下に擦り付けられた状態のまま、ぼくは眼球をその人物に向けた。

濃い煙幕の中、見えたのは青いネクタイと、青い裏地のローブ。

「お前に忘れられるほど、俺はキャラが薄くはねえつもりだが」

「誰がメタ発言をしろと言った」

「メタって程でもねえだろ。……はあ、またお前か」

「うんそう、ぼくだよ。だからアリス、この手を離してくれたら、ぼくとっても嬉しいなあ」

「バーカ」

ぐ、と、背中に更なる重み加わった。

「楽しそうなことしてんじゃねえか。俺も混ぜてくれよ」

「やーだね。こんな楽しいこと、君に渡してなるものか」

「そんな悲しいこと言うなよ、俺たち親友だろ？」

「親友でも、秘めておきたいことくらいあるだろう？　ねえ、見逃してよ、お願い」

「さあて、どうしようかね」

　　楽しげに笑うアリス。畜生憎たらしい。

　　ぼくはアプローチを変えてみることにした。

「アンブリッジに取り入ったところで、君にメリットはないよね？」

　　ぼくをガマガエルに突き出して、後からぼくに報復されるのと、今ぼくを見逃してぼくに報復されないの、どっちがいい？」

「個人的には、お前の呪文の的にだけは絶対になりたくないから見逃してやりたいんだがな。メリットはなくとも、奴に背くデメリットはあんだよ」

「君が、たとえ家督のためとは言え、自分のやりたくないことをやるなんて、出会ったときは考えられなかったな。本当に同一人物？」

「人は変わるもんさ」

「なるほど、違くない。……じゃあ、力尽くで抜け出すしかないわけだ」

　　押さえも何もない右手で、指を鳴らした。いくらアリスでも、腕は二本しかない。片手をぼくの頭に、もう片手でぼくの腕を押さえたとしたって、もう一方の手は自由なのだ。

　　弾かれたようにアリスがぼくの上から飛び退いた。本当、野生じみた危機察知能力だ。時折羨ましいとまで思う。見習いたくはないけれど。

「……なーんてね」

　　眩き、杖を掴むとダツシュした。「あっ!？」とアリスが叫ぶもお構いなしだ。魔法を掛けてくるだろうと思いついで騙される方が悪い。

　　風の流れを操り、ぼくの前の視界を開く。ついでに追い風に乗って駆け抜けるぼくに、さすがのアリスも追いつけなかったようだ。

　　振り切った、と確信して、立ち止まる。止まった瞬間、汗がどつと流れた。久しぶりにこんなに運動した気がする。

「良かった！　無事だったか、アキ！」

声に振り向くと、リー・ジョーダンがこちらに走ってくるころだった。インスタント煙幕の効果が段々と薄れてきているのか、先ほどよりも視界がクリアだ。

「何とかね」

そう言いつつ時計を見ると、この騒ぎが始まって大体二十五分を指していた。ノルマは一応達成したらしい。

「大丈夫だった？ そっちは」

『尋問官親衛隊』を三人ほど吹き飛ばしてやった。DAは意外なところで役に立つ」

「それは重畳」

その時、ゆるやかにぎわめきがぼくらのところまでやって来た。階下から足元を伝い、噂がぼくらを通り過ぎていく。

『ウィーズリーの双子が追い詰められたらしい』

そんな言葉を聞いて、ぼくらは顔を見合わせると、噂の源を辿って駆け出した。



噂は本当だった。『尋問官親衛隊』がフレッドとジョージを囲んでいる。

双子はたった今追い詰められた、という顔をして、お互い背中合わせに周囲を見回している。

アンブリッジの姿を見つけ、ぼくとリーは慌てて隠れた。物陰から様子を伺う。

フィルチがアンブリッジに駆け寄った。

息を荒げて手元の羊皮紙を振りながら、

「校長先生、書類を持ってきました。それに、鞭も準備してあります……今すぐ執行させてください」

「いいでしょう、アーガス。その二人、わたくしの学校で悪事を働けばどういふ目に遭うかを、これから思い知らせてあげましょう」

アンブリッジの言葉に、双子はまったく堪えていない様子だ。むし

ろにやりと笑ってみせた。

「ところがどっこい、思い知らないね」

そう言って、双子の片割れを振り返る。

「ジョージ、どうやら俺たちは、学生稼業を卒業しちまったな？」

「ああ、俺もずっとそんな気がしてたよ」

「俺たちの才能を世の中で試すときが来たな？」

「まったくだ」

そして二人声を揃えて「アクション！ 箒よ、来い！」と叫んだ。

どこか遠くから、鋭い風切り音。アンブリッジの部屋から、忠実な部下のように主人の元へと馳せ参じた箒は、双子の前でピタリと止まった。一本にはまだ重たい鎖を引きずっている。軽く指を鳴らすと、ガチャン、と鎖は地に落ちて、箒を解放した。

「またお会いすることもないでしょう」

「ああ、連絡もくださいますな」

「上の階で実演した『携帯沼地』をお買い求めになりたい方は、ダイアゴン横丁九十三番地までお越しく下さい。『ウィーズリー・ウィザード・ウィーズ店WWW』でございます。我々の新店舗です！」

「我々の商品を、この老いぼれ婆あを追い出すために使うと誓っていただいたホグワーツ生には、特別割引をいたします」

そう言い残して、双子は地を蹴って宙に飛び上がった。

「二人を止めなさい！」

アンブリッジが叫ぶも、双子はもう既に手の届かない空中へと上がっていた。

ピーブズと同じ目線になった双子は、にやりとピーブズに笑いかける。

「ピーブズ、俺たちに代わってあの女をてこずらせてやれよ」

信じられないことに、ピーブズは双子の声に帽子を脱ぐと、さつと敬礼の姿勢を取った。

アンブリッジとフィルチ、それに『尋問官親衛隊』以外の全ての生徒が、双子に喝采を送る。声援に手を振りながら、ふと双子がぼくとリーに目を止めた。

「頑張れよお前ら！ 俺の分までな！」
隣でリーが叫ぶ。

双子は声を揃えて「心配するな、我が親友よ、待ってるぞ！」と
応えた。

「君も頑張れよ、アキ」

「レイブンクローの悪い子ちゃん？」

「ハリーと買い物に行くよ、待っててね！」

ぼくも、大きく手を振った。

大歓声の中、双子は正面の扉を素早く通り抜け、自由への階段を一
足飛びに駆け上がった。行った。

第34話 ふくろう試験

四十九番はリオン、十七番はローランドとそれぞれ名乗った。

結局、ぼくとソフィは彼らと手を組むことを承諾した。その選択も
阿利かな、と思っただからだ。

もちろん気は抜けないが、城の中は広いし、タイムリミットまでは
まだまだ時間がある。

それに――

「ホグワーツ生なの!？」

「そうだよ。幣原がまさか闇祓いを目指していたとはね、知らなかつ
た」

そう目を細めて微笑むのは、四十九番のパトリック・リオン。なん
とぼくと同級生、グリフィンドール生らしい。そう言われてみれば、
合同授業で顔を見たことがある気もする。

「ぼくのこと知ってるの?」

「そりゃあ知ってるさ。喧しい悪戯仕掛人と一緒にいるのを見かけ
ていたし、それに前、魔法魔術大会で優勝しただろう? 僕らのグリ
フィンドールの先輩、ライ・シュレディングーを差し置いて優勝した
君は、そうそう忘れられるもんじゃない」

……ぼくの四年生、魔法魔術大会でのあれは、なかなか色んなとこ
ろで尾を引いているようだ。もう三年も前のことだし、ぼくも半ば忘
れかけていたんだけど。

――あまり思い出したくないことまで、思い出すから。

胸の痛みに一瞬だけ目を伏せた。

「ところでさー、二人の指令は何だったの?」

ソフィの明るい声。ふわりと気持ちりが浮き上がる。

「僕はね、『西塔で封じられた物を見つけろ』っていうやつ。それが、多
分これなんだよね」

そう言っただけでリオンがポケットから取り出したのは、首から下げるタ
イプのロケットだった。

「開かないんだよ、このロケット。他にそれらしいものもなかったか

ら」

「……これだ、って確証が見当たらないから、ちよつと困るよね」

その通りだよ、とリオンはぼくに同意して微笑んだ。

「ローランドは？」

そう言つて、ソフィと共に歩いてきたローランドを振り返ると、ローランドは驚いたように大きく肩を震わせた。大きな凶体に似合わず、おどおどと視線を彷徨わせている。

呆れたようにリオンが口を開いた。

「ローランドは北塔。『金色の鍵を手に入れる』だつてさ。北塔はまだ探していないんだ。幣原、君は司令塔だったよね？ 先に司令塔を探して、機密文書を手に入れる。その後でいいから、ローランドを手伝つてくれないか？」

「ああ、構わないよ」

軽く返事をする。

四人でいると、確かに二人でいるときよりは相当心強かった。迷いながらも、司令塔らしいところに辿り着く。そこで、新たな二人組と出会った。

「ステューピファイ！」

リオンの放った失神呪文と、ぼくの放った攻撃呪文がそれぞれに直撃する。少し感心して、隣のリオンを見遣った。反応が早いし、火力も強い。

そして何より、幣原秋を敵に回さないしたたかさを兼ね備えている。

「さあ、行こう」

司令塔へと続く扉を、リオンは開け放った。

沈んだ二人に視線をやる。十五番と三十二番。

「……待って、リオン。この二人のうちどちらかが、司令塔の機密文書か、北塔の『金色の鍵』を持っている可能性はないかな？」

リオンは目を瞬かせたが、すぐにぼくの意図を読み取ってくれたようだ。

ぼくとリオン、手分けして二人の持ち物を探る。

「……え？」

十五番の荷物を探っている最中、思わずぼくは声を漏らした。

「どうしたの、秋？」

「あ、いや……なんでもない」

ソフィに尋ねられ、首を振った。

覚え違いかもしれないし、そもそも理由がない。

——いや、理由はなくもない、のか。

ならば——。

「……ふむ、二人ともそういうものは持ってないみたいだね」

リオンは小さく息を吐いて立ち上がった。

杖を振って二人を縛り上げると、『目くらまし呪文』を掛け、廊下の片隅に放置する。

司令塔の中は、一方通行だった。

薄暗い螺旋階段をぐるぐると登った後、視界が開ける。

ホグワーツの大広間、のような場所だった。四つの長いテーブルが置かれている。

違うのは、天井が空を映し出していないこと、そして空中に浮かぶシャンデリアがないこと。

大きく開いた窓はあることはあるけれど、採光が室内の広さに比べて少なすぎる。周囲が見えないほどじゃないが、薄暗いことに変わりはない。

「大広間みたいだね……」

リオンもぼくと同じ感想を抱いたようだ。ソフィが小さく頷いた。

広間の奥、ホグワーツという教職員テーブルの場所は、一段高くなっている、その奥に、更に小さな扉があるのが見てとれた。

『最奥』に、機密文書があるんだよね？」

「うん」

ソフィの問いかけに首肯する。

奥の扉に近付くと、その扉は思った以上に小さかった。ぼくの腰ほどまでしかない、小さな木製の扉だ。

そうっと開け、慎重に中を覗き込むと、中は真実真つ暗闇だった。

「ルーモス・マキシマ」

一瞬だけ、中を強い光で照らし出す。杖の明かりに照らされ見た中は、案外狭かった。

金庫のような重厚な作りをした棚が、最奥に見える。

同時に、光が消える僅かな瞬間、影でもぞりと蠢く何物かが垣間見えた気がした。

「……………」

隣のリオンと顔を見合わせる。

リオンも、苦いものをそうとは知らず口にしたような表情をしていた。

「見えた？」

「見えた」

「何、今の」

「……さあ」

「どうしたのー？」

背後でソファイが喚いている。ぼくもリオンもスルーして、もう一度中を覗き込んだ。

今度は二人で、唱える。

「ルーモス・マキシマ」

先ほどより明るく照らされた室内で、確かにいた。

光によって強く彩られた影、その影自身が、蠢いている。

「……………どうする、幣原？」

「……………どうするもこうするも、入るしかない」

そう呟いて、ぼくは杖を振った。火の玉を数個放ると、柔らかな光が中を照らし出す。

杖をしっかりと握り締めたまま、ぼくは中に足を踏み入れた。

『影』は、ぼくを攻撃しては来なかった。ただし、強い視線を感じる。気配というか存在感も。

部屋自体が『影』のテリトリーであり、ぼくはそのテリトリーを犯す闖入者だから、それも当然か。

棚に辿り着いたぼくは、引き出しを開けた。

思っていたより、引き出しは簡単に開いた。

「秋ー、見つかったー?」

背後からソフィの声がする。

小さな声で、呟いた。

「……ない」

引き出しの中は、空っぽだった。

『影』の視線を感じながら、ぼくは小部屋から出た。

『影』は、やっぱり襲いかかっては来なかった。

「先に、誰かに奪われたんだ」

ぼくの言葉に、リオンは僅かに目を瞠った。

「同じ指令を受けた奴が他にもいると?」

「さつきソフィのスニジェットを見つけに行ったとき、同じく『囚われし物』を探している人たちに会った。最初に『ペア以外の受験生は、任務における『敵』です』ってアナウンスがあったし、運営側はぼくらを戦わせたいんだと思う。実践でぼくらがどう動くのかが見たいはずだ」

「なるほど、それなら、同じ指令を異なる人に出して奪い合いをさせようって魂胆か」

深々とリオンは頷いた。

頭の回転が速い。同時に、油断ならない、と思った。

「しかし、この広い城の中、機密文書を持っている奴が見つかるかな?」

「見つかるさ」

断言したぼくは、リオンにとって予想外だったようだ。

「どうして?」

「勘」

「……………マジかよ」

「ぼくの勘は案外当たるんだよ」

「いや、君の勘の鋭さがどうたらじゃなくってだね……………はあ、ま、いいか」

リオンは追及を諦めたらしい。眉間を押さえて息を吐いている。

——まあ、理由はあるんだけども。

リオンたちがぼくらを利用しているのと同じで、ぼくも彼らを利用している。そういうことだ。

彼らには、特にリオンには、利用価値がある。

言葉を尽くさずとも伝わる頭の良さに、呪文を繰り返す反応の速さ。そして、ぼくを利用しようとするしたたかさ。

この三つを、ぼくは特に高く評価している。

「いつまでもここでぼうつとしていてる訳にもいかないし、北塔に向かう。ローランド、君は『金の鍵』を手に入れなきゃいけないんだよね？」

ローランドに話を振ると、ローランドはビックリと大きく肩を震わせた。どことなくソワソワしつつ、小さく頷く。

大広間を、来た方と逆向きに歩いた。ちようどここは、ホグワーツの大広間と照らすと、グリフィンドールとレイブンクローの間か。

大広間を出て、螺旋階段をずうつと下っていく。降りて、北の方角を探すべく窓の外を見た。

太陽は、いつの間にか大分沈んだようだ。仰角四十五度くらいか。タイムリミットは確実に近付いてきている。

「北塔はこっちなだね」

そう言つて、背中を晒した瞬間。

「インペリオ！」

飛んできた呪文は、しかし予想が出来ていた。

盾の呪文では防ぐことの出来ない、三つの呪文。「許されざる呪文」と総称されるその呪文は、しかし今回そのうち一つだけ、行使が認められていた。

「背中を狙うだなんて、不躰だなあ」

笑顔で、ぼくは背後のリオンを振り返った。杖をリオンに突きつけたまま、ぼくはリオンとローランドを交互に見遣った。

「北塔の金の鍵は、やっぱりでまかせだったんだ」

「……思っていたより鋭いじゃん。どでかい魔力でぶん殴るだけかと思っていたけど」

そう言つて、リオンは笑つた。

ぼくに突きつけられる、二本の杖。リオンとローランドのものだ。

「西塔で見つけたと言つたそのロケットも、でまかせだよね」

「……どうして分かつた？」

リオンの声は、純粹に疑問に満ちていて、どうしてぼくがそれを見破れたのかを他意なく知りたがつていた。

だから、ぼくもちゃんと答えを返してあげる。

「君がそのロケットを見せてくれたとき、『これだ、つて確証が見当たらないから、ちよつと困るよね』つて言つたぼくに、君は同意したよね。でも本当は、これだ、つて確証があるんだよ。ね、ソフィ」

ソフィはぼくの言葉にこくりと頷いた。

「スニジェットの鳥籠に触つたときにね、いきなりおつきなアラートが鳴つて、煙が吹き出してきて、呪文に追いかけられたんだ。他のもの触つたときは、そんなことなかったのに」

「ぼくがさつき小部屋に入ったとき、あの小部屋には何かがいて、ぼくの行動を監視していた。でも、ぼくには何の危害も及ぼさなかつた。機密文書がなかつたから、既に誰かに持ち出されてしまつていたから。……ぼくを利用しようとしたのは、素晴らしい判断能力だつたけどね」

さあ、と、杖を構えたまま一步近付いた。

「どうするっ？」

「……どうする、つて？」

「投降するのなら、手荒な真似はしない。眠りに落ちるよりも早く安らかに失神させてあげるよ」

「……さすがに、その提案には乗れないな」

リオンは強気に笑つてみせた。そして――

「きゃっ!？」

あろうことか、ソフィの腕を無理やり掴むと、彼女の頭に杖を突きつけたのだ。

「さすがに君も人質を取られちゃ敵わないだろう」

「……卑怯な」

「卑怯？ 何を今更。『服従の呪文』まで認可しておいて、人質が卑怯だとは、幣原、君の頭は随分とおめでたいつくりに来ているようだ」
思わず、奥歯を噛み締める。

やられた、まずはソフィの安全を確保すべきだったのに。悔やんでも、しかしもう遅い。

その瞬間、リオンが変わらぬ笑みを顔に貼り付けたまま、ゆっくりと崩れ落ちた。

崩れるリオン、その後ろには、リオンの仲間であるはずのローランドが、リオンの背中に杖を向けていた。驚いたように、ソフィも目を丸くしている。

「どうして……？」

「……なんか、許せなかったから」

ぼくの言葉にローランドがまともに答えを返したのは、これが初めてだった。

「不意打ち騙し合い上等なこの試験だけれど、苦し紛れの人質作戦に、意味はないと思っただし。……それに」

ローランドは僅かに笑って、両手を上げた。

「……君に、歯向かいたくはなかったし」



「どのペアも、『東塔の囚われし物』と『司令塔の機密文書』って指令を受けてるのは間違いなさそうだねえ」

ソフィは口ずさんだ。

両腕にはしっかりと、スニジェットの入った鳥籠が抱かれている。

「ローランドがあそこで嘘ついてなけりやあね」

「秋は案外深いんだね」

「君は楽観的過ぎる」

「う……よく言われる」

がつくりとソフィは肩を落とした。

しかしすぐさま復活する。回復が早い。

「東塔でクローゼットの中に突っ込んだ二人組、司令塔前で出会った二人組、そしてリオンとローランド。ぼくらがこれまで出会ったのは六人。受験者は十人だったから、ぼくらの他にあと一組残ってる。彼らが『機密文書』をぼくらより先に手に入れたのは、ほぼ間違いない」「だったら、あたしが持つてる『囚われし物』を奪いにくるはずって?」「そういうこと。だから、探さずとも向こうからぼくらを見つけてくれるはずだ」

言いながら、窓から空を見上げた。

夕焼けが地平線を赤く染めている。あと一時間もしないうちに日没、タイムリミットだ。

おそらくこの城の中央部分に位置するだろう吹き抜け。両サイドには、左右対称に階段が伸びている。その階段の手すりに腰掛け、ぼくらは喋っていた。

ぼくらがここにいるということは、既に伝えてある。階段の手すりについていた鳥を、本物の鳥に『取り替え』、ぼくらの所在を書いた手紙を持たせて飛ばしたのだ。

十匹も飛ばしたし、たとえば城の中が相当広かろうが、一羽くらいはそろそろ辿り着いてもいい頃だろう。

そんなことをちようど考えた折、ボタン、と扉が開く音がした。

ぼくはゆつくりとそちらに目を向ける。

「相方はいないの?」

ぼくの言葉に、『彼』は答えた。

「邪魔だったもんで」

唇が、歪な弧を描く。

「なるほど」

彼の意見に頷いて、ぼくは手すりから飛び降りた。

「取引しませんか? 幣原くん」

『二十一』の番号をつけた彼の手首には、何色のブレスレットも掛かっていない。

ひよつとすると、相方を見捨てた瞬間、ペア制度は解除され、同時にブレスレットが外れるのではないか。

そんなことを思いながら、自身の手首に掛かっている赤いブレスレットを見た。

「取引?」

「そう。君と戦いたくはないんですよ。そもそも、ここは闇祓い本試験、腕に覚えがあつて能力がある者が集う場所です。手練れのはずなんですよ。そんな彼らを、君はいとも簡単に倒してしまふ。『敵が弱かった』なんて、観客にそんなことを思わせる君は——人間じゃない、化け物だ」

「……………」

「ここに、君の探し求める『機密文書』があります。君が欲しいというのなら、これを渡しましょう。その代わりと言つては何ですが」

彼は、唇を吊り上げた。目は一切笑つていないその笑顔は、寒気すらも呼び起こす。

「そちらの彼女の持つ鳥籠——『囚われし物』を寄越してください」

「……君の指令は、どっちだったの?」

「どっちだったと思います?」

質問を質問で返して、彼は口を閉じた。

順当に考えれば、彼の指令は『機密文書』の方だろう。だがしかし、相方がいない彼が『囚われし物』との交換材料に『機密文書』を持っていたという線も否定出来ない。

短い時間しか相対していないが、彼が一筋縄ではいかなない人物であることは、感覚的に理解出来た。

「その取引、もし断つたら?」

「『機密文書』を燃やします」

迷いのない口調だった。

「……それは困るなあ」

眩いて、ソフィに目を遣った。

「どうしよっか」

「……あたしは」

ソフィは小さな声で俯いた。

「秋、あんたに、この試験に受かつて欲しいよ。ペア組んで、よく分

かった……あなたは才能の塊だ。あなたと一緒にいたから、あたしはここまで残れた。あなたを闇祓いにしないのは」

静かな口調で、言い切る。

「この世界の、損失だ」

「……………」

「二十一番。あなた、名前、何て言うの？」

彼は目を瞬かせると「マーク・ヴィツガー」と名乗った。

「そ。マーク、あなたに渡すよ、これ。だから、秋に『機密文書』渡してあげて」

ソフィが鳥籠をそつと掲げる。

「……………本当に、それでいいの？」

ぼくの言葉に、ソフィはにつこりと笑った。

「元々あたし、そんなにこの職に就きたいわけじゃなかったもん。

……気に病む必要は全くないよ、秋」

澄んだ青い瞳が、ぼくを真っ直ぐ捉える。

「でも、誓って、秋。必ず、魔法界の平和のために、その力を使うって。あなたの力は恐ろしく強大で、敵う人はそうそういないだろうけど、あなたは優しいから。だから」

絶対に間違わないで。

その力の使い所を。

闇祓い本試験、二日目。

信じられないことに——最後は話し合いで、決着がついた。



双子の華々しい自由への逃走は、ホグワーツの伝説となりあちこちで語り継がれた。

その煽りを受け、双子に続け、とばかりに次期悪戯仕掛人の座を狙って、校内で悪戯つ子たちが跳梁跋扈する様は、非常に愉快だった。

双子の痕跡は、ありとあらゆるところで残っていた。

ホグワーツの様々なところが吹き飛ばされていたし、東棟の六階に

は沼地が広がっていて、ファイルチが渡し船で生徒を教室まで運ぶ仕事をしていた。遠回りすればそこを通らず行くことも出来るのだが、皆はそんな億劫なことをせず、素直にファイルチの渡し船に並んだのだった。

一番大はしやぎしたのは、しかし誰が何と言おうとピーブズだろう。学校中を飛び回り、ありとあらゆるものを滅茶苦茶にした。

生徒もピーブズに以前より好意的になり、いろんな騒ぎを手助けしていた。

季節は滑るように六月になった。

ふくろう試験が、いよいよ始まろうとしていた。



「この呪文での杖の振り方って、C だっけ、O だっけ」

「C のはずだ、お願いだから黙って……」

「不安で仕方がないよ……歩きたびに記憶が抜け落ちていきそうだ……」

「黙って、アンソニー」

「ご、ごめん、レーン……」

ふくろう試験初日。レイブンクロー五年生は、いくぶんやつれた顔で大広間へと向かっていた。

もつとも、レイブンクロー生だけではない。五年生全員が、普段より生気のない顔で、どことなくふらついている。

大広間は、四つの寮の長テーブルは片付けられ、代わりに個人用の机と椅子がずらりと並んでいた。寮ごとに並んで着席する。

机の上には問題用紙と羽根ペン、羊皮紙の巻き紙、インク壺が並べられており、問題用紙の表にはデカデカと赤い文字で『カンニング厳禁』と書いてあった。

「始めてよろしい」

マクゴナガル先生の声で、皆が一斉に試験用紙をひっくり返した。



午前は筆記、午後は実技、というのは、幣原の頃と変わらない。察関係なく名簿順に名前を呼ばれるからか、ぼくとハリーは同じ組として名前を呼ばれた。

ぼくの顔を見て、ハリーはホツとした表情を見せる。顔色が悪い、勉強疲れか。

「アキくん、さあ」

フリットウィック先生に促され、ドラコの後のマーチバンクス教授の前に立った。

全ての課題をこなしてみせると、マーチバンクス教授は僅かに呆然とした表情でぼくを見つめていた。その表情の意味が分からず、ぼくは僅かに首を傾げる。

「あの……教授？」

「あ、ああ、すまない……ふと思いついたものでね」
思いつく。

その言葉の意味に、少し身構えた。

「……君は、昔見たあの子にそっくりだ……彼も、素晴らしい呪文の冴えを見せてくれた……名前は、確か……」

「人違いです」

少し食い気味にそう言う。

ハリーが心配げに、ぼくにちらりと視線をやるのが見えた。自分の術に集中しなよ、と思いつながら、奥歯を噛みしめる。

マーチバンクス教授は気圧されたように目を瞬かせると「そ、それはそうだな……もう何年も前のことなのだし」と呟いた。

——ぼくは一体、何度こんな思いをしなければならぬのだろう。幾度となく考えた答えのない問いに、ぼくは眉を寄せると目を伏せた。



「いったあ!？」

いきなり頭を叩かれ、ぼくは弾かれたように顔を上げた。

見ると、幾分ヤツれた表情のアリスが『天文学』の分厚い教科書を手にしていた。どうやらこの本でぼくの頭を殴ったらしい。

「すまん、ムシヤクシヤしてな」

「ムシヤクシヤしてるからって人を叩くなよ!」

「うるせえ」

再び頭上に振り下ろされる教科書。音の割にそう痛くはないが、それでもいきなり殴られるのは嫌なものだ。

「お前は一人余裕そうだな」

「そんな余裕ないからね!?」 ぼくが全科目取ってんの、知ってるでしよー!」

「なんで全科目取ってんのにそう余裕そうなんだよ」

再び誰かに頭を殴られた。今度はアリスじゃない。

後ろを振り返ると、目の下に深々と隈を作ったウイルの姿が。

「いいな、アキの頭……俺にもくれよ……」

「ひっ……」

思わず後ずさる。怖い、試験はここまでも友人らを追い込むものなのか。

ゆらり、とレーンも立ち上がると、アリス、ウイル、レーンの三人で、ぼくを囲み出す。

「アンソニー」

「任された」

逃げよう、と思った瞬間、ガシ、と背後から両肩を押さえられた。

顔を向けると、そこには我らがレイブンクロー五年監督生、アンソ

ニーの姿が。

「やあ、アキ。勉強は捗っているかな?」

「今現在全力で君らに妨害されてますけど!？」

ぼくの周りに、男だけじゃない、女の子までもが近付いてくる。

全員が全員血走った目をしていて、本能的な恐怖に駆られた。

「毎年こうだよ、寮トップの子が生贄になるの」

「レイブンクローの風物詩だよね」

六年生のお姉さん二人が、のほほんとそんな話をしながらぼくらの脇を通り過ぎていく。

「アキくん頑張つて」

「応援してるよ」

「なら助けてよお！」

ぼくに手を振るお姉さん方に喚くも、おっとり笑顔は崩れなかった。

「とりあえず全員、一発ずつ殴ろう。上手くいけば、こいつが試験範囲の内容を忘れてくれるかもしれない」

アリスが淡々と言う。それにぼくを除く全員が大きく頷いた。

「了解」

「ぼくは了解してないから!! ちよつと、マジで、やめつ、アーーーーー!!!」

レイブンクローに組み分けされたことを、生涯でこんなに後悔したのは初めてだった。



『天文学』の実技試験が終わった後は、誰もが先ほどあったことについて話していた。

つい先ほど、ハグリッドの小屋をアンブリッジら五人が襲い、マクゴナガル先生がその巻き添えを食らって倒れてしまったのだ。試験に集中するどころの話じゃなかった。

『失神呪文』を四本も食らって……お可哀想に。無事だといいいんだけど」

未だ腫れている頭をさすりながらも、眉を寄せる。

ぼくの言葉に、アリスも静かに同意した。

「もう少し、決定的な何かがありやあな……動けるんだけど」

「え? 何の話?」

口が滑った、と言わんばかりに、アリスは苦々しく顔をしかめた。

それでもぼくがせがむと、仕方ない、と言うように大きくため息をつく。

「いろんなしがらみつてもんがあるんだよ、名門貴族様ってのは。……今の段階じゃまだ動けないんだ。あんの甘々閣下が、目を閉じれば見たくないもんを見なくて済むって思ってたやがる。だから困つてんだよ。お前の兄貴の言うことをきちんと受け止めてきちんとやるべき対処をやつとけば、俺はこんな柄でもない優等生姿でクソガマガエルに媚び売らなくていいって訳だ」

アリスは肩に担いでいた望遠鏡のケースを背負い直すと、本当に何の気もない口調で呟いた。

「魔法省あたりでどんちゃん騒ぎでも起こしてくれりゃあ、動き出せるってもんなだけだな……」

それが数日後に実現するだなんて、このときは夢にも思っていなかった。

第35話 両手いっぱい幸せを

桜の花びらが、風に舞って散っている。

薄い水色の空に、淡いピンク色。この色合いに物凄く郷愁を感じるのは、一体どうしてなのだろう。

イギリスの桜は日本と少し違うが、なぜだかホグワーツには一本だけ、日本によく咲いている種、染井吉野の木があった。東塔の校舎裏にあるそれは、ひっそりと佇んでいて、誰に見られていようが見られていまいが構わない、という矜持があるようで、思わず笑みが零れる。

「秋だ！ 秋ー！」

名前を呼ばれて振り返ると、東塔の二階から、リリーが手を振っていた。微笑んで手を振り返すと、リリーがパツと東塔の中に引っ込んでいく。

あつという間に、二階から駆け下りてきたリリーが、校舎裏へと姿を現した。

「こんな桜、今まであつたかしら？」

今日は風が少し強いようだ。長く綺麗な赤い髪を手で押さえながら、リリーは首を傾げた。

「ぼくも初めて見つけたんだ。ホグワーツの不思議なところだよね。季節も、本当なら三月や四月に咲くはずなのに」

「ふふっ、そうね」

リリーは笑みを浮かべたまま、桜を見上げて目を細めた。

「……でもね、この花は、日本じゃちょうど卒業の時期に咲くんだ」
眩いたぼくの言葉を、リリーは拾った。

「日本で、とつても愛されている花でね……川べりやら、本当に至る所に植えてある。学校にだって。日本の学校の卒業は三月なんだけど、ちょうどその時期に満開になって、桜並木の中をね、歩くんだ」

「……とつても、綺麗なんでしょうね」

ひらりひらり、風が吹くたびに、花びらが少しずつ散ってゆく。

リリーの赤い髪に、花びらがついていっているのに気付いた。手を伸ばさうとして、躊躇う。

「……髪に、花びらついでる」

結局、口で指摘するだけに留めた。

「えっ、どっか?」

「頭のとっぺん……ああ、違う、もうちよい左」

照れたように、リリーは微笑んだ。大人っぽい綺麗な笑みだった。

「不死鳥の騎士団に、入るんだ」

「……ええ、そうよ」

リリーから目を逸らして、桜を見上げた。

「……止めて欲しい、つて言ったら、どうする?」

「……たとえそれが、秋の頼みでも、私は聞かないわ。ただでさえ、ジェームズに再三言われているのに。……嫌ね、男の子つて。どうして、女の子を守ろうとするのかしら」

「……………」

「女の子だつてね、戦いたい時もあるのよ。私にとって、今がその時」

穏やかな表情だった。迷いのない言葉だった。

「今この世の中で、私に出来ることをしたい。ジェームズはきつと、不死鳥の騎士団で戦いの最前線に飛び込むわ。あなたも、シリウスも、リーマスも、ピーターも。皆が戦っている中、置いていかれたくない。私だつて、私に出来ることがしたい。……私が、仲間外れが嫌いだつて、秋ならよく知ってるでしょ?」

「……そう、だったね」

嘆息した。

「リリーが男だつたら良かったのになあ」

「あら、私だつて、秋が女の子だつたら良かったのにつて、いっつも思っているわ。覚えてる? 昔、セブを驚かせようとして、私たち入れ替わったの」

久しぶりにリリーの口から聞いた「セブ」という単語に、思わず表情が強張った。

悟られないように、強いて平静を保つ。

「覚えてるよ。スカートを履いたのは、あれが生まれて初めてだ」

「あの時、あなたの制服を借りたけど、私男の子の制服、案外似合つて

いたでしょ？ サイズもぴったりで」

「身長の話は止めようか」

悲しくなってくるから。結局、あんまり伸びなかったし。

「大きくなったわよね、でも。昔は私より小さかったのに」

「今でも、リリーとほんの少ししか変わらないけどね」

それでも、一応はリリーより背が高くはなったから、少しだけホツとする。ぼくの遅く短い成長期も、このときばかりは空気を読んでくれたようだ。

「……卒業、するんだよね。変な感じ」

リリーはぼつりと呟いた。

「リリーと出会って、もう七年が経つのか。早いね」

「秋と出会ってたった七年だなんて、短いわ」

むう、とリリーはむくれる。

一体どうしてふくれっ面をするんだ、と、ぼくは笑った。

「……変なこと言ってもいい？ 秋」

「……どうしたの、リリー？」

リリーは、自身の赤いネクタイをぎゅつと握った。グリフィンドールの、赤と金色のネクタイを。

「……なんでもない」

「なんだよ、変なの」

「私は変な子よ、知らないの？」

「よーつく存じております」

クスクスとぼくらは笑い合った。

「七年と言わず、何年だって。君が結婚しても、ぼくが結婚しても、変わらずに友達でいよう。……だって」

人生は長いのだから。

——なんて、なんたる痛烈な皮肉だろうか。



一番最後の試験は、魔法史だった。

よく、こんな重たい教科を最後に持つてきたものだ。五年分のノートと教科書を積み上げると、優に一メートルは超えるだろう。

「試験問題を開けて。始めてよろしい」

マーチバンクス教授の言葉に、一斉に問題用紙を開く音。

泣こうが笑おうが、これが最後の試験だった。



「殺すなら殺せ」

目の前でシリウスが言っている。

血まみれで、苦痛に顔を歪めながらも、誇り高く気高く、そう言い放つ。

「言われずとも最後はそうしてやろう」

自分の口から、信じられないほど冷たい声が出た。

そもそも、自分はこんな声をしていただろうか。自分の視線は、こんなに高かっただろうか。

分からない。何も、分からない。

自分の口が、言葉を紡ぐ。

「しかし、ブラック、まず俺様のためにそれを取るのだ……これまでの痛みが本当の痛みだと思っているのか？ 考え直せ……時間はたっぷりある。誰にも貴様の叫び声は聞こえぬ……」

杖が、シリウスに向いた。閃光が迸り、シリウスは息も絶え絶えに絶叫する。

自分はそれを笑って見ている……。

——僕は、誰だ。

違う。これは僕じゃない。

僕はシリウスをこんな目に合わせたりなんてしない。

大切な大切な後見人を、こんな惨たらしく痛めつけたりは絶対にしない。

悲鳴が聞こえた。そう思った。

それが自分の声だと気付いたのは、少し経ってからだった。

「ハリー、ハリー!!」

僕の名前を呼ぶ声が聞こえる。

肩を思い切り揺さぶられ目を開けると、視界に愛しい弟、アキの姿が入ってきた。

「大丈夫、ハリー!?!」

大丈夫、と反射に答えようとした。

しかし、口から零れたのは、信じられないほど小さく震えた声だった。

「シリウスが、ヴォルデモートに捕まった」

あまりに小さいその言葉は、アキにしか聞こえなかっただろう。

アキは大きく目を見開いた。

「ハリー、それ、どういう……」

アキの声を遮ったのは、マーチバンクス教授だった。

アキを僕から引き剥がす。同時に、トフティ教授は僕の腕を引いた。

「アキ・ポッターくん、君は試験に戻りなさい。トフティ教授、彼を頼んでも?」

「承知しました。さあ、ポッターくん」

有無も言わさぬ口調で、トフティ教授は僕を支えると玄関ホールまで連れ出した。

誰もが一斉に僕を見つめている。

「行きません……医務室に行く必要はありません……行きたくない……」

大きく咳き込むと、少し震えが治まった。

トフティ教授は気遣わしげに僕を見ている。

「何でもありません、先生。大丈夫です……眠ってしまったって、怖い夢を見て……」

額の汗を拭いた。トフティ教授は好々爺風に笑いながら、僕の肩をトントンと叩く。

「試験のプレッシャーじゃな! さもありなん、お若いの、さもありなん! 試験はもうほとんど終わっておるが、最後の答えの仕上げをし

てはどうかかな？」

「はい、あ、あの、いいえ、もういいです……出来ることはやったと思いますから……」

「そうか、そうか。ならば、私が君の答案用紙を集めようの。君はゆっくり横になるがよい」

「そうします。ありがとうございます」

素直に頷いた。

トフテイ教授の姿が大広間に消えた瞬間、僕は駆け出していた。

階段を駆け上がる。通り道の肖像画が、僕のあまりの速さにブツブツ文句を言うのも知ったことじゃない。

医務室に駆け込むと、マダム・ポンフリーが驚いて悲鳴を上げた。

「マクゴナガル先生にお会いしたいんです。いますぐ、緊急なんです!!」

「ここにはいませんよ、ポッター。今朝、聖マンゴに移されました」

マダム・ポンフリーの言葉にショックを受けて、しばらく呆然とした。

何かマダム・ポンフリーが言っているが、耳を素通りしていつてしまふ。

「……秋」

連絡が取れる不死鳥の騎士団のメンバー。ダンブルドアもマクゴナガル先生もハグリッドもない今、頼れるのは彼だけだ。

それにさつき、アキに対して呟いた。『シリウスがヴオルデモートに捕まった』と。

くるりと身を翻して大広間に駆け戻ると、ちょうどロンとハーマイオニーに出会った。

「ハリーー」

駆け寄ってくるロンとハーマイオニーに「一緒に来て。話したいことがあるんだ」と告げた。

第36話 笑顔に包まれて

卒業の儀は、つつがなく終了した。

頭に乗った帽子の位置がなんとなく気になって、両手で直す。ガウンというものを初めて着たが、ローブとよく似ていて、じきに慣れた。

裏地は見慣れた濃い青色。

「あー、疲れた……」

式典というのは、どうしても肩が凝るのか。

外に出て、空を見上げながらぐつと伸びをすると、後ろから笑い声を掛けられた。

「君は相変わらずだね、秋」

「リイフ」

ぼくの隣に並んだリイフは、同級生だというのに随分と大人びて見える。日本人は童顔だとか、そういう話だろうか。端から見たら、ぼくとリイフが同い年だと思う人はそういないだろう。

「卒業だけど、秋とは就職先が一緒だからなあ」

「ああ、リイフも魔法省だっけ」

「そ。闇祓いなら、法執行部か」

「まだ闇祓いになれるって決まった訳じゃないんだよ。採用通知もまだだし」

「いつ通知が来るの？」

リイフの言葉に、思わず渋い顔をした。

ぼくの表情の変化に、リイフはきよとんと目を瞬かせる。

「……今日」

「今日！へえ……」

ちょうどその瞬間、一羽の鳥が飛んできた。真っ白の鳩だ。そいつはぼくの真上で手紙をポトリと落とすと、一鳴きしてすぐさま身を翻し、風に乗って飛んでいってしまう。

相変わらず、動物にはトコトン嫌われている。

「わっ、と……！」

空から舞う手紙をキャッチしようとしたが、誤って手で弾いてしまった。

ヒラヒラと手紙が地面に落ちる直前に、リイフがサツと拾い上げる。

「おつ、闇祓いの封蝋だ。じゃあこれが採用結果かあ」

リイフは手紙をためつすがめつ眺めていたが、ふと悪戯っ子のように笑顔を浮かべた。

「開けてあげよっか、秋」

「……頼む」

「えっ!？」

提案した立場だというのに、リイフは素っ頓狂な声を上げた。でも、こればかりは本当の本心だ。リイフが「闇祓いの封蝋だ」と声を上げた瞬間から、心臓が気持ち悪いくらいにドキドキしているのだ。

緊張しているのか、ひよっとして。

「嫌だよ！ どうして人の、それも大事な就職試験の結果なんて開けないといけないの!」

「リイフが提案したんじゃないか!」

「それは君が嫌がる顔が見たかったから!」

「変態か!!」

「言い方ミスっただけだよ!」

リイフが手紙をぼくに押し付けてくる。頭をぶんぶん振ってリイフに押し戻した。

「開けて! どうか頼む、今生のお願い!」

やがて根負けしたリイフが「あ……もう!」と言いながら手紙を受け取った。ピリピリと上部分を破ると、中から羊皮紙を取り出す。その段階でもう直視が出来なくなつて、ぼくは勢いよくその場に蹲つた。顔を覆い、目を瞑る。

リイフはそんなぼくの様子に、呆れて笑った。

「……ほお」

上から降ってきた声に、ビクリと肩を震わせた。

恐る恐る顔を上げると、リイフは満面の笑みを浮かべてぼくを見下ろしている。

「知りたい？」

「……知りたい」

こくりと頷いた。リイフの持っている羊皮紙に手を伸ばす。

「おめでとう、秋」

卒業の帽子を被っていたからか、頭を撫でるように、帽子の上をコンコンと軽く叩かれた。

羊皮紙に、文字が書いてある。しかし脳みそが痺れたように霞みがかかっていて、全く動いてくれなくて、アルファベットの羅列にしか見えなかった。

初めてここ、英国に来た十一歳の頃に一瞬で戻った気分だ。

「あーもう、大丈夫？」

肩を揺さぶられ、やっと意識が浮上した。

「……合格したの、ぼく？」

「そう書いてあるじゃん」

リイフが文面を指し示す。

リイフの指に従って目線を動かしたが、それもなんだかきこちない。錆び付いた引き出しを無理矢理開け閉めしているようだ。

「あー、こりやダメだ。……おーい、悪戯仕掛人！」

リイフの叫び声に、わらわらと悪戯仕掛人たちが集まってくる。

濃い赤の裏地の集団に、リイフがぼくを引き渡した。

「こいつ、現実を受け入れられないみたい。君らなら無理矢理にでも秋の脳に事実を叩き込めるでしょ」

「僕らを誰だと心得る！ 任されよ！」

ジェームズの声。と、ひよいつと手から羊皮紙が抜かれた。顔を上げるとシリウスだった。羊皮紙を読むと、ぼくよりも数倍嬉しそうな顔で、ぼくの肩をばしばしと叩く。痛い。

「まっ、秋を落とすだなんて愚行、犯すはずもないって。あっちもバカじゃないんだし」

「おめでとう、秋！」

視界が赤色に染まった。リリーだった。ぼくの手をぎゅっと握って、満面の笑みを浮かべている。

「あ……」

ぼくは辺りを見渡した。

ジェームズが、シリウスが、リーマスが、ピーターが……そして少し離れたところでリイフが、みんなが、ぼくを祝ってくれている。

「ありがとう……」

嬉しさが、心の底からこみ上げてきた。

噛みしめるように俯いた瞬間、優しく肩を叩かれる。ジェームズだった。

「こういうときはさ、笑うんだよ、秋」

ふに、とジェームズはぼくのほつぺたを引っ張ると、笑う。

笑顔に包まれて、ぼくも笑った。



幣原秋の周りで盛り上がる赤い裏地の集団の隣を、緑の集団が通り過ぎた。

聞こえた「闇祓い」という言葉に、一人が小さく零す。

「——厄介だな」

半数以上が、先日幣原秋一人の手によって沈められた者たちだった。

そして当然、その集団の中にはセブルス・スネイプの姿もあった。ガウンの下、人目に触れない部分には、未だ包帯が巻かれている。ほんの僅かだが、片足を引きずっていた。無意識に左肘を押さええている。

秋はちらりと目を向けた。同じ瞬間、セブルスもそちらを見遣った。

一刹那、視線が交錯する。

赤い集団から少し離れた場所で、リイフ・フェイスナーもまた、険しい表情で緑の集団を見つめていた。

ピーター・ペティグリューは、不安げな眼差しで振り返る。

しかし、他の赤い集団は、緑の集団に目を向けることはない。すれ違ったことにすら、気付いていないだろう。

「……そういうものなのだ。」

「そう、なっているのだ。」



『シリウスが、ヴォルデモートに捕まった』

試験に戻っても、ハリーの言葉が頭の中で何度も何度もリフレインして、集中し切れず諦めて羽根ペンを放り投げた。〇はもらえないかもしれないが、Eは取れるだろう。

残りの試験時間を、巨大な砂時計がさらさらと砂を零す様を見て過ごした。

試験終了のアナウンスに、ぼくは瞬時に椅子を蹴って駆け出した。まずは、シリウスが本当にグリモールド・プレイスにいないのかどうかを確かめなければいけない。

とりあえず寮に戻って諸々の道具を取りに行かなければ。筆記試験だったから、本当に制服に杖しか携帯していないのだ。シリウスに手紙を書いて送るにも、まずそもそも筆記用具が手元にない。

階段を駆け上がった足が、ふと止まった。

待てよ、と、その場に突っ立って思考に頭を浸す。

ダンブルドアはいない。マクゴナガル先生も、昨日『失神呪文』を四本も食らったのだ、起き上がれる状態ではないだろう。

残るは。

『不死鳥の騎士団』として、ホグワーツに残っているのは。

「……………」

考えた。本当にそれでいいのかと。

考えて、一つの結論に達した。

信じるしか、ないのだと。

上に向かっていた足を、下に。階段を駆け下りて、大広間まで戻る。

そして、人の流れと逆の方へ。下へ下へと、下っていく。

石造りの廊下を、走った。足音が反響して、響く。

人気がない魔法薬学教室、そのもう少し先に、部屋。スネイプ教授の、研究室。

ノックすると、くぐもった返事があった。

やがて開けられたドアの先には、ぼくの姿を見て驚いた顔をしたスネイプ教授がいた。

「よか、った……」

ここにいなかったら、どうしようかと思っていた。

喋ろうと思ったが、思った以上に動悸と息切れが激しい。胸を押さえて息をつくぼくに、教授は「……とりあえず、入りたまえ」と入室を促した。

「落ち着け、ひとまず。それから話せ」

教授はソファを勧めると、コトリと紅茶の入ったカップを置いた。

切れ切れにお礼を言い、口をつける。カップの中が空になって、大きく息をついた。

「一体どうした？」

「……ハリーが、シリウスがヴォルデモートに捕まった夢を見た、って」

ぼくの言葉に、教授は表情を僅かに変えた。

「多分、神秘部の奥だと思うんです。……シリウスと連絡を取りたいんです。本当に、シリウスが捕まっているのか。ヴォルデモートの罠なんじゃないのかって」

スネイプ教授は、しばらく黙ってぼくの目を見据えていた。

挑むようなその視線に、ぼくもじっと対峙する。

先に目を逸らしたのは、教授の方だった。

立ち上がると、机の上から二番目の引き出しを開け、何かを取り出す。何の変哲もないそれは、手鏡のようにも思えた。

『『不死鳥の騎士団』の連絡ツールだ。騎士団の者として登録された者が握らない限り、この手鏡はただの手鏡だ』

ほい、と投げ渡され、慌てて受け取った。

「貴様が使えるかは分かんが、あの狸爺は貴様の分も勘定に入れて
そうなんぞな」

柄の部分手握って、話したい者の名前を告げろ、そう言われ、ぼく
は素直に従った。

「シリウス・ブラック」

ぼくの顔を写していた鏡面が、ふと揺らいだ。霞みがかつたように
ぼんやりと霧がかかる。

本当に繋がるのだろうか。心配になるほど待ったところで、再び鏡
面はクリアになった。その先には、シリウスの顔が写っていた。

『おいスネイプ、何の用だ手短に五秒で言えその汚い顔を俺に近付け
るな——アキ!』

「よかった、シリウス、無事なんだよね?」

『はあ? 無事だけど、それが一体どうした?』

はああ、と、膝が抜けるくらいに安心した。ソファに座ってなかつ
たら、その場に座り込んでいただろう。それくらいの安堵感が、全身
を包み込む。

『おい、一体何があつたんだよ?』

「大丈夫。ちゃんとグリモールド・プレイスにいるんだよね?」

『ああ。ちよつとバックビークが怪我をしてな。ほら、見えるか?』

酷いもんだ……』

シリウスが、手鏡をちよいと動かしてバックビークを写した。腕の
付け根のあたりが、ザックリと刻まれている。酷いものだ、と思わず
眉を寄せた。

『この部屋で、こんな怪我するようなものはそのうそうないはずなんだ
が……まあともあれ、放っておけなくってな』

「うん、綺麗に治るといいね。ありがとう、よかった」

その時、研究室のドアをノックする音が聞こえた。ぼくと教授はギ
クリと顔を見合わせる。

奥に行つてろ、とばかりに教授は私室の扉を指差した。入つてもい
いのだろうか。しかし迷っている暇はない。

「教授? スネイプ教授、いらつしやいませんか?」

扉の奥から声が聞こえる。

どこか聞き覚えがある気がするが、誰のものは思い出せなかった。

『アキ?』

「な、なんでもない……大丈夫」

ドアを開けると、中に滑り込む。音を立てないように締めて、ほお、と息をついた。

『しかし、君がスネイクに頼るとは思ってもいなかった』

「……そう、かな。そうかも」

幣原の記憶を思い返しながら、ぼくは呟いた。

「ぼくは……幣原じゃないから。だから教授も、まともに話してくれるんだと思う」

『ふうん? 俺にはよく分からない感覚だな。そもそも、君らの友情は、側から見てもよく分からないものだったよ……つと、ごめん。そんな顔をさせるつもりじゃなかったんだ』

シリウスは氣遣うように笑ってみせた。

「いいや、とぼくは小さく首を振る。」

「……ぼくにもよく分からないんだ。幣原は、多分、こうしてぼくが教授を頼ることに、いい顔はしないとと思うんだけど」

今度は、シリウスが黙る番だった。

『……そう、だな。君は、幣原秋じゃあない、んだよな』

「……そうだよ。ぼくは、幣原秋じゃ、ないんだよ」

思わず、声が震えそうになった。

「そうだよ、シリウス。」

ぼくは、幣原秋じゃ、ないんだよ。

間違えないで。ちゃんと、ぼくを見て。

『君は、アキ、なんだよな』

「……っ、そう、だよ……」

認められたことが、物凄く、嬉しかった。

ぼくは、ぼくでいいのだと。

誰かに、ずっと肯定されたかった。

時計塔のてっぺんから、空を見上げた、あの時から。

『間違えてばっかで、ごめんな。君を幣原秋だと、いつもそのように扱って、君は、それに応え続けていてくれたんだな。俺のために』

「……気付くのが遅いんだよ。こんな子供に気を遣わせて、それが大人のやる仕事？」

『はは……済まない。頭では分かっていたはずなんだけどな、どうもその顔を見ると、あいつだと思ってしまっただよな……アキ』
頑張ったんだな。

とても、優しい声だった。

『まだ十五なのにな。あいつのせいで、わっけわかんない使命背負わされて。『ハリーを守ってくれ』なんて……十五の少年に、掛ける言葉じゃないだろうに』

「……そう、だよ……」

涙が出そうになって、慌てて目元を拭った。
強がって、言ってみせる。

「まあもつとも、ぼくの方が強いことは明白だけどね。ハリーくらい簡単に守ってみせるよ、だって大切な……大切な」

言葉を切った。

震える声で、吐き出す。

「……お兄ちゃん、なんだから」

たとえ血が繋がっていないなくても。

たとえ、幣原の都合でこの立ち位置が決められたのだとしても。

それでも、ハリーはぼくの、お兄ちゃんなんだ。

『……そうだよな。君は、弟、なんだもんな』

少し懐かしそうな表情で、シリウスはぼくを見た。ぼくはふふっと笑う。

「もしかして、レギュラスのこと思い返してる？」

『なっ……そんなわけあるかよ、あんなバカ』

「そんなこと言わないでよ、『お兄ちゃん』」

ぐう、とシリウスの顔が悔しげに歪んだ。ぼくは笑い声をあげる。
その時、私室に繋がるドアがガチャリと開かれた。

ぼくは慌てて立ち上がる。

「ごめん、もう切るね。それじゃあ、話せてよかった」

「その必要はない。アキ・ポッター、そいつを貸せ」

スネイプ教授は眉を寄せ、右手を差し出した。

少し躊躇い、手鏡を渡す。

『なんだ、スネイプ？ 君の声はあまり聞きたくないのね、手短に頼むよ』

「ああ、私も貴様と長々と口を利いていたくはないのね。……不死鳥の騎士団本部から、全体命令を出してくれ」

スネイプ教授は、一呼吸置いて言った。

「ポッターとその仲間たちが魔法省に向かったと思われる。ポッターの見た夢といい、罊が仕掛けられている可能性が非常に高い。今手が開いている者は、至急魔法省の神秘部に集まれ」

何を言っているのか、脳みそが理解するまでに少しの時間が掛かった。

『どういうことだ!? スニベルス、説明しろ!』

シリウスの怒鳴り声に、我に返る。

「今言った通りだ。ポッターとその仲間たちが魔法省におびき寄せられた。恐らくは、あの——」

そこでスネイプ教授は僅かに眉を寄せた。

「——予言を手にいれるためだろう。言っておくが、貴様は動くなよ。ダンブルドアもそう言って——」

『動くな!? 動くなと、本気でそう言っているのか!? ハリーが危険な目にあっているというのに、お前それでも人間か!!』

「生憎だが、れっきとした血の通った人間だ。……ダンブルドアに伝えた。もうじき本部に現れるだろう。そのためにも誰かがそこに残ってもらう必要がある」

『そんな雑務で俺を、この俺を縛れると思っているのか!? 俺はお前のような臆病者じゃない、杖を取り立ち向かうべき時はわきまえている!』

もしこれが電話だったなら、ガシャンと勢いよくシリウスは受話器

を置いたに違いない。

教授は少し途方に暮れたような、普段よりずっと無防備な目で見えたが、すぐさま我に返ったのか、そんな光はあつという間に消え失せてしまった。

「……それで。貴様はどうする?」

「決まってる。魔法省へ」

教授は大きいため息をついた。

「アンブリッジの部屋が、今ならば空いているはずだ。どうやらポッターとグレンジャーが、あやつを森に連れていったらしくな。しばらくは帰ってこられまい、ということだ」

それならば、あそこの暖炉が使える。唯一見張られていない煙突飛行ネットワークが。

「ありがとうございます……!」

駆け出そうとしたが、手を掴まれた。

振り返ると、教授もどうしてぼくを引き止めたのか、よく分からないうように慌てて手を離れた。

「……大丈夫、皆、守ってみせるから」

にっこりと微笑むと、踵を返した。

第37話 自己犠牲

「……………うぐっ」

手が咄嗟に出なかったのは、杖を握っていたからだ。それにしても、久しぶりに顔面から転んだ。強打した鼻を涙目で擦りながらも、辺りを見回す。

夏休み、ハリーの尋問で訪れた魔法省。そのただっ広いエントランスは薄暗く、誰もいない。それが、ぼくを不吉な気分にした。

記憶を頼りにエレベーターに向かうと、九階へと向かうボタンを押した。エレベーターの音がすぐくうるさいなんて、前は全然気付かなかった。

「神秘部です」

アナウンスの声と共に、扉が開く。

取っ手のない黒い扉の中に足を踏み入れると、そこはどこまでも真っ黒な丸い部屋だった。ずらりと壁一面に、扉が並んでいる。

そのうち二つの扉が開いていて、少し悩んだのち、一つの部屋を選んで駆け込んだ。

「……………っ!?!」

途端、赤ん坊の顔をした成人男性がよたよたと駆け寄ってくるのに、足が竦んだ。

気持ち悪さに顔を顰めながらも杖を振る。吹き飛んだ様を見ぬまま、ハリー達の姿を探した。争った跡があるけれど、姿は見えない。違う部屋か。

舌打ちをして、部屋を飛び出し、次の部屋へ。

不可思議なアーチがある部屋だった。

段の上に置かれたアーチは、どことなく存在感があり、胸をざわめかせる。

声が聞こえた気がして、ぼくは小さく息を呑んだ。

幣原の、父と母の声。

気のせいに決まってる、そんな場合じゃない、と頭を振った。奥で笑い声が聞こえる。仲間の笑い声じゃないことは確かだ。

ぼくの仲間、友人は、そんな醜悪な声で笑わない。台座に駆け上がると、数人の死喰い人の姿が見えた。

そのうちの一人が、ハリーの首を掴み上げている。

カツと頭に血が上がった。杖を鋭く振ると、ハリーに手を掛けていた人物は、遠くの壁まで軽々とぶち当たる。

「……ハリーに汚い手で触れるなよ」

低い声で呟いた。

その声に残りの死喰い人は振り返ると、ぼくの顔を見るなり悲鳴を上げる。

「幣原だ!!」

『『黒衣の天才』だ、逃げー』

言い終わる前に、『失神呪文』で攻撃する。

崩折れる死喰い人を尻目に、ぼくはハリーに駆け寄った。

「ハリー、大丈夫!」

泥と血に塗れていたが、ハリーは無事なようだった。啞然とした顔でぼくを見つめている。

「アキ、どうして……」

「君を助けに来たに決まってる。ぼく抜きで楽しそうなことしてるじゃない。仲間ハズレにしないでよ、寂しいなあ。……ぼくから離れないで」

ハリーの手を強く掴んだ。同じくらいの強い力で握り返される。

「アキ、奴らは『予言』を狙ってる」

「予言?」

「ああ」

そう言うとハリーは、ポケットの中から水晶の球を取り出した。中は靄がかかったように不透明で、時折揺らいでいる。

「大事なもののなの?」

ぼくの問いに、ハリーは頷いた。

「なら、手放しちゃダメだね」

にっこり笑うぼくに、つられたようにハリーも笑顔を浮かべた。

上の方で音がした。扉が開き、シリウス、リーマス、マッドアイ、ト

ンクス、キングズリーが杖を手に駆け込んでくる。

「アキ！」

トンクスが手を振るのに、軽く振り返した。それを見て、マッドアイがしかめっ面を浮かべている。

そこから先は、大乱闘だった。

「アキ、後ろ！」

ハリーに勢いよく引つ張られた。数瞬後、ぼくの頭があつた位置に青の閃光が飛んでくる。

「幣原！……こいつがどうなつても——」

ネビルの首根っこを掴み、頭に杖を押し付ける死喰い人に、躊躇なく杖を振った。

ハリーがネビルの元へと駆け寄った。助け起こそうとするも、足がリズムを刻んでいて立ち上がれないようだ。

杖を向けたが、感じた殺気に振り返つて杖を構えた。

三人の死喰い人が、ぼくの背後にいるハリーに杖を向けていた。

頭から血を流し倒れているマッドアイと、目を閉じ動かないトンクスの姿を、素早く視認する。

「動くな」

ぼくの声に、三人は杖先を僅かに震わせた。

全員の視線がぼくに集まる。そこを逃すようなハリーじゃない。

「ペトリフィカス・トタルス！」

ハリーが呪文を放つと同時に、爆破呪文を放つ。爆音と共に、残っていた二人の死喰い人は吹き飛ばされる。

「よくやった、ハリー！」

「伊達に、君に手合わせを頼んでいたわけじゃない。——僕を庇っていたら、君は思うように戦えないだろ。僕は大丈夫だから」

「……でも」

「アキ」

厳しい声だった。兄のような威厳を持った声だった。

「君に守られるばかりの僕じゃない。他の DAメンバーの安否も心配だ。君がやるべきことは、ここにいる敵の掃討だ。それが一番、あ

りがたいんだ」

ぼくの手を掴むハリーの手に、ぎゅつと力が籠った。そして、するりと離れていく。

「……分かった。絶対死なないで、アキ」

「僕は死なないよ」

ハリーを振り返った。

ハリーはにっこり笑うと、袖を捲って銀のブレスレットを見せた。

「君が、僕を守ってくれるからね」

「……………っ、絶対だぞ！」

そう言うのと、ぼくはまだ戦いの音が鋭く鳴っている戦場へと駆け出した。

リーマスが戦っている敵に狙いを定め、『武装解除呪文』で杖を取り上げる。落ちた杖を踏んで折った。遠くへと蹴り飛ばす。

リーマスが『失神』させたのを見届けて、石段の上へと駆け上がった。周りより数段高い場所に身を晒し、叫ぶ。

「幣原秋はここにいます！ 殺せるものなら殺してみろ!!」

ぼくの声に、真っ先に一人の死喰い人が駆け寄ってきた。目をぎらつかせ、何よりも楽しいと言わんばかりに笑っている。

彼女の名前を、ぼくは知っていた。

「…………ベラトリクス・レストレンジ」

「やあ、幣原秋！ 随分とおチビちゃんになったものだ、元々背丈はそんなものだったかな？ ヒヤハハハハハハ!!」

指先で、くるりと杖を一回転させると、もう一度握り直した。

「ねえねえ覚えてるウ？ クラウチのヤツが法廷で言った言葉」

「…………さあ、雑魚の負け惜しみなんて、わざわざ覚えていられないもんでね」

にやりと笑うと、心の底から楽しそうにベラトリクスは哄笑した。

「聞きたいなア、アンタはあたし達を殺すとき、どんな気分になるの？

苦しい？ 悲しい？ それとも楽しい？ ロングボトム夫婦が

気が狂ったときどう思った？ ねえねえ教えてよオー——レイノウォーターを、自分の大切な人を殺したとき、アンタは一体どう思っ

た？」

小さな空気の弾が、音速を超える速さでベラトリクスの顔の真横を突き抜けた。

彼女の豊かな黒髪が、風圧でふわりと舞う。

「……次は、当てる」

「……ヒヤハハ、ヒヤハハハハハ!! なアんだ、血も涙もない人形だと思つてたら、案外奥にはやわらかあい心があるんだア。見直しちゃうねエ、『黒衣の天才』」

「……………」

挑発されて、すぐ近くに迫っていた敵に気がつかなかった。

ぼくの目の前に滑り込んで『盾の呪文』で防御した黒い影、それがシリウスであることに、遅れて気がついた。

「アキ、お前はよその相手をしろ。——お前の相手はこの俺だ、我が親愛なる従姉妹様よ」

「……ツハア、アズカバン以来じゃないかア。クリーチャーはまだ元氣かい？」

シリウスに加勢したかったが、下から緑の閃光が飛んできて、慌て避けた。

緑の閃光はそのまま半透明のアーチに当たると、ふわり、とボールの向こうに霞のように消える。

このボールを見ていると、何故だか胸が無性にざわついた。さわさわと、何人もの人たちが頭の内側で喋っているような、そんな妙な気分させられる。

そんなことを悠長に考えている時間ではない、と、頭を振った。一番上の石段から一步飛び降り、二人の流れ弾に当たらないように配慮しつつも、杖を構えた。

そのとき、扉が大きく開け放たれた。アルバス・ダンブルドアの姿が、そこにあった。

一番近くにいた死喰い人がダンブルドアに気付き、もがくように石段に足を掛け、石段の上にいるぼくの姿を見て絶望した表情を浮かべた。

ダンブルドアの呪文により、その死喰い人はやすやすと吹き飛ばされる。

石段から奥側にいる死喰い人はぼくが、石段から入口側にいる死喰い人をダンブルドアがあらかた片付け終わっても、一番上では未だ、シリウスとベラトリクスが戦い続けていた。

ひらり、とシリウスがベラトリクスの放った閃光をかわすと、左手でベラトリクスを挑発する。

「さあ、来い。今度はもう少し上手くやってくれ！」

シリウスが大声で笑ったちようどその時、ベラトリクスの放った呪文がシリウスの胸に直撃した。

全てがスローモーションのように思えた。

シリウスが、精悍な顔に笑みを残したまま後ろに吹き飛んでいく。そのまま優雅な弧を描いて、ベールの方へ――。

「シリウス!!」

ハリーの大声に、我に返った。

シリウスを、あのベールの向こうに行かせてはならない。

もう誰一人として、失いたくない。

あちらへ、渡してはならない。

手を伸ばした。

ぼくの手は、シリウスの手を掴んだが、しかし一瞬遅かった。

ベールの向こうへ沈もうとする身体を、渾身の力で引き戻した。

ドサリと力なく、シリウスの身体がぼくの正面に落ちる。

見開かれた瞳は、衝撃でぼくの方を向いたものの、その目が焦点を結ぶことは決してない。

「……シリ、ウス」

ぼくの意識を浮上させたのは、ベラトリクスの勝ち誇ったような歓声だった。

「シリウスが死んだ！ シリウスが死んだ!! 憎たらしい我が従兄弟様が死んだ!!」

子供っぽい無邪気な仕草で石段を飛び降りると、シリウスの前に膝をついたぼくを、ベラトリクスは満足げに見下ろした。

「前から思っていたんだ。大切な人が死んだ時、アンタが浮かべる表情、本当に——最高だねエって」

空気の弾丸から逃げるように、ベラトリクスはヒラリと空中に身を躍らせ、黒い影となって奥の部屋へと飛び込んだ。

「シリウス！ シリウス!!」

ハリーが叫んでいる。

シリウスに駆け寄ろうとするハリーを、リーマスが抑えている。

「ハリー、もうどうすることも出来ないんだ。あいつは……行つてしまった」

「シリウスはどこにも行つてない！ だって、そこに！ そこにいるじゃないか!!」

「あいつは戻れない。だって、あいつは——」

「シリウスは、死んでなんか——いない!!」

ハリーの声も、周囲の音も、全てが遠い世界での出来事のようにだった。

ぼくの世界は、ぼく自身と、そして目の前にいる、ぴくりとも身じろぎをしないシリウスの二人きりだった。

「……シリウス、ねえ、シリウス」

杖を握っていない右手で、シリウスの腕を掴んだ。

目で見て分かるくらい、ぼくの手は震えていた。

——暖かい。

まだ、暖かい。

「あいつがシリウスを殺した！ あいつが——僕があいつを殺してやる!!」

ハリーがリーマスの腕を振りほどいて、ベラトリクスの消えた奥の部屋へと飛び込んで行った。それすらも、遠い世界の出来事のように見える。

リーマスの動きも、どこか緩慢だった。

「アキー」

ダンブルドアがぼくの名前を呼ぶ。

すぐ真横で、呪文が弾けた。ダンブルドアが、盾の呪文をぼくのす

ぐ近くに張って、守ってくれたのか。

シリウスの目を瞑らせると、ゆらり、とぼくは立ち上がった。

どこか、自分が自分じゃないような、自分の手足が自分の意思で動いているものじゃないような、そんな感覚が身を包む。

『ハリーを、追って』

頭に響く声に、無意識が従った。

石段から飛び降り、駆け出す。踏みしめる床の感覚も、どこか遠く、ふわふわとしていた。

左手の杖が、行き先を示す。ぼくの行く道を、誘う。

魔法省のホールのだ真ん中で、ハリーは立っていた。

その正面には——姿形は変わっていたが、その人物が、その人物こそがヴォルデモートなのだ、直感が告げていた。

「アバダ・ケダブラ」

ハリーの死を乞う声が、言葉を紡ぐ。

魔法式を浮かべるよりも早く、杖先から呪文が吹き出した。ハリーの眼前に『出現』した黒い壁が、ヴォルデモートの呪文を弾き返す。

ヴォルデモートがハリーから目を逸らし、ぼくを見た。

裂けたようなその唇が、興奮と歓喜に歪むのを。

鋭く赤い瞳が、期待と激情に見開かれるのを。

ぼくは静かに、見据えていた。

「……幣原、秋」

否定する気は、さらさら起きなかった。

ぼくらの間に、言葉は交錯しない。

交わるのは、唯、呪文のみ。

杖が、空間を切り裂く。

リミットを振り切った魔力が、エネルギーの塊となってぶつかり合い、相殺する。

「幣原秋よ」

爆発音の最中にも、ヴォルデモートの柔らかい声がすぐ側で囁いた。

「親を殺した俺様が憎いか？ 友を殺した俺様が恨めしいか？ 仲間

を殺した俺様が忌々しいか？」

静かに、目を閉じた。

「悲しいよ」

爆発音が、鼓膜を破らんばかりに揺らす。

軽く頭を振って、衝撃を逃した。

「あなたがそうなってしまったことが、何よりも悲しい」

莫大な魔力を、互いにぶつけ合う。金色の閃光が互いの杖先から迸り、力比べを始めた。

じりじりと押されるその力に、詰めていた息を吐き出す。額に垂れる汗を、拭う力もない。

——もう、保たない。

誰よりも、ぼくが一番、そのことを理解していた。

——秋に代わっておくべきだった。

しかし、後悔してももう遅い。

そんな隙はヴォルデモートの前で見せられない。見せられるわけがない。

ぼくと幣原秋の、差異。

絶対的な魔力の保有量が、ぼくらはそもそも違うのだ。

ぼくは、幣原秋にはなり得ない。

人形は、決して本人の代わりとは、なり得ない。

「……………っ、う」

秋。

どうして君は、こんな欠陥品を作ったんだ。

ぼくは、君にはなれない。

どんなに願っても、望んでも、君の代わりは務まらない。

『——ぼくの、望みのために』

頭の中で、声が響く。

柔らかな声音に、ハッと我に返った。

『力を貸そう、アキ』

頭を、誰かに優しく撫でられたような、そんな気がした。

——秋？

胸中で名前を呼ぶも、返事はない。

代わりに、杖の振動が強まった。吐き出す金色の閃光が、太く、力強くなる。

『もう少し、頑張れる?』

穏やかな声は、するりと心に満ちていく。

素直に、ぼくは頷いていた。

『君を苦しめることしか出来ないぼくだけど、今だけでいいから——ぼくを、信じて』

「……何言ってるの」

歯を食いしばった。

眉を寄せ、眩い光の先をしっかりと見つめる。

「ぼくはずっと、君を信じ続けるよ」

頭で響く声の主は、少し、笑ったようだった。

つたつた汗が、顎からポタリと落ちる。

「誰と話しているのだ、幣原秋よ!」

ヴォルデモートが叫んだ。

ぼくは虚勢を張って笑う。

「自分とだよ」

ぼくよ、幣原秋に作られた存在、アキ・ポッターよ。

どうか、もう少しだけ、保っていて。

「そこまでじゃ、トム」

静かな声が、朗々と響いた。魔力は打ち消し合い、宙へと掻き消える。

ふらりと倒れこんだぼくを支えたのは、年老いた二本の腕だった。

「退いておれ、アキ。君の命の炎を、かの者のために吹き消す必要はない」

ダンブルドアの声に、ぼくは薄っすらと微笑んだ。

「今夜ここに現れたのは愚かじやったな。闇祓いたちがまもなくやって来よう」

「その前に、俺様はもういなくなる。そして貴様は死んでおるわ!」
言い放ち、ヴォルデモートが死の呪文を唱えた。

しかしその呪文は軽々と遮られる。

「幣原秋に相對した直後の君に、わしを倒す力が果たしてあるものか」
「黙れ、老いぼれよ！」

ヴォルデモートの杖から、大蛇が吹き出した。ダンブルドアが杖を一振りすると、蛇は空中高く吹き飛び、一筋の黒い煙となって消える。瞬時に泉の水が立ち上がり、ヴォルデモートを繭のように包み込んだ。もがくように水の中で足掻くヴォルデモート。やがて繭が割れ、水が床へと落ちたときには、ヴォルデモートの姿はどこにも見当たらなかった。

「ご主人様！」

ベラトリクスの叫び声。ヴォルデモートは逃げたのか。

「ハリー、動くでない！」

鋭い声に、思わず背筋が伸びた。

『まだ、奴はいる』

脳内の声が、焦りを帯びる。

呼吸を止め、周囲を見渡した。ガランとしたホールには、ぼくらの他、フォークスしかない――

「俺様を殺せ、今すぐ、ダンブルドア……」

低くくぐもった声に、背筋が震えた。

どんな声音をしていようが、聞き間違えるはずがなかった。

このぼくが。

大好きな、たった一人の兄の声を。

「死が何物でもないなら、ダンブルドア、この子を殺せ……」
ゆつくりと振り返る。

ダンブルドアを向いていたハリーの瞳が、ぼくに移った。

赤い瞳。ハリーの濃い緑とは、全然異なる色合いの目。

「ねえ、殺してよ、秋……シリウスのところに、行かせてよ……」
ハリーの眸から、涙が一筋伝った。と同時に、瞳から狂気の色がふと消える。

「アキ、近付いてはならん！」

そんなことを言われても、ふらりと崩れ落ちるハリーに駆け寄った

のは脊髄反射だ。

しかしハリーに触れた瞬間、そこから『何か』がぼくの中にするりと侵入してきた。

肉体を持たぬ『それ』は、ぼくの身体の主導権を瞬時に握ると、ダンブルドアへと向き直る。

「どうした、ダンブルドアよ。さあ、俺様はここにいる。殺すがよい」
ぼくの口元が笑みを浮かべた。

自分の口が、勝手に言葉を紡ぎ出す。

「さあ、殺せ」

ぼくの足が、ダンブルドアに向かって一步を踏み出した。

驚くべきことに、ダンブルドアは一步後ずさる。

——自分の身体の感覚が、遠い。

どこか霞がる思考の中、そんなことを思った。

『——アキ。アキ、アキー！』

脳内の声が、ぼくの意識を揺さぶる。

その声に、わずかに浮上する。

『起きろ、アキ・ポッター!!』

名前。

そう、それが、ぼくの名前。

幣原秋じゃない、本当の、ぼくの名前。

我に返った。

「どうした、殺せないか？ 今こそ好機だというのに、みすみす——

——

ペラペラと、よく動く口だ。

「ふざ、けるなよ……」

言葉を、吐いた。

左手に握りしめたままの杖を、ゆっくりと持ち上げる。

「この、ぼくの身体はなあ……お前なんか使っていないもんじゃないんだよ」

主導権を精神力で引っ張り合っている気分だ。

杖先を自分に向けると、両手で持ち直す。瞬間、杖が鋭い短剣へと

変わった。

「この身体は……ぼくと、あいつのもんなんだ……返せ」
迷いなく。

短剣を、自らの腹部へと振り下ろした。

体内で聞こえる、嫌な音。痛いかと思っていたが、痛いより、熱い。初めて味わうその痛みに、しかし意識は一気にクリアになった。喉から溢れそうになる声を、歯を食いしばって堪える。

「……返せ。これは、ぼくらのだ」

刃の、根元まで。

しつかりと、押し込めた。

金縛りが解けるように、ふと身体が自由になった。

今度こそ、いなくなる。今度こそ、奴は逃げていく。

視界が、霞む。汗がだくだくと流れるのに、身体は冷え切っていた。ただ両手にかかる真っ赤な色の液体だけが、熱い。

堪えきれず、地に膝をついた。

「よくやった、アキ！」

遠くで、近くで、そんな声が聞こえた。

絶え絶えの息で、それでも怒気に満ちた言葉を口にする。

「ふぎ、けるな……よくやった、って……、こういう自己犠牲を、美德としてんじゃ、ない……」

地面に手をつくすと、杖が音を立てて落ちた。

栓を無くした傷口は、存分に血液を周囲に撒き散らし、床や、床に転がったぼくの杖を血みどろにする。

杖に手を伸ばしたぼくの手も、血で光っていた。細い棒をしつかりと握りしめる。

「はは……他人の血を吸ったことは多かれど、ぼくの血を吸ったのは初めてだな、お前……」

そう呟いて、杖を胸に抱いたまま、ぼくは静かに目を閉じた。

第38話 エゴイズムの行く先

合格通知を握りしめ、指定された日時に魔法省へと向かった。初めて入る魔法省は驚きの連続で、トイレ——そう、トイレから入るだなんて！ 信じられないことばかりだ。

英国、ひいては魔法界に来て七年、随分と慣れたと思っていたけれども、いやはや世界は広い。

そこでぼくは、今年の合格者である他二人と顔を合わせた。

なんとなく予測していた通り、四十九番のパトリック・リオんと、二十一番のマーク・ヴィツガーだった。

「僕が合格して、君が合格しないはずはないよなって思ってたよ」
試験から離れた場所でのリオンは、案外気さくだった。

少し離れたところでは、ヴィツガーが一人で空中に杖で何か書いている。

ぼくの視線の方向に気付いて、リオンが言った。

「さつき話しかけたら、邪魔しないでくださいって怒られちゃった。マグルの学問に興味があるらしくって、今数学の問題を解くのに忙しいらしい」

「……数学は案外面白いよ。興味があつたらやってみるといい、マグルの知恵も見習うべきさ」

リオンは目を瞪ると、「違う」と言つて笑った。

「でも、君のペアの女の子は、合格する気がしてただけだなあ」

「ああ、ソフィ」

そう、とリオンは頷く。

ぼくは静かに微笑んだ。

「合格したからと言つて慢心するな。敵は貴様らのすぐ近くに潜み、寝首を搔こうと虎視眈々と機会を伺っている。いつだつて気を抜くな、貴様が立っているのは戦場だ。油断大敵！」

ぼくらの前に立って櫛を飛ばしたムーディ先生は、相変わらずだった。

闇祓いの証として、懐中時計を受け取る。蓋には翼を広げた鷲と

『A』の飾り文字があしらってあった。おそらくこの『A』は、A u r
o r 〈闇祓い〉の頭文字だろう。

金色に鈍く輝く懐中時計は、見た目よりもなんだか重かった。

「幣原くーん！」

短い休み時間に、ふと扉が勢いよく開かれた。

入ってきたのは、アリス・プルウエット先輩だ。その後ろには、やれやれと苦笑を漏らすエリス・レインウォーター先輩と、相変わらずなんだから、とゆったり笑顔を浮かべているフランク・ロングボトム先輩の姿が。

「合格おめでとう！ 君なら絶対合格するって思ってたの！」

ぼくの手を取り、プルウエット先輩は満面の笑みを浮かべた。

ぼくは悪戯っぽく口を開く。

「ありがとうございます、プルウエット先輩。——いや、それとも『ソ
ファイ』って呼んだ方がいい？」

ポカン、とプルウエット先輩の口が開く。後ろ二人、エリス先輩と
ロングボトム先輩を見遣ると、彼らも驚いたように目を見開いてい
た。

「……え、嘘、ちよつと待って……」

気の毒なほどに動揺しているプルウエット先輩。縋るような眼差
しでロングボトム先輩やエリス先輩を見ていたが、やがて諦めたよう
に大きく息を吐いた。

「えー……どうしてバレてんのお……私、何かミスした？」

「ミスはしてませんよ。プルウエット先輩は見事に『ソファイ』でした、
非の打ち所がない」

「じゃあ、どうして……?」

「私も知りたいな、それ、是非とも」

ぼくの肩を叩いたのは、エリス先輩だ。

「聞かせてもらおうか、幣原くん」

ロングボトム先輩も、ぼくの前に回り込むと笑みを見せる。

小さく肩を竦めた。

「……確証はなかったんですけどね」

「君に疑いを抱かせてしまった時点で、私たちの負けさ。一体何が引つかかったんだい？」

ぼくはそういうエリス先輩をちらりと見上げた。

「エリス先輩、十五番の人ですよ？ ぼくとリオンに一瞬で倒された」

エリス先輩は酷く苦い顔をした。

「不意打たれた、なんて言い訳にはならないだろうね」

「そしてロングボトム先輩は、リオンとペアだった、十七番のローランド」

ロングボトム先輩は黙って首肯した、

「初めにあれ？ って思ったのは、十五番の——エリス先輩の持ち物を探ったときです。もしかしたら、『機密文書』を隠し持っているんじゃないかなって」

「……私、何か余計なものは持っていた記憶はないんだけど」

「余計なものは持っていないませんでした。必要なものだけしか。例えば……杖、とか」

エリス先輩の目が見開かれる。

「……よく覚えていた、と、そう言うべきなのかな」

「記憶力には自信があるんです、ぼく。エリス先輩の杖は、何回か目にしていたから」

だって、同寮の先輩なのだ。

何度、レイブンクロー寮の前で立ち往生しているところを助けてもらったことか。ノツカーの問いに対して取り出した杖を目にして、その後魔法魔術大会で対戦して。おまけに、『不死鳥の騎士団』本部に連れていってもらった時にも、杖を見ていた。

三度も見れば、ぼくは覚えている。

「どうして、エリス先輩が紛れ込んでいるのか？ どうしてこの試験はペアを組ませたのか？ そう考えると、見えてきたんです。ランダムにペアを組まされたように見えて、実は片方が本当の受験者で、もう片方はその受験者がどのような動向をするか監視する人なんじゃないかって。受験者は十人いたように思っていたけど、本当の受験者

は五人だったんじゃないかって。後は、消去法ですかね。いくら変化術が得意だからって、ポリジューズ薬でもない限り異性に長時間変身するのは困難でしょ。ポリジューズ薬の効果、試験時間ほど長くないし。だから、受験者の中で唯一の女の子だったソフィが、プルウエツト先輩」

「じゃあ、僕は？」

ロングボトム先輩が尋ねた。口元には楽しそうな笑みが浮かんでいる。

「ロングボトム先輩、自分でも自覚あるんでしょ？」

ぼくも笑った。

「ソフィを人質にとったりオンは、さすがに倒しちゃダメでしたよ。受験生がすることじゃない。受験生はもつと死に物狂いの無我夢中です、あんまり周りを気遣う余裕はない」

「言われてみれば、そうだった気もするね。初々しい頃を忘れてしまったのかな」

「ソフィだって。普通の受験生だったら、ぼくに合格して欲しいからって自分の勝利は投げ出さない。だから、ソフィは受験生じゃないんだなって思ったんです。本物の受験生だったら、多分ソフィはあそこで杖を抜いて戦いを挑むでしょう。取引なんて応じないはずだ。二対一なんだから、こちらが優位なのに」

おそらく、ではあるけれど、ぼくらに取引を持ちかけてきた二十一番——マーク・ヴィツガーもまた、半分は本物の受験生じゃないことを見抜いていたのだろうと思う。

そうじゃないと、取引なんて持ちかけてこない。蹴られることが分かってきているのに、誰が手札を晒すものか。

「隠密試験は落第だな、貴様ら」

新たな声に、ぼくらは振り返った。

ヒツ、とプルウエツト先輩が息を呑む。

「いくら知り合いと言えども、悟られるとあってはな。闇祓いたる者、親友や恋人までも騙す気概が必要だ」

「……ムーディ先生の口から『恋人』なんて単語が出てくるなんて思っ

てなかった」

「プルウエット、そんなに訓練が恋しいか、そうかそうか」

やだー！ とプルウエット先輩がロングボトム先輩の後ろに隠れた。頬を膨らませ「あの人には注意するんだよ、幣原くん！」と拳を握る。

はは、と愛想笑いをするも、ムーディ先生が「幣原」とぼくの名前を呼んだことで、反射的に背筋が伸びた。

「は、はい」

威圧感が半端じゃない。オーラが違う。歴戦の戦士、と言うか。

一体どれだけ戦えば、そんなに傷だらけになるのか、考えるのも恐ろしい。

「よくやった。期待している。これから励めよ」

——しかし、予想に反して、言葉は暖かだった。

へ、と思わず肩に入った力を抜く。すると、大きな手がぼくの頭に乗せられた。そのままわしゃわしゃと乱暴に撫でると、来た時と同じ性急さで手が離れていく。

そのまま踵を返したムーディ先生の後ろ姿を、ぼくはぼかんと見つめていた。

「気に入られたな、幣原」

エリス先輩が楽しげに笑う。

「あの人は気に入った奴に対してえげつないから、頑張れよ」

「ああ、かつてのエリスじゃん、それ」

「エリスくんだけ倍の訓練内容だったりね、えげつなかったねえ」

「うるさいよ二人とも」

何だって。思わず青ざめた。

エリス先輩は、敏感にぼくの表情の変化を見て取ったか、少し勝ち誇ったように笑っている。

「がーんばれ」

それは、闇祓い試験に紛れ込んでいたことをぼくに見破られたことに対する、意趣返しのようにも思えた。



目が覚めたら、真つ白な部屋の中だった。慌てて身を起こすと、ズグンと身体を貫く痛みが全身を駆ける。

「アキー・ダメだよ、動いちゃー!」

そうやってぼくの肩を抑えたのは、ハリーだった。疲れが色濃く残る表情をしている。

そうか、と、自分の身体を見下ろした。アーサーおじさんが纏っていたのと同じ病院着だ。

「……あれから、何日経った?」

ぼくの端的な質問に、ハリーは小さく息を呑んだ。

目を伏せて「……二日」と答える。

「そう……二日」

ズシン、と心の中に重石が乗った気分だった。

「DAのメンバーは、皆無事だった。ロンもハーマイオニーも、ネビルもジニーもルーナも。トンクスは、まだ目を覚まさないけど、でも完全回復するって。マッドアイは、一週間入院しなきゃいけないのに、昨日の段階で逃げちゃった。そんなに、病院が嫌いなのかな」

ハリーは、強いて淡々に言葉を紡ごうとしているようだった。

「……そう」

ハリーは、無理をして笑顔を浮かべてみせた。

「予言、壊れちゃったんだ。でも、別にいい——あの予言は、トレローニー先生からダンブルドアになされたものだった。ヴォルデモートを滅ぼす者についての、つまりは僕についての、予言だった。『一方が生きる限り、他方は生きられぬ』……僕が、ヴォルデモートを殺す。もしくは、僕がヴォルデモートに殺される。そのどちらかが、必ずなされる」

「……………」

「ダンブルドアが、全てを僕に話してくれた。魔法省はとうとうヴォルデモートが復活したことを認めたとよ。そろそろ『日刊預言者新聞』に、僕を褒め称える記事が載るはずさ」

ハリーは乾いた笑い声を上げた。ぼくは、笑えなかった。

「アキ、君の傷は、物理的な怪我に魔術が絡み合っていて、治療魔法じゃ治らないから、もう少しここに缶詰だつて。……出血多量で、あともうちよつとで、……死んじゃうところ、だったんだつて」

最後のあたりで、ハリーの声が震えた。ぼくの肩に触れているハリーの手もまた、震えていた。

「……ハリー。……シリウス、は？」

その言葉に、ハリーの瞳は揺れた。

「……おいで、アキ」



車椅子をハリーに押されながら、聖マンゴを歩いた。

以前聖マンゴを訪れた時には、クリスマス飾りつけがされていたが、それらは全て取り外されている。

外は、素晴らしくいい天気ようだった。窓から、聖マンゴの中庭が見える。子供が何人か、楽しげにはしゃぎ回っていた。

『隔離病棟』と書かれた表札の隣を、通る。

ずつと歩いて（ぼくは『押されて』だったけど）、辿り着いた先は、一つの病室だった。

「……アキ！」

椅子に座って沈鬱な表情を浮かべていたリーマスが、驚いた顔で立ち上がった。

「目が、覚めたのか。大丈夫かい？」

「平気だよ、ありがとう」

一人部屋だった。殺風景な部屋に、花瓶が一つ。

真っ白な色彩の中、生けられた花だけが、彩りを持っていた。ベッドで、シリウスは眠っていた。眠っている、ようだった。

口元に、マグルの呼吸器と似た器具が取り付けられている。

他は、眠っている人と、全く変わらない姿をしていた。

ハリーが、ぼくをベッドのすぐ近くまで押して行った。

ぼくは手を伸ばして、シリウスの左手を握り締める。温かみのあるその手は、しかしぼくの手を握り返すことはなかった。

「……目を覚ますことは、ほぼ、絶望的らしい」

リーマスの囁きに、ぼくは、

「そう、なんだ」

と短く返した。

「……ただ、ね。一人だけ……この世界でたったの一人だけ、シリウスの治療が出来るかもしれない人がいるようなんだ」

リーマスの声は、少し震えていた。

「サリユーマン医療研究所の研究者でね……名前は」

「紹介する必要はない、リーマス」

背後のハリーが、息を呑んで振り返った。

ぼくも、ゆつくりと顔を向ける。

病室の入口で佇むその人は、長めの前髪の間から、じつとぼくを見据えていた。

「……ライ、先輩」

両腕で身体を持ち上げた。足を床につけると、立ち上がる。少しふらついたが、堪えた。

ハリーがぼくを止めようとするのを、リーマスが押し留める。

崩折れるように、ライ先輩の前に膝をついた。

両手を床につき、頭を下げる。

「お願い、します……」

身体が裂けそうに痛む。それでも、どうでもいい。

それは土下座というより、這い蹲るような懇願だった。

「お願いします。大事な……とつても大切な人なんです。本当に、心から生きていて欲しい人なんです……お願いします、お願いします……!」

この人の前には、嘘もでまかせも通用しない。完全なる本心を、見透かしてみせる。

ごまかしが通用しないから、心からの思いを言わないと、意味がない。

ライ先輩はしやがみ込むと、ぼくの頭を上げさせた。

「……それがどれだけ、望みが少ないとしても、お前は彼に生きて欲しいと望むのか？ 彼の魂は彼方へは行けない。いつまでたっても此方に引き止められ続けるといふのに」

ライ先輩は、純粹にぼくに対して問いかけていた。

「彼方へ送ってやるのも、一つの優しさだ、アキ。いつまでもこんな半死半生の状態にいるより、ずっと楽だろう。それを引き止めたいというのは、お前のエゴだ。彼はお前の急所となる。お前の足をずっと引っ張り続けるぞ。もし、死喰い人の奴らが聖マンゴに侵入して、『従わないとこいつの首を掻き切る』と脅したら？ 脅しに屈さないという確証はあるか？」

静かな茶色の目を見つめ、ぼくは。

「……それでも、生きていて欲しいんだ」と言った。

「シリウスが、本当は死にたいとも思っていることくらい、知ってるよ……ジエームズとリリーが死んだ時から、ぼくも、シリウスも、リーマスも、皆死にたがってるんだ。赦して、欲しがっているんだ」

リーマスが後ろで小さく息を呑んだのが分かった。

振り返らず、続ける。

「ジエームズは、とても眩い光だった。ぼくらはその光に魅せられたんだ。……後悔してもし切れないよ。何から後悔すればいいんだろうって……あの二人の元に行きたいって、シリウスはぼくに言ったんだ。その思いを知って、それでも、ぼくは……シリウスに生きていて欲しい」

大きく息をついた。

「生きて、未来と一緒に歩みたい。その未来に、ぼくらの大切な人は……ジエームズやリリーはいないけど。それでも、もう一度シリウスと言葉を交わしたい。もう一度あの顔で笑って欲しい。……シリウスが、死にたいって望んだところで、ぼくはその望みを受け入れたくない。万に一つでも可能性があるのなら、ぼくはその可能性に賭けてみたい。……もう……誰も、失いたくない……」

涙が一筋、頬を伝った。

それを見ていたのは、ライ先輩だけだった。

拭って、ぼくは笑ってみせる。

「全部ぼくのエゴだ。シリウスに生きて欲しいって思う、ぼくのエゴ。シリウスはそれに付き合ってもらおう、ぼくが生き続ける限りね。ぼくの急所、結構じゃないか。守るものがある方が強いのはお約束だろう？」

ライ先輩は、二、三度目を瞬かせた後、僅かに口元を緩めた。

「……悪くないな」

第39話 乞い願う

ありがたいことに、魔法省の魔法法執行部には独身寮が備え付けられていた。魔法省から歩いて三十秒の場所にあり、安く、想像していたよりもずっと綺麗だ。

それに食堂までついている。寮と言っても、中はそこらのアパートとなんら変わりはない。結婚する予定もないし、そもそも恋人すらないのだ。ぼくは迷わず、独身寮に居城を構えることにした。

引越は、シリウスとリーマス、それにリリーが手伝ってくれた。ジエームズは、両親の体調が思わしくないということで、寮の中を興味深げに眺めてはすぐさま帰ってしまった。ジエームズの両親は、一度六年生の夏にお世話になったから、ぼくとしても心配だ。結構なご高齢だったし、体調の回復を祈っている。

ピーターは、今日の面接が通れば採用なのだ嬉しそうに言っていた。ダイアゴン横丁にある薬問屋らしい。

「しかしピーターが薬問屋で働けるとは、俺には到底思えないな。魔法薬学であんな散々な暗黒物質作り出しておいて」

人が住めるようになった部屋で、シリウスはケラケラと笑った。ソファにどっかりと腰を下ろしている。

「そうねえ、ピーター、魔法薬学はその、ちよつとばかり壊滅的だったから……」

リリーが少し遠い目をして呟いた。魔法薬学がすこぶる得意だったこの子にとつては、ピーターの生み出す暗黒物質はさぞやトラウマとなったことだろう。

「僕としては、ピーターがあそこで働いてくれるならラッキーだけだね。店員割引とかあるんじゃないかなあ」

リーマスはそう言いながら、皿に積まれたクッキーに再び手を伸ばした。山盛りに積んでいたクッキーは、少し目を離れた際にもう半分近くまで体積を減らしている。おそらく大半がリーマスの腹の中へと消えたと思われる。

「リリーは魔法薬学の研究所だっけ？」

「そう、スラグホーン先生の口利きでね。ありがたいわ」

「リリー、魔法薬学得意だったもんね」

リーマスが、少しだけ羨ましそうな表情でリリーを見ている。『人狼』であることで、リーマスの就職はほぼ不可能に近いのだ。つい先日『半人狼法』の法案が通ったことも、かなり大きな要因だった。

ちなみに、シリウスはそもそも就職自体をしないらしい。少し前、「無職！ お揃いだな！」とリーマスの地雷を盛大に踏み抜いていたことを思い出した。

リリーはまっすぐにリーマスの目を見た。その瞳の真剣さに、リーマスは少したじろいだようだ。

「私ね、『脱狼薬』を作ろうと思っているの」

その言葉に、リーマスだけじゃなく、ぼくもシリウスも目を瞠った。脱狼薬。この薬さえあれば、たとえ満月が来ても理性を失わない。残虐なまでの破壊衝動に襲われない、狼人間にとってみれば垂涎の品だ。

しかし、今はまだ空想の夢物語、開発に成功した者は誰もいないとされていた。

「ジェームズやあなたたちは、リーマスのために姿を動物に変え、寄り添うことを選んだわ。それなら私は、リーマスのために脱狼薬を開発したい。私だって、リーマスのためにやれることをやりたいの」

リーマスは呆然としていたが、かろうじて喉から「一体どうして……？」と声を絞り出した。

「あら、決まっているじゃない」

リリーはにっこりと微笑んだ。

「友達だからよ」



引き止める癒者を振り切って退院した。動くたび引き攣るような痛みはあるが、傷口は塞がっているから大丈夫だろう。

内臓は無事だったようだが、ちよいと大きめの動脈を切ったらし

く、未だに少し貧血気味だった。頭が少しばかりボウっとする。

それでも、行かなくてはならない場所があった。

校長室だ。

姿を見せたぼくに対し、ダンブルドアは落ち着き払った視線を返した。

ぼくが来ることを、予期していたような瞳だった。

「……君の担当癒師が、君の扱いにたいそう手を焼いておったよ。あまり、純朴な者を困らせるでない」

「ダンブルドア先生」

「座るのじゃ、アキ。立っているのも辛いじやろう」

一瞬躊躇して、ソファに腰掛けた。

無意識に、息を吐く。

「君がわしに言いたいことがあるのは分かっておるよ。……君は、わしに謝りに来たのじやろう」

ダンブルドアは、しばらく見ないうちに老け込んだようだった。疲れが顔に表れている。

「去年、ハリーをみすみす死地に向かわせたわしに対して失望したの
は分かる。だがの、君は意固地になりすぎた。もし君がどこかの機
会でわしからの呼び出しに応じていれば、わしは、ハリーとヴォル
デモートの繋がりについてのことを君に教えることが出来た。今年
の君は、随分とハリーに近しかった。それがどれほどヴォルデモ
ートの情報を与えたか、考えたことはあったかね？ 幣原秋は、特に
闇の生い立ち、好きなもの、弱み、奴らと戦う上で障害となる自
らの情報を、覆い隠していた。この一年で、ヴォルデモートは今
までの数十年に血眼でかき集めた君の情報より、はるかに上回るもの
を手に入れたじやろう。全て、君の短慮がもたらした結果じゃ」

ぼくは、何も言えなかった。

その通りだと思ったから。

だから代わりに、乞い願った。

「……もう、誰一人失いたくない。詰まらない意地は捨てます。全部、

何もかも……あなたが正しかった。ぼくが間違っていた。だから、どうか……お願いします。愚かなぼくに教えてください。誰一人取りこぼさないために、ぼくは何をすればいいですか?」

ダンブルドアは、薄い青の瞳でぼくを見据えた。

「わしの言うことをなんでも無条件に信用すると約束するか?」

「はい」

「君の意思を無視する任務を突きつけても、やり通すと誓うか?」

「それが、誰かを守るためであるのなら」

それぞれの思惑を乗せた視線が交錯する。

痛いほどの沈黙を破ったのは、ノックの音だった。

「入ってよいぞ」

ダンブルドアの声に、ドアが開いた。

入ってきた人物に、目を瞠った。

「……アリス?」

「アキ! 帰ってきてたのか」

アリスも驚いたように目を瞬かせていた。

アンブリッジがいなくなったからか、身に纏っている制服は今まで通り着崩されている。校長先生にお目通り願うときは、せめてネクタイくらいはきちんと整えろと思う。まあ、ダンブルドアは気にもしないのだろうか。

アリスの右手には、見たこともない剣が握られていた。僅かに青みがかっている。鞘には細かな装飾が施されており、宝石がいくつも散りばめられている。実用性よりは見た目を重視したもの、儀礼剣のようにも見えて、普段シンプルなものを好むアリスが持っている、なんだか違和感があった。

「どしたの、それ」

ぼくが尋ねると、アリスは「ああ」と軽く剣を持ち上げた。見た目より軽いようだ。

「ちよいと、やんなきゃなんねえことがあるんだ」

アリスの視線が、ぼくからダンブルドアへと動いた。

『名前を呼んではいけないあの人』が復活した。再び戦争が始まりま

す。……ダンブルドア先生」

「……成長したのう、アリス・フィスナー。昔のリーフが懐かしい」

「……先生、こいつの前でも?」

「君が気にしないのなら、構わんよ」

ダンブルドアは立ち上がると、部屋中央に進み出た。

アリスはダンブルドアの前に片膝をつくと、剣をダンブルドアに差し出す。

一体何が始まるのか、ぼくは二人の様子を、ただ見つめていた。

「フィスナー家当主代理、アリス・リーフ・フィスナーの名において」
「アルバス・パーシバル・ウルフレッド・ブライアン・ダンブルドアの名において」

『名前を呼んではいけないあの人』が復活したことをここに諒解し、英国魔法界の秩序と平和を守る身として、ここに『中立不可侵』フィスナーとして錦の御旗を立てることを宣言する」

「我が名において承認する」

鞘を装飾している宝石が、青白く発光した。光は筋となり、アリスとダンブルドアの二人を縛るように取り囲む。

アリスはちよつとだけ躊躇ったあと、言葉を口にした。

「ホグワーツに永遠の秩序と安寧を」

光はしばらく形を保った後、空気中に離散した。

「……アリスよ。よくフィスナーを継いでくれた。感謝してもし足りんわい」

こうべを垂れていたアリスが、顔を上げた。眉を寄せ、少しムツとしたような表情をする。

……この表情は知っている。予想外に褒められて照れている顔だ。

「……フィスナーがなくなったら、俺だって困りますから」
「そうじゃの」

アリスは立ち上がると、ダンブルドアから剣を受け取った。

ローブの中にしまい込むと、肩の荷が降りたような顔で、左耳のピアスに触れる。

「お前、大丈夫なのか?」

アリスの視線がぼくに向いた。

「大丈夫」とぼくが言うより早く、ダンブルドアが「それがの、病院を抜け出して帰ってきてしまったみたいなんじゃよ」と言う。

「はああ？ 何考えてんだ阿呆が」

ギ、と睨まれ、目を逸らして苦笑いをした。よりにもよって、アリスにバラすなんて。

「アリスに早く会いたかったんだ」

「気でも失えば抵抗しなくなるだろう」

「やめ、やめて、拳は止めよう、アリス。平和的に話し合いと行こうじゃないか」

はあ、と大きなため息つきではあったが、アリスはひとまず握った右手を下ろした。

ホツとする。こいつの拳は痛いんだ。

「寮まで連れ帰ってくれんかの？ アリス」

「……はあ、ま、途中でぶっ倒れられても嫌だし、分かりました」

おら立てよ、とアリスはぼくの足を軽く蹴る。

「痛いんだよ、怪我人には優しくしろよ乱暴者！」

「ほお？ じゃあ聖マンガにでも送り返さなきゃだな、怪我人さんよお」

「……ごめん、それだけは止めて」

立ち上がった。歩き出す。

「手を貸そうか？」

「いらない。必要ない」

「強がっちゃって」

「強がってない」

アリスはくつくつと喉の奥で笑いながら、校長室から出る扉を手で押さえた。通れ、つてか。

その気遣いに気付かないフリをして、ぼくはダンブルドアを振り返らず、扉をくぐった。

ぼくの前で、ほんの少しだけゆっくりめに歩くアリスは、てっきりそのままレイブンクロー寮に戻ると思っていたが、違うみたいだっ

た。

「どこへ向かってんの？ アリス」

「んー？」

アリスは首を傾けて背後のぼくを見遣ると、にやっと思どい笑みを浮かべてみせた。

「お前の死地」



本当に死地だった。

「あー……ごめん、本当にごめんなさい、許してください……」

ぼくの手を両手でギュツと握ったまま泣くアクアに、一体全体どうしていいか分からずにアリスを振り返った。

助けを呼ぶも、アリスは鼻で笑う。

「バカやらかさない薬になりやあいんだけどな、お嬢サマの涙が」

「……っ、本当、本当よ、バカ……」

アクアは涙に濡れた顔を上げた。直視出来なくて、思わず目を逸らす。

「去年も、今年も……いつもいつも、私は心配してばかりで……なんでも、あなたは一人で決めて、一人で行ってしまうから……本当にいつか私の前からいなくなっちゃうんじゃないかって、怖くて、すごく、不安で……」

俯いてすすり泣くアクアを、見下ろした。

アクアに掴まれていない右手で、彼女の頭を撫でる。

「……ごめん、本当に、ごめん」

アクアはキツと顔を上げた。涙の跡に、思わずたじろぐ。

女の子を、それも大好きな女の子を泣かせてしまったことに良心が痛んで仕方がない。

「許さないわ。いつだって泣いてあげるんだから。あなたが自分を大事にしないたび、泣いてあげるんだから。覚悟なさい」

「……それは、怖いなあ」

くすり、と笑った。

「心配かけてごめんね。……ありがとう」

アクアはぼくの手を離すと、唇を尖らせそっぽを向いてしまった。白い頬が、今は僅かに赤みを帯びている。

少し惜しいな、と思いつつも、これが彼女なりの照れ隠しだと思うと、それも可愛いな、と感じるから、現金なものだ。

「……そうだ、あなたに言っておかなきゃならないことがあるの」

頬の赤みが引いた折、アクアは口を開いた。

ちようどアリスはぼくの腹の傷を見ようとしているところで、ぼくはそれに抵抗しつつも、アクアを向く。

「何？」

「私の両親が捕まったの」

「……へ？」

ぼくとアリスの間抜けな声が揃った。

ぼくらはお互い、嫌そうな顔を見合わせる。

「……捕まったって？」

「そう。『死喰い人』として。魔法省にいたらしいの。あなた、見なかった？」

「二人一人の顔を見る余裕はなかったよ……」

そうなのか、アクアの両親に会っていたのか。

一体どれだろう。人を人と思わず吹き飛ばしてばかりいたから、顔を認識しようとしていなかった。

「まあ、この夏休みをどう消費しようか考えていたから、私としては少しありがたいのだけれど」

アクアは案外淡々としていた。

どうしてそんなに平然としているのか、と尋ねると、いつかこうなると思っていた、との答えが返ってきた。

「ドラコは悔しそうにしていたけれど。悪いことをしたら捕まるのは当たり前じゃない。私の両親は、それに気がつかなかった、それだけのことじゃないかしら」

「……あつさりと言うな、おい」

アリスの言葉に、アクアは軽く肩を竦めた。

「そうかしら。……そうかもね。実のところ、少しホツとしているのよ。私の両親は、子供に対してはいい親だったけれど、人としていい人だったかは言いがたいわ。……だから、あなたが申し訳なく思う必要は全くないので、アキ」

言い当てられ、ギリとした。

やっぱり、とアクアは柔らかく微笑む。

「私とユークは大丈夫よ。これでデイゴリーを出してあげられそう
で、良かったわ」

「……セドリックのこと、頼んでも?」

「ええ。……少しは私のことも、頼ってちょうだい」

「……ありがとう」

その時、アリスが口を開いた。

「お嬢サマよお。……何かあればうちに来い。お前の壊滅的な料理よりはマシなもんが作れるから」

アクアはパツと顔を赤らめる。

「一体いつの話をしているのよ! 今はもっとマシなものが作れるわ
!」

「さあて、どうだかな。アキもそこそこ料理は出来るもんな、なあ?」

「え? ああ、ま、簡単なものならね」

「だってよ、お嬢サマ」

アクアがぼくを睨みつけてくる。え、ぼく、何かしたっけか。今晚
むべきはアリスだと思っただけど、違うのかな?

「……アキ」

「は、はい」

顔が整っているから、睨まれると今だに少し怖いんだよな、アクア。
返事をする、思いがけない言葉が降ってきた。

「誕生日、七月三十一日よね?」

「う、うん。そうだけど……?」

どうしてそんなことを聞くのだろう。「どうしたの?」と尋ねると、
アクアは「な、なんでもない!」と両手を振った。アリスはクスクス

笑っている。
なんだか久しぶりに、
肩の力が抜けた。

第40話 刻

「……ただいま、父さん、母さん」

ぼくは墓石の前で微笑んだ。

闇祓いの研修が本格的に始まるのは、九月に入ってからだという。引越しも終わり、少し時間の余裕が出来たので、ぼくは日本に来ていた。墓参りのためだ。

座り込むと両手を合わせ、目を閉じる。

父さん、母さん。ぼくね、闇祓いになったんだよ。なんとか、合格したんだよ。

もう、ちっちゃくて無力なぼくじゃない。もう、学生じゃない。成人した、立派な大人なんだよ。

父さんと母さんは、今のぼくを見たら何と言うのかな。頑張れと、応援していると、言ってくれるのかな。

父さん、母さん。

——絶対に、仇を討つから。

もう少しだけ、待っていて。



「……帰ってきてたの」

階段に足を掛けたシリウス・ブラックは、背後から掛けられた声に振り返った。

一つ下の弟、レギュラス・ブラックが、眉を寄せてこちらを見ている。

「そんな嫌そうな顔すんな。すぐ出て行ってやるよ、ここには荷物やら何やら置きに来ただけだ」

シリウスは肩を竦めた。

「親父とお袋には、俺のこと言うなよ」

「言わないよ。母さんなんて、兄さんのことはもう息子だとも思っていないと叫んでいたし」

「おー、それが平和だ。俺はただのシリウスさ、ブラック家なんて知らない、興味もない。オリオン・ブラックとヴァルプルガ・ブラックの間には、レギュラス・ブラックって出来のいい両親の息子が一人。ひとりつきりさ。家系図も、この調子じゃ俺のところは既に抹消されてんだろ。異端な闖入者はとつと消えますよ、安心しろって」

そんなシリウスの言葉に、レギュラスは形の良い眉を顰めた。

何も言わず睨むレギュラスに、シリウスは小さく息をつく。

「……お前と会うのも、多分最後だろうからさ」

ぽつりと呟いた。レギュラスは僅かに目を瞠る。

シリウスは目を逸らした。

「親父とお袋のこと、よろしくな。……あんなんでも、一応は育ててくれたワケだし。そのことについて、感謝はしてる。とりあえずは……後」

こういうのは、苦手なのだ。

シリウスは髪をぐしゃぐしゃと掻いた。

「……身体に気をつけろよ、お前も。季節の変わり目とか、すぐ風邪引くんだから」

言い逃げるように、階段を駆け上がる。

「……っ、兄さんなんか言われずとも、分かってるよー！」

階段下から、レギュラスの大声がする。

それに、シリウスはくつくつと笑った。

「——バイバイ、レギュラス」

俺の、たった一人の、弟。



闇の帝王の居城にて、集められたセブルスら若年の死喰い人は、何をこれから言われどんな罰を受けるのかについて戦々恐々としていた。『幣原秋を無力化して連れてこい』という指令に、誰一人として成功することが出来なかったからだ。

しかし彼らの前に姿を現した闇の帝王は、怒り狂ってもいなければ

殺意を周囲に撒き散らしもしておらず、どころか普段よりも纏う雰囲気は柔らかかった。

「まあ無理だろうなとは思っていた……それでいい。それでこそ、幣原直の血を継ぐ者。幣原直の命を代償にしたのだ、そこそこの者だと詰まらない……」

喉の奥で、闇の帝王はくつくつと笑った。笑みは普通、周囲を暖かくさせるものだが、この空間において、笑みはむしろ空気をひんやりとさせるものだった。

闇の帝王の笑い声を聞いて、何人かがギクリと身を強張らせる。

「さて、エイブリー。俺様に何かいい知らせを持ってきているようだな」

急に名前を呼ばれ、一人の青年の瞳に動揺が走った。

しかしそれも一瞬のこと、すぐさま動揺を瞳の奥に押し込めると、青年は一歩足を踏み出す。

彼は、巾着袋のようなものを右手に持っていた。

その袋の口を開き逆さにすると、中から一匹のネズミが姿を現した。

闇の帝王が指を鳴らすと、ネズミは一刹那後に人型に戻される。

彼は涙を瞳に浮かべ、恐怖にガタガタとその身を震わせた。

「彼の名はピーター・ペティグリュウ。グリフィンドール生で認可されていない『動物もどき』で、ポッターとブラックの腰巾着で、幣原秋の友人——いや、違うかな？ 普通友人は、敵に売り飛ばさないから」

クスクスと、忍びやかに嘲笑が漏れる。

笑うことなく目を伏せたのは、セブルスただ一人だった。

「ポッターやブラックらと共に『不死鳥の騎士団』に入団した奴です。スパイにでも何でも、いかように」

エイブリーは乱暴にピーターの背中を蹴り飛ばす。

あっけなく床に這いつくばったピーターは、顔を上げ闇の帝王を見ると、真っ青な顔のまま「やめ……殺さないで……助けて……」と涙を零した。

「ペティグリューよ」

闇の帝王の声は、存外に優しかった。

「死ぬのが怖いか？」

その言葉に、ピーターは強く頷いた。

「俺様も怖い。だから貴様の臆病さはよく分かる」

闇の帝王は静かに言った。

死喰い人も、ピーターも、驚いたように目を瞠った。

「当然だ、死は恐ろしい。大義のために命を投げ打つ？ そんなこと出来るはずもない。そんなことが出来るのは聖人か超人だ。命が消える瞬間はあつけない。人間は脆い生き物だ。どれだけ大切に守っても尚、あつけなく踏みにじられる。——ピーター・ペティグリューよ」

ピーターは闇の帝王の言葉に聞き入っている。涙と鼻水で汚れた顔のまま、呆然と。

闇の帝王は、人の弱さを知っている。弱さを見抜き、付け込むことに長けている。

『不死鳥の騎士団』の戦死率は非常に高い。だが今我らの仲間になれば、少なくとも貴様はどんな戦場に連れ出されたとしても、死なずに済む」

甘い言葉を、望む言葉を、闇の帝王はくれてやる。

「さあ、どうする……？」

闇の帝王は、ピーターに手を差し伸べた。

震える手で、ピーターはその手を取ってしまった。

誰に聞かせるでもなく、闇の帝王は楽しげに呟いた。

「彼奴が闇祓いになった。さあて、こちらの手札も増やさねばなるまい。幣原秋よ、貴様はその手を血に染める覚悟があるか……？」



年度末の宴会が開かれている最中、ぼくは自室のベッドに大の字になって、天井を見つめていた。

レイブンクローのベッドは天蓋付きで、深い青のビロードに、星の形をした銀糸が彩られている。他の三寮だつて何かしらの特色があるだろうが、宇宙に包まれているような心持ちで眠れるのは、レイブンクロー寮だけだろう。

「宴会に行かないの？」

涼やかな声が聞こえた。顔だけをそちらに向ける。

緑の裏地が縫いこまれたローブに、同じく緑色のネクタイ。

トム・リドルが、ぼくに笑い掛けていた。

「……腹刺したせいかな、食欲があんまりない」

「なるほど」

ギシリ、とベッドが音を立てる。リドルがベッドの端に腰掛けたのだ。

「久しぶりに本体を見ると、なんだか萎えるもんだねえ」

「本体……ああ、ヴォルデモートのことか」

「そう。僕には一切合切気がつかなかったようだけど」

リドルはナイトスタンド横に置いてあった本を手に取ると、パラパラとめくった。もつとも、読む気はなく、ただ手遊びの一環のようだったが。

「ねえアキ、読みたい本があるんだ」

「あー……何？　ここにあるものなら、いくらでも持っていっちゃって大丈夫だよ」

「いいや、ここにない本」

リドルはぼくを振り返ると、底知れぬ笑みを浮かべた。

ぼくは目を瞬かせる。

「日本魔術の書物だよ」

——運命の刻は、巡り来る。



ホグワーツ特急に乗ってマグル界へと帰る日は、いつもいつも晴天だ。

まあ、もう夏だしな。眩い陽射しに目を細め、思う。

「帰りたくない……ずっとホグワーツ特急に乗っていたい」

「気持ちは分かるけどね、ハリー」

そう言いながら、日刊預言者新聞をめくった。

ここ一年の目逸らしは一体なんだったのか、新聞は今や、死喰い人への対策や吸魂鬼の撃退法、非常時の備え、ヴォルデモートを見たなどという信憑性の低い投書で記事が埋まっていた。見事な手のひら返しに笑ってしまう。

「まだ本格的じゃないけど、でも遠からずね……」

ハーマイオニーがため息をつきながら、新聞を畳んだ。ハーマイオニーの隣で、アクアも難しい顔をしている。

……どうだっていいけど、ぼくとハーマイオニーが一緒にいる時、アクアは必ずと言っていいほどぼくじゃなくハーマイオニーの隣に行きたがる。……いや、別にいいけどさ。いいけどさあ。

ロンとアリスは、今日もまたチェス対決をしている。よく飽きないもんだ。

「ちなみに、今の勝率は？」

「百五十勝百七十八敗」

チェス盤から目を逸らさず、アリスは呟いた。ほっほう、微妙にロンの方が上手いのか。今現在のチェス盤の戦況も、ロンの方が優勢のようだ。

ぼくとハリーは、しばらく二人のチェスを眺めていた。

風に当たりたくなって、外に出た。デッキは相変わらず、風がビュンビュン吹いている。

手すりに体重を掛けて、ほっと息をついた。

「……アキ」

そつとぼくの名前を呼ぶ声。高く小さなその声は、しかしぼくが聞き逃すはずがない。

「……アクア」

風の強さに、アクアは少し顔をしかめた。両手で、長い銀髪を抑えている。

笑って指を鳴らすと、彼女の髪を乱すけしからん風は姿を潜めた。

「……ありがとう」

「どういたしまして」

はにかむように、アクアは微笑んだ。その笑顔に、胸が温かくなる。

「あー……」

好きだなあ、と、素直にそう思った。

照れ臭くって、あんまり言えないけど。

「……ご両親のこと、ごめん」

口から零れたのは、全然違う言葉だった。

ぼくの言葉に、アクアは目を瞬かせる。

「……あなたが謝ることじゃないと思うけど」

「そうかもしれないけど……いや、それでも」

口ごもる。アクアは小さくため息をついた。

「私の両親のことに對して、あなたが出来ることは何一つとしてないわ。気に病む必要も一切ない。……それは、私の領域よ。あなたが立ち入る必要はないわ」

アクアの口調は、存外はつきりしていた。

いや……この子は元々そうだ。一度こうと決めたことに對しては曲げない頑固さを持っている。

この子のそういうところが、ぼくは好きなんだ。

「……もし何かあったら、アリスの家に駆け込むんだよ。あいつのところは『中立不可侵』だから、おいそれと危害は加えられないはずだ。きつと安全だから」

ぼくの言葉に、アクアは目を瞳ると楽しそうに笑った。

「……何？」

「いえ……まさかあなたが、そんなことを言うなんてね。彼女に、他の男の家に転がり込め、なんて」

「……あっ」

何も考えていなかった。そうか、一応は、そういうことになるのか。

「……気に障った？」

「あなたらしいなって思っただけよ」

アクアの声は穏やかだった。

「残念ながら、フィスナーと私は幼馴染なのよ？ フィスナーがどんな人か、私はそれなりに知っているつもりよ。それに、ユークもいるしね。あの子はフィスナーを好いているから」

「……それもそうか」

ガタン、と列車が揺れた。徐々に速度を落としていく。もうすぐキングズ・クロス駅に到着するのか。

「戻ろうか、アクア」

そう言っつて、アクアに手を差し伸べる。

アクアは嬉しそうに笑って、ぼくの手を握った。

「……うん」



キングズ・クロス駅には、予想もしていなかった集団が待ち構えていた。さしずめ、ハリー歓迎団と言ったところか。

マッドアイにトンクス、リーマス、アーサーおじさんにモリーおばさん、それにフレッドとジョージの双子だ。

バーノンおじさんとペチュニアおばさん、それにダドリーは、ハリー歓迎団を見て物凄い表情をしていた。言うならば、そう——ハグリッドが、海の上の小屋に現れたときのような、あんな表情。

マッドアイとアーサーおじさんがダーズリー家三人に近付いているのに、ぼくとハリーは顔を見合わせ、クスクスと笑った。

今年の夏は、どうやら去年よりも随分と過ごしやすくなるに違いない。



地下牢への階段を、アクアは降りて行った。

幼い頃、両親に口答えしては何度も何度も放り込まれた地下牢だが、成長してからは随分と久しい。冷たい空気に、懐かしみを感じた。早く、行ってあげなくては。魔法省での一件から、そろそろ一週間が過ぎようとしている。

地下牢に囚われている彼、セドリック・デイゴリーに食料を届けるのは屋敷しもべの役割だったが、この家の主人である父が捕まってしまったから、果たしてその役割が今も継続されているかは怪しいものだ。

いつもこの家に帰ってくると出迎えてくれていた屋敷しもべ、彼の姿をまだ見ていない。どうしたのだろうか、と、ユークは屋敷の中を探し回っているところだった。

ゾクリ、とアクアは身震いをした。階段を降りる足が竦む。何だか、嫌な予感がした。

——アキに、頼まれたのだから。セドリックのことを。

思い返して、気力を奮い立たせる。

——嫌な予感ごとき、何だつて言うのだ。

「……デイゴリー、いる？　いるのならお願い、返事をして……」
暗闇にそう声を掛けるも、聞こえるのは自分の靴音だけだ。
やがて、階段が終わる。地下へとたどり着く。

手に持った燭台を、アクアは掲げた。周囲が蝋燭のぼんやりとした
灯りに照らされる。

「……………っ！」

悲鳴を上げなかったのは、声が出なかったからだ。

血に染まる死体を、これまでに数度目にしたことがあるというの
も、要因の一つかもしれない。

それでも、思わず腰が抜けた。

「……デイゴリー」

それだけを喉から絞り出す。

地下牢の奥、鉄格子。

以前彼がいたそこに、あの快活な青年、セドリック・デイゴリーの
姿はなく、ただ、おびただしい血痕のみが、広がっていた。

短編 ユーク視点 灰色の少年が見る夢（上）

姉であるアクアマリン・ベルフェゴールがホグワーツに入学してしまつた後の日常は、ユークレース・ベルフェゴールにとって、あまりにも退屈で空虚なものだつた。

姉が帰ってくる長期休暇だけが、当時のユークの一番の楽しみで。中でも、夏季休暇に家族と、そして姉の婚約者であるドラコ・マルフォイの一家と行く海外旅行を、ユークは心の底から待ち侘びた。

一年ぶりに見た姉は、相変わらず無口で、相変わらず表情もあまり変わらない。それでもユークを見て、安心したように僅かだけ浮かべる微笑みが、ユークはやっぱ大好きなのだつた。

旅行先だつたアテネの古代遺跡は、たくさんの見どころがあつたけれど。パルテノン神殿の夜景は、とても素晴らしかつたけれど。それ以上にユークは、姉とずっと一緒にいられることが嬉しかった。

いつでもどこでも、姉にまわりついては、姉の婚約者であるドラコに「渡さない」とばかりに歯を剥いて。幾度となく繰り返されたその光景に、ドラコもため息を吐いては苦笑していた。

姉上もドラコもずるい、僕も早くホグワーツに行きたいです、そんなワガママを言うユークに、両親も「あと一年だから、我慢してね」と宥めながらも笑っていた。

——あれはそんな、どこまでも幸せな最中に投げかけられた言葉だつた。

「お前は本当は、姉のことが疎ましいんじゃないのか？」

——旅行最終日。

船上で水平線に沈む夕日を眺めていたユークレース・ベルフェゴールは、ドラコ・マルフォイから突如投げかけられたそんな言葉に、しばし言葉を失つた。



ベルフェゴール。

この苗字は、英国魔法界で重い意味を持つ。

家系図を遡れば、元は純血ブラツク家、またグリーングラス家の分家であるらしい。傍系であった筈のベルフェゴール家は、しかしいつしか誰も、その名を軽んじることなどできない程の名家に成長した。『中立不可侵』フィスナーが、英国魔法界の官界を制し、秩序と安寧を齎しているのと同様に。ベルフェゴールはその資金力から、魔法界の経済に多大なる影響力を有している。

かつては分家筋であり、か弱い力しか持っていなかったベルフェゴールは、しかし中世からの変革期、時代情勢を読み切り投資家として急速に力を発展させた。口きがない者は、ベルフェゴールの発展を、その苗字になぞらえこう囁いた。

曰く。

——『ベルフェゴールは悪魔と契約したのだ』と。

本当に悪魔と契約したのか、そんなことをユークは知る由もないが、それでもその言葉を一笑に付せない理由もある。

一族の急激な発展の裏で、ベルフェゴールがしてきたことが、決して綺麗なことばかりでないことを知っている。

かつて一世を風靡した闇の時代。その筆頭たる闇の帝王の思想に賛同したベルフェゴールは、多くの資金を提供した。

闇の帝王が失脚した後、闇側であったベルフェゴールが持ち堪えたのは、ひとえにその資金が、人々の口をべったりと封じ込めたこそ。アズカバンには入れられなかったものの、闇の帝王に対する恭順は強く、平和な時代となった後も、ひっそりと息を潜めては、闇の帝王の復活を渴望している。

表の顔は、資金力で魔法界の発展を後押しする投資家。

裏の顔は、闇の帝王に跪き頭を垂れる忠実な臣下。

ユークレース・ベルフェゴールは、そんな家の直系嫡子として生まれ育った。



ベルフェゴールの一族で、姉、アクアマリン・ベルフェゴールは、たったひとり問題児だった。

ベルフェゴールの直系長子でありながら、一族の思想、ひいては闇の帝王の全てを否定する異端の娘。

普段は大人しい姉が、その時ばかりは声高に怒鳴るのだ。許せない。闇の帝王は人殺しで、とつても悪い人なのだ。みんな、騙されているのだと。

何度も何度も地下牢に閉じ込められて尚、姉は自分の意見を決して曲げはしなかった。

階下から聴こえる、姉が泣きながら訴えかける声。その声を聞きながら、ユークはずっと、疑問に思っていた。

なんで、姉上は謝らないんだろう。

謝ればいいのに。

謝れば、それで終わるのに。

自分が間違っていました、もうそんなことは言いませんと、ただそう言うだけでいいのに。

そうしたら、すぐに出してもらえるのに。

ユークも、地下牢に閉じ込められたことがある。木の一番高いところから魔法を使ってふわりと着地する、なんてちよつと危険な遊びをしていたら、そりやもうめちやくちや怒られた。

反省するまでそこに居なさいと放り込まれた地下牢は、夏でも寒さに凍えるほどで、自分以外の音は何一つ聴こえなくて、暗闇に何かが浮かび上がってくる気がして、幼いユークは心の底から震え上がった。

号泣しながらごめんなさい許してくださいと叫ぶと、案外拍子抜けするほどあっさりとして出してもらったことを憶えている。もうそんなことはしちやダメよ、と優しくユークを諭した母に、ガタガタ震えながら頷いた。

両親は、恭順を示しさえすればどこまでも優しく、そして甘かった。ユークに対してだけではない。姉のアクアに対しても、きつとそうだっただろう。

一言、その場しのぎのもので構わない、たった一言「ごめんなさい」と、「私が間違っていました」とさえ口にすれば、それだけで良かったのに。それだけで、間違いなく両親は、即座に姉を許したのに。

姉は絶対に謝らなかつた。謝れない人ではない。自分が花瓶を割ってしまった時は即座にごめんなさいと謝っていたし、ユークが父の希少な魔術本を破ってしまったときも、姉はユークを庇って父に謝ってくれた。

ただ、これだけ。

闇の帝王とその思想に関してだけは、姉は決して謝らなかつたし、自分の意見を一度たりとも曲げなかつた。

何度、地下牢に閉じ込められても。

何日も、出してもらえなくても。

姉だって、地下牢は怖い筈だ。青ざめ震える姉の横顔を、恐怖にすすり泣くその様を、ユークは何度だって見てきた。そのたびに、込み上げる声を噛み殺した。

姉が謝ってくれさえすれば、一緒に暖かい夜ご飯を食べられたのに。

信念を永遠に曲げるとか、そこまでする必要なんてない。たったの数文字。心を裏切る数文字を、ただ唇の上に紡げばいい。

今だけ、嘘をつけばいい。

それだけで、全て終わるのに。

十字架を踏むという簡単なことが出来ずに処刑される異教の者の心情が、ユークには全く理解できなかつた。

だって、十字架は彼らの信ずる神そのものではないのだ。

敬虔なる信徒が、神の纏う衣そのものを穢してしまったと言うのなら、その恐れ戦き具合は想像もできよう。

しかし十字架自体は、ただのモノでしかない。「私が間違っていました」という言葉が、ただのコトバでしかないのと同じように。

目の前にある正解を、姉はどうして見逃すのだろう。

姉はきつと、どうしようもないほどに正直者だった。

姉を地下牢に入れた後、父は決まって険しい顔で『犯人探し』を行

なつた。

誰が、姉にそんな思想を吹き込んだのか。

親族を疑い、仲間を疑い、時にその矛先は家族へ、母へと向いた。その度に母は、顔を覆って私じゃないと呟いていた。

『私には、あの子がわからない。私のお腹から生まれたはずのあの子が、私とあなたの血を引くあの子がどうしてあんな馬鹿げたことを叫ぶのか、私には全く理解できない』

自分の心を偽れない、不器用で馬鹿正直な姉のことを、ユークはいつしか、守ってあげなければと思うようになった。

姉が一番近い自分が、姉を守ってあげなければ。

『ユーク。お前は、アクアのように馬鹿げた妄言を吐きはしないだろうね?』

父から度々投げかけられる、忠誠を確かめるその言葉。

『お前は、ベルフェゴールを継ぐ者なのだから』

その度に、ユークは頷いてきた。

「——はい。父上、母上。僕はベルフェゴールの長男として、この家に相応しい人間になります」

したり顔で。

「父上と母上の思いを、姉上もいつか、わかってくれる日が来るでしょう」

ユークレースは、姉以上に頑固で不器用な人を、これまで一度も見ることがない。

恐らくはきつと、これからも、見ることはないのだろう。



「……どうして、そんなことを言うんですか」

耳の奥で、心臓の鼓動が聞こえる。ドクドクと、普段よりもずっと早く大きなその音に、自分の緊張と動揺を悟った。

否定を。

ドラコの言葉に、否定をしなければ。

僕が、姉上を疎ましく思うだなんて。そんな馬鹿げた妄言は、即座に否定されるべき代物だ。

唾を飲み込む。しかしユークが口を開くより、ドラコが言葉を継ぐ方が早かった。

「お前は、ベルフェゴールの次期当主だから」

ユークを見据え、ドラコは静かに微笑んだ。

「きつとお前は、これまでそう思うことを自らに禁じてきたんだろう」

ドラコが何を言っているのか、ユークには、よくわからなかった。

ユークの思いを知ることなしに、ドラコは言葉を紡ぐ。

「姉のことが好きだと全身で振る舞うことで、お前は姉を守ってきた。ベルフェゴール次期当主、ユークレース・ベルフェゴールのその立場で。姉が孤立してしまわぬよう、お前は空気を読んで器用に立ち振る舞ってきた。愛嬌を振りまいて、どこにも角が立たぬよう、要領よく、愛想よく。お前の器量には、僕も随分と助けられた」

そんなことはないのだと、ただ叫びたかった。

自分が姉を想う気持ちに、そんな裏などないのだと。

ただ純粋な気持ちで、自分は姉を慕っているのだと。

そう言いたくて仕方ないのに、なぜか言葉は喉裏で張り付いたまま、音になることはなかった。

「でも、もういいんだ」

そう、ドラコは続けた。

「ユーク。もういい。もう、いいんだ。僕は、僕だけは、お前の心を肯定しよう。姉のことを疎ましく思っても、良いんだ。お前はずっと、姉に迷惑をかけられてきた。その感情は、正常なものだ。罪悪感に駆られる必要なんてない」

そんなことを、ドラコは言う。

まるで、ユークが姉のことを厭うていることを、確信しているかのようにだった。

何を勘違いしているのか。あまりにも見当違いなことを得心顔でのたまうドラコを、一笑に付してしまいたかった。

何を、馬鹿なことを。

ドラコ、あなたは僕の何を見てきたんですか。
そんな筈、ないじゃないですか。

僕は姉上のごことが大好きなんですよ。

僕が姉上を疎ましく思うだなんて、そんな馬鹿なこと、ある筈が――

「もう、大丈夫だ。もう、お前が姉を守ってやる必要はない」
重荷だっただろう。

お前の頑張りをも、僕は讃えたい。

そう、ドラコ・マルフォイは呟いた。

「お前の姉、アクアマリン・ベルフェゴールは、この僕、ドラコ・マルフォイが、この先一生を掛け、永遠に守り通すことをここに誓おう。……お前はもう、自由になっていい。お前は、お前の為すべきことをして、良いんだ」

ドラコの目は、言葉は、どこまでも誠実だった。

「来年のお前の入学を、楽しみにしている。……スリザリンで待っているぞ、ユークレース・ベルフェゴール」



夏休みは終わった。ドラコも姉も、ホグワーツへと戻ってしまった。ユークはあと一年、この家で待たなければならぬ。

ユークも、プレップ・スクールの最高学年となった。かつて姉やドラコも通ったこの学校は、英国魔法界における良家の子女がホグワーツに通う前の受け皿という一面を帯びている。

最高学年となった学友たちは、来年と迫ったホグワーツ入学のことを、しきりと噂するようになっていた。中でも彼らの興味の中心は「自分がどの寮に入るのか」ということらしかった。

ホグワーツに存在する四つの寮。グリフィンドール、レイブンクロー、ハッフルパフ、そしてスリザリン。

組分け帽子が選んだ寮で、七年間の学生生活を送ることになる。所属する寮次第で、友人も、先輩も、自らの未来さえ変わり得る。

一度折り返された制服の袖を、ぼんやりと見つめた。二年前にアリス・フェイスナーから譲ってもらった制服は、まだユークには少し大きい。

「ねえユーク、あなたはどの寮に入りたいの？」

無邪気にそう尋ねてきたクラスメイトの女子が、周囲に慌てて引き止められる。

口を開きかけていたユークは、周囲のそんな対応を見て、そつと口を閉じた。

父親がマグルである『半純血』の彼女は、ベルフェゴールの一族が一人残らずスリザリン出身だということを知らないのだ。

一族の『問題児』たる姉、アクアマリン・ベルフェゴールでさえ、スリザリンに組分けされた。

父も、母も、誰だって。例外はない。あつてはならない。

ユークが組分けられる寮なんて、入学する前から決まっている。

「……………」

入りたい寮——なんて、今まで一度も考えたことがなかった。考える必要もなかった。

両親が次期当主に望んでいる寮は明らかだったし、ユークは親の期待に、これまで誠実に応えてきた。

これからも、応え続ける。

それが、ユークレース・ベルフェゴールの役割で、人生だ。

ベルフェゴールを継ぐ者として、ユークレース・ベルフェゴールは



足元で、ぱしやりと雫が跳ねた。

ユークはゆっくりと視線を向ける。

靴の先が、湧き出す赤色に濡れていた。ひたひたと靴底を浸すそれに、思わず目が離せなくなる。

ぐい、と強い力で肩を引かれた。思わずユークは一步、後ろに下が

る。

「ああ、靴が汚れてしまったね。あとで新しいものを買ってあげよう」
ユークの靴の汚れを嘆く、父の声。ユークは足元から視線を上げ、赤い色の出処を見た。

奇妙に折れ曲がった手足は、針金細工のおもちゃを力任せに変形させたかのようにだった。まだ息があるそれは、ただ『まだ息がある』だけに過ぎない。

「困ったものだ。血を裏切るものが途絶えない。我々には、闇の帝王が戻ってくるまで魔法界を綺麗に保つ義務があるというのにな」

あのフィスナーも混じってしまったのだものなあ、と、父は呟く。
『中立不可侵』の象徴がああ、の体たらくでは、魔法界の墮落も無理なからん……リイフもいい加減、純血の新しい妻でも娶ればいいのに。マグルの血が入った息子が次代の象徴など、フィスナーももう終わりかね……」

そこでふと、父はユークを見て微笑んだ。びくりと思わず身が竦む。

「ユーク。魔法界の掃除も、我がベルフェゴールの大事な使命だ。闇の帝王がお戻りになるまで、我々は秩序を保ち続ける責任がある。純なるものは保全し、穢れは速やかに排除する責任がね……ユーク、お前ならば、わかってくれるはずだ。だってお前は、私の自慢の息子なのだから」

ユークの肩に手を置いて、父はユークを見下ろしていた。その瞳をただ見返す。

ユークの言葉を、父は待っている。従順な息子の言葉を。自分の跡を継ぐ、利発な息子の良い返事を。

だから、ユークは。

『正解』を、選んだ。

いつものように。

「はい。わかりました、父上」

父は、安心したようににっこりと笑った。

正面から、ドクロの仮面を被った者が近付いてくる。その者はユーク

クの父に気がつくくと、その場で膝をつき、頭を下げた。

父は軽く言う。

「あとは任せたよ」

「承知しました」



魔法が使えぬ者のことを、マグルと言う。

加えて近い者は皆、マグルと婚姻した者を『血を裏切る者』と呼び、マグルの両親から誕生した魔法使いを『穢れた血』と呼称した。

——魔法界にマグルは不要。魔法界に関わるマグルは穢れそのものである。マグルと関わろうとする魔法使いもまた、穢れを持ち込む大罪人である

一方で。

——マグルと魔法使いは、共に手を取り合い共存すべきである。闇の帝王がかつて行なった大量殺戮は断じて許されるべきものではない。かつての過ちを悔悟し、正しい世にて更なる発展に尽力するべきである

ユークは、相反する思想を受け入れ、立場と状況によって使い分けることを求められた。

現代の魔法界で、穢れた血排除を大々的に謳うことにメリットはない。『名前を呼んではいけないあの人』が『生き残った男の子』ハリー・ポッターに倒された現代では、かつてサラザール・スリザリンが掲げた思想は警戒されるばかりだ。

表の顔と、裏の顔。

ベルフェゴールの繁栄に、二面性は切っても切れない。

『そういうもの』なのだと思え入れた。

——否。受け入れるしかなかった。

子供にとって、両親は絶対的な存在だ。逆らって良いことなどひとつもない。

両親は、ユークに『次期当主に相応しい、従順で賢い良い子』を望

んだ。ユークは親の望むまま、期待に沿って生きてきた。

きつと自分はこのまま、理想通り期待通り、ベルフェゴールの次期当主として生きるのだろう。両親が敷いたレールの上を、外れることなく進んでいく人生。

表と裏を使い分ける器用さと、空気を読んで振る舞う技術。共に、姉が持ち合わせていないもの。共に、ユークが持ち合わせているもの。ベルフェゴールとして生きていく上で、必要不可欠な二つの要素。

姉のことが、好きだった。

恐らくは、憐憫込みで。

不器用で馬鹿正直な姉のことを、かわいそうだ、守ってあげたいと思いはすれど、疎ましいだなんて考えるはずもないと——少し前まで、思っていた。



「お帰りなさい、姉上！」

「……ただいま、ユーク」

冬休みで帰ってきた姉に、ユークは勢いよく飛びつこ——うとして、途中で慌てて堪えた。前は姉の方が高かった背丈が、今は逆転している。そうはいつでもほんのちよっぴりだが、ユークにとっては大きな差だ。

勢いを寸前で殺すと、姉を包み込むように優しく抱きしめた。

「背が、伸びたわね」

「僕だって成長しますから」

そうねと言って、姉はユークの頬をそつと撫でた。

その夜、ユークは姉と久しぶりに一緒に寝たいとワガママを言った。姉はしようがないわねと微笑かに笑った後、そのワガママを許してくれた。

枕だけを持って、姉の部屋の天蓋付きベッドにダイブする。ユークが両手両足を広げて届かないほど大きなベッドは、小柄な子供二人

くらい難なく受け止めた。

クスリと微笑んだ姉は、おいでとばかりにユークに手を伸ばす。素直にその腕に飛び込んだ。

電気を消し、毛布に丸まっては、小さな声で近況を話す。と言つても主に喋っているのはユークばかりで、姉はいつものように、静かにユークの言葉に耳を傾けていた。

——やっぱり、ありえない。

僕が、姉上を疎ましく思っているだなんて、そんなことは絶対にありえない。

一通り話したいことを話し切つて、すつきりとした気持ちで息をつく。心地よい疲労感が、夜の眠気と混ざり合つて気持ちいい。

ぽふんと枕に頭を埋めると、姉は手を伸ばしてユークの銀髪をさらりと撫でた。優しい手つきに、思わず目を瞑る。

「……ねえ、ユーク。一つ、訊いてもいい?」

投げかけられた姉の声に、うとうとしかけていたユークは瞼を持ち上げた。

天蓋付きベッドのカーテンは、今日ばかりは閉じられていない。隙間から射し込む月明かりで、シーツに流れる姉の銀髪は、キラキラと光を放っていた。

「どうしたんですか? 改まつて」

「……ユークは、どうして」

そこで姉は、言葉を切った。続きを聞き漏らしたかと、ユークは思わず訊き返す。

「……ユークはどうして、私に良くしてくれるの?」

柔らかな声音だった。

穏やかな眼差しで、姉はそんな言葉を口にした。

「……………え?」

言葉の意味は、すぐにわかった。

でも、それをどうして姉が言うのかまでは、理解がすぐには及ばなかった。

「どうして、って……………そんな、なんで、その、そんな」

思わず身を起こす。狼狽えるユークと対照的に、姉は落ち着き払った目線で、微笑みさえも浮かべては、ユークのことをじっと見つめていた。

姉が、何を言いたいのか。

直感でわかったそれを、ユークはどうしても認めたくなかった。

「どうして、なんて、そんなの 아닙니다。姉上が好きだから……姉上のこと、大好きだから。理由なんてないです。ずっと一緒にいたって、そう思ってるから……」

『ずっと一緒に』……ね」

姉は、ユークの言葉の一部を繰り返す。その声は存外乾いていて、思わずユークは息を止めた。

「姉上は、僕のことを嫌いですか……?」

確かめるように囁いていた。

いいえ、と姉は頭を振る。

「好きよ、ユーク。大好きよ。私の、たったひとりの弟ですもの」「じゃあ、なんで」

どうして、そんなことを言うのか。

『良くしてくれる』なんてそんな言葉、姉弟間で使うようなものじゃないのに。

「……ねえ、ユーク。たとえば、私がこの家の敵になっても。それでもユークは、私を好きでいてくれる?」

「……………」

即答は。

ユークレース・ベルフェゴールには、できなかった。

きつとその日は、いつか来る。

きつと姉は、いつの日か、この家を出ていってしまうだろう。

それはもはや、確信だった。

今はまだ、姉が未成年だから、この家に帰ってきてくれる。でもいずれは成人となり、自分ひとりでも生きられるようになったらば。

姉は、この家を捨てるだろう。

姉の居場所は、この家にはない。

そのことを一番よくわかっているのは、他でもない姉自身だった。姉は、独り言のように呟いた。

「父様と母様は、きっと私を許さないわ……。今はまだ見逃してくれているけれど、それも一体、いつまででしょうね。私が考えを改めることを、もうあの人たちは期待していないでしょう。そして、私も……。もう、あの人たちの考えを変えさせようなんて思っていない。……。あの人たちにとって、私の考えは敵でしかないのでしょうか……」

姉は、両親を『あの人たち』と、まるで他人のように呼称した。事実、他人なのかもしれない。

姉にとって両親とは、家族とは、敵でしかないのかもしれない。

姉はずっと、敵に囲まれ生きていた。

「……ねえ、ユーク？」

小さな、小さな、姉の声。

ずっと、この声を聞いてきた。

生まれた時から、ずっと。

姉は、ユークのそばにいた。

「私がユークの敵になっても、ユークは私を好きでいてくれる？」

「……姉上は」

発した声は、僅かに震えていた。

「姉上は、僕の敵になることはありません。絶対に」

だって、ドラコが守ってくれる。

『一生涯守り通す』と、ドラコはユークに誓ってくれた。その言葉自体は腹立たしいものの、それでも頼もしいと思ったことは事実だ。

姉は僅かに目を瞞った後、くすりと小さく笑い声を零した。

「……ユーク、本当はわかっているんでしょ？ ベルフェゴールの次期ご当主様。私はきっと、このままいつか、この家を壊してしまう日が来るわ」

「マルフォイ夫人には、そんなことできません。この家は僕が継ぎます。僕が護ります。ドラコと僕が、姉上のことを護ります。姉上からも、この家を護ります」

家督を継ぎ、純血の血筋を護ること。

それが、ベルフエゴールの長男として生まれたユークの為すべきことだ。

「……そうね。ドラコはきつと、私を守ってくれるのでしようね……まさしく、一生をかけて、ずっと……こんなどうしようもない、問題ばかりを引き起こす、私なんかを……いっぱい迷惑かけられても、尚、それでも……」

姉はそこで、初めて表情を曇らせた。細い身体を小さく丸め、膝を抱える。

「……それでも私は、ドラコの語る純血主義が受け入れられない……。闇の帝王を賛美する父様や母様と同じくらい、理解できないの……。どうして？ 純血であることがそんなに偉いの？ マグルと私たちに、一体何の違いがあるというの？ ……マグルを忌避して疎むその思想が、私にはさっぱり理解できない。穢れて何？ 穢れてるって何なの。わからないわ。わかりたくもない。私には、純血を尊ぶその思想が、高貴なる血と持て囃される理由が、ちつともわからないの……気持ち悪くて、たまらないの……」

姉がここまで饒舌に話すのを、ユークは初めて聞いた気がした。

「……わかってる。わかってるの。こんなこと言っちゃダメなんだって。こんな考えを表に出してはいけないんだって。飲み込んで、黙って従わないと……私が我慢すれば、それで全部丸く収まるって、わかってる。わかってるのに……わかってるのに、できないの。そう振る舞えない……父様にも母様にもドラコにも、迷惑かけずに済むって、わかってるのに……」

姉は膝に頭を埋める。

ユークは何も言えず、ずっと姉の長い銀髪を見つめていた。

「……ユークにも。私なんかがお姉ちゃんで、ごめんなさい。今まで沢山苦勞を掛けたでしょう。ユークはずっと、良い子だったわ。私の分までずっと、余計に『良い子』でいてくれた。本当に感謝しているわ……ユークだけが、私を否定しなかった。ユークだけが、私の心の支えだった……でも……」

「ごめんなさい、と姉は言う。

震える声で。

「……私の弟、ユークレース。優しくって、そしてうんと賢い、私の自慢の弟……。あなたを惑わせてしまって、ごめんなさい。ドラコのように、両親の言葉だけを素直に聞いて、両親の期待だけに添ってれば、きっと今よりずっと楽に生きられた筈なの」

悔やむような声音だった。

自分さえいなければと、そう思っているような。

「思っているわ……。私さえいなければ、父様と母様をこんなに悩ませることもなかった。ユークだけが、この家の子だったら良かったの……。私さえ、生まれてこなければ」

「姉上!!」

それ以上は、聞いていられなかった。堪え切れずに姉の肩を掴んで揺さぶる。

「姉上、もうやめて、もうやめてください、僕は」

「あなたが、父様と母様のように、ドラコのように、あの思想を尊ぶというのなら……。父様の望む通り、ベルフェゴール当主になるというのなら……。私は、それを受け入れるわ」

決然とした声だった。

意志の灯った瞳で、姉はユークを見返す。

その瞳を見て、ユークは初めて、ドラコが言っていたことを理解した。

ドラコも、姉のことが疎ましいのだ。

姉のことを大切に思うからこそ、真っ直ぐにぶつかって来る姉が、この上なく鬱陶しいのだ。

ドラコも、自分も、『家』を中心に生きてきた。

だからこそ、その中心を揺さぶってくる姉と相対すると、揺らがされるような、恐れおののく気分になってしまう。

ユークの手を自分の肩から外した姉は、ユークの手をぎゅっと掴むと、まっすぐに目を見て尋ねかけた。

「ユーク。あなたの本音が聞きたいの。……。ユークは一体、どう思っ

ているの？」

——やめてほしい。

僕にはベルフェゴールの長男として、姉の分まで、家族の期待に添う義務がある。

その決意を、揺らがさないで。

僕までが姉に賛同したら、姉弟もろとも親に捨てられてしまう。そんな簡単なことが、どうしてわからないんだ。

僕が、姉を守らないといけないんだ。

このわからず屋で不器用な人を、それでも大好きだから、心の底から愛おしいから、守らないといけないんだ。

これまでもそう、生きてきた。

これからだってそう、生きていく。

ユークはそつと、囁いた。

「……姉上。僕が父上の後を継いでベルフェゴール当主になったら、姉上は僕を嫌いますか？」

姉は、静かに頷いた。

「……ええ。きつと、間違いなく」

「……………」

そうだろうと思っていた。

でも。

たとえ嫌われたとしても。

「……変なことを言っつて、ごめんなさい、ユーク。悩ませてしまったわね」

ユークが答えないことを見てとつて、姉はそう言うのと淡く微笑んだ。そつとユークの手を離すと、ベッドに横たわり身を沈める。

「おやすみなさい、ユーク。愛してるわ」

「……僕もです、姉上。おやすみなさい」

眠りにつく姉の寝顔を、ユークはじつと見つめていた。

短編 ユーク視点 灰色の少年が見る夢（下）

世間的には復活祭イースターは休暇だが、しかし長期休暇の扱いではないため、ホグワーツの寮で暮らしている姉は帰ってこない。

退屈だ、そう思っていたのだが、しかし退屈しのぎに行った商店街の本屋で思いもよらぬ人物に出くわして、そんな気分は一瞬で吹っ飛んでしまった。

「へあつ!? えっ、アリス・フィスナー!?!」

んお、と名前を呼ばれたアリスは振り返ると、ユークの姿に軽く目を瞠る。そんな彼に駆け寄った。

姉と同級生であり、プレップ・スクールからの幼なじみであるアリス・フィスナーのことを、ユークは昔から慕っていた。それでも今回は、思いもよらぬ出逢いに喜ぶ以上に驚きが勝る。

「な、えっ、なんで、なんでここにっ!?! 今って別に、ホグワーツから帰ってくるお休みじゃないですよね!?!」

アリスの服を掴んで問いただす。姉からそんな話は聞いていない。いや、ひよつとすると姉は実家に帰ってきたくないという思いがあるのかもしれないが、しかしそれでもドラコも帰ってきていないのだ。

そもそも、今ユークの目の前にいる彼は、クリスマス休暇も実家に帰らず、この前の夏季休暇は迎えに行った父親を撒いて一度も家に姿を見せなかったと聞く。

そんなアリスが、どうしてここに？

アリスが顔を顰めて、服を掴んでいるユークの手を払う。ユークは慌てて手を離れた。

「……も、もしかして、ホグワーツを退学になった、とか……」

「いやちげーし」

即座に否定された。違うらしい。素行がすこぶる悪いこの人のことだ、万が一、と思ってしまうた。

「……でも、それじゃあ一体どうしたんですか？ このへん、ホグワーツからは割と遠いと思うんですけど、なにかここにしかないものを入りますか?」

「あー、ま、たまたまだよ。親父に引つ張られてな、ちよいとこまで。うちの親父、今ホグワーツで視察官っぽいことやってんだ。ホグワーツは休みだし、ヒマなら来いって連れてこられた。今は親父が服仕立てんの待ち」

父親のことを語るアリスの口調には、これまでであった刺々しい雰囲気は見当たらない。至って穏やかなものだから、これまでアリスが父親といがみ合う姿ばかりを見てきたユークとしては、なんだか少し戸惑ってしまう。

と、ふとアリスは碧の瞳を煌めかせ、ユークの耳元に顔を近づけた。「そうだ、丁度いい。おいユーク、今からちよつと時間あるか？　なんか奢ってやるよ」

「え？　でもアリス、お父上を待っていたんじゃないですか？」
「待つの飽きたし、大人しく待ってんのもガラじゃねえなと思ひ直したんだよ」

「なんなんですか、その反骨精神は」
「うるせえ、そもそも俺にあんだけ苦労させられたくせに、懲りることなくいとも簡単に俺から目を離しちまう親父様の方が悪いだろ。おら行くぞ」

どういう理由ですか、なんて、ユークは少々呆れてしまう。それでも思いもかけずアリスと出会えたことはなんだか嬉しくて、本屋を出ていくアリスの背中を小走りで追いかけた。

喫茶店に足を踏み入れたアリスは、席につくなりメニューを開きもせず注文をする。慌ててユークも倣った。この人はせっかちだ。

やがて頼んだものが運ばれてくる。ユークの前に置かれた品を見て、アリスはくつくつと喉奥で笑った。

「お前、昔っからどこに連れてつてもそればっかだよな。アイスミルク好きなのに、背は伸びねえのな」

「うるさいです。これからよきによき伸びるんです。父上もそんな小さくはないですし、今はこんなでも将来はきつと……というかアリス、これでも僕、昔より結構伸びたんですよ！」

「あー、それは思った。お前、ちよつと見ない間に思ったよりでかく

なつてたし。お前の姉貴の背も抜かしたんじやね?」

「そう! そうなんですよ! 僕もうすつごく嬉しくて!」

我が意を得たりとばかりに立ち上がった。さすがアリスだ、ちゃんと見てくれている。いきなり立ち上がった自分に、アリスは苦笑しつつも優しい眼差しは崩さない。

ユークの背を測るように右手を掲げたアリスは、ふと思いつくように呟いた。

「……あいつと同じくらいかなあ」

あいつ? 誰だろうか。ドラコかと一瞬思ったが、しかしドラコもアリスほどではないが背丈は人並みにある故、ユークと比較されるような対象ではないはずだ。

しかし、浮かんだ疑問は「いいから座れよ」とアリスに促されたことで、頭から飛んでいってしまった。

「――ま、なんとなくさ。そろそろ親父のことも、許してやっていいかなつて思えるようになったんだよ」

前置きも何もなく、アリスはぽつりと話し出した。唐突な語りに思わず目を瞠つたが、黙って耳を傾ける。

「前までは、たとえばどんな時でも仕事を優先する親父のことが許せなかった。母さんの具合がどんなに悪くても、仕事が舞い込むとそっちに行つちまう。フィスナーの責務を、魔法界の『中立不可侵』を優先する、そんな親父のことが許せなかったよ」

頬杖をついたまま虚空を見つめるアリスは、そこでぎゅつと眉を寄せた。

「母さんを殺したのはあいつだと、今でも思ってる。あいつが母さんと結婚しなかったら、母さんはまだ生きてたかもしれない。俺を生まなかったら、母さんはまだ生きてたかもしれない。あいつが母さんを魔法界に縛り付けなかったら……フィスナーの檻に閉じ込めなかったら、母さんは……その思いは、きっとこの先何年経っても消えはしないんだろうな」

そこで、アリスは言葉を切った。左耳のピアスに触れると、小さく息を吐く。

「俺はあいつに、仕事なんかよりも母さんを選んで欲しかった。母さんを大事にして欲しかった。葬式で母さんを侮辱したあいつらに、俺以上に本気でブチ切れて欲しかった。……結局、そんな俺の願いはたった一つも叶えられることはなくって、俺はあいつを許せなくってあの家を出たんだけど」

でもさ、と続けられた声は、穏やかだった。

「最近、わかんなくもねえな、って言うか、親父も大変だったんだろな、くらいのことは思えるようになったよ。愛する人と世界の平和、どっちを優先するかって。小説の中の主人公は、大概愛する人を選ぶよな。でも、親父は違ったんだ。親父は、愛する人より世界の平和を選ぶ人だった。……その気持ちも、わかんだよ。愛する人を選べない気持ちだが、俺にもわかってしまうから、だから嫌だったんだ」

非情だよな、とアリスは自嘲的に吐き捨てた。

「愛してんの。ちゃんと愛してんだよ。心の底から喪いたくないと思ってるのに、それでも理性が、論理が離してくんねえの。この魔法界からフィスナーがなくなったらどうなるか、その影響を考えずにはいられない。……結局、親父は主人公にはなれない人だった。自分の背負ってるものをかなぐり捨ててまで、大事なものに手を伸ばすことはできなかつた。愛する人のためにですら、バカにはなれない人だった。そのことに気が付いたら、なんかもう、恨むのも憎むのも、疲れてきてさ。多分俺も、そうなんだろうな。失いたくないたった一つの大事なモンと、数多くの見知らぬ人間と。どっちか選べと言われたら、俺もきつと苦しみながら、大事なものを見殺しにするんだろうな。親父がそうだったみたいだ。……そう思うと、なんか、虚しくなっちゃった。許すしか、ないじゃん、そんなのさ」

アリスはそこで、大人びた笑みを浮かべた。力の抜けたような笑顔だった。

その横顔を見ながら、ユークは思う。

大好きな人と、世界。どちらかを選べと言われたら、僕は一体どうするのだろうか。

(姉上と、家。僕はどちらを選べば良いのだろうか)

どうするのが、正解なのだろう。

そこでアリスはふと表情を変えると、ユークに向き直った。

普段通りの笑みを口元に浮かべて「そういやお前、今度ホグワーツ入学じゃん。少し早えけど、おめでとう」と口にする。

「あ……はい、そうです。ありがとうございます、アリス」

慌てて返事をした。しかし少し歯切れの悪いユークに、アリスは軽く眉を寄せる。

「どうした？　なんかあったか、お前。悩みがあんなら聞いてやるから、話してみろって」

「……別に、アリスに聞かせるようなことでは……」

「いーって。俺もちよつと恥ずかしいこと話し過ぎたんだし、少しはお返しさせろよ。てつきりお前のことだから、お前の姉貴と同じホグワーツにやつと通える！　って、入学までの日を指折り数えてるもんだと思ってたんだぜ、俺は。それとも何、俺は信用に足らないって？

悲しいねえ」

「そんなこと！」

思わず食いつくように否定して、嵌められた、と気が付いた。アリスは計画通りとばかりにニヤツと笑う。

「だろ？」

「……アリスずるい……」

「ずるかねえだろ」

アリスは軽く肩を竦めた。だって、とユークはストローを噛む。

「……でも、本当に、悩みというほどじゃないし……」

「お前も意固地だなあ。悩みじゃなくつても、なんか気になつてるところがあるってツラだぜ。どうしても話したくねえつてんなら無理には聞かねえけど、お前、明るく見せて結構溜め込む方じゃん。……そういうところ、あいつと似てるし。だからさ、吐き出せるときに吐いちまえよ」

また『あいつ』だ。一体誰のことだろう？

ともあれ、アリスがそこまで言うのなら。この頭の中のモヤモヤが、アリスに話すことで少しでも整理できるかもしれない。

「……ねえ、アリス？ 僕って、どの寮に入りそうですかね？」

ストローを弄りながら、目を伏せた。

「いや、特に何かあった訳じゃないんですけど。何だろう、ちよつと常識を疑いたくなっちゃって。ほら、僕、ベルフェゴールの長男じゃないですか。みんな、僕にスリザリンへ行くことを期待して……姉上も、ドラコもスリザリンですし、僕も、自分がスリザリンに行くことを疑ったことって、これまでにほんと、一度もなくなつて……」

そう、一度も。

一度も、なかった。

「組み分けって……ホグワーツの創始者四人が魔法を掛けた組み分け帽子が、入る寮を決定してくれるんですよ。僕が入りたい寮を選ぶ、ワケじゃなくって……帽子が、その人に相応しい寮を決めてくれるというのなら……どの寮に入っても、おかしくはないですよ。そしたら、僕が両親の期待を裏切つて、スリザリン以外に組み分けされるってことも、ありえるんですかね」

アリスは、しばらく黙っていた。やがて、ゆつくりと口を開く。

「基本的に、組み分けは家柄で決まる。というのも、子供には家の思想が根深く染み込んでいるからだ。自分の手の届く範囲の世界しか知らない子供にとって、『自由に決めろ』と言われるところで、その自由には偏りがある。組み分け帽子は、そいつの思考の方向性を読み取って判断する。結果、全員がその寮出身、みたいな一族が多くなるんだ」

「……そう、ですよね」

ならば、尚更。

自分の入る寮は、決して揺らぎはしない。

それは、安心するべき事柄なのに。

(父上と母上の期待に添えたことに、安堵するべきなのに)

どうして、モヤモヤが消えないんだ。

「……………」

俯くユークに、アリスは淡々と尋ねる。

「なあ、ユーク。お前は、どの寮に入りたいんだ？」

「…………どの寮って、そんなの」

ユークの未来など、決まっている。

ホグワーツに入学し、スリザリン寮で七年間を過ごして、ベルフェゴール当主となる。そのことに、何の不満もありはしない。

衣食住には決して不自由しない。お金に困ることもない。ユークは将来、魔法界の中でも、相当恵まれた暮らしを手に入れることができる。

悩むことなんて何も無い。

——何も無い、はずなのに。

「……まあ、大概は一族の寮に倣うだろう。だが、それにも例外はあるよ。双子がそれぞれグリフィンドールとレイブンクローに組み分けされることだってある。それに俺は、お前の姉貴はスリザリンには行かぬえかもしんねえなど、漠然と思ってたんだぜ。当然、本人の生まれ持った気質にだって影響されんのが組分けだ」

「それは……」

それは、確かに、そうだ。

アリスは軽く伸びをする。

「お前の家族やマルフォイの野郎が、きつとうるさく言ったんだろ。その過保護が上手く行ったかは定かじゃねえけど、それでも俺は、あいつがスリザリンに組み分けされてホツとしたよ。お前の一族も、きつとそうだっただろ？」

その通りだ。

姉の組み分けを、両親はいつにもなくピリピリしながら見守っていた。姉がホグワーツへ向かう直前も、姉の細い肩を強く掴んで、かなりキツめの言葉も掛けていたと記憶している。

「そりゃあ心配に決まってるよな。一族直系の娘が、万が一グリフィンドールなどに組み分けされたりなんかしたら、それこそ目も当てられない……と、お前の一族ならば考えることだろう。ともあれ、お前の姉は自らの気質を裏切って、言いつけ通りに行動したってわけだ。帽子から何を言われたのかは個人的に気になるところだが……それが良かったかは、俺は知らない。俺から見ると、あいつは自寮の連中というときはいつも窮屈そうだがな。一族の奴らというときとおん

なじツラしてる。あいつは他寮の奴といるときの方が気楽そうだな」
「……それじゃあアリスは、姉上はスリザリンに入るべきではなかったと、そう思ってるんですか？」

ユークの言葉に、アリスは少し考えた後「いや」と首を振った。
「……そうは思わない。お前の姉貴の暴挙は、まだ家の内側でだからこそ許されていた。スリザリン寮の内部でならば、そこはまだ『身内』の範囲内だ。如何様にでも隠蔽が効く。内側で、お前の姉貴は守られている」

「守られて、いる……」

意味もなく、その言葉を繰り返す。

守られている。

——本当に？

それは、一体、何ものからだろう？

「ユーク。お前は、どの寮に入りたいんだ？」

アリスは再び問うてくる。何度同じ言葉を繰り返せば良いのだと、少し苛立った。

「……どの寮なんて、そんなの、決まってるじゃ……」

「違う」

鋭い声に遮られ、思わず慌てて顔を上げた。

「それは『入るべきだとお前が思ってる寮』だ。そうじゃねえ。俺が聞きたいのは、そんなくだらないことじゃない」

強い眼差しが、姉と重なる。

『ユーク。あなたの本音が聞きたいの。……ユークは一体、どう思っているの？』

脳裏に蘇る姉の声。

息が止まった。

「ユーク、お前は空気が読めすぎる。周囲の期待を読み取って、その通りに振る舞えるやつだ。俺や、お前の姉貴とは、そこがはなっから違う。でもお前にもあるんだろ、誰にも言えない本心ってやつが。お前は思考停止して唯唯諾諾と周囲に流されるバカじゃない。色々考えてんだろ。だから今、自分でもよくわかんねえことで悩んでんだろ」

アリスの声が、心の柔らかいところを軋ませる。
やめてほしい。

僕はユークレース・ベルフェゴールだ。ベルフェゴールの長男として、僕はやるべきことがある。僕にしかできないことがある。

僕には。

「……あね、うえが」

心と裏腹に、震える声が零れ出た。

「姉上が……僕に言うんです……」

姉に嫌われたくない。

でも、家族の期待も裏切れない。

ただ、ただ、間違ったことを言ってみ捨てられることが、怖かった。自分の意見をしっかりと持って主張できる姉のことが、ずっと、ずっと羨ましかった。

——守りたいなんて、烏滸がましい。

ユークはいつだって、姉を庇いはしなかった。

自分が、姉と同じ考えを持っているなんて、誰かに知られることが怖かった。

保身ばかりを考えて、ただ、器用に立ち振る舞って。

やがては、大切なことまで忘れてしまうのか。

一緒にいたいと願ったことも。

心の底から大好きな姉に背を向けられても『仕方ない』と——未来の自分は、思ってしまうのだろうか。

途切れ途切れのユークの言葉を、アリスは黙って聞いていた。聞き苦しいところはあつただろう。まとまりのない話だったし、論理が一貫しない部分も多くあつたに違いない。それでもアリスは口を挟むことなく、ただ耳を傾け続けてくれた。

ひと通り言いたいことを言い終わって、ユークは静かに息を吐く。アリスは店員を呼び止めると、ユークのグラスへお代わりを要求した。ユークへ掛ける言葉を探すよう、アリスは自身の金髪をガシガシと乱暴に搔く。

「……あのさ、ユーク」

アリスに呼びかけられても、ユークはただ、黙っていた。

うじうじしている奴だと思われたかもしれない。自分でもそう思う。誰に何を言われても両親に従うと、ドラコのようにすっぱり割り切れたら良かったのに。もしくは姉のように、きっぱりと嫌なことは嫌だと反抗できたら良かったのに。

結局、自分は半端ものなのだ。

そんなユークに、アリスはため息をついた。

「……ユーク、俺さ。昔、お前の姉貴のことが好きだったんだぜ」

……。

……………。

……………??

今、なんて？

「へ、……………え、へえええええ?!?!」

思わず絶叫する。ユークの声に店内にいた人が一斉に振り返ったが、そんなことユークが知ったことじゃない。

顔をひきつらせたアリスは、耳を覆って叫んだ。

「うるつつせえな驚きすぎだつて!!」

「べつ別にいい!? 別に驚いてなんてないですけどお!?」

ちよつとびつくりしただけですし！ へえええええ!! そうなんだああ!!

チイツとアリスは舌打ちをする。耳を赤くさせたアリスは「言わなきゃ良かった……」と呟いていたが、しかし勝手に話したのはアリスだ。

「へええええ、そおなんですねえ、そおだつたんですねええ。いや意外でしたが、まさかアリスが姉上のことを好いていたなんてねえええ!! だつて姉上、超っつかわいいですもんねえ!!」

「うるせえ黙れ、昔の話だつつつてんだろ……」

ユークを止める声にも、いつもの力が無い。思いもよらなかった告白に、ついついにやけてしまうのを抑えられない。

(アリスも恋バナなんかするんだああ!!)

「クソが、一瞬で元気になりやがって、腹立つう……」

「それでそれでっ、姉上のどんなところが好きだったんですかっ？
照れないで教えてくださいよお、ほらっ誰にも言いませんから！」

「それ絶対言いふらすやつ言う言葉だろ！」

「ええっそんなことないですよお心外だなあ、僕は口が堅いんです、姉上に誓って！」

「お前の言葉マジでペラいんだよ、ほんとそういうところあいつにそっくりだな！」

「さつきからあいつあいつって、一体誰のことなんですか！」

「うるっせえなお前がホグワーツ入学したら紹介してやつから楽しみに待ってる！」

「わあいー！」

と、ついついひとしきりはしゃいでしまった。でもアリスがいきなりあんな面白いネタを提供したのが悪い……。

アリスは顔を顰めて眉間のシワを擦っていた。思わずアリスの様子を伺う。アリスだって別に、いきなり衝撃告白をしたかったわけはないだろう。何か違う話の前座だったに違いない。

出来る限り真面目な顔をしよう、とユークは表情を引き締める。決して、アリスの恋バナをもっと聞きたいとか、そんな思惑なんて持っていない。断じて、下心なんて持っていない。

果たして、アリスは不機嫌そうにしながらも（照れ隠しだろうな）口を開いてくれた。

あまり物々しく傾聴の姿勢を取っても、アリスは機嫌を損ねるだけだろう。運ばれてきたお代わりのグラスを両手で持ち、ストローを口にくわえながらアリスの言葉を待つ。

「……俺が、お前の姉貴のことが、昔、好きだったのは……」

滅茶苦茶嫌そうにしながらも、アリスは言い切った。

「お前の姉貴が……アクアが、マグルである俺の母親のことを、決して見下さなかったからだ」

ストローから口を離した。思わず、姿勢を正す。

それは。

「お前なら、わかんだろ……お前ならきつと、純血主義の家で育ったお

前には、俺なんかよりずっと、その凄さが、俺のあの時の感動が、わかんたろ……わかって、ほしい。これは魔法族全体に根付いた偏見だ……いくら『親マグル』気取ったところで、マグルに対する偏見は抜けない。マグルを自分たちより劣ったものだと思わず思想は、魔法使いであれば心のどこかに存在するものだ……。純血の誇り高きフィスナー、その中に混じり込んだ唯一の異物が、俺の母親だった。一族からの風当たりは、めちやくちや強かったよ。そんな母と、その周囲とを見続けて、俺もいつしか染まっていた。『そういうものなんだ』と――魔法が使えないだけなのに、見下されるのが当然だって、そう思い込みそうになってた。母さんはそう言われてしかるべき存在なんだ、マグルはそう扱われても仕方ない存在なんだって。……それを、アクアは、アクアだけが認めてくれた。『お母様、とつても綺麗ね』って笑ってくれた」

懐かしむように、アリスは当時を語る。

それを、初恋がなんだとか、からかう気には全くなれなかった。「母に会いたがってくれた。母が作った菓子を喜んで食べてくれたし……母も、そんなアクアのことが、心底好きだったみたいでさ。家でもよく、あいつの話を……。……母はきつと、確かにアクアに救われたんだろう。俺も……。アクアのそういうところに救われた。お前の、ベルフェゴールの一族や、マルフォイなんかは疎ましく思っているだろう、アクアのあの、どうしようもない真っ直ぐさに、勝手に救われた気になった奴はいるってことだ」

「……でも、それは」

それは、確かにそうかもしれない。

アリスの母親が、姉の存在で救われたというのは、あり得ることかもしれない。

それでも、やっぱりユークは思うのだ。

姉は、それでも間違っていた。

姉は、マグルと関わるべきではなかった。だから姉も、アリスの母親とそんなに親しくしていたことを、家族の誰にも伝えなかったのだ。

糾弾されることが、わかっていたから。

「お前らも、俺も、家つてやつに縛られすぎてんだよなあ……」

頭を掻きながら、アリスはぼつりと呟いた。

「じゃあ聞くがよ、ユーク。俺にはマグルの血が入ってる。純血主義の奴らが忌んで止まない穢れた血がな。なら、純血のお前は、半純血の俺を見下すか？」

「そんっ………」

否定しかけ、慌てて口を噤んだ。

考えたこともない問いかけだった——からじゃない。

ただ、ユークは。

アリスの血筋が、どうであろうと。

『『どうでもいい』——よな、そんなこと』

ユークの胸中を読み切ったように、アリスはそんな言葉を口にした。

「俺が半純血だなんて、本当にどうだつていいんだ。そんなことマジでどうでもいい。俺はアリス・フィスナーだ。純血名門フィスナーの嫡子で、非魔法使いの母を持つ人間、それがこの俺だ。俺が持つてる何もかも、全部引つくるめてこの俺だ。家柄だ血だ、そんなものを俺から完全に切り離すことはできないが、でもそれだけを切り取ってこの俺を語ろうなんざ、ちゃんちゃらおかしいとは思わねえか？」

アリスはそう言って笑った。

心の底から自由そうに。



——九月一日。待ちに待ったホグワーツ魔法魔術学校への入学の日が、やってきた。

両親は、ユークの肩をぽんと叩いて「頑張りなさい」と、これからの学校生活に向けた激励の言葉をかけるだけだった。姉への対応とは全然違う。ユークのことを、心の底から信頼し切っている態度だった。

真つ暗な湖をボートで渡り、煌びやかに装飾を施された大広間へ。新入生が立ち並ぶ壇上のすぐそばには、一脚の椅子と古ぼけた帽子が置かれていた。組分け帽子だ。

これから帽子が、七年間を過ごすこととなる寮の名前を叫ぶことになる。

「——ベルフェゴールⅡユークレース」

マクゴナガルに名を呼ばれた。一度目を伏せ、まっすぐ胸を張って組み分け帽子へ歩み寄る。

視線が、刺さる。

名門ベルフェゴールの嫡子がスリザリンへと組分けられる瞬間を、今か今かと待ちわびる視線。名門貴族の嫡子に生まれた子供に対する、好奇とやつかみの眼差し。隙や綻びがあれば決して見逃しはしないとばかりに不躰な視線を、凜と背筋を伸ばして受け流す。

促され、椅子へと腰掛けた。すぐさま、頭上に帽子が被せられる。ストンと視界を漆黒が覆った。外の世界のごとは、何も見えなくなってしまう。

「……私がすぐに『スリザリン』と叫ばなかったことを、少し不思議に思っているようじゃのう」

帽子がそつと囁いた。

「そう叫ばれる覚悟は、してたんですけど」

その時はその時だと、思っていた。それがやはり運命だったなら、受け入れようと。

「確かに、君はスリザリンで充分よくやっていけるはずじゃ。ユークレース・ベルフェゴール。君の一族を、私はこれまで悉くスリザリンへと送ってきた」

「姉上も、ですよね」

「当然、君の姉君もじゃ。あの子とも、私は少し話をした。気に掛かるところがあつたものでな」

「……姉上が、スリザリンでうまくやっていけるか、ということですか？」

「左様」

「……うまくやっついていってるのか、僕にはよく、わかりません」

そもそも『うまくやる』というのはどういうことなのだろうか。

友人知人を多く作り、ソツなく寮の中に溶け込み、寮杯のために一致団結して頑張ることだろうか。

「君の姉君は、スリザリンを強く望んだ。というより、スリザリン以外へと組み分けされることを、酷く恐れているようだった。私は彼女の恐れを、ことのほか強く汲み取った」

帽子は、静かに語りかけてきた。

「組み分けとは曖昧なものじゃ。創始者の決めた一定のルールはあるものの、本質的にはもつと自由な筈じゃった。誰もが等しく、この学び舎で魔法を学ぶ輩であるのにも関わらず。どの寮に入るかというだけで、一生が決まってしまうとばかりに喜び、嘆く。創始者の意志を離れた偏見によって、望まぬ組み分けが起こってしまう。君の姉君も、ひよつとしたらそんな、哀しい被害者であるのかもしれない」

ただ、ただ、組み分けとは。

魔法をどの創始者の下で学ぶのか、各々の性質に見合って振り分けるもの、そんな入り口でしかなかったのに。

自己の気質に合った指導者の下、この先生きる未来を広くすることはあれど——狭めることは、あつてはならないと。

「たかが組み分け、されど組み分け。創始者たちは、このような対立を望んではおらんかった……後の子らが、グリフィンドールかスリザリンかで相争う未来など、決して望んではおらんかった。たとえば兄弟家族であったとて、おのおの気質は異なつて当然だというのに。ゴドリック・グリフィンドールとサラザール・スリザリンは、かつてその昔手を取り合い共に同じ夢を見た親友であったと言うのに。今となつてはそんな影も見ることとはできなくなつた。その責任の一端は、当然ながら私にもあるのじゃろう」

これは悔悟じゃと、組み分け帽子はそう言った。

世界地図が赤と緑に塗り分けられる世の中にしてしまったのは、他ならぬ自分なのだ。

「……それでも、姉上は守られています。組み分け帽子が、姉上をスリザ

リンに入れてくれたから。もしあなたが、姉上を気質通りの寮に組み分けていたとしたら、姉上はきつと、こうして学校に通えてはいないでしょう」

両親は、子供に対しては優しく寛容だったが、その実敵に対しては容赦がない。両親に敵と見なされたら最後だ。ベルフェゴールはいつだって、目前の敵を排除することで繁栄してきた。血が繋がっているような関係はない。血が繋がっている分余計に、容赦も情けもないだろう。

「……かつて、ひとりの魔法使いを組み分けたことがある。彼は、連続した純血の一族の末裔じゃった。スリザリンのみを輩出し、そのことを誇りとして生きていた一族の直系長子を、私はグリフィンドールに組み分けた」

当時を懐かしむ口調で、組分け帽子は語った。

「悪を憎み、自らの正義に向かって一途に突き進む、才気に満ち溢れた子じゃった。私はその子に触れた瞬間、グリフィンドールと口にした。……その後どのような混乱が起こったか、君には推し量ることができよう」

そう言われ、ユークも想像する。

もし姉が、グリフィンドールに入っていたらと。

「ユークレース・ベルフェゴール。君は、スリザリンでも充分よくやっていけるじゃろう」

帽子は、そんなことを口にした。

「頭も良い。要領も良い。大局を見通す稀有な眼差しも持っている。君はスリザリンに入れば、間違いなく偉大になれることじゃろう。……というのに、何故、君はその選択を捨てようと思うのか？」

ユークは一度、強く目を閉じる。

「……僕には、昔から『正解』が見えていた」

どの道を選べば、正解なのか。

父が、母が、周囲が、自分に何を望んでいるのか。

どう振る舞えば、その期待を満足させることができるのか。

「姉上は、とつても不器用で……いっつも不正解ばかり選んで、よく叱

責されてて……その分、僕が頑張らないとって。姉上を守ってあげられるようになるうって……本当は、そうだった。姉上を守りたかった。姉上の言ってることも、わかるんだもの。姉上、間違ってるないんだもの。ただ環境が、姉上を不正解と定めていただけ」

最初は、ただ、それだけだった。

正解も、不正解も、全ては見方次第でいくらでも変わり得る。

「でも、その場その場で『正解』を選び続けていたら、本当の目的を忘れちゃいそうになってた。姉上のことを、守りたかったのに。いつの間にか姉上の敵になっちゃいそうになってた。……それは、僕がやりたかったことじゃない。『正解』を選び続けた結果、大好きな姉上に嫌われてしまうのだったら、僕は……」

小さく息を吐いた。

「もう、いい子でいるのは、やめにする」

「……不正解を、選ぶと？」

「不正解？ いいや、違うよ。そんなんじゃない」

誰にも間違いだなんて言わせない。

僕は、僕の選択を、間違いだなんて思わない。

「僕はね……全部欲しいの。何もかも、全部。姉上のことは大好きだ。でも、両親のことも大好きだよ。両親の期待に応え続けたいとも思うし、ベルフェゴールを継ぐのは僕、ユークレース・ベルフェゴールだ。全部あって、僕がいる。一個でも欠けてちゃ、今ここに僕はいないんだ。……だったら僕は、ひとつも失いたくない。今、僕が大切だと思ってるものを、何一つとして手放したくない」

無理だろうか。

不可能なことだろうか。

二兎を追う者は、一兎すら得られないのだろうか。

それが常識。

それが正解。

「——でも」

心が、ふるえる。

知らない感覚に、おびえそうになる。

やわらかく馴染んだ温もりの外は、きつとつめたいことだろう。それでも、踏み出す。

外に。

自由に。

だって、僕は。

「僕はもう、姉上ひとりを矢面に立たせたくはないんですよ！」

姉は、いつもひとりだった。

誰も味方がいない中、たったひとりで顔を上げて、立っていた。

ただひとり、嘘を付かず、生きてきた。

「僕はベルフェゴールを変えたい。ううん、ベルフェゴールだけじゃない。この魔法界にはびこる純血思想そのものを変えてみせる。姉上がもう、泣かなくてもいい世の中にする。それが今の、僕の夢。そのためにも、僕は……新たな道を、選んでみたいんだ」

頑張る前から諦めたくない。

強欲で構わない。

欲しいものが多い人生、大いに結構じゃないか！

ただ与えられるだけの人生は嫌だ。

自分がやるべきこと、為すべきことだけに、囚われ続ける人生は嫌だ。

姉上を泣かせる男にだけは、なりたくない。

僕が為すことは、僕が選ぶ。

僕は——自由に生きたい。

「……昔から、憧れ続けている人がいます」

脳裏に『彼』の背中を思い描きながら、言葉を紡いだ。

「あの人だって、色んなものに縛られてるのに。僕と同じくらい、色んなものに縛られてるはずなのに。それでも、なんか軽いです。重さを感じない。あの人を見ると、なんだか心が軽くなる」

もしも、願っていいのなら。

僕も、そんな風になりたい。

ただ、まっすぐ前を見つめて生きているだけで『綺麗だ』と——そう思われるような人間に。

しがらみも、枷も、全てを笑い飛ばしてしまえるような人間に。

「——叶えようぞ」

組分け帽子は、歌うように口にした。

「叶えようぞ、純血主義の申し子よ。どうか、どうか、君の夢が現実
に敵いますよう。君の剣となり盾となるべき寮を。君の戦場は執務室
であり、君の敵は世間の偏見である。なればこそ、君に相応しいのは
——レイブンクロー!!」

帽子が叫ぶ。

瞬間、確かに、ぐらりと世界が揺らいだ気がした。

それは、進んでいたレールが確かに切り替わった感覚。

小さいながらも、それでも一步を確かに踏み込んだ瞬間。

歓喜に胸を弾ませ、椅子から立ち上がった。帽子を頭から外し、目
を眼下、大勢の生徒が座る大広間へと向ける。

歓声は——来なかった。

現実にあつたのは、水打ったように冷たい静寂。

戒律に背いた者に対する、動揺と敵意。

「——ありえない!!」

静まり返っていた大広間が、その言葉で一気にざわめいた。

テーブルを叩き、蒼白な顔のまま立ち上がったドラコ・マルフォイ
は、大きくかぶりを振る。

「その組み分けは、認められない! 頼む、もう一度、一度でいい、組
み分けのやり直しをしてくれ!!」

——ドラコ。

「ごめんなさい。これまであなたは、僕たち姉弟を守っていてくれた
のに。」

優しさを踏みにじるような真似をして、ごめんなさい。

数千もの瞳に見据えられ、思わず怯んだ。心の中に広がる、後悔の
味。

やっぱりこの選択は、間違いだった。

ユークレース・ベルフェゴールが、選んではならない道だった——
「あわや、組分け困難者かと思われたようじゃのう」

帽子は、少し面白そうにそう言った。

ユークは慌てて、組み分け帽子に視線を落とす。

帽子は変わらぬ口調で続けた。

「私は案外お喋りが好きでな。にも関わらず、こうして日の目を見るのは年に一回。そりやあもう、気に入った生徒とはこうして喋り込みたくなってしまおうというものよ」

その言葉の穏やかさで、震えた心に温もりが灯る。

自分の足で立つ、勇気が貰える。

「――ホグワーツの組み分けは、魔法契約で定められた一度きり。やり直しは、認められません」

凜としたマクゴナガル先生の声が、響く。

顔を、上げた。

(姉上)

姉の姿を、探す。

儂く綺麗で、世界で一番だいすきな人の姿を。

(――姉上)

姉は、瞳をまんまるにして、ユークをまっすぐ見つめていた。

桃色に色づいた唇をほんの僅かに開けたまま、息を止め、ただまっすぐに。

その頬が、やわらかに緩む。

どちらが先に笑みを零したかわからぬほど、ユークも自然と笑っていた。

いずれ、この選択を後悔する日が来るのかもしれない。

それでも、今、今この、ほんの僅かな瞬間だけは。

「……僕は、ユークレース・ベルフェゴール」

誰にも聞かれぬ、口上を。

「レイブンクロー寮所属、ベルフェゴール家嫡男、ユークレース・ベルフェゴールです！」

ただ、己の胸にのみ、響かせよう。

短編 レギュラス視点 僕の嫌いな先輩

語り出す前に、一言述べておこう。

僕、レギュラス・ブラックは、幣原秋のことが大嫌いだ。



彼との初めての出会いは、不躰にも彼が僕に、人違いで飛びついてきたときだった。

人違いだとしたところで、他人に後ろから飛びかかるなどなんたる無礼、と思ったが、しかし当時は、あまりにも久しぶりに他人に触れた感覚に驚いてしまったことを覚えている。

我が愚兄、シリウス・ブラックの友人だと名乗った彼は、僕が今まで見たことのある人間の中で一番小柄であり華奢で、自分よりもひとつ歳上だという事実が、酷く信じられないことのように感じられた。

だというのに、あんな非力そうな見た目をしていて（いや、単純な腕力で見ると、幣原秋は女子にも劣るだろうが）魔法魔術大会で全校生徒の頂点に立つほどの実力者となったことは、心の底から僕を驚愕させた。

幣原秋は、とても妙な人物だった。普通、ダンスパーティーに同性を誘うものか？ 後輩である僕に散々な貶されようをしたというのに、腹が立つどころかそれをどうして受け入れる？ 全くもって意味が分からない。

その意味の分からなき加減は、まさしく自分の兄をも想像させ、僕を苛立たせた。

兄も、常日頃から僕の予想を大きく外れたことをしてくる人だった。平穩に生きたい僕の人生を大きく狂わせた原因の一人は、どこをどう考えても兄だろう。

代々スリザリンばかりで続いてきたブラック家、その直系長子であるにも関わらず、兄がスリザリンと何世紀も昔から天敵関係であるグリフィンドールに組み分けされたときから、兄は僕に心労と頭痛とを

もたらす存在だった。

兄に失望した両親は、今度は弟である僕に大きな期待を寄せるようになった。その期待に応えられるよう、僕は精一杯努力したつもりだ。

品行方正、成績優秀、文武両道。模範的なスリザリン生となればなるほど、両親は僕を褒めてくれた。逆に、兄は僕からどんどん離れていった。

昔は、仲の良い兄弟だったのだ。まあ、昔から兄に振り回されてばかりだった感は否めないが、それでも当時は、それが幸せだった。

二人でひとつの箒に跨り、深夜に屋敷を抜け出して夜の世界に繰り出したこと。木陰で、肩を並べて本を読んだこと。本ばかり読んでいる僕を根暗だと悪口を言い立てた同級生を、兄が殴ったこと。

何ひとつとっても、かけがえのない記憶だ。

しかし、そんな幼少期がまるでなかったかのように、兄は僕から離れて行った。

置いて行かれたようで、兄から見放されたようで——そんな気持ちになる自分を認めたくなくて、僕も自覚的に、兄から距離を置いた。そうして月日が経ち、僕も兄のいない日常を普通のことだと受け止めるようになった折、僕は幣原秋と出会ったのだった。



幼い頃から、僕は闇の帝王を慕ってやまなかった。闇の帝王関連の新聞記事は悉くスクラップした。

それは、当時スリザリン寮に所属する学生にとっては当然のことだったし、我が敬愛する両親も、闇の帝王の思想に賛成していたからだ。

親の思想を間違いだと断ずるような子供は、そういない。

しかし、僕の兄はそのごく僅かな方に入るようだった。

僕が五年生に、兄が六年生になる、夏休みのことだ。

夏休み、実家に帰ってきた兄は、僕のそのスクラップブックを発見

した直後に、そいつをビリビリに引き裂いた後燃やしてしまったのだ。

勿論、兄の目につくところ、家族共同の場所であるリビングに放置したのは、僕の迂闊であったと思う。がしかし、他人の私物を自分自身の判断のみで勝手に処分するというのはどういう見か。

僕と兄はお互いに一步も譲らず、激しく罵り合い、口だけでなく暴力にも訴えた。兄は僕の思想だけでなく、両親、果ては一族全ての思想を完全に否定した。僕に両親も加勢し、このことがきっかけで、兄は家を飛び出して行った。両親は家系図から兄を抹消し、それ以降兄などいなくなったように振舞った。

『……どうして、分かんないんだよ』

苦々しげに兄はそう言い放ったのだ。

幣原秋も、兄とよく似た思想、つまりは僕と相容れぬ思想の持ち主であると気付いたのは、比較的すぐのことだった。

これには少々ばかり驚かされた。何故なら、幣原秋は僕の同僚の先輩、セブルス・スネイプ先輩と、とても仲が良かったからだ。

セブルス先輩は八割がた、死喰い人となることが確定していた。そのため、親友である幣原秋も、同様の、ないしは似通った思想であると思っていたのだった。

それが思い違いであったことを、幣原秋本人の口から聞かされた。

『ヴォルデモートは間違っている』

幣原秋は、とても悲しそうな眼差しで僕を見ると、淡々とした口調で言った。

優しく語りかけるような口調ではあったが、激情を理性で押さえつけているような声色だった。

『純血至上主義だなんて……マグルを排斥していい理由なんて、何ひとつとしてないんだ。……誰だって、誰かを殺していい権利なんて持っていないんだよ、レギュラス』

それを幣原秋が言うのは、物凄い皮肉だ。後に闇祓いとなり、何十人も死喰い人や、それに関連する人々の命を奪い、戦争の時代に『黒衣の天才』として名を馳せた幣原秋が、『誰も、誰かを殺していい権利

なんて持っていない』なんて、一体どんな冗談なのだ。

しかし当時、幣原秋はまだ『黒衣の天才』ではなかったし、そもそも僕の命がある間は、幣原秋はまだその名前で呼ばれることはなかった。

どうして、理解してくれないのだ。兄も、幣原秋も。察が異なるといふのは、これほどまでに違う思考をもたらすものなのか。

当時の僕は、二人の態度に憤慨した。そしてその勢いのまま、自分が間違っているなんて心の片隅にすらも思わずに、死喰い人となった。

十六の、冬のことだった。



クリーチャーは、我が家に長年仕えている屋敷しもべ妖精だ。幼い頃から、ずっとクリーチャーと一緒にだった。

兄と仲違いをした後、ずっと僕の側にいてくれたのはクリーチャーだった。兄はクリーチャーを蔑ろにしたが、僕はクリーチャーを家族の一員として愛した。クリーチャーも、それに応えてくれたように思う。

だから、闇の帝王がクリーチャーを差し出せと仰ったときには、大変素晴らしいことだと舞い上がった。

クリーチャーの価値を、他ならぬ闇の帝王が認めてくださった。自分はずっと尊敬していたお方に。

どうして、闇の帝王は屋敷しもべ妖精を必要としているのだろう。闇の帝王の身の回りのお世話をする人たちは十分すぎるほどいて、クリーチャーが入る隙はないように思えた。

そもそも、闇の帝王が望んで出来ないことなど、この世には存在しないのに。そんな疑問がふつつつと湧き上がりはしたが、僕はそれを無視して、クリーチャーを送り出した。

これは、とても名誉なことなのだ。クリーチャーが認められて僕は嬉しい、闇の帝王の仰ったことは何でもするんだよ、と、何度も口

にしなから。

——しかし、クリーチャーはそのすぐ一週間後、見るも無残な姿になって帰ってきた。

一体どういうことなのか。闇の帝王は、クリーチャーに一体何をしたのか。

クリーチャーの話聞いた僕は、俄かには信じる事が出来なかった。

闇の帝王は、クリーチャーに計画の深く深くまでを話していた。

分霊箱。自分自身の魂を封じ込め、実際の肉体がたとえ滅びたところで、永遠に生き永らえる術。

クリーチャーが僕に嘘を吐くはずがないと知っていたにも関わらず、僕はクリーチャーの話の最中、少なくとも三度、「嘘だろう？」と呟いた。

恐らくは、楽しい楽しい独り言だったのだろう。誰にも話すことが出来なかった、しかし誰かに話して聞かせて仕方がなかった、そんな時、クリーチャーは格好の相手だったのだろう。何でも言うことを聞く、従順で、そして今から永からぬ時間の後に死ぬ相手。

惜しむべき誤算は、クリーチャーが僕に絶大な信頼を——死に瀕しているながらも、僕の元に帰ってきてくれるだけの信頼を——示してくれていたことに気づかなかったことか。

闇の帝王は、クリーチャー、ひいては僕ら死喰い人なんて何とも思っていないのだ、ということについて呑み込むことが出来るまでに、長い時間が掛かった。

闇の帝王にとっては、僕らは所詮使い捨ての道具にしか過ぎなかった。彼がかつて語った、魔法使いにとっての理想郷とは、すべて嘘っぱちだったのだ。

いや、すべてがすべて嘘ではなかったのかもしれない。幾分か真実も混ざっていただろう。しかし、闇の帝王が目指す世界に、僕ら死喰い人は必ずしも存在が必要とされる訳ではなかったのだ。

それは、長年闇の帝王を信じていた僕にとって、自己の最も太い柱をへし折られるにも等しい衝撃だった。

クリーチャーに絶対屋敷から出ないよう言いつけ、それから過ごしたホグワーツ最後の七年生を、どのように過ごしたのか、ついこの前だった筈なのだが、よく思い出せない。

ただぼんやりと死人のように、心臓だけが鼓動するまま、時を過ごしていたのではないか。

果たしてそれは、生きていると言えるのだろうか。

自分が間違っていた。そう自覚すれば、解決するのは早かった。

あれだけ憧れていた闇の帝王に、今は何の魅力も感じない。

しかし、反逆することなど出来るはずもなかった。逆らったところで、虫けらのように命を消されてお終いだ。左腕の『闇の印』の刻印がある以上、闇の帝王から逃げることも出来ない。

僕がたまたま目が覚めただけで、友人らにこのことを伝えても、同感してくれるどころか鼻で笑い飛ばされるに違いない——でも、このまま唯々諾々と闇の帝王に従い続けることだけは、嫌だった。

結局のところ、兄が、幣原秋が正しかったのだ。

そんなことを今更気付くなんて、我ながら嘲笑しか込み上げてこない。

どうして彼らは自分たちを理解してくれないのか、不満で仕方がなかったが、今の自分も、昔の盲目的な自分がさっぱり理解出来ない。

どうしてあそこまで、何も考えずに生きることが出来たのだろうか。どうしてあそこまで熱狂的に、闇の帝王を慕うことが出来たのだろうか。

だから、これは、自らの罪滅ぼしだ。

そう考えたとき、すつ、と覚悟が決まった。

父親の戸棚から、こっそりとブラック家のロケットを失敬する。父親にバレたら大目玉だが、恐らくもう、この家に生きては戻るまい。

それに、このくらいの値打ちのものでないと、本物の分霊箱であるスリザリンのロケット、その偽物としても力不足だろう。

ほんの小さな抵抗として、闇の帝王に向け、手紙を書いた。文末に R・A・B と署名をし、ロケットの中に仕舞い込む。

そのまま真っ直ぐ洞窟へ向かおうと思っていたが、気が変わった。

階段を上がり、自分の部屋ではなく、兄の部屋へと向かう。
ドアを押し開くと、やや埃っぽい匂いがした。

壁を覆う大量の紅と金のペナントは、兄が両親を苛立たせるためだけのものだということは分かりきっていた。ペナントだけでない、オートバイのポスターも、マグルのビキニの女性のポスターも、全てが全て両親に反抗するためのものだ。昔は僕も、兄のそんな態度にいちいち苛立っていたが、今はむしろ、兄のそんな豪快さに、素直に笑みが零れた。

壁にピン留めされた写真に、目が止まる。兄の学生時代の写真だ。端から二番目、兄のすぐ隣に、幣原秋の姿を見つけた。兄に肩を組まれ、困ったように微笑んでいる。

その表情をじつと見つめた後、僕は目を離すと、勉強机に近寄り、躊躇いもなく引き出しを開けた。出てきた手紙を驚掴みにすると、目的のものを探す。兄に見つかったら脳天に拳骨が降ってくるに違いないが、この時はむしろ、兄の鉄拳を心待ちにしていた。

「……っ」
見つけた。小さく息を吸い、そして吐く。

意外と、彼は癖字だった。読めないわけではないが、少しばかり読むのに苦勞する字だ。埃を指で払うと、眉を寄せつつその住所を写し取る。

「……秋先輩」

小さく呟いて、そう言えば面と向かって、彼に先輩と呼びかけたことがないことに思い至った。いつも「貴方」と二人称でしか呼んだことがなかったのだ。

元あった場所に手紙を元通りに仕舞い込むと、僕はクリーチャーが普段根城としている納屋へと足を運んだ。

クリーチャーは突然寢床に現れた僕に驚いていたようだったが、僕は構わず、穏やかな口調で言った。

「一緒に付いて来てくれないか、クリーチャー」



幣原秋が現在住んでいる家の近くに「姿現し」した僕の首筋に、冷たい雫が当たった。雫の数は次々と増え続け、やがては冷たい雨になる。

「風邪を引かないようにね、クリーチャー」

そう微笑むと、クリーチャーは気遣わしげな瞳で僕を見た。

雨に濡れるのなんて、何年振りだろうか。学生のクイディッチの試合以来かもしれない。

ふと、幼い頃の記憶が蘇る。兄と二人、土砂降りの中で泥んこになりながら遊んだ記憶だ。今日と同じくらいの寒い日だった。

次の日僕は熱を出して、兄は母親に雷を落とされていたつけ。兄は自分だけ怒られたことに拗ねて「病人はズルい」だのなんだのと、僕にぶつくさ言っていた。

涙が出るくらいに懐かしかった。

少しくらい、雨に打たれるのもいいかもしれない。最後なんだ、次の日熱を出したところで、どうだつていいだろう。

幣原秋の住む家に辿り着く頃には、洋服を着たままシャワーを浴びたかのように、上から下までぐしょ濡れになっていた。

チャイムを押すと、家の中で来訪者を知らせるベルの音がするのが漏れ聞こえる。数秒後「……誰だ？」と押しくぐもった声があった。

「……秋先輩。誰か、なんて分かっているんでしょう？ ……僕です。レギュラス・ブラックですよ」

朗らかに答えると、明らかに逡巡したような間が合った。

やがて、駆け寄ってくる足音が聞こえた後、ゆっくりとドアが開かれる。

僕が記憶していた幣原秋と、現実に目の前にいる幣原秋は、そう違いがなかった。少し背が伸びたくらいか。男子三日会わざれば刮目して見よ、とは言うものの、彼は二年の歳月が流れても、相変わらずの彼だった。

昔と変わらず、艶やかな黒髪を後ろで括っている。少し大人びたものの、まだ幼さを残す大きな黒い瞳。クラシカルな黒のローブは、彼

らしい几帳面さと繊細さを表していた。

「レギユラス……」

そつと僕の名前を呼ぶ声も、記憶とほとんど違わない。同世代の男子よりも幾分高い声。

幣原秋は僕の姿を見ると、驚いたように「濡れているじゃないか」と声を上げた。

「立ち話もあれだし、中に入ってくれよ。ちよつと待ってて、今タオルを持ってくるから……」

そう言つて背を向けかけた幣原秋の腕を、僕は掴んだ。幣原秋は驚いたように振り返る。

「長く時間は取らせませんから。大丈夫です」

僕の言葉に、幣原秋は足を止めた。僕に向き直る。

「貴方は正しかった。そんなことに今更気付いた。もう、遅過ぎるけれど……それでも、貴方に、最後に言いたかった」

微笑んで、告げる。

「僕は、貴方と出会うことが出来て、本当に良かった」

どうか、お願いします。

闇の帝王を止めてください。

貴方は、僕の知る中で、それが出来る唯一の人物だから。

そして——願わくば。

また、どこかで、貴方がセブルス先輩と笑い合えるようになりたいですよ——。

それらは、あまりにも無遠慮な願いだった。遺言とは言え、口には出すことなく、胸の奥で呟くだけに留めておく。

「……凍えてしまう。やっぱり入ってくれないか。積もる話もあるんだ。君が好きなロシアンティーを淹れてあげよう。タオルを持ってくるから」

そう言つて背を向け、家の中へ駆け出す幣原秋に、僕は小さく黙礼した。そして、ドアを開け、家から出て行く。

冷たい雨に打たれながら、僕はクリーチャーの手をしっかりと掴んだ。

「さあ、行こうか。洞窟に」

今にも「姿くらまし」しようとした瞬間、僕の耳に声が届いた。

「レギュラス？ レギュラス！」

幣原秋が、僕を呼ぶ声だ。僕を追ってくる。今は濃い霧で見えないが、やがて彼は僕を見つけ出してしまおうだろう。その前に、行かなくては。

静かに目を閉じ、僕は「姿くらまし」した。全ての風景、音声が、どこか遠くの次元に流れていく。

深い深い暗闇に、僕はクリーチャーと共に落ちていった。



洞窟の最奥、分霊箱が沈んでいた水盆の前で、僕は倒れ込んでいた。自分の荒い息遣いと、胸の鼓動が耳障りだ。早く消えてくれないだろうか。

僕の忠実なクリーチャーは、よくやってくれた。言いつけ通り、僕に水盆の薬を全て飲み干させ、ロケットをすり替えた。

後に、クリーチャーはロケットを破壊するだろう。僕との約束通りに。

クリーチャー。悲しませるようなことをして、本当にすまなかった。心から感謝している。

強い喉の渴きを感じた。水が欲しい。しかし杖を振っても、水は杯に溜まることはなかった。おそらく強力な魔法が仕掛けられているのだろう。水を飲ませないための仕掛けが。

まだ理性が残っているから、亡者が蠢く水面の水を飲もうとは思わないが、そんな理性ももう長くは持たまい。亡者の仲間入りをして、水の中に漂うのも時間の問題か。

最後に、闇の帝王に意趣返しが出来た。

それだけで僕は、何よりも満たされていた。

自分で思っていたより、僕の性格は兄に似ていたのかもしれない。退屈を嫌い、驚きに喜ぶ。

拳句の果てに、自らの人生を賭けて闇の帝王に悪戯を仕掛ける、なんて——学生時代に校内を賑わせた、兄たち『悪戯仕掛人』も瞠目するだろう。

視界が朦朧としてきた。亡者は、死の淵に瀕した僕を迎えに来ようと、その白く冷たい腕を伸ばしてきている。抗う術を持たない僕の身体は、段々と岸边へと近付いていた。

暗く沈んで行こうとしていた意識は、しかしながら誰かの手によって遮られた。

「レギュラス！」

数刻ぶりの声。驚きに、僕の意識はわずかに浮上する。僕の身体に群がっていた亡者は、一斉に四散した。

どうして、貴方がここにいるんだ。

「死ぬなっ、レギュラス！ 生きるんだよ、君は！ 遺言めいた言葉をぼくに残して、勝手に死のうとしてんな!!」

身体を強く揺さぶられた。暖かい手が、僕の頬に触れる。

「——貴方くらいですよ、僕に遠慮なく触れてくる人なんて……」

思えば、初対面からずつとそうだった。身体にも、そして心にも。躊躇なく、彼は触れに来た。

「掴まって。絶対に離さないですよ」

左腕を引つ張られた。僕を背中に背負うようにして、幣原秋は歩き出す。

僕の方が、幣原秋よりもかなり背が高い。自然、背負われる、というよりも引きずられる、といった表現が正しくなる格好となった。

幣原秋は、右腕で僕の身体を支えながら、左腕で杖を掲げ、亡者の攻撃を退けている。

亡者は、僕という獲物を闖入者に搔つ攫われたことに対し、酷く腹を立てたようだった。執拗に追い縋ってくる。

対人戦では負けなしの幣原秋でも、何度倒しても起き上がってくる亡者の攻撃には難儀しているようだった。まして、僕という足枷がいるのだ。四方八方から飛んでくる攻撃を弾くのに精一杯で、中々前に進めない。

「このままじゃ、二人とも亡者の餌食になってしまいます……貴方だけでも、逃げてください……」

「……っ、嫌だ！ 誰が君を置いていくものか……っ、君が死ぬなんて、神が許したところで、僕は絶対に許さないぞ……っ！」

そういう幣原秋は、かなり息が上がっていて、こんなに消耗した彼を見たのは初めてだった。

魔法魔術大会の最終戦でも、こんな様子になる幣原秋は拝めなかったというのに。

「……………」

最後の力を振り絞って、僕は幣原秋を突き飛ばした。

予想もしていなかっただろう僕の行動に、幣原秋はあっけなくすっ転ぶ。僕の身体もふらりと傾いだが、なんとか堪えた。

転んだ幣原秋の身体の上に、亡者が何体も積み重なった。その重さに喘ぎながらも、幣原秋は呆然とした眼差しで僕を見る。

「……知ら、なかったんですか……？ 僕は貴方が大嫌いなんですよ」

——僕を恨んでいいよ、幣原秋。

本当に——ごめんなさい。

「貴方の言うことを、僕が——聞く訳がないじゃないですか」

そう言って笑顔を作った僕の身体に、しゅるりと亡者が巻き付いた。

一切の抵抗をせず、僕は亡者のされるがまま、水の中に引きずりこまれた。

暗い水の中は、想像していたよりも暖かく、僕を出迎えてくれた。

「……っ!!」

幣原秋が最後に叫んだ言葉は、僕には聞き取ることが出来なかった。

あれほど煩かった呼吸の音も、心臓の音も、何一つ届かない。

深く真っ暗な闇の中、そのことによく安堵して、僕は静かに目を閉じた。



——嗚呼、願わくば。

いつかどこかで、貴方にまた会いたい。

そんな未来を想い描くくらいなら、僕にも許されるだろう。

短編 アリス十?・視点 黒猫と子守唄

「あ……」

小さく声を上げて、アキが立ち止まった。

アキの隣を歩いていたアリスは、アキの数歩前で足を止めると振り返る。

「どうした」

「猫がいる」

「猫?」

アキが指差したのは、石造りの廊下の隙間の暗がりだった。

千年以上も歴史のあるホグワーツは、そりやあ確かに至る所が魔法で修復されてはいるものの、やつぱり風化は否めないのか、朽ちたり欠けたりしている部分がある。このくらいの隙間は、生徒の安全に配慮して適宜修繕されてはいるのだが、それでもこうして放置されている場所も数多い。

「猫くらいいんだろ。ミセスノリスとか、その辺にだって歩いてる」

放つとけ、とばかりにアリスはそう言うも、アキはその場から動こうとしない。

近寄るでもなくただじつと、その暗がりを見つめている。

「アキ」

少し苛立って名前を呼んだ。

この声を出すと、アキは大抵「ごめんごめん!」と駆け足でアリスの元に戻ってくる。

だがしかし、今日ばかりはそれも効かないようだった。

「……怪我してるみたいだ」

「あ?」

「ねえ、アリス」

そう言うときアキは、少し心細げにアリスを見た。不安げな眼差しが、小さく揺れる。

アキのその顔に、アリスは弱い。普段元気いっぱいいでうるさいほど絡んでくる奴が、しゅんとして言葉少なに自分を呼ぶ時。無視して先

に行くことが出来なくなるのだ。

また、普段は意識しないことなのだが、アキが一見すると少女のような風貌をしていることも、原因の一つではある。まるで女子を泣かせてしまったかのような罪悪感が、胸の内に湧き上がってくるのだ。本当に卑怯だと思う。

「……あーもう、なんだよ」

諦めてアキに歩み寄ると、アキは無言で暗がり一指差した。

腰を屈めて目を凝らすと、確かに奥で蠢く影が見える。

「ちよつとお前、持ってる」

アキに鞆を預けると、ローブが汚れるのも構わずに膝をついた。

暗がりを覗き込むと、光った瞳と目が合う。そろそろと手を伸ばすも、警戒しているのか近付いては来ない。

引つ搔かれたら嫌だな、と頭の片隅で思いながらも、アリスは両手でその身体を掴んだ。

暖かい。

チリン、と涼やかな音が鳴った。

引つ搔かれることも暴れられることもなく、アリスはすんなりとそれを日の当たる場所へと引き摺り出した。

それは、小さな黒猫だった。アリスの片手に乗るくらいの大きさで、ツヤツヤとした毛並みが日に当たって輝いている。

暗がりの中の黒猫なんてよく見つけたな、と、アキの目敏さに呆れ返った。

「どこが怪我してるっつーんだ？」

「右の前足」

アキにそう言われよく見ると、確かにそこから出血しているようだった。本当に目敏い。

アキは数歩離れた場所から、アリスと黒猫をじつと見つめていた。地面に置けばいいのに、アリスの鞆を律儀に両腕で抱えている。

アキは、動物が好きだ。ふくろうやネコは言わずもがな、犬やウサギやインコ、果てはドラゴンや蛇やスクリュートまで幅広く大好きだ。

しかし、何故か動物に嫌われる。アキが近付くと、どんなに人懐っこい動物であろうと毛を逆立てて威嚇し、もしくはガタガタと震えて後ずさってしまふ。

その原因はいまいちよく分かっているらしいが、きつとぼくの人並み外れた魔力が周囲に漏れ出して影響を与えてんだらうねー、と、以前アキは寂しそうに笑っていた。

ツヤツヤした毛並みを指先で撫でてやると、黒猫はこっちを見た。金色の瞳と目が合う。

どことなく賢そうな瞳だった。小さくニヤーと鳴くと、気持ちよさげに目を細め、アリスの指先に頭を寄せた。

リン、と音が鳴る。首輪についている鈴だ。誰かの飼った猫なのだろうか。

右足に治癒魔法を掛けてあげたいところだが、習った治癒魔法は全て人間用のもので、魔法動物用の魔法を学びたい場合は、七年生で選択科目を取るしかない。

流石にアキも、その魔法については詳しく知らないようだった。

「ねえ、アリス……」

申し訳なさに、アキが名前を呼ぶ。

ああもう、と、小さく舌打ちをした。このバカは次に何を言い出すのか、そんなの言われなくってももう分かっている。

「……いいけど」

「あのさ、ごめんけど……って、え？」

仏頂面で、アリスはアキを見た。

口を尖らして続ける。

「どうせ飼いたいわって言うんだろ。怪我が治って飼い主が見つかるまでなら、別にいいぜ」



「アリスが……！ 子猫という……！！ 何この光景、ちよつと、誰かカメラカメラ!!」

場所は移り、レイブンクロー寮の寝室。

アリスの腕に抱かれた黒猫を見た同室のウィル・ダークは、一人チェスをする手を止めて、アリスを指差して笑い転げた。レーン・スミツクも寝転んで読書をしていたのを止め、静かに肩を震わせて笑っている。

「うるっせえー！」と叫ぶも、子猫片手じゃ締まるもんも締まらない。

ウィルは目の縁にたまった涙を拭うと、アリスに近付いていき、黒猫をまじまじと見つめた。

「しつかし、どうしたんこれ。拾ったん？」

「ああ、アレがな」

親指で後ろにいるアキを示すと、「ああ」と納得したように二人は頷いた。

「なるほどな。アキお姫様のお願いには逆らえなかったと。うんうん、君も立派な男子だよ」

「あいつのどこが姫っつーんだよ。そんな可愛らしいもんじゃねえだろ」

「はっ、一番あいつを姫扱いしている奴が、よく言うよ」

一体何を言っているのやら。

とりあえずウィルの腰を蹴り飛ばすと、自分のベッドへ向かった。

「大丈夫、ウィル？」とアキが尋ねているが、無視する。

「レーン、包帯持ってねえか？ あと消毒液みたいなもん」

「あるあるー。ちよつと待ってねー」

マグル生まれのレーンは、週に二、三回の割合で、ホグワーツの裏庭でマグルのスポーツであるバスケットボールを友人らと行っている。二つのチームに別れて、ボールを相手のゴールに叩き込むというスポーツで、若干クイディツチに似ていた。

アリスも数度混ぜてもらったことがあるが、中々楽しかった。ただ、あれは身長がモノを言うゲームなので、同年代の女子と比べても小さい部類に入るアキは拗ねて、見学しながらずっと野次を送り続けていたっけ。

バスケットボールは突き指をすることが多いゲームらしく、レーン

はいつも怪我したとき用に包帯を持ち歩いていた。

「はいいよ」

「お、サンキュ」

ベッドに腰掛け、黒猫を股の間に置くと、右の前足を取った。赤く血が滲んでいる。

どこかで擦ったのか打ったのか、何にせよ放置出来るような怪我ではない。消毒をして包帯でくるくると巻いてやる。

アキは勉強机の椅子の、背もたれに腕をつけて、心配そうにじっと見ていた。

「大丈夫だって、そんなひでえ怪我じゃねえし。しばらく動かさなきゃ、自然と治ってんだろ」

「本当？ よかったあ……」

ほっと安心したように、アキは肩の力を抜いた。

包帯を綺麗に留め終わり、黒猫を離してやると、黒猫はアリスを見上げた後、くるんとアリスの股の間で丸くなってしまった。

「なあ、その猫の名前とか付けたの？」

「は？ 名前？」

うん、とウィルは腰を摩りながらも、アキに後ろから抱きつくかのように椅子の後ろに跨がると、その黒猫を指差した。

「付ける暇なんてあつかよ、さつき見つけてきたんだ。それに飼い猫かもしんねえじゃん」

「あー、確かに飼い猫かもね。ほら、その猫首輪つけてるし」

レーンの言う通り、猫は細く赤い首輪を付けていた。首元に鈴があり、触れるとチリンと音が鳴った。

どっかに名前でも書いてあるんじゃないかと思ったが、それはないようだった。

「でも飼い猫にしたって、飼い主見つかるまでに時間かかるでしょ。ずっと猫猫呼んでんのも味気ないしさ、今だけでも呼び名つけちゃえば？ ね、アキもそう思うよね？」

レーンの言葉に、アキはこっくりと頷いた。

「そうだよ、アリス。なんか名前、つけようよ」

「はあ？ 名前くらいお前がつけなければいいじゃねえか」

「だってアリスが飼うって言ったんじゃない」

「言ってるねえだろ！ 怪我が治って飼い主見つかるまでだったら寮に置いてもいいぜって言ったんだよー」

「あれ、そうだっけ？ まあいいじゃん、細かいことはさ」

「細かくねえ！」

「しっかし、名前ねえ……簡単に思い浮かぶんなら苦勞はしないよね……」

いつの間にか、レーンがアリスのベッドに腰掛けていた。アリスの膝の間の黒猫を抱き上げて、「わあちっちゃい」と声を上げる。

「名前ねえ……ティガーとかキティとかマックスとかか？」

「アリス、ありふれ過ぎ安直過ぎ。捻りがないなあ」

「うるせえ！」

後、俺のベッドに勝手に座んな！ と手を振り上げれば、わわっと慌ててレーンは立ち上がった。

「猫抱えてる奴突き落とそうとするとか、アリスくんだったらさいつてえ〜」

「おい、でかい男がクネクネすんじゃないやねえよキモい」

「もうっ、ホンットに思いやりの気持ちがないなーアリスは！ こんなんじゃ女の子にモテないぞー」

「ウイル、猫をレーンから奪い返してくれ」

「まあまあ落ち着こうやアリスくん。とりあえずその手に握った本は離してね」

どうどう、とばかりにレーンがアリスから距離を取る。

アリスは小さくため息をついた。

「あ、レーン、俺にも抱かせてー」

「いいよー。はいつと」

「お、どうも。……うおー、ちっせー！ 本当に生きてんのかこれ！」

「そりゃ生きてんでしょ、ウイルってバカなの？」

「ば、バカじゃねーし！ 魔法薬学の成績はレーンよりいいし！」

「他の全ての科目では僕が勝ってるわけだけどね」

「う、うるせー！」

「アキ……」

ふと呟く。

唐突に名前を呼ばれたアキは、きよとんとした顔で首を傾げた。ウィルとレーンの二人も言い合いを止め、アリスを見る。

「どうしたの？ 急に」

「あ、いや……この黒猫、お前に似てるなーってふと思ってな。黒いとかか、小さいとかか」

「……何それ、喧嘩売ってんの？ 言い値で買うよ？」

むつとしたようにアキの瞳が細くなる。

ローブの中でアキが杖をぎゅっと握ったのが分かって、アリスは「いやいやそうじゃなくてだな、そう怒んなって、悪かったよ」と謝りの言葉を述べた。

魔法ありでアキと喧嘩しようだなんて、そんな自殺行為をする気はない。

「いや、その、なんだ、綺麗な毛並みとか、お前の髪思い出すし、賢そうな目えしてっし、案外人懐っこいしき。お前と似てる」

「……ねえ聞きましたレーンさん、まるで彼女の機嫌を損ねた彼氏みたいですよわね」

「まあ本当ですよわねウィルさん、ナチュラルな惚気にわたしたちお腹がいっぱいですよわ」

「お前ら黙ってるー！」

ウィルとレーンに向かって叫ぶも、全く堪えてない様子だ。

「きゃー」とおぎなりの悲鳴を上げると「レーンさん、アリスさんは亭主関白がお好みのおようですよ」「いえいえウィルさん、あれでアリスさんは振り回されるのが好きですから……」とまたコソコソ話している。アリスの額に青筋がピシイと浮かんだが、話題に上っているはずのアキは、二人に構うことなく「なるほど……」とうんうん頷いている。

いや、そうじゃないだろ、今するべきはその反応じゃないだろう。

「なるほど、よく分かんなかったけど、とりあえずアリスがぼくを滅茶

「苦茶大好き愛してるのはよく分かったよ」

「いや、お前それ何にも分かってねえよ!？」

「はいはいぼくもアリス滅茶苦茶大好き愛してるから心配しないで」

「いいよ別にお前から愛されなくっても！ 普通でいいから！」

「普通に愛してる？」

「愛さなくていい！」

「いーんじゃない？」

そこでアキは、へらりと表情を崩した。

無防備なまでの笑顔で、レーンが抱いている黒猫を見つめる。

「よーし、今日から君は『秋』だよ。よろしくね、秋」



アキが言うには、ネコの名前の『秋』は日本の漢字で『秋』らしい。

響きは同じでも、拘りがあるのだと聞いた。

「秋という字はね、日本では季節の秋を示しているんだよ。日本のね、とつてもいい季節なんだ。夏の暑さは和らいで過ごしやすいし、山は紅葉や銀杏が赤とか黄色に色づいて、すごく綺麗なんだよ。

お米や果物が沢山実る季節だし、夜が長くなってくるから、星や月が見やすくなる。雨は比較的多いけど、晴れた秋の空は高く澄み渡つてて、清々しいんだよ」

アキは楽しそうにそう言うと、柔らかく笑った。まるで実際に、日本の秋を体感していたような口ぶりだ。

ふうん、ととりあえず頷いておく。

アリスが拾ってきた子猫、『秋』は、あつという間に寮中で話題になった。

『あの』アリス・フィスナーが拾ってきた、というのと、最近はペットはふくろうが主流であり、猫、しかも黒猫は珍しいからだ。

あと一部では『アリス・フィスナーがアキ・ポッターの名前を猫につけたらしい』ということも密かに囁かれているそう。確かに事実だが、何となく脚色込みで語られている気がするのは自分だけだろう

か。

黒猫の怪我は、一週間もせずに完治した。怪我が治るまではアリスのベッド脇で、クツションとブランケット（両方ともアキのものだ。アキがそうすると言って聞かなかった）に包まれて眠っているか、誰かに抱き上げられているかのどちらかだった秋も、怪我が治ってから寮内を歩き回って遊んでいる。

色んな人に愛想良く擦り寄り遊んでもらっている姿など、本当にアキそっくりだ。

昼間はそうやって好きな場所へと放してやり、夜は寝室に連れ帰って眠るのがアリスの日課になった。

そんな折。

「……フィスナー、アキ。私も猫が見たい」

いつも意志を見せない灰色の目は、今日はいつもの以上にキラキラと輝いている。

普段無表情のアクアマリン・ベルフェゴールは、しかし今日ばかりは期待に頬が緩んでいた。

「アクア！ うんっ、アクアなら大歓迎だよっ!!」

アクアに心底惚れているアキは、ほぼ即答でOKを出す。

今にも飛び跳ねそうなほどに満面の笑みを浮かべるアキと対照的に、アリスははあ、とため息をついた。アキは秋に触れないから、秋を連れてくるのはアリスの役目なのだ。

スリザリンであるアクアを寮の中に入れちゃあ、流石に先輩から色々言われるだろう。

お願い、とばかりに、アキとアクアはアリスを見上げた。

この二人の『お願い』に、自分は本当に弱い。

「……あー、もう、分かった、分かったから。先に中庭行つとけ、後から秋連れてくる」

「……秋？」

アクアが首を傾げた。

「子猫の名前だよ！ アリスが名付けたんだーもう、ホンツトアリスってばぼくのが大好きなんだから」

「一体どの口がそんなことを言ってるんだろうな……う？」

「い、いひやいいひやい！ ぐふえんアリス！」

アキの口を掴み軽く捻ると、アキが謝ってくる。

手を離すと「うー……」と唇を擦っていた。きつと赤くなっていることだろう。ザマミロ。

先行ってろ、とアキの背中を押すと、レイブンクロー寮へと向かった。

談話室で女子の先輩二人に構われている秋を見つけ、すみません、と断り秋を抱き上げる。そのまま立ち去ろうとしたが、彼女らに呼び止められた。

無視するのも感じが悪いので、足を止める。

「……………っ!？」

振り返った瞬間、目の前を光が覆った。

カメラのフラッシュを焚かれたのだと、遅れて気付く。

「アリスくん、可愛い！」

そう言っで見せられた写真には、何てことはなく普段鏡で見ているのおんなじ仏頂面した自分と秋がいて、相変わらず女子の『可愛い』は訳わかんねえな、と思いつながら「……………はあ」と適当に頷いた。

中庭へ向かうと、アキとアクアは仲良さげに肩を寄せ合い、何やらお喋りに興じているようだった。

アキのアクアに対する想いを、アリスはこの上なくよく知っている。一体何度奴の惚気話に付き合っただけか……。また、アクアがアキに抱く想いもまた、段々と変わってきたようだ。雰囲気は柔らかくなり、今までよりも格段に、笑顔を見せるようになった。

なんとなく、ではあるが、この二人には幸せになってもらいたい、とぼんやり思う。

二人のいい雰囲気を壊したくなくて、僅かばかり時間を潰した後、アリスはアキとアクアと合流した。

「……………」

この上なく幸せそうな表情で秋を撫でるアクアに、普段無表情なこいつもこんなに年相応な笑顔が出来るのか、とアリスは驚いた。

そして、そんなアキアと秋を、心底幸せそうに見つめるアキにも。もつとも、彼は年齢以上に感情表現が多彩だが。

「……アキも、触らないの?」

「いやっ、ぼくは……触れ、ないから」

そう断りを入れたアキだったが、秋はスルンとアキアの腕から抜けると、あ、と思う間もなく、アキの足元に擦り寄り、丸くなる。

アキは呆然と口を開けて、その様子を見ていた。

「……秋」

手を伸ばし、アキが黒猫に触れる。

黒猫はピクリと耳を動かしたが、されるがままになっていた。

アキの瞳が、僅かに揺らぐ。

眉を寄せたまま、アキは秋の頭を撫でていた。



「——誰?」

家に帰って来た幣原秋は、部屋の中から聞こえてきた物音に鋭い声を発した。

それが黒い子猫の小さな鈴の音だと分かると、ふ、と安心したように肩を落とす。

「……なんだ、まだいたの」

秋の声に応えるように、駆け寄ってきた黒猫が小さく鳴いた。

「変なやつ。普通は、ぼくを怖がるもんなんだぞ。ぼくの魔力、痛くないの?」

小さく微笑んで、電気を点けた。

奥へと向かう秋に、黒猫が付き従うように着いてくる。

魔法省から徒歩三十秒の、魔法法執行部の独身寮。幣原秋がそこで暮らし始めて、もう三年が経つ。

かつては一杯だったこの寮も、今や両隣、上の階の住民もいなくなりガラガラだ。それが『黒衣の天才』幣原秋を忌んでのものであることを、秋はよく理解していた。

むしろ、ぼくが引越すべきなのだろう。

そうは思うが、膨大な仕事量で中々荷造りする暇も出来ないし、何より魔法省から徒歩三十秒という素晴らしい立地に、申し訳ないとは思いつつもなかなか引越せずにいる。

この黒猫は、たまたま開け放していた窓からスルリと忍び込んできた猫だった。

敵からの監視かとも思って調べたが、どうもそういう類のものではなく、本当に純粹に迷い込んできただけのようだった。

首輪をしているから、誰かの飼い猫なのかもしれない。もしくは、誰かの飼い猫『だった』のか。この寮で、猫を飼っている人もいた、気もする。

闇祓いの制服と手袋を脱ぐと、ほう、と秋は人心地ついた。

ソファに身を沈めると、ふとぼうっとした目で遠くを見つめる。両手の指を無意識に合わせた。

「あつ、ぶーめんぶーめん」

黒猫の催促するような鳴き声に、秋は我に返った。

慌てて立ち上がると、「水と、ご飯だね。忘れてた。生き物を飼ったことがないもんで……」と、誰が聞いている訳でもないのに、言い訳めいた口調で呟く。

「……飼ってる訳じゃ、ないんだけど」

迷い込んできたのだ。

自分の内側に入れないという線引きは、しっかりとしている。

だから、この黒猫が住み着いてそろそろ一ヶ月が経とうとしているが、未だに名前をつけないのは、そんな理由からだった。

不規則な帰宅。任務で数日家を開けることもザラにある。

いつでも外に出ていけるよう、入ってきた窓はいつも開け放したまま。

なのに、どうしてか出ていこうとしないのだ。

「変なやつだね、本当に」

足元に纏わり付いていた黒猫が、ふと伸び上がって窓枠に飛び乗った。

その姿を目で追って、窓枠に数枚の手紙が置いてあることに気付く。その中の一枚、メッセージカードを手にとって、秋は目を瞬かせた。

「そうか、ハロウィーンか……」

日付の感覚も、失っていた。気付けば口元が緩んでいた。張り詰めていたものが、ふ、と緩む。

「……ジエームズとリリーの家で、ハロウィーンパーティーをするんだって。お前、行って来なよ、ぼくの代わりにさ」

カードには、ハロウィーンパーティーのお誘いの文言の他、ジエームズとリリーの手書きの文字で一言、メッセージが添えられていた。

『顔だけでも見せに来てくれ。ハリーも随分大きくなったんだよ』

『久しぶりに、秋に会いたいなあ。あなたへの誕生日プレゼント、まだ渡せてないもの』

「……なかなか、ねえ」

生憎と、明日も仕事が入っている。

闇祓いになって三年、『不死鳥の騎士団』も兼業しているせいか、まともな休暇なんて月に一度あるかないかだ。

シリウスやリーマス、ピーターとも、『不死鳥の騎士団』の会議でしか会っていない。ジエームズとリリーとなると、尚更。

記憶の中のハリーは、未だ寝返りも打てない赤ん坊だった。

残念の意を込め、返事を書き、送る。

しばらく窓から夜空を見上げ、ぼうっと佇んでいた秋だったが、再び黒猫に鳴かれて意識を引き戻した。

「ごめん、ごめんって」

猫用の缶詰と水を用意してやると、黒猫は頭を突っ込んで食べ出した。

秋はしばらく、そんな黒猫の様子を目を細めて見つめていたが、やがて手を伸ばすと、黒猫の頭を撫でた。

ピクン、と黒猫は耳を動かし、探るような瞳を秋に向けたが、後ずさることはしなかった。

「お前、鈍いんだなあ。そんなんじや、野生で生きていけないぞ？」

そう言つて、小さく秋は笑つた。
久しぶりに、笑えた気がした。



黒猫にとつて、この部屋は居心地がよかつた。

この家主、幣原秋は、「こんなところにはいないで、早く外に出ていきなよ」と言うが、屋根もあり、暖かで、おまけに秋の世話は案外細やかだつた。

数日間食事でありつけない生活は慣れていたし、おまけに季節は、これから冬へと向かおうとしている。

黒猫が厭うことと言えば、秋が度々風呂に突つ込もうとすることくらいだつた。

この家主は、病的なほどに綺麗好きで、黒猫が汚れまみれなのが許せないようだ。『飼っていない』と主張する癖に、妙なところで気に掛けている。

『変なやつ』と秋はよく黒猫に言うが、黒猫こそ、秋に『変なやつ』と物申したい。通じるのであれば、の話だが。

真つ暗な部屋で、ソファに丸まっていた黒猫だつたが、ドアが開いた音に頭を上げた。家主が、幣原秋が帰つてきたのか。

五回、朝と夜を繰り返した気がする。普段からよく家を空けていたが、ここまでの長期間は、黒猫にとっては初めてだつた。

とてとて、と短い廊下を歩く。

迎えた家主は、家に足を踏み入れドアを閉めたところで、ぐつたりとへたり込んでいた。

どうしたのか、具合でも悪いのだろうか。黒猫はひと鳴きして近付くと、秋は俯いていた顔を上げた。

黒い瞳が、緩慢に黒猫へと向く。

悲しみと疲れと憎しみと苦しみと、全ての負の感情をいっしょくたにしたような、光すらも吸い込んでしまうような瞳だつた。

ピリピリと、肌を灼く感覚。なぜだかこの人間の近くに行くと、妙

な感覚が身を包むのだ。

それでも黒猫は、この人間に身を寄せずにはいられなかった。ひとりぼつちなこの人間が、ひどく、かわいそうに思ったから。

「……、う」

秋は目を細めると、震える手で黒猫を抱き上げた。

そして胸に抱え込むと、ぎゅっと抱きしめる。

触れられたところが、全身が、痛くて堪らない。秋の手袋越しであるというのに、この痛さは尋常じゃない。

秋の左手が、強く右の前足を掴んでいる。ジリジリと焼け焦げるように痛んだが、震えるその手を振り払うことは、黒猫には出来なかった。

今、この人間から離れてはいけないと、寄り添ってあげなくてはならないと、理解していた。

「ごめんね、痛いだろうね、ごめんね……っ」

そう言いながら、秋は震える息を零した。背中に、熱い雫が落ちる。

一滴ぽたりと落ちた後は、すぐだった。雨と同じだ。

「リリー……ジエームズ……っ、ピーター……シリウス……っ、う、っく……ごめん、ごめんなさい……ごめんなさい……」

更に強く抱かれ、黒猫は、小さく鳴いた。

「あの日、行けばよかったんだ。仕事なんて大したものじゃなかった、それなのに、ああ、ぼくはまた……っ、ああ、間違えて、しまった……どうして、行かなかったんだ……っ、……リリー……まも、れ、なかった……あ、ぐ、うう……っ」

誰にも聞かれていないのに、秋は泣き声を噛み殺す。

ここには、一人と一匹しか、いないのに。

そうか、と黒猫は思い至った。

自分がいるから、この人間は泣けないのかもしれない。



気を失うように、眠っていた。

気がつくのと、既に昼間だった。黒猫を抱きしめて、泣いたまま眠ってしまっていたのだ。靴も、闇祓いの制服も脱がずに。

幼子のように、いつまでも大人になり切れない自分に、うんざりする。

目が覚めても、現実が変わらない。

夢であつたらと何度も願った最悪な現実は、今もなお、ここにある。

「……………」

幣原秋は立ち上がった。身体が軋む。変な体勢で眠ってしまったからに違いない。それだけ、疲労が溜まっていたのか。

直轄の上司、エリス・レインウオーターに無理矢理あそこで仕事をとり上げられていなかったら、と思うと、ゾツとする。

ふと、気付いた。

黒猫が、いない。

「……………あれ？」

おーい、と呼びながらも、部屋を見渡した。リビング、台所、寝室、バスタブ、トイレ。

こういうとき、名前をつけていないと不便だな、と思い知る。

ふと、思い至った。

「……………いなくなった、のか」

ふ、と肩の力が抜けた。

とつとと出ていけど、いつも言っていた。

それがたまたま、今日になった、それだけの話だ。

「……………」

ここ一月ほど開け放していた窓に、手を掛けた。

閉じると、部屋に吹き込む風が止む。

「……………全部、ぼくの前からなくなっちゃうんだ」

俯いて、呟いた。

「……………ならもう、何も持たなかったら、いいのかな」

ふと、窓枠に置きっ放しになっていたカードに、目が止まった。

息が止まる。震える指で、それを拾い上げた。

「……………ああ……………」

思う存分、泣いたはずなのに。
どうして、まだ涙が零れるのだろう。

脳裏に鮮やかに浮かぶ、二人の親友の姿。

「リリー……ジエームズ……っ、あ、あああ……」

座り込むと、身体を折り曲げ、秋は一人、嗚咽を漏らした。

涼やかな鈴の音は、聞こえない。



ホグワーツ、レイブンクロー寮の男子生徒寝室。

部屋の片隅で、クッションとブランケットに包まれ眠る黒猫を起こしたのは、一人の少年の控えめな足音と、毛並みを揺らす風と、肌を刺す痛みだった。

「ごめんね」

密やかな声。ブランケット越しに抱き上げられた。

素手でないにしても、それでも感じる痛みに、小さく鳴き声を上げる。

「ごめん」

再び、そんな声が落とされた。

黒猫を抱き上げた少年は、寝室を出た。

階段を降り、そしてもう一枚、扉を潜り抜ける。

大きな窓から、月明かりが差し込む廊下を、少年は歩く。

「……不思議な場所だ、ホグワーツは」

呟く声に、黒猫は顔を上げた。

黒猫の微かな記憶、それより幼い顔をした少年は、微笑みを浮かべ、黒猫の金色の瞳を見返した。

「魔力を上手く制御出来ない子供が集まるホグワーツは、色んなものを近寄らせる。良からぬものも、そうでないものも。……そんなに、ぼくに会いたかったの？」

会いたかった？

そうなのかもしれない。

聞きたいことがあったから。

君は、思う存分、泣けた？

「……君の言葉が分かればいいのに。ライ先輩なら、動物の気持ちも分かるのかなあ。……いや、日本語と同じか。言葉が分からないんじゃない、雑音と一緒にだ」

黒猫の意志は、残念ながらこの少年には全く伝わっていないようだ。

——でも、まあ。

そんな柔らかな笑顔を見ることが出来ただけでも、いいとしよう。この少年は、泣いている姿より、笑っている姿の方が似合うのだから。

「せめて一番高い場所で、送ってあげよう」

月が、大きい。空が、広い。

黒猫は思わず、目を見張った。

少年が地面に腰掛けた。抱えていた黒猫を、傍らに下ろす。

ブランケット越しに、黒猫を優しく撫でた。

「実体とゴーストの間を彷徨う君。ぼくと同じ名前を持つ君に、とっておきの呪文があるんだ」

撫でる手は、変わらず暖かだった。

「長いから、聞いているうちに、きつと眠ってしまえるだろう」

そう言った少年の唇から、不思議な言葉が漏れる。

僅かに旋律を伴うそれを聞きながら、黒猫は静かに目を閉じた。

風が、静かに吹きすさぶ。少年の言葉を乗せ、空へと運んでいく。

呪文が終わり、少年は口を閉じた。

風が、少年の長い黒髪を遊ばせる。

しばらく少年は、大きな月と真っ暗な夜空を眺めていた。

やがて、傍らのブランケットを手に取ると、立ち上がる。

その場から立ち去ろうとした少年の背後で、チリン、と涼やかな鈴の音が鳴った。

少年は振り返る。

そして、静かに微笑んだ。

「
バイバイ、
秋
」

謎のプリンス編

第1話 もしも、すべてが

もしも、全てが夢だったら。

そう考えて、静かに目を閉じた。

両親は日本にいて、長期休暇のたびに帰ってくるぼくを、暖かく迎えてくれるんだ。

そこには、ぼくと父さんと母さんの三人だけで、他の登場人物は誰一人として必要ない。ぼくら家族だけで完結している世界が、広がっているんだ。

リリーとセブルスは、仲違いすることなく、ずっとずっと友達なの、親友のまま。

ぼくら三人は、寮が違っても、卒業しても変わらず仲良し三人組のまま、就職したりなんなりで、学生時代よりも会う頻度は少なくなっってしまったけれど、時折誰かの家に集まって、美味しい紅茶とケーキを片手に歓談するんだ。

ぼくら三人の会合は、たびたび悪戯仕掛人たちに妨害される。様々な手段で乱入する彼らに、リリーは怒るけれども、でも最後は皆で一つのテーブルを囲んで笑っているのだろう。

楽しい時間があつという間に過ぎて、いつの間にか深夜になっていて、騒ぎ疲れてジエームズやシリウスはきつと、ソファで寝ちやうことだろう。

そんな折、兄を探してレギュラスが訪れるのだ。「兄がご厄介になっ

ていませんか」なんて言いながら。寝こけるシリウスに眉を顰めるレギュラスの腕を、リリーが「レギュラスも少しお話ししていきましよう！」と引っ張るんだ。

レギュラスは少し驚いたように目を見開いて、少しだけ微笑んで「……兄が起きるまでなら」なんて、そんな言い訳めいたことを口にしつつ、なんだかんだで一緒にいてくれるんだろう。

どうしようもない妄想を。

そんな、どうしようもない空想を。
あつたかもしれない未来を、一体何度、思い描いただろう。
何度思い描けば、気が済むのだろう。

◇ ◆ ◇

もしも、全てが夢だったら。
ぼくの存在自体が、ただの空想で、構想でしかないのなら。
幣原秋が、家族や友人に囲まれて、笑っていられるのなら。
彼が、悪夢に苦しまずに済むのなら。
幣原秋が幸せであるのなら。
アキ・ポッターは必要ない。
それは、自明だ。

◇ ◆ ◇

英国首相は、自分の腰掛ける高価な肘掛け椅子の肘置きを、再びぎゅつと握り締めた。

暖炉から人が、一人、二人、気付けば三人。そういう超常現象はあまりお目に掛かりたくないのだ。

まだ見知っていたファツジならばともかく、新しい魔法大臣だと名乗ったルーファス・スクリムジョール、そして彼の付き人だと名乗るライフ・フイスナー。ファツジが以前ここを訪れたときも、行動を共にしていた。

年若い彼が魔法大臣の付き人とは、さぞや優秀なのだろう、そう以前嫌味も混ぜて口にするに「家柄のせいですよ」とサラリと返された。さぞやいい坊ちゃんなのだろうと腹立たしくもなったが、瞬間温和そうな彼の瞳に激しい炎が閃いたような気がして、首相は口を噤んだのだった。

魔法使いを怒らせて、何か妙なことがあつてはたまらない。

しかし、決して広いとは言えないこの部屋に三人も魔法使いがいた

んじゃ、落ち着くものも落ち着かない。

だが、そう思っているのは首相一人だけのようにだった。

「フェイスナー」

話は終わりだと、切り上げる声音で、ルーファス・スクリムジョールはライフ・フェイスナーの名を呼んだ。

首相の前に進み寄った彼は、懐から棒きれを取り出した。それが杖だと、首相は知っていた。

「怯えないで。危害を加えるつもりはありません」

そう言われても、身体が強張るのはどうしようもない。

ライフ・フェイスナーは僅かに苦笑したようだった。

「私の妻はあなた方と同じ、魔法使いじゃない、普通の人間でした。私たちはきつと、分かり合えるはずです」

思わず目を瞠った。そんなプライベートを口にするとは。

と同時に、そうか、目の前の彼にも自分と同じく家庭がある、妻がいて、恐らく子供もいるのだろう、ということに気がついた。

今まではそんなこと、考えもしなかった。

微笑んだまま、彼は杖を振った。

『中立不可侵』フェイスナーの名に掛けて」

さらさらと、薄絹のようなものが上から降ってくる。重みはなく、感触もない。

キラキラと光に煌めくそれは、しかし何故だろう、首相を安心させた。『魔法』を、こんなに心穏やかに受け止めたのは、生涯で初めてだった。

「あなたの安全は、私の名に掛けて保証しましょう」

一回りも二回りも年齢が違う彼の言葉に、首相は頷いた。

「終わったか」

「ええ」

フェイスナーはスクリムジョールに受け答えするため、首相に背を向けた。

その後ろ姿に、言葉を掛けた。

「君の奥方は、ならば私が守るべき人だ。我が政府の威信に掛けて、安

全を保証しよう」

フィスナーはゆっくりと振り返った。口元には笑みが浮かんでいた。た。

「——あいつも、きつと喜ぶことでしょう」

多くは語らずに、彼らは暖炉の炎に消えた。

暖炉を見つめ、ふと思う。

もしも娘が、彼のような魔法使いの男を旦那にしたいと連れてきていたなら、自分は一体どういう反応をしただろうか。その結婚を、果たして自分は認めただろうか。

次に彼らが訪れたときは、もう少し暖かな歓迎をしてやろう。

そう、思った。



静かな病室で、リーマス・ルーピンは椅子に腰掛け、両手を組み合わせて項垂れていた。

部屋の中は、全くの無音だった。病室の外を、時折看護師がパタパタと歩く音が響くくらい。

控えめなノックの音に、リーマスはピクリと肩を動かした。

僅かに顔を上げ、ドアを伺う。

「……やつほー、リーマス」

「……トンクス」

右手をひらひらとさせ、気遣うように笑みを浮かべたのは、ニンファドーラ・トンクスだった。ショッキングピンクの短い髪に、手には花束が握られている。

トンクスは、リーマスに何と声を掛ければ良いのか躊躇ったようだ。

視線を彷徨わせ、間を持たせるように窓枠に歩み寄り、花瓶を手にとった。生けてある花を入れ替える。

作業の途中、トンクスはリーマスをちらりと振り返ったが、リーマスはトンクスが現れる前と同様に顔を伏せていたため、トンクスのそ

んな動きには一切気が付かなかった。

「……仕事は終わったの？」

リーマスから声を掛けられ、トンクスは軽く飛び上がった。

誤魔化すように、軽く笑みを浮かべてみせる。

「う、うん。今日は遅番だったからさ」

「……こんなところに寄ってないで、早く家に帰って寝ればいいのに」

「あ、はは……なんだか、目が冴えちゃってさ。折角時間が出来たんだし、それに……」

意を決して、ごくごく普通のトーンで、何の気無しに見えるように、呟いた。

「リーマスに、会えるかもって思ってたさ」

リーマスはその言葉に、何の反応も返さなかった。

トンクスは安心してつつ、心の何処かで僅かに落胆する。

リーマスと、シリウスの眠るベッドを挟んで反対側に、トンクスは椅子を出した。腰掛ける。

「リーマス、その……あ、あんまり根を詰めすぎちゃ、身体にも悪いよ！ パアツと気晴らし、というかさ……そうだ、遊びに行こうよ！」

「……このご時世、そんな余裕はないよ。トンクス、君だって忙しい、私以上に……私なんか、君の貴重な時間を浪費させるのは、良くない」

『私なんか』って……」

トンクスは拳を握り締め、少し勢い込んだが、それもすぐに萎んでしまった。

「……闇祓いは、身体が資本なんだから、あまり無茶をしちゃいけないよ」

「……そんな無茶、しないよ」

「そう？ ……そうか。でもね、心配なんだ」

リーマスは細く、長く息を吐いた。

「あいつみたいに……秋のように、君がなってしまうかわかって……思うと、それだけで、怖くなる……」

頭を起こしたリーマスは、仄暗い眼差しで、どこか遠くを見据えて

いた。

「……秋」

焦がれる口ぶりだった。執着を垣間見せる、声だった。

その視線の先に、一体何があるのか。

一体誰を、視ているというのか。

——引き戻さないで。

此方に。現世に。現実には。

トンクスは焦る思考の中、そう思った。

それ故、悪手を打ってしまった。

彼女はうっかり者ではあるが、本来は思慮深く頭も回る。そうではないと、闇祓いになんてなり得ない。

魔法力と頭脳、共に最優秀だと認められた者しか、闇祓いになることは出来ない。

ただ、彼女は。

彼を笑顔にさせたい、彼の願いを叶えてあげたい、ただ、それだけだったのに。

椅子を蹴って、トンクスは立ち上がった。

大きな音に、緩慢にリーマスは顔を向ける。

トンクスはにっこりと微笑んだ。

「あの人に会いたい？ —— 見た目だけで、いいのなら」

生まれ持った、その能力。『七変化』の能力。

幣原秋の——アキ・ポッターの姿形は、覚えている。

長く艶やかな黒髪に、白い肌。少女のように大きな黒い瞳、目立たないけれども丁寧に整った顔立ち。

目を閉じて、しっかりと彼の容姿を頭に思い浮かべ——

「やめろ!!」

大声に、息を呑んだ。

「やめてくれ……その姿で、あいつじゃないのに、あいつじゃないのにその姿をしないでくれ!」

真っ青な顔で、リーマスはトンクスを見ていた。立ち上がると、トンクスによろよると歩み寄り、ふらついて床に膝をつく。

トunksは『七変化』を解くと、慌てて歩み寄った。落ちた肩に手を伸ばした瞬間、触れるよりも早くに手を払われる。じんわりと痛む右手を、反射的に胸に抱えた。

リーマスはそれに我に返ったようだ。愕然とした眼差しでトunksを見つめた。

「……ごめんなさい」

トunksの謝罪に、むしろリーマスは顔を歪めた。

トunksは、頑張って微笑んだ。

「ごめん……あたし、帰るね」

トunksは酷く後悔していた。

幣原秋の話は、リーマスにとっては地雷だと、理解していたはずだったのに。

彼の弱いところを、無意識に思いつき踏みにじってしまった。

呆然とリーマスは、トunksが消えた先を見つめていたが、やがてがつくりと項垂れた。

痛みに耐えるように、身体を折り曲げる。

「最低だ……私は」

込み上げるものを飲み込んだ。

ゾクリと身震いしながら、吐息と共に言葉を漏らす。

「……秋……っ」

その声は、誰にも届かず、空に消えた。



「……どうしたんだ」

アリス・フィスナーは、紅茶のポットを片手に持ったまま、自宅の暖炉前の絨毯に転がっている銀髪の姉弟を見下ろした。

もつれ合うように倒れている二人は、ほとんど同時に起き上がると、アリスを見て声を上げる。

「アリス！」

「フィスナー！」

「そうとも俺がアリス・フィスナーですけれど……はあ、まさか休みに入って初日から駆け込まれるたあ、思ってもなかった……」

空いている方の手で、髪をぐしゃぐしゃと搔く。

ひとまず座れ、とソファを顎でしゃくり、紅茶を淹れ直そうと台所へ向かった。あともう二人分、用意しないといけなくなったからだ。

「で？ どうしたよ」

紅茶を差し出すと、二人はそれぞれ感謝の言葉を述べてから口を付けた。ついでに茶請けとしてクッキーを広げてやると、こちらにも歓声上がる。

何があつたのかは、話をするのが苦手な姉に代わり、よく口が回る弟が説明をした。

アリスは時折眉を顰めながらも耳を傾けていたが、全てを聞き終わると大きく息を吐いた。

「……なるほどな」

左耳のピアスに触れながら、アリスは少し考え込む風だったが、やがて顔を上げると、銀髪の姉弟を見た。

「とりあえずお前ら、荷物まとめてうちに来い。ここは『中立不可侵』の本拠地だ、魔法契約も新しいし、そうそう滅多なことは起こらない」
「……ありがとう、フィスナー」

「気にすんな、幼馴染のよしみつてもんだ。……ちゃんとアキに手紙送っとけよ、あいつにゴチャゴチャ言われたくねえしな」

二人を再び暖炉の炎に送り返した後、アリスはしばらく面を伏せていた。

「……よし」

碧の瞳に真摯な光を宿し、アリスは顔を上げると、踵を返した。

第2話 集合写真

「集合……写真？」

思わず渋い表情になるのを、止めることは出来なかった。

不死鳥の騎士団本部では、発足当時の倍以上の人数がいた。とても心強いことだと思う。ヴォルデモートと死喰い人らに対抗する人手は、多ければ多いほどいい。この戦争が終わるときに一体何人残っているのだろうか、そういうことは思うまい。

それはいいのだが。

「なんじゃ、不満かの？ 秋」

ダンブルドアに笑顔を向けられて、苦笑いを返した。

「不満、というか……」

写真を撮ると聞いていたら、来ていなかった、というか。

「まあ、誰か一人、カメラのシャッターを押す人物が必要なんじゃがのう」

「やりますー！」

一も二もなく手を上げて、カメラを受け取る。そんなぼくに、仕掛人の面々は不満そうだったが、文句も言わずに並ばせた。

「はい、じゃあ撮りますよー」

人が多すぎて、三段に並んでもらうことになった。増えたものだと少し驚く。

中心にダンブルドア、そのすぐ横にムーディ先生。年功序列、というわけではないが、仕掛人やリリーは後ろだった。

「ハグリッド、もうちょい寄れる？ うーん、もう少し……」

「秋、僕らを潰す気かい!？」

ハグリッドのすぐ隣にいたロングボトム先輩が、青ざめた表情で叫んだ。

「おお、すまんかった、フランク」

「全くだよー」

ロングボトム先輩の逆隣では、プルウエット先輩とエリス先輩が笑いを堪えている。

前、悪戯仕掛人とリリーを撮ったときのような失敗はしない。写りたくないとかワガママを言うのだから、撮る役割くらいはしっかりと果たしたい。

「行きますよー、こつち見て！」

ぼくの声に、全員が微笑んだ。

……いや、全員じゃないな。ダンブルドアの弟だと名乗ったアバーフォース・ダンブルドアは、今にも帰りたいそうにそっぽを向いている。ちよつと気にはなったが、まあいいや、と気にせずシャッターを切った。

「本当に君は、写真が嫌いなんだなあ」

こつちにやって来たシリウスは、肩を回しながらぼくの手元のカメラを覗き込んだ。

「おつ、いい感じに撮れてる撮れてる。前より相当マシだぜ、成長したな、秋」

「うるさいなあ、いいじゃん、別に」

やがて人数分刷り終わった写真を、全員に回した。

ある人は嬉しそうに、ある人はそっけなく、ぼくから写真を受け取っていく。

ぼくの手元に残ったのは、ぼくが写っていない集合写真。

ぼくは満足して、そいつを見つめた。



「どこに向かっているのです？」

プリベット通りをダンブルドアとハリーの三人で歩きながら、ぼくはそう尋ねた。

夏休みを二週間ほど過ぎた七月。ぼくらをダーズリー家から迎えに来たダンブルドアに、ぼくらは飛び跳ねんばかりに驚いたのだった。

確かに事前に連絡はあった。しかしこんな早くにダーズリー家から解放されるといふ幸運が、果たしてぼくらにあっていいものか？

こんこんと無表情にそう説くハリーに流され、半信半疑で時間を潰していたのがつい一時間ほど前。

慌てて荷造りをしたから、外からじゃ分からないがトランクの中身はちよつと人には見せられない。

「バドリー・ババートンという村じゃ。ほれ、わしの手を取って」

そう言つてダンブルドアは、ぼくらに左腕を差し出した。

反対側の右腕は黒く萎びていて、何か凶悪な呪いを受けたことが一目で分かる。

ぼくとハリーがダンブルドアの左腕を掴んだ瞬間、景色が反転した。

なんだか懐かしい感覚だ。思えばアキ・ポッターが『姿くらまし』するのはこれが初めてなのだった。

一瞬後ぼくらは、小さな広場に立っていた。人気はない。もつとも、深夜だから、という理由はあるだろうが。

ハリーは眉を寄せて耳を擦っていた。『姿くらまし』の感覚が不快だったのだろう。確かに、あの感覚は慣れないとかなり気持ち悪い。具体的には、胃に来る。

「大丈夫かな?」

「大丈夫です……でも、僕は箒の方がいいような気がします」

ハリーらしい言葉だ。

ダンブルドアを先頭に、ぼくらは歩いた。小さな村らしく、教会や宿屋がひっそりと並んでいる。

「ところで、ハリー。君の傷跡じゃが……近頃痛むかな?」

ハリーはパツと額の傷に触れた。

「いいえ……でも、それがおかしいと思つていたんです。ヴォルデモートがまたとても強力になったのだから、しょっちゅう焼けるように痛むと思つていました」

「わしはむしろその逆を考えておつたよ。君はこれまでヴォルデモート卿の考えや感情に接近するという経験をしてきたのじゃが、ヴォルデモート卿はやつと、それが危険だということに気付いたのじゃ。どうやら、君に対して『閉心術』を使つているようじゃな」

「なら、僕は文句ありません」

安堵したような声音だった。

「さて、毎年恒例のことじゃが、またしても先生が一人足りない。ここに来たのは、わしの古い同僚を引退生活から引きずり出し、ホグワーツに戻るよう説得するためじゃ」

なら、どうしてぼくらを連れてきたのだろう。同じ疑問を持ったのか、少し首を傾げてハリーが尋ねた。

「僕らはどんな役に立つんですか？」

「君らが何に役立つかは、今に分かるじやろう。特にアキ、君はの」
一体どうということだろう？

その疑問はしかし、その通りすぐさま氷解した。

玄関の扉は、上の蝶番が外れてぶら下がっている。

杖に明かりを灯したまま家の中へと入ると、予想通り部屋はぐちゃぐちゃに荒らされていた。

引き倒され中身が露出したグラウンドファーザークロック、横倒しになり鍵盤がばら撒かれたピアノ。粉々になったシャンデリア。壁には血痕らしきものが飛び散っている。はめ込まれたガラスに大きく蜘蛛の巣が張っているキャビネットは、元は小洒落たものだったのだろう。今は見る影もないが。

幣原秋の両親が死んだ時の家の惨状も、これとよく似たものだったことを思い出してしまい、口元を押さえて息を吐いた。幸いにして、我が兄は気付かなかったようだ。

「先生、争いがあったのでは——その人が連れ去られたのではありませんか？」

ハリーが息を呑みながら尋ねる。しかしダンブルドアの答えは軽かった。

「いや、そうではあるまい」

「では、その人は——？」

「まだそのあたりにいるとな？ その通りじゃ」

ダンブルドアはそういうと、横倒しになった肘掛け椅子に杖を突っ込んだ。すると、驚くべきことに椅子が叫んだのだ。

「痛い！」

「こんばんは、ホラス」

ダンブルドアはにこやかに挨拶をする。

肘掛け椅子はみるみる間に、涙目でダンブルドアを睨む太った老人の姿に変わった。彼の姿を見てぼくは、ダンブルドアがぼくらを——ハリー・ポッターを連れてきた理由を悟った。

「そんなに強く杖で突く必要はなからう、痛かったぞ……なんでバレた？」

「親愛なるホラスよ、本当に死喰い人が尋ねてきていたのなら、家の上に闇の印が出ていたはずじゃ」

「闇の印か、何か足りないと思っていた……まあよいわ」

ダンブルドアとスラグホーン先生、二人が杖を振ると、瞬く間に部屋の惨状が元通りになった。ホッと胸を撫で下ろす。

ふと、スラグホーン先生の視線がハリーに行った。小さな瞳が大きく見開かれる。

タイミングを見計らったか、ダンブルドアはハリーの肩に手を置いた。

「こちらはハリー・ポッター。ハリー、こちらがわしの古い友人で同僚のホラス・スラグホーンじゃ」

「それじゃあ、その手で私を説得しようと考えたわけだな？ いや、答えはノーだよ、アルバス……おや」

首を振った拍子に、スラグホーン先生はぼくを見た。

途端、ハリーを見た以上に大きな衝撃が彼を襲ったようだ。わなわなと口を開いた彼は、怯えたように数歩後ろに下がった。

「な……何故、君が……」

「もう二十年以上昔のことだから忘れてしまったかと危惧しておったんじゃないの」

「アルバス、茶化すんじゃない！ この子は——」

「幣原秋、本人じゃよ。もつとも、今はアキ・ポッターと名乗りハリーの双子の弟としてホグワーツに在籍しておるがの」

目で合図され、ぼくはスラグホーン先生に一歩近付いた。

「お久しぶりです、スラグホーン先生。覚えて頂いて嬉しいです。昔よりかは、魔法薬学も上達したんですよ?」

「つつこりと微笑むと、それに釣られたかスラグホーン先生も僅かに笑みを零した。」

「とは言え未だに警戒するような眼差しを送っている。」

「後で詳しいことは聞かせてもらうからな、アルバス」

「それはまた、わしと一緒にテーブルを囲む気があると、そういうことかろう?」

「そういうことではない!」

「どうどう。一緒に一杯飲むくらいならどうじゃろうか?」

スラグホーン先生は躊躇ったようだ。しかし無愛想に「よかろう、一杯だけだ」と無表情で言い放つ。

ぼくらは各々椅子に座った。受け取った紅茶を啜りながら、眼前に繰り広げられるダンブルドアとスラグホーン先生の舌戦を眺める。

ハリーは不安げな眼差しで時折ぼくを見ていたが、話がアンブリッジの事になり、スラグホーン先生が「愚かしい女め。元々あいつは好かん」と言い放った折、クスリと笑みを漏らした。

「すみません、ただ——僕もあの人が嫌いでした」

突然、ダンブルドアが立ち上がった。目を輝かせ、スラグホーン先生は「帰るのか?」と尋ねる。

「いや、手水場を拝借したくての」

「ああ……廊下の左手二番目」

明らかに落胆した声音だった。

ダンブルドアが出て行くと、一気に沈黙が訪れる。スラグホーン先生はどうしていいのか分からない素振りをしていたものの、立ち上がって暖炉の側へと近付いた。

「彼がなぜ君を連れてきたか、分からんわけではないぞ」

スラグホーン先生はハリーにそう言った。

「君は父親にそっくりだ。目だけが違う。君の目は——」

「ええ、母の目です」

「うん、いや……教師として勿論依怙鼻頂はすべきではないが、しかし

彼女は私のお気に入りの人だった。君の母親のことだがね」

ちらりとスラグホーン先生はぼくを見たが、ぼくと目が合うとすぐさま逸らした。

「リリー・エバンズ……教え子の中でも凶抜けた一人だった。生き生きとしてね、魅力的な子だったよ。私の寮に来るべきだったといつも言っていたのだが、そのたびに悪戯っぽく言い返されたものだった」
「どの寮だったのですか？」

「私はスリザリンの寮監だった」

ハリーがぎゅつと眉を寄せる。それを見てスラグホーン先生は言った。

「それそれ、そのことで私を責めるんじゃない！ 君は彼女と同じくグリフィンドールなのだろう、普通は家系で決まる。必ずしもそうではないが。シリウス・ブラックの名を聞いたことがあるか？ 彼は学校で、君の父親の大親友だった。ブラック家は全員私の寮だったが、シリウスはグリフィンドールだったな……残念だ、能力ある子だったのに。弟のレギュラスは獲得したのだが、出来れば一揃い欲しかった」

ハリーは少し嫌そうに眉を寄せた。蒐集家のような彼の表現が嫌だったのかもしれない。

「君の母親がマグル生まれだと知ったときには信じられなかったね。絶対に純血だと思った、それほど優秀だった」

「僕の友達にもマグル生まれが一人います。しかも学年で一番の女性です」

ハリーが嫌悪を露わに言う。スラグホーン先生はそれに気付いたようだ。

「私が偏見を持っているなどと思ってはいかんぞ！ 君の母親は今まで一番気に入った生徒の一人だったと、たった今言ったはずだ……」
そう言いながらスラグホーン先生は、ドレッサーの上に並べられた写真立てを指差した。

「全部昔の生徒だ、サイン入り。バーナバス・カッフは『日刊預言者新聞』の編集長で、毎日のニュースに関する私の解釈に常に関心を持つ

ている。アンブロシウス・フルームはハニーデュークスの菓子を誕生日のたびに送ってくる——私がシセロン・ハーキスに紹介してやったおかげで最初の仕事に就けたからだ！ それに——」

「ではそこに、幣原秋の写真も？」

ハリーの言葉にギクリとした。何を言い出すのだ、こいつは。

ギクリとしたのはぼくだけではなく、スラグホーン先生もだったが。しかし尋ねられた手前、無視する訳にもいかないだろう。ぼくをちらりとまた見ては「待てよ……」と言い、ドレッサーの下の段に入った古びたアルバムを手に取った。

「幣原秋のことをよくご存知のようですが」

「よく、ではない……彼は私の寮生ではなかったし、それに亡くなってからは……」

もごもごと言いながらもアルバムを捲っていたが、落胆したように大きいため息をついた。

「ああ、彼は写真を撮られることが嫌いなのだった……一枚くらいはあるかと思っただが」

少しばかり悔しそうな声だった。こんなぼくに対しても、収集欲はあったらしい。

「それじゃ、この人たちはみんなあなたの居場所を知っていて、いろいろな物を送ってくるのですか？」

スラグホーン先生の顔から笑みが消えた。

「無論違う」

一拍置いて続けた。

「一年間誰とも連絡を取っていない。しかし……賢明な魔法使いは、こういうときに大人しくしているものだ。今このときにホグワーツに職を得るのは、公に『不死鳥の騎士団』への忠誠を表明するに等しい……騎士団員は皆、間違いなくあつぱれで勇敢で、立派な者達だろうが、私個人としてはあの死亡率はいただけない——」

「ホグワーツで教えても『不死鳥の騎士団』に入る必要はありません」

ハリーの口調にはありありと嘲りの色が見えた。

「大多数の先生は団員ではありませんし、それに誰も殺されていませ

ん——ああ、クイレルは別ですが。あんな風にヴォルデモートと組んで仕事をしていたのですから、当然の報いを受けたんです」

スラグホーン先生は身震いをして口を開きかけたが、ハリーは無視して言葉を続けた。

「ダンブルドアが校長でいる限り、教職員は他の大多数の人より安全だと思います。ダンブルドアは、ヴォルデモートが恐れたただ一人の魔法使いのほずです。そうでしょうか？」

スラグホーン先生はハリーの言葉を反芻していたようだったが、やがて観念したように呟いた。

「確かに『名前を呼んではいけないあの人はダンブルドアとは決して戦おうとはしなかった……それに、私が死喰い人に加わらなかった以上、『名前を呼んではいけないあの人が私を友と見做すとは到底思えない、とも言える……その場合は、私はアルバスともう少し近い方が安全かもしれん……』」

ダンブルドアが部屋に戻ってきたことに、スラグホーン先生は飛び跳ねて驚いていた。

「ああ、いたのか、アルバス。随分長かったな、腹でも壊したか？」

「いや、マグルの雑誌を読んでいただけじゃ。編み物のパターンが大好きでな。さてハリー、アキ、ホラスのご好意に長々と甘えさせてもらうた。暇する時間じゃ」

ハリーはパツと立ち上がった。ぼくも小さく息を吐いて従う。下手なことは言わないに限る。

「行くのか？」

スラグホーン先生は、明らかに躊躇っている雰囲気だった。

ダンブルドアは「勝算のないものは、見ればそうと分かるものじゃ」と朗らかに言う。

「勝算がない……？」

「さて、ホラス、君が教職を望まんののは残念じゃ。 Hogwartz は君が再び戻れば喜んだであろうがのう。我々の安全対策は大いに増強されてはおるが、君の訪問ならいつでも歓迎しましょうぞ。君がそう望むなら、じゃが」

「ああ……まあ……ご親切にどうも……」

本当に、ダンブルドアは策士だ。老獪な狸だ。

「分かった、分かった。引き受ける！」

追い詰められたように、スラグホーン先生は叫んだ。ダンブルドアは振り返ると、ゆったりと尋ねる。

「引退生活から出てくるのかね？」

「そうだ。馬鹿なことに違いない。しかしそうだ」

「素晴らしいことじゃ。では、ホラス、九月一日にお会いしましょうぞ」



「僕らを連れて来たのは、スラグホーン先生を教職に呼び戻すためですか？」

「今まではの。そしてこれからは違う。もう一件、別の用がある」

来た道に戻りながら、ダンブルドアはあつさりと言った。

「別の用？」

「そうじゃ。そしてこれは、アキ、君にしか出来ないことじゃ」

ぼくにしか出来ないこと？ 何だろう、と目を瞬かせる。

果たして、ダンブルドアは。

「最果ての地、日本の、かつての君の住処へ向かおうぞ」

そう、ぼくらに告げたのだった。

第3話 奈落は二度訪れる

視線を感じて、ぼくは振り返った。

「どうした？ 幣原」

闇祓いの同期、パトリック・リオンが尋ねる。「いや……」と呟きながらも、首を傾げた。

「誰かいた、気がして」

「誰か？」

リオンが目を細め、ぼくの視線の先を見る。

「誰もいないと思うけど」

「……ヴィツガーは？」

「さあ」

もう一人の同期、マーク・ヴィツガーに話を振ると、そっけない言葉が返ってきた。気のせいだったのか、と自分を納得させる。少し、敏感になり過ぎているのかもしれない。

広々とした訓練場に、ぼくらは座っていた。コンクリートの壁で周囲は覆われ、窓は一つも存在しない。魔法省の地下にあるそこは、魔法執行部の持ち場らしく、ぼくら闇祓い他、魔法警察所属の者が、呪文やらを練習するための場所だった。

「そもそも、窓もない、出入り口はその小さな扉一つだけで、どこから僕ら以外の視線を感じるって言うのさ。ね、ヴィツガー」

「さあ、どうでしょう」

ヴィツガーが杖を振ると、杖先から銀色の霞が零れた。その霞はやがて、銀色のクジラに姿を変えると、悠々と辺りを泳ぎ回る。「ああっ！」と、リオンは慌てたように立ち上がった。

「幣原はともかく、ヴィツガーに先を越されるとは……」

「生温いですね、リオン」

ヴィツガーがせせら笑う。何を、と発奮したように、リオンも杖を取り出した。

「守護霊の呪文……ただでさえ難しい呪文なのに、これを無言呪文でとか、鬼か」

「このくらい出来て当然、そういう自負はあなたにはないのですか？」
ヴィツガーは時に容赦ない。リオンはその言葉にカチンと来たようだったが、ヴィツガーの言うことももつともだと思ひ直したらしい。

しかし、リオンが杖を振る前に、この部屋たった一つの扉が開かれた。

「あら、魔法を掛けるのですか？　ではリオン、やって見せてくださいませ」

入って来たのは、アメリカ・スミス女史。ぼくがホグワーツ五年生の頃、闇の魔術に対する防衛術の教鞭を取っていた人だ。まさか、今度は教官として、再びお世話になるとは思ってもいなかった。

「僕が無言呪文が苦手なの、知っているでしように……」

「苦手なところを集中的にねちつく嫌らしくやるのが、訓練です」

リオンは数分粘っていたが、実体ではなく霞のような守護霊を出すのが関の山だったようだ。「声出していいなら出来るのに！」と叫んでいる。それじゃあ本末転倒だろう。

「何ですか、それ？」

スミス女史の手には、小さなトランクが握られていた。それを尋ねると、スミス女史はにっこりと微笑んだ。思わずギクリとするが、その笑みが最近よく見かける『何かいいものを（ぼくらにとってはよくないものを）持ってきたゾ♪』な類のものではなく、ごくごく普通の微笑みだったことに、ぼくら三人は揃って胸を撫で下ろした。

「トランシーバー、って知ってるかしら？　はい、幣原、答えなさい」

「はえっ、っと、無線電波の送信機と受信機が一体化された、マグルの通信器具……です」

急に指名され、目を白黒させるも、答えを口にした。「はい、ご名答」とスミス女史は口元を緩める。

「ですが、魔法界では無線機は使えないはずでは？」

ヴィツガーが首を捻った。

「電波が魔力に妨害されるからね。でも、そんな魔力に指向性を持たせたら、一体どうなるかしら。……その試作品よ」

カパリ、とスミス女史はトランクを開いた。

中には黒の、イヤリングだろうか？ 耳たぶを挟むリングに、四角の薄くて小さな黒い板。イヤリングと言えば両耳対になっているものを想像するが、中に収められているものは一つずつしかないようだ。トランシーバーとしての役割なら、一つで十分、ということなのだろう。

「聞こえてくる音声は、自分にしか聞こえないようになってるわ。こちらから通信したい場合は、親指と人差し指で板の部分を摘んで、話したい人の名前を脳裏に思い描けばいい。声に出す必要はありません。応答するときも同じく、板を摘んで話す内容を思い浮かべれば伝わるわ」

スミス女史の説明を聞きながらも、右耳にトランシーバーをつけた。違和感があるかな、と思ったが、案外軽くて付けた感じも気にならない。むしろ、本当に付いているのかどうか何度も確認してしまいたい。落としても気がつかないかもしれない。

「これ、途中で落したりしちやいませんか？」
気になったのは、リオンも同じらしい。気がかりな表情で尋ねている。

「自分が意図しない限り、外れない仕組みになっているはずよ。ちなみに防水性だから、たとえシャワーを浴びる時でも外さないでね。闇祓い局の者は全員が付けることが義務付けられたし、これから連絡はほとんどこれですることになると思うわ」

その直後、トランシーバーから声が聞こえて来て、飛び跳ねんばかりに驚いた。目の前にいるスミス女史の声だ。
『さて、訓練生の諸君。今から一時間、魔法無しでこいつから逃げ回ってください』

トランクの底からポンと飛び出してきた、見逃すほど小さな綿毛は、地面に着地するとむくむくと体積を変える。大型犬ほどになった綿毛は、様々な色に体毛を輝かせ始めた。

正直、凄く不気味。

「魔法無し!?!」

『魔法無し、よ、幣原。リオンとヴィツガーも、魔法を使えばフルマラソンをダッシュユキさせられるものと思いなさい』

ぼくら三人は青ざめた。互いに言葉を交わす暇を惜しみ、広い訓練場に駆け出す。

『スタート！』

……なるほど、このトランシーバーはとっても役に立つようだ。

女史から相当離れたというのに、楽しい声はすぐ近くで聞こえるのだから。

感じた視線は、もはや意識の彼方へとぶっ飛んでいた。

◇ ◆ ◇

まさか、ぼくの人生でもう一度ここに来ることになろうとは思ってはいなかった。

懐かしい、と感じる。ぼくであって、ぼくのものではない心が。

幣原秋の感情が、揺れ動いているのが分かる。

自然、顔を歪めていた。

門に手を掛け、押し開く。足裏に、玉砂利が擦れる感覚。

「……変わらない」

何もかも、変わっていない。積もった埃だけが年月を感じさせるものの、ただ、それだけだ。

取り残していた場所。時の流れから取り残された此処は、ただ静かに佇んでいた。

「……靴を、脱いでもらえるかな」

指を鳴らすと窓が一人でに開き、二十年籠った空気と共に埃が、風に乗って飛んで行った。

ダンブルドアとハリーの二人に来客用のスリッパを出すと、奥へと進んだ。

「日本だと言うから、畳に障子だと思っていたけど。違うんだね」

ハリーが周囲を見回しながら呟いた。

「畳に障子の部屋もあるよ。後で見せようか……でも、まずは、ダンブ

ルドア先生」

「うむ」

ダンブルドアは重々しく頷いた。

「書齋を見せてもらおうかの」

わざわざ日本まで来て、ダンブルドアは何を探しているのか。

それは、一冊の本だと言う。

「恐らく多言語で、そして直筆で書かれたものじやろう。のであるから多少は絞れる。一般の出版物ならば無視しても構わぬ」

「直筆、ですか？」

「そう。幣原直が書いたものじや」

幣原秋の——ぼくの、父親の。

ちらりと、地下室のことが脳裏を掠めた。あそこにも本棚があつて、本が並んでいた。

父が手書きしたもので、そして今こうしてダンブルドアが求めるほど重要なものならば、あそこに隠してあるのかもしれない。

……行きたくないなあ。

本心からそう思ったが、しかしそんなことも言っていられないだろう。

「……ダンブルドア先生、ちよつと」

ハリーには見せたくなかったのだけれど、しかし仲間外れの気配を敏感に察知したのか、ハリーは瞬時にぼくにぴったりとひつつき、会話の内容を聞こうとする。

こうなつたハリーはどうすることも出来ない。大きく息を吐いた。知らないぞ。

「地下にちよつとした隠し部屋がありました……」

「ほづっ」

ダンブルドアが食い付いた。その部屋の実状をオブラートに包んだ説明をすると、ふむ、と腕を組む。

「案内してもらおうかの、アキ」

……まあ、そう言われるとは思っていた。

回転する本棚の場所は、覚えていた。押すと、ゆつくりと本棚は動

き、隠し部屋が姿を現す。実に簡単な仕掛けだ。

杖をついっと振ると、床が開き、奈落へと続く階段が姿を現した。「ぼくの意見を言わせてもらおうなら、ハリーはここについて欲しいんだけど……」

しかしぼくの兄は、そんな弱い主張に応じるような性格はしていないことは分かりきっていた。ぼくの言葉に、ハリーは瞬時に首を振る。

「そんな顔をしているアキを、僕が放っておくとも?」

「……………」

そんなに酷い顔をしていただろうか。顔に手を当てると、ハリーは目を細めてぼくの頭を優しく撫でた。

「僕がいるよ。心配しないで、アキ」

「……………」

ハリーの言葉に、温もりに、救われる。

階段を降りていった先に、小部屋。扉を押し開けると、全く変わらぬ惨状が目に入った。

壁に、床に、小物に、本に散った血は、今じゃ酸化し切って黒いインクを撒き散らかしたようにも見え、言われないと血とは分からないかもしれない。しかしぼくは、昔梓さんから言われた言葉が脳裏に焼き付いていて——それでも、隣でハリーが手を握ってくれていたから、随分と気分的には楽だった。

「なるほど、なるほど」

ダンブルドアは辺りを見回しながら、得心言った顔で髭を撫でていたが、本を手にとるとパラパラと調べ始めた。ぼくも気力を振り絞り、本に手を伸ばす。吐き気を気のせいと断定して、唾を飲み込んだ。

この吐き気は、アキ・ポッターのものじゃない。

引きずられるなよ、アキ・ポッター。

お前は幣原秋じゃない。

——結果。

それらしい本は見当たらなかった。

「おかしいのう……必ずあるはずなのじゃが。アキよ、ここにある本

をどこかに動かしたりしたことか？」

「そんな記憶は……」

首を捻った、その瞬間。

思い至った。

「あ……っ」

血の気が引く。

幣原梓。彼が。幣原の伯父が。あの人が。

あの時確か、ここから本を

持ち出していなかったか？

第4話 異界への扉

「もー無理、体力が、続かない……」

「身体が動かない……なんかフラフラする……」

今日の訓練は、気付けば明け方だった。

冷たい訓練場に大の字になり、ぼくとヴィツガーは呻いていた。Aの飾り文字が刻まれた懐中時計を見ると、時間は朝の五時十二分。こんな時間まで起きていたのは初めてだ。

闇祓いのローブは、さつきまで死ぬ気で駆け回っていたため、色んな要因でボロボロだった。杖を振れば簡単に修復出来るが、杖を取り出す気力もない。

「大丈夫かー、君ら」

リオンは一人ケロリとした表情で、ぼくとヴィツガーを見下ろしている。体力お化けか、こいつは。グリフィンドールのクイディッチチームでビーターをしていたとは聞いていたが、こんなに体力が違うとは。

「少し休めば、なんとか……」

ヴィツガーは声を出す体力すらも惜しいらしい。目をつぶって、ぐったりと息を吐いている。

「んー、ま、お大事になー。寝る前にしっかりマッサージしておかないと、翌朝筋肉痛で動けなくなるぞー」

「あいー……」

ぼくらにヒラヒラと手を振り、リオンが立ち去って行く。

しばらく体力回復に専念して、ぼくは立ち上がった。これ以上ここに寝転がっていたら、本当に眠ってしまう。寝るなら、自分の家のベッドで眠りたい。

「ヴィツガー、ちゃんと家に帰りなよ……」

「うー……」

呻き声が返ってきた。本当に大丈夫だろうか。しかしぼくも、人を気にする余裕はない。

普段は大勢の人で賑わう魔法省は、しかし明け方五時ともなれば人

気はない。

薄暗い廊下を、ふらつきながら歩く。本当に、魔法省から徒歩三十秒の寮は最高だ。エレベーターをうたた寝で数度乗り過ごした後、やっとこきロビーに辿り着く。

「秋！ 秋じゃないか！」

と、『魔法族の和の泉』のところで声を掛けられた。

振り返ると、懐かしい姿に目を瞠る。

「ライフ！」

レイブンクロー寮での同室の友人、ライフ・フィスナーの姿が、そこにはあった。

深い緑色のローブは、彼の目の色ととても合っている。襟元には魔法省内閣の紋章が刻まれたバッジが留められている。

「今、帰り？」

「うん、そう。……それにしても、凄い汚れ具合だねえ。訓練そのままでしょ」

ライフが杖を振ると、ボロボロだったぼくのローブは新調したように綺麗になる。

「ありがとう……」

「どういたしまして。秋が、このくらいの魔法を使うのも億劫がるほど、訓練つてしんどいんだ」

ライフはクスクスと笑った。はは、とぼくも笑顔を浮かべる。

色々と話したいこともあったが、それより今は——寝たい。

「ねえ、秋、寮住まいだったよね？」

「そうだけど……どうした？」

ライフは両手をパチンと合わせた。

「お願いします、泊めて！」

「……え？」



気がつくくと、昼間だった。

目が覚めると、なんて、そんな清々しい目覚めじゃない。意識を取り戻すと、という表現が一番正しいか。

慌ててベッドから飛び起きると、身体の色んなところがミシミシと痛んだ。しばらく筋肉痛に身悶えしつつ、ベッドサイドの時計を見る。午後二時半。

今日は闇祓いの訓練はお休み、夜に不死鳥の騎士団の会議がある。予定を脳内で確認して、大きく安堵のため息をついた。

それにしても、久しぶりにベッドで眠った。最近では疲れ果てて、気付けばソファで眠ってしまうことが多かったから。

ぐっ、と伸びをすると、あらゆるところで関節がパキパキと音を立てる。

ベッドの上で軽く柔軟体操をすると、少しは筋肉の痛みがマシになった。それでも気怠さは抜けない。

ベッドから降りて、一つ欠伸をしながらリビングへ。

何の気無しにソファを見遣って、心臓が飛び出るかと思った。

人間が倒れている。しかし彼の顔を見た瞬間、昨日の——いや違うな、今日の明け方のことを思い出した。あー、と声を漏らす。

「そう言えば、リイフ泊めてたんだっけ……」

ソファを占領して、リイフは熟睡中だった。毛布から、腕と足が一本ずつはみ出ている。その様子に、思わず笑った。

朝の身支度を済ませ、朝ではないが、モーニングティーを淹れる準備をする。普段は杖一振りで済ませてしまうが、今回はお湯を沸かすところから始めてみることにした。

英国に来て、もう七年。紅茶文化にはかなり馴染んでしまった。

「……紅茶の香りがする……」

くぐもった声が、ソファから聞こえた。ぼくは振り返ると「ストレート？ ミルク？」と尋ねる。

「ストレート……」

「了解」

カップに注ぎ、空中に浮かせたままリビングまで運ぶ。そう言えばこの前の訓練では、大きなバケツになみなみに入った水を、一滴たり

とも零さずに数キロ先まで運べ、なんて指令が出たっけ。それに比べれば、小さな紅茶のカップなんて簡単簡単。

「ありがとう……」

「どういたしまして」

緑の目をうつすらと開けて、リイフがこちらを見ている。手にカップを握らせてやると、リイフは一口啜り、はあ、と息を吐いた。

「おはよう、リイフ」

「おはよう……今、何時？」

懐中時計を確認すると、二時四十五分を指していた。それを告げると、リイフは顔色を変え「やばい！」と叫んで身を起こす。

「何時出勤？」

「十六時半！」

「なら、もう少し時間はあると思うけど」

徒歩三十秒を舐めちやいけない、そう茶化すと、リイフの瞳に落ち着きが戻る。

「あー、そうだった……本当、いいところに住んでるよ……」

「君もどう？」

「そうしたいのは山々なんだけど、色々としがらみつてものがあってね」

ふうん、とだけ言葉を返した。しかし続けて言われた言葉に、ぼくは思わず身を乗り出す。

「それに、今結婚したい人がいるんだよねー」

「結婚!？」

「渋る彼女を説き伏せて婚約まで持つてったんだけど、絶対に親が納得してくれない相手だから、こりやあもう既成事実を作るしかないかなって」

ポカン、と口を開けた。震える声で呟く。

「き、既成事実って……」

「そりやあ勿論、子供かな？」

……言葉が浮かばない。学校じゃああんなに優等生だったリイフの口から、そんな言葉が出てくるなんて。これも成長、と呼ぶべきな

のか？

「……えつと、何と言っているのか……頑張ってる？」

いや、絶対違う。口にした瞬間に、そのことだけは分かった。

リイフは、ぼくの動揺も心得ている、とばかりにクスクス笑っている。

「君は変わらずウブだね。是非ともそのままできて欲しいな」

「う、うるさいな……」

「彼女くらい作ればいいのに」

「モテる君みたいな人種と一緒にしないで。それに、今はそんな暇ないよ」

寝る時間を確保するだけで一杯一杯なのだ。闇祓いの訓練が終わったらもう疲れ果てて眠くて仕方ないし、そもそも闇祓いの同期は男しかない。学生時代と比べて、出会いは相当減った。

「学生時代も、女の子とほとんど話してなかった癖に。グリフィンドールのエバンズくらいじゃない？ まともに仲が良かったのは」

「あー、うん……そうかも」

思わず歯切れが悪くなってしまった。

しかし、リイフは気付かなかったようだ。ホツと胸を撫で下ろす。「……君の彼女さん、会ってみたいなあ」

ポツリと呟くと、リイフは照れたように笑った。恥ずかしそうに、でも自慢げに「とってもいい子だよ」と口にする。

「……君のおかげなんだよ」

「え？」

リイフの言葉に聞き返した。

「なんでもないよ、秋」

楽しげに、なにより嬉しそうに、リイフは笑った。



結局念のためにこの家の全ての本を確認したが、ものの見事に空振りだった。全く魔法というものは便利な代物だ、一々手に取らずと

も、本をずらずらつと空中に並べてパラパラ見では外れなら本棚に戻す、が簡単に出来る。そのため、随分と短い時間で全ての書物に目を通すことが出来た。

その結果、この家には存在しないということが自明となった。

「さて、さて……」

幣原梓のいるであろう、日本の魔法界に行く方法を、一つだけぼくは知っていた。

麓まで降りた先の、使われていない線路がある踏切。

この踏切が音を立てたときに線路内に足を踏み入れればいい……はず。多分そう。自信はないけども……。

時刻はちょうど、逢魔が時。日本の夏において、日が段々と沈み始める時間帯。

夕焼けが地平を緋く染め抜き、道を歩く人も一気に少なくなった。今ならば。丑三つ時と並び、一番異界に近くなる、今ならば。

遠くから聞こえた踏切の音に、息を呑んだ。ハリーとダンブルドアを振り返ると、頷いて前を向き、歩みを進める。遮断機すらない線路に、足を踏み入れた。

ゴウ、と、姿の見えぬ電車が迫ってくる。目には見えないけれど、圧倒的な質量と速度で近付いてくる。正直、怖い。

——それでも。

大丈夫、と言いたげに、ハリーがぼくの手をしっかりと握っている、だから。

だから、ぼくは大丈夫。兄が、すぐそこにいてくれるから、ぼくは落ち着いて目を開けていられる。

ぼくとして、ここにいられる。

電車がぼくらをすり抜けた瞬間、景色がふわりと歪み溶けた。一回瞬きをすると、風景は改めて、今までとは全く異なる色合いを構成する。

「……う、わあ……」

鮮やかな朱の色に、思わず目を瞠った。

目の前には、森に分け入るようにならずらりと続く階段と、階段に沿っ

て立ち並ぶ、目にも鮮やかな朱色の鳥居。

思わず躊躇するほど、目の前の風景は圧巻だった。ハリーも驚いたように、眼鏡の奥の瞳を見開いている。

「わしも初めて来たのお」

「え、そうなんですか?」

ダンブルドアの言葉に瞬きをすると「そうなんじゃよ」と落ち着いた声が降ってきた。

「日本の魔法界は、ヨーロッパほど寛容で戸口が広くはないらしい」

「……あー」

なんとなく、それは理解出来た。周囲を海で囲まれたこの国は、外から見ても随分と排他的だ。

階段を登る。高齢のダンブルドアは大丈夫かと思っていたが、彼は相当な健脚のようだった。むしろ、この中で一番体力がないのはぼくなんじゃないのか。気を抜くと置いていかれそうだ。

永遠とも続く階段を登った後——先が見えないものは辛い——、やっと開けた場所に出た。

膝に手を付き息を——吐く間もなく、眼前にふわりと光が突きつけられた。

その光が、日本刀の刀身が放つ鈍いものと遅れて認識する。

気配もなく現れた人だった。気配はおろか、抜き身をこちらに向けられているというのに、殺気すら感じない。だからこそ、反応が遅れたのだ。

——気は張っていた、つもりなのだけれど。

深い緑の長着に、青みを帯びた墨色の袴。背丈はそれほど高くない——平均的な日本人の身長だ。ぼくと同じように、長い黒髪を一つに括っている。少し違うのは、括る位置がぼくは低く、そして目の前の彼は高いということ。

年の頃は掴み辛いものの、纏う落ち着いた雰囲気から三十は下るまゝいと推定する。

「いずかた何方でしょう」

当然のことながら、彼の口から零れる言葉は日本語だった。ダンブ

ルドアなら苦もなく理解しているだろうが、ハリーは目を白黒させている。

彼の瞳は一直線にぼくを射抜いていて、深い漆黒がまさしく「お前は誰だ」と雄弁に問いかけていた。

ぼくはゆつくりと両手を上げる。その人を目の前にして尚、気配は希薄だった。一陣の風に紛れてしまいそうさ。

彼ならば、気付かれずともぼくら三人を袈裟斬りにすることも簡単だっただろう。

ならば、こうしてぼくらの前に姿を現した理由は。

「幣原秋に、縁ある者です」

その名を耳にした彼の気配が、僅かに揺らいだ。

流星にこの場で「本人です」と言える肝の太さは持ち合わせていない。縁ある、とは奇妙な言い方だと我ながら思うが、しかしぼくと幣原秋あいつの関係は実に奇妙なものだから、構わないだろう。

「幣原梓に、用があつて参りました」



「幣原家現当主、幣原桜と申します。幣原梓は、私の父です」

通された客間で、目の前の彼——幣原桜はそう言った。彼の瞳は主にぼくを向いているが、時折ダンブルドアを気にかけるように気配が揺らいでいる。

日本刀は鞘に収められていたが、信用されていないのは、彼の左側に未だ刀が置いてあることから明らかだった。

梓さんの息子、ということは、幣原秋の従兄弟にあたるのか。従兄弟の名前すら知らない、というのは如何なものなのだろう——一切交流がなかったとしても、だ。

「幣原秋に縁あると申されましたが、一体如何様の縁でしょう」
どうしようか、と少しだけ迷って。

「……幣原秋の息子です。名は……春、と申します」

結局嘘を突き通すことにした。まあ、年齢的に考えてもアリな嘘だ

ろう。幣原と同級生であるジェームズとリリーの息子が、ぼくと同年齢なのだし。

「……ほう。で、彼の息子が、一体父に何の用があると言うのでしよう」

「かつて我が家にあつた本を、返して頂きたく参りました」
「本？」

ゆるり、と瞼が一度閉じられ、開かれる。

幣原桜——桜さん、は、一切与り知らぬことのようなだった。

「何の本でしょう」

「……梓さんなら、多分分かると思います」

あの、人を食ったように喋り、何もかもを見透かしたような言葉を紡ぐ、あの人なら。

「梓さんに会わせてください」

——しばらくぼくらは視線を交わし合う。

先に目を逸らしたのは、桜さんの方だった。すつと音もなく立ち上がると「お寛ぎください」とだけ言葉を残し、去って行く。

はあ、と隣で大きく息を吐く音がした。ハリーだ。

「アキがその、日本語だっけ、喋っているのを聞くと妙な感じがするよ……」

「ぼくだって慣れないよ。知識はあるが経験はないんだ。意味が分からないだろうけど、もうしばらく付き合って」

ハリーはこくりと頷いた。

「ちなみに、今の人は？」

「幣原桜さん。ぼくの——幣原秋の従兄弟にあたる人」

「へえ、僕にとつてのダドリーか」

「……うん、まあ」

そうなんだけど、なんだか頷き難いのはどうしてだろう。

「本来の君は、僕と同じ年じゃなくなって、ああいう大人なんだと思うと……シリウスやルーピン先生と同じ年なんだと思うと、凄く変な感じがする」

そう言つて、ハリーは僅かに目を伏せた。

今のハリーに掛けてやるに相応しい言葉を探そうとするも、ダンブルドアに阻まれる。

「アキ。いつでも杖を抜く準備をしておくのじゃぞ。この老いぼれの杖腕は、以前ほどしつかりしておらんのでな」

「……当然、ですよ」

この屋敷に入った瞬間から、幾重にも巻かれた結界と攻撃呪文の存在に、このぼくが気付いていないはずもない。向こうは、こちらを一瞬で斬り伏せられると考えているのかもしれないが、こちらだって向こうを半瞬のうちに制圧することが出来るのだ。

いくら身内の居住区だと言えど、ここは敵地も同然。むしろ下手に血が繋がっている分、厄介かもしれない。

「お待たせ致しました」

障子を開ける音も微かに、桜さんが戻ってきた。手元にはしかし、日本刀ではなく薄型のノートパソコンが握られている。

「幣原春様」

「は、はい」

そうか、今は春だった。慌てて返事をして姿勢を整える。

「恐らく」存知ではないのだろうという予想の元に、申し上げます——実はつい先日、日本魔法界は外部の手により壊滅的打撃を受けたのです。それにより、日本魔法界および日本魔法学校——『魔法処』も甚大な被害を被りました。そのため、不審者の情報などにわざわざ私が出向いたのですが」

……その『不審者』とは、ひよつとしなくてもぼくらのことなのだろうなあ。

いや、それよりも。

だから、この広い屋敷に通されても、誰一人として出会わなかったし、人氣がなくシンと静まり返っていた訳か……。

「外部の手により、とは」

と、そこに切り込んだのはダンブルドアだった。明らかに欧州人のダンブルドアの口から零れた流暢な日本語に、桜さんは少し驚いたようだったが、その動揺をすぐさま内に押し込める。

「ええ……強力な結界を一撃で破るほどの力の持ち主です。一瞬、幣原秋かとも考えましたが……彼は既に、鬼籍に入っているのですよね」

漆黒の瞳がぼくを見るも、すぐさまダンブルドアに移った。

「監視カメラの映像があります……是非とも見て頂きたい」

そう言つて桜さんはノートパソコンを開くと、軽くキーをいくつかタツプし、すぐに画面をこちらに向けた。

画面が四つに分かれて、室内——学校のようなだから、恐らくここが日本魔術学校『魔法処』だろう——の様子をモノクロームに映し出している。

と思つた瞬間、右上と左下の画面が揺れ、砂嵐に変わった。瞳目しつつも、無事な右下と左上にも動きが見える。黒いフードを被つた人影が数人、杖を片手に押し入つてきたのだ。

思わぬ奇襲に虚を突かれたか、年若い生徒らしき人物たちが逃げ惑い、応戦する教師も力なく閃光に巻き込まれた。上がる煙の中、強い風に、黒い影のフードがはらりと脱げ、闖入者の顔が露わになる。

その瞬間、桜さんは映像を止めた。

たつた今黒いフードが取れた人物を、ぼくらはよくよく知つていた。

忘れもしない。

短い髪に、荒い画像でも分かるほど整つた顔立ち。いつも笑顔を浮かべていた彼は、しかし今は氷のような無表情だった。

ハリーもぼくも、ダンブルドアは言うまでもなく、上手い具合に動揺を押し隠した。特にハリーは見事だったと思う。彼に対して思い入れがあるのは、ぼくらの中では一番ハリーだったから。

セドリツク・デイゴリーのことを一番気に病んでいたのは、ハリーだったから。

「……………」

アクアから送られてきた手紙の内容を、思い返していた。

ベルフェゴール家の地下牢に囚われていたセドリツクが、血痕を残して姿を消した——とすれば、今のセドリツクは恐らくヴォルデモー

トの手により『服従の呪文』に掛けられている、と見るのが妥当だろう。

「この襲撃により、安倍、加茂、一条、五行、幣原等、力のある氏はどこも多大な人的被害を被りました。特に、学校が襲われたため、生徒数五十九人のうち三十二人が重軽傷、四人が亡くなりました」

淡々とした声だったが、その声音には抑えきれぬ悔しさが滲んでいた。守れなかった、その心が、膝の上で強く握りしめられた拳から伝わってくる。

「調べは既に済んでおるのじやろうが、わしからも改めて謝罪をしようぞ。日本魔法界を滅ぼそうとしたのは、我らイギリスの、一部の魔法使いじゃ。そのことについて既に、新魔法大臣ルーファス・スクリムジョールから謝罪を受けていることは存じておったが、改めてわしからも……」

「必要ありません、ホグワーツ魔法魔術学校校長、アルバス・ダンブルドア」

姿勢を正した桜さんは、今一瞬見せた悔恨を胸の内に収めてダンブルドアに対峙した。

「現在イギリスを中心に、テロリストがいることは存じておりました。こんな島国に、彼らが用はないだろうと高を括って油断していたことは否めません。多くの謝罪は不要です」

桜さんの言葉には、矜持と、そしてこれ以上は立ち入らせたくないという、相手を排斥する意志が籠っていた。

「……そうか」

ダンブルドアは、言葉を飲み込んだようだ。

その時、廊下を。パタパタと歩く軽い音が聞こえ、やがて障子の奥に小さな人影が見えた。

「父様」

幼い少女の声音。答えたのは桜さんだった。

「入りなさい」

障子を音もなく開けたのは、声通りに少女だった。年齢は二桁行くか行かないかくらいか。長い黒髪を、上で二つに結わえている。

少女は正座して頭を下げていたが、桜さんに「蘭」と名前を呼ばれて顔を上げた。露わになった顔は、左目を白い眼帯、左の頬をガーゼで覆っていて、襲撃者の存在を如実に感じさせた。

思わず奥歯を噛み締める。

「お祖父様が、通しても良いと。ぜひ会いたいと、言っています」

「……そうですか」

桜さんは、そこで小さく息を吐いた。

「ありがとうございます。すぐ行くと、父様に伝えてください」

「はい」

少女——蘭ちゃんは、ぼくらを一瞥するとすぐに下がってしまった。

桜さんは眉を寄せ、額に手を当てていたが、目を開けてぼくを見据えた。

「幣原梓の元へ、案内致します」

第5話 束の間の幸福

新月の夜。ぼくとピーターは、月明かりのない外を歩いていた。季節はもう冬に入ろうとしていて、夜は随分と冷え込んで来る。

「寒いね……」

両手を擦り合わせ、襟元を掻き抱きながら、ピーターにそんな言葉を振った。途端、ピーターはビクリと大きく肩を震わせる。星の仄かな明かりしかないとためよく分からないが、顔色が随分と悪い気がした。

「大丈夫、ピーター？」

「う、うん……」

大丈夫とは到底思えない震えた声で、ピーターは顔を伏せた。

不死鳥の騎士団の任務で、ぼくらは真夜中にゴドリツクの谷に来ていた。ここに家を構えているオーティス家が、今夜襲撃されるといいう情報を掴んだためだ。

ぼくらはこれから、家人を連れ出し安全な場所——不死鳥の騎士団へと連れて行く。ぼくらの他にも、ジェームズやシリウス、エリス先輩やベンジー・フエンウィック氏など、不死鳥の騎士団六人が今回の任務に当たっている。それだけの人員を割くということは、かなり信憑性が高く、そして危険な任務なのだろう。

「……ねえ、疑問には思わないの？」

ピーターが小さな声で呟いた。

「何が？」

ぼくの問いかけにピーターは、囁くような本当に小さな声で答える。

「……相手の情報をこうして僕らが得ているように——相手側に、こちらのスパイがいるように——こちら側にも、あっちのスパイが紛れているかもって」

思わず、息を呑んだ。

ピーターは自分が発した言葉に身震いをしたが、それでも言葉を続けた。

「ねえ、秋——誰が味方で誰が敵か、なんて、どうやって見分けがつくの」

何と答えていいのか、ぼくは分からなかった。

それでも、予定された時間は刻一刻と迫ってきている。ピーターの言葉に答えるより、ぼくは任務を優先させた。ピーターもそれに対して、何も言わなかった。

家の扉を、あらかじめ決めておいたリズムで四度叩く。待ち構えていたように、扉がパツと開かれた。

玄関先には、分厚いショールを巻いた夫人と、夫人に手をしっかりと握られた、まだホグワーツにも通っていないだろう少年と少女の姿。ぼくは一礼をして、夫人に闇祓いの紋が入った懐中時計を見せた。

「不死鳥の騎士団団員、闇祓いの幣原です。あなた方を安全な場所へと案内致します」

闇祓いの名は、夫人を安心させるのに役立ったようだ。やつれて、目の下に黒々と隈を作った彼女は、僅かにぼくらに微笑んだ。

ピーターは少年と少女の目線になるよう屈み込むと、笑顔を見せる。

「お兄ちゃんたちについて来たら、大丈夫だからね」

ピーターの控え目だけれどしっかりした言葉に、子供たちも不安げな眼差しながら、コクリと頷く。

「今からこの家に守護呪文を掛けます。お手数ではありますが、もうしばらくお待ちください」

夫人は青ざめた表情ではあったが、「はい」としっかりした声を発した。

しかし、ぼくが杖を取り出した瞬間——ドーン！——という物凄い音と共に、家が揺れる。

小さな悲鳴と共に、夫人は慌てて二人の子供を抱き寄せた。

「ピーター、三人連れて本部まで『姿くらまし』して！」

「秋、僕の『姿くらまし』のテストの点数知ってるでしょ!? 僕一人でもギリギリなのに他三人とか無理だから!!」

思わず舌打ちが零れる。と、次の瞬間に扉が、蝶番が壊れんばかりの勢いで開かれた。身構えるも、入ってきたのはシリウスだ。

「秋、ピーター、早く連れて逃げてくれ！ 情報の時間より早い——死喰い人だ！」

シリウスが焦った声で叫びながら、「コンファンド！」と扉の外へ杖を振った。

「——、死ぬなよシリウス！」

「俺は殺されても死なないさ、安心しろ秋！」

「とつとと行け幣原！」

この声はエリス先輩だ。呪文を打ち合う音が段々近付いてきていることに、覚悟を決める。

「ぼくの手を取って！」

ピーターの手を掴むと、夫人に手を差し出した。自分含めて五人の『姿くらまし』はしたことがないが、ぼくなら出来るはずだ。いや、やらなくてはいけない。

失敗は絶対に許されない。同時に何人も運ぶタイプの『姿くらまし』は、術者よりも付き添いに——この場合は夫人と子供たちに失敗のどぼつちりが飛ぶ。

絶対に成功させる。

夫人は意を決したようにぼくの手を取った。

右足を軸に、左足で地面を蹴った。脳裏にしっかりと目的地の座標を思い浮かべながら、『姿くらまし』する。周囲の風景が急速に回転し、やがて——止まった。

地面に足がつく。ふんばろうと思ったが、夫人がぼくの腕を強く握ったまま体勢を崩したため、無理だった。せめて夫人と子供たちを下敷きにしないよう、上手に倒れる。

不死鳥の騎士団から少し離れた小さな公園に、ぼくらは降り立った。

「大丈夫ですか!？」

ピーターが呻きながらも立ち上がる。

『ばらけ』たりはしていないだろうか。慌てて起き上がると、夫人と子

供二人をそれぞれ検分する。どうやら失敗はしなかったようだ、そのことにホッと安堵した。

新月のため月の明かりはないが、公園の街灯がぼくらを照らしている。杖を振り街灯を消すと、念のために尾行されていないか、場所探知を解除する呪文を周囲に振り撒いた。そしてピーターを振り返る。

「ピーター、この人たちを無事に本部まで送り届けて。出来るよね？」

ピーターはこっくりと頷いた。ぼくは笑顔を浮かべる。

「え……秋、また向こうに行くの？」

ピーターは慌てたようにそう言った。

ぼくは目を瞬かせるも、その通りだったので首を縦に振る。

「奇襲を仕掛けるつもりが、逆にこちらが奇襲を仕掛けられる形になった。形勢は騎士団が不利だよ、加勢に行かないと」

「危ないよ!!」

ピーターの大声に、驚いた。声を発した本人であるピーターも、目を白黒させている。

「ど……どうしたの」

「……その、ごめん、大声出して」

シユン、とピーターは項垂れた。

「……危ないのは承知だよ。あつちにはまだ、ジエームズとシリウスもいるんだ。彼らも戦っているんだよ。……不死鳥の騎士団は、そもそも人数差で不利なんだ。動ける奴が行かなきゃだ」

「……どうして皆、そんなに強くいられるの？」

ピーターの肩は、震えていた。

一体ピーターにどんな言葉を掛ければ良いのか、思索して唇を舐めたが、しかし一刻も早く向かわなければ。

「強くなってるよ——ぼくは」

よろしく、との気持ちを込めて、ピーターの背中を叩く。

ぼくとほとんど変わらない背丈のピーターは、しかし項垂れているから、ぼくよりも小さく見えた。

次の『姿くらまし』は、一人の分さつきよりも気が楽だ。その場で軽く飛ぶ。そのまま流れに身を任せた。



残されたピーターは、一人呟いた。

「……君が強くないというのなら、きつと」

僕は途方もなく、弱いのだ。

手の平に爪が食い込むほど、握り締めた。



『姿あらわし』したぼくは、その場の惨状にハッと息を呑んだ。

家が、燃えている。轟々と大きな音を立て、炎がちっぽけな家を呑み込んでいる。

夫人と二人の子供は、どんなに悲しむことだろう。夫人の細い手を、不安げな眼差しの二人の幼い少年少女を思い心が重たくなったが、今はそんな感慨に耽っている場合じゃない。

魔法式を組み立て上空に打ち上げると、数秒後に雨がパタパタと降ってきた。一秒ごとに雨は激しさを増していく。化学製品を混ぜ込んでいない、単なる純粋な炎だったようで、ただの水滴でも十分に炎はその威力を弱めていた。

『幣原か!?!』

イヤリングの形をしたトランシーバーから、エリス先輩の声が聞こえてきた。慌てて右手でイヤリングを摘む。

「先輩！ 皆は無事ですか!?!」

『敵は引いた、戦闘は終了だ。だが、フェンウィックが殺された。ポッターも怪我をしている——』

ドキリと胸が騒めいた。奥歯を食いしばり、俯きそうになる顔を上げる。

「——今、どこに」

『家の二階だ。火の手が回って降りられない。もう少し、雨を強く出さないか』

「了解しました」

答えながらも杖を振ると、途端に歩くのも辛いほどの雨が降ってきた。玄関から中に入り、雨じゃまだ掻き消せない室内の炎を、杖先から水を出して消していく。

階段を上がって、二階に。そこは、本当に室内かと思えるほど滅茶苦茶に荒らされていた。屋根は半分以上が壊され、外が見えている。廊下を挟んで二つ部屋があったのだろうが、壁は薙ぎ払われていて、広々とした一つの部屋だったようにも思われた。

「秋！」

シリウスに抱えられたジエームズは、意識がないようだった。頭から血を流している。

エリス先輩は周囲を探索していたが、チイツと舌打ちをした。エリス先輩らしくない、乱暴な仕草だった。

「一体、何があつたんですか？」

「分からない。ただ、フェンウィックとポッターの側に、何かがあつたんだ——詳しくはポッターに聞かないと」

エリス先輩は濡れた髪をガシガシと乱暴に掻いた。シリウスは、ジエームズに対して止血呪文を唱えていたが、どうやらそれも終わったようだった。

雨に打たれながら、ぼくは目を細めて頭上を見上げた。

「……………」

壊れた屋根の隙間からは、あの銀色の髑髏が浮かんでいた。



エリス先輩は、ダンブルドアに今回の任務での被害と戦果を報告すると、すぐさま『姿くらまし』で闇祓いの方に戻って行ってしまった。訓練期間の三年を経て、前線へと組み込まれたら、闇祓いは本当に忙しい。その見本がすぐ側にいるというのは、果たして良いことなのか、悪いことなのか。

炎は、幸いにも全焼と行かないところで消し止められた。家主であ

るオーティス氏がぼくと一緒に同行して詳しく描写してくれたため、完全に元通り、とは行かないまでも、それなりに暮らせるレベルにまで、住居を復旧させることが出来た。

しかし、夫人はもうあの家には住みたくないと言う。守護呪文を掛けようというダンブルドアの言葉を蹴り、夫人のご両親の家に、子供二人を連れて帰ってしまった。

まあ、それも無理もない——夫人の思いも、分からないではない。今回の戦闘の犠牲者、ベンジー・フエンウィック氏。今回の任務最年長の彼の死体は、欠片でしか見つからなかった。

二人ペアで組んでいたこの任務。比較的玄関付近にいたエリス先輩とシリウスの組は、死喰い人四人に奇襲を受けたという。

家の裏手にいたジェームズとフエンウィック氏の身に、一体何が起きたのか。

知る唯一の術であるジェームズの意識は、まだ戻らない。



ジェームズの意識が戻ったと聞いたのは、その二日後だった。

ちょうど闇祓いの訓練が終わった夜の八時で、ぼくは慌てて騎士団の本部へ駆けつけた。ベッドの上で半身を起こし、ダンブルドアに経緯の説明をしていたジェームズだったが、ぼくの姿を見て笑顔を見せた。その笑顔に、力が抜けるほど安堵した。

「よかつ、た……」

「心配かけたね、ごめんね」

と、バーンと大きな音がして扉が開け放たれた。ぼくと同時に連絡を受けたであろうシリウスとリーマス、それにリリーが、部屋になだれ込んでくる。三人は笑うジェームズを見た後、ぼくと全く同じ表情を浮かべた。

「はっはっは、僕がいなくてそーんなに悲しかったのかい？ やっぱり君達は僕がいないとダメダメなんだねえ！ まあさしずつめ僕は君達の真上に光り輝く太陽の如き存在だからね、無理もない！ だが安

心してくれたまえ、太陽は姿を隠すことはあれど、明けない夜はないのだから！」

……っ、全く、こいつはペラペラと……。変わらぬジェームズに、呆れて笑った。シリウスもリーマスも、ホツとした顔で苦笑を浮かべている。

しかし、リリーだけは違うようだった。顔を伏せたまま、ツカツカとジェームズに歩み寄る。ジェームズは朗らかに「やありりー！ 僕がいなくて寂しかった？ 僕の不在に、僕の存在がどれだけ重要だったのかが分かったのかな！ ふふふモテる男はツライねえ、彼女持ちはツライねえ！」と口走っていたのだが、リリーの顔を見た瞬間、言葉が止まった。

「バカ……バカあ……」

リリーはベッド脇で、膝をついた。カーデイガンに包まれた細い肩が、震えている。泣いているのだ、と瞬時に気がついた。

「あ……っ、ご、ごめん、なさい……」

ジェームズがたどたどしく謝罪の言葉を紡ぐ。手を伸ばして、リリーの頭をぎこちなく撫でた。

「あ、あの……ごめん、ごめんってば、だから泣き止んで……」

珍しくもジェームズが狼狽えている。天然パーマの髪をいつものようにぐしゃぐしゃと掻こうとして、頭をぐるりと覆う包帯に気がついたようだ。助けを求める瞳でぼくらを見るが、ぼくらの中の誰が、適切な対処が出来ると思っているのか。

何より一番は、ジェームズがただそこで、リリーの手を握っていることだというのに。

ぼくら三人は、それがよく分かっていた。

だから、ぼくらが出来ることと言えば――。

「結婚式には呼ぶんだぞー！」

「ずっとお幸せになー！」

「子供は女の子がいいなー！」

外野からそんな野次を飛ばすことくらいだった。

ジェームズは、珍しいことに真っ赤になってぼくらの野次に首を

振っていたが、リリーの手を離そうとはしなかった。

第6話 いつかの誓い

「ヴォルデモートだった。僕とフェンウィックは戦ったけど、フェンウィックはあいつに殺された——木っ端微塵だった」

「——ああ、欠片しか見つからなかったと、聞いている」

「そうか——そうだろう」

秋、と、ハシバミ色の瞳が言った。暖炉の明かりに照らされた瞳は、光の加減か、いつもよりも鋭かった。

「あいつは僕に尋ねた。——『幣原秋は、いないのか』と」
ギリ、と奥歯を噛み締めた。

「『いない』と言った瞬間、ヴォルデモートは去っていった。用はない、と言いたげに。——誰かが、不死鳥の騎士団の誰かが、あちらに情報を漏らしているんだ。この任務に君がついていると、リークしたんだ。そうじゃないと、あんな行動はしない——僕がヴォルデモートなら」

「……………」

ピーターの言葉を思い返していた。

『……………ねえ、疑問には思わないの？ ……相手の情報をこうして僕ら
が得ているように——相手側に、こちらのスパイがいるように——こ
ちら側にも、あつちのスパイが紛れているかもって』
ゾクリ、と身震いをする。

暖炉のすぐ近くにいるというのに、何故だか、とつても寒かった。



闇祓い訓練生の指導教官は、一年ごとに代わる。現教官であるアメリア・スミスは、仕事の引き継ぎのため大量の書類をまとめていたが、声を掛けられ顔を上げた。

「っ、クラウチさん！」

自分に声を掛けてきた者が、魔法省魔法法執行部部长、バーティミウス・クラウチだということに気付き、スミスは慌てて立ち上がった。

「そう畏まらなくていい、スミス」

クラウチはそう言うが、平坦な口調のため親しみは一切感じられない。

「何の……御用でしょうか」

スミスの言葉に答えず、クラウチはスミスのデスクに積み上がった書類を手に取った。それが今年の訓練生のプロフィールと成績が書かれたものであることに気付き、思わず声を上げる。

「それは極秘資料です！　いくら貴方と言えど、目を通すためには所定の手続きを踏んでくださらないと……」

「スミス、私が、この私が、手続きを踏んでいないとでも？」

低い声でそう言われ、スミスは思わず身震いをした。思わない、この几帳面が過ぎるほどに几帳面な目の前の上司は、恐らく本当に、全ての必要な手続きを踏んでいる。それだとしたら、スミスは何も言うことが出来ない。

「——こいつだけでいい」

そう言うと、手に取った書類から一束だけを抜き出し、残りは乱暴にスミスのデスクに放った。スミスは慌てて、放られた書類を確かめる。スミスの手元にあるのはパトリック・リオンと、マーク・ヴィツガーの資料のみ。となると、現在クラウチの手元にあるものは——。

「……幣原に、何の御用でしょうか」

今度こそスミスは、口調に警戒心を滲ませた。スミスの質問に直接は答えず、クラウチは資料に記された文言を読み上げる。

『魔法攻撃力、魔法防御力に著しく高い特性を發揮。対人戦闘、対物戦闘共に高い戦績を収める。膨大な魔法力を有し、どれだけ魔力を消費してもへばることはない』——

「その分体力はあまりありませんし、シビアに徹しきれない一面もあります。確かに、魔法力は目を瞞るものがありますが、魔法薬学は不得手です」

早口でスミスは言った。無意識に手を握り締める。クラウチが何を意図しているのか、今から何をしたいのか、感覚が分かっていた。「幣原はまだ未熟です。訓練期間である規定の三年を終えてないので

すから、当然です。あと二年で彼の才能を引き出せるだけ引き出して
——」
「余計な言葉は必要ない。私が何の根拠もなしにこの言葉を発している
と思うかね？」

「……………」

時折、訓練生三人から「視線を感じる気がする」と、愚痴のような
言葉が漏れ聞こえていた。

もしかして、もしかして——

「スミス。君も分かっているはずだ」

クラウチは手に持っている資料を放った。バサリ、軽い音を立て
て、資料はデスクの上に落ちる。

「彼の才能を極限まで引き出せるのは、戦場でしかあり得まい。無限
にも近いあの魔法力が、一体どれほどの戦力になるか、考えたことが
ないわけではないだろうか？」

鋭い瞳が、スミスを射抜いた。

「幣原秋を、実践に投入しろ」



「——は、え？」

スミス女史の言葉に、ぼくはポカンと口を開けた。

「ちよつ——ええ？　なんで？　ぼくまだ、訓練期間一年も——」

「上司命令です、幣原」

ピシヤリと、口答えを許さない厳しい声がスミス女史の口から零れ
た。

「人手不足と戦力増加のためです。覚悟は、その制服を纏い懐中時計
を持った瞬間から、出来ていた筈でしょう」

「……………」

「リオンとヴィツガーには私から説明をします。あなたは明日から、
地下二階の闇祓い本部に行きなさい」

有無を言わさぬ口調だった。教官として、少し砕けた口調で接して

くれていたのに、硬い口調に戻ってしまったことが、とつても勝手だが、けどなんだか悲しかった。

「……はい」

目を伏せて一礼する。スミス女史の靴音が遠ざかり——と思つたら、再び近付いてきた。ぼくは思わず顔を上げかけ——

「上官が立ち去るまでは頭を上げない！」

「はい——」

鋭い声に、慌てて頭を下げ直した。

ぼふ、と頭に暖かい感触。ゆるゆると髪を撫でられる。

「……精進するのですよ、幣原」

「……う、は、はい」

どうか、無事に生き延びなさい。

囁かれた声を、ぼくはきつと忘れないだろう。



長い廊下を、桜さんに従って歩く。

空気が、なんとというか、日本だ。日本の夏の空気。遠くでセミの鳴き声がしている。もう日は沈んでしまい、西の地平付近が僅かに明るいのみとなった。

板張りの廊下を、じつと歩く。広い屋敷なのに、人の気配は感じない。セミの鳴き声と、風が木々の葉っぱを揺らす音、それにぼくらの足音以外は、完全に無音だった。

……ところで、どういふ足運びをすれば桜さんのように静かに歩けるのだろうか……謎だ。足袋に秘密があるのだろうか。……いや、そういう訳ではないだろう。

板張りの廊下の突き当たり……離れ、とでも言うのだろうか。そこに通されたばかりが見たものは、年老いた老人が布団に横たわっている姿だった。僅かな面影から、彼が幣原梓、幣原秋の叔父であることを認識する。

「やあ、こんにちは。こんな姿で済まないね、幣原秋くん」

「いえ、ぼくは……」

言いかけた言葉が、止まる。その僅かな間を、梓さんは笑った。

「元来正直者なんだね、君は。久しぶりだ、秋くん」

その口調も、何もかも、あの時と変わらない。恐ろしいくらい、変わっていない。

「……お変わりない、ようで」

迷った挙句に、そんな言葉を発した。一体どうしてぼくが幣原秋であることを看過されたのかは分からないが、今更取り繕うのも遅いだろう。先ほどの逡巡は、取り返しの付かない間となってしまうた。

「変わりない？ 僕にしてみれば、秋くんの方が何も変わっていないように見えるけれどね。……まあいいや。もう少し早く来てくれるかと思っていたけれど、僕には直兄と違って未来は視えない。僕が生きているうちに来てくれたことこそを、僥倖だと喜ぶべきなのだろうね」

「……ぼくがあなたに会いに来ることを、最初から予測していたんですか？ ……あの時から？」

「当たり前だろう」

『秋クン、君ハ本当ニ、莫迦ダネエ』

そう言つて、梓さんは嗤った。底冷えのするような、狂った嗤い声だった。

呑まれないように、大きく深呼吸をする。

この人に呑まれてはいけない。

「父の本を、返してください」

腹に力を込め、梓さんに向かい合う。梓さんはしばらく愉快そうにケタケタと嗤っていたが、正気な瞳でぼくを見た。

「いいよ。僕には、あの本は使えない」

「……使えない？」

どうも、変な表現だ。

「直兄の、幣原直という一人の天才が書き記した書物は、僕のような凡人の手には余るといふことさ。君も解読してみれば分かるだろう。桜、本を秋くんに渡してやってくれないか？」

桜さんが音もなく梓さんの枕元に跪き、枕の下から一冊の本を取り出した。

和綴じの本だった。表紙には黒いシミが残っている。それが血の痕だということを考えないようにしつつ、ぼくはその本を受け取った。軽くパラパラと捲つてみる。

確かに、ぼくの父、幣原直の文字だった。ダンブルドアが言う通り、多くの言語で書かれている。日本語、英語のみならず、フランス語、ドイツ語、スラブ系言語もあれば、いきなり漢字が出てきたり。殴り書きのような文字まで見受けられる。また、魔法陣だのといった図形も時折あった。これは解読に手間取りそうだ。

そもそも、どうしてダンブルドアは、こんな本を欲したのだろうか？

「あ……ありがとうございます」

あまりにも呆気なく目的の物が手に入ったため、拍子抜けしてしまった。ぼくの知る梓さんなら、もっと渋るかとも思っていたのだけれど。肩透かしを食らった気分だ。

「この本は、何が書いてあるんですか？」

梓さんは、この本を解読したのだろう。だからこそ、この本に対して妙な表現をしていたのだ。そう思つて尋ねると、梓さんの笑みが深くなった。

「ねえ、秋くん。君の国のテロリストで、日本魔法界を無茶苦茶にしたあの彼、ヴォルデモートは、どうして直兄に執着しているのか、聞いてもいい？」

「……ぼくも、よくは知らないですけど。昔は友人だったと聞いていますよ」

「友人？ ……へえ、友人、ね。じゃあ、そのかつての友人であつたその人が、君のご両親を殺したんだ」

何が言いたい。思わず眉を寄せた。

「殺した時には、友人だとも思っていなかったんじゃないですか？

友達ならば普通、殺さない」

「それはどうかな。友達だとしても、殺そうと思えば人は死ぬよ」

「……それは、そうですけど」

……でも、リドルは。

ちらりと右手の小指に目を遣った。そこには、リドルとの魔法契約の証である、赤いリングが嵌っている。

——リドルは、父のことを、どう思っていたのかな。

両親が死ぬことになったのは、ぼくのせいだ——ぼくがいなければ、両親は死ぬことはなかった。

リドルは、ぼくの両親を殺したことを、後悔していたりとかするのかな。

——初めて考えることだった。頭の中で言語化したその考えに、思わずぎくりとした。

後悔しているから、何だと言うのだ。

殺した事実を、一切合切覆らない。

死者が生き返ることは、決してない。

「ねえ、秋くん。君にその本を託すのはね、君ならば、叶えられるからだよ。その本はね、悪魔の書物だよ。今までの努力や苦労、慟哭、後悔、成功も失敗も、全てを呑み込んでしまう悪魔の所業だ。全てをなかつたことにしてしまう、全てを水泡と帰してしまう。だから、直兄はそれをしなかつたんだ」

『それ』とは、どれのことだろう。

分からない。

「どうして家の物が、全て粉々になつていたか分かるかい？ どうしてそんなことを、と、考えたことはある？ その理由を教えてあげよう。その本が、ヴォルデモートの手に渡りそうになつたからだ。絶対に見つからないと思つていたこの本の存在に気付かれ、暴かれそうになつたからだ。——木を隠すには、森の中。本を隠すには、大量の本の中。魔力を隠すには——より強い魔力の中。全てを粉々にして、魔法使いの魔力が籠つた血を振り掛けたら、さすがにヴォルデモートでも見つけれなかつたようだ」

——それは。

ぼくの両親は、意図してあの惨状を——あの家の地下に広がる、あ

の惨状を——作り出したと、そういうことなのか？

「最後に、一っだけ聞いてもいいですか？」

ぼくの言葉に、梓さんは目を向けた。

「どうして……そんなに詳しく、両親の死の状況を知っているんです」
まるで、その場にいたかのように。

梓さんは答えた。

「君には言っていないかったねえ。直兄が未来を視られたように、僕はね、ものの過去が見えるんだよ。……覚えておくといい。幣原家は、時を司る家系だということを」

彼の唇が、吊り上がって弧を描く。

「直兄が守った本を、僕が守れた。直兄の子供に僕が手渡すことが出来た。直兄の思いを、託すことが出来た。……もう幣原家は終わりで。日本の魔法界も、もうこの襲撃で途絶えるだろう。直兄が憎んだ幣原家は、ここで終わるんだ。その終焉を、この目で見る事が出来た」

目を細め、恍惚の表情で虚空を見上げ、梓さんは呟いた。

「——もう、悔いはないよ」



済みませんでした、と、桜さんはぼくらしく頭を下げた。

「父が不敬を致しました」

「いえつ、全然、そんなこと……」

語尾が萎む。桜さんはしばらく頭を上げなかったが、やがて姿勢を正すとぼくを見下ろした。

「……貴方が、幣原秋なのですか？ 私の、従兄弟の」

「……嘘ついて、ごめんなさい。ま、その……本当は、幣原秋じゃないかなって、あいつはぼくの別人格というか、なんというか……」

これ、見ず知らずの人に説明するのは滅茶苦茶難しくないか。拙いながらも言葉を並べ立てると、なんとなくは伝わったようだ。

「……では、幣原秋は生きているということなんですか」

「ええっと、一応は。ここに……ですけど」

自分の頭を差し示す。

しばらく桜さんは目を瞬かせていたが、やがて、ふと無表情を崩し、微笑んだ。

「彼に、お伝えください——」

その唇が、言葉を紡ぐ。

「貴方と、もつとちゃんとしたところで会いたかった」

改めて、ぼくは桜さんを見た。

「……てつきり、恨み言を言われるかと」

「恨み言……そりゃ、積もる話をすればいくらでもありますが」

やっぱりあるんだ……そりゃそうだよなあ。幣原秋の父、幣原直は、かなり幣原家に影響を及ぼした人だし、幣原秋にも言いたいことはたくさんあるだろう。

「父は、日本魔法界と幣原はこれで終わりだと言いましたが、私はそうは思いません」

そう言つて、桜さんは目を細め、背後の屋敷を振り返った。

「日本魔法学校『魔法処』校長、幣原桜の名にかけて、必ず復興してみせます。子供たちから未来は、奪わせません、何者にも」

ぼくは目を瞞つた後、深々と頭を下げた。



日本魔法界から抜け出た時は、もう世界は夜闇に沈んでいた。それでも日本の夏は、夜になつても暑さは収まらない。生温い風に眉を顰めながら、ぼくらは歩いていった。

目的地は、幣原家の墓。

「あの、この本……」

梓さんから受け取った本をダンブルドアに渡そうとしたが、しかし「それは君が持つておくべきものじゃ」と断られた。なんだ、と思つたが、言い返す気力もない。小さく息を吐いた。

梓さんと会話すると、大体気力が根こそぎ持つていかれる。精神が

酷く疲れるのだ。

「……彼も、可哀想な被害者の一人なのかもしれない」

ダンブルドアの言葉に、目を瞬かせた。

「才能に、人は狂うのじゃ。幣原秋しかり、幣原直しかり、ヴォルデモートしかり——わしもじゃ。彼もまた、才能という名の大きな力に狂わされた一人なのかもしれない」

「あなたも？　ダンブルドア先生も、なのですか？」

ハリーが尋ねる。

ダンブルドアは多くは語らず、ただ静かに微笑んだ。

第7話 暗闇の影

前日にアイロンを掛けておいたワイシャツを羽織る。一番上までボタンを留めると、ループタイを通し、長さを調節した。その上から黒のカーデイガンを着ると、闇祓いの制服、インバネスコートに袖を通す。巻き込んだ髪を両手で出し、纏めて一つに括った。結び紐は、昔リリーに貰った黒の髪紐。

鏡を見て、妙なところがないかを確認すると、膝丈の黒いブーツを手を取った。編み上げの紐を一つずつ確認しながら、ブーツを履く。黒の光沢があるブーツは、それなりに値が張ったが、おかげでいいものを選べたと思う。

そもそも、休みが殆どといていい程ないため、給料は貯まる一方なのだ。しかも命を張る仕事だからか、受け取る額は他の仕事と比べ物にならない。

命の値段。ぼくの命は、一体いくらだろう。

ベッドサイドの懐中時計を手を取った。金色に鈍く輝く懐中時計は、気分の問題か見た目よりずっしりと重たい。鎖を指に絡ませ纏めると、ケープの内側に仕舞い込んだ。襟元と袖口についていた今までの紋章を外し、真新しいものに付け替える。

訓練生から、一兵卒になった証。ここ、闇祓いでは、軍隊のような階級制度が存在する。他の部署からはあまり好ましく思われていないようだが、ぼくはこの制度が嫌いではなかった。

自分が立っているのは戦場だと、思い知らせてくれるから。

「……よし」

黒革の手袋をしっかりと嵌めると、鏡の中の自分に、意気込んだ。今日から本格的に、闇祓いとして働くのだ。



地下二階の闇祓い局に足を踏み入れたのは、実のところ初めてだった。今までは、訓練生は訓練室にほぼ直行だったから。

「し、失礼します……」

『闇祓い本部』と表札の付いた扉を押し開けると、一気に注目が集まった。視線に身を竦ませながらも「今日付けで配属になりました、幣原秋と申します」と名乗る。

「幣原か」

声に目を遣ると、アラスター・ムーディ先生の姿が。顔には一部の隙もないほど傷だらけで、一見すると凄く恐ろしい人ではあるけれども、今のぼくは顔見知りがいた、という安堵に胸を撫で下ろした。

ちよいちよい、と手招きされ、狭い通路をすり抜けながらもムーディ先生の元へと駆け寄った。

「お前はこれから第一班の班員だ。第一線で働いてもらう。覚悟するんだな」

黒い瞳に射竦められた。ギクリと身を強張らせるものの「……はい」と頷く。ムーディ先生はしばらくぼくをじっと見ていたが、やがて「レインウオーター！」と叫んだ。

少し離れたところに座って書類を見ていたエリス先輩が、弾かれたように立ち上がる。

「はいー」

「お前の後輩だ、お前がサポートしろー」

「はいー」

エリス先輩は殊勝な顔をしていたが、椅子に腰掛ける瞬間ぼくに向かって片目を瞑ってみせた。思わずぼくも頬が緩みかけ、慌てて引き締める。

「全部頭に叩き込め。全てを今日中に。複写も持ち出しも厳禁だ。『記憶力には自信があるんです』——言った言葉は違えるな。お前のデスクはレインウオーターの隣。いいな」

ムーディ先生がぼくの腕に書類を渡す。厚さはぎつと三センチはあるだろうか。細かな文字でビッシリと書かれている。これを今日中に。だが、出来ないなんて言える訳がなかった。

「はい」

「いい返事だ」

ぐしやり、乱暴に髪を掻き混ぜられた。うつ、と思わず顔を歪めるも、その時はもうムーディ先生はぼくに背を向けている。

書類を抱えたまま、妙に立った髪のを抑えてデスクに向かうと、エリス先輩はニヤリと笑ってぼくを迎えてくれた。

「ひつどい髪」

「だって……」

唇を尖らせながら、髪紐を解くと再び結び直した。ついでに頭を一振りし、気合を込めると改めて書類を手取る。

「……………」

首筋に熱いものを押し付けられて、我に返った。飛び退いて顔を向けると、そこには笑顔のエリス先輩が、マグカップ片手に立っていた。

「随分と没頭していたね」

「え、あ……」

慌てて時間を確認すると、もう夕方を指していた。午前中からずっと書類を見続け、もうそんなに時間が経っていたのか。何人かは帰り支度をしている。

「凄い集中力だ。昼にプルウエットが誘ったんだけど、覚えてる？」

君はこちらも見ずに生返事をしていただけ」

「う、すいません……プルウエット先輩にも謝っておきます」

「気にすることはないよ。その集中力はきつと、君の武器なんだから。卑下することは何もない」

コトリ、ぼくのデスクの上にマグカップが置かれた。中にたゆたう液体は、真っ黒な色合いをしていた。あまりコーヒーは嗜まないが、疲れた頭を抱えた今は、紅茶よりもコーヒーの方が身体が欲しかった。

「どうぞ」

「……ありがとうございます」

熱いコーヒーは、紅茶とはまた違った充足感をもたらしてくれる。自然と、息を吐いていた。

「幣原、これから時間あるかい？」

言われて、予定を脳裏に思い描いた。今日はもう何もなかったはず

だ。そう言うと、エリス先輩はぼくの肩に手を置いた。「夕食でも食べに行こう。君、昼も食べてないだろ？ 昇進祝い奢ってあげるよ」

丁度いいタイミングで、お腹が鳴った。思わず顔を赤らめるように、エリス先輩はクスクスと笑う。

「喜んで」

少しつつけんどんに言いながら、ぼくはマグカップの中のコーヒーを飲み干した。



『隠れ穴』に辿り着いた頃は、もう夜更けと言って差し支えない時間だった。それにも関わらず、モリーおばさんはいつもと変わらない暖かい歓迎をしてくれた。

「ああ、これはニンフアドラー！」

「こんばんは、先生」

ダブルドアが、テーブル脇に座っていたトンクスに挨拶をする。挨拶を返したトンクスは、ぼくとハリーに対しても片手を上げて微笑んだが、しかし随分とやつれたようだった。普段はシヨッキングピンの髪の毛が、今は茶色だ。元々はこれが地毛なのだろうが、しかしトンクスらしくない。彼女はこの髪色を気に入ってはいなかったはずだ。

「あたし、もう帰るわ。モリー、お茶と同情をありがとう」

そう言つてトンクスは立ち上がった。

「わしへの気遣いでお帰りになったりせんよう。わしは長くはいられないのじゃ。ルーファス・スクリムジヨールと、緊急に話し合わねばならんことがあつてのう」

「いえ、あたし、帰らなきゃいけないの……おやすみ」

「ねえ、週末の夕食にいらっしやらない？ リーマスとマッド・アイも来るし——？」

リーマスの単語を聞いた瞬間、トンクスの肩が跳ねた。しかしトン

クスは首を振る。

「ううん、モリー、ダメ……でもありがとう、みんな、おやすみなさい」
トンクスはぼくらの横を通ると、庭に出て行った。

心配のあまり、ぼくは思わず彼女の後を追う。

「トンクス……」

今にも『姿くらまし』しようとしていたトンクスは、ぼくを振り返った。

「……アキ」

彼女の灰色の瞳が、きゅつと泣きそうに細まる。

「どうしたの……闇祓いの仕事が辛い？　ならあんなもの、辞めてしまえばいいよ。君なしじゃ回らない組織なら、そんな組織は滅びるべきだ。君ほど能力がある人なら、他にも職はいっぱいある……無理をしないで、あそこはいるべき場所じゃない」

闇祓いの職に就く彼女を必要以上に気にかけてしまうのは、きっと、ぼく自身が幣原に対して色々と感じているからだ。ぼくが幣原に對して言いたいことを、彼女を通して伝えた気であるのかもしれない。

彼女に、幣原を投影しているのか。

「ううん……違うよ、アキ。あなたが負い目に思うことは、何一つないよ」

「……なら、どうして？　どうして、そんな……辛そうな顔をしているの？」

ぼくの問いかけに、トンクスは儂い笑顔を浮かべた。

「あたしの心配じゃなくって、あなたはリーマスの心配をしてあげて」
「リーマス？」

思いもしなかった名前に、目を瞬かせた。そう、とトンクスは微笑む。

「あたしじゃ、あの人の暗闇は癒せない。……あなたじゃないと、リーマスには寄り添えない……あなたでも、もしかしたら寄り添えないのかもしれない。……彼じゃないと、いけないのかもしれない」

『彼』とは、ひよつとして。

トックスは目を細めると、ぼくの髪をそつと撫で、頬から顎に手を滑らせた。

「お願い、アキ」

第8話 黒衣の天才の作り方

『一斉突入』の声に、杖を振った。粉々に砕け散る窓ガラス。欠片を避け、開いた窓から家の中へと飛び込んだ。廊下に降り立つ。

「動くな！」

少し離れたところで、声が聞こえた。同じ班の、エリス先輩の声。しかし敵も、黙って従うはずもない。呪文の閃光が辺りに飛び交う。

死喰い人の黒いマントを頭から被った人物が部屋の中から飛び出してきた。廊下に立つのがぼくだけだと見ると、喚きながら手に持っている杖を振る。難なく呪文を打ち消すと、一步踏み込んだ。

『武装解除呪文』を掛けると、飛んできた杖を右手で掴む。くるり、指先で回した。先頭の奴はそれで怯むも、もう遅い。

背後にも敵の気配。丁度いい、まとめてやってしまおう。

杖を縦に振り下ろすと、廊下に出てきた二人が、まるで目に見えない大きな手に押し潰されたかのように地に這いつくばった。これで指一本上げられまい。

うつ伏せに倒れるそいつらの背中を、丁寧に踏んづけた。

「苦勞様」

先ほど死喰い人が出てきた部屋を覗き込むと、途端に禍々しい空気が解き放たれた。思わず顔を顰める。

禍々しさの出処は、部屋の中心に置かれた大きな大鍋だということ。間違いない。紫色の煙で部屋が霞んでいる。

大鍋の辺りでも、激しい先頭が行われていた。敵が三人、対する闇祓いは二人。エリス先輩とサッチャー先輩だ。逸れた呪文がこちらに飛んできたのに、盾の呪文を張って凌いだ。

「加勢しますー！」

「頼むー！」

エリス先輩はぼくを見ずに叫んだ。杖先から溢れる光の玉。杖を鋭く敵側に向けると、物凄い速度で光の玉は敵を攻撃しにかかる。二人は光の玉に対応したが、一人は無理だったようだ。

倒れた一人に、敵側の二人は一瞬、助けようか逡巡する。そこを逃す先輩方ではない。『妨害呪文』と『失神呪文』が連続で直撃し、ぐんにやりと敵はその場に沈み込む。

「助かった、幣原」

ぼくの背を叩いて、サッチャー先輩は大鍋に駆け寄った。資料として保存するのだろうか。

少し大鍋の中身が気になったが、ぐい、とエリス先輩に腕を引かれた。まだ、二階で戦っている音が聞こえる。

ぼくらは部屋を出ると、廊下を通って階段へと向かった。その際に、廊下に転がる二人を踏みつけていくことも忘れない。階段を駆け上がる。

この班を率いる班長、リスター先輩は、二人の敵相手に大立ち回りを演じていた。敵の攻撃は絶え間なく、リスター先輩の顔は苦しげに歪んでいる。

エリス先輩と息を合わせ、『盾の呪文』で身を守りながらも飛び込んだ。

息つく暇もなく呪文を打ち合う。魔法式を構築する速さは向こうが上。なら、こちらで対抗出来るのは、魔力の量。

普段は抑えている出力を上げる。しかし少し手加減しながら放った『爆破呪文』に、エリス先輩は勘付いたようだ。

「何に気を遣ってる、幣原！ 家か、家の壁は仲間の命より重いのか！！」

「そりゃあ傑作だ、なんとも期待の持てる新人よな！」

エリス先輩、リスター先輩、二人に言われて反省する。

ぼくの強みは、これしかないんだ。それをもったいぶってちゃ、それこそ宝の持ち腐れだ。

「分かりましたよっ！」

息を吐いて、杖を振った。魔力の単位は存在しないが、もしあったとするならば、桁が一つは跳ね上がるだろう。それくらいの出力で呪文を行使する。

杖から膨れた魔力が、指向性を持ち一直線に向かった。そして――

轟音が響く。意識を失った死喰い人が二人、崩れ落ちた。手早く、エリス先輩が二人を縛り上げる。

「よくやったー！」

強く背中を叩かれ、思わず絶息した。リスター先輩が豪快に笑っている。わしゃわしゃと髪を掻き混ぜるのは止めてもらいたかったが、しかし手放しに褒められるのは嬉しかった。

縛られ、意識のない死喰い人らを『浮遊呪文』で浮かせると、一階へと降りる。

大鍋が置いてある部屋へと行くと、そこにいたサツチャー先輩は、既に薬品の調査を完了させたようだ。班長であるリスター先輩の姿を見ると、パツと姿勢を正す。

「報告を」

「はい。こちらの人的被害はなし。上々ですよ。大鍋の中身のサンプルは採取しました。ガラス瓶を溶かすので、真鍮製の容器に入れていきます。監察に回せば、より詳しい結果が出るでしょう……」

そこで、淡々と報告を口にしていたサツチャー先輩が言い淀む。

「どうした」とリスター先輩は片眉を上げた。

「簡単な分析器に掛けた結果と、あくまでも自分の勘ではありますが……この炭素とカルシウムの含有量から鑑みて、恐らく煮込まれていたのは人の死体と思われます」

瞬間、空気がピリリとした。ゾクリ、と皮膚が粟立つ。

「——そうか」

「ここ最近に出た行方不明者を、マグルも含めて洗うべきかと」

「ありがとう」

サツチャー先輩が、リスター先輩に数枚の紙切れを手渡した。

「この魔法薬の手順書です」

「よく見つけたな」

「証拠が見つかりすぎて、少し不安な気もしますが」

リスター先輩はその紙に目を通すと、懐に仕舞い込んだ。

「廊下に転がっている奴らも連れてこい」

「あつ、はい！」

言われ、慌てて杖を振った。目視出来ない位置にいたが、このくらの障害は苦にもならない。

「ひい、ふう……七人か。この部屋に最後までいた奴は、吐かせたか？」

「搾り取れるまで、きつと」

「それならば、その三人をアズカバンに。残りはこちらで。サツチャー、頼んだ」

こくりとサツチャー先輩は頷くと、意識のない死喰い人三人の腕を取り『姿くらまし』した。ぼくらは死喰い人四人と共に、取り残される。

「幣原」

名前を呼ばれて顔を向けると、リスター先輩はぼくに言った。言葉を飾ることなく、ただ当たり前前的事实を語るかのように。

「こいつらを殺せ」

——何を言われたのか、理解が出来なかった。

さあつと、血の気が引く感覚。

指先がやけに冷たく感じたことを、覚えている。

「リスター先輩！」

エリス先輩が慌てたように、呆然と立ち竦むぼくとリスター先輩の間に割り入った。

「初陣で、しかもこんな真似をさせることはないでしょう!? 幣原の代わりに、私が……っ」

「お前じゃ務まらない、レインウオーター。お前にも分かっているはずだ——いつまでも学生時代と地続きの生温さに浸っている訳にはいかない。……幣原」

名前を呼ばれ、肩が跳ねた。

「闇祓いとして生きていくのならば、覚悟を決めろ。利用される覚悟を」

——そういう、ことか。

そういうこと、だったのか。

「……アズカバンに入れるんじや、ないんですか……っ、普通、そうでしょう……」

「アズカバンの看守、吸魂鬼は、現在闇側の手に大多数が落ちた。もはやあそこは、罪人を閉じ込めておくことに役立たん」

「なら……っ」

「分かっているのだろう、幣原。聞き分けのない子供のようなことをいつまでも口走るな」

分かっていた。分かり切っていた。

罪を犯した魔法使いを閉じ込めておく場所は、アズカバン以外に存在しない。アズカバンの看守が寝返ったのならば、いたずらにアズカバンに囚人を増やすことも出来ないだろう。

三年の訓練期間を待たずに、異例にも第一線に投入されたのは、そういうことだったのか。

手のひらを、強く握り締めた。

ぼくの手には余るほどの、膨大な魔力。

その終着点は——ここ、だったのか。

「敵を、殺す覚悟を。この戦争の立役者となる覚悟を。——さもなくば、去れ。弱い奴は、闇祓いこの世界には必要ない」

——今まで使ってきた『覚悟』という言葉は、一体どれだけ軽々しかっただろう。どれだけ空々しいものだっただろう。

覚悟。

顔を上げた。

「やります」

声は、震えていなかっただろうか。分からない。

エリス先輩が、驚いたように、そして少々沈鬱な表情で、ぼくを見ている。

その視線を避けるように、エリス先輩の影から歩み出て、リスター先輩を見上げた。

「……嫌な目だ」

杖を握る左手は、目で見て分かるほどに震えていた。右手で、左手

の震えを押し止める。

一年にも満たない訓練期間だったが、それでも『許されざる呪文』の練習はあった。——相手は、人ではなく、ネズミやコウモリといった小動物ではあったものの。

今まで、ぼくに使えない呪文は、一つとしてなかった。昔は、それが誇りであった。

今は。

……ああ、ぼくは狂おしいほどに、レイブンクロー生なのだ。少数の犠牲を払い、多数の利を得ることが出来る、レイブンクロー生。

目の前に倒れる誰かを見殺しにすれば、よりよい世界があると、そう信じられたならば、躊躇なくその誰かを見放すことが出来る。

だから、ぼくは。

自分の心を殺すことで、平和な世界が手に入るのならば。

杖腕を上げた。抵抗もしない、意識もない『敵』に——杖を、向ける。

今から、ぼくは人間を殺すのだ。

ぼくを裁いてくれる者は、きつと誰一人としていないだろう。司法制度は、ぼくら閻魔いを絶対的に守っている。

だから、せめてぼくだけは。

自分の十字架から、犯した罪から目を逸らすことなく、歩み続けよう。

「——アバダ・ケダブラ」

二度と、日の当たる場所には戻れない。

第9話 初恋の寿命

込み上げる吐き気を感じ、喉に手を当てた。もう吐き出すものなんて、何もないというのに。

酸で灼けた喉が痛む。任務終わりに浴びる朝の日差しは、ぼくから着実に体力を奪っていった。しかし、まっすぐ寮に帰る気にも、なれなかった。

「……………あ」

ふと気付くと、路地の突き当たりだった。何も考えずに足を進めていたら、こんなところに来てしまっていた。

引き返す気力も湧かなくて、物陰に座り込む。見上げると、建物で四角く切り取られた青空が映った。

「……………はあ、あ」

項垂れ、左手を見つめる。軽く握っては開いた。

杖を握った感触は、未だ手に残っている。

死の呪文を放った瞬間に僅かに感じた、杖の振動も。

「……………」

両手で顔を覆い、目を閉じた。細く、長く息を吐く。

これからぼくは、何人も敵をこの手に掛けるだろう。屍の山を築くほど、数多くの敵を。それが、ぼくに期待される役割。ぼくが果たさなければならぬ役目。

——どこまでぼくの心が保つのかは、定かではないけれど。



チャイムの音に、本から顔を上げた。もう時間は夜更け過ぎだ、こんな時間に、一体何の用だろう。

初任務が終わってから、ぼくは二日間の休暇を言い渡された。余りにも、顔色が悪かったからか。情けない。食事も、胃が受け付けてくれなかったし、疲れているにも関わらず、眠気は一切襲って来なかった。

寝転がっていた身体を起こすと、ソファから降りる。廊下を小走りで進むと、玄関の扉前で「……誰？」と低い声で呟いた。

『僕だよ、パトリック・リオン！』

途端、右耳につけているトランシーバーから声が聞こえてきた。慌てて、親指と人差し指でトランシーバーを摘む。

「リオン？」

『ヴィツガーもいるぞ。なあ、開けてくれないか？』

そう言われて、断る理由はなかった。

錠を外し、扉を開け放つ。そこには、訓練生時の同期、リオンとヴィツガーの姿があった。ほんの数日前まで、彼らと一緒に訓練を受けていたのに、なんだか無性に懐かしかった。

「どうしたの？」

「レインウォーター先輩が、絶対眠れてないだろうからって。『生ける屍の水薬』の希釈液。紅茶とかにそのまま入れて飲んで大丈夫だとさ」

「エリス先輩が……」

本当にあの人は、優し過ぎると言うか、何と言うか。面倒見が良過ぎる。

ぼくは弱いから、いけないことだって知っていながら、ズルズルと甘えてしまいそうになる。

「届けてくれたんだ……ありがとう」

微笑もうとしたが、ぼくの試みは失敗に終わったようだ。だってリオンもヴィツガーも、痛ましそうな顔で口を噤んだから。

いつの間に、ぼくは笑顔を浮かべるのが下手くそになってしまったのだろう。

「……幣原」

とそこで、ヴィツガーが一步足を踏み出した。ぼくはヴィツガーを見る。

「君は、覚悟をしたんですね」

静かな声だった。目を閉じると、息を吐く。

「うん」

今度こそぼくは、しっかりと笑顔を浮かべた。二人が、僅かに目を
瞠る。

「幣原……、今度空いた時間が合ったら、三人で食事にも行こう。僕
は、君のことを何も知らない」

リオンがそんなことを言う。

確かに、その通りだった。ぼくら三人は、一年弱一緒にいたという
のに、互いのことを全くと言っていいほど知らなかった。毎日の訓練
は過酷で忙しく、また三人とも、自分のことを語り合うような性格で
はなかったし——ぼくはどうして、リオンとヴィツガーがこのご時世
に闇祓いになろうとしたのか、何も知らないのだった。

リオンの申し出はとてもありがたかったが、ぼくは互いのことを知
らない方が、いいようにも思えた。

だつて。

互いのことを知っていたら——相手のことを知り過ぎていたら、
きっと、別れは何よりも辛いものとなる。

「ありがとう。きつと、時間が合ったら」

心にもないことを口にする、リオンの肩がホツとしたように落ち
た。

「ちゃんと寝るんだぞ——あ、あとこれ、適当に摘めそうな食料！ ゼ
リーとか、ヨーグルトとかも持ってきたから」

「ぼくは病人かい？」

思わずそう突っ込みを入れた。ヴィツガーがクスクス笑っている
のに、リオンが赤い顔で肘鉄を食らわす。

「ま……助かるよ」

リオンは元来、世話好きだ。人を細やかに観察しては、色々と気を
遣ってくれる。もしかしたら、兄弟が多かったりするのかな。そうか
もしれない。ぼくは一人っ子だから、兄弟がいる感覚が上手く理解出
来ないんだけど、リオンがぼくに時折取るこの態度は、『兄』のよう
にも感じられた。

「ありがとう」

色んな思いを押し隠し、ぼくはもう一度、笑顔を作った。

リオンとヴィツガーは、安心したように微笑んだ。



届いたふくろう試験の結果に軽く目を通した後、折り畳む。羊皮紙をポケットに突っ込み辺りを見回せば、ハリーもロンも、ハーマイオニーは言うまでもなく、まだふくろう試験の結果と睨めっこしていた。

「占い学と魔法史だけ落ちたけど、あんなもの、誰が気にするか？」

ロンは嬉しそうにそう言うと、ハリーと成績表を取り替えっこしている。ハリーの成績表を見るなり、ロンはハリーの肩にパンチを食らわせた。

「君が『闇の魔術に対する防衛術』でトップなことくらい分かってたさ——僕たち、よくやったよな？」

「よくやったわ！ 七ふくろうだなんて、フレッドとジョージを合わせたより多いわ！」

モリーおばさんが、感極まったようにロンの髪を掻き混ぜる。ロンは少し迷惑そうにしていたが、それでも嬉しそうだった。

「ハーマイオニー？ どうだったの？」

「私——悪くないわ」

ハーマイオニーが呟く。ロンはハーマイオニーに近付くと、彼女の手から成績表を奪い取った。

「それ見ろ、Oが九個、Eが一個、『闇の魔術に対する防衛術』だ。——君まさか、がっかりしているんじゃないだろうな？」

ハーマイオニーは首を振る。それに小さな声でハリーは笑った。

「あの……アキは？」

ハーマイオニーが近付いてくる。小さくため息をついて、一度ポケットに直した成績表を広げると彼女に渡した。

ロンとハリーが、ハーマイオニーの両サイドからぼくの成績表を覗き見る。

「すっげえ、十二ふくろうの天才だ！ ビルとパーシーと同じだぜ！」

ロンが軽く口笛を吹く。ぼくは小さく肩を竦めた。キラキラした眼差しでぼくを見つめるハーマイオニーの視線を、そつと避ける。

「これじゃあ主席は待ったなしだな。来年は君も監督生と同じ広い風呂を使えるぞ！」

「はは……」

広い風呂も、十二ふくろうも、あまり達成感を感じない。将来の選択肢が広がったからと言って、ぼくの『ホグワーツ教師』という将来の夢には対して変わらないし——そもそも、このぼくに将来なんてあるのだろうか。

幣原秋の人形に過ぎない、このぼくに。

かと言って、喜んでくれる人たちにこんな暗く重い内心を悟られたくなかった。

だからぼくは、精一杯の虚勢を張って、心に幾重のベールを被せ、せめて嬉しそうに「ありがとう」と微笑んだ。



それからの『隠れ穴』での生活は、ダーズリー家に比べることすら恥ずかしくなるほどの、とてもとても素晴らしいものだった。ハリリーの誕生日には——失礼、一応は、ハリーとぼくの誕生日には、豪華な料理とプレゼントが用意された。

ふくろうは遠く離れた場所に住む友人からもプレゼントを運んで来てくれる。その中でも、綺麗にラッピングされた小包の差出人を見て、ぼくの心は高鳴った。

ぼくの、世界で一番可愛い彼女、アクアマリン・ベルフェゴール。彼女からのプレゼントに心拍数の上昇は止まることを知らない。

しばらく小包を手を固まっていたら、大きいため息をついたジニーに思いつきり背中を叩かれた。痛い。

「全く、いつまでも惚けてないでよ。付き合って何年経つんだっけ？」

「えっと、今で一年と七ヶ月……」

「あつきれた！ それでまだキスもしてないってワケ？」

「声が大きいよジニー！」

わたわたと周囲を見回すぼくに対して、教え諭すようにジニーは自分の腰に両手を当て、ぼくに向かい合った。

「付き合い方なんてそれこそペアの数ほどあるし、別に強制はしないけど……アキ、ちゃんと彼女のこと、大事にしてるの？ 寮だって違うんでしょ。ちゃんと会ってる？ 好きだって伝えてる？」

「う……」

そう言われると、痛い。

「この前の、魔法省でのことだってそう。去年、時計塔から飛び降りようとしたときだってそう。アキは勝手だよ。すごくすごく、心配したと思うよ、彼女さん。だって私も死ぬほど心配したもの。ハリーだってそうよ。いくらあなたが強くて……強いせいで、アキがここからいなくなるのなら」

ジニーはぼくの手をしっかりと握り、目を見て告げた。

「そんな強さ、いらないよ」

「……………」

「あなたがそんな、いつまでも向こう見ずで、自分を大切にしない自己犠牲の姿勢を崩さないんだったら——いつか終わるよ。……好きなんでしょ？ 大切にしたいんでしょ？ ……なら、大切にしてください。あんまり自分の彼女を、泣かせないで」

するりとぼくの手を離し、ジニーは部屋を出て行った。

残されたぼくはしばらくその場に立ち竦んでいたが、息を吐いて、少しだけ笑った。

「……随分と年下の子に諭されるなんて、ねえ……」

前髪を軽く引つ張ると、目を伏せた。

「……アクア」

君のことも、色々と考えないといけないのかもしれない。

第10話 人生最後の悪足掻き

ロンドンには、三日に二日は重苦しい雲で陰っていたが、しかし今日ばかりは天気も空気を読んでくれたようだ。イギリスの秋は曇りばかりだけれど、今日は久しぶりの青空だった。

カラツとした陽気に、上着を脱ぐかどうか迷った。ひとまず、襟元のボタンを一つ外すだけに留めておく。

招待状を手に、ぼくはゴブレットの谷にある広場へと足を運んでいった。

今日は、ジエームズ・ポッターとリリー・エバンスの結婚披露宴の日だ。いや——もうエバンスじゃなく、リリーはポッター夫人、となつたのか。

時間を確認すると、もう三時を回っている。とつくに披露宴は始まっていた。仕事を一つ片付けていこうと思っていたら、思った以上に長引いてしまった。

ふと、気が向いた。

わざとりボンタイを乱暴に緩める。ぼくらしくない行動に、気付いてくれるだろうか。

広場には、色とりどりのテントが立ち並んでいた。中からは華やかな音楽が漏れ聞こえている。

入り口の垂れ幕をくぐり、受付係に招待状を渡して中に入った。そこには数多くの参列者の姿があった。親族と思われる年配の方々に、ホグワーツ時代の学友、そして先生方。見知った顔もちらほら見える。

音楽は今、弾むようなダンスミュージックを流していて、綺麗な衣装を身に纏った参列者が手に手を取り合い踊っていた。

邪魔にならないよう端を通り、壇上にいるジエームズとリリーの元へと向かった。挨拶に訪れる人も途切れていたようで、ぼくはすぐに二人と会うことが出来た。

「秋！」

リリーが輝く微笑みで立ち上がった。

真っ白のウエディングドレス姿の彼女は、ぼくが想像していたよりもずつとずつと、綺麗だった。もしかすると、ジェームズの隣にいるからかもしれない。

「遅いわよ！ 来てくれないんじゃないかって不安で仕方なかったわ！」

「ごめんごめん……やあジェームズ、昨日ぶり」

「二日酔いで死んでんじゃないかと思ってたよ」

ジェームズはニヤリと笑って言った。そんなことあるもんかい、と、ぼくも笑う。

「あら、秋、リボンタイがズレてるわよ。あなたにしては珍しいわね……」

と、そこでリリーがぼくのリボンタイに手を伸ばした。少し困ったように片眉を下げながら、一旦リボンを解く。

ぼくは少し顎を上げてされるがままになっていたが、ふと視線を感じて目を遣った。ジェームズだ。眉を寄せてぼくとリリーを見ていたが、ぼくの視線に気付いて片頬を吊り上げた。声に出さずに——『この野郎』とな。いいじゃないか、明日からはずつとリリーを独り占め出来るんだから、今くらいは。

「……よし。これでいいかな？」

「ありがとう、リリー」

リリーが、ぼくから一步距離を取る。

普段通りの距離。友達の、距離。

リボンタイにそつと触れた。

「ああ、秋、それとね。ハンカチ、いつ返せばいいかな？」

「いつでも構わないよ。そのうちまた、会う時にでも」

「リリー、秋から借りたのかい!？」

素っ頓狂な声を上げてぼくらの会話に割り込んできたのはジェームズだ。ええ、とリリーは平然と頷く。

イギリスに古くから伝わる言い伝え。花嫁は式の当日、四つものを身につけると、生涯幸せに暮らせると言う。

『何か古いものを、何か新しいものを、何か借りたものを、何か青いも

のを』。

「だって、秋は私の一番の友達よ。友達からハンカチを借りて何が悪いの？」

「い、いや……だって、その、女友達から借りればいいじゃないか！」
「秋は私が一年生からの友達よ！ あなたなんかとの付き合いよりもっと前からなのよ！」

リリーの剣幕に、ジェームズはタジタジとなっている。まあまあ、と二人の間に割って入った。

「それよりさ、ジェームズ」

ずずいっとジェームズに顔を近付ける。ジェームズは驚いたように、メガネの奥からぼくを見返していた。

「リリーを幸せにしなかったら、タダじやおかないからね」

「……当然さ。こんな可愛い子を、お嫁さんにするんだからね。それ相応の覚悟してもんがあるよ」

ジェームズが不敵な笑みを浮かべた。それを見て、ぼくは心から安心する。

ジェームズがこの笑顔を浮かべた時は、絶対、間違いなく、成功するんだ。

「結婚おめでとう、二人とも」

ぼくの言葉に、二人は毒気を抜かれたような顔をした。お互いに顔を見合わせ、クスクスと笑い合う。

「ありがとう、秋」



ぼくらが安寧と過ごしている間にも、世間は暗黒時代に突入していた。

日刊預言者新聞は定期購読しているものの、リーマスが持ち帰ってくる情報の方が新鮮で、また情報規制に呑み込まれていないため、随分と実情を——騎士団側には不利な情報を——聞くことが出来た。

「吸魂鬼の襲撃事件がいくつか、それに、イゴール・カルカロフの死体

が、北の方にある掘建小屋で見つかった。その上に闇の印が上がっていたよ——正直なところ、あいつが死喰い人から脱走して、一年も生き永らえたことの方が驚きだがね」

「カルカロフが……」

となると、裏切り者として処刑されたのだろう。新聞ではまだ出ていない情報だし、きつと記事になることはない。

「フロリアン・フォーテスキューのことを聞きましたか？」

「ダイアゴン横丁のアイスクリームの店？」

ハリーが愕然とした表情で問いかける。よくアイスクリームをくれた、いい人だった。

「そう。拉致されたようだよ、現場の様子では」

「どうして？」

「さあね。何か連中の気に入らないことをしたんだろう……昔と同じだよ。狙われる理由は大層なものじゃない……」

疲れ果てた声で、リーマスは呟いた。その横顔を盗み見る。

トンクスがぼくに言った、リーマスの抱える暗闇とは、一体何なのだろう。

「ダイアゴン横丁と言えば、オリバンダーもいなくなったようだ」

アーサーおじさんの発言に、目を瞠った者はぼくだけではない。

「杖作りの？」

「そうなんだ。店が空っぽでね。争った跡がない。自分で出て行ったのか誘拐されたのか、誰にも分からない」

「でも、杖は？ 杖の欲しい人はどうなるの？」

「他のメーカーで間に合わせるだろう。しかし、オリバンダーは最高だった。もし敵がオリバンダーを手中にしたとなると、我々にとってあまり好ましくない状況だ」

オリバンダーがもし、彼らに拉致されたのだとしたら。

隣のハリーは考えが及んでいないようだが、じきに分かるだろう——兄弟杖。四年生の時、優勝杯の移動キーにて連れ去られた先の墓場にて、杖同士が不可思議な繋がりを持ったのだと聞いた。恐らくはそれを避けるため、ヴォルデモートは新たな杖を求めたのかもしれない

い。

時代は確実に、二十年前と変わらぬ風景をもたらそうとしていた。



それから数日後、やっとぼくらはダイアゴン横丁に行くことを許された。

モリーおばさんはずっと渋っていたし、多くのセキュリティ付きではあるのだが。さすがは有名なハリー・ポッター、と言うべきか。茶化そうかと思ったが、ハリーの顔が思った以上に沈んでいたため、言葉を呑み込む。

『漏れ鍋』で、また追加の警備員がいると聞いてげんなりしていたが、その人物がハグリッドと知ると話は別だ。

ハグリッドを両手を広げて迎え入れ、ぼくらはダイアゴン横丁を歩いた。

随分とダイアゴン横丁は重苦しく沈んでいた。辺り構わず貼り付けられた、魔法省の注意喚起ポスターのせいだということは明白だった。また、去年に比べシャッターが閉まっている店も多い。フロリーアン・フォーテスキューは言うに及ばず。

その代わり、怪しげな露店が数多く並んでいた。アーサーおじさんが「私が仕事なら……」と、露店売りの一人を横目に見て呟く。

幣原の時代でも、見たことがある。目に見えぬ恐怖に対し、人はあまりにも無力だ。継るものを欲し、精神の安定を保とうとするのはよく理解出来た。

モリーおばさんと二手に分かれ、マダム・マルキンの店へと向かった。しかし、言っても想定内しか身長が伸びていないため、中に用事はない。残念ながら。悲しいことだ。

だから、ぼくはハグリッドと共に外で待っていることとなった。ベンチに二人腰掛けると、それだけでぎゅうぎゅうになる。それでも収まりのいい場所を探すと、息について空を見上げた。

薄い雲が水色の空に淡くかかっている。雰囲気は淀んでも、空だけ

はいつも変わらない。

「おや、アリスじゃないか！」

ハグリッドの声に顔を向けると、ぼくの同室の友人で、親友……とは、なんとなく表現したくない、強いて言うなら悪友の、アリス・フィスナーが、たった一人で歩いていた。ぎくりと「しまった」という驚愕が顔に張り付いている。

たった一人で。お供も付けず、名門フィスナー家のご子息様が、たった一人で。

「……おいおい」

自由にも程がある。リイフは息子に首輪を付けて、屋敷に縛り付けておくのが一番なのかもしれない。

ハグリッドも難なくその思考に辿り着いたのか、しかめっ面でアリスを手招きしている。愛想笑いを浮かべながら、アリスは「降参」とばかりに両手を上げ、近付いてきた。

「お前さん、一人で来た……は流石にねえわな。お供は？」

「撒いてきた」

一切悪びれることなく、平然とアリスは言い放つ。ハグリッドはやれやれと額を押さえた。

「リイフの苦勞が偲ばれるわい」

「親父が俺を野放しにする方が悪いと、そうは思わないか？　ところでアキ、暇そうだな。ハグリッド、こいつ借りてくぞ」

「お、わあ!？」

言うが早いのか、アリスはぼくの手首を引つ張って駆け出した。足が纏れそうになりつつも、慌てて踏み出す。

背後からハグリッドの制止の声が聞こえたが、アリスが聞く耳を持っていないはずもない。細かい路地をいくつも抜け、ぐねぐねと入り組む角を曲がり、ハグリッドがもうどう頑張っても追いつけないであろうところまで走ってから、ようやくアリスは足を止めた。

「……まで来りや、大丈夫だろ。……はあ」

そう言ってアリスは汗が滲む髪を掻き上げると、シャツの首元をパタパタと扇がせた。

そしてふとぼくを見下ろすと「……大丈夫か？」とやっとおぎなりな心配の言葉を掛けてくる。

「だ……大丈夫と……思うのかよ……」

全身の毛穴から汗が吹き出ているんじゃないかと思うくらい、暑い。呼吸もままならない。身体は酸素を欲しているけれど、呼吸器が大きく息を吸うことを許してくれないから、浅く短い呼吸を繰り返している。それに準備もなく全力ダッシュを求められたから、膝から下、いや、腰から下が、本当にもう、ヤバい。しんどい。

その場に座り込むと、目に入りそうになっていた汗を拭った。あー……もう立ち上がりたくない。

「体力無さすぎ」

「うるっせ……君と一緒に……はあ」

言葉を紡ぐのも面倒臭くて、途中ではあるが切り上げた。しばらくは黙って体力回復に専念する。

「……で？ 一体何の用でぼくを連れてきたのさ誘拐犯」

「誘拐犯って、あーのーな……まあいいや。調べたいことがあったんだよ、ちよいとな」

「調べたいこと？ そりゃあ傑作だ、お供の人を振り切ってぼくを強奪してきたことに値するものなんでしょうねえ。いやいやそんな、大親友であるアリスを疑うような真似なんてしませんよ。きつとそこには崇高で何よりも気高い目的が存在するんだろうね、ああ楽しみだなあ 一体どんなことなんだろう」

「お前、疲れてると普段よりも口数増すよな」

そろそろ立ち上がれ、と手を差し伸べられた。適当に手を伸ばすと、手首を掴まれ身体が持ち上がる。

「お嬢サマから連絡あっただろ。あの関連と……後は、最近闇市場が動いてるから、一応探つとこうと思って」

話しながらも、足は進む。ピンと勘付いた。アリスの目的地は、ノクターン横丁か。

アリスはちらりとぼくを見ると、パーカーのフードをズボツと頭に被せた。自らも明るい金髪を隠すように、カバンから長く真っ黒な

ローブを取り出すと、頭の先からすっぽりと巻きつける。

「行くぞ。妙なことうなよ」

「待って」

アリスの袖を引くと、杖を取り出し振った。とりあえず髪色と目の色だけでも変えてやる。光に輝く金髪を黒に、目の色を青に。それだけで随分と印象が変わった。

アリスは前髪を一房摘むと、光に透かし「上手いもんだなあ」と呟く。微笑んでもう一度杖を振ると、今までぼくがいた場所には、長い黒髪で女の子みたいな顔立ちをした小さな男、ではなく、短い茶髪に緑の瞳をした好青年が立っていた。

アリスはじと目でぼくを見る。

「下駄履き過ぎじゃね」

「うるさい」

アリスを見下ろす気分、というのを味わってみたかったのだ。

ちなみに、味わった感想はと言うと——最高、もう一回やりたい。癖になる。

ノクターン横丁は、ダイアゴン横丁とは全然違う。アングラ感満載、法にギリギリ抵触してるかしていないか……なものばかりが溢れている。

通りは人気がまったくなく、店にも客がいるようには見えない。

「お前に、未成年魔法使いは云々言っても意味ねえんだろうな」

「そうだね、ないよ。だってぼく、未成年じゃないもの」

とつくの昔に成人は迎えて、今じゃどこから見てもいいおじさんだ。悲しくなるからその辺りは直視しないようにしているけど。この人格自体は後天的なものだから、精神年齢はまだ未成年……だと思いたいものだ。

アリスは迷う様子もなく、すいすいと路地を抜け曲がりくねった道を行く。とても初めて訪れたとは思えない。実際、初めてではないのだろう。重ね重ね、ライフの苦勞が偲ばれる。

「何処に向かっているの?」

「知り合いがいるんだ。その人と会って、ひとまず情報が欲しい——」

そこでふと、アリスが言葉を切った。

アリスの視線の先を辿ると、見間違えるはずもない——ドラコだ、ドラコ・マルフォイの姿。緊張しているのか、随分と強張った表情で周囲を見回し、そそくさと路地を曲がって消えて行く。

「あんの馬鹿」

盛大に舌打ちをした後、アリスは駆け出した。今回はまあ予測はしていたから、そうそう焦らずぼくも後を追う。

やがて、ドラコがちょうど『ボージン・アンド・バークス』——闇の魔術こつてりな商品をたんまり取り扱っているお店だ——に入っていく辺りで、ドラコを発見することが出来た。

「一体何の用が？」

「何だって思い浮かぶ……馬鹿が」

アリスは眉を寄せ、憎々しげに扉を睨みつけた。燻んだガラス越しに、こちらに背を向けたドラコの姿は見えるものの、話し声は当然ながら一切聞こえない。

ため息を吐いたその時だ。

「アキー！」

心臓が口から飛び出るかと思った、それほど驚いた。慌てて悲鳴を呑み込む。

さつきまで誰もいなかった通りから突如現れたのは、我が兄、ハリー・ポッターだった。ハリーだけではない、『透明マント』からロンとハーマイオニーも出てくる。

「アキだつて!?! ハリー、君気が変になったのかい？ そんなにいなくなつたアキが心配？ いい加減弟離れしなよ」

「馬鹿言うなよロン。ぼくがアキを間違えるはずがないでしょ。ね、アキ？」

……一体どうして、どうやってこの兄はぼくを見分けているのだろう。

そう言えば、ハリーは「君と幣原秋、どっちが今出てきているのかなんて、一目見ただけで分かるに決まっているじゃない」と豪語していたっけ。あれはてっきり出まかせだと思っていたが、ひよつとする

と本当のことだったのかもしれない。ぼくが未だに見間違えるフレッドとジョージも、ハリーに掛ければ百発百中だしなあ、観察眼が いいのかも。

「……信つじられない。どうやって分かったのさ」

「んー、十六年間一緒に育つて来た勘？　十六年じゃないかもしれないけどね。んで、そこにいるのはアリス、と。案外雰囲気変わるもんだね」

「アリス!？」

驚いたように声を上げたのはロンだ。諦めたようにアリスは軽く微笑むと「よ」と片手を上げる。

「ねえアリス、こないだの全英チェス選手権見た!?　その準決勝の試合について話したいんだけど……」

「ロン、それは後でな。それより、中の様子を聞きたいんだろ?」

ニヤリと笑って、ハリーは手元の『伸び耳』を軽く振った。

ああ、とぼくも口元を緩める。

『伸び耳』が伸ばせる限界まで遠ざかって、ぼくらは紐の端に耳を傾けた。五人頭を寄せ合って、はさすがに辛いから、『響かせ呪文』で『伸び耳』から拾った音を大きくし、この辺り一体に『人払い呪文』と『防音呪文』その他、一通り呪文を掛けた。

『……直し方を知っているのか?』

『かもしれない。拝見いたしませんと何とも。店の方にお持ちいただけませんか?』

『出来ない……動かすわけにはいかない。どうやるのかを教えてくださいだけだ』

僅かな沈黙。ドラコの虚勢に満ちた声を、店主が吟味しているのだろう。

『さあ、拝見しませんと、なにしろ大変難しい仕事でして、もしかしたら不可能かと。何もお約束は出来ない次第で』

『そうかな?　もしかしたらこれで、もう少し自信が持てるようになるだろう』

ドラコのそんな声は、今まで初めて耳にした。明らかな優位を確信

しているものの、何かを恐れているような、そんな二面性を持った声音。

足音と、何か擦れるような音を『伸び耳』は拾った。

『誰かに話してみろ。痛い目に遭うぞ。フエンリール・グレイバックを知っているな？ 僕の家族と親しい。時々ここに寄って、お前がこの問題に十分に取り組んでいるかどうかを確かめるぞ』

『そんな必要は……』

『それは僕が決める。さあ、もう行かなければ。それで、こっちを安全に保管するのを忘れるな。あれは、僕が必要になる』

『今お持ちになつてはいかがです？』

『そんなことはしないに決まっているだろう、馬鹿め。そんなものを持って通りを歩いたら、どういう目で見られると思うんだ？ とにかく売るな』

『勿論ですとも……若様』

『誰にも言うなよ、ボージン。母上も含めてだ。分かったか？』

『勿論です。勿論です』

ドアの鈴が音を立てる。ドラコが店を出たのだ。

と、ハリーがぼくの表情を見「顔色悪いよ、大丈夫？」と声を掛けてきた。

「……フエンリール・グレイバックつて今、ドラコ言ったよね。あれは、リーマスの……リーマス・ルーピンを、幼い頃に噛んだ奴だ、狼人間だ」

ハリーの顔色も一瞬で変わる。

ドラコを追おうとアリスが立ち上がり掛けたが、それを誰であろう、ハーマイオニーが止めた。少し毒気を抜かれた表情で、アリスは目を瞬かせハーマイオニーを見る。

「ここにいて」

ハーマイオニーは立ち上がると、止める間もなく店の中へと入って行った。

あまりの早業にぼくら男性陣は目が点だ。

「すつげえ度胸だな……」

「さすが、ハーマイオニー」

回収しかけていた『伸び耳』をもう一度伸ばして、ぼくらは再び耳を澄ませた。

ハーマイオニーの明るい声が響く。

『こんにちは。嫌な天気ですね?』

「おい、大丈夫か?」

アリスが心配そうに呟いた。早速暗雲が立ち込めて来たが、はてさてどうなることか。

『あのネックレス、売り物ですか?』

『千五百ガリオン持っていればね』

『ああ——ううん。それほどは持っていないわ。それで……この綺麗
な、ええつと、髑髏は?』

『十六ガリオン』

『それじゃ、売り物なのね? 別に……誰かのために取り置きとかでは?』

「ハーマイオニーつて、どうしようもなく演技の才能がないんだね」

ロンがしみじみと囁いた。

ハーマイオニーの問いかけに店主は答えない。これは下手を打つたとハーマイオニーも感じたのだろう、今度は直球で行った。

『実は、あの——今ここにいた男の子、ドラコ・マルフォイだけど、あの、友達で、誕生日のプレゼントをあげたいの。でも、もう何かを予約してるなら、当然、同じ物はあげたくないの、それで……』

アリスがため息と共に口を開く。

「それに嘘も下手だ。頭と嘘は相関がないってことがよつく分かった。アキとか見ていると、頭いい奴は嘘も上手いのかと勘違いしそうになるからな」

「ちよつとアリス、誤解生むようなこと言わないでくれませんかね」

全く酷い奴だ。友達甲斐がない。

『失せろ!』

鋭い怒声が響くのと同時に、ハーマイオニーが飛び出して来た。ぼくらはため息をついて迎え入れる。

ロンがハーマイオニーに透明マントを着せながら、肩を竦めた。「ま、やってみる価値はあったけど、君、ちよつとバレバレで——」
「あーら、なら、次のときはあなたにやってみせていただきたいわ。秘術名人様！」

アリスは目を細めると、店の前まで歩いて行つた。店は既に『閉店』の札が掛かつており、分厚いカーテンが窓を覆っている。

「……なあ、アキ」
「うん」

アリスが考えていることが何なのか、手に取るように分かつていた。

ドラコが店主に見せていたその『何か』。一体それは何なのだろう。「アキ、アリス、行くよ！」

ハリーがぼくらに声を掛ける。アリスはゆるりと首を振り掛けたが、ロンがそれを遮った。

「ねえ、準決勝のロウがCの4にナイト打ったところあったじゃん。でもあそこは絶対にクイーンを動かすべきだったとそう思わないか？」
アリスの興味が一瞬でチェスに行つたのが、手に取るように分かつた。

開きかけた口を、ゆつくりと閉じる。

「……戻ろう、ダイアゴン横丁へ」

杖を一振りして、踵を返した。

第11話 折り重なる十字架

『全員殺せ』

その声に、一瞬だけ目を伏せ。

「はい」

頷いた。

『行けるな』

「行けます」

スツと息を鋭く吸い込むと、左手を目の高さまで掲げた。指を鳴らす。

途端、眼前に広がる家々が一瞬で、土埃すらも立てずに崩壊した。

『姿くらまし』対策、完了』

「ありがとうございます」

答える声を乱さぬまま、飛んできた呪文を払った。振り返れば、杖を持った死喰い人が一人、不意打ちが効かなかったことに慌てて逃げていくところだった。

しかし、簡単に敵に背を向けるのは、頂けない。

「ねえ、今ここにいる君の仲間たちは、全部で何人？」

足元を『凍結呪文』で動けなくさせて、ぼくは歩み寄った。その死喰い人は真つ青な顔で足元の氷を外そうと必死になっていたが、ぼくの呪文がその程度の悪足掻きでどうにかなる訳がない。

「ねえ」

「い……言うものか」

ふうん、とぼくは首を傾げた。見ると、案外年若い。ぼくより少し上くらいか。

「お前……幣原秋か」

「おや、知ってたの？ ごめんね、ぼくは君のことを全く知らないから。……さて。全身の関節を逆向きにされるのと、『磔の呪文』どっちがいい？」

「お前……お前なんか」

「出来ないって？」

目を細めて、笑顔を浮かべた。

「生憎だけれど、闇祓いはそんな優しい部署じゃない」

その時、通信が入った。右手で、右耳に止まっているトランシーバーに触れる。

『ここにいるのは三人。全員雑魚だ、幹部クラスは誰もいない』

エリス先輩の声だ。ぼくは小さな声で「了解」と呟くと、トランシーバーから手を外した。

「残念、君を吐かせる手間が省けちゃった」

杖を、彼の心臓に合わせる。

「最後の一言だけ、聞いてあげる」

死喰い人は、ぼくを憎悪の籠った眼差しで睨みつけた。

「……地獄に落ちろ」

「……言われなくても、きっと」

ぼくの行く末なんて、決まり切っている。



二週間前は四人殺した。

十日前は二人殺した。二人、仲間が死んだ。

八日前は四人殺した。

七日前は一人殺した。一人、仲間が死んだ。

五日前は三人殺した。

四日前は三人殺した。

三日前は五人殺した。四人、仲間が死んだ。

二日前は二人殺した。一人、仲間が死んだ。

昨日は四人殺した。

今日は三人殺した。

「……これで地獄に落ちないって方が、どうにかしてる……」

明日は何人殺すのだろう。

明後日は何人殺すのだろう。

明日は何人仲間が死ぬのだろう。

明後日は何人仲間が死ぬのだろう。
考えることは、もう諦めた。

考えたところで、気が狂い何も出来なくなるまでの時間が短くなるだけのことだ。

ただ、両親の復讐のためだけに。

ヴォルデモートを殺すために、今のぼくは生きていた。

ぼくが入った当初の第一班は、この半年で半分の顔ぶれが変わった。

季節は、滑るように冬となった。

どうしてぼくの罪は、誰も裁いてくれないのだろう。



「……またか」

濃い霧の中、ジエームズは舌打ちした。

「また外れか。……どうなっているんだ」

不死鳥の騎士団での任務は、最近失敗続き、外れ続きだった。

今日もそうだ。会合が開かれると言われていた家は、全くのもぬけのからだだった。

数年は放置されていただろう空き屋で、ネズミやらクモやらもうじやうじやした害虫にわんさか出会っただけだ。余計に疲れてしまった。害虫の類は得意じゃないのだ。家で見つけたら、その後数時間は掃除しないと気が済まない。

「……誰かが、この情報を流してるのか」

「その可能性が、残念だけど強くなってきた。……秋、闇祓いの方では？」

「こんな作為的なものは感じられないよ」

「そうか……」

ジエームズは眉を寄せて目を伏せた。

「ねえ秋。じゃあ、このことは気付いてる？」

「何が？」

帰路、ふとジェームズは足を止めてぼくをまつすぐに見つめた。

「空振りの任務の時は、僕ら……僕と君、それにシリウス、リーマス、ピーターの誰かが、必ずメンバーに加わっている」

それは、どういう。

「……後で確かめてみてくれ。でもあくまでも、誰にも悟られないで」
「誰にもって……シリウスやリーマスやピーターにも？」

「そうだ」

ジェームズの声は、はつきりとしていた。

それは、つまり、ぼくらの中の誰かが——ジェームズはそれを疑っている、ということなのか。

「……………」

口を開きかけ、すぐに閉じた。

こちらでも——こちらでも。

ぼくらの友情は、歪みを見せ始めた。



「お前、聞かないのな」

人氣が一切ないノクターン横丁を歩きながら、アリスはふとぼくに言った。

「何を？」

「お嬢サマの現状について。普通自分の彼女が他の男の家で寝泊まりしていると知ったら、もう少し焦って色々聞く気があるけれど」

「君を信用しているのさ、アリス。君に、ぼくから彼女を寝取るような甲斐性はないって思っているから」

「よーし、杖を捨てろ、拳を握れ」

「寝めたつもりなんだけど!？」

ダイアゴン横丁に戻るとすぐさま、アリスはサングラスを掛けた屈強なスーツ姿の男性三人に引っ捕らえられた。

大袈裟かと思うだろうが、事実そんな感じだったから仕方がない。途中「ライフさんに殺されるだろ!」これ以上減給食らってたまるか

クソガキ大人しくしやがれ！」という悲痛な叫び声が聞こえた気がした。気のせいだと思いたい。

とはいえ。

アリスやハグリッドと別れて、ぼくとハリー、それにロンやハーマイオニー、ジニーとモリーおばさんは、非魔法界にある一台のバスへと乗り込んだ。

行き先は、ロンドン市街。

聖マンゴ魔法疾患障害病院だ。



ロビーで簡単な受付を済ませた後、ぼくら一行は『隔離病棟』へと向かった。

夏休みだからか、長期療養者が集うこの病棟も賑やかだ。ぼくらのすぐ脇を、入院着を着た少年が兄らしき人の手を取り楽しそうに駆けて行った。

思わず、と言った調子で、ハリーは彼らを振り返る。

ぼくは、振り返らなかつた。

白い扉を開けると、シンとした静寂が出迎えた。モリーおばさんが窓を開けると、ふわりと風が舞い込む。

重苦しい真っ白のカーテンが膨らみ、端がはためいた。窓枠に置かれている鮮やかな黄色の花だけが、このモノクロームに染まった世界の中で、色がある。

シリウスは、以前に見た姿と全く変わらずにただ、眠っていた——眠っている、ようだった。

ぼくらの誰もが、痛い傷口から目を背けるかのような沈鬱な表情を浮かべていた。

そのことに気付き、ぼくは考える。

ぼくは責任を取らなければならない。

シリウスを生かし、この世に留めた責任を。

「……………」

眠るシリウスに歩み寄ると、ハリー達がぼくの表情を窺うことが出来る角度で、シリウスに微笑んだ。

「生きていてくれてありがとう、シリウス」

ハツと鋭く息を呑んだのは、一体誰だったか。無視して、シリウスの顔をそつと撫でる。

「君は今まで沢山頑張ったよ。だから、好きなだけゆっくり休みな。あ、でもあんまり休み過ぎたら、皆待ちくたびれちゃうからね。気付いたら一人置き去り、なんて嫌でしょ？ ……仲間外れは大嫌いだったもんね、君」

ぼくの一举一動を、ハリー達は固唾を飲んでみている。

全てを見られていることに、ぼくは酷く自覚的だった。

「だから、早く目を覚ましなよ」

優しく、慈愛に満ち溢れた言葉を掛ける。

ハリーにも、誰にも、この内面は読み取らせない。言葉にも表情にも、幾重にベールを巻きつけて。

ぼくは『幣原秋』を演じる。

「……シリウス、おじさん」

泣き出しそうな声が、空気を震わせた。眼鏡の奥でハリーの瞳が、ふるりと揺れる。

ベッドに歩み寄ったハリーは、リノリウムの床に膝を付くと、囁いた。

「……もう一回、話をしたいよ。次に目を覚ましたら、今度こそ一緒に住もう……父さんと母さんの話を、聞きたいよ……」

項垂れた肩が震える。ロンとハーマイオニーが、ハリーに駆け寄った。

その姿を見て、ぼくはシリウスから数歩離れる。

振り返ると、心配そうな眼差しでぼくを見つめるモリーおばさんと目が合った。彼女を誤魔化すのは難しいが、誤解の矛先を示唆するとはそれよりも容易い。

夢げに微笑みを滲ませると、瞳を揺蕩わせ「お手洗いに」と囁いた。軽く目頭を押さえると、それだけで彼女はぼくが涙を拭いに行くもの

だと思ってくれたようだ。

廊下へと出ると、辺りを見回した。少し離れたところで、子供の入院患者と楽しげに笑っている女性の看護師さんを見つけ、駆け寄る。

足音に看護師さんは顔を向けると、笑っていた表情を一変させ「こちら」とぼくを叱った。

「病院内は走ったらダメでしょう」

「ご、ごめんなさい……」

実年齢よりも若く見られる童顔に、女子にも間違えられる容姿、それを最大限に利用する。

シユンと顔を俯かせたぼくに、看護師さんは気にかけるように軽く腰を屈めた。

「どうしたの？」

「……ライ・シュレディンガーって先生を探してるんです。本日はいらっしやいますか？」

看護師さんは首を傾げると「ちよつと待ってね」と言っ、ポケットから手帳を取り出し確認する。

「残念だけど、今日はお休みみたいね」

「あー……そうですか」

そんなにぼくの運はよくないらしい。まあそもそも、昔から運の良さを感じたことはほとんどない。むしろ不運な目にばかり遭っている気がする。

はあ、と肩を落とした。

「あ、でも、今日は日曜でしょう？　なら、いつもの場所にいるかもしれないわ」

「いつもの場所？」

看護師さんの言葉に目を瞬かせる。

看護師さんは可愛らしく片目を瞑ったが、その表情には少しだけ沈鬱そうな表情が見え隠れしていた。



看護士さんの言う『いつもの場所』に、ライ先輩はいた。

『いつもの場所』——隔離病棟『ヤヌス・シツキー病棟』六階の角部屋。重苦しくカーテンが引かれた部屋の中、ライ先輩はいた。

声を掛けるのを躊躇したのは、ここがどういう病室なのかが分かったからだ。病室の前に掛けられている三人の名前は、誰もが苗字に『シュレディンガー』とついていた。

——彼らが、ヴォルデモートがライ先輩を排除しようとしてライ先輩に嵌めた『枷』。三十年前から頑として在り続ける足枷。

……この枷は、確かに。

重い、なあ。

「……アキ」

ライ先輩がふとこちらを振り返った。立ち上がって、病室の扉を開ける。入れ、ということなのか。

躊躇しつつも、薄暗い病室に足を踏み入れた。

ベッドが三床。寝かせられている人の姿形までは、暗くて伺えない。

情けなくも、少しホツとした。良かった、とまで思ってしまった。

「申し訳なく思う必要はない」

こちらを見もせず、ライ先輩は呟いた。

ぼくに対して椅子を勧めると、少し離れた位置で自分も腰掛ける。照明のせいかな、少し離れただけなのに、格段に表情を読むことが難しくなった。元々この人は、表情に乏しいのだし。

「……シリウスの容体を聞きに来たのか。以前と全く変わらない。悪化してもいないが、良くなつてもいない。身体の臓器や機能に一切の損傷はない。ただ魂だけが、帰ってきていない」

そこでライ先輩はチラリと三つのベッドに目を向けた、ようにも思えた。

「……研究所では、どういうことをされているんですか？」

「大体は呪文による脳機能の障害についてを扱っている。忘却術により改竄された記憶の元データを取ったり、服従の呪文がどの程度他人を害すか調べたり。……磔の呪文が元での発狂は、また少し違ってく

るが」

「……ネビルのお父さんとお母さん、ですね」

ライ先輩は静かに首肯する。

「……知つての通りだろうが、ダンブルドアと不死鳥の騎士団が、この聖マンゴに相当の守護呪文を重ね掛けした。シリウスの寝首をかく奴らの心配は、あまりしなくていい」

「……それは」

少しだけ安心する。もう身の回りで、誰かが死ぬのは御免だ。

「……ところで、リーマスを知っているだろう」

「リーマス？ そりや、まあ……」

いきなりの名前に目を瞞った。トンクスといいライ先輩といい、一体どうしたのだ。

「彼がよく、シリウスの病室に訪れるのは知っているか」

「まあ、予想は出来ていましたが」

そりやあそうだろう。何年来の友人だと思っている……途中で色々あつたりはしたが。

ライ先輩はしばらく黙りこんだ。やっと出てきた言葉は、少し不思議なものだった。

「リーマスは追い詰められている」

何に？ どうして？ 脳内に疑問符が湧き上がるも、ひとまずは話を聞こうと口を噤んだ。

「俺は……話をするのが下手くそだから。話がよく分からなかったら、すまない。だけど、今のリーマスは凄く、不安定だ。……それも仕方ないのかもしれない、けど、でも」

少し乱暴な仕草で、ライ先輩は髪を掻き毟った。軽く頭を振ると、光の灯った瞳で虚空を見つめる。

「……そのリーマスに、この世でただ一人、お前だけが寄り添える、のだと思う」

「……リーマスは、何に對して追い詰められているんですか？」

ぼくに對してそんなことを言うのなら、ライ先輩は分かっているはずだ。人の考えていることが分かってしまう能力を持つ、この人なら

ば。リーマスの悩みも憂いも、全て分かった上で、こうして話しているのだろうか。

しかしぼくの質問に、ライ先輩はゆるりと首を振った。

「……これ以上は俺が口を出す部分じゃない、から」

……それもそうか。

「……妙なことを言ったな。俺はお前と違って、思っていることを上手く口に出来ない。混乱させたなら、すまない」

「い、いえ……」

ライ先輩がわざわざこうして伝えてくるということは、重要なことなのだろう。魔法魔術大会の際、幣原に対して忠告めいた言葉を口にしたのと同じで。

同じ、なのだとしたら。

リーマスは一体、どうしたのだろう。

何を思い悩み、憂いているのだというのだろう。

「……………」

思い至ることは、ある。

せっかく誤解が溶けたばかりのシリウスの、早すぎる離脱。これが、リーマスの心に深い影を落としていることは想像に難くない。

——幣原。

君なら何か、知っているのだろうか。

ぼくの知らない、リーマスのことを。

第12話 取り損ね、零れ落ちる

ドアベルの音で、目が覚めた。闇祓いの報告書を書きながら、眠ってしまっていたのか。

自分が癖字の自覚はあるが、うとうとしながら書いた自分の字は、どうしようもなく見るに堪えない。後で全部書き直さなければ。

外は雨が降っているようだ。雨粒が地面を打ち付ける音が聞こえる。

しかし一体誰だろう、と指を鳴らした。空中に浮かぶ長方形が、扉の外を映し出す。

そこに映った人物に、目を瞠った。

慌てて部屋を出、廊下を歩きながら「……誰だ？」と確認する口調で問いかけた。

『……秋先輩。誰か、なんて分かっているんでしよう？ ……僕です。レギュラス・ブラックですよ』

朗らかな声だった。彼から『秋先輩』なんて呼びかけられる日が来ようとは。

想像もしなかった出来事に、少しばかり驚く。

躊躇いながらも、扉を開いた。

「レギュラス……」

信じられないほど穏やかな笑みで、目の前の彼、レギュラス・ブラックは微笑んだ。

彼の右手には、屋敷しもべ妖精の手が握られている。屋敷しもべ妖精はぼくを物凄く警戒するような目で見つめていたが、ぼくの視線に気付いたか、レギュラスの後ろにパツと隠れてしまった。

レギュラスの、男児にしては少し長めの黒髪から、ポタポタと雫が滴っている。雨に打たれたのか。

レギュラスの背後には、雨が糸のように降り続いていて、見慣れた玄関前に灰色のベールが掛かったようだった。

「濡れているじゃないか。立ち話もあれだし、中に入ってくれよ。ちよっと待ってて、今タオルを持ってくるから……」

そう言つて身を翻したぼくの腕を、レギュラスが掴んだ。驚いて振り返る。

「長く時間は取らせませんから。大丈夫です」

その笑顔に、表情に、ゾクリとした。

凄く綺麗で、完璧な笑顔だったから。

「貴方は正しかった。そんなことに今更気付いた。もう、遅過ぎるけれど……それでも、貴方に、最後に言いたかった」

レギュラスは微笑んで、ぼくに告げる。

「僕は、貴方と出会うことが出来て、本当に良かった」

それは——まるで。

最期の言葉のようで。

どうしてそんなことを言うのだ。

どうして、ぼくなんかに。

「……凍えてしまう。やっぱり入ってくれないか。積もる話もあるんだ。君が好きなロシアンティーを淹れてあげよう。タオルを持ってくるから」

いいね、ちゃんと居るんだよ。

そう念押しして、ぼくは慌てて部屋へと駆け戻った。バスタオルを引つ掴み、慌てて玄関へと戻る。しかし既に、レギュラスの姿は消えていた。

「……っ」

迷つたのは一瞬だった。

雨空に飛び出すと、辺りを見回す。しかし雨と霧で視界は煙つていて、数メートル先すらも見通せなかった。

「レギュラス？ レギュラス！」

声を限りに叫ぶ。しかし頭のどこかで、あの後輩はぼくの呼ぶ声に絶対に返事なんてしないんだと、分かっていた。

雨音に混じつて、バチンという『姿くらまし』特有の音が聞こえた気がした。

ハツと息を呑み、その方向に杖を向ける。魔力の痕跡だけでも見つかれば、その微かな残り香から、向かった先を特定することが出来る

からだ。

レギュラスが、ぼくにあんなことを言うなんて。普段の毒舌は一体どこに行っただ。

そんな言葉を残して、勝手に満足していくんじゃない。人を自己満足に巻き込むな。

ふつつつと湧き上がる怒りは、焦る感情に依るものだろう。

レギュラスが、このまま消えてしまうのではないか。そんな予感が、気持ちを急かせる。

「……っ、あつた」

見つけた、魔力の痕跡。杖で触れると、それは薄い紫の光となって浮かんだ。

雨に混じって消えてしまうよりも早く、解析に掛ける。じりじりと待つだけの時間も、気が焦れる。

「どこだ、どこ……」

垣間見える情景からして、洞窟、のようだ。どうしてレギュラスは、こんなところに用事があつたのだろう。

しかし、迷っている時間はなかった。既にかかなりの時間を浪費しているのだ。ぼくが今着ている服も、かなりの水気を吸って重たくなっている。防水呪文を掛けることすら忘れていたのか。

ついつと指を振ると、一瞬でローブの水は蒸発し、太陽に照らされていたような温かみを帯びた。

どこかは分からないが、行ってみるしかないだろう。そう思って、ぼくは『姿くらまし』をした。

辿り着いて真つ先に感じたのは、足元の不安定さだ。

すぐ近くには崖があり、磯の香りがすることから、ここは海にほど近い場所のようだ。

崖と反対側に、洞窟がある。先ほど垣間見えたのは、この洞窟か。

洞窟は、半分が海の水に浸かっていたが、ぼくが足を踏み出すと、瞬時にパキパキと小さな音を立てて凍りついた。抜けないよな、と一応地面を踏み鳴らすも、まあ安心していいだろう。

杖明かりを頼りに、ぼくは歩いた。

大きな洞穴へと続く階段を上ると、突き当たりに出た。

眉を寄せ壁に近付いて——真新しい血だまりを発見する。

「これは……」

思わず目を細めた。杖を向け、呪文を放つ。

しかし『爆破呪文』でもってしても、この壁にはヒビ一つ入らなかった。

「んー……」

真新しい血。この先をレギュラスが進んだのだとしたら、この血は恐らくレギュラスのもの。

何かしらの事故で、ピンポイントにここに血が溜まることになったとも考えにくいし、レギュラスの意思が働いていることは間違いがないだろう。

もしかして、と思つて、ぼくは右の前腕を捲り上げた。一振りで杖を短剣に変えると、眉を寄せる。

「……っつー」

手首から滴る血を壁に振りかけると、途端壁にアーチ状の輪郭が浮かび上がった。次の瞬間、その形に壁が切り抜かれる。

先は、真つ暗だった。光は一切存在しない。目の前には大きな湖が広がっていて、縁の部分は通れそうだ。

湖の水面に光を近付けると、光を感知したか大きな魚の影が寄つてきた。こんなところにも魚がいるのか、と目を見張り、瞬時に魚じゃないことに気が付いて、ぼくは思いつきり後ずさった。

「な、に……」

魚なんかじゃない。あれは——人間だ。亡者だ、ホグワーツ時代、授業で習ったことがある——ヴォルデモートが亡者の軍隊を作っているという噂も、同時に思い出した。

壁に手をつきながらも、立ち上がった。水面を見ないようにしながらも、歩く。

こんなものが自然に出来るはずがない。誰かが魔法で作ったものだ。ならば、魔法の痕跡を探せばいい。

しかし、悪趣味なことだ。アズカバンの成り立ちを聞いたときも

ゾツとしたが、ここもそれなりに酷い。吸魂鬼の姿を一体も見ないのが、嘘のようだ。

「……ん」

行き止まり、のようだ。しかし、まだ仕掛けはあるのだろう。ぐるりと杖を空中で振り、魔力の痕跡を探す。労せずすぐに見つかった。空中にある透明の鎖を引っ張ると、やがて水底から一隻の小舟が現れる。

一瞬躊躇したが、乗るしかない、と腹を括った。

舟はゆつくりと進んでいった。オールを漕ぐ必要もない、楽なものだ。

しかしゆつたりと腰掛ける気にもなれず、ぼくは立ったまま、真っ暗な先を見つめていた。

やがて、遠くに緑色の光が見えた。なんだろう、と目を凝らす。舟がその光の方へ向かっているのは明らかだった。

しかし、ぼくがその光が何かを確かめることは、ついぞなかった。光の近くに、暗い影。

ぼくの視力は決して悪くない、誰かが倒れている、ということが視認出来た瞬間、ぼくは小舟の縁先を蹴った。風を操り、風に乗って、その人物の元に——レギュラスの元に、向かう。

「レギュラス！」

レギュラスに水面から手を伸ばす亡者を、杖を横に振り薙ぐことで払った。

「死ぬなっ、レギュラス！」

レギュラスの身体を掴み揺さぶる。

「生きるんだよ、君は！ 遺言めいた言葉をぼくに残して、勝手に死のうとしてんな!!」

そう叫ぶと、レギュラスは薄っすらと目を開け、静かに微笑んだ。

「——貴方くらいですよ、僕に遠慮なく触れてくる人なんて……」

そんな言葉が返せるなら、大丈夫だろう。皮肉げな口調に、安心する。

「掴まって。絶対に離さないでよ」

レギュラスの左腕を取ると、彼の身体を背負った。もつとも、ぼくよりもレギュラスの方が大分と背が高いため、自然と引きずる形となってしまう。

亡者は、レギュラスという獲物をぼくに横から搔つ攫われたことに酷く腹を立てたらしい。一体この湖の中に何体いたのか、考えるだけでぞつとする数が一斉に襲ってきた。杖で払うも、キリがない。

亡者には、磔の呪文も死の呪文も効かない。一斉に炎で焼き払ってもいいが、それだと小舟まで一緒に燃えてしまうかもしれない。あの小舟は木製だったから、火がついたらさぞかしよく燃えることだろう。

『姿くらし・現し術』も、この場所ではきつと封じられている。

背中から滑り落ちそうになるレギュラスを、慌てて背負い直した。

お、重い……こういう時、自分の体型の貧弱さに泣きそうになる。

「このままじゃ、二人とも亡者の餌食になってしまいます……貴方だけでも、逃げてください……」

「……っ、嫌だ！ 誰が君を置いていくものか……っ、君が死ぬなんて、神が許したところで、僕は絶対に許さないぞ……っ！」

レギュラスから、そんな言葉が聞こえた。奥歯を食い縛る。

勝手に諦めるなんて許さない。

そんなこと、もう何人もの人を殺したぼくが、言えた義理じゃないのは分かっているけれど。

それでも、レギュラスには死んで欲しくなかった。

死んでいい人間なんているものか。そんな人、誰一人としていないんだ。

——その考えが、誰よりも自らの首を絞めると、何よりも自分の罪深さに絶望することになると、分かっていた。

分かっているけど、願ってもいいだろう？

生きていて欲しいと、そんなことを勝手に望むくらいは、いいだろう？

「……………」

レギュラスは、大きく息を吐いた。そして――

驚いて、何も対応が出来なかった。レギュラスに突き飛ばされ、ぼくは無様にもすつ転ぶ。

瞬間、ぼくの上に亡者の重みはずしりとのし掛かった。重みに喘ぎながらも、ぼくは呆然とレギュラスを見上げる。

「なん、で……う？」

レギュラスは僅かによるめいたが、二本の足で自らの体重を支えようと、ぼくを見つめて微笑んだ。

「……知ら、なかったんですか……？　僕は貴方が大嫌いなんですよ」
レギュラスの笑顔は、とてもよくシリウスに似ていて——でもシリウスよりも、ずっと繊細で、儂くて、涙が出そうになるくらい、綺麗だった。

「貴方の言うことを、僕が——聞く訳がないじゃないですか」
するりと、亡者がレギュラスに絡みつく。

水の中に手繰り寄せられる時、レギュラスは一切の抵抗をしなかった。

「レギュラスツツツ!!」

伸ばした手は、あえなく空を切る。

ぼくにのし掛かっていた亡者は、もうぼくに興味はなくなったとばかりに水の中へと戻っていった。

「……っ、あ、ああああ……ツツ」

伸ばした左手を空中で握り締め、地面に叩きつける。

お前には何一つ守ることなど出来ないよ、運命に嘲笑われた気分だった。



『——。おい、幣原。幣原!』

名前を呼ばれ、ハツと我に返った。

洞窟の中だった。

一体、ここでぼくは何時間を過ごしただろう。茫然自失して、どのくらいの時間が経っただろう。

右腕を上げ、右耳のトランシーバーに触れる。ただそれだけの動作も、億劫だった。

「——はい」

掠れた声が、自分の喉から零れた。途端、耳元で捲し立てられる。

『幣原、お前どうした!?! もう始業時間だぞ!!』

エリス先輩の声だ。もう、そんなに時間が経っていたのか。

懐中時計を探して、家の中に忘れてきたことに気がついた。

「すみま、せん……」

『……何かあったのか?』

エリス先輩は、こんな時でも優しすぎる。だからこそ、迷惑を掛けちゃいけない。

「……すぐに着替えて向かいます。本当に申し訳ありませんでした……始末書は後で書きます……」

それだけ言って、通信を切る。軋む身体に鞭打って、立ち上がった。

ぼくらには、立ち止まることは許されない。

第13話 それはそれはとても綺麗な

雨は数日、降り止まなかった。

暗い部屋で、ぼくはシリウスに頭を下げた。

「ごめん……助け、られなかった」

「……君が謝ることじゃない」

掠れた声だった。

僅かに頭を上げ、シリウスの表情を伺う。

目を伏せ両手を組み合わせたシリウスは、低い声で呟いた。

「……バカな奴だ」



「大丈夫!？」

身重の新妻、リリー・エバンズ——否、リリー・ポッターが躓いて体勢を崩したのを見て、ジェームズは慌ててリリーの両腕を後ろから掴んだ。

「もう、大袈裟よ」

「何かあつたらどうするんだい！ 欲しいものがあつたら僕が全部準備するから、君はずっと座っていてよ！」

「ジェームズ、ちよつとウザいわ」

「うぐっ」

身も蓋もない辛辣な言葉、学生時代はよく食らっていたが、最近は何となく無沙汰だった。

「大体あなた、私なしで一人でご飯が作れるというの？ ならやってみなさいよ。言っておくけれど私は三ヶ月前のあの大惨事を忘れたことなんて一度もないわよ」

「ご、ごめんなさい……」

すごくすごと立ち戻る。言い返す言葉が何一つ思い浮かばなかったのだ。

「そんなに心配しなくても、大丈夫よ」

そつとリリーはジェームズを押し返し、微笑んだ。

ソファに座ると、目立ってきたお腹を優しく撫でる。ジェームズもその隣に腰掛けた。

「そう言えばね、昨日、秋が訪ねてきたのよ」

「えっ、秋が!？」

驚いて目を瞠った。

その反応を予測していたとばかりに、リリーがクスクス笑う。

「結婚しても、私が秋の話題を出すと慌てるのは変わらないのね。ジェームズは今騎士団の任務でいないわよって言ったら、少し寂しそうな顔をしてたわ」

「……忙しいだろうに、顔を見せてくれたんだね、あいつ」

「ええ。『いつ頃生まれるの?』って目を輝かせて聞いてきたわ。夏頃よ、って言うと『そっかあ……』って、目を細めてた」

リリーが描写したその表情は、ジェームズも簡単に脳裏に思い描くことが出来た。

目を細めて。何よりも嬉しそうに微笑むのだろう。あいつは、秋は、そういう奴だ。

「……ねえ、ジェームズ」

「なんだい、リリー?」

リリーは僅かに瞳を揺らしてジェームズを見上げた。少し不安げな眼差しだった。

「……最近、秋に会った?」

「最近……? そうだねえ、二週間前に騎士団の会議が終わった後、少し話をしたくらいだけど」

そう、とリリーは目を伏せた。

「どうしたんだい?」

「……私の気のせいかもしれないんだけどね」

そう一拍置いて、リリーは呟いた。

「今の秋の笑顔、ゾツとするほど、綺麗なの。恐ろしいくらい……純粹な、笑顔なの」



ハリーは、ドラコがボージン・アンド・バークスの店主に見せていた『何か』を、死喰い人の証である『闇の印』だと考えているようだった。ロンとハーマイオニーはそれについて曖昧な反応を返すばかりで、ぼくもはつきりと言明しないものだから、ハリーは業を煮やしなながらも、腹の中でその考えを吟味するのみに留めていた。

ドラコが『死喰い人』になったのかどうか。

可能性は無くも無い、そう思う。前回の闇の時代を生きた幣原の記憶を持っているぼくだからこそ、そう思うのかもしれない。

——この学期は、ドラコと距離を取っておいた方が安全かもな。

ぼく、ではなく、ドラコ自身の安全のために。

ヴォルデモートはハリーだけではなく、幣原秋を、ひいてはぼくを目の敵にしている。ぼくを崩すためだったら、何だってやるだろう。心苦しい役目を、ドラコに背負わせたくはなかった。

リーマスとは、長いようで短い夏休みの間、全く会うことが出来なかった。不死鳥の騎士団メンバーに尋ねると、彼は現在長期の張り込み任務に出ているのだという。トンクスも滅多に『隠れ穴』に姿を現さなくなつたし、たまに訪れたとしても憔悴し切った表情をしていた。髪は未だ茶色のまま、指摘されると力無く笑っていた。

新学期は、驚くほどに早く訪れた。

魔法省の車で送迎され、キングズ・クロス駅ではマグルのスーツを着こなした闇被いが二人、むつつりとした顔のままぼくらを挟んで進んだ。一体何の護衛だろう、と、駅の構内で擦れ違う人達が振り返ってぼくらを見ている。もう少し愛想のいい人はいなかったのだろうか。

ふと視線を感じて顔を上げると、闇被いの一人がぼくを見下ろしていた。

ぼくは数秒目を合わせた後、手を伸ばしてパーカーのフードを目深に被ると目を逸らす。

九と四分の三番線を抜けると、いつもの喧騒が身体を包んだ。

監督生であるロンとハーマイオニーに手を振って別れ、ハリー、ジニーと共にぼくが先頭になって空いているコンパートメントを探す。混み合った車内の中、やっと空いているコンパートメントを見つけた。そそくさと乗り込み、気付く。ハリーがいつの間にか消えていたことに。

ハリーの姿を見失ったことに、心臓がドキドキと音を立てる。「ハリー・ポッターを守る」という目的の元、幣原秋に作られた存在である自分が顔を出す。

動揺を押し隠して窓から首を突き出し探すと、ハリーの姿は案外簡単に見つかった。アーサーおじさんと話しているハリーに、ホッとする。

汽笛が鳴ったのに、慌ててハリーが話を切り上げて汽車へと近付いてきた。キヨロキヨロと視線を彷徨わせるハリーに「ここだよ！」と大声を出す。

ぼくの声はハリーに届いたようで、ほぼ迷い無くハリーはこちらに歩み寄ってきた。

アーサーおじさん、モリーおばさんに手伝われ、窓からハリーとトランクを入れると、ぼくらは一息をついた。

すぐさま列車が動き出す。

窓越しに、モリーおばさんが声をかけた。

「身体に気をつけるのよ。それからいい子にするのよ。それから——危ないことをしないのよ！」

ぼくとハリー、それにジニーは、二人の姿が見えなくなるまで手を振った。

「じゃ、あたしディーンと落ち合う約束してるから、また後でね、ハリー、アキ」

そう言つてジニーは、長くて綺麗な赤毛を柔らかく揺らしてコンパートメントから出て行った。

ぼくは笑顔で手を振り返したが、ハリーは少し複雑な表情をしていた。一体どうしたのだろう、と表情を窺うも、ちよほどのタイミングでコンパートメントがノックされた。

「やあ、ハリー、アキ」

「こんにちは」

「ネビル！ それにルーナも。元気？」

ネビルとルーナの二人を中へと招き入れる。

ネビルは椅子に腰を下ろすなり興奮した表情で、新品の杖を取り出した。

「見て、ハリー。僕ね、新しい杖を買ってもらったんだ。ばあちゃんが『日刊預言者新聞』に載った記事を見てとっても喜んで、やっと父さんと母さんに恥じない魔法使いになり始めたって言うんだ。オリバンダーが売った最後の一本だと思う。次の日にいなくなっただもの」
少し気を惹かれて、ぼくは口を開いた。

「オリバンダーの様子は、どうだった？ どこことなくソワソワしてたり気も漫ろだったりとかなかった？」

「特にそうは思わなかったよ、いつも通りだった」

「ふうん……」

ならばいいよ、ヴォルデモートらがオリバンダーを誘拐した線が強くなるな。

目を伏せ思考に脳を浸していたが、コンピュータメントの外が騒がしいのに目を向けると、女の子が数人中を伺ってはクスクスと笑っている。やがて一人がコンピュータメントのドアを開けた。顔には出さないものの、ノックくらいしたらどうか、くらいは感じる。

女の子はまっすぐハリーを見つめて、自信たっぷりの声で言った。

「こんにちは、ハリー。私、ロミルダ。ロミルダ・ベインよ。私たちのコンピュータメントに来ない？ この人達と一緒にいる必要はないわ」
初っ端から随分と悪手を打ってきたものだ。

窓枠に頬杖をついて、起こる喧騒を眺める。

「この二人は僕の友達だ。それに僕を誘いたかったら、僕が世界で一番大事にしている弟を貶すことは、絶対にしちやいけないことだと思うよ。後学のためにもね」

彼女の目の前で、ハリーがドアをピシヤリと閉める。ついでにブラ

インドまで下ろしてしまった。

「ハリー、そんなこと言ったらとんでもないブラコンだと噂を流されちゃうよ」

「事実だからね、構わないよ。その程度で引くような人は、所詮その程度」

「みんな、あんたにあたしたちよりももっとカツコイイ友達を期待するんだ」

ルーナは率直だった。それに対し、ハリーは端的に答える。

「君たちはカツコイイよ。あの子達の誰も魔法省にいなかったし、誰も僕と一緒に戦わなかった」

「いいこと言ってくれるね」

ルーナはにつこりと微笑むと『ザ・クイブラー』に視線を落とす。ネビルはしかし、真面目な表情で囁いた。

「だけど、僕たちはあの人には立ち向かってない。君が、立ち向かった。ばあちゃんは『あのハリー・ポッターは、魔法省全部を束にしたより根性があります！』って。ばあちゃんは君を孫に持てたら、他には何もいらないうらな」

ハリーは少し笑うと、急いで話題をふくろう試験のものに変えた。ネビルの注意はうまい具合にそちらに逸れ、『変身術』が思った点数が取れなかったと嘆いている。

ハリーは頷きながらネビルの話を聞いていたが、よく見ると上の空だった。

トランクから一冊の本を取り出す。わざわざ日本まで取りに行った、あの本だ。

梓さんのことを思い出し、少し憂鬱な気分になる。上から手織りのブックカバーを掛けているため、傍目から血痕は見えない。

世の中の魔導書には、開くだけで具合が悪くなったり生気を吸い取られたりするものがあるという。たとえば写本でも、だ。

だから、父である幣原直が書いたと言われる本にしても幾分覚悟はしていたのだが、実際は何にも起こらなかった。少なくとも自覚症状は一切ない。

極々普通の本だ。中身が読めないだけで、
そう、読めない。

これは単純に言語力の問題だ。気合いの問題、と言い換えてもいいかもしれない。ぼくに扱えるのは英語とせいぜいの日本語、後は呪文学で少し触ったラテン語と古代ルーン文字、その程度。

しかしこの本を開いてみると、一ページの中に様々な言語で書き込まれていて、見るだけで頭が痛くなる。

とりあえず読める部分だけさらってみたけれども、進捗ははかばかしくない。

「ねえ、それなあに？」

ふとルーナが、手元の本を覗き込んでいた。と思うと軽く取り上げ、首を傾けたまま目を通す。

苦笑しつつも「読めないと思うよ……？」と口に仕掛けて。

ルーナは本を手から取り落とした。

バサリと床に本が落ちる。

「あつ……ごめんね、アキ」

謝罪の言葉を口にしたルーナはしかし、たださえ白く抜ける肌が、今度こそ色を失うほどに青ざめていた。

「……ルーナ？」

「……ごめんアキ、あたしこの本は耐えられないよ。よく分かんないけどね、見ただけで気持ち悪いんだ」

それだけを呟いて、ルーナはコンパートメントから出て行ってしまった。

ハリーとネビルも話を止めて、ルーナが消えた方向を見る。

「どうしたの？」

「……さあ」

本を拾い上げると、少し振れたブックカバーを整えた。軽く叩いて砂を落とす。

昼食どきにやっと、ロンとハーマイオニーがやってきた。

それとほぼ同時に、一人の女の子がノックと共に入ってくる。三年生くらいだろうか、女の子は上級生ばかりのコンパートメントにあた

ふたしながら顔を赤らめた。腕には紫のリボンで結ばれた羊皮紙の巻紙が三つ抱えられている。

あー、これは。見覚えあるぞ。

「わ、わたし、これを届けるように言われてきました。ネビル・ロングボトムとハリー・ポッター、それにアキ・ポッターに」

ネビルとハリーはきよとんとした眼差しで受け取ったが、ぼくはやんわりと受け取りを拒否した。女の子は少し困ったような表情をしたが、元々断られたらすぐ引くようにとでも言われていたのだろう、無理矢理押し付けるような真似はしなかった。

逃げるようにコンパートメントを出て行く女の子を尻目に、ハリーとネビルは巻紙を開く。

「何だい、それ？」

「招待状だ」

ロンの疑問に、ハリーが短く答えた。やっぱりな、とぼくは息を吐く。

あの人は本当に、そういうことが大好きだ。幣原の時はさておいて、今のぼくと何を話したいと言うのだろうか。

「行ってらっしゃい、二人とも」

「アキは？」

「ここから動く気はない、という意味を込め左手をヒラヒラと振ると、ハリーは軽く肩を竦めてネビルと共に出て行った。

「スラグホーン先生って、何を教えるのかしら？」

「決まってるだろ？ 『闇の魔術に対する防衛術』さ」

ハーマイオニーの呟きにロンが返す。「いや」とぼくは口を挟んだ。「魔法薬学、だと思う」

隠居生活から無理矢理引っ張り出しておきながら、ダンブルドアが専門外の学問に就けることはさすがにない……ないだろう、ないと思いたい。もし『闇の魔術に対する防衛術』だったら、スラグホーン先生が気の毒すぎる。

「魔法薬学？ そうだとしたら、スネイプ先生は？」

「スラグホーンがスネイプを蹴落としたのか!? そりゃヒヤッホイだ

！」

ロンは浮かれているが、さすがにそれはないだろう。ダンブルドアは、スネイプ教授を手元に置いておきたいだろうし——そうならば、そうしたら。

「……………」

浮かんだ考えを、ぼくは黙っておくことにした。どうせ数時間後には正解が発表されるのだから。

代わりに、考える。

今年は一体、どんな一年になるのだろうか。

第14話 闇を歩む

「今の君、何て呼ばれてるか知ってる？」

ぼくはコートを脱ぎながら、リーフの問いかけに短く答えた。

『黒衣の天才』

「……正解」

ハンガーを放ると、リーフは難なくキャッチしてみせた。

最近のリーフは、一週間に一度はぼくの部屋に泊まりに来る。ちやんと家に帰っているのかと尋ねると、苦笑いで目を逸らした。まったく、と大きくため息をつく。

「奥さんが泣いてるぞ」

「こつちとしても帰りたいのは山々なんだけどねえ」

ハンガーにコートを掛けながら、リーフはしみじみと呟いた。

「仕事をきちんと果たさないと、奥さんが奥さんじゃなくなっちゃうから」

「……君も大変だね」

「そうかな？」

リーフの奥さんは、魔女ではない。魔法を使えない、極々普通の人だ。

長く綺麗な金髪と、海の色のような碧の瞳が印象的な、とても美しい人だった。

純血一族、『中立不可侵』フィスナー家。よりもよってその直系であるリーフが、マグルの女性を選ぶなど。

しばらくは色んな場所での話題を呼んでいたリーフだったが、今では大分落ち着いたようだ。

「子供の名前は、考えてるの？」

「何にしようかなあ。どうしようかな。ねえ秋、どうしよう」

「知らないよ、ぼくに聞かないで。君の子供でしょ」

「今のところね、一つだけ候補が上がっていて、『アリス』っていうの。僕は寡聞にして知らなかったんだけど、マグル界じゃ有名な小説の主人公の名前らしい。シャーロットが、うちの奥さんが好きだって

言うから、その名前にしようかなって」

「アリス……ああ、なるほど」

小さく頷いた。可愛らしい、いい名前だと思う。

「読んだことないのかい？ 日本語にも翻訳されているし、とっても有名な作品だと思うんだけど」

「マグル界の有名と、魔法界の有名はまた質が違うしね。『ビードルの物語』をこっちは聞いて育ってきてるんだ。『白雪姫』やら『シンデレラ』やら、マグル界には色々あるもんだ」

「そりや、マグルの方が人口も圧倒的に多いですから」

コートが掛かったハンガーを受け取ると、少し背伸びをしてフックに掛けた。

手袋を外すと、少し気が休まる。ソファに腰掛け、大きく息をついた。無意識に指先を合わせる。

『『黒衣の死神』じゃないだけマシさ』

「おや、自覚あったんだ」

「そりやあね、そうだ。何年この魔力と付き合ってると思ってる」

隣にライフが腰を下ろした。スプリングが軋む音がする。

「魔法省は、君を英雄に仕立てるつもりだ」

「……知ってる」

仕立てるも何も、既に偶像化は始まっている。

ぼくの名前は一週間おきくらいの感覚で、日刊預言者新聞の紙面を飾っていた。写真が載らないのは楽なものだが、噂話ならぼくの目に入らないところでやって欲しい。

まるで、ホグワーツの一年再来だな、と感じる。

あの頃も確か『天才』だと呼ばれていた。悪意と侮蔑と恐怖の籠った、あの呼び名。

今の呼び名には、何が籠められているのだろう。『呪文学の天才児』を引き継いでいる感じは、微妙にする。

「ほんのすこし前、ここに死喰い人からの襲撃を受けてね——まあ侵入者対策は万全だったし、二度と手出しが出来ないくらい容赦ない仕掛けを施していた訳だけど、それでも帰宅したら玄関の前に他人の肉

塊があるっていうのは結構な騒ぎになってね。まあ、ぼくと——『黒衣の天才』と関わり合いになるのが嫌だったというのもあるだろうけど、それを機に、最近は続々と引越しているらしい。空き部屋増えだし、折角ならリイフ、一部屋借りなよ。今ならお金さえ払えば貸してもらえる」

言葉に皮肉げな響きを滲ませ、ぼくは笑った。リイフは少し切なげな眼差しでぼくを見つめている。

耐えられなくなつて、ぼくは視線を逸らした。

「……先にシャワー浴びてきなよ。明日も早いんだろ」

つつけんどんな口調で言うと、立ち上がる。

「……ああ、そうだね」

諦めたような笑顔を、リイフは浮かべた。



これは一体、何に使う薬なのだろう。

恐ろしく複雑な魔法薬の手順書を睨みながら、セブルス・スネイプは考えていた。

魔法薬学の優秀な成績を買われ、薬作成を命じられたのがつい先日。前線に立たなくていい、というのは、個人的に気が楽だった。作らされるものが『真実薬』や『ポリジューズ薬』『生ける屍の水薬』と言う類のものであるということとはさておき——

戦場で万が一にでも、幣原秋と出会ってしまったならば。

『黒衣の天才』、幣原秋。

彼の噂を、数多く聞いた。

全ての退路を塞ぎ、涼しい顔で敵を葬る闇祓い。

長い黒髪を一つに括った闇祓いを見たら、戦いを挑まずに逃げることだけに専念しろ。

さもないと、必ず殺される。

胃が、振じ切れそうな気分になった。

何も考えたくなくて、セブルスは魔法薬の作成に没頭した。

それが一体どんな薬で、未来で誰を傷つけるのか——そんな、考える必要のないことは、考えなかった。



紅の列車から人がひっきりなしに吐き出される。人の波に突っ立って、ぼくは眉を寄せてハリーの姿を探していた。

意地張っていないで、ハリーに着いてスラグホーン先生のところへ行けばよかった。どうしてそういうところで横着するのか、そういう些細なところで、相変わらずぼくは詰めが甘い。

「よっ、アキ」

ふと肩を叩かれた。

振り返ると、そこにはトンクスの姿。笑顔を浮かべてはいるが、覇気がない。闇祓いの制服は、幣原の時代とは少しデザインが違うが、基本的な部分は同じだ。

トンクスの闇祓い姿を見るのは、思えば初めてだ。階級章を見ると——年齢にしては結構地位が高い。これは高給取りだなあ。

「トンクス！ どうしてここに？ 仕事かい？」

「そつ。学校の警備を補強するためにホグズミードに配置されてるんだ。それより、どうして皆と一緒に行かないの？」

「ハリーの姿が見当たらないんだ……スラグホーン先生のお茶会があったね、そこでハリーから目を離しちゃった」

「スラグホーン？ ……ああ、聞いたことはあるよ！ 習ったことはないけど。上級生の先輩が、スネイプと比べて『昔は良かった……』って懐かしんでた」

「は、はは……なるほど」

しかし、そうか、トンクスはその世代か。セブルスが新任教授としてホグワーツで働き始めた頃合いか。

……意外と年齢差があるんだなあ。

「うーん、ハリー見当たらないね。普段だったら君を見つけるとすぐさま駆け寄ってくるのがあの少年じゃない？」

「……………うん、そうなんだけど」

否定の言葉を探して、見付からずに止む無く肯定した。

ホグワーツ特急から出てくる人の数が、段々と減ってくる。最後の一人らしき人物は、ぼくとトンクスに奇異の目を向けつつも、友人に取り残されまいと前の子の背中を追う。

さて、とぼくは声を発した。

「ハリーは透明マントを持っているから、ちよいと厄介だね」

「そうだね。ところでアキ先輩、ちよいとご覧いただきたいものが」

「どうしたんだいニンフアドーラ後輩」

名前で呼ばないで！ とトンクスが拳を振り上げる。

避ける真似をして、少しホツとした。さつきよりは、元気になったようだ。女の子が暗く沈んでいるのを見るのは、おじさんには辛いものがある。

「ほら、あそこの窓だけブラインドが掛かっている。いかにも怪しくない？」

「……………確かに」

トンクスが指差す方向を見ると、本当だ、一つのコンパートメントだけブラインドが掛かっている、外から伺えないようになってい

る。汽車にピヨンと飛び乗ると、通路を走る。さつきまで生徒で溢れていた通路は、今はガラガラだ、当たり前だけれど。

走りながら杖を取り出し振ると、眼前に半透明の四角い物体が現れた。ぼくの走る速度に従って追隨する。

「何、それ？」

ぼくの後ろを走るトンクスが尋ねた。ぼくは振り返らずに口を開く。

「サーモグラフィって、知ってる？」

「サーモ……………ああ、そゆこと」

さすがは闇祓い、理解が早い。お父さんがマグル生まれだからか、マグルの文化にも明るいし。

常々いい人材だ、そりゃあマッドアイも可愛がるってもんだよ。

サーモグラフィー。黒体放射の概念を知っていれば、理解は容易だ

ろう。

全ての物体は熱を持つていて、熱を持った物質は全て赤外線を発している。その赤外線を感じて、受光量により色分けしたものが、サーモグラフィだ。

この箱を通して世界を見れば、温度が高いと赤色に、温度が低いと青色に映る。透明マントがどのくらい遮るかは分からないが、以前触れた限りじゃ、マント越しでも人の温もりは感じられたから、それを頼りにすることにする。

見つけた、ブラインドのあるコンパートメント。足を止めドアを開けると、画面を向ける。

座席の下に見えない熱源を発見したのを確かめ、手を伸ばすと、柔らかな布に触れた。サツと取っ払い、笑う。

「やあ、ハリー」

トンクスが瞬時に『全身金縛り術』の反対呪文を唱える。その間にぼくは『エピソード』と『テルジオ』を唱え、ハリーの鼻を治して血を拭き取ってやった。

しかし服についた血が拭えないのは、血自体に魔力があるからだろう。後で綺麗に染み抜きをしないと、なんて主婦臭いことを考える。

「ありがとう……アキにトンクス、どうしてここに？」

「君を探しに来たんだよ、バカ」

笑って、ハリーに手を差し伸べた。ぼくの手を取ってハリーは立ち上がる。

ホグワーツ特急がガタンと音を立て、ゆるやかに滑り出した。慌ててぼくらは特急から飛び降りる。

トンクスが杖を振ると、杖先から霞型の守護霊が現れ、伝言を乗せて城まで飛んで行った。随分と大きなそれは、どこかで見たことがあるような……パッドフットより大きい今のは、もしかして狼か？

「……え」

いや、でも、一回りは年下だぞ？

でも、じゃあなんである時、彼女はぼくに『リーマスを助けて』な

んて……。

ハリーが目を睜り、尋ねる。

「今のは『守護霊』だったの？」

「そう。君を保護したと城に伝言した。そうしないと皆が心配するからね。さ、行こう。ぐずぐずしてはいられない」

トンクスが急かす。

ぼくら三人は連れ立って、学校までの道を歩き始めた。

第15話 映すは深い絶望と

「幣原秋、という名前を知っているか」

バーティミウス・クラウチ・ジュニアは、厳格な父からそんな言葉が出てきたことに、少し驚いた。驚きを胸の内に押し込める。

多忙な父が、久しぶりに自分と母と共に夕食の席を囲んだ日。普段は全くと言っていいほど必要なこと以外は口にしない父が、今日は珍しくも色々と喋った。研究施設で働いている自分に対し「最近どうだ」と近況まで聞いてきたのだ。ワインと、久方ぶりに家族団欒を過ごせることに、舌も緩んだのだろうか。

何にせよ、父から情報が得られるのは喜ばしいことだ。

内心舌舐めずりをしながらも、父の舌の油を失せさせぬよう、一つ一言葉を選び選び返す。父は魔法法執行部の部長だ、闇祓いにも魔法警察にも重要な権限を握っている。

ペラリと『良いこと』を話してはくれないだろうか。

「知っているよ、父さん。レイブンクローの生徒だろ。前、魔法魔術大会で優勝していた」

「もう学生ではない。闇祓いとして働く者だ」

「あ、もう卒業してたんだ。月日が経つのは早いな」

まあ、知っていたけれど。心の中で呟く。

彼が卒業したことも、闇祓いになったことも、父より数段多くのこととを、自分は知っている。

「彼が杖を振る様を一目見て、思った。ああ、本物の天才とは、幣原のような者を呼ぶのだと。あれは——化け物だな。恐ろしい存在だ。闇祓いにも化け物のような者は数多くいるが、幣原はその中で英雄になれる——この戦争の英雄になれるだろう」

珍しくも多弁な父、それを後押しするように、空になったグラスにワインを注いでやる。その際に隠し持っていた自白剤の錠剤を、一つだけ投入した。

「おお、悪いな」

「父さんと話すの、久しぶりだから。僕、父さんともっと話したいよ」

殊勝で健気な息子。成績優秀で品行方正な息子の皮を被り、微笑んだ。予想通り、父の機嫌は更に良くなったようだ。

『戦争』だと、父は呼んだ。

『戦争』の敵同士が、こうして一つのテーブルを囲み、見た目だけでも和やかな時間を過ごしている。

吹き出しそうになった。

「僕の記憶だと、幣原秋は僕よりも三つ歳下だよな？　となると、まだ訓練生か」

「いや、違う。先日、一班に引き上げた。この戦争に勝つためには、彼が必要な手駒だ。少々若年だが、そんなものは関係ないだろう。ムーデイも同意してくれた。少々不安げだったが。彼の魔力は兵器だ——どうして幣原が人間なのだろうと不思議に思う。どうせ心が押し潰されるのなら、どうせ狂うのなら、せめて為すことを為してから潰れるがいいさ」

「……………」

どう立ち振る舞えば、自分はこの父からもっとより良い情報を引き出せるだろう。

既に自分は、父をただの情報源としか見做していなかった。もっと、もっとと有用な情報を。

幣原秋が闇祓いとして働くこと以上に、もっと使える情報を。

「闇祓いは、そんなに狂う人が多い職業なの？　父さん、大丈夫？」

少し悩んで、そんな言葉をチョイスした。父は小さく鼻を鳴らす。

「私は文官だから、前線には出て行かないが——前線で働く者には一定数出ると聞く。仲間が目の前で死んでいく、殺さなければ自分も殺される、そういう極限状態を迫られるからか。いくら相手が極悪人であろうと、自らの手で殺すのには抵抗があろう。心が優しい者なら尚更だ。幣原にその覚悟があるのかと、ムーデイはそんなことを気にしていた——甘いことだ、優しいことだ。覚悟がないのなら、力づくでも覚悟を植え付ければいい。何のために私が、闇祓いに『許されざる呪文』の行使を認めさせたと思っている。この戦争に勝つためだ！」

語気も荒く、父はテーブルを殴りつけた。食器が一瞬飛び跳ねる。

洗い場にいた母が、一体何事かと様子を見に来た。手を振って、何でもないことを示す。

「そもそもムーディ、あいつは甘い、甘すぎる！　これは戦争だぞ、勝つために手段を選んではいられないと言うのに！　一体今まで闇祓いは何人死んだ、何人奴らにやられた！　戦力となる人材を前線に投入して、一体何が悪い！」

「そうだね、父さんの言う通りだ。闇祓い側は不利なんだ、その状況を逆転させるためには、ある手札は全て有効に使わないと」

「そうだ、その通り。さすがは私の息子だ。誰もがお前のように考えればいいのに」

流石にそれは無理な考えだと思う。父の言葉に口元が緩んだ。

「闇祓いの権力を上げることに否定的な上の奴らもだが――ムーディ、歴戦の戦士であるあいつが！　結局はシビアに徹しきれぬ奴だ、よりにもよって幣原を、彼を一番知るエリス・レインウォーターの下に付けるとは！　これでは想定の半分以下の戦力しか見込めない、誰も彼も甘すぎる！」

「――エリス」

知った名前だった。

というのも、同期であり、同じ監督生仲間だったから。

これだ、と直感した。

「――っ!!」

背筋が震える。歓喜にだ。

管を巻いていた父が、やがてテーブルに突っ伏してしまった。穏やかな寝息を立て始める。

母は、こちらに来る気配はまだない。

今のうちに、杖を取り出した。父の鼻先に杖を突きつける。

「――オブリビエイト」

柔らかな声で、父の記憶を葬った。

それに対する罪悪感はない。



夏の夜道。

帰宅途中に感じた気配に、エリス・レインウオーターは勢いよく振り返った。

「……………つとお、びつくりした」

「な……………なんだ、バーティか」

学生時代の見知った友人、バーティミウス・クラウチ・ジュニアの姿に、肩の力を抜いた。エリスの肩に手を伸ばし掛けていたクラウチも、気まずい表情で手を引っ込める。

「さっすが闇祓いサマ、気配に敏感なことだ」

「茶化すなよ……………久しぶり。どうした、今帰り？ 君は確か、どこかの

研究施設で働いてるって聞いていたけど。頭、良かったもんな」

「闇祓いのエリートさんに言われても、全く褒められている気がしないのはどうしてだろうな」

「褒めてるってば……………褒め言葉くらい素直に受け取れよ、相変わらず捻くれてるなあ」

「相変わらず、って何だよ」

「相変わらずは相変わらずさ」

クラウチと歩調を合わせた。 数年間の空白を埋め合わせるように、会話を交わす。

「最近どう？ ……なんて言っても、こんな時代じゃあね」

「そうだね。闇祓いは今こそ忙しそうだけれど」

「こんな職業は、暇で税金泥棒なんて言われている方がいいはずなだけだね。生憎と、いくら金を積まれても、命に代わるものはないよ」
「うちの父親から、たまに話は聞いているよ。と言っても硬い人だから、本当に些細なことしか話さないんだけどさ。うちの父親、色々無理を通しているだろう？ 理に勝って非に落ちる、なんてことになっていないかと思ってるさ」

「クラウチさん、ね。彼のせいで下の私たちは辛いんだ——なんて言えればいいのだけれど。生憎と、結果が出てしまっているからね。クラウチさんのやり方に物申したい奴らは大勢いるが、この世界は実力

主義だ。クラウチさん以上の辣腕はいない故、この体制は変わらないだろうね」

「——幣原か」

二人分の足音が、路地に反響する。

「知っていた？　ま、そりやそうか」

「研究者は世情に疎いものとは言え、あれだけ紙面を騒がせちゃね。魔法界は偶像崇拜が好きだし、士気を上げるためなら一人を祭り上げることくらい平然とするだろうな。同期の女子社員が、カツコイイと騒いでいたよ。そういうガス抜き目当てもあるのかな」

「……流石だな。そこまで見抜いているとは」

「頭の体操の一環だよ。空想に頭を浸すようなものさ。真実の側面でも掠めていたのなら、重畳だ」

「……いくらその身に有する力が膨大とは言え、彼はただの優しい子だよ。それなのに」

「エリス」

クラウチの微笑に、ハツとしたようにエリスは口を噤んだ。

「君たちは戦争をしているんだろう？　そんな甘い考えで勝てると思っっているのか？　使えるものは使う、今回それがたまたま人間だっただけのことだ。幣原秋が使える駒なら、使うべきだ。使用期限があるのなら、それまでに使い尽くすべきだ、そうだろうか？」

酷く美しい笑顔だった。

「賢明でありなよ、レイブクロー生。君たちは弱く、敵は強大だ。僕の父は随分と形振り構わない決断を下した訳だが、それが未来で英断となるか愚策と判断されるかは、君たちが幣原秋をどう使うかに掛かっている。——『俺たち』側の戦力をどれだけ削ぐことが出来るか、見ものだね。いい見世物を期待しているよ？」

そこに、お前はいないけど。

「……え？」

なんとも間抜けな声だった。その表情が青ざめた色に変わるのを、暗闇に取り込まれていたことによつと気付き、呼吸を乱し辺りを見回す様を、クラウチは面白おかしく観察していた。

「なん……っ、……こは」

「レイブンクロー生は考え事をしているとき、自分の世界に入り込みすぎて周りが見えなくなる。それは明らかに短所だ。卒業しても変わっていないね？ ……さあ、思考力豊かなレイブンクロー生さん、ここで俺から問題です」

目を細め、微笑んだ。

「お前はこれから一体何をされ、何をするのか。一欠片だけ意識を残してあげるから、答え合わせをして好きなだけ絶望するがいい」

この物語の結末は、きつと俺が気に入る喜劇となるだろう。

お前も気に入れば、楽なものな。



六年生からは、ふくろう試験での結果を元に、自分の希望する科目を履修することができるといえる。これでもう十二科目履修なんて頭の悪いことから解放された。

呪文学、闇の魔術に対する防衛術、変身術、薬草学、天文学、それに古代ルーン文字学。希望する科目の許可はあっさり降りた。古代ルーン文字は迷ったが、幣原直が遺した本の解読の手掛かりがあるかもしれないと思い、最後の最後に付け加えたのだ。

しかし初日の一限で、論文二つの翻訳とエッセイを四十センチ、それに分厚い課題図書が数冊といった随分と重たい宿題を喰らい、ぼくは大きいため息をついた。ついていない。

ハーマイオニーと話しながら、二限の『闇の魔術に対する防衛術』へと歩を進めていると、廊下の先に見知った人影が見えた。

長く綺麗な銀髪の、小柄な少女。ハツと息を呑んだぼくに、ハーマイオニーは悪戯っぽく笑うと「アクア！」と声を張り上げた。

その声に、アクアは驚いた表情で振り返ると、ぼくらを視認してふんわりと微笑んだ。……あー、可愛い。

六年生になり、一科目に対する履修生が少なくなったことで、寮に限らず学年合同の授業が増えたことは、個人的にとっても嬉しい知らせ

だった。スリザリンとはこれまで『薬草学』でしか一緒にはなれなかったのだ。

「久しぶり、アクア。いい休暇だった？」

微笑むと、アクアはこくりと頷いた。

銀色の大きな瞳が、何かを伝えるように僅かに歪む。ん？ と首を傾げると、今度はふいつとそっぽを向かれてしまった。……ううむ。

「アクアはどの教科を取ったの？」

おお、ハーマイオニー、ナイスアシスト。それすっごい興味ある。

アクアは右手を胸の前に翳すと、宙に目を彷徨わせながら「……えっと、闇の魔術に対する防衛術、呪文学、薬草学、変身術に、魔法薬学……かな？」と指を折って数えていた。

「それなら、全部の授業が私と一緒にね！ 嬉しいわ！」

ハーマイオニーのテンションに、アクアも嬉しそうな微笑みを返した。

ハーマイオニーとアクアは、ぼくを放置して連れ立って歩いていく。

「……え、いや……」

今、アクアが挙げた五科目は。

闇祓いの試験で必須とされる五つだ。まさか——？

……考えすぎだ。どれも重要な科目だし、たまたまかもしれない。きっとそうだ。考えすぎだ。

それでも、疑念を払拭出来ないのは。

アクアが、闇祓いであった幣原秋のことを、伝聞でも何でもいいが、その存在を知っていたこと。

——幣原秋に憧れちゃ、いけない。

誰にとつても、望まない結末になってしまうのに。

第16話 一縷の希望

はあ、とぼくは目を瞠って息をついた。

ジエームズとリリーの子供が誕生したとの報告を受け、我ながら驚くべき速度で仕事を済ませ『姿くらまし』した。リリーの入院している聖マンガにはもう既にかつての悪戯仕掛人が全員集合していて、皆が皆輝く瞳で、小さなベビーベッドの中の赤ん坊を見つめていた。

「ハリー。ハリー・ポッターって名前にしたの」

リリーがふわりと微笑む。

「……ハリー」

「うん。……ハリー・ジエームズ・ポッター。私たちの、希望」

抱っこしてみる？ と尋ねられ、慌てた。こんなふにやふにやしていて壊れそうなものなんて抱き上げられる訳がない。

しかしリリーがぼくの話の聞かないのは、いつものことだった。ベビーベッドから手早くハリーを抱き上げると、そうっと受け渡してくる。

弟も妹もない、一人っ子のぼくにとって、子供、しかも赤ん坊とというのは全く見慣れない、全く接点のない存在だった。触れた経験なんて今まで一度もない。

両手に抱えたハリーは、凄く小さくて、それでいて暖かくて、リリーが『希望』と呼ぶのも当たり前前だと思った。

無条件で愛される存在。真っ白で穢れを何も背負っていない存在。そんな存在の近くにいるだけで、こちらでも思わず笑顔が零れる。

「髪の毛は明らかにジエームズ似だな」

シリウスの声だ。それにジエームズが答える。

「ああ。でも、瞳だけはね……」

ふと、ハリーが目を開けた。ハリーの瞳に、目が吸い寄せられた。

「……リリーの目だ」

綺麗な綺麗な、深い緑色。

鮮やかな緑の瞳を持って生まれてきた、小さな子供。

ハリーは、大きな目をぱちりと瞬かせると、なんとも機嫌が良さそ

うに笑った。

その笑顔に、胸を打たれた。

「……可愛い、なあ」

リーマスとシリウスが、にやりと笑ってぼくの頭やら背中やらを撫でる。

どうしてだか、涙が零れそうになった。



「……は？」

投げられた言葉を上手くキャッチ出来ず、ぼくはただ間抜けな声を漏らした。

深夜の外出は禁止されているが、明け方の外出は禁止されていない。そしてぼくと、目の前に立っている、御年百は下らないお爺さん、アルバス・ダンブルドアもまた、朝には滅法強かった。

朝の五時に、ぐっすり眠る同室メンバーを横目に訪れた校長室は、早朝のささやかな光で満ちていた。大きな机の上に置かれたプリズムは、光を通し虹色の影を落としている。

「……ご冗談、でしょう？」

喉から零れた声は、僅かに上擦っていた。それに対する返答は、憎たらしいほどに落ち着いていた。

「わしは本気じゃよ、アキ」

「……いや、信じられない。そんな……」

先ほど言われた言葉を、そつと復唱する。

『『全校生徒の願いを叶えろ』なんて……』

途方もなさすぎる。一体このホグワーツに、何人いると思っているのか。千人は下らないぞ。

「千と、二百五十九人じゃ。君の分を除けば、千二百五十八人。この全員願いを叶えてもらう」

「……早朝に呼び出して、一体何かと思えば……寝言ならベッドで言ってください」

「君に心配されずとも、頭はぼつちし正常じゃよ。……はてさて、君はついこの前、自分が言ったことを覚えておるかのう？ 君は確かにここで、『君の意思を無視する任務を突きつけても、やり通すと誓うか？』という問いかけにイエスと答えたのじゃ」

……覚えている。夏休みに入る前、確かにぼくはここで、ダンブルドアに乞い願った。

もう、誰一人失いたくないと。

「……確かその時は『それが、誰かを守るためであるのなら』と答えたと思うんですがねえ……」

ぼくの言葉を、ダンブルドアは飄々と受け流した。

ダンブルドアが指を振ると、羊皮紙が一巻きこちらに飛んできた。手に取り確かめると、そこには名前がずらつと書き記され、それぞれの名前の隣には所属寮と学年が書いてある。ざつと見ても、千はあるだろう。ということは、これが全校生徒の名簿なのか。

「君が願いを叶えた者の名前は、この名簿から消えることになる。この羊皮紙が真っ白になった時、きつと君の願いも叶うじやろう」

「……いつまでにやり遂げればいいんです？」

「君が学校にいるまで、じゃ」

となると、あと二年。たったの二年だ、長期休みやらを省くと、残り日数はあと六百日と少し。

最悪でも、一日に二人は消化していかないと間に合わない。

「あと、わしからの任務じゃと本当のことを話していいのは、そうじゃの……五人までとしよう。あまり任務の難易度を落とすのは好ましくないのではな」

「ただでさえ超弩級の難易度なんで、少しくらい手心加えてくれても……はあ、はい、分かりました。やればいいんでしょう」

「聞き分けの良い子で助かる」

につこりとダンブルドアは微笑んだ。

しかし、そうと決まればボヤボヤしてはいられない。

ぼくがホグワーツにいる間にこの任務を達成しなくちゃいけないのだとしても、七年生は一年足らずでいなくなってしまう。それに年

度が変われば、今度は新一年生がやってくるのだ。名簿に載っている名前が増えるかは分からないが……いや、きっと増えるのだろう。ダンブルドアはそういう人だ。

足早にその場を立ち去りかけ、ふと足を止めた。

ダンブルドアを振り返る。

「ところで、なんですけど……なんでこんなことをさせるんですか？」
「何、君の選択科目を見せてもらったが、かつて習ったものばかりで退屈じゃろうと思っただけ。日常にささやかなスパイスを投入してやろうという爺心じゃよ」

思わず目を細めた。ささやか、どころじゃないぞ。この任務はこの先のぼくの学生生活を思いっきり振り回す、そういう類のものだというのに。

ダンブルドアは続けた。

「そして、じゃ。君の疑問に対する答えは、きっと未来の君が知っている」

第17話 非日常はいつしか日常になる

「――突入を」

まだ真新しい『闇の印』が浮かんだ家の前で、ぼくは静かに呟いた。了承の声を確かめて、トランシーバーから手を離す。

侵入者避けの呪文は、既に全て解除してある。玄関の扉を開け、ぼくは歩みを進めた。

リビングで、一人の男性が事切れている。恐らくは、この家主だろう。僅かに歩く速度が遅くなったことに気付き、足早に歩き去る。

死者に構う暇はない。それよりも眼前の敵こそ、どうにかしなければ。死者に構うのは、その後でも遅くない。

『二階です、幣原さん！』

「分かった」

トランシーバーから聞こえる報告に短い言葉を返して、階段を探した。駆け上がる。

ドアを開けた瞬間、血飛沫が視界を覆った。

見るも無残な肉塊となったモノが、どつと音を立てて倒れる。顔があった部分で見分けることは出来なかったが、身に纏う制服を見る限り、一斑に先週配属されたばかりの後輩だろうことが分かった。

年齢はぼくより上だが、後輩だ。目に見えぬ階級も、ぼくの方が上。戦争中じゃ、褒美なんて名誉くらいしか与えられないのだし、仕方がない。

部屋の奥には、下で見た家主の奥さんらしき人が、幼い子供を抱きしめて青い顔で震えていた。

生きていたのか。

あの後輩は、自分の命に代えて、この二人を守ることが出来たのか。ぼくの姿を見た死喰い人三人が「幣原だ！」と鋭い叫び声を上げた。ぼくの顔も、よく知れ渡っているようだ。写真でもあるのだろうか。最近撮られた記憶はないのだけれど。

捕縛しようと杖を上げるも、向こうの方が早かった。一瞬後、細かな瓦礫と化した壁や屋根が、こちらに襲い掛かる。

ぼくはいいが、奥さんと子供を庇うのに一テンポ遅れた。その僅かな隙を縫って、三人が窓から飛び降りる。

逃すものか。瓦礫を踏み越え、窓があつたらしき場所から飛び降りる。空気を抵抗を上げ着地の衝撃を和らげると、駆け出した。三人組の姿を探す。

夜中で黒いフードを被ってはいたが、今日は満月だ、月明かりが味方をしてくれる。

殺すか捕らえるかしなければ。向こうの戦力を削がないと、今度は闇祓いの誰かが、あるいは罪のない一般人の誰かが、殺される。

——見つけた。『姿くらし』が出来ない魔法は、あの家から周囲三百メートルを目安に張り巡らせている。それよりもギリギリ近い、捕まえられる。

しかし、向こうもぼくの姿に気付いたのは同じようだった。背を向け駆け出す。

ぼくは体力はないが、走る速度は決して遅くはない。風力も利用しているし、追いつける。

走りながらも杖を構えた。照準がブレるのを、せめて範囲を狭めようと右手で左手を支える。

「フリペンドー！」
しかしぼくが放った攻撃呪文は、一番後ろの死喰い人をギリギリで逸れた。

慌てたのか、死喰い人がぼくを振り返る。その弾みにフードが脱げ、顔が月明かりに照らされた。

心臓が止まるかと思った。
息を呑む。

見間違えようもない、彼は。

ぼくの友人であつた、彼は。

セブルス・スネイプ。

ぼくの、親友。

「——」

ぼくは、追撃することが出来なかった。

バチンと音を立て、三人はぼくの目の前で『姿くらまし』する。魔法が効く範囲から、既に出ていたのか。

「……………クソッ」

なんたる失態。こちらの被害だけを出して、向こうに一人すら欠けさせることが出来ないとは。

なんたる無様。『黒衣の天才』が、聞いて呆れる。

震える手で、顔を覆った。

このどうしようもない気持ちの矛先は、一体どこに向ければいいのだろう。

◇ ◆ ◇

「何？ この『依頼文』。君が悪戯でやったの？ それとも君の名前を使った悪意ある誰かのもの？ 後者だとしたらちよいと待ってね、軽い食前の運動をしてくるから」

そうにつこり笑顔で言い放ったのは、誰であろう親愛なる我が兄、ハリー・ポッター。

レイブンクローの朝食の席に顔を出したのは、ハリーだけではなく、ロンとハーマイオニーも一緒だった。ハリーの手には、ぼくが今日の明け方にパッと作ってグリフィンドール寮に忍び込み、談話室の掲示板に貼ったチラシが握られている。

「似たようなこと、ついさっき俺も尋ねたな」と、正面に座っていたアリスがトースト片手に呟いた。「そうなの？」とロンが尋ねるのに、アリスは鷹揚に首肯する。

この二人は、初めて会った時に比べると格段に仲良くなったなあ。アリスのことすっごい怖がってたもん、ロン。

「悪戯じゃないよ。もちろんぼくの名前を騙った誰かでもない。……えーっと」

そこで口ごもった。

ダンブルドアは確か、五人までなら話していいと言っていたな。さつきアリスに話して、ハリーにロンにハーマイオニー、それに……

あと一人はやっぱりアクアかな。それで五人、か。
絶対見計らって「五人」って指定したんだろ、あの人。本当に食えない。

ぼくの話聞いた三人は、揃って妙な表情をした。

「どうしてダンブルドアは、君にそんなことを？」

「さあてね……なんでだろ。とまあ、そういうことで、ぼくは皆の願いを叶えなくちゃいけなくなったからさ、周りに宣伝しといてよ」

「そう言えばハリーも、ダンブルドアと個人授業を受けることになったのよね？」

「あつ、うん、そうだった。今週土曜からなんだって。一体何をするんだろう？」

ハリーが首を傾げる。ぼくだってよく分からない。

「君に妙な依頼をして、僕に個人授業をして……なんか今年のダンブルドア、いろいろ忙しいね」

「うーん、そうだね……あ、そうだ。君らの願いをもう聞いておこうかな。何か『願い』ってある？」

ロンとハーマイオニーは揃って首を傾げた。

ハリーは腕を組むと軽く肩を竦め「アキ、そのこのリングゴ一切れもらっていい？」と尋ねる。

フォークを手に取ると、大皿に入ったリングゴを突き刺し、ハリーに「はい」と手渡した。受け取りながら、ハリーはにっこり笑う。

「はい、僕の願い、終了」

「……え？」

思わず目を瞬かせた。慌てて名簿を確認すると、『ハリー・ポッター』と名前が載っている部分が発光し、やがて吸い込まれるように消える。

「……それでいいの？」

「いいいいの」

朗らかに笑うハリーに、敵わないな、と息を吐いた。

その時「そうだ！」とロンが声を上げる。

「アキ、それなら僕の『変身術』のレポートをやってくれよ！」

「ダメに決まってるでしょ！ 宿題は自分でやるものよ！」

ロンを厳しく叱りつけたのはハーマイオニーだ。それに対しロンが言い返し、夫婦漫才じみた光景を繰り広げる。

「アリスは何か願ってないの？」

尋ねると、んー、とアリスは首を捻った。

「パツと思いつかねえや。また今度でいいか？」

「ま、アリスならいつでもいいや」

「……なんだその投げやりな感じ」

「アリスは小さく息をつくと「後でお嬢サマにもちやんと伝えておくんだぞ」と釘を刺した。」

第18話 それは夢か幻か

セブルス・スネイプは愕然とした。

たまたま張り込んでいた『ホッグズ・ヘッド』、ダンブルドアの姿を見かけて聞き耳を立てた先には、思わぬ拾い物があった。

『予言』。闇の帝王を滅ぼす者が、この七月末に生まれるという予言。残念ながら、最後まで予言の内容を聞くことが出来ないまま、セブルスはその場から摘み出されてしまったのだが——ともあれ、前半部分だけでも、何よりの収穫だろう。

そう意気揚々と闇の帝王の居城へと向かい、片膝をついて報告したのがつい先刻。

そこで聞いた驚くべきことに、先ほどまでの気分は吹き飛んだ。

「し、失礼ながら申し上げます!」

声が裏返る。じつとりと首筋に汗が滲むのが分かった。

闇の帝王が、緩慢にセブルスを見つめる。赤い瞳に射竦められ、目を逸らしたい衝動に駆られながらも言葉紡いだ。

「性急、ではございませんか。予言では何も『今年の』とは申しておりません……来年かもしれない、再来年もかもしれません。それを、それを、何も——何も、ジェームズ・ポッターとリリー・ポッターの息子だと、断定するのは早すぎます」

「断定はしておらぬ、セブルス。他にももう一人上げただろう。フランク・ロングボトムと、アリス・ロングボトムの息子。彼らもまた、俺様に三度抗い、今もなお生きている者共よ」

「ですが!」

「セブルス。はつきりと申すのだ、貴様自身で。貴様には立派な口があるだろう?」

クスクスと闇の帝王は笑い声を漏らした。底冷えのする笑みに、セブルスは身震いをする。

闇の帝王の前では、隠し事は無意味だ。何より素晴らしい『開心術師』である闇の帝王に立ち向かえるほど心の強い者は、そういない。迷いながらも、セブルスは口を開いた。自分の心の下劣な部分を、

闇の帝王の前につまびらかにする。

「わ、私——私は、どうか、お願い致します。どうか、あの人は——
——リリー・ポッターだけは、殺さないでください」

床に額を擦り付けた。這い蹲るように乞い願う。

「彼女だけは、殺さないでください——ご主人様、あなた様の敵となる
と『予言』されたのは、彼女の息子ただ一人です。息子のことは——
私は何も言いません。あなた様の邪魔になることは一切致しません。
ですが、あの人は——どうか」

物凄く冷めた瞳で、闇の帝王は自分を見つめているのだろう。そんな
なことを、セブルスは思った。

想像通り、機嫌を損ねた声の上から降ってきた。

「……詰まらん。貴様も愛だの恋だの抜かす口か」

地を這う低音に、背筋が凍る。

「愛する者がいることが、そんなに偉いのか。愛を知らないことは、そ
んなにも見下されなければならぬものか——ふざけるな。ダンブ
ルドアも——直、お前も」

直。

その名前には、聞き覚えがあった。

フルネーム、幣原直。幣原秋の父親で——闇の帝王と何かしら因縁
のある、故人。

ことあるごとに、闇の帝王は彼の名前を呟いては虚空を睨みつけ
る。

闇の帝王自身が彼の命を刈り取ったというのに、今も尚、彼と張り
合うように。

「——いいだろう。リリー・ポッターと言ったか。善処はする——
まあ、余計なことをしたのなら、その時は容赦はしないが」

「あ——ありがとうございます」

深く、深く。セブルスは頭を下げた。



初めての——いやまあ本当は初めてではないのだが、便宜上初めての——スラグホーン先生が教鞭を取る魔法薬学の授業がやってきた。本日調合するのは『生ける屍の水薬』で、うまく調合出来たものにはフェリックス・フェリシス——幸運の液体をプレゼントするのだと言う。それに誰もが、目の色が変わった。

飲むだけで幸運になれる薬。どれほど魅力的だろう。

スラグホーン先生の「始め」の合図で、皆が一斉に動き出した。

大鍋を引き寄せ、材料を手元に揃え、秤を調整する。誰もが真剣に教科書に向き合っているのが、なんだか微笑ましかった。

いや、しかし何だか懐かしい気分だ。

幣原はよく、この薬を同期のリオンによく調合してもらっていたっけ。

眠り薬として抜群の効能を誇るから、眠れない時には凄く重宝した。文句を言いながらもなんだかんだで作ってくれるリオンは、本当にありがたくって——

カノコソウの根を刻んでいた手が、止まった。

本当にいきなりの変化だった。

ナイフが左手から滑り落ち、カランと音を立てる。その音に、隣にいたアリスは顔を上げると、瞬間作業を放り出して近付いてきた。ナイフを拾い上げると、ぼくの顔を覗き込む。

「……おい、大丈夫か？」

皆の集中を妨げぬよう、小さな声だった。

大丈夫、と言おうとした喉が張り付く。

頭が痛い。目を開けていられないほどの痛みが、高波となって襲ってきた。

目も眩む閃光に、思わず手で顔を覆う。

微かに、何かが聞こえる。ぼやける視界が何かを映す。

人だ。顔は分からない。

ぼくは、その人物に杖を掲げていて——

いや、違う。その人物はぼくの腕を掴んで、自分の左胸に杖を押し当てさせている。

『許さない』

『許さない』

『許さない』

微かな音が、意味をなす文字列として脳に認識される。鼓膜を通さず、脳に直接送り込まれる。

目の前の人物の口元が、緩く弧を描いた。

聞きたくないのに、聞こえてしまう。

その言葉は――

「アキー！」

至近距離で叫ばれた言葉に、我に返った。

魔法薬学の教室は、先ほどまでとは違った意味で静まり返っていた。誰もが手元の作業を止め、ぼくとアリスを唾然とした表情で見つめている。

スラグホーン先生は呆気にとられた顔をしていたが「一体どうしたのかね？」と小さな目を瞬かせてわたわたと駆け寄ってきた。

「……すいません。体調が優れないので、保健室に行つてきていいですか」

ぼくの言葉にスラグホーン先生は目を泳がせながらも「……行つておいで」と優しく微笑む。

こくりと頷いて、ぼくは立ち上がった。

「……ついてかなくて、大丈夫か？」

「大丈夫。気にしないで」

教室を横切つて出口まで行くぼくを、クラス中が固唾を飲んで見守っている。

その中に、不安げな眼差しでこちらを見つめるアクアの姿が目に入った。大丈夫、と笑つてみせる。

教室を出て、耐え切れずに座り込んだ。冷たい壁と床が、体温を奪つて行く。

「……やつてられない」

一日ごとに、その身に抱える十字架が増えていく。

こんな追体験を、誰が望むものか。

「……………」

秋。

君の罪は——ぼくらの罪は。

どうやったら贖えるのだろうか。

第19話 操り人形は幸福な未来の夢を見るか？

「八月十日。クインズベルの張り込み任務」

「十月三十日。ウイズロウの探索任務」

「十一月十八日。オーティス家の保護任務」

虚ろな声。

ピーター・ペティグリュウの声の、残滓。

「二月二十三日。スタツフォード家の保護任務」

闇の帝王は、決して多くを吐かせようとはしなかった。ピーターが恐れないほどの、ほんの小さな事柄しか聞き出すことはしなかった。

「三月四日。バードリーの防衛任務」

少しずつ、少しずつ。

彼から罪悪感を奪っていく。

「五月七日。レイサム家の保護任務」

このくらいなら大丈夫だと、ピーターが侮るほどに。

「八月十五日。ハンプトン家の保護任務」

大丈夫、大丈夫。

このくらいならまだ、大丈夫。

「だって僕はまだ、誰からも咎められていないんだもの」

——操り人形は、一体いつ自らが人形であったことを知るのだろうか。

それは、きつと。

操り師が、糸を投げ捨てた瞬間に違いない。



『半純血のプリンス』？ 知らないなあ」

「そっか、アキでも知らないかあ」

魔法薬学で見事フェリックス・フェリシスを獲得したのは、ハーマイオニーではなくなんとハリーだったらしい。目を瞞つて褒めるばかりにハリーはひとしきり照れてから、体調不良と言い教室を抜け出た

ぼくを気遣った後（全力で誤魔化した）、ふと真面目な表情で、幸運の液体を獲得した経緯を教えてくれた。

大量の書き込みがある教科書——『半純血のプリンス』蔵書。

魔法薬学の教室にずっと置いてあったものなら、スネイプ教授が何か知っているのかもしれない。そんなことを頭の片隅でちらりと考えたところで、聞こえたアラームの音に飛び上がった。

腕時計のアラームを解除しながら時間を確認する。やばい、もう行かなくては。

「また『依頼』？ どのくらい終わったの？」

「レイブンクロウの六年生の女の子が五人、グリフィンドール生が君を入れて四人、スリザリン生が一人。これからハツフルパフ生の頼まれごとを引き受けに行くんだ」

「君も大変だねえ」

ハリーがしみじみと呟いた。

手を振って別れ、指定された場所へ向かって走り出す。南棟の二階、白鯨の肖像画が掛かっている待ち合わせ場所へと急ぐと、そこにはまだ誰もいなかった。なあんだ、と肩透かしを食らった気分になる。

カバンから、今朝ふくろう便で届いた手紙を引っ張り出した。

ハツフルパフの四年生、名前はステイブ・スチュアート。初対面で依頼を受けたのは、実を言えば彼が初めてだった。全校生徒千二百五十九人。今まで依頼をこなした分と、ぼくを除けば、あと千二百四十八人。気が遠くなるような数だ。

手紙には、ただ単に『是非とも叶えて欲しい願いがある』という旨と、来て欲しい時刻と場所が明記されているだけで、実際に彼が抱いている『願い』が何なのかは一切書かれていなかった。

今まで十人分の『願い』を聞いてきた。苦手な科目のレポートをやってくれ、だったり、どうしてもクイディッチの朝練が起きられなから起こしてくれ、だったり、パーティの手伝いをしてくれ、だったり。変化球としては「髪を編ませてくれ（これは同級生のレイブンクロウの女の子三人分の願いだった、好きなように髪を弄らせた後

は、確かに三人の名前が名簿から消えていたから、複数人が同一のことを願い、それを叶えたならばそれでいい仕組みになっているみたいだ」とか。

……いや、しかし。遅いぞ。ぼくだって数分の遅れにぐだぐだ言うつもりはないが（遅刻しかけたことだし）、それでも他寮の先輩を待たせているという状況は少し文字面が悪いのではないだろうか。

暇だなあと伸びをしつつ、名簿が載っている羊皮紙を広げかけ、ふと階段を上ってきている女の子に目が止まる。

いや、回りくどい表現をするまでもない、目が止まったのは、その女の子がぼくの最愛の子、アクアマリン・ベルフェゴールだったからに他ならない。

声を掛けるのに躊躇したのは、彼女が友人と一緒にいたからだ。アクアと同寮同室の少女、ダフネ・グリーングラス。友人との楽しいひと時をぼくが邪魔するのは忍びない。

……いや、本音を言おうじゃないか。もしここでアクアを呼び止めても、アクアはぼくに立ち止まりもせず、手を振って微笑を寄越し、談笑を継続するのではないか、すげえナチュラルにぼくの存在スルーされるのではないだろうか。

そんな、ちよつと悲しい妄想が、ぼくの声を竦ませた。それだったから『気が付かなかった』で素通りされた方がマシだ。

しかし幸か不幸か、アクアはぼくに気付くと——わああ眩しい、ぼくに対する笑顔が最高に可愛すぎる——ダフネ・グリーングラスと話をつけ、こつちに駆け寄ってきた。

うっわあ、可愛い。天使か。

しかしだ、ダフネがすっごい目つきでこつちを睨んでいる……そのうち彼女の願いを叶えに行くことを考えると、気が重い。なんつか、彼女の願いが「アクアと別れる」な気がして。

「……どうしたの、こんなところで。一人？」

「いや、人を待っているんだ。相手がなかなか来なくって」

「ふうん？」

頭上に疑問符を浮かべたまま、アクアはコテンと首を傾げた。

どんな仕草も可愛いんだから凄いやなあ。どうしてこんな美少女がぼくの彼女になってくれているんだろう。

「……あの、君には言っておかなくちゃって思ってた」

そう前置きして、ぼくはダンブルドアからの依頼についてを彼女に語った。彼女は言葉少なに話を聞いていたが、ぼくが語り終わると「……どうしてダンブルドアは、あなたにそんなことを言ったのかしら」と呟いた。

さあてね、とぼくも肩を竦める。

考えたさ。考えたけれど、さっぱり目的は見えて来ない。むしろ冗談めかして言った「日常にスパイスを投入してやろうと」が本心なのだろうか。

あの人は好きな子を自覚なく虐めるタイプだろうな、間違いなく。「そう言えば、ちゃんと話す機会もなかったね。夏休みはどうだった？」

「ええ……フィスナーの家から、十分過ぎるほどいいもてなしを受けてしまったわ、申し訳ないほどに。ユークも、とっても楽しそうだった。ただ……セドリック・デイゴリーに関しては、フィスナーの情報網を借りても、全然分からなかったのだけど」

「……それは」

それはきつと、セドリックが日本に、日本魔法界を訪れていたからだ。服従の呪文か、洗脳か、はたまた違う魔法かは分からないけれど。セドリックのことについて、何と彼女に伝えれば良いのか。

言葉を見つける最中、彷徨させた目がふと人影を捉えた。数メートル離れた場所で、甲冑に隠れるように身を屈め、こちらを伺っている。ぼくと目が合うと、わっと慌てたように姿を隠した。ふと見えたローブの裏地の色は、黄色。

「……待ってて」

「えっ」

アクアを残し歩み寄ると、人影は明らかにビビったようだ。と思うと、パッと脱兎のように逃走しようとする。

「ひゃうっ!!」

逃げる彼の背中に、杖を一振りする。縛り上げると、そいつはやけに可愛らしい声で地面に転がった。

「もしかして、君がステイブ・スチュアート？」

右手に持っていた手紙を翳しながら尋ねると、気の毒なほどにビクリと肩が震えた。

……ちよつと待つて、そういう小動物のような仕草をされると、なんか物凄く罪悪感が。もし別人だしたら非常に気の毒な話なので、ローブかズボンのポケットに入っているであろう学生証を『呼び寄せ』る。

手紙を薬指と小指に挟んだまま、彼のズボンのポケットから呼び寄せられた学生証を手にとると片手で広げた。名前、所属寮、学年。彼が他人の学生証を集めることが趣味な少年でない限り、ステイブ・スチュアート本人だろう。

「あー……その」

大きな目に涙をいっぱい溜めている少年、彼の苦痛の原因となっていると思うと、忍びない。このくらいで泣かないで欲しいし、それならこうして覗いていないでとつと挨拶なりなんなりして欲しい。ぼくだって出来れば実力行使は避けたいんだから。

「……とりあえず、術を解除してあげたら？」

アクアがため息交じりにそう言った。それもそうか、と思い、杖をついっと一振りする。自由になったはずの彼はしかし、その場から動かずにえぐえぐと涙を零し始めた。

アクアは非難を込めた瞳でぼくを見る。

「謝りなさい、アキ」

……えー、これ、ぼくが悪いの？

「……あのー……ごめんね？」

苦笑いしながら謝罪の言葉を紡いだ。ぼくの見た目は到底怖がられる類のものではないから、なんと言うか、油断していた。

でもまあ、考えてみれば……そうだな。ぼくの魔力は怖がられるに値するものなのだ。

幣原秋ほど、ではないにしたところで。

と、アクアがスカート裾を抑えながらしゃがみ込んだ。「大丈夫？」と軽く頭を揺らして尋ね、少年の頭を優しく撫でる。

存外に面倒見のいい仕草に驚いていると、アクアは「……何か言いたげね」と目を眇めた。

「あ、いや……」

随分と失礼なことを考えてしまった。そうだよな、考えてみればアクアにも弟がいたのだった。

「……怖がらせてしまって、ごめんなさい。でも、彼に用があるのよね？」

ようやくと泣き止んだ少年は、アクアの声にコクリと頷いた。よかった、これでやっとマトモに話が出る。

「……はい。あの、うちの寮の、ハツフルパフの談話室に貼ってあったチラシを見て。寮の先輩たちは、またレイブンクロー生の訳分からぬ実験が始まったと、気にも止めてなかったんですけど、その、僕、ぜひとも叶えて欲しいお願いがあつて」

……なるほど。だからハツフルパフ生の反応が芳しくないわけだ。レイブンクロー生、ハツフルパフ生にそんなに迷惑掛けてたかなあ……

一概にノーと言い切れない、悲しい現実がここにある。レイブンクロー生がちよいちよい『訳分からぬ』実験をし、それに往々にして他寮の生徒、特に、あまり頼み事を断らないハツフルパフ生を狙って被験者にするのは、ままあることだったから……。

「あの、でも、アキ・ポッターさんにこんなこと頼んでもいいのかなって、ふくろう便出した後も悩んで、それで、姿を現せなくて……」
瞳を揺らす少年に、優しく微笑んでみせる。

「何を心配してるのか知らないけど、大丈夫。どんな願いだって、叶うまでぼくが全力でサポートするから。あー、でもこう……『お金持ちになりたい』とか『石油王になりたい』とかそういう超長期的な目標はちよつと勘弁かな……」

願いを叶える前に、ぼくが卒業してしまう。出来れば今すぐ、そうでなくても半年以内に実現可能な願いであつて欲しいものだ。

「そう、いうんじゃないですけど」

「なら大丈夫！ ぼくに話して聞かせてくれないか？ 君の胸の中にある叶えたいことを。ぼくはそのために、君に会いに来たんだ」

キザったらしいセリフを吐くと、アクアが呆れたように肩を竦めた。いいじゃないか、少しくらい格好付けたところで。演技とハツタリが大事な時もあるのだ。

「じゃ、じゃあ、あの……」

少年はそう言うと、勇気を振り絞るように大きく息を吸い込み、ついでに何故か顔を赤らめた。そして、ぼくではなく、アクアに対してその『願い』を告げる。

「ずっと前から好きでした！ その、お友達からでいいので仲良くしてください!!」

「……は、ああああ?!?!」

思わず叫んだ。

アクアは目を白黒させていたが、やがて頬を染めて「……えっ?」と口元に手を当てる。

やめてそのまんざらでもないみたいな顔。君、氷雪系美少女だったでしょ、ちゃんとキャラ守ってくれ。

「ダメダメ絶対ダメだから!! アクアはぼくの、アキ・ポッターの彼女なの!! 君に渡してたまるものか!!」

声を限りに叫ぶ。と、少年は再びしゅんと俯いてしまった。

「……ダメ、ですか?」

「ダメに決まっているだろう!!」

……まあ、そんなこんなで。

一番目の願い事を叶えるわけにはいかなかったが、『引込み思案で不安症の性格を改善したい』という二番目の願いを叶えることで、なんとか手を打ってもらうことにした。そのためにかなりの日数を費やすことになったが、しかし背に腹は代えられない。

ついでに言う『二番目の願い事』でも、きちんと羊皮紙から名前が消えるということが分かったことは、収穫と言えよう。

しかし、しかしだ。アクア本人の前で、ぼくが思わず口走ってし

まった言葉が消えるわけもなく。

あれほど楽しみだった合同授業がそれから一週間ほど物凄く気ま
ずくなってしまったことに関しては……誰に文句を言えればいいんだ
ろうな。

第20話 ベツレヘムの星

「今日は、お仕事はお休みなの?」

目の前に、暖かな紅茶がコトリと置かれた。

ハリーはベビーベッドの中で、空中に浮く金色の小さなボールに手を伸ばしては、きやいきやいと機嫌よく笑っていた。流石はジエームズの子だ、この子も将来、シーカーになりそうだな。

「ああ、うん……多分、近々昇進するから。来れなくなる前に」

「凄いいじゃない。おめでとう」

「……ありがとう」

昇進と言っても、上の席が空いたから、繰り上がりでぼくが収まることになるだけなのだ。

ぼくが所属する、闇祓い局の第一班。ぼくが入ってからずっと班長を勤めてくださっていたリスター先輩が殉職されたのは、つい三日前。繰り上がりで、エリス先輩が班長に、ぼくが副班長になることは明らかだった。

でも、そんな血生臭いことは、リリーの耳に入れる必要はない。

「秋が来るときは、いつもジエームズがいないとき。見計らってるんでしょ」

「そんなことないよ……たまたま、だよ」

嘘だった。特に、今日は。

リリーに聞いて欲しい話が、あったから。

「……美味しい。リリー、腕上げたね」

お茶請けのケーキの味に、目を瞠った。へへん、とりりーは自慢げに胸を張る。

「でしょ！ お料理、随分上手になったのよ！ いつでも食べに来ていいんだからね！」

「うん、いつか、きつと」

柔らかく微笑んだ。

正面で、リリーがフォークを置く。

「……ね、秋。何か話したいことがあって、来たんでしょ?」

「……鋭いね。女の勘、ってやつ？」

「茶化さない」

「はいはい……」

カップの中の液体を、ぼんやりと見つめた。揺らめく琥珀の水面に、ぼくの顔が映っている。

「セブルスに、会ったんだ」

その名前に、場が緊張したのが手に取るように分かった。

「闇祓いの、任務でね……向かった先で、かち合った。勿論、想定してなかった訳じゃない……たとえ過去がどうであれ、普段通り動けるようにシミュレーションしていた、それなのに」

全く身体が動かなかった。

目の前で、簡単に取り逃がしてしまった。

「……秋」

静かに、リリーはぼくに問いかけた。

「セブは、誰かを殺した？」

その言葉に、思わず表情を変えた。変えてしまった。

ぼくの変化に、リリーが気がつかないはずがなかった。

「……それ、は」

言い淀む。

しかし、リリーの眼差しは強かった。

「ねえ、前にも言ったわよね、私。あなたの暗闇に寄り添いたいって」

「……それは、でも、今は」

今は、違う。

「何が違うというの？ 状況？ あなたの立ち位置？ 変に偽らないで。私を誤魔化そうとしないで。私はあなたの親友よ、そうでしょう？」

ぼくの震える手を、リリーは掴んだ。ぎゅつと、両手で握り締める。

「……ぼくは、君に聞かせたくはない」

「じゃあ、秋が喋りたいことだけでいい。私の質問、答えられる？」

それは——それならば。

「……セブルスは、殺していないよ。その痕跡は見当たらなかった」

ぼくの後輩と、あの家の主人。二人を殺したのは、別の人間の杖だ。そのことが分かって、随分とホツとしたことを、覚えている。ホツとしてしまった自分に、激しく自己嫌悪した。

「そう……それは、良かった」

そう言つて、リリーは目を細めた。

ぼくの手を、リリーは優しく撫でる。とても暖かくて、柔らかな手の平だった。

この手で触れられると、ぼくの罪が全て赦されるようで——赦されると勘違いしそうで、心が軋む。

昔ならともかく、今のぼくの暗闇に、リリーを巻き込むことはしちやいけない。

この胸中を、この真つ黒な感情を、全てリリーにぶちまけたなら。リリーはきつと受け止める。受け止めてくれる。だからこそ、リリーは巻き込めない。

ぼくの罪を悟った上で、こうしているのだとしても。悟られるのと、自ら知らしめるのとじゃ、全然違うのだから。

リリーのことを、好きだった。だからこそ、区切りはつけなければいけない。

「変なこと、言つてもいい？ 秋」

急に、リリーはそんなことを尋ねた。

そんなことを改めて聞くなんて。昔から君は、変なことをよく言う子だったじゃないか——そんな軽口は、今は叩けそうになかった。

「……どうしたの、リリー」

「あのね。今なら、セブルスを許せる気がするの」

「……………」

「どうしようもない、ことだけどね」

力無く、リリーは笑つた。ぼくも、静かに息を吐く。

「……ああ、本当に、どうしようもないね」

ぼくらが再び笑い合える未来。

そんなもの——幻想だ。

ボタンと扉が開いた大きな音に、ぼくとリリーは飛び上がった。お

互い瞬時に手を離す。

「リリー！ リリー聞いてくれよ！ ……おや、秋もいたのか。いらっしやい」

「もう、ハリーがビククリするから大声を出さないで」

「はっはっは、それは済まなかった。ただいまハリー、パパでちゅよー！ 同じ黒髪でも、パパは秋じゃないからな！ パパは僕、ジェームズ・ポッター！ そこんとこちゃんと覚えてよね、我が息子よー」

「まだ歩けもしないハリーに何言ってるんだか」

リリーが肩を竦めている。

ジェームズはハリーの元へとスキップ気味に駆け寄ると、ハリーを抱き上げようとして、金色の小さなボールに気付いたようだ。ぶんぶん飛び回るそれを、見事な反射神経でキャッチしては、しげしげと眺めている。

「これは秋の仕業かい？ 僕らの息子の扱いに随分と手馴れたようだね」

「そんな恨めしそうな口調で言わないでつてば。でも、ハリーはきつと、いいクイディッチ選手になりそうだ」

「そりゃあ僕の息子だからね！ というかクイディッチに殆ど興味を示さなかった秋に『いいクイディッチ選手になりそうだ』とか言われたくないね！」

「全然似てないって」

下手な声真似に、苦笑が零れる。その時、ハリーが泣き出した。ジェームズが金のボールを取り上げたことがお気に召さなかったのか。つくづく、ジェームズの息子だ。

「ああ、ごめんごめん！ 君の遊び道具を取り上げるつもりはなかったんだぜ！ ほらほらだからどうか泣き止んでくれよ……」

オロオロとジェームズは、泣くハリーの周囲を右往左往しては助けを求めようとリリーに視線を投げかける。

仕方ない、とりりりは息を吐いてハリーを抱き上げた。泣き喚くハリーをなだめすかしに入る。

「様ないね、『パパ』」

「うるさいね……君だつて親になれば、この気持ち分かるさ。パパはママには勝てないんだつて」

「ぼくが子供を持つ日が来るとは思えないけれど」

戦死率の高さ故か、専門性の高い職だからか、闇祓いの殆どは独身だ。結婚している者なんて、ロングボトム先輩とプルウエツト先輩くらい。プルウエツト先輩は、既にもう『アリス・ロングボトム』なのだけれど、昔からの癖が抜けずに、未だに旧姓で呼んでしまう。「職場では旧姓で通すから、気にしないで」と笑っていたっけ。

そんな彼女は、今は産休に入っていてここ半年ほど姿を見ていない。いつか、子供とも会つてみたいものだ。確か、もう産まれたはずだけれど。それなら、ハリーと同じ年になるのか。

その時暖炉から、ふわりと一通の手紙が飛んできた。ひらりひらりと舞う手紙を、ジエームズはキャッチすると「なんだろう？」と首を傾げながら開く。

目を通すうちに、その顔はだんだんと渋いものとなった。

「……ダンブルドアが来るよ」

「そうなの？ なら、ぼくはちよつとお暇しようかな……」

「いや」

ジエームズは手紙から目を離すと、ぼくを見て言った。

「君もいてくれ、秋」

「……何かあったの？」

いつものおちゃらけた彼と、雰囲気違った。ぼくが尋ねると「詳しいことは、ダンブルドアが話してくれるはずだ」と言葉少なに呟く。やがて戸口に姿を現したダンブルドアは、ぼくがここに訪れていたことも全て承知していたようだった。

ダンブルドアが語る話を、ぼくらは固唾を飲んで聞いていた。

闇の帝王を打ち破る力を持った者が、七つ目の月が死ぬとき、闇の帝王に三度生き残った両親の元に生まれるという予言が為されたこと。

その者がジエームズとリリーの息子だと、ヴォルデモートが見当をつけたという情報が入ったこと。

「身を隠すのじゃ、ジェームズ、リリー。秋、手伝ってくれんかの？」
「……一つ、伺ってもいいですか？」

ダンブルドアの話に少し不可解な部分があつて、ぼくは片手を上げた。

「予言は、シビル・トレローニーから、ダンブルドア、あなたに為されたものなんですよ？ どうしてそれをヴォルデモートが知ることが出来たのです？」

「同じことを僕も思っていた。是非とも聞かせて頂きたい。ひよつとすると防音侵入者避け対策を怠った挙句に、闇側の人間に盗み聞きをされたのでは？」

ジェームズがぼくの言葉に、更に苛烈な援護射撃をする。援護射撃でも、射手の力量次第で致命傷を与えることにもなるらしい。ダンブルドアは両手を上げて降参の構えを取った。

「老いぼれが言い訳をさせてもらうなら、わしは予言を受け取りに行ったのではなく、新任の古い学の先生を面接するために向かったのじゃがのう」

「それでもこのご時世にそれを、しかも貴方がそれを怠ったのは怠慢であるとしか言いようがない」

さすがに予言の内容が自ら、そして愛すべき息子に関わり合いがあるものとなれば、ジェームズの怒りようも最もだろう。杜撰だお粗末だと彼の口が放り投げるのをしばらく鑑賞していてもいいが、しかし目の前にいるのは仮にも恩師であった。

「過ぎたことを言っても仕方がないですから、もうあなたの不手際をどうこう言うのは止めましょう。ジェームズもそれで抑えて」

ジェームズはハシバミ色の瞳にありありと『まだ責め足りない』という色を乗せていたが、それでも不承不承黙ってくれた。ぼくはダンブルドアに向き直ると、口を開く。

「で、どこの誰なんですかその死喰い人は。そいつを殲滅します」

「秋、対象者は一人なのだから、殲滅という表現は合わない」

「ならば虐殺します。せめて苦しんで死ね」

「清々しいばかりに表現を選ばなくなったね、秋」

僕は君のそういうところも好きだけどね、と晴れやかな笑顔で言うジエームズ。当然だ。ジエームズとリリー、それにハリー。ぼくの身内である彼らに手を出されたのなら、ぼくが黙っている訳もない。

「虐殺はして欲しくないのう。彼はこちらに寝返ることを決意して、スパイの役どころを了承してくれたのじゃ。貴重な手駒を無駄にしとうない」

ダンブルドアは、そう飄々と言つてのけた。予想はしていた返答に、それでも肩透かしを食らう。

そういう返しをするのなら、ダンブルドアはぼくらにその死喰い人が誰なのかを教えたくはないのだろう。しかしそんな予想を立てた一瞬後、ダンブルドアは彼の名前を口にした。

因縁のある、その名前を。

「二重スパイをしてもらっている彼の名前は、セブルス・スネイプ。君たちもよく知っている名じやろう」

知っている。

知っている——どころの騒ぎではない。

ジエームズはその名前を聞いた瞬間、物凄い表情をした。殺意を籠めた顔、とでも評すのだろうか。親の仇を見る目、いや、そんなのはまだ生ぬるい。般若のような顔だ。学生時代より凄みを増している、伴侶を持ち子供を持ち、親としての責任が備わったからか。ぼそりと彼の口から「昔叩き潰しておけばよかった」と零れたことは聞き間違いではないだろう。

その後、ジエームズはハツとした表情でぼくとリリーの表情を盗み見た。しかしジエームズがぼくを見るのは一拍遅かったので、表情を取り繕う時間は十分にあった。まあ、リリーが今どんな表情をしているのかまでは、定かではない。

「……そうですか。彼が」

押し殺している訳でもなく、全く気負わずに平坦な声が出た。怒りを通り越したら、いっそ人は無表情になるというが、それは声にしたって同じことらしい。

「あなたの役に立つというのなら、この戦争の役に立つというのなら、

「虐殺はしないでおくことにしましょう」

「助かるの、秋」

「ポッター家の方々が身を隠すのを、手伝えばいいんですよね」

「そうじゃ。多少、複雑な手続きになるのは否めんが、彼らの安全のためじゃからの」

「いいですよ」

ぼくは「も」もなく引き受けた。

「彼らの命を守ることは、ぼくの意に反しませんから」

第21話 想いの果て

「……レインウオーター、貴様……誰だ」

喉元に杖を突きつけられ、闇祓い局第一班班長アルベルト・リスターは低い声で唸った。自身に杖を突きつけている人物——二つ下の後輩、第一班副班長であるエリス・レインウオーターを、鋭く睨みつける。

杖を握るエリスの手の甲には、抵抗され付けられた深い傷口が、切り裂かれた手袋の間から覗いていた。しかし、骨まで達するほどの深い傷だというのに、その傷口からはほんの僅かの血液しか零れていない。頬を一文字に薙いだ傷も、同様だった。

「レインウオーターを、どこにやった」

「やだなあ、ここにいないじゃないですか」

「どういう——」

「アバダ・ケダブラ」

緑の閃光が杖から迸る。ぐつたりと崩折れた『元』先輩に対し、エリスはちやらかした十字を画いた。手に持っていた死喰い人の杖を、自らの杖で粉々に破壊する。木屑と化したそれを、その辺りに放った。

「あなたが知る必要はない、リスター『先輩』——全ては」

あの方のために。

歪な弧を描いた口元を見た者は、いない。



第一班副班長の席を、拝礼して受け取った。

かと言って、やることは変わらない。ぼくはただ、敵方の戦力を出来る限り削ぐ、それだけだ。

ダンブルドアは、ジェームズとリリーに『忠誠の術』という魔法を使うことを提案した。とても古く、強力な魔法。生きた人間の中に秘密を隠し『秘密の守人』とすることで、守人が漏らさぬ限り、その秘密が外部に漏れることはない、という類のものだ。

最初、ダンブルドアが『秘密の守人』になろうかと自ら名乗り出たが、ジェームズはそれを拒否した。彼の中では『秘密の守人』にした人はもう決まっているようだった。

シリウスかな、と頭の片隅に思い浮かべる。結婚式の仲人も務め、ハリーの後見人にもなった親友のシリウスを、ジェームズはきつと誰よりも信頼しているだろうから。

ぼくとしても、シリウスがジェームズを裏切ることなんて想像すら出来なかった。ジェームズを裏切るくらいなら、シリウスは死ぬことを選ぶだろう。そんな絶対的な信頼を感じた。

セブルス・スネイプは『死喰い人』であることの間違いに気づき、戻ってきたのだと、そうダンブルドアは告げた。

でも、だから？

だから、何だと言うのだ？

だからと言って、ぼくが彼を許すことはない。彼がぼくを許すことがないのと、同じで。

ぼくらの進む道は、あの瞬間断ち切れたのだ。

ともあれ。

『不死鳥の騎士団』におけるジェームズとリリー、特にジェームズの尽力は非常に大きかった。彼らが家から自由に動けなくなった今、『騎士団』の残りのメンバーにかかる負担は大きくなる。

新しくメンバーに加わる人数より、殉職して消える人数の方が圧倒的に多かった。

昨日まですぐそこで笑っていた人が、明日には物言わぬ死体になっている。

昨日友人だった者が、明日は『服従の呪文』を掛けられている。

そんな時代を、ぼくらは過ごしていた。



ハリーとダンブルドアの個人授業は、トム・リドル——ヴォルデモートについて知るための、記憶の旅のようだった。

ダンブルドアは、どうしてハリーにそんな記憶を見せるのだろうか。彼が全く不必要なことをするとは思えない、きつと未来での、何かしらの布石なのか。

でも、一体何のために？ それは、今のぼくらにはいくら考えても分からない事柄だった。

十月半ば、学期が始まって初のホグズミード行きがやって来た。まだホグズミードへの外出が許可されるとは。その分安全対策は普段の何倍も厳しくなるのだろう。

ともあれ、ホツと息つける場があるというのは有難い。スマートにアクアをデートに誘い……なんて、出来たら良かったのだけれど。スマートとは程遠く、もう夏は過ぎ去ったはずなのに滂沱の汗をかくことになってしまった。いつかさりと女の子をデートに誘えるような男になりたいものだ……何年掛かっても無理だろうなあ。

ま、それはそうとして。ホグズミードへ行く日は朝から荒れた天気ではあったが、ホグワーツ生の気分は浮ついていた。

「ねえ、ぼくこの服でアクアの隣に並んで大丈夫？ 変じゃない？」

「おー、似合ってる似合ってる」

「せめてこっち見てから言え馬鹿！」

レイブンクロー寮の寝室で、姿見相手に百面相していたぼくは、こちらをちらりとも見ず生返事をしたアリスに向かって丸めたマフラーを投げつけた。魔力に後押しされたマフラーは、空気抵抗なんて言葉が存在しないかのような速度で飛んでいくも、狙いが僅かに逸れてベッド脇の戸棚に当たる。倒れた戸棚が中身を吐き出したのに、慌てて「ごめん！」と言いながら駆け寄った。

「……つたく、ノーコンが」

「ごめんごめん、そんなつもりはなかったんだよ！」

同室の友人、ウィル・ダークとレイン・スミツクは、ぼくらを「またやってるよ」と言った目でちらりと見るだけだ。ストックされていった羊皮紙にインク壺、替えの羽根ペンや手紙の束、以前使っていた教科書などが辺りに撒き散らかされる。あー、まずい、これは後からアリスにぶん殴られるやつだ、と内心覚悟を決めながらも、身を屈めて

拾い集めた。

「……………ん？」

様々な雑貨に紛れて、未だ包装が剥がされていないラツピングボックスが落ちている。真っ黒の包装紙で包まれており、中は伺えない。包装紙を留めるシールには、赤い文字で『C O L D S T E E L』と記されていた。

ぼくが手を伸ばすより、アリスがさっとそれを拾い上げる方が早かった。戸棚の上段に放り込むと、パタンと閉じてしまう。

「ダツフルコートはやめとけ、子供っぽく見える。ただでさえ童顔なのに救いようがねえぞ」

「う、うるさいな……………」

「チエスターか、うーん……………ネイビーとかそういう色のロングコートかな。トレンチは……………微妙だな。もう少ししやんとした顔になればいいんだが」

「生憎と生まれてこの方この顔なんでね！ 悪かったな！」

とは言え、アリスのアドバイスは貴重だ。羽織っていたダツフルコートを脱ぐと、紺色のロングコートを取り出して袖を通す。

ぼくの姿を横目で見たアリスは「ま、そんなもんか」と小さく呟いた。



ホグズミードは、予想してはいたけれども骨身に沁みる寒さだった。鼻までマフラーを巻きつけていても尚寒い。

「来るべきじゃなかったな……………」

「……………そっつ…」

少し寂しげに囁かれるアクアの声。ち、違うんだ、君にそんな顔をさせるつもりはなかった。そう慌てて言い訳すると「……………分かってるよ」と微笑まれる。

……………なんだか、いつまで経っても彼女の手のひらの上で転がされる気がする。それも悪くはないな、と思うのだけけれど。

とは言え、寒空の中ぼううつとしていたら本当に凍死してしまう。ぼくらはひとまず『三本の箒』を目指して歩き出した。あそこには、暖かな空調と、甘く湯気を立てる飲み物と、ホッと一息つける椅子、それに昔と相も変わらぬ美人なマダム・ロスメルタがいる。

「……マンダンガス？」

予想もしていなかった人物に、目を丸くした。『三本の箒』前で座り込んで行商を行っていたマンダンガス・フレツチャーは、ぼくの顔を見てあからさまに肩を跳ねさせた。

「よう、アキ……デートか？ ヒヒツ、若いってのは羨ましいねえ……」

言いながら、広げていた品物をかき集める。

その時、急にアクアが身を屈めた。品物を袋に詰めるマンダンガスの手を掴む。

「……待って。それ、どこから手に入れたの」

凍てつく寒さより、アクアの口調の方が冷たかった。隣にいるぼくでさえそう感じたのだ、向けられた本人であるマンダンガスはぶるりと身震いをした。

「この家紋はブラック家のものよ。純血の由緒ある品だわ。あなた如き下賤な者が、気安く触れていいものではないわ」

なんだって。慌てて検分すると、確かに見覚えがあるものだった。去年グリモールド・プレイスの大掃除の際、戸棚に飾ってあったものが軒並み置いてある。

変色した銀の箱に、錆を心なしか落とした短剣、銀のゴブレット、かつては多くの宝石がついていただろうオルゴールは無残な姿で置かれているし、勲一等のマーリン勲章までもある。

「マンダンガス。詳しく話を聞かせてもらいたんだけど、構わないよね？」

「くい、と親指で『三本の箒』を指し示し、微笑んだ。マンダンガスは更に青ざめる。

「アキ！ アキじゃないか！ こんなところで何しているの？」
「ハリー」

今日のぼくは運がいいようだ。駆け寄ってきたハリーの姿を見て、マンダングスの顔は青を通り越して白っぽい色になった。

簡単に経緯を説明すると、ハリーの穏やかだった目つきが変わる。「シリウスの屋敷からあれを盗んだんだな。何をしたんだ？ シリウスが倒れた夜、あそこに戻って根こそぎ盗んだのか？」

「ハリー、ダメよー！」

杖を取り出して詰問を始めたハリーを制止しようと、ハーマイオニーが声を上げる。

瞬間、もうどうにもならないと悟ったのか、バーンと音がしてマンダングスは『姿くらまし』してしまった。ハリーは大きく舌打ちをしながら地団駄を踏む。

「……あの盗つ人、今度会ったらタダじゃおかない」

「まあ、盗品が詰まった袋をここに置いていったことだけでも感謝しましょう。私だってあなたの立場だったら怒るに決まっているもの、だってあの人が盗んでいるのは、あなたの物なんだし……」

ハーマイオニーが宥める口調で言う。ハリーはその言葉にハッとしたようだった。

「……そうか、グリモールド・プレイスの所有者は僕だったね。そうだ、僕はシリウスが戻ってくるまで、あの屋敷をきちんとした状態に留めておく義務があるんだ。なのに、あの男……」

怒りがふつつと収まって止まらない様子のハリーに、アクアがブラック家の品物を手渡した。少し気が削がれたのか、二、三度瞬きをしてから「……ありがとう」とハリーはアクアに告げる。

空間を切り裂くような甲高い悲鳴が、近くで上がった。悲鳴が上がった方向を振り返り、思わず目を瞠る。

人が、空中に浮いていた。両手を伸ばし、今にも羽ばたかんとするかのような。両目を閉じ、表情は能面のように動かない。

「……ケイティ？」

ハリーが呆然と呟いた。

と同時に、ケイティが物凄い悲鳴を上げる。苦悶に苛まれるかのような、ぼくの記憶で一番近いものを上げるとするならば——『磔の呪

い』を受けた者が上げる声と、よく似ていた。

その想像に顔をしかめたが、しかし我には返った。杖を抜くと『全身金縛り呪文』を掛ける。ドサリと雪の中力なく倒れたケイティに、彼女の友人であろう女子生徒が慌てて駆け寄った。ぼくは魔法で担架を出すと、ケイティを浮かして乗せる。

「何が起こったの？」

ハーマイオニーは女子生徒の肩を抱き、尋ねた。

「包みが破れた時だったわ」

女子生徒が茶色の紙包みを指差した。裂け目の間から、緑色に光る物が見える。

ロンが手を伸ばしかけたのを、ハリーが引き戻した。

「不用意に触っちゃダメだ。ロン、ハーマイオニー、ケイティを学校まで連れて行って欲しい。そしてダンブルドアを呼んでくれないか？」

僕らもすぐに向かうから」

ロンとハーマイオニーはそれぞれ頷くと、ケイティに付き添って学校へと向かって行つた。雲が吹きすさぶ中、ぼくとハリーは屈み込んで包みに目を凝らす。

「……アキ」

「ああ……呪いが幾重にも掛かってるね」

オパールのネックレスだ。ハリーはそれを険しい表情で見つめながら「随分前に、ボージン・アンド・バークスでこれと同じものを見たことがある」と呟いた。

「ケイティはどうやってこれを手に入れたの？」

「ええ、そのことで口論になったの。ケイティは『三本の箒』のトイレから出てきたときそれを持っていて、ホグワーツの誰かを驚かす物だつて、それを自分が届けなきゃならないって言ってたわ。そのときの顔がとても変で——きつと『服従の呪文』に掛かっていたんだわ。私、それに気がつかなかった……」

『凍結呪文』を唱えると、ピシリとネックレスが氷漬けにされた。杖を振り、ひとまず『消失』させる。このままだと二次被害を引き起こしかねない。

「ケイティは誰からもらったかを言っていないかった?」

「教えてくれなかったわ。それで、あなたは馬鹿なことをやっている、学校には持つていくなつて言ったの。でも全然聞き入れなくて、そして……それで私が引つたくろうとして……それで——」

しばらくぼくらは無言で学校までの道のりを歩いたが、校庭に入つた瞬間ハリーが口を開いた。

「マルフォイがこのネックレスのことを知っている。四年前、ボージン・アンド・バークスのショーケースにあった物だ。僕がマルフォイや父親から隠れているとき、マルフォイはこれをすっかり見ていた。僕たちがあいつの跡をつけていった日に、あいつが買ったのはこれなんだ! これを覚えていて、買いに戻つたんだ!」

「……どういうこと?」

ハリーの言葉に、アクアが食いついた。

ハリーは手短に、夏休みにボージン・アンド・バークスでドラコが何をしていたかを説明する。ハリーの言葉を聞きながら、アクアの表情がどんどんと暗くなつていくのが見て取れた。見かねてぼくは口を挟む。

「でも、彼女はケイティが女子トイレであれを手に入れたつて言っていたんだよね。なら、ドラコが渡すのは厳しいんじゃないかな……」

あのドラコが、いくら何か目的があるのだとしたつて、プライドが高い彼が女子トイレに入る姿は……さすがに想像がつかない。

「女子トイレから出てきたときにあれを持っていったつて言っていた。トイレの中で手に入れたとは限らない——そうだよな?」

ハリーは女子生徒に確認するように尋ねた。

ハンカチを手にし、顔色も蒼白ではあったが、女子生徒は首肯する。

「……ドラコ」

マフラーに顔を埋めながら、アクアは眉を寄せて囁いた。アクアにハリーは尋ねる。

「アクア。最近のマルフォイで、何か不審なこととかない? どんな些細なことでも構わないから」

その言葉に、アクアは目を伏せた。

「……よく、分からないの。最近のドラコは、私と全く口を利いてくれないし……私が近付くと、すぐどこかへ行ってしまうの。だから……役に立てなくて、ごめんなさい」

「ドラコが、君を避けているの?」

目を見開いた。ハリーも驚いたように口を噤んでいる。

ドラコが、アクアを避ける理由とは。昔から、ドラコはずっとアクアのことを気に掛けていた。ぼくと想いの種類は違えど、アクアのことを大切に考えているのはドラコも同じ。——そう、思っていたのに。

「……とうとう、私に愛想尽かしちゃったのかな」

アクアは、無理矢理にも笑顔を浮かべてみせた。その笑顔に、何と言葉を掛けていいのか。

「……アクア」

しかしタイミング悪く、いいや、見方によっては『タイミング良く』マクゴナガル先生がこちらに駆けてきたため、アクアに声を掛ける機会を見失った。場面が切り替わったことで、アクアの一瞬の微笑みも見えなくなる。

「……………」

重苦しい空は、いつもより暗く、果てが見えなかった。

第22話 デウス・エクス・マキナ

「幣原」

机の上のマグカップが取られ、コーヒーを注がれて返ってきた。そのことに我に返って時計を見る。気付けば三時間、書類に埋もれていた。

「あ——ありがとうございます、エリス先輩」

エリス先輩はぼくを見てにっこりと微笑んだ。頬は真っ白のガイズで覆われている。怪我でもしたのかと思いつながらも、聞けるような雰囲気ではない。

先輩は椅子に腰掛けると、左手でカップの持ち手を掴み口に運んだ。

「少しは、息を抜かないと」

「はは……さすが、凄いですね、先輩は」

ぼくよりもっと多い仕事を抱えているのにも関わらず、ぼくを氣遣ってくれるのだから。本当に凄い人だ。

「凄くないよ、私はね」

謙虚に先輩は笑ってみせる。つられて、ぼくも笑った。

「もうすぐ、君の同期だった二人の研修期間が終わる。誰が欲しいかは、大体班長が話し合っただけだけど……君が望むなら、その二人を第一班に迎え入れても構わないよ」

「ああ……」

同期。リオンとヴィッガーの姿を、脳裏に思い浮かべた。ほんの二年前なのに、随分と昔のように感じる。そうか、あの二人が。

「どっちでも……構わないですよ。そりゃあ、また一緒にいられるってのは嬉しいですけど、仕事だし。……うちの班は特に、戦場の第一線だし」

ただでさえ高い閹祓いの死亡率、その中でも第一班は五本の指に入るだろう、残念なことに。その分、成果もダントツではあるが——人の命には何物も比べられない。

ぼくが言うな、の話だろうか。

視線を落とした先で、エリス先輩の右手が目に入った。使い込まれた黒の革手袋、その甲の部分が、一文字に切り裂かれている。裂かれた手袋の間からは、白い包帯が巻かれているのが見えた。

「先輩、手……」

どうかしたんですか、と言いかげながら、先輩の右手に手を伸ばした瞬間、バツとエリス先輩に払われた。あまりに素早い動きで、思わず目を瞠る。

「気にしない。怪我くらい日常さ、皆隠して生きている」

「……それは」

確かにその通りだった。怪我していない者の方が少ない。今までで、一切怪我を負っていない者なんて——ぼく、くらいのものだ。

恐ろしいまでの、この魔力。何人をも連続で殺傷しても尚衰えないこの魔力は——しかしぼくを一切傷つけない。

「……………」

杖腕を怪我して大丈夫なのか、という言葉を、飲み込んだ。

ぼくが心配しても仕方がないものだ。ぼくがどうにか出来る問題ではないのだから。

ぼくが出来ることはただ、一人でも多くの敵を倒すこと。

ただ、それだけだった。

それだけしか、ないのだった。



暖かい毛布の中、目を覚ました時は、辺りはまだまだ暗かった。誰もが寝静まり、シンとした寮の中は、昼間のざわめきこそが夢だったのではないかとまで思う。

ナイトスタンド上の腕時計に手を伸ばすと、僅かな光を頼りに文字盤に目を凝らした。深夜三時半。腕時計片手に身を起こすと、髪をガシガシと掻き——ふと、淡い光に目を遣った。

光の原因は、トム・リドルだった。

輪郭は淡く発光しており、この世の者ではないことが如実に分か

る。机に備え付いている椅子に浅く腰掛け、足を組んで背中を丸めては、膝に乗せた本をパラリパラリと捲っていた。あの手織りのブックカバーは、ぼくが梓さんから受け取った、幣原直が書いたとされる本だ。

声を掛けようとした瞬間——見間違いかと思った。絵画の人物のように儂く美しい彼の頬を、一滴の水がつつと伝ったのだ。薄い唇が僅かに動き、何かの言葉を形作る。思わず息を止め、固唾を呑んでリドルを見つめた。

「……リド、ル」

小さな声で名前を呼び掛け、慌てて杖を掴んだ。防音呪文と目くらまし呪文を二重に掛けると、カーテンで区切られた多くのスペースに、青白い幾何学模様が浮かび上がり、やがて空間に定着するように消える。息を吐いて、リドルに目を向けた。

「やあ、アキ。珍しいね、君がこんな時間に」

先ほどの涙はどこへやら、普段通りの美しい微笑みを浮かべて、リドルは僅かに首を傾げた。

「……目が覚めちゃった。リドルは一体、どうしたの」

「んー、バレちゃったから言うけど、実はこうして夜な夜な君が寝ている時に現れては、この本に目を通していたんだよ。僕が、ずっと欲していた本だったからね」

リドルは膝の上の本を軽く持ち上げてみせた。そう言えば、五年生の終わりに、そんなことも言っていたっけ。『日本魔術の書物を読みたい』——あの本が一概に『日本魔術の書物』とは言い切れないけど、なるほどリドルが欲していたのはこの本だったのか。

幣原直が、書いた本、だったのか。

「……何が書いてあるか、分かるの？」

「時間と人並みの検索能力さえあれば、誰にだって分かるよ。幸いにして、僕はどちらも備わっているからね」

「はは……人並みというか、君は人並み外れた能力を持っているじゃない」

まあね、と謙遜すらすらにリドルは頷くと、本の表紙を撫でた。随

分と、優しい手つきだった。

「アキ。『デウス・エクス・マキナ』って言葉、知ってる？」

唐突な言葉だった。戸惑いながらも首肯する。

『機械仕掛けの神』——物語における表現技法の一つだよ。シェイクスピアのオーベロンとか」

「ああ、そう言えば住んでいたダースリー家には、超がつくほど有名な作品がずらりと並んでいたっけね」

「ファウストだって知ってるさ。唐突に現れた、今までの展開とは無関係な事柄が、物語の結末を付ける……で、合ってる？」

「その通り。物語ではよく『超展開』やら『ご都合主義』やらと並んで、あまり好ましくない手法とされている。そりゃあそうだ、今まで何日も何時間も掛けて読んできた物語を、そんなポツと出の奴に手渡してエンドマークを付けられたと思う奴はそういないからね。『誰もが納得の行く結末を』なんて贅沢は言わないまでも、納得は出来ずとも、せめて整合性のとれた、一貫性のある物語を読みたいものだ。……だから、この本こそが、もしこの日常が物語なのだとしたら、まさしく『デウス・エクス・マキナ』と呼ぶにふさわしいものだ、僕は思うよ」

リドルの言っていることは、言葉の意味は分かるのだけれど、何を言いたいのかまではよく分からなかった。

しかし、たった一つだけ、そんなぼくでも分かったことがある。

「……その本は、それじゃあ……今までのぼくらのやってきたことを、引っくり返してしまえるようなものだったってこと？」

ヴォルデモートにも、幣原秋にも、全てに無理矢理ピリオドを打つような。

そんなとんでもない力を秘めた、ものだということか。

「ひっくり返す、どころじやない。全てを無に還す代物だ。決着がつきかけたチェス盤を、破壊してから素知らぬ顔で『なかったこと』にしようような存在だ」

リドルは淡々と告げる。

梓さんの言葉を、思い出した。

『ねえ、秋くん。君にその本を託すのはね、君ならば、叶えられるから

だよ。その本はね、悪魔の書物だよ。今までの努力や苦勞、慟哭、後悔、成功も失敗も、全てを呑み込んでしまう悪魔の所業だ。全てをなかつたことにしてしまう、全てを水泡と帰してしまう。だから、直兄はそれをしなかつたんだ』

幣原直が——父が書き記し、しかし使わなかつた、とんでもない代物。

「……君はきつと、そこに書かれているものが何なのかは教えてくれないんだろうね」

ぼくの言葉に、リドルは笑つた。

「そんなことしたら、僕の楽しみが一つ消えるだけじゃないか」

「……ああ、君はそういう人だつた」

大きくため息をついた。

リドルはクスクスと笑つてから、ふと遠い眼差しを虚空へと向けた。

「……聞きたい？ 幣原直と、僕の物語」

思わず、息を呑む。

「……聞かせて、くれるの？」

「……気が向いたんだ。それより、どうなんだい？ 聞きたいの、聞きたくないの」

「き……っ、聞きたい、です」

慌てて答えた。リドルの気が変わっては敵わない。

トム・リドル——ヴォルデモートから、幣原直の話を聞くことが出来るなんて。

でも食いつき過ぎたら、リドルはひよいと引つ込めてきそうだし、かと言って興味ない素振りをしたら「あ、そう」とだんまりを決め込みそうだしで、加減が難しい。

「ならそこに正座して『リドル様どうか教えてください』と頭を下げなよ」

「わ、分かつた」

その程度で話が聞けるといふなら、安いものだ。いそいそと膝を曲げたぼくに、リドルは大きく息を吐くと「……君にはプライドという

ものがないのか」と、眉間に指を当てて呟いた。

「だって、リドルがそうしろつて言ったんじゃないか」

「だからと言ってハナから疑わずに土下座の準備をする奴もそうそういないよ。……全く、どうして」

そういうところは、直にそっくりだ。

目元を隠して、リドルはそう吐き捨てた。

「……聞かせて、リドル」

お願いだよ、と、囁いた。

「……飽きたら、止めるから」

彼にしては珍しい、はすっぱな口調だった。こくりと頷いたぼくを、彼は指の隙間から見遣る。

「僕が、あいつに……幣原直に出会ったのは、ホグワーツ一年生の、春のことだった」

哀愁を帯びた声が、夜の静寂に漂う。ぼくは、聞き逃さないように耳を澄ませた。

もう戻らない、あの日々を懐かしむ声音と共に、語られるはずのなかつた物語が幕を開ける。



僕が幣原直と初めて出会ったのは、ホグワーツ一年生の春だった。

四月という季節外れの時期の、外国、日本魔法魔術学校『魔法処』からの転校生。一人だけ違う、金色の裏地が縫いこまれた制服に、一人だけ違う東洋系の顔立ち。今ならともかく、WW2前のヨーロッパじゃ、日本人なんて見たこともなかった。

当時の校長、アーマンド・デイペットから紹介を受けた直は、随分と無愛想な表情で挨拶をしたものだった。

「幣原直です、初めまして」——日本語で言われた言葉を理解出来た人物は、あの空間の中じゃあアルバス・ダンブルドアくらいだろう。……なんだい、その顔。僕はダンブルドアが心の底から大嫌いだ、あの男の能力自体には正当な評価を下しているよ。

平坦なイントネーションの日本語を聞き慣れていない僕らにとって、直の言葉は名前だとも分からなかったほどだった。

どうして、聞き取れなかった直の挨拶の内容を知っているの？ その脳みそには一体何が詰まっているというのだい、とつと掻き出してもう少し有益なものでも詰め直してあげようか？

……冗談冗談。直の話をしていたら、懐かしくなったものでね。直に対してよくそんな戯言を言っていたことを思い出したのさ。直は気を悪くした様子もなく「弟よりマシさ」なんて言っていていつも笑っていたから、そのたびに僕は苛ついたものだがね。

直の弟って、こないだ日本で出会った幣原梓だろう、あの爺の。なかなかどうして食えない爺だったがねえ、僕の本体を欺いてこの本を守り切ったという点だけは褒めてあげるよ。

話が妙な方向に逸れたね、戻そう。

直の挨拶の内容は、後に会話するようになってから本人から聞いたのさ。あの時あんな無愛想だった理由もね。……島流し、放逐、村八分。どういう言葉が正確かは定かではないが、要は直が邪魔だと親族家族に思われ弾かれ飛ばされた。

その生い立ちを聞いたときにね、僕としたことが少し同情してしまったんだよ。自らの境遇に重ねてしまった、とも言うかな。味方はゼロ、一人ぼっちで言葉も通じぬ異国の地に放り出された少年。健気で泣けるお題目だ。

僕にも若かった頃はある。青臭く、心を通わせることの出来る友が、肩を並べ歩くことが出来る朋が、欲しかったんだ。

若い、若いし、我ながら痛いな。穿った目でかつての自分を見れば、僕は直を見下していたんだろう。

僕は自分の生まれが大嫌いだった。孤児院で育ったこと、どこかの馬の骨とも知らぬ自分の血統を恥じ、隠して偽って生きてきた、昔はね。そんな僕が、初めて自分より下だと思える人間に出会えた。初めて心から『可哀想だ』と思える人間に出会えた。

……屑だと罵るか？ なんだ、やらないの。詰まらないな。

何？ ああ、出会いの話ね。別に時系列に沿って話をしなくても構

わないだろう？ どうせ、君しか聞いていないんだから。

話したいように話をさせてくれよ。じゃないと、続きを話してやらないよ？

そうそう、それでいいんだ。思うんだけど、君、僕の笑顔に弱すぎない？ 僕というよりか、美少年や美少女にね。ベルフエゴール家の長女は確かに美少女だけど、僕の趣味じゃないな。……睨むなよ、どうせ君は『好みドンピシャ』と言っても同じように睨む癖に。

愛だとか恋だとか、どうして人はわざわざ目を瞑ってその場でぐるぐると回って当てもない方向へと歩き出すような凶行に及ぶのだろうね、さっぱり理解出来ない。直も可愛い女の子に弱くってねえ、顔は確かに可愛いんだけど、でも僕には結婚相手にアキナ・エンディーネを選ぶ気にはサラサラならないよ。学年一の変人美少女、アキナ・エンディーネをね。

ともあれ——物言いたげな顔をしているね、ひよつとして君の両親の馴れ初めだとかをもっと聞きたかった？ ははっ、聞かせてあげるものか。絶対教えない。

出会いの話に戻そう。たとえば同学年に転校生が来たからと言って、他のガキと同じようにはしゃいだり噂し合ったり、そんな浮ついた行動を取るなんて死んでも御免だからね、しばらくは転校生なんて気にも留めず、普段通りの生活を行っていたよ。

そもそも、転校してきたばかりの直は英語が分からなかったし、こちらも日本語が分かる人物なんていなかったからね。話しかけられるような人もおらず、直はいつも一人だった。直自身、それでも構わないと平然とした態度で過ごしていた。

実家に対する怒りと、見知らぬ地で過ごすというストレスで、ひとまずその日一日をどうにか過ごすので一杯一杯だったのだと、後から語っていたけれどね。言われるまで、そんなことを考えていたとは分からなかった。

直と僕のファーストメットは、四月十二日、直がホグワーツに転校してきて一週間が経った頃だった。少し転校生騒ぎが落ち着いてきた時だ。

廊下でね、呼び止められたんだ、直に。さすがの僕も、少しは驚いたよね。

『上に気をつけて』

そうたどたどしい英語で言った後、ふらりと直は立ち去って行った。何のことかさっぱり分からないまま、その日の授業が終わった後、夕食へと急いでいた時のことだ。

頭上からいきなり水をぶっ掛けられてね。そう、お察しの通り、あの忌々しいピーブズの仕業だ。ケタケタ笑うあいつを締め、笑った生徒の記憶を葬った後、直が少し離れた位置で僕を見ていたことに気が付いた。

どうして、直は僕に『上に気をつけて』なんて、これからピーブズに悪戯されることを知っていたようなことを言ったのだろう。一体何なんだあの転校生は。

あの当時の僕は、直の言葉の真意を知りたくって仕方がなかった。自分が分からないものがある、ということが我慢ならなかった。

直と付き合うようになって、日本語も学習したよ、序でだけどね。こつちが英語を教える序でさ。僕を師と仰ぐのなら、弟子はそれなりに才能ある者か、なけりや血反吐吐くほどの努力をして結果を出してもらおうじゃない。

幸いなことに、直は僕の期待に応えることが出来る程度の能力はあったようだからね、あつという間に平易な会話くらいはすぐに交わせるようになった。

……え？ ……ああ、君のことか。幣原秋の話だね。君にも、僕みたいなのが近くにいれば良かったのに。ま、僕は直の妙な能力が気に掛かって付き合い始めた訳だから、君の例とは少し毛色が異なるかな。

まあ、異国語を独学一年で会話まで持つていくのは凄いいんじゃないの、直より才能あるよ、多分ね。

ともあれ、気がついたら僕はいつの間にか、幣原直に対して友情めいたものを感じるようになっていた。友情、恐らく、そうなのだろうね。直と一緒にいると、心のままに振る舞えた。裏表なく、笑うこと

が出来た。安心して居眠りすることが出来た。

僕の傍若無人さや理不尽さを、直は平然と許して受け入れた。あー……ま、時折「弟よりマシだ」と疲れた笑みを浮かべてはいたけれどね。直の弟は一体どんな奴なのか、気になりはしていたけれどプライドが邪魔をしてね、興味のない素振りをいつもしていたよ。やっぱり聞いておけばよかった。

あんまりロクな人間じゃない？ 君が言うなら相当だな。ま、僕自身ロクな人間じゃないけれどね。直の周りにはそういう人間が集まるように出来ているのかな。

僕は、五年生の頃に本体から切り離された記憶だ。マートル・ウォーレンを生贄として……っと、口が滑った。何のことだい、追及しても無駄さ。またの機会にね。

君が心配せずとも、あの狸爺はハリ・ポッターに対して色々吹き込んでいるようだから、君がどうこうする必要はないんじゃないかな。僕も、一度敗れた本体に未練はないからね。

うるさいな。黙るよ？ ……よし、静かになったね。そのまま呼吸音と心音も止めて安らかな眠りに入ってくれても構わないのに。……冗談だって。

その後、一体何がどうなつて本体が直を殺すことにしたのか、その理由は一切知らない。……君のせい？ うん、ま、それもあるだろうな。でも、直を殺す気は無かったと思うんだ。

……理由はね、凄く酷い話かもしれないけれど、僕、トム・リドルにとって大切なのは幣原直一人で、たとえ直の息子だろうが嫁だろうが、そこらの有象無象と同じなのさ。

まあ、何となくの想像はつくよ。そう、君だよ、幣原秋。君の才能がね、きつと怖かったんだ。親友の息子を敵に回したくなかったのかもしれないね。

もつとも、その目論みはあえなくぶち壊された。

分かっていたはずなのにね、直が『予知夢者』だってことくらい、知っていたはずなのに。あいつから反撃を受けることなんて、考えてすらいなかったのか。

つくづくそういう辺りが、直のことを心の底から見下していたのだろう所以だな。恥ずかしい限りだ、全く。

僕は、直を殺した本体のことを許さない。僕の想像が当たっていたならば、それは五年生の頃から一切成長していないという証だ。そんな愚か者は、どうせ滅びを待つしか能がない。終止符を打つ価値すらない。

もし、想像が当たっていなかったなら——幣原直の死が、何か意味を持つものであったのならば。

万が一にでも、そうだったのならば……いや、明言するのは止めておくことにするよ。

ねえ、アキ。そして、幣原秋。

聞いているんだろう？ まさか『黒衣の天才』が、アキ・ポッターとトム・リドルの会話を聴き漏らすはずがないものね。

君たちがこの『デウス・エクス・マキナ』を使うかどうかは分からない。使わない可能性の方が高そうだ。

でも、もし、この本を使おうと、君たちが願うのならば。

その時は、僕は全力をもって、君たちを手助けすると誓おう。

嘘じゃない。僕は君に対して、嘘がつけないのだから。

魔法契約は幾千の言葉よりも雄弁だ。その、右手の小指に嵌った指輪に賭けて。

覚えておいて。『デウス・エクス・マキナ』は、読者にとっては非常に不義理で不親切な代物だ。

だけれど、物語の登場人物にとっては、違う。決して叶わないと思っていた願いが叶う、魔法の品だ。悪魔の作品だ。

これを、幣原直が——かつての友が作ったということがね、僕にとっては酷く、意味深なものに思えるんだ。もしかしたら、直も後悔しているのかもしれない、と。僕と同じように、思ってくれているのかもしれないと。

そう願うくらい、あってもいいだろう？

きつと、君はこの本を使わない。何となく分かるよ。

君は、未来を見据える人間だ。過去に置き忘れた宝物より、未来に

あるまだ見たこともない宝石を求めめる者だ。

分かってる、分かっているさ。

分かっているんだ。ただちよつとね、途方もない絵空事に、期待してしまっただけ。

……そう。それなら、あまり期待をせずに待つておくことにするよ。期待をして、呆気なく裏切られて傷つくほど、阿呆らしいことはないからね。

もし、この話が物語だったとして。

この結末に、読者は一体どう思うのだろう。

そのことは少しだけ、気になるかな。

第23話 都合のいいプロット

名前を呼ばれて、俯いていた顔を上げた。膝を抱えたまま、同じく膝を抱えているリーマスに返事をする。

「何？」

季節は冬に突き進んでいた。隙間風が至る所から吹き込んできている。

『不死鳥の騎士団』の任務で、ぼくとリーマスはとある家をじつと見張っていた。その家の主人、ないし夫婦が共に死喰い人かもしれない、という疑惑が上がったからだ。

しかし、それもガセネタなのかもしれない。オレンジ色の明かりの中、穏やかに過ごしている二人からは、そんな闇の香りが一切感じられなかった。

もつとも、ガセネタを掴まされるのは慣れっこではあった。なんとも嫌な慣れだ。

最近じゃ、五件に四件の割合でガセネタだ。闇祓いほど確実性が高くない、信憑性が低い情報も調査するから、外れはそこそこ多いのだけれど——しかし最近は、本当に露骨だった。今や、身内にあちら側のスパイがいることは、ほぼ確定だった。

「……秋はき。誰がスパイだと思う？」

「……随分と直球で来たね。もう少しオブラートに包むかと思ってた」

「そんな探るようなことは、君に対してしたくない……スパイは君じゃない、って、僕は思ってる。スパイなら『黒衣の天才』なんて華々しく呼ばれて、毎週の如く日刊預言者新聞を賑わせたりしないだろうから」

リーマスは小さく咳き込んだ。細長い手足を、窮屈そうに折り曲げている。

「……分からないよ。分かりたくない、が本音かもしれない」

味方の誰かが、黒かもしれない。長年友達だと思っていた人が、実は裏切っていたかもしれないなんて、考えたくもない。

「考えたくもない、で、思考停止させられればいいんだらうけどね……」

リーマスはそこで、仄暗い微笑みを浮かべた。膝を抱え直す。

「秋は、君は強いから。君ならたとえ、心から信じていた人に背後から奇襲を受けても、驚きはしつとも跳ね返せる。そもそも君に仕掛けようとする人物の方が少ないから。それだけの絶対さを、絶対に敵わないと思わせる力を、君は持っている。油断が出来る。——僕は出来ない」

「……………」

「出来ないから、せめて——ネガティブに、考え過ぎな程考えていた。最悪な事態を想定して、勝手に不安がって……そして、ああ、現実はその人のよりもマシだった、って、一人で勝手に安心したい。そのくらいなら、きっと僕にも許されるはずだから」

その気持ちは、少しだけ分かった。

ぼくが思考を止め、現実から目を逸らし問題を先送りするのと同じように——リーマスは物事を何でも悪いように悪いように考え、もし何かが起こっても『想定のうちだった』と心を守っていたい、と言うことなのだろう。

どちらが正解なんかはない。どちらも、正解ではないのだろう。

「…………リーマスは、誰を疑っているの？」

ぼくの言葉に、リーマスは明らかに逡巡したが、やがてポツリと零した。

「…………シリウスを、本当に『秘密の守人』にしているのか、最近考えている」

「……………」

予測していたような、していなかったようなリーマスの言葉だった。ぼくはそう動揺せずに、その言葉を受け止めた。

「理由を、聞いても？」

「…………シリウスの家族が、家族だから。いくらシリウスでも——弟や従姉妹が死喰い人だなんて。シリウスの意志じゃないとしても、シリウスが『服従の呪文』に掛けられて情報を漏らしたとも考えられる

じゃないか」

苦々しい口調だった。友達相手にそんな疑いを掛けたくないと思っているのに、止められない口ぶりだった。

きつと、一人寝付けない夜、そういうことを散々考えてしまうのだろう。思考がそちらに行つて、もう止められないのだろう。

何度も何度も、考えて考え尽くした末の——今の、リーマスの発言なのだ。

ぼくは、否定も肯定もしない。出来ないし、そもそもリーマスが望んでいないから、必要ない。

自然、ポケットを上から撫でた。

ポケットの中には、薄い色の液体が入った透明の小瓶が入っている。『生ける屍の水薬』の希釈液だ。最近はこの薬が手放せなかった。寝なければいけないのに神経が高ぶつて眠れなかったり、余計なことを考えたり、また眠れたと思つても、悪夢に魘されて一時間置きに飛び起きてしまうからだ。薬に頼るのはよくないと思つていても、気がつけば抛り所にしてしまう。今や立派な依存症だ、と、一人苦笑した。

見張っていた家から、明かりが消えた。ここらが潮時か、と息を吐く。

三日間の張り込みは、今日もまた空振りだった。



クリスマスは、思っていたより早く訪れた。毎日届く『依頼』に、一日一日が圧縮されているかのようだ。

歳を取れば取るほど、一年の体感時間は短くなると聞く。なら、実際三十七年を生きているぼくにとっては、一年というのはハリーやアリスの感じる一年の半分ほどの長さなのかもしれない。なんとも悲しいことだ。

ロンとハーマイオニーの冷戦に、ハリーは随分と参っているようだった。いつものことじゃないかと思つたが、話を聞く限り少し違う

ようだ。色恋沙汰は、ぼくには随分と難しい。

「道理で、最近アリスとロンがチェスを指してる姿を見ないなんて思っていたよ……」

そういうあたり、アリスの危機察知能力というか、そういう類のものは凄いなあと思う。本当にぼくと同じ人間なのだろうか。ぼくにもその一割でも備わっていてくれれば、トラブルに巻き込まれる数は随分と減っただろうに。

「ともかく、スラグホーンのクリスマスパーティーが終われば『隠れ穴』だ。荷造りをして置いてよね」

「……どうしてクリスマスパーティーに行くことになったって知っているの」

まだアリスにしか言っていなかったはずだけど。目を眇めたぼくに、ハリーは笑った。

「女の子の情報網を舐めちゃいけないよ、アキ。アクアとハーマイオニーが仲良いことくらい把握してるだろ？」

「なるほど盲点だった……」

ぐぬぐぬ歯噛みする。『スラグ・クラブ』の誘いにあの手この手で逃げ回っていたのだが、まさかアクアを使ってくるとは思ってもしていなかった。さすがはスリザリン出身者、と言ったところか。

ちなみに、どうしてアリスが知っているかと言えば、名門フィスナー家の嫡子にスラグホーン先生が目をつけなければもなくて。

「こちらが割り切って付き合えば、あの人はかなり使える人間だ」とアリスは評していた。各方面に太いパイプを持ち、時勢と風向きを素早く読む人物。性格に少々癖はあれど、丸っきりの悪人じゃない。その通り。相変わらず、あいつの勘の良さには舌を巻く。よくお判りのことで。

「君はルーナを誘ったそうじゃない。いい人選だと思うよ……」

「やめてくれよ、そういうつもりじゃないからね」

「分かってるってば。大人気なものね、ハリー」

ハリーが大袈裟に顔を顰めた。

「お陰様で、毎食『愛の妙薬』が混ざっていないか確かめる羽目になっ

「ちゃったよ」

「きつといい闇祓いの訓練になることだろう。口をつけるものはおろか、無色無臭の空気にまで注意を払わなきゃいけないんだから」

「なんの気なしに放ったぼくの言葉に、しかしハリーはビクリと大きな反応を返した。」

「ど、どうしたの？」

「っ、あー……なんでもない」

「なんでもない反応じゃあなかったと思うけど」

「ハリーは『参ったな』と言いたげな表情で頭を搔いて、ぼくに向き直った。」

「……あのさ。このまま隠し通せなさそうだから言うけど。ホグワーツを卒業したら『闇祓い』になろうかと考えているんだ」

「や……え？」

「驚いた——思いもなかった、とまでは言わないけれども、いや、ハリーの生い立ちや予言、様々な因縁を鑑みて『闇祓い』という職は領ける。けれども。」

「……ほら、アキはそういう顔するって思っていた」

「少し悲しそうな眼差しでハリーは微笑むと、ぼくの頬に手を触れさせた。」

「ぼくは……君に、もうこれ以上の不幸を背負い込ませたくはない」

「闇祓いの職が、どれだけ重たいものなのか。憧れだけでは、その壁を乗り越えられない。」

「君は、もう一生分の不幸を経験したよ……これ以上、どうして苦しもうと言うの。もう……十分だよ」

「最初の一年で、仲間の半数が死んだ。残りの半分は、いつの間にか消えていた。それでも残った奴らは、どこかおかしかった。」

「おかしくならなきゃ、耐えられない職場だった。そんな、職業だった。」

「今が、あの闇の時代ほどではないにせよ。闇祓いの本質というのは、そういうものだ。」

「幣原秋のような人を、絶対に出さないために、だよ」

それなのに、ハリーはにっこりと微笑んだ。
見慣れた、いつもの笑顔だった。



クリスマスパーティーの会場であるスラグホーン先生の部屋は、随分広々として見えた。幣原の時代と、趣味はそう変わっていない。もつともあの歳じゃ、そうそう大きな変化は見られないだろう。

天使のように可愛いアクアの手を引きながら奥へと進むと、ぼくらを目敏く発見したスラグホーン先生が近付いてきた。ゆつたりとしたビロードの上着に房付き帽子、片手にワイングラスを持ったスラグホーン教授は、魔法使いというよりは上流階級の隠居老人といった雰囲気醸し出している。

「これは、アキ君。来てくれて嬉しいよ。アクアマリン嬢と君が親しい仲だと聞いてね。アクアマリン嬢も、そのドレスは君によく似合っているよ」

さらりとした言葉は、べったり貼りつく嫌な感覚を一切纏っていない。アクアはスカート裾を軽く摘むと、優美に礼をした。

「君といつか話をしたいと思っていたんだ。今日は少し喧しいから、またいつか時間が空いた時で構わないから、私の部屋にでも来て欲しい。……オー、ハリー！」

ハリーの姿を見つけたか、伸び上がってスラグホーン先生は手を振った。振り返ると、そこにはハリーとルーナの姿が。銀色のスパンコールがついたローブを着たルーナは、目立つが随分と可愛らしい。

あまりじろじろ見るのも不躰なので、ぼくはすぐに目を離すとアクアに「飲み物でも貰いに行こうか」と促した。金色の垂れ幕の下で、給仕をしてくれている屋敷しもべ妖精から飲み物を受け取る。そこで「あらー」とアクアが珍しくも大きな声を上げた。

「ハーマイオニー！」

ほう、とアクアの視線の方向を辿り——思わず口をあんどりと開けた。

……え、なにそれ。嘘、どういふこと、ぼくなにも聞いてない。
綺麗に着飾り微笑むハーマイオニーの隣にいたのは、誰あろう、ぼくの同室の悪友で六年の付き合いになるうとしている、アリス・フィスナーその人だった。



「なる、ほど……つまりはロンへの嫌がらせ……滅茶苦茶びつくりした、心臓止まるかと思つた……」

事情を聞き、ぼくは胸に手を当てつつ大きな安堵のため息を吐いた。

ハーマイオニーは肩を竦め「そんなに驚くとは思っていなかったの、ごめんなさい」と申し訳なさそうに眉尻を下げる。

「でも、アリスからお話は聞いているかと思つたのよ。あなたたち、よく一緒にいるもの」

「一緒にいるからと言つてそういう話をする訳じゃないよぼくらは……」

そもそも、アリスとぼくつて普段何を喋つてるんだっけか。一時間後には記憶からなくなってしまうような、そんなどうしようもないどうでもいいことばかり話しているような気がする。でもまあ、男の友達なんてそんなものだ。女の子みたいに恋愛の話なんぞ滅多にしない。

深緑のローブを纏つたアリスは、しばらくハーマイオニーが語るに任せていたが、やがて大きなため息を吐くと「本当、やってらんねえ……」と呟いた。

「でも、アリスが紳士で良かったわ。こんな企みを知つて協力してくれるんだもの。ロンが一番嫌がる人選かと思つて」

「嫌がるというより、アリス相手なんてロンが萎縮しちゃうと思うんだけどねぼくは……」

顔だけはいいのだ、アリスは、顔だけは。

ロンが嫌がる、どころか、なんか違う二次被害を起こしそうでなん

だか先が恐ろしい。アリスとロンが最近チェス対戦しているところを見ないなあとは思っていたが、裏ではそういう事情もあったのか。ぼくがロンの立場だったら、泣くぞ。

「だから、とつとと仲直りでもなんでもしろって言ってるんだ。痴話喧嘩に俺を巻き込むな」

アリスの言葉に、アクアはムツとしたように眉を寄せた。ハーマイオニーの腕に軽く抱きつき、言う。

「……なによフィスナー、ハーマイオニーのどこが不満なのよ、こんなに可愛い子を引き連れて」

「俺は勝算のない勝負はしないんだよ」

そう言って、アリスはふいつと顔を背けた。真意を汲み取ったか、ハーマイオニーの顔が赤くなる。

「か、勘違いしないでよ！ その予想は的外れです！」

「学年主席の才女サマが聞いて呆れるな。どうでもいいが、俺から折角のチェス仲間を奪うなよ。あれだけの才能は貴重なんだから」

なんともまあ、捻くれ者のアリスらしい言葉だ。ぼくとアクアは苦笑したが、ハーマイオニーはまだプンスコ怒っている。ロンがいなければこれはこれでいい組み合わせな気もするが、生憎とハーマイオニーの心にはロンが大きく居座っているようだった。

ふと、周囲がざわめいた。騒ぎの香りに振り返る。

「スラグホーン先生ー！」

ホグワーツ管理人、フィルチの声だ。なんだろう、と背伸びをしていると、アリスがひよいつとぼくの腹あたりに腕を回して抱き上げた。軽いぼくの身体は、簡単に宙に浮く。

「なんだその恨みがましい目は、俺としちゃあむしろ『ありがとうございますアリス様』と土下座して感謝の意を示してくれてもいいんだぜ」

アリスが楽しそうにせせら笑う。もしかしてこの前ダイアゴン横丁でアリスを見下ろしたことを根に持っていたのだろうか。嫌味な奴。

フィルチに引つ張られていたのは、ドラコだった。

「こいつが上の階の廊下をうろついているところを見つけました。先生のパーティに招かれたのに、出かけるのが遅れたと主張しています。こいつに招待状をお出しになりましたですか?」

ドラコは青白い頬を紅潮させ、フィルチを振りほどいた。

「ああ、僕は招かれていないとも! 勝手に押しかけようとしていたんだ。これで満足か?」

「何が満足なものか! お前は大変なことになるぞ、そうだとも。校長先生がおっしゃらなかったかな? 許可なく夜間にうろつくなど。え?」

「構わんよ、フィルチ、構わんき。クリスマスだ、パーティに来たいというのには罪ではない。今回だけ罰することは忘れよう。ドラコ、ここにいてよろしい」

ドラコは無然とした表情を浮かべたが、瞬時にスラグホーン先生に笑顔で感謝の言葉を並べ立て始めた。

しばらく見ないうちに、随分とやつれたようだ。目の下には黒々とした隈を作っている。

ドラコが『死喰い人』かもしれない、という、ハリーの言葉を思い返していた。これは……。

ストーン、とアリスの手により地上に降ろされた。ぼくでさえ人垣に阻まれ見えなかったのだ、ぼくより背が低いアクアは尚更だろう。不安そうな表情で「……どうしたの?」と訪ねてきた。

「今、ドラコの名前が聞こえた気がしたんだけど……」

しかし、アクアの疑問に答えるよりも早く、アリスがぼくの手を引っ張った。人の間を縫って大股の早足で進むものだから、ぼくとしちゃ無様に駆け足でついていくしかない。

「ちよつと、アリス! どうしたの、何のつもり……!」

ぼくの言葉に碌な返事をせず、気付けば廊下に出ていた。パーティの喧騒が嘘だったかののように、こちらは静まり返っている。

「どうしたのさ、一体……」

「黙ってる、お前ならいざれ分かる」

一步を踏み出した瞬間、誰もいないと思っていた廊下いきなり人

が一人現れた。思わず仰天するも、その人物は『透明マント』を羽織ったハリーだということに安堵する。

「ハリー？」

「アキ、アリス、君らも気になったのか」

アリスは言葉少なに首肯して、自らの唇にそつと人差し指を当てた。何のことやらさっぱり分からないが、ひとまず黙っていよう。アリスからも『いずれ分かる』と言われたことだし。

長い廊下で、何かを探すように教室の鍵穴に耳を当てていたハリーとアリスだったが、やがて一番端の教室に屈みこんだハリーが手招きでぼくらを呼び寄せた。

駆け寄り、ぼくを見た二人に察して『響かせ呪文』を範囲限定で掛ける。そして三人揃って屈みこんだ。

『……ミスは許されぬぞ、ドラコ。なぜなら、君が退学になれば――』

『僕はあれには一切関係ない、分かったか？』

スネイプ教授の声だ。それに、今までのドラコとは一線を画す刺々しい声音が重なった。

『君が我輩に本当のことを話しているのならいいのだが。なにしろあれは、お粗末で愚かしいものだった。既に君が関わっているという嫌疑がかかっている』

『誰が疑っているんだ？ もう一度だけ言う、僕はやっていない。いか？ あのベルのやつ、誰も知らない敵がいるに違いない――そんな目で僕を見るな！ お前が今何をしているのか、僕には分かっている。馬鹿じゃないんだ。だけどその手は効かない――僕はお前を阻止できるんだ！』

一瞬の沈黙。口を開いたのは、スネイプ教授だった。

『ああ……ベラトリクスが君に『閉心術』を教えているのか、なるほど。ドラコ、君は自分の主君に対して、どんな考えを隠そうとしているのかね？』

『僕はあの人に対して何も隠そうとしちゃいない。ただお前がしやしやり出てくるのが嫌なんだ！』

主君——あの人。

アリスが鋭い目を鍵穴へと向けた。

『なれば、そういう理由で今学期は我輩を避けてきたという訳か？』

我輩が干渉するのを恐れてか？ 分かっているだろうが、我輩の部屋に来るようにと何度言われても来なかつた者は、ドラコ——』

『罰則にすればいいだろう！ ダンブルドアに言いつければいい！』

嘲りを含む、ともすれば自棄っぱちとも取れる声音だった。僅かな沈黙が再び流れる。

『……君にはよく分かっていることと思うが、我輩はそのどちらもあるつもりはない』

『それなら自分の部屋に呼びつけるのは止めた方がいいな』

『よく聞け。……我輩は君を助けようとしているのだ。君を護ると、君の母親に誓った。我輩は『破れぬ誓い』を立てた——』

『それじゃ、それを破らないといけないみたいだな。僕はお前の保護なんかいらない！ これは僕の仕事だ、あの人が僕に与えたんだ、僕がやる。計略があるし、上手くいくんだ。ただ、考えていたより時間が掛かっているだけだ！』

『どういう計略だ？ ……ドラコ、あの方は時折無茶苦茶な命令を出されるのだ。絶対に成し得ないであろうことを。いくら周到に計略を練つたとしても、成し得ないことは存在する。我輩が君に手を貸そう。君がいくら不意を打つたとて、君が任務を果たすことは……』

『無理？ 果たしてどうかな？ お前が失敗したからと言って、僕が失敗するとそう思われるのは心外だ！ お前の狙いは知っている、僕の栄光を横取りするつもりだろう。そうはさせない。僕はマルフォイ家の長男として、為すべきことをしなくてはならない！』

随分と悲壮な、追い詰められた、されど凜とした、矜持の籠った声だった。

ドアへと駆け寄る足音に、真つ先に反応したのはアリスだった。ぼくとハリーの服を引っ掴むと、横っ跳びに飛び退く。

ドアの影に隠れた矢先、ハリーがすぐさま『透明マント』を広げてぼくらをすっぽりと包んだ。

ドラコが飛び出し、そしてスネイプ教授が廊下の奥に消えたことを確認して、ほうつと息を吐く。

どういうことだろう、と口にしようとして、思っていたより深刻な表情をしているハリーとアリスに言葉を飲み込んだ。

ハリーは口元に手を当てながら、アリスは虚空を睨み左耳のピアスを弄りながら、それぞれ思索に没頭しているようだった。

ぼくも目を伏せ、考える。

たくさんの、様々なことを。

第24話 絡み、捻れ、纏れ合う黒の糸

「リーマスは、俺がスパイかもしれないって疑ってるんだろ」

シリウスの口からそんな言葉が零れたことに、ぼくは少なからず驚いた。

その言葉に、何と返せば良いのか。黙り込んだぼくに、むしろシリウスは慌てたように両手を振った。

「君が気にすることじゃない——なんて言っても空虚だな。はは、は……」

笑い声は、途中で掻き消えた。ぼくは夜空を見上げる。

ホグワーツは郊外にあるため、星が驚くほど良く見えた。そのことに気付いたのはしかし、そんなホグワーツを卒業してからだ。ロンドンじゃ、霧と公害が酷くて星なんて見えもしない。『騎士団』の任務、それに闇祓いの任務は深夜帯が多く、ぼくも時折空を見上げては、重苦しい雲に息を吐いていた、そんな折。

「乗ってかね？」

ぼくにヘルメットを投げ渡したシリウスは、大きな黒いバイクの前で、にかつと笑った。

「息抜き、しよーぜ」



シリウスのバイクの後ろに乗せられ、空の旅を一時間弱。山の山頂近くの原っぱでヘルメットを取ると、星空に圧倒された。

「どうだ……すげえだろ」

なんでシリウスが自慢げに言うのだ、とは思ったがしかし、その通りだった。

原っぱに寝転がり、星空を眺める。星が多すぎて、星座線もロクに繋げやしない。天文学は苦手じゃなかったんだけど。

しかし、さすがはシリウスだ。おおいぬ座の一等星の名前を持つだけはある。オリオン座から始まり、冬の大三角、そして冬のダイヤモンド

ンド。贅沢な自然プラネタリウムの解説に、ぼくは静かに耳を傾けた。

語り終わって、シリウスは手を下ろすと息を吐いた。白い息がふわりと浮かび、すぐに掻き消える。

「俺は、俺がスパイじゃないって知ってる——けど、人がはたしてどう思うのかまでは、どうこうすることは出来ない。……しかし、リーマスに疑われてるっつーのは、ちとキツイもんがあるよな……お互い様、なんだけど」

ぼくは黙って、シリウスの言葉を聞いていた。

「こないだ、ジェームズと話しててな……スパイうんぬんが紛れてる、って話。ジェームズは言葉少なかったけれど、一言だけはつきりと言ったんだ——『秋だけは、スパイじゃない』と。ジェームズは、根拠のないことは絶対に言わない。ジェームズがそう断定するのなら、君はスパイじゃないんだろう。ホツとすると同時に、何だか羨ましかった。断定してもらえる、君が」

「……………」

「ジェームズは、君を『可哀想な奴』だと言っていた……英雄に祭り上げられた『黒衣の天才』が、哀れだ」と

「……それが、ぼくが選んだ道だから」

「はは……そうだな」

しばらく、ぼくらは口を開かずに空を見上げていた。

「……話半分に聞いてくれ。笑い飛ばしてもいい——秋。俺は、リーマスこそがスパイなんじゃないかと考えている」

笑い飛ばせるはずも、なかった。

シリウスは、ぼくに同意や意見を求めているわけではないことは、分かっていた。ただ自分の考えを整理するためだけに、ぼくに話して聞かせているのだ。

「……理由を、聞いても？」

リーマスにしたのと全く同じ質問を、ぼくはシリウスにもした。

「……リーマスは、本心を隠すのが上手いから」

少し予想外の言葉が返ってきて、ぼくは僅かに目を瞠った。

「長々と、学生の時からずっと一緒だけどさ……リーマスの考えてることは、今でもそんなに読めないんだ。誰かに隠し立てをすることは、リーマスにとつては、息をすることと同じだから——人狼だということを、誰にも隠して生きてきたように。だからこそ——ここまで露骨にスパイがいると分かかっていても、断定が出来ないほど身を隠すことが上手い奴は、リーマスが一番適任なんじゃないかって」

「……なるほど」
そういう、理屈なのか。

「……リーマスと板挟みになるようなことを言つて、悪かつた」

「いや……ぼくはただ、聞いているだけだから。どっちつかずに……誰も疑いたくないから、なんてそんな綺麗な言葉で、その実、ただ考へることを放棄した、思考を停止させちやつた、そんなどうしようもない奴だから……」

本当に、我ながらどうしようもない。

どうしようもない、クズだ。

「確かに君は、優柔不断なところがあるからな。……でも」
「でも？」

シリウスは、灰色の瞳に星を映しながら、僅かに微笑んだ。

「その、どっちつかずの決め切れなさが……きつと、レギュラスが最後に君の元に向かった所以、なんだと思うぞ」

「……優柔不断が評価されたってこと？」

「さあて、どうだろう」

よく分からなくて、眉を寄せた。シリウスは喉の奥でくつくつと笑う。

「グリフィンボールもスリザリンも、どちらも黒は黒、白は白だとか見られない奴らだ——でもさ、君なら。グリフィンボールでもスリザリンでもない、君ならば。黒と白の間の、何千、何万とある色から、ちようどいい色を見つけることが出来るんだと、俺はそう思いたいよ」



クリスマス休暇は、いつものように『隠れ穴』、ウィーズリー家で過ごすことになっている。モリーおばさんのお手伝いをちゃつちやと済ませた後、ぼくはフレッドとジョージの部屋で一人、リドルが『デウス・エクス・マキナ』と称したあの本の解読に勤しんでいた。

学校が始まれば、また依頼にと校内を駆け回ることは間違いないのだ。なら、時間があるうちに進められるだけ進めておくべきだ。そうだろう？

「何やってんの、アキ？」

「うおあ!？」

いきなり後ろから肩を叩かれ、飛び上がらんばかりに驚いた。

解読作業に集中していて、全く気がつかなかった……。

「リーマス！ 久しぶり」

「うん、久しぶりだね、アキ」

そう言ってリーマスはにっこりと微笑んだ後、ぼくの手元を覗き込み、机の上に散らばる紙の中から一枚を引き抜いた。

「なんだい、これ？ 何をしているの？」

「解読作業さ。幣原の……幣原秋の父親が書き記したものでね、見ての通り、いろんな言語がごちゃ混ぜの闇鍋状態なんだ」

「なるほど。これを解読するのは至難の技だね」

僅かに本を浮かしてリーマスに見せると、リーマスは頷きながらページに目を走らせた。

ふむ、と僅かに首を傾げると、柔らかな口調で「手伝おうか？」と口にする。

「いや、いいよ。君だって忙しいでしょ。ちゃんと寝ているかい？」

リーマスの頬に手を伸ばし、目の下に刻まれた隈を親指で軽くなぞる。ハツとしたように、リーマスの瞳が揺れた。

「……大丈夫、だよ」

「昔はもう少し嘘が得意だったのに、随分と下手になったものだ。それだけ今の君が追い詰められていて、取り繕うことが出来なくなっていることに気付きなよ」

そつと手を滑らせ、やがてぶに、とリーマスのほっぺを人差し指で突いた。

やめてくれよ、とリーマスは眉を顰めながらも苦笑し、ぼくの手首を掴む。そして静かに顔を伏せた。

「追い詰められているのか、僕は」

「……そうだね、そう見える」

白髪が随分と混じった髪を見ながら、ぼくは呟いた。リーマスは大きく息を吐く。

「……取り繕って無理をしている君を責める言葉を、ぼくは持っていないんだ」

リーマスはゆるりと顔を上げた。ぼくは薄っすらと微笑む。

『生ける屍の水薬』を睡眠導入として常飲する幣原を、ぼくはずっと見てきた。眠れない夜を恐れるように、薬で無理矢理眠りにつくあいつを、ぼくはずっと見てきた。眠れないのなら、何に縋ったって構わない。君が苦しみから逃れられないというのなら、ぼくは何だって手を貸そう。どんな薬も作ってあげるよ、どんな魔法でも掛けてあげよう。夢でいいのなら、君が望むものをなんでもあげる。——でも、君はそれを望まない。そうでしょう？ リーマス」

君の苦しみを完全に共有することは、ぼくには出来ない。

する必要も、ないのだろう。

ぼくと君は、違う人間なのだから。

「……君は、どうして」

ぼつりと、リーマスは呟いた。

「どうして君は——じゃないんだ」

囁かれた言葉に。

息を、呑んだ。

リーマスの瞳が、痛みを堪えるかのようにぎゅつと細まる。手加減なしの力で、手首を掴まれた。強い光が、双眸に灯る。怒り、憎しみ、執着、苦しみ、様々な強い感情が入り混じった光だと、思った。

「……………」

皮膚がぞくりと粟立つ。

息を止めて、ぼくはその光をただただ見返していた。

「……すまないね、アキ。君と話して、少し心が軽くなった気がするよ」

強い光を瞳の奥の奥に押し込めて、リーマスは微笑んだ。

ぼくの手首を離すと「そろそろ夕食だ、君も降りておいで」と、普段通りの口調でにこやかに言い、部屋を出て行く。

残されたぼくは、手首を擦りながらじっとリーマスが出ていった扉を見つめていた。

「——そんなこと」

思ってもいない癖に。

第25話 たとえ赦されないとしても

「結局、アリスって名前になったんだ。男の子なのに」

「うるさいよ……いいじゃないか、これはこれで、じっくり来ちやつてんだ。何よりも、うちの奥さんが変える気がない」

リイフは少しヤケになったように、カップに入った紅茶を飲み干した。

たまの休みが取れた、四月末。ぼくはリイフの家にお邪魔していた。八ヶ月を過ぎたという、リイフの息子を見に来ないかと誘われたのが発端だ。

しかしまさか……

『アリス』なんてねえ……」

将来やさぐれたりしないだろうか。それだけが気がかりだ。

しかしまあ、今は「アリス」という名が似合うくらい可愛らしい盛りなのだが。今もほら、ぼくの眩きにも『名前が呼ばれた?』と、大きな瞳を瞬かせて、はいはいでぼくの足元へと歩み寄ってきた。ううん、可愛い。目鼻立ちはリイフによく似て整った顔をしているし、これは将来格好良くなるぞ。

サラサラの金髪に、リイフより少し濃い色合いの碧の瞳。目の色は、お母さんから受け継いだのかな。綺麗な海、深海の色だ。軽く頭を撫でると、何だか妙な顔をして、身体の向きを変えてよそへとはいはいて行ってしまった。

「まー、うちの奥さんがそう言うんだから、仕方ないよねえ」

「デレデレだなあ」

肩を竦めた。

リイフは優しくはあつたけど、誰にでも平等に厳しかった。それが彼女——というか、お嫁さんか——相手だと、何でも許せてしまうよ。うだ。恋は人を変えるというが、信じられないな。好きな女の子のやることだったら何でも許せちゃう、なんて——来世のぼくでも考えられない。

「さあ、それはどうだろう」

「どういう意味だ」

「案外来世の君なら、彼女にデレデレかもしれないよ」

「あり得ないな、それ、本当にぼく？」

信じられない仮定の話だった。

「しつかし……一体いつまで、この戦争が続くんだか」

リーフは目を細め、物憂げに呟いた。

『中立不可侵』フィスナー家当主、リーフ・フィスナー。彼がこの戦争の最中、陰で陽で動き回っていることをぼくは知っている。国の働きを止めてしまわぬよう、走り回っていることも。『騎士団』と『死喰い人』間の調整役なんて、ぼくなら頼まれたってやりたくない仕事だ。
「……いつまで、だろうね」

小さな声でそう答えた。

死喰い人側はよく分からないが、ぼくら『騎士団』側は、少なくとも相当に疲弊していた。人手不足が困窮している。戦力にならない者を入れたとしても、ものの足しにはならないし——先行きが暗いのは否めなかった。

「騎士団側も死喰い人側も、もう少し柔軟になればいいんだ——落とす所を見つけられれば、少しは前進するのに」

「そういうわけには……いかないんだ」

反論した。ヴォルデモートが目指す世界など、受け入れられるはずがない。あちら側との折り合いなんて付けられない。こちらから見たら、明らかに間違っているのはあちら側なのだ。

「じゃあどうする。向こうが全滅するまでやるのか？」

その言葉に、思わず詰まった。

何も、返せなかった。

「得られるものなんて何もない。殲滅戦の果てに残るものなんて、疲弊した兵士と荒れ果てた焦土だけだ。くだらない」

くだらない、と——リーフは吐き捨てた。

「君だってレイブンクロー生だったんだ、見えるだろ、分かるだろ。戦争は悪いことばかりじゃない。技術を促進させ文明を発達させる面があることは、誰にも否定出来ない。……だけど、この戦争は何だ？」

「一体何が得られるって言うんだ？ どうすれば、この戦争は終わるって言うんだ？」

険しい瞳で、リイフはぼくを見た。

「一体何のために、君は戦っているんだ？」

ぼくはその言葉を受け、静かに目を閉じた。両手の指を合わせる。

「ぼくが戦う理由はね」

目を開けた。にっこりと微笑む。

「復讐のためだよ」

ぼくの声に、リイフは小さく息を呑んだ。

「たとえこの戦争に、何も意味がなくなっても。何も意義がなくなっても。得るものがあるから、戦争をしているんじゃないんだ」

まっすぐに、リイフの目を見てぼくは言う。

「君の言うことはとてもよく分かるよ。誰もがこんな世の中間違ってるって思ってる。でも今更止められない。ぼくに歩みを止めることは許されていない。君の言葉は立派だ。立派な——綺麗事だ」

自然、笑みを浮かべていた。

「リイフ。ぼくは君とは違う。ぼくの手は、誰かを守るようには出来ていない。ぼくは——誰も守れない」

ぼくは、ヒーローにはなれない。

ヒーローだったら——きつとぼくはあの時、レギュラスの手を掴めたはずだ。セブルスが死喰い人になるのを、説得でもなんでもして、食い止められたはずだ。両親が死ぬことは、なかったはずだ。

この手は、人を傷つけるしか、能がない。

「君だって一度、ぼくのせいで怪我をしただろう？」

一年の頃、魔力を暴走させてしまった折。リイフはしばらく考えて、思い出したようだ。「そんな昔のことを……」と咎める口調で呟く。

「何年経とうが、忘れられるものじゃないよ。忘れてはいけないことなんだ。ぼくは人を傷付けることしか出来ない。新しい命を育める、君たちのような人間じゃない」

この手は、幾人の血に塗れているし。

この杖は、幾許の命を奪っている。
変えられない。過ぎた時間は、戻らない。

誰も裁いてくれないぼくの罪は、赦されることがない。

「守れないならせめて、大切なものがまた壊されてしまわないように。壊されるよりも先に、壊す相手を殺すんだ。これが、幸せな未来に繋がると信じて」

「……本当に？ 本当にそれが、幸せな未来に繋がっていると信じられるの？ ……秋、君が言う『幸せな未来』に、君はいるの？」

答えず、ぼくは静かに笑った。



クリスマスの昼食時、思いも寄らぬ人物が『隠れ穴』を訪れた。今年新しく英国魔法省の魔法大臣となったルーファス・スクリムジヨールと、ウィーズリー家三男、パーシー・ウィーズリーだ。

庭の案内にハリーを指名したスクリムジヨールに、残っていたスープを一口で飲み干すと、ぼくも立ち上がった。

「ぼくも行くよ」

リーマスが、ハリーが、そしてスクリムジヨールが、三者三様の視線をぼくに向ける。

「オツケー、アキ、行こうか」

ハリーが微笑んで、ぼくに手を差し伸べた。

三人で、庭をぐるりと巡った。スクリムジヨールが僅かに足を引かずっていることに、ぼくは気がつく。彼は元閹祓い、それも局長の椅子についていた人だ。会話したことはないが、幣原とも面識がある。幣原のことも覚えているはずだ。

「随分前から、ハリー……君に会いたかった。知っていたかね？」
「いいえ」

ハリーは険しい表情のまま首を振った。

「実はそうなのだよ。しかし、ダンブルドアが君をしつかり保護しているね。勿論当然だ。君はこれまで色々な目に遭ってきたし、特に魔

法省での出来事の後、だ」

そこでスクリムジョールはハリーをちらりと見たが、ハリーが口を開く様子がないので、話を続けた。

「大臣職に就いて以来ずっと、君と話をする機会を望んでいたのだが、ダンブルドアがそれを妨げていた。様々な噂が飛び交っている……当然、こういう話には尾ひれがつくものだということは知っている。予言の囁きだとか、君が『選ばれし者』だとか。……ダンブルドアはこういうことについて、君と話し合ったのだろうか？」

ハリーは躊躇うようにぼくに目を遣ったが、やがて腹が決まったらしい。はつきりとした口調で言った。

「ええ、話し合いました」

「……そうか。それで、ハリー、ダンブルドアは君に何を話したのかね？」

「すみませんが、それは二人だけの秘密です……アキに聞いても無駄ですよ」

牽制するかのようになんな言葉を放ったハリーに、スクリムジョールも快活に返事をした。

「もちろん、秘密なら君に明かして欲しいとは思わないよ。それにいわずにせよ、君が『選ばれし者』であろうとなかろうと、大した問題ではない」

ハリーは訝しげに目を細めた。答えを返すように、スクリムジョールは笑ってみせる。

「勿論君にとつては大した問題だろう。しかし魔法省全体にとつては、全て認識の問題なのだよ。重要なのは、人々が何を信じるかだ。人々は、君が本当に『選ばれし者』だと信じている——君こそが英雄だと思っている。それはその通りだ。一体君は何度『名前を言っただけじゃないあの人』と対決しただろう？」

要するに君は多くの人にとって希望の象徴なのだ。『名前を言っただけじゃないあの人』を破滅させることが出来るかもしれない誰かが、そう運命づけられているかもしれない誰かがいるということが、人々を元気づける。君が一旦そのことに気付けば、魔法省と協力して人々

の気持ちを高揚させることが、君の、そう、ほとんど義務だと考えるようになるだろう、私はそう思わざるを得ない」

ハリーは随分と長く黙り込んでいた。

次に口を開いたハリーは、激情を理性で押し込む声音だった。

「それではあなたは、僕に『偶像の英雄になれ』と言いたいですね——幣原秋のように」

ぴくん、と、スクリムジョールの肩が動いた。ハリーは口元を緩めたが、目には激しい色が渦巻いていた。

「残念です、闇祓いの局長であったと聞いたから、少しは期待していましたが。幣原秋のことから何も学んでいないようですね。バーティミウス・クラウチと全く同じだ、いつもやり方を間違える。一人矢面に突き出して、魔法省はちゃんと仕事をしていますと言い張って、使えなくなったら捨てるんですよね？ 幣原秋をそうしたように、僕のことにも。」

……馬鹿にするのもいい加減にしてくださいよ。今あなた方がやるべきことは、こうして僕を偶像の英雄に仕立て上げることでも、無関係な人をアズカバンに送ることでもない。本当の死喰い人こそを監獄へぶち込み、きちんとした偏りのない正しい情報を流し、たとえ魔法省がヴォルデモートから攻撃を受けたとしても、それに耐え得るだけの基盤を作ることだ。そうじゃないんですか？ アキ、僕は何か間違っているかい？」

燃える炎を瞳に宿し、ハリーはぼくに同意を求めた。

「いいや、何も間違っていない」

ハリーの成長に、思わず目を細めていた。そこまでもう、自分の考えを組み立てることが出来るようになっていたのか。

「……大臣。ぼくはね、幣原秋を『黒衣の天才』として打ち出したあの策、言うほどの悪手じゃなかったと、そう思うんですよ」

そんなことをいきなり口にしたぼくに、スクリムジョールは不審な眼差しを送った。

ぼくは静かに微笑む。

「幣原秋一人が抱え込むことで、他の皆の負担が軽くなるのなら、あい

つは喜んでその身を差し出します。あの時代に、あいつはぴったりの人材だった、英雄視するためのね。

……でも、ハリーは幣原秋とは違う。それこそ悪手を打ちましたね、大臣」

「……君は」

「申し遅れました、アキ・ポッターです。それなりに、存じていらっしやることでしよう」

目をしっかと開け、相對する。

「ハリーは、ハリーだ。誰の道具にもさせやしない。ハリーに手を出すというのなら」

不敵に、微笑んだ。

「全力でもって、お相手致しましょう」

「……なるほど、なるほど」

スクリムジョールはしばらくぼくの目を見つめていたが、やがて目を離した。

「ダンブルドアは何を企んでいる？　　ホグワーツを留守にして、どこに出かけている？」

「知りません」

「知っていても私には言わないだろう。違うかね？」

「ええ、言わないでしょうね」

ハリーも静かに答える。

「ダンブルドアと幣原秋が、君を上手く仕込んだということがはつきりと分かった。骨の髄まで忠実なようだ、ハリー・ポッター」

「ええ、その通りです」

一陣の風が、ぼくらの間を吹き抜けた。こちらとあちら、明確に区切りをつけるかのような風だった。

ハリーがスクリムジョールに背を向け、歩き出す。

新しい魔法大臣から目を切り、ぼくもハリーの後ろに続いた。

第26話 悲劇の幕よ、開かれん

鐘の音に、思わず振り返った。教会の鐘が、鳴っている。

そうか、今日は礼拝の日だ。もつとも、ぼくは十一歳まで日本で生まれ育ったため、礼拝に行く習慣はないのだが。

ぼくは連れ立って、ピーターと歩いていた。

騎士団の会議前、ジェームズとリリーの家に様子を見に寄ったら、ピーターの姿があつたのだ。ジェームズとリリーに手を振って（ジェームズは少し不満そうではあつたが。外に出られないことにストレスを感じているのだろう）、ぼくとピーターは連れ立って出掛けた。

普段からピーターは口数が少ないが、今日は輪を掛けて無口だった。ぼくと二人きり、だからだろうか。

苦手にされてる、という訳ではないのだろうか、得意とは言えないかもしれない。悪戯仕掛人の他のメンバーと一緒になら、こんな空気を感ずることはないのだけれど……ううむ。

「秋は、元気？」

と、急に話しかけられた。思い掛けなくて目を白黒させるも、慌てて答える。

「げ、元気だよ」

「そう……」

「……ピーターは、元気なさそうだけど」

意気消沈、というか。元々大人しい奴だったけど、なんだろう、覇気がない。

何うように尋ねると、予想もしなかった言葉が飛んできた。

「秋は、誰が『秘密の守人』だと思う？」

「……」

躊躇うほどに直球だった。

「……シリウス、だと思ってるけど」

誰も口にはしなかったけど、ジェームズはシリウスをこそ、自分の秘密を託すに足る人物だと考えているだろうことは違いなかったし

——ぼくも疑いもしなかった。

それは、ピーターも同じだと思っていたし——むしろ、シリウス以外の誰がいるのだとまで思っていた。

それほどまでに、シリウスは適任だった。

友情を売るくらいなら、シリウスは死を選ぶだろう。

それほどまでにあいつは義理堅く、ジェームズのことを大切に思っている。リリーのこと、ハリーのこと。ハリーの後見人となったからか、ハリーのことにはまるで息子のように可愛がっていたのだし。

「そう……そうだよね」

「何……？　ピーターは違うと思ってるの？」

今更、とまで思った。

ピーターは慌てて首を振った。

「そ、そんなことない……シリウス以外にいないって思う、僕も」

「なら、どうしてそんなこと訊いたの？」

疑問に思っ、ぼくは尋ねた。

「……ジェームズたちは、死なないよね？」

「はっ」

思わず強い声が出てしまった。「ご、ごめん！」とピーターは身を縮める。

謝ろうかとも考えたが、それよりピーターの言葉は聞き捨てならぬものだった。

『『忠誠の呪文』は絶対だよ。ぼくとダンブルドアが保証してる。……』

シリウスだって、そうだ」

脳裏にリーマスの言葉が浮かぶ。目を瞑って、頭を振った。

「ジェームズもリリーも、ハリーだって。誰一人殺させない。……あの三人にさつき御守りを渡したの、見てたよね？」

「う、うん」

ピーターが頷く。ぼくは自分の首元を探って、首から下げていた水晶を引っ張り出した。

「こいつの欠片が、あの御守りの中に入ってる。『黒衣の天才』幣原秋が魔力を籠めたものだ。一度だけ、一度だけ——持ち主を災厄から

守ってくれる。彼らの命は、絶対に奪わせやしない。……それに」

水晶を元通りに仕舞い込み、ぼくはにっこりと笑った。

「ジエームズが、あのジエームズがだよ？　今までヴォルデモートの手から三度も生き延びたジエームズが死ぬなんて、ぼくには想像が付かないよ。あの眼鏡は、殺しても死ななさそうだし、そうでしょ？」

ぼくの言葉に、ホツとしたようにピーターは笑顔を見せた。

「そうだよね……ジエームズは、死なないよね」

——嗚呼、嗚呼、ここだって。

どこだってぼくは、間違い続けるんだ。



ホグワーツに帰ってくると『依頼』の山が出迎えた。一つ一つに対応していたら、いつの間にかやら年が明けていた。

イギリスは、日本ほどに年明けを祝わない。存外あっさりと新年は過ぎて行った。

「……………」

手紙の文字に、視線を落とす。はてさて、これは一体どうするべきか。どう、動けばいいのだろう。

人の悩みが、実に多種多様であるということ。そのことに、随分と今更ながら気付かされる。

それでも、ぼくは。

ダンブルドアの筆跡で書かれた手紙を、空中で放り投げた。勝手に火がついた手紙は、ひらひらと舞いながら火の粉と灰を散らし、やがて塵すら残さず掻き消えた。

「——初めまして」

満面の笑みで窓をノックすると、虚空に視線を留めていた少年の顔がこちらを向き、驚きに大きく目を見開いた。駆け寄り僅かに窓を開けつつも、随分と警戒した瞳で「……誰だ」と低い声で呟く。

随分と整った顔の少年だった。否、少年と表現するには、少し大人び過ぎている。目つきの悪さも、纏う雰囲気の刺々しさも、アリス以

上。黒い瞳は鋭い光を灯し、こちらを射抜かんとする勢いだ。

彼の願いは、随分と重い。生い立ちに起因し、今も尚、彼の心に深々と根を張り続ける。

「初めまして、ぼくはアキ・ポッター、レイブンクロー寮の六年生さ」
今から、ぼくは。

彼の心に、押し入ろう。

どう足掻いても、傷つかない方法はきつとない。もはやぼくも、無事で済むような願いはない。

——それで、いいんだ。

アリスの家族の問題に首を突っ込んだときから、分かりきっていたことだ。

何かを得るためには、それ相応の犠牲を払わなければならない。

それが、他人のものであるのなら、尚更。

背後に大きな満月を背負ったまま、ぼくは窓枠に左手を掛け、余った右手を彼に差し出した。

「——君に、魔法を掛けに来たんだ」

ぼくは、君を助きたい。

ぼく自身の、都合で。

第27話

届いたハロウィーンのメッセージカードに、目を瞬かせた。ジェームズとリリーからの、ハロウィーンパーティーの招待状。

「……なかなか、ねえ」

生憎と、仕事漬けの毎日だった。徒歩三十秒の自宅に帰る暇もない生活。彼女なんて作る暇もない——作る気も全くないけれど。

行けない旨をしたため、手紙を送った。

1981年の、十月三十日のことだった。



今頃、ポッター家では楽しくやっているだろうか。騎士団の仕事がなかったら、シリウスとリーマスは絶対いるだろうな、ピーターはどうだろう。

リリーの手料理に舌鼓を打って、可愛い盛りハリーに大の大人がデレデレになって……。

そんなことを始めは考えていたが、仕事に取り掛かるとあつという間にそんな雑念は飛んでいってしまった。机の上にある書類の山を崩すことに専念する。

ここ数日任務続きで外に出ていたから、溜まってしまっただけで仕方がない。任務の報告書、これからの任務資料、それに大量の始末書。

闇祓いにいくら「許されざる呪文」の行使が許可されようと、誰も無尽蔵に使っていいはずがない。使用許諾をしかるべき場所にいちいち取らなきゃいけないのだ。少々煩わしいが、これもお役所仕事、踏まなければならぬ手続きなのだろう。

日時と場所、対象者。淡々と綴られる人物名に、感じる心は既に麻痺している。

魔法省闇祓い局の中は、平和なものだった。

漂うコーヒートの香り。少し遠くで、ラジオが今日のニュースを流している。

机の数に比して、今いる人の数は三割ほど。省内便の紙飛行機も、今日は普段より数が少ない。

その中で、闇祓い訓練生での同期、マーク・ヴィツガーの姿を見つけて、少しだけ嬉しくなった。見ていると、向こうもこちらに気付いたようだ。やれやれと大袈裟に頭を振っている。彼も、変わらないな。

ザワザワともうるさくなく、絶好の書類片付け日和だった。

昼過ぎに、アリス・プルウエット先輩——じゃなかった、アリス・ロングボトム先輩が、子供を連れて局に顔を出してくれた。キヨロキヨロと辺りを見回していたが、ぼくを見るとパアツと顔を明るくする。

「幣原くん！」

「お久しぶりです、プルウエット先輩——じゃ、なくなつて」

頭では分かっているのに、口から零れるのはどうしても旧姓の方だった。

彼女はくすくすと笑う。

「別にいいよ。全く、でも一度くらいは顔を見せてくれてもいいんじゃない?」

「あ……はは」

何と答えていいか分からず、苦笑いで返した。

先輩との距離の取り方は、苦手なのだ。当然ながら、後輩とも。

今も、ぼくと言葉を交わしているプルウエット先輩を、局にいる人は遠巻きに眺めるだけだ。まあいい、遠巻きにされることには慣れている。

「エリスくんは、元気?」

「元気——なんじゃないですかね」

利き腕を怪我していたことを思い出したが、しかしそんなことは言う必要のないことだろう。

ぼく以外にも何人か仲が良かった人と言葉を交わして、プルウエット先輩は息子のネビル君を連れて帰って行った。

書類を片付け終わって、ぐ、と大きく伸びをした。時間を確認する

と、もう夜の九時を過ぎていく。

最終確認の印を頂くものの仕分けをしていたら、人影に気がついた。

顔を上げると、ヴィッガーが気の無い素振りではぼくを見下ろしていた。

「そろそろ終わりですか？ 幣原」

「うん。君も？」

ヴィッガーはこくりと頷く。

「なら、ご飯でも食べに行こうか。久しぶりだね……」

そう言いつつ、立ち上がった瞬間。

ゾクリと背筋に悪寒が走った。

思わず目を見開く。

動きを止めたぼくに、ヴィッガーは小さく首を傾げた。

「どうしたんです？」

答えず、慌てて首元のボタンを開けると、水晶を引っ張り出した。

透明な水晶の内側に、大きくヒビが入っている。ヒビ割れた部分から、黒いものがジワジワと侵食していき、透明だった水晶はやがて黒に変色して行った。

「……ごめん、ヴィッガー」

「え？ ……ちよつと、幣原！」

説明している時間も、惜しかった。

その場から勢いよく駆け出す。机の狭い隙間を縫って、闇祓い局を飛び出した。

エレベーターに辿り着くと、ボタンを連打する。どうしてこんな時ばかり、エレベーターは遅いんだ。やっと来たエレベーターに駆け込むと、ぼくを見て人々は驚いた顔をして、僅かにぼくから距離を取った。そんないつものことも、今日は煩わしい。

エントランスを、人の目なんて構ってられない、全力で走った。

何事かとこちらを振り返った人々が、小さな悲鳴を上げてぼくの前から引いていく。

魔法省から出てすぐさま「姿くらまし」した。風景が溶け、再構築

される。

閑静な住宅が立ち並ぶ、ゴドリツクの谷。
ジエームズとリリーとハリーが住む家は、大きく半分が崩れて
いた。

ぼくの、このぼくの保護呪文を打ち破れる者なんて——そんな。
そんな人物、一人しかいない。

玄関の扉を開けた。鍵は、掛かっていなかった。
中の電気は点いていたが、物音一つしなかった。
入ってすぐに、ジエームズが倒れていた。

「……ジエームズ」
拳を強く、握り締める。

死体なんて、見慣れていた、はずなのに。

敵の死体も、味方の死体も。初めて見たのは、両親の死体だ。

記憶に残る両親の死に顔は安らかだったが、ジエームズの見開かれ
た瞳には、強い強い驚愕が映っていた。

ジエームズから目を離して、周囲を見回した。一階を一通り見て回
るが、リリーの姿は見当たらない。となると、二階か。

階段を踏みしめ、二階に向かう。扉に手を掛ける自分の手が震えて
いるのを、どこか人ごとのようにも感じていた。

そして、ぼくは対面する。

「ああ……」

ベビーベッドのすぐ脇に倒れている、赤毛の女性。

そつと手を伸ばした。

「リリー……」

顔に掛かる髪を、そつと払う。恐怖に慄く表情が露わになって、ぼ
くは思わず顔を歪めた。

二度と、彼女は目を開けない。

彼女の深い緑の瞳に射竦められることは、決してない。

『ねえ、秋？』

もうぼくの名前を呼ぶことも。

ちよつと得意げに笑みを浮かべること。

ぼくの手を握ることも、ない。

「……っ、う……」

嗚咽を、奥歯を食い縛ることで噛み殺す。

息を止め、身体を折り曲げた。

小さな衝撃を頭感じて、ぼくはゆるゆると顔を上げた。

そこで、ハリーと目が合った。

思わず青ざめて、声を漏らす。

「どう、して……」

どうして、なんで。

どうして、ハリーが生きている。

ジェームズもリリーも死んでしまったのに、どうして、一体、どうして。

「あー?」

頭を感じた衝撃は、ハリーの手のようだった。ベビーベッドの柵の隙間から手を伸ばしたハリーが、ぼくの頭に触れたのだ。

ハリーは、さつき起きた惨状など何も知らないまま、笑顔を浮かべた。

リリーと全く同じ瞳で、緑色の瞳で、ジェームズとそっくりの顔立ちで、純粹無垢な笑顔をぼくに向ける。

幼児ゆえの、状況なんて理解しようもないからこそ、そして見知ったぼくの存在を知覚し、項垂れたぼくを励まそうとしたのだと——落ち着いた後のぼくなら、きつと分かった。

でもあの当時のぼくは、あの惨状の中なお無邪気に微笑むハリーが、底知れぬほど怖く、恐ろしく感じたのだった。

「どうして……どうして! どうして、お前が生きているんだ!!」

妙に覚めた脳内が、恐ろしい妄想を弾き出す。

「ジェームズも、リリーも死んだのに、どうして……お前だけ、生き残っているんだ!」

きつとそれは、ぼくが死の呪文を日常的に操ってきたからこそその言

葉だったのだろう。

ハリーに、死の呪文を受けてなお生き残っているハリーに、底知れぬ恐ろしさを感じた。

死の呪文に、反対呪文は存在しない。それなのに、こうして生き残っているということは、ぼくの知らない闇の魔術が働いたのではないか。

この小さな少年こそが、災厄なのではないか。

この辺りは、自分の行動であるはずなのに、なんだか現実味が薄く、ふわふわとしていた。

ぼくの怒号を受けて、ハリーの表情が驚いたものになると、やがてくしやりと歪んだ。大きな声で泣き出す。

「やめてくれ……やめてくれ！ 泣きたいのはぼくの方だ！」

現実を受け止め切れなくて、頭を抱えた。赤ん坊の泣き声を聞きたくなくて、両手で耳を塞ぐ。目も閉じた。暗闇が視界を支配する。

「なんで……なんでお前が、ハリー、お前が泣くんだよ……!! リリーとジェームズが死んだのはっ、お前のせいじゃないか!!!」

元はと言えば、あの予言のせいだ。

あの、ハリーに関する予言さえなかったら。

ハリーさえ、生まれていなければ。

リリーとジェームズは、死ななかつた。

リリーとジェームズハ、シナナカツタ？

「やめろ……やめろ!!」

狂った空間だった。

いや、狂っているのはぼくだけだ。邪気の欠片もない赤ん坊に喚き散らすぼくだけが、絶望的に狂っている。

「ごめん……ごめんなさい、ごめんなさい……」

ハリーは何も悪くない。

ハリーは何も悪くない。

ハリーは何も悪くない。

いつだって、いつだって、間違っているのはぼくの方。
そんなことに、いつも、間違ってから、気がつくんだ。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
守れなかった。」

今回もぼくは、何も守れなかった。

大切な人、だったのに。

とても、大切な人だったのに。

大切な人さえ、守れない。

ぼくは誰一人として、救うことは出来ない。

こんな力を持っているのに、殺すか壊すかしか能がない。

ぼくの謔言のような懺悔と、ハリリーの火が付いたような泣き声。二
人の生体、二人の死体で満ちた、崩れた家。

狂気で満ちた、この空間。

いっそ、狂ってしまえばいいのに。

狂ってしまったなら、楽なのに。

完全に狂ってしまえば、ただの狂人と化して永遠ここで罪もない
ハリリーに向かって喚いていられれば、それはそれで幸せだったのに。
数少ないながらも残った理性が、現状を無慈悲に伝えてくる。いつ
までも膝をついている場合じゃないんだと、ヒタヒタと責め立ててく
る。

目を伏せるな、幣原秋。

狂ったらそこで終わりだ。

立ち止まったら、ぼくはそこから一步たりとも歩き出せなくなる。

今まで何人、顧みず進んできた。

今まで何人も、殺された人を見て、殺した人を見てきたんだ。今更

二人くらい増えたって、どうってことあるものか。

心を殺せ。

「お前の得意なことだろうか？」

「お前がやらなければいけないことに、お前の私的な感情は不必要だ。」

「……そう、だよな」

「よろよると立ち上がった。」

「『黒衣の天才』は、立ち止まったらいけないんだ」

「ぼくはまだ、求められている。」

「ぼくはまだ、世界に存在を認められている。」

「エクスペクト・パトローナム」

目を瞑った。

「幸せなことを思い浮かべる？　今までに幸せなことなんて、一つだってあっただろうか。それでも、ぼくのこの無茶苦茶な魔力は、大抵のぼくの願いは叶えてくれるんだ。」

「リリーとジエームズの死と、ハリーの生の伝言を乗せた銀の霞は、崩れた家の隙間から消えていった。『騎士団』に向け送ったものだ。いずれ何らかのアクションが来るだろう——もつとも、ぼくがポッター家の異常に感じついたのだから、同じ術者であるダンブルドアが気付いていてもおかしくない。ならばあの、異様なほどに手を打つのが早いあの人は、もう既に動いているかもしれない。」

「どうしてハリーが生きているのか。ヴォルデモートはハリーをこそ殺しに来たのに、どうしてこの場にヴォルデモートはいないのか。泣き叫ぶハリーに申し訳ないと思いつつも『失神』させると、彼の小さな身体を検分する。」

「呪文の痕跡は、すぐさま見つかった。額の稲妻型の傷。となると、何らかの原因で死の呪文が跳ね返った、と捉えるべきか。」

「死の呪文が跳ね返ったならば、ヴォルデモートは死んだか——いや、死んだのなら死体がないのはおかしい。なら、きつと儂い生にしがみついているだけの、靈魂に過ぎないのだろう。」

「戦争は、終わったのだ。」

「あまりにも、呆気なく。」

「……あれ？」

すぐに、妙なことに気がついた。ぼくが渡した水晶のお守り、あれがない。

どうして、何で？

リリーの首元をまさぐるも、やっぱりというか、あのお守りは見つからなかった。リリーがまさか、ぼくがあれほど念を押したお守りを手放すとは思えない。

「……あ」

気付いた。やっと、というべきか、案外早かった、と思うべきか。

この家の守護呪文、中でももつとも力が強い『忠誠の呪文』の存在に。

目を見開いて、虚空を見つめた。

「……まさか、裏切ったのか」

シリウス。

君が？

——まさか。

「嘘だろ……？」

でも、そうでないと。ならば——シリウスならば。

今日はここで、ハロウィンパーティーがあっていた。きっとシリウスは、ここに来たのだろう。その際、言葉巧みにポッター家の三人から水晶のお守りを回収したのだ、恐らく。三人ともか、は分らない——でも恐らく、リリーとハリーの水晶は、そこで取り上げた。

きっと多分「秋が、このお守りの不備に気がついたんだ。俺が渡しておいてやるよ」とかなんとか言っ——

「……ああ……」
なら。

捕まえないといけない。

シリウス・ブラックを——あの裏切り者を。

ぼくはゆっくりとリリーの前に膝をつくと、動かない彼女を引き寄せた。

「……リリー」

激しい感情が、渦を巻く。後悔の念と、自責の念。

こんなぼくが——どうしようもないぼくが願うこともお粗末だけ
れど。

でもぼくは、君に。

生きていて、欲しかった。

「……………」

涙が零れるかと思つたが、予想外にも、眼球は潤うどころか乾いて
いた。頭ほどには、心は事実を受け止め切れていないらしい。

大好きだった。

本当に、心から、幸せになつて欲しい人だった。

この世で一番、大切にしたい人だった。

それなのに。

「……………なんとも、はあ……………秋！ どこだ、秋！」

「……………ハグリッド」

大きな物音と共に、ハグリッドの声が聞こえた。『不死鳥の騎士団』
団員で、ホグワーツでは鍵と領地の番人をしている、ルビウス・ハグ
リッド。彼が、来たのか。

「ここにおつたか……………ここは危ねえ、いつ崩れるか分からん」

そうだろう。ハグリッドが二階に来てからというもの、不吉な音が
建物から響いているのだ。元々半壊して脆かったものが、重たいもの
を載せていよいよ軋み出したか。

「一体何が起こつたんだ？」

「……………ぼくにもよく分からないけれど、ヴォルデモートがジエームズ
とリリーを襲つたんだ。ハリーも殺そうとしたのだろうけど、何故か
呪いが跳ね返つてハリーには効かなかつた。今のヴォルデモートは、
影か霞のような存在だろう」

強いて淡々と言葉を紡いだ。ぼくの「ヴォルデモート」という言葉
に、ハグリッドはギクリとする。ついでに右手が扉に当たり、蝶番ごと
と吹き飛んでいった。

「ちゅーと、何だ……………つまり『例のあの人』は敗れたと？」

「……………そういうことに、なるのだろうかね」

リリーを元通り床に横たえると、腰を上げる。

「ダンブルドア先生の元に、俺がハリーを連れていく……お前さんは、何だ、これから忙しいだろう？」

「ああ……ハリーのこと、よろしく頼んでも？」
「任せとけ」

ハグリッドはそう胸を張りながらも、大きく鼻を噉った。真つ黒な瞳はキラキラと潤んでいて、ああ、きつとこの人は、人の死を素直に悼むことが出来る人なんだなあと感じた。

悼むことは、もう一踏ん張りしてからだ。

麗しい友情だと思っていたものを、粉々に壊してからだ。

壊すことしか知らないぼくならば、きつと簡単なことだろう。

「秋！」

『姿くらし』しようと、崩れ掛けた瓦礫を乗り越え夜風に吹かれたぼくを、ハグリッドが呼び止めた。振り返る。

「妙なこと、考えるんじゃないぞ!？」

その言葉に、思わず苦笑した。

妙なことなんて、考える訳がないだろう。

ぼくにとつて『死にたい』と願う気持ちは、妙なことでも気の迷いでもなんでもない、極めて普通のことだと言うのに。

第28話 愛おしき友情よ、永遠なれ

それは、唐突に訪れた。

魔法省にある唯一の有線電話から来た通信。要領が掴めない表情ではあったものの「幣原秋を出して欲しいと言っているので……」と、闇祓い局を訪れた電話通信士はぼくを呼んだ。

まだ、ジエームズとリリーがこの世から去って半日と経っていない頃合いだった。

ヴォルデモートの脅威がひとまず消え去ったということ、そして『生き残った男の子』、新たな偶像、新たな英雄、ハリー・ポッターの存在は、風より何よりも早く、驚くべき速さでイギリス全土を席卷した。

驚くべき速さであった。ポッター夫妻の死が深夜であり、その日の朝刊記事の差し替えにギリギリで間に合ったということも、理由の一つかもしれない。

ともあれ。

ヴォルデモートが消えたからと言って、闇祓いの仕事が一瞬にしてなくなる訳ではない。むしろこれまで以上に、ヴォルデモートの影に隠れていた『死喰い人』らが表に出るのではないか、主人を失って自棄っぱちになってマグルを手当たり次第殺して回るのではないかという不安が、ぼくらにはあった。

それに——シリウス・ブラック。ジエームズとリリーを裏切った者の所在も、総力を挙げて探索していたところだったのだ。

よく分からない情報に構っているような時間はない追い返せと、エリス先輩はうんざりした顔で今の話を持ってきた通信士を追い返そうとしていた。ぼくも完全同意の体で、闇祓いのトランシーバーからひっきりなしに入る報告を聞きながら指示を飛ばしていたのだが、なかなか電話の主もしぶといようで、この忙しい時にと辟易しながら電話の受話器を耳に当てた。

「お電話代わりました、幣原秋です。どちら様ですか？」

『——秋？』

「ん？」

随分とくぐもった声だ。落ち着きがなく、周囲を伺っているような
声音だった。

しかし、微妙に何か記憶に引っかかった。

「誰ですか？」

『——ぼ、僕だよ……。ピーターだよ』

受話器を取り落とすかと思った。実際のところ、受話器を握る指先
は白くなるほど力が籠っていて、落とすこととは無縁だった。

「ピーター!?!」

エリス先輩がピクリと顔を上げ、ぼくを見る。慌てて口元を覆い、
声を落とした。

「ど——どうしたの」

『……秋。シリウスだ。シリウスが……ジエームズとリリーを、裏
切ったんだ。僕は——僕は』

耳に、強く受話器を押し付ける。

「シリウス、だということは、分かっている。今全力で探して——」

『——通り』

「え？」

『僕は——責任を、取らなくてはならない』

「何、どういうこと？ ピーター!」

『ねえ、秋。最後の、僕からのお願い——というより、伝言、なんだけ
ど』

そこで、ピーターは僅かに笑ったようだった。

『《ハリーを、守って》——僕には、絶対に出来ないことだから』

『……っ、ピーターお前……っ』

ぼくの言葉を遮るように、無情に通話が切れた。ガチャンという音
の後、無機質な発信音が響いている。

大きく舌打ちをして受話器を通信士に押し付け振り返ると、いつの
間にかエリス先輩が立っていた。



告げられた通りに「姿現し」したぼくらは、その場の想像以上の惨劇に、ただ、息を呑んだ。

血まみれだった。大通り一面が、血で染まっていた。血だけではない、細かな肉片がそこらじゅうに散らばっていた。それが元は人間だったというのはには信じられなかったが、チエツクのシャツの切れ端や、吹き飛ばされたハンドバッグなどの証拠から、認めざるを得なかった。

現れたぼくらにいち早く気付いた一人が、即座に駆け寄ってきて、状況を説明した。十三人のマグルと、一人の魔法使い、ピーター・ペティグリーユを、たった一つの魔法で殺したのだと。

魔法警察の機動隊が、魔法を通さない盾を持ち、ズラリと一人の間を取り囲んでいる。全身が、血のシャワーを浴びたように血みどろだったが、それが全て返り血であろうことは容易に察しがついた。彼が好んで着ていた真っ黒なローブは、それを脱いだら最後、もう二度とは着られそうもない。

その人間は、彼が殺したのであろう人々の残骸の中心に立つ、彼は、彼は、ぼくの友人だった、親友だった、シリウス・ブラックは、

噛っていた。

天を仰いで、哄笑していた。

険しい顔で、エリス先輩が彼の元へと行こうとする。先輩を、ぼくは引き止めた。

「……ぼくが行きます」

そう言つて、ぼくは前を向いた。杖を抜き、左手にしつかり持ったまま、足を進める。人間の血液に、ブーツの底が浸かった。飛沫が跳ねる。血飛沫が、跳ねる。

機動隊が、ぼくの目の前でさつと二つに割れた。その真ん中を、ぼくは歩く。

シリウスがぼくに気付き、笑うのを止めた。前髪を思い出したように掻き上げ、「よう」と笑いかける。ぼくは笑わずに、シリウスに杖を突き付けた。

「魔法省魔法法執行部闇祓い局第一班副班長、幣原秋が命じる。……杖を捨てろ」

「案外サマになってんじゃねえか、秋。威圧感が増した」

「聞こえなかったのか？ 杖を捨てろ。従わないなら、殺す」

杖の先を、彼の左胸に向けた。「はいはい」と、シリウスは右手に持っていた杖を、足元に放り投げた。

杖が血の海の中に落ちる前に、ぼくは左手の杖は構えたまま、右手の人差し指を軽く振った。呼び寄せ呪文で、シリウスの杖はぼくの手に収まる。念の為に武装解除を施すが、何も出て来はしなかった。

シリウスの杖に、直前呪文をかける。死の呪文が現れたことを確認した後、シリウスの目の前で、杖を真つ二つに折った。

「シリウス・ブラック。君をアズカバンの看守に引き渡す。抵抗する素振りを見せたら、迷わず殺すからそのつもりでいてくれ」

「君に抵抗なんてしないさ……アズカバンでも何でも、好きにしてくれ」

シリウスは笑って、両の手をぼくに差し出した。

部下の一人に合図をし、彼の手首に、魔法防止の手錠を掛けさせる。

「秋、変わったな……昔の君はさ、優しくて、純粹で、そんな目えするような奴じゃなかったのにな……」

シリウスがそう呟いた。低い声で、ぼくも返す。

「……君にも同じ言葉を返すよ、シリウス」

全くだ、と、シリウスは笑った。

笑いながら、昏い瞳から、一筋の涙を零した。

「なあ秋、一っだけ頼みがあるんだ」

アズカバンまで「付き添い姿くらまし」される直前に、シリウスはそう言った。

シリウスをぼくから離そうとする魔法警察の人たちを抑え、「何だいい？」と尋ねる。

「ハリーを、守ってやってくれねえか？」

その言葉に、胃が奇妙に振れる感覚を覚えた。

動揺し過ぎて、閉心術が破れる。慌てて貼り直そうとしたが、シリ

ウスには気付かれたようだ。目を見張り、そして小さく笑う。

「なるほど、な……俺が唯一習得出来なかった魔法だ……」

「ふぎっ、けるな……っ！」

閉心術を掛け直す余裕は、もうなかった。

右手でシリウスの胸倉を掴み、引き寄せる。シリウスは抵抗らしい抵抗をしないまま、ただ、ぼくを見ていた。慌てた部下がぼくに声を掛けるも、全てを無視してシリウスを睨み付ける。

「ハリーを守れ!? よく言えたもんだっ！ お前がつ、お前が……っ」

それ以上は、言葉が出なかった。お前がヴォルデモートに全ての情報を売ったんだろう、お前がリリーとジェームズを、ピーターを殺したんだ、お前が、お前さえいなければ――

「幣原、ブラックから手を離せ」

後ろから、先輩の声が聞こえた。その声に、我に返る。

シリウスから手を離すと、ぼくは顔を背けた。シリウスに背を向ける。

「……言われなくても、守ってやるさ」

背後から、喉の奥を震わすくつくつと言う笑い声が聞こえた。

瞬間バチツという「姿くらまし」の音が聞こえ、懐かしい気配も、何もかもが全て、掻き消えた。

たった二日で。

ぼくと悪戯仕掛人の青春時代を彩った、あのうつくしい友情は、粉々に消え去った。

ぼくと、リーマス・ルーピンだけを残して。



「ホークラックス?」

「そう。アキなら、聞いたことあるんじゃないかって」

「残念だけど、その期待には応えられそうにない……知らない単語だよ……多分」

語尾が弱々しくなったのは、幣原のことを考えたからだ。幣原なら

ば、あるいは知っているのではないだろうか？

「そこ、授業中は授業に集中だよ、ハリー、アキー！」

途端、スラグホーン先生から厳しい檄が飛んだ。ぼくらは揃って身を縮める。

「……ということは、勿論『スカーピンの暴露呪文』により魔法毒薬の成分を正確に同定できたと仮定すると……」

スラグホーン先生の声が朗々と響くも、この教室にいる一体何割がきちんと理解しているのだろう。ロンはぼけつとした顔で『上級魔法薬』の教科書に落書きをしていたし、ハリーは聞いてはいるものの、まさしくチンプンカンプンだと雄弁な表情をしていた。

「……で、あるからして。前に出てきて、私の机からそれぞれ薬瓶を一本ずつ取っていきなさい。授業が終わるまでに、その瓶に入っている解毒剤を調査すること。頑張りなさい、保護手袋を忘れないように！」

ハーマイオニーは真つ先に立ち上がったが、他の皆はスラグホーン先生の解説が終わったことにそこでやつと気がついたようだ。慌ててガタガタと机を揺らしながら立ち上がっている。

「ねえ、アリス」

頬杖をつきぼうつとしていたアリスの肩を揺さぶると、アリスは勢いよくこちらを振り返った。その勢いに驚いて、思わず肩から手を離す。

「あ、悪い……」

「……どうしたの？ 随分と上の空だ、案外真面目なファッシュヨン不良のアリスさんらしくない」

「誰がファッシュヨン不良だ、誰が！」

歯を剥いてぼくを怒鳴りつけると、アリスは肩を怒らせながら薬瓶を取りに行った。

その後ろ姿を見た後、先ほどまでアリスが視線を彷徨わせていた方向に目を向け、静かに目を細める。

険しい表情で大鍋を睨みつけるドラコが、そこにいた。



ぼくの兄貴が信じられない方法で授業の問いかけに完璧に答えてみせた後、ぼくは「スラグホーンに尋ねたいことがあるんだ」というハリーに付き合ひ、じつと教室に残っていた。

「ほらほら、君たち次の授業に遅れるよ」

「先生、お伺いしたいことがあるんです」

スラグホーン先生は機嫌良さに微笑んで、ハリーを促した。

「先生、ご存知でしょうか……ホーククラックスのことですが」

スラグホーン先生の顔色が変わった。落ち着きなくぼくとハリーの顔を交互に見つめると、かすれ声で呟く。

「ダンブルドアの差し金だな。ダンブルドアが君にあれを見せたのだろう——あの記憶を。そうなんだろう？」

「……はい」

「勿論そうだろう。……まあ、あの記憶を見たのなら、ハリー、私が一切何も知らないことは分かっているだろう——一切何も、ホーククラックスのことなど」

ハリーから目を逸らし、今度はぼくに瞳の焦点を合わせ、スラグホーン先生は苦々しげに何かを口元で呟いた。

そしてすぐさまぼくから目を切ると、震える手でドラゴン革のブリーフケースを掴み、つかつかと扉に向かって大股で歩き出す。

「先生——」

慌てたように、ハリーがスラグホーン先生に追いつがった。

「僕はただ、あの記憶に少し足りないところがあるのではと——」

「そうかね？ それなら君が間違つとるんだらう。間違つとる！」

目の前で扉がバタンと閉まる。

過去の恐怖に染まる瞳が、最後ぼくを透かして誰かを視ていたような、そんな気がした。

第29話 血管を流れる命の音

エリス先輩に散々「大丈夫だ」と言ったのだが、大丈夫ではなかったようだ。

気つけ呪文に閉心術、その他ありとあらゆる精神感応系統の呪文を自らに掛けてはいたのだが、さすがにこのちっぽけな肉体では、精神的疲労と肉体的疲労のダブルパンチを受けると軽々と沈んでしまうらしい。

無理矢理にでも帰宅を命じられ、良かった、と思うべきか。

玄関の扉を閉めたそこに座り込み眠っていた———というか、意識を落としていたため、最悪な目覚めであった。

全く寝た気もしないし、一切合切疲れは取れていないし、呪文を重ね掛けしていた副作用か頭は無茶苦茶ガンガンするし吐き気と眩暈は律儀にも交互に間断なくやってくる。

いつそのこと、死んでしまった方が楽なのではないかとまで思った。

よろよろと洗面所まで這うように進むと、顔を洗う。

鏡を見て、我ながら酷い顔だ、と笑った。鏡の中の人物は、笑みともつかぬ醜悪な歪んだ表情を虚ろに浮かべた。

大きく息を吐き、洗面台に両手を掛けたまま、崩れるように床に膝をついた。頭を伏せ、目を瞑る。

もう、無理だ。

そう一言、呟いた。

一切合切、もう無理だ。

もう、何も背負いたくない。

もう、何もしたくない。

誰も殺したくないし、誰かが殺される様も見たくない。

『黒衣の天才』なんてクソな渾名で呼ばれたくない。

闇祓いになって、初めて今、立ち止まった。

一度立ち止まってしまうと、次再起動するときには多大なエネルギーを必要とする。

今のぼくにそんなエネルギーがあるかと問われれば、答えよう、否だ。

エネルギー切れ。

ぼくはさ、十分頑張ったよ。

頑張った結果が——このザマだよ。

ならもう、頑張ってもこんなどうしようもない未来しか訪れないというのなら、さあ。

もう頑張らなくても、いいだろうか？

「……………ダメ、だ」

まだ、数多くの死喰い人はこのうのと生き延びている。主人を失って動揺しているだろうが、そこを畳み掛けておかないと、彼らは懲りない。

時代は変わった。

ヴォルデモートは、闇の陣営は、負けた。

不死鳥の騎士団や闇祓い、ぼくらが勝ったのだ。

敗残兵が余計なことをする前に、一掃しておかないと。

それはきつと、ぼくにしか出来ないことだ——まともな人の手を煩わせちゃいけないことだ。

まともな人は、きつとこれからの未来を作るのに必要な人たちだから。

「……………あー……………」

頭が全然回っていない。

とりあえず、まだぼくは生きていなきやいけないということとは分かった。それだけでも、収穫だ。さもないと、風呂場で突発的に溺死しようとしていたかもしれぬ。

今の自分が何をしでかすのか、正直予想が付かない。しかも、色んな気力が根こそぎになつていいるから、きつとぼくが何しようが、意識はぼんやりと眺めているだけなのだ。

それは、さすがに頂けない。

ガン、と、強く頭を洗面所の流しに打ち付けた。大きな音がした割に、そうそう痛みは感じない。

とりあえず、寝よう。見る夢は、ほとんど確実に悪夢の類だろうけど。

悪夢を見たくないのなら、依存気味の薬に手を出して、無理矢理にでも眠ろう。

明日も、ぼくは生きていく。

大切な人が随分と減った世界で、のうのうと。



「ロンが愛の妙薬を飲んだ？」

三月一日、ホグズミード行きがとうとう中止になった、ロンの誕生日。

朝食に向かう途中に、フラフラと夢見がちな歩調のロンと、しかめっ面をして右耳を抑えている親愛なる我が兄ハリー・ポッターと出会ったぼくは、事の顛末を聞いて思わず苦笑した。

「笑い事じゃないよ、アキ」

「いやいや、分かっているんだけど……つく、ふふ……どうして早めに捨てなかったの」

「バカ、『愛の妙薬』はそのままダストボックスにゴールインすることは出来ないこと、知ってるだろ。いつかどうにかしようと思っていたんだよ」

そのとき、ロンの瞳がぼくを向いた。奇妙に満面の笑顔で近付いてくるロンに、思わず寒気が走ってたじろいだ。

「やあアキ……君も凄い綺麗な黒髪だね、でもまあ、ロミルダの方がもっと美しいけどね……」

熱に浮かされたようにぼくの髪を掴もうとするロンから慌てて飛び退く。同時にハリーがロンの腕をがっしりホールドして、ぼくから引き離してくれた。

「ほら、ロミルダ・ベインに会いにスラグホーンのところに行くんだろ」

「そうだった！ 早く行かないと！」

隙あらばピョイツと飛んでいってしまいそうなロンを、苦勞して捕まえながらもスラグホーン先生の私室へと向かう。

なんとか正気を取り戻したロンに、ぼくらは揃って微笑みを向けた。

「……死にたい」

「滅多なことを言うな。気付く薬を出してあげよう。バタービールがあるし、ワインもある。オーク樽熟成の蜂蜜酒……ダンプルドアに送るつもりだったのだけれど、構わんだろう。ミスター・ウィーズリーの誕生日と洒落込もうじゃないか。失恋の痛手を追い払うには、上等の酒に勝るものなし」

スラグホーン先生はクスクス笑いながら、ぼくらにグラスを握らせた。軽く掲げる。

「さあ、誕生日おめでとう、ラルフ——」

「ロンです」

ハリーが訂正する。

しかしロンは、スラグホーン先生の音頭を聞いちゃいなかったように蜂蜜酒を一気に飲み干した。

一瞬の出来事だった。

「ロン——」

ハリーが叫ぶ。ロンの手からグラスが滑り落ち、石造りの床に当たって砕けた。

手足を痙攣させ、口から泡を吹いて目を回しているロンにハリーは瞬時に駆け寄ると「先生！ 何とかしてください！」と叫ぶ。慌ててぼくもロンに近付いた。

今ロンが口にしたのは蜂蜜酒だ。もしかして、これに何か毒が？

と、ハリーがパツと駆け出した。スラグホーンの魔法薬キットに飛びつくと、中身を引っ張り出し、やがて小さな小石——ベゾワール石を持って戻ってくる。察してロンの口を開けさせると、ハリーは焦る瞳のままその口にベゾワール石を押し込んだ。

ロンはビクリと身体を跳ねさせると、やがてぐったりと息を吐き出す。

「早く、医務室に！」
ハリーの怒号が、冷たい空気を震わせた。

第30話 黒衣の天才の殺し方

ジエームズとリリー、それにピーター。彼らが死んで、もう何年も経った気分である。実際は、まだほんの数ヶ月しか経っていないに。

右耳にずっとあつたトランシーバーは、もう回収された。元が実験品だったからか。

ひとまず緊急の事態はそうそうないと判断されたのだろう。もう、緊急の事態は起こらないのだと。

季節は、冬になっていた。

ヴォルデモートの台頭で長年暗くどんよりとしていた魔法界も、悪夢から解放されたとばかりに色とりどりに飾り付けられていた。元よりマグル界などはヴォルデモートなど知らないから、いつも通り大きなクリスマスツリーに電飾が飾られ、見た目にも華やかなものだ。街行く人も、どこか生き生きとして見える。

テムズ川を横切る、ロンドン橋。

自動車を通すための橋は、しかし今は端から端を見回してもぼくしかいない。人払いの魔法を張り巡らせてある。

こうして悪用することも簡単なのだから、全く、魔法なんてものは。

「London Bridge is broken down,
……」

よく聴き馴染んだ童謡を口ずさみ、すぐさま止めた。

自分が音痴なのは自覚している。芸術方面には一切才能がないのは、よく分かっていた。

辺りに誰もいなくとも、第一の聴衆であるぼく自身が、自分の歌声を聴くことを苦痛だと感じるのだ。それでも歌い続けるなんて、とんだ被虐趣味者だろう。生憎と、ぼくにそんな趣味はない。

橋の欄干に両腕を置いた。

正面から風を受け、目を閉じる。

ジエームズとリリーの息子、ハリー・ポッターは、彼にとつての叔母夫婦に預けられることとなったらしい。つまりは、リリーの姉、ペ

チユニア・エバンスの家庭に。

いや——エバンス、じゃあない、のか、もう。いつもいつも、旧姓で呼んでしまうのは、ぼくの悪い癖だ。

ここしばらくずっと、イギリス魔法界の話題を独占していたハリー・ポッター、そしてそれに関連するお祭り騒ぎも、一時期に比べれば随分とマシになった。

もつとも、それも少し薄れてきたくらいのもので、時期的にそろそろハリー・ポッター関連の書物が発売される。そうすれば、また爆発的な騒ぎが巻き起こるのだろう。

急に頭がいなくなつて右往左往していた死喰い人の残党も、あらかた捕らえ終わった。かつては独断でショートカットされていた裁判も、時間と余裕が出来た今ならほとんどが行われているようだ。

もつとも、イギリスの魔法界でまともな裁判はそうそう期待出来ないが。評議会の人物をどれだけ味方につけたか、ただそれだけ。

状況証拠より自供を重んじるし、より強力な後ろ盾があれば、どんな逆境であつても跳ね返せてしまう。もう少し公平には出来ないものか、そうは思うものの、司法にはまるで興味が持てないぼくにとつては本当にただ「思うだけ」だった。

十三人のマグルと、可哀想なピーター・ペティグリューを巻き込んだ、シリウス・ブラックのあの凶悪な事件は、マグル界のガス会社の不始末と『改竄』されていた。

何ともまあ、魔法界は不祥事を他所に押し付けるのが上手い。謂れなきことで罰を受けるガス会社の人たちも、たまつたものではないだろうに。

常々どうして『忘却術』やらが規制されないのか、不思議でならない。『忘却術』に『ポリジュース薬』『愛の妙薬』『真実薬』あたりをどうかしないことには、魔法使いは犯罪について好き勝手に改竄し放題なのだから。

魔法とは恐ろしい。

眼下の大通りをひっきりなしに行き交う車、その大勢の中の、運転席に座るたった一人を『失神』させただけで、一瞬で朝のストリート

は大惨事に変わるといふのに。

魔法使いなんて、この世にいない方がいいのかもしれない。少なくとも、魔法使いは隔離されるべきなのかもしれない。非魔法族と共存なんて出来るものか。むしろ、非魔法族の側がごめんだろう。

こんな厄介なものに構っていられるか、という気持ちか。その気持ちには、とてもよく分かる。

そうだ——これを忘れていた。

一月前、ぼくのかつての訓練生時の同僚であった、パトリック・リオンとマーク・ヴィツガーの二人が死んだ。殉職として、闇祓いのしきたりに則り、葬儀はしめやかに、そして淡々と執り行われた。

この二人だけではない。ここ数ヶ月、続々と人が死んでいる。

確かに、つい先日死喰い人の大集団と、ほぼ全面戦争のような形相を呈したことは確かだ。しかし、それでもあまりに異様な量だった。

「幣原」

気配には感づいていたものの、名前を呼ばれてようやくぼくは振り返った。

エリス・レインウォーター先輩が、人好きのする笑顔を浮かべて立っていた。頬には未だ、真っ白のガーゼが貼られている。

「一体どうしたんだい？ 急に呼び出したりして」

「覚えてますか？ エリス先輩。少し前、闇祓いの中でもスパイが紛れているってごたついたこと」

ああ、とエリス先輩は、思い出すかのように目を細めた。

「そんなこともあったね」

「結局あれ、デマだったらしいですけど、そもそもあの話の発端は、あまりにも最近の闇祓いの死亡率が高すぎるから、なんですって。腐ってもエリート、というべきなのか、案外しぶとい人が多いんですね、さすが闇祓い」

「……君の同期の子も二人、死んだのだけ」

「はい、死にました。リオンもヴィツガーも。でもまあ、仕方がないことです。闇祓いにいる以上、死は親友よりも近しくて、恋人より離れがたい存在なのですから」

いつか必ず、別れは訪れる。

それは、仕方がないことだった。

ポケットの中にいつも入れていた『生ける屍の水薬』の希釈液。それを布越しに撫でようとした指が止まる。

そうだ、もう、あれはないのだった。

それを思うと、僅かに残念に感じた。

「なんだかんだで、ぼくはあの二人のことを信用していたんです。結局、ぼくら三人はお互いのことを何一つ知らないまま——家族構成も、恋人や親友の有無も、好きな作家も、感銘を受けた言葉も、闇祓いになるうと決意した理由も知らないまま、こうして死別した訳ですけど。信用に、多くの情報はいらainです。ただ、そいつを信用出来るか。背中を預けうるか。そういう感覚を、一年の訓練期間を通して、ぼくらは育んだんだと思います」

エリス先輩は、ぼくが何を言いたいのかいまいち要領が掴めていないようだ。曖昧な笑みを浮かべている。

「そうか。幣原、君がそういう感覚を育むことが出来たのなら、きっと君はいい仲間に恵まれたんだね」

「恵まれました、本当に。そのお陰で、色々知ることが出来たんですから」

ピンと弾いた指の上に、空っぽの小さな小瓶が出現した。『生ける屍の水薬』の希釈液が入っていた、小さな瓶。

「ぼくが初めて人を殺した日を、覚えていますか？」

「……覚えているよ。確か私が、君が眠れていないだろうと思って、この薬を煎じて贈ってもらったようにしたのだったね、君の同僚の二人に」

「ええ。ぼくもしばらく前まで、その話を信じていました」

もう一度空中の小瓶を弾くと、今度は空気に溶けるように、小瓶は姿を消してしまった。

「……信じていた、とは」

「ところで、エリス先輩。ぼくの不得意科目をご存知ですか？」

今度こそ、エリス先輩は黙り込んだ。

なんとなく、自分の不手際を悟ったのかもしれない。案外、引き際はいいのか。

「……さあ、知らないね。君に不得意な科目があること自体、驚きだ」「先輩にそんなことを言われるのは恐悅至極ではありませんがね。何はともあれ、ぼくは魔法薬学だけが、こればかりはどうしようもなく苦手なんですよ。人並みまでならなんとかなるけど、それを外れようと思っただろうにもならない。人にはやれ『君は作業の途中で思考が次の手順に飛んでいくから手元が疎かになる』だの何だの言われましたがね、こればかりはもう性格だ。几帳面な癖に興味のないものには大雑把。だからぼくも魔法薬学には造形が深くなくて。その点、リオンは魔法薬学に対して優れた適性を持っていました。無言呪文やらそつち系は、中々苦手だったんですけどね」

補い合って丁度いいのでは、とヴィツガーがよく呆れていた。ヴィツガーはぼくらみたいに偏らず、優等生的になんでも出来たから。

「リオンはですね……結構あいつ、張り合いたがりなんです。自分が出来ないのに人が出来るってことがすこぶる嫌なようで。全く他人に興味がないヴィツガーとは正反対。意地っ張りというか、負けず嫌いというか……そして、凄く人を見ている。ぼくなんかをね、気に掛けてくれるんです。ぼくが訓練生から一足先に引き抜かれて、前線に連れ出されても、それでもずっと気に掛けてくれたんです。ぼくの家までわざわざ足を運んで、眠れないぼくに対して『エリス先輩からだから』なんて言い張って、眠り薬を押し付けて。エリス先輩も、口裏を合わせてくれたんでしょう？ ……それとも、ご存知ありませんか、そのあたりのことは」

エリス先輩の表情から、とうとう笑みが消えた。

「ねえ、先輩。ぼくはですね、記憶力には滅法自信があるんです。だから、訓練生時代、魔法薬作成の時に隣でリオンがどんな瓶を使っていたかとか……案外ね、そんな細かいことも、覚えていたりするんですよ。だから、あの瓶を見た瞬間、すぐに分かりました。ああ、これはよくあるリオンなりの照れ隠しなんだって。自分の好意を上手く押

し付けられなくて、人の名前を借りてやつとぼくに押し付けられたのだと」

変な奴、とヴィツガーも思っていたことだろう。

ぼくだって、変な奴だ、と思う。

「リオンにね、後日『君だけが頼りなんだよ、お願い、エリス先輩が煎じてくれた眠り薬と同じものを用意して?』と頼むと、物凄い憎まれ口を叩きながらもね、やってくれましたよ。エリス先輩が作ってくれた、と言つてぼくが受け取った薬と同じ大鍋、全く同じ割合の希釈液で。それが……ぼくとリオンの、コミュニケーション。端からみたら、ただの薬のやり取りだけど……ぼくらにとっては、違うんです。

……エリス先輩」

息を吸い込んだ。

「エリス先輩なら知っているはずの情報を知らない、そんなあなたは、一体誰ですか」

しばらく、エリス先輩は黙つてぼくを見つめていたが、やがてにっこりと微笑んだ。

「私は私だよ。エリス・レインウオーター、その人だ。——しかし」

エリス先輩は——『彼』は、笑みを深くした。

『エリス・レインウオーターの身体』を操っているのは、私^{エリス}じゃない」

「……まさか」

「さあ、君の頭の中で組み立った推理を聞こうじゃないか」

芝居がかつた大仰な仕草で、彼は両手を広げた。

本能的な恐怖を感じて後ずさりかけ、背後は逃げ場がない欄干だということに遅れて思い至る。

『服従の呪文』じゃ、ないですよね……」

「そうだね、あの呪文じゃない」

「……ならば」

思い起こすのは、レギュラスを追つて入った湖。

「——『生ける屍』……『亡者』」

「なに、言葉遊びさ」

「……なんと悪趣味な」

「お気に召さなかった？」

「常飲していたあの薬が飲めなくなるかと思うとね」

「君は案外、妙なところで繊細だ」

杖を抜き、目の前の彼に向けた。彼は逃げも隠れも怖気付きもせず、ただ普段通りの人の好い笑みを浮かべている。

なら、随分と治りが遅いなど思っていたその頬の傷も、道理。右手の傷も、癒えてはいないのだろう。

屍に治癒能力は、望めないから。

「闇祓いの、内部調査——か？ その割には——」

エリス先輩の肩書きは、闇祓い局第一班の班長だ。かなり大きな権限を持っているし、集まる情報も多い。

しかし、それならばもう少し上手く出来ただろう——情報を読まれていたにしては、お粗末だ。

では、一体何が目的だったんだ？

「分からない？ 幣原」

エリス先輩と全く同じ口調で——嫌になるくらいそっくりの口調だった。

「……分かりたくもない。どうせお前達の考えることだ、ロクでもないことに決まっている」

「つれないな。心の乱れは口調と声に現れると言うよ？」

「うるさい。早く言って。最近のぼくは、そう気が長くない」

軽く杖を振ると、杖先から赤い火花が零れた。「おお怖い怖い」と戯けて彼は言う。全くそう思っていないだろうに。

「ぼくにそこまで言ったつてことは、もう誤魔化す気もないんだろ？」

「そうだね、目論見も中途半端に終わってしまったし、我らの主人もいなくなってしまうたからね。最後に自棄っぱちではあるけれど、事件を起こすことも悪くない」

「……何をやる気」

「さて、考えつかない？ 諜報活動でもなく、こうして我らがこの身体を使って、何をしていたか、本当に予測はつかないかい？」

『我ら』ということは、エリス先輩の身体を使って悪さをしていたのは

複数なのだろう。

「どうしてエリス・レインウオーターがこんな可哀想なことになったのか、本当に分からないの？」

耳を貸すな。どうせ戯言だ。

杖を振り、魔法式を構築しかけ――

「エリスは君のせいで死んだのに」

――式を発動させることは、出来なかった。

中途半端な魔法式は、呆気なく空中に離散する。

「なるほど、君のウィークポイントはそこだったか。君のせいで、誰かが傷ついたり死んだりすることは耐えられないってことかな。随分と不可思議なメンタルだ。犯した罪の重さには耐えられても、自分のせいで仲間が命を落としたと聞くと動揺するとは」

「……………どういうことだ」

「どうもこうもないよ。エリス・レインウオーターは君の動向を探るためだけの贄だった。幣原秋が闇祓いとして彼の下に就くことになったから、都合が良かったエリスを殺した。――慕っていた先輩が、本当は随分と前に、君のせいで命を落としていたと知って、今どんな気分かい？――エリスの死は、君のせいだ」

「……………違う」

「違わない。君のせいで死んだんだ」

「……………っ」

頭の中で、沢山の恨み言が聞こえる。

ぼくが今まで殺した人の声。

ぼくのせいで、死んでいった人の声。

――気のせいだ。幻聴だ。

それでも、空いている右手で片耳を塞いだ。

塞いでも、頭の中の声が小さくなることはなく、むしろ外界からの聴覚をシャットダウンされたため、ポリウムが上がつて聞き取れるようになる。

『許さない』
『許さない』
『許さない』
『許さない』
『許さない』
『許さない』
『許さない』
『許さない』
『許さない』
『許さない』
『許さない』

「現実から逃げないでよ、幣原。全部全部君の罪なのに。目を逸らさないでよ、自分自身から」

掲げる杖は、目で見て分かるほどに震えていた。照準が定まらない杖先は、一応は彼を向いているものの、当たるとは思えない。

「君を倒せる人材なんてそうそういない。君以上に魔力を持ち、君以上に魔法の扱いが上手い人なんて、闇の帝王くらいのものだ。となると、後我らが積極的に出来ることは、君の心を折ることだ——君の精神を殺すことだ。せっかく魔法省も『黒衣の天才』として持ち上げるつもりのようなだし、こちらとしても申し分ない。どうぞどうぞ、殺してくれたまえ。幣原秋、君が殺した中で、一体どのくらいが本物の死喰い人だったと思う？ 一体どのくらいが『服従の呪文』を掛けられた一般人だったと思う？ さあ幣原、考えろ。考えるのは得意だろうか？ レイブクロー生」

やめてくれ。

それでも、脳は言われた通りに思考を始める。答えが提示されることのない問いかけを、思考する。

自分の首を絞めるだけと、分かっているながら。

「君のやってきたことに、意味はなかったんだよ。君はただ、罪のない

人を大量に殺しただけだ。ああ勿論、罪のある人間もそこに殺していた訳だけど。我らはずっと見ていたよ。……こちらだつて犠牲は多く出たけれど、それで幣原秋が排除出来たのならば、その犠牲には意味がある。君の精神はいつまで保つのだろう。いつ君は罪の重さに耐え切れず膝をつくのだろう、立ち止まってしまふのだろう——そう、ワクワクしていたんだがね」

そこで彼は舌打ちをした。

「意外としぶといんだから。あの方は消えてしまった。戦争は終わってしまった。私たちは、あの方に幣原の首を持って行くことが出来なかった——だが、あの方は必ず復活なされる」

狂気を孕む瞳で、彼はぼくの目をじっと見つめた。

縫い付けられたように、動けない。吐き気と頭痛が、波のように押し寄せる。

「あの方は必ず、我らのもとに戻ってきてくださる。ならば我らはそれを信じて、未来に向けて布石を打ち、脅威となる存在を挫いておかなければならない——時に幣原、君はフランク・ロングボトムとアリス・ロングボトムを知っているね？」

ぱつと二人の顔が、脳裏に浮かんだ。知らない訳がない。ぼくが知らない訳がないことを、エリス先輩を通して彼もまた、知らない訳がない。

彼の唇が、歪な弧を描く。笑ったのだ、と遅れて気がついた。

「……あの二人に、何を」

血の気が引く。彼らもまた『闇の帝王を倒し得る』と予言された『七月末に生まれた男の子』の子供を持つ親だった。

ジエームズとリリー、この二人と同様に。

「早く行かないと、手遅れになるよ？ 特にベラは——ベラトリクス・レストレンジは凶悪だからねえ。磔の呪文の連続で頭がイカレるが早いか、君が間に合う方が早いか。まあどっちにせよ、君が見るものは地獄だけだ」

ぼくの左手首を、彼は自然な振る舞いで掴んだ。怯んで力を込めるものの、それより強い力で引き寄せられ、杖先が彼の左胸へと押し付

けられる。

『死の呪文』以外に、エリスの身体を自由にしてやる術は存在しない。そういう風に、仕掛けてある。この身体の生体反応はない、心臓も動いていなければ血も吹き出ない、この身体に痛覚はない。だからたとえ骨を全て折られたところで、損傷するのはエリス・レインウォーターの身体のみ。我らには傷一つ付けることが出来ない」

簡単なことだよ。

黒衣の天才、幣原秋。

「生かしたままだと、我らは全力で君がロングボトム夫妻に辿り着けないよう邪魔をする。ああ、失神呪文も、この身体には効果がないよ。さて、賢い賢いレイブンクロー生。君なら今とるべき最良を選べるはずさ」

右耳のトランシーバーに手を伸ばしかけ、しまった、今はないのだと小さく眉を寄せた。重要な時に使える機器が手元にないのはお約束だ。

「敬愛する先輩方を、我らの手から助けたければ。何、手慣れたものだろう？ 今すぐ動けば、もしかすると我らも捕らえることが出来るかもしれない」

息が、上手く出来ない。

自分が一体、どんな表情をしているのか。ロクな表情でないことだけは、目の前の彼が心からの笑みを浮かべたことで、何となく察することが出来た。

「その絶望し切った表情、本当に——素晴らしいねえ」

まあ狂人というのは得てして人が下す評価であるので、ならば自己評価も不要だろう。

どっちでもいいや、狂っていても、狂っていないくとも。どうでもいい。こんな奴でも使わざるを得ない闇祓いこそ、同情に値する。可哀想に。

まあ、それでも。

もう闇祓いにも不死鳥の騎士団にも、ぼくは必要ない——ぼくの魔力は、必要ない。

『不死鳥の騎士団』は、そもそも少し前になああの解散を見せていた。生き残った者は一握りだけど、平和な世の中を彼らは生きて行くのだろう。

「……………」

結局のところ、ぼくの与り知らぬところで全てが終わってしまった。

偶像の英雄は、生き残った男の子、ハリー・ポッターに移った。ぼくの名前が日刊預言者新聞の記事を賑わすことは、もうないに違いない。

黒衣の天才の役目は、終わったのだ。

「……………」

もうぼくは、必要とされない。新しい世の中に、ぼくは存在は必要ない。

下手に目立てば、今度は『第二のヴォルデモートの台頭』だと思われるかもしれない——ヴォルデモートと同じように、ぼくが大虐殺を行つた張本人であることは間違いないのだ。

裁かれないだけで。司法が、ぼくに完全に味方をしているだけで。ぼくだって大罪人だ。

そんな大罪人が、平和な世の中の中のうのと生きていいはずがない。

「そろそろ死のうかな」

お腹が空いた、と呟くのと変わらぬテンションで、ぼくは口ずさんだ。



目の前で、頑張っていたためた手紙があつという間に細かい紙屑になつた。

パラパラとデスクの上に落ちる紙屑、しかしそれでも飽き足りなかったのか、ぼくの直属の上司たるアラスター・ムーデイの手によってそれらは全てインセンディオされた挙句デリトリウスされてしまった。一生懸命書いた辞表は、もう影も形も残っていない。

「……ダメ、ですか」

「ダメに決まっている」

眉間に強烈なシワをつけたムーデイ先生は、じろりとぼくを睨めつけて「余計なことを考えておるのだろう」と唸るように言った。

余計なこと、だろうか。ぼくは同意も否定もせず、僅かに首を傾げた。

「貴様の辞表は受け取れない。分かっているだろう」

「もう『黒衣の天才』の役目は終わったと思いましたが」

魔法界を支える偶像は、既にハリリー・ポッターへと変化した。ぼくの存在はもう見向きもされない。平和な世の中に、戦争の中で際立つたぼくは、必要とされない。

「貴様が生きている理由は、ただ貴様に通り名があつて、それを世間から必要とされているから、ではないだろう」

ムーデイ先生は歯を剥き出しにした。

「貴様みたいな奴は、せめて『闇祓い』の役職でもって縛り付けておかないと——手放したら手放したで、自死に走るだろうくらい予想済みだ」



まあ、ムーデイ先生が言うことも、分からないではない。多分ぼくは、目的を失ってふらふらしているだけなのだ。

ずっと『両親の復讐のためヴォルデモートを倒す』という思いの元、生きてきた。その目的が呆気なく取り上げられて、今のぼくは途方に暮れている。

そんな、迷子の子供のようなものなんだろう、今のぼくは。

「……まあ、死ねば目的も何もあつたもんじゃないな」

死後の世界でまで、そんな瑣末な意識に振り回されはしないだろう。しない、はずだ。

だから、ひとまずの目的である『自殺』というものに縋っている、という現状だ。おおよそ褒められたものではないけれど、そもそもぼくの生き様自体、褒められたものでは決してない。

褒められたものなら、人なんて殺していない。もうちよつとマシな道を選んでいる。

「……さて」

時刻は深夜。月の明かりは見当たらない。月齢はどうだっただろう、覚えていない。

天文学を取っていた学生の頃はともかく、今もなお夜空のことに構ってられるほど、ぼくの身の回りは平穩ではなかった。

「バカと煙は高いところが好き、とはよく言ったもんですが」

場所はロンドンの中心街。摩天楼とも呼ばれる、超高層ビルと定義されるであろう建物の屋上。

確かに、嫌いではない。高所恐怖症とは無縁だった。日本に飛行機で帰るたび、飽きることなく窓の外を眺めていたものだ——もつとも、雲より高く飛んでしまえば、変わらぬ風景に飽きて本を手にとっていたものだけだ。

高所恐怖症は患っていないとはいえ、さすがにこの高さから地上を見下ろしたら身が竦む。生物の、命あるものの本能のようだ。

今から、その本能を無視した行動を取ろうとしているというのに。屋上をぐるりと囲むおぎなりなフェンスを乗り越え、降り立つ。足場は一メートルそこらか。

コンクリート張りの足元は味気ないが、しかし見下ろした夜景は思いの他美しかった。地下や路地に潜む魔法使いの街とは違う、マグル

の街灯り。

夜景に見惚れたのは何年振りだろうか。自分の命に区切りをつけた今となつては、目に映る全てが美しい。

受け取ってもらえなかった辞表と遺書、それに杖は、寮の自分の部屋、机の上に置いてきた。

おそらく、ぼくの死体を発見するのはマグルだろう。彼らに不審がられないように、魔法使いのローブは脱いで、トレンチコートにシャツ、ボトムスと、装いは普通に。

そういうところで妙に気を回してしまうのは、まあ何と言うか、ぼくの生まれ持った性質故だ。

自分自身で、人生に終止符を打つなんて、なんと贅沢なことなのだろう。

ぼくが今まで殺した人たちは、そんなぼくに対し何と恨み言を吐くだろうか。

でも、まあ——こんなぼくに、生きてくれなんて思う人はいないから。

目を細めた。夜風が頬を撫で、髪を揺らす。

この世界に、ぼくは必要ない。

そのことに、もつと早く気付くべきだった。

「馬鹿だなあ、本当……」

ごめんなさい。

生まれてきて、ごめんなさい。

空気に、一步を踏み出した。

大好きな人達は、ぼくを迎え入れてくれるだろうか。



「ドラコー」

自らの袖を掴んだ腕に、ドラコ・マルフォイはギクリとした。全く気が付かなかったのだ。

八階の『必要の部屋』に向かっていた途中だった。ドラコのローブの袖を掴んだ、ドラコの元婚約者で幼馴染の少女、アクアマリン・ベルフェゴールは、その整った表情を僅かに崩し、ドラコを見上げていた。

額には汗が滲んでいる。見つけて、走ってきたのだろう——いくら思索に耽っていたからと言って、もう少し周囲に気を配らなければならなかった。

「やつと、捕まえた……」

今、自分がすべきことは、この少女を撒いて一刻も早く『必要の部屋』へと向かうことだ。クラブとゴイルを待たせている。

しかしどうしてだか、袖を掴む小さな手を振り払うことが出来なかった。

「ねえ、ドラコ……教えて。一体あなた、どうしちゃったの？ ……も

う私に愛想尽かしたのかと、最初は思った。でも、違うわよね」

灰色の瞳は、ドラコのものより少し色が濃い。

幼い頃から、ずっとこの色を見続けていた。

「……お前には」

『関係ない』？ 心配することも、許してくれないの？ ……ドラコ。私は」

そこで、一度アクアは言葉を切った。再び顔を上げた時には、灰色の瞳に真摯な光が宿っていた。

「私はアクアマリン・ベルフェゴール。ベルフェゴール家の長女、アクアマリンよ。……関係なく、ない筈よ」

離さぬよう、アクアはぎゅつとドラコの袖を掴む。

「……教えて、ドラコ。もしかして……」

「違う」

はつきりとした声が出た。ピシヤリと物言いを許さない声。そのことに、安堵した。

「お前には関係ない。本当の意味で、お前には一切関係ない。……いい加減鬱陶しいんだよ。もうお前が、僕の後ろをずっとついてくるよ。うな、そんな時期は過ぎたはずだ」

袖を掴むアクアの指に触れた。アクアの手は冷たかったが、自分の手はそれ以上に冷たかった。ゆつくりと彼女の指を、外してゆく。「いつまでも僕に頼っていいないで、自立したらどうだ、アクア。もうお前の面倒を見るのは、疲れたんだよ」

その言葉に、アクアは泣き出しそうに顔を歪めた。無表情を装い、背を向ける。

「……嘘。嘘、嘘！ ドラコはそんなこと言う人じゃない！」

「じゃあ、それがお前の見込み違いだったんじゃないのか？」

振り返って、冷笑を浮かべた。

「婚約者でもなけりゃあ、お前と一緒にいたいと思うはずがないだろう？ ずっと、目障りだった。親にいつも歯向かう、家の思想を一切受け付けない問題児と、この僕、マルフォイ家の長男、ドラコ・マルフォイが、どうして一緒にいたいと思う？ こちらから距離を取った時点で、少しは察してくれると思っていたんだが。そこまで頭が回ることを、お前に期待した僕が馬鹿だったようだ」

ざつくりと傷ついた表情で立ち竦むアクアに、鋭い言葉を投げつける。どんどん暗くなっていくアクアの表情を見るのは、辛かった。

でも、アクアは巻き込めない。こちらに来てはいけない。

アクアには、光が当たるところで生きていて欲しかった。黒衣のマントを纏い仮面を被るのではなく、暖かな陽だまりで、いつまでも幸せでいて欲しかった。

自分がいなければと、思っていた。凄く不器用で、随分と生き辛そうな奴だと。自分が手を引いてあげなければと、そう思っていた。

今は違う。アクアの手を引いて、アクアを愛してくれる人がいる。長い黒髪の少年の隣にいるアクアは、ずっとずっと幸せそうだった。アクアの表情を豊かにしたのは、間違いなくアキ・ポッターだった。

自分ではない。

「もう、僕に話しかけるな。婚約者でもないお前は、ただの他人だ」
どうか、いつまでも幸せでいて。

僕が、与り知らぬところで。

左の前腕を、ぎゅっと掴んだ。



スラグホーンの記憶の中に入り込んだハリーは、キョロキョロと左右を見回した。

スラグホーンの部屋だ。くつろぐスラグホーンの周囲に、十代の少年が六人ほど。その真ん中に、トム・リドルがいた。指に金と黒のマールヴオロの指輪が嵌っている。

「トム、それ悪趣味じゃないかい？ 君には似合わないと思うよ」
大きなため息と共に、リドルの隣にいた少年が一言呟いた。

初めて見るはずなのに、ハリーには何故か見覚えがある気がした。艶やかな短い黒髪に、同じ色の瞳。黄色のハツフルパフのネクタイに――少し周囲の子と制服の形が違う。

その違和感を掴むより、リドルが笑ってその少年を見る方が早かった。指輪が嵌った手をひらひらと振る。

「なんだ直、君の趣味じゃなかったか？」

「僕の趣味じゃないことは確かかな。アキナから貰ったとしたら、つけるにやぶさかではないけれど」

「君は本当にあの変人が好きだよなあ。全く意味が分からない」

「分からなくて結構。君をライバルに回したくはないからね」

肩を竦めながら、リドルは指輪を抜くとポケットの中に滑り落とす。

リドルが案外素直に少年の言葉を聞いたことに、ハリーは多少なりとも驚いた。リドルは、もつとこう……他者からの言葉に耳を傾けない存在だと、思っていたから。

「かの者にも、友はいた。そういうことじゃよ、ハリー」
気付けば、後ろにダンブルドアが立っていた。

友。リドルに？ ……似合わない、というのが正直な気持ちだ。しかし確かに、リドルが少年に向けた、心を許したような微笑みを見たことは事実だった。

ダンブルドアは、静かにハリーに告げる。

「今、リドルが素直に聞き従った者。彼こそが、幣原直——名前を聞いたことくらいはあるじやろうて。あの幣原秋の、父親じゃよ」

息を呑んで、もう一度リドルと、その隣の少年を見た。

幣原秋の——アキの、父親。道理で、見たことがあると思ったわけだ。目の前にいる日本人の少年と、血が繋がっている少年を、いつも近くで見えてきたのだから。

置き時計が十一時の鐘を鳴らしたことで、会話が途切れた。きつと、これが解散の合図なのだ。

少年たちがそれぞれ腰を上げる。幣原直も素直に部屋を出て行きかけ——リドルに制服のフードを遠慮なしに掴まれた。

ぐえ、と息の詰まった声を上げた幣原直は、抗議しようと眉を寄せて振り返る。直にシツと人差し指を立てたリドルが手を下ろしたのと、スラグホーンが振り返るのはほぼ同時だった。

「おや、トムに直、早くせんか。時間外にベッドを抜け出しているところを捕まりたくはないだろう？ トム、君は特に監督生なのだし……」

「先生、お伺いしたいことがあるのです」

直は、一体どうして自分がこんな目に、という苦々しい表情をしながらも、諦めたように息を吐いていた。恐らくはこれが日常だったのだろう。トム・リドルと幣原直の。

「それじゃ、遠慮なく聞きなさい。トム、遠慮なく」

「先生、ご存知でしょうか……ホークラックスのことですが？」

直は興味なさげに空中に視線を彷徨わせていたが、リドルの言葉に目を瞠った。

スラグホーンはじつとリドルを見つめていたが、やがて『闇の魔術に対する防衛術』の課題かね？」と静かに尋ねた。

「いいえ、先生、そういうことでは。本を読んで見つけた言葉ですが、完全には分かりませんでした」

「ふむ……まあ……トム、ホグワーツでホークラックスの詳細を書いた本を見つけるのは骨だろう。闇も闇、真つ暗闇の術だ」

「でも、先生は全てご存知なのでしょう？ 先生ほどの魔法使いなら——すみません、つまり、先生が教えてくださらないなら、当然——誰かが教えてくれるとしたなら、先生しかないと思ったのです。ですから、とにかく伺ってみよう」と——

リドルよりも背が低い幣原直は、リドルに隠れるようにしながらもリドルの後頭部をじっと見据えていた。視線の鋭さは、アキが時折浮かべるものとよく似ていた。

疑惑を含むその表情に、しかしリドルは気付かない。

「……さて、まあ勿論、ざつとしたことを君に話しても別に構わないだろう。その言葉を理解するためだけになら。ホークラックスとは、人がその魂の一部を隠すために用いられる物を指す言葉で、分霊箱のことを言う」

「でも、先生、どうやってやるのか、僕にはよく分かりません」

ハリーには、リドルが興奮していることを感じる事が出来た。幣原直も、ピクリと片眉を上げる。

「それはだね、魂を分断する訳だ。そして、その部分を体の外にある物に隠す。すると、体が攻撃されたり破滅したりしても、死ぬことはない。なぜなら、魂の一部は滅びずに地上に残るからだ。しかし、勿論、そういう形での存在は……トム、それを望む物は滅多におるまい。滅多に。死の方が望ましいだろう」

「どうやって魂を分断するのですか？」

リドルの食いつき様に、はつきりと幣原直は苦々しい顔つきをした。

「それは……魂は完全な一体であるはずだということを理解しなければならぬ。分断するのは暴力行為であり、自然に逆らう」

「でも、どうやるのですか？」

「邪悪な行為、悪の極みの行為による。殺人だ……殺人は魂を引き裂く行為だからだ。分霊箱を作ろうと意図する魔法使いは、破壊を自らのために利用する。引き裂かれた部分を物に閉じ込める……」

「閉じ込める？ でも、どうやって？」

「トム」

静かな声だった。全てを調伏出来てしまいそうな、鋭い声音だった。

ハツと思い出したように、リドルは幣原直を振り返る。瞳に先ほどまで滾っていた炎は、漆黒によって瞬時に鎮火した。

「……失礼しました、スラグホーン先生。不躰でした」

「いや。気を悪くはしていない。こういうことにちよつと興味を持つのは自然なことだ……ある程度の才能を持った魔法使いは、常にその類の魔法に惹かれてきた。君たちもきつと、そうなのだろう」

「ですが、あと一つだけ……学問的な思索によることを前提に、ですが。魂は一度だけしか分断出来ないのでしょうか？ 例えば、七という数字は一番強い魔法数ですよ。七個の場合は？」

「七個……とんでもないことを。……勿論、全て仮定の話だ。学問的な……」

「ええ、その通りです。それでは、可能ではあるのですね？」

その時、堪忍袋の尾が切れたように、直はリドルの腕をぐいつと掴んだ。そのまま部屋の出口に向かう。

「失礼をしました、先生」

「何をするんだ直、折角……」

「折角？ 何だ言ってみろよ」

怒りを滾らせ、幣原直は微笑んだ。ぐう、とリドルは黙り込む。

「ただの学問的興味さ、それだけ……」

二人の少年が部屋から姿を消したことに、スラグホーンは心から安堵したようだった。大きく肩を落としている。

「ハリー、ありがとう。戻ろうぞ」

その言葉に、ハリーは大きく頷いた。



「あの、その……幣原直は、知っていたのでしょうか？ その……トム・リドルがやろうとしていたこと、分霊箱について」

ダンブルドアはハリーに挑むような視線を向けた。

「ある程度は本人から耳にし、そしてある程度は勘付いておったことじやろう。あの場にわざわざ幣原直を同席させたことから、かの者は直を相当自らに近い存在であると考えておった。しかし、じゃ。全てをつまびらかにしていた訳ではなからう。その証拠が、あの短い記憶の中にあつた」

何のことだか、ハリーには予想がついていた。

「マールヴォロの指輪、ですな」

「左様。直は、トム・リドルがあゝの指輪をどこから手に入れたかを知らなかつた。あの指輪を『悪趣味』と称したことからして」

「友達が……友達が秘密を抱いていたら、尋ねたくなるものでは？」

指輪の入手方法だとか……」

「おうおう、君は随分と素晴らしい人間関係を築いてきたようじゃ。『友達なら秘密な物事などなくて当然』——本当かのう？ 君がどのように考えるかはさておいて、直はそうは思っておらんかつたのじやろう。話したくないことならば、あえて聞こうとはしない、そういう人間じやつたよ、幣原直は。秘密であると明示したのであれば、その境界線を踏み越えてくることはしない人間じやつた。トム・リドルには、直のそんな人間性を好ましく思っていたよ……リドルがはつきりと『友達』と表現したのは、人生において幣原直、ただ一人、一人きりじゃ」

ハリーはしばらく黙っていた。頭を整理出来たと確信してから、再び口を開いた。

「幣原直は、リドルが闇の魔術に関わることを好ましくは思っていないかつた？」

「想像でしか言えんがのお。もう直とコンタクトを取る手段は失われてしまった。もはや彼の行動からしか、察することは出来ないが。しかしある程度は、彼が残した息子、幣原秋を見ると分かることじやろう。あれほど心根がまっすぐな少年に育つには、しっかりとした善悪の区別を幼い頃から教え込む、きちんとした両親の元で育たぬ限り、難しいことじやとわしは思う」

半月型の眼鏡越しに、ダンブルドアはハリーをじっと見つめた。

「幣原直を誤解するではない、ハリー。彼もまた、ヴォルデモートに裏切られた憐れな犠牲者の一人なのじゃ」

第32話 巡り、巡る

「、――」
聴覚が何かを拾う。霞みがかった意識の中、なんだか光が見えた。何の音だろう。

ああ、そうだ。

ぼくは、確か――

「なんてとこで寝てんだね！」

「うひゃあ!」

乱暴に揺さぶられ、脳内の霧が一瞬で晴れた。

ハッと目を開けると、目の前には初老を超えたくらいの人。白いものが混じった髪をひつつめて、ものすごい形相でぼくを見ている。

女の人の足元には、愛らしい小型犬が鎮座していて、そりやあまあじつとしていたらなんとも愛くるしいのだろうが、ぼくに対して鋭い犬歯を剥き出しにして狂ったように吠え続けている。相変わらず、動物には異常なほどに嫌われている。

「あんた、酔っ払いかえ？ 全く今時の若いモンは。こんな寒空の下で寝てんだもん、凍死しちまうよ！ ゴミが転がってんのかと思ったよ」

「あ……え？」

辺りを見回すと、そこはロンドンの路地裏だった。辺りは薄暗かったが、真上を見上げると超高層ビルの間から空が見える。明るさと寒さから考えて、今は明け方か。

「……え？」

ぼく昨日、記憶が確かなら、あのビルの屋上から飛び降りた……はず、ただけど。

嘘、なんで？

「おおかた酔い潰れてその辺りで寝ちまったんだろえ。ルーちゃんがあんたを見つけれなかったら、そのうちゴミ回収車に回収されてたんじゃないだろうねえ。ゴミ箱から足だけ突き出してんだもの、死体か

と思つてゾツとしたよ」

慌てて自分が腰かけているものを見ると、よくある形の大きな丸いダストボックスだった。ぼく以外のゴミは捨てられていないようだったが……いや、早く家に帰ってシャワーを浴びたい。

昔はそうでもなかったんだけど、闇被いになつてからと言うもの、潔癖の気が出てきた。総毛立つ気分、慌ててゴミ箱から飛び退く。

「あたしに感謝するんだねえ。全く、最近の若いモンは……ルーちゃん、いつまでもこんな小汚いのには吠えていないで、ほら行くよ。……あんた、何か犬猫が嫌がるモンでも付けてんじやないだろうね？」

ぼくに対し睨めつける口調で言うと、その女の人はフンと鼻を鳴らしてぼくから離れて行つてしまった。

犬はずつとぼくに対して吠え続けていたが、女の人に引きずられるようにして路地を曲がると、その鳴き声も止んだ。

「……えー……どういふことだ」

左手を額に当て、一番最近の記憶を引っ張り出す。

確かに、ビルの屋上から飛び降りたはず、なんだけど。

しかし見る限り、外傷は一切見当たらない……いやいやありえない、百メートルには届いていないけれど、それでも結構な高さから飛び降りたのだ。それで無傷なんて、どんな風が吹いたとしてもありえないだろう。

それとも、飛び降りたこと自体がぼくの夢だった？ 実際は昨日の夜から今さつき揺さぶり起こされるまで、ずっとここで寝こけていたのか？

思考に浸っていた頭が、ウエストミンスターの音で現実に戻される。日本の学校でも時間を知らせる際に鳴る、あのチャイムの音だ。

慌てて懐中時計を引っ張り出し確認すると、始業時間までもう間もないことが分かった。

「……………」

パチンという音と共に、時計の蓋が閉まる。

どうにもならないけれど、とりあえず。

「……仕事、行くか……」



「……なんとなく、理解したぞ」

自宅で、ぼくはそう呟いた。

既に二度の飛び降り、溺死を三度、感電死を一度、首吊りを三度、中毒死を二度、服毒死を四度、全てに失敗した折のことだ。

普段、ぼくは自宅で料理をしない。せいぜいが紅茶を淹れる時くらいだ。ぼくが住む独身寮には、いつでも開いている食堂が備えついていたし、料理をする必要性がなかったからだ。

料理を趣味としてもしていないぼくは、だからフライパンもまな板も包丁も、持ち合わせていない。せいぜいが数枚の皿とマグカップ、それに一揃いのカトラリー。

そのため、今ぼくの左手に握られている包丁は、真正銘このためにわざわざホームセンターにて買ってきたものだ。料理目的ではないけれど、まあお目こぼしをしてくれれば嬉しい。

右手の袖は捲り上げられていて、筋肉のついていない貧弱で細い自分の腕が露わになっている。しかし我ながら本当に貧弱だなあ、貧弱というか、貧相というか。

その手首に包丁の刃先を押し当て、ゆっくりと横に引く。すうつと一筋の傷が出来、傷口から赤い血が流れるも、一雫、二雫ほど腕を伝うと、もう後は流れなくなつた。

「……で」

左手の包丁を握り返ると、勢いよく振りかぶり右腕に突き立てた――突き立てようとした。

包丁は、右腕に触れることもなく何かに弾かれ、ついでに言うとう左手からも離れ、床を滑ってやがて止まる。

立ち上がり、包丁を拾い上げると、買って来たばかりの新品の包丁は、刃先が高熱で溶かしたように丸まっていた。

「……はああ」

ダストボックスにもう使えない包丁を投げ込むと、その場に座り込んだ。捲っていた袖口を戻す。

「昔から、やけに怪我とかしないなって思っていたけれど……」
それはただ、ぼく自身が慎重な人間だからだと思っていたのだが。多分、だけれど。

ぼくの持つ、莫大とも思えるこの魔力が、ぼくを死なせない方向に働いている。だから、何度トライしても悉く失敗に終わるのだ。

「ぼくの魔力なら、せめてぼくの意志に従ってくれよ……」

そうは思うが、どうにもならないのは幼い頃から知っていた。

フィアン・エンクローチエらを滅茶苦茶に傷つけた一年生のあの時も、ぼくがいくら願っても、ぼくの魔力は決して攻撃の手を緩めることはなかった。

残酷で、純度が高い、この魔力。

ここまで恨んだのは、久しぶりだ。

「どう、しようなあ……」

何一つ変わらずに、ぼくはこの世界を生きている。

神か悪魔か、本当にいるのならば。

どうかぼくの罪を、裁いてくれ。



人気がない廊下を一人歩きながら、ぼくは思索に耽っていた。

採光のため広く開いた窓からは、雪に煌めいた明るい日差しが差し込んでいる。今年は、暖冬のようなだ。いつもより寒くはない気がする。冷たく吹き抜ける旋風は、どんな心境の変化か、自己主張を引っ込めている。

果たして、ドラコは本当に『死喰い人』なのだろうか。問題はそれだ。ダイアゴン横丁で耳にした衣擦れの音、あれが左腕を捲るときに立った音なのだとしたら。

スネイプ教授は、果たしてどこまで知っているのだろうか。

ドラコの母親と『破れぬ誓い』を立てた——何の誓いだ？ 何のた

めに？ ドラコを護るため、ドラコを手助けするためだと、確か言っていた。

ドラコの請け負った任務とは？

『僕はマルフォイ家の長男として、為すべきことをしなくてはならない！』

叩きつけるようにそう言ったドラコ。アクアを全力で拒絶したと耳にした。一体どうして？

ドラコは昔から、アクアを守るために随分と尽力していた。そう、アリスも言っていた。この、随分と暗い今のご時世、ドラコがアクアから目を離すものか？

『……とうとう、私に愛想尽かしちゃったのかな』

そう、儂く微笑んだアクア。なるほど、分からなくもない——納得は出来ないが、決してありえないことではない。

マルフォイ家の長男として、ドラコは何をしなければいけないのだろう。

逮捕されアズカバンへと送られた、ドラコの父親。不甲斐ない手下の代わりに、ヴォルデモートはドラコに何を望むだろう。

スネイプ教授は、ドラコの任務を『絶対に成し得ないこと』と表現した。

一体、それは何なのだろう。あの時ドラコとスネイプ教授の会話の中で出てきた『ベル』——ケイティ・ベルのこと、だろう。

ホグズミードでの、あのオパールのネックレス。『ボージン・アンド・バークスで見たことがある』と、ハリーは呟いていた。

ドラコと、話をしなくては。

目の前に現れた人影に、ふと目を遣った。

その人物に、慌ててぼくは息を呑むと姿勢を正す。

「お、お久しぶりです、スネイプ教授」

噂をすれば、というものだろうか。少し違うが、しかし先ほどまで脳裏に思い描いていた人が目の前に立っているという状況は、心臓に悪い。

「妙なことをしているそうじゃないか」

挨拶もなしに、むっつりとした表情でスネイプ教授はそう言った。一体何のことかと一瞬首を傾げたが、ダンブルドアからの依頼――『全校生徒の願いを叶えろ』、そのことを言っているのだとすぐに気付く。

「嫌だなあ、ぼくが妙なことをするのは、いつものことでしょうか？」
「………違うない」

教授は僅かに笑ったようだった。

周囲にちらりと目を走らせる。教授に聞きたいことは、山のようにあった。きつと教授も、それを分かっているはずだった。

「続きは、部屋で話そう」

そう言って、教授は身を翻す。ぼくは小さく頷いて、その後を追いかけた。



スネイプ教授の部屋に入るのは、一体何回目なのだろう。思い返して数えることを諦めるほど、ぼく、アキ・ポッターとセブルス・スネイプは、ここで会話を交わしてきた。

ぼくに対し、たびたび出される真っ白のマグカップ。その時の教授の気分によつて変わる茶葉。茶器を扱う、神経質な教授の指先。

部屋の風景は、あまり変わらない。どこか無機質で、何年もここに住んでいるはずなのに、どこか生活感が見当たらない。

大切なものが欠けたまま、ずっと時ばかりが進み続けているような、まっさらな空間。

熱い紅茶で温められたマグカップ、その縁に指を滑らせた。

蒸気が鼻先を撫る。上品な、甘い香りがした。

「カモミール、ですか」

「よく分かったな」

そりゃあ、分かる。独特の、リンゴのような香り。鎮静作用があり、安眠を促すハーブ。

自然、息を吐いていた。

何から話していいのやら。話したいことは沢山あったが、こう一息ついてしまうと切り出し辛い。

「……秋は」

「え？」

何か教授が口にしたような気がして聞き返したが、ふるりと首を振られた。

ぼくの気のせい、だったのか、それともぼくに聞かせる言葉ではないと口を噤んだか。

誰に対する言葉だと——誰に向けての言葉だと言うのか。

「……………」

未だに、この人との間隔が掴めない。どう、振舞っていいのか、時々分からなくなってしまう。

アキ・ポッターと幣原秋の境界線が、霞んで揺らぐ。

「……最近のドラゴ、少し妙じゃないですか」

寒気を振り払うように、言葉を発した。

スネイプ教授は片眉を上げこちらを見ると、黙って続きを促した。真意の推し量れぬ瞳であった。

「妙というか、心配というか……何か、思い悩んでいるみたいだとかか。思いつめているみたいで。何か理由、ご存知ではないですか」

「さあ、そこまで一生徒に対し干渉するほど、私も暇ではないのでな」
むう、やはり直球じゃ無理か。次はどう探りを入れようかと攻めあぐねているうちに、教授に会話の主導権を取られてしまった。

「貴様の兄がどうしていきなり魔法薬学の成績を伸ばしたか、知っているか？」

ああ、なんだ、そんなことか。

「ああ、それは『半純血のプリンス』が——」

ガチャンと大きな音がした。教授がカップを取り落としたのだ。

まだ中身をなみなみと満たしていたカップは、ソーサーに当たり大きく跳ねると、飛び降り自殺を図ったようだ。音を立てて割れたカップに、薄い黄色の液体が石造りの床を汚す。銀のティースプーンが、床に落ちてテーブルの足にぶつかり動きを止めた。

「ちよつ……大丈夫ですか!？」

慌てて立ち上がる。教授は動揺を瞳に浮かべたまま、割れた食器に手を伸ばした。

触らないよう押し留めようとするも、一拍遅い。目元を引きつらせて、教授はカップから手を飛び退かせた。指先に赤い血が滲んでいる。

杖を抜き一振りすると、カップにソーサー、ティースプーンがふわりと浮き上がり、元通り何事もなかったかのようにテーブルに戻った。床に溢れたハーブティーを拭い去ると、おずおずと教授を伺う。

「……半純血の、プリンス……?」

教授は、誰の目にも明らかほどに青ざめぼくを見返していたが、やがてテーブルに手をつき立ち上がった。

信じられないくらいに素早い動きで身を翻し、部屋の外へと飛び出してしまふ。一瞬呆気に取られたが、慌ててその後を追った。

スネイプ教授が駆け込んだのは、今はもう用はないであろう魔法薬学の教室だった。

戸棚を開けて中身をひっくり返し、お目当てのものが無いことに気が付くと、よろよろと立ち上がった。血走った瞳でぼくを見据える。思わず、足が竦んだ。

「知っていることを全て話せ、アキ・ポッター。『半純血のプリンス』について」

「は、話せと言われても……」

剣幕が怖い。後ずさった分だけ、距離を詰められた。

「えつと……」

その時、だった。

「人殺し! トイレで人殺し! 人殺し!」

甲高い女子生徒の声だ。弾かれたように、スネイプ教授は駆け出す。呆気にとられたまま、その後を追った。

声が聞こえる先は、男子トイレだった。駆け込んですぐ、青い顔のハリーに出くわした。

その奥には、血だまりに沈むドラコと、その脇に屈み込むスネイプ

教授の姿。

ドラコの傷には見覚えがあつた。幣原の学生時代の記憶。学校内で流行つた、あの呪文。

「ぼ——僕じゃない」

「ぼくに嘘を付くな、ハリー・ポッター」

ぐつとハリーは苦しげに黙り込んだ。

ドラコを抱えたスネイプ教授は、ハリーに冷たい瞳を向ける。

「医務室に行く必要がある。多少傷跡を残すこともあるが、すぐにハナハツカを飲めばそれも避けられるだろう……ポッター、今すぐ学用品のカバンを持って来い。それと教科書を全部だ。全部だぞ。ここに、我輩のところへ持ってくるのだ。今すぐ！」

怒りの籠つた声だった。ドラコとスネイプ教授が角を曲がつて姿を消した直後、ハリーは大きく息をついてその場に膝をついてしまった。

「僕のせいだ……僕の……」

「そうだ、君のせいだ。どこで知つた——なんて聞く必要もないな」

その腕を掴み、容赦なく引つ張り上げる。

「グリフィンホール寮に行つて。後からぼくも行く」

「どこに行くの？ アキ」

縫るような瞳を向けられ、ぼくは吐き捨てた。

「レイブンクロー寮に決まっている」

猛烈な勢いで部屋に駆け戻ってきたぼくに、同室メンバーは啞然としていたようだった。一言も会話せぬまま目的のものをひつ掴んで出てきてしまったから、はつきりとは分からないけれど。

グリフィンホール寮の前で、ちよいどいい具合に出てきたハリーと出会うことが出来た。

『半純血のプリンス』の本を出して」

ハリーは、ぼくの行動を予想していたように、即座にプリンスの本をぼくに手渡した。

名前部分を削除すれば、他には授業に関する書き込みしかない。確か、その筈だ。

「本当にありがとう、アキ——この恩は必ず」

「早く行け！」

ぼくの声にハリーはビクリと肩を震わせた後、奥歯を噛み締めこつくりと頷いた。

その後ろ姿を見ながら、ぼくは大きく息を吐くと顔を覆う。

『セクタムセンプラ』——懐かしい、本当に……何と言う」

様々な記憶が、脳内を駆け巡る。どれもが、ぼくの物ではない記憶。

「なんとという、巡り合わせなんだか……」

奥付に細い文字で書かれた『半純血のプリンス蔵書』の文字は、随分と見慣れた文字だった。

第33話 死に損ないと、生き損ない

ぼんやりとした意識が覚醒する。ああ、またやったのか。目覚めた時にこうフワフワとした感覚に包まれるのは、決まって何かしらの自殺めいたことをやらかしたときだ。

頭に残る最後の記憶を辿ると、摩天楼の屋上がヒットした。成る程、そう言えば飛び降りたんだった。どうせ死ねないのに。死ねないと分かっているのに高いところから飛び降りたがるのは、どういう心理が働いてのことだろう。

半ば発作的に飛び降りるのが癖になっているのかもしれない。うわあ、なんだそれは。我ながらドン引きする。

死ねないのなら、大人しくしていればいいのに。もしくは完全に狂ってしまった方がいいのに。自己の中で肥大化した自意識はしかし、狂人に見られるのを嫌がるのだ。狂いたいのには、狂っていると人から見られることを厭う。

本当に馬鹿だなあと我ながら思う。ここまで来て、ここまでのことをしておいて、今更人の目を気にするのか。大量殺人犯と見られるのは構わないが、狂人だと思われるのは嫌らしい。

いや、しかし。ちよつと待てよ。
徐々に意識が浮上し、それと同時に四肢の感覚も明瞭になってくる。

この暖かい感覚は何だ？ 大体飛び降りた後は決まって、何処ぞの路地裏かよく分からない場所にぶつ倒れているものなのだが――

「……………」

慌てて起き上がった。

身体はふかふかのベッドに寝かせられており、暖かい毛布が胸から下を覆っている。周囲を見回すと、よくあるアパートメントで見られるようなベッドルームだった。クリーム色の壁に、ベッドサイドには焦げ茶の小さなテーブル。テーブルの上は洋燈ランペンと、深緑の表紙をした分厚い本が一冊置かれている。

「起きたか」

声を掛けられ、ハッと小さく息を呑んだ。

声の主は、そんなぼくを身じろぎもせずに見下ろしている。

「……っ、どういうことだ」

厳しい声音で問いかけた。杖を抜こうとするも、マグルに発見されてもいいようにいつも杖は家に置いているのだということを出し出す。

それでも、目の前の『彼』は、ぼくが杖なしでも魔法が使えるということを知っているはずだ。その身を持って。

目の前の彼——セブルス・スネイプならば。

学生時代より少し老け込んだようだ。目の下に隈が見える。しかしそれ以外は、殆ど変わっていないかった。もっともぼくらが別れたのは青年期であるため、互いに容姿がそう変わらないのは年齢のせいだろう。

「どういうことも、何も」

セブルスは眉を寄せたまま、棘のある口調で吐き捨てた。

「……路地裏に人が倒れているのを見つけた。だから家まで運んで医者呼んで手当てをした、それだけだ」

音が鳴るほど、奥の歯を食い縛る。

セブルスはぼくを見、冷笑を零した。

「君だから助けたとでも言うと思ったのか？」

毛布の上に投げ出した自分の拳は強く握り締められ、震えていた。寒さではない、怒りだ。誤魔化しようのない怒りが、目の前の男に對して渦を巻く。

「助けなくってよかったんだ。だってぼくは、死ぬつもりだったんだから」

死のうとして死に切れず、いつまでもふらふらしている死に損ないだけだ。

しかしぼくの言葉に、セブルスは少なからず動揺したようだ。表情が強張り、言葉が止まる。そんな彼をせせら笑った。

「で？ 闇祓いのぼくを助けたってことは、今からぼくは何をされるのかな？ もう君たちの主はいないけど、君たちの中にはぼくに恨み

を持つ者だって少なくないだろうね。拷問した後、見せしめの処刑？
どうぞ、好きにしなよ」

敵からの罵詈雑言を浴びるのも、悪くはないだろう。もしかしたら殺してくれるかもしれない、ぼくが思い浮かびもしなかった方法で。もしくは本当に気が触れるほどに拷問してくれるかもしれない。

ダンブルドアは、セブルスは既に騎士団側についてスパイの役目をしてきていたと言っていたが、それでもぼくを突き出せば、セブルスの地位も上がりスパイはしやすくなるだろう。もつとも、スパイの役目ももう必要ないだろうが。

もう、何もかもどうでもいい。

しかしそんなぼくの態度が、セブルスは気に食わなかったみたいだった。ツカツカと歩み寄ると、右手を伸ばしてぼくの胸倉を掴み上げる。

「僕を見ろ」

食い縛った歯の隙間から漏れた言葉に、目を向けた。

「どうして、あんなところにいた」

「……十七階建てのビルの屋上から飛び降りた。飛び降りに失敗したのは、これで三度目だ……三度飛び降りて、三回とも失敗した。この憎たらしい魔力が、ぼくの身を守っている。万が一、億が一にも死んじやわらないかなって試しているんだけど、今回もまた駄目だったようだ」

セブルスは歯噛みした。憎しみの光が灯った淀んだ瞳で、ぼくを睨む。

「今更——今更、死を選ぶのか。その手で何人殺したと……何人……！」

「ぼくの罪を、君が裁くのか」

胸倉を掴むセブルスの腕を、反対に掴んだ。

「君に裁かれる謂れはない。君に裁かれたたくもない。これは、ぼくの十字架だ。ぼくが背負うべきものだ。……リリーを殺した君に……っ、そういうことは言われたくないっ!!」

そうだ。リリーとジェームズをヴォルデモートに売ったのは。二

人が死ぬ元凶となったのは。

他でもない、この男だ。

リリーの名前を聞いた瞬間、セブルスも犬歯を剥き出してぼくを睨んだ。殺意の籠った、激しい眼差しだった。

「君がその名を口にするな！」

「リリーの名前を聞いて激昂するのか？ いいご身分だ、君がリリーを殺した癖に。君がリリーとジェームズを売ったんだ」

嘲笑した。目の前の男を、どこまでも嘲笑ってやりたい、そんな荒んだ気分だった。

「どうしてリリーを殺した。あの子が一体何をしたって言うんだ。そんなにジェームズと結婚したのが気に入らなかったの。そんなに、君の思想を否定したことが気に食わなかったの。……いくら君が闇に落ちて、リリーだけは守ってくれるって思ってたのに」

学生時代、セブルスがリリーに向けていたあの眼差しだけは、本物だと。

ぼくらの間の友情が粉々に砕け散っても、それだけは事実だと、そう思っていたかったのに。

「リリーだけは、いくら仲違いしても、リリーだけは守ってくれると思っていた。リリーにだけは手を出さないと、信じていた。ジェームズと、君が大嫌いな男と結ばれたとしても、それでも君の愛は変わらないと……そう盲目的だった自分を、ぶん殴ってやりたいよ。どうして……、どうしてリリーを殺したんだ……！ どうしてっ、どうして……!! どうして学生時代に、ヴォルデモートが間違ってるって分かってくれなかったんだ……ぼくらが言う言葉に、どうして耳を貸してくれなかったんだよ……!!」

奥歯を噛み締め、項垂れた。

「遅いんだよ、気付くのが……！」

いくら泣いても、悔やんでも。

彼女は既に、墓の下だ。

ぼくら三人が共にいて、笑い合っていたあの頃には、決して戻らない。

ぼくの胸倉を掴むセブルスの腕が、ふと弱まった。と思うと、今までよりも強い力で肩を掴まれ、揺さぶられる。

「お前にだって、僕を断罪する権利はない!!」

悲痛な声だった。ハッと顔を上げると、泣き出しそうな表情の彼と目が合った。

きっとセブルスは、今自分がどんな顔をしているのか、よく理解していないに違いない。

「僕がどれほどの思いで『黒衣の天才』の話聞いていたと思っ
ていっ!? 僕だって言いたいよ、何で殺した、何で殺した、何で!
どうして闇祓いなんかになったんだ、どうして!! 友人も、先輩も、後輩も、皆がお前に殺された!! 何人殺したんだよ、お前は、その手で!!」

「……………」
ぼくがついさつき、セブルスを言葉のナイフで思いつきり傷つけたように。

セブルスも、ぼくを本気で傷つけてくることに、どうして思い至らなかった。

「お前が殺したんだ、お前が!! お前は、君は、僕は君にそんなことをして欲しかった訳じゃないのに!! エイブリーも、マルシベールも――レギュラスだって!!」

レギュラスの名前を聞いて、自分でも驚くほどにスツと激情が収まった。

「レギュラスだけは、見逃してくれると思っていた。レギュラスが君に殺されたと報告を受けたことを、信じられないと思った。全ての足取りを辿り、君しかいないと知って絶望した。……どうして? どうして殺した……」

ぼくの両肩を掴む男の手を、無感情に振り払う。

「そうだ。ぼくが殺した」

自分の口から零れた言葉のはずなのに、どこか他人の声のように聞こえた。

「どうしてかって? 敵だからだ。それ以外に理由なんてない。君だって、そうだろう。リリーが敵だったから、殺したんだ。ヴォルデ

モートに逆らう者は、皆敵なんだろう、そう思っていたから、ジェームズとリリーを売ったんだろ」

乱れたシャツの襟元を整えると、服の上から首元のロケットに触れる。両親の形見のロケット。これだけは、いつだって手放したことがない。

「だから……言っただろう。あの日に、『ぼくを許さないで』って。……ぼくは君を許さない。リリーを売った君を、絶対に許さない。だから君も、ぼくを許すな。絶対に、ぼくを許すな。君の仲間を大量に殺したぼくを、絶対に許すな」

ベッドから抜け出て立ち上がると、靴を履きながら辺りを見回した。ついつと左の人差し指を振ると、椅子の背に掛けられていたコートが飛んでくる。それに腕を通した。

「……どこに行くんだ」

「帰る。今何時かは知らないけれど、仕事に行かないといけけない」

「死のうとしたと言うのにか」

「あの職場は、ぼくが丹精込めた辞表を粉微塵にして吹き飛ばすことにやり甲斐を感じているらしいから」

彼の横をすり抜けようとした瞬間、男の手がぼくを引き止める。

少しばかり焦った表情で、男はぼくを見た。先ほどから色んな感情を見せる奴だ、疲れないのかな。

「……何？」

微笑して、手を振り払った。それだけの仕草に、酷く傷ついたような瞳で彼はぼくを見る。

「……君にあの仕事は向いていない」

「そう。人には『天職だ』と言われるけれど」

「それが皮肉だと、君が気付いていない訳がないのにか」

「何でもいいよ。今はあそこが、ぼくの居るべき場所だ」

「もう君は、世界に求められていないのに！」

その声に、思わず顔を歪めた。

「……そんなこと、言われなくても分かり切っているよ」

呟いて、脇目もふらずに走って家を飛び出した。

『姿くらまし』を数回繰り返し、自宅付近の公園へと辿り着く。日は思っていたよりも高く、時刻はきつと正午前後だろう。家に帰ったら、着替えて職場に行つて頭を下げ、始末書を書かなくては。考えるだけで気が重い。そろそろ減給処分を食らうだろう。

昼間の公園は、サッカーを蹴り合っている数人の子供しかいなかった。ふらつく足取りでブランコへと歩み寄ると、腰掛ける。

震える手で髪を引っ張ろうとし——結ばれていない髪に、空中で手が止まる。

リリーから、十六の誕生日に貰った黒の髪紐。解いた記憶はない——飛び降りるときも、髪は括ったままだった。ならば落ちる時に解けたか——もしくは。

セブルスがぼくを寝かせるときに、髪を解いたか。

「……………」

自分の黒髪を一房掴むと、大きく息をついた。顔を両手で覆うと、目を閉じる。

全てのことには、嫌気が差していた。セブルスも、何もかも嫌だったし、自分のことは、それ以上に一番大嫌いだった。

「秋!!」

名前を呼ばれて、驚いて顔を上げた。サッカーに興じていた子供たちも、揃つて目を向けている。

「……………リーマス?」

慌ててブランコから立ち上がった。

リーマスは随分と悲壮な顔をしていた。切羽詰まった表情でぼくに駆け寄ると、その勢いのままぼくに抱きついてくる。驚きに数歩よろめいた。

「ど……………どうしたの」

子供たちがポカンと口を開けたまま、ぼくらを見つめている。なんだか恥ずかしい。

「探した……………すつごく、探した。見つからなくて……………僕こそ、死ぬかと思つた」

ぼくを抱きしめるリーマスの身体は、細かく震えていた。腕の力は

加減がなく、少し痛いほどだった。

その右手に、一枚の封筒がぐしゃぐしゃに握られていることに気がつく。ぼくの遺書だということに思い至ったのは、すぐだった。

「心配した……心配した、心配した、心配した！ 君まで僕を残していくつもりか！ 一人は嫌だ、一人は嫌だ！ 皆いなくなつたこの世界で、唯一縫れるものが君なのに、君さえも僕を置いていくつもりなのか……！」

更に、強く抱きしめられる。首筋を掠めた吐息は、熱を帯びていた。「死なないで、秋、頼むよお願いだ……もう、生きる理由がないと言うのなら、僕のために生きてくれ。これ以上……周りで人が死ぬのは、もう見たくない……!!」

リーマスの震える背に、恐る恐る手を伸ばした。

「……ごめん……ごめん、リーマス」

一人ぼっちだったリーマスのことに、思いが回らないなんて。ぼくも随分と目の前のことしか見えていなかったのか。

「死なないで、自ら命を絶とうとしないです。一緒に生きて。この世界は、残酷で、救いがなくなつて、すごく辛くて苦しいけれど！

僕のために、ハリーのために、生きてくれ……」

痛いほどにぼくを抱きしめていた腕の力が抜け、やがて縫るようにぼくの両腕を掴んだ。

代わりに、今度はぼくから強く抱きしめる。もう消えないからと、ぼくはちやんとここにいますよと、安心させるように。

「うん……ごめん。もう、絶対に君を置いていかないから……ごめん、ごめんね……」

春の風が、吹き抜ける。気付けば、季節が変わっていた。

そんなことに、今更気がついた。

第34話 選べなかつた最善策

どうして、リーマスがぼくの家の机の上に置いていたはずの遺書を持っていたのか。その理由は、すぐに分かった。

家に帰り着いたぼくらを出迎えたのは、全てを見知った表情で微笑むダンブルドアだった。なるほど、なるほど。

元々自殺する予定だったから侵入者避け呪文は一通りしかしていなかつたけれど、ダンブルドアならばぼくが脳みそを振り絞って呪文を重ねがけしたところで、綺麗にさっぱり全て解除しそうだ。

闇祓いには休みの連絡を入れたとにこやかに言われ、思わず頬が引きつる。

ぼくの家なのに、ダンブルドアがぼくとリーマスの前に紅茶を出した。

リーマスは、先ほどまでの状態から回復して、今は落ち着きを見せている。

自らの紅茶にティースプーン山盛りの砂糖を一杯、二杯。五杯を超えたあたりで、数えることを諦めた。

目を逸らすと、ダンブルドアに用件を尋ねる。

「何、おぬしに死なれるのは勿体無かつたからの。捨てたいと願うならその命、一時ばかりわしに預けてはくれまいか」

『勿体ない』、そう表現されたことには、怒りを感じない。

もう随分と、才能を使われることに慣れてしまった。ダンブルドアの言い回しも、失言ではなく狙ったものだろう。

「……内容を、お聞きしましょう」

指先を合わせ直す。ダンブルドアは、僅かに微笑んだ。

そこでダンブルドアが語ったことは、とんでもないものだった。絵空事にしか、冗談にしか思えない。

『ハリー・ポッターを守る』

黒衣の天才、幣原秋としてではなく——全くの別人として人生を歩む。

ヴォルデモートは死んではおらず、まだ生きている。いつか昔の地

位を願い、復活するだろう。その際即座にハリーを守ることが出来るように、自らの身体に退行魔法を掛け、ハリー・ポッターと同世代の少年として、彼のすぐ近くで成長を見守る。

ぼくであってぼくじゃない、第二の人格を作って、そいつを表に出したまま、ぼくはハリーの身に何か危険が及んだ時だけ交代する——どこまでも絵空事、どこまでも冗談。

それでも、ダンブルドアの声音は本気であって、こちらをおちよくなる色は一切見られなかった。

「時間はある。君が考える価値もまた、十分にある空想じやと思うぞ」
そう言って、ダンブルドアはぼくの返事を待たずに帰っていった。
しばらくリーマスと同居するよう、ぼくに言葉を残して。

おそらくは監視のためだろう。随分と信用されていないものだ——信用されないようなことばかりしてきたからなあ。

「断っても、いいんだよ」

おずおずと、リーマスはそう言った。

「ハリーを守る方法は、他にもある……何もこの方法にこだわらなくて」

「いや……悪くはない。リリーが、自己犠牲の守護呪文をハリーに掛けたのだとしたら、リリーの血縁であるペチュニアの元へ預けて守護を継続させるべきだと思うし、そのハリーを一番近くで見守ることが出来るのは、こつちも幼くなって同年代としてハリーと一緒に暮らすことだと思う。ハリーを守るなら、ぼくが一番適任だろう……恋人も子供もいないし、やらなきゃいけないこともない訳だし、ハリーを守るだけの力はある」

しかし、ならば。それならば。

いきなり立ち上がったぼくに、リーマスは驚きの声を上げた。

「ど、どうしたの？」

「そうと決まれば、あんまりグズグズ出来ないよ。いろいろやらなくちゃいけないことがある……リーマス、ついてきて」

「いいけど……どっかっ？」

決まっているだろう、と、ぼくは微笑んだ。

「闇祓い局だよ」



物音に、医務室のベッドでウトウトとした眠りについていたらドラコ・マルフォイは目を開けた。

辺りは真つ暗で、カーテンを開け見た空には、大きな満月が姿を現していた。

身体がじんわりと気怠い。身体に負った全ての傷が、それぞれに熱を持っていく。それでも先ほどよりは随分と楽になった。傷による熱は、大分収まってきたようだ。

カツン、と、再び耳が物音を捉える。

夢と現の狭間でボンヤリしていた時はそう違和感を抱かなかつたが、一体これは何の音だ？ マダム・ポンフリーの靴音かと思ったが、彼女の靴はこんな音は立てない。

もう少し体重のある、そう、男の――

「……なあんだ、起きてんのか」

声を上げそうになった。片手で慌てて口元を抑える。

カーテンを引き姿を現したのは、自らの幼馴染であるアリス・フィスナー。ドラコの様子を喉の奥でクツクツと笑ったアリスは、ドラコのベッドに腰を下ろした。ギシリとスプリングが軋む。

「……今、何時だ？」

「夜中の二時半、過ぎかな」

「何も、こんな時間に……」

「夜更かしは不良の特技の一つだ、知らねえのか？」

「……初めて聞いたな」

「なら覚えとけ」

アリスは僅かに肩を震わせた。背を向けているため、ドラコから表情は伺えない。

「怪我の具合、どう」

唐突に投げられた言葉に、少し焦った。

「っ、ああ……大丈夫だ」

「……そう」

そして流れる沈黙。居心地の悪さに身じろぎした。

幼馴染ではあるが、アクアほど距離は近くなかった。一時期は共に近寄りもしなかったことだってある。だからか、距離感が上手く掴めない。

「……なあ、ドラコ。何か俺に言わないといけないこと、あるんじゃないかねえの」

その言葉に、息を呑む。

言わないといけないこと。

『中立不可侵』フィスナー家長男、アリス・フィスナー。彼に、言わないといけないこと。

左の腕を押さえた。

「……何のことを言っているのか、さっぱり分からないな」

「分からないか？ そうか」

ゆっくりとアリスは振り返る。

碧の瞳は、これまでに見たことがないほど鋭い光を湛えていた。

「お前は『死喰い人』になったのかと、聞いている」

血の気が引いた。

鋭い眼光に射竦められ、ドラコは動けない。その反応こそが、アリスには雄弁であっただろう。

慌てて『閉心術』を貼ったものの、果たしてアリスに対して有効なのかどうか。そもそも、アリスは『開心術』を使って無理矢理聞き出す奴ではない。ドラコ自身の言葉で、言わせるように仕向ける奴だ。

「ドラコ・マルフォイ。ここはホグワーツ、『中立不可侵』フィスナー家の管轄だ。ここでそういう騒ぎを起こすことは、俺が許さない」

「……フィス、いや、アリス……違う、違うよ。お前が考えていることは全て、的外れだ」

「へえ、そうか？」

目を細めてアリスは笑うと、声音を一変させた。低い声で、鋭く言う。

「――左腕を出せ」

「……は」

「心配いらぬ。窃視と盗聴防止、人払いは一通り掛けている。ドラコ、何も心配いらぬ。全部、俺に任せてくれ」

そう言うアリスの瞳は、真剣だった。

久しく、こんな目を向けられていなかった。そこまで真剣に、自分のことを考えてくれる人間なんていなかった。自分を思ってくれる人間は、早々に拒絶してしまったから。

「マルフォイ家の長男として、お前が為さないといけないことなど何一つない。お前はお前だよ。昔から変わらぬ、俺の幼馴染のドラコ・マルフォイだ。俺なら、お前を助けられる。フィスナー家の俺なら、お前を守ることが出来る。――なあ、ドラコ」

差し伸べられる手。夢にも見るほど、焦がれた。誰かが、いつか誰かが助けてくれるのではないかと。

でも、だからこそ躊躇した。この手を取ってしまえば、アリスまでもとぼつちりを食うのではないか。

フィスナーの守護なんて、机上の空論だ。現にもう闇の勢力は、その手をじわじわと伸ばし、フィスナーの領域を侵食し始めている。フィスナーだから安全など、既にそんな段階は過ぎた。

平和な時代など、ない。

アリスは、じつとドラコの答えを待っている。左手を差し出したまま、まっすぐにドラコを見据えている。

「――僕は」

「うん」

「お前を……巻き込みたくない」

「俺が、巻き込まれてもいいと言っているんだ」

静かな声だった。何かを押し隠す、声音だった。

その隠されたものに気付かないまま、ドラコはアリスの手をそつと取った。

「……ありがとう」

アリスは項垂れると、ドラコの左手を掴む。捲る腕に、ドラコは抵

抗しなかった。

ぎゅつとアリスの目元が細まる。口汚い言葉を声に出さず吐いた後、アリスはドラコの袖を元に戻した。丁寧ではあったが、指先は僅かに震えていた。

「……悪かったな」

「いや……僕の方こそ」

歪んだ袖元を弄りながら、ドラコも目を伏せた。

「……何をしでかすつもりだ」

「それは……言えない。絶対に」

「そうか……言えないか」

ミシリとベッドが軋む。アリスが重心を移したのだ。

「ドラコ。悪いな……」

アリスは笑っていた。いつにない、優しい表情だった。

右手がポケットの中に滑り落ちる。次に右手が姿を見せた時には、何かが握られていた。

パチン、と音を立て、鞘が落ちる。銀色に輝くそれに、頭よりも身体が素早く理解した。

「な……っ、何、アリス!」

僅かに開いたカーテンから、銀色の月明かりが差し込んでいる。

銀色の光が、アリスの手元のナイフを輝かせた。ドラコは思わず後ずさると、ヘッドボードに背を付け、しがみつく。

「言えないか?」

アリスの声は、淡々としていた。この場にそぐわないほど淡白過ぎていた。

ドラコは声も出せず、その鋭い切っ先を見つめていた。

「お前が死喰い人として、マルフォイ家の長男として、何か為すべきことがあるというのなら。……俺にだってやらなければいけないことがある。ホグワーツを戦場にさせない義務が、俺にはある」

『中立不可侵』フィスナー家。

英国魔法界の、秩序と平和を統べる者として。

「ホグワーツに永遠の秩序と安寧を誓う者として、お前のやろうとし

「していることが何であれ、見過ごすことは出来ない」

アリスの指が、ナイフを握り直す。

「大丈夫……殺さない。死なないように努力する。聖マンゴは安全だ、そこで療養するといい。『中立不可侵』フィスナーの名に掛けて」
俺が、お前を守ってやる。

右手が、大きく振り上がる。煌めいた刃の先は、ずっとこちらを向いていた。

衝撃に備え、ドラコはぎゅつと息を止め――

――想定していた衝撃がいつまで経っても訪れないことに、おずおずと目を開けた。

「君はいつも唐突だ。行動力があるのは大いに結構だけれど、少し性急すぎる選択肢じゃないかい？ 少なくとも、ぼくなら選ばないな」
聞こえるはずもない少年の声が、響く。声変わりしても尚、一般男性よりも高い声。

ナイフの刃は、ドラコに届く数センチのところで止まっていた。振り下ろした姿のままだったアリスは「……っ、ああ、もう！」と叫んで身を起こす。

「そういうところで、お前は、いつもいつも……っ！」

『『いつも』？ はてさて、一体何のことやら存じ上げませんなあ』

ドラコがずっと横になっていたベッドの下から這い出てきたアキ・ポッターに、ドラコは仰天するほど驚いた。なんでそこに？ 一体いつから？ どこから聞いていたんだ？

当ても無い疑問がぐるぐると回る中、アリスは力が抜けたように座り込むと、金髪を乱暴にぐしゃぐしゃと搔いた。

「もう、何なんだよお前ホント意味分かんない理解が出来ないししたくもないし行動がさっぱり読めないし一般人である俺の理解の範疇軽々飛び越えてくんの止めてくんねえかなアキ・ポッターくんよお！」

「何を言う、今更じゃないかアリス・フィスナーくん。ぼくと同室になつて興味持たれちゃったのが運の尽きだったと思って諦めてね。……そんなに行動読めないかなあ、そんなに一般人に理解不能な行動

してるかなあ、ぼく……」

むうつと考え込む顔つきではあったが、アキはアリスの手から剥き身のナイフを取り上げると、鞘を拾い上げて嵌め、アリスに返す。……返すのかよ。アリスも受け取るとポケットにしまい込んだ。……お前も受け取るのかよ。

「んで、ドラコ。腕見せて」

そう言いながらも問答無用でアキはドラコの袖を捲ると、大きな黒い瞳を細めた。口から蛇が出ている髑髏の紋様に指を這わせる。

「痛みは？」

「時々……あの方は、仲間を呼ぶのにも使っていらっしやるから、だからだろう」

「ふうん……」

「アキこそ、一体いつから……というか、どうしてあんなところに！」

アキの髪に綿埃が付いていることに気付いて、手を伸ばして払った。ありがとう、とアキは目を細めて微笑む。

「アリスが何かしでかしそうなのは、読めてたからね。決行するなら今日だろうと思って、ずっと潜んでた」

「俺が来なかつたらどうしてたんだ？」

「そりや、そのままそこで寝てたに決まってる」

頭が痛い、とばかりにアリスは大きく息を吐いて眉間を押しえた。

『COLD STEEL』だけでバレるとはなあ……」

「あのパッケージを見せたのは失敗だったね。まあそれがなくなっても、君は態度からぼくにヒントを与え過ぎた……でもアリス。君がやるうとしたことは間違っている」

その言葉に、アリスはアキを睨みつけた。

アキはしかし怯むことなく、全てを吸収する黒の瞳で、碧の瞳を見返す。

「……間違いはハナから承知だったよ」

「……へえ」

「そりやそうだろ、あんなの正攻法じゃねえ、邪道だよ。お前は、邪道を好まないからな」

「邪道が嫌いな訳じゃない、血を見るのが嫌なだけさ」

「去年自分の腹刺したお前が、よく言うよ」

アキはハッキリと顔を顰めた。無意識にだろう、腹辺りの服を握り締めている。

「……人が傷つくのを見るのは、嫌なんだ。それだけ」

目を伏せた少年に「なあ、アキ」と語り掛けた。黒の瞳を見たまま、ドラコは僅かに微笑んだ。

「他に方法を……探そうと思う。僕があの方に何を命じられたのか、それは言えない。言うことは出来ない。でも……」

言葉を切る。

アキは、開心術を掛けて来ない。嘘は、絶対に見破られない。その自信が、ドラコにはあった。アキは、そういう奴だ。

そこを、利用する。

既に計画は、止められない。止められる段階はとうに過ぎた。

アリスの暴挙で、一時はどうなるかと危惧したが——結局はアキが間違っていた。『邪道』と称したアリスの案こそを、アキは選ぶべきだったのに。あれが、最後の引き返せるタイミングだったのに。

「……でも、僕を止めてくれて、ありがとう」

二人の笑顔を見ていられなくって、ドラコは静かに視線を落とした。

第35話 背中合わせで、空を見上げて

リーマスがいてくれたおかげか、とりあえず死ぬ気はなくなったのかと、休職願いはそれまでとは打って変わってスムーズに受理された。

これで、しばらくは仕事に縛られない。引き継ぐべき仕事の割り振りは、いつ死んでもいいようにキチンと済ませてあった。後輩指導さえやり終えてしまえば、後は自由だ。

「確かに、お前は少しじっくりと休んだ方がいいのかもしれない」

休職願いを受け取ったムーディ先生は、大きく顔を顰めていた。もつとも、この人の笑顔などぼくはお目に掛かったことはないのだが。

「ルーピンよ。こいつが妙なことをしでかさないかキチンと見張っているよ」

そう言われたリーマスは、苦笑いをしていた。

自宅に帰り、闇祓いの制服を脱ぐと、なんだか随分気楽になった。思っていた以上に、この役職に縛られていたようだ。

てつきり部屋着に戻ってくると思っていたらしいリーマスは、きつちりジャケットを羽織って出てきたぼくに驚いたようだ。

「今度はどこに行くの?」

「ホグワーツさ」



閉館時間いっぱいまで粘って、役に立ちそうな資料を探した。その間リーマスは、お世話になった先生のところへ言って挨拶を済ませてきたらしい。ぼくも挨拶くらいしておけばよかったな、と思いながらも、司書のピンス女史に追い立てられるようにして図書室から追い出される。

久しぶりに歩いたホグワーツの廊下は、夕食どきだからか混み合っていた。制服姿でない大人なぼくらを、生徒たちは不躰な瞳で見つ

大広間へと足を向けて行く。

ぼくだって、学生時代に先生じゃない見知らぬ大人が校内をうろついていたら、不審にも思うだろう。無理もないことだ。

「さて、理由を聞かせてもらおうか」

家の扉を閉めてすぐ、リーマスは腰に手を当てて目を眇めた。ぼくは大量の本が入ったカバンを肩に掛け直し、廊下を進む。

「そりゃあ君、闇祓いなんかの仕事をしてたら研究が進まない」

「闇祓いの休職の件はいいよ、分かるから。その後さ、ホグワーツの図書館で、一体君は何を探していたの」

答える代わりに、テーブルの上に借りてきた本をぶちまけた。数冊を手を取ったリーマスは、表紙を見て首を傾げる。

「どれも変身術関連の本みたいだけど……」

「正解さ、リーマス」

微笑みを浮かべた。

「まだ誰も到達していない、前代未踏の研究を始めるんだ。退行呪文、それもきつちり狙った分だけ。計り間違えちゃ、自分が消えちゃうからね。それに何年もその身体でいるんだ、例え成功したとしても、長期的な不具合が出ないかを確かめないといけない……失敗は許されない、何から何まで未知の領域さ……どうしたの、リーマス？」

クスクスと笑うリーマスに気がついた。いや、ごめんねとリーマスは片手を上げ、目を細める。

「なんだか、秋が……生き生きしているなって。忍びの地図を作っていたときも、確かこんな感じだった」

一瞬、思考が止まる。

あの懐かしい日々を思い出して、胸が痛んだ。それでもなんだか、嫌な痛み方ではなかった。

静かに微笑む。

「……そう、かな」

「……うん、そうだよ。君は実際のところ、闇祓いよりも研究開発に向いているんじゃないかな」

「そう？ 考えたこともなかった」

「適性はあると思うよ」

そう言われれば、そんな気もしてくる。昔は闇祓い以外の選択肢なんて、考えることすら出来なかった。

「僕に手伝えることがあったら、なんでも言っただけ」

「……じゃあ、遠慮なく」

笑顔で、ぼくは夕食を所望した。

久しぶりに他人と囲む食事は、随分と彩りが違って見えた。



「……………っ」

思わず息を呑んだ。

早朝であった。部屋の自分のスペースで、幣原直の書いた本——リドルが『デウス・エクス・マキナ』と称した本の解説作業をしていた折のことだ。

「……嘘だ」

呟いた言葉は、白々しかった。ノートに書き付けていた手が止まる。

「嘘だ、嘘だ、嘘だ」

誤訳。きつとそうだ。誤訳に違いない。何か決定的な単語を間違えたんだ。

異国語は、一つの単語を誤訳するだけで意味が全く変わってくる。そのことを、ぼくはよくよく理解していた。

だって、かつて凄く大変だったんだ、英語を、授業についていけて、友人と楽しくお喋りが出来るほどのレベルに一息で引き上げるのは、祈るような気持ちで、本を浚った。

どうか、杞憂でありますように。どうか、誤訳でありますように。違う、お前の脳裏に浮かんだ解釈こそが、間違っているのだと言って。お願いだ、ぼくこそが間違っているのだと言って。

「……間違っつて、いなかっただろう？」

静かな声が聞こえた。ビクリと肩を震わせ、恐る恐る顔を上げる。

トム・リドルが、ぼくの傍らに立っていた。ぼくの手元を、無表情で覗き込んでいる。

寒気がするほど綺麗な顔立ちは、無表情でいると精巧な作り物めいて見えた。

「……違う。ぼくは……」

生唾を飲み込んだ。震える声で、言葉を紡ぐ。

「ぼくは、こんな結末、認めない……」

「……ふうん。そう」

リドルはぼくの反応を見ても、一切表情を変えなかった。全て予想していたかのような眼差しだった。

「別に……いいよ。君は、きつと気に入らないと思っていた。……どうだい、幣原秋。君は、気に入ってくれたかな？」

「止めてくれ……止めて、お願いだ……」

大きく首を振った。本を勢いよく閉じると、引き出しの中に突っ込む。

翻訳のメモとして使っていたノートも一緒に入れると、二重、三重、四重にも魔法で錠を掛ける。

「君の父親が、作り出したんだ。幣原直の、人生を賭けた魔法だよ。それを息子の君が、否定するのかわ？」

「父は、これを完成させても使わなかった！　それが……つ、それが、答えだ！」

辞書を掻き集めると、カーテンを引き外へ出た。まだ早朝で、誰も起き出していない頃合いだからか、リドルもぼくの後をついてくる。

レイブンクロー寮を出て、まっすぐ図書館に向かい、まだ開いていない図書館の返却ポストに、持っていた全ての辞書を投函した。そこでやっと、息をつく。

「……認めてくれなくても、構わないよ」

投げやりな声だった。諦め切った眼差しだった。

「……リドル。君の言ったこと、頷くよ。これは確かに、デウス・エクス・マキナと呼ぶに相応しい」

「へえ。君のお眼鏡に叶って、嬉しいよ」

「こんな無茶苦茶な……こんな、結末。受け入れられるかよ」

「……なんだっていいさ。でもね、これは僕にとって、最良の結末なんだ」

思わず、リドルを見た。しばらく押し黙って、ゆっくりと口を開く。「……確かに、君にとっては、そう……なのかもしれない。でも……でも、ぼくは」

口の中が乾く。頭の中が真っ白になって、リドルに言うべき言葉が何も浮かばない。

そんなぼくの様子を見て、リドルはつまらなさそうに鼻を鳴らした。

「ぼくは……認めない」

「そう。それだけ」

「幣原も、あいつも……認めないだろう」

「そうかい。お気に召さなかった、そういうことか」

「お気に召す……はすが、ないじゃないか……」

きつく握り締めた拳が戦慄く。

リドルは目を細めてぼくを見ると、碌な言葉も残さず消えてしまった。

第36話 その手に嵌るは友情の手錠

「ここに置いておくよー?」

そう肩を叩かれ、頭より先に身体が反応した。瞬時に杖を抜き相手に突き付け——度肝を抜かれたリーマスと目が合う。

「あ……ぶごめん」

バツが悪い思いを感じながら、杖を下ろした。

リーマスは面食らった表情を浮かべていたが「まあ、職業病だよ」と微笑んだ。

「ああ、でも、びつくりしたなあ」

「ごめんってば……」

申し訳なくって身を縮める。

リーマスはクスクスと口元を押さえて笑いながら。机の上に、ぼくの手元を覗き込んだ。

「進捗はどう?」

「悪くはないよ。上々さ……この分野には先駆者がいたようですね。いくつか論文が残ってる、かなり参考になるものがね。だからひとまずは手詰まりにはならないよ」

へえ、とリーマスは興味深げに目を睜った。

「僕も、時間があるときに読んでみようかな」

「それがいいよ。何か思いついたら遠慮なく教えて欲しいな」

「折角なら、この論文の著者に会いに行ってみれば? 何か有益な情報、聞けるかも」

「そりゃあ無理だよ。この人名家の出身だったらしくてね、四年前に死喰い人に殺されてる……、あ」

リーマスの表情を見てやっと、自分の失言に気がついた。その辺りの感覚が、ぼくはもう麻痺してしまっているようだ。物騒な世界に、浸り過ぎた。

「気にしないで」

謝罪の言葉をぼくが紡ぐより、リーマスが押し留める方が早かった。

につこりと微笑みを浮かべたりリーマスに、先ほどの面影は微塵も見えない。この辺りは、流石リーマスだった。身震いするほど、嘘が上手い。

「……うん」

共に暮らして、一月が過ぎた。

互いの傷は癒せぬまま、胸に開いた空洞は埋まらぬまま、ぼくらはただぼんやりと共にいる。

先に逝くなど、見張り合っているかのよう。



ハリーとジニーが付き合い始めた、という知らせは、ここ数日の中でもとても大きなサプライズだった。

重苦しい中降って湧いた光に（その重苦しさが例え、グリフィンドールがレイブンクローをクイディッチでちよんけちよんに負かした挙句の、チョウらクイディッチメンバーに寄るものだとしたつて）、ぼくも拍手で迎えた。

ジニーは少し照れくさそうだったが「ありがとう、アキ」とにつきり微笑んだ。

「ハリーのことについて知りたいならなんだったって教えてあげるよ。手始めに好きな食べ物からかな？ ハリーはね……」

「もう、アキったらー」

バシン、と力強く叩かれる。思った以上に痛かった。

ジニー、クイディッチ選手になつてからますます力が強くなったんじゃないのか？ 四年の頃食らった右ストレートもなかなかの威力だったけれど。

しかしそんなこと言ったら、今度こそぶっ飛ばされかねない。しとやかな娘さんのジニーは、ことぼくに対しては何故だか暴力的だったから。

「いやあ……でも、初恋を実らせたのだと考えると、何だか凄いよ」

ジニーは確か、一年の頃からハリーのが好きだった筈だ。淡い

片思いが、五年を経てこんなに強固な絆になったこと。そのことに感動を覚えずにはいられない。

「どうしたの。変なアキ」

「失礼だな……変じゃないよ。凄いなあって。……ぼくの初恋は、実らなかつたから」

ぼくの言葉に、ジニーは目を瞠って首を傾げた。

「初恋？ アキの初恋って、アクアマリンじゃないの？ スリザリンの、アキが付き合ってる大好きな彼女さん」

「……ぼくがアクアのことを大好きなのは否定しないけどね。……違うよ」

脳裏に、綺麗な赤毛の女の子を思い浮かべながら、ぼくは静かに微笑んだ。

第37話 空の記憶

「リーマス。聞いて欲しいことがある」

夜中に、リーマスの部屋を訪れた。

寝る準備をしていたリーマスは、それでも話を聞こうとダイニングに場所を移すことを提案する。ぼくはその提案を呑んだ。

季節は夏が過ぎようとしていた。暑かった日差しは徐々に弱まり、時折涼しい風が吹いている。

買い出しの時や資料を探しに行く以外は、ぼくはずっと家に閉じこもる生活をしていた。

ダイニングのテーブルに、羊皮紙を広げる。計画の概要を書いたものだ。

「完成したのかい？」

「理屈の上ではね。……計画を聞いて欲しい」

指を滑らせ、ぼくは言った。

「『幣原秋』を、殺す計画だ」



幣原秋を殺す。対外的に、死んだように見せかける。幣原秋と一切が同じ人形を作成し、それをビルの屋上から突き落とすことで、幣原秋の死を偽造する。

「恐らくぼくの身体は司法解剖に回される。死んだのは『黒衣の天才』だ、事件性がないかを徹底的に調べられるだろう。一つたりともミスは許されない。身長も体重も、血液の成分構成も、細胞も、遺伝子も、全てを『黒衣の天才』と同じ存在を作り出す」

リーマスはそれを聞いて、渋い顔をした。

「それは、闇の魔術ではないのかい？」

「違う。それはただの物質だ、魂は宿らない。命を作り出す術ではない——心臓を数度鼓動させ、血液を数周循環させる、その程度だ。ただの工作さ、物凄い緻密な模型作りだよ」

リーマスはしばらく黙って目を閉じると、静かな声で続きを尋ねた。

「その後は？ その肉塊をつき落とした後の話を聞かせてもらおうか」

「その後は、幣原秋としてぼくが大つぴらに動くことは出来なくなるから、リーマスの協力が不可欠だ。退行呪文の臨床実験を繰り返して、大丈夫だと確信出来たら実行する。あんまりもたもたしてられないよ……ハリーの双子の弟として生活させるんだ、ハリーに完全に自我が出来、自分は一人っ子なのだとして理解してからじゃあ遅い。ハリーの頭の中は、弄りたくないからね」

指を羊皮紙に滑らせながら説明する。リーマスは険しい表情で、腕を組んでぼくの言葉を聞いていた。

「そして、ハリー・ポッターの弟『アキ・ポッター』というまつさらな人格を作り出す。『アキ・ポッター』に使命やらを埋め込めば、晴れて一丁上がり、つて訳だ。新たな人格に、ぼくの記憶を徐々に徐々に流し込む。人間は、記憶によつて自我を保っている。ぼくと同じ記憶を持ち、ぼくと同じ肉体を持ち、ぼくと同じ魔力を持つ存在は、もうそれは『ぼく』だ」

「……人格を作り出す方法は？」

「存在する。心配せずとも、そこは大丈夫」

少し、焦った。しかしきつと突っ込まれるところだと思っていたから、想定通りに演技する。

人格を作り出す方法は、存在する。多分、おそらくではあるが、きつとこれで大丈夫なはずだ。

ホークラックス——分霊箱、と呼ばれる、闇の魔術。自分の魂を分断し異なる器に封じ込める、その理論を応用する。

人殺しをすることで魂が引き裂かれるというのなら、ぼくの魂は既に裂く部分が見当たらない程粉微塵だろう。その欠片を人格として押し出すことは、雑作もない。

「……じゃあ、まずは、肉塊を工作することから始めないといけないかな」

リーマスはゆっくりとそう言った。そう、とぼくは頷く。

「夜中にごめんね。でも、すぐに聞いて欲しかった」

「いや、嬉しいよ。秋がこうして相談してくれたってことがね。君は今まで、他人を頼らなすぎた。……君が、本当に死んでいたらと思うと。自殺に成功していたらと思うと、それだけで震えが止まらなくなる」

静かに微笑むリーマスに、何も返せず黙り込む。

「……『空^{から}の記憶』」

「え？」

「どうだろう。このプロジェクト名。今、思いついたんだけど。……君が作った新しい人格に、君の記憶を流し込むと言うのなら。悪くないネーミングセンスだと思うんだけど」

「……空^{から}の記憶、か。いいね……気に入った。忍びの地図といい、これといい、君のセンスを結構ぼくは気に入ってるんだ」

ならば、悪戯っぼく朗々と。

ぼくの全てを捧げるプロジェクトを、開始しよう。

「プロジェクトN°. 0 『空の記憶』——」

さあ、全てを。

変えようか。

「——始動」



「——アキ」

声を掛けられ、ぼくは振り返った。

大広間へと続く、大ホールの階段でのことだった。ぼくを呼び止めたのは、ダンブルドアだった。

ダンブルドアの背後には、大きな窓から夕焼けの強い日差しが差し込んでいる。眩しくて、思わず目を細めた。

「ダンブルドア先生。どうされました？」

「今からわしは、ハリーを連れて『分霊箱』を破壊しに行こうと思う」

厳かな声だった。

「……分霊箱」

「聞き返されるかと思っておったが」

「あいつが、幣原が……かつて自力で調べ出したことを、思い出しただけですよ」

少しつつけんどんな口調になってしまったことは否めなかった。

逆光で、ダンブルドアの表情は何えない。そのことは、少しぼくを不安にさせた。

「あなたの右腕も、分霊箱の仕業ですか」

「左様。マールヴォロの指輪じゃよ」

「ハリーを連れていく意味は？ ハリーを危ない目に遭わせるのではないと、誓ってくれますか」

詰問口調のぼくに対し、ダンブルドアは始終穏やかだった。

「誓おうぞ。ハリー・ポッターを損なうことは決してない。老いぼれの命で良ければ、賭けても良い」

「……あなたの命が欲しい訳では、ありません。そこまで言うのなら、安心しました」

ガランとしたホールに、ぼくらだけがただ立っている。

この学校には千人以上の人間がいるというのに、この空間だけが切り取られたように、とても静かだった。

「着いて来たいとは、乞わんのかね？」

「逆に聞きます。ぼくに着いて来いとは、言わないんですか？」

ダンブルドアはしばらく動かなかったが、やがてゆつくりと頷いた。

「それならば、ぼくはここにいます。あなたは……あなたは、時折非情で不義理で不親切ですが。数多にある選択肢の中から、最適解を選び取る人間であると、考えています」

「……幣原秋の記憶については、もう手に入れたのだろうか」

「……ええ」

静かに、ぼくは目を閉じた。

「確かに、ぼくは幣原秋から全てを受け取りました。幼少期から、彼が

アキ・ポッターとなるまでの記憶の全てを手に入れました。今のぼくは、全てを知っています。ぼくは一体何者なのか。ぼくは何故ここにいるのか。ぼくは何をしなければならぬのか。ぼくは全てを知っています。……でも、だからこそ、理解が出来ない」

頭を振って、ぼくは問い掛ける。

「やっぱりぼくは、幣原にとつて失敗作なんだ。幣原は言っていました。『ぼくと同じ記憶を持ち、ぼくと同じ肉体を持ち、ぼくと同じ魔力を持つ存在は、もうそれは『ぼく』だ』と。——そんなこと、ない。ぼくはアキ・ポッターだ。たとえ記憶があつても、同じ身体を共有していたとしても、ぼくはアキ・ポッターとして積み重ねた時間がある。ぼくとして他者と結んだ絆がある。それがあつた限り、アキ・ポッターは幣原秋とはなり得ない。幣原秋が、アキ・ポッターになり得ないのと同じで」

拳を、ぎゅつと握った。

「人は代わりにはならない。例え同じ身体を使つていても、違う人格の代わりなんてなれない。ぼくではリーマスの孤独を癒せない。リーマスの孤独は、幣原秋にしか癒せない。初めから……初めから、そうであつたなら良かった。こんな真実、知りたくなかつた。幣原秋は愚か者だ。未来に後始末をぶん投げた卑怯者だ。過去のぼくが、そんな愚かな選択をしたことが……アキ・ポッターを作り出した思考が、ぼくは理解出来ない」

「……そうじやろう。君はきつと、そうなのじやろう」

一歩、ダンブルドアはこちらに降りてきた。

「自らの手で、幼い自分に教育を施すならまだしも。いくら自分だとは言え、期待し過ぎだ」

「でも、君は今ここにいる。かつての幣原秋が望んだ通り。そうじやろう？」

「だから——そこが理解出来ないんだよ！」

感情のままに、声を荒げた。

「ぼくは幣原秋じゃない、ぼくは幣原秋じゃない、ぼくは幣原秋じゃない、ぼくは幣原秋じゃない!!」

全てをぶん投げて、そんな使命知らない興味ないのだと叫んで、ハリーのことも、ヴォルデモートのことも、何もかも今の自分には関係ないと——ただ、ぼくはぼくとして生きたいと、このたった一つの生を満喫したいのだと、逃げ出したとしたらあいつは一体どう責任を取るつもりなんだよ！　ぼくが生きたいと、ぼくがやりたいようにやると、そう願ったら一体どうするつもりだったんだよ！　人形に自我を与えて、人形が糸を振り切って意図せぬ方向へ駆け出していったら、あいつは一体どう始末をつけると言うんだよ!!

ぼくは……っ、どう生きればいいんだよ。幣原秋として生きればいいのか、アキ・ポッターとして生きればいいのか。

ねえダンブルドア先生、教えてくださいよ。シジフォスの罪がどうかなんて、聞かないで……シジフォスの罪は、死を偽ったことだ。それを、それを！　あなたが言うのか、あなたがぼくに突きつけるのか！

葬式はもう上げてしまった、幣原秋として、ぼくはヘルメスが冥界に連れ帰るまで待てと、そう仰るのですか？」

歯を食い縛り過ぎて、どこかを切ってしまったのか。僅かに血の味がした。

「……アキよ」

ぼくの激情を刺激しまいと、抑えた声音だった。それさえも今は腹立たしい。

「おぬしの行動を、わしは否定せんよ。おぬしがこの先全てを放って逃げ出したところで、わしは責めない。恐らく、誰も責めんじやろう」

「……そんなこと」

「あるんじやよ。アキ、考えてみるが良い。わしが君に、アキ・ポッターに、幣原秋になれと命じたことが一度でもあったかね？」

のろのろと、ぼくは答えた。

「——いいえ」

「君は君自身の意志で動いておる。幣原秋が取らないであろう行動を、アキ・ポッターは選び取る。そうじやろう？　……アキ・ポッターはアキ・ポッターでいいんじやよ。おぬしはおぬしのやりたいことを

やればいい。やりたいように、生きればいい」

人生は一度きりなのじゃから。

「今年度の最初に、君に出した課題を覚えておるか？」

課題。『全校生徒千二百五十九人の願いを叶えろ』という、アレか。現在の進捗は半分弱と言ったところだろう、そう率直に告げると「ふむ」とダンブルドアは頷いた。

「君自身の願いのために、それをこなしてくれ。後——この生徒をよろしく頼むぞ」

「……え？」

なんだ、その。

『言い遺して行く』雰囲気は。

遺言めいた言葉の意味が知りたくて、ぼくは階段に足を掛けた。一歩を踏み出す。

しかしぼくが手を伸ばすより、ダンブルドアがその場から姿を消す方が早かった。一陣の風と共に、搔き消える。

「……………」

伸ばした手を、ゆつくりと引き戻した。胸に抱え、消えた先をじつと見る。

何故だが、妙な胸騒ぎがした。

第38話 境界の向こう側

年が明けて、ぼくは闇祓いに復帰した。

一年弱を開け、改めて見た闇祓い局は、顔ぶれ自体はあまり変わっていないようだった。

親しい人は、とうの昔に皆いなくなつた。ぼくはかつての英雄、『黒衣の天才』として、今まで通り奇異と好奇と敬意と邪念の籠つた視線を向けられる日常に舞い戻つた。



「気付いたら、休職しているんだもん。驚いたよ。住んでた寮も引き払つてたし」

「はは……ごめん」

久しぶりにライフと休日が合い、彼の家にお邪魔した。

リビングでは、ライフの一人息子、アリスが母親と遊んでいる。それを横目で見ながら、出された紅茶に口を付けた。

「ちよつとね。心機一転、というか。気分を変えようかなつて」

「そう……まあ、今まで君は頑張りすぎた。少しばかり休んだつて、バチは当たらないさ」

昔と全く変わらない笑顔を浮かべる友人に、ぼくも微笑み返すと目を伏せた。

「ごめん、ライフ。」

胸の中で詫びる。

ずっと、ぼくと親しくしてくれた。そんな彼に、何も話せないという事実。

もう幣原秋は、君の友人である幣原秋は、あと一月もしないうちにこの世から消えてしまう。なんて残酷な仕打ちを、この善良な友人にしなければならぬのだろう。

「……随分と、大きくなつたね。子供の成長というのは早いものだ」

何も言えないまま、話題を逸らす。そうだね、とライフは穏やかに

笑った。

父親の顔だった。その顔を見て、やはりリーフは巻き込めない、と決心する。

「今年で三歳になるんだ。……と、おおアリス、どうした？」

「……べつに」

先ほどまで母親と遊んでいたアリスが、とてとてこちらに駆け寄ってきてそのままリーフの膝によじ登った。まるで自分の椅子かと主張するかのように唇を尖らせている。

「懐かれてるね、お父さん」

「ありがたいことだね。忙しくてあまり家に帰れないから、いつも長期出張の後とかは、アリスに忘れられてないかな？　って心配になるんだけど」

「帰ってあげなよ、ちゃんと。忙しいのは分かるけどさ」

そうですね、とリーフの奥さんに同意を求めると、彼女は微笑んで頷いた。リーフはまいったなあ、と頭を掻く。

リーフの息子、アリスが今年で三つ、ということは、ハリーと同じ年か。

ということは、ぼくの計画——『空の記憶』が成功すれば、『アキ・ポッター』とも同級生になる。

もしかしたら——もしかしたら。ぼくとリーフみたいに、アキとアリスも。

「……もう一回」

「ん？　何か言った？」

なんでもないよ、と、ぼくは笑った。

「そう言えば、聞いている？　セブルス・スネイプがホグワーツの教師になったって話」

「……え」

息を呑んだ。吐き出すことを、しばらく忘れていた。

リーフは頬杖をつき、少し複雑な表情をしていた。

「……ダンブルドアも、一体何を考えているのやら。僕には分からないよ」

ぼくには分かる。監視目的か。手元にずっと置いておくためだ。ヴォルデモートが再び蘇り力を取り戻したとき、また使える駒として。

「……………」

もし、『空の記憶』が成功したとして。そうしたら、アキとセブルスは――

考えかけた思考を、放り投げた。

全ての準備が整ったのは、その年の七月。ぼくが二十三の、夏だった。



真つ黒の夜空を見上げて、大きく息を吐いた。

深夜にこうして、ビルの屋上で風に吹かれるのも久し振りだ。全ての生きる希望を失って、死ねないかと何度もいろんなことを試したっけ。今となっては、随分と懐かしい。

「……………本当にやるのかい？」

囁いたのはリーマスだ。そうだよ、と静かに頷く。

「君が来る必要は、なかったのに」

そう言うと、リーマスは泣きそうな顔で微笑んだ。

「君が飛び降りてしまわないかの見張りだよ」

「……………随分と信用されてないなあ」

それならば、色々と言うのも野暮だというものだろう。

指を鳴らすと、ぼくと一切合切変わらないそっくりの人形が空中に現れた。こうしてまじまじと見ると、なんだか変な感じだ。

鏡で見るのとは違う、自分と同じなのに、自分の意思では動かない存在。

あまりまじまじと見るのも少し気持ちが悪いので、空中に浮かせたまま、フェンスをよじ登って乗り越えた。足元からも風が吹き込んでくる。

左腕の先に、自分と全く同じ人形の姿。

魔法を解けば、この人形は真つ逆さまに地上へと落下する。

魔法を解けば、『幣原秋』は死ぬ。

魔法を解けば、二度と今まで通りの生活を歩むことは出来ない。

「それで、構わない」

安寧と生きていたくはない。

後悔と自己否定を繰り返すよりは、ぼくは未来を見据えたい。

ぼくが存在しない未来を、望みたい。

「さようなら、黒衣の天才よ」

未来のために、君は死ぬ。



「……アクア」

ドラコの呼び声にアクアは振り返り、整ったその顔に、久しぶりに話しかけられた嬉しさと、そして戸惑いを浮かべた。ドラコは優しく微笑む。

「ど……どうしたの。もう……私と、口を利くのも嫌なのかと」

「そんなことはないさ……そんなことない。アキから何か、聞いてない?」

訝しげに眉を寄せ、アクアは首を振る。

そうか、アキは話してはいないのか。そのことは、ドラコに対するアキの誠意のようにも思えた。

「人目が多いから」という理由で、アクアを寮から連れ出す。空き教室に、アクアを先に促した。彼女の後ろに従って入る。

「……さ、一体どういうことなのか、教えて……」

「インペリオ」

無防備に背中を晒していた彼女に、杖を振った。

心が定まらないかと危惧していたが、上手く言ったようだ。ふらついたアクアを、慌てて支える。アクアは一瞬だけ虚ろな瞳であったが、すぐにいつも通りの瞳に戻った。なるほど道理で、端から見れば

『服従の呪文』に掛けられているのか、それとも本心から従っているのか、区別はつかない。

「……アキを閉じ込めておいて。可能な限り長く」

ドラコの囁き声に、アキアはこくりと頷いた。

言葉を紡ぐのに、躊躇した。

偽善だ欺瞞だと、人は言うのかもしれない。しかし、今は自分とアキアしかないのだ。

「……そして、死なないで。無事でいて。幸せでいて。……僕を、許さないで」

第39話 シジフォスの罪

『黒衣の天才』の葬儀は、国を挙げて華々しく執り行なわれた。

闇祓いのほぼ全員が参列しているのではないかと思う。闇祓いだけではなく、かつて不死鳥の騎士団だった者の姿もある。少し離れたところでは、かつての同級生、リイフ・フィスナーが、険しい瞳で立っていた。その者たちに気付かれないよう、リーマス・ルーピンはそつと目深に帽子を被った。

壇上では、前任であったバーティミウス・クラウチに代わり、局長の座に就いたルーファス・スクリムジョールが長々と口上を述べている。

幣原秋が、いかに闇祓いとして世界に貢献してくれたか。どれだけ希望の光であったか。中身の伴わない言葉にしかし、感動している観客は多いようだ。

舌打ちしそうになり、自制した。

下らない、心の底から、そう思う。秋を、あの善良な人間を、英雄に祭り上げたのはどこの組織だ。しかしそんな心の中を悟られるのは、非常にまずい。

もう、視察は十分だろう。

棺に土を掛けられる様を見て、リーマスはその場を後にした。



訪れたぼくを、ダンブルドアは迎え入れた。生徒は誰もいない夏休み中の Hogwartz は、驚くほどに静まり返っている。

「待ちくたびれるかと思うたぞ」

ダンブルドアが手に持っているのは、幣原秋ほくの死が報じられた日刊預言者新聞だった。黒い棺に、山のように積み上げられた百合の花。

「シジフォスの罪が何か、知っておるか？」

「そんな戯言に興じるほど、ぼくは時間を持て余してはいないんですよ」

無表情で、ぼくは言った。

「入学名簿を出してください」



入学名簿と、名前を書き込む羽根ペンは、塔のてっぺんに存在するのだという。

鍵を手の中で遊ばせながら、階段をずっと上がった。扉を解錠し、開け放つ。

小さな部屋に、机が一つ。真ん中には革張りの本と羽根ペンがそっと置かれている。

創始者の時代、千年以上昔に作られたものだということに、一切風化が認められない。室内の床と違い、埃すら積もっていない。

近付くだけで、それらがとても高い魔力を籠められていることが分かった。

ヘルガ・ハツフルパフが魔法を掛けた羽根ペン。サラザール・スリザリンが魔法を掛けた名簿。

イギリス魔法界随一の魔法学校を作り上げた創始者が、自らの死後も入学者を選ぶために作成した魔法道具。

ピリピリと、魔力が肌を灼く。無視して、羽根ペンに手を伸ばした。

掴んだ瞬間、電流のような痛みが掌に走る。眉を顰めたまま、名簿に手を掛けた。見た目は極々普通の本なのに、滅茶苦茶重い。

魔力を思い切り込め、名簿を押し開く。開いてもなお抵抗する名簿に、こちらも肘で押さえ付けた。

「……この世、全ての魔力よ」
奥歯を食い縛る。

「ぼくに、跪け」

青いインクで、無理矢理に。

『アキ・ポッター』と、書き殴った。



ハリーとダンブルドアが分霊箱探しの旅に出るのを、ぼくはぼんやりと廊下の窓に寄り掛かって眺めていた。

傾く夕日が、二人の影を長く伸ばしている。二人の姿が宵闇に掻き消えるのを見届けても、しばらくずっとそのままだった。

取り留めもなく、考える。頭の中の物事たちは、きちんとした考えにまとまることなく、ただただふわふわと、ずっと脳内を漂い続けていた。

「……解決策なんて、何一つないんだ」

小さな声で、呟いた。

「何も……ないんだよ……」

秋。幣原秋。

ぼくは君のために、何が出来るのだろう。

近付いてくる足音に、目を遣った。人影に、思わず目を見開いた。大きな窓から差し込む真っ赤な夕焼け、それに照らされ輝く、長く綺麗な銀色の髪。白く透き通る肌は、赤い日差しに晒されてか普段より血色よく見える。

「……アクア」

そつと、愛しい彼女の名前を呼んだ。

アクアは微笑みを浮かべたまま、ぼくの元へと歩み寄り、そして無言でぼくの手を取る。

「……来て、アキ」

「え？ どうしたの？」

「……いいから」

そう言って、ぼくの腕をアクアは引つ張った。強引だけど、強引にされるのは嫌いじゃない……なんて、言ったら語弊があるだろうか。何を言ったところで、アクアにされることだったらぼくは何だって嬉しいのだ。

長い廊下を通り、いくつもの動く階段を下っていく。どこに向かっているの、と聞いても、アクアはただ意味深に微笑むだけだった。

何か、彼女なりの考えがあるのか。もしかしたら、何かのサプライズだろうか。うわあ、それは……考えるだけで嬉しい。

こうして手を繋いでいるだけで、舞い上がってしまう。柔らかくて薄い手のひらを、どんな力で掴んだらいいのか。そんなことに、いちいちドキドキしてしまう。

地下へと、ぼくらは降りていく。春から夏に変わる風が吹き抜けている地上と違って、地下の空気はひんやりとしていた。

石造りの扉を押し開け、アクアは部屋の中へと入っていった。人を感知してか、蝋燭の光がふわりと点灯する。

アクアが後ろ手に扉を閉めた。どうやら、ここが目的地のようだ。手狭な部屋に、机が一台、机を挟むようにして椅子が二脚。

「……最近、お話出来てなかったから」

にこりと微笑むアクアの前で、断れる男などいるものか。

アクアが椅子に腰掛ける。つられてぼくも、椅子に腰掛けた。

机の上にも、蝋燭が一つ。ゆらゆらと不安定に揺らめいては、ぼくらの影を奇妙な形に映し出している。

アクアとこうして話すのは、いつぶりだろう。

あまり、ぼくの時間が取れなかった。普段から、いつも放りっぱなしで、アクアはそれに耐えてくれていたんだ。

本当に、余計な苦勞を掛けさせている。他の男の子と付き合うなら考える必要もないことを、掛けることのない苦惱を背負わせてしまっている。

それでも、一緒にいたいとぼくが望んだんだ。

アクアの存在は、ぼくがアキ・ポッターであるという一番の証。

ぼくが、ぼくだけの意志で——幣原の意志が一切入らずに——好きになつて選り取った女の子。

一体、どれだけ話していたのだろう。アクアの口数はそう多くはないまでも、いろんなことを、ぼくらは話した。アクアは始終、穏やかな表情でぼくを見つめていた。

くう、とお腹が鳴ったことで、空腹に気がついた。アクアがクスクスと笑うのに、恥ずかしくって唇を尖らせる。

「自然現象だから仕方ないでしょ……でも、お腹すいたね。話したら、夜ごはん食べ損ねちゃったな……」

時計を出して、時間を確認する。もういい時間だった。そろそろ寮の門限の時間になる。

「一度厨房に行つて、何か食べれそうなもの貰つて来ようよ。アクア、今日は君とたくさん話せて嬉しかった……寮まで送るから」

「だ……ダメ」

え、と、訳が分からずに目を瞬かせた。

アクアは一瞬だけ困つたような眼差しをしたが、やがて——心臓が飛び出るかと思つた。アクアがぎゅつと抱きついてきたのだ。

慌てて受け止めるも、思考の中は大パニック。この場合どうすればいいのか、この空中に浮いた両の手はどこに置いておけばいいのか、待つて待つて吐息が掛かる、なんだかすつごいい匂いする！

潤んだ瞳で、アクアはぼくを見上げた。こんな至近距離で、アクアの顔を見たのは初めてだ。どうする、大人の階段登っちゃう？

「ねえ、アキ……」

耳朶を撥る甘い声。思わず息を吐いていた。

アクアの背中に手を回そうとし——その手が止まる。

「……アクア」

アクアの灰色の瞳を見据えた。何かがおかしい。脳内のどこかが、警報を鳴らしている。

彼女の肩を押し返すと、左手をローブの中に突っ込み杖を掴んだ。

彼女の目の前で、解除呪文を唱える。一瞬虚ろな瞳をさせたアクアは、膝から地面に崩れ落ちた。慌てて、彼女が落ちる前に抱き留める。

「……ん？ あれ、アキ？」

やがてこちらを向いたアクアは、ぼくを見るなりパツと顔を赤らめた。

両手で突き飛ばされ、思わず硬い地面に尻餅をつく。

「やつ、アキ、ごめんなさい！ 近くつてびっくりしちやつて、怪我してない？」

「いや……大丈夫」

ちよつと心が痛いけど。ちよつと心に傷を負ったけれど。

「……童貞の妄想臭いって思ったんだ……」

アクアに聞こえないよう、口の中でごによごによと呟く。

アクアがぼくに手を伸ばしている、その手にありがたく掴まった。

「ここでぼくと会話した記憶、ある？ 随分長々と喋ってたんだけど」
アクアがきよんとした顔で首を傾げる。それこそが、答えだった。

舌打ちをして、部屋を飛び出す。アクアがぼくの後ろから懸命についてきているのが、足音で分かった。申し訳ないけれど、今はアクアの体力を慮る余裕はない。

地上に出た。広がる惨状に、立ち竦んだ。

争いの後が、ありありと伺えた。夜の帳はとうに落ち切っている。

今こそ、全てを理解した。

ぼくが騙されていたことに。

第40話 未来へ繋ぐ

「……ねえ秋、一つ聞いていい?」
「ん?」

計画は、もう最終段階に入っていた。

部屋の余計なものを全てを退け、ぼくが両手を伸ばしてもなお余りある大きな一枚の紙に魔法式を書いていたぼくは、リーマスの声に顔を上げた。

◇ ◆ ◇

見上げた空には、ちょうど天文学塔の真上に『闇の印』が浮かんでいる。

窓から見える、月ほどに光り輝く銀の印を睨み据え、ぼくは足を踏み出した。眼前の戦いを一望し、壇上へと乗り上げる。

「……さあ、ぼくが幣原秋だ」

来いよ、ぼくが殺し損ねた者共よ。

◇ ◆ ◇

「どうして、君自身が『アキ・ポッター』にならなきゃいけないの?」

「……どうして、『幣原秋』が消えなきゃいけないんだい?」

リーマスの表情は、固く強張っていた。学生時代に見た、彼が泣くのを必死で堪えていた時の表情と、実によく似ていた。

◇ ◆ ◇

杖を振る。杖を振る。ただひたすらに、杖を振った。許されざる三つの呪文、それ以外を使い切るほどに、延々杖を振り続けた。

「アキー!」

名前を呼ばれ、振り返る。ハリーの姿がそこにあった。

慌てて駆け寄る。擦り傷まみれで、服は一度水に濡れたように色が変わっていたが、それでも大きな怪我はなさそうだった。

「大丈夫、ハリー……」

言葉を紡ぎ終えぬうちに、ぐいと手首を掴まれた。ハリーはそのまま駆け出して行く。

焦りながらも足を踏み出した。

「アキ、聞いて。——ダンブルドアが死んだ」

「……え？」

言われた言葉が理解できずに、聞き返す。

ハリーは顔を大きく顰めながらも、もう一度同じ言葉を繰り返した。

「……何故」

「マルフォイだ。あいつがヴォルデモートからダンブルドアを殺すよ
う命を受けていた。マルフォイが失敗し、代わりにスネイプが——ス
ネイプが、ダンブルドアを殺した」

吐き捨てる声音だった。眼前を見る瞳は、怒りと憎しみに歪んでいた。

戦いの名残に目を向けず、ぼくらはただ走った。

——セブルス・スネイプを追って。

◇ ◆ ◇

ああ、そうか、と、その時やつと——やつと、理解する。

幣原秋がアキ・ポッターになったら、リーマスは、一人残されなければならぬんだ。

リリーにジエームズ、ピーターは死んでしまった、シリウスはピーターを殺して、アスカバンに送られた——ぼくが、送った。

残ったのは、ぼくとリーマス。

◇ ◆ ◇

血染めの足跡を見付け、ぼくらは言葉を交わさずとも理解し合った。

人気のない廊下を疾走し、正面玄関に向かう。

ハリーに向いた呪文を、指を鳴らして弾いた。

視界の片隅に、二人の死喰い人。失神呪文は狙い違わず二人に当たった。

かつて『忍びの地図』を作ったぼく。現在の『忍びの地図』所持者のハリー。

ぼくら以上にこの城を熟知している人間は、いまやホグワーツには存在しないだろう。

吹き飛ばされた正面扉を抜け、粉々になった寮の砂時計を横目に、玄関ホールを横切った。

雷鳴が轟き、その瞬間に二人の影を浮かび上がらせた。教授とドラコの影。

ハリーは息を切らせながら、瞳に爛々と殺意を滾らせ杖を振った。惜しくも外れた赤の閃光は、スネイプ教授の頭上を通り過ぎる。

ドラコの背を押し、スネイプ教授は振り返った。



「……前から思っていたんだ。確かにヴォルデモートが復活するのは分かるよ。その時にハリーが危険になるっていうことも分かる。ハリーを守らなくちゃいけないことも、分かる。……でも、それは君がハリーの弟になるしか方法がないの？ 君の……君の未来を消すしか、本当に方法はないのかい？」

リーマス声は、震えを押し殺しているように、どこか無理しているようにも聞こえた。



ハリーが崩折れる。一瞬躊躇して、教授を追った。

ただ、ひたすらに、悲しかった。

「——セブルス!!」

名前を叫んだ。

ぼくの声に、スネイプ教授は——セブルスは、振り返った。

「どうして——どうして殺したっ、どうして!!」

頭の中で、記憶が回る。

「答えろ——答えろ、セブルス・スネイプ!」

手を伸ばした。その時、声が聞こえた。

外部からじゃない。ぼくの、頭の中から。

『——もう、いいよ』

ぼくであって、ぼくではない、声。

ぼくと全く、同じ声で。

『もう、いいんだ』

幣原秋は、囁いた。

◇ ◆ ◇

ぼくは目を伏せ、そして顔を上げると、小さく笑った。

「リーマスには、本当のことを教えておくね」

腹を括る。

今まで、誰にも話したことのない本音を。誰にも話せなかった本音を。ずっと、胸の中で燻らせていた、本心を。

誰にも言っちゃいけないよ。これは二人だけの秘密だよ。

悪戯っぽく笑って、リーマスの顔を覗き込んだ。

◇ ◆ ◇

「いい訳あるかあ!!」

無我夢中で叫んだ。

「勝手に……っ、勝手に諦めてるんじゃないやねえぞ、幣原秋!」
ふざけるなよ。

ふざけるなよ！

「やりたいことがあったんだろ！ わざわざ自分を殺して、ぼくを生み出して、それでも成し遂げたいことがあったんだろ!!」

大きく、息を吸い込んだ。

「教授と仲直りがしたかったんだろ!!」

息を呑む音が、聞こえた気がした。

◇ ◆ ◇

「……ぼくはね。セブルスと仲直りがしたかったんだ」

喧嘩別れ？ ううん、そんなんじゃない。もっと酷い。

あの瞬間、ぼくらを繋いでいた糸は、全て千切れ飛んだ。

ぼくは闇祓いに、セブルスは死喰い人に。

正反対の道を、ぼくらは歩み始めた。

「もう『ぼく』は、セブルスには会えない。セブルスは、ぼくを許さない。ぼくが、セブルスを許せないように。でも……生徒なら、教師なら……もしかしたら」

絵空事、なのかもしれない。

でも、いいだろう？

未来に想いを馳せることくらい、許されても、いいだろう？

◇ ◆ ◇

——バカだ。子供かよ。

二十過ぎて、言うに事欠いて『仲直り』なんて——黒衣の天才が、そんな子供みたいな単語吐くなよな。

でも、でもさあ。

それが、君の願いだと言うならさあ。

「何だって遅くないっ、今からだって遅くない!! 秋っ、聞け、聞けよ

!! ぼくはお前のために生きてやるっ、この人格、この命、全てをお前に捧げてやる!!」

幣原秋、君は本当にバカだけど。

こんなこと叫んでいる、ぼくだって、バカだ。

「だから言え、お前の本心聞かせろよ!! お前は結局、何がしたい、どうしたい、幣原秋、お前の言葉を聞きたいんだ!!」

脳内の声に。

耳を、澄ませた。

『……ぼくは』

本当に、微かな声。

世界に掻き消されてしまいそうなほどに、微かで小さな声だった。でもぼくだけは聞き漏らさない。

だってそれは、間違いなく。

ぼくが発した、言葉だったから。

『……アキ。ぼくは……セブルスと……ぼくは……っ、かつての親友と、仲直りがしたい……っ』

震える声で、それでも、しっかりと。

『ぼくを助けて——アキ!』

「……言えるじゃん」

にやりと笑った。

「ぼくに任せて、秋」

目の前の、セブルスの背中に手を伸ばす。

短い、とても短い、ぼくの手は。

それでも確かに、セブルスに届いたんだ。

「……っ」

セブルスはぼくを見て、顔を歪めた。ぼくは、セブルスに微笑む。

「……やっと」

君に、届いた。

「全てを聞かせて。ぼくも、全てを教えるから」

セブルスは堪える表情でぼくを見ると、ぼくの手を取り、逆に抱き込んだ。

瞬間、景色が回る。

置いていかれないよう、セブルスのローブを、ぼくはぎゅっと掴んだ。



「……秋、君の気持ちは、よく分かったよ」

リーマスは、何だか泣きそうな表情で微笑んでいた。

「アキ・ポッターを作り出すことを強行したのは、そういう……そういう、裏の目的があったんだ」

「……うん。ごめん、言つてなくって」

「いや、いいんだ。こちらこそ、話してくれてありがとう」

リーマスは、ぼくの想いを否定しなかった。それが、ひたすらに嬉しく、そして有難い。

リーマスは、ぼくの全てを理解してくれている。リーマスなら、ぼくを——ありのままに、受け止めてくれる。

それが、凄く心地よかった。

「……ねえ、秋」

リーマスは、穏やかな微笑みを浮かべていた。普段通りの笑顔だった。でも、何だか寒々しい。その理由が、ピクリとも笑っていない瞳に起因することに気付いたのは、次に放たれた言葉を受けたのと同じだった。

「全てが終わったら。ヴォルデモートの危機が去って、全てが終わったら——秋は、ここに帰ってきてくれるよね？」

それは、質問の形を取っていたけれども、ほとんど断定の意味を持っていた。

「……どういう、意味？」

息を呑んだぼくは、数拍置いてその真意を問い質す。

いや——本当は、気付いていたんだ。

見ない振りを、してただけで。

リーマスの狂気に、気付かない振りをしていただけで。

「分からないの？ 秋」

滑らかな口調だった。クスクスとリーマスは笑うも、その瞳はじつとぼくを見据えている。

「全てが終わったなら、アキ・ポッターなんて仮初めの人格は捨てて、今まで通り『幣原秋』として生きてくれるんだよねと——そう、聞いているんだよ」

秋は、僕を一人にしないよね？

ゾクリと、背筋に寒気が走った。

リーマスが、微笑みを浮かべたままぼくに一步ずつ近付いてくる。

腰を地面に付けたまま、思わず後ずさった。

「偽物の人格は、いくら君にそっくりでも、それでも『幣原秋^き』じゃない。秋、君は分かっているはずだ。ねえ——秋。君は、確かに僕に言ったよね。『もう、絶対に君を置いていかないから』と。その言葉——違えないでよね？」

約束だよ、秋。

勝手に死ぬなんて、許さない。

僕だけを置いて逝くなんて、許さない。

笑みは、狂気に塗れても尚、変わらず美しかった。

ぼくは——ぼくは。

「や……約束、するよ。絶対に、君の元へ『幣原秋』として戻ってくる——全て、終わったなら」

リーマスはぼくの言葉に、陶然としたように微笑んだ。

第41話 さよなら、主人公

ペチュニア——ペチュニア・ダーズリーとバーノン・ダーズリー、二人の前でぼくは手を付いた。土下座して頭を下げる。

二人は青褪めた表情で、ぼくとリーマスの話を聞いていた。

「お願い……っ、お願い、します……ハリーをぼくに守らせてください。そのために、ぼくをこの家の庇護下に置いてください。ぼくはあなた方の全てを守ります。ぼくの力の及ぶ限り、あなた方を守ると誓います。無理なことを、勝手なことを言っているのは承知です。ですが、お願いします……っ、リリーを守れなかったぼくが、何を言っても意味ないのかもしれない。でも、それでも……お願い、します」

少し離れたところで、子供の泣き声が聞こえた。ペチュニアは、ぼくを見据えて動こうとしない。どうしていいか戸惑う瞳で、バーノン・ダーズリーは子供をあやしに向かった。

「……幣原、秋。顔を上げてください」

それでもぼくが頭を上げずにいると、ペチュニアはぼくの前に屈み込んだ。

「秋」

「……………」

おずおずと、身体を起こした。

「私はあなたを、自らの子供として愛することは出来ません。私は、妹の子供を愛することが出来なかった。愛そうと努力した、でも無理だった。私は魔法界が憎いです。私から妹を奪った魔法界が大嫌いです。その、住人であるあなたも……大嫌いです」

「……………」

「ですので……約束してください。私と。私はあなたを信じます。あなたの言葉を信じます。あなたが私たちを守ると、そう誓った言葉は、本物と思うから……あなたがリリーに向けていたあの優しい視線は、真実だと思うから。だから、約束してください」

灰色の瞳。リリーとは全く違う瞳の色で、それでも何故だか、眼差しは凄くよく似ていた。

「私はあなたを愛せません。私はハリーを愛せません。そのことについて、どうか私を責めないでください。理不尽なことを、してしまうかと思っています。傲慢な言葉だと、分かっています。何様のつもりだと言われても、甘んじて受け入れます。ですが秋、あなただけは私を責めないでください。保護者として至らぬ身ですが、そんな私で良いのなら——あなたを胸に抱き留めることは出来ません、そんな保護者でいいのなら……私はあなたの提案を受け入れます」

苦しげな声音だった。ぼくはしばらく黙って、そして「分かりました」と頷いた。

「ぼくだけは、ペチュニア、あなたを責めない。あなたはただ、ぼくとハリーを生かして、この家の中で眠りにつかせてくれるだけで構いません。ぼくを……アキ・ポッターを、この世界の片隅で呼吸することを、許してくれて……ありがとう」

ハリーを連れてくる、という彼女の言葉に、ぼくとリーマスは少し待った。

「……後のことを頼んだよ、リーマス」

「分かっているよ」

返事はすぐに来た。ぼくは気付かれないくらい僅かに目を伏せる。

杖を預け、首元を開いた。ずっと首から下げていたロケットを外すと、リーマスに託す。

リーマスのことは、少し不安だが……任せるしかない。今のぼくは、既に死を偽ったぼくは、リーマスしか頼れる人がいないのだ。

やがて姿を見せたハリーは、記憶の中のハリーよりも随分と成長していた。しかし、あまり他者に興味を示さない虚ろな眼差しや、ダボダボの洋服から覗く細い手足から、どのように育てられて来たのかは簡単に予想がついた。

「……ハリー」

きつと君は、もう覚えていないのだろう。望まれ生まれてきたことも、最高の愛情を注がれ育ったことも、君の両親が、君を守るために死んだことも、何一つ、知らないのだろう。

名前を呼んだぼくを、ハリーは緩慢に見上げた。意志の籠らない眼

差しだった。

「……だれ？」

微笑んで、ぼくはハリーに手を伸ばす。ハリーは警戒心剥き出しの瞳でぼくを見据えたが、構わず、優しく抱き締めた。

強張り震えていたハリーの細い肩から、徐々に力が抜けていく。冷たい身体が、ほんのりと温もりを帯びていく。

「……おにいさん、ないてるの？」

少し平坦な声ではあったが、それでもハリーは、ぼくを心配するような言葉を発した。

「どうしたの？ どこか……いたいなの？」

「……痛いんじゃないよ。嬉しいんだ」

ハリー、君に会えたことが。

「ぼくが誰かって、君は聞いたね。……ぼくはね」

涙を拭わぬまま、ぼくはにっこりと微笑んだ。

「ぼくは、君の弟だよ、ハリー」



朝の光に『アキ・ポッター』は目を開けた。

ぼんやりとしばらく世界を見ていたが、やがてふと手元に目を向ける。ハリーが、アキの手を握ったまま眠っていた。くらり、と視界が揺れる。アキが首を傾げたのだ。

「……だれ？」

なるほど。『アキ・ポッター』の中から見ると、このように見えるのか。

目に見えるもの、聞こえるものしか感じ取れない世界。アキ・ポッターが受け取ったものの、ほんのり一部しか感じ取れない世界。

なんだか、酷く安心した。だってぼくは、死にたかったから。ここであつた、こうしてアキの瞳で世界を見るのは、とても気楽だった。

アキの声に、ハリーが目を覚ました。アキの手を握っていない方の拳で目元を擦ると、ふとアキを見る。数度目を瞬かせ、ハリーは「……

おはよう」と言った。

「だれ？」

アキはもう一度尋ねる。ぎこちない笑みを作ろうとしていたハリーの試みは、その一言で無念にも砕けたようだ。

「……ぼくは、ハリー。ハリー・ポッター」

「……は、リー？」

戸惑うように、アキは名前を繰り返した。そうだよ、とハリーは呟く。

「ぼくは……だれ？」

アキの声は、不安が滲み出ていた。心もとない、不安定な足場。その上に一人座り込むアキは、縋る誰かを求めようとする。

「きみは、アキ。アキ・ポッター。きのう、おにいさんがいった……ぼくの、おとうと、なんだって」

今度こそ、ハリーは笑みを浮かべた。

「アキ……これからはずっと、いっしょだよ」

アキの視界が滲む。瞬間、ポタポタと大粒の涙が滴った。「え、な、なんで」と、焦ったようなアキの声。

もう、いいだろう。そう思っただけ、ぼくは目を閉じた。目を閉じたというのは言葉の綾で、今のぼくは目を瞑るための身体も持っていない。感覚を遮断した、というのが、一番近い。

まるで眠りに落ちるような感覚。ああ、ぼくはずっと、これを守っていた。

暗闇に抱かれ、ぼくは静かに息を止めた。



ダンブルドアの葬儀中、ぼんやりとハリーは空を見上げていた。

前では、ダンブルドアの亡骸の前で誰かが口上を述べている。一切興味が湧かず、ただただ空を見上げた。

アキは、セブルス・スネイプと共に行ったまま帰って来なかった。ずっと待ち続けたし、ハリーとアキの間の連絡ツールである羊皮紙に

も、永遠言葉を書き連ねた。それでも、一切返事は来なかった。

アキは行ってしまったのだ、と険しい声で呟いたのは、リーマス・ルーピンだった。

食い縛った歯の隙間から、漏れた言葉。リーマスは確かにこう言ったのだ。

『僕を裏切ったのか……秋』

そんなリーマスは、今はトンクスに寄り添われ、ダンブルドアの葬列のどこかにいる筈だ。がっくりと項垂れてしまったリーマス。トンクスは、そんなリーマスにずっと付いていた。

ずっと、幼い頃からずっと、アキと一緒にだった。あの少年と、ずっとずっと一緒だった。

それでも、もつと話しておくべきだったと、ハリーは悔やんでいた。アキのことも、幣原秋のことも、全然知らない。

空を見ていた目を、参列者に戻した。

少し離れたレイブンクロウの集団の中に、アリス・フィスナーの姿。ここのところずっと、アリスは荒れていた。ぐしゃぐしゃと乱雑に髪を掻き「全部自分のせいだ」と、押し殺した声で呟いていた。その真意は、押し計れなかった——碧の瞳は、アキと出会う以前のように他者を寄せ付けない光を放っていた。

スリザリン寮を伺った。一番動揺していたのは、グリフィンドールではなくスリザリンだった。落ち着く様子は、今もまるでない。

ドラコ・マルフォイが欠けたスリザリン、その中でぼんやりと立ち尽くす少女の姿を捉える。アクアマリン・ベルフェゴール。

慟哭し、恐慌一歩手前の状態に陥っていた彼女。後悔と懺悔の言葉を繰り返す彼女を、ハーマイオニーも泣きながら、彼女の小さな背中を撫でていた。途切れ途切れに聞いた言葉から、ハリーはアキの身に、あの日何が起こったのかを察した。

結局のところ、一体どうすれば良かったのだろう。

これから自分は、どうすればいいのだろう。

立ち竦んだときは、アキがいつも手を引いてくれた。初めて魔法界に触れたときも、初めてヴォルデモートと対決したときも、あの柔ら

かな微笑みで、ずっと一緒にいてくれた。

それなのに、どうして今、君はこの場にいないんだ。

幣原秋について、もつとちゃんと言っていておけばよかった。アキの瞳によぎる暗い影、それを見たくなくて、いつか幣原秋について問いかけるのを止めてしまった。

もう少し深く聞いておけば、アキの行動の理由も、五里霧中の今よりは読めていたのかもしれない——全てはもう、遅いけれど。

悲鳴に、緩慢に顔を向けた。ダンブルドアの亡骸が載った台が、眩く白く燃えている。炎は高く、天を燃え焦がす勢いで巻き上がると、一瞬ふわりと不思議な形を描き——ハリーにはそれが、不死鳥のようにも見えた——次の瞬間、何事もなかったかのように炎は消え去っていた。

今、目の前で何が起きたのか。

ざわつく人々の中、ハリーはジニーを見た。ジニーも、ハリーを見ていた。

全てを理解し、受け入れた眼差しだった。

第42話 42

カツン、と、高らかに靴音が響く。闇の帝王は鷹揚に音の出先を見——真紅の瞳に激情を走らせた。

一人の少年だった。少女のように長く艶やかな黒髪を、後ろで一つに括っている。夜の闇色の、全てを吸い込んでしまうような双眸。小柄な体躯、それに見合わない、暴力的なまでに膨大な魔力。口元には、心底楽しそうな笑みが浮かんでいた。

「……っ、なるほど……セブルスめ、数十年越しに、任務を遂行したと、そういう訳か」

「ああ、そうだよ」

軽やかな声。無礼にも、両の手を制服のローブの中に突っ込んだまま——彼は一步、二歩と歩み寄る。挑むように、挑発するように、彼は上目遣いで闇の帝王を見上げた。

「こうして会うのは、初めてだね——改めて、名乗りを上げましょう」
朗々と。よく通る、澄んだ声で。

「元闇祓い幹部、元不死鳥の騎士団団員——幣原秋、もとい——アキ・ポッター」

そして、優雅に一礼を。

「以後、お見知り置きを」



誰もいないホグワーツは、驚くほどに静まり返っていた。静けさが、逆に耳に痛い。

湖の音は、こんなにも大きかったのか。鳥の鳴き声は、ふくろうの羽ばたきは、こんなにもうるさかったのか。

レイブンクロー塔へと、歩みを進めた。何度も何度も、歩き慣れた道だった。

レイブンクロー寮の扉の前に立ち、鷲のノッカーに手を伸ばした。一度、軽く打ち付ける。途端、鷲の嘴から歌うような声が零れた。

『生命、宇宙、そして万物についての究極の疑問の答えは?』

「ちよつと、なんで知ってんの。読んだの? 君の脳の在り処を突き止めたよ。脳というか、知識の源をさ」

苦笑するぼくに、鷺は楽しげに答えた。

『ロウエナ・レイブンクローの叡智の前じゃ、君も赤ん坊と同じであるということよ』

「あつはは……違くない」

答えを告げる。

開いた扉の先に進んだ。人気のない談話室を抜け、男子寮の階段を上る。部屋の扉を押し開いた。

綺麗さっぱり片付いた部屋の中、ぼくのスペースだけが、手付かずで残っていた。

机の上に、一枚の紙が置いてある。羊皮紙に殴り書きされた文字だ。署名はなかったが、乱雑ではあるものの育ちの良さが現れた小綺麗な文字に、思わず苦笑する。手を触れずに、目を離した。

ベッド脇の机、上から二番目の引き出し。指を鳴らして解錠すると、引き出しを開けた。手を伸ばす。

一年の、クリスマスに送られてきたロケット。幣原秋の両親の、形見。

首の後ろで、チェーンを止めた。下げたロケットを、左手でぎゅつと握り締める。

顔を、上げた。



イギリス夏時間

七月三日、BSTにして午後六時四十二分。イギリス魔法界で一番愛されているラジオ番組『ロンドン・マジック・タイムス』が突如違法電波によりジャックされた。

ちょうど同時刻、魔法省、聖マング、魔法警察局、グリーンゴッツ、漏れ鍋、三本の箒——その他名所およそ五十ほど——に、突如モニターが出現した。耳に、あるいは目にした魔法使いや魔女の総数は、五万

を下らないであろう統計が、既に報告されている。

『……あ、あー。これ大丈夫？ ちゃんと聞こえてるかな？ 見えてるかな？ えー、コホン』

映し出されたのは、一人の少年。長い黒髪を一つで括った、楽しいげな笑みを浮かべた少年だった。

『ご存知の方も、初めましての方も。こんばんはー、ちようど今はお夕飯時かな？ ご飯食べる手はそのままでもいいよ、お仕事の方も耳だけ傾けてくれりやあいから。んー、なっかなかねえ、ぼくの顔は知られていないから。あ、ラジオもジャックしてんだっけ。なんだよそれじゃあぼくの顔見えないじゃん早く言ってよ！』

……はてさて。ぼくの名前は幣原秋。もう皆、平和な時代にボケすぎて忘れちゃった？ かつて『黒衣の天才』と呼ばれ、日刊預言者新聞で虚像の英雄やってた存在、忘れちゃったかな？

……忘れたのならば思い出せ。初めて聞いたのなら、そのシワが見当たらない脳みそに刻んどけ！ よくそんな間抜け面晒せるもんだ。見えてないだろうって？ ぼくらいいになると見ずとも分かるのさ。

いいかいよくよく聞いてくれ。今から大事な話をするからね。君たちの命にダイレクトに関わる大事な話さ。はい、全国のパパさん、姿勢正したかな？ 話半分に聞いても構わないよ、その場合命の保証はしかねるけどね！ 皆々さん準備は出来た？ じゃあ言うよ、『黒衣の天才はヴォルデモートと手を組んだ』！ もう一度言っておこう、『黒衣の天才はヴォルデモートと手を組んだ』！ ヴォルデモートって言葉が嫌なら、例のあの人でも闇の帝王でも構わんさ。

いいかい、この意味が分かるかい？ かつての闇の時代を知っている人間には、この悪夢が理解出来るだろう。闇の時代を歩んだ者は、ぼくの言っている言葉の意味が分かるだろう。戦争？ 違うよ。これは統治だ。アルバス・ダンブルドアはもう死んだ。ぼくらを止められる者がいるならば、ぼくらの前に立ち塞がる物好きがいるならば』そこで少年は言葉を切り、不敵な笑みを深くした。

高らかに。声を限りに、張り上げる。

『いくらでも掛かってくるがいいー！』

——午後六時四十四分ちょうど。イギリスのあらゆるところに出現したモニターは、現れたときと同様に唐突に掻き消え、『ロンドン・マジック・タイムス』は、先ほどの二分間が夢だったように、変わらぬ音楽を流し続けていた。

しかし、今の二分間が夢でも幻でも幻聴でも幻覚でもないことは、確かに私が、私こそが、ルーファス・スクリムジョールが！ 確かに理解した、理解した、理解した！

至急会議を開く。この先どう振る舞うかを決定付けねばならない。あんな無茶苦茶な放送を、まさか魔法大臣が信じるのかって？ 信じるに決まっている。

幣原秋の恐ろしさを、私はよく知っている。かつての部下として、幣原秋をよく見知っている。あれの異常さを、異質さを、とんでもなささを、あの、切れ味を！

幣原秋の弔辞を読んだのは、私なのだぞ！

——ルーファス・スクリムジョールの手記より抜粋

短編 梓視点 直兄の話（上）

——魔法処、四月。

薄水色の空は高く澄み切る大安のこの佳き日、しかし場の空気は不穏なざわめきに満ちていた。幣原梓は母に手を握られたまま、黒の瞳を見開いて、七つになる兄の姿をじいと見る。壇上でこの場全員の注目を集めている張本人である梓の兄、幣原直は、初めは驚いたように背中を強張らせていたが、やがて力なく肩を落とした。

梓の頭上で、言葉が忙しく飛び交う。

『幣原の小倅が』

『これで当代は安泰か』

『——否、彼は』

『彼が次代当主であれば全てがまああるく収まったのに』

『本当の当主はその従兄弟』

『——嗚呼、それはかあいそうだ』

魔法処、入学の儀。新入生の肩に黒の衣を着せかける儀式。その裏地が、鮮やかな桜色に『通常は』染まる筈であるというのに——幣原直の細い肩に乘せられたそれだけは、他と一線を画す色合い——純然たる『金色』を示していた。

梓の手を握る母の指に、力が籠る。小さな梓の手を折らんばかりのその力に、梓は兄から目を離すと母親を見上げた。

母は、梓のことなど気にも留めず、梓のことなど眼中にないという瞳で、唯。

直を見て、嗤っていた。



幣原直は、幣原梓の三つ上の兄である。二人の男兄弟として、直と梓は育てられた。

幼い頃、魔法処に入学するより以前から、直はすこぶる才があると親族からも評判であった。難解な術書を絵本のように読み解き、幣原

の血筋に数代に一人発現する『予知夢者』の能力も得ている。次期当主としての資質は余すほどに持ち合わせていた——本物の次期当主よりも。

直より二つほど歳上で、直や梓の従兄弟に当たるその彼が、一切の才覚にも恵まれなかったということは、ない。しかし、なけなしの才能を無自覚で踏み躪ってしまうほどに、幣原直は誰の目にも明らかに『才能ある者』であった。

梓は、そんな直と従兄弟、そして腹に一物ある親族らを見て、育った。

直は、弟の梓に対しては、優しくかった。勝手に屋敷を出ることは許されてはいなかったが、時折悪戯っぽく「内緒だからね」と微笑んでは、梓の手を掴みひらりと屋敷を抜け出して、色々なところに連れて行ってくれた。海も、花火も、夏祭りも。魔術の才を持たぬ人との交流も、全て直が教えてくれた。直に、教えている自覚はなかっただろう。ただ『遊び』に弟を付き合わせていただけだ。それでも梓は、直が構ってくれることが、とても嬉しかった。

父は、当代幣原家当主の弟だった。次男ということが、きつとあの人を苦しめていた。矜持が高い人だったから。そう、梓は回想する。兄よりも当主に相応しいのは自分だと、酒が入るといつも熱弁を奮っていた。時折、ゾツとするほど冷たい目を子供に向ける人だった。愛情の欠片もない、家具を見るような瞳。その瞳が兄に注がれるたびに、梓の身が震えた。止めてくれ。あなたの子供は、僕の兄は、あなたの自尊心を満たすための道具ではないのに。

「……直、兄」

梓の声に、直は顔を上げた。座敷から少し離れた縁側で、本日の主役であるはずの直は、一人ぼんやりと夜風に吹かれていた。四月の夜風は、まだ肌寒い。というのに直は、随分と薄着であった。

「かぜ、ひいちゃうよ」

梓が差し出した羽織を、直は受け取らなかつた。軽く身じろぎをして「いらない」と言うと、梓から目を離し、そのまま空を見上げる。少し躊躇って、それでも兄の細い肩に上着を羽織らせた。そしてそ

の隣に腰掛けると、同じように空を見上げる。屋敷の屋根瓦と、屋敷林に囲まれて、広々と続いているだろう空は狭く小さい。少し放れた座敷からは、まだ華やかな笑い声が漏れ聞こえてくる。

「……梓、お前だけでも」

ふと、直は呟いた。名前を呼ばれた梓は、目を瞬かせて兄を見遣る。闇夜に融ける黒髪と、ぼんやりと光る白い肌。その唇が言葉を紡ぐ。

「お前だけでも、この家から出してあげられたらなあ」

——それは僕の台詞だよ、直兄。



「お兄様に勝ち目はもう、ないでしょうね」

幣原凜は、大人びた眼差しでそう言った。「そうかなあ」とぼやつと呟く梓に対し「どうして分からないの、梓さん」と睨む。その目を受けて「そうかもなあ」と言い直した。

直が魔法処に入学して、三年。梓の時は、何の波乱もなく入学の儀が終わった。十に差した兄の評判は目覚ましく、きつと誰もが、幣原直に期待していた。

梓と同じ年の幣原凜は、次期当主である従兄弟の妹である。梓にとって凜も従姉妹である筈なのだが、その実感は薄かった。

「もう、どうしてあなたはそうふうらと生きていられるの。直お兄様のことは興味ないの、心配ではないの」

「興味もあるし直兄のことは好きだけど、心配はしてないかなあ」

呆れた、とばかりに凜は額を押さえると「凜はあなたのことが心配です」とため息を吐いた。それでも、梓の言葉は嘘偽りない本心だ。「だって僕が心配したところで、直兄にもあの従兄弟にも、何の益もないんだよ。直兄は、勝手にどうにかするだろう。褒められたり疎まれたりして大変だなあ直兄も、とは思うけど」

幣原直の登場で、今まで燻っていた火種が燃え広がったと言うべきか。本家直系の従兄弟を擁する派閥と、直を推す分家衆の派閥。大人たちの策謀渦巻く様を見て、物思わぬ子供らではない。

「従兄弟に勝ち目なんて初めからなかったんだよ。勝負にすらなっていない、あんなの従兄弟の独り相撲さ。直兄は、従兄弟のことなんて眼中にすらないよ。君のお兄さんも可哀想にねえ」

梓のその言葉に、凜は一瞬燃える光を瞳に浮かべたが、すぐさまその光は鎮火した。

「……そうね。お兄様はかわいそうな人。いくら張り合ったところで、直様が兄を好敵手だと見做すことは決してないのに。哀れで、酷く——かわいそう。……でも、梓さん」

齒痒い顔で、凜は言った。

「お兄様は確かに小者ですが、兄を推すお父様のことだけは、決して侮らないでくださいね」

嫌な予感がするのです、そう言う凜に、軽く返した。

「そんなことを言ったところで——僕に出来ることなんて、何一つないんだよ」

——凜の真意を、梓が知ることになったのは、それからおよそ一年と少し経った、夏の日のことだった。



その日は、ひぐらしが鳴いていた。梅雨が明けてそう間もない、七月の話だ。

魔法処から屋敷に帰ってきた直を、母がいつになく強張った顔で呼び止める。梓は「遊んでらっしゃい」と言外に近付くことを禁じられたが、それでもなんだか気になった。

兄とは部屋を同じくする。手先が器用で発明家気質の兄は、気が向くと様々なものを作っていた。その中に確か、気取られることなく盗聴に使えるようなものもあった筈だ——兄はそのつもりで作った訳ではないのだろう。まあ何事も、悪用しようと思えば何だって出来るのだ。

部屋からそれを持ち出すと、床下に潜り込む。座敷の真下まで迷いのない足取りで進むと、地面に背をつけ寝転がった。床下からマイク

を当てると、耳を澄ませる。まもなく、父の声が聞こえてきた。低い、感情の機微を感じさせない無機質な声だ。

『……来たか直。座りなさい』

『……はい』

父に応える、兄の小さな声。子供の軽い足音と衣擦れの音。微かに拾うざわめきは、この場に両親と兄以外がいることを如実に示している。

『こんにちは、直。元気かな？』

それは聞き慣れぬ声ではあったが、決して聞き覚えのない声ではなかった。見えぬ場所であるにも関わらず、梓は一瞬身を強張らせ、そして密かに息を吐いた。梓にとって伯父にあたる男——現在幣原家当主にあたる男の、声だった。

『——お陰様で』

『それは重畳。君の噂は聞いているよ、直。君の伯父としても誇り高いことだ。お父上もさぞかし満足していることだろう』

『——兄上。直を呼びつけて、話と云うのは一体何なのですか』

父の声。その上から、窘めるように柔らかな、それでいて感情の読まさぬ声が被さった。

『まあそう話を急ぐものではないよ、薫。可愛い甥っ子と話をしたいという気持ちだが、君には解らない？』

その言葉に、父は黙り込む。

『でもまあ、薫の言葉も尤もなものだ——幣原本家当主も、暇な役職じゃないからね。『魔法処』理事というのも、なかなかどうして面倒な仕事だ』

その言葉で父が殺気立ったことは、姿が見えない梓にも容易に想像出来た。本家当主の席を、喉から手が出るほどに欲しがっていた父なのだ。梓にも判ったことを、本家当主である伯父が判らない筈もない。いや、全てを判った上で、伯父はわざとそんな挑発的な言葉を吐いているのか。

『兄上』

『今にも人を殺しそうな目で見ないでよ、薫。悪かったよ、本題に入る

う。——直の話だ。我が『魔法処』で最優秀の生徒にね、一ついい知らせを持ってきた。きつと、薫も気に入ることだろう』

『……何ですか』

『なあに、身構えることはない。簡単なことさ——交換留学、という言葉葉くらいは知っている?』

ざわり、上で空気が揺らぐ。荒れる空気に一切構うことなく、伯父は楽しげな口調で言い放った。

『幣原直。この九月から英国魔法界随一の魔法学校『ホグワーツ』に行く』

——それは、命令し慣れている人間の声だった。



直が日本からいなくなっても、梓の月日は何も変わらずに過ぎて行く。直のように飛び抜けて優秀とは決して言えないまでも、とんでもなく落ちこぼれることもなく、ただふらふらと梓は『魔法処』で生きていった。

兄について、時折上級生やらに尋ねられることがある。その時も梓はのらりくらりと躲し続け、年月が経ち人々の記憶が薄れるごとに、それもどんどん減っていった。

それでも梓は、直を忘れることは決してない。梓だけではない、幣原姓を持つ者にとって幣原直は、たとえ遠い異国の地に追いやったところで、記憶までもやすやすと追いやれる存在ではなかった。次期当主である従兄弟は、この隙に追いつけ追い抜けと発破を掛けられていたが、その努力はむしろ空回りしているのではないかと梓の目には映った。だからと言って、それを忠告してあげる気にはならない。下手にそんなことを言及すれば、絞め殺されかねない。そんな危うさと狂気を、従兄弟は秘めるようになってきた。

一年に一度、夏の長期休みに帰ってくる兄と会うことが、いつしか唯一の楽しみとなった。本家に足を踏み入れ、当主である伯父の前で淡々と一年の成果を報告する直。誇りを滲ませる父母と、鋭い瞳で直

を見据える伯父。殺意と敵意を隠しもせず直を睨みつける従兄弟。従兄弟の妹である凛は、いつも目を伏せ身を小さくさせていた。禍々しいものが満ち満ちた、大人たちの思惑が絡み合った、揮発性の爆薬が漂う、なんとも息苦しい場であった。

涼しい筈の座敷を離れ、真夏の日差しの下に出た兄は、解放されたとばかりに息を吐く。直と共に川べりを歩く夕暮れの時間が、梓はいつとう好きだった。直がどう感じていたかは定かではないが、恐らく嫌われてはいなかっただろう。無邪気な好意を寄せる、害のない弟。きつとそう、思われていたはずだ。

「直兄、元気にしている？」

「ああ、うん……まずまず。っはは、それにしてもまあ、言語の問題がね……と言つても、梓には関係ないかも。わざわざ『外』に出る必要もないし……日本は随分と保守的だ」

「ふうん……外から見たら、そう見えるんだ」

見えるよ、と呟いた直の瞳は、幣原家の未来をきつと捉えていた。幣原の行く末を危ぶむ目だった。危ぶみながらも、決して忠告などしてやるものかと――崖縁に立っていることに気付かぬ愚か者を、憐れむ瞳だった。

幣原家も、日本魔法界も、全て無くなってしまえばいい。

そんな思いを孕んだ、眼差しだった。

祭り囃子の音に気が付いたのは、直と梓、ほぼ同時だった。そうか、そう言えば、と、実家の予定表を思い返してふと思う。幣原と同じ程に日本魔法界で有力な家系、日本の神社を束ねる一条の家が主催するお祭りが、確か今日だった。直もその発想にやすやすと辿り着いたのだろう、通りに貼られた和紙の家紋を見て「一条か」と小さく呟いた。「直兄、見て行く？」

「……そうだね、少しくらいはいいだろう」

神社へと続く、長い石造りの階段を、ずっと上る。両側には灯籠が、ぼんやりと灯を揺らしていた。夜の帳が降り切ると、もっと明るくなるのだろうか。

「おや、幣原んとこの直くん、帰ってきてたのか」

「五行の和泉さん、お久しぶりです」

「やあ、直くん、ご無沙汰だね」

「どうも、三ノ宮さん」

道行く人が兄に目を留め、兄も律儀にそれぞれに返して行く。この兄は意外と記憶力が良く、その辺りも大人達に気に入られる要因の一つだった。梓には決して真似出来ない。興味のないことを覚えておくのは、梓が最も苦手とすることだった。

階段を上り切り、最後、ひときわ大きい鳥居をくぐると視界が開けた。笛と太鼓の音は、奥の神楽殿から聞こえてくる。鳥居から横拝殿までの間には、ずらりと屋台が立ち並んでいた。日本魔法界とは関わりのないであろう、一般人の姿も数多い。雪洞ほんぼりと行燈が、黄昏の時間を静かに照らしていた。

「迷子になるなよ、梓」

「ならないよ、もう子供じゃないもの」

「どうだか。お前はすぐに何処か行ってくつて、凜が嘆いていた。……ほら、手。握っておいてやるから、出して」

しぶしぶ出した手を、直は掴む。その手は小さく薄く、それでいて梓よりは一回り大きい。

——直兄がいるのに、迷子になんてなる訳がないじゃないか。判ってないなあ、そう内心で呟くと、ほんの少しだけ笑った。



日が落ち切ってからが、祭りの本番だ。紐で頭上に結わえられた提灯が、橙色を灯している。

これから奉納される神楽に、人の流れが変わった。直も興味を惹かれた顔つきで、神楽殿のある方角に目を遣っている。「行く？」と促すと、直も僅かに目を細めて「そうだね……行こうか」と柔らかに微笑んだ。その表情が、背後から掛けられた冷たい声に凍りつく。

「直」

凍りついた直の表情が、やがて無表情に融けた。ゆつくりと振り

返った直は、その顔に笑みを湛えてはいたが、しかし視線は鋭い。

「——おや、来られていたのですか、律様」

直と梓の従兄弟に当たる男が、幣原本家当主の血を継ぐ男が、立っていた。その隣には、俯き居心地悪そうに佇む凜の姿。外面だけでも穏やかな笑みの直とは対照的に、従兄弟はにこりともしない。瞳に映るのはただ、誤魔化しようのない敵意のみ。

歩みを止めた梓らを、人々は邪魔そうに迂回して行くが、何人かはハツとしたように、あるいは面白がって、不躰な視線を向けては歩き去って行く。

「何か御用でしょうか」

「……御用か、と？ 用が無かったら従兄弟に声も掛けてはいけないうのか？」

「いえ、そういう意味では」

直が、どうこの場を無難に切り抜けようか頭を回していることは、梓にも判った。笛の音が、神楽舞が始まったことを知らせている。腹の底に響く太鼓の音も、梓の耳にはどこか遠い。

「そっちはどうだ」

「……お陰様で、楽しいですよ、本当。こんなところ、帰って来たくない程に」

従兄弟の瞳が静かに細まる。引くことなく、直はじつと従兄弟を見返した。

「どうして、お前なんかが」

「——さあ。それが」

薄っすらと直は笑うと、躊躇いもなく残酷な一言を叩きつけた。『才能』ってやつの違いなんじゃあないですか？ 僕にはよく判りませんがね」

直は従兄弟から目を切ると、踵を返した。梓の手を引き、従兄弟に背を向け、歩き出す。

梓が振り返ると、そこには燃える瞳で直を睨む従兄弟がいた。



「……ねえ、梓」

直の声に、梓は課題の手を止め振り返った。梓の両肩に手を乗せた直は、梓の頭越しに文机の上の書物を一目見ると「お前、黄道座標と銀河座標間違えてるぞ」と軽い口調で指摘する。

「ああ、成る程。道理で計算が合わないと思った」

「そういうミスは変わらずだなあ。どれ、見せてみる」

「十一で魔法処を辞めた直兄に、果たしてこの高度な課題が理解出来るかどうか」

「かつての魔法処切つての神童を舐めるなよ。僕にばかりとんでもないレベルの課題を押し付けてきて、理事の職権乱用だよ」

「生徒のレベルに合わせた教育を、っていう意味じゃ、最適な教育者だったのかもしれないね……つと、僕に何か用だった？」

梓の問いかけに、直は「あつ、そうそう、忘れてた」と軽い調子で呟いた。梓の肩から両手を離すと、少し言い淀むように髪を掻く。

「どうしたの」

「……いや、その。あのさ、梓」

「どうしたの、改まって」

「……僕がもし、ここから逃げたら、お前、どう思う？」

梓は黙って直を見つめた。直はしばらく梓の目を見て堪えていたが、やがて「……ごめん、もう無理」と目を逸らす。梓は淡々と呟いた。

「僕個人としては、直兄には是非ともこんなところから逃げて欲しいけどね」

「……本当に？ 本当にそう思っているのか？」

「僕は僕の利になる嘘しか吐かないよ。直兄こそ、よく知っているでしょっ」

「ああ……そうだな。お前は変わらないから、僕はいつも安心するんだ……」

直はそう言うと、小さく微笑んだ。

——当たり前でしょう、直兄。

僕が直兄を裏切ることなんて、それこそ天地がひっくり返ってもあり得ない。

「急に、というか、やっと、というか。どうかしたの？」

むしろもつと早く、その決断に至っても良かったのではないかと思う。まあ、直はそういうところで我を通し切れぬ真面目なところがあるから、仕方ないと言えば仕方ないのかもしれない。

もし、直が日本魔法界からも幣原家からも逃げたのなら。伯父がわざわざ遠い異国にあるホグワーツに直を留学させたのは、直のよすがを幣原家以外にも作らせるためだ。直が日本魔法界を『自ら』捨てる決心を固めさせるためだ。伯父の思惑に乗るのは癪だが、しかし幣原から逃げた方が、直はきつと幸せになれる。それなら、梓は手放して応援しよう。

たとえ会えなくなっても、直が幸せでいるのなら。

梓にとって、それが一番のしあわせだ。

直は照れたように頬を緩ませ、素朴な声で「内緒だよ」と言い、その一言を口にした。

「守りたい子が、出来たんだ」



現幣原家当主、幣原朔が齢五十を迎えるのは、現当主の息子である律が、十九になる頃だった。直が十七、梓が十五の時だ。

幣原家は、当主の身に何かが起こらぬ限りは基本、五十で隠居が筋だ。当主継承の儀は、当主の生まれ月に合わせて冬に行うことにした。当主継承自体は、今までずっとゴタゴタしていたとは思えないほどにすんなりと進行する——筈だった。

起こる筈のない番狂わせが起こってしまった。

幣原直が、日本魔法界に帰ってきたのだ。

傍に、身重の妻を従えて。

幣原本家当主は、幣原直の帰還を受けて、次期当主を急遽変更。

当主の冠は、幣原直の頭に載せられた。



「……あれだけ、嫌がっていたのに。どうして？」

「僕が望んだ訳じゃない……と言つても、結局選んだのは僕だから、その言葉に説得力はないんだけど」

梓の問いかけに、直は小さく息を吐いた。かつて直と梓が使用していた部屋で、二人は向かい合っていた。部屋は、窃視、盗聴、物理的あるいは遠隔的な攻撃に対する防壁で、対魔法、対非魔法共に念入りに練り上げられている。現幣原家当主である幣原直が保証する、究極なまでに閉じられた空間だった。

「結局のところ、従兄弟には悪いことをした。従兄弟の律には、本当に……どれだけあの人の人生を捻じ曲げたのかを考えるとね、気が重たくなる」

「……自覚、あったんだ」

「そりゃあね。……ねえ、梓。僕は一体どうすれば良かったんだろうね」

直の言葉に、梓は静かに返した。

直が望むであろう答えを。

「日本なんかに戻って来なければ良かった。幣原なんて継がなければ良かったのに」

その言葉は、直が欲した答えであったにも関わらず——受け取った直は、酷く悲しげな顔をした。その変化に、らしくもなく動揺する。

「……そうだね」

「……両親には絶縁状を叩きつけたと聞いた」

「うん。アキナに対し刺客を放ったようだね、それで一気にこれまでの情や恩が冷めた」

「ああ……そういうことか」

それは親子の縁も切りたくなる。この兄が今までどれだけ振り回されてきたか、一番身近で見てきたのは梓なのだ。

「直兄の好きなようにするといいいよ。奥さんと、子供と、三人で。幣原

「からも離れてさ」

「そうさせてもらおうよ。……ところで梓。お前に一つ聞きたいことがある」

「何……っ!?!」

気がつけば、羽織の衿を掴まれ押し倒されていた。喉元に硬い木の感触。日本魔法界で生まれ育ち、きつと骨までも埋めるであろう梓が、決して持つことのない存在——杖。

「直、にい……?」

「……あの従兄弟をあそこまで狂わせたのは、お前だな」

口調は断定的だったが、瞳は否定して欲しがっているように揺らいでいた。

「気付きたくもなかった。今でも信じられないよ。お前を、信じていたのに。……一体、どうして? どうしてそんなことをする必要があった? 答えろ……答えろ、幣原梓」

小さく、直は頭を振る。前髪がさらりと揺れ、目元を覆い隠した。しかし下から覗き込む体勢にある梓にとって、伏せた直の表情は丸見えだ。奥歯を噛み締めた様子も、力なく顰められた眉も、手に取るように判る。

梓は。

「……どうして? 直兄、今、どうしてって聞いたの?」

自身の衿を掴む直の左手を掴み直した。彼の着物の衿を掴み、逆に引き寄せる。

「だって直兄、日本魔法界も幣原家も、何もかも嫌いじゃない。——だから」

直の揺れる瞳を見ながら、梓はにい、と嗤った。

「お望み通り、壊してあげようかなって思っただけだよ」

直の眼差しが、困惑から恐怖に、そして理解出来ないものを見るものに変わるのを。

ああ、仕方ないかな。そんな気持ちで、見つめていた。



——一番最初は、多分、あの時だ。

直が、魔法処に入学した、あの時。直を見ながら嗤う母に、梓は言った。

『直兄を駒にしないで』。

その言葉は、すぐさま父に伝わった。梓を呼び出した父は、あの無機質な瞳でこう言ったのだ。

『なら直の代わりに、お前が駒になるか？』

梓は——それを了承した。

梓が、四つの頃の話だ。

直が決して知り得ない、過去である。



『かあいそうだねえ、律様』

そんな言葉を背後から掛けられた従兄弟は、驚いて梓を振り返った。従兄弟の先ほどまでの視線の先には、金色の衣を無造作に纏う直の姿。従兄弟の、変わらぬ桜色の衣を見、笑った。

『お前——梓だな。何をしに来た』

『そんな目で見ないでくださいよう。僕はただ、律様に伝言を伝えるに
来ただけなんですから』

『——伝言？』

『はい』

目を細め、梓は言葉を紡ぐ。

呪いと狂気を織り交ぜて。

『ご当主の伯父様から、律様に。『直兄に負けたら承知しない』だそうですね——』

梓の言葉に、従兄弟の顔が紙色になる。五つ年上の従兄弟、律の、真っ黒な瞳を覗き込んで、梓は嗤った。

『がんばって、くださいね？』



追い詰められた従兄弟の心を後押しするのは、そう難しいことではない。一步、また一步。十三の階段を上り終えるのは、きつとすぐ。

「でもねえ、直兄。あの従兄弟に止めを刺したのは、直兄だよ」

それでも、まだ従兄弟の精神は堪えていた。たとえふらつきながらも『次期当主』という肩書きに支えられていた。

それなのに。

「直兄が、あの従兄弟の最後の支えまで奪ったんだ。無自覚の才能っていうのは、こわいものだねえ」

「——お前、全部知っていたのか」

「全部が何処から何処までを指しているかは定かではないけど、うん、きつと知っていたよ。直兄が帰ってくることは、予想外だったけれど。伯父様が——『前』当主様が、既にあの痴れ者の従兄弟に見切りを付けていたことも。あの従兄弟の無意味な努力も、それを平然と踏み潰してしまう直兄の才能も、僕はきつと全てを知っていた」

畳に背をつけたまま。

梓は手を伸ばすと、直の右手中指に嵌まる指輪に触れた。直は顔を顰める。

「幣原のぐ当主様。ねえ——どうして、帰って来てしまったの。ここに、あなたのしあわせはないよ。どうしてまた、縛られに来てしまったの」

従兄弟を、想う。梓が壊し、直が止めを刺したあの従兄弟は今、死んだように日々を生きていた。あの虚ろな眼窩を、梓はきつと一生忘れない。

「——ぼく、は」

梓の衿から、直の手が外れた。左手で顔を覆った直の薬指に、指輪は無い。

「直兄さえ、いなければ。こんな日本魔法界も、幣原も、全て壊してやれたのに。——どうして直兄、帰ってきてしまったの」

従兄弟に見切りを付けた伯父が、直がいない状況下の幣原家で次に

目を付けたのは、梓だった。そこまで、両親は読んでいた。『駒になれ』とは、そこまでの意も含んでいた。

「僕が当主であれたなら、直兄が嫌った幣原も、日本魔法界も、全て、壊してあげたのに」

杖は既に、梓の首元から逸れていた。直の指に引っかけただけの杖。

ああ、どうして。どうしてこうなってしまったのだろう。

「ねえ、教えてよ、直兄。——僕こそ一体、どうすれば良かったの」

短編 梓視点 直兄の話（下）

直と別れ、十年余りの月日が過ぎた。直は子供を授かったらしい。初めの子は流れたと聞いていたから、その知らせは喜ばしいものだった。『秋』と名付けたその子を、直はきつと日本魔法界には触れさせない。梓のみに届いた書簡は、梓が目を通すとすぐに燃え、灰となった。直とは、あの日を最後に会っていない。自分が常人とは少し違う人間だということは、承知していた。自身の持つ狂気に、直の家庭を巻き込む訳にはいかない。年に数通の書簡を行き来させるだけの希薄な関係に、それでも縋った。

梓も妻を娶り、子を授かった。と言っても恋愛婚ではない。相手は従姉妹であり幼馴染の幣原凜だった。直はきつと、子供に当主権を渡さない。ならば、じきに当主は梓へ渡る。そう見越しての政略婚であることは間違いなかったが、凜はしあわせそうだった。

「梓さんは危なっかしいので、誰かが付いてあげなければと思っています。凜で良ければ、お相手仕ります」

「……うん、よろしく」

凜の兄である従兄弟は、親族の中で『いないもの』として扱われた。その位置に従兄弟を押しやった要因の一つは、梓だ。きつと凜は気付いていただろう、梓の仕出かしたことに。それでも何一つ聞いてこない凜に、梓も甘えたのだった。

やがて授かった一人息子に『桜』と名付けた。秋より二つほど歳下となる子だ——その筈だ。胸に宿る暖かさが、親が子を想う情であるかは梓には判らない。思えば、父母からは情らしい情を掛けては貰えなかった。それでも、生まれて来た子に罪はない。幣原の淀みは、この子にまで受け継がせたくはない。

その日は、憎たらしいほどに空が透き通る日のことだった。カタン、と音を立て、梓の文机に一つの小包が『出現』した。送り主は幣原直、兄からだった。

いつも書簡の兄が、小包とは珍しい。一体どういう心境の変化だろう。そう楽天的に思っていたのも、包みを開くまでの間だった。

中には、次期幣原家当主を梓に認めるといふ当主の認印と、数束の書類、幾ばくかの手紙と、幣原家当主の指輪が入っていた。

「……………」

震える手で手紙を漁る。そこには兄の流麗な字で、梓に宛てた文が綴られていた。

『僕の弟、梓へ』

きつとお前は驚いていることだろう。お前の驚く顔の記憶が薄い。昔から、あまり驚かない子だった。いつも、周りとは一段違う場所から、世界を見渡している奴だった。

今手紙を読んでいる頃、僕は死んでいるだろう。この包みが届いてから、十日。十日は待つてくれないだろうか。何、僕を殺した奴とお前が対面することを避けるためさ。お前の命をみすみす摘み取られる様を見過ごすのは、僕だって嫌だ。一応忠告しておくが、絶対に僕の仇を取りに行こうなんて考えるなよ。そのためにお前に当主を投げ渡すんだから。まだ小さい桜を、何も判らぬまま幣原の真つ暗な部分に放り込むのは、お前だって忍びないだろう。

僕とアキナの死を、どうか秋に伝えてやってはくれないか。僕らの住処は、秋にしか辿れない。そして、秋をどうかあの両親から守ってやってはくれないか。秋の才は僕より強大だ。知れば両親はきつと秋を欲しがる。もう秋も十五だ、英国に足場はあるし、日本のことなど知らずに秋はあちらで生きて行くだろう。生きる理由も作ってあげたことだしね。

梓。最後にもう一つ、頼みがある。一冊の本を探してくれ。僕の家にあるはずだ、あいつはきつと見つけきれない。幣原の血に反応する代物だ。そして、その本を守ってくれ——頼んだよ。

ねえ、梓。僕は結局、最期までお前のことを理解は出来なかった。弟なのにね。ずっとお前は、僕の中の『よく判らない』という場所に居座り続けた。

それでも、僕はお前のことが——』

最後まで読むことなしに、文を閉じた。文と、幣原当主の指輪を懐に放り込むと、ふらふらと部屋を出る。おぼつかない足取りに、少し驚いた。自分でも、動揺することがあるのか。

「どうかされました、梓さん？ ……大丈夫ですか？」

梓に気がついて、凜がぱたぱたと走り寄ってきた。顔を覗き込んでそう尋ねた凜に、一目で心配されるほど顔色が悪いことに気がつく。

「……今すぐ幣原本家に行く。準備をして」

「えっ？」

「桜も連れて行く。早く」

「ちよっと！ 一体何の話です？ 急に——」

「直兄が死んだ」

自分の声は、何処か遠くから聞こえて来たようにも感じられた。



直の死の知らせは、狭い日本魔法界ではすぐさま回った。その翌日、従兄弟の死も『つい』で回って来た。直の死を聞き、止める間もなく飛び降りたのだと聞く。直の死が、十三階段の最後の一段を上らせたのだ。あの人は本当に最期まで、直に振り回され続けた、かわいそうな人だった。

幣原直の住処には、幾重にも結界が巻かれている。一番強大であったのが『二人の血を引く子しか辿り着けない』そういう類の結界だった。その後、秋が足を踏み入れたことにより、梓たちもその地に訪れることが出来た。光景に、思わず息を呑んだ。

かつて家があった場所で、瓦礫に囲まれながらも両親に縋って慟哭していた小さな少年。その家を粉々にしたのが少年自身であったということを知り、また驚いた。

目を改め見た秋は、意気消沈し、顔は青褪めてはいたが、雑事を淡々とこなす細い後ろ姿に、危うげなものを感じ取った。今の状態の子から、仕事を取り上げ一人にするのは酷くまずい。

気を抜けば、梓の知らぬところで秋に擦り寄ろうとする両親も、梓

の悩みの種だった。何度か無理矢理割って入ったこともある。秋が聡い子であったのは幸いした。引き取ろうと誘いを掛ける両親に一言「どうして父はあなた方と一切の交流を持つとうとしなかったんですか？」と言い放った秋。あの時の両親の顔は、なかなか愉快で忘れられそうにない。

葬儀が終わり、当主継承の儀も恙無く済ませ、幣原家本家の一室で、梓はやつと息を吐いた。今までのらくらと生きてきたツケか、忙殺されるのは苦手だった。

ふと思ひ出し、指輪を懐から取り出した。行灯に照らす。父が、そして従兄弟が、あれほどに欲しがっていた当主の座。こんなところに座ったところで、人は何一つ変わらないというのに。指輪はやつぱり、ただの指輪だった。苦笑しながら指輪を嵌め――

世界が変わった。

視界が塗り潰される。自宅の居間から、見知らぬ家へ。此処は何処だ？ 身をぐるりと囲む、高い高い焦げ茶の本棚。空はただ青く、澄んでいる。焦点が合わぬ視界はぼやけ、判別が出来ない。その中、無邪気な少年の声だけがはつきりと輪郭を伴う。

『凄いな、魔法って！ 何でも出来ちゃうみたい！』

誰の声だ？ 聞き覚えがあるような声。ふと乱暴に風景は拭い取られ、気付けば一人の少年が自身の前に正座をしていた。一瞬合ったピントに、ハッと息を呑む。その少年は、幼い頃の直だった。

自身の手が持ち上がる。右の中指には、本家当主の指輪が嵌っている。はつきりした声音で、目の前の直に告げた。

『幣原直。この九月から英国魔法界随一の魔法学校『ホグワーツ』に行け』

その視界がひび割れる。ぐしゃぐしゃに破り取られた世界が、新たな風景を構築する。見下ろす自身。杖を握るその右手にも、本家当主の指輪が光っていた。衿を掴み、誰かを引き倒している。――否、引き倒されているのは、自分だ。

『……あの従兄弟をあそこまで狂わせたのは、お前だな』

――嗚呼。

そうだよ、直兄。

「——梓さんッ!!」

身体を強く揺すられ、我に返った。視界一杯に広がる、凜の顔。慌てて右中指に嵌まる指輪に目を遣った。指輪はただ、そこに在った。

「大丈夫ですか!?!」

「ああ——大丈夫、僕は」

「嘘、嘘……お医者様をお呼びしましょう。きっとお疲れなんです。直様も、お兄様も立て続けに亡くなられたのよ。当然です……」

「そういう凜こそ、疲れている。僕は平気だから、君こそ休んで」

行灯に照らされた凜の顔は、橙の光を浴びているというのに青白い。彼女の両頬にそっと手を触れ「僕は大丈夫」と言うと、立ち上がった。

「少し、夜風を浴びたい気分なんだ」



本家に来たのは、久しぶりだった。鳥居が連なる山の上に居を構える此処は、どこに負けず劣らずの結界と対侵入者用攻撃呪術を敷いている。幣原家当主となった梓は、今後ここで執務を行わなくてはならない。直ほどの我侭は、梓では無理だ。

「直兄……」

呟いた。雪駄を履いて、庭に出る。玉砂利の敷き詰められた間を、飛び石を踏んで、当てもなく歩いた。夏の夜は寝苦しいのが常だが、山の上に位置するこの家は比較的涼しい。着流し一枚では、少し寒い程だった。

息を吐き、空を見上げる。雲が僅かにたなびく空では、淡く月が輝いていた。

かつて見た空は、酷く狭かった。それでは、今はどうなのだろう。右手の中指に嵌まる指輪を、左手で覆った。目を閉じ意識すると、ふと想念が流れ込む。その声に、耳を澄ませた。

『——秋。お前は魔法使いなんだよ』

聞こえる直の声。間違いない。伝聞ではあるが、この能力は聞き知っている。『過去視』の能力。時を司る幣原の血が引く、異能力。目を開けると、ぼんやりと漂っていた風景は霧散した。

飛び石を辿っていくと、やがて池に着いた。ここが、終着点だ。水は澄んでいたが、生き物はいないようだった。揺らぐ水面には月の影が映っている。梓は足を止めると、その場に座り込んだ。頭を抱えて、息を吐く。

「直、兄……」

風に、庭の草木が音を鳴らす。

月の影が、揺らいだ気がした。

◇ ◆ ◇

行ってくるよ、と言って、家を出た。何処にです？ と尋ねる凜に、微笑み告げる。

「直兄の墓」

梓の言葉に、凜は目を瞠ると「行ってらっしゃいませ」と深々と頭を下げた。

夏の強い日差しが、分厚い緑のトンネルに遮られて地面に木漏れ日を投影する。着流しの懐から扇子を取り出しながら、軽く呟いた。

「今日も暑いなあ」

◇ ◆ ◇

流石に意識が飛んだ時は自分の浅慮に呆れ果てたが、結果的に幣原秋に会えただけ良しとしよう。過去はあまり振り返らないのが、梓の主義だ。

幣原直の住処で、秋は少し困った表情を浮かべながらも梓に紅茶を出した。この子は目の前で困っている人を見捨てられないタイプの人間だ。直と同じく。紅茶を一息で飲み干して「ありがとう」と微笑んだ。

「それより、一体どうしてあんなところに？」

「なんとなく、君に会えるかなあって思っていたんだよ」

秋の顔には、まだ色濃い戸惑いが見てとれた。それも無理はない。本来であれば、梓一人で終わらせたいことだったのだが、秋に案内されないところの家自体に辿り着けないようになっていたのだから仕方がない。

幣原家についていっさいを知らなかった秋に、少し呆れると共に、直の理想を感じ取った。直はきつと、何も知らぬ極普通の子供として生きてかったのだ。息子には決して、自分のようには生きて欲しくなかったのだ。

ほぼ言葉を飾ることなく告げたことに、秋は僅かに青褪めて目を瞠っていたが、それでも飲み込みはとも早かった。梓を一目で思い出したように、記憶力もとても良いのだろう。流星は、幣原直の血を引く子供だ。

数日間、当てもなく一冊の本を探して、やがて隠し部屋の存在に気が付いた。永遠とも言える長い階段を下った先は、恐らくあの小さな少年にとつては酷な惨状だっただろう。

足の踏み場もないほどに粉々になった小物。全てのページがバラバラになった大量の書物。本棚と机と椅子がそれぞれあったのだろうということは、かろうじて残骸の山から見取れた。粉碎されたそれら全てに満遍なく降り掛かった、かつて液体であった赤黒いもの。足元に転がる小物に手を伸ばすと、目を閉じた。途端浮かび上がる、直の死の情景。一人納得して、目を開けると手を離す。

「秋くん、吐くならよそに行つてね」

嘔吐物で汚されては堪らない。ただでさえ酸化し切った血で塗れているというのに、更に汚されては堪ったものじゃない。梓の言葉に秋は「だ……いじょうぶです」と俯き呟いた。そう言うのなら、自分で何とかするだろう。もう子供ではないのだし。

しかし、困った。頭を掻きながら秋に問いかける。

「んー……秋くん。これ、元通りに直せる？ ひとまず、引き裂かれた本だけでも何とかしてくれたらいいんだけど」

「……全部戻せます、大丈夫です」

秋は小さく息を吐くと、杖を抜いた。左利きなのか、とふと目を瞠る。思いもよらぬ、秋と自身の共通項だった。直はきつと気が付いたことだろう。愛らしい息子と、どうしようもない弟との共通点を見つけて、直は一体どう思っただろうか。そう考えると、何だか可笑しかった。

秋が杖を振ると、全てがかかってあったように戻る。まるで逆再生を見ているようだな、なんて感想を抱いた。

「ああ、血は仕方ないよ。そもそも血に魔力は宿るものだしね。しかも幣原直の血なんだし」

拭えぬ血に目を細めていた秋にそう言うと、本棚に近付き一冊の本を手を取った。秋がそろそろ臨界であろうことを察し、声を掛ける。「君に手伝えというのはさすがに酷か。待っていてね、そう長くは掛からないと思うから」

ざつと見てもここにあるのは十五冊といったところか。目を通すくらいならばすぐに終わる。秋は頷くと、その場にうずくまった。身体を小さく丸め、頭を抱える。そうなるのも無理はない。梓ならたえ実の親が殺され、死体が転がっている状況下でもほうじ茶を啜れるが、普通の人間の精神はもつとか細かいものだ。梓の精神もか細いのだが、精神の在り処はきつと人と違っていい。

六冊目に手を伸ばした時、ふと秋が階段を駆け上がって行った。限界だったのだろう。その後ろ姿を横目で追うと、手元の本を戻し、次の本を手取る。何気なしに、周囲を見回した。乾いた血の痕が残る床に腰を下ろすと、そのまま寝転がる。

右手の甲を額に当て、梓は少しだけ目を閉じた。



幣原秋が死んだという知らせは、数ヶ月遅れでこちらに届いた。へえ、そうか。あの少年は死んだのか。直の血を引く者はもういなかった。それどころか、幣原の名を引く者すら、残るは梓と凜、そし

て桜のみ。気がつけば、随分と減っていた。

墓は、英国の方で用意したのだという。ならばこちらでわざわざ葬儀を上げる必要もあるまい。そもそも頼まれてもいないのに、わざわざ墓に名を刻んでやる必要もないだろう。

幣原秋。彼も自身の内の才能に狂った、かわいそうな子だったのか。

才ある者の早逝は、世の定めなのだろうか。ならばダラダラと生き続けている自身は、心の底からの愚鈍であり、単なる昼行灯に過ぎなかったのだ。いつそ従兄弟のように狂って死んでも良かったのかもしれない。

右中指の指輪は、既がない。息子である桜に譲り渡した。隠居老人は表舞台からとつと退いて消え去るべきだ、出来る限り跡を残さずに。

桜はもったいないほど良い子に育った。母親の名のように凜とした、静かな子だった。母親似で、心の底からホツとした。自身に似ては、目も当てられない。今はもう、才能で争う相手もない。数年前とは打って変わり、静かに当主継承は終わった。五行家から二つ歳下の妻を娶り、やがて孫娘も授かった。

どうして、自分がこんな普通のしあわせを手に入れているのだろう。梓はふと、立ち返る。兄の直も、あの従兄弟も、甥の秋も、手に入れることが出来なかった、ごく普通のしあわせ。子を持ち、孫を抱くことの出来る、どこにでもあるしあわせは、自分よりも彼らこそ、受け取るに相応しい筈なのに。

直の本を、パタンと閉じる。直は一体何を思っ、この本を書き記したのか。消し去って欲しいのなら、梓に一言「燃やせ」と言うだけで良かったはずだ。直に命令されたなら、梓は盲目的に従うのに。血の痕をそつとなぞり、息を吐いた。

「……直兄」

ふと、けたたましい警戒音が鳴り響いた。顔を上げる。直の本をいつもの場所に隠すと、立ち上がった。魔法処の守護結界が破られたのだ。そんなこと、今まで数百年起こったことがなかったのに。

「どういふ……っ」

慌てて監視画面を展開させる。モニターにカメラからの映像を同時に接続した途端、殺気を感じた。振り返ると同時に飛び退くも、肩を掠めたナイフの熱さに、思わず顔を顰める。

「……幣原本家には、許可された者か、あるいは幣原の血を引くものしか侵入出来ないはずだけどねえ……？」

肩を抑えて、梓は侵入者に笑いかけた。

頭から黒衣を被ったその侵入者は、ケラケラと嗤いながら頭の装束を取る。梓よりも二十は年若いか。桜と同年代であろう青年の、黒髪に漆黒の瞳、そしてその目鼻立ちには、何処かで覚えがあつた。

「判らないか？ 幣原梓」

「僕は直兄のように、物覚えがよくなかつたからねえ……でも、んん、見覚えがあるような、ないような……桜や凜が君のような不審者然とした奴を入れる訳がないから、幣原の誰かかな……？ 秋くんはもうちよつと大人しい顔立ちをしていたし、そもそも僕が直兄の息子を見間違える筈はないし……ああ、ひよつとして」

誰かの隠し子か、そう思い至つてからは、早かつた。

「僕のあの、どうしようもない痴れ者従兄弟の息子かな？」

「——その言は気に食わないが、如何にも。我が父の名は律。貴様に狂わされ殺された男の息子だ」

ザリ、と草履が畳を踏みつける。梓は軽く息を吐いた。

「日本家屋では、履物は脱いで欲しいものだねえ。ま、あの痴れ者に当たり前の躰を望む方が無茶か。何、言つてくれればきちんと認知したのにさ。君のお父上、何も残さず飛び降りちやうんだもの」

侵入者の瞳が細まる。梓は悠然と微笑んだ。

「——それが、死者に対する言葉か」

「痴れ者を痴れ者と言つて何が悪い。あの従兄弟を痴れ者にしたのは紛れもなく僕だ。まあなんと、人間の脆さ儂さ頼りなさを実感する——とっ！」

眉間狙つて直線に飛んできた小刀を、札を使ってすんでのところまで叩き落す。広い幣原本家、侵入者には誰も気付いていないようだ。

「……いや、とするともしかして、今魔法処でドンパチやってくれて
いる彼らはもしかしてお仲間さん？」

「是。『あの方』の望みと私の望みは合致する部分があったのでな。――
幣原梓。私の主君が一冊の本をお求めだ。引き渡せば命は助けて
やろうとの言――もつとも、我は貴様を殺すから、どっちみち貴様は
死ぬのだからなあ！」

哄笑する目の前の不審者に、肩を竦めた。随分と楽しそうなこと
で。

「あー、本、本ね……日本魔法界も幣原も、全部ぶっ壊してもらって構
わないけど、本は困るんだよなあ――直兄に頼まれたものだからね。
直兄に『守って』と言われた本、だからねえ……！」

扇子を開く。忍ばせていた札を数枚指に挟み込むと、鉄扇を相手に
向け、対峙した。戦闘など、何年、何十年振りであろう。ひよつとし
たらかつて魔法処で学習した切りであるのかもしれない。そんな内
心を顔には出さない。ただただ静かに、嗤っついていよう。

梓が嗤うそれだけで、人はそうつと狂うのだ。

「本はやれないけど、存分に戦ってあげよう。君のお父上を壊し尽く
した男だ。相手には申し分ないだろう……あの従兄弟の狂った情念
は、僕が仕立てた。――来いよ、若造」

静かな狂気のおそろしさを、とくとその身に知るが良い。

「思う存分、壊してやろうぞ」

短編 ライ視点 臆病者の天才の末路（上）

家族を、殺してしまおう。

そう決断してからは、早かった。ふ、と心が軽くなる。心の重荷を全て下ろしてしまったかのような開放感。そうか、俺は、俺のこの思いは、こんなにも重たいものだったのか。

杖だけを持ち、階を上がる。長期入院患者ばかりが集うヤヌス・シツキー病棟。すれ違う看護師は、誰もがこちらの姿を視認しては微笑みと会釈を寄越す。騒めきの中、彼女らの思考が浮かんでは消える。俺が今から何をするのか、何をしようとしているのか、勘づく人は誰一人としていない。

病室の前に立つと、ふう、と息を吐き出した。この六年間、数え切れないほど開閉を繰り返したドアは、何故だか今日ばかりは普段よりも重かった。

分厚いカーテンが引かれた室内は、昼の陽射しを遮り薄暗い。三床のベッドは、奥から母、妹、そして父の順に並んでいる。

後ろ手にドアを閉めると、廊下から差し込む光が途切れた。同時に喧騒も、どこか遠くに沈み込む。世界から切り離されたこの部屋で、思考するのは自分ひとり。

杖を抜いた。シーツの膨らみに杖先を向ける。何も、難しいことはない。杖に魔力を込め、ただ一言呟くのだ。——アバダ・ケダブラと。たったの一步、法というもので引かれたラインの外に踏み出すだけ。簡単なことだ。それだけで、全てが終わる。今まで耐えていた全てを、ここで終わらせることが出来る。

躊躇うものなど一つもない。魔法使いの監獄、アズカバンへ行くことは怖くない——最も、今現在アズカバンが機能しているかは怪しいものだが。であれば、その時はその時だ。望むべくは、介錯は親愛なる友人、エリス・レインウォーターにお願いしたいものだが……：そう多くは望めまい。

俺の不在を悲しむような友も、恋人だっていない。家族だって——家族だって。こんな中途半端なところで儂い生にしがみついている

よりも、きつぱりと引導を渡してやる方がずっと幸せだろう。俺の父は、母は、妹は、怒るだろうか。それならばただ謝るだけだ。同じ所へと行き、ただひたすらに許しを乞おう。

「……………ア」

声が出ない。何ということだ、これでは呪文が発現しない。今まで俺が使うことの出来ない呪文は、何一つとして存在しなかった。おそらくこの先も、現れることはないのだろう。

ああ、しかし、一体どうして。

「ああ……………」

瞬間、気付いた。

気付いた瞬間、涙が零れた。

その場に崩折れ、こみ上げる嗚咽を噛み殺す。絶望の冷たさに、一人静かに身を震わせた。

俺には出来ない。

俺には殺せない。

この先何年掛かっても、俺はこのラインを踏み越えることは出来ない。

見えているのに。知っているのに。俺には向こう側へと行く勇気が出ない。

彼らのように。

エリスのように。

なれていればまた、違ったのだろうか。



嵐のように降り注ぐ賞賛を、当然のものとして受け取った。伝統あるホグワーツ魔法魔術大会で、並み居る上級生を差し置き優勝した四年生。良い注目、宣伝の的だなとは思うがしかし、嫌な気分はしなかった。当時の自分は、その程度には傲慢だった。

ゴブリン製だと言う盾は小さいが、随分と精巧な銀細工の装飾が為されている。その職人技に感心はしたものの、しかし飽きるほど絶賛

されては流石にうんざりもしてくる。その盾を抱えたままの自分に、先ほどから幾度もフラッシュが焚かれている。ここで微笑みの一つも浮かべることが出来れば上出来なのだが、生憎と何年も訓練をサボっていた表情筋が、そう簡単に言うことを聞いてくれるとは思えない。不恰好な似合わぬ愛想笑いを浮かべるよりは、割り切つて無表情に徹した方が数倍マシだ。

人が多い。その分喧しさも相当だ。耳を塞いでしまいたいが、この騒々しさが鼓膜を震わせた故でないことは、長年の経験上重々承知していた。付き合ってきた年数は歳の数だけある。これが、ただの大広間に集まり夕食を取る生徒たちであればまだ良い。しかし今回は、自らが注目されている場面。誰も彼もが自分のことを、ライ・シュレインガーのことを考え、しかもその思考が、無差別に『聴こえる』、言葉というオブラートに包まれることのないそれに、奥歯を噛み締めただ耐えた。

右から左へと、それら心の声を聞き流していたからだろうか。記者からの問いかけに気がつくのが一拍遅れた。訊き返した自分に嫌な顔一つすることなく、記者はにこやかに繰り返す。しかしその内心はお察しだ。

「魔法魔術大会の優勝者には三百ガリオン相当の学問・研究的補助が与えられるということです、Mr. シュレインガー、貴方は将来どのような道に進もうと考えていますか？」

ホグワーツの四年生ごときが、そんなたいそうな将来のビジョンを描いているものか。しかし、そんなことを言えるような雰囲気ではない。

周囲をゆつくりと見回した。自分が何を期待されているのか、じつくりと読み解き、口を開く。

「……そうですね。未熟な身ですが、この英国魔法界最高難度を誇ると言われる闇祓いで、己を磨いていけたらいいなと考えています。

……英国魔法界に、永遠の秩序と安寧を」

熱狂的な拍手が湧き上がった。



ホグワーツ特急を降りた先、プラットフォームには、いつものように母と妹が待って——は、いなかった。少し拍子抜けするもしかし、両親ともに癒師であった故、突然の不在には慣れていた。

きっと急患でも入ったのだろう。妹は今年ホグワーツ入学だ、一人で兄を迎えには来れまい。そう頓着せず、電車を乗り継いで家へと帰り着き、玄関の扉を開け——日常が反転した。

父を見つけたのは、玄関へと続く廊下。母の姿はリビングで発見した。

妹が倒れているダイニングでは、一人の見知らぬ男が我が物顔で、優雅に紅茶を飲んでいた。

目を瞠るほどに美しい容姿を持った、黒い髪に赤い瞳の、壮年の男だった。

「やあ、遅かったね」

その男は、ライを見て極々普通に笑いかけた。この場に似つかわしくない、しかしこれ以上しつくりくるものもないという微笑だった。歳は掴み辛いが、父より多少下だろうか。

「初めまして、私はトム・マールヴォロ・リドル。ヴォルデモートと名乗ったが、君には馴染みがあるのかな？」

知っていた。

その名前を、ライは知っていた。

ここ二十年の長きにわたり、魔法界に関わりを持つマグル、及びそのマグルと関わる魔法使いを次々と殺害した人物——ここ数年は鳴りを潜めていた——闇祓いが何年もその影を追い続け、しかし捕らえたと思えば追い詰めた闇祓いの一族諸共皆殺しにしては、戯れのように去っていくという——『あの』。

冷たいフローリングに倒れ伏す妹に、恐る恐る近付いた。小さなその身体を抱き寄せる。身体はまだ暖かい。自発的な呼吸も見られる。

——死んではいない。生きている。

そのことに、心の底から安心した。

ライの一挙一動を、ヴォルデモートはまるで観察するかのようじつと見ていた。ライは顔を上げると、ヴォルデモートを睨みつける。

「……どういう、つもりだ」

「何のことだい？」

「なっ……惚けるな！ お前がやったんだらう!？」

声を荒げた。意識せずとも聞こえてくる他人の内心、しかし今ばかりは、それを聞き取ろうと尽力する。しかし、ヴォルデモートは取り成すようにゆったりと片手を振った。

「まあ、そう焦るなよ。物事は順番に一つずつだ、そうだらう？ それくらいぐらいは聞いてあげるよ——ライ・シュレディンガーくん？」

瞬間、ヴォルデモートの手にあつたティーカップが爆発した。粉々に砕け散った破片、それとライとを、ヴォルデモートは見比べる。

「魔力の暴走……というわけではないようだね。もう十五歳、自分の魔力くらい自力で制御出来なければ、残念ながらお粗末だと呼んでしまうのも致し方ないかな……」

「……帰れ。……頼むから、帰ってくれ」

ヴォルデモートは目を瞬かせると、楽しそうに笑った。

「私を帰しても良いのかい？ 君の家族をこのようにしたのは、何を隠そう私なのだけれど」

「いい……いいから、帰って……下さい。……それとも」

小さく息を吐いた。握っていた杖を掲げ、ヴォルデモートの眉間に狙いを定める。

「戦い、ますか」

「……いいね、ライ・シュレディンガーくん。君のそういうところを、私は高く買っているんだ」

驚くことに、ヴォルデモートは両手を上げてみせた。いわゆるハンズ・アップの体勢だ。勿論その手に杖は握られていない。

「君は才能ある魔法使いだ。きつと将来、君は望めば歴史にだってその名を刻むことが出来るだろう。呪文学に興味を持てば新境地を発見出来る学者に、魔法薬学を極めれば発明した薬で財を成す資産家

に、変身術を極めれば、ひよつとしたら世界の真理にだって到達してしまえるかもしれないね。君は間違ひなく偉大になれる。スリザリンであればとも考えはしたが、君がグリフィン・ドール生であったところで、君の才が損なわれることはないのね。私は君の才を瑕疵なく評価しよう。

君は素晴らしい才能の持ち主だ。凡夫とは違う、くだらない、低俗で、先人の知恵を土足で踏み荒らすような輩とは一線を画す存在だ。選ばれた人間なんだよ、君は。神から愛された証、ギフトの持ち主だ。そのくらいは自覚していただろう？」

考えたことがないと言えば、嘘になってしまう。自分が何者かである可能性に、期待しなかったと言われれば——自分は人とは違うのだと、そういう考えに取り憑かれたことは、確かにあつて——でも、それは——

「おまけに人の心が覗けるんだってね？　なんて素晴らしいことだろう。誰もが君を羨むだろう。諸手を上げて、君を讃えるだろう。君はその才能一つで生きていける。預言師にも、占い師にも、どうとだつて生きて行けるのにも関わらず、それを良しとせず、才能に甘んじない姿勢、いいねえ、大好きだよ」

ライが占い師にも預言師にもなりたくはないのは、この才を疎んだからだ。生まれ落ちた瞬間からずっと、この能力が心の底から大嫌いだったからだ。

それを、それだというのに——否。
だから、か？

話が見えない。戯言の裏の本心が、何一つとして読み取れない。この能力は、開・閉心術とはなんら関連性のないものだ。望み通りに相手の記憶を読み取る開心術、それとは異なり、その瞬間に他者の心に浮かんでいる思考が読み取れてしまう、そんな代物だ。だがしかし、その閉心術を、目の前の男は用いている気配すらない。

どうする。彼の心に押し入るべきか。今なら絶好の機会だ。しかしその間、こちらの心も無防備になってしまう。そんなことをする訳にはいかない。

ヴォルデモートは饒舌に語り続けている。

「ライ・シユレディングーくん。私は君に期待をしているんだ。君は偉大になれる。可能性に満ち満ちた存在だ。君がグリフィンドール生だとか、そんな瑣末なことは私の思考に影響を及ぼさない。君のよ
うな才覚をこの世から失わせてしまうのは、あまりにも勿体無い。」

——だからね、ライ・シユレディングーくん。私は君を敵に回さないよう、万全な策を弄さなければならぬんだよ」

瞬間、理解した。

両親と妹が襲われた理由。

彼らが命だけは取り留めている理由。

深く考えることなく、ただ周囲の求めるがまま、言葉を発してしまつたことに対する、莫大すぎるほどの代償を——理解した。

「私だって、君を讃えたかつた。私だって、君を素直に賞賛したかつた。私だって、若い才能に手を叩きたかつた。君が、それをさせなかつたんだ」

にこやかに発せられる言葉と思考には、一切のズレがない。

ヴォルデモートは心の底から、そう思つて言葉を発しているのか。

「君が闇祓いに、私の敵になりたいと願うのであれば、私は君を殺さなければならぬ。危険な芽は早々に摘んでしまわないと、成長して取り返しがつかなくなつては遅いからね。でも君を殺してしまうとなると、それは英国魔法界にとっては大きな損失となつてしまう。逆行行為と言つてもいい。それは私だって避けたいんだ。……ねえ、だから、ライ・シユレディングーくん。私は私の望みを叶えるために、一体何をすれば良いんだと思う？」

身体が震える。足に力が入らなくて、思わずよろめいた。咄嗟に椅子の背もたれを掴む。

「ライ・シユレディングーくん。君なら容易にその答えに辿り着く筈だ。だって君は賢いからだ。私が出した答え、唯一の最適解にね」
最適解。

ああ——何たることだ。

「失礼だけれどね、君の家族に印を付けさせてもらった。頸動脈、その

くらいは分かるね？ その薄い皮膚の上にだ。私が望めば、彼らがどうなるか……分かるだろう？」

慌てて、妹の首元を確認した。黒い星型の刻印が、確かにしつかと刻まれている。

「呪いを解こうだなんて考えない方が良く。親切心で忠告しておくよ、この呪いはとても気が短くてね。少しでも危害を加えられたと感じたら、即座に自発的に発動するようになっていく。君のご家族を殺したくないのであれば、余計なことにはしないに限る。——これから」

そして、いつまでも。

「私はね、君に偉大になって欲しいんだ。私に関わりたくないところだね。そうすれば、私にだって君を素直に讃えることくらい、許されるとは思わない？」

この男は、本気で。

本気でこんなことを、考えている。

「……俺の、せい？」

確かめるように、呟いていた。

分かり切ったことを。

「俺のせいで……家族は、こうなった？」

「その通り。全て、君のせいだ」

親切にも、ヴォルデモートはライの言葉を丁寧に肯定した。

「君が、自分の家族を害したんだ」

「俺が……家族、を」

「そう、君が、家族を壊したんだ」

遠くから、近くから、サイレンが聞こえる。

音が反響して鼓膜に伝わり、なんだか距離感が上手く掴めない。そうだというのに、ヴォルデモートの声だけは何故か、一音一音がしつかりとした輪郭を伴っていた。

「何かを交渉しようと考えてる人間が、どうして複数の人質を取るのか、その理由を君は知っているかな？ それはね、何がなんでも、その要求を通したいからだ。例え一人を殺したとしても、もう一人を盾にし

て、再びその要求を押し通せるからだ」

他人の声——鼓膜を震わせる方の声を聞いて気分が悪くなるのは、初めてだった。

息苦しい。上手く息が吸い込めない。呼吸を今までどうやってきたのか、全く思い出せない。

「忘れてはいけないよ、ライ・シユレディンガーくん」

その声は、柔らかであるにも関わらず、暴力的な響きでもってライを圧倒した。

「君の家族に降り注いだ災厄の全ては、君のせいだ」

君がこの世に、生まれたからなのだ。



救急隊員が到着するのとほぼ同時に、ヴォルデモートは姿を消した。膝を突き自失するライに、救急隊員はライも患者の一人かと思っただけだ。寸前で我に返り、事無きを得た。

両親、及び妹は、聖マンゴのヤヌス・シツキー病棟へと運び込まれた。病院にての入院費用は、何者かが先払いで振り込んであったらしい。計算すると、この先六十年は優に超える額で、心の底からゾツとした。あの男は、彼は、本気で自分の人生を縛るつもりなのだ。

夏休みの間、毎日病室へと通い詰めた。初日は床に膝を突き、三人に対して謝罪した。二日目は、どうか奇跡が起こらないかと神に祈った。三日目からは、ただただ黙って虚ろにパイプ椅子に腰掛けては、窓の外で日が昇って沈む様子を、ただぼんやりと眺めていた。

夏休みが終わり、ホグワーツへと帰らなければならぬ頃となった折、ライはこれからどうするかを決めかねていた。このまま家族を置いて学校へと帰るべきか、それともここに残って家族と過ごすべきか。しかし、残ったところでライに出来ることなど何一つとしてない。それならば学校に戻った方が生産的な気もするが、しかしこの状態の家族を置いていくのは如何なものか。

家族を滅茶苦茶にした自分が、一人今までのように日常に戻ることに

を、家族は許してくれるのだろうか。

ダンブルドアが訪ねてきたのは、そんな時だった。

「ヴォルデモート、かね？」

病室をぐるりと見回して、開口一番ダンブルドアはそう尋ねた。淡いブルーの瞳は、何もかもを知り得ているように煌めいていた。

口止めは、確かされなかった。記憶を思い起こす。しかし本当に、ダンブルドアに語っても良いものか。英国で一番とも評されるアルバス・ダンブルドアを、ヴォルデモートが警戒していないはずもない。どこかでこの会話を聞いていて、ライが語り始めた瞬間、家族が命を落としたり――

しかしそんな葛藤は、ダンブルドアの目を見た瞬間消し飛んでいた。気が付けばライは、まるで神に懺悔する罪人のように、ダンブルドアの前にへたりこんで、起こったこと、その時感じたことを全てつまびらかに話していた。

全てを聞き終えた後、ダンブルドアはゆったりとした声音でライに告げた。

「君は、学校に来るべきじゃ」

その言葉に、力無く首を横に振る。

「何故、そのように思う？」

この状態の家族を置いてはいけない。下手なことをすれば、家族に何が起るかわかったものじゃない。

それに――

「……これからのように生きていけばいいのか、俺にはもう、分からないんですよ……」

それは嘘偽りのない、ライの本心だった。

これからのビジョンが、一切見えない。かつては曖昧ではあったが、確かに足元の道は未来へと続いていった。けれど、今は違う。家族の未来を潰してしまった自分には、未来を歩む権利はない。

「……贖罪の道を、選ぶと言うのかね？」

贖罪？ なるほど、そう言うことも出来るのかもしれない。

そんな高尚な思いではない。だけれど、手放すことも見捨てること

も、自分には出来そうにない。

「それならばなおのこと、君はホグワーツに通わなければならん。唯、無意に無意味にこんなところで日を浪費するでなく、君にしか出来ないことをやるべきじゃ。あのヴォルデモートにそこまで言わせもうたその才能を殺すのは、あまりにも勿体無いとわしは思うがね。……君の才能で、君の所有物じゃ。捨てるも生かすも、君次第であろう。じゃが、きつと君にとって、悪くはない道をわしは提示出来ると思う」
穏やかな声で。

アルバス・ダンブルドアは、ライ・シユレインガーに提案した。
「君が、ご家族を救うのじゃよ」

短編 ライ視点 臆病者の天才の末路（下）

勧められるまま、魔法医学の道へと足を踏み入れた。初めは右も左も分からず混乱したが、すぐに勘を掴み、トントン拍子で『魔法医学への誘い』に論文掲載、最年少で魔法医学学会に入会するという結果を収めることが出来た。

「常々思うんだけど、どうして君はレイブンクローでなくグリフィンドールの生徒なのだろうね？」

レイブンクロー寮に所属し、その監督生も務めるエリス・レインウォーターは、そう言って嘆息した。読んでいた本から目を離しエリスを伺えば、エリスは頬杖をついたまま羽根ペンを振った。

テスト前でもない図書館は、勉強している生徒の数も少ない。人気のない場所は、ライが好む所でもあった。ささやかなざわめきに満ちた空間で、エリスは気兼ねすることなく言葉を発する。

「君自身もそうは思わないかい？ 君の勤勉で努力家なところと、ある意味では異様とも言える集中力、そして際限のない知識欲。これはむしろレイブンクロー生特有のものだ。私は時に、君がレイブンクローでありさえすれば、レイブンクローが優勝杯を独占することも可能だったんじゃないかと思うんだよ。全く、どうしてレイブンクローに来てくれなかったんだい？」

ライは曖昧に笑った。自分は勤勉でも努力家でもなければ、人一倍知識欲がある訳でもない。ただ、一人でのめり込めるものが欲しかっただけだ。勉強が一番手っ取り早く、また容易に自己欲を満たすことが出来た、ただそれだけのこと。

胸に留まる主席のバッチを、ぼんやりと見つめた。七年生で最優秀の男女一名ずつに与えられるこのバッチにも、大した感慨は湧かない。ただ何となく、流されるまま、ここまで生きてしまった。

魔法医学の道に足を踏み入れたライに対し、ヴォルデモートからのアクションは無かった。それは幸いと取って良いものだろう。

「もう、研究所に入ることは決定しているんだっけ？ いいな、進路が決まっている奴は。私は単純に羨ましいよ」

「…………お前は、確か…………」

「うん、闇祓いになるつもりだ。なれるかどうかは分からないけれど」
軽い口調でそう言つてのけるエリスを、目を細めて見つめた。

エリスはライのことを羨ましいと言うが、ライこそエリスが羨ましい。闇祓い。ヴォルデモートの脅威が高まる中、彼と最前線で戦うことの出来る、唯一の職業。家族の仇を取ることが出来る、ただ一つの道。

エリスと親しくなったのは、二年生の頃だ。溢れる内心から、随分と勝気な奴だと思つた。お節介で優等生气取りの鬱陶しい奴だと。だから本人に言つてやったのだ。『俺はお前の全てを知っているぞ』と。『今何を考えているのか、俺に対してお前がどんな思いを抱いているのか、俺は全てを知っているぞ』と。

そこまで言われれば、普通は距離を取ろうとするものだ。誰だつて自分の心を暴かれるのは嫌だろう。肉体というベールに覆われた心に、土足で踏み入る闖入者など、ライ自身だつてお断りだ。

そう言われたエリスは、目を見開いて立ち竦んだ。しかしその時エリスが放つた言葉に、自分はむしろ呆然として――

「……………」

あれ？

あの時エリスは、何と言つていたのだっけ？

「…………なあ…………」

口を開きかけたその瞬間、ひう、と誰かの声か飛んできた。咄嗟に頭を下げる。

瞬間、ライの後頭部を掠めるように何かが猛スピードで飛んできた。ライは避けられたが、エリスは顔面に直撃を食らつたようだ。椅子ごと後ろにぶつ倒れる。

「あつ、やべー！」

声に振り返ると、しまった、といった顔でこちらを見ている少年二人と目が合った。グリフィンドールの後輩で、悪戯小僧と有名な二人だった。

早く行け、と手で指示すると、二人は両手をパチンと合わせ、ロー

ブを翻しては物凄いスピードで駆け出して行った。流石、逃げ足は天下一品。そう目を瞠っている間に、エリスは起き上がったようだ。

「……っ、誰だこんなことをする奴は！ 所属寮は、学年は！ 監督生によくもやってくれたな、シュレディングー、知ってる奴か!？」

「し、知らない」

咄嗟に嘘を吐く。エリスは忌々しげに舌打ちをしながら椅子を起こし、少々乱暴に腰掛けた。赤くなっている額を擦りながらも、飛んできたものに手を伸ばす。何やらそれは、チラシをぐしやぐしやに丸めたものようだった。チラシを広げたエリスは、目を通すと眉を寄せながら小さく鼻を鳴らす。

「ああ、魔法魔術大会ね……そう言えば今年だったか。でもまあ、今年が君がまだいるからな……君が出るのなら確定だろう。何せ、前回弱冠四年生ながら優勝したのだから……シュレディングー?」

「……魔法、魔術大会?」

喉からは震えた声が零れた。

関連する記憶が蘇る。優勝盾を持ちインタビューに答えた自分。昼間の柔らかな陽射しが差し込む自宅で、倒れ伏す両親と妹を発見した時のこと。こちらを嘲笑うように紅茶片手に出迎えた、あの男のことを。あの、悪夢のような現実を、思い出す。

そうだ——あれが、キツカケだった。

魔法魔術大会。これが、ライの家族を壊した、全ての引き金だったのだ。

「……、なんで」

なんで。

どうして、再びこれが開かれる。

ダンブルドアは気付いていた筈だ。ヴォルデモートはこの大会をチエックしている。将来自分の敵に回る人物が出ないかを確認している。それを、ダンブルドアは知っているのに。

それなのに、何故。

「……シュレディングー? 大丈夫かよ、おい、ライ!!」

腕をぐいと掴まれ、我に返った。必死な瞳と目が合う。心の底か

ら、こちらを気遣う瞳だった。

「……ダンブルドアに、会わないと」

「その前に私が先だ。……何があった。何の話だ」

真摯な目を直視出来ず、目を伏せた。しかしそれでも、エリスは容赦なく攻め立ててくる。そうだ、彼は、こういう奴だった。

「前回の魔法魔術大会に、何か関わりがあるのか？ 君がいきなり魔法医学にのめり込んだのも、纏う空気が変わったのも、その頃だったよな。……話してくれ」

「……お前に話す義務はない」

「ああ、義務はないさ。だが私は執念深いからな、話をしてくれるまでは帰さない」

「……………」

ああ、確かに執念深い奴だった。

エリスはニヤリと笑った。挑発するような微笑みだった。

「時に、ライ・シユレディングー。君だけ私の事情を知っている、というの、誠に不条理で不平等なものだとは思わない？」



司書の先生に追い立てられるまで、そこが図書館だということも忘れていた。西日が痛いほど射し込む廊下を、爪先を見つめながらとぼとぼと歩く。隣ではエリスが、額を抑えては小さく呻いていた。先ほど、ダンブルドアから言われた言葉を引き摺っているのだろう。

「まあ、それも道理ではあるよね……」

たった一度のレアケース。伝統ある大会を、一度そうだったからと言って止めることはそうそう出来ない。取り止める理由として、ライ・シユレディングーの件だけでは理由が不十分だと言うのだ。

「道理ではあるけれど、でも、ダンブルドアだよ？ あのダンブルドアだから、もう少しは柔軟な考えをしてくれないかなって期待してたのにさ……」

そう言ってエリスは小さくため息を吐く。ライは、黙っていた。

何故だか不穏な胸騒ぎを感じたのだ。漏れ聞こえた心の声、それだけでダンブルドアの本心を推し量るのには足りないが、しかし邪推を止められない。

もしかして、ダンブルドアはヴォルデモートに対し、誘い水を掛けているのではないだろうか。

何かの意図を感じる。気付けば舞台に立たされ、操られているかのような、そんな背後に糸引く存在が垣間見える。

それでは、その意図とは一体何だ？ 一体何を囮にし、何を為そうとしているんだ？

「……どうでもいい」

邪念を振り払うように、言葉を発した。

「俺が、今年も優勝すればいいだけの話だ」

もう、失うものなど何もないのだから。

エリスは目を瞠ると、小さく苦笑した。

「そんな台詞、一度でいいから言ってみたいものだよ」



「ライイ、くん」

視界を覆った長い髪に、ライは本から顔を上げた。青く澄み渡った空を背後に、アリス・プルウエットが満面の笑みでライを見つめている。

「……アリス」

「折角天气がいいのに、本ばかり見ていちや勿体無いよ」

ひよい、とアリスはライから本を奪い取った。ライが立ち上がらないと届かないよう、本を空高く掲げると、片方の手をライに差し伸べる。

「卒業まで、あともう少ししかないんだからさ。遊べるうちに遊んでおかないと損じゃん？」

「……遊ぶ、って、この歳で」

「はい出たー。ライくんのそういう冷めたところ、いけないと思いま

す！ 行こう？」

柔らかそうな手をしばらく見つめ、その手を取ることなく立ち上がった。ん、とアリスは不満げに眉を寄せるも、その表情はすぐさま笑顔に掻き消える。

「そう言えば、知ってる？ ダンブルドアがね、闇の組織に対抗して、レジスタンス組織を作ろうとしているの」

思わずアリスを見つめた。アリスはにっこりと笑ったが、しかしその瞳に宿る光は鋭かった。

「……アリス、も」

「当然。フランクも、エリスくんも加わるって言っていたからね。私だって、名門プルウエット家の誇りがある。魔法界を滅茶苦茶になんて、させやしないよ」

強い瞳の色に、ライは言葉を飲み込んだ。「……そうだな」と言い、何とか笑おうと努力する。しかしその試みは、あえなく失敗に終わったようだ。アリスの困ったような表情から、そう判断する。

「ライくんはいつまで経っても笑顔が上手くならないねえ。口角を上げるんだよ、ほら、こう」

そう言うと、アリスは口端を人差し指で押し上げ笑ってみせた。こちらの口角も上げてこようとするので、慌てて身を振り回避する。卒業後の進路を闇祓いに定めている彼女は、案外すばしっこいのが困りものだ。

「……ライくんは」

ふとアリスはそう呟いた。尋ね返すと、我に返ったように両手を振る。

「ううん……何でもない。でも私、ライくんは闇祓いになるものだと思うっていたの。だから……もう、魔法医学の道で生きていくって、分かっている筈なんだけど」

ごめんね、とはにかんだように笑う彼女に、掛ける言葉が見つからず、ただ黙った。

「あーあ、今年で学生生活も終わりかあ……長かったようで、短かったなあ……」

空を見上げながら、アリスは呟く。その表情を横目で見てみると、ぱつとアリスがこちらを向いた。慌てて目を逸らす。

「今まで私やフランクと仲良くしてくれて、ありがとうね。私、きつと喧しかったと思う。それでも我慢強く付き合ってくれて、ありがとう。ライくんが友達で、良かったよ」

——違うのだ、と言いたい気持ちを押し堪えた。代わりに言葉を、唇に乗せる。

「……結婚式には呼んでくれよ」

彼女は、陽だまりのような笑みを浮かべた。



本戦には、トントン拍子で駒を進めた。前回の優勝者、ライ・シユレインガーが出場するということで、七年生の出場率は例年に比べ格段に低く、与えられた二枠に易々と、自分とエリス、共に入ることが出来た。

番狂わせが起こったのは、本戦一回戦でのことだ。

「……まさか、四年生にお前が負けるとはな」

ライの言葉に、エリスは顔を顰めた。

「傷口を抉らないでくれよ。でも、自信を無くす出来事だったことは確かだな。四年坊主に負けるようじゃ、闇祓い試験なんて受かる訳ないよね……ロングボトムやプルウェットにも忠告を受けたよ……」

だけれどな、ライ。歳下だからと言って侮れない程、彼は強いぞ。前回の大会を思い出したよ。予選で君にボコボコに伸された時のことをね。圧倒的な才能の差、とも言うべきかな、それを身に沁みて感じたものだ。全く、君や彼の近くにいると、自分の才能の無さに泣けてくる」

「……幣原、秋と言ったか」

「そう。我がレイブンクロー寮の可愛い可愛い後輩だ。このまま君も喰ってくれたら、我が寮に久々の優勝杯が手に入るのだけれどね」

「……そんなことはさせない」

眉を寄せ、呟いた。

ライに勝つほどの人物を、ヴォルデモートが野放しにしておくとは到底思えない。必ず、何かしらの手を打つだろう。

——そうなる前に、自分が。



静かな少年だと思った。

別に静かな訳ではないと理解したのは、すぐだった。ふわふわと舞うその思考は、ライにとって聞き取れない類のもので——日本語であつたからなのだ。

静かな魔力が、少年の周囲に漂っている。普通の魔法使いとは比べものにならないほどの膨大な魔力の影、それを感じるたびに、心は騒めいた。

杖を使わずとも、魔法を使えるその才能。未来への可能性を秘めた、発展途上の少年。

似ている、と感じた。

かつての自分に。当時の自分に、よく似ている。自分と違うのは、この少年は謙虚で、傲慢でない努力家だったということだ。授かり物を乱雑に扱うでなく、きちんと丁寧に抱え込む、そんな優しい少年だったということだ。

——気をつけろ、と忠告はした。返ってきた言葉に、目を瞠った。

「ぼく、頑張りますからっ……、負け、負けません、から……！」
その真摯な瞳に。まだ見ぬ未来に、素直に煌めくその光に。

——ああ、いいなあ、と、素直に妬んだものだった。



魔法魔術大会本戦、決勝戦。

——見縊っていたな、と、他人事のように呟いた。

既に両足は地上から離れ、身動きの取れぬ状況で空中に縛り付けら

れている。杖は持っているけれど、目の前の少年に対し、為す術は既になくなっていった。

幣原秋は、自分が仕出かしたことだというのに、大きな目を丸く見開いてはライを見上げていた。

——ごめんな、秋。

守ってあげようとしたけれど、このザマだったよ。

才能ある者。お前はこの大会の名誉と引き換えに、数多くの大切なものを失うだろう。

分かっていたのに。気付いていたのに。

——守ってやれなくて、ごめんな。

「お前の勝ちだ」

杖を投げ捨てる。秋はよろよろと杖に歩み寄り、震える指を伸ばした。掲げられた杖に起こった大爆発とも言える歓声を、目を瞑って聞いていた。

秋が、力が抜けたかのようにその場に座り込む。同時に魔法が解けた。自由になった足を踏み出し、秋の元に歩み寄ると、手を差し伸べる。

「秋」

ぼんやりと秋が顔を上げた。おずおずと伸ばされた腕を掴むと、引っ張り上げる。小さく軽い身体は、簡単に持ち上がった。

「おめでとう」

「あ……」

秋の瞳に、光が灯る。頬が赤みを帯びると同時に、その目に歓喜の涙が浮かんだ。秋が慌てて、その涙を拭う。

「ありがとうございます……」

素直な喜びを示す、幼い少年に。

ライは何も言うことが出来ず、ただ逃げるように、その場を後にした。



表彰式を見ぬまま、人気のない廊下を駆け抜ける。行き先はダンブルドアの居室、校長室。息を切らせて飛び込んだライに対し、ダンブルドアは何もかもをお見通しと言った表情を浮かべて出迎えた。

ダンブルドアの手元では、銀細工の小物が銀色の霞を吐き出している。それが何かを形作り、やがて千々に掻き消える。不吉な胸騒ぎを感じ、息を詰めた。

「行こうか」

ダンブルドアの言葉は端的だった。

つい、とダンブルドアが腕を上げる。すると、止まり木で眠っていた不死鳥がパツと目を覚まし、羽根を広げてはダンブルドアの腕に止まった。そのまま、ダンブルドアはライに対して余った方の手を差し出してみせる。

考える余裕もなく、ライはその腕に手を伸ばした。



友人、エリス・レインウオーターの訃報を受け取ったのは、ヴォルデモートが『生き残った男の子』、ハリー・ポッターに打ち倒されて、数ヶ月後のことだった。

この戦争で、何人の友が死んで行ったか。数えたくも考えたくもない。フランク・ロングボトム、そしてその妻アリス・ロングボトム。長らくの友人であった彼らは、気が触れて長期療養病棟に閉じ込められた。彼らはもう、ライのことが分からない。死ななかつただけマシだと人は言う。果たして本当にそうだろうか。ライにはもう、何が正しくて何が間違っているのか、分からなかった。

エリス・レインウオーターの葬儀で、数年ぶりに幣原秋に出会った。記憶よりも少し背が伸び、大人びた彼はしかし、危うげな瞳でエリスの遺体が納められた棺を見据えていた。

黒衣の天才の噂は、何度も耳にした。彼の才能の終着点は、ここだった。もしかすると自分も、彼のようになっていたのかもしれない。

エリス・レインウオーターは、黒衣の天才に殺された。裏切り者であり、敵に情報を流していたとして、処断されたのだと言う。

「……………」

長らくの友人であったからといって、エリスのことを全て理解しているとは思っていない。それを言うならば、あの才気溢れる後輩であったジェームズ・ポッターが死ぬなんてことも、彼の幼い息子が戦争の英雄になることも、彼の親友であったシリウス・ブラックが、ジェームズを裏切るなんてことも、想像さえもしなかった。何かの悪い冗談かと。

葬儀が終わり、足早にその場を立ち去ろうとした秋の腕を、咄嗟に掴んだ。瞬間感じたピリツとした魔力に、ライが慌てて手を離すのと、秋がこちらを振り返ったのは同時だった。

「あ……ライ、先輩」

見開かれていた瞳が、やがて落ち着く。すみません、驚いたもので、と力無く微笑んだ顔は、随分と憔悴しているようだった。

「……構わない。少し、時間は取れないか。話したいことがある」

そう言うと、秋は僅かに瞳を揺らした。凝ったデザインの懐中時計で時間を確かめると、眉を寄せてパチンと閉める。

「忙しいのなら仕方がないが……」

「いえ、ぼくも、あなたとお話でしたかった。そう長くは無理ですが、少しの時間くらいならば」

一瞬、秋が周囲に気を配ったのが分かった。つられてこちらも周囲を見渡すと、周囲の人物は素早く目を伏せる。そうか、黒衣の天才。彼の一挙一動を、今や誰もが気に掛けている。

「先輩、こちらです。腕の良いバリスタがいる喫茶店を知っているんですよ」

秋が仕事用の仮面を貼り付け、微笑む。闇被いのローブを翻し歩く彼の後を、小走りで追った。

「エリス先輩は裏切り者なんかじゃありません」

歩きながら、秋は端的に告げた。思わず目を瞠る。

「エリス先輩は死喰い人に嵌められただけです。彼の魂を身体から引

き剥がし、生ける死者として、人形のようにエリス先輩を使った奴がいる。ぼくは、その犯人を追っています」

「……なら、エリスをお前が殺した、という噂は、間違っているということか？」

ライの言葉に、秋は軽く頭を振った。黒衣に包まれた細い肩が、僅かに揺れる。

「……いえ。間違つてはいないんだと思います。ぼくが、亡者にされたエリス先輩の動きを止めたことに違いはなくて……そもそも、ぼくがいなければ」

エリス先輩がこうなることもなかった。

苦い口調で、秋はそう吐き捨てた。

その声音に、かつての自分を思い出す。

「……手がかりは掴んでいません。現在のエリス先輩に対する不名誉な噂も、きつとすぐ収まることでしょう。……戦争は、終わりました。これから、平和な世の中になる。黒衣の天才の出番は、終わったんです。……ねえ、ライ先輩」

静かに、秋は振り返った。ふわりと長い黒髪が、冷たい十二月の風にたなびく。ライに向き直った秋は、僅かに笑ったようだった。

「ぼくを殺してくれと頼んだら、あなたは受け入れてくれますか？」

足を止めた。旋風に、枯葉が舞う。

どれだけの時間、無言で見つめ合っていただろうか。先に口を開いたのは、秋だった。微笑みを深くして、秋は前を向く。

「冗談です。忘れてください」

向けられた背に、——ああ、自分はまたも、失敗してしまったのだと。

そう、思った。



漆黒の棺に、山のように積み上げられた白百合の花。動く魔法界の写真は、しかしこればかりは微動だにしない。黒衣の天才の訃報を告

げる新聞記事、その写真を撫でながら、ライは目を伏せ、ブラックコーヒーを飲み込んだ。

自殺であったと、記事は告げている。他殺ではなく、まして事故でもなく、自ら命を絶つたのだと。

「……………」

最後に出会った日のことを。エリス・レインウォーターの葬儀の日、あの時の秋の微笑みと声を、思い出す。

今回も自分は、あの少年を助けてはやらなかった。

組んだ両手を、目に当てる。

これからの未来を、どうやって歩んでいけば良いのか。

その答えは、いくら考えても分かりそうになかった。



扉を叩くのを、躊躇した。一度大きく息を吐き、心を決めると扉を開ける。

大きな窓からは、暖かな日差しが降り注ぎ、柔らかな陽だまりを作っていた。白い壁には写真や手紙、様々なものが所狭しと貼り付けられている。鼻歌を歌いながら、ぎこちない手つきで折り紙をしていた彼女――アリス・ロングボトムは、入ってきたライの姿に表情を明るくさせた。

『ライくん、こんにちは』

言葉は、まだ上手く話せない。それでも、彼女の心の断片は読み取れる。

「……………こんにちは、アリス」

作り笑顔は、昔よりも上手くなった。アリスは安心したように微笑む。ベッドに身を起こす彼女に近付くと、すぐ近くに折り紙で不器用に作られた鶴があるのが目に入った。アリスは、まだそのようなものを作り上げられるほどには回復していない。それでも、数年前まではライのことも分からなかった。長い時間を掛け、ようやく頑なな記憶を開き、受け入れさせることに成功してきた。

「この鶴は、誰が？」

ライの言葉に、アリスは目を輝かせた。

「……そうか。ネビルが、来ていたのか」

彼女とフランクの、まだまだ幼い一人息子。彼のことを考えるたび、妙に自分に重ねては息苦しくなる。意識的に思考を振り払い、普段通りの回診を執り行った。

『……ねえ、ライくん。エリスくんは、元気？』

立ち去り際、そんな想いと共に袖を掴まれた。振り返り見た彼女は、無邪気に笑っていた。

「……エリス、は」

言い淀んだ自分に対し、アリスはきよとんと目を瞬かせると、ただどしい手つきで一葉の写真を指差した。この人、と唇が、そつと言葉を紡ぐ。

「エリスは、死んだ」

ん？ とアリスは首を傾げた。『死』という概念を、彼女はまだ理解出来ていないのだ。

そんなことは、分かっていた。

分かっている、それでも、どうしようもなかった。

「エリスは死んだんだ」

『エリスくんは？』

「……っ、死んだんだ」

『エリスくんは——』

「死んだんだよ!! 皆々、死んだんだ!!この世からいなくなった、もう二度と、会えないんだ!!」

怒鳴り声を上げたのなど、一体何年振りだっただろう。

窓ガラスさえも震わせる大人の男の怒声に、アリスはびくりと身を震わせた後、その頬に涙を伝わせた。そんなことにすら構っていられないほど、その時のライは気がおかしくなっていた。

「どいつもこいつも死んで行ったんだよ!! 友達も、先輩も、後輩も、誰も彼もがこの世から消えて行った! 死んだんだよ、分かってくれよ!! ただ安全な場所で、お前らが死に行く様をただただ眺めていた

俺の、この気持ちを知ってくれよ！ 死なないで、俺を、俺を置いて逝くな、誰もいなくなつた、誰も、いなくなつたんだ！」

その場に崩折れた。頭の中で、声がする。

「俺だって死にたい、一緒に逝きたい、どうして俺だけこんなところに、家族も、友も、何もかもを失つた、それなのにどうして、俺は生きてるんだ……！」

『ぼくを殺してくれと頼んだら、あなたは受け入れてくれますか？』

そう言った少年のことを思い出し、やるせない気持ちになつた。ああ、あの時の言葉を発した彼は、今のライと同じ心持ちだったのだ。殺してくれと、赦してくれと。人生という牢獄から解放してくれと、叫んでいたのだ。

今更気が付いた。

——ああ、本当に、俺は役立たずだ。

何も出来なかつた。

何も出来なかつた！

周りでこんなにも人が死んで行つたのに、俺は何も為すことが出来なかつた！

どうしようもない無力感に、心の底から打ち震える。好きだった人の、少女のような泣き声が、その思いに拍車を掛けて行く。

頼むから、もう赦してくれ。

もう俺は、十分過ぎるほど頑張つた。

これ以上は、もう、耐えられない。

大切な人を守りたかつた。

自分の信念に殉じたかつた。

俺だって何かを成したかつた。

何一つとして、許されなかつた。

「……殺してくれ……死なせて、くれ……アリス、お願いだ……俺を、殺してくれよ……」

無理な願いを、無茶苦茶な思いを、それでも言葉に乗せた。

もし、自分に勇気があつたなら。

もし、自分に覚悟があつたなら。

この枷を壊し、杖を取る覚悟が、あつたのならば、きつと犠牲はもつと少なかった。

守る力が、自分にはあつた。三人を犠牲にしてでも、もつと沢山の人間を、きつと自分を守る事が出来た。

——あつたのに！

何も出来なかった？

何もしなかった、の間違いだろう。

何もしなかった自分が、現世の身を嘆く権利などない。

俺は何一つ救えなかった。

何もかもを犠牲にしても救いたいと願った家族すら、未だ目を覚まさない。それどころか、大切で、大好きだった筈の家族ですら煩わしく思い、殺してしまおうかとも考える始末。

それならば、もう、いつその事。

あの時死んでおけば良かった。

あの時、殺してくれば良かったのに。

頭に、柔らかな衝撃が来た。くしやりとぎこちない動作で、その手はライの髪を掻き混ぜる。

「ライくん、泣かないで……」

大粒の涙を零しながら、幼子のようにただ、彼女はしゃくりあげる。「ごめ、なき、ライくん……やだよ、ライく、いなくなっちゃ、やだよ……」

細い指先が、ライの目尻をそつと拭った。その微かな動作にすら、涙腺を刺激される。

「死んじゃ、やだよ……」

その声に、奥歯を噛み締めた。

死ぬことも、生きること許されない、このどうしようもない牢獄の中。

心臓の鼓動を止めない理由が、また一つ増えてしまったと、それでもその理由に縋るのだと、そんな思いで項垂れた。

短編 ゴミ箱から出てきたくしゃくしゃの紙片

はじめまして、秋。そして、お誕生日おめでとう！ ジェームズはいつつもやることなすこと無茶苦茶だ。しかもシリウスだったら、あれは僕も腹抱えて笑っちゃった。ごめんごめん、怒らないでよ。でも、秋。僕らは君を歓迎するよ。これから、よろしくね。

お誕生日おめでとう、秋。君と出会って二回目のバースデイだ。君はピーターに似てると思っていただけ、この一年付き合ってきて違うということに気付けたよ。今年の悪戯仕掛人の力作、楽しんでもらえたかな？ ふふっ。

誕生日おめでとう、秋。君は僕の、いや、僕らの共犯者だ。僕を受け入れてくれて、ありがとう。僕を見抜いてくれて、ありがとう。これからも共に、罪を重ねていこうじゃないか。君がいてくれて、よかった。心より、祝福を。

ハッピーバースデイ、秋。最近、よく沈んでいる君を見かけるよ。君は誰にも気付かせていないと思ってるだろうけど、僕らを舐めちゃいけない。君に関することじゃ、ジェームズの目ざときは天下一品なんだから。今は無理でも、そのうち打ち明けて欲しい。僕が、君にそうしたように。

誕生日おめでとう、秋。やっと「忍びの地図」が完成した。僕らの青春の象徴だ。君は何よりも功労者だ。レイブン、僕に「ムーニー」と名付けてくれて、ありがとう。手を取ってくれて、ありがとう。

誕生日おめでとう。君にこれを言うのも何回目だろう。今度君に会ったら言おうと思っていたんだけど、ジェームズとリリーが付き合っ出したんだ。君からもおめでとうを言ってあげて欲しい。多分、二人とも、とつても……喜ぶはずだから。

ハッピーバースデー、秋。卒業したら途端に会えなくなっちゃったね。「不死鳥の騎士団」の集まりくらいか。闇祓いは、やっぱり忙しい？ 君に笑顔をあげようと、僕ら悪戯仕掛人からのささやかなプレゼントだ。卒業したって、悪戯仕掛人は何も変わってないよ。

秋、お誕生日おめでとう。最後に会ったのは、ジエームズとリリーの結婚式の時だったね。少し痩せたんじゃない？ ちゃんと食べてる？ 君は夢中になると、平気で睡眠も食事もぶっ飛ばすからね、心配なんだ。リリーの手料理は中々上達してきたよ。新婚生活を邪魔するのも、親友の大切な務めさ。

お誕生日おめでとう、秋。ハリーを抱き上げたときの君の笑顔は、久しぶりに晴れやかなものだったね。まさかジエームズが、僕らの中で一番にパパになるなんて、信じられるかい？ 暗いニユースばかりが報じられる中、ハリーの誕生は、僕らの光だ。……つと、君の誕生日祝いなのに。おめでとう、秋。

誕生日おめでとう、秋！ ジエームズは気が滅入ってるようだ。家に何日も監禁されっぱなしで……僕やシリウス、ピーターがちよくちよく見舞いに行っただけ、やっぱり不満は溜まってるみたい。たまには君も顔を見せてあげて。……久しぶりに、君に会いたいよ、秋。

秋、誕生日おめでとう。……たとえ君が祝う気にならないとしても、僕は変わらさず言うよ、おめでとうを。……この一年で、いろんなものが変わってしまった。最後に残ったのは、僕と君の二人だけだ。秋……君は、もしかして、リリーのことを……いや、止めておこう。身体に気をつけてね、秋。

秋。お誕生日おめでとう。君がそう決めたのなら、僕は何にも言う

まい。……悲しそうな顔をしないでよ、ひとりぼつちは慣れてるんだ。君の『願い』を、どうか叶えてくれ、秋。君にとって彼は、僕にとつてのジェームズみたいなものだったんだろう？ ……なら、諦めるな、秋。

もう君に届くことはないと分かっているけど、それでも毎年書くのは何でだろうね、秋。お誕生日おめでとう。君は今、何を思い、何を考え、日々を過ごしているのかな。僕らの『願い』、『ハリー・ポッターを守ること』——分かっている、少しの別れだって。でも、秋、僕は——君に会いたいよ。

秋、ハッピーバースデー。君は今、12歳くらいかな。ちょうど、僕らと初めて出会った時か。君は写真を撮られることが嫌いだったから（魂を抜かれる、なんてそんなことあるわけないだろ！）、君の写真はあのときの一枚しかないんだけど……目を閉じると、当時の君を思い出すよ。……戻りたいあの頃を。

お誕生日おめでとう、秋。君の、僕を見て驚いたあの表情、なかなか傑作だった。しばらく、君を——アキを、見ていたいな。君が願った象徴、アキ・ポッターという1人の少年を。……久しぶりに、生きているって思えるよ、秋。ホグワーツとは不思議なところだね。

秋。お誕生日おめでとう。君は自分の誕生日を祝わないだろうか、君の代わりに僕が、皆の分まで祝おう。秋。秋。——幣原秋。生まれてくれて、ありがとう。生きていてくれて、ありがとう。君の存在が、僕をこの世に繋ぎ止めている。

——秋。

それも全て、君の願いを叶えるため？

君の思惑が見えない。

君は。

どうして■■■■を突き放した。

■■■■■■■■■■は、君の生きる希望じゃなかったのか。

信じられない。君は。

——世界を敵に回すのか。

(ゴミ箱から出てきたくしゃくしゃの紙片より)

短編 モブ闇祓い視点 Goodbye, Her
o.

え、あ、私を呼んでいたんですね。すいません、全然気が付かなくて。棺の上の、ほら、百合の花。あれが持ち上げるときに崩れちゃったんです。さすがにあれだけ多くの花はね、乗り切れないと思っただんですよ……ん。あれ。どちら様、でしょうか。

……はあ。魔法警察の方ですか。いや、ま、はい、時間はあります。大丈夫です。知つての通り、闇祓いの仕事は随分と減りましたから。いや、適正になったと言われればそれまでですけど。働き過ぎ？ いえいえ、平和な時代が目前ですからね、もう少ししたら、闇祓いも暇になりますよ。こんな職業は、閑職なくらいが丁度いいんです。

ええ、そうです、私がエリック・ボールドウインです。歳は今年で二十六、闇祓い局の第三班にて働いています。杖を提示は、あ、構わないんですか。ああ、なるほど、捜査というほど積極的なものじゃないんですね。お話が聞きたいと。承知致しました。

そのうちね、来るかと思っていたので。案外早かったというか、思っていたより遅かったというか。はい、分かっています、幣原秋の死について、ですよ。

自殺、だと聞きました。ロンドンの高層ビルから飛び降りたと。自殺……ね。そうしてもおかしくない危うさが、幣原秋にはあったような気がします。彼の死は衝撃的でもありませんが、でもその衝撃の中、どこかで私は、いつかはそうなるのでは、と予期していたのかもしれません。でも、こうして魔法警察の方が動かれているということ、事件性があるかもしれないと思われているんですよ。いえ、彼を恨んでいた死喰い人は数多くいたでしょうから。検視の結果は？ ああ、まだなんですか。でも、正直……あ、いえ、何でもないです。

幣原秋について、ですか。難しいことを言いますね。いえ、はい、彼の存在は知っていました。むしろ知らない人なんていないんじゃないんですか、闇祓いで『黒衣の天才』の存在を知らないなんて、さすが

にありえない。だからこうして、彼の葬儀にも大勢人が駆けつけているのでしよう。無論、私もその一人なのですけれどね。英雄の死を悼むために。彼が、マスコミが作り出した英雄の虚像だって？ いえ、確かにその面もあったとは思いますが。しかし、実際闇祓いとして、同僚として働いてみると分かりますよ。彼の特異さというか……異常さが。

いくら人手不足だと言っても、研修一年で普通実践に組み込みませんよ。普通じゃありえないから、異例となり得るんです。偶像の英雄だと、人は言います。本物の英雄、ハリー・ポッターが出てくるまでの間、私たちが継る希望だと、かりそめの光であったと。私は、そうは思いません。仕立てられた英雄、それは確かにそうでしょう。でも、だからと言って幣原秋が、惹きつける光を放っていなかったと言われたら、それは間違いだと言わざるを得ない。

……え？ ……あー、はい。そうですね……私個人の意見を言わせてもらうならば。

認めましょう。私は幣原秋のことが好きではありませんでした。馬が合わなかったと言ってもいい。故人のことを、悪くは言いたくないのですが……はは、ということは、全部分かった上で、私に話を聞きに来たのですよね。

はい、そうです。以前、私は幣原秋と揉めました。目撃者も多く、始末書も書きましたから、裏付けも容易でしょう。そうか……もうあれから、一年は経つんですね。なんだか、つい先日のようにも思えてしまいます。

だからと言って幣原秋を殺そうとなんて思いませんよ。そもそも私なんかには殺されるような人ではない。私程度が不意打ったところで、彼の命なんて刈り取れるはずがないじゃないですか。

言っておきますけど、謙遜じゃないです。誤魔化している訳でもありません。闇祓いには確かに、化け物のような人間が数多くおりました。しかしそんな化け物の中でも、幣原秋は飛び抜けた化物でした。到底、同じ人間だとは思えない。

揉めた理由、ですか。少し、長い話となりますが宜しいですか。そ

れに、聞いていてあまり気持ちのいい話とはならないと思いますよ。
……でしたら、場所を変えましょうか。雰囲気の良い喫茶店を知っているんです。そこで、せめて暖かい紅茶でも飲みながら、お話ししよう。美味しい紅茶が、話の後味の悪さを誤魔化してくれると嬉しいんですが。



さて。何から話しましょうかね。少々失礼しますよ。ああ、盗聴と窃視防止の魔法です。事が、幣原秋に関するものですからね。いえ、捜査にはちゃんと協力致しますよ。彼の死を解明する手がかりになるかもしれないから。あ、すいません、そのシユガーポットを取ってくれますか？ いえね、なんだか紅茶を飲むのも久しぶりです。闇祓い局内は基本コーヒーですから。局、来られたことあります？ きつとコーヒーの香りが出迎えてくれることでしょう。他所の部署からは、よく『カフェイン中毒の吹き溜まり』などと揶揄されているようですがね、私にとっては居心地がいい空間ですよ、ホッと一息つくと言うか、生き返る心持ちになるというか。無論、そこから任務に行つて、二度と帰つて来ない人も多いのですけれど。はは……少し時期を読み間違えたジョークでしたね、不謹慎だったかもしれませんが。気分を悪くされたのなら申し訳ないです。闇祓いではそれなりにウケるんですが、身内ネタ過ぎましたね。お恥ずかしい、反省します。

幣原秋のお話、でしたね。揉めた理由、か。それではまず、我らが闇祓いの仕組みからお話しましょう。

我が闇祓いは、十の班より成り立っています。権限は、かつてはほぼ平等でしたが、今は第一班の一人勝ちですね。そう、幣原秋が班長をしていた一斑です。もともと一番戦場に近いと言われていた一斑でしたが、幣原秋が入ってから、更に突き抜けた感じでしたね。一斑は、他の班と比べて段違いの戦死率を誇っていました。半分の顔ぶれが一年で変わるんですから、相当なものですよ。私、闇祓いに勤め

て今年で八年になりますけれどね、その短い間で三回班長が変わるなんて、はつきり言わせてもらうなら異常です。リスター先輩、エリス、そして幣原秋……ああ、エリスというのは、学生時代の同級生でして。いえ、その世代じゃないんです、ロングボトム夫妻とエリス・レインウォーターとは、闇祓いでは同期ではないんです。いえ、難しい話ではなく、単純な話でして。私が彼らほど優秀ではなかったため、現役では闇祓いに合格しなかったというだけのお話です。拍子抜けでしよう？

計算して頂けると分かりますが、私と幣原秋は三つ歳が離れておりまして。ですので、通常の研修期間三年を終えた私と、異例の一年で研修を終わらせた幣原秋は、ほぼ同時期に実践へと投入されました。班は違ったんですがね。噂は十二分に入って来ましたよ。稀代の逸材、『黒衣の天才』幣原秋。先輩が人目を阻むように指した彼は、お世辞にも体格がいいとは言い難く、大人しそうで柔らかな顔立ちをしていて、どうして、とまあ言い方は悪いですがね、ベテラン闇祓いを差し置いて、ひよつと出の若造がそこまで祭り立てられているのだとは思いました。彼の力を、見るまでは。

トン、と、ただ彼は左足を下ろしただけかと思いました。それだけで、死喰い人らが張り巡らしていた防衛結界は粉々に破れ、永久魔法にて補強されていた家々は一瞬で瓦礫になっていました。何が起こったのか、始めはさっぱり意味が分からなかったことを、覚えていきます。彼の背に靡く長い黒髪を、一拍置いて吹き抜けた爆風が揺らしたあの情景が、私は忘れられなかった。これから先も、この鮮やかな記憶が薄れることはないでしょう。

三つも歳下の、まだ少年と言ってもいいほどの年齢であった幣原秋を、私はあの時間違いなく畏怖しました。あの時、彼は二十歳も超えていなかったと思います。私だけではありません、彼の力を初めて間近で見た者は皆、多かれ少なかれ私と似た表情を浮かべておりました。圧倒的な力に対する、本能的な恐怖と呼べば格好はつくのでしょうか。

私だって闇祓いです。自分の能力に対する自負がありました。学

業だって訓練だって、何にも手を抜いたことはありません。それを、それなのに、彼は。幣原秋は。

住んでいる世界が違うのかと、そうまで思いました。

幣原秋は、必要なこと以外は一言たりとも口を開きませんでした。氷のような無表情を、最後まで崩しませんでした。丁寧な顔つきと相まって、近寄り難い雰囲気をつけていました。あの中では一番最年少であったはずなのに、あの子の全ての空気を、彼が支配していました。誰もが幣原秋を伺い、彼の一動作に目を凝らしていました。小さく華奢なその背中が、酷く恐ろしいものに感じたものです。

あの場でただ、エリスだけが、幣原秋を悲しげな瞳で見っていました。その理由を尋ねることは、ついで出来ませんでした。

思えば、多くの友人を亡くしたものです。同期も、先輩も、後輩も、分け隔てなく神は自らの懐へと招き入れました。私は、受け入れてはもらえませんでしたけれど。

長くなりましたね。まだ本題に入っていなかった。幣原秋と揉めた理由を、順を追ってお話致しましょう。

『例のあの人』を打ち破った『生き残った男の子』ハリー・ポッター、彼が現れた後、相次ぐ闇祓い襲撃事件があつていた頃合いです。闇祓いの内情が、どこかから漏れているのではないかと噂されていた時です。任務を命じられました。その時私が所属する第三班が戦力不足だということで、第一班が補填するということになりました。そこまでは、どこにでもあることです。しかし、第一班が派遣してきた人材が、かの有名な幣原秋であつたことで、一気に班の緊張感が高まりました。幣原秋を交えて任務の打ち合わせをするあの瞬間が、敵地に踏み込むよりも恐ろしいとは、なんともおかしな話ですね。

しかし、そんな第三班にも、幣原秋の名を聞いて瞳を輝かせた者がおりました。幣原秋の、訓練生時代の同期、パトリック・リオンです。幣原は優しい子なのだ、彼はぼつりと零していました。僕は知っている、僕は彼を信じている——そう、リオンは語ってくれました。もう、随分と遠くに行ってしまったような気がすると、苦々しい笑顔で言っていました。

任務の内容について、あまり詳しくはお話出来ないので、ざっとした概要を説明しますと、あの任務は残存する死喰い人の捕縛任務でした。荷が重い、と正直感じました。第三班はどちらかと言うと、警護任務が多く、戦闘を全面とした任務は少ない方でしたから。幣原秋がいたからこそ、この任務が回されたのだと、一瞬で誰もが悟りました。

助っ人である幣原秋に、あまり碌なもてなしは出来なかったと思います。彼も、そんな気遣いは無用だと言わんばかりに、任務に関わらない交流は避けていたようでしたので、その点では安心していました。ただ、リオンだけは懐かしそうに、幣原秋に対して親しげに話しかけていましたね。その時初めて、幣原秋の笑顔を見ました。年相応の、いえ、年齢よりも幼さを感じる、随分と穏和な微笑みでした。正直、驚きました。失礼だけれど、幣原秋も人間だったのだなあと思い、その力に畏怖していた自分を僅かに恥じました。彼は今まで、その持つ恐るべき力のせいで、どれほど他人から距離を置かれてきたのだろう、どれほど排斥されてきたのだろう。望まないことに巻き込まれたことだって、数多くあったことでしょう。そう思うと、彼が酷く不憫に感じられたのです。

リオンと談笑する彼は、極々普通の少年のように見えました。二十を超えた男を少年と呼ぶのは少々妙かもしれませんが、幣原秋は下手したらミドルティーンと言っても誤魔化しが効くのではと思えるほどに童顔でしたから、なんだか、ね。アジアの方は年齢より幼く見えると聞きますし、そういうことなのでしょう。

会話の内容は、何かの魔法薬についてのようでした。どうして覚えているのかって？ そのときの幣原秋の言葉を覚えていたんです。「ぼくの友人にも、魔法薬学が得意な子がいてね」その言葉を口にした瞬間、少し妙な間が空いたんです。思わず彼の方を見ると、彼は明らかに苦々しい顔をしていました。誤魔化すのを失敗したような表情でした。正面からその表情を見たりオンは、どうしようかと逡巡する素振りをしましたが、流すことに決めたとようでした。何も気付かなかった体で、似て非なる話題を振ったりオンに、幣原秋は救われたよ

うにホツとした表情をしていましたね。

その時の任務は、死喰い人の会合の情報入手したため、その場に踏み込み捕らえよというものでした。ざっくり言えば、ですが。です。誰が会合の防衛呪文を解除するのか、等、打ち合わせでは役割分担についての話が主でした。幣原秋に呑まれてはならないと、我らが第三班は打ち合わせを主導しました。今になって思えば、死喰い人捕縛について我らは素人も同然だったので、素直に彼の意見を聞けば良かったんです。ほとんど最終決定に相成るまで、彼に口を挟ませませんでした。幣原秋は私たちの話を聞いて静かに頷き「それでいいです」と小さな声で言いました。幣原秋の返答を聞いた同じ班の方々は、覇気のない返事に不安の声を漏らしていました。元々細かい、頑健とは言い難い体躯に、頼り甲斐がないと感じた者も多かったようです。中には顔に『期待外れだ』とありありと浮かべている者もおりました。

幣原秋は、随分と憔悴しているようでした。まじまじと観察していた訳ではありませんが、食事もそう取っていないようでした。目の下には黒々と隈が刻まれていましたし——もつとも、それは職業病のよくなものですが——時間が惜しいとばかりに、何かしらの仕事をしていました。仕事に取り憑かれているような、と申しますか、何か鬼気迫るものを感じたことは確かです。時間が出来ることを、暇になることを、恐れているようでした。

任務の地に赴き、班長が散開の命令を出して、皆がバラバラになつたちようどその折でした。背後を取られる形で『死喰い人』が『姿現し』したのです。スパイの存在、内通者がいるということ。全ての統制を失った最中、夜中の乱戦が始まりました。明かりが全て落とされた視界で、閃光だけが光源でした。怒号と魔力の音だけが響く世界の中、思い切り横から突き飛ばされました。次の瞬間の閃光に照らされて、幣原秋の顔が浮かび上がりました。幣原秋は眩い光源を打ち上げると、返す一振り目目の前に——本当に目前にいた死喰い人の二人の意識を奪いました。

険しい表情で周囲を見渡した幣原秋は、その場に私しかいないこと

を知ると、舌打ちして駆け出していきました。その後を慌てて追って——広がる惨状に、思わず立ち竦みました。

惨状——言葉にしたら、案外軽いですね。想像して欲しいとは思いません、が……話の都合上、ここを省く訳にもいかないですよ。淡々と描写するならば、闇祓いが一人、そして死喰い人が一人、その場で死んでいました。一目で、絶命していると分かりました。……すみません、状況を描写する元気がありません。もし気になるのであれば、闇祓い局の情報にアクセスしていただければ。

倒れている闇祓いの名は、パトリック・リオン。幣原秋の、訓練生時代の同期であった筈の人物でした。

仲間の凄惨な姿に、私は思わず駆け寄りました。学習した治癒魔法と医療知識でもって、リオンを治療しようとしたのです。今思えば、自分は完全なる恐慌状態、パニックに陥っていました。自分がそのようになる経験は初めてで——あんな凄惨な現場を見たのは、初めて。幣原秋は、そんな私をどんな気持ちで見えていたのでしょうかね。

気がつけば、彼に胸倉を掴まれていました。嫌悪をありありと含んだ眼差しで、幣原秋は私を見下ろしていました。

「全て終わってから立ち止まれ。闇祓いになった覚悟はその程度か」
数度私を揺さぶった後、幣原秋は手を離すと、私から目を切りました。駆け出そうとした彼の腕を、私は掴みました。案外、というか、想像通り、というべきか、成人男性にしては細い腕でした。

人非人かと、倒れている仲間を見捨てるような血も涙もない人間なのかと、そういう思い一色で脳内が埋め尽くされました。自分と同じ人間のやることだと、その瞬間の私には思えなかったのです。

手加減も、もはや力のリミッターも、なかったでしょう。右の拳を握り締めた私は、幣原秋が気配に気付くよりも早く、その拳を振り抜きました。成人男性の、それもきちんとした戦闘訓練を受けている者の拳です。生半可な威力ではないことは、私が一番よく理解していました。小柄な身体が宙を飛び、壁に当たって地面に崩折れるのを、私は自分の二つの目というよりは、どこか少し離れた視点から、見ていたような気がします。

散開した仲間を探して駆け寄ってきた同僚は、私の凶行を目にして焦ったように、私の名前を叫び私を羽交い締めにしました。残念ながら、私は一切耳に入ってはいませんでした。

私は、随分と口汚い言葉を吐いたようです。色を失った顔をした同僚から、後ほど話を聞きました。お前は本当に人間か、狂っている、そう言った類の言葉を、幣原秋に放っていたのだといいます。

やがて咳き込んで身じろぎをした幣原秋は、身体を起こしながら、怒りの籠った眼差しで私を睨みました。血で汚れた口元を拭うと、立ち上がり私の元へと歩み寄りました。

殴り返されるとは、思っていなかったというのが正直なところです。あの細い腕が放ったとは思えないほどの力でした。そう言えば、幣原秋だつてきちんとした戦闘訓練を受けた軍人なのでした。私より体格は随分劣りますが、戦闘経験は明らかに向こうが上。同僚が私を羽交い締めにしていなければ、きっと地面に座り込んでいたことでしょう。

誰もが、一言も言葉を上げることなく、呆然とした表情で幣原秋を見ていました。よろめいた私に強い侮蔑の瞳を向け、幣原秋は言いましました。

「現実を見たくなくて喚いていたのならばそうすればいい。闇祓いなんて辞めてしまえ。お前のその判断が、この無為に過ぎた時間が、他者の命を守るか守れないかの瀬戸際だと——どうして分からない！」

最後は、空気を震わす怒号でした。怒りに顔を歪める幣原秋の瞳には、強い感情が浮き上がっていました。

「狂っている、ああそれで構わない!! 新たな犠牲を出すくらいなら、狂った方が数倍マシだ!! リオンの死に対する多くの感情を、お前ごときが斟酌するな!! 勝手に推し量って好き勝手言われて黙っているほど、ぼくは気が長くない!!」

籠が外れたように叫ぶ彼の瞳から、一筋の涙が零れるのを私は見ました。彼は、流れるものに気付く素振りもなく、私をその場に放って戦禍の最中へと駆け込んで行きました。私はその場にへたりこんだ

まま、物も言えずにその小さな背中を見つめていました。

その後、私は減給処分を受けました。幣原秋は、何もお咎めがありませんでした。公が、私が間違っており幣原秋が正しいのだと認めたのです。私も、そのことに対し一切の不服はありませんでした。

始末書を書いた後、事実関係を確認するために、私は幣原秋の所属する第一班に赴きました。幣原秋は私の書いた書類を一目見て「構いません」と言い突き返しました。尚も謝罪の言葉を紡ごうとする私を遮り、幣原秋は立ち上がると、眉を顰めて私を見上げました。

「あなたは闇祓いに向いていない。その言葉は、撤回しません。あなたは優し過ぎるあまり、極限状態では随分と視野狭窄になるようです。ぼくの班に来なくて、本当によかった」

淡々と紡ぐ彼の階級章は、第一班班長を示していました。エリス・レインウオーターが殉職した、一週間後のことでした。

それでも闇祓いでいたのだ、と、私は幣原秋に返しました。

「どうしてですか？」

無感情に幣原秋は私に問いかけました。

私は、この暗い世の中を変えたいのだと言いました。否、変えたかったのだと。自分の力はとても小さなものだけけれど、それでも変えられる何かがあるのかもしれない、そう思ったから闇祓いになったのだと、そう伝えました。幣原秋は、私から目を逸らして、いつそ聞いていない風に、窓の外、魔法で映し出した夕焼け空を、じっと眺めていました。

私が語り終えても、しばらく幣原秋は何も反応を返しませんでした。気が焦れて、私は逆に彼に問い返しました。どうしてあなたは闇祓いになったのか、と。

幣原秋は、ゆっくりとこちらを振り返りました。笑っていた、と思います。灼き尽くす夕日に照らされた表情は、酷く読みにくいものでした。影が落ちた彼の口元が歪むのを、私は息を止めて見つめていました。

「――復讐のため、ですよ」

……話は、以上に相成りません。それ以降、私は幣原秋と一切の言葉

を交わしたことはありません。

私は、幣原秋が好きにはなれませんでした。そもそも生き方自体、似ているところが本当に一切なかったのでしょうか。私は、幣原秋を理解出来なかった。幣原秋も、私のことを嫌いであったと思います。理解出来ない存在であったと、そう思います。もう、確認する術はありませんけれど……。

でも、万が一、ですよ。もし、幣原秋と出会ったのが、あんな戦場でなかったのなら。あんな、どうしようもない場所でさえ、なかったのなら。

あの稀代の天才と分かり合えたかもしれないと、思うことは罪ですかね？

あの、暖かな陽だまりのような微笑みを、純粋な笑顔を、柔らかな声を——願うことは、悪ですかね？

私は幣原秋の死を悼みます。闇祓いの仲間であったからだけでなく、エリック・ポールドウィン一個人として、彼の死を悼みます。彼が死を選んだ理由を、悲しみます。

復讐のためだと、幣原秋は言いました。復讐のために、闇祓いになったのだと。そう彼に言わせた、世界こそを憎みます。幣原秋を英雄として祭り上げた、世界こそを憎みます。

随分長々と、お時間を頂いてしまいました。ねえ、どうです、最後に一杯だけ。幣原秋に対する、手向けの酒を。……乗ってくださいるんですね、有難うございます。

幣原秋に、そして、天才がいなくなった世界に、乾杯を。

死の秘宝編

第1話 白の世界

「結局——それで、よかつたの」

真つ白な部屋だった。どこを見渡しても真つ白の世界。

声を掛けられたアキ・ポッター^ほは、ゆるゆると顔を上げた。

「——秋」

ぼくとまるつきり同じ顔。少し向こうの方が大人びて見えるのは、彼がぼくより幾つか歳上の外見をしているから。それ以外は、何一つ変わらない。

だって、ぼくは彼なのだ。そして、彼はぼくなのだ。

「……ごめんね、秋。ぼくが、全部決めちゃった」

ぼくは笑った。秋は笑わず、沈鬱な表情を浮かべてぼくを見る。

「なんで、謝るの」

「……そりゃあね、謝りたくもなるよ。だって本当はさ、ぼくの人生って、ぼくの生きてきた日々って、君の未来を上書きしていたようなもんなんだよ……人、一人の人生食い潰して、生きてたんだよ」

「……………」

秋は刹那に、瞳を揺らせた。

「あ……謝らなくちゃいけないのは、ぼくの方だよ。ぼくこそ、君に謝って……今までありがとう、ぼくの代わりに生きてくれてありがとうって、そう……言わなくちゃ、いけないのに。ぼくは死んでしまいたかった。死ぬことすら世界に否定されて、最後の悪足掻きとして君を造り出した。……君に恨まれるべき人間だ。君に、蔑まれるべき人間なのに。……どうして！ そんな顔でぼくを見るの？」

「……何、言ってるの」

息を吐いて、微笑んだ。

「ぼくを造ってくれてありがとう、秋。君がいなかったら、ぼくもここにはいないんだよ。とつても……人として生きるのは、楽しかったよ。たとえば偽物だとしても、君というオリジナルから作られたレプリ

カだとしても、使命を埋め込まれた人形だとしても……それでも、嬉しかった」

秋。君は。

ぼくの、全てだ。

秋の手を取る。冷たい手は、僅かに震えていた。ああ、これは全て、夢なのだ。

「ねえ、秋。きつとね、あともう少しだ。先はそう長くない。ダンブルドアは死んだけれど、ハリーにやるべきことを残してから逝ったはずだ。言い換えれば、ダンブルドアは自分が逝つてもどうにかなるだろうと思つて逝つた——ならば、あともう少しで、全部の決着が付くはずなんだ」

秋のような、純粋な笑顔は浮かべられない。けれど、せめて精一杯の笑顔を、ぼくは浮かべてみせた。

「だから、ぼくのワガママを聞いて。アキ・ポッターが必要とされなくなるまで——ぼくで、いさせて。ぼくの好きに、振る舞わせて」

秋の表情が、くしやりと歪んだ。目を伏せ、痛みを堪える顔つきになる。

しばらくそのままだったが、やがて秋は顔を上げ、ぼくの両目をしっかりと見据えた。

「分かった」

「……ありがとう、秋」



——『この状況』を設定したのは、闇の帝王本人だった。貼り付けた無表情の下、セブルス・スネイプは密やかに苦いものを飲み込んだ。信じられないほど重苦しい空気。身じろぎすらも出来ない、物音一つ立てられない、呼吸音ですらも押さえるほどの——殺気。

自分に向けられていなくとも、ただこの場にいるだけでこんなにも痛いのだ。それなのに、自身に向けた殺意の全てを一身に背負っている目の前の少年は、普段と変わらぬ余裕げな笑みを浮かべていた。

「初めましての方も。そうでない方も。初めまして、幣原秋です。以後お見知り置きを」

「……アンタを見知り置け、と？」

言葉を発したのはベラトリクス・レストレンジだ。凄絶な笑みを面に貼り付けている。この場に数多い死喰い人の中でも、強烈な殺気を少年へと向けていた。

「アンタと？ あたしらをアズカバンへと突っ込んだアンタと、一体これからどうやってお手手繋いで一蓮托生して行こうって言うんだ？ 一体何人がアンタにブチ殺され何人がアズカバンにブチ込まれたと思ってる！」

「別にここに居る人たち皆、一蓮托生ではないと思うよ」

涼やかな声だったが、僅かな冷ややかさも伴っていた。

少し顎を上げ、少年はぐるりと卓を囲む人を見渡す。その視線に、大多数は顔を伏せた。

「勘違いしないでよ。ぼくは闇の帝王に誓えど、アンタらに従う訳じゃない。——身の程を知りなよ」

——本当に豪胆だ。これがかつての友、幣原秋の姿だろうか。引っ込み思案で人見知りな、幣原秋と——

否。そうでないことをセブルスは知っている。ここにいるのは、こうして『幣原秋』として喋っているのは、幣原秋に『造られた』存在、アキ・ポッター。

アキは左の袖を捲ると、細い上腕を晒した。そこに『闇の印』が刻まれていることに、何人かは息を呑み、何人かは目を逸らす。

「——伊達や酔狂でここに立っている訳じゃない」
淡々とした、声だった。

この印をアキが刻み付けたときのことを、セブルスは思い返していた。

大人の男でも悶え苦しみ吐き出す悲鳴を、アキは理性で飲み込んだ。砕けるほどに奥歯を噛み締め、右の拳を震えが見て取れるほどに強くつよく握り締めながらも、瞳の光を失わせることも、瞳を揺らさせることすらもなかった。

——きつと、秋は願ったのだ。

自らの魂の欠片に。強く在れ、と。前を向け、と。

目の前のアキは、瞳を煌めかせ口を開いた。

「忘れんなよ。ぼくは『黒衣の天才』幣原秋だ。前線から退いて長いけれど、いざとなりやこの家の結界全て粉々にぶち壊した挙句アンタら全員殺して逃走することだって出来るんだぜ」

その言葉に、静かに場が震撼した。言葉を放ったのが、自分の子供ほどの年齢の少年だからと言って、囲む大人に侮る色は一切見られない。

かつて敵だったからこそ——徹底的に理解していた。

「秋よ。あまり脅しつけない——ある程度の寛容は必要だ。目下の者に対する慈悲とでも呼ぼうか」

そう言つて、闇の帝王はアキの肩に手を置いた。そして、自身の隣の席へ座るよう誘導する。

「さて、話を再開しようぞ」

その言葉を皮切りに、中断されていた会議が始まったが、しかし雰囲気明らかに変化したのは否めなかった。

誰もが、少年を伺っていた。それに闇の帝王が気付いていない訳でもあるまいに——いや、態と、そうさせているのか。

ドラコ・マルフォイは、凍りついた表情でアキから目を逸らせずにいた。視線に気付いたアキは、しかし一切興味関心を向けぬ瞳のままに目を逸らす。全く、役者だ。

「世界全体でも……純血のみの世になるまで、我々を蝕む病根を切り取るのだ」

闇の帝王は、ルシウス・マルフォイの杖を上げると、テーブルの上で宙吊りになっている魔女を狙い杖を振った。息を吹き返した魔女は呻きながら、拘束を外そうと足掻く。

「セブルス、客人が誰だかわかるか？」

闇の帝王が尋ねる。顔を上げた魔女と、目が合った。

「セブルス！ 助けて！」

怯え切った悲痛な声だ。

奥歯で舌を噛む。余計な感情を出さぬように。余計な言葉を吐かぬように。

「なるほど。お前はどうか？ ドラコ」

ドラコは肩を震わせ、パツと首を横に振る。顔くらいは見たことがあるだろうが、知らないのは事実だろう。

「お前がこの女の授業を取るはずはなかったな。それではお前はどうか？ ——秋」

アキは感情を読まさぬ瞳でじつと魔女を見据えていたが、静かに口を開いた。

「ホグワーツ魔法魔術学校マグル学教授、チャリテイ・バーベッジ女史」

「アキ……アキなの？ どうしてこんなところにいるの？、お願い、助けて！」

「いい子だ、秋。そう。バーベッジ教授は魔法使いの子弟にマグルのことを教えておいでだった。何でも？ 奴らが我々魔法族とそれほど違わないとか……」

アキの頭を愛おしむように撫でながら、闇の帝王は嗤った。ここは笑うべきところなのだ、と察し、死喰い人らも笑い声を漏らす。しかしアキは、ピクリとも表情を変えなかった。

「アキ、お願いよ……あなたなら助けられるでしょう、私はあなたのことを知っているわ……優しくって、賢くて気が利いて……助けて、お願い……」

「黙れ」

軽やかな一言と杖の一振り、闇の帝王は魔女を黙らせた。

「可哀想になあ、秋。この女のくだらぬ授業などを受けなければならぬ羽目になるとは。生徒は教師を選べない、ホグワーツでは。きて、魔法族の子弟の精神を汚辱するだけでは飽き足らず、バーベッジ教授は先週『日刊預言者新聞』に穢れた血を擁護する熱烈な一文をお書きになった。我々の知識や魔法を盗む奴らを受け入れなければならぬ、と宣うた。純血が徐々に減ってきているのは、バーベッジ教授によれば最も望ましい状況にあるとのことだ。我々全員をマグルと交わら

せるおつもりよ。もしくは、勿論狼人間とだな……」

怒りと軽蔑が籠った声だった。底冷えのする激情に触れ、今度は誰一人として笑い声を立てはしない。

「最期の慈悲だ。一言だけ、喋らせてやろう」

魔女に杖を向け、闇の帝王は言う。口が自由になった魔女は、涙に濡れた顔を向け、アキを見た。

「信じて、いたのに……」

「アバダ・ケダブラ」

緑の閃光に、アキは目を瞑った。魔女の身体はテーブルの上に落ち、死喰い人の何人かは息を呑んで飛び退いた。

「眩しかったかな？ 秋」

「……次は予告してくれると助かるなあ」

「それは済まなかった。見慣れた閃光であると思っていたのだがな。最期は自らの生徒に対し恨み言とは、全く見上げた教師だ。秋……お前もそう思うだろうか？」

紅い瞳が、アキを見る。

「ああ、その通りだよ」

——漆黒の瞳は、一体何を想っているのだろうか。

「ナギニ、夕餉だ」

優しい声は、冷え切っていた。

第2話 鉛色の魂

プリベツト通り四番地。今までは二人で使っていた寝室は、今となつてはハリー一人。本来なら一人部屋であり、適正なサイズであるはずのそれは、いつもいたはずの少年が一人いないだけで、随分と空々しい。

「アキが裏切った、か……」

新聞を手に取り、ベッドに横たわると広げた。

日刊預言者新聞は連日沸き立っていた。アルバス・ダンブルドアの悲報と、あと——『黒衣の天才』幣原秋、彼のことで。

七月三日。イギリス魔法界随一のラジオ『ロンドン・マジック・タイムス』がジャックされ、また同時にあらゆる魔法界の重要ポイントにてモニターが出現した。

短い二分間、その間に語った少年の言は、すぐさまイギリス全土を席卷した。少年の言を、たまたま録音していた人物がいた。その者が日刊預言者新聞に録音テープを回したらしい。いまや少年の言葉を知らぬ者はいなかった。

中面に、デカデカと広告が載っていた。『アルバス・ダンブルドアの真つ白な人生と真つ赤な嘘』広告のすぐ隣だった。

『リータ・スキーター女史、次回作は《黒衣の天才》の過去をすつぱ抜く！ 八月下旬発売予定！』……」

読み上げ、気分が悪くなった。身を起こす。

『黒衣の天才』幣原秋の——アキの、記事。

「……………」

欲しいなあ、と思つてしまうことが、腹立たしかった。

自分が一番、アキのことについて知っているはずなのに。ずっとずっと、アキと一緒にいたのに。真実か嘘かもあやふやなりータの本を、欲しいと考へてしまうなんて。

——でも、アキが教えてくれなかったんだ。

ハリーが聞こうとしなかったからじゃないのか？

「うるさい……やめろ」

頭を振ると、新聞を閉じ、ベッドに叩きつけた。部屋を出る。

居間には、ダーズリー家の三人が勢揃いしていた。バーノン・ダーズリーはハリーを睨むと、唸るように告げる。

「気が変わった。わしらは行かん」

「そりや、驚いた」

「お前の言うことなど一言も信じるものか。わしらはここに残る。

……お前が言うには、わしらが狙われとるとか。相手は——」

「僕たちの仲間』、そっだよ」

愛想尽かしながらも呟いた。

「わしは信じないぞ。これはお前の、家に乗っ取る罠だろう！」

「家？ どの家」

「この家、わしらの家だ！ このあたりは住宅の価値がうなぎ上りだ、邪魔なわしらを追い出して、あつという間に権利証はお前の名前になって——」

「おじさん気は確か？ 顔ばかりか頭までおかしくなっちゃったの？

僕にはもう家がある、名付け親が遺してくれた家だよ。それなのにどうして僕がこの家を欲しがって訳？ 楽しい思い出がいっぱいだから？」

——まあ、アキと過ごした日々は、悪くはなかった。

二人で手を繋いで、自分たちが魔法使いとも知らないままに、ただただ二人で守り合い生きてきた。

苦いものを飲み込んだ。アキは今、ここにはいない。

「……全部説明したはずだ。僕が十七歳になれば、僕の安全を保つてきた守りの呪文が破れる。そうしたら、おじさんたちも僕も危険に晒される。騎士団は、ヴォルデモートが必ずおじさんたちを狙うと見ている。僕の居場所を見つけ出そうとして拷問するためか、さもなければ、おじさんたちを人質に取れば僕が助けにくるだろうと考えてのことでだ」

バーノンはしばらく黙りこんだ。

その時ヒュイツと風を切る音と共に、一通の手紙が舞い込んでくる。手紙は優雅に滑ると、ペチュニア・ダーズリーの元に過たず届い

た。ペチュニアは青褪めた顔のまま手紙を震える手で開く。

数秒経って、彼女は毅然とした眼差しで夫のバーノンを見た。

「この家を出ましよう、バーノン」

「しかし、ペチュニアや……」

「ダドリー、準備は終わった?」

ペチュニアはバーノンの言葉を無視して息子のダドリーに声を掛ける。ハリーはペチュニアの手元に握られた手紙を見、尋ねた。

「一体誰からの?」

マグルの郵便ではないことは確かだ。マグルの手紙は飛んではない。

となると、魔法使いからの手紙だろう。しかしそれにしては、随分と落ち着いているのが気になった。魔法嫌いのペチュニアなら、一体誰からであれ驚愕しそうなものだが……。

ペチュニアはハリーの質問には一切答えず、自らも最後の支度をすするため背を向けた。



鈍い音が、部屋に響いた。激情を瞳に迸らせながら、アキ・ポッターは石造りの壁を手加減なしに殴りつける。一度たらず、二度、三度。指の骨がイカれるぞ、そう思い慌ててセブルスは手を伸ばすも「触るな!」と低い声で凄まれる。弾けた殺気に手を引いた。

数度殴って少しは満足したのか、肩を震わせながらアキは深く、深く息を吐いた。目を閉じ、石壁にゆっくりと凭れかかる。

「……守れなかった、ことが、腹立たしいだけだから。大丈夫、ぼくは……」

「その顔でよく、大丈夫だと抜かせるものだ。……守れなかったのはお前だけではない。私もだ」

「だから何、気にするなって? 考えるなって? 残念だけれどぼくはそういう風には出来ていない。幣原はそういう風にぼくを造ってはいないんだ」

前髪を引つ張りながら、虚空を睨みアキは眩いた。危なっかしい色の瞳だった。

「目の前で、仲間が死んだ時……一人になって、部屋で荒れていた幣原を見ててき……そんなになる程のものか？　って、正直思っていた。ああ、でも、これはダメだ……ダメ、だよ……」

アキの、血が滲んでいる左手を掴んだ。そのまま部屋へと連れて行く。椅子に座らせると、治癒呪文を唱えた。

「……どうしてあそこで、目を瞑った？」

尋ねる。

そこが、疑問だった。この少年は、自らの眼前で行われた殺人を、目を逸らすよりもむしろはつきりと目を見開くような人間だと、勝手にそう考えていたから。

「幣原に気を遣った」

答える声は、淡々としていた。

「あいつは、幣原は……人が死ぬ様から、目を逸らさないから。あいつは決して忘れない。どんな凄惨な死に様からも、あいつは決して目を逸らさない。それが、自分に与えられた罰だとも言うように受け止める。……バカなんだ。忘れることは、苦手なのに」

そこで言葉を切つて、アキはゆつくりと首を振った。息を吐き、項垂れる。

「ぼくが守つてあげないといけないんだ。不安定なあいつの全てを知つて、支えてあげられるのはぼくだけだ……ぼくはあいつの全てを知っている。あいつの弱さも、脆さも……」

ぎゅ、と眉が寄せられた。両の拳が握られる。

もし、目の前にいる少年がアキでなく、幣原秋であったなら。自分は躊躇なく、震えるその手に手を重ねられたのだろうか。

そんなどうしようもないことを、考えた。

「……アキ」

カタン、という物音に、振り返る。瞬間だった。

黒い風が隣を駆ける。気付いた時には、アキはワームテール——ピーター・ペティグリュアの喉元を押さえ、壁に押し付けていた。

「……いいかピーター」

押し殺した声だった。

二人の背丈は、あまり変わらない。アキはワームテールの襟首を掴むと揺さぶった。必死な瞳だった。

「ぼくはお前を許さない……っ、ジェームズとリリーを裏切って、シリウスと幣原秋をも陥れたお前を許さない！ だがひとつ教えてくれ、どうしてお前はぼくに、あそこで電話を掛けてきた？ どうして電話で『ハリーを守って』なんて——どういう意図でそんな言葉を吐いたんだよ！ 答えろよピーター・ペティグリュー!!」

ワームテールは苦しげに呻いた。止めようとセブルスは立ち上がる。

その時だった。ワームテールの銀色の腕が持ち上がる。その腕は人体の可動域を超越して、ワームテールの首に手を掛けた。ハッとアキは息を呑むと、ワームテールから手を離し、代わりに杖を抜き一文字に横薙ぐ。

銀の腕に魔法陣が一瞬浮かび上がると、やがて光の粒子となって掻き消え、銀の腕は力なく重力に従い垂れた。

「……なるほど、呪いか。ヴォルデモートから貰った腕だよね……どういふ条件で発動するんだろう……」

アキは呟いていたが、我に返ったように頭を振った。

ワームテールは蹲り、恐怖に喘いでいたが、やがて大粒の涙をぼろぼろと零し始めた。アキの前に両手を付くと、頭を下げる。

「ごめん……っ、ごめんなさい、ごめんなさい……!! 何度謝ってもどう謝ってもどうしようもない、本当にどうしようもないことをしたのは分かってるんだ、僕が全部壊してしまった、僕が、僕が……!!」

それは命乞いであるのか、それともかつての友情の残滓であるのか、セブルスには判断が付かなかった。アキ・ポッター——幣原秋という強烈な才を持つ者、彼の不興を買わぬよう媚び諂っているのか、それとも純粹に謝罪しているのか、判別が出来なかった。

しかしアキは、後者と取ることにしたようだ。アキは、そういう人間だ。セブルスはそのことを、よく知っていた。

「……ねえ、ピーター」

外間もなく這いつくばる男を見下ろし、アキは声を掛けた。

「どうしてあの時、幣原秋に『ハリーを守って』なんて言ったの？」

ぶるりと、ワームテールは大きく背中を震わせた。くぐもった声が、低い場所から漏れる。

「……ジエームズが、最後にそう、言ったんだ……」

「……そう」

アキは目を閉じた。両手で顔を覆うと、深いため息を吐く。

両手を下ろした後には、普段通り強い意志を宿した瞳があった。

「ぼくに協力して、ピーター・ペティグリュ」

第3話 浅緋色の思い出

七月二十六日。今日は『七人のハリー作戦』が実行される日だ。

ぼくはスネイプ教授の自宅で、ただただハリーの無事を祈っていた。

「大丈夫、大丈夫……ハリーは絶対、絶対に大丈夫だから……」

自分に言い聞かせるように、何度も何度も呟く。

ぼくの存在意義——『ハリーを守る』、それに急ぎ立てられるように、上がった心拍は収まらない。ハリーは危険だ、ダメだ、行かなくてはいけない、ハリーの元へ、行くんだよ君が、頭の中の声は、鳴り止まない。

「ダメだよ……ぼくは、行ってはいけない……」

全てのことが無駄になる。ぼくとセブルスがこうして積み重ねてきたことが、全て無駄になる。

「大丈夫、絶対に大丈夫だから……」

首筋に垂れる汗が気持ち悪い。やらなければいけないことに逆らっているという強烈な違和感が、気持ち悪い。

それでも、ほんの少しだけ、ホツとしてしまう。

だってこの感覚は、ぼくがアキ・ポッターだからこそそのものなのだ。幣原秋が『ハリー・ポッターを守る』ために造り出したぼくだからこそ、抱く感情なのだ。

この気持ちこそが、ぼくがぼくであり、幣原秋ではないという証。不安定な場所にいるぼくが、唯一縋れるもの。

扉が開く音に、思わず肩が跳ねた。おずおすと顔を上げる。教授が、セブルス・スネイプが帰ってきたのだ。

「教授……っ」

部屋の電気が点く。いつの間にか、周囲は真っ暗だった。

「寝ていると……、まあ、無理もないか」

ぼくはどれほど悲痛な顔をしていたのだろう。教授は呟きかけた言葉を切って、そんな言葉を続けた。

「貴様の兄は無事だ。結界の内側に入ったことを確認した」

その言葉に、全身から力が抜けて行くのが分かった。思わず、その場にへたり込む。

「そっか……よかった。……ああ、教授も、無事に帰ってきてくれてよかった」

「私を気遣える程度には落ち着いたらいいな」

そう言われ、気まずくて目を逸らした。そうだ、普通は真つ先に教授の無事を喜ぶところだったのに。

口元に笑みを滲ませた教授は、しかしすぐさま笑みを拭い去った。

「マッド・アイが死んだ」

「——え」

身体が冷える。しかし頭は、この頭はやすやすと理解に至るのだ。

「あの、人が——」

死なないと思っていた、なんてことは言えない。殺しても死ななさそうだった、ダンブルドアだって死んだのだ。殺したのは、目の前でぼくを静かに見下ろす男。

ぼくらの手は共に、血に塗れている。

「——そう」

静かに目を伏せた。

今更他人の死に立ち止まるな。死を省みるな。

前だけを向いている、アキ・ポッター。

「まだ眠りにつくほど、精神は落ち着いていないだろう——アキ・ポッター、出立するぞ」

「え、どこに?」

決まっている、と教授は低い声で呟いた。

「グリモールド・プレイスだ」



『七人のハリー作戦』、それにマッド・アイの——アラスター・ムーデイの死。これらに騎士団は掛かり切りだろう。忙しない今だからこそ、かつて騎士団の本部であり、更に以前はブラック家本家であったグリ

モールド・プレイスはもぬけの殻、のはずだ。

対幣原秋に、どれほど強化された侵入者対策が施されているのだろうと少し楽しみではあったのだが、肩透かしの期待外れだった。

どうやら不死鳥の騎士団は『ぼくらを中に入れない』ことに尽力するよりも『大切なものや見られて困るものをここに置いておかない』ことに力を注いだようだ。そちらの方が断然賢い。

碌なものも見当たらず、諦めてぼくは教授の姿を探した。

「教授ー？ どこですかー」

大声を出しながら上階へと上がる。開け放たれていたのは、シリウス の部屋だった。

覗き込むと、こちらに背を向け教授は座り込んでいる。

「教授……？」

ぼくの声に、教授はびくりと肩を震わせ振り返った。涙に濡れた顔に、見てはいけないものを見てしまった気がして足が竦む。目を逸らした。

「……探したよ。下は何も残っていない、見事な撤退加減さ」

「……そう、か」

「……………どうしたの」

教授は少し考えるようにして、ぼくを手招きした。躊躇しながらも近寄る。

教授の手には、一通の手紙と写真が握られていた。それがリリーの字だということを、ぼくは即座に理解した。

「り……っ、リリー」

吐息と共に言葉を漏らした。熱い感情が、胸の奥底から湧き上がる。痛くて苦しくやるせない、しかしそれでも、確かにそれは暖かった。温もりを帯びていた。

教授は『愛を込めて』と書かれた手紙を懐に仕舞い込む。そしてポッター家三人が笑っている写真を手に取ると、躊躇なく破った。リリーが写っている切れ端だけを、手紙と同じように懐に入れた。

何と声を掛ければいいのか。全てが全て不正解な気がして、ぼくはただ黙って教授の背中を叩いた。



ガンと大きな音に、ハリーも、周囲の誰もが振り返った。リーマス・ルーピンが近くの壁を思いつきり蹴り付けた音だった。

手には先ほど速報として届いた、日刊預言者新聞の夕刊が握られている。震える右手は、新聞をぐしゃぐしゃにするほど力強い。

「リーマス！　うちの壁を蹴らないでちょうだい！」

「モリー、ごめんね、あたしが宥めるから。大丈夫」

目を剥くモリーに、トンクスは慌てて立ち上がるとリーマスの元へ駆け寄った。色んな言葉を掛けるも、リーマスの耳に届いているのかは怪しい。

ハリーはそつと二人の元に近付いた。リーマスが人前で荒れる様を見せるのは——激情を大人の仮面に隠し切れないのは、大体が幣原秋関連であったからだ。

「……許せるか……？　こんなこと、許されるとでも……っ！」

「許せないよ、分かる、分かるよ。許されちゃいけないことだ。でもリーマス、今は頭を冷やして。お願いだから」

「……………」

リーマスが床に叩きつけた新聞を、こつそり拾った。トンクスは僅かに咎める眼差しを向けたが、何も言わなかった。

広げて——ああ、そういうことか、と、リーマスの激情に納得をする。

掘り起こされ、暴かれた幣原秋の墓、その写真が、写っていた。

第4話 葵色の約束

荷物を整理していた折、ふと羊皮紙が目に入った。二年生の頃、ぼくとハリーが連絡ツールとして互いに持ち合っていた羊皮紙だ。

ぼくが教授と共にホグワーツから姿を消した日から一週間くらいは、引つ切り無しにハリーから連絡が来ていたものだが（無視するのに多大な精神力を用いたし途中で教授に取り上げられた）、しばらくは何の音沙汰もなかったため手元に戻ってきていたものだ。

なんの気なしに羊皮紙を手に取り——息が、止まった。

『アキ、誕生日おめでとう』

滑らかな文字が躍る。ハリーの字。

そうか、今日は七月三十一日。ハリーの——ぼくらの、誕生日。文字が音もなく綴られていく様を、ぼくは息を呑んで見つめていた。

『元気にしているかな。ちゃんとご飯食べているかな。ちゃんと、眠れているのかな』

脳内で聞こえる、ハリーの声。簡単に思い出せる。

文字の通りに、声が聞こえる。

だって、ずっとずっと一緒だったんだ。

『ルーピン先生とトンクスが、この前結婚式を挙げたんだって。慎重しやかで、それでもきつと、いい式になったことだろう。明日は、ビルとフラーの結婚式があるんだよ』

柔らかな文字。ハリーらしい真っ直ぐさを持った字は、ぼくに静かに語りかけてくる。

どうして、ハリーはぼくを責めない。どうしてぼくを嫌わない。

ぼくは、ハリー達の敵なのに。ぼくは、君たちを裏切ったのに。

どうして、どうして、どうして責めない。

流れるように文字が綴られていたのが、ふと揺らいだ。

『……幸せが満ちている。僕は、多くの人に愛されている。……それなのに、どうして。どうして、今僕の隣には、君がいないんだろう』
文字を書きかけたまま、ハリーはその言葉をぐしゃぐしゃと消し

た。その文字は潰され見えなくなる。

再びインクが浮き上がったときは、普段通りの筆致だった。

『大好きな、僕のたった一人の弟よ。十七歳の誕生日、おめでとう』
ぼたりと雫が羊皮紙に垂れた。それで初めて、自分が泣いていたことに気がついた。

慌てて手の甲で拭うも、次から次へと溢れてくる。

「ハリー……」

愛おしさに、胸が苦しくなる。

天を、仰いだ。



「付いて行くのか？」というセブルスを断り、一人でプリベット通りへと向かった。四番地にあるそのタウン・ハウスは、一見すると何も変わらないただの住宅だけれど、解析してみれば予想通り、騎士団の守護結界が幾重にも掛けられていた。

監視の人間は、入り口と裏口を見張るようにそれぞれ一人ずつ。結界の種類は魔力検知式のもものが五つ、そして——一歩下がって目を細めた。非魔法界のもものが二つ、潜むようにして置いてある。マッド・アイか果たして違う人のものか定かじやないけれど、粗忽者ならば引つかかってしまうだろう。

果たしてそれ以外にもう罫はないか、もう十分ほど粘って観察したが、流石にそれ以上は仕掛けられていないようだった。

姿を宵闇に溶け込ませる。足音も気配も、全てを掻き消した。結界を一時的に解除させ、極々普通にチャイムを鳴らす。

リンと室内に響いたチャイムに少し待てば、すぐさまペチュニアおばさんが扉を押し開けた。見えぬチャイムの主におばさんが目を瞬かせたその隙に、家の中へと滑り込む。

ぼくが魔法を解除したのと、おばさんがぼくを見たのはほぼ同時だった。ペチュニアおばさんはハッと息を呑む。ぼくはおばさんに笑いかけると、そのまま——玄関に手を付いた。土下座する。

「おばさん……今までぼくを育ててくれて、ありがとうございます。ぼくを受け入れてくれて、本当にありがとう。ぼくを生かしてくれて、本当に感謝しています……幣原秋との約束を、守ってくれて、ありがとうございます」

ペチュニアおばさんは戦慄く瞳でぼくを見据えていた。騒ぎを聞きつけたか、おじさんとダドリーだろう、こちらに駆け寄って来る。も、ぼくを警戒してか一定ライン以上は近付いて来ない。

「……アキ、よね」

「……うん、そうだよ」

「じゃあ、全部思い出したのね」

ぼくはゆっくりと顔を上げた。ペチュニアおばさんは、じつとぼくを見つめている。

「……うん」

はつきりと、頷いた。

「ならば、アキ。幣原秋の代わりに、あなたに頼みます」

思っていたより、随分と優しい声だった。ぼくに手を差し伸べ、ペチュニアは微笑む。

それは、無理矢理なものだったが、それでも確かに『笑顔』なのだった。

「……約束、まだ、守ってくれますか」

第5話 聴色の信託

1997年8月1日。英国魔法省、陥落。

時の魔法省大臣ルーファス・スクリムジョールは、闇の帝王、並びに『黒衣の天才』に全て従うと声明を発表した。



「……まあるで」

ぼくはぐるりと周囲を見回した。

「江戸城無血開城、みたいだなあ……」

少し狙った節はある。血を、犠牲を、一切出したくなかったのだ。

上手く行くかは賭けだった。特に頭のルーファス・スクリムジョールは、そもそもが闇祓い局の局長だ。腹に据えかねたヴォルデモートが、スクリムジョールを殺してしまう可能性は、十分にあつた。――まあ、きつとそうはしないだろうという予想もありはしたのだが。

ヴォルデモートは、有能な者を殺すことを好まない。この場合の『有能な者』というのは、単純に能力の多少を指すだけでなく『魔法使いとして有望な者』ということだ。

顕著なのが、純血思想。非魔法族の血が入り混じることで、本来持ち得るはずの力が薄まることを恐れるのは、実際のところ真理だろう。

だって、魔法族と非魔法族には純然たる違いがあるのだ。差別とか区別だとか、そういう問題じゃない。これは、はっきりと理解しておかなくてはいけない。

魔法使いとマグルは違う生き物だ。ラインを引いて接し合い、話し合うことは出来れど、対個人としてはともかく、集団として同一視することは難しい。というか、はっきり言わせてもらえば、出来ない。

互いの文化を尊重するのならば、お互いに不可侵でいるのが一番いい。その点に於いて……その点に於いては、ぼくとヴォルデモートは意見が一致した。

そもその話。ヴォルデモートは全てのマグルを滅ぼそうと思っ
ていないのだ。魔法族に関わりを持つマグルの存在が許せないだけ
で。それは——それは、彼の生い立ちからも、なんとなく察せられる
ことだろう。

だからこそ、統治。線引きをきつちりとつけ、マグルが目に入ら
ないようにすることこそ、ヴォルデモートの望むこと。

……言ってしまうえば、簡単なのだ。やり方が少し過激なだけで。

実際魔法界は、非魔法界と分離する方向を歩んでいる……いや、魔
法界が非魔法界に取り残されているのだ。マグルは急速に情報化社
会へと適応し、世界の足並みを揃え始めた。

頑迷なのは魔法界の方。未だに羊皮紙に羽根ペンだなんて。服装
も永遠中世引きずってるし、そりゃあ取り残されるに決まっている。
もはやマグルこそが、ぼくたち魔法使いに目も向けなくなることだろ
う。「魔法使い？ ああ、ファンタジー小説でよく見るアレね……」み
たいな。

「……ま、このまま魔法界が滅びていくのは、ぼくも忍びない」
ならば魔法界の進歩に、少しばかり手を貸すのも悪くはない。

大理石の床を闊歩する。懐かしい、魔法省。かつての風景とそう変
わりはない。二十年近く時間は経っているというのに。

変化がないというのは、それはそれで駄目なんだ。閉じこもってば
かりじゃあ空気は淀む。世界は停滞を許さないし、それでも停滞した
いと望むなら、世界に置いていかれることを選択しなければならな
い。

ぼくを見た魔法省の人たちは、それぞれ息を呑み、ぼくの前の道を
開ける。やれやれ随分と有名になったものだ。

本当に関係ないけど、一番初めにハグリッドに言われた言葉を思い
返して、思い出し笑いをしそうになった。海の上の掘建小屋で、ハ
リーと共に自分は魔法使いなのだ知らされて。

『アキもだ……ハリーばかり注目されるつつわけじゃねえんだ、おま
えさんは元々天性の才能がある、ハリーに隠れようとしたって無駄だ
ぞ』

まさかハグリッドも、ぼくがこんなことになるだろうと予測していた訳ではないだろう。それでも、何だか愉快的気分だった。

そんな気分は、ある出来事によって破られる。

真後ろから来た呪いは、常に貼っていた防御呪文によって離散した。ぼくは立ち止まると、ゆっくりと振り返る。

若い魔法使いだった。この制服は見覚えがある、どころじやない。間違いなく闇祓いのものだ。怒りに染まった瞳で、杖をぼくに向け、ぼくを見据えていた。

省内のざわめきは、一瞬で水を打ったように静まり返る。

「お、お前の……お前たちのせいだ。ムーディ先生を……」

一歩踏み出す足は、震えていた。今にも崩れ落ちそうな身体で、それでもぼくを睨みつける。

「……っ、お前のせいだっ、殺してやるツツツ!!」

若い闇祓いが杖を振るより先に、指を鳴らした。風が周囲を吹き荒び、一息で男を吹き飛ばす。壁に思いつき叩きつけられた男は、そのまま静かに伸びたようだった。

「……身の程を知りなよ、わっかいなあ」

見下した瞳で、ぼくは嘲笑う。目を逸らし、元のように歩き出した。後ろで喧騒が、堪え切れなくなったように爆発した。

魔法省の地図にはない、最奥の場所。選ばれた者しか、そもそも足を踏み入れることが許されない場所——魔法省内閣。

リーフがこの辺りからいつも姿を現していた、そのことを考えながら突き進む。

近衛兵など、ぼくの敵じやない。むしろ居てくれるだけ目印だ、道案内みたいなものだった。

やがて——最奥の重たい扉を開けた先には、それぞれの首に何万ガリオンも価値がある、この部屋吹っ飛ばしたら一体どうなるだろうと悪趣味な想像をしてしまうくらいの重鎮がズラリと雁首揃えて、ぼくに呆然とした眼差しを向けていた。

杖を瞬時に抜くような者は一人もいない——むしろ肩透かしだった。平和に錆び切ってしまったのか。少しばかり見下した色が

入り混じるのは、仕方がなかった。その中からリイフ・フェイスナーの姿を探す——と、探す手間が省けた。立ち上がったリイフは、青褪めてはいたがしつかりとした眼差しでぼくを見据えていた。

「話がしたい、幣原秋——いや、アキ」



マイクを掴み、声を出す前に軽く咳込んだ。襟元を引っ張ると、ぐるりと周囲を見渡す。

自らを取り巻くモニターを眺め、一度息を吐き前髪を引っ張り——顔を上げた。

電源が付いたモニターは、こちらからは啞然とした表情でこちらを見つめる人々の姿が映し出されている。逆に向こうからは、ぼくの姿だけが映っているはずだ。マイクを通し、前回と同様、ラジオもジャック済み。

全てが全て、計算尽くの笑みをぼくは浮かべた。

「はい、注目。皆さん、ぼくのこと覚えてる？ 七月三日に同じように演説した『黒衣の天才』幣原秋だけど、覚えているかな？ まあ一月前の、そうだったの一月前のことすらも覚えていられない脆弱な記憶の持ち主の人間は淘汰されてしかるべきだと、ぼくなんかは思うがね。

人間が一番保持するべきは、その理性でも器用な指先でも、明晰な頭脳でもない。記憶だよ。脈々と受け継がれるべき記憶だ。先人たちの紡いできた世を引き継ぎ、更に繁栄させるため、言葉を、伝達手段を生み出した。全てが全て、記憶を受け継がせるための装置に過ぎない。だからこそ、記憶力が悪い者は淘汰されるべきだ、せつかくの人類の叡智を受け取るにはもつたない」

戯言を並べ立てた後、軽く咳払い。目線で、指の動き一つで、空気を支配する。

「……さて。今日は皆さんに大事な大事なお知らせがあります。魔法省が今日付けでぼくらの手に落ちた。知っている人も、いることだろ

う。

「おや？ 驚愕している人も見受けられるね。ダメだよ情報はいち早く察知しておかないと、死んじゃうよ？ ふふ、じゃあこれはどうだろう？ 英国魔法界唯一の『中立不可侵』——ふふっ、もうこの看板も意味をなさない。『中立不可侵』も落ちた。魔法省、聖マンガ、それにホグワーツは、ぼくらのものだ」

「そう言い切って、作り笑いを顔から拭い去った。目から力を抜く。薄っすらと笑んで、ぼくは言葉が続けた。

「……アキ・ポッターが言う。ぼくの学友よ。ホグワーツで学ぶ全ての徒よ。……ホグワーツは安全だ。ぼくが全てを保証する。ぼくが、全てを守ってあげる。……新学期に、ホグワーツで会おう」

最後の言葉を紡いで、通信を落とす。消えたモニターに、大きく息を吐いて座り込んだ。

「全く、慣れるもんじゃない、こんなのは。公に立つのは苦手なのだ。

「……ちゃんと、伝わったかなあ」

「伝えたかったのは、一番最後。

「ぼくの友人たちは、まだぼくを友人だと思ってくれているのだろうか。」

「……………これでいい」

大きく息を吐いて、顔を覆った。

第6話 青鈍色の葛藤

ホグワーツを落とすとしたということで、死喰い人の重鎮は再び会議のために集められていた。ぼくは会議の空間におりはするものの、会話に加わる気はさらさらなく、取り寄せたリータ・スキータ著『黒衣の天才』——望まぬ栄光と死』という、まあざっくり言ってしまうと幣原秋の伝記本のようなものを読んでいた。まあ、幣原秋だけではなく、その本の中にはアキ・ポッターの名前もありはするのだが。幣原秋とアキ・ポッターについて、憶測をも多分に交えた娯楽本だった。

「面白いかな？ 秋」

「悪くないよ、そうそう的外れでもない」

ヴォルデモートに声を掛けられ、気軽にぼくは答える。

「ま、流石に日本魔法界については調べられなかったみたいだけど？

結構いい線行ってるんじゃない」

「ということは、幣原家についてはノータッチだということか」

「そういうこと。まあ、海を挟んじゃ大変だよなあ。記者に同情するよ」

そういや四年生の頃、リータに週間魔女で色々書き立てられたこともあった。よく調べたものだと感心したが、もしかして誰か信頼ある情報源があるのかもしれない。正直、どうでもいい。

会議は話が決まらないものだと相場が決まっているが、しかしヴォルデモートは流石有能だった。有能な指揮官が頭にいる集団は強い。サクサク話が決まってゆく。

ホグワーツ魔法魔術学校の校長に、セブルス・スネイプ。空いている闇の魔術に対する防衛術、マグル学、それぞれの教授としてアミカス・カロー、アレクト・カローの兄妹。

この二人はヴォルデモートに恭順を誓うというよりは、単純に快楽で人を害するタイプの者だ。言葉は通じないと見ている。となると、ホグワーツの生徒を守るためには、この二人を抑えておく必要がある。色々と、早めに策を立てておかないと。

有能な指揮官らしく、会議はサクサクと終わった。この辺り、ぼく

はヴォルデモートの能力を高く評価している。高く、というか、能力をありのままに見ているだけなのだが。

そもそのポテンシャル自体、この人は相当に高いから。

「秋よ。貴様はどうする?」

そうヴォルデモートに尋ねられ、少し迷った。しかし、答えは決まっている。

「セブルスと一緒に、ホグワーツに行くよ。せつかく最高学年なんだしね。きつと主席のバッジがもらえるはずだ」

とことんまでに貴様らしいな、と、ヴォルデモートは笑みを浮かべた。



「貴様を見ていると胃が保たない」

ぼくの隣で、教授はそう呟いた。

「そう?」

「そうだ。いつ何かあるんじゃないかと気が気じゃなくなる」

夏休みのホグワーツは、本当に人がいない。校舎に、見事にぼくらだけ。独り占めしているようで少し気分はいいけれど、それでも幾許かの寂しさは拭えない。

「あんまり気にし過ぎないで……なんて言っても無理な相談か」

「こちらの心労が分かっているのなら、どうにかしてくれ」

「ふふ……嫌だね」

階段を登り、廊下を歩く。

着いた先は、校長室。ガーゴイル像の前に立つと、教授ははつきりとその言葉を口にした。

「ダンブルドア」

合言葉……を聞いて、ガーゴイルはピョンとその場を飛び跳ね、道を譲る。ぼくは目を睜った後「……これは、教授が? それともダンブルドアが?」と尋ねた。

「どちらだと思うか?」

「……………」

どっちだろう。正直どちらでもあり得る気がして、いくら考えを巡らせても断言が出来ない気がした。

しかし、思考実験としては悪くない。暇潰しのいい材料となりそう
だ。

「……六四でダンブルドア」

「ほう。果たしてどうかな」

「あ、答えは教えてくれないんだ」

「勝手に考えろ。言う気はない」

階段を登って着いた先は、ダンブルドアが居た頃と一切変わって
なかった。今にもひよっこり、何処からともなくダンブルドアが現れ
て「元気かの？」と手を振って来そうだった。

同じ印象を、教授も抱いたのだろう。痛みを堪えるように僅かに顔
を顰めた後、大股でダンブルドアの肖像画へと歩み寄った。

「これで満足ですか……ダンブルドア」

奥歯を噛み締めながら、教授は呟く。眠っていたと思っていたダン
ブルドアは、ゆっくりと瞳を開けると、教授を、そしてぼくを見つめ、
微笑んだ。

「上々じゃよ、セブルス、アキ」

「あなたは全て予期していたんですか……私の元に、アキ・ポッターが
転がり込むことを」

「時間だけはたっぷりあるのじゃよ、校長職というものは。思索に耽
る時間は、たっぷりとあった。……覚悟を決めるのじゃ、二人とも」

ぼくらを見下ろし、朗々とダンブルドアは告げた。

「悪役として、振舞う覚悟を」

第7話 白練色の病室

久しぶりに足を踏み入れた聖マンゴは、病院という性質上雰囲気は変わらないまでも、周囲の人がぼくに向ける視線の質まで変えることが出来なかった。

受付のお姉さんはあからさまにぼくに怯える瞳を向けていたし、歩き慣れた道すがらも、聖マンゴの職員、お見舞いに来たらしき一般の人々から遠巻きにする視線が永遠飛んで来ていた。仕方なくはあるが、慣れるかと言ったら慣れはしない。『黒衣の天才』幣原秋は、いつもこの視線を背負っていたのか。その身になってみて初めて、辛さと息苦しさを理解した。夢で見る様より、キツイものがある。

目的地は決まっている。隔離病棟にある、シリウス・ブラックの病室。

白い扉を開けると、真っ白い病室の中へ一歩踏み込んだ。その時死角から現れた手が、ぼくの胸倉を掴み壁に叩きつける。背中を思い切り打ち付け、肺から空気が無理矢理押し出された。苦しい呻き声を漏らし、目を開ける。

「……ライ、先輩」

長めの前髪に隠れる瞳は、しかし鋭い光を帯びていた。

こちらを射抜くほどの光に、ぼくは薄っすらと笑ってみせる。

「……予期していたな」

「もしかしたらいるかもなー、って考えてたくらいですよ」

「俺を制圧しなかったのは、ぶん殴られたかったからか？」

「先輩には逆らいたくなかったから」

チツと舌打ちをして、ライ先輩はぼくのシャツから手を離した。ぼくはシャツがシワにならないように、襟元を軽く引き伸ばす。

ぼくらの喧騒が一切耳に入っていないかのよう——いや、事実耳に入っていないのだろう——シリウス・ブラックは固く瞳を閉ざし、眠っていた。胸まで掛けられた毛布は、それでも以前よりずっと細くなった肩や首までは覆い隠してくれていない。

シリウスが目を覚まさなくなつて、既に二年が経っていた。そ

りや、筋肉だつて衰えるし脂肪だつて削げるだろう。ただでさえ十二年間もアズカバンで囚人やっついていて、それからも逃亡生活で、きちんとした食事を摂ったのなんてきつと、グリモールド・プレイスでモリーお婆さんの手料理を食べたくらいだろう。

彼の人生は、本来ならばありえないほど狂い、捻じ曲がり過ぎた。窓枠の花瓶を手に取ると、萎れた花を抜き取った。流しに歩み寄り、中に入っていた水を捨てると、軽くすすぎ、新しく水を入れる。『出現呪文』で買っておいた花束を出すと、花瓶に生けてあるものと取り替えた。萎れた花を代わりに包むと『消失』させる。

花瓶を元のように窓枠の日が当たるところに置くぼくの様子を、ライ先輩はじつと見ていた。

「……何をやる気だ」

静かにそう、問いかけられる。

ぼくは微笑んで振り返った。

「世界を変えます」

第8話 刈安色の新学期

九月一日。ホグワーツでの新学期が——様々な意味で『新たな』一年が——始まった。

胸に輝く『主席』のバッジ、そいつを弄りながら、大広間に歩みを進めた。教職員テーブルの影から、様子を伺う。

新一年生の組み分けは、あと数人を残すばかり。大広間の埋まり具合は、例年の八割強。

『意外と来たな』というのが本心だった。あれだけはつきりと『ホグワーツはヴォルデモートの手に堕ちた』と宣言したというのに、よくもまあこれだけ集まったというか。親もよく許したものだ。

一番人数が少ないのは、こればかりは隠せない、グリフィンドールだった。ハリー、ロン、それにハーマイオニーの姿は見当たらない——それもそうだろう。今は一体どこにいるのだろうか。無事でいてくれたら、それ以上のことは望まないのだが。

組み分けが全てつつがなく完了した後は、校長先生からの一言だ。立ち上がったセブルス・スネイプに、様々な感情が籠った視線が投げかけられる。憎々しげに、あるいは困惑して。教職員の方々にも、事情は伝えていない。そもそもカロー兄妹がいる最中、余計なことは話さないが吉なのだ。前方の生徒、後方の教師からそれぞれ苦い視線を向けられて、一体どれだけ針の筵な心持ちだろう。

——まあ、それもそう長くはない。

暗がりから、一気にライトの下へと躍り出た。一瞬だけ目が眩む。スネイプ教授からマイクを搔つ攫うと、生徒たちを見下ろした。

「セブルス・スネイプ校長から有難い一言を賜る前に、ぼくから先に挨拶をしましょう。きつと、存じてくれているはずだ。ああ……新入生のためにも、一つ自己紹介。ぼくはアキ・ポッター。かつて『黒衣の天才』幣原秋と名乗り、闇祓いで敵の屍の山を作っていた。今はレイブンクロー寮の七年生として、立派に学生やっているよ。主席にもなったし——」

眼前に何かが煌めいた。物凄い速度で飛んできたそれにたまらず

言葉を切ると、魔法で障壁を作る。

掴んだそれは、フォークだった。

ざわめきが空気を揺らす。生徒がやがて、一人の人物を見遣る。

「……よう、アキ。久しぶりだな？」

碧の瞳は見開かれ、口元は大きく吊り上がっている。金色の髪に、左耳には雪印と群青の二つのピアス。ちゃんとした格好で黙ってりやあいいのに、凶悪な面で全てが台無しだ。

と、いうか。

今まで付き合ってきて、見た事ないほどブチ切れたアリス・フィスナーが、そこにいた。

……うん。弱音を吐くことを、少しの間許してもらってもいい？

——超怖い！ なにあれ超絶怖い!! あんな顔して笑う人初めて見たよ、そうそういないよあんなちよつとイっちゃった笑顔浮かべる奴！

パン、とアリスは手を打ち鳴らした。狂気の微笑みを浮かべ、ぼくに対し品のないジェスチャーをする。

育ちのいい坊ちゃんがするんじゃないよお、そんな仕草。

「降りて来いよオラ、殴^{ハナシ}り合^{アイ}いしよーぜ」

「……は。まあ待つてなよ。躰^{ハナシ}がなつてないなあ。『待て』くらいは出来るでしょ？」

アリスは怖いけれど、全ての感情を腹の底に押し込め、表情を取り繕うのは大得意だ。

「興^{ハナシ}が削^{アイ}がれたね。まあいい。ぼくが言いたいことは一つだ。——みんな、よく戻^{ハナシ}ってきてくれた」

深々と。

悪い微笑みを顔に刻み込み、ぼくは声を張り上げた。

「ようこそホグワーツへ。ぼくらは、君たちを歓迎しよう！」

第9話 織部色の信頼

「……ヤダなあ」

「何がだ」

「レイブンクロウ寮。帰りたくない……」

組み分けの儀が終わり、歓迎のご馳走も全てが片付けられた後。ぼくは校長室で、もそもそと冷たいサンドイッチやチキン、冷えた Pasta やサラダ——はもともと冷たいか——を口にしていった。

大広間でのご馳走？ ああの空気の中平然とご飯が食べられるほど肝は据わっていない。そもそもどこで食べろと言うんだ？ レイブンクロウ寮のテーブルに行けば最後、顔面がどれほど歪むことになると思っっている。

メディアへの露出は先々まで予定しているのだ、そんな訳の分からないアクシデントで計画を止めるわけにはいかない。

「それでも、フェイスナーの息子くらいには話をしておけよ」

教授はため息と共にそう呟くと、手を伸ばしてリンゴを一切れ摘み、口の中に放り込む。ぼくもかぼちゃジュースを一息で飲み干すと、口を開いた。

「分かってるよ」



どうして今日のレイブンクロウのノッカーは、こういうときに限って優しいただの論理パズルを出してくるのだろうか。急いでいるときこそ、意地悪なクソ難解な答えなんてないような問題を繰り出してくるのだ、あのノッカーは。

信号と同じだ。用事があるときこそ、赤になる。

息を吐きながら、開いた扉の奥に進み——

「アキが来た！」

「アキだ！」

「捕らえろ！」

「逃がすな！」

次々掛けられる声。瞬きする間もなく、気付けば両手を後ろに回され、談話室の床に押し付けられていた。手首を柔らかな布で縛られる。

あまりの早業に抵抗するよりもまず呆然としてしまった。

「さ、アキ。どういうことなのか説明しろよな」

「全部きつちり理由揃えてくれないと、僕らレイブクロー生は信じないよ」

聞き慣れた声が入り込んでくる。同級生で同室の二人、ウイル・ダークとレーン・スミツク。真剣味の一切ない、気の抜けるような声音だった。

腕を貸され身体を起こすと、談話室には驚くほどの数の人が集まっていた。よくもまあ入ったものだ。新入生らしい小さな子から、ぼくと同級の七年生まで。こうも揃っていると壮観だった。

「その前に」

「一発喰らつとけな」

「え？」

ウイルとレーンがパツと離れる。

瞬時に挟りこむような右ストレートがぼくの左頬を襲った。そもそもが不意打ちだったため、勢いすら殺せずにつぶ倒れる。両手を後ろで縛られていたため、手をつくことも許されなかった。談話室の床に絨毯が敷き詰められていたのが幸いだった。

ぼくを殴ったのは、まあ誰だろう、きつと予想はついていただろう

——アリス・フェイスナーその人だった。先ほど見た、ちよつとイッた笑顔は影を潜めていたが、だからと言って取扱注意なのは変わりがない。

「全て話せ、アキ・ポッター。お前の真意も、目的も、洗いざらい話せ」
低い声で言われた言葉に、思わず目を瞠った。震える声で、囁く。

「……信じてくれる、の」

口元が痛みに引き攣れる。唇の端を歯で切ったか。でも今はそんなことどうだっていい。

だってそんな言葉、ぼくを完全な味方だと——ぼくが裏切ったと思つた人間の口からは、出て来ようがない言葉だったから。

「信じる？　なんだ、その言葉」

アリスは眉を寄せ、顔を顰めた。

「いいか、アキ・ポッター。ここにいるレイブンクロー生誰一人として、お前のことを頭から信じている奴なんざいねえよ。信じる信じないはお前の話を聞いた後、俺たちが一人一人決める。レイブンクロー生はそういう奴だ、知ってんだろ？」

「……知ってる」

ぼくはきつと、よく知っていた。

ふわり、薄い金色が視界を覆う。首を向けると、ルーナだった。

「でもねえ、アキ」

ぼくを見て、ルーナ・ラブグッドはにつこりと微笑んだ。

「ここにいる誰もが、あなたを信じたいから集まっているんだと、あたしはそう思うなあ」

「……それも、そうか」

腕の拘束を解いてくれ、と静かに頼んだ。アリスは僅かに目を瞠つたが、それでもぼくの脇に屈み込むと、手首を縛る紐を解いてくれる。振り返つてアリスの手に握られているものを見ると、レイブンクローの誰かのネクタイのようだった。

自力で身を起こすと、立ち上がる。杖を振って、防衛呪文、盗聴防止呪文を幾重にも掛けた。大きく息を吐いて、ぼくを見る人々をぐるりと見回す。そこで、一人真摯な目でぼくを見ている少年と目が合った。

「……ユーク」

「アキ・ポッター。一つだけ、お聞きします」

銀色の髪に、姉とよく似た顔立ちの少年、ユークレース・ベルフェゴールだった。普段キチンと制服を着ている少年は、どうしてだか今日ばかりはネクタイを締めていない。

……あ、もしかしてひよつとして、さっきまでぼくの手首を拘束し今現在はアリスの手にあるあのネクタイがそうだったりするのだから

うか。

ユークはふと後ろを振り返ると、人混みの中から一人の少女を引つ張り出した。

そしてぼくを睨み、毅然と言う。

「あなたがやってきた、そしてやろうとしていることは、姉上に胸を張って言えることですか」

長い銀髪。覗く緑と銀。スリザリンカラー

僅かに照明が落とされた談話室で、銀色のこの二人の姉弟の輪郭だけが霞んで見えた。

「……アク、ア」

息が上がる。心拍が跳ね上がる。きつと、ぼくは青褪めていることだろう。

ぼくは、この日が来ることをどこかで恐れていたんだ。アクアからまつすくな瞳で見つめられるのが、怖かったんだ。

一歩、二歩と、アクアがこちらへと歩み寄る。

至近距離で立ち止まると、アクアは手を伸ばした。ぼくの左頬に軽く触れ、淡く微笑む。

「……全部話して。アキ」

声は、視線は、力強かった。

第10話 真空色の狂気

「へえ、ハリーは今、そこにいるんだ」

校長室のふかふかな肘掛け椅子に身を沈めたまま、ぼくは肖像画のフィニアス・ナイジエラス・ブラックの報告を聞いていた。校長の席にはこれまたセブルス・スネイプが腰掛け、顰めっ面のまま報告に耳を傾けている。

フィニアス・ブラックはそのまま報告を続けていった。グリモールド・プレイスにハリーら三人が訪れ、現在の仮の住処としてしていること。そして RAB がレギュラス・アークタルス・ブラックであると突き止めたこと。本物のロケットを探していること――

「……ちよつと待つて。どうしてハリー達は RAB なんて探しているの?」

言葉が無礼にも遮ったぼくに対し、フィニアス・ナイジエラスは虫ケラでも見るかのような目を向けたが、それでも渋々口を開いた。

『高尚なダンブルドア校長――否『前』校長の遺言みたいなもののようにだな(ここで心地よい寝息を立てていたダンブルドアの右目が持ち上がった)。破壊し損ねた、すり替えられた『分霊箱』に、ポッター共の手に渡った偽物のロケット。そのロケットの持ち主が、我が曾々孫であつたと突き止めたようだ』

情報の断片が繋がる。あの日、レギュラスはそのために、あんな洞窟へ行ったのか。

そしてそこで死んだのだ。自分の死を彼は予期していた。だから最期、幣原に対し、あんなことを……。

「なるほどね……レギュラス、そういう訳か……」

静かに目を瞑る。そんなぼくに対し『闇の帝王に言わんのか?』とフィニアスは尋ねた。

「言う必要はないよ。ぼくと教授、二人だけが知っていれば問題はない。そうでしょう?」

確固たる意志で、フィニアスの言葉を取り下げる。そんなぼくにフィニアスは物言いたげな視線を投げ掛けたが、咎める言葉は口にし

なかった。ぼくのせいで途切れた報告の続きをする。

屋敷にリーマスが訪れたこと。ハリーたちと共に行きたいと願ったこと。トンクスとの間に子供が出来たことをハリーが聞き、リーマスを激しい口調で罵ったこと。ハリーを伸したリーマスが、彼らの前から立ち去ったこと。

『リーマス・ルーピンは物凄く不安定だ』

最後に、フィニアス・ナイジェラスはそう付け加えた。

ぼくは肩を伸ばすと、更に深く肘掛け椅子に座り込む。両手の指を組むと、額を付けた。

「……知っているよ。……そうしたのはぼくだ」

静かな声で、呟いた。

「狂気の淵に立つリーマスを、狂気から手を引つ張り引きずり込んだのは、紛れもないぼくなんだから」

第11話 白銅色の革命

『ハリー・ポッターらが魔法省に侵入した』との知らせを受け、他の死喰い人らの頭を押さえてすぐさま魔法省に向かった。

ハリーたちは、魔法省の役人三人に『ポリジューズ薬』を使い化け、忍び込んだのだと言う。

アルバート・ランコーン、レッジ・カタモール、それにマファルダ・ホップカーク。ハリーたちが化けた三人と、上首尾に接触することが出来た。

『黒衣の天才』が目の前にいることに色を失い怯える三人、彼らの前に杖を置くと、手を離す。これで彼らから見ればは丸腰だ。

「手首を縛って貰っても構わないよ。ぼくはあなた方を処罰したり害を与えたりする意図はない」

もちろん、杖なしでもぼくは魔法を使えるということは黙っていた。余計なこととは言わないでおくに限る。

三人は杖を自ら手放したぼくに対し疑いの眼差しを向けていたが、それでも怯えの色は拭われたようだ。見た目は無害そうなただの少年だからだろう。……アリスあたりが今のぼくの自己分析を聞いたら爆笑するな。

「どうか教えてください。彼ら三人は……無事でしたか？ 元気そうでしたか？」

予想もしていなかったぼくの言葉に、三人は目を瞬かせた。



慎重に三人の記憶を弄って改竄した後は、次の関係者に会う手筈となっている……のは、いいのだが。

物凄く気が重い。理由は分かり切っている。

「人に任せりやよかった……」

そう悔やんでも、今更引き返せない。

人柄はともあれ、立場と役職は目を瞞るものを持っているのだ。生

かさない手はない。こちらにはちようど取引出来る手札が揃っているのだ。私情は無価値だ。

「——そうでしょう」

ドローレス・ジェーン・アンブリッジ先生？

ホグワーツでの彼女の部屋と、そっくりだ。ピンクと子猫の洪水。違うのは、ホグワーツではいつも苛つく笑みを浮かべていたのに、今は物凄く怯えた表情でこちらを見ていること。それで溜飲が下がるほど、ぼくは性格が悪くないつもりだ。

「……ミスター・アキ・ポッター……？」

「幣原秋でも、どちらでも構いませんよ。どうせ大した違いじゃない」「わ……私のことを殺すつもりですか？ 恨まれている自覚はありませんでしたのよ」

「へえ、あったんですね。じゃあこれ、覚えていますか？ 『ぼくは嘘をついてはいけない』、アンタがかって刻ませた文字なんですけど」

普段は目くらまし呪文を掛けて側からでは見えないようにしている、左の甲の傷を晒した。アンブリッジは顔を背けようとするが、そのうは問屋が卸さない。指を鳴らし、目を逸らせぬようにする。白く残った傷跡に、アンブリッジは顔を歪めた。

「アンタがぼくにやったこと、ハリーにやったこと、ぼくは何一つ忘れてないからな。……だけど、私情と公務は交えない。ぼくの本音としちゃあ全力でアンタをガマガエルに変えて蛇に丸呑みさせてアンタが蛇の腹のなかで胃酸に溶けていく様を見ながら面白おかしく観察日記でも付けてやりたいよ。それだけのことをアンタはしたんだ」

淡々と言葉を叩きつける。アンブリッジは青ざめ切った顔でブルブルと震えていた。少し言い過ぎたかもしれないが、ともかく脅しとしては十分だろう。

「……そうされたくなかったら、ぼくに従って」

ぼくの言葉に、アンブリッジは小さな目を数度瞬かせた。

「……どういう、ことですか？」

「法整備をする。アンタは殺さない。役職そのままに生かしてあげる。一切処分を下さない。その代わりぼくの言うことに全て従って。」

あなたはクズの中でも生粋のクズだけど、事務能力だけはあるからね」

口元を吊り上げると、吐き捨てた。

「……何がマグル生まれ登録だ」

第12話 濡羽色の忠誠

グリモールド・プレイスが死喰い人の手に落ちた。

死喰い人であり魔法省に勤務しているヤックスリーの手柄だと聞く。シリウスは嫌っていたし、確かに陰気臭いことは否めなかったが、それでも由緒ある屋敷が蹂躪されるのは見ていて辛かった。

かつて英国魔法界のトップを引いていたとされるブラック家。それが今や、その姓を引く者はたった一人、聖マンゴで永久とこしえの眠りについている。全く、栄枯盛衰を如実に感じさせる佇まいだ。

荒らした後は、死喰い人共は一切片付けをしていかなかったようだ。ぐしゃぐしゃに引つ掻き回された家は、空き巣の方がずっとスマートにやっただろうと、そんなことまで考えてしまう。

杖を振って、荒れ果てた部屋を片付けた。しばらく何もする気が起きなくて、ダイニングのソファに座り込むと目を閉じる。

「はああ……」

どつと疲れが込み上げてきた。閉心術を久々に解く。

盾の呪文も……構わないだろう。この家の守護結界自体は、動いているのだ。だから侵入者対策に頭を使う必要はないし、まあ死角から殺されたところで、構うものか。元々、あつてないような命だ。少し早まっただけ。

それでも、死にたくはないけれど。

『君はこの家を、荒らそうとはしないんだね』

声を掛けられた。鷹揚に、目だけをそちらに向ける。

壮年の男性だ。黒髪に、灰色の瞳は理知的な印象を受ける。口元には穏やかな笑みを浮かべていたが、こちらを見つめる目は、対象の奥底までも読み取ってやろうという意志が見受けられた。

ぼくはうつすらと微笑んだ。

「シリウスのお父様ですね。オリオン・ブラック」

『おや、知られていたとは』

肖像画に描かれた青年、オリオン・ブラックは、そう言うとき笑った。『ずっと、君を見ていた。二年前から変わらずに』

「……ええ、きつとそうでしょう」

『私の息子はまだ生きていると聞いた。君が、生かしてくれたのだと。いつかお礼を述べたくってね』

「……お礼なんて」

気をもう一度だけ張り詰める。結局ここでも休息は許されないようだ。

余計なことを、再びここに訪れた死喰い人連中に吹き込まれては敵わない。

「家系図から抹消済みの息子でも、それでも情なんてあるんですかね？」

表情を意図的なものに塗り替えた。試すような、挑むような視線を投げかける。

ぼくの眼差しを受け止め、オリオン・ブラックは静かに笑った。

『妻が怒りに任せて消した息子だ。ブラック姓の男は、今や我が愚息のみ。……君に言葉を繕っても無駄なようだ。そう言えば君はレイブンクロー生だったね？ ならば情で甘く言葉をコーティングせずとも、私の意図は伝わることだろう』

「……ブラック姓が英国魔法界から消えることが惜しいんであって、息子だからと言って格段の情を持ち得はしない、そう言いたいんですね」

『洞察力が高くて素晴らしいよ。瑣末な言葉遣いに拘って、本意を見失う愚か者がこの世には多すぎる。そうは思わないかい？』

最後の問いかけには答えずに、ぼくは口を開いた。

「……シリウスの生存を喜ぶ気持ちは真であると、信じます。たとえば、様々な思惑に塗り固められていた思いだとしても。……いいところの当主様ってのも、大変そうだ。ぼくは普通の家系に生まれ育って良かったなあって、心の底から感じますよ」

『はは。そうかい？ ……よく言うものだ。姓から察するに、君の父親は幣原直だろう？』

思わず目を細めた。

そうか、そつちが本命か。

「……ええ。そっか、父を ご存知なんですね。生没から見たら、ぼくの父の後輩に当たりますものね。トム・リドルはあなたの寮の先輩です」

『よく覚えていたものだ、そんな細かい数字を。記憶力がいいんだね』
「忘れることが苦手なだけです」

身を起す。

『かつての再来かと思ったよ。トム・リドルの隣に君の姿。幣原直に生き写し、とまではいかないまでも、容姿の目立つ部分は引き継いだようだしね』

「……回りくどいですね。はっきりと言ったらどうです?」

『おや、いいのかい? それじゃあ遠慮なく』

オリオン・ブラックは口元に手を当て上品に笑うと、軽い口調で尋ねた。

『幣原直みたいなのに、君もトム・リドルを裏切るんじゃないのかな、と思っただけだよ』

動揺を全て押し隠す。心拍の上昇も、最低限に留めた。

「……失礼なことを言いますね」

『礼を失した発言であることは認めるよ』

「父は闇の帝王を裏切った訳ではありませんよ。その点の認識に、些か誤解があるようです。……お暇します」

『まあ待って。すまないね、気分を害したのならば誠心誠意謝ろう。あまりに退屈でね。煩いからと言って妻を追放したら、今度は話し相手がいなくなってしまうんだ。久しぶりに誰かと話して羽目を外してしまっただようだ』

そう言われてみれば、オリオン・ブラックの奥さん、ヴァルプルガ・ブラックの肖像画の中は空っぽだった。肖像画というのはそういうことも出来るのか。同じ家に飾られ、同じ絵師が描いたからこそ出来る技なのかもしれない。

「……本来の用件があるんですね、ぼくに」

浮かせた腰を再び下ろした。すまないね、とオリオン・ブラックは滑らかな口調で言う『クリーチャー、邪魔立てして済まなかった』と

声を張り上げた。

瞬間、パチンという姿現し特有の音と共に、ブラック家付きの屋敷しもべ妖精、クリーチャーがぼくの目の前に現れる。思わず目を瞠った。

『幣原秋に話したいことがあったんだらう。目の前の彼こそが、幣原秋だ。会話した私が保証しよう』

クリーチャーはオリオン・ブラックの肖像画を向いて「心より感謝申し上げます、旦那様」と深々と頭を下げた後、ぼくに向き直った。「ぼくに用事が？」

『死喰い人から如何なる拷問を受けても漏らさなかったクリーチャーが、幣原秋にだけは言いたいことがあるのだと言う。まあゆつくりして聞いて行ってくれよ。紅茶でも飲みながらさ』

「いや、紅茶は別に……」

しかしぼくが言葉を紡ぎ終わるよりも早く、クリーチャーは恭しくぼくに紅茶を差し出していった。戸惑いながらも受け取る。

何だこの待遇の差は。騎士団としてここに滞在していた頃は、こんな高待遇受けたことないぞ。

「あなた様が本当に幣原秋様であったのか、クリーチャーはずっと疑問でございました。旦那様は、そんなクリーチャーの悩みの種を取り去ってくださるよう取り計らってくださいました」

大きな瞳が、ぼくに注がれる。

「……どうして？ どうして、ぼくを知っているの？」

「幣原秋様。クリーチャーはずっと存じておりました。レギュラス坊つちやまが、最期にお会いしたいと願った存在なのです。当然でございます」

思いも寄らぬ言葉だった。思わず目を見開く。

表情を取り繕うことは、ちよつと、出来なかった。

『おやまあ、それでは、私の息子は揃って二人とも君に救われたのだね。何とも奇特な縁だね』

オリオン・ブラックは静かに笑っている。ぼくは、笑えなかった。

「……クリーチャー。一つ聞かせて。ううん、一つと言わず幾つも、に

なると思うけれど。……ハリーたちはどうして魔法省に？」
密やかに、クリーチャーは囁いた。
「破壊出来なかった分霊箱、スリザリンのロケットを探しに」

第13話 紫苑色の危機

『親愛なる僕の弟、アキへ』

ハリーとの連絡ツールである羊皮紙には、時折近況が綴られていた。

近況と言っても、本当にぎっくりとしたもので、今どこにいたりとか、何をするとか、これからどうするつもりだとか、そういう事には一切触れない。そこは、ハリーもしつかり理解しているようだった。

ぼくが羊皮紙に返事を書き綴ることはない。こちらからハリーに連絡を取ることもない。それでも、身から離せなかった。

ハリーの言葉を、ハリーがちゃんと『生きている』という、ただそれだけの知らせを、ぼくは心の底から待ち侘びた。

『最近元氣かい？ これから、寒くなっていくからね。身体には十分気を付けるんだよ。……僕は、元氣とは言えないや』

そこで数秒、文字が止まった。もう、今日は書いてくれないのかな。そう危惧した矢先、何事もなかったかのように再開される。

最近寒くなってきてもう半袖じゃあ辛いこと。風邪を引かないようにと、ぼくの体調を心配する言葉。そう言えば昔あんなことがあったね、と、核心に触れてしまわぬよう、話題は様々なところへ飛ぶ。

『ねえ……アキに、会いたいよ』

そんな言葉を最後に、羊皮紙は沈黙した。



「それ、やめろよ」

苛立ったロンの声に、ハリーは振り返った。片腕を吊ったロンは、顔を思い切り顰めながらハリーの手元にある羊皮紙を指差した。

「……どれのこと？」

手早く折り畳むと、ポケットの中に突っ込む。

ロンは眉間のシワを深くすると、歯を剥いた。

「誤魔化すなよ、ハリー。分かってないのなら、何度だって言ってや

る。アキは、僕らを裏切ったんだ。騎士団から死喰い人に寝返ったんだぞ」

その通り、何度も言われた言葉だった。何度言われても慣れぬ言葉だったし、何度繰り返されてもその都度痛みを呼び起こす言葉だった。

「……分かってるよ」

「いいや分かってないね。僕らが何度止めても、その羊皮紙にアキへのメッセージを綴るのが良い証拠さ。アキは見向きもしてないと思うよ？ 君が書いた愛しい弟へのラブレター……いいや弟でも何でもないんだよね本当は。君との繋がりがある道具なんて、いの一冊に『例のあの人』に対する献上品さ。『あの人』が君の書いたラブレターを読んで笑っているんだ。もしかしたら僕らの居場所とかをポロつと零してくれないかな、なんて期待して」

ギリと奥歯を噛み締めた。

ロンは、積もり積もった苛立ちをハリーに叩きつけるように言葉を並べ立てる。こうなったロンをいつも止めてくれるハーマイオニーは今ここにはおらず、食料調達に出掛けていた。

実際のところ、ハーマイオニーもハリーがその羊皮紙にメッセージを書くことに良い顔をしてはいなかった。

ハーマイオニーはハリーに言ったのだ。「あのねハリー、あなたがいくら気を付けたとしても、相手はあなたを絡め取るためにあらゆる手を使うことを惜しまない人たちのよ。あなたは馬鹿ではないことは知っているけれど、あなたよりも頭の切れる人達が、あなたを陥れるために策を練っているの。不用意な発言は慎むべきだよ」

「本当に君は愚かだよ、滑稽だと言ってもいい！ アキは君など歯牙にも掛けていないんだ、アキが大事なのは君ではなかった！ 返事が来ないのが、何も言っても来ないのがいい証拠だ！」

それ以上黙って聞いてはおけなかった。カッと頭に血が上る。

気付けばロンの胸倉を掴んでいた。

「アキを悪く言うな!!」

その時ハーマイオニーが戻ってきた。ハリーとロンの様子を見て、

ハッと大きく息を呑む。

彼女の手からバラバラと木の実が落ちてテント中に散らばったことで、ハリーもロンも我に返った。ロンから手を離す。

「……もう、止めてちょうだい」

ハーマイオニーは俯いて呟いた。

彼女も、随分と憔悴していた。慣れぬ旅、先の見えない恐怖、分霊箱を手に入れたものこの先どうすればいいか、など、悩みは尽きない。

だからこそ、ここにいる三人で力を合わせていかなければならないのに。分裂なんて、仲間割れなんてしている時間はない。

「……ごめん」

「僕こそ……ごめん」

もそもそと謝って、屈み込んだ。落ちた木の実を拾い集める。

その日は随分と、静かな夕食となった。

第14話 臙脂色の友情

「ハリー達はロケットの破壊方法を知らないんだ」

そのことに思い至ったのは、少し遅かった。ぼくとしたことが。

しかし過ぎたことを悔やんでも仕方がない。思い至ったことを喜ぶことから始めよう。

「という訳で。あなたに頼みたい、フィニアス・ナイジェラス・ブラツク」

ホグワーツの校長室、ずらりと並んだ肖像画の中の一つ、フィニアス・ナイジェラス・ブラツクの肖像画の前に立つと、ぼくは言った。

彼はしばらく寝たフリでぼくを誤魔化していたが、ダンブルドアが自らの肖像画を抜け出てフィニアスを小突きに行ったことで、堪忍しづらい。

「仕方ない。貴様の命令を聞いてやろうじやないかクソガキが」

「実年齢自体はもう三十過ぎたいいおっさんなんだけど」

「生者の概念など知らん。寿命がない我ら肖像画にとつて、生者などどいつもこいつもガキさ」

「そういうものなのかな」

よく分からないけれど、まあそう言うのならば言い分は認めよう。

「しかし私はあくまでも、あのクソガキ三人共から聞かれない限りは答へんぞ。いきなりそんなことを言い出したら、いくら頭の中がオガクズ詰まっっている阿呆とて不審がるに決まっっている」

「……それもそうだなあ。んー……」

顔を伏せ、額を中指で叩いた。何かいい案は出ないものか。

「……剣」

ちらりと、ガラスケースに収まったゴドリック・グリフィンドールの剣を見遣る。この剣をどうにかして彼らに渡したい。

あと、ハリー達がフィニアスに分霊箱の破壊方法を聞こうと思うに足るだけの理由が必要だ。

「……………」

考えて、考えて、考えて。高かった日が沈み、部屋の中が薄暗くな

るのにも気付かないくらいにずっと考えて。

いきなり立ち上がったぼくに、フィニアス・ナイジェラスは驚いたような声を上げた。

「何か思いついたのかね？」

「ああー！」

言っている暇も惜しい。校長室から駆け下りると、廊下へ。

ちょうど最終の授業が終わった頃合いだったため、廊下の人は混み合っていた。苦勞して抜けながら、ジニーの姿を探す。

「アキ！ どうしたの、そんなに慌てて」

声を掛けられ振り返ると、そこにいたのはネビルだった。穏やかな微笑みを浮かべている。

そうだ、ネビル。

「ちようどいいや、ついてきて！ ジニーとルーナを探しているんだ」

ぼくの言葉に、ネビルは目を白黒させた。

「一体どうして？」

「後でゆっくりと話す……君にも協力して欲しい、んっ!？」

いきなり結んでいた髪を引つ張られ、ガクンと首が後ろに倒れた。

勢いが良かったため首の筋を違えたようだ。首を押さえ、しばらく声も出ないほどの痛みに悶え苦しむ。

「ああっ、ごめんよアキ！ フードを掴もうと思ったんだけどちよつと目測誤ってさ。本当にごめんね」

「う……ん、い、いいけどさ……一体急に、何の用？」

ぼくの首の筋を違えさせるほどの用件なのだろうな、という気持ちを含めネビルを見るも、ネビルにはあまり伝わっていないようだ。なんだか、その辺りのおっとりのおんびりマイペースさは……彼のお母さん、アリス・ロングボトムさんに、似ている気がした。

「ジニーとルーナの時間割を知っているよ。この時間ならちようど変身術が終わった頃合いのはずだ」



レイブンクロー寮をこういう作戦会議の場として選んでしまうのは、きつとぼくがレイブンクロー生だということもあるが——カロー兄妹には決してレイブンクローのノツカーが出す問題が解けないだろうという自信の表れでもあった。

レイブンクローの談話室に、ぼくとネビル、ルーナ、ジニー。

ぼくらの周りには野次馬というか好奇心に駆られたレイブンクロー生ども。基本的に、好奇心で動いているレイブンクロー生は無害だ、放っておいて構わない。全ての腹を割って話したのだ。彼らがぼくを信頼してくれているのと同じように、ぼくも彼らを信じたい。

「校長室に、グリフィンドールの剣を盗みに入って欲しいんだ」

ぼくの言葉に三人は驚いたようだったが、すぐさま真剣な表情になった。話の続きを静かに待つ。

それを確認して、再びぼくは口を開いた。

「盗みは成功しなくて構わない——あのガラスケースの中の剣は偽物だ。本物はちゃんと保管してある。『盗みに入った』という事実と、その後『処罰された』という情報、ぼくが欲しいのはこれだ。処罰と言っても軽いものにする——ハグリッドと森の散歩、が妥当かな。ぼくらはそれを大々的に利用する。ハリーにそのニュースを届かせたい。だからこそ、ロンの妹でハリーの恋人であるジニーと、あの三人の友達であるネビルとルーナが必要なんだ。危険なことかもしれないけれど、やって欲しい。……勝手なことばかりで、ごめん」

頭を下げた。

と、頭に三回分の衝撃。驚いて顔を上げると、三人の笑顔と目が合った。

「目一杯、使ってよ。あたしたちは、アキを信じているんだから」

叩かれたところを撫でながら、ぼくは僅かに頬を緩めた。

第15話 瑠璃色の裏切り

ロンは、ハリーとハーマイオニーの元から離脱、というよりも喧嘩別れのような有様で離れていったらしい。

羊皮紙でそう綴るハリーの筆跡は、随分と乱れていた。環境の変化と積もるストレスに、きつと耐えられなかったのだ。むしろここまで耐えているハリーとハーマイオニーの精神こそ、常人離れしている。

綴られるハリーの言葉をしながら、思考を浸した。静かな校長室は、思索に耽るのいうってつけた。

ロンは一人で無事に生きていけるだろうか。ウィーズリー家の誰かと連絡を取ってロンを探してもらおう方が安全かもしれない。

ぼくの言を一番きちんと聞いてくれそうなのは、多分ビルだ。グリンゴッツで働く彼は、居場所も突き止めやすい。でも彼は確かフラァーと結婚したばかりだし、邪魔だと思うだろうか？

次点でパーシー。魔法省勤めだからこちらも拠点を抑えやすい。ただ、パーシーを説得するには骨が折れるだろうなきつと、という考えが頭の片隅をチラついた。

アーサーおじさんは身動きが取れない。あの人は動かしてはいけない人だ。ただでさえ重要人として始終監視されているのに、これ以上の負担は掛けさせられない。

「となると……やっぱり」

ぼくが動いた方がいいな、と独り言を呟き掛けた瞬間だった。

爆発——かと思った。予想もしていなかった。

爆風に吹き飛ばされ、小さな身体は思いつきり校長室の壁に叩きつけられた。衝撃で肖像画が揺れ、歴代校長がそれぞれ驚きの声と『現れた者』に対し非難の眼差しを投げ掛ける。

身体中が軋むように痛んだが、地に臥せりながらも目を開けた。

「幣原秋よ。俺様がそんなに愚かに見えるか？」

声の主は、絶望した。

静かな声だった。地獄の底から這い上がってくるかのような声。

感情が一切読めぬ、低い声。

トム・リドル——ヴォルデモートが、気配もなく立っていた。「俺様がそんな阿呆に見えるか？」

胸倉を掴まれ引き起こされる。と思った瞬間には地面に叩き付けられた。

ぼくの喉元を露わにすると、細く長い両の手で首を掴み、一切の力の加減なく締め付ける。

「幣原ッ、幣原幣原幣原ッ!! 俺様が貴様の動向を探っていなかったと思うか？　ずっと泳がせておっただけに決まっているだろうッ!! 貴様の腕にその印を残した瞬間からッ!! 貴様が裏切るであろうことくらい読めておったわッッ!!」

急速に視界が濁る。思考が混濁する。身体の震えが止まらない。四肢は末端から冷え切り、力も入らなくなった。

意識が吹き飛び掛けた頃合いで、ヴォルデモートはぼくの首から手を離すと、ぼくの髪を掴み引つ張り上げた。

抵抗する気力は既に根こそぎやられていた。肺は、やっと自由になった喉から酸素を取り入れようと急ぎ仕事を再開する。しかしそう簡単には呼吸を許してくれる人じゃない。ぼくの長い髪の毛を掴むと、部屋中を引きずり回した。様々などころに音を立ててぶつかり、その勢いでいくつももの小物が割れ、砕け、壊れてゆく。

ああ、折角の、折角の、ダンブルドアの遺品であるのに。彼が好んだガラス細工の置物が、きつと生徒から貰ったのだろう、小さな植木に入った鉢植えが、かつての卒業生と撮ったであろう写真が収まった写真立てが、ああ、ぼくのせいで。ごめんなさい。

「本当に貴様は愚かだなア。俺様が一切を気付いていないと、まさか思考において俺様を凌駕していたとでも過信していたか？　自惚れていたか？　自らの能力に自惚れ足を取られ拗れこうして引き倒されている気分はどうだレイブンクロウ生？　幣原秋よ、否——アキ・ポッターよ」

乱暴に手を離され、壁にぶつかり身体は動きを止めた。息も絶え絶えで、もう身体のどこが痛むのかもよく分からない。それでも、ぼくは顔を上げた。

「……その面も、何もかもが気に食わないッ！ 『苦しめ』！」

もう痛覚の限界に達したとてつきり思い込んでいたけれど、浅慮だったようだ。身体中の神経全てに直接痛みを送り込まれているかのよう。頭の中は痛みで真っ白になり、ぼくはただ身を振ってもがき苦しんだ。

数十秒だったか、数分だったか。そう長くはなかっただろうが、それでも永遠とまで感じられる痛苦であった。

杖を外され、ふ、と解放される。浅い呼吸を繰り返しながら、言うことを聞かない手足に苦心しつつも腹這いになり、顔を起こした。

「ハリー・ポッターとの間でこうしてやり取りをしていたのか。それで？ こちらの情報もあちらに流していたという訳だ。なんともまあ二重スパイも笑わせる……」

校長室の机の上に置いてあった筆立ては、今は倒れている。そこから一本の万年筆を手にとったヴォルデモートに、元々失せていた血の気が引いた。

「や、やめ……」

「この後に及んでの言葉がそれか？ あまり失望させるなアキ・ポッター。さあ書け。貴様の字で書くのだ。貴様が、貴様自身がハリー・ポッターを売り飛ばすのだ」

ぼくの左手を取ると、ヴォルデモートは無理矢理に万年筆を握らせる。いや、と力なく首を振ると、頤を掴まれ顔を上げさせられた。

「それなら初めから裏切らぬが良かったのだ。自らの浅知恵を、自らの至らなさを悔やむのだな」

どこをどう見ても、ぼくの『詰み』だった。

ヴォルデモートの言葉通りの文字を、震える手で羊皮紙に書き綴る。すぐさま、ハリーからの返事が来た。

『アキ？ アキなんだ！ 連絡をくれてありがとう！』

踊りださんばかりの筆致だった。強く強く奥歯を噛み締める。

どうかハリーよ、気付いて。ぼくじゃないと気が付いて。ハーマイオニーでも構わない。ぼくはこんなこと言わないと、君たちの居場所を、これから先の目的地を誘導したりなんてしないって——嗚呼。

目の前で紡がれてゆく絶望に、心が屈する。ぼくが造り出された意味。『ハリー・ポッターを守る』——それを自らの手で破り捨て、紙屑に変え、足で踏みつけているこの、絶望感。

ハリー、頼むよ、お願い——気付いて。

「っ、う……」

何も入れ込めない。ぼくが普段使う単語を、全て記憶されている。この場面ではこの単語を選び、このような表現を好むのだと、全て把握されている。

細工が出来ない。これは罫だと知らせる手段がない。八方塞がりだからこそ『詰み』。

ぼくの口調をそのままに、ヴォルデモートは言葉を綴る。その通りにただ、ぼくは羊皮紙に書き付ける。

ヴォルデモートを本当は裏切っていたこと、思惑があつて彼に今付いていること、ぼくはいつだって君の味方だよ、ハリー、なんて——どこの、誰が、そんな言葉を吐けたものか。

自己嫌悪と破滅願望が入り混じる。心の底から死にたいと消えてしまいたいと思った。強く強く願った。

恥ずかしい、存在自体が愚かしい。世界なんて変えられない。こんなちっぽけで矮小で愚鈍な存在が、世界なんて変えられるはずもなかったんだ。

『ぼくも君と会いたい。実は、君に伝えておかないといけないことがある。羊皮紙じゃあ伝え切れないから、会って話をしたいんだ。十二月二十四日に、ゴドリツクの谷で会えないかな?』

嗚咽を零す気力すら、なくなっていた。頬を涙がただ伝う。涙が羊皮紙を汚さぬよう、ヴォルデモートは顔を顰めて杖を振った。乱暴に涙を拭われる。

『——分かった。実は今こちらでも行き詰まってるんだ。君に会って、その情報を聞いたら、何かヒントになるかもしれない。……相談に乗ってくれてありがとう。ロンがいなくなったから、少し心細かった——会う日を楽しみにしている。大好きだよ、アキ』

『ぼくも大好きだよ——ハリー』

そう書き切ると、羊皮紙が抜き取られた。

ぼくの目の前で、長年ずっとハリーと共にあつた証が、ぼくがハリーを守るのだと、ぼくがハリーを守らなくちゃいけないのだと、ハリーを守る意図で作りに出した羊皮紙が、つい先ほど真逆の意図で使われたその羊皮紙が、真ん中から真つ二つに破られる。

紙が破れる、耳をつんざく嫌な音。魔法で燃やされるより、人力で引き裂かれる方がキツイ。細切れになった羊皮紙をぼくの前に散らすと、ヴォルデモートは足でぐしゃりと踏みつけた。

「兄を売り飛ばした気分はどうだ？ アキ・ポッターよ。純真な、自らを盲目的なまでに信じ切っている愚かで愛しい人間を売り払った気分はどうだ？」

「……最悪、だよ」

思いつきり顔を蹴られた。勢いを殺せるだけの力が、ぼくに残っているはずもない。

後頭部を背後の壁に強く打ち付けて、意識が一時白んだ。鼻が折れたか、腫れた顔面にぬるりとした生暖かさを覚える。

杖が抜かれ、避ける暇もなく再び『磔の呪文』がぼくを襲った。痛み、苦しみに、喉が張り裂けるほどに絶叫する。

痛みの余り意識が飛びそうになるも、それを痛みが引き戻す。いつ終わるかもしれない地獄。これならば拳銃口に突っ込んで一息にトリガー引いてしまった方がマシだ。死の呪文の方が何倍も優しい。

終わらせてくれ、もう死んだ方がいい、死なせてくれ、苦しいのは嫌だ、痛いのは嫌だ――

呪文が止む。意識は既に朦朧としていた。

ネビルの両親のことを思い出していた。ロングボトム先輩とプルウェット先輩。狂うほどにこの呪文を受け、気が振れてしまったあの二人。

ああ、ぼくが間に合わなかったから。あそこですぐさまエリス先輩を殺して向かえば、もしかしたら間に合ったのかもしれない。ぼくが弱かったから。ぼくのせいだ。ぼくのせいで、あの二人にこんな苦痛を。待っていただろう、ぼくの訪れを、どうして来ないのだと早く楽

にしてくれと心の底から腹の底から思いながら。早く殺してくれと、あの優しい二人は叫んだのだろうか。あの強く優しい二人に対して、ぼくは、ああ、ぼくは。

「まだ意識はあるか？」聞け、アキ・ポッター。そして想像しろ。考えろ。考えるのは得意だろうレイブンクロー生よ。

貴様の目の前でホグワーツの生徒を一行に並べる。一番左端からだ。さきほど貴様が喰らった威力の『磔の呪文』をきっちり十回。舌すら噛み千切りはさせない、痛みで歯に力も入らぬだろうよ。そしてその後殺す。

その次は一つ右にずれ、その者にも同じようにした後、殺す。全て貴様の目の前で行う。ホグワーツの生徒に『今貴様が受けているその痛みはこの男のせいだ』と囁きかけて何度も何度も何度も何度も拷問に掛けてやる。恨み言を、泣き言を、死にたくないどうして自分が何をしたというんだお前のせいだ殺してやる呪ってやる死んでしまえという声を一身に受けるが良い。目を背けることも意識を失うことも許さない。はてさてアキ・ポッターよ、一体貴様は何人目で狂うのだろうか？」

「や……」

喉から掠れた声が出た。

指先一つ動かすだけで、目も眩みそうな痛みが走る。それでもぼくはしなければいけない。ホグワーツの生徒を殺させるわけにはいかない。彼らの命乞いをしなくてはいけない。

その場で土下座をした。綺麗な土下座ではなかっただろう。それでも頭を床に擦り付ける。

「ごめ、ごめんなさい、ごめんなさい……ぼくが全部悪かった、ぼくが悪かったんです。従います、従いますから……どうか……どうか、それだけはやめてください……っ」

歯の根が合わない。寒気が全身を包む。

ガタガタと震えながら、ぼくは懇願した。

「もう二度と逆らいません、全て従います、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、だから、だからお願いします、それは……それだ

けは……ツツ!!」

ヴォルデモートはしばらくぼくを見下ろしていたが、やがて笑い声を漏らすと足を踏み鳴らした。

粉々であった羊皮紙は、瞬時に火の粉に包まれ、同質量の灰だけを残しすぐに消える。

「二人。アキよ、貴様が妙なことをしでかしたら、そうだな……まずは貴様の後輩であるルーナ・ラブグッドを殺してやろう。死体すら残さず粉微塵に殺す。その次は貴様と七年間同室であったクラスメイト。一番大きな破片が小指なことに慟哭したくなければ、俺様に従えアキ・ポッター。貴様は殺さない。貴様が死ぬのは許さない。たとえ貴様が自害したとて、貴様の死出の旅路に一人を付けよう。無作為に選んでやろうぞ、哀れな生贄を」

そう言うと、ぼくの左手首を掴み引きずった。

校長室を出、廊下を進む。廊下に人がいないのが、せめてもの救いだった。階段をずっと下り、下り、下り続け、地下牢に。

かつて生徒の処罰用に使われていたと噂には聞いていたが、果たしてどこまで本当なのか。フィルチの創作か妄想なのではないかと密かに言われていたけれど、それでも地下牢は事実ホグワーツにあるのだ。

ぼくを地下牢に放り込むと、ヴォルデモートは幾重にもこの空間に呪文を掛けた。ローブのポケットに、ぼく自身の杖はあるものの、ヴォルデモート直々に掛けた複雑で難解極まりない呪文を解除するには相当な労力が掛かるだろう。

「貴様にはもう少し賢明さを求めよう、アキ・ポッター、愚かしい少年よ」

ぼくにそう言い放つと、ヴォルデモートは姿を消した。

ぐったりと、地下牢の冷たい床に倒れ込む。床は氷のように冷たくなって、それでも身体を起こすことは出来なかった。三半規管が少しどうにかになっているのかもしれない。軽い脳震盪でも起こしたか。ちよいちよい頭を打ち付けていたし、可能性はある。物がさつきから二重に見えるのだ。少しよくない兆候かもしれない。

「——アキ」

ああ、幻聴まで聞こえてきた。鉄格子越しに、人の影が見える。幻覚までも。大分やられたようだ。

「——アキ——おーい、アキ！」

名前を叫ばれ、薄れかけた意識が浮上する。一瞬だけ視界がクリアになった。

目にした像を、脳が正しく認識する。

「……え」

……いや、この脳は本当に正しいのか？ 振り回され過ぎて、もう二進も三進も行かなくなるほど追い詰められたのか。

だって、鉄格子の奥で、ぼくに笑いかけているのは。その、人物は。「やつとこつち見た。酷い顔だね——アキ、大丈夫かい？」

目を見開いた。口もポカンと開いているはずだ。もしかしたら、これは夢なのか。

そう思い、軋む身体に鞭打って左手を振り上げ自分の頬をぶつ叩いた。痛い。というか痛みを感じたいのならじつとしているだけでも十分じゃないか？ 馬鹿かぼくは。殴られ過ぎて本当にイツたか？

「本当に大丈夫かい、アキ？」

目の前の人物が、本心から心配そうな口ぶりで呟いた。

もう、構うものか。これが夢だろうが、ぼくの脳が見せている幻だろうが。もう、どうだっていい。

「……セドリック」

泣き出したいのを堪え、目を細めてぼくは微笑んだ。

うん、と彼は——セドリック・デイゴリーは、人好きのする笑顔で浮かべてみせる。

「ただいま、アキ」

「……っ、おかえり、セドリック」

崩れ落ちそうな身体で、それでもセドリックに手を伸ばす。

鉄格子越しに握られたその手は、ちゃんと暖かった。

第16話 萱草色の例外

「杖を貸して。そのまままで眠ったら本当に命に関わるよ」

そう言われ、ローブのポケットを探ると素直に杖を渡した。

セドリツクが杖を振ると、ふわりと身体が暖かい毛布に包まれたような心地になる。

「つて、何この杖すぐく癖があつて使い辛いな、アキラしいと言つちやあらしいけど……ひとまず体力回復に専念して。杖を借りておくよ、何時間かしたら、また来るから」

「あ……」

声を発するも、小さな掠れ声しか出なかった。

ぼんやりとした視界の中、影が動く。靴音がだんだんと遠ざかつていく中、抗い切れずにぼくは意識を落とした。



次に目覚めた時は、随分と身体がマシになっていた。少なくとも、視界はきちんとクリアに見える。頭の動きも、多分正常。

記憶を探ってみたけれど、幣原秋の記憶も含めてきちんと揃っていないようだった。少なくとも、妙に開いた記憶の穴みたいなものは見受けられない。きつちりぼつちり、ぼくの記憶だ。

「……つてえ……」

軋む身体を起こした。折れたかと危惧した鼻だが、それはセドリツクが気付かぬうちに治してくれたようだ。どこかしこも痛むが、幸いなことに骨は折れてはいないらしい。

ぐしやぐしやになっている髪を解くと、手櫛で整える。痛みに悶えながらもストレッチをすると、大分楽になった。再び髪を結び直す時、どうにかこうにか気分がしやんとする。

地下牢だから、日の光は差し込まない。一体今はいつなのだろう。十二月二十四日、クリスマススイブの日まで後何日だ。ぼくがヴォルデモートにめたくそにやられたあの日は、十二月二十一日。丸一日眠つ

ていたとして二十二日。となると、あと猶予は一日。

立ち止まっちゃダメだ。思考を止めちゃダメだ。ぼくはぼくとして、まだやらないといけないことがある。ヴォルデモートなんかには、ぼくの心は折らせない。

背中を壁につけ、身体を丸める。この体勢が一番楽に考えられる。横になったら眠ってしまいそうだった。体力回復を第一にしなごらも、思考は止めたくない。

微かな足音を捉え、パツと顔を上げた。誰かが、こちらに近付いてきている。

身体が僅かに震え出す。思索の断片は千切れて掻き消された。縮こまって、足音をひたすらに聞く。一人じゃない、複数だ。足音が重なって聞こえるから。

松明の明かりで、影が長く伸びているのが見える。やがてその影は角を曲がり、こちらに姿を晒して——ぼくはやつと身体力を抜いた。

「……セドリック」

喉が引き攣れて、軽く咳き込んだ。それでも嬉しさに、目を細める。幻覚でも、幻聴でもなかったんだ。

「生きていてくれて……ありがとう」

「こちらこそ、生かしてくれてありがとう、アキ」

優しい笑顔も、口調も、何一つ変わっていない。以前より子供らしさが抜け、精悍な男性らしくなった。羨ましい、本当に——カッコいい。

「彼女たちが……アクアとユークがね、手引きしてくれたんだ」

セドリックが身体を退けると、二人の銀髪姉弟が顔を覗かせた。ぼくに手を振りながらも、眼差しはちよっぴり痛ましい。

「ありがとう……」

感謝の言葉を伝えると、アクアは優しく微笑んで鉄格子の前に膝をついた。

「……だって、あなたに頼まれたことだったから。セドリック・デイゴリーについて……そのくらいなら、私にだって力になれるから」

その笑みに、胸を突かれた。一瞬、言葉が出なくなる。

「私だって、なかなかやるでしょう？ ……私のことは知られていないはず。好きに使って、アキ」

震える手をアクアに伸ばした。アクアはハツとした眼差しで、ぼくの手を握り止めると、両手で優しく包み込んだ。

「……ありが、とう……」

ぼくはいろんな人に、助けられている。

そのことが、どうしようもなく、嬉しかった。

「……ねえ、アクアは……アクアはさ、どこまでぼくと一緒に生きてくれるの？」

そんな言葉が喉から零れ出る。アクアは僅かに、瞳を揺らせた。

「……どうして、そんなこと聞くの？」

「さあ……どうしてだろ、不安なのかもね」

曖昧に笑ってみせた。

アクアは戸惑っていたが、それでもしつかりと意志を言葉に乗せる。

「あなたが望む限り、どこまででも」

「………ありがとう」

ユークが睨んでいたのので、手を離れた。暖かい手の感触を、それでもぼくは覚えていよう。

頭を切り替える。表情を真面目なものに作り変えた。

「詳しい話を……と言いたいところだけど、それは後だ。今は何月何日？」

十二月二十三日、と言われた言葉に軽く意識が遠のきかける。

一日誤差があった。致命的な誤差が。修復出来るかは運を天に任せるしかない。

「ぼくの尻拭いをさせるようで申し訳ない……でも緊急なんだ。聞いてくれ」

セドリックを見据えて言う。彼はさすが、飲み込みが早かった。

「何？」と声を潜め尋ねる。

「ハリー達が危険なんだ。十二月二十四日にゴドリックの谷へハリー

達は向かう筈。でも、それは罠なんだ。なんとかして、彼らに伝えて。どんな手段でも構わないから、彼らを引き止めて欲しい」

「どうして……なんて理由を聞くのは後にしよう。分かった」

「それと、ぼくのごことは一言も伝えないで。ハリーはぼくを信じすぎるところがある……ぼくを信じちゃいけないのだと分かせて。じゃないと、また同じ手に引つかかる」

たくさん疑問はあるだろうに、セドリツクは一つたりともぼくに対する質問を口にしなかった。

こんなにも不親切なぼくを、彼は信じてくれている。ぼくもそれに対する信頼を返さなくてはいけない。

「分かった。君の杖を、借りていても？」

うん、と頷く。

セドリツクの瞳に宿る、真摯で真っ直ぐな光。この光を失ってしまふところだった。失わなくなつて、本当によかった。

「あと、一つだけ……お願いが」

腰を浮かせかけたセドリツクに、慌てて追い縋る。目を瞬かせたセドリツクに、少し口ごもりながらも言った。

「……絶対に死なないで。危ないと思つたら、すぐに逃げて。自分の命と身の安全を、第一に考えて」

「君の言葉に従うかは、その場の僕が決めるよ。君の言葉より、僕はその場の直感を信じる」

はつきりとした口調で突っぱねられた。少し予想外だった。

目を睜つたぼくに、セドリツクは笑いかける。

「レイブンクロー生とハツフルパフ生ってさ、そういう根本的な考え方で、気性が合わないよね」

「……それもそうだね」

ぼくも笑った。

「……アキ」

囁き声が鼓膜を揺らす。アキアだった。ぼくを呼び寄せるようにちよいちよいと手招きをしている。

耳を貸せと、そう言いたいのか？ 素直に、鉄格子に頭を嵌めるよ

うにして――

頬に柔らかな感触が訪れた。

「……少し、早いけど。メリークリスマス、アキ」

そう囁いて、アクアは立ち上がった。

頬を抑え、呆然とアクアを見上げる。アクアは少し得意げにぼくを見下ろしていたが、それでも頬は赤みを帯びていた。

「……殺す」

ユークがどす黒いオーラを放ちながらぼくを睨む。ちよつと、怖い。怖い。

セドリツクはすつごい微笑ましいものを見るような視線でぼくを見ているし、なんなんだよ全くもう。

「行ってくるね、アキ」

セドリツクの言葉に、ぼくは深々と頭を下げたのだった。

第17話 呂色の死神

一体どのくらいの時間が経ったのだろうか。

一日に数度、カロリー兄妹のどちらかが来ては、最低限の食料と水を投げ渡し、戯れのように『磔の呪文』を唱えて姿を消す。ヴォルデモートほど呪文の威力は強くないが、それでも痛いものは痛いのだ。苦しいものは苦しいのだ。

明滅する意識の中、正気を失わない程度に何度も何度も拷問を受けるのは、正直なところ地獄だった。何度も何度も殺してくれと叫び、そのたびに嘲笑が耳朶へ届く。

ただただぼくには、願うことしか出来なかった。

一度酒瓶で思いつきり殴られたことがある。あれはカロリー兄妹の兄の方だったか。あの時は流石に、死を覚悟した。

まだ半分ほどが残る酒瓶を投げつけられ、頭やら身体やらに降り注ぐ細かで鋭いガラスの破片。その後、自分が投げた癖に「酒がなくなった」と切れて『磔の呪文』を存分に掛けて。

彼が去った後は冷え切る身体と赤く染まる視界に鞭を打ちながら、このまま意識を失うと非常にマズい本当に冷たくなってしまうと、杖がないため魔力の制御に四苦八苦しながらも傷の手当てをして。全く、五体満足なのが夢のようだ。

足音を聴覚が拾い、ふわりと意識が浮上する。身に染み付いた痛み、身体中が震え出す。

僅かに開けた瞳が、侵入者の姿を映し出した。閉じ込められて初めて、地下牢の門が開く。

ヴォルデモートだった。地面に力なく横たわるぼくを見下ろすと、つかつかと歩み寄り、むんずと髪を掴み引つ張り起こした。

「……何か用？」

「永遠貴様をここに閉じ込めておく訳にもいかぬ。貴様がいればもしや———と思ってしまうことが、本当に情けないが」

「じゃあ、とつとと殺せばいい」

薄っすらとぼくは笑ってみせる。ヴォルデモートは真紅の瞳に怒

りを進らせると、ぼくの髪を勢いよく振り払った。思いつきり地下牢の石壁に頭をぶつけ、脳が揺れる。

そのままヴォルデモートは杖を抜くと、ぼくに『磔の呪文』を行使した。たまらず叫び声をあげ、身を振る。苦痛が思考を埋め尽くし、全てを蹂躪する。

やがて止んだ呪文に、浅く呼吸した。やはりカロー兄妹とは比べものにならないな、と、脳の片隅でそんなことを考えた。

「――発狂するほど拷問してやつてもいいんだぞ」

「……へえそうかい。ならばそれなりのバリエーションを要求するよ。『磔の呪文』はワンパターンなのが頂けないね、拷問というのは感覚全てに訴えかけた方がいい……人間の想像力というのはかなり素晴らしいよ。クラウチ・ジュニアは惜しい男だった」

「……よくもそこまでペラペラと口が回るものだ」

腹を一息に踏み抜かれ、たまらず嘔吐した。といってもそもそも胃の中は空だったので、出て来るのは僅かな胃酸ばかり。

汚らわしいとばかりに目を吊り上げ、ヴォルデモートは消失呪文で拭い去った。

「来い、アキ・ポッター」

そう言われ左手首を取られた。抵抗出来るはずもない。

ずんずんと進む彼は、随分と不機嫌そうだった。彼が不機嫌だと、ぼくにとってはなかなか嬉しい。もしハリーがヴォルデモートに捕らえられていたのだとしたら、こんなに不機嫌ではないだろうか。

連れてこられたのは、ゴドリツクの谷だった。

着の身着のままに連れて来られたため、寒さが骨身に沁みる。一時降り止んでいた雪は、再び降り始めたようだ。足元の雪の感触が、少し違う。踏み固められた雪の上に、新雪が積んでいる。

「逃げないから、手を離してくれないか」

そう言うと、ヴォルデモートはしばらく観察するかのようによくを見下ろしていたが、無言で手を離した。

掴まれていた部分が、指の形に痣になっている。手首を無言で擦つ

た。

やがて、一軒の家の前に到着した。二階部分は粉々になっていて、家の内部が外に露出している。読み取った表札は『バグシヨット』――バチルダ・バグシヨットの家か。

家の中へ足を踏み入れる。むっと漂った饅えた匂いに、顔を顰めた。

同じことを思ったのだろう、ヴォルデモートが杖を振ると、家中全ての空気が新鮮なものへと入れ替わる。しかし家自体に染み付いたこの匂いは、新鮮な空気もそのうちに汚染されるだろう。

「この匂いに嗅ぎ覚えはあるか？」

ぼくを振り返らずに、そんな言葉が投げ掛けられた。

ぼくは質問をすつ飛ばし、端的に答える。

「死臭だね」

第18話 柘榴色の十字架

ヴォルデモートはとりあえずハリーを捕まえ損ねたようだった。ぼくにとっては救われる知らせだ。

羊皮紙はヴォルデモート自身の手で灰になったため、もうぼくがハリーを害することはきつとない。それだけの事実には、心の底からホツとした。

地下牢に再びぶち込まれることはなく、ぼくは大手を振ってホグワーツを歩くことを許された。自分のベッドで眠りたいのは山々だったが、まずはスネイプ教授に会わなくては。

在室しているかどうかは賭けだったが、その賭けには見事勝ったようだ。もつとも、いなかったところでソファに身体を沈めておこうとは思っていた。

ぼくを迎えた教授は、瞳を揺らして安堵の声を漏らした。

「無事、だったのか……」

「あつはは……心配掛けたね、ごめん」

せめて元気そうに笑ってみせる。心は屈していないのだと証明するよう。

「君に累が及ぶことがなくって、本当に良かった。大丈夫だった？」

「ああ……少々痛めつけられたくらいだ。これからの計画に関わるようなことは一切吐いていない」

「本当に？」

冷たく厳しく声を発した。教授はぼくを見、口元を吊り上げる。

『『開心』させても構わない。カウンターでこちらを覗かせてもらおうが』

「……じゃあそうしよう。『レジリメンズ』」

やすやすと相手の心に入り込んだ。同時にこちらの心にも踏み込まれている。

互いにそう荒らす気はない。直近の記憶数日分を矯めつ眇めつ見やると、問題ないと判断した時点で手を引いた。

「オツケイ、信頼しよう」

「そうして貰わないと困る」

ぼくらのどちらかが暖色寮所属なら、きつと今の申し出は断つただろう。ただしぼくらはそれぞれレイブンクロー生とスリザリン生だ。盲目的に、他者は信じていない。

信じるためには確固たる、揺らがぬ証拠が必要だったし、それさえあれば、ぼくらは再び背を預け合うことが出来る。

これから先のことについて二人でしばらく密談を交わした後「飲んでおけ」と薬を手渡された。気付け薬とか、恐らくはその類だろう。今のところは必要ない——心はまだしゃんとしている。お守りとして取っておこう。

レイブンクロー寮の談話室は、ずいぶんと静かだった。見渡しても誰一人としていない。そういえば、もうクリスマス休暇に入っていたのだ。色んな感覚を失っていた。きつと今日は、静かに眠れることだろう。

ゆつくりした足取りで、男子寮の階段を上がった。眠ってもいいが、それよりも風呂に入りたい。

劣悪な環境下、魔法によつて身体自体は清潔なのだが、それでも一通り身を清めたかった。

「あ」

「え」

レイブンクロー男子寮の風呂場を開けると、そこには驚いたことに先客がいた。

いやまあそれは構わない。問題なのはその人物だ。

ネクタイを外しシャツを脱ぎ、その下の黒のインナーを今にも脱ごうとしている彼、アリス・フィスナーもまた、ぼくと同じように目を瞠った。

「……よつす」

「お、おお……」

多分ここで会ったんじゃないやなかったら、もう少しまともな挨拶が出来たのだと思う。

一週間と少しぶりの再会にしては、何ともまあ気の抜けるような夕

イミングだった。

「……大丈夫か」

「うん」

「嘘つきが」

くつくつと笑いながら、アリスは黒のインナーを脱ぎ切った。割れた腹筋に、いいなあと羨望の目を向ける。

アリスはそのまま、今度は脱いだはずのローブを探ると、やがて一枚の羊皮紙を引っ張り出した。ぼくにホイッと投げ渡す。慌てて受け取った。

「え、これ……」

ダンブルドアとの約束『全校生徒の願いを叶えろ』という、あの羊皮紙だった。ぼくが最後に見たときよりも、随分と残った名前が減っている。

「……や、え、やっておいて、くれたの?」

「お前がとつとと帰ってくりやあ、俺の手間も省けたはずなんだがな」
聞き慣れた憎まれ口に、何だかホツとした。

「他人ひとがやってても、構わないんだ……」

呟くぼくを尻目に、アリスは風呂場へ向かってしまった。羊皮紙を畳むと、ぼくも手早く服を脱ぎ、髪を解く。

身体を濯ぐと、アリスは既に湯船に浸かっていた。髪を纏めタオルに包むと、そろそろと足先から湯に入る。細かい傷が湯に晒されて痛むが、それでも心地よさが勝った。

「傷増えたなあ、お前」

アリスがぼくを見ながら言う。そうかなあ、そうかもなあとこちらも返して、湯の中に身を沈めた。

「普段は、腹の傷も腕の印も手の甲の傷も全部目くらし呪文で隠してんのに、今日はしねえんだ」

「アリスしかいないし構わなくなつて。それに今、杖を人に貸し出しているんだ」

「へえ、誰」

「セドリック・デイゴリー」

アリスは思いっきり湯を飲んでしまったようだった。ゲホゲホと苦しげに咳き込む。

「マジかよ……」

「大マジさ」

首の後ろが痛む。どうしたかなあと擦っていると「アキ、ちよつと来い」と手招きされた。

近寄ると、身体を反転させられる。今触れていた首の後ろをじっと見て「なんか刺さってんな」とアリスは呟いた。

「あー、多分ガラス片だ」

「なんでだよ」

「酒瓶で殴られた」

「お前は、つたく……抜くか？」

「お願い」

ビツと皮膚が裂ける感覚。痛いが声を上げるほどじゃない。

何度かの痛みに耐えた後「終わったぞ」と声を掛けられた。指を鳴らして治癒呪文を傷口に施す。

「ありがとう、助かったよ。自分じゃ見えないし」

「普段髪に隠れるところだしな。礼を言われるようなことじゃねえ。本当にお前死なくなってくつてよかったなあ、頸動脈切つてたらさすがに死んでんじゃねえの」

「ふふ……運が良かったんだ」

バカ言つてんじゃねえよ、とアリスは力ない声で呟いた。

しばらくぼんやりと黙り込んでいたが、やがてアリスは口を開く。

「……なあ、アキ。俺を使え。お前の心のままに、動いてやるよ」

「……一体どうしたの、急に」

「急じゃない。ずっと考えていたことだ……」

アリスは視線を虚空に彷徨わせ、静かに言った。

「お前の描こうとしている未来は、確かに俺が望むものと一致してんだよ。だから、俺はお前に協力したい。そういうことだ、それでいい」
「……ねえアリス。覚えてる？ むかーし昔にさあ、フレッドとジョージの双子が、ぼくと君のことを『アキ殿下とフィスナー卿』つ

て呼んでたの」

にやりと笑う。アリスも笑みを返した。

「呼ばれたいのか？ 殿下様よ」

「……っふふ、何様のつもりだい？ フイスナー卿」

ぼくら二人の笑い声が、浴室に木霊した。何だか、すごくホツとした。

「お前はとんでもない嘘つきだよ。平気で嘘つくわ誤魔化すわ、しかもそれに対する罪悪感が欠片もない。そうだろ？ 現にさつき俺が

『大丈夫か？』と聞いて、淀みなく頷いた。天性の嘘つきだ」

碧の瞳が、まっすぐにこちらを向いている。

否定は、出来なかった。

「……ごめん」

チャプン、と水音が響く。

なんの気なしに左腕を見つめた。忌まわしい『闇の印』。両親の死体の上に浮かんでいたあの印を、これを見るたびに思い起こす。

「でもさ……でも」

ぼくを見るアリスの眼差しは、それでも優しかった。

「それでも皆がお前を信じてんのは、お前は絶対、人を裏切るような嘘はつかないって知ってっからなんだよ。お前の嘘は、全部人を思っただけの嘘だって、分かってんだよ」

——ああ、アリスは気付いているのか？

その言葉一つで、どれだけぼくが救われるのか。

勢いよく、両手で自分の顔に水を掛ける。アリスはその勢いに驚いたようだった。

「びっくりした……なんだ、いきなり」

「何でもないよー」

涙は見せない。ただ前だけを向いて、歩み続けよう。

それが、ぼくに付いてきてくれる人に対する、ぼくが出来るたった一つのことなのだ、信じよう。

少し、頭がボウツとするようだ。湯あたりしたのかもしれない。

湯船から立ち上がり掛け——そこで、意識が飛んだ。

第19話 紺碧色の願望

気がついたら、医務室にいた。

居場所を把握して記憶を振り返って、自分の身に何が起きたのかを悟った。

「……そりゃあ、倒れるよなあ……」

熱でも出ていたのだろう。というか、熱が出ていなければおかしいくらいだ。あれだけ執拗に痛めつけられてなお、身体が悲鳴を上げぬ筈もない。

風呂場で素っ裸でぶっ倒れるなんて、アリスはさぞや慌てたことだろう。申し訳ないことをした。

そして、教授からもらったあの飲み薬はその体調を改善させるためのものだったのだ。気付け薬とか思ってた飲まず、悪いことをした。

ベッドサイドには、ぼくの杖が置いてあった。

手紙だとかそういうものはない。他人に見られることを恐れたのだろう。それでいい。

「ありがとう……」

セドリツク、と口に出さずに呟いた。

ベッドサイドに掛かっていたローブを手に取ると、ポケットの中を探る。すぐさま、飲み薬が手に触れた。

痛む頭を押さえ、一息に飲み干す。

数秒目を閉じて「……よし」と顔を上げた。



クリスマス休暇が終わり、レイブンクロー寮の談話室も賑わいを見せてきた。しかしルーナは帰って来ない。

ぼくと同じ寮の後輩で、かつてダンブルドア軍団として魔法省の戦いにも赴いたルーナ・ラブグッドを、ヴォルデモートはきつと手が届くところに閉じ込めているのだ。

頭を掻き毟りたくなるほど辛かったが、しかし足を止めることは許

されない。

レイブンクロー寮の談話室は、時折秘密会議の様相を呈することがあった。カロー兄妹が足を踏み入れないからだ。

しかし、それも今までの話。

「レイブンクロー寮だからと言って、安全とは限らない」

ぼくの言葉に、何人かのレイブンクロー生が目を剥いた。その中の一人が鼻で笑う。

「闇の帝王が叡智を理解すると？」

「彼は相当頭が切れる奴だ。あんまり期待しない方がいい」

「その通り。さすがアキくん、鋭いですね」

予想もしていない至近距離で言われた言葉に、慌てて振り返った。

呆然とするぼくの肩を、その人物——フィリナス・フリットウィック先生はポンと叩く。

「しかしまだまだですわねえ、私の存在に気付かないようじゃ。あつ、これはもしや先生、『黒衣の天才』よりも一枚上手ということですかね？なんとまあそれは嬉しいこと。まだまだ教え子には負けませんよー」

「先生、あの、アキが」

「こりや多分フリーズしてます、先生」

「許容量超えたか？意外と予想外のことに弱いんだよなあ」

「おやおや。柔軟さが足りませんなあ」

「アキ、おーい、アキ」

肩を大きく揺さぶられ、茫然自失していた意識がやつと動き始めた。

「な、ななな、えっ、へ、ええっ!? せんせ、うそ、いつから!?!」

「結構最初の方からいました、今日は受け持ちの授業が午前で終わって暇だったんです」

「『暇だったんです』じゃあないですよ!!」

喚くも、フリットウィック先生は普段通りの穏やかな笑みを浮かべるだけだ。

こうして対面したのも、随分と久しぶりな気がした。

「君とセブルスが何かを企んでいることくらいね、先生にはお見通しです。二人とも私の教え子なんです、当然でしょう？　いつ、打ち明けてくれるのかなあってミネルバと賭けをしていたんですが、待ちきれなくって。私、意外と忍耐強くはないんです」

ぼかんと口を開けたまま、ぼくはフリットウィック先生を見つめた。

「アキくん。私たち教師を巻き込みたくないという意志はよく分かりました。嫌われ役を買って出ているということも、知っています。でもねえ、先生仲間外れは嫌いですから。おおつぴらには何も出来ませんが、困ったときはいつでも相談しに来てくださいね」

少し背伸びをして、フリットウィック先生はぼくの頭をくしゃくしゃと撫でる。

「君も、幣原秋くんも、共に私の生徒なのには変わりありませんから」

「……あ、ありがとう、ございませ……」

頭を下げた。

フリットウィック先生はニコニコしながら「ほら、君の言葉を皆が待っていますよ」と肘のあたりを突く。

思わず奥歯を噛み締め、髪を引つ張った。何人かがぼくを気遣わしげに見つめているのに気付き、手を離すと頭を振った。

「ぼくに協力したせいで、ルーナが危ない目に遭った。いいか、自分の身を第一に考えてくれ。絶対、絶対に」

シン、と談話室が静まり返る。も、それも一瞬だった。

笑い声が部屋中を包み込む。呆気に取られたぼくに、レーンは笑いかけた。

「知ってるか、アキ。レイブンクロー生はな、目先の得より長期的な利を取る事が出来る、ちよいと頭のおかしい奴らの吹き溜まりさ。あんまりね、舐めない方がいい」

「レーンの言う通り。危険なことくらい承知の上。だから君の言っていることは今更なんだ」

ウイルも強気な笑顔を浮かべていた。

「俺たちがここで諦めて膝を屈したら、ホグワーツはどうなる？　来

年も、再来年も、それからずっと先までも。ホグワーツは誰の支配も受けやしない、そのために今、戦うんだろう？」

「……あ、は」

身体中から、力が抜けていくのが分かった。

「うん、そう。そう、なんだよ」

嬉しい、有り難い。

心の底から、ここにいる全員に感謝した。

「……アキ・ポッター」

ぼくの目の前に歩み寄る、一人の少年。

整ったその顔に、静かな決意をたゆたわせて、彼、ユークレース・ベルフェゴールは、ぼくに一枚の羊皮紙を手渡した。

「羊皮紙に記名がある、残り全ての人は、皆同じ願いを持っています。アキ・ポッター……僕たちを、ホグワーツを、守ってください」

灰色の瞳に射抜かれ、視界がじわりと滲んだ。涙が零れそうになり、思わず動揺する。

「……当然。ぼくが、全部守ってあげる」

涙を散らして、ユークから羊皮紙を受け取った。

瞬間、羊皮紙自体が発光する。光の中、中央に文字が現れた。細長い特徴的なこの字は、ある人物を脳裏に蘇らせるには十分だった。

『君の願いは？』

「ぼくの、願いは……皆を守んぐっ!」

途端、口を塞がれた。アリスだった。

ぼくの口を両手で覆ったアリスは「違うだろ？」とにやりと笑う。

「そりゃあお前の願いじゃない、お前が『やんなきゃいけない事』だ。願いつつーのはもっと切実で、お前一人の力ではどうしようも出来ない手出しが出来ない、そういう存在が——あるんだろ、お前には？」

そう囁かれ、パツと手を離される。

改めて、ぼくは羊皮紙に浮かんだ文字をじっと見た。

「……ぼくの、願いは」

声が震える。大きく息を吐いた。

様々なことを脳裏に思い浮かべるも、最終的な答えは、最後まで

残った答えは、たった一つなのだった。
「……シリウス・ブラックを、目覚めさせて」

第20話 深紅色の奇跡

——シリウス・ブラックが目覚めた時、そこは真っ白の空間だった。いや、白い空間ではない。

ここは病室だ。壁に嵌められた窓枠からは青空が、そして窓のすぐそばには花瓶に生けられたオレンジの花が、まっすぐ天にその身を伸ばしている。

「……ガーベラ、か」

声を出そうと思ったのだが、上手く声が出なかった。

声帯が上手く動いちゃくれないし、舌の動きも何となしに鈍い。咳き込みしばらく発声の練習をすると、少しはマシになった。

その時、ドタドタドタツと慌ただしい足音が廊下から響く。と思うと、勢いよくこの部屋の扉が開け放たれた。

目を驚愕に見開いて駆け込んで来た人物に、シリウスは「あ」と何の気無しに呟いた。

「……あれ、シユレディンガーさん？」

その筈だ。かつての自分の所属寮、グリフィンドールの三つ上の先輩、ライ・シユレディンガー。有名な人だったから、覚えている。

年齢は重ねてはいるが、纏う雰囲気は全然変わっていない。

「……っ、こんな、ことが……っ」

この人が目を見開いているのはなんとも珍しい、いつも眠たげな半眼でいるのに。

一体どうしたんだろう、と思っていると、ライ・シユレディンガーはガシガシと髪を掻き、必死な瞳で呟いた。

「……あいつに……」

「必要ない！」

しかし言葉を紡ぎ終えるよりも早く、もう一人が病室に飛び込んできた。

小柄な少年だった。レイブンクローのローブを羽織ったその少年を、シリウスはよくよく知っていた。

「アキ……っ？」

アキは、シリウスを見てその場に立ち竦んだ。こちらを今にも泣きそうな瞳で見つめ、身を震わせている。

やがて一步、一步と頼りない足取りで歩み寄ると、感極まったようにシリウスに抱きついた。

「生きていてくれて……ありがとう……っ、ありがとう、ありがとう、ありがとう……っ!!」

状況が把握出来ないまでも、シリウスは手を持ち上げアキの背中を叩こうとする。

しかし手は鉛のように重たくて、思ったように持ち上がってくれなかった。

「……アキ、病人だ、さつき目を覚ましたばかりなのだぞ」

ライがアキの肩を引つ張り、シリウスから引き剥がした。

と、アキはその場にぐしゃりと座り込んでしまう。アキはシリウスを見上げると「あ、はは……腰が抜けた」と、泣き笑いのような顔で呟いた。

「大丈夫か？ アキ」

「大丈夫。本当だよ……今のぼくなら、なんだってやれそうな気がするくらいだ……」

アキは震える手で、顔を覆った。はああ、と肺の中の空気全てを押し出すかのようにため息をつく。

シリウスは身を起こそうとしたが、ライにすぐさま阻まれた。

「二年も眠っていたんだぞ。無理に身体を動かそうとするな」

「は……えっ、二年も!?!」

そう言えば、一体どうして自分は病室に寝かされているんだ？ 病気とは縁遠かったはずだ。

記憶を探るも、随分と霞みがかかったように曖昧だった。古い記憶は鮮明なのだが、新しくなるに従ってぼやけている。

やがてすつくとアキは立ち上がった。瞳には真摯な色が滲んでいる。

「詳しいことは言えないけれど、シリウス……ぼくと出会ったこと、全てを黙っていて。ぼくは敵だ」

「…………どういうことだ？ アキ！」

「いつか絶対、答えるから」

それだけ言うと、アキは来た時と同じように唐突に姿を眩ませた。呆気にとられて消えた方を見つめる。

「なん、だったんだ…………？」

「…………あいつ」

ライは何か気付いたように目を細めていたが、頭を振るとシリウスの肩を軽く叩いた。

「…………まず、お前はリハビリだ。身体を元通りに戻す、それだけを第一に考える」

第21話 曙色の幻想

『それ』が起きたのは、変身術の授業時間だった。左腕の『闇の印』が猛烈に痛み始めたのだ。

講義するマクゴナガル先生の声も遠くなるほどの、強烈な痛み。羽根ペンを取り落として左の上腕を掴むと、しばらく身を強張らせ耐えた。

しかし収まる気配もなく、むしろ痛みは増す一方だ。これはダメだ、と判断し「マクゴナガル先生」と立ち上がった。

「体調が悪いので、医務室へ行きたいのですが」

——マクゴナガル先生が即座にイエスを出すほど、顔色が悪かったのだろうか。

額に浮かぶ脂汗を、拭う間もない。教室を出るまではと、せめて取り繕い、教室の扉を閉めたその場へへたり込んだ。奥歯を強く噛み締める。

「——アキ・ポッターよ」

「……そうだろうなあとは、思ったんだ」

普段の印の痛み方とは、違うから。

目の前に立つヴォルデモートを見上げ、薄く笑った。



手首を掴まれ連れて行かれた先は、マルフォイ家の屋敷だった。ぼくも何度か足を踏み入れたことがある。その時も、ヴォルデモートと並んでだった。

当時とは、ぼくらの関係も随分と変わった。いや……本当は何一つ変わっちゃいないのかもしれない。

ぼくらの関係は、何と呼べば良いのだろう。

敵対関係、とは、ほんの少しズレがある。ヴォルデモートはぼくを——幣原秋を殺す気がない。それは、ぼくが幣原直の息子だからか、それともそれ以外の意図があるのかは正直分からない。

ヴォルデモートは、ぼくに親切に「どうしてこの屋敷にぼくを連れてきたのか、ここで何があったのか」なんて教えちゃくれない。それでも聞く話の断片から、ここにハリーたちが捕まっていた（そして上手く逃げ果せた）ということくらいは理解した。

ホッと胸を撫で下ろしそうになるも、ヴォルデモートに睨まれ表情を押し殺す。

「アキよ、俺様は忙しい。少し用事で出る、その間に全てを済ませておけ」

「全て？ 一体何の話だ。君の言葉が足りない癖に、相手の洞察力が足りないせいにするなよ」

ヴォルデモートを嘲笑ったぼくに、ヴォルデモートだけでなくここにいる全員が目を剥いた。

ヴォルデモートは一瞬視線を杖に走らせたが、やがて唇を捲り上げぼくを見る。

「それは済まなかった、幼児にも如何なる愚鈍にも分かりやすく説明してやろう——この者たちの」

ヴォルデモートの細く長い指が、ベラトリクス・レストレンジ、フェンリール・グレイバック、ルシウス・マルフォイ、ナルシッサ・マルフォイ、そしてドラコ・マルフォイ、彼らをなぞるように動く。

彼ら死喰い人も予測していなかったのだろう、驚愕に目を見開いて、その場で身体を硬直させた。

「記憶を暴き、俺様の前につまびらかに晒すのだ」

恐らく誰もが、青褪めたことだろう。

言葉を失ったぼくに対し、ヴォルデモートは嗤う。

「拷問、開心、薬に頼つても構わん——この屋敷で起こったこと全てを揃えて出せ。一部でも矛盾があれば——まあ、分かっているだろうな？」

「……なん、だと」

「なあに、得意分野だろう——聞かいよ、『黒衣の天才』よ。それとも既に、腕は鈍ったか？」

黙ってぼくはヴォルデモートを睨んだ。余裕のある瞳で、ヴォルデ

モートはぼくを見下ろす。

自分の手を汚したくないから、ぼくの手を汚させる気だ。

内部粛清——というよりはガサ入れに近いか。何か出てくれば儲け物、何も出て来なかったとしても、痛くない腹を探られたということ、ぼくにヘイトを集める気だ。

立ち去るヴォルデモートの背を、殺意を籠め睨みつける。髪をぐしやぐしやと搔いて舌打ちをし、立ち竦んでいる五人を勢いよく振り返った。せめて陰鬱な笑みを、浮かべてみせる。

「——誰からがいい？」



醜悪な取り調べが一息つき「一人にさせてくれ」と言い放って、思索がてら屋敷をうろついた。

一度泊まりにいったアリスの家も広かったが、この家も相当だ。訪れたことはあると言ったものの、入る部屋自体は限られていた。

ここにも地下牢があるのか。ズキリと頭から背中から掛けてが痛む。嫌な記憶が蘇るも、顧みず足を踏み入れた。

「——秋？」

掛けられた声に、目を瞠った。

暗がりの小さな影が、やがて人の姿を取る。そこにいたのは、かつての友人ピーター・ペティグリュウだった。

一瞬、声が出なかった。

「……ピーター」

ふわふわとした足取りで、彼に歩み寄る。

ピーターはぼくを見て僅かに表情を明るくしたが、ぼくが彼の両耳すぐ側の石壁を思いつき殴ったことで、ヒツと瞬時に怯えた表情になった。

「……盗聴防止だ。このまま聞いて、ピーター」

ピーターの耳元で囁く。ピーターは恐る恐る顔を上げて、ぼくを横目で見た。

「シリウスは生きている。お前が本当に罪を償いたいと思うのなら、シリウスとリーマスのところに行け」

地下牢自体にいくつか魔法が掛けられている。盗聴防止呪文と相性が悪い類のものだ。

しかしこの屋敷の主人は、ぼくを盗聴するほどの度胸はないだろう——あれだけのことをされた直後ですぐさま反撃の手段を講じられるのだとしたら、随分と有望なのだけけれど。

「洗いざらい話せ。土下座でもなんでもして謝罪しろ。許してもらえないかもしれない……でも、誠意を見せて、ピーター」

ピーターの瞳に、光が宿るのを見て取った。ぼくは静かに言葉を紡ぐ。

「あの友情は粉々に砕けたけれど、もう一度繋ぎ合わせることが出来るんだって、証明して」

ピーターは奥歯を食い縛ると、ぼくを見据えてしつかりと頷いた。微笑んで、ぼくは彼から離れる。

瞬時に目の前のピーターが縮んで、やがてネズミとなり、ぼくの足を数度駆け回ると、ぼくの視界から消えた。

——これ以降は賭けだ。

砕けた幻想に、意味はあるのか。

繋ぎ合わせた絵は、どんな姿を取り、どのように再び煌めくのか。

それはきつと、ピーター・ペティグリューが証明してくれる。

第22話 群青色の心音

「ホグワーツに、一体何の用なの」

隣を歩くヴォルデモートは、随分と機嫌が良さそうだった。

この人が機嫌良さそうだと、ぼくにとっては嫌な予感しかしない。警戒しながらのぼくの言葉に、ヴォルデモートは楽しげな笑みを向けた。

以前のトム・リドルのようなイケメンだったらまだしも、この人に笑みを投げかけられたところで気分良くはならない。そこまで、ぼくは彼に心酔していない。

「最近、何かをしに世界中を飛び回っていたようだね。法整備も学校改革も何もかもぼくらに任せて。それだけの価値がある何かを、君は求めていた。そして、きつとそれはもうすぐ手に入る」

「……いいだろう、アキ・ポッター。教えてやろうぞ。俺様が手に入れようとしているものを」

浮かれて、舌も緩んだか。

そのままヴォルデモートはぼくに対し『ニワトコの杖』についてを語り始めた。世界最強の杖。その存在は、ぼくも『魔法史』でちらりと耳にしたことがある——曰くがたんまりとついた杖だ。

その最後の所持者がダンブルドアなのだと、ヴォルデモートは喜色に濡れた瞳で語った。

「興味はないか？ 最強の杖だ。これを持っていれば最強となる杖の存在に、心惹かれないか？」

「……生憎と」

肩を竦めた。

「ぼくは『最強』には心惹かれないな。元々この身に生まれつき持ち得た力も、忌んで忌んでどうしようもないお荷物だと思えない。この力は、今までぼくを苦しめるだけで、一度もぼくを救ってはくれなかった」

何度も何度も願ったさ。

力なんて、なければいい。消えてしまえば、心の底からぼくはホッ

とするのに。

「父さんと母さんが死んだのも、ぼくのせいだ。かつての君がそう言ったんだ。エリス先輩が死んだのだってそう。そもそも力なんてなければ、こうして言葉も分からぬままホグワーツに来ることもなかった」

くすりと笑った。

「何も知らないまま、日本で小学校を卒業して、中学校に上がって、高校生になって。ぼく結構勉強は好きだったから、ひよつとしたら大学に行つて、その辺りで先生にでもなっていたりしてね。少なくとも、今よりは随分と平坦で、そして幸福な人生だ。奥さんもらつてき、子供が出来てき。両親は生きていて、初孫にすごい勢いで大喜びしてき——そんな妄想を、一体何度しただろう」

本当に、何度も。

何度も何度も何度も何度も、夢想したんだ。

ぼくの表情を見て、ヴォルデモートは少し真面目な顔になった。

「……………そう、か」

「……………きつと、君には分からないと思う。君の人生は、魔法のおかげで広がった——君の居場所はここ、英国魔法界だ。魔力のおかげで、居場所が作れた。分かってくれとは、言わないよ。分かる筈も、ないだろう」

「……………ああ」

ヴォルデモートは、静かに呟いた。

「さっぱり分からないな——貴様の言うことなんぞ」



白の大理石で出来た墓が、真つ二つに割れる。「墓を暴く」という醜悪な行為を目の当たりにして、思わず顔を顰めていた。ついでに、自身の仮の墓も心無いマスコミの手によって暴かれたことも思い出す。探しても何も出る訳がない。だってあれは『天才』の作品だ。あの時はそうマスコミを嘲笑したが、想像以上に気分が悪くなるものだと

知った。リーマスあたりはガチ切れしているかもしれない。悪いことをした。

最強の杖——ニワトコの杖を手に入れたヴォルデモートは、歓喜に沸いていた。

意味もなく頭上の分厚い雲を千々に引き裂く。その後、杖がぼくに向かうであろうことは読めていた。『磔の呪文』には大分慣れてきた——嫌な慣れだ。

「どうだ、黒衣の天才！ 俺様は貴様よりも遥かに強い！ 見ろ、直！ 貴様の子供は俺様の敵にはならない、それほど弱い！ だから始めっから俺様の元についていればよかったのだ、貴様は本当に無駄死にした、犬死にした！ こんなつまらぬ子供のせいで!!」

流星、最強の杖。こちらに与える苦しみが段違いだ、レベルが違う。苛む感覚が尋常じゃない。

脳裏に映る、様々な記憶。もしかして走馬灯だろうか。ぼくと、幣原の記憶が入り乱れながらも吹き抜けて行く。

いい記憶ばかりならいいのだけれど、生憎とぼくらの人生は、いい記憶ばかりが並ぶようなものではなかった。

「もう嫌だ……もう嫌だ!!」

どうしてぼくがこんな目に。ぼくが一体何をした。

流したくもない涙が流れる。

これほど痛みを受けるほど、ぼくは悪いことをしたの？

心はもう限界だった。狂いたいっそのこと狂ってしまいたい。

こんな辛い現実なんて見たくない嫌だ嫌だもうぼくは生きていたくない、どうして、どうしてどうしてどうしてどうして。

『代わろうか?』

頭の中に、そっと声が響いた。

痛苦にホワイトアウトする感覚の中、それだけがただ、鮮明だった。幣原秋の、声だった。

『辛いというのなら……君にその痛みを、背負わせているのはぼくだから……』

声が、聞こえる。無我夢中で、首を振った。

『ぼくに気を遣っているの？ お前には、こんな痛み耐えられないってそう思ってるの？』

バカか、こいつは。

そうじゃない、どうして分からない。

ああ、もう、もうさ。痛いし苦しいし何が何だか分からない、自分が今どういう体勢でどうもがいているのかも分からない。地獄でだって、こんな痛苦味わえるものか。

それでもさあ、地獄の最中だったとしてもさあ。

「これはぼくの受けた痛みだ、手出しをするな幣原秋!!」

何もかも嫌だ。本気で心の底から嫌になる。

絶望しそうだよ、全く、こんな世の中。

理性の籠が弾け飛ぶ。心の底の底に押し込めていた、深く激しい感情を、もうとり隠すことは出来なかった。

幣原秋としてぼくを見るな。ぼくはぼくでいたいだけだ。

ぼくは幣原秋じゃない。それでも、ぼくは幣原秋としてじゃないと世界に存在を認められていない。

ほんつとうにさあ。

やってらんないよ!!

今なら分かる。幣原秋はアキ・ポッターに対し、一切の情を抱いていなかった。愛だのそういう感情が入らぬまま、あいつはただ自分が逃げるためだけにぼくを作り出した。

あんな様子の幼いハリーを見た癖に、アキ・ポッターも同じ目に遭うと分かっていたはずなのに、それでも平然とあいつはぼくを放置した。

あいつは何も分かっちゃいない。ぼくの痛みも、苦しみも、何一つとして理解しちやいない。

ああそうだよな、本物に偽物の苦しみが分かるはずないもんな!

天才に凡人の苦勞が理解出来るはずもないもんなあ!! オリジナルがレプリカなんぞに構うはずもないもんな!!

「……ぼくを認めろよ、世界ツツツ!!!」

世界に認められない苦痛なんて、何一つ知らないんだよなあ!!

それでもそれでもこれこそがこんな痛みこそがさあ、ぼくがぼくである証なんだよ！ こんなクソみたいな方法でしか自分という存在に縋れないくらいに、脆弱な地盤に立っているんだよ!!

いい加減さあ、ぼくの努力を認めてくれても良くないか？ 天才様のお眼鏡には、それでもまだ足りないと言うの？

「本当、クソな世界だ……」

間違っているのは、世界か、ぼくか、どっちだ。

『磔の呪文』が止む。

さすがにショックで耐えられなかったか、同時に意識を失った。

第23話 思色の邂逅

「……本当に大丈夫か？」

「やだなあ、もうガキじゃないんです、大丈夫ですつて」

——聖マンゴ。

二年間己が暮らしていた——正確には『眠っていた』だが——病室は、綺麗さっぱりと痕跡もない。

僅かな荷物を纏めると、シリウス・ブラックは一度ライ・シュレディンガーを振り返った。

「シュレディンガーさん、いや、先生。ずっと付き添ってくれて感謝しています」

かつてシリウスが在籍していたホグワーツグリフィンボール寮、そこでの三つ上の先輩であるライ・シュレディンガーに微笑みかける。

ライは長めの前髪の隙間から、シリウスに案ずるような視線を投げ掛けた。

「……行く当てはあるのか？ お前の仲間がここに見舞いへ訪れなくなって久しい……せめて、誰か一人でも」

「いいんです、皆忙しい。戦争なんだから。誰もが戦っているんです。私も——いや、俺も」

学生時代のように一人称を戻し、シリウスは笑った。

「仲間と一緒に杖を取って戦いたい、それだけ。こんな状況下眠り呆けていたバカに気を回す必要なんてありません」

シリウスの言葉に、ライの表情が一瞬陰った。思わず目を瞠り、今何か失言したのだろうかと言を思い起こすも、一度瞬きした後はどう、ライは普段通りの無表情に戻っていた。

「杖は、確か持っていたな？」

「ああ、はい」

ポケットの中の杖に、服越しに触れた。幣原秋の『二本目』の杖。黒壇に、芯はドラゴンの心臓の琴線。

今から杖を作り直すのは面倒だった。相性自体は悪くないのだし、折角だから使い続けようと思っている——実際のところ、新品同様

だったのだ。

闇祓いが二本の杖を常に所持していることは、初耳だった。恐らくは他言無用の極秘事項だろう。そうでないと意味がない——秘密兵器は『秘密』であることに意味がある。

しかしながら、ここまで一切使われた形跡がないというのは、逆に恐ろしかった。こうなるとむしろ『相性がいい・悪い』の話ではなくなってくる。

杖はシリウス・ブラックこそを『キッチンと使ってくれる主人』として認識したのではないかと、そんなことまで考えてしまう。事実ゾツとするほど手に馴染んだのだ。

「……ブラック家の金庫は使えぬだろう。俺の金庫の番号だ……グリソグツツに金庫が1ダースは硬いお前の実家には見劣りするだろうが、それなりの額はある。好きに使え」

「いや、でも悪いですよ」

「構わない。……どうせ俺は独り身だし、金を注ぎ込むような趣味もない詰まらない仕事人間だ。そんな中腐らせておくよりも、お前たちの活動資金に使ってもらえた方が、金も喜ぶだろう」

メモ帳に走り書きした後、ライはその一枚を破って寄越した。本当に何から何まで、と恐縮する。

昔からなんだかんだで、面倒見が良い先輩だった。無愛想なことと淡々とした喋り方で怖がっている後輩もいたが、自分はそれなりに可愛がられ構われた記憶がある。入学して、まさか自分がグリフィン・ドールなぞに組み分けられるとは思っても寄らなかつた頃のことだ。当時は鬱陶しく疎ましくも感じていたが、今となっては大事な記憶だ。

「……大丈夫、ですかね？　このご時世、他人が金庫の金を弄つても」

「何だ、そんなこと」

ライはニヤリと笑ってみせた。

「研究者が研究対象に謝礼を払った、ただそれだけのことだ。研究者の金の動きなんぞに、構う暇人はいないだろう」

こちらも存分にデータは取らせてもらった、と口端を吊り上げ言う

ライに、敵わないなどシリウスは肩を竦めた。



「しっかし、一体どこに向かうべきかねえ……」

『セイリオス・グレイ』としてグリーンゴッツでまとまった額の金を手に入れた後、シリウスは首を掻きながら嘆息した。

荒れ果て、大半がシャッターを閉じてしまったダイアゴン横丁は、かつての繁栄ぶりが夢のようだ。息子同然に可愛がってきたハリー・ポッターが、脱獄囚であつたかつての自分と同じように、その首に懸賞金が掛けられベタベタと顔写真が貼られている。学生時代の自らだつたら目につく全てのそれをビリビリに引き裂いていただろうが、いくらそんなことをしても無駄だということがよく分かつていた。睨みつけながらもその場を後にする。

聖マンゴでのリハビリがてら、シリウスは情報収集に勤しんだ。

その結果分かつた「ぼくは敵だ」と言つたアキの発言の意味。

ひとまず、不死鳥の騎士団と合流したい。そう思いながら、公共交通機関を乗り継ぎ、ロンドン一等地に居を構えるグリモールド・プレイスへ。

どうしてマグルばかりの中心地なんかに、純血の名門中の名門であるブラック家が存在するのか、若い頃はずっと疑問だつた。しかし今となつては理解に至る。マグルの時勢も読まなければ、英国魔法界は衰退する一方だ。

後年のブラック家はしかし、それを本当に理解していたのだろうか。自分の父親は、祖父は、曾祖父は。マグルを忌み嫌うばかりでは、いずれぐずぐずに腐り果ててしまう。

そんなことを考えるようになったのは、恐らく魔法省が急ぎ足で法改正に勤しむ姿を見たからだ。

まるで誰かに脅され蹴飛ばされるように、腐った法律は消えていった。マグル生まれ登録委員会などがあつたらしいが、発足して3ヶ月でバラバラになつたらしい。あらゆる所に改革の手が伸びていた。

今までずっと、ダンブルドアに癒着して頼り切っていた魔法省が、今やつと自らの足で歩き始めようとしている。

ヴォルデモートの影に隠れるようにして、誰もが動いている。ヴォルデモートの支配の下の市民は、黙って虐げられるような存在ではなかった、そういうことなのだろう。

「……変なのいる、よな」

変装しておいて正解だった。家の前をうろつくのは、珍妙なマグルの服を着ている男。恐らくは魔法使いだ。ロンドンは確かに個性的な服装の人物が多いが、それでもこれはよろしくない。

一瞬男と目が合った気がして、シリウスはすぐさま目を伏せると近くの自動販売機へ立ち寄った。しばらくシリウスをじつと見ていた男だが、シリウスが財布から1ポンド硬貨を取り出しコーヒーを買ったことから、マグルの一般人かと思ってくれたようだった。

案外真面目にマグル学も受けとくもんだ、と、キャップを開け呷りながらも考える。ちなみに味はお察しだ。

家から少し離れると、公園を見つけた。昔レギュラスと共にここで遊んだこともあったっけか。

懐かしさに目を細めながら、足を踏み入れる。経年劣化した遊具が立ち並ぶせいか、子供らの姿は見受けられるも、遊具で遊ぶのではなく足元のボールを楽しげに蹴り合っていた。

横目で見ながらベンチに腰掛け、コーヒー缶を軽く振る。容量の六割ほど満ちた液体が、ちゃぽんと音を立てた。

口元に手を当てながら、はてさてこれからどうしようかと考える。今からどこに行こうか。

今すぐ会いたいのはリーマスだけでも、彼の居場所は掴めない。手にある缶コーヒーを飲み干したら、ダメ元で『隠れ穴』にでも行ってみようか。ああ、それにしても、足元を這い回っているこのネズミ、尋常じゃない既視感があるな。そうだ、ピーターの『動物もどき』に似ているんだ……今まで何度間近であいつが変身する様子を見てきたと思っっている。

あいつが死んだという噂はまだ耳にしていない、どこかで生きてい

るのだろうか。どっかで会えたりしないものだろうか。もし会ったなら、一発と言わず何度もぶん殴って、ジエームズとリリーの墓前で土下座させて、それからそれから……しっかしこいつ本当に『動物もどき』のピーターにそっくりだなあ、指が一本ないことも含めて——
「ってピーター?!?!?」

思わず立ち上がる。

そのネズミはビクリと身体を震わせシリウスを見た、次の瞬間には、シリウスの目の前で、禿げた頭の男が一人腰を抜かしていた。

「はっ、えっ、シリウス?!?!?」

——旅は道連れ、世は情け?

ええっ、裏切り者とでも?

第24話 月白色の決意

「本当お前……っ、おんまえ……!」

「ごめんっ、ごめんなさい!! なんでもするから許してください!!」
「許せるかボケエ!!」

とりあえず、先ほど脳内シミュレーションしていた通りに身体が動いた。と言っても、そう複雑なものではない。『胸倉を掴んで、殴る』ただそれだけだ。

ああ、それにしても随分と腕の筋肉が落ちている。腕だけじゃない、全身も、鍛え直さなければ。

聖マンゴじゃ必要最低限のリハビリだけしてとっとと退散したから、力が完全に戻っていないのは仕方がない。それでも、目の前のピーターをよろめかせ尻餅をつかせる程度の威力は発揮出来たようだ。

一発じゃ怒りが収まらないと再びピーターを引っ張り起こそうとした時、周囲のざわめきが耳に入る。

騒ぎを聞きつけ、いつの間にか集まってきたのか。子供たちは遊びの手を休め目を大きく開いてこちらを見ているし、大人たちはこちらを見てヒソヒソと話している。こりや通報されるのも時間の問題だった。

「……行くぞ」

ピーターの腕を掴むと、そそくさとその場を去る。

ピーターは頬を抑えながらも立ち上がると「ど、どこに?」と尋ねた。正直なところ、場所のアテは一切ない。しかしここにはいられないということは確かだった。

物陰で『姿くらし』する。集中し切れていなかったからか、今どこに自分が立っているのかを把握するのに時間が掛かった。

潮風香る丘の上だ。ホグワーツに入学するずっと以前、家族四人でピクニックに訪れた場所だと、遅れて思い出す。少しノスタルジックに浸っていたのか。

辺りを見回しても、人は誰もいない。ならまあ構わないか、と判断

し、ピーターと向かい合った。

「……お前さあ」

本当は、もっと違う言葉を言うつもりだったのに。

ピーターの姿を見たら、思わず本音が零れた。

「……禿げたなあ」

「なっつ!?!」

てつきり責められると思っていたのだろう、ピーターは思わぬところを突かれ愕然とした表情を浮かべた。

いや実際シリウスもきちんと責めるつもりだったのだが、ピーターの頭を見ると気が抜けた。四年前にも一度『叫びの屋敷』で会いはしたのだけれど、その時は暗かったことと雰囲気も相まって、そちらには一切指摘しなかったのだ。

「いや……なんか、悪かったよ……」

「その反応やめてくれない!? 傷つくから!! とうかシリウスたちが変わらなすぎるんだい!!」

そつとかつての友の頭から目を逸らす。ピーターは薄くなった頭に手を遣ると、うう、と小さく呻いた。

「仕方ないじゃないか……いい年なんだ」

「その『いい年』すら迎えることが出来なかった奴らのことをお忘れじゃねえの」

冷たい口調で言い放つ。

ビクリとピーターは肩を揺らして、伺う瞳でこちらを見上げた。その卑屈な態度に、思わず舌打ちをした。

「お前のことは、ジエームズとリリーの墓前で土下座させてやんねえと気が済まねえが……それは後だ。とりあえず、アキについて知っていることを全部話せ」

ピーターは目を瞬かせたが、一睨みしてやるとすぐさま口を開いた。自身の持つ情報と組み合わせ、推論を多分に混ぜ込みながらも、恐らくこういうことだろうと背景を組み立てる。いくつか疑問点を述べ、それに返ってきた話で、推論を補強した。

「……しっかしまあ、いくらかつての友だからって、よく親友裏切った

奴を使う気になるよなあ、あいつも……」

頭をガシガシと搔く。その辺りは、流石レイブクロー生らしいというか、使えるものは何だっけ使うという考えの表れか。グリフィンドールである自分にはない考えだ。

『グリフィンドールもスリザリンも、どちらも黒は黒、白は白だとしても見られない奴らだ——でもさ、君なら。グリフィンドールでもスリザリンでもない、君ならば。黒と白の間の、何千、何万とある色から、ちよūdい色を見つけないか』

ふと、かつての自分の言を思い出した。

これは確か、自分が幣原秋に対して語ったものだ。もうあれから十年以上経っているというのに、案外覚えていたものだ。

——これが、君の選んだ色だというのか。秋……いや、アキ。

心の中で呟くと、立ち上がった。

「……これから、どうするの？」

途方に暮れた瞳で、ピーターがシリウスを見上げる。学生時代、よくこの瞳を見ていた。こんなに時が経っても、ピーターが自分に向けて眼差しは変わらないのか。

つくづく、いろんなことが嫌になる。

許した訳ではない。許せはしない。しかし、一時の間だけでも受け入れることくらいは、ジェームズも許してくれるだろう。

いや、もうジェームズは何もかも「仕方なかった」と笑って受け入れて、自分たちを見下ろしているのかもしれない。昔っから、いつもどこか達観した、物を上から見下ろすタイプの奴だった。

「リーマスを探して合流したい。お前リーマスん家に遊びに行ったりしてただろ、かつての実家とか……まあ、そんな分かりやすいところにいるとは思えないけどさ。でも何かの手掛かりがあるんじゃないかと思う。片っ端から、そういうところを虱潰しに回って行く——お前も着いて来るんだからな、分かっているか？」

「わ、分かっている！ 分かっているよ。……そうだ、シリウス……」

ふとピーターは首元をゴソゴソと探った。そして出てきたのは、

チェーンがついた水晶が三つ。

どこか見覚えがある気がしなくもないが、既視感の出処は分からなかった。

「秋が……あの『黒衣の天才』幣原秋が『絶対』の単語を使い保証した御守りだ。一度だけ、持ち主を災厄から守ってくれるのだと言う……持っている」

「……お前から受け取るというのは、気に入らないが」

ピーターの手から水晶をぶん取ると、首に掛け、シャツの下にしまい込みながら口を開いた。

「秋の言葉だと言うのなら、それを信じよう……折角、あいつから貰った命なんだ」

服の上から、軽く水晶を叩いた。

「今更砕くのは、あまりに勿体ない」

第25話 茜色の夕暮れ

数十キロ単位で大量購入した（正確にはフリットウィック先生に頼んで『購入してもらった』）水晶の欠片。それを全校生徒一人一人に手渡し、守護呪文を掛ける。

幣原秋が、以前ポッター家三人に対してやったように。ハリーの銀のブレスレットと同じように、持ち主を一度だけ命の危険から守ってくれる存在を作り出す。

莫大なまでの魔力、常人の何倍もの魔力を一身に手にしているぼくですら、流石に千人を超える全校生徒を相手取って魔法を掛けるのは辛かった。へたり込みそうになるぼくを、そつと華奢な腕が支えた。アクアだった。

「あ……ありがとう」

「いいの。こちらこそ、ありがとう」

アクアの大きな灰色の瞳が、柔らかく細められる。お疲れ様、とばかりに背を撫でられた。なんだかくすぐったい。

「……これからも、一緒にいてね」

咄嗟に返事は、出来なかった。

「……あの、さ。アクア……」

ん？ とアクアは首を傾げる。その瞳は無邪気に澄んでいて、思わず口を噤んだ。

「……何でもな、つう……」

「アキっ!？」

いきなり左腕が痛んだ。思わず膝を突いたぼくに、慌ててアクアが屈み込む。

この痛み方は知っている、ヴォルデモートがぼくを呼んでいるのだ。今闇の印を見れば、ぼくが行くべき場所の名が共に刻み込まれているはずだった。しかしアクアの前で、この印は晒せない。

「ごめん、ちよつと……トイレ」

アクアを振り切つて、物影で確認した。指定場所は予想通り、禁じられた森側の校庭。

駆け出した外は、宵の仄暗い薄紫色に染まっていた。もうじき、夜が訪れる。

「――来たか、アキ」

思わず、近付くのを躊躇った。それほど殺気が、辺りに充満していた。こちらを向いた真紅の瞳は、激情を隠しもしていない。

ビシバシと突き刺さる殺気に反応してか、魔力も漏れ出しているようだ。ぞわぞわとした何かが這い上がる感覚を皮膚が覚える。

「……血の匂いつけたまま、ホグワーツに来ないですよ」

――誰か殺してきたか。誰が犠牲になったのだろう。そして、ヴォルデモートがここまで怒り狂っている原因は何なのだろう。

確かめる目的で、少し挑発気味に言葉を吐く。ヴォルデモートは僅かに眉を寄せたが、杖には手を伸ばさなかった。脈絡もなく、言葉を吐き出す。

「分霊箱。知識くらいはあるだろう……俺様の高貴なる分霊箱だ」

「……へえ、ま、作ってないとは思っていなかったけど。それがどうしたの？」

ヴォルデモートの分霊箱は、確かスリザリンのロケット。レギュラスがすり替えたアレだ。今は確か、ハリーたちが持っているはず。

剣も上手いように彼らの手に渡ったようだし、既に破壊済みだろう。それが、一体どうしたのか。

「分霊箱が一つだと、一体誰が言った？」

その言葉に、息を呑んだ。意味は分かったが、理解は出来なかった。

「……はあ？ まさか、え――」

――ありえない、が、真つ先に来た。

そのことがすぐさま理解出来るくらいには、ぼくも闇の魔術に関して造詣が深かった。

「――いくつ」

「七つだ、愚か者が」

絶句したぼくに、ヴォルデモートは一瞬だけ得意げな表情を浮かべたが、それもすぐさま拭われた。

不機嫌極まりない表情のまま、こちらに近寄るとぼくの手首を掴ん

だ。

「全ての分霊箱が無事か確かめに行く。着いて来い、アキ」

ここでぼくを連れて行く、ということとは、ぼくが分霊箱に手出し出来なくするだけの何かがあるのだろうか。

一瞬、躊躇に足が竦んだ。立ち止まったぼくを、ヴォルデモートは振り返る。

訝しげにぼくを見て、やがて——更に遠くに目を向けた。

「なあ、闇の帝王様よ」

——聞こえた声に、息が止まった。思考も止まる。

ただただぼくは、ゆつくりと振り返った。

緩められたレイブクロウのネクタイ。黒のインナーが覗くほどボタンが開いたシャツ。捲られた袖。左耳に、雪印と群青のピアス。

「アキの身代わりに、俺を連れて行ってくれないか？」

碧の瞳が、夕暮れの光を受けて煌めく。

アリス・フィスナーが、立っていた。

「……はっ。フィスナー家の濁った血か」

「お揃い、だろ？ 俺とアンタ」

「はっ……なっ、お前何考えてんだよ!!」

腹の底から声を荒げた。思いつきり睨みつける。

「ふぎ……っ、ふぎけんなよ誰がそんなこと頼んだよ!! おいつ、おい聞けよっ、こっち見ろよアリスツツツ!!」

ぼくの手を掴む腕の力は、緩んでいた。振り解くとアリスの元に駆け寄り、アリスの襟首を掴んだ。力の限り揺さぶる。微動だにしないかったアリスは、そこでやっつとぼくを見た。

碧の瞳が何かを訴えかけるように揺らぐ。何だ？ と思わず目を瞠った。

「お前はホグワーツにいる、アキ」

トン、と胸を強く押され、よろめいた。その瞬間、アリスが何かをぼくの胸ポケットに入れたのが見えた。

踏み止まると、思わずポケットに触れる。これは、紙か？

「頼んだぞ」

ヴォルデモートに歩み寄ったアリスは、そこでぼくを振り返るとニカツと笑った。

その笑顔は、酷く純粹で、こちらに寒気までも呼び起こす類のものだった。

ヴォルデモートはアリスをじつと見下ろした。アリスも目を逸らさずに対峙する。閉心術くらいは貼っているんだろうなあ、と、こちらとしては気が気じゃない。

フィスナー家の唯一の直系嫡子だから、殺されはしない、と、思いたい……しかしヴォルデモートは、熱くなると後先を一切考えることなくやらかすことがあるのが懸念事項だ。ライフ・フィスナーが生きているから、息子一人がどうなっても構わないと考えているかもしれない。

アリスは母親がマグルの半純血だし、ライフと他の純血の誰かを掛け合わせるとか……嫌な想像ばかりが頭を一気に駆け巡る。

「……ふ。いいだろう……アキ・ポッターを連れていくのは止めてやろう」

ヴォルデモートのその言葉に、アリスは僅かに頭を揺らせた。

しかしその後続いた言葉に、ぼくは呼吸を忘れた。凍りつく。

ヴォルデモートは、真紅の瞳をぼくに向け言ったのだ。

「しかし、連れて行くのはアリス・フィスナー、貴様ではない。……アクアマリン・ベルフェゴール。ベルフェゴール家の長女を、ここに連れて来い」

第26話 藍鉄色の思惑

「……な、んで、アクアを……」

「気付いていないと思っただか？」

夕闇の中、ヴォルデモートは確かにぼくを嘲笑った。

「アリス・フェイスナーよ。アクアマリンを知らないと言いは、さすがに吐かぬよな？ ……連れて来い」

アリスは隠すことなく舌打ちを零すと、背を向けホグワーツへ駆け出して行った。

計算を狂わせるつもりが、逆にこちらが狂わされてしまった、そういう腹立たしさが見え隠れしていた。その苛立ちは物凄くよく分かる。

どうすれば、どうすれば。頭を動かそうとするものの、心臓の拍動がやかましくて集中なんて出来っこない。

髪を掻き毟り、目を閉じた。ヴォルデオートがすぐそばにいるが、目なんて開けていようが閉じていようが大して変わらない。

動揺していることを、今更押し隠すことも出来ない。それならばいつそ割り切って、思考を働かせることに全力を注ごう。

「……………」

アクアは純血だ。ベルフェゴール家の直系長子で、しかも両親は死喰い人。害される可能性は、アリスより低い。

低い、はずだ。そのはずだ。しかし、どう考えてもこれはぼくの枷、抑止策。余計なことをするなという、人質の役割。

いや、人質ならば害されない。ぼくが彼の言う通りに振る舞えば、殺しはされない。人質は、生きてこそ価値がある。

そして一点ホツとすること。ヴォルデモートはアクアしか人質に取らなかつた——アリスの申し出を突っぱねた。ということは最悪の事態は、ない。

人質が二人以上の場合、ヴォルデモートは一人を殺した上で、再度ぼくの行動を縛ることが出来るから。魔法族の高位な血を、これ以上流したくないというのは、きっと同じだ。

統治には、臣民が必要なのだ。皆殺しをしてしまえば、統治は不可能。誰も生きている者がいない焼け野原の中心で勝ったぞと叫んだところで、誰一人聞いていないのだ。ヴォルデモートはそれを、勝利とは認めぬだろう。

やがてアリスに連れて来られたアクアは、青ざめてはいたものの毅然とした顔つきをしていたし、何なら微笑までも浮かべていた。

ヴォルデモートに対し優雅に、良家の子女らしくしとやかな一礼をした後は「……お選び頂き光栄ですわ。昔のような美丈夫でしたなら、揺らがないこともなかったかしらね」と、強気に微笑んでみせる。しかしその小さな指先が震えているのは見て取れた。

「……アクアに何かをしたら、ただじゃおかない」

語気を強め、ヴォルデモートを睨む。

ヴォルデモートはぼくを見下ろして「それは貴様次第だ、アキ・ポッター」と薄く笑った。



アリアナの絵から顔を出したネビルは、ハリー達三人を見て一気に表情を明るくさせた。

「君が来ると信じていた！ 僕は信じていた！ ハリー!!」

存外に健やかなネビルに、ハリーは目を瞠った。ホグワーツは既にヴォルデモートの手に落ちたのだ、もっと痛めつけられているかと思っていた。ところがどうだ、何不自由なく生きてきた様じゃないか？

「アキのお陰なんだ。アキが、何もかもを抑えてくれた。アキは本当に、ホグワーツの生徒全員を守ってみせた。ハリー、君の弟、アキ・ポッターのお陰なんだよ」

「……アキは、じゃあ、味方、なんだね？」

そう言われ、思わず地面にへたり込んだ。慌ててロンとハーマイオニーはハリーの両腕を取ると、引っ張り起こす。

ロンは神妙な顔をして言った。

「……前に言ったこと。謝るよ、ごめんな、ハリー」

「私も……アキを疑って、ごめんなさい。あなたはずっと、アキのことを信じていたのに」

ハーマイオニーも泣きそうな表情で謝罪する。ハリーは晴れやかな表情を浮かべてみせた。最高に、気分が晴れやかだった。

「いいんだ。今、信じてくれるんだろ？」

アキ・ポッターか、とアバーフォースは呟いた。ネビルはふと表情を曇らせる。

「そう……僕らが今こうして元気でいられるのは、本当にアキのお陰なんだ。でもその代わりに、アキはずっと一人で苦しんできた。ハリー……君の大切な弟を、僕らが苦しめた。アキに……すごく、申し訳なくって……」

「……アキは多分、ネビルにそんな顔させたいから、皆を守った訳じゃないと思うよ」

顔を上げたネビルに対し、ハリーは微笑んだ。いつも、アキがするように。

「アキはきつと、皆に笑って欲しいと思うはずだ。生きて欲しいと、そう——思う、奴だよ」

アキ、と、噛みしめるように囁いた。

アバーフォースはネビルに視線を向けると「アキ・ポッターに連絡をしたか？」と尋ねる。

「アリスが、アキの行方に心当たりがあると言っていたから、アリスに任せただ。そろそろ来るんじゃない——」

ネビルが最後まで言葉を告げ切らぬうちに、アキが絵から飛び出して来た。存外地面からの高さがあったことに気付かなかったのか、そのまま転がり落ちそうになる。

ハリーは慌てて、アキの身体を受け止めた。想像以上に軽くて驚いた。

「気をつけろと言っただろう……」

アバーフォースがアキを見てぼやく。

「あつ、うわ、びっくりしたあ……ハリー！」

「アキ！」

アキを下ろして、改めて抱き合った。この少年の肩は、こんなにも細かったか。こんなにも、この少年の身体は薄かっただろうか。

「お帰り、ハリー」

アキが大きな目を細め、ハリーに微笑みかける。ずっと、ずっと、この笑顔をハリーは待っていたんだ。

「……っ、ただいま、アキ！」

第27話 赤朽葉色の旧友

戸口を開けたリーマスは、呆然とした表情を隠さずに二人を、シリウスとピーターを見遣った。瞳が徐々に状況を認識し、顔がだんだんと泣き笑いのようなものになるのを、シリウスは微笑みを浮かべてじっと見つめていた。

「……まさか、こんな……」

「……一体いつまで、俺たちを戸口に立たせておく気だい？　そして、さ。最初に、言うべき言葉があるんじゃないのか？」

リーマスは目元を拭って、頬を綻ばせた。

「おかえり」

「……おう、ただいま」

「たっ、ただいまっ」



思いつきりリーマスに殴られたピーターは、壁にぶち当たって木造りの温かい小さな家を揺らした。トンクスは目を瞠っているが、あまり驚いていなさそうな分、肝が太い。シリウスの従姉妹であるアンドロメダの子供だから、シリウスにとっては従姪に当たる。いや——失念していた。既に『トンクス』ではないのか。

彼女の腕には、小さな赤ん坊が眠っている。先ほどリーマスがピーターをぶん殴ったとき、物凄い轟音を立てたのだが、その騒ぎにも目を覚ます気配はない。これは、将来大物になりそうだ。

「結婚と、あと、子供もか。まあなんだ、おめでとう、リーマス」

拳を振り抜いた体勢のまま息を整えていたリーマスだったが、シリウスの声に身体を戻した。はにかみながらも「ありがとう」と笑う。「この年になって、奥さんも子供も私が……僕が、持てるとは思ってないなかった」

「リーマスは今まで自分の幸せを顧み無さすぎた。もう幸せの貯蓄はたんまりあるだろ。存分に幸せになりやがれ」

「君もね、シリウス」

ピーターはベソをかきながらも起き上がっている。顔が歪んでいるが、誰も気に止めちゃいない。

むしろたったこれだけでリーマスも溜飲を下げたのだ、感謝されてしかるべきだろう。十二年の因縁の精算としては、少なすぎるくらいだ。

「……子供の名前は？」

トンクスの腕に抱かれた、生後まもない赤ん坊に近付き、シリウスは尋ねた。それにトンクスは「テツドよ。エドワード・リーマス・ルーピン」と微笑む。

「リーマスがね……ハリーをこの子の後見人にするって、聞かなくって」

「ハリーを……」

じんわりと、胸の中に暖かさが染み渡る。自分が後見人となったハリーが、親友の息子の後見人となった。脈々と、命は引き継がれてゆく。

「……父親になったのなら、ま……死ねないよな？」

ピーターに合図する。ピーターは察して、シリウスに水晶を預けた。シリウスはリーマスの首に、その水晶を掛けてやる。

「これは……？」

「幣原秋の品だと。持ち主を一度だけ災厄から守ってくれる——そうだよな？」

ピーターはシリウスの言葉に、慌てて頷いた。少し呆然とした表情で、リーマスは首に掛かった水晶に触れる。

「秋が……」

そう呟くと、口元を噛み締めた。瞳の光が、一瞬消える。

ん？ と思った矢先に、ピーターがぐもった声を上げた。

「どうした、ピーター？」

左腕を掴み震えているピーターの肩を起こす。ピーターは汗が滲む顔でリーマスとシリウスを見上げると、掠れた声で「闇の印が……痛むんだ」と呟いた。

「しよつちゆう痛むのか？」

「最近は、まあ……これは闇の帝王が、死喰い人を呼び集めるときにも使うし……でも、これは……、これは、違う」

険しい瞳で、ピーターは呟いた。

「……ハリー・ポッターを、見つけたんだ」

第28話 青色の殺意

ハリーを守る為、学校中が動き出した。これから、ホグワーツは戦場となる。

ハリーはロウエナ・レイブンクローの『失われた髪飾り』を探すのだという。ヴォルデモートの七つの分霊箱は、恐らく創始者の宝物であると突き止めたようだ。

レイブンクロー寮に行きたいというハリーに付き添いたいのは山々だったが、ぼくには他にやるべきことがある。

大広間に集まる、全校生徒。大広間のど真ん中を突っ切って、壇上へと上がった。

ぼくの姿を視認した人は口を噤むと、静かにぼくの言葉を待つ。壇で皆を見回したときには、大広間は静まり返っていた。

先生方の姿はない。先ほど出会ったフリットウィック先生に頼み、城の守りの強化をお願いした。きつと今は総出で、守護呪文を更新させ、普段より何倍も何十倍も分厚い結界を作っているはずだ。

大きく息を吐くと、両手で顔を覆った。もう、これが全ての最後だ。顔を、上げた。

「……ぼくはこの日のために、ずっと準備をしてきた。アキ・ポッターが言う。ヴォルデモートが死喰い人を引き連れ、このホグワーツにやって来る。ホグワーツは戦場となる。……だけど、焼け野原になんてさせない。来年も、再来年も、ずっとこの学校はここにある！ 誰の支配も受けぬ、英国随一の名門魔法魔術学校として、ずっとここに存在する！」

未来を語る。語ったことは、絶対に現実に見せる。

「……いいか。絶対に生き延びてくれ。戦うな。自分の力量を見極めろ。敵わない可能性が一欠片でもあったのならば、すぐさま撤退しろ。絶対に死なないでくれ……最優先すべきは、自分の命だ」

「嫌だ、戦うー」

飛んだ野次は、グリフィンボール生のもだった。勇敢そうな眼差しで、ぼくをじっと睨んでいる。

しかし、ここでぼくは引けない。引いてはいけない。

「いいか！ グリフィンドール生は勇気と無謀を履き違えている！」
声を荒げた。今声を上げたグリフィンドール生、メルヴィン・キャ
ンベルを見据え、叩きつけるように言葉を発する。

「戦った先の死は怖くない？ ふざけるな!! 自分の命は人と代えら
れない、代えが効かない、自分が死んで絶対に悲しまない奴がいると
断言できる奴がいる？ ぼくは言い切ろう、この場には誰一人として
そんな人間はいない!!」

ぼくは君たち一人一人の名前を知っている、一人一人の願いを知つ
ている、一人一人の望みを知っている!! 一人でも欠けたら、ぼくは
嘆き悲しむぞ、本気だ!! ぼくの心はな、そんなに強くないんだよ。
いいか、絶対に……絶対に、英雄なんかになるな!!」

シン、と、先ほどとは違った静寂が大広間を包んだ。

一度前髪を引っ張ると、ぼくは前を向き、再び口を開く。

「……最適解を。状況をしっかり見て、最適解を選んでくれ。

ねえ……レイブンクロー生。ぼくからの……たった一人の七年生
に過ぎないアキ・ポッターからのお願いだ。無理無策で突っ込む人た
ちを止めてあげて。ぼくたちはいつ何時でも、冷静になることが出来
る。状況を冷酷なまでに判断して、目先の得でなく長期的な利を取る
ことが出来る。今こそ、それを生かして。グリフィンドールでもな
く、スリザリンでもない、言わば『蚊帳の外』だからこそ、選べる道
がある。

——さあ、叡智を誇るレイブンクロー生。『全体の利益』を優先し
ろ。少数の犠牲を払い、圧倒的多数を救え。これが、戦争じゃ一番大
事なことなんだ。君たちならば——それが出来る」

微笑んだ。

レイブンクロー生はぼくをしっかりと見て、頷いた。彼らに認めら
れたのなら、これほど心強いこともない。

「たとえ——たとえ目の前で人が死のうが。絶対に立ち止まるなつ、
狼狽えるなよ狂気に負けるなよつ、死に立ち止まるのは全て終わった
後にしろ！ ただ『生きろ』、生き延びてくれ！」

言い切って、息をついた。もう、言い残すことはない。少し気を緩めた、その瞬間だった。

聞き慣れた声が、学校中に響き渡る。酷薄な声は、薄っすらと笑みにコーティングされていた。

『……アキ。随分と楽しそうなことをしているじゃないか……?』

ヴォルデモートの声に、全校生徒は青ざめた。青ざめ震えたいのは、ぼくだって同じだ。でも、ここでぼくが怯えを見せれば、千人の人間が揺らぐ。

「……っは。怯えた子羊はねえ、何しでかすか分かんないんだよ！目を離すそちらが悪い!!」

『こちらには貴様の大事な少女、アクアマリンがいることを忘れたか?』

『アキ聞いちゃダメ!!』

アクアの珍しい大声に、指先が冷えた。心臓も一瞬止まった気がした。

ヴォルデモートの声は続く。

『さあレイブンクロー生よ。『最適解を選べ』——選べるだけの選択肢が、眼前にあればいいのだがな』

くつくつと低い笑い声が響いた。

誰もが身じろぎすら出来ず、ヴォルデモートの言葉に耳を傾ける。

『俺様が最適解を提示してやる。ハリー・ポッターを差し出せ。そうすれば誰も傷つけはせぬ。そう、アクアマリン・ベルフェゴールも。さて、レイブンクローの愛子、アキ・ポッターよ。兄か、恋人か、選ぶがいい』

その言葉に、確かに理性の籠が弾け飛んだ。

選べ? ハリーか、アクアかを?

お前は一体何様だ。

「……ふっざけんなぶち殺してやるツツツツ!!!」

これからの策、計画、予定。何もかもが、意識から遠ざかる。怒りに染まった視界の中、ただ、殺意だけが鮮明だった。

第29話 浅葱色の未練

アキがいなくなった大広間は、生徒がどうしていいのか分からず、ただざわめきだけが満ちていた。大きく息を吐くと、レイブンクロウの場所から抜け出す。

「あいつつてさ……バカだよなあ。最後の最後で締まんねえっつーか、最後にそんな無様なサマ晒していなくなるなんて、それまでの言葉全てドブに捨てる行為だぜ」

ゆつたりと壇上に歩み寄ると、振り返った。少し上の目線から、全校生徒を見下ろす。

様々な色の瞳が、自分を向いている。慣れぬ感覚だ、と小さく舌打ちをした。俺に尻拭いをさせやがって、次に会ったらただじゃおかない。

しかし、今はそんな私情とは無縁だ。必要ない思考を切り落とす。「俺の名前はアリス・フィスナー。『中立不可侵』の名の元に、この場にいる誰か一人でも、欠けることは許さない」

フィスナーの名は、この場においても有効のようだ。かつて父親の存在と共に忌み嫌ったこの家を、共に見直すきっかけになったのは、確かにアキ・ポッターのお陰なのだった。

「……お前ら皆さ、アキのこと、好きだろ」

壇に肘をつき、寄り掛かる。ぐるりと見回して、笑みを浮かべた。

「あのバカで、自分勝手に、傍若無人で、無茶苦茶で、すげえ嘘つきなペテン師で、臆病で、弱虫で……いつも一生懸命だった……そんなあいつのためにさ。あいつの願い、叶えてやってくれ」

あいつ一人じゃ、その願いは叶えられないのだから。



かつて分霊箱であった『トム・リドルの日記』、残った数ページに取り憑いた霊魂であるトム・リドルは、ホグワーツを歩いていた。

全校生徒は皆大広間に集められているため、廊下に人気はない。八

階の、トロールのタペストリーの前で三往復。反対側の壁に現れた扉を押し開け、中に進んだ。

広い室内を埋め尽くすかのように積み上げられたガラクタの数々。一々確かめるのは骨だったが、そう文句は言っていられない。

やがて見つけたものに、手を伸ばした。指先で軽く弄ぶ。

「……思考回路って、あんまり変わらないものだねえ」

それが良いのか悪いのかは分からないが、『本体』にとっては『良くない』ことであるのは間違いない。

「まさか自分に裏切られるとは思ひもしなかった？ 今の自分に、一体誰が着いて行きたいと願うものか——愚かだね、全く」

レイブ・クローの髪飾りを、指に引っ掛けくりと回す。そのまま『必要の部屋』から出たところで、ハリー・ポッターに出くわした。

「あ、おっと」

「……は、あ、えっ!? あれっ、トム・リドルが、なんで!」

「……僕の『記憶』が正しければさあ。『君』が、アキ・ポッターに僕の日記の一部を渡したはずだと、そう思うんだけど?」

肩を竦めた。

ハリーはしばらく記憶を探ったのち「あっ」と小さく声を上げる。どうやら思い至ったようだ。

「君が探しているのは、これだろ」

ひょいっと髪飾りを放り投げた。ハリーは慌てるも、流石は何年もクイディッチで正シーカーを務めただけのことはある、見事な反射神経でキャッチする。

「……僕を、止めないの?」

立ち去りかけたリドルを、声が呼び止めた。一時足を止めると、リドルは振り返る。

「……自分の未来の凄惨な末路なんて、見たくないだろう? 自分が選びたくも、選ぼうとも思わなかった選択肢を選んだ、未来なんてさ……」

それだけを言って、目を切った。

第30話 甕覗色の悲鳴

ヴォルデモートの場所は、左腕の『闇の印』が教えてくれる。こつちへ来いと、ぼくを誘いぎなうように。挑発しているのだ、このぼくを。

「アキ・ポッター、それは罠だ！」

大声に呼び止められた。スネイプ教授だった。ぼくに追い続いて来たのか。

けれど。

「罠だと知っていても!! ぼくは行かなくちゃいけないんだっ、じつとしていてだけで気が狂いそうになる!! ぼくの気持ちに君には分かるはずだっ、リリーが死ぬと予言を受けて、ダンブルドアの元へ寝返った君ならば!!」

ざつくりと痛いところを突かれたように、教授は苦い表情を浮かべた。暴れ柳の元で、足を止める。

「……ぼくがヴォルデモートを引き止めておく。その隙にアクアを助け出して。ぼくはあの子が大切なんだ——ハリーと同じくらい、大切なんだよ守りたいんだよっ、守んなきゃいけない子なんだよっ!!」
足元の小石を拾い上げ、魔力で飛ばす。過たず瘤に当たり、暴れ柳は動きを止めた。

太い根の間、隠し通路に足を踏み入れる。

「……君の寮の生徒だ。死ぬのは不本意だろう」

「……ああ、当然だ。無事に取り戻すことを、約束しよう」

その言葉に、安心した。

『叫びの屋敷』の扉を蹴破るようにして開け放つ。

一階のホールに、ヴォルデモートは立っていた。全身の毛を逆立てるような殺気と魔力が、渦を巻く。魔力酔いさえも引き起こしそうなそれに、ぼくの結ばれた髪が揺らされた。

喜色ぼんだ瞳で、ヴォルデモートはぼくを見据える。

「待っていたぞ、アキ・ポッター。そうだ、その目だ。幣原直と一切合切同じ色の目、その目が俺様だけを向いている! 沸騰しそうな怒り

が俺様のことだけを考えている！ 戦おう、戦おうぞ殺し合おうぞ理解し合おうぞツツ!! 共にそういう風にしか、我らは生き合えないのだからツツツツ!!!」



粉々になった木屑が弾け飛ぶ。今時、木で出来た家だなんて。リーマスが学生時代に連れて来られていた『叫びの屋敷』は、既に屋敷の原型を留めていない。

魔力を絞って、ヴォルデモートを吹き飛ばした。脆い壁を突き破り、ヴォルデモートは姿を消す。追い打ちを掛けようかと思っただが、膝が抜けた。その場に崩れる。

——魔力切れの気配。しかし、あまり心配していなかった。

「代われ、秋！」

叫ぶ。瞬時に頭の奥底で声がした。

『言われずとも！』

頼んだよ、と、口元に言葉を残した。

精神がぐいっと引つ張られる。一瞬ブラックアウトした視界は、やがて世界を取り戻す。

幣原秋は静かに目を開けた。

杖を握り直すと、煙幕の中に杖を突っ込み駆け抜ける。外気に、視界がパアツと晴れた。

ヴォルデモートの姿を探す——手間は省けた。斜め左方向から飛んで来た光線が、周囲に展開させている魔法障壁によって弾け飛ぶ。そちらか、と瞬時に杖を振った。杖先に重なる魔法陣。互いの欠点を補い合う、闇祓い時代に覚えた魔法の使い方は、杖が覚えてくれていた。

幣原秋の、一番幼い頃からずっと側にいた。両親よりも一番近くでぼくを見ていたこの杖は、ぼくの全ての罪も知っている。

「——戦い方が変わったな」

全ての呪文を綺麗に打ち消し、ヴォルデモートは無傷で立っ

た。

真紅の瞳に映る感情は、先ほどアキ・ポッターに向いていたものと少し種類が異なる。その眼前に、ひた、と杖を突きつけた。

「幣原秋か」

「答える義理はない——と言つてもまあ、構わないか。イエスだ、トム・リドル」

薄く笑う。

夜闇に沈む世界の中、ただ魔法の閃光のみが光源だった。

しかし視界などぼくの敵じゃない。暗かろうが明るかろうが、静かだろうが煩かろうが、外界はぼくの敵とはなり得ない。思考はいつでも研ぎ澄まされ、視界は常に広々と。アキは怒りに視界が狭かったが、ぼくにとつてアクアマリン・ベルフエゴールはただのスリザリン生の女の子に過ぎない。アキ・ポッターを縛るハリー・ポッターという彼も、ぼくにとつては親友の息子だ、ただそれだけ。

ぼくが怒りに我を忘れるほどに大切だと感じるものは、この世に一つとして存在しない。

『叫びの屋敷』が、ホグズミードのメインストリートから遠く離れた場所ので良かった。戦禍を撒き散らさずに済む。夜中だからか、野次馬もない。すぐそばで核弾頭並みの戦力を持つぼくらが戦い合っているというのに、静かなものだった。

本心を言えば、ぼくらの戦いをわざわざ観に来る頭の悪い野次馬など消し飛んでしまっても構わないとは思っていた。平和に錆び付いた愚か者が、ぼくとヴォルデモートの力量すらも理解せずにノコノコと近付いたのなら、そこまで気を回すほどぼくは優しく出来てはいない。

それでも、きつとアキは嫌がるだろう。見知らぬ愚か者でも、他人の死に膝をつくだろう。

あの、ぼくよりずっと優しい少年は、その通りに悲しむのだろう。

ならば、街に被害が行かぬように、気を遣いながら戦ってやろうじゃないか。

木々が裂け、火花が枯れ木を燃やす。

爆風の中、膝をついたヴォルデモートの眼前に杖を突き付けた。真紅の瞳が、ぼくを忌々しげに睨みつける。

「ぼくの勝ちだ、トム・リドル」

死の呪文を放つてもいいが、かつて彼は七つの分霊箱を作ったと言った。現在どれほどの数残っているかは未知だが、既に全て破壊済みと楽観は出来ない。

それでも、試しに死の呪文を唱えてみるくらいならいいだろう。口を開こうとした、その瞬間だった。

「やめろ秋！」

声に目を遣る。アクアマリンを引き連れた、セブルスの姿があった。

アクアマリンが駆け寄ってくるのに、慌てて抱き止める。

「……あなたは……？」

普段この少年の周りに漂わない風に、異変を感じたか。女の子は勘が鋭いとは、よく言ったものだ。目の前の男が自分の恋人ではないことに勘付くとは。

「ぼくは、幣原秋。君の知っているアキじゃない。でも……無事ではなかった」

静かに微笑む。そこでヴォルデモートは、ふらつく足取りで立ち上がった。

自然、杖を握る手に力を籠めると身構える。アクアマリンを後ろに庇った。

「……そうか。俺様が杖の忠誠心を勝ち得ていないから、こんな小童に膝をつく羽目になるのだ」

俯いて、その表情は伺えない。しかし、魔力が不穏に渦を巻いている。

何だ、と重心を落とし動きを伺った瞬間、ヴォルデモートが何事かを厳かに告げた。シューシューと吐息にも似た——蛇語、だった。

破裂音にも似た大きな音がした。音の方向を向き、目を見開く。

大蛇の牙が、セブルスの首を貫いている。セブルスはこちらを見て目を見開いていたが、やがてガクリと床に膝をついた。

倒れ伏すセブルスから大蛇は離れると、この場から立ち去るヴォル
デモートの後を追う。牙という栓が抜かれ、首から勢いよく血が吹き
出した。

少女の声に為らぬ悲鳴が、夜のしじまに木霊する。

第31話 銀色の信念

ハリーとロン、ハーマイオニーは『透明マント』を脱ぎ捨て、慌てて秋に駆け寄った。

秋は呆然とその場に立ち竦み、倒れたセブルス・スネイプを見下ろしている。アクアは青ざめた表情で、秋の腕に縋って震えていた。

ハリーはセブルスの前に跪く。セブルスの昏い瞳が、ハリーを見つめた。

「これを……これを、取れ」

銀の霞が、口やら耳やら目やらから溢れ出る。ハーマイオニーがハリーにフラスコを押し付けた。ハリーは震える手で、その銀色を全て汲み入れる。

「僕を……見て……くれ……」

セブルスがハリーに囁いた。そして重たい瞼が閉じられる。

「……っ、許すかよお……!!」

悲鳴にも似た声だった。

秋はセブルスに駆け寄ると、なりふり構わず杖を傷口に押し付けた。灼き焦がすような青白い光が、杖先から零れ出る。渦巻く風が、周囲の瓦礫をもカラカラと揺らした。

浄化の魔法、と、ハーマイオニーは震える声で囁いた。

「誰一人失うことは許さない!! アキもそうだ……ぼくだってそうだ!!」

パキリ、と軽い音が響く。音の源は、秋が手に持つ杖だった。パキパキピシリと、杖にヒビが入って行く。

どれだけ膨大な魔力を、こんな細い杖に流し込んでいるのか。額に玉の汗を浮かべながらも、それでも秋は魔法を流し込むことを止めない。

やがて——呆気ない音と共に、杖が砕け散った。破片が血の海へと降り注ぐ。

しかし秋は何一つ構うことなく、そのまま左の人差し指と中指を傷口に当てた。

「生きて、生きて、生きてくれよ!! なあつ、セブルスツツ!!」

呆然と秋を見下ろしていたハリーの袖が引かれた。アクアだった。静かな決意を秘めた瞳で、ハリーを見つめている。

「……ハリー。あなたは行きなさい」

「……つ、でも」

「行くの!! 彼の思いを無駄にしたくなかったら、早く!!」

アクアが叫ぶ。行きましよう、とハーマイオニーは決然とハリーを促した。

このままセブルス・スネイプとアキを置いておくのは気が引けた。しかし、何一つ自分にはやれることがないということも、理解していた。

そのとき、冷たい声が響き渡った。思わずビクリと周囲を見回す。ヴォルデモートの声だった。

「ハリー・ポッターよ。一時休戦、と行こうではないか。俺様はこれから一時間『禁じられた森』で待つ。もし一時間の後に貴様が俺様の元に来なかつたならば、降参して出て来なかつたならば、戦いを再開する。そのときは、俺様自身が戦闘に加わるぞ、ハリー・ポッター。そして貴様を見つけ出し、貴様を俺様から隠そうとした奴は、男も女も子供も、最後の一人まで罰してくれよう。——一時間だ」

秋は、それらの声が一切耳に入っていないようだった。ただただ一心に、目の前のセブルス・スネイプを見据えている。

「……つ、アキを頼む」

アクアは頷くと、躊躇いながらも口を開いた。

「……あなたが死ぬことを、アキは望まない。アキのためにも、あなたは生きて……アキを悲しませたくは、ないでしょう」

頷くことは出来なかった。

アクアの視線から逃げるように、ハリーはロンとハーマイオニーを促すと、その場に背を向けた。

第32話 白百合色の自我

「……僕は」

——死ななければならぬ。

ハリーは服の上から心臓を抑えた。どくどくと耳の裏で鼓動が脈打つ。

先ほどのヴォルデモートの放送も、ついでに脳裏に蘇った。

校長室の『憂いの篩』。その中で見た記憶は、鮮明だ。

きつと、恐らく、永遠に。

アキに知らせてはならない。知らせれば、余計にあの少年を苦しめる。

ホグワーツをゆつくりと歩いた。およそ一年ぶりに訪れたホグワーツであるというのに、もう二度と足を踏み入れないことを知っているのは、何だか妙な気分だった。

ネビルの姿を見つけ、呼び止める。ヴォルデモートの近くにいる蛇、ナギニを殺すよう頼むと、ネビルは頷いたものの探るような眼差しを向けた。

「ハリー、捕まりに行くんじゃないだろうね？」

「違うよ」

静かに嘘をつき、微笑んだ。この表情を、そう言えばアキもよく浮かべていたっけ。

呼吸をするように、嘘をつく奴だった。

「僕が、アキを悲しませるようなことをする奴だと思うかい？」

そう言葉を並べてやれば、ネビルは押し黙った。それもそうか、と思ってくれたのだろうか。

——これでいい。

「……あと、これも」

思い出した。これから死ぬのならば、このブレスレットは邪魔になる。

三大魔法学校対抗試合の折、アキが作ってくれたもの。手放すのは、なんだか少し惜しかった。

「きつと、君の身を守ってくれる。だから——」

「ハリー、それはいらぬよ。アキは全校生徒全員に魔法具をばら撒いた。それはむしろ、君が持つておくべきものだ」

厳しい口調でネビルは押し戻した。まさか断られるとは思ってもおらず、少し途方に暮れる。

まあ最悪、森のどこかで捨てればいいだろう——アキからもらったものを捨てるなど、心は痛むが。

ホグワーツ城の門で、ジニーを見つけた。傷だらけではあるが、元気そうだ。

一人だったため、後ろから声を掛けた。透明マントを脱いだハリーに、ジニーは目を見開いて少し笑った。

「……久しぶりね、ハリー」

「ああ……久しぶり、ジニー」

そうだ、ジニー。少し前にビルやチャーリーを見た。きつと何処かで戦っているのだろう。少しでも、役に立てるのならばきつとそちらの方がいい。

「会いたかった……これを、君の兄の誰かに渡してくれ。きつと身を守ってくれるから」

それだけを早口で言うと、駆け出した。あまり長々と話していると、心が恐怖に屈して何もかもをジニーにぶちまけてしまいそうだった。

振り切ったと確信してから、足を緩める。気付けば、森に入っていた。

首から掛けた巾着から、スニッチを引っ張り出した。

『私は終わる時に開く』、その時は、今以外にどこにあるというのか。「僕は、まもなく死ぬ」

スニッチを唇に押し当て、囁いた。

手の中に転がる、黒い石。『蘇りの石』——

目を瞑って三度、手の中で転がした。そして、目を開けるとぐるりと周囲を見渡す。

自身を囲む、四つの影。自身の父親と母親、そして——

「……アキの、っ両親？」

『せーいかい』

栗色の髪を持つ女性は、にっこりと微笑んだ。アキとよく似た笑顔だと、思った。

ジェームズとリリーも笑みを浮かべると『まさかこんなところでもご一緒するとは』『奇妙な縁ですね』『ありがとうリリーちゃん、そうだ、この前頂いたケーキすっごく美味しかったよ』『アキナその話は少し止めてくれないかな、シリアスが崩れるから……！』などと霊体同士で好き勝手喋り始める。緊張感のないやり取りに呆気に取られるも、やがて笑った。

「あはは……元氣そう。なんか、いろいろ……ホツとした」

本当は、死ぬことが怖かった。当然だ。

しかし死者とこうして触れ合った瞬間、不思議なことに今までの胸のわだかまりがすうっと溶けていくのが分かった。心が軽くなる。

『今まで、秋を支えてくれてありがとうね』

秋の母親はハリーの両頬に手を触れた。感触はないものの、ほんのりと温かみを感じる。その隣で、秋の父親は険しい表情を浮かべていた。

『僕らの世代の間違いを、下の世代に押し付けた。それが申し訳なくって……』

『もう、秋のお父さんだったら、心配しないで。私たちはちゃんと、幸せだったよ』

リリーが微笑み、ジェームズを見上げる。ああ、とジェームズもすっかりと頷いた後、ハリーを優しい眼差しで見た。

『ハリー、死ぬことは恐ろしいことじゃない。いつか必ず、皆がここに訪れる』

「……うん」

しつかりと、頷いた。

「最期まで、一緒にいてね」



気がつけば、真っ白な世界でハリーは横になっていた。明るい霧の中だ。

「……やあ。こんにちは、ハリー」

正面に、一人の少年が微笑んでいる。

少し身を屈めて、大きな黒い瞳をうつすらと細めて。長く艶やかな黒髪は、後ろで一つに括られている。

愛しい弟に、よく似た――

「幣原、秋」

差し伸べられた手に掴まり、立ち上がった。

立ち上がると、ハリーの方が背が高くなる。

「……君、さつきまで向こうに……アキと一緒に……」

途切れ途切れに言葉を発する。状況が、未だ飲み込めていなかった。

秋は悪戯っぽく微笑むと、軽く首を傾げる。

「だってこれ、君の夢なんだから。夢ならなんだってアリ、なんだよ」
無邪気に、秋は笑った。そういうものかなのかな、と首を傾げつつも、
考えても詮無いことだ、と結論づける。

「……君の笑顔が、見たかった。君は今まで、僕の前で笑ってくれなかったから」

ハリーの言葉に、秋は眉尻を下げた。悲しげな笑顔だった。

「ハリー」

呼びかけに顔を向ける。ダンブルドアだった。左腕は萎びておらず、五体満足そのものだった。

「なんと素晴らしい子じゃ。なんと勇敢な男じゃ。さあ、一緒に歩こうぞ」

呆然としたハリーの背中を、秋は軽く叩いて促す。

醜い子供を見つけ、思わずたじろいだ。小さく、傷ついた赤ん坊だ。息をひそめるようにしながらも、泣いている。

気にかけて、ハリーはダンブルドアに疑問をぶつけた。

ダンブルドアは、ハリーの死にどういう意味があるのかを滔々と

語った。ハリーの血の意味、分霊箱の秘密、そして死の秘宝とは。

ダンブルドアはハリーの全ての疑問に完全に答えてみせた。ずっと、こうして疑問が氷解する日を待ち侘びていた。

秋は黙って二人の問答を聞いていたが、やがてふわりと立ち上がると、醜い子供をその両の手に抱き上げた。右手に赤ん坊を抱くと、左手に杖を握る。優しい眼差しを赤ん坊に落としながらも、歌うような柔らかな声音で『アバダ・ケダブラ』と告げた。

緑の閃光が一瞬弾け、光が消えた瞬間には、赤ん坊はもう泣くことはなくなっていた。

「……それが、君の慈悲か」

ダンブルドアが静かに呟く。

秋は息絶えた赤ん坊を腕に抱きながら、ダンブルドアを振り返り微笑んだ。

「違いますよ。慈悲なんて言葉は勿体ない。こんなの、ぼくのエゴに過ぎないんです」

第33話 空色の祝福

「アキ、や、もう止めて……」

『叫びの屋敷』は、先ほどの戦いで既にほぼ更地となっていた。その中に横たわるセブルス・スネイプの前で、懸命に浄化の魔法を籠めるアキ——否、幣原秋。

さて、二話前を思い出してもらいたい。幣原秋の杖がどうなったかを。

三十年ほど一人の主人に仕え続けた献身的なあの杖は、先ほど幣原秋の魔力に耐え切れずに砕け散った。構わず彼は、杖なしで膨大な魔力を注ぎ込み続けている。杖腕である左手を、セブルス・スネイプの傷口に押し当て、魔力を籠め続けている。

後、左腕が、杖と同じ末路を辿るであろうことは、簡単に予測出来ることだろう。

現に、ローブから覗く手は真つ赤だった。床の血だまりは、セブルス・スネイプのもの、幣原秋のもの、区別がつかない。ローブにまで血は滲んで来てはいないものの、その下のシャツは真つ赤に染まっているだろう。

秋の集中が、ふと揺らいだ。チラリとアクアを見「触らない方がいい。感電するよ」と静かに告げる。秋の背に伸ばしかけた手を、慌て引つ込めた。

「これがぼくの選択だ……アクアマリン、黙って見ていて」

そこで秋は頭を振った。眉間に右手を当て「うるさいなあ……」と呟く。

「そんなに厳しい言葉を投げかけたつもりはないよ。あー、うるさい、集中切らす気か。喚くなつて。代われ？ バカか君は、じゃあ君はこの術式組み立て……は、見てたか。でも魔力の保有量が違うだろ。いからばくに任せとけよ……ん？」

浄化の魔法は止めぬまましばらく一人でぶつぶつ言っていた秋だったが、やがてアクアを振り向いた。思わず凍りつくアクアに構わぬまま、アクアを上から下まで眺めると、口を開く。

「……アキから、伝言。『怖い目に合わせてごめん』ってさ。あと『怪我がなくて良かった』って。ちゃんと伝えたからな」

「……後で、自分の口で言えばいいのに」

思わず、思ったことが零れた。

秋は一瞬目を瞠ると、やがてくすりと微笑む。その笑顔に、思わず目を奪われた。想像していたよりも随分と柔らかな笑みだったから。

「本当、その通りだよ」

そう言っただけ、研ぎ澄まされた集中が周囲に漂った。手出しも出来ぬまま、アキアはただ秋の隣で、事の様子を見守った。

血溜まりが、じわじわと広がって行く。跪いた秋の制服はおろか、アキアの革靴も、ローブの裾も浸して行く。それをただ見るだけしか出来ないのは、辛かった。

血液を失ったからか、それとも魔力の使い過ぎか、あるいはその両方か、どんどん秋から血の気が引いてゆく。それでも、秋は決してその手を止めようとはしなかった。

やがて——ふ、と糸が切れたように、秋がふらりと倒れ込んだ。彼の身体が血の海に落ちる前に、反射的に身を支える。そう言えば先ほど『感電するよ』とか言われたのだったけ、などと遅れて思い返すも、触れた感触は柔らかな人体のものだった——もつとも、随分と冷え切っていたが。

「……っ、う……」

荒い息で崩折れた彼は、ぎゅっと強く目を瞑っていたが、やがてハッとしたように目を開けた。黒い瞳がこちらを向く。アキだ、と直感した。

瞬間、信じられないほど強い力で抱き締められた。血に濡れた地面に転がりながら、アキアを右腕一本で抱き締めている。

「ひと、まず……なんとか……よかつ、よかつた……」

荒い息の狭間で聞こえた声に、身を震わせた。ホッとアキアも安堵する。

「……っ、あなたも！」

慌てて身を起こすと、アキのローブに手を掛けた。そのまま左肩を

引きずり出すと、シャツのボタンも開け放つ。左肩から下の惨状に、息を呑んだ。

惨状——その表現がピッタリだった。ずたずたであった。アキは右手でアクアを押し止めたが、本当に微かな力だった。先ほどアクアを抱き締めたのが、きつと最後の力だったのかもしれない。

震える手で、自身の杖を抜いた。実家にあつた本からかつて得た、解剖学の薄い知識を引っぱり出し、大きい血管から順に繋いで行く。

しかしその最中、異変は起きた。左の指先から、すうつと色が変わって行く。色は段々濃くなり、最後は漆黒へと変わって行つた。指先だけではない、その変化は手首を、上腕を、肘上を這い上がり、左肩の手前でようやくやく色の侵食は止まった。

「な、何……？」

アクアの声に、アキは首を回した。左手を見ると目を細め、恐る恐る右手で触れる。感触を確かめるようにした後「何だろうねえ」と普段通りの口調で首を傾げた。

「い……痛く、ないの……？」

血の気はないものの、顔を顰めたりといった苦痛の表情をしていないアキに尋ねる。んー、とアキは微かに笑った後、諦めたように首を振った。

「……あはは。言ったら怒られるかなーなんて思っちゃって……うん。あのね、実は痛くない。痛覚トんでるのかそれとも痛い！」

躊躇なくアキの頬を叩いた。こちらの痛みは感じるようだから、脳の神経回路の問題だろう。そう思っていたのだが、アキの考えは少し違つたようだ。

「……幣原が肩代わりしてくれているのかも。まあもしくは、この腕の痛覚がもう役目を果たしてないんだ……しかし初めて見るケースだなあ、ぼくは魔法医学にはあんまり明るくないんだけど、面白い障害を引き起こすこともあるんだね。一体何なんだろう魔法って……」

「……全く、あなたって人は……」

思わず苦笑した。どうしてそこでそういう方向に頭が行くのか。本当に信じられない。

動かない左腕を隠すように、アキはローブを纏った。血に染まり切ったレイブクローのローブは、裏地が紫色に変化している。

そして再びセブルスに駆け寄った。セブルスも顔色は悪いものの、傷口は塞がれ、呼吸も安定しているようだ。アキは大きく安堵の息を吐いた。

その時だった。魔法で拡大された声が鳴り響く。弾かれたように、アキが顔を上げた。

『ハリー・ポッターは死んだ！ 『生き残った男の子』は完全に敗北した。戦いは終わりだ。抵抗する者は全員虐殺する。城を捨てよ、俺様の前に跪け。さすれば命だけは助けてやろう』

——人が、ここまで絶望した表情を浮かべる様を見るのは、初めてだった。

愕然とした表情で一度身を震わせたアキは、やがてよろよろと立ち上がった。

「……嘘。嘘だ……」

虚ろな足取りで、アキはふらふらと出口へと歩みを進める。その口から、謔言のように言葉が零れた。

「ハリー、ハリー、ハリーハリーハリー……」

見て、いられなかった。痛ましすぎる。

アキの右側に潜り込むと、無事な方の腕を取り、肩を貸す。ハツとした瞳でアキはアクアを見ると、目を伏せ「……ありがとう」と呟いた。

通路を潜り、動かない暴れ柳の隣を抜け、校庭へと出た。学校の玄関側に、黒衣を纏った集団——死喰い人の集団。

その集団の中心に立つヴォルデモートが、アキに目を向けた。隣には震えながらもハリーの亡骸を捧げ持つハグリッドの姿がある。ギリ、と奥歯を噛み締めた。感傷が胸中で荒れるも、今はそれぞれではない。

ヴォルデモートは楽しげに、アキとアクアに軽い足取りで歩み寄った。両手を広げるパフォーマンスを試みせる。

「アキよ、一步遅かったなあ？ 貴様が守りたいと思っていた存在は、

既に死んだ。貴様を大切に思う奴は、誰もが死ぬ。思い返せ、幣原秋。貴様が築いた屍の山を」

アキの、元々不安定だった呼吸が更に揺らいだ。衝動に任せヴォルデモートに歩み寄ろうとするアキを、慌てて引き止める。今この状態で、アキがヴォルデモートに敵うとは思えない。

ヴォルデモートは愉悦を瞳に滾らせ、アキに言葉を叩きつけた。

「貴様は何一つ守れない」

「ぼくは……なにひとつ、まもれない……」

弾みにアキを取り落とした。アキはそのまま座り込むと、肩を落として項垂れる。

そのアキに、ヴォルデモートは杖を向けた。やがてその瞳が、更なる悦びに見開かれる。

「やめなさい、アクア、何をしている!!」

聞き慣れた声が黒衣の集団から聞こえた。焦ってヴォルデモートの一歩後ろに並びこちらを見ているのは、自身の両親、アンバー・ベルフェゴールと、エメラルド・ベルフェゴールであった。

少年の前に両手を広げて立ち塞がったアクアは、両親に微笑みを向ける。

「……あら、父様に母様。来られていたんですか、連絡くらいくださいればよかったのに」

「……そうすれば、もっと早く私たちの来襲に気付けたのに、という腹積もりか?」

「ええ」

チラリと後ろのアキを振り返ったが、アキは心ここにあらずの虚ろな眼差しで、目は開いているが何処にも焦点が合っていないのが一目で分かった。

今までアキに散々守られてきた。私だって、アキを守りたい。

足も、腕も、身体も、全身が震えていた。死への恐怖に怯え竦んでいた。

それでも、アクアは前を向く。昔、前を向かせてくれた少年のために。

「……我が君。あなた様に刃向かった不届きものは、我らの娘です。どうか、我らにこの娘を処断させてはくさいませんか」

「……いいだろう」

「有り難き幸せ……」

ヴォルデモートの瞳が、新たな見世物の存在に煌めいた。親が子を殺す様を、酷く滑稽だと思っているに違いない。

父が、杖を取り出した。ひたりとアクアを見据えるその瞳には、娘に対する慈悲も容赦も見受けられない。母も、父を止める様子はなく、ただ出来ない娘を冷やかな眼差しで見つめていた。

その姿を見て、アクアは息を吐く。

「……そう。父様も母様も、そうとしか生きられないの。私たちと一緒に生きては、くださらないの」

「出来損ないの娘に用はない」

杖がアクアに向いた。一拍のち、振りかぶられる。

死の呪文が、父の口から零れた。恐怖で思わず目を閉じ、衝撃に備え身構える。

——しかし予想していた衝撃は、訪れなかった。

「……君と、アキに助けられた命だ」

静かな声が、目の前で響く。アクアは恐る恐る、目を開けた。

セドリック・デイゴリーが、目の前に土壁を『出現』させ、立っていた。『死の呪文』の衝撃で、土壁は数拍後砕け散る。

「受けた恩は必ず返す。ハッフルパフ生として」

「姉上、下がっててください」

セドリックの隣に並ぶ小柄な少年。銀髪の、アクアとよく似た顔の少年、ユークレース・ベルフェゴールは、アクアを振り返りニツと笑った。

城からわらわらと生徒や『騎士団』の面々が溢れ出る。それぞれ強い眼差しで杖を構え、死喰い人の集団を見据えている。

進み出たのは、ネビルだった。不死鳥を肩に乗せ、組み分け帽子を手をしている。組み分け帽子を払った先、その右手にはルビー輝く銀の剣——グリフィンドールの剣が握られていた。

銀の剣が、何者よりも早く振り落とされる。切っ先は過たず、大蛇の首を跳ね飛ばした。首は宙を舞い、大蛇の身体はドウと校庭に倒れ伏す。

それをきっかけに、互いに乱戦が始まった。

「アキー！」

予想もしていなかった声に、アクアは思わず目を向けた。驚愕に目を見開く。

死んだと言われたハリー・ポッターが、確かに二本の足で立って、目の前に立っていた。

ハリーはアキの姿を目にすると、アキに歩み寄り、座り込んだアキの身体を強く抱きしめた。

虚ろに濁っていたアキの目が、徐々に光を取り戻して行く。

「……ハリー？」

「そう、僕だよ。アキ」

アキの顔が、くしゃりと歪んだ。大きな瞳から涙が溢れ、頬を伝う。右手をハリーの背に回すと、確かめるようにぎゅつと掴んだ。

「……この、気持ちだが、たとえ幣原秋に埋め込まれた偽物の想いなのだととしても……ぼくは、君が」

「言わなくても分かっているよ、アキ」

その様子を眺めていたアクアに、ユークは呟いた。

「……アキって、姉上よりもハリーのことを好きですよね」

「それは言っちゃいけない約束だよ、ユーク」

セドリックは肩を竦め、アクアを見る。なによ、と思わずむくれた。

第34話 勿忘草色の決着

「立ち上がれる、アキ?」

「……当然!」

ハリーの手を借りて、ぼくは立ち上がった。

身体は軋んで、もう魔力も枯渇し切っている。それでも心は暖かった。

「私の娘に何をする!」

ジニーを傷つけられそうになったモリーおばさんが、憤怒の表情でベラトリクスに突進した。ベラトリクスはモリーおばさんを挑発するように指を立てたが、横から割り入った闖入者に目を剥いた。

「シリウス!!」

隣でハリーが叫ぶ。その声にシリウスは振り返ると、ニカツと若々しい笑みを浮かべた。

「なんだ、その墓の下から這い出した死人を見たような面は。私がハリーを置いて逝く訳がないだろう!」

「逝きかけた君が、何を言う」

そう嘆息したのはリーマスだ。隣には頬を腫らしたピーターの姿。

三人の登場にポカンと口を開けていたハリーだったが、突つ込まざるを得なかったのだろう、「ワームテールも……って何その顔緊張感ないから止めてくれよ!」と叫ぶ。ピーターはあわあわと頬に手を当てたが、諦めたように情けない顔をした。

「もつ、文句ならシリウスとリーマスに言つてよね! とんでもない力でぶん殴られたんだから!」

「満月近かったからかな?」

リーマスが笑顔でとんでもないことを言う。脱力し、思わず笑った。

三人はそれぞれ協力すると、ベラトリクスを沈めた。ホツとするも、飛んできた呪文に身を強張らせる。

しかし呪文はどこからともなく貼られた『盾の呪文』にあえなく離散した。

「大丈夫か、おい」

「アリス！」

「俺らもいるぜ。さあてどっちがどっちでしょ？」

青のローブが一枚、赤のローブが三枚。アリスと双子と、あともう一人はリー・ジョーダンの姿だった。ぼくを庇うように立ち塞がり、油断なく杖を構える。

「アキ、本当に見分けが付かないの？」

リーが呆れたように声を発した。し、仕方ないじゃないか、実際分からないうから……と思わず頬を引き攣らせる。

顔も体型も、この二人はわざわざ似させている節があるのだ。むしろ皆よく見分けがつくもんだと問いたい。

「そーいやアキ、いやハリーか？ ブレスレットありがとな！ おかげで死に損なった！」

ほい、と放られたビニール袋を、片手で苦勞しながらもキャッチした。中を開くと、銀の細かな残骸が入っている。何だ？ とぼくは首を傾げたが、ハリーは何かを理解したようだった。

「アキ、君はここにいて」

「ど……どこに行くの」

ハリーの手首を慌てて掴んだ。ハリーは少し困った顔をして、ぼくに微笑みかける。

「最後の決着は、ぼくにしかつけられない」

するりと手首を振り解かれる。ぼくを見下ろして、ハリーは笑った。

その笑顔は何故か、幣原秋の純粹な微笑みに重なった。

「絶対、生きて戻るから！」

——そんなこと言われたらさあ。

信用せざるを得なくなるじゃないか！

「誰も手を出さないでくれ」

ハリーは大声を出した。ヴォルデモートにつかつかと歩み寄る。静まり返った中、ハリーのために誰もが道を開けた。

ハリーは滔々と語る。ニワトコの杖の所有権が、どのように移動し

たのか。自身の母親の守護の血が、ヴォルデモートにどのような作用したのか。

朝日が差し込んだ、瞬間だった。赤と緑の光線が互いにぶつかり合い、そこから黄金の炎が吹き出した。ヴォルデモートは杖を手から取り零す。

離れた杖はくるくると回りながら、ハリーの元に向かってくる。パシンと音を立て、ハリーはニワトコの杖をしっかりと手にした。

跳ね返った呪いを胸に受けたヴォルデモートは、信じられないと言った眼差しで、その場にぼったりと倒れ込むと――動かなくなつた。

わあつと一斉に、歓喜に周囲が沸き立った。

第35話 深藍色の灯火

校内はお祭り騒ぎだった。

ハリーは主役だと言うことで、双子に担ぎ上げられ何処かへと連れ去られた。誰も、ぼくを気に止めない。浮かれ切っている。

倒れたヴォルデモートを静かに見つめていると、ふわりと隣を霞が通った。ハツと息を呑む。

かつて日記に内蔵された魂の欠片——ぼくと曲がりなりにも数年を寄り添い歩いた、十五歳のトム・リドルだった。

誰も、リドルに気付いていない。もしくは気にも止めていないのか。それでも、ぼくは慌てて立ち上がると、後を追った。少し重心が傾きふらつくが、構うことはない。

リドルは、仰向けに倒れたヴォルデモートを静かな瞳で見下ろしていた。ぼくが駆け寄ると、ゆったりと視線をぼくに合わせ、淡く微笑む。

「……分霊箱の役目、知ってる？ 本体が死んでも……こうすること。僕が願った分だけ、本体の魂を延命させることが出来る。勿論、心臓の拍動は戻らないから、ほんの少しだけだけど」

そう言うと、リドルは手のひらをヴォルデモートの遺体に翳した。微かな光が降り注いだ後——静かに、ヴォルデモートは目を開けた。しかし、ただそれだけだ。身じろぎは一切しない。ただ瞳だけが、ぼくとリドルを交互に見つめている。

「……死んで尚、かつての自らの姿を見るとは、罪を思い知らされている気分だな」

ヴォルデモートが自嘲した。リドルは感情の読めない瞳で囁く。

「……一つだけ教える。どうして、直を殺した？」

ヴォルデモートはくつくつと愉快そうに喉を鳴らした。

「……直は自ら望んで死んだ。俺様の手を汚すまいと、最後まで気に掛けた愚か者だった」

「……………」

ぎゅっとリドルの目元が寄る。

ヴォルデモートはそんなリドルを見、鼻で笑うと言葉を続けた。「息子の、幣原秋を守る為に。……直が隠した本を、見つけ切れなかった……その時代の俺様であれば、記憶にあることだろう」

「……見つけた。あるよ、ここに。……直は完成させていた。あの語った夢物語を、あの、バカは……」

リドルはそこで言葉尻を震わせた。ぐっと奥歯を強く噛み締める。そうか、と、少し満足げにヴォルデモートは息を吐いた。

リドルが右手を少し持ち上げ、軽く手を開く。瞬時に、手元にナイフに現れた。刀身が朝の光に照らされ煌めく。

自身の未来に馬乗りになったリドルは、両手でナイフを握ると、はつきりとした声で言った。

「死ぬ、ヴォルデモート」

「……かつての自分に殺されるというのも、悪くはないものだな」

そう薄く笑い、ヴォルデモートは目を閉じる。

振り上げられたナイフは、吸い込まれるようにヴォルデモートの胸へと突き立てられた。



誰にも顧みられることのないヴォルデモートの遺体に触れる。現在片腕しか動かないため、少し苦心しながらも、胸の真ん中で指を組ませた。乱れた着衣を整え、せめて死者らしい格好をさせる。

倒れ伏す死喰い人にも、ぼくは同じ行為を繰り返した。

それにしても、血が足りない。少しクラクラする。

左腕は、相変わらず痛覚も無ければ、触れられた感覚も何もないし——これはちよつと、早めに聖マンゴに向かうべきだろう。切り落とす、なんて羽目になっても驚かないぞ。それくらいにゾツとする。

よろめきながらも足を進めると、アクアとユークの姿があった。自身の父と母、二人の亡骸の前で膝を付き、静かに涙を零している。

一度立ち竦み、やがて何かに突き動かされるように、彼女らの元へ歩み寄った。

「……アク、ア」

ぼくの声に、アクアは涙に濡れた顔を上げた。その顔はいつにも増して綺麗で、そして、美しかった。

「……後悔は一切していないわ。でも、少し……泣かせて、ちょうだい」

ユークは齒を食い縛り、嗚咽を殺しながら泣いている。

周囲をよく見渡せば、スリザリン生がそれぞれ、家族や親類、またはお世話になった先輩だろう、それぞれに、密やかに縋り付いては、密やかに涙を零していた。

「……もしも」

呟いた言葉を、アクアが聞き咎める。静かに首を振った。

「なんでも、ないよ」

目を伏せた。

逝った魂に、静かに祈る。

第36話 黒の選択

ヴォルデモートが命を落とし、早一月。既に風は夏の薫りを運んでいた。

僅かの空き時間に、ライフ・フェイスナーは魔法省の屋上へ出た。

フェンスに寄り掛かると、ポケットから煙草のパッケージを取り出し、一本を啜える。空になったパッケージをぐしゃりと握り潰すと、ライターで火を付けた。大きく煙を吸い込み、ゆっくりと吐き出す。

「……一体さ。どこまで、予期していたんだろうね、アキは」

法整備と、技術革新。「マグルの文化を下と見ず、魔法界が劣っていると認められるのは、ライフ、君だけだ」と言われたことを思い出す。見違えるように、駆け足で魔法省は内質を変えていった。今や淀んだ空気は跡形もない。

長年止まって錆び付いた魔法省を無理矢理にも動かしたのが、たった一人の学生であると、一体誰が信じるものか。

しかし事実は変わらない。ライフ・フェイスナーはずっと覚えている。

煙草の灰が落ち切った。

消失呪文で燃え滓を消し去ると、時間を確認して身を起こす。

平和への一步を、踏み出した。



墓に、花を手向けた。毎年彼の命日には参っていたが、今日来たのは理由がある。

『エリス・レインウオーター』の名が刻まれた墓に目を細めながら、ライ・シュレディングーは立っていた。

「ライ先輩」

声に、気配に、振り返る。

アキ・ポッターが、立っていた。

「……アキ、か」

左手は、三角巾にて吊られていた。包帯の下の腕は漆黒に染まっていることを、その理由が莫大な魔力を扱った故に神経回路がずたずたにされたためだということを、ライは知っていた。

無事な右手には、花束が握られている。

「ぼくの知る、逝ったすべての人に対して、祈っています。随分と遅れちゃいましたけど」

アキはそう言うと、静かに笑った。墓に花を手向け、右手の指先をぴんと揃えると、目を閉じる。

やがてアキは目を開けると、墓をじつと見つめた。まるで、埋まった彼がそこに実際にいるかのようにだった。

思考を読むのは悪い気がしたが、それでも流れ込むのは仕方がない。出来る限り違うことを考え、頭の中を誤魔化した。

「……平和な世界になる」

「……ええ」

アキはそこで顔を上げると、ライを見つめた。澄み切った色の瞳だった。

『でも、あなたは救われない』

「でも、あなたは救われない」

声に、流れ込む思考に、凍りついた。

流れ込む、アキの思考と一致する言葉。

研ぎ澄まされた刃のようなシンとした静けさを眼差しに灯し、アキは言葉を発する。

「あなたのご両親と妹さんは救われない。あなたもずっと囚われ続けている。何年も、何年も、何年も。重たい荷物を、降ろす方法を……いや」

そこでふと、空気が変わった。一気に思考が読めなくなる。

「……幣原秋」

「忘れてください……今の言葉は」

ざあつと吹いた風が木々を揺らし、少年の長い髪をも揺らす。

目を伏せ、幣原秋は仄暗く微笑んだ。



セブルス・スネイプが目を覚ますと、そこは聖マンゴの病室だった。恐る恐る、首筋に手を触れる。ぐるぐると巻かれた包帯の感触に、息を吐いた。

「……生き、てるのか」

その時、病室の扉が開いた。首は動かせないのも、目だけをそちらに向ける。

かつて憎んだ男の息子で、かつて愛した人の息子が、入り口で立っていた。

ハリー・ポッターは、緑の瞳を真っ直ぐにセブルスに向け、歩み寄る。

「あなたに……一言、感謝を述べたかった」

静かな声だった。こちらを射抜く緑から目を逸らすと、小さく嘆息する。

「秋が、生かしたのか」

死んでもいいと、思っていた。セブルスがそう思っていたことを、きつとアキも知っていた。

死ぬ覚悟で、全てを騙した。

——それなのに。

「本当に、ありがとうございました……」

感謝の言葉を耳にしながら、セブルスは四角く切り取られた空を見た。



アキの、聖マンゴにての『軟禁』状態が解かれ、出歩きを許可されたのは、ホグワーツ最終決戦から一月後のことだった。

そんなアキと、リーマス、ピーターと共に、シリウスはゴドリツクの谷にある、ジェームズとリリーの墓を訪れていた。

「オラもつと地に額めり込ませろ！」

「痛い痛いやめっ、ごめんって止めてよお！」

ケラケラ笑いながら、額ついたピーターの頭を上から押した。それでも、本気で言っている訳ではない。いや、八割ほどは本気であったが、二割は冗談、戯れだ。

リーマスもアキも笑っている。ああ、平和だ。そう思った。学生時代、ピーターに対してはいつもこんな感じだった、自分は。

あの頃には、決して戻れないけれど。

「なあ……全部終わったよ。君たちの息子は、凄く強かった」

墓石に向かって話しかける。ひよつとしたら、あの二人に聞こえるのではないかと思って。

「まだまだそっちにはいけないけどさ、行った暁には、待ちくたびれたとかへソ曲げたこと言わずにさ『ジジイになつて誰か分かんなかったよ』とか、ケラケラ笑いながら迎えて欲しい」

柔らかな風が、頬を撫でた。六月の夏風に目を細める。

ピーターも、額から土を払いながら神妙な顔つきで膝をついていた。

かつてこの四人と、そして墓の下の二人でいた懐かしい日々を思い出す。

あの頃には、もう戻れない。それでも、残った欠片は新たな絵を構成した。

「皆、無事だったよ……こうして生きているよ。そっちも楽しそうだけど、もう少しだけ、待っていてくれよな」

空を見上げる。

夏の透き通るような青空が、自分たちを見下ろしていた。

「そっういやさ、アキ。君の彼女見たぞー、可愛い子だなー」

アキの背中をバシッと叩く。もうっ、とアキは口を尖らせたが、すぐさま頬が緩んだ。

それにしても、アキに彼女とは。いや、以前にも耳にはしていたが、改めて見ると可愛い弟分がいつの間にか離れていったような一抹の寂しさを覚える。

「いい子捕まえたな、アキ。そうそう手放すなよっ。」

「……………」

アキのことだから『当たり前じゃない』と即答するかと思っていたが、返ってきたのは沈黙だった。仄かに目を伏せ、口元に笑みを浮かべている。

「アキ？」

胸がざわついた。アキの顔を覗き込む。

とその時、リーマスが微笑んだ。しかし目だけは、笑っていないかった。

「ねえアキ。僕と最後に交わした『約束』覚えているかい？」

「……覚えて、いるよ」

ぴくりとアキの肩が震える。何だ、この不穏な雰囲気は。

ピーターも目を瞠って、アキとリーマスを交互に見ている。

「……おい、何の話だ？」

「大丈夫……大丈夫、だから」

アキは微笑んだ。嘘が上手いアキは、どんな時でも綺麗に笑ってみせる。

普段通りの曇りのない笑顔は、しかしシリウスには何故か、泣きそうなのを堪えているかのようにも見えた。

「おい！ 何の話だよ！」

アキはダメだ、咄嗟にそう判断し、リーマスの肩を掴むと揺さぶった。

リーマスはシリウスから目を逸らすと、静かに口を開く。

「……皆無事だったと、君は言った。僕らは皆、確かに健在だ。じゃあ

……秋は？ 僕らの友人、幣原秋の未来は、一体どうなる？」

雷に打たれたような気分だった。ピーターも恐らく、そんな気持ちだろう。

凍りついた瞳で、アキを見た。アキは力なく、微笑んでいた。

「アキ・ポッターと幣原秋は違う人間だ。アキ・ポッターが生きている限り、幣原秋は人間として生きることが出来ない。アキ・ポッターが居る限り、幣原秋は人生を送れない。分かっているはずだ」

「……そんなことをアキの目の前で言う奴がいるかっ!？」

「アキは全てを理解しているつ、自分のことなんだ聞かせない訳にはいかない！」

リーマスは声を荒げた。険しい瞳でシリウスを、ピーターを、そしてアキを見据える。その瞳に、何年も変わらぬ妄執の色を感じ取り、思わず竦んだ。

「他の誰もが幣原秋を忘れたのだとしても、僕だけは覚えておかなければいけない！ あいつをこの世に繋ぎ止めるために、約束したんだ、あいつと！ 必ず戻ってくるって！」

「だからと言って……だからと言って！ アキの未来を否定するのか!？」

「僕だけは否定しなければいけない！ 僕は秋の味方だ、この子の味方じゃない！ 秋とこの子は違う人物だ、君もよく分かっているはずだろ!!」

叩きつけるように叫ばれた。胸の中心を強く押され、リーマスの肩を掴んでいた手が外れる。

よろめいた体勢を立て直すと、シリウスはアキを見た。

目を伏せ、静かに微笑むアキ。この戦争においての、影の功労者。彼のお陰で、どれだけ犠牲が少なく抑えられたことか。どれだけの想いで、アキは全てを敵に回して生きてきたのか、そう思うと、やるせなかつた。

「……それでも、アキのお陰で、大勢が救われたんだ。それを……それを」

ただたどしく、言葉を紡ぐ。リーマスは目を細めシリウスを見た。

「……俺だって！ 俺はアキに、今ここにいるアキに命を救われた！」

あそこで引き止められていなかったら、俺だって今は墓の下だ！」

「ぼ……僕だって！ この銀の手に殺されそうになったとき、アキが助けてくれたんだ」

思いも掛けず、ピーターが援護射撃をしてくれた。少々頼りない気もするが、それでもリーマスには効いたようだ。大きく息を吐くと、乱暴に頭を搔く。

「……分かった。一步譲ろう。……アキ、君が、選ぶんだ」

リーマスの瞳がアキを射抜いた。

血の気が引き切った表情で、アキはただリーマスを見返す。
「死ぬか、生きるか。簡単な二択だよ、アキ」

黒衣の天才編

ハリー・ポッターの場合

『アキ・ポッターは消えてしまう』

その知らせを、ハリー・ポッターは息を呑んで受け取った。

理解が出来なかった。意味が分からない。

どうして、アキが消えなければならぬのか。

聖マンゴの病室に、アキはいなかった。足はあるし問題なく動くのだ、どこにだって行ける。

勘で辺りを探し回り、アキの姿を見つけたのは、聖マンゴの屋上だった。

今日は重苦しい曇り空だった。

灰色の空の下、フェンスに囲まれた屋上で、アキは座り込んだままじっと膝を抱えている。俯いているため、表情は伺えなかった。

「……アキ」

ハリーの呼び掛けに、アキは顔を上げた。漆黒の瞳がハリーを向く。

「どういうこと、なの」

風が二人の少年の間を吹き抜けた。アキは薄っすらと、笑ったようだった。

「君がきつと、聞いた通りさ」

「僕は……嫌だ。アキが消えるなんて認めない」

「君が認めずとも、消えるもんは消えるよ」

いつそ冷たいとも取れる声だった。

アキは背後のフェンスを掴みながら立ち上がると、ハリーに向き直る。

「ぼくは作られた存在だ。本来この身体はぼくの物じゃない。ただ……借り暮らしをしていた、それだけ。幣原の身体を借りていただけなんだ。借りていたものを、返すときが来た。そういうことだよ」

「嫌だ……嫌だ！ どうして!?! そんなの許される訳がない！」

ハリーの叫び声にも、アキは一切動じない。漆黒の瞳は、揺らがなかった。

「そうだ、今のまま、そう、幣原秋と同居した状態のまま、生きればいい！ そうだよ、だって今まで君は、君たちは、そうして生きてきたんだろう!？」

「ぼくは幣原の人生を食い潰して生きている。もう、浪費させちゃいけないんだ」

淡々とした声だった。きつと、ずっとそう考えてきたのだろう。

アキは知っていた。自身を待ち受ける運命を。

全てを知って尚、その未来に自分は存在しないと気付いて尚、ホグワーツを守り、未来を護り抜いた。

恐ろしいまでの執念。一体どうして、そのように生きられる。

君の描く未来に、君はいないのに。

「アキは？ アキは、一体どう思っているの?？」

「……ぼくは、幣原に生きて欲しいよ。元々、あいつの人生なんだ。あいつに、返してやらないと」

真摯な瞳がハリーを射抜く。

それが嘘なのか、それとも本当に本心からの答えなのか、長年一緒にいるハリーですら伺えなかった。

アキの嘘は、全てを覆い隠す。目線も、呼吸も、他者に与える情報の全てを意図的にコントロールして、アキは演技をやり通す。それが演技なのかも、人に知らせぬまま。

アキを揺らがせたい。一番奥底の、アキの根幹となる部分をひっくり返したい。

ハリーはきつと、アキが揺らぐであろうところを知っていた。

息を吸い込むと、アキを見据えた。

「じゃあアクアは一体どうするのさ!!」

「……っ」

アキは息を呑むと、顔色を変えてしまったことに、苦い表情のまま顔を背けた。

ここだ、と踏み込む。アキをどれほど傷付けることになろうが、構

わない。

「じゃあどうしてアキアを突き放さなかった。いや、そもそもルーピン先生から『選べ』と言われて、本当に迷いが無いのなら既に選んでいるはずだ。君はそういう奴だ、重要なことこそ相談せずに一人で決めてしまう！ それなのに今現に君はここにいる！ 迷っているんだろ、本当は！」

瞬間、アキが脱兎のように駆け出した。しかしハリーも長年クイデイツチで培った体力がある、負けはしない。追いかける。

屋上を飛び出し、階段を駆け下りる小さな背中。しかし――

一瞬アキはハリーをチラリと振り返ると、右手一本で器用に手摺を掴み、空中に身を躍らせた。そのまま階下で着地音と足音。

「そんなに――」

そんなに突かれたくないことだったのか。

追いかけても意味のないことは、分かり切っていた。そこまで拒絶の意を示すのなら、もう何を言っても聞く耳を持たない。

アキがそういう奴だということを、ハリーは多分、誰よりも知っていた。

「……アキ」

息を吐いて、足を止めた。

シリウス・ブラックの場合

「ハリーが嘆いてたぞ、アキと話が出来ないって」

シリウスの言葉に、アキは小さく肩を竦めた。

アキ・ポッターと病室で二人きりになれたのは、シリウスにとっては酷く僥倖のようにも思えた。アキは凄く暇そうな顔で、魔法で本を浮かせパラパラペラリとページをめくっていたのだ。利き腕が使えなくとも、アキを見る限りそう不便はないようだった——もつとも、そのように振る舞っているだけかもしれないが。

「おや、ブラック家のご当主様。お仕事はよろしいので?」

「君、俺じゃなかったら潰れるレベルの仕事ガンガン任せてくるよな」
「現に君は潰れてないからいいじゃない、他人の力量は見極めて割り振っているつもりだよ。ブラック家のかつての人脈が今は欲しいんだ。英国魔法界の裏の支配者であった頃のね」

「お陰様で、被った埃を叩く作業が死ぬほど大変だよ」

アキは目を細めるとふふつと笑った。

「それなのに、わざわざぼくに会いに来てくれたんだ、嬉しいねえ。最後の挨拶でもしに来たの? それとも懐かしの友人に対し感動の再会でもしに来た? 代わろうか、ぼく邪魔でしょ」

「うんにや、今日は君に用があつて来た」

アキは真意を探るような目つきでシリウスを見る。

「よく、自分のいない未来をそうまで鮮やかに描けるもんだな、つて思つてよ」

「ぼくらしいと言つて欲しいね」

「不自然なくらいにな。秋の思考回路じゃああり得ないことだ」

すつと、アキは表情から笑みを消した。右手で頬杖をつくつと、視線だけで続きを促す。

「幣原秋は良くも悪くも自己中心的な男だよ。まあもつとも誰もがそうだが。自分の復讐のために闇祓いになり、自分が逃げるためにアキ・ポッターみを作った。あいつの行動原理は、ちゃんと自分の利益が透けて見える。それが普通の人間だ。——なのに、君はそうじゃな

い。どうしてそこまで自己犠牲に振る舞える。どうしてそこまで、未来に献身的になれる」

自分がいない未来に、どうして。

「いっそのこと、君は消える気がないんじゃないかとも思うよ。誰もが君に、アキ・ポッターに消えて欲しくないと思っっている。ハリリーなんていい例だ、必死過ぎて涙が出そうだよ。そのところ、結局どうなんだ？」

しばらくシリウスの灰色の瞳をじつと見ていたアキだったが、やがて静かに口を開いた。

「ぼくが消えていない理由はね、幣原秋のせいだ。あいつは多分、ぼくを殺す気はない。むしろぼくに生きて欲しいと願っている。幣原にとつては今の生活が心地よいんだ。こうして表に出て来ず、引きこもっているこの生活が。ぼくは……それが腹立たしい」

アキは眉を寄せた。シリウスにとつては、思いも寄らない言葉だった。

アキは続ける。

「ぼくはあいつに生きて欲しい。元々あいつの人生だ。折角、神様に認められて生まれてきたんだ、偽物のぼくとは違う、本物なんだ。本物ならちゃんと人生生き切つて欲しい。それが、心の底からのぼくの願い。今の状態を簡単に述べると、ぼくの願いと幣原の願いが完全に拮抗し合っていて、おいそれと手出しが出来ない。だから——」

そこでアキは言葉を切ると「……いや。なんでもない」と呟いた。「なんでもない、な雰囲気じゃなかっただろ。なんだよ、続きが気になるじゃないか」

「本当に気にしないで。言いかけた言葉があるのは本当だけど、君に對して言うべきものじゃなかったことに思い至っただけだから。

……ちよつと、ね」

そこでアキは、仄暗い眼差しで微笑んだ。



「……シリウス」

アキの病室を後にし、数歩歩いた時だった。

名を呼ばれ振り返ると、ハリー・ポッターがそこに立っていた。

「おお、ハリー。どうした、アキは今部屋にいるぞ」

アキと話でもしに来たか、そう思つて親指で病室の扉を指し示すも、ハリーは首を振った。

「シリウスと話がしたいんだ……今、いいかな」

言葉を呑み込んだ。

脳裏に浮かんだ「仕事」の二文字を叩き潰すと踏みつける。

「おう、いいぜ」



ここでいいか、と聖マンゴ備え付けの喫茶店に足を踏み入れる。運ばれてきたコーヒーを一口飲んで顔を顰めた。文句言いながらも献身的な実家の屋敷しもべに思いを馳せる。

かつて自身を売ったクリーチャーに思うことはあれど、あれからシリウスも色々学んだのだ。ぽつりぽつりと、弟のことでも話してやろうかと考えている。

「シリウスは……シリウスは、さ。幣原秋に戻ってきて欲しいと、そう思つてる？」

手元のコーヒーに視線を落としながら、ハリーはそう呟いた。

少し迷うも、ここで嘘を吐いても意味がないだろう。

「……その気持ちは、否定出来ないよ。かつての友人と共にまた生きていきたい、その気持ちは否定出来ない」

そっか、とハリーは呟くと、身を縮めた。そうだよな、とポツリと漏らす。

自身が長年共に生きたアキを望むように、シリウスやリーマスだつて長年の友人であつた幣原秋を望むのは、それもそうだと理解したらしい。

「でも……アキにも生きて欲しい」

シリウスの声に、驚いたようにハリーは顔を上げた。緑の視線を受け止め、投げ返す。

「私の命を救ったのは、アキだ。幣原秋じゃない。その感謝の気持ちは、決して消えないし……どちらかと言えば私は、アキに生きて欲しいよ。偽物だと卑下するけれど、あいつの成し遂げたことはまぎれもない本物だ。アキこそ、これから紡がれる未来を生きるに相応しい」

まあ、とそこで一口コーヒーを呷ると、シリウスは呟いた。

「リーマスは、そうは思っていないだろうな」

アクアマリン・ベルフェゴールの場合

アクアマリン・ベルフェゴールにとっては当然のことながら、その知らせは到底受け入れられるものではなかった。

アキが素直に病室にいることは稀だ。大抵はどこかを彷徨っていたり、気付くと病院を抜け出していることもザラにある。

今日は、比較的早く見つけることが出来た。中庭で子供達とボールを投げ合い遊んでいたのだ。

左手を吊ったまま、右手でボールをキャッチしては投げ、弾けた笑顔が浮かべている。

右が利き腕ではないため時折ミスするのが、子供達にとっては楽しくって仕方がないらしい。アキがボールを取り落とすたびに、邪気のない笑い声が上がった。

中庭に降り、日陰を選んでベンチに腰掛ける。ぼんやりとアキを見つめた。

今、ああして子供達に囲まれ遊んでいる少年が、つい先日『アキ・ポッターは消えてしまう』と能面のような無表情で言い放った彼と同一人物なのだと、一体誰が思うだろう。

あの無邪気に笑う少年が、先の戦争の静かな功労者であると、一体誰が信じるだろう。

やがて休み時間が終わったのか、バラバラと子供達はアキに手を振って病院の中に走って行った。それに手を振り返したところで、アキがアクアに気がついた。僅かに目を見開いて、アキはこちらに近付いてくる。

「アクア」

「アキ……今から少し、話せる？」

アキは僅かに微笑んで、右手の甲で額の汗を拭いた。

「はいよ」

覚悟を決めた、瞳だった。



日陰のベンチに、二人並んで腰掛ける。

アキも、何と口にしていいのか迷っている風だった。共にいる沈黙がこんなに気まずく感じたのは、初めてだった。

「……あの、ね」

自分から話したいと言ったのだ、自分が口火を切るべきだろう。

口を開いたアクアに、アキは僅かに身じろぎをした。

「何？」

「えつと……その」

沈黙は崩れたが、しかしアクアの頭はまだ纏まってはいなかった。

それでも、時間を掛けても纏まることはないのだろう。そう思っ
て、強引に言葉を押し出した。

「……嘘、そうなんでしょう？　いつもみたいに、何もかも嘘なん
でしょう？」

「……何が？」

「あなたが……アキが、消えてしまっつて」

「……残念ながら、本当なんだよ、アクア」

アクアはアキを見た。

視線に気付いていない訳でもないだろうに、アキは頑としてアクア
を見なかった。

「じゃあ……なんで」

止まりそうな呼吸を、意図して整える。激しく叩きつけたい気持ち
を制御して、静かに言った。

「どうして私を拒絶しなかったの。あなたは賢い人よ。なのに一体、
どうして私を引き離さなかったの。私は……」

ねえ、アキ、見てよ。

こつちをキチンと見なさいよ。

「私はあなたの『心残り』じゃないの？」

アキの右手に力が籠ったのを見て取った。歯を食い縛ると、アキは
目を伏せ、そして静かにアクアに向き直る。

漆黒の瞳と向かい合い、つい先ほどまであれほどこちらを向いて欲

しいと願ったのにも関わらず、居心地の悪さを感じた。

「本当は、もっと早くに言わないといけなかった。切り出せなかったのは、ぼくが弱かったからだ。……君を手放す勇気が、持てなかったから」

アキは、淡々と言葉を紡いだ。

『心残り』を、『未練』を、引き剥がしに掛かる。

「別れよう、アクア」

——覚悟は既に、出来ていた。

それでも一瞬、頭は真っ白になった。

「ぼくは君を幸せには出来ない。もっと早く言えって……はは、本当その通りだよ」

自嘲して、アキは目を逸らすと乱暴な手つきで頭を搔いた。

「本当、もっと、早く……」

震える声で呟くと、目を伏せる。次にアクアを見たときには、静かな微笑みが浮かんでいた。

全ての悲しみも苦しみも、心の奥底に押し込めてしまうような微笑みだった。

「君に手を出さなくなつて、本当に……良かった。君の人生を浪費させてしまつて、本当にごめんね。ぼくじゃない人の隣で、君は幸せでいて。それが……ぼくの、一番の願いだよ」

ピーター・ペティグリュウの場合

ホグワーツ最終決戦は終わった。闇の帝王は死んだ。それなのに、誰も荒れている。

ピーター・ペティグリュウは、そう思った。

グリモールド・プレイスで、ピーターはシリウスの手伝い役としてくるくと忙しい日々を過ごしていた。シリウスはしかし、ピーターから見たら呆れるほどの仕事量を平然とこなしてしまふ。

処理能力は、学生時代の要領の良さからしたら納得だった。手際が悪いと自負しているピーターとしては、羨ましい限りだ。

「……アキ、ねえ」

『アキ・ポッターは消えてしまふ』、そう言い放った少年を思い起こす。正直なところ、アキに対しての思い入れはそんなにない。ピーターにとつては幣原秋こそが秋であったし、あの少年が消えようが、秋は残るのならば、何も変わらないのではないか。

そうとも思うのは、自分が冷たいからなのか。ピーターにはもう、よく分からない。

「……でも、僕にああ言ったのは、アキなんだよなあ」

ピーターを生かしたのもアキだ。数年前、秋に杖を向けられ笑顔で殺されそうになったことを思い出し、身が震えた。

アキも大概激しい奴だが、しかし杖を向けられたことはない。しかも左腕に殺されそうになっていた自分を、見殺すでもなく助けてくれた。アキもつとも、あの少年は、殺されかけていたのが自分でなかったところで助けたのだろうか。

そう考えると、幣原秋よりもアキの方が取っつきやすいか。

あれ以来、幣原秋とは一度も会っていない。会うことが怖かった。シリウスとリーマスは、数発ぶん殴ってそれで手打ちとしてくれた。しかし秋はピーターに対し何もしていない。それはそれで、恐ろしかった。

きつと幣原秋は、ピーター・ペティグリュウを許してはいないのだ。死ぬ、とまで思われていないだけで、友人とは思っていないだろう。

う。

それは仕方がない、当然のことだ。それだけのことを、自分はやってしまった。ジェームズとリリーを売り、『不死鳥の騎士団』の情報を流し、シリウスに全ての罪を着せてアズカバンに追いやった。改めてこう数えると、自身の罪の多さに愕然とする。

秋とアキのカラクリについては、リーマスが説明してくれた。よくもまあ、そんなことをやろうと思いついたものだ。感心するというよりもまず呆れた。

そして「そこまでして秋は生きていたくなかったのか」ということに気付き、心が痛んだ。

秋がこの世に見切りをつけた理由は、ピーターが作り出したも同罪だったから。

果たして、秋はまだこの世界で生きていたいと望むのだろうか。

平和になった世の中で、裏切り者の自分がいる、この世で。

「……秋。君の気持ちは、どうなんだい？」

静かに呟いた、瞬間だった。

部屋の扉が開け放たれる。思わずパツと振り返り、見た人物に、動きを止めた。

「……秋は、どこだ」

重苦しい雰囲気。真ん中から分けられた粘つく黒髪に、きつちり一番上まで留められた黒のローブ。不機嫌そうに眉間には深々と皺が刻まれている。

セブルス・スネイプが、立っていた。

セブルス・スネイプの場合

幣原秋は——アキ・ポッターは、実際のところ自身が退院した聖マングで未だ入院生活を送っていた。

そのことを誰も教えてくれなかったことについて、誰かの悪意が働いているように感じるのは、セブルスの気のせいであろうか、否、断じて気のせいではない。

舌打ちしながら聖マングに舞い戻り、病室を訪問すれば、そこに探し人の姿はなく、ハリー・ポッターがパイプ椅子に座って本を読んでいた。

ハリー・ポッターが苦笑いしながら言った言葉によると、アキは現在聖マングすら抜け出して学校復興に手を貸しに行っているらしい。心の底から忌々しい。

ともあれ、言われた通りにホグワーツを訪問する。

そこには、ホグワーツ最終決戦の爪痕はもうほとんど見当たらない綺麗な城が、変わりなく建っていた。あと二月で、新しい一年生が入学してくる。その準備を整え終えたようにも見えた。

ホグワーツですら入れ違いになってはたまるものか。きつと校長室にいるだろう、と予想を立てる。やつとそこで、当たりを引いた。夕焼け空に染まる校長室で、アルバス・ダンブルドアの肖像画と歓談している一人の少年。長い黒髪を一つに括っついて、左腕を吊っている。

少年の左腕が使い物にならなくなった原因は、セブルスを救おうとしたからだということは聞いていた。杖と片腕一本を犠牲にして、この少年はセブルスを死の淵から引っ張り出した。

「おや、教授。久しぶりです」

扉の開閉音に、少年、アキ・ポッターは振り返ると、無邪気に微笑んだ。



「お元気そうで、何より」

勝手知ったると言うようにセブルスの前に紅茶を出すと、アキも正面の肘掛け椅子に腰掛け、紅茶を啜った。少し不器用に見えるのは、利き腕が使えないせいだろう。ティースプーンを使う手が覚束なく見えた。

「……その、腕。大丈夫なのか？」

ああ、とアキはちらりと左腕に目を落とすと、軽く肩を竦めた。

「もう動かないって言われちゃった。ああ、気に病まないですよ。ぼくが……ってより、幣原か。あいつが勝手にやったことだ。こうなるのは予想してはいなかったけど、それでも使えなくなるかなくらいは思ってたよ。杖が砕けた時点で、嫌な予感はしてたんだ。君の命を、たったの片腕一本で助けられたんだ。ぼくは後悔してないよ。だから君も、悔やまないで。悔やむくらいなら、ぼくがあげた命だ、必死に生きてくれ」

そう言って、柔らかく微笑む。

セブルスは「そうか……感謝する」と息を吐くと、カップをソーサーの上に戻した。

「消えるというのは、本当なのか」

セブルスの言葉に、アキは鋭い光を瞳に宿す。

ああ、と、微笑みまでも浮かべて頷いた。

「ずっと借りていた身体だからね。いい加減に返す時が来た」

「本当に……そう、思っているのか」

「それは一体どういう意味かな？」

「貴様がこの平和に貢献したんだ。享受したいとは願わないのか？」

「その平和は幣原が受け取る。それでいい」

漆黒の瞳は揺らがない。

思わず、言葉を漏らした。

「……理解出来ない」

「して欲しいと思ってる」

「本心を言え、アキ・ポッター」

「どうして本心だと思ってくれない」

はつきりとアキは不機嫌を顔に出した。

信じられないからだ、とセブルスは言う。

「貴様が消えて、幣原秋が残る。世界は平和になった、さあだから幣原秋よこれから好きに生きろ——秋はそんな戯言には頷くまい。……幣原秋を出せ、アキ・ポッター」

「……後悔しますよ、きつと」

そんな言葉を残すと、アキは目を閉じた。

切り替わりは、本当に一瞬だった。

目を開くその仕草で、セブルスには目の前の少年が幣原秋であると理解した。

「——やあ、セブルス」

元気そうでなにより、と、幣原秋はアキと全く同じ言葉を述べた。

顔形は一切同じ。視線も、表情も、そつくりだ。それでもこの二人は『違う』のだと、一心に感じさせる佇まいだった。

「アキに無茶を言ったようじゃない。心の底から残念だと述べよう。ぼくが保証してあげようか、アキの言葉は本心だ。本心からあいつは、ぼくに生きて欲しいと願っている」

「……嘘だ」

「嘘じゃない。アキはあの瞬間から幣原秋のために何もかも捧げると決めた。ぼくのために生きると決意した。決意した人間は強いぞ。アキは、強いだろう」

言葉を失うセブルスを、秋は横目で見つめた。

「……じゃあどうして、あそこまでこの先の世の中を献身的に整備した。どうして、私の命も、シリウス・ブラックの命だって、学校中の人間の命だって守り抜いた。どうして——」

「むしろどうして分からないのか、ぼくには不思議でならないよ」

冷えた声音だった。

冷め切った眼差しでアキはセブルスを見据える。

「そんなの決まっているだろう。『目の前で人が死ぬのを見たくない』『大切な人には死んで欲しくない』、ただそれだけだ。自分の未来なんて二の次三の次、いや考えもしていない。法整備も改革も、全て自分

がそれに苛ついたからさ。未来のためなんてこれっぽっちも考えちやいないよ。『間違っていると思つたから、手を入れた』んだ。そこに崇高な理由も、輝かしい未来への夢想も、何一つ入っちゃいないよ』
思わず、絶句した。構わず秋は言葉を続ける。

「アキは自分の運命を知っていたよ。正直なところを言うと、ぼくは永遠アキの中で眠っていたいよ。もしくは消えたいよ。アキに人生譲り渡した方がいいって、思っていない訳がないだろう。ぼくがこの先人生返してもらったところで、死んだように生きるだけだ。それならさ、アキに投げ渡した方が、ずっといい未来を歩める……そう、思っているのに」

そこで秋は舌打ちをした。珍しいほど粗雑な振る舞いだつた。

「リーマスやシリウスやピーターと、そしてセブルス、君と生きていけと、あいつは言うんだ。もう君の人生は食い潰せないとね、言うんだよ。初めはさ……こんなことになるなんて思つてもいかなかった。アキは幣原秋の記憶を持っている。ぼくの身体で、ぼくの記憶を持つていたらさあ、それつてもうぼくだよねって……そう、思い込んでいた。でも違つたんだ。確かにアキは、ぼくの身体とぼくの記憶を持つている。それでもアキはぼくじゃないんだよ、だつてアキは、ぼくが持たないアキ・ポッターの記憶を持っているんだ。杜撰だつた迂闊だつたよ、ぼくのミスだ。人格を統合することも考えたけど、アキはそれでも嫌がった。統合したところでアキ・ポッターが強く出て、今と大して変わりが無いというのがあいつの言だ。認めざるを得なかった……その通りだと思つた。

アキは幣原秋が幣原秋のままに生きて欲しいと望んでいるんだ。アキを作り出す以前の、ぼくのままに。自分の足で立って自分の目で見て自分の考えで喋って欲しいんだ。そこまで言われちゃあもうどうしようもないよね、中庸は選べない。かと言って……ああー！」
そこで、秋は何か思いついたようだ。

と思うと、いきなり虚ろに笑い出した。空虚な笑い声に、思わず首の毛が逆立つ。

「ああ、ああ、そういうことか、アキ……心の底から、意地が悪いな、

あいつも……ぼうつとしていたよ、すぐさま君の意図に気付けなくつてごめんね、アキ。そうだね、いい考えだ……っふふ、あはは……そう。セブルスに、教授に、決めてもらおう」

クスクスと笑いながら、秋はじつとセブルスを見据えた。

右手でセブルスを指さすと、愉悦を漆黒の双眸にたゆたわせ、狂気が滲む声で宣言する。

「幣原秋が生きるか、アキ・ポッターが生きるか。そう色々と言うのなら、折角だから君が選んでよ。ねえ、それが一番の上策じゃない？」

……期待してるよ、セブルス・スネイプ」

楽しい口調だった。

こちらにも狂気に呑み込んでしまいそうな笑い声を聴きながら、セブルスは思う。

ああ、僕は秋に、赦されてはいなかったのだ、と。

ライ・シュレディンガーの場合

アキ・ポッターの居場所であれば、ライ・シュレディンガーは大体理解出来る。

普段は、自分の数メートル四方ほどにいる人物の思考しか読めないが、読もうと思えば建物まるまる一つ程度は、ライにとつては余裕だった。

常人では気が狂うほどの情報量と内容。ライが狂っていないのは、単にライが常人離れた精神を持っているからに過ぎない。

だからこそ、ヴォルデモートはたった15の少年に、未だ引き千切れぬ鎖をつけたのだ。

「……お前は偶に、凄いところにいたりするな」

どうして入院患者を、地下のリネン室なんかで見つけなければならぬのか。

ため息を吐いたライに、アキは驚いた様子で振り返った。叱られる、と思ったようだ。

叱る気はなかったが、そう思っているのなら応えてやろう。軽く頭を叩いてやる。

「かくれんぼ、か。アリシアとエルにもきつく言ってやらないとだな」「あの二人は怒らないでやってくれませんか。病院は、子供にとっては退屈なんだって。あ、そうだ。長期入院してる子を集めて、勉強会なんてどうだろう。頭いい子、知識欲旺盛な子が多いから、凄くスルスル飲み込むだろうな……魔力の制御もそこで学ばせれば、魔法疾患の子にも一石二鳥だろうし。となると、それなりの知識持った教師が数名と、場所と、時間が必要か……」

ぶつぶつ新たな案を練り始めた。案外面白い提案なので、そのまま練らせても良かったが、生憎とこちらも暇じゃない。

「いいか」と口を開くと、アキはハツとした表情で「ごめんなさい、用があったんですよ。どうしましたか？」と首を傾げた。

「お前の左腕の話だ。今はただの動かぬ無用の長物だろう」

「はあ、まあ。本当魔法使いで良かったって心の底から思いますよ。」

なのでマグルほど不便はないです」

「その腕、切り落としちゃダメか？」

アキは目を細め、探るような視線をライに送った。

流れ込む思考に、やっと言葉足らずだったことに気がつく。

「邪魔なので切り落とす自体には構いませんが……」

「ああ、すまない。違うんだ、義手の話からすべきだったな」

「どうも己は本当に話の順序が下手くそだ。いい加減改善されてもよくないか、とも思うが、きつとこちらの努力が足りないのだろう。」

『他人の考えていることが分かる』という能力に頼り切りだからか。

アキはその言葉に、納得の表情をした。

「ああ……そういうことですね。マッド・アイの義足みたいなものか」

「そう。魔法で動かすから、慣れれば元の腕くらいに器用に動くだろう」

「いいですよ……と、即答したいところですが。もう少し待つてはくれませんか」

「どうも珍しいことを言う。「構わないが」と目を瞬かせた。」

「資料だけください。あ、別にライ先輩を信頼してないとかじゃありませんよ、ちよつと……ロクでもないことを考えているだけです」

ニツとアキは笑うと、ライを見る。

さつぱり訳が分からずにアキを見返すと、アキは「あ、やつぱり考えてないことは分からないんですね」と若干得意げに言った。

「当たり前だろう。『開心術』とは性質が違うんだから」

「ああ、なるほど、言われてみれば。え、じゃあライ先輩に『閉心術』つて効くんですか？」

「……かつてのエリスも同じことを聞いてきた。レイブンクロー生は変わらないな」

「え、だって未知の能力ですよ？ 限界を知りたいって思うの、当然じゃないですかね？ ぼくだって魔力のスカウターみたいなものがあれば全力どのくらいかって既に測ってますよ！」

研究者として、その気持ちは分からなくもないが、と肩を竦めた。「お前は闇祓いよりも教育とか研究に向いてるな」

ぽつりと呟く。

その言葉にアキは目を丸くした後「そうですか？」とにっこり笑った。

アリス・フェイスナーの場合

「毎回さあ、お前探すの面倒なんだけど」

聖マンガ図書館の片隅で、本を浮かせて読書している少年、アキ・ポッターに対し、アリス・フェイスナーはそう言った。

靴を脱いで遊ぶ子供用のちよつとしたスペースに、大の字に寝転がっては、両手を使わずに本を読んでいる。まあ周囲に誰も人がいないから、寝転がっていても差し支えはないか。

アキは本を脇に移動させると、アリスを見た。黒の瞳を細めたまま、にっと笑う。

「だってさあ、妙なところに行かないと一人になれないんだ。現にこうしていても、人が来る」

「お前は人付き合いが好きだと思っていたんだがな、俺は」

「嫌いじゃないよ。でも、一人も嫌いじゃない。それに、どうせぼくに用がある人は、ぼくがどこにいたところまでやって来るんだ。君もその口でしょ、アリス。やれやれ、人気者は辛いねえ」

「お嬢サマを泣かせたな」

アリスの言葉に、アキは軽口を叩くのを止めた。

しばらく黙ってから「……やっぱりアクア、泣いちゃったか」とぼつりと呟く。

「ぼくの前では、涙は見せなかった」

「おおそうか。俺んトコ来てずつと泣いてたから、もしかしちやあお前より俺の方が信頼されてんのかもな」

アリスの軽口に、アキは乗らなかった。ただジッとアリスを見つめている。

調子狂うな、とアリスは舌打ちをした。

「……ねえ、アリス」

「断る」

何を言い出すのかは読めていた。アキは、まだ何も言わずに断られたことについて、僅かに不満そうな顔をした。

「親友の彼女寝取る趣味ねーよ」

「……君から初めて『親友』なんて言われた気がする」

「ん？ 俺今そんな単語吐いてねーぞ、聞き間違いじゃねえの」

「あつそ、じゃあそういうことにしておいてあげる」

くすくすとアキは笑ったが、すぐに止んだ。

「……もう彼女じゃない。ぼくとあの子は他人だよ。あの子も、理解してくれただはずだ。……そういう頭のいい子だって、ぼくは知っている。何年、好きで見えてきたって思ってる」

アキは右手で顔を覆った。

アリスは身を屈めると、その手首を掴み引つ張り起こす。

「……なあ、アキ」

声に、アキは顔を上げた。

「お前さ、本当は消えたくなんてないんだろ？」

アキはうんざりしたような表情をした。きつと誰もに、同じようなことを聞かれ、その都度答えてきたのだろう。

アリス、君も同じことを聞くのか。君はそんな凡庸とは思っていた見込み違いだったようだ。失望を目に乗せながらも、アキは口を開く。

「そんなことないよ。ぼくは消えるべきだ。ぼくは幣原に生きて欲しいって願ってる、心の底から」

「消えるべきだとしても、消えたくないと考えている」

アキは苛立ちを隠そうともせず、眉を寄せてアリスを見た。

「勝手に人の思考を独断で結論付けないでくれないか。そういうところ、本当迷惑。腹が立つ」

「おー、そつか。イラつかせたんなら悪いな。だがよ、聞くとところによれば？ 幣原の方は、お前に生きて欲しいと願っているらしいじゃねえか」

はっ、とアキは鼻で笑った。

「あんな臆病者の言葉に聞く価値があるとでも？ 自分が世界と対面することを恐れる弱虫さ、幣原なんて。……元々あいつの人生だ、あいつに返して何が悪い！ あいつを待ってた人がいるんだよ、一心に、十五年も。十五年だ、一人の人間に対してさ、あんまりだよ……」

もう、あいつは逃さない。楽な方に行かせはしない。辛くつても苦しくつても目を開けて前を見させる。ぼくなんていない方が正しいんだ。造られた、偽物のぼくなんて」

「……なるほどな。十五年か、そら長いわ。お前のそれは、本心なんだろうよ」

「……信じてくれて、嬉しいよ。何もかも疑ってかかる愚か者が、この世には多過ぎる」

宙に浮かせていた本を手元に呼び寄せると、アキは立ち上がった。背を向ける。

その後ろ姿に、声を掛けた。

「本当に貰っていいのなら、俺がお嬢さま貰うぜ。恋人と別れた直後の女は落としやすいからな。それに何も手エ出してねえんだって？ ラツキイ、ファーストキスも処女も頂いてく。据え膳食わぬは男の恥だしなあ、お前も下手な男よりは俺の方が安心だろ？ 安心しろよ、一生可愛がってやるから。ずーっと手元に置いておいてやるよ。性格はともかく顔は極上だからな、屋敷の奥の奥に閉じ込めて、可愛らしい服着せて、永遠人形のように扱ってやる。あの真つ白な純粹さを汚すのは俺だけでいい、外界に汚させやしねえよ。気持ちいいだろうなあ、あのお嬢様然とした無表情がさ、俺に組み敷かれて歪むさま見んの。無邪気な信頼踏み付けるのは、さぞや快感だろうなあ。それだけですげえ優越感に浸れるぜ。オマケに……」

至近距離で本を投げられた。避けられたが、敢えて食らった。

容赦なく、迷いすらなく顔面を狙ってきたな、と、痛む眉下に手を触れ思う。

怒りに染まった目でアキはアリスに歩み寄ると、足を上げ思いつきりアリスの腹を蹴った。そのまま片腕で胸倉を掴むと、引き倒す。アリスのシャツを掴む右手は、戦慄き震えていた。

「ふざけるなよ……」

低い声でそう言うと、アキはアリスを睨みつける。その顔にせせら笑った。

「なんだ、元はお前が出そうとした提案だろうが。呑んでやるって

言っただよ。お嬢サマのことなんざ別に好きでもなんでもねえけど、あの顔はそそられるって話だ。胸はねえけどな、あいつ。そこは残念だけど、まあ抱けるだろ」

「この……っ」

「どうしてキレてんだ？ お前がいなくなった世界なんざどうだっていいだろ、偽物くんよお。どうでもいいって思ってたから、好きな子遺して逝けんだろ。お前いなくなって悲しむ奴ら放って逝くんだろ！」

アキの右手首を掴んだ。

「消えたくねえんだろ、ならそう言えよ、嫌だって叫べよ！ 変に理屈で塗り固めんなよっ、一人で何でもかんでも決めてんじゃねえぞ、本心聞かせる大バカ野郎が!!」

「……っ、そんなこと言えるわけないだろ！」

売り言葉に、買い言葉だったのだろう。

脳で言葉を吟味せぬまま、アキは声帯を震わせた。

「消えたくないなんて……っ、今更そんなこと言える訳ないだろ!!」

絶対に言うものかつ、口が裂けても生きたいなんて言うものかつツ

!!」

「……本当、バカだよな、お前」

その言葉こそ、雄弁なのに。

リーマス・ルーピンの場合

「……どうしてあんなこと言ったんだよ、リーマス」

リーマスは顔を伏せたまま、シリウスの声を聞いていた。

ニンファドローラとの新居でずっと引きこもり続けるリーマスの元に、シリウスがピーターを連れて訪れたのが数十分前。それからずっと、一言も言葉を発しないまま、リーマスは項垂れ続けている。

「なあ、リーマス」

いい加減痺れを切らしでもいい頃だろうに。シリウスはめげずに話しかけ続ける。

学生時代ならば「もういい！」と癩癩を起こして、きつと席を立っていた。気が長くなったことが、果たしていいことなのか悪いことなのか、今のリーマスには判別がつかなかった。

「ハリーは毎日、アキに生きて欲しいと懇願している。共に生きる理由を作ろうと必死なんだ。これからの平和な未来を、共に生きていきたいんだ。……なあ、どうして二択を突きつけたよ。死ぬか、生きるか、なんて。今のままが多分、一番幸せだったのに」

「……現状維持は、思考停止と同じだよ、シリウス」

久方ぶりに口を開いたリーマスに、シリウスは一瞬目を瞬かせたが、そのまま静かに続きを促した。

「じゃあ聞くけどさ、本当にいつまでもアキ・ポッターと幣原秋が、あのままでいいだなんて、本当にそう思ってる？ いつまでもいつまでも、必要に請われて人格を交代させる、なんてそんな所業を繰り返す気？ 一体いつまで？ アキが所帯を持ってても？ 子供が出来ても？」

「それは……」

シリウスは言葉に詰まった。リーマスは更に畳み掛ける。

「きつと気付いていないだろうから、教えてあげるよ。幣原秋とアキ・ポッター、この二人の人格交代は、昔よりも杜撰になっている。ポロが出てきた、と言つてもいい。元々自然発生の多重人格、解離性同一性障害じゃないからね、人為的に真似た、似せたものだ。元々期間限

定のものなんだ、たとえそれが天才の所業であったとしたって、一生は続かない。

昔はもつと境が明確だった。片方が意識を失って、しばらくしてもう片方が出てくる。そういう仕組みになっていた。今は大分危ういよ。目を閉じて数瞬で交代出来るし、多分……昔は幣原秋として話した言葉を、アキは認識出来なかったけれど、今はきつと認識出来ている。今まで『幣原秋が身体の絶対的な支配者』だったのが崩れ始めているんだ。よくない兆候だと思うよ。

このまま放置したところで、そのうち数年で、力を失った幣原秋の人格は、きつと魂の藻屑になってアキ・ポッターに統合されることになるだろう。そのことはきつと、アキが一番よく理解している。きつとアキは全てを隠し通すだろうね。僕らが望めば、幣原秋として振舞うだろう。演技かそうじゃないかなんて、僕らに見分けられる筈もない。そんなの、僕は耐えられない。幣原秋じゃないのに、秋として振舞うのを見るのも、それに自分が永遠騙され続けることにも、耐えられやしない」

シリウスは死角から殴られたかのような表情のまま、リーマスの言葉を聞いていた。

リーマスは続ける。

「アキ・ポッターだって嫌なんだよ、それは。望むことじゃないんだ。幣原秋がそのように、なあなあうちに消えるのを一番恐れているのは、アキ・ポッターだ。今のこの状況を仕立てたのは僕だけれど、今更アキは止める気もないだろう。どちらかを、必ず選ぶ。その時はきつと、そう遠くはないはずだ」

「……今は執行猶予期間だと、そう言いたいのか」

シリウスはリーマスを睨んだ。その視線を甘んじて受け止める。

「だから、言っただろう。僕は幣原秋の味方であって、アキ・ポッターの味方ではない。立ち位置ははっきりさせておかないと。さて、君たちはどちらを取る？ 命を救ってくれたアキ・ポッター？ それとも長年の友人であった幣原秋？」

「……お前、よくもそんなことが言えるな。アキが……あいつが可哀

想だと思わないのかよ！」

シリウスは声を荒げた。思わずこちらも、ボリユームが上がる。「思わない訳が、ないだろう!!」

ハツとしたようにシリウスの瞳が見開かれる。

ああ、もう限界だ。考えていたことが、全て喉を伝って零れ落ちて行く。

「だって、僕だけが幣原秋を認めてあげないと、秋は一体誰から認めてもらえばいいのさ！ 今にも死にそうな目で、死にたいと願う瞳で僕を見る秋に——君たちがいなくなつた世界で、僕らだけしかない世界で——死なないでと声を掛けることの、何がいけない！」

拳を強く握り込んだ。

「僕は秋から死ぬ理由を奪いたかつた、絶対に死なせたくなかつた！」

だから絶対に戻つて来てねと約束したんだ、秋は約束を破らない男だ、きつと約束に縛られてくれる……縛られて、生きてくれるとそう信じて！ アキ・ポツターのことなんて何一つ考えちゃいない、だってあの当時は僕は幣原秋が大切だつたんだから、アキ・ポツターなんて仮初めの人格に、興味も関心もなかつたんだから!! なのに、一体どうして！ どうしてアキは僕を責めない！ 秋と同じ顔で僕を見ては笑いかける！ 優しい顔でっ、信頼した顔で！ 僕はアキに生きる理由を渡せないっ……秋を、裏切ることになつてしまうから……」

シリウスとピーターは、先ほどまでとは違う眼差しでリーマスを見つめていた。

ああ、言うつもりはなかつたのに。胸中で後悔が荒れ狂う。自分一人が悪役として、全てを背負い込むつもりだつたのに。いつだって自分は、半端者だ。

「……僕だつてさあ、アキに生きて欲しいよ。アキ・ポツターを、僕だつてずっと見てきた。あの優しい少年を、ずっと見てきたんだ……でも、アキと秋、共には選べないんだよ!!」

そう言い切つて、息を吐いた。

せめて自分だけは、秋とアキ、彼らがどういう選択をしようと、全てを受け止めよう。

たとえそれが、彼ら以外の誰からも望まれない、彼らしか望まない
選択であったとしても。

トム・リドルの場合&選択

名前を呼ばれて、姿を現した。

目の前でリドルを見据える少年、その右手に握られた本を見て、リドルは口元を歪めた。

「……まさか、君の方がこちらを選ぶとはね……アキ」

黒髪の少年、アキ・ポッターは、静かな瞳で口を開いた。

『「デウス・エクス・マキナ」——悪魔の書を使おうと思う。手伝って、リドル」

仰せのままにと、リドルはアキに頭を垂れた。



「君は選ばないと思っていたよ」

両手を広げても余るほどの大きさの紙に、アキは慎重に文字や図形を書いてゆく。利き腕ではない方の手で書き記しているため、動きは少々ぎこちない。

インクとして使うものは、自身の血液。右手の指先を、顔を顰めて噛み切ると、その血でもって魔法陣を描く。その血——幣原直の血を引く、幣原秋の、魔力の籠った血で。

『「デウス・エクス・マキナ」——本当に、言い得て妙だ。悪魔の書、その通り。時を巻き戻す、悪魔の書だ。……梓さんに言われた言葉を思い出すよ」

眉を寄せながら、アキは呟いた。

『「今までの努力や苦勞、慟哭、後悔、成功も失敗も、全てを呑み込んでしまう悪魔の所業だ。全てをなかつたことにしてしまう、全てを水泡と帰してしまう」——そりゃあ、時間自体を戻してしまえば、全ての物事は夢幻と変わらない。やり直し——リセットボタンを押すようなものだ」

「だからこそ、アキ・ポッターは選ばないと思っていた。君は努力や想いを大事にするタイプの人間だと」

「努力も想いも大事さ。それよりも結果の方が大事だと、そういうことだよ。時間を巻き戻してしまえば、全てを救える。幣原秋の両親も、ジエームズやリリーもエリス先輩も、リオンやヴィッガーも、マツド・アイも、レギュラスも、ライ先輩のご家族も、アクアの両親だって……幣原だって、君だって」

黒の瞳が、赤の瞳を捕捉した。

『もし、この本を使おうと、君たちが願うのならば。その時は、僕は全力をもって、君たちを手助けすると誓おう』——君が言った言葉だよ。違えないで」

「……違えないよ」

息を吐いて、僅かに微笑んだ。

アキは笑うことなく、ただシンとした目でリドルを見る。

「君の言葉を信じよう。君が殺したヴォルデモートが、君の『選びたくもなかった未来』であると信じよう。幣原直を殺したくなかったと、その言葉を、ぼくは信じよう」

そこでアキは僅かに頭を振った。「うるさいよ……何」と、額に手を当てる。

「……なんだ、そんなこと。何、君の親友だろう？ 親友ならば君の望む答えを弾き出してくれるはずさ。賭けだと言ったでしょ、最初から。親友を信じてやりなよ。それとも何？ 既に賭けに負けたときのことを考えているの？ ……なら黙ってな。結果を待っていないよ」書き切った魔法陣を、アキは確かめるように見つめ「大丈夫かな」とリドルに尋ねる。「きつと大丈夫だ」と、その出来栄えに太鼓判を押した。

「君にそう言われると安心するよ」とアキは無邪気に笑む。

「本当、梓さんの言葉が今更になって沁み入るよ……『幣原家は、時を司る家系だということ』なんて、これ解読してみたら、どうしようもなく暗示的だ。梓さんがこの本を使えなかったのは、単にこの術が莫大な魔力を消費するからに過ぎない。本当に無茶苦茶だ」

アキはそう言って笑うと、肩を落とす。

「これがもし物語だとして、読者はこんな結末認めないだろうね。で

も、認めてもらえなくなつて構わない。読者のために書いた物語じゃない。たとえ無茶苦茶だとしても、そこにぼくの理想があるのならば——ぼくは、そこに手を伸ばすだけだ」

その時、ノック音が響いた。リドルとアキは目を見合わせる。音もなく、リドルはその場に溶けるように消え失せた。

「どうぞ」

アキは微笑んで入室を促す。誰が来たのか、予想がついているような穏やかな笑みだった。

「……やっぱりあなただと思つていました。セブルス・スネイプ教授」
セブルスは、アキを見据えて口を開いた。

「幣原秋に、会わせて欲しい。あいつと——話がしたい」

心が決まった、眼差しだった。



「……決まったの？」

幣原秋は、静かな瞳をセブルス・スネイプへと向けた。

穏やかな漆黒は、凧いでいる。内心は、読み取れない瞳だった。

「ああ、決まった」

本当にこの選択で良いのか。後悔はしないか。何度も胸中で繰り返し問いかけた。

そのたびに迷い、惑い、悩み——苦しみながらも、心の内を決めた。

「苦しい役目を押し付けて、ごめんね」

「ああ——全くだ」

どちらも、言葉を多くは重ねない。

静かな部屋の中、セブルスは口を開いた。

「幣原秋、君が死ぬ」

「アキ・ポッター、君が死ぬ」

……こんにちは。

今この文章を読んでいるということは、彼らの選択を選べずに次の話へ飛んじやったパターンですかね？

もしくは、セリフのリンクに気付かずに、飛んできちやった手合いと見た。

……全く。

ここは臨場感を出すために、ちゃんとセブルスの言葉を選ぶべき場所でしょ？

なあに、ぼうつとしてるんですか。

ここまで読んできたのは貴方です。

ここまで、彼らの物語を見守ってきたのは貴方です。

貴方の手で、彼らの物語に決着をつけてあげてくださいよ。

……まあ、お気持ちちは、分かりますけれど。

残酷な二択を迫った自覚はね、あるんですよ。

でも、それでも、選んであげてください。

二人の望みを、叶えてあげてください。

どちらを選んだとしても、彼らはその選択を受け入れます。

……でも、まあ。

こんなとこまで読んじやったのは、仕方ありません。

罪滅ぼしも兼ねて、ちよつとしたSSを置いておきます。

本当に短い短い、ほんの一部分の切り取りめいたお話ですが。

それでも、どちらも選べなかつた貴方には、ふさわしい話だと思うから。

いいですか。

このSSを読んだら、1話前にお戻りくださいいね？

そして、どちらかをちゃんと『選択』してあげてくださいいね。

どちらも選べずに、選ばずにいた彼らは、一体どんな未来を歩むのか。

その未来はきつと、生温い優しさと悔恨に満ちた、なんともやさし

いものでしょう。
ゆるい幸せが、ずっと続いて行くのでしょう。
心残りを、全員がずっとずっと抱えたままに。

幣原とアキは、結局人格統合の道を選びませんでした。実はその道も書き掛けはしました。

書き掛けて、なんか違うと思い眠らせた、超短いSS。
黒髪の少年と、アリスがただ喋るだけ。



「幣原、秋」

名前を呼ばれて、彼は振り返った。

「アリスじゃないか」

そう言うと、目を細めて笑う。

「結局、そっちの名前にしたんだな」

「うん。ぼくはポッター家の血を引いていないからね。ジェームズとリリーの息子として墓に入るより、本来の、幣原家の息子として墓に入りたいと思って」

「そのへんは、よく分からない感覚だが……」

「日本人独特の感覚なのかもね、ひよつとしたら」

そう言つて、彼は言葉を切つた。風に、短い髪の毛が舞う。

「……切つちまつたんだな」

「うん。……えへへ、似合うかな？」

「似合わねえな」

「酷いっ！ 昔はアリス、ぼくに やれ『髪切れー』だの『丸刈りにしろー』だのよく言つてたくせに！」

「よく覚えてんな、そんな昔のこと……」

呆れて嘆息した。

「……なあ」

「ん？」

「お前はさ……結局、どつちな訳？」

彼は、ひどく透き通つた微笑みを浮かべた。とても純粋な笑顔だと思つた。

「……どつちだと思つ？」

「ぼくがない世界」——1

セブルスの言葉を聞いて、秋はこの上なく嬉しそうに微笑んだ。

「……君なら、そう言ってくれと信じていた」

黒の瞳が、歡喜に揺らぐ。

「この未来を紡いだのはアキだ。ぼくじゃない——そう、ぼくじゃない」

軽く頭を振ると、右手を広げた。愛おしさを眼差しに湛え、笑う。

「それでこそ、ぼくの——親友だ」

「……当たり前だろう、秋」

ああ、きつと、これで良かったのだ。

これで——良い。

「幣原秋。君は死ぬべきだ。未来をあの少年に譲り渡せ。そして……僕を赦して、くれるか」

「元から何一つ怒っちゃいないよ。君を信じて、良かった」

柔らかく秋は微笑む。かつて見慣れ、かつて焦がれた笑顔が、確かにそこにはあった。

純粋な笑顔だと、そう思った。

この笑顔をもう一度見ることが出来て、本当によかった。

「先に逝くよ。ぼくとリリーが恋しいからって、駆け足飛びにこつちへ来ないでよね。ふざけんなって、もう一度現世に蹴り落とすから」

「……ああ」

どちらからともなく、手を伸ばし合った。指を合わせ、絡める。

「バイバイ、セブルス。……ああ」

眦に涙を浮かべ、晴れやかに、秋は呟いた。

「今まで生きていて……よかったなあ」



白い空間で目を覚ませば、そこには自身と全く変わらぬ顔があつ

た。憤怒の表情で、ぼくを——幣原秋を、睨みつけている。

「どうしてっ、どうしてだよ幣原秋！」

掴みかからんとする勢いでこちらを見るアキ・ポッターの姿に、思わず笑った。

「ここが夢の世界、内面世界であるため、共に左腕は吊っていない。

「生きたいんだろ、アキ。……この未来は君が作ったんだ、ぼくじゃない。もう君は、一人で生きてゆく番だよ」

「オリジナルを差し置いて生きると、そう言うのか!？」

アキの視線は必死なものだった。

ああ、この子は、心の底からぼくに消えて欲しくないと願っているのだ。

そこまで想われている、そのことが、なんだか嬉しかった。

「君は未来を紡げる人間だ。君を待っている人たちが、この世の中にはたくさんいる。……シリウスを助けてくれて、ありがとう。ぼくに、生きていて良かったとそう思わせてくれて、本当にありがとう」
微笑んだ。ぼく的笑顔に、アキは息を呑む。数瞬後、その顔がくしやりと歪んだ。

「バカ……バカだよ。どうして生きてくれないの……ぼくは、君に生きて欲しいんだよ……っ。どんな有様だったっていい、ただ、ぼくは……」

頬に涙が伝う。慌てて、アキは目元を拭った。

「どんな有様でも、いいって言うならさ。ぼくのやることも、許してよ」

え、とアキは小さな声を漏らす。ぼくは心の底からの笑みを浮かべた。

ぼくの生き様は、君が知っている。

ぼくの未来は、君なんだ、アキ。

「胸を張って。誇って。君は偽物なんかじゃない。——だって君は、ぼくなんだから！」

どうか、生きて。

幸せな未来を、歩んで。

「今まで君を苦しめることしか出来なかったぼくからの、最初で最後の贈り物だよ」

涙を拭って、アキは微笑んだ。凄く綺麗な笑顔だと、思った。

「最初で最後、なんかじゃないよ」

両手を広げ、アキは笑う。

「君から貰った人生も、君から貰った記憶も、全て——大事に、するか
ら」



少し離れたところで、トム・リドルが立っていた。ぼくとアキのやり取りを、冷めた目で見つめている。茶番だとも思っているのだろう。

その手には、例の本『デウス・エクス・マキナ』が握られていた。「バカバカしいとは思っているよ。茶番さ、こんなもの……あーあ、貴重な時間を無駄にした」

大袈裟にため息を吐くと、リドルは毒付く。深紅の瞳をこちらに向けてると、吐き捨てた。

「君は、こっちの道を選ばないんだ」

「うん。……ごめんね、その道は選べない。ぼくの父は、父さんは、選ばなかったよ。……君を助けてあげられなくて、ごめん」

「……本当、バカだよね」

リドルはぼくに背を向けると、一瞬で姿を消してしまった。恐らく本体ごと、消えてしまったのだろう。リドルが手にしていた『デウス・エクス・マキナ』も、同時に消えた。

「さあ……アキ、分かっているはずだよ」

アキを呼ぶ。少し頼りない足取りでアキはぼくに歩み寄った。

その手を取り、導く。ぼくの首元へと。

地面に背をつけた。

腹の上に跨ったアキは、涙を零しながら、ぼくの首に置いた手に力を込める。ぽたぽたと涙が降り注いでくる。

「うん……上手」

手を伸ばした。アキの頭をそっと撫でる。

「大好きだよ、アキ」

苦しめるばかりでごめんね。

これからは、君が未来を生きてくれ。

「ぼくがいない世界」―2

目が覚めると、そこはベッドの上だった。ぼくは、大勢の人に囲まれていた。

ハリーにロンにハーマイオニー、アリスにユーク、シリウスにリーマスにピーター、ライ先輩だって。ぼくの右手を握っていたのは、アクアだった。

「……アキ、なの？」

アクアが揺れる瞳で呟く。ぼくはゆっくりと、頷いた。

「……アキっ！」

アクアが、ハリーが、皆がぼくを抱き締めてくれる。ああ、ぼくはこんなにも、沢山の人達に囲まれている。

胸に空いた空虚を感じた。

ずっと一緒に生きてきた秋は、もうここにはいないのだ。それを、噛み締める。

「……っ、う……」

ぼくは、ここにいてもいいのだ。

やっと、世界に存在を認められた。

そんな気分で、天を仰いだ。



その日は、さんとさんと太陽が照り付ける、暑い夏の日だった。

真っ青な空に、入道雲がぷかりと浮かんでいる。山の木々は日光を浴びて、綺麗な緑色に染まっていた。

石で舗装されている細い道を、ぼくらは歩いていた。山の中腹くらいに位置する、上り坂。辺りにはぽつりぽつりと、昔ながらの日本家屋が立ち並んでいる。

「ねえ父さん、まだなの……？ もう疲れたよお」

ヒカルがへたれた声を漏らした。「もうちよつとだから頑張れ」と鼓舞して、前へ進む。

「……ソラ、大丈夫?」

アクアが後ろを振り返り、皆から一步遅れていたソラを氣遣った。アクアが手を差し伸べると、ソラは額の汗をぐいっと拭い、アクアの手を握って「大丈夫だよ」と微笑む。

「……で? 今年は一体何をやらかすつもりなのかな? ヒカルとジェームズは」

「ふっふーん、父さんに教えてなるもんか。ジェームズに怒られちゃうよ。ただでさえ、ホグワーツ副校長兼呪文学教授のアキ・ポッターには、散々手こずらせられてんだからさ」

「手こずらせられてんのはぼくの方なんだけどね、全く」

やれやれ、とため息をついた。

ぼくの息子、ヒカル・ポッターは、ハリー・ポッターの息子、ジェームズ・ポッターと同じ年だ。従兄弟同士のこの二人の結末は強く、そして二人とも中々やんちゃなため、三代目悪戯仕掛人の名を欲しいままにしている。手を取り合い笑いながら駆けて行く二人を捕まえるのに、一体どれほど苦労したことか。

「父さん達だつてズルいよ。子どものやることなんだからさ、少しくらい見逃してくれたっていいじゃない。デイビス教授に追いかけられたときは、ホント生きた心地がしなかったよ」

「ぼくも、君たち二人がデイビスに悪戯を仕掛ける勇氣があつたことに脱帽したよ」

「……悪戯は程々になさいよ、ヒカル。あんまり人の迷惑になるようなことはしちやダメよ。……お父さんになら、存分に仕掛けていいからね」

「ちよつとアクア!?!」

ふふ、とアクアは楽しげに笑った。こういうところは昔から全然変わらない。今や闇祓いの中でも10本の指に入る逸材として名を馳せているというのに、子どもっぽい一面をずっと持っている。

墓地の中に入ると、先は大分平坦だ。でもこの暑い中日陰もないし、ソラは大丈夫だろうか、とソラの体力を心配する。

外で遊ぶよりも家の中で本を読むことの方が好きなソラは、普通の

子どもよりも体力がない。ヒカルも、妹を心配するかのようにはチラチラと後ろを振り返っている。

やがてぼくらは、あるお墓の前に到着した。その墓石に刻まれている名前に、ぼくは目を細める。

近くの水道からバケツに水を汲むと、ぼくは雑巾を絞って、墓の汚れを綺麗に拭き始めた。アクアもそれに倣う。普段は騒がしいヒカルもソラも、この時ばかりは神妙な顔で黙っていた。

指を鳴らして椅子を出現させると、ソラに座っているように言う。

『幣原家之墓』と書かれたそこには、三人の名前が刻まれていた。幣原直と幣原アキナ、そして、幣原秋。最も、幣原秋の骨はこの中には収められていないのだが。せめて名前だけでも両親と一緒に、と思いつたのは、秋が消えて一月ほど経った後のことだった。

萎れそうな花を取ると、新聞紙に包み、買ってきたばかりの花を生ける。水を注いでやると、雫が日の光に触れてキラキラと光った。

線香を取り出すと、指を鳴らして火を灯す。懐から数珠を取り出すと、一歩離れて手を合わせた。左手の義手も、随分慣れた。

目を閉じる。

今年も帰ってきました。父さん、母さん、そして——秋。

息子と娘は、相変わらず元気です。

ヒカルは、見た目はアクアに似て儂い美少年の癖に、性格は一体誰に似たのやら悪戯好きで困ります。ハリーの息子ジエームズと、いつも何かしら企んでいます。ぼくは止める立場だけど、実の所、どんな悪戯をするのか楽しみだったりするんだ。初代悪戯仕掛人と比べてみたりね。

ソラは、見た目はぼくにそっくりなんだけど、性格はアクアに似たのかな。ヒカルやジエームズ、アルバスやリリー達といるときは楽しそうに騒ぐけど、ちよつぴり人見知り。

今年ホグワーツに入学するんだけど、だから少し心配なところもあるんだ。でも、アルバスと同年だし、何かあったらアルバスが助けてくれると思う。アルバスはハリーに似て、すつごく優しいから。でも父親としては、ソラが男の子と仲良くしているのを見るのは複雑だ

な……なんてね。

ヒカルもそのうち、彼女とか出来たりするのかなあ。アクアに似たおかげか、学校では結構モテてるみたい。『銀髪の王子様』なんてあだ名を聞いたときは笑ったよ。ヒカルが王子様だって？　こんな悪戯小僧が、ありえない！

リーマスは最近風邪を引いたみたい。リーマスが体調を崩すたびに、トンクスが大騒ぎするのは止めてもらいたいな。テッドも呆れた。息子に呆れられる母親ってどうなのよって感じだよ、全く。

ハリーは、今年闇祓いの局長に就任したんだ。凄いでしょ、秋、君よりも立場が上なんだぜ？　しかも、子どもにジエームズとリリーとアルバスってつけるって、欲張りすぎだろ！　って突っ込んだよ、思わず。しかもアルバスのミドルネームはセブルスだし。それに狙い澄ましたようにハリーそっくりだし。教授の凄い顔を、昨日のこのように思い出すよ。

闇祓いは相変わらず忙しそう。でも、だいぶ楽になってきたってアクアが言ってたよ。

そうそう、この前アクアと大喧嘩しちゃったんだ。ここ数年で一番くらいの大喧嘩。アクアは泣くしヒカルとソラは怖がってハリーの元に避難しちゃうし、それを受けたハリーとアリスが止めに来るしの大騒ぎ。副校長の席を引き受けたのがこんなに大変だなんて思ってた。ホント、マクゴナガル先生を尊敬しちゃうよ。

ホグワーツはもう、本来通り通常営業だ。あんな戦争のど真ん中にあっただってことが今や信じられないくらいに平和だよ。

「……君の、お陰なんだよ」

——秋。

目を開けると、立ち上がる。ヒカルが手を合わせる様を眺めていると、ふと裾を引かれた。ソラだった。

「どうしたの？」

身を屈めそう尋ねる。ソラは少し言い淀んだが、やがて決心したように顔を上げた。

「父さん、幣原秋って人について、教えて」

思わず息が止まった。ソラはこちらを伺うように、じつとぼくの目を見つめている。アクアも心配げにこちらを見ているのが分かった。

「あつ、ソラずるい！ 父さん、僕にも教えてよ！」

ヒカルはびよんと立ち上がると、ソラの隣に並んでぼくを見る。

ぼくは意識して呼吸を整えると、二人の頭を優しく撫でた。

「そうだね……そう、だね」

もう、次世代に伝えてもいい頃合いだろう。

「じゃあ、帰り道にでも少しずつ話をしてあげようか」

言葉はこうして記憶となり、次世代に引き継がれて行く。

たとえ本人がいなくなっても、彼の話を知る者が居る限り、決して消えはしないのだ。

「幣原秋という、一人の天才の生き様を」

さあ、空よ、記憶しろ。

ぼくらをずっと、見ていたのだろうか？

——秋エンド「ぼくがない世界」 f i n ——

もう一つのエンディングへ

「ぼくがいらない世界」――1

「――っ、ふざけんなよ……っ！」

激昂した表情でこちらに近付いて来た幣原秋は、ふとその場に崩れた。慌てて手を貸すと、目を開けた彼はにつこりと笑った。

「ありがとう――教授」

ああ、これは。

これは、アキ・ポッターだ。

立ち上がったアキは、机へと歩み寄ると一冊の本と一枚の紙を取り出した。机の上にその紙を広げる。

紙に描かれているのは、魔法陣のようだった。使われているインクは、赤い。

猛烈に、嫌な予感がした。

「……壮大な自殺をしてあげる」

セブルスが声を上げるよりも、アキがその魔法陣に右手を押し付ける方が早かった。

瞬間、青白く発光する魔法陣が、アキの周囲三メートルほどに広がる。結界により、セブルスは近付けない。

青白い光に照らされたアキは、恍惚とした表情で口を開いた。

「手伝って、リドル」

◇ ◆ ◇

「ああ、アキ。君に力を貸そうじゃないか」

部屋中に風が吹き荒れる。音もなく、リドルが姿を現した。

「ぼくの魔力と、リドルの魔力。途方もない魔力を持つ者同士が、この想いを捧げよう。過去を書き換えよう。全ては」

幸せな未来へ。

ふ、と本が、光輝く魔法陣の中心に浮かび上がった。本は凄まじい

勢いで、見えぬ手によりバラバラとページを捲られてゆく。

「ねえリドル、約束して。もう絶対、間違わないと、誓って」

「……誓うよ、アキ。決して二度と、間違えやしない」

本に書かれた文字が、時間経過で煌々と煌めきを増す。

「例え夢幻だつて理想論だつたつて、空想だつて夢物語だつたとして、現実になつてしまえば、全て起こり得ることになる。

——幣原秋が、ぼくを作り出さない未来。ぼくが求めるのは、それだ」
大きく、息を吸い込んだ。

言葉に意志を込め、ただ叫ぶ。

「幸せな未来に、アキ・ポッターは必要ない!!」

ぼくの言葉に、より一層本も魔法陣も強く光り輝いた。もう、直視は出来ない。

歌うような声が、近くから聞こえた。

「幣原秋が生まれるより、もっと以前。あの日へ戻ろう。トム・リドルと幣原直が出会つた、あの日へ。まだ道を踏み外していない自身の中に——分霊箱の魂の欠片よ、定着しろ」

リドルがいるであろう方向に、目を向けた。ぼんやりとした影しか見えないが、それでも確かにそこにいるのだろう。

「……ねえ、リドル。願つてもいい?」

世界が光に包まれる。やがて、ひび割れ世界は一度崩壊するだろう。そして、かつてあつたように、世界は再構築されるだろう。

それをきつとぼくは認識出来ないが、リドルならば。過去の完全な魂に、魂の欠片は引きつけられるだろう。術者であるリドルならば、きつとこの記憶を持つていてくれるはずだ。

「君の願いとやらを、聞こうじゃないか。何だい?」

リドルは優しい声音で言った。光に向かつて、ぼくは言う。

「どうか忘れないで、ぼくのことを。全ての記憶から、記録から、ぼくの存在はいなくなる。でも君だけは、リドル、君だけはお願いだ、ぼくのことを覚えていて!!」

世界にすら認められなかったぼくだけれど、それくらいは、願ってもいいだろう？

「ぼくを忘れないで、ぼくが、アキ・ポッターが確かにここにいたってことを、ぼくの生き様を——忘れないで!!」

「……聞き届けた」

その言葉に、安心する。リドルならばきつと、覚えていてくれる。ぼくのことをずっと、覚えていてくれる。

たった一人だけでも、ぼくのことを覚えていてくれたのなら。作り物で、紛い物で、偽物だけれど、それでも確かにぼくは生きていたのだと、誰かの記憶に刻まれてくれたのならば。

もうぼくは、それだけで構わない。

「……ねえ、アキ。この世界は消える。今なら、誰も聞いてないよ。……最後に一言、あるんじゃない？」

その言葉に、ぼくは笑った。弾みで、溜め込んだ涙が零れる。

誰も、聞いてないというのなら。

ならば、一言、構わないかなあ。

「……本当は、死にたく、なかったなあ……」

世界が、光に呑み込まれた。

「ぼくがいない世界」――2

気がついて、一瞬呆然とした。

今までの記憶と、新たな記憶。混ざり合い、全てを呑み込むまでに、少し時間が掛かった。

廊下の真ん中で立ち竦んだ自分に対し、生徒は僅かに邪険にするような瞳を向けて行く。

ふと、隣を金色の裏地の少年が通り過ぎて行つた。ハツと息を呑み、トム・リドルは後を追う。

待ち侘びた。この日を。彼と再び笑い合う日々を、心の底から。

「――っ、直――」

ピクリと少年の肩が揺れた。不審と警戒心を露わに、少年――幣原直は、振り返る。

真つ直ぐな短い黒髪に、同じ色の瞳。東洋系の薄い顔立ち。一人だけ違う、金色の裏地が縫い込まれた制服。

――嗚呼。

記憶通りの、その姿。

酷く、懐かしかった。

「ファーストネームで呼びつけるなんて、僕はかつての君の友人か何かかい？」

訝しみと荒んだ心が合わさり、直は昏い瞳をリドルに向けて薄く笑つた。出てくる言葉は、日本語だ。外国語を面と向かって投げつけられれば、誰もが怯むと知っている目だった。

その視線も意図も、全てを受け止め、リドルは微笑む。

「……ああ、そうだ」

リドルの口から零れた流暢な日本語に、直は目を見開いた。やがて、驚愕を瞳に宿す。

「……なんで、泣いてんの？」

リドルの頬を一筋伝った涙に、直は狼狽えたようだ。ギクリとたじろぎ、落ち着きなくリドルを見る。

リドルは涙を拭わず、ただ笑つた。

「——初めまして」

もう、間違えないよ。

胸の中で、呟いた。



紅の蒸気機関車が、キングスクロス駅の九と四分の三番線に滑り込む。色鮮やかな紅に、思わず胸が高鳴った。

「早くっ、父さん、母さんっ！」

「秋、慌ただしいなあ」

父が呆れた声を漏らす。ぼくはにっこりと笑った。

「だって、待ち遠しいんだもん！」

待ち焦がれたホグワーツ。今日からぼく、幣原秋は、ホグワーツ魔法魔術学校に入学するのだ。未知の世界に飛び込む興奮に、気が逸つて仕方がない。

「気持ちに分かるけどね。あまり直たちを急かすんじゃないよ」

と、その時頭に手が乗せられた。慌てて頭を押さえ、顔を上げる。

「リドルさん！」

ぼくの目線に合わせるように、リドルさんは身を屈めて薄っすらと微笑んだ。弾みでサラリとした黒髪が揺れる。ああ、この人は初めて見た時から変わりなくカツコイイなあ。

ぼくを見る紅い瞳が、柔らかく細められた。

「トム、秋を頼む。この通り落ち着きがない息子だけど」

「この年代じゃこんなものだろう。それに秋は直、お前よりも頭の良い子だ。これからが楽しみだよ」

コンパートメントにぼくの荷物を置くと、リドルさんは先頭車両に向かった。闇の魔術に対する防衛術の教師であるリドルさんは、教授陣の集まりがあるらしい。

また後でね、とリドルさんは微笑むと、思い至ったようにぼくを見た。

「秋、君はどの寮に入りたい？」

そう言われて、はたと考え込む。どの寮に、か。正直ピンと来ない。「……どの寮に、って言われてもなあ。そうだ、リドルさんは、ぼくが何寮っぽいって思う？」

そうだねえ、とリドルさんは目を細めた。何かを懐かしむような、遠くを見つめる眼差しだった。

「……レイブンクローに、きつと君は入る」

それは予想というよりは、未来の断定だった。

思わず目を瞬かせたぼくの頭を、リドルさんは笑って撫でると背を向け姿を消した。

ホグワーツ特急が、ゆつたりと滑り出す。両親の姿が見えなくなるまで手を振ると、ストーンと座席に腰掛けた。

ふと、寂しさに襲われる。これから、両親と離れて暮らすのだ。リドルさんに英語は叩き込まれたけれど、それでも日常会話には不安が残っている。

その時、コンパートメントの扉が開かれた。姿を現したのは、小柄な一人の少年だ。長めの肩ほどもまでの黒髪で、不機嫌そうに顔を顰めている。

少年はふとぼくを見ると、ぽかん、と目を瞬かせた。

その表情の変化を、妙だと思うべきなのだろう。だけれどぼくも、多分今、彼と全く同じ表情を浮かべていた。

どこかで、彼と出会ったことがあるような、そんな不思議な気分。知らないことを知っているかのような、知っているべきことを知らないような、そんな少しふわふわとした心持ち。

先に立ち直ったのは、彼の方だった。

「隣、空いているか」

投げられた英語に一瞬戸惑うも、慌てて頷く。彼は小さく「ありがとう」と呟くと、すぐさま大きなコートを脱ぎ、学校指定のローブに袖を通した。

「あともう一人、連れて来ても構わないか」

「大丈夫だよ」

そうか、と言った彼の眼差しは、暖かだった。

やがて彼が連れてきた女の子も、なんだかぼくには初めて会った気がしなかった。綺麗な赤毛で、深い緑の瞳が印象的な女の子。

「初めまして」

女の子が、ぼくにつこりと微笑みかける。柔らかに目を細め、口を開いた。

「私はリリー。リリー・エバンズよ。あなたのお名前、聞いてもいいかしら？」



「アキー」

名前を呼ばれ、ぼくは振り返った。ぼくの手を握っていたハリーも、共に顔を向ける。

キングスクロス駅で、パタパタとこちらに駆けて来たのは父さんだ。瞳に困惑を滲ませている。

ぼくと瓜二つの父さんは、三十過ぎているのに見た目も中身も子供っぽい。父さんと同じ歳になったら、ぼくも多分こんな感じになるのだろう。願わくばもう少し大人っぽくありたいものだ。

「ああ、やっと会えた……この人混みじゃ、無理かと」

「秋さん、仕事はいいの？」

ハリーの声に、抜けて来た、と、父さんは頬を書きながら悪気もなく笑う。

その笑みに肩を落とした。

「別に、来なくつても良かったのに。ハリーたちと一緒に行くから大丈夫だって言ったじゃない」

「でも、アキとしばらく会えなくなるんだよ。会いたいと思うのは当然だよ」

父さんは、大学にて呪文学の講師をしている。十年前ほどに新設された大学で、 Hogwarts を中心とした英国魔法学校の進学先だ。この大学の設立により、魔法使いの人生は一気に多様化した。

設立者の一人である父さんは、しかしぼくから見たら全然凄い人に

は思えない。この前は洗濯機を壊したし、電子レンジも爆発させたし、パソコンは分解させちゃうしで、いつも母さんに怒られている。その時の父さんは、凄く情けない顔をしていて、到底父親の威厳なんて見当たらぬ。

「ジエームズとリリーは？」

「今日はリリーお姉さん一人。ジエームズおじさんは用事があるんだって」

「何かまた妙なことしてるんだよ、うちの父さんは」

ハリーはうんざりした顔で言った。変わらないな、と父さんは苦笑する。

そこで、リリーおばさ……お姉さんの姿を見つけた。向こうもぼくらを見つければ、笑顔で駆け寄ってくる。

「どこに行ったかと思った、探したのよ。……あら、秋じゃない！ お仕事は？」

「皆それを聞いてくるよね……三限が空いてるから、いいかなって。アキを送ったらすぐ戻るよ」

リリーお姉さんと話してるときの父さんも、少し情けない。

ハリーがリリーお姉さんに服の乱れを直されている。先に行くよと言って、ホグワーツ特急に飛び乗った。ぼくの背中に、父さんの声が掛かる。

「リドルさんとセブルスによろしくって言っておいて！」

分かったの言葉の代わりに、左手を振った。

空いているコンパートメントを探して、キョロキョロと辺りを見渡しながらか歩く。もうある程度座席は埋まっていて、生徒もひっきりなしに通路を歩き来していた。

隣を通った小さな女の子の、風に靡いた銀髪に目を惹かれた。思わず目で追う。

「……え」

何かに導かれるように、立ち止まった。ぼくの声に、女の子は振り返る。大きな灰色の瞳と、目が合った。

凄く、可愛い女の子だった。静謐な硝子細工のような美しさに、息

を呑む。

恋に落ちたと、頭のどこかで理解した。一目でこの子に惚れたのだと、どくどくと喧しく脈打つ鼓動が聞こえる中、ぼくは思った。

「……っ、な、名前を……聞いてもいいかな」

彼女は少し訝しむ瞳を向けたが、それでも口を開いた。

「……アクアマリン・ベルフェゴール」

「……やっ与会えた」

「え？」

「あれ……何、今の」

思いも寄らず、言葉が零れた。ぼくもびっくりして、口元に手を当てる。

「……変な人」

楽しげに、彼女は微笑んだ。

——アキエンド「ぼくがいない世界」 f i n ——

もう一つのエンディングへ

ネタバレ全開オリジナルキャラクター紹介&一言

・アキ・ポッター

主人公。国籍は英国。7月31日誕生日。ハリー・ポッターの双子の弟。レイブンクロー寮に所属。長い黒髪を後ろで髪紐で一つに括っている。髪の長さは肩甲骨あたり。瞳は黒。小柄で童顔。幼く見られることを自覚しており、からかわれると怒ってみせたりするが本人はさほど気にしてはいない。性格は明るく社交的。おちゃらける面が目立つが、本来は思慮深い。頭の回転も速く、成績はかなり優秀。呪文学が一番の得意科目。また記憶力は常人の比ではなく、一度経験したことや覚えたことは滅多に忘れない。

兄であるハリー・ポッターのことを、命よりも大事だと思っている。左利きである。杖は紅葉の木に不死鳥の尾羽根、25センチ。気まぐれだが忠誠心は強い。幣原秋がかつて所有していたものと同じものを所持する。

その身に有する魔力は非常に大きく、また魔力の練り方も上手い。若年にして無言呪文を行使できる。簡単な魔法程度ならば杖なしでも発現させることが可能。

夢で幣原秋の人生を追体験している。

本作主人公、です！ パツと見明るく社交的で、その実一番闇が深い少年でした。

死の秘宝編での一場面「ぼくを認めろよ、世界ツツツ!!!」の一言が、個人的なお気に入り。

幣原秋に『操り人形』として作られた存在ですが、その人形は天才の作品であったが故に意志を持ち、一人歩きをし始めました。『操り人形』であり『偽物』であり『模造品』であり『レプリカ』であるアキですが、「偽物がオリジナルに勝てないと誰が決めた?」と笑って突き進んでくれました。

幣原秋は天才ですが、アキ・ポッターは天才ではない。誰からで

あつても決して「天才」と呼ばせない、そういう意志があつたので、アキは誰からも「天才」だと呼ばれたことはありません。

彼の名前が冠されたエンディングに、彼はいません。彼の犠牲によつて成り立った世界を、アキは心の底から愛するでしょう。

秋とアキは、互いが互いの幸せを心より思い合う、そんな存在でした。互いにならないものを持ち、互いを羨ましがる、そんな同一人物です。どうしてレイブンクローなのかというのは、グリフィンドールやスリザリンドと、アキのスペックが高すぎて色々滞りが出るからです。ハッフルパフほど善良じゃないので、こうなりました。嘘つきだしね、アキ。平然と嘘を吐きますし罪悪感も持ちません。こんな主人公で本当にいいのか。

秋エンドでは、アクアとの間に二人の子供を儲けました。ヒカルとソラ、そんな名を持つ二人も、これからを精一杯生き抜いてくれることでしょう。

・幣原秋

裏主人公。国籍は日本国。10月15日誕生日。日本人の幣原直と、英国人のアキナ・エンディーネを両親に持つ。ハリーの父親、ジェームズ・ポッターや現ホグワーツ魔法薬学教授セブルス・スネイプと同級。レイブンクロー寮に所属。長い黒髪を後ろで髪紐で一つに括っている。瞳は黒。小柄で童顔。

本来は活発な少年だったが、一年時に言葉が通じないことが原因で苛めに遭い、それ以来内気で引つ込み思案に。勉強家で、目的のために努力を惜しまない。性格は温和で優しい。呪文学が一番の得意科目。記憶力は常人の比ではなく、一度経験したことや覚えたことは滅多に忘れない。

左利きである。杖は紅葉の木に不死鳥の尾羽根、25センチ。気まぐれだが忠誠心は強い。

その身に有する魔力は非常に大きい。魔力の練り方はまだ荒く、上

手く力を使い切れない場面も。若年にして無言呪文を行使できる。簡単な魔法程度ならば杖なしでも発現させることが可能。

ホグワーツを卒業した後は闇祓いに。そこで『黒衣の天才』として名を馳せ、戦争の英雄となる。

23歳、ビルの屋上から飛び降り自殺。その生涯は未だ謎に包まれている。

本作の裏主人公。こいつの存在感は目を瞠るものがありました。

主人公らしくない主人公です。本当に。意志薄弱で、決めきれず、話に流され、誰も救えない。それなのに愛してくださった皆様に感謝を。

幣原が、本作随一の「天才」です。「呪文学の天才児」「黒衣の天才」、彼を称する言葉は常に「天才」の言葉が付きまといまします。

もともとは「凡人が類稀なる才能を手に入れたらどうなるか？」という思考実験の中に生まれた子でした。精神凡人、しかしその身には、人の身には余る才。その才能によって自分も振り回され、周りも巻き込む様を描きたかった。

「黒衣の天才編」では、幣原のあだ名が付けられているというのに、ほぼ登場がありませんでした。それでも尋常じゃない存在感でしたので、これでいいかな、と。

この連載は、初め「セブルス・スネイプを救いたい」という思いの元練った作品です。原作の「プリンスの物語」を読んで、この人を生き残らせたのだと強く感じ、このような形で救済することになりました。「どうやったらこの人を救済出来るか」と考えた結果、「親世代と子世代を跨る存在」が必要だと考え、秋とアキの設定が出来ました。有り体に言えば二重人格ですね。

個人的に、幣原とリリーとセブルスが寄り添い合っている様は凄くなんだか和みます。寮の垣根のない、青と赤と緑のローブが寄り添い合う様。ハツフルパフのオリキャラも作るべきでしたかね？

アキエンドでは、ハリーと同年の子供「幣原アキ」くんを儲けて

おります。奥さん誰かつて？ ノーコメントで。

・アリス・フィスナー

子世代オリキャラ。アキ・ポッターの同期であり友人。国籍は英国。8月25日誕生日。リイフ・フィスナーとマグルの女性を両親に持つ。レイブンクロー寮に所属。魔法省王室直属勤務を生業とするフィスナー家直系の息子。純血主義を貫いていたが、父親がマグルと結婚したため、血は混じっている。金髪に明るい碧の瞳。左耳に雪の結晶の形をしたピアスをしている。

性格は直情型であり神経質。粗暴に振る舞い他人を遠ざける気がある。話したくないことは徹底して何も喋らない。何事からも縛られるのが大嫌い。警戒心が強く疑り深いが、一旦懐に入れた人間にはとことん甘い一面もある。家柄や目つきの悪さから因縁をつけられることも多く、喧嘩慣れしている。一時期は、周囲に不良と思わせることで他人を近づけないようにしていたことも。ドラコ・マルフォイとアクアマリン・ベルフェゴールとは幼馴染。

9歳の頃母親が死に、同時に家を飛び出し一年強放浪した経験がある。ピアスはその時拾ってもらった人からの唯一の贈り物。

よつく動いてくれたよこの子。

そんな印象。働き者です。そして主人公ズを除けばオリキャラぶつちぎりの人気を誇りました。なんと。

金髪に碧の瞳に雪印ピアス。雪印ピアスの由縁は本編じゃ語られませんでしたがね。彼は気まぐれな奴なので、ふらっと語る気になるかもしれません。五章あたりからピアスがもう一つ増えました、群青の宝石のピアス。一体どうして増やしたんでしょうね。私にもよく分かりますが気付いたら増えていた。

ちよいちよいアキのメンタルを引っ張り上げてくれる安定した子

だったので、すごく重宝しました。ありがたいね。特に黒衣の天才編「アリス・フィスナーの場合」では、あんなこと言ってくれるのアリスしかいなかった。

悪ぶっているけど本質は面倒見のいいお兄ちゃん気質です。早生まれなんだけどね。一人っ子なんだけどね。

秋エンドでは、きつと目が離せないフラフラした幾つか年下の女の子とでも結婚しているんじゃないでしょうか。

・アクアマリン・ベルフェゴール

子世代オリキャラ。アキ・ポッターの友人、のち恋人（4章）。国籍は英国。スリザリン寮に所属。数少ない純血一族、ベルフェゴール家の長女。長い真っ直ぐな銀髪をそのまま後ろに流している。瞳は灰色。ドラコ・マルフォイとはお互いが生まれる前からの婚約者。無口で無表情。周囲からは大人しいお嬢様だというイメージを持たれがちだが、実際は頑固で意地っ張りであり、人をからかったりする一面もある。

純血至上主義の一族の長子であり、両親が死喰い人の身でありつつも、闇陣営の思想や行動に違和感を覚えている。そのため一族の中から孤立しがちであり、直系でありながらも疎まれる存在である。ドラコ・マルフォイ、アリス・フィスナーとは幼馴染。

アキのお相手として作った女の子です。銀髪ストレートロングの、お人形さんみみたいな綺麗な女の子。中身はちよつとツンデレ気質。

アキをこの世に止める重要な役割を果たしてくれました。

主人公がスペック高くって色々霞みますが、この子も秋エンドでは卒業後に闇祓いとして働いているのでそれなりに成績優秀です。アキとの間に二人の子供を儲けました。

アキエンドでも、一番最後にアクアじゃないといけない役割をきち

んと果たしてくれました。アキ・ポッターの再現というか、何とか。ちよつと違うけど。

両親が死喰い人でありながら思想には違和感を持っている、というあたり、気質はシリウスによく似ています。この二人、作中で会話することはありませんでしたが、作品外できつと意気投合していることでしょう。

・ライフ・フィスナー

親世代オリキャラ。幣原秋の同期であり友人。国籍は英国。レイブンクロー寮卒業生（監督生卒）。魔法省王室直属勤務を生業とするフィスナー家直系であり、現フィスナー家当主。子世代オリキャラであるアリス・フィスナーの父。妻はマグルのシャーロット・フィスナー（故人）。金髪に明るく緑の瞳。情報通。性格は明るく穏やかであるが、時にレイブンクロー生らしく情を切り捨てる場面もある。

本作唯一の喫煙者。学生時代、幣原に喫煙の現場が見つかり情けなく「誰にも言わないで、なんでもするから」と頼み込むところが個人的に一番好きです。

魔法界で数少ない純血家系フィスナー家の直系男子でしたが、彼が選んだのは幼い頃から恋していた病弱のマグルの女性でした。死の秘宝編では、アキの思いに同調し、影に日向に駆け回ってくれた功労者でもあります。彼のお陰で魔法界の法律も技術も格段に進歩しました。

最初からずっと出ている割には存在感がなくなつて少し不憫な奴でもあります。息子はあんなに人気なのに。アリスのパパだよ!!

・ユークレース・ベルフェゴール

子世代オリキャラ。3章にて初登場。アクアマリン・ベルフェゴールの2つ違いの弟であり、ベルフェゴール家の長男。レイブンクロウ寮に所属。姉とアリス・フィスナーを慕い、アキ・ポッターに無邪気な敵意を向ける。両親が死喰い人ではあるが、姉の影響により闇側の思想に染まっておらず、この戦争の最中どこに立っていればいいのか分からず不安定である。

アキもアリスもハリーもハーマイオニーもドラコも一人っ子だったので、兄弟を作りたいなと思いついた。アキの弟を作りました。この子はかなり思いつきです。シスコン。おねえちゃんだいき。敬語で喋るやかましい子。

「ユークレース」は宝石名。「出会うこと自体が奇跡の宝石」とも言われる珍しいものです。短縮されて皆からは「ユーク」と呼ばれます。アリス大好きっ子で、アリスを追いかけてレイブンクロウに入りました。あわや組み分け困難者。

不死鳥の騎士団編では、両親は死喰い人であるけれども思想に同調はできず、かといって姉のように振り切れず、と、不安定な立ち位置でおりました。死の秘宝編では吹っ切って、いくらかカツコイシーンもあったんじゃないかな。アクアの前にセドリツクと共に立ち塞がるシーンはお気に入り。

・ライ・シユレディンガー

親世代オリキャラ。3章にて初登場。幣原秋より3つ上の先輩。国籍は英国。グリフィン・ドール寮卒業生（主席卒）。エリス・レインウォーター、フランク・ロングボトム、アリス・ロングボトムとは友人。現在はサリユーマン医療研究所の研究員であり、聖マングにも行き来している。幣原秋四年時に魔法魔術大会の決勝戦で戦った相手

であり、前回の大会優勝者。家族をヴォルデモートの手により植物状態にされている。他人の考えていることが分かる能力を持つ。

思っていた以上にいろんなところで活躍してくれました。アキは、この人を救いたいという思いもあり、あの『デウス・エクス・マキナ』エントを強行しました。

ヴォルデモートにとんでもなく重たい枷をつけられた人です。魔力的にもそうですが、精神的にもとんでもない人。ひよつとしたら、幣原秋の代わりに「黒衣の天才」やっていたのは彼かもしれない。彼もまた「天才」と呼ばれてもおかしくない逸材でした。ヴォルデモートが早めにその才能の芽を叩き潰して表舞台に出て来れなくしちゃったけれど。

あまりにもちよいちよい聖マングに入り浸っているので、お前さん研究所のお仕事大丈夫？ と時折尋ねたくなります。きつと臨床実験のサンプル採集でしょう。

名前の「ライ」はそのまま「嘘」を、苗字の「シユレディンガー」は量子力学の天才から取りました。

ちなみに、『デウス・エクス・マキナ』が発動されない秋エントでも、家族はそのうち目を覚まします。シリウスの時のデータがきつと役立つことでしょう。それが何年後かは、はてさて分かりませんが。

・ エリス・レインウオーター

親世代オリキヤラ。3章にて初登場。幣原秋より3つ上の先輩。国籍は英国。レイブンクロー寮卒業生（監督生卒）。ライ・シユレディンガーとは友人、フランク・ロングボトム、アリス・ロングボトムとは友人兼閨祓い同期。幣原秋の閨祓い直属の先輩。

心の底から可哀想な人。すげえいい人でしたが、いい人こそ早く死にます。

幣原と共に、闇祓いとして戦場を駆けてくれました。

「黒衣の天才の殺し方」で、幣原の心を折るためだけに殺された御仁。幣原の心がそれで大分折れたので、死んだ意味はあつたのかなあと。

学生時代の魔法魔術大会で幣原に負けましたが、本来ならこの人もかなりスペック高い人です。だから主人公のスペックが高過ぎるとこうなるんだって！

・パトリック・リオン

・マーク・ヴィツガー

幣原秋の闇祓い訓練生時代の同期。

なんだかんだでいい人たちでしたが、二人とも死んじゃいました。だからいい人ほど早く死ぬんだって。

秋が苗字を呼び捨てにする数少ない二人です。信頼感はきつとあつた。

彼らが秋を「幣原」と苗字呼びするのが、個人的にとてもしきめきます。短い間だったけれど思い入れの強い二人です。

・ウイル・ダーク

・レオン・スミツク

アキとアリスの同室の友人。レイブンクロー生。

共に書きましようか。初めて名前が出たのは、ウイルは賢者の石編

で、レーンは秘密の部屋編です。

あまり目立つ場所ではい wasn't でしたが、ちらちらと時折名前が出ていました。

ウィルは一人称が「俺」で少々アホな元気っ子。魔法薬学が得意です。

レーンは一人称が「僕」で穏やかな子。両親がマグルで、レイブンクローにバスケットボールの面白さを広めたのは彼でした。

・ファイアン・エンクローチエ

幣原秋の同級生。レイブンクロー生。

幣原秋の異常性に一番早く気がついたのは恐らく彼です。勘が恐ろしく良かったのでしよう。それが仇となりましたが。

虐めっ子という悪い印象を与えてしまった子ですが、しかし幣原があそこで虐められず自分の才能を「危ないもの」だと認識していなかった場合を考えると無茶苦茶恐ろしいので、ああして虐めさせた次第です。でも虐めはダメ、ゼツタイ。

アキエンド後でもきつと幣原秋とは同寮の同級生となりますが、果たしてどうなるでしょうね。相性は最悪だと思いますが。

・幣原直

幣原秋の父親。日本魔法界有数の家系「幣原家」先代当主。トム・リドルの親友。『デウス・エクス・マキナ』の書き手。ヴォルデモートに追い詰められ、自死。

死んだ後にスポットライトが当てられたお方でした。お父さんがこんなに重要な人だっと思ってなかったでしょう？

直の父親は次男でしたので、本来ならば幣原の当主は直の従兄弟に行くはずですが、直の才があまりにも際立ちすぎたためにホグワーツに飛ばされたりその癖当主にさせられたり。いろいろ幣原本家には思うところがあつたため、本家や親戚とはすっぱり断絶して、ど田舎で家族三人で細々と暮らしていました。

発明家気質で、いろんなものを作っていました。『デウス・エクス・マキナ』もその一つ。学生時代にトムと「時間巻き戻せたら面白いよね」と言つた本当に何気ない言葉を実現させてしまった人でした。

彼自体は『デウス・エクス・マキナ』を使いはしませんでした。しかし手放すことが出来なかったあたり、ある程度のことには察してください。さい。

ホグワーツではハッフルパフ生です。どうしてリドルと親友になつたのかという理由としては「あそこまで僕を丸ごと肯定した人間は初めてだから（byトム・リドル談）」。下手するとリドルに絡め取られて闇側に落ちていました。落ちて尚、リドルの全てを肯定し、地獄への歩みを共に進んでくれる存在でもありました。そんな彼だからこそ、リドルは直が死んでからもずっと執着しました。

トム・リドルの裏をかいいた人物でもあります。「僕の勝ちだ、トム」の台詞はお気に入りに入り。トム・リドルが初めて誰かに「負けた」瞬間。

・幣原アキナ

幣原秋の母親。ヴォルデモートに追い詰められ、自死。

いろんな人から「変人」「変な人」と称される人。美人さんなんですけどね。いつもニコニコしていて、心の奥にしっかりとした芯を持っている人。

母親の愛情というものに初めて触れたセブルスがぐらついた人でもあります。恋、というほどではないけれど、セブルスの心にずっと残った人でもあり、だからこそ「闇の帝王が秋の両親を殺した」と聞いて動揺しました。

ホグワーツではグリフィンボール生でした。学生時代は、直を巡ってリドルと水面下で争っていたのだと思います。

・幣原梓

幣原直の弟。幣原家先代当主。

「一見無害、中身狂人」の典型例。綺麗に狂人になりました。じわりじわりと雰囲気侵す狂気を無自覚に振りまく人。

一応ブラコン……なのですが。大分アレな人なもので、あんまりそんな感じがしませんね。

登場した回数は無茶苦茶少ないのですが、なんだかとんでもない存在感を振りまいた人でした。

直が書いた『デウス・エクス・マキナ』をヴォルデモートからも隠し通すことに成功した人。日本魔法界が死喰い人集団から受けた傷により、梓さん自体は多分死の秘宝編終了前後くらいに亡くなっているのではないのかな、とは思っています。

・幣原桜

幣原梓の息子。幣原家当主。

秋の従兄弟に当たる人です。現在『魔法処』にて校長業務に携わっ

ています。幣原家の当主でもある。

秋が下の方で黒髪を括っているのに対し、桜は上の方で括らせました。存在感も殺気もない静かな人です。暗殺業務に向いてる、きっと。

娘に「蘭」ちゃんがあります。黒髪ツインテール。幣原家の一族はきっと男子も女子も髪が綺麗だ。秋の髪質は幣原家から受け継がれたのだという本当に密かな設定が。

「ぼくがいない世界」After ep「心の底から幸せに」

「ゲームをしよう」と言ったのは、一体誰だったか。

兎にも角にも、ぼくら——ぼくとハリー、ロン、そしてアリスは、ゲームをすることになった。

場所は、聖マングにあるぼくの病室。ここでの入院生活も、もう二ヶ月になる。幣原秋がぼくの中から消え、使い物にならない左腕をさっぱり切り落とし、今はもっぱら体力の回復と傷の治りを待っている状態だ。

ぼくの体調が安定したら、義手を嵌める手術をするらしい。そこそ魔法でちんぷいぷい☆と出来ないものかと思ったが、出来ないものに文句を言っても仕方がないだろう。なによりライ先輩にも「無理だ」と断言されてしまった以上、どうしようも出来ない。医学関連にはあまり興味が湧かないのだ。

それから「どうして魔法では出来ないのか」を医学的様々な観点においてライ先輩から滔々と講義を受け（全く、学者に向いている人だよ、それすなわち教育者には向いていないという意味でね）クタクタになったのがつい先日。二度と医者には逆らわないと感じたものだ。そもそも、あまりお世話になりたいものではない。

それはともかく、話を戻して。

「ゲームって、一体何をするのさ」

そう尋ねたぼくに対し、ハリーは無言でどこからともなくトランプを出すと、慣れた手つきでカードを切り始めた。

「ポーカーはどうか。……もちろん」

ハリーはにっこりと微笑んだが、後ろに般若が見えた気がして一瞬身震いをした。

何だ、今のは。気のせいかな？

「当然、最下位には罰ゲームがあるからね」



ぼくは、ゲームが苦手ではない。

レイブンクロー以外の寮生からは「得意そうなのに」とか言われるけれど、チエスではアリスやロンに勝てた試しがないし、同室組で夜の空き時間によくゲームをやったりするのだが、あれがまた……なかなかエゲツない。レイブンクロー生特有の底意地の悪さというか、悪賢さというか、他寮生には見せられないレベルの腹黒い探り合いが行われるのだ。

もつともぼくだって負け通しではない。嘘をつくのは大得意だし、負けず嫌いも相まってそれはもう、智略謀略策略はかりごと、裏切り同盟潰し合いエトセトラなんでもござれ……何度枕が飛んで来て、こちらも何度枕を同室メンバーにぶん投げたことか。

枕であるというあたり、ぼくらの優しさを汲み取って欲しいものだ。無理だろうけれど。

ともあれ。

ハリーが淀みのない手つきでカードをシャッフルし、ぼくらに配ってゆく。五枚手元に揃った時点で、それぞれ手に取った。片手、しかも利き腕ではないため少し苦労しながらもカードを内に向ける。

ぼくの手札は、配られた時点でKのワンペアが既に揃っていた。悪くない手札だ。そのまま机に伏せ、順番を待つ。

「ビッド」

右隣のハリーが宣言しながら場にチップを出した。まあ、まずは様子を見よう。

「コール」

同数のチップを出した。

序盤であるため、淡々とゲームは進んで行く。

誰もドロップすることなく一巡し、ハリーが手札を二枚替えた。

ぼくの順番が回ってきて、こちらも二枚を場に捨てると、新しい二枚を手に取り、伏せていた全てのカードを開く。新規にKがもう一枚手元に来ていて、腹の中でよし、と頷いた。Kのスリーカードとは、な

かなかない手札なのではないか。

「ドロップ」

一巡したハリーが呟いた。手札を伏せる。

「コール」

一巡し、手札を開いた。結構自信はあったのだが、結果はロンが7のフォーカードで一人勝ち。

いや、これは勝てないよ、仕方がない。

「運が良かったんだね」

ロンは勝ったというのに控えめなコメントをして、それから二戦目に移った。

粛々とゲームは進む。

「ちよつとー」

ぼくが大声を出したことで、ゲームが止まった。

テーブルを右の拳で叩く。反動で、伏せていたカードが軽く飛び上がった。

「仕組んでるでしょ、君らー！」

「そんなことないよー」

ハリーが笑顔で言う。見慣れた笑顔すら胡散臭い。

「仕組んでないんだったら、一体どうしてこうも強い手が頻出するのさ！ 絶対フォールスカットだ、ディーラーの交代を要求する！」

ハリーは肩を竦めると、カードを素直にアリスに手渡した。

アリスは軽くカードを切りながら「疑い深い奴だな、ったく」と軽く笑い、カードを配る。

「お前の運が悪かった、つてことじゃねーの？」

結果を先に言おうと、ぼくは負けた。ボロ負けした。完膚なきまでに負けた。

今までこんな手応えのない勝負をしたことがない、それほどまでに何もさせてもらえずに終わってしまった。手に入れたチップを積み上げ数える必要さえない。

「そういうことしておくよ。さあ、罰ゲームは一体何？」

今回のゲームの勝者、ハリーに尋ねる。

ハリーは少し考える素振りをして、そうだ、とばかりに口元を吊り上げた。一枚のカードを取り出すと、ぼくに差し出す。

「このカードに書かれた指示に従ってね」

そのカードを受け取りながら、ああ、やっぱりさっきのポーカー、イカサマがおおっぴらにまかり通っていたのだなということを、ぼくは確信したのだった。



ぼくに手渡されたカードに書かれていた内容は「指定された場所に行き、花を受け取ること」だった。あらゆる場所にいるんな人が、花を持ってそこにいるらしい。その花を受け取るだけかと聞いたら、少し違うのだという。

「君はその花を受け取るために、花を持っている人からそれぞれ一つ『命令』を聞かなきゃいけないよ。花は全部で二十人が持っている。全部集めることが、今回の罰ゲーム」

ハリーは物凄く楽しそうだった。ぼくとしては不本意だ。やけに手が込んでいるな、という印象を持った。わざわざそんなに沢山人手を集めてぼくに罰ゲームをさせる意味って、一体何だろう。

まあ、考えていても仕方がない。病室を出て、てくてく歩いた。

まず指定された場所は、聖マンガ四階のラウンジ。そこにいた人物に、目を瞠った。

「ウィル、レイン！」

よ、とばかりに二人はぼくに手を振った。それぞれ一輪の花を、白い紙に包んで持っている。

ホグワーツのレイブンクロー男子寮で、七年間ずっと同室であったウィル・ダークとレイン・スミツク。卒業して、この二人は確か就職も決まっていたんじゃないのか。今頃は用意に追われていると、てつきりそう思っていたのに。

「久しぶり、アキ。なんだ、意外と元気そう」

「何で少し残念そうなの。ぼくが元気じゃ悪い？」

「正直なところ、もう少し静かな方がありがたいかな」

「何をっ！」

怒ってみせるも、全ては戯れだ。意味のない会話の応酬。

他愛もない会話を、いつだってしていったっけ。

「……で。そうだ、ぼくは君ら二人から『命令』聞かなくっちゃいけないだっけ。さあさあ一体何だい何だと言うのだい。覚悟は決めているから早く言ってよね」

七年間ずっと同室だったのだ、気心は知れている。同時に、腹の中がどんなにどす黒いかも。どんな命令が来たところで驚くものか。

「んー、普段だったら、折角だから十七歳のいたいけな男子であるアキにミニスカメイド服でも着せて歩き回らせたいところなんだけどね」

レーンが笑顔でさらりと言う。その言葉に顔を引きつらせた。脳みそのどこの部分をどう捻ればそんなエゲツない罰ゲームを思いつくのだろう、理解に苦しむ。

見た目十七歳（実年齢ピー歳）の男がミニスカメイドとか、もうそれは兵器だろ。魔法警察の出勤待ったなし、先生病院で不審者が！レベルだろ。

「でも、今日は少し違うから」

と、本をそれぞれ一冊ずつ手渡された。

「廃品回収。よろしくね」

「い……いいけど、それだけ？」

「そっ。処理、任せたからな」

それじゃあね、と、ウィルとレーンは手を振りながらラウンジを出て行った。右手が塞がっているため、こちらは手を振れずにただ見送る。

ふと視線を本の表紙に落として、思わず口を開けた。

「ちよっ、これ、嘘、四十年前に絶版になったラテン呪文学の超レア本じゃないっ、一体どこで手に……っ！」

慌ててぼくも二人の後を追ったが、既に姿はない。混乱しながらも、テーブルの上に無造作に置かれた花を抱える。

すると包み紙の間から、するりと一枚のカードが零れ出てきた。



次に向かった先は、聖マンゴの食堂だった。

身分証を見せ中に入ると（食事制限のある患者さんが潜り込まないための処置らしい。そう言われれば納得だ）、奥のテーブルで手を振っているのは、久しぶりに見た三人組。

「遅いぞ、アキ！」

「コラコラ、言葉遣いには気をつけたまえよ、全く」

「そうだぞ。何せこの方は世界の殿下様、先のホグワーツの戦いで影の功労者、アキ・ポッター様であらせられるからな！」

「何言ってるのか。おい、アキ、逃げるなよ他人のフリしたい気持ちには分かるけどさ！ ほらそこに座れって！」

フレッドとジョージ、リーの姿を認め瞬時に背を向けたぼくに対し、声が追い続ける。

ため息をついて足を戻した。まあ今のはお遊びのポーズだ、本気で逃げる気はない。

「何してるの」

『何してんの』じゃないぞ。もう忘れたのか？ メイレイ、だよ」

「ああ……命令ね……」

テーブルの横に置かれた紙袋には、確かに花束が三つ入っていた。頭を掻きながらも、四人掛けのテーブルの空いている席に腰掛ける。

「で、命令って、何」

「わー、すごい警戒してる。そりやそうだけど」

「なんて酷い！ 俺たちはただの善意の塊に過ぎないのに、どうしてそんな目で見られなければならないのか！」

「アキ、ああアキ！ あなたはどうしてアキなんだ！」

「知るかつ！ 二代目悪戯仕掛人に対して警戒するなって方が間違っているでしょ、初代の悪戯仕掛人にはぼくはファーストキスを……」

あつ、ヤバイ、口が滑った。

運良く聞き逃してくれてはいないかなーと思ったけれど、基本的に

ぼくは運が悪い。

「ほお？ んんん？ 何何、お兄さんよく聞こえなかったなあ」

「違うぞ相棒、その煽りじゃアキは逃げちまう。初代悪戯仕掛人と言えば、ハリーのおっとさんたちのことだよなあ。さて、アキ。詳しく話を聞かせてもらおうか」

「お前ら止めてやれって、アキが可哀想だろ」

全く本当に、たびたびリーの優しさに救われる。

リーはそのまま、隣を通りがかった店員さん呼び止めると「すいません、デザートメニュー上から下まで全部ください、と、後は紅茶のポットも四人分」と注文をした。店員のお姉さんは可愛らしい笑顔で頷くと、パタパタとキッチンに向かう。……って、え、待つて待つて。

「え、デザートメニュー上から下まで!？」

「お、アキ、耳聴いな」

「普通だよ！」

「じゃあ俺たちがさっきの言葉に興味持ったのも普通だな？」

「う……」

そう言われると弱い。

「……ところで君ら、仕事はいいのかよ。WWW の評判は聞いているよ、上々だそうじゃない。若きやり手さんは昼も夜もなく働き詰めかと思っていたんだけどね」

「ご安心なされよ、殿下」

双子の片方が誇らしげに胸を張る。もう片方が補足した。

「従業員を雇ったのさ。それくらいの給料を出す余裕は出来たからな。店を切り盛りしてくれる人を雇ったから、俺たちは研究に専念出来るって訳」

「まあ市場調査の言い訳で、ちよいちよい店員としても働いているけどな。お客さんが俺たちの作ったものを見て目を輝かせてくれるのは、何にせよ嬉しいものさ。その反応が見たくって」

「ああ、なんか分かるかも」

そうぐだぐだと喋っているうちに、店員さんがトレイを手に近付い

てきた。挨拶の口上と共に、にこやかな笑みでトレイいっぱい食材をテーブルに並べ出す。紅茶の大きなポットに四つのカップとソーサー、砂糖、そしてケーキを四つ。お姉さんが消えると、すぐさま違うお姉さんがこちらにもトレイをいっぱいにさせてやって来てテーブルに並べる。

最初は歓声を上げていたぼくらだったが（甘いものは好きだからね）、入れ替わり立ち替わりやって来るお姉さんがのべ八回を超えたところで、少し不穏さが増してきた。テーブルの上には既に、乗り切れないほどの甘いものが積まれている。

「さあ、アキ。これが俺たちの『命令』だ」

リーはにっこりと笑って言った。

「これ全部、ちゃあんと食べ切ってくれよな」



甘いものは好きだ。

しかし、限度というものがある。

「うう……」

重たい胃を抱えてよろめきながらも、最後に双子の片方——多分ジョージ——かな？ から受け取ったカードを見る。

長期病棟患者が集うヤヌス・シツキー病棟前の中庭に來い、と書かれたカードの右下には、青いクレヨンで星のマークが描かれていた。それだけで、なんとなしに誰がこの先にいるのかを把握する。

「おねえちゃん、おそいよー！」

「お兄ちゃんだって言ってるでしょー！」

中庭でぼくを待っていたのは、二人の少女。それぞれアリシア、エルと名乗る子達で、たびたびぼくを振り回すのが得意な子供らだ。アリシアは花束を、エルは柔らかな素材で出来たボールを持っている。

そのすぐ後ろには、ライ・シュレディンガー先輩。あまり表情が動かないため読み取り辛いのが、穏やかな顔でぼくを見ていた。

と、アリシアとエルがわつとぼくにまとわりつく。

「おねえちゃん、遊ぼう！」

「おねえちゃんが鬼だからね！」

「いいけど一体何をするの？　ってかぼくは『おねえちゃん』じゃなくって『おにいちゃん』だって！」

しかしアリシアもエルも聞く耳を持たない。ぼくの右手をそれぞれ掴むと「かくれんぼ！」「鬼ごっこ！」とそれぞれ別の提案をする。「せめて統一してくれよ！」

ぼくの声に、アリシアとエルは顔を見合わせる。

じゃんけんに勝ったアリシアの「鬼ごっこ」を数十分ほどして、ぼくはようやくと解放された。

「ありがとう、おねえちゃん」

そう笑顔で言うアリシアの顔が、ふと曇る。

「もうすぐ、いなくなっちゃう？」

「……あー、えっと」

確かに、長期入院患者であるアリシアやエルと違って、ぼくは義手を繋いでしばらくリハビリすれば退院だ。何と答えようか、ライ先輩を見上げると、彼は静かにアリシアとエルに対して「そうだ」とすぐさま肯定した。

少し驚いた、もう少し、その……何だろう、誤魔化しや嘘が滲むと、そう思っていたから。

悲しがると思っていたアリシアとエルの反応は、しかし意外と淡泊であっさりとしたものだった。

「なんだあ。おねえちゃん、だまっていなくならないでね？」

「ちゃんとおわかれしていつてね」

「う、うん……」

予想と違う反応に、ライ先輩を見た。

ライ先輩は小さく息を吐くと「この子達は『お別れ』を沢山見てきたからな」と零す。ああ、そうか。そういうことか。

「この子たちを憐れむなよ。全ては自然の摂理だ」

「……神に逆らおうとするのが、研究者でしょう」

ライ先輩は少し目を瞞ったが、やがて柔らかに微笑んで「……そう

かもしれないな」と呟いた。

「はい、おねえちゃん」

アリシアから花を受け取る。え、ぼくはまだ命令を受けていないのに。そう思つて口を開き掛け、アリシアの笑顔に気がついた。

「あそんでくれて、ありがとう」



次の行き先は、病院一階の面会室。

そこで佇む人物はちよつと予想外で、思わず目を瞠った。

「ライフー」

手元の文庫本に目を落としていたライフ・フィスナーは、ぼくの声に顔を上げると、その端正な顔に微笑みを刻んだ。手元の本をパタンと閉じ、背中を預けていた壁から身を起こすと、こちらに寄つて来る。

ライフの動きにつられてか何人かの女性がこちらに視線を動かした。相変わらず、人目を惹く容姿だ。しかし再婚を彼は望むまい。どちらにせよ、ライフが幸せであればそれでいいのだ。

「やあ、アキ。久しぶりだね。元気？」

「元気だよ。さつきも鬼ごっこに付き合ってきたばかりだ」

「お疲れ様、と声を掛けてあげよう。元気そうで何よりだ」

痛ましげな眼差しで、ライフはぼくの、今はない左腕を見た。ぼくに何と声を掛ければいいのか、一瞬迷ったようだ。全く、彼は幾つになつても優しい。

「義手を嵌める手術をして、問題なく動くようになれば退院さ。実はねえ、今フリットウィック先生から、呪文学教師の席を勧められているんだ。もういい年だからそろそろ引退したいんだって。ホグワーツで働き出したら、また連絡するよ」

ライフは少しホツとした顔をして、ぼくの出した話題に乗った。

「そうか、君らしいな。実際のところ君は、闇祓いよりもそういう教育や研究に適性があると思つていたんだ」

「同じことをライ先輩にも言われたよ」

「ライ先輩？ ああそうか、彼もこの病院にいるんだね」

「本当は研究所に所属している人なんだけどね、ちよいちよい様子を見に来てくれているよ。義手の話を持ってきてくれたのもあの人だ」
「そうか、少し挨拶でも出来ればいいんだけど」

「願えば来るよ。あの人はそういう人だ」

ぼくの言葉にリーフはきよとんと目を瞬かせた。

ぼくは多くは語らずに笑ってみせる。

「ところで、君も持っているんでしょ、花。と、命令。さ、今回の命令は何？ 忙しい中よく来てくれたねえ、ぼくの罰ゲームなんかのために」

『なんか』じゃないよ」

今度はぼくが目を瞬かせる番だった。リーフはくすりと微笑むと、ぼくをテーブルに促す。

テーブルを挟んで対面する椅子に腰掛けると、リーフが杖を振った。瞬時に『出現』したのは、チェス盤だ。

『君』とは初めてだね。……久しぶりに、一試合やろうよ」



負かして『命令』完了とは、本当にそれでいいのだろうか。

まあ、リーフがいいというのならば、いいのだろう、それで。

しかし、息子のアリスはぼくに勝ち星を譲ってくれないほど強いのに、その父親であるリーフはぼくより弱いとは、つくづくこの親子、全く似ていない。性格も含めて。似ているのは見た目くらいなのかもしれない。

はてさて、まだまだ指令は終わらない。受け取ったカードに書かれた次の場所は、なんと学校、ホグワーツだった。

まあ、聖マングォからホグワーツへは直通の暖炉がある。手続きを踏むのも慣れたものだ。数枚の書類にサインをし、受付のお姉さんも「ああ、また君ね」みたいに慣れた応対をして、フルーパウダーをぼくに渡す。

正直煙突飛行での移動は苦手なのだが、ホグワーツの結界の維持面を見るとそうも言ってはられない。箒よりも煙突飛行よりも、ぼくは『姿くらまし』の方が得意だ。しかしそう言うのは少数派なのだろうな、とも理解している。

『煙突飛行』にて訪れたホグワーツは、シンと静まり返っていた。既に夏休みに突入したからか。

少し前までは、戦禍に崩れた城の修復作業に結構な人数が残っていたのだが、あの戦いから二ヶ月が過ぎ、七月も終わろうとしている今となつては、戦いの跡もない。荘厳で綺麗な城が変わらず建っている。

指定された場所は『必要の部屋』だった。

足を踏み入れたそこは、えっと、何だろう……何と表現したらいいのだろう。クローゼット、それも女の子のクローゼットの中に迷い込んでしまったかのような錯覚を得た。

思わず部屋を間違えたかと踵を返しかけたぼくの腕を、ガシツと掴んで中に引きずり込む手。ジニーとルーナの姿があった。

「久しぶり、アキ」

「うん、久しぶりだね」

学校はもう夏休みだというのに、二人ともそれぞれ自寮のローブを羽織っていた。と、ジニーは「見て見て」と誇らしげに胸を張り、エンブレムの隣に煌めくバッジを見せつけた。

「ほら、主席バッジ！ どうぞ、凄いでしょ！」

「わあ凄い！ おめでと、頑張ったんだね！」

拍手でもしたい気分だったが、生憎と片腕しかないため叶わない。そうか、この二人ももう最終学年、七年生なのか。すっかり感覚を失っていた。

「ふっふん、一切主席を誇りもしなかったアキに褒められてもあんまり嬉しくないんだけどね」

「言っていることと顔が一致していないよ、ジニー」

やだ、とジニーは両手を頬に当てた。その様が可愛らしくて、思わずこちらにも穏やかな気分になる。

同時に、ジニーと同じような赤毛の『彼女』のことをふと想起した。くるくると変わる表情を浮かべていた彼女も、そういえば主席だったのだ。今のジニーと同じように、幣原秋に対して主席バッジを誇って……しかし『彼女』とジニーは、いくら似ていても絶対に重ならないのだった。

「あのねえ、アキ」

ふと、のんびりとした声が耳に入る。少し浮世離れた響きを持つたその声の主は、ルーナだった。

「ホグワーツの先生になるんでしょ？ フリットウィック先生が、言ってたよお」

「え、嘘、もう広まってるの？」

ルーナはくすくすと笑いながら「そうだよ、知らないの？」と首を傾げる。知らないよ知るはずもないじゃない、と思わず頬が引きつった。

「だからさ、アキ」

こちらを吸い込むような瞳で、ルーナはぼくを見つめた。

「ちやあんと、帰ってきてね。あたしたちが、ホグワーツの生徒でいるうちに」

約束だよ、と微笑んで、ルーナは小指を出した。おずおずとその小指に自身の小指を絡める。

「……一体どこで知ったのさ、『指切り』なんて」

『ザ・クイブラー』に書いてあったよお。この約束を破ったら、えつと……千本の針を生きたまま血管に送り込まれるん……だっけ？」

「うわあ、想像するだけで痛い」

誤解を敢えて訂正せず、ぼくも笑った。ルーナは「はい」とぼくに花を渡す。

「え、命令……」

「今のが、命令。約束、破っちゃ針千本、だからね」

わあ、怖い。もしかしたら一番怖いかも。

花を受け取ると、今度はジニーがずいっと進み出てきた。

「今度はあたしの命令、聞いてね？ アキ」

「はいはい、分かっているよ。で、ジニーは一体何？」

「ふふつ、想像つかない？ アキも大概鈍いなあ！」

え、想像？ 思わず周囲を見渡した。手掛かりとなるのは、ドレッサーの中に様変わりしたような『必要の部屋』だけれど……。

ジニーは、そりやあもう満面の笑みでこう言ったのだ。

「アキって絶対、可愛いお洋服似合うと思うの」



「酷い目に遭った……」

だから肉体年齢十七歳精神年齢ピー歳の男が許される衣装ではないと何度言えば分かるのだろうか。そして女の子に服をひん剥かれる男の気持ちも、彼女たちには少し察して欲しいものだ。

鏡で見た自分の姿が、案外似合っていて普通に可愛いことがこれはまた……これはまた精神を削岩機でガリゴリ削られているような気分させられる。記憶の奥底に封じ込めてお札を貼っておかないと。さて。話を戻して。

次の目的地は、ホグワーツの大広間だった。

踏み入れたそこは、普段はみっちり生徒でわさわさしているというのに、流石に夏休みだからか人気はない。大広間は各寮のテーブルが取り払われ、代わりに決闘用の舞台が中央を走っている。

そこにいるハリーとロン、ハーマイオニーの姿を認め、ぼくは目を瞠ると駆け寄った。

「やあ、アキ」

「ハリーたち、どうして？」

「そりやあ、僕らだつて君に『命令』したっていいじゃないか」

ロンが笑った。まあそうだけど、と戸惑いながらも頷く。と、ハーマイオニーが口を開いた。キラキラした瞳でぼくの両手を取ると、笑いかける。

「そう言えば、あのね、アキ。私、来年もう一年だけ、ホグワーツにしようと思うの。ちゃんと卒業したくつて。もう一年しっかり勉強し

てから、社会に出たい」

「ハーマイオニーはもう十分に勉強してきたと思うけどね……」

まあ、彼女がそう言うのなら止める義理はない。

「ロンとハリーは、闇被いになるんだっけ？ 全く、よくやるよ」

「君はきつとそう言うと思った。でも、幣原が生きた時代と今の時代は違うからね。僕らは良い未来のために、生きることにするよ」

「君のやったことを否定は出来ないよ、ああ。あの頃はそれが『最善』だったんだろう。僕らも、僕らが思う『今の最善』を貫くことにした」

二人の笑顔に、ぼくも苦笑を返した。

「……はあ。ま、いいや。きつと何を言っても無駄なんだろうね。さて、そろそろ命令とやらを聞こうじゃない」

ハリーはちらりとロンとハーマイオニーを見遣ると、ぼくを取り囲む方向に足を踏み出した。身の危険を察知して、思わず一步下がる。ロンが口を開いた。

「じゃあこれ、僕とハーマイオニーからの命令ね。じっとしていて」

「そして、逃げないでね」

「えっ、ぼく今から何をされるの!?!」

たじろぐも、命令は命令だ。罰ゲームで逃げ出すような軟弱な男ではない。

硬派な男なら女の子に服剥かれて可愛らしいドレスなんて着せられないだろうと、そういうツツコミは全力で却下させてもらおう。

「いくよ？ セーのっ」

一体何が来るのだ、と思わず身を強張らせた。

と、途端に三人から一斉に抱きつかれる。息苦しさと重みに喘ぎながらも、感じるのは暖かさだった。

「今までありがとう、アキー！」



押し潰され、抱き潰され、やっどこさ解放されたぼくは思わず床に尻を付けた。

はあ、と息を吐くと、右手を差し出される。

「アキ」

ハリーのその手を取ると、ぐいっと引つ張り上げられた。立ち上がる。

「僕からの命令も、聞いてよね」

「……あー、そっか。今のはロンとハーマイオニーだったね……いいよ。何?」

ハリーは背後の舞台を親指で指し示すと、にっこりと笑った。

「決闘してくれないか、アキ」

「……、……ぼく、杖持っていないよ」

この前碎いてしまって、それからもずっとドタバタしていて、オリバンダーさんも監禁から解放されたばかりだったから見繕ってもらうのも難しくくて、ずっとなおざりにしていたのだ。

しかしハリーは動じなかった。

「杖なしで構わない。杖と利き腕がなしで、いいハンデじゃない。それとも何? 杖なしで戦って、僕に負けるのが怖いのか?」

「……よく言ったね。その言葉、違えないですよ」

望むところだ、とばかりに、ハリーはぼくの視線を受け止め、投げ返した。

壇に登る前に、右手の指を鳴らす。スニーカーの靴紐を魔法で硬く結び直すと、爪先で地面を叩いた。髪紐に手を触れ、乱れがないか確認する。

普段の目線より一メートルは高い壇上。そこから見る景色は、懐かしい。

対戦相手は、今日の前にいる彼でも、彼とよく似たその父親でも、なかったけれど。

「隠れていな。身の安全は保障しないよ」

ロンとハーマイオニーに向けて言うと、右腕を目線の高さまで上げた。ハリーもそれに倣う。

静かな緑の瞳を見て、ぼくは。

——ああ、魔法界の未来も安泰だ、なんて、そんな爺臭いことを考

えた。



次の行き先を見て、誰がそこで待っているのかを、ぼくはすぐさま理解した。

『あの小部屋で待っている』と書かれた文字は、乱暴な癖に幼い頃の高度な教育を垣間見るほど綺麗だ。

東の賢者の石像は、かつてと変わらずそこにいた。杖はないけれど、指でも代わりになるだろう。

息を吸い込むと、かつての合言葉を記憶の湖から引き上げる。

「寿限無寿限無五劫の摺り切れ海砂利水魚の水行末雲来末風来末食う寝る処に住む処藪ら柑子の藪柑子パイポパイポパイポのシューリンガンシューリンガンのグーリンダイグーリンダイのポンポッピーのポンポコナーの長久命の長助！ ……あー」

よく噛まずに言えたと自分を褒めてあげたいところだ。これ、噛んだら入れないんだよなあ。ピーターと、後は何でも器用にこなしてしまふ彼にしては意外なことに、ジェームズも苦手だったっけ。

「日本語発音は難しい！」と怒っていた。ならどうしてこんな合言葉にしたのかと問いたい。もう、無理なことだけだ。

石像が真つ二つに割ると、人一人が通れるほどの穴が開いた。

かつては随分と大きな穴だと思ったが、今見ると小さいものだ。そう背が高くないぼくだっけと思うのだ、中にいる彼らは特段だろう。

「……懐かしい、なあ」

埃が積もっているかと思っただが、そんなことはなかった。

先にここに訪れていた『彼ら』が掃除をしたのだろう。

彼ら——シリウス、リーマス、ピーターの三人の姿を見て、ぼくは目を細めた。

「よお、アキ。やっと来たか」

「うん……久しぶり」

万感の思いを込め、そう呟いた。



「待て待て待て！ リーマス早まるな！」

「落ち着いてリーマス！ 顔を上げてくれよぼく怒ってないから！」

「両手地面に付けないで、うわあ大の大人が額づくの見るのって結構エグいね！ 最近自分がちよいちよい土下座してたから人の土下座見る機会なかったけどさあ」

ぼくとシリウス、それにピーターは、ぼくを見るなり地面に這いつくばって頭を下げようとしたリーマスを引き止めるのにひと騒ぎした。

シリウスとピーター、二人の大人の男に両脇を抱えられているというのに、それにも負けない物凄い力だ。満月はもう過ぎたはずだけだなあ、と曆に思いを馳せる。

「もう、本当、君には申し訳ないことをしたと思って……君のことを一切考えていない言葉を、しかも意図的に、君が傷つくであろう言葉ばかりを吐き続けて、君の教師でもあったというのに、私は、僕は……」
「か、構わないから、リーマ……」

「これは『命令』だ！ 君は僕からの謝罪を受けるんだ、アキ！」
そう言われて竦んだ。シリウスとピーターも吞まれたように目を瞬かせる。

一拍の隙を逃すようなリーマスではない。日本式の謝罪の方法は、きつとぼくと、そして幣原秋に向けるためだ。このためだけにもしかして異文化を学んだのだろうか。

……なんて、少し思考を逸らしてみたりもしたが、現実ぼくの目の前にそろそろ四十に手が届こうとするかつての友人がぼくに対して土下座をしていることは事実な訳で、内心では結構焦っていたりもする。

かと言って謝罪を止めてはいけないと先ほど『命令』されたので、一体どうしていいやら困り果てているのが現状だ。命令を無視してリーマスの頭を引き上げるのも一つの手だが、彼はきつと納得するま

い。

「……ぼくはね、怒ってないよ、リーマス」

迷った末、リーマスの後頭部を見つめながらぼくは呟いた。

少し薄くなっただか、髪の毛は昔よりも細くなっただか……男として切なくも仕方のないことだ。ぼくは親戚と殆ど会ったことがないから、自分が脱毛の家系なのか分からないけれど、髪の毛の量はそう多い方じゃないから、少し心配ではある。『髪を縛る』という行為自体、頭皮にダメージを与えているとも聞かされた……いつそのことばっさり切ってしまうかなあ。

閑話休題。

「……怒ってないと言うか、全く動じなかったと言えば嘘だけども。酷いことされた自覚はあるんだ。でも多分、いつかは突きつけられる命題だった。ぼくは、君がちゃんとこうして突きつけてくれたことに、感謝をしたい」

屈み込む。リーマスの髪を右手で掴んで（ごめんよ毛髪）顔を上げさせた。

目を合わせ、微笑む。

「幣原として生きることとは出来ない。ぼくは君たちの友達ではない。たとえ記憶を持っていたとしたって、ぼくは幣原秋じゃない。……リーマスは決して、ぼくと幣原を同一視しなかった。幣原とぼくの関係を知りながら、ぼくはぼくだと見てくれた。それは、凄く嬉しかったんだ」

こうして今、ぼくがここにいるのは、かつてリーマスがぼくの全てを否定したからに他ならない。

「ぼくらだけだったら……ぼくと幣原だけだったら、決め切れなかった。どちらも、互いに生きて欲しいと強く望んでいたから。本当、変な奴だよ、幣原は。作り出した偽の人格にさ、使命埋め込んだだけの人形にさ……生きて欲しいと望むなんて。馬鹿だ。でも……」

思い出して、思わず笑った。

「アキ・ポッターが生きていることを、許してくれてありがとう、三人とも」



シリウスとリーマスの二人から花束を貰い、ぼくは次の目的地に向けて廊下を歩いていた。

ピーターは「さすがに僕は鳥澁がまし過ぎる」と、この役目を拒否したのだと言う。ぼくはあまり気にしていないのだが、ピーターがそう言っているのなら、無理は言えない。シリウスは「俺がこいつを見張っておくから、安心しろよな」と笑っていたっけ。

そんなシリウスがぼくに下した命令は「今度うちに来て書類整理を手伝え」というものだった。付け加えて、クリーチャーの食事は想像していたよりも美味で手放せない、君も一度食べてみるといい、なんて捻くれた台詞を吐いていた。未来の約束が、今から楽しみだ。

続いて指定されたのは、レイブンクローの談話室。

アリスだろうか？ と見当をつけていたのだが、その予想は三分の一しか正解していなかった。これが試験じゃ落第している。

こちらにもまたレイブンクロー談話室にいたのは、アリスとユーク、それにドラコの姿だった。

「……いや、さすがにドラコは予想出来ない」

何せ他察生なのだ。ドラコの姿を、なんだか久しぶりに見たような気がした。

最後に見たのは、確か……ホグワーツ最終決戦の時だ。その時も声を掛けられず仕舞いだった。この一年で随分と寡れた気がする、頬が瘦けた。きつと心労に依るものだろう。

「アキ」

ぼくを呼ぶ声も、何だか恐る恐るだ。まあ、ドラコには余計な気苦労を掛けた気もする。ヴォルデモートの隣にいた時、演技だとしてもちよつと手厳しく扱い過ぎた。

少し反省しながらも、普段通りの笑顔をドラコに向ける。

「久しぶり。怪我はない？ 〴〵両親も無事？」

「ああ……健在だ」

「そう、良かった」

胸を撫で下ろした。

死喰い人の犠牲者は、決して少なくはなかった。地に伏す死喰い人はあらかた顔を確認し、ドラコの両親がその中に混じっていないことは把握していたが、ぼくの知らないところで何かしらに巻き込まれていた可能性は否定出来ない。

ちらりとドラコは、申し訳なさそうにユークを見た。彼は先のホグワーツ決戦で、両親を失っていたからか。

しかしユークは気丈に振舞っていた。もう彼も六年生、背もぼくと変わらないほど伸びていた。入学当初のあどけなさは薄れ、少年から青年へと変わりつつある。名門当主としての矜持と自負がそうさせるのか、その立場に立ったことがないぼくには分からなかった。親族を束ねる立場には、ついぞ立つたことがない。

そんなユークは、ぼくに当てつけるようなため息と共にこんな台詞を吐いた。

「アキ・ポッターから授業を教わるとか絶対嫌なんですけど……」

「おい」

なんだか色々と脱力する。『変わらない』とでも言えばいいのだろうか。

相変わらず、この子には始めから嫌われている。

ユークは灰色の瞳を軽く細めてぼくを見た。

「だってそうでしょう。遣り辛いことこの上ないし。あなた呪文学の成績自体は優秀でしたけど、果たしてそれは後輩を教え導く種類のものなんですかね？ 教育なんて簡単なものじゃないですよ。教師にとって生徒なんて十把一絡げの存在かもしれませんが、僕らは個々人に未来のある存在なんです。分かっていますか？」

「き、厳しいな……」

「ええ、厳しいです。でも、当たり前のことだと思えます。僕らの未来を左右する、それほど大きな責任が発生する職業ですよ、教師なんて。

……あなたは官僚になるのかと、思っていました」

思ってもいない言葉に驚いた。

だってそうでしょう、とユークは鼻を鳴らす。

「去年あなたがどれだけ色んなことをやって来たのか、レイブンクロー生である僕は知っているつもりです。理解しているつもりです。その功績全て他人に投げ渡して、そんな、無責任ですよ」

「……ふふ、ありがとう、ユーク」

褒めてませんけど、とユークがぼくを睨む。

姉と同じ灰色の瞳を見返して、笑った。

「君から認められているのはなんだか嬉しいんだけど、魔法省だってそんな脆弱じゃないさ。一度初速を与えてやれば、最初はゆっくりおぼずおぼずとでも、段々と安定して走れるようになる。ぼくがやったのは、車体とタイヤを整備して、背中蹴飛ばしただけだよ。未来は他の人が紡いでくれる。——そうだろ、アリス？」

「なんだ、忘れられてるのかと思った」

「おや、期待に添えず申し訳ないね」

アリスはくつくつと笑って、ユークの頭をぐしゃぐしゃと掻き混ぜた。

ユークは唇を尖らせたが、それでも少し嬉しそうにアリスを見上げる。なんだこの対応の差は。涙が出そうだね。

「表舞台にお前の名は一切登場しない。親父に、忌々しいガマガエルに、その他有能な俊英才媛に、全てを割り振った。何というかさ……全てお前の手のひらの上で転がされてる気分だよ」

「心地よいかい？」

「馬鹿言え、腹立たしいわ。……見てろよ、お前の業績全て、俺の名前で塗り替えてやるから」

「だから、ぼくの名前で通した法案は一つもない筈なんだけどねえ。

……君がそういうのなら、安心するよ」

アリスなら、きつと大丈夫だ。それだけの信頼を、ぼくは彼に置いている。

認めるのはなんだか、少々気恥ずかしいけれど。

「で、そうだ、命令だよ。忘れるところだった」

そう、ぼくはその命令を受けに来たんだった。ああ、とアリスやドラコも思い出したように宙に瞳を彷徨わせる。

ドラコは頤に手を当て悩んでいたが、やがて口を開いた。

「……あいつの言に従うのは、未だに気に食わないが」

「ん？」

あいつって、誰のことだ？ 思わず首を捻り掛けるも、ドラコが続きを言う方が早かった。

「幸せになってくれ。それが、僕から君への『命令』だ」

思わずポカンと口を開けた。

ドラコをじつと見つめると、彼の青白い頬に段々と赤みが差していき、やがて頭を抱えてしまった。

「あーっ、もう、あまり恥ずかしいことを言わせるな！ そんな分切り切ったことを言わせるんじゃない、というか君は今まで自分の幸せを蔑ろにし過ぎなんだよ少しは対価を受け取りたまえ！」

普段の彼とは口調が大分違うその様にぼくは仰天したが、アリスとユークは流石幼馴染、予想していたとばかりに笑っている。

「返事は！」

「は、はい！」

「よし！」

いいか絶対だぞ、とドラコは念を押す。唾然呆然としていたぼくだが、状況を脳が理解して思わず吹き出した。

笑い声を上げるぼくに比例するように、ドラコの顔が苦味を増して行く。

「じゃあ、次は僕ですよ」

そう言つて歩み寄ってきたのは、ユークだった。

思わず身構える。一体どんな命令をされるのだろうか。

ユークはぼくに対して手を突き出すと（行儀の悪い仕草にドラコとアリスの双方から咎める視線を向けられていたが気にもしていないようだ）、淡々とした声で言った。

「ホグワーツのローブ、ください」

「……え？」

「鈍いですね。あなたが着ていたローブをくださいと言っているんです。もう用済みでしょう」

「いや、まあそうだけど……でも、なんで？　ローブ買うお金くらいあるでしょ……」

言い淀むぼくに、ユークは苛立ったように地面を踏み鳴らした。

「ああ、もう！　これは『命令』ですつ、僕の言葉にごちやごちや言うことは禁じます！」

さあ早く、と怒ったように言うユークは、子猫が毛を逆立て威嚇しているかのようで、なんだか可愛らしい。

しかし、そんなことを言ったら余計に怒ることは目に見えていた。大人しく呼び寄せ呪文で仕舞っていたローブを呼び寄せ、検分する。血染めのエゲツない状態だったので一応綺麗にはしたのだけれど（正確には担ぎ込まれた先の聖マンゴの職員さんがクリーニングしてくれた、だ。ありがたい、魔法使いの血は単体でも魔力を秘めているから消失呪文じゃ拭えないというのに）それでも確認のためだ。

と、ユークはぼくの手からローブを奪い取ると、さっさと羽織ってしまった。今は夏だから、ローブなんて着たら暑いだろうに。ユークは、丈の長さを確認するようにその場でくるりと一周すると、軽く鼻を鳴らした。

「……丈が変わらない」

「ま、そりゃあ背丈もそう変わりがなし……？」

それでもユークは不満そうだ。

と、アリスは何かを理解したのか、いきなり笑い始めた。なんなんだ一体もう。

「で、アリスは？　なんか何となく色々と読めてきた感じなんだけど」
何でかはよく分からないけれど、皆ぼくを甘やかしたりなんたりしなかったのだろう。

もつとも、その好意を素直に受け取るべくじゃない。だからこそ贈り手も、捻くれた手段を使ったのだ。

アリスはぼくの言葉を受け、ニヤツと笑ってみせた。

「お、そっか。んじゃ、俺が今からやろうとしていることも、予想ついでるってことか？」

「まあね」

アリスだったら……何だろう、何をするだろう。

一番考えられるのは贈り物系統だろうか。値段を聞いたら飛び上がるようなものを渡しながら「拒否するなよ」みたいな……？ アリスのことだから実用性の高いものだろう。となると箒、大鍋、稀少本か？ そうつらつら考える。悪くはない線だろう。

「なら、俺の予想当てたら十ガリオンやるよ」

「……太っ腹だね。それほど自信があるの？」

「そういう訳じゃねえけど、お前杖新しく買わないといけないんじゃないっけか。そのくらい奢ってやるよって言ってるんだ」

「素直じゃないなあ」

それでも思考に少し修正を掛ける。アリスがそこまで言うということは、ぼくの意表を突いてくるようなものだということだ。しかも結構な自信がある。

ああクソ、ぼくは嘘は得意だけど他人の策略を見抜くような勘の良さは持ち合わせちゃいないんだ。幣原の頃から鈍い鈍いと言われ続けてきたし、改善される雰囲気も一切ないし。

「じゃあいいか。予想外してビビったらちゃんと言えよ」

「分かった分かった」

ということは、予想を口に出して事前に言わなくてもいいということか。それなら例え予想外だったって顔に出さずにシレッツとしていればそれで済むのだ。なんだ、アリスも中々甘いなあ。

ドラコとユークの顔を見ると、なんだろう、生温い目と言うか、何かを悟ったような瞳をしていた。

どうということなのだろう、と首を傾げるも、視界が黒に覆われる方が早かった。次いでいきなり身体が持ち上がる。

「……………っ!？」

悲鳴を上げなかったのは、堪えたとかそういうことじゃない。単に呼吸のタイミングの問題だ。息を吸う時にアクションを起こされ、タイミングを見失った。

ぼくの身体を空中に浮かしたまま、アリスはぼくを強く強く抱き締める。左肩の傷口には触らないように、腕の位置は慎重に探っている

のが分かった。

「……俺がさ、どれだけの思いでいたか、お前、分かるか？」

押し殺したそんな声が、すぐ近くで聞こえた。

吐息交じりのその声は、微かに震えも混じっている。

「俺が、そこまで薄情な奴に見えるかよ」

見えない。決して、そんなことを思えはしない。

ぼくは、何も言えなかった。

「お前が生きているってだけで、救われる奴もいるんだ……お前が誰かを救いたいと思うように、誰かだってお前を救いたいって、そう思ってたんだよ」

そう言ってアリスは軽く鼻を睨った。

ぼくは少し苦勞しながらも、アリスのホールドから右腕を引き抜くと、そつと彼の頭を抱き寄せる。金色の柔らかな髪の中に、指を通した。

アリスとこんな触れ合いをしたのは、初めてだった。抱き合うことも、顔を近付け笑い合うことも、アリスは嫌うから。密で過度なスキンシップを、アリスは遠ざける氣質があったから。

「ごめん……ごめん」

静かに呟いた。

「何度謝っても、謝り足りないんだろうけど……本当に。本当に、ごめんなさい」

アリスの頭に触れたまま、手の甲に瞼を押し当てた。

涙が零れてしまう前に、抑え込む。

「いつも、君はぼくを心配してくれていたのに。気付けなくって、ごめんなさい……心配ばかり掛けて、ぼくは、本当に……」

ふと、背中を撫でられた。柔らかで暖かな手だった。

それがどちらの手なのか、振り返って確認することは、ちよつと出来そうになかった。



目元が少し引き攣れた感覚を覚えるけれど、鏡でぼつちり確認したから、きつと大丈夫だ。いつも通りのアキ・ポッターで、人と会える。次の行き先は、クイディッチ競技場だった。一体誰が待っているんだ？ と首を傾げる。

「ご丁寧に「箒を持つてくること！」と書いてあったので、学校の箒置き場から一本拝借してきた。古いが言うことは聞いてくれるのだ。ぼくの魔力に、箒も『逆らったら木っ端微塵にされる』と感じているのかもしれない。

木っ端微塵にする気はないけれど、ぼくが願えば一瞬で木屑には変えられるからね、程度のこととは思いながら、箒を御すのがコツだと思っている。もつとも、そんなこと考えているのはぼくだけかもしれないが。

しかし、久しぶりに箒に乗った。一年以上振りだろうか。

そもそもぼくはクイディッチ選手じゃないから、そうそう乗る機会はないんだ。しかも片腕だから、少々危なっかしい運転になるのは仕方がない。

始めはよたよたしていたが、競技場に着く頃まではなんとか普通に飛べるレベルまで勘を戻した。本当は、校舎からクイディッチ競技場まで箒での移動は禁止されているが、誰も見ていない今くらいは許されてもいいだろう。

そもそも、既に生徒ではないのだ。卒業の儀には出られなかったけれど。あれ、確か主席の生徒が挨拶するようになっていたけれど、今年は一体どうしたのだろう。女の子の主席は、同じくレイブンクロー生のクレアだったから、彼女が一人でやってくれたのだろうか。そう考えると、申し訳なかったなあと思う。赤茶の髪をおさげにした、笑顔が可愛い女の子だった。あとでふくろう便でお詫びの手紙でも出そうつと。

競技場で待っていたのは、セドリックとチョウだった。それぞれ黄色と青色のクイディッチローブを纏っている。

ぼくなんかからすれば物凄い高さで、楽しげにクアツフルを投げ合っていた二人だが（カップルの情景としては微笑ましいのかもしれない

ないが、しかし飛び交うクアツフルの速度がちよつとエグい、ぼくの姿を認めると、すぐさま降りてきた。

「や、二人とも。チョウは随分久しぶりだね」

「あら、私ホグワーツの戦いに来てたのよ。知らなかったの？」
「えっ、そうなの!?!」

全然知らなかった。いやまあ、あの時のぼくに周囲を見渡す余裕がなかったことは確かだ。

そうだったのか、と小さく呟いた。

「聞く限り、君も散々な目に遭ったそうじゃないか。でもまあ、元気そうでよかった」

セドリツクはそう言って笑う。左腕がなくなったぼくに対し『元気そう』とは少し表現がおかしい気もするが、現実元気なのだ、ぼくは。不便だし、時折ないはずの左手を出そうとして脳が混乱したりはするけれど、それ以外はとうってことない。

「セドリツク……そうだ、君とロクに話をしていなかった。前学期はどうもありがとう。今度また、詳しい話を聞かせてよ」

「ああ、そう言えばそうだった。でも、ありがとうを言うのは僕の方だよ。君たちが助けてくれたから、今、僕はここにいるんだ」

セドリツクは柔らかに目を細め、ぼくを見た。

「君に『命令』をしなくちゃいけないんだっけ」

「ああ……ごめんね、なんか大掛かりなことに巻き込んだりして構わないよ。……僕の『命令』は、ただ一つ」

続けられた言葉にぼくは一瞬目を瞠ったが、やがて笑った。チョウもクスクスと笑っている。

「オツケー、分かった。きつと彼も、受けてくれるはずだ」



ぼくの言葉に、ハリーは目を瞬かせた。

「セドリツクとクイディッチ？」

「そ。君とラストバトルがしたいんだって」

三年の頃の、あの結果が不満らしい、と笑うと、ハリーも納得の表情になった。

やがて不敵な笑みを浮かべ「分かった、準備してくるから少し待って、って伝えてよ」と言い、姿を消す。

やがてクイディッチ競技場に、真紅のクイディッチクロブを纏ったハリーが現れた。手には相棒のファイアボルト。

セドリックに歩み寄ったハリーは、固い握手を交わすと「じゃあアキとチョウ、審判をよろしく」と言う。ぼくは戸惑ったが、チョウはすぐさま頷いた。ま、ぼくがダメダメでも、チョウが何とかしてくれるだろう。我がレイブンクロー寮の元シーカー様であるチョウならば。

「今回使うのは、この金のスニッチだけね。上空十メートルからアキが手放す。その、きっかり三十秒後に、互いにスタート。それでいい？」

チョウの説明に、ハリーとセドリックは真剣な表情で頷いた。

ぼくとチョウは十メートルの高さまで上がると(どこにも目盛りがないのに、よく十メートルの大体の位置が分かるものだ。クイディッチ選手は凄い)、ぼくにスニッチを手渡した。

恐る恐る右手を柄から離すと、スニッチを受け取る。チョウが頷いたのを見て、せいやつと放り投げた。

瞬間チョウはぼくの手を掴むと、一気に急降下する。こちらの血の気も一瞬で引いた。左腕を失ったことを、初めてとも思う程強く後悔した。

地上に降りると、一気に身体が震え出す。あー、怖かった。物凄く怖かった。三次元の曲芸染みた動きは、ぼくには永遠慣れそうにない。

やはり『姿くらまし』が移動手段としては一番だ、次いで徒歩だ、そんなことを考えていたら、隣でチョウが鋭い声で「スタート!」と叫んだ。

半瞬後、紅と黄の閃光が爆風を散らし弾丸のような速度で飛んで行った。それがハリーとセドリックの姿であると理解したのは、少し

遅れてからだった。

クイディッチってそういやこんなスピードだった。なんだか随分感覚が遠い。

「いいなあ……」

チョウが隣でポツリと零した。

「行つて来たら？」と軽く言うと、チョウは目を瞠り、そして蕩けるような笑顔を浮かべた。

「うん、行つてくるね！ 審判よろしく！」

「え」

青の閃光を残して消えるチョウ。遅れてホイッスルが投げ渡された。

キャッチしながら、途方に暮れる。

「審判って、何すればいいのさ……」



花は、全部で二十本ある。そう、ハリーは言っていた。

ぼくの手元には現在十八本。終わりは、近い。

次に示された行き先は、校長室だった。ガーゴイルの石像前で、少し迷った。

「……ダンブルドア」

まだ、この合言葉は有効のようだった。

ということとは、この奥に待っているのは。

「……スネイプ、教授」

呼び方を一瞬迷った。幣原秋とアキ・ポッター、ぼくらを共に知る人とその呼び名は、シリウスやリーマス、ライフやライ先輩と言うように、徐々に統一して来た。

しかし、彼だけは、違う。ぼくはこの人を、幣原秋のように「セブルス」とは呼べない。

彼をファーストネームで呼ぶことが出来るのは、きっと、リリー・エバンズと幣原秋の二人きりなのだ。

ぼくでは、ない。

「……今まで色々、すみませんでした」

残酷な決断を下させたこと。

何年も何年も、孤独な迷宮に一人取り残したこと。

『許さない』その言葉で、彼の魂を永久に縛ったこと。

教授は、窓の外をじっと見ていたが、やがて目を切るところちらに視線を向けた。

昏いその瞳は、しかしぼくをちゃんと見据えている。

「本当に、愚か者で、大馬鹿野郎だ、貴様らは」

「……ごめんなさい」

目を伏せた。色んなことをやらかした自覚は、ちゃんとあるのだ。

「でも、これがぼくらの思いつく『最善』だったんだ」

「ならその『最善』に、己の幸せもカウントしろ。そういうところが大馬鹿野郎だと言っているのだ。自己犠牲系破滅型馬鹿とでも呼んでやれば、少しは身に沁みるだろう。ナルシズムに浸った愚か者めが、自分自身に見惚れた拳句湖に落ちて死ねばいいのに」

「う……」

凄い言われようだが、何一つとして否定出来ないところが悲しい。ぼくはナルキツソスのように水面の顔に心奪われるほど精悍な顔面をしてはいないのだが、いや、きつとそういう話ではないのだろう。「貴様が素直に自分の幸せを受け入れていれば、こんな面倒な手段を取らずにきつと済んだんだ」

教授の声は淡々としていた。事実を並べる、ただそれだけの声音だった。

「でも……それでも、ぼくはあいつに、生きていて欲しかった……幣原に、秋に、ちゃんと世界を愛して欲しかった。生きて、生き抜いて、欲しかった。幸せでいて、欲しかった。ずっと、ずっと、永遠に」

「……本当に貴様は頑固だな。それは、秋も手を焼く訳だ」

「あいつがワガママ言い通しなんだ。なんだって力技で押し込めちゃって、ぼくの不平不満なんて、あいつは耳も貸さなくて。結局のところ、最後の悪足掻きにも、ぼくは負けちゃった。秋はもういない。」

死んだ人格が、死後の世界に行けるのかは分からない。魂を伴わない人格は、もしかしたら千々に消えてしまったのかもしれない。そう、考えると……目眩がする」

せめて、逝った世界で笑っていて欲しい。

リリーやジエームズ、そして両親や、欲を言えば、リドルと共に。

ぼくの願いは、とても不確かで曖昧だ。

消えた人格の行方など、どの書物を漁っても出て来ない。

「消えるものか」

しかし教授の言葉は、はっきりしていた。

思わず顔を上げると、教授は僅かに、けれど確かに、ぼくを見て微笑んだ。

「だって、あの秋だぞ」

「……っ、あは………違う」

何も現実が変わっていないのに、その一言で、心が救われた。

そうだ。彼は幣原秋なのだ。彼が消えるはずもない。

秋が迷ったとしても、きつと死後の世界の彼らが、道標になつてくれる。

「アキ・ポッター。私から一つ『命令』だ」

柔らかな声音で、手を差し伸べられた。

「あいつの墓を、作ってやってくれ」

暴かれたアレではなく、と言われ、ぼくは一瞬息を呑み、そして深々と頷いた。



ラスト、一本の花を、誰が持っているのか。

歩く速度を、少し緩めた。会うのが、怖かった。

禁じられた森へ行く、少し手前で左に曲がる。

小道を辿れば、やがて開けた場所に出た。

「……アクア」

銀色の長い髪が、風に吹かれて舞った。

アクアは柔らかかに、ぼくを見て微笑んだ。

「……もう、嫌われたかと思った」

思わず呟く。

アクアは軽く首を傾げ「……呆れたのは本当だけれど」と言い、笑った。

「この場所……」

「……あの花は、雪が積もっている頃しか咲いていないのね」

呼吸が止まる。覚えていてくれたのか。

ぼくが、アクアに告白した場所。四年生のクリスマスの日、ドレス姿の彼女に想いを伝えたのは、ここだった。

どうしようもなく、期待をしてしまう。別れを告げたのは、ぼくなのに。

『呆れた』、その言葉通り、アクアはぼくに呆れ果てているだろう。

どうして、この場所を選んだのか。その真意を上手く押し量れない。

「……アキ」

夕日に照らされ、彼女の銀色の髪が輝いて見える。

一番初めに会った時よりも、随分と感情を表に出すようになった。一年生の頃は、こんな笑顔を向けられることなど、夢にも思っていなかった。

いや、夢には少しだけ、思い描きもしたけれど。そりゃあね……ぼくだって思春期の男の子でしたし。

「アクア……あの、ぼく」

しい、と、アクアは人差し指を唇に当てた。それだけで、声が出なくなる。

それは、魔法のようだった。

「……あのね、アキ。聞いて」

ぼくの右手を、アクアの白い手が掬い取る。柔らかで冷たく薄い手に包まれ、心拍が早まった。

アクアはぼくの目を見て、灰色の瞳をゆっくりと細めた。

「私、あなたのことが好きよ」

耳を疑った。幻聴じゃないかと、自分の脳みそまでも疑った。それは、ぼくの身には余るほどの幸せだった。

思わずアクアの手を振り解き掛けるが、ぼくの手をアクアが慌てて掴み直す力の方が強かった。そうでなくても、こちらは腕一本に對し、アクアは腕が二本あるのだ。

「いや……ダメだよ、アクア。ぼくは君に相応しくないよ」

「相応しい相応しくないって、誰が決めるの。私の旦那様は、私が決めるわ」

うう、と目を泳がせる。耳も塞いでしまいたかった。

片腕で、しかもその手はアクアに封じられている今、叶わぬ願いだったけれど。

「私はあなたがいいの。ううん、あなたじゃないと嫌なの。隣にあなたがいることが、私の幸せなの。ねえ……私の幸せを、願っている人でしょう？ アキ」

「……その言い方、ズルいよ」

「ええ、私はズルいだよ。だって、スリザリン生なんだもの。……私は、私が欲しいもの全て手に入れたいの。アキと一緒に、未来を歩ませて。……ダメ、かな？」

……ああ、もう。

そんなこと言われて、断れる男がいるというのなら、是非ともお目に掛かりたいものだ。

「……いっぱい、迷惑掛けるよ」

「ええ」

「今まで以上に、絶対」

「覚悟の上よ」

「君にいっぱい、嘘も隠し事もしてきたよ。嘘つきなのは、ぼくの性格みたいだから……きつと、直らないよ。そんな不誠実な奴で、いいの」
「……面倒臭いわね、あなた」

「うん……ぼく、面倒臭い奴だよ。本当にそれでも、いいの？」

「いいから、わざわざこうしているのよ」

「……………」

上手く、言葉が出なかった。力の入る顔を見られなくなつて、顔を伏せ歯を食い縛る。

「困った人ね」とアクアは苦笑して、ぼくの頭をそつと抱き寄せた。



アクアと手を繋いで、聖マンゴの病室へと戻ると、そこには今までぼくと会った人たちが勢ぞろいしていてガヤガヤと喧しかった。

シリウスとスネイプ教授は何かを互いに険しい顔で言い合っていたし、アリスもリィフに対して突っ掛かっている。ハリーとセドリックとチョウは、先ほどのクイディッチの話が白熱しているみたいだし、あ、今そこにジニーが加わっていた。ルーナはアリスとエルと何やら意気投合しているし、誰もが好き勝手なことをしている。

ぼくが入って来たことに一番初めに気がついたのは、ハリーだった。会話を切り上げると、優しい笑顔で近付いてくる。

「お帰り、アキ」

「ただいま……ハリー」

もらった花を出して、と言われ、出現呪文で取り出した。片腕じや抱えきれない花束を、テーブルに置く。

ハリーが杖を振ると、色とりどりの花は一纏めに窓枠の花瓶へと入っていった。

「包み紙をさ、広げてみてよ」

え、と首を傾げハリーを見るも、ハリーはぼくを見て笑うだけだ。ひとまず一番手近な花の包みを広げると、その裏にはローマン体のフォントで、アルファベットが一文字印字されていた。

「R」と書かれたその紙に目を瞞っていると、アクアが、そしてハリーが、他の皆も、包みを開け始める。

やがて包みは、二十枚の紙となり、そして二十のアルファベットに変わった。二十のアルファベットが、やがて一つのセンテンスを形作る。

その言葉に、意味に、呆然とした。

『THANK YOU FOR BEING BORN』

「——『生まれてきてくれてありがとう』、だよ」

息が、上手く出来なかった。

「十八歳の誕生日おめでとう、アキ。成人のお祝いには、一年遅れちゃったけれど」

そうやってハリーは、ぼくの右手に懐中時計を握らせた。そうか、今日は七月三十一日。ハリーの——ぼくとハリーの、誕生日。

成人のお祝いに時計を贈る習慣が、魔法界には存在する。幣原秋も、成人の頃には両親は亡くなっていたし、ぼくは誕生日の概念自体を忘れていた。

だから、初めての経験だった。

「ハッピーバースデー、僕ら」

——ああ、もう、ぼくは。

この瞬間に死んだとしても、構うまい。

懐中時計を握ったまま、手の甲で目元を抑えた。と、ぼくは皆に揉みくちやにされる。

抱き締められたり、背を撫でられたり、頭を軽く叩かれたり。

「……ありがとう」

ぼくの掠れた小さな声は、それでもきつと誰かに届いたのだ。

「ぼくがいらぬ世界」 After ep「おはよう、君のいる世界」

目を覚まして、ハッと飛び起きた。自分が今居る場所と、時間、それに日付を確認する。

ここはスリザリン寮の一室、自身、トム・リドルの寝室で、時計は朝の六時十分を指していて、サイドテーブルに置かれたカレンダーは、1942年12月の面をこちらに向けていた。それら全てを確認して、ホウ、と息を吐く。

今日もまた、平和で平凡で退屈極まりない、酷く失い難い、愛しい日常がやってきた。



トム・リドルは、二つの記憶を持っている。

『それ』は天啓のように、ある日突然降ってきた。

自分の未来。生まれてから、ひとり孤立し孤独に血塗られた呪われし道を歩み、逆らう者はみな殺し、一度ハリー・ポッターに倒され滅び、それでもいじましく生に縋りつき、そして忘れもしない1998年5月2日、再びハリー・ポッターと戦い、馬鹿みたいな一騎打ちで絶命した、哀れな男のどうしようもなく愚かな末路。

それが、自らの未来が選んだものだと俄かには信じられなかった。悪い夢かと、悪夢かと。それでも信じざるを得なかった。胸の中に色濃く渦を巻く感情——『後悔』。それは、かつての自分の中には存在しなかったものだ。

『記憶』と共に降り注ぎ、気付けば自らの中に根付いていたもの。その感情は、あの友人を——幣原直と相対する際、もつとも深く、もつとも苛烈にざわめくのだった。

幣原直。ホグワーツ魔法魔術学校ハッフルパフ寮に在籍する、トム・リドルと同級の、日本魔法魔術学校『魔法処』からの留学生。

平凡な男だと、そう思った。自らと並び立つような存在ではないと。それでも何故か、この男を隣に置いておかねばならないと思っただ。決して、手放してはならないのだと。

——もう二度と、間違えてはならないのだと。

『記憶』の自らは、幣原直の持つ『予見者』という能力に触れ、彼に興味を持ったということだった。ならば、その能力を垣間見たわけでもないというのに、彼に惹かれてやまないこの感情は、一体誰のものだろう。

「トム」

平凡極まりない、自らの名前。父親と同じ名前のそれを、憎みさえもした。それでも何故か、彼に呼ばれるその響きは、酷く懐かしい感傷をも呼び起こす。

「直」

微笑みさえも浮かべて身を起こす。直は、トム・リドルを信じ切った表情で、自然に隣へと並んだ。軽い口調で語りかける。言葉は英語だ。昔は、日本語しか喋れなかった。英語を授業さえも苦にならなくなるまで叩き上げたのは、リドルだった。

「楽しみだなあ、今日のクリスマスパーティー」

「そう思っているのは君くらいだろうね。その反応から察するに、やっとこさエンディーネ嬢を誘えたということか」

憂鬱だ、そう思つて息を吐く。一体なんだって、こんな行事があるのだ。

スラグホーン教授のお気に入りメンバーを集めた『スラグ・クラブ』、今日はその、年に一度のクリスマスパーティーだった。

「そう、いやあ勇気を出してみるものだね。そしてトム、君は本当に変わらなずだなあ。女の子が選り取り見取りな君の状況は、男としては羨ましい限りだというのに」

「僕にだって選ぶ権利というものがあるだろう。僕の隣に並ぶことを許す女性が今のところ見当たらない、そういうことさ」

「それで壁の花決め込むのも、なかなかいいぞ。……本当、僕にはどうしてトムが、僕なんかとつるんでくれているのか、たまによく判ら

なくなるんだよ……」

笑い混じりに漏らされたその言葉を、聞き咎める。気を悪くしたならすまない、と直は軽く謝罪した。

「……まあ、僕だって『どうして君のような凡庸な男と』という気持ちは、時折抱くがね」

「……抱くのかよ……」

捨てちまえそんな気持ち、と、苦虫を噛み潰したように直は言う。気を取り直したように「ま」と声を上げた。

「凡庸と、平凡と、そう言われる日が来ようとは思ってもいなかったからね。僕はこの平和で普通の日常が好きだよ。失いがたい、宝物だ」

——そうだろうな。

声に出さず、呟いた。

——だからこそ、取り戻したんだ。

黒の瞳が、こちらを向く。邪気のない目が、敵意の欠片もない光を湛え、柔らかに弧を描く。

「今年もトムは、クリスマスに帰らないのだろうか？ 良かった、今年も、寂しくはない」

「……直、知っているか？ この前同寮の女子に尋ねられたんだ、『トムって幣原くんと付き合っているの?』と」

ゲヒュン、と直は妙な音を立てて咳き込んだ。ハ、とこちらを見上げる顔は、僅かに赤かったり、青かったり。その様子が可笑しくて、思わず鼻で笑った。

「は、あ、あ……?!? 付き合い、付き合い合ってるって、え、つまりは……」
「理解が及んでいない君に、微力ながら教えてあげるとするならば、彼女の意図する言葉は『恋仲かどうか』ということだろうね」
「……………」

今度こそ直は青ざめて固まった。やがて大きく息を吐くと同時に、全身の緊張を解く。

「一体どういう論理の飛躍だ……僕と、トムが付き合い合っている？ 眼科に行った方がいいんじゃないのか？」

「まあ僕は『イエス』と答えたんだが」

「何してくれてんの何考えてんのっ!？」

「冗談だよ。君は人の言葉を信じすぎるのがいけないな。僕の言葉に何度バカを見れば気が済むのだい？」

君の冗談は性質が悪すぎる、とぶつくさ言いながら、直はムツとリドルを睨んだ。ハハ、と軽やかに笑うと「遅刻してしまうよ」と微笑んでみせる。リドルのその笑みに呆気に取られ、やがて渋い表情で、直は歩き出した。

直。

本当は、この世界はね。

一度壊れ、そして再構築されたものなんだよ。

君の。僕の。そして。

——自らの幸せよりも世界を選んだ、正真正銘の大馬鹿野郎の手によって。

「……そうそう、直。君はひとつ誤解をしているようだね。このダンスパーティー、僕にパートナーがいない訳ではないんだよ」

「……え、そうなの？ 一体それは誰？」

勿体振る必要もあるまい。極々普通のトーンで、言葉を放った。

「マートル・ウオーレン」

「……………は？」

そうそう。彼女に声を掛けたときも、今の直と同じ表情を浮かべていた。それを思い出し、ほくそ笑む。

「……え、は、なんで？ ウオーレンって、レイブンクローの子だよな？ 君、ああいうのが好みなのか？」

「まさか」

「じゃあ、なんで」

訝しげに、直が追及してくる。躲してもいいが、と少し悩んだ。まあ構うまい。

「……………ちよつとした罪滅ぼしさ」

やがて大きく嘆息した直は「性格悪いな、君は」と呟いた。



結局のところ、在学中は一度も『秘密の部屋』を開くことはなかった。秘密の部屋で後継者を永遠待ち続ける大蛇バジリスクは少し気の毒にも思えたが、しかしそれならば孤独にバジリスクを取り残したサラザール・スリザリんと、女子トイレなんかに秘密の部屋を繋げた後継者にこそ、文句と異議を申し立てるべきであろう。

トム・リドルはただの、百年に一人の逸材とも呼ばれた俊英の優等生に過ぎないのだから。

卒業後の進路を尋ねられ、躊躇しながらも闇の魔術に対する防衛術の教師を願いだした。それを聞いたアルバス・ダンブルドアは、こちらに探るような瞳を向けた。淡いブルーの瞳に身を強張らせる。

大丈夫、不安に思うことは何一つない。自分は闇の魔術に浸つても、懂れてもいないただの学生だ。友人に『ヴォルデモート卿』と呼ばせたことだって、ただの一度もない。

「きつと君はいい教師になることじやろう、トム」

かけられた言葉に、ホッと胸を撫で下ろした。

『記憶』と変わり、直はホグワーツを自主退学することなく、極々普通に卒業して、アキナ・エンディーネとささやかな式を挙げていた。数年英国で新居を構え、両親が亡くなったという知らせを受け、日本へと移り住むことにしたようだ。

年に一度、夏休みに、直はいつもリドルを家へと招いた。ホグワーツ以外に帰る家のないリドルに気を遣っていることは明らかだったが、その透けて見える思惑も込みで、リドルは直の案に乗ることにした。

直とアキナの一人息子、幣原秋。抱き上げたその子供は酷く小さく、弱く、しかし漏れ出す魔力は常人と桁が二つは違うもので。予測はしていたけれど、これには少し驚いた。これは確かに、未来の自分に膝をつかせただけのことはある。

秋の魔力を、苦勞して封じた。しかし封じるだけでは、この純粹な魔力はあまりにも無邪気に凶悪だ。だからこそ直に「秋の家庭教師を

させてほしい」と申し出た。直は戸惑っていたようだったが、やがて「……君の仕事の邪魔にならない程度ならば」と言い、了承してくれた。賃金はいらないと突っぱねた。夏休みの間日本に滞在する諸費用を直が負担する、ということ、話し合いは落ち着いた。

日本の夏は、英国の夏とはまた違う。湿気と日差しに辟易しながらも、段々と、日本の未知なる生活に慣れてきた。また、子供の扱いにも。

「秋」

名前を呼べば、パアツと表情を明るくさせて駆け寄ってくる。少女とも見紛う顔立ちに、真っ黒の大きな瞳。自分の腰ほどしかない背丈。目線を合わせるように、その場にしゃがみこんだ。

「リドルさん！ いらしてたんですね！」

「ああ。久しぶりだね、秋。元気そうで何よりだ」

そう微笑みかけると、はにかんだ笑顔を秋は浮かべた。曇りも曇りもない、純粹な笑顔を、記憶の中の自分はいそげ向けられたことがなかった。かつて自身と曲がりなりにも数年を生きたあの少年はよく笑う人間ではあったが、ここまでの笑顔は浮かべられなかった。

目の前の小さな子どもと同じ名前の彼は、親の仇である自身に、こんなにも無邪気に笑いかけられることはなかったことだし——ただただ望まれ生まれ、愛され慈しまれながら育てられた子どもは、ここまで純真な輝きを放つものなのかと、そう考えると目眩がした。

秋には、自分が教えられる限りの物事を教え込んだ。この子どもの理解力の高さは、知っている。魔力の制御の方法から、読み書き計算、魔法界・非魔法界問わずのあらゆる学問。語学だって、何だって。

するすると何でも吸収する脳みそは、元々のポテンシャルの高さをも感じさせ、気付けばそこらの魔法界に住む子どもなど目ではないほどの英才教育を施していた。貪欲に、新たな知識に瞳を輝かせる少年。ああ、やはり、この少年がいるべき場所は、決して戦場などではなかった。

「秋は驚くほどトムに懐いた」

よくそう直は零していた。「嫉妬かい？」と軽やかに尋ねると、分かりやすく眉が寄る。

「まるで実の親である僕よりも、秋のことを理解しているようじゃないか」

「考え過ぎさ。まさか君、本当は秋がアキナと僕の間の子だとか考えているんじゃないだろうな」

「そんなことあるわけないだろう……あつてたまるか、秋は日本人顔だからな……女の子じゃなくなつて良かったよ、『リドルさんのお嫁さんになる！』とか言われた暁にや、僕は君をぶちのめさないと気が済まない」

「そういうものなのかね」

親から子に向ける想いというものは、よくわからない。そもそも自身が受け取つたことのないものだ。そういうものさ、と肩を疎める直も、記憶が正しければ両親には恵まれなかった。

「君も親になれば、気持ちの一端もわかりそうなものなだけだな」
「生憎と」

マグルの父親から受け継いだリドル姓は、きつとここで絶えるだろう。そう言えば父親を殺しに行くこともなかった。碌な男でなかったことは確かだ。狂つたゴーント家の血も、きつと自分で途絶える。惜しいな、と思わない訳ではないが、それ以上の気持ちが勝つた。「自身は親には向いていない」という思いだ。

自分はきつと、直ほど一心に子どもは愛せまい。元々バカなガキは嫌いだった。秋は別格だ。

「そうかなあ」

「そうだよ」

そういう、ものなのだ。



初めて紅のホグワーツ特急を見た秋は、その黒く大きな瞳をキラキラと輝かせていた。すごい、とその唇が、声にならない言葉を漏らす。

その様子を、微笑ましくも見つめた。

「また後でね」

これから飽きるほど、ホグワーツで会うことになる。コンパートメントに秋の荷物を置くのを手伝い、教授陣が集まる先頭車両にそのまま向かおうとしたが、ふと気が変わった。足を戻す。

「秋、君はどの寮に入りたい？」

そう尋ねられた秋は、そんなことを考えるのは初めてだと言わんばかりに考え込んだ。まあ、きっとそうだろう。直はハツフルパフ、アキナはグリフィンドル、そしてリドルはスリザリんと、ものの見事にバラバラなのだ。明確に『この寮』という憧れは持つてはいないのか。

「……どの寮に、って言われてもなあ。そうだ、リドルさんは、ぼくが何寮つぽいって思う？」

「……そうだねえ」

思わず、目を細めていた。眼前の秋を透かし、彼を、彼らを、思い浮かべる。

もはや誰も覚えていない、彼らを。

目の前の少年とは違う、彼らのことを。

「……レイブンクローに、きつと君は入る」

秋はキョトンと目を瞬かせた。その頭を優しく撫でて、今度こそ踵を返した。



グリフィンドルの四人組——彼らは『悪戯仕掛人』などと名乗っていた——には、本当に手を焼かされた。ジェームズ・ポッターとシリウス・ブラックを筆頭とする彼ら全員には、覚えがあった。複雑な感情を抱かない訳ではなかったが、しかし悪戯小僧に日々対抗していると、それらが思考の彼方へと飛んで行ってしまふ。

成績優秀なクソガキをやり込めるのは並大抵のことではないが、出来ないということはプライドが許さなかった。

「リドルさんって、そういうところ子どもっぽいよねえ」

教務室でリドルが淹れた紅茶を啜りながら、のんびりと秋は呟いた。一月に一度ほどの割合で、秋は「父さんたちから送られてきた」という手土産の菓子と共に、リドルの居室に訪れる。その才能ゆえに『呪文学の天才児』と呼ばれてもいるらしいが、かねてよりのほんとした秋は、あまり気にしていないらしい。その首元には、レイブンクローのネクタイが結ばれていた。

「子どもっぽいってどういう意味だい」

「文字通りの意味さ。最近じゃジェームズ達、リドルさんに構ってもらうために趣向を凝らした悪戯を考えていたりする訳だし」

「なんとという才能の無駄遣いか」

「まったくだよねえ」

そう言うも、秋の頬は緩んでいた。友人たちが誇らしいのだろう。秋の口から、楽しげに知った名前が零れる。そう言えばリドルさん、セブルスに新しい創作呪文のアドバイスをしたんだって？ とか、リリーがリドルさんから珍しい薬草を譲ってもらったと嬉しそうだった、とか。喋っても喋っても話題の尽きない秋を、穏やかな気持ちで見つめていた。

「……ねえ、リドルさん」

夕暮れの日差しが差し込む。そろそろ夕食の間だからお帰り、と秋を促した。秋は素直に立ち上がり扉に手を掛けたが、そこでふと、リドルを振り返った。

「……ぼく、何かを忘れてる気がするんだ」

橙色の柔らかな光に照らされた秋は、少し苦しいような笑顔を浮かべていた。困ったような、どうしていいのかわからないような、そんな無防備な瞳で、リドルを見る。

「とつても、大切なことを……忘れてはいけないことを、忘れてしまっているような……そんな気分になるんだ。セブルスと、リリーと、ジェームズやシリウスやリーマスやピーターと、ライフと話す時……『あれ？』とね、たまに思う、ことがある。一回、どこかでぼくらはこれと同じ話をしたことがあるような……そんな奇妙な既視感を、覚え

るんだ……」

秋に歩み寄った。その頭にそっと手を触れさせ、髪の中に指を入れる。後頭部を支えると、軽くこちらに倒した。秋は、されるがままでいた。

小指が、秋の細い首に触れる。延髄に近いところに触れられても、秋は無防備だった。かつての彼ならば、リドルに触れることすら良しとしなかっただろう。警戒心を剥き出しにした瞳で、首になど触ろうものなら吹き飛ばされていた。

「気のせいだよ、秋」

穏やかな声で、言葉を紡ぐ。

「いきなりの環境の変化で、きつと疲れているのだろう。暑さ寒さも、ここは日本とは違うのだしね。時差だつてあつた、体調を崩しても無理はない」

そう言つて、手を離れた。秋はそっと、リドルから一步離れる。リドルに触れられた辺りをそっと撫でると、静かに目を伏せた。

「そう……そうだよね。ぼくの気のせい、なんだよね」

呟いて、顔を上げる。微笑みを灯した。

「変なこと言つて、ごめんなさい。またいつか、来てもいい？」

「ああ……いつでも来るといいよ」

お邪魔しました、と言つて、秋は部屋を出て行つた。

リドルはしばらく、秋がいた辺りを見つめていた。



死喰い人自体が存在しないため『不死鳥の騎士団』は発足どころか草案すらも持ち上がらなかつた。闇祓いに『許されざる呪文』の行使が許可されることもまた、ない。吸魂鬼や闇の生物にヴォルデモートが声を掛けることもなかつたため、アズカバンは侵されることなく、ただただ其処に在つた。

これからの魔法界の未来には、高等教育機関が必要だと考えた。ホグワーツを卒業して、より高度な教育を学生に施す場所。「面白い考

えだね」と笑って乗った秋と共に、ホラス・スラグホーンの人脈も駆使してやってのけた。英国だけでない、世界にまで手を広げ、講師を招いた。

「リドルさんが大学で教鞭を取る訳ではないのに、どうしてリドルさんがそんなに頑張っているの？」

秋の疑問を、誤魔化した。

秋は知るまい。自分が秋のために大学という制度を整えたことを、秋が知る必要はない。彼の才能は、教育・研究という立ち位置こそ一番の冴えを見せる。この少年を、一体何年間教えてきたと思っっている。

英国魔法界は、立ち止まらせない。かつて、彼がやったように。自身が政治家になり全てを執り行えば早かったのかもしれないが、かつての経験上、出来る限り自分は権力を握りたくはなかった。だからこそ、大学。自身ではない、より世界を良くしようと考える人物が現れることを、期待して。

「驚くほどに、リドルさんって無私だよね」

——そんなことは、ない。

自分の行動は全て、私利私欲に塗れている。



秋が結婚して、子供も儲けたと聞いて、月日が経つのは早いものだと驚いた。ついこの前まで、自らの背丈の半分ほどしかなかったのに。身長は、かつてと変わらずあまり伸びなかったようだ。本人は少し悔しげだった。

「リドルさんの背丈が目標だったのに……」

「それはね、無茶というものだ」

思えば直も、そう大きい方ではない。

そうか。あの少年は、平和な世の中ならばごくごく普通の幸せを手に入れることが出来たのか。

初孫に、直とアキナは大盛り上がりだった。祖父母バカを存分に発

揮している。思わず苦笑いを浮かべたが、それでもかかつての彼らは孫を抱くどころか、息子の卒業すらも見る事が出来なかった。そう思うと、窘めるのも無粋に思う。

秋がホグワーツを卒業し、就職してからはめつきり彼とも疎遠になった。元々互いに筆まめな方ではない。どころか秋は、研究に没頭すると、クリスマスもハロウィーンも誕生日すらも忘れてしまう困った性質の持ち主でもあった。

こちらが贈ったカードに数日遅れで『忘れてた……』と遠慮がちに返ってくることもしばしばだ。初めは呆れていたが、やがて慣れた。全ての物事は、慣れるのだ。そんなので秋は上手くやっていけているのだろうか、などと余計な心配までもしてしまう。

「……………」

目が覚めて。真つ先に行くことは現状把握だ。今、自分はどこにいるのか。今は何時何分で、今日は何月何日なのか。十二歳の頃からの習慣は、今も抜けずにいる。ここはホグワーツ、闇の魔術に対する防衛術教授の居室であり、今は夜で、もうすぐ夕食となるだろう。

授業が終わり、少し休憩しようと目を閉じたら、そのまま眠ってしまったらしい。ソファ横のサイドテーブルに置かれたカレンダーを確認して、朝と同じように、思わず息を止めた。静かに、吐き出す。

今日は、1981年10月31日だ。

ああ、そうか——と、一眠りする原因となった鈍い頭痛の正体に思い至る。

身体が重い。それが、精神の不調から来るものだということも明らかだった。

長く息を吐いて、ソファに沈み込む。額に右手を当てた。今日はハロウィーンのご馳走が出るが、しかし今の体調では、大広間に行かず自分の部屋でゆっくりとしていた方が良さだろう。薬で無理矢理にも眠ってしまいたい欲求はあるが、しかしレポートの採点がまだ残っている。

ソファから身を起こすのと同時に、扉が軽くノックされた。誰だ、と耳をそばだてる。

『リドルさん、お久しぶりです』

「……秋？」

しばらく聞いていない声に、少し唾然とした。扉に歩み寄り、開ける。純粹な笑顔を浮かべる幣原秋が、そこに立っていた。その隣にはシリウス・ブラツクの姿も。数年前に卒業したはずの二人が、どうして？

「こんにちは。待ちくたびれて、迎えに来ちゃいました」

照れたように秋は言う。意味が判らず「……待ちくたびれた、とは」と聞き返した。

「あれ、行っていませんか？ ハロウィーンパーティーの招待状」

「ハロウィーンカードは後で読もうと纏めていて……」

そう言えばまだ目を通していなかった。その旨を伝えると、秋はやっぱり、という顔をして微笑んだ。

と、シリウスがリドルの腕を引く。かつての後輩、オリオン・ブラツクの息子。しかし破天荒な性格は、母親であるヴァルブルガに似ていると常々感じていた。

「リドルさんを是非とも呼びたいって、ジエームズと秋が聞かないんです。良かったら付き合っちゃくれませんか」

そう言つて、シリウスは相手を崩す。「秋、リドルさんが好きだから」との揶揄いの言葉に、秋は顔を赤らめ「違うから！ ヘンな意味じゃないからね！」とムキになっては叫んでいた。その黒い双眸が、リドルを向く。穏やかな光が、リドルを射抜いた。

「でも、今日は……リドルさんに来て欲しいと思ったんだ」

——何故。どうして。

よりにもよつて、どうして今日なんだ。

「……パーティーの場所は」

上がる心拍の中吐き出した言葉に、秋は何のてらいもなく口を開いた。

「ゴドリツクの谷の、ポッター家であるんだよ」



忌まわしき記憶が、蘇る。

日記のリドルでも、今のリドルでもない、それはかつての、本体の記憶。

暗い道を、たつたひとりで歩いていた。『忠誠の呪文』は、破れていた。決して身構えていなかった訳ではないが、それでも敵にはなり得まいと慢心していた。

闇祓いであつた幣原秋は、ハロウィーンパーティーには訪れないと聞いていた。そうだろう、そんな時間の余裕があるような部署ではない。邪魔は、決して入らない。

生垣のこちら側で、息を潜めて家の様子を伺つた。カーテンは、開いていた。メガネを掛けた黒髪の男が、杖先から色とりどりの煙の輪を出して、パジャマ姿の小さな男の子をあやしている。小さな男の子、『選ばれし男の子』ハリー・ポッターを、ヴォルデモートを破滅にもたらす存在を――

「リドルさん？」

涼やかな声に、我に返つた。秋がこちらを覗き込んでいる。漆黒の双眸は、宵闇にも負けることはない。

「……大丈夫？　顔色、良くないみたい。無理に連れてきちゃつてごめんなさい、体調、悪かつた？」

「……いや、心配ない。気にするな」

意識して息を吸い込み、吐いた。ローブの裾をギュツと握りしめる。

自分はヴォルデモートではない。

自分は直とアキナを殺してはいない。

自分は幣原秋の敵ではない。

――逃げては、いけない。

「本当に大丈夫ですか？」

シリウスも心配げな表情を浮かべている。

「大丈夫だと言っているよ。少し空腹を思い出しただけさ」

嘘だった。しかし演技はお手の物だ。普段通りの微笑みを向ける

と、二人は安心したように微笑んだ。

「リドルさん、そんなにお腹空いていたんだ。クッキーか何か持ってくれば良かったかな。リリーが作ってくれたクッキー、凄く美味しかった」

「リリーが？ 彼女は魔法薬は上手だけれど、料理は壊滅的だと以前聞いたことがあるんだがね……」

「いや、確かに学生時代はよく暗黒物質を作り出していましたけどね」「すつごく上達したんだよ、結婚してから」

苦々しい顔のシリウスの言葉を、秋が引き継ぐ。その瞳は純粹に、自らの親友に対する誇らしさを湛えていた。

玄関に辿り着くと、シリウスは手の甲で軽くノックをした。すぐさま、奥から足音が響く。かつての闇の時代にはあり得ないほどの気軽さで、玄関の錠が外された。

家の中から顔を見せたのは、ジェームズ・ポッターだ。ドキリ、心臓が一際強い鼓動を打つ。無意識に杖を指先で探し掛け、慌てて手を離した。

違う。

「リドル先生！ 来てくださりありがとうございます、さ、どうぞ上がってください」

眼鏡の奥の瞳が、弧を描いた。かつての恩師であるリドルを信用し切った瞳で、入室を促す。

知らないのだ、彼は。

誰も知らないのだ。

自分がかつて、何をやったか。

この日、この家で、何が起きたのか。

「リドルさん、ほら早く」

秋に軽く背を押された。一步、足を踏み入れる。リドルと目が合うと、秋はきよとんとししながらも微笑んだ。

止めてくれ。

そんな笑顔向けられる価値は、自分にはない。
そんな純粹な笑顔を浮かべるのは、止めてくれ。

秋とジェームズに手を引かれるようにして、廊下を歩いた。明るく暖かい一軒家。この家がかつて、滅茶苦茶にしたのは――。

明るい光の元に出た。

かつての教え子、リリーが、ひとりの小さな男の子を抱き上げた格好のまま振り返った。

赤く長い髪が、ふわりと揺れる。リリーはリドルの姿を見て、パタパタとこちらに駆け寄ってきた。

「ああ、リドル先生！ お忙しいのにお呼び立てしてすみません、でもどうしてだか、今日、会いたかったんです。先生に」

そう言つて、リリーはにっこりと微笑んだ。

小さな男の子が、こちらを向く。癖っ毛の黒髪は、ジェームズにそっくりだ。しかし瞳は、リリーと同じ深い緑。その額に、稲妻型の傷はない。

「……ハリー」

思わず、息を吐いていた。

君は、英雄ではない。幣原秋も、ハリー・ポッターも。

英雄になんて、してやるものか。

「ああ、リーマスごめんね、任せちゃって」

「全然。遊び疲れたら寝ちゃって、楽なもんだったけどちよつと寂しかったよ……と、お父さんの気配を察知したら起きるのか。はい、秋」
「どうもありがとう」

秋が、ひとりの子供を抱き上げる。目を覚ましたばかりのようで、少しまだ目が虚ろだ。

幼い頃の秋と、瓜二つだった。驚くほどにそっくりな、その小さな男の子は。

「アキと、言うんです。響きは、ぼくの名前と全く同じなんだけど」

目を細めて、秋は笑った。

「リドルさんにも、抱いて欲しくつて。ぼくの子どもなんだよ……まだ、見せてなかったから」

秋がそつと、腕の中の温もりを手渡した。取り落とさぬよう、そつと抱く。

アキの瞳が、リドルを向いた。にこりと無邪気に微笑むと、リドルに短い手を伸ばす。

「……アキ」

「そう、アキ。……はは、どうして同じ名前なのって話だよね……名付けたぼくも、たまに混乱するんだ……でも」

そうしなきゃいけないと思つたのだと、秋は言った。

「今日、リドルさんをこの家に呼ぶことも。そうしなきゃいけないと思つたからなんだ」

掛け時計が、時間を知らせる鐘を鳴らした。「日付が変わった」と漏らした声は、一体誰のものだったか。

——ああ、今日が、終わったのだ。

今日だけではなく、何もかもが、終わったのだ。

秋が、息を呑んだ。恐る恐る尋ねる。

「……リドルさん？ どうして泣いてるの？」

答えず、幼子を抱えたまま、秋の前に跪いた。頬を伝う涙を拭わぬまま、頭を垂れる。

贖罪の日々が、きつとこの瞬間、全て報われたのだ。

「リドルさん……？」

耳朶を震わす声に、微笑みを浮かべた。

——ああ、アキ。

声に出さず、呟いた。

僕は、間違えなかったよ。

君が望んで、選んだ、君のいないこの世界で。

君が愛し、君を愛した人たちが、君のことを忘れてしまったこの世界で。

僕はこの、平和で平凡で退屈極まりない、酷く失い難い、愛しい日常を送っている。

これまでも、そして、これからも。

世界が君を忘れても、僕だけはずっと、君のことを覚えていよう。

「——さようなら、君がいた世界」

これが、幸せな未来だ。

番外編 セブルス視点 不器用な友

「……………ハア」

痛む頭を、セブルス・スネイプは指先で押さえた。

頭痛の原因は分かり切っている。過度な疲労と慢性的な睡眠不足。加えて常に気を張り詰め、途切れることなく『閉心』し続けるが故の、極度のストレス。

アルバス・ダンブルドアが死に、闇の帝王がホグワーツを掌握した。それに伴い、ホグワーツの自治はセブルスへ一任されることとなった。それだけの信頼を、今の自分は勝ち得ている。

闇の帝王からの信用を損なうことなく、死喰い人として従順でいること。同時に、ホグワーツの在校生が決して害されることのないよう、命をかけて守り通すこと。

決して思惑を見破られてはならないし、悟られることもあってはならない。

「君の暗闇に付き合おう。これは、ぼくらの贖罪だ」

あのととき、アキ・ポッターはそう言った。

アルバス・ダンブルドアをセブルス・スネイプが殺した日、『姿くらまし』した先の廃屋で、瞳に強い光を灯したアキは、そう言つてセブルスに手を差し伸べた。

「死んではならない。守らなければならないものがある限り、ぼくらが死ぬことは許されない。全てが終わる、その時まで——」

ホグワーツ魔法学校校長の職は、今年度いっぱいまで辞する心算だ。教育機関であるホグワーツは『中立不可侵』フィスナーの管轄。

当主であるリイフ・フィスナーから提示された条件は二つだった。一つ、生徒を無益な殺生に巻き込まないこと、二つ、全てを一年間で片付けること。全ての条件を呑み、ホグワーツの全権限はセブルス・スネイプへと移譲された。

学校は通常通り運営しなければならぬ。たとえ死喰い人に侵されたとして、生徒が学ぶ権利だけは、誰にも奪わせてはならない。

新入生を迎える手筈、教職員の準備、足りない人員の補充。

不死鳥の騎士団への監視も怠ってはならない。後手に回ってしまえば最後だ。闇の帝王からの信用が失墜することは、自分たちにとつて命取りになる。

それでも不死鳥の騎士団に、致命傷を与えないように。極力、誰も死なぬように――。

やらなければならぬことは山積みだ。どれも完璧に、誰にも知られることなく、やり遂げなければならない。

ふとその時、細い手首が視界に映った。数枚の書類を取り上げた彼は、セブルスが向かう机に体重を預ける。

導かれるように、顔を上げた。

窓から覗く月明かりに、艶やかな黒髪が煌めいている。じつと書類に目を落とす横顔からは、普段のにこやかさは窺えない。

丁寧に整った顔立ちは、以前は少女のようでもあった。幼さが抜けるに従い少女らしさも薄れたものの、それでも柔らかな印象は残したままだ。

彼を見ていると、時が止まった気分になる。

学生だった頃の、隣で笑い合っていた時代に、戻れたような気分になる。

「……………秋……………」

——そんなものは、ただの夢まぼろしに過ぎないのだと。

もういなくなってしまう彼女を想って、いつだってすぐに、我に返るのだ。

「――ポッター」

名前を呼ぶと、アキ・ポッターはそつと顔をセブルスに向けた。

普段通りの笑みを口元に湛える。

「教授」

「済まない……………起こしたか」

「いいや、目が覚めちゃってね。君に仕事をさせてる間、ぼくだけが惰眠を貪るといふのは据わりが悪い」

「成長期だろう、きちんと睡眠は取るべきだ」

そう言えば、アキは驚いたように目を見開いた。やがて耐えられな

くなつたように笑い出す。

「――『成長期だろう』？ あははっ、教授がそんなことを言うなんて、考えたこともなかったよ」

「なっ……、私はただ、君の身体を思つて、だな……君に身体を壊されると、計画に差し障りがあるからであつて……」

思わず顔を赤らめた。

うん、とアキは柔らかく微笑む。

「ありがとう、教授。大丈夫、少し……寝付けなかつただけだから」
そう言つて、アキは指を引っくと振つた。瞬間、アキの手の中に万年筆が『出現』する。

キャップを開け、書類にさらさらと書き付けながら、アキは口を開いた。

「教授も、少し休んだ方がいい。疲労が顔に出ているよ。精神の不調は、術の精度に影響を及ぼすからね。闇の帝王の前で、無様は晒してくれるなよ？」

「ああ……理解している。これに片がつけば、今日はもう休むつもりだ」

書類をトントンと指で叩く。それを見て、アキは静かに微笑んだ。
しばらく、無言の時間が流れる。

アキの様子をチラリと伺つた。

ソファに腰を下ろしたアキは、口元を覆つて書類に目を落としては、『呼び寄せ』た本をパラパラと捲っている。処理済みらしい書類は仕分けられ、四隅を揃えてテーブルの上に積んであつた。その几帳面さと仕事の速さは、やはりただの学生とは一線を画す。

アキ・ポッターがホグワーツに入学してからというもの、セブルス・スネイプは、この生徒をどう扱えば良いものか、しばし悩んだものだった。

記述試験は勿論のこと、授業での魔法薬作成も、課題のレポートも、全てにおいて文句のつけようが無いほど、きっちり丁寧になさしてくる。

同じ代にハーマイオニー・グレンジャーという優等生がいたからこ

そ、比較・採点が行えたものの——百点満点の試験で三百点をつける事が、どれほどまでに難しいことか。

一度、呪文学教授のフィリウス・フリットウィック教授に、忸怩たる思いで尋ねたことがある。

レイブンクロウの寮監であり、『呪文学の天才児』と呼ばれた幣原秋の恩師であつた彼ならば、あるいは、と。

彼の返答は明確であつた。

『今も昔も、彼は私の最高の教え子です。常に最高点をつけ続けた。そこに、幣原秋だから、アキ・ポッターだからと、そういうものはありません。だから、ねえ、セブルス。あなたも教師として、素晴らしい一生徒の教鞭を執ることができる喜びと誉れを、共に分かち合おうじゃありませんか』

——教え子である以前に友であり、そして決別した親友なのだぞ！

その時、アキは一枚の書類を手に、クスクスと笑みを零した。なんだと彼を見ると、アキは楽しそうに声を上げる。

「ねえ教授、今年の首席についてなんだけど、男子の方はぼくが頂いてもいいかなあ？」

今年度の首席について。そう言えば、まだ決めてはいなかった。

「構わない、学年の成績表を付き合わせる必要もないだろう。十二ふくろうの秀才は、君の代ではただひとり、君だけだ」

「そういうわけにもいかないよ。成績表、ぼくが見ても構わないかな？ ああ、でも、一生徒が見るわけにはいかないかな……」

「君は変なところで気を遣うな。未だに自分をただの一生徒だと思つているのなら、それはいつそ傲慢というものだ」

七年生の成績一覧を書類の山から引つ張り出すと、魔法でアキの元へと飛ばす。アキは視線だけで、セブルスが渡した一覧表を空中に縫い止めた。

「女子を決めたいんだよね。ハーマイオニーがいれば彼女に決定だったんだけど、彼女は新学期には来ないだろ。だったらレイブンクロウのクレアかな……あつ、アクアも中々、へえ……」

ブツブツと独り言を言いながら、アキは空に金色の数字を書き連ね

ている。どうやら計算をしているようだ。

「君が、首席バッチを欲しがるとは思っていなかった。てつきり、そういうものには興味がないものかと」

そう呟くと、アキは無邪気な笑みを寄越した。

「そんなことはないさ。褒められたら嬉しいし、努力が報われたらやる気が出る。幣原だって、魔法魔術大会で優勝したときは誇らしい顔をしてただろう？ まあそれはそうとして、首席はね、結構嬉しいんだ。幣原にぼくが抜きん出た、唯一の証明になるからね」

思わず、苦いものを呑み込んだ。

「……なるほど」

この少年の頭上には、いつだって幣原秋がいる。

幣原秋に造り出された紛いもの。ハリー・ポッターを護るという、ただそれだけの目的のために生み出された、秋の魂のひとかけら。

生きる意味も、目的も、全てが幣原秋によって用意されたその人生。幣原秋のために生き、そして幣原秋のために死ぬ、幣原秋に非常によく似た偽者。

「……寝付けなかったんじゃない。本当はね、飛び起きたんだ。悪い夢を、見てしまって」

ぼつりと、アキは呟いた。

「夢で見ていた幣原の記憶は、もう全て受け継いだ。……幣原の記憶を受け入れることは、何でもないんだ。仲間がどれだけ目の前で死のうと、どれだけの命をこの手で奪おうと。それがあいつの罪だというなら、ぼくは死ぬまで付き合うさ」

そう言つて、アキは静かに息を吐いた。

「……だからね。恥ずかしながら、アキ・ポッターが悪夢というものを見たのは、ここ最近が初めてでね……ぼくはこれまで、夢というものを一度たりとも見る事がなかった。他人が言う悪夢が何なのか、幣原の記憶を通して見た夢でしか、知識がなかった。……自分の目で見て、初めて理解したよ。悪夢とは、救いようがないものだね」

眉を下げてアキは笑う。

「……悪夢で寝付けないというのなら、薬を煎じてやろうか？」

そう言うと、アキは笑みを崩すことなく首を振った。

「気遣いありがとう、でも大丈夫。元々、生ける屍の水薬にはトラウマがあつてね。まあ幣原がかつて常飲していたものだし、確かあれには依存性があるだろう？ 抜くのちよつと苦労したんだよ」

「ああ……」

依存性か。

——さらりと言つてくれる。

「……わかつた、ならば良いが——それでも、さつき君が言つたことだが、闇の帝王の前で無様を晒す真似だけはするなよ」

「承知しているよ。何、君が望むなら、いくらでも魔法をかけてあげる。痛みもなしに終わらせてあげるよ。戦線離脱したいなら、出来る限り早めに伝えてくれると嬉しいな。だってほら、リコール期間は欲しいだろ？」

「ハッ……よく言う。それはこちらの台詞だ、アキ・ポッター。いつでも降りてもらつて構わんだぞ」

「言うねえ」

強がりのような戯言だった。

お互いが重々承知の上だ。

——既に舞台の幕は上がった。

役者は揃つた。

今、息をしている意味は、ここにある。

唯、今だけの為に、生きている。

「……………」

そう。

退路はとうに断ち切つた。

アルバス・ダンブルドアに『死の呪文』を向けたあの瞬間、セブルス・スネイプの中から『逃げる』という選択肢は消えたのだ。

忘れられない。

全て、憶えている。

死の間際、アルバス・ダンブルドアが浮かべた微笑みも。

呪文を紡いだ唇の感覚も。

手の中で杖が、僅かに身動いだことも、全て、全て、全て——憶えている。

一生、忘れないのだろう。

忘れられる日など、来ないのだろう。

——ならば。

それを幾度も、幾度も、幾度も幾度も幾度も幾度も幾度も幾度も、繰り返し、繰り返し、繰り返し続けた血染めの英雄、黒衣の天才は。

擦り切れながら、摩耗しながら、それでも四肢に力を込め、頭を上げた英雄は、未来を信じ進み続けた。

この罪の先に、幸福な未来が在ることを願って。

この杖が、明るい世界を切り開くのだと祈って。

「……………いよいよ」

小さな声が出た。アキの声だ。

セブルスが顔を上げるのと、アキが閉じていた瞳を開けるのは、ほぼ同時だった。

「済まない、何か言ったか？」

そう尋ねると、アキはそつと微笑んだ。手に持つ書類を静かに机に放る。

「何でもないよ。それより、気晴らしに夜風でも浴びないか？」

「は？ いきなり……………それに、今は一体何時だと……………」

反論した声は、身に走った予感に途中で掠れた。

——風が。

締め切られた部屋の中、何処から風が吹いている。

彼はそつと、体重を預けていた机を押し返した。そのままベランダへと歩いて行く。

風に、彼の長い髪の毛先が、ふわりふわりと揺れていた。

「——」

思考も、感情も、何一つ言葉にはならなかった。

書類を放り投げると、彼の背中を追いかける。

外は、月の光に満ちていた。彼の艶やかな黒髪に、蒼い影が落ちてくる。

彼はそのまま、欄干へと足を掛けた。とんつと軽やかに跳ね上がる
と、音もなく屋根へと降り立つ。

重力操作の魔法だろうか、そう考えるのも野暮だった。

ただ彼が、天使のようにも見えたから。

後を追わない、なんて選択肢は、最初から存在しない。

無様でも構いはしなかった。柱にしがみ付いては、腕を伸ばして屋
根瓦に指を掛ける。

これまでロクな運動をして来なかったものの、意外と身体は動いて
くれた。十七年のホグワーツ生活で、生徒たちに揉まれていると、そ
れなりに体力はつくらしい。

屋根に這いつくばり、何とか身を起こす。闇の帝王から空を飛ぶ秘
術を教わっていたことを、額に浮かんだ汗を拭ったときに思い出し
た。

だとしても、あれは闇の魔術だ。彼の眼前で犯したくはない。

腕を後ろで組んだまま、彼は屋根の尾根を伝い歩いて行く。足取り
は緩く軽やかだった。

「……っ、……」

口を開いて、そのまま閉じた。

自分が声を掛けたら、彼は消えてしまうのではないだろうか。

アキ・ポッターとの信頼、もとい、利害関係は構築できている。目
的を同じくする仲間であり、背を預け合う朋友であるとの認識はあ
る。

だが、彼はどうかだろうか。

元来善良で、心優しい彼のこと。できるだけ犠牲を出したくない
と、その思想に賛同はしてくれるだろう、などと——そんなものは、セ
ブルスがただ思いたいだけだ。

彼がセブルスを信じる理由は一つもない。

彼の『死』後、命日には必ず彼の墓前で額ずき、心からの謝罪と懺
悔を繰り返し続け——だからといって、そんなセブルスの行動を、彼
は知る必要もないのだから。

棟の先で立ち止まった彼は、ただ眼前の風景を眺めているようだっ

た。都会から少し離れた港町、その高台からは、市中の様子と同時に、遠くまで広がる真っ黒の海が見通せる。

この屋敷は、若い夫婦が所有していた。新婚旅行に行く暇が無かったと嘆いていたため、今頃は地中海で羽を伸ばしていることだろう。闇夜に沈む世界は、昼間の喧騒が嘘のように静かで、今まさに戦争が起こっている最中だと思えないほどに穏やかだ。

屋根の一番高いところで足を止めた彼は、黙って海を眺めていた。セブルスに視線を向けぬまま、彼はそつと口を開く。

「……幣原秋の怖いものつて、何だと思っ？」

問いかけられているのだと、一拍遅れて気が付いた。

——幣原秋の、怖いもの。

何だろう。何だつて思い浮かぶような気もするし、そのどれもが不正解な気もした。

ただ、セブルスは。

「……アキ・ポッターの前でまね妖怪が変身したのは、ハリー・ポッターの死体だと聞いている」

まね妖怪。

『リばディかクかラス』で退治できる、力の弱い魔法生物。

学生だった当時は、こんなものの何処を怖がるのかと侮っていた。

大人になった今、思う。

——自らの最奥にある恐怖を晒されるのは、どれほど恐ろしいことだろうか。

セブルスの言葉に、彼はそつと口元を緩めた。

「彼が三年生の頃の話か。リーマスの授業では、そうだったね」

「今は違うと？」

「今の彼が一番怖いものは、多くの人の命が奪われる未来だよ。そしてそれは、ぼくが恐れるものとも重なっている」

そう呟いて、彼はゆるりと左手を上げた。思わずぴくりと反応するも、彼の手の中は空っぽだった。

そのまま静かに、彼は天を指し示す。

——一瞬のことだった。

煌々と輝いていた月が、瞬時に雲に覆われる。

陰った世界の中、黒黒とした雲は渦を描いては、ある図形を形作つた。

それを見上げてセブルスは、ああ、と小さく息を吐く。

頭上に大きく広がるのは、髑髏に蛇が巻き付いた『闇の印』だった。

「……馬鹿みたいだろ。『黒衣の天才』、英雄とまで呼ばれてき、最期は国葬までも賜った、そんな男が心の底から恐れるものが、たかがこんなちっぽけな絵だなんて」

自嘲的に、彼は笑う。

セブルスは、笑えなかった。

彼が手を下ろすと、そのまま雲は霧散する。数度瞬きをすれば、空は普段通りの姿を現した。

ただただ穏やかに、月は世界を照らしている。

思わず、左腕を掴んでいた。

そこには、闇の帝王が印した決して消えぬ刻印がある。それは、目の前に佇む彼の左腕も同様だった。

彼は一体どんな気持ちで、その刻印を刻んだのだろう。

この印はきつと、彼の父母が死んだ現場にも残されていたのだ。

おそらく彼にとって、この闇の印は『守れなかったもの』と強く結びついている。

一歩遅れた。間に合わなかった。殺され壊され奪われた。そんな、忌まわしき記憶の旗印なのだ。

彼の髪が、緩く揺蕩う。空を見上げて彼は呟いた。

「もう二度と、この印を見ない世界にしたい。そんなぼくの願いを、アキ・ポッターは『必ず叶える』と誓ってくれた。だからぼくは、君たちに賭けようと思っている」

彼の細い背中を見つめ、口を開いた。

「……私も誓おう。全てを、必ず守ってみせる。この身を賭けても構わない」

「……別に、賭ける必要はないさ。どうも皆、命やら信念やらを賭けるのが好きだよね」

彼の口調は、少しぼんやりとしていた。

そつと、彼は続ける。

「命も名誉も要らないよ。たかがそんなもので責任を取れると思っ
ている方が興醒めだ。失われたものは決して戻らない。だから自分の
身は、大事にしてくれ」

「……………」

リリーとジエームズの死体を最初に発見したのは、幣原秋だと聞い
ている。

襲撃により半壊したポッター家は、今もなおゴドリツクの谷にて保
存され、今は観光名所となっていた。

真上に闇の印がおぞましく輝く家に踏み込んだ時の彼の心情を、セ
ブルス・スネイプは想像する。

幣原秋のことを理解できているとは、思わない。

それでも、理解したいと願っている。

「……………ぼくの側だけ弱みを見せるのは、不公平だ」

どこか遠くを見つめながら、彼は小さな声でそう言った。

そこでやつと、今の彼の言葉が、彼なりの歩み寄りであったのだと
理解する。

自ら弱さを晒すことで、敵でないと示しているとしても言うのだろう
か。

——彼も随分と、人付き合いが下手になった。

アキ・ポッターに現世を任せ、引きこもり過ぎた弊害か。

「怖いもの、か……………」

リリー・エバンズがこの世を去り、そして幣原秋の死を知ってから
というもの、まさしく抜け殻のように生きてきた。

どこにも自分の居場所はなく、どこにいても場違いなようで——か
と言つて死ぬことも許されない。

いつ死んでも良いと思つていた。世界の全てが灰色で、何もかもが
他人事の人生。

だから、だろうか。

少し前までの自分には、怖いものなど何もなかった。

今は――

「君を、喪うことが怖い」

そんな言葉が、心の奥底から零れ出た。

共に笑い合うことは、望まない。再び友人として隣に立つことは、望まない。

信じ合い、共に生きる未来は、望まない。

ただ、生きていてくれる。ただ、ここにいてくれる。

セブルスはもう、それだけでいい。

「……………」

セブルスの言葉に、彼は小さく息を呑む。肩を震わせ俯いた、その背中に声を掛けた。

「この言葉を、受け取ってくれとは言わない…………聞き流してくれるだけで構わない。それでも、言わせて欲しいんだ…………生きていてくれて、ありがとう」

死にたかっただろう。

生きていたくはなかつただろう。

誰ひとりとして、殺したくはなかつただろう。

英雄になって、なりたくはなかつただろう。

あんな大掛かりな真似をして、自らの死を偽装して。

それほどまでに、この世界から消えてしまったかったのだ。

そんな彼に掛けるには、酷な言葉だとわかっていた。

それでも、どうしても伝えたかった。

「…………、ぼくは…………」

そつと、彼はセブルスに向き直った。意を決したように顔を上げては、眉を寄せ視線を落とす。

目を伏せた彼は、言葉を探すように奥歯を噛み締めた。

アキ・ポッターと同じ顔であるというのに、それでもその表情は、ただ、彼だけのものだった。

「…………ぼくも、君に…………伝えたい言葉が、あったんだ」

ぎゅつと、彼が拳を握る。

怖がるように、迷うように、身体を強張らせた彼は、それでも静か

に顔を上げた。

「こんな言葉を告げるのに、十七年も掛かってしまった」

不器用でぎこちない、それでも精一杯の笑顔を浮かべ、彼は言う。
掠れて震えた、囁き声で。

「君に、また、会えてよかった」

番外編 アクア視点 私達の未来

「知ってるか？ アキって基本朝は早いけど、年に数度寝坊することがあるんだ」

そう言ってきた相手の顔を、思わずジッと見た。

短い金髪に、碧の瞳。左の耳に二つのピアスを揺らした私の幼馴染、アリス・フィスナーは、私の視線に気付かぬまま、フオークでミートパイを崩している。

魔法省唯一の食堂は、ピーク時はとんでもない人でごった返すものの、それを過ぎれば人は疎らだ。少し遅いランチとでも洒落込もうとした折、その中で見つけた数少ない知り合いの姿に、席を外す理由は思いつかなかった。

「……あなたも、随分遅いのね」

「ん……まあ、な。入りたて、だし」

そんな言葉を一つ漏らし、目の前の彼はペリエを煽る。それを見て、私も少しだけグラスを傾け、唇を潤した。

「お前、いつもこの時間に昼なのか？」

「……そういう訳じゃないわ。たまたま、よ」

私が闇祓い局に入局して、三ヶ月が経った。この時間に昼なのは、単に午前の仕事が終わらなかったからだ。

今年の闇祓いは、入部希望者は全員受け入れるという大判振る舞いだった。入部試験どころではなく、またいもり試験どころではなかったからというのが理由だ。それにつられて入部した同期は多かったが、じきに篩に掛けられて行くのだろう。既に半分は減ってしまった。夢と希望で乗り切れる職ではない。

「あいつは反対してたんじゃないの、お前が闇祓いに入ること」

その通りではあったが、同意するのは癪だった。第一この男は、どうしてこうもアキのことを知ったように話すのだろう。仲が良いのは承知の上だが、ここまで来るとイラツとする。しかも、無自覚だし。

「……押し切っただけよ」

「押し切っただけ、ねえ」

意味を含むように私の言葉を繰り返す。

学生時代と変わらぬシヤツ姿。襟元は流石に少しボタンを詰めたようだ。所属を一目で示すローブを日頃纏わないのは、ホグワーツ卒業後も変わらない。

「そういや、とんとあいつに会ってねえな。あいつが退院しちまつてからは、一度も」

「……まあ、そうでしょうね」

「連絡は取ってんのか？」

一瞬、躊躇した。

「……ええ、まあ」

嘘ではない。ゼロではない、というだけだ。

新たな年度が始まり、新たな身分になり、三ヶ月。その間交わした手紙は一通きり。こちらから送って、その数週間後に返って来た、ただ、それっきり。

アキの様子は、弟のユークからのふくろう便がむしろ雄弁だった。私の可愛い弟は、お姉ちゃんが心配でならないらしく週一でふくろう便を送ってくる。

先の戦いで亡くした両親ですら、こんなには連絡をして来なかった。授業の様子、生徒からの評判。私はアキが思うより、随分と多くのことを知っている。

「ま、あいつなら、どんなところでも生き抜けるとは思うがな」

果たして、それはどうだろう。私はそこまで、アキを信じ切れはしない。

誰もが、アキは強いと言う。真っ直ぐな眼差しで、背筋を伸ばしてただ前を見つめられる人だと言う。その言葉を否定はしない。

でも、私は知っている。アキの強さに隠された脆さを、私は多分、知ることを赦されている。

ホグワーツ特急のデッキで、土砂降りの雨の中、彼に縫られたあの時を。時計塔から飛び降りようとした直前に見せた、あの微笑みを。幸せになることを恐れた、震える瞳を、きっと私だけが知っていた。

でも——それでも。

私しか知らないアキがいるのと同じように、フィスナーしか知らないアキは、きつと存在するのだろう。私が想像出来ないアキが、きつと沢山いるのだろうか。

アキにとって、私は恐らく『特別』だ。

しかし、その『特別』な場所にいるのは、私一人では決してない。フォークでリンゴを突き刺した。咀嚼しながら、考える。

アキにとっての唯一は、私でも、フィスナーでもなく。

唯一人、ハリー・ポッターに他ならないのだろう。

アキの存在にも関わる、大切な人。いつだって連絡を取り合える羊皮紙を渡した相手は、ハリー・ポッターだ。

私では、ない。

そう思うと、何だか笑えてきた。脈絡なく笑みを零した私に、フィスナーは訝しむ視線を向けてくる。

「どうした？」

「別に……なんて、誤魔化すのも野暮ったいわね。単に面白いなと思ったの。私たち、一応はずつと付き合いがある間柄なのに、アキのことしか共通の話題がないみたいで」

「アイスコーヒーを飲み終わり、立ち上がる。」

「あまり一人の友人に依存し過ぎると、女の子にモテないわよ？ アリス」

子供の頃のように名前と呼んだ。随分と可愛らしい響きを持つそれに、彼の顔が苦味を帯びる。

「……そんなに依存してるか、俺」

「自覚ないの？ 小悪魔ね、アキも」

肩を竦めた。

まあ、それも、アキラしいと言えばアキラしいのだけど。

「……学生時代から、いきなり環境が変わってさ。今までいつもそこにいた奴が、今じゃ会おうと思ってもなかなか会えなくなった。物事が一瞬で変わることなんざ、とうの昔に知っていたことなのに」

アリスは小さな声で呟いた。

「……クリスマス」

口を開いた私に、ん？ とアリスは目を上げた。

「予定ある？」

「ねえけど……何だよ、突然」

「それなら空けておいて。……あの連絡不精さんと少し話せば、あなたも気が紛れるでしょ？」

そこまで依存してねえ、と、目の前の彼はムツと眉を寄せた。どうだか、と軽く肩を竦める。

「……いいのかよ」

「何が？」

「二人きりじゃなくって」

「二人きりなんて初めっから考えてないわ」

目を瞬かせるアリスの前で、指折り数えた。

「私にユーク、ハリーにハーマイオニー、そしてロン……ウィーズリー家の方達もきつと集まると思う」

他にも多分、何人も。アキに知らせることなく、クリスマスパーティーの準備は着々と行われている。

共に、クリスマスを祝いたいのだと。

祝えるこの幸運を、噛みしめるように。

だから来てね、そう言うのと「なんでそんな大人数なんだよ……」とアリスは嘆息した。頭を抱える彼に、笑う。

「あら、知らないの？ クリスマスはね」

家族と過ごす日なのよ。

左手を、軽く振った。

そう、クリスマス。付き合い始めて四年目の記念日なのだし、指輪でもせがんでみようか。

アキは一体、どんな反応をするだろう。何事も積極的なのに、私に關してだけは臆病な彼。

それならば、渋々ながらもこちらから、距離を詰めても良いだろう。

「……離れてても、よくアキを信じられるな」

アキアと、そう呟かれた声は力ない。

アキのことを信じ切れなど、していない。けれど、この気持ちを言

葉にするとしたら、きっとこのようになるだろう。
「だって、私の未来の旦那様ですもの」

短編 シリウス視点 空が墜ちた日（上）

アズカバンに朝は来ない。

常夜の闇に閉ざされた奈落^{アバドゥン}の底。この孤島を最悪の要塞と仕立てた狂人、彼の没後数百年が経って尚、孤島全体に染み込んだ不幸と苦痛は、決して祓えぬ闇の帳としてこの地に君臨し続けている。

吐き気がする浮遊感と共に、シリウス・ブラックは目を覚ました。

「……………、……………」

吐く息が白い。何百という吸魂鬼のせいで、アズカバンはいつも凍えるような寒さだった。

どれだけの間、蹲っていたのだろう。独房に差し込む微かな光さえ、闇に慣れた目には眩しく思える。

身を震わせ、動物^{アニメーガス}もどきを解除する。ヒトの躰は、犬のものより寒さが堪える。凍えて上手く動かない四肢を引きずりながら、看守である吸魂鬼が運んできた食事に手を伸ばした。

空腹は覚えても食欲は湧かない。味覚はどうに喪った。煮込まれたものの原型すら留めない薄いスープを、それでも無理矢理胃の奥へと流し込む。

アズカバンの囚人の中には、段々と食事に手を付けなくなる者も多い。

アズカバンでは、生きる気力や希望が根こそぎ奪われていく。ぼうと虚空を見つめたまま、気が付けば呼吸を止めている。そしていつしか、それを羨ましく思っている自分がいる。

——ただ、死ねない理由があったから。

かつての友、ピーター・ペティグリューの裏切りに対する、深い悲しみと憤り。彼への憤怒が、今のシリウスが息をしている、たったひとつの理由だった。

——まだ、逝けない。

親友が死ぬ原因を、自分がこの手で作ってしまった。ピーターだけは、自分がこの手で始末を付けなければならぬ。

それでもしないと、親友に顔向けできない。

——まだ、何も償えていない。

ピーターのことを考えると、胸の中に炎が灯る。

昏く陰鬱な復讐の炎は、それでもシリウスの心を暖め、今日を生きる糧となってくれる。希望の儂い光と違う、吸魂鬼にも奪えない絶対のもの。

(あの野郎のおかげで生きてるとか、考えるだけで最悪な気分だけど) 空になった器を通路へ押しやり、力を振り絞って立ち上がる。

胃に物が入ったおかげで、少し頭がしゃんとしてきた。その分、他の囚人たちの呻き声もまた、より明瞭に聞こえてくる。

誰へのものか、きつと本人にもわからないであろう謝罪。幼児帰りしたように、親を呼んで泣くしわがれ声。気が触れたような喚き声。何ものかに対する憎悪の声が、きつと一番大きくて力強い。

聞いているだけで、こちらの精神も削られる心地になる。いずれ、慣れてしまうのだろうか。それより先に、自分の気が触れるのが早いだろうか。

早く奥の暗がりへ行つて、ただじつと耳を塞いで耐え凌ごう。息をするだけの獣になって、夢うつつのまま時間が過ぎるのを待とう——

何日、何ヶ月、何年、何十年？

——どれだけ耐えれば良い？

——どれだけ耐えれば、ジエームズは俺を赦してくれる？

赦されない。赦されない。償いきれない過ちに息が止まる。惨め過ぎて死んでしまいたい。赦されない。赦されてはならない。赦されてはならない。だつてまだ償えていない。これしきの苦痛ではまだ足りない。償いにならない。死にたい。死にたい。死んではならない。死んではならない。解放されたい。救われたい。赦してくれ、助けてくれ、ジエームズ——

「……っ、」

頭を壁に打ちつけた。躊躇はない。くらりと眩む視界と共に、絡まった思考は消えて行つた。

そのまま大きく息をつく。目を数度瞬かせて、狂った平衡感覚を取り戻す。

その時、何かが視界に映った。這い寄って確認する。新聞だ。アズカバンを訪問した役人の誰かが落として行ったのか。

鉄格子の隙間から手を伸ばして新聞を掴む。何故かぐらぐらする頭を押さえながら、一面を捲る。

——目が『それ』を認識するより、身に走った予感の方が早かった。ドクンと心臓が脈を打つ。命の感触を思い知る。

吸った息を吐けぬまま、吐いた息を吸えぬまま——新聞の写真に指を這わす。

動かない。

その写真は動かない。

漆黒の棺の上に、山と積まれた白百合の花。

墓石に刻まれた、かつての英雄の銘。

世界を湧かせた血塗れの英雄。

彼はその手で、自らの命に幕を下ろした。

「——ああ」

深く、深く。

肺腑を絞り出すように、息を吐く。

不思議と、疑問は湧かなかった。

そうか。

君も、死んでしまったのか。

「秋」

眩いて、目を瞑った。

約束した時間から十分が過ぎた。懐中時計の文字盤を見つつ、シリウスは目をすがめる。

待ち合わせ場所に間違いはない。ダイアゴン横丁の顔である『漏れ鍋』前。陽が落ち始めたものの、そこかしこにある灯りのおかげで、人の判別くらいは容易だ。

時間には几帳面な奴だった。それこそ、余裕を持って待ち合わせの十五分前には到着しているような。だからこそ彼と待ち合わせる時

は、ついつい自分も気が急いでしまって、普段より幾分早めに出てしまふこともしばしばだった。

今回もそう。

待ち合わせ場所に着いたのは、約束した時間の二十分前。今日は秋より早く着いたぞと、にんまりしたのも束の間のこと。

どうも自分はこんな場所に一人でいると『デートをすつぽかされた人』のように見えるのだそう。辺りに居合わせた女性たちが、好機とばかりに寄ってくる。

普段なら据え膳と美味しく頂くところではあるのだが、生憎と今のシリウスは、デートをすつぽかされたわけでもなければ、待ち合わせしている相手が恋人というわけでもないのだった。

「というか、マジでなんかあったわけじゃねえよな？」

と、そんな心配をし始めたのは、約束の時間からゆうに三十分が経った頃のこと。

何かあったら連絡くらいは寄越すはずだと判断する頭に、「そうは言っても連絡すら寄越せない状況に陥っていたら？」と不安が囁く。

闇祓いの彼に限って滅多なことがあるとは思いたくないが、それでも今は闇の時代だ。闇の帝王、ヴォルデモートとその臣下が蔓延ることごと世、『万が一』は十分に考えられる。

否。むしろ闇祓いだからこそ『滅多なこと』は付き物かもしれない。危険に自ら飛び込む職業。悪意の前に身体を張り、杖ひとつで闇を祓う道を選んだ、誰よりも何よりも優しい彼。

嫌な予感を振り払う。

「……とにかく、連絡を……」

マグルのような通信機器はないものの、『不死鳥の騎士団』の一員たるもの、守護霊に声を乗せて飛ばすことなら簡単にできる。

杖を取り出しかけ、ふと空を見上げた。太陽は既に陰り、西に赤紫の残光を示すのみ。薄色の淡い雲が、紺青の空を細く横切っている。

その時。

何かが空から降ってきた。

漆黒の髪。漆黒のコート。焦りが滲んだ漆黒の瞳が、ぎよつとした

ように大きく見開かれる。

何もない空中に『出現』した彼は、そのまま地球の重力に従い、まっすぐ、シリウスの頭上へと――

「ぶぐうつ!?!」

『滑落』と言って差し支えないほど、それは無様な落下だった。

咄嗟に手を伸ばすがもう遅い。いや、受け止めることはできた。ただ体勢までは追いつかなかった。

結果、成人男性一人分の重量を支えきれなくなった身体は、腰やら背中やらを盛大に地面に打ちつける羽目になる。

きやあつと周囲から悲鳴が上がった。

「わああつ、ごめんねシリウス！ 焦ってたもので、ちよつと転送位置ミスっちゃった！ やっぱり横着しちやダメだねえ」

慌てた声が腹の上で聞こえる。

おい、ともうう、ともつかぬ音が、自分の喉から溢れ出た。かろうじて、腕で「とつとと退け」と示す。

腹の上の重みが引いて、やつと呼吸ができるようになった。薄目を開けて仰ぎ見る。

彼は。

待ち人である幣原秋は、申し訳なさそうな笑みを浮かべて、シリウスに手を差し伸べていた。

「本当にごめんね。立てるかい?」

「コノヤロ……さんざん人を待たせておいて、この仕打ちかよ」

差し出されたその手に掴まり、身を起こす。その間に秋は、周囲の人々に対し「驚かせてしまつてすみません」と謝罪していた。

地面で打ちつけた肩や腰が痛む。撫でさすつていると、振り返った秋は一度目を瞬かせ、左の手で軽く指を鳴らした。途端、嘘のように痛みが消えてなくなつていく。

「腕を上げたな」

「ごめんつてば……」

「いや、責めてるわけじゃない。……見りゃわかるよ、仕事か思いの外長引いてしまつて、ここまで急いで来たんだろ? 闇被いの服も脱が

「ずいさ」

「あ」と小さな声をあげて、秋はいそいそと闇祓いのコートを脱いだ。どうやらすっかり失念していたらしい。このご時世、軍隊のような階級章は流石に目立つ。

階級章。そうか、もう彼は訓練生ではないのだった。本来ならば三年掛かるはずの訓練を、たった一年で終わらせた異例の新人。

——当然だ。だって秋なのだから。

ジエームズが見出した稀代の天才。

常人の何倍、何十倍、何百倍といった膨大な魔力を、彼はその身に宿している。それでいて、魔力の扱いは誰よりも繊細で丁寧だ。決して大味になることのないその様は、既に達人の域に達している。

「でも、連絡くらいくれりゃあいいのに」

それなりの時間待たされたのだ。このくらいの恨み言は良いだろう。そんなシリウスの言葉に、秋は「え？」と首を傾げた。弾みで、秋の片耳に嵌った黒のイヤリングが揺れる。

「連絡したよ？ ついさつき、魔法省から出たとき、だけど。『今から向かう』ってさ」

「は？ いや、来てないけど」

「ええ？ 嘘だあ」

嘘ではない。そんな嘘などつくものか。そう反論しようとした矢先、守護霊が音もなく飛んでくるのが見えた。鴉の姿をしたその守護霊は、秋の声で喋り始める。

『ごめんシリウス、今から向かうから、あとちよつとだけ待っていて！

この埋め合わせは必ず——』

「……………」

「……………」

「…………ぼくが『姿あらわし』する方が早かったんだね」

「理解が早くて助かるよ、友よ」

まじごめん、と秋はシリウスに向かって両手を合わせる。

その仕草、というより、そもそも自分は秋に弱いのだ。何をされても怒る気になれないというか、何があっても許せてしまうというか。

現に、今だつて全然怒りは湧いてこない。いや、先ほど秋のブーツが腹のイトコに入ったときは、ちよつとだけ恨めしい気持ちになりはしたが。

「別にいいさ。立ち話もなんだ、行こうぜ」

「あ、うん。……ところで、シリウス？ 今日とは一体、何のためにぼくを呼び出したの？」

「ん？」

秋の問いかけに、言葉を返した。

「だって今日は、君の誕生日だろ」

シリウスの言葉に、秋は呆気にとられた顔をする。その顔を見ながら少し思案した。

本当はもう少し先で渡そうと思っていたが、減るものでもないし、まあいいか。

用意していた花束を『出現』させると、そのまま秋に手渡した。

「おめでどう、秋。君とこの世界で巡り会えた奇跡を、君と共に祝いたい」

呆然と花束を見下ろしていた秋の表情が、何かを噛み締めるようにゆっくりと綻ぶ。

そつとシリウスを見上げた秋は「君がモテる理由が、なんだかわかった気がするよ」と、照れたようにはにかんだ。

「それはそうと、ぼく、花瓶持ってないんだよね」

食後の紅茶を傾けながら、秋は独り言のように呟いた。え、と思わず反応する。

コース料理も一通りが終わり、デザートが運ばれてくる頃には、秋の緊張もだいぶ解けてきたようだ。前菜が来た辺りの秋は、思わず笑ってしまいそうになるくらいの緊張っぷりだったから。笑うのは流石に失礼だと、シリウスは必死に堪えていたものだ。

「こんな高所……良いとこのレストランは、なんだか場違いな気になるんだよ」と秋は渋っていたが、一体どうしてそんな気持ちになるの

か、シリウスには理解できない。

秋はいつもきちんとした格好をしているから、ドレスコードにも問題はな。食事のマナーも、特に気になる部分はなかった。

秋は自分を庶民の出だと言うものの、それにしても諸々の所作が丁寧すぎる。実は日本では、それなりに知れた名家の出身なのではないかと、密かにシリウスは疑っていたりもする。

ホグワーツは秋の両親にとっても母校なのだと聞いている。秋はあまり意識していないようだけど、WW2以前の、それも極東の地からの留学生なんて、それこそ庶民ではあり得ない話だろう。

「花を飾る用に、家にあるもんじゃないのか？ 普通」

「家に花を飾らないから、ないんだってば。実家にはあつただけだね」

母さんが好きだったから、と秋はそつと目を細めた。その瞳に一瞬暗い影が過ぎる。

「……ああ。あと、一度……こうして誕生日に花をもらったことがあつたなあ……」

口調は懐かしむようだったものの、声は精彩を欠いていた。

今日のこの日に、そんな暗い顔をさせる気はない。空になったカッブを置いて、シリウスは立ち上がる。

「なら、花瓶買いに行くか。小洒落た良いやつ」

「え？ あ、ちよつとシリウス、お会計は?!」

「もう済ませた。いちいち言わせんな、そういうのを無粋と呼ぶんだぞ」

主役に払わせるわけがないだろう。侮るのも大概にしてほしい。秋はしぶしぶ口をつぐんだ。その手を取って店を出る。

陽が落ちると、外を出歩く人の数はぐつと少なくなる。忍び寄る闇に、思わず足取りは早くなる。

それでもまだ、通りには賑わいがあつたし、パブは仕事帰りの人で溢れていた。まだ飲み足りない若者たちも、二軒目はどの店が良いかと言いつ合っている。

ショーウィンドウを眺めながら通りを歩いて、ピンと来た店の中へ

と入った。輸入雑貨が並ぶ棚で足を止める。どれが良いかと品定めをしていると、ふと秋に袖を引かれた。

店員の耳に入らぬよう、秋は小声で囁く。

「シリウス、シリウス、確かにここの雑貨はどれもおしやれなんだけど、それ以上にお値段が格好良過ぎるよ！ 具体的には二桁ほど！」
「……………」

「ぎゃあつ、なんで更にティーセットまで追加してんの!? 嘘嘘、信じられない、良いとこの坊ちゃんめ！」

「君は金の使い方が下手だよな」

呆れて嘆息した。闇祓いがいくらもらっているのかは知らないが、先ほど「忙しくて使う暇がないから貯まる一方」と愚痴っていたのはどこの誰だ。

そもそもこれは秋へのプレゼントなのだから、秋が額面を気にする必要なんてないというのに。

「遅刻の埋め合わせしてもらわないとだったし」

「ぼくが遅刻したのに、余計奢られてんのは変な気分だよ…………」

ぼやく秋に構わず会計を済ませる。陶器を持ち歩くのは嫌だから、秋の家へ届けてもらうようにした。

秋の住所までは流石にシリウスは覚えていない。

「秋、すまないが、君の住所を…………、秋？」

振り返って秋を見る。

秋は何かに気を取られたかのように、店の窓をじっと見つめていた。その唇が微かに動く。

「…………今、何か聞こえなかった？」

「何が？」

「——誰かの、悲鳴が」

そう呟きながら、秋は既に駆け出していた。店の戸を押し開け外へと飛び出す。一瞬ギョツとしたものの、すぐさまシリウスもその背を追った。

外は、不穏な空気に満ちていた。先ほどまでの華やかな賑わいは何処にもない。

遠くでガラスが割れる音がして、一つの店の灯りが消えた。

道行く人が、悲鳴を上げながら姿をくらます。『姿くらまし』ができない人びとは、恐怖に背を押され、少しでも距離を取ろうと逃げ出していく。

黒い瘴気が飛んでいる。

箒にでも乗っているのかと思うようなスピードで、それは自在に空を舞い、大通りを蹂躪する。

——泣き声と共に、またひとつ、店の灯りが掻き消えた。

「こつちだ、秋！」

通りを逃げ惑う人の群れは、正面から行き合っても立ち往生してしまふだろう。

秋の手を掴み、上を示す。それだけで秋は理解してくれた。

シリウスを見て頷いた秋は、軽やかに屋根へと飛び上がって行く。その身のこなしに内心で感嘆しながら、シリウスも後へと続いた。

「——はい、応援を要請します。場所は——」

前を行く秋が、闇祓い本部へ連絡を入れている。二言三言で話はいったようだ。

ひとつに括られた艶のある髪が、尻尾のように右へ左へ揺れている。

眼下を流れる人の波。その流れに逆らい、闇夜を駆ける。

破壊の元へ。悪夢の坩堝へ。惨劇の元凶へ。

半壊した店の中。

この悪夢を生み出したであろう男は、愉しそうに笑っていた。

「……っ」

「待って、シリウス」

「何故止めるー！」

飛び出しかけたシリウスを、秋の腕が素早く押し留める。思わず頭がカツとなった。

男の足元には女性がいる。蹴倒されたテーブルや割れた食器などがそこかしこに落ちた空間で、ウエイトレスの制服を纏った娘が、男に蹴り転がされている。

秋を睨むも、秋はイヤリングを摘んだまま、じつと男を見据えていた。

「人質を取られると厄介だ。それに、仲間がいないとも限らない」
「だからって……！」

言いかけた言葉は、漆黒の瞳に遮られた。

小さく息を吐いた秋は「……わかったよ」と頭を振る。

「ぼくが男の注意を引く。その隙に、君は彼女を助けてくれ」
「……ああ。了解だ」

頷く。と、秋は一度、唇を噛んでシリウスを見た。

揺れる瞳は、一体何を思っているのか。判断が付かず「どうした？」と尋ねかける。

「……いや、何でもないよ、シリウス」

「？……そうか」

互いに頷き合って別れる。

秋は表に、シリウスは裏手に回った。勝手口を探して中に忍び入る。室内は真つ暗だが、灯りを付ければ勘付かれる。

ここの家主か店主だろうか、倒れている死体を跨ぐ。『不死鳥の騎士団』の任務で、死体は徐々に見慣れてしまった。業務用の大きな冷蔵庫の傍を抜けると、カウンターの脇にしゃがみ込んだ。同じ頃、入り口の側から秋の声が聞こえてくる。

「こんばんは。今、いいですか？」

敵意のない、穏やかな声。思わず気を抜く柔らかな声に舌を巻く。

「……あ？ 嬢ちゃん、いや坊ちゃんか？ その目は随分と節穴なようだ。ここの惨状が見えてないのか？」

「……………」

「それとも……くくつ、義憤に駆られて来てみたか？ その心意気だけは買ってやるよ」

「ぐっ」と女性のくぐもった声。男が女性の腹を踏みしめたのだ。

秋は小さな声で「なるほど」と呟いた。

衝撃で意識を取り戻したか、女性は手足をばたつかせて泣き叫ぶ。鬱陶しげに舌打ちをした男は『磔の呪文』を口にした。女性の悲鳴

は絶叫に変わる。

思わずシリウスは立ち上がった。

「だが運が無かったな、坊ちゃん。この教訓を魂にでも刻んでおきな、『お節介は首を絞める』って、来世でも見返すことができるようになる」

「……はい。了解しました」

「あ？」

「十月十五日、二十一時三十六分」

パチンと、秋が懐中時計の蓋を閉じる。

イヤリングに指を触れながら、秋は静かに口を開いた。

「闇祓い局第一班、幣原秋。対象の『許されざる呪文』行使を確認。今から職務を遂行します」

それは、聞いたことがないほど冷たい声だった。

男の手から杖が消える。「……へ？」と惚けた顔で空の手を見たのが、男の最期の行為だった。

男の杖を難なく回収した秋は、そのまま一歩踏み込んで。

「」

その呪文を、唇に乗せる。

彼らしい、柔らかな、それでも何処か張り詰めた、苦しげな音で。決して人間に使うことが許されない、それを。

ただ現在、この闇の時代において、闇祓いにのみ許された、それを。一瞬後。

緑の閃光が世界を灼いた。

「……………、あ」

生命活動を止めた男の身体が、重力に従い崩折れる。

床に倒れた男は、惚けたままの顔をしていた。

倒れている女性が潰れてしまうと、シリウスは慌てて女性に駆け寄り抱きかかえた。

微かだがまだ息はある。カウンターに彼女をそつと寝かせ、自身の上着を掛けてやる。治癒呪文を重ねがけしてやれば、女性の呼吸は少

し安定した。

「……シリウス」

秋の声に思わず肩が跳ねる。

シリウスの顔を見て、秋は泣き出しそうな顔で笑った。

「巻き込んだじゃって、ごめんね」

見えない線を引くような微笑を浮かべ、秋は静かに顔を背ける。

細い肩は、寒さを堪えるように震えていた。

「……………」

この上なく、感覚で理解する。

秋の苦しさと痛みを感じ取る。

闇祓い。常世の闇を祓う者らに課せられた、使命と檻を理解する。

理解して、尚。

「君のおかげで、彼女は助かった」

カウンターに寝かせた女性を示し、シリウスは言う。

秋は軽く目を瞠った。

「君は彼女の命の恩人だ。そのことは、胸を張っていいと思う」

『助けて』と、秋の目は雄弁に語っていた。

魂を引き裂く痛みに、耐えられないと叫んでいた。

それでも、こうも言っていた。

『こうしなければ、勝てないのだ』と。

覆しようのない戦力差。闇の時代に立ち向かうには、こちらも綺麗

なままではいられない。

綺麗事では、敵わない。

奪われる前に奪うのだ。殺される前に殺すのだ。

大切なものを失わぬように。

「ありがとう、秋」

世界を守ってくれてありがとう。

その手を血に染めてくれてありがとう。

守られた者の礼儀として、そう、告げなくてはならない。

その言葉こそが、秋を苦しめ、追い詰めるのだと理解しながら。

「……………」

秋の顔が歪んだ。泣き出しそうな顔で、それでも涙を浮かべることなく、ただ力無く、地面に膝をついては嗚咽を零す。
その隣に跪き、若き英雄の背中をそつと撫でた。

夜はまだ明けない。

短編 シリウス視点 空が墜ちた日（下）

花瓶は結局、手元に余っていたものを贈ることにした。

『不死鳥の騎士団』の定例会に現れた秋は、普段通りの穏やかな笑みで、改めてあの日の感謝と謝罪の言葉を口にした。

「ハロウィンパーティーと君の誕生日、顔出せなくってごめんね」

闇祓いが忙しいのは承知の上だ。日刊預言者新聞は、日々激化する戦争と闇祓いの活躍を綴っていた。

それでも秋は、シリウスの誕生日にと、相応の万年筆（老舗のリミテッドエディション）を用意してくれていた。そのあたりは流石だと思ふ。

……もしかすれば、先日「君は金の使い方が下手だ」と言ったことを根に持っていたのかもしれないが。意外と嫌味な男なのだ。

「花はまだ綺麗に咲いてくれてるよ。見るたびに、少しだけ心が休まる気持ちになれる」

そう言って笑う秋の表情は、学生時代と変わりない、純粹で柔らかな微笑みだった。

——それでも、瞼の裏に浮かぶのは。

縋るようにシリウスを見上げた、秋の揺れる瞳で。

あの漆黒が、網膜にこびり付いて離れない。

恐らく、自分は。

秋の態度に、何かの引っかかりを感じている。

あの時。

あの時、秋は。

シリウスに何か、言いたい言葉があったのではないだろうか？

「……お」

『不死鳥の騎士団』本部に顔を出すと、そこにはただひとり、ジェームズ・ポッターの姿があった。

頬杖をついたまま、心底つまらなさそうな表情で、日刊預言者新聞を捲っている。

「新聞、取ってなかったっけ？」

シリウスの端的な問いかけに、ジエームズは顔を上げもせず「最近、リリーに独占されていてね」と答えた。

「暗い顔で、戦況の暗澹たる記事ばかりをじっと見つめている。『黒衣の天才』……秋の名前が載るようになってからというもの、ずっとそんな調子だ。そんなこととしては気が滅入る一方だろうが、それでも止められはしないだろうね。あーあー全く、新婚だということにねえ。新妻が、違う男の情報ばかりを集めているというのはなんとも悲しい話だ」

そう言つて、ジエームズは顔を上げるとにやりと笑つた。その顔に苦笑を返し、隣に腰掛ける。

「秋の名前、か。闇祓いでは大活躍のようだな」

「当然だね、だって僕の秋だもの」

「いや君のじゃないだろ」

「失敬した、僕らの秋だったね」

「いや俺らのでもないだろ!？」

シリウスのツツコミに構うことなく、ジエームズはケラケラと笑つていた。相変わらずの親友に、思わず力が抜けてしまう。

新聞を畳みながら、ジエームズはなんの気無しに呟く。

「身重の身体に障るから、リリーには心身ともに健康でいてもらいたいのだけど……リリーにとって秋は一番大切な友人だろうし、無理なからんよ」

「ああ、秋はリリーと仲良かったもんな……、つて、おい」「ん?」

わざとらしい顔の眼鏡だ。しれつとしゃがって。

それでもポーカーフェイスに徹しきれず、口元がひくついているのが見て取れる。

親友の背中を思いつきりぶつ叩いた。

「おいっ……おい、聞いてねえぞー!」

「あれ? そうだったっけ?」

「何だよもう! ああクソッ、おめでどう!」

身重。

つまりは、そういうことで。

この男は父親になるのだ。

学生時代、ずっと一緒にバカやってきた親友が、いつの間にか結婚して所帯を設け、そして父親になるうとしてしている。

そう考えると、あまりにも感慨深い。

ジエームズはしばらくとぼけた顔をしていたが、やがてブハツと吹き出すと、肩を震わせ笑い始めた。

「いや、うん、ありがとう。実は僕もまだ信じがたい気分なんだ。リリーのお腹も全然ぺったんこだし、実感が湧かないというか」

「それでも、ちゃんと気を遣ってやんねーとだぜ。女は妊娠中に旦那にされたことを一生覚えていと聞かすし」

「ハハ……気を付けるよ。実はリリーからも、あまり他言しないでと言われていてさ。初期は特に、流れる可能性があるらしくて。この話もしリウスだけにしかしていないんだからね」

だから他の人には黙ってて、とジエームズは軽く片目を瞑った。それもそうだと頷いて請け負う。

ジエームズは「シリウスだけに」と言った。

ということは、リーマスにもピーターにも、そして秋にも伝えていないということだ。

誇らしくて鼻が高くなる。気を抜けば口元が緩みそうだ。現に目の前のジエームズは、それはもう幸せそうにニマニマと緩み切った顔を晒している。

おおかた、誰かに打ち明けたかったのだろう。堪え性がないと窘めるべきか。いやでもきつと自分が同じ立場なら我慢できずに喋ってしまうだろうし。如何ともしがたい。

「い、いつ頃の予定なんだ？」

「夏頃だって。まだまだ先だね」

「ふ、ふうん。そうか。きつと君も忙しくなるんだろうな」

何せ、子供だ。赤子が一人、家族として増えるのだ。想像も付かないほど大変なのだろう。

レギュラスとは年子だったから、シリウスに赤ん坊の世話をした記

憶はない。

それでも幼い頃は、子供が産まれた親族が、顔見せにと父の元を訪れていた。父の前で、子供が泣いたり喚いたりしないようにと、親達は必死に子供を宥めていたものだ。

父親に対するシリウスの記憶は、あまり良いものではない。

英国魔法界の重鎮。由緒正しい、伝統あるブラック家。

父のシリウスに対する態度に、愛情を感じたためしはない。ただ家を継ぐ長男としてしか見られず、そしてグリフィンドールへ入った後は、声を掛けてもらった記憶も曖昧だ。ヒステリックに喚き散らす母を諷めている姿ばかりが残っている。

いや。

きつとジェームズは、良い父親になるだろう。

リリーにもド直球で愛を告げた男だ。子供を可愛がらないはずがない。むしろ滅茶苦茶可愛がって仕方ないんじゃないだろうか。

幼い頃からおもちやの箒に乗せて「僕の子供は天才だ！」と叫び、ちよつと魔力を見せれば「僕の子供はやつぱり天才だ！」と叫び、そして最後に「まあ僕とリリーの子供だからね！ 当然だったね！ ワハハハハ!!」とドヤ顔で叫ぶ……。

「……………」

どうしよう、想像だけでちよつとムカついてきた。

手が出てしまう前に早く帰ろうと立ち上がる。

「ん？ もう帰ってしまうのかい？」

「ああ。よく考えりや、ここには大した用がなかった」

「そうか」

「じゃあよ……お祝いとか、その辺はまた今度話そうぜ。リリーが安定期に入ったら、皆にちゃんと話してくれるんだろ？ その時には俺も『初耳でした』ってツラで演技しないとな。一人だけ抜け駆けしただって、皆にバレないようにしねえと」

「ふふ、シリウスは演技が下手だからなあ。リーマスあたりに勘付かれちゃいそうだ」

「全くだ」

扉に手を掛ける。

「シリウス」

静かな声に、振り返った。

丸眼鏡の奥で、ハシバミ色の瞳がじつとシリウスを見つめている。

「実は何か悩みでも、あるんじゃない？」

おどけるような声音。

普段通りの、どこか茶化すような態度。

それでも、瞳の奥は真剣だった。

真剣に、シリウスの内心を伺っていた。

この眼差しには憶えがある。

学生時代、誰かが悩んだり、苦しんだりしていた時に。

ジェームズはいつも、この眼差しで寄り添ってくれた。

——悩み。

秋の顔が脳裏に浮かぶ。

縋るような眼差しと、震える背中。

——それでも、仕方ないじゃないか。

戦力差は歴然で、

こちらは常にジリ貧で、

先手を取らないと誰かが死ぬんだ。

自分が秋の立場でも。

きっと躊躇わずに杖を取る。

幸せな未来のために。

これから生まれる幼子が、安心して過ごせる世界のために。

秋には、それだけの力があるから。

『英雄』として相応しいだけの力を持っているのだから。

秋のおかげで、徐々に空気が変わってきた。

我が物顔で非道の限りを尽くしてきた死喰い人が、どこことなく控えるようになったのだ。

闇の帝王、ヴォルデモートと張り合う魔力の持ち主が闇祓いにいるということ。

それだけで、被害の抑制と犯罪の抑止に繋がっている。

黒衣の天才。名前が付けばすぐに流行る。
魔法界は噂好き。英雄譚を楽しく消費して。
彼の行為を華々しく、時に美麗に書き綴って。
秋の心を、知りもせず。

一度だけ、強く。
拳を握りしめた。

「悩みなんて、無いさ」

——あれが、秋の選んだ道なのだ。

外野が口を出す問題ではない。
縫るような、秋の眼差しを。

『英雄のする顔じゃない』と、シリウスは見なかつたことにした。

普段は昼も夜もなく忙しい秋が、今年の誕生日はたまたま休みを取
れたと小耳に挟んだので、今年もシリウスは秋を食事に誘うことにし
た。

夜は不死鳥の騎士団の集まりがあるため、今回はランチを取った
後、ポッター家にお邪魔する予定になっている。今頃はリリーが腕に
よりを掛けて、秋をもてなす準備をしていることだろう。

黒のコートを翻し、シリウスは歩く。

地下は魔法使いの遊び場だ。

煌びやかなショップPINGモールの中、ただ一つだけ使われていない
エレベーター。その中に入ってボタンを押すだけで、マグルの世界か
ら魔法使いの世界へと様変わりする。

未だ世間は『名前を呼んではいけないあの人』、ヴォルデモートの台
頭で物騒なもの、まだ日が高い現在、ショップPINGモールにも大勢
の魔法使いの姿が見える。魔法植物ショップの脇を抜け、魔法のブ
ティックを通り抜けた折、ふと声が聞こえてきた。

「大丈夫よー！ いざとなったたらきつと『黒衣の天才』が助けてくれるわ
！」

思わず声が出た方向を見た。

まだホグワーツに入学していないくらいの歳の少女だ。金の豪華な髪をなびかせては、ふてぶてしい顔で腕を組み、胸を張っている。どうやら彼女には行きたい場所があるらしい。それも、両親が渋い顔をするような所へ。しかし両親が止めれば止めるほど、少女は意固地になっていく。

やがて少女はスカートの裾を掴んでは、悔しげに顔を歪めてポロポロと涙をこぼし始めた。

「なんで……っ、なんでっ、パパもママもダメダメっていうのよ！ 何かあっても、幣原様があたしを助けてくれるんだから！ 幣原様はね、すごいんだから！ とってもとっても強くて、その、すごいんだからあ!!」

……………。

秋の強さと少女の訴えに、一体何の関連があるのだろうか？
謎だ。

それにしても、秋はこの数年で随分と有名になった。新聞をまだ読むような歳でもない幼児だって、今や幣原秋の名を知っている。

日々華々しい戦果を挙げているのも大きな理由ではあるのだが、これも国民に認知された理由は、日刊預言者新聞に連載されているコミック・ストリップコマ漫画のおかげだろう。

流浪の旅人、幣原秋。

物語は、極東の地から来た黒い髪に着流しの男が、ふと訪れた英国にて、ひよんなことから闇祓いに入局するところから始まる。

連載が始まってそろそろ一年が経つだろうか。相棒の刀と共に、秋が人助けをしたりばったばったと悪人を斬ったりする、いわゆる勧善懲悪系のストーリーだ。

絵は下手ではないものの、シリウスが三年ほど練習すれば追い抜けそうな、どこか味のある絵柄だった。

当然のことながら、秋とは顔も性格も全く似ていない。黒い髪という特徴しか似ていない。

闇祓いで働く彼らの容姿が公開されていないからこそ出来る荒技だった。

一応は闇祓い局の公認の元行われているとのことだが、一度秋をついてみたところ、

「——次、ぼくの前でその話をしたらただじゃおかない」

と、温厚な秋らしからぬ声と眼差しで睨まれたので、うずうずする気持ちを抑えながら、漫画をスクラップする日々だ。

この連載がきっかけかは知らないが、日刊預言者新聞の購読者数はここ一年でぐっと増えたと聞き、闇祓いの人気は急上昇したらしい。

連載がまとめられて書籍化したら、ひとまず二十冊は欲しいところだ。

そんな冗談はさておき。

そんなヒーローの元ネタである幣原秋は、既に指定した喫茶店で待っていた。

柔らかな印象を残す整った顔に、艶のある長い黒髪。決して頑健ではない、線の細い身体。目線は下方、手元の本に向けられている。

近付いて来ようとする店員に手で合図し、秋の座る席へと歩み寄った。

「よう色男、あんな小さな女の子を泣かせるなんて流石だな」

「はっ」

秋は怪訝な表情で顔を上げる。ただの軽口だと軽くかわして、秋の正面に腰掛けた。

ちらりと秋の手元が目に入る。分厚い専門書かと思ったが、どうやらソフトカバーの小説のようだ。

「待ってる間、仕事でもしてんのかと思ってた。何読んでんの？」

「ぼくだってプライベートの時は気を抜くさ。……子供のころに好きだった作家の新作だね。翻訳されたのが書店に並んでいたから、思わず買っちゃった」

「ふうん。……面白い？」

「シリウスは嫌いかも。主人公がずっととうじうじしてるし……でも、久しぶりに日本の描写を目にすると、なんだか懐かしい心地になる」

そつと微笑んで、秋は本の表紙を軽く撫でた。ふうんとシリウスは

頬杖をつく。

『懐かしい』ね……そういや、秋は日本に帰らないのか？　もうずっと帰ってないだろ」

学生の頃は夏に帰っていたようだが、闇祓い局に入局してからは、確か一度も帰っていなかったはずだ。闇祓いの仕事に不死鳥の騎士団の任務にと、日々を忙しく過ごしていたように思う。

秋はしばらく黙っていたが、やがて柔らかな声で言った。

「確かに、ここ最近日本に行けてないんだよね。忙しいは忙しいんだけど、たまには墓参りもしないとだった」

「……あの……悪かった」

「気にしてない、大丈夫。……それに——」

『あいつ』を殺すまで、日本には戻らないと決めてるんだ」

穏やかな顔だったが、瞳の奥には強い感情が渦巻いていた。

その眼差しに、思わず次の言葉を飲み込む。

秋は苦笑して席を立った。

「……ふふつ、ごめん、冗談。——早く行こう、シリウス。君が奢ってくれるんだろ？　今日のぼくは野菜の気分なんだ、君イチオシの美味しいところに連れて行ってくれよ」

伸ばされた秋の手を、緩慢に取る。

「……今日の俺は肉の気分だ」

「誕生日特権で却下だよ」

「奢られる身のくせに！」

秋の要望通り、野菜の美味しいレストランへ足を向けた。山の麓、山と海が一望できる、都会から少し離れた奥まった隠れ家。こういうとき『姿あらわし』は便利だ。

誕生日プレゼントにとラテン呪文学の本を贈ると、秋はとても喜んでくれたあと「ぼくからも、少し早いけどシリウスの誕生日に」と言って、魔力で書けるボールペンをプレゼントしてくれた。

秋の手製と聞くと、どこか慄く心地になるのは何故なのだろう。昔

から滅多に羽根ペンを使わない奴だったが、自作するほど筆記具には一家言あつたとは驚きだ。

ラテン呪文学の本の値段が気になるらしい秋に「君がくれたボールペンと同じくらい」と返せば、秋はむうつと眉を寄せた。冗談だと思われたようだが、しかし実際、幣原秋が作った魔法道具とすれば、そのくらいの値は付くと思う。

話はやがて、ハリーのことに移り変わった。

仲間のうち、秋が一番忙しくてハリーには会えていない。だからだろうか、秋にせがまれて途中からずつとハリーの話をしていたように思う。

あと数時間もすれば直接顔を見られるというのに、どうしてこうも待ちきれないのか。

とは言え、シリウスもハリーのこととなると無限に話すことができず。

一歳の誕生日におもちやの箒を贈ったらとても喜んでくれたこと。先日ハリーがついに「シリウス」と呼んでくれるようになったこと。歯が少しずつ生え揃ってきたこと。でも歯磨きは嫌いで、いつもリリーから逃げ回っていること。

どんな話も、秋は楽しそうな顔で聞いてくれた。

「いいなあ。ぼくもハリーに名前を呼ばりたいよ。まだぼくのこと憶えてくれてないみたい」

「接する時間が短いもんな、仕方ない」

「君はポッター家に入り浸りすぎなんだよ」

「無職の特権ってやつかな」

「働け無職」

おお、秋が白い目で見てくる。しかしこのくらいで怯んでいては、職業無職は出来やしない。

誰から何を言われようとも馬耳東風、のらりくらりと受け流す技術がなければ務まらない名誉職なのだ、無職というものは。

「そりゃあね？ 確かに、騎士団の活動に専念してくれる人がいるのはありがたいんだけどさ……」

「だろ？」

「ドヤ顔しないで。『だけど』の後には前文の否定が続くんだよ」

そんな文法の授業のように言われても、定職に就く気はシリウスにはさらさらしないのだ。

自分も秋のように闇被いでも目指していれば良かった気がする。年齢制限は無かったはずだし、来年にでも受験してみようか。

秋はため息をひとつついた。

「……でも、リリーもジエームズも仕事を辞めなくちゃいけない。たのは、何だか悲しいんだよね。お金を稼ぐだけが仕事じゃないし。リリーなんて、念願叶って魔法薬学の研究所に入れたのにさ。復帰させてあげたいよ。……早く、全部終わればいいのに」

「……………」

ジエームズとリリーの息子、ハリー・ポッターについて為された予言。

ハリーを狙うヴォルデモートから隠れるため、ジエームズとリリーは騎士団の活動も控えては、ずっと家の中に引きこもる生活を送っている。

オマケに、気掛かりなスパイのこと――

「……………なあ、秋」

一度気になったらもう駄目だった。

「奴らは左腕に『闇の印』を入れてるんだろ。なら、俺のことも存分に確かめればいい」

左の袖を捲り上げ、秋の眼前に前腕を晒す。秋はシリウスの腕を横目で見たあと、皮肉げな笑みを浮かべた。

「そんな、ぼくの眼前で証拠を残すような愚行、あいつが犯すと思う？」

誰にも一目でわかるような痕跡があるんなら、ぼくらはこうも苦労してない。そうだろ？」

「……………ハハ。ま、そうだよな」

敵味方の判別としては不十分。そりゃそうだ。そんな簡単な話じゃない。

しずしずと袖を戻した。大きく息を吐いて椅子の背に体重を預け

る。

「でも、こつちとしてはさあ……あんな野郎に寝返つてると疑われるだけで気分悪いし、白黒はつきり付けてえんだよ。でも、君もジエームズも、誰がスパイかを突き止めようとすらしてねえし。何、モヤモヤしてんのは俺だけ？ 君ら、気持ち悪くはないのかよ」

そう話を振ると、秋は困ったように微笑んだ。

「シリウスらしいね。曖昧は許せない？」

「許せないな。敵か味方か、実に単純な話だろ」

「……それもそうだけど。でもね、ぼくは思うんだよ」

「何を？」

「……友達を殺したくはないなって」

「甘いよね」と、秋は笑って首を傾げた。

「甘いのは、わかってる。ぬるいなって自覚もある。でも、どうしても、思ってしまう。スパイはまだ誰も殺してない。だから決定的な瞬間が来る前に、まだ戻れると自覚してほしい」

「……」

「結局ね。ぼくは、誰も疑いたくないんだ。友達の、誰のことも。だから、ぼくに気付かせないでほしい。ちよつと間違えてしまったかもしれないけど、その失敗はまだ、許されていい。許されるうちに、ぼくらの元へ戻ってきてほしい。……疑わしきは罰せずだと……そうは、思わないかな？」

「……許しちゃ、駄目だろ」

「駄目かな」

「駄目だよ」

「そうだね。シリウスはいつも正しい」

秋はやっぱり笑っていた。

秋の言葉は、理解はできても納得はできない。ぬるいと思えな
い。

犯した罪は償わせるべきだし、裏切りは決して許してはならない。こうしてジエームズが、自宅に閉じこもらざるを得ない今の現状でさえ、シリウスには腑が煮え繰り返る心地になる。

——それでも。

誰よりも戦場に立っている秋が「誰も疑いたくない」と、そう言うのであれば。

(まあ、秋が目零ししても、俺はそいつをぶん殴るけど)

それでも、今はまだ何も起きてないと言うのなら、ぶん殴るだけで済ませてやろう。

「……早く、全部終わればいいな」

そんなシリウスの呟きに、秋は「そうだね」と短く返した。

さて、暗い話はもうおしまいだ。

今日は秋の誕生日なのだ。このめでたい日にするべき話題じゃなかった。

ホスト側として深く反省しつつ、シリウスは軽く手を上げ、ウェイターに合図した。頼んでいたワインを持ってきてもらおうよう頼む。

「酒かい？」

「飲めるだろ？」

「……ま、いいや。それじゃあ一杯だけ頂くとするよ。リリーに迷惑かけたくないし、ポッター家に行く頃には醒めるくらいでね」

「そんなこと言って、俺、君が酔い潰れた様は見たことないんだけど？」

見た目に似合わず、いくら呑んでもケロッとしているのだ。つまり男である。

そうこうしている間に、ウェイターがワインボトルを手に歩み寄ってきた。ラベルをこちらに向けながら軽く説明しつつ、ウェイターはコルクの栓を抜く。

瞬間。

ウェイターが持っていたワインボトルの、上半分が粉々に吹き飛んだ。

白のテーブルクロスに染み込む赤色に、思わず思考が停止する。

——タ——ン……………

遅れて、微かに聞こえる銃声。

「……っ、伏せろ!!」

叫んで、秋とウエイターの腕を掴むと身を伏せた。同じフロアにいた数組の客も、悲鳴を上げながらテーブルの下に隠れる。

秋は面食らった顔をしていたが、すぐに眉を寄せては周囲を見渡した。

「狙撃か？」

「みたいだ」

割れた窓ガラスと、その先に広がるなだらかな山地に目を向ける。

直線距離にしておよそ二キロほど、ライフルの射程圏内だ。木々が茂っているから、狙撃手が身を隠すにもうってつけの場所だろう。

弾丸が着弾した壁を見て、秋はすつくと立ち上がった。

「おい、秋！」

「動かないで」

窓の外を睨みながら、秋は言う。

「狙われてんの、多分、ぼくだから」

そう言っつて、秋が指を鳴らした瞬間。

——ぐわんと、世界が歪んだ。

それは味わったことのない感覚。

未だかつて経験したことのない、虚。

時間の流れが遅くなるような、幻覚。

世界の中心が、今この瞬間書き換えられる。

括られた彼の黒髪が、魔力に揺られ宙を舞う。

部屋中の魔力が一斉に、幣原秋に対して跪く。

『ご命令を、我らが主』

——音より疾く。

二撃目が迫る。

膨大な魔力を束ね上げ、

彼は静かに杖を抜いた。

「たどえ狙撃手がどこを狙ったとしても、弾は必ず秋の正面に到達しただろう。」

他の客を巻き込んでしまわぬよう、狙撃手が狙いを過たぬよう、周囲の魔力が秋の手により手繰られる。

空気を切り裂いた凶弾は、秋の眼前で不可視の盾に遮られた。

弾は音速を超える衝撃波を伴って、盾を砕き奥の人間を食いちぎるべく暴れ続ける。

しかし、その盾は決して敗れることがなく。

やがて力を失った弾丸は、絨毯の上に音もなく落ちた。

「そこか」

淡々とした秋の声に、たった今、狩る側と狩られる側が入れ替わったことを知る。

背筋に震えが走るも、なんとか堪えた。

「シリウス、ごめん。こっちは頼んだ」

「……おう、任せろ」

こくりと頷き、秋はその場で『姿くらまし』した。数秒後、森の一部から炎が上がる。あちらはあちらで、戦闘が始まったのか。

そろそろと立ち上がると、シリウスはあたりを見回した。

「今、俺の仲間が制圧に向かった。もう狙撃の心配はない……だが、安全のために避難を提案したいと思う」

客から異論は出ない。そのとき、一人が声を上げた。

「あの……今のはまさか、闇祓いの幣原秋、なんででしょうか？」

シリウスが「ああ」と肯定すると、途端に張り詰めていた空気が緩んだ。ホツとした顔で胸を撫で下ろしている。

ホツと息を吐いて、隣のウェイターに視線を向けた。

「避難誘導を頼む。俺と一緒にいたのは闇祓いだ、魔法警察にはこちらから話を通す」

「はっ」

狙撃の狙いは秋だろうし、既に秋が向かったのならば、狙撃手は潔

く撤退しようとするはずだ。

しかし万一が起きては敵わないので、客の避難が済むまでの間、全員を守るように薄く広く盾の呪文を張り巡らせた。

「……それにしても……」

何故、秋の居場所が敵にバレたのだろう。

ここは英国内ではあるものの、ロンドン市街からは離れている。たまたま敵方が秋を見つけ、狙撃しようと思いついた——というのは、どこか不合理な気がする。

しかし秋以外を狙ったとしては、あの狙いは正確すぎた。

そもそも、秋が今日休みだったということさえ、知っている者は少ないはずなのだ。

シリウスでさえ今日のことは、秋の闇祓い直属の先輩であるエリス・レインウオーターから、世間話のついでに聞いていなければ知り得ない。あとは、ジエームズとリリーと——

「……ち」

そこまで考え、思わず舌打ちした。

簡単な話だ。今日この日のこの場所で、狙撃手が秋を狙えた理由。そんなもの、シリウスが情報を流せば一瞬だろう。

もちろん、シリウスには何一つ身に覚えがない。しかし身に覚えがなくとも、秋がシリウスを疑うには、十分すぎるほどの証拠となり得る。

(——誰に嵌められたかも判別できないってのは、嫌になる)

「キャアアアアア!!」

耳をつんざく悲鳴に、ハッと我に返った。

今の悲鳴は、避難中の客のものだ。杖を握ると駆け出す。

「何っ……!?!」

思わず息を呑む。

店の外には、避難しようとする者を出さないよう、2体の合成獣^{キメラ}が立ち塞がっていた。鋭い爪に硬い鱗は、見る者に無条件で恐怖心を植

え付ける。

(なんでこいつら、こんなトコに……いや、今は！)

怯える客の前に躍り出た。

「——フリペンドー！」

周囲に他の敵影がないことを確認した後、シリウスは場をウェイターに任せ、そのまま『姿くらまし』した。

目的地は、秋が狙撃手を追って向かっただろう山の中腹。秋に限って滅多なことはないだろうが、万が一を思うとどうしても気に掛かった。

降りた山は、戦闘の後が色濃く残っている。焼け焦げた草木に折れた枝、所々に広がる泥濘に混じって、先ほどシリウスも行き合ったキメラが、至るところで息絶えていた。横目に見ながら先へ進む。

やがて、古びた塔に行き着いた。

半壊した扉を開け中に入る。螺旋階段の周囲にも、多くのカメラの死骸が散らばっている。階段の足場にまで血が溢れているので、靴裏を汚さず上るのに神経を使った。

上の方から物音がする。

杖を握り、油断なく構えた。慎重に足を運ぶ。

音が聞こえるのは奥の部屋だ。ガタンバタンと転がるような音に加え、魔法の閃光が漏れている。

「来るな……来るなあ!!」

知らない男の叫び声に、シリウスはそつと部屋の中を覗き込んだ。階段はこの部屋で切れている。つまり、この部屋が最上階だ。

四角く切り抜かれた窓が並んだ円い部屋で、ひとりの男が壁にもたれてへたりこんでいる。

対する秋は、ただ黙って男を見下ろしていた。黒のコートの裾が土埃で汚れている以外、目立った外傷は無さそうだ。

少しだけホツとした時、男の声が耳をつんざいた。

「あと、もう一歩でも近づいてみる、闇の帝王を呼ぶぞ！ お前みたい

な若造なんて、あの御方にかかれればひとたまりもないんだ!!」

左腕に刻まれた闇の印を見せながら、男は歯を剥き出して秋を牽制する。ぎよろついた瞳が落ち着きなく秋と窓とを行き来しているから、恐らく窓から逃げる気なのだろう。

秋は一度だけ足を止めたものの、再び歩みを再開した。ゆつくりと歩み寄る秋を見て、男は再度悲鳴を上げる。

「だから——近付くなって言っただら! いいか、あと一歩でも——」

「だから、早く呼べばいい」

低い声で呟いて、秋は強く一步を踏みしめた。

「呼びなよ。ほら」

「……ヒイツ……」

「早く呼べよ。殺してやるから」

秋が握った杖の先から、バチバチと火花が弾け飛ぶ。

「ねえ、早く。あいつを殺す機会を用意してくれるのなら、むしろ本望だよ」

「……ひあ……」

「あいつを殺すことだけが、今ぼくが生きてるたったひとつの意味なんだ」

それだけしか、ないのだと。

秋は、昏く断言した。

「殺してやる。殺してやる。絶対に、絶対に許さない。必ず殺す。誰も敵わないと言うのなら、ぼくが相手になってやる。ぼくが絶対に、あの男の息の根を止めてやる」

絶対に殺す。

絶対に殺す。

絶対に殺す。

「英国魔法界に、秩序の回復を。それが闇祓ほくらいの責務と使命だ。……英国魔法界は『名前を呼んではいけないあの人』——ヴォルデモートを悪と定め、奴を血眼で追っている。奴をぼくの前に引き摺り出してくれるというのなら願ったり叶ったりだ。英国魔法界に、永遠の秩序

と安寧を誓う者として……我々は、君らを決して許さない。

……ほら、呼びなよ、ご主人様をさ？ 酷い闇祓いに脅されています助けてくださいって、早く乞えよ」

部屋の中を、殺意が渦巻く。

呼吸さえも止まるほどの緊張に、ガタガタと震えていた男は、とうとう白目を剥いて失神した。

「なんだ、呼ばないの」

つまんなそうにそう呟いて、秋は男の前にしやがみ込んだ。男の左腕に刻まれた闇の印をじつと見ては、ふと思いついたように自身の指先を触れさせる。

特に何も起こらないのを確かめては、自嘲するように笑い声を溢した。

「……はは。ま、そうだよなあ……」

男の腕から指を離し、秋はそのまま床へ、へたり込むように尻をついた。膝を抱えて息をつく。

虚空をぼんやりと見つめながら、秋は掠れた声で呟いた。

「………疲れた、な」

あれだけ渦巻いていた殺意は、もうどこにも見当たらない。

秋の背中は、驚くほどに無防備だった。

壁を隔てたシリウスにも気付いている様子はない。今、魔法を秋に向けたら当たってしまうのではないかと思うくらい。

空っぽの背中に、何と声を掛ければ良いのか、シリウスにはわからなくなった。

気配を消して、部屋から離れ階段を降りる。

塔の外で待つこと、数分。

秋は普段通りの顔をして降りてきた。

秋は、事件があつたため一旦闇祓いに戻ること、でもすぐ終わりそうだからポッター家には後ほど向かうつもりだと、そういう旨の話をしていた。

していたと、思う。

「ちよつとした事務仕事が増えちゃった。でも、大丈夫だよ」
そう言つて秋がいつも通りに笑うから、シリウスはもう二度と、問
い糺す機会を失つた。

…

…

…

「幣原秋の死に、心当たりはないか？」

その問いかけに、彼方へと飛んでいた意識が現実へと戻つてきた。
監獄の中は寒すぎて、見開いた眼球の表面が凍つてしまひそうだつ
た。

冷たい床に這いつくばるよう、両の手足を触れさせて。

視界の中心には、日刊預言者新聞の一面がずっと居座っている。

緩慢に顔を上げた。

綺麗に磨かれた革靴に、仕立てのいい紫色のローブ。胸元には、魔
法省の紋章があしらわれている。

すつきりとした金髪に、学生時代から変わらない、人好きのする
整つた容姿。

「リイフ……フェイスナーか」

「久しぶりだ、シリウス・ブラック。学生以来かな」

リイフはシリウスと目線を合わせるようにしやがみ込んだ。

二人の間に挟まる鉄格子を見て、立場の違いに思わず笑みが溢れ
る。

「フェイスナーの御曹司が、こんなトコ来ちゃいけねーよ。とつとお
家に帰んな」

「今日はフェイスナーとしての用事ではなく、幣原秋の友人としてここ
に来た」

そう言つて、リイフは日刊預言者新聞の見出しをトンと指さす。

『友人』という言葉に苦いものを感じながら、もしかするとこの新聞は、リイフが意図的にシリウスの監獄前に落としたものかもしれないと思ひ至つた。

「僕は秋の死を調べている。……秋の遺体は、マグルのビル群が並ぶ区画で発見された。発見は早朝、ランニングをしていた一般のマグルだ」

尋ねてもいないのに、リイフはそんなことを伝えてくる。

「検死の結果、すぐそばの十五階建てのビルの屋上から飛び降りただろうことが判明した。ビルの屋上の鍵は魔法で破壊されていて、その魔法は秋本人の杖で為されたことが確認されている。目撃者は誰もいない。第一発見者のマグルにも怪しい点はない。防犯カメラの映像からも、ロクなものが出なかった。

黒衣の天才、幣原秋。死喰い人の中に、秋を憎む者も多くいたはずだ。殺したいと願う者も、きつと……。そう言つた者に、心当たりはあるだろうか？」

真顔で問うリイフを見ると、暗い笑みが喉奥から溢れてきた。

この男はなんて愚かなのだろう。

それだけの状況証拠を持ってして、なお、秋を殺した犯人を探そうとするのか。

「じゃあアンタ、もしアンタが秋を恨んでいたとして、果たしてアンタは秋を、あの黒衣の天才を殺せるのかよ？」

いきなり笑い出したシリウスを見ても、リイフは表情を変えない。

そのことが余計に愉快だった。

「秋は何度も俺に背中を向けたよ。一切警戒なんてしていない、無防備すぎる背中だった。その背に杖を向けたって、きつと秋は気付かなかつただろう。……それでも俺は、自分が秋を殺せるなんて戯言、たつたの一度も思えたことがないさ」

勝てるとか敵うとか、そんなレベルの話じゃない。

冗談じゃなく、立っている次元が違つていた。

魔法の撃ち合いを試みる気にもなれない。

あんな、空気中の魔力さえも従えてしまえるような魔法使いを、一体どうやって殺せるというのだ。

あのような天賦の才能を、きつと英雄の資質と言うのだろう。ただその才能のみで、世間から祭り上げられた孤高の天才。

秋と張り合える者なんて、ヴォルデモートくらいのものだ。

——そのヴォルデモートも、いない今。

「英雄を殺せるものなんざ、たったひとつしかないだろ」

怪物を退治するのが、英雄なのだとしたら。

その英雄を殺すものは、たったひとつ。

「俺も、アンタも……秋を取り巻いた人間、全てからなる『大衆』こそが、英雄を死に至らしめたのさ」

知っていた。

気がついていた。

秋の弱さに、脆さに、気がついていながら、シリウスは、全部見なかつたことにした。

大衆よりもずっとずっと罪深い。

秋が死んだ理由の一つは、間違いなく自分だ。

ビルの屋上に佇む秋、その背を押した手の一つは、間違いなく自分のものだった。

「秋を殺したのは、俺で、アンタで、世間で、一般人で、空気で、そして、秋自身に他ならない」

耳をすませば聞こえていた。

助けを乞う小さな声が聞こえていた。

誰よりも強かった彼は、それでも誰よりも心優しくかったから。

軋む心を、全て仮面の奥へと押し隠して、ずっとずっと戦場に立ち続けたのだ。

——全ては、明るい未来のために。

戦争は終わった。

大切なものを全て失くした秋は、復讐という唯一の拠り所さえも失った。

戦争に勝ったのに、その功労者である秋の手元には、何一つとして

残らなかった。

そりゃあ、死にたくもなるだろう。

リイフはしばらく黙っていた。

次に口を開いたとき、声は僅かに怒気が混ざっていた。

「では君も、秋の死は自殺だと言いたいのか……君さえも」

「……………」

「……いや、すまない。君に怒りを向けるつもりはなかった。……ただ僕は、秋の死が他殺である可能性がなくなる限り、犯人を探し続ける気だ。でないと、秋に顔向けができない」

「……おう。なら、気が済むまでやればいい」

親しかった友の死を受け入れられないのは、多分、当然のことだと思う。

シリウスだって、少し前まではきつと受け入れられなかっただろう。

——今だつてきつと、受け入れられてはいないのだ。

どれだけの月日が経とうとも。

ああと頷き、リイフは立ち上がった。

「それじゃあ、君も達者で」

「……………はは。じゃあよ」

リイフが立ち去って行く。

靴音が遠ざかるのを聞きながら、シリウスは静かに顔を上げた。独房の隅から光がさす。

奈落の底を照らす朝日は、どこまでも白々しくて嘘くさい。

世界に朝は来れど、罪を抱えた心は決して晴れることはなく。

澱んだ闇夜に沈む檻の中、ただ目を閉じて、祈る。

友を殺したこの罪が、いつか赦される日が来ることを。

友の元へと逝ける日を、ただ、じつと待ち続ける。

救いは未だ来ない。